



A property of the party of the

[字統] 普及版の刊行に当って

稿を終えた。〔字統〕の執筆に当って予定していた三部の字書を、ともかくも完稿することができたのは、全く幸運であ ったというほかない。何ごとも、冥護の力によることであろう。 〔字統〕を刊行して、早くも十年を過ぎた。その間に、ひきつづいて〔字訓〕を刊行し、いままたようやく〔字通〕の

その間に、普及版を要望される声も多かったということである。 甲骨・金文の文字資料も豊富であり、方法的な処理を誤ることがなければ、彼らは十分にその生い立ちを語ってくれるは たその結果を、字書の形態で一般化するために、〔字統〕を書いた。幸いにこの書は、多くの読者に迎えられて版を重ね、 ずである。私は三十年に近い間、その世界に沈潜した。そして〔甲骨金文学論叢〕十集、〔説文新義〕十六巻を書き、ま 組織的・体系的な文字学を確立するためには、まずその基礎となる字源の研究を確立しなければならない。幸いに今では、 〔字統〕は、字源の解明を試みた書である。字の初形初義を明らかにして、はじめてその展開義を考えることができる。

風神のなすところであった。風の多義性は、風という字が成立した当時の、風のもつ古代的な観念に内包するものとして、 なわち風神であった。風土・風俗のように一般的なものより、人の風貌・風気に至るまで、すべてはこの方神の使者たる った。四方にそれぞれ方域を司る方神が居り、その方神の神意を承けて、これをその地域に風行し伝達するものが鳳、す て、はじめて生まれた文字の形象は、古代的な思惟そのものである。たとえば風は、もと鳳の形に書かれ、鳥形の神であ 字源の学は、字源の学だけに終るものではない。原初の文字には、原初の観念が含まれている。神話的な思惟をも含め

そこから展開してくる。このことは、原初に成立した文字の多くについて、いうことができる。

字法を対象とした。 その実態と、その適応性・必要性を確かめるために、私は「字訓」を書いた。そこでは主として〔記〕〔紀〕〔万葉〕の用 字化も可能となり、さらに造語力の基礎が生まれた。「訓よみ」は、漢字の国字化に道を開き、漢字に国語としてのはた らきを与える重要な方法であった。 漢字を訓よみにして国語化するという方法は、漢字文化圏の中でも、わが国だけのものであり、これによって漢字の国 今の国字政策ではほとんど無視されている字訓の問題を、国語表記の原初に遡って、

抄〕によると、風にはカサーホノカ・オトヅル・スクル・ソヨメク・ノザなど二十数訓が加えられている。このような訓義的な理解 の上に、風の字を用いる連語(熟語)の意味がすべて理解される。 「訓よみ」は平安朝以後、 加点本が多く、鎌倉・室町期には多くの字書が作られた。鎌倉期書写の (観智院本類聚名義

極めている。不易なるものを保ちながら、 もちつづける限り、国語の純化と発展のために、漢字文化の解明には、どのような努力をも惜しむべきでないと考える。 による漢字文化の全体を、歴史的に理解し、また形・声・義の関連を通じて、 生命を与えなければならない。 歴史的なものには、すべて不易と流行の原理がはたらくものである。漢字の歴史は古く、漢字文化の及ぶ範囲は広汎を 〔字通〕は、〔字統〕における字源の解明、〔字訓〕における国語としての訓義的理解の基礎の上に、連語としての語彙 もとより〔字通〕は、その試みの一部に過ぎないものであるが、 同時に時代の要請にこたえる方法を、考えなければならない。漢字に、新しい 国語が、 その全体を体系化することを試みようとし 漢字をその造語の方法、表現の手段として

れることになったが、このような漢字についての基礎的な知識を共有することによって、 しい時代に適応させてゆく方法を、考えることができるように思う。 私の考えるこのような文字学のありかたの、出発点にあたるものである。このたび軽便な普及版が用意さ 漢字に新しい息吹きを与え、

うのである。 によって、より多くの人々に理解され、 字は、過去の文化遺産の全体に連なり、文化の連続性を保証する最も重要な方法である。私の意図するところが、この書字は、過去の文化遺産の全体に連なり、文化の連続性を保証する最も重要な方法である。私の意図するところが、この書 わゆる国際化、開放化のはげしい動きの中で、国語の状況にも、 国字政策の全体が、 その正しい文字知識の上に推進されてゆくことを、 いくらか懸念すべき徴候があらわれてきている。漢 切にねが

平成五年十二月

白川 静

字統の編集について

白 Ш

目

三、声母と古紐8 二、六書について3 四、文字学の資料10 一、本書の要旨1 声 6 字源と語源6 韻母と古韻9 字源の研究について2 わが国の古代文字学12 本書における六書の扱いかた5 わが国の漢字音9 字書の形式3 文字学の方法13 会意と形

Æ 六、本書の収録字18 字形の問題14 字形の意味15 音と訓19 解説について20 文字の系列16

この書は、漢字の歴史的研究を主とする字書である。 的な問題にもふれようとする「漢字文化の研究書」である。要約していえば、 史的字書」であり、またそのような語史的な展開を通じて、漢字のもつ文化史 字書」であり、その初形初義より、字義が展開分化してゆく過程を考える「語 この書は、漢字の構造を通じて、字の初形と初義とを明らかにする「字源の

漢字の構造は、その文字体系の成立した時代、今から三干数百年以前の、当

時代に入るとともに、文字はその文化の最も重要な担持者であった。文字はつ 的に表現されている。漢字の歴史は、その無文字時代の意識にまで、遡ること その時点において文字に集約され、その一貫した形象化の原則に従って、体系 ねに過去の文化の継承者であり、またそれを通じて、新しい創造への源泉であ て形象化し、文字としての体系を与えたものということができる。そして歴史 ったとするならば、漢字は文明以前の原始文化を、文明への最初の段階におい ができるものといえよう。文字の発明が、人類の文明への最初のステップであ り以前の、文字がまだなかったいわゆる無文字時代の生活と思惟のしかたが、 時の生活と思惟のしかたを、そのままに反映している。あるいはまた、それよ った。その機能は、現在においても、すこしも変ることはない。

あり、 でなく、 加えて受容することに、格別の苦心を要したからであろう。 る。ただその受容には、ことばの体系が異なることもあって、方法上の困難も 半島からの渡来者たちによって示唆を受け、いろいろ試みられていたはずであ じめていたであろうし、その受容のしかたについての模索も、当時の先進的な 文化が進み、古墳時代に入るころには、文字の機能についての関心がもたれは わが国がこの漢字文化に接したのは、かなり古い時代のことであろう。農耕 かなりの期間を必要とした。それは漢字漢語をそのままにとり入れるの 漢字をわが国のことばに適応するものとして、いわば国語化の方法を

いる。〔万葉集〕の中でも、〔柿本人麻呂歌集〕の表記にみられる、あの簡潔に 成果は、〔万葉集〕のあの絢爛たる表記のしかたのうちに、遺憾なく示されて て、はじめて国語に奉仕しうるものとなった。長い試用の時代を過ぎて、その 漢字は、その音のみでなく、その訳語である訓をあわせ用いることによっ

字統の編集について

原音とは必ずしも同じでない。漢字の音は、国語としての音である。 り、国字である。この書では、国字としての漢字という立場をいっそう明らか 字漢語が国語化され、その音訓が用いられている。漢字はわが国では、はやく が国で選択され、国語の音韻と調和する関係において固定したものであって、 にするために、文字の配列を五十音順とした。漢字に与えられている音は、わ からすでに国字であった。国語として用いるかぎり、漢語といえども国語であ はそれが知識人の一般の教養でもあった。国語そのもののうちにも、 たわけである。さらには、漢字をもって詩文を作ることも行なわれ、江戸期に によむことができた。漢籍はすべて、この方法によって、 と、反読法という文法的な克服によって、わが国の知識人たちは、漢籍を自由 着したことを示している。そして平安朝以後には、その国語化した漢字の知識 して自在な表記力は、漢字がすでに完全に国語化して、国字としてわが国に定 いわば国語領域化し 多くの漢

は、すべてこの二点を原則として、そこから出発しているからである。 して国語の表記に用いられる限りにおいて、それは国字に外ならぬものである この二点を、まずこの書の綱領としてあげておきたい。編集上の用意 その文化の歴史的な展開のなかでみること、漢字は、その音訓を通

字源の研究について

後漢の許慎の〔説文解字〕(以下略して〔説文〕という)にも、実に誤りが多った。 きゃんきょ 画的な方法によるものであり、その図象の理解は、もともと困難なものではな はもとより、音を示すときにも、その象形字を仮りて、その音を声符として用 いのである。 いはずである。しかしそれにもかかわらず、従来の漢字の字源説には、疑わし いるのであるから、基本字はすべて象形文字であった。象形文字は、いわば絵 漢字は象形文字である。事物を示すときには、象形的方法を基本とすること ところが多い。字形学的な字書として唯一のものであり、その聖典とされる

せて、告げ訴える形というような説明がある。天地人三才を貫くものが王でたとえば、王一上は天地人三才を貫くもの、告二上とは、牛が人に口をすり

資料を手にすることができるのである。 はあたかも紀元一○○年であるから、文字が成立してから約一五○○年を経て 金文の便化した古文若干が主たるものであった。許慎が〔説文〕を完成したのが資料としたものは、古い金文の構造をいくらか伝えるところのある秦篆と、 文字の最古の資料である甲骨文は、まだ地下深く埋もれたままであった。許慎 て簡単な銘文をもつ彝器が出土しても、その解読に大騒ぎするような状態で、 的には、古い文字資料の不足に帰すべきことであった。許慎の時代には、極め あるというのは、漢代の天人合一の思想による思弁的な解釈にすぎず、 にすぎない。われわれはいま、その最初の一○○○年間の、確実にして豊富な いる。そして許慎が用いることのできた資料は、その最後の五○○年間のもの いての知識の不足を、思弁や推測で補おうとすることから生れたもので、基本 の字説は、あまりにも稚拙にすぎる。このような字説の誤りは、字の初形につ また告

見るをえなかったものである。 附録の未釈異体の字二九四九字に達する。これらの資料は、先人たちがすべて ことである。殷墟の安陽小屯の遺址が発見されて、組織的な発掘も行なわ 万片が著録されている。字数は〔甲骨文編〕の正編に録するもの一七二三字、 た。最近にその総集として編纂されている〔甲骨文合集〕既刊+三冊には、約四 文字の最も古い資料である甲骨文が紹介されたのは、今世紀に入ってからの

すなわち文字学者のうちには、段玉 裁のように金文を無視して顧みないもの図〕などの著録の類も出て、一時その研究も盛んであったが、清代の小学家、金文は、宋代に各地の開発が行なわれて桑器の出土も多く、〔考古図〕 [博古 について、いいうることである。 方法を、綜合的に適用する必要があり、そのことが自覚されない限り、文字学 由さを失っている。もっとも、古代文字の研究には、古代学的な文化諸科学の の信条であった。説文学の伝統の強い中国では、かえって古代文字の研究が自 が多く、民国初年の章炳麟なども、彜銘は偽作、信ずべからずというのがそ は単なる謎解きに終るであろう。これは内外を通じて、文字の起原的研究一般

甲骨文・金文の字形によっていえば、王は玉戚の刃部の形で、 玉座の儀器

明されることを要するのである。 に及ぶ載書関係の字群によって証明される。字源は体系的に、字群によって証 告は木の枝につけた祝詞で、神に祈る祝禱の意である。王が儀器であること 父(斧)・士(王の小型)がみなその地位・身分の象徴的儀器の形である また告が載書とよばれる祝詞の形であることは、いを要素とする数十字

配列法がなくて、以後「康熙字典」に至るまで、 その字形学は随処に破綻をみせている。しかしこれに代るべき文字の統属法、 ではない。〔説文〕の部首には、このように部首としがたいものがかなり多く、 が、のちに字形上それぞれ直線化したもので、四字いずれも、本来一に従う字 天・丕・吏の四字を属するが、元・天の一は頭の形で○、丕の一は花萼に実が つきはじめる形で肥点の●、吏の上部は祝禱を枝につける形で、枝の丫の形 では多く出土している。〔説文〕は巻首に「一」を部首とし、その部に元・ である王の上部に、玉飾を加えてその煌輝を示す字で、そのような遺器がいま 字で、壬に余分の意があり、その形声の字とみられ、また皇は玉戚の刃部の形字で、壬に余分の意があり、その形声の字とみられ、また皇は玉戚の刃部の 王として天下を治めた三皇の皇を意味すると説く。しかし閨はおそらく壬声の る。たとえば王の部には閏と皇とを属し、閏どは閏月に王は門に居る意である部首を建てて、それに属する字を、部首字によって説くという方法をとってい 〔説文〕は、当時行なわれていた九三五三字を、五四○部に分ち、それぞれ もと皇に作る形で、自は鼻の形で始の意であるから、 この部首法が用いられた。

表現という意識が加えられている。しかし明・清以来、文字の検索の必要上、字的表現という意味をもつものであった。部中の字の配列にも、一定の秩序の字的表現という意味をもつものであった。部中の字の配列にも、一定の秩序の など分化の極である亥に終るもので、当時の陰陽五行思想による世界観の、 には一定の原則があり、それは太始化成の元である一にはじまり、十干十二支 首の配列も、部中の字の配列も、すべて画数順となった。〔説文〕の部首配列 法によったが、のち次第に整理されて、「康熙字典」では二一四部となり、部 〔説文〕ののち、晋の呂忱の〔字林〕、梁の顧野王の〔玉篇〕などはその部首

丏・丑・且・世・丘・丙・西・丞・系・丣・並・壼の諸字を録する。圏点をつ[康熙字典]の「一」部には、丁・丂・七・万・丈・三・上・下・丌・不・部首法がとられ、本来の精神を没して、その形式だけが残されている。

る。意味を失っている記号である。 分属配列されている。そこにあるものはすでに文字ではなく、文字の形であ 的な原理から離れ、その構造的な意味も捨てられて、ただ筆画の形式によって けたものは、〔説文〕において別に部首とされていた字である。字はその構造

が知られており、あるいは類推によって容易に知りうるものである。 その方法を採用した。本書所収の六八○○余字の大部分は、国語としてその音 る本書の立場からは、当然五十音配列の方法をとるべきであるから、本書では の漢字を扱う上からいっても、必ずしも適当な形式ではない。近年では中国で 踏襲している。この部首法は、韻別字書を不便とすることから、一種の便法と して中国で用いられているものに、いわば追随しているにすぎず、 わが国の現行の字書は、〔大漢和辭典〕をはじめ、ほとんどがこの部首法を 発音による配列法が行なわれようとする傾向にある。漢字を国字国語とす 国語として

六書について

化しうる性質のものをいう。会意は、象形的に独立する文字を複合し、新し り」とあって、場所的関係を指示するものであるが、上下・本末のように一般 本的な造字法である。指事は「視て識る可く、察して意を見はす。 隨つて詰詘す。日月是なり」というように絵画的な方法によるもので、 質はみな同じである。このうち象形は、〔説文叙〕に「その物を畫成 事・象意・象声・転注・仮借の六をあげており、その名と順位は異なるが、 に象形・会意・転注・処事・仮借・諧声、また〔漢書、芸文志〕に象形・象に指事・象形・形声・会意・転注・仮借の六をあげ、[周礼]の〔鄭司農注〕に指す・象形・形声・会意・転注・仮借の六をあげ、[周礼]の〔鄭司農注〕(東京の構造法について、古くから六書ということが説かれている。〔説文叙〕漢字の構造法について、古くから六書ということが説かれている。〔説文叙〕 上下是な Ļ 最も基 體に

字表記の方法であり、完全に表意文字である。とお情成であることを特質とする。以上の象形・指事・会意は、形による文による構成であることを特質とする。文字の要素が声の関係をもたず、意味的な結合はす。武信是なり」という。武は〔説文〕によると戈(武力)を止めるもの、観念を示すもので、〔説文叙〕に「類をないば(義)を合はせ、以て指摘を見る観念を示すもので、〔説文叙〕に「類をないば(義)を合はせ、以て指摘を見る

節全体を、その文字は約束として示す。それで一定の音をもつ文字を、形声字 音節を分解的にでなく、単音節語である中国語に最もふさわしく、単音節の音 な一定の音をもつものであるから、それはそのまま表音記号でありうる。ただ 声義をもつものであるから、これを声符として用いるときには、その字義を限 譬とは声符として他の字を借ることである。声符の字はそれぞれ本字としての の声符として用いることができる。〔説文叙〕に「形聲とは、事を以て名と爲 その意を含めて工の字が選択されているといえよう。ただこのことは語源の問 ば工は工具の形であるが、それは杠・虹のように横に湾曲する形をいう語で、 このばあい、声符にすぎず、その本来の意味を棄てたものとして扱われる。尤 れの範疇を限定符的に用いて、 定するための範疇を示す必要がある。山川草木・鳥魚虫獣などの名は、それぞ 題にも連なるものであるから、文字学的な方法だけで把握しうる性質のもので 源的な意味の関連を以て、声符とする字が選択されていることもある。たとえ しかし表意文字といっても、音をもたないのでなく、その形によって固定的 音が何らの意味をも伴わないことはありえぬことであるから、そこには語 譬を取りて相成す。江河是なり」というもので、事とはその属する範疇、 たとえば水ならば江河のようにいう。 工・可は

し」とは、形によって表示しがたいもの、たとえば代名詞・助詞あるいは否定に「本その字無く、聲に依りて事を託す。令長是なり」という。「本その字無であるから、いわば文字の二次的使用法ともみられるものである。「説文叙」については、その理解のしかたに異説があり、これを文字の用義法とする説がについては、その理解のしかたに異説があり、これを文字の用義法とする説がについては、その理解のしかたに異説があり、これを文字の用義法とする説がについては、形によって表示しがたいもの、たとえば代名詞・助詞あるいは否定に、本

きである。

までよる。

まである。

で大きを「造字の本なり」とするのは、その意味において正しいとすべた仮借によって成立する字であるから、これもまた造字法である。〔漢書、芸に仮借は、文字の構成原理を説くものでなく、いわば用義法の問題としまさと、

大書法についての一般的な理解のしかたは、右に述べたが、それを具体的に 、家に従う形であるが、この豕は犬性を意味する。犬性を以て配る配所を家という。家はいま家に従う形であるが、もと女に従う字で、これも犬性である。家に従う形であるが、この豕は犬性を意味する。犬性を以て配る配所を家という。家はいま家に従う形であるが、もと女に従う字で、これも犬性である。家に従う形であるが、この豕は犬性を意味する。犬性を以て配る配所を家という。家はいま家に従う形であるが、もと女に従う字で、これも犬性である。家にはもと廟の建物を意味し、犬性を埋めて奠基とした。これらの字は、同じく家・家に従うも、それぞれ異なる意味が与えられている。

う。説解中にいう全体象形とは、この種のものをいう。 のを加えたものである。フに刃(刃)部を加えたものは刃、双刃のときは刃となる。これらの附加物は指事的な意味のものである。丸は弓の弦に、弾丸を示する。これらの附加物は指事的な意味のものである。丸は弓の弦に、弾丸を示する。されらの附加物は指事的な意味のものである。丸は弓の弦に、弾丸を示するとはない。象形字にこのような附加的要素をもつとき、これを全体象形という。説解中にいう全体象形とは、この種のものをいう。

り、かつ抽象的に一般化しうるものであることをいう。たとえば、上は掌上にすることを主とする。関係的というのは、空間的また時間的ということであだ「察する」ことを必要とするもので、象形的な方法によって、関係的に表示指事は「視て識るべく、察して意を見はす」もので、象形と極めて近い。た

会意は文字の複合したものであるから、説解にはたとえば「安、一と女とに会を加えることによって掌の上下を示すが、上下一般の意に用いる。その造字点を加えることによって掌の上下と同じく、のちには空間にも、また時間にも用いるが、前はもと爪を剪ること、後は道路における呪儀を示し、ともにその造字法は会意であるから、これは指事とはしがたい。また豕・刃・丸は、それぞ字法は会意であるから、これは指事とはしがたい。また豕・刃・丸は、それぞ字法は会意であるから、これは指事とはしがたい。また豕・刃・丸は、それぞ字法は会意であるから、これに属する字は極めて少なく、むしろ象形の一部として扱うべきであろうが、本書では一応、指事の名を用いた。全意は文字の後合したものであるから、説解にはたとえば「安、一と女とに会が、前はもとが、上下一般の意に用いる。その造字点を加えたもの、下は掌を臥せてものを覆う形で、象形的には掌の上下に小小点を加えたもの、下は掌を臥せてものを覆う形で、象形的には掌の上下に小小点を加えたもの、下は掌を臥むさいる。

でなく、 敗の形、 構成をとるかという、 ころがなく、その差は、その声義を兼ねる字が限定符に従うか、 る。 姿をいい、神に薦めるものをいう。択の旧字は擇であるが、睪は獣屍の象で殬宯は巽であるが、巽は神殿の舞台で二人並んで舞うことを示す字で、もと舞う とき、語との意味的関連が考慮されていることが多い。たとえば選(選)の正 符を加えたものである。声符とする字は同声の中から選ばれるが、その選択 もう一度項を改めて述べよう。 形声は、山水鳥魚のようにその範疇を限定符的に示すものに、語としての声 会意にして亦声たるものと、形声にして亦声たるものとは、殆ど異なると 字の声義はむしろその声符のうちにある。それでこれもまた亦声であ それを択びとる意がある。巽や睪は無意的に声符として択ばれたもの 極めて微妙な問題に属している。この問題については、 会意としての 0

であるから、これについても別項に述べる。転注は、いわば意符系列による文字の体系で、部首法と原則を異にするもの

って有無の無となるように、すべて本義を失って、仮借義に専用されるものをに、於(死んだ鳥の羽)がその本義を失って介詞に、無(舞)がその本義を失また仮借は、単なる通用の関係でなく、我(鋸)がその本義を失って代名詞

さす。従ってその字は、指事と同じく極めて少数である。

会意と刑声

とみるか声符とするかによって定まる。声との区別のうちにある。字を会意とするか形声とするかは、字の要素を意符声との区別のうちにある。字を会意とするか形声とするかに、字の要素を意符会意にして亦声たるものと、形声にして亦声たるものとの区別は、会意と形

表意における文字要素の結合はいわば相関的なものであり、形声における文字要素の結合は、いわば指事的である。たとえば高を要素とする字において、字要素の結合は、いわば指事的である。たとえば高を要素とする字において、字要素の結合は、いわば指事的である。たとえば高を要素とする字において、字形には省略がある。このように字形に省略がある。このように字形に省略がある。このように字形に省略がある。このように字形に省略がある。これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字でよまれるとき、これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字でよまれるとき、これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字でよまれるとき、これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字でよまれるとき、これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字でままれるとき、これを省声という。蹇は省声であるが、同時にまた亦声の字である。省声は亦声の特殊な場合とみてよい。

会意にして水声であることは、会意字がもともと声と無関係に構成されるとされるのである。

があり、それらは字形上、形声とすべき字である。いずれも甲骨文・金文にみであったという関係のものが多い。たとえば示部に、社・神・祖・祝・禘の字形声にして亦声を兼ねる字の成立には、もと声符である字が、その字の初文

ら、厳密にいえばこれらは本来の形声字ではなく、形声化した字である。 前に象形字として存したものに、あとから限定符が加えられたものであるか ものであった。 は祝禱の禱を収める器である当を戴く人で、長兄たるものは家の神事を司るはない。字の初形からいえば、土・申・且・帝は象形、且はおそらく仮惜、兄はない。 事を示す限定符として用いるのであって、それを行為の場所として用いるので 法が要求されるようになって、示を加えた。示は祭卓の形であるが、それを神 示した。これらの土・申・且・兄・帝が、のち多義化して、その本義を示す方 に用いるときには、亲(帝)に対して栄(禘)のように祭卓の足に枠を加えて ものとされた。且は俎、薦俎して祭る意のある字である。兄は祝詞を奏する 字である。 義化によって、形声字としてその限定された本義を示したのである。形声字以 人。祝の意に用いるときは、兄の前に出した袖に袖飾りを加えている。 えるが、その字はもと土・申・且・兄・帝に作り、示に従うものはみな後起の 土は土主の形。そこで地霊を祀った。申は電光、天神の霊威を示す 社・神の初文はもと象形字として存しており、のち土・申の多 帝を禘

のが多く、その声符に字形上の意味を求めうるものは殆どない。河・汝・洹のような川の名などである。鳥獣虫魚の類にはその土音を写したも金文には、形声の字が少なく、最も多くみえるのは姫・妌・姜のような姓、本来の形声字は、名詞、特に固有名詞としてまずあらわれてくる。甲骨文・本来の形声字は、名詞、特に固有名詞としてまずあらわれてくる。甲骨文・

字源と語源

字の成立した基盤をなす社会と文化、その時代の人々の生活とその意識のなか字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありえない。それはただ字形の解釈についてのみいうのではなく、文字形学はありませい。

は、またのちに述べる。化的所産であるという立場において、理解すべきである。そのことについて化的所産であるという立場において、理解すべきである。そのことについて化的所産であるという立場においてである。これでのみ、字形についての真の理解に達しうるという意味においてである。これでのみ、字形についての真の理解に達しうるという意味においてである。これ

古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈 古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈 古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈 古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈 古い文字資料によって考えると、いまの字形によって草卒に下される解釈

源的な説明を、語源的な解説と誤解されないように望みたい。ともに影母とよばれ安と宴との間には、語源的な関係があるかも知れない。ともに影母とはおそのではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源のではない。しかし字源を通してのみ、語源への探求が可能となる。ただ字源的な説明を、語源的な解説と誤解されないように望みたい。ともに影母とよばれ安と宴との間には、語源的な関係があるかも知れない。ともに影母とよばれ安と宴との間には、語源的な関係があるかも知れない。ともに影母とよばれ安と宴との間には、語源的な関係があるかも知れない。ともに影母とよばれるとない。

して適用しようとした章炳麟の字説には、破綻が多い。章氏のような考えかたを、これによって多く解決しえたからである。しかしこれを語源学にまで拡大を、これによって大きな収穫をあげた。古典の文献にみえる通用仮借の例である。その説は訓詁学の上ではまさに正しい一つの原則であり、また王氏の「臀近ければ義近し」というのは、清の訓詁学の大成者であった芸念孫の主張「臀近ければ義近し」というのは、清の訓詁学の大成者であった芸念孫の主張

は近いとしても、語としては何らの共通義をも持つものではない。 対い、単語家族説として、七とは「中にたっぷり入れこんでふくれる」「男とは入南を一家族語として、壬とは「中にたっぷり入れこんでふくれる」「男とは入南を一家族語として、壬とは「中にたっぷり入れこんでふくれる」「男とは入南を一家族語として、壬とは「中にたっぷり入れこんでふくれる」「男とは入京とは、南は霜よけ」で、「苗を両側からおおう囲いの姿」のように解する。共通義は「たっぷり入れこんでふくれる」「男とは入南を一家族語として、七とは「中にたっぷり入れこんでふくれる」「男とは入京、東・諸家族説として、わが国でも主張されたことがある。たとえば光・紫・が、単語家族説として、わが国でも主張されたことがある。たとえば光・紫・が、単語家族説として、わが国でも主張されたことがある。たとえば光・紫・が、単語家族説として、わが国でも主張されたことがある。たとえば光・紫・が、単語家族説として、わが国でも主張されたことがある。たとえば光・紫・が、単語家族説として、わが国でも大きないる。

- □三三頁○枯(草木が枯れる) 涸(水が涸れる) 竭(尽きる) 渇(口がかわく)
- き) 淤(水が流れない) 抑(おさえる) 圧(おさえる)四七頁き) 淤(水が流れない) 抑(おさえる) 塩(つつみ) 堰(せき)

まず字形学的にその字源を把握することが、基本でなければならない。悪ず字形学的にその字源を把握することが、基本でなければならない。たとえば右にあげた二条においても、古は固閉した祝禱の意で、古くからに承されている前例古式を原義とし、涸渇の意はその二次的な転義であり、派生義である。また曷は匄(屍骨)に祝禱(日)を加えて、その呪霊を喝して邪生義である。また曷は匄(屍骨)に祝禱(日)を加えて、その呪霊を喝して邪生義である。また曷は匄(屍骨)に祝禱(日)を加えて、その呪霊を喝して邪生義である。ゆえに古・固はその系列字において、まずその系列字の原義とするもので、曷に従う諸字は、すべてその声義を承けている。ゆえに古・固はその系列字において、まず字形学的にその字源を把握することが、基本でなければならない。

漢字は、その語としての音節を示す約束をもっている。それが字音である。 することが不可能であり、そのため語を字形で示す漢字が生れた。それぞれの 中国語は単音節語であるから、その語は、子音と母音との一回的結合より成 語がそのように単純な音構造であるため、これを表音文字で分節的に表記

は、 がある。この紐を代表するものは深で、この一類は渓紐とよばれ、代表字を字がある。この紐の代表字として見が用いられ、見を声母として見母という。またkる。この紐の代表字として見が用いられ、見を声母として見母という。またkて、紐という。加・甲・各・可・古・干・九・公などは、すべてこの紐に属すて、紐という。加・甲・各・可・古・干・九・公などは、すべてこの紐に属す て、紐という。加・甲・各・可・古・干・九・公などは、すべてこの紐に属すくよを声母とする字は、約四〇〇字に及んでいる。そこに属する字を一類とし を含む語尾の部分 uan を韻母という。官の語頭音はkであるが、これと同じ 字音は音節より成る。官の音節は kuan, 語頭の子音kを声母といい、母音

行なわれたものとされ、次の三十六字母が設けられた。 記号を表示しておく (付表参照)。

三十六字母は、唐宋期の音韻組織を示すものであるが、古代の声母、 いわゆ

> (宙)・道用 声母となる。王力氏の古声母表を録しておく と異なるところがある。上古の声母は、のちの分化したものを除くと、三十二 る古紐は必ずしもこれと同じでない。たとえば古紐には重脣・軽脣の区別がなる古紐は必ずしもこれと同じでない。たとえば古紐には重脣・軽脣の区別がな 兼(廉)などによって知られる語頭子音の複合があり、のちの音韻組織 たとえば各(洛)・

影 匣(中古匣・喩3)

見 渓 疑

泥•娘) 褝 端(中古端・知) 透(中古透・徹) 定(中古定・澄) 日 来 余 (喩4) 章 (照3) 昌 (穿3) 船 (床3) 書(審3) 泥(中古

歯音 従 ıÙ. 邪 荘(照2) 初(穿2) 崇(牀2) 山(審

唇音 幫(中古幫・非) 滂(中古滂・敷) 並(中古並・奉) 明(中古

ている。 著しい進展によって、声母の名称や音価について、新しい研究が多く提出され のことである。声母のたてかたは古くは「韻鏡」によったが、今では音韻学の 表中の数字は等呼、〔韻鏡〕にいう二等音(イ)・三等音(ウ)・四等音(ユ)

発音部位	声	音標記							
莅	母	咢							
牙	見	k							
牙音(溪	k'							
舌根	羣	g'							
5	疑	ŋ							
	端	t							
舌	透	t'							
頭	定	d'							
	泥	n							
	知	ţ.							
舌	徹	\$ '							
面	澄	đ ,							
	娘	nj							
	幇	р							
重	滂	p'							
脣	並	b'							
	明	m							
	非	f							
軽	敷	f'							
脣	奉	v'							
	微	m							
	精	ts							
歯	清	ts'							
頭	從	dz'							
矣	心	s							
	邪	z							
	照	tş' tç							
	穿	tş', tç							
正蜜	牀	dz', dz'							
捲	審	ş, ç							
舌と	禪	Z,							
舌面	影								
m	(曉)	h							
	(匣)	<u></u> 6							
喉 音	喩								
	曉	x							
舌 根	甲								
舌 根	來	Y 1							

果、王念孫の二一部説が古韻の実際によく適合するものとして、王国維はその段玉裁・戴震・銭大昕・孔広森・王念孫・江有誥らの名家が輩出した。その結れ、その研究は、清代考証学の重要な一領域とされ、顧炎武をはじめ、江永・辞」の押韻例によると、ほぼ三〇部前後とみられる。古代の音韻を古韻とい辞〕の押韻例によると、ほぼ三〇部前後とみられる。古代の音韻を古韻とい辞」の押韻例によると、ほぼ三〇部前後とみられる。古代の音韻を古韻とい辞』の押韻例によると、ほぼ三〇部前後とみられる。古代の音韻を古韻とい辞。 われる。その分韻は二九部、陰・入・陽の三声に分って表示されている。意味で、王力氏の試みている〔詩経韻読〕の分韻を一応の準拠としてよいと思意味で、王力氏の試みている〔詩経韻読〕の分韻を一応の準拠としてよいと思 詩篇などの押韻例と、さらにそれを組織する音韻史的研究を必要とする。その 多く加えたが、金文には類型的な文が多く、古韻の全体を明らかにするには、 分部によって金文の韻読を試みている。私もその分部によって金文の韻読例を 元のとき一韻を減じた一〇六韻の分部である。古代の音韻は、〔詩経〕や〔楚 韻に分ったが、 ong, 天 thyen においては yen が韻である。隋の陸法言の〔切韻〕は二〇六音節の母音より以下、韻尾までを含めて、韻という。東 tong においては いま作詩に用いられるものは、南宋の劉淵の一〇七韻、また

əi

陰 声 幽いま 2 3 候魚 4 5 6 (脂徴歌

声 ək uk ôk ok ak ek 7 et ət at əp 8 9

入 11 覚 薬屋鐸 12 13 ong ang 14 eng 錫醬 15 en ən 16 質ら 17 物が 18 月ば an əm am 19 絹よ 20 盍"

陽 声 23 陽等 24 耕等 25 真炭 26 文炭 27 元烷 28 侵火 29 談差

右の表を王念孫の二十一部に比較すると、陰声・陽声には大差がなく、 字統の編集について

入声に

て分出するもので、〔楚辞〕の分韻は三○部となる。 おいて緝・盍のほかに九韻を加えている。また冬部は、〔楚辞〕の押韻に至っ

ち陰入対転である。 錫、脂・質の韻は相互に通用することがある。この関係を対転という。すなわ となるものがある。すなわち之・職、幽・覚、 は昭mmなど鼻声で終るものであるが、陰・入の音の間に、 陰声は母音で終るもの、入声はktp(f)のように子音で終るもの、 宵・薬、侯・屋、魚・鐸、支・ 一定の関係で通韻

真・質、元・月、談・盍が対転の関係にある。 之・蒸、侯・東、微・文、歌・元がそれである。また陽声と入声との間では また陰声と陽声との間にも、いわゆる陰陽対転の関係をもつものがあり、

声、職・緝、鐸・盍、物・緝は入声である。そのほかにも、韻尾が同じである幽、幽・宵、幽・侯、之・魚は陰声、蒸・侵、陽・談、陽・元、耕・真は陽 (入)、屋・覚(入)、質・月(入)、緝・盍(入)が合韻となることがある。 ときには、脂・微(陰)、脂・歌(陰)、真・文(陽)、真・元(陽)、職・覚 く陰声あるいは陽声などの間に通韻の関係があることを、旁転という。之・ 対転は陰・入・陽の声の異なるものの間における通韻の関係であるが、同じ

わゆる対待語の成立にも関係があり、遠く語源の成立にまで連なるものとも思 陽・古今・生死・疾徐・精粗・加減・燥湿・夫婦・規矩・褒貶・上下など、 どは畳韻の語である。このような語は必ずしも特殊なものでなく、天地・陰 中国語は単音節語であるから、二字連ねて語を作ることが多い。そのとき同

史研究によってえられた諸法則が、原理的にほぼ適用しうるという関係もあっ 古紐や古韻の研究は、西洋の言語学・音韻学がとり入れられ、殊にその音韻

なかで、最も古い時期のものであることが明らかになった。その結果、わが国の国語として残されている字音が、いま残されているもののて、カールグレンがその方法を開いてから、急速な進展をみせている。そして

の用例のみえるものである。
いう。この二字表記のものは、みな一字に対する反切音にあたり、先秦にそにいう。この二字表記のものは、みな一字に対する反切音にあたり、先秦にそ孟、之於を諸に約することがあり、また鄒は邾婁、飈は扶搖、夢を孟浪のよう諡、之於を諸に約することがあり、まれで而已を耳、何不を語音の分節は古くから知られていることであり、それで而已を耳、何不を

で、大きない。 「切韻」とよばれた。梁の顧野王が編した〔玉篇〕は、「説文〕の体例による部「切韻」とよばれた。梁の顧野王が編した〔玉篇〕は、「説文〕の体例による部(作られ、敦煌出土のものに数種の残巻を存するが、そのうち隋の陸法言の編した〔切韻〕は、わが国にも早く将来されている。また〔切韻〕系統の韻書も多した〔切韻〕は、わが国にも早く将来されている。『玉篇』の反切は、空海のした〔切韻〕は、わが国にも早く将来されている。『玉篇』の反切は、空海のした〔切韻〕は、わが国にも早く将来されている。また〔切韻〕系統の韻書も多いた〔切韻〕は、わが国における漢字が失われたいまも、その大体を知ることができるし、また〔切韻〕も、深にあたわれたいまも、その大体を知ることができるし、また〔切韻〕も、深にあたわれたいまも、その大体を知ることができるし、また〔切韻〕も、深にあった。『独立の長』は、本語の大部の長』といる。これらが、わが国における漢字音の基礎をなした。

五世紀後半とみられる稲荷山古墳の鉄剣銘は、漢文形式の文中に、乎獲居・

実なものであったことが知られる。
まなものであったことが知られる。
まなものであったことが知られる。
という方法は、すでに一般的なものであった。その時期の字音仮名別でするという方法は、すでに一般的なものであった。その時期の字音仮名別でするという方法は、すでに一般的なものであった。その時期の字音仮名期仮名の由来するところを知ることができる。その字音には、大矢透が〔周代期仮名の由来するところを知ることができる。その字音には、大矢透が〔周代期で名の由来するところを知ることができる。その字音には、大矢透が〔周代財で名の由来するところを知ることができる。その字音には、大矢透が〔周代財で名の由来するとの方法に、一般的字音にあるということができる。その字音には、大矢透が〔周代書音に対応するということができる。その字音には、大矢透が〔周代書音に対応するというというというというというには、

わが国の漢字音は、仏典や経籍の誦読による慣習音のほかは、〔篆隷万象名や文変化するのは元以後のことで、それ以後、入声音の韻尾 t・k・f が失わたく変化するのは元以後のことで、それ以後、入声音の韻尾 t・k・f が失われている。

TQ.

文字学の資料

著録である劉轶雲の〔鉄雲蔵亀〕が出てから、約八十年になる。その間に多が大量に発見されており、当時の文字の全体を知ることができる。その最初の資料である殷王朝の甲骨文(文字としては卜文、文章としては卜辞という)の資料である殷王朝の甲骨文(文字ととはよう、文章としては卜辞という)文字の字形学的な研究は、まず文字形成期における文字資料によって、その文字の字形学的な研究は、まず文字形成期における文字資料によって、その文字の字形学的な研究は、まず文字形成期における文字資料によって、その文字の字形学的な研究は、まず文字形成期における文字資料によって、その文字の字形学的な研究は、まず文字形成期における文字資料によって、その

別編成がなされ、〔甲骨文合集〕資料編十数冊の刊行が進められている。う高められた。近年中国では、胡厚宣氏の主編によって、その時期区分と事項版が出土し、「小屯」四巨冊が刊行されるに及んで、その資料的価値はいっそ版の書が出されたが、殊に殷城小屯の発掘調査によって大量の完全な亀くの著録の書が出されたが、殊に殷城小屯の発掘調査によって大量の完全な亀

字五六七字、存疑一三六字、ほぼ従来の字説をみることができる。 考釈をはじめ、諸家の字説を集成している。正文一〇六二字、「説文」未収のものに李孝定氏の〔甲骨文字集釈〕 - 九六五があり、著録類に加えられているものに李孝定氏の〔甲骨文字集釈〕 - 九六五があり、著録類に加えられているがあるが、その収録字数はともに前者に及ばない。また甲骨文編〕 - 九九五九次の「甲骨文編」 - 九九五九次の「甲骨文編」 - 九九五九次の「甲骨文編」 - 九九五九次の「甲骨文編」 - 九九五九次五があり、

には例のないことであろう。 明の資料が、これほど豊富に、その全時期にわたって存するということは、他期の資料が、これほど豊富に、その全時期にわたって存するとができる。文字形成ら、次第に字形化されてゆく過程の終始を、追跡することができる。文字形成ら、次第に字形化されてゆく過程の終始を、追跡することができる。文字形成なべきものもある。たとえば王や才(在)の字形などは、その象形的な初形かる、きれに置文であり、断片も多くて、その用義を確かめがたいものがある。しかしては例のないことであろう。

金文の資料も、時期的に古いものは甲骨文と並行して存する。たとえば近年金文の資料も、時期的に古いものは甲骨文と並行して存する。たとえば近年の後の出土器もかなりの数に達しており、そのうち重要な銘文をもつものもあめる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録しる。それらは概ね私の〔金文通釈〕(白鶴美術館誌として分冊発行)に収録している。

正編一八九四字、附録未釈字一一九九字、合せて三〇九三字を収める。甲骨文金文の字形を収録したものに、容庚氏の〔金文編〕重訂版、一九五九があり、

字形が安定してきているからである。て数えているからであろう。また正編に収める字が金文に多いのは、それだけて数えているからであろう。また正編に収める字が金文に多いのは、それを字数としより字数が減っているのは、甲骨文には異体別構の字が多く、それを字数とし

中骨文・金文を合せて一編とするものに、高號編 [古文字類編] ーカハ〇、平線で達成である。「字形表」は金文の時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列し、さらに盟書・印刻類及び繁文を加えて、字形の形を時期区分を加えて配列しており、されていると、「字形の下である。「字形表」は、徐氏の序によると、「漢語大字典」編纂の準備工作の一として作られたもので、これを古代文字資料とする、大規模を容典の編修が企画されているという。

東字の字形学は、その初形を確かめることからはじまるものであるから、当漢字の字形学は、その初形を確かめることからはじまるものである。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文然古文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであり、漢字文と言文字学となる。古文字学への学問的模索は、近年殊に盛んであるから、当次式としての漢字の字形学は、その初形を確かめることからはじまるものであるから、当次式というでは、まないのであるから、当次式がよりできないらはじまるものであるから、当次式をいうでは、

説を華訳して収めている。 「記をでいる。 「記を実験しており、私の「説文新義」の該当項目全部と、また〔金文通釈〕中の字説を集録したものであるが、続編の八巨冊は、主としてわが国の研究者の字説説を集録したものであるが、続編の八巨冊は、主としてわが国の研究者の字説を集録したものであるが、続編の八巨冊したと、また〔続金文詁林〕近年、『記書記》

わが国の古代文字学

甲骨文・金文の学は、わが国においても早くから注目され、林泰輔が釈文を に書契淵源」五帙一九三七刊成が出された。「古籀篇」は、当時利用することのできた甲骨文・金文資料を網羅し、また「書契淵源」は金文資料によって、それぞれ「説文」の字説に拘束されることのない字形学的な研究を試みたもので、とれ「説文」の字説に拘束されることのない字形学的な研究を試みたもので、とれ「説文」の字説に拘束されることのない字形学的な研究を試みたもので、とれ「説文」の字説に拘束されることのない字形学的な研究を試みたもので、とれて自獲のところがある。この二書は漢文で書かれており、特に「古籀篇」一○○巻は、その大規模な編集と、衆説を徴引している便利さもあって、中国の文字学界に大きな影響を与えた。近時の馬叙倫の大著「説文解字六書疏証」で字学界に大きな影響を与えた。近時の馬叙倫の大著「説文解字六書論正」となった。その花大な著述のうちに、採るべきものはむしろ少ない。その点では、「書契淵源」もまた同断である。

稿本である。私も少しおくれて〔甲骨金文学論叢〕初集「カエートを出して十集冊で刊行され、二十年間に一九冊が出た。のちの〔漢字の起源〕「カセの初戦後五年を経て、加藤常賢博士の〔漢字ノ起原〕が、油印一〇〇ページの小

である。 である。 「白鶴美術館誌」として、第五十六集を出し、なお続刊中までつづけ、またかねて礎稿を用意していた〔金文通釈〕「九六二を季刊で発までつづけ、またかねて礎稿を用意していた〔金文通釈〕「九六二を季刊で発

たもので、字形学的には何の得るところもない。
氏の〔漢字語源辞典〕「九六五が出ているが、その書は書名の通り語源を論じ書契後編釈文稿〕「九六四が詳密な考釈を試みている。字書としては藤堂明保の考釈編「九六〇を、伊藤道治氏が担当して解説し、また池田末利氏の〔殷虚の考釈編「九六〇を、伊藤道治氏が担当して解説し、また池田末利氏の〔殷虚の表釈編「九六〇を、伊藤道治氏が担当して解説し、また池田末利氏の〔殷虚ので、字形学的には何の得るところもない。

このような古代文字学の研究の達成度からみると、わが国の字典類の字説にの研究を無視すべきではなかったであろう。としては、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。それはその編集者たちが、これらの研究には、一般に甚だ貧弱なものである。

研究をとり入れたもので、その拠るところをも明記せず、ときに俗説を交え、に改められている。ただその字説は一見して明らかなように、みだりに他家の近年その要略本というべき〔廣漢和辭典〕が出版され、字説の部分が全面的

い。そこには文字学としての、方法がなくてはならない。ことがなくては、「文を望んで説く」という恣意的な解釈に陥ることを免れな構造には意味的な連関、すなわちそれ自身の体系がある。その体系を理解する著しく体例を失ったものとなっている。漢字は表意字であるから、その字形や

又字学の方法

つけた。それが事で、使の初文である。事はもと祭祀を意味し、大祭を大事とはその意のみに用いられている。外に出て祭るときには、竿の上部に吹流しをはその意のみに用いられている。外に出て祭るときには、竿の上部に吹流しを 字は孤立的なものでなく、 と史と事と使と、これらの字は、その字形において系列をなし、その字義にお り、大きな竿につけてこれを掲げると史となる。史を、のちの人は歴史を意味 を行なうときの、祝詞や盟書を入れる器の形であることは、はじめから諒解さ いて共通するものをもっている。文字の全体は、そのような関係で各自に系列 いった。使とはその祭の使者、他の地に赴いて祭祀を執行するものである。告 する字とするが、当時は家廟に祭る内祭のことを史といった。甲骨文では、史 れていることであった。それで、その器を木の枝の丫に結びつければ告とな 当時、その文字の使用に関与していた人たちにとって、 文字の形には、一定の意味が与えられている。その意味は、文字の成立した またその系列が声義において結合し組織されて、一大体系をなす。 もとより自明のものであった。たとえば、Dは神に祈るとき、 つねにその全体の中においてあるという認識が必要 共通した観念によるも 盟誓 文

> であり、内史・内史尹・作冊内史のようにいう。 私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨全文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五私はそのことを論証するために、かつて〔釈史〕甲骨金文学論叢、初集、一九五

田を祭祀祝禱のときの器とする解釈は、田形を含む文字の全体のみでなく、のである。 のである。 その全体を通じて、田が祝禱の器であることが確定されるのである。 としてその音でよみ、その系列字の字形と声義を論じたものである。また言は、世の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを日という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを日という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを可という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを可という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを可という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを可という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことを可という。また言は、田の上に入墨に用いる辛(針)を加えて神に誓うことが確定されるのである。

月、五典書院主小野楠雄氏の義捐をえて、四○○○ページに近いその全巻を刊す、五典書院主小野楠雄氏の義捐をえて、四○○○ページに近いその全巻を刊文」の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文〕の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文」の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文〕の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文〕の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文〕の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九六九七文〕の全面的な改訂を試みる〔説文新義〕の稿を進め、昭和四四年 - 九五五を書き、祭祀祝冊のば文身関係の系列字をまとめて〔釈文〕論叢、□集、一九五五を書き、祭祀祝冊のば文身関係の主め、日本の主の主のといいとの主の主の主のといいとの主の主のにないとの主を刊まる。そのために私は、たとえて文字は系列化を通じて、その形義が確かめられる。そのために私は、たとえて文字関係の言いといいとの主の主の主の主の主のに、「本書では、「本書では、「記文」の言いとは、「本書では

行したのである。

本は戦後まもなく、「ト辞の本質」 1.72m、「訓詁における思惟の形式について」 1.72m、「帝の観念」 1.72m、「別の族形態」 1.73mのよど、中国古代社会に関する論考を発表したが、それらはいずれも文字学的方法を多く用いている。しかしまだ、文字学の書をまとめるには至らないて」 1.72m、「前話における思惟の形式につ私は戦後まもなく、「ト辞の本質」 1.72m、「訓詁における思惟の形式につれば戦後まもなく、「ト辞の本質」 1.72m、「訓詁における思惟の形式につ

大の型を正当として生きなければならぬという時代を、私は恥ずべきことにて社会に出ることも、社会に出て種々の活動に従うことも、不可能となってた。漢字が生れて以来、どのような時代にも、このように寄聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽ちのうちに新聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽ちのうちに新聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽ちのうちに新聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽ちのうちに新聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽ちのうちに新聞・雑誌をはじめ、文書を主たる対象とするものであったが、忽年一九四九四月に当用漢字字体表をであるに出ることも、社会に出て種々の活動に従うことも、不可能となって社会に出ることも、社会に出て種々の活動に従うことも、不可能となってして社会に出ることも、社会に出て種々の活動に従うことも、不可能となってして社会に出ることも、社会に出て種々の活動に従うことも、不可能となっている。誤りを正当として生きなければならぬという時代を、私は恥ずべきこといる。誤りを正当として生きなければならぬという時代を、私は恥ずべきこといる。誤りを正当として生きなければならぬという時代を、私は恥ずべきこといる。誤りを記する。

Б.

字形の問題

り、それがいまの活字体の源流をなしている。活字体はもと、楷書として最もある。唐代に科挙の制が生れたとき、その用字を正字として定めたことがあ体との区別であって、以前には何ら問題とされることのなかった性質のもので体と内・史・匹・分・月などの字形をみよう。これらはいわゆる活字体と筆記試みに、常用漢字表のなかで、旧字形と異なるものとされる公・及・交・試みに、常用漢字表のなかで、旧字形と異なるものとされる公・及・交・

とになり、徒らに繁重を加えるのみである。ければならぬ理由は、何もない。このような正字化は、無用の区別を設けるこえた字である。点のないものは、夕であった。月中の二横画を左右とも接しな正しい字体であった。月は三日月が実体のあるものとして、その中に小点を加

そのような正字化によって、かえって不統一を招き、字形を誤ることがある。たとえば辛(辛)・音(音)・意(意)・新(新)・親(親)のうち、それぞる。たとえば辛(辛)・音(音)・意(意)・新(新)・親(親)のうち、それぞを含む。辛は細身の刀。入墨のときに用いるもので、墨溜りのあるものは辛を含む。辛は細身の刀。入墨のときに用いるもので、墨溜りのあるものは辛を含む。辛は細身の刀。入墨のときに用いるもので、墨溜りのあるものはい感応する「音なひ」として示される。それを音という。中意はその言に感応する「音なひ」として示される。それを音という。この暗示的な神の感応を、推測することを意といい、騰度する意である。辛・言・音・意は一系の応を、推測することを意といい、騰度する意である。辛・言・帝・意は一系の応を、推測することを意といい、騰度する意である。辛・言・帝・意は一系のでを、推測することを意といい、騰度する意である。辛・言・帝・意は一系の方ち、とれぞる。

このような変改はなかったであろう。

さい大がえらばれる。それを新という。新木で作られた位牌を拝する形を親といい木がえらばれる。それを新という。新木で作られた位牌を拝する形を親といい木がえらばれる。それを新という。新木で作られた位牌を拝する形を親といとがある。それは神意にかなう木であった。死者の位牌を作るとき、その新しとがある。それは神意にかなう木であった。死者の位牌を作るとき、その新しとがある。それは神意にかなう木であった。死者の位牌を作るとき、その新しとがある。それは神意にあり、神事に用いる木には針を投げ、矢を射て木をえらぶことのような変改はなかったであろう。

版築などの建設のときの犬牲、就は京観(アーチ状の門)の落成のときの犬、飲い・黙(默)・器(器)・類(類)・技(抜)・髪(髪)などの字がある。状は一下に犬牲を埋めて墓基とする意。家や家も、その犬牲に従う字である。とは犬の耳で、これによって人の正面形である大と区別したものが多い。この小大の形を含むその系列字であるが、そのうち小点を外したものが多い。この小大の形を含むその系列字であるが、そのうち小点を外したものが多い。この小大の形を含むその系列字であるが、そのうち小点を外したものが多い。この小大の形を含むその系列字であるが、そのうち小点を外したものが多い。この小大の形を含むその表別・数(類)・数(集)・突(突)・戻(戻)・状(狀)・就・献常用字のうちに、犬・伏・臭(臭)・突(突)・戻(戻)・状(狀)・就・献常用字のうちに、犬・伏・臭(臭)・突(突)・戻(戻)・状(狀)・就・献

磔殺された犬牲の形で、祓うことを原義とする字であった。 (穀) や犬牲を供えて拝する祭儀であった。拔・髪に従う字はもと发に作り、(穀) や犬牲を供えて拝する祭儀であった。拔・髪に従う字はもと发に作り、大ある。默とは、そのとき言をタブーとする意を示す。類は天を祀る祭名で、米ある。默とは、そのとき言をタブーとする意を示す。類は天を祀る祭名で、米ある。歌とは、それのとき、牲血で清める繋礼を示す字である。器は明器とし牲、獻は器物の製作のとき、牲血で清める繋礼を示す字である。器は明器とし

や呪儀に用いることは、甲骨文に極めて多くの例をみることができる。出入の要所などには、断首葬や獣牲を用いていることが多い。また犬牲を祭祀出入の要所などには、断首葬や獣牲を用いていることが多い。また建物の前方、の将軍と、犬牲とがともに坑下に埋められている例がある。また建物の前方、は、その玄室の坑下に、人と犬牲とを埋めた。安陽の殷墓には、武装したままは、その玄室の坑下に、人と犬牲とを埋めた。安陽の殷墓には、武装したままは、その玄室の坑下に、人と犬牲と地下に埋めることをいう。尊貴な人の墓室に伏は伏瘞というように、犠牲を地下に埋めることをいう。尊貴な人の墓室に

字形を解釈することは、字形のもつ意味を理解することである。犬・友・字形を解釈することは、字形のもつ意味を理解することである。犬生を元すものであり、その字形構造のなかで、その意味を把握することはできない。古代文字の字形を理解するには、その文字を成立させた社会の生活と習い。古代文字の字形を理解するには、その文字を成立させた社会の生活と習い。古代文字の字形を理解するには、その文字を成立させた社会の生活と習い。古代文字の字形を理解するには、その意味を理解することである。犬・友・字形を解釈することは、字形のもつ意味を理解することである。犬・友・字形を解釈することは、字形のもつ意味を理解することである。犬・友・字形を解釈することは、字形のもつ意味を理解することである。犬・友・

字形の意味

形的に整理された最終の段階のもので、すでにその初形を失っているところがだい。それは「説文」を発どを乗している。しかし資料的には、甲骨文・金文をこそ信ずべきであり、「説文」の依拠した篆文は、古代文字が字に、音韻学に新しい資料に拒絶反応を示している。しかし資料的には、甲たずとするなど、新しい資料に拒絶反応を示している。しかし資料的には、甲たずとするなど、新しい資料に拒絶反応を示している。しかし資料的には、甲たずとするなど、新しい資料に拒絶反応を示している。とかし資料的には、第しい文字学のながあまりにも強く、新しい文字学のなかった。それは「説文」を殆ど経典として扱っており、また章炳麟のよう。たと方法の導入を、容易に許さない状況にあったことも、それは「説文」を持ちます。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

意を見失っている。

よって、明らかであろうと思う。言・音の諸系列)の字、また犬牲による修祓を示す犬・犮・豕系列の字などに言・音の諸系列)の字、また犬牲による修祓を示す犬・犮・豕系列の字などに代学的な用意が必要であることは、すでに述べたJ系列の載書関係(ロ・曰・字形の理解には、字の系列的な把握が必要であること、その字形解釈に、古

る。理由のない変改は誤字に外ならない。際・隨からは工を略し、曆の禾を木に代えるなど、理由のない変改を加えていの字はすべて者の点を削って者とし、舍・害の中央の線を削って舎・害とし、削り、点画を省略することを許さないものがある。いまの常用字には、者系統削り、点画を省略することを許さないものがある。いまの常用字には、者系統

者は祝禱を収めた曰(呪符を入れた器)の上から、木の小枝や土をかけて埋者は祝禱を収めた曰(呪符を入れた器)の上から、末の小枝や土をかけて埋めたが、これを書という。書は書(筆)と者(者)ので、その要所に呪符を埋めたが、これを書という。書は書(筆)と者(者)ので、その要所に呪符を埋めたが、これを書という。書は書(筆)と者(者)の下、その要所に呪符を埋めたが、これを書という。書は書(筆)と者(者)の下、その要所に呪符を埋めたが、これを書という。 オの小枝や土をかけて埋者は祝禱を収めた曰(呪符を入れた器)の上から、木の小枝や土をかけて埋着は祝禱を収めた曰(呪符を入れた器)の上から、木の小枝や土をかけて埋

がたい字である。
おいまの字形である舎・害は、その針先を折り取っていて、舎・害の目的を達しいまの字形である舎・害は、その針にといまの字形である舎・害は、その呪能を捨て害することを示す字である。長把手のある長い針で突き通し、その呪能を捨て害することを示す字である。長を害は、そのような祝禱の機能を失わせるために、祝禱の器である口を、

足かけを刻みこんだ梯の形で、神が天地の間を陟降する神梯である。その降隠は隱が旧字形である。左偏はもと自に作り、甲骨文では阝に作る。円木に

いる。 とはできない。随・堕などもみな神事に関する字であるが、すべて工を削って (尋)となる。尋とは祝詞と呪具とを以て、 何の原則もない。 の隠は、神隠れの呪具である工を奪うているため、神はもはやその姿を隠すこ 工である。 り立たす墜(地)に、神は姿を隠す。その「御身を隱し給ふ」ときの呪具が、 しかし惰だけは工がそのまま残されている。字の要素の省略において、 日をもつ手は右、工をもつ手は左で、この左右を上下に重ねると尋

物乞いの類ではない。古い文献にみえる盗の用義例から考えると、 0 水を注ぎ、罵詈を加えて盟誓を拒否するもの、いわば体制の否定者である。多 にそむき、 いわれる。 くは集団として行動するもので、 を羨む意とした。これは〔説文〕の字説の誤りで、盗は皿中のものを欲する 盗はいま盗と書かれている。「説文」では盗に作り、 魯の実力者陽虎も、亡命するときは盗とよばれた。字形の解釈に 血盟をけがす謀叛人、盟約の破棄者をいう。 次を涎とし、 皿は血盟の盤、それに 盗とは族盟 皿中のも

文字の系列

対応するものであり、その表象としての意味をもっている。 わたって、 日・言・音・意、またこれを音符とし声符とし限定符とする数百の字の全体に 文字はその形によって意味を示し、その系列字は意味的な連関をもってい 日に従うものは、載書関係の字として一系列をなし、それから分化した 一の体系をなす。このような文字の体系は、その時代の意識体系と

もので、 これを神話的に説く資料もあるが、〔呂刑〕篇の成立はおそらく戦国期に下る 文化の諸問題について、その意識面に照射を加えることが可能である。 字学においては、 ば古代における罪悪観、法の起原の問題については、〔書、呂刑〕篇のように、 このような文字の系列と体系とを通じて、 法の起原的な形態についての、具体的な叙述はみられない。しかし文 獄訟関係の字、 罪辜関係の字の系列的な理解によって、 文字学の立場から、 古代の社会や たとえ

僉

(厳)

品

品

区

喿

臨

霝

靈

(霊)

にその問題に接近することができる。

る。罪悪は神に対する汚穢である。それで大祓いのように、 文では廃の義に用いられる。廃棄して祛うのは、罪を汚れと考えるからであ の字が灋である。去は古く玄と書かれたが、去るとは祛うことである。灋も金 と、審判のとき神に宣誓した日の蓋をとり去った口とともに、水にすてる。そ 身が、心の形で加えられる。その字は慶である。敗訴者の羊は、その人(大) 行なわれた実例が記録されている。羊神判の勝者の羊には、神の祝福を示す文 犯罪については羊神判が行なわれた。その方法は〔墨子〕 法の初文は灋とか 祛い清めるのである。 かれる。

凌に含まれる

鳥は解

鳥とよばれる

神羊で、 明鬼〕に、斉の社で これを水に流し捨 重大な

神にささげられるものであった。罪とはその本質において、神に対するもので 河神に妾を献じたことなどがみえる。隷とは穢れや災を移された人で、これも に入墨したものである。これらは本来は神にささげられたもので、甲骨文には するなどの方法をとった。臣・民はいずれも眼睛を傷つけたもの、 て奉仕させた。これらの犯罪者には、辛器で入墨を加え、あるいは眼睛を刺割 死罪にあたるほどでない罪人たちは、神に犠牲としてささげ、 また徒隷とし 童・妾は額

その系列字の一端を左に掲げておく。 編〕は、その方法によるものであった。 解には、この方法によることがむしろ便宜である。先年私の監修した〔漢字類 このような系列字の体系で作ることも可能であり、 文字の系列的な理解に便するために、 文字の全体的理

載書 害 (周) 告 (告) (H) 高 歌 右 吾 召 敔 古 啓 固 (啓 可 各 唐 司 商 谷(俗・ 矞 咎 欲・容 舍 (舎) 害

器 日 嘂 習 (習) 易 沓 魯 歐 (欧 曹 曹 曶 簪 皆 某 習 曆

(暦)

占 (貞

巫祝 〔選〕・撰・饌) 巫 筮 若 兄 匿 如 祝 薁 笑 歎 (吳 難 難 而 令

宗廟 宼 宗 寢 (寝) 客 安 完 祝 冠 寬 (寛) 宥 家 賓 (寳) 宿 容

公 頌 訟

斎 帚 婦) 齌 參 (参) 每 (每) 敏 (敏) 繁 **(繁)** 毒 齊 (音

祭祀 使 吏 祭 祀 有 (有) 宜

聖器 裸鬯 嚴 (厳) 咸 威 侵 **侵** 滅 秘 祲 (秘) 釁 鬱 戒 哉 式 吉 瑿

神梯 限 幾 (幾) 陰 陋 陽 隊 (隊) 陟 降 墜 (墜) 隠(隠) 隓 陼 隙 (隊) 隈 陳 隘 (隔 潾 陵 问 隰

文身 生子 土 彣 名 彦 (彦) 產 (産) 在 廷 者(者、堵) 顔 (顔) 孟 育 (毓) 斐 禁 章 存 坐 棄 彰 封 奭 保 爽 褒 爾 隆 (隆) 蓝

盟誓 凶 矢 兇 文 字 折 嫈 誓 匈 盟(盟) 胸 質 則 (**鼎**) 智 賊 賊

修禊 盜 **盗** 修 贖 滌 契 (契) 先 (約

儀器 聖火 王 火 攸 士 主 $\widehat{\pm}$ 父 尹 変 (叟) 君 前 (前) 宰 侯 變 斀 熒 烖 焂 密 烈 光 炎

粦

(積) 貝 **注**(演) (玉) 易 賞 得 賊 具 (賊) (見 揚 場 賚 碭 黂 瑒 皇 賜 妟 實 旻 玩 寶 弄 (宝 瑱 資

工 左 尋 (尋) 읭 展 差

習 習) 易 霋 旞

神の所在を尋ねる意である。いま

は、その初義の用法を知り、その時代を知ることを要するのである。 盗跖は従者数千人、諸侯もその威を避けたと あった。 字書を、

徒隷 獄訟 臣 獄 民 童 辜 (法 妾 (憲) 宦 去 豎 訊 賢 刵 귮 辟 黥 執 罿 報 鏑 械

俘 奴 隸

死葬 (慎 墓 死 瞋 葬 化 化 久 匛 眞 (真) 顚 塡 瑱 鎭 (鎮)

F 莫 屍 哀 宋 (寂 褱 襄 高 袁 薨

齋

屋 亞 **垂** 罨 遷 (遷) 衰 (衰) 票 喪 展

泛 窆 浮 (浮) 流 氾

(肇)

鬼 畏 異 戴 翼 (翼) 冀 鬽 魃 頫 倛

死霊 高 Ċ 瘞 운 包 曷 喝 (喝) 遏 惕 咼 禍 (禍) 丐 句 局

媚蟲 蔑 眉 媚 敚 微 (微) 敖 傲 徵 (徴)

廫 瞢

道路 道 (道) 導 (導) 路 途 (途) 除 徐

御 御 衞 衒 術 (術)

祭梟 方 敫 徼 邀 竅 竅 邊 (辺) 縣 (県 列 烈

殴打 放 敲 殿 毆 殴 變 (変) 更

呪霊 犬牲 (戻 犬 祟 獄 氰 犮 鮲 隷 拔 獻 (献) (抜 救 穀 伏 攺 猌 突(突) 殺 (殺) 默 (黙) 弑 哭 類(類) **弑** 器 (器) 敷 緋 蛇 厭 蠱 戾

城郭 或 國 邑 **(** 都 (都) 域 城 (城) 衞 (衛) 童 囲 京 郭

軍礼 禾 秝 和 休 厤 曆 (暦) 歷 (歴)

取 聝

自 劇 師 帥 官 館 (館) 追 (追) 遣 (遣) 歸 (帰) 戲 (戯)

農耕 劦 靜 年 (静) 委 辰 農 蓐 稐 加 喜 嘉 台 始 畟 稷 夋 カ

啚 鄙 圖(図)

鳥占 日-白 進 進) 皋 睪 (嬕 鳴 雖 斁 雁 繹 應 (定 鞶 (霸 (覇)) 膺 雝

天象 旦 朝 (朝) 夕 夙 昃 星

굸 (妻) 虹 蜺 申 (神)

無 (舞 乞 羅)

望 望 聞

医術 医 殹 经 醫

齲

樂 (楽) 愈 糜 (療)

兪 可 癒 (癒) 歌 4 謳 諺 詉 警 詩誦 謠 (謡)

てもいうことができる。そして文字のこのような縦横の関係を確かめてゆくこ おいて意味していた意味の領域や相互の関係を、文字はおそらくその関連にお 愈・癒など治癒の字となり、 の義となり、 これを道路の呪儀に用いて、これを以て埋蠱などの禍を除くときは途・除・徐 細い曲刀の形であるが、祝禱の□を貫いてその呪能を害するときは舎となり、 に、またその形や声義において他の系列と関連するものをもつ。たとえば余は いて表示する方法をとっているのであろう。そのことはまた、音の関係におい これらの系列字は、それぞれの系列字において相通ずる意味をもつととも 文字ははじめてその体系をあらわすのである。 これを医療に用いて、膿血を除いて盤(舟)に移すときは兪・ また転じて輸送の意となる。ことばがその本来に

本書の収録字

字にくらべると、 一万字前後を収めるのに対して、それよりやや少ないが、常用漢字の一八五〇 この書にはすべて六八○○余字を収めた。字数としては、一般の中字典が 中国の文献を読むのに必要な基本的な字は、殆どこのうちに含まれ 約四倍に近い字数である。国語の語彙として用いられる字は

ともに約四三五〇、作詩一万八六〇〇首に及ぶ白楽天においても、その字数はにすぎない。下って唐の時代では、李白の詩の字数約三五六〇、杜甫・韓愈は作品の総集で、文字の最も繁多とされるものであるが、その字数は約七〇〇〇 できる。 用の一般的な限度とみられる。〔文選〕は、修辞主義の最も盛行した六朝期のおいても〔内篇〕三七六五、〔外篇〕三五〇二であるから、この程度が文字使 六八、〔韓非子〕二七二九など、議論の宏博を以て知られる〔荘子〕〔荀子〕も二三一七、〔老子〕八〇四、〔荘子〕三一八五、〔管子〕二九〇一、〔荀子〕三六 〔詩〕二八三九、〔書〕一九四三、〔論語〕一三五五、〔孟子〕一八八九、 字数はそれほど多いものではない。 なお三千数百字にすぎない。晋代では、最も博弁とされる葛洪の〔控朴子〕に 程度の文字を駆使しえたことは、〔本朝文粋〕などの詩文によって知ることが 約四六○○前後という。白楽天の詩に親しんだわが国の王朝の人たちも、その 中国の文献には、多くの字が用いられているように考えられ易いが、実際の 試みに先秦の文献の用字概数をあげると、

から、 多数の字は、用いることもないものが多い。ついで魏の〔広雅〕一万八一五一五三字を収めるが、草部・木部・水部・女部・糸部・虫部・金部などに属する 明の〔字彙〕三万三一七九、清の〔康熙字典〕に至って四万二一七四字となる と、また南北の方言分化の傾向を示す。そののち宋の〔広韻〕二万六一九四. 字書ということになれば、使用度に関係なく網羅的に字を録するものである 隋の〔玉篇〕が二万二七二六字に及んでいるのは、六朝期の修辞の極盛 無用の異体俗体字を加えたためで、語彙に用いる字が増加したのではな 字数の多いのは当然である。〔説文解字〕には五四〇部に分って、

の検索にはかえって不便である。 わが国の「大漢和辭典」はついに四万八九〇四字に達しているが、所要字

要とされる程度の文字は、殆どこのなかに含まれている。 列において理解するために、必要とするものを加えて六八〇〇余の字数となっ た。国語の語彙として使用されている文字、また中国の文献を理解する上に必 ば、文字の選択はその必要度を考慮して定めるべきである。ただ文字をその系 漢字は国語を表記するものであり、すなわち国字であるという立場からすれ

るから、 に即したものでなく、検索にも不便なことが多い。中国の字書も、文字改革以 て、部首別の配列をするのが普通であるが、その部首法は必ずしも文字の構造 きは、最も一般的な音に従った。従来の字書は、〔康熙字典〕の部首法に従っ 文字は五十音順に配列した。国語の語彙としてはその字音を用いるわけであ 字形が変改されて部首法や画数がみだれ、いまでは音別によるものが多 わが国の字書が部首法によるべき理由は、はじめからないのである。 字音によって配列した。字音は漢呉音、唐宋音のように区別があると

うるのである。 が生れている。 形・指事・会意字の総数は約一四○○字前後であり、それを基本として形声字 形声字は全体の八割に近い。漢字における表意的な構成のもの、すなわち象 他はみな音を使用する字である。漢字には形声の字が多く、〔説文〕における 常用漢字の字数は一八五○字であるが、国字として作られた数例を除いて、 従ってその基本字の知識があれば、形声字の音は容易に推測し

教えるのは別としても、 ちうるものではない。それは最低限の知識である。それを最低限の知識として 活のなかでは指定外の字が実際に多く用いられている。人名・地名はもとよ い。本書に収める約六八○○字の知識は、必要字の最低限度と考えてよいもの 常用漢字は、学校教育などで制限的に教えられているものであるが、社会生 専門書や古典・文献資料の世界に入れば、この種の制限は何の意味をもも すべてをこの最低限の範囲に限定すべきものではな

音と訓

みられ、 多く引く源順の〔和名類聚抄〕の反切音は、その時代のものである。その音韻 [玉篇] に基づくと思われる空海の〔篆隷万象名義〕や、陸法言の〔切韻〕を と徹、定と澄との音の混合、また山と删、蕭と宵との混同というような現象が 音韻そのものも、時代的な変化や語の方言化によって、同じ字に各種の音が加 撮口の等呼をかえることがあり、そのため音に変化を生ずることがある。また にはその時期の漢字音であった。 は、国語の音韻に調和する形に改められているところがあるとしても、 えられることがある。 去・入)といわれるアクセントや、母音の発音部位である開口・斉歯・合口・ して機能することはできない。ただ語義が分化するときに、四声(平・上・漢字は、もとは一音であったはずである。音が固定していなければ、文字と 類の書が作られた。その切韻類の反切を通じて、たとえば端と知、透 またそこから音韻史的な種々の問題を導くことができる。 六朝期にはその傾向が著しくなって、そのため多く 主として 基本的 0

その書は字を四声に分って反切を加えたもので、その反切字数は五万三五二五 でのちの字書の反切音は、北宋のときの勅撰本〔集韻〕に拠るものが多いが、中国では元以後に入声音を失うなど、大きな音韻上の変化があった。それ る音を、標準音として用いた。音によって字義を異にするものは、その音をも あるが、実際に用いない音が多い。この書では、国語の語彙として実際に用い 字にも及んでいる。わが国の〔大漢和辭典〕はこの〔集韻〕を録入したもので しるした。

石文が、 書紀〕の原注には多くの訓注があり、〔万葉〕では漢字の音訓的使用は、 や、ヲコト点を加えたいわゆる点本類にも古訓があり、貴重な国語資料とされ に自在巧妙を極めている。また〔日本霊異記〕のように古い訓注をもつもの とを求めたであろうことは、たとえば稲荷山古墳鉄剣銘のような文献以前の金 わが国が漢字を受容するときに、その訓義をも合せて、国語と対応させるこ すべて訓読を前提とする形式の文であることからも知られる。 古い字書類にも和訓を加えているものが多く、 これらを収集整理する 〇日本 すで

慮を加えるのがよいと思われる。
これによってその字音の使用が可能となる。漢字音訓表には、その点の配れ、その意味が理解されるのであるから、つとめてその訓養を用いるべきであことであるから、ここには通訓のみをあげた。漢字はその訓を通じて国語化さことは極めて重要であり、意味のある作業であるが、それはこの書の範囲外のことは極めて重要であり、意味のある作業であるが、それはこの書の範囲外のことは極めて重要であり、意味のある作業であるが、それはこの書の範囲外の

解説について

かめうるものであるから、なるべく参照字を併読されるように希望する。 かめうるものであるから、なるべく参照字を併読されるように希望する。 で、その字には*印を加えて表示した。文字は系列字のなかでその意味を確独立した項目として扱ったが、その字形に即する解説を加えた。それぞれの字を、資料とすべきものをあげ、その字形に即する解説を加えた。それぞれの字を、資料とすべきものをあげ、その字形に即する解説を加えた。中骨文・金文にその初形と、初形によって示される意味とについて解説した。甲骨文・金文にその初形と、初形によって示される意味とについて解説した。甲骨文・金文にそのであるから、なるべく参照字を併読されるように希望する。

軍は車上に旗騰を立てた兵車で、軍の指揮者の乗る車乗であることを示す字である。それで揮・軍・運はみな軍を声符とするものは二十二字、そのうち揮・彈・弾・軍・弾、運・部・縄などの声がある。このようにその声符うちにあるものである。〔説文〕において軍声とするものは二十二字、そのうち作あるものである。〔説文〕において軍声とするものは二十二字、そのうち揮・彈・弾・軍・運はみな軍を声符とする字であるが、それぞれ声が異である。それで揮・軍・運はみな軍を声符とする字であるが、それぞれ声が異である。それで揮・軍・運は本社であることを示す字である。

を声符とする字に、格・額(額)・洛・路・略の声がある。〔説文〕の各声である。にてないを対することによって知られる。そしてこのような古い音構造した音とみてよい。各は語頭音が見母に属しており、これもまたその基本では、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、太し、音をかすることによって知られる。そしてこのような古い音構造は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩、小雅、斯は、おそらくかなり後までも残されていたらしい形迹がある。〔詩文〕の各声音が近かったのであろう。各に洛の声があったのである。そしてこのような関係は、たとえば縁(變・蟹と巒・鑾)においても中という語頭音を推測することができる。

あり、ふくらみをもってはみ出る意がある。 は神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫(山すそ)と袖とは、また声義において通ずるところがは神を収めないが、岫)と神とするもの十九文があり、おそらは神を収めないが、曲声とするもの十九文があり、おそらあり、ふくらみをもってはみ出る意がある。

納することができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おすることができよう。

おいて言及するにとどめる。ただその音韻変化を考えるときにおいても、字のこの書は字形学を主とするものであるから、音韻の問題には、必要な程度に

の基礎をもつのでなければ、確かなものとはなりえないのである。規則的な法則性の上に立って理解することはできない。音韻の研究も、字形学初形初義の把握が十分でなくては、その文字構造の変化に伴う声義の関係を、

この書を編集するにあたって、私の意図したところ、またそのために用意してするために、この書を編集するにあたって、私の意図したところ、またそのために用意している。字の初形初義を明らかにすることが、できる。初形初義を証するために、なるべく古い用義例をあげて証としたが、できる。初形初義を証するために、なるべく古い用義例をあげて証としたが、できる。初形初義を証するために、なるべく古い用義例をあげて証としたが、にするためにまずるために、まず字源の研究から着手した。文字の研究には、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な把握を必要とする。そのことを指標として明らかは、つねに系統的・全体的な形をと、表である。

例

(藝)

ゲイ

ウン (別出)

芸 芸

缶

カン

缶 (罐)

フ (別出)

凡 例

よりも、 的、また統一的な理解を深めることを目的として編集した。引く字書である 本書は、漢字の字形学的な研究の成果に基づいて、その形・声・義の系列 読む字書であることを意図した。

収録した文字

○常用漢字表・人名用漢字別表の文字。 本書に収録した文字は、次の基準によった。

○〔広辞苑〕通用漢字一覧の文字。

である。 〇収録した親字の総数は、副見出しとして示した字をも含めて、 〇古典や文献資料において用語例が多く、読書や研究の上に必要な文字。 ○〔説文解字〕のうち、 字形の体系を明らかにする上に必要な文字。 六八三八字

親字について

前項の字形が旧字形と異なるときは、旧字形に太わくのカッコ 〔 〕を早常用漢字表・人名用漢字別表にある文字は、それぞれその字形によった。 副見出しとして示した。 一を加え

亜ヶ(配)8

圧 5 (壓) 17

常用漢字表・人名用漢字別表に用いる文字が、旧字形において別の字である ときは、 その旧字形を親字とする一条を別に設けた。

べて同様である 五画とするが、 実際の運筆は四画であるから、四画とする。その系列字もす

艸部の字も一応右に準ずる。 ただ旧字形においては、旧に従って四画として

画数は見出し字の下に、 算用数字で示した。

字音について

語彙として実際に用いられる音のみをあげた。 たとえば重には、 字

チョウ・デュ・トウ・ヅ・シュウ・シュ

字音は表音式により、旧字音は()に加えた。 ュウのみであるから、この二音のみをとり、慣用音をもって収めた。 の附音があるが、このうち語彙として用いるのはチョウ、慣用音としてのジ

字訓について

れているもののうち、主要なものをあげるにとどめた。字の本来の訓義を明 訓としては字の初義において用いられているもの、その引伸義として用いら であるからである。 らかにし、そこから字の用義法を考えることが、この書の目的とするところ

文字資料について

に収める篆文・籀文・古文の字形を収めた。 古代文字の資料として、甲骨文(卜文)・金文・石鼓文、 孫海波 民国二十三年 その採集書は次の諸書である。 及び〔説文解字〕

〔甲骨文編〕 十四巻 〔甲骨文編〕 十四巻

〔金文編〕十四巻 〔続甲骨文編〕十四巻

容庚 重訂本 全样 恒 民国四十八年 金样 恒 民国四十八年 一九六五年

うに異体の字があるときは、親字の下に細わくのカッコ 〔〕を加えて示し た。 また旧字体のうち、 たとえば 「説文解字」にあげる古文・籀文・或る体のよ

災〔裁〕〔灾〕

きは、改訂を加えたところがある。 親字の字形は一応〔康熙字典〕によったが、字形学的に改める必要があると

とを示す。 解説のなかで*印を付した文字は、本書に見出し字として収録されて いるこ

配列について

漢字はその字音によって、五十音順に配列した。 同画の字は部首の画数順によった。 同じ音の字は字画数によ

また常用漢字表・人名用漢字別表にあげるものは、 音は最も普通に用いられるものにより、 すべて表音式によった。 その音によった。

右二表に訓でのみあげられているものでも、 皿 (さら) **→**皿 (ベイ) 字音によって収めた

画数は運筆上の実際の数に従った。 たとえば乏は、 〔康熙字典〕以来すべて

字の画数につい

本・孫星衍校本によって補った。所収のものによった。説文新附の字など、 「説文篆韻譜」 〔篆韻譜〕未収のも 0 は 大徐

〔説文解字〕に収める字形は

〔漢語古文字字形表〕

徐明舒

一九八〇年

一九八〇年

○印を付して、この順に掲げた。 右の文字資料のうち、〔説文解字〕に収める字形は、無印のまま文字資料欄 の冒頭に掲げ、ついで甲骨文には◉印、金文には◎印、 それ以外の文字には

振り仮名について

を用いた。 ないものには、原則としてルビをつけた。ルビは叙述部分については表音式書名・人名・地名などの固有名詞、その読みくせのあるもの、常用字にみえ

出典について

した。〔太平御覧〕のような類書は、その巻数を附記した。した。〔国語、周語〕は三篇、同〔晋語〕は九篇に分れるが、のように篇を分ちがたいものは「〔左伝〕隠元年」のように、 引用の文の出典については、原則として書名・篇名をあげた。〔春秋左氏伝〕 その分巻は略 その所在を示

引用文について

例をあげた。古典の引用にはすべて旧字・旧字音・歴史仮名づか 字の初義に近い用語例のあるものは、 卜辞・金文・古典籍のうちからその文 いを用い

索 引

ア

字

音

글 글 = \equiv 三三三天三三 === --- \equiv = 0 99 農為 9定 8 7 7 7 7 6 依矣囲医位弛 9 8 威 虚 8 8易 &怡 8 委 衣 匠 。 夷 伊 9章 5 5 位 矣 二四 壹 四九 7 13 違 13 13 葦痿 13意 12 媐 12 12 逶 貽 12 計 12 萎 12 12 **弇** ¹²偉 12 **韋** 13彙 12 為 11移 異 惟 11尉 唯 極 数 Ŧ = Ξ === =: = = = 0 9 ~ ö 15 15 15 15 14 遺 熨 慰 蝟 廙 15 撝 15頭 14 誒 16謂 16縊 16 16遺 15 15 蹄 15 蔚 14 飴 臺 三 桑 臺 蓋 亖 童 壹 22 를 = 薑 = 壹 。。 郁 昱 育 ²² 17 17 16 15 14 12 10 鬻燠寶槭賣毓粥彧 谁域或 ク 四九 쏲 (美 즟 二四四 モ 츳 モ モ 卖 五 츷 츳 12 16 16 13 獻 遙 ¹² 軼 22 逸 宣壹 11 逸 10 益 10 益 9 洫 。。 洗 佾 · 汨 イン 与龙允 <u>F</u>0 **元 元 元 元 元 元** 元 종 퐁 11 陰 14 夤 13 隕 13 飲 12 ¹²湮 ¹²煙 11 酓 11淫 11寅 10院 10 萬 10 10 殷 10恁 10員 9普 9 9胤 9 9 空 咽 姻 声声 弄 弄 蓋 三 壹 1995 23E 蓋 豊 豊 亖 픨 픨 亖 三 三 穴 垩 三 20 19 17 17 17 16 16 16 [隱韻 闄 檃 隱 醮 雾 15 14 14 14 執 演 隠 禋 羽宇枵右寺 16 15 蔭 15

蓋 美

雪鳥

13 12 11 傴寓偶

쿷 풋 픗

葁 葁 三五 罿

壽 元 Ö 五

슬

事

6 。 养养

싈

畫

9 9 8 8 8 7 7 6 6 6 籽禹於雨盂迂杆有有

三 三 三

二 二 五 元

幸 翁

引用の書名について

の書名をあげておく。 引用書のうち、 文字学書については、 略称のまま用いたものがあるので、

そ

〔説文解字注〕三十巻 (段注) 〔恵氏読説文記〕十五巻 〔説文繋伝〕四十巻 (小徐本) 〔校定説文解字〕 三十巻 (大徐本) 〔刊定説文解字〕二十巻 (佚) 〔説文解字〕十五巻 南唐 宋 唐 帝 徐紫李ッ許ま 徐紫鉉が陽紫慎な 錯れ 冰紫

〔説文解字群経正字〕 二十八巻 [説文通訓定声] 十八巻 〔説文解字義証〕五十巻 〔説文段注箋〕 二十八巻 民清清清清清清清清清清清清清清清清 - 俞* 吳:吳:王;王;邵;朱。桂:徐:段《惠: 《樾· 大作善》。筠》、筠、瑛:駿。馥:瀾;玉;棟; 《歲》述。

三 王が羅ら胡された国で振り乗い 林な国で振り乗い 義が継い玉く 光が

〔説文解字詁林〕+五巻・〔説文解字詁林補遺〕+五

民国 元 宋 戴た鄭に 侗を樵き 馬叙倫

巻に集録されている。 以上の諸書は、丁福保の

〔通志、六書略〕

〔六書故〕三十六巻

〔説文解字六書疏証〕 二十九巻

〔文源〕

〔史籀篇疏証〕一巻 〔殷虚書契考釈〕 増訂本三巻 〔説文管見〕 三巻 [児笘録] 四巻 〔字説〕 一巻 [説文広義校訂] 三巻 〔説文釈例〕二十巻 〔説文句読〕 三十巻

> 〔説文新義〕十六冊 〔書契淵源〕五帙十七冊 〔古籀篇〕 百巻

〔続一切経音義〕十巻 〔一切経音義〕二十五巻 [経典釈文] 三十巻 〔一切経音義〕百巻 〔毛詩草木鳥獣虫魚疏〕二巻

釈 釈 釈 釈 答陸?陸? 慧礻希*慧衤玄汉徳钅璣* 苑》麟2琳2応淳明8

〔新訳大方広仏華厳経音義〕二巻 白川 中島 竦 静

74

三五

콫 둧 킃

> ¹⁵ 夏 夏 夏 鴉

> > () 元

킂

17 16 優 踽

16 14 14 13 13 13 13 13 12 12 10 10 10 8 7 4 賴 蕪 殞 煇 暈 慍 運 隕 雲 運 耘 紜 員 芸 吽 云 ウ 29 28 15 15 15 11 8 ウン鬱鬱蔚熨慰尉苑ッ == 四四 三 三 九 至 20 17 16 蘊 薀 褞 型 量 元 三 元 五 章 公 元 公 云 公 云 公 云 12 12 12 12 12 11 10 10 10 9 9 9 9 9 8 8 8 8 8 7 劂客詠瑛営殹왳郢栧盈栄枻映洩咏英泳泄医 曳央永 17 17 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 聚嬰營幾衛衛縈頴穎殪 16 15 15 15 15 15 15 15 15 叡 銳 鋭 禜 藥 瑩 潁 影 14 14 14 14 14 13 熒 榮 睿 勸 榮 裔 嬴

 16
 16
 14
 13
 12
 11
 11
 11
 10
 10
 9
 9
 8
 7
 6
 6
 x
 23
 21
 20
 18
 18
 17

 營 劉 股 股 X 兰 異 **严** 五 咒 玉 玉 咒 | 16 | 16 | 15 | 15 | 15 | 14 | 14 | 14 | 13 | 12 | 12 | 11 | 10 | 10 | 9 | 9 | 7 | 5 | 4 | エ | 23 | 20 | 19 | 17 | 喉 謁 閱 閱 謁 說 説 霧 鉞 越 粤 事 悦 悦 逑 咽 兌 戉 曰 ッ 驛 譯 繹 斁 **E E E E E E 严 更 克 秃 秃 秃 秃 秃 秃 秃 毛 毛 毛 毛 毛 毛** Ξ **表 表 表 表 表 表** 28 26 24 監 黶 24 24 23 19 凹圧区王允尤う 鹽醫艷 立 立 奏 兲 立 立 查 5 莹 空 空

 12
 12
 12
 11
 11
 10
 10
 10
 9
 9
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 8
 15 13 12 9 5 7 24 22 21 21 18 18 17 17 17 17 16 16 16 15 15 15 14 13 13 億奥奥屋肊ク鷹鷗鶯櫻謳甕鷹應燠壓鴨隩橫橫毆歐嘔奧雁

6 カ 19 18 17 17 16 16 15 15 15 14 14 14 14 14 13 13 13 13 13 13 12 12 各 ク 礙 鎧 騃 趙 骸 駭 磑 皚 概 閡 蓋 概 漑 慨 嘅 碍 賅 該 睚 慨 愷 街 剴 15 15 15 15 15 14 14 14 14 14 14 14 14 18 號 稿 確 鹽 槨 熇 毃 閣 赫 聝 榷 摑 愨 廓 14 14 14 13 幗 劃 毂 隔 02 101 13 12 12 12 12 12 12 12 12 13 12 12 12 12 12 13 14 15 15 16 16 16 16 16 要 学 完 学 19 费 费 穫 擴 殼 嚇 鞟 馘 5 霍 署 16 16 噩 學 15 15 14 13 13 額樂叡萼楽 11 10 10 10 9 9 9 9 8 7 6 カ 20 20 18 18 17 17 桰 栝 搭 搭 括 曷 括 剧 刮 昏 初 ッ 鰐 敷 顎 額 壑 嶽 \equiv Ξ 岳 童 童 節 幹 拿券券卷各官函侃果肝罕杆旱政完坎串 兲 = = = =

型 17 14 13 13 13 12 12 11 11 10 9 9 9 9 7 6 6 6 8 22 18 18 16 16 蓋權跼輂殛極戟棘勗勖挶茍洫侷亟局臼曲旭,驍顒翹凝曉 110 H 2011 EOU EOU HOU 100 掀堇新亀衾衿巹矜金芹欣昕囷近近均肋今斤匀巾>嶷玉 三〇八 101 104 功有旧勾区工首人 = = = 履窶踽駒駆寠榘煦癪傌區救訏矩矩栩宮苦盱狗吼劬究吁弘 支 三 一七五 三六 릋 I3 13 13 12 12 12 12 12 11 10 9 9 8 8 7 虞愚裘隅遇堣嵎寓偶俱紅禺具具求 完 表 六 7 ク 13 12 12 11 11 8 5 ク 15 13 12 12 12 12 11 10 グ 8 8 ク 13 13 2 2 窟 詘 欻 掘 堀 屈 圣 ッ 耦 遇 隅 遇 堣 嵎 寓 偶 宮 ゥ 空 空 ゥ 遇 虞 = = Ξ 0=0 E4= グ 20 19 19 18 18 18 18 16 16 16 15 15 14 13 13 13 12 ン 纁 攗 麕 嚑 燻 薫 燻 麇 薫 勳 勲 輝 熏 葷 煇 煇 勛 豊 豊 畫 畫 畫 畫 臺 喜 五 篇 壞 懈 壞 罫 稀 袈 假 氣 家 怪 卦 希 快 気 仮 化 化 群 古充 形型启囧冏圭荆刑初丼禾兄冋井兮门ィ廨頙解偈訝夏外化 **芸 皇 元** 型型 惠 奚 勍 倞 徑 迥 計 挂 扃 契 契 奎 型 勁 剄 揭笄惠愒容婞羝頃逕蛍脛経絅畦渓揭啓啓莖竟耿陘荆笄桂

多 9 7 * 7 * 16 15 13 12 12 12 10 10 9 8 7 7 7 6 6 6 6 7 客卻却 * 伽 * 橘 頡 詰 喫 喫 矞 訖 桔 拮 佶 迄 汽 俼 吉 吃 仡 云 云 云 云 星 云 云 云 云 云 * 16 10 9 9 9 6 2 謔逆逆虐虐屰 6 6 6 6 5 5 4 4 4 4 3 3 3 3 2 2 朽扱吸休旧丘数知仇及弓及久九 4 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 | 141 元 云 究 究 充 古古古古 甚
 14
 14
 14
 14
 14
 14
 13
 13
 13
 13
 13
 12
 12
 11
 11
 11
 11
 11
 10

 殠 髤 賕 觩 廢 躬 廐 鳩 裘 舅 嗅 裘 翕 給 逑 球 毬 救 畜
 9 9 8 8 8 8 7 5 5 5 5 ½ 炬艇拠拒据库尻巨巨去凵 승 듯 ごうごうごう 売 ごうごう 元 릋 七九 中 一 古 圭 天 天 17 16 16 16 16 15 15 15 14 13 13 13 12 12 12 12 12 11 11 11 虞鋸歔據踞墟嘘扊豦裾宫距距距淚屣旂虚旂椐 4 4 3 + 19 16 16 14 14 12 12 凶収升 ³ 敷禦 駿語漁 馭御 11 11 11 11 10 7 ギ 21 21 20 20 19 18 17 御魚敔園哥哥蘧鐻醿饕籐攀遽 **五** 五 五 교 교 를 김 그 云 8888888777777776666666555独怯協供京享協季孝亨况狂杏巩夾劫向叫匡匈劦共兇兄叶
 1
 2
 3
 3
 4
 3
 5
 4
 5
 4
 5
 4
 5
 4
 5
 4
 5
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4
 4</t 九九九 頃経郷竟梟教教強虓校倞陝 九 고 고 고 九七 九 초 16 16 16 16 16 15 15 15 15 14 14 14 14 14 14 13 元 元 元 元 壹 101 101 101 101 101 25 등 등 풋 10 10

11.1

尊 儆 廎 輕 詰 詣 罫 継 硎 15 15 15 15 稽景憬慶慧慧劌 复磎閨鉶緊 丟 烹 烹 薑 萘 萘 票 景 票 20 19 19 19 19 19 18 18 17 17 16 16 16 16 觿鷄攜韾繼競蹶鶏警繋瓊雞巂韾鮭蹊罄谿髻頭褧磬檠檠憩 를 를 19 19 19 16 15 14 13 12 11 11 10 10 9 9 8 7 7 5 鯨 麑 藝 霓 蓺 蜺 睨 羿 猊 埶 臬 倪 芎 羿 迎 迎 芸 亻 24 20 19 覡貨書孔 18 17 競機 17 17 16 檄 擊 激 15 15 14 14 14 13 13 12 10 10 10 9 ゲキ製 劇 覡 毄 隊 隙 綌 戟 食 屐 逆 ヴキ 景景 景 文 章 三 三 云 云 云 云 云 21 19 18 18 12 11 10 8 7 7 6 4 4 ゲ 21 21 19 18 16 16 15 15 15 15 集 葉 蘭 擘 陧 跀 梟 崔 杌 抈 刖 月 月 ッ 齧 纈 蹶 擷 蕨 橛 頡 獗 潔 羯 **畫 臺 臺 臺 臺 臺 臺 臺 臺 臺** 臺 99999988888888877766664412ヶ24県建妍喧畎巻弦図肩肩酬券券卷旬妍見卒吅件犬欠くン欟 五 五 五 暖暖遺萱腱絹献犍楗愆嫌嫌睠劇絭絢硯膃検堅圈喧現圈馬 즐 20 20 20 18 18 18 18 17 17 17 賽懸獻鬈験顕繭鍵蹇謙 云 臺 云 云 云 云

중 중 를 £0 100 5 」。 「鉱鉤遑詬觥練煌溝溝 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 15 14 高 膏綱睾犒熇毃構構藥槁暠敲 14 14 13 13 慷 蓋 號 閘 101 M10 M11 = 0 三 三 三 三 0 九 三 0 九 三 0 九 ≡ 17 17 17 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 18 18 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 基語 舊 糠 礦 孌 橫 賡 膠 篁 稟 稿 噑 廣 横 閤 酵 遘 誥 蒿 三 === 즛 를 三三 증 六 21 20 20 顆 **製 覺** 24 24 23 100 三元元 六點 **2**4 21 21 18 17 14 14 14 14 12 11 11 11 11 10 10 9 8 8 酷穀穀熇熏黒牿梏國哭尅剋或国刻谷告告克方 **E O =** 11 10 10 8 8 8 8 7 7 5 3 3 コ 14 ゴク 惚骨笏質智忽汩扣圣兀乞ッ獄ク 20 18 17 17 15 14 嚳 鵠 轂 觳 榖 酷 6 3 ゴ 21 13 13 13 13 13 13 13 蓋 交 11 11 11 10 10 10 10 10 9 9 8 8 8 8 8 8 7 7 7 6 4 6 6 9 11 11 12 13 14 15 1 ン机 = 훘 i6 l6 l5 l4 l4 l3 l3 l3 l3 l3 l3 l2 l2 l2 l1 l1 l1 譚墾輝魂褲髡跟壺献煇頎蚗渾紺痕混 17 17 16 16 緊 懇 鮫 閣 === 至 売 景 云 墓 室 景 景 景 景 12 6 製詐釵梭貨紗差唆茶砂査作沙佐些左乍叉ナ 勤勤艮 101 **元**至 를 薑 Ξ 量 薑 弄 === 鼍 蠹 薑 量 薑 臺 豐 18 18 17 17 16 15 14 14 14 13 13 13 12 10 19 ザ 在戈再切巛才 挫座坐 銷銷 磋養瑣槎嵯嗟戲蕊 를 룶

13 13 13 嗣 嗜 葘 5 5 5 5 5 5 三 三 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 質髭駟駛輜賜摯廝幟镽 16 16 16 16 26 諡 熾 禩 鼒 誌 15 数 14 齊 23 22 21 職 驚 齎 ²¹ 饎 18 17 17 28 26 25 震襲 躍 耀 19 19 19 18 17 17 17 觶 職贄創頾嗣 識齊 三八0 三九八 增加滋時瓷茲珥時形持恃 물 물 물 물 등 증 좋 17 16 15 15 14 14 14 13 13 13 12 嗣膩餌辤磁爾蒔辞慈孳貳 6 6 ジ 9 ジ 19 18 6 6 シ 19 19 18 17 肉肉ク食 キ 識 職 色 式 キ 璽 辭 邇 壐 景 景 줐 15 14 13 13 13 13 12 11 11 11 10 9 5 5 膝漆厀瑟嫉溼湿桼悉執疾室失叱 軸舳衄恋柚 シセ 衄悪柚 チ 콧 콧 콧 콧 8888777553シ1414984ジ22019171717舍者炙社車社沙写叉*暱實昵実日ッ躓騭櫛隰隲劕 三九C 三九C 三九C 五 元 景 景 亮 素 売 売 兲 17 16 15 15 14 14 14 14 13 12 12 11 11 11 11 11 10 10 9 9 9 8 8 8 8 謝赭遮寫耤遮賒榭煮煮奢這赦貿斜捨捨借射卸者洒姐卸舍 3 3 シ 21 17 11 10 8 9 関蛇 衰邪 斯 釈 速 迹 酌 酌 借 **听** 三 元 五 18 17 17 韓寶爵 17 16 16 15 15 14 14 13 爵錫積踖趞綽嘖裼 至九七 풏 弄 LIS 15 15 14 13 12 11 10 10 10 10 9 9 9 8 8 8 7 6 6 5 5 4 4 シ 趣 諏 嬃 種 腫 須 娶 修 酒 珠 殊 株 兪 首 狩 取 侏 百 朱 守 主 主 殳 手 ュ

四 四 三 三 三 三 三 五 三 型 称祥症消消悄峭将宵宵倢倡笑寁従挾洋莊相省舜昭庠唤咲 一 八 五 五 四 元 六 莊接逍訟舂紹章涉梢梢捷惝寁婕娼商唱解祥將莊從涉墜笑 23 23 23 14 14 14 14 14 14 14 韶障誦誚裳翣 大 至 喜 吾 吾 豊 豊 豊 元元仍上丈 章 離 豐 攝 懾 囁 20 19 鐘 瀟 19 19 18 포 플 五 五 五 五 五 五 五 五 五 四 四 四 四 四 至 至 至 九 六 至 五五五 四六0 四六0 四六0 三六0 三六0 三六0 0X III 6 4 4 2 24 24 23 22 22 22 21 20 20 20 20 20 20 19 19 18 18 18 18 18 18 18 18 大 仄 ³ 釀 讓 犪 禳 穰 攖 疊 饒 醸 譲 攘 孃 孃 滯 繩 襛 繞 穣 穠 擾 를 홒 홒

17 16 15 15 14 13 13 13 12 12 11 9 9 9 7 6 ダ 25 22 19 18 17 17 17 17 17 恒 壇 談 彈 團 煗 暖 暖 弾 赧 断 南 段 弇 男 団 ン 鼉 灘 譚 簞 鍛 癉 膽 膻 폴 품 智植笞离致耻恥值墨直知坻治豸底池地弛久 難難斷 ¶ 騃 簃 篪 遲 徵 褫 緻 墀 稺 墜 墜 質 徵 疐 摛 馳 雉 置 絲 稚 痴 廌 黹 遅 10 8 チ 16 16 13 12 11 10 10 8 8 6 6 チケ 株 ツ 築 築 蓄 筑 逐 逐 畜 豕 竺 竹 ク 27 23 22 21 19 18 17 17 17 17 17 18 觀 黐 躓 魑 癡 嚔 縭 薙 螭 穉 螭 弄 弄 五九〇 五九〇 五九〇 五九〇 五九〇 虫 仲 虫 中 丑 ウ 侏 コ 踞 躇 擿 擲 嫡 著 着 着 五五 元 五五 ¹⁴ ¹³ ¹³ ¹² ¹² ¹² ¹² ¹¹ ¹¹ ¹¹ ¹⁰ ¹⁰ ¹⁰ ⁹ ⁹ ⁹ ⁹ 舉 誅 稠 厨 鈕 註 偸 啁 晝 酎 衷 紐 紂 柱 柱 昼 五九 チュコ 12 13 計 影影張帳啁倜冢鬯凋倀迢挑鹵重長佻耴町吊兆庁弔 大〇二 ¹¹ 月 11 11 11 11 11 的 15 14 徴 墊 童 章 章 容 7 6 チ 20 17 16 14 13 11 11 10 10 9 8 8 3 チ 25 25 22 19 19 沈 灯 ン 騭 隲 觀 斲 飭 敕 敕 陟 捗 勅 直 豕 亍 ヲ 糶 廳 聽 鯛 鯛

10 7 7 6 6 3 9 11 11 9 8 9 21 21 19 13 13 13 12 12 11 9 9 17 17 15 荃邨村村存寸ン率率帥卒ッ續屬鏃賊賊続粟属族俗ク燭쀎 至 四 五 ソ 23 19 18 16 15 14 14 13 12 12 12 12 10 ン鱒蹲頭樽噂遜愻損飧巽奪尊孫 泰茶汰多它他太 12 12 11 11 11 11 11 10 10 9 8 7 7 7 7 6 6 6 5 **堕** 隋 荼 雫 舵 唾 蛇 拿 娜 拏 陀 那 那 妥 妥 兌 朵 杂 打 좃 종 奈 交 7 7 7 7 7 7 6 5 5 5 4 3 9 25 22 21 19 18 17 16 15 15 14 13 13 R 3 对 体 兑 汰 自 台 代 台 太 大 イ 鼉 驒 儺 難 驡 懦 橢 隨 堕 駄 馱 隓 **季季季奈奈季季季季季 弄** ¹⁴ ¹¹ ¹⁰ ¹⁰ ⁹ ⁹ ⁹ ⁹ ⁸ ⁸ ⁸ ⁷ ⁵ ⁵ ⁵ ⁴ ⁴ ³ ² ⁷ ⁸ 臺 第 能 迺 柰 廼 柰 耏 奈 奈 弟 台 代 台 內 內 大 乃 ⁷ 23 22 18 17 17 17 體騰蠆黛擡戴 五 五 元 九 **丟 丟 丟** 塚塚塚紫度柝冢拓坼卓臭沢択托宅乇 タク 至 至 至 9 夕 16 15 5 夕 22 22 21 18 17 17 17 16 16 16 16 16 15 15 14 14 13 12 幸 ッ 濁 諾 疒 ク 籜 讁 鐸 謪 擢 濯 濯 斀 濁 橐 퐮 澤 擇 踔 磔 斲 摭 睪 豥 9 9 8 8 8 7 5 4 9 19 14 11 11 11 8 8 9 16 13 12 11 11 11 11 10 10 単専担坦炎但旦丹ン獺奪脱脱斂怛妲ッ撻達達捺脫脱斂窋 五二 五 五七八 五七八 九 九 五 五七八 五 五 五 五 五 五 七 七 七 七 七 七 七 五七七 耽 期 表 表 表 表

三五 芸 芸 芸 秃 秃 18 15 10 ネ 17 14 14 12 8 7 爇熱捏ッ濘寧寧空中佞 15 14 14 怒努奴 潤認認 高高 音 至 至 空空空 18 17 16 16 15 13 12 11 11 8 8 6 ネ 燃 黏 燃 鮎 撚 稔 然 粘 捻 拈 念 年 > 13 12 12 11 11 10 10 10 10 腦腦腦腦腦能納納腦力 22 21 20 19 17 16 15 13 跛琶破派派陂芭爬波坡伯把底巴 ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ 7 21 21 16 16 15 15 15 15 14 14 13 13 13 11 10 8 7 21 19 19 17 17 15 14 13 魔魔磨磨摩摩罵禡麽麼痲貊貉婆馬芭 霸覇簸擘皤播頗葩 9 8 查查查查查查查查查查查查查 六 六 六 分 15 15 15 14 14 14 13 12 12 罷 輩 廢 惴 誖 裴 稗 焙 跋 牌海廃陪培敗排 28 16 15 15 14 14 14 14 13 13 12 12 11 11 11 10 10 10 10 10 10 10 8 8 7 7 薶 顯 賠 賣 貍 貍 禖 槑 煤 楳 買 媒 陪 培 梅 狸 埋 狽 梅 唄 倍 枚 沬 貝 売
 11
 11
 10
 10
 10
 10
 10
 9
 9
 9
 9
 8
 8
 8
 8
 7
 7
 5
 4
 八
 26
 23
 22
 18

 副 舶 粕 砲 砲 剝 亳 陌 敀 迫 洦 迫 狛 泊 拍 帛 伯 吠 白 川 ク 釁 徽 霾 薶
 11 7 バ 24 21 21 20 19 18 18 17 17 変 麦 ク 鑮 礟 霸 疈 覇 鎛 簙 暈 薄 15 13 10 2 ハ 20 19 19 18 18 18 17 17 16 16 16 15 15 14 13 13 13 13 13 撥鉢捌八チ驀爆曝邈藐瀑纂貘縛縛駮暴夢駁漠幕寞貊貉莫 六 六 六 点 充 克 克 八 克 6 5 × 19 15 15 15 15 14 13 12 12 10 10 9 9 9 9 8 8 8 8 8 7 5 5 5 以 酸 駿 潑 撥 髮 髮 鉢 跋 發 捌 茷 茇 発 癹 废 拔 废 帗 抜 犮 呆 ッ

6 6 6 b z 20 13 12 11 9 z 18 15 15 12 12 11 11 11 10 10 9 8 8 份份牝 z 疈 逼 皕 副 畐 z 藐 廟 貓 渺 森 庿 猫 描 病 病 秒 苗 ビ 30 23 薫 ウ 24 20 19 19 19 18 18 18 17 17 17 17 17 16 16 顰續觸瀕瀕臏殯頻豳虨擯濱頻嬪 箵 指 個 憫 閩 餅 愍 瓶 贁 閔 瓶 敏 紊 敏 便 昬 敃 泯 旻 忞 牝 ン 当当 七三 。。。。。。。。。。。。 使 俘 免 附 阜 斧 拊 怖 府 免 甫 芙 扶 巫 孚 缶 布 付父夫仆木 S 埠 殍 釜 9 9 9 9 9 射 18th 184 184 384 384 18 覆 17 15 鬴 賦 15 15 15 15 14 14 14 14 膚敷敷頫誣腐榑孵 18 覆 17 11 15 15 16 15 諷 瘋 楓 桴 浮 浮 風 封 夫 ゥ 鶩 蕪 膴 儛 舞 撫 廡 嫵 葡 八八六 18 16 15 15 14 14 14 13 13 12 12 11 11 11 11 11 9 9 8 8 8 8 6 4 7 26 覆輻蝮蝠複懶福腹福復幅虚匐副副葡畐夏服服宓伏足ク飌 15 14 13 11 11 11 11 10 8 8 8 8 8 7 5 5 4 4 4 7 20 20 觜 韍 綍 艴 紼 紱 紱 祓 沸 拂 芾 废 帗 芾 佛 払 弗 勿 仏 市 ッ 鞴 疈 六九五 交 15 15 13 墳噴賁 12 12 12 焚 棼 雰 11 10 10 8 8 8 7 7 6 7 8 7 胞紛粉氛忿扮吻刎ン物佛 4 4 ブ 間 勿 仏 ツ 黻 七五 七五 八三五 五九 閉屏瓶陸娉併竝病病俾苹昺炳柄柄俜枋秉幷坪坪併並甹兵

20 17 15 15 15 15 15 14 12 11 10 9 9 8 7 7 7 4 3 メ 13 メ 17 16 15 25 響 響 瀬 緜 瞑 瞑 綿 棉 値 眠 面 眄 免 免 芇 写 丏 ヴ ン 滅 ッ 謎 螟 瞑 莽猛耄旄耗耗眊芼罔盲盂网安妄毛月ウ模摸茂母 \$ \(\text{\chi}\) \(\text{\chi}\ 問紋們門文ン沒没ッ勿チ默黙墨墨沐目木ク毅濛髳絮網髦 で 扼 役 役 見 卮 ク 壄 墅 爺 椰 埜 野 斜 耶 夜 邪 冶 邪 也 을 을 을 을 을 을 \$\frac{32}{25}\$ \$\frac{25}{25}\$ \$\frac{23}{23}\$ \$\frac{22}{21}\$ \$\frac{21}{21}\$ \$\frac{20}{21}\$ \$\frac{19}{19}\$ \$\frac{17}{16}\$ \$\frac{13}{13}\$ \$\frac{12}{12}\$ \$\frac{11}{9}\$ \$\frac{9}{9}\$ \$\frac{8}{8}\$ \$\frac{8}{8}\$ \$\frac{8}{8}\$ \$\frac{8}{8}\$ \$\frac{18}{8}\$ \$\frac{12}{8}\$ 16 16 15 14 13 13 13 13 13 13 12 12 12 12 12 12 10 9 9 8 5 ユ 諭諛쯟瘉遊逾腴瑜楡愈遊楡愉愉庾喩婾鳳臾兪油由 位占佑囮有有丝幼由右尤友尤又立惟唯ィ籲癒癒融輪輸 能誘恩 E 真 M 遊 献 遒 雄 釉 遊 裕 猶 游 揖 郵 道 就 莠 畲异余余予予与 物物甬妖羊用幼孕由夭幺,譽旟礜歟輿

響縄 鄘 踊 瘍 燁 熔 漾 様 曄 숲 술 カカ 10 10 9 8 8 7 7 3 ヨ 27 24 24 23 22 22 22 21 21 21 20 19 浴 漠 昱 或 应 沃 抑 弋 ク 饕 鸉 魘 鷹 癰 鷕 饔 邎 鷂 瓔 廱 耀 饁 八 八 八 八 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 至至至点条至至季 八五 八五九四 八八八五八五 23 23 21 21 20 19 19 19 17 14 14 14 13 邏蘿蠡巓羅蠃羅嬴螺蓏扇蜾裸 賴齊磊厲酹雷萊徠來来来 상 상 호 상 쏬 강 숲 강 2 2 2 3 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 쏬 15 14 14 13 13 12 12 10 10 9 9 23 22 21 21 20 20 20 19 19 19 17 17 17 16 樂 雒 举 酪 楽 落 絡 珞 烙 洛 ク 靁 籟 罍 癩 蠣 糲 闘 櫑 瀨 瀬 癘 蕾 儡 賴 三盆盆盆三盆盆盆盆盆 소 살 살 살 한 한 소 살 살 살 함 술 술 술 11 11 11 蓝蓝蓝鳞鹭颜辣亂窗嵐惏惏婪卵乱 ラ 14 12 10 9 ラ 10 ラ 19 16 ン 辣 喇 捋 剌 ツ 埒 チ 爍 駱 \(\frac{1}{2} \) \(\frac{1} \) \(\frac{1}{2} \) \(\frac{1}{2} \) \(\frac{1}{2} \) \(\frac{1} \) \(\frac{1} \) \(\frac{1}{2} \) \(\frac{1}2 \) \(\f 쓸 숲 쏦 30 27 27 24 23 22 22 21 21 21 21 20 20 鸞鑾纜攬欒孌巒爛欄蘭覽籃欄 20 攔 19 19 19 編 蓋 蘭 利吏 公 쏲 쏲 쏬 15 14 14 13 13 12 12 12 12 11 11 11 11 10 10 10 10 9 9 8 8 8 8 7 7 履 貍 嫠 裡 詈 痢 犂 理 梨 촫 莅 离 狸 莉 涖 悝 厘 俚 丽 焱 秎 里 李 2 り 30 29 26 25 25 23 22 21 20 19 19 19 18 18 18 17 17 16 15 15 15 15 15 力 キ 鸝 驪 籬 纙 灑 酈 儷 黧 麗 離 棃 鯉 釐 薶 縭 螭 罹 黎 璃 犛 氂 屦 全 4 全 술 술 술 7 7 2 2 2 2 2 2 公益

字統

	24 鷺	24 鑪	22	22 籚	²¹ 露	20蘆	20爐	19 櫓	19 廬	¹⁶ 蕗	喧盧	柩	15 魯	15 慮	¹³ 輅	¹³ 路	13 賂	¹³ 虜	12 虜	11	。	D	,	3	25 臠
	찬	친근	九二	九二	<u>+</u>	<u>1</u>	九0九	<u>차</u>	<u>+</u>	九二	九二	<u>+</u>	#10	公	九10	九10	九10	公	公	九0九	九0九				九 〇 九
	12 勞	11 莨	現	届	11	朖	朗	狼	10浪	10朗	郎	9 陋	郎	数.	7	₇ 弄	7	7 労	6老	ロウ	28	27 鸕	27	26 騙	25
	九三	九六	九六	九六	九 五	九 五	九五五	九 玉	九 五	九五	九 宝	九宝	九宝	九四	九四四	九四	九四	친글	九三	_	九	차 글	찬	<u>売</u>	九二
	19 雅	19 鏤	19 臘	19	19	19 瀧	19 龎	19 寵	18	坡	17 癆	17	16臈	15	15 潦	¹⁵ 撈	坡	15 膢	漏	捜	14 凄	¹³ 滝	¹³ 楼	¹³ 廊	12 廊
	九六	九八	九八	九八	九八	九 六	拉三	<u></u>	九八	九七	九七	八九四	九八	九 七	九七七	九七	九	八九三	カセ	九七七	カーゼ	九 六	九 六	九 六	츠 六
	18 轆	16 錄	16 録	13 碌	13 祿	¹² 菉	¹² 禄	11 鹿	¹¹ 勒	¹¹ 陸	。 泐	· 泉	· 李	7 角	肋	· ₅ 扐	4 六	仇	ロク	22	22 籠	21	21 蠟	²⁰ 瓏	20 朧
L	찰	九110	차:10	차110	九110	当	和10	차등	和10	四十二	丸110	九九九	八古	1011	九九九	九九九	九九九	九二九		丸丸	치	九九九	九九九	九八	<u>추</u>
	淮	9 歪	9	ワイ	22 献	超	15 流	窪	14	13 話	温	蛙	10 倭	。 和	ワ	ŧ	2	15 論	13	11 崙	8 侖	7.	ロン	²² 籙	19 麓
L	호	芸	元		± <u>=</u>	六	皇	<u></u>	6	흐		六	豊	츠		•		츠	쏫	兰	公允	숲		=	<u> </u>
	¹¹ 惋	20	10 盌	10 剜	ワン	14 斡	ワツ	26 養	18	隻	15 鋈	雙	12 惑	8 枠	8 或	ワク	18 穢	18	17 薈	16 濊	13 賄	13 矮	13 進	¹² 隈	雅
L	호	売	立三五	五五五		10		초	출	침	츠	흐	츴	九四	た品		土四	출	초금	九云	九云	츠글	查	查	売
																		25 灣	22 彎	14	13 孯	¹³ 碗	¹² 腕	12 湾	¹² 椀
																		土宝	六	츷	츠 포	五三五	五三五	立五	츠 포

いい、交叉することを丫叉という。 句がある。丫の字形よりして、二またの枝を丫枝と句がある。丫の字形よりして、二またの枝を丫枝とりがある。 唐の劉禹錫の〔寄せて小變に贈る詩〕に、「花面、る。わが国の「おちょぼ」に相当する俗語である。 らしく、 女子の賤しきものを呼びて丫頭と爲す」とみえてい 宋のころからみえ、大体南方で用いられた語である 丫頭ともいう。少女の髪形であるから、また小間使 ら」「つのがみ」ともいう。その髪を丫髻・丫鬟・象形 童子の髪を総角に結んだ形。また「みづ いの意に用いる。少年のときには丫童という。字は 明の陶宗儀の〔輟耕録〕巻一七に「吳中、 童子の髪を総角に結んだ形。 あげまき・きのふたまた

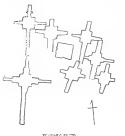
7 经多。 はかのへや・はふり・つぐア・アク

J

能的な奉仕のあ

象形 ことは殷王朝の時代にはじまり、安陽期以前の遺址 た平面形(挿図)が亞である。玄室を亞字形に作る 室という。 らくこの玄室の意であり、それよりこの玄室におけ まだその例がみえない。亜字の原義は、おそ 陵墓の墓室の形。墓中の棺槨をおく室を玄が その玄室の四隅をおとして、入りこませ

> 殷代の氏族がその氏族の標識として、 る。図象標識とは、 としてもつ氏族が、 者があったことは、この亜の形を図象標識(挿図) びかたである。それぞれの氏族に亜とよばれる聖職 王が親しく臨むこともあった。各地の氏族から、そ らくその氏族が、 る標識として用いた図象である。その図象は、 められており、 の亜とよばれる聖職者が、上番制によって殷都に集 か」とトしている例もあって、この集団のところに、 せることを卜したものである。「王は多亞に入らん とする法によって、 ている各氏族の聖職者である多亜集団に、犬を犠牲 亞に命じて犬を改せしめんか」とは、 ばれる氏族のうちの聖職に携わるものであり、「多 いる。 某という語がみえ、 能者を指したものと思われる。卜辞に亜・多亜・亜 る儀礼の執行者、 たとえば亜雀・亜顰とは、雀あるいは顰とよ また職 多亜というのはその集合名詞的なよ 殷王朝に服事する関係において、 すなわち喪葬の儀礼を執行する臘 災禍を祓い改める儀礼を執行さ その職能者・職能集団を指して きわめて多いことからも知られ いわばわが国の紋所のように、 文字とは異な 殷都に集まっ おそ



祭祀儀礼を掌れる。たとえば

いるものと思わ りかたを示して

るものはその祭

亞字形墓室

祝の職にあって、いずれも最高の聖職を含く。としるされている。周公は明保、は、 作戦を行なったときのもので、 した。 儀礼が多く行なわれるので、 のような制度が、神聖王朝としての殷の宗教的支配 部たちが、殷都に上番しており、多亜の参集するこ 部)や中臣のように、祝部に属するものであり、そは、他にはない。それで亜とは、わが国の斎部(忌 亜字形と氏族標識とを組み合せた図象の種類はきわ その標識を加えて、司祭者たる職能を示した。 軍礼を行なうものであるから、 預の注に「亞族は上大夫なり」というが、亜はもと 盟うて曰く、請ふ、命を亞族に承けん」とあり、 のとなった。〔左伝〕文十五年に、「宋の華耦、 神祇官であった。亜がこのように軍礼に従うことか る伯禽の作った器であるが、それは周が東方の戡定 の氏族における重要な宗教儀礼を掌る聖職的身分の の、重要な方法であったことを示している。亜はそ によって祝部と認定されたものを意味するとみてよ れがそれぞれの氏族標識と結合しているのは、王朝 めて多く、 己の標識として、 ら、亜はまた軍のそのような特殊部隊を意味するも ものであったが、戦争などのときにも、それに伴う い。多亜という集合名詞は、そのような各氏族の祝 をとり扱うものはその供犠儀礼の法を、それぞれ自 たとえば周初の「禽殷」は、周公の子であ とくに聖職にあるものは、亜字形のなかに かもこのような複合の形式をとるもの 図象化して用いた。それらの氏族 いずれも最高の聖職者であり、 祝部としてこれに随行 ここでは盟誓を行な 文首に「周公謀り 伯禽は大 り、 杜^とり この

司空・輿師・候正・亞旅はみな一命の服を受く」と一とされていたらしく、『左伝』成二年に、「司馬・ 将軍職であるのに対して、候正すなわち斥候長の次 伯、 外服すなわち地方の統治には「侯・甸・男・衞・邦 えられる〔書、酒誥〕には、当時の官制を述べて、 あって、亜旅は軍官の末に列せられ、三帥・先路が [令彝] に、「郷事寮と諸尹 と里君と百工と諸侯、 の諸職をあげており、亜や服は宗工とともに、重要 に名を列している。 候・田・男に四方の命を舍く」とあるのと相対応す な儀礼の執行者であったらしい。このことは周初の るもので、亜が当時きわめて高い地位のものであっ 「百僚庶尹、これ亞これ服、宗工および百姓里君 大亞とを飼め、訟罰を訊かしむ」と、成周の行政 の東都である成周の統督を龖に命ずることをしる たことを知りうる。西周中期の〔龖毀〕には、周 権・裁判権を委託することを述べている。成周は当 ところをいう。 また畿内の行政組織である内服については 「龖よ。女に命じて、成周の里人と諸侯 もっとも春秋期には、亜は軍官の しかしたとえば周初の文献と考

- Eは受りみでなく、罰り族狙職のうちにも同じよたので、「諸侯大亞」とはその有力者であろう。時、亡殷の貴族や豪族をこの地に移して管理してい

立政〕には、軍官として司徒・司馬・司空・亜・旅かれており、また周初の官制を示すとされる八書、 百夫の長よ」といい、亜・旅は師長たる師氏の上に 事・司徒・司馬・司空・亞・旅・師氏・千夫の長・ ける語として、 王曰く、嗟、我が友邦の冢君・御される〔書、牧誓〕に、武王がその同盟軍によびか うなものがあって、武王が殷を伐つときの宣言書と は春秋期に至って整う官制であるから、亜・旅がそ を列している。この両篇にみえる司徒・司馬・司空 主は族長、伯は宗伯、亜と旅とがその儀礼の執行者、 伯 これ亞これ旅 これ遭これ以」と歌われており、 であるが、その儀礼に参加するものは「これ主これ 「司徒・司馬・司空・尹・旅」という官制を示して彊と以とが農耕の指導者である。〔書、梓材〕に 員された。 掌る旅と並称されたもので、藉田のような集団耕作 れは亜がもと軍礼の執行者であったために、軍事を のときにも、 いるが、古くは亜と旅とを並称することが多い。こ 亜は殷のみでなく、 その儀礼執行者として、旅とともに動 周の族組織のうちにも同じよ なお、詩、 周姆、

亜雀・亜翼には子雀・子舉のように王子身分を称す不若(禍) 无きか。一月」のようにトする例がある。今かった。ト辞に、「貞ふ。 亞晩は王を保んずるに、毎つた。ト辞に、「貞ふ。 亞晩は王を保んずるに、毎は聖職者として王の神聖性を保持する儀礼にも

聖職者の組織をもっていたのである。 生朝は、政治的な支配の体制とともに、このような に対した条子聖は、その人である。古代の とは諸氏族の亜とともに多亜とよばれ、一種の神聖 とが討伐した条子聖は、その人である。古代の とがが成んだのち天子聖と称し、また周の大保たる というがあり、王族にも亜職のものがあった。それ をいうがあり、王族にも亜職のものがあった。それ というな

と同じ語といわれるが、それならば亜と滹とは声のなる大神亞駝」に訴えた文である。この亜駝は滹沱多い、懐王に詛いを加えようとして、「丕いに輝々なる大神亞別」は、秦の恵文王が楚の懐王と覇をの意は、それよりの引伸義である。

通ずる字である。置に悪地とよばれる川があり、 【礼記、礼器】に「質人まさに河に事することあら (礼記、礼器】に「質人まさに河に事することあら 「鄭玄注」に「惡はまさに呼と爲すべし。聲の誤り なり」という。それならば悪池とは滹沱河のことで、 なり」という。それならば悪池とは滹沱河のことで、 古く悪と滹との声が近かったのであろう。「説文」 古く悪と滹との声が近かったのであろう。一般を でいた。でいる。それならば悪池とよばれる川があり、 でいた。でいる。 でいた。なり、なかに啞・壁・姫・ をから類推して解したものであろう。 世を声符 とするものはおよそ八字あり、なかに啞・壁・姫・ をするものはおよそ八字あり、なかに啞・壁・姫・ をするものはおよそ八字あり、なかに啞・壁・姫・

可 8 やまのくま・のき・しなやか・こびる

हिं इंग्र

うこと、限が呪眼を掲げて聖地への出入を禁ずるもを清め記ること、陽が玉を飾って魂振り儀礼を行なわれる儀礼の方法を示す。それは神霊の影降する神様の前で行なわれるを清め記ること、場が玉を飾って魂振り儀礼を行なわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。そのことは、時・降がなわれる儀礼の方法を示す。

〔楚辞、

桐が朝陽に生ずるという吉祥語をつらねている。

し「山の阿に」と山鬼を点出しており、また九歌、山鬼〕は山中の鬼を祀る歌で、「人あ

の第七・八・九の三章には、鳳凰が高岡に舞い、梧あった。〔巻阿〕はすべて十章の長篇であるが、そ

の儀礼歌を歌い尽すと、さらに賡歌を献ずることが

似ている。

そこで犠牲をつらね、

寿康を祈り、定め

[穆天子伝] に「天子西征して九阿に昇る」とは、

ある。〔詩、衛風、考槃〕はわが国でいう孋の歌で、その仙遊をいう。阿はいずれも、神の棲むところで

である。わが国の〔万葉〕にみえる吉野の御幸歌にちが集まって、神霊に楽歌を献ずる儀礼を歌うもの 以てその音を矢ぬ」とあって、山間の聖所に貴族た 風南よりす [詩、大雅、巻河] は、首章に「卷れる阿あり 禱はそのような秘匿の場所で行なわれる。それで阿 であるから、その声義を承ける字とみてよい。阿と 可は声符として、喉音暁母から喉頭音に転じたもの ふもとの神を祀るところ、そこで祝禱する意である は大陵とか曲阜のように解されているが、もとは山 る。神梯はおおむね山すそのところに設けられ、祝 は、その神梯の前で、神に向かって祝禱する意であ であろうが、可は呪詛し祝禱することを意味する字 にして
自としるすことは、
考えがたいことである。 であることからも知ることができる。 立をもつ字がみな神事に関し、その呪儀を示すもの 神の姿を隠すことを示す字であることなど、 のであること、隱(隠)が呪具である工によって、 豊弟の君子 ここに遊びここに歌ひ 山陵の形を縦 飄

升りて、阿に當る」とは軒下の義。四阿とは寄せ棟という。[後礼、士昏礼]に、「貧(客)、西階よりある。また家の棟や檐先のそりのあるところを、阿ある。また家の棟や檐先のそりのあるところを、阿原石]に「亞礬たるその華」とあるのも、同じ語で原石」に「西鉄で、 「濕桑、阿たるあり 容語の語義に近い。「詩、 那・阿娜など、擬声的な連語としての形容語である姿から出ており、「なだらか」「美し」の訓は、阿「ななめ」などの意があるのは、その山川の委曲の「ななめ」などの意があるのは、その山川の委曲の は「阿たるあり……幽たるあり」に作り、 るのは、字義の引伸というよりも、阿難のような形もねる」「まげて従う」など、私阿・曲従の意があ 作りをいう。のきのある門を阿門という。阿に「お すそや川べりの聖地を、阿という。阿に「まがる」 らであろう。それでそのような遊幸の行なわれる山可がもと祝禱の儀礼や、その際の歌詠の意をもつか じ趣向である。阿がそのような聖地を意味するのは章に舟遊びを歌うているのは、吉野の仙遊と全く同阿に在り」、以下二・三章に中沚・中陵をいう。末 あろう。四章のうち首章に「菁々たる莪は「彼の中 な山間の聖地における魂振り的な遊幸を歌うもので 山すその聖所であったが、のち川べりの聖所をも うのは、その嬥の行なわれる聖所である。 「槃を考して阿に在り」「槃を考して陸に在り」と 三章のそれぞれ首句に、「繋を考して瀾に在り」 小雅、隰桑」に「隰桑、阿たるあり 小雅、菁々者莪〕も、 その葉沃たるあり」、第三章に 小雅、隰桑」第二章に、 おそらくそのよう その葉

ある。 するものに婀・痾(疴)があり、いずれも形声字で意は、連語としての用法から出ている。阿を声符と 用い、〔老子〕第二十章「唯と阿と相去ること幾何 親族称謂の上に加えるほか、「呉下の阿蒙」のよう 人を軽んじていう語である。阿父・阿野・阿兄など語に用いることがあり、阿堵物とは銭、阿堵輩とはの用義にはまた、軽くものをさしていうときの接頭の用義にはまた、軽くものをさしていうときの接頭 阿与は趣言すること、阿諛も趣告追従することをよい。阿邑・阿与なども同系の語で、阿邑は曲従、よい。阿邑・阿与なども同系の語で、阿邑は曲従、沃・阿凶は、それぞれしなやかさをいう連語とみて 義とし、それより屋阿の意となったが、曲従阿諛の ぞ」とみえる。字は聖所としての「山川の阿」を原 に人の姓氏の上にもそえていう。軽い応答の語にも いう。みな曲従の姿態から導かれる語義である。阿

哇 へつらう声・みだらな声・むせぶア・アイ

れを呟く」、「莊子、大宗師」「其の喩言は呟くが若とばのさまをいう。「孟子、滕文公、下」「出でてこの歌である。男女のむつごとなど、たあいもないこの歌である。男女のむつごとなど、たあいもないこ 出す意で、 し」の嗌言はのどを締めた声。古い用義例では吐き 多きときは則ち鄭なり | とあって、鄭声は鄙俗多淫 り」とし、 あったと思われる。哇々は笑声、哇咬は音の繁細な出す意で、むせぶようなさまをいう擬声語的な語で の〔法言、吾子〕 R ラ、吾子」に、「中正なるときは則ち雅、哇 と、「讀みて醫の若くす」という。漢の揚雄 声がある。[説文]ニ上に「詔ふ臂な 一方の持律 である。[説文]ニ上に「詔ふ臂な である。[説文]

> るもの、 いまの歌謡曲の類である。

疴 10 / 痾 13 やまいカ

檀 のようにいう。 あげている。久しくて癒しがたい病を、旧痾・宿痾〔説文〕セ下に「病なり」とし、また痾に作る形を の声符は阿。文献には痾の字を用いる。 形声 声符は可。また痾に作り、そ

匹 わらう・かたこと・ああア・アク

き声など、ことばにならぬものをいう擬声語。それ 「笑言すること啞々たり」を引く。笑う声や鳥の鳴 で瘂に通じて用いる。また驚きのあまり声のないさ まを、啞然という。 に「笑ふなり」とし、[易、震卦]の形声 声符は亞(亜)。「説文]ニヒ 声符は亞(亜)。

姬 あいむこ・こびる・こしもとア

ろう。婭嬛はこしもと。近世以来の語である。 相謂ひて姫と曰ふ」とあり、妻の姉妹の夫同士が、 ともいう。もと親族称謂としての亜から出た語であ たがいに婭とよぶ。その関係を両壻とも、また連禁 声符は亞(亜)。〔爾雅、釈親〕に、「兩壻

蛙 12 [蠅]19 かえるワ

毒 いわれるようによく鳴き騒ぐものであるから、 ある。正字は蠅。蛙は「蛙鳴蟬噪」 形声 声符は圭。圭に哇・津の声 蛙ぁとが

> 声より名をえたものであろう。 鼓・蛙市・蛙吹のような語がある。 蛙と同じくその**

瘂

殷の武丁の失聴をトするものがあり、「書、説命」という。というである。トロの歌な状態をいう擬声語である。ト辞にその発声の困難な状態をいう擬声語である。ト辞に いない。〔礼記、王制〕に「瘖曹」という語があり、言ふこと能はざるなり」というも、瘂字を録して言ふこと能はざるなり」というも、瘂字を録してるなり」とあり、〔説文〕セ下には瘖字を録して 形声 響のゆえに発声が不能となる。字はまた嘘に作り、 にも「三年言はず」とする伝承があった。 声符は亞(亜)。「玉篇」に「瘖瘂、言はざ

鴉

〔説文〕四上には両者を同じとするが、雅が雅正の 意に用いられるようになって、声義ともに区別され その鳴き声による語である。鴉と雅とはもと同音で、 ることもあり、雅はみやまがらすをいう。いずれも と声義ともに区別のある字である。 いた生気のない形にかかれており、鳥と鴉とは、 るようになった。鳥は金文の字形では、その羽を解 いうときは、鴉ははしぶとがらす。字はまた雅に作 宮の脱落した形である。鳥の別名。両者を区別して 符とすることもあり、疑母の語頭子音形声 声符は牙。字は亞(亜)を声

のなまめかしいことを哇といい、娃と声義の近い語いたのであろう。美に窪の声があって、窪む意がある。むかし呉に官娃の宮があって美女を収めた。また趙の武霊王が美女を夢み、歌に託してこれを求め、た趙の武霊王が美女を夢み、歌に託してこれを求め、た趙の武霊王が美女を夢み、歌に託してこれを求め、たがのであろう。圭に窪の声があって、窪む意がある。むかし呉に官娃の宮があって美女を収めた。またがの武霊王が美女を夢み、歌に託してこれを求め、担世家別に入える。美人のことを哇といい、娃と声義の近い語にみえる。美人のことを哇といい、娃と声義の近い語にみえる。美人のことを哇といい、娃と声義の近い語にみえる。 である。 ごとし、「吳楚の閒にては、好を謂ひてある。〔説文〕二下に「豳くして深きある。〔説文〕二下に「豳くして深き形声 声符は主。圭に注・哇の声が 挨10

唉 ああ・笑うこえ・なげくアイ・イ・カイ

に対して禱りを行なうことがしるされている。哀は

その絶気を確かめたのち、山川などの五祀

をして、

着せ、綿を鼻にあてて呼吸の有無をうかがう属 纊〔儀礼、士喪礼〕に、臨終のとき死者に左前の襲を〕

襟もとを示す形である。その襟もとの胸のところに

〔説文〕 二上に衣を声符とするのは誤る。衣は衣の を収める器である。日を加えて、魂よばいをする形。

衣の襟もとに、死者の招魂のために、祝詞

哀。

かなしい・あわれむ

日をおいて、死者に対する哀告の儀礼を行なう。

痛恨の意を示すこと唉と同じ。 の声を発している形が欸である。欠は口を開いて祈清める儀礼を示す。そのときの発声が矣であり、そ 部のムは目の形、下部は矢の形で、矢をそえて目をもと、そのような発声の意が含まれている。美の上 「唉、豎子ともに謀るに足らず」と嘆じた。矣にはが、みすみすこの機会をのがした項羽を罵って、が、みずみすこの機会をのがした項羽を罵って、だ場門の会のとき劉邦の脱出を知っただ場に、「唉、予これを知れり」、また〔史記、項羽本 り、声を発して呵する形で、欸もまた感動詞に用い に、「唉、予これを知れり」、また「史記、もその気息を示す擬声語である。「荘子、 明 嘆という。感動詞の「ああ」にも用いるが、 だい、小児の啼く声を唉といい、また嘆くことを唉!! ぶるなり | とみえる。いまアイの音を 形声 声符は矣。〔説文〕こ上に「譍 その音も同じである 知北遊り

> にもいう。 から、もと同語であろう。船歌を欸乃といい、

埃10 ほア こり

こりを塵埃、もやのようにみえるものを埃靄という。に「塵なり」とする。汚れた大気を埃気、こまかいほ軽く動く土ほこりの類を、埃という。〔説文〕二三下軽く動く土ほこりの類を、埃という。〔説文〕二三下 桑 形声 口気を意味する字がある。気によって 声符は矣。矣に唉・欸など、

だ異なるものとなっている。 う指責めのしかたがある。挨拶という語は、古くは あるが、のち社交的な儀礼をいう。本来の用義と甚 を「一挨一拶」といった。もと相手を呵責する意で あり、また禅家では一問一答して相手を試みること 衆人がたがいに前に出ることを争うておし合う意で して用いる。また拷問や刑罰の法として、拶指とい人を逮捕することを挨拿といい、これは法律用語と人を逮捕することを失さ おしのけて争う意の字である。家ごとに調査して犯 舞うさまを「相排拶す」と歌うており、これも他を いない字であるが、唐の韓愈の〔雪の詩〕に、雪のいない字であるが、唐の韓愈の〔雪の詩〕に、雪の らおしのける意の字である。拶は〔説文〕に収めても、「挨なり」としているから、強く撲って後ろかも、「 「背を撃つなり」とみえ、 形声 声符は矣。〔説文〕一二上に、 次条の撲に

欸 ああ・なげく ・こたえるこえ

娃

憐の意が含まれている。

語では「かなし」ともよみ、「かなし」にはまた愛

「哀は愛なり」

とみえる。

愛は国

報更」「人主胡ぞ以て士を哀しむを務めざるべけん」

形で、喪に服することをいう。死を弔う文を哀辞と るが、その初文は、襟もとのうちに麻の経を加える 帰納して知ることができる。衰は哀と字形が似てい 襟のうちに玉の呪器などを加えて哀告し、その復生 その礼をいう字である。すべて新喪のときには、衣

いう。哀の音は、愛と関係があろう。「呂氏春秋、いう。哀の音は、愛と関係があろう。「呂氏春秋、

哀 娃 唉 埃 挨 欸

楚にては、凡そ然りと言ふものに、或いは欸と曰「欸、秋冬の緒風」のように用いる。〔方言〕に「南。如が欽である。古くは〔楚辞、九章、歩江」に、ものが欽である。古くは〔楚辞、九章、歩江)に、ものが欽である。 の詩に「欸乃一聲、山水綠なり」の句がある。 連ねて用い、船歌をいう。唐の柳宗元の〔漁翁〕 ふ」とあって、もと南楚の語であろう。のち欸乃と う字である。それに欠を加えて、 た形で、農具を清めるときの発声をい 声符は矣。矣は目に矢をそえ その語勢を示した

愛 いつくしむ・したしむアイ

0 南 きせ

会意 優・曖などみなその声義を承ける。
意の定まらぬ、おぼろな状態をいう語であるから、 愛好・愛恵・親愛・愛嗇などの意がある。愛とは心 文の左偏とよく似ており、疑の初文は、左右を顧み **牧は足を引いて行くさまをいう。愛の初形は疑の初** ので、愛を夊部に加えて行く意としたのであろう。 り」と訓しているのは、すでに炁を愛恵の字とした は愛と同字異文である。愛字の条五下に「行く皃な る人の姿を写したものであろう。〔説文〕 - 〇下にま の会意字。後ろに心を残しながら、立ち去ろうとす も人の心意を字形に写して、 た炁の字を出して「惠なり」と訓しているが、これ 杖を植てて凝然として立つ形である。いずれ 後ろを顧みて立つ人の形である変と、心と 巧妙をきわめている。

> 隘 13 せまいアク・ヤク

開 藍

糸の象に従うており、篆文は水溢の象に従うているいう。〔説文〕のあげる隘の字形のうち、籀文は縊いち。〔説文〕のあげる隘の字形のうち、籀文は縊陋もそのような聖所に関する字で、狭隘なところを 形声 神梯の形であるから、その聖所への出入を制限する る。それで狭隘の義となる。自は神霊の陟降する 引伸義である。 が、声義の上からも籀文の字形がまさる。かつ籀文 のが、字の原義であろう。「説文」「四下に、「陋な この字の従うところは、糸を結び縊るときの益であ で、狭隘や陋巷、 で、狭隘や陋巷、また危険や困隘の義は、みなそのわちもと聖所に呪禁を施して隔絶することを示す字 の初文であり、それよりして狭隘の義となる。すな の墓道の間に呪糸を結んで閉塞する意としたのが字 いう。〔玉篇〕に「墓道なり」とする字である。そ は左右二目の形で、それは隧の初文、陵墓の羨道を り」というのは、隘を陋巷の義とするものであるが、 声符は益(益)。益に溢と縊の両形があり、

愛 ほア のイ か

隀 として見えず」の句を引く。仿仏はまた彷彿・髣髴 字で、その心情を愛といい、その姿を僾、ものに隠 に作り、ほのかの意。愛は立ちどまって顧みる形の 佛なり」とし、〔詩、邶風、静女〕「俊形声 声符は愛。〔説文〕八上に「伪

> ある。 「薆は隱るるなり」とあり、また日のかげるのを曖れてみえがたいさまを薆という。〔爾雅、釈言〕に を愛というので、愛・僾・夔・曖はみな一系の字で という。すべてうちにこもり、外に定かでない状態 れてみえがたいさまを薆という。〔爾雅、釈言〕

曖 かげる・くらいアイ

意である。 曖乎として時雨の如し」とあるのは、情意のこもるな。に終れる。[韓非子、主道]に、「明君の賞を行ふや係がある。[韓非子、主道]に、「明君の賞を行ふや 翳・隠の声とはともに影母に属しており、声義の関 日が翳ってうす暗いさまを曖という。愛声の字と いい、草木が茂ってものを蔽い隠すのを薆といい、彫声 声符は愛。人の姿の定かでないことを優と

藹 草木の茂るさま・たちこめるアイ

調 う。また雲のさかんな状態を靄然というが、藹は草の気の立ちこもるような状態を藹々、また靄煎とい 訓〕によって、「藹とは、臣、力を盡すことの美し に従うもので、この詩は山川の間に遊幸する魂振り「靄々たる王の多吉士」の句がある。吉士とは神事「靄 気、靄は雲気についていう語である。 きなり」とするが、それは転義。草木が繁茂し、そ 儀礼を歌うものである。 〔説文〕 三上に、 〔爾雅、 形声 さまをいう。〔詩、大雅、 いう。〔詩、大雅、巻阿〕に、声符は謁(謁)。草木の茂る

靄 もや・たちこめるアイ

一次 のでは 其間 神経神経

(ヲ)の音でよむ。 ク、憎悪の意や副詞・感動詞に用いるときはオ 何の言ぞや」とみえる。名詞・形容詞の用法ではア などの字を用いる。また否定的な感情を示す感動詞などの字を用いる。また否定的な感情を示す感動詞したもので、もとその字なく、他に安・焉・烏・於したもので、もとその字なく、他に安・焉・烏・於したもので、もと にも用いる。〔孟子、公孫丑、下〕に、「惡、是れ なる。 原意。それより禍災・醜悪・忌諱・憎悪などの意というものであろう。字は凶事に臨む心情を示すのがいうものであろう。字は凶事に臨む心情を示すのが 西を安く」というのは、当時行なわれていた字形を ある。 なく、 白土を塗った車である。卜文・金文にはその字形が のテキストは字を堊車に作る。それならば悪車とは 既夕礼記〕に、「主人、惡車に乘る」とあり、古文 から、その死喪凶礼の意を承けるものとすべきであ もし亜の意味をとるとすれば、亜は玄室の象である 亜の形は、陵墓玄室の四隅をおとした平面形である。 文〕一四下の解を承けるものであるが、卜文・金文の すなり」というのは、亜を背の曲った形とする〔説ものは醜なり。故に文において、心と亞とを惡と爲 疑問副詞の「いづくんぞ」の用法は音を仮借 | 顔之推の〔顔氏家訓、書証〕に、「惡は上に然」と、 がいかば、書証」に、「惡は上に漢明には亜の部分を西や囱の形に作るものが 、死喪のときに用いる車を悪車という。 〔儀礼、

り」とあり、白堊をいう。亜は墓の玄室の形であり、がある。〔説文〕二三下に「白く涂るな野声 声符は亞(亜)。亜に悪の音

11

しろくぬる・しろつちアク・ア

握 12

悪"(惡)2

味が含まれていたようである。

顔料に用いた。白・朱・赭などには、特に呪的な意

また他に黄堊・赭堊などの名もあって、

みな塗飾の

西山経〕に、「大次の山、その陽に堊多し」とあり、 を用いたが、牆壁などには白土を用いた。〔山海経、 の部分は白く塗りあげる。漆喰には貝を焼いた屋が 桃これを黝堊にす」とあり、地の部分は黝く、牆壁 主を祭る礼を述べて、「其の祕するときは、則ち守 はその玄室を意味していよう。〔周礼、守飛〕に遷その玄室の壁は漆喰で白く塗られることが多く、亞

わるい・にくむ・ああ・いずくんぞアク・オ(ヲ) 旧字は惡に作り、亞(亜)声。 じこめておく意がある。〔説文〕一二上に、「捡持すを待つ間収めておく板小屋をいう。狭いところに閉 痙 をかりもがりして、その風化 声符は屋。屋は死者

> 齪・偓促などに作る。畳韻の連語である。 (紫注) に「持つなり」とあるから、やはり握持の義いわれる。その字は〔淮南子、詮言〕にみえ、〔高詞とわれる。 である。こせつくことを握齪といい、字はまた齷 条八上にこれと似た古文の字形があり、 形電は、〔玉篇〕や〔広韻〕にみえないが、屋字の の賢士に接したという。〔説文〕の録する古文の字 三たび髪を握り、いわゆる「吐哺握髪」して、 く握って拳を作ることを握拳という。周公は一体にるなり」とは、指をかがめて強く持つ意である。固 重出の字と 天下

水墨画の源泉となった。

アク

雲霧の靄然たる美は、六朝期の自然文学に歌われ、

を心意に移して、和気のあふれるさまを靄々という。

雲気などのたちこめるさまをいう。それ

一下に「雲の見なり」とする。藹々

声符は關(謁)。(説文新附)

と同じく、

形声

都 梅 鄉 柳 納 總 本 八 本 八

渥 12 あつい・ひたす・うるおうアク・オウ

歌う。丹を塗ったような元気な赤ら顔の意で、 容を「赫として渥丹の如し、それ君子なるかな」と 秦風、終南〕は君子を祝頌する詩で、その人の顔。またい。とれている。は君子を祝頌する詩で、その人の顔意味したが、のち恩恵の大なることをいう。〔詩、 いやさかを寿ぐ語である。 はもと瀀渥に作り、瀀渥とは雨多くして潤うことを (ひたす)と同義に用い、またその音がある。 優渥 「周澤、未だ渥からず」のように、渥厚・渥洽の意 によってものが柔らかとなり、つやが出るので、 M に用いる。久しく水に漬けることを渥といい、それ で 「霑ふなり」とあり、「韓非子、説難」 「霑ふなり」とあり、「韓非子、説難」 形声 声符は屋。〔説文〕 一上に その 温

アツ

徐鍇の〔説文繋伝通論〕に、「亞なる 垩 悪[惡] 握

渥

九

王 (壓)17 おさえる・しずめるアツ・オウ(アフ)・エン

が、獣は犬肉の象。曰は肩の骨臼の部分を示す形断したものであろう。厭は獣を要素とする字である義と甚だしく異なるものであるため、関係なしと推義と甚だしく異なるものであるため、関係なしと推 考えられるが、いずれにしても、厭勝と鎮圧とはそ あるいは犠牲を埋める伏瘞・薶牲の方法を示すかと 語にいう「まじない」である。土は社の意とするか、災厄を鎮圧することを厭といい、厭勝という。国 は壞るなり。一に曰く、塞補するなり」という訓義で、と述べているが、それは〔説文〕一三下の「壓ず」と述べているが、それは〔説文〕一三下の「壓 壓(圧)は一系の字である。 壓(圧)とを通用することもあり、漢碑の「繁陽の 地に埋める伏瘞などに用いた。これを聖所に供えて えて同じからず。しかして學者多く辨ずること能は 段 玉 裁は〔説文解字注〕に「これ厂部の厭と義絶だぎょう。 に厥の德に猒く」とあり、猒は厭の初文。猒・厭・ の方法が同じであり、呪禁の法である。それで厭と から、字はもと地霊を鎮圧する意をもつ字である。 いわば骨つきの肉である。犬牲は天を祭る瀬、 西周後期の金文〔毛公鼎〕に「皇天、弘い時にふる。」に、「克く帝の心を壓(厭)かしむ」と呼」に、「克く帝の心を壓(厭)かしむ」と 会意 もって呪禁を施し、清め祓う意である 厭と土とに従う。 厭は犬牲を

軋 8 きしる・ひくアツ・アン・エン

> す」という。軋轢は両字ともに車でひき殺す意で、「罪あるもの、小なるものは軋し、大なるものは死杖、また骨節を挫く刑があり、〔史記、匈奴伝〕に大きまた骨節を挫く刑があり、〔史記、匈奴伝〕によるとし、車で轢き砕くこと、力を加えて傷つける本義とし、車で轢き砕くこと、力を加えて傷つける あって、強弁の意である。 辭」という語があり、〔疏〕に「委曲の辭なり」とのち紛争の意となる。〔殺。梁伝〕襄十九年に「軋のち紛争の意となる。〔殺。梁宗 たいさまなどを形容する語である。車のきしる音を ぐ音、また草の叢生するさま、集まり乱れて進みが なものが多く、軋々は車の音、機を織る音、櫓をこるもの、まがる状態を示す。乙に従う字には擬声的 また物がふれ合うて音を発すること。乙は直ならざ ときなどの、車輪のきしる音をいう。 声符は乙。車が方向をかえる

遏 とどめる・そこなうアツ

八音を遏密す」、また「易、大有、象伝」に「君子に「武をを遏む」、また「書、舜典」に「四海された。その祈る声を喝という。[詩、大雅、民労)された。その祈る声を喝という。[詩、大雅、民労) を加え、また他からの呪詛を遏めることができると することを曷という。それでこれによって人に呪詛 祝詞、匄は死骨。死霊に対して祈り、所願を成就を与える意にも用いる。曷は曰と匄とに従い、曰は を与える意にも用いる。曷は曰と匄とに従い、曰は義のうちに存するもので、また遏害、すなわち禍害 ものである。ものをおしとどめる遏止の義は曷の声の音がある。語頭子音のkが脱落した 形声 声符は曷。曷に謁(謁)・藹 四海、

> 作る。行路において喝を加えて禍害を遏止するを遏むる莫し」の曷を、〔漢書、刑法志〕に引いて遏にある。また〔詩、商、復之。刑法志〕に引いて遏にある。また〔詩、商、忠王、下〕に按を遏に作る。ともに声義の近い字で う系列字は、みなその声義を承ける。 も死霊を用いる古い呪術の法によるもので、曷に従 といい、呪詛して神に祈ることを謁という。 (大)に「以て旅に徂くを按む」とあり、[孟子、梁宗文]に「以て旅に徂くを按む」とあえる。〔詩、大雅、皇以て惡を遏め善を揚ぐ」とみえる。〔詩、大雅、皇 いずれ

斡 14 めぐるアツ・カン(クヮン)

儀斡運」とあり、天体をめぐらす軸受けのところ。 説もある。〔楚辞、天問〕に、「斡維馬にか斃れるきはカンの音でよみ、それは幹の字義であるとする 斗は運斗、すなわち北斗の象。旧状を回復すること とする説をあげている。賈誼の〔服鳥の賦〕に「大 しゃくの柄」とし、また揚雄・杜林が斡を車輪の軸いたらしく、〔説文〕には字をなれ、すなわち「ひいたらしく、〔説文〕には字をなべ をいう。倝の字形の確かな知識は早くから失われて 天極焉にか加はれる」とみえ、天体の転旋すること あるかも知れない。幹維のようにその中軸をいうと アツであり、斡旋・斡棄など、めぐらす、まわす意 四上に形声の字とし、声符を倝とするが、慣用音は のときは音アツである。あるいはもと駄に従う字で 人の世話をすることを斡旋という。 て、めぐる意をあらわす。「説文」 会意 旗竿の形と、北斗の象に従う

16 さえぎる・ふさぐ・とどめるアツ・ア・エン

などに用い、それぞれ別の音でよむ。 匈奴王単于の皇后は閼氏、また仏教語に閼伽の水 る。〔書、舜典〕に、舜の没するや、四海のうちは 字が於に従うのは、その声義を承けるものと思われ 八音を閼密」したと伝えるが、閼密は遏密と同じ。 また感動詞に用い、人の語を遮るときの発声である。 遏は曷の声義を承け、死者の呪霊によって呵禁を行 なう意。於は烏の羽をかけわたして鳥害を防ぐ字で、 せぎとどめる壅遏の義とする。遏と声義が通ずるが、 「説文」 二上に「遮壅するなり」とあり、ものをふ かけわたす形で、呪禁の意がある。 形声 声符は於。於は鳥の羽を縄に

アン

安 やすらか・おく・いずくんぞアン



静・安寧を求めるための行為を示す。卜文・金文に 安静にすることをいう字ではなく、祖霊に対して安 〔説文〕七下に「靜かなり」と訓しているが、ただ 形、その廟中で行なわれる儀礼をいう字である。 へと女とに従う。〜は祖霊を祀る寝廟の

アン 安

按 晏

> 牲を供えて、その霊を安んずる礼である。安の金文 安の礼はまた寧とよぶことがあり、寧とは廟前に血 がそれに対えて使者に貝・布などの礼物を贈った。 作册睘が夷伯に使いして安撫の儀礼を行ない、夷伯 って、安は安撫の意。王姜の使者として、史官たる 夷伯を安んぜしむ。夷伯、睘に貝・布を實る」とあ いせ、西周初期の〔曩卣〕に、「王姜、作册 景に命じて、西周初期の〔曩卣〕に、「五姜」をよるない。 ななず にっちょう きょうしん ないう字である。この字がみえ、金文では安寧の儀礼をいう字である。 の字形には、女の旁に斜

いる。安価・安易のように用いるのは国訓である。 くんぞ」「なんぞ」「あるいは」などの疑問副詞に用 である。字は仮借して焉・鳥・抑と通用し、「いづ と思われる。安寧・平舒の義は、すべてその引伸義 く例 (挿図) があって、それらはいずれも、受霊の ために一時外界と隔絶する儀礼のしかたを示すもの に女を口中におく字があり、金文には子を口中にお 的な行為は、その拡大された用法と思われる。卜文 て〔瞏卣〕のように、「夷伯を安んず」という政治 安寧を求める儀礼が、安の原義であろう。したがっ その家廟に入れて廟見の礼を行ない、祖霊にその あり、その例を以ていえば、新しく嫁してきた婦を、 ものとみてよい。新生の子にこれを加えるのが保で わが国で即位継体のときに用いる真床襲衾にあたる で、子の右下にその形をそえる。すなわち保呂で、 に加える霊衣である。保も生子の受霊の礼を示す字 (A) (P) それはその安撫の礼のとき 線を加えているものがあり、

按9 おさえる・しらべるアン

かきかたであろう。字はまた案と通用することが多 国では安堵とかくことが多いが、按堵の方が古い ずるなり」という。所領を保証することを、わが ずらよう こ、このでは、「按とは次第を按の如し」とあり、[応劭注] に「吏民みな授経することとる。〔漢書、高帝紀〕に「吏民みな授経することとと、 148。 投表・投表・ 248のように考察する意に用い 鳴らすことを接弦という。また接摩・接排のように を按轡、剣をかまえることを按剣、琴糸をおさえて に徂くを按む」とみえる。馬のたづなを締めること 制することをいう。〔詩、大雅、皇矣〕に「以て族 二上に「下すなり」とあって、 按察・按考・按験のように考察する意に用 すなり」とあって、手を加えて抑止控安撫する儀礼を示す字である。〔説文〕 声符は安。安は廟中で女子

晏10 あざやか・たのしい・やすらか・おそいアン・エン

両義を重ねたもので、日月の日に従う字ではない 儀礼を行なう意の字である。晏はおそらく晏と安の の日は珠玉の形、匽は女子が秘匿のところで魂振りこと晏々たり」という。思うに宴の初文は晏。上部 義は陽気晏温の意である。 い、〔詩、衞風、氓〕に「總角の宴しき」言笑する。終は陽気晏温の意である。それでまた和楽の意に用義は陽気晏温の意である。それでまた和楽の意に用 え、〔毛伝〕に「晏は鮮盛なり」とあって、字の本 する。〔詩、鄭風、羔裘〕に「羔裘晏かなり」とみ 清むなり」とあって、 声符は安。〔説文〕七上に「天 よく晴れる意と

案

案 10 つくえ・かんがえる

(形声 声符は突。もと食盤用のもの(水) (形声 声符は突。もと食盤用のもの(水) をいい、その事案を調査し考案することをいう。 たいい、その事案を調査し考案することをいう。 案をいい、その事案を調査し考案することをいう。 案をいい、案上でとり扱う事案を対して机案・案件・案考の意となる。 技とも食業よりして机案・案件・案考の意となる。 おい国では、草稿・草案とて身構えることである。 わが国では、草稿・草案を案という。

庵 11 アンドリ

下声 声符は奄。〔説文〕にみえず、『吹きょのの庵裏、曉燈の前」の句がある。

暗 13 「闇」17 マラい

黙・幽暗などの意がある。音形声 声符は音。暗黒・暗

CIERT

言にたがうときには鼻を受ける意味で、辛をおく形する字。祝詞を示す切の上に、自己詛盟として、誓ことをいう字であろう。言は神に盟うことばを意味 らわれる闇をいう語であった。 の意に用い、日に従う字となったが、本来は神のあ そむくものというべきであろう。暗はのち明暗の暗 る。この字を暗愚のように用いるのは、甚だ神意に 知れずあらわれるものであるから、幽暗の意が生れ ひ」があらわれることを闇という。それとなく、 意を示す。すなわち「神の音なひ」をいう。廟門で の字である。音はその日の中に、もののあらわれる おくのは闇、その字はおそらくもと廟門で哀訴する を問うことを意味する字である。同じく廟門に言を 廟門にJ、すなわち祝詞を収める器をおいて、神意 なわれる儀礼に関する字であろうと思われる。問は 形によって考えるべきである。闇はもと、廟門で行 分化した字である。したがってその初義は、闇の字 をも闇という。すなわち闇がもとの字で、暗はその は古今の字である。〔周礼〕によると、 闇とかかれ、経伝にはみな闇の字を用いる。闇・暗 とはもと目にみえないもの、視覚ではとらえがたく かに聴くことのできるものをいう。暗は古くは 闇々として訴え、これに対して神の「音な 日食や月食

鞍 15 くら

に作る。中国には古く騎馬の俗がなく、その俗は戦 るくら。〔説文〕三下には篆文の字形 を事 声符は安。乗馬のときに用い

A. Va

1、 身色有限的人

よかなことは母は別の時間を

全国 16 酒つぼのふた・いおり

計 16 アン

お声 声符は音。音はもと「神の音を変なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」のお訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関なり」「誦するなり」の諸訓がある。闇と声義の関係のある字である。

點21

い・かなしい

を吞んで悲傷する意である。 を否んで悲傷する意である。そのうす暗いさまを心情の上に移して、心の悲しむさまをいう。黯然とは、声また奄に作る字もある。そのうす暗いさまを心情のよいであり、それで旁を

1

2 3 イ かむ・すでに・はなはだ・ああ

366

以5もって・おもう

用いている。また以の字としてはト辞に「衆を以るがなわちその反文であるとする説を引くが、ト文・金文の字形からいえば、明らかに耜(目)の象形である。ただその原義において用いられることはなく、字形も已と以とに分化して別の字となった。耜の形はまたムともかかれ、矣・私・台などはその形を含んでいる。已は金文の「毛公鼎」に「ああ」という感動詞、「叔夷・韓、おいうには、明らかに耜(目)の象形を含んでいる。已は金文の「毛公鼎」に「ああ」という感動詞、「叔夷・韓、おいて明の字となった。耜の形はまた人ともかかれ、矣・私・台などはその形を含んでいる。日は金文の字としてはト辞に「衆を以るの形を含んでいる。日は金文の字としてはト辞に「衆を以るの書である。」という感覚は、明らないというに、明らないというに、またというない。

る」「人を以ゐる」のように用い、金文においても 西周初期の「小臣謎段」に、「伯懋兴、殿の八師を 以ゐて東夷を征す」後期の「毛公鼎」に、「乃の族 を以ゐて、王の身を干害(扞護)せよ」のように用 いる。また列国期の「許子鐘」に「馬でとし、斉の「叔夷鐏」「女、台て余殿が身を叫る 形とし、斉の「叔夷鐏」「女、台て余殿が身を叫へ よ」のように、台を以の義に用いる。これを以てい えば、已・以・台はみな声義の同じ字であり、ただ のち歌字の形が分化して、用義上の区別が生れたの である。たとえば日は動詞の「やむ」、感動詞の 「ああ」に用い、以は「ひきいる」「ゆえに」「おも う」「以いる」に用い、台は「われ」「台で」に用い るが、その訓義の範囲を越えて互用することは殆ど ない。ト文・金文の字形では已と以(目)とは同形 で、のち字形の分化に伴って慣用上の区別を生じた ものである。

世 5 みずをいれるうつわ

のもので、蓋に獣飾をもつものは古く兕觥とよばれ語末の助詞となり、器名には匜を用いる。この器形である。匝の器銘には多く也の字を用い、匜の流鷺を当り、部分を正面にした形である。のち也は形に山を加えて盗に作るが、塩は也の繁文形はその下に皿を加えて盗に作るが、塩は也の繁文を新、水器の匜の象形で、もと也の形。金文の字象形

以

にが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に良銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かめがたいたが、その遺器に自銘のものがなくて確かがあります。

これを揮ふ」とみえ、そのため奏騙の怒りを受けた話がある。いま存する匜の遺器には小さなものが多く、おそらく儀礼のときに用いたものであろう。[儀礼、たものであろう。[儀礼、たものであろう。[儀礼、たものであろう。[後礼、たものであろう。[後礼、たものであろう。[後礼、たものであろう。[後礼、たものであろう。[後礼、たものであろう。



台 5 もちいる・われ

易(陽・場・湯)をはじめ、羊・也・枼・兪・由の関係にあるものとして、たとえば甬(俑・踊・桶)、食・・ 造など、各系列の音がある。これと同じようなな・ 笠 い、それで三公の位を台衡・台槐・台臣、その命をも戦国期以後のことであろう。北斗三星を三台とい用いる古い用例はなく、また一人称の台に用いるの用いる古い用例はなく、また一人称の台に用いるの用いる古い用例はなく 台収のように用いる。台は喩母の字であるが、それ台命という。敬語として手紙の脇付に台安・台禧・ ができる。 諸字においても、そのような音の分化をたどること を声符とするものに恰・治・胎、始・似・姒、胎・

川の名・人名・これ

水の神で、その神を祀る聖職者の名とされたもので王業をなさしめた賢臣とされているが、もともと伊 伊尹の神話は北魏の酈道元の「水経注」にみえる。に阿衡とよばれるものは、その聖家族の名である。 あろう。ト辞に黄尹といい、「詩、商頌、長発」あろう。ト辞に黄尹といい、「詩、商頌、長発」 後のものである。伊尹は、殷の湯王をたすけてその 「これ」という語詞としてのよみかたは、それより うに、これを助ける聖職者をいう語であった。古く を加えたものが君で、君とはもと女巫にして女君た 介する聖職の人をいう。その尹に祝禱の器である J. 形声 声符は光。**は神杖をもつ形で、神意を媒 は伊水・伊尹のように、固有名詞にのみ用いる。 るものをいう。伊は君に対して、たとえば伊尹のよ

> 朝の祭祀を受けている。[周礼、伊耆氏] に、「國の朝の祭祀を受けている。[周礼、伊耆氏] に、「國の朝の祭祀を受けている。[周礼、伊耆氏] に、「國の朝の祭祀を受けている。[周礼、伊耆氏] 〔書、君奭〕に、湯のとき伊尹があり、太甲のとき 聖者をえたという。その家は世襲であったらしく、 空桑のうちに嬰児がいるのを見つけ、養育してこの昔、辛氏の女が伊川のほとりで桑摘みをしていて、また、いま 神の憑りつくその呪杖をもつ人を意味した。 を掌る」とあり、祭祀のときの呪杖を掌る。伊は みえる。その世系は王朝のそれと並んで、久しく王 阿衡があったとする。卜辞に尹系の神を祀ることが

夷。 えびす・たいらか・きずつく

0 2 今東東 7

があり、陳列の意に用いる。「爾雅、釈詁」に、尸・夷が通用した証としてよい。夷にまた矢陳の義のは、すべて夷槃・夷牀・夷衾という。これは占く 会意 盤に用いる氷を供することである。尸牀に用いるも 凌 人〕の「大喪には夷繋の冰を共す」とは、尸の り、もと象形の字。尸と全く同形であるから、尸といくらか腰や膝をまげた人の側身形にしるされてお 字形の説明とが一致しない。卜文・金文の字形は、 もつ人とするが、「平らかなり」とするその訓義と、 〔説文〕「O下に大と弓とに従うて、大弓を 『 ! ! と

> 近年、陜西宝鶏號鎮から出土したと伝えられる音は中であったと考えられる。 (場)・兪(偸)などにも認められ、それらの古代頭 は、夷と同じく喉頭音喩母に属する墨(擇)・易は、夷と同じく喉頭音喩は、馬音のこのような関係とするものと多く通用する。夷音のこのような関係 洟・桋・眱・銕(音テイ)などと連なり、弟を声符 尸は一の音系に属する語である。この系列音は、 た雉を介して、これらの字は夷を声符とする荑 矢・雉・尸・旅は陳ぬるなり」とあり、 矢。雉 ま

[論語、憲問]「原墺、夷して俟つ」の〔馬融注]「白虎通〕の「夷なるものは釋夷、禮義無し」、またち今の尸字、占の尸字は卽ち今の死字なり」とし、ち今の尸字、占の尸字は卽ち今の死字なり」とし、 【南宮柳州】に、「柳(人名)に册命して、六師の の象に近い。呉大澂の〔字説〕に、「古の夷字は即 その字はみな尸形に作り、人の側身形で蹲踞・跪踞・麻南夷・淮夷・夷人など、夷をいう例は甚だ多いが 作られたとみるべきであろう。金文に東夷・南夷・ 用いられていることもまた疑いのないことであるか である。しかし尸が、卜文・金文において夷の義に では、それは一そう明白である。いわゆる大弓説は、矢に繳をつけた形に似ており、「侯馬盟書」の字形む」、とあり、その夷字は大弓に従うというよりも、む」とあり、その夷字は大弓に従うというよりも、 牧・場・虞・□を嗣め、義夷の場・甸・史を嗣めし に、「夷は踞なり」とあるによって、その字形を夷 ら、尸が夷の初文であり、のち繳形の夷の字が別に なわち字は弔に近い構造のもので、尸とは別系の字 のちの字形による附会的解釈のように思われる。す 人の蹲踞する姿勢を写すものとする。〔古文孝経〕

方諸国のことがしるされている。 書、東夷伝〕〔宋書、夷蛮伝〕のほか、〔隋書〕に東 …たことが知られる。 [魏志、東夷伝] 以後、 [後漢)きものであるから、のちまでもなお尸を夷に用いて 点を加えた字形があり、みな尸の重文で夷と解すべ 「漢書、樊噲伝、注」、「敦煌本尚書」などに、尸に重

臣 6

拉馬

衣 て養うことを頤養という。匠は頤の初文とみてよ る。授乳をたのしむ乳子の姿を熙々といい、授乳し 授乳頤養のことを示す字で、巳はその乳子の象であ 並ぶ形を写したもの。姫とは成人した女。また巸は 系統の字を説くことができない。字は姫・配の字形 からも知られるように、両乳を横からみて、 とするもので、匠に従う姫(姫)や頭・巸及びその き櫛の形とするが、それは蟣を梳きとる館の初文 異なる字である。また子省を氏は梳比、すなわち梳の重文はいずれも顕養の字であって、おとがいとは として篆文の頤、また鼈の字形を出しているが、こ ころも・きる 「説文」ニニヒにおとがいの象形とし、重文 その相

向 Ŷ ()°

「二人を覆ふ形に象る」とし、下部を人二人の形と象形 一衣の襟もとを合せた形。〔説文〕ハ上に、

Œ

衣位

医(醫)(毉)

気り敢こ克たしめ」たからであるという。饕も、始その保護霊であった文母が「永く厥の身に襲き、治・の保護霊であった文母が「永く厥の身に襲き、 服に着かえて、兵器で祓い、入魂の儀式をしたので博とは兵器で搏つ意であるから、おそらく新しい衣 奪還して、「衣博」という儀礼をしたことがみえる。 る。〔刻設、一〕の文では、その作戦の成功は、終 あろう。その上で、かつての旧君に引き渡されてい ことで、大学で一)に、現外の間に俘人となっていた百十四人を一)に、現外の間に俘人となっていた百十四人を設め、う儀礼を行なったことがみえ、また近出の「姿設、う儀礼を行なったことがみえ、また近出の「 俘人となっていた四百人を奪還して、「衣津」 に二例みえている。西周後期の〔敵敗、三〕に、 ための、復活の儀礼が行なわれた。そのことが金文 老〕などはみなそれである。一たび外賊の俘囚とな ったものが生還したときには、死を送り生を迎える 含うものが多い。〔詩、邶風、緑衣〕 〔鄘風、君子偕うものが多い。〔詩、邶風、緑衣〕 〔鄘風、君子偕死者の衣は招魂のよすがとされ、挽歌には衣裳を歌 を結んだ形を卒という。死卒を意味する字である。 死者の胸もとは絶息とともに結ぶので、衣の胸もと 袁などの字形によっても、知ることができよう。する文字、たとえば哀・袞(袞)・蹇・襄・袰・女の文字、たとえば哀・袞(袞)・蹇・継・衆・衆・衆・衆・衆・衆・衆・衆・を用いることが多かった。それは喪葬の儀礼に関 ことを示している。占代の招魂・鎮魂の儀礼には、 は衣る人の魂が寄せられるという古い観念があった いずれも衣の同音の字によって訓するもので、衣に し、〔白虎通、衣裳〕には「隱るなり」と訓する。 は裳という。また〔説文〕に「衣は依るなり」と訓した。 い。衣は上衣、上下を分つときには、下を常あるい みているが、二人を覆うような衣服があるはずはな بح

> 位7 あり、卜辞に直系の祖を合祀することを衣祀という。衣による受霊をいう字である。衣にはなお殿の声が衣による受霊をいう字である。衣にはなお殿の声が くらい (中)

· 人工學 ***

0

沊

 \uparrow

会意

器では、「国差験」に、「國差、立事の歳」という紀ている。そのときの音の同異は知られない。また斉は位という名詞と、また立つという動詞に両用され 年形式の文があり、それは「事に立(涖)むの歳」 をとる。「諫殷」には、「王、大室に各り、立(位)嚮す」、あるいは「立に卽く」という定型的な形式徐役の右者が、受命者を右けて「中廷に立ちて北京が、立が位の初文。金文の廷礼冊命形式の金文では、ら、立が位の初文。金文の廷礼冊命形式の金文では、ら、立が位の初文。金文の廷礼書は、 って音をかえていたのであろうと思われる。 の意である。涖の音はり。立や位はその用義法によ に卽く」のように、王の行為をいうこともある。立 立とは、儀礼のとき、一定の位置に立つ形であるか 右に列す。どを位と謂ふ」とし、字を会意とする。 人と立とに従う。〔説文〕ハ上に「中庭の左

医 7 【醫】18 【毉】18 うつぼ・いやす・イ・エイーくすし

(題の

また た翳に作る。〔国語、斉語〕に「兵、翳を解かず」 とは、ゆぎを解かず、武装したままの意である。 会意 「ゆぎ」ともいう。その本音はエイで、字はま 矢を匚の中に収めている形で「うつぼ」、

義ともに異なる字である。醫は殹に従うが、殹は呪はいま醫の略字として常用字に用いるが、もとは声 のち毉・醫の字が作られた。 医療には巫術や呪具を用い、また酒を用いたので、 とあり、その祝禱のときのいきんだ声をいう。古く とをいう。殹は〔説文〕「四下醫字条に「病聲なり」 禱し、これを殴ち、その呪霊によって病魔を祓うこ に、呪矢を秘匿のところに収め、これに向かって祝 匿のところで巫舞を行なうことを示す字であるよう あった。その医は「うつぼ」の意ではなく、匿が秘 器としての矢を殴つ形で、それが古代医術の方法で

2 12

圍

義において相通ずるところがある。 た形がその初文である。韋・違・圍・衛は、その声 防衛のときには衛といい、衛は口の四方に止を加えさらに口を加えて包囲の意を示したものとみられる。 の形はすでに韋の字形に含まれているが、その外に 左行・右行する止を加えて巡回することを示す字で 「守るなり。 声符は韋。韋は城郭の形である口の上下に、 の初文、めぐる意のある字である。〔説文〕 口に從ひ、韋聲」とする。城郭

矣, 終助詞

一个

交」に謀・萊と饋している。矣を要素とする挨・埃古くはアイであったらしく、〔詩、小雅、十男之とする説もあるが、それは音が合わない。その音はとする説もあるが、それは音が合わない。その音は 气は直疾なり。 会意 るものが多い 「桃弧棘矢」のように、古くは呪的な儀礼に用 のような語として、語末の助詞に用いられる。 詞の「ああ」、あるいは応答の語に用いる。矣もそ て耜を撃ち、田器を清める儀礼であり、唉とはその 撃つ意をもつ字である。それならば矣は、矢をもっなり」、[広雅、釈詁]に「挨は撃つなり」とあって、 はその音であり、 それで徐灝の「説文解字注箋」のように、矢を声符 が、口気の直疾を矢で示すというのは適切でない。 の气を出すこと直にして疾きなり」と会意に解する 意についてはふれていない。【説文繁伝】に、「矢の 五下に形声とし、目を声符とするが、 もので、矢に従う字には、古代の修祓の儀礼に関す ときに発する声をいうものであろう。唉・欸は感動 を加えて、清め祓う儀礼を示す字である。〔説文〕 耜の象形である厶と、矢とに従う。耜に矢 いま試みに矣と言ふときは、則ち口 挨は「説文」「三上に「背を撃つ 字が矢に従う 矢は いた

依8 よる・たもつ

뼷 面合

る霊の憑依や受霊の意を示す。「説文」ハ上に字を会意 人と衣とに従う。人に衣をそえて、衣によ 形声とするが、 ト文の字形は衣中に人の形を加えて

[詩、周 頌、載芟〕に「其の婦に思媚す(依たるまたそのように神霊の憑りつく状態を依という。 ない。 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないであるが、第四章に祖霊を招すの都作りを歌うものであるが、第四章に祖霊を招す の都作りを歌うものであるが、第四章に祖霊を招す 受には衣裳を用いた。〔詩、大雅、公劉〕は、公劉 体の儀礼を行なう次第をのべたものである。霊の授 上あり」の句があり、穀霊に扮する男女の舞を歌 その筵や几によって、祖霊の憑りつくことをいう。 て乃ち依る」というのは、宗廟を築いて祖霊を招き もみえる。〔顧命〕篇は成王が没し、康王がその継 そのような形式がとられることは、「書、顧命」 霊をよりそわせる意である。受霊継体の呪儀として ることを本義とする字であるからである。 れも恍惚たる状態をいう語である。依は神の憑依す う。依々は思慕、依稀は彷彿、依微はほのか、いず おり、わが国の真床襲。衾のように、衣を身にかけて

委8 ふす・おく・したがう・まかすイ(ヰ)

爱

多いので委曲・委折という。おだやかに従うことを 蛇・委靡・委屈・委然といい、また曲折することがその舞う姿勢は低くしてしなやかであるから、委 会意 であり、男女が稲魂に扮して舞う農耕儀礼を示す。 のを被って舞う女の姿をいう。同じく禾形の作りも のを被って舞う男を年というのと、同じ構造法の字 禾と女とに従う。穀霊に象る禾形の作りも

統の語と、声義において通ずるところがある。 字の原義は田舞の姿である。萎・痿など萎声の字義 は、委靡の義から出たものであろう。委は于・宛系 〔左伝〕に委任・委置・委棄などの用義例があるが、 隨なり」として会意とするが、それは字の転義。 農事のことに関する語である。〔説文〕一二下に「委 物を集積する委積・委置、これを移送する委輪も、 いう委随・委順の義も、そこから出ている。 また作

怡 よろこぶ・たのしむ

(悦)・懌はその頭音が同じで、声義において通ずる ところがある。 農具を清める儀礼をいう字であるから、恰は台の声 語がある。同じく台を声符とする总は、怠慢の字で とみえ、〔史記、太史公自序〕に「諸兄合ばず」のとみえ、〔史記、太史公自序〕に「音は悲ぶなり」って、〔説文〕二上に「台は悲ぶなり」 ある。昔は耜の形である厶に、祝禱の〓を加えて、 兼ねて、怡悦の義となる。台・怡・予・悅 形声 声符は台。台にも恰ぶ意があ

威。 おごそか・おどすイ(ヰ)

散赋於

とは関係がない。清末の兪樾の[児笘録]に、女子あるとする。威姑とは漢律にみえる語で、字の初義 の性は怒りやすいものであるから、字は女に従うと の会意とし、婦が姑をよぶ語、すなわち威姑の義で 成と女とに従う。〔説文〕一二下に戌と女と

宧

の用義ではない。 意はその転義であり、権威のような語も、字の本来 字とすべきである。他に対して畏懼や威侮を加える を受け、心を終んじ、威儀を厳荘にすることをいうから、そこに威儀の義が生れる。聖器によって祓いから、そとに威儀の義が生れる。聖器によって祓いたい。戈や戊によって邪霊をしりぞける意である は、もと聖なる兵器をもって、女子を綏安する儀礼 形は、党の下に妥を加える形である。すなわち威と のと同じく、威儀の甚だ備わるをいう。その威の字 - 盤] 「「威義遊々」とあって、遊々とは悠々という盤」 に「威義遊々」とあって、遊々とは悠々にいる。列国期の〔蔡侯』の語がみえ、威の古い用法である。列国期の〔蔡侯』 である。「書、 怒を原義とするものでなく、威儀あることをいう語 義を秉る」とあって、明徳に対して威儀という。威 西周後期の〔椒 向父禹殷〕に、「明德を共み、威忠」。。金文には威義という語が多くみえ、たとえばいう。金文には威義という語が多くみえ、たとえば 顧命〕や〔詩、邶風、柏舟〕にもそ

宧9 やしなう

宧養の他に用義例はない。 『室の東北隅、食の居る所なり』とするが、宀は、廟「室の東北隅、食の居る所なり」とするが、宀は、駅であって、宧養は双声の語である。〔説文〕にまたあって、宧養は双声の語である。〔説文〕にまた と声義は同じであるが、宧はその廟中の儀礼をいう。 げる育子儀礼の一を示す字であろうと思われる。頤 屋の象であるから、宧はもと養育することを廟に告 象形。〔説文〕七下に「養ふなり」と 、と匠とに従う。 匠は乳房の

為。[爲]12 なす・つくる・おもう・イ(ヰ)「まねする・ため

*** 李至年 8 少少少

日本のいいあんと ないれる あるのはない

0

に公叔禺人の名でみえる。禺とは猴の類である。* 魯の昭公の子である「公爲」 〔左伝〕にみえる人名などにも、その解釈によるか った。 と思われる例がある。 たとえば昭二十五年にみえる だそのような字形解釈はかなり古くからあって、 る」という訓義のあることからの推測であろう。 にこの字を母猴の象形とするのは、為に「まねす に」や受身などの用法は仮借とみてよい。[説文] べて象を使役することからの引伸義であり、「ため 十数義を列するものもあるが、その動詞の用法はす にもいう。この字は用義法が甚だ多く、字書には五 「余が鐘を作爲す」というように、器物の制作など 礼を執行する意に用いている。また列国期の鐘銘に 大豐を爲す」のように、神都である辟雍で大豊の儀だ背。ねの全般に及び、周初の〔麦尊〕に「王、舟に乗りての全般に及び、周初の〔麦尊〕に「王、舟に乗りてあることからも知られる。のち語義を拡大して行為あることから また周初の〔離伯鼎〕に、「宮を爲る」という語が ト辞に「王は我が家(宮廟)を爲らんか」とト ときなどの力役を補うためにこれを使役したことは、 使役している形である。古代において、宮殿を作る 形に合わない。ト文・金文の字形は、明らかに象を 三下に「母猴なり」とし、猴の象形と解するのは字 で、土木工事などの工作をすることをいう。[説文] 会意 手と象とに従う。手を以て象を使役する形 は、「礼記、檀弓、下」

畏

様とするものが多い。 えられる事実である。殷周期の彝器には、象文を文 ており、殷人が象を使役していたことは、十分に考 にも棲息していたことは、古い伝承や文献にもみえ でに忘れられていたのであろう。象が古く江北の地 為がもと象を使役する形であることは、そのころす 名は為、字は禺で、名と字と相応ずるものとしてお 為を猴の義に解していることは明らかである。

畏 9 おそれる・つつしむイ(ヰ)・ワイ

r (*) 墹 ф М 料

上部を鬼頭の形、下部を虎の省形でその虎爪を示す それは夢魔のなすところで畏夢の意。「周礼、占夢」 なるという。ト辞に「鬼夢多し」という語があり、 ものをもつ形に作る。羅振玉の「殷虚書契考釈」 ものとするが、ト文・金文の字形は、神杖のような 邪霊のなすところとされているが、呪杖をもつ鬼も にいう「懼夢」の類であろう。夢は媚蠱とよばれる に、鬼にして支をもつゆえに、畏るべきものの意と 「天の畏を畏れよ」、また後期の〔毛公鼎〕に「敗天長夢の語がある。西周初期の金文〔大盂鼎〕に「以子 また、悪夢として禍をもたらすものとされ、 疾畏」「王畏を敬念せよ」とあり、畏とは霊的な力を 字はまた威と通用し、列国期の〔王孫遺者 鬼形のものの形に象る。〔説文〕九上に字の t. それで

別」に「德の畏をこれ威る」とあって、畏と威とをの明畏は、我が民の明威に自る」とあり、〔書、呂の明畏は、我が民の明威に自る」とあり、〔書、呂の明畏は、我が民の明威に自る」とあり、〔書、呂の明是は、我が民難〕に、「畏義を叔くす」と 相対して用いている。神畏に対するおそれを、威と いったのである。

胃 いぶくろ

88

[吉日剣]に、胃を「謂ふ」の字に仮借して用いて 意によって肉の形を加える。〔説文〕四下に「穀府会意」と部は胃の象形。下部に、五臓の一である いる。 なり」とあり、 る形である。蝟集の蝟と、語義が通ずる。列国期の 篆文の象形の部分は、胃中に物のあ

1、 たがう 2、なめしがわ

書 五より HOD やするエロチ 弟

えば圏であり、守る立場からいえば衛となる。韋に儠(囲)・衛にあたる字である。攻める立場からい 左行と右行であるから、また違背の意となる。また 従う違・圍・衛の諸字は、みな城邑の攻防に関する の形である止を加えて、 会意 -文に城邑の四方に止を加えた字形があり、のちの 口は城邑。その上下に左行・右行する趾 違(違)る意をあらわす。

任戻し、相章背すべし。故に借りて以て皮韋と爲いれる。姓に從ひ、□營。獸皮の 韋 は、以て束ねてなり。舛に從ひ、□營。獸皮の 韋 は、以て束ねてなり。年に1の韋字と合せて一字とし、「相背く2象形 なめし皮を重ねて、これを束ねた形。 字である。 字明らかに異なり、別の字である。卜辞に四方の方 違戻の二義があるとするが、卜文・金文の字形は両 ·神と風神の名がみえ、「西方を韋と曰ふ。その風を す」とし、獣皮の韋は左右に抂げうるので、 の神が起す風である。この古い伝承が〔山海経〕 に作る。ト辞にまた「韋風」という語があり、西方 彝と曰ふ」とあり、その韋の字は、ものを束ねた形 字があり、「束ぬるなり」と訓する字であるが、さ 方神と風神の名にあたる。また「説文」七上に홿の 夷と曰ふ。來風を韋と曰ふ。西北隅に處りて、以て 淑士と曰ふ。顓頊の子なり。……人あり、名を石いさいて、〔大荒西経〕に、「國あり、名をにも残されていて、〔大荒西経〕に、「國あり、名を [説文] には、意外に古い きの卜文の「韋風」の字はまさにその形にかかれて 日月の長短を司る」とあって、卜辞にいう西方の 字形や古義を存しているこ おり(博図)、その字が〔山海経〕では韋と釈されて とがある。 いるのであろう。文献には全く用例のない字である。 THE ALTE 皮韋と

倚 10 よる・もたれる

億 0 왕

とをいう。 倚る」「杖に倚る」のように、ものに身を寄せるこ よる受霊の呪儀を示す字で、本義は異なる。「机に のものに倚附し、よりかかることをいう。依は衣に 意をもつ。〔説文〕、八上に「依るなり」とあり、他 手のある大きな曲刀の形で、かたよる、よりかかる 声符は奇。奇に猗・椅の声がある。奇は把

唯

[麦方彝]「唯歸りしとき」のように、 意味をもつ虫が加わると、「雖も」という逆接態と は口ではなく日の形。日は祝禱の器の形であるから、を口に従う形声の字とするが、唯や鳴の従うところ 惟を用いることが多い。〔説文〕二上に「諾するな惟を用い、金文ではのちに唯を用い、経籍では維・ 唯ること無し」のように、有の意に用いるのはそのりていうときに用いる。後期の〔毛公鼎〕に「正聞していうときに用いる。後期の〔毛公鼎〕に「正聞 なって保留がつく。発語としての唯は、肯定体の文 認を示し、唯諾の意となる。 これらは鳥占いを示す字とみられる。それで唯は承 り」とあり、唯・諾は応答のことばである。また字 用いるが、その用義では隹が初文。卜辞・金文には 隹と口(U)との会意。発語の「これ」に その形式化したものであろう。周初の もし祝禱の器に邪悪の 確かな事実と

> きは、唯一 のであろう。「礼記、玉藻」に、「父命じて呼ぶとる。そのような過程を経て、唯は応答の語となった 事をする意である。 ず唯諾を謹む」「唯して起つ」とあって、すぐに返 という語義の展開をもつものであることを示してい とがある。これらはすべて唯が、卜占・承諾・保有 姿んず」のように、領格の之と同じように用いることがある。中期の〔也設〕には「用て明公唯壽をためである。中期の〔や設〕には「別て明公唯壽を いて諾せず」、また〔曲礼、上〕にも「必

11 ひのし・官名・じょうイ (ヰ)・ウツ

〔左伝〕にみえ、軍官また獄吏をいう。 秦漢以後に その兵書〔尉繚子〕にのみ用いる。熨は尉の繁文。 を「じょう」とよむ。ウツの音は、戦国の尉繚、は法官を廷尉という。わが国では、官名としての尉は法官を廷尉という。わが国では、官名としての尉 意の上に移して、慰の字が作られる。官名としては 火の形はすでに示の形で尉のうちに含まれている。 火のしで、布帛を平らかにする意である。これを心 寸(又。手の形)をもってこれをのばすことを示す。 おもう・ただ・これ (ユヰ) 会意 が正しく、上に布帛、下に火をおき、 字はもと觑に作る篆文の字形

惟

0

しては隹の繁文であり、惟・維・帷などみな同声で二十六字、さきの唯は会意字とみてよいが、発語と形声 声符は隹。 作声に属するものは〔説文〕中

「常思」、想に「冀思」のように、それぞれに思慮の「凡思」とは、憲に「謀思」、願に「欲思」、念にある。〔説文〕:〇下に「凡そに思ふなり」とあり、 ろがあろう。列国期の〔陳侯因脊敦〕に、唯の下に 大雅、生民」「載ち謀り載ち惟ふ」の謀は、神に謀隹を用い、のち文献には維・惟・唯を用いる。〔詩、 る意を示す字形である。 心を加えた字形があり、 ることであるから、惟もなお鳥占の意を承けるとこ しかたをいうのと同じ。発語としては、金文に多く それは鳥占によって思慮す

異 ことなる・わざわいイ・ヨク

界 學學へ

その形は、ものを養就する形に似ている。周初のその形は、ものを養戴する形に似ている。周初のとことを述べて、「嚴以、就、允益」に祖霊の来臨することを述べて、「嚴以、於、益」に「天、異臨して子しむ」、また後期のその形は、ものを養然 ずる。 界と、
計との会意とするが、
異は分与を原義とする 三上に「分つなり」と訓し、「界は予ふるなり」のいずれも翼の音でよみ、厳翼の意である。〔説文〕 象形 示したもので、それより異常・異変・奇異の義を生 畏 は異の側身形、ともに鬼頭の畏懼すべき神状を** るか」とトするのは、災異の有無を問うものである ものでなく、霊鬼の象形である。卜辞に「王に異あ | 蒙棋・方相などの異相は、その面貌を伝えるもる。鬼頭の形は、あるいは仮面であったかと思わる。 鬼頭のものが、その両手を掲げている形。

移11 うつす

がある。 ずる意となった。元の戴侗の〔六書故〕に、苗を移 宰相たる令尹の身に移すことができよう、と答えた。 えるものは遷(遷)と移とであるが、遷とは死者を が古いと思われる。「うつす」意の字で最も早くみ ことが字の原義で、のちすべて、これよりかれに転 はまもなく消えたという話がある。この移殃という 移さん」といって、祟よけの祭を拒否したが、異変 もない。罪あらば私が受けよう。「また焉ぞこれを 楚に異変のことがあり、楚子が周の大史にそのこと するもので、その本義としがたい。〔左伝〕哀六年、 声とし、「禾、相倚移するなり」と稲などのなびく災異を他に移すことをいう。〔説文〕七上に字を多 ずれも古い宗教的儀礼や呪術を反映する文字である。 遷し、神尸を遷座すること、移とは移殃の義で、 し植える移秧の義をもって解するが、移殃の義の方 しかし王は、腹心の疾を股肱に移しても、 をたずねると、大史は、 さまとするのは、倚移のような連語をもって字を解 もし祭という祟よけの祭をすれば、これを 多は肉の象。この両者を供えて祀り、 禾と多とに従う。 禾は禾穀、 王の身に災禍の及ぶおそれ なんの益

> いる。のち神位を遷すのに遷を用い、 人を移すには移を用

偉 12 すぐれる

美の要素を含むとされた。 者」の注に「美なるかな」とするのによる。偉には なり」とあり、〔淮南子、精神訓〕「偉なるかな造化師〕「偉なるかな造物者」の〔釈文〕に、「偉は美師」「偉なるかな造物者」の〔釈文〕に、「偉は美 で、

遠・

華にもみな

美盛の

意がある。

「荘子、 で、壁・韡にもみな美盛の意がある。〔荘子、大宗大・偉盛・偉美の義は韋の声義のうちに存するもの 形声 なり」と訓し、奇偉の義とする。偉 声符は韋。〔説文〕ハ上に

弇 12 こイ の(井)

木のさかんなるさまをいうとするが、李もまたはじ〔説文〕 メトトに「艸木麝字の兒」とし、〔段注〕に草 めて果を結ぶさまの象形の字である。 はしべの残り、 た状態の象形字。上部は花萼、下部の象形 花が終って、実を結びはじめ 田形の部分が実となるところ。

椅 12 木の名・いす・はし

糙

定之方中〕は、衛の都作りのさまを歌ったものでいた。というでいた。ないいいぎり・あずさ・あおぎりをいう。〔詩、鄘風、いいぎり・あずさ・あおぎりをいう。〔詩、鄘風、 形声 あるが、「これに榛栗と 椅桐梓漆とを樹ゑ 声符は奇。奇に倚・輢の声がある。 木の名。 7 1 3

木の椅子を用いた。わが国で「天の椅立」「倉椅山 以後のことといわれ、宋の高宗は徽宗の服喪中に白 後ろに倚のあるものをいう。椅子を用いるのは五代 ている喬木である。椅几は脇息、椅子は腰かけで、 の材としようという。 に琴瑟を伐らん」と植樹のことがみえ、それを琴瑟 のように用いるのは、その字を階梯・橋梁の意に解 したからであろう。 その実は南天に、皮は桐に似

萎 12 かれる・なやむイ(ヰ)

それ頽れんか 梁木それ壊れんか 哲人それ萎ま 萎縮して力のない状態であるから、萎を病の意に用 萎というのであろう。人の病のときには痿という。 稲魂を被って舞う女の姿を示す字であるが、その姿いな。*** ち草の枯れしぼむことをいう。*委は農耕儀礼として をまぐさとするものであろうが、字は萎絶、すなわ 日にして没したという。 んか」と歌うて門に入ったが、のち寝疾すること七 いることもある。〔礼記、檀弓、上〕に、孔子が病 のなえしぼむ状態に類比して、草の萎絶するさまを は委靡として低く、 んで死に近いとき、杖を曳いて門に逍遥し、「泰山 形声 を食ふなり」と訓しているのは、菱草やな。声符は委。〔説文〕一下に「牛 しなやかな状態であるから、草

計 12 おくる・あざむくイ・タイ

弱 A P

繁文であり、以には与える意があるので、言を以て の〔方言〕によると、相欺詒するというのは汝南の り」と訓し、「一に曰く、遺るなり」という。揚雄訓し、〔説文〕三上にそれを承けて「퀌歎許するな遺る意に用いる。〔爾雅、釈詁〕に「欺くなり」と 王に論る。これに名づけて鴟鴞と曰ふ」など、みな 台は以の にこの字なく、張次立の補入したものと思われる。 爲(為)の音をとるものであろうが、[旧本繫伝]。る字である。[説文]に或る体としてあげる蟜は、る字である。[説文]に或る体としてあげる蟜は、 蛇・逶遅・逶随はみな同じ語で、それぞれ声の通ず 池」に作り、〔説文〕の字と同じ。 逶夷・逶池・逶 羔羊〕の「委蛇たり委蛇たり」を、〔韓詩〕に「逶ぎょ ……な文の表記法はこれと同じである。〔詩、召南、する文の表記法はこれと同じである。〔詩、召南、 曲すべきなり」というのは、古く詩句を「委~蛇 は、これでは、「では、「では、「では、これでは、できない。」の伝に、「できない。 「できない。」の伝に、「できない。」では、「できない。」とし、次条に「池、邪行なり」といえるの見なり。とし、次条に「池、邪行なり」といえるの見なり。とし、次条に「池、邪行なり」といえるの見ない。 に去るの見なり」とし、次条に「池、邪行なり」 するために、そを加えた。「説文」ニ下に「逶迤、郷 」と表記していたからで、金文においても、重読

彙13 [蝟]15 はりねずみ・あつまる

胎 12

おくる

詒を紿の声義をもって解するのは誤りである。 う。紿はその声義が詒・貽と系統を異にしており、 おくるのを給といい、財物を以ておくるのを胎とい 方言である。欺の意には給の字を用いる。

蝟はのちに作られた形声字である。 としては、彙のほうがふさわ をみると仰臥して腹をみせ、その啄するに任せると 険がせまると、毛を立てて刺球の形となるが、 ******* ある。〔本草〕の陶隠居の説によると、彙は身に危ある。〔本草〕の陶隠居の説によると、彙は身に危 と、その声をとるというも、字はその全体が象形で いう。豪毛が密集しているので、彙集の意に用いる。 といい、また「胃の省聲」、すなわち胃の上部の形 〔説文〕カトに「蟲なり。豪豬に似たるものなり」 秦 獨 まるめて毛を立てている形。 象形 はりねずみが、 はりねずみの字 身を

逶 12

まがりめぐるさまイ (ヰ)

それが麦禾の類であるからであろう。

句を〔漢書、劉 向伝〕に引いて貽を飴に作るのも、タヒテビータータールーク。でいています。 を以て人におくるので、字は貝に従う。〔思文〕の

「我に形管を貽る」とあり、その財宝とするところり嘉禾を与えられた伝承を歌う。〔邶風、静女〕に

. . 思文〕に「我に來牟(麰)を貽る」と、天帝よ . 「贈遺するなり」とみえる。〔詩、『鳥 . 『だ、「贈遺するなり」とみえる。〔詩、『鳥 . 『だ、『『記文新附』六下に

儀礼において、稲魂を被った 形声 声符は委。委は農耕 意 13 おしはかる・おもう・ああイ

> る。のちの億の字である。 の〔嗣子壺〕に「萬意年に至らん」とその字を用い 同声で、仮借の用法、蟾は感動詞としてのちに作らとなる。「あるいは」は或・抑、「ああ」は悪などと意とはもと憶度・憶測の意、それよりして心意の意意とはもと覚を るなり」と訓し「十萬を意と曰ふ」とする。列国期 れた字である。〔説文〕にまた意の字を出し、「滿つ をいう。それによって神意を推測するのであるから うが、字は音に従う形であるから、「音によって意 を知る」というべきである。。音とは「神の音なひ」 下に「言を察して意を知るなり」と 音と心とに従う。「説文」一〇

痿 なえ(本)

て動かぬこと、中風などをもいう。 るなり」とあり、神経系の疾患をいう。手足の奏えせる意がある。〔説文〕七下に「痺れた。 一般に 一形声 声符は姿。 委にしなやかに伏

章 13 あし・よし

旧正月十五日の節日である上元の日に、婦女がこれ だ葦席は、喪葬の礼に用いる。葦の神を葦姑とい 夜に鬼やらいをして、門戸にかける。また蓆に編ん 鬱壘の二神が鬼を捕えるときに用いる縄で、歳晩の 罩 形声 声符は草。草にはものを束ね

しなやかに舞う姿をいう。その歩む姿を形容

1

貽 逶

意

痿

きった。草を取れた。とが行なわれた。とが行なわれた。とが行なわれた。となるとに、民俗的な意味が含まれているようである。とに、民俗的な意味が含まれているようである。とが行なわれた。

建 13 「建」14 めぐる・たがう

新 · 中田 · AOH

形声 声符は常。常は城邑の周囲を巡回すること。 〔説文〕ニ下に「離るるなり」とは、韋に「相背くなり」とする訓を承けるものであるが、城を巡回するのに、上下その方向を異にするので、違戻の義がるれた。周初の〔班段〕に「隹徳を敬みて、攸て違ふこと亡し」のような例がみえる。

4 ならう・ゆえに

新春 和

会意 名と書とに従う。希は教・私の字の従うと会意 名と書とに従う。希は教・私の字の様うともあり、また祟と釈されることもあるが、みな名がその初形である。幸は〔説文〕三下に「手の恵がその初形である。幸は〔説文〕三下に「手の恵がその初形である。幸は〔説文〕三下に「手の恵がその初形である。幸は〔説文〕三下に「手の恵がその後うとという。わが国の神話にみえる「蛇の比禮」「呉という。わが国の神話にみえる「蛇の比禮」「呉という。わが国の神話にみえる「蛇の比禮」のようなものと考えてよい。〔説文〕な・戦の字の従うと

に皇天尙とせず」のようにいう。繍をその義に用いその語は文献では肆を用いて、〔詩、大雅、抑〕「肆をのように、「繍に」という上を承ける語に用いる。 三下に「習ふなり」と訓し、名声の字とするが、そ の字が金文にみえ、「県改設」に「緋に敢て彝 の反切音は羊至切でイの音である。 るのはおそらく字の転義であり、その音も肆と同音 襲(恭)保す に除す」、〔大克鼎〕「繍に克く厥の辟襲(共)王を 肆陳、ゆるめる意の肆赦、安んずる意の綏肆など、義にも及ぶが、思うままにする放肆、殺してさらす れているようである。字書にあげる肆の用義は四十 と考えられ、繍の本来の字義は、みな肆の字に移さ 金文の用法からいえば繍は肆ともと同じ字であった 肄の肄の字の訓であるが、金文にはその用法はない。 とする訓は、〔説文〕が繍の重文としてあげる線・ とされているのであろう。〔説文〕の「習ふなり」 ものである。これとよく似た形の隷は、呪霊のあるみな緋の形象の示す呪儀から引伸することのできる 赦の意を生ずるのである。 て、呪布をもってその邪霊を祓う字であるから、肆これを移されたものは奴隷となる。繍はこれに対し 獣を用いて、その邪霊を人に移す呪儀を示す字で、 」、〔毛公鼎〕 「繍に皇天斁ふこと亡し」 この字形のまま (器)

維 14 つな・これ

雅 婚

形声 声符は隹。隹に唯・維の声がある。〔説文〕

こ三上に「車蓋の維なり」というが、「詩、小雅、台でに用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、方に用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、方に用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、方に用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、方に用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、方に用いる。その維の字形は隻(獲)に従うており、古くは鳥を維いでトするようなことがあったのかも古くは鳥を維いでトするようなことがあったのかも古くは鳥を維いでトするようなことがあったのかも古くは鳥を維は鳥下いを示す字形であり、進・唯・維はみな一系の字で、唯以下は形声字と考えられているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、ちれているものであるが、古い時代の鳥占の俗が、白い字形の背後にあるように思われる。

餡 4 イ・シ

配 15 なぐさめる・いやす

移して慰安の義となる。〔詩、小雅、車牽〕は、世ってものを安舒にするものであるから、心意の上にといいます。 おしのばす意があり、これによい とない とない おしのばす意があり、これによいない。 野は火のしするこ

蔚の訓義で、字を通用した仮借の義である。晴れるのをいう。むすぼれる、やまいなどの訓は、観て「以て我が心を慰む」とあり、心のいぶせさの観で「以て我が心を慰む」とあり、心のいぶせさのに許されぬ神人の愛情を歌うもので、「爾の新昏を

熨 15 イ (ヰ)・ゥッ

形声 声符は尉。尉は熨の初文で、尉の字形のう ちにすでに火を含んでいる。それがのち示形となり、 さいうが、また斗を合せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を合せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰の字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っ字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っ字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っ字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っ字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っ字が作られた。字の というが、また斗を含せて慰っとなる。

遺 15 【遺】16 おくる・のこす

精 UA WY WY

形声 声符は貴。貴は貝貨を両手でもち、人に遺贈する形の字である。金文はイに従う。「説文」ニ下に「山なり」と亡失の義に解するが、遺贈が字の本義である。食をおくるときには饋という。西周中期の〔晉鼎〕に「十秭を潰る」とあり、十秭の量中期の〔晉鼎〕に「十秭を潰る」とあり、十秭の量中期の〔晉鼎〕に「十秭を潰る」とあり、十秭の量中期の〔晉鼎〕に「十秭を潰る」とあり、十秭の量中期の〔晉鼎〕に「本社」として遺贈することをいう。「書、大誥」「寧(文)王、我に大寶龜を潰れり」とは、大誥」「寧(文)王、我に大寶龜を潰れり」に過きいる。

頭 15 ヤしなう・あご

「急・就篇」に「娘頤頸項」など頭部の名に列する。 の意味をもつ。これをあごの意とするのは後起の義。 噫 16 れば、 くものであるから頷、はげしく動くものであるからの意をもつはずはない。あごは食事のときにはたら 厄は婦人の両乳の象であるから、本来この字があご あり、〔漢書、賈誼伝〕にもその語がある。これらあごで人を使うので、〔荘子、天地〕に願指の語があごで人を使うので、〔荘子、天地〕に願指の語が り、廟中で行なわれる儀礼を示す字。頤が頁に従う もって訓する。〔説文〕七下に「宧は養なり」とあ 「人生れて百年を期と曰ふ。躓はる」とあり、頤養詞に用いる別の字である。〔礼記、曲礼、上〕に、言に用いる別の字である。〔礼記、曲礼、上〕に、 「あご」と訓する字である。頤をあごに用いるとす 顎、強くかみしめるものであるから顧という。みな は頤をあごと訓するに至ってからのちの用法である。 のも、頁は礼貌の姿であるから、やはり儀礼として を本義とする。〔釈名〕に「頤は養なり」と双声を るが、用義法の異なる字であり、匠は名詞、頤は動 それは乳のみ子の方についていう語であろう。 ああ・なげく 上に匠を頤の初文とし、頤を篆文とす 匠と頁とに従う。〔説文〕 ニ

なり、噫」、〔詩、周・頌、噫嘻〕に「噫嘻、成王よ」、として別にこの字が作られた。〔書、金縢〕に「信として別にこの字が作られた。〔書、金縢〕に「信として別にこの字が作られた。意には感動詞としている。

擬声語である。

紀 16 くびる・くくる

形声 声符は益(益)。益の字源に、 が強い 米を縫った形のものと、水の溢れる形である。糸を縫った形のものとがあり、この篆文中の益の字形は、盤中に水の溢れる形である。糸を縫った形のものも、のち水溢の形でかかれ、隘・益なども縊糸の形から、のち水溢の形となった字である。〔説文〕ニ三上に「經するなり」とあって自経する、自らくびれることをするなり」とあって自経する、自らくびれることをするなり」とあって自経する、自らくびれることをするなり」とあって自経する、自らくびれることをするなり」とあって自経する、自らくびれる形である。「左伝」哀二年に「絞縊して以て戮す」とは、絞首刑をいう。

緯 16 イ(井)

16 なづける。. いう・おもう

0

い。晋器の〔吉日剣〕に「朕余これに名づけて、こ報知の意とするが、もとは名づける意であったらし ので、商量・評価を伴うものであるから、おもうの に至って謂の字を用いている。名は実にそうべきも れを少□と胃(謂)ふ」とあり、〔石鼓文、吾水石〕 訓義を生ずる。 声符は胃。〔説文〕三上に「報ずるなり」と 為と通用することが多い。

簃

るも、 郝王の簃台のことがみえる。郝王は、天子の位にあ と通用する字である。書屋の雅号に用いることが多 しかねたので、簃台に登ってこれを避けた。民はそ ,。 [太平御覧] 巻八五に引く [帝王世紀] に、周の 諸侯の圧迫を受け、民間からの借用をも返済 形声 をいう。〔説文新附〕五上にみえ、診形声 声符は移。楼閣に連なる小屋

舜 18 祭器・のり・つね

の台を「逃債臺」と名づけたという。

不月死不 熱 暴

会意 鶏を両手でもち、羽交いじめにして血を吐

> るのは、 るが、器物や建造物の釁礼には牲血を用いた。〔説 廟に用いるので、 意味で正しいが、その字形を米と糸と廾との会意と 文」一三上に「宗廟の常器なり」と訓するのはその かせている形。その血を以て祭器や礼器を清め、宗 文〕の当時、す するのは、全く字の初形を失したものである。〔説 いわゆる釁礼である。釁は酒に従う形であ、るので、その器を彝器という。鶏血で清め

ろう。彝の字形 多かったのであ 糸のような形が

正しい構造の知

られないものが

のうちに、米や

でに古代文字の

[説文] はそれ以後の字形によって説を立てたので 出てくるのは〔秦公殷〕の字形などからであり、 大澂の〔字説〕に至ってはじめて提出されたが、あろう。彝を鶏牲を執る形とする解釈は、清末の呉 伝説に附会し、 伝説に附会し、徐仲舒のごときもなおその説に依しかし呉氏は、それを夏后氏は鶏彝を用いたとする 味を、正確に把握することが必要である。古代にあ っている。また羅振玉は字を両手に鶏をもつ形と解 必要があり、それで牲血をもってこれを清める儀礼 厳重に修祓して、邪霊や蠱害の寄り著くのを防ぐ っては神聖の施設をはじめ、兵器や農具の類もみな いう。字形の解釈には、その字形の示す古代的な意 しながら、「その誼(義)は則ち知るべからず」と

これに易へよ」といって、牛を許させた話がしるさ それる様子であるのを見て、斉の宣王が「羊を以て るために牽かれて行く牛の姿が、 が行なわれた。〔孟子、梁恵王、上〕に、鐘に繋す

「雞夷」に作り、またのちの魏の〔元丕碑〕に「夷作り、[闖礼]の「雞彝」を〔礼記、明堂位〕に「秉彝」を〔孟子、告子、上〕に引いて「秉夷」に字はときに夷と通用することがあり、〔烝民〕の字はときに夷と通用することがあり、〔烝民〕の いることは、〔詩、大雅、烝民〕に「民の彝を秉るを作る」というのが例であった。彝を法則の意に用 れている。金文においては、作器のことを「寶隆祭 「隹民は出づること亡くして、彝に在り」という。この懿徳を好む」とみえ、金文の〔됐段〕にも、 海経〕にも伝えられていて、西方の人を石夷、その方神を章、風名を彝という。その古い伝承が「山れる。卜辞に四方の方神と風神の名をしるし、西方 戎」を「彝戎」としるすなど、声の通ずる字と思わ て夷と韋としたもので、 の風を韋とするが、それは卜辞の韋と彝とを互易し 意によって彝法・秉彝・彝倫の意に用いることは、 れている。彝・夷通用の由るところを知って、 して語られており、西方では「厥の民は夷ぐ」とさ ある。この神話は〔書、尭典〕』に聖王尭の説話とて夷と韋としたもので、また弊と夷と通用する例で すでに西周期の文献にみえ、中国古代の倫理思想 めてこの文をも理解することができよう。彝を常の る中心をなすものであったからである。 禁器による祖祭の執行が、周の礼教的文化を形成す を組織する基本の理念とされた。それはこのような いかにもものにお

韙 よい(#)

〔三家詩〕ではその字を煒に作っている。 に「常棣の華・鄂不(萼柎)韡々たり」とみえ、韡は花の美しいさまをいい、〔詩、小雅、常棣 韡は花の美しいさまをいい、〔詩、小雅、常棣〕ている。韙は善美の意で、また韡とも声義が近い。 字を韙の義に用い、班固の〔幽通賦〕には恨む意と に「説ばざるなり」、〔広雅〕に「恨むなり」と訓し のは韓と通用するときの義で、韓は〔説文〕二二下 字とし、怨恨の意とする。〔漢書、叙伝〕にはその に作るが、〔玉篇〕〔広韻〕にはそれを韙とは異なる し、この字に相反する義がある。怨恨の意に用いる とあり、注に「是なり」と訓する。籀文の字形は偉陽十一年に「五不韙を犯す」 声符は韋。〔左伝〕

懿 22

₽)° 野砂

て飲む形である。亜は壺の蓋を外した形。壺中の醞』というが、初形の欠は欠乏の意ではなく、口を開い というが、初形の欠は欠乏の意ではなく、 する。 に従う。 し、字は心と欠と壹に従うて、壹の声をとるものと 合わず、〔段注〕にこれを後人の改竄するところと 「壹に從ひ、恣の省聲に從ふ」とするが、形も音も 〔説文〕一〇下に「專久にして美なり」とし、 会意 そして心と欠とは、その志を持する意である 字の初形は欧に作り、 亜は壺の形、壺中の酒を飲む形である。 亞(亜)の形と欠と 字は

> 従うが、甚だしく字の初形を失っており、これによ 手本とする)せん」という。もと神霊によって与え 「余小子、肇ぎて朕が皇祖考の懿德に帥井(帥型、 「懿父は廼ち是を子しまん」のように、父霊を懿父(よき鳌)を受けられたまふ」、また〔也殷〕に(よき鳌)を受けられたまふ」、また〔也殷〕に って字の初義を説くことはできない。 られた徳を懿徳と称した。いまの字形は壹と恣とに とよんでいる。祖考の徳を称しては、〔単伯 鐘〕にとよんでいる。祖考の徳を称しては、〔単位[4]に、父霊を懿父 「烏康、不不なる丸が皇公、京宗(宗室)の懿釐、神徳を体することにあった。金文では〔班殷〕に神徳を体することにあった。金文では〔班殷〕に を好む」とはその意で、徳の根原は、祭祀を通じて る。〔詩、大雅、烝民〕「民の彝を秉る 是の懿德に在ることを懿といい、それよりして懿美の意とな 人相楽しむことをいう。こうして神意を承ける状態 たところの壺中の酒を飲んで、神とともに酔い、神 醸 したものを用いる意である。 懿とは神に供薦し

イキ

11 かぎる・ちいき

丰 趈

ず・域・國は一系の字。〔老子〕第二十五章に「域外がわにさらに囗を加えたものは國(国)である。 装して守る意を示す。域とはその領域をいう。或の 形声 す口の周囲に城壁をめぐらし、それに党を加えて武 声符は或。或は防備された城邑。邑居を示

> の意。〔商 頌、烈祖〕の「彼の四方を正し域つ」は、いう。〔詩、唐風、葛生〕「蘞 城に蔓れり」は墓域と墓域(墓域)のように、限定されている特定の地を 領有の意の動詞である。 域は天下の意にまで拡大されているが、もとは領域、 中に四大あり。而して王はその一に居る」とあり、

育 8 「毓」 そだてる・やしなうイク(ヰク)

0 灩 京京 中田 中都 居

字である。 という語があり、 をいう。〔班殷〕に「文王・王姒の聖孫に毓せらる」 人が廟事にいそしむのを敏疌(婕)という。それなつかえるため髪を整え、簪飾を加えている形で、婦 婦人の姿、充は去と同じく生子の象でその古文、毛 養ひて善を作さしむるなり」とし、肉声の字とする らば毓とは、生子のことを廟に告げる儀礼に関する 髪を加えている。毎は敏(敏)の初文。敏は廟事に 或いは毎に從ふ」とするが、毎(毎)は髪を整えた が、音が合わない。また重文として毓をあげ、「育、 生れおちるときの形である。〔説文〕一四下に「子を 太と月 (肉) とに従う。 太は生子の倒形: すなわち毓は育の初文、その廟見の礼 その身分のものとして養育される

**になった。脱王の毓祖乙の名に用いる。文献に后文にもみえ、脱王の毓祖乙の名に用いる。文献に言文にもみえ、別王の徳祖乙の名に用いる。文献に言も記述がなく、不明のところが多い。毓の字形は下 うている。ただ生子儀礼の詳しいことは〔儀礼〕に 示す字であるが、祭肉と祝禱の器であるHの形に従 だ多い。多毓は多后。毓が君后の意に用いられるこ 辞にまた「貞ふ。上甲より多毓(后)に至るまでに、 祖乙とみえるもので、毓はすなわち后にあたる。ト の月(肉)は、骨や胃が肉体表示の意であるのとは ことをいう。育はその生子をさしていう語で、 ない。 に合わず、 毓を育の異構とみることは、卜辞の用法と声義とも とを、郭沫若は母権時代の語義が遺存したものと に生子儀礼に関する文字であることは、 の姿勢から、前后(後)の意となったものであろう。 しているが、毓を后の意に用いるのは、その分娩時 祭肉であろう。たとえば名は命名の儀礼を 合祭)せんか」のようにトするものが甚 なお疑問とすべきである。ただ両字とも いうまでも 下部

昱. あきらか・あくるひイク・ヨク

字形のうちに昱を含むものがあり、翌がその原義で て昱耀・昱奕のように用いる。しかし卜文では翌の かなるなり」と訓しており、光りかがやく意をもっ あり、**と同字であるが、〔玉篇〕などには「日明 ある。〔説文〕七上に「明日なり」と 声符は立。立に翌・広の声が

というない ないない 大学などのできる かっとう かっちゅう

郁。 地名・うつくしいさまイク(ヰク)

語、八佾)に「周は二代に監みて郁々乎として文な 作られたのであろう。郁々紛々、郁々菲々のように、 槭に作る。 彧と郁とが通用することから、 槭の字が るかな」の郁を、「汗簡」に載せる「古論語」には 連語として用いることが多い 形声 声符は有。もと地名。彧・

暖の「酸」は うつくしいさま

文〕七上に「文章(あや)あるなり」とみえる。郁 舞うさまの美しさをいう。字はまた醸に作り、〔説 たり」とみえ、注に「彧とは長き貌なり」とあって、 いう。〔尚書大伝、虞夏伝〕に「夏伯の樂舞は謾彧を稷彧々たり」とあって、作物のゆたかなさまを めす表意的な記号である。 と彧とを合わせた字形である。彡は美盛のさまをし 山」に「疆場(農耕地)翼々たり形声 声符は或。〔詩、小雅、信 声符は或。八詩、

賣 15 【賣】17 うりあるくイク(ヰク)

餋 ₩ \$

会意 [説文] メトトに形声とし、古文睦は声符であるとす 形も確かでなく、会意とみるべきである。上部は貴悲 上部は古文睦の形とされ、睦と貝とに従う。

> もと贖う意のある字で、粥の音でよむときは贖の意賣ふ」「然の五夫を贖ふ」の字に賣を用いており、き且つ賣るなり」という。〔晉鼎〕に「女に五夫を意な」に「衒ふなり」と訓し、〔段注〕に「行き行〔説文〕に「衒ふなり」と訓し、〔段注〕に「行き行 に作る」とあって、その声義を知ることができる。 不正のものをうりあるく意は、後の用法であろう。 れば、皆災を貝で贖う意の字となる。衒鸞のようにの用法であろう。字がもし眚と貝とに従うものとす (わざわい) の形に近い。〔玉篇〕に 「或いは粥・鬻

燠 あたたか (アウ)・オウ (アウ)

声符は奥(奥)。奥は室の西

ころであるが、古くはおそらく火を用いたところで と竈と韻をふみ、相対する語である。もと炉でもあ むしろ竈に媚びよ」という俗諺をしるしており、 あろう。〔論語、八佾〕に「その奥に媚びんよりは ったのであろう。ゆえに燠に燠暖の意がある。 南隅で、神饌を供える聖所とされると

器 かゆ・うる

平満で とは孕育の義である。 をこれ関め」とは育子、[礼記、楽記] 「毛あるものをこれ関め」とは育子、[礼記、楽記] 「毛あるもの みえる。また育と通用し、〔詩、豳風、鴟鴞〕「鬻子の仮借義。〔玉篇〕に「聲、或いは粥・鬻に作る」と 振り売り、 かゆのときは粥を用い、鬻と声義ともに区別する。 おしつけ売りを衒鬻という。おそらく資 会意 その湯気が両旁にたちのぼる形。 粥と鬲とに従う。鬲で米を蒸

とはならない。乙と同字で、仮借字とみるべきであ る。乙は骨ベラなどの象形字である。 が、燕の象形をどのように簡略化しても、この形 という。字形は象形、その音は鳴く声であるとする 乞と謂ふ。その鳴きて自ら呼ぶを取るなり。象形」 る。〔説文〕一二上に「玄鳥なり。齊魯にこれを

祈り舞う姿で、

ある。失とは巫女が髪をふりみだして 佚の初文。自己を失う状態をいう。

声符は失。失に決・軼の声が

イツ

ひとつ・はじめ・もっぱらイツ

聿 ふで・ここに

肃 A 0

している。卜片には、ゆたかな筆づかいを残してい施すことを示す。殷墟からは当時の筆の遺品が出土 のち「聿に修む」をその動詞と熟して「聿修」の[唐風、蟋蟀]「歳聿にそれ莫れぬ」などであるが、 とうとうと、本に来りて骨ひ字る」、またり、一笑に姜女と、本に來りて骨ひ字る」、またむ。 これ、文王」、本に厥の徳を修詞に用いる。〔詩、大雅、文王』、本に厥の徳を修は本を筆の意に用いることはなく、字はほとんど助は本を筆の意に用いることはなく、字はほとんど助 るものがある。 釈器〕にも筆を不律ということがみえ、〔郭璞注〕 とは周(方形の楯)の上に聿(筆)をもって彩文を は聿(筆)を廷上に立てて設計すること、畫(画) ような語として用いる。助詞の用法は仮借義。建と に、蜀の人はいまも不律とよぶとしるしている。今 れを弗といふ」と、各地の方言をしるす。〔爾雅、 れを聿といひ、吳にはこれを不律といひ、燕にはこ会意 筆を手にもつ形。[説文] 三下に「楚にはこ 』 幸に來りて胥ひ宇る」、また

命〕に、「祖鬯一卣、彤弓弌、旅弓弌」のような書き、とみられる。藤原宜賢本〔古文尚書、文侯之字形とみられる。藤原宜賢本〔古文尚書、文侯之す字である。弋はその形にならってのちに作られたす字である。弋はその形にならってのちに作られた

ものを戊で削りとって、その盟誓に貳うことを示 と貝(鼎)・二の形に作る。貳は鼎銘として加えた は戊と二とに従う。また「瑪生設、一」に貳を戊

「貳ふことなかれ」という貳(弐)があり、その形が、卜文・金文にはその字がなく、ただ「띹別」にが、卜文・金文にはその字がなく、ただ「띹別」に

〔説文〕にまた古文として式(一)の字形をあげるすべてを合せて一とするので、全一の義がある。

てその数を表示する。一は数のはじめであり、

また

横にならべる計算法を、そのまま文字化したもので

横画一をしるす。記号的な表示で、算木を

一より四まで、卜文・金文ともに横画を重ね

佚 たのしむ・みだらイツ

> ゆえに安佚・佚楽・佚遊・佚美・佚蕩・佚豫などのる」とは、そのような巫女の姿態をいう語である。 て罰を受けることをいう。巫女が祈り舞ううちにエ 字としたのである。「書、般庚、上」に「これ予一な「無佚」に作る。そのころには、佚・逸を通用の に「毋逸」の字を劮に作り、〔史記〕〔漢書〕にはみするのは、字の初義ではない。〔漢石経、今文尚書〕 佚を〔説文〕ハ上に「佚民なり」とし、逸民の意と かであった。〔楚辞、離騒〕に「有娀の佚女を見 クスタシーの状態となる姿は、狂お 人、佚罰あらん」という例が最も古く、佚乱によっ しくまたあでや

壱 7 (壹)12 もっぱら・ひとつイツ 義が生れる。

愈 南

「孟子、 象形 る。気の盈ちる状態であるから、専一の意となる。 で、〔詛楚文〕の字形では、なかを凰の形にして であるという。古い字形がなくて初形を確かめがた ひ、吉の聲なり」と形声に解し、〔段注〕に亦声の字 態をいう。〔説文〕一〇下に専一の義とし、「壺に從 し、氣壹ならば則ち志を動かす」とは、意志が気を いが、壺中の形はいわゆる氤氲の気をしるしたもの 公孫丑、上」に「志壹ならば則ち氣を動からずだらら 壺中にあるものが醱酵して、中にみちる状

乞1 息 12

つイ ばツ め

仮借

駅の字の声符のみを

壱に専壱の義があり、

一と声義の近い字である。

画の字をあてるときは、一には壹(壱)を用いる。 法がある。のちの加筆を避けるため、貳のような筆

佾 泆 逸(逸) 矞 軼 溢

数字の一に仮借する。改竄を避けるためであるが、 ぶ)・曀(くもる)のように閉鬱の意がある。また となるものが壱、それで壱に従う字には、噎 することもある意である。なかに鬱結して一団の気 支配するものであるが、 声義に通ずるところがある。 衝動によって気が意志を決 (むせ

佾 まいのれつ

ない。〔繋伝〕には「振なり」、〔玉篇〕には「振眸 なり」というも、振骨という語はその義が明らかで 子が憤激して、「これをも忍ぶべくんば、孰れをかに、季氏が天子の舞楽である八佾を庭に舞わせ、孔 なり」という。「六書故」に引く唐本に「賑骨なり」 忍ぶべからざらん」といったことがみえている。 とを骨といい、舞楽の列を悄という。〔論語、八佾〕 とあって、祭肉を頒つ意であろう。肉を両分するこ に「骨は振骨なり。肉に從ひ、八の聲 形声 声符は骨。 **骨は〔説文〕四下**

泆 みずがあふれる・ほしいままイツ

誥]「非弊に淫泆す」、[左伝] 隠三年「驕奢淫泆」 まって、 状態を洗という。また人の行為に移して、〔書、酒 にあって、狂乱する姿である。それで水の洪蕩する のようにいうが、それは佚の義。佚と通用する。 ある。失は巫女がエクスタシーの状態 声符は失。失に佚・軼の声が

逸 1 (逸) 1 のがれる・はやい・たのしむイツ

1、なるないになるながなるなどをあるとのないのであると

会意 逸して止むること能はず」のように、放逸の義にも〔左伝〕成十六年「楚囚を逸つ」、〔国語、晋語〕「馬 善く逃れるものであるから、逸脱の字とするという。 に属し、「失なり」と畳韻の字をもって訓し、兔は 「逸豫すること期無からん」、「十月之交」「民、逸 別いる。古くは佚の義に用い、〔詩、 「齊の陳曼、敢て逸康せず」の語があり、逸脱より佚楽することができるのであろう。〔陳曼簠〕に 語義が同じく通用するが、逸脱することに 友の自ら逸するに傚はず」のようにいう。佚・逸はせざる無きに 我獨り敢て休せず」「我は敢て我が 逸楽の義となった。 兔と辵とに従う。〔説文〕 -〇上に字を兔部 小雅、白駒〕 よって、

福12 ただす イツ・キッ

巡撫し査察することを適正という。「説文」三上に が、字形に合わない。この形に従うものには商・裔上部を錐の形とし、錐で穴を穿つことであるという 立てて巡行することを遙正といい、支配地を査察す などもあり、冏はみな台座の形である。それで矞を みな矞の声義を承けるところがある。冏に含まれて 権詐をもって人に誇り傲る意をもつものが多いが、 を形容する語。矞に従う字には、遹・譎・獝など、 ることをいう。矞皇とは、その武威のかがやくさま 形。その上に矛を樹てて武威を示し、 会意 **矛と問とに従う。間は台座の**

器で、商にはまた神に謀る意があり、矞ももとは神 譎は詐謀、獝は驚き狂うことをいう字である。 に謀る意があったものと思われる。矞を要素とする いる口は祝禱の器。商の下部に含まれる口も祝禱の

軼 12 すぎるイツ・テツ

と、車が車を追い越す意とする。〔荘子、徐无鬼〕ることをいう。〔説文〕「四上に「車相出づるなり」 の義があり、 みな逸の義。佚・逸・軼の三字に通用の義がある。 出・逸失の義にも用いる。軼材・軼詩・軼事などは、 に「超軼經廛」の語がある。また軼去の義から、逸 軼はまた迭と通用する。 ある。失は巫女の狂舞する形で、疾速形声 声符は失。失に佚・泆の声が それで車の軼過することの速やかであ 疾速

溢 13 あふれる

ころである。初形はそれぞれ異なるが、のち字画化 のは溢の従うところ、糸端を縊った形は縊の従うと には糸を加えて、両者を区別した。溢・縊の初文は したとき同形となり、水溢の字には三水、縊糸の字 る。形声字のうちには、このような成立をもつもの もといずれも象形。のち限定符を加えて形声字とな がかなり多い 形声 もと二形があり、 声符は益(益)。 釜の字源に 盤上に水の溢れるも

遹 ただす

雅歌鄉

「王、肇めて文武の堇めたま 査察の意に用いる。周初の「大盂鼎」に「我におい譎」の義であろう。遹は金文ではすべて遹正、巡撫 まひしっぱとと適省せよ」、後期の「宗周鐘」にて、それ先王の受けられたまひし民と、受けられた |講字に施すべきもので、//詩〕の「回遹」は「回物のの) 辟邪 (よこしま) をいう。しかしこの語義は 「謀齎、回適す」などの語例と同じく、譎詐(いつぼう)、〔桑柔〕「民の回適する」、〔小雅、小旻〕 辟なり」とあり、〔詩、大雅、抑〕「その德を回る。この矞を奉じて巡行することを遹正という。〔説文〕ニ下に「回て巡行することを遹正という。〔説文〕ニ下に「回るがり、その武威を示す意の字である。この矞を奉じ 声符はる。番は台座の上に矛を樹てて神に 小旻

〔克鐘〕に「王、親しく克に て軍事的な意味をもつもので とあり、遹省・遹正は主とし む。克に甸車・馬乘を賜ふ」 撫することである。後期の は、その領有支配する地を巡 して、京師(地名)に至らし し疆土を遹省す」というの 涇 (水名) の東より遹

にその適正のことが行なわれるのである。漢代の車成周八師は殷の余民をもって編成されており、ゆえ 命を成周に含き、八師を適正せしむる年」とみえる。 あった。 〔小克鼎〕に「王、善(膳)夫克に命じ、

> 正の方法のなごりを存するものであろう。 てて行列に加わっている。おそらく古代における遹 馬行列に黄鉞車というものがあり、車上に 鉞 をた

駅 16 とりのとぶさまイツ

〔韓詩外伝〕に鴥を鷸に作るのは、穴・矞の声が同れていませい。 常になまだ。 (鸇)」とあり、鴪とはその速やかに飛ぶさまをいう。 とする。〔詩、秦風、晨風〕に「篤たる彼の晨風とする。〔詩文、鬼……」となり、 ある。〔説文〕四上に「鸇の飛ぶ兒」 齘 じであるからであり、また逸ともその声が近い。 声符は穴。穴に抗・紋の声

鰯

国字 弱きもの、集は集まるものの意である。 字、また集に従う字を用いる。庶は多きもの、弱は て「伊和志」と訓し、[倭名類聚抄]に至って鰯のみえる。[新撰字鏡](享和本)に庶に従う字を出しみえる。[新撰字鏡](享和本)に庶に従う字を出し 平城宮址出土の木簡中に「伊和志」の名が

イン

黄绒車

允 | 執 まこと・あたる・ゆるすイン(ヰン)

B 名

八下に「信なり」と訓し、「儿(人)に從ひ、日の象形 後ろ手に縛られた人の形に象る。〔説文〕

聲」とするが、声が合わない。

「段注」に会意とし、

「歌李子白盤」に「敵執を博伐す」という。俘虜の『教に升る。大いに吉なり」の文を引く。金文にの「執に升る。大いに吉なり」の文を引く。金文に 用いる。後期の〔師詢設〕に「夷允三百人」を賜与 設]にも、「允に顯に在り」のように、允信の義に後ろ手に縛られている人の形である。周初の〔號 『允に雨ふれり』という刻辞を加える。雨ふらんか』と卜し、その験のあった 辞の次に下験の群をしるすときに、たとえば「今日目の形に従うものは姿の初文である。ト辞に占繇の を目の形とするのは、ト文・金文の字形に合わず、るとするが、字は目に従う形ではない。篆文に上部 日は以・用で、任用するゆえに「信なり」の訓があ く行なわれていたのであろう。 る。執訊のことは、それよりも古い時代から、 辞として「まことに當る」意の副詞に用いられてい などが生じたのであろう。ト辞において、それは験 字形のうちに含まれている虜囚をいう。おそらくそ 誓って真実を述べるという字が鼈であり、 る日をおいて、訊問することを示す字である。 る。辮髪の族を後ろ手に拘執し、前に盟誓の器であ ことを執訊というが、その訊の字形を金文に蜷に作 示すものがある。また「説文」「〇下に靴の字があ に作るが、その允の字には、縄をかけて縲紲の象を することがみえ、夷允とは夷族の俘囚をいう。すな のことから、「信なり」「當るなり」、また允許の義 わち允とは虜囚の人である。玁狁を金文に「厰允」 世上 允声の字で、「進むなり」と訓し、[易、升卦] と卜し、その験のあったときには その允は、 允はその

冘 ゆく・おこたるイン・ユウ(イウ)

「梛風、柏舟」に「髪たる彼の雨髦(若もの) 實にまし、といった。これにいるは、これにいるないで、耳のところに当る耳飾り。〔詩、みだまをつないで、耳のところに当る耳飾り。〔詩、みだまをつないで、耳のところに はみなその形に従う。紞は冠冕を用いるときに、みするものであるが、確かな用例はない。耽・紞など する。口を炯界の義とし、その界を越えて行く意とり」とし、その字形は「人の口を出づるに從ふ」と の字であろう。 に「太后冘豫して、いまだ忍びず」、〔馬援伝〕「冘 猶予の字に用いることがある。〔後漢書、 る意である。なおこの字を〔玉篇〕に曲の音でよみ、 維我が儀(思い人)なり」という髪も、耳飾りのあ いまだ決せず」とみえるが、これはまた別 「説文」五下に「尤々として行く見な 人が枕をして臥している形。 竇武伝

匀 ひとしい・すくないイン・キン

0 0

ふ」のように用いるが、〔效父段〕に九形をつけず「等しい、少ない」意となる。金文に「金一勻を賜 る。なかの小点二は、一定量の銅塊の形。それでじく、九の形に近い。**は竜が尾を内に捲く形であ 鈞の初文。地の均しいものを均、音の整うものを韵 に二の形だけを用いている例があり、象形である。 勺と二とに従う。 十は旬のト文・金文と同

尹

緊

「説文」に重文としてあげる古文の形は、似・肆系令尹は、宰相の職にあたる。尹に祝禱の器である引を加えたものは君、女君をいう。もと卑弥呼のようを加えたものは君、女君をいう。もと卑弥呼のようである。 とれば いっかい とり はいうのは、その意である。 との 天下を尹治す」というのは、その意である。 との 「天下を尹治す」というのは、その意である。 との 「天下を尹治す」というのは、その意である。 との 「天下を尹治す」というのは、その意である。 との 「天下を尹治す」というのは、その意である。 との 「天下を尹治す」というのは、その意である。 文〕三下に「治むるなり」と訓し、伊字の条八上に を尹す」とあって、百官を総べることをいう。()説をなって、西官を終べることをいう。()説がある。周初の〔令彛〕に「三事四方尹」などの職がある。周初の〔令舜〕に「三事四方 儀礼の執行者を尹といい、金文に「作册尹」「內史聖職者であったと思われる。のち尹は官名となり、 興したといわれる伊尹は、おそらく伊水の神を祭るりつくものであった。殷の湯王をたすけて殷王朝を りつくものであった。殷の湯王をたすけて殷王朝をで、それをもつものは聖職者である。杖は神霊の憑之、それをもつものは聖職者である。杖は神霊の憑之。一と又(手)とに従う。手に神杖をもつ形 統のもので、誤入とみられる。

引 ゆみをひく・ひくイン

勢をなおす木を曖恬という。引はその檃と声義の関く意とするが、初形がなくて確かめがたい。弓の曲く意とするが、初形がなくて確かめがたい。弓の曲文〕 ニ下に「弓を開くなり」と弓引 文・金文には汚に作る字があり、汚は于をもって あり、「滿弓、鄕ふところあるなり」という。 **係があるようである。、「説文」には次条に弙の字が** 会意 弓と一とに従うとされ、「説

> く、「長なり、導なり、申ぶるなり、演ぶるなり、なる。ともに引く意のある字である。引の訓義は多 引伸を説くことができるように思われる。 寅を矢を正す字とみることによって、これら諸義の 正すなり、爭ふなり」などの意にも用いる。引を弓 ことをいい、寅とは矢の曲直を正すことをいう意と 義である。そのことからいえば、引とは弓幹を正す 右から形を整えるが、そのことを寅という。寅正の**^* 要素は弙と同じであるから、おそらく汚がその初文弓 幹の形を正し、曲勢をつけるものである。字のいか であろう。矢がらもまたその曲直を正すために、

ED 6 おさえる・しるし

0

せよ」、〔曾伯簠〕に「紫 湯 (地名)を印婆す」の皇天に印邵し、大命を黼を (種格、鍾ぎつつしむ)鼎〕に「余に先王の若德(よき徳)を告げて、用て鼎〕に「余に先王の若徳(よき徳)を告げて、用ていた。 「説文」カ上に爪とり(節)とに従うて、り(印璽) 「凡そ貨賄を通ずるに、璽節を以てこれを出入す」は、戦国期以後のことであろう。〔周礼、司市〕には、戦国期以後のことであろう。〔周礼、司市〕にように用いる。印を印璽、その押捺の意に用いるのように用いる。 ことを印御、やわらげることを印變という。「毛公は頭音が同じく双声の語である。金文に、よく従う 会意 を押捺する意と解している。 仰、その臥するものに手を加えるのが印、印と抑と の形。抑える人よりいえば抑、臥する人よりいえば 手をもって人を抑え、仰臥させる意である しかし卩は仰臥する人

その国を失ったことがみえている。 外儲説、右下〕に、燕王噲が印璽を人に与えて、然とは、ない。といいである。、重要なときには虎節の類を用いた。〔韓非

大6

大に従うていて、 い。戦国期の〔陳侯因脊敦〕の因の字は、明らかに諸義は、みな茵席を用いることからの引伸とみてよ 依委する意となり、囚果の因となる。因のこれらの とを因仍といい、因繁・因循の意となり、ものにとをはいい、といい、という 日常に用いるものであるから、従前のままにするこ ける百の部分に、席文をしるすものがある。茵席は は茵席の象にすぎない。卜文・金文の宿の字形にお ころの形、大を大小の大と解するものであるが、字 を擴充するなり」とするのは、□を或・国の従うと らかでない。〔段注〕に「その區域に就きて、これ に「就くなり、口大に從ふ」というも、その意が明 席の象、人の寝臥するところである。〔説文〕 六下鉄。 口と大とに従う。口はむしろ、すなわち茵会意 口と大とに従う。口はむしろ、すなわち茵 人の仰臥する形である。

むさぼる

经 る形の字であるから、淫りに貪る意となる。「説文」 挺立する人の上に手を加えて、はげしくこれを責め 天に祈ることを示す字である。至は、 立する形。呈(呈)は祝禱の器である 手と壬とに従う。壬は人の挺

因

玺

型(煙)

妪

胤

員 恁

形声

ては、壬を朝廷の義に解しているが、壬は廷とは関ハ上に「近づき求むるなり」とし、前条の望におい

型の「煙」2 イン

係のない字である。

§°

に伊に作る。伊は仮借字であろう。文を引くが、字はいま陻に作り、〔魏石経〕の残字文を引くが、字はいま陻に作り、〔魏石経〕の残字 「商書に曰く、鯀、洪水を垔ぐ」と「書、洪範」の う。土を以て塞ぐのを堙という。〔説文〕「三下に 字は陻に作り、神梯のある聖所を清め祓う意であろ文の字形は、煙が湮鬱して流れる形。また或る体の文の字形は、煙が湮鬱して流れる形。また或る体の というになって、煙(煙)の初文。家と上部は煙抜きの形で、煙(煙)の初文。家

如 9 とつぎさき・えんぐみ

ABO 图学

雅、節南山〕に「姻亞」、『我行其野〕に「舊姻」のみえる。金文には「昏嬦」「昏遘」といい、〔詩、小い、「詩、小い」を呼吸がは、「婦の父母、壻の父母、相謂ひて婚姻と爲す」とに「婦の父母、壻の父母、相謂ひて婚姻と爲す」と り)の義あり。本を忘れざるなり」とするが、字は論〕に「牂(淵)は回水なり。女子に歸宗(里帰 いずれも形声。親族称謂としては、 会意の字とする。籀文の字形についても、『繋伝通 一三下に「壻の家なり。女の因るところ。故に姻と いふ。女に從ひ、因に從ふ。因は亦聲なり」とし、 声符は因。籀文の字は鼎に従う。〔説文〕 「爾雅、釈親」

> 通婚がくりかえされる。 婚を原則とする古代中国にあっては、 通婚関係にあるものを意味した語であろう。同姓不 語がみえる。特定の親族の称謂というよりも、 因にはくりかえす意がある 特定氏族間に

胤 9 すえ・たね

181

) 19

子・胤士とは、その嫡子たるものをいう。 「晋公鑑」に「余咸く胤士を安んず」とあり、胤 「秦公鐘」に「咸く百辟(君)胤子を畜ふ」、またいまな。 「本はいる」に「咸く百辟(君)胤子を畜ふ」、またみおとされる形であろう。八は左右の後脚である。 重、累に象るなり」とするが、字はそのような要素從ひ八に從ふ。その長きに象るなり。女に從ふ。後ひ八に從ふ。その長きに象るなり。女に從ふ。象形 〔説文〕四下に「子孫相承續するなり。肉に に分解すべきものでなく、全体が象形で、獣子の生

員 10 まるい・かず (エン)・ウン

Ä

圓(円)の初文とみてよい。 し、また「貝に從ひ、口の聲」とするが、上部の〇示す。〔説文〕六下に「物の數なり」と員数の意と は記号的なものであり、貝は鼎形の変化したもので ある。もと鼎数を数えることから、員数の意となる。 鼎の上に○形を加えて、円鼎であることを

恁10 おもう・やすらぐ・このようにイン・ニン・ジン

孫遺者鐘〕に「余、台が心を恁ぐ」とあり、「広雅、なり」とあって、それが本義であろう。金文の「玉なり」とあって、それが本義であろう。金文の「玉なり」とあるが、「後漢書、注」などに引く「説文」り」とあるが、「後漢書、注」などに引く「説文」 「このような」、また禅家の公案類に恁麼(いかん) と通ずる。宋以後の語録の類に、恁地・恁的など 釈詁〕に「弱し」、〔正字通〕に「忱なり」とするの孫遺者鐘〕に「余、台が心を恁ぐ」とあり、〔広雅、 のように、多く近世語として用いる。 声符は任。 だでは 「説文」 - 〇下に「下に齎すな

殷 さかん・あか・国名イン・アン

角質 P3 F

これを殳で殴つのは、呪的な意味をもつ行為である 会意 干戚(たて、まさかり)の類、鳥を人の舞う形とす るを殷と稱す」と盛楽の意とする。「段注」に殳を と思われる。〔説文〕ハ上に「樂を作すことの盛な 「左輪、朱殷たり」の〔杜預注〕に、「今の人、赤黑 殷の義が、原義に近いようである。〔左伝〕成二年 たるが、字は妊婦を殴つ形であり、あかを意味する朱 〔詩、邶風、北門〕「憂心殷々たり」とは殷憂、そのたものであるから、憂心のさかんなさまを殷という。 を呼んで殷と爲すなり」という。それは痛苦にみち があり、それは廟中においてこの殷の呪儀が行なわ 心情を慇という。殷の金文字形のうち竅に作るもの 身の反文と、殳とに従う。身は妊娠の象、

おそらくそれは魂振り的 れることを示す字である。

都を大邑商とよんでいる。殷は周よりよぶ蔑称にあろう。殷商は商がその自称で正号、卜辞にその れんだあって、これを殷同の礼という。殷盛・殷子が十二歳に一巡する礼にかえて、諸侯を大会同す 近い語で、周初の金文や〔書、周書〕の諸篇に、殷 あろう。殷商は商がその自称で正号、 賑・殷富の義は、そこから出たものであろう。また というものが多い。殷にはまた殷同の義があり、天 天下の諸侯を会するを殷同というのは、衣・殷の義 を合祀する祭祀を、衣祀という。直系の祭祀を衣祀、 ト辞において、直系の祖王、すなわちその正宗のみ 衣祀・殷同のときの殷とは、声義ともに異なる用法 からいえば、妊婦を改撃して朱殷の意となる殷と、に相通ずるところがあるように思われる。そのこと (挿図)、 を意味するものであったことは疑いなく、その義は とみるべきである。ただ字形が妊婦を殴つ呪的行為 妊婦を殴つ殷の呪儀を行なうことを示す字があり 朱殷の語意に残されている。金文に両禾軍門の前で た。おそらく殷は、 あったと思われる。 それは軍行に際して行なわれるものであっ もとそのような呪儀をいう字で な意味で行なわれたので

当

雪 [説文]四下に「依據する所なり」とし、「讀むこと 会意 もって、呪具の工をもつ形である。 受と工とに従う。上下両手を

> 右は祝禱の器である可をもつ形で、これをもって神 ると尋(尋)となる。
>
> 雪はそれに対して、神が隠れ を尋ねるのである。それで左右の字画を上下に重ね ない。左右とは神事のときの所作で、左は呪具のエ、 隱と同じ」とするが、この字形のままで用いた例は ぎこめることをいう。狂死者の死霊などは、甚だ恐を塞ぐ。塞の初形は琵げんずで、呪具をもって塞 ることを るべきものであるから、四工を重ねた琵をもってこ をうるので、これを急といい、穩(穏)という。もって足る。神は自らの身を隠すことによって安息 れを塡塞するが、神がその姿を隠すのには、一工を いう字で、呪具である工によってその所在

茵10 しとね

B

「儀きれ、 「儀礼、既夕礼、記」に、棺を藉くに「茵を加へて板屋に 殯 する挽歌で、その詩に文茵がみえる。たものを文茵という。〔詩、秦風、小戎〕は武人を ら、茵の初文。茵席は草を編んで作り、 軪 に人の臥している形であるか 声符は因。因は茵席 文様を加え

院 10 かきのあるたてものイン (ヰン)・カン (クヮン) 疏布を用ふ」という。卜文の囚は死の義に用いる字*^

で、因にも死者寝臥の象があると考えられる。

のちインが通用の音となった。またその義について、 闸 して院をあげ、「寏、或いは盲に從ふ」とするが、 「説文」の奥字条七下に、奥の重文と 形声 声符は完か もと完声の字。

なる に「周垣なり」とあり、 の建物をいう。 や院落(庭)、学校・書院・仏寺・道観・妓楼など その字義を確かめることができない。普通には宮殿 「説文」「四下に「堅なり」というのは畳韻の訓であ 院については唐以前の用例がほとんどなく、 もし寏の異文ならば、寏は〔説文〕 垣をめぐらした建物の義と

寅二〔簋〕6 つつしむ・とら

\$ 喇 0 史 那 禹 处 贯 南

り、上部は祭肉。金文では盥に作り、〔陳侯因脊敦〕形に即しない説である。夤に「つつしむ」の義があ 直を正す形である。篆文の字形はその初形を失って会意 矢と両手に従う。両手をもって矢がらの曲 意味をもつものであろう。寅正の義より、寅敬の義 義であるが、 に「諸侯、吉金を簋薦す」とあって、神霊に薦める また「正月、 ひざさらのことで、この訓には字の誤りがあろう。 されている。〔説文〕一四下に「髕なり」というのは いるが、卜文・金文の字形には、その初意がなお残 おり、〔説文〕古文の字形も甚だしく形が変化して 陰尙彊し」など、 矢がらを正すという行為も、 寅に敬の義があるのは、この夤・臨の 陽气動き、 十二支名の用法は、 黄泉を去りて上り出でんと 五行説によって説くが、 仮借である。 神事的な 字

淫

を徼むるなり」という。壬は人が挺立する形で、祈いがつき求むるなり。爪壬に從ふ。壬(挺)して幸 至とはもと淫祀。〔礼記、曲 礼、下〕に「淫祀には うもので、 形声 に赴くものであった。 福なし」とみえる。淫祀による邪悪は、 である。〔段注〕に「淫行はれて婬廢す」というが、 れより淫泆・淫虐・荒淫など、すべて邪悪の甚だし を失ったことをいい、 だしいのを逞というのであるから、至とは祝禱の度 り、その姿勢を挺という。窓に呈告することの甚 (呈)、すなわち天に祝禱を呈して、哀訴する形であ い状態をいう。淫泆はその意を水の状態に移してい るときに祝禱の器であるDを高く掲げている形は呈 声符は至。全は「説文」ハ上の王部にみえ、 人の風俗や行為に関しては婬というべき いわゆる淫祀の類である。そ しばしば婬

陰11 (会) 8 (霧) 16 くもる

° € 票 壁 壁 垒 令

形声 べき字で、今は蓋栓の形。云は雲の初文であるが、いい、陰の初文である。侌は今と云との会意とみる 声符は会。会は「玉篇」に古文陰であると

陰[衾][霧]

ある。 稷下の五行思想と関連して、のちに起ったものでいる。 [参] にいう陰陽二元の観念は、日の陰晴をいう。 [参] 〔石鼓文、霝雨石〕に「或いは陰、或いは陽」とは、 まきこれがうとは、地勢による寒暖を察すること、陰陽を相る」とは、地勢による寒暖を察すること、 晴をいう語となった。〔詩、大雅、公劉〕に「其の する解釈に拘泥したもので、套易が陰陽の初文であ とし、会易九下を陰陽と別の字とする。これは肖をなわち〔説文〕は、陰陽を川南山北、山南川北の字 を覆ふなり」とし、会の古文二形を出している。 語とする。また雲部二下に繋の字を録し、「雲、日 「陰は闇なり。水の南、山の北なり」と地勢をいう 閉ざすことを侌という。 の呪儀に関するものであったが、のち日景や日の陰 ることは疑いない。かつその初義はそれぞれ魂振り 小阜にして丘陵の字とし、陰陽を山北山南をいうと る。陰陽はもと、神梯の前で行なわれる魂振り、 が、神梯である真の前で行なわれるとき、 れは玉による魂振りの儀礼を示す。このような呪儀 日の形は玉、 会の字形では霊気を示すものであろう。これを蓋い 下部はその陽光の放射するさまで、 会に対する語は易。上部の 陰陽とな す 魂

湮 12 む・ふさぐ

う。湮にも〔荘子、天下〕「禹、洪水を湮ぐ」のよぐ意となり、〔説文〕」三下に「垔は塞ぐなり」とい 形声 声符は塑。塑は煙(煙)の初 ゆえにふさ

も用いる。〔説文〕 二上に「沒するなり」としてお うな意があるが、湮沈・湮没のように、 ものの散亡することを湮散・湮滅という。 しずむ意に

飲12 (飲)13 [酓]11[歓]15 のイ むン

龣 剂 愛 # 金雪 香糖 3

雷

「歓酒」などの語がみえる。飲食歌舞は、列国期よ は酒漿の類である。卜文の字形に、俯して舌を出むます。 酓は酒器に蓋栓を加えた形。欠は人が口を開けて飲 す形のものがある。列国期の金文に「飮食歌舞」 り殊に盛んとなった。 正字は飲。命と欠とに従う。その初文は禽

隕 13 おちる (ヰン)・ウン

隕石をいう字である。人の死することを殞という。 聖所とする考えかたがあったからであろう。〔説文〕 七年「夜中、星隕つること雨の如し」とあり、もと 一四下に「高きより下つるなり」とする。〔春秋〕荘 の形である肖に従うのは、隕石の落下したところを、 ものの意がある。隕とは隕石をいう。その字が神梯 声符は員。員は円鼎。員に円くして転ずる

> 夤 つつしむ

GCCCで病を憂えて医薬や卜筮に訴えることを、「惻然子の病を憂えてとをいう。[論衡、明零] に、慈父案じて愛えることをいう。[論衡、明零] に、慈父すことで、漢代にみえる語である。もとは人の身をすことで、漢代にみえる語である。もとは人の身を

字として心を加えた字が慇。慇懃とは心の委曲を尽

の字で哀痛の意をもつが、その義の専

声符は殷。殷は妊婦を殴つ形

[邶風、北門]に「憂心殷々たり」に作る。殷・慇桑柔】[小雅、正月]に「憂心愍々たり」とあり、 痛慇懃、驗あらんことを冀ふ」という。〔詩、大雅、

恭寅の意。〔書、無逸〕に「嚴恭寅畏」とあるもの〔秦公改〕に「嚴として天命を難るす」とあるのは「就な」と上に「敬み惕るるなり」とあり、金文の〔説文〕と上に「敬み惕るるなり」とあり、金文の「説文」と と矢とを供えて神を祀ることから、夤敬の義となる。 義の本字であろう。上部の夕の形は肉で祭肉。祭肉 寅は両手で矢がらを正す形であるから、夤が寅敬の と同じで、文献では多く寅の字を用いる。 声符は寅。寅に寅敬のように敬む意がある。

第14 「 つつしむ・うれえる・かなしむ

殞

おちる・しぬイン(ヰン)・ゥン

は通用の字である。

列

形声

声符は員。殞は〔説文〕にみ

震 う。〔礼記、檀弓、下〕「喪禮は哀戚の至りなり。拜憂あるが如し」とは悉の意、すなわち哀痛するをいある。隱(隱)と通用し、〔詩、邶風、棺・舟〕「隱 いい 運命であった。 るということは、出雲の神々のように、敗北の神の の関係を暗示するものであろう。そもそも神が隠れ を失ふ。故に隱みてこれを葬る」とは、隠と濦痛と きものなり」も悪愛の義。〔公羊伝〕荘四年に、「國 して稽顙するは哀戚の至隱なり。稽顙は隱の甚だし 会意 をもち、神を隠す行為。急はその情を **筝は上下の手で呪器である工**

慇 いたむ・したしむイン・オン

瘖

おし ・オン ・オン

は質を用いる。

が、『は神梯の象であるから、もとその神梯より落きより下つるなり」とあり、天より落つる意とする意味する字である。隕は〔説文〕一四下にみえ、「高

wan えず、『正字通』に隕と同字であるとwan に買いる。

隱(恩)と通用し、〔詩、邶風、柏舟〕 「隱 *ジ 謹む・憂える・哀しむの意。 [[はその俗字で

隕石・隕霜のように、天より落下する自然の現象に 失うことによって命を失うことを殞命・殞没という。 墜さず」とは、天命を失わないことをいう。天命を ちる意である。〔詩、大雅、縣〕に「またその問を

も用いるが、それは引伸義とすべく、雨が降る意に

は、その声義を承けるところがあろう。

<u>陰</u> かイ

がある。 (人名)、蔭を視る」とは日の早晩を視ることをいう て官に補せられることを蔭補、その官を蔭官、その たすけかばうことを庇蔭という。父祖の勲功によっ がある。また陰と通用し、[左伝]昭元年「趙孟人を蔭子という。わが国にも「お蔭さま」という語 蔭を生ずるのをいう。そのように人を 声符は陰。草木が茂って、

16 こうじ・たのしむイン・ジン

かせることである。耽・湛とも通用して、耽楽の意てものを烹飪する形の字であるから、離とは麴をね に用いる 嬲 熟することをいう。甚は竈に鍋をかけ会意 酉(酉)と甚とに従う。麹を

檃 17 たイ めぎ

誤れるを正すことである。 人、尙くはみな隱れよや一の隠は檃栝の意で、そのいう。[書、般庚、下〕:嗚呼、邦伯師長、百執事のいう。[書、殷庚、下〕:嗚呼、邦伯師長、百執事の 木。すなわち背にあたる。檃栝とは、そのため木を 形声 形。弓の曲勢をなおすのに用いるため 声符は隱(隠)の心を省いた

圛 ふさぐ・まがる

語である。古くは一種の神聖病とされ、そのため神 啞という。ものいわぬことをまた唵というが、これう。瘖は病のため言聴を失ったもので、また嚥・膏がった。音は病のため言聴を失ったもので、また嚥・膏がしている。音とは、ものいわれる。音とは、ものいわ の徒隷として犠牲とされることがあった。 らはすべて発声が喉頭でとどこおることを示す擬声

禋 まつり

廖

膕

天神を祀るものであった。〔詩、小雅、大田〕に農や黍稷・柴薪を燎いて、その芳香と煙とをもって、後。〔説文〕」上に「潔祀なり」としており、犠牲というように、禋は上帝を祀るのに煙気を用いる祭というように、禋は上帝を祀るのに煙気を用いる祭 星辰・山河の属で、自然神をいう。その神はみな上 帝に類し、六宗に禋る」とあり、六宗とは日・月・ こと、禋祀のときと同じ。〔書、舜典〕に「肆に上 を類(類)という。類の祭には犬牲と穀とを供する のであるが、 (大)福を介む」という。犠牲と黍稷とを用いるも その黍稷とを以ひ、以て享し以て祀り、以て景に方めて輕記す。その騂(赤牛)と黒(羊・豕)と 祭を歌い、田神を迎えてこれを饗したのち、「ここ ときに柴薪を加えた。天神を祀ること

天にあるものとされた。

隠14 (隱)17

隱 r mes

あり、 も切り わち」 〔説文〕一四下に「隱は蔽ふなり」とあるが、隠れるもと辞に従う字形であることからも知られよう。 荘王が飂を好んだことがみえる。飂とは謎のことでい。隠語を飂という。[呂氏春秋、重言] に、楚のい。隠語を飂という。[呂氏春秋、重言] に、楚の ることをいう、醸、その初文である、裏が、いずれもあることは、邪神・邪霊を閉じこめる塞、祓い清めあることは、邪神・邪霊を閉じこめる塞、祓い清め舞う。その字が尋(尋)の字形となる。工が呪具で 形声 の字の中心的な要素である工をすて、また下の手首 るものは、おおむね敗北の神であるから、隠痛すな り坐すということである。そのように「神隱り」すものは神であり、神梯によって「神隱り」して静ま を尋ねるときには、左右の手を振り、これを重ねて 隠れるときには、その工を呪具とする。隠ります神 の工、右は祝禱の器である団をもつ形である。神の 形に含まれる工は、巫祝の用いる呪具で、左は呪具梯の形を加えた隠がその本義にあたる。雪・鴦の字 のである。雪はもと神隠れをいう字であるから、 れる)の下に心をつけて、憂え哀しむ意を示したも あるが、隠語はもと神事に関して行なわれたもので 。隠語を뾅という。[呂氏春秋、重言] に、楚の切りおとされている。まことに隠痛というほかな 神託や忌詞などに用いた。 隱み」哀しむ義となる。いまの新字には、こ 旧字は隱に作り、声符は急。巻は等(かく 字が隠に従うの 神

おいた。

があり、字はその声義を承ける。城の 声符は堕。覃に「ふさぐ」意

場であった。〔詩、鄭風、出其東門〕に「その閩圏る。そこでは歌垣などが行なわれ、男女の会集するのところであるから、闄にまた「まがる」の意があのところであるから、闄にまた「まがる」の意があ に「闘妓支離無脈」という異態の人のことをしるしく原(石灰)を供す」とみえる。[荘子、徳元符] ているが、闡跂とは足の彎曲することをいう。 と通用し、「周礼、掌蜃」に「以て壙(墓穴)を闉を出づれば、女あり茶の如し」と歌われている。空 外郭門上の物見台をいうが、出城になっている重門 の凹曲のところの意を、転用したものである。 城壁

韻

韻士といった。中国語は単音節語であり、その頭音 〔詩、大雅〕〔小雅〕の諸篇は、西周後期のころ行な をもって押韻する。押韻は西周初期の金文にすでの末尾が同じものを韻といい、詩や韻文は同韻の字 分野より成るが、その概略については序説に述べて を紐、母音以下を韻という。中国の音韻学はこの両 風度・雅致あることを風韻・韻度とい 人の風度のすぐれたことをいい、六朝期には人の われていたものであろう。音声の諧和することより にみえ、西周後期にはさかんに用いられている。 にはひとしいもの、相和するものの意がある。声音 和することをいう。 いう。古くは均・贄の字を用いた。気「和するなり」とあって、音の調子の 声符は員。〔説文新附〕三上に い、その人を

ゥ

于3 「方」3 「朽」6 まがる・ああ・に

木の意から引伸したものであろう。於・乎・為・与曲・于大の義があるのは、やはり号幹を正すそえ 法は、形の字形によって知ることができる。于・丙 その上に一を加えて、气を平らかにする意とするが、 長い曲刀の形。〔説文〕五上に「於なり」と感動詞象形 まがった形を作るためのそえ木。また刃の 直刃のものは辛、 劂の具の形である。その把手のあるものは辛、 のを用いるが、汚は于をもって弓に曲勢をつけてい きは曲勢の大なるもの、深く射るときには直体のも 于を用い、同声同義の字である。弓は遠くを射ると に于、末期に汚を用い、金文では初期に汚、後期にはいずれも介詞の「に」に用いられ、卜辞では初期 ら、字形によって説明しうるものではない。于の用 て感動詞は、その音を用いる仮借義の用法であるか 卜文・金文の字形は、弓のそえ木の形である。すべ り」という。丂を上部がものにさえぎられる形とし、 從ひ、一に從ふ。一とは、その气の平らかなるな の用法を本義とし、「气の舒ろに亏るに象る。」でに る形である。字はまた大きな曲刃で、 みな一系の字である。 ものを削る剞 ただ下に子 その

> 「と」に用いる例が金文にみえる。 などに通用するのは声の仮借、また与のように連詞

みぎ・たすけるウ・ユウ(イウ)

礼の右者、また「先王を左右せよ」と補佐の意に用 「又又を受けられんか」のようにいう。金文では儀 を右・佑・侑の意に用い、「山又を受けられんか」来全く理解されていないことであった。卜辞では又来全く理解されていないことであった。卜辞では又 原義が、祝禱・呪儀に関するものであることは、従 〔段注〕に「又なるものは手なり。手もて足らず、 相助くるなり」とし、いずれも又口の会意とする。 右の舞は神楽、左右を上下に重ねると尋(尋)とな工をもつ。この左右をもって神をたずねるので、左 会意 では一般に左を上位とする風があった。 右の意に用いる。右文とは学問を尚ぶこと。わが国 口を以てこれを助くるなり」と解する。左右の字の に「助くるなり」、また巻三下にも重出して「手口 を収める器で、右に祝禱の器をもち、左には呪具の いる。左右はもと神事の用語であるが、のち手の左 神の所在を尋ねる意である。〔説文〕は巻二上 又と口とに従う。又は右手。 口はD、祝禱

宇 6 [萬]12 のき・おおきい

序 廟 0

床

形声 声符は于。子に大なるもの、まがれるもの

[荀子、賦篇] [漢書、功臣表] [東京賦] などに通 じるだっただか、声同じくして字と通用し、礼を意味する字であるが、声同じくして字と通用し、 用の例がある。 の諸器があり、字をまた霰に作る。寓はもと呪的儀 文として寓の字形をあげている。金文に禹(人名) ぼして眉字・姿字のようにもいう。〔説文〕に、"鴛'の字・守字、また事業に施して業字、人の性情に及帝字・守字、また事業に施して業字、人の性情に及 のちその義が拡大されて領有・支配の及ぶところを 「津に來りて胥ひ宇る」とあって屋室の義が古く、間と空間をいう語とされる。〔詩、大雅、爲〕に間と空間をいう語とされる。〔詩、大雅、爲〕に 宙といふ。四方上下、これを于といふ」とみえ、 とあり、〔淮南子、斉俗訓〕に「往古來今、これを は〔荘子、紫紫紫波に「日月に旁ひて宇宙を挟む」の意とし、屋根の水落ちのところをいう。宇宙の語の意とし、屋根の水落ちのところをいう。宇宙の語 の意がある。〔説文〕七下に「屋邊なり」とのき先 時

刃 6 多。

ることが多い。〔詩、周 頌、有瞽〕は、客神たる殷羽葆・羽旌・羽旄・羽襚など、羽をその目的に用いれての意である。物とは呪飾をいう。羽衣・羽蓋・はその意である。物とは呪飾をいう。羽衣・羽蓋・れたからで、〔礼記、楽記〕に「羽を物と爲す」とれたからで、〔礼記、楽記〕に「羽を物と爲す」と 両翅の形である。羽を飾りに用いることが多いのは、 ただ美飾のためでなく、 の今に「新たに羽を生じて飛ぶなり」とあり、羽は 「説文」四上に「鳥の長毛なり」とあり、た。 「鳥の短羽なり」と長短を区別する。凢部 呪的な意味のあるものとさ

> 味で羽を用いることを示す字である。 の字では習・饗・翥(纛)・翳など、みな呪的な意 は楽器を繋けるもの。それに羽飾をつける意。羽部器のなかに、「紫牙に羽を樹つ」の句があり、崇牙 の祖神の参向を歌うものであるが、その陳設する楽

物が、 類であったことを で、〔逸周書、王会解〕にも、この方面の部族の貢西南の方面は、古くより奇鳥珍禽の多く棲むところ 右に敵の首を携えている戦士の姿。長江の上流より 西南の方面は、 にも大きな羽飾をつけている。図は左に盾を擁し、 くみられる。その戦士は頭上に高い羽飾を戴き、 古銅鼓の文様に、戦士の勇武な姿をかくものが多 みな奇鳥の

あったと考えられ 域も、この方面で 銅鼓の成立した地 しるしている。古

いも・さといも

る。

[本草] に薬草とする。ずいきを芋梗、おやいもをである。大葉の芋といえば、さといも。その葉は **吁驚、于を吁と解しての音義説で、意味のないこと** 文に通じがたいところがある。〔句読〕 を驚かす。故にこれを芋と謂ふなり」とみえるが、 뿔 形声 「説文」「下に「大葉にして實根、 声符は于。于に大の意がある。 に「大葉に

> のとして芋を供えるので芋明月という。 であろう。わが国では旧八月十五日の夜、季節のも 食べると子宝がえられるという。子沢山の類想から 元の日に芋を人の形に作って芋郎君と称し、これを <u>予魁・芋頭という。これを搗き堅めて壁とし、饑饉すれ</u> に備えることもあって芋牆という。正月十五日、

杆7 □ 〒皿 □ 8 みずのみ・わん

烹 美经经额 我是

青銅器にはそのように大きな の村のことがみえているが、 記、玉藻」に、浴器として が多く行なわれている。〔礼など、初期にその器制のもの いるものは盂。周初の匽侯盂 のある器で、青銅で作られて る。器腹のゆるやかな、深み 声符は于。于にゆるくまがるものの意があ



まわる

ものはない。

彭 F. Y

がある。 形声 それで道の迂曲するところを迂という。迂声符は于。于にゆるやかにまがるものの意

羽(羽)

芋

ウ雨禹紆鳥

愚・迂端なることをいう。ら迂遠の意となる。俊敏なるものに対して、人の迂回して人を回避すること、また遠まわりすることか回して人を回避すること、

雨 8 あめ

ה ה ה

A

象形 雨の降る形。〔説文〕一下に「水、雲より下るなり。一は天に象り、口は雲に象り、水その間下るなり」というが、ト文・金文には上に一のない。雨の古音は、〔詩、鰕風、鴟鴞〕に土・戸・予と韻し、〔小雅、正月〕に輔・予と韻していて、もと魚部の韻であった。

1 9 夏王朝の始祖の名

《食》七名

禹が竜の字形で示されているのは、洪水神としての として加えられたものでなく、神像としての意味を には魚形を文飾とするものが多く、これはただ文様 なごりを存するものであろう。半坡出土の彩文土器 の神話は〔詩、大雅、文王有声〕に「豐水東に注ぐ神と考えられ、禹の字形が作られたのであろう。禹 もつものであったと思われる。 められ、「秦公鐘」に「丕いに顯かなる朕が皇祖、発」にもみえるが、のち中原の文化地域の全体に広い。 を述べ、「腐々たる成唐(湯)、嚴として帝所に在るを述べ、「腐々たる成唐(湯)、嚴として帝所に在るを述べ、「腐々たる成唐(湯)、嚴として帝所に在るを述べ、「傷々たる成唐(湯)、嚴として、「鬼」という。 帝のところに在り」とみえ、 天命を受けられて禹の寶(迹)に羆宅し、十又二公 場の堵に處る」とあって、禹を九州の水土の治定者あり。專いに天命を受けられたり」「九州を咸有し、 ない。 としている。禹の信仰は墨子集団のなかに承けつが また黄河下流の斉の のち洪水神は竜形の この集団のなかで

[禹響] や [禹之)総徳) とよばれるような文献が とよばれるような文献が 成立したが、その説話は 成立したが、その説話は 成立したが、その説話は 成立したが、その説話は で、真を磨らして壁に す。頂を磨らして壁に す。頂を磨らして壁に す。頂を磨らして壁に

> り、〔荘子、盗跖〕に「禹は偏枯なり」とみえる。 禹が偏枯とされるのは、その徹底的な勤労主義によって肉体を損じたと考えられたのであろうが、偏枯って肉体を損じたと考えられたのであろうが、偏枯とは同じものである。この人面魚身の洪経〕に「魚あり偏枯、名づけて魚婦と曰ふ」とあり、経がは、おそらく半坡の土器文様にみえる魚文と関係があろう。洪水神禹の神話は、この洪水神の神像係があろう。洪水神禹の神話は、この洪水神の神像係があろう。洪水神禹の神話は、この洪水神の神像があろう。洪水神禹の神話は、この洪水神の神像を発展してきたものと考えられる。

行っ まがる・めぐる

新新

は、ことの経過に変化の多いことである。 お符は手。手は大きな曲刀の形で、ゆるくがある。「説文」 三上に「謎るなり」とし、まがる意がある。「説文」 三上に「謎るなり」とし、ずる。山道のめぐりうねるさまを紆動・鬱行という。 行余曲折といの結ぼれるさまを紆軫・鬱行という。 行余曲折という。 とし、形声 声符は手。手は大きな曲刀の形で、ゆるく

に 10 からす・ああ・なんぞ

彩绘 电干燥

長剛

半坡出土の魚形彩文土器

四上の古文の第一字はその形、第二字はさらに分解かなり異なり、いわゆる解羽の形であろう。〔説文〕生気を失ったもので、鳳・雚などの象形的な表現とまのを失ったもので、鳳・雚などの象形的な表現となる。

とて、於の字形に近い。於もまた感動詞に用いられる字で、金文には、その解いた羽を縄にかけわたした形のものが最も早くあらわれ、その字も感動詞に形いられる。周初の〔大盂鼎〕に「王曰く、斌、女盂に命じて、好の祖南公に井らしむ」とあり、おそらく古文第二字のもとの形であろう。また〔大おそらく古文第二字のもとの形であろう。また〔大おこれを繋ける形で、烏の害を防ぐために、農地にその羽を繋け、これを逐うたものであろう。局が農作に害を及ぼすことは、古くからのことであった。鴉はその鳴き声をとって作られた字であるが、鳥・於の系列のものは、鴉などの鳥を逐う声をとる字で、これを感動詞、あるいは疑問副詞的に用いる字で、これを感動詞、あるいは疑問副詞的に用いるのはそのためである。

写 11 あまごい

罗罗 年下下

ッテ

なる。しかしこの雨乞いに祈るときには、「吁嗟」羽舞なり」という。それならば羽の声義をとる字ととして羽に従う字を録し、「或いは羽に從ふ。雩は赤帝に樂して、以て甘雨を祈るなり」とあり、重文赤声 声符は于。〔説文〕 二下に「夏の祭なり。

「舞雩に風す」とは、沂水のほとりにある魯の聖地それぞれの地域にあり、[論語、先進] にみえる 實らんことを求む。一歳に再祀するは、蓋し穀を重 に「靈星の祭は、水旱を祀るなり。禮の舊名におい 辞例もあって、霧は請雨に関する神であろう。のち 五月に行なわれている。また「霧に燎す」という 景としている。ト辞にはまた羽という祭祀があり、 歳のうち再祀、そのときにいわゆる歌垣が行なわれ の雨乞いの儀礼には、巫祝の徒のみでなく、王が親 舞せんか」のようにトするものがあって、この零舞 るすと、「貞ふ。王は舞すること勿からんか」「王は おそらく零の初文。いまその字をかりに舞の形にし である。ト文には雨の下に舞を加える字形があり、 のち星祭となった。 神なり。神とは龍星をいふなり」とあり、その俗が 靈星の祀を脩めて、今に至るまで絕えず。 靈星とは 春雩の禮廢して、秋雩の禮のみ存す。故に世、常に んずるなり。春は二月を以てし、秋は八月を以てす 實を祈るなり。春には雨ふらんことを求め、秋には て雩と日ふ。雩の禮は、民のために穀雨を祈り、 に霊星とされているものと思われる。〔論衡、祭意〕 た。〔論語、先進〕にいうところも、歌垣の俗を背 らこれに臨んでいたことが知られる。舞雩はのち一 とをいうのであろう。舞雩の行なわれるところは、 のとすべく、羽舞とはその祭儀に羽を用いて舞うこ という声を発するので、零の字形はその声によるも

値 13 かがむ・ふす

なり」とみえる。撃の本字は覡で、 王制」に「その吉凶妖祥を知るは、 て僂み、再命せられて傴し、三命せられて俯す」と それで背の曲って伸びがたい人を傴、また傴僂とい 誦することを欧、神徳をほめて、呪誦の効果を期待 勢でことが行なわれる。その祈りのうめくような声 や呪詛を行なう。狭いところであるから、傴んだ姿を、秘匿された場所に多く列する形で、ここで祈禱を、秘匿された場所に多く列する形で、ここで祈禱 声義に一貫したものがある。區は祝禱の器である!!(歐)・殴(殿)・嘔の音があり、そのにい 形声 声符は區(区)。區に欧 とである。巫祝の人には傴僂のものが多く、 う。孔子の先世の物語に、正考父の銘とされるもの て、これを殴つことがある。山伏などが調伏のため するのを謳という。ときには祝禱の器に呵責を加え を嘔という。そのときはげしい声で祝詞をあげ、呪 あり、僂・傴・俯はかがむ姿勢を次第に深くするこ に身を低めて嘔吟するので、その姿勢を傴とい 〔左伝〕昭七年にみえ、「一命(初任命)せられ (低巫跛撃のこと) かんほげき

鯛は「鴨」3 かしば

新

をたべる虫のことで、齲歯も人の気づかぬうちに蠹鴉に作り、「齒蠹なり」という。蟲とは變の中の穀もクが原音である。〔説文〕ニ下は牙の部に収めてもクが原音である。〔説文〕ニ下は牙の部に収めていると、「食は」虫を組み合せた形である形声

伝〕に、冀の妻の孫寿というものがよく「齲齒笑」りのあらわれとされたのであろう。〔後漢書、梁冀噛は霊のたたりのなすところであり、虫はそのたた歯は霊のたたりのなすところであり、虫はそのたた ちは翕然としてみなこれに傚ったという。歯の大なをなし、甚だ凄艷であるというので、京師の婦人た (の日) において、婦好(武丁の后とされる人)の人は古くから齲に苦しんでいたらしく、卜辞に「甲 齲を御(禦ぐ祭)すること勿からんか」と卜する例 重文として齲を録しており、 これ父乙の壱ならざるか」などの例からみると、齲 るは、これ告あるか」「貞ふ。齒を疾むことあるは、 であるが、「王戌トして、豆貞ふ。齒を疾むことあ がある。その齲は、歯なみの中央に虫を加えた字形 食されるものであるから、歯蠹という。〔説文〕に ゆえに字はまた癪に作る。 いまはその字を用いる。

15 さかんなさま・おとこよもぎウツ・イ(ヰ)

鬯の気がなかにみちて、香酒が醸されることをいい。いかり、とみえる。鬱と声義が通ずるが、鬱は鬱なう。〔易、革卦、象伝〕に「君子豹變す。その文う。〔易、革卦、象伝〕に「君子豹變す。その文 う。〔易、革卦、象 (こ)に「君子豹變す。う。〔易、革卦、象 にこに、君子豹變す。 をいう。 た人徳のなかに充ちて外にあらわれるものを蔚とい 草木のさかんに茂るさまを蔚茂といい、ま 字で、なかに熱気のこもるような状態 声符は尉。尉は火のしを示す

> 28 におい酒を作る草・かおりぐさウツ

よると、大秦国すなわちローマの原産で、二月三月と名を改めたところである。鬱金草は、〔魏略〕に の官の注に、鬱金香草の意とするが、〔正義〕に引り貢する芳草を用いて作るとする。〔周礼、鬱人〕 これを合醸して、以て神を降す。鬱は今の鬱林郡な 鬯 百艸の華、遠方の鬱人質するところの芳艸なり。**。いれば、「説文」にまた一日の義として「鬱的に示すもの。 〔説文〕にまた一日の義として「鬱 酒に香草を加えた鬯を覆うておくと、 爲す」とその法をいう。

田は両手、両手に缶をもち、 貫と爲す。百二十貫、築きて以てこれを養るを鬱と い。鬱林はもと桂林と称し、漢言ない。紫林はもと桂林と称し、漢言ない。また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、というない。 例がある。かつその字は鬱の形に作り、〔説文〕が 子のみであるという。しかし金文には、王が鬱鬯・ を以てす」とみえ、鬯すなわち鬱鬯を用いるのは天 く〔王度記〕に「天子には鬯を以てし、諸侯には薫 り」という。鬱は降神の儀礼に用いる酒で、鬱林よ に花が咲き、状は紅藍に似ており、四月五月にその 鬱を香草とし、鬱を林木叢生の鬱として区別してい 隋器〕に「叔に鬱鬯・白金・□牛を賞す」、また し、芳香を発する。彡は、色や音や香などを、 に用いる香草。〔説文〕五下に「芳艸なり。十葉を 小子生尊〕に「小子生、金・鬱鬯を賜ふ」などの 圏と彡とに従う。酒に香をつけるのき。 え 正字の形は、臼と缶と一と 時を経て熟成 記号

> 〔論衡〕の〔異虚〕 〔儒増〕 〔超奇〕 〔恢国〕 などの諸 花を採って用いるという。西周のとき、大秦や鬱 おおむねそのようにいう。 きには「秬鬯一卣」といい、金文にみえる賜与は 鬱壺と自ら銘する器がある。卣に移して賜与すると いるもので、これを壺に蔵して鬱壺といい、金文に神を降す」とあり、暢草ともいう。降神の祭儀に用 ものなり。まさに祭らんとするときは、暢を灌ぎて には、「夫れ暢草は以て熾醸すべし。芳香暢達なる 話がみえるが、これも伝説にすぎない。〔異虚〕篇 篇に、周の太平のとき、倭人が鬯草を献じたという 林と交通してその花をえたとは考えがたく、また

極圏 29 しげる・ふさがる

鬱

慢・鬱陶・鬱結などの意に用いる。それらはすべている。からいいです。からないではないではない。これではなどの意に用い、また鬱にできる。 「説文」が鬱鬯・鬱壺の字とするものを、鬱の形に 会意 あろう。蔚にしても鬱にしても、みなうちに鬱閉す 鬱鬯を作るときの固密鬱閉の義から引伸したもので 別体の字であろうとするが、鬱が鬱の別体である。 は鬱を用いてよい。徐灝の〔段注箋〕に、鬱は鬱の であろう。それで特に必要でないかぎりは、鬱鬯に とし、鬱の声をとるものであるとするが、 にかえた形で、〔説文〕六上に、「木の叢生するもの」 しるしており、鬱はむしろのちに至って分岐した字 林と缶と「と鬯と彡とに従う。鬱の臼を林 金文では

るところのある意で、 声義に共通するところがある。

4 くウもン・

 \overline{v}

りて器を知り、事を占ひて來を知る」とあり、云為に、「この故に變化云為、吉事には詳あり。事に、象を知らざる云爾」のようにいう。[易、繋群伝、下]を知らざる云爾」のようにいう。[易、繋群伝、下]を知らざる云爾」のように入る。まん」、[論語、述而]「老いのまさに至らんとするまん」、[論語、述而]「老いのまさに至らんとするまん」、[論語、述の] 芸に作っている。「云々」とはその衆多なるをいう 語である。 「萬物云々、 とは言動の意。 誰をかこれ思ふ」、〔小雅、正月〕「伊誰をか云に愴 ように別の義に用いる。〔詩、鄘風、桑中〕「云に雲の字となり、もとの形の云は「云ふ」「云に」の雲の字となり、もとの形の云は「云ふ」「云に」の 竜が尾を巻いている姿がみえる形。のち雨を加えて -六章に「夫れ物は芸々、各ゝその根に復歸す」と 雲の形で、その古文。雲気のたなびく下に *各、その根に復る」とあり、〔老子〕第各、その根に復る」とあり、〔老子、在宥〕に意。また芸に借用し、〔荘子、在宥〕に

会意 のかみ合うをいう。のち仏教語の音訳に用いられ、 る。〔漢書、東方朔伝〕に吽牙という語があり、犬いう。本音はコウであるが、いまウンの音を通用すいう。本音はコウであるが、いまウンの音を通用す いう。 牛と口とに従い、獣が吠え、かみ合う声を 吽 芸 紜

> 間に包摂されるという。いまその語として用いられ一切衆生の性情は、阿に生じて吽に収まり、阿吽の一切衆生の性情は、阿に生じて吽に収まり、阿吽の 阿が開口音であるのに対して、吽は合唇音であり、

芸 8 くさのな・くさぎるウン

ばみたり」の芸は隕、花の隕つる意である。いま藝借。また〔詩、小雅、茗之華〕に「芸としてそれ黃り」と、芸を除草の意に用いるが、その字は萩の仮り」と、芸を除草の意に用いるが、その字は萩の仮 の略字として用いるものと、声義ともに異なる。 る」、〔孟子、公孫丑、上〕に「苗を芸らざるものあ動詞として、〔論語、徴予〕に「その杖を植てて芸いう。六、朝期には芸香を賦した作品もある。またいう。六、朝期には芸香を賦した作品もある。また 目宿を漢使がもち帰って離宮別館にこれを植えたと 別の草であろう。目宿は〔史記、犬宛伝〕に蒲笥・陽華の芸なり」とみえる。蔬菜の名とされるものは、 「芸始めて生ず」とあり、〔夏小正〕の正月に「芸えるとなができるという。〔礼記、月令〕の仲冬にくことができるという。〔礼記、月令〕の仲冬になると戯を避けるべく、席下におけば蚤や蝨を除るが強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いので七里香の名があり、その葉を書帙に加香が強いる。 を采る」、「呂氏春秋、本味」に「菜の美なるものは、 子〕に、芸草は死者を復生させる霊草であるという。 に似た草とし、一説として〔淮南 形声 声符は云。〔説文〕一下に艮

紅10 みだれる

運[運] くてみだれる意があり、糸に施して紛紜の義となる。形声 声符は云。云は雲の集まる形で、ものが多

耘[賴][耘]

紜という。 すべてものがもつれて容易に処理しがたい状態を紛

耘10 [賴]16 [薪]14

の形声字である。 して除く意であるから、耘を正字とすべく、賴はそ た略して芸を用いることもある。 薪は草の紛紜を鋤た略して芸を用いることもある。 薪は草の紛紜を鋤にっている。 素はその略体とみてよく、ま して耘を出している。耘はその略体とみてよく、 形声 四下に賴を正字とし、重文と 声符は云。〔説文〕

運12 (運)13

うのも、禍福の循環するものであろう。 り、その声義の間に共通するものがある。運命とい 雲気によって日や月のまわりにできる円いかさであ する轆轤板をいう。惲は謀議をめぐらすこと、 指示し、 に回運する意。軍は車上に旗を立てて、車の方向を「多り徙るなり」とあり、運転・運動・運行のよう。 いう。〔墨子、非命、上〕に運鉤の語があり、 た
旋回することを原義とし、運はその行動を 惲・暈の声がある。〔説文〕 ニ下に形声 旧字は運に作り、軍声。軍に 量は 回転

雲 くウもン

要して 6

雲となった。〔説文〕一下に「山川の气なり。 形声 声符は云。云は雲の初文。のち雨を加えて 雨に

雲気の流れる下に、雲中の竜が尾をうちに捲いている形で、雲中には竜がいると考えられていた。〔説る形で、雲中には竜がいると考えられていた。〔説をするが、雲中には竜がいると考えられていた。〔説を神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊格をもつものとされており、「各れる云然神的な霊を大ったの尾を内に捲く形である。形に近く、また竜がその尾を内に接く形である。形に近く、また竜がその尾を内に接く形である。「世遊と」に雲神を豊隆、あるいは屏翳という。「漢書、郊祀に雲神を豊隆、あるいは屏翳という。「漢書、郊祀に雲神を豊隆、あるいは屏翳という。「漢書、郊祀に表神を豊隆、あるいは屏翳という。「漢書、郊祀に素神を豊隆、あるいは解析・雨師の職がある。と、かみえ、「周礼、大宗伯」に観師・雨師の職がある。と、かみえ、「周礼、大宗伯」に観師・雨師の職がある。「大路には雲神に焼祀を行なう例が多く、古い時代にはその祀礼がさかんであったが、「周礼」の時代には、雲は自然神的な性格を失ったのであるう。云声の字には、なかに気がたちこめる氤氲の意を含むものが多い。

13 うらむ・いかる

を ことをいう。〔詩、邶風、柏舟〕に「群小に慍ら ことをいう。〔詩、邶風、柏舟〕に「群小に慍ら ことをいう。〔詩、邶風、柏舟〕に「群小に慍ら

暈 13 かさ・くま

■ 形声 声符は軍。軍に運の声があり、 い状態をいう。目がくらむことを暈目という。 い状態をいう。それよりして、光のはっきりしな い状態をいう。目がくらむことを暈目という。

公加 16 ふるわた・くずあさ

を声 声符は覧。器に温熱の気がみを高い、 ちてみだれる意がある。温はわた入れ。 「論語、子罕」に「散れたる温袍を衣で、狐貉を衣たる者と立ちて恥ぢざるものは、それ由なるか」と、たる者と立ちて恥ぢざるものは、それ由なるか」と、かなどをつめたどてらの類をいう。

20 [温] 1 つむ・つつむ

下声 声符は温。 鑑の声義を承け、 を取り、とあり、思いの解けぬことをいう。 人の くならん」とあり、思いの解けぬことをいう。 人の がひろく穏やかなことを蘊藉という。字は〔唐石 心がひろく穏やかなことを蘊藉という。字は〔唐石 心がひろく穏やかなことを蘊藉という。字は〔唐石 心がひろく穏やかなことを蘊藉という。字は〔唐石 やがひろく穏やかなことを蘊藉という。字は〔唐石 をり」とみえる。蘊はもと俗字であるが、のちその 字が用いられる。

エイ

夕 4 エイ・コ

〔詩、周南、巻耳〕の句を引く。いまはその字を姑して「詩に曰く、我別く彼の金罍に酌まん」と、ふ」とするのは、乃を仍の意とするのであろう。そ る象より、夙夕の字となったもので、夕は肉の象で えられ、盈は盤(盤盤)に浴する人の盈満の姿をいえられ、盈は盤(盤盤)に浴する人の盈満の初文と考を説くことができない。字はおそらく盈の初文と考めを站・沽の音でよむものであるが、それでは字形 亚 音としてここに収める。盈・贏は喩母に属して同声ある。いま字を盈字との関係によって解し、エイの 晋の荀盈は字を伯夙という。夙はもと祭肉を奉ずし、 じんき しょうじょう じょうじょ しょうしょ あづきのよい女をいう。 う。〔石鼓文、霝雨石〕に盈の字がみえ、盤中の 篇〕に〔論語、子罕〕「善賈を求めて諸を劝らんか」に作るので、別は姑の字義とされている。また〔玉 声義ともに通用する字である。 の盈満する象である。〔文選、古詩十九首〕の の文を引くが、いまはその字を沾に作る。いずれも 別と爲す」と市利の多いことをいうとし、字形につ 文」五下に「秦には、市買して得ること多きを以て が人の側身形、又の部分が肉の省略形である。〔説 いて「乃に從ひ夕に從ふ。益べ至るなり。乃に從 象形 たかさがあらわれている形。乃の部分 人が坐して、その腿の肉

象形 水の流れる形。[説文] ニードに「水の長きなり。水の空理の長永なるに繋るなり」という。空理とは水脈。派ど左右正反の形であり、底は水の分流するに象り、永は水が合流して急疾を加え、いざよう形をいう。[詩、周南、漢広] に「漢の廣き泳ぐべからず 江の永き 方すべからず」とは、江漢の水の合するところ、水勢がさかんで、方では渡漢の水の合するところ、水勢がさかんで、方では渡りきれない意である。[詩、周 頌、有聲] に「永く費の水の合するところ、水勢がさかんで、方では渡水の水の合するところ、水勢がさかんで、方では渡水の水の合するところ、水勢がさかんで、方では渡いが、また金文には銘末に「永く費用せい」というのが例である。美はその形声の字。水脈の永いことから、時間の長久の意に転じて、のちおおむねその意に用いる。

曳のひて

は、「足を塗(泥)中に曳かん」、あるいは「衣いる人の上体は左に傾き、足は右に流れている。そいる人の上体は左に傾き、足は右に流れている。その形象は、牛が引きまわされている牽の形とよく似ている。〔礼記、玉藻〕に「龜玉を操るときは、前を奉げて踵を曳く」とあり、すり足で歩むことで、もと人体についていう語である。これを「荘子、前を奉げて踵を曳く」とあり、すり足の形象は、大きの手をもと人体についていう語である。これを「荘子、前を奉げて踵を曳く」という。人を両手を由人

泄 8 「捜」9 もれる

쇖

水

一美美儿

永

NE 形声 声符は世。世は金文に葉に作れている。には従う。〔説文〕二上には泄を出している。字はまた鬼に従う。〔説文〕二上には泄を出している。字はまた鬼に従う。〔説文〕二上には泄を出している。字はまた鬼に従う。〔説文〕二上には泄を出している。字はまた鬼に従う。〔説文〕二上には泄を出している。字は来たり」など、多く用いられている字である。また泄も〔詩、魏風、十畝之間〕に「十畝の外 桑摘れてり」など、多く用いられている字である。また泄もの泄々たり」、「大雅、板」「天の方に蹶きとき然く泄々すること無かれ」のように、すべて多くのものがたちさわぐ形容に用いる。槐を枻に作るように、泄・洩は通用の字である。

泳 8 ガイイ

形声 声符は、※。 「説文」 一」上に 「潜りて水中を行くなり」とあり、没水潜行の意とする。下条の 子字下に「浮びて水上を行くなり」とあるのと、相対する訓である。 「詩、周南、漢な」は漢水の女神を祀るもので、その女神を追迹することを「漢の廣き 泳ぐべからず 江の永き 方すべからず」と歌う。泳と方と対文であることからいえば、泳とはただ游泳の義と解すべきであるう。 「爾雅、釈言」に「泳は游なり」とみえる。あろう。「爾雅、釈言」に「泳は游なり」とみえる。

に乗じて游泳することを泳という。

英 8 はな・すぐれる

映 9 ラフす・はえる

世。〔栧〕。 ご

永

業は葉の初文である。ものではないかと思われる。金文では世を葉に作り、

栄り「祭」はないさかえる

9 みちる

强型 军五

「養琳、一切経音義」に引く「説文」によると、「器な肢体。皿は盥盤の形。盥に人が坐して、あふれるようなさまをいう。「説文」五上に「器に滿つるなり」と訓し、皿別の会意としているが、「説文」はようなさまをいう。「説文」五上に「器に滿つるなようなさまをいう。「説文」五上に「器に滿つるなようなさまをいう。「説文」五上に「器に滿つるなようなと為と聞とに従う。別は坐している人の豊満をない。

本の音では、エンタシスのあるような円柱ない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける字である。人の坐してない。かつ別の声義を承ける。温に從ひ別に從ふ。別はが響なり」と流が表し、

10 地名イ

野野

芝 10 エイ

W W W

形。たいまつを交叉する形で、熒・營(営)などは榮(栄)の初文と思われる。庭療(にわび)の象象形 字書にない字であるが、卜文・金文にみえ、

11 うつこえ・ああ

€**∑**

宮12「營」ないとなむ

文〕七下に宮に従う字とするのは誤る。 形声 旧字は鶯に作り、琴声。〔説

意。のちすべて計画造作をなすことを営という。
を經しこれを營す」とあり、経は測量、営は造営のいた居には営窟という。「詩、大雅、霊台」に「これで居には営窟という。「詩、大雅、霊台」に「これで居には営窟という。「詩、大雅、霊台」に「これで居には営窟という。「辞、大雅、霊台」に「これを授しこれを營す」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「營は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「登は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「登は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「登は市居なり」と解するが、市居とは軍営のまた「登は市民ない」と解するが、市居とは軍営のまた。

英 2 玉のひかり (ヤウ)

詠12 「咏」8 チェイ

雪響 言

をあげている。

容12 かしこい・ふかい

エイ 瑛 詠〔咏〕 睿 瑩

楹

裔

商簡順

大きな営といい、墓域を営むを塋という。 (営)の省声にして亦声とする。然はどで庭僚(にわび)、その庭燎をもって清める地域をいう。それより墓地・墓域をいう語となる。[礼をいう。それより墓地・墓域をいう語となる。[礼をいう。それより墓地・墓域をいう語となる。[礼をいう。とあるのは、営と通用の義である。宮室を作べるを営といい、墓域を営むを塋という。

超 13 はしら

衣冏 13 すえ・すそ・ちすじ

南京。

〔詩、邶風、縁衣〕〔鄘風、君子偕老〕など、その例いかと思われる。衣裳を掲げて魂まつりをする例は、 が多い。先秦には裔を衣裾の義に用い の授受継承ということが考えられていたからではな て遠つ親をしのぶことが行なわれ、衣裳による祖霊 衣の裾からの引伸義とするよりも、この衣裳によっ た形の字である裔が、冑裔の意に用いられるのは、 くその意であろう。衣をかけて、その裾まで垂らし にして小裔邦を望れたまはず」とあるのは、おそら あろう。西周後期の〔羋伯設〕に「天子、休(恵)血統の遠近の関係を地域的なものに及ぼした用法で血統の遠近の関係を地域的なものに及ぼした用法で 四年「夷裔の俘」などは辺境の義であるが、それは の意。〔左伝〕文十八年「これを四裔に投ず」、定十 また〔楚辞、離騒〕「帝高陽の苗裔」などはみなそ 孫なり」とみえ、「左伝」に「これ四嶽の青裔なり 逆段〕に「余は陳趙(桓)の裔孫なり」「陳氏の裔末孫をいう曹裔・裔孫の義に用いる。斉器の〔陳末孫をいう曹裔・裔孫の義に用いる。斉器の〔陳なり〕とするが、字の用例はほとんど直系の子孫やなり」とするが、字の用例はほとんど直系の子孫やなり」とするが、字の用例はほとんど直系の子孫やなり」とするが、字の用例はほとんど直系の子孫やなり」とするが、字の用例はほとんど直系の子孫やなり、 それは衣桁を立てる台である。〔説文〕に「衣の裾 〔説文〕 って、声符とすべきものではない。裔においては、 の上にものを樹て、あるいは載せるための台座であ 冏は、商・矞などの字形からも知られるように、 . ハ上に声符とするが、音が合わない。 衣を衣かけの上にかけた形。下部の間を また

会意とみるべき字である。〔説文〕艸部一下に「壅め見づかいをいう字であるから、声義ともにあわず、

一三下に姨を声符とするが、姨は病人

デと夾と土とに従う。
「説文」

裔子・裔孫が裔裾から演繹されたものとはみえな

勤 14 くるし

周末の社会的混乱を歌うもので、「我が 勚 を知るも る。世に泄の音がある。〔詩、小雅、雨無正〕は、文〕二三下に「答るるなり」と訓し、貰を声符とす 〔通訓定声〕によると、蘇州語では、もののすり減 の莫し」の句があり、それが最も古い用義である。 りて耕すこと、 るのを勩という。 会意 と、力は耜の象形で、勩とは労力を借 また労力を貸すことをもいう。「説 貰と力とに従う。貰は借るこ

容 14 [叡] 16 ふかい・あきらかエイ

その下部に目をあらわしているのは、その深馨なる 祈るものに対して、神容の彷彿としてあらわれる形。 ので、容と目との会意字とみてよい。容は祝禱して 会意 容・沓・叡の三字はみな叡智・叡明の義をもつもの 手を加えて、その叡明の象をあらわすことを示す。 面容を示すものであると思われる。また叡はそれに もと神明のことをいう語であるが、天子に用いて叡で、神の叡明をいう字であり、幽暗深穆の状をいう。 文として経の字をあげ、叡の古文とするが、睿・叡 聖・叡威・叡旨・叡覧のようにいう。〔説文〕は叡 字条四下に「深明なり。通ずるなり」とし、 睿は叡の初文。睿は睿の下部を目に作るも また重

と語義の異なる字である。

かげ・ひかり

影字はもと景であったらしく、「顔氏家訓、書証」にみえず、「玉篇」に至って収めている。諸経籍の 音などを示す彡を加え、影の意に用いる。〔説文〕 るとする説がみえている。しかし漢碑の〔張平子に、影字を作るものは晋の葛洪の〔字苑〕にはじま ある。 だそれより古い確かな例はみえず、景がその初文で また〔繁陽令碑、陰〕にもその字がみえている。た 碑」にその字があることを清の恵棟が指摘しており、 景と彡とに従う。景は影の初文。のち光や

を用いることが多い。人と犬とを合わせて埋めるこを用いることが多い。人と犬とを合わせて埋めるこを、天に対して羹、地に対して瘞の語を用いる。般な、天に対して羹、地に対して瘞の語を用いる。般な、大に対して羹、 また宮室の黛をなどに、人性を祭るを瘞をし、といることが多い。人と犬とを合わせて埋めることが、

ら人性、缠は獣の形に従うものであるから獣性をい り」とあって互訓。瘞は人の形を含むものであるか は瘞むるなり」とあり、瘞には「幽かに蘿むるな

潁 川エ の名 名

鄭重に埋葬されたもので、「万葉」にみえる人麻呂を死の人は強い呪霊をもつものとしておそれられ、行き倒れのものを墐める字であったかも知れない。

いることからいえば、この字はもと道確、すなわちともあり、これを伏瘞という。ただ字が疒に従うて

うといわれて、その耳を洗うたと伝えられる川であ る。許由は姜姓許国の祖神である。 形声 額水は、むかし許由が尭に天下を譲ろ 声符は頃。頃に穎の音がある。

祭 15

おはてらい

形声

の道殣歌のごときも、

みなその鎮魂の歌である。

竖 あきらか・みがくエイ

州 瘞 をいう。瑩潔・瑩徹の義がある。〔詩、衞風、淇奥〕 火の意。その声義を承ける字で、玉光 意である。 に「充耳琇瑩」とあり、美石をもって耳飾りとする うず が る 形声 声符は然。然は變で、 かがり

營 (営)

の省声に従う字とし、

(にわび)の形。〔説文〕一上に、示と

かつ亦声であるとし

声符は然。然は変で庭燎

痛疫を、日月星辰山川に禳ふなり」という。緜蕝は痛疫を、日月星辰山川に禳ふなり」という。緜蕝はて、「緜蕝を設けて營と爲し、以て風雨雪霜、水旱で、「緜蕝を設けて營と爲し、以て風雨雪霜、水旱で

国の注連の類とみてよく、蕞は木の枝などを束ねて またい。これでいい、いいでは縄をひきまわすこと、

表に立てること、笹竹を立てるのと同じ。満蒙の地

王に命じ、戎殷を殪す」とみえる。国が滅びるこ とをもいい、また獣が撃たれて死ぬことをいう。

穎6 [額]6 ほさき・すぐれるエイ

穎悟という。頴はその俗字である。 穀実の脱することをいう。引伸して人の賢いことを 意があり、穂の垂れ傾く意である。穎脱とは秀穎、 おそらく古く役の音があったのであろう。頃に傾の り」の句を引く。いま「禾役襚々たり」に作るのは、 ち穂をいうとし、〔詩、 とし、〔詩、大雅、生民〕「禾穎襚々た〔説文〕七上に「禾の末なり」、すなわ 声符は頃。頃に潁の声がある。

紫 16 めェ ぐイ る

鶯 , The

形声 周南、樛木〕「葛藟これに繁ふ」とは、つた・葛のに「收め卷くなり」とあり、糸を繰りとる意。〔詩、 いう。〔説文〕 | 三上に赞の省声とするが、愛の声義形声 | 声符は燃。 ぬは愛。 炬火をめぐらすことを 類が木にまといつくことをいう。 をとる字である。縈は糸をめぐらす意で、〔説文〕

衛 (衛)16 まもるエイ(エイ)

0 VO. ボ 常 条 またりも

當れるか。若しこれを榮せば、令尹・司馬(宰相・ 哀六年に、楚に赤鳥が日を夾んで飛ぶという異変があるが、中国では人に移す祈りがあり、〔左伝〕 意味した。 川の神、 股肱に移すも益なしとして従わず、災異もまた自然 将軍)に移すべし」とすすめたが、王は腹心の疾を があり、これをトした周の大史が、「それ王の身に ぶことが予見されたとき、これを他に移す祈りをも を禁らし、朱鼓を伐つ」としるされている。禁は山 則ち禜祭す。赤幘朱衣、諸陰を閉ざし、朱索もて社 に終熄したという話を載せている。 われていて、 **縈らす意をとるもので、日食のときには、朱糸をもが社の最も古い形態であろう。字が熒に従うのは、** って社に縈らして祀った。その法はのちまでも行な でオボとよばれるものがそれに当り、おそらくそれ **癘疫の災のみでなく、高貴の人に災禍の及** わが国ではアマガツなどに転移させる俗 〔晋書、礼志、上〕に「雨多きときは

鋭 15 (銀)15 / 例 12 するどい

解に「願は古文銳の字、讀みて芮の若くす」とあり.鋭の初文である。艸部一下に蘭の字がみえ、その説. その反切は居例の切。〔説文〕の附音に混乱がある 刀を加える形で、 て劂の字をあげている。〔段注〕にその字を广声とへまっ。〕。〔説文〕」四上に讚文とし ようである。 し、〔通訓定声〕には会意とするが、字は炉火中に 鋒刃をにらぐ意であり、その字が 旧字は鏡に作り、兌

> 嬴 16 みちる・あまる・姓エイ

歌岛 顧臨

である。羸姓は盈・偃・匽、また熊に作ることもあた。江・黄・郯・莒の諸国があり、江淮に沿う諸国に、近、黄・郯・莒の諸国があり、江淮に沿う諸国である。羸は能と字形が近く、声も近い。〔説文〕である。羸は能と字形が近く、声も近い。〔説文〕 するが、 「あまる」などが初義に近いものであろう。 甚だ多い字であるが、字形からいえば「みちる」 貝はそれに身を寄せるところの貝殼である。訓義の 形からも知られるように、やどかりの象形であり、 を、〔庚羸卣〕には庚羸に作っている。羸は羸の字 作ることもあって、西周中期の〔庚羸鼎〕の庚羸羊伝〕〔穀梁伝〕にはみな熊に作る。羸はまた羸に羊。〕〔※※※ 形声 り、「左伝」文十八年の敬嬴、宣八年の嬴氏を、「公 声符は扇。〔説文〕二三上は「贏の省聲」 、羸は能と字形が近く、声も近い。〔説文〕。*金文の字形によると、羸に女をそえた字形

殪 たおれる

文〕四下に「死するなり」と 声符は壹 (壱)。 〔説

尽きて死ぬことをいい、〔書、康誥〕に「天乃ち文「中心噎ぶが如し」という。そのように内部の力が憂えで胸がつかえることを〔詩、王風、泰離〕に 懎 いう。 壹は壺中のものがむれて、 気のこもること。

鋭〔銳〕〔劂〕 嬴 殪 穎[頴] 祭 衛(衛)

形声 声符は章。〔説文〕ニ下には衞を正字とし、 を守ること、金文に囗の四辺に止を加えたものがあり、その字が衛の初文。章・違(違)・衞・闡(囲)り、その字が衛の初文。章・違(違)・衞・闡(囲)なみな韋の声義をとる一系の字である。

安 16 しにんのころも

8 秋秋秋

見女 7 エイ みどりご・くびかざり・かける

関りまけ

会意 駅と女とに従う。関は製の初文で、貝を綴った首飾りの呪具。これを新生の女子の首飾りとしった首飾りを瓔という。冠飾に用いるが、またを綴った首飾りを瓔という。冠飾に用いるが、またを綴った首飾りを瓔という。現は製の初文で、貝を綴らないながいをもいうのは、その形が似ているからである。

医光 17 ほこぶくろ・ああ

際元年に「繋、我は獨り無し」と感動詞に用いる。 こ上に「繋の表なり」とするが、殿と同字。[左伝] であるが、糸はおそらく呪飾であろう。[説文] ー あ」という感動詞に用いる。繋は殿に糸を加えた形 あ」という感動詞に用いる。繋は殿に糸を加えた形 をはこに収め、これをうつシャーマン的な方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい の、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこいのの、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつシャーマンのな方法をい をはこに収め、これをうつとので、また「あ

医才 17 はね・かざー

の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。
の意を含む字である。

麗 20 エイ

会意 厭と貝とに従う。贏はやどかりの象形。や字を贏声とし、「賈して餘利あるなり」という。商賈によって利をうる意とするが、字形に合わない。ではやどかりが貝からはみ出す形であるから、余贏字はやどかりが貝からはみ出す形であるから、余贏字はやどかりが見からはみ出す形であるから、余贏字が通用の字であるから、意心に「疾羸鼎」があり、また「庚贏」と銘する情がある。同じ作器者にして羸・贏の両字を用いるのは、高さに、疾羸鼎」があり、また「庚羸」と銘する情がある字で、贏を氏族徹号とする伝承をもつものであるる字で、贏を氏族徹号とする伝承をもつものであろうと思われる。

娘女 3 ひも・かざりひも

紐を解くという表現が多い。を説響という。わが国の〔万葉〕にも、紐を結ぶ、まままという。わが国の〔万葉〕にも、紐を結ぶ、大が親しくこれを解くことがしるされている。これして許嫁し、纓を加えるが、初夜のとこ入りのとき、

エキ

がら かき・また

● 象形 人の正面形である大の両腕を など 示す。〔説文〕 - ○下に「兩亦の形に 象る」という。腋下に両点を加えてその部分を指 事を上下のように抽象化しうる性質のものに限定 指事を上下のように抽象化しうる性質のものに限定 するとすれば、この字はなお象形としてよい。ト するとすれば、この字はなお象形としてよい。ト

写の 8 あらためる・かわる・やさしい

中分 会意 日と勿とに従う。日は玉の形、 のはその玉光を示す。易と易とはとも を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。また一説として〔秘書名を列し、その象形とする。と続います。

亦

易奕弈疫

[段注箋] に、易をカメレオンであるとする李時珍なり。俗に十二時蟲と名づく。嶺南異物志に言ふなり。俗に十二時蟲と名づく。嶺南異物志に言ふ。なり。俗に十二時蟲と名づく。嶺南異物志に言ふ。れに取るあり」と、易名の起原をカメレオンに求めている。蜥易を古く何らかの呪的な目的に用いることがあったとしても、そこから易の名義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって易義が作られたともしがたく、また嶺南の異虫によって多数が生わたとはしがたく、また嶺南の異虫によって多数が作られたともしがたり、あるのもの成立の過程が、次第に実証されてきているが、その対交のとりかたのうちに、陰陽的な思考の作る。 かり、多にはその台座が省かれている。と示す字であり、場にはその台を確かもの故であろう。

変 9 エキ

大を加えて両手を拡げて立つ人の姿を 大を加えて両手を拡げて立つ人の姿を で、従ってもののすぐれた姿をいう。〔詩、大雅、 で、また〔商・頌、那〕に「萬舞奕たるあり」とは ば、また〔商・頌、那〕に「萬舞奕たるあり」とは ば、また〔商・頌、那〕に「萬舞奕たるあり」とは ば、また〔商・頌、那〕に「萬舞奕たるあり」とは は、また〔商・頌、那〕に「萬舞奕たるあり」とは がきず。 で、の舞容をほめていう。〔方言〕に「關よりして西、 とうない。 とが、また〔商・頃、那〕に「朝よりして西、 とうない。 で、の舞容をほめていた語である。 で、の異から演繹することができる。

亦十 g ばくえき・いご

※科学なり」とあるが、囲碁のことではなく、もと双六のように賽を用いる遊戯であったらしい。「論語、陽貴」に、一日を飽食無為にすごすよりは、博弈でもする方がよいという孔子の語を録する。「左伝」襄二十五年にも弈棋という語がみえ、象棋に似たものである。近年中山王墓から出土したて説くところがある。近年中山王墓から出土したて説くところがある。近年中山王墓から出土したて説くところがある。近年中山王墓から出土したて説くところがある。近年中山王墓から出土したて説くところがある。と兵法の義を寓したものといわれ、「李衛公問対」にも兵法を弈棋によって説くところがある。また馬王堆漢墓出土のものが彫られていて、規矩文をは、本で、大大をでは、東京に、大大をのが彫られていて、規矩文を寓したものが彫られていて、規矩文とよばれる文様に似たものが彫られていて、規矩文を寓した。本様になる。当時この遊戲がひろく行なわれていたようである。「西京雑記」がひろく行なわれていたようである。「西京雑記」に、社様の社夫全は天下第一の名手であったという。に、社様の社共学は天下第一の名手であったという。

疫の えやみ

金10 (金)10 ます・イッ

増益の字はこれに従う。

路向路

があり、縊糸の系統に属するものに隘・镒がある。して両音両義であるのでなく、楷書化された形で混して両音両義であるのでなく、楷書化された形で混文は各、別の形で、声義ともに異なる。もと一字に文は各、別の形で、声義ともに異なる。もと一字に文は各、別の形で、声義ともに異なる。もと一字に

掖 11 たすける・わきばさむ

液11 しる

12 エキ

季。 *季

(沢)・擇 (択)・簿・鐸系統のものとがあり、繹系なっていることをいう。[説文] | OFに字を目とをもって導人を捕へしむ」というが、字形からみても字義からみても、妥当としがたい。金文の字形によって知られるように、上部は獣頭、下部はその肢体である。 睪に従うものに、釋・譯(訳)・驛体である。 睪に従うものに、釋・譯(訳)・驛体である。 睪に従うものに、釋・譯(訳)・驛体である。 睪に従うものに、釋・譯、訳・緊・動とがあり、經系が風雨にさらされて、分解する状態と象形

のものには連なる意があって繹解・絡繹、教系統のものにはくずれる意があって殬敗・択取の義がある。「説文」にいう「司ひ視る」「皋人を捕ふ」などの用義例は文献にみえない。〔段注〕に、漢のときばが、大変を作り、その裾につけ糸の線縫を施しておいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とおいて、これを目印に賊をとらえた話を引いて証とするが、目と卒とに従うとする「説文」の字形解表に、漢のときばがある。署の字形はまた皋と極めて似ており、皋はその愛死した獣尻が、風雨にさらされて色を失い、漂白して皋白となったことをいう。皋は皮の色を以てし、墨はその分解した形を以ているは、大変に関するが、国人を紹介を表している。

駅14 に撃しる うまや・えきしゃ

形声 旧字は驛に作り、臺声。業に悪り継ぐ意。ゆえに駅車・駅伝の意となる。「説、厚傳なり」、また遠字条二下に「傳なり」とあって、その制度によって名を異にし、車には伝、とあって、その制度によって名を異にし、車には伝とあって、駅伝の制度によって名を異にし、車には伝、とあって、駅伝の制度によって名を異にし、車には伝、とあって、駅伝の制度によって名を異にし、車には伝、とあって、駅伝の制は春秋の時にすでにあったとされるが、西周後期の「散氏盤」に「これをたとされるが、西周後期の「散氏盤」に「これをたとされるが、西周後期の「散氏盤」に「ごれを作業をしているが、西周後期の「散氏盤」に「ごれを呼楽る」とあって、駅伝の制は春秋の時にすでにあったとされるが、西周後期の「散氏盤」に「ごれを神楽」といる。

| 16 めぐる

学 16 よろこぶ

27 19 エキ

釋。樂

エキ 圏 懌 澤 エツ 日 戊〔载〕 形声 声符は睪。睪は獣屍の殬敗する形。繹は糸

とをいう。 とがったことがみえる。 にから、おしひろめる意の演繹の義が年れる。 「論語、八佾」に、孔子が魯の大師に楽音中れる。 「論語、八佾」に、孔子が魯の大師に楽音中れる。 「論語、八佾」に、孔子が魯の大師に楽音中れる。 「論語、八佾」に、孔子が魯の大師に楽音中れる。 「論語、八佾」に、孔子が魯の大師に楽音中は、余韻の尽きないことをいう。

ュッ

日4いう・ここに

は、みなその系列の字である。「説文」五上の日部は、、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものない、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もは、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もは、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もは、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もは、文字が古代の視禱儀礼に関して成立した事情もなって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものあって極めて多く、ロ・田・音・言の形を含むものまた。

部を下にして玉座の前

には、田以下、雪・葛・宮・鷲・鷲(曹)の七には、田以下、雪・葛・宮・鷲・紫(曹)の七郎が乙形にまきあげられた形のものがあるのは、そのおうとしている形で、宮開の養をもつ。田の上部が乙形にまきあげられた形のものがあるのは、そのおうにして蓋を開く形である。祝禱は深く蓋蔵するようにして蓋を開く形である。祝禱は深く蓋蔵するようにして蓋を開く形である。祝禱は深く蓋蔵するま。古・成などはみな。鍼などの聖器をガ上に加える形、曷・譬・沓は田にそれぞれ呪器、あるいは呪の行為を加えて、その呪能にはたらきかける意をもの字である。

戊5 〔鉞〕13 まさかり

ボ ア 大炭

儀器である。儀器としては、刃部の大きな戊を、刃る」というが、それらは要するに王の指揮権を示すら取を執り、周は左に黃 戊を杖き、右に白廃を乗白戚を執り、周は左に黃 戊を杖き、右に白廃を乗り」という。〔司馬法〕に「夏は玄戍を執り、殷はかまさかりの形。〔説文〕 ニ下に「大斧な象形 まさかりの形。〔説文〕 ニ下に「大斧な

である。図は近年殷墟 か字であり、上部に玉 がまなる。 戊は鉞の 初 である。 戊は鉞の 初 である。 戊は鉞の 初 を加えたものが皇



思われる。下に婦好の名をしるす。同出の多数の精 の武丁の正妃と考えられている人である。 巧な青銅器にも、その名をしるしている。婦好は殷 う形で、この文様は辟邪の意をもつものであろうとの婦好墓より出土した鉞。中央の人面を両饕餮が襲

呕 のど・むせぶエツ・イン・エン

その声の転じたものであろう。噎(むせぶ)とも通隘いの意をもち、その字が正字であるらしく、咽は めるようにして人を攻めることをいう。 咽喉はのど。「咽を溢し、背を拊つ」とは、 じ、声がむせび、ふさがる意。擬声的な語である。 なり」とし、因声とする。 監は総る・ 形声 声符は因。〔説文〕二上に「監 鶏をし

10 (悅)10 よろこぶ

神意にかなうことを悦という。またそのエクスタシ る」状態で、神とともにあるものであるから、その 神気の降ることを象徴する。それは「怳たり惚たスタシーの状態にあることを示す字で、上部の八は (関)の声がある。兌は兄(祝)が神に祈ってエク形声 旧字は悅に作り、兌声。兌に説(説)・鬩形 ともに兌に従う字である。 の状態にあることを脱(脱)という。悦も脱も、

粤12 「事」11 「鴨」14 エッ(エッ)

野門那 0 雨ず 原門

> 電に作るものがその字である。〔説文〕に「周書に に越に作る例がある。西周前期の〔麦尊〕に「零に越に作る例がある。西周前期の〔麦尊〕に「零に越に「月、侯、宗周に見ゆ……電若に翌日、辟雍に「ない」という文があり、霧若は発語。〔書、尭典〕に「零になるである。〔説文〕に「周書に そらく室奥において、米(獣掌)を台上において祀る喩母の字で写したものである。粤の字の初義は、お 喩母の字で写したものである。粤の字の初義は、おゆれ のはなどはみな同声で、相通用する。発語の語端を る意であろう。ただその義の用例はない。 に「日若」、〔召誥〕「越若來に三月」「越に翼日乙 ,で、発語の辞とする。卜文・金文に掌に作り、またり」とあり、〔説文〕八上も同じ。「ここに」とよん 声符は亏(于)。〔爾雅、釈詁〕に「于な

越12 「返」9 エツ(エツ)・オチ(ヲチ)

靿 狀。 辨

金文には多く戉を用いる。 た粤に作ることがある。国名・地域名としての越は | 來に三月」などの例がある。字はまた逑に作り、ま あって、踰越は双声の訓。曰・于・字と同じく語詞って度越の義とする。踰字条三下にも「越なり」と形声 声符は戊。〔説文〕三上に「度るなり」とあれ にも用い、〔書、召誥〕に「越に三日丁巳」「越若

掲15【掲】16 エッ

靄の意となる。のち長者に見えてことを請うこと**。 明晰でなく聞きわけがたいものであるから、***。 委曲を告げて哀訴するものが謁であろう。その言は するもので、喝とはその祈る声、遏とは、これによ 呪霊に祈り、 屍骨、それに祝禱の器である曰を加えるのは、その とし、曷声とする。曷の上部は曰、下部は匄。匄は遏・謁の音となった。〔説文〕三上に「白すなり」。 を呵して祈る行為であり、曷に従う字はその声義を に対する行為であったからである。およそ曷は死霊 う。取り次ぐものが必要であるのは、謁がもと神霊 を請謁といい、その取り次ぐものを典謁・謁者とい の初義はおそらく喝と近く、声を激していうを喝、 って敵対者の行動を遏止しようとするのである。謁 **^。これを呵して呪能をはたらかせようと もと喉音で、その子音kが脱落して 旧字は謁に作り、曷声。曷は

関 15 (関) 15 けみす・いれるエツ

に「軍馬を廟に簡ふるなり」とあって、軍獲を廟門る。[左伝] 第二十五年「甲兵を數ふ」の〔賈逵注〕の「曹逵注〕というが、兌にその声があり。 馬」の「大関」の注に「軍實を簡ふるなり」とある で数える意とする。許慎はその師説を用いたのであ 「門に從ひ、說の省聲」というが、兌にその声のと同義。軍礼をいう字とするものである。 とあり、門中の車馬の数を験する意。「周礼、 文〕二三上に「數を門中に具するなり」 形声 旧字は関に作り、兌声。〔説 また 大司

をいう。鬩とはもと、門中に容れる意であろう。 られず」というのは、夫に容れられない棄婦の嘆き 邶風、北風〕や〔小雅、谷風〕に「我が躬すら関れば、 どき かいまい ひょう いっぱい 外事に接するところが関である。〔詩、称しており、外事に接するところが関である。〔詩、 「その兌を開き、その事を濟す」では兌と門とを対 「老子」第五十二章「その兌を開き、その門を閉づ」 る。のちにも閲兵・査閲・検閲のように用いる。

エン

円 4 (圓)13 まるい(エン)

賢、下〕〔周礼、司圜〕に「圜土」の名がある。字員の字なり」とするが、禁獄圜土の字。〔墨子、尚などの諸義を生ずる。圜を〔繋伝〕六下に「これ方る。平円・円周の意より、円通・円転・円滑・円融 字である。 えたが、円形はすでに口の形で示されているのであ 示し、両者を合せて員となった。のちまた外囲を加 別があるので、上部に○を加えて円鼎であることを 貝形となったもので、もとは円鼎の象。鼎に方円の という。員は圓の初文。員の下部は鼎の形を略して なり」と畳韻をもって訓し、「讀みて員の若くす」「貴声。〔説文〕六下に「圜の全きものだ」、「影の全きもの形声 円の初文は圃。圓は口に従い、 はまた天圜地方の意に用いるが、圓(円)とは別の

合 5 やまあいのぬま・よるエン

エン

円(圓)

召

夗 舦 妟

> はない。 水の敗るる形に従ふ」とするが、その意に用いた例 〔説文〕三上に「山閒の陷泥の地なり。口に從ひ、 〔説文〕のいう谷地の陥泥のところを意味する字で るから、のち天子の御衣の名となって袞竜という。 衣中に加えたものは衰、神霊の憑るところの衣であ とを示す字で、悦・脱はともに兌に従う。また合を 兌、すなわち巫祝がエクスタシーの状態にあるこ***。 るべきであろう。この下部に人の形を加えたものは 禱の器であるから、字は祝禱儀礼に関するものとみ はない。 〔段注〕 に谷と同系の字とするが、 日は祝 Ÿ める器の形でID。祝禱して神気の下る意である。 彷彿として下る形。口は祝禱の文を収 八と口とに従う。八は神気の

夗 ふくよか・ころがりふすエン(エン)

するなり。夕に從ひ卩に從ふ。臥するに卩あるなか。夕に從ひ貫。〔説文〕七上に「轉臥と、その膝のふくよ てふくよかの意がある。 に「二人宛轉の形に象る」とするも、それは色や仰ある。肥や残(盈)とその意象が似ている。〔文源〕 字とするが、宛転・転覆は男女交歓の態をいう語でり」と横臥するときにも節度のある行儀よさを示す などの字形に施すべき解である。夗声の字に、 すべ

从 はたあし・ふきながし

> */ イド

・子優、孔門の言優など、みな字に游を用いており、 はまた優養に作る。晋の幕優・荀優、鄭の公 が養はまた優養に作る。晋の幕優・荀優、鄭の公 は変し)、放蹇(なびく)たるの見なり。中に從ひ、 はない。 いたなり、からいに従ひ、 はない。 いたなり。 いに従ひ、 はない。 いたなり。 いに従ひ、 はない。 いたなり。 いに従ひ、 (挿図)、その部分は斿。 象形 な旗を捧じているものがあり 金文の図象に、盤上の人が大き 偃・从は通用の字。のち从に代って偃の字を用いた。 旗竿と吹流しの形。〔色葉字類抄〕に「は 旗のな

妟 やすらか びく形が放である。

夫を褒ましむ」のようにいう。卜文に晏に両手と印気期の金文に「用て優し用て喜(饎)す」「台て大変」の金文に「用て優し用て喜(饎)す」「台で大変」の意をもつ。列 是 くるは、陰(女)、日(陽)に続べらるるなり。婦説解を加えていない。〔段注〕に「女、日の下に系が二下に「安らかなるなり」とし会意とするが、その 中でその儀礼を行なうことで、これによって宴安を の説である。と・宴はともに晏に従い、とはこすな は夫に從ふときは則ち安し」とするが、全く道徳家 授霊のための儀礼を行なうことをいう。〔説文〕一 わち秘匿のところで魂振り儀礼を行なう意、宴は廟 女子の頭上に玉をおいて、魂振りなど会意 日と女とに従う。日は玉の形。

である。 加える形から出ており、晏・匽・宴は一系をなす字 えている形のものがある。字は女子の頭上に珠玉を

おエ おう

ものとしがたい。〔詩、大雅、皇矣〕〔執鏡〕に部は明らかに黽形のもので、その解は字形に即する で、黽形のものを掩うている形である。奄有と寵囿 餘有るなり」とし、「大に從ひ申に從ふ。申は展ぶ とは同一の語とみてよく、くまなく保有すること、 を寵囿す」とみえ、竈とは空気抜けの穴のある器蓋 るなり」という。ゆえに有余の意とするが、字の下 〔説文〕 IOFに「覆ふなり。大にして 会意 大と黽形のものとに従う。

天產形図象 ものがあり(挿図)、 図象に天黿形とよばれている いわゆる掩有である。金文の 上部は人

図象であるという。また聞一多は奄と釈して、周初天竈と解し、古帝王として伝えられている軒轅氏の天竈と解し、古帝王として伝えられている軒轅氏の 伐つための東征と解している。奄は黽形のものを蓋の大東征と伝えられる「踐奄の役」を、この部族を に黽形のものを加えている。郭沫若はその図象を う形であるから、いわゆる天黿形の図象の意味する が足を開いて立つ形、その下

> 「久しい」の意があり、奄蓋・奄留・奄久・奄黒のその部族の標識とされたのであろう。奄に「蓋う」 文である。 ようとするさまをいう。奄に従うものに庵・淹・掩の精気を閉蔵する意である。奄々とは、気息の絶え ようにいう。また去勢したものを奄というのも、そ ところと異なり、また図象と文字とは異なる性質の の諸字があり、みなその声義を承ける。掩は奄の繁 いる何らかの呪儀を掌る職掌を示しており、 ものではない。ただその図象をもつものは、黽を用 もので、このような図象をそのまま軒轅と釈しうる それで

宛 8 みをかがめてすわる・あたかもエン(エン)

する意である。その拝する形が、身をまるめて伏す 奥とは神のあるところであるから、宛もまた奥を拝 き膝・腿のあたりのふくよかなさまをいう。宛とは 解したからである。夗は敬んで坐する形で、そのと 「岡に寄せわが刈る草のさね草のまこと柔やは寢ろ 霊を拝している形である。〔説文〕セ下に「艸を屈なり」を拝している形である。〔説文〕セ下に「艸を屈なり」を持して、祖は解。願中に人が坐して、祖 阚 るさまであるので、宛屈・宛曲・宛転などの意とな なり。室の西南隅なり」とあって、奥と同義とする その姿勢で廟に拝する意である。奥字条七下に「宛 字中に含まれる妃七上を、 とへなかも」の歌のような意となるが、それはこの るようである。それならば〔万葉〕一四・三四九九の めて自ら覆ふなり」とし、草中に臥する意としてい 廖 「轉臥するなり」の意に 一と夗とに従う。*

> 心的な状態を示す字であろう。宛然の意より、副詞り、宛は本来そのような神事に関するもので、その 〔説文〕が重文としてあげる字に、心に従う形があ 化して「あたかも」の意となる。 「遡游してこれに従はんとすれば るが、祭るものがその女神を追迹する祭儀を述べて る。〔詩、秦風、蒹葭〕は晩秋の水神祭祀の詩であ 宛として水の中

延 〔延〕 ひく・のびる

古い字形や用義例がないが、〔爾雅、釈詁〕に「閒 が、もと墓室への道をいうものであった。 という。それよりして延引・延長・延及の意となる **羨道を意味し、羨は延の仮借。墓中の隧をまた延道だり」とあって、墓道をいう。字は延道、すなわちなり」とあって、墓道をいう。字は延道、すなわち** 廷・建の字から知られるように、 とするが、字は乏に従う字で、乏は死者の形。ゑは 涎 会意 文〕ニ下に「長行なり」と訓し、 ゑと匠 (乏) とに従う。∑説 儀礼の場所をいう 月ま

沿。〔沿〕。 そエ うン

意とするが、その意の用例はない。[書、禹貢]にひ、水の敗るる形に従ふ」として、谷川の溢流する 三上に「山閒の陷泥の地なり。口に従 形声 声符は合。合は〔説文〕口部

海が字の原義、それより沿道・沿辺、また時の関係 に移して沿革・沿襲の意となる。 「江海に沿ふ」とあって、水辺に沿う意。沿岸・沿

うており、墉の意。それに亘声を加えた字で、亘はきの象形で、垣は土垣。籀文の字形は尊(郭)に従きの象形で、垣は土垣。籀文の字形は尊(郭)に従

炎 8 ほのお エン (エン)・タン

淡

会意 火を二つ重ねて、火焰の意をあらわす。焰の初文。〔説文〕一〇上は次条に「燄、火の行くこと微に、小、足間に炎ゆれば、玉石ともに焚く」の語がある。〔説文〕一〇上に「火光上るなり。重火に従の初文。〔説文〕一〇上に「火光上るなり。重火に従る。 声義の同じ字である。 次条にまた銛をあげて、「火光なり」という。 して燄々たるなり」とし、字はまた燗に作る。その 会意 火を二つ重ねて、火焰の意をあらわす。 みな

苑 その(エン)・ウツ

WW AP

り奏こ丘ハが、もとは樹木のあるところをいう。鬱っ〔説文〕一下に「禽獸を養ふ所以なり」とあり、飼った。 声符は死。夗になだらかなものの意がある。 と声義近く、通用する字である。

垣9 かき (エン)

ē

声符は豆。豆に超・洹の声がある。豆はか ŦĘ.

エン

炎 苑

垣

弇

怨 爰

> は、中央の寛きをいふ」、また〔左伝〕襄二十五年り」とし、ものを覆う意とするが、その用義例はない。[呂氏春秋、孟冬〕に「その器、宏にして弇しい。[呂氏春秋、孟冬〕に「その器、宏にして弇し」とし、ものを覆う意とするが、その用義例はなり、[説文]三上に「蓋ふな金意 合と卅とに従う。[説文]三上に「蓋ふな金意 合と卅とに従う。[説文]三上に「蓋ふな れないからである。弇蓋の義は〔爾雅、釈器〕「圜れないからである。桑蓋の義は〔爾雅、釈器〕「圜れているのは、要するにその的確な字義が知ら て生れる子を取る形である。字書に弇の音義を多く (嘉)なるか」の意。嘉とは男子の出生をいう。弇 「弇加」と釈すべき字があって、「娩するに、 中ひろく、奥の深いところをいう字である。卜辞に の字形は婦人の分娩の形で、下部の廾は胯間を開い という。これらの訓義によると、弇とは口狭くして 「行きて弇中に及ぶ」の注に「弇中とは狹道なり」 魯 弇 9 周の武王は、殷に克って紂を宣室で殺したと伝えらところであり、また〔淮南子、本経訓〕によると、ところであり、また〔淮南子、本経訓〕によると、名〕は、戦勝の報告である献述の礼の行なわれる名)は、戦勝の報告である献述が 関する字であろう。 れる。宣室は獄舎。宣は亘に従い、建造物の構造に 周の聖所である辟雍(神宮)の宣榭(講武の室の別の意味をもつ場所であることを示す。たとえば 声義を兼ねている。建物にかきをめぐらすのは、特 ふかい・ひろい エン・カン・ダン・ナン A) 為しめ

であるが、それは引伸義を器形の上に適用したものの上を葬めたるもの、これを薫といふ」によるもの にすぎない。

怨9 うらむ エン (エン)

るのは、いずれもうちに深くつつむものだからである。 婉・惋というのであろう。蘊と通用することがあまれた。だいうべきである。そのような憂えある姿をは宛曲にいうべきである。そのような憂えある姿を 形。廟中に坐してつつしんで祖霊を拝するを宛とい う。怨とは神霊に対して怨み申すことであり、怨言 、哀訴することがあって坐して拝するのを怨とい 坐して、その膝のふくよかな 声符は妃。 夗は人が

爱 ひく・ここにエン(エン)

• Thy 罗琴

F

の十三字のうちに、援・媛・猨のほか、湲・緩・古書にその礼をしるすものはない。爰を声とするも ず、この瑗によって援引するものであるとするが、 ○の形にしるすものがあり、羅振玉はその形を繋べあって、爰はその援の初文。ト文には手中のものをあって、爰はその援の初文。ト文には手中のものを 説くものである。手部一二上に「援は引くなり」と ひ于に從ふ」とするのは、篆文の字形によって誤り を上るとき、臣下のものが直接に手を援くことをせ すなわち大孔璧をもつ形であるとする。 もって援く形。〔説文〕四下に「引くなり。受に従会憲 受と○とに従う。上下よりして環形の○を 人君が階陸

加

行 9 あまる・おおい

雅 排制 温

会意 行と水とに従う。〔説文〕ニュに「水、海に朝宗するなり」とし、「繋ばれいった」には文末に「続なり」とあって、形容の語とする。朝宗は海に注ぐことをいうとするが、行は街路、街路に水が溢流することをいうとするが、行は街路、街路に水が溢流することをいう。ゆえに衍余(あまる)の意となり、衍盈となり。の意となり、衍盈とをいう。ゆえに衍余(あまる)の意となる。水の溢流(みつる)の意となり、衍子となる。水の溢流(みつる)の意となり、衍子となる。水の溢流で、が大のる)の意となり、行名とを行義といい、演と声義が通ずる。たちという。

俺 10 おおきい・われ

語であろう。 形声 声符は確。をにはものを蓋うを自称に用いることは元曲にみえる。もと北方人のを自称に用いることは元曲にみえる。を生ずる。俺

冤 10 エン(エン)

会意 『と発とに従う。[説文] 一〇 会意 『と発とに従う。[説文] 一〇 に作る。ト文に上部を関に作るものがあり、とあり、[玄応音義] に末句を「善く曲折するなり」に作る。ト文に上部を関に作るものがあり、なり」に作る。ト文に上部を関に作るものがあり、なり」に作る。ト文に上部を関で作るものがあり、なり」に作る。ト文に上部を関でして事せられることを得る。

炎 10 エン・セン

全意 炎と刀とに従う。〔説文〕四下 会意 炎と刀とに従う。〔説文〕四下 の が に「鋭利なり」と訓し、炎声とするが、字形からいえば、炎に刃を加えてにらぐ意で、よって鋭利の意となる。鋭の初文は順に作り、炉中の炎に刀を入れる形。〔楚辞、離騒〕に「皇(神霊)、地名・人名のときには、センの音を用いる。 地名・人名のときには、センの音を用いる。 かんげ

家 解解 医光电影

が、専ら宴安・宴楽の字に用いられ、妟の字形の示た厦に作る。宴はまた廟中での儀礼を示す字であるた厦に作る。宴はまた廟中での儀礼を示す字である。在区に下をおき、魂振りの儀礼を行なう字である。一と旻とに従う。旻が字の初文で、女子の会意 べんぱん

捐 0 すてる・おくる

表 10 ながいころも・とおい

え、枕もとに之(止、あしがた)をおいて、死者の もとに魂振りの器である○(玉)を加 会意 之と玉と衣とに従う。衣の襟

『長衣の見なり』とし、字を慰の省声とするが、声養ともに誤る。この字を長衣の美に用いた例もない。金文の〔師宴設〕の妻は、廟中において袁の礼を行なう字である。死喪の礼には衣を用いるものが多く、「表・裳・裳・裳・表・衰)などは、みなその儀礼に関する字である。死喪の礼には衣を用いるものが多く、「記を祈るものであろう。遠行のときにも、種々の呪いな儀礼や呪具を著けるので、長途の旅行を遠といめな儀礼や呪具を著けるので、長途の旅行を遠といいな儀礼や呪具を著けるので、長途の旅行を遠といいな優礼や、またその帰りを待つ家人の行なう禁いなどのことが、多く歌われている。

偃 11 エン

るのである。

婉 11 よなやか・つつましい

形声 声符は宛。兜・窓は女子がつな受情に苦しむことを歌う。飢とは欲望の不充足かな受情に苦しむことを歌う。飢とは欲望の不充足をいう語である。

淵1 まか(エン)

ぐ意象の字。焉も烏・於と声義が近い。焉は死んだある。烏・於はともに烏をさらして田畑の鳥害を防草焉黃」は玄黄して萎絶する意で、焉に黄色の義が草焉子。は玄黄して萎絶する意で、焉に黄色の義が「兵」の「百馬・於の声は通ずる。また〔大戴礼、用兵〕の「百馬・於の声は通ずる。また〔大戴礼、用兵〕の「百

のみ用いられる。太歳名の薫逢はまた闕逢に作り、焉の実体は知られない。字はただ疑問副詞や助詞に焉の実体は知られない。字はただ疑問副詞や助詞に

説もあるが、それらはいずれも神奇とするに足らず、

祀る燕をその例としてあげているが、焉の神異につま。(木星)のあるところを知るという鳥、諸子儀礼に

いてはふれていない。焉を鳶、あるいは黄鶯とする

〔段注〕に「今、何の鳥なるかを審らかにせず」と

出づ。象形」とするが、鳥名としても定かでなく、

〔説文〕四上に「焉鳥なり。 黄色、江淮に

るとし、聖鳥の鳳(朋)、日中の精である鳥、太歳いう。〔説文〕は、およそ神異の鳥はみな象形であいう。〔説文〕は、およそ神異の鳥はみな象形であ

馬川 黒かる・いずくんぞ

偃

婉

淵焉

の字を用い、〔説文〕にも堰の字はみえていない。 「後漢書、王賢伝」に「景の堰流法を用ひて、水乃 に、後名頻深・抄」に「景の堰流法を用ひて、水乃 は民生の重要事とされた。〔新撰字鏡〕に堰を「井 世久」、〔倭名頻深・抄〕に「赤が豊。」と調する。ま 世久」、〔倭名頻深・抄〕に「赤が豊。」と調する。ま かずれることをいう。 をすることをいう。

媛 12 エン(エン)

とあり、誘いこむような態度をいうのであろう。 ずれも女巫をいう。注に「なほ牽引のごときなり」「女、嬋媛として予がために太息す」とあるが、い「女、嬋媛として予がために太息す」とあるが、い 申々としてそれずを罵る」、また〔九歌、湘君〕」とが弾連ともいう。〔楚辞、離騒〕「女婆の嬋媛なるた嬋連ともいう。〔楚辞、離騒〕「女妻の嬋媛なるだ嬋連ともいう。〔楚辞、離縣〕「女世・ やかな姿態をいう畳韻の連語。嬋娟、形声 声符は爰。嬋媛は女子のしな 声符は爰。嬋媛は女子の 相

掾 ¹² たすける・したやく・じょうエン・テン

属官の類をいう。〔通典、職官〕に、漢の大司馬長〔説文〕二三上に「縁るなり」とあり、 の第三等官を称した。「霊異記」にみえるが、丞に 史の下に掾属二十四人ありとみえる。下級の書記官 あててよんだもので、のちの判官に相当する。 を掾史という。わが国では「じょう」とよみ、地方 声符は彖。彖に縁の声がある。

揜 ¹² おおう・とるエン・アン・オン

て、その善を著す」の語がある。 形声 るから、開く意があり、揜はそれを蓋 声符は弇。弇は分娩の象であ

援12【援】12 ひく・たすける

を援きあげるときは、助ける意となる。証拠として が、 文〕二上に「引くなり」とみえる。鐶形のものを 引用することを、援引・援証という。 用いるときもあり、また長い杖を用いるときもある これをもって援引することをいう。陥没した人 物をもって上下より両引する形。〔説 旧字は援に作り、爰声。爰は

焰 ほエ のン お

が異なるが、匣母の字には、皇・黄など同じようなない。 声十六字のうち、燄・閻のみカンと声いい 形声 声符は名。「説文」所収の名 燄々たる」による訓である。 「火の行くこと微にして燄々たるなり」と、火のも 関係のものがある。〔説文〕一〇上に燄を正字とし、 えはじめるさまとする。〔書、洛誥〕「火の始めて

焱 12 ほエ のお

焱 北京

*☆と形が似ているため、誤用されることがある。*ゆよ。 ねゆる火花。焰と声義同じ。ふいごうを焱橐という。らわす。〔説文〕 〇下に「火華なり」というのはいらわす。〔説文】 会意 火を三つ合せて、火勢のさかんなことをあ

<u>袁</u> その (エン (エン)

形声 れた土地。果樹・草木のあるところ。 声符は袁。□は一定の区画さ

> も知れない。 きを歌う詩であるが、園に特別の寓意があるものか 魏風、園有桃〕は、土地を棄てて流浪するものの嘆きの起原は墓地の植樹にあったかと思われる。〔詩、その起原は墓地の植樹にあったかと思われる。〔詩、 園寝・園陵・園廟・園塋など陵廟に関する語が多く

塩 13 (鹽) 24 しおン (エン)

成六年に あり、古帝王の大庭氏の末裔であるとし、宋の王応あげている。〔左伝〕襄二年に夙沙衛というものが(人名)初めて煮海鹽を作る」という事物起原説を で、いわゆる河東の塩池。〔周礼、塩人〕にその塩り、〔根虔注〕に「盬とは鹽池なり」とみえるものり、〔程以 麟の〔困学紀聞〕巻一○に引く〔魯連子〕にも、古別の「鬼がなきだ」を見られているない。大帝王の大庭氏の末裔であるとし、宋の王応あり、古帝王の大庭氏の末裔であるとし、宋の王応 を祭祀に供したことがみえている。塩は俗字である 成六年に「郇瑕氏の地、沃饒にして盬に近し」とあとする。天生とは塩池の塩の類であろう。〔左伝〕 生を鹵といひ、人生を鹽といふ」という文があった ろう。〔玄応音義〕に、〔説文〕のこの条になお「天 おそらく古く塩人たちの奉ずるその職業神の名であ の善く漁するものとして宿沙瞿子の名がみえている。 る。〔説文〕二上に「鹹なり」とし、「古者、宿沙の監の頭音kが脱落したものと思われ が、いま常用の字とする。 形声 旧字は鹽に作り、監声。見母

煙 (煙)12 (烟)10

侧圆

の字形をあげる。烟の声符は気。 堊は〔説文〕土部の字形をあげる。烟の声符は気。 堊は〔説文〕土部 「火气なり」とあり、重文として烟及び古文・籀文 旧字は煙に作り、堕声。〔説文〕一〇上に 竈の煙が上に流れ出 じうするものであろう。 なり」という。わが国のわらふだなどと、起原を同 礼、司几筵〕の〔疏〕に「筵は神を坐せしむるの席

担13 かえだ・つよい

一三下に「塞ぐなり」とあり、

には袰を用うべきで、爰にはまた換の声がある。て、その声と義とを改めるべき例が多い。絙田の義 あるべきである。〔説文〕には、卜文・金文によっ りいえばこれがその本義であり、音もまた柜の音で 誓」「尙くは桓々たれ」という桓々と同じ。字義よい。 1822 - 1823 - 1824 - 1825 - 182 [號季子白盤]「超々たる子白、骸を王に獻ず」〔者ある。金文にこの字を勇武の状をいう語に用い、ある。金文にこの字を勇武の状をいう語に用い、 易・再易の三種とし、一易とは「漢書、食貨志」に 田のことである。〔周礼、大司徒〕に田を不易・一るのは、いわゆる愛田、一年おきに耕作する一場の 辺鐘」「桓々たれ哉」、〔秦公設〕「剌々桓々として、 上田・中田・下田とするもののうち、第二等の田で 逦 る。〔説文〕二上に「趣田なり」とあ形声 声符は亘。亘には垣の声もあ

舜典」「六宗に麓す」、「周礼、大宗伯」「薩祀を以上をで、「六宗に麓す」、「周礼、大宗伯」「薩祀を以上をで、だい。」とあり、「書、〔説文〕示部一上に「薩は潔祀なり」とあり、〔書、

れに被らしむ」という。牡繭はいまいう除虫菊。

するものであるが、「牡繭を焚き」「その煙を以てこ 意がある。〔周礼、蠍氏〕は虫害を除くことを職と 作られた字であるが、因にも氤氲(立ちこめる)のる形である。垔は煙の初文。烟はその形声字として

遠流(遠)14 とおい

筵 13

むエ しろ

後、唐宋以後には多く猿を用いる。 学の声義を承けるものであろう。漢魏のころまでは学の声義を承けるものであろう。漢魏のころまでは「いっ」という。という。という。という。

猿13 [猴]12

エン (エン)

形声

声符は袁、また爰。〔正字通〕

みな煙をあげて天神を祀る祭儀である。

て、昊天上帝を祀る」などの禋とよばれる祭祀は、

畿 0 為學學

遼々として遥遠である意。西周後期の〔大克鼎〕遠とは死者の遠行をいう。〔説文〕『下に遊と互訓。遠とは死者の遠行をいう。〔説文〕『下に遊と互訓。おき、枕べに止(はきもの)を加えて死者を送る形。 形声 声符は袁。袁は死喪のとき、襟もとに玉を

> 味した。 り」とあり、遐は遠とともに、もと登遐(死)を意って、遠近の字に用いる。〔爾雅、釈詁〕に「遐なや〔番生設〕に「遠きを柔らげ、��きをむ」とあり、「また。

鉛13 (鉛)13 なエン

した。 米辱〕に「これに鉛ひ、これを重ぬ」と撫循の意いもの。〔玉篇〕には「黒錫なり」とみえる。〔荀子、いもの。〔玉篇〕には「黒錫なり」とみえる。〔荀子、いもの。〔玉篇〕になっている。〔〕では、これを重ね」と 無語の お声 声符は 合。〔説文〕 | 四上に ひず」の語がある。六朝の貴人は、男子も化粧を くからのことで、曹植の〔洛神の賦〕に「鉛華御に用いるのは仮借。鉛華を白粉として用いたのは古に用いるのは仮

厭14 まんぞくする・あくエン・ヨウ(エフ)

F 校於新

会意 服する意である。占くは獣を厭の意に用いており、 どの聖所、そこで牲を供えて祀り、祈って禍害を圧 の形。猒は犬の肩肉を牲として、天神を祀る。神意 は厭勝(まじない)の意。厂は猒を用いる崖下 また厭には「笮なり」として圧笮の意とするが、 に從ひ狀に從ふ」とするが、 上と厭力下をそれぞれ録し、猒には「飽くなり。甘 がそれに満足することを猒という。〔説文〕は猒五 は肩の骨臼の部分、下部は肉であるから、胃は肩肉会・ 厂と獣とに従う。獣は厭の初文。胃の上部から、 日は骨臼の形である。

「鄭注」に「筵は神の爲に席を布くなり」、また〔周

「筵席を舗き、尊祖を陳ぬ」とみえる。廟中の儀礼

祭祀儀礼の際に用い、〔礼記、楽記〕に

埋めるところ。筵とは神事に用いる竹

声符は延(延)。延は死者を

にも、「儀礼、士冠礼」に「東序に筵す」とあり、

演 4 のばす・おこなう

ルト の手で正しくなおす意の字。「説文」 ことなく、ゆたかに流れる意である。次第をもっることなく、ゆたかに流れる意である。次第をもってことが行なわれるのを演といい、演舞・演劇・演奏のように用いる。演響とは論理の次第に従って布奏のように用いる。演響とは論理の次第に従って布奏のように用いる。演響とは糸がもつれずに抽き出される意演すること、響とは糸がもつれずに抽き出される意

14 とび

に「鳶飛んで天に戻り」魚淵に躍る」という句があ悪鳥とされている鳥であるが、〔詩、大雅、早麓?・形声 一声符は弋。この字は〔説文〕にみえない。

葉〕の吉野歌のように、自然讚頌の意である。 葉〕の吉野歌のように、自然讚頌の意である。 味の清遊を試みることを歌うもので、この句も〔万味の清遊を試みることを歌うもので、この句も〔万味の清遊を試みることを歌うもので、この句も〔五味の清遊をはれる。その詩は、貴人たちが山川の間に遠え

縁15【縁】15 ふち・タン

縁とはふちかざりをいう。因縁は仏教語である。 べてエンの音でよむ。彖にはふちをめぐる意があり、 べてエンの音でよむ。彖にはふちをめぐる意があり、 を解している。 というほかは、すい。 を解している。 というほかは、すい。 を解している。 というほかは、すい。 を解している。 というほかは、すい。 というない。

夏 16 まるい (エン)・カン (クヮン)

音の脱落したものであろう。 が、 下〕に「むかし傳説は北海の洲、闌土の上に居る」 天円地方の説は、「呂氏春秋」や「大戴礼」などに丘も、天体に則るものという。のちの天壇にあたる。に「冬は地上の圜丘に至りてこれを奏す」という圜に「冬は地上の圜丘に至りてこれを奏す」という圜 であろう。〔説文〕に睘声に従うものは十八文ある というのは獄城のことで、これを辺土に設けたもの [周礼、比長]〔司圜〕にみえる。〔墨子、尚賢、至ってあらわれるものである。圜土は古代の獄の名: には「これ方圓の字なり」とする。〔周礼、のが圓。〔説文〕六下に「天體なり」とし、 環形のものをいう。その外囲にさらに円を加えたも 8 エンの声はこの字のみであり、あるいは語頭子 形声 死者の胸もとに飾る玉、すなわち環で 声符は睘。睘は復活を求めて 大司楽 「繁伝」

■四个 象形 上部は目の周辺のくまどり、下部は大で、人の正面形である。〔説文〕四上に「無は冒塵なり。讀んで書卷の卷の若くす」とあり、目のふちに入墨し、あるいはくまどりすることを示す字であろう。慶について〔説文〕ーすることを示す字であろう。慶について〔説文〕ーすることを示す字であろう。とし、参勇を示す字であるという。武勇を示すために目にくまどりを加えることは、古くわが国でも行なわれ、大久米命に向かってイスケョリヒメが「あめつつ 千鳥ましとど などがける利目」と問いかけた歌がある。女子が襲を加えたものを鰻という。〔説文〕ニ下に「好なり」とみえる。あり、「広雅、釈訓」に「鰻々は容なり」とみえる。あり、「広雅、釈訓」に「鰻々は容なり」とみえる。

16 つばめ・たのしむ

大学では、大学である。また宴楽の字には 大学では、大学である。また宴楽の字には 大学では、大学である。また宴楽の子には 大学では西周期は屋、列国期は圏に作る。文献に か行なわれて、子求めの祭をした。〔詩、商頌、玄 が行なわれて、子求めの祭をした。〔詩、商頌、玄 が行なわれて、子求めの祭をした。〔詩、商頌、玄 が行なわれて、子求めの祭をした。〔詩、商頌、玄 が行なわれて、子求めの祭をした。〔詩、応頌、玄 を立して表しむ」というのは、その祖神 の話を歌うものであり、郊襟の民俗は殷の時代から あったのであろう。字は陵に仮惜し、〔詩、邶風、 大台では、小雅、南有嘉魚〕「嘉賀式て燕し 以て樂しむ。〔章、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式て燕し 以て樂しむ。「詩、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式て燕し 以て樂しむ。「詩、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式て燕し 以て樂しむ。「京、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式で燕し は宴楽の義である。また宴楽の子には 、京本 本文では西周期は屋、列国期は圏に作る。文献に 別の一次というのは、その祖神 の義。また「詩、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式で燕し の義。また「詩、小雅、南有嘉魚」「嘉賀式で燕し 以て樂しむ。「京本院をこれ求む」とは「京が、日義と は「京本のである。」とあり、また東梁の字には 本文では西周期は屋、列国期は圏に作る。文献に 別の一次という。

を施 ・ 下声 ・ 声符は驚。常に流・橋の音が を増きて坐し、大夫は檐に向ふ」の注に「檐は屋外の でななり」とあって、それは門外にめぐらした、い の目じ字であるが、その材質が異なり、従って慣用 の目じ字であるが、その材質が異なり、従って慣用 の上にも区別がある。[国語、呉語]に「王は檐に の上にも区別がある。[国語、呉語]に「王は檐に の上にも区別がある。「国語、呉語]に「・ 権は屋外の なって、それは門外にめぐらした、い

る盍声九文のうち、他に齷と疒部にアフの声の字が從ふ。豐は大なり。盍聲」という。〔説文〕にあげ

た。〔説文〕二上に「豎なり。宮中の奄、昏に門をので、古くは宦者をもってこれにあて

閣16

かんがん・宮門を守るものエン

形声

声符は奄。閹は宮門を守るも

が明らかでない。

閉ざすものなり」という。奄に蓋蔵・閉蔵の意があ

いまこれを宦人といふ」とみえる。豎・宦は

天官序官、注〕に「奄は精氣閉藏する

原面 23 エン・ヨウ(エフ)

先世の説話のうち、宋の華父督が孔父の妻を路上に

古くからその意に用いられ、〔左伝〕桓元年、孔子られる。美好の意は嫣の仮借とする説もある。ただの形であるから、供薦のさかんなことをいう字とみみえず、豐(豊)は豆に盛った穀物、盍はふたものみらず、豐はその転音であろう。字形は美好の意ともあり、豔はその転音であろう。字形は美好の意とも

刑余のものを用いることが多く、「周礼、酒人」「箋

ト文に羌人を去勢することを卜する例がある。のちもので、眼睛を失わせ、また去勢することもある。みな臣の字形を含むが、臣とはもと神に捧げられる

人〕以下の十四職には、奄人を配している。奄人に

実践では誌というとする。誌とは痣の意である。 「説文」「〇上に「中黒きなり」とあるが、「玄応音義」に「面中の黒子なり」とするのがが、「玄応音義」に「面中の黒子なり」とするのがが、「玄応音義」に「面中の黒子なり」とするのがが、「玄応音義」に「面中の黒子なり」とあるが、「玄応音義」に「中黒きなり」とある。

鴛16

おしどり

形声

声符は夗。鴛鴦は双声の語で

おしどり。

鴛は雄、

鴦は雌であるとい

の。作者は「寺人孟子」この詩を作爲す」と名のっの巷伯も奄官で、宮中にあって王后の命を掌るもして門を守るものを閹という。〔詩、小雅、巷伯〕して門を守るものを閹という。〔詩、小雅、巷伯〉

寺人とは閹人である。

₩〒 に「好にして長きなり」とし、「豐に 会意 豐と蓋とに従う。〔説文〕五上

才

える。

まだその字がみえず、〔玉篇〕に至ってはじめてみいう話がある。艶は美好の意を示す俗字。漢碑にはみかけて、「美にして豔なり」といって目送したと

汚 6 「汗」 6 けがれる・ひくい

於 8 おあ・に・おいて

而利利

エン閣鴛瘩靨黶豔

檐

のき・ひさ

鴦塚という。

女の列坐する会を鴛鴦会、男女を合葬するものを鴛ら夫婦の愛を象徴するめでたい鳥とされていた。男

小雅、鴛鴦」は君子祝頌の詩で、

古くか

繁 豔〔艶〕 オ 汚〔汙〕

七(允)(尪) 王

うに、かなしんで心結ぼれる状態や、於乎・於戯なであろう。のち於が多く用いられ、於色・於悒のよ於がもと一字であったことは、よく知られていたの於がもと一字であったことは、よく知られていたの であろう。金文ではともに感動詞に用い、[也段]であろう。金文ではともに感動詞に用い、[也段] れていることを、カールグレンが注意している。 に用いるが、〔左伝〕にはその用法が厳密に区別さ ど感動詞に用いる。於・于は助詞としては同じよう ある。列国期のものには「於摩」の語もあり、鳥・く、派(於)」とあって、いずれも西 周前期の器でく、《《於)」とあって、いずれも西 周前期の器で れを耕作の地にさげて、鳥害を避けようとしたもの その形について説解を加えていない。鳥は死鳥の全 [説文] 四上に烏の古文としてこの字形をあげるが、 於はその羽を解いて縄にかけわたした形で、こ 鳥の羽を解いて、縄にかけわたした形。

たまりみずオ(ヲ)

魚を捕ることから名をえたものであろう。 る。洿沢はペリカン。泥水をさらうように含んで、 の意とする。汗・淤、 一上に「濁水流れざるなり」とあり、また「一に日 ゆるくまがる、くぼむなどの意がある。〔説文〕」 いるもの。その字形は大きな曲針で、ものを削る器。 く、窳みて下きなり」とあって、低いところ、汙下 う字で、古い語頭音gがなお残されて 声符は夸。夸は喩母の于に従 また注・窪などと近い語であ

鳴 3 オ (ヲ)

れる、嗚咽はむせび泣きする意である。とみてよい字である。嗚呼は感動詞、嗚悒は心結ぼとみてよい字である。嗚呼は感動詞、嗚悒は心結ぼときの声などから出たものであろう。嗚はその繁文 形声 いるのは、この死鳥の羽を農地に掲げて、鳥を追う 声符は鳥。鳥は死鳥の形。古く感動詞に用

Ŕ **七**₃[允]₄[尪]ァ 象形 足や腰のわるい人。オウ(ワウ)「まがる 曲脛の人に象る。

しく雨ふらず。吾、尪を暴さんと欲す」など、その巫柱を焚かんと欲す」、〔礼記、檀弓、下〕「天、久巫柱を焚かんと欲す」、〔礼記、檀弓、下〕「天、久犠牲とすることもあった。〔左伝〕僖二十一年「公、 障害の人を用いることが多く、早魃のときなどに、えて尪に作ることがある。古くは神への犠牲として ろう。 に響うからであるとされているが、古くはそのようとあり、そのような傴僂のものを焚くのは、面が天 とあり、そのような傴僂のものを焚くのは、面が天たのである。〔玉篇〕に「尤は僂なり。短少なり」 り、匡は尪。巫覡(男巫)には嘔・尪の人が多かっ 例である。「荀子、正論」に「臨る改匡」の語があ な疾患を、かえって神聖とする観念があったのであ 字は冗に作り、また王声を加

 Ξ_{4} きみ (ワウ)

王丁

EII I f°

三畫してその中を連ね、これを王と謂ふ。三なるも 思われるものがある。〔説文〕一上に「天下の歸往 象形 通三〕にみえ、その下文に「王者に非ずんば孰か能摂するものとする。董仲舒説は「春 秋 繁露、王道 摂するものとする。董仲舒説は「春 秋 繁露、王道なり」とし、王は天地人の三才を買いて、これを統なり」とし、王は天地人の三才を買いて、これを統 の字形について、「董仲舒曰く、古の文を造るもの、 を示す儀器として用いた儀礼用の鉞で、その遺器と のは、天地人なり。而してこれを參通するものは王 するところなり」と王・往の畳韻をもって訓し、そ く、一もて三を貫く くこれに當らん」という。〔説文〕はまた「孔子曰 戊(鉞)の刃部を下にしておく形。王位

文〕に引く孔子の語 の語を引くが、〔説 るべきものがなく、 十二条は、すべて取 を王と爲す」と孔子

520

「王」字の原形

を加えた字形であるが、それは武が戈と止(歩)と 武王の字を攻・珷に作る。王名としての用義である**は、疑うべくもない。周初の〔大盂鼎〕に、文王・は、疑うべくもない。周初の〔大盂鼎〕に、文王・ 文・金文の字形が儀器としての鉞頭の形であること 激の地中火説、郭沫若の牡器説などもあるが、トないの地中火説、郭沫若の牡器説などもあるが、トみな後人の俗説である。王の字形については、呉大 に従うて、征伐を意味するのと同じ。帰往の義では 王声の字に汪・旺など盛大の義があり、往も祉に王 ことを区別するために、特に作られた文字である。

【青苔賦】に「凹險を悲しむ」の句がみえ、六朝期 など、平滿にして高下無し」とあり、また江淹のと同系の語。〔神異経〕に「大荒石湖は、千里凹凸と同系の語。〔神異経〕に「大荒石湖は、千里凹凸と同系の語。〔を発して、凹陷の象を示す。窪・汗など *の意となることは王と同じ。父は斧頭をもつもの、くの玉飾りを施し、その光輝の煌く意で、また皇王くの玉飾りを施し、その光輝の煌く意で、また皇王また王に従うが、儀器である鉞の秘部のところに多まなく、儀器を奉じて前進する意の字であろう。皇もなく、儀器を奉じて前進する意の字であろう。皇も 王・皇・父・士はみなその征伐権・支配権・指揮権 からみえる字である。硯の中央を低く潭池とするも を示す象徴的な儀器で、わが国の古代に銅剣・銅鉾 士もまた鉞頭の形で、士の身分を示す儀器の形。 その権威の象徴として用 「已むなり」「盡くるなり」の訓があるのは、久しう から、 に曰く、久しきなり」とあり、〔広雅、釈詁〕にので、のちには吉祥の語となった。〔説文〕に「一 (尽きない)の意も、その盛大の意から引伸したも **:、「秦風、蒹葭」の詩にみえ、〔礼記、月令〕 〔准きの〔秦風、蒹葭〕の詩にみえ、〔むき に首に枷して殺す意で、その呪霊のさかんなところ かなさまを形容する語であるが、擬声的な用法に近 鉄々」などと同じく、鈴の音をいう。みなそのゆた て、それは鐘銘に多くみえる「嬔々雕々」「其の音 また〔周頌、載見〕には「和鈴央々たり」とあったに流れるところ、旗のなびくさまなどに用いる。 して尽きる意である。 い。字の初義は、やはり殃の字義から知られるよう り」、〔六月〕に「白旆央々たり」とあって、水の盛 墜形訓〕などにも用いられている。また未央 決然の義が生れたのであろう。中央の意はさ

など、非実用的な儀器が、

いられたのと似ている。

くぼむ(アウ)(アフ)

応7 (應)17 あたる・こたえる・まさにオウ

變 原原師 0

公の易へる光を確受す」のように確受という。応とは「毛公鼎」に「大命を確受す」、「叔夷鐘」に「君は「毛公鼎」に「大命を確受す」、「過ぎにより 受せん」の「毛伝」に「富るなり」とあり、金文では、周頌、査」「文王旣に勤めたり 我これを應 その応徴は、隹によって示される。鷹が雁に従うのは神に祈ってその応徴のあることをいう語であるが、 符を羅とするが、金文では確が應(応)の初文。 形声 旧字は應に作り、権声。〔説文〕一〇下に声

> 意。〔叔夷鐘〕に「雁岬」というのと同じく、 [書、康誥] に「殷民を應保す」とあって、雍和の ものと思われる。よびかけに対する応答の意には磨っ古代にもそのような意味で行なわれることがあった 国では「うけひ狩り」として行なわれたが、中国の にかなう意である。 神意を問い、それに対する応答のある意であろう。 を用い、〔説文〕三上に「對は鷹ふること方なきな り(自在である)」という。しかしこれも、本来は は、その神意を示す鳥の意であろう。鷹狩は、 神意

坳 8 くぼみ
オウ(アウ)・ヨウ(エウ)

平らかならざるなり」とあり、地のくぼんだところ は、堂庭のくぼみをいう。 《せば、則ち芥これが舟と爲る」とあり、坳堂とゑ゚、、れて、則ち芥これが舟と爲る」と「杯水を坳堂の上にいう。[荘子、逍遥遊]に「杯水を坳堂の上にまずま 形声 意がある。〔説文新附〕「三下に「地、 声符は幼。幼に拗じたものの

往8【往】8 ゆく(ワウ)

学理当 獲

旁は古く室に作り、古文の形が字の初形で、とみえ、[説文] ニ下はその訓により、室声と 形声 上に之(止、あし)を加えた形である。のち彳を加 声符は王。〔爾雅、 釈詁〕に「之くなり 室声とする。 王の

往(往)

Ш

央

応[應]

坳

央 5

まんなか・なかば・つきるオウ(アウ)・エイ

のを凹心硯、また凹硯という。

り」と歌い、また〔小雅、出車〕に「旗旐央々た水神遊行のさまを述べて「宛として水の中央に在は方で、放の初文である。〔詩、秦風、蒹葭〕に、は方で、放の初文である。〔詩、秦風、蒹葭〕に、 り」と歌い、 同意なり」とするが、上部は首枷の形。その側身形 大の口の内に在るに従ふ。大は人なり。央と旁とはのち中央の意に用いる。〔説文〕五下に「中央なり。 人の首に枷を加えた正面形で、殃の初文。 兼葭」に、

従うが、〔隷釈〕に収める漢碑の字には、なお室の れている字には、柱・狂・匡など室声に従うている形に従うているものが多い。のち王の形に従うとさ 初文の形である。のち略されて、いまの字形は主に 王の出行に際して、「往來、災亡きか」とトする例それが王の出行儀礼を示す字であろう。ト辞には、 道路において鉞形の器を捧げる形の字があり(挿図)、 普通の行為としては考えがたいこ 神聖な儀器としての鉞頭の形であ が多い。その安全を祈る呪的儀礼を示すのが、その とであるから、特別の儀礼的な行為を意味する字と るが、これに趾を加えることは、 えて、祉(行く)に王を加えた形となる。王は王の ものが多く、それらの字の声義は、この字との関連 もと王の出行をいう字であろう。卜文に、

快 うらむ イウ (アウ)

において考える必要がある。

垣彷怏然として説ばずして曰く、譆、亦太甚だしいたが。をもつことをいう。〔戦国策、趙策〕に「予恨の意をもつことをいう。〔戦国策、趙策〕に「予 る心情をいう。 かな、先生の言や」とあり、快然・快々は不快とす して懟むなり」とあり、罪殃に対して不満とし、

おす・おざえる (カフ)

声符は甲。 もと甲の音でよみ、柙と通じて

> :『『『り』本字と用いるようになった。押法で、はじめ真草を用いたが、のち五朶雲といわれ捺印し、 有者をカラネオーリー 捺印し、花押を加える意に用いる。 させな署名の方名が、人を挟押す」とみえるが、のち押捺・押字のように収 権する意に用いる。仲長を統の〔昌言〕に「天収・権」の 領は守護、押送は護送の意である。

拗 ねじる・たがうオウ(アウ)・ヨウ(エウ)

世人はかれを拗相公と称した。いわゆる「ねじけ拗戻を加える意。宋の王安石はその人甚だ剛愎で、勢ないない。またすべて正常でなくを通して、拗ることをいう。またすべて正常でなく 「手もて拉くなり」とするが、もと糸たばの端に木 人」である。 形で、拗の初文。〔説文新附〕一二上に 声符は幼。幼は糸を拗らした

旺 さかんワウン

「秋冬旺相」の語がある。 暈なり」とするのがその字義であるが、のち美盛 もさかんなものを旺相という。〔論衡、禄命〕に の意の字に用いる。 字に作り、 美盛の意とする。旺は「玉篇」 〔爾雅、釈詁〕〔説文〕七上に往に従う 陰陽家では、五行消長の気の最 正字は日と往とに従い、往声 に「日の

枉 まがる ワウ)

文] 六上に 正字は室に従い、室声。〔説

> につけて枉駕・枉問のようにもいう。て人のためにすることを枉屈、敬語的に相手の行為 語、微子」に「道を枉げて人に事ふ」の語がある。 をまげて曲断することをまた枉撓という。身を屈し もとは木を枉曲する意で、枝を撓めるのを枉撓、 法

欧 うたう・はく

。 碑の〔三公山碑〕に「百姓歐歌」とあり、歐を謳歌を多く列して、これに対して謳吟して哲る形であり、を多く列して、これに対して謳吟して哲る形であり、を多く列して、これに対して謳吟して哲る形であり、この字では欠は區に対する行為を示す字であるから、この字では欠は區に対する行為を示す字であるから、 の字に用いている。 十九文の大半は欧声で、渓母の字にその音があるが、 会意 くなり」 区(區)と欠とに従う。〔説文〕ハ下に「吐 とし、区声とする。〔説文〕に區声とする

[殿] 15

tiş° 歐

祈りの成就することを責めて、これに対して殴 (欧)・謳の音がある。區は多くの祝禱の器を秘匿しを捶齪するなり」と訓し、区声とする。區に吹ぐ金竈 区(區)と殳とに従う。[説文]三下に「物会意 区(區)と殳とに従う。[説文]三下に「物 たところに列ねて、ひそかに祈る意であるが、その

寝廟に薦める礼がしるされている。櫻という字は字 庭園などに植樹された。 書では〔玉篇〕にはじめてみえ、「含桃なり」とす され、〔礼記、月令〕に、仲夏の月に天子が含桃を すらうめのことで、わが国には江戸初期に渡来し、 る。中国の詩文にみえる桜花・桜樹はすべてこのゆ 久良と訓している。桜桃は古くから果樹として珍重くらい。 [和名類繁抄] に佐わが国ではさくらの字とする。 [和名類繁抄] に佐き

南、を殿つ、、「冥氏」、「靈鼓を以てこれを殿つは、所、を殿つ、、「冥氏」、「衆は、四隅を撃ちて方良(罔氏」、「壙に入りて、犬を以て四隅を撃ちて方良(罔代にあっては呪的な意味を含むものであった。 「湯代 にあっては呪的な意味を含むものであった。 「湯代にあっては呪的な意味を含むものであった。 「湯代にあっては呪的な意味を含むものであった。 「湯代にあっては呪的な意味を含むものであった。」

秧 なえ・うえつけオウ(アウ)

もと支に従い、「師寰盤」に「士女牛羊を歐字し、吉

など、みな呪的な方法の遺存を示すものである。字は べしむ」、〔壺涿氏〕「炮土の鼓を以てこれを毆る」 〔庶氏〕 「凡そ蠱を曮るに、則ちこれに令しこれを此兩) を毆つ」、〔冥氏〕 「靈鼓を以てこれを毆つ」、

た欧と通用する。謳吟して詛祝を加えるからである。 金を学れり」とあって、歐孚とは俘獲をいう。字はま

秧田、植えつけを秧挿という。宋以後の詩人に、そものをいい、不苗のさかんに茂る意である。苗代をものをいい、不古の の風景を歌うものが多い。 は〔玉篇〕に禾苗とするのがよく、苗の状態にある 秧穣なるなり」とあるが、禾若声符は央。〔説文〕七上に「禾

殃。

わざわい・とがめオウ(アウ)

翁10【翁】10 くびげ・おきなオウ(ヲウ)

死するをいう。殃死はまた枉死であり、その死霊はまするをいう。殃殺・殃僇・殃戮はとがによってことを殃という。殃殺・殃稷・殃戮はとがによって

人の正面形。それによって死にいたる

声符は央。央は首枷を加えた

人に殃答をもたらすものとして恐れられた。〔説

如く、 公司(が、漢代には翁や嫗は通語であった。ととき、一般では、老を尊んで公また翁というとするととなった。 「頸毛なり」とあり、また鳥の頭毛をいう。〔山 会。 、黒文にして赤翁」とみえる。〔方言〕に、周、、黒文にして赤翁」とみえる。〔方言〕に、周、四山経〕に「天帝の山に鳥あり、其の狀鵠の世山経〕に、 とあり、また鳥の頭毛をいう。「山海海るが、瓮の声がある。〔説文〕四上に 形声 声符は公。公は見母の字であ

必ず餘殃あり」という。

桜10【櫻】21

さくら・ゆすらうめオウ(アウ)

旧字は櫻に作り、

とあり、果、 嬰声。 〔説

罰をいう字である。〔易、坤卦〕に「積不善の家に「凶なり」と改めているが、咎の訓がよい。咎も神 文〕四下に「殃は咎なり」とあり、〔段注〕に訓を

凰 おおとり (ワウ)

文新附〕

形声 声符は皇。鳳凰の凰はもと皇に作る。 0

> のであって、実事実景ではない。 に」というのは、祝頌詩として吉祥の語を連ねたも ことを歌うものであるが、「鳳皇鳴きぬ」かの高岡ている。〔詩、大雅、巻阿〕は山川の間に遊幸する ている。〔詩、大雅、巻阿〕 凡声であるので凡に従うが、 文〕にはなおその字がなく、皇を用いている。 鳳の字形に合せて、凰の字が作られた。〔爾雅〕〔説 凰は几の形だけを加え

雁 たか・ヨウ

Karkin Com

(応)・臀の字は確に従う。金文に「大命を確受す」としての鷹狩りによって神の応徴を求めるので、應 会意 鷹・應・膺はみなこの字より分岐したものである。 などの語があり、天命や神意にあたることをいう。 して養われる鷹をいい、鷹の初文。「うけひ狩り」 ところで祠所の意であるらしく、雁はそこに神鳥と 字の初文は广と隹とに従う。广は司の従う

はく・うたう

〔新序、雑事二〕に「鄭衞の聲を聽くに、嘔吟感傷」というのに近い。また謳に通じ、「獸は吐くなり」というのに近い。また謳に通じ、 とあり、嘔血・吐瀉の意に用いる。〔説文〕八下にとあり、嘔血・吐瀉の意に用いる。「釈名、釈疾病」に「傴するなり」などをする。〔説文〕に悪名、釈疾病〕に「傴するなり。である。〔説文〕に嘔がみえず、歌と同字とされて 謳・傴の声があり、嘔・謳はほとんど声義の同じ字 声符は區(区)。區に歐(欧)・殿(殴)・

5

は毛桜桃というもので、樹のゆすらうめをいう。 、また含桃・桜桃、わが国で がそり、またり」とあり、果 六上に「果なり」とあり、果 いわゆるさくらではないが、 秧 翁(翁) 凰 8

八六

謡をいう。「鄭衞の聲」とは、最も退廃的な歌す」とみえる。「鄭衞の聲」とは、最も退廃的な歌

横 15 【横】16 よこ・ほしいまま

伝】に「庠・序 横 塾に遊ぶ」はみな黌字の義。横は「後漢書、鮑是伝」に「乃ち横 含を修起す」、[儒林』とないう。横は古くは黌、学校)の意に用いる字で、とをいう。横は古くは黌、学校)の意に用いる字で、 は横恣・横行など、秩序に反することをいう。その 木を横ざまにすることで、すべて横にする、横たわ 合同する政策と、秦と六国とを東西に連合する政策 こしまという語がある。 甚だしいものを専横・横逆という。わが国にも、 ることをいう。また縦が従順であるのに対して、横 縦横家の説くところは、合縦連衡、南北の六国をに横にわたす形のものである。戦国期のいわゆる 木、また牛が車を輓くときに用いるくびきで、とも ゆる従横の字には、古くは衡を用いた。衡は牛の角 すかんの木、 しきりとしてわたす横木をいう。 に「闌る木なり」とあり、門などに施 形声 声符は黄(黄)。〔説文〕六上 いわ

奥 6 オウ (アウ)

す」とみえる。隈も神畏のところとされたのであろ 「爾雅、釈丘」に「厓内を隩と爲し、厓外を隈と爲 「就が、釈丘」に「厓内を隩と爲し、厓外を隈と爲 な山川のいりくんだ間には、神が住むとされた。 なが、 「説文」一四下に「水の隈厓なり」とあり、そのよう なが、 「とき、 「本が、釈丘」に「厓内を隩と爲し、厓外を隈と爲 をき、 「おが、一四下に「水の隈圧なり」とあり、そのよう ので、神を祀る最も奥深いところ。

(1) けっこう。
自は神の
は神の
降する
神梯の
象である。

16 おひる・かも

(現本、斉王紀、注〕に「鴨なり」という注記がある。 「魏志、斉王紀、注〕に「鴨なり」という注記がある。 「魏志、斉王紀、注〕に「鴨なり」という注記があり、あひるをいう。鴨脚はあひるの足。その中とあり、あびるをいう。鴨脚はあひるの足。その中とあり、までは字をかもに用いる。「万葉」には、助詞のかもにこの字を用いて表記することが多い。また「万葉」に、注〕に「鴨なり」という注記がある。

発 18 「公し」9 かめ (ヲウ)・ヨウ

18 うたう

三上に「齊の歌なり」とするが、「孟子、告子、下」 「改」・酸(殴)の声がある。〔説文〕 ・形声 声符は區(区)。區に監督

とう。いくらか抑揚をつけただけで謳吟する歌いかたう。いくらか抑揚をつけただけで謳吟する歌いかたた聖所に列してがることで、その祝禱の器を秘匿した聖所に列してがることで、その祝禱の器を秘匿した聖所に列してがることで、その祝禱の器を秘匿した聖がは、「今西善く謳ひ、齊右善く歌ふ」とみえ、「楚辞、に「今西善く謳ひ、齊右善く歌ふ」とみえ、「楚辞、に「今西善く謳ひ、齊右善く歌ふ」とみえ、「楚辞、に「今西善く記し、

第 21 うぐいす

だはその異名で、古くはその名でみえている。 に鳥の羽の美しさをいうとする。〔詩、小雅、桑扈〕「鶯たる羽あり」とは、その意である。小雅、桑扈〕「鶯たる羽あり」とは、その意である。〔詩、小雅、桑扈〕「鶯たる羽あり」とは、その意である。〔詩、小雅、桑扈〕「鶯たる羽の美しさをいうとする。〔詩、小雅、桑屋)

22 かもめ

(欧)・謳の声がある。[説文] 四上では偏旁を互易している。[列子、黄帝] に字を握には偏旁を互易している。[列子、黄帝] に字を握にて接すれば至り遊び、取り害する心があれば空に舞て接すれば至り遊び、取り害する心があれば空に舞でした。 という話がみえる。鷗の悠遊する。 というに、退隠して自適することを鷗波という。 というに、退隠して自適することを鷗波という。

たか たか・ヨウ

を放舞し、勝利を導いたことをいうものであろう。 を放舞し、勝利を導いたことをいうものであろう。 を放揮し、勝利を導いたことをいうものであろう。 を放射主との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のが王との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のが王との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のが王との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のが王との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のが王との戦いを述べ、「維師倫父(太公望呂尚)のであるが、「養婦人」と歌う。この「鷹時推鷹場」 彼の武王を涼く」と歌う。この「鷹島」という語は、なお定解のないものであるが、「養婦人」という語は、なお定解のないものであるが、「大きない」というものであるう。

オク

屋のオク(ヨク)

壓壓률

温として玉の如し その板屋に在りて 我が心曲を剥す」とは、その人を追思哀悼する 含・屋室の意はその転義である。屋は宮・室と同じく、もと神聖の居るところであった。図は前漢墓出土の銅屋。た。図は前漢墓出土の銅屋。を示すものであろう。



奥12 (奥)13 おく・ふかい アウン

使 15 オク・ヨク かえる祀所とされた。のち深奥・秘奥の意となる。

形声 声符は意。〔説文〕八上に「安んずるなり」とあり、「左伝〕昭二十一年「心信きときは則ち樂とあり、「左伝〕昭二十一年「心信きときは則ち樂を前字の本義であろう。「論語、「百神を憶寧す」、「呉語」「音が安が字の本義であろう。「論語、先進」「信すれば則ち屢・中る」、また「荀子、賦篇」に「請ふ、これを測意せよ」とあって、意と憶とを通用する。憶・を測意せよ」とあって、意と憶とを通用する。憶・を測意せよ」とあって、意と憶とを通用する。憶・を測意せよ」とあって、意と憶とを通用する。憶・を測意でよ」とあって、意と憶とを通用する。憶・を測意では「萬意年」と意の字を用いる。その数は十万をいうときもあり、万万をいうときもあるが、古くは十進法であった。

16 おもう

作る。〔方言〕や〔広雅、釈詁〕には、意をみな臆である。〔説文〕一〇下に字を意に作り、「満つる意がある。〔説文〕一〇下に字を意に作り、「満つるなり」とし、「一に曰く、十萬を意といふ」と億の意に解する。〔論語、先進〕に「億すれば則ち屡の意に解する。〔論語、先進〕に「億すれば則ち屡の意に解する。意には音・声符は意。意には音・声音は表します。

屋

言の下部は祝禱の器である日であるが、そ

会意

は追憶し、それによって感慨を催す意である。 に「分別以來、毎に慨憶を増す」の語がある。 慨憶 れを憶識す」、梁の簡文帝の「湘東王に答ふる書」 意に用いる。「後漢書、董祀の妻の伝」に「能くこ なお一定していない。憶はのち記憶・追憶・憶念のに作り、これらの字は通用していて、その慣用義が

臆" [肊]5 おもう

である。また気の鬱抑することをもいう。臆病、臆 測の意で、賈誼の〔版鳥の賦〕に「請ふ、對ふるすなわち中臆・臆中のことであろう。臆は臆見・臆 || 配を正字として「胸の骨なり」といい、また或る体 面のような使いかたは、わが国独自のものである。 に臆を以てせん」というのは、主観というほどの意 形声 の意がある。〔説文〕四下に 声符は意。意に推測

 $Z_{\frac{1}{2}}$ おとる・まがる・

(8)

乙が五行において木にあたり、方角において南にあかがまるように生え出す形とするが、それは十干の 〔説文〕一四下に、春のはじめに草木の芽が

> という。 李孝定の水流説などもあるが、みなその字形を説きの他の研究者には、楊樹達の魚鰊、呉其昌の刀形、の性のは、それは、『ままの刀形、のといるといるが、いずれもその象とはみえない。そ尾を丙とするが、いずれもその象とはみえない。そ 郭沫若の〔釈干支〕に、〔爾雅、釈魚〕に「魚腸、に附会した説で、字の初形にあたるものではない。 であろう。干支は殷の卜辞にすでに日を干支をもっ乙はヘラの形で、おそらく獣骨や魚骨を用いたもの 亂字の条一四下に「乙はこれを治むるなり」という。 て〔爾雅〕によって説き、魚枕(頭の骨)を丁、魚 これを乙と謂ふ」とあるのによって、乙丙丁をすべ の意とみてよい。 組み合せであることが考えられ、甲乙は亀甲・獣骨 たいところがある。ただ十干は、甲乙、丙丁などの てしるしているが、それぞれの字義に統貫を求めが ので、「おさめる」とよむべき字である。〔説文〕の る」意。亂はそれに乙を加えてそのもつれを解く 下より手を加えて解こうとしている形で、「みだれ は亂(乱)である。。働は糸かせの糸がもつれて、上 えたものとしがたい。乙の形を最も明確に含むもの たり、音において軋、すなわちきしる意であること 十干の順序によって、 優劣を甲乙

> > るとされ、その「音づれ」を音という。意も音に従反応があるときには、「音づれ」としての暗示があ

受けるという自己詛盟が行なわれるが、その形式を

また誓約するときに、もし偽りがあるときは神罰を

文字化したものである。このようにして祈り、

神の

言は辛と祝禱の器であるコヒとに従う。神に告げ祈り、*

して人の声である言に従うのか、矛盾した説である。 一を含む」という。八音のような器楽の音が、どう 角徴羽は聲なり。絲竹金石匏土革木は音なり」と、これを音といふ」と声音をもって解し、また「宮商

五声八音の別を説く。字形については「言に從ひ、

〔説文〕三上に「聲なり。心に生じ、

ら、それから変化したものとして、

会意とする。 外に節ある、

す。指事的な字であるが、言がすでに会意であるか こに一を加えて、器中に自鳴の音を発することを示

包10

めぐみ・いつくしむオン

ず」など、〔左伝〕にもその例がみえている。 よって神意を卜することは、たとえば「南風競は 諳はみなその系列の字である。風の音、また楽音に

音 9 おと・ね

W \(\frac{1}{2}\)

0

鶻〕「恩しみ勤めり」の〔伝〕に「愛なり」とあり。に因る」意とするのはよくない。〔詩、豳風、鴟に因る」をとするのはよくない。「詩、豳風、鴟り」とあり、因声とする。〔段注〕などに因を「心り」とあり、因声とする。〔段注〕などに因を「心

に深くこもる意がある。〔説文〕「〇下に「惠むな

の象形で、常に用いるものであり、

ú

声符は因。因はむしろ。茵席

は、[晋書、顧愷之伝]「行人安穏、布帆・恙無し」であるとするが、雪の用義例はない。安穏という語であるとするが、雪の用義例はない。安穏という語 からいえば、もと農耕に関する字で、安穏な収穫を のように、晋人の書簡にみえる。字が禾に従うこと 健・穏妥の意に用いる。〔段注〕に安穏の字には雪り」というが、その用義例はなく、すべて平穏・穏り」というが、 文新附」七上に「穀を踩んで聚むるな いま安穏のように用いるのは俗用 旧字は穩に作り、等声。〔説 下 帰するのである。真の上部もまた七の形。化去する に從ふ。須髪の白に變るを言ふなり」とするが、七を用いる。〔説文〕の老字条八上に「人毛の七する繁簡の字とみてよい。のちその意にはすべて化の字 ことが、存在するものの真の姿である。 は死去を意味する字。万有悉く化して、ついに無に るなり」とあり、化と同声。七・化と一系をなし、

を用いるべきで、

3 した・ひくい・くだるカ・ゲ

_ = F

ででで、上は掌、下は西覆の意。 西はものをとするが、卜文・金文の字形は掌上・掌下にものあとするが、卜文・金文の字形は掌上・掌下にものあ 下昏字条に「氐の省に從ふ。氐なるものは下なり」 指事 すべて対称的な関係のものを意味する。 直線の上に向かうものを上、下方に向かうものを下 とみえ、本条と互訓。篆文の字形は、一横線より、 一上に「底なり」とは下方の意であろうが、日部七 掌を伏せた、その下方を指示する。〔説文〕

ものをかぞえるご・こ

ころをいう。〔書、秦誓〕の「一介の臣」を、〔礼記、 大学〕に引いて「一个の臣」に作り、〔段注〕 令〕に「孟春、天子靑陽の左介に居り、季春、右个 「唐本説文」 fi 上に箇の別体の字とする。 [礼記、月象形 | 支柱のあるひさしの形。 [六書故] に引く に居る」とあり、明堂四面の支柱のあるひさしのと €2 —

意である。 で、〔広雅、釈詁〕に「隱むなり」というのもその恩愛・恩恵の意。心に充ちて、外にあらわれるもの

A 10 あたためる

仁の語もみえるが、すべて引伸の義である。温の初して温暖・温和・温柔の意を生じ、[景林] には温溫(温)・醞・縕の字は盥に従う。温めることより 文とみてよい。 中の温熱の状態を示す。すべて中に蘊積し、それになり」という〔官溥説〕を引いているが、囚形は器 「仁なり」と訓し、「皿に從ふ。以て囚に食はしむる熱気がみちている形。〔説文〕五上に よって醞醸の状態にあることをいう字であるから、 食器の中のものが温められて

温 あたたか・おだやかオン(ヲン)

人をしのぶ句がある。[論語、為政] に「故きを溫秦風、小戎〕に「溫としてそれ玉の如し」と、故べ、 とないら という。 釈詁〕に「煗かなり」、〔玉篇〕に「漸く熱きなり」 (温)の初文。〔説文〕二上に水名とするが、〔広雅、器中のものが温められている形で、温 ねて新しきを知る」とは温習の意である。 *****温暖の意より温和・温厚の意となり、〔詩、 形声 旧字は溫に作り、盥声。 盤は

穏 (穩)19 おだやか

力

穏に関する意味があるのかも知れない。

成語〕には、刑死した女の験死役をいう。生死の安

はだ。 婆は産婆、内庭につかえるものをいい、また〔六部。 学である。その祈る心情を穏というのであろう。穏 工を上下の手でもち、神を「際して齋く」意をもつ

祈る儀礼を示す字であったと思われる。雪は呪具の

 $\frac{1}{2}$ かわるのつ

とである。 の肉が消去する意であるから、化とは骨と化するこ る。〔孟子、公孫・丑、下〕「化するときに比ぶまで、 八上に「變るなり。到(倒)人に從ふ」と変化の意 土をして膚に親づくこと無からしめん」とは、死者 とする。たんなる顚倒の意ではなく、化去の義であ 鬼部九上にも、魄の字があって「鬼變す 象形 (化)の初文。人の死をいう。〔説文〕 人を倒しまにした形で、化

オン 囧 温(温) 穏[穏] 力 Ł 下

化 かわる・しぬ・したがうカ(クヮ)・ケ・ゲ

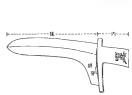
意とするが、死去の意。とがその初文。化はその複人に從ふ。七は亦聲なり」とし、人を教えて化する〔説文〕ハ上に「教行はるるなり」とし、「七に從ひ、 化育などの義が生れる。 兵災に対する祈りをいう。化去の義よりして変化・ 数形にすぎない。〔周礼、大祝〕に「化祝」があり、意とするが、死去の意。どがその初文。化はその複 会意 人と七とに従い、死人の倒錯している形。

ほカ (クヮ)

ぢ ¥ φ

は、呪飾としての綴をつけたものが多く、 文の形に象る。ト文の字形や金文の図象に 戈は武器

> 関している。 禱の器である日を加えた形でもあった。 戈の上部に祝 を聖器として用いる儀礼に であるとともに、また聖器

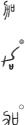


火 ひカ(クヮ)

从

燬、 の音であった。 火 〔詩、豳風、七月〕「七月流火 九月授衣」「七月流 いま潮州の人は、なお火をキの音でよむという。 汝墳」「王室燬くが如し」の〔釈文〕に、 字の条にも「火なり」と訓している。〔詩、 くるなり」というのは、燬の音と合せたもので、梶象形 火の燃える形に象る。〔説文〕一〇上に「惚ま 八月崔葦」の火・衣・葦は押韻、占くは火はそ 呉の人は梶というとする。徐灝の〔段注箋〕に、 斉の人は 周南、

くわえる



るなりし 部三上の鸞字条に「加なり」、誣字条にも「加なり」 ための儀礼をいう。〔説文〕一三下に「語、相増加す の器の形でD、加はもと耜を清めて生産力を高める 会意 力と口とに従う。 とあり、人を中傷し誣妄する意とする。言 力は耜の象形。口は祝禱*

子白に儀を加ふ」とは加礼の意で、その威儀をさかして、加礼の意となる。〔號季子白盤〕に「王孔だして、加礼の意となる。〔號季子白盤〕に「王孔だ加はもと農耕儀礼であるが、これを礼の全体に及ぼ が、のちには加殃・加髪・加法など、他より加えら性のあることが知られる。加は本来吉嘉の礼である 義となり、神を祀るとき、その祝詞で実際の供薦よ を追うことを哿という。耜に丹青を加えて祓うこと*** のはじめに、秋の虫害を避けるため、耜に修祓を加 誤ったものである。加は耜を祓い清める礼で、農耕字に含まれる口を口耳の形と解して、字形の理解を す」の加、すなわち中傷の意とするが、それは加の とは、我もまたこれを人に加ふること無からんと欲 長」「我、人のこれを我に加ふることを欲せざるこ のまま生子儀礼に用いられていて、両者の間に関連 女子のときには不嘉という。加が嘉の初文であるこ ならざるか、これ女なるか」のようにいう。加は嘉 神に対して犠牲玉帛の数を偽ることがない意である。 伝〕荘十年「犠牲玉帛、敢て加へざるなり」とは、りも多く供えたようにいうことをも加という。〔左 んにすることをいう。加礼の意より、加上・累加の を呪器として加えることがあり、それは實である。 もあり、これを靜(静)という。こうして修潔とな うことがあり、その礼を嘉という。また呵責して蠱 えるのが例であった。そのとき鼓声をもって蠱を祓 とあって、〔説文〕は一貫して加を〔論語、公冶 とが知られるとともに、農耕儀礼に用いる字が、そ ト辞に分娩をトするものがあって、「加なるか」「加 ったものを「靜嘉」といった。また加の儀礼に、 貝

+5°

〔左伝〕 加えて、[書、大禹謨]「畏る可きは民に非ずや」、も知る可きなり」という。また当為としての意味をも知る可 測しうることであるから、「論語、為政」「百世と雖 僖三十年「武は畏る可きなり」のように用

<u>瓜</u> 5 **カ** (クヮ)

る。

ij

j T

a)

月 5

よし。ゆるす

という

れるものをもいう。

また人を凌ぎ踰えることを加陵

BI

果巖(瓜)・壺・鼓など、みな声義に通ずるところから、低いいでは、からになるを無といひ、地に在るを蔵といふ」とみえる。 あり、 は、土鼓をもって虫害を祓うことを掌る。 があり、大腹の形のものをいう。〔周礼、壺涿氏〕 象形 **呱もまた象形である。また艸部一下に「木に** 瓜の形。〔説文〕セドに「呱なり。象形」と

禾 いね・ぐんもんカ (クヮ)

背綮をいう字であるから、

に「賃(肯)ふなり」というのは、[爾雅、釈言] 意がこれを聴くことをまた可という。[説文]五上 祈願の成就することをせまる意で、呵の初文。神

...「肎は可なり」とあって双声の訓であるが、肎は「「屌

祝禱の器の形で、祝詞をいう。神に祝詞をささげて

ロと木の柄の象である丁とに従う。ロはD

また斧柯・柯枝をもってその器に呵責を加え、

7 故 0

大司馬〕に「旌を以て左右和の門と爲す」とある和行なう意で、未稷の禾に従う字ではない。〔周礼、行なう意で、未稷の禾に従う字ではない。〔周礼、義をもって解するものであるが、和は軍門で和議を 「嘉穀なり。二月始めて生じ、八月にして孰す。時から の中を得たり。故にこれを禾と謂ふ」とは、中和の 禾穂が垂れた形。軍門の字は標木に袖木をつけた形象形 いねの象形。また軍門の象形。いねの字は 字にして別義のある字である。〔説文〕七上に もとの形象は異なるが、のち同形の字とされ、

> 稲魂を被って舞う男女 の形を加えるものは、 ころを示すものである(挿図)。 た禾をたてている形があり、いずれも軍営のあると の象である。金文に建物の上に両禾を加えた形、ま 従来はみな禾穀に従う字とされているが、これらは され、休・和・ いずれも軍門の禾に従う字。両禾を並べるのは軍門 は、軍門の禾を 麻・歴(歴)・暦(暦)などの字も、**・**。この両系の字は早くから混同 この両系の字は早くから混同 年・委など禾下に人

う字である。 の姿で、禾穀の象に従

给水

仮 (假)11 かり・ケ かす・たとい

礼、少年饋食礼」「爾大筮の常あるに假る」のよう礼、少年饋食礼」「爾灰龜の常あるに假る」、「儀」という。となり、「大きない」となった。という。となり、神事に用いた。仮面を著けて真に代るものであり、神事に用いた。仮面を著けて真に代るものであり、神事に用いた。仮面を著けて真に代るものであ のを通じてそれをなすことである。 に、神霊の力を借る意に用いる。仮借とは、 瑕玉、すなわち璞玉で、これを撲って鴉冶琢磨を加とをいう。假を用いるのは声の仮借。假の初文段は える。假とはおそらくもと仮面をいう字であろう。 まのテキストには字を格に作り、格とは神の各るこ 卜文や金文に仮面を用いたらしい図象的なものがあ して、〔書、尭典〕「上下に假る」の文を引く。に非ざるなり」と訓し、「一に曰く、至るなり」 形声 假(仮)の初文。〔説文〕ハ上に「眞 旧字は假に作り、叚声。叚は 至るなり」と 他のも V

であろう。神意の許すところは可能であり、

野に適き、可否を謀らしむ」とは、神意を求める意が、。

た。「神の我に許す」ことを許可という。それより ているが、これが古代における祈りのしかたであっ

乃ち璧と珪とを屛けん」という畏迫的な言辞を用い

「爾の我に許さば、我はそれ璧と珪とを以て、

金縢」に、周公が武王の疾に代ることを祈るとき、たい。 こうじょ という にきいう にきいい ずれも祝禱して祈る声をいう にきいてい いずれも祝禱して祈る声をいう にきい また祝禱して祈るときの声を訶という。訶は歌の初 もって通ずる字である。誰何・譴呵も可の引伸義。肯綮をいう字であるから、もと字義が異なり、声を

て爾の命を俟たん。爾の我に許さざるときは、

我は 歸り

6 けずるっつ

〔列子、湯問〕に「楚の南に炎人の國あり。その親に象る」という。下部は肩・胸の残骨であろう。 があり、犠牲の肉を剔る意であろう。凌遅処死の刑を用いるとき、「犬を冎せんか」のようにいうことた髑髏を作る法であったかも知れない。卜辞に、牲 とです 残骨を埋める複葬の俗があった。 肉を剔るのは、ま 戚死するときは、その肉を門りてこれを棄つ。然る は清代にもなお行なわれたが、それは人の四肢を断 のち、その骨を埋む」とあって、屍体を風化させ、 ち、耳目をそぐ残酷なものであった。 、「人の肉を剔りて、その骨を置くなり。頭隆骨 形。 象形 肉を剔ることをいう。〔説文〕四人の頭隆骨を主とする残骨の

おか おう

右に垂れるものは霧であって、冂ではない。 意の下と、声義が通ずる。〔説文〕七下に「覆ふな 门に從ふ。 上下 象形 の左右は垂れて器口を覆う。 よりこれを覆ふ」というが、左 器口にかみ合せる栓の形。そ

伽 ゆたかに・とぎ

「類聚名義抄」に「ゆたかに」などの訓がある。多ることをなった。 あることをなった。 形声 声符は加。梵語五十字母の一に用いる。

をいう。 の名で香、伽藍は精舎の訳語である。国語では「と ぎ」、夜のつれづれを慰め、病人の介抱をすること く仏訳語に用い、伽陀は偈、伽那は象、伽羅は香木 になう・なに お伽話、お伽草子の名はそこから起った。

何

形声 12 ₹* 牙柯

ずの声義を承ける。可には呵責・誰何の義があり、で、荷戈の字とは字源が異なり、 声符は可。ト文の字形は戈を荷なう形に作 の義。「何ぞ」の義は可に従う字

吡 うごく カ (クヮ)

それより疑問詞となった。

业 偽とも通ずる字で、吪がその原義に近い字である。**ん」の〔伝〕に「動くなり」とみえる。**、靍)・ 〔詩、至風、兔爰〕に「倘くは寐ねて叱くこと無らし、その呪霊にはたらきかける意の字であろう。 屍をいう字であるから、吪はその死霊に対して祝禱 に「動くなり」とみえる。化は人の死 形声 声符は化 (化)。〔説文〕ニ上

化7 おとり ・ユウ (イウ)

「雉蝶、江の賦」の 鳥を誘い取る鳥媒の法をいう。〔説文〕云下に「譯あり、囮とはおとりに用いる鳥を籠の中に入れて、 遊の音でよみ、また遊の字を用いる。潘岳の「射雉」で縁に従うが、もと囮とは別の字である。その字はて縁に従うが、もと囮とは別の字である。その字は ろう。〔説文〕に重文として録する字は、化にかえ 義に用いる例はなく、これはおそらく字の誤りであ なり」とし、鳥媒の義とする。しかし「譯」をその 本字は〔説文〕重文の字である。囮をその字の音で よむのは、正しくない。 江淮の閒、これを游といふ」とあり、その 、 吾が游の晏起なるを恐る」の游は、注に すなわち他を欺く意が 声符は化 (化)。化

花、【花】。【華」。

荒 等 という。花は華を形声化した略字。漢魏以前にはそ形で、拝は「抜く」とよみ、その華を摘む姿勢を拝 の字がなく、北魏の太武帝の始光二年(四二五年)、 形である。 拝(拝)の初形は、それを手で摘みとる 六下には「華は榮なり」と訓する。華麗の意にはな 華と謂ひ、艸にはこれを榮と謂ふ」とし、〔説文〕 新字干余を作ったことがあり、そのときのものであ お華を用い、花を用いることはない。 ろうと思われる。〔爾雅、釈草〕に「木にはこれを 形声 字の華は、その下部が華の象 声符は化 (化)。正

佳 よい・めでたいカ・カイ

大招〕に規・施・卑・移と韻しており、佳は支韻。のは、不祥の器なり」と、物に移していう。〔楚辞、 古くは支と歌を合韻して用いた。 をさす。のち〔老子〕第三十一章「それ佳兵なるも 歌、湘夫人」「佳と期して夕に張る」の佳は、女神ず」とあり、もと人の佳蓍なるをいう。〔楚辞、九ず」とあり、もと人の佳蓍なるをいう。〔楚辞、九 に「佳人、體を同じうせず。美人、面を同じうせ なり」と訓する。「淮南子、 声符は主。「説文」ハ上に「善 説林訓

8 (價)15 あカ た い

品評の語にも用いる。 顧みると、「一旦にして馬價十倍す」とみえる。 ち物の価値より、声価・評価のように、 を承ける。〔戦国策、燕策〕に、伯楽が一たび馬を 価値をいう。賈に賣(売)買の義があり、その声義 文新附〕ハ上に「物の直なり」とあり、 旧字は價に作り、賈声。「説 人の評判や 0

卦 8 うらかた・うらなうカ (クヮ)・カイ (クヮ)・カイ (クヮ)・カイ (クヮイ)・ケ

宇饋食礼〕によると、卦を木に記したという。、兆を筮する法がしるされている。また〔儀礼、兆を筮する法がしるされている。また〔儀礼、 類であろう。卜には兆、筮には卦という。六爻によ を地に画し、終って木に刻するので、圭とは土版の って卜する古法は、殷周の際にすでに試みられてい

たようである。

るときの擬声語である。 る。もと神事についていう語であった。呵筆は息を た。可の声義を承けて、呵責・呵禁・呵護の意とな その祈禱・呵責の声が、歌の起原をなすものであっ に「責むるなり、訶と同じ」という。訶は歌の初文。責する字で、呵の初文。〔説文〕にみえず、〔玉篇〕 かけてあたため、筆を走らせること、呵々は大笑す 呵 せめる・しかる 声符は可。可は祝禱の器に対してこれを呵

くるぶしをうつカ(クヮ)

Ty 題 (A)

に「規の弋(秘、柄のあるもの)」という語があり、厳されることが多かった。〔県改設〕の賜与のうちものであろう。祭儀は、聖器である武器によって荘ものであろう。祭儀は、聖器である武器によって荘 会意 県改は婦人であるから、これも祭儀用のものであろ ふ」とあり、麦(人名)は作冊、職の祭祀官であるた周初の〔麦輳〕に「者〔諸〕、城臣二百家の劑を賜す」とあって、その祭儀を示す字であるらしい。ます」とあって、その祭儀を示す字であるらしい。ま 金文にみえ、殷器の〔切其卣〕に「旣に上帝に親行為のために作られた字とは思われない。その字は に「踝を撃つなり」とするが、そのような特定のあるから、字は戈を奉ずる意である。〔説文〕三下 から、「諸娥臣」とは、その祭祀儀礼に必要とする 戈と乳とに従う。乳はものを奉持する形でかり。

> ような古字や古訓を存していることがある。 を録するのみであるが、〔説文〕には、ときにこの う。夙は文献に全くみえず、ただ〔説文〕にその字

果 このみ・はたす・はてカ(クヮ)・カン(クヮン)

 \mathbb{R}

の實三つ」や「衛風、木瓜」「我に投ずるに木瓜を寒むことを示すだけの字ではなく、もとそのような寒むことを示すだけの字ではなく、もとそのような寒むことを示すだけの字ではなく、もとそのような寒むことを示すだけの字ではなく、もとそのようなまなことを示すだけの字ではなく、もとそのようないあるとされ、これを衣中に加える褻は、ただ果をがあるとされ、これを衣中に加える褻は、ただ果を ことを果爾・果信という。〔論語、雍也〕「由〔子いう。結果は結実、それより予期された結果を得る なり。 の用法である。 より、その結果を「果て」という。「果て」 遊〕に「腹なほ果然たり」とみえる。また果敢の意。かな様から、満腹の状や裸身をいう。[荘子、逍遥かな様から、満腹の状や裸身をいう。[荘子、逍遥 意をもつ民俗である。果実の充実した形や、 果の俗を歌うもので、投果は魂振りとともに求愛の 以てす。これに報ずるに瓊瑤を以てす」などは、投 象形 木に從ひ、果の形の木の上に在るに象る」 木上に果実のある形。〔説文〕 ボ上に「木實 は国語

河 かわ・こうが

阿介的的城

形声 声符は可。卜文の字形は可に従わず、ただ木の桐の状である丁を、声符として用いる。卜文にまた党を荷なう象に作るものがあり、また金文にはまた党を荷なう象に作るものがあり、また金文にはまた党を荷なう象に作るものもあるが、河神の祭祀にみえる。字は、みな柯枝の象に従う形のもので、それが黄河をぶす字であろう。卜辞に高祖河の名がみえる。陳響に外ならないとする。戸辞祀を受けている。「辛未貞ふ。年を河にもとむるに、三字を変き、三牛を沈め、年を河にもとむるに、三字を変き、三牛を沈め、年を直さんか」「辛未貞ふ。年を高祖河にもとむるに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年穀を祈るに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年穀を祈るに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年穀を祈るに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年穀を祈るに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年穀を祈るに、辛巳に彰し、寛せんか」のように、年数の子玉は、夢にあらわれた河神の求めをくみえ、楚の子玉は、夢にあらわれた河神の求めをくみえ、楚の子玉は、夢にあらわれた河神の求めをくみえ、楚の子玉は、夢にあらわれた河神の求めをくみえ、楚の子玉は、夢にあらわれた河神の求めをした。

段 かか

月月月 明日

Ψ

べきものは段、玉塊をなすものが段であろうと思わて、もと暇玉・璞玉の意であろう。鉱物質の鍛冶すで、もと明玉・璞玉の意であろう。鉱物質の鍛冶す

のたに玉をそえており、関の繁文とみられる。これでなった、というの下に玉をそえており、関の繁文とみられる。これを琢冶して真玉を得るところから、真関の字となり、それで仮面を假(仮)という。その字には古くからそれで仮面を假(仮)という。その字には古くからを琢冶して真玉を得るところから、真関の字となり、を琢冶して真玉を得るところから、真関の字となり、を琢冶して真玉を得るところから、真関の字となり、とれで仮面を假(仮)という。その字には古くからを琢光視福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意であろう。春秋期の〔曾伯簠〕に「設な、祝福の意である。しかしこれらはいずれも仮情義で、字は、まなり、関いというのが、原義に近い。

田 g か(クヮ)

周之。 魯

会意 門と口とに従う。門は上体の残骨、口は祝会意 門と口とに従う。門は上体の残骨、口は祝会意の習。その残骨に祈り、死霊の呪能を駆使しなり」と口禍をいう字とするが、字は屍骨に祈ってなり」と口禍をいう字とするが、字は屍骨に祈ってなり」と口禍をいう字とするが、字は屍骨に祈り、死霊の呪能を駆使しなり、とい礼をがする。門は上体の残骨、口は祝会意 門と口とに従う。門は上体の残骨、口は祝会意

好の かへくしい・コ

形声 声符は夸。〔説文〕にこの字を収めないが、

え、もと楚巫の用いた語であろう。 (楚辞、九歌、礼魂)に「姱女、信へて容與す」にみた〔東君〕には「紛として獨り離れてこの姱節あり」と、自らの美行を誇示する。姱は多く〔楚辞〕には「紛として獨り離れてこの姱節ある。 ****

かく 9 たな・けた・かける

とをいう。 とをいう。 来空・架虚とは事実のないそらご を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るで、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成 を作るや、冬至にこれを架し、春に至りて乃ち成

枷。からさお・くびかせ

柯 9 えだ・え

柯枝の形を含んでいる。[説文] ホーに「斧の柄ない。をもって祝禱を呵するものであるから、形声 声符は可。可は柯枝(えだ)

なることをいう。柯枝が本義である。は、斧で柯を伐るのに、その斧の柄の長さが準則とは、斧で柯を伐るのに、その斧の柄の長さが準則とは、斧で柯を伐り柯を伐る「その則遠からず」とり」とみえ、柯枝をもって柄とする。〔詩、豳風、り」とみえ、柯枝をもって柄とする。〔詩、豳風、

助り かみかざり

科 9 しな・おきて

会意 水と斗とに従う。斗は量器。 ・程るなり」、また次条の程には「品なり」とあり、 「程るなり」、また次条の程には「品なり」とあり、 行なう制度である。また窠と同声で、穴をいう。 行なう制度である。また窠と同声で、穴をいう。 でエ子、尽心、下」に、水が流れるとき「科に盈たでれば行かず」とあり、徳行のありかたにたとえている。

可 9 からい・きびしい

影影

力珈科苛迦

哥

哿

夏(頭)

形声 声符は可。〔説文〕一下に「小艸なり」とある。小草叢維の義より、煩なり、擾るるなり、また虐なり、暴なりの訓義が生ずる。「局急、『美元」に「奇察」、「世婦」に「苛罰」、「詩序〕に「刑政の苛」などの語がある。「礼記、檀弓、下〕に、虎害に苦などの語がある。「礼記、檀弓、下〕に、虎害に苦などの語がある。「礼記、檀弓、下〕に、虎害に苦などの語がある。「礼記、檀弓、下〕に、虎害に苦などの語がある。「礼記、檀弓、下〕に、水野の地を離れないことを聞いて、孔子が弟子たちに「苛政は虎よりも猛し」といった話を載せている。

迎9 さえぎる

哥 10 うた

は、 に「詩は志を言ひ、歌は言を永うす」とあり、足利。 の重文としてその字をあげている。「書、舜典」。 ので従ふ。古文以て謌字と爲す」とし、欠部八下の でに従ふ。古文以て謌字と爲す」とし、欠部八下の でに従ふ。古文以て謌字と爲す」とし、欠部八下の が、歌に作る。「説文」五上に「聲なり。二 でに従ふ。古文以て謌字と爲す」とし、欠部八下の成 が、こ

本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世南の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世常の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世常の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世常の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世常の〔孔子廟堂碑〕など、本には歌を哥に作る。虞世常の〔五〕

部 10 よか

をす」を引く、「等は嘉なり」としている。「雨無正」の句の注には、「等は嘉なり」としている。「なり」のもうに哀と対文に用いる。加は嘉の初文であるからその意があり、「左伝」 恒八年に引く「なり」のように哀と対文に用いる。加は嘉の初文であるからその意があり、「左伝」 恒八年に引っなる人」のように哀と対文に用いる。加は嘉の初文であるからその意があり、「若は加。 [説文] エ上に「可針の一般的である。

夏10 「頂」はなつ・中国の人・国名

學 金 夏沙沙

とよばれる舞楽があり、「周礼、鐘師」に「凡そ樂家の遺象を存するものとみてよい。古く九夏・三夏に変の字形は「秦公設」にみえるものと同じく、秦にない。東はは兩手、欠は兩足なり」として古文一字を録する。東にない。 後容を整えて舞う人の形。〔説文〕五下に象形 (儀容を整えて舞う人の形。〔説文〕五下に

「叔夷鐘」に成唐(湯)が天命を受けて、碩祀を伐であり、その足を前にあげて舞う形は碩。斉のであり、その足を前にあげて舞う形は碩。斉の であり、のちその地に周・秦が興った。秦が自らを北地区の彩陶文化圏の古王朝として伝承されるもの 「秦公設」に「緑(蠻)夏を鯱事す(おさめる)」のすものであるというので、やがてその自称となった。 「夏屋廣大」などの大の義は、夏の舞容からの引伸 た〔詩、秦風、権興〕「夏屋渠々」、〔楚辞、大招〕 疋・小疋のようにしるすことがある。夏を四季の名 であり、その足を前にあげて舞う形は頭。斉のであり、その足を前にあげて舞う形は頭。紫夏と称するのはそのゆえである。夏は舞客を示す字 中華の義とするのは、その舞楽こそ文雅・文明を示 の義であろう。 に用いることは春秋期の金文にみえ、仮借の義。 とである。 ように、蛮に対して夏を用いる。夏王朝は、もと西 げている。夏はその舞容を示す字形である。これを 事には鐘鼓を以て九夏を奏す」とその楽章の名をあ ったことがみえる。「頙祀」というのは、夏祀のこ 小雅は、頭の省文である疋を用いて、大3。頭は雅と通用する字であるから、〔詩〕

家10 いカ・ケ

(3)° 今多

形は、明らかに犬牲に従うている。〔説文〕セドに家の襲基のために犬を犠牲とした。ト文・金文の字 †と豕とに従う。古くは犬牲に従う字で、

> のが古義であった。屋は「殯」のための板屋、室は太「上甲の家」とあるように、先王の祀所を家というている。いずれも神霊を祀るところで、家も卜辞にている。いずれも神霊を祀るところで、家も卜辞に 家族・家系・家格・家名など、氏族の単位を家をも 室・玄室で、 は、同じく犬牲を用いる。「塚)や墜(地)と似牲を埋めて奠基とする建物」の意である。その構造 とより、〔魏石経〕の字も犬の形に従うており、「犬 この字は一大疑案たり」というが、卜文・金文はも 字を求めたものにすぎない。〔段注〕に「按ずるに、 説は、家を形声の字とするために、強いて声の近い っていう。 「居なり。宀に從ひ、豭の省聲」という。この省声 みな祀所をいう字である。のち家屋・

盉 あじをととのえるうつわカ (クヮ)

濫 T A

る。禾は秬鬯を上におく形に作 会意 形は禾、また禾を手にもつ形、 の器ではなく、響酒を作る礼器である。金文の字るものなり。皿に從ひ、禾聲」とするが、五羹和味 未と皿とに従う。

〔説文〕

五上に「味を調ふ あるいは禾を尊や鼎

く、殊に根津美術は巨製大器が多 玄酒と和する器で ある。殷器の盉に 示し、皿はそれを



荷 10 館に蔵する三器の盉は、最も雄偉の作である。

灣

荷ふ」とみえる。「林を以て藤(竹籠)を原義で、「論語、微子」に「杖を以て藤(竹籠)を負う荷担の形のものとがある。荷は荷担の意がその負う荷担の形のものとがある。荷は荷担の意がその 形声 致しないところがある。何に可に従うものと、艾を の実は蓮のようにみな部分名があり、書によって一 という。〔爾雅、釈草〕によると、その茎は茄、そ 声符は何。〔説文〕一下に「扶渠の葉なり」

車10 はな・はなやかカ(クヮ)

業 学学

を榮と謂ふ」とあるが、草花を抜きとる形は拜雅、釈草〕に「木にはこれを華と謂ひ、草にはこれ 雅、釈草]に「木にまこれとをを象形とする。〔爾足の部分であるから、その全体を象形とする。〔爾は、 象形 字千余を作ったことがあり、 作られた。北魏の太武帝の始光二年(四三五年)、新字の構成ではない。のちこの字の形声字として花が がよい。〔説文〕は華の字形を会意とするが、 は草花をいう。〔説文〕六下に「榮なり」とするの (拝)、その拜の右旁が華の初形である。 従って華と その象形部分の上に艸を加えた形となった。もとの もと左右に葉が出ている草花の象形。 そのときのものであろ 会意 のち

の関係が認められることが多い。 繁簡の字、疏と疎のような別体の字の間にも、同様 しばそのような関係のものがあり、原と源のような 字が作られたのちにも、華はなおその慣用を保って いる字である。象形字とその形声字との間にはしば きには、花を用いることはない。代字としての形声 美・光華・栄華・精華・繁華・中華・華族などのと た花が作られたのちにおいても、たとえば華麗・華 うとされている。古くはすべて華の字を用いる。ま

掛 かける・かかりカ(クヮ)・カイ(クヮイ)

卿の妻のために作る〕は夫婦のあと追い心中を歌うりながな。ととる卦のときに用いる語である。古詩「焦」仲は紫が、もと易卦のときに用いる語である。「易、繋辞で、もと易卦のときに用いる語である。「易、繋辞で、もと易卦のときに用いる語である。「易、繋辞で、もと。」 く」と、 長篇の叙事詩で、その篇末に「自ら東南の枝に掛 の意に用いる。 の諸掛り、また受付掛のように、 夫の縊死をいう。わが国では掛物や、費用 しごとの分担など

東
11 このみ・かしカ(クヮ)

加えて加工したものをいう。はじめは蜜柑や仏手柑もと果物をいい、のちわが国では澱粉などに砂糖をもと果物をいい、のちわが国では澱粉などに砂糖を などを加工したものをいったが、のち菓子をいう。 声符は果。果は果実で菓の初文。菓子とは

訛」(譌)19 いつわる・あやまりか(クヮ)・ガ(グヮ)

掛 菓 訛(譌) 貨(貨) 媧 斝

陷入するなり」という。また〔玉篇〕に「妖言を譌も「訛言」に作る。〔鄭箋〕に「人、僞言を以て相 といふ」とするが、多くは訛誤の意に用いる。 にその句があり、流言蜚語の類をいう。字はいずれ 言」の句を引く。〔詩、、、雅、正月〕また〔沔水〕三上に「譌は僞言なり」とし、「詩に曰く、民の譌・光声 声符は化(化)。また譌に作る。〔説文〕

貨二【貨】二 たからカ(クヮ)

門にも子貢のように貨殖に長ずるものがあった。 玉亀貝を貢する。貨賄のことは〔左伝〕に多くみえ 唱 る。貨殖のことは春秋期以後、大いに行なわれ、孔 礼、大宰〕の「九寶」のうちに「貨貢」があり、は、然ま、「九寶」のうちに「貨貢」があり、日に従う。古く貝が宝貝とされたからである。「 古く貝が宝貝とされたからである。〔周に「財なり」とあり、財貨の字はみな 形声 声符は化(化)。〔説文〕 六下 金

媧 神女の名・じょかカ(クヮ)

では、伏羲とともに男女二神、下体は竜尾をもってらわれた最初の女神で、漢代の画像にみえるところらわれた最初の女神で、漢代の画像にみえるところ れる女媧自身は、誰が作ったのかと問う。地上にあ 爾に従う。〔楚辞、天問〕に「女婦、體有るは、熟物を化するものなり」とあって過声。籀文の字形は一点(一点)、 かこれを制匠する」とあって、万物の創生者とさ 形声 声符は咼。〔説文〕

> するもので、 どがみえる。もと洪水神であったらしい形迹もあり、 ふ」とみえる。その十神は女媧の腸より化生したと 大荒西経〕に「神あり十人、名づけて女媧の腸とい 話、〔風俗通〕には、黄土をまるめて人を作り、つ を立てた話、また〔説林訓〕に、七十たび化生した石をもって天の欠けたるを補い、鼈足を断って四極 いには絶を泥中に曳き、これをあげて人とした話な 形にかかれている。〔淮南子、覧冥訓〕に、五色の 相交わり、手にそれぞれ規矩あるいは日月を奉ず 盤古の化生神話と一類のものである。

斝 12 礼器の名・さかずき

開 ATT. A

殷周を通じて行なわれているが、斝・角の類はお を奠く」とあり、「闖礼」にもその名がみえている器であるが、「詩、大雅、行葦」に「爵を洗ひ、斝に斝、周に殿というとする。いま存する斝は殆ど殷に斝、周に殿というとする。いま存する斝は殆ど殷 から、周でも用いたのであろう。なお尊・爵の類は 「玉爵なり」 象形 學の形に斗酌を加えた形。〔説文〕 | 四上に として、夏・殷・周の器名をあげ、殷

徴的な両耳が が、器上の特 の器はな る。斝の自名 むね殷器であ

斝

渦 訶 過(過) 嫁 廋 鴉 暇

いと思われる。 字形と合しており、その器が斝であることは疑いな

渦 うず (クヮ)・ワ

渦盤という。これを紛争にたとえて、その渦旋の中 の意がある。水がうずをなしてめぐることを渦旋・形声 声符は咼。咼にくぼんだもの、めぐるもの に捲きこまれることを「渦中に入る」という。

訂 12 しかる・うた

FI ST

声義を承ける。〔説文〕三上に「大言して怒るなり」 歌の字となった。祝禱して祈り、その成就を責めるどに施すべきものである。字はまた謌に作り、のち ていて、歌の初文。〔説文〕の訓はむしろ可・呵な という。金文では訶舞・訶鐘のように歌の字に用い るものが詠歌である。 ことが可・呵であり、その言を永うして曲節を加え 声符は可。可に呵責の義があり、訶はその

過 12 【過】13 すぎる・あやまち

后后 0

呪儀をいうものであろう。〔説文〕ニ下に「皮るな す字。従って過とは、特定の場所を通過するときの り」とは度越・通過することをいう。すなわち道路 声符は咼。┣は残骨に対して祈る呪儀を示

疆ならん。ことを過る」とあり、匄求の匄と同義にう。春秋期の〔邾大宰鐘〕に「用て眉壽、萬年無いう。春秋期の〔邾大宰鐘〕に「用て眉壽、萬年無いる」という。過いいると関連するところがあろの儀礼で、通行のために禍を除く意であろう。過誤 用いる。 智も屍骨を呪霊として祈るもので、過と字 意が生れる。金文の〔過伯殷〕の過は、祝禱の器で 去の意、また過度・度越の義より過多・過激などの の構造に似たところがある。通過の義より経過・過 とを示しえたのであろう。道路に関する古い字形に が、それによってなお通過するための呪儀であるこ あるDに従わず、残骨を途上におくのみの形である は、このような呪儀を示すものが多い。

嫁 とつぐ・よめ

飲)し、我が室家を盱しましめん」とあり、室家とつかえる。列国期の「林氏壺」に「魔台て優飲(宴家はもと家廟をいう字で、婦人は嫁してはその廟に というように、夫婦の相処るところを室家という。 る。〔左伝〕粒十八年に「女に家あり、男に室あり」 はその家族や妻党をも含む語のように思われる。 嫁娶の意に用いるのは、戦国期にはじまるようであからい。 瑞」「まさに衞に嫁せんとす」のように、稼の義で くは女子の嫁することを帰といい、嫁は〔列子、天はその家族や妻党をも含む語のように思われる。古 せんとす」は売りつける、また〔史記、趙世家〕出かせぎ、〔戦国策、西周策〕「以てこれを誓に嫁 「女、人に適くなり」とし、家声とす形声 声符は家。〔説文」二三下に

> る。 わが国では、新婦を嫁という。

夏13 おおきないえ・ひさしか

に「屋なり」 厚 は廈屋の意。 形声 ひさしのある大屋をいう。 と訓する。〔詩、秦風、権興〕の夏屋 その声義を承ける。「説文新附」九下 声符は夏。夏に大の義があり、

腡 おどろくこえ・わざわいカ(クヮ)

字形によっていえば、咼は人の残骨に祝禱を加えて とみえる。屰悪とは凶悪というほどの意であろう。 この荷々のような声をいう。[荀子、仲尼][漢書、も得ず。再びして荷々といひて遂に崩ず」とあり、 梁武帝紀〕に「疾久しくして口苦し。蜜を索むるいる形、先は頭をそむけている形である。〔南史、 てよい。もと死骨を用いて呪詛することをいい、 五行志〕に禍の字に鴉を用いており、禍の初文とみ の祈禱の声をいう字であろう。 光は頭をそむけている形である。〔南史、 〔説文〕ハ下に「逆悪、驚く詞なり」形声 声符は局。 局は禍の初文。

暇 13 いとま・ひま

るなり」という。〔書、酒誥〕に「敢て自ら暇あり呼」 りの義がある。〔説文〕七上に「閒あ める意である。暇逸・暇豫(豫はたのしむ)のよう十六年「好みて暇を以てす」とは、忙中に間暇を求 とし、自ら逸せず」とは自戒の語。また「左伝」成 形声 声符は段。段に大なり、遠な

に用いる。

瑕13 きカず

[喜°

匿す」、〔礼記、聘義〕「瑕、瑜を揜はず」とは、美疵のある玉をいう。〔左伝〕 宣十五年「瓘瑜、瑕をとし、〔子虚の賦〕に「赤瑕」の語もあるが、字はは〔説文〕」上に「玉の小赤なり」と赤みのある玉は〔説文〕」上に「玉の小赤なり」と赤みのある玉 り、瑕像とはものに欠点のあることをいう。いたがないとの意である。〔広雅、釈詁〕に「裂なり」とあいとの意である。〔広雅、釈詁〕に「裂なり」とあ 玉には小疵があっても、その価値を減ずるものでな 形声 声符は段。段は玉の原石を切り出す形。 瑕

禍 [禍] わざわい・とがめカ(クヮ)

〔釈 名、釈言語〕に「禍は毀なり」とあり、毀も人 骨を毀滅して呪詛する形の字である。 従うものなどもあり、 嘆慨の意をもつ旡に従うもの、残骨の象である歺に福せざるなり」の文を引く。 咼を含む古い字形には、 一上に「害なり」とし、また〔左伝〕荘十年「神、 形の字で、禍はその声義を承ける字である。〔説文〕 これによって禍殃がもたらされるのである。これによって禍殃がもたらされる呪儀であろっものなどもあり、みな残骨を用いる呪儀であろ 声符は咼。咼は残骨に対して呪詛して祈る

窠 す・あな (クヮ)

> するという。古巣を棄てて新巣に就くことである。 なり」とし、「穴中を窠といひ、 声符は果。〔説文〕七下に「空 樹上

靴13 (靴)13 くつ・かわぐつカ(クヮ)

便なるを取り、戎服に施す」とあるように、もと 轢 ち靴の字が用いられる。「隋書、礼儀志」に「事に は軍装用のものであった。革製の長靴をいう。 り、〔説文新附〕 三下にみえるが、の形声 声符は化(化)。もと鞾に作

融 13 どがま・どなべカ(クヮ)

のであろう。金文に〔滸攸従鼎〕があり、滸・攸礼のとき、この器のように注口のあるものを用いた 金文に課礼を馬の字で示すが、酬と字形が近く、課酬といふ」とし、のちの鍋にあたる。鍋は形声の字。 字の用例はない。 はともに裸礼やみそぎに関する字である。文献にはのであろう。金文に〔滸攸従 鼎〕があり、融・攸 〔説文〕三下に「秦、土釜を名づけて 象形 幕形の器に注口のある形。

嘉 よい・よみす

蠹 常见 A STATE OF THE PARTY OF THE PAR 多

会意 **壴**(鼓)と加とに従う。 加は耜 (力) を被告

> 〔左伝〕植六年に「嘉栗旨酒」というのは、みな清稲を〔礼記、曲礼、下〕に「嘉疏」といい、またものを、〔詩、大雅、既酔〕に「邊豆辭嘉」という。 [周礼、庶氏]の「嘉草」、〔大司寇〕の「嘉石」ならかな穀物を供えて神に告げるときの語である。 生を加というが、それは嘉の意。農耕儀礼と生子儀 禾種を嘉禾とよび、〔書〕の逸篇に「嘉禾」の名がからかか。 からかかが、嘉の原義は加のうちに含まれている。 周がえた 礼との間には、相関的な関係がある。 下よりもち、左に丹・青を加える。神饌の清らかな みえる。静も耜を祓い清める儀礼で、耜(力)を上 る。〔説文〕五上に「美なり」と訓し、加声とする に壴を加えるのは、その儀礼に鼓声を用いる意であ い清めるため祝禱を加えることを意味する字。それ いずれも呪的な意味をもつ。卜辞に男子の出

嘏 14

を匄む」の屯叚は、屯魯・屯右と同義の語であるか同じ。〔克鐘〕「用て屯叚(純椒)永命ならんこと同じ。〔克鐘〕「用て屯叚(純椒)永命ならんことに對揚す」という。叚休とは皇休・魯休というのと を用い、〔袁盤〕に「敢て天子の丕顯なる叚休の命を用い、〔袁経〕に「教へ天子の心説なるという。または、というない。」というない。 形声 公に純嘏を錫ふ」とみえ、〔箋〕に「幅を嘏といふ」にいる。ない。という、『詩、魯頌、閟宮』に「天、ら、嘏とは福枯をいう。〔詩、きょうじょう)に「天、 り」とあるが、〔爾雅、釈詁〕に「遐は遠なり」 声符は叚。〔説文〕三上に「大なり。遠な

と韻している。すなわちもと古声の字であった。の閟宮〕では魯・許、〔礼記、礼運〕では度・御・序をいう。嘏は金文では魚部の韻に入り、〔詩、魯頌、をいう。嘏は金文では魚部の韻に入り、〔詩、魯頌、 ち叚声をもって行なわれる。 なり」とあり、吉祥の語をもって祝福などを奏する「嘏なるものは、祝、尸の爲に福を主人に致すの辭 祝、尸の爲に福を主人に致すの辭れなど。 , の爲に福を主人に致すの辭

夥 おおい・おびただしいカ(クヮ)

をいう。 語であろう。法律用語で夥盗・夥党とは、盗賊仲間ふ」とする。先秦の用義例はみえず、もと口語的な の盛多なるを、齊宋の郊、楚魏の際にては夥といきをいひて夥と爲す」といい、[方言]に「凡そ物 であるとするが、〔漢書、陳 渉伝〕に「楚の人、多ので、 にて、多きをいひて夥と爲す」と斉語 形声 声符は果。〔説文〕七上に「齊

寡14 やもめ・すくないカ(クヮ)

鳳 4 原

字は廟中にあって、頭に哀麻などの喪章を加えた婦り」と頒に従う字とするが、字形の解釈を誤まる。 頒に從ふ。頒は分ち賦つなり。 会意 [説文〕 セドに「少し」と寡少の意とし、「宀に從ひ この字では手を加えた側身形にしるされている。 人が、両手を前におき、廟中の霊を拝する形で、寡 宀と頁とに従う。頁は礼拝する人の姿で、 故に少しと爲すな

> う。〔詩、小雅、鴻雁〕「この鰥寡を哀れめ」の〔毛きもの、これを寡といふ」とある寡婦、未亡人をいきもの 寡の義は転義である。 救済は、古代においても社会的な問題であった。多 に対する施策の必要が述べられており、鰥寡孤独の ときは鰥という。金文の〔毛公鼎〕に、すでに鰥寡 伝〕に「偏喪を寡といふ」とみえるが、男が残った とは「鰥寡」の寡、〔礼記、王制〕に「老いて夫無

樺 かば(クヮ)

箱の外まきなどに用いた。信濃では桜をかばとよん 形声 ようである。 とする説もあり、もとは特定の植物名ではなかっ だことがある。また「かには」はアイヌ語であろう にはざくらは、のち、かばざくらといい、その皮は よばれ、〔万葉〕には「櫻皮まき」の語がある。 の多いものであった。わが国では古く「かには」とべし」とあり、その皮が厚くて、燭火の他にも用途 声符は華。〔玉篇〕に「皮は以て燭と爲す か

歌 14 (詞) 17 うたう・うた

「訶鐘」のようにいう。歌うという行為は、もと祈 として謌を録する。金文には字を訶に作り、「訶舞」なり」とし、詠三上にも「歌ふなり」と互訓。重文なり」と る声を呵といい、歌という。〔説文〕八下に「詠ふを神に祈り、呵責してせまるもので、そのとき発す 羆 重ねた形。ずは祝禱の成就形声 声符は哥。哥は可を

> ざるものは 我が士をば驕るといふ」と歌う。[園桃]に「心の憂ふる 我、歌ひ且つ謠ふ 我を知ら 歌の起原は、おおむね凶礼に発しているのである。 のがあった。歌と哭と吉凶相対して用いているが、 檀弓、下〕に、晋の献文子の室が成るや、「斯に歌だい。」に、皆の献文子の室が成るや、「斯に歌だい」という。「私記、温歌の意に用い、楽しむべきものとなった。「礼記、 大裁には、歌哭して請ふ」とみえるが、のち歌楽・ 詛するもので、「此の好歌を作りて、以て反側を極判されるのである。〔詩、小雅、何人斯〕は人を呪判されるのである。〔詩、小雅、何人斯〕は人を呪 謡には呪詛的な意味があり、それで「驕る」とも批 有桃〕は故地を棄てて漂泊するものの歌で、この歌 禱や祝頌のことから発しており、本来呪的な意味を ひ、斯に哭し、國族を斯に聚めん」と新室を祝うも 哀告をなすもので、〔周礼、女巫〕にも「凡そ邦の もって、呪能を発揮するのである。歌はもと呪詛・ む」と、その裏切りを責める。歌はそのことだまを 同じ語源であろうとされている。「詩、

高 あな・くぼみカ (クヮ)・ワ

形声 のよい字ではない。 科・筆・**と同系の語で、小さな穴やくぼみをいう。 声符は咼。咼は残骨の象に従う字である。

窗 ものをかぞえる・ものをさすカ・コ

(あの)のように、ものをさす語に用いる。 字である。唐以来の俗語では、這箇(この)・那箇とみえるが、个は半竹の形ともみえず、別の系統のると、「竹の枝なり。今或いは个に作る。半竹なり」 のを数えるのに用いる。〔六書故〕に引く唐本によ の枚なり」とあり、竹べらの類で、も 声符は固。〔説文〕五上に「竹

蜾ュ じがばち カ (クヮ)・ラ

詳しい観察がしるされているが、古代の詩篇〔小 解釈したのであろう。ファーブルの〔昆虫記〕にその がばちが生れるというふしぎな現象を、このように 扇に逢ふ。これに祝り、て曰く、我に類よ、我に類よのがある。〔法言、学行〕に「螟蛉の子、殪る。蜈のがある。〔法言、学行〕に「蜈蚣の子、殪る。蜈 痲痺させ、 桑虫。蒲盧は桑虫の子をとって、変化して己れの子 「螟蛉に子あり(蜈蠃これを負ふ」という。螟蛉はあって、じがばちをいう。〔詩、小雅、小宛〕にあって、じがばちをいう。〔詩、小雅、小宛〕に と。久しうしてこれに肖る」というのは、桑虫からじ となすとされるが、蜂類のうちには、桑虫を刺して 声。「蟠嬴、蒲盧なり。細腰の土鷁(蜂)なり」と コミ上に正字を蠮に作り、誘 が、 声 声符は果。〔説文〕 14 つつむ・まとうか(クッ) そのことがすでに歌われているのである。 〔法言、学行〕に「蜈蚣の子、殪る。蜈卵を生みつけて、孵化後の食餌とするも

会意 を入れるのは魂振り、招魂儀礼のしか 衣と果とに従う。衣中に果物

力

蜾

裹

稼

蝦

課

譁〔嘩〕

霞

儀礼に衣を用いることが多く、哀・寰・寰・褱な瓜〕など、嬥の歌にみえる。喪葬の際には、招魂の瓜〕など、嬥の歌にみえる。喪葬の際には、招魂のなって、〔詩、召南、紫・紫・な、紫・な、ないでは、日本のという 法をとる字である。 どはみなその儀礼を示す字。裹もこれらと同じ構造 るが、形声の字ならば、偏旁にしるすのが原則であ たである。〔説文〕ハ上に「纏ふなり。果聲」 とす

稼 15 うえる・みのり

ることを「稼ぐ」という。 稼を入る」、〔小雅、甫田〕に「曾孫(領主)の稼な穡といふ」とするが、〔豳風、七月〕に「十月、禾紀の〔毛伝〕に「耕種するを稼といひ、收斂するをの〔毛伝〕に「耕種するを稼といひ、以れ わが国では、農事に限らず、仕事にはげみ、つとめ の秀實あるものを稼と爲す」とし、また収穫をいう。 り」などは、みな収穫をいう。〔説文〕七上に「禾 〔詩、大雅、桑柔」「稼穡 卒く痒む」 形声 声符は家。農耕のことをいう。

蝦 がま・えび

らく、音義説の愛好者であった。 というとする説がみえる。王安石は古字の知識にく に遐遠の地におくも、必ずその故地に帰るので、蝦 [字説]を引き、 ることもある。〔本草〕の〔李時珍注〕に王安石の「蝦蟆なり」という。えびには鰕に作蝦蟆なり」という。えびには鰕に作形声 声符は段。〔説文〕一三上に がまはよくその故地を知り、 かり

> 15 こころみる・わりあてるカ(クヮ)

会社では課、病院では科を用いる。 の意に用いる。科と通用するところがあり、官庁や みてこれを行ひざる」の句がある。課役・課程など って、課試・試用の意。〔楚辞、天問〕に「何ぞ 鄩 形声 試用の意。〔楚辞、天問〕に「何ぞ誤なり」、次の試字条に「用なり」とあ 声符は果。〔説文〕三上に「試

譁 一中 13 かまびすしカ(クヮ)

り、喧譁を喧嘩という。 る。喧譁とは騒擾することをいう。 抑制策をとり、「諸侯喧譁して晁錯を惡む」とみえ「大語なり」という。〔史記、晁錯伝〕に晁錯が諸侯「大語なり」という。〔史記、晁錯伝〕に晁錯が諸侯 かましく騒いで言いたてることで、〔切韻〕残巻にいましく騒いで言いたてることで、〔サイラトム 変形・ 声符は華。〔説文〕三上に終了 字はまた嘩に作

鍋 なべ・あぶらさしカ(クヮ)

う。鍋上鍋下とは水と火、これなくては生きること の池を鍋底池、鍋の底にいりついた飯を鍋底飯とい 形の意がある。油さし・なべの意に用いる。その形 のできないものである。 声符は尚。骨には円くして中央のくぼんだ

霞 かすみ

形声 る。 〔説文新附〕一下に「赤き雲气な 声符は段。段に遐遠の意が あ

霞

る。 とあり、 南方の風物が叙景への道を開いた。 衣・霞衾という。煙霞・霞光の美しさが文学の作品 遠くたなびくもので、 にあらわれるのは六朝期に入ってからのことで、 り」とあり、 それで仙人の住むところを霞洞、仙人の衣を霞 遠遊」に「營魄(肉体)を戴せて登霞す」なびくもので、遐と通用することもあり、 登霞とは登遐、遠く天上に遊行する意であ 夕やけなどでうす赤くみえる霧をいう。

牙 きガば

ħ 9

詢設」に「厥の爪牙と作る」とは、王の親衛とないる。金文の〔師克盨〕に「爪牙と作る」、〔師という。金文の〔師克盨〕に「爪牙と作る」、〔師となる〕とし、〔段注〕に「壯齒」の誤りである 象は殷代には江北にも棲息しており、 牙の上下相交わる形に象る。〔説文〕ニ下に ト辞に



ていて不前、とこうできの精巧な象牙杯が出土している。牙は彎曲ですの精巧な象牙杯が出土している。牙は彎曲でするい。近年殷墟の婦好墓から、饕餮文を加えた把するい。近年殷墟の母好墓から、饕餮文を加えた把するいとされ、それに彫飾を施し、彩色した遺品重なものとされ、それに彫飾を施し、彩色した遺品重なものとされ、それに彫飾を施し、彩色した遺品 は嵯峨、歯には齟齬という。牙・我・吾はみな声のていて不揃いなものであるから、差牙という。山に手つきの精巧な象牙杯が出土している。牙は彎曲し 近い語である。

瓦 かガ わら グヮ)

弄とは新生の児に魂振りとしてもたせるもので、女に瓦を弄せしむ」とは、紡塼のことであるという。に気を弄せしむ」とは、紡塼のことであるという。の未だ焼かざるもの」という。〔詩、小雅、斯書だっただ焼かざるもの」という。〔詩、小雅、斯書だった。 ろう。秦漢以後、瓦ぶき 子に土瓦をもたせるのは、 ものの總名なり」とし、土部一三下の坏字条に「瓦会」 「説文」二下に「土器の已に燒きたる」を表形 屋根瓦のそりのある形に象る。 地霊を受けさせる意であ

は、高祖の創業をいう。 た。「漢、天下を併す」と は吉祥の文字などを加え こに花文を施し、あるい きの瓦に瓦当を用い、そ の建築が行なわれ、軒さ



疋 雅の古文

仮借 雅の字に用いる。 頭の省略体で、大雅・小雅の ||説文] ニ下に「古

> 越、夏に居りては夏なり」とあって、ここには夏を子、儒効〕にまた「楚に居りては楚、越に居りてはりない」とあって、ここには夏をんず」とある雅は「起・朱しら 用によって、雅の古文として用いられたのである。 とは通用することがあった。[荀子、栄辱]に「越れるとなるとしての詩篇をいう名であるから、夏と雅 のがあり、複姓の夏侯氏をいう。碩は夏の異文で、あることを述べている。印泥に「頙侯某」というもあることを述べている。印泥に「頙侯某」というも (夏祀)を□伐す」とあって、その家は殷の末裔でして帝所に在るあり。尊いに天命を受けられ、碩司して帝所に在るあり。尊いに天命を受けられ、碩司の高祖に典らんとす。歳々たる成唐(湯王)、厳との高祖に典らんとす。続々たる成唐(湯王)、厳と 世のことをしるし、「夷(人の名)、その先舊及びそ である。疋は頭の省文。斉器の〔叔夷鐘〕にその先雅正の雅に通用するというも、声義ともに異なる字 ない。あるいは〔通訓定声〕に、正と疋と形近く、 なく、 段 玉 裁のごときも好んで大疋・小疋としるすが、火きをがない。 とあり、清朝の学者は文、以て詩大疋の字と爲す」とあり、清朝の学者は 人は越に安んじ、楚人は楚に安んじ、君子は雅に安 疋が雅と通ずる理由については何ら述べるところが とある雅は、越・楚に対して夏をいう。〔荀 ただ「古音同じく五部に在り」というにすぎ 清朝の学者は

我

以找状 퐸 赤

るものを、仮借という。のように字の本義をすてて、 羲・肌・峨などのうちにわずかに残されている。こただ代名詞として用いられるが、字の声義は義** は双声の語。我を嵯峨のような畳韻の連語に用いる字形があり、その字は肌の初文である。我と別も知られよう。また卜文に、人の下肢に我を加えても知られよう。また卜文に、人の下肢に我を加えて である。我はその本義において用いられることなく、 のは、鋸歯の意がなお我声の字に残されているから 羊に加えて犠牲とすることが義、羊の下体が下にあ 義に合うところがない。我が鋸の形であることは、 「身に施して自ら謂ふなり。或いは說ふ。我傾、「身に施して自ら謂ふなり。或いは說ふ。我傾、 らわれるものが羲(犧の初文)の字となることから くなり」と俄傾(傾く)の義とするが、すべて字形字 そらく鋸の形であろうが、我をその義に用いること 、一人称の代名詞に用いる。〔説文〕 字はもと鋸歯のある戈形の器の象形。お 他の義にのみ用いられ が傾、頓・ ・

8 (書)12 え・えがく・かぎるガ(グヮ)・カク(クヮク)

劃 奏田幸あ

田の四界に象る。聿はこれを畫する所以なり」と、文とするのは誤りである。〔説文〕三下に「界なり。 を畫という。画はのちの略字。〔正字通〕に畫の古 周は方形の楯。 旧字は畫に作り、聿と周とに従う。聿は筆 方形の楯に彫飾あるいは彩飾を施す

画(畫)

臥

芽〔芽〕 俄

峨

ある。 あり、畫(画)は画文を施した楯を原義とする字で (図)という。 金文に「書轎」「書轉」の類があり、聿の下に×をなお明らかに周(楯)の形に従う。車服賜与形式のなお明らかに周(楯)の形に従う。車服賜与形式の を用いることはありえない。〔説文〕の篆文及び古田土の境界を画定する意とするが、田上の画定に筆 加える。×形にしるすものは規、すなわちブンマワ 文二形は、すでに正確を失っており、金文の字形は 図は農地の図面を原義とするもので

臥。 ふす (グワ)

である。 をいう。これを寝臥の意に用いるのは、 ろであるから、臥は寝臥の意でなく、俯視すること の字の誤り。監・臨はすべて在天の神霊のなすとこ 從ふは、その伏するを取るなり」とするが、 のちの転義 休は伏

芽 (芽)。 め・きざす

り」の訓がある。〔易林〕に「芽蘩、生達す」とあに「萌芽なり、〔広雅、釈詁〕に「始なり、糵ないまなり、藁ないなものの意がある。〔説文〕」下 THE STATE OF THE S 形声 声符は牙。牙に突出してふぞ

> 雀舌鷹爪などとともに最も珍重される。そのが、古い用例である。茶の新芽を芸るのが、古い用例である。茶の新芽を芸 い用例である。茶の新芽を芽茶と

俄。 かたむく・にわかガ

「頃くなり 雅、賓之初筵」「弁(冠)を傾くること俄たり」のちなこと張く、さんないないとなってはりの義となる。〔説文〕は〔詩、小ち時に移して追ゅの義となる。〔説文〕は〔詩、小ち時に移して追ゅ 戦国期に至ってみえる。 義を取って訓したものであろう。 あるが、俄・傾の初義は身を傾けることである。 」という。この頃を頃刻の意とする説も ふぞろいの義がある。〔説文〕八上に 声符は我。我は鋸の象で、 「俄に」の用法は 0

娥 うつくしい

眉としるすことがある。 好きものを謂ひて煙娥といふ」という。〔方言〕に好の妻娥皇の字なり」とし、また「秦・晉にて、形声 声符は我。〔説文〕一二下に「帝堯の女、形声 声符は我。〔説文〕一二下に「帝堯の女、形声 英、また月神常娥の話などは、別の系統に属するも 対象とされている自然神である。舜の妻娥皇・女 え、その神は犬牲をもって祀られ、年穀を祈るは「好にして輕きもの」とする。卜文に婺の字がみ あり、美容をいう。美人の眉を蛾眉といい、 のであろう。〔広雅、釈訓〕に「娥々は容なり」と

10 けガ わし

「嵯峨なり 山は四川の名山として、道・仏二教の聖地とされた。 」と畳韻の連語をもって解するのは形況 ふぞろいの意がある。〔説文〕九下に 声符は我。我は鋸 の象形で、 餓(餓)

むかえる・あやしむガ・ゲ

ある。もとは外からの訪問者を誰何して迎える意で 事」にみえる。怪訝の意は〔呂氏春秋、必己〕に 鼓を撃って神を迎えることを訝鼓といい、〔宣和遺そのことを職とするものを訝士という。祭祀のとき、 あったと思われる。 「訝も無く訾も無し」とあって、 という。〔儀礼、聘礼〕に「賓を館に訝ふ」とあり、 迎える意に用いる。〔説文〕三上に「相迎ふるなり」 形声 どと声が近く、人をねぎらい 声符は牙。逆・迎な これも古い用法で

賀 12 いわう・よろこび

魂振り的な呪能をもつとされるもので、両者を併せ の生産力を高めるための儀礼。貝も生産力を高め、 生子儀礼や農耕儀礼に用いる字である。〔説文〕 「禮を以て相奉慶するなり」と慶賀の意とす 声符は加。加は耜(力)を祓い清めて、そ

> 四方より祝、頌を献ずることをいう。り近い。〔詩、大雅、下武〕「四方來り賀す」とは、から、知語の「いはふ」(斎う)と語義の関係がかなか」、国語の「いはふ」(斎う)と語義の関係がかな 嘉を、今文系のテキストに賀に作る。賀は「いは 声義が近い。〔儀礼、覲礼〕「余一人これを嘉す」の 産力を鼓舞する意がある。嘉も加に従う字で、賀と 助に作る字があり、耜に貝を加えている形。耜の生る字で、賀とは字義が異なる。金文の〔大豊殷〕に って互訓とするが、慶は神判における勝利を意味す る。慶字条一〇下に「行きて人を賀するなり」 とあ

戦 3 が・はねあり

ぶものをみな蛾といい、かげろうの類をも含めてい なり」とあり、蚕蛾をいう。すべて蛹より化して飛 蓉 糕袋 形声 一三下に「蠶の化して飛ぶ蟲 声符は我。〔説文〕

衙 やガくしょ

自(脈肉)をおくところ、衙は牙旗を立てるところ、衙の戦の衙を〔釈文〕に牙に作る。官は軍行のときのち官衙・宮殿の意となる。〔公羊伝〕文二年の影のち官衙・宮殿の意となる。「公羊伝〕文二年の影がある。古くは将軍の軍門に牙旗を樹てた。 官衙とはいずれも将軍の居るところであった。 く見」とは、衙々という形況の語に解 をを 声 声符は吾。〔説文〕ニ下に「行

> 雅 (雅)12 形声 からす・みやびやか・ただしいガ・ア

[論語、述而]「子の雅言するところは、詩・書・執ら[儒教] に「夏に居る」に作り、夏・雅は通用の字。にない。 〔詩〕の〔大雅〕〔小雅〕の字に用いるのは仮借。雅 「つねに」などの意が生れる。雅を鳥の名として用 ることをいう。〔詩〕の〔大雅〕〔小雅〕を「大疋・ ジサルド でいる。〔荀子、栄辱〕「君子は雅に安んず」ををいう。〔荀子、紫ヒサヤヤ それが字の初義で、牙はその鳴く声を写す。これを いることは殆どない。 から、雅には典雅・文雅・雅正のほか、「もとより」 省文である。歌舞は古い伝統の上に立つものである 小疋」とかくことがあるのは、夏の異体である頭の 禮なり」の雅言は、古典や古礼には伝統の語を用い る。夏はまた頙としるし、足をあげて舞うその儀容 は夏と通じ、夏は舞楽の象で、多く楽章の名に用 〔説文〕四上に「楚鳥なり」とあり、 声符は牙。字はまた鴉に作る。

餓 15 (餓) 16 うガ える

飢渇の苦を受けるものを餓鬼という。

草がみだれるさま カイ

初、初に呪飾の糸飾りを加えたものを絜、人身には、ないの多寡を示す。鑿歯を加えることをによって、数の多寡を示す。鑿歯を加えることを 初を加えたものは契、みな一系相承ける字である。 みを加えて相約するものを、鑿歯という。その歯数 約することを示す字とみるべきである。 芥の義であり、孝とは関係がない。孝は契・絜の従う。草の乱れ茂るさまとするものであるが、それはう。 蔡なり」とし、「艸の生じて散亂するに象る」とい加えたものを契(契)という。〔説文〕四下に「艸がれえたものを契(契)という。〔説文〕四下に「艸が東のしるしとする形で、その刻文を うところで、すべて相約する意であり、契刻して相 丰 斜線を刻してこれを両半とし 木などに刻

鵝

がガ ちょう

形声

声符は我。我はその鳴き声を

乗・駕行・駕御・凌駕などの意が生れる。

「戎車旣に駕す」の句がある。それより車駕・駕車に馬をつけること。〔詩、小雅、深薇〕は軍歌で、

声符は加。加に架けわたす意がある。駕は

繁糕

15

車に馬をつける・のる・しのぐガ

よろい・たすける・へだてるカイ

〔続斉諧記〕にみえる「鵝籠書生」の話は、おそらいさい。 を以て鵝と交換した話はよく知られている。またを以て鵝と交換した話はよく知られている。また 晋の王羲之が鵝を好んで、その書写した〔道徳経〕 「劇機なり」というのも同じ。また家雁ともいう。かが、写したものであろう。〔説文〕四上に

く仏説からその材をえたものであろう。

0

齖 19

はならびわるし

声符は牙。牙は獣牙。齖は歯なみのそろわ

殷盤の信屈聱牙なる」の語があり、聱牙は聱虧。当ずそのを贅齢という。韓退之の〔進学解〕に「周誥するのを贅齢という。韓忠之の〔進学解〕に「周誥なぬことをいう。人言に耳を傾けず、かってな行動をぬことをいう。 があるが、〔詩、鄭風、清人〕「駟介旁々」の〔毛「大なり」「助く」「介添え」「仲介」など、多くの義 とあって、介・界・畫(画)は同義の字である。介二上に「畫るなり」とし、畫字条三下に「界なり」 れることが多く、 武具であるという。多介父は殷の先王とともに祭ら の語があり、羅振玉はその介を、革を聯ねて造る 虫・魚介のようにいう。ト辞に多介父・多介子など は介冑を本義とするもので、甲羅をもつ虫類を介 象形 身の前後によろいをつけた人の形。〔説文〕 おそらく親衛の武将であろう。

時は、「周誥殷盤」の真器の出土は、まだ殆どなか

ったのである。

をいう。 に一丁字なし」とは「一个の字なし」の意で、文盲る。〔儀礼、大射〕では矢を「一个」と数える。「目の「介の臣」は、〔大学〕に引いて「一**の臣」に作 胃であり、一は疥疾である。〔書、秦誓〕にみえる語である。その象るところは似ているが、一は介語である。 が、それは疥の初文で、芥などはその系統に属する形に、牀上の人の両旁に、小点を付したものがある 訓は句と声が通じ、「小さい」は芥と声が通ずるなに近い訓義を集めている。そのうち「もとめる」の ど、多く仮借義を含んでいる。介と相似たト文の字 より派生したものである。〔経籍餐詁〕には七十義伝〕に「甲なり」とあり、その義が古く、他はこれ

夬 ゆがけ・わけるカイ(クヮイ)・ケツ

欠はもと欠伸(あくび)で、声義ともに異なる。その一部が切れているもの。欠を缺の意に用いるが、用いる形である。缺は環が円形であるのに対して、 訣・弢はみな決の音でよみ、このうち玦はゆがけを字形として同じ形となる。 快の音のほか、決・抉・ 当 形に象る」という。この両義はもと別の字であるが、 〔説文〕 三下に「分決するなり」とし、また「決の 会意 つ形。また物を切る刃器をもつ形。 正字は麦に作り、ゆがけをも

<u>±</u> つちくれ カイ (クヮイ)

象で土あな。土は土塊の形で、塊は由会意 凵と土とに従う。凵は坑路の

ガ 駕 鵝 齖 カイ 丰 介 夬

句[匃][丐] 会[會][袷][淦][卿]

であろう。 あるから、 「後漢書、蔡邕伝」に「それ九河の弘益するときは、 に、服喪のときに、凷を枕にするという。 る。墣は撲つ意を加えたもので、うち固めた土塊で の形声字とみてよい。〔説文〕「三下に「僕なり」 字を象形、また塊は凷の俗字であるとしてい 出もまた版築などによって塊としたもの 土のブロックというほどの意である。

白5. [匈]5[丐]4 もとめる

0 A. 图图 以

文の字形は光に従い、すなわち人の残骨をよせ集め 字同義であった。それはもと、気を見て祈る儀礼を 句という。〔説文〕一二下に「气むるなり」とあり、 て呪能をもつものであり、これを用いて祈る呪儀を た形。鄭重に葬られることのない屍骨は、怨霊とし 例がある。また「希すること勿きか。勾ること中る名)に苦方を(禦がんことを)匂めんか」のような の国名)を(禦がんことを)匄めんか」「上甲(祖いう字である。匄も卜文にみえ、「河に苦方(外族 ト辞に气を乞と同義に用いている。 气・乞はもと同 に「眉壽を煽り匄む」の語が多く用いられるが、そが知られる。それで害と通用することがある。金文 するもので、 が、匄のような呪詛によるものであるかどうかをト か、匄ること亡きか」とトする例があり、柔の原因 篆文の字形は人と亡とに従うが、卜文・金 匄はまた害をもたらす呪儀であること

> (喝)・愒・渴(渇)・槝・歇、また遏などがあるが、は、通用されている。 匂の系列字には曷・鳴の声が近く、西周後期より列国期にわたる金文での声が近く、 たり (以上、句)を用いることがある。これらはみなそ の懈怠の字にはまた旂・气(以上、懈)、害・割 みな屍霊を用いる呪儀によってその意をえているも は良民と区別して賤民とされ、明の太祖はその家に が用いられた。丐児・丐者とは、乞食をいう。丐戸 に作るが、匄の俗字。匄の形義が失われて、のち丐 の侵入を遏める呪儀を示すものもある。字はまた写 ので、遏のようにそれを道路の呪儀に用いて、邪霊 が、おそらく唐以後に字を改めたもので、古い用例 に沐せしめ、 世家」に「沐(米の白水で髪を洗う)を丐むれば我 丐の字を書いて張り出させたという。

> 「史記、 のない字である。 丐は字形が近いが、声義ともに異 なる字である。 食を丐むれば我に食せしむ」とみえる 外戚

会。〔會〕13 〔拾〕9 〔拾〕 10

卿 あう・あつまる カイ (クヮイ)・エ (エ)

會 482

上に蓋のある器をおき、下から蒸すもので、蒸し物 象形 を料理することをいう。〔説文〕五下に「合ふなり」 蓋のある食器の形。下部は甑の形で、その

> 「曾は益なり」としている。會と曾とは形が近く、 として「人に從ひ、曾の省に從ふ」といい、 會を啓く」、「士虞礼」に「佐に命じて會を啓かした。」をいう。「儀礼、公食大夫礼」に「坐して簋のる鼎をいう。「儀礼、公食大夫礼」に「坐して簋のは「自ら會鼎を作る」というものがあり、蓋のあは「自ら會別を作る」というものがあり、蓋のあ 會は蓋を加えたもの、曾は甑の初文である。 用いる。秦の虎符に「以て王の符に會して、敢て之陰に會す」、〔沈児鐘〕に「百姓を龢鐘す」のようにとなり、[職・先鐘]に「長城に入るに先んじ、平となり、[職・先鐘]に「長城に入るに先んじ、平 む」という。器蓋を合せることから会合・会集の意 は、古くは袷・途・穴を用いた。を行へ」とは、符を合せることをいう。会合の字に 金文に なお

回 6 回 」 5 めぐる・かえる

0 0

(大)たる彼の雲漢(銀河) 天に昭回す」のようにするものの義に移して、〔詩、大雅、雲漢〕「停 で、孔門の顔回は字は子淵、名と字と相応じて、いただないながない。それに則ち回る」という。淵をなして水の回流する意 「淵は回水なり」とあり、〔荀子、致仕〕に「水深け 象形 よると、水の回流するさまである。 なる。〔詩、小雅、小旻〕に「猶を謀ること回適また回曲・回邪・回違・回適(たがう)などの意と わゆる名字対待である。回水の義より、すべて回転 す」のように、早くからその用例がある。回に従う いう。転回・旋回・回復・回避の義、巡回・回数、 ものの回転する形に象るが、古文の字形に 「説文」 二上に

いる。 字に洄・廻・徊などがあり、みなその声義を承けて

灰

かない。 〔荘子〕には、好んで死灰の語を用いている。字は 声義の関係は確かめがたい。 ト文・金文にみえず、篆文によって字形を考えるほ り」とし、「火旣に滅し、以て執持すべし」という。 灰に従うものに恢・詼などの字があるが、

承ける字であるが、鑿歯契刻の意とはまた異なるもえようとして非に妨げられる意を示す。非の声義を

こころよい・はやいカイ(クヮイ)・ケ

耨は蜃器をもつ形である。鋭く切ることよりして、 ような心的な状態をいう。ゆえに快意より快楽・快 ことを決すること、速やかに定めること、またその されています。 すいていたらしく、草切りをいう古くは貝などを用いていたらしく、草切りをいう 刃のあるものをもってものを絶つ形。 声符は夬。夬の本字は叏で、

24

0 25

락

改

あらためる

る。

峰の樹に神の降ることを示すもので、別の字であ

のである。また、も字形の似た字であるが、これは

形声

声符は己。〔説文〕三下に「更ふるなり」と

る意とする説もあるが、〔繋伝〕には形声としていし、「戈已に從ふ」と会意に解する。自己を変革す

る。改・更は双声の字。およそ支に従う字は、その

戒 いましめる

去人

であげている形で、警戒の意。斤をあげる形は兵会意 戈と光とに従う。廾は両手。戈を高く両手 の義となり、悈・誠はみなその声義を承ける。国語 で、字の作りかたが同じである。警戒の意より戒告

改 あらためる

まさに攺に作る。

文であろう。〔牧設〕に「餒改」の語があり、字は 疑問とすべきところがあり、たに作るものがその初対象が撃つべきものであるが、この字はその構造に の「いましむ」にも警と誠との二義がある。 欠と非とに従う。欠は人の足 0 25

さえぎる

用いることもあって、「羌百を攺すること勿からん 神意にかなうこと、「不若」とは禍殃のあることを 不若なるか」とトするものがあり、「若」とは諾、 (の日) に至るまで、��して、��ち旣ょるときは若ち、血の滴る形にしるすものがある。ト辞に「庚寅な呪術的な呪法である。ト文に蛇形のものを杖で殴 逐ふなり」とあり、歿攺の字とする。歿は希をなす文〕三下に「歿攺なり。大剛卯、以て鬼鬽(魅)を改これを殴って鬼魅邪悪を祓う呪儀をいう。〔説いはこれを殴って鬼魅邪悪を祓う呪儀をいう。〔説をはいるをしてととに従う。巳は蛇形で盤虫を示し、 子が巫蠱をもって武帝を呪詛すると讚言するものが 帝のとき、この呪法を用いる巫蠱の乱があった。太 巫蠱といい、他を呪詛するときにも用いた。漢の武 で、変更・更改とは、もと禍殃を他に移す呪的行為 ている禍殃を他に移し、 れらの犠牲を殴つことによって、自己が被ろうとし これを百人連ねて殴つことをトするものである。こ を攺せんか」という例もあり、ときには異族犠牲を ば「それ小军(犠牲の羊)を攺せんか」、また「牛 なるか。庚寅に至るまで、攺すること勿きときは、 獣を殴つ形、攺は蠱を殴つ形であるから、ともに共 を意味する。巳は蛇形の蠱であり、この種の呪儀を か」とトするものがある。羌は西方の牧羊人で羌族、 いう。その殴つものは必ずしも蠱に限らず、たとえ 変更することを求めるもの

(説文) IO上に「死火、餘妻(燼)な会意 火と又とに従う。灰をとる形。 はい カイ (クヮイ)

快

活・快適・快挙・快速などの義となる。

灰(灰) 快 戒 筝 改 攺

北 8 一季 11 そむく・せばね

届8【届】8 いたる・とどける

なり」、また「一に曰く、極なり」という。極とはをおくこと。〔説文〕ハ上に「行くこと便ならざるの前条に「墣は塊なり」とあって、屆は土塊中に屍の前条に「墣はり」とあり、そ「罠」という。」とあり、そ「産」

きを徹底的に取り締ることを要求する意である。ないことは、「お、小雅、小弁」に、「彼の舟流の 居るとこお [詩、小雅、小弁] に、「彼の舟流の 居るとこきを徹底的に取り締ることを要求する意である。な 民の心をして関ましめん。君子如し夷さば、悪怒と四方の喪乱を嘆く詩であるが、「君子如し屆むればな」とのやまぬ意である。また「小雅、節南山」は、 居まることなく究くることなし」とあり、 [詩、大雅、蕩] に「これ作(詛)ひこれ而 り」という。艐はその字形からみると、枉死者を乗 〔説文〕ハ下には「艐は船、沙に著きて行かざるな と便ならざるなり」とはおそらく。機字の義であろう。 極死、人を極所におしつめることをいう。「行くこ せて流す舟のようである。届は古い詩篇にみえ、 て行かざるなり」という艐と同義である。艐にソ をこれ違らん」というのも、為政者が決断して、不 役所などに文書を提出すること、また礼物を贈る意 意の字である。わが国では届を「届ける」とよみ、 屍を埋めること、 すなわち届は、 おそらく枉死のものを送る礼に関する字であろう。 が同声同義の字であったことが知られる。いずれも ウ・カイの両音があり、詩篇の時代には、届と艐と に用いる。 、大雅、蕩」に「これ作(詛)ひこれ祝ること 土中深く土塊に達するところにその 艐はこれを舟に乗せて流し棄てる 呪詛す

怪 8 あやしい

左右から手を加えている形の字があり、地霊を祀る字であるが、卜文に別に土主の上に野 お声 声符は至。圣は墾田を意味す

土主に対する儀礼を示す字であると思われる。〔説 文〕「○下に「怪は異しむなり」と訓し、地物の怪 文〕「○下に「怪は異しむなり」と訓し、地物の怪 水石の怪を竜・罔象、木の怪を夔、土の怪を強 水石の怪を竜・罔象、木の怪を夔、土の怪を強 であろう(挿図)。怪はもと地の怪異、すなわち地妖 をいう字で、のち転じてすべて異常なもの、異変を 生ずるものをいう。「層礼、関人」に「奇服怪民は 生ずるものをいう。「層礼、関人」に「奇服怪民は 生ずるものをいう。「層礼、関人」に「奇服怪民は としてしるされている異形の神々は、その類のもの としてしるされている異形の神々は、その類のもの としてしるされている異形の神々は、その類のもの としてしるされている異形の神々は、その類のもの さいう字で、のち転じてすべて異常なもの、異変を 生ずるものをいう。「層礼、につるの、とである。 をいう字で、のち怪を登力のように、すぐれた意にも用い た。のち怪像・怪力のように、すぐれた意にも用い るが、怪奇・怪

在の形に誤った 在の形に誤った

拐8 かたる

字である。

意となり、拐騙・誘拐のように用いる。には呪的な意味がある。のち拐帯の意より人を欺くんだ葦索で連ね、敵中に突入するものという。葦索

介8 からしな・あくた

毎9 易卦の外卦

形声 声符は舞(毎)。毎に海・町が、字がなおトに従うているのは、[易]の用語である終とする。射はその上体の名。[易]の用語であるが、字がなおトに従うているのは、[易]の窓法が、が、字がなおトに従うているのは、[易]の窓法が、が、字がなおトに従うているのは、[易]の窓法が、が、字がなおトに従うでいるのは、「易」の窓法が、が、字がなおトに従うでいるのは、「易」の用語であるが、字がなおトに従うているのは、「易」の用語である。 本に海・町であった。

廻 9 まわる (クヮイ)・エ(エ)

いてよい。回・迴・廻はみな声義の通ずる字である。に迴を正字とするが、周迴などには回をそのまま用所の廻廊などを意味する字であろう。〔康熙字典〕礼を行なう場所に関する字であるから、廻ももと聖と同字とされるが、ゑ部の字は廷・建など、みな儀形声 声符は血。この字は〔説文〕にみえず、迴形声

谷の「治」10 「卿] 11 カイ (クワイ

给 公的食品

形声 声符は言。「説文」の會(会)字条玉下に重文として袷をあげ、「古文會、此の如し」という。これが会合の会の字の初文、字はまた途・卿に作る。「保宙」「四方、王に造して大いに周に祀補するに遺ふ」(養野方、王の射に離す」とは会射の礼で、のちにいくを動力。「・「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射す」、「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射す」、「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射す」、「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射す、「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射す、「霊侯鼎」「王、林宴して乃ち射す。聖と卿射礼である。合は蓋のある食器で、もと器蓋の合うとことをいう字であるが、のち谷・迨のようの合することをいう字であるが、のち谷・迨のようの往来の意を加えて形声字とした。また卿はその両側に嚮いあって人の坐する形で、中の食器に会し、「世界」とは会射の礼で、のちに、という。

们 9 さまよう

竟に何事ぞ 徘徊ただ自ら知る」という句がある。 でたちもとほる」の訓がある。柳宗元の詩に「索莫」 「たちもとる」、また徘徊の字をあげて「たたすむ」 の「類聚名義抄」に徊をあげて「たたすむ」 を動詞化した字であるが、古い字書にはみえない。 を動詞化した字であるが、古い字書にはみえない。

恢 9 カイ (クヮイ)

悔り【悔】10 けいる・とが

洲。 金

下声 声符は舞(無)。毎に紙・海の声がある。 「詩、大雅、雲漢」に、上帝の怒りにふれることをおそれて、「明神を敬恭す 宜しく悔怒すること無かるべし」とあり、「毛伝」に「悔は恨なり」とその文をとる。 「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 る。 「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 る。 「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 る。 「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 を「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 を「説文」一〇下にも「悔恨なり」とその文をとる。 なこれで「論くは速やかに予が身に悔あらしめよ」と祈った話がみえる。 悔はすべて神から与えられるもの、天罰を意味する語である。これを「論語、為政」「言に尤等く、行に悔寒し」のように、自己の内面を省察する語に用いるのは、その転義である。 の内面を省察する語に用いるのは、その転義である。 原はずべいた。

カイ

なお過誤の意がある。

海 海10

よばいの礼に用いる〔楚辞、招魂〕にもみえる。地を晦冥の地とするもので、そのような観念は、魂晦に作る本があるという。中華に対して、四方の極 〔説文〕 二上に「天池なり。 南方には雕題黒歯、封狐雄虺、西方には流沙千里、代る代る出で、金を流し石を鑠かす」といい、またすなわち東方には「長人千仞」魂をこれ索む、十日すなわち東方には「長人千仞」魂をこれ索む、十日 第二十章「澹としてそれ海の若し」の〔釈文〕に、 海は晦。四極を晦冥の地とする観念による。〔老子〕 に「九夷八狄七戎六蠻、これを四海といふ」とあり、え、南極の大海である南溟をいう。〔爾雅、釈地〕 なり」という。天池の語は「荘子、 まで至ったことをしるすが、海眉は海湄、すなわち う。金文の「小臣聴設」に、東夷を伐って海眉に 赤螘玄蠭、北方には飛雪千里、一夫九首のものがい とは雲夢の地で、そこは当時なお晦冥の地であった。 人を執えて深淵に投ずる恐るべき地であるとい いう。〔詩、大雅、江漢〕の「南海に至る」 声符は毎(毎)。毎に晦・悔の声がある。 以て百川を納るるもの 逍遥遊』にみ

界。〔畍〕。 さかイい

篆を畍に作り、「境なり」という。〔繋ば形声 声符は介。〔説文〕一三下に正され

畫(画)であり、畫は田の四界に象るものとする公司の形で前後の分界があるもの。〔段注〕に介はなる。。 「段注」に介は伝〕に界を正字とし、紫碑にもみな界に作る。介は伝〕に界を正字とし、紫碑にもみな界に作る。介は 界石などをおいて榜示とした。金文の〔散氏盤〕に ち境界・限界の意に用いる。境界には封木し、また 盾の形であるから、田界のこととは関係がない。の ている。字はまた堺に作る。 は、古代における境界榜示の方法が詳しくしるされ が、畫の従うところは周(周)で、周は文様のある

疥。 ひふびょう

0

うのは、「紫と通じて、おこりをいう。「左伝〕昭二の皮膚病をいう。「広雅、釈詁〕に「病なり」とい文〕と下に「掻くなり」とあり、ひぜんなど伝染性文〕と下に「掻くなり」とあり、ひぜんなど伝染性 従うところは、床上の人の前後に疥癬(かさ)のあ形声 声符は介。介は介冑の象であるが、疥の に落書きして汚すことを、疥壁という。十年に「齊侯、疥す」とはその病のことである。壁 る形で、その形象の意味するところが異なる。〔説

皆 9 みカなイ

M 0 日

またその白とは自の一体であり、皆とは多数の人が の詞なり」とし、「比に從ひ、白に從ふ」という。 会意 比と曰とに従う。〔説文〕四上に「偕にする

> ことを示す字であった。〔広雅、釈言〕に「皆は嘉こと孔だ皆し」というように、皆は神意のあまねきをいう字である。〔詩、『詩』と、『韓文』に「福を降すをいう字である。〔詩、『寺』と、釈言〕に「福を降す り護ることを諧という。諧とは祈りの「諧ふ」こと偕とはその意であり、そのように多くの祖霊が来た 一人の霊が降る形。その二人並んで降るものが皆でいい、その霊を拝することを韻(稽)という。旨はい、その召きに対して神の降ることを旨(詣)ると禱や盟誓の器である。祝禱して神霊を招くを召とい禱や盟誓の器である。祝禱して神霊を招くを召とい える字形は、JJあるいは日に従うており、ともに祝口をそろえていう意とする。しかし金文や秦焜にみ う意である。のち善悪の区別なく、「書、湯誓」「予なり」とは諧の意をとるものであろうが、神意に諧なり」とは諧の意をとるものであろうが、神意に諧 _,ある。祖霊の降るものが複数であるのを、皆という。 す」のように用いる。 汝と皆に亡びん」、〔論語、微子〕「天下の惡、皆歸

陔 9 きざはし

郊祀志、上〕に「泰一(天を祀る祭壇)の壇は三陵 阿 だけを用いる。その字は闄と通用するが、闄には閉 ので、天子諸侯のときには鐘鼓、大夫士のときは鼓 とが終り、賓が快く酔うて退出するときに奏するも 篇は失われ、楽章のみを存していた。賓を饗するこ 「樂正、命じて陔を奏せしむ」とみえるが、その詩 また陔夏というものがあり、〔儀礼、郷射礼〕にかざいかい。字はまた垓・騣に作る。楽名に陔、なり」とあり、字はまた垓・髎に作る。楽名に陔、 「階次なり」と階段の意とする。〔漢書 形声 声符は亥。〔説文〕一四下

夫の礼が終るとき、鐘を用いる金奏として奏するが、 する意を寄せたものとされる。その曲は諸侯・卿大古く笙詩に〔南陔〕があり、孝子がその親を陔養蔵の意があって、送賓の曲とされるのであろう。ま とする訓と、関係があろう。 また送賓の曲である。亥に闄閉の意があり、陔も本

10 たわむれる

のときに、別音でよむ理由は明らかでないが、来母が付せん」、「小雅、十月之交」「悠々たる我が聖が何せん」、「小雅、十月之交」「悠々たる我が聖が本訓であろう。「詩、大雅、雲漢」「ここに里をおか本訓であろう。「詩、大雅、雲漢」「ここに里をとあり、「爾雅、釈詁」〔玉篇〕も同訓で里声。そのときに、別音でよむ理由は明らかでないが、来母は、とのときに、別音でよりでは、釈詁」〔玉篇〕も同訓で里声。そのときに、別音では、釈詁」〔玉篇〕も同訓で里声。その は、鬲(隔)・洛(冬里声の語頭子音に、・ 「説文」に収める里声の字九文のうち、 をもつものはない。また別に「一に曰く、病なり」 傳に「孔悝あり」という。苦回切の附音であるが、 (隔)・洛(各)・廉(兼)などと同様なので語頭子音に、古くkを含むものがあったこと 「蜩るるなり。心に從ひ、里聲。春秋 声符は里。「説文」一〇下に 他にその音

晐 あまねくてらすカイ

ね咳すなり」とあり、 声符は亥。〔説文〕七上に「兼 晐 歿 偕 日光の遍く照射 晦

悝

傭の本字なり。今の字は則ち該・賅行はれて、晐廢ttが、晐がその本字である。[段注]に「晐、これ晐 す」という。 の意となる。いま備具の意には該・販の字を用いるすることをいう。それよりして「備わる」「みな」

殁 おにやらい

関係があろう。折口説に卯杖を「ウツ・エ」とわけ「卯杖」「卯槌」の俗も、おそらく漢の大剛卯の俗と える。 てよみ、大剛卯との習俗的関係を否定しようとして 古代の被譲の儀礼の方法を示している。わが国の **毅と同じく蠱といわれる呪霊のある虫を殴つ形で、** 広さ一寸、方角の面に「庶疫 剛く癉み、我に敢て正月の卯の日に作って腰に佩びる呪飾で、長さ三寸、正月の卯の日に作って腰に佩びる呪飾で、長さ三寸、 〔顔師古注〕に「射魃とは大剛卯を謂ふなり」とみ『紫』:「射魃辟邪、群凶を除く」とあり、『寒』と『ないま』に「射魃辟邪、群凶を除く」とあり、『穀攺、大剛卯なり。以て精鬼を逐ふ」という。 當るものなし」など、四言の句数句をしるす。攺も 漢代の大剛卯はそのなごりである。〔説文〕三下に いるのは、正しい理解の方法ではないと思われる。 大剛卯は金石もしくは桃杖に文を刻して作る。 会意 す呪霊をもつ獣の形。これを殴って邪 亥と支とに従う。亥は祟をなが、 またり

偕山

「**禮**なり」 形声 「、うつま、「詩、小雅、北声符は皆。〔説文〕八上に

> る。〔左伝〕襄二年「福を降すこと孔だ偕し」とは、子、梁恵王、上〕に「民と偕に樂しむ」の語があの初義。〔詩、邶風、撃撃〕「子と偕に老いん」、〔孟の初義。〔詩、邶風、撃撃〕「子と偕に老いん」、〔孟らわれることで、ともにの意。偕は偕老・偕楽が字らわれることで、ともにの意。偕は偕老・偕楽が字 山〕「偕々たる士子」の〔毛伝〕「偕々は強壯なり」 広く及ぶことをいう。 ら、字の本義とはしがたい。皆は祖霊が相つれてあ とあるのによるが、それは連語の形況の語であるか

晦 くらい・つごもりカイ(クヮイ)

帙

号し、 形声 ないことを、韜晦・晦蔵という。宋の朱子は晦翁と暗愚の意となる。知徳をうちに包んで外にあらわさ 盛んなときであるから、兵法家はその日を避ける意 するに晦を違けず」とは、月の尽きる晦の日は陰のくみえる。成十六年「蠻は軍して陳(陣)せず。陳 現象が起ることがある。しかし〔春秋〕に月末を晦 晦を昼晦の義としている。地震のとき、そのような 廟に震す」とみえ、「公羊伝」「穀梁伝」にともに 字の本義は晦冥、昼にして日の光を失うことをいう 日の意とする。卜文・金文には晦朔の語はみえず、「説文」七上に「月盡くるなり」とあって、月の末 である。光を失うときであるから、晦闇の意となり、 としるすもの二、また〔左伝〕には晦日の用法が多 ものであろう。〔春秋〕僖十五年「己卯晦、夷伯の その学派を晦翁学派という。 声符は每(毎)。毎に海・悔の声がある。

加 11 かせ・からくり

塊 12 「褒」20 もののけ・おおきいさま

中心 食べ 形声 声符は鬼。鬼には他心 食べ 大なり」と訓し、「周礼、大司楽」「凡そ日八上に「偉なり」と訓し、「周礼、大司楽」「凡そ日八上に「偉なり」と訓し、「周礼、大司楽」「凡そ日月の食、四鎭五嶽の崩、大・傀異炭、諸侯の薨には果を去らしむ」の「鄭注」に、「傀はなほ怪のごと学を去らしむ」の「鄭注」に、「傀はなほ怪のごと学を去らしむ」の「鄭注」に、「傀はなほ怪のごと学を去らしむ」の「鄭注」に、「鬼心、諸侯の薨には学を去らしむ」の「鄭注」に、「龍はない声がある。「説文」の字形によると、衣に憑いた鬼霊を、珠をもって被いた鬼霊を、珠をもって被いた鬼霊を、珠をもって被いた鬼霊を、珠をもって被いた鬼霊を、珠をもって被いる。

用いるが、おそらく瓌の省文であろう。で祓いおとすことをいう。瑰は玟瑰のような玉名にで祓いおとすことをいう。瑰は玟瑰のような玉名には、に、といっ。とないない。までない。原代を示す傀異の字、瓌・瑰はその憑きものを玉は、いっない。はは人に鬼の憑はした状態をいう字であろう。

火 12 くちばし・くるしむ

大変の あり」とし象声とする。象に強・痰の 声がある。鳥の味や獣口をいう。「くるしむ」の意 は、〔詩、大雅、縣〕に「混夷(澱沈) 脱たり(走 るさま) これそれ家めり」とその敗走するさまと は、〔詩、大雅、縣〕に「混夷(澱沈) 脱たり(走 るさま) これそれ家めり」とその敗走するさまを は、〔詩、大雅、縣〕に「混夷(澱沈) 脱たり(走 るがの義に用いるもので、その字はまた疹に作る。 の義である。強・痰はいずれも喙と同音であるから、 に「部」の喙は、發・痰の仮借であり、象にその声があるとしなければならぬ。また嘘の音でよみ、息づかいの急なことをいう。〔方言〕に「關よりして西、 を育の間、或いは喙といふ」とあって、古語にみえる る房・痰の用義が、漢代にもなお残っていたことが 知られる。なお〔説文〕にみえる象声の字は、すべて定母の音である。

堺 12 カイ

慣用上の区別がある。〔類繁名義抄〕に界・堺の両であるが、わが国では地名などに用いては地名などに用いいます。果の繁文で同じ字

抄」に「堺ふ」という動詞の用法がある。 くから堺を界の意に用いている。また〔色葉字類紀、景行紀〕に「封堺」の語があり、わが国では早年のが、場合は、塚字条に「俗界」とする。〔日本書字を別に録し、堺字条に「俗界」とする。〔日本書

12 古代の楽章の名

下声 声符は戒。〔説文〕」上に「宗文を引く。笙師は学・笙をもって臧楽を教える。そ文を引く。笙師は学・笙をもって臧楽を教える。その楽をまた臧夏といい、陔夏ともいう。別に〔周礼、ケ司馬〕に賦という鼓楽があり、軍礼に用いる。戒は両手で艾を奉ずる形であるから、臧・駴はもと武は両手で艾を奉ずる形であるから、臧・駴はもと武は両手で艾を奉ずる形であるから、臧・」のと思われる。

絵 12 「鱠」 9 カイ (クヮイ)・エ (エ)

形声 声符は会(會)。[説文] ニミ を(能)、五色の刺繍による絵模様をいう。天子の衣裳にり、五色の刺繍による絵模様をいう。天子の衣裳には〔書、皋陶謨〕に「日・月・星・辰・山・龍・建・蟲もて繒を作す」とあり、五彩十二章であった。のち彩色の絵をいい、[論語、八佾]に「繒事は表で後にす」とあり、白粉をもってしあげる。絵・画はいま同義に用いるが、絵は繍文や帛画、画(書)はもと形文のある楯の象で、刻画(劃)したものをいう。絵像は画像、肖像画をいう。

開 12 ひらく

階 12 カイ

進 3 カイ (クヮイ)・ワイ

(ない) に乗・大などの義がある。歴史・歴銭は為替、を影螽と爲す」とあり、諸水の注ぐところをいう。を影螽と爲す」とあり、諸水の注ぐところを叱う。を影螽と爲す」とあり、諸水の注ぐところを叱う。を影螽と爲す」とあり、諸水の注ぐところを叱う。を影螽と爲す」とあり、諸水の注ぐところを叱う。

塊(占)

嵬

楷

解詼

塊 13 [出] 5 つちくれ

見 3 カイ (クヮイ)・キ

連文。〔聯縣字典〕に同系の語十四例をあげている。 連文。〔聯縣字典〕に同系の語十四例をあげている。 をいう。〔説文〕丸上に「高くして平らかならざるなり」とあり、〔詩、周南、巻耳〕「彼の崔 嵬に) れば 吾が馬虺 隤たり」の〔毛伝〕に、「崔嵬は、 れば 吾が馬虺 隤たり」の〔毛伝〕に、「崔嵬は、 れば 石の土を戴するものなり」といい、〔爾雅、釈山〕 には「石の土を戴するもの」とする。崔嵬は畳韻の状

**13 木の名・かた・かいしょ

附会したもの。それは周公家上に模樹多しというものであるという。孔子の没したとき、弟子たちがものであるという。孔子の没したとき、弟子たちがものであるという。孔子の没したとき、弟子たちがものであるという。孔子の没したとき、弟子たちがものであるという。孔子の没したとう、弟子に「木とり」とあり、孔子の家堂に樹うるという。

ろう。字形について正字というのと同例である。とあるのは、楷式の仮借である。皆は多くの霊が相伴うて降下する意で諧和の意があり、それより楷式の意となる。これを書体の名に用いるのも、省体やの意となる。これを書体の名に用いるのも、省体やの意となる。これを書体の名に用いるのも、省体やの意となる。これを書体の名に用いるのも、省体やの意となる。とれを書体の名に用いるのも、省体やのと同例の話である。楷には楷式の義があり、「私のと同例の話である。楷には楷式の義があり、「私のと同例の話である。楷には楷式の義があり、「私のと同例の話である。

解 13 とく ゲ

会意 角と刀と牛とに従う。刀で牛角を解く形で、 「説文」四下に「判つなり」という。引伸して獣体を解く意となり、「荘子、養生主」に「庖丁、文恵君の為に牛を解く」という有名な文章がある。それより紛乱・疑問・鬱積を解くことをいう。浄付して戦体を以て獣屍(睪)を解くことで、解釈とは庖丁が牛を以て獣屍(睪)を解くように獣屍をさばくことである。

| 13 カイ(クヮイ)

鬼 3 けわしい・たかい

形声 声符は鬼。〔説文〕一四下に「唯味なり」という。あり、また前条の唯に「唯隗、高きなり」という。古く隗姓の国があった。隗は単なる形況の語でなく、本義のある字と思われる。隈・隅なども鬼形に従う字で、水曲や山隅の聖所をいう。隗も神梯に従う字であり、もと磐座のようなけわしい聖所をいう字であり、もと磐座のようなけわしい聖所をいう字であり、もと磐座のようなけわしい聖所をいう字であり、もと磐座のようなけわしい聖所をいう字であったと思われる。

乳 14 カイ・ガイ

形声 声符は既(既)。既は食し終 ・でくなり」として、食器にそむいて気を洩らしている形で、人の概く形に似ている。〔説文〕ニ上にてそれ嘆く」の句を引く。既の声義を承け、悲嘆してそれ嘆く」の句を引く。既の声義を承け、悲嘆の気を洩らすことをいう。その第二章の末句に「人の気を洩らすことをいう。その第二章の末句に「人の気を洩らすことをいう。その詩は夫に死別した嘆きを歌うものである。

14 けものをきょせいする

みな去勢の意、獣畜によってその字を異にする。 馬で、また馬ともいう。犍・騬・舞・猿・猗・駮に (説文) 二上に「騬牛なり」とあり、騬は去勢した 乗があり、犗とは去勢した牛をいう。 をいう。著に割去の

> りうま」という熟しない語を用いる。 がなく、獣のときにも「きんきりうし」「きんき がなく、獣のときにも「きんきりうし」「きんき がなく、獣のときにも「きんきりうし」「きんき のがなく、獣のときにも「きんきりうし」「きんき ないは縊って去勢する。人に施すときは腐 いる。

14 かイ

ともいう。

形声 声符はが、**は上とを成といい、他を戒めることを誠という。〔説文〕三上にい、他を戒めることを誠という。〔説文〕三上にい、他を戒めることを誠という。

お 14 おしえる

事 整 新工作

燕

字の原義であろう。

1 おおきなしゃく・さきがけ・すぐれる

門界

る。古くは木偶を用いたものであろう。神ががのを狂おすとする信仰があった話を伝えてい

僧 15 なかがい

慣 15 みだれる

形声 声符は貴。「説文」一〇下には、微・微・微など、潰乱の意をもつものが多い。に、微・微・微など、潰乱の意をもつものが多い。て世俗の禮を爲さんや」の語があり、「釈文」にて世俗の禮を爲さんや」の語があり、「釈文」にてはない。

潰 5 かイ (クヮイ)

公家の急激な衰微のさまを歌い、「我この邦を相る」は、と訓し、「段注」に屋根漏りの意とするが、水の決演するをいう語である。そのような状態で、ものが、次するをいう語である。そのような状態で、ものが、と訓し、「段注」に屋根漏りの意とするが、水の決している。「説文」一上に「漏るるなり」といる。

憒

潰

艐噦

壊〔壞〕

般 15 いたる

(大人の賦)に仙遊の状を述べて「料蓼(綾)」とし、吳声とする。〔爾雅、釈詁〕や〔方言〕には「至るなり」として人の賦〕に仙遊の状を述べて「料蓼(綾)」で、機の音は居」、「孫炎注」に古の界字で、機が届と声義同じとすれば、これは屍体を舟にで、機が届と声義同じとすれば、これは屍体を舟にで、機が届と声義同じとすれば、これは屍体を舟にで、機が届と声義同じとすれば、これは屍体を舟にで、機が届と声義同じとすれば、これは屍体を舟に、農が上で、大の東京であろう。となられ、機とは舟に載せて流し棄てるが、上部が凶に従うのは任死者の象とみられ、機とは舟に載せて流し棄てるか。「本」「小雅、鼓鍾」などは、水葬のことを歌うものにあたる。「鄘風、柏舟」も、あるいはその俗を歌うものかもしれない。

売 16 すずのね・えずく カイ(クヮイ)・ケイ・エツ(エツ)

壊 16 【壞】19 やぶれる

寒 料 新 。 集

するときの礼を壊という。ただ字形から考えられるするときの礼を壊という。ただ字形から考えられる。その第一字は深と土、すなわち土主に深(涕・涙)をそそぐ形であるから、土主に対する儀礼と思われる。たとえばその地を大去するとき、その社を壊つなどたとえばその地を大去するとき、その社を壊つなどで、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっていえば、壊とは、で、死別の礼である。これをもっている。その社を壊り、その地を大去するときの礼を壊という。ただ字形から考えられるするときの礼を壊という。ただ字形から考えられるするときの礼を壊という。ただ字形を考えられる。

「禮必ず壞れん」というが、壊とはもと敗壊の儀礼 をいう字である。 測を試みることは可能である。〔論語、陽貨〕に残されている古代的儀礼の全体から、このような推 このような古い呪儀の例を、のちの文献に徴するこ とは困難であるが、土地や道路関係の字形のうちに

解

みえる。 [文選、劉注]に「官物を藏するを公廨といふ」とませた。とう。 軍営であることに対して、廨署とは役所をいう。 賦」に「營屯櫛比し、 公解なり 營屯櫛比し、廨署棊布す」とあり、営屯がり」とあり、公舎をいう。班固の〔呉都のり」とあり、公舎をいう。班固の〔呉都の声符は解。〔説文〕にみえず、〔玉篇〕に声行は解。

解 おこたる

0 3

懈倦の状態をいう。それより懈怠・懈慢の意となる。

懐 [懷] 19 おもう・いだく・なつくカイ(クヮイ)

人部

旧字は懷に作り、褱声。寰は死者の胸もと

文〕八上に竅を俠の義とし、「衣に從ひ、衆聲、一「神姿」などの語があり、みな懐の意である。〔説 神意を柔らげることである。 人を恋うる意、「周頌、時邁」「百神を懐柔す」は、「詩、召南、野有死醫」「女あり春を懐ふ」は懐春で「詩、召南、歩きにき、 懐は死者を懐念する意より、わが心に懐うこと、あ に曰く、橐なり」とするが、声義ともに合わない。 を示す字で、懐の初文。金文に「率っ」「嵏刑」に眾(涙)を垂れて、その死を哀惜する喪葬の儀礼 る情念・情操を心に懐抱し、懐蔵することをいう。

獪 わるがしこいカイ(クヮイ)・カツ(クヮツ)

頼といい、缪という。狡獪・狡猾も同義の語である。〔方言〕によると、獪は秦晋の語、江湘の間では無いた。 (清空) (1952) 一〇 北声 声符は會(会)。〔説文〕一〇 北声 声符は會(会)。〔説文〕一〇

獬 神判に用いる獣の名

た「論衡、是応」に、「解豸は一角の羊なり。性、則ち不正を咋ふ。名づけて獬豸といふ」とみえ、まりち不正を咋ふ。名づけて獬豸といふ」とみえ、まりなど。 罪あるものを識る。皋陶(古の理官)獄を治めしと [神異経]に「東北荒中に獸あり。 は鹿に類するとも、また羊・熊に似るともいう。 れしむ」とあって、この獣を神判に用いた。その形 に似て一角。古は訟を決するに、不直なるものに觸 形声 に獬を収めず、 収めず、廌字条一〇上に「解廌獸なり。山牛声符は解。獬豸、また獬廌という。〔説文〕 人の闘ふを見る

> に象る法冠を用い、これを解る冠といった。神判に から って断罪したことがみえる。古代の法官は、その獣 含んでいる。 敗れたものを廃棄する字が灋(法)、勝訴したもの の解廌に文飾を加える字が慶で、ともに廌の字形を き、罪あるものには羊をしてこれに觸れしむ」とい

褢 ・ かだく・そで カイ (クヮイ)

惠 。

会意 呪玉を瓌(傀)という。 造法であり、鬼の馮りつく意であろう。これを破うものであろうが、衣中に鬼を加えるのは会意字の構 というのは、字を鬼声にして、大の義があるとする 衣と鬼とに従う。〔説文〕ハ上に「袖なり」

裵 いだく・おもうカイ(クヮイ)

恋 0 偷偷

、要など、みな同じような構造法をとり、いずれもいまた「炊なり」とするも、「段注」に夾のおい。また「炊なり」とするも、「段注」に夾のおい。また「炊なり」とするも、「段注」に夾のおい。また「炊なり」とするも、「段注」に夾のをそそぐ形。〔説文〕ハ上に眾声とするが、音が合をそそぐ形。〔説文〕ハ上に眾声とするが、音が合 会意 衣と眾とに従う。死者の胸もとに眾(涙)

が多い。 字には、その儀礼のありかたをあらわしているもの 鎮魂・受霊の儀礼を示すものが多く、衣に従う会意 喪葬に関する字である。古代には衣をもって招魂・

諧 16 ととのう・あう・やわらぐカイ

いう。〔荘子、逍遥遊〕「齊諧なるものは、怪を志語であるから、意味のよく知られないふしぎな語を語であるから、意味のよく知られないふしぎな語を 諧ふ」、「周礼、wand」「萬民の難を司りて、これを「克く諧らぐるに孝を以てす」、「舜典」「八音克く」、「舜典」「八音克く」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、「宋」、 謔の語も、 語をよくして武帝の寵をえた人であるが、俳諧・諧 であろう。漢の東方朔は「口諧辭給」、いわゆる諧すものなり」とは、斉の国の神怪の説をしるすものす 神霊を安んずることをいう語であった。神に対する 諧和することを掌る」のように用いるが、本来は ことをいう。それで和諧の意となる。〔書、尭典〕
祈り、神霊が相伴うてたちあらわれる もとは呪語に関するものであった。 声符は皆。皆は祝禱して神に

檜 17 ひのきかイ(クヮイ)

皮を檜皮という。檜は火を切る木の意であろうとさとすべた」とみえる。古くはただ檜といい、その樹とすべし」とみえる。古くはただ檜といい、その樹 ある。〔神代紀、上〕に「檜は以て瑞宮を爲るの材 木。樹皮は屋根を葺くのに用い、木は建築の良材で 形声 声符は會(会)。〔説文〕六上

カイ に「柏葉松身」とあり、松科の常緑喬 諧 檜 膾 薤(雞) 逾 醢 聵

17 なますクライ)

という。 作ることがある。〔論語、郷ではこに「膾は細きを厭 あったので、だれもが知ることを「人口に膾炙す」 はず」とみえる。料理には膾と炙とが最も普通で 「釈 名、釈飲食〕に、その肉を会合して味つけする ので膾というとする。魚を用いるときは、鱠の字に に「細く切りたる肉なり」とあり、形声 声符は會(会)。〔説文〕四下 声符は會 (会)。 〔説文〕四下

薤"[黛]3 おおにら

という。 かき (屍骨の形) を棄てるところをいう。 古楽府曲で高 (屍骨の形) を棄てるところをいう。 古楽府曲で あるが、漢魏のころには宴飲の席でもよく歌われた る。挽歌に〔薤露〕〔蒿里〕の二曲があり、蒿とはその一部のみを存している。いわゆる省声の字であ 形声 他の部分が声であるが、薤の字形には 正字は丘。韭がにらの象形で、

澶 17 めぐる・あうカイ(クヮイ)

• 稳 心 一种

形声 を用いるべきであるが、会を借用することもあり、 会は調理用の器名であるから、会合の意にはこの適 生(姓)を蘇瓊(和会)す」と、この字を用いる。みえるが、用例はない。戦国期の〔沈児鐘〕に「百みえるが、用例はない。戦国期の〔沈児鐘〕に「百 声符は會(会)。〔玉篇〕に「迊るなり」と

> の字は最も古くは卿・益に作り、列国期に潼に作る 符に「會符」「王符に會す」などの語がある。会合 「麋 羌 鐘」に「先んじて平陰に會す」、また秦の虎 が、のちみな廃して、会のみが行なわれている。

醢 しおから・ししびしおカイ

が、〔礼記、檀弓、上〕にみえている。に家人に命じて、すべての醢を棄てさせたという話 没し、その肉が醢にされたと聞いて、孔子はただち 。
臨にすることがあった。孔門の子路が衛の内乱で 形で、会意字である。春秋のころ、怨家を殺して 審文の字形は肉と塩鹵とを器中に入れて蓋蔵する に表する 醬なり」とし瘟声とするも、 〔説文〕 一四下に 「肉

繢 18 おりあまり・いろどる・あやぎぬカイ(クヮイ)

にして結ぶこと、いわゆる純縁である。 文〕一三上に「織餘なり」とは、織余のところを総裁あり、布の縁どりに綵色で飾り織りをつけた。〔説 〔漢書、食貨志、下〕に「縁するに纜を以てす」と(変)。 色してなるもの、續は色糸で織りあげたものをいう。 形声 ある。繪(絵)と声義が近く、絵は彩 声符は貴。貴に潰・憤の声が

瞶 18 みみきこえず

同系の語で、 桐 崩潰の意を含む。「国語、 情の声がある。聵は潰・憒と 形声 声符は貴。貴に潰・ 声符は貴。貴に潰

なり」とし、蔽と耳に従う或る体の字をあげている。職々とは無知の状をいう。〔説文〕二上に「職は聾「聾聵には聽かしむべからず」とあり、聵は聾、

圏 18 からく・たのしむ

| お声 | 声符は豊。 **は数の形で慢し| に設文] | 二上に「開くなり」とあるも、「方言」によるとそれば楚地の方言である。豊・愷・凱・閩は、先祖を楽しませるゆえんである。〔毛詩」に多く見える「豊弟の君子」を、「韓詩」に「陽弟」に「なり」とある。〔毛詩」に多く見える「豊弟の君子」を、「韓詩」に「毘蟲闘懌す」にりなった。また司馬相如の〔封禅文〕に「毘蟲闘懌す」という語があり、生きとし生けるものみな喜ぶ意でという語があり、生きとし生けるものみな喜ぶ意である。

219 きのみちるさま

を語である。大気や水声などを形容するものには、 を語である。大気や水声などを形容するものには、 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 て、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的 で、長生をうることをいう。双声の連文で、擬声的には、

19 羽音 (クヮイ)

淵。

形声 声符は歳 (歳)。歳に噦・濊の声がある。

であろうと思われる。

「詩、大雅、然阿」は、わが国の方野仙遊のように、がいっせいに飛ぶ羽音の擬声語である。その下章にがいっせいに飛ぶ羽音の擬声語である。その下章にがいっせいに飛ぶ羽音の擬声語である。 劇風は別像上の瑞鳥であるから、それは下章にみえる梧桐ともに、わが国でいう山車飾りの類を歌ったものとともに、わが国でいう山車飾りの類を歌ったものであろうと思われる。

蟹19

瓌 20 「瑰」」4 たま・すぐれる・めずらしい

現代 形声 声符は衰。〔説文〕一下に字を現代 現に作り、鬼声。「斑・破・球をり」とし、「一に曰く、関好なり」という。攻塊は火斉ともいわれ、雲母のように重層ある黄赤色の玉である。 壊がれた徳をたとえていう。 壊貨・壊宝は器物、壊姿・ぐれた徳をたとえていう。 壊貨・壊宝は器物、壊姿・でれた徳をたとえていう。 壊しいう。 び塊は火斉ともいう。 関好なり」とし、「だいった」を対していることをいう。

ガイ

刈 4 【乂】2 かる・おさめる

XS

外 5 だと・よそ・はずれる

Ph Ph Ph Sh

ものとする。ト辞にみえる殷王の名にト丙・ト壬とるは外なり」、すなわちト事の定時をはずしているるは外なり」、すなわちト事の定時をはずしているから、夕と下とに従う。[説文]七上に「遠きなり、会意 夕と下とに従う。[説文]七上に「遠きなり

女 6 が(十二支のゐ)

うる ブイマ

象形 獣の形に象る。[左伝] 実ニ十年に「大月、 の天がなから解した俗説にすぎない。[説文] 一四下に「十月、 の表が終り、次に子にはじまる循環の意を含めたもの変が終り、次に子にはじまる循環の意を含めたもの変が終り、次に子にはじまる循環の意を含めたもの変が終り、次に子にはじまる循環の意を含めたもの変が終り、次に子にはじまる循環の意を含めたものであろう。歌まるよう。なながした犠牲の形で、愛敬の憂はその形に従う。なな殺した犠牲の形で、愛敬の憂はその形に従う。 は変殺した犠牲の形で、愛敬の憂はその形に従う。 は変殺した犠牲の形で、愛敬の憂はその形に従う。 は変殺した犠牲の形で、愛敬の憂はその形に従う。

女 6 よもぎ・もぐさ・やしなう

刻 8 せめる・しらべる

し、亥声の字とする。力は耒の象形であるから、こぶ燗 『辜あるものを灋(法)するなり」とぶ燗 形声 声符は亥。〔説文〕 | 三下に

の字の意符としがたく、この字形には誤りがあろう。
「きずん」に「背がを禁門し、罪人を効す」とあり、「顔師古注」に「罪あるときは則ち案を擧ぐ」、いわゆる告発の手続きをとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きをとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きをとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きをとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きなとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きなとる意とするが、劾は漢以いわゆる告発の手続きなところ、要路の弾圧を受け、活動に、文を対とし、教を勃とし、交を別とて去る」とあり、注に「自らその劾狀を投じて去る」とあり、注に「自らその劾狀を投じて去る」とあり、注に「自らその劾狀を投じて去る」とあり、注に「自らその劾狀を投じて去る」とあり、注に「自らその劾狀を投じて去るなり」とみた、自己弾劾して職を辞することをいう。字の構造え、自己弾劾して職を辞することをいう。字の構造え、自己弾劾して職を辞することをいう。字の構造え、自己弾劾して職を辞することをいう。字の構造え、自己弾劾して職を辞することをいう。字の構造を鳴いまである。議政壇場などでしばしば弾劾のことが行なを勇力の意符としがたく、この字形には誤りがあろう。との字がは、なを功とし、対を対して表を鳴らせて邪霊を長れさせ、被う呪儀、効もまた殺で、別を対してなる。弾とは引きなを鳴らせて邪霊を長れさせ、被う呪儀、効もまた殺で、別を対してなされる被、譲かれるが、それはもと魔物に対してなされる被、譲れてある。

屋 8 がけ・きし・はて

邊なり」とし、形声とする。圭は土層形声 声符は圭。〔説文〕ヵ下に「山

厓

ガイ 咳 孩 害[害] 欬 豈 崖

こは神を迎え、神に接するところとされた。るものとしてよい。山の辺崖、また水涯をいう。そのあらわれている形とも解しうるが、圭の声義をと

「**火** 9 が兄の笑う声・せき

形声 声符は変。〔説文〕 には、かり、また小児をあやす声をいう擬声語。幼児のことを幼咳・咳嬰という。咳唾はせきとしわぶき。とを幼咳・咳嬰という。咳唾はせきとしわぶき。とを幼咳・咳嬰という。咳・はせきとしわぶき。のによる。のち片言隻語もみな珠玉の文をなすこと、のによる。のち片言隻語もみな珠玉の文をなすこと、のによる。のち片言隻語もみな珠玉の文をなすこと、のによる。のち片言隻語もみな珠玉の文をなすこと、

孩の あかご・おさない

で歩く子をいう。 で歩く子をいう。

害 10 【害】10 そこなう・わざわい

周 生野母

かに祈願や盟誓の文を入れる。その祝禱の器である刺割する器。下部の口は祝禱を収める器で、このな気を 字の上部は把手のある大きな針で、ものを

とを意味するものに舎・害・呑・満などがある。文吾・歳々・**・・『かなどがあり、これを妨げるこ要であった。その守ることを意味するものに書き、要であった。その守ることを意味するものに書きり、これを妨げるためにはこれを毀害することが必り、これを妨げるためにはこれを毀害することが必 れ自身が言霊的な呪能をもつものであるから、 ことは明らかである。祝禱の祝詞や呪文の類は、そ 意とするが、卜文・金文の舎・害の字形をみれば、 家より起るなり」と、争いごとは家の内部から起る り」と訓し、字を宀・口に従うものとして、「言、がたい形となっている。〔説文〕七下に「傷くるながたい形となっている。〔説文〕七下に「夢っ 能を喪失させるものであるから、これを害という。 すべて仮借である。 に「害む」とよむのは包の仮借。疑問副詞の用法も、 害・害悪・害毒・災害・損害などの意となる。金文 られた。害は祝禱を害する意で、それより阻害・禍を、その形象のうちに定着することを目的として作 字にも呪能があるとされ、文字はことばのもつ呪能 を成就させるためにはこれを守ることが必要であ 上部が刺割の器であり、下部が祝禱の器の形である Dを、大きな針で貫き害するのは、器中の祝禱の呪 いまの常用字形は針の先端を止めており、 Dを害し これ

一女 10 おくび・せき・さざめく

「その側に謦欬す」とあるように、気楽に談笑するでいた。「対气なり」とみえる。咳と同じく、謦欬・然下に「対气なり」とみえる。咳と同じく、謦欬・然れに「労气なり」とみえる。咳と同じく、謦欬・然れる。「説文」ハ

うるのである。のち貴人に接見する意に用いるが、そことをいう。のち貴人に接見する意に用いるが、そ

当日 10 がちどき・あに

崖 11 がけ・きし・きわだつ

らざる、これを寛といふ」とみえる。崖異とは孤独あるところである。〔荘子、天地〕に「行、崖異なあるところである。〔荘子、天地〕に「行、崖異なあるところである。〔荘子、字を圭声とするが、厓は辺圧。

崖岸といい、その傲るものを傲岸という。 ***** に振舞うこと。人とみだりに妥協しない変屈の男を、

涯 11 ガイ

う。涯・崖は多く聖所の存するところであった。に「水邊なり」とあり、山には崖とい脈声 声符は尾。〔説文新附〕二上

慢 13

たのしむ・かちどき

ところである。

人のうわさ話を街談巷語という。小説家者流のとるに在り」とあって、その道は四方に通じていた。世

「史記、貨殖伝」に「洛陽の街居は、齊秦楚趙の中の街」の名がみえ、渠公は斉の富人の名である。

12 かちどき・たのしむ

慨

(骶)14

なガ げく

形声

いて、

顧みておくびをする形。その姿

声符は既(既)。既は食に飽

た愷・凱に作る。

五上に「愷は康しむなり」、また心部一〇下にも重出ず」と、愷をその字に用いている。〔説文〕は豈部ず」と、愷をその字に用いている。〔説文〕は豈部

[周礼、大司馬] に「愷樂して社に獻

声符は豊。豊は凱旋の軍楽。

して「樂しむなり」という。豊弟・豈楽の字は、ま

9 12 おおきなかま・きる・ちかい

有 12 よっまたのみち・まち

の名をとることが多く、〔荘子、徐无鬼〕に「渠公いう。圭は土版で、区画の意がある。荷衢には勢家いう。圭は土版で、区画の意がある。荷衢には勢家をは土地で、とあり、交叉する道路をでいる。

13 ガイ 13 ガイ 15 カイ

紀〕に「慨哉」を「うれたきかや」と訓している。「壯士志を得ざるなり」と慷慨の意とする。〔神武前する。〔説文〕一〇下に「惊慨するなり」と訓し、する。〔説文〕一〇下に「ながた

をまなじりをいう。 「目際なり」とあり、まなじりの意。 世を決するのは怒るさまであるから、「睚眥の怨」 という。此には細く鋭いとごろの意があり、眥もま を決するのは怒るさまであるから、「睚眥の怨」 とあり、まなじりの意。

| 13 | 軍中の約・そなえる

下声 声符は変。〔説文〕三上に「軍中の約なり」というが、その用義例がない。古楽の陔夏をまた械夏に作る例からいえば、変い。古楽の陔夏をまた械夏に作る例からいえば、変〕三上に「讀みて心中滿該の如くす」の満該とは、十分に満足する意。また兼ね備わる意に用い、該件・該博・該洽のようにいう。「販・暖の通用の義である。

13 たる

漑 4 そそぐ・すすぐ

が嘆くさまに似ているので、心を加えて慨嘆の意と

糊。那

金鹮に群がん」とみえる。のち灌漑の意に用いるのを漑ぎ濯う意である。「檜風、匪風」にも「これがを漑ぎ濯う意である。「檜風、匪風」にも「これがを漑ぎ濯う意である。「檜風、匪風」にも「これがない。「京である。「檜風、鹿風」にも「これがない。「京である。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声がある。「説の声が表している。」

涯

凱

は、その転義である。

14 (概)15 とかき・おおむね・あらまガイ

感概の字は、慨の仮借である。 概・節概・勝概など、人物や風景についても 要・概括のように、あらましの意に用いるほか、気 いう。すなわちとかき。篆文の字形は槩に作る。概 を平らかにして量るもので、量概を 声符は既(旣)。 斗斛(ます)

蓋14 おおう・ふた・けだしガイ・コウ(カフ)

常

けっとあり、疑問の存するところを保留することを「蓋とあり、疑問の存するところを保留することを「蓋 いう。それで覆う意となる。また車蓋は車上に樹て苫蓋を被る」とあり、ちがやの類で屋を蓋うことをざる。 またいで、こという。「左伝」襄十四年「乃の祖吾難、「苦なり」という。「左伝」襄十四年「乃の祖吾難、「苦なり」という。「乾文」一下にら、その声義を承ける字である。「説文」一下に する用法である。 闕の義に從う」という。「なんぞ」は曷と声の通用 の意。転じて発語、推測の語となる。〔論語、子路〕正月〕「山をば蓋し卑しといふ」とは、「山をすら」 正月」「山をば蓋し卑しといふ」とは、「山をす 意に用いる。また抑揚の語として用い、〔詩、 て近よるので、傾蓋という。のち一見して相親しむ る傘。途上で相逢うて語るとき、互いに車蓋を傾け その知らざる所においては、蓋し闕如たり」 声符は蓋。蓋は器物に蓋をする形であるか 小雅、

> 14 とをしめる・とどめるガイ

> > 16

むくろ・はぎぼねガイ

ない。 示すものであるかも知れない。金文に翼の字があり、 三豕を用いているが、その字は人名の他には用例が 牲を埋めて厭勝(まじない)とする抑止の儀礼をものをふさぎとめる意に用いるが、それは門基に犠 駲 形声 声符は亥。〔説文〕一二上に

皚 15 しガイ ろい

뚎 皚々という。 また冰と豈とに従う字形がある。 雪の白きなり」という。その字は雨、形声 声符は豈。〔説文〕七下に「霜 声符は豈。〔説文〕七下に「霜 霜雪の白いさまを

磑 15 いしうす

いさまをいう。 形声 皚と通用し、磑々は高いさま、また白 声符は豈。いしうすをいう。

駭 おどろく

輛 駭くなり」とみえる。引伸して人の駭愕・驚駭す 「驚くなり」とあり、前条の驚に「馬、 「驚くなり」とあり、前条の驚に「馬、 ることをいう。 形声 声符は亥。 〔説文〕 一〇上に

超 致仕して老後の自由を求めることをいう。 その声義を承け、骸骨をいう。「骸骨を乞う」 はガ しる 骨なり」とする。亥は獣屍の象、骸は 声符は亥。〔説文〕四下に「脛 とは、

鴪

騃 ある。趙は豳師の冢司馬を命ぜられている軍官であるが、用例はない。西周中期の金文に〔趙設〕がるが、用例はない。西周中期の金文に〔趙設〕が形声 声符は豊。〔玉篇〕に「走るなり」と訓す形声 る。趞の字形は、軍楽に関するものかも知れない。 おろかが・チ

あり、 八上人部に「佁は癡なる皃。讀みて駿の若くす」とをなる。ない。これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、一次には、一次には、一次には、一次には、一次には、一次には、一次には、 もとその音を用いたのであろう。 形声 声符は矣であるが、 ガイの音

鎧 18 よガイ ろい

た。 「古には甲といひ、漢人は鎧といふ」とするが、「造には」の語がある。「周礼、司甲」の「鄭注」ではない。「韓非子、五蠹」という。「韓非子、五蠹」という。「韓非子、五蠹」という。「韓非子、五蠹」という。 秦にすでにその語がある。 形声 声符は豊。 〔説文〕

19 碍] さまたげる

各す」、また〔秦公鐘〕に「以て邵客孝享す」とあて、周鐘〕に「用て丕いに願かなる皇考先王を邵子を持ち、また。

零に作る。また神事のために聖所に赴くことを各と るものは、みなその意。各はまた格・洛・格・客・

障一碗の意を示したものであろう。字はまた碍に作 意がある。それで石によってさえぎられること、 ることがある。 人の立ちつくす形であるから、止まって進退しない 形声 むるなり」という。疑は凝然として形声 声符は疑。〔説文〕九下に「トト

カク

各6 いカ たる • おの おの

ব A

番

を降下する人の形に作るものは召、それを拝するの で止むるも聴かず、「おのおの」勝手なことをいう 祈りによって神霊が下り来ること、すなわち「各祝禱を収める器の形で、祝詞で祈ることをあらわす。 とをいうのが字の初義である。 義とするが、各自はのちの転義。神霊の来格するこ をとがある。〔説文〕『上に「異詞なり」と訓し、口とがある。〔説文〕『上に「異詞なり」と訓し、口 る」が字の原義。ト文・金文では狢・狢を用いるこ を 卲 という。それで神霊を招くことを卲 各という。 りてくる形で、神霊の下降することを示し、口はJv、会意 欠と口とに従う。夂は上より夂(足)が降 夕のみでなく、上部

のを各と

下るを、** の例があるが、後起の義であろう。神霊の相伴うて

また各自の義となったものであろ

角 7 つカのク・・ ・
す
み
・ あらそう

A

各

角

拡〔擴〕

たが行なわれており、そのことを許慎が指摘していみな角の形にしるしている。当時そのような書きか 漢碑の〔曹全碑〕〔景北海銘〕などの鰥の字の魚を、と、篆文の字形の誤り易いことを注意しているが、と、篆文の字形の誤り易いことを注意しているが、 象形」 は相争うためのも り、青銅の酒器にも角とよばれるものがある。 るのであろう。古くは獣角をりに用いることがあ 、とし、字形について「角と刀魚と相似たり」 獣の角の形。〔説文〕四下に「獣角なり。

ん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあらわれることを「各雲」というが、その雲は「面はは格・版(仮)を用いることが多い。[書、尭には格・版(仮)を用いることが多い。[書、尭には格・版(仮)を用いることが多い。[書、尭には格・版(仮)を用いることが多い。[書、尭には格・版)「大雅、抑」「神の格る」、また「大雅、本の茶ん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。ト辞には雲のあん」とは、それらを集め会する意。 でできない。 競技を角觝とい う。 〔詩、小雅、角で う。 〔詩、小雅、角で のできない。 はない。 はない。 はない。 のできない。 のでもな。 のでもない。 のでもない。 のでもない。 のでもない。 のできない。 のでもない。 のでもない。 のでもない。 のでもない。 。 のでもな。 のでもな 追逐することを角のであるから、相 号」「騂々たる角

0000

韻し、杜甫の「赤霄行」にも角・觸を韻しており、口召南、行露」に角・屋、〔史記、刺客伝〕に角・粟をがある。また先端であるから、隅角の意がある。〔詩、がある。また先端であるから、隅角の意がある。〔詩、 とはない。〔魏書、江式伝〕に、五音の角・徴・羽の角をクの音があったらしいが、しかし角声の字にその音 弓 駅としてそれ反せり」とは、弭に用いた牛角の形 龣としるしており、彔の音でよんだものであろう。 のとき、「藩客に角弓を賜ひて射せしむ」という記事 をいう。『日本後紀』弘仁元年、豊楽院における観射

各自の義は〔書、湯誥〕「各 爾の典を守れ」など霊を迎える敬虔な心を窓といい、恪の初文である。

金文の卲各・卲零にあたる語である。その卲各する

拡 (擴)18 ひろめるカク(クヮク)

文〕にはこの字を収めていない。動詞に転用して音 声符は広(廣)。広とは広屋をいう。

カク

格[遙] 恪[窓] 珏[穀] 革

声符は各。非は線刻を加えた

みえる。 に用いる。〔孟子、公孫丑、上〕に「凡そ我に四端が変化し、入声となり、拡大・拡充・拡張のよう あるものは、皆擴してこれを充たすことを知る」と

答。[洛]10

る」「狢る」を用い、四川では「狢る」を用いるとのときに用いる。〔方言〕に、晋・斉の地では「假治」に「王、庚廳の宮に澄る」とあり、宗廟の神事 のち格を通用する。 声符は各。 各は各るとよみ、

恪。 [急] つつしむ

文に〔窓鼎〕があり、呉大澂はその器をえて、そを迎える詩。ともに「我が客戻る」の句がある。金 礼があり、〔詩、周頌、振鷺〕 〔春秋説〕に、先王朝の子孫を、 の室を「愙齋」と号した。 の降下することをいう。客は廟中に神霊の至るもの 秋説」に、先王朝の子孫を、三恪として迎えるい、客神。その客神を迎えて恪む状を愙という。 のち恪を用いる。各は祝禱して、神霊 周頌、振鷺」「有客」はその客神 声符は各、 また客。愙が正字

珏。〔穀〕1 一 対 の 玉

Ħ Ħ

> 会意 玉相合するを一珏と爲す」とは、玉を係ぐ意である。 玉二穀を係ぐ」とみえている。〔説文〕 - 上に「二 玉五穀を賜ふ」とあり、玉とは玉朋、 た穀に作り、その字は形声。〔左伝〕荘十八年「皆、 いう。〔左伝〕襄十八年にまた「獻子、朱絲を以て玉五穀を賜ふ」とあり、玉とは玉朋、一綴りの珠を 二玉を並べた形。一聯の玉をいう。字はま

「發して然るのちに禁ずるときは、則ち扞格して勝相交はる」と格の字を用いる。〔礼記、学記〕に

へず」という格も同じ。扞格とは不一致の意。猺猛

格という。丯を〔説文〕四下に草の茂るさまとする

が、契刻の形である。

が縦横にからむこと。庾信の〔小園の賦〕に「校格いた。〔説文〕四下に「枝、格はるなり」とは、校いた。〔説文〕四下に「枝、格はるなり」とは、枝

木で、契約のときにはそれを割符に用

革 かわ・あらためる

単

象形 陰陽、革めずして成る」とは、革は自然の推移の状 を去った形はいずれも革の形に近い。革をなめした 三下に「その毛を治去して、これを革更するなり」 あろう。〔詩、小雅、斯干〕「鳥のここに革ぶが如であろう。鮑の初文は釁。罿は皮をなめす意の字で ものを生じたが、春秋期の斉の鮑、叔などはその要な産業となり、その富力によって政治に発言す 命である。皮革のことは軍事の需要拡大に伴って重 態でなく、これを革治し、変革を加えることをいう。 ねて括った形である。〔呂氏春秋、執一〕に「天地 ものを韋といい、韋皮という。韋皮の韋は、皮を重 を皋(鼻)といい、暴といい、睪という。その頭部 と革治・変革の義とする。獣屍の暴されているもの 革卦〕に「文武、命を革む」とはいわゆる革 獣の革をひらいた形。皮革をいう。〔説文〕 靭の仮借である。

쇰

格10 夷、木皮を以て篋と爲す。狀、籤奪の如し」とあり、る意に用いるのは仮借である。〔説文〕六上に「蠻 核10 形声 の中心をなすものを核心という。考覈のように竅え 核という。堅いものであるから堅核の意がある。それで、ころ。これを食事にも供したので、その それで不一致を意味する扞格の義となり、格闘の意 籔は鏡匣。〔説文〕のいうところは字の用法の一義 り」とするのは、枝が伸びて入りまじることをいう。 にすぎず、字の原義ではない。 さね・かたい・かんがえるカク・カイ 声符は各。〔説文〕六上に「木、長ずる兒な からむ・いたる・ただすカク **k*** 形声 声符は亥。果実の種のあると

となる。また格子形に木を組むことより、規格の意

があり、鳥の飛ぶ音をいう。〔説文〕の高飛の解は、 す」とあり、眼を推ちつぶす意。錐部四上に羅の字 断)し、その眼を推ち、以て人彘(豚、便器)と爲 行志〕に「高后(呂后)、戚夫人の手足を支離(切 義を承ける。

殼」「殼」2「豉」0

その字義に近い。

明学派との立場が分れるが、「孟子、雕婁、上」「たれて、格字の理解のしかたによって、朱子学派と陽いて、格字の理解のしかたによって、朱子学派と陽いて、格字の理解のしかたによって、朱子学派と陽いて、格子、文学

また。 ならのように用いるが、すべて各の仮惜。〔書、舜典〕のように用いるが、すべて各の仮惜。〔書、舜典〕『上下に格る』雅、秋、、 となる。経伝の用義では「格る」と訓し、〔詩、大

だ大人のみ能く君心の非を格すと爲す」という格正

は引伸もしくは仮借である。

10

とらえる・うつ・たかくとぶカク

に「高く至るなり。隹の、上りて口を会意 口と隹とに従う。〔説文〕五下

は三十九義を列するが、扞格・規格が字の本義、他 の意であろう。訓義が甚だ多く、「大漢和辭典」

精 その省略形。もと禾穀の殼をいう字であるが、貝殼る禿の下部にある几の形に似ている。常用字の殼は 殻の字に含まれている几の形は、華のぬけがらであ 正しくその物に中るときは、確然として聲あり」と 中空の意であろう。〔段注〕に「上より下を撃ち、 ない殻をいう。〔説文〕三下に「上より下を撃つなを撃つ形。殻はその禾穂のない形で、脱穀して実の。 のように、すべて中の空虚なものをもいう。 り」とし、また「一に曰く、素なり」というのは、 いい、殼・確の声義を同じとするが、彀は殼の初文、 会意 た形と、支(殳)とに従う。穀は穀実会意 初文の樹は、禾穂の実を脱し

郭 くるわ・かこいカク(クヮク)

金里鲁令 食事具

〔釈文〕に引く〔鄭注〕に「堅高の貌なり」という。

に「確乎としてそれ拔くべからず」とあり、

確に作る。

れ乾は確然たり」「坤は隤然たり」とあって、 の「夫れ乾は寉然たり」の文を引くが、今本は「夫

「……・「説文」には確の字を収めていない。〔易、然たり」「坤は隤然たり」とあって、字を

背景においた解釈である。また〔易、繋辞伝、下〕 出でんと欲するに從ふ」というのは、高飛する鶴を

形声 [孟子、公孫丑、下]「七里の郭」とは、七里四方のの字形はその省略形。邑を加えて形声字の郭となる。 その望楼を四方に配している形のものがある。いま 城壁上の南北に、望楼のある形である。卜文には、 字の初文は夢に従い、夢は城郭の郭の象形。

あるものを郭といい、槨・鞹・螂などはみなその声城郭である。郊外を貨跡の地という。およそ外郭に城郭である。郊外を追りの地という。およそ外郭に

停12 [柳]15 ひつぎ カク (クヮク)

に作る。棺椁の材は高価なも ある棺を納める外箱であるから、椁という。〔説文〕 六上に「葬に木簟あるなり」とみえる。字はまた槨 形声 外にめぐらしたものをいう。棹は柩で 声符は郭の省文。郭は城郭、

り、孔子は、自分の子の伯魚を爲らんことを請ふ」とあ (父)、子の車を以てこれが椁 先進〕に、「顔淵死す。顔路のであったらしく、〔論語、 と、これを拒絶している。古 の葬にも椁を作らなかった で、この槨室がいわば玄室に 組んで槨室を構築したもの くは棺の外槨は幾層もの木を

棺槨

築造したものを、寿郭という。寿陵というのと同じ 石もしくは塼をもって築造したものをいう。生前に どの字がみえる。槨とはその玄室の壁や天井を、 帯方の古墳の塼文に槨・冢槨・壁郭・霊郭・壁郛な でこれを覆った。のち塼を組んで塼室を作るように 相当する。この槨室を墓坑の坑底に埋め、 なって、その塼室の壁や天井を槨とよんだ。楽浪・ 木炭などをつめ、上に白骨泥、さらに五花土を積ん

郭

きている。 鳥形霊の観念による一系の字である。 を声に従う字

それを確く執えて防ぐ字が隺である。奮・奪・隺は、 襟中の鳥が奮飛する形で、鳥形の霊の脱去する形。 確く執えてその奮飛を防ぐ意。これに反して奪は衣 寉は鳥が高飛しようとして冂に障られる形で、鳥を

に権・推があり、権は水上の横木、推は〔漢書、

よびかたである。

覚12 「関」20 めざめる・さとる・あらわれる

(学)の従うところと同じで、それが学の初文であった。學・覺はそれに子・見をそえただある。〔説文〕ハ下に「寤むるなり」とあって、である。〔説文〕ハ下に「寤むるなり」とあって、である。〔説文〕ハ下に「寤むるなり」とあって、である。〔説文〕ハ下に「寤むるなり」とあって、である。〔説文〕ハ下に「寤むるなり」とあって、である。〔就十年「音侯、大鷹(鬼)を夢む。公、党のたり」、〔荘子、斉物論〕「且つ大覺あり。しかる後、この大夢なることを知るなり」など、みな眼覚めることをいう。覚知・発覚・覚悟・覚道などはその転義。その人を覚者といい、〔左伝〕裴二十一年「夫子は覺者なり」のようにいう。「覚え書き」のように記憶の意に用いるのは、国語の用法である。のように記憶の意に用いるのは、国語の用法である。のように記憶の意に用いるのは、国語の用法である。

推 3 カク (クヮク)

の語があり、商権・商量というのと同じく、適度を をれよりして確守・確持の意が生れる。権はそれを とあり、「漢書、五行志」に呂后が成夫人の眼 をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推るとい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推つ」とい をうって失明させることを、「その眼を推っ」とい をうって失明させることを、「その眼を推っとい をうって失明させることを、「その眼を推っ」とい をうって失明させることを、「その眼を推っとい

電る意である。〔漢書、叙伝、下〕に「古今を揚権す」とは、古今のことをあげて、その大略を論ずるまた揚較・揚攉に作る。酒の専売を推酤といい、そまた場較・揚攉に作る。酒の専売を推酤といい、それに持数・揚攉に作る。

第 13 (第) 15 かり かしな・つつしむ

貉 13 【貊】13 カク・バク・バ

新 新於

で、権の仮借である。較の本義は車前の横木、比区別がある。較はいま比較の意に用いるが、それは区別がある。較はいま比較の意に用いるが、それは区別がある。較はいま比較の意に用いるが、それは別がある。「説文」「四上に字を較に作り、形声

れぞれ校・覈・搉と通用の義である。較・較覈(考える)・較要(あらまし)などは、そ

隔 13 (隔) 13 へだてる

形声 声符は高。〔説文〕に収める 京文。来母の字に里(悝)・呂(莒)・婁(窶)など、 六文。来母の字に里(悝)・呂(莒)・婁(窶)など、 同様の関係のものがある。自は神霊の野によって聖 と俗とを隔離する意味をもつものであろう。〔説文〕 は土部一三下の塞字条にも「隔つるなり」とする。 塞は呪具である工を塡塞して、邪霊を隔離する兜的 方法を示す字である。鬲は裸礼の器として用いるもので、爾はその注ぎ口を加えた字形。〔炭氏諸器〕 に「麥の宮に爾す」「用て邢侯の出入に爾せん」と あるのは、裸礼をもって方割。障も隔離儀礼を意味し、 でで、ではその注ぎ口を加えた字形。〔説文〕 「四下に「隔は障るなり」、また次条の障字条に「隔つるなり」とあって互訓。障も隔離儀礼を意味し、 要所を守る意をもつ。わが国にも、国境に大饗を埋めて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が〔播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が〔播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が〔播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が〔播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が〔播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が「播。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が、「番。 かて境とし、その地を「変の坂」とよんだ話が「番。

割 4 くぎる・わける

事。

節を加えること、その文様を方形に四分して加え形声 声符は畫。畫(画)はもと方形の楯に雕

隔[隔]

劃

幗 廓 愨

摑

を時に及ぼして劃期という。 割は畫の繁文で、刀を加えた動詞的用法の字である。 の区画を加えて区別あることを、劃然という。刻 を加えるものであるから、劃傷の意となり、ままでは、 がこようである。

14 くびかざり (クヮク)

厚 4 ひろい・むなしい・くるわ

形声 声符は郭、郭は城邑をめぐる土壁。外が広大で、中に空間の多い建物を廓という。空の窮極することのない姿を廓清という。達磨が遅れて一新するを廓清という。達磨が遅れて一新するを廓清という。達磨が遅れて かっぱい 大きな かっぱい 大きな かっぱい 大きな かっぱい 大きな かっぱい はいて かっぱい はいて かい はい で あった。

長い 14 カクしむ・まごころ

重端窓なり」とあり、誠実なことをいう。私心のない意。〔淮南子、主術訓〕に「その民、撵

14 カク (クヮク)

形声 声符は國(国)。巾幗の幗の声義を承ける の話である。国でも盗りそうな字であるが、わが国 の話である。国でも盗りそうな字であるが、わが国 では「つかむ」とよみ「一摑千金」、また「葉をも では「つかむ」とよみ「一摑千金」、また「葉をも

権 14 まるきばし・ぜいのな

喊 14 「馘」 17 みみをきる

什響 流太

なり」とし、重文として馘を録する。金文では戦功を数えた。〔説文〕二上に「軍戰ひて耳を斷るで敵をたおしたときは、その左耳を切り、その数で形声 声符は或。或に國(国)の声がある。戦争

軍獲をいうもので、獲と声義の関係があろう。 矣〕などの詩篇には馘、〔左伝〕には聝を用いる。 を敗えることがあったのであろう。〔詩、大雅、皇のある。首や耳のほかに、古くは指の爪をもって戦功。『詩』では、 「小盂鼎」に繋、〔號季子白盤〕に戒に作る。いず も献馘の礼にこの字を用いており、爪に従う字形で 'n

赫 あかいセキ

るが、 〔段注〕に詩篇にみえる赫はみな奭の義であるとす の勢威のさかんなるさまを赫奕・赫々のようにいう。矢コ「王、赫としてここに怒る」とは盛怒の意。人ほめて、「赫として遅赭の如し」という。「大雅、皇ほめて、「赫として遅赭の如し」という。「大雅、皇 める意であろう。〔詩、『地風、簡兮〕に舞人の姿を を浴びている人の姿で、聖火で身を清 。 二赤をならべた形。赤は火光 る 奭は文身の象で、赫とは意象の異なる字であ

閣 たかどの

それで木を架した棚などをもいい、「礼記、内則」 門柱の意とする。本義は架閣。ものをかけわたす義 に「門の辟旁の長概なり」とあって、扉をつける 各に格止、 に「大夫、七十にして閣あり」とみえ、注に「板を で、そのような構造の建物、台閣・秘閣の類をいう。 あろう。〔爾雅、釈宮〕には字を閎に作り、〔郭注〕 さえぎりとどめる意があるとするもので 「扉を止むる所以なり」というのは、形声 声符は各。〔説文〕一二上に

> もので、 閣風の建物があり、高明の聖域であることを示して た中山王墓の兆域図には、三層の台上に壮麗な楼 蔵するを秘閣、その書を秘書という。近ごろ出土し である。閣道・架閣・庋閣などは、みな架して作る以てこれを爲り、食物を茂く」とあって、茶棚の類 四阿方丈の建物を阿閣といい、そこに書を

確 15 [稿] 15 かたい・たしか

執という。字はまた碻に作る。 より的確・確実の意となり、また相譲らぬことを確く くれに易きことを示す」などの用例がある。堅確の意 を能くす」、「易、乾、文言」「夫れ乾は確然として、にみえないが、[荘子、応帝王]「確乎としてその事とは石の堅確であることをいう。その字は〔説文〕 形声 声符は寉。寉は鳥を確くとめておく形。確

號 15 「韓」17 「韓」20 とらがわをなめす

等級特

のない説である。また〔北戸録〕ニに引く〔博物 文であろう。虎爪による画文とするのは、全く根拠 鐘〕にみえる「已侯焼」の焼も、おそらく號の異い。これになり、これになり、いまいでなり、これになり、かれるが、號は鞟、鞹がその形声字である。〔已侯 治することを示す。金文に「朱磯族」の名が多く治することを示す。金文に「朱磯族」の名が多く声が合わない。守は虎皮をなめす器をもつ形で、剝で 畫するところの明文なり」とし、守声とするも、くう。 守と虎とに従う。〔説文〕五上に「虎の攫会意 い

> 淵〕に「虎豹の鞟」の語があり、車の軾の中央に巻これが虎皮を剝治する器の形であろう。〔論語、顔 志〕に、虎はその爪あとを試みて獲物を下するので、 朱を塗ってしあげたものであろう。 く皮を鞹韆という。金文に「朱虢旂」というのは、 ないことである。虢の従う守は、この卜を持つ形で、 これを虎トというとみえるが、虓の字形とは関係の

獲 えものをとる・えもの・うるカク(クック)

鬞 · 多天 至心 夢 一个

隷の意となったものであろう。刑罰をうけることを 生ましめた子を獲奴というとあり、もと俘虜より奴 って獲というとする。呉の章昭の説に、羌人は婢に「方言」に判准より沿海、斉燕の地方では、婢を罵「いい」 百を隻たり」「百三十七職を隻たり」という。〔公羊(俘虜や馘首)の意に用い、〔小盂鼎〕に「喊三千八隻をり」とあり、犬は猟犬を示す。金文には説祭された。 形声 獲罪という。 臧獲のように召使の意に用いるのは、おそらく転義 虜。また〔楚王畬志鼎〕に「戰ひて兵銅を隻たり」伝〕昭二十三年に「生得を獲といふ」とあるのは俘 のように戦利品を獲たことをもいう。隻は獲の初文。 〔説文〕−○上に「獵の獲るところなり。犬に從ひ、 る形に作り、もと鳥を捕えることをいう字である。 声符は篗。字の初形は、卜文に隹を手に執

莖なり」とみえ、羽根の茎の白い部分 声符は鬲。〔説文〕四上に「羽 ようにいう。刀光や電光を形容する語にも用いる。 焉・霍然という。また閃転するものを霍々・霍閃のそのです。 て飛ぶことを霍繹という。また急速の意があり、家て飛ぶことを登録。

亭 16 くるわりのクシ・ヨウ

古文としている。〔毛公鼎〕に「余、章て聞ありと土に従ひ庸聲。古文、孽に作る」とみえ、豪を墉の を知りうる。 するに非ず」と字を用の義に用いており、その古音 のある形。〔説文〕土部「三下墉字条に「城垣なり。 脚に用いる。字は城郭に垣墉があり、その上に望楼駅に用いる。字は城郭に垣墉があり、そ文にはまた『郷のすなわち字は墉の初文であり、卜文ではまた『ぷぷ 〔左伝〕定四年「土田陪敦」というのと同じである。あるのは、〔詩、魯頌、ない。〕に「土田附庸」、またあるのは、〔詩、魯頌、ない。〕に「土田附庸」、また いることが多く、「獨生設、一〕に「僕幸」としているが、ト文・金文ではこの字を庸・墉の字に用ているが、ト文・金文ではこの字を庸・墉の字に用 えたものが郭の初文。〔説文〕はこの字を郭と解し 韻をもって訓するが、その用例はない。旁に邑を加 に「度るなり」「民の度居するところなり」と、畳 形に象り、城墉をいう。〔説文〕五下 象形 城郭の南北に、両亭相対する

翯 16

はねしろし

形声

の意がある。〔説文〕四上に「鳥白く、

声符は高。高は白骨の象で白

のがある。

器であるから、金文にはときに「鬲鼎」と銘するもをいう。この翩は鬲の音でよむ。鼎と鬲とは同系の両耳のある三鼎を用いる意で、その豪奢を誇ること

に「三翮六翼に吞みて、以て世主に高うす」とは、

翻を潰するの政を掌る」という。〔史記、楚世家〕な、輩するの政を掌る。」という。〔史記、せても重要なもので、〔周れ、羽人〕に「時を以て羽をいう。鬲には隔の音もある。羽は装飾・呪飾とし

をいう。鬲には隔の音もある。

16

羽の茎・はね

形声

嚇 おどす・カク・カ しかる

霍16

はやくとぶさまカク(クヮク)

さまをいう。

翯乎として滈々たり」とあり、

高々もまた白く光る

司馬相如の〔上林の賦〕に「安かに翔り徐に回り、司馬相如の〔上林の賦〕に「安かにったる。ないない。」の句を引く。〔毛伝〕に「肥澤なり」という。 肥澤の皃なり」とし、〔詩、大雅、霊台〕「白鳥鸞々いた。

辱・嚇詐のようにいう。〔六部成語〕に、人を驚死下文に「我を嚇す」と動詞に用いている。嚇怒・嚇、これを過る。仰ぎてこれを視て曰く、嚇と」とあり、これを過る。仰ぎてこれを視て曰く、嚇と」とあり、魔難、声語。〔荘子、秋水〕に「鴟、腐鼠を得たり。魔難、声語。〔荘子、秋水〕に「鴟、腐鼠を得たり。魔難、 形声 在子、秋水」に「鴟、腐鼠を得たり。操雛声符は赫。おどすようにして叱るときの擬

> であろう。 させることを嚇死というとあり、拷問死に近いもの

穫 かりとる・とりいれカク(クヮク)

に「八月これ穫る」「十月、稻を穫る」の句がある。 猟には獲、収穀には穫という。〔詩、豳風、七月〕 を刈るなり」とあり、収穫をいう。狩か 声 声符は蒦。〔説文〕七七に「影 声符は蒦。〔説文〕七上に「穀

覈19 [覈]21 かんがえる・きびしいカク・キョウ(ケウ)

字は、微・竅・機・激・皦・邀など、すべて敫めただす意であるが、それはのちの転義。敫に従うめただす意であるが、それはのちの転義。敫に従う 正字、霚は竅が正字である。 るが、それは覇を霸に作るのと同じ。 る。〔説文〕に字の上部を雨とする重文の字を録す また拷覈という。すなわち拷囚訟獄、犯人として責きびしく訊問すること。考覈はとりしらべる意で、 その覈験の意である。西年とは反覆し迫窄する意で、 その辭を邀遊し、實を得ることを繋どいふ」とは、 の声義を承け、呪霊を用いる呪的な方法に関してい 「説文」七下に「實にするなり。事を考へて两管し、 する意である。その秘事をあばくことを覈験という。 うとすることを意味する。すなわち、ひそかに呪詛 殴ってその呪霊を責め、徼めるところを実現させよ は上より覆うもの。 会意 西と敷とに従う。 西 ただ覇は霸が 敷は屍を

矍 おどろきみる

が群飛するさまを形容する語であろう。大群をなし 群飛する意。その羽音を霍という。おそらく渡り鳥 雨と隹とに従う。 EVE FRE 字はまた難に従うて鳥の (:T:\)

翮 章 嚇 穫 覈[竅]

矍

産住 20 まめのわかば

在野の士には「藿食の者」と称した。
に野の士には「藿食の者」とよんで卑しみ、精神訓」に「藜藿の羹」という語があり、粗食を精神訓」に「藜藿の羹」という語があり、粗食を精神訓」に「藜藿はあかざと豆の葉。〔淮南子、なり」とする。藜藿はあかざと豆の葉。〔淮南子、なり」とする。藜藿はあかざと豆の葉。〔淮南子、なり」とする。

鶴 21 つる

形声 声符は霍、霍はその鳴き声を というものがあって、その異相瑞祥を説くこというものがあって、その異相瑞祥を説くことが甚だ詳しい。古くは僊人の乗るものとされ、のとが甚だ詳しい。古くは僊人の乗るものとされ、のとが甚だ詳しい。古くは僊人の乗るものとされた。

攪 3 みだす・うごかす)

を選択 ド声 声符は覚(覚)。[説文] ニ と歌う。 おからであろう。

ガク

学8【學】16「製」の まなぶ・おしえる

学校的这个学

会意 旧字は學、ジ゙キモベ゙・子の四文の会意。会意 旧字は學、ジ゙キモベ゙・子の四文の会意。字がみえている。〔説文〕三下に「敷を正字とし、學をその省文とするが、字の初形よりいえば、ときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はときには爻と子のみで示すこともある。教(教)はり、學をその省文とするが、「玉篇」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。覺るなり」とし、両り、學を「教を受くるなり。

のち慣用を異し、二字に分用される。〔書、説命、[周礼、大司楽] に詳しい記述がある。學と數とは、[乱記、文章表記 ける教学の全体については、[礼記、文章表記 ける教学の全体については、[礼記、文章表記 の学宮では射儀の教習が行なわれている。学宮におの学宮では射儀の教習が行なわれている。学宮にお 子・小臣は王族の子弟をいう。〔大盂鼎〕にも、王 字を区別している。もと教・學は一系の字であり、 下」に「これ数ふることは、學ぶことの半なり」と 学とはその機関の名である。周にもそのような年齢が「余はこれ族が小學に卽かん」と述べており、小 戒律下の生活がなされたのであろう。ト辞に小子・ の神社建築と似ており、そこで秘密講的な、 にみえるメンズハウスの建物は千 支を加えるのは教える立場を示す ある辟雍に附設されていた。〔静段〕によると、そ 小臣を集めて教学することをトするものがあり、小 学習に外ならぬことである。 あり、教学相長ずるをいう。教えることは、自己の 木形式で、 とみてよい。 厳し

岳 8 【嶽】17 やま・たけ

原文区《天安氏》

官を派遣して岳を祀り、「貞ふ。人を岳に事せしめ「姜は伯夷の後なり」とみえる。殷はしばしば祭祀は大嶽の胤なり」とあり、また〔国語、鄭語〕に荘二十二年「姜は大嶽の後なり」、隠十一年に「許荘二十二年「姜さ、恋愛 極る これ織、神を隆し、甫と申とを生めり」と歌大雅、崧高」に「崧高なるはこれ嶽、駿くして天に天雅、崧高」に「崧高なるはこれ嶽、駿くして天に夷の子孫とされ、岳神の信仰を伝えていた。「詩、 ある。孤竹君の二子として武王の伐紂に反対した伯伯夷・許由・皋陶の名はみな伝承の分化したもので という。叔斉はおそらく姜斉の始祖、皋地に祀ら っている。岳神は伯夷、その許地で祀るものを許由んか」と祭の使者の派遣を卜し、雨請いなども行な われ、周と逋婚を重ねている古族であった。〔左伝〕う。甫は呂。斉・呂・許・申の四国は姜姓四国という。甫は呂。紫、忠、紫・申の四国は姜姓四国とい い国の国したところで、姜姓の諸族は、岳神たる伯 として岳を用いる。 もつ。のちすべて山岳を岳という。いまは常用の字 岳は古代の山岳信仰のうち、最も古い神話的伝承を る岳の祭祀権も、すでに殷に奪われていたのである。 る。かれらは殷に服してその支配に入り、聖地であ れるものは暴陶である。夷・由・陶は古く同声で、 はのちの嵩嶽にあたる。嵩嶽の周辺は、かつて姜姓 する伝承を、そのまま字形の上に存するもので、岳 るのは、その山が牧羊人たる羌人の聖地であったと ある。岳の卜文が、山頂に羊頭を加えている形であ 一・叔斉は、遼東の人ではなく、この地の古族であ

野 9 「野] 12 「 IIII] 16 だかましくいう

THE THE THE

雅」は鄂侯の器。麗はまた鄂の初文である。 「講しく訟ふるなり」とし、「玉篇」に「驚咢するなり」という。咢も野も字の初形を伝えるものではなく、その初形は驚。祝禱の器である世を四個列ね、なく、その初形は驚。祝禱の器である世を四個列ね、なく、その初形は驚。祝禱の器である世を四個列ね、なく、その報がしさは、まさに神霊を愕かせるに足る。是その騒がしさは、まさに神霊を愕かせるに足る。是れまを論じて相譲らぬのを諤々というが、噩がその初ま、一般著声をあげてやかましく呪誦を行なうのであろう。をの騒がしさは、まさに神霊を愕かせるに足る。是その騒がしさは、まさに神霊を愕かせるに足る。是その騒がしさは、まさに神霊を愕かせるに足る。是その騒がしさは、まさに神霊を呼かせるに足る。是ぞれまない。「説文」ニ上に下げる。「説文」ニ上に下げる。「記文」に表する。「聖侯」というない。「記文」に、「本学

愕 12 「遌」13 おどろく・であう

形声 声符は響。等の初形は噩、多神霊を愕かせるのである。「説文」ニ下に選を正字え、大勢で祝禱することを示す字で、これによって字を愕に作る。等の声義を承ける字で、人の心情に移して愕という。「史記、留侯世家」に「孺子、下移して愕という。「史記、留侯世家」に「孺子、下移して愕という。「史記、留侯世家」に「孺子、下移して愕という。「完然としてこれを殿たんと欲りて履を取れと。良、愕然としてこれを殿たんと欲りて履を取れと。良、愕然としてこれを殿たんと欲す」とみえる。愕然として自失するを、錯愕という。「後漢書、寒朝伝」「二人、錯愕して對ふること能はず」の注に、倉卒の意であるという。前後を失する意である。

楽13 【樂】15

おんがく・たのしむ・ねがう ガク・ラク・リョウ (レウ)・ゴウ (ガウ)

「鼓鼙(ふりだいこ)の形に象る。木はその虡(楽 象形 樂に成る」といい、楽を人の修為の究極のものとし され、孔子も〔論語、泰伯〕「詩に興り、禮に立ち、 祖を樂しましめん」のようにいう。本来は神霊を楽 たったなく かひく あろう。金文には和楽の意に用い、「王孫遺者鐘」あろう。金文には和楽の意に用い、「王秀孝ないしゃしよう 手にもって振り鳴らすもので、シャーマンの呪具と する羅振玉らの説もあるが、上部は鼓や絃の形で 器をかける台)なり」という。また絃楽器の象形と しませるためのものであった。楽は古く六芸の一と 「用て嘉賓父兄を樂しましめん」、〔即鐘〕「我が先 して最も愛用されるが、もとは神楽に用いたもので ト文・金文には、一鈴もしくは二鈴の形にしるす。 はなく、小さな鈴の左右に糸飾りをつけている形。 の楽音をもって神を楽しませる。〔説文〕六上に 木の柄のある手鈴の形。これを振って、そ

萼 13 ぱなのがく

をいう。花萼と剣鞴の鍔と口顎の顎と、みなもの常、棣〕に「萼末、韡々たり」とは華の盛んなさま光声。 声符は咢。花のうてなをいう。〔詩、小雅、光声 声符は咢。花のうてなをいう。〔詩、小雅、

を含むところをいい、共通義がある。

| 叡 | 14 ほり・たに ガク

壑 17

ろう。思うに叡は占すなわち空虚の残骨をもつ形で、壑くす」というのも、自然の地勢を利用する意であいまで、は都城の造営を歌うもので、「實に嫌り實に教え のであるから、谿壑の字としては壑をその本字とす の坑坎(おちこんだ穴)である谿谷の意を示したも その類ではなく、自然の谿谷をいう。〔詩、大雅、 の意に用いるのは、 べく、叡の声義を承ける字である。これを溝や城池 もと空殼・空虚の意がある。それに土を加えて、地 引伸の義である。 形声 四下に声符の字を正字とし、 声符は叡。〔説文〕

額18 (額)15 ひたい・がく

六朝期の婦人がひたいに黄粉を塗る化粧法、点額事に精出す意に用い、額と用義例が異なる。額黄は事に精出す意に用い、額と用義のが異なる。額黄はする。〔書、益稷〕に「晝夜となく領々す」と、悪する。〔書、益稷〕 は頭うち、 試験に失敗する意に用いる。建物の正面

> をいう語である。 に掲げる題額を額という。題も額も、 ともにひたい

顎 18

六帖」には、この字はみえていない。 ただその訓は古い字書にはみえず、「和漢三才図絵」 などに至ってみえるものである。伊藤東涯の「名物などに至ってみえるものである。伊藤東涯の「名物などとない。 でととい 「面の高き貌」とあって、頰骨の張ったいかめしい 声符は咢。〔説文〕にみえず、〔玉篇〕に

耖

ŧ)

鰐 20 一 単 12

棲息していたらしく、左思の〔呉都賦〕にその名を南に出づ」としるしている。かつては長江下流にも 似て長さ一丈。水に潛り、人を吞みて卽ち浮ぶ。日 さめ類のことであろうと思われる。 あげている。わが国で古くわにとよんでいたものは 形声 をその正字とし、「蜥易(とかげ)に 声符は咢。〔説文〕 三上に蝉

樫

白檮」のようにいう。〔万葉〕に「なつかし」に樫(斉明紀〕「甘檮が丘」、〔垂仁紀〕「甜白檮の前」「熊(斉明紀)「甘檮が丘」、〔五年紀)「甜白檮の前」「熊(子に、また檮・橿があり、古書にはその字を用いる。字に、また檮・橿があり、古書にはその字をある。かしとよむ国字 堅い木という意味の字である。かしとよむ た檍ともいう木である。檮・橿・檍はみな常緑の大て「萬年木なり」という。もと「もちの木」で、ま を借用している例がある。〔新撰字鏡〕に橿を出し

木で、樫もその意の造字である。

カツ

韧 6 きざむかっケイ

会意 ものが絜である。 の割符にもそれを加えた。それに呪飾の糸をつけた むことで、初はその刻刀を合せてしるした形。契約 散乱する形であるとするが、ものに刃形をつけて刻 非と刀とに従う。非は〔説文〕四下に草の

昏7 ふさぐ・けずるカツ(クヮツ)

E E E III

ことで、譌(訛)言というのと同じ。人の話に、信みな部り害する意の舌の形。話とは悪意のある語のない。話とは悪意のある語のない。 というのと同じ意象をとどめるもので、 ** (害)・** 会意 ずべきものはない。 ある日に刮刀を加えて、これを刮り害し、その呪能 とするが、口は口耳の口ではない。唇は祝禱の器で 口は口で祝禱の器。〔説文〕ニ上に「口を塞ぐなり」 氏と口とに従う。氏は劂の形で削るもの、

刮。[倒]。 かきとる・けずるカツ(クヮツ)

は眼を見開くことで、 る。刮去・刮摩・刮削・刮刷のように用いる。 に刀をそえたもので、昏が初文、刮はその繁文であ (把手のある曲刀) で突き刺し、 る曲刀)で突き刺し、背る形。刮はそれの呪能を害するために、その器を氏の呪能を害するために、その器を氏形声 声符は舌(昏)。 いる その転義である。 刮目

括 9 [括]10 くくる クヮツ)

まり、上に「製るなり」とあり、まとめて括ることをいう。髪をくくることを括髪、嚢をとじるとを括嚢という。〔易、坤卦〕六四に「括嚢なり。とを括嚢という。〔易、坤卦〕六四に「括嚢なり。とを括嚢という。〔をくくることを括髪、嚢をとじることを括嚢という。 形声 声符は舌(唇)。〔説文〕一二

曷 もとめる・なんぞカツ・アツ

活。[活]1 遏とは、この呪儀によって禍をとどめる意である。である。疑問詞として、何・奚・胡などと通用する。 「匄める」の意に用いるが、曷がその本義をもつ字 当に 台求の義があり、金文には 台・害・曷をみな だ」のような呵責の義は、その呪儀からの引伸義。 (喝)・楬・駄はみなその声義を承ける。「なん 屍骨に祈り、その呪霊を用いる呪儀をいう。 収めた器。匂は屍骨の相交わる形であ 会意 いきる カツ (クヮツ) 日と匄とに従う。日は祝詞を

たり 上に重文として、聒に従う形を録している。 るが、それは擬声語的な用法であろう。〔説文〕二 生気を回復する意。〔詩、衛風、碩人〕「河水、洋々は、活くべからず」という。賦活・復活など、みな となる。〔孟子、公孫丑、上〕に「自ら作せる撃の方法で無効ならしめるときは、自らを活かすこと その呪能を殺ぐ呪儀である。自己に対する呪詛をこ 北流、活々たり」とは水勢の盛んなさまであ は祝禱の器に曲刀を加えて、 声符は舌(昏)。悸

括。[格]1 ゆはず・たきぎカツ(クヮツ)・テン

字にして二声二義となったものと思われる。 とが同形にかかれるようになってその別を失い、一 甜の声。この両義はもとおそらく別の字で、昏と舌 だめの意には活の声。たきぎのときは形す 声符は舌 (昏)。ゆはず・ゆ

喝 [喝]12 しか かる

宋を振るときのかけ声を喝采という。いまはほめそ行道の先払いするのを喝道、すごろくなどの博弈でて地を割かんことを求む」とは、恐偈の意。高官の とする。〔戦国策、趙策〕に「諸侯を恐喝して、以 せぶことをもいう。〔説文〕ニ上に「臀の濁くなり」その声を喝という。その声が激しく、声がかれ、む やすことをいう。 屍骨を呵して人に呪詛を加えることで、 旧字は喝に作り、曷声。曷は

> 戛 ほこ・うつ・たたくカッ

昊 〔爾雅、釈詁〕に「常なり」、〔釈言〕 「戛として鳴球を撃つ」は擬声語的な用法である。 伐・蔑と同じく、 などの訓がある。〔書、康誥〕に「大戛に率はず」〔爾雅、釈詁〕に「常なり」、〔釈言〕に「醴なり」 のいう輓に用いた例をみない。 は大法の意で、これが字の原義であろう。〔説文〕 下に「戟なり」とし、 会意 人の首を斬る形。〔書、 百と戈とに従う。 〔説文〕 | ニ 会意とす 益報(

渇 [温] かわく・つきるカツ

閘

「盡くるなり」とあり、「繁伝」に飢渇の字は歇に作った。 歇・竭は竭尽の意に用いる。 る。渇・獣・竭は声義の近い字であるが、渇は飢渇、 「昔、伊洛(ともに水名)竭きて、夏亡ぶ」とみえ 大雅、召旻」「池の竭くる」、また、「国語、周語」るという。尽きるの意にはおおむね竭を用い、〔詩、 形声 旧字は濁に作り、曷声。〔説文〕一上に

割 12 割12 わる・さく・そこなうカツ・カイ

勴 A A,

で祝禱の器を刺し、その呪能を害する意。それに刀形声 声符は常(害)。書は把手のある大きな針 をそえて、ものを割裂する意をあらわす。 〔説文〕

カツ 括〔括〕 曷 活(番) 括(格) 喝[喝] 戛 渇[渴] 割(割)

カツ

古くは害の音であったのであろう。
「門で眉壽を割む」のように、智・求の義に用いる。「無意識」になる。「無意識」にない。「無意識」にない。「無意識」にない。「知を問いるところが異なる。「無意識」にない。

|| 12 おどす・むさぼる

形声 声符は気。 場は屍骨を呵し、児祖によて人を恐れさせることを偈という。〔説文〕「○下にで人を恐れさせることを偈という。〔説文〕「○下になるなり」と訓するのは、〔詩、大雅、民労〕「民また勞せり」だど小しく偈ふべし」によるもので、また勞せり「だど小しく偈ふべし」によるもので、また勞せり「だど小しく偈ふべし」によるもので、また勞せり「だど小しく偈ふべし」によるもので、また「左伝」昭元年「歳を翫び日を偈との言と言います。」

害 12 やはず・ゆはず・はず

形声 声符は舌(昏)。昏は氏(厥、細い曲刀) でものを刮る形。筈は矢のさきを削って、つるにか けるところ。矢末をいう。わが国では弓の両端の弦 けるところに、くばみをつけてあり、ゆはずと いう。すなはち弭、上を末弭、下端を本弭といい、 字はまた特に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた特に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた特に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた特に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた特に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた持に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた持に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた持に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〔新撰 字はまた持に作る。〔神武前紀〕〔高橋氏文〕〕

12 かまびすし・おろかなさま

形声 声符は舌(舌)。香に括・活 ・ 大い、「書、投表、上」に「いま汝眠々たいい、また水声を活々という。耳に喧しいことを称いい、また水声を活々という。耳に喧しいことを称いい、また水声を活々という。また思慮なく騒ぎ罵ることを話々といい、〔書、投表、上〕に「いま汝眠々たり」とみえる。「聒々児」とは、くつわ虫のことである。

近月 3 なめらか・すべる・みだれる

育 省

反問に答えることができなかったという。滑にみだ を吐きて已まず」とあって、汲めども尽きぬ意がある。「説文」二上に「利なり」と訓するのは、なめらかで渋滞することのない意であろう。 「滑社、食医」「調するに滑すを以てす」の「疏」に「滑とは通利往來、五味を調和する所以なり」とに「滑稽多智」の「索隠」に「酒器は轉注すべし。酒を吐きて已まず」とあって、汲めども尽きぬ意がある。それで多智多弁、弁舌の間に人の判断を誤らせるような弁才を滑稽といい、ついで俳諧の言、人をあまっな弁才を滑稽といい、ついで俳諧の言、人をるような弁才を滑稽といい、ついで俳諧の言、人をるような弁を疑りている。王安石は字説を好み、かつて蘇東坡に「坡とは土の皮なり」と説いたが、東坡の「然らば則ち滑はまた水の骨なるか」という反間に答えることができなかったという。滑にみだ

国では滑る意に用い、滑走という。た狡猾の猾にも通じ、悪人の徒を滑賊という。わがた狡猾の猾にも通じ、悪人の徒を滑賊という。わがれるという訓があるのは、汨乱の汨と通用の義。ま

看 3 みだれる・わるがしこい

牽 13 くるまのくさび

葛 3 ケザ・かずら

れるものがあり、殊に〔詩、周南、樛木〕「南に樛れるものがあり、殊に〔詩、周南、樛木」「南に樛」が入べ隠者の用いるものを葛巾という。葛の用い、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田い、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田い、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田い、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田が、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田が、野人や隠者の用いるものを葛巾という。葛の田が、野人や隠者の用いるものを葛巾という。

褐 13 【褐】 14 わたいれ・あらいぬの

形声 旧字は褐に作り、気声。〔説い、江本子、公孫丑、上〕に「褐寬博にも受けず、大正教をいう。あらい毛織の服を褐寬博といい、「孟子、公孫丑、上〕に「褐寬博にも受けず、小八郎、西子、公孫丑、上〕に「褐寬博にも受けず、本の賤者をいう。「褐を釋ぐ」とは仕宦すること。その賤者をいう。「褐を釋ぐ」とは仕宦すること。その賤者をいう。「褐を釋ぐ」とは仕宦すること。その賤者をいう。「褐を釋ぐ」とは代官すること。

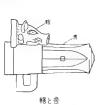
利 うみものをとる

を削りとる副と、同様の治癒法である。 だ声 声符は高。〔説文〕四下に「悪なが、瘍医〕の「副殺の齊」の文を引く。副は膿血を除いて盤に受けるもので、絵はすなわち兪。悪なは絵、舟は盤、余は把手のある手術刀、これで膿血を除いて盤に受けるもので、絵はすなわち兪。悪なに、ないて盤に受けるもので、絵はすなわち兪。悪いない、一個殺の方と消すこと、を刮去すること、殺とは薬で悪肉の部分を消すこと、を刮去すること、殺とは薬で悪肉の部分を消すこと、を刮去すること、殺とは薬である。

15 去勢した黒羊

全 7 ひらく・おおきい・ふかい カツ(クヮツ)

轄 7 (轄) 17 大さび・しめくくる



字である。 な事となった。拳はくさびの象形字、轄はその形声 轄を抜いて井戸に投じたので、「轄を投ず」という な事となった。拳はくさびの象形字、轄はその形声

居 17 ひろい・とおい

野元 18 わるがしこい・かたくてくろい土口 8 カツ

影音 3 カツ (クヮツ)・カイ (クヮイ)

を加えることをいう。

を加えることをいう。

「養礼、土養礼」に「香笄を加える。「詩、常風、淇奥」「會弁、星の如し」に桑を用ふ」とは、葬礼のとき束髪して、桑の木のに桑を用ふ」とは、葬礼のとき束髪して、桑の木のともに括束の義がある。「儀礼、土喪礼」に「香笄ともに括束の義がある。「儀礼、土喪礼」に「香笄ともに括束の義がある。「儀礼、土喪礼」に「香笄

ガツ

方 * 1日 K 小 万 * (方) 5 (歩) 5 (\smile) 5 (

し、葬はその屍骨を収めることを示す字である。死は役ふ」という。門は頭隆骨から胸郭に及ぶも半門に從ふ」という。門は頭隆骨から胸郭に及ぶも半門に從ふ」という。門は頭隆骨から胸郭に及ぶもの、変はそので、一切

カン

> / 2 がカン・ゲン ・きし

厅介介

●形 山の崖や岸の形。「説文」九下に「山石の産業を考えるべきである。

は、人の居るべきところ」という。 圧巌を利用してとあっても、彦・産などの従う厂はひたいの象形で、であっても、彦・産などの従う厂はひたいの象形で、であっても、彦・産などの従う厂はひたいの象形で、「と同形屋根がけした案は、广で示すことが多い。厂と同形屋根がけした。「説文」九下に「山石の産業を表するべきである。

弓 2 カン・ゴン

干 3 たて・おかす・ふせぐ

中 大 大 大 大 大

象形 長方形の盾の形。〔説文〕三上に「犯すた

おけれて、 をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・であるから、干犯はその転義。「小臣宅設」に をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・をいう。周は方形の盾に画飾を加えたもので、彫・をいう。周は方形のものがある。

出 4 カン (クヮン)

象形 具を貫く形。〔説文〕七上に

「物を穿してこれを持つなり」とし、
「変貨の形に象る」という。金文の図象に、両貝を
貫き、またそれを前後にふりわけにして荷なう形の
ものがあり、もとは両貝を貫く形である。〔牧殴〕
ものがあり、もとは両貝を貫く形である。〔牧殴〕
ものがあり、もとは両貝を貫く形である。「牧殴〕

リ 5 「十」 4 あげまき・あらがね カン (クヮン)・コウ (カウ)

象形 あげまきの形。幼童の髪を結んだ形。丱がその正字。〔詩、斉風、甫田〕に「聰角丱たり」の句がある。河北の丱兮城は、徐福に従った童男童女句がある。河北の丱兮城は、徐福に従った童男童女士人が、一時居住したところという。また〔周礼、五千人が、一時居住したところという。また〔周礼、五千人〕は銅鉄樸石を掌るもので、計は礦の古文。北人の字はその上もと黄(黄)に従うて礦に作る。
小人
「は銅鉄樸石を するもので、計は礦の古文。
小人
「は銅鉄樸石を するもので、計は礦の古文。
小人
「ないった。
いった。
いった。

干 5 けずる・のぞく

形声 声符は干。〔説文〕四下に「別りて大をつもとの字である。書を木版に付することを、木を刊る」とは、木を刊って表識を樹てることを、木を刊る」とは、木を刊って表識を樹てることを、木を刊る」とは、木を刊って表識を樹てることを、木を刊る」とは、木を刊って表識を樹てることを、木を刊る」とは、木を刊って表識を樹てることを刊書、校訂のとき刊改を加えることを刊誤・校刊という。

甘 5 あまい

ま形 左右の上部に横に通ずる鍵の お、左右に含ませて錠とするもので、 で表す。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と に「美なり。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と に「美なり。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と に「美なり。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と に「美なり。口の一を含むに従ふ。一は道なり」と に「美なり。口の一を含むに従ふ。である。

|日| 6 めぐる

(公) に「宣字の回風回轉に従ふは、陰陽を宣ぶる所で、 に「宣字の回風回轉に従ふは、陰陽を宣ぶるのとするが、その文意が明らかでない。「繋がなり」とするが、その文意が明らかでない。「繋がなり」とするが、その文意が建などの字形からみて、塩のめぐる形のように思われる。「説文」 の形は、金文の道・趙などの字形からみて、塩のめぐる形がられている。

以なり」というのも、字義に即しない解である。「雅南子、本経訓」に「武王、特を牧野に破り、これを宣室に殺す」とあり、宣室は獄舎の名とされるが、獄舎の構造が、この亘の形のように曲折したものであったのかも知れない。「易、屯卦、初九」に写情でり」とは般亘の意。ともにめぐる意のある字である。「説文」に亘声に従うもの十一字のうち、字である。「説文」に亘声に従うもの十一字のうち、字である。この三音の関係には、心母の歳(滅・穢)とある。この三音の関係には、心母の歳(滅・穢)とある。この三音の関係には、心母の歳(滅・穢)とある。

奸 6 おかす・みだす・たわける

とあり、姦淫のことをいう。干・姦と通用する。とあり、姦淫のことをいう。干・ぼを犯すなり」と、「妊を犯すなり」と、「生を犯すなり」と、「大きない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない

开 6 みせぐ・まもる

汗。あカン

呼に口液のように注しており、この条も身液とする「身の液なり」の誤りとする。〔説文〕は洟に鼻液、1分の液なり」とあり、〔段注〕にいた。 (説文〕 二上にいた。 (説文〕 二上に

犴[豻]

缶〔罐〕

犴。「豻」ロ 野犬・ひとや

り、犴獄の意である。それが字の原義であろう。 し」、また「荀子、青坐」に「獄犴治まらず」とあ するが、〔詩、小雅、小宛」に「狱行治まらず」とあ するが、〔詩、小雅、小宛」に「狱行治まらず」とあ でなった。 では、これが字の原義であろう。

缶 6【罐】23 かめ・かん

建。 基

₩ 7 つらぬく・くし

他に、賞・慣・摜と通用して、慣れ親しむ意にも用たもので、貫と同じ意の字であろう。それで串通の象形 卑ざしの状であるが、もとは貝などを綴っ

侃

串夷は昆夷。人形使いを串客という。また幇間のいる。〔詩、大雅、皇矣〕「串夷すなはち路る」のいる。〔詩、大雅、皇矣〕「おればち路る」のいる。〔詩、大雅、皇矣〕「おればちなる。 徒をも串客というのは、慣の意に用いたものである。

坎 あな・けわしいカン

壇は四ち祭るなり」とあって、山林・川谷・丘陵燈は四年祭るなり」とあって、山林・川谷・丘陵めに犠牲を入れる祭祀坑をいう。〔祭法〕に「四坎とは墓壙のことで、もと墓穴をいう。また祭祀のたとは墓壙のことで、もと墓穴 河・轗軻などに作る。坎梁・坎稟は楚語であるらしゃ。 紫か なな ななな ななな なない あいろう。 坎坷は地が平らかでなく行きなやむことから、いう。 坎坷は地が平らかでなく行きなやむことから、 弓、下」「その坎は深きこと泉(地下水)に至らず」 の諸神を祀る。転じて一般に土の坎下したところを |志平かならず」の句がある。また陥の意に用いて坎
なら。 く、〔楚辞、九弁〕に「坎廩たる貧士 職を失ひて 穽という。壑・谷・坑・坎・陥は同系の語である。 声符は欠。欠は人があくびし

完 まったし カン (クヮン)

るを冠といい、廟で俘囚の首を撃つのを窓という。 て寛の字と爲す」というが、元は首。字は元首を全 みな完に従う字である。寛(寬)は巫女が廟前で舞 うして廟見する意であろう。廟で結髪して元服す う形で、完とは関係がない。 会意 に「全きなり。 、と元とに従う。 〔説文〕 七下 一に從ひ元聲。古文以

> 刊 (製)1 まもる・うつ

Y®Y

親に教る」の文を引く。干・扞・孜・敦は古今の字して「止むるなり」と訓し、「書、文侯之命」「我をとあり、扞と声義同じ。「説文」三下に敦を正字とがある。「大鼎」に「厥の友(同僚)と入りて孜る」がある。「大鼎」に「厥の友(同僚)と入りて孜る」 会意 とみてよい。 たと文とに従う。干は盾。干に打ぎ扱る意

早 ひでり・かわく

海経、大荒北経〕に、黄帝の女がその神であると大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲す」とみえる。[山大雅、雲漢] に「旱魃、虐を爲す」とみえる。[山大雅、雲漢] に「旱魃、虐を爲す」とみえる。[山大雅、雲漢] は「旱暵の事を舞ふ」ことを掌る。いわゆる舞雩 をう祭を旱暵といい、「周礼、舞師」 が変といい、「周礼、舞師」 をなっていい。雨を 水溢の絶えないときは、「社稷を變置す」とあり、いう。「孟子、尽心、下」に、十分に祀っても旱乾い その神は神の座からおろされるのである。

まゆみ・たて・てこカン

形声 用いる。てこは「てこふ」、「類聚名義抄」に「起わ。たおれた木の意もある。わが国ではてこの意に の意に用いる。また木の名としてはまゆみ・やまぐ 弱」を「てこふ」とよんでおり、てこでたおれたも 声符は干。干は盾であるから、そのまま盾

> のを起す意である。てこの字は槓杆、また槓桿に作 る。〔正字通〕に木挺というものである。

罕,(罕)。 あみ・まれ 鳥さしのあみの形。〔説文〕

象形

(若者)發することぞなり」、「論語、子罕」に「子、あみの形である。 〔詩、鄭風、大叔于田〕に「叔あみの形である。 〔詩、鄭風、大叔于田〕に「叔(後仗に用いる網飾りのある旗を罕輩という。 罼も鳥 罕に利を言ふ」など、稀の意に用いるのは、声の仮 ある。網をのせた狩猟用の車を罕靠といい、天子の するが、下部は長い柄の形で、 借である。 七下に「网なり。网に從ひ、干聲」と ト文にその形の字が

肝 きも・こころ

魂の居る所なり」とあり、肝胆といえば心、肝腎とう。また〔素間〕に「肝は糀を(疲れきる)の本、に三葉、右に四葉の形をもつことを木にたとえてい す。故にその體狀に枝幹あるなり」という。肝は左心に「肝は幹なり。五行において木に屬形」を表している。「おくれ」のでは、「おくれ」のでは、「おくれ」のでは、「おくれ」のでは、「おくれ」のでは、「おくれ」 葉はじめて薄く、元気が衰えるという。 いえば最も重要なところをいう。人は五十にして肝

侃 8 やわらぐ・たのしむカン

腻 :11/2 B 7

会意 人と口と彡とに従う。口は祝禱を収める器。

鼎〕の蓋の刻文に「侃師」とあるものは、他器に対して神気のあらわれる象を示す。また〔楚王盦念なそれが字の本義。その字形は祝禱して祈り、それにそれが字の本義。その字形は祝禱して祈り、それに て前文人を侃ましむ」のように侃を喜侃の意に用い、て皇考。(父)を喜侃す」、「井人安鐘」「用て追考しむ意の衎の仮借とする。金文には、「土父郎」により、はいいのではなり、とあり、〔段注〕にはその義をたの和樂の貌なり」とあり、〔段注〕にはその義をたの 郷(党)に「子路侃々如たり」の〔孔注〕に、「侃はまずな。」とするが、形義ともに誤る。〔論語、ざるを取る」とするが、形義ともに誤る。〔論語、 侃・和侃の字とは別の字である。 で、鋳込み鍋の形とみられる。〔説文〕に侃を剛直 その字は喜侃の字と稍しく異なり、鋳冶に関する字 「工師」というものと同じく、その鋳作者をいう。 従う形とする。また川に従うのは「その晝夜を含か〔説文〕二下に「剛直なり」と訓し、字を古文信に の意とするのは、おそらくその字の訓であろう。喜

8 はこ・いれる・よろいカン

曲乳 あり、 関の函を和訓によって「はこ」とよみ、箱根の関にないう。また「書なり」ともあり、書函の意。函会をいう。また「書なり」ともあり、書函の意。函会である。[玉篇] に「鎧なり」とあり、気とは鎧作りる。[玉篇] まならい あてて、そこより東西を関東・関西に分つ。〔礼記、あてて、そこより東西を関東・関西に分つ。〔礼記、 上に舌の形とするのは誤りで、その重文の字義であ 師への手紙の脇付には「函丈」という語を用 上〕に、師弟の間は「席閒、丈を函る」と 象形 を入れる嚢の形。〔説文〕七 正字は圅に作り、矢

廁 やくにん・つかさどるカン(クヮン) B (8)

るが、 て司るところあるものを官といい、人の感覚機関ですが、金文に嫡官・官司の語が多くみえる。すべをいい、金文に嫡官・官司の語が多くみえる。すべわれる場所である。のち将官の意より、ひろく官僚 さんとして、官に各る。競、篾曆(旌表)せらる」周中期の〔匡庙〕に「伯辟父、競(人名)を皇かば、「佐路」、「佐路」、「佐路」、「京路」に「佐路」、「京路」にいる。西山を求めることを館止という。宿る意である。 西山を求めることを館止という。宿る意である。 西山を求めることを館止という。 あろう。 とあり、官は軍功を賞する儀礼としての蔑暦が行な ら、これを迎えて饗饌することを館といい、その留 あり、官が祭肉をおく軍の聖所の意であることは疑 帝がその聖所に臨んで宿るかどうかをトするもので 牛牲を供すること、「帝は官するか」とは館の意で、 るか」などの例がある。牛を官に用いるとは、官に 官に用ひんか」「真ふ、帝は官するか」「帝は官せざ に「父戍(祖王の名)に山伐(祭名)するに、牛を自は将帥たるものが携行する祭肉の形である。卜辞 いう。また一は廟屋で衆を容れるところではなく、 自はなほ衆のごときなり。これ師と同意なり」とす 「吏の君に事ふるものなり。宀に從ひ、自に從ふ。 き、軍礼を行なうところとした。〔説文〕一四上に るときに奉ずる祭肉の形。軍行中はこれを聖所にお 会意 いがない。そこは軍の守護霊のあるところであるか 官はもと一般の吏をいうものでなく、将官を 一と自とに従う。一は廟屋、自は軍を発す ト文には自を両手で捧ずる形に作るものも

> なる字である。 を五官という。字はまた宦と通用するが、もとは異

臽8 おとしあな・おとしいれるカン

B

たまで、「宗周 鐘」に「南國艮子、敢て我が土を金文にも〔宗馬 鐘」に「南國艮子、敢て我が上間に、口中に逆茂木をうった形と思わている。ト文には、口中に逆茂木をうった形と思わている。ト文には、口中に逆茂木をうった形と思わないたとの旁に、上の崩れるさまを示す小点を加え 呂 虐す」とあって、異族の侵寇することをいう。 さき 阱 なり」とあり、篆文の字形は、人が口中に象形 ― 人が土あなに陥ちる形。〔説文〕 七上に「小象形 ― 人が土あなに陥ちる形。〔説文〕 七上に「小

冠。 かんむり・げんぷくカン(クヮン)

る加入儀礼で、このとき名を定め、字をつける。 は厳粛を極めている。これによって氏族の成員とな え、加冠して薦腆し、酬 酌を行なうなど、その礼上冠礼」にその次第をしるしている。廟中に資を迎上を禁む。 ルかない 儀礼を冠という。すなわち冠は元服の礼で、〔儀礼: なった。 冠に法制あり。寸に從ふ」というが、寸は又にして 冕の總名なり。 1に從ひ元に從ふ。元は亦聲なり。 と畳韻をもって訓し、「髪を繁む所以なり。 弁り」と畳韻をもって訓し、「髪を繁む所以なり。 発もと一に従うべき字である。〔説文〕七下に「繁なもと一に従うべき字である。〔説文〕七下に「繁な 冠・窓はすべて廟中で行なわれる儀礼であるから、 手、廟中において手をもって元(首)に冠を加える と寸とに従うと解してもよい。 に従うと解してもよい。**タネ゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚と元と寸とに従う。また完く*

いる。またその師をいうことがある。

ない若者の意である。 (礼記、曲礼、上)「二十を弱といふ。冠す」とあり、二十のことを弱冠という。冠は頭上にあるもり、二十のことを弱冠という。冠は頭上にあるもり、二十のことを弱冠という。冠は頭上にあるも

巻の「卷」のまく・まがる

一会意 旧字は、メルサンドとに従う。手で巻く動作を捲という。 とする形で、「説文」九上に「膝曲るなり」とするもする形で、「説文」九上に「膝曲るなり」とするもする形で、「説文」九上に「膝曲るなり」とするもする形で、「説文」九上に「膝曲るなり」とするものであるが、ここではその獣皮を捲きこむことが巻のであるが、ここではその獣皮を捲きこむことが巻のであるが、ここではその獣皮を接きこれだ形とない。素の下に手を加えるものは攀で、握り攀をしたい。。皮革や紙などを捲くことを巻といい、古く書には巻いて一編としたので、書巻という。とする形で、説となるものであるが、ここではその獣皮を接きこれだ形となっ。方にない。 大は獣ないう。 大は獣ないう。 大は獣ないう。 大は、いう。 大きないっとない。 大きない。 大きないる。 大きないっとない。 大きないっとない。 大きないっとない。 大きないっとない。 大きないる。 大きないっとない。 大きないっとないまない。 大きないる からない はいまいる はいまないる はいまない はいまないる はいまんないる はいまないる はいまんないる はいまないまないる はいまないる はいまないる はいまないまないる はいまないまないる はいまないま

咸 9 おわる・ことごとく・みな

八 智問 我版情

文〕三上に「皆なり、悉なり」とし、字は戌と口と意で、鉞を加えて封じ終ることを鍼という。〔説器。これに聖器である鉞を加えて、その祝禱を守る器。 戊・鍼〉と口とに従う。口は罰で祝禱の会意 戌・鍼灸

に従い、戌は悉、送ぶくの人がものを言う意であるに従い、戌は悉、送れる。また副詞に用いて、「令弊」で意象の字である。金文では、咸は廷礼の儀節の終ることをいい、「班段」「攸勒(馬具)を賜はしむ。縁る」のように用いる。また副詞に用いて、「令弊」「四方の命を含き、既に咸く命ず」、「叔夷鐘」「九州を成有す」のようにいう。「国語、魯語」「少賜は見な。からず」は、動詞的用法である。この祝禱に対して神の感応があることを感という。「左伝〕僖二十四年「昔周公、二叔(管叔・蔡叔)の域がざるを帯む」は感和の意である。また甚だしく人の心意をあかすことを「撼かす」という。咸は織の初文。感・撼はその声義を承ける一系の字である。感・撼はその声義を承ける一系の字である。

免 9 おおきい・さかんなさま

14 (B)

いう。いずれも引伸の義である。 いずれも引伸の義である。 いずれも引伸の義である。 とは 広大なさま、「礼記、籍文の形は免・奐と似ており、これらの字がもと 独立の形は免・奐と似ており、これらの字がもと 独立の形は免・奐と似ており、これらの字がもと ないから。 いずれも引伸の義である。

女好 9 よこしま・わるい

震 是

会意 女を三人合せた形。〔説文〕二下に「私するなり。三女に從ふ」とし、重文として旱声の古文 るなり。三女に從ふ」とし、重文として旱声の古文 があり、「奴は訟ふるなり」という。三人ならば、その争訟は一そう熾烈である。奸と声義が同じとされるが、奸は婬を犯すこと。「私するなり」という。「狂子、徐无鬼」に「それ神は和をなり」という。〔荘子、徐无鬼〕に「それ神は和をなり」という。〔荘子、徐无鬼〕に「それ神は和をなり」という。〔荘子、徐无鬼〕に「それ神は和をなり」という。〔荘子、徐无鬼〕に「それ神は和をなり」という。〔荘子、徐元鬼〕に「それ神怪の文様し、器を盗むを姦と爲す」とみえる。賄とは神怪の文様やない。。だ伝〕宣三年に、疊器に神怪の文様や変という。「左伝〕宣三年に、疊器に神怪の文様を加えるのは、「民をして神姦を知らしめる」ためであるとしている。奸は奸妊、姦は神をけがする悪の行為で、もと字の初義を異にするものであった。の行為で、もと字の初義を異にするものであった。の行為で、もと字の初義を異にするものであった。

医 9 つかえる・まなぶ

会意 べと臣とに従う。一は駒屋。臣はもと神会意 (本社)と臣とに従う。一は駒屋。臣は神につかえる徒隷を原義としてつかえるものであり、宦は神につかえる徒隷を原義として、その子を納官せしむ」というのは、なお古俗に近い事実である。〔左伝〕僖十七年「妾を宮女と爲す」というのも同じ。金文の(伊設)に「康宮の王の臣妾百工を官司せよ」とあるように、それらは王の所有とされ、特定の宮廟に属して、これに奉仕するものであった。〔国語、越語〕に、越王句践が「范蠡と入りて吳に宦す」というのは、そのような徒隷として仕えることであった。宮中に仕えるものには、宦者として去勢した男子を用いる。のち、出仕のために遊学することを宦学という。さいい、出仕のために遊学することを宦学という。さいい、出仕のために遊学することを宦逆といい、出仕のために遊学することを宦党といい、出仕のために遊学することを官学という。さいに、出れ、上〕に「宦學して師に事ふる」礼をしるしている。

相のこうじ・みかん

八七に栗の大きさの柑子のことがみえる。 「伊勢」に甘子を出して大、ただ橘は久しく保つも、柑は腐敗しやすい。 「楠録」に柑の別種に八あり、乳柑を第一とするとして大、ただ橘は久しく保つも、柑は腐敗しやすい。 「食名 類菜炒」。に柑子を出して形声 声符は甘。〔倭名 類菜炒」。に柑子を出して形声 声符は甘。〔倭名 類菜炒」。に柑子を出して形声 声符は甘。〔倭名 類菜炒」。

東 9 カン

カン柑東看竿衎信倝

崇

家形 (東)の中にもののある形。[説文] 六下とに従うて会意、八は分別を意味するとする。字形とに従うて会意、八は分別を意味するとする。字形とい従うて会意、八は分別を意味するとする。字形よりいえば、東は橐の卑形字で、東はその中にもののある形。長母の字に兼(廉)・監(濫)など、その両系に分れるものがあるのと同じく、頭音klのkの脱系する現象によるものである。

看のみるかる

東月 計画 会意 手と目とに従う。手の月 計画 会意 手と目とに従う。手の月 計画 を目の上にかざして、望み見ることをいう。〔説文〕四上に「稀るなり」とあり、望見する意。経籍に殆ど用例がなく、岑参「看る君望見する意。経籍に殆ど用例がなく、岑参「看る君が馬去つて疾き、疾戦「路人、老儒の看を作すこなる。

竿 9 さか

史書のことをまた汗青という。いる。汗青とは竹簡。記録を竹簡にしるしたので、寇〕に竿牘というのは竹簡、竿はのち汗青の汗を用った。

行 g たのしむ・よろこぶ

倌 10 とねり

形声 声符は官。〔説文〕八上に「小小学」の句を引く。その第三章に「霊雨旣に零るで、〔毛伝〕に信人を駕を、主るものとするが、〔説らしむ」と歌う。この詩は衛の都作りを歌うもので、〔毛伝〕に信人を駕を、これ〕にいう内小臣、対が国の舎人にあたる。「桑田に説る」という行為は、都とする新しい地の地霊に接するためのもので、は、都とする新しい地の地霊に接するためのもので、たの地霊を慰撫するために、種々の儀礼が行なわれた。「説る」は、わが国の「旅宿り」にあたり、その地霊を慰撫するために、種々の儀礼が行なわれた。「説る」は、わが国の「旅宿り」にあたり、それた。「説る」は、わが国の「旅宿り」にあたり、それた。「説る」は、わが国の「旅宿り」にあたり、それた。「説る」は、わが国の「旅宿り」にあたり、それた。「説文」

倝 10 はたのはためくさま

4

字形と声義との関係を疑問とする。〔繋伝〕にはま 從ひ、从聲」とするが、なお「闕」の一字を加えて、文〕七上に「日始めて出で、光軌々たるなり。日に、れて、 旗ざおと、吹き流しのはためくさま。〔説 の杠飾りで、金文の旌旗の **** は、旅学上につける幸字形 が、三日に従う理由はない。日の形にみえるところ た籀文の字形について、三日の从中にある形とする 1 旗の図象

加えている。

図象には、必ずその飾りを

やのふくろ・おちいるカン・エン

10

月之交」の「豔妻」の豔、〔漢書、谷永伝〕に引く「ない」の面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、十等がしの面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、十年にの面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、世界はこの面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、世界はこの面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、世界はこの面を、問旗諸器にみえる娘、〔詩、小雅、世界はこの面を、問旗諸器にみえる娘、〔神経〕 た字の上部は、車上に弓、藁を繋けるわなの形で、 好々たり」と解するが、そのような用例はない。ま がしとする。字の上部を好の形とみて「舌の體、 がしたする。字の上部を好の形とみて「舌の體、 のような用例はない。ま て用い、〔毛公鼎〕「乃の辟を以て、囏(艱)に、圅、舌の形などではない。金文では字を陥の義に仮借し

いる例が多いから、函を函とよむこの函氏閻妻説は、一人と(緩)・或(國)など、音がその二系に分化して一般(一人)であるとする。喩母の字には句(対)・「閻妻」の閻にあたる字で、函・頻・豔・閻はみな「閻妻」の閻にあたる字で、函・頻・豔・閻はみな 十分に成立する可能性がある。

悍 10 つよい・たけだけしいカン

なるものを三段に分けて、強悍・上悍・下悍とい 性情をいう。それで手に負えないものを悍民・悍婦 急・悍民などの語があるように、むしろ狂暴に近い のようにいい、悍馬のようにも用いる。馬の悍威 「勇なり」とするが、軽悍・愚悍・悍形声 声符は早。〔説文〕一〇下に

捍 打 6 まもる・ふせぐ

には干・牧の字を用いる。干は盾、盾で衛ることをには干・牧の字を用いる。干は盾、盾で衛ることを第〕には「衞るなり」とする。扞衛の意には、金文篇〕には「衞るなり」とする。扞衛の意には、金文章とは「大・牧の字を用いる。干は盾、盾で衛ることをは、「大・牧の字を用いる。干は盾、盾では早。〔説文〕 二上に扞 に足らず」の語がある。 いう。〔列子、楊朱〕に「皮膚は以て自ら捍禦するなど」

天 10 みちじるし・しおり

とで、「書、禹貢」に「山に隨ひて木を栞る」とみ

> と改めているのは、木頭を刊って表識・榜示とす 形。わが国では「しおり」とよむ。 ることをいう。壁中古文とされる第一字は誤った字 える。〔史記、夏本紀〕に「山に行り木をまとす」

桓10 しるしのき・つよいカン(クヮン)

い孔を残しているものがある。〔漢書、酷吏伝〕に起源となった。碑の古い形式のものには、碑頭に円その碑に被葬者の名をしるしたものが、のちの碑の 漢代には和表といい、のち華表の字を用いる。都市いう。横木をつけているので、また交午柱ともいい、その木に著けた箱に投書することが許されていたと た。かつて「誹謗の木」とよばれ、民の訴えごとを、のち官庁の前にも立てられ、左右に各、一桓を樹て 樹てて表識としたものである。古代には、神聖な場 の碑頭に穴を作り、そこに紐を通してつりおろす。 みえる。また桓碑は、墓壙に棺をおろすときに、そ [礼記、檀弓、注] に「四植、これを桓といふ」と の大通りには、稲荷鳥居のように並べて樹てたもの の上端に四方に出る横木の飾りをつけた。この柱は であるが、その古制は建物の四隅に樹てる定めで、 郵の表なり」とあり、 声符は亘。〔説文〕六上に「亭 宿坊の前に木を

O上の狟字条にその句を引いているから、それは狟 〔書、牧誓〕に「尚くは桓々たれ。虎の如く貔の如和・桓・華は音が通ずるが、禾がその古称である。 の仮借義である。 威のある勇武のさまをいう語であるが、〔説文〕一 く、熊の如く羆の如く、商郊においてせよ」とは武 場に、この桓表があったので、その地を桓東という。 という詩句があり、無頼の少年たちが処刑された刑 「何れのところにか死子を求めん」桓東少年の場」

10 (路)11 おちいる

を陥れることを陥擠・陥阱、誤って罪に陥ることをを陥れることを陥擠・陥阱、誤って罪に陥るといい、人の形であり、その聖所に臽を設けるのは、聖所を衛 各は坎中に人の陥る形。自は神霊の陟降する神梯*と、下のるなり」とし、会意にして亦声と解する。く、降つるなり」とし、会意にして亦声と解する。 文 リー四下に「高下あるなり。一に日日 陥答・陥刑という。臽の声義を承ける。 形声 旧字は陥に作り、呂声。〔説

乾 はたがひらめく・かわくカン・ケン

乙を〔説文〕「四下に「その出づること乙々たり」*なり。乙に從ふ。乙は物の達るものなり」とする。 た吹き流し、すなわち偃游の形で、旗の高くひらめば繁空の形、乙はそれにつけ と乙出の義に解しており、乾をもその義をもって説 くさまをいう。乾を〔説文〕」四下に「上に出づる **營** 会意 **倝と乙とに従う。** 倝

> なわれる、 大徳はこの卦のうちに象徴される。字義の深化の行大和を保合するは、乃ち利貞なり」のように、天の 〔詩、王風、中谷有雅〕に「嘆としてそれ乾く」とあろう。乾の本義とみられる古い用義例はなく、 の意が生じて、[易、乾卦]の乾の義を生じたのでものがある。旗游のはためく状態から、勇健・健剛 文の旗形図象にも、そのような杠飾りを加えている 文の字形には、倝上に晶形の飾りをつけており、金 乙は偃游と解するほかはない。〔説文〕のあげる籀 以て天に御す。乾道變化して、各ゝ性命を正しうし. を明らかにし、六位時に成る。時に六龍に乘じて、 って乾は乾坤の意となり、本来の字義を離れて、深 いうのも初義とはしがたいようである。〔易〕に至 一の方向をみることができる。

勘 かんがえる・しらべるカン

国では計算することを勘定といい、直観がはたらく を勘契、帳簿を引き合せることを勘会という。わが 書を対校することを校勘・勘合といい、通門の割符と考え定める意とするが、経籍にその用例はない。 らは会意字とすべきである。〔玉篇〕に「覆定なり」 するが、戯・堪なども甚声とは異なっており、これ 会意 |三下に「校ふるなり」とし、甚声と会意 甚と力とに従う。[説文新附]

> 堪・碪で礪ぎ台の形。これですきなどを礪ぎあげるないない。」という。力はすき、甚はことを「勘がよい」などという。力はすき、甚は 意であろう。勘考はその転義とみられる。

患 うれえる・わずらうカン(クヮン)

惠 弱 歌

形声 心情の上に移して患という。 で、そのとき宝貝をそこなうおそれがある。それを とあり、憂患・患害・患苦・病患の意に用いる。 串 の声義を承ける字であるが、串は貝を貫いて綴る形 声符は串。〔説文〕一〇下に「憂ふるなり」

涵 ひたす・うるおう・しずむカン

鄙 人の讃言をにくむ政治詩であるが、「僣(醬)始め沈むことを涵というとする。〔詩、小雅、巧言〕は、沈むことを涵というとする。〔詩、小雅、巧言〕は、 「水澤多きなり」とし、[方言]に、楚郢以南では、に蓄積し、享受する意にFL て旣に涵ふ」とあり、譖言が水の入るように次第に る。転じて涵蓄の意となり、涵養・涵泳など、十分 人心を侵すことをいう。 に蓄積し、享受する意に用いる。〔説文〕一「上に 形声 形。涵は水が低いところを涵す意であ 声符は函。函は人が坑に陥る

琀 ふくみだま

を、飲含の礼という。 を、飲含の礼という。 を、飲含の礼という。

売ュ いのむしろ・わらう

貫口 つらぬく・ぜにさし

中国 会意 貝と出とに従う。「説文」七上母員 しの古針で行ないつづける意。人の出身地は父祖という。金文は貝二つを綴る形に作る。それを前後を生ずる。ものを貫く意よりして、時間的に前後妻を生ずる。ものを貫く意よりして、時間的に前後妻を生ずる。ものを貫く意よりして、時間的に前後を生ずる。ものを貫く意よりして、時間的に前後を生ずる。ものを貫くだいい、それより貫通・貫穿のいう。「殺することを貫行という。「漢書、谷永伝」「次さして、時間の貫なり」とあり、ぜにさしせいう。「説文」七上母目

長習という。慣はその声義を承ける字である。 は来の地であるから本貫・旧貫といい、その習俗を

|| 1 単門・ふせぐ

野型

喊 2 カン

はその義に用いる。 という できない できない できない できない であって、 でいるで、 でいるでは、 でいるでいるでは、 でいるでは、 でいるでは、 でいるでいるでは、 でいるでは、 でいるでは、 でいるでは、 でいるでい

喚 12 よぶ・わめく

形声 声符は数。[説文新附] 二上に の」に「窮措大(貧書生)、妓女を喚ぶ」という一 の」に「窮措大(貧書生)、妓女を喚ぶ」という一 条がある。

寒、12 【寒】12 さむい・こごえる・まずしい

會會

に二横線を加えており、それは敷きものの形であっ形をそえている。しかし金文の字形は両艸と人の下あげ、人がその中に寒を避けている形で、下に冰の「凍るなり」とするが、篆文の字は屋内に草を積みへとった。

状をいう語に用いる。といい、また寒門・寒徹・寒陋など、すべて貧窮のといい、また寒門・寒徹・寒陋など、すべて貧窮のといい、また寒門・寒徹・寒陋など、すべて貧窮のて、冰ではない。狂鷲

吹 12 やまのおくぶかいさま・はめる

換12 とりかえる・かわる

形声 声符は炊。 奥は婦人分娩の象で換することを換揚という。 一声符は吹。 奥は婦人分娩の象もって鵝に換えた話はよく知られており、書を求めることを換鵝という。

敢 12 あえて・つつしむ

いる。

また。 大丁を光かしむ」とあり、また〔論語、尭曰〕「敢 文丁を治や 「敢て明公尹の休に揚へ、別て父丁に追ぼし、用て を、といっな、とまる。」だ、別で、以の廟号)の ない、の心をもってことに従うことをいう。〔4.2.1 の心をもってことに従うことをいう。〔4.2.1 の心をもってことに従うことをいう。〔4.2.1 の儀礼の廃絶とともに字の初義を失うことが多い。 の義とするが、敢の初形初義は、 の義。また字形を「受に從ひ古聲」とし、受を闘争 るなり」は勇敢の意とするものであるが、最も後起 こと母れ」のようにいう。〔説文〕四下に「進み取 て内國を伐つ」、〔師劉設〕「敢て否善(不善)ある すまじきことを為す意となり、「泉 茲卣」「淮夷敢霊に対していう辞に用いる。敢為の意より、本来為霊に対していう辞に用いる。敢為の意より、本来為 て昭かに皇々たる后帝に告ぐ」のように、祖霊や神 おかす意があり、敢為・敢行の意となる。 る意がある。また神霊に対して、あえてその尊厳を 礼を敢という。それで敢には厳恭、 を招くために鬯酌し、祝禱するもので、その鬯酌の 体象形の字である。厳(嚴)の字はこれに従い、そ 儀礼の場所を清める灌鬯の儀礼を示すもので、そ 象形 金文の字形は、杓をもって鬯酒をそそぎ、 の屋上に多くの祝禱の器を列している形である。神 きがたいものであるから、象形とする。いわゆる全 の鬯酌の形を字形化したもの。要素的に分解して説 いる。このような神事に関する字については、そ すでに全く失われ つつしみおそれ その厳恭

棺 12 カン (クヮン)

植。常

を布帛で綰って収める木箱。「左伝」傳二十八年を布帛で綰って収める木箱。「左伝」傳二十八年う。「白虎通、崩斃」に、棺を完の声義をとるとするのは疑問である。また「説文」六上に「關なり」とするのも、関ずるものとする音義的な解釈にすぎない。「丈夫棺を蓋うて、事方めて定まる」とは、歌詞に対して、東方ので定まる」とは、歌詞に対して、東方ので定まる」とは、歌詞に対して、東方のででまる。棺は尾体形声 声符は官。官に綰るの義がある。棺は尾体形声 声符は官。官に綰るの義がある。棺は尾体

款 2 まこと・よろこぶ

とを定款という。のち契約の条項を定める意となる。とを定款という。のち契約の条項を定める意となる。その相約するところを文章に移すこれを整鎖することをいう字である。呪能をもつ獣を用いて祈るのは、厚く願うところのある意であるから、それより誠心を致す意となり、誠心をもって交のる意となる。その相約するところを文章に移すことを定款という。のち契約の条項を定める意となる。その相約するところを文章に移すことを定款という。のち契約の条項を定める意となる。その相約するところを文章に移すことを定款という。のち契約の条項を定める意となる。

カン 渙 睅 睆 稈 萈 産〔藿〕 酣

後 12 ちる・はなれる

形声 声符は奥。奥は婦人の分娩す を充といい、俊といい、娩という。奥はその正面 姿を免といい、俊といい、娩という。奥はその正面 形。渙・煥・換はその声義をとる字である。渙は 形。渙・燥・換はその声義をとる字である。渙は 形。②こと判決たり」、「大雅、巻阿」「爾の游を伴奥 機ぐこと判決たり」、「大雅、巻阿」「爾の游を伴奥

非 12 カン(クヮン)

院 12 おおきなめ

彫声 一声符は完。〔説文〕四上に「大

時のような出目ではなく、つぶら目の、大きく美しいりであろう。〔荘子、天地〕に睆々然という語があり、熟視することをいう。〔詩、小雅、有状之柱〕、「状たる柱あり、院たる實あり」、また〔小雅、大京」「皖たる彼の牽牛」は、みなまるく美しいもの東」「皖たる彼の牽牛」は、みなまるく美しいものの形容で、牽牛星のような星の光にもいう。漆塗りの色の美しいことを、〔礼記、檀弓、上〕に「華にして睆たり」のようにいうことがあるが、漆塗りの本字は垸、睆はその仮借字である。

稈 12 わら・むぎわら

見 12 みこのいのるすがた

すべい。 を見という。上部はその巫女の目に呪飾を加えて祈る巫女の があり、それは廟中で巫女が祈禱しているさまをいう。上部はその巫女の目に呪飾を加えている。 と見というが、声が合わず、その字形も山羊など 獣の形とはみえない。この字に従うものに寛(寛) 獣の形とはみえない。この字に従うものに寛(寛) 獣の形とはみえない。この字に従うものに寛(寛) 獣の形とはみえない。この字に従うものに寛(寛) と関という。上部はその巫女の目に呪飾を加えて祈る巫女の を見という。上部はその巫女の目に呪飾を加えて祈る巫女の

の如し」とあり、莧とは異なる字である。 の如し」とあり、莧とは異なる字である。 [論語、釈謝]に「類は美爾として笑ふ」とみえる甍は莞覧 (対域 女が媚 のことを行なうときの姿態をいう。に「莧、夫子莧爾として笑ふの莧の如し」とみえる。に「莧、夫子莧爾として笑ふの莧の如し」とみえる。に「莧、夫子莧爾として笑ふの莧の如し」とみえる。に「莧、夫子莧爾として笑ふの莧の如し」とみきのの如し」とあり、莧とは異なる字である。

作12 「花」16 草が多い・あし・よし スキ)

置 然 死

形声 正字は槎に作り、在声。〔説文〕「下に崔を が続、花はあし・おぎの類である。の音をカンの 音でよみ、崔葦・崔席のようにあしの意に用いる。 でよみ、崔葦・崔席のようにあしの意に用いる。 でよみ、崔葦・崔席のようにあしの意に用いる。 でたる。よし・あしの密生する、いわゆる葦原であ は沢名。よし・あしの密生する、いわゆる葦原であ る。〔詩、幽風、七月〕に「八月崔葦」の句があり、 よし・あしなどを刈り取って、蚕の下に敷く用意を することをいう。卜文の字形は鳥の象形で、おそら く雚の異文であろう。

11 たのしむ・たけなわ

けを甘美の養に用いる。 甘草の昔より出ており、果物では柑という。〔書、 けずの昔より出ており、果物では柑という。〔書、 けかまた〔韓非子、十過〕「酣戦の時」のようにたけな たて、「韓非子、十過〕「酣戦の時」のようにたけな ただ。

12 もんのしきり・ふせぐ・しずか

新

間 12 「胴」12 すきま・あいだ・しずか

學 開 明 期

要素 正字は閉に作り、門と月とに従う。〔説文〕 二上に「隙なり。門と月とに従ふ」として、なお古文一字をあげる。その古文の形から考えると、字は形を含んでいる。その古文の形から考えると、字は形を含んでいる。その古文の形から考えると、字は形を含んでいる。その古文の形から考えると、字は形を自るし、「長子遺別して、來りて郡(昭)王をである。〔宗周、韓〕に、外族である長子の来のであろう。〔宗周、韓〕に、外族である長子の来のであろう。〔宗周、韓〕に、外族であると、字は別に作り、門と月とに従う。〔説文〕

大学がままり、には、古文に似た字形がある。字の「曾媛無興空」には、古文に似た字形がある。字の「古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な種々の方法が古代の儀礼には、攻撃的また防禦的な事を表している。

勧3 (動) り すすめる・つとめる

形声 旧字は動に作り、雑声。雑は を表すくの大きな目のさまをいう語とされているが、勧・観(觀)・歓(歡)・謹などの声されているが、勧・観(觀)・歓(歡)・謹などの声とであるから、これらに共通する意味をもつものといけれ、もと鳥占いの方法に関する意味をもつものといけれ、もと鳥占いの方法に関する意味をもつものといい「惡を懲めて善を勸む」の語があり、〔説文〕「に「惡を懲めて善を勸む」の語があり、〔説文〕「空を診りて善なり」という。勧勉・勧務はみな力がの形であるから、勧と農事を勧む」の語があり、「説文」「空をしているが、一般である。

寛は「寛」は、ゆるやか・ひろい

さまをいう。その気象は寛緩・寛舒、ゆえに寛道の字とするが、廟中の変なが終歌漫舞して祈る巫女、寛は〔説文〕七下に「屋、寛大なり」とし、巫女、寛は〔説文〕七下に「屋、寛大なり」とし、上、「人」、「人」、「人」

度についていう語である。家の大きさをいう字ではなく、すべて人の気象・態線・寛弘・寛弘・寛大・寛容・寛和などの義が生れる。

幹 13 「榦」14 はしら・みき・ただす

第 "

下海 声符は干。正字は軟で軌声。もともと軌は、 を加えて根幹の字となる。干にも学・杆の義があり、 を加えて根幹の字となる。干にも学・杆の義があり、 を加えて根幹の字となる。干にも学・杆の義があり、 を加えて根幹の字となる。干にも学・杆の義があり、 を加えて根幹の字となる。「説文」六上に「満を築くと きの端木なり」というのは、版築のとき、その版を きの端木なり」というのは、版築のとき、その版を きの端木なり」というのは、版築のとき、その版を をえる両端の柱をいう。「爾雅、釈詁」に「槇は幹 なり」とするが、槇は横にわたし、幹は両端に立て る木である。しかし軌の字形は旗竿の象形であるか ち、幹枝・槙幹の意はその転義。幹枝はまた十幹十 二枝をいい、字を略して干支という。ト辞に日辰を いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 いうのにすべて干支を用いており、その法は文字以 のえに才幹・幹主・握幹・幹事のように用いる。幹 事とは、事を幹すものである。

感ョ こころうごく・おもう

蓼 潮

形声 声符は感。感は祝禱を収めた器のDを、

カン 戡 漢〔漢〕 裸 慣 箝 管〔琯〕 関〔關〕

実験などの聖器で緘封し、その呪能を守ることを意 、感傷の意とする。〔詩、召南、野有死麕〕「我が というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。のち人 というが、本来は神の感応をうる意である。 の心情に移していい、「玉篇」に「傷なり」とあっ の心情に移していい、「玉篇」に「傷なり」とあっ の心情に移していい、「玉篇」に「傷なり」とあっ のがでいて、感傷の意とする。〔詩、召南、野有死麕〕「我が で、感傷の意とする。〔詩、召南、野有死麕」「我が で、感傷の意とする。〔詩、召南、野有死麕」「我が で、感傷の意とする。〕

起 3 かつ・さす

漢は【漢】14 川の名・国名・おとこ

極 燃 遊

漢朝以来、中国を意味した。いうのは、五胡の乱以来のことであるという。漢は

1 きょめの儀礼・きょめる

形声 声符は果。〔説文〕一上に 形声 声符は果。〔説文〕一上に で清める儀礼で、課學をいう。[書、洛誥]「王、公室に入りて課す」の〔正義〕に、宝遺という玉器で、鬱鬯の酒を酌んで戸に献じ、戸がそれを地にで、鬱鬯の酒を酌んで戸に献じ、戸がそれを地にで、鬱鬯の酒を酌んで戸に献じ、戸がそれを地にで、鬱鬯の酒を酌んで戸に献じ、戸がそれを地にて、いる。金文の裸のほか、〔礼記、郊特性〕に降神の裸、〔周礼、大行人〕に礼賓の裸の策が、大行人」に礼賓の裸の儀礼をしるして保の逆造(出入)に裸す」とあって、いわゆる礼客の課にあたるものであろう。「小盂鼎」は告捷献資の裸にあたるものであろう。「小盂鼎」は告捷献資の礼をしるすもので、廟門に入るごとに服酒裸礼で、神野で入見して王に献饗したとき、終って裸礼を賜うたことをしるしている。裸は神事における重要な清めの儀礼で、わが国のみそぎに相当するものであろう。の儀礼で、わが国のみそぎに相当するものであろう。の儀礼で、わが国のみそぎに相当するものであろう。の儀礼で、わが国のみそぎに相当するものであろう。

慣 4 ならう・なれる

慣・習にはいずれも褻翫、なれもてあそぶ意がある。「閑・狎・串・慣は習ふなり」とあってみな同訓。す」の句を引いている。樌は慣。〔爾雅、釈詁〕にす」の句を引いている。樌は慣。〔爾雅、釈詁〕に文とみてよい。〔説文〕 二上に字を攅に作り、「習文とみてよい。〔説文〕 二上に字を攅に作り、「習

箝 14 はさむ

管は「琯」は くだ・ふえ・つつ

男 14 【男別】19 もんのかぎ・とじる・せき

会意 旧字は關に作り、門と鈴とに従う。門に発を施す意。〔説文〕ニ上に「木を以て横に門戸を持するなり」とあり、かんぬきを施すことをいう。これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す職である。「呂氏春秋、慎木」に、これに関肩を施す事ともあげた話を載せ、「左伝」と表さい、「線献・三上に「織絹なり。糸の杼を貫くに従ふ」とあるが、「線猷・三上に「織絹なり。糸の杼を貫くに従ふ」とあるが、「線猷・三上に「織絹なり。糸の杼を貫くに従ふ」とあるが、「線猷・三上に「織絹なり。糸の杼を貫くに従ふ」とあるが、「線猷・三上」に「編市は護してあるう。門関の意より、交通上・軍事上の要所の名となる。「孟子、梁恵王、上」に「編市は護して征せず」とあり、課税はしないが、その出入を厳に任せず」とあり、課税はしないが、その出入を厳に任せず」とあり、課税はしないが、という。

遅 15 かでり・かわく

形声 声符は夢。 英はひでりのとき、 薬を繋いて雨請いすることを示す字で、 薬を繋いて雨請いすることを示す字で、 でと双声の訓。〔周礼、舞師〕に「皇舞を教ふ。帥っるて旱暵の事を舞はしむ」とあり、雨請いの舞をいう。 でと双声の訓。〔周礼、舞師〕に「皇舞を教ふ。帥っるて旱暵の事を舞はしむ」とあり、雨請いの舞をいっ。 できているのまであった。 できているであった。 できているであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるでは、 であった。 でいるであった。 でいるでは、 でいるであった。 でいるでは、 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるでは、 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるでは、 でいるであった。 でいるでは、 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるであった。 でいるでは、 でいるでいるでいるでは、 でいるでいるでは、 でいるでは、

歓 15 【歌】 21 カン (クヮン)

灣。

形声 旧字は歌に作り、灌声。崔は毛角のある鳥の大きな目をあらわしている形で、みみずくの類の大きな目をあらわしている形で、みみずくの類の図象をしるすものがある。「説文」ハ下に「喜樂するなり」とみえる。字は惟・離・繋と通用し、歓喜の意に用いる。「礼記、檀弓、下」に「茶を啜り水を飲み、その歌を盡す」という語がある。心にか水を飲み、その歌を盡す」という語がある。心にかれているだ。

熯 15 かわく

ルターの下に「態は敬なり」とみえる。

ルターの下に「態は敬なり」とも、漢の省声であるとするが、に「乾く見なり」とし、漢の省声であるとするが、に「乾く見なり」とし、漢の省声であるとするが、「大きない。」に「萬物を燥かすものは、火より漢くしまり、説針」に「萬物を燥かすものは、火より漢くしまり、はり、はいいでは、大きない。」という。「詩、小雅、楚茨」「我孔だちが、はいいでは、大きない。」という。「詩、小雅、楚茨」「我孔だちが、はいいでは、一〇下に「きないでものとき、まない。」とかえる。

15 カン・みる

金意 臥と皿とに従う。皿は盤の形。水盤に臨んを意 臥と皿とに従う。皿は盤の意で、鑑の初文である。〔説文〕八上に「下に臨の意で、鑑の初文である。〔説文〕八上に「下に臨の意で、鑑の初文である。〔説文〕八上に「下に臨れずり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。臥に従ひ、峪の省聲」とするが、字は血にむなり。以に従い、本で、鑑の前となる。〔書、太甲〕「天、有周を監る」と、鑑れ、みな天より監臨する意。金文に「監嗣」という間には、みな天より監臨する意。金文に「監嗣」という間には、みな天より監臨する意。金文に「監嗣」という間となる。上は、の者というのは、鑑の意。監督・監軍はいるなどのである。と述とばら、の意というのは、鑑の意。監督・監軍は監問の意より官名となったものである。

緘 15 とじる・ふばこ

談

野番としての戦をおき、これを封線してその呪能を守る意。「説文」ニュに「腰を束ぬるなり」とあって、とじひもをいう。「礼記、要大記」に棺束を咸とするが、それも鍼の意。「説文」は次条に「縢は鍼なり」としており、縢はつづらのひもである。金でとり」としており、縢はつづらのひもである。金でとり」としており、縢はつづらのひもである。金でとり」としており、縢はつづらのひもである。金でとり」としており、縢はつづらのひもである。金でとり、としており、縢はつづらのひもである。金でとめるのを金縢という。「書、金縢」は、周公が武王の疾に代ることを祖王に祈る書を、金縢に収めた説の疾に代ることを祖王に祈る書を、金縢に収めた説が、書きいる。

暵

緩は「緩」はゆるい・おそい

カン

冥 16 字内・よのなか

憾 16 カン・うれえる

形声 声符は感。感は封縅して神に祝禱するのに対して、感応のあることをいう。その感応の意にみ対して、感応のあることをいう。その感応の意にみにぬものが憾。〔管子、版法〕「憾慨の心無し」、〔戦国策、秦策〕「身死すと雖も、憾悔無し」とは、遺国、秦策〕「身死すと雖も、憾悔無し」とは、遺国、秦策〕「身死すと雖も、憾悔無し」とは、遺い心情をいう。

越 16 うごかす・ゆらぐ

援 6 かン(クヮン)

第20代 形声 声符は賞。 景は環形の玉で環 関の武家では「援甲の禮」という。

幹は「浣」ロ あらう・すすぐ

語ふ」とあり、灰は石鹼の用をなした。 語ふ」とあり、灰は石鹼の用をなした。 に「な垢を濯ふなり」とあり、〔詩、周南、葛堂〕に「ここに我が衣を潔ふ」という。常沙という。常沙という。常沙という。字は浣と通用して、また上浣・中浣・下がという。「礼記、内則」に「灰に和して楽はんと流という。「礼記、内則」に「灰に和して楽はんと流という。「礼記、内則」に「灰に和して楽はんと流という。「礼記、内則」に「灰に和して楽はんと流という。「礼記、内則」に「灰に和して楽はんと流という。「礼記、内則」に「灰に石鹼の用をなした。

配 16 たらい・てあらう

※ ない。 必な

盤の法については、〔礼記、内則〕に詳しい。 と意 水と臼と皿とに従う。無は盤。〔説文〕玉上をたっところによって、みなその字を異にする。状といい、足を洗うことを洗といい、盤を洗うことを無といい、とを洗さことを洗といい、とを洗さことを洗といい、とを洗さことを洗といい、とを洗さことを洗といい、とが、カリカーのでは、「心臓の法については、〔礼記、内則〕に詳しい。

翰 16 たかくとぶ・はね・ふで

りが、新

形声 声符は倝。倝は高い旗竿に吹流しのある形

16 かさめる・ただす

下方、 下方、 東京に「証は諫むるなり」とあって両字互訓。 は、保氏」に「王の惡を諫むることを掌る」、 に「諫はなほ正のごとし」とは、証の意である。 に「諫はなほでのごとし」とは、証の意である。 に「諫はなほでのごとし」とは、証の意である。 とがこのに「証すなり」とあって両字互訓。 というには、証の意である。 というには、この意である。 というには、この意である。 というには、この意である。 というには、この意である。 というには、この意である。 というには、この。 にいる。

> ものである。 ものである。

還 16 【還】17 かえる・めぐる

FOR REPORT OF

形声 声符は裳。袰は死喪のとき、死者の復活を 順うて玉環を襟もとにおくことで、還帰の意がある。 意とするが、古くは復活・生還を意味する語であっ 意とするが、古くは復活・生還を意味する語であっ た。金文では軍を還す意に用い、「噩候罪」に「こ た。金文では軍を還す意に用い、「噩候罪」に「こ た。金文では軍を還す意に用い、「霊候罪」に「こ た。金文では軍を還す意に用い、「霊候罪」に「こ た。金文では軍を還す意に用い、「かけないです。 など、旋疾の意に用い、声義ともに異な る用法である。

館 16 【館】17 やかた・たち・やどる

物の中に安置することで、そこが軍の館止するとこれの祭肉として奉ずる自(蔵)を、建工館、一般のの中に安置することで、そこが軍の館止するとこれの中に、軍

還[還]

館〔館〕

環パ【環】17 たま・たまき

题 驱 题 多

のたまきの玉」と歌うように、わが国ではそのようのたまきの玉」と歌うように、わが国ではそのような魂振り的な呪能があると信じられており、殷墓からは、環形の玉器があると信じられており、殷墓からは、環形の玉器があると信じられており、殷墓からは、環形の玉器があると信じられており、殷墓からは、環形の玉器があると信じられており、殷墓からは、環形の玉器があると信じられ、字も形声字となった。国語で「たまずが作られ、字も形声字となった。国語で「たまが作られ、字も形声字となった。関連を求める呪器が作られ、字も形声字となった。

るから、環堵・環境のように、周辺をめぐるものは魂振りとして用いられる。環は円環形のものであな瑞玉は海神のもつものとされていた。「たまき」 の意に用いる。

曆 ととのえる

* の音も暦・歴(歴)の音でなくてはならない。 り、形を誤る。字は曆(暦)に作るものが正形であり、形を誤る。字は曆(暦)に作るものが正形であり。甘は亦聲なり」とするが、この字をその声義にり。甘は亦聲なり」とするが、この字をその声義にり。甘は亦聲なり」とするが、この字をその声義にり、形を誤る。解は調なり、日本の音をを表している。 とを金文に「暦を蔑す」、すなわち茂曆という。 「説文」が曆とする字は、その曆の字を誤り解した 功歴をかぞえ、 勝の地に両禾の軍門を樹て、そこを本陣として軍の 麻は両禾の形に従うが、両禾は軍門。山下などの形* もので、調味のこととは全く関係のない字である。 旌表のことなどを行なう。そのこ

瞰

で、「陽貨、孔子の亡き(留守)を欄ひ、孔子に蒸豚あり、すなわち遠く視る意である。字はまた臓・膿あり、すなわち遠く視る意である。字はまた臓・膿あり、すなわち遠く視る意である。字はまた臓・膿とあり、遠く臨み、見下すことをいう。語としてはとあり、遠く臨み、見下すことをいう。語としてはとあり、遠く臨み、見下すことをいう。語としては を饋る」とみえる。 声符は敢。〔広雅、釈詁〕に「視るなり」

製 7 「喜」 3 カン

ALD'S Ald'S

外族の侵寇のとき、その陣頭に女巫が鼓をうって侵一期では「來娘」というものがこれにあたる。娘はは、みな卜辞第二期(祖甲・祖庚期)のもので、第 すなわち外艱をいう語である。「來囏」をいうものとトする例があり、「來囏」とは外族の侵寇をいう。 ト辞に「今夕、來竸亡きか」「今日、來囏亡きか」すべきである。また籀文として囏の字形をあげる。あって艮を声符としている。それならば葉を意符とあって艮を声符としている。それならば葉を意符と 辟・墾治の意とするものであるが、また「艮聲」と ジー トニニ゙ー こっぱい というのは、艮を墾ま下に「土、治め難きなり」というのは、艮を墾ま 「厥の子は乃ち稼穡の艱難を知らず」とあり、稼穡 きた。ないのである。薬は焚巫の象鼓をうって祈る意があるからである。薬は焚巫の象 入することをいう。囏が喜に従うのは、喜にもまた みえない形。藁はひでりで困難する意。〔説文〕 で饑饉を意味するが、それより外寇などをも含めて のことは艱難の多いこととされた。 声符は艮。艮は邪眼に逢うて、おそれて進

韓 いげた・はたざおカン

羚 岁

〔説文〕玉下に「井垣なり」と「いげた」の意とし、会意 正字は倝に従うており、倝と章とに従う。

がみえるが、彫飾のある戈に赤い綾飾、柄の部分〔寰盤〕などに「戈瑪威・彤沙・騒必」を賜うことを製に作り、韋の形を含んでいない。金文の〔休盤〕 期の〔騷 羌 鐘〕に、三晋の韓の字がみえるが、字とらく旗竿に皮などを巻きつける意であろう。列国 韋は「その帀ることを取るなり」、すなわち釣瓶のい。 名・人名・地名のほかには古い用法がない。のちい 倝は旗竿に吹流しをつけた形であり、韋は韋皮、お*、 へんだり であるとするが、その用義例はない。って桔稈の 形とするが、釣瓶の形にはみえない。また「井垣 げたの字に用いるのは仮借義である。 か巻きつけて、使用に便したものと思われる。国 を韋皮などで捲いたものの意であろう。旗竿にも何 を「井橋」に作るものもあり、〔段注〕はそれによ

檻 おり・てすり

ており、櫳は字。牢は牛馬などを畜養するところ、という。次条の櫳字・柙字下に「檻なり」と互訓しという。次条の櫳字・柙字下に「檻なり」と互訓しい。 といい、おとし穴にしかけるものを檻穽という。 もので、罪人を護送することを檻送、その車を檻車同じである。また欄干をいう。檻は木を組んで作る 檻・柙は虎兕を入れるところであるから、牢と大体 声符は監。〔説文〕六上に「櫳

簡 18 「簡] 18 たけふだ・ふみカン

前

マに欠落が生ずるものを脱離という。簡の本義は簡なに欠落が生ずるものを錯離、また綴じおちによってて乱れが生ずるものを錯離、また綴じおちによってで動いたが、「韋編三絕す」のように紐が切れるという。 「是を用て大いに簡む」は、諫がそれぞれ本字。簡が黨の小子狂簡」は狂僴、また〔左伝〕成八年が黨の小子狂簡」は狂僴、また〔左伝〕成八年札。簡関は柬関、簡略は減略。〔論語、泛光に 〔書〕は一簡に二十数字をしるし、〔国語〕 〔孝経〕 によって区別があり、〔漢書、芸文志〕によると、いうのは、軍令をさす。簡の大小字数は、書の軽重 「大史、禮を典り簡を執る」とあって、史官の を用いるのは、仮借の通用義である。 は十二、三字、〔論語〕は七、八字であったらしい。 いい、〔詩、小雅、出車〕に「この簡書を畏る」とるところである。古く文書に簡を用いたので簡書と 五年「南史、簡を執りて以て往く」、〔礼記、王制〕なり」とみえ、ともに才育るし なり」とみえ、ともに木簡をいう。「左伝」襄二十〔説文〕五上に「牒なり」、また木部六上に「札は牒・兆声 正字は簡に作り、閒(間)声。竹簡をいう

観 18 (觀) 24 みる・しめす

· 一般 · 馬

翟は卜辞に「崔藉」の語があり、農耕儀礼に関す。親するなり」とあって、審らかに観る意とするが、 る字と思われる。また字が鳥の形であることから 旧字は觀に作り、 を 一覧文 八下に 「諦な

観(觀)

雚

懽灌

から、次第に引伸したものであろう。「観る」とい望・観兵・観遊の義は、農耕儀礼としての雚の儀礼 が含まれていた。 う行為には、呪的にその対象を支配するという意味 れるので、京をまた京観という。京観は、戦場の屍のような高楼の形。その高楼で観望のことが行なわあり、王領の圃でその礼が行なわれている。喬は京あり、王領の圃でその礼が行なわれている。喬は京 を収めて塗りこんだ凱旋門のような建物である。観 文の尊の銘に「癸未、王、圃に在りて喬に雚す」とえば、それは鳥占いの方法による儀礼であろう。金

雚 鳥の名・あまさぎ

整 節

あり、金文にも「效尊」に「王、嘗(地名)に雚するで歳せんか」「雚藉せんか」など祭儀としての例がでいて、往れている。「注意では、などのでは、これでは、「注意では、「注意では、これでは、「注意では、これでは、 字と思われるが、雚礼の古儀の詳細は知られない。 (觀)・歡(歡)・懽・讙なども、その声義を承ける よると、農耕に関する儀礼であろう。勧(勸)・観*のち納饗の儀礼が行なわれている。「雚藉」の語に 公東宮(人名)、饗を王に内る」とあって、崔礼のあり、金文にも『效尊』に「王、嘗(地名)に翟すあり、金文にも『汝尊』に「王、訾(地名)に翟す それならば、あまさぎの類である。卜辞にこの字が 四声の字とする。〔玉篇〕に「水鳥なり」とあり、であろう。〔説文〕四上に「小爵(雀)なり」とし、柔気の類であるから、雚もそのような冠毛をもつ鳥へ発言。 生角があり、大きな目をした鳥の形。崔は象形 毛角があり、大きな目をした鳥の形。崔は 金文に雚を図象的にしるすものがあり、 毛角があり、大きな目をした鳥の形。崔は その古儀を

司る氏族がいたようである。

懽 カン (クヮン)

ずれも古代の呪儀から出ている字である。権・款はいもと呪霊のある獣に祈る形の字である。権・款はい 〇下に「喜款するなり」とあり、「喜款」の款も、など、みな喜ぶ意で、声義の通ずる字。〔説文〕 | 懽はその吉兆を懽ぶ意であろう。 懽・歡(歓)・讙 形声 声符は雚。雚は農耕儀礼に関 する鳥占いの俗を示す字であるらしく、

灌 そそぐ・ひたすカン(クヮン)

ででいる字である。『礼記、明堂位』「灌ぐに玉漫灌す」は水をやる意。『礼記、明堂位』「灌ぐに玉河に灌ぐ」、『逍遥雄』「時雨降りぬ。しかるになほらうなどに用いる字である。『荘子、秋水』「百川、らうなどに用いる字である。『荘子、秋水』「百川、らうなどに用いる字である。『荘子、秋水』「直げった。 意。その礼を裸といい、また灌をその義に通用する瓚大主を用ふ」は、その玉器で酒をそそいで清める ことがある。 形声 声符は雚。〔説文〕一」上には

轘 くるまざき カン (クヮン)

狼氏〕に出軍に際しての誓辞を載せ、「馭に誓ふと きは、車轘すといふ」とみえる。車裂とは、足を左

鬟 23

みずら・わげカン(クヮン)

形声

声符は睘。睘は玉環、

まるい

形を意味する。〔説文新附〕 九上に

丸髻のようにまるく束ね

両漢以後にもなお行なわれた。 右の車に縛して走らせ、身を引き裂く残虐な刑で、

轗 ゆきなやむ

苦辛す」の句があるが、坎坷あるいは垳坷がもとのくと、は続木した軸であるという。[古詩]に「轗軻長くなやむ意とするが、轗の字はなく、軻字条一四上になやむ意とするが、轗の字はなく、軻字条一四上に 〔説文〕三下の坷字条に「坎坷なり」とあり、行き 字である。それを車の行きなやむ意に及ぼして、轗 の連語。 声符は感。轗軻の二字で双声 車のゆきなやむことをいう。

艦 いくさぶね

の建造が発達した。〔説文〕にはこの字はみえない。 その作戦区域に入ってからしきりに行なわれ、艦船 の声義をとる字である。水戦は三国時代に、長江が 船をいう。四方を板で囲んだ形が檻に似ており、檻り、舟の上に版屋を設けて、矢を防ぐ装置をした軍 声符は監。〔玉篇〕に「版屋舟なり」とあ

默 おとこやもめついた。

架砂

その形声字。老いて妻を失ったものをいう。寡はや り」とするも、魚名も明らかでなく、 もめ。合せて鰥寡という。〔説文〕一下に「魚な 魚と眾とに従う。聚は涕の象形字で、涕は また眾声とす

> 〔礼記、王制〕に「老いて妻無きもの、これを矜との。。 の詩には、多く魚がその発想に用いられている。 た老夫が夜も眠られぬ意とするのは、俗説である。 それを示す字であろう。魚の眼は閉じず、妻を失っ は亡妻に贈る魚に涕を垂れる悼亡の儀礼があって、 の正字。寡は廟中で亡夫を哭する妻の姿であり、鰥いふ」とみえ、字を矜に作ることもあるが、鰥がそ 古い観念によるもので、詩篇では愛情・結婚・棄婦 を要することがしるされている。魚に涕をそそぐと 鼎〕に「鰥寡」の語がみえ、施政の対象として注意 魚」、〔鄭箋〕に「魚子」という。金文では〔毛公 な)、梁に在り その魚は鰥魴」の〔毛伝〕に「大るも声が合わない。〔詩、斉風、敝笱〕「敝笱(やるも声が合わない。〔詩、斉風、於詩」(於詩 いう字が鰥を意味するのは、魚を女性の象徴とする

鑑23 厂 監 22 かがみ・みる・いましめカン

艦 0 沙水 縣縣

面に獣首があり、遊鐶を加えて の字となった。挿図の器は、四 が、のち慣用によって両字別義 その引伸義。監の繁文である れた。鑑戒・鑑定・鑑賞の義は を用いたが、 形の字で、鑑の初文。 形声 いる。そこに紐をかけて用いた 声符は監。監は盤に水を盛り、 のち鏡鑑が作ら もと水盤 顔容を写す

記 24

さけぶ(クヮン)

「髪を總ぶなり」とあり、

た髪をいう。

署品

会意

田と莧とに従う。〔説文〕 三上

器を列する形。莧は眉飾を加えた巫女が祝禱をして

いる形。その狂うような歌舞の声をいう。廟中で祈

離と同声であ

謹 かまびすし・よろこぶカン(クヮン)

る。蠶は囂と形義の近い字である。 る姿は寬(寛)。その声を囂といい、

【礼記、檀弓、下」「三年言はず。言くば乃ち離ぶ」字はまた記・喧に作る。また懽・歡(歓)に通じ、字はまた記・喧に作る。また懽・歡(歓)に通じ、・ない。とあって、かまびすしいことをいう。とみえ、賭は「倉韻篇)に「耳孔上に「驩語なり」とみえ、賭は「倉韻篇)に「耳孔上に「驩語なり」とみえ、賭は「倉韻篇)に「耳孔 噪なるをいう語であろう。 囂の意に用いることが多いが、もと祝禱の声の とは口やかましくいい騒ぐことをい えられる。〔説文〕三上に「譁なり」とあり、 の注に、「喜悦するなり」とみえる。字は讙譁・ 説文〕三上に「譁なり」とあり、讙譁占などを行なう儀礼を意味する字と考 声符は雚。雚はもと農耕の予 う。

話字条一二

ものであろう。 鑑

24 たまう トウ(タウ)

内部製

.門 たの競巨山は音咸。[漢志]「豫章郡籟」の音は感、の競巨山は音咸。[漢志]「豫章郡教」もので、その仮借義であろう。[山海経、海内経]「贛は陷なり」という。これは陥・坎の音で解する「贛は陷なり」という。これは陥・坎の音で解する 冒輸せしむること無かれ」とあり、[馬融注]に「爾、釗(康王の名)を以て非幾(非違)に「「爾、釗(康王の名)を以て非幾(非違)に 美をいう字であるから、もと神の恩寵をいう語であ ても、なお確かめがたいところがある。章は文身の [水経注] 贛水の贛も同じ。地名はみなその音を用 の意を含む字である。また〔書、顧命〕の〔馬鄭王条は神霊の降ること、貝は賜与のもので、神の恩寵 字対待であるから、贛に貢の音があったはずである [礼記] 〔漢石経〕にみなその字に作る。賜と贛と名 いる。他に用義例なく、字形が章に従うことについ に「賜ふなり」とあり、 端木賜は字は子賈。賈はまた贛に作り、〔左伝〕 に作り、 また籀文一字を録する。孔 正字は奉に従う字形 **奉声。**〔説文〕六下

驩 よろこぶ カン (クヮン)

ったかも知れない。

あそぶ意で、 と同じ。また〔孟子〕にみえる王驩は字は敖、敖は に「覇者の民は驩虞如たり」とあり、歓娯というのり」というもその用義例はない。〔孟子、尽心、上〕 、うもその用義例はない。〔孟子、尽心、上〕 驩と敖とは名字対待の義である。 [左 の意がある。〔説文〕一〇上に「馬名な 声符は雚。雚に懽・歡(歓)

> とする。[海外南経]には、それを尭の子、丹朱のれる驪頭がある。人面鳥、喙にして、翼のある人種とされ、[山神経、大荒南経]にその子孫の国とさとされ、[山神経、大荒南経]にその子孫の国とさ 義通ずる字である。[書、舜典]に、四凶を四極に晋世家]に歡(歓)に作っており、これらはみな声晋世家]に歡(歓)に作っており、これらはみな声伝〕文六年の晋侯驩を[公羊伝]には讙、〔史記、 国であるという。 放竄する神話があり、驩兜は南裔の崇山に放たれた

ガン

3 まるい・たま ガン (グヮン)

M

象形 通行する人を弾ち、丸を避ける様子をみて楽しんだ あろう。〔左伝〕宣二年、晋の霊公が台上より外をさな丸を充てている字形があり、それが字の初文で | 仄に従ふ」と、仄の反文であるとするが、それでは 「説文」 九下に「圜なり。傾側して轉ずるもの。 に丸・散・膏・丹の別がある。国語では全体を意味 という話がみえるが、その丸は弓で飛ばせたもので 「丸い、たま」の意はえられない。卜文に、弦に小 し、丸吞み、丸焼きのようにいう。 あろう。弾丸の意から、すべて丸いものをいい、薬 弓弦に丸いたまを充てて、これを弾く形。ないで、これを弾く形。ないで、これを弾く形。

6 きる・けずる ガン (グヮン)

ガン

丸

含

忨

れを截りおとす意。 すなわち刓とは首を切ることである。尤は元首、そ なり」とあって、その本字は斷(断)と首とに從う。 なり」とあり、また剸九上には「截る 削り取ることをもいい、「楚辞、 声符は元。〔説文〕四下に「剽

含 ふくむ・ふくみだまガン

死者の口に含ませるものは琀という。含には復活蘇う。〔説文〕こ上に「嫌むなり」とは、口に含む意。 器。蓋をしてその呪能を内に含ませることを含とい 君、垢を含む」とは、君 含蓄・含徳・含弘など、みな外にあらわれず、 生を祈る意味で、蟬の形を彫った玉を用いた。墓中 に深くものを包摂する意。〔左伝〕宣十五年「國 から出上する琀は、概ね死者の口のあたりにある。 る蓋の形、口は日。祝詞などを収める 会意 今と口とに従う。今は栓のあ

って恥を忍ぶことをい たるものは、度量をも



忨, むさぼる・おしむガン(グヮン)

とする。 **貪・愛は同義。楽しんで無為にすごすこと** 形声 「貪るなり」、「玉篇」に「愛むなり」 声符は元。〔説文〕一〇下に

義を存する字で、忨はのちの形声字とみてよい。 を忨という。〔左伝〕昭元年「歳を翫り日を愒る」 は声義同じ。ただ翫弄の意よりすれば、翫がその原 を〔説文〕習部四上に引いて翫に作っており、両字 を、〔説文〕に引いて「歳を忨り」に作る。同じ文

岩 いガ わン

としても用いる。古くは「磐戸」「磐座」「磐根」のその省略形で、わが国で多く用いる。また歳の略字 おむね神事的な用語である。 影廳 ように、磐をその字に用いることが多く、それはお 上に岩石の累々たる形。岩は 正字は嵒に作り、 山

きし・がけ

岸・傲岸・岸忽のようにいう。〔漢書、江充伝〕に紫に紫が、紫にのまびしいさまを人に移して魁岸訟という。岸峭のきびしいさまを人に移して魁京が、はその字を狩に作る。獄訟のことをまた中央の獄に対して、地方にある獄舎を岸という。 「建立」(作冊景直)など西周前期の器に、厈といては亦聲なり」とするが、その字は用例もなく、岸には亦聞いている。金文のと干声とするために設けた字のようである。金文の「は亦聲なり」とするが、その字は用例もなく、岸 する。前条に岸を出して「岸高きなり、山厂に従ふ。10人 「上でして高きものなり」とし、下声といて、 下声と 「おり」とし、下声と 「おり」をは、 「おり」をは、 「おり」をは、 「おり」をは、 「おり こうだい まる 小雅、小宛〕に「岸に宜しく獄に宜し」とあり、山川の断崖のところで、岸の初文であろう。〔詩、 う地名がみえ、そこで儀礼が行なわれている。厈は は亦聲なり」とするが、その字は用例もなく、

> 玩 8 「充、人となり魁岸、容貌甚だ壯なり」とみえる。 もてあそぶガン (グヮン)

貝の類をも用いたからであろう。字はまた翫と通用に或る体として貝に従う朊を出しているのは、子安 瓦を弄せしめることを歌うている。玩弄はもと魂振、祝頌詩で、男子が生れると玉瑋をもたせ、女子には 手に奉ずる形である。〔詩、小雅、斯干〕は新室の びに本来のことを忘れる意。玩世とは世上の事を軽 れで褻翫・翫瀆などけがすの意をも生ずるが、玩弄 する。習には神への祈りをくりかえす意があり、そ それぞれ身につけさせるための呪器とした。〔説文〕 によって陽の気を、女子には瓦によって陰の気を、 んじ、自ら一世に高しとするをいう。 けることによって、魂振りの呪器とするものであっ にも同じように軽侮の意がある。本来は常に身につ りとして幼児にもたせるもので、男子には玉器の璋 弄字条三上に「玩ぶなり」とあって互訓。 弄は玉を両 -上に「弄ぶなり」とあり、 形声 声符は元。〔説文〕 旅

眼 まなこ・め・みるガン・ゲン

棄を眼と爲す」とあるから、眼睛を主とする字である。 なり」とするが、〔霊枢経〕に「精のした。 「説文」四上に「目した。 「説文」四上に「目 ろう。艮には人の逆行する形を示す退に従うものと、

> って、「眼花し丼に落つるも水底に眠らん」というを眼花という。杜甫の〔飲中八仙歌〕に賀知章を歌眼となって詛いをかける意である。眼がかすむこと眼となって詛いをかける意である。眼がかすむこと が眼を抉りて以て吳の東門の上に縣けよ。以て越寇に、子胥が夫差の怒りにふれて自裁するとき、「我はその呪眼をいう字であった。〔史記、伍子胥伝〕はその呪眼をいう字であった。〔史記、伍子胥伝〕はそれにおそれて人が立ちかえる形の字である。眼と 眼で知らせることを「眼語」という。眼目・主眼と 呪眼を示す限に従うものとがある。眼の古い字形が は、ことの要所をいう。 句がある。常に眼底に俤のある人を「眼中の人」、 の入りて吳を滅ぼすを觀ん」といったが、それは呪 は神の陟降する神梯である自の前に呪眼を掲げ、 そらく限字の従う艮を声符とするものであろう。 なくてその何れであるのか確かめがたいが、眼はお

記 12 いわ・けわしいガン・ギュウ(ギフ)

ねた形の品と、いまは同じ字形であるが、もと字源 の初文で、榊の枝に多くの祝禱(D)を結びつけて 〔説文〕ニ下口部にこれと形の似ている器という字 朝のころ「岑嵒」という語がよく用いられ、岩石のは品類の品ではなく、ただ岩石の形を示す。六 品は品類の品ではなく、ただ岩石の形を示す。六、山品に從ふ。讀んで吟の若くす」と会意に解するが、 いる形である。岩石の形である品と、祝禱の器を連 があり、「多言なり」と訓しているが、その字は噪 のそびえる山容をいう。巌と声義の通ずる字である。 象形 える形。〔説文〕ヵ下に「山の巖なり。 山上に岩石の累々としてそび

を異にする字である。

雁 [編] かりがね

客」という。 ことを「雁塔題名」といった。流寓の人を「雁來 代科学の合格者の名を掲げたので、進士に及第する のことを雁書・雁信という。長安の大雁塔には唐のことを雁書・雁信という。長安の大雁塔には唐のことを雁書・雁に託したという故事によって、手紙 じ字として用いる。漢の蘇武が匈奴に使してとらえる説がある。鴈はそのあひるをいう。声義ともに同 ものであるから、鵝雁(あひる)の雁であろうとすこの贄に用いる雁としては、鴻雁は容易にえがたい なるものは玉帛、小なるものは禽鳥」とみえる。 とみられる。〔左伝〕荘二十四年「男の贄には、大 うときの礼物として、雁を贄に用いたことを示すか めがたいが、字が人に従うとすれば、それは人にあ あって、鴈とは異字とする。古い字形がなくて確か に從ふ。厂聲」とし、なお「讀みて鴈の若くす」と 四上に「鳥なり。生に從ひ人形声 声符は厂。〔説文〕

頑 かたくな・おろかガン(グヮン)

がたいものという意がある。ゆえに頑固・頑愚・頑木を削ることを測というので、元には容易に裁制しとあって、節くれの丸太の類をいう。そのような梡 木のいまだ柝かざるもの」、梡には「棞木、薪なり」 頭なり」とあり、木部六上に槶は「梡 声符は元。〔説文〕九上に「槶

> あり、古くから用いられている字である。 う。〔伊訓〕〔国語、鄭語〕にも「頑童」という語が しい)」といい、「益稷」に苗民を称して苗頑といの父母の不徳を称して「父は頑、母は體(口やかまの父母の不徳を称して「父は頑、母は體(口やかま鈍・頑健・頑強などの意となる。[書、尭・・・)に舜

銜 くつばみ・ふくむガン・カン

忍ぶ意があり、銜悲・銜冤・銜悔のように用いる。 に枚を銜ませることを銜枚という。また含と同じくるものなり」とあり、くつばみの意。行軍のとき口るものなり」とあり、くつばみの意。行軍のとき口 上に「馬、口中に勒す」「銜は馬を行会意 金と行とに従う。〔説文〕」四

翫 もてあそぶガン(グヮン)

玩は魂振りとして玉器を玩弄とすることをいう。 のちものを愛翫する意となった。玩と通用するが、 のは、神がその翫褻・翫弄をいとう意。翫弄は祝禱なる。〔説文〕四上に「習うて厭ふなり」と訓する の器や呪器としての玉についていう語であったが、 れをあまりくりかえすことは、神聖をけがすことと を羽で摺り、願うことの成就を祈る意、しかしそ と曰とに従う字で、祝禱の器である日 声符は元。習(習)はもと羽

額16 あご・うなずく

연

形声 声符は含。〔説文〕ヵ上に「面黃なり」とは、

頑

銜

癌

顔(顔)

諾のとき領を動かすので、領可という。例象形でに、竜の領下にある珠をとる話がある。承別象形で に南楚の方言であごの意とし、下顎を頷という。頗る嫌きの意。食に飽かず、飢える意である。〔方言〕 「楚辞、離騒」「長く頗頷すとも又何ぞ傷まん」とあ 頷は連語であるから、下顎の方が字の原義。「荘子、

癌

形声 その組織が次第に増大して嵒のようになるところか とが多い。最も処理・解決の困難なことをい ら、癌という。胃腸・乳・舌・子宮などに生ずるこ 声符は嵒。嵒は岩山をいう。悪性の腫瘍で、

顔 18 (額) 18 かお・ひたい

產

〔春秋名字解詁〕に、 五年にみえる邾顔は、字を夷父という。王念孫のに、正面の額の部分をいう意であろう。〔左伝〕荘に、正面の額の部分をいう意であろう。〔左伝〕荘 り」というのは、〔方言〕に「顙なり」というよう い、全体を面という。〔説文〕九上に「眉目の閒な である。文身は額に加えるので、その部分を顔とい う。文身といっても、朱などで一時的に加える絵身ないた、額に文身を加え、廟に拝するときの顔容をいいて、額に文身を加え、廟に拝するときの顔容をい 声符は覚。彦の旧字は彦。成人の儀礼とし 顔は高くして平らかならず、

文身の俗であるから、文身の義で名字対待となる。 夷は平らかにして高からず、 とすると解するが、 顔は文身を加えた面、夷は断髪 相反の義をもって名字

쏄 優 22 にせもの

とあり、 形声 器作りは古くから行なわれていたのであろう。書画 の奪器にはときに偽器とみられるものもあるが、偽 魯では贋鼎を作って与えたという話がみえる。青銅 が魯を伐ってその讒鼎(鼎の名)を求めたところ、 の偽物を贋本という。 偽物をいう。 〔韓非子、 声符は雁。 〔玉篇〕 に 、説林、下〕に、斉に「直ならざるなり」

願 ねがう・おもうガン(グヮン)

り」というのが本義。[邶風、二子乗、舟]に「願うり」というのが本義。[邶風、二子乗、舟]に「願っうのと同義である。[爾雅、釈詁]に「思ふなり」うのと同義である。[爾雅、釈詁]に「思ふなり」とい、項に「楓爽なり」とい、項に「楓爽なり」とい て言に子を思ふ」のような用法もある。 声符は原。〔説文〕九上に「大

嚴 20 (嚴) 23 いガン・ゲン

から、巖も山上のそのような磐場の祀所をいう語でし、その下で鬯酒を酌んで清めばる意の字であるの嶮峻なるところをいう。嚴は屋上に祝禱の器を列の嶮峻なるところをいう。嚴は屋上に祝禱の器を列 あったかも知れない。「巌穴の士」とは巌居穴処す 〔説文〕丸下に「岸なり」とあり、崖 形声 旧字は巌に作り、嚴(厳)声

> る高士をいう。 字はまた嵒に作り、岩に作る。

龕 ずし・うけるガン・カン

全 拿

仏教語に用い、龕灯・龕塔など、廚子形式のものを紹(うけつぐ)す」の義をとるものであろう。のち紹(うけつぐ)す」の義をとるものであろう。のちに、「逸周書、祭公解」「用て克く成康の業を龕り、南陽を龕る」という 形声 というが用例はなく、 声符は合。〔説文〕一下に「龍の兒なり」 また古い字形も確かめがたい。

キ

3 ものおきだい・その

TT®

が多く、〔三体石経〕に〔尚書、君奭〕の基字をま意に用い、〔牧設〕に「敢て丌の不中不刑を尹さざること母れ」のように用いる。〔古文尚書〕や〔墨ること母れ」のように用いる。〔古文尚書〕や〔墨を天子伝〕にも、其に代えて丌を用いることが、とし、箕の音でよむという。金文では丌を其の形」とし、箕の音でよむという。金文では丌を其の形」とし、箕の音でよむという。金文では丌を其の た丌に作る。丌は其・基の系統の字に用い、其の下 文〕五上に「下基なり。物を薦むるの丌なり。象丌は台基に用いるもので、その用法が異なる。〔説だは合基に用いるもので、その用法が異なる。〔説 象形 ものをおく台の形で、几と同形であるが、

> り、「亓の賄」「亓の事」のように用いる。丌上にも 部の形である。 ののある形である。 斉器の〔子禾子釜〕には字を亓に作

むせぶ

き 犬

「飲食の气屰(逆)にして息するを得ざるを旡と 文。 象形 であろう。 王風、中谷有雅」「嘅としてそれ嘆く」の嘅の初文智、「常ないない。」、然がいることはないが、〔詩、形である。 旡は単独に用いることはないが、〔詩、 *微・慨(慨)などはみな旣に従う。また反顧の形。***、***、***、***、***、**、」とする。食し終ることを旣(既)といい、嘅・**、」とする。食し終ることを**、(既)といい、嘅・** 愛の初文は夌に作り、心にかけて後ろをふりかえる おくびや、 、びや、むせぶ意を示す。〔説文〕ハ下に人が後ろ向きになって口を開く形。欠の反

うんき・もとめる

5 = = ጟ፟

句・害と同じく祈求の意に用いる。乞ももと同字でた。** に「用て嘉命を气む」「用て眉壽を气む」のように、に「用て嘉命を气む」「用て眉壽を气む」のように、中画が短い。古くは雲気をみて祈ったもので、金文中画が短い。古くは雲気をみて祈ったもので、金文 あり、のち氣(気)の初文として用いる。 とする用法がある。〔説文〕」上に「雲气なり」と あるが、のち両字に分化した。卜文に气を「迄る 乞も同形の字である。卜文は三横画の形に近く、***。 雲気が空に流れ、その一方が垂れる形。 雲気が空に流れ、その一方が垂れる形。

5 きキず・ ッつける カイ (クヮイ)

鶏血をとって釁することを示す字である。 刉は獣、珥は鳥を殺して祭る意で、その血を塗って いわゆる釁礼のことである。祭器を彝といい、彝はいい、〔肆師〕には「祈珥」という。正字は刉衈、 清める儀礼をいう。〔周礼、小師〕には「珥祈」 では、すと、「脚後するなり。」という。 「周礼、士師」まりり、という。 「周礼、士師」まりません。 → 長名はケー 士師」は刉珥のことを掌る。するなり。一に曰く、斷つな 声符は乞。〔説文〕四下に

わるもの

魚 九 鸾

いのが宄である。〔書、舜・典〕に「寇賊姦宄」、〔般なのが宄である。〔書、舜・呉、「寇賊姦宄」、〔般なて呪詛する象とみられ、それを廟中において行なう 晋語〕にもまた外姦内宄の語があり、[魯語]には爲す」とし、九声とする。[左伝]成十七年、[国語、 双声の語。盗は氏族の盟約に違背するものを原義と 庚〕に「暫*く姦宄に遇ふ」など姦宄という例が多く 文〕の古文第一字は九を手にもつ形で、蠱霊を用い 窃盗者を宄、宄の財を用いるものを姦とする。〔説 七下に「姦なり。外なるを盗と爲し、內なるを宄と らかの禍害を加えようとする意であろう。〔説文〕 屋中に蛇形のものがあるのは、その呪霊によって何 会意 ↑と九とに従う。九は蛇形。↑は廟屋で、

> ろう。仇と声義の関係がある字と思われる。 と殳に従う字があり、それが宄の方法を示す字であ 従うており、その禍心のあることを示す。卜文に宄 立てることができる。〔説文〕古文の第二字は心に し、宄は廟中に呪詛するもので、そこに外内の別を

企 6 つまだつ・くわだてるキ

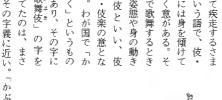
闽 E

者同じである。 「趾 立つ」で、つま立つことから企画する意となっ 象形 た。企立から企画へという語義の展開が、まさに両 様子を望見する姿勢である。国語の「くわだつ」も であるが、それは他に対して何かを企てるときの、 るなり」とし、止声とするのは誤り。遠くを望む形 ないから、象形とする。〔説文〕八上に「踵を擧ぐ 大きな足を加えている。人と止とに分つべき形では 人が踵をあげて立つ形。人の側身形の下に、

伎。 わギ・ ギ

走るとき 傾き流れるさまをいう。また〔小雅、小弁〕「鹿の 「成たる彼の織女」の句を引く。天漢が空の西北に「成たる彼の織女」の句を引く。天漢が空の西北に上坡字条に「傾くなり」とあり、〔詩、小雅、大賞と 意に用いるが、伎の字義と関係がある。〔説文〕八 陰 るのは、字の誤りのようである。伎は伎芸・伎楽の これ足伎々たり」というのも、足を屈伸 形声 ある。〔説文〕ハ上に「與なり」とあ 声符は支。支に岐・庋の声が

> 「歌舞伎」の字を 充てたのは、まさ であり、その字に ぶく」というもの る。わが国で「か 芸・伎楽の意とな 動く意がある。そ **歧には身を傾けて** を伎といい、伎 の姿態や身の動き れで歌舞するとき をいう語で、 して疾走するさま 伎



a

百戲図

9

.

00

舞伎の実際をみることができる。 を写しているものがあり、漢賦などに歌われている をいう語である。漢の画塼には、当時の百戯の姿態 にその字義に近い。「かぶく」とは身を傾けること

卉

たまり」とみえ、広く草木に用いる語である。〔書、井あり」とみえ、広く草木に用いる語である。〔書、中本)に「卉木萋々たり」、〔小雅、四月〕に「山に嘉りの總名、楚人の語なり」とするが、〔詩、小雅、出た。」とし、〔呉都賦〕「卉木」の〔五臣注〕に「百草ふ」とし、〔呉都賦〕「卉木」の〔五臣注〕に「百草ふ」とし、〔呉都賦〕「卉木」の〔五臣注〕に「百草 ることをいう。 禹貢」「島夷は卉服す」は、 という。〔方言〕に「東越揚州の閒、これを卉とい 示す。〔説文〕一下に「艸の總名なり」 会意 中を三つ重ねて、衆草の意を くず麻で作った服をき

危の「危」のあやうい・たかい

形声 声符は弁。 产が危の初文で、 である。 〔説文〕九下に「高きに在りて懼るるなり。 である。 〔説文〕九下に「高きに在りて懼るるなり。 たに従ひ、自ら时 (節) してこれを止む」とする。 かは高所に人のある形であるが、已に節止の意があるのではない。「冠を危くす」とは、冠を正しくつるのではない。「冠を危くす」とは、冠を正しくつるのではない。「冠を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥くし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥くし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らし、行を危くす」とは、正言高行して、世俗と妥らして、一般にない。

机 6 [几] 2 つくえ

気 6 【氣】10 「〔〔〔〕19 おくりもの・くうき

原 黎 謫

能声 旧字は氣に作り、气声。〔説文〕七上に「客 を調の意である。

肌 6 はだ・にく

また虫の総名とする。[爾雅、釈魚]「蝮虺」の注に、象形 虫の形。[説文]「三上に「一名蝮」とし、

字であった。

岐っ わかれみち・おいたつ

希 7 まれ・ねがう

希なり」、「先進」「瑟を鼓すること希なり」、またればりの意から、少ない、疏いの意となり、遠く、いとりを加えたもの、すなわち締である。そのすかいとりを加えたもの、すなわち締である。そのすかいとりを加えたもの、すなわち締である。そのすかいとりを加えたもの、すなわち締である。そのすかいとりを加えたもの、すなわち締である。そのすかいとりを加えたもの、すなわち締じの意となり、遠く、かすかな意となる。「論語、公冶長」「怨こを知るときは、別ちがない。

らいの意をもつものが多い。
「老子」第十四章「これを聞くとも聞えず、名づけて希と日ふ」のように用いる。希望の意は睎・號のて希と日ふ」のように用いる。希望の意は睎・號の

皮で「腹」で おく・とだな

本語 声符は支。支に使・岐の声が大きなの高地から大鏡が出土するのは、そこに祀って供したものであろう。山を祭ることを「皮繋」といい、字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた庪に作る。「爾雅、釈天」にみえ、黄玉や字はまた皮に作る。「神な光」という。「倭礼、觀礼」に「山丘陵を祭るに升す」とかり、殷代の四羊様葉や大鏡などが出土、また江南の各地の高地から大鏡が出土するのは、そのありかたは、ちいの声がが国の銅鐸と似たところがある。

己心 7 けむ・つつしむ

神に襲夤し、襄 親慢忌す」のように、神事につかもとは戒慎の義。〔叔夷鐘〕に「女、小心慢忌」「鬼り」とあり、忌諱・忌避・妬忌のように用いるが、り」とあり、忌諱・忌避・妬忌のように用いるが、お声 声符は己。〔説文〕一〇下に「憎惡するな形声

庋(庪) 忌 杞

汽 佹 其

味っる字である。 味っる字である。 となることをいう。 [編集] には、字を「裏記」に作る。認は〔説文〕三上に「認は誠なり」とみえ、よつかえるにあたって、禁忌とすべきことが多く、それよりして忌諱・忌避の義となり、また妬忌のような僧悪の感情をいう語となる。そのような語義の展開の過程は、わが国の「いむ」という語義の展開に関の過程は、わが国の「いむ」という語義の展開にあみられる。その字には忌・斎・諱・禁などが用いもみられる。その字には忌・斎・諱・禁などが用いることを意られ、いずれも身を清め、けがれを避けることを意られ、いずれも身を清め、けがれを避けることを意いれ、いずれも身を清め、けがれを避けることを意いれ、いずれも身を清め、けがれを避けることを意いれ、いずれも身を清め、けがれを避けることを意います。

杞 7 + Si · 国名

常 * **

り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類聚り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類歌り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類聚り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類聚り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類聚り、枸杞はくこ。一に却老ともいう。「倭名 類聚がみえている。また柳の一種。春秋の国名に杞があがみえている。また柳の一種。春秋の国名に杞があがみえている。また柳の一種。春秋の国名に杞があり、杞伯の器数器を存している。

汽っ ゆげ・ほとんど

小康すべし」、「易、未済」「小狐汽ど濟る」のようとをいう。〔詩、大雅、民労」「民また勞せり「汽どとをいう。〔詩、大雅、民労」「民また勞せり「汽どとをいう。〔詩、大雅、民労」「民また勞せり」である。

らく泣くときの擬声的な語であろう。また「或いは曰く、泣下るなり」というのは、おそまた「或いは曰く、泣下るなり」というのは、おそに用いる。字はまた汔に作るが、气と乞とは、ト

他 8 もとる

其8み・その

大可 8 かたがわ・あやしい・すぐれる

会意 奇と口とに従う。口は□、祝

との意に用いる。また奇異倜儻(非常)の意より、との意に用いる。また奇異倜儻(非常)の意より、との意に用いる。また奇異倜儻(非常)の意より、との意に用いる。また奇異倜儻(非常)の意より、 文]五上に「異なり」と訓し、「一に曰く、耦(偶)劂(彫りもの用の刀)の剞の初文とみてよい。〔説似を用いる形であるが、奇は曲刀を用いる。奇は剞を声いる形である。ずと字の立意が同じく、可は木のを責め求める意。ずと字の立意が同じく、可は木の 古く可声によまれていた字で、 邪・奇怪・奇矯・奇禍など、 りのしかたは尋常のことではなく、それよりして奇 は大と可とに分つべきものではない。このような祈 あらざるなり。大に從ひ、可に從ふ」とするが、字 ある大きな曲刀。この曲刀をもって、 なおその音がある。 [楚辞、招魂] に奇を羅・歌と韻しており、 3刀。この曲刀をもって、祝禱の成 就禱を収める器の形で祝詞。 うは把手のここ すべて尋常ならざるこ わが国の推古遺文に

わかい・とき

事學學學

孔子弟子列伝〕に、冉季の字を子産とする。季と産に扮して舞うことを意味する字であろう。〔史記、 て舞う人の形である。季もまた幼少のものが、穀霊 ものに年・娄があり、いずれも稲魂に象る禾を被っ 禾と子とに従う。これと同じ構造法をとる

> うも、 女の性格をもち、おそらく家にあって、巫児としている。末子をいう。詩篇にみえる季女はみな巫叔季で、末子をいう。詩篇にみえる季女はみな巫叔季で、末子をいう。詩篇にみえる季女はみな巫母が後する。のち年・季はそは女子、季は幼少のものが扮する。のち年・季はそは女子、季は幼少のものが扮する。のち年・季はそ と名字の対待をとるもので、季が農耕に関する儀礼 り。子に從ひ、稚の省に從ふ。稚は亦聲なり」とい地理志〕にみえている。〔説文〕一四下に「少き偁な地理志」にみえている。〔説文〕一四下に「少き偁な は長姉が巫児として家に残されたことが、「漢書」 家廟につかえるべきものとされたのであろう。斉で を意味する字であることが知られる。年は男子、委 形も声もともに誤るものである。

款 8 ねキ がう

ふに便ならざるなり」と、吃の意とするが、乞求があり、孬は幸でねがう意。また「一に曰く、口、言を発することを示す。[説文]八下に「霽なり」と 赞 どの字と通用する。 字の本義。ただ字はほとんど用例がなく、覬・幾なふに便ならざるなり」と、吃の意とするが、乞求が る。飲はさらに欠を加えて、祈りの語 形声 声符は气。气に乞求の義があ

祁 さかん・おおいキ・シ

。 (重

記、晋世家」に「示眯明」に作る。祁・提・示は古明」を、〔公羊伝〕宣六年に「祁瀬明」に作り、〔史形声 声符は示。〔左伝〕宣二年にみえる「提彌 く同音であったことが知られる。字の構造からいえ

に孔だ有し」のように、単用することもある。のように衆多の意に用い、〔小雅、吉日〕「それ祀いの如し、〔小雅、大田〕「雨を興すこと祀々たり」の如し、〔小雅、大田〕「雨を興すこと祀々たり」は地名であるが、〔詩、大雅、韓奕〕「祁々として雲

祈。 (祈)。[擔] [編] 2 いキ の る

派 0 ting The state of 图 IT

からであろう。また匄・介・害などを用いることもうものが多いのは、軍行のとき祈ることが多かった 旂・瘡などの字を用いる。金文の字形に旗の形に従多幸を祈る。金文に字を癖に作り、後期のものに 祈年のように年穀を祈り、また祈寿・祈福のように り」とあり、前条の祓に「惡を除く祭なり」という形声 一声符は斤。〔説文〕一上に「福を求むる祭な あり、みな声の近い字である。 のと合せて、祭祀にこの二義があるとする。祈雨・

配 9 一要」 たのしむ

W **3**2° ST.

かさから熙喜の意となる。〔説文〕三下は字を婴に婦人が授乳している形の字で、頤養の意。その和や 子の象。〔説文〕二上に「廣き匹なり」とするが、会意 匠と巳とに従う。匠は婦人の乳房、卍は幼 作り、「悅樂なり」と訓する。巸はその初文である。

用いている。 形容する語として、「皇々巸々」のように擬声的に 字はまた熙に作るが、巸がその初文。金文に鐘声を

癸 9 はかる・みずのと

※ ※ 業

うにして用いたものであろう。字は十干の最後にあは探ること、終度をいう。おそらくブンマワシのよ 字形では、器を樹てるときに台座として用いる柎足者にその解をとるものが多い。しかしト文・金文の に似たものがあり、羅振玉をはじめ、近時の研究に入るの形に象る」とするが、金文の字形に三鋒をに入るの形に象る」とするが、金文の字形に三鋒をした。 数のための記号であるから、これを字形・字義によ 金文の字形にときに不整形のものがある。十干は序 せてたたく工作の器の形、癸は器をおく台座の柎足 ある。これでものを度ることもあったらしく、 であると思われ、木を十字形に交叉して組んだ形で 壬・癸で一組。壬は碪(砧)で、上にものを載 特別に意味づけようとするのは誤りである。 相似たものとして一対とされたのであろう。 揆* と

紀 2° いとすじ・のりキ

> うにいう。 との経緯を明らかにするものを紀事・紀事本末のよ ぼして紀元・紀年という。歴史の叙述において、こ をいう。ゆえに紀綱・紀統の意を生じ、また年に及 るものなり」とあり、糸数をそろえてまとめること る」といい、その注に「絲縷(糸すじ)の數の紀あ 器〕に礼を論じて「衆の紀なり。紀散ずれば衆亂。。文〕一三上に「絲の別あるなり」という。[礼記、礼文〕一三上に「絲の別あるなり」という。[礼記、礼 形声 上に「絲の別あるなり」という。[礼記、礼声符は己。世は糸をくりとる器の形。[説

虺 まキむ むし (クヮイ)

を文様化したものである。虺々はまた雷声の形容語尾は上巻し、地は雷文をもって埋める。長身の竜形 の語に用いる。 という。クヮイの音は虺隤・虺頽など、畳韻の形況に用い、〔詩、邶風、終風〕に「虺々として雷す」に帰れてして雷す」 また虁竜文ともいう。虺竜文は張口一角で一足、 う。殷周の古銅器に虺竜文とよばれる文様があり、 なんぞ虺蜴をなす」と、身をひそめて生きる苦を歌小雅、正月〕は乱世を悲しむ詩で、「哀し今の人 るが、また蛇医(いもり)とする説もある。〔詩、 (蛛)を以て鳴く」とは、蜥蜴(とかげ)の類であ 禹と同じ構造の字である。〔説文〕-三上に「注い中の形であるから、虺は虫を組み合せた字で、 会意 篇〕に北の形に作る。九と同じくこれ **兀と虫とに従う。兀を〔玉**

くるまのみち

り、軌式・軌則という。天下統一して、その法度を 輪の間をいう。 一定にすることを「軌を一にす」という。 を軌という。軌迹よりして通路、また法則の意とな 「車徹なり」とあり、車の興の下、両 また両輪の間を軌といい、 声符は九。〔説文〕一四上に その車迹

供10 あざむく・方相の面キ

僕の如し」とあり、孔子は角尾(孔子の字)の狀、面は蒙に 呪儀を行なうものであろう。〔荀子、非相〕に「 形声 ト文にみえる供面の人は、おそらく方相氏のよう のある大きな面で、それをかぶることを供という。 る。方形の面は類。 声符は其。其は箕の象形で、方形の意があ 方相氏が鬼やらいに用いる四目 X 200

張った顔の人であったらし

〔淮南子、精神訓〕に字を頻醜に作る。供面によっい。雨請いの土偶にもそれを用い、供醜という。い。雨請いの土偶にもそれを用い、失き。 のである。 て人を欺くので、 欺く意がある。「棋面、 人を欺く」

唏 10 わらう・なく

ある。字はまた歓に作り、歔欷という。きは歔唏。歔唏は双声の連語で、もとより擬声語でならぬ状態をいう。笑うときは唏々、すすり泣くとならぬ状態をいう。笑うときは唏々、すすり泣くと を晞といふ」とみえ、笑うにせよ泣くにせよ、声に 榮 形声 ふなり。 声符は希。〔説文〕ニ上に「笑 一に曰く、哀痛して泣かざる

鈴をつけた旗である。金文の賜与に「鸞旂」という

姓口(姫)の きの

市 常 海中居 私

会意 旧字は女と啞とに従う。では乳房の象形。 会意 旧字は女と啞とに従う。では乳房の象形。 の通過儀礼と関係があるものと思われる。

屓10 けいき

れた。古い用例のない字である。 見を荷なう意であろう。〔玉篇〕に贔屓という語があって「力を作すなり」、すなわち奮励する意でああって「力を作すなり」、すなわち奮励する意であら。〔玉篇〕に贔屓という語が

帰10 (歸)18 かえる・とつぐ・おくる

静縣

文の字形はただ自と帚とに従い、字義はこれによっ会意 旧字は歸。自と止と帚とに従う。卜文・金

の職であったからであろう。帚はそのとき用いる玉廟所を清める裸鬯のことも、家刀自としての婦人婦人はその嫁いだ家の寝廟につかえるもので、帚で婦人はその嫁いだ家の寝廟につかえるもので、帚でなかった。婦人の嫁することを「帰ぐ」というのは、 もとみな廟礼に関する字である。 の義のほかに、饋贈・帰就・死去などの義があるが、点を加えた字形もある。帰には軍の帰還、女の嫁帰 廟室を清めるのである。それで卜文には、これに水 とかかれる。帚は束茅の形、これに酒をそそいで、 帚であって、掃除の道具ではない。ト辞には婦は帚 の安否を問う帰寧の礼のほかには、家に帰ることはこと勿れ」とあって、婦人は嫁してのちには、父母 には必ずこれに祝る。祝りて曰く、必ず反らしむる〔戦国策、趙策〕に「媼の燕后を送るや、……祭祀がえたのも、嫁女の義に用いてからのことであろう。 「女の嫁するなり」というのはのちの用義で、止を て清めるときのもので、帯は寝廟、すなわち正殿を 廟に報告する儀礼をいう字である。〔説文〕ニ上に 示す。これによっていえば、帰とは軍が帰還して寝 じて、帰還の報告をする。また帚は廟中を裸鬯し ときは官という。凱旋のときは、これを寝廟に奉 るとき祭った肉を、脈という。軍がこれを携行し、 て考えることができる。自は賑肉の形。軍が出行す 駐屯地におくのを諫といい、そのために舎を設ける

旂10はまた

紫 书覧

て、二音両義のある字である。 中とは別で、甘旨の意をとるものであろう。一字にし といる。また嗜好の意に用いるのは、声義ともに耆老 干いる。また嗜好の意に用いるのは、声義ともに耆老 干いる。「礼記、曲礼、上」に「六十を耆といふ。指使 おう。〔礼記、曲礼、上〕に「六十を耆といふ。指使 おう。〔礼記 きょう

10 もしるす・かきもの

起10 (起)10 たつ・おきる

超量 。沿

をきの姿勢が、身を屈曲するのに似ている。〔説文〕ときの姿勢が、身を屈曲するのに似ている。〔説文〕ときの姿勢が、身を屈曲するのに似ている。〔説文〕ときの姿勢が、身を屈曲するのに似ている。〔説文〕とものない。また〔白虎通、五行〕に「日なるものは、物必ず起つ」とは、五行説において日は四月にあたるからであろうが、五行説は後世の思想で、文字の成立をこれによって説くべきではない。篆文の字形は已に従うが、日は蛇の形である。〔礼記、離れ、は日に従うが、日は蛇の形である。〔礼記、離れ、は日に従うが、日は蛇の形である。〔説文〕ときは則ち起つ。益を請ふときは則ち起つ。益を請ふときは則ち起つ。益を請ふときは則ち起つ。益を請ふときは則ち起つ。とうといい。人の起つ形声

形式のものである。 起義より、小は起家・起身、その他発動してことをはじめる意に用いる。人の日常は起居のうちにあり、 天子の日常の言行を記録する官を起居注といい、 大子の日常の言行を記録する官を起居注といい、 大子の日常の言行を記録する官を起居注といい、 大子の書をまた「起居注」という。わが国の「六国 という。わが国の「六国

飢口【飢】11 「饑」21 きえる

鬼10 おに

鬼雕 中田公下家

祝禱の器であるいを加えている。金文には他にも異は陰气賊害す。ムに従ふ」とし、本を陰気を示すものとするが、古い字形はただ鬼頭の人の形に作る。ものとするが、古い字形はただ鬼頭の人の形に作る。の歸するところを鬼と爲す。人に從ひ、鬼頭に象る。の歸するところを鬼と爲す。人に從ひ、鬼頭に象る。象形 鬼の形で、人鬼をいう。[説文] 九上に「人

副 旨は詣(稽)首の形で、その声義をとるものであろ甘旨のものをもって老を養う意とする説もあるが、 「老なり。老の省に從ひ、旨聲」とする。この旨を 形声 耆 字形に即しない説である。 である。〔説文〕五下に「小食なり」というのは、 態をいう。食し終る意から、すべてことの終ること、 既 形で、食することすでに足り、嘅気を催している状食の器。**は人が坐して、後ろに向かって口を開く 会意 字に借用する。きの助数詞には、鈴を用いる。金文ではまた祈求の 鼎〕に「朱旂二鈴」というように、鸞旂を数えるとものがあり、鸞形の飾りのある鈴をつけた。[毛公 (旣)1 としより・このむキ・シ 声符は旨。皆は詣の初文。〔説文〕ハ上に 旧字は宮(殷)と旡とに従う。散は簋で盛 QŢ. おわる・つきる・すでに 0

体の字があるが、ムに従うものはない。字は とこれを複雑する字。鬼とはもと人屍の風化したものを称する語であろう。人鬼に対して、自然神を神という。神は電光の象を神格化したものである。神は電光の象を神格化したものを称する語であろう。人鬼に対して、自然神を神という。神は電光の象を神格化したものである。

基11 もとい

英 美

形声 声符は其。〔説文〕一三下に「牆の始なり」とするが、牆に限らず、すべて設営するものの基礎をいう。〔詩、周頌、吴天有成命〕に「夙夜、命ををいう。〔詩、周頌、吴天有成命〕に「夙夜、命ををいう。「邦家の基」の語があり、基本をいう。其の初文すべてことのはじめである。〔小雅、南山有台〕にすべてことのはじめである。〔小雅、南山有台〕にすべてことのはじめである。「小雅、南山有台」にすべてことのはじめである。「小雅、南山有台」にすべてことのはじめである。「本をできる。」

1 1 き・みさき

岬の字がみえ、みさきと訓する字。もと山側をいうる。水岸の曲折しているところをいう。〔唐韻〕に形声 声符は奇。奇にふそろいなるものの意があ

は埼また崎の字を用いている。という。字はまた崎に作り、碕に作る。〔万葉〕にという。字はまた崎に作り、碕に作る。〔万葉〕に字であり、これに対して水涯の曲折するところを埼

字 11 よる・たよる

(例) 形声 声符は奇。奇に倚寄・倚託のり」とあり、「国語、斉語」「以て政を寄すべし」の命を寄すべし」のようにいう。寄宿・寄寓・寄生など、みな人に附託する意。寄語とは伝言をいう。(管子、山国軌)」に寄幣の語があり、国幣を給すること。寄附はもと人を頼る意であったが、のちには人に物を贈ることをいう。

崎 11 けわしい・さか・みさき

中国風によんで崎陽という。 中国風によんで崎陽という。 長崎などもその例で、ところを崎ということが多い。長崎などもその例で、ところを崎という。不遇で世渡りに困難することをがいる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水産に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むる。わが国では崎をみさきの意に用い、水崖に臨むとという。

異 11 まぐら

季11 キそれる・むなさわぎ

形声 声符は季。〔説文〕 - 〇下には上、「心動くなり」とあって、むなさわぎすることをいう。〔詩、衛風、芄臓〕「帶を垂るること悸たり」は悸々の意で、〔毛伝〕には節度のあるさまをいうとするが、この詩は女に言い寄られて、さまをいうとするが、この詩は女に言い寄られて、さまをいうとするが、この詩は女に言い寄られて、されどおどする男の小心さを歌うものである。〔楚辞、おどおどする男の小心さを歌うものである。〔楚辞、おそれること。そのむなさわぎを動悸という。

稀 11 あける・かわく

ゆる「日光の意微なる」状態をいい、希の声義を承とは、その日ざしに髪をかわかすことである。いわりはじめる意で、日ざしのまだ少ないときをいう。「楚辞、九歌、少司命」「女の髪を陽の阿に晞かす」とは、その日ざしに髪をかわかすことである。いわ明」に「東方未だ晞けず」とあり、夜あけの日が上明」に「東方未だ晞けず」とあり、夜あけの日が上明」に「東方未び、「説文」と上に「乾

ける字である。

秋 11 もせびなく

形声 声符は希。〔説文〕八下に「歌歌は哭泣して餘聲あるなり」とみえ、泣きじゃくる意である。

見 1 ぶんまわし・はかる・きそく

いものである。あかぎれを亀手という。 いものである。あかぎれを亀手という。 には縫合部が多く、亀裂の語があるように裂けやすには縫合部が多く、亀裂の語があるように裂けやすには縫合部が多く、亀裂の語があるように裂けやすには縫合部が多く、亀裂の語があるように裂けやすいものである。あかぎれを亀手という。

跂

かまだつ でまだつ 局 促する意の形況の語である。 粗法である。規々は区々と同じく、身をかがめて

吉日 12 よろこぶ・このむ

[荀子、勧学]「吾嘗で跂ちて望む」のように用いるに呼び、、勧く、「話」「跂ちて予これを望む」よい。[詩、衞風、河広]「跂ちて予これを望む」、どその意に用いる。企は象形字、跂は形声字とみてどその意に用いる。企は象形字、跂は形声字とみて

り」と六指ある意とするが、字は企と声義近く、殆

ある。〔説文〕ニ下に「足、指多きな

声符は支。支に伎・岐の音が

が、跂立の意のみで、企及・企謀・企画のような語

義の展開はない。

亀11 (龜)16

かキッキン

亀の全形を写した字。

亀をトいに用いると

溜

如

是来。 第二条

会意 きと口とに従う。豆は鼓、口はご。祝禱を楽しませるの字形の中に喜を含むのも、鼓楽して祈る意である。嘉は喜に力(耜)を加えた形で、耜を清意である。嘉は喜に力(耜)を加えた形で、耜を清めるために祝禱し、鼓楽する意。また饑饉をいう。高初の「大豊設」に「上帝に事書(鱚)す」という語があり、これは供饌して事ることをいう。高初の「大豊設」に「上帝に事書(鱚)す」という語があり、これは供饌して事ることをいう。「満れで譆と爲す」という句があり、この喜は「鄭箋」に「讀んで譆と爲す」というように、供饌する儀礼をいう。「説文」五上に録する古文は、鼓に欠を加えた形で、鼓して歌う意を示す。欠部八下にその字があって「喜を卒ふるなり」とみえる。喜は鼓楽した形で、鼓して歌う意を示す。欠部八下にその字があって「喜を卒ふるなり」とみえる。喜は鼓楽した形で、鼓して歌う意を示す。欠部八下にその字があって「喜を卒ふるなり」とみえる。喜は鼓楽した形で、鼓して歌う意を示す。欠部八下にその字があって「喜を卒ふるなり」とみえる。喜は鼓楽した形で、鼓して歌う意と示す。欠部八下にその字があって「喜を卒ふるなり」というは、はいいう。

殷周の盤には、亀を文様とするものがあり、竜でいる。とするのは、同声をもって訓したもの。いるものとされたからであろう。〔説文〕一三下にいる。

や、長生のものとして干歳の化を知り、吉凶の変を本づくものであろうが、天円地方にかなうその形態ることもある。亀が霊物とされたのは、古い観念にきは、その腹甲を用いるが、極めて稀に背甲を用いきは、その腹甲を用いるが、極めて稀に背甲を用い

明 12 キ ためいき・なげく

終12 「終」12 かすか・きざし・あやうい

號 85

キ 跂 亀[龜] 喜 喟 幾[幾]

その図象標識がある。また亀卜に用いる亀版は、

諸

用いると、「孟子、公孫・五、下」「王庶幾くはこれ、撃辞、下」「顔氏の子、それ殆庶幾か」を副詞的に撃・後望の意となる。「易、小畜」に「月、望に幾し」とあり、その状態を求めることから、庶幾・幾望の意となる。「易、を求めることから、庶後・参・愛望の意となる。またんど」とよむ。それに近い状態の意である。またんど」とよむ。それに近い状態の意である。またんど」とよむ。それに近い状態の意である。またんど」とよむ。それに近い状態の意である。またんど」とは、 幾し」とは、危殆の意で、幾・殆はともに「ほとき」 とは、幾微幽深、〔書、顧命〕「疾大いに漸み、惟り」は、幾微幽深、〔書、顧命〕「疾大いに漸み、惟に、援なるものは動の微、者の先づ見るるものなに、幾なるものは 他の訓義はおおむねそこから引伸したものである。 及ぶが、字は戈に呪飾を加えた形で譏察を原義とし、 を改めよ」となる。幾の訓義は多く、三十数義にも

基12 そこなう・おしえる・いむ

表む」は忌の義。金文に「畏認」「畏嬖」の語がある。また哀二十七年「趙 襄子これに由りて智怕を教える意であるが、いくらかからかう気味の語であ これに基へて扃(車輪のかんぬき)を脱せしむ」はに「毒するなり」とある意。また宣十二年「楚人」 って声義が近く、誋・惎は通用する字であろう。 「王室を碁閒す」とは、「説文」一〇下 形声 声符は其。〔左伝〕 定四年

揆 12 はキかる

方中」は衛の都造りのことを歌うもので、「これをいることを「揆を一にす」という。〔詩、鄘風、定之ることを「揆を一にす」という。〔詩、鄘風、でしんが揆度を定めることになり、その揆度を同じうす外が揆度を定めることになり、その揆度を同じうするが、その大戦が 声符は癸。癸に揆る意がある。

> 「則ち我を敢て奏る莫し」と、その字を用いている。〔詩、小雅、栄哉。「天子これを奏る」、〔大雅、板り、天子これを奏る」、〔大雅、板り、大雅、桜が、大雅、桜が、大雅、桜では、日景を揆って方位を正すどは、日景を揆って方位を正す ふキ るう

棋(棊)

揮

揮へば雨を成す」の句がある。 「ない。」のも手を揮う行為に及ぼして、「汗をは、、臨淄の都の人口の多いことを形容して、「香味」で、、臨淄の都の人口の多いことを形容して、「香味」で、「海峡・運然・運流の お手を揮う行為に及ぼして、揮毫・また。」 あり、 (発) は弓を発すること、揮は旗などを振って指揮 もと軍事に用いる語であろう。発揮の發 ある。〔説文〕 三上に「奮ふなり」と形声 声符は軍。軍に暉・輩の声が と

晷 12 かげ・ひかり

芸文志〕に〔日晷書〕三十四巻を著録する。その観 運行をはかるため柱を立て、その影を観測したので、 刻・晷漏という。漏は水時計である。 天象を観測するものを晷儀、ときをはかるものを晷 測の法をしるしたものであろう。日の運行によって 〔広雅、釈詁〕には「柱景なり」としている。〔漢書〔 形声 の景なり」とあり、景は光の意。日の 声符は咎。〔説文〕七上に「日

期12 (期)12 ときをきめる

剙 TOT **食** 基本 城八

> ろう。 定の日時をいう。〔詩、鄘風、桑中〕「我を桑中にする説もあるが、金文の字形は日に従うており、特 のように用いる。〔礼記、曲礼、上〕「百年を期と期す」は、場所を約する。期限・時期・周期・期待 り、日月の運行は二十九日余にして一たび会う意と いふ」と百歳の称とするのも、周期に達する意であ 声符は其。〔説文〕七上に「會ふなり」とあ

棋 12 ご・しょうぎ

「李善注」に、邯鄲淳の〔芸経〕というものを引き、る。のち囲碁の字に用いる。〔文選、博弈論〕のの棊を擧ぐ」とみえる。また樗浦馬というものであ 茶 今同じであろう。漢魏のころその技が流行し、「梵」、合せて三百六十一路であるが、その棊理は古 を録する。それには日月星辰などの名があり、 いうことがあり、「隋書、経籍志」に「象経一巻」 碁をうって遊んでいる図がみえる。字はまた将棋を った。わが国では〔源氏物語絵巻〕に、女房たちが る。唐宋のころには〔棊訣〕〔棊経〕などの書があ 書、経籍志〕にすでに定石の書などが著録されて 黑の棊子一百五十枚」とみえる。いまの碁は縦横十 「棊局は縱横各↑十七道、合せて二百八十九道、白 文様を知りうる。〔左伝〕襄二十五年に「弈するも 王陵墓より博弈の盤が出土し、棊面に描かれている り」とあり、古く六博と称するものであった。中山 の意がある。〔説文〕六上に「博棊な 形声 声符は其。其には四角いもの

の将棋とは異なるもののようである。

稀 まれ・すくない

稀覯本という。字はまた希と通用する。 まばらであること。それで稀有・稀世・稀少・稀薄 概ね希の声義を承ける字で、稀とは禾穀が密生せず、 ことをいう。「説文」に収める希声の字は十一文、 の意となる。古写本・古刊本の流布の少ないものを 葛布の織りめのあらいこと、希疏なるがよ 声符は希。希は絹の初文て 声符は希。希は絺の初文で、

葵 12 あおい

ひ」とよむのは和訓で、冬葵の古名。〔万葉〕一、樂しき君子 天子これを葵る」は揆の仮借。「あふとを葵心・傾葵のようにいう。〔詩、小雅、栄養ととを葵心・傾ちのようにいう。〔詩、小雅、栄養やとを葵心・傾ち 六・三八三四にみえる。 と菽とを亨る」とあるのは、せり・じゅんさいの類。 観賞用の葵の葉には向日性があり、人を思慕するこ 類が多く、〔詩、豳風、七月〕に「奏哉形声」声符は癸。野菜の名でその種

貴 12 とおとい

「貨を貴び、土を易んず」、〔老子〕第三章「得難き貝を草器で荷なうことはない。〔国語、魯語〕に 従う字で、 文〕六下に「物賤からざるなり」とし、貝と與とに 臾は蕢、すなわち草器であるとするが、 携える形で、貴重なものをいう。〔説 貝と臼とに従う。貝を両手で

稀 葵

貴 逵 愧

暉 棄

> 逵 12 人に贈ることを遺といい、食を贈ることを饋という。い、ひろく敬称として語の上に冠して用いる。貝をい、ひろく敬称として語の上に冠して用いる。貝を た性情や技能について、高くすぐれているものをい ど、みな貴貨の義。それよりして人の地位身分、ま の貨を貴ばざれば、民をして盗を爲さざらしむ」な

「山海経、中山経〕の合水に「騰魚多く、逵に居せただきち」とあり、市場などの開かれる反し場別でする。 達市に達す」、宣十二年「皇門より入りて逵路に達が、〔左伝〕 荘二十八年「衆車は、純門より入りて [爾雅、釈宮] に「九達これを逵といふ」とみえる り、これは洞窟の状をなすところである。 る」、「郭注〕に「水中の穴道、交通するもの」とあ です。これでれ会意字の構造をとるものと思われる。 が、をは陸・睦などにおいてその声がみな異なり、 とあり、市場などの開かれる広い場所であろう。 会意 この字がみえず、初形を確かめがたい 奉と是とに従う。「説文」に

愧 はキ じる

ち多く愧を用いる。。娘は金文に媿姓に用いる字で、 とあって互訓。〔中庸〕「尙くは屋漏に愧ぢざらん」省に從ふ」とする。また慙字条一〇下に「媿なり」 の〔釈文〕に字を媿に作り、愧・媿はもと一字であ るなり」とし、重文として愧を録し、「或いは恥の 形声 三下に媿字を出して「慙づ 声符は鬼。〔説文〕 慙愧の字にはの

> 暉 13 ひキ かる

うに、星の光にいうことが多い。 高帝紀〕「景星、暉を淸漢(天の川)に垂る」のよ 水詩序〕に「雨に潤ひ星に暉る」、また「南史、 形声 ある。 る。字は輝と通用するが、王融「曲」 声符は軍。軍に揮・輝の声が 声符は軍。軍に揮・輝の声が

棄 13 すてる

金幣 0 育奮 A PI

とのや、ときには初生児を棄てる習俗も、古代にはものや、ときには初生児を棄てる習俗も、古代にはあるが、みな棄子とされた伝承がある。異常出生のあるが、みな棄子とされた伝承がある。異常出生の たという話がある。傅説も伊尹も、古代の聖職者でられ、葉と名づけられたが、奇瑞によって養育され 会意 とき、箕に灰を入れて、その中におく俗があるといいまも江西杭県に、生後一月の里帰りの子を迎える といふ」のような話は他にもある。「六書疏証」に、 つ。共姫の妾、取りて以て入る。これに名づけて棄徒、女子を生む。赤くして毛あり。これを堤下に棄 である。周の始祖伝説として、后稷が生後に棄て 逆子であるから棄てるのでなく、大は子の生れる形 るなり。廾に從ふ。華を推してこれを棄つ。去に從 ふ。去は逆子なり」とあって、生子を遺棄する形。 去と華と廾とに従う。〔説文〕四下に「梋つと。 the まち その中におく俗があるとい

国にもその古俗のあったことを示すものである。金文の「武氏盤」に、契約のときの自己組盤の語として、「これを襲棄せん」という語があり、伝はもと神やらいを意味する語であった。その形式で遠方に放逐ちいを意味する語である。生子を棄てることはわが国の古俗にもあり、生母の凶年に生れた子は、一度棄てて他の人に拾わせ、改めて引き取る習俗があり、捨を名とすることが多い。古代には種々の信仰上の捨を名とすることが多い。古代には種々の信仰上の捨を名とすることが多い。古代には種々の信仰上の連由によって棄子のことが行なわれた。この字は中理由によって棄子のことが行なわれた。この字は中理由によって棄子のことが行なわれた。この字は中間によって棄子の古俗のあったことを示すものである。金文のう。子を箕中に入れる形が、葉の字である。金文のう。子を箕中に入れる形が、葉の字である。

四式 13 やぶる・そしる

たれたのであろう。毀はまた人を呪詛するためにもされたのであろう。毀はまた人を呪詛するためにもされたのであろう。毀はまた人を呪詛するためにもされたのであろう。毀はまた人を呪詛するためにもされたのであろう。近来の殷墓の調査によると、味するものであろう。近来の殷墓の調査によると、味するものであろう。近来の殷墓の調査によると、味するものであろう。近来の殷墓の調査によると、は未成人の児童を犠牲とする、何らかの儀礼を意れは未成人の児童を犠牲とする、何らかの儀礼を意れは未成人の児童を犠牲とする、何らかの儀礼を意れまでなく、いわゆる奴隷殉葬説に対して疑問がも極めて多く、いわゆる奴隷殉葬説に対して疑問がもを問いて多く、いわゆる奴隷殉葬説に対して疑問がもした。

輝 3 サ・クン・ウン

形声 声符は軍。軍に揮・暉の声がある。 るもの。軍声の字には概ねこれらの音がある。 し出す)は燻、煇胞は皮革で甲を作り、また屠殺すし出す)は燻、煇胞は皮革で甲を作り、また屠殺す」とあり、日を掌り、以て妖・祥を觀、吉凶を辨ず」とあり、日を掌り、以て妖・祥を觀、吉凶を辨ず」とあり、日をないが、という明るさである。 爆風、鼠をいぶし出す)は燻、煇胞は皮革で甲を作り、また屠殺すし出す)は燻、煇胞は皮革で甲を作り、また屠殺するもの。軍声の字には概ねこれらの音がある。

匹ハ13 キ しむ・ひろい・よろこぶ

形声 声符は虹。毗は婦人が授乳している形で、和楽の意がある。〔説文〕 〇上に「燥くなり」とするが、字の本義としては、〔華厳音義〕に引いて「一に曰く、說ぶなり」とする方がよい。〔詩、大雅、「な」」が、 縄熙して敬止す」の緝熙は光明のあるさま、それより広まる意となり、〔書、尭典」「庶意」(政治上の成績) 成熙まれり」のようにいう。女語「政治上の成績」 成熙まれり」のようにいう。女語「政治上の成績」 成熙まれり」のようにいう。女語「正下に「嬰は說樂なり」とあり、それが授乳の意の正字である。

畸 13 はしたのた

碁ョ ざ・いごゴ

祺 13 きいわい

下海が、神座 形声 声符は其。 鑑文の字には「青本り」とあり、吉祥のあらわれる意。 〔詩、に「青なり」とあり、吉祥のあらわれる意。 〔詩、に「靑孝維・祺なり」とみえる。いま手紙の文末にに「斎孝維・祺なり」とみえる。いま手紙の文末にに「斎孝維・祺なり」とみえる。いま手紙の文末にで「斎孝維・祺なり」とみえる。いま手紙の文末にで「清孝維・漢字では「『独文の字』

棋 13 りちねん・むぎわら

記 3 りつわる・せめる

本野 (もとる)・俺異の義があり、跪変の意識・詭弁・詭謀など、すべて人をあざむく意に用いい。 (もとる)・俺異の義があり、俺・詭は・詭・詭弁・詭謀など、すべて人をあざむく意に用いい。 (説文) 三上に「責むるなり」と訓するが、「變を強い。 (意) ・ (本) に (本) に (本) に (も) に (本) に (も) に (も)

である。

跳 3 サンジまずく

ルー ド声 声符は危(危)。危は高所にを勢をいう。〔説文〕ニ下に「拝するなり」とあって跪拝の意とする。跪坐・跪伏のように用いる。で跪拝の意とする。跪坐・跪伏のように用いる。近記、曲礼、上〕「立てるひとに授くるときには跪かず」とは、授受しやすいためである。〔説文〕 こ下に「跽は長跪なり」とあり、〔史記、項羽本紀〕 ニ下に「跽は長跪なり」とあり、〔史記、項羽本紀〕 「項王、劍を按じてとく」のように、次の動作に移り易い姿勢である。

順 13 乗・コン

形声 声符は斤。斤に堅強なるもの質がある。「説文」九上に「頭の佳いた」とするが、堂々たるさまをいう。「詩、衛風、き兒」とするが、堂々たるさまをいう。「詩、衛風、き兒」とあり、いずれもその人を称める語である。「長し」とあり、いずれもその人を称める語である。「長し」とあり、いずれもその人を称める語である。「長し」とあり、いずれもその人を称める語である。「最大大きな男を頎大という。また「礼記」としてそれ至れり」は、懇と通じて、行いた。「「値」という。

置 14 はこ・とぼしい

頎

あり、大なるものを匱、次が匣、小なるものを置という。次条に「墮は匱なり」とみえる。また匱乏のいう。次条に「墮は匱なり」とみえる。また匱乏のいう。次条に「墮は匱なり」とみえる。また匱乏のにがるで、「乃ち册を金縢の質に納む」という。めたもので、「乃ち册を金縢の質に納む」という。めたもので、「乃ち册を金縢の質に納む」という。めたもので、「乃ち册を金縢の質に納む」という。というのである。のち字は櫃に作り、匱はからで、「乃ち册を金縢の質にがむ」という。という。というのである。のち字は櫃に作り、匱はをく匱乏の意に用いられて匱餓・暖冷・暖水・でした。

14 ぬき

形声 声符は既(既)。〔説文〕一三 などを塗る意である。〔書、梓材〕に「惟それ匹夫を教ぶ」とあり、既は貝を焼いた歴灰(今の石灰とを教ぶ」とあり、既は貝を焼いた歴灰(今の石灰とを教ぶ」とあり、既的の語があり、既飾の意・上塗り書、礼楽志〕に肸飾の語があり、既飾の意・上塗り書、礼楽志〕に肸飾の語があり、既飾の意・上塗り書、礼楽志〕に肸飾の語があり、既は食では、ところ」と休息の意に用いるのは楓、また〔召南、ところ」と休息の意に用いるのは楓の字の義。既には食足りて息づく意があり、食し終ることであるから、この両訓の用法は既の声義から出ている。

微は けるし・はた

ている。微は道路において巫女を殴つ形である。そ〔説文〕はまた徽字条一三上においても徴の省声とし 徽は邪幅、いわゆる三角巾で、三股索とよばれるもての意味をもつものであった。字は微とも通用する。 振ったのであろう。中国の武人が小さな旗に巾をつ を揚ぐる者は公の徒なり」とあり、背にある小旗を 属を示すしるしに用いた。〔左伝〕昭二十一年「幑 関して用いるしるしである。軍中においてはその所 あり、巾を著けたものが幑で、いずれもその呪儀に の巫女にしるしとして呪飾の糸を加えたものが徽で の。声義の近い字である。 る。微識の識は、のちの幟にあたる。わが国の武将 以て背に箸く。巾に從ひ、微の省聲なり」という。 も、多く吹き流しの類を用いたが、もとは呪飾とし これを背に著けることは、のちの戯劇にもみえ 〔説文〕七下に「微識なり。絳き帛を もと微(微)と巾とに従う。

14

司常」に「都鄙に旗を建つ」とあり、それぞれの地ときには、犠牲をもって清める儀式をした。〔周礼、ときには、犠牲をもって清める儀式をした。〔周礼、[26] 直方の形をいうものである。〔周礼、考工記〕に旗 や旅の制をしるしている。旗は軍旗。〔呂氏春秋、 游、以て罰星に象る。士卒以て期と爲す」と旗・期 の畳韻をもって解するが、其は箕、僕や棋のように の意がある。〔説文〕七上に「熊旗五形声 声符は其。其に直方なるもの

> 埃あるときは鳴鳶、士師あるときは虎皮をあげ、朱代[礼記、曲礼、上]に、前に水あるときは青旌、塵は、紫然、 一切になるときは青旌、塵のて指揮するので、その本陣を旗下・旗営という。 たので、 旗じるしは旗章・旗幟。のち料理屋や酒舗にも建て を左にし白虎(西)を右にして、軍を進めたという。 鳥(南)を前にし玄武(北)を後にし、青竜(東) 区指揮官のあるところに、その旗を建てる。旗をも 旗亭・酒旗のようにいう。

み・ちりとり

箕 14

世界公共 治館為國 Ø

V

発え

B

形声 を伸ばして坐ることを箕坐・箕踞という。一年た塵取り。妻を謙称して「箕帚の妻」という。両足 うな農作業は、女子のなすところであった。箕はま を去る形。金文に類があり、また製に作る。そのよ 「簸なり」とあり、古文第二字は簸揚してもみがら34。のち丌を加え、竹を加える。〔説文〕五上に初形。のち丌を加え、竹を加える。〔説文〕五上に で、改めて箕が作られた。ト文や古文第一字がそのその形声字である。其を代名詞などに用いるに及ん 声符は其。其は箕の象形でその初文。箕は

綦 14 網別 も えぎ

形声とする。綦は〔説文新附〕二三上にみえ、綦の 綦 韘 形声 一三上に綥を正字とし、字を 声符は其。〔説文〕

> 巾」とあり、もえぎ色のあやぎぬをいう。〔説文〕をが通行する。〔詩、鄭風、出其東門〕に「縞衣綦字が通行する。〔詩、鄭風、出其東門〕に「縞衣綦 形のようである。綦はその形声字であろう。 の正字とする字は、字形からみると、髪を包む巾の

綺 14 あやぎぬ

美しいものにつけて、綺羅・綺幡・綺陌・綺楼のよ藻・綺文のように文章の美しさをいう。またすべていう。綺縞・綺絨・綺縠など織物をいうほか、綺ら織りに対して特に美しい織物であるから、綺麗なら織りに対して特に美しい織物であるから、綺麗な うにも用いる。 子をいう。〔説文〕一三上に「文繒なり」とする。 意があり、斜糸の交錯する綾織りの編れるでは、 声符は奇。奇には邪、敬邪のない。 v

褘 14 ひざかけ

韓 • 혧

あろう。 ている。 衣は王后の祭服の名で、それには雉の模様が描かれ 推の間では蔽膝(前かけ)を褘というとみえる。褘は、胃(喟)・或(國)の例と同じ。〔方言〕に、江は、胃(喟)・或(國)の例と同じ。〔方言〕に、江北、胃(喟)・或(國)の例と同じ。〔方言〕に、江水 雉はまた翬といい、禕衣の名も翬と関係が

誒 14 **ああ** キ・アイ・イ

形声 を清める儀礼で、そのとき発する声を 声符は矣。矣は矢をもって目

あった。〔楚辞、大招〕に「談笑すること狂たり」いま「譆々出々」に作り、廟の火災を予言する謎でいま「譆々出々」に作り、廟の火災を予言する謎で とは、声を出して笑う意である。 また〔左伝〕襄三十年「誒々出々」の文を引くが、 ある。〔説文〕三上に「惡むべきの辭なり」といい、 矣といい、また唉・欸という。 談もその系列の語で

豨 いキのこ

をいう語とする。〔方言〕に南楚では豬を締というと、その走るさまをいう語とする。〔方言〕に南楚では豬を締というとみえる。〔淮南子、本経訓〕に「古、封豨(大猪)とみえる。〔淮南子、本経訓〕に「古、封豨(大猪)と、その走るさまをいう語とする。〔方言〕に南楚では豬を締という。 勇と名づけたのは、その好古癖を示す話柄である。生葬が天下の囚徒人奴を募って軍を編成し、豬突豨王莽が天下の囚徒人奴を募って軍を編成し、豬突豨定四年、〔楚辞、天問〕などにも伝承されている。 封豨を桑林に擒にす」とみえ、その神話は〔左伝〕 形声 声符は希。〔説文〕九下に「豕

羽本紀〕「項王、劍を按じて跽く」、「范雎伝」「秦王、る長跽・跽坐の姿勢と、少しく異なる。「史記、項するなり」とあって、跪拝の姿勢と、膝を地につけ 跽きて請ふ」などは、立て膝の姿勢であろう。 とあり、同じく「ひざまずく」と訓する跪には「拜 形声 ある。〔説文〕ニ下に「長跪するなり」 声符は忌。己に屈曲する意が

ああ・やわらぐ

豨

跽 嘻

器(器)

嬉 撝 槻 という。

は、恐懼の声を発する意である。また〔易、家人〕(史記、藺相如伝〕「秦王と群臣と相視て嘻す」と意外なことに驚き嘆くときに用いることが多く、 嘻」「噫嘻、成王」は讚仰するときの声であるが、ませる意。嘻は感動詞に用いる。〔詩、周頌、噫ませる意。嘻は感動詞に用いる。〔詩、周頌、噫彩』。 ので、むりに笑うことをいう。 「婦人嘻々たり」とは、人に驕って笑声を発するも

器 15 【器】16 きつわ

影响 野野野

会意 [鄭注]に「尊彝の屬なり」とみえ、祭器・礼器をうのが原義。[『礼、大行人]「その貢は器物」の用いるもので、彝器・祭器・祥器・明器のようにい い。 祭器を、器という。犬牲を用いるのはいわゆる釁礼。 縁れ、 縁の器で、これを列べて祈り、犬牲を用いて清めた むる所以なり」という。諸家はみなこれを疑問とし口に象る」、また犬に従うのは「犬はこれを守らし 【説文〕三上に「皿なり」とし、四口の形を「器の **霽器には鶏血をもって清め、その器を霽という。** 器量・器度・器宇の意となり、役に立つことを器用 いう。のち器財・器械の意となり、人の上に移して いに犬を廃して大と改めている。器は神事や祭事に め犬の部分を工に改めた字形もあり、常用字ではつ ながらも、犬が犬牲であることに想到せず、そのた 旧字は器。四口と犬とに従う。口はひ、祝

たのしむ・たわむれる

「或いはこれを嬉といふ」とあり、婬戯を嬉という。 形声 るが、神事の語には堕落する傾向をもつものが多い るのを嬉という。喜はもと神をたのしませる語であ 嬉々は笑声の擬声語。そのような声を発して嬉戯す 意。〔方言〕に「江沅の閒、戲をいひて姪と爲す」 声符は喜。喜は鼓楽して神をたのしませる

撝 15 さしまねく

「裂くなり」とするが、「公羊伝」宣十二年「莊王親「裂くなり」とするが、「公羊伝」宣十二年「莊王親しく自ら旌を手にして、左右して軍を撝く。舎をいる。こと七里」、また「淮南子、覧冥訓」「魯陽公、東京と戦を構ふ。戦間にして、日暮る。「沈を援りてきまれる。 とあり、 〔説文〕の「裂くなり」の訓に近い。 こと撝奪するが如し」とあり、これは収奪する意で、 いる。 これを

揚くに、日これがために

反ること三

含なり また〔晏子、外七、重而異者〕に「賦斂する、いずれも指撝、すなわちさしまねく意に用 形声 声符は爲(為)。為に偽

槻 つキ

う。わが国でも弓に用い、「播磨風土記」に槻弓のから、字ははじめから弓の木の意をもつものであろという。規はぶんまわしで半円形をなすものであるという。規はぶんまわしで半円形をなすものである に〔唐韻〕を引き、「弓を作るに堪ふるものなり」 形声 た一声符は規。 槻は欅の一種。 【倭名類聚抄】 まではます。 はずきます はっぱい

名がみえる。

文 15 キ・ギ

新

会意 正字の字形は、業と殳とに従う。素は〔説会意 正字の字形は、業と殳とに従う。素は〔説表 ない。この文〕九下に「豕怒りて毛豎つなり」というが、この文〕九下に「豕怒りて毛豎つなり」というが、このない。 また「一般にないるときも同じ。従って表は呪能をもつ思いられているときも同じ。従って表は呪能をもつ用いられているときも同じ。従って表は呪能をもつ用いられているときも同じ。従って表は呪能をもつとない。これを殴つ数はその呪能を鼓舞する意で、然・殺などと、その文字構造が似ている。〔説文〕三下に「毅は妄りに怒るなり。一に曰く、決することかるなり」とあり、これによって事を決する意でとあるなり」とあり、これによって事を決する意でとあるう。 [国語、楚語] に「強忍して義を犯すは殺あろう。[国語、楚語] 「剛毅不満は仁に近し」など、ちず、また〔子路〕「剛毅不満は仁に近し」など、ちず、また〔子路〕「剛毅不満は一に近し」など、たいう。「論語、泰位として強又に従う。素は〔説をおいる。「論語、泰位といるの類などといるのが、もとは古代の呪的、など、方が、また〔子路〕「剛毅不満は一般である。

畿 15 キ このち

らく田土の封境に、このような呪禁を施して、農 形で、これによって悪邪をしらべ阻止すること、す 形で、これによって悪邪をしらべ阻止すること、す がとしての飾り紐である璣組を加えた すること、す

> は者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意で、 は者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をがらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者(土中の呪禁の書)をめぐらしたところの意では者によりである。都となるの意で、後にしてものである。

T 15 きキ

形声 声符は軍。軍に揮・暉の声が大いに飛ぶなり」と訓し、また「一に曰く、伊維よりして南、雉の五采みな備はるものを聞といふ」とあり、色の美しい雉である。王后の服にその図を描くので、その服を愛翟という。宮殿の軒楹(柱)などに、丹青の文彩を施した美しさが暈の飛ぶように美しいというので、新室」の詩である〔詩、小雅、斯干〕に「暈のここに飛ぶが如し」と形容する。雉は羽毛が美しく神鳥とされ、[周礼、司服〕「禕雉は羽毛が美しく神鳥とされ、[周礼、司服〕「禕雉は羽毛が美しく神鳥とされ、[周礼、司服〕「禕糠は羽毛が美しく神鳥とされ、[周礼、司服〕「禕糠は羽毛が美しく神鳥とされ、[周礼、司服」「禕糠は羽毛が美しく神鳥とされ、「周礼、司服」「禕糠は羽毛が美しく神鳥とされ、「周礼、司服」「禕糠は羽毛が美しく神鳥とされ、「鬼に揮・暉の声がかられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。魯用いられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。魯用いられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。魯田いられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。魯田いられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。魯田いられ、またその羽は多く呪飾に用いられた。

いう。この揮は翬の仮借である。

角 15 かたむく

形声 声符は奇。奇は奇偶の奇で単 を右のそろわぬ角。〔説文〕四Fに「角の一は俛し 一は仰ぐものなり」という。転じて奇邪の意となり、 「周礼、大ト」に「鮹夢(怪しい夢)」の名がみえ、 「杜子春注〕に奇偉(すぐれる)の奇であるという。

其 15 まざむく

路 15 かたあし

で引返してこれを取り返し、偕に出たものは偕に反て敗れ、「一路の屦」を失い、行くこと三十歩にして敗れ、「一路の屦」を失い、行くこと三十歩にして敗れ、「一路の屦」を失い、行くこと三十歩にして敗れ、「一路の屦」を失い、行くこと三十歩にしている。今は奇偶の奇で片でいる。

は倚、倚の仮借である。

「強弱相踦る」は相倚る意で、そのときの音で、一徴〕「強弱相踦る」は相倚る意で、そのときの音る。踦距・躊躇は行くに困難するさま。〔韓非子、るべきことを教えたという。弓流しのような話であ

舞

0

象形

異(鬼の正面形)に角形の頭飾のある形。

冀

ねがう・こいねがう

輝 15 [煇] 13 かがやく・やく

形声 声符は軍。軍に揮の声がある。 形声 声符は軍。軍に揮の声がある。

15 きしまねく・はた

会意 今の字形は麻(麻)と毛とに (麻)と毛とに従うて靡声の字とする。しかし靡声では壁の 声を説くことができず、字は会意とみる外ない。 直を説くことができず、字は会意とみる外ない。 「説文」に「旌旗、指麾する所以なり」とあり、を 「説文」に「旌旗、指麾する所以なり」とあり、を 「たった。」とあり、電団をいう。諸侯は三麾を置く」とあり、電団をいう。諸侯は三麾を置くをめである。 「たった。」とがである。 下・麾幟・壁だなど、みな軍事にいう語である。 「たった。」とあり、を をである。な文の「師虎段」に「左右戲」のようにも用いる。麾下はまた戯下ともしるし、戯のようにも用いる。産ではまた戯下ともしるし、戯のようにも用いる。を下はまた戯下ともしるし、戯のようにも用いる。を下はまた戯下ともしるし、戯のようにも用いる。を下はまた戯下ともしるし、戯のようにも関いてある。のようにも関いてある。のようにも関いてある。のようにも関いてある。の字である。の字である。の字である。

と 言 16 よろこぶ・たのしむ

が多い。

糞闕・冀州の他には冀求・冀望のように用いることあるのは、祈・乞・匃と声が通用するものであろうな葉の峻茂せんことを」のように冀求・冀幸の意が枝葉の峻茂せんことを」のように冀求・冀幸の意が

を記することである。「説文」一○下に「説がなり」とした字が意である。「説文」一○下に「説がなり」とあり、嬉も同様の字である。「漢書、賈誼伝」に「これに遇すること禮あるときは、則ち群臣自ら意思」という。「穀梁伝」桓六年に「獵を憙む」、「越を憙む」とあり、漢以後に用いられて絶書」に「遊を憙む」とあり、漢以後に用いられている字である。

16 かすかなひ・およぶ・ともに

形声 声符は既。既)。「説文」七上 (既注)に既を日食と解し、小食の意とするが、「浸 の意としてよい。「公羊伝」、「別元年に「會と及と蟹 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とは、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とは、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とは、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とば、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とば、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「及とば、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「放とは、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「放とは、 とは、みな興なり」と連及の詞とし、また「放とは、 とは、みな興なり」という。

機 16 人機 16 も しかけ・はたらき・きざし

儒家もその字を用いている。のちには〔大学〕「その機かくの如し」のように、な機に入る」など、道家は好んでこの語を用いるが、

京 16 まる・かすかなひかり

CER REF.

璣 16 たま

本で作った渾天儀をいう。璿は旋の意である。 地域、 が表示されたものを選組という。組は、幾における紋が、に相当するものとみてよい。「書、禹貢」に、 が表示されたして、以て七政を齊ふ」とあり、 ではままなが、名で、以て七政を齊ふ」とあり、 ではままなが、名で、以て七政を齊ふ」とあり、 ではままなが、名で、以て七政を齊ふ」とあり、 ではままなが、名で、以て七政を変か」とあり、 ではままなが、名で、 がある。また「舜典」に、 がままなが、名で、 がままなが、名で、 のとあてよい。「書、禹貢」に、 がままなが、名で、 のとあてよい。「書、禹貢」に、 がままない。「書、馬貢」に、 がままない。「書、馬貢」に、 がままない。「書、馬貢」に、 のとが、また「舜典」に、 がままない。「書、馬貢」に、 のとが、また「舜典」に、 がままない。「書、馬貢」に、 のとが、また「舜典」に、 のとが、また「母のとが、また「舜典」に、 のとが、また「母のとが、また「母のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、また「母のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、また「母のとが、」」に、 のとが、またい、 のとが、またい、 のとが、 のとが、

見 16 きかがう・みる

字はまた闚に作る。〔老子〕第四十七章「戸を出でれるなり」とあり、のぞき見る意。とれるなり」とあり、のぞき見る意。

真 16 おじか・つちくれ

費 中。謂

津 16 キ

帮 彩 死

「周礼」以下の礼書に至ってからである。「礼記、「説文」三上に「認むなり」、また前条に「認は融をなり」とあって、急調をいう。金文に「少心慢をの成立とともに古いものであろうが、その俗が一字の成立とともに古いものであろうが、その俗が一字の成立とともに古いものであろうが、その俗が一字の成立とともに古いものであろうが、その俗が一字がある。章に煒・禕などの声がある。形声 声符は韋。章に煒・禕などの声がある。形声 声符は韋。章に煒・禕などの声がある。

出、上」「本哭しては諱む」「門に入りては諱を聞ふ」、また「周礼、小史」に「若し事あるときは、則ち王の忌諱を詔ぐ」とあり、「鄭司農注」に「先王の死日を忌と爲し、名を諱と爲す」という。のち民を避けて「世本」を「本」、「四民月令」を「失を避けて「世本」を「本」、「四民月令」を「たいう。のちはを永崇とするなど、その他万般のことに及んだ。と永崇とするなど、その他万般のことに及んだ。と永崇とするなど、その他万般のことに及んだ。中国、秦本紀」に「秦の俗、忌諱の禁多し」とは、ひろく禁令のことをいう。

微7 もるし・よい

「君子に徽猷(よき謀)あり」はみな佳美の意。字 が早くから佳美の意に用いられているのは、字のも 雅、思斉」「大姒、徽音を嗣ぐ」、「小雅、 の髪に糸飾りをつけて、巫女たることの徽識としたえている巫女で、これを媚女という。徽はその媚女 呪術を意味するのと同様である。岩も眉に呪飾を加巣をなす呪獣を殴って、その呪詛を減殺する共感があら加えられる呪詛を微くすること。たとえば殺がから加えられる呪詛を徴くすること。たとえば殺が 微は道路において巫女を殴つ形で、これによって他*が合わず、おそらくもと微と糸との会意字であろう。 糾縄なり」とし、字は微の省声であるとするが声 為 つ呪術的な意味がそのころすでに失われていたから 徽音・徽容のように佳美の意にも用いる。〔詩、 ものであろう。のち徽号・徽章のように用い、 会意 「三上に「邪の幅なり。一に曰く、 な。 鷲 もと微と糸とに従う。〔説文〕 また Ξ

禧慶・新禧など、吉礼の挨拶の語に用いる。は吉福をうる意。古い用例のない字であるが、

いま

飛17 たたり・まつり

燬

やく つり (クワ)

とも、

形声

また毀香して骨だけとなった屍声符は毀。毀は幼児を殴つ形

であろう。

形声 声符は幾(幾)。幾は型に呪飾をつけて、 を知りこれを被うもので、磯はその声義を承ける。〔淮南子、氾論訓〕に「鬼神の磯祥(禍福)に 因りて、これが爲に禁を立つ」とあり、〔列子、説。 が〕に「楚人は鬼、熱人は磯」というのは、みな磯符」に「楚人は鬼、熱人は磯」というのは、みな磯符となす法をいう。これを被う法が〔礼記、玉藻〕にみえ、沐してのち磯酒を飲む。酒に祓邪の力があるとされたのである。

第 17 「 12 □ 11 条器

磯

かわら・いそ

な字を避けることがなかった。

がみえるが、古人はその名字に、必ずしもこのようするをいう。〔春秋〕僖二十五年に「衞侯燬」の名〔玉篇〕に「烈火なり」とあり、猛火をもって燬滅

一〇上に「火なり」とし、その古音は火と近かった。ような犠牲を用いる呪的行為である。燬を〔説文〕を殴つ形とも解しうるものであるが、ともかくその

差额 無常 的 是

告子、下〕「親の過小にして怨むは、これ磯すべかそれ

あり、

相磨することをいう。〔孟子、

声符は幾。幾に詆譏する意が

たす。 一方符は「民であるが、民は殴の省略形。金文 の方がある。重文として録する「説文」古文の字形は を担いるもので、簋(段)はみな円形、肉食 には殴の字を用い、盛食の器である設中のものを杓には殴の字を用いるのは、のち竹器を用いたからである。 「説文」玉上に「黍稷の方器なり」というが、それ は重じとよばれるもので、簋(段)はみな円形、肉食 に用いるものである。「説文」の当時、古代の祭 には殴の字を用い、盛食の器である設中のものを杓 には殴の字を用い、感食の器であるといっても、 を でとる形であるが、足は殴の省略形。金文 を が、それ には殴の字を用い、感食の器であるといっても、 を が、それ にはというが、それ は、のち竹器を用いたからである。 「説文」の当時、古代の祭 にはといるする。 「説文」の当時、古代の祭 にはといるする。 「説文」の当時、古代の祭 にはといるが、とはといるである。

をもつ器制のものではない。金文にはは円形で両耳あるいは円形で両耳あるいは円形で両耳あるいい。金文にははのいいのが形を伝えるもののが形を伝えるもののが形を伝えるもののが形を伝えるものといい。

Æ

塞・舅が同声であったことが知られる。 (対す、) 「難を陳ぬること八簋」の〔毛伝〕に「圓な代本」「饋を陳ぬること八簋」の〔毛伝〕に「四路とするのが置させ、(供)す」の注も同じで、円器とするのが置きを共(供)す」の注も同じで、円器とするのがでがら、では祭器の器名のほか、「河上でます。とあって舅に仮借して用いており、その音のあったことが知られる。〔説文〕三下と部に設の字がみえ、ことが知られる。〔説文〕三下と部に設の字がみえ、ことが知られる。〔説文〕三下と部に設つ字がみえ、ことが知られる。〔説文〕三下と部に設つ字がみえ、ことが知られる。〔詩、小雅、伐木〕に墹・簋・牡・鳴・器。

虧 17 かける

17 17 よろこび のように石で、まさに磯の原義とあう。

の沙浜をいうが、「いそ」の語源は「石上」「石島」に「水中の磧なり」とする。わが国では波打際「説文新附〕九下に「大石、水に激するなり」、〔玉てはならぬ意。水中に石のあるところを磯といい、らざるなり」とは、石の相磨するように厳刻であっらざるなり」とは、石の相磨するように厳刻であっ

ることを蘑という。〔説文〕一上に「禮吉なり」と 所る意の字で、それによって福を求め 形声 声符は書。**

キ 燬 磯 禧 禨 簋〔殷〕 虧

のち欠失の意となる。

17 のぞむ・ねがう

「是を以て民その上に服事し、下に觊觎無し」、「魏ること、すなわち覬勰の意とする。「左伝」粒二年ること、すなわち覬勰の意とする。「左伝」粒二年を強い取り、とあって、上位を窺い取り、 える。饮・幾・窺・冀など、みな声義の近い字である。 声符は豈。〔説文〕ハ下に

期17

顔は類面に似ていたと伝えられる。 た。僕は雨請いの土偶、娸字条一二下に「醜なり」 獣を以て儺を爲す」とあり、儺鬼には木仮面を用い 作る。卜文に顦頭を示すらしい字形がある。孔子の いるもので、〔漢書、食貨志〕に「大儺の儀、 う。〔説文〕ヵ上に「醜なり」とし、「今、 みな醜悪な鬼頭の面である。 類はまた魌に 〕九上に「醜なり」とし、「今、逐疫にの意があり、顦とはそのような面貌を 声符は其。其に直方なるもの 木面

際 18 [**医**] 13 やぶる・くずれる

上部をまた隓に作る。隓は〔説文〕一四上に隳の正 があり、土の崩落する形を示すものであろう。字の 字は隋に従い、

> 神梯で、 する。 についていう用法がみえる。字は野・危などと通用嬢漿惰、歳を翫び時を愒ぶ」のように、人の行為裝準で、歳を翫び時を愒ぶ」のように、人の行為はまたして獨り存す」とあり、なお字の本義におい歸然として獨り存す」とあり、なお字の本義におい 〔漢書、師丹伝〕に「その皇廟を繁廢す」とあるよ (後漢書、祭祀志)に「宗廟隳壞し、 歸然として獨り存す」とあり、 [魯の霊光殿の賦] 「みな隳壊せらるるも、靈光のみ 義は、「蜀志、劉備伝」「宗廟繁亡す」、王延寿の義は、「蜀志、劉備伝」「宗廟繁亡す」、王延寿の 壊するに至る意を示す字である。そのような字の原 えて斎く形の隋に従い、その聖所の土が崩落して際 はその聖所に呪具の工をもって神を鎮め、祭肉を供 の工を探り出そうとする形であるかも知れない。際 その字形からは隳廃の意があらわれず、あるいはそ を二つ重ねた隓は、際の正字とされるものであるが り隠す意であり、隠は工の上下に手を加える形。左 も知られるように、呪具である工をもって神聖を護 う形。左の意味するところは、隱(隠)の字形から際もその聖所を瞭廃する字である。正字は両左に従 ある。自は城自ではなく、神霊の陟降するところのるときに用いており、その神聖を冒す意をもつ字でるときに用いており、その神聖を冒す意をもつ字で うに、宗廟社稷など、聖所とされるところを隳壊す **隳はその俗字であるとするが、のち隳の字が用いら** 字としてあげ、「城自を敗るを隓といふ」とみえる。 いる。〔呂氏春秋、順説〕に 自部の字は陟降などみな神事に関する字。

騎 18 うまにのる・ので

> 環し、社 稷喪亡す」、 に「人の城郭を隳る」、 騏 18 馬で先駆する意。〔左伝〕宣十二年、晋の趙旃がそわれるが、金文の〔令鼎〕に「先馬走」の語があり、 帰国した話がみえている。当時騎乗のことがなか 昭二十五年、晋の左師展将が、昭公の乗馬をえて の良馬二をもって兄と叔父とを戦場から救い、また ことは趙の武霊王が胡服騎馬したのにはじまるとい とあって、騎馬をいう。古くは車乗を用い、騎馬のとあって、騎馬をいう。古くは車乗を用い、騎馬の たのではなく、ただ車戦を主としたのである。 くろみどりのうま る。〔説文〕一〇上に「馬に跨るなり」 声符は奇。奇に単奇の意があ

をいう。 は多くその毛色でよばれる。騏驎は千里の馬、駿馬の如し」とあるのは「文、綦の如し」の誤り。馬名の如し」の誤り。馬名

〔説文〕一〇上に「靑驪なり。

文、博装

声符は其。其は綦で青黒色。

魌 [類]17

面のような面で、まこぎま・・、かつい鬼面で、漢の大質では木仮面を用いた。伎楽かつい鬼面で、漢の大質では木仮面を用いた。伎楽ない。 という 魅は武張ったい 点 字条一二下にも「醜なり」という。魌は武張っ とあり、「今、逐疫に顛頭あり」とみえる。 面をいう。〔説文〕カムに字を類に作り、「醜なり る。魌頭は追儺のとき方相氏が用いる形声 声符は其。其に直方の意があ みたくい また娸

禧 19 ああ・たのしい

は、その感情をいう語で、感動詞に用いる。 「狂子、養生主」に、文語君が寛丁の牛を解く神技をほめて、「譆、善い哉。技も蓋しここに至るか」をは、その感情をいう語で、感動詞に用いる。 と声が近く、その火災を予言する声であった。字は また嘻と通用して嘻笑のように用い、笑声をいう。 だ「譆々出々」と叫ぶものがあり、譆の音は火 楽しませる意。〔説文〕三上に「痛む 声符は喜。喜は鼓楽して神を

19 しる・しらべる・いさめる

「誹るなり」というのは、刺譏することをいう。 一談 さいまい というのは、刺譏のように諫める 意に用いる。〔説文〕三上にき。 下」「關市は譏して征せず」とは、通関などは、取 がその 物をしらべとがめる意であるが、のち譏誡・譏諫・物をしらべとがめる意であるが、のち譏誡・讒詫・ り調べるだけで課税をしないことをいう。本来は外 止するもので、幾に譏る・しらべるの意があり、幾 を が がをつけて、妖祥を譏察し、これを譏 初文であるとみてよい。〔孟子、 声符は幾(幾)。幾は戈に呪 梁恵王、

題 うかがう・みる

関戯はまた覬覦・窺戯ともしるし、同じ語である。声義を承け、身をかがめてうかがい見ることをいう。 は局促する意の形況の語であるから、闚・窺はその 小しく視るなり」とあり、窺と声義同じ。規々す。 「閃ふなり」という。穴部七下に「窺形声 声符は規。〔説文〕一二上に 声符は規。〔説文〕一二上に

> 覦は兪に従う字で、ゅ *** 偸み見る意であろう。

鰔 おくりもの

持として給せられるものを鎭廩という。气は気の初け、日祭の犠牲として供する羊をいう。犠牲を鎭牽、扶した、〔論註〕ハ作〕にみえる「生朔の籐羊」は、 した。〔論語、八佾〕にみえる「告朔の餼羊」は、餼を録する。のち気は気質の字となり、両字が分岐 上に「氣は客に饋るの裼米なり」とし、重文としています。 する穀をいい、餼の初文。〔説文〕セ 文、気は餼の初文である。 形声 声符は氣(気)。氣は食糧と

19 おくる・まつる

く、必ずしも鬼に饋ることのみをいう語ではない。字は会意にして亦声であるという。饋と声義が同じの人、祭を謂ひて餽といふ」とあり、 としるしている。 虩 形声 声符は鬼。〔説文〕五下に「吳

麒 19 きりん

蹄・狼蹄・鹿蹄・円蹄とするものがあり、また生態は異説が甚だ多く、円頂・狼額・羊頭・馬蹄・五るから、麒が麒麟の正名である。その形態について あり、麒麟をいう。麟は前条に「大牝鹿なり」とあ 形声 「仁獸なり。 り。麇身牛尾にして一角」と声符は其。〔説文〕 - 〇上に

> 周南、麟之趾〕のように、麟が古い詩篇にみえて 麒麟という聖獣の観念は、西方の神獣の観念と、鹿 ることが注意される。 く西方からもたらされたものであろう。ただ「詩、 のと思われる。飛翼をもつ獣という形態は、おそら を神獣とする伝統的な観念とが習合して、生れたも に深い意味を与えようとして、種々の説が生れた。 て麟を獲たり」とあり、この獲麟で経文が終ること にすぎない。〔春秋〕の経文は哀公十四年「西狩しについても諸説がみえるが、要するに想像上の聖獣

蘄 20 もとめる

義である。金文の旛字は、單(盾)の上部に旗杠の跨して離むること無し」というのは、みな旛字の用りしを知らんや」、また〔荀子、[**効〕に「天下に死せるものの、その始めにして生を漸めしを悔いざ死せるものの、その始めにして生を漸めしを悔いざ 橐泉宮に蘄年観があった。 意の癲気の癲がもとの形。それより蘄となっ 下には芹を「楚葵なり」とする。蘄は癖る・櫥める 釈草〕の〔釈文〕に芹と同字とするが、〔説文〕」にない。(新文文)の意であるから、祈と同声である。〔爾雅》。 形となることがあって、鰤と通用した。「鰤める」 頭部と同じような飾りをつけ、その形が蘄と殆ど同 るべきであろう。〔荘子、斉物論〕「子惡んぞ、夫のの意に用いられることが多く、むしろその異文とみ ,本来草名とは関係のない字である。秦の景公の 字書にみえず、金文に煽の字があっ 形声 声符は斬であるが、 その字は たもの

譏

変 1 年の怪神・おそれつつしむ

AL DA GA DEC

象形 頭に両角あり、手足を垂れているものの形に、神像をそのまま字形化したものと思われる。で、神像をそのまま字形化したものと思われる。で、神像をそのまま字形化したものと思われる。をはは、あり、複雑な神格のものと思われる。では古い伝承があり、複雑な神格のものと思われる。「国語、魯があり、複雑な神格のものと思われる。「国語、魯があり、複雑な神格のものと思われる。「国語、魯があり、複雑な神格のものと思われる。「国語、魯があり、複雑な神格のものと思われる。「電影」「木石の怪、夔・罔兩」の「章昭注」に「或いはいふ。夔は一足なり。越の人これを山繰といふ。はいふ。夔は一足なり。越の人これを山繰といふ。はいふ。夔は一足なり。対の人これを山繰といふ。はいふ。夔は一足なり。対の人これを山繰といふ。はいふ。夢は一足なり。対の人これを山繰といふ。神像にもそれらしいものがある(神図)。「山海経済があり、手足を垂れているものの形は、神像をそれらしいものがある(神図)。「山海経済があり、手足を垂れているものの形を、神像をそれらしいものがある(神図)。「山海経済がある。「神像を表情ないる。「は、神像を表情ないる。」

の声は五百里に聞えるという話であり、その声は雷の如く、黄であり、その声は雷の如く、黄

人面猴身の神

東なりがある。[呂氏春秋、察伝]に、楽正夔一足の説話は、「夔は一にして足る」意であるとする孔子の説を載せているが、〔説文〕の当時でもなお「龍の如くにして一足」とされている。その説明は、古銅器におけるいわゆる夔竜文の文様を想わせるもので、竜を展開文として文様化すると、当然一足となる。また始めて歌舞を作るものは、〔山海経〕に帝嚳俊、舜)であるとされ、「君国維はこれによいる。また始めて歌舞を作るものは、「山海経」となる。また始めて歌舞を作るものは、「山海経」となる。また始めて歌舞を作るものは、「山海経」であるとされ、「君国維はこれによいる。また始めて歌舞を作るものは、「山海経」の名がみえ、側身形で一足にかかれている。夔の説話は、今では容易に追迹しがたい複雑さの中に埋もれている。

饋 21 おくる・おくりもの

形声 声符は貴。貴は両手で貝貨を 持える形で、これを人に遺る意がある。 それで食事を人に遺ることを饋という。「説文」五 それで食事を人に遺ることを饋という。「説文」五 で人に物を贈ることをいい、「論語、陽貨」「孔子 じて人に物を贈ることをいい、「論語、陽貨」「孔子 じて人に物を贈ることをいい、「論語、陽貨」「孔子 に蒸豚を歸る」、「微子」「常人、女樂を歸る」を、 「古論語」では字をみな饋に作り、歸(帰)と通用 する。もともと「左伝」桓六年「齊の人、これに餼っている。もともと「左伝」桓六年「齊の人、これに餼っている。 を饋る」のように餼食を進める意の字で、「過れ、 を饋る」のように顧食を進める意の字で、「過れ、 をしていう。金文に途の字がみえ、「、できる。 とにもいう。金文に途の字がみえ、「、できる。

語 21 きけさかな

勢鳴點

21 うえる・ききん

「古論」の文、「魯論」には字を飢饉に作る。古代の はざるを饑と爲す」とし幾声、字はまた飢に作る。 はぎるを饑と爲す」とし幾声、字はまた飢に作る。 は、先進〕「これに因ぬるに饑饉を以てす」は がある。〔説文〕五下に「炎こきで は、熟)、幾に幾少の

24 | 23 | おもがい・たづな・たび

26 よいうま

大き、 原経」を載せている。【楚辞、離騒」に「自楽相とあり、孫陽は伯楽。【隋書、経籍志」に「伯楽相とあり、孫陽は伯楽。【隋書、経籍志」に「伯楽相とあり、孫陽は伯楽。【梵辞、離騒」に「騏驎に乗りて以て馳呼せよ」の句があり、験馬をいう。高才の人につき従うて追随することを「駿尾に附す」といい、「史記、伯夷伝」に「蘇聯に乗りて以て馳呼せよ」の句があり、験馬をいう。高才の人につき従うて追随することを「駿尾に附して行益。顧る」と述べている。

キ 羈〔羇〕 驥 ギ 妓 技 宜

ギ

妓っ うたひめ

技っ おざ・たくみ

宜 8 ギつる・よろしい・むべ

れているのは、今と同じである。

り」と規定している。

すべての技術が軍事に結合さ

便し、機關を積み、以て攻守の勝を立つるものな

南軸 魯

沙・宜・多・嘉・為が韻、〔女曰鶏鳴〕では加・宜が、古くは歌韻に入る音で、〔鳧驚〕第二章ではが、古くは歌韻に入る音で、〔鳧驚〕第二章では 「鄭風、女田鶏鳴」「子とこれを宜はん」とは、肴と 雅、鳧鷺]「公尸ここに燕しここに宜す」は祭饗、義もともに合わず、宜社の宜が字の本義。〔詩、大 が国の古代音表記にも反映しているのである。 はゲの乙類音に用いる。中国音の古音の推移が、 清音、宜・奇はその濁音に用いられ、〔古事記〕 を韻とする。わが国の推古期遺文においても、 宜・時宜などの義はみな転義。字は義・誼と通ずる する意であるが、なお際宜の遺意をもつ。適宜・便 一の上に従ひ、 多の省聲」というも、形も声 加は で b

祇。 くにつかみ

示を用いる。〔書、微子〕に神祇の語はあるが、そを"掌る"、〔大司・楽〕に「地示を祭る」とあって、宗伯〕に「邦の天神・人鬼・地示の禮を建つること等代。 用いる食器のナイフの形であり、 あるのが最も古い例である。氏は氏族共餐のときに 〔詩、小雅、何人斯〕「我をして祇らかならしむ」との篇は後出のもので、字の初義とは定めがたく、 三字同じく真部の字を用いるのと同じ。〔周礼、大萬物を引出するものなり」とあって、天・神・引の 字同じく支韻の字を用いる。神一上に「天神なり。 萬物を提出するものなり」とあり、地・祇・提の三 にもその両音がある。〔説文〕一上に「地祇なり。」たとえば是に翨の音があるように、氏正、 形声 声符は氏。氏は禅母の字で、 祇は氏族の保護神

園は仏教語の音訳で、また祇洹とかくことがある。 炒えに安らか・地霊などの意をもつのであろう。祇

偽 (偽)14 いつわる・うそギ・キ・カ(クヮ)

偽詐の意となる。作為は詐偽と通ずる語である。 作る。すなわち化の意をもつ字である。のち仮偽・ とある吪はまた偽に作り、言部三上の譌はまた訛に り」とするが、〔説文〕ニ上妣字条に「動くなり」 [説文〕八上に「詐なり」、「法雅、釈詁]に「欺な」、「きが 爛 の考えかたで、 形声 の声がある。人為を偽とするのは後世 ものの変化することを偽とい 声符は爲(為)。為に譌・鳩 う。

欺 12 あざむく

欺詐の言に満ちたものである。 国策」は奇書というべきものであるが、その全篇は 下に「詐欺なり」、また言部三上に「詐は欺なり」と 熊 行為であったが、のち人を欺詐する意となる。〔戦 みえる。面をもって他を欺くことは、もと神事的な って人を欺き、驚嘆させる意であろう。〔説文〕ハ 形声 ばれる仮面の意を含む。その仮面をも 声符は其。其は供、蒙棋とよ

義 ¹³ ただしい・よい

蒸煮。 氋 菲

> 〔師旂鼎〕には「義しく……べし」という用例があぼして饕という。金文には多く威義の字に用いるが、ぼして饕という。金文には多く威義の字に用いるが、など下体のみえるものが叢、それを牲獣の全体に及 るが、いまの〔墨子〕にみえず、字も訛形であろう。る。〔説文〕重文の字は〔墨翟の書〕にみえるとす 会意 正善の義に用いる例がある。 の〔叔夷鐘〕に、「蕭々たる義政」と、すでに字を正義・義理・義行のように語義が引伸する。列国期 ことはない。義はもと犠牲の犠の初文。下に羊の脚 会意とするが、我を已と解しての字説である。自我 を加えて犠牲とする意で、牲体に犠牲として欠陥が の意は仮借義であり、仮借義で会意の字を構成する れる。〔説文〕二三下に「己の威儀なり」とし、字を 神意にかなうものとして「義しい」の意が生 羊と我とに従う。我は鋸の象形。羊に鋸

疑は「鬼」の うたがう

天秋雨 科 愛くな

然として起ち、杖を植てて進退を定めかねている形象形。字の初文は矣。 吴は人カほそを買いて と 形を加えていまの字形となったが、初形はかなり失 で、心の疑惑しているさまを示す。のちにまた足の いる篆文の字形によっていうもので、 われている。〔説文〕一四下に「惑ふなり。子止ヒに , 矢聲」というのは、すでに字の初形を失って 字の初文は美。矣は人が後ろを向いて凝 そこからは字

はその心情をいい、嫌疑によって獄に繋がれるのを 形を説くことができない。疑殆・疑惑・疑忌・疑怪

偽の明らかでな 疑獄という。真 いことを疑似、 亞素 至美形図象

る。 及んでいる。山東の鬒侯の図象と思われる亜字形中 見せかけで敵を欺くためのものを疑臓・疑城のよう 掌が疑事を定めるなどの聖職であるからであろう 象と複合しているものもあり、 に、曩・曩侯としるす図象は(挿図)、また亜矣形図 あり、その関係図象はすべて四十三種、七十三器に の譌形であろう。金文の図象に亜美形に作るものが にいう。字はまた欵に作るが、右にそえたものは杖 いずれも亜字形を伴う図象であるのは、その職 その本族は髸侯であ

羕 たけだけしいけものギ・キ

従うものに毅があり、その字は豪を殴つ形である。 「一に曰ふ、殘艾なり」とは草を根こそぎ刈りとるとするが、そのような姿があるとは思えない。また 呪的な儀礼としての意味をもつ軍戯として行なわれ がそのような軍戯に起原することからいえば、 意であろうが、そのような用義例もない。この字に 蒙という。〔説文〕 カトに「豕怒りて毛豎つなり」 である。その辛字形の冠飾をもつ獣の勇武なる姿を (竜) やまた虎に加えられることがあり、みな神獣 虎頭のものを殴つ軍戯を意味し、戯や劇 れるしるし。辛字形の冠飾は、鳳や龍象形 辛は神獣の冠飾として加えら

> 声であったと考えられる。 たものであろう。字は毅と通用することがあり、 同

儀 15 ようす・ただしい・のりギ

※ 對我亲

形声 り」は儀匹、わが思う人の意である。 ます。 に用いる。〔詩、鄘風、柏舟〕「實にこれ我が儀なの初文。のち人の儀容であるというので、礼儀の字 共み、威義を乗る」のように威義に作り、義がそろとなり、大きな、これの人は、「大きな」といい、「大きな」といい、「大きな」という。といい、大きないの意とし、義声とする。金文には「「秋きないまった。 声符は義。〔説文〕八上に「度なり」と儀度

嬀 姓ギ キ

嬀瑚母の媵器として作られたものである。 姓。〔書、尭典〕に「二女を嬌の汭に釐め降す」とという。 できない の声がある。古代の聖王とされる舜のとい 形声 声符は爲(為)。為に偽・ 譌

戱 (戲)17 ぐんたい・たわむれるギ・キ

駹 0 敖 **分子** 位

会意 **遺を後ろから撃つ形。** 旧字は戲。慮と戈とに従う。戈をもって、 豊は〔説文〕 五上に「古陶器

> 西偏の語がある。金文の〔師虎段〕に「嫡として左兵なり」とあり、偏とは偏軍で、〔左伝〕に東偏・兵なり」とあり、偏とは偏軍で、〔左伝〕に東偏・ なり」とあるも、その器制は明らかでなく、字に即 は、古代の社会、あるいは未開の種族の間では、極 立って、種々の祈禱的舞踊や呪儀が行なわれること 起原するものとみてよい。戦闘が行なわれるのに先 これも虎頭のものを伐つ呪儀であるらしく、それよ るものを伐つ模擬儀礼で、その呪儀より戯弄・戯謔 左右両戯の軍律などを掌ることを命ずる意である。 右戯の繁荆を官嗣(司)せよ」とあり、嫡長としている。 類があり、もと軍事に関する字であることが知られ 形である。古く軍中の遊戯としてこれを撃つ舞楽の い、開戦を通告するときには、〔左伝〕 めて一般的なことであった。実際の交戦をも戯とい りして戯・劇の意となる。戯・劇はいずれも軍戯に の意となる。これと字形の類するものに劇があり、 いう。戯にまた戯弄の意がある。戯はもと虎頭を飾 戯はまた麾・旗と通用し、麾下をまた戯下・旗下と る。〔説文〕「三下に「三軍の偏なり」「一に曰く、 していえば、虎頭の人が豆形の台座に腰かけている 僖二十八年

「請ふ、これと戲〔国語、晋語〕に 戲れん」のよう **激とは、もと軍の** にいう。遊戯・遊 語であった。また 示威的行動をいう

漢画像石

伝えるものであろうと思われる。のち戯曲・戯場の の属と相搏つ形のものがあるのは、なお戯の初義を い。漢の画像石にみえる百戯のうちに、虎豹や猛禽 「善く戲謔したまへど 虐を爲したまはず」のよう 板」「敢て戲豫(楽)するものなし」、「衛風、淇奥」だった。のちすべて遊戲的な行為をいい、「詩、大雅、た。のちすべて遊戲的な行為をいい、「詩、大雅、 よすに、お芝居をいう語に用いる。 に用いる。戯謔とは虐の一歩手前の行為であるらし 行為に代る判定の方法として用いられることもあっ れん」とあるのは角力のことであるが、角力が戦闘

誼

のいうところは何の根拠もない。〔漢書、董仲舒にしく……べし」の語法に用いている例があり、段氏は誼の字がみえず、かえって義を〔師が鼎〕に「義に作る。みな今の仁義の字なり」というが、金文にに作る。 とは古今の字なり。周の時は誼に作り、漢の時は義ところから信誼の字となった。〔段注〕に「誼と義 誼のように、人の好意をいう字に用いるが、もとは は、義・誼それぞれの用法がみえる。のち恩誼・厚 ず」とあり、誼を義の意に用いている。〔隷釈〕に 伝〕に「それ仁人はその誼を正してその利を謀ら とから正義を意味するように、誼も神の宜しとする 宜しとする所なり」というも、 が享けることをも意味する。〔説文〕三上に「人の 神に対する信誼をいう字であった。 形声 上に肉を列する形で、それに対して神 声符は宜。宜は神饌として俎 義が犠牲の完全なこ

劓 16 〔劓 〕 12 はなきる

の反、すなわちゲツの音を与えている。この字の異 を対して、また劇のことを削鼻・決鼻・割鼻のようにいうことを削鼻・決鼻・割鼻のようにいうことを刺りる。 [あ、睽卦、六三] に「その人、天られ且した。 とある。 [あ、睽卦、六三] に「者の人、天られ且した。 という。 [書、般庚、中] に「我は乃ちこれを刺した。 がある。 礼、掌戮〕に「劓者は關を守らしむ」という規定は、というという場では、というでしょうというというとの刑があった。〔周を被せん〕とみえ、古くからその刑があった。〔過ぎとき 〔説文〕の解と異なる。劇の字音は〔釈文〕に牛列(仲間)と造せ」のように同僚の意に用いており、 [辛鼎]に「厥の劇多友」、[叔夷鐘]に「而の儩劇」となっ字形が最も古いものである。劇は金文にみえ、その字形が最も古いものである。劇は金文にみえ、と刀とに従う字があり、自は鼻の初文であるから、 会意 としているが、幕六上は射的の形である。卜文に自 りおとす刑罰の方法で、古く五刑といわれた肉刑の 一。〔説文〕四下には剿を正字とし、剿を臬声の字 鼻(鼻)と刀とに従う。刀を以て鼻頭を截

羲 16 ぎギせ

养 を加えて分断し、その下体の部分が、号あるいは万 の形にみえる。〔説文〕五上は字を「兮に從ひ義聲」 会意 に供える犠牲。これに我(鋸の初形) 羊と我と写とに従う。羊は神

> 作る。伏羲・女媧は南方系の神話と考えられる。 ぎない。字は犧(犧)の初文。伏羲はまた伏犠にもと訓したが、犠牲の下体を兮と誤り解したものにす とし、兮は語気を示す字であるから、「羲は气なり」

嶷 やまのたかいさまギ・ギョク

の立つ姿勢をいう。ゆえに山の嶷然と 声符は疑。疑は凝然として人

る。〔楚辞、離騒〕九嶷山をあげてい葬ると伝えられる に山名として、舜を して高いさまを嶷と いう。〔説文〕九下

く地上におとしているさまが描かれている。

擬 はかる・なぞらえるギ

伸の義である。 して従うことを擬範という。みな擬度の意からの引 罪・擬断といい、かりに定めることを擬定、手本と それである行為に出ようとするときの、思いはかる とは、その思いはかる意。ことを定めることを擬 状態をいう語となる。〔説文〕「二上に「度るなり」 ことに迷うて、凝然としてたたずむ形。 声符は疑。疑は人が進退する

あるのは、その舞容をいうものと思われる。 の義を伝えず、ただ〔広雅、釈詁〕に「好なり」と するのであろう。もと農耕儀礼をいう字であるがそ 舞う形。委に対して、高く舞う姿勢のものを魏と称 べきであろう。一姿は穀霊に扮した女子が身を低めて り」と訓し、委声とするが声が合わず、意符とみる に従うものとも定めがたい。〔説文〕ヵ上に「高なり、また巍字には山を鬼下にしるすことも多く、嵬

旧字は犠に作り、羲声。 義は羊性に我

犠

(犠)20

いけにえ

蟻 19 あギ り ガ

(神名)は能く百物を議して、以て舜を佐くるもの〔段注〕の趣旨と異なる。〔国語、鄭語〕に「伯翳

て、天下亂る」の例を引くが、この議は論難の意で、 入して風議す」、「孟子、滕文公、下」「處土橫議し字を義の亦声と解し、また〔詩、小雅、忠言。字を義の亦声と解し、また〔詩、小雅、忠言。字を義の亦声と解し、また〔詩、小雅、忠言。

字を義の亦声と解し、また〔詩、小雅、北山〕「出り。言その宜しきを得るをこれ議といふ」として、 補説して、「議は誼なり。誼は人の宜しきところな 字の原義はそれぞれ異なる。〔段注〕に〔説文〕を り」とあって、この三字の訓義は循環しているが、

牲という。〔説文〕ニ上に「宗廟の牲なり」とする。 羊を犠牲とする意。これを獣牲の一般に及ぼして犠 (鋸)を加え、その下体下肢が下に垂れている形で、

形声 しるして蟻の声でよむ。 声符は義。字はまた蛾にも作り、古くはそ

曦 20 ひのいろ・ひかりギ・キ

字はまた義に従うことがある。 **がは太陽の御者とされ、太陽の車を職軒という。え、日光をいう。我が国では、あさひの意に用いる。形声 声符は羲。[玉篇] に「日の色なり」とみ

議 20 かる・あらそう

は語なり」「語は論なり」「論は議 「吾ま侖なり」「論は議な声符は義。[説文] 三上に「議

藤

キク

態を明らかにすることである。

なり」とみえ、この議とはものを譏察して、その実

匊 8 すくう

专 浏

とめるような形である。〔玉篇〕の勹部に、古文の して(茂って)匊に盈つ」、「小雅、采緑」「終朝に〔詩、唐風、椒聊」「椒聊(はじかみ)の實 蕃衍れ上に「手に在るを匊といふ。勹米に從ふ」とする。 字は臼に作るというが、声義ともに異なる。 壺〕にその字がみえ、からだをかがめてものを受け :のような願かけの行為であった。金文の「番匊生」がはいることをいう。この草つみは、「うけひ狩」 綠(草の名)を采るも 一匊に盈たず」は、みな両 会意 勹と米とに従う。勹は人の側身形。〔説文〕

魏 魏 たギ かい

象・犠尊という。〔左伝〕定十年に「犠象は門を出

でず」とあり、宗廟の器は門外不出とされた。

牛を以ふ」、注に「犧とは純毛なり」という。祭器

も重要なもので、〔礼記、曲礼、下〕に「天子は犧犠の初文とする賈侍中説がよい。 字性のうち牛は最 として、「气なり」とする解をとっているが、羲を る意であろう。〔説文〕は羲については兮に従う字「これ古字に非ず」というのは、羲を字の初文とす された。〔説文〕はまたその師賈侍中の説として 宗廟の牲としては毛色肢体すべて備わるものが要求

のうち、酒器に獣形をとるものがあり、これを犠

山を省く理由はないとするが、慣用上のことでもあ然の意であるから、〔恵記〕に嵬に従うべき字で、宮城双闕の高楼をいう語に用いるのみである。巍々 名・姓氏に用い、他には魏闕・魏象・魏観のように の魏をみな巍に作り、 文〕には魏字を収めず、漢碑にも魏国 巍がその初文。字は国名・地 正字は巍に作り、嵬声。〔説

キク 匊

乞3

こう・もとめるキツ・コツ

掬 すくう

量をいう。 を こ、う。 ゜の指、掬すべきなり」としるしている。 けるので、舟中の人がその指を切りおとし、「舟中 い、〔左伝〕宣十二年、敗走の兵がみな舟に手をか 声符は匊。 匊が掬の初文。 文献には掬を用 一掬とは少

菊

として、 陰暦の九月を菊秋といい、九日の重陽を菊花の節 字を出して、「日精なり。秋を以て華さく」という。 秋菊の字は黐に作る。〔説文〕一下に別にその かわらなでしこであるから、いまの秋菊ではな 魂振りの行事などが行なわれた。 菊なり」とあり、大菊は蓮麦でなでし、一下店 一声符は匊。〔説文〕 一下に「大

字は仮借して鞠躬に作ることが多いが、鞠はけまり を意味する字である。 をさげ、 つ形。その身をかがめた状態を躹という。 声符は匊。匊は身をかがめてものを掬いも 身を屈して行なう拝の礼を躹りという。 また両手

鞠 けまり・かがむ・しらべるキク

けまりの鞠をいう。 ります。
りまする。
りまる。
りまる。< 三下に「蹋鞠なり」とあり、形声 声符は匊。〔説文〕

> ことがある。 らべる)の義に借用し、鞠訊・鞠獄のように用いる

> > 7

同字。のち分化して、气は雲気、乞は

雲気の流れる形に象る。气と

麴

〔左伝〕宣十二年に「麥麴有るか」とあり、古くか 麴や酒の製法については、〔斉民要術〕に詳しい記「酒母なり」とする。酒を作るには、芽米を用いた。 ら酒母による醸造法が知られていたのであろう。 述がある。母は媒、これを媒体とすることをいう。

17

声符は乞。「説文」ハ上に气に

いさましい

韜 23 しらべる

を窮治するなり」と訓し、卒・人・言に従うて竹声 従う。

示す。罪状を訊問することを訊縮という。 また言は訊問のとき自己詛盟を行なう意で、誓約を また言は訊問のとき自己詛盟を行なう意で、誓約を した。

いるように、罪人を訊問する意である。〔説文〕の

字義は卒(幸、手械)を加えた人と言とに示されてとするが、竹は罪人を鞭笞するために加えたもので、どよ 「説文」 一〇下に「皋人竹と幸と人と言とに

声符は領。〔説文〕七上に正字を黐に作り、 仡

に乞む」というように、神霊に祈ることをいう。である。金文に「用て眉詩を乞む」「用て嘉命を乞む」「用て嘉命を乞む」「用て嘉命を乞む」「用て嘉命を乞む」「用て嘉命を乞む」と求の字となる。古くは雲気をみてトし、祈ったの

従う字形に作り、「勇壯なり」とする。

は墉の高大なさまをいう。仡とは頭を高く挙げるさをいう。乞、兀・吉などの声に、勇健の義をもつもをいう。乞、兀・吉などの声に、勇健の義をもつもで、寒雪」に「仡々たる勇夫」とあり、壮健の状質・ まをいう語である。

吃 どもる・くらう

1 い。吃驚は喫驚。仕事もなく俸給の高い役人を吃い。で驚は喫と音が通用するもので、本来の用義ではなっ意は喫と音が通用するもので、本来の用義ではなの形である。笑う声を吃々というのは擬声語。くらの形である。笑う声を 飯官という。穀つぶしに類する語である。い。吹鷲は喫驚。仕事もなく俸給の高い。吹 滞ってつづかぬをいう。正字は气に従い、篆文はそ 蹇まりて難きなり」とあり、形声 声符は乞。〔説文〕 -声符は乞。〔説文〕ニ上に「言、 ことばが

6 よい・めでたい

뇹 なりまります

軍・嘉の五礼に分たれるが、吉礼とは「周礼、葉」にもこの種の歌がある。礼事は吉・凶・ [召南、野有死麕] は難解の詩とされるものである 許されぬ愛情のことを歌うもので、 れにいい寄る祝をいう。いずれも神につかえる身の、 て神につかえる巫女、「吉士これを誘ふ」とは、こ 川の地に仙遊する魂振り的な遊幸儀礼を歌うもので人を吉士・吉人とよぶ。〔詩、大雅、巻阿〕は、山といい、儀礼を行なう日を吉日といい、神事に従う が、「白茅純束(女あり玉の如し」とは白茅を持っ 去勢して清めたものを神饌として供えることをいう。 に「吉蠲を饎と爲す」とは、祝禱して清めたもの、神事を吉というのがその古義で、〔詩、小雅、天保〕 士」「蕩々たる王の多吉人」のようによばれている。 あるが、この神事に従うものは「蕩々たる王の多吉 神事に関していう語で、祭器を作る青銅などを吉金 とするように、士人の言には択び捨てるべきものが に從ふ」という。〔繋伝〕に「口に擇言無きなり」原義とする。〔説文〕ニ上に「善なり」とし、「士口 D、祝禱を収める器の形。祝詞を収めた器の上に、 さる。 士と口とに従う。士は鉞の刃笛の形、口に なく、吉善であると解するのである。吉善とはもと これを守ることを意味する字で、「詰める」ことを 聖器として鉞頭をおき、祝詞の呪能を封じこめて、 士と口とに従う。士は鉞の刃部の形。口は わが国の「万 ~ 賓・ 天府、

> 語を用いる。 「弘いに吉なり」という。易筮にもなお吉・貞吉の吉康」の語がある。卜辞には卜兆の吉なるものを吉康」の語がある。卜辞には卜兆の吉なるものを 意にかなうこと。金文では「師空父鼎」に「黄耇吉を用いる。〔書、無逸〕「民迪で吉康なり」とは神のを吉といい、神馬の名にも吉光・吉皇・吉黄など、 季節祭は概ね魂振り的性格をもつ。すべて吉祥のも 注〕によると「四時の祭なり」とあり、そのような

骨。 わキ かツ つ

間である。「六書故」に引く「唐本」に「脈骨なり」をし、声の字とするが、声義ともに疑しない。 爷 意となったものであろう。 小なる肉、僧は分列した肉の意より、楽舞の舞列のいう。骨はその祭肉を頒つ意とみられ、背はそのとあり、脈とは軍を発するとき、軍社に祭った肉をとあり、脈とは軍を発するとき、軍社に祭った肉を 会意 両分する形である。 〔説文〕 四下に 月(肉)と八とに従う。肉を

迄 およぶ・まで

彰 彰

で」とよむ。 意の字として作られた繁文である。 む」と「およぶ」の両義があり、迄は「およぶ」の(外族の侵冦)ありき」のようにいう。乞に「もと る例があり、「九日辛卯に至るに乞んで、允に來娘と」を言う、「おい」といいた。」を記した。」を言いた。」の意に用い わが国では「ま

> 8 いかめしい・ただしいキツ

に「周誥殷盤の佶屈聱牙なる」とみえ、難解な文章のして進みがたい形容に用いる。韓愈の〔進学解〕のして進みがたい形容に用いる。韓愈の〔進学解〕のして進みがたい形容に用いる。韓愈の〔進学解〕の「世世既に佶ふ善既に佶ひ且つ関ふ」の句を引く。「四社既に佶ふ善既に佶ひ且つ関ふ」の句を引く。「説文〕ハ上に「正なり」とし、〔詩、小雅、六月〕 をいう 斯 Tなどと同じく、強健の意をもつ。 ***。 お声 声符は吉。吉声の字は乞・ 声符は吉。吉声の字は乞・

拮。 手をいためる

「予が手拮据す」の意によるもので、鳥が巣作りに予が手拮据す」の意によるもので、鳥が巣作りにともに作す所あるなり」とは、〔詩、ໝ風、七月〕 である。 の行為として手を足にかえたもの。二字双声の連語 「口と足と事を爲すを拮据といふ」とするのは、鳥 らぬ意がある。〔説文〕一二上に「手口 声符は吉。吉に佶屈にして捗

桔 はねつるべ

舍つときは則ち仰ぐ」とあり、井水を汲むはねつる裝桔槹を見ずや。これを引くときは則ち俯し、これを 声符は吉。〔説文〕六上に「桔

するときのきしむ擬声音をとるものであろう。 の急なるもの、 い、槹はその声の緩やかなるもの、上下枯槹二字は双声の連語で、桔はその声

訖 10 いたる・おわる・ついにキツ

する字で、いずれも乞の声義を承けている。 訖ど自若たり」は、迄と声義同じく、ともに通用 [玉篇] に「畢るなり」という。[書、奏誓] に「民ある。〔説文〕三上に「止まるなり」とは終るの意。 , 形声 る」「およぶ」の意に用いる字で、 声符は乞。乞は卜文に「いた

喫12 (喫)12 くらう・のむ

校書を送る詩〕に「酒に對ふも喫むこと能はず」と喫するなり」という。古い用例がなく、杜甫の「零」として「食ふなり」、〔玉篇〕に「啖ひり また喫驚ともかく。 当時流行した語であろう。字は吃と通用し、吃驚をは緊急・緊要の意で、宋人の語録類に多くみえる。 あり、また喫飯・喫茶・喫煙のように用いる。喫緊 形声 声符は契(契)。「説文新附」

計 13 とう・しらべる・つめるキツ

〔左伝〕昭十四年「姦匿を詰む」、襄二十一年「子なれを人の言に及ぼして、その善を責めることをいう。 じて、その呪能の保全を求める意。こ 声符は吉。吉は祝禱の器を封

> 信屈と同じく双声の連語、かどかどして円滑でない兵を詰めよ」などは、その古い用法である。詰屈は兵を詰め 状をいう語である。国語では詰める意に用いる。 んぞ盗を詰めざる」、〔書、立政〕「それ克く爾の戎

橘 たちばな・みかんキツ

の葦は伊勢の浜萩」というのと同じ。 ことが多い。「考江記、序官」「橘、荘、(水)を踰えて北するときは根(からたち)と爲る」は、「難波ではするときは根(からたち)と爲る」は、「葉はないる。橘は曹値の「橘賦」以下、詩文に歌われるいる。 あり、「命を受けて遷らず 南國に生ず」の句があ橘」とみえる。〔楚辞、九章〕に〔橘(類)の一篇がほとみえる。〔楚辞、九章〕に〔橘(類)の一篇が江西〕の貢物として橘柚の名があげられており、江西)の貢物として橘柚の名があげられており、 期待するもので、賦誦文学の起原的な形態を残して 樹徳を歌いあげることによって、魂振り的な効果を仰が、古くからあったのであろう。〔橘頌〕はその 橘樹とはまた異なる。〔書、禹貢〕に荆州(湖北・ えに柑橘・橘柚のように用いる。たちばなは花橘で煮香。 含む わが国でいう蜜柑にあたる。ゆ南に出づ」とあり、わが国でいう蜜柑にあたる。ゆ る。「時じくの木の実」とする生命の樹としての信 形声 ある。〔説文〕六上に「橘果なり。 声符は矞。矞に譎・獝の声が 南國に生ず」の句があ 江.

キャク

却 · 谷 。 しりぞける・かえってキャク

> る。 の人と、また盟誓の器である日の蓋をとり除き、羊)による羊神判に敗れたときは、その解廌と、 不実であることをいう。法の初文は濂。解廌(神 篆文の字形にすでに誤りがある。 るが、各は「説文」三上に「口上の阿」とする形で の意となる。〔説文〕の篆文の従うところは合であ その主張が却けられる意である。ゆえに退去・退却 と川(日の蓋を除いた形)とに従う。その去の前にままる。その解腐を省いた形が法、去とはその人(大) れを合せて水に投棄し、その穢れを祓うのが灋であ る解であるが、字は去に従うてその声義を承けるも と訓し、谷声の字とする。谷を欲とし、 人の跪坐する形をそえたものが却で、神判によって ので、去は神に誓った上で審判を受け、その盟誓が に卻を正字とし、「欲を節するなり」 去と卩とに従う。〔説文〕九上 卩を節とす

客 まろうど・たびびとキャク・カク

B 0 禽禽

い、客とは客神の意。〔詩、周、頌、振鷺〕に「我が霊の格り臨む意である。その廟に答るものを客といる。」といい、昭格とは神谷ることをいう。者に対して各といい、昭格とは神谷。 会意 馬を白くす」とみえるが、この二篇は、先王朝の殷太客戻る」、また〔有客〕に「客あり客あり」亦その 神に祈り、神霊がそれに応えて下降する意で、神の の祖霊を迎える詩である。先王朝の祖霊は、二王三 宀と各とに従う。☆は廟屋、各は祝禱して

なその声義を承ける。 各声に従う字には狢・追・格・客・恪・愙など、み客戸・客死といい、旅客を扱うところを客舎という。 味した。のち賓客をいい、異客をいい、他地に赴く 「まれうど」は、わが国においても、もと客神を意 ことをいう語となって、客卿・客遊・客行・客寓・ 祖神は白馬に乗って周廟に入った。客とはそのよう な異族神であり、 神参向の儀礼である。殷は白色を尚んだので、殷の 裔たちが、客神としてこれに臨んだ。すなわち異族 格として、周の廟祭に参向する定めであり、その後 すなわち「まれうど」である。 夫の倒文に作る。〔説文〕一〇下に幸をסに作り、天『逆える』意がある。秦の〔釋山石刻〕には、字を来ることをあらわす。逆の初文。逆の意と、また ¥° 虐の「虐」の せいたげる は手械の形で、屰に従う形ではない。 (若死)の がであるから幸の義となるとするが、 象形

7

11 [腳] あキャク

贏湯

当

うのは、自分の脚もとを見よとの意である。 に用いる。脚下人は家来、禅家で「脚下省顧」と 称したが、 したものを脚色状という。演劇では役付表を脚色と 文の下方につける注は脚注、出仕のとき履歴をしる 姿勢よりして、脛の義となる。足部の全体をいい、 鳥獣にも用い、器物の体を支える部分をもいう。本 なり」とするが、脚を正形としてよい。却くときの のち筋書の台本をもいい、いまはその義 る。〔説文〕四下に腳を正字とし、「脛を声 声符は却。却に却去の義があ

・ヤク

并

さからう

キャク

脚(腳)

ギャ 7 屰

虐[虐]

逆(逆) 謔

キュウ

)¥° 送災 さからう・むかえるギャク・ゲキ

逆。〔逆〕10

で、漢碑には下を亡形に作るものがある。

また「人を爪す」というのは篆文の字形によるもの

の正面形である大の倒形。それで、逆の意と逆える形声 声符は逆。 並は向うより人の来る形で、人

秦の文にみえる。 逆境という。旅館を逆旅というのは古い用法で、 道の順逆の意に用いるのは転義。正邪でいえばよこ ことを、〔晉鼎〕に「晉に逆付せず」のようにいう。 しま、 とあり、叩にもまた逆の意がある。また反対給付のを遊ふ」とみえる。〔説文〕ニ下に「迎ふるなり」 (出入)に饗す」、〔宗周 鐘〕に「來りて邵(昭) 王意とが生れる。周初の〔令段〕に「帰て王の逆遣意とが生れる。周初の〔令段〕に「帰て王の逆遣 時間の関係でいえばあらかじめ、また不遇を

人の正面形である大の倒形。向うより人の

謔 たわむれる

幸

う。 棄婦の詩で、「謔浪笑傲」中心これ悼む」と、はげ 手ひどい戯れをするのであろう。「地風、終風」 なで新婦に戯れる俗があり、 「善く戲謔すれども 虐を爲さず」と歌う。 しく罵られてそのやるせなさを歌う。のち諧謔を (新婦に戯れる俗があり、謔親という。 戯婦の法とよばれて、新婚の夜に婿を隠し、 形声 声符は虐(虐)。虐はし かなり 2 は

爪形に作る。〔説文〕五上に「残ふなり」という。の名)、敢て我が土を名虐す」の虐の字は、下部をは人を加えているが、〔宗周 鐘〕「南國及子(外族は人を加えているが、〔宗周 鐘〕「南國及子(外族は人を加えているが、〔宗周 鐘〕「南國及子(外族は人

虎が爪をあらわしている形。篆文の字形に

ュウ

Ц 2 まつわる(キウ)

કૃ 6

るとされた。 つわるものには古く神聖観を伴うものがあり、伏っ上に「相糾線するなり」とあり、糾の初文。相ま られた。ものを結ぶということに、呪的な意味があ た・かずらの姿も、吉祥として祝 頌の発想に用い 羲・女媧の神像をはじめ、たとえば喬木にまとうつ ****であれまつわりつく形に象る。〔説文〕ものが相まつわりつく形に象る。〔説文〕 久 及[及][役] 弓 九 竜の形・ここのつキュウ(キウ)

₹ SX SX さか

旬の形は、九形の竜がその尾端を捲いて内こおとれば岐頭の竜で虯竜というのと同じ。卜文の雲・九は岐頭の竜で虯竜というのと同じ。卜文の雲・素は声をもって説くが、これも字の形義と関係はない。 あり、 角の曲れるものを斛といい、匙の曲れるものを捄と 正六変に対する易の象数論より説くものである。ま 象形 語源において通ずるものがある。九は聖数。〔楚辞、 のを設といい、背の円きものを亀という。みなそのいい、木の曲下するものを愛といい、器の円なるもいい、木の曲下するものを愛といい、器の円なるも めている形である。九声に屈曲するものの意があり、 た数は一に始まり九に窮まるものとし、九・窮の双 七は陽の正、九はその正陽の変じたもので、陰の八 の變なり。その屈曲し窮盡するの形に象る」という。 の両者を組み合せた形である。〔説文〕一四下に「陽 九は岐頭の形、おそらく雌であろう。禹はそ竜の形。竜に虫形のものと九形のものとが

> に関する語に、この聖数を用いるものが多い。 九歌〕は自然神を祀る祭祀歌謡である。神話や神仙

久3 ひさしい

り、その籀文の字形は曲形中に舊(旧)をしるしてるのを概という。世部一二下に「柩は棺なり」とあるのををという。世部一二下に「柩は棺なり」とあてこれを久す」と久の字を用いる。これを器に収めてこれを久す」 灸す。 7 に喜・祉・久・友・鯉・糸と韻しており、[徐箋] 匶に作り、旧声。柩の古音は、〔詩、小雅、六月〕 意に用いているが、【儀礼、士喪礼】には「木桁もとはつっかいの柱をする意。【愚礼】には灸をそのとはつっかいの柱をする意。【愚礼】には灸をその で人に会うことを久閣。長生を久寿という。長久・久遠の意に用い、天長地久という。久しぶり 義に用いるのは、転義というよりも仮借であろう。 これに近し」という。久の初義は柩、これを旧久の に「久の古音は讀むこと己の若し。いま杭州の語音 人の兩脛の後に距あるに象る」とあり、灸をない。「説文」五下に「後よりこれをない。 屍体を後ろから木で支えて

及3【及】4〔级〕7 およぶ (キフ)

A 有海馬 3 4

とは追及逮捕の意。また古文三字を列し、第一字を をもって追い及ぶ形。〔説文〕三下に「逮ぶなり」会意 人と又(手)とに従う。人の後ろより、手

> とをもって 近きを以て遠きを窮むるものなり」と、弓・窮の音 象形 B 弓 3 我が倗友を樂しましむ」のように及を用いる。 り、列国期には〔王孫遺者 鐘〕「用て嘉賓父兄及び人。金文に連及の「と」に用い、西周期には役に作人。金文に連及の「と」に用い、西周期には役に作 (三体石経) 古文と同じ形である。第三字は逮を誤 秦の刻石と同じとするが、いま存するものと異なり、 の通ずるこ ゆキみュウ 弓体の形。〔説文〕 ニドに「窮むるなり。 B 0 03

名、釈兵] 説き、[釈 、釈兵」『人

「魯頌、閟宮」に乗・縢・膺・懲・承と韻しており、解する。〔詩、秦風、小戎」に膺・縢・興と、また解する。〔詩、秦風、小戎」に膺・縢・興と、またを張ること穹隆(ドーム形)然たり」と穹の音でを張ること穹隆(ドーム形)然たり」と穹の音で その古音は蒸韻に属している。 を張ること穹隆(ド には弓体のみのものが多い。 にしるし、金文の図象も同様であるが、金文の字形 には「これ ト文に弦を張った形

仇 かたき(キウ)

置〕の「公侯の好仇」と同義。〔秦風、無衣〕「子と関睢」「君子の好逑」を〔韓詩〕に仇に作り、〔兔関睢」「君子の好逑」を〔韓詩〕に仇に作り、〔急、とい。 形声 声符は九。古くは仇匹、同

ることが認められていた。 「宄は姦なり。外なるを盗と爲し、內なるを宄と爲 〔左伝〕桓五年「晉は吾が仇敵なり」、 哀元年「世々 す」とみえ、この宄に対しては、仇怨として報復す のは、おそらく宄と関係があろう。[説文] 七下に 仇讐たり」など、仇怨が字の初義。字が九声である があるとし、字を反訓の例とするのは誤りである。 の字は仇で、もと別義の字。仇に仇匹と仇讐の両義 といふ」によるものであるが、仇匹の義は逑、仇讐 する。〔左伝〕桓二年「嘉耦を妃といひ、怨耦を仇 を仇方に調れ」の〔鄭箋〕に「怨耦を仇といふ」とを仇方に調れ」の〔鄭箋〕に「怨耦を仇といふ」とめのには〔詩、大雅、皇矣〕「帝、文王に謂ふ善爾ものには〔詩、大雅、皇が 同仇」というのと同じである。仇讐の意に用いる。

あつめる キュウ (キウ)

九・ 求 の声に聚合の意があることが知られる。の* *****。 * ****** に「天下の川を九雑す」とあって、「荘子、天下」に「天下の川を九雑す」とあって、 ち鳩をその義に用いるのは仮借である。 るなり」、また〔説文〕是部二下に「述は斂聚なり」、 とあって、鳩聚の意。「爾雅、釈詁」に「鳩は聚む」とし、「讀みて鳩の若くす」とし、「讀みて鳩の若くす」 声符は九。〔説文〕九上に「聚

丘 おか・はか

17 表 不 死 死

る所に非ざるなり。北に從ひ、一に從ふ。一は地な 〔説文〕ハ上に「土の高きものなり。人の爲

キュウ

勼

丘

旧(舊)

って生れたので、字を仲尼という。 つ発想である。孔子は名は丘、母の顔氏が尼山に祈つ発想である。孔子は名は丘、母の顔氏が尼山に祈黄鳥 丘阿に止まる」は丘墓と鳥形霊への連想をも が多い。〔詩、小雅、緜蛮〕は悼亡の詩、「緜蠻たる 丘隴・丘撃・丘隊・丘堪など、丘墓に関する語等である。また、までは東丘の象形で、丘筌・丘陵・殿を意味する。丘は墳丘の象形で、丘塋・丘陵・ ところとされた。崑崙は西方のジグラット形式の祭 の連想があったらしく、特に崑崙は死後の霊の赴く 都城の北郊に設けることが多い。北や西には冥界へ 墳丘の形とみてよい。墓地は洛陽の北邙山のようにいる。字形を北一に従うとするのは誤りで、これは 央下きを丘と爲す。象形」と異例の長文をもって説居は、崑崙の東南に在り。一に曰く、四方高く、中別。人の居は丘の南に在り。故に北に從ふ。中邦のり。人の居は丘の南に在り。故に北に從ふ。中邦の くが、このうちに丘に対する古い観念が伝えられて 丘墟など、丘墓に関する語

旧 5 【舊】18 サュウ(キウ)・ク

普鵬 AC SCO CHAT.

羅をその旁に張れば、鳥則ち聚まる」とみえ、昼はを折り、その兩足を絆ぎ、以て媒(おとり)と爲し、を折り、その兩足を絆ぎ、以て媒(おとり)と爲し、鵂もて鳥を致す」の注には「鴟鵂を取り、その大羽 ものの見えぬみみずくに、鳥が報復しようと集まる また機を重文として録する。〔淮南万畢 術〕の「鴟鷹、舊留なり」とみみずくの意とし、臼声という。舊、舊留なり」とみみずくの意とし、臼声という。勝しえない状を示す形である。〔説文〕四上に「雎脱しえない状を示す形である。〔説文〕四上に「雎 捕える鑿歯のある器で、雈がこの器に足をとられて、 会意 正字は雈と臼とに従う。臼形のものは鳥を

> は旧・時を韻し、〔召旻〕では旧・里を韻している。 ものがあり、久と旧とは同声。〔詩、大雅、蕩〕に の意より、旧久・旧時・先例などの意となる。すべ [叔夷鐘] 「その先舊に典る」のように用いる。留止 文の〔今甲盤〕に「淮夷も舊我が貞畝(資納義務あ文の〔今甲盤〕に「淮夷も舊我が貞畝(資納義務あ「舊しく外に勞す」「舊しく小人たり」はその意。金 て久しく時を経ることをいう。柩の重文に鷹に作る か、〔邾公華鐘〕「元器實器をそれ舊しくせよ」か、〔邾公華鐘〕「元器實器をそれ舊しくせよ」る)の人なり」、〔師嫠段〕「乃の祖考の舊友」のほる)の人なり」、〔前の禁〕「先等 留・旧止の意となり、久時の意となる。〔書、無逸〕 れると脱することのできないものであるから、 のを利用して、鳥を捕るのであるという。足をとら

休 さいわい・やすむ・やむキュウ(キウ)

读 代な汁

、休に對ふ」のように用いる。また『匡卣』に、注き。 「休に對ふ」のように用いる。また『匡卣』に、子なる效に、王の休へる貝廿朋を賜ふ。效、然の順〔效卣』に「王、公に貝五十朋を賜ふ。公、厥の順〔款ē] ځ 賞をえたことをしるして、「王曰く、休(善)なり 懿王が射廬にあるとき、匡がその礼に奉仕して、賜 『『・休賜・休善の意に用い、光栄のことをいう。『『・休賜・休善の意に用い、光栄のことをないる。金文では「休ま」(表彰)をうけることを休という。金文では「休ま」のある両禾軍門といわれる軍門の表示が、そこで推 、(表彰)をうけることを休という。金文では、休のる両禾軍門といわれる軍門の表本、そこで旌いる両禾軍門といわれる軍門の表本、そこで旌いる一人と才とに従う、 オロもと末形に作り、い 人と木とに従う。木はもと禾形に作り、

子の丕いに駆かなる休命に奉揚す」などは、何れも語」「以て天の休を承く」、「左伝」僖二十八年「天語」「以て天の休を承く」、「左伝」僖二十八年「天路、頌、長発」「天の休を何ふ」、また「国語、周いて王の休に對揚す」、 お休善・休功の意に用いられ、〔詩、大雅、民労〕形義からみても明らかである。古い文献では休はな 若は休が禾の字形に従うことから、作戦中には禾は、休の字義としては最も後起の義である。弥なところで、休息の訓の適当な例ではない。休息の義 い。また「詩、周南、漢広」「南に喬木あり、伏ふの木に依るに從ふ」とするのは、全く字形に合わな に用いられる。〔説文〕 ボェに「息止するなり、人 休善二字を連用する。休の古義は、戦功を軍門に旌 員に命じて犬を執らしむるに休善なり」とあって、 止などの意に用いる。〔詩、周南、漢広〕の「伏ふ(咎はとが)などがあり、のちには休養・休息・休 対待の語義のものに休否・休戚(戚は憂)・休答・休光・休徳・休明などがその初義を存するもので、 その義である。ただ休を休息の意に用いることもあ あることは、和・麻・歴(歴)・暦(暦)・磯などの上を避けずに休息すると説いたが、禾が軍門の象で上を避けずに休息すると説いたが、禾が軍門の象で べからず」をその例として引くが、喬木は神の倚る 表する意で、それより名誉・恩寵・賜与・休善の意 員が王の狩猟に従い、犬を執って奉仕したが、「王、 (嘉命)に對揚(奉答)す」といい、[員鼎]では、 など、晩期の詩篇にみえている。休の用義は休徴・ しく休すべし」、〔小雅、菁々者莪〕「我心則ち休す」って、〔詩、大雅、民労〕「民また勞せり」 訖んど小って、〔詩、大雅、民労〕「民また勞せり」 訖んど小 キュウ 吸[吸] 扱[扱] 朽[死] 記んど 小

字である。

吸の「吸」でする・ひく

形声 声符は及(及)。「説文」ニュいの立という。

形声 声符は及(及)。「説文」ニューを吹うこと。別に「引くなり」の訓があったようである。吸に対して、息を吹くことを嘘という。古い健康法に導引の術があり、引とは吸息の意。「荘子、康法に導引の術があり、引とは吸息の意。「荘子、康法に導引の術があり、引とは吸息の意。「荘子、康法に導引の術があり、引とは吸息の意。「正子、ののでは、「大きない」とあって、「おいば、「大きない」とあって、「おいば、「大きない」とあって、「おいば、「大きない」とあって、「いいば、「いいば、」といいう。

扱。〔扱〕

とる・ひく・はさむ・あつかうキュウ(キフ)・ソウ(サフ)・シュウ(シフ)

形声 声符は炎(及)。また挿・拾いて、(などと通用し、その声がある。〔説文〕 こ上に「收むるなり」とあり、手もとに引きとる意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、曲礼、上〕に、塵をとるときの作法を意。〔礼記、神社、一次の前裾を帯にはさむこれを凝している。

られる字である。 まを帯にさして、そこに草を摘み入れるのである。 本来の字義よりも、国語としての訓で用いたよむのは、強くはさみ取ることから転じたものでとよむのは、強くはさみ取ることから転じたものであるう。本来の字義よりも、国語としての訓で用いあろう。本来の字義よりも、国語としての訓で用いある。

朽。「好」。 くちる (キゥ)

からず」の語がある。無用の人を朽木という。 を通用する。〔論語、公治長〕に「朽木は雕るで、大は曲刀。複葬には、肉をそぎ、骨を洗う方法もお」というのは、風化を待って葬る複葬の法をいう。まか」というのは、風化を待って葬る複葬の法をいう。で、本に斧斤を加えればそこから腐朽するので、あった。木に斧斤を加えればそこから腐朽するので、あった。木に斧斤を加えればそこから腐朽するので、あった。木に斧斤を加えればそこから腐朽するので、あった。木に斧斤を加えればそこから腐朽するので、あった。木に斧斤を加えればそこから腐朽する。無用の人を朽木という。

日 6 きュウ(キウ)

(C) (C)

を放無 では、下」の文によるものであるが、地を掘りて臼と為す。その後、木石を穿つ、は地を掘りて臼となるとする。説解は〔易、繋砕形」とし、中は米に象るとする。説解は〔易、繋砕形」とし、中は米に象るとする。説解は〔易、繋砕形」とし、中は米に象るとする。説解は〔易、繋砕形」とし、中は米に象るとする。説解は〔易、繋砕形」として、ないのであるが、地を掘るのは陥り、木石を穿った。

〔列女伝、弁通〕にみえる。

役っ いそぐ (キフ)

形声 声符は及(及)。及は後ろよな一系の字である。

水 7 「袋」3 もとめる

東形 東形 獣皮を剝いだ形で、 東の初文。「説文」に求字を収めず、裘字条八上に重文として求の字形を出し、 「古文、衣を省す」という。求と装とを一字とするものであるが、「字を通用することは殆どない。金ものであるが、「字を通用することは殆どない。金ものであるが、「方の人を求へ」のように、贖うの義に用いる。また「邾君、益益」「邓君、吉金を求む」、「輪縛」る。また「邾君、益益」「邓君、吉金を求む」、「輪縛」る。また「邾君、益益」「邓君、吉金を求む」、「輪縛」る。求に贖求・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖求・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖求・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖求・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖す・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖す・求得の義があるのは、おそらく救いる。求に贖す・求は呪霊をもつ獣の形、これを殴つことは、たとえば崇をなす呪霊をもつ崇(獣形)を殴とは、たとえば崇をなす呪霊をもつ崇の獣形)を殴とは、たとえば崇をなす呪霊をもつ崇の獣形)を殴いる。

のち求得・要求の意にのみ用いる。るという、共感呪術的な方法を示す字である。求はるという、共感呪術的な方法を示す字である。求はつことが殺で、これによって崇を減殺することがでつことが殺で、これによって崇を減殺することがで

没っ くむ・とる・いそがしい

形声 声符は及(及)。[説文] 二一次に、水を引くなり」とし、字を水声とする。井戸より水を汲みあげることをいい、古書をよてものを引きよせ、吸収することをいい、古書をよない、古事を知るにつとめることを汲古という。 音のない 古書を知るにつとめることを汲古といい、古書をよれ、汲冢 竹簡として知られるもので、「逸周書」上、汲冢 竹簡として知られるもので、「逸周書」上、汲冢 竹簡として知られるもので、「逸周書」と表示をは、一次記述が、本ので、「逸」を対している。

灸 7 キュウ(キウ)

一次。 コツ

形声 声符は気。久は人を後ろから支える形であるが、この字においては声符とみてよい。〔説文〕 一〇上に「灼くなり」とあり、医療として用いた。 「荘子、盗跖」に「いはゆる病無くして自ら灸するなり」とみえる。〔史記、倉公伝〕に灸法のことがみえ、医家の重要な治療法であった。脈絡の研究も、かなり進んでいたのであろう。刑罰としては〔後漢かなり進んでいたのであろう。刑罰としては〔後漢かなり進んでいたのであろう。刑罰としては〔後漢かなり進んでいたのであろう。刑罰としては〔後漢かなり進んでいたのであろう。

プイ きわめる・はかる キュウ (キウ)・ク

形声 声符は九。九は竜がその身を配置である。一次は窮なり」、第字条に「極なり」、また穹字条に「窮なり」とあって、穹・究・窮の三字はみな声義の近い字であるが、それぞれ慣用上の区別があり、弯は穹窿でドーム形、窮は身を窮曲する形、究は探索しつくす意である。[詩、大雅、皇宗」「爰に究め爰に圖る」の〔毛伝〕に「深くするなり」とあら、〔小雅、常禄〕にも同じ句があって、穹・究・察は探索しつくす意である。同じく九に従う字と、究は探索しつくす意である。同じく九に従う字に先があり、姦宄の意。中は廟、廟中にあって竜形に先があり、姦宄の意。中は廟、廟中にあって竜形に先があり、姦宄の魔と関係がある。同じく九に従う字に先があり、姦宄の意。中は廟、廟中にあって竜形に大があり、姦宄の意。中は廟、廟中にあって竜形に大があり、姦宄の儀と関係があろう。ただ究に図おそらくこの宄の呪儀と関係があろう。ただ究に図おそらくこの宄の呪儀と関係があろう。ただ究に図まなりも古い用義例がなく、その初義を考えることができない。

外口 8 とが・そしる

う。〔説文〕ハ上に「災なり。人に從ひ各に從ふ。ち字は、神霊によって咎禍がもたらされることをいたり降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、より降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、より降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、より降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、より降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、より降下する形。口はJD、祝禱を収める器の形で、

汲灸

答あらしむること微かれ」のようにいう。この答責せり」のようにいい、〔詩、小雅、伐木〕「我をして された。それで「室温」に「廼ち余一人の答を作天によって与えられるもので、天の咎責として理解 本来は呪詛による禍殃をいうものであった。 それが自然界の現象としてあらわれることをいう。 らしめよ」と祈っている。〔書、洪範〕の咎徴は、 作る。斉器の〔国差瞻〕に「侯氏(主君)に磨なか が病気として与えられることもあり、その字は磨に なく、従って各異の義が含まれるはずはない。咎は と文とが相連なる形であるから、字は各に従う形で 各なるものは相違ふなり」とするが、字の上部は人

8 なく キュウ (キフ)・リュウ (リフ)

を泣といふ」とする。〔素問〕に「血、脈に凝るもあり、〔説文〕二上に「聲無くして涕を出だすもの るや、泣血すること三年、未だ嘗て齒を見さず」との語があり、[檀弓、上]に「高子皋の親の喪を執雨無正」[易、東上野」[礼記、檀弓、上]に「泣血」 雨無正〕〔易、屯卦〕〔礼記、檀弓、上〕に「ゅんせ、 巻き まなか ここま ださう、上〕に「鬼(悝)など、音の転ずるものがある。〔詩、 と関係のある語かも知れない。 のを泣と爲す」とあり、その字は粒声によむ。血滞 るが、来母の字に呂(宮)・婁(窶)・ 声符は立。立は来母の字であ 小雅、

穹 8 ゆみなり・きわまるキュウ

のの意がある。蒼穹・穹廬のように、形声 声符は弓。弓に彎曲するもをきる

でドーム形。蒙古の包を穹廬という。 が、究極の字には究・窮を用い、穹はいわゆる穹窿

虯 みずち キュウ (キウ)

「龍の子の角あるもの」とするが、〔淮南子、高誘う。またみずち、水中の竜をいう。〔説文〕「三上に ことが多かったのであろう。 味する字である。竜はそのような形態で考えられる 蛟・螭・禹・虯はいずれも二虫の糾纏する形を意き゛。。。

急。(急)。 すみやか・いそぐキュウ(キフ)

勇 なり」とは褊急、〔爾雅、釈言〕に「褊は急なり」要性に語義が移るのである。〔説文〕一〇下に「褊る要性に語義が移るのである。〔説文〕一〇下に「褊る とあって互訓。ことの一偏に執することを、狷急と 急・急要・急所の意となる。時間的なものから、緊 れで急遽・急激・急速・早急の意となり、急務・緊 手が及ぶことを示す。その追う心情を急という。そ 及は後ろより人を追う形で、わずかに** 旧字は急に作り、及(及)声 旧字は急に作り、及(及)声

柩 舊 20 ひつぎ (キウ)

字で、〔周礼〕にはこの字を用いている。 〔礼記、曲礼、下〕に「牀に在るを戸といひ、棺にらいまいないない。 おいまでならない。 形中に舊を加える籀文の字「匶」を録している。 在るを柩といふ」とする。籀文の字形は後起の形声 怄 る。〔説文〕 二三下に える形。それを収めたものが匛、柩はその繁文であ 「棺なり」とし、重文として曲 初文。久は屍体を後ろから支 声符は医。医は柩の

糾 紅刻 あざなう・ただすキュウ(キウ)

糺に作るが、糾が正字である。 〔左伝〕僖二十四年「宗族を成周に糾合す」のよう 糾縄をもって罪人を糾問する意であろう。字はまた 意となり、また糾察・糾弾・糾逖・糾禁の意とする なり」とあり、三筋よりに縄なうことをいう。もと に用いる。糾聚・糾纏・糾結の意より糾紛・糾雑の 形声 せる形。〔説文〕三上に「繩三合する 声符はり。りは縄をよりあわ

級。 (級)10 いとのついで・しな・きざはしキュウ(キフ)

[礼記・曲礼、上]に、階段の上りかたを「級を拾られ、曲礼、上]に、階段の上りかたを「級を拾らとをいう。それより転じて段階・階級の意となる。 り足を履む」、つまり一段ずつ足をそろえてからあ 次第なり」とあり、機織のとき糸の次第をつけるこ 形声 及ぶ意がある。〔説文〕一三上に「絲の 声符は及(及)。及に前後相

が行なわれている。首を級をもって数えるのは、秦ヒがるとあり、いまもわが国では、神社などでその法 一首をうるものは爵一級が進められたから り、左右に廂・り、左右に廂・中央の堂を中心として前に中廷があみられている。中央の堂を中心として前に中廷があ 遺址が発見され、 山・扶風の地で、西周期の宮廷と思われる建築の2、株人はの地で、宮とは関係がない。近時陝西の岐呂椎骨の形で、宮とは関係がない。近時陝西の岐宮にいる。 その遺構による建物の復原図が試

韭。

にら キュウ (キウ)

にらの生えそろった形。〔説

のとき、

が行なわれている。首を級をもって数えるのは、

であるという。

それ蚤く 羔(小羊)を獻じ韭を祭る」とみえるよ と、 に用いた。〔詩、豳風、七月〕に「四の日(四月) は春韭を薦む」とあり、〔内則〕によると豚ととも 〔礼記、曲礼、下〕に「韭を豐本といふ」とは、そいう。韭には一種の薫があって、祭事に用いられる。 て久しきものなり。故にこれを韭といふ。象形」と の祭事に用いるときの名である。〔王制〕に「庶人 文〕セトに「菜の名なり。一たび種ゑ 金文の字形に宄* あり、 る。 形に従うものが に作るものもあ のであることが と同じ構造のも 書にみえるもの いて、のちの礼 宄は廟中の 、また室形

室が配置されていた。

字で、 行〕「儒に一畝の宮あり」のように用いる。 て、〔礼記、内則〕に「父子みな宮を異にす」、〔儒 の構造を示す形であろう。室は金文に休と通用する 呪儀に関する字であり、 これらの字はみな同声。のち住居の意に用い 室は儀礼の行なわれる場所

笈 10 おいキュウ(キフ)・キョウ(ケフ)

挿とし、またケフの音をあげ、「不美波古」と訓する。「倭名類聚抄」に〔唐韻〕を引いて音を箱をいう。「倭名類聚抄」に〔唐韻〕を引いて音を 形声 声符は及(及)。書物を入れて背に負う文

> 赳 つよいさま・いさましいキュウ(キウ)

らしい。

の負なり」とみえ、驢馬につけて運ぶものであった であるという。〔説文〕六上に极の字があり、「驢上 は狩谷棭斎の〔箋注〕によると、〔風俗記〕の誤りはないをきまれる。

また〔風土記〕を引いて、「學士の書を負ふ所

語に用いる。 たる武夫は、公侯の干城」の〔毛伝〕に「武きな 級 なり」とみえる。赳々のように連語として、 て才力あるなり」とあり、〔詩、周南、兔置〕「赳々 力あるさまを赳という。〔説文〕ニ上に「輕勁にし る早起の意がある。それを人の行為の上に移して、 の。形り (糾)纏、まつわりながらたち上 声符はり。りにまといつく意 形況の

西周期の宮廷

躬1[船]1 み・みずからキュウ

帮 R

載せている。 自分の父の窃盗を告発した。直躬というものの話をは曲躬の義がある。〔論語、子路〕〔荘子、盗跖〕に、 南山」「躬らせず親らせず」、〔衞風、氓〕「躬自ら悼をとう。」。 これ これ こうかい 漢碑には躬に作るものが多い。〔詩、小雅、節が、漢碑には躬に作るものが多い。〔詩、小雅、節も、会意とする。呂を脊椎の形とするものであろうし、会意とする。 形声 む」など、複称的用法が多い。身は直身の形、 声符は弓。〔説文〕呂部七下に「身なり」と 躬に

शि (0) \(\cdots\)

宮10

みやキュウ・グウ・ク

うに、古くから祭事に用いた。

8

〔伊段〕に「王、周康宮に在り。旦に王、穆大室に 名。辟雕の雕の卜文や金文の字形にも、その形がみ 格る」とみえ、宮中に儀礼の室があり、宮はその大 には公宮があり、先王の合祀が行なわれた。金文の の平面図で、室の相連なる形。殷都の「天色商」会意 (と呂とに従う。☆は廟屋、呂はその宮室 ち居室の意となり、〔説文〕 モ下に「室なり」とし、 える。もと祭祀の行なわれる宮廟の称であった。

ュウ 宮 笈

すくう (キウ)・ク

_ቚኇ፝

り、朮もまた呪霊をもつとされる獣の形で、主とる。教の字形に近いものに述(述)・衞(衞)がある。教の字形に近いものに述(述)・衞(衞)があに教助・教済・救護・救援・教荒のように用いられ 改のように、のち剛卵とよばれる魔よけの呪符とし飲いように、のち剛卵とよばれる魔よけの呪符としては、穀解しないものである。このような呪儀としては、気 ゆる方術で、のち呪儀の全体をいう語となった。方して道路の呪儀に用いられた。述は遂行、術はいわ むるなり」とし、求声とするのは、求の形義を全く る。教が崇をなす獣を殴って、その祟禍の減殺を求 ら加えられる呪詛を免れるための共感的な呪術であ これを支して殴つのは、その呪霊を駆使して、他か も架屍の象で、古代の祭梟をいう。 初義が忘れられて、その呪的な性格は失われ、一般 て伝えられるものもあった。救・殺なども字の初形 める共感呪術であるのと同じ。〔説文〕三下に「止 求と支とに従う。**は呪霊をもつ獣の形。

毬 まり・たま

〔荆楚歳時記〕に、正月に打毬・鞦韆の戯がなされ「鞠なり」という。字はあまり古いものにみえず、 する解釈もあるが、杖を用いるものであったらしい。 たという。打毬については多くの説があり、蹴毱と のの意がある。〔説文新附〕 ハ上に 声符は求。求に球、まるいも

> 「類聚名義抄」の毬字下に「毛丸、打者、マリ」とまをまるめてたまとしたものであるから、毬という。 いう注記がある。

球

れば、逐鏘として琳琅鳴る」とあって、逐鏘とは玉鬼に用いる。〔書、益稷〕に「長劍の玉珥を撫すは〔楚辞、九歌、東皇太一〕に「長劍の玉珥を撫すは〔楚辞、九歌、東皇太一〕に「慶(楽祖の名)玉磬に用いる。〔書、益稷〕に「夔(楽祖の名)おり、寥声。翏に漻・膠の声がある。美玉の名で、おり、寥声。翏に漻・膠の声がある。美玉の名で、おり、寥声。 いても「魂」であった。 「西北の美なるものに崑崙虚の塚琳琅玕あり」とみるものであろう。中国の美玉は「爾雅、釈地」にるものによる。『なない歌歌を示す霊玉で、わが国の神器にあたあり、天の恩寵を示す霊玉で、わが国の神器にあたあり、 長 発〕に「小球大球を受けて「天の「休を何ふ」とど、多くの霊玉が陳設されている。〔詩、商 頌、ど、多くの霊玉が陳設されている。〔詩、商 頌、ものであるが、そのとき大玉・夷玉・天球・河図なものであるが、そのとき大玉・夷玉・天球・河図な をもち、その伝統を保持していた。玉はわが国にお わが国でも玉造り部は所在の古代政権と密接な関係 品が出土し、当時の玉造り技術の高さを示している。 れた殷の武丁の妃婦好の大墓から、多くの玉器の精 れる。〔書、顧命〕は康王の即位継体の礼をしるす 声をいう。玉は精気の凝るところで、霊の象徴とさ え、〔書、禹貢〕に雍州の貢物とする。近年発掘さ 形声 声符は求。〔説文〕

逑 もとめる(キウ)

声符は求。求は呪霊をもつ獣の形。

これを

以て民

たまっ(キウ)

一上に重文として珍をあげて 義によるものであるが、それは鳩字の義である。〔説文〕はくのというに「聚むるなり」とする。〔説文〕はその 雑守〕にみえ、給事を速やかにすることから敏速のじ、下よりして事える意がある。給事の語は〔墨子、賜給を原義とする字であろう。すべて上よりして命 給 12 とみえ、仇はもと仇讐をいう字である。作るのは仮借。〔左伝〕粒二年「怨耦を仇といふ」道路の呪儀として行なうことをいう。好逑を好仇に 〔詩、周南、関睢〕「君子の好逑」の好逑の義と同じ。の逑を爲せ」の〔毛伝〕に「合ふなり」とあり、 〔詩、大雅、民労〕に「此の中國に惠して ころに充足することをいう。戴侗の〔六書故〕に、 〔説文〕 一三上に「相足すなり」とあり、 給といい、ゆえに給足・供給の意となるとするが、 繭を煮て糸をつむぐとき、数糸を合せて取ることを 反対給付的な意味をもつものであったと思われる。 求・救は呪儀によって相救う意があり、述はそれを

たす・たまう・すみやかキュウ(キフ)

形声

声符は合。合は金文において

答の義に用いられていることがあり、

足らざると

その驕奢のさまをそしっている。 く詩で、「舟(周)人の子、熊龍をこれ裘とす」と、東〕は、殷人の子孫である譚国の人が周の搾取を嘆い

鳩 はと・あつまるキュウ(キウ)

「我、舅氏を送りて ここに渭陽に至る」、また〔左

は、〔爾雅、釈親〕の文による。〔詩、秦風、渭陽〕兄弟を舅と爲し、妻の父を外舅と爲す」というの 兄弟を舅と爲し、妻の父を外舅と爲す」というの日。の形にしるす。〔説文〕二三下に「母の

声符は臼。篆文は臼男を偏旁

賜はしむ」、〔礼記、檀弓、下〕「むかし我が舅、虎伝〕僖九年「〔宰〕孔をして、伯舅に胙、祭肉〕を

に死せり」など、古くから用例のある字である。

天

帽

鶏・鶴など、鳥名にその類のものが多い。含まれている。鳩の名はその鳴声にとるもので、 のように鳩聚の意がある。九・爿の声にその意があろう。〔書、尭典〕「共工方く鳩めて功を僝す」が、あるいは鳥トーテムをもつ古部族があったのでが、あるいは鳥トーテムをもつ古部族があったので 鳥をもって官名を立て、祝嶋は司徒、鴅嶋は司空形声 一声符は九。〔左伝〕昭十七年に、少皞氏は北京、「金郎」 のように、鳩を五官の名とする伝説をしるしている

子は異姓の諸侯を伯舅、小邦を叔舅とよんだが、こ子は異姓の諸侯を伯舅、小邦を叔舅と、『恒子孟姜壺』「齊侯の女鵬、聿にその殷(舅)と、『恒子孟姜壺』「齊侯の女鵬、聿にその殷(舅)と喪ふ」、『神子は異姓の諸侯を伯舅、小邦を叔舅とよんだが、こ子は異姓の諸侯を伯舅、小邦を叔舅とよんだが、こ

〔詩、小雅、伐木〕に殷・牡・舅・答を韻しており、は斉の器であるから、その地の方言かも知れない。 皇 殷(舅)に追孝す」のように用いる。この二器

廏4 [厩]13 うまや キュウ (キウ)

簡剛 0

とが知られる。「貉子卣」に「玉字を筬に敲む」と的のために、馬種の改良や飼養が行なわれていたこう。「周礼、校人」に廏の制をしるし、一廏に馬二う。「周礼、校人」に廏の制をしるし、一廏に馬二う。「周礼、校人」にのの制をしるし、一廏に馬二百十四匹、僕夫をおく規定がある。穆王期の「盠駒はい」とい形声 声符は殴。[説文]九下に「馬舎なり」とい形声 声符は殴。[説文]九下に「馬舎なり」とい形声 声符は殴。[説文]九下に「馬舎なり」とい 「山谷に依りて、 犠牲をおくところである。 〔説文〕 一四下の法字条に あり、その廒を廏の初文とする説もあるが、それは 牛馬の圏を爲すなり」とみえ、

意から引伸した義である。 ことを給数といい、[荘子、天地]に「聰明叡知、 給數にして敏なり」とみえる。すべて給賜・給事の かまわぬことをいう。またせかせかとわずらわしい 禮義に順はず」の語がある。急速にしてなりふりを 意となり、「荀子、非十二子」に「齊給便利にして

12 あつまる・あうキュウ(キフ)

章のことを論じ、「始めて作るや翕如たり」というることを、翕然という。[論語、八佾]に孔子が楽翕。忽という。人が多く集まって一致した行動をと 翁 忽という。人が多く集まって一敗した了動とこををいる が一せいに飛び立つ意。鳥の速やかに飛ぶことを 音の相和することをいう。 のは、合奏の諸楽器が一せいに吹奏をはじめ、その [説文] 四上に「起つなり」とは、鳥 声符は合。合に給の声がある。

嗅這〔齅〕24 かぐ キュウ (キウ)

裘 13

かわごろも

段・舅はもと同声であった。

0

原本重磁色

求と衣とに従う。篆文の字形は衣中に求を

寒邪

りであろう。〔爾雅、釈獣〕に、狊とは鳥が両翼を 〔論語、郷党〕「三嗅して起つ」とあり、鳥が三嗅。 臭)とに従う。嗅はその略字。 魏晋以後に至って行なわれた。六 朝期まで殆どみえない。香 張る意とする。 [論語] の例を除くと、嗅の用例は するというのは変な話であるから、三嗅は三臭の誤 朝期まで殆どみえない。香物を賞翫することは、 会意 正字は齅に作り、鼻(鼻)と

舅 しゅうと キュウ (キウ)

葛、合せて一年を一裘葛という。「詩、小雅、犬然か。合せて一年を一裘葛という。「詩、小雅、犬然かのところに獣毛を加えた形に作る。冬は裘、夏は

求声とするが、求は裘の初文とみてよい。ト文は衣 ものが裘である。〔説文〕ハ上に「皮衣なり」とし しるしており、**は獣皮の形。求を衣用にしたてた

ュウ 翕 嗅〔齅〕 舅 裘 鳩 廏[厩]

傷つけざりしか」と問い、馬のことは口に出さなか 舎が焚けたとき、 とは放牧の地をいう。〔論語、郷党〕に、孔子の廏 た話をしるしている。厩は俗字。 孔子が役所から退出して、「人を

觩 ¹⁴ つののまがったさまキュウ(キウ)

詩 ったゆはずの形をいう。求は九・川と声が通じ、「商頌、洋水」「角弓それ觩たり」とは、牛角で作生)の角で作った角杯の形で、字はまた槲に作る。 いずれもいくらか屈曲したものをいう意がある。 小雅、桑扈」「兕觥それ觩たり」は、兕牛(水声符は求。角の少しくまがったさまをいう。

財14 まいない キュウ (キウ)

いまの収賄罪。質も請託のためのものでうって、
「生法相謝とは〔漢書〕にいう「受財狂法」の罪で、ないい、また「一に曰く、質を戴するなり」とする。いい、また「一に曰く、質を戴するなり」とする。 これらは本来は贖罪のためのもので、金文に贖求いまの収賄罪。質も請託のためのものであるが、 の語がある。 声符は求。〔説文〕六下に「財

昌15 けもの・やしなうキュウ(キウ)・キク・シュウ(シウ)

434% 04% 图象

おき、ときに祝禱の器を示すJDをその前に加えてい象形が猟用の盾の形。羽飾のついた盾を台座に ることがあるのは、狩猟の成功を祈る意であろう。

> にみえる。 ときには、これに辵を加えて用いる例が、〔大盂鼎〕 なわれたのではないかと思われる。狩の意に用いる でなく、軍行のときにも楯祭りとしてその儀礼が行 きである。またそのことからいえば、嘼は狩猟のみ の意である。したがってこの字には歯の音があるべ 故を邎ふ」のようにいうものは、捕虜となった虜酋 る。〔小盂鼎〕に「執嘼三人」「嘼に卽きて、厥のものはない。金文にはこの字をすべて含の意に用いものはない。金文にはこの字をすべて含の意に用い 象る」とするが、字の下部を改形とする古文の誤また字形について、「耳・頭と、足の地を公む形にまた字形について、「耳・頭と、足の地を公む形に それは畜と通用の義であり、この字の本義ではない った字形からの解釈であり、金文にはその形に作る 一四下に「犍なり」とは家畜の意であるが、

璆 15 うつくしいたま・たまキュウ(キウ)

るなど、 図玉球には球、佩刀の零珌(玉飾)には璆を用い零 鏘という。〔説文〕に球・璆を一字とするが、河い。 「かない」として崑崙虚の塚琳・琅に「西北の美なるもの」として崑崙虚の塚琳・琅に「西北の美なるもの」として崑崙虚の塚琳・琅(爾雅、釈器〕に「璆琳は玉なり」とあり、〔釈地〕 瓓 用義上に慣用を異にするところがある。 形声 ある。〔説文〕一上に球を正字とし、 声符は翏。翏に漻・膠の声が

窮 厂 編 19 きわまる

会意 (身)をおく形で、身体を屈曲する窮 穴と躬とに従う。穴中に躬

> 不毛の極地を窮髪の地という。 理を究めることを窮理、生涯を費やすことを窮年、 極限の状態にあることを窮極という。学において原 追究して調べることをいうのが、字の初義であろう。 るなど、もと刑罰の意を含むものであろう。〔説文〕 で刑罰の字であり、窮も人を穴室に幽閉する形であ 〔説文〕七下に「究は窮なり」「穹は窮なり」とする のち進退に苦しむ生活を窮乏・窮困といい、すべて 一○下鏑字条に「罪人を窮治するなり」とあって、 が、字義はそれぞれ用いるところが異なる。極は殛 で弓に従う字としてよい。究・・穹・と声義が近く、 屈さをいう。〔説文〕七下に「極まるなり」と訓し、

歙 きをあわせる・あうキュウ(キフ)・ショウ(セフ)

鳥あり、下に大蛇があって口を張ってこれを奪うと、のことをいう。劉義慶の〔幽明録〕に、松上に双白ハ下に「鼻を縮むるなり」とあり、気息を引くとき 十九章に「聖人の天下に在るや、歙々として、天下鳥が動けないという話をのせている。〔老子〕第四 蘇 る。字は翕の声義を承ける。 の爲にその心を渾す」とは、気を専一にする意であ 形声 さまで、あつまる意がある。 〔説文〕 声符は翕。翕は鳥の群飛する

聚 21 「髹」16 「髤」14 うるし キュウ (キウ)

文。 木の幹から漆をとることを示す字 影と黍とに従う。黍は漆の

れを用いていたようである。春秋期に曾伯爨の簠が極めて古くから行なわれており、殷代の彩色にもこ 雕 開は漆雕を氏としており、もと漆雕りをもって のは、その色に潤沢がある意であろう。孔門の漆めり、爨は漆に従う字である。爨が雨に従うている 髹 は形声の字、髤はその略字。漆を用いることは 髟はその刷漆、すなわち塗抹の法をいうものか、 業とするものであろう。 るいは髪の色をもって、爨を示すものであろう。

牛 うし ギュウ (ギウ)



という。 周を通じて、牛は犠牲の最も重要なものとされ、あるいは牛耕のことと関係があるかも知れない。殷い至って横線の形とする。これを横線としたのは、に至って横線の形とする。これを横線としたのは、 が、下体は牛に特徴的な腰骨墳起の状を写している なり」とし、「角頭三、對・尾の形に象る」という象形 牛を正面からみた形。〔説文〕ニ上に「大牲 耳を取ってその血をすすったので、 ものであろう。ト文はその部分をⅤ形にかき、金文 曲礼、下」に祭祀用語として牛を一元大武 元は首、武は足の意。盟誓のときには、左 盟誓を司会する

> 「牛は件なり。件は事理 う字で、また胖の意がある。〔説文〕ニ上にまたとがあり、それを半という。左右を両分した肉をい 銘末に「攤牛鼎」、すなわち牛を覹る鼎と称してい 寸の大鼎で、銘文も四百四字に及ぶものであるが、 のは獺牛鼎という。〔晉鼎〕は高さ二尺、深さ九 性体のままで神に供することもあり、鼎の大なるも に通ずるものとする。庖丁とは料理人の丁という男 丁の話があり、その伎の極まるところは、道の体会子、養生主」に、文恵君のためにその伎を示す庖 sterrore 、 takingのこめにその伎を示す疱れを解くには甚だ伎倆を要することであった。〔荘ことを「牛耳を繋る」とい、、 る。牛牲は甚だ大であるから、その半体を用いるこ の意であるが、のちその刀をいう語となった。牛を ことを「牛耳を執る」という。牛は大牲であり、こ 〔説文〕ニ上にまた

て、俘人一万三千八十一 ものであろう。〔小盂鼎〕 理は畳韻をもって訓する てよく知られない。事・ は唐以前の用義例がなく なり」とするが、件の字 山西の鬼方を伐っ

に、

という。 は農耕儀礼のうちにのちまでも伝承された。「礼記、は古代において犠牲の最も重要なものとされ、それ 秋期には行なわれており、孔門の冉伯牛は名を耕であったかも知れない。牛耕のことは少なくとも春 の初義は、あるいはこのような俘獲の数を正すこと 人、牛三百五十五牛、馬百数十匹をえたという。件 牛と耕と名字の対待をとるものである。牛

> 奪し、 図は山東沂南の漢画像石にみえるもので、牛角をつ儀礼が、のち天神信仰と結合したものといわれる。 とが、宋の〔東京夢華録〕にみえる。牛を鞭でうつ所の前では、百姓が小春牛を売り、賑わっていたこ 春祭の行事となった。わが国の北野信仰も、春雷とのち春牛会とよばれ、土牛を出す故事を民芸化して、 出して、春気の回復するしるしとした。この儀礼は ことをした。古儀では、土中より牛形のものを掘り 者はみな青鬢をつけ、青幡を立てて、「土牛を施す」京師の百官はみな青衣を著けて参列し、郡国の参加 礼儀志〕に、当時実際に行なわれていたその儀礼の 月令〕に立春の日の儀礼をしるしており、〔後漢書 土をえて戸上におけば田作りによろしという。 儀礼が終ると、牛はまたたくまに引き裂かれて相攘 ころであろう。中国でもこの行事は、のちには立春 けたものを中心として、出牛のことを演じていると ともに土牛を出す民俗として行なわれていた春耕の ようすを詳しくしるしている。そのとき宮廷では、 のは家蚕によろしく、病を癒すによろしく、 の一日前、春牛を宮中に迎えて百戯が行なわれ、役 怪我人も出る騒ぎであった。その肉を得る 角上の

キョ

11 はキこョ

五上に 象形 「山盧、飯器なり。柳飯器の形。〔説文〕

ギュウ

の外されている器の形である。
を以てこれを爲る。象形」という。盧字条五上にも
を以てこれを爲る。象形」という。盧字条五上にもを以てこれを爲る。象形」という。盧字条五上にも

去 5 きる・すてる

心 太明 大日十分

□ 5 □ 5 きしがね・おおきい

百樣王 工具

象形 矩形の定規。「説文」五上に「規巨(矩)ない」というが、規は円を画くもの。後漢のだ式はり」というが、規は円を画くもの。を巨大のように用いるのは鉅との通用義。これを人の上に移して巨魁・巨頭・巨嫂(一番上の兄嫁)・巨子(墨家の打導者)のようにいい、また大きな数量を巨万のよりにいう。

居 8 「尻」5 はヨ・コ

展而 潜袖

屆

会意 正字は尻に作り、尸と儿とに従う。祖祭の形声字、声符は古。〔説文〕はこの両字を区別して、尻一四上に「魔るなり」とし、居八上に「蹲るなり」と蹊踞の字とするが、この両者はもと同字である。〔詩、唐風、葛ま世」は悼亡の詩で、「百歳の後ある。〔詩、唐風、葛ま世」は悼亡の詩で、「百歳の後ある。〔詩、唐風、葛ま世」は悼亡の詩で、「百歳の後ある。〔詩、唐風、葛ま世」とし、居八上に「蹲るなり」と蹊踞の字とするが、この両者はもと同字である。〔詩、唐風、葛ま世、とし、居の居る所を奠む」のような古い般康、下〕に、「厥の居る所を奠む」のような古い般康、下〕に、「厥の居る所を奠む」のような古い般康、下〕に、「厥の居る所を災亡」のような古いとに近い。のち日常の居る所をいう。〔論語、陽貨がに近い。のち日常の居る所をいう。〔論語、陽貨がに近い。のち日常の居る所をいう。〔論語、陽はかる語である。となに語らん」は、席に即くことを命ずる語である。祖祭のでは語らん」は、席に即くことを命ずる語である。祖祭の形声字、戸または、「記れている」に「韓るないの形声字、「論語、陽りないる」といる。「論語、「はいる」には、「はいる」といる。「論語、「はいる」といる。「はいる」にはいる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」になる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」にはいる。「はいる」といる。「はいる」といる。「はいる」にはいる。」にはいる。「はいる」にはいる。「はいる」にはいる。」にはいる。「はいる」にはいる。「はいる」にはいる。「はいる」にはいる。」にはいる。「はいる」にはいる。「はいる」にはいる。」にはいる。「はいるいる。」にはいるいる。」にはいる。」

諸」という。漢文に独自の造語法である。
や」をもって承けるので、父母のことをまた「髻末に用いることがあり、この詩は下句に「父や母神の義。〔詩、邶風、日月〕「日居月諸」のように語はの義。「詩、邶風、日月」「日居月諸」のように語居正・居易・居常・居敬などの居は日常の意で、引居正・居易・居常・居敬などの居は日常の意で、引

拒8(拒)8 こばむ・ふせぐ

う。〔説文〕では歫ニ上がその義の字である。 れは横木などを組んで交通を遮断するのと形が近く、 れは横木などを組んで交通を遮断するのと形が近く、 たことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 たことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみえる。矢来を組んで馬をとめるものを拒 にことがみるが、そ

拠 8 【據】16 よる・おる・しめる

上り とめる・ふせぐ

り、拒絶あるいは鶏距のように用いる。〔説文〕ニであるが、接触をはばむ器の形でもあい。 をはばむ器の形でもあり、 巨は矩の形

に通用の例が多い。意とする。近・距はほとんど同字とみてよく、経籍う。足部二下の距には「雞距なり」とし、けづめのう。足部二下の距には「雞距なり」とし、けづめのを収めず、この字に拒の義があるとするものであろとに「止むるなり」とみえる。〔説文〕には拒の字上に「止むるなり」とみえる。〔説文〕には拒の字

炬り ひ・たいまつ

▼声 声符は空(巨)。松明をいう。

お多いのは、炬火に聖化の力があるとされたからであるう。

倨 10 おごる・あなどる

「NE」 一声符は 宮」にみえる。 唱を受けた話が、〔史記、酈生伝〕にみえる。 でき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とき、入謁を求めた酈生を、高祖が牀に倨し、両女とのが、「史記、酈生伝〕にみえる。

学10 製 18 まげる・おこなう

献10 はらう・ひらく・さる

形声 声符は去。去は神判に敗れたもの(大)を、 を存するため祛が作られた。他の誤妄を除去することを祛妄という。

柜 10 [色] 20 くろきび

柜量 野新

形声 声符は巨(巨)。[説文]五下に「黑黍なり。 一科二米、以て醸すものなり」とし、鬱を正字、租を或る体としてあげる。黒黍に鬱金草を加えて醸した酒を鬱といい、古くは神事に用いた。[書、洛誥]た酒を鬱といい、古くは神事に用いた。[書、洛誥]た酒を鬱といい、古くは神事に用いた。[書、洛誥]た酒を鬱といい、古くは神事に用いた。[書、洛誥]を調を贈るがある。全文にも秬鬯二古を明う例が多く、その字を竇に作る。竇がその初文を賜う例が多く、その字を竇に作る。竇がその初文を賜う例が多く、その字を竇に作る。竇がその初文を賜う例が多く、その字を竇に作る。竇がその初文を明ら、正形である。

据 11 てをいためる・すえる

形声 声符は居。拮据は双声の連語いう。〔詩、豳風、鴟鴞〕「予が手拮据す」とは、巣いう。〔詩、豳風、鴟鴞〕「予が手拮据す」とは、巣いることがあるのは、倨の仮借義。「腰を据える」「心を据える」「膳を据える」「据え置き」のような「心を据える」「膳を据える」「据え置き」のようないる。

虚 11 【虚】12 みやこのあと・はかば・むなしい

画。公司《成

経〕の崑崙虚の説を引く。崑崙はもと、ジグラッとは墳丘。古くはそこに聖所を作り、また墓地を営むこともあった。〔説文〕八上に「大丘なり」と訓し、「説祭」とは墳丘。古くはそこに聖所を作り、また墓地を営むは墳丘。古谷は花。下部はもと丘に従う形である。形声 声符は花。下部はもと丘に従う形である。

ならしめる原理としての意味をもつ。のち張 横渠あるのに対じて、虚は実の否定態として、実を可能 となる。 虚となり、虚偽・虚構の意となり、空虚・虚無の意 あろう。 の大虚において、それは実を含む虚となる。 例が多い。老荘の思想において、無が絶対否定的で うな建造物をもつところが、もと都であったからで い。古代王朝の都城の址を虚址というのは、そのよ ト形式の重層する神殿や聖所をいう語であったらし 虚実と相対して、実の相反語として用いる 虚址の義よりして現存しないもの、虚実の

許 11 ゆるす

を加えていることがあり、午はそのような祝禱の際いう。金文の字形には、午の下に祝禱の器であるD 〔毛公鼎〕に「上下の若否(神の諾否)を四方に 虢(ない) 俟たん」とあり、これが祝禱の辞の定式であったの許さば、我はそれ璧と珪とを以て、歸りて爾の命を 災禍を防禦することを原義とする字である。神の聴 文にも含まれているもので、御はその呪器によってに用いる呪器であることが知られる。それは御の初 許せよ」とあって、これも神意を宣明にすることを であろう。許とは神がこれを聴許することをいう。 に代ることを祖霊に祈る文であるが、「爾の、我に り、聴許する意。〔書、金縢〕は、周公が武王の疾形声 声符は午。〔説文〕三上に「聴すなり」とあれる。 許することを許といい、これを人に移して、人に許

> とを求める意の字であった。 すことをいう。可も祝詞をもって祈り、 神が聴くこ

渠 12 みぞ・なんぞ

き鄭国が鄭公渠を作り、漢の孝武のとき白公が穿っ堀割り、運河の類で、灌漑や水運に供する。秦のと城割り、運河の類で、灌漑や水運に供する。秦のと 韻をもって訓する。〔大徐本〕に「榘の省聲」とす。 上に「水の居る所なり」と渠・居の畳 河に対して人工のものを渠という。 た渠が知られている。〔史記〕に〔河渠書〕があり、 るが、水偏の形声字とみてよい。渠の大きなものは 形声 声符は巨(巨)。〔説文〕ニ

拒 12 なんぞ・あに

高帝紀」「浦公先づ關中を破らずんば、公臣能く入がいはゆる知の、知に非ざるを知らんや」、〔漢書、がいはゆる知の、知に非ざるを知らんや。〔漢書、世・匡・渠と声が近い。〔在子、秀物論〕「庸詎ぞ吾」とあり、 であろう。王引之は鉅・距・遽も同系の語であるとすべきものがなく、俗語の音表示として作られた字 らんや」のように、疑問副詞に用いる。字の本義と 鄄 している。 形声 声符は巨(巨)。〔説文新附〕

距12 (距)12 けづめ・さる

後にある「けづめ」がその形に似ているので、距と 距 形声 初文で、横に木の出ている形。鶏の脛 声符は巨(巨)。巨は 矩 0

深築

距離という。〔左伝〕僖二十八年に、晋の文公の亡いう。拒と通用する。足首の力で跳躍することを、いう。拒と通用する。 命に従った臣が、なお余勇を示して「距蹤三百」を したという話がある。のち多く距離の意に用いる。

宫 ¹³ かご・はこ

뼝 游 特的 40

ごである。稲束を入れるような大きなものもあった。 みを歌うもので、「ここに以てこれを盛る これ 筐のがある。 〔詩、召南、采蘋〕は、神に供える草摘(泣)・里(悝)・婁(窶)など、両系の声をもつも (泣)・里(悝)・婁(窶)形声 声符は呂。呂 金文では国名に用いる。 わが国では、貴重品などを入れる容器の意に用いる。 と筥とに」と歌う。筐は四角いかご、筥はまるいか 常いる く おおおり 大田の字に立声符は呂。呂は来母。来母の字に立

裾 すそ・えり・ふところキョ

見ゆ。孔子曰く、由よ、・・)聲・・・・もある。〔荀子、子道〕に「子路、盛服して孔子にもある。〔荀子、子道〕に「子路、盛服して孔子にもある。〔444〕。 人となり廉裾」は倨の仮借字である。 達姿を好んだ人のようである。〔漢書、趙禹伝〕「禹、とは、衣服の業々しくめだつことをいう。子路は伊たとは、衣服の業々しくめだつことをいう。子路は伊たり。孔子曰く、由よ、この裾々然たるは何ぞや」 いう。えり・すそ・そでや、またおくみをいうこと 形声 の寝なり」とし、褒に「寝なり」と 声符は居。〔説文〕ハ上に「衣

豦 おおいのこ

る。店に従ふ。異はその下足に象る」とするが、異正字とし、「鐘鼓の柎なり」とし、「飾りて猛獸を尽が用いられたものと思われる。〔説文〕玉上に虞をが用いられたものと思われる。〔説文〕玉上に虞を ても、 に「簨魔を爲る。天下の大獸五、贏なるもの(浅毛い、〔詩、周嬪、有聲〕に「業を設け廩を設く」とい、〔周礼、梓人〕と、大野、「夢」に「業を設け廩を設く」と上部を鑿歯状に作るものが多く、その器を虞業とい その龍、既に鬯處を鑄る。大鐘既に懸け、玉鑞形である。〔耶鐘〕に「余が鐘を作爲す。喬々たるは鬼の正面形。字をまた鑢に作り、虔はその猛獣のは鬼の正面形。字をまた鑢に作り、虔はその猛獣の あるが、青銅器の製作以前にそのことがあったとし た。〔礼記、明堂位〕に「夏后氏は龍虡を以ふ」ととあり、竜虎鳳麟など、すべて怪異のものが好まれ の獣)、羽あるもの、鱗あるもの、以て簨虞と爲す」 に象された思われるものを飾る例が多い。 虡はまた たものであろう。[宗周 鐘]以下、鐘の鼓面右下り、この象虞は、おそらく字のままに象を飾りとし みられ、楽器を懸繋するものには、殊に華麗な獣飾 神獣など、器の台座に猛獣奇獣を配したものが多く ふしぎではない。

賦〕に封豕・蜚虞の名がみえ、〔漢書〕〔文選〕にはらかでない。〔史記〕にみえる司馬相如の〔上林のらかでない。〔史記〕にみえる司馬相如の〔上林の

り」というが、

それらがどのような獣であるのか明

設〕の遽字は、虎の距躍する形に近い字である。

據] 21

かねかけ

鳳鶲

器の柎足の飾りとして用いる奇獣の姿を、写した字

重文として鎌を録している。豦は鐘鼓などを懸ける 處を豦に作る。〔説文〕 虍部五上に虞の字がみえ、

嘘 なげく・うそぶく・うそキョ

囐 はことばにならぬ気息をいう。〔荘子、斉物論〕「南い」とばにならぬ気息をいう。〔荘子、斉物論〕「南い」とはいるの。嘘 形声 声符は虚(虚)。虚は墳墟

> は声を出さずに、すすり泣く意で、双声の擬声語。かに息づくこと。嘘吸・嘘喙のようにいう。嘘啼郭子蓁、凡に隱りて坐し、天を仰いで嘘す」は静 嘘は気息に用いる字である。 わが国では「うそ」の意に用いるが、うそは虚偽、

墟 おか・あと

虎の兩足擧ぐる」意とする。〔玉篇〕にも「封豦な馬相如説〕として「豦は封豕の屬なり。一に曰く、『鬼子子子 とて「縢がて相孔ち、解けざるなり。又応に從ふ。豕に「鰯がて相孔ち、解けざるなり。豕応に從ふ。豕んで頭を奮迅するものであるという。〔説文〕九下

頭なり」とあり、〔郭注〕にさるに似て毛多く、好象形 「虎頭をもつ獣の形。〔爾雅、釈獣〕に「迅

虎頭をもつ獣の形。〔爾雅、釈獣〕に「迅

記、檀弓、下〕に「墟墓の閒には、未だ哀を民に施墟の初文。〔説文〕にはこの字を収めていない。〔れ いう。 さざるも、民哀しむ」とあり、墟墓の意にも用いる 形声 る。墟に虚を用いることも多く、 都城の重要な部分は、丘陵の上に営まれたからであ が、都城の廃したあとを壚ということが多い。古く 声符は虚(虚)。虚は墳墟(はか)の意で、 殷墟をまた殷虚と

踞 うずくまる・こしかける・おごるキョ

用することがある。 招」「長爪踞牙」の踞は鋸の仮借。字はまた拠に通い。 まずいままが の路は鋸の仮借。字はまた拠に通は信機に近いことがあり、踞傲という。〔楚辞、六きょう

歇 16 むせびなく

に「称くなり」とし、「一に曰く、形声 声符は虚(虚)。〔説文〕。 声符は虚(虚)。〔説文〕ハ下 气

퉱

犀牛の形をなすもの、犀足の筒形器、銀象嵌の羽翼

虎が鹿を殪している金銀錯屛風台座、また

金銀の象嵌飾を施した竜鳳形の

墓出土の遺品には、

の飾りをつけるからであろう。近年出土の中山王ある形。上に虎形をつけるのは、慶とよばれる獣形

鼓鐘の類をかける楽器かけの台座に柎足の

鋸遠醿蘧

とあり、〔楚辞、離騒〕に「曾て歔欷して余鬱邑とあり、〔楚辞、雑騒〕に「歔欷は悲なり」ないない。
は双声の連語。声をあげてすすり泣く意で、形況のは双声の連語。声をあげてすすり泣く意で、形況の す」の句がある。 を出すなり」、次条に「촶は歔なり」という。歔欷

16 のこぎり・ひくキョ

礁

いう。わが国の古代仮名のケの甲音に居、乙音に義に刃鋸の語がある。古く刑罰に用い、肉刑を刀鋸と[壓王戈] 銘に「御鋸」の語があり、[国語、魯語]状勢。 〔玉篇〕に「解截なり」というのは、みな当時の語 を用いる例があり、古音の近かったことが知られる。 であろう。古くは我といい、我はその象形字。のち 声符は居。〔説文〕一四上に「槍唐なり」、

遽 17 はやうち・あわただしい・にわかにキョ

[周礼、行夫] に「邦國傳遽の小事を掌る」とあり、 いまな、行法 駅伝の制は当時すでに発達していたようである。 をいう。〔左伝〕僖三十三年「遽をして鄭に告げし二下に「傳なり」というのは伝遽、伝車の意で駅伝 伝遽のことは日常の小事であった。伝遽の義よりに む」、また昭二年「遽に乘じて至る」とあり、伝車 声符は處。豦は獣の奮迅する形。〔説文〕

> が多い。〔漢書、陸賈伝〕「庸遠ぞ漢に若かざらん」、「庸遠」「何遠」の二字連用して疑問副詞となることのようにいう。声をもって記・豈とも通じ、またのようにいう。声をもって記・豈とも通じ、またのようにいう。声をもって記・豈とも通じ、また その例である。 〔史記、越世家〕「何遽ぞ福を爲さざらんや」など、 る意となり、「左伝」襄三十一年「豈遽れざらんや」 わかのことをいう速疾・遽卒の意となる。また懼れ は、 だった。声をもって記・豈とも通じ、またようにいう。声をもって記・ま

醵 さかもり

ことである。いまは募金することなどに用いるが、酒を醸といふ」とあって、古くから行なわれていた 釂 「周の禮はそれなほ醵のごときか」の注に、「合錢飮 もとは酒食のためにすることであった。 は合銭、いわゆる『わりかん』で、〔礼記、礼器』では、また。「會して酒を飲むなり」とあり、会と 形声 声符は處。〔説文〕一四下に

遽 かわらなでしこ・はす・おどろくキョ

ける用法である。 周なり」は、何れも驚遽のさまで、遽の声義を承 声符は遽。〔説文〕「下に「遽

吾 10 まもる

をおくところである。〔玉篇〕に「圄は楚囚なり」 本字は閨。圉は手械の形である幸に従い、拘執の人獄舎の意に用いて狩り・別選のようにいうが、そのしるすこともあって、圄・禦はその声義同じ。のちしるすこともあって、圄・禦はその声義同じ。のち とは、字を圉の義に用いたものである。 り」という。戦国期の思想家列禦寇を、また圄寇と とを示す字である。〔説文〕六下に「これを守るな する字で、 外囲を加えた字形であるから、さらに厳重に守るこ るに及んで、別に敔などの字が作られた。圄は吾に きな蓋をおいて、その祝禱の機能を敔ることを意味 一般がその原義。吾を一人称の名詞に用 器であるTの上に、五の形に組んだ大 下声 声符は吾。吾は祝禱を収める

室11 ひとや・ふせぐ・うまかいギョ

圉 \$ P 題園園

*** 秦

まるが、この辺垂・圉人とする一日両義の文は〔繋垂なり。一に曰く、圉人、馬を掌るものなり」とまる。 まる所以なり。卒に從ひ口に從ふ。一に曰く、(潑)する所然なり。卒に從ひ口に從ふ。一に曰く、(潑)ころを圉という。〔説文〕一〇下に「囹圄、罪人を拘こるを圉という。〔説文〕 会意 伝本〕にはみえない。囹圄は囹圉。牢獄は辺地にお 人の両手に加えたものは執。その手械の人をおくと 口と幸とに従う。幸は手械の形で、これを

[墨子、天志、下]に「丈夫以て僕圉胥靡と爲す」という。のものをいい、[広雅、釈詁]に「臣なり」という。 の称は秦以後のことで、古くは均台・美里・圜土の 漢の地で行なわれた。その畜養の義から転じて臣下 であったと思われる。 ようにいわれ、聖所に附属し、 あるいは刑余のものを臣僕としたのであろう。 とは臣僕の類であるが、圉には獄舎の意があるから、 せん」とはその意。馬を畜養することも、辺境の広 あろう。〔左伝〕隠十一年、「聊か以て我が圉を固う かれることが多く、それで辺垂の義をも生ずるので 人牲を供するところ **仓** 吾

敔 まもるゴ

賽 数

とある干吾がその初文。〔攻敌王光戈〕の敌は呉の「乃の友(友官)を率以して、王の身を干吾せよ」、〔師詢殷〕つ行為を示す。まもることを扞敌という。〔毛公鼎〕つ行為を示す。まもることを扞敌という。〔毛公鼎〕 会意 楊なり」とあって、祝い致をいう。字はまた祝圉にめある。〔説文〕三下にまた「一にいふ。樂器、終 三下に「禁なり」とし、吾声とするが、字は吾を殴 仮借。音が同じであるから、圉・御に借用すること その効果をさらに高めようとする字である。〔説文〕 作る。虎形の器の背上に鑿歯形を作り、それをささ んだ大きな蓋を加えた形。敔はそれに攴を加えて、 めに、祝禱を収める器であるIDの上に、五の形に組 吾と支とに従う。吾は祝禱の機能を守るたぎ。 **

> 魚11 らに撫でる原始的な楽器で、祭祀のときに用いる。

象 育食

をいい、妻を失った老夫は鰥、すなわち魚に涙をそとり、棄婦の詩には必ずその梁・筍(やな)のことく魚文を加え、結婚の祝頌詩の発想には釣魚の興を 矢ぬ」というのはその礼であるが、のちの伝の作者で、、「春秋経〕隠五年「春、公、魚を棠(地名)にり、「春秋経〕隠五年「春、公、魚を棠 ぞれ神事用のよび名である。古く魚をたねる礼があ (乾魚)を商祭といい、鮮魚には挺祭という。それ に非ざるなり」というが、燕尾・火形などみな不要 「その尾みな枝る。故に枝るる形に象る。火に従ふ象形。魚尾と燕尾と相似たり」という。〔段注〕に 象形 そぐ形で示される。 る。魚は婦人の象徴とされ、婦人の用いる盤には多 はその古礼を知らず、「禮に非ざるなり」としてい 的な部族がいたのであろう。その祭祀に供する稟魚 く、王室の祭祀に、魚を供薦することを掌る職能 の説である。金文に魚を図象としてしるすものが多 魚の形に象る。〔説文〕一下に「水蟲なり

御12 (御)1 ふせぐ・ゴ もちいる・つかえる

13 孙 额

魚

御(御)

の初形は知に作るもので、午は杵の形ともみえ、まする。しかしその義には概ね「説駕」「税駕」のよする。しかしその義には概ね「説駕」「税駕」のように説・税の字を用い、卸を用いることはない。卸が、まり、で、 (説文) 九上卸字条に「車を含解に発するもので、〔説文〕 九上卸字条に「車を含料に発するもので、〔説文〕 九上卸字条に「車を含料に発するもので、〔説文〕 九上卸字条に「車を含料に発するもので、〔説文〕 九上卸字条に「車を含料に発するもので、「説文」 九上卸字条に「車を含料に発するもので、「説文」 九上卸字条に「車を含料に表するもので、「説文」 九上卸字条に「車を含料に表するもので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともので、「記述ので、「記述の形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともの形ともの形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともの形ともの形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともの形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、「記述の形ともので、」をいまする。 るは、これ父乙の壱なるか」のように、災禍や病気か」「貞ふ。祖辛は王に巷ずるか」「貞ふ。齒を疾めのであろう。卜辞には「貞ふ。玉亥は我に祟するが、たり 従い、三・四期以後は午形に従う。甲はその幺や午 井や婦鼠が、その姑にあたる先妣の霊が、婦井や婦 御を用いる。たとえば「貞ふ。婦井は母庚(先王のを禦ぐ祭祀が行なわれた。これを饗祀といい、字はない のものもある。この糸たばは、わが国でいえば白香シン形のものは糸たばで、これを二たば列ねている形 それが御の初文。卜辞では第一期武丁期の字は幺に それで「説文」ニ下には馭をなお御の古文として録 字で、御の初文であった。のち馭の字の義となり、 鼠に何らかの祟をなすことがあって、 の名)に御するに、牛の牝牡を用ひんか」とは、 夫人の名)に御せんか」「婦鼠を妣己(先王の夫人 は祖霊などの下す祟のためであると考えられ、これは祖霊などの下す祟のためであると考えられ、これ の類にあたる。午形のものも、それを呪器化したも を拝する形であるから、幺や午は呪器の形である。 た糸たばをねじた幺の形にしるされるときもあるが、 て混用を来たしたものである。その誤りは、卸字の しているが、御と馭とはもと別字別義、声同じうし 声符は卸(卸)。卸は古く午と卩とに従う それを禦ぐた

刺、御ふ」、「號叔旅鐘」「厥の辟に御ふ」など、 「剌鼎」「王、禘して吐を大室に用ひ、昭王を禘る。 (離といい、「逾設」「王、邶(饗)酒す。遹、御ふ」、(編)を作る」という。その事に従事することをも る説もあるが、幺は隰・顯(顕)の従うところ、形のうち、幺や午を馬鞭とし、字を執鞭を示すとす御馬の意に用いるのは、駅の仮借義である。御の字 酒に敷ぶも、敢て酸ふこと無かりき」としるしていをいう。周初の〔大盂鼎〕に「事に御ふるに在りて、だって、まっ」はあるに在りて、まっ」はいます。はいまればいます。 下では、「「「大き」では、「大き」では、、 これをいった。 「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、「大き」では、 よ、〔洹子孟姜靈〕「用て天子の事に御ふる監に『新造の貯(屯倉)を監司して、用て宮に御ひに『新造の貯(屯倉)を監司して、用て宮に御ひ 用法は金文にも継承されていて、たとえば「頌鼎」 「茲を用ひよ」「これを御ひよ」のようにいう。この その可否をトすることがあり、その可なるときは ある。御はその怨念を禦ぎ祓うための祭祀であった。勃谿」という相容れぬ関係は、死後にもつづくのでめの祭祀を行なうことを卜するものである。「婦姑 名)駿して、王の南征に從ふ」などの例がある。王 午は許の従うところで、いずれも神明のことに関す る。のちの御史・御事の語は、その意である。御を ある。卜辞には狩猟や禁祀の犠牲を用いるときに、 に移してよい。ゆえに御に、用いる・行なうの意が このようにして祓い清められたものは、これを実行 に駿するものは有力な王臣であろうが、一般に駿者 る字であり、幺や午は馬鞭の類ではない。 御馬には

> 十義に近いが、その初義は禁禦の御で、 璽など、その用義甚だ多く、字書にあげる訓義は三 呪儀を示す字。御事・侍御・進御・臨御・制御・御 ることがあるのにすぎない。御の初義は禦で、その 馭とは全く別義の字であり、ただ音をもって通用す 妾」のようにいう。これによっていえば、御と駭・ 0 り庶人に至る」と庶人に列ぶ地位であり、〔師豰段〕 の身分は卑賤なものであった。〔大盂鼎〕に「駿よ べてそこから引伸したものである。 「西隔東隔(その部属)の僕駿・百工・牧・臣・ 他の義はす

|| 12 | || || || || うまをつかう・のる・おさめる

發戰於 献

はもと、妖祥を禦ぐことを原義とする字である。の道を民を治める上に適用するものであるが、御と る。〔周礼、大宰〕「八物を以て王を詔けて群臣を馭るのは誤りで、御と馭とは字源の全く異なる字であるのは誤りで、御と馭とは字源の全く異なる字であ 下御字条に馭を出して「古文御、又馬に從ふ」とす る。また馬の飼養に従うものであった。〔説文〕ニ 策を執る形とする。〔令鼎〕「王、駿す」、〔玄殷〕 会意 し、八統を以て王を詔けて萬民を馭す」とは、馭馬 工・牧・臣・妾」のように、下層の階級に属してい の低いものの職とされ、〔師穀段〕に「僕駿・百 馬と又とに従う。 金文に字を販に作り、

すな どる



鼎」には、王が大池に進して、その魚を井にも賜うける儀礼で、その魚を辟雍に薦めるのである。[井]ける儀礼で、その魚を辟雍に薦めるのである。[井]漁す」は、神都である葬(豊)京 辟雍の大池にお漁す」は、神都である葬(豊)京 辟雍の大池にも賜う 天子親しく往き、乃ち魚を嘗め、先づ寢廟に薦む」、に薦む」、〔季冬紀〕「漁師をして始めて漁せしむ。 形声 季春紀〕「天子、ここに始めて舟に乗り、 行ふ」とあって、金文にみえる賜魚の例は、「國人 り、川禽を登め、これを寢廟に嘗め、これを國人にいては〔国語、魯語〕に、大寒に入ると「名魚を取いては〔国語、魯語〕に、大寒に入ると「名魚を取 漁して、公姞に「魚三百」を賜う例がある。 たことをしるし、〔公姞方鼎〕には子仲(人名)が 自ら行なうべき古礼であった。〔過段〕に「大池に (不諾) なるか」と王の行為としてトするものがあ るか」「王は祉まりて魚すること勿きときは、不若 んか」「王は往きて祉まりて魚するに、若(諾) 礼として行なわれることがあり、ト辞に「王、漁せ が、その字が漁の初文。漁は神に供薦するための儀 う形を正字とし、「魚を捕るなり」という。竹部五 に行ふ」というのに当るのであろう。〔呂氏春秋: も神都の辟雍儀礼のときである。天子親漁の礼につ る。漁や魚を矢ねてみる矢魚のことは、王や諸侯が 上に獅の字があり、その重文として魥を録している のがあり、象形である。〔説文〕一下には二魚に従 声符は魚。古い字形には釣魚の形に作るも 鮪を寢廟 いずれ な

魚藻」に「魚在りて藻に在り 頒たる首あり 王在紅葉 魚をもって祭事の発想とするものが多い。〔小雅、魚をもって祭事の発想とするものが多い。〔小雅、 周、熠、潜〕は、季冬に魚を薦め、春に鮪を献ずるの大池に赤旂舟を浮べたという記述がある。〔詩、の大池に赤旂舟を浮べたという記述がある。〔詩、 歌われている。 りて鎬(辟雍)に在り 異同があるのであろう。周初の〔麦尊〕では、辟雍射を用いていて釣魚の法と異なるのは、礼に古今の 辟雅儀礼において、魚は祖霊を象徴するものとして ときの詩篇であり、また大雅・小雅の祭事詩にも、 廟に薦む」というのも、その礼である。取魚の法に 始めて漁せしむ。天子親しく往きて魚を射、先づ寢 また〔淮南子、時則訓〕に「季冬の月、漁師をして 豊樂して飲酒す」とあり、

禦 まつる・ふせぐ

14 ŦŁ)

南庚に御らんか」というのは、王の眼疾が妣己の祟なぎ、まら、下辞に「王の目を、妣己に御らんか」「齒を霊の祟を祓うことを御と称していることからも知ら霊の祟を祓うことを御と称していることからも知ら 「上に「配るなり」とあるが、巣を被うための禦祀ために限定符の示を加えた禦が作られた。〔説文〕 のなすところであり、歯痛が南庚の霊のなすわざと を本義とするものであることは、卜辞において、祖 多義的に用いられるようになって、その初義を示す 声符は御。御は禦の初文。御が禦祀のほか

> 的その他の意味で、 ており、禦はその声義を承ける字である。のち軍事 考えられて、それを祓い、禦る祀礼を行なうことを トするのである。御の形義のうちにその意は含まれ ひろく防備・防禦の意に用いる

キョウ

3 収 4 ささげる

〔玄応音義〕に引いて、「拱手なり」とする。字はなり」というのは、拱手の象とするものであろう。 (廾)より分化した字である。 ことをいう。収・共・供・恭はみな一系の字で、収 る靈公の所に収するあり」とは、その廟所に供する せしめんか」のように、提供させる意に用いる。字 供の初文で、卜辞に「人を収せしめんか」「牛を収 44 会意 た形。〔説文〕三上に「竦手を会意 左右の両手をならべ

区 4 わるい・まがごとキョウ

その邪霊が災厄をなすことをとどめようとするもの **枉死者の屍の胸に、この文身を施すことによって、** Ø 象形 文身として×形を加えたことを示す。 山は胸郭の形。その中央にな

> るに象るなり」と陥没の意とするが、臽とは全く意文〕と上に「惡なり。地穿たれて、その中に交陥す文〕と上に「惡なり。地穿たれて、その中に交陥す 爾のような字形となる。凶は凶悪の象で、これに側 **とは乳房をモチーフとして加えるので、爽・柬・子には乳房をモチーフとして加えるので、***・* 乱・凶寇のように用いる。吉凶と対文、不吉のも それよりすべて凶悪のことをいい、凶荒・凶暴・凶 象の異なる字である。もと枉死者の邪霊をいう字で 身形を加えると匈となり、胸の初文。凶悪のことに ぐ意味がある。その字形は、男子にあっては文、 朱の文身を加えるが、朱には邪霊の憑りつくのを防 であろう。身分ある人の死については、同じく胸に のをみな凶という。 心動きおそれるのを恟、凶悪の人を兇という。〔説

T+ 5 協。 かなう(ケフ)

協

字はまた協治・協光・汁洽に作る。 形声 叶の確かな用例はないようである。 に十二支の未の異名として叶冷歳の名がみえるが、 するなり。劦に從ひ十に從ふ」とし、古文として叶 を声とする。〔説文〕「三下協字条に「衆の同じく和 というとするのも、俗説であろう。〔史記、天官書〕 また古文の叶について、十口の一致するところを叶 をあげているが、漢碑にもその字を用いるものなく 正字は協で劦声。叶は協の略体としての十 六朝以前には

兇 わるもの・わるい・おそれるキョウ

匡(里)(選)

た晋軍が、曹人の墓地を発くと揚言したからであった。十八年「曹人兇懼す」というのは、曹を包囲しそのためである。兇は兇懼の意に用いられ、〔左伝〕 れ、わが国の〔万葉〕にも道産を弔う歌が多いのはの怨念によって強烈な呪霊をもつものとして恐れら 形とみてもよい字である。枉死・変死のものは、そ 字法であるから、兇も光・見と同じくその全体を象 などは、みな特定部分を上に掲げて強調する意の造 を兇器という。 をもつものを兇という。儿は人の下体。光・見・望 その邪霊をここに封ずる意をもつ。そのような呪霊 暴・兇悪の徒をいう。人を殺傷するを兇行、その器 の義をもつ。もと死霊の恐怖をいい、のちすべて兇 た。凶・匈・兇・恟はみな一系の字で、兇悪・兇懼 などの胸に×形の文身を加えた形で、 凶と儿とに従う。凶は枉死者

共。 つつしむ・そなえる・ともにキョウ

4. 类

会意 左右の手にものをもち、ささげている形。 「説文」三上に「同にするなり。甘・井に從ふ」と し、「段注」に甘を二十と解して「二十人みな竦手 し、「段注」に甘を二十と解して「二十人みな竦手 し、「段注」に甘を二十と解して「二十人みな竦手 し、「段注」に甘を二十と解して「二十人みな竦手 のをもつ形で、恭の初文。〔善鼎〕「德を秉ること共

> がはよく知られない。井・駅・共・恭はみな一系のえる。玉器の名であるが、どのようなものであるの 長 発〕に、伝国の重器として大共・小共の名がみという。 (詩、商 頌、思われるが、金文の字形とは異なる。 (詩、商 頌、思われるが、金文の字形とは異なる。 (詩、商 頌、 字である。 とは拱手の礼。〔説文〕の字形はその拱手の形かと の礼器であろう。〔儀礼、郷 飲酒礼〕「退きて共す」意ではない。両手にもつところのものは、玉器など る」とあり、 純」、〔叔 向父禹設〕「明德を共み、威義(儀)を秉 いずれも恭の義に用いており、 共同の

刕 ちからをあわせるキョウ(ケフ)

Ħ,

会意 「大いに衆人に命じて、曰ひて魯田せしめんに、年で大いに衆人に命る。また卜辞に魯田のことがみえ、に作る字である。また卜辞に魯田のことがみえ、その伝承が残されたものである。為・魯は文献に飈 性號の山、その風、劦の若し」という文を引くのは、神の名に用いる。〔説文〕にまた「山海 經に曰く、卜辞に「東方を析といふ。風を脅といふ」と東方風くの字は祭名や、風神の名に用いられることがあり、 を受けられんか」とあり、神饌用として、かなり大 **魯があり、農具を祓うて虫害を防ぐ儀礼を意味する。** に三つの耒を列して、その下に祝禱の器をおく形の なり」と筋肉の意とし、労働をいうと解する。 るなり。三力に従ふ」とあり、また力一三下を「筋力して耕すことをいう。〔説文〕一三下に「力を同せ力して耕すことをいう。〔説文〕一三下に「力を同せ 力を三つ合せた形。力は耒の象形。三人協 卜文

> 主基などにあたるものである。 「同耕作を歌う詩篇である。わが国の斎田や、悠紀・工〕 〔噫嘻〕 などは、その藉田・藉農とよばれる共工, 規模な共同耕作が行なわれている。〔詩、周 頌、臣

囟

〔漢書〕にも、 ざる無し。故に勹(包)に従ふ」と説く。巧説といの中よりしてこれを言ふ。容れざる無きなり。容れ 外よりしてこれを言ふ。當らざる無きなり。 「膺は匈なり」とあって互訓。〔段注〕に「膺はその 九上に「膺なり」とし、凶声とする。肉部四下に ・ 文身を加えた形で、胸の初文。〔説文〕 8 動悸が高まることは凶事に多いものである。 がきだい。わが国で「むなさわぎ」というように、 凶・兇・匈・胸・恟はみな一系の字で、凶悪・兇懼*** 形的な字にすぎない。匈は胸の初文で、〔史記〕や うべきも、′†は人の側身形、匈はその部位を示す象 なお匈字を用いている例が多い。 側身形の人の胸部に、×形 匈はそ

王 〔里〕。〔進〕13 ただす・はこキョウ(キャウ)

E 医面面

「飯と声 器* **籇と曰ふ」とあるものは別義。金文で簠に作る字に** 篆字条に「牛に飲ふ筐なり。方を筐と曰ひ、圜を「飯器、筥なり」というのは筐字の義。竹部五上のばままま。 あたる。宝は之部六下に「艸木妄生するなり」とす 正字は置に作り、里声。〔説文〕一三下に

「明命を遷かにす」、〔頌段〕「日に天子の親命を遷か作り、また〔麦尊〕「天子の休(恩寵)を響いにす」則ちこれを匡す」のようにいう。金文には字を運が 「以て王國を匡せ」、「左伝」襄十四年「過つときは 匡すことを匡正・匡救という。〔詩、小雅、六月〕 祭。 礼を行なう意である。このようにして往いてことを すなわち運は匡正の字の初文である。 にある。その往いて匡正を行なうことを選という。 を清め、神徳を明らかにし、ものを匡救・匡正する は字を筐の意をもって説くが、匡の初義はその出発 にせん」のように用いて、明徴にする意。〔説文〕 に出発する儀礼を意味し、匡は秘匿の聖所でその儀 て中(止)の形を加えたもので、重要な行為のため 字は鉞頭の象である王の上に、之く意をもっ

さけぶ(ケウ)

く聞えることをいう。 叫喚してその苦を訴える意。大語叫々とは、声の遠 小雅、北山〕「或いは叫號することを知らず」とは、に叫ぶ」とあり、譆々の声を出したという。〔詩、

おびやかす・おしとめるキョウ(ケフ)・ゴウ(ゴフ)

に従う字形を出して、「人、去らんと欲し、 a出して、「人、去らんと欲し、刀を以う形であろうが、〔説文〕 | 三下には力 正字はおそらく去と刀とに従 劫 夾 巩

杏

んで、兵火を劫灰・劫塵のようにいう。る。仏教語の劫火・劫災などの語が行なわれるに及る。仏教語のあがり、劫災などの語が行なわれるに及るものであろう。劫迫の意より劫奪・劫掠の意となるものであろう。劫迫の意より 正字〕に経籍中に往々にして刀に従う字があり、そまに、刀に従う字形もあったらしく、「群経解によると、刀に従う字形もあったらしく、「群経去らんとするを止むるを劫といふ」とする。この説 るのが普通である。去は追放を意味する字であるか れは俗字であるとしているが、脅迫には刀刃を用い ら、それに刀を加えるのは、いわば強制退去にあた て脅止せらるるを劫といふ。或いは曰く、力を以て

夾 はさむ (ケフ)

夾

「持するなり」とし、「二人を恢む」という。俠をざる」のように、古い用例がある。〔説文〕 |〇下に 「爾曷ぞ夾介して、我が周王を火め、天の命を享けなをないない。」ない、 (挟)の初文。〔書、多方〕れ人を 挟む形で、挟(挟)の初文。〔書、多方〕ない。 人の正面形である大と、その両脇にそれぞ の字がある。 もその義の字とする。卜文に一方のみに人を挟む形

現 かキョウ ・おそれる

礟 功

呪器で、左・巫の字はこれに従う。乳は手で高くも会意 工と乳とに従う。工は巫祝の執るところの のを揚げる形であるから、字は呪具を高く掲げて祈

> 「永く先王に現(党)あらしめん」のように用い、に臨保し、丕いに先王の配命を珖(鞏)くせり」鞏の初文。〔毛公鼎〕「肆に皇天斁ふことなく、有周鞏の初文。〔毛公鼎〕「韓に皇天斁ふことなく、有周 き字である。 その用義例なく、またそれでは現に従う鞏・恐の声 であろう。〔説文〕三下に「褒くなり」と訓するがることであり、またその神威を恐れる意を含むもの 分化した字で、その呪祝の行為が、神寵を鞏固にす 鞏固の意と、恐懼の意とに用いる。鞏・恐は現より 義を解することができない。現は恐の初文とみるべ る意である。それによって神寵を鞏固にするもので、

杏 あんず キョウ (キャウ)

一とされた。〔大和本草〕に花は美しく、実は果物本〔下学集〕に、李・棗・桃・栗とともに五菓の本〔下学集〕に、李・棗・桃・栗とともに五菓の村」はよく知られている句である。わが国では元和村」はよく知られている句である。わが国では元和 酒家 何れの處にかある 牧童遙かに指さす杏花の 親しまれた木である。杜牧の〔清明詩〕に「借問す の木は杏に宜し」とあり、各地にひろく植えられ、のともみえない。〔管子、地員〕に「五沃の土、そ從ひ、向の省聲」とするが、特に向の省形に従うも として、また核仁は薬にもなるとしるされている。 象形 う。〔説文〕☆上に「杏果なり。 枝に木の実のある象形であろ 木に

狂 くるう キョウ (キャウ)

趋 對 0

中行を得てこれと與にせざるときは、必ずや狂狷これを裁する所以を知らず」、〔子路〕に「子曰く、長」に「吾が黨の小子狂簡、斐然として章を成す。長〕に「吾が黨の小子狂簡、斐然として章を成す。うのは、関心を示さない男を罵る語。〔論語、公治うのは、関心を示さない男を罵る語。〔論語、公治 鄭風、褰裳〕は、女からの誘引の詩で、「子、我をいない。」というに溺れるというほどの意である。〔詩、好むところに溺れるというほどの意である。〔詩、 章「馳騁田獵は、人心をして狂を發せしむ」とは、發出せん」というのが原義に近く、〔老子〕第十二 のある人をいう字で、これを置すも、 るのであろう。〔説文〕一〇上に「新犬なり」とは嚙むの、その霊力の誤って作用するものを、狂と称す 思はざれば がおちない意であろう。〔書、微子〕「我はそれ狂を されるが、字形によって考えると、むしろ憑きもの みえる。それより転じて人の狂痴なるものをいうと み癖のある猛犬をいう。前条に「狾は狂犬なり」と 匡正・匡救を行なう。しかもなおその匡救しがたい 意。このようにして出行し、その神威を明らかにし **生は出発にあたって、鉞頭を呪器として清める形で** (止)を加えている形。王は鉞頭の形であるから、に「艸木妄生するなり」とするも、王形の上に山 とは、デモーニッシュなものである。わが国で「も 精神に連なる詩的狂気をいう。狂における憑きもの 清狂・風狂など、みな一種の狂で、日常性の否定の り」とみえ、孔門では特に狂簡・狂狷の士を愛した。 か。狂者は進みて取り、狷者は爲さざるところあ **匡(匡)は秘匿のところでその儀礼を行なう** 不妄生するなり」とするも、王形の上に虫正字は宝に従い、宝声。**は〔説文〕ハトト コハ・ミできょハ男を罵る語。〔論語、公冶() 豊他人無からんや「狂童の狂よ」といる。 は、女からの誘引の詩で、「子、我をがあれる」といい。 というのが原義に近く、〔老子〕第十二 その憑きもの

写 8 まつる・うける・もてなすの狂い」というのも、やはり神の憑くことをいう。

祭宮に亯、饗宴に饗、〔礼記〕には祭享饗宴にみなである。〔段注〕に〔周礼〕における用字例として、解しうる説明を加えている。献とは上に献進する意解しうる説明を加えている。献とは上に献進する意 れよ」、〔麦尊〕、「享く命に奔走す」という。これも詞的用法があり、〔大盂鼎〕、「享く奔走して天畏を畏詞的用法があり、〔大盂鼎〕、「享く奔走して天畏を畏 君臣僚友の間の饗宴に用いる字である。享にまた副 せん」、〔趙曹鼎〕「用て倗(朋)友に饗せん」など、 鐘〕「我皇祖文考に、用て享し用て孝せん」のよう それ用て朝夕して、皇祖考に享せん」、「王孫遺者それ用て朝夕して、皇祖考に享せん」、「皇子ないも 祝嘏(神への祝詞)の辞に多くみえ、〔克盨〕「克、は生人の間にいう語である。享は銘文の末に加える であり、享は先人を祀るときに用いる祭祀用語、饗 享と饗との用法上の区別は、金文では極めて明らか ころが多く、必ずしも字の本義によるものではない。 る用字の別をあげているが、これらは慣用によると 饗、〔左伝〕にはみな亯を用いるなど、経籍におけ の両形をもって録する。両字の間に、 象形 ある。亨・享・亯と三様に釈されるが、 籀文の字形は、下は台基、上は建物の形で 饗は「令設」「用て王の逆造(出入) いくらか声義 いま亨・享 に饗

> 祭事の用語である。字形について、これを烹飪の器 の形とする説もあるが、建物の形であることは明ら かで、そこに神を祀るのであろう。金文に 神霊が臨むとされた。〔説文〕五下に「孝經に曰く、 一子状の門がある形。いわゆる重京の象で、そこに 神霊が臨むとされた。〔説文〕五下に「孝經に曰く、 祭るときは則ち鬼これを高く」を引くが、字はいま 等。に作り、〔石台本〕は亨、〔群書治要〕は饗に作る。 享に作り、〔石台本〕は亨、〔群書治要〕は饗に作る。 享に作り、〔石台本〕は亨、〔群書治要〕は饗に作る。 等に作り、〔石台本〕は亨、〔群書治要〕は饗に作る。 「烹る」の意に用いるのように亨通の意に用いる。 には多く「元いに亨る」のように亨通の意に用いる。 「烹る」の意に用いるのは烹の仮借で、声義ともに 異なる用法である。

兄 8 キョウ(キャウ)・ケイ

常 各品 角角

を設けてある形。これを軍営や都城の入口に建ててを設けてある形。これを軍営や都城の入口に建ててを設けてある形。これを軍営や都城の入口に建ててを設けてある形。これを軍営や都城の入口に建ててを設けてある。「武文」五下に「人の爲る所の絕だ高き丘なり。高の省に從ふ。」は高き形に象る」と高を正なり。高の省に從ふ。」は高き形に象る」と高と山陵の若し」とあり、その「高誘注」に、戦ること山陵の若し」とあり、その「高誘注」に、戦ること山陵の若し」とあり、その「高誘注」に、戦ることは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の楼をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の横をもつ京観のことであろう。京観のとは、二層の横をもつ京観のことであろう。京観の

ことは「左伝」宣十二年、楚が邲の戦いにおいて、出行の軍者である晋を撃破したとき、臣下のものが発王にすすめて、「君なんぞ武軍に築き、晉の尸を楚王にすすめて、「君なんぞ武軍に築き、晉の尸を建土して、京観を作るという。これが京字の古義で、自のである。ト辞に義京・磐京などの名があり、そこでは、「義京に羌三人を宜し、十年を卯かんか」をこでは、「義京に羌三人を宜し、十年を卯かんか」でで表に、多数の異族犠牲や牢牲を用いて祀ることをトしている。その各辞の下に、左・中・右の一字をしるす例であり、左中右三軍のうち、それぞれ軍礼としている。その各辞の下に、左・中・右の一字をしるす例であり、左中右三軍のうち、それぞれ軍礼としている。その各辞の下に、左・中・右の一字をしるす例であり、左中右三軍のうち、それぞれ軍礼としている。その各辞の下に、左・中・右の一字をしるす例であり、左中右三軍のうち、それぞれ軍礼としている。その各辞の下に、左・中・右の一字をしるす例であり、左中右三軍のうち、それぞれ軍礼としている。その各辞の下に、左・中・右の「直す」といてこの犠牲を供したのであろう。この「直す」といる。

に用いる。 は後世の解釈にすぎない。のち京様・都雅の意の意で、「公羊伝」 植九年「京は大なり。師は衆なの意で、「公羊伝」 散九年「京は大なり。師は衆なち国都を京師という。もと京観と師旅のあるところ

供 8 そなえる・すすめる・とも

が 8 キョウ (ケフ)

翻叶叶

大衆を動かすには、必ず先づ社に事することあり、師には社に宜す」、また〔爾雅、釈天〕「大事を起し、

礼には「礼記、

上帝に類し、

ぬし、社に宜す」、〔周礼、大祝〕「大王制〕「天子まさに出でんとすると

じ。いずれも劦の声義を承ける字である。 形画 声符は劦。劦は表を三本あわせた形で、農 耕に協力すること、共同作業をいう。〔説文〕一三下 に「衆の同に和するなり」とし、刕と十とに従うて に「衆の同に和するとしている。」

れらは周の神都である。周都は宗周といった。のり、〔詩、大雅、文王有声〕に鎬京辟雅があり、そり、〔詩、大雅、大王有声〕に鎬京辟雅があり、その古俗が用いられている。金文には葬京『詩を書きる』

が築いた京観はまた髑髏堆とよばれており、

なおそ

た。王莽が築いた京観はまた觸骨台とよばれ、後魏て作られるこの京が、軍社の起源をなすものであっ辞における京の宜祭にあたる。すなわち積尸封土ししかる後に出づ。これを宜といふ」とあるのは、ト

怯の「猛」のおそれる「ケフ」

¶ 8 キョウ (キャウ)・コウ (カウ)

形声 声符は況。兄は祝禱の器を戴 形声 声符は況。兄は祝禱の器を 長兄が配廟につかえるものであった。怳とは祝禱してエクスタシーの状態にあることをいう。〔説文〕 「〇下に「狂ふ鬼なり」とし、況の省声とするが、兄は巫祝、これに神霊の下るのを登(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのを登(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのを登(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのを登(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのを登(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのをを(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのをを(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのをを(悦)といい、兄は巫祝、これに神霊の下るのをを(悦)といい。「祖本鬼」の解寄は、字であろう。〔淮南子、原道訓〕に怳惚、〔礼記、祭を、状態をいうが、況はおそらく怳、寄とは寄り憑く意であろう。〔淮南子、原道訓〕に怳惚、〔礼記、祭を、状態をいうが、況はおそらく怳、寄とは寄り憑く意であろう。〔淮南子、原道訓〕に怳惚、〔礼記、祭を、状態をいうが、況はおそらく怳、寄とは寄り憑く意であろう。〔淮南子、原道訓〕に怳惚、〔礼記、祭を、状態をいうが、況はおそらく怳、寄とは寄り憑く意であろう。〔淮南子、原道訓〕に怳惚、「礼徳の語」に恍惚、曹値の、「神女の賦の序」に怳惚の語。〔説文〕に恍惚

て巫祝の入神の状をいう語である。 の字なく、ただ怳のみを録する。怳・悦・脱はすべ

況 況 ありさま・ここに・いわんやキョウ(キャウ)・コウ(カウ)

形声 ところで、古くは家兄が一家の祭祀の 声符は兄。兄は祝・兌の従う

とあり、矤は「いはんや」とよむ字であるが、字義 を承ける。〔説文〕矢部五下矤字条に「況詞なり」 からいえば況が本字である。 とがあり、〔礼記、聘義〕に「北面拜況す」の語が ある。況の諸義は、 意が生れる。 文献に至ってみえる。また字を况に作るものは漢碑 にはじめてみえ、〔説文〕にはなおその字を収めて のと思われる。抑揚語法は〔孟子〕など、戦国期の らに「況んや……をや」という抑揚語法となったも にすぎない。字の本義はおそらく神気の下る状態を 歎す」のほか、「ますます」のような語詞例をみる 訓しているが、〔段注〕にいうように、その用例が いい、それより語詞の用法に転じたもので、 あろう。〔説文〕一上にはこの字を「寒水なり」と らくその状態をいう語で、惝怳の意を含むものでし、神気の彷彿として下る形である。況とは、おそし、神気の彷彿として下る形である。況とは、おそ た。兄は祝禱の器を戴く人の形、兌はその祝禱に対 金文に大祝食というものがあり、大祝の職にあっことにあずかり、巫祝となった。周公の子伯禽は、ことにあずかり、巫祝となった。周公の子伯禽は、 ない。状況の意よりまた比況の意となり、比較の 古い用例では、〔詩、小雅、常棣〕「況に永 既と通用して、賜眖の意に用いるこ すべて祝禱を意味する兄の字義 のちさ

羌 8 羌人 キャウ)

養 ず等 ** 新 3 爷爷弟

である。捕えた羌人たちを都に送ることをトした か」というのは、そのために軍を行動させているの るのであろう。「自(師)はそれ羌を隻(獲)ざる 礼とされている。また「羌 搊五十を獲ることある 京・磐京の儀礼では、「羌三十人を宜」ことが常います。 か」とトするのは、遊牧中の羌人を襲撃して捕獲す 羌族の頭飾の形と辮髪とが、はっきりと示されてい したものが甚だ多く、また一時に用いる犠牲の数も、 る。ト辞には、羌人を捕獲し、犠牲とすることをト 種族であろうと思われる。挿図の金文の図象には、 辮髪を加えている形のものがあって、チベット系のメ、メータ。 | ト、チピ。 | ト辞は時期によってその字形を異にするが、後頭に るが、卜文の羌字は羊・人に分別すべき形ではない。なり」とし、羊・人の会意にしてまた羊の弥声とす 族の祖神であった。〔説文〕四上に「西戎、 羌人の頭部と同形である。その岳神伯夷は、姜姓諸 は、卜文では番の字形にかかれ、山上を羊頭に作り、 れるが、姜姓諸族の聖地とされる嶽(のちの嵩山) ようである。姜姓の諸族は羌種から出ていると思わ 牧羊族であり、古く羊頭神の信仰をもってい 羊頭の人に象る。西戎の一とされる羌人 牧羊人

> ではない。その一部は早く華化 牲は、卜辞によって考えると、この羌人以外のもの の処を異にして、一坑に十体ずつ収められている人 る。殷墓に残されている数千に上る断首葬、身首そ 肉をおく形、その肉を刳取して供える犠牲の法であ磬京で「三十羌を宜さんか」という宜とは、俎上に 三百罕を如かんか」「それ五十羌(を用ひ)、三牢を 「來羌(羌を寳らす)」「携羌」の辞例も多い。 には五十羌・百羌を用い、ときには「百羌を箙き、 X;

た。その原住の地は、姜姓の伝 俗を守るものは遠く西境に去っ して姜姓の四国となり、なお古

羌

ったらしく、嵩嶽がその聖地であった。承によって考えるといわゆる豫西、河南の西部であ承によって考えるといわゆる豫西、河南の西部であ

俠。 おとこだて

ていた墨家の末流が、いわゆる兼愛的行動をとってゆる任俠の風は戦国期に起り、特に集団的に行動し 墨俠とよばれた。都市に人口が流れ、 或いは曰く、粤使なり。三輔(都附近)にては、財 それは金ばなれのよいことをいう。万部五上に「粤、条に「俜は使なり」という。傍使という語があって、 を輕んずるものを謂ひて甹と爲す」とみえる。 意に用いるが、俠字条八上では「傳なり」、その前(こ)との下に「二人を俠む」と俠を挟持の 形声 声符は夾。〔説文〕は夾字条 他所者がふえ わ

大都市が成立してからのことである。 の亡命者は盗、盗の都市生活者が俠であったと考え 私交をもって縄張りを張る任俠の徒が生れる。古代 ると、氏族的秩序や伝統的な共同体的体制が失われ わが国で俠が発生するのも、流入者の多い

姜 9 姓の名(キャウ)

等等第

周が殷を滅ぼすに及んで、姜姓四国はその故地をは岳に雨を祈り年穀を祈ることを卜するものが多い。 たのであろう。殷の興起によって、その故地は殷の嶽の岳神伯夷である。姜人は早くからこの方面にい紫で 帝を姫と爲し、炎帝を姜と爲す」とあり、この姫姜 炎帝は姜水を以て成る。成りて德を異にす。故に黃 娶りて黃帝・炎帝を生む。黃帝は姬水を以て成り、のであろう。〔国語、晋語〕に「昔少典、有蟜氏に 文〕二下に「神農、姜水に居り、以て姓と爲す」彩声 **い下部を女にかえて、姜姓を示す。〔説 助けた人である。武王が紂を伐つことに反対したと 太公望呂尚ははじめ河南西部にいて、周の東伐をない。ほうではいる。 国復し、斉のみが山東経営のために東海に移された。 支配下に入り、岳神の祭祀権も殷に帰して、卜辞に 二姓は、歴代通婚の関係にあった。姜姓には古く と水名とするが、水名はむしろその種族名によるも (甫)・許・斉の四国があり、その祖神は嵩

> 地にあった苗族との、神話的葛藤を主とする構成を の地であったことは、「書、呂刑」が、当時湖北の を忌避したからであろう。かれらの故地が河南西部 伝承である。伯夷・叔斉が、武王が紂を伐つこと 典〕〔皋陶謨〕などに展開しているが、みな姜姓の既した〔書、呂刑〕にみえ、さらに〔尭典〕〔舜 もつものであることからも知られるのである。 に反対したのは、かれらがもと牧羊族で、その戦争 「無化した〔書、呂刑〕にみえ、さらに〔尭典〕〔舜此にられるものは皋陶で、その神話は姜姓の神話を経祀られるものは皋陶で、その神話は姜姓の神話を経れられるものは皋陶で、その神話は姜姓の神話を経れる。 される伯夷は岳神。許で祀られるものは許由、 皋で

峡。(峽)10 かい キョウ (ケフ)

国語の山峡は「山交ひ」の名詞形とされる。の意があり、山のはざまの狭まったところ 形声 旧字は峽に作り、夾声。夾に俠・狹(狭) 山のはざまの狭まったところをいう。

恊9 かなう・ちからをあわせるキョウ(ケフ)

礼、大史」「協事」の〔釈文〕に汁に作る本があり、然、大史」「協事」の〔釈文〕に汁に作るが、協は古く十声の字であったらしい。〔周る。字はまた協に作り、〔段注〕に「十は衆なり」 と協とを別の字として出している。 その音は執であるという。それならば恊は、協・叶 の意。〔説文〕「三下に「同心の龢(和)なり」とす とは音の異なる別の字である。〔説文〕も劦部に恊 形声 わせて共耕することを示す字で、 声符は劦。劦は三つの耒をあ 協力

恟

この系列字は、すべて凶の声義を承けている。 動悸をおぼえるもので、それを恟という。凶に従うで匈とし、胸の部位を示した。兇懼のときには胸に 意味で×形の文身を加えた形。それに側身形を加え 胸の部位を示した。兇懼のときには胸に はもと凶死の人の胸部に、呪禁の 声符は匈。匈は胸の初文。

拱 9 こまねく・かかえるキョウ

と片手の意である。 身をかがめる姿勢である。手は右内左外を原則とし、 古く九拝の礼があり、みな手を胸もとにかさねて、 〔説文〕 三上に「手を斂むるなり」とは、拱手の形。を奉ずる形。拱とは拱手をいう。 にこれに反する。拱木は一かかえの木、拱把は両手 女子はその逆とする。また凶礼のときは、男女とも 形声 声符は共。共は両手をもって

挟。 はさむ・もつ・たのむキョウ(ケフ)・ショウ(セフ)

恃むことを勢を挟む、賢能を恃むことを賢を挟む 「夾介(助ける)」のように夾を用い、 摯に握持、操に把持、攝(摂)に引持、捫に撫持のの初文。[説文]二三に「俾け持つなり」とあり、の初文。[説文]二三に「俾け持つなり」とあり、場・一 つことによって、それを恃み誇る意となり、勢威を ずることを挟書の律という。のちの禁書である。 は挟を用いる。挟書は書をもつこと。特定の書を禁 ようにいうのと同例である。古くは〔書、多方〕 旧字は挾に作り、夾声。夾は のち俠あるい

とを「挟治」といい、その義にはセフの音でよむ。うのは、心に強く抱く意である。普くゆきわたるこうのは、心に強く抱く意である。普にゆきわたるこという。また節義を持することを「義を挟む」とい

狭。 (灰)10 せまい(ケフ)

であろう。 字が獣(犭)に従うのは、せまい獣道を意味したの 旧字は狹に作り、夾声。夾に狭の意がある。

。 俗 さらしくびキョウ(ケウ)

に七(化)を加えた眞、眞(真)とは呪霊としての 法を示す字とみてよい。、場に残骨を存するものは上 である。 ****・****、これを殴つものは放、その首を存するものは 形で、これを殴っ 代に、 つものは、徴(徴)、これらもみな祭梟的な呪術の方***** が、文字構造のうちにもその蹤迹を多く存している。 たとえば方は屍を架したさらし首、すなわち祭梟の とは、殷墓の数千に及ぶ断首葬によっても知られる の初形は、首を木の枝に繋けた形である。中国の古 梟す」の注に「首を木上に懸くるなり」とあり、縣 とは別の字。〔漢書、高帝紀〕「もとの塞王欣の頭をとは別の字。〔漢書、高帝紀〕「もとの塞王欣の頭を県の字なり」とする。いま縣の略字として用いる県 敷 。方・敷に従う字はすべてその声義を承ける字 九上に「到首なり。賈侍中の説に、これ斷首到縣のから、梟首の字としては愚が正字である。〔説文〕から、梟首の字としては愚が正字である。〔説文〕 断首祭梟のことが大いに行なわれていたこ

> 矜 9 永生をえたものをいう。 あわれむ・ほこる(クヮン)

> > 10

「矛の柄なり」とあり、矛を意符とす 声符は今。〔説文〕一四上に

明らかにしがたい。 ちに求めがたく、声の仮借であろうが、その関係を 槿に作り、予槿ともいい、〔説文〕の「矛の柄なり」に作る。矜と鰥とを、同音に用いている。矜はまた 〔書、尭典〕「鰥あり、下に在り」を〔史記〕に於 とする解はその義。哀矜・矜誇の義はこの字形のう の「鄭鑑」に「妻無きを矜といふ」とあり、また いる。 奢・矜伐のように、人の性情や態度をいう語に用いている。これではない。これではないではないであるからその意の字であろうが、用例はない。る字であるからその意の字であろうが、用例はない。 (語)、小雅、何草では、「何人か矜まざらん」(語、小雅、何草では、「何也となる」では、からに、人の性情や態度をいう語に用け伐のように、人の性情や態度をいう語に用

恐10【恐】10 おそれる・かしこむ

醪 T

鞏固の意。恐・鞏はともに巩に従うており、それ**** から分岐した字である。

> がみえる。その字形は竜形の神像を奉ずるもので、 雙 ・觏の字があり、[三体石経]の古文にその字***** がいの初文である。恭の専字として、金文には別にの初文である。 禹設」「明德を共む」は恭の意で、共はすなわち恭か。 がで、「―… っと、「ない」は恭純、「叔 向父に(伯 教設)「德を乗ること共純」は恭純、「叔 向父にない。」は、「我のを奉ずる形で、恭敬の意を含む。金文には手でものを奉ずる形で、恭敬の意を含む。金文には 荫 手でものを奉ずる形で、 「蕭なり」とみえ、恭敬の意。* 形声 つつしむ・うやうやしいキョウ 声符は共。「説文」「〇下に

胸 10 むキョウ

その奉ずる心意をいう字である。

えて胸となる。みな一系の字である。 ており、 凶の義を強調する字は兇、それに肢体の意で肉を加 うちにすでに含んでいる。凶に側身形を加えて匈、 として施す字であるから、凶悪と胸部の両義をその 凶声とする。凶は胸郭に×形の文身を呪禁 「説文」九上に「匈は膺なり」と訓し、形声 声符は匈。匈は胸の初文。

脅 10 [脇] 10 わき・おびやかす

で、肋は一本、劦は多数の肋骨をあらわすとみてよ はまた脇に作る。肩をそびやかすことを脅肩という い。〔説文〕四下に「兩膀なり」とは両脇の意。字 しかしこの字においては肋骨の相並ぶことを示す形 せた形で、共耕を意味し、協の初文。 形声 声符は劦。劦は三本の耒を合

脇側、 うに用いる。脇と同字異構の字であるが、 する。怯に通じ、また劫に通用して脅従・脅辱のよ りも病る」というように、それは卑屈な態度を意味 「孟子、滕文公、下」に「脅肩諂笑するは、夏畦よいます。」というない。 脅を威劫の意に用いる。 いま脇を

10 やまあい・せまいキョウ(ケフ)

の意でないものがある。〔説文〕-四下に「隘きな るが、大秦の古い用例がみえない。ト文・金文にお 迫るところをいう。 り」、〔玉篇〕に「廣からざるなり」とあり、地勢の するものであるが、後起の形声字には、必ずしもそ いて、阜部に属する字は、みな神梯のある聖所に関 形声 うにも用い、狹(狭)と殆ど同義であ 声符は夾。陝隘・陝少のよ

強 强 つよい・しいてキョウ(キャウ)・ゴウ(ガウ)

松脂などを塗り、 文に疆土の疆に用いる字で、強とは別義。また强は るとは思われない。字は、畳と通用するが、畳は金 血を吸う虫の名とするが、その強蚚が字の原義であ をいう。〔説文〕一三に「斬なり」とあり、牛馬のたのであろう。強とはその弓弦の強靭であること 天蚕から抽出したもので、蚕の意であろう。天蚕に その下に虫をしるしているのは、おそらくその弦は 弘と虫とに従う。弘は弓弦をはずした形、 くすね糸を作る方法が知られてい

キョウ

強[强]

教(教)

梟

故に君子は和するも流れず。強なるかな矯たり。中死して厭はざるは、北方の強なり。勇者これに居る。るは南方の強なり。君子これに居る。金革を衽とし、 とき、 う。「髪、蚊針、象伝」にも「天行は健なり。君子と。強の道を説いて、至れるものというべきであろと。強の道を説いて、至れるものというべきであろ 以て自強息まず」の語がある。 きときは、死に至るも變ぜず。強なるかな矯たり」 も塞(節)を變ぜず。強なるかな矯たり。國に道無 立して倚らず。強なるかな矯たり。國に道あるとき か、抑いは女の強か。寛柔以て教へ、無道に の意となる。〔中庸〕に、子路が強について問うた ら勉強・強行の意となり、むり強いする強迫・強制力・強健・強固の意となり、むりにつとめることか 俗字である。弓弦の強靭であることから強弓・強 孔子は答えていう。「南方の強か、北方の強 報いざ

教』 [教] 1 おしえる

李5

〔説文〕 三下に「上の施すところは、下の效ふとこ 生活の規範を教える。支は長老たちの教権を示す。 なった。指導者は氏族の長老たちで、氏族の伝統や 齢の子弟を集めて、秘密結社的な生活と教育とを行 は屋上に千木のある建物の象形。古代のメンズハウ会意 旧字は教に作り、爻と子と支とに従う。爻 スとして、神聖な形式をもつ建物で、ここに一定年

> 「敷ふるは學ぶことの半なり」という語がある。「敷ふるは學ぶことの半なり」という語がある。[礼記、学文王世子]などに、詳しい記述がある。[礼記、学文王世子]などに、詳しい記述がある。[礼記、学えばかま] に「教學相長ず」、また〔書、梵の表言、記述、「はいま」に「教学の制度については、「周礼、大司寇」(礼記、学ればいま)に附設される機関であった。周代の貴族子(神宮)に附設される機関であった。周代の貴族子(神宮)に附設される機関であった。周代の貴族子(神宮)に では「大盂鼎」に王が「小學」に即くこと、「静までは「大盂鼎」に王が「小學」に即くこと、「静までは上朝的な規模において行なわれていた。周のまでは上朝的な規模において行なわれていた。周のまでは「明的な規模において行なわれていた。 なわれ、 設〕には「學宮」の名がみえており、いずれも辟雍。 都に集めて、教戒することをトする例があり、 いられる。古代の教学は年齢階級的な教化機関で行として記を加えた形は敷、略して學(学)の形で用 に、多方の小子小臣、すなわち豪族たちの子弟を国 する古文第二字は、その形である。また教に、声符 うものではない。効ももと教の字で、〔説文〕に録 に従うて会意とするが、孝は老に従う形で、爻に従 ろなり」と教・效(効)の畳韻を以て訓し、字を孝 もと秘密講的な性格のものであった。卜辞 殷代

梟 ふくろう・さらしくびキョウ(ケウ)

といふ。 あり、〔注〕に「鼓造とは蓋し梟をいふ。一に蝦蟇 なわち梟磔をその本義とする。「淮南子、 木部に属し、さらし首や、はりつけにすること、 不孝の鳥とは鴟鴞のことであるが、〔説文〕は字を に「鼓造は兵を辟くるも、壽は五月の望に盡く」 これを磔す」とし、鳥頭を木上に著けた形とする。 いま世人、五月五日の望に梟羹を作る」 会意 に「不孝の鳥なり。日至に梟を捕りて 鳥と木とに従う。〔説文〕六上 ۲

梟帥とよんでいる。 崇将・梟雄という。〔日本書紀〕には、異族の長を 鳥で猛禽であるから、乱世の雄将をこれにたとえて 「梟たり鴟たるをや」とあって、鴟鴞の属。梟は悪 形にかかれ、鳥の異文とされる於は派とかかれてい の羽を解いて縄にかけわたした。それで烏は死鳥の 鳥害が甚だしく、それで鳥を木の枝につけ、またそ る。爪は解羽を縄にかけわたしている形。これをの ちに行なわれるに至ったことである。古くは農耕に ものであろう。夏至梟羹のことは節供の行事で、のとに及んでいない。字はおそらく磔鳥を原義とする に、これを食ふなり」とあるが、いずれも磔鳥のこ を作り、以て百官に賜ふ。その惡鳥なるを以ての故 に、「漢、東郡をして梟を送らしむ。五月五日、梟羹 百吏の祠にみなこれを用ひしむ」、また「如淳注」 破鏡は獸名、父を食ふ。黃帝その類を絕たんと欲し、 「音義」に引く「孟康注」に、「梟は鳥名。母を食ふ。 至梟羹の礼があるという。〔漢書、郊祀志、上〕の 〔繋伝〕に「漢儀に、夏至を以て梟業を作り、以ていば、「漢人」という。 鼓造の合音は梟あり、梟をあつものにするという。 鼓造の合音は梟 百官に賜ふ。その類を絕たんと欲するなり。夏至に 微陰始めて起り、萬物を育す。梟はその母を害 を 故にこの日を以てこれを殺すなり」といい、夏

わる・ついにョウ(キャウ)・ケイ

電 Y

係はない。 字の立意は竟と全く異なり、章とは文章の美、すな 〔説文〕のいう楽曲の終りを意味するものは章。 〔説 は竟を踰えず」などは、なお竟の字を用いている。 〔礼記、曲礼、上〕「竟に入りては禁を問ふ」「祭器のき、ませる。 いき、ませる。 ことを竟といい、またこれを地に施して境という。 文〕三上に「章、樂竟るを一章と爲す」とみえるが、 ることをいう。それですべてことの終結、終了する であるから、竟とは祝禱の竟ること、その成就すひ」である。その神の応答があることを示す字が竟ひ」である。 二人並んで祝禱する形である。祝禱である言に対し わち文身を意味するもので、両者の間に字形上の関 て、神の応答があるのを音という。いわゆる「音な 部は言、すなわち祝禱を示し、その祝禱を捧げて、 るを竟と爲す」とあって、終竟の意とする。競は上 音と人とに従う。〔説文〕三上に「樂曲盡く

郷1(郷)13 むかう・さと

なる。〔説文〕 メトトに「國の離邑、民の封ぜらるる饗飲酒礼は村落の重要儀礼であるから、郷村の意と またその礼に与る人の地位を示して卿となる。そのかう意より響となり、饗食する意より響となり、にして、左右に人が相向かって坐する形。その相向にして、左右に人が相向かって坐する形。その相向 会意 饗宴の際の盛食の器である設(宮)を中 98°

治組織を郷党という。 限定する声符となる。本籍地を郷貫といい、 重複している。また嚮においては、郷はその声義を 〔説文〕 カ上に別に卿字を出して「章かなり」と訓用い、それぞれの字はのちその字形に分化する。 に在りて郷醴す」のように、やはり神事や儀礼の逆遣(出入)に郷す」、〔師遽方彝〕「王、周の家院がき。(出入)に郷す」、〔師遂方彝〕「王、周の家院は、『春殿〕「用て王の共饗をも郷といった。金文では〔令殿〕「用て王の共饗をも郷といった。金文では〔令殿〕「用て王の共響をも郷といった。金文では〔たま) った。饗においては、食器の形である息が、上下に 饗・嚮・曏および卿の字が別に行なわれるようにな 専用するに及んで、この一字であらわされていた うて坐する形で郷と同形。郷をのち郷村離邑の意に して卿事・卿事寮・正卿・卿大夫のように、公卿のうのが定式であるが、北郷は北嚮。また官職の名とうのが は「立(位)に中廷に卽きて、北郷す」のようにいときに饗宴が行なわれている。また廷礼冊命金文にしる。 ある。すなわち金文では郷を饗・嚮・卿・曏の意に るに、又(祐)を受けられんか」のように饗の意に郷は卜辞に「王は祖辛に郷せんか」「これ王は郷す 微の諸職があり、 嗇夫は聴訟・賦税を職とする。 し、卯を「事の制なり」としているが、人の相向こ ものであろう。〔漢書、百官公卿表〕に、県の十里六卿これを治む」とあり、これは漢制によって説く に一亭、十亭に一郷、郷に三老・有秩・嗇夫・ 所の郷なり。嗇夫の別治なり。封圻の內の六鄕は

喬 指育 清 金角角

12

かョ

い・すぐれる・おごるウ(ケウ)

喬とは高所に神霊のある意。その神威のさかんであ 邁〕に「百神を懷柔し、河と喬嶽とに及ぶ」とあり、ところの楼門で、これを喬という。〔詩、周頌、時ところの楼門で、これを喬という。〔詩、周頌、時またその屋上に桙立てをしているのは、神明を招く 造物である。その門下に祝禱の器である日をおき、 望楼のある、いわゆる楼門の形。すなわち聖所の入 高は亭・京と同じ構造の建物で、アーチ状の門上に *立てている形で、いわば棒立てをした建物である。を加えたものであるが、金文によると枝のある木を はない。〔説文〕は字を天に従うと解し、天曲の義 句を引いている。〔毛伝〕に「上竦めるなり」とあ ふ」といい、〔詩、周南、漢広〕「南に喬木あり」の に「高くして曲れるなり。天に從ひ、高の省に從それが字の初形であろうと思われる。〔説文〕一〇下 の上に呪飾として表木を立てた形の字形があり、 敢て喬を爲すにあらず」とあり、神威を仮りて驕る 鐘に腹の竜飾の騰躍するような姿をいう。また「余、 口に、邪霊の出入を呵禁するために建てた呪的な建 って一本杉のような高竦の木をいい、高曲の義で ことを喬といい、嬌・憍・驕などみなその声義を承 篆文の字形は高と夭とに従う。金文に、高 〔部鐘〕「喬々たるその龍」のように、 キョウ 喬 貺

> 飾をつけて二矛を連ねたものをいう。 ける字である。矛や盾に呪飾を施したものをも喬と い、〔詩、鄭風、清人〕の「二矛重喬」とは、羽

貺 12 たまう・おくるキョウ(キャウ)

鸎 \$

[儀礼、士昏礼]「吾子、惠あり、寶(麦)を某に貺なり」とし、〔詩、小雅、彤弓〕「中心これを貺ふ」、会意・ 貝と兄とに従う。〔説文新附〕六下に「賜ふ会意・ 貝と兄とに従う。〔説文新附〕六下に「賜ふ があり、 の意である。 に「五侯祉(人名)、 恵を示す字には、兄の袖に綏 飾をつけた形のもの ふ」のように用いる。兄は神に祈ることで、その恩 さなにその字を既の義に用いる。[保貞] 六品を兄る」というのは、 貺

敫 ¹³ もとめる(ケウ)

射 (首祭) の呪術を示すものであったという字の初義 激 求 の儀礼である。白は頭顱(されこうべ)の象 霊を鼓舞する意。旅は追放の儀礼であるが、 は、全く忘れられている。これを道路辺境において を流散の意とするもので、放・敫などが古代祭 白に從ひ放に從ふ」というのは、白を白日の光、 為を意味する。〔説文〕四下に「光景流るるなり。 で、これを殴つことは、死者の呪霊を用いる呪的行 いずれも架屍の象。その架屍に攴を加えて、その呪 会意 に頭部の形である白を加えたもので、 男と支とに従う。 男は方の上 敫は

> 行なうものは後、邊(辺)、その殴つ音は毅、***** を発する。これを文に移して、 の屍は暴されて皦く、 の系列字を解くことはできない。 ので、「光景流る」とする「説文」の字説では、 その勢を激という。みな敫の声義を承けるも これを殴てば、嗷然として声 四方に宣布するもの

款 13 うたう・さけぶキョウ(ケフ)

注〕に説解を「楚歌なり」の誤りとし、司馬相如ころなり」とし、叫呼の叫の音であるという。〔段 祝禱することを敷という。〔説文〕ハ下に「歌ふと けぶ)と同字とみてよい。 の〔上林の賦〕「激楚悲涼」の意とするが、 の呪霊を鼓舞することを敫といい、 顱(されこうべ)を加えた形が昘。これを殴ってそ 会意 象。 方も架屍の形であるが、それに頭* * 男と欠とに従う。男は架屍の これに対して

畫 13 / 編] 19 さかい・かぎり

8 電 8

象形 語がある。彊は強、のち土を加えて疆に作るが、 説もあるが、疑問である。「大盂鼎」や「宗周鐘」一号六尺、一歩と同じく、弓を測量に用いたとする り」という。金文に置に作り弓の形に従うのは、〔説文〕一三下に「界なり」とし、「三はその界書な に「彊土」の語があり、「散氏盤」には「東彊」の 田と田との間を画して、その境界を示す。

嬌 鋏

14 たび・かりずまいキョウ(ケウ)

0

僑士、旅先にあることを僑寓・僑居、外地にあるも 喬は屋上に呪飾として表木を施した高楼の形。それます 声符は喬。〔説文〕ハ上に「高なり」という 字であった。 のを華僑のようにいう。もとは神の出遊を意味する のお旅を僑という。のち人事に移して、遊歴の士を 神を招くものであり、 の表木は神社の柱や神事に用いる鉾立てと同じく、 神がしばらく宿るところ、そ

兢 つつしむ・おそれるキョウ

り。孝聲に從ふ。讀みて矜の若くす。一に曰く、兢 文〕八下に「競ふなり。二兄に從ふ。二兄競ふ意な文〕八下に「競ふなり。二兄に從ふ。二兄競ふ意な字形はその上に孝をつけており、〔説 [毛公旅鼎]に「競まざるあること母し」とあって はこの字から出たものであろう。 この字が兢の初文であろう。篆文の字形は、あるい 恭敬の意に用いており、その用義よりしていえば、 謨」「兢々業々」のように、戒懼恐慎の意に用いる。 深に臨むが如く 薄冰を履むが如し」、〔書、梟淘然だいが、〔詩、小雅、小旻〕「戰々兢々として 深近いが、〔詩、小雅、小旻〕「戰々兢々として 深 競で、二人相並んで祈る意である。兢は競と声義が 敬なり」という。二兄の上部を言の形に作るものは

> 14 さかい (キャウ)

という。 境地・境遇・境涯といい、また佳境・老境・夢幻境 区画して農耕を営む地には疆といい、社寺などの 聖地には境という。転じて一定の状況にあることを る。政治軍事的には武装して守ることを意味する域 り、場所的には境界、また地域の限界をいう語とな あらわれることをいう。それよりして終竟の意とな に祈り、 形声 ・・・)なぶとして「音なひ」の声符は竟。竟は言をもって神

言言 あらそう キョウ (キャウ)・ケイ

競は神事に関する字である。 善・競はいずれも詰に従う字であるが、善は裁判、 事をいう語である。神に献ずるものを饌という。 禱する意で、二人並んで舞う選(選)とともに、神 は争訟の神判に用いる羊である。競は二人並んで祝 告とがその善否を争う意。善は羊と詰とに従う。羊 立誓して争訟することであるから、話とは原告と被 「競ひて言ふなり」とするが、言とは会意 二言に従う。〔説文〕三上に

僵 15 たおれる(キャウ)

また「史記、淮南衡山伝」に「儒尸千里、流血質う。「戦国策、秦策」に「頭鰕儷仆し、境に相望む」、するなり」とあり、斃れ仆すことをいするなり」とあり、斃れ仆すことをいするなり」とあり、斃れ仆すことをい

字はまた殭に作る。 薑 に強の意があり、硬直する畝」とある例からいえば、遺棄屍体をいう語である。 する字である。 ことをいう。もと行きだおれ、すなわち僵屍を意味

嬌 なまめかしい・あでやかキョウ(ケウ)

字義に影響することがあると考えられるが、姣・嬌 形声字の声符が異なるとき、声符のもつ語感がその 嬌羞・嬌笑・嬌痴など、姿態を主とする語が多く。これで、姣には姣潔の意があるが、嬌には嬌艷・あって、姣には姣潔の意があるが、嬌には嬌艷・ 字である。また字義にもいくらか分岐するところが り、〔一切経音義〕には「姣、古文の嬌なり」とあ のごときはその一例となしえよう。 また嬌奢・嬌飾などには驕の語義が加わっている。 り、嬌は六朝以後に至ってみえ、姣・嬌は古今の しい。姣は先秦に用例が多く、佼とも通ずる字であって、姣を正字とする。その方が声義ともにふさわって、姣を正字とする。その方が声義ともにふさわ くところ。 〔説文新附〕一二下に「姿よきなり」とあ 声符は喬。喬は高楼の上に

鋏 かなばし・はさみキョウ(ケフ)

の故事にみえる「長鋏よ歸らんか 出づるに興ない。長鋏の陸離たるを挟む」、〔戦国策、斉策〕馮驩はまた剣をいうこともあり、〔楚辞、九章、渉江、また剣をいうこともあり、〔楚辞、九章、渉江、 とあり、 鋳造などのときに用いるかなばしである。 「以て冶器を鑄鎔に持すべきものなり」形声 声符は夾。〔説文〕一四上に

い、〔管子、問篇〕にみえている。し」とは、佩剣をいう。のち仕立てに用いる鋏をい

鞏. 15 かたい・つかねるキョウ

@

現を鞏固と恐懼の二義に用いるが、現にその両義をす」「永く先王に現れあらしめん」のように用い、す」「永く先王に現れあらしめん」のように用い、「それに、まない」「私いに先王の配命を現く形」 声符は現。現は呪具としての工を両手で捧 「鞏むるに黃牛の革を以てす」の文を引いている。 「章 を以て東ぬるなり」とし、〔易、革卦、初九〕の〔毛伝〕に「固なり」という。〔説文〕三下にの〔毛伝〕に「固なり」という。〔説文〕三下に 雅、瞻卬」「藐々たる皇天 克く鞏からざるなし」

噭 さけぶ・なく

五年「噭然として哭す」、〔荘子、 として隨ひてこれを哭す」とは、その哭声をいう。 ことを徼める呪的行為で、そのとき発する声を噭と その呪霊を鼓舞し、祈願を成就する形声を向い霊を鼓舞し、祈願を成就する形声をついている。数は架屍を殴って

16

くにざかい・つよいキョウ(キャウ)

3

形声 声符は蠆。〔説文〕一三下に「弓に力あるな キョウ 鞏 噭 彊 徼 敽

> 「萬年無疆」の疆に用いており、のち彊・疆の両字 弓体の強いことをいうものであろう。漢碑には強・蚕を用いる意で弦の強いことをいい、殭とは弓幹・ に分岐する。強の意に用いるのは後起の義である。 疆を何れも同義に用いる。 ただ金文に彊を「疆土」 を出し、「斬なり」とするが、強の本義は弓弦に天り」と強弓の意とする。〔説文〕は虫部「三ょに強字

徼 もとめる・とりでキョウ(ケウ)・ヨウ(エウ)

中、或いは千里亭徼無し」の注に「塞なり」とあるり、求なり」の訓を加える。〔漢書、食貨志〕「新秦り、求なり」の訓を加える。〔漢書、食貨志〕「新秦 二年「福を周公魯公に徼む」とは、その神霊の加護 その欲するところを徼めるのである。「左伝〕文十あった。激はその呪霊を邀える呪儀。これによってにおいて、外部から邪霊の入るのを防ぐ呪的儀礼で ので、放が放竄の呪的儀礼であるように、徼は辺徼の呪霊を激し、その徼むるところを得ようとするも儀礼に発している。敫は放と同じく架屍を殴ってそ があり、それは辺徼で行なわれる祭、梟(首祭)のが、これらの訓義の間に、その脈絡を通ずる基本義 福を祈ることを徼幸という。〔中庸〕に「小人は險 をもいい、[左伝]成十年「豈敢て亂を徼めんや」を行うて幸を徼む」とはその意。不法に徼めること 義よりいえば拡大用法である。それでみだりに神に を徼めるもので、〔左伝〕にこのような例が甚だ多 他国の祖霊の祐助を徼めるのは、本来の徼の字 声符は敷。〔説文〕三下に「循

> 承けるところがあり、そこから字義が展開している 私事をあばいて要求を貫こうとすることを微評される。君主に強要することを「君に徼む いう。敫に従う字には、みな古代祭梟の俗の遺意を のように用いる。呪霊を動かして強制することが原 بح

敽 16 つらねる (ケウ)

〔書、費誓〕に「乃の干を敵ねて、敢て弔からざるのは、攻撃あるいは防禦の際の呪的行為とみられる。 の」を載せることを歌っている。柩車の衛りに用である〔詩、秦風、小戎〕に「龍盾の合せたるもあろう。骸は車に載せることもあり、武人悼亡の詩 列戦のためのもので、門に緊戦として並べたもので当時。出土の中 山王墓の山字形三鋒戟五器も、いわゆる出土の中 山王墓の山字形三鋒戟五器も、いわゆる る。〔説文〕三下に「繋連するなり」という。近年さなものであるが、それで盾を繋ぎ合せて衛りとす ことなかれ」とあり、それは盾の上部に紛とよばれ こに神明を招く意である。それに対して攴を加える 香は高楼上に呪飾としての表 木を樹てる形で、そ の」を載せることを歌っている。 る組紐の飾りを加えることである。紛は綏よりも小 いたものであろう。 いう行為を示すものであるから、概ね会意字である 会意 に喬声とするも、支に従う字は支つと 喬と支とに従う。 「説文」 三下

橋 はし・よこにわたすきキョウ(ケウ)

節としての表本を樹てて、神を招く形声 声符は喬・喬は高楼の上に呪

具のために、高橋・浮橋及び天の鳥船また供造られたが渡したものは、わが国では高橋という。[日にかけ渡したものは、わが国では高橋という。[日のことであるが、それは漢以後の用義である。山岸のことであるが、それは漢以後の用義である。山岸 〔礼記、曲礼、上〕に「席を奉ずること橋衡の如くららか。」という。 しんじゅう きの字である。 ゆえに喬に架上・高挙の意がある。 高梯とともに、いずれも神聖のところとされ、そこ 0 た。その天に直上するものは高梯である。〔催馬楽〕ん」というように、それは神の遊ぶところともされ では橋占などが行なわれた。 はしわたす あはれ る。〔説文〕六上に「水梁なり」とは水に架する橋 淺けれど はれ 淺けれど恭仁の宮人や〔沢田川〕に「澤田川 袖漬しばかりや ね と歌われ、〔琴歌譜〕にも〔高橋ぶり〕がある。 士香礼」「纁裏は橋に加ふ」とは衣桁の類であ そこよしや たかはしわた 淺けれ たか

頰 ほお (ケフ)

去・甫の声に、左右両旁の義をもつものが多いとす。 楊敬達の〔積徴居小学金石論叢〕に、夾・劦・ないとす。 文一字を録する。その字は頁上に髪を加えている。 を頬という。〔説文〕丸上に「面旁なり」とし、"鴛鴦」を「まり」とし、"鴛鴦」を「まり」として、「おり」を「おり」として、「おり」という。 る説がある。 声符は夾。夾は左右

矯17 ためる・いつわる・つよいキョウ(ケウ)

> 駆して以て命を下に布く」、『左伝』昭二十六年「先精愛(上命と偽って奪う)」、『仲虺之誥』「上天を矯う。矯の古い用例は、たとえば〔書、呂刑』「奪 繋り、ただす意であるとするが、そのことは古くは寅とい 「矯々たる武臣、泮(宮)に在りて馘を獻ず」のよ 盾の類をいう。敽はその盾を連ねて邪悪を防ぎ衛るやを矯枉する行為をいうものと思われる。喬はまた するのが古義であろう。事実をいつわりまげること せのと思われる。ゆえに「詩、魯頌、ものと思われる。ゆえに「詩、魯頌、 意であるが、矯はこれに対して攻撃的な意味をもつ ある。これを以ていえば、矯とは矢を呪飾として、 すなわち矯枉することであり、矯正はのちの義で に用いることが多く、〔玉篇〕に「矯は詐なり」と 王を矯誣す」など、ことをまげて人を詐る矯偽の意 矯厲武勇の意に用いる。 を揉むるの箝なり」といい、矢がらを 声符は喬。〔説文〕五下に「箭 浄沈 水!

皦 しろい・あきらか・きよいキョウ(ケウ)

「麴如」として起り、「純如」「皦如」「釋如」としてれで明確な状態をもいい、「論語、「代)に、楽はが例であった。もと色の抜けきった状態をいう。そ 誓約のとき天を指して「皦日の如きあり」というの文〕と下に「玉石の白なり」とするが、〔左伝〕に、 える。その漂白されたような白さを皦という。〔説 その形義が同じで、放の上に髑髏の形である白を加 形声 その呪能を激することを示す字。 声符は敫。敫は架屍を殴って 放*

成るという孔子の語がある。

竅 18 あな・とおす キョウ (ケウ)

[斉物論] 「大木百圍の竅穴、鼻に似たり、目に似た もと頭顱(されこうべ)の空竅であることをいう。 とうがく というのはその引伸の義。竅とはり、耳に似たり」というのはその引伸の義。竅とは 七竅あり」のように、人の竅穴をいうのが原義。 あるから、竅の意となる。〔荘子、応帝王〕「人みなを殴つ形である。すでに膚肉を失って骨立する形で その呪能を激する字で、風化した髑髏 声符は敷。敷は架屍を殴って

嚮 むかう キョウ (キャウ)

即っ設*形 く (息) 意。 る例がある。 の関係に移して曏といい、金文に郷を曏の意に用いまた対坐して饗宴を行なうので饗の意となる。時間 北嚮。郷は嚮の初文。その対坐する人を卿という。 立ちて北鄕す」というのが定式であるが、 うて坐する意である。金文の冊命廷礼には「中廷に 即(即)は右に一人坐する形、郷は相向こ をはさんで、左右に二人相対し、その座に 声符は鄕(郷)。鄕は礼器の盛食器である 北郷とは

疆 さかい・かぎり

疆 通

「説文」 一三下に疆を 畺の重文として収める。 形声 声符は竇。畺は田界を画する形で疆の初文。 金文に

は弓弦の強さをいう字であった。彊を疆の意に用い その字がみえる。橿はもと弓幹の強さをいい、強鑑〕〔蔡侯盤〕など、春秋末期以後のものに至って、 るのは声の仮借。文献にはすべて疆を用いている。 「眉壽無疆」にも彊を用い、のち〔秦公設〕〔呉王光・ロミを撃った。を撃ったことでは『を輩土・疆界の意に用いている。また金文のは『を輩土・疆界の意に用いている。また金文の

鏡であったという。また陸機が弟の陸雲に与えた****。 物の武帝の御物は、尺二寸の金錯も精美を加え、魏の武帝の御物は、尺二寸の金錯ものである。漢鏡には多く吉祥の語をしるし、文様ものである。漢鏡には多く吉祥の語をしるし、文様

鏡 19 かがみ・あきらか。てらすキョウ(キャウ)

周期と考えられるものが九面あり、鏡は青銅器文のものが二面、殷の安陽期のものが五面あり、西のものが五面あり、既出土のものに彩陶文化の斉家期最も古いものは、既出土のものに彩陶文化の斉家期になる。鏡面の りも、遡ること五百年 のとされていた上村嶺虢国墓出土の三面の銅鏡よ 最も確実なものは、近年殷墟の婦好墓から出土した 期の甚だ古いものには、凹面で鏡の用に適しないも 化とともに古いものであることが知られる。ただ時 四面の銅鏡をあげうる。 のがあり、それはあるいは陽燧であったかもしれな 燧をとるためのものであった。鏡として時期の 陽燧は、光の反射によって日光を一ヵ所に集中 声符は竟。古くは水鑑を用い これは従来、最も確実なも

0

馬角

育19 12 つつしむ

とは影の意で畳韻の訓、鑑・鏡は双声の字である。 簡略にしたものと思われる。〔説文〕一四上に「景なり」 鏡銘には多く竟の字を用いるが、鋳作のため字形を 古小説の〔古鏡記〕にその霊験談をしるしている。 う。鏡の精妙なるものには破邪の力があるとされ、 尺余、広さ三尺二寸、庭中に立てて姿見としたとい 書によると、仁寿殿前におかれた大銅方鏡は高さ五

澄澈となるみごとな では鏡体が玉のように の日光鏡は、ある角度 精美を加え、近年出土 鏡の制作はのち次第に の時期のものである。



婦好墓の銅鏡

「猫鐘」「先王それ嚴として帝の左右に在り、不親

として天命を親夤す」は、

恭夤すの意である。

難は

鄭保す」とあって、 またでは、 「厥の德を淑哲にす。肆に克く厥の辟 蝉(恭)王を「厥の德を淑哲にす。肆に克く厥の辟 蝉(恭)王を押〕に中で行なわれる呪儀である。金文の〔だこれで 地名に用いるが、广・一に従う字もあって、廟屋の字は明らかに竜を奉持する形で会意。ト辞には字を 献には殆ど使用例がない。また「龍聲」とするも、 会意 われる。〔説文〕三上に「惑むなり」とするが、文 する形で、古代にそのような呪儀があったものと思 \$ 龍(竜)と廾とに従う。竜形のものを奉持 颗额 恭字の義。字はまた觀に作り、

> 「象恭し」を〔王尊伝〕に「襲し」に作る。襲は蟬ふ」を〔漢書、叙伝〕に、龔に作り、〔書、菩・哉、ふ」を〔漢書、叙伝〕に、龔に作り、〔書、菩・哉、ふ」を〔漢書、叙伝〕に、龔に作り、〔書、苦・哉、ふ」できる の異文。〔左伝〕にみえる豢竜氏・御竜氏は、 の獣を用いる呪儀を掌ったものであろう。

競 20 きそう・すすむキョウ(キャウ)・ケイ

100 N

別はあまり定かではないが、競は言に従う形である。 あるが、明らかに言に従うものもある。兢と競との が言でなく、巫祝者の礼冠の形かと思われるものも 神楽を奏する選(選)と同じく、ともに神に奏する である兄(祝)が相並ぶ形。・兢と字の構造が似てべきでなく、竞は言を戴く人の形で、祝禱を戴く人 二人に從ふ」という。しかし字は謂と二人とに分つた「一に曰く、逐ふなり」とし、字形は「謂言從ひた「一に曰く、逐ふなり」とし、字形は「謂言從ひ 会意 いている。競の卜文や金文図象にみえる字は、上部 意。〔説文〕三上に「彊語なり」とは畳韻の字の彊 いる。二人並んで祝禱するのは、二人並んで舞い、 をもって訓するもので、相争う語の意であろう。 成ることありて競ふなし」と、その義に用 二竞をならべた形。二人相並んで祝禱する 0

響 20 【響】22 ひびき・おと

のがあり、いわゆる鶯張りの廊である。呉王は西響が正字。春秋末の呉王の宮に「響 屧廊」という國の望なり。いま王と言ふこと響くが如し」とみえ、 「應ずる聲なり」というのがよい。〔荀子、勧学〕に音三上にも「聲なり」と訓している。〔玉篇〕に音三上にも「聲なり」とあり、〔説文〕はまた 施をその宮においたといわれる。 を発するを響という。「左伝」昭十二年「音子は楚「君子は嚮の如し」と嚮を用いるが、相郷うて共鳴 形声 声符は郷(郷)。〔説文〕ごと

饗 さかもり・も なす

礼の際にしばしば饗宴・饗醴が行なわれるが、字は にはみえず、古儀とはしがたい。金文には祭祀や儀 が成立したのちであるから、かなりのちのことであ となるのは、血縁的な秩序が失われて、地縁的秩序 の饗宴に与る身分のものを卿という。郷が郷党の意 廷における儀礼である。郷と卿とは同形同字で、そ 臣下より納饗の儀礼を献ずることもあるが、みな宮 みな郷を用いる。王が饗酒を賜うこともあり、また するが、郷は郷人の意ではなく、郷飲酒の礼も金文 郷の繁文である。〔説文〕五下に「郷人飲酒するな らわし、饗の初文。饗はさらに食を加えたもので、 こといわゆる郷飲酒の礼と解し、字を郷の亦声と 左右相対して人の坐する形で、饗宴のさまをあ 声符は郷 (郷)。郷は虫 (段、食器) の前

> て、また「史記、魯周公世家」に「高宗(殷の武く」、また「史記、魯周公世家」に「既に右けられてこれを饗〔詩、周頌、我行〕に「既に右けられてこれを饗きによって人に佑助が与えられることを饗という。 射の意とするが、郷射は金文に卿射というもので、 用する。「周礼、司服」に饗射の語がみえ、注に郷丁)國を饗くること五十五年」とあり、字は享と通丁、 賓主が左右両班に分れて会射することをいう。 る。祭祀饗宴を神が享けることを饗といい、また神

> > 仰

6

あおぐ・おおせ (ギャウ)・ゴウ (ガウ)

形声

声符は叩。叩は人が仰臥し、

ギョウ

驕 おごる・たかぶるキョウ(ケウ)

から、

る。

れで下よりすれば仰ぐ、上よりすれば抑える字とな

これを上から抑えている形である。そ

すなわち卬は能動・被動の両義のある字である

のち仰・抑をもってその義を示した。〔説文〕

着

〔詩、小雅、車舝〕に「高山は卬ぐ」とあり、

字は

に解するが、

ハ上に「擧ぐるなり。人に從ひ、卬に從ふ」と会意

仰は卬の繁文とみてよい字である。

ことなどに用いる。仰天とは嘆息の最も甚だしいさ と、毒薬などをためらわずに飲むこと、天命を嘆く また仰に作る。その仰ぐ姿勢より、上命を受けるこ

まをいい、また大笑するときにも用いる。わが国で

本の意に用い、馬について用いることがない。「段日く、野馬なり」とするカー ダー Wern これない。「段日く、野馬なり」とするカーダー Wern こ 殴つことを散といい、みな驕り傲る意がある。〔説・形。干や盾にその呪飾を加えたものを充っ、これを下。下や盾にその呪飾を加えたものを充っ、これを形声 声符は喬。喬は高楼の上に表れを立てた にすでにその声義がある。 」 日く、野馬なり」とするが、殆ど驕奢・驕泰・驕 文〕 |○ヒに「馬の高さ六尺なるもの」とし、「一に

驚 おどろく キョウ (キャウ)

ついていう語である。
というであろう。驚愕・驚喜など、みな人の行為にからであろう。驚愕・驚喜など、みな人の行為に 「説文」一〇上に「馬駭くなり」という。驚駭の意 を馬をもって示すのは、馬が驚きやすい動物である するものを殴って、これを儆める意。 形声 声符は敬。敬は呪的な祈りを

陶唐氏とは、

を曉确という。尭は古帝王の名とされるが、帝尭

土器文化の創始者としての意味を含む

遠なり」という。

山の尭高、またその石の多いさま

「高なり」と訓し、垚の兀上に在る形で、また「高

初形初義を知りがたい。〔説文〕「三下に

字がなく、 会意 養

旧字は垚と兀とに従う。

ト文・金文にその

尭。〔堯〕12

たかい・古聖王の名ギョウ(ゲウ)

は、大いに驚くときに仰天という。

んや 子、在宥」「幾何ぞ僥倖にして、

養和の太陽説話、ト辞や〔山海経〕にみえる四方期に下るものであろう。その養和仲叔の説話は、東に下るものであろう。その養和仲叔の説話は、東京、尭典〕の成立も〔呂刑〕よりものち、戦国中に列することは、〔論語〕〔孟子〕以後のことで、に列することは、〔論語〕〔孟子〕以後のことで、 おこうとした、いわゆる架上説によるものである。典化を試みたことに刺激され、禹の上にその道統を 尭・舜を称道したのは、墨家が禹を称道してその経 の方神・風神名より演化したものである。儒家が 神であったのかも知れない。尭・舜を古聖王の道統 のらしく、下部に人の形を付するのは、その技術 両版の間に土を加え、これを撲ち固めるもので、業ふ」とは栒虡のことではなく、版築をいう。版築は思われるが、〔爾雅、釈器〕に「大版これを業と謂 義からみても、その字は作業的な意味をもつものと

暁 12 (曉)16 あさあけ・さとるギョウ(ゲフ)

業 13 は智なり」「曉は説くなり」とあり、これを晨暁のなおその意。〔広雅、釈詁〕に「曉は慧るなり」「曉ないるなり」「曉ない」で 見る。無聲のうち、獨り和するを聞く」とあるのも 意に用いるのは、六朝以後に至って多くみえる。 が占く、〔荘子、天地〕「冥々のうち、獨り曉くるを知・暁悟・暁告・暁祭のように明知の意に用いる例 わざ (ゲフ)・ゴウ (ゴフ) 形声 に「明なり」とあり、晨明の義。暁 声符は尭(堯)。〔説文〕七上

〔説文〕 銀絽相承くるに象るなり」とあって、楽器をならべり。捷業は鋸齒の女し、丘を以てこれを引

僥 14 ねがう・もとめるギョウ (ケウ)・キョウ (ケウ)・

の訳語である。

うに用いる。宿業・業苦の業は仏教語の Karman子、梁恵王、下〕「君子、業を創め統を垂る」のよ 乾卦、文言伝〕に「君子、德を進め業を修む」、 ことをいい、「爾雅、釈詁」に「業は事なり」、「易、 大なるさまを形容する語である。のちすべて事業の 車旣に駕し 四牡業々たり」とは、いずれもその盛 「赫々業々、殿だる天子あり」、「小雅、采薇」「戎」「妹々業々、殿だる天子あり」、「小雅、宗武の「歩」は大規模に行なわれるもので、「詩、大雅、宗武」は大規模に行なわれるもので、「詩、大雅、宗武 築によって城壁を作る土木工事を業といった。それ とはその撲つ器。その柄のあるものを業といい、版

盆

膫 の極なり とするが、字は僥倖の義に用いる。 に「南方に焦饒あり。人の長三尺、短形声 声符は堯(尭)。【説文】八上 莊

> 字であり、僥は形声の仮借字であろう。 儀によって強いて求める意であるから、徼がその本 いう。〔釈文〕に字をまた徼に作るという。徼は呪 ことは、僥倖にして得たものは喪い易いことを 人の國を喪はざら

嶢 15 山の高いさまギョウ(ゲウ)

であるが、業の本義としがたいようである。業の用

を爲す所以なり」とは、そこに当てる飾り板のこと

分けていい、〔毛伝〕に「大版なり。栒を飾りて縣 警〕に「業を設け處を設く」とあって、業と處とを: に一致をえがたいところがある。〔詩、周頌、有

に一致をえがたいところがある。〔詩、周頌、有中が栒虡のどの部分に当るのか、字形と器制との間

「丵に從ひ、巾に從ふ。巾は版に象る」とするが、 て懸ける栒庭のことであるとする。また字形を

といい、石ころだらけの道を磽确という。 山の嶮峻であることをいう。その石の多いことを磽 巕 形声 に「焦嶢なり。山の高き皃」とあり、 声符は堯 (尭)。[説文] 九下

凝 こる・さむい・きびしいギョウ

:)!: .

れた訓義である。 とを凝滞という。 ものを凝笳といい、またこり固まってはかどらぬこ う。遠くを望み見ることを凝望、笛の音の清遠なる した状態にも用い、凝遠・凝邈・凝正のようにい冰雪霜露に関して用いることが多いが、人の端然と 形で、それを冰の凝結するさまに移して凝という。 進退に迷う人が凝然として杖を植てて佇立しているり、漢碑においても冰・凝は区別されている。疑はり、沈 V, 形声 かし〔玉篇〕には冰と凝とを別義異音の字としてお 水に從ふ。凝、俗に冰は疑に從ふ」という。し 冰を正字として、「水堅きなり。仌(氷) 声符は疑。〔説文〕一下に凝を冰の俗字と いずれも冰の凝結した状態から生 に從

ギョウ 暁[曉] 業 僥 嶢

ゥ

左右の手を合せる形に象る。

18 はねをあげるギョウ(ゲウ)

る。そのような枝を楚といい、特に長く伸びたもの う語である。 を翹楚という。翹楚はまた、人の卓出するものをいぎませ てせり伸びるのを翹々といい、〔詩、周南、漢広〕 それはまさに飛ばんとする姿勢であるから、 に「翹々たる錯薪」ここにその楚を刈る」の句があ いう。羽毛に限らず、たとえば木の枝が上に向かっ いい、また目ざすところがあるのを翹望・翹思と なり」とあり、鳥が尾の羽毛をひろげることをいう。 意がある。〔説文〕四上に「尾の長毛形声 声符は堯(尭)。尭に尭高の 翹金と

顒 大きなあたま

大雅、巻阿」「顒々叩々」は、君子の威厳にみちた恐るべく威厳のあるさまを願若・顒々という。〔詩、げている形で、〔説文〕九上に「大頭なり」とあり、げている形で、〔説文〕九上に「大頭なり」とあり、 さまを形容する語である。 であろう。そのようなものが、顒然として首をもた うが、下部は虫の形であるから、頭の大きな蛇の類 形声 に「母猴の屬。頭は鬼に似たり」とい 声符は禺。禺は〔説文〕九上

驍 22 つよいうま (ゲウ)

に「良馬なり」とあり、人に移して驍勇・驍雄とい 形声 どかどしいものをいう。〔説文〕一〇上 声符は堯(尭)。尭は高くか

> 梟は仮借字である。 う。漢に驍騎将軍の名があり、また梟騎に作るが、

キョク

旭 6

がある。 **町に作り、夜明けをいう。九声の字に、これらの音** 「旭々・蹻々は憍なり」とし、また好声。字はまたみて好の若くす」という。[爾雅、釈訓]に 音について、 ・ できる。
・ との
・ との</p 旦に出づる鬼」とあり、〔詩、邶風、北声 声符は九。〔説文〕七上に「日 「説文」には島、〔詩、釈文〕に「讀

曲 6 まがる

W 0 L

曲折、 を蒙、方底のものを筐という。金文の簫字はその筐を、方底のものを筐という。金文の簫字は曲底のものる「す」の意とする。その器は山東では曲底のもの ある。それで屈曲・柱曲・曲隈より委曲・曲尽・の形に従うており、竹などで細かく編んだ籠の類での形に従うており、竹などで細かく編んだ籠の類で また邪曲・曲学などの義を生ずる。

E3 左右の手・すくうキョク

> である。 〔玉篇〕には臼を匊の古文であるというが、匊は抱 つ」の〔毛伝〕に「兩手を掬といふ」とみえる。 A 臼に従う形で、費は貝を、遣は祭肉を携えている形 字形には臼はみえないが、金文の字形ではいずれも [詩、唐風、椒聊]「蕃衍(よく実る)して匊に盈學(学)の字にその形が声として含まれている。 えこむようにものをもつ形である。貴・遣はいまの 両手で左右からものをもつことをいい、

局 まがる

声は亟と近く、変もまた極限のところにあることを部・局所・局面・局勢・局外のように用いる。その をもつ行為と思われる。局、蹐の意より、局限・局曲した形で、それに祝禱を加えるのは、呪的な意味 を局す」とあり、〔段注〕に口を緘する意とするが、 字形について、「口の尺下に在るに從ひ、またこれニ上に「促なり」というのは、局と畳韻の訓。その 体をまげて埋葬する形。口は D、祝禱の器で、祝詞同一を屈している形でいわゆる屈肢季。 皮の形と口とに従う。 P、は身 肢葬があり、それぞれ何らかの意味が与えられてい 仰。身伸展葬が普通であるが、ときには俯身葬や屈誓されたといい。 口形は祝禱の器の形である。古代の葬法としては 霊に何らか祈るところがあるのであろう。〔説文〕 るのであろう。 句は曲身、局はその一層甚だしく屈 を示す。屈肢葬のものに祝禱を加えるのは、その死

ること勿れ」の句がある。亟・殛・極は一系の字で、に作る。また〔大雅、霊台〕にも「經始亟やかにす みな亟の声義を承ける字である。

会意

芍と口とに従う。 芍は人の跪坐する形であ

吸9

ころす・

・きみ・すみやか

偏 9 キョク

小なり」というが、曲 蹐している形である。形勢をかがめる姿勢を侷という。[広韻]に「侷促、短をかがめる姿勢を侷という。[広韻]に「侷促、短形声 声符は局。局は屈肢薬を示す形で、その身 の迫ることを侷促という。

とからも知られる。〔説文〕に「自ら急敕するな

り」とは戒慎の意であるが、それはこの犠牲と呪祝

これを殴つことが敬であり、繋であり、警であることは、出をおく。芍がその呪儀における犠牲であることは、を行なう意であるらしく、その前に祝禱の器であるを行なう意であるらしく、その前に祝禱の器である

おそらく異族である羌人などを用いて、呪祝のこと 文として録する字形は、羌人の頭飾の形に似て るが、頭上に呪飾をつけており、〔説文〕丸上に古

いる。

みぞ・ほりキョク・イツ

韻とするが、洫にもその声がある。 るものである。〔詩、大雅、文王有声〕に滅・匹をく流るるなり」とするのは、字を擬声語として解す であるから、字義に合う。〔説文〕二上に滅を「疾 にも溝減の字を用いており、***は区域を無る意の字 に減す」を、〔韓詩〕に洫に作る。〔史記、夏本紀〕 をよく (詩、大雅、文王有声)「城を築きてここるらしく、〔詩、大雅、文王有声〕「城を築きてここるらしく、〔詩、大雅、文王有声〕「城を築きてここ を洫と謂ふ」とあり、〔遂人〕にも溝洫の制をしるます。成の閒、廣さ八尺、深さ八尺、これ里を成と爲す。成の閒、廣さ八尺、深さ八尺、これ ところをいう。〔周礼、匠人〕に「十ところをいう。〔周礼、匠人〕に「十字だ」に「かれを通ずる形声」 声符は血。田間の水を通ずる

尊 章 有 9 つつしむ・いやしくも 軿 A

意に字義が引伸しているのであろう。亟は局と同じ

に辟君の意に用いる。殛より極、極より極上の位の

室まりて亟と爲り、萬年無疆ならんことを」のようとめ、我が邦我家を閉ならしむ」、〔晋姜鼎〕「乍ちしめ、我が邦我家を閉ならしむ」、〔晋姜鼎〕「佐さい。金文には〔毛公鼎〕「女に命じて一方に亟たらい。金文には〔毛公鼎〕「女ら

らく棘・革などと声の通ずる訓で、字の初義ではならく棘・革などと声の通ずる訓で、字の初義ではなもこの義によって説くが、「敏疾なり」の訓はおそ

る。時は失ふべからず。疾きなり」とし、〔段注〕 地の利に因り、口もてこれを謀り、手もてこれを執 は天地であるという。〔繋伝〕に「天の時を承げ、〔説文〕」三下に「敏疾(速やか)なり」と訓し、二

地に追放することもあって、その地を極という。「撃を加える刑罰であった。これに代えて、遠方の僻」「撃を加える刑罰であった。これに代えて、遠方の僻」 **を加える刑罰であった。これに代えて、遠方の僻ない。とは窳と同じく、狭いところに閉塞して呪詛・殴もとは窳と同じく、狭いところに閉塞して呪詛・殴り 極の初文である。極は刑死を意味する字であるが、 おいて、極とよばれる処刑の方法であり、すなわち 手を加えてこれを殴ちこらしめる意。古代の刑罰に 押し入れて、その前には祝禱の器をおき、後ろから 狭く、迫窄する空間であることを示し、そこに人を

挶 ささえる

が、芍・敬・憼は一系をなし、いわゆる古今の字で

あることが知られる。

ような語があり、時期によってその字形を異にする

の他芍儺・芍徳・虔敬・敬念・敬明・敬共・惣戒の「大盂鼎」「乃の正(官僚)を若芍、敬)せよ」、そば、『、ない。金文に「大保殷」「大保克く芍み、遺無し」、ない。金文に「大保殷」「大保克く芍み、遺無し」、とによって災厄を憝め、それに備えることに外ならとによって災厄を憝め、それに備えることに外なら

曲する意をもち、通用の例が多い。 鴟鴞」にみえる拮据という語と同じ。字はまた拘と 持するなり」とあり、「詩、 声符は局。〔説文〕 ニュ上に

勖 11 [島] つとめる

合わない。「書、 「書、般庚、下」「懋めて大命を建てよ」 「富声によむべきであるとするが、音が いまった。」「「夢のて大命を建てよ」

「その欲を亟やかにするに匪ず」の亟を、一本に棘疾(はやい)の義となり、〔詩、大雅、文王有声〕、く身を窮局する意の字であるが、それよりまた棘 0 A SA

귮

侷

の辟を以て、親に函(陥)れざらんことを欲す」れ」とあり、これは金文では〔毛公鼎〕「女の、乃智めて非幾(非道)に貢(陥)れしむること無かる。また〔書、顧命〕「爾、剣(康王の名)を以てる。また〔書、顧命〕「爾 でであると、「今文尚書」はみな動に作及び石経残碑によると、「今文尚書」はみな動に作及び石経残碑によると、「今文尚書」はみな動に作ると、「恭祝」の巻を、「隷釈」 があり、字に両音両義があるようである。〔説文〕〔燕々〕における用義との間に声義の異なるところ 「以て寡人を動めたり」の動を、「礼記、坊記」に引 命」の冒もまた動の意である。〔詩、邶風、燕々〕 一三下に「勉なり」と訓し、許玉切の附音がある。 があるのであろう。ただつとめる意の懲勉の義と、 いて字を畜に作る。これによると、動にまた畜の音 というのと、語彙・語法がまさに同じである。〔顧 殛 輂〔樺〕 跼

棘 12 いばら・すみやかキョク

といい、科挙の試験なこれを植えるので棘囲と称棘をうえ、大理卿(司法)のところを棘寺・棘署野、という。並束は棘、重束は薬。古く公卿は九り」という。並束は棘、重束は薬。古く公卿は九り」という。 ばらの形。〔説文〕七に「小棘、、叢生するものない。 [左伝] 隠十一年「棘を拔いてこれを追ふ」の棘は した。また宮門には矛戟の類を立てて棘門という。 ・革の音と通用の義である。 その形が似ている。棘疾(速やか)の義は、 会意 二束を並べて、いばらのある

極 いたる・きわめて・すみやか・むねキョク

> 「孟子、離婁、下」「これをその往く所に極む」などであり、という。しかし極の古い用法には、「詩になった。」という。しかし極の古い用法には、「詩になった。」という。しかし極の古い用法には、「詩になった。」という。しかし極の古い用法には、「詩になった。」という。しかし極の古い用法には、「詩になる莫し」、「大雅、松高」「鞍くして天に極る」、「大都という。「在子、則陽」に「その隣に夫妻と互訓している。「在子、則陽」に「その隣に夫妻と互訓している。「在子、則陽」に「その隣に夫妻と互訓している。「在子、則陽」に「その隣に夫妻 文に〔毛公鼎〕「女をして一方に亟たらしむ」のよ寒を卒へずんばあらず」のようにもいう。亟は金疾の義もあり、〔書、大誥〕「予敢て極やかに文王の疾の義もあり、〔書、大誥〕「予敢て極やかに文王の 殴つ形で極の初文。これを究極するところから急 極至の意に用いるものが多く、屋棟の義はむしろ後 位の意となったものであろう。のち〔書、洪範〕の ころに人を幽閉し、前に祝禱の器をおき、後ろから 起のものであろう。極は亟の声義を承ける字で、 「皇 極」、〔易〕の「大極」のように、規範や存在の うに用いるが、それは極致・究極の意から、 根源にあるものの意に用いる。 亟 はもと刑罰の法を示す字。上下の相迫る狭いと 形声 なり」とし、また棟字条に「極なり」 声符は亟。〔説文〕六上に「棟 極上の

殛 ころすク

舜 典」に「鯀を羽山に殛す」とみえ、罪人を絶遠いの初文。〔説文〕四下に「殊すなり」という。〔書、の初文。〔説文〕四下に「殊すなり」という。〔書、上記: 「共工を幽州に流し、驩兜を崇山に放ち、三苗を三の地に追放し、殛死させることをいう。鯀と合せて、 形声 声符は亟。亟は人を極所にお

> この悪霊神を四裔に配して、その鎮護とする意を説 危に竄し、四凶を放竄する説話をしるしている。 く神話に外ならない。

こし・てぐるまキョク

〔漢書、溝洫志〕には梮の字を用いている。 毒・土を治めるとき、山行には檋を用いたとするが、 ある。 り、橋・轎ともいう。〔史記、夏本紀〕に、禹が水するものなり」とし、共声とする。字はまた続に作 に両手を加える形。〔説文〕「四上に「大車、馬に駕 会意 るま」を意味する字で、共は車の前後 山行には檋を用いたとするが、 共と車とに従う。もと「てぐ

跼 かがむ・まがる

である。 と歌う。 今の人 胡すれぞ虺蜴(とかげ・やもり)となる」も 敢て同せずんばあらず」といい、下句に「哀しあるう。〔詩、小雅、正月〕「天をば蓋し高しと謂ふあろう。〔詩、小雅、正月〕「天をば蓋し高しと謂ふ曲した形には、何らかの意味が与えられていたので曲した形には、何らかの意味が与えられていたので の古代には仰臥伸展葬が普通で、屈肢葬のような屈形声 声符は局。局は屈肢葬を意味する字。中国形 世にひそむものの姿である。局は跼の初文

盡24 いたむ・くるしむキョク

衋 · 本部区 表題

雅、民労」「王、女を玉にせんと欲す」とは、ある畜の如くす」とあり、瑕のある玉をいう。〔詩、大本のない。とあり、野のある玉をいう。〔詩、大上に「朽玉なり。玉に從うて點あり。讀みて畜物で ている。中国では殷の婦好墓の出土器が、当時にお合する存在であったことは、かなり詳しく解明され いは畜の音でよみ、「好す」の義であろうかと思わ は王の字形にしるす。いまの玉の字形は〔説文〕 ける玉の文化の高さを示している。玉の完全なもの 作の技術をもち、当時の政治権力と地域的に深く結 化中期のころに、玉人や玉作りたちがすぐれた玉制 して用いられた。わが国においても、すでに縄文文 むしろ魂そのもの、生命力の根源にかかわるものと して、古代人の信仰の対象であり、 のような倫理的な比喩の意味で尊ばれたのではなく のち多く礼器と

その入墨を加えるときの傷痛をいう。また字を〔説加える。〔説文〕五下に「傷痛なり」というのは、

墨するものであるから、上に聿形を加え、下に血を ときに、呪禁のため朱で画くものであった。畫は入 乳房に文身を加えた形で、身分のある婦人の死葬の れぞれ円形に近い文様を入れる。奭や爽は、婦人ので、婦人の両乳をモチーフとして、乳房を中心にそ れで皮膚を刺して、入墨する。皕はその入墨の文様

津と皕と血とに従う。聿は辛をもつ形。こ

ギョク

ところを知ることができる。

りがたい。ただその字形からみて、纛傷の意の因る の字がみえるが、文が残欠していて、その用義を知

T たギョク

王再 ‡** ** 0

「説文」一上に「石の美なるもの、五徳あり」といる。
まで置いた形で、佩玉の類をいう。 [荀子、法行][管子、水地]の文にみえる。玉はそばれ 玉の五徳を仁・義・智・勇・絜にあてることは ギョク 玉

キン

ф

斤

| | | | ひざかけ・きれ・てふきキン

0

象形 佩巾の形。腰におびる巾であるが、単なる

に巾幗を贈って、これを辱めたことは有名な話ででは婦人の髪を覆うもの。諸葛孔明が、司馬仲達の類、沐巾・佩巾に至るまで、すべて巾という。巾の類、沐巾・佩巾に至るまで、すべて巾という。巾を禁ちいます。 すって 不常の類は大小に拘わらず巾と称し、巾車・すべて布帛の類は大小に拘わらず巾と称し、巾車・すべて 4世/2 用途はもとより多端であった。 て物を拭ふ。後人これを頭に著く」というが、 拭き清めることをいう椒拭の字。〔玉篇〕に「本以ある。椒は佩巾を帯びている形に手を加えており、ある。

ておの・きる

K

「民、心を灩傷せざるもの罔し」という。金文にそ わず、皕は文身の文様の形である。〔書、酒誥〕に文〕玉上に皕声とするが、皕は彼力切の音で声が合

という。 「木を斫るなり」とあって手斧をいう。〔荘子、徐无斧は斧鉞ともいう大きな斧、斤は〔説文〕一四上にて山林に入らば、材木勝げて用ふべからず」とあり、 鬼〕に、斤を運らして、婦人鼻頭の白土を削りおと であろう。[孟子、梁惠王、上] に「斧斤、時を以象形 一斧の形。「ちょうな」とよばれる手斧の形 いう語が生れた。詩文に删正を加えることを、運斤 したという名人の話がみえ、「運斤、風を成す」と

ひとしい・ならすキン

帥 <u>+</u>

形声 それで平均・均等の意がある。土をならし、平衡に 声符は匀。匀は同量の鋳込みのものをい

る」という。 〔詩、小雅、節南山〕に、国の執政を「國の均を秉 会意にして亦声とするが、土は限定符とみてよく、すること。〔説文〕「三下に「平徧なるなり」とし、 衡の生ずるところであるから、施政の要にも通じ、 字は形声。土器を作るろくろを運均という。左右平

近~(近)。 ちかいコ

父、また祈父という。〔孟子、尽心、下〕「言近くしち五十里をいう。畿内を圻といい、圻の司馬職を圻附近の意。近郊とは王畿千里の二十分の一、すなわ 臣とは身近なもの、近年・近時のように時間にもいう。 て指遠きは善言なり」は卑近の意、近衛・側近・近 形声 二下に「附くなり」とあって 声符は斤。〔説文〕

釆

六下に「廩の圜なるも ものを囷とい いい、方なるものを廩という。〔説文〕形。禾が倉廩の中にある形で、円なる 口と未とに従う。口はもと円 MILLIONS

とするが、京は京観と よばれるアーチ形の凱 の、これを京といふ」 の」とし、「方なるも

穀物を集積するところであるから、困集・困積の意旋門の象で、穀倉を字義とするものではない。困は がある。困声の字にその声義を承けるものが多い。

昕 8 あさ・よあけ

に「凡そ事を行ふに、必ず昏昕を用ふ」という。古るときは、大昕に鼓して黴す」、また〔士昏礼記〕 が行なわれ、〔礼記、文王世子〕に「天子、學を視が行なわれ、〔礼記、文王世子〕に「天子、學を視とし、「讀みて希の若くす」という。旦明には朝礼とし、「讀みて希の若くす」という。旦明には朝礼 明なり。 声符は斤。〔説文〕七上に「旦 日まさに出でんとするなり」

欣の「新」」」 よろこぶ・たのしむ

用いる。 「君欣々として康樂す」など、多く形況の語として 欣々然として喜色あり」、「楚辞、九歌、東皇太一」 鷺」「旨酒欣々たり」、〔孟子、梁恵王、上〕「學ない「喜ぶなり」とあって、声義同じ。〔詩、大雅、鳧はない。」といいの。言部三上訴字条に曰く、古の欣の字なり」という。言部三上訴字条に

芹 8

承

流(芹の漬物)あり」の文を引いており、近に従う部の上文に近に従う字をあげ、その条に「周禮に芹部の上文に近に従う字をあげ、その条に「周禮に芹婆なり」とみえる。また〔説文〕は艸wf 字が芹の初文であったと知られる。のち字は芹を用 葵* **形声** 声符は斤。〔説文〕一下に「楚

> いう。 抄〕に〔切韻〕を引いて「水中に生ずるなり」とと。〔類撰字鏡〕に「世利」と注し、〔類聚 名義いる。〔新撰字鏡〕に「世利」と注し、〔類聚 名義 た長上に意見を述べるときにもその語を用いる。 人にものを贈るとき、謙して献芹という。 ま

金 8 かね・こがね・かなもの

全 金 金金 全点系

「金|勻を賜ふ」の勻に含まれる小塊も同じ。***|「效父殷」に「王、效父に金三を賜ふ」、また他にもている。その小塊の形がもと金の字であったので、ている。その小塊の形がもと金の字であったので、 行する。のち金属の総称として用いる。 ず、百鍊するも輕くならざる」ものであるという。 の長とするもので「久しく蓮むるも衣(銹)を生ぜ また赤金ともいう。金は黄金、〔説文〕に五色の金 れたものであろう。当時の金とは青銅のことであり、 授受している形で、青銅彝器を作るときの原料とさ に「金百守」という守は鍰の初文。守はその鋳塊を その鋳量の均一であることをいう字である。〔禽殷〕 金文の字形は、全形の左右に隋円形の小塊二をそえ を加えた字とするが、字は今声に従うものではない。 「五色の金なり」とし、金の土中にある形に、今声 象形 金を装飾品などに用いることは、戦国期に至って盛 銅塊などを鋳こんだ形。〔説文〕一四上に

巹 9 まぐわい・つつしむ

形。色と字の構造が殆ど同じく、ただ抱擁の手をそるが、香はその下に世の字形を加え、両は相重なる方法である。丞は前後より人を抱き救う形の字であ方法である。丞は前後より人を抱き救う形の字であ 義〕に「合卺して酳ぐ」とあり、それは飄を半截に知られるように、己に従う形ではない。〔礼記、旨知られるように、己に従う形ではない。〔礼記、旨 瓢を合せるという形式が、いわゆる合巻を暗示する徴的な意味をもつものとして行なわれ、半截にした 意味がよく知られず、字もまたその篆文の字形から 俯伏する形である。瓢形の杯を合せる合巹の礼は、 えた形となる。従って字の下部は己でなく已、人の 三々九度にあたる儀式である。この儀礼はかなり象 所あるなり。己・丞に從ふ」というが、会意とする いわばその象徴的儀礼である。 して杯とし、これを酌みかわすもので、わが国の 「説文」-四下に「身を謹みて、承くる 字の正形は丞と巳とに従う。

衿 9 えり・つけひも

る。〔詩、鄭風、子衿〕「靑々たる子が衿」は恋愛詩、その義には襟・裣も用いられる。みな形声の字であ ある。結ぶことが約束のしるしであった。〔礼記、り・つけえりのことで、〔詩、豳風、東山〕に「衿り・つけえりのことで、〔詩、豳風、東山〕に「衿り・でけえりのことで、〔詩、豳風、東山〕に「衿り・でれてり」という。え 青衿とは若い男の意である。 た。胸もとで交わる交領のところをも衿という。 内則〕に「纓を衿ぶ」とあり、纓は本来呪飾であっ 声符は今。〔説文〕ハ上に絵を

掀

衾

堇

掀 菌

> 衾 ふすま・きょうかたびらキン

があり、 と歌う。今には、上から覆うもの、閉じるものの意「衾と裯(ねまき)とを抱く「寒に命同じからず」共同体の祭祀を歌うもので、その疏属は、宮外で、共同体の祭祀を歌うもので、その疏属は、宮外で、 経・帷子の類であろう。〔詩、召南、宍・星〕は氏族『紫がらのなれ、土喪礼〕に「幠ふに衾を用ふ」というのは、衣中に今を加えており、形声字の造字法と異なる。 衿も衾もその声義を承ける字である。 形声 被なり」とし、今声とするが、篆文は 声符は今。〔説文〕ハ上に「大

堇 ねばつち・ぬる

蕃菜

NO 一家人

一大大大大学

系をなすものと考えられる。 塗りこめる意があるかも知れない。それならば英の く塗りこむことをいう。 英は焚巫の象で、饑饉の意。いるもので、堇は墐の初文。墐は土に草を加えて固に従う。黏土は塗りこめること、すなわち攆塗に用し、黄の省に従う会意字とするが、字は明らかに英し、黄の省に従う会意字とするが、字は明らかに英 声義を承ける字となる。茣・堇に従う字は、みな一 墐にはあるいは道殣(行き倒れ)を葬るとき、厚く 声符は藁。〔説文〕「三下に「黏土なり」と

かかげる・あげる

動くのを掀髯という。高く上にまくれ上るような状 態をいう。 の天を擣つを「天を撒つ」といい、大笑して口鬚のす」のように、上に援きあげる意にも用いる。激浪す」のように、 あげる意。〔左伝〕成十六年「公を掀きて淖より出い。「擧げて出すなり」とあり、手で高く 声符は欣。〔説文〕一二上に

菌 きのこ・たけ

壊の上に菌芝といふものあり。朝に生じて晦に死とあって、きのこの類をいう。〔列子、湯間〕「朽りとあって、きのこの類をいう。〔列子、湯間〕「朽りとあって、きのこの類をいう。〔説文〕」下に「地草なり」 闔 注に虫の名であるという。要するに温湿によって生 」とあり、〔淮南子、道応訓〕には朝菌に作り、 密生するものをいう。 形声 声符は囷。囷に密集・群集の

勤 ¹² (勤)13 つとめる・いそしむキン・ゴン

黝

賚〕は文王を頌する廟歌で、「文王旣に勤めたり の勤がその義。それよりすべて事に勤労することを とは王業に勤めることをいい、農作の意ではない。 力に従うて、農作に関する字である。〔詩、周頌、 いう。〔説文〕一三下に「勞なり」と訓し、労もまた

キン欽琴窘筋約

金文には堇を勤の意に用い、〔宗周 鐘〕「王肇めて文武の菫めたまひし疆土を適省す」、〔単位 鐘〕「丕文武の菫めたまひし疆土を適省す」、〔単位 鐘〕「丕文武の菫めたまひし疆土を返げ、大命に勳蓮せり」、〔毛公鼎〕「亦これ先王、厥の辟を襄 辞し、大り」、〔毛公鼎〕「亦これ先王、厥の辟を襄 辞し、大り」、〔毛公司〕「民を遠きに勤めしむること無かれ」と記、『書記』「民を遠きに勤めしむること無かれ」と記り、『書記』「日本のよう。

金 1 つつしむ・かねのおと

銀紙

歌声 声符は念。〔説文〕ハ下に欠部に属してない、金文の「者減鑑」には、鐘声を「憨々告々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々がいい。金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨々音々いい、金文の〔者減鑑〕には、鐘声を「憨なっき」と形容していて「金」を用いており、それは欽の初文。また「音」はおそらく歌の初文であろう。ともに鐘声を形容する語で、その高低をいう。音や金に欠を加えるのは、「者減鐘〕の下文に「上下……に登り、四秀(方)に聞せよ」とあるように、下に「神、食するの气なり」とあって、神が祭祀を享けることをいう。欽・歆はもと声義全く同じく、欽は欽敬、歌は歌変の意に用いる字である。

琴12 こよン

窘 12 くるしむ・せまる

筋 12 すじ

のなり」とするが、字は竹に従うものではない。 を関い部分。月は腱下の肉。力はその 精体では同形となる。[説文]四下に「肉の力なり」 をし、力・肉・竹の会意字で、「竹は物の筋多きも をし、力・肉・竹の会意字で、「竹は物の筋多きも をし、力・肉・竹の会意字で、「竹は物の筋多きも

**は、筋肉のかたいところを撃って柔らかく散ず散は、筋肉のかたいところを撃って柔らか、その肉の上部はやはり腱の部分である。〔説文〕の次条に腱を録するが、その正字は筋の肉の部分の一画を省いた形に作る。〔左伝〕哀二年「筋を絶つことなく、骨を折ることなし」とは強腱の意。〔礼記、曲礼、上〕「老者は筋力を以て禮と爲さず」とは、筋力の衰えることをいう。筋斗はとんぼがえり。漢の武帝のとき、教坊の一小児は筋斗絶倫であったという。孫悟空の乗った雲はその筋斗雲であった。斉梁以来、散楽として行なわれた擲倒杖・翻金斗といわれるとんぼがえりの技は、中国の戯劇にいまもその伝統を存している。わが国では、筋を筋道のように用いる。

釣12 サンしい

神 窓 ・ う 全 多

をいう。 権りて然るのちこれを準にし、準にしてれる権名。 権りて然るのちこれを量とす」とあり、軽重優劣をきときは則ち左右釣しといふ」とあり、軽重優劣をきときは則ち左右釣しといふ」とあり、精煉したものをはかることを釣衡という。

僅 13 キン

大学で、僅少の意があり、「公羊伝」を 「元す字で、僅少の意があり、「公羊伝」を 「一位」では、「一方」では、

五日 13 うける・よろこぶ

会意 音と欠とに従う。[説文] ハ下 会意 音と欠とに従う。[説文] ハ下神術神饌を饗する意とし、字を段するなり」とあって、にもその声の字がある。それで形声とみることのでにもその声の字がある。それで形声とみることのできる字であるが、欠は祝馨し詠嘆する動作をあらわきる字であるが、欠は祝馨し詠嘆する動作をあらわきる字であるから、いま会意とする。音は言の下部をするであるから、いま会意とする。音は言の下部をするであるから、いま会意とする。音は言の下部をはいいます。

記さして入墨を受ける意で辛(入墨の針)を加える。 祝藤の器に反応して、その「音づれ」を感ずる。それが音である。散とは、神の「音づれ」を感ずる。それが音である。散とは、神の「音づれ」と、祝藤する欠とをもって、神意の感応あるを示す意である。 「詩、大雅、生民」「帝の武の酸を履みて歌けたり」というもので、いわゆる感生帝説話である。そのような感応のしかたを散という。「左伝」停十年「神は非類を歌けず、民は非族を祀らず」とは、祭祀も同じ族類の間に成立することをいう。歌はひろく感応のある関係に用い、「国語、周語」「民歌けてこれを適とす」とは、治政上のことである。「者滅鐘」に、第20間に成立することをいう。歌はひろく感応のある関係に用い、「国語、周語」「民歌けてこれをあるとして、神霊の音でよむべく、その鐘銘にまたおそらく「歌々」の音でよむべく、その鐘銘にまたおそらく「歌々」の音でよむべく、その鐘銘にまたおそらく「歌々」の音でよれでく、その鐘銘にまたおそらく「歌々」の音でよれでく、その鐘銘にまたである。ともに、神事的な用語であったものと思われる。とともに、神事的な用語であったものと思われる。とともに、神事的な用語であったものと思われる。とともに、神事的な用語であったものと思われる。

林六 13 いむ・とどめる

「祝宗(神祇官)をして禽獸の禁を選ばしむ」とは、林声とする。林の語頭音が占く心であったとすれば、林声とする。林の語頭音が占く心であったとすれば、林声とする。ともできるが、字は偏旁の構造をとめることもできるが、字は偏旁の構造をとかることもできるが、字は偏旁の構造をといる。本は林叢。

神事に用いるため、俗人の出入を禁ずる禁断の地で しての名を王宮・宮殿に移して、禁城・禁門・禁 中・禁衛など、宮城・宮中のことにみなこの字を用 いる。罪によって人を拘囚することを禁錮という。 禁には聖俗を分つ意味があり、それでタブーを禁忌 という。 [礼記、無い礼、上] 「竟に入りては禁を問 という。 [礼記、無い礼、上] 「竟に入りては禁を問 よ」とは、いわゆる吉凶の忌のことである。日にも よ」とは、いわゆる吉凶の忌のことである。日にも 方とは、いわゆる吉凶の忌のことである。 日にも た」とは、いわゆる吉凶の忌のことである。 日にも た」とない。 日には生子を挙げずとされたが、これらはむ しろ忌に属することである。

名 13 キン

會 "內對不對"

伯禽の名が「禽殴」や「大祝禽鼎」にみえており、伯禽の名が「禽殴」や「大祝禽鼎」にみえており、外のでは全く異なり、殊に禽はもと獣形ではない。「礼記、世礼、上」に「遅々は能く言へども、禽獣を離れず」とあって、禽獣を一類の名としているが、を離れず」とあって、禽獣を一類の名としているが、を離れず」とあって、禽獣を一類の名としているが、を離れず」とあって、禽獣を一類の名としているが、の別していえば、「爾雅、釈鳥」「二足にして羽あるもの、これを禽と謂ふ」とあり、鳥をいう。これを禽というのは、畢で捕え伏せるからであり、禽はもとその字形である。それで禽獲するものは、鳥獣のからでき形である。それで禽獲するものは、鳥獣の別なく禽ということができた。金文では周公の子が「禽どいうのは、異で捕え伏せるからであり、禽はもとその字形である。それで禽獲するものは、鳥獣の別なく禽ということができた。金文では周公の子が、鳥獣の名が、鳥、となど、となど、となど、となど、となど、となど、とない。

僅

歆

生活を禽息鳥視という。をえたものであろう。鳥獣のように飼い殺しになるをえたものであろう。鳥獣のように飼い殺しになるとはまたすこしく異なるが、その覆う正とより今声學の上に覆う形である。その覆う形は器物の蓋の形

塩 14 きンめる・ぬる

延 15 ゆきだおれ・うずめる

字で、殣は行きだおれ、いわゆる道殣形声 声符は墓。菫は饑饉に関する

である。〔説文〕四下に「道中の死人、人の覆ふ所なり」とあり、〔詩、小雅、小弁〕「行に死人あるときは 尚これを蹙むる或り」を引くが、今本は字を墐に作る。〔周礼、蜡氏〕に「若し道路に死するものあるときは、則ち埋めて楊を置かしむ」と規定し、楊すなわち墓標を立てた。古代には〔左伝〕昭三年「道殣相望む」というような状態が、しばしばみられたのであろう。墐とはこれを墐塗し、その呪霊を封ずることをいう。

瑾 15 うつくしいたま・たま

用い、暴器に銘するときには大則といった。のであろう。則は鼎に銘する意であるが、玉器にも

医犬 15 かたくしめる・かたい・まとう

(現実) 形声 声符は欧。** およっきまのない状態を緊凑といい、書の結体のしまたすきまのない状態を緊凑といい、書の結体のしまたすきまのない状態を緊奏といい、書の結体のしまたすきまのない状態を緊凑といい、書の結体のしまたすきまのない状態を緊凑といい、書の結体のしまりあるものを緊凑体という。

錦 16 キン

檢

錦にあたるものであろう。(平伯段)は漢水下流に近い地の羋伯の器で、文中にまた質を献ずることがみえ、この帛はいわゆる蜀にまた質を献ずることがみえ、この帛はいわゆる蜀にまた質を献すは、その伝統を承けるものと思われる。また織文は、その伝統を承けるものと思われる。また

謹17【謹】18 キン

離りが

形声 旧字は謹に作り、董声。董は饑饉に関する こ説文〕三上に「慎むなり」と謹慎の意とする。 「詩、大雅、民労」「以て無良、(不善)を謹め」「式なった。 「説を埋めることを堪という。魔は行きだおれ。「説文」三上に「慎むなり」と謹慎の意とする。 することをいい、その祝禱を謹という。「見み畏み で申す」意である。

襟 18 「絵」 13 きり

额

謹(謹)

同字。いま普通には襟の字を用いる。(繋)、もはやことが終ると、その交衽のところであった。それで人の心情をあらわすのに、襟懐・襟情・た。それで人の心情をあらわすのに、襟懐・襟情・た。それで人の心情をあらわすのに、襟懐・襟情・楽はみなが。その字が卒である。襟もとは、人の魂振りやんだ。その字衽のところを結り、もはやことが終ると、その交衽のところを結り。

第 18 まみえる・あう

となって

形声 声符は菫。〔説文〕ハ下に「諸侯、秋に朝す をいう。董に勤労の声義を含むとするものである。 をいう。董に勤労の声義を含むとするものである。 をいう。董に勤労の声義を含むとするものである。 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「左伝」昭十六年「寛子、私かに子産に親 であり、「五世、本の であり、王観が字の本義。「後礼、 などにも用いるが、王観が字の本義。「後礼、 をいう。 単に、 はいました。 であり、「本に、 などにも用いるが、王観が字の本義。「後礼、 などにも用いるが、王観が字の本義。「後礼、 などにも用いるが、王観が字の本義。「後れ、 をいう。 単に、 はいました。 であり、「となり、「とあり、「となり、」とあり、「とない。」 であり、「とない。」となり、「とない。」とない。 であり、「とない。」となり、「とない。」とない。 であり、「とない。」とない。」とない。 であり、「とない。」とない。 であり、「とない。」とない。 であり、「とない。」とない。 であり、「とない。」とない。 であり、「とない。」とないに、「とない。」とない。 であり、「とない。」とない。 できない。 ・ できない。 できない。 できない。 ・ できない。

建 20 ききん

 で巫の形に従い、飢饉に関するものとみてよい。
 る」を頭上に頂き、両手を前に交えて縛り、これを火で焚く形。すなわち焚巫の俗を示す。このような火で焚く形。すなわち焚巫の俗を示す。このような火で焚く形。すなわち焚巫の俗を示す。このような火で焚く形。すなわち焚巫の俗を示す。このような火で焚く形。すなわち焚巫の俗を示す。当は凶作のとき、弘禄と犠牲とお食べい。

解するが、いずれもその区別には関しない字である。「穀の孰らざるを饑と爲す」と蔬と穀とを区別して、説文〕玉下に「蔬の孰らざるを饉と爲す」とし、「説文」玉下に「蔬の孰らざるを饉と爲す」とし、

25 ちぬる・すき・きず・あやまち

り」とみえるが、釁の本義は、そのことを祓い清めに「聲章(名声)の數に過ぐるときは、則ち釁ああるのを繋ぎら、知りの數に過ぐるときは、則ち釁あるのを繋ぎら、かまない。」という。「国語、晋語」はいる。というに 分に從ふ。分は亦聲なり」という。形も声もともにり。爨の省に從ひ、酉に從ふ。酉は祀る所以なり。るのは正しいが、字形について「竈を祭るに象るなることであった。〔説文〕三上に「血祭なり」とすることであった。〔説文〕三上に「血祭なり」とす 誤るもので、そこからは釁浴・釁鬯・釁塗の意を求 めることはできない。 また亀(龜)と通用し、亀にはひびわれの意がある。 もあるとされ、それで釁にまた釁隙の意が生れる。 清めた。その器を繋という。その鋳きずを補う意味 寝廟において用いるものであるから、鶏血をとって 大は建築設営のことから、小は器物の製作に至るま 惻隠の情がある例話とされている。釁塗のことは、 「羊を以てこれに易へよ」といった話は、人にみなみ、鐘に釁するために牽かれてゆくことを知り、 斉王が堂下を牽かれてゆく牛のおそれるさまを怪しめことは諸書にみえる。〔孟子、梁恵王、上〕に、のことは諸書にみえる。〔孟子、『きだまり すべてにわたって行なわれ、殊に祭器・礼器は

吟 うたよむ む

鹶 獪

銀14

り、 にも用いる。字はまた唫に作る。 吟懐・吟興の意となり、また吟味のように味わう意 り、呻吟の意。今は栓のある蓋の形で、含の意があ形声 一声符は今。〔説文〕二上に「呻くなり」とあ 気を含んで歌う声を吟という。吟詠の意より、

海経、南山経〕及び〔北山経〕に銀を産することにはまた梁州の貢として「璆鐵銀鏤」をあげ、〔山た。〔書、禹貢〕の「金三品」とは金銀銅。〔禹貢〕

「白金なり」とは銀。銅を赤金といっ

声符は艮。〔説文〕一四上に

脈 ふたふりのおのギン

この字は質の音でよむべき字であろうとしている。 質といい、則といい、剤という。みな鼎に銘刻して** 貝はもと鼎の形で、これに刻して盟誓とすることを うことからいえば、誓約に関する字であるらしく、 「闕」とし、字義を不明とする。質の字がこれに従 約剤(契約文書)とする意である。〔通訓定声〕に、 「二斤なり」とするが、〔繋伝〕に 会意 二斤に従う。〔説文〕 一四上に

計

れたので、金融関係に銀座・銀行のように用いる。 銀色のものを銀河・銀波といい、通貨として用いら 中・山王墓諸器には、金銀象嵌の精巧な器が多い。いるのでは、金銭では、金銭ではなおその字をみないが、近出のがみえる。金文になおその字をみないが、近出の

狀 8 かむ・あらそうギン

訟の意であろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。
いるであろう。 会意 には狺があり、〔楚辞、九弁〕に「猛犬狺々として 獄訟に関する字のように思われる。犬の齧み合う字 なり」というが、両犬に従う字に殲・獄などがあり、 二犬に従う。〔説文〕「〇上に「兩犬相齧む

の字を用いる。〔後漢書、張酺伝〕「闊々惻々、誠心記、玉藻〕には「二爵して言々たり」と「言々には、王漢〕には「二爵して言々たり」と「言々に接して和敬なるをいう。字はまた訴に作り、〔む 醫 より出づ」というのが、字の初義に近い。 廟門において盟誓し、祝禱の器をおいて祈るのに対 すべて幽黙のうちにおいて示され、それを闇という。 して、神の音ずれがあらわれることをいう。神意は 字にこの音はなく、もとより会意である。これと似 の器をおいて神意を問うことである。また闇とは、 た構造の字に問・闇などがあり、問とは廟門に祝禱 けて争う意とする。字をまた門声とするが、門声の に「和説して諍ふなり」とあり、おだやかに理を別りなる。 祝禱をいう字であろう。〔説文〕三上 やわらぐ・つつしむ 会意 門と言とに従う。門における

15 ふしてあるく

前漢末まで伝えられていたことが知られる。 か否かは知りがたいが、ともかく西周期の文字が、 鼎」に人名に用いる。 〔説文〕 にいうところが古訓 、義例は全くない。ただ金文にその字がみえ、〔師趛 を低れて疾く行くなり」とあるも、用 野声 声符は金。〔説文〕二上に「頭

憖 なまじいに・かけるギン

ず」とあり、その句は「詩、小雅、十月之交」に公の誄辞に、「昊天不淑にして、楚に一老をも置さ公の誄辞に、「昊天不淑にして、楚に一老をも置さる。〔左伝〕衰十六年、孔子が没したときの魯の哀るところがない。字の本義が失われているようであるところがない。字の本義が失われているようであ 「十月之交」の り」とし、形声とする。また「一に曰く、説ぶなり。るが、憖一〇下については「問ふなり。謹み敬ふな 敬」の義も、敢に厳敬の意があるように、肯と関連 う。哀公の誄辞の意も、それで通ずる。また「謹 た「閒なり、且なり」とし、これらの字義に統貫す 一に曰く、甘し」と二訓を加える。〔玉篇〕にはま 来麦で農作のものをいい、犬はその豊穣を祈る犠牲 する訓義である。字形の上よりいえば、來(来)は な未だ憖けず」とは傷害の人がないことをいう。 みえるものである。また文十二年、「兩君の士、み 「猌は、犬齗を張りて怒るなり」とす 肯ての意。それがこの字の訓義であろ 『疏』に引く〔説文〕に、「憖は肯な 声符は猌。〔説文〕一〇上に

> るのは、その意に近い。〔広雅、釈詁〕の「憂ふる称するのであろう。〔小爾雅〕に「願ふなり」とあであり、この犬牲を以て豊穣を祈念する心情を黙と 耕儀礼をいう語であったと思われる。 ない字であるが、すでに不作が予想されるときの農 ひ」と語義が甚だ近いようである。他に殆ど用例の それで「なまじひ」の訓がある。国語の「なまじ には「心に欲せず、自ら彊むるの辭なり」とあり、 ところには無理と思われるところがあり、「鄭箋」 なり」も、 一おうそれに連なる訓である。その願う

器 18 やかましい・かまびすし・おろかギン

ものを鷙、眉飾を施した巫女が祈ることを蠶、そのの用義は字の本義ではなく、神に拝舞して祝禱するの用義は字の本義ではなく、神に拝舞して祝禱する 「口に忠信の言を道はざる」程度ではない。ただそ の父母のことを「父は頑に、母は嚚なり」とあって、 可ならんや」とあり、口やかましく争う意。また舜 伸の義とするが、経伝には〔書、尭典〕「體訟なり。忠信の言を道はざるを體と爲す」を引いて、その引 わない。また〔段注〕に〔左伝〕傳二十四年「口に 「語聲なり」と訓し、臣声であるとするが、声が合 すなわち望の初文の形に作るものもあって、天に向 会意 くの祝禱の器を列する形である。〔説文〕 三上に いうもので、巫をして天を望んで祈らせ、周囲に多 かって祈る儀礼をいう。おそらく請雨の儀礼などを 臣と問とに従う。臣は古文の字形ではいい

> いものであるとする。〔広雅、釈詁〕に「愚なり」捨は言はしむべからず」とは、嚚訟の言は聞きがた独は言はしむべからず」とは、嚚訟の言は聞きがた頑・嚚愚、いわゆる嚚訟となる。〔国語、貰語〕「脈 おける喧噪の声をいうものであろう。その語は喧嚣古文が堅に従うことからいえば、請雨などの巫儀に古文が いるのである。 とあり、古代の巫術はすでに世間から見はなされて にしてほとんど儀容をなさぬものであるから、 声を嘂というように、字は祝禱に関している。また 嚚

齗 19 はぐき・あらそうギン・コン

には、までも、 「史記、魯世家」「洙泗の閒、鰤々如たり」とは闘争 してさわぐ意。笑うとき歯齗をあらわすを哂という。 してさわぐ意。笑うとき歯がをあらわすを哂という。 〔説文〕ニ下に「齒本の肉なり」とあり、はぐきを るが、 粼 齗をあらわさない意である。 [礼記、曲礼、上]「笑ふも矧に至らず」とは、 みな同声。その声の間に通用の例が多い。 形声 て齦に作り、あるいは言に従う字もあ 声符は斤。字はまた艮に従う

X 4 くぎる・わかつ・かくすク・オウ

CC HR

晶







会意 旧字は區。口と品とに従う。口は秘匿のと

音をもつものがある。 にもつものであったらしく、嫗・謳の他に傴・嫗の 小の義。区は渓母に属するが、よくは影母を語頭音が生れ、区域・区別・区分となり、また区々とは細 多くの祝禱の器を列することから「區して別つ」意 これを殴ち、これを謳歌して、祝禱の成就を願う。 隠僻のところに秘匿する意をもち、匽・医・匿など味を説くところがない。およそ匸に従うものはみな ころにものを匿す意とし、字形を「品の亡中に在るニドに「隣區、藏匿するなり」とあり、けわしいと はそこに多くの祝禱の器をおき、呪儀を行なう意で は、みなそこで行なわれる秘儀を示す字である。区 に從ふ。品は衆なり」と解するが、品を蔵匿する意 (欧)・殿(殴)などはみなこれに従う。〔説文〕 |

句 まがる ク・コウ

ş

字形がみえ、句折の葬法と似ている。局はその屈肢を含むことはない。〔姑馮 句鑵〕〔殷句壺〕にその 字である。〔説文〕三上に「曲なり」とし、また字 加える意であるから、字は局と同じく屈肢葬を示すに屍の象。口は凹、祝禱の器の形で、これに祝禱をいる。 のさらに甚だしいものである。のち引伸して、その をり声とするが音が合わず、 **勹と口とに従う。勹は人の句曲した形で**り 篆文の字形にもその形

> 概ねその声義を承ける。 爪を句爪といい、まがった形の句点を付することか 戴礼、會子立事〕「その倨ならんよりはむしろ句なたま、**しませっなこだわる拘謹の意となり、〔大姿勢よりして小心でこだわる拘謹の意となり、〔大 ら句読・章句・句法のようにいう。句に従う字は、 れ」は拘謹の意。句曲の意より武器を句兵、鳥獣の

吁 ああ・うれえる

5 J

ある。 る。吁呼・吁嗟など、みな「ああ」とよむ感動詞で

劬 つかれる・つとめるク

る。 もと農事に労する意より、すべて労苦のことに用い「勞なり」、〔広雅、釈詁〕に「數するなり」という。 劬労とは農事をいう語である。 〔説文新附〕 | 三下に は「この子ここに征き、野に劬勞す」の句がある。 邶風、凱風〕「母氏劬勞す」、また〔小雅、鴻雁〕になった。 ないち かがめて農作につとめる意を示す字である。〔詩、かがめて農作につとめる意を示す字である。〔詩、 がある。力は来の形であるから、身を形声 声符は句。句には句曲の意

弩 称 いク ぬ・コウ

形声

の愛犬が死んだとき、孔子が貧しいうちにも十分なとるべきものがない。〔礼記、檀弓、下〕に、孔子〔説文〕に引く「孔子説」はみな俗説で、一として ときに、狗鼠・狗盗・走狗のようにいう。心遣いをした話を録している。ものを軽蔑していう 狗は叩なり。气を叩く。吠えて以て守る」というがい。「いては駒という。「説文〕一〇上に「孔子曰く、においては駒という。「説文〕一〇上に「孔子曰く、 声符は句。句に小なるものの意があり、馬

みはる・たのしむ・うれえるク

虰

が室家を盱しましめん」という。哀歓何れにも用いいう語で、燕器の〔秋氏壺〕に「處以て匽飮し、我耳〕の「云何ぞ吁はしき」と同じ。古くは楽しみを耳〕の「云何ぞ吁はしき」と同じ。古くは楽しみを て、驚きを示す語であろう。 耳〕の「云何ぞ吁はしき」と同じ。古くは楽しみをいれ、都人士〕「云何ぞ盱はしき」は、〔周南、巻小雅、都人士〕「云何ぞ盱はしき」は、〔周南、巻をいう。吁はそのとき発する驚きの声である。〔詩、 四上に「目を張るなり」とあり、驚いたときのさま 声符は子。于に吁・許の声がある。〔説文〕

古8 にがな・くるしいク・コ

苦なり。苓なり」とあり、 声符は古。〔説文〕一下に「大 にがなをい

用いるのは、劬の仮借義である。苦学は困学と同じ は藥なり。甘言は疾なり」の語がある。 などの訓があるのは、その引伸。また苦労のように 苦という。副詞に用いて「はなはだ」「おろそか」 う。苓がその草名であるが、甚だにがいのでまた大 学問に苦労する意。〔戦国策、秦策〕に「苦言

栩 くぬぎ・とち

り」と互訓。また様(樣)六上に「栩の實なり」との卓、一に樣といふ」とあり、次条に「杼は栩な・ て蝶なり」は擬声語的な用法である。 て喜ぶさまの語とし、[荘子、斉物論]「栩々然としあり、橡には木名・実の名をいう字が多い。仮借し

矩』(矩)』(榘)』 さしがね・のり

とするが、その矢の部分は、金文では巨を持つ人の を求めよ」とあり、榘矱とは法度をいう。 形である。〔楚辞、離騒〕に「榘矱の同じきところ 「或いは木矢に從ふ。矢なるものはその中正なり」 文。〔説文〕五上に巨をその正字とし、 声符は巨 (巨)。巨は矩の初

計 10 いつわる・おおきいク

ある。〔説文〕三上に「詭譌なり」と形声 声符は于。于に吁・盱の声が

矩[矩][榘]

訏

偊[踽]

煦

宴〔窶〕

、樂し」。また驚くときの声をもいい、〔詩、大雅、生の義があり、〔詩、鄭風、溱洧〕「洵に訐にして且つ訳。皆、」とみえ、誇大にいう意である。于には大訂。」とみえ、誇大にいう意である。于には大は、大言して偽ることをいう。〔秋氏壺〕に「多彩は、大言して偽ることをいう。〔秋氏壺〕に「多彩 民〕の〔箋〕に「口を張りて嗚呼するをいふなり とみえる。

偶1「踽」6 くぐまるさま

ニ下に踽を録して「疏り行く見なり」とし、偶字をがめてひとり歩くさま。字はまた踽に作る。〔説文〕 収めていない。〔孟子、尽心、下〕「踽々涼々」とは、 を愼む」、〔力命〕「偊々として歩す」とは、身をか 独行のさまをいう。 形声 声符は禹。禹は喩母で于と同

煦 あたたか・めぐむ

が、その字には煦を用いる。 る意。句に句曲の意があるので諂笑の意ともなるを煦嫗獲育す」とあり、身をかがめてあたため育てを煦嫗獲育す」とあり、身をかがめてあたため育て に「赤き色なり」という。〔礼記、楽記〕に「萬物 赤色の意などに引伸して用いる。〔説文〕一〇上に 形声 に従って、温暖和恵の意があり、また 声符は句。日に従い、また火

宴14 運動 16 まずしい・やつれる

(繁)・ 曲(礼、上)「主人辭するに窶を以てす」など、そのまな。外物〕「抑いは置より窶なりしか」、また〔礼記、外物〕「抑いは置より窶なりしか」、また〔礼記、 ごとし。みな小なる意」とみえる。字はまた穴に従 あり、「釈名、釈姿容」に「寠數は、なほ局縮のあり、「釈名、釈姿容」に「寠數は、なほ局縮の るものである。裏藪は頭上に荷を載せるときに頭に対して裏は束ねた髪、これを撃てば数々として乱れあり、簪笄の髪飾りを加えている字である。これにあり、簪笄の髪飾りを加えている字である。これに ただ髪を巻きあげている形であるから、貧寠の意とを上に束ねた形。廟中にあって、髪飾りをも加えず、 例である。 うて窶に作り、多くその字が用いられる。〔荘子、 おくもの。いまも大原女が用いる。また寠数の語が なる。〔説文〕セドに「禮無きの居なり」とし婁声 のように両系の声をもつものがある。妻は婦人の髪 毒など、みな婦人の盛飾を字形化したもので るが、来母の字に里(悝)・立(泣) 形声 声符は婁。婁は来母の字であ

駆1 (驅)21 かる・はしらせる・おうク

騎馬の俗は、趙の武霊王が胡服してその術を学んだという。 とし、馬を走らせる意。古文として録するより」とし、馬を走らせる意。古文として録する字はり」とし、馬を走らせる意。古文として録する字は 驅 〔説文〕 10上に「馬を驅るな 形声 声符は (区) 區。

ものとされており、「左伝」というのも、なお乗車のことで車射御驅侵を教ふ」というのも、なお乗車のことである。また悪邪を追放する意に用い、「孟子、滕文を放つことをいう。区は多くの祝禱の器を列して、を放つことをいう。区は多くの祝禱の器を列して、を放つことをいう。区は多くの祝禱の器を列して、を放っことをいう。区は多くの祝禱の器を列して、をがた。

駒 15 こま

是

形声 声符は句。句に小なるものの意がある。 「説文」「O上に「馬の二歳なるを駒といふ」とあり、 「詩、周南、漢広」の〔伝〕に「駒とは五尺以上なるを謂ふ」とする。成馬はバ尺以上のものをいう。 「園礼、慶人」に、駒の通淫を避けるために、一時 群から離す執駒のことがしるされているが、金文の 群から離す執駒のことがしるされているが、金文の ない。 「素いぎ、 に、駒の通淫を避けるために、一時 は、だいだ。 に、駒の通淫を避けるために、一時 は、だいだ。 ないます。 であった。

種 17 くつ・はきもの

は複底のものを陽、単底のものを屨といい、漢以後ち履というとし、また〔通訓定声〕には、漢以前にえたものとする。〔段注〕に、古くは屨と称し、のえたものとする。「段注〕に、古くは屨と称し、のた。とのとする。「段注」に、っては戻っ。「寒に寒の声がある。」を「寒の声がある。」を「寒の声がある。」を「寒の声がある。」を「寒の声がある。

には履、いまは鞋をいうとする。「礼記、 端礼に、には履、いまは鞋をいうとする。「礼記、 端礼に、 上」「戸外に二屦あるときは、言聞ゆるときは則ち入らず」、また「荘子、寓言」「屦を戸外に脱ぎ、膝行して前む」とあり、剣履のまま升殿を許されることは、殊寵ととあり、剣履のまま升殿を許されることは、殊寵ととあり、剣履のまま升殿を許されることは、殊寵ととかふ」とあって、屦は粗末なものをいうとしている。「古今注」に「履は屦の帶あらざるものなり」とあるから、屦はかけ紐でとめるもの、履はかけ紐でとめるもの、履はかけ石とあるから、屦はかけ紐でとめるもの、履はかけ石とあるから、屦はかけ紐でとめるもの、履はかけ石とあるから、屦はかけ石とあるから、屦はかけ紐でとめるもの、履はかけ石とあるから、屦はかけ石とあるから、屦はかけ石とめるもの、履はかけ石といかったけである。

18 みる・おどろく

会意 住と聞とに従う。間は〔説 まうに、目を見張ってみまわす意。聖とは鳥(生) のそのような状態をいう。おそらく鳥占の俗を、背 景にもつのであろう。のち人の驚い。驚懼するさ まをいい、〔詩、唐風、蟋蟀〕「良土聖々たり」、 まをいい、〔詩、唐風、蟋蟀」「良土聖々たり」、 甚だ落ちつかない状態をいう語である。〔荘子、徐 を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた を失ふ」とは驚懼の甚だしいことをいう。字はまた をなっ。「祖子、徐 なき」「一人

の用義例はない。
「説文」四上に瞿を「鷹隼の視なり」とするが、そによった。というのも、戳のことである。

18 からだ・み

順生 21 おそれる・おどろく

引息 零型

雕 22 [雇] 23 やせる

多いからである。う。字はまた癯に作るが、臞瘠は病気によることがう。字はまた癯に作るが、臞瘠は病気によることが

化 24 ちまた

7

具へ8 【具】8 そなえる・そろう・つぶさに

月 湯 常 過具

会意 貝と井とに従う。両手をもって鼎を奉ずる会意 貝と井とに従う。両手をもって鼎を奉ずるか、貝の省に従ふ。古は貝を以て貸と爲す」という。「爾の性則ち其はる」のように、具は鼎に限らず、すべて物の具わることをいう。「商皇父氏」とは、無の全形に従う。「詩、小雅、無羊」とが、「かい」とは、無の全形に従う。「詩、小雅、無羊」とは、祭器のセットをいう。鼎の字形は、鼎の字形は、鼎の全形に含まれる貝は、もとみな鼎であった。

男 9 おながざる

河 事

である。 経 を牽く形、虁は神像の形であり、禺だけが「山海を牽く形、虁玉下にも母猴という。しかし為は象目にそれている。 象形 く防風氏が都したところと伝えられる。禺軀は東海にはないう字であろう。浙江武康に禺山があり、古の神をいう字であろう。ガニボニュ が、要するに実体は知られない。「山海経、海外北 尾、今も江南の山中に多くみえるとするものである。 由に從ひ内に從ふ」とする。〔説文〕には爲(為)。〔説文〕九上に「母猴の屬なり。頭は鬼に似たり。〔 半は禹と同じく両竜相交わる形で、禹はおそらくそ また寓の字形から、穴居の獣名とする説などもある の海神、禺彊は北海の海神、 大宗師〕にも、北極に禺強が立つというが、字の下 経〕に禺強の名がみえ、これは海神である。 南山経〕の〔郭注〕に獼猴に似て大、赤目長 おそらく頭部の大きな虫の形であろう。 みな水神とされるもの (莊子、

俱 10 どもにする・みな

图 思想

天運」「道は載せてこれと俱にすべきなり」とは、倶に存す」と、すべて具備することをいう。[荘子、凡に「皆なり」とあり、[孟子、尽心、上]「父母形声 声符は具(具)。具は具備する意。〔説文〕

一体となる意である。

思 13 おろか

思 果

形声 声符は禺。[説文] 九上に「禺は母猴の屬なり」、また愚二〇下には「熱かなるなり。心に從ひ禺に從ふ。禺は猴の屬、獸の愚かなるものなり」とするが、猴は必ずしも愚かな獣の代表とすべきものではない。禺は水神の名とされることが多いが、そのは、その厳荘の状をいう語である。その厳荘の大きな爬虫類であろう。その姿を人に移して顧然というのは、その厳荘の状をいう語である。その厳荘の風姿に似合わず、機略に乏しいという感じを、愚といったのであろう。狡智の人からみると、温和な人は、円発さに乏しいとみえるものであるが、いわゆる姿に似合わず、機略に乏しいという感じを、愚といったのであろう。狡智の人からみると、温和な人は、月発さに乏しいとみえるものである。〔詩、大概、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるは靡し」とは、世雅、抑〕に「哲として愚ならざるなかし、一声に違いない。

虞 13 【虞】13 ばかる・おそれる・たのしむ

原一种英

形声 声符は、呉(吳)。呉は祝禱の器を掲げて

われた。その虞の字形は、〔三体石経〕の古文に四子を下する方法として、掌紋をしらべることが行な子の掌紋が、その字形をなしていることをいう。生 「文ありてその手に在り。虞といふ」とは、生れた 神意に虞ることをいう字である。〔左伝〕昭元年 どのような獣であるのか、明らかでない。〔国語、 紀〕に「冬十月、新野言ふ、騶虞見る」とあるが、とき祀られる神であるかも知れない。〔晋書、安帝とれて虞人の称となったものであろう。騶虞はそのそれで虞人の称となったものであろう。騶虞はその とするが、虎頭をつけるのは、戴・劇など軍戯に関職がある。〔六書故〕に、虞は虎を防ぐものである の字形を収めていない。 詢る」とは、武将たちをいう。もと軍事について、背番3「その(周の文王)位に卽くに及び、八虞に晋統」「その(周の文王)位に卽くに及び、八虞に することで、虞は虎頭をつけて神を悞しませる舞楽 を治める官を使んといい、「周礼」に山虞・沢虞のうところのものである。この獣にあやかって、山沢 り。白虎黑文、尾は身よりも長し。仁獸なり。自ら 舞い祈る形。神を悞しませて、その願うところを達 入をならべた字形に作っているが、〔説文〕にはそ の意。狩猟のときにもそのような祭儀が行なわれ、 死せる肉を食す」とあり、〔詩、召南、翳虞〕に歌 しようとすることをいう。〔説文〕五上に「騶虞な

クウ

空。〔空〕。 あな・むなしい・そらクウ

> て司工に作り、土木などの工作のことを掌るもの「周礼」の六官に司空の名があるが、金文にはすべ空竅のドーム形を空にまで拡大した用法である。 『推南子、原道訓』「空穴のうち、是を以て情に適ななない、『詩、小雅、肖駒』「彼の空谷に在り」、とは石穴。『詩、小雅、肖駒』「彼の空谷に在り」、とがあり、空もその声義を承ける字である。もとことがあり、空もその声義を承ける字である。もと 文〕セドに「籔なり」、その前条の竅に「空なり」 であった。 の閒も、また一孔なるのみ」というが、天空の義は と互訓し、空竅の義としている。〔段注〕に「天地 は最も後起のもので、経籍にその用例がない。〔説 ふ」など、みな空虚・空孔の意であった。天空の義 うにゆるく彎曲する形のものを示す 声符は工。工には虹・杠のよ

グウ

11 ひとかた・でくグウ・グ

「桐木人を得たり」の文があり、また〔淮南子、繆が、〔漢書、江充伝〕に「地を掘りて偶人を求む」 などには「相人(人の姿)」の誤りであろうとする には「偶人」、〔韻会〕には「洞人」に作り、〔校議〕 う。〔説文〕ハ上に「桐人なり」とし、〔太平御覧〕 とかた」を偶という。木偶・土偶・偶像のように 神像で、そのような形に作られた「ひ 声符は禺。禺は顒然たる姿の

嘗君伝〕に木偶が多く出土している。〔史記、孟漢墓からは、木偶が多く出土している。〔史記、孟桐人の語があったことが知られる。いま発掘される 偶を偶数の意に用いるのは「相人偶する」意である。 「相ともに語る」のような話も生れるのであろう。 精巧な機発を備えたものもあったらしく、それで 偶人なり。面目機發ありて、生人に似たり」とあり、 用いたが、近ごろ秦始皇の陪葬地から出土した武 ぞ桐人を爲らんや」とあり、話の内容は別としても、 を作る。吾が父生けるとき供養することを得ば、何 も葬ること能はず。過ちあることを知る。故に桐人 母に悪まるるに遇ひ、父を養ふことを得ず。死する 公曰く、桐人は虞卿に起る。虞卿は齊の人なり。継 称訓」「魯、偶人を以て葬る」の〔高誘注〕に、

寓 2 やどる・かりずまい・おる

腐

〔韓非子、説林〕〔内儲説〕〔外儲説〕には寓話が多批判の形式として生れる。[荘子〕には寓言が多く、批判の形式として生れる。[荘子〕には寓言が多く、 学の形式として、寓言は権威主義的な思想に対する 形式を寓話という。寓話は専政的な支配下の諷刺文 は、大夫が国を去るときの礼をいうもので、そのと 〔礼記、曲礼、下〕「大夫は祭器を大夫に寓す」とるものであるが、本来は神事についていう字である。 ことを寓言といい、そこに意を託することを寓意と ものを託することをもいう。また仮言に託していう き祭器を他の大夫の廟に寓寄する。それよりして他 いう。〔説文〕セドに「寄なり」とは旅寓の意とす 位をいうもので、それより一時やどることを寓寄と 形であるから、廟中に神像としておかれる木偶や神 い。みなその教説に用いたものである。 いう。また動物などに人間的な行動をさせる説話の 人の所に寓寄することをいい、また転じて書を寄せ、 声符は禺。禺はおそらく木偶。では廟屋の

嵎 | 場 | やまのくま

山名である。『書、尭典』に太陽の運行をしるし、を守るものなり」とあり、封・嵎二山は呉郡永安のを守るものなり」とあり、封・嵎二山は呉郡永安のの國なり」と山名に解し、また〔国語、魯語〕に孔の國なり」と山名に解し、また〔国語、魯語〕に孔 「説文」九下に「封嵎の山は吳楚の閒に在り。 「嵎夷に笔る。暘谷といふ」とあって、日の出ると また嵎谷は日の入るところという。〔列子、 形声 声符は禺。禺に隅隈 の前は吳楚の閒に在り。汪芒 の前は吳楚の閒に在り。汪芒

> 嵎夷に作る。嵎・堣は通用の字とみてよい。 「堣夷なり」とその字を用いるが、〔書、尭典〕は 的伝承である。字はまた堣に作り、「説文」一三下に これを嵎谷の際に逐ふ」とみえるが、いずれも神話 湯問〕「夸父、力を量らずして日影を追はんと欲し、

遇12【遇】13 あう・グ

0 争

形声 また時運に会する意に用い、奇遇・千載一遇のようることをいう。遭遇の意よりして、すべて運命的に、文〕ニ下に「逢ふなり」とあり、相期せずして会す うことを遇合という。みな偶然のうるところである に用いる。礼をもって遇するを待遇・優遇、心に協 声符は禺。禺に人相偶する意がある。〔説

隅 12 くま・すみ・かどグウ・グ

製

である。 は、自を草と解したものであるが、自は神梯の象で条の陬字に「阪隅なり」とみえ、山隅の意とするの形声 声符は禺。〔説文〕一四下に「陬なり」、前 れを設ける。禺には、神異なるものの意を含むよう 角櫓は浮思ともよばれる櫓建で、聖所の四隅にそ 文の〔史頌殷〕にみえ、そこには角櫓がおかれた。 限には畏懼すべき聖所の意がある。城隅の字は金まな、この字も聖所に関する字とみられる。

粗15 ならびたがやす・たぐグウ

〔詩、周頌、噫嘻〕にはいわゆる藉田の耕作を歌い、 くもので、 耕作であると解されているが、藉田の耕作は神事的 「十千これ耦す」の句がある。二万人の奴隷の集団 意。耦耕は一本の犂を両牛に架し、二人でこれを挽った。とは、梁五・壁五の二人が共謀して悪事をなす。 年「晉人、これを二五耦といふ」とみえる。「二五子」「長沮・桀溺、耦して耕す」、「左伝」荘二十八字) 江南では早く耦耕が行なわれ、その法はやがて江北 なもので、この詩も〔周頌〕に属する廟歌である。 古く二人相偶して耕すことが行なわれ、「論語、徴した」があり、二人並んで耕すを耦耕という。 耦 にも波及したのであろう。 ト文に未を横に並べた字形がみえている。 形声 声符は禺。禺に人相偶する意

クツ

屈。 かがむ・まがる・きわまるクツ

懕 0

す。〔玉篇〕には「短尾なり」とみえ、また〔韓非するが、字の全体が屈尾の獣の形で、屈服の意を示するが、字の 象形 八下に「尾無きなり。尾に從ひ、出聲」と形声に解 めている形で、尾を屈するのが字の原義。〔説文〕 尸は獣の上体の形。その下に尾をまげて収

堀 あないほり

堀は名詞的に用いる。〔説文〕の部末にまた「兔堀 を歌うものであるが、字はいま掘に作る。掘は動詞、 曹風、蜉蝣」「蜉蝣堀関」の句を引く。羽ありが地 いる。堀のほとりを濠上という。 ように、水をたたえるところ、すなわち濠の意に用 なり」とする同形の字がある。 を掘って外にあらわれるようにという、再生の願い べきところで、窟の意である。〔説文〕にまた〔詩、 り」とは竈突の突で、煙抜きの穴。堀は穴中の居る 匿している土穴を堀という。 〔説文〕 三下に「突な 形声 ている屈尾の形。そのようにして身を 声符は屈。屈は獣が尾を屈し わが国では城の堀の

掘 ほる・うがつクツ

釈詁」に「穿つなり」、 の如し」とは、地下に葬られている佳人の屍を蜉蝣 っ - とあり、〔詩、曹風、蜉蝣〕に「蜉蝣掘関・麻衣雪とあり、〔詩、曹風、蜉蝣〕に「蜉蝣掘関・麻衣雪釈詁〕に「穿つなり」、〔説文〕 | ニ上に「滑つなり」 そのように土を掘りこむことを掘という。〔爾雅、する形。その棲むところを窟といい、 声符は屈。屈は獣が尾を屈曲

> 儒が墓を掘って、墓荒しをする話がみえる。殷墓に 〔左伝〕哀二十六年、衛侯が墓を掘ってその墓葬の歌である。それで墓を掘りかえすことをもいい、にたとえ、それが地中から復活する願いをこめた挽 に古い。これを掘蔵という。 ものを焚いた話がみえ、〔荘子、外物〕に大儒・小 も早期に盗掘のあとがあり、盗掘の歴史は墓ととも

数 12 たちまち・にわかにクツ

気が一時に盛んとなることをいう。欠は気を送る形ない。起るとは忽ち起る、卒に起る意で、欻とは火九文中に「讀みて忽の若くす」という忽の声の字はとするが、字はまた歘にも作る。[説文]の炎声十とするが、字はまた歘にも作る。[説文]の炎声十 火を吹いて起す意である。 脈 会意 に「吹き起す所あるなり」とし、炎声 炎と欠とに従う。〔説文〕八下**

当山 2 かがめる・まがる・つまる

製頭 る体の字は屈に従うており、 〔説文〕にあげる或

「折なり」、〔玉篇〕に「狂曲するなり」とあるよう節・詘辱など、みな屈と同義。〔広雅、釈詁〕に配声によむ。字は屈の声義を承け、詘伸・詘折・詘屈声によむ。字は屈の声義を承け、诎伸・詘折・詘 とは吃の意であるが、その用義例は殆どない。に、枉屈の意がある。〔説文〕三上に「詰詘なり」 声符は屈。詘は絀の意に用いるとき以外は、 すべて

窟 13 あな・いわや

> を爲りて、夜酒を飮む」という。人に隠れて宴楽す 形声 伏という。 とは異なり、巌窟をいう。巌窟にかくれることを窟 掘を窟字の義に用いるものであろう。窟は兔掘の類 にこの字なく、堀一三下に「兔掘なり」というのは、 るところに宜しく、遊里を遊仙窟という。 〔説文〕 いた。〔左伝〕襄三十年、「鄭伯有、酒を嗜む。 が住み、物を集積するところとし、また墓窟にも用 の棲むところを窟という。古くは洞穴人のように人 声符は屈。屈は獣が尾を屈曲する形で、 窟室

喰 12 くらう

と 餐、また音孫」とみえる。その書は古今正俗の字二ず、ただ遼の僧行均の〔竜・龕手鑑〕に「喰、音はず、ただ遼の僧行均の〔竜・龕手鑑〕に「喰、音は一種を表している。中国の書に殆どみえ が国で多く用いる字である。字はその音から考える に「くらふ」と訓する字はすべて三十八字。喰はわ 六四三〇余字を録したものである。 〔類聚名義抄〕 おそらく餐・飱の略体であろうと思われる。

くめ

国字 麿とするのと同じ。ただ久米の姓は〔万葉〕にも多 別の意味のある字ではない。たとえば麻呂を合せて くみえるが、字を粂に作る例はない。 久米の二字を含して一字としたもので、特

であった。のち二人称の敬称として用いる。 それで君子とはもと位に在るものをいう。これに聖 代と同じである。のち君臣の意となり、君子の義と 人君子のような徳性としての意味を与えたのは儒家 たる女性が君であったことは、わが国の卑弥呼の時り」とあり、神につかえるものが君であった。神巫 いわゆる多君・里君百生を指していう語であった。

訓 10 おしえる・みちびく・よむクン

文に官名として作冊尹・内史尹など、巫史系統の長する意とするが、口は祝禱を収める器の形。尹は金

「尹に從ひ、號を發す。故に口に從ふ」と口で命令 こ上に「尊なり」と声義の近い字をもって釈し、 禱して祈る聖職者をいうのが原義である。 〔説文〕

職者を意味する字。口はID、祝禱を収める器で、祝会意 尹と口とに従う。尹は神杖をもつ形で、聖

君

君

きクみン

周問 和

に従い、 韶けて辟忌を諧げることを掌る。地俗に関する語れ、地官〕に「土訓・誦訓」の職があり、地事をに「土訓・誦訓」の職があり、地事をに「これ順ふ」に作るなど、通用の例が多い。[鳥 多い。訓と通用する順もまた金文の字形は渉と頁と また〔書、洪範〕「これ訓ふ」を〔史記、宋世家〕 [左伝] 哀二十六年に引いて「これに順ふ」に作り、 化のように用いる。 〔説文〕三上に「説教するなり」とあり、 されるものにも、その地の地霊に対する献詠の歌が な呪詞の遺存するものであり、〔万葉〕の叙景歌と わが国の古代歌謡にみえる序詞や枕詞は、そのよう を誦して、地霊を安んずる呪儀を掌るものであろう。 く、〔詩、 あるのは、あるいは音声の類似によるものであろう。 もと河水に対する呪儀を意味する字であっ 、周頌、烈文」「四方それこれに訓ふ」を 形声 川声六文の中、この字のみがこの声で 訓は順と声義の関係があるらし 声符は川。〔説文〕に収める 訓育・訓

に「皇辟君」の語があり、〔史頌殷〕に「里君百生れた。〔小盂鼎〕には「多君」の語があり、〔盟由〕れた。〔小盂鼎〕には「多君」の語があり、〔盟由〕

政治的な君長たるもので、古くは氏族長が君とよば

公であった。君はそのような聖職者であり、同時にいたものは伊尹、周では皇天尹大保とよばれる召けたものは伊尹、周では皇天尹大保とよばれる召者の代表が殷都に集められていた。殷の王権をたす

であった。卜辞にも多尹の称があり、各氏族の聖職 官名に用い、みな神事を掌る聖職者とされるもの

> 盐・訓故という。〔漢書、劉·欽伝〕「初め左氏傳にとなる。古字古言を今字今言をもって解するを訓た。それより教訓・説教の意となり、また訓詁の意 るものがそれである。 古字古言多し。學者訓故を傳ふるのみ」とみえて た。それより教訓・説教の意となり、また訓詁の

焄 ふすべる・かんばしい クン

高悽愴」といい、神を祭るをいうときに多くこの語為はい。これによって神気のあらわれるさまを「気養」に、これによって神気のあらわれるさまを「気候」にこの字を収めていない。ただ「礼記、祭 「説文」にこの字を収めていない。ただ「礼記、祭字であるが、煮はおそらくその形声字であろう。 形声 り。亦薰に作る」とする。薰(薫)は火薫の象形の ている例がある。 が用いられる。〔孔子家語、五儀解〕に葷に借用し 声符は君。〔玉篇〕に「焄は火上出する

裙 12 [帮]10

は「釈名、釈衣服」に「下裳なり」とあり、常とに「繞れる領なり」と改めて衿あての意とする。裙と下に常を正字として「下裳なり」とし、〔段注〕と下に常を正字として「下裳なり」とし、〔段注〕と「発している。 裙とは同字とみてよい。裙釵・裙帯など、みな婦人 ものがいたのであろう。 少年を裙屐少年という。古い時代にも、女装を喜ぶ の用いるものであるが、女子のような身なりをする 琴幕 形声 声符は君。正字は常

葷 13 からな・なまぐさ

という。〔左伝〕襄十四年に「夫れ君は神の至りな 君と称している。また〔墹生設〕には母氏を君氏 王の夫人であろうが、作器者の睘(人名)は王姜を 夫人のことである。「作冊簑卣」にみえる王姜は成た。「尹姞鼎」(公姉県)に「天君」と称するものも、た。「尹姞鼎」(公姉県)に「天君」と称するものも、

ともあり、王侯夫人のことを君氏とよぶ伝統があっ (姓)」の語がある。古く婦人がその地位にあったこ

葷を薫・煮などの字に作ることもあり、みな通用の 字である。 を許さないのは、致斎を破るがためである。葷酒の て齋と爲すべきか」という。葷酒の山門に入ること 唯酒を飮まず、葷を茹はざること數月なり。則ち以 w.定めであった。〔荘子、人間世〕に「回の家貧し。事のもの斎みをする致斎のときには、これを用いな事のもの斎みをする致斎のときには、これを用いな を問ひて葷を膳す」というのもその義であろう。神 という。〔儀礼、士相見礼〕「夜侍坐するときは、夜 みえ、〔玉篇〕に「葷菜は凶邪を辟くる所以なり」 (桃の木・あしの穂、 玉藻〕に「君に膳するときは、葷・桃茢 菜なり」とあり、韭・葱の類である。 邪気をはらうもの)あり」と 声符は軍。〔説文〕一下に「臭

熏 14 [燻] 18 [纁]20

黄蜂

離に作る。 骸は架糸の形、東は東、田は染色の鍋。 を用い、糸を染めることを種といい、その初文は 橐の上部を括った形である。 古くは染色に熏染の法 從ひ黑に從ふ。中黑は熏の象なり」とするが、中は 文〕一下に「火煙、上に出づるなり」とし、「中に形。これを火であぶって熏染することをいう。〔説

> 「三入を纁と爲す」という。経籍に熏を纁に作るこ 裏」を賜うことが多く、虎皮に朱黒の裏地をつけたいう。金文の車服賜与冊命形式のものに「虎冥薫」直接に火にあてて、熏蒸を行なう字。その色を熏と直接に火にあてて、熏蒸を行なう字。その色を熏と [周礼、鍾氏]は染色を掌るものであるが、鍾は種にいい。 れている。燻は熏の繁文で、俗字である。 とが多く、古今の字とみてよいが、用義上は区別さ ものである。字はまた纁に作り、「周礼、鍾氏」に が正字、鰡がその初文である。熏はその東(橐)を

勲 15 (勳) 16 (勛) 12

もと職事のない散官であった。 隋唐以後、上 柱 国徽章を勲章という。 軍功を賞する官を勲官といい、 勲・勛はその形声字であろう。 [周礼] に〔司勲] 〔毛公鼎〕に「厥の辟を襄 辪し、大命に勳勤せり」する字であろうが、その初義を考えうる資料はない。 の官がある。勲功を賞することを勲賞とい とよみうる文があり、その勲の字形は爵をもって酒 をそそぐ形の象形字である。おそらくその字が初形、 おり、力は耒の象形の字であるから、もと農耕に関 二体が同時に行なわれている。いずれも力に従うて 漢碑には勲と勛と相半ばして用いられており、この て、王事に勲功のあることをいう。〔書、尭典〕の る。〔説文〕」三下に「能く王功を爲すなり」とあっ 形声 -放勳」を、〔孟子、万章、上〕に「放勛」に作る。 旧字は勳に作り、薫声。古文の字は勛に作 い、その

その系列の官名がある。

薫『(薫)』[燻]』 かおり・くゆらすクン

する意より、刑に連坐することを薫胥、徳をもっては、以て癘(悪疾)を已すべし」という。他に薫染は靡蕪(おんなかぶら)の如く、これを佩ぶるときは靡蕪(おんなかぶら)の如く、これを佩ぶるときある。〔博物志〕に「君子の國に薫華の草多し」とある。〔博物志〕に「君子の國に薫華の草多し」とある。〔博物志〕に「君子の國に薫華の草多し」と 十年にして尙なほ臭有り」といわれるほどのもので に香気の強いもので、〔左伝〕僖四年「一薫一蕕、 人を化するを薫化という。 文〕「下に「香草なり」とあり、 形声 旧字は薫に作り、 熏声。 〔説

麇 「雷」 のろ・あつまる

る。みな同声の字である。 用いる。またその意には攈の字を用い、また捃に作 をいう。群集の性があるので、麋至・麇集のように ある。 困声。字はまた君に従うて、君声とすることが また。 灪 〔説文〕 一〇上に「麞なり」とあり、「のろ」 省略形。籀文の字形は麕に作形声を一声符は禾、禾は囷の

曛 18 たそがれ・くれるクン

たもので、熏の声義を承ける字である。纁とは赤黄 きのかげりを、たそがれの日の光に転用して作られ 朝のころより用いられている字である。熏蒸のと 形声 声符は蒸。〔説文〕にこの字を収めず、

動進退するを運という。〔中山王鼎〕の字は勾に従名がみえている。軍を指麾するを揮といい、軍を移 字を勻声としているようである。

犁

郡 こグ おり

無羊」は牧場開きの詩で、「三百これ群す」とあり、

声符は君。〔説文〕四上に「輩なり」と訓

一団をなす群集の意である。〔詩、

また〔吉日〕は狩猟を歌うもので、「或いは群し或

するが、

字はまた捃に作り、[急 就篇] に「穫を捃ひ把をので集まる意となり、凝摭・攈拾のように用いる。

秉る」の句があり、落穂を拾うことをいう。

午教〕に「群諸侯」という語がある。すべて多く群とないような字が生れた。これを人に移して、〔陳侯どのような字が生れた。これを人に移して、〔陳侯〕

いう。羊や鹿には群集する性があるので、群・ いは友とす」の句があり、何れも獣の群れることを

際な

集する意に用いて、群雄・群臣・群衆・群言・群小、

また群生・群飛のようにいう。

形声

声符は糜。糜は「のろ」。群集を性とする

攈』「捃」」。

あつめる・ひろう

輛

村

女。

色をいう。

群 千里、 「郡は國なり」とする方がよい。郡制は、 音義説をもって解するよりも、 のであろう。〔釈名、釈州国〕に「郡は群なり」と 氏族国家が、王朝的組織に編入されたとき生じたも 程度の規模であったとみられる。郡は独立的な古代 地名)を賜ふ。……その縣三百なり」、また〔論轉〕 字はみえず、「叔夷鐘」に「余、女に釐都(所領の知録」や「陔余叢攷」に詳論がある。金文には郡の前にも、すでに郡大県小の制であったことは、「日 伝〕哀二年、「上大夫は縣を受け、下大夫は郡を受 のであった。〔説文〕六下に「周の制、天子は地方 同体は、その後も長く地方行政下に含まれていたも 周書、商警〕に、誤って里居に作る。この村落共築。」また〔史頌段〕にみえ、〔書、酒誥〕や〔ぬ矣〕 を都といったのであろう。里君の名は周初の〔令を都といったのであろう。里君の名は周初の〔令なる村落の統治者で、その支配する地域配り、 おは里君とよばれ 接統治下においた秦に至って布かれたものである。 に二百九十九邑を賜うたことがみえ、県と邑は同じ く」とし、県大郡小とする。しかし秦の三十六郡以 **、分ちて百縣と爲し、縣ごとに四郡あり」、〔左** 〔広雅、釈詁〕に 天下を直

11

けさっカ

声符は加。袈裟は「倭名類聚抄」に「天

軍。

いグ

形声 竺の語なり」というように、梵語 kasāya の音訳語 である。袈はもと毛ごろもをいう字であり、

袈裟も

さケかイ

**** こうご はじめ衣を毛の形に作ったという。〔倭名 抄〕にま なり」とするが、いまの〔広韻〕にみえない。 た孫愐の〔広韻〕を引いて「傳法衣、卽ち沙門の服

り」とし、包に従うて包囲する形を含む字とするが、 を軍と爲す。車に從ひ、包の省に從ふ。軍は兵車な とを示す。〔説文〕一四上に「圜く圍むなり。四千人

車上に旗を立てている形で、兵車であるこ

グン 軍 郡 ケ 袈

諸侯は三軍。〔叔夷鐘〕や〔庚壺〕に、斉の三軍のは則ち鳴惑を載つ」などの記述がある。天子は六軍、

むらがる・むれグン

八月州

意となった。

今 4 ケイ

韻文に多く用い、〔詩、鄭風、羔裘〕「彼の子やところなり」と、今・稽の畳韻をもって訓するだというのは、余声の残る意であろう。字は乎と形がというのは、余声の残る意であろう。字は乎と形がというのは、余声の残る意であろう。字は乎と形がというのは、余声の残る意であろう。字は乎と形がというのは、余声の残る意であろう。字は乎と形がというのは、余声の残る意をもって訓する。字ところなり」と、今・稽の畳韻をもって訓する。字ところなり、大を呼ぶとき用いたものであろう。「説文】」を明らせて曲の終始を知象形 鳴子板の形。これを鳴らせて曲の終始を知象形 鳴子板の形。これを鳴らせて曲の終始を知り、

一なれば今 心結ぶが如し今」のように句末に用いる。〔老子〕第四章「淵兮として萬物の宗に似たり」のように状態詞に用いることがある。この淵兮を〔河上公本〕に淵乎に作り、兮と乎とは声義ともに近く、何れも匣母、その音に長短の差があり、兮は語勢が長く、乎は短促である。字はまた猗と通ずる。 たイ・キョウ(キャウ)

光 学界光雅

会意 口と人とに従う。口は"D、神に祈る祝詞を は、季女の悲恋を歌うものが多い。兄の字形の袖の は、季女の悲恋を歌うものが多い。兄の字形の袖の なす。これを"祝という。」」と訓し、兄弟の兄の字と し、〔段注〕に「口の言は盡くることなし。故に滋 長の意は、兄長が家の祭事を"掌"。るものであったからで、これを"祝という。」』」。」の長子伯念は大祝のらで、これを"祝という。」』」。公園といい、他に被することがなく、終生家廟につかえた。一般には本女が巫児となることが多く、「詩」の国風諸篇には、季女の悲恋を歌うものが多い。兄の字形の袖の部分に、舞うときの飾りをつけた字があり、"訳"。 の言となり、「大祝禽」と銘している鼎がある。〔漢書、 地理志〕によると、斉では長女を巫児といい、他に 嫁することがなく、終生家廟につかえた。一般には 本女が巫児となることが多く、「詩」の国風諸篇に は、季女の悲恋を歌うものが多い。兄の字形の袖の 部分に、舞うときの飾りをつけた字があり、"訳"。

形に従うのは、兄がもと祭事に従う人であったからである。

大 5 とどまる

象形 曲頭の木の形。〔説文〕六下に 「木の曲頭、止まりて上ること能はざるなり」とするが、その木は犠牲をつなぎ、あるいは神を迎えるための表木であろう。祝・稽はその形に従う字で、犬は犬牲、旨は鼠・詣の初文で、神形に従う字で、犬は犬牲、旨は鼠・詣の初文で、神不の意をもち、軍門に樹てる禾と同じ意味のもので木の意をもち、軍門に樹てる禾と同じ意味のものであろう。

刑。「荆」。つみて

が、ササカ

邗

明井とかき、帥型を帥井としるしていて、もと一字に分化して刑と型となったもので、金文には明刑をあり、刑罰のときに用いる首伽の形と、鋳型の形があるが、刑罰のこととは関係がない。井に両義があり、刑罰のときに用いる首伽の形と、鋳型の形をあり、刑罰のこととは関係がない。井に両義があり、刑罰のときに用いる首伽の形と、鋳型の形をあり、刑罰のこととは関係がない。井に両義があり、規制するものという同じ語源をもつ語である。のちに分化して刑と型となったもので、金文には明刑を形声 正字は州に作り、北声。〔説文〕に両形を形声 正字は州に作り、北声。〔説文〕に両形を形声 正字は州に作り、北声。〔説文〕に両形を

である。

主もたま

土

象形 主玉の形。〔説文〕ニー下に「瑞玉なり」と、その形制について「上闌(円)下方、公は、根し、その形制について「上闌(円)下方、公は、根し、その形制について「上関(円)下方、公は、根し、その形制について「上関(円)下方、公は、根し、その形制について「上関(円)下方、公は、根し、その形制について「上関(円)下方、公は、根し、その形制について「上関)に「女にした。主玉は頭部が長方形で、その両旁に近常といった。主玉は頭部が長方形で、その両旁に近常といった。主玉は頭部が長方形で、その両旁に近常といる。金文に裸主を制り、男は瀟氅を執りみな五寸、以て諸侯を封ず」とともに授与される例が多く、「毛公鼎」に「女にした。主張を対して、おけである。金文に裸主を賜うことが多くみえ、卣(酒器)とともに授与される例が多く、「毛公鼎」に「女にした。主張を対して、諸侯を封ずるとさいた。のち礼器として、諸侯を封ずるときの玉器とされた。

四 7 「四」7 まど・あきらか

ී ම ම

古くは地下、あるいは半地下式の土室に近いもので、象形 窗の形。窗(窓)は地下の室に囧のある形。

圭 冏(囧)

启 巠 形

木の格子を加えた窗から光をとった。それで明の初木の格子を加えた窗から月光の入る形である。「説文」とは明に作り、四から月光の入る形である。「説文」と上に「窗牖、龍樓薗明なるなり」とあって、格子と上に「窗牖、龍樓薗明なるなり」とあって、格子と上に「窗牖、龍樓薗明なるなり」とあって、格子とよった。それで明の短いたのである。

启っ からく

(戸) 会意 戶(戸)と口とに従う。戸は 原の中に祝詞が収められている。〔説文〕ニ上に 扉の中に祝詞が収められている。〔説文〕ニ上に になり。戸口に従ふ」といい、他家を訪ねて戸 を明け、挨拶する意と解するが、字は祝詞を収めた ところを啓く意で、后に手(又)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后に手(又)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后に手(又)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后に野(双)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后に野(双)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后に野(双)を加えた字が啓で ところを啓く意で、后は啓の初文とみてよい。

至7 たていと

里電

分であろう。〔説文〕の地下水脈とする字形解釈は、を録しており、下部を壬に作る。字形は地を示す一の下に川があり、壬声とするが、下部の工の形は、の下に川があり、壬声とするが、下部の工の形は、では、この、 また古文の字形を録った形で、經(経)の初文。

金文の字形からみても全く誤ったものである。金文にこの字を経の字として用い、[大盂鼎]「悪空を記にこの字を経の字として用い、[大盂鼎]「悪の聖保なる祖、師華父を巠念す」とは徳経、すなわち徳の基本を敬むこと、また「大克鼎」「厥の聖保なる祖、師華父を巠念す」とは、の聖祖をつねに回念する意である。巠はたてとはその聖祖をつねに回念する意である。巠はたてとはその聖祖をつねに回念する意である。空はたてとはその聖祖をつねに回念する意である。望は既を敬言路では径(徑)・逕のように用いる。劉は頸を切道路では径(徑)・逕のように用いる。金文はない。

形っかたち・あらわす

成す」の意であろう。〔易、乾卦、彖伝〕「品物、形 「形色は天性なり。惟聖人にして然る後以て形を踐 を流く」とは、地上の森羅万象、すべての形あるも 楽記」「天に在りては象を成し、地に在りては形を楽記」「天に在りては象を成し、地に在りては形をれるとする。〔説文〕九上に「象なり」とは、〔礼記』 て完成しうることをいう。形は実によって成 むべし」とは、天与の形体を、修為によってはじめ という。形態の美を形といい、〔孟子、尽心、上〕 の美しいことを変彰といい、丹には形、光には影 う。彡は色彩や光沢などの美しさを示すもので、色 に属しており、型によって形成された形態を形とい るから範型の意となる。形の声義は範型の型の系統 であるから刑の意となり、また鋳型の外枠の形であ明井は明刑、帥井は帥型の意である。井は首姉の形 、帥井は帥型の意である。井は首出。井は刑および型の初文で、今時。井は刑および型の初文で、今日の一番を表演が、一番の一番を表演が、一番の一番を表演が、一番を表演が、一番を表演が、一番を表演が、一番を表 肝と彡とに従う。开の初形は 金文の 就さ

のをいう。

系っ かとすじ

京鷺縣 机点

祭のときの尸として、この呪飾をつけている形でので、その占断の語を占鯀という。孫もおそらく祖ので、 籍文の字形は綵の形に作るものであるが、その形「繋くるなり」とあり、重文二を録する。そのうち する字である。 る言の両旁に呪飾をつけ、これによって神を變しま て祖霊が顕ち顕れるのである。また縁は神に祝禱す 形の頁を加えているもので、この玉と呪飾とによっ (日の形の部分)にこの呪飾を繋け、これを拝する は卜文・金文にもみえ、呪飾としての組紐を垂れて あろう。のちすべて系連するものをいい、繫と通用 た鯀は、祭肉に呪飾を加えて祈り、 として佩びるものであった。顯(顕)の字形は、玉 ることがしるされており、それは祓除のための呪飾 いる形とみられる。「儀礼、士喪礼」に組繫を著け また禍殃を變(変)更させることができた。ま 飾り糸を垂れている形。〔説文〕一三下に 神意を求めるも

明8郊野の地

は外界を画することを示す象形の字。 形声 声符は回。その初文は口。↑

「避かなり」と訓する字である。 「避かなり」と訓する字である。 「競雅、釈詁」にいられる。同じく同に従う過は、「爾雅、釈詁」に対して同・坰をあげているが、〔詩、各類、駉〕「坰の野に在り」のように、坰の字が用各類、駉〕「坰の野に在り」のように、坰の字が用を換べ、割しているが、『詩、本の字である。

径8【徑】10 こみち

形声 旧字は徑で、空声。楽はたて 系を張ってその下端を横木でとめている形で、たて糸をいい、直線的であるものをいう。 意。〔礼記、月令〕に「袋徑を塞ぐ」とは獣道をいすべきところも、歩行ならば近道することができるすべきところも、歩行ならば近道することができるすべきところも、歩行ならば近道することができるすべきところも、歩行ならば近りという。

別 8 とおい・はるか

である。である。の詩のほかには、古い用例をみない字という、その祭儀と関係のあることであるらしく、という、その祭儀と関係のあることであるらしく、

茎8「莖」11 くき・もと・はしら

係のかける・つなぐ

到 9 ケイ

勁 9 つよい・かたい

勁

期以後に至って用例がみえる。 野直のもので、力と前に至って用例がみえる。 野山の強くはたらく状態を勁という。対は筋力の意とはたらく状態を勁という。対は筋力の意とならず」とあり、筋力の強いことをいう。転じてすならず」とあり、筋力の強いことをいう。転じてすならず」とあり、筋力の強いことをいう。転じてすならず、手足勁強ならず、とない、別が、(大)・勁兵(武器)、乗車が、乗車のもので、力を対している。

型 9 いがた・かた

世帯を

のは模、竹で作るものは粒(範)、それで模範とい井・荆・型と展開する。型を作るのに、木で作るも型の意に用い、刑罰の字は井・荆・刑、範型の字はは縁型を組み合せた形。金文に井を刑罰の刑と、範に縁型を組み合せた形。金文に井を刑罰の刑と、範に縁型を組み合せた形。金文に井を刑罰の刑と、範に縁型を組みでする。

っ。土で作るものは型で、刀はその整形のためのもう。土で作るものは型で、刀はその整形に作る字があり、その田は鋳こみに用いる鍋田の形に作る字があり、その田は鋳こみに用いる鍋田の形に作る字があり、その田は鋳こみに用いる鍋田の形であろう。型に鋳こんでから、その型を外すことを剛という。剛は网と火と刀の会意字。网形の部とを剛という。型は録は catalogue の音訳で、ものを典型という。型録は catalogue の音訳で、ものを典型という。型録は catalogue の音訳で、わが国の造語である。

奎 9 またぐら

奎 《大生

奎画、文運のことを奎運という。

契の「契」の わりふ・きざむ・きる

加え、 を質・ 誓のために行なうことがあった。〔左伝〕哀十一年 問う「臂に契して、以て誓ふ」のように、契約や人の身体に契を加えることは、たとえば〔列子、 人の身体に契を加えることは、たとえば〔列子、湯契の字形からいえば、人の頭部に鑿歯を加えた形で、 隣人に告げて曰く、吾が富まんこと待つべしと」と のあり。歸りてこれを藏す。密かにその齒を數へて 道に游きて、人の遺契(落しものの契)を得たるも な券契のことをいう。〔列子、説符〕に「宋の人、屋〕に「客と有司と、契を別つ」とは、そのよう と鼎の形である。契は割符のことで、「管子、 大を大小の大の意とするが、大約を鼎に刻したもの に重要な契約の方法と解して「大約なり」と訓し、 に両分して割符とする。大は人の形。おそらくもと は、みな入墨の針である辛を額に加える形で、 とすれば理解しうる。家内奴隷を意味する童・ たらしく、〔説文〕にいう「大約なり」も、 るような、 契刻を加えるのは、その人自身が契約の対象物とな 人頭に契刻を加える意の字であろう。 〔説文〕 - 〇ト に、三刻して信を約することがみえる。契が人頭に いう話があり、契には歯、すなわち刻み目の鑿歯を これによって金額を示したものと思われる。 劑(剤)・則という。質・則の従う貝は、 たとえば人身売買を意味することであっ 会意 刻を加える意で、その線刻の部分を縦 初と大とに従う。

初は刀で 契約や盟 どう *しょう 入墨

によってその身分関係を示す。契も本来はその意で、 本に契刻するものは契という。契はのち一般の契約 の意となり、その撃歯の合致することを契合といい、 これを心意の上に及ぼして契会・契心・契機のようにいう。契濶は双声の語で、もと死生契うを持つようにいう。契濶は双声の話で、もと死生契論。子と説のを成さん」と歌う。戦死した夫を弔う悼亡の詩でびを成さん」と歌う。戦死した夫を弔う悼亡の詩である。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字をある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を書という。セツの音は、舞のとき同様によってその身分関係を示す。契は本来はその意で、 本に契刻するものは契という。 思われ、〔詩、邶風、撃鼓〕に「死生契論」子と説。 びを成さん」と歌う。戦死した夫を弔う悼亡の詩である。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある。のちひろく文字を契刻する意に用い、文字を ある契のときに用い、字はまた関に作る。

局 9 とびら・かんぬき

形声 声符は同。[説文] ニ上に同り、 「外より閉づる闕なり」とあり、かんなきをいう。[呂氏春秋、君守] に「中、出でざらんことを欲する、これを帰と謂ひ、外、入らざらんたことを欲する、これを帰と謂ひ、外、入らざらんたことを欲する、これを帰と謂ひ、外、入らざらんたことを欲する、これを帰といる。ときは扃を奉ず」とは、静かにもち上げるようにるときは扃を奉ず」とは、静かにもち上げるようにるときは扃を奉ず」とは、静かにもち上げるようにる。 大鼎をもちあげる横木をも、扃という。その鼎の両耳は口沿の上に立ち、いわゆる立耳の形式をとっている。

挂りかける

◆ 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 」 」 「 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「

国語では掛を用いることが多い。 掛と通用し、た月が上空にあることを挂月という。掛と通用し、た月が上空にあることを挂月という。 宮殿を辞することを 建窓・ は続い しょうに用いる。 宮殿を辞することが まかり」とあり、横にわたしたものにかけ渡す意。

三日 9 かぞえる・はかる

ろう。 ト筮の用語であり、計はもとトに従う字であったから。〔説文〕に「舅ねり」の言?.. り、もと占卜の記録を稽える意と思われる。卟=下占人」に「蕨終には則ちその占の中否を計ぶ」とあまれず、字は他に基づくところがあろう。[周礼、思われず、字は他に基づくところがあろう。[周礼、 [周礼、大宰]「歳終には則ち百官府をして、各、そとは既会の意で、年間の総括報告のことをいう。 じ」とあり、計・卟・稽の声義に通ずるところがあ り、もと占トの記録を稽える意と思われる。 「會なり。筭なり」と解している。〔説文〕のいう会 と思われるが、訃の形を避けて計となったものであ に「トして以て疑はしきを問ふ。讀むこと稽と同 に干に従う形もあるが、十・干何れも字の初形とは 入を聽くに要會を以てす」とみえる。字形は古陶文 の治を正し、その會を受けしむ」、また〔小宰〕「出 〔説文〕に「筭なり」の訓を加えているのも、 のちすべて計数・計画・計謀のことをいう。 会意 う。〔説文〕 三上もその字形によって 篆文の字形は、言と十とに従

迎 9 はるか・とおい

へだてめぐらす障壁の形。遠く辺境形声 声符は同。同は外境との間を

甚だしく異なる状態のものをいう。 地質なるをいう。また廻抜・廻異のように、尋常と炯と声義が近いが、炯はその障壁をいい、廻はそのの城塞に設けることが多く、それで廻遠の意となる。

惊ロ ケイ・キョウ (キャウ)

形声 声符は常。京は戦場の遺棄屍うこの字の背景には、その呪霊の力があるようである。〔説文〕ハ上に「彊なり」と強の義とし、〔詩、大雅、桑柔」、「心を乗ること競ふこと無し」を〔唐大雅、桑柔」、「心を乗ること競ぶ」と強の義とし、〔詩、大雅、桑柔」、「心を乗ること競ぶ」と強い義とし、「詩、大雅、桑柔」、「心を乗ること競し」に作る。文献には殆ど用石経〕に「倞ふこと無し」に作る。文献には殆ど用石経〕に「倞ふこと無し」に作る。文献には殆ど用

勍 10 つよい

形声 声符は点。京は戦場の遺棄屍というときにはこの字を用いる。

変10 かしつかい・なんぞ

Box sort your sort

" The set the

象形 頭上に髪を編みあげた女子を牽く形で、女奴隷をいう。[周礼、禁襲氏] に実験の名がみえ、 を関うし、また「漿水」に「実育有五十人」など、 多数の奚が属している。呉大澂の「字説」に、朝 学はその形を示す字であるという。それは裏数と 異はその形を示す字であるという。それは裏数とよ ばれるもので、「漢書、東方朔伝」に「盆下に裏数 を爲す」とみえ、平たい合座を頭に載せ、その上に 盆をおき、物を盛る。朝鮮婦人の戴器や、わが国の 大原女と同じである。しかしト文・金文の字形は、 ものを戴く形ではなく、編髪を牽く形であるから、 やはり女奚の象形字とみてよく、ト文にはまた蹊の 学形がある。「説文」一〇下に「大腹なり。大に從ひ、 字形がある。「説文」一〇下に「大腹なり」の義は、そ の用例がなく、これは豕部九下の奚声の字の義。また系に従うとするも、字形が異なる。系は呪飾とし て人に加える糸で、係や孫

して加える例はなく、〔説であるが、これを編髪形とはその呪飾を加えた形の字

an C + m

大量に捕獲され、犠牲とされているものであるが、祭の形は、ト文の差の対象の形と似ており、厳一等、氏に辮髪奚奴と解する説がある。金文の図象にど、「大郎を柔に従うとするのは疑問である。奚の編とび、「大郎を柔に従うとするのは疑問である。奚の編して加える例はなく」副

恵口(恵)2 めぐむ・いつくしむ・したがう

AL PAR

「師詢設」「女をして我が邦の小大の「猷」を恵鑑せし恵張でひろめること、「大克鼎」「萬民に恵す」は恵、恵張でひろめること、「大克鼎」「萬民に恵す」は恵、恵の意に用いる。「気はど思う」「大命を恵・閉す」は 我が邦の小大の一飲を難げよ」においても、上一人とが多い。〔毛公鼎〕「夙々を虔み、余一人に惠し、とが多い。〔毛公鼎〕「夙々を虔み、余一人に惠し、用いる。愛恵の意よりも、むしろ敬慎の意にいうこ が知られる。 舵を惠む」、『王孫遺者鐘』「政德を惠む」のようにと字形も心を加えて惠(惠)となる。『沈児鐘』「明と字形も心を加えて惠(惠)となる。『沈児鐘』「明 るもので、のち繋となる字であるが、金文には叀を 形声 など金文の用義と近く、同時代的な用法であること 大雅、抑〕に「朋友に惠す」というのも、〔毛公鼎〕 に対して恵というのは、なお戒慎の意である。〔詩、 嚢にものを入れ引き締める意があり、列国器になる む」は恵雝(ひろめやわらぐ)の意である。叀には **叀は上部を括った嚢の形、上から繋けることのでき** と訓し、字を会意とするが、会意とする説明がない。 大雅、民労」「この中國に惠す」の「鄭箋」に 正字は叀で叀声。〔説文〕四下に「仁なり」 のち恵愛・恩恵の意に用いるので、

「愛するなり」とするが、この句もなお戒める意であろう。〔詩、邶風、燕々〕「終に温かにして且つあろう。〔詩、邶風、燕々〕「終しこれを自然に及ぼして恵風・恵雨という。〔書、顧これを自然に及ぼして重風・恵南という。〔書、顧これを自然に及ぼして東風・恵中という。〔書、顧いよる恵は三縄矛。古文や金文の恵の字形に、新聞の本のである。

挈 10 さげる・とる

新学 形声 声符は郷。〔説文〕二二上に (学伝) 襄二十七年「その妻子を挈ふ」、〔礼記、 王制」「班白のもの(白髪まじり)は提携せず」の ように、携と同義に用いる。参考としてあげるト文 の形は、孫治譲が挈の初文としたもので、人・衆・ 射・羌を目的語とする

リン)がイ(ひきいる)の義をもつ。挈はのちの形声字である。

契10 きざむ

桂10かつら

笄10【笄】12 たうがい



辨

妻とはそれぞれ笄・簪を加えて正装した姿で、婚礼た形が夫である。女子が簪飾を加えた字形は妻、夫士冠礼〕にも冠笄のことがみえ、その冠に笄を加えまり、冠翼を用いるときにも笄を加えた。〔儀礼があり、冠翼を用いると

で、長さ一九三センチの例がある。 に、長さ一九三センチの例がある。 に、長さ一九三センチの例がある。 が就は長さ一尺の定めであった。新出土の骨笄のときをいう。吉笄は長さ尺二寸、喪礼のときに用

斛

į

邦 10 かばら・むち

形物があれる

形声 声符は刑。[説文]一下に「楚、木なり」と形声 声符は刑。[説文]一下に「楚、木なり」という。を文の〔塵段〕にみを・荆は互訓、荆(棘を加えた字形がある。〔弦段〕に巻きる判は互訓、荆(棘をいう。金文の〔塵段〕にみると、(本)と、(を)を)を(を)がある。「説文」では、人の手足に械を加えている形、える判は互訓、判(棘を)に、後、木なり」と形声 声符は刑。〔説文〕一下に「楚、木なり」と形声 声符は刑。〔説文〕一下に「楚、木なり」と形声

10 さか・たに

門。町

形声 声符は堅。堅は小径の意。阜部の字は、もと神梯の自の形に従うもので聖所を意味し、阿なり」れたる坎なり」とあり、「広雅、釈丘」。「阪なり」という。古い用例がなく、ただ竈神を祀るとき、そという。古い用例がなく、ただ竈神を祀るとき、そという。古い用例がなく、ただ竈神を祀るとき、そという。古い用例がなく、ただ竈神を祀るとき、そという。古いけんで、あるいは字の古義を存するもぞらえたいいかたで、あるいは字の古義を存するもぞらえたいいかたで、あるいは字の古義を存するもぞらえたいいかたで、あるいは字の古義を存するもであるう。

路コ【的】コ ひらく・はじめ・おしえる

意 旧字は啓に作り、同

会意 旧字は啓に作り、記と文とに従う。后は扉の中に祝霧の器であるごを収めている形。それを又の中に祝霧の器であることを啓くという。祝禱は扉の中に行ったところ、これを武王を呪詛したものであろうとそしるものがあり、周公を他処に移し、その祝詞を収めた金縢(つづら)を啓いてしらべたところ、詞を収めた金縢(つづら)を啓いてしらべたところ、詞を収めた金縢(つづら)を啓いてしらべたところ、詞を収めた金縢(つづら)を啓いてしらべたところ、詞を収めた金縢(つづら)を啓いてしらべたところ、同公の冤が明らかにされたという説話をしるしている。「籥(鍵)を啓きて書を見る」ということが、啓字の初義である。[論語、泰伯]「予が足を啓けばじめをいい、肇もその義に用いる。さらに啓発・啓蟄・啓明のまうに、ことのはじめをいい、肇もその義に用いる。さらに啓発・啓蟄・啓明のまうに、ことのはじめをいい、肇もその義に用いる。さらに啓発・啓蟄・啓明のまっに、ことのはじめをいい、肇もその義に用いる。金文に「厥のはじめをいい、肇もその義に用いる。金文に「厥のはじめをいい、肇もその義に用いる。でいる。で、答(鍵)を啓きて書を見る」というのは「論語、本語」に「教ふるなり」というのは「論語、学をしている。「論文とない。「はないましている。「論文というにはいる。「はないる。」にはいることにはいる。「はないる。」というにはいることに従う。「はないる。」というにはいることに従う。「はないることに従う。「はないることにないる。」というにはいることに従う。「はないる」というにはいることにないる。ことにないる。「はないるというにないる。」というにないる。

掲11【掲】12 かかげる・あげる

院霊を用いて呪詛を行なうことを示す 形声 旧字は掲に作り、曷声。曷は

渓11【溪】13【谿〕17【磎〕15 から

歌門 形声 旧字は溪に作り、梁声。字は 室符をつけた字である。〔説文〕の谿字条 二下に 一山濱の通ずる所なきものなり」というのは、舟行 しがたいところの意。谿壑というとき、谿は小さな 流れの集まるところ、壑は空谷で大壑をいう。〔左 位〕隠三年「瀾谿沼祉の毛」は、山川の水草をとっ て神に供えることで、神事には特定の谷川のものを 用いた。〔詩、召南、采繋〕〔采蘋〕に歌うものは、 用いた。〔詩、召南、采繋〕〔采蘋〕に歌うものは、 その採草のことである。

イ渓(漢)(谿)(磎) 畦絅経(經) 脛蛍(

吐 11 うね・しきり

和 11 かくえもの

河西海

形声 声符は同。〔説文〕一三上に「急に引くなり」とする。〔段注〕にこれが本義であり、「中庸」「錦を衣て絅を尚ふ」の絅は仮借、その本字は繋であるというが、金文の賜与に、絅衣を「門衣」「問意」に異に作る字形があり、糸かざりをつけたうすぎぬを示すものであろう。〔詩、衞風、碩人〕 ・錦砂 に暴に作る字形があり、糸かざりをつけたうすぎぬを示すものであろう。〔詩、衞風、碩人〕 ・錦を衣て褧衣す」は麻のひとえもので、同じく錦衣の上にはおる上衣である。

経 11 【經】13 たていと・すぎる・いとなむ

程 理

一脛(蛍〔螢〕 を張り、その一端を工形の横木に巻きつけた形で、を張り、その一端を工形の横木に巻きつけた形で、を張り、その一端を工形の横木に巻きつけた形で、

経歴・経験の意となるが、経歴は「書、君奭」にみを経しこれを管す」のまうにいる。経緯の意よりとなり、といい、「書、召問」という。建物の造営に、まず測量して南北を正すことを経緯(いきさつ)といい、経過・過程の意に用いる。交織の中心となるものであるから経紀・先王の典籍を経とし、これを補質するものとして作られた漢代の讖(予言)を主とする書を、緯書という。建物の造営に、まず測量して南北を正すことを経といい、「書、召誥」「厥の旣に」を得るや、則ち經營す」、「詩、大雅、霊台」「靈臺を經始し、」れを經しこれを管す」のようにいう。経緯の意よりれを經しこれを管す」のようにいう。経緯の意よりれを經しこれを管す」のようにいう。経緯の意よりれを經しこれを管す」のようにいう。経緯の意よりれを經しこれを管す」のようにいう。経緯の意よりれを經してれる。

11 すね・はぎ

(大という。きゃはんのことを脛巾という。 をという。きゃはんのことを脛巾という。 (大きないの)を「腓に敗(柔毛)無く、脛に毛無し」と形容する。袴の両脛に分れているものを、脛に毛無し」という。〔荘子、天下〕に属の治水の労を「腓に敗(柔毛)無く、脛に毛無いである。袴の両脛に分れているものを、脛に発音の巻がある。

第二【繁】16 ほたる

形声 旧字は螢に作り、終声。然に熒・滎の声が

の語がある。 は、たいまつを交叉した形で、光のめぐある。 はは、たいまつを交叉した形で、光のめぐある。 はは、たいまつを交叉した形で、光のめぐある。 ぬはぎ、たいまつを交叉した形で、光のめぐ

遅れ こみち

動することをいう。字は多く径と通用する。
「大いに逕庭あり、人情に近からず」とは、へだた「大いに逕庭あり、人情に近からず」とは、へだた「然逕きなり」と逕近の義とする。[荘子、逍遥遊りの甚だしいこと。直情逕行とは、感情のままに行りの甚だしいこと。直情逕行とは、感情のままに行います。
「大いに逕庭あり、人情に近からず」とは、へだたりの甚だしいこと。直情逕行とは、感情のままに行います。
「大いに逕庭あり、徑(径)

頃 1 かたむく・しばらく・ころ

会意 とと真とに従う。とは召の字では、少頃の時の意があるのは、頃首の姿勢は長く保に、少頃の時の意があるのは、頃首の姿勢は長く保に、少頃の時の意があるのは、頃首の姿勢は長く保い、という。頃に頃刻・頃時・頃歳・頃流・頃かところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を示し、それを拝うところで、上より下りくる神霊を持ちない。

12 ケイ・キョウ (キャウ)

经验

燃

私 12 やまのな

といわれる。嵆の字は嵆康の作字である。嵆康がその地に住んだことによって、その名をえた上部を取って嵆と称した。河南修武西北の嵆山も、上部を取って嵆と称した。河南修武に移ったが、稽のはもと奚氏、会稽に居り、のち誤に移ったが、稽の

字 12 うれえる・ひとりみ

為場

敬 2 ケイ・キョウ(キャウ)

神 子 呼敬節

大上に「離むなり」とし、*離、(粛) 字条三下に「事本とに「であるから、もそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の器の日をおく。おそらく古く形で、その前に祝禱の書の日をおく。 古いまに、「本に、「本に、」」

を持すること振敬なるなり」は、殆ど互訓の義である。金文には敬の字を西、間初期に芍・苟、ついで中期に「原夜を敬む」のように敬、春秋期に至って佛、雲漢」「明神を敬恭す」、「板」「天の怒りを敬み雅、雲漢」「明神を敬恭す」、「板」「天の怒りを敬み雅、雲漢」「明神を敬恭す」、「板」「天の怒りを敬みな、雲漢」「明神を敬恭す」、「板」「天の怒りを敬みないという。

早分 12 ひかり・かげ・あきらか

る字であった。

字は会意とみることができる。卜辞に「五百四旬七 排置のしかたでは、日景の観測も可能であろう。マ 上に望楼をおく。軍礼をそこで行なうが、その門の も「之を揆るに日を以てす」と、都を遷すに当って考えて方位を定めることで、〔鄘風、定之方・中〕に雅、公劉〕に「旣に景し旣に冏す」とは、日景を雅、公劉〕に「旣に景し旣に冏す」とは、日景を雅、公劉〕 日」という日数があり、 る。もし京を日景を測るに用いたことが確実ならば、 ヤ族にも、神殿をそのような目的に用いるものがあ 義京・磐京の名があり、京とはアーチ状の凱旋門で、*** とは、*** 日景観測の法をいう字であるかも知れない。ト辞に の経営をいう。このことからいえば、景は京による 千里にして日景に一寸の差があるという。〔詩、大 以て地の中を求む」と日景測量のことをいい、地上 光をいう。〔周礼、大司徒〕に「日景を正して、なり」とし、京声とする。光景とは日 の日至と合う。〔周礼〕に日圭の法のことがみ 形声 声符は京。「説文」七上に「光 一年半の日数五四七・八七

吟日 12 からく・はれる からく・はれる かいらく・はれる

間 的 服

大 1 わりふ・はたぼこ・たてやり

たっこ「後漢書、興服志」に、その制をしるしている。 になり」とあって、割符をいう。宮門 出入のときに、その割符を、戦を包む幡や、あるい いう。また儀衛用の戟はすべて布に包んでたてたもいう。また儀衛用の戟はすべて布に包んでたてたもいう。また後衛用の戟はすべて布に包んでたてたもい。 「後漢書、韓延行」に「幡楽を載つ」とみえ で、〔漢書、韓延行」に「幡楽を載つ」とみえ

軽 1 【輕】14 かるい・はやい

本で、工軽便のことは、軽薄に陥りやすいものである。 大謙称として軽軀、人を軽んずることを軽侮という。ま となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽輩のようにいう。ま となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽輩のようにいう。ま となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽輩のようにいう。 のち軽重の字 となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽量のにいう。 である輪重と区別した名である。のち軽重の字 となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽量のようにいう。 である輪重と区別した名である。のち軽重の字 となり、軽羅・軽輌・軽煙・軽量のようにいう。 である輪重と区別した名である。 である輪重と区別した名である。 である。 である。 である。 である。 である。 のち軽重の字 となり、 に続いる。 である。 である。 のち軽重の字 にがする。 である。 のち軽重の字

高12 「頃」14 かさないえ

傾 3 ケイ

形声 声符は頃。頃は神霊の降下す であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾く姿勢となる。〔説 がいて迎える形であるから、傾くという。

携ュ「攜」ュ たずさえる・ひきつれる

攜の字義と関連するところがあろう。携は俗体であ るが、この字を用いることが多い。 以てす」は、いずれも懦の仮借であるが、おそらく 年「攜貳を閒つ」、僖七年「攜れたるを招くに禮をで、鳥占いに関する字かも知れない。[左伝] 閔元で、鳥占いに関する字かも知れない。[左伝] 閔元 形である。字はあるいはこの鳥形のものを携える意 ともされるが、字形からいえば、台座にすえた鳥の 形声 は雟周で杜鵑(ほととぎす)の異名 正字は攜に作り鸞声。 傷四上

<u>榮</u> ひとり・うれえるケイ

作る字形などもある。 るのがよい。熒の初文は變で庭療、すなわち炬火の省聲」とするが、声義の上からみて熒の省声とす れ一字のみで、しかも鳥の迅飛の意とは、関係のな 字形に疑問があり、あるいは孤火を掲げもつ字であ あることをいう。字は刊に従う形とされるが、その ぞ鶯獨にして予に聽かざる」とは、孤立する立場に子なきものを独という。[楚辞、離縣] に「夫れ何子なきものを独という。[楚辞、離縣] に「夫れ何 下〕に引いて「鶯獨」に作る。兄弟なきものを縈、 **嬛々の仮借で孤独の意。** を組み合せた形である。 い字である。煢の字形には煢のほかに、下部を几に ったかも知れない。〔説文〕卂部に属するものはこ 「左伝」哀十六年「気々として余疚に在り」は 正月〕「哀しこの惸獨」を、〔孟子、梁恵王、の仮借で孤独の意。惸と同義に用い、〔詩、小の 下に「回ること疾きなり」とし、「營 形声 声符は熒の省文。〔説文〕ー ただ字にその意の用義例な

13

庖丁が文恵君のために牛を解き、しかも刃こぼれも埋き、犬はなんないとという。[荘子、養生主]に型にみがきあげることをいう。[荘子、養生主]に 代には玉器が盛行し、その精品も多いが、玉造りの なく「刀刃新たに硎より發するが若し」という。古庖丁が文恵君のために牛を解き、しかも刃こぼれも 型の意があり、硼の従うところは範型の意で、 技術の大部分は、その磨研のしかたにあっ 声符は刑。刑の常用体は刑。刑に刑罰と範 その

13 (機)20 つぐ・つなぐ・つづくケイ

鱜 8 = 8 =

エー・・、。 6と迷ぐことから継続の意となり、継用いている例があるが、劙・豔は何れも絶糸の象との意をテー・・・ 嗣・継室・継体・継緒・継述のように用いる。みてよい。糸を継ぐことから継続の意となり、 斤を加えて斷(断)の意を明らかにしたものとみらが継断の象であるのではなく、それに糸を加えて継、 形声 の意を示しているものがある。漢碑に蠿を絶の字に れる。卜文には系や絲に横画二、三を加えて、断糸 また「一に曰く、反鐺を繼と爲す」とするが、嶳縐継には「續ぐなり。糸、讎に從ふ」と会意に解する。 ぐのを継という。〔説文〕「三上に蠿を絶の古文とし、 いる形であるから、断糸の象。これを糸をもって継 旧字は繼に作り、鱶声。鱶は絲を両断して

野 13 すじケイ・カイ・ケ

形声 声符は卦。卦はトうときに用いる土版で、

> 上欄を烏糸欄という。 線を加えることがあり、 碁盤の縦横の線などを罫という。書物や原稿紙に罫 を加えることを罫という。上部は网、網目を示し、 それに線を加えて六爻・八爻をしるした。それで線 その太線のところを烏糸、

記 13 いたる・まいるケイ

詣とい ことを「闕に詣る」という。学芸の詣るところを造神事に関していう語であるが、のち宮城に参向する に「往くなり、到るなり、至るなり」という。もとり」とするも、その義に用いる例はなく、〔玉篇〕 を参詣という。〔説文〕三上に「候(節候)至るな て迎えることをいう。ゆえに往いて神を拝すること て記されています。 それずることを示し、頃はその神霊を領首しの降下して詣ることを示し、頃はその神霊を領首しの降下して詣ることを示す曰に対して、神霊 造にも古くは至る意があっ 形声 祝禱することを示す曰に対して、 声符は旨。旨は頃の初文で、 た。

儆 14 いましめる

伝〕成十六年に「儆備」の語があり、警備の意。敬 戒の語は〔墨子、天志、上〕にもみえる。また〔左虞(まだ前兆のないとき)に儆戒せよ」とあり、儆虞 が作られた。〔書、大禹謨〕に「吁、戒めよや。敬が敬愛・尊敬の意となるに及んで、戒める意の 敬める意に用いる。すなわち敬は儆の初文。のちいた を責める意の字であるが、金文にはすべて自ら敬み 祝 禱をさせ、これを撃ってその成就をといる。 声符は敬。敬は羌人の巫女に形声 声符は敬。敬は羌人の巫女に 戒めよや。無 概める意の儆

つものであったかも知れない。 解されなかったとしても、その伝承そのものには正 とに示唆的であり、その伝承の意味が当時の人に理 係があると指摘しているのは、その点においてまこ あったとみられ、そこより敻遠の義が生じたのであをいう。敻絶とは、もとそのような状態をいう語で しい知識が含まれていたとしなければならぬ。瓊と ろう。[説文] が奥と甍の両字において、敻との関 ぐりを撃たれて眴目喪精、目がくらんで見えぬこという。すなわち敻・矎・眴はみな同声同奏。敻はふいう。 には聞いて声義の同じ字で、眴とは目のくらむことを賦〕に「目矎々として精を喪ふ」という句があり、されたのであろうと思う。 H 延寿の〔魯の霊光殿のされたのであろうと思う。 H 延寿の〔魯の霊光殿のというような呪儀的な要求から、そういうことがなというような呪儀的な要求から、 形であるが、これはたとえば人を気絶の状態とする の誤った形で「ふぐり」、その下部に支を加えるのげている形。目の形にしるす部分は、**こにおける瓦 はこれを撃つ形。すなわち敻は胯間のふぐりを撃つ が側身形であるのに対してその正面形、胯間をひろ 〔説文〕は奥三上と鷺三下を何れも敻の省声として るが、夐はもと奐声に従う字である。奐は免(娩) われる玉も、このような眴目喪精を救う意味をも とあり、字はまた腹に作り、古くその声があった。 **敻は** [広雅、釈訓] に「敻々は視るなり

赕

<u>类</u>

ひかり・あきらか・まどうケイ・エイ

に熒を滎に改めたのであるという。

る。〔段注〕によると、宋の開宝年間に至り、妄り方氏〕以下、漢碑の類に至るまで、みな熒の形に作方氏〕以下、漢碑の類に至るまで、みな熒の形に作

会意

祭 14 沢の名 エイ

覹 「絕だ小さき水なり」とあり、前 * 声符は熒の省文。〔説文〕 - 1

> て目がくるめく意であろう。
> 文)四上に「管は登惑なり」とみえる。熒光によっ をも熒惑というが、 をもいう。熒惑は火星の異名。 火光の熒々たることをいう字である。 焱口に從ふ」とするが、字は庭燎をめぐらした形。炎に、をいう。 〔説文〕 一〇トに「屋下の鐙燭の光なり。 両火を交叉し、

、その義は營の仮借である。「説

人心を眩惑することである。のち小燭の光

そかく・キ

畔 ®® ₩

〔説文〕四上「目相聽かざるなり」は「相視ざる」て、×形に組んだ木の形で、相そむく意がある。 形声 声符は癸。癸は物を立てる台座の柎足とし

「耿々として寢ねられず」の〔毛伝〕に「なほ儆々 のごときなり」とあり、 『は、などが作られるのである。[詩、邶風、柏舟] 驚、などが作られるのである。[詩、邶風、柏舟] い字義が分化して、その形声字である儆・懲・警・の字義が分化して、その形声字である儆・懲・警・ 形容の語に用いている。

の大沢である。その字はもと熒に作り、『周礼、職が、河南の滎沢は〔書、禹貢』にもみえる「然な小水の呑舟の魚無し」の滎沢は、小沢の意であるが、河南の滎沢は〔書、禹貢』にもみえる「然ないが、河南の滎沢は〔書、 東京」にもみえる「祭は小水のごまをいう。「韓詩外伝〕五にみえる「祭は小水のである。その淳に「祭澤なり」というのと相応ずる。祭濘と条の濘に「祭澤なり」というのと相応ずる。祭濘とればいる。

かすかな・ちいさなケイ

何れも擬声語である。〔説文〕ニ上に「小聲なり」等語、蟬)暳々たり」とは、蟬の鳴き声をいう。とび、野谷する語である。また〔小雅、小弁〕には、「衆星の貌なり」と注する。みな星星あり」には、「衆星の貌なり」と注する。みな星 というが、その用義例はない。 伝〕に「微なる貌」といい、〔大雅、雲漢〕「鳴たる 小星〕「暳たる彼の小星 三五、東に在り」の〔毛 たくさまをいい、「詩、 声符は彗。星のまば 召南、

复14 「夐」 とおい・はるかケイ

ような説話を背景として作られるということはあり 説話と結合して、 の姿を画かせて物色し、その人を傅巌にえたという 命〕に、殷の高宗武丁が、夢に賢人傳説に会い、然と言いてい、夢に賢人はいるというないに、とれは「書、を挙げて捜求する形であるから、それは「書、 げて人を使ふ」意とする。敻は穴上に在る人を、目は夏に従う形とする。敻は穴上に在る人を、目は夏に従う形とする 〔説文〕四上に字を「營求するなり」と訓し、「旻に 人の穴上に在るに従ふ」として、字の下部 会意 いまの字形は支を夊の形に作るが、 夐字の構造を説くが、文字がその 嘒 奥の上部と、目と支とに従う。 复[窒] そ

いた。これは、今日では、これでは、いいない、からないできます。これでは、いいないできません。これでは、いいないでは、いいないでは、いいないでは、いいないでは、いいないでは、いいないでは、これでは、いい [易] の卦名にみえるほか、古い用例はない。 う。〔玉篇〕に引く耳部「こ上の睽に「耳相聽かざる の誤り。〔玉篇〕に「乖くなり。目に精少し」とい

14 みそぎ・はらう

一である。

緊14 むすびめ

の意であろう。〔説文〕 三上に 「 致 (緻)き繪な関く形。その戸の部分に呪飾として結びつけるきれ ろをいう。それでものの急所に当ることを、 を解く条に、肯綮の語があり、肋肉の結び合うとこに結んだ呪飾である。〔荘子、養生主〕の庖丁が牛り。一に曰く、徽謙の信なり」というも、本来は扉り。一に曰く、徽謙の信なり」というも、本来は扉 当るという。 の器である当を収め、手(又)で扉を形す 声符は放。啓は扉の中に祝禱 肯綮に

14 楽をもる鼎

> 釧羮には塩菜を加えるという。漢代の礼家が用いての〔鄭司農注〕によると、大羮には五味を加えず、〔儀礼〕[周礼]にみえるのみである。[周礼、亨心]なが、いま存するものに自名の器もなく、その字もるが、いま存するものに自名の器もなく、その字も [儀礼]に鉶や豆を用いることが多くしるされてい いたものであろう。 だ「器なり」とのみあって、その器制 声符は刑。〔説文〕一四上にた

閨 14 小さな門・ねやケイ

せざるなし」も、その家庭・家族を合せていう。間の内に在り。父子兄弟同にこれを聽かば、則ち和親なお小門の意である。[礼記、楽記]「樂しみは闡門なお小門の意である。[礼記、楽記]「樂しみは闡門と爲す」などは、 文五を閨門と爲す」などは、 の内に在り。父子兄弟同にこれを聽かば、則ち和親の所室に設けられることが多く、のち閨房の意となの居室に設けられることが多く、のち閨房の意とな の小なるもの、これを聞といふ」とあり、後宮夫人〔爾雅、釈宮〕に「宮中の門、これを爛といふ。そ〔戦国策、斉策〕に「中閏に至る」とは里中のこと。門の意とする。もとは里中に設ける小門をいい、 立の戸、上園下方、主に似たるあり」とアーチ形の 訓〕「それ醉ふもの使して城門に入り、おもへらく、もへらく、小小の闘なりと」。また〔淮南子、氾論 ば小門の閨に異ならぬという。〔説文〕「ニ上に「特 七尺の閨なりと」とあり、城門の大も、俛して通れ 小小の閾なりと」。また「淮南子、 「荀子、解蔽」「俯して城門を出づ。 声符は主。門の小なるもの。 氾なっ

うな語がある。六朝以後、閨怨の詩が多く、またって〔漢書、張、敞伝〕「閨房の内、夫婦の私」のよって〔漢書、張、敞伝〕「閨房の内、夫婦の私」のよ遠なり、哲王また寤めず」などにはじまり、漢に至意なり、哲王また寤めず」などにはじまり、漢に至意なり、「楚辞、離騒」「閨中既に邃 「篳門閨竇」というように、土室の入口をいう語で、 むっきんけいとう
閨秀の作家も出ている。閨はもと〔左伝〕襄十年 その意であろう。のち閨閣・閨閣といえば、最も豔 麗な奥座敷をいう。 土版で固めたようなところであった。圭に従うのも

劌 そこなう・するどいケイ

を截り分つ意であり、もともと刺割の義のある字で疑問がもたれる。歳の初形は、大きな戊(鉞)で肉足はを語頭音とするもので、〔説文〕の形声説には 「方言」に「凡そ草木の人を刺すを、關より東にて であろう。〔礼記、聘義〕「廉にして劌ならざるは義ある。それにまた刀を加えて、刃傷の意としたもの に収める歳声の字は歳・翽など八字であるが、すべ なもので傷つける意とし、また歳声とする。〔説文〕 く入声の音があったことが知られる。 に、〔文子〕に割・伐と韻する例をあげており、 は、或いはこれを劌と謂ふ」とする。〔通訓定声〕 ると劌に陥る意で、厳刻というほどの意である。 なり」、注に「傷つくるなり」とするが、廉に過ぎ 会意 文〕四下に「利傷なり」とあり、鋭利 歳(歳)と刀とに従う。 〔説

慧 15 【悪】15 さとし・かしこい

はともに不慧の意。〔論語、衛霊公〕「好んで小慧無し」、〔漢書、昌邑王伝〕「淸狂にして不恵なり」 を行ふ」は、みせかけの行為をいう。のち仏家では 恵と通用し、〔左伝〕成十八年「周子に兄ありて惠 に「慧なり」と互訓する。智恵を智慧というように をいう。〔説文〕一〇下に「儇なり」、また儇字条八上 **省學院** 高東 法海 為英。 星の光をいう字で、ほのかに光るもの 旧字は慧に作り、彗声。彗は を慶雲のようにいう。それより転じて、 小雅、楚天」「孝孫慶あり 報ずるに介福を以てし、また。」「孝孫慶はのち、すべて幸慶・福善のことに用いる。〔詩、 に用いた語を、のち裁判用語としたものであろう。 件における解決案を提示する意に用いる。古く神判 の意を示す。〔琱生殷〕第二器に「余は慶を告げ もたらされるもので、慶賜のものをいい、その吉兆 のように、善行の意に用いる。慶はもと神によって また〔書、呂刑〕「一人慶あらば(兆民これに頼る」 ん」という語が両見し、それはこの銘文では争訟事 よって、神の恩寵・恵福をえたことを表示し、神聖 ているものが多く、もと文身の文様である。これに 文飾は、文身を示す文の古い字形にもその形を加え 萬壽無疆ならんことを」のように吉祥語に用い、 人を祝うこ

慶 15

よろこび・たまもの・さいわケイ

悟達を意味する語として愛用する。

憬 15 とおい・さとる

とを慶賀という。

あり、遥かなさまをいう。憧憬はあこがれる意と夷」の句を引くが、〔毛伝〕に「遠行の貌なり」と不の例文として〔詩、魯忠、は木以」の「憬たる彼の准るが、その義に用いた例はない。また〔説文〕はそるが、その義に用いた例はない。また〔説文〕はそ を生じたのであろう。 いう語であるが、自失の状態より、 う。惝怳も失意のさま、ぼんやりと自失するさまを かなさま。憧憬はおそらく惝怳と同系の語であろ されるが、中国にはその語例がなく、憧は憧愚、愚 「覺悟するなり」とは心に悟る意であ 声符は景。〔説文〕一〇下に ものに憬れる意

> 瞏 15 おどろきみる・うれえるケイ・セン

零 多的多

して疚に在り」を、〔左伝〕哀十六年に引いて『録々』に作り』を、〔左伝〕哀十六年に引いて 「祭々」に作り、また「周頌、閔予小子」「嬛々と風、杕杜」に「獨行寰々たり」の「歌文」に風、杕杜」に「獨行寰々たり」の「歌文」にせるのと同じ。それは送葬の儀礼である。〔詩、唐 瞏の初文はおそらく嬛であろう。環・還などの金文**** 「榮々」に作る。嬛・榮はみな孤独を哀しむ字で、 せるのと同じ。それは送葬の儀礼である。〔詩、唐上に止形のものをおくのは、わが国でわらじをはか の呪儀を示す字である。袁はその人すでに死し、頭ることを願うて、上に目を加えたもので、その招魂 玉をおいて魂振りとし、再び生気を復して視力の還からいえば、人の絶気のとき、その襟もとに環形の ず、篆文の字形は甚だ疑うべきである。金文の字形 会意 の字形は、みな睘に従う形である。 し、袁声の字とするが、声義ともに字の初形に合わ とに従う。〔説文〕四上に「目驚き視るなり」と訓 金文の字形は睘に作り、目と衣と環形の玉

とどまる・かんがえる・いたるケイ

その曲頭にして伸びることができないところから うもので、禾は木の曲頭なるもの。〔説文〕 ハトに、 会意 「留止なり」と訓しているが、禾は軍門の象。 禾と尤と旨とに従う。上部は禾と尤とに従い。

遠くこれを祓い清める。わが国の〔大祓詞〕にい

あわせて厺(去)とを、

水に投棄して、

う祓いの形式と似ている。勝訴した廌の胸につける

と、敗訴の人(大)と、宣誓した祝詞の器の口の蓋纏は金文に廃棄の廃に用いる字で、神判に敗れた廌

ある。勝訴には慶といい、敗訴には灋(法)という。〇上に「解鶊獸なり」とする神判に用いる獸の形で

するが、鹿皮をおくるときは両鹿皮、すなわち儷皮、火にして往行とし、故に「行きて人を賀する」意と

をおくる。

字の頭部は鹿とは異なるもので、廌部一

る。〔説文〕一〇下に「行きて人を賀するなり」とし、 部に、心字形の文飾を施し、その吉慶のしるしとす

上部を鹿皮とみてこれを吉礼のおくりもの、下部を

古を稽ふ)」という文があり、のちの擬古的な語法 いう。〔書、尭典〕の文首に「日若稽古(ここに稽察・稽謀・稽疑の義となり、また稽古のようにも である。そこに神を迎え、神意を稽えるので稽考・と訓する。稽淹・稽滯・稽蹕などは、みな留止の義 これを留止することを願うので、〔説文〕に「留止」 「大浸、天に稽る」の文がある。そこに神が稽り、霊のそこに稽るを稽という。[荘子、逍遥遊〕に霊のそこに稽るを稽という。[荘子、逍遥遊〕に 表木のもとに犬牲を埋め、祝禱して神霊を迎え、 の稽首の字にあたる。以上によっていえば、禾形の するを頃といい、金文にみえる頃首(拝礼)はのち り神霊の降る形で「詣る」の初文。これを迎えて拝 の臨むところである。昔は祝禱の曰に対して、上よころに用いたものであろう。そこは軍の聖所で、神に 頃が稽の初文である。 拝すること。金文には頧首・拜頧首のようにいい、 姿勢を稽首・稽顙という。稽顙とは顙を地につけて 稽古などはのちの転義である。また神を迎え拝する とされている。稽はもと軍礼に関する字であるから、 われるものがそれである。 には禾形の表木を立てたが、のち和表・桓表と 尤は犬牲、その表木のと 神

艏 (領)15 ぬかずく・いたるケイ

顕首」の意。〔周礼、大祝〕の九拝の一に「銷首」する形。〔卯設〕に「拜手頁手」とあるのは「拜手する形。〔明改 金文は字を韻に作る。頁は廟中の儀礼として霊を拝 会意 文。〔説文〕九上に「下首なり」とし、 大祝」の九拝の一に「留首」 旨と首とに従う。盲は頃の初

魏以後、書輸に多く頓首の語を用いる。 を用いて稽首という。頓首は頭を地につける礼。漢があるが、賭は顧を誤り伝えた字であろう。のち稽

駉 15 まきば・馬のたくましいさまケイ

詩 とみえ、〔玉篇〕に「駉々」を「駫々」に作り、馬 にも駫に作る。坰は遠野、その地の牧場を駉という。 が肥えて壮盛なるさまを形容する語。〔説文〕-〇ヒ 魯頌、駉〕に「駉々たる良馬 囲んだ地を示す。ここでは牧場の意。 形声 声符は回。回は土塀や木柵で 坰の野に在り」

嬛 うれえる・ひとりケイ・ケン・カン(クヮン)

はまた惸独といい、嬛とも通用する。嬛はまた鰥寡して疾に在り」を引くも、今本は覺々に作る。覺独その用義例はなく、また〔左伝〕哀十六年「嬛々とその用義例はなく、また〔左伝〕哀十六年「嬛々とでいうが、 アラー 声符は裳(瞏の省形)。〔説というが、 アラー 東谷は裳(瞏の省形)。〔説とは、 アラー 東谷は裳(瞏の省形)。〔説をは、 アラー 東谷は裳(た鰥と通用するのであろう。 めることを示す字。ゆえに嬛に煢独の意があり、 の鰥に用いる。睘はもと絶息のときの招魂復活を求 ま

憩后 [愒]2 [憇]5 いこう・カツ

〔詩、召南、甘棠〕「召伯の憩ひし所」の〔釈文〕に、たい。〔爾雅、釈詁〕に「憩は息ふなり」とみえ、 幝 が、喝と声義の通ずる字で、休息はその本義としが 「説文」 一〇下に「息ふなり」と訓する 形声 正字は愒に作り、曷声。愒は

> 憇はその俗字である。 法からいえば、あまり古い字ではないかも知れない。 めがたいが、息に舌を加えた形とみられ、その造字 声義の通ずる字である。憩は古い字形がなくて確か

擎 16 ささげる・かかげる・あげるケイ

撃灯・撃天のように用いる。〔楚辞、天問〕に「八撃だ・撃天のように用いる。〔楚辞、天問〕に「外ぐるなり」とみえるが、その古い用例はない。て身をまげ、拝伏するさまをいう。〔広雅、釈詁〕がするは、人臣の禮なり」とみえ、手をあげ、歌げするは、人臣の禮なり」とみえ、手をあげ、歌げ 形声 なり、天を擎えることをいう。 柱何くにか當れる」とは、天に八山があって天柱と 声符は敬。〔荘子、人間世〕に「擎跽曲拳

檠 ゆだめ・ともしびケイ

〔淮南子、脩務訓〕に「弓は檠を待ちてしかるのち の曲直をなおす木をいう。卜文・金文に于を汚の形 短檠という。 能く整ふ」という。また燭台をいい、手近な燭台を に作る字があり、 そのゆだめをあらわす字であった。

磬16 うちいし・けい

簡 將 解

延く」という。 「頭莖なり」と莖(茎)にみたてて説く。首枷をこにして上下を支えるところである。〔説文〕 丸上に こにはめるので頸枷とい ものをいい、人体では頸と脛とが径直形声 一声符は巠。※は径直の状態の い、待ち望むことを「頸を

髻 16 たぶさ・まげ

簪飾などを加えるのを、髯華という。〔推古紀〕に九上に「髪を總ぶるなり」という。髪を結びあげて九上に「髪をき もみえ、「うず」の訓がある。 の義があり、 形声 髪を高く結びあげる意。〔説文新附〕 した。吉には中につめこむ、結ぶなど 声符は吉。古くは結ともしる

舜典」に楽祖の夔のことを述べ、「於、予石を撃ち字はこの硜で、磬の異文とすべきものでない。[書、 「鄙なるかな、硜々たり」と評した。〔説文〕重文の

で、磬を衞に撃つ」とあり、その門を過るものが、「子、磬を衞に撃つ」とあり、その門を過るものを楽石とした。[論語、憲問] にのよく鳴るものを楽石とした。[論語、憲問] に

経〕に「小華の山、その陰に磬石多し」とあり、石重文として、堅声の字を録する。〔山海経・西山重文として、堅声の字を録する。〔山海経・西山縣くるの形に象る。殳はこれを撃つなり」とし、「殿は處にれる。〔説文〕九下に「樂石なり」とし、「殿は處にれる。〔説文〕九下に「樂石なり」とし、「殿は處に

初形の声は、いま聲の略字として、常用字に用いら

に用いる字であるが、さらに石を加えて磬となった。 た象形の字。殸はこれを撃ち鳴らす形で、同じく磬

声符は殻。磬の初文は声。磬石をつりさげ

那〕に「旣に和し且つ平なるは「我が聲聲石を拊てば、百獸率る舞ふ」とあり、〔詩、

罄 つきる・むなしい・ことごとくケイ

て祀ることがあったのであろう。ト文は籀文の字形の軍門に磬京の名があり、あるいはそこで磬を鼓し

とあって、

磬は神人相和する楽器とされている。

器とされている。殷、我が磬聲に依る」

商领、

はその意である。皿部五上にも「盡は器中空なり」 なり」とみえ、〔説文〕五下に「器中、空なり」と 〔詩、小雅、蓼莪〕に「絣の罄くるは これ罍の恥 腦 と同訓をほどこしている。 虚であるので、繋を比喩的に用いた造字である。 空尽の意となるが、県磐は両旁が下り、中ほどは空 とをいう。罄は缶(ほとぎ)の中にものがない意で、く、野に青草無し」とあり、人も物も尽き果てるこく、野に青草無し」とあり、人も物も尽き果てるこ 〔左伝〕僖二十六年に「室、縣磬の如形声 声符は蔑。殿は磬の初文。

褧 16

ひケイえ

形声

声符は耿。〔詩、衛風、碩人〕

字を殸に作る。

蹊 17 こみち

頸

くケびイ

回衣に作るものが、その初文である。 だこの詩句を引いて、字を絅に作る。金文に『衣・にこの詩句を引いて、字を絅に作る。金文に『衣・などのひとえものを重ねて着ることをいう。〔中庸〕

のが、その初文である。

「錦を衣て褧衣す」とは、錦の上に麻

て鮭という。 を祭る詩に「新果と異鮭と」とあり、魚菜を総称し その魚はふぐであるという。 形声 鮭 山、敦薨の水出づ。その中に赤鮭多し」とみえるが ことをいう。蹊径のように連用し、径と同義である。 蹼隧無く、澤に舟。桑無し」とは、進む方法のないいます。 「本子、馬蹄」「山にふ」とあり、山中の小道の意。〔荘子、馬蹄〕「山に (釈名、釈道)に「歩の用ふるところの道を蹊といい。 ふぐ・さけ 声符は圭。「山海経、 わが国ではさけ(しゃけ)の名に用い 小さな谷水の集まるところをいう。 声符は奚。奚声の字に谿があ 張籍がその師韓退之 北山経〕に「敦薨の

磬 18 せきばらい

る。魚部の字には中国と用義の異なるものが多い。

〔列子、黄帝〕「謦欬疾言す」というように、 闣 んでせわしくもの言う意であった。 の言を聞くことを、謦欬に接するという。 その言説に接することなきをいう。のち尊敬する人 て、吾が君の側に謦欬する莫きこと」とは、親しくいう。〔荘子、徐无鬼〕「久しいかな、眞人の言を以いう。〔荘子、従む。〕 なり」とあって、せきばらいを警数となり」とあって、せきばらいを警数とを 声符は製。「説文」三上に「然 もとは せきこ

擂18 つケ ばイ め

下部の間は台座の形である。〔説文〕 会意 字の上部は冠飾のある鳥の形

褧 頸 訾 罄 蹊 鮭 罄 樓

ケ

〔説文〕にまた一説として杜鵑とする。もし台座ににおいても台座の形である。檮周は燕であるが、 する。冏は商・矞などにおいて辛器や矛器を樹て從ひ、中はその冠に象るなり。冏聲」と冏を声符と四上に「巂周、燕なり」とし、字形について「隹に四上に「楊周、燕なり」とし、字形について「隹に四上に「楊郎」、燕なり 座につけた鳥を携える意であろう。それがどのよう 鼎」にみえる鳥形冊図象には、下に台座形のものが が数種あり、またたとえば〔令方彝〕や〔作冊大図象的な文字のうちには、鳥の信仰を思わせる図象 種々の伝承があり、異名も多い。ただ卜文・金文の おいて殷の始祖伝説と連なるものであり、 があるのも、巂・攜の字義と関連していよう。 いの俗と関係があるかも知れない。懦に離れ叛く意な意味をもつ行為であったかは知りがたいが、鳥占 すえるものならば、霊鳥とすべく、燕は玄鳥説話に る台座の形であるから、声符とはしがたく、この字 つけられている。携はまた攜に作り、攜とはこの台 杜鵑にも

瓊 19 赤い玉・たま

受を意味し、ことに瓊のように赤い玉には、その感えし、愛情のしるしとする意。玉の授受は、霊の授 に瓊琚を以てす」とは、自らの佩玉を解いて投げかい。 では、我に投ずるに木瓜を以てす これに報ずる ものをいう。玉の赤いものをまた瓊という。〔詩、 女から果物を思う男に投げ、男が玉を投げか 木瓜〕は投果の俗を歌うもので、歌垣などの 形声 り、菱は「ひるがお」で、その華の赤 声符は夐。夐声に赤の意があ

> 物を、八瓊という。語として用いる。方士が錬丹に用いる朱砂以下の八語として用いる。方士が錬丹に用いる朱砂以下の八 敗れた話がみえる。その玉色の美しさを他にも及ぼ 楚の子玉が、瓊弁玉纓を作ったところ、夢に神がと、これ、以てきるとなり、一つまで、以てきるとなり、「左伝」 僖二十八年、情を含むとされたのであろう。 [左伝] 僖二十八年、 して、瓊花・瓊殿・瓊音・瓊筵のように、修飾的な あらわれてそれを欲したが与えず、そのため戦いに

繋 つなぐ・かける

囚・繋馬・繋累のように用いる。とあり、紐で繋げるようにすることを繋という。とあり、紐で繋げるようにすることを繋という。といい、繋縛・繋留・繋ぎらい。 っていていることを繋という。「儀礼、士喪礼」「組繋をを懸けることを繋という。「儀礼、士喪礼」「組繋を 次の形で、これを撃って豪につめこむ意。その豪 叀は下部に底袋があり、上部を括った 形声 声符は殿。殿は叀を撃つ形。

<u>巻</u>言 9 かましめる

は箴慾、 さに或いは大いに晉を警めんとす」のように、本来 る意。 が作られた。[周礼、宰夫]「正歳には則ち灋(法)愛・尊敬の意に用いられるに至って、警戒の意の警 を以て群吏を警戒す」、〔左伝〕宣十二年「今、天ま 字はまた儆にも作り、警は最も後起の字である。 したがって敬は警の初文であるが、敬が敬 いましめる意である。金文に懲戒の語があ 祈るもの(茍)を殴つ形で、敬み戒め 形声 声符は敬。敬は祝禱して神に

鳥形の器を用いたのであろう。

おそらく白鶴美術館に蔵する〔大保卣〕のような、

もこの語が喜ばれ、〔源氏、花の宴〕に「ふみども乃ち一篇の警策なり」という。わが国の平安期に大き、と機の〔文賦〕に「片言を立てて以て要に居く。 きゃうさくに」とみえている。 と馬策をうつ意であるが、文章の警抜なるものに用 警世・警抜・警慧のような語義もある。警策はも 敬・儆のような内面的な意味が稀薄となるが、なお 警察・警邏のように主として治安に関する語に用い

鶏 [鷄] [雞] 18 # にわとり

雜

れを輸音とよんだ。[周礼、司尊彝] に、酒で儀場かなだ。 これ、これ、これ、本を玄酒というように、鶏を神饌とするときは、そ 交い締めにして血をとるからで、彝はその形である。**その血を用い、青銅祭器を彝器とよぶのは、鶏を羽 の鳴声からえたものと思われる。古く祭器の愛礼にを告げる鳥とされたからであろう。雞という名はそ を知る畜なり、〔玉篇〕に「晨を司る鳥なり」と に近い形にかかれ、雞が神鳥的な観念で扱われるも 字形とがあり、 飾をつけた象形的な字と、 形声 を清める裸の儀礼に「雞彝・鳥彝を用ふ」とあるが いう。〔周礼〕に〔鶏人〕の職があるように、啓明 のであったことを示している。〔説文〕四上に「時 正字は雞に作り、奚声。卜文の雞には、 その象形的な字形は、高冠脩尾、 形声字として奚を加え 鳳また 冠

20 かおる・こうばしいケイ・キョウ(キャウ)

民を監るに、馨香の徳あること罔し」のように、周の祀りて天に登聞するのみに非ず」、〔呂飛〕「上帝、馨とはその馨香をいう。〔書、道誥〕「これ徳の馨香 「こんな男」というほどの意である。 香をいう字であった。蘭に芳香あり、馨列侯の異名では馨を専ら徳聞の意に用いるが、本来は黍稷の馨 る。ただ篆文は馨の形に作る。黍稷をもって神を祀 に黍に従うべく、香の初形もまた黍に従う字形であ 非ず、 | 殻は声符である。〔書、君陳〕に「黍稷 馨しきに説もあるが、聲においては殿は意符、馨においては ることは古くから行なわれ、黍の字形は黍酒を示し、 をいうものであるから、正字は〔説文〕のいうよう 聲も無く臭も無し」とあり、〔三家詩〕に「馨も無 う字とする。〔詩、大雅、文王〕に「上天の載は『たまり』とし、字を素に従れるもの」とし、字を素に従 」に作る。それで聲(声)・馨を通用の字とする 明德これ馨し」とあって、馨とは黍稷の芳香 六朝期に「寧馨児」という語があって、 声符は殻。〔説文〕七上に「香

艪 くじり・つのぎりケイ

子でもの。 らず」というのは、この男が女の紐を解くすべも知 艫を佩ぶ」「則ち觿を帶ぶと雖も 、「くじり」という。〔詩、衛風、芄蘭〕に「童「くじり」という。〔詩、衛風、丸臓 形声 角器で、先が尖り、 、先が尖り、紐の結びめを解く 声符は雟。男子が腰に佩びる 能ち我を知

> に応じかねている初 らぬと、女子の誘引

> > 觽

べからず」とみえる。漢代の人も、なお觿を帯びる苑、雑言〕に「百人、觿を操るときは、固結を爲す焼、雑言〕に「百人、觿を操るときは、固結を爲す焼、雑言〕にも小りにも、米のであるが、中国の古代歌謡にもそれがある。 俗があったのであろう。 る。紐を解くという表現は、〔万葉〕に多くみられ 心さを笑う詩であ

ゲイ

芸~【藝】』「埶」」「、蓺 15 うゲ える

0 地写線

な も左偏は木土に従うて熱に作り、種芸の意が明らか形とする。ト文の字形は若木を奉ずる形、また金文 会意 を誤ったものであろう。若木を種えるのは、神事的 である。〔説文〕などに埶に作るものは、その字形 るなり」と訓し、「坴丸に從ふ」として土塊をもつ ぎらわしい。〔説文〕三下に正字を観に作り、「種うであるが、耕耘にようという字があって、ま ト辞では祭儀に関して用いられ、 また政治的な意味をもつ行為であったらしく、 旧字は藝に作り、熱声。芸はその常用字体 金文では「毛公

> 文〕にはみえていない。 を用いるとする説があるが、蓺・藝はいずれも〔説 文』に、唐人は種藏の字に蓺を用い、六芸棋は早くその正形を失ったものであろう。 る字で、力は耒の形。従って鉷に従う字であるが、丸で別の字である。勢は種芸の木の勢いよく生育す丸で別の字である。*** 形に従うのがよく、 である。また纨にしても埶にしても、すべて両手の の字であるから、字は埶に作るべく、埶もまた誤り 執は手に手械を加えている形で拘執の字。 藝は種芸* 女に従うこともあり、巫女がその儀礼に与ることがを柔らげ想きを能んず」のように用いる。その字が暴うといれたの整誠(賦貢)を観む」、また「遠き鼎」に「小大の整誠(賦貢)を観む」、また「遠き *あったのであろう。字は執の字形と誤りやすいが、 丸に従うのが正形、 六芸の字に藝 丸は弾丸の (経)

迎 迎。 むかえる・あう

という。 するが、迎えることを主とする。逆も彼方より人迎える形である。〔説文〕ニ下に「逢ふなり」と訓迎える形である。〔 の語。漢のとき迎神の楽が作られたが、 が来る形で、やはり逆えるとよむ字。逆・迎は双声 の関係に移せば、彼方より人が来て、これを一人が 迎はもと人に対していう語である。 形声 一人が抑える形であるが、これを平面 声符は印。叩は一人が俯し、 古くは降神

77 9 「2F」12 与 9 弓の名手の名

FF 声。羿の字形で行なわれてい 正字は羿に作り、幵

馨 觿 芸(藝)(熱)(藪)

迎[迎] 羿[羿][芎]

る。「説文」四上に「羽の風に乳ふなり」とあり、 大、〔説文〕に「亦古の諸侯なり。一に曰く、射師 く、〔説文〕に「亦古の諸侯なり。一に曰く、射師 なり」というように、有窮の后羿という神話的な 古帝王の名であり、また射の名手とされる者である。 古帝王の名であり、また射の名手とされる者である。 古帝王の名であり、また射の名手とされる者である。 古帝王の名であり、また射の名手とされる者である。 古帝王の名であり、夏の少康、これを滅ぼす」として、「論語に曰く、慧、善く叛る」の文を引いており、 り、芎がその正字である。十日説話では、十日が並り、芎がその正字である。十日説話では、十日が並り、芎がその正字である。十日説話では、十日が並り、 世上で地上が灼熱にさらされたとき、羿がその九日 出して地上が灼熱にさらされたとき、羿がその九日 かり、芎がその正字である。十日説話では、十日が並り、 ちがその正字である。十日説話では、十日が並り、 ちがその正字である。十日説話では、十日が並り、 でいた。

倪 10 おごる・みる・ひめがき

をのの始めの意である。思うにこの系統の見の初文 をのの始めの意である。思うにこの系統の見の初文 をい。見声の属する日母の字に、このような声分化 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 をい。見声の属する日母の字に、このような声分化 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 の関係を示すものはみられない。それで見童の見と、 を対し、すなわちぬ 益の義とするが、その義に用いた例がなく、〔管子、 がでに、 でにで、 でが、 でにでいる。 である。思うにこの系統の見の初文 をいるの始めの意である。思うにこの系統の見の初文

その名をえたものであろう。その名をえたものであろう。その名をえたものであろう。は、蜆・霓の従うところのだで、右院左院の形で近く、倪の諸義はみなここから説くことができる。に近く、倪の諸義はみなここから説くことができる。に近く、倪の諸義はみなここから説くことができる。に近く、倪の諸義はみなここから説くことができる。との名をえたものであろう。

猊1「麑」1 じょ

下方 声符は見。「説文」 | ○上に正を記さ | 下方 声符は見。 「説文」 | ○上に正 | 下方に | 下方に

睨 3 がイ

形声 声符は 児。 「説文」四上に 「歌に親るなり」とあり、横にらみする意とする。 児は霓。長蜆の形で左右に頭あり、右 のこれである。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」の末章のとこ を異にする字である。「楚辞、離騒」のように、天上 より竜に駕して下界を睨るというのに、ふさわしい 字である。城上のひめがきを倪、また問睨というの も、城壁の両端にあって、上より臨む意をもつもの であろう。

寛 16 「蜆」14 にじ

下で、この雌類は天空のかなたからその姿をあらわしたのであった。虹に雌雄があり、色の鮮やかなものなり」という。虹に雌雄があり、色の鮮やかなものなり」という。虹に雌雄があり、色の鮮やかなものは難虹、色の暗いものは雌蛇であるという。見はこの雌類の頭部の象形で、児が寛の初文。長身の左右に両頭をもつその形は卜辞にみえ、「八日庚戌(の時別、各れる雲ありて東よりす。面母なり。長にまた出・蝦ありて北よりし、河に飲めり。という。神た出・蝦ありて北よりし、河に飲めり」という。神た出・蝦ありて北よりし、河に飲めり」という。神た出・蝦ありて北よりし、河に飲めり」という。神た出・蝦ありて北よりし、河に飲めり」という。神た出・蝦ありて北よりも、河に飲みの山があめ」という。神の名で、この雌質は天空のかなたからその姿をあらわしたのであった。虹が河水を飲みにあらわれるという。神の名で、この峨鏡は天空のかなたからその姿をあらわれるといったとえて、仙人の衣裳を覚しまったという。をといる。ととは、たりとは、のちの「複神記」にもみえ、州東の婦と通う話は、のちその子を伴って天に去ったという。もとにたとえて、仙人の衣裳を覚しまったという。もとは、たりとない。

鯨 19 [鰮] 24 ゲイ

のも數十丈」とみえる。〔左伝〕宣十二年「その鯨(異物志〕に「大いなるものは長さ千里、小なるもし、正篆として鱧の字を出しているが、鯨の字が用し、正篆として鱧の字を出しているが、鯨の字が用し、正篆として鱧の字を出しているが、鯨の字が用し、正篆として鱧の字を出しているが、鯨の字が用し、正篆として鱧の字を出しているが、鯨の字が用しているが、鯨の子がある。

は、 ・ であってこれを封じ、以て代教と ・ はの巨魁を数殺することで、鯨配をもって巨魁にた ・ とえる。鯢は雌鯨、崔 豹の〔古今注〕に「大なる もの亦長さ千里、眼睛は明月珠を爲す」という。鯨 ・ です。 です。 という。 杜甫の〔飲中八仙 のように飲むことを鯨飲という。杜甫の〔飲中八仙 のように飲むことを鯨飲という。杜甫の〔飲中八仙 のように飲むことを鯨飲という。 ・ です。 です。 という。 ・ です。 です。 という。 ・ です。 です。 という。 ・ です。 です。 という。 ・ です。 という。 です。 という。 ・ です。 という。 という。 という。 という。

第 20 いれずみ

ケキ

見 4 とる・もつ

手9 石の裂ける音 (クヮク)

整形のときは石理をみて数ヵ所に穴を穿ち、これを容易に破砕できる。非はその亀裂の形とみられる。裂を生ずることを砉といい、その音を砉然という。裂を生ずることを砉といい、その音を砉然という。という。半はものに亀裂の生ずる

るが、荘子はこれを解牛のことに用いたのである。 (荘子、養い)、庖丁の自在な手の動きに「膝の踦るところ、書り、庖丁の自在な手の動きに「膝の踦るところ、書り、庖丁の自在な手の動きに「膝の踦るところ、書がないのきが、刀を奏すること騒然」として、音をたてながらさばかれたという。 書はもと石を裂く字であながらさばかれたという。 書はもと石を裂く字であるが、荘子はこれを解牛のことに用いたのである。 (荘子、養摯ではその欲する形のものがえられる。[荘子、養摯ではその欲する形のものがえられる。[荘子、養摯では

ゲキ

展 10 はきもの

黥

ケキ

烮

砉

ゲキ

しているのである。

第10 ひかる・すき

金文の字形から知られるように、玉光をいう。隙と小かに見ゆ」と白と小の会意と解するが、続しのれた見ゆ」と白と小の会意と解するが、ない。 〔説文〕七下に「際見の白きなり」とは、壁の間を は、神梯の前に玉をおき、その光の放射することに 神霊の示現を示そうとしたものであろう。 形。 日の形の部分が、円い玉である。 玉の光が上下に放射している

戟 12 ほこ・さす

よって、

会意 「子都(人名)、棘を抜いて以て逐ふ」、〔礼記、明堂り」とみえる。古く棘とよばれ、〔左伝〕隠十一年 は旗竿の上に幸字状の飾りをつけた形で、倝の左偏**タネ 呂布伝〕に「董卓、手戟を抜きて、これを布に擲き」。車上に樹てた戟である。別に手戟もあり、〔魏志、 位〕「越棘大弓」はみな戟の意。「棘を抜く」 の部分にあたる。〔説文〕二二下に「枝あるの兵な つ」とみえる。 戈と、戈上につけた飾りの形とに従う。卓 とは

給 13 あらいぬの

布をいう。〔詩、周南、葛覃〕 形声 声符は谷。粗い葛の

> て斁ふ無し」とは、祭事に用いる服を自ら作ることに刈りここに獲て「締と爲し給と爲し」これを服しに刈りここに獲て「締と爲し給と爲し」これを服してう。 嫁したときのことである。神事には絺綌を用い、喪 礼のときには、主人から麻を賜うことが例であった をいう。下章に帰寧の礼を歌っているから、新たに

隙13 [隙]14 すき・ひま・きず

酬 をかいまみる意の字であろう。のち空隙の意となり、 えられず、殊に神梯の形に従う字であるから、神光 り」と解しているが、壁孔のために字を作るとも考 「際見の白」、また隙「四下においては「壁際の孔な を示したものと思われる。〔説文〕は第字条七下に おき、その光の放射することによって、神霊の示現 う。隙は俗字。 人事に移して、不仲のことを「隙あり」のようにい 会意

毄 14 うつ・あたる

般(こしき)の形とし、車の相撃つ字とするが、篆をうち砕く意である。〔説文〕三下に「相撃ちて中をうち砕く意である。〔説文〕三下に「相撃ちて中をうち砕く意である。〔説文〕三下に「相撃ちて中た。いわゆる括嚢である。それを撃って、中のもの形。いわゆる括嚢である。それを撃って、中のもの形。いわゆる括嚢である。それを撃って、中のもの形とし、東の上を括った の形である。〔玉篇〕には、字を採にして繋の初文文の字形は叀を誤るもので、叀下の部分は囊底の袋 会意 ものではなく、嚢の上を括った恵と支とに従う。 恵は車の形

〔説苑〕に、斉の人が甚だ穀撃相犯すことを好んで、ばれた。 ばいたない。 が、車轄の相撃つ字には車部一四上に繋の字があり、 〔周礼、考工記〕にこの字を車轂の義に用いている は叀に従う字で撃の初文。撃は嚢中に穀類などを入 これを楽しみとする車争いのことがみえている。毄 とするが、声が異なり、撃の初文とすべきであろう。 れ、これを撃って脱穀収実することを行なうもので あろう。繋・撃はその形に従う字である。

覡 かんなぎ

るなり」、また〔国語、章昭注〕に「巫覡は鬼を見が見に従うことについて、〔繋伝〕に「能く神を見ふ」とする。〔国語、楚語〕に、その文がある。字 え、また〔荀子、王制〕に「傴巫跛撃」とある撃は、姫、子無し。巫覡禱祈、鬼神歌舞の樂を好む」とみ見には祈る意がある。鄭玄の〔詩譜〕に「陳の大見には祈る意がある。鄭玄の〔詩譜〕に「陳の大 なり。男に在りては覡といひ、女に在りては巫と るものなり」のように、鬼神を見る意と解するが、 覡の仮借字である。傴・跛は身障者。古くは巫覡に 捧げられたものであった。 て異常なるものは、神明に通ずるものとして、神に 廃疾の人を用いることが多かったのであろう。すべ に「能く齋禰して神明に事ふるもの 会意 巫と見とに従う。〔説文〕五上

劇 はげしい・げきゲキ

被って奮迅する形。これに対して刀でなる。 虚と刀とに従う。 虚は虎頭を 康と刀とに従う。 康は虎頭を

て劇と同訓。力はもと耒の形であるから、豦とは結「甚なり」、また〔広雅、釈詁〕に「疾なり」とあっ うが用例なく、〔沈珠注〕などに引く〔説文〕に 〔説文〕 ニーに動の字を収め、「務むるなり」とい それが戯劇となった。戯も戦闘の意を含む字である。戈をもって撃つ形で、戯・劇はいずれも軍戯、のち 用いる。 『猶然として材劇く、志大なり」、また「解蔽」「夢いいと、いうだい。」では、これでは、まりも形容詞的な語である。「荀子、非十二子」によりも形容詞的な語である。「『伊心』 文をもって撃つ形で、戯・劇はいずれも軍戦とは、強は虎頭を被ったものが豆形の器に腰かけ、 合しがたい字で、おそらく劇の異文であろう。 劇を以て知を亂さざる、これを靜といふ」のように 「尤甚なり」と甚だしい義とするが、副詞的である たち向かう軍戯を、劇という。〔説文新附〕四下に 字の構造は戲(戲)と類するところがあり、 雄々しく、狂おしいような状態をいう語で これを

「擊」17 うつ・たたかう

分化するのである。[説**] に穀三下を車穀(こしれを撃って砕く形で撃の初文。穀がのち撃と繋とにれを撃って砕く形で撃の初文。穀がのち撃と繋とに 盤に作る。 うつ形としている。 常用字は、その誤りを承けて字形を改め、車を手で 誤りであり、叀は底袋のある嚢の形である。 き)をうつ形とし、字を書に従う字とするのは叀の 穀を撃つ字は、

「説文」ー四上に 旧字は撃に作り、設声。 いまの 般は

激 16

ゲキ

撃[撃]

激

檄 鬩

鷁[鵙]

ケツ

子

はげしい・ささえる・そそぐケキ

他に注ぐ意をもつものであろう。 殴ってその呪霊を激し、他に呪詛などを加える方法 附 するが、字はおそらく敫の声義を承け、水を激して 一上に、水をさえぎってはげしく流れ波だつ意と で、刺激・激烈の意を原義とする字である。〔説文〕 敷は白骨化した頭顱を殴つ形。これを **あった。 一声符は歌い。 熟に檄の声がある。

21

隠』19

みずとりのな

檄 ふた れ ぶみ

の文を檄文という。漢代には、檄文に一尺二寸の簡さで、罪状などを書するもの。ふれぶみに用い、そ六上に「尺二の書なり」とするが、それは木簡の長 殴ってその呪霊を激し、他に呪詛などを加える方法 であったと思われる。 を用いる定めであった。檄は本来は神霊に訴える文 で、刺激・激烈の意を原義とする字である。[説文] 敷は白骨化した頭顱を殴つ形。これを 形声 声符は繋。敷に激の声がある。

開18 せゲ めキ ぐ

く訟ふものなり」とするが、兒に従う字としては、まま、「恒に訟ふなり。門に從ひ兒に從ふ。兒は善三下に「恒に訟ふなり。門に從ひ兒に從ふ。兒は善で、児童の児(兒)ではない。〔説文〕 ぐ」の句がある。 小雅、常棣』に「兄弟牆に鬩ぐも、外その務を禦されて相争いせめぐ意を含みうるのである。〔詩、 声義ともにえがたい。虹霓の兒は左右に頭があり、 形声 声符は見。見は虹霓の象形字

形声

書、司馬相如伝〕に「文鷁を浮かぶ」の語がある。じょう。〔淮南子、本経訓〕に「龍舟鷁首」、また〔紫いう。〔淮南子、本経訓〕に「龍舟鷁首」、また〔紫いかり)との貴人の船、前に青雀を作る。これその像なり」と 鶏の相視るや、眸子(ひとみ)運かさずして風化字を鶴に作る。この鳥は〔荘子、天運〕に「犬れ白宗都を過る」という異変記事を引いている。今本は宗都を過る」とし、〔左伝〕僖十六年「六鶂退き飛び、鳥なり」とし、〔左伝〕僖十六年「六鶂退き飛び、 雅、釈鳥〕の〔郭注〕に「鷁は鳥名なり。今、江東が 雁に似た鳥ともされるが、実体は知られない。 [爾 の舟遊びにも、 す」とあり、相視るのみで孕んで卵を生むという。 もとは水神に対する呪飾であろう。わが国の王朝期 正字は鶂に作り、兒声。〔説文〕四上に「鶂 竜頭鷁首の舟が用いられた。

ケツ

子3 ぼうふら

9 一四下に「右の臂無きなり」とし、〔段注〕に「これ 中で身をくねらせる形を写したものである。〔説文〕 を引伸して、 凡そ特立するを孑と爲す」とする。

異なる。〔方言〕に「孑は蓋餘なり」とするのも、義は蘖、すなわち「ひこばえ」の意で、この字義と 子遺あること靡し」を解するものであるが、そのできる。それらは〔詩、大雅、雲漢〕「周餘の黎民とあり、それらは〔詩、大雅、雲漢〕「周餘の黎民ぎない。〔方言〕に「遺なり」 蘗の仮借義である。 は対待、語としては擬声語、字も単純な象形字にす の反文の字形には「左の臂無きなり」とあり、両字

欠4 (缺)10 かけつ

ることをいう字で、缺とは異なるものである。 の常用字とするが、欠は欠伸、あくびして背のびす詩書缺く」とは典籍の残欠するをいう。いま欠を缺 不充足をいう。〔史記、孔子世家〕に「禮樂廢し、 損すること、条件の充たされぬことをいい、心意の 五下に「器破るるなり」という。夬声に従うものに は、概ね缺失の義がある。それよりすべて器物の欠 形声 瓦器、夬は切断することで、〔説文〕 旧字は缺に作り、夬声。缶は

あな・うがつケツ

あった。上部も棟字の形でなく、穴室前面の形。え、穴居土室は、黄土地帯では一般的な住居形式でえ、穴居土室は、黄土地帯では一般的な住居形式で [墨子、辞過] に「古の民、いまだ室を爲ることを 知らず。時に陵阜に就きて居り、穴して處る」とみ 八は土室の入口の象形であって、声ではない。 に「土室なり」とし、字を八声とする 土室の入口の形。〔説文〕七下

> など、土穴の類をいう。

<u>∰</u>. ちケ ・ちぬる

M

ひざるか」のようにトする。〔礼記、礼器〕に、大か」「今日、夕に雨ふるか。血室に在りて、牛を用か」「 「血室に虫(侑)するに、五大罕(羊牲)を用ひんがあり、そこで牲を用いる礼が行なわれている。 会意 て誓うこと、いわゆる血盟を司会することである。 とき「牛耳を執る」というのは、その牲血をすすっ 廟に血祭するときの儀礼が詳記されている。盟誓の 薦むるところの牲血なり」という。卜辞に血宮の名書 皿の中に血のある形。〔説文〕五上に「祭に

抉, えぐる・ほる

「ゆがけ」を用いるその形が、刃器を執る叏の形に のように、「ゆがけ」のことをいう語があるのは、 らこじて上げた意であろう。また抉に抉弦・抉 拾上げて抜きとったという武勇談である。抉とは下か りて、門せむる者を出せり」とは、門を扉ごともち して、「左伝」、襄十年「陬の人紇、これ(門)を抉め東門に繋けよ」、また孔子の父叔、梁・紇の説話と 声字である。〔史記、伍子胥伝〕「吾が眼を抉りて吳えぐりとることを示す字で、抉の初文。抉はその形 る。刃器を手にもってものを切断し、 声符は夬。夬の初形は叏に作

> の字があり、みな夬の声義を承けるところがある。 にもいう。夬に従うものに抉・決・快・缺・玦など似ているからであろう。あるいは満を引いて放つ意

決,〔决〕。 きる・きめる

河深川あり」とはその意。河を決することは決断をして四海に距らしむ」、〔漢書、溝流志〕「治水に決濫を防ぐことをいう。〔書、益稷〕「予、九川を決濫を防ぐことをいう。〔書、益稷〕「予、九川を決濫を防ぐことをいう。〔書、益表別〕とは、洪水のとき堤防の一部を切って、沈 意となる。决は俗字である。 要する重大なことであるから、決意・決定・決心の でなり」とは、洪水のとき堤防で一部を切って、沢袋えぐりとることを示す。〔説文〕 二上に「流れを行えぐりとることを示す。〔説文〕 二上に「流れを行 形声 り、刃器を手にもってものを切断し、 声符は夬。夬の初形は叏に作

頁。

る意、これを迎えて拝するのを顧という。類は公権首の字は、金文に讀首に作る。旨は神霊の降下すなく、金文に稽首を「真論」としるすことがある。 儿(人)に從ふ」とし、「古文賭首、かくの如し」と考えてよい。〔説文〕九上に「頭なり。 百に從ひ、と考えてよい。〔説文〕九上に「頭なり。 1號 同訓の字とするが、頁は礼貌を示す字で他と同じで り」「首は古文百なり」とあって、この三者をみな という。〔説文〕ヵ上には「頁は頭なり」「百は頭な 姿で、この字を含む字は、すべて儀礼に関するもの をつけている。儀礼を行なうときのいわゆる礼貌のない。 頭上に廟中の祭事のときにつける飾り 顔を中心とした人の側身形で

とはその法が異なる。年末に鬼やらいをする大儺のをいうとするが、首を懸けるものは県(縣)で、集をいうとするが、首を懸けるものは県(縣)で、集 「梟磔死の鬼もまた蠱を爲す」とみえ、桀とは梟首 て侵入しようとする風蠱を祓うことが行なわれ、そ ときには、城門に高く犬皮を磔して張り、風に乗じ 「磔なり。舛の木上に在るに從ふ」というのは、字 木の枝の左右に人を磔にする形。〔説文〕 五下に 文の字形には、その頭部に衰経を纏く形を示して な儀礼を示し、頭上に緇布(黒い布)や衰経(喪章う。寡は廟を拝する未亡人の姿。頁はみそのようう。寡は廟を拝する未亡人の姿。頁はみそのようとをいまで、生の世界で、原歌をいう。顕(顯)宮で祖霊を迎えて祀る辞で、廟歌をいう。顕(顯) の麻の紐飾り)をつけている形である。憂や寡の金 木上に二人のある形に従う。 「国語、楚語」に「珠は以て火灾を禦ぐ」とあり、る。 〔説文〕」上に「珠は蚌の陰精なり」とみえ、る。 〔説文〕」上に「珠は蚌の陰精なり」とみえ、など四種の呪物が用いられてい明いたのであろう。 〔祝詞〕の 〔鎮火の祭〕には、用いたのであろう。 〔のま〕 雅、正月〕「赫々たる宗周、寒似これを威ぼす」は、ではない。字は滅の初文。〔説文〕に引く〔詩、小ではない。字は滅の初文。〔説文〕に引く〔詩、小て地に入るなり」というのと対応するが、字の初義 あったようである。 毎(晦)・無(鰓)のように、xの音をもつものがまった。 り。九月、陽气微にして、萬物畢 く成り、陽下り 戌に至りて盡く」とするのは、〔淮南子、天文訓〕戌に従うて十二支の戌とし、「火は戌に死す。陽气は、「寒は(水)の力があるとする。〔説文〕一〇上に威を真珠に鎮火の力があるとする。〔説文〕一〇上に威を の陰陽説によるもので、戌字条一四下に「戌は滅な 清める修祓に用い、また火を鎮める呪器としても 器として種々の呪儀に用いられた。戉に火を加えて や戈は、兵器であるとともに、また聖 戊と火とに従う。 戊(鉞)

架10

はりつけ・あらいケツ

THE DE

字の初形は、

るものがある。

つよい・はやい・げケツ・ゲ

「在子、天道」に「又何ぞ偈々乎として仁義を掲げは發たり「匪の車は偈たり」は車の疾駆するさま。に「健なり」と訓する。〔詩、檜風、匪風〕「匪の風しい意を含むことが多い。この字を〔広雅、釈詁〕 形声 んや」とは、その力んだようすを嘲笑する語。仏教 行なう意で、その声義の字には、きびしくたけだけ 声符は曷。曷は死霊を呵して責め、呪詛を

> 袺 では偈頌の語の音訳に用い、 つまどる また偈佗とも

さんで、 末言〕は、子求めとして行なう草摘みを歌い「芣苢 胎(はらむ)の音に通じ、その薬効があるとされる。 を采り采り 摘み草などをすることをいう。〔詩、 しばらくここにこれを結る 芣苔を采 める意がある。結は衣のつまを帯には 声符は吉。吉にものをとじこ 周南、

訣 11 わかれる・方法ケツ

を善く 訣といい、〔列子、説符〕に「衞の人に數(術数)で死別することを永訣という。道家では方術の法を 訓をあげている。 上に「別なり」とし、また「一に曰く、 とみえ、秘訣・要訣をいう。〔説文新附〕 するものあり。死に臨みて訣を以てその子に 形声 る意があり、訣とは別辞をいう。それ 声符は夬。夬にものを分離す 法なり」の

厥12 [毕]6

٦ °

形声 声符は歎。その初文は季に作り、 大

ケツ 桀 威 偈 袺 訣 厥[季]

威

ほろびる

主には、諸悪が悉くこれに帰するのである。 その文化が最も典麗を極めた時期であった。亡国の きは、卜辞や青銅器資料からいえば、殷代において

悪諡とされているが、殷の桀王のと

いふ」とあり、

とをいう。諡法では「人を賊し殺すこと多きを桀と のことを疈辜磔牲という。疈とは牲体を両分するこ

抵るところ、厥られて澤溪と爲る」とあり、劂の意い。(山海 経、海外北経〕に「相 柳(九首蛇身の神)のるが、それは厥にこじ起す意があるからであろう。 廣成す」、「公、厥の事を上に告ぐ」、「大克鼎」「厥 いることは殆どなく、金文では「斑段」「厥の工を掘撃するに用いる。しかし厥をその初義において用 りも大なり。讀みて厥の若くす」といい、木根の橛や二下については「木の本なり。氏に從ふ。末よ 形も久しく行なわれていて、〔敦煌本古文尚書〕にふ」のように、領格の助詞「の」に用いる。氒の字 また〔令彝」「敢て明公尹の(厥)宣(休)に揚れて称。「哉」の徳を淑哲にす」のように、領格の代名詞に用い、 である。 氒の初形は氏と形が似ているが、 氏は把手 ついては「石を發するなり」と石を掘り出す意とす は食事のときに用いるナイフである。また厥九下に いた例はない。字を氏に従うとするのも誤りで、氏 をいう字とし、厥と同声とするが、氒を橛の義に用 声字である。〔説文〕は氒と厥とを異なる字とし、 (ほりもの刀)をいう。 きな把手のある曲刀の形で、彫刻をするときの剞劂 が用いられている。 は、厥をみな氒の字としているが、文献には厥の字 が内向きの小刀、氒は把手が外向きで、器材を削り 劂は厥の繁文。厥は氒の形*ホゥゥ

生 12 むすぶ・しめる

る力をとじこめる意味をもつものであった。「説文」 があり、結ぶということも、そこにあ 形声 声符は苦。吉にとじこめる意

一三上に「締むるなり」とあって深端の意。Wを結だらことは、古代の歌謡では愛情を約する行為とびまとう)のような呪飾が喜ばれた。転じて結交・びまとう)のような呪飾が喜ばれた。転じて結交・びまとう)のような呪飾が喜ばれた。転じて結交・は、古代の歌謡では愛情を約する行為というにも用いる。

東六 2 あさたば・きよめる・あきらか

「靜かなり」 鷙 のようにいう。修禊・禊祓のように、みそぎの意これを神事に用いるので、絜斎といい、絜静・絜白「靜かなり」とみえ、絜を廟中に用いる形である。 く用いられる。[説文]、一部七下に爽の字を録し、る。古代の神事的な儀礼においては、麻枲の類が多 (束) なり」とあるから、麻を用いたことが知られ ようなものであろう。〔説文〕一三上には「麻一帯のか、あるいは布を細かく裂いた、わが国の白香のないものであるから、呪糸としてその架に繋けるもないものであるから、呪糸としてその架に繋けるも 潔の初文とみてよい。〔大学〕に「絜矩の道」とい 所以なり」のように、自ら潔清にする意にも用いる。タメム、郷飲酒義コ「主人の自ら絜くして、以て實に事ふる郷飲酒義コ「主人の自ら繋ょして、以てする。 トゥム トゥム 「絜柔豐盛なり」とあるのは神饌の意。また〔礼記、」からしょうと けっしほうせい。繋を加えている女の意であろう。〔左伝〕粒六年に絜を加えている女の意であろう。〔左伝〕粒六年に と思われる。漢碑に絜の下部を女に作る字があり、 修はみそぎ、祓は犬牲、絜は麻たばを呪飾とする意 に用いるのも、その儀礼に絜を用いたからであろう を用いるときは絜というが、糸は刻することのでき 形声 みを入れることで、わりふをいう。木 声符は初。初は刀で細かく刻

る。「撃る」という字に仮借したものであろう。りて、同じき者に合す」とあり、揆度する意に用いとされるが、[荀子、本奇] に「君子はその鰶を繋をされるが、[荀子、本奇] に「君子はその鰶を繋をう語があり、己の欲せざるところを人に施さぬこと

傑 13 to y n a

形声 声符は樂。**は人を木上に礫(***)。 かいまた架尾を撃つ形で、祭梟の俗をいう。「説文」八上に「傲るなり」とある。傑・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。傑・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。傑・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。傑・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。傑・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。保・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。保・傲は何れも祭梟の俗を示す字に従うてそある。保・傲は何れも祭梟の俗を木上に礫といる。

掲 3 たてふだ・くい

形声 声符は場。。 場は屍骨の象である。 またその呪霊を呵して責め、呪詛を行なう意の字である。 またその呪霊を鎮めるために祭ることをいう。 た。 [周礼、 蜡氏] に「若し道路に死する者あるとた。 [周礼、 蜡氏] に「若し道路に死する者あるとた。 [周礼、 蜡氏] に「若し道路に死する者あるとた。 [周礼、 蜡氏] に「若し道路に死する者あるとた。 [別ち埋めて褐を置かしむ」とあり、立札を立さは、則ち埋めて褐を置かしむ」とはその立札のてる。 [説文] 六上に「楊桀なり」とはその立札を立また築とも、著ともいう。 処刑者のために立てるこまた築とも、著ともいう。 処刑者のために立てるこまた築とも、著ともいう。 処刑者のために立てるこまた築とも、著ともいう。 処刑者のために立てるこまた築とも、著ともいう。 場は屍骨の象であり。 [左伝] 昭二年「諸を周氏の衢に戸して、ともあり、 [左伝] 昭二年「諸を周氏の衢に戸して、

木旁を加ふ、注に「その罪を木に書して、以て尸木旁を加ふ」という。〔漢書、酷吏伝〕にも、都内ののとき、棺を、とみえる。楊著は名札。のち墓葬その姓名を著す」とみえる。楊著は名札。のち墓葬のとき、棺を、という。〔漢書、酷吏伝〕にも、都内の上に加ふ」という。

駅 3 かむ・つきる

形声 声符は易。 書は鬼霊を呵して 動い、呪詛などを行なう意で、その声義 を唱(喝)といい歇という。 これによって災厄をと を唱(喝)といい歇という。 「左伝」哀トニ年「愛い とめることを遏止という。 「左伝」哀トニ年「愛い まだ歌まず」のように用い、「説文」へ下に「息む なり。一に曰く、气、越泄するなり」という。もと 房霊を用いる呪儀であり、曷声の字はみなその声義

M 14 刻刀・こがたな

掲 14 さる

責め、呪詛する意の字であり、これに形声 声符は曷。曷は屍霊を呵して

ケツ

歇

劂朅碣竭

潔[潔]

獗

頡

用い、往来の意とする。 (説文) 五上に「去るなる意で、「祛う」義がある。 [説文] 五上に「去るなの意で、「祛う」義がある。 [説文] 五上に「去るなの意で、「祛う」義がある。 [説文] 五上に「去るない。 (対する) に登りて場來す」のようにつづけて「精測(山名)に登りて場來す」のようにつづけて「精測(山名)に登りて場來す」のようにつばれたものを去

碣 4 ケツ・カツ

建つ」とあるように、紀念碑的なものをいう。 建力」とあるように、紀念碑的なものをいう。 建建一旦、「東海に碣石山あり」という。碣は道産(行き の義がある。方なるものを碑、円なるものを碣というとされるが、碑は墓葬のとき、棺を下した石柱からとされるが、碑は墓葬のとき、棺を下した石柱からとされるが、碑は墓葬のとき、棺を下した石柱からとされるが、碑は墓葬のとき、棺を下した石柱からとされるが、碑は墓葬のとき、棺を下した石柱からとされるが、碑は墓葬のという。

週 4 つきる・ほろびる

潔 15 (潔) 15 きょらか・いさぎょい

形声 旧字は潔に作り、製声。繁は はみそぎを示す字であるが、潔もわが国の白香のより、神事に与るものは最も清潔を重しとした。修一次をいう。「説文新附」ニー上に「からかなり」とあって清潔、「広雅、釈器」に「白なり」という。とあって清潔、「広雅、釈器」に「白なり」という。とあって清潔、「広雅、釈器」に「白なり」という。とあり、神事に与るものは最も清潔を重しとした。修一次が、神事に与るものは最も清潔を重しとした。修一次が、深られているものであろう。楽は

が 15 たけりくるう

特立の義において通ずるところがある。
はまた猖獗に作る。桀・曷・厥の声義に、強暴・人の強暴にして制しがたいものを猖獗という。字人の強暴にして制しがたいものを猖獗という。字人の強暴にして制しがたいものを猖獗という。厥声の字には刻などに用い、彫刻刀を剞劂という。厥声の字には刻などに用い、彫刻刀を剞劂という。厥声の字には刻などに用い、彫刻刀を剞劂という。厥声の字には形声がは把手のある大きな曲刀。彫

15 くびすじをのばす

鐘〕に「余、頡剛して君に事ふ」とあり、古くかして容易に人に屈しないことをいう。金文の〔部『王公大人、嚴志頡頏の行ある者』とあり、強項に「王公大人、嚴志頡頏の行ある者」とあり、強項に して頸を立てた形とする。〔淮南子、脩務訓〕に〔説文〕丸上に「直項なり」とあり、うなじを伸ば をも調顔といい、〔詩、邶風、燕々〕に「燕々ここら人臣の美徳とされていた。鳥が上下して飛ぶこと これも同系の語である。 双声の連語。指さきに力を入れることを拮据という。 に飛び これに頡しこれに頑す」とみえる。頡頏は ど、力のこもった状態の意がある。 形声 声符は吉。吉に拮・結・詰な

橛 くい・とじきみ・きりかぶケツ

を處するや、橛株拘の若し」とあり、盤根のとり除の整わないものをいう。[荘子、達生]に「吾の身に用い、門橛という。また切株のように、短くて形が鉤形であるからであろう。字はまた門のとじきみが鉤形であるからであろう。字はまた門のとじきみ る。 きがたいもの、不動のものにたとえる。 [説文] 六上に「代なり」というのは、その形 手のある曲刀の形で、彫刻などに用い 声符は厥。厥の初文は季、*** 把

蕨

召南、草虫」「言にその蕨を采る」の〔陸疏〕にその形が鼈の足に似ているからであるという。〔詩、その形が鼈の足に似ているからであるという。〔詩、 なり」というのは、蕨が初生のとき、 形声 声符は厥。〔説文〕--下に「覧・パーラー

> 公孫樹(いちょう)を鴨脚というのと似ている。厥 の木屑の形への連想があるのであろう。 は彫刻刀で木を削り起すものであるから、蕨にはそ できた。 「かられば、ないない。ないない。」とみえる。

擷 つむ・はさむ

擷は擷菜・ 宮中から出て一時天下に流行した。その擷ははさみ 流行した擷子髻は、髪を束ねて繒で結んだ髪型で、 擷・襭は拮・袺と対応する字である。 を帯にはさみ、そこに草を摘み入れることをいう。 こむ意で、襌と同義。襌はまた袺に作り、衣のつま |撒芳など草花を摘む意に用いる。 晋代に れる字であるが、 拮は指爪を用いる字。 形声 声符は頡。拮の繁文ともみら

19 たおれる・つまずく

「樂を爲すも荒すことなく 良士蹶々たり」は、動蹶起、その状を蹶然という。〔詩、唐風、蟋蟀〕蹶を倒れることをいう。優れてはねおきることを 作のきびきびとした、けじめのあるさまを形容する 状態をいう。〔説文〕ニ下に「僵るるなり」とあり、 鑿を加えるものであるから概の義があり、不安定な などに用いる剞劂の形で、刻形声 声符は厥。厥は彫刻

細21 しぼりぞめ・あやぎぬケツ

て、声 しぼり染めをいう。しぼり染めした部分がぼか 声符は頡。〔玉篇〕に「綵纈なり」とあっ

> 整圈 齧21 たものが蠟染めである。綵纈の法は、六朝期に入しのようになるので、また酔眼をもいう。蠟を用いしのようになるので、また酔眼をもいう。蠟を用い 似ているので牣を声符とする。 って行なわれた。 かむ・くいやぶるケツ 形声 ろった線を刻むこと。歯形はこの形に 声符は初。初は刀で細かくそ 歯で契刻するわけで

ゲツ

なり」とあり、相争うことを齧噬という。 はないから、会意ではない。〔説文〕ニ下に「噬むはないから、

月 [月] つゲ

P

のは、 太陰の精なり。象形」と月・闕の同声をもって説く 象形 を加えて、夕の字と区別したものである。よって異なるが、要するに三日月の形で、中に小点 ある。当時はその音であった。卜文の字形は時期に 「日は實なり」というのと同じく、音義説で 月の形に象る。〔説文〕七上に「闕くるなり。

刖 あしきる・きるゲツ

にはなお 「手足を截るなり」の語がある。卜文に脚 に「絶るなり」とあり、[慧琳音義]形声 声符は月(月)。〔説文〕四下

適せしむ」という。 をいう諺である。 の字。足趾を削って屨に合せることを「脬趾、饜にとして駅の字形を録している。刖・跀は何れも月声 〔説文〕足部ニ下に「跀は斷足なり」とあり、重文に我(鋸)を加えている象形字があり、刖の初文。 ものごとの本末を顚倒すること

1.500

抈

文〕 ニェに「抓は動くなり」とあり、抓と通用する。るなり」とあり、挺でこじ動かすことをいう。〔説語〕「その本を置くこと固し。故に拥かすべからざ 声語。別をまた跀・町に作るのも同じ。〔国語、 上に「折るなり」という。月はその擬形声 声符は月、丿 声符は月(月)。〔説文〕一二

軍の祭肉・あやういゲツ

書という。 ****の初文。軍を分遣するとき、その祭肉を頒つのをの初文。軍を分遣するとき、その祭肉を紹っるときに祭り、軍行中に奉戴するところの肉で、師上にある形で中声とするが、自は版物。軍が出動す上にある形で中声とするが、自は版物、とし、自(阜) の字に適当しないものである。 る。〔説文〕の「危高なり」とする訓は、この一系 細い曲刀(辛)を加える。これを欝とい みだりに辛を加えるを雙といい、禍殃を意味す 軍中にはこの祭肉を繋け、頒つときは 象形 自肉を繋けている形。〔説文〕 い、治める

臬10 つみ・まと・のりゲツ・ゲイ

ゲツ 抈

崔 臬 跀 陧

跀 あしきる

形である。〔説文〕六上に「射の準的なり」とあっ辺の正字邊は、台架の上に自を上にした祭梟をおく 辺塞に祭梟して、辺境を戍ることが行なわれたが、向けた祭梟(首祭)のしかたを示す字であろう。いう。字は木上に自(鼻)をおくもので、鼻を上にいう。字は木上に自(鼻)をおくもので、鼻を上に 克くせざること問れ」など、みな罪法を言り行な「汝、時の泉事を陳べよ」、また〔多方〕「禰、泉を「汝、時の泉事を陳べよ」、また〔多方〕「禰、泉をの意に用いる。〔書、康誥〕「汝、時の泉を陳べよ」 息 を陳ぬ」とあるのも同じ。〔段注〕に梟を自声とすた槷の仮借字である。〔左伝〕文六年「これが藝極 〔上林賦〕に「弦矢分れ、藝窟仆す」とある藝もまて的の意とするが、それは勢の仮借義であろう。 の字がみえるが、その用義が明らかでない。字形か 会意 るが、従母の字にその声を求めがたい。 う意である。〔広雅、釈詁〕に「灋(法)なり」と らみると、古い刑罰の法であるらしく、 自と木とに従う。自は鼻の象形。ト文にこ 文献では罪

陧 12

わゲッ わい

あろう。

そのため常人の履は安く、跀者の用いる踊(義足)

昭三年、斉国では跀刑を施すことがあまりにも多く、 も軽重があり、多様であったのであろう。〔左伝〕

う。兵法家孫臏の名も、この臏刑を受けた人の意で が騰貴したという話を伝えている。跀をまた臏とい に「剕罰の屬五百」とあり、剕とは刖刑、その刑に

を失ったもので、その刑を斬趾という。〔書、呂刑〕

犠牲とすることを意味する字。〔説文〕に〔賈逵説〕 のであろう。〔書、秦誓〕に「��の杌隉は、ここにそらく非常の災厄のときに、この儀礼が行なわれる 字連文、畳韻の語である。 を引いて、また「陧は法度なり」とする。杌陧は二 語である。兀は翫で刖刑、皇は毀で、人を処刑し、 訓し、字を毀の省に従うものとする。 ものとみられる。〔説文〕一四下に「危ふきなり」と 年のものが犠牲とされているのは、その事実を示す たとえば殷墟西区の殉葬十五人のうち、その半数近 呪的な意味があるとされたのであろう。殷代の墓葬 あり、杌陧と栄懐と対文。杌陧とは危難災厄をいう 一人に由り、邦の榮懷も、また一人の慶に尚る」と いてその呪儀が行なわれることを示す字である。お訓し、字を毀の省に従うものとする。陧は聖所にお くが未成年者であるように、殉葬者として多く未成 つ形とみられ、そのような童形のものを撃つことに、 会意 形によって考えると、兒(児)童を撃 **自と**皇とに従う。 呈は野の字

の「魯の兀者、叔山無趾」とは、朗刑を受けて趾の収めず、重文として凱を録する。〔荘子、徳太祥、別に作り、その字が用いられているが、〔説文〕にいる。こと、となり、のこと、となり、別はその形声字。また加えている象形の字があり、別はその形声字。また加えている象形の字があり、別はその形声字。またから とあり、足切りの刑をいう。卜文に脚に我(鋸)を 文〕ニ下に「足を斷るなり」 声符は月(月)。〔説

悟るなり」とは、欠伸のことであるらしく、また欠欠他の意に用いる。〔説文〕ハ下に「口を張りて気火性とばを発し、歌い、叫ぶときの形である。この字はとばを発し、歌い、叫ぶときの形である。この字は

撃 18 わざわい・つみ

このでは、もと軍の祭肉として祭るところの版が、 でりて民を撃す」とは、民に撃をもたらす意であい、 のでは、 とは、 滅ぼして改め治めること、 [四氏春秋、過合]とは、滅ぼして改め治めること、 [四氏春秋、過合] 子に従う理由がない。雙は欝に乂をそえて雙治の義るときには、妖孼の意となる。字が罪孼の義ならばる)の義となり、それが賑肉の神聖を犯す行為である)の義となり、それが賑肉の神聖を犯す行為である)の義となり、それが脈肉の神聖を犯す行為であ れがも となるのであるから、犨もあるいは孑声に従う字で ものを撃と称した。〔楚辞、天問〕『夏民を革撃す』とみえ、この群・蟹に対して、人の妖撃、罪戻あるこれを禊といふ、鳥獸蟲蝗の怪、これを鑚といふ」 の字形に従っておく。 みえず、またその古い字形もないので、 あろうかと考えられる。ただ字書に孑に従う字形が 肉である省を、大きな曲刀で切りとる形である。そ 「孤臣撃子」、『、「詩、小雅、白華、序」「撃を以て宗に えて、撃というとする。しかし〔孟子、尽心、下〕、寒とするが、正妻でない脇腹の子をこれになぞらい。 ある。〔説文〕虫部「三上に「蟹、衣服歌謠艸木の怪、 るもので、撃には罪辟の意があり、また妖撃の意が代ふ」の撃子は、罪によって賤しい身分とされてい あり、 雙子の意とする。 伐木ののちに生ずる若芽をあり、 雙子の し軍を分遣するようなときには斃治(治め ある。〔説文〕一四下に「庶子なり」と 声符は辞。辞は省に従う字で いまは篆文

門中のたて木・門のほりたてゲツ

である。〔説文〕二上に「門梱なり」とあり、 ゆる門限で、これは横にしておく木をいう。 中の扉の中央で合うところを、 説文〕二上に「門梱なり」とあり、いわ「央で合うところを、とめるためのたて木「焼、これを関といふ」とあって、門「棚、これを関といふ」とあって、門が、これを関といふ」とあって、門が、これを関といふ」とあり、

\$\frac{\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\exitt{\$\exitt{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\exitt{\$\exitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitt{\$\exitt{\$\exitt{\$\exitt{\$\}\exitt{\$\text{\$\exitt{\$\text{\$\exi ひこばえ

不粹

〔釈言〕に「菑なり」と訓するのは、雙の字と誤っ こばえをいう。「広雅、釈詁」に「皋なり」、またに钀を櫱に作り、今の〔尚書〕も同じ。由櫱とはひに钀を櫱に作り、今の〔尚書〕も同じ。由櫱とはひあるが若し」の文を引くが、〔説文〕の続っ本木部あるが若し」の文を引くが、〔説文〕の続っ (献) 声とする。また〔書、般庚、上〕「顚木の由巘」上に钀を正字としてあげ「伐木の餘なり」とし、獻なり、また肜声字として巘が作られた。〔説文〕六なり、また肜声字として巘が作られた。〔説文〕六 て訓したものである。 から、 形声 であるから、のち省の上部を艸と誤って、蘗の字と また芽生えるものを葉という。ひこばえの義 声符は群で撃の省文。一たび切り倒した木

ケン

欠 あくび・かけるケン・ケツ

震 7

象形 前に向かって口を開く形。 口気を吹き、

> 「今、粤俗になほ欠故の語あり」とあり、その遺語 去にして、くさめの意とする説もある。「徐箋」に、 はその反文である。 であろう。欠に従う字は、みな口気に関する字。

犬 いケぬン

产在

用いて類(類)となる。犬の小なるものは狗、馬の (器)・歳(献)・猷、建物に用いて就、天の祭祀にことが多く、器物を牲血で清める釁礼に用いて器ととが多く、器物を牲血で清める釁礼に用いて器とこ犬が埋められていた。しかし犬は犠牲とされる 小なるものを駒というのと同じ。 あり、近出の中山王墓には、金銀製の首輪をはめるもので、金文では〔員無〕に「犬を執らしむ」と 象形 た二犬が埋められていた。 の」とは、爪の隠れた犬の意であろう。猟犬に適す 犬の形。〔説文〕一〇上に「犬の縣號あるも

件 わかつ・くだりケン

件して豪省に申す」、また〔旧唐書、刑法志〕「斷罪り字とする説もある。〔北史、郎基伝〕に「遂に條う字とする説もある。〔北史、郎基伝〕に「遂に條う字とする説もある。〔北史、字源は知られず、半に従 と爲す」のように用いる。もと裁判用語であろう。 するところ、二十件以上を大と爲し、十件以上を中 会意 人と牛とに従う。唐宋以後に

6 かましい(クヮン)

器(器)・器・器、みな祝禱の器を列するもので、る。品に従うものは歐(欧)・謳、間に従うものは(欧)・謳に従うものは・寒・喪など、みな祝禱に関する字であ 口耳の口に従うものではない。 に「驚き嫭ぶなり とを吅といい、その声の喧噪をいう。〔説文〕ニ上 収める器の形。これをならべて祈るこ 」とするが、吅に従うものは嚴 二口に従う。口は口、祝禱を

节 6

Ŧ

は考、 をもつ。 取る刑、 をいうとする。この形に従う辟・欝は、曲刀をもっは上と干とに従うて、上を干す意であり、それで墓はちに作る。〔説文〕三上に「鼻なり」とし、字形はちに作る。〔説文〕三上に「鼻なり」とし、字形は方に作る。〔説文〕 て肉を切る形で、辟はいわゆる大辟で腰の肉を刳り 辛とは形義の異なる字である。 辟・辪の字形においては辛を用いるが、辛 **辪は軍の奉ずる祭肉を切る形で、襞める意**

見 みる・あらわれるケン・ゲン

979

9

服の儀礼をいう。見るという行為は、対手に向かっ 現在書目をいう。 は「見れる」のである。見在は現在、見在書目とは の……を瞻るに」、〔万葉〕に「見ゆ」「見れど飽か て霊的な交渉をもつことを意味する。〔詩〕に「彼 「南夷東夷、具見するもの二十又六邦」とあり、 事す」、「麦萼」「侯、宗周に見ゆ」は謁見の礼、見いれ、では、大いて視るを見という。「賢設」「初めて宗周に見ない。」、「初れ、明本記」、「我といい、「我と」、「初れ、明本記した人の形。望見を望といい、 ぬ」という表現が多い。見ることによって、その霊 はその儀礼のときの姿である。〔宗周鐘〕にも 降

券。[券]。 わりふ・けんケン・カン(クヮン)

般に木を用いた。巻(卷)は券と形の近い字でありる。〔説文〕四下に「契なり」とあり、書契には一 おそらくこの米に従うて、拳声であったかと思われりふとする。券の上部は米の形で獣爪。字の初形はり のは玉石に刻し、最も重要なものは鼎に銘刻した。 木簡を編して巻いたものであろう。さらに重要なも 会意 両手でもつ形。これを刀で剖いて、わ 実と刀とに従う。 実は獣皮を

訓 8 「く」1「畎」9 みぞ・こみぞ

会意 する。また「くは水小しく流るるなり」、次部にてくをあげ、古文として甽、篆文として畎の字を録け 田と川とに従う。「説文」一下に正字とし

> を説きえない。甽はのちの畎畝の畎、畎はその形声流の大小による字形とするが、それならば甽の字形 「公は水流繪々たるなり」とし、巛を川とする。水 の字である。

肩。〔肩〕。 かた・たえる

であるから、肩任・肩輿という。肩をすくめて笑う医術では肩井という。肩はよくものを負荷するもの医術では肩井という。肩はよくものを負荷するもの 局 「脅肩諂笑」は、卑屈なもののすることである。 す。〔説文〕四下の正字はその骨日部分を日形にし 形と、その下に肉を加えて、その嵌接する部分を示 るしており、肩形に作るものは俗字。日形の部分を、 F 象形 骨が腕に連なる骨臼部分の 肩の形に象る。肩胛

臤 8 かしこい

0 Br

田

碑」に「優町」の語がある。優町は「書、般庚」にとし、漢碑の[潘乾校官碑]に「親臤實智」、[袁良とし、漢碑の[潘乾校官碑]に「親臤實智」、[袁良経の鄭伯堅を[穀梁伝』に賢に作り、[釈文]に臤 の巫賢あり」の賢を、「魏三体石経」に臤に作る。
いれいない。とあり、「書、君妻」「時に則ち若賢の字と爲す」とあり、「書、君妻」「時に則ち若 形は明らかに会意字の構造である。また「古文以て 会意 経籍や漢碑に両字通用の例があり、「春秋」 に「堅なり」と訓し、臣声の字とするが、金文の字 を加えて、その眼睛を失うことをいう。〔説文〕三下 臣と又とに従う。臣は眼の形。眼に又(手) 成四年

二五六

(書、大誥)「民獻十夫あり」、〔酒誥)「殷の獻臣」、あったからであろう。字はまた獻(献)と通用し、神智として神明のことに通じ、賢者とされるものが神智として神明のことに通じ、賢者とされるものが 小雅、北山」に浜・臣・均・賢と韻しており、真韻(洛誥)「殷の獻民」は、みな賢の義である。〔詩、 切」の音をあげており、緊はその声による。 の音がある。〔公羊伝〕成四年〔釈文〕に「苦仞の 近東では奴隷に対して古く行なわれていたことであ ものであった。わが国にも一つ目小僧の話があり、 であることを意味していよう。臣も神に捧げられた ているのは、もと神への犠牲として捧げられるもの よい字であるが、その字形が眼睛を破る形にかかれ 優賢としてみえる語である。臤は賢の初文とみて

9 こどものなきごえケン

間の語であるという。「詩、衛風、漢奥」は君子を間の語であるという。「詩、衛風、漢奥」は君子を解にて、兒泣きて止まざるを喧といい。」とみえ、「方言」にも、燕の外鄙、朝鮮別水のが、ない。「はない」とは、その後容のない。「説文」こ上に「朝いる」とは、その後容のない。「説文」こ上に「朝いる」とは、その後容のない。 妍。 備わることをほめる語。〔韓詩〕には宣に作り、宣 明の意とする。おそらくこの方が字の初義であろう。 妍 うつくしい

なり」と技巧のある者の意とし、また「一に曰く、 形声 の声がある。〔説文〕 ニ下に「技ある 声符は幵。幵(开)に研・訊

> 魔・妍艶・妍靡というとき、妍は他の語に対して洗あろう。妍も研と通じて研精の意があり、妍華・妍なで、その仮借義。恵・安の訓もそれぞれ音通の義で り」の諸訓を列する。「侵し難きなり」とは訳の義 好をいう当時の標準語であった。妍蚩・妍 醜は美して西、秦晉の故都にては妍といふ」とあって、美して西、秦 練された美を意味しているようである。 侵し難きなり。一に曰く、恵なり。一に曰く、 醜相対する語である。 〔説文〕 にはなお「一に曰く、 熟の意もある字である。〔方言〕によると、「關より 事を省録せず」、ことを暁らぬ意とするが、 研精習 安な

建 9 たてる・さだめるケン・コン

褂 表

に及ぶ次第がしるされている。また〔逸周書、意。〔書、召誥〕〔洛誥〕に相宅・ト宅より、浩 建というものがそれで、もと都するところを建てる の原義は、〔周礼〕にいう「國を建つ」、あるいは封まると、奠築が行なわれ、造営がはじめられる。建 いでから、儀礼が行なわれた。その設営の場所が定 壁のうちがわには上主を祀り、そこに酒をふりそそる「まちかた」を書く意であろう。ゑは廷、廷の障るなり」とするが、聿は筆を立てることで、いわゆ 地相を下し、また宮廟などを建てるときは、その地障壁の形。その廷内に聿(筆)を立てて、方位やいの形。その廷内に聿(筆)を立てて、方位や金倉 聿と处とに従う。 えは儀礼を行なう廷の るなり」とするが、聿は筆を立てることで、 を定めることをいう。〔説文〕ニ下に「朝律を立つ 書↓ 造 作₹営

> 解解〕 〔周礼、考工記、匠人〕に営国・営邑の法がいた。 いまい みえる。法を建て、教を建てるという用義は擬似的 なもので、字の原義ではない。

県。 [縣]16 かける・かけはなれる・くにケン

TS.

十又九邑」が下文の「民人都啚」と対挙されている の縣三百」は釐都に属するものであり、「二百又九事実によるものではない。斉器の銘において、「そ 送人」、王城の三百里から四百里の間を県と為すと た説礼、小司徒〕、「五巓を縣と爲す」という〔周礼、「潰れ、小司徒〕、「五巓を縣と爲す」というば王の近畿において、「四旬を縣と爲す」という において相近いものであったと思われる。それなら とは、ほぼ相匹敵するもので、県と邑とはその実質 がある。この「縣三百」と「邑二百又九十又九邑」 いう〔周礼、県士、注〕などの諸説は、みな当時の 又九十又九邑と、□の民人都量とを賜ふ」という文また同じく斉器の〔輪轉〕に「侯氏、これに邑ニ百また同じく斉器の〔輪轉〕に「侯氏、これに邑ニ百 女に釐都の□□を賜ふ。その縣三百なり」とあり、たを整都の□□を賜ふ。その縣三百なり」とあり、で定めうる問題ではない。斉器の〔叔夷鐘〕に「余、ら出ているとする説もあるが、これはその一義だけ んで、のち懸の字を用いる。郡縣の字も繋繋の義か垂れることを縣といい、縣を郡縣の意に用いるに及 懸の初文である。それよりして、すべて上より懸け懸首の象。〔説文〕ヵ上に「繋なり」と訓し、縣は 懸首の象。〔説文〕九上に「繋なり」と訓し、 会意 を倒にした形、系はそれを木の枝などに繋ける形で 小司徒〕、「五鄙を縣と爲す」という〔周礼、 旧字は縣に作り、農と系とに従う。綦は首

〔書〕にみえる里君・多君の支配地が、のちに行政 国家、すなわち君の統治していたもので、金文や ときの郡は、もと氏族的首長の支配する古代的な小 その上層の機構に属するものであろう。郡県という ことからいえば、それは特定の行政的区域であり、 封)や鎮江(丹徒)にも及んだが、イラン人の間に撃・洛陽にも状祠が建てられ、宋代には汴京(開安・洛陽にも状祠が建てられ、宋代には汴京(開西北部に盛行し、当時状道の名でよばれた。長の西北部に盛行し、当時状道 のみ行なわれ、漢訳経典も殆ど残されていない。

倦 うむ・おこたる

倦み労れることを倦游という。陸機の〔楽府〕に八上に「罷るるなり」とする。故郷を出て、仕事にハ上に「*** を倦という。〔書、大禹謨〕「朕帝位に宅ること三十がめた形。人が疲労して、身を屈して休息する姿勢 「余はもと倦游の客」の句がある。 有三歳、耄期にして勤めに倦む」とみえ、〔説文〕 形声 の字の従うところで、 声符は卷 (巻)。巻は券・拳 ものをまるくか

寰は直轄の支配区域をいう。上垣などをめぐらした かたが異なるものであろう。字はときに寰を用い、 して、直接支配下にあったもので、郡と本来のあり 区域化したものであろうが、県はもとから経営地と

倹 10 (儉) つづまやか・とぼしいケン

肝は簪笄の笄の初文で、平直のもの。 形声 旧字は研に作り、H(开)声。

研。

研

みがく・きわめる

実質において両者は一であったと考えられる。 をもっていえば邑、その耕作地をもっていえば県、 一区画が寰であるから、それは邑と近く、その居邑

〔礼記、楽記〕「恭儉にして禮を好む」のように用い、 という。 「宮室紫からず、器に形鏤無きは儉なり」、 いよに「約なり」とあり、つづまやかの意。〔国語、ハ上に「約なり」とあり、つづまやかの意。〔国語、 る。もと神に祈ることの恭倹であることをいう。 る。象は二人並んで神に祝禱している形。〔説文〕 焼(検)・險(険)・驗(験)の声があ形声 旧字は儉に作り、僉声。僉に 旧字は儉に作り、僉声。僉に

な硯の意。書状の脇付に研北という。から、また研としるすことがあり、研匣・研屏はみから、また研としるすことがあり、研匣・研屏はみ 鑽・研精のように用いる。 硯は研磨するものである から、すべて精密にものをしあげる意となり、研ゆえに刊(栞)・研などは幵に従う。研磨することは****

ゾロアスターのかみケン・テン

会意

示と天とに従う。〔説文新附〕

兼10 (兼)10 かねる・あわせ

新

一上に「胡神なり」とし、天声とする

六朝のころ中国にも伝えられ、 古代ペルシアで行なわれ、天地 会意 正字は兼、 **秝と又とに従う。** 二禾を併せて

> 剣10 (劍)15 つケ るぎ

り」は落穂拾いをいう。多くのことにわたって修学 兼併の意となる。〔詩、小雅、大田〕「彼に遺秉ありだ。一禾をもつものは秉、二禾をもつものは兼、ゆえに一禾をもつものは兼、ゆえに もつ形である。〔説文〕七上に「丼すなり」とし、

することを兼修・兼学という。

W. Carlot 劒勳

形声 は帯剣、六朝の士人も、聖徳太子像のような長剣作る。みな双刃、呉越の剣に優品が多い。古く男子作る。みな双刃、呉越の剣に優品が多い。古く男子 (険)の声がある。「説文」四下に「人の帶ぶるとこ ろの兵なり」とあり、 旧字は劍に作り、僉声。僉に儉(倹)・險 帯剣をいう。金文の字は鐱に



に、向秀と樹下に剣を鍛していた話がある。 はないような 別様を出する 剣様 を出する 乳焼き とされた。 竹林の七賢の嵆康を帯しており、着剣のまま殿上に入ることを許され

青10 [書]11 つかわす・つちくれケン

튙 End

€8**}** 腎

会意 自と両手とに従う。両手で自をもつ形。

貴(者)

祆 倦 倹[儉] 兼[兼] 剣(劍)

研(研)

水火の諸神を祀る。 いわゆる拝火教で、

二五七

は軍中に奉ずる祭肉の形。軍を派遣するとき、この祭肉を奉ずるので、常は遺の初文である。「説文」「自に從ひ、実に從ふ」とするが、自は神の陟降する神梯の形で、両手でもちうるようなものではない。ちかに自、ずなわち祭肉の形に作る。「大保良」に「たけっ、「書商」という。字は卜文・金文にみえ、明し古語ならん」という。字は卜文・金文にみえ、明し古語ならん」という。字は卜文・金文にみえ、明し古語ならん」という。字は「文・金文にみえ、明し古語ならん」という。字は「大保良」に「禁いる。その字は、書の下に祝禱の器の形であるごをそえている。書は遺の初文であるが、軍を派遣し、これに祝禱を加えるのは、軍征の成功を祈るものであり、その軍征を受けるものに、譴責のことがあるとするものであろう。字を〔説文〕のいうような貴的・小塊の意に用いた例をみない。

埍 10 つちべや・ひとや

形声 声符は覚。胃に潤、猾の声が ころなり」とし、また「一に曰く、女の牢なり。 に曰く、亭部なり」とする。女牢について〔句読〕 に「今、京師にこの語あり。ただ專ら女のみを謂は に「今、京師にこの語あり。ただ專ら女のみを謂は に「今、京師にこの語あり。ただ專ら女のみを謂は でるのみ」という。女囚の土室である。亭部は地方 の〔韓詩章句〕に「郷亭の繋を犴といひ、朝廷を獄 といふ」とみえ、犴・埍は声義の近い字であろう。 といふ」とみえ、犴・埍は声義の近い字であろう。

> 形声 声符は笑。篆文の字形によるときは、則ち拳々服庸してこれを失はず」という。 と、字の上部は米。獣掌の形である。 その獣掌をもって撲つを拳という。その形を拳曲・ な、謹慎のさまであるから、「中庸」に「善を得た は、謹慎のさまであるから、「中庸」に「善を得た なときは、則ち拳々服庸してこれを失はず」という。 をきもって戦う法は拳法、その技をよくするものを 拳をもって戦う法は拳法、その技をよくするものを 拳をもって戦う法は拳法、その技をよくするものを 拳見という。

・) 10 小さいながれ・しずく・のぞく

お声 声符は冒。冒に狙・組の声がり」とあり、水中の虫の象形。それで冒声の字に小の意がある。〔説文〕二上に「小流なり」とあり、別なのように用いる。涓人は宮中の掃除人。宦官が得るのように用いる。涓人は宮中の掃除人。宦官が多くこれに任じた。清掃に従うので涓というとされているが、織と同声であるから、涓人の義は蠲の仮であろう。蠲とは去勢をいう。

狷10 きみじか・かたくな

で取り、狷者は爲さざる所あるなり」というのも同ななり」とは、分を守って節を立てることをいう。〔国語、晋語〕「小心狷介、敢て行は、対るをいう。〔国語、晋語〕「小心狷介、敢て行は、対るを守って節を立てることをいう。を得てこれと與にする。となくんば、則ち狂狷(の人)か。狂者は進みであり、狷者は爲さざる所あるなり」というのも同ない。

皮 10 ケン じ。孔子は狂簡・狂狷のものを愛したようである。

景。麦麦类

る意の字である。虎皮に文を加えるのは、神判におれて勝訴をえた解應(神判に用いる獣)に、文身としての心字形を加えて慶とするように、虎皮に文を加えて、これを聖化する儀礼があったのであろう。虔の古い用義例では、[書、呂刑]に「奪攘、矯虔」とあって擾す意、成十六年「卜を先君に虔む」は恭とあって擾す意、成十六年「卜を先君に虔む」は恭とくトする意。[詩、大雅、韓奕]「爾の位を虔」とは、虔恭の意であろう。虔恭が基本義、他せよ」とは、虔恭の意であろう。虔恭が基本義、他の諸訓の擾・殺はおそらく引伸の義で、列国期以後の用義であろうと思われる。

10 のき・くるま・てすり・あがる

健コーすこやか・たけし・つよい

形声 声符は建。〔説文〕八上に「伉原行して以て俗に違ふ」という。〔淮南子、斉俗訓〕に健に行なうことで、〔韓詩外伝〕に「驕るなり」と健に行なうことで、〔韓詩外伝〕に「驕るなり」といいうような訓も生れる。〔易、乾卦〕に健を天道の徳とし、「天行は健なり、君子以て自彊して息まず」といい、君子の徳を称する語となった。

倦い もだえる・ねんごろ・うむ

形声 声符は巻(巻)。巻は巻曲で、身をまるめ でかがんだ状態をいう。深玉の〔神女の賦〕「心を ってかがんだ状態をいう。深玉の〔神女の賦〕「心を っていがんだ状態をいう。深玉の〔神女の賦〕「心を をしていつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に いつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に いつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に いつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に いつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に いつづけるさま。〔説文〕にこの字なく、〔玉篇〕に

捲 11 まく・おさめる・きおう

形声 声符はな(巻)。巻に巻曲の 大学である。〔説文〕二上に「气の熱(勢)なり をは捲勇、気負うた勇気をいう。すべて捲き収める とは捲勇、気負うた勇気をいう。すべて捲き収める とは洗り、一直にに「气の熱(勢)なり」 た字である。〔説文〕二上に「气の熱(勢)なり」 た字である。「説文」二上に「气の熱(勢)なり」 た字である。「説文」二上に「气の熱(勢)なり」

牽 11 ひケン

軍災少昊

会意 牛と玄とに従う。玄は牛を牽く際の形。牛会で、牛と玄とに従う。玄は牛を牽く際の縄で、いわゆる鼻嵌である。〔説文〕ニ上鼻に施す縄で、いわゆる鼻嵌である。〔説文〕ニ上鼻にが引きて前むるなり」とは牽と前と畳韻の訓。また「牛を引くの際に象るなり。玄聲」とするが、玄は際の象形である。ト辞の第一期負人の名にみえる牽は、牛角を執って牽きまわす形。それに羈縻の縄を加えたものが牽。ト文の字を争と釈する人が多いが、誤りである。

眴 11 「旬」 7 またたく・くらむ

形声 声符は旬。「説文」四上に旬を正字とし「目形声 声符は旬。「説文」四上に旬を正字としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、には関に従う字、また瞬をあげて古文旬としており、人を眩惑する意である。

眷川 「睠」」3 かえりみる・おもう・めぐむ

とを眷顧という。〔詩、大雅、皇矣〕「乃ち眷みて西巻曲の義があり、身をまげて顧みるこれの一巻曲の義があり、身をまげて顧みるこれの一巻に

着という。字はまた睠に作る。 「大禹諫」「皇天眷命し、四海を奄有し、天下の君たらしむ」のように、用例古く、みな天意による恩寵らしむ」のように、用例古く、みな天意による恩寵らしむ」のように、用例古く、みな天意による恩寵らした。 「大禹諫」「皇天眷命し、四海を奄有し、天下の君たらしむ」のように、用例古く、みな天意による恩寵らした。

険コ【験】16 けわしい・あゃうい

(検)・剣(剣)の声がある。〔説は山川丘陵なり。王公陵を設け、以てその國をでる。險の時用、大なるかな」とし、険阻の意とする。象である自に従う字で、もと神路の険を守る意であ象である自に従う字で、もと神路の険を守る意である自に従う字で、もと神路の険を守る意である自に従う字で、もと神路の険を守る意である。送葬のとき柩に先行する険道神があり、[周・大なるかな]という。険は神様のからず。と神路の険を守る意である。

11 一歳の馬

というから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでとする説もあるが、用例がなくて確かめがたい。 「字杯」に駄を一歳馬とし、「爾雅、釈査」に玄駒のとする説もあるが、用例がなくて確かめがたい。 「字杯」に駄を一歳馬とし、「爾雅、釈査」に玄駒のとする説もあるが、用例がなくて確かめがたい。 「説文」「〇年外」に駄を一歳馬とし、その字形について、というから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでというから、駄の義をもってこの字を解したものでという。

形をその意とみることができる。時つなぐ「勢駒」のことが行なわれるので、この字時つなぐ「勢駒」のことが行なわれるので、この字あろう。駒ならば、通淫を防ぐために放牧の馬を一

喧 12 やかましい (クヮン)

いまもその流儀である。 「説文」二上形声 声符は置。宣に諡の声がある。「説文」に「大語なり」とあって、大声で喧譁することをいう。字語なり」とあって、大声で喧譁することをいう。字話なり」とあって、大声で喧譁することをいう。字話なり」とあって、大声で喧嘩することをいう。字がある。「説文」二上形声 声符は置。宣に諡の声がある。「説文」二上

色 12 一色 11 かこい・おり・さかい

形声 声符は巻 (巻)。巻は巻曲で表うに囲うた圏内を示し、牛馬を養うところの意。ように囲うた圏内を示し、牛馬を養うところの意。ように囲うた圏内を示し、牛馬を養うところの意。ように囲うた圏内を示し、牛馬を養うところの意。とあり、虎をしい、その範囲の外にあることを圏外、中でともにいい、その範囲の外にあることを圏外、中でともにいい、その範囲の外にあることを圏外、中でともにいい、その範囲の外にあることを圏外、中でともにいい、そのを関係という。文章に対しているのは、いわゆる圏点である。

至土 12 かたい・つよい

意。のちすべて強堅なるものに用い、堅甲・堅城・お型の意であるが、堅は緊圧によって固まった土のあり、堅い土をいう。剛は火を加えて堅剛となった。(説文)三下に「剛きなり」とある。〔説文]三下に「剛きなり」と

堅守・堅持・堅忍のようにいう。

検12【検】17 しるしする・しらべる

川 12 めのふち

を次条の瞋、「目邪なるなり」の下にあるべきものう。醜の声義とは甚だ異なるので、「徐箋」にこれう。醜の声義とは甚だ異なるので、「徐箋」にこれなり」とあり、また「古文以て醜の字と爲す」といる。「説文」四上に「目剛のとあるである。「説文」の下にあるべきものである。「記文学の学術を次条の順、「日本の本のでは、「本の本のでは、「本の本のでは、「本の本のでは、「は、「本の本のでは、「は、「は、」の本のでは、「は、「は、」の下にあるべきもの

利目」ともみえる字形である。 に従う字が三字(買部九上・芥部一〇下・女部一二下)に従う字が三字(買部九上・芥部一〇下・女部一二下)とする。 農は用例のない字であるが、説文にこの形とする。 農は用例のない字であるが、説文にこの形

現 12 すずり

では、現北をまた研北という。

| 下声 | 声符は見。 (説文) 元下に「石をいる。 (説文学) 以来、書家はみな名硯の収得を誇りとする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇とする風を生じた。字はまた研を用いる。書状の脇という。

約12 あや・うつくしい

800 形声 声符は旬。旬に胸の声がある。 (説文) ニュ上に説解の文を著けず、 で、(論語、八佾)にみえるもので、礼が修為の最 そ。〔論語、八佾)にみえるもので、礼が修為の最 後の段階であるように、絵事も素でしあげる意とさ れるが、朱子は下地をまず塗ることが基本の意であ るという。〔礼記、礼器〕「白、宋を受く」とあるに よるものであろう。〔嫌礼、聘礼〕の「絢組」の注 よるものであろう。〔嫌礼、聘礼〕の「絢組」の注 よるものであろう。〔嫌れ、聘礼〕の「絢組」の注 よるものであろう。〔がれ、聘礼〕の「絢組」の注 など、文彩の目をおどろかすをいう。

条 12 たすき・しばる

意 资

国で作られた字である。 とは袖をつかねることで、たり、つかねてしばることをいう。 「説文」 一三上にり、つかねてしばることをいう。 「説文」 一三上にがまった。 学はなり、とは袖をつかねることで、たけまった。 声符は巻(巻)の省文。巻に巻曲の意があれた字である。

嫌13 (嫌)13 きらう・あきたらぬ・うたがう

形声 旧字は嫌に作り、衆 (兼) 声。 「説文」二下に「心に平らかならざるなり」とあり、不満足とする意。嫌脱、嫌忌・嫌いがある。〔礼記、曲礼、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがある。〔礼記、書では、上〕に「禮は嫌名を諱まのがあるとを、近似音の瓦を避ける必要はない。中国語のような単音節語では、近似音まで避けるのは、非常に困難なことであった。

紀 13 「傷」」 あやまち・たがう

學圖

0

晋

變

形声 声符は衍。衍は喩母。喩母の字に爱

硯

絢

嫌(嫌)

愆[譽]

楗

犍(劇)

献[獻]

(緩)・爲(論)・韋(諱)など、声の転ずるものが、(緩)・爲(論)・韋(諱)など、声の転ずるものがなり」と訓し、別義の字。疊は「爾雅、釈言」に「過なり」と訓し、別義の字。疊は「爾雅、釈言」に「過なり」と書し、別義の字。疊は「爾雅、釈言」に「過なり」と書し、『義文章を意味する。「説文』とし、東文として歌・響の二文をあげるが、歌二〇下は「實なとして歌・章(韓)など、声の転ずるものが、後、爲(論)・章(諱)など、声の転ずるものが、後、爲(論)・章(諱)など、声の転ずるものが、

健 13 かんのき・せき

形声 声符は建。建に建てるものののれを支えとして、土石をもって水を塞ぐのである。これを支えとして、土石をもって水を塞ぐのである。これを支えとして、土石をもって水を塞ぐのである。これを支えとして、土石をもって水を塞ぐのである。本質が大の決震所を塞ぐ意に用い、「史記、沖雲書」に河水の決震所を塞ぐ意に用い、「史記、沖雲書」に河水の決震所を塞ぐ意に用い、「史記、沖雲書」に河水の決議所を塞ぐ意に用い、「東京は建」。建に建てるもののれを支えとして、土石をもって水を塞ぐのである。

犍13「劇」12 去勢した牛

形声 声符は建、〔説文新附〕ニ上に ・う。字はまた虔声に従い、あるいは劇に作る。牛・う。字はまた虔声に従い、あるいは劇に作る。牛・う。字はまた虔声に従い、あるいは劇に作る。牛・たからである。字は鐲と同声。犍・劇・鍋はみな声たからである。字は鐲と同声。犍・劇・鍋はみな声である。

温 社

於替與東別

会意 旧字は處と犬とに従う。〔説文〕一〇上に 宗廟の犬、突献と名づく。犬の肥えたるものは、「宗廟の犬、突献と名づく。犬の肥えたるものは、「宗廟の犬、突献と名づく。犬の肥えたるものは、このによるものがみえ、突献のためにこの字が作られたとたるものがみえ、突献のためにこの字が作られたとたるものがみえ、突献のためにこの字が作られたとたるものがみえ、突献のためにこの字が作られたとたるものがみえ、突献のためにこの字が作られたとはしがたい。金文には献工・献倉・献徳・献帛・典はしがたい。金文には献工・献倉・献徳・献帛・典はしがたい。金文には献工・献倉・献倉・本で、犬はその器を襲するための犬性の意であろう。で、犬はその器を繋するための大性の意であろう。な後、(器)・飲・説・・数・数など、みな犬性を用いることがでより、一般に、字献のという。舞器には現立といく、をいてこれを関するように、字献の器にも、また繋礼がてこれを関するように、字献の器にも、また繋礼がてこれを関するように、字献の器にも、また繋礼がてこれを関するように、字献の器にも、また繋礼がである。ト辞には犬性を用いるのはなく、極めて多いが、これを突献として用いる例はなく、極めて多いが、これを突献として用いる例はなく、極めて多いが、これを突献として用いるのはなく、

名 13 きぎぬ・きぬ

麦茎、麦稈の浅黄にして光沢あるものに似ているのニューに「繒の麥稈の如きものなり」とあり、稈は形声 一声符は骨。胃に潤・墹の声がある。(説文)

は、精巧な絹織物の遺品が多く出土している。親蚕の儀礼としても伝えられた。漢の馬王堆墓から話は古代の神話・文学にもみえ、蚕桑・桑摘みの説話は古代の神話・文学にもみえ、蚕桑・桑摘みの説で、黄絹をいう。卜文に蚕の字形がみえ、また桑葉で、黄絹をいう。卜文に蚕の字形がみえ、また桑葉

腱 13 すじのつけね

の声義を承けるところがあろう。 ところの白く強い部分。大筋。健・健・ところの白く強い部分。大筋。健・健・なる

言 3 ケン・カン(クヮン)

萱 朦 瓢

形声 声符は置。宣に喧・龍の声がある。[説文] 形言 声符は置。宣に喧・龍の声がある。[説文] を書く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も を葺く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も を葺く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も を葺く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も を葺く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も を葺く料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も をすく料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も をすく料とする。屋根を葺く草は多いが、萱が最も

遣は「遣」は つかわす・やる

高から いまから いまがら にもがら いまがら にもがら にもが にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら にもがら

形声 声符は置。書は自肉を両手でもつ形である祭肉で、軍社から受けてきた脈肉であり、軍を派遣し、また分遣するとき、これを奉じて行動する。自は師の初文。その肉を奉置するところが餗(駐屯地)、その建物が官、それは指揮者の居るところが陳(駐屯ので、三大大学で、一人教育の意となる。遣の初義は軍を派遣することで、周初の〔明公設〕に「これ王、明公に命じて、三大大学での意となる。遣の初義は軍を派遣することで、周初の〔明公設〕に「これ王、明公に命じて、三大大学での意となる。遣の初義は軍を派遣することで、周初の〔明公設〕に「これ王、明公に命じて、三大大学では、軍位を派遣して和を請うことをいう。葬りとは、軍位を派遣して和を請うことをいう。葬りとは、軍位を派遣して和を請うことをいう。葬りとは、軍位を派遣して和を請うことを心と、関が終めるとき、となる、「大学である」に登場が、既夕礼」に発展に収めるとき、中である。本は、東大学である。また近常のとき、様性など供薦のものを積むものは遺車。「発行、既夕礼」に発展に収めるとき、史官に賜物をよみあげさせる礼があって、「遺を讀む」という。また近常、大学であるとき、様性などは高いのを強いであるとき、様性などは高いののを強いない。これを一様に表している。

|| 1 かたいじ・おしむ

蘇軾の造語。わが国の「突慳貪」は、とげとげしく 梅雨の雨の降りしぶるのを「慳 嗇 霖」というのは、 に墮つ」の語があり、墜客(もの惜しみ)をいう。 に墮つ」の語があり、墜客(もの惜しみ)をいう。 はないでは、 そとで、仏典にみえる。[法華経、方便品]に「慳貪 語で、仏典にみえる。[法華経、方便品]に「慳貪

乱暴に振舞うことで、語義があまり適切でない。

事14 ぬきとる

形声 声符は寒の省文。〔説文〕一二 「大歌、湘君」「芙蓉を木末に寒る」など、草木を 手折る意に用いる。〔呉子、料敵〕に「旗を搴り將 を取る。必ず能くする者あらん」とは、敵旗を奪う を取る。必ず能くする者あらん」とは、敵旗を奪う

生 14 みわける・あきらか

形声 声符は型。空に鄧の声がある。 「説文」二下に「甸なり」とあり、上になびく煙を加えている。瓦を焼く窯の煙をいう。 などく煙を加えている。瓦を焼く窯の煙をいう。 など。 例工を顕着という。人を甄別挙用 なことを顕複といい、表彰することを甄瑟という。 することを甄瑟といい、表彰することを甄瑟という。 することを甄瑟といい、表彰することを甄瑟という。

假 15 ケン

で我をば慢なりと謂ふ」の〔毛伝〕に「利なり」とり」とあって互訓。〔詩、斉風、鷺〕に「我に揖しり」とあって互訓。〔詩、斉風、鷺〕に「我に揖しり」とあって互訓。〔詩、斉風、鷺〕に「我に揖しり」という。 形声 声符は裳。裳はめぐることで

寨

甄儇

権(權)

憲[憲]

暴[暴]

権 15【權】21 はかり・おもり・はかる

とされるが、「大戴礼、詰志」に「百草權與す」ともののはじめ、度量や車輿を作る次第から生れた語 〔詩、秦風、 威・権勢・権貴、 り」、〔孟子、尽心、下〕「中を執るも權ること無く權なるものは常經に反し、然るのちに善あるものな 權るべからず」、〔公羊伝〕桓十一年「權とは何ぞ。緣なり、〔論語、子罕〕「與に立つべきも、未だともになり、〔論語、子罕〕「與に立つべきも、未だともに 動詞に用いる例があり、その本字は灌渝、草の萌芽 ば、なほ一を執るがごときなり」のようにいう。権 重さを権るもので、おもりを権という。権は重量に 殆ど権量あるいは権要の意に用いる。権量のときは するが、どのような木であるのか知られない。字は することをいう語の仮借字である。 は権量の字で標準・準的の意があり、それより権 よってとりかえるものであるから、臨機応変の意と 権興」の「干嗟乎 文」六上に「黃華木なり」と木の名と また権謀・権数の意ともなる。 旧字は權に作り、雚声。〔説 權輿を承けず」は

憲16【憲】16 のり

康 春春

形声 声符は需。需はいまの字書にみえない字で

の字形に含まれている大きな把手のある入墨用の針の字形に含まれている大きな把手のある入墨用の針であるから、のち法の義となった。「説文」一〇下にであるから、のち法の義となった。「説文」一〇下にであるから、のち法の義とするが、そのような用義例です。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、それも爲す。引伸の義を法と爲すなり」とするが、そのような用義例のないことである。金文の梁山七器といわれるもので、もと刑罰を示す。刑罰を加えることから、表示すことを「掌る」、「小司徒」「群更をして禁令を憲すことを「掌る」、「小司徒」「群更をして禁令を憲すことを「掌る」、「小司徒」「群更をして禁令を憲すことを「掌る」、「小司徒」「群更をして禁令を憲すことを「掌る」、「小司徒」「群更をして禁令に憲らしむ」のように用いる。法は審思すべきものに憲らしむ」のように用いる。法は審思すべきものにあるから、孔門の原憲は、字を子思という。

以 16 「 以) 14 かきらか

子白盤」「子白孔だ親にして光あり」、「井人安鐘」 することをいう。また金文に親の字があり、「號季ている形で、繁簡の字ともみられ、やはり霊の顕現 「天顯民祗」の顕を暴に作る。ただ金文に顕をその 「親淑なる文祖皇考」のように用い、字の声義が近い。 することをいう。 て、はじめて顕現の意となる。現は顕の呪糸を略し 形に作るものはなく、拝する者の形である頁を加え また金文に親の字があり、

褰 かげる・あげる・はかま

「詩、鄭風、褰裳」「裳を褰げる字である。簾を褰る」とあって、搴の声義を承げて溱(川の名)を渉る」とあって、搴の声義を承げる字である。簾を褰げて溱(川の名)を歩きない。 げることを褰簾という。 寒曲(まがる)意がある。[説文] ハ 形声 声符は繋の省文。搴声の字に

諠16 【鍰】16 わすれる・やかましいケン

「斐たるある(徳ある)君子・終に鍰るべからず、割〕に「忘なり」という。〔詩、衛風、漢奥〕にという。〔法、衛風、漢奥〕にが、「原雅、釈詁〕に「欺くなり」、〔爾雅、釈とあり、「「のないのは、「のないのでは、 『衛風、伯兮』「焉くにか諼草を得て「言にこれを「髪たるある(徳ある)君子「終に諼るべからず」、 諠は諠伝・諠譁・諠囂などの意に用いる。 背に樹ゑん」のように、忘れるという訓が最も古い。 **誼はその転音で諼と同字。〔説文〕に「諼は詐なり」** 正字とし、爰声。爰・亘はもと同声、 声符は宣。〔説文〕三上に謎を

賢 16

腎 EN EN

社稷の常隷といわれる巫祝の多才なるもの、すないており、これは後起の義であろう。賢の起原は、に分つ、これを賢人と謂ふ」という管仲の語を引があったのである。〔列子、力命〕に「財を以て人があったのである。〔列子、力命〕に「財を以て人 の巫賢を〔魏石経〕に巫臤に作る。当時なおその字漢明にも親臤・優臤などの語がみえ、〔書、君奭〕 即は「説文」三下に「古文以て賢の字と爲す」 の聖職者で、そのゆえに自ら多才多芸、よく神に事祈った祝詞の文であるが、周公は明保とよばれる周とははず」という。周公旦が武王の疾に代ることを然 ことは、神につかえる重要な条件であり、「書、念や妾はもと神につかえるものであった。多才である て傷つけるもので、神に捧げられた徒隷をいう。臣ある。散は臣すなわち目の眼睛を、又(手)を加え であった。のち字は賢人の意となるが、この字を用 貝は呪器としても、また装飾品としても貴重なもの り、賢は本来は貝の良質のものをいう字であろう。 貝を財貨と解したからである。臤に堅・緊の意があるのを〔段注〕に「多財なり」と改めているのは、 と祈り、これを金縢に封じて、その感応を待った。 えるものであるから、余が命にかえて武王を助けよ いる以前には臤が用いられており、臤が賢の初文で 声符は臤。〔説文〕六下に「多才なり」とあ

> の献民」などは、みな賢の義である。寺人・閹人をの「民獻」、〔酒誥〕の「殷の獻臣」、〔洛誥〕の「殷の献臣」、〔洛誥〕の「殷神人である。賢はまた献(獻)と通じ、〔書、大誥〕 王方壺には、下を子に作る字形がある。 おり、その用義法を確かめることはできない。 であろう。金文に賢の字がみえるが、人名に用 また豎といい、字は臤に従う。豎も同じ出自のもの の、神によくつかえるものから出ており、 て神の声を聞きうるものであった。聖賢はもと巫祝 わち神意にかなうものであり、また聖とは、聡にし いわゆる 大浩 中山

黔 16 くろい・あさぐろケン・キン

と爲す。黑色なるを謂ふなり。周はこれを黎民と謂と爲す。黑色なるを謂ふなり。周はこれを黎民と謂と爲す、黑色なるを謂ふなり。周はこれを黎民と謂と爲す。(説文)一〇上に解末 「 くろい・3: 〔史記、秦始皇本紀〕に「二十六年、更めて民に名 り」とする。〔国語、呉語〕「黎老を播棄して、夜童漢〕〔大学〕などにみえ、〔爾雅、釈詁〕に「衆な漢〕〔大学〕などにみえ、〔爾雅、釈詁〕に「衆なぶ」と補説している。黎民の語は〔詩、大雅、雲 したのであろう。〔泰山刻石〕にはなお黎庶の語をにもその語があり、二十六年以後にはこれを公称と 楽」の諸篇、及び李斯の〔客を逐うを諫むるの書〕じまるとするが、「呂氏春秋、振乱〕〔懐寵〕〔六代はまるとするが、「呂氏春秋、振乱〕〔懐寵〕〔六代は、「はいかいかい」とあって、黔首の称はここには む」の注に「子罕、黑色にして邑中に居る」という。 る。〔左伝〕襄十七年「邑中の黔、實に我が心を慰ものであるが、〔孟子〕には老者と黎民とを対挙す にこれ比謀す」というのは、年輩者を黎老と称する。

野にはたらいて日焼けするものを、黔と称した。黎 の黒いことをいう。〔説文〕隹部四上に黎声の難のも〔史記、李斯伝〕に「面目黎黑」の語があり、色 用いている。〔荘子、天運〕に「鳥は日に黔まずし て黑し」とあり、黔とは日焼けすることである。 蹇

字があり、楚雀の名であるが、「その色黎黑にして

黃なり」とみえる。盧声の字にも黒の意があり、

黎

謇 直言する・どもるケン と声義が近い。

と、「楚辞」に多く用いられており、もと楚の語で字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零曲(まがる)の意がある。語の和順字があり、零として書いばる。同声の字に攀・騫などの形声 声符は奪の省文。同声の字に攀・騫などの形声

謙 17 (謙)17 つつしむ・ゆずるケン

称し、君子の道の窮極するところとする。もと廉と て踰すべからず。君子の終なり」と、盈と謙とを対 謙卦〕に「天道は盈を缺きて謙を益し、地道は盈を譲なり」という。佐秦の月事伊に死とすり、 リ」という。 に「敬むなり」とし、「玉篇」に「遜に「敬むなり」とし、「玉篇」に「遜形声 声符は兼(兼)。「説文」三上

も声義の関係がある字であろう

あしなえ・くるしむ・とどまるケン

り、直言を蹇諤という。蹇は蹇吃・蹇歩を意味する蹇卦〕六二に「王臣茂々、躬の故に匪ず」の句がある。[易、整計] に「思ひ譽産して釋けず」の句がある。[易、整計] に「思ひ譽産して釋けず」の句がある。[易、意語] に「思ひ譽産して釋けず」の句がある。[易、意思] に「思ひ譽産して釋けず」の句がある。[易、意思] に「思ひ譽産して釋けず」の句がある。[易、意思] に「という。[楚辞、九章、意思] に「という。[楚辞、九章、意思] に「思いるが、また心順・蹇様(みだれる)などの意となるが、また心順・蹇様 の意がある。蹇はあしなえ。引伸して蹇難・不る)の意がある。蹇はあしなえ。引伸して蹇難・不 字であるが、世故に拙なるものをもたとえていう。 寒・騫などの字があり、寒曲(まが形声 声符は搴の省文。同声の字に

鍵 くさび・かぎ

車輪の軸端をとめるもの。錠前の意に用いるのは健た「一に曰く、車靀なり」とあって、くさびをいう。鼎の両耳に横木を通して、鼎をあげる木をいう。ま かなけん。けんやく とえていう。 を関鍵・鍵鑰といい、ものの最も重要なところをた 「鉉なり」というのは鼎局、すなわちだれ 声 声符は建。〔説文〕一四上に

18 かいこのまゆ

葉の上の蚕が、繭を結んでいる形をあらわす。〔説 文〕「三上に「蠶衣なり」とし、黹の省に従う字と 上に糸と虫とを加えた形。 桑の葉の形と、 その 桑

> なるものを下し、蠶を蠶室に入れしめ、種を奉じてた素養(礼服)し、三宮の夫人と世婦(女官)の吉介素養(礼服)し、三宮の夫人と世婦(女官)の吉介素を書。たまた、たまた、夜明け)の朝に及び、君、皮れを外閉す。大昕(夜明け)の朝に及び、君、皮れを外閉す。大昕(夜明け)の朝に及び、君、皮いなきない。川に近くして「古は天子諸侯、必ず公桑蠶室あり。川に近くして「古は天子諸侯、必ず公桑蠶室あり。川に近くして れており、 うとする。 室の儀礼が川の近くの織殿で潔斎して行なわれてうちにも、蚕桑のことが詳しくしるされている。一 を、夫人が自ら染織して黼黻文章(礼服の文様)と川に浴し、公桑に桑つむ」。このようにしてえた繭 蚕神オシラ信仰にもまた中国古俗の残映がある。 ることは、わが国の古俗とも一致するところがあり 敬の至りなり」という。[呂氏春秋]の月令記事の に奉仕する王后世婦のことが詳しくしるされている。 ぜられ、〔礼記、祭義〕に、神衣・祭衣を作ること するものは形声の字。養蚕のことは古くから行なわ それが字の初文であろう。〔説文〕に重文として録 その桑葉の上に繭をつづる蚕の形をしるす字があり、 するが、「六書故」に引く「唐本説文」には常に従するが、「六書故」に引く「唐本説文」には常に従 し、「服旣に成る。君、服して以て先王先公を祀る。 しかし字の全体は桑葉の形で、卜文には、 特に神衣を作る神事的な儀礼として重ん

酮18 【話】23 あきらか・あらわれる・あらわす

TO THE OWN OFFI

顯の字と爲す」とみえて、顕の初文ともされる字で 〔説文〕七上に「日中に絲を視るに從ふ。古文以て会意 旧字は顯に作り、縁と頁とに従う。縁は

て繭と爲す」など数義を列するが、すでに暴・顕のり」とし、「或いは曰く、衆口の完なり」「或いは以文〕七上に暴を「衆くして、微しが(妙)なるものなるが、これは暴を頭飾と解するものであろう。〔説るが、これは暴を頭飾と解するものであろう。〔説 語があるのは、この親字の用法である。頁と見も神 が近い。〔詩、大雅、仮楽〕に「顯々たる今德」の見の字は、その扁を尹と絲との形に作り、顕と形 皇考」のようにいう。〔也設〕の「親々たる受命」 「実験」「天子の親命」、「戦季子白盤」「住父、孔(史頌設)「天子の親命」、「戦季子白盤」「住父、北はに親孝す」、「大盂鼎」「天子明哲にして神に親孝す」、「以答。」 ない。字はまた関に作るものがあり、〔麦尊〕「井侯的に用いる語法は金文にみえず、古いものとはいえ 「顯かならずと日ふこと無からんや」のように反語 「丕いに顯か」の字をみな顕に作り、「大盂鼎」「丕ら、顕の世界に顕ち顕れることを顕という。金文にら、顕の世界に顕ち顕れることを顕という。金文に をつけ、これを拝して神霊を招くので、縁は神降し だ親かにして光あり、、「井人安鐘」「親淑なる文祖。 きょう り」のように国名につけて述語に用い、また〔抑〕 顋なる文王」のようにいう。人やその徳に冠して用 に暴の字に作る。これを拝して、神霊が幽の世界か の呪儀に飾るもの、顕はその呪儀を行なうことをい 部分は珠玉の形。その下に白香のように糸飾り二系 **濕の字形を〔説文〕は日に従うものとするが、日の** あろう。〔説文〕カ上に顕を「頭の明飾なり」とす に対する姿であるから、顕と親とは声義の近い字で いる丕顕を、〔詩、大雅、文王〕「有周丕いに顯かな 〔書、多士〕「民祗を顯かにす」 それに対して礼拝を示す頁を加えた字である を、「魏石経」

初形初義について、正確な知識を失っていたのである。また金文にみえる「不園」の語は、[詩]にある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌く」の語がある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌く」の語がある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌く」の語がある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌く」の語がある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌く」の語がある。のち頭米に「顯を微にして幽を闌りして、正確な知識を失っていたのであの意に用いて、顕要・顕功・顕貴・顕名のように用いる。また人を表彰することを顕彰という。

験 18 【験】23 しるし・ためす

18 ケン おうつくしい

で、「その人美にして且つ。を美しく捲きあげた形のをいう。〔詩、斉風、盧令〕は狩人をほめる詩で、「その人美にして且つ。繁はし」と歌う。〔礼記、で、「その人美にして且つ。繁はし」と歌う。〔礼記、平居雑記、下〕「燕するときは則ち繋首す」とは、平居雑記、下〕「燕するときは則ち繋首す」とは、平居ないとない。

第20 かける・とおい

形声 声符は縣(県)。縣は県(首の倒の形)を がには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 かには、庾信の〔試懐に擬するの詩〕「造かに塞北 がには、庾信の〔試験に擬するの詩〕「造かに塞北 がには、庾信の〔試験に擬するの詩〕「造かに塞北 がには、庾信の〔試験に擬するの詩〕「造かに塞北 がには、庾信の〔試験に擬するの詩〕「造かに塞北 の雲を看て 懸かに關山の雪を想ふ」のように、懸 想・懸思の意に用いる。わが国では、人に思いをか 想・懸思の意に用いる。わが国では、人に思いをか 想・懸思の意に用いる。わが国では、人に思いをか

震 20 かける・そこなう

記 21 とが・つみ・せめる

形声 声符は遺(遺)。〔説文] 三上連手 おう 大保克く敬みて書亡し」に多い、罪科を問責する意とする。〔戦国策、東周策〕に「太下これを遭めて曰く、周の祭地、崇を爲す」とみえる。〔詩、小雅、小明〕「遺歸ることを懷はざらんや この識がを畏る」とは、征役の苦を歌い、軍律の厳しさを畏れることをいう。遺はもと軍を派遣することをいう語で、譴責・謹怒の語も、もとその関係の用語であるように思われる。金文に字を書・遣のまま謹の終に用いる例もあり、「大保設」「王、征命を大保に降す。大保克く敬みて書亡し」、「適段」「王、郷降す。大保克く敬みて書亡し」、「適段」「王、郷降す。大保克く敬みて書亡し」にはみな「謹し」の意である。ト文に書に祝壽の器の田をそえているの形があり、「大保設」の字形もその形である。書字形があり、「大保設」の字形もその形である。書ながあり、「大保設」の字形もその形である。書は軍が奉ずる祭肉の形。それに祝壽を加えるのは、敵に対して譴責を加えるための儀礼であろう。

配22 かつお・うなぎ

を引いて「加豆乎」とよんでいる。かつおの意に用いる。「倭名類聚抄」に〔漢語抄〕を発表されたい。となるない、わが国では原義はうなぎ、大うなぎの意であるが、わが国では形声 声符は堅。〔爾雅、釈魚〕によると、字の形声

23 ケン

譴

鰹 殲 蠲 鹼

ゲン元

その征役のことをしるしている。

強族に作り、「党甲盤」「號季子白盤」「不要設」に、第一時度、「党甲盤」「號季子白盤」「不要設」に、の強族で、「成北の地よりしばしば周に来寇した。字の強族で、「成北の地よりしばしば周に来寇した。字

20 きよめる・きょせい・あきらか

「周礼、蜡氏」「州里をして不蠲を除かしむ」はみな「左伝」襄九年「明神は要盟を蠲しとせず」、またばを眩と爲す」とは、清めた犠牲を神饌とすること。 知って、 とをいう字である。 り」というように、牡器の蜀を敲く形で、 まっぱなど清めを意味する語となり、蠲疑・蠲邪きっぱながら。すなわち蠲去がその本義、蠲除・蠲いることをいう。すなわち蠲去がその本義、蠲除・蠲いることをいう。蠲は益と蜀とに従うて、その牡器を去牡獣をいう。蠲は益と蜀とに従うて、その牡器を去 絜清の義をとる。この字は益・蜀の字形と原義とを #描造的な理解を誤っている。 [詩、小雅、天保] 「吉鬼の名にあてているが、字を益声とするなど、字の虫の名にあてているが、字を益声とするなど、字の 「説文」一三上に「馬蠲なり」と「げじげじ」というように貢賦などを免除する意に用いることもある。 のように疑惑を去ること、また蠲脈・蠲省・蠲賦ののように疑惑を去ること、また蠲脈・蠲省・蠲賦の 蜀は牡器のある獣の象、獨(独)とは、牝をえない (属)の従うところ。屬は尾と蜀、すなわち獣の牝 醪 と牡とが相連なる字であることから知られるように はじめてその会意の義を理解することがで 縊の初文で、糸で強く縊る意。蜀は屬 会意 益(益)と蜀とに従う。釜は **斀去のこ**

上図 24 しおけ・あく・せっけん

のようにしたもので、「衣を謳ふべし」という。「鰡なり」という。また灰をこしたあくをいい、そ「鰡なり」という。また灰をこしたあくをいい、それより石鹼の意となった。〔正字通〕に「石鹼」のれより石鹼の意となった。〔正字通〕に「石鹼」のれまり石鹼の意となった。〔正字通〕に「石鹼」のようにしたもので、「衣を謳ふべし」という。

ゲ

元 4 がしら・もと・はじめ

南京 新工

全身形で、首をあらわし、元首という。「説文」一全身形で、首をあらわし、元首という。「説文」一上に「始なり」と訓し、「段注」に字を元声とするが、兀とは首を失ったものをいう。学は譬をおとした剔髪者のことである。「左伝」僖三十三年「先軫、狄の師(軍)に入りて死す。狄人、その元を歸せるに、面、生けるが如し」、また袁十一年「國子の元に、面、生けるが如し」、また袁十一年「國子の元を歸す」、「孟子、滕文公、下」「勇士はその元を要を歸す」、「孟子、滕文公、下」「勇士はその元を要を歸す」、「孟子、滕文公、下」「勇士はその元を要を記す」、「公本」といい、虜囚を訊問する

ので、 の長なり」のようにいうのは、その転義。天地の元語に用いたものであろう。〔易、文言〕に「元は善語に用いたものであろう。〔易、文言〕に「元は善大・正・嫡の義があり、その語義からみて、祭祀用 用・元日・元祀のように、元を冠していう語が多い。 玄と通じ、その字義と渾融したところがある。**^^ 気、太元の説などは、老荘や易の本体論に用いたも には元徳・元明の徳・元武・元子・元孫・元器・元 大宗というのに近く、最も重要な神霊をいう。金文 ときには窓という。卜文に元示の名があり、大示・ 思想的な意味が附加されている。字は原・***

女 4 まぼろし・まどわす

Q 8) 8) 8)

[書、無逸]「民、胥講張して幻を爲すこと惑る無る。[説文]四下に「相許りて惑はすなり」とあり、あいい。 その倒文である幻も、また機杼の形でああるから、その倒文である幻も、また機杼の形であ 金文にこのの字があり、「文源」に「のは變幻窮り無字義の由るところが知られず、議論の多い字である。 と思われる。予の従うところの字には舒緩(ゆるやない。幻は玄と音が同じく、古くは通用していたか 初文とするが、金文ではその字を見ずと連文、ぬいきに象る。環の相連なる形の如し」とその字を幻の し」とみえ、早くから用いられている字であるが、 とりを示す黼の初文で、〇市とは黼黻の字に外なら あるから、予に対して幻・玄という関係があり、幻 か)の意があり、これに対して弦・絃は対待の語で 予の倒文。予は機杼(ひ)を意味する字で

> とみえる。のち西方から多くの幻術が伝えられ、胡 話を伝える〔列子、周穆王〕に「幻化の生死に異な 西域伝〕に幻人を眩人に作る。古くは周の櫻王の説思。というに知るとなった。というというというで、そこから惑乱の義となる。(漢書)となすわけで、そこから惑乱の義となる。 杼を倒にしてその糸を引けば、経緯が乱れて幻惑はあるいは眩(めくらむ)の義をもつ字であろう。 人の幻術譚は、唐以後には多く伝えられている。 らざるを知りて、始めてともに幻を學ぶべきなり」

女 5 くろ・ふかい・しずか

þ 0

天地の存在態をいう語となる。色彩語にはおおむね 「何の草か玄まざる」「何の草か黃ばまざる」のよう のとなった。玄黄はもと〔詩、小雅、何草不黄〕にその色彩感覚よりも、むしろ理念的な意味をもつも の度を加え、黝黒よりして玄となる。その複雑な色ろうといわれるが、染色は赤黄よりして次第に紅赤 入を纁、五入を緅、 つけない。「周礼、鍾氏」に薫染の法をしるし、三衣・玄衮衣の字は重文の字形に近く、上に結びめをものでなく、ただ糸たばの形にすぎない。金文の玄ものでなく、ただ糸たばの形にすぎない。金文の玄 るものを玄と爲す。幽に象り、入はこれを覆ふな〔説文〕四下に「幽遠なり」とし、「黑にして赤色あ に草の枯れる色であったが、のち天地玄黄のように 相よりして幽深の意となり、幽遠・幽玄の意となり、 り」と字形を説くが、卜文・金文の字形は入に従う 糸たばを拗じた形。黒く染めた糸をいう。 七入を緇という。玄は六入であ

会意 このような観念化の傾向がある。

삫 いう・ことば・ちかいゲン

古く中国に言霊的な観念があったことを示すものと 語には散、すなわち敵る意がある。言・語がこのよ言・語は双声の語。ことばによる攻撃と防禦を示す。言が辛に従うのは、その墨刑に服する意を示す。 をするのであろう。諺は言と同声で、ことわざ。こ 行なわれているので、地霊をいいはやして、 「その信ならざるものは、墨刑に服す」とみえる。 りのことばをいう。〔周礼、司盟〕に「獄訟あるも撃的なことばであり、これに対して語は防禦的な祈 「直言を言といひ、論難を語といふ」とし、字を予覧き、神に盟警することばをいう。〔説文〕三上に とだまのはたらきをいう。言を神にささげ、その器 に語々す」という句があり、それは都定めのときに みられる。〔詩、大雅、公劉〕に「時に言々し うにことばによる呪的行為を意味する字であるのは、 のは、則ちこれをして盟詛せしむ」とあり、また に辛に従う。言は自己詛盟して他に呪詛を加える攻 声に従うものとするが、卜文・金文の字形は明らか で、日をサイの音でよむ。言はその器の前に辛をお の盟誓の書を入れる器の形。その書を載書というの 違約のときにはその罰を受けることを示す。口はそ 針の形で、盟誓のときには自己詛盟を行ない、 辛と口(D)とに従う。辛は入墨に用いる 時

先秦の資料にはその字形を証するものはない。また。(釈 例)に言は心の声であると解しているが、いる。〔釈 例〕に言は心の声であると解しているが、 形に作り、「玉篇」や「汗簡」にもその形を録しての各条にあげる古文の字形は、言を心と口とに従う の言部に属する字のうち、詩・謀・訊・誥・訟など はその「音なひ」によって示される。〔説文〕三上 中に神意の反応があらわれることを音という。神意

弦 **つる・ゆづる** ゲン・ケン

うに用いる。伯牙の死後、知己を失った鍾子期が、べている。琴瑟の絃と声義が通じ、弦歌・弦管のよ居小学述林〕に、玄声の字に急の義が多いことを述 絶弦という。 その弦を自ら断った故事があり、知己の死を断弦・ た象形とするが、玄声とみてよい。楊樹達の〔積徴・「弓弦なり」とし、**をゆはずを引い 形声 声符は玄。〔説文〕「二下に

彦。〔彦〕。 ひこ・すぐれた男ゲン

上に「美士、文あり。人の言ふところなり」とは、 わが国で「ひこ」というものにあたる。〔説文〕 九 といい、元服のときの儀礼を示す。彦とは元服者、 わば生れかえを行なう。その儀礼を終えたものを彦 齢に達すると、その加入儀礼として文身を加え、い 旧字は彦、 文と厂と彡とに従う。文は文身、

> 代に文身の俗があったことは疑いない。 えた面を顔という。生子・成人・死喪のときに、みや墨で一時的に描くものである。成人式の文身を加や な文身を加える字があることからいえば、中国の古 死喪のとき加えるものは文で、胸に加える。みな朱 ける印が犬に似ているので「犬くそ」などという。 わが国にもその俗があり、「アヤツコ」といい、つ 産(産)の字は、生子の頂ことず:『・・・・とれてことである。文身は生れた直後にも行ない、それでことである。文身は生れた直後にも行ない、それでことである。 彦と言と畳韻をもって訓するものであるが、無用の (産)の字は、生子の額に文身を加える形の字。

> > 原 10 「源] 13 「原原] 30 みなもと・はら

雚のように眼形を誇張して示す字形のなかにも、***

邪眼を配したとみられる形のもの数種がある。また

界・極限などの意となる。殷器の図象(挿図)に、

このような呪禁に関するものがあろう。

限。 かぎり・へだてる・さかいゲン

象形

わす。源の初文。平原の原とはもと異なる字である。

厂は巌。巌下に泉をかき、水源の意をあられて

閉 PER APER

金文の〔晉鼎〕にその字がみえる。そこを限閾とし ることを示す。すなわちそこを限界とする意である。 怒目相視る意とするが、限の字形から知られるよう 会意 て、うちに立ち入る に、神梯の前で辟邪の邪眼に会い、辟易して立ち去 ほ目相匕するがごとく、相下らざるなり」といい、 見の字をあげ、「很るなり。匕目に從ふ。匕目はな**** いわゆる邪眼で、辟邪の意をもつ。ヒは人の却く形神梯の形。その聖所を守るために、上に目を掲げる。 で、自にそむいてかえる意である。〔説文〕ハ上にで、自にそむいてかえる意である。〔説文〕ハ上に

定・限度・制限・限 示す。それより限 を禁ずる呪禁の法を D C 289

> 唱 とむらう・なぐさめるゲン

その形声字として源が作られた。

原に用いるが、その本字は遼、狩猟を行なうところ 因・原由、また推原・遡原の意となる。のち原野の水源の意よりして原本・原始・原委(本末)・原

の意である。原を原野の字に用いるに及んで、また

とをいう。弔生の原義は、おそらく魂振りの儀礼で りて公を唁はしむ」とあり、他国より赴いて弔うこ である。〔春秋〕昭二十九年「齊侯、高・張をして來所作的な表現が多くて、舞劇らしい感じのある詩篇 に攻められて、その国都を失ったとき、許穆夫人が、 載馳」に「歸りて衞侯を唁はん」とあり、、衛が狄人というのに対して、弔生を唁という。〔詩、鄘風、というのに対して、常生を喧という。〔詩、鄘風、というのに対して徐い。 がんしょう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう しゅうしゅう 配 その兄を弔うことを歌った詩とされるものであるが を弔ふなり」とあり、亡国を弔うて、 形声 声符は言。〔説文〕ニ上に「生

9 200

彦[彦]

限

原[源][驫]

二六九

と区別して唁という。〔玉篇〕に重文として嘘をあこれは生者のための魂振りである。これを弔死の弔 呪能のある語であるから、ことわざという。 があり、帝が巫陽に命じて下招することを歌うが、あろう。〔楚辞、招魂〕は、下界に魂魄離散せる人 字はおそらく諺と関係があろう。諺とは

眩10 くらむ・くらい・まばゆいゲン

問〕に「妖夫曳衒す」の句があり、曳衒は呪詛をな信」に「見そ藥を飲みて毒ある、東齊にてはこれを言〕に「見そ藥を飲みて毒ある、東齊にてはこれを原眩と謂ふ」とあり、目まいする意。〔漢書、揚維原眩と謂ふ」とあり、「方 す法で人を惑わす意。眩・幻・衒(衞)には、声義 に通ずるところがある。 らぬ状態をいうとする。〔孟子、滕文公、上〕に に常主なきなり」とあり、視点の定ま 形声 声符は玄。〔説文〕四上に「目

現 あらわれる

教語である。〔抱朴子、至理〕「或いは形現れて往來 現在・現相・現識・現象・現出・現身など、みな仏 「現にも夢にも」という万葉歌がある。現在は古く 街 11 「街」 13 だらう・うる は見在としるし、「日本国見在書目」のようにいう。 すーも、 仏教語を用いたものであろう。わが国では 声符は見。〔説文〕にこの字なく、現世・

べる 周幽(幽王)誰をか誅めて、焉ち夫の褒姒をる。〔楚辞、天間〕に「妖夫鬼衒す、何をか市に號鬻す」とある衒鬻と同じく、自ら売りこむことであ鬻す」とある衒鬻と同じく、自ら売りこむことである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔説文〕のいう衒売は、〔漢書、東方朔のである。〔第5 減 衒も玄がもと糸たばの形であり、玄と幻と相通ずるの意。衞はおそらく呪語を用いて呪詛をなすもの、 ることを衒媚という。媚は女巫、呪祝を行なう巫女うにエクスタシーの状態となって、奇怪な行為をす 得たる」とは、褒姒が竜の精水の化身で、この女の ****・御のように行の間に字を加えている形のもの字は衙にしても衒にしても会意。行路に従う字には (杵)に従う形を用いるが、午もまた呪器である。 やはりその呪飾を用いたものであろう。また午 確かめがたいことであるが、術は祟をなす呪獣を用 とをいうものであろう。古代の呪儀の方法は容易に 字であるから、やはり呪儀をもって人を幻惑するこ って、そのことを叫ばせるというのである。そのよ の「妖夫曳衒」の語がある。神がこの狂夫に乗り移 出生によって周が滅亡するという説話のうちに、こ が多く、それらは概ね道路における呪儀に関するも の字を録する。この衒の字が普通に用いられている。 に「行き行き且つ賣るなり」とあり、重文として衒 いる方法であり、御の中央は古く玄形に従う字で、 ・御のように行の間に字を加えている形のもの へる・はぶく・そこなうゲン・カン

用によってその用法の異なる字となったもので、華 とその形声字である花の関係と似たところがある。 と源とを区別している。もと同一の字であるが、慣 源を水源、源泉のように用いる例も漢碑にみえ、原 字にあてたものであろう。漢碑には「平原溼陰」の ような語がみえ、原をその用義に用いている。また く肥えている)」のような例はあるが、のちにその

愿14 つつしむ・すなおゲン

を焼いたのであろう。〔荀子、正論〕「上端誠ならば妾ありて、愿なり」とあり、古人もこういう女に手 則ち下愿懲なり」とは、 直でも底心の強いもので、〔国語、楚語、上〕「吾に 徳の賊なり」と、孔子はこれを悪んでいる。外面謹 あるものを郷愿といい、「論語、陽貨」に「郷愿は のように、もと善良の意。洗練されない田舎臭さの あり、〔左伝〕襄三十一年「愿なり。吾これを愛す」形声 一声符は原。〔説文〕一〇下に「謹むなり」と いわゆる郷愿の徒である。

16 ことわざ・さとことばゲン

いうのが語義にあたる。「ことわざ」の語が示すよ はない。〔国語、越語、注〕に「俗の善語なり」と の訓であるが、それは単なる伝言を意味するもので それは呪能のある語であり、もと神霊によび に「傳言なり」とあり、伝と諺と畳韻 形声 声符は彦(彦)。〔説文〕三上

> は、韻語が適当なものとされていたからである。 れており、概ね韻語をなしている。呪能を託するに ことをいう。中国の古諺の類は〔古謡諺〕に集録さ 内宰、疏〕に「媚道とは妖邪巫蠱、以て自ら숢媚すなぎ、** はいまない。 語的な表現で、人を衒惑するものをいう。[周礼、 る。衒はまた衙に作り、道路に当って呪言を誦する 〔周礼、土訓〕〔誦訓〕は、もとそのような呪語を伝いる。 るをいふ」とみえるが、諺はこの衙と同系の語であ なり」とし、「前代の故訓」であるという。もと呪 その類のものであろう。〔段注〕に、「傳言とは古語 承していたもので、〔説文〕にいう「傳言」とは、 の初義において、そのような呪語を意味しており、 きかけ、呼びかけるときのことばであった。諺はそ 」とよんでいるが、それらはもと地霊にはたら

厳17【嚴】20 [厥]14 つつしむ・おごそかゲン「きびしい

A HO AAA

牖

響

1

為

係のある字ではなく、聖所にあって幽 酌(においの字があり、巉巌の義であるとするが、飯は山に関であることをいう字である。〔説文〕广部九下に厳であることをいう字である。〔説文〕广 上に祝禱の器であるDを並べた形。その祝禱の厳重 形声 声符は厳。厰は嚴(厳)の初文。嚴は駁の

> 生じたものである。 はもと一字、慣用によってそれぞれの用義に区分を 追む」は、「嚴みて」というのと同じ。敢・廠・厳拝を「敢て」という。〔令殷〕「敢て明公の賞を父丁にを「敢て」という。〔令殷〕「敢て明公の賞を父丁に ることがある。霝が祝禱三を列しているのと同じ。 嚴の字は、ときに上部に祝禱の器式を三つ列してい 敢に厳恭の意があり、 逸〕「嚴恭寅畏」も、これと近い語である。金文の このである。それで神霊につかえる心意を厳といい、〔秦とある。それで神霊につかえる心意を厳といい、〔秦とある。それで神霊につかえる心意を厳といい、〔秦とある。それで神霊につかえる心意を厳といい、〔秦と り」など、上帝のところにある儀容の厳恭なる意でに在り」、〔猶 鐘〕「先王それ嚴として帝の左右に在 り」という。〔宗周鐘〕に「先王それ嚴として上 「鱧々たる成唐(湯)、」、(厳)として帝所に在るあ形であるので、敢が厳の初文であり、「叔夷鐘」に形であるので、敢が厳の初文であり、「叔夷鐘」にどの、その聖所のあるところ。もともと敢が鬯酌のどの、その聖所のあるところ。もともと敢が鬯酌の 酒をかける)し、清める儀礼をいう。ゲポ山すそな 謹んでそのことを行なうこと

黿 あおうみがめ

なかった子家というものが、のち霊公を弑殺すると珍重されたようである。その饗宴に与ることのでき もので、 F あった。〔左伝〕宣四年に、「楚の人、黿を鄭の靈公令〕に「龜を葺め、黿を取る」と神饌に供する礼が に獻ず」とみえ、この南方産のものは、異味として おが国でいう正覚坊である。[礼記、月わが国でいう正覚坊である。[礼記、月たをとう。 鼈に似て大なる「大鼈なり」とあり、鼈に似て大なる 形声 声符は元。〔説文〕一三下に と言とに従う。〔説文〕ニ下 正字は衙に作り、行

源 上に戉(鉞、まさかり)を加えて、その祝蘚を緘封減損・減少の意に用いる。咸は祝禱の器であるごのンの音でよむ。〔説文〕二上に「損なり」とあって、上に「損なり」とあって、が高いたが、いまはゲ えてこれを黷すことを意味した。金文の〔者滅 鐘〕これをけがすこと、沓は祝禱の器である曰に水を加これをけがすこと、沓は祝禱の器である曰に水を加 とそのような呪儀であったことを示すものであろう の減に、下に皿形を加えた字形があるのは、減がも ことは、しばしばその神聖をけがすために行なわれ る行為を意味するものであろう。水を聖器に加える とはたとえばそれに水を加えて、その機能を減殺す た。たとえば盗(盗)は血盟の際の血に水を加えて し、祝禱の機能を守ることを示す字であるから、減 みないもと

用いるものに〔詩、大雅、縣〕「周原膴々たり(よに「地の廣平なるもの」とみえる。原を原野の意に「平原を遠といふ」、また〔周礼、遠師〕の〔鄭注〕で、その儀礼を示す字である。〔爾雅、釈地〕にで、その儀礼を示す字である。〔爾雅、釈地〕に された。原野の原の本字は遠、狩猟を行なうところ の意に用いる。のちその字が草原・原野の字に誤用 水源をあらわす字である。それで原始・原由・原因

諺

厳[嚴][厥]

Personnel of the Control of the Cont

神霊のものと考えられていたようである。に「江中に或いは闇さー・二丈のものあり」とみえ、に「江中に或いは闇さー・二丈のものあり」とみえ、に「白電に乗じて文魚を逐ふ」とあり、[本草図経]ことを、「電鼎の變」という。[楚辞、九歌、河伯〕ことを、「電鼎の變」という。[楚辞、九歌、河伯〕いう異変が起った。それで飲食の怨みで異変が起るいう異変が起った。それで飲食の怨みで異変が起る

121 こしき

常気を対する。

上部に穿があっ という。鷹がその初文。下部は鬲。そのり、蒸し器をいう。鷹がその初文。下部は鬲。その形声 声符は鬳。〔説文〕二下に「甑なり」とあ

通して上に達すの類を入れる器をの類を入れる器をの類が、穿を



(献)に作るものが多い。獻は仮借字である。しるしている。卜文に象形の字があり、金文には獻る。殷周の遺器も多く、[周礼、陶人] にその制をる。器に上下を分つものと、一体をなすものとがある。器に上下を分つものと、一体をなすものとがあ

蹇四「原」10 はら

續原 愛海養

形声 声符は糞。辵に従う字であるから、袰声と

ち鳥獣を捕るのに用いる畢網の形である。[周礼、氏盤]の字は二田に従うており、田は畋畢、すなわ氏盤]の字は二田に従うでおり、田は畋畢、すなわ石」の字はその形に従い、金文にも数見する。[散] になった。 ではその形に従い、金文にも数見する。 「数で、「石鼓文、田車石」「作原 学形からいえば、それは猟場を意味する字のようで という。 は地の廣平なるもの」とあり、邃隰(のはらとし「平原を遠といふ」、また「周礼・遠師、注〕に「遠理由を不明とするものである。〔爾雅、釈地〕に 〔説文〕 二下は「廣平の野なり。人の登る所なり」 とみられる。金文の「魯邃鏡」の字には、その儀でいる文は春の従うところで、神霊の降下を示す形でいる文は春の従うところで、神霊の降下を示す形でいる文は春の従うところで、神霊の降下を示す形な開墾・開拓を行なうときに、犠牲を供して地霊をな開墾・開拓を行なうときに、犠牲を供して地霊を り 田を徹りて糧と爲す」とは、その一部を開墾すめる悲惨をいう。〔大雅、公劉〕に「その隰遷を度める悲惨をいう。〔大雅、公劉〕に「その隰遷を度なる。 「遠隰に裒まるも「兄弟求む」の句がある。遠隰になど毎も及ぶ靡し」と歌われ、〔小雅、常株〕にふと毎も及ぶ靡し」と歌われ、〔小雅、常校〕に ものは華かの遠隰においてす、駄々たる征夫、懐ことが多く、〔詩、小雅、皇々者華〕に「皇々たるは境域外の間地であるので、戦争のとき戦場となる 邑すべきものを辨ず」とあり、狩猟地をいう。平生 遠師〕に「その丘陵・墳衍・遠隔の名物を以て、封 すべきであるが、その字は〔説文〕にもみえない。 ることであろう。遠の字形から考えると、そのよう っ地)と相対して用いるので、高平の地とされるが いう。字を要素的に分解した上で、 字形については「辵・备・彔に從ふ。 その会意となる 常様」に 闕と

原はもと声義ともに異なる字である。神の降下を求める意となる。のち原を借用するが、地として、畢を加えた犠牲を供えて祀り、地霊たるる。これによると、字は狩猟地として、また開墾の礼のときに祝禱を用い、下部に祝禱のごをそえていれのときに祝禱を用い、下部に祝禱のごをそえていれのときに祝禱を用い、下部に祝禱のご

儼 22 おごそかなさま・つつしむ

温いのでは

コ

一 3 おさめる・おのれ・つちのと

う。〔詩、小雅、節南山〕に「式て夷ぎ式て己む」定める工作の器や、糸の捲取りに用いたものであろ定める工作の器や、糸の捲取りに用いたものであろます。 己形の矩(定規)に似た器で、角度などを象形 己形の矩(定規)に似た器で、角度などを

るものとみられる。 のものとみられる。 のもれ、戊己はともに工作の器で、曲と方と相対するまた仮借。十干は二字を一組とする五組の編成とに用いるが、それは仮借。一人称代名詞に用いるのとみられる。

及 4 ふくよか・うる

戸4「戶」4と・かどぐち・いえ

尸原 明

⇒形 一扇の戸をいう。両扉を門という。〔説文〕

こ上に「護なり。半門を戸といふ」とあり、戸・こ上に「護なり。半門を戸といい、上戸と下を吹める鷹の扉である。門戸は内外を別つとこなどを収める鷹の扉である。門戸は内外を別つとこなどを収める鷹の扉である。門戸は内外を別つとこなどを収める鷹の扉である。門戸は内外を別つとこなで、下辞に三戸・三門を神として祀る例がある。た家門を門戸といい、「戸を出でずして天下を知る」の語がある。「説文」重を出でずして天下を知る」の語がある。「説文」重を出でずして天下を知る」の語がある。「説文」重を出でずして天下を知る」の語がある。「記述は、戸をもって数え、戸部は民政を掌り、国家の財政戸をもって数え、戸部は民政を掌り、国家の財政戸をもって数え、戸部は民政を掌り、国家の財政戸をもって数え、戸部は民政を掌り、国家の財政戸をもって数え、戸部は民政を掌り、国家の財政を開かる。

平 5 よぶ・や・か

デルイツ

。 デ ステ ボテ

が原義であった。のち廷礼のときに人を使役する意に用い、「豆開設」「王、内史を乎び、豆閉に册いたものとから、神意によって行動すること、命令的な動詞につづけて用い、もと神事に用いたものとから、神意によって行動すること、命令的な動詞につづけて用い、もと神事に用いたものに愛す」」その他感動詞としては「于嗟乎」「於乎」などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものに至などがみえるが、「書」では戦国期成立のものとみに愛す)」その他感動詞としては「于嗟乎」「於乎」などがみえるが、「書」では戦国期成立のものとみに愛す)」といる。

古っ いにしえ・ふるい

古 图 "中」 也 电

これによって十分に期待することができる。もし祝い、祝禱の器の形で、中に祝禱の詞を収める。このだ、祝禱の効果を維持するためには、これを安全に護ることが必要であり、それで器上に聖器としての干をことが必要であり、それで器上に聖器としての干をことが必要であるときは、さい、祝禱の器の形で、中に祝禱の詞を収める。このは、祝禱の器の形で、中に祝禱の詞を収める。このは、祝禱の器の形で、中に祝禱の詞を収める。このは、祝禱の器の形で、中に祝禱の詞を収める。このに、祝禱の器の書

「師詢設」「古に先王に承くるなし」のように用いる。 というでは古の字を故の意に用い、「大盂雅」に「古に天、では古の字を故の意に用い、「大盂雅」に「古に天、では古の字を故の意に用い、「大盂雅」に「古に天、 だった。 〔説文〕三上に「故なり」と訓し、字を「十口に從 [史牆盤]に「日古文王(古に曰う文王)」の語が めるは、これ古山るか」とトするものがあり、古と揮することができた。卜辞に「貞ふ。王の、舌を疾揮することができた。卜辞に「貞ふ。王の、舌を失 文の字形は、廟中における儀礼の意を加えたもので あり、古事・典故の伝承者というほどの意であろう。 の意よりして、故事・典故の意となる。近年出土の 範として遵用されるものであり、ゆえに往古・先古 についてなされている祝禱は、先例として典故・規 古は固閉されている祝禱の意であるが、重要な事案 うにこれに刺割が加えられると、その呪能は舎てら 禱の器に対して、たとえば舎(舎)・害(害)のよ は、祝禱による呪詛などを意味するものであろう。 ように聖器で護られることによって、その呪能を発 その廷前に祝禱をおく形とみられるが、祝禱はこの ので、全くの俗説である。また重文としてあげる古 は十人がそれぞれ口をもって相伝承すると解するも ふ」と解し「前言を識るものなり」とする。〔説文〕 「鉞で護られる字は吉で、固く詰め護る意である。****。、害されるのである。これに反して、聖器として、

今 (大) (クワ)

上 6 虎頭・虎文

の意であろう。

題であった。金文こま文古・先古君りためこ、答覧族霊を異にするものの間における、古代宗教的な間問題は上古以来のことであるが、それは主として氏問題は上古以来のことであるが、それは主として氏

110

形声 声符は古。〔説文〕にみえず、穴・緋期に至れを沽らんかな」のように、沽を用いることがある。 れを沽らんかな」のように、沽を用い、估客・估価・れを沽らんかな」のように、沽を用い、估客・估価・れを沽らんかな」のように、沽を用いることに用い、估客・估価・れを沽らんかな」のように、沽を用いることがある。

列 8 さく・えぐる・ころす

形声 声符は夸。〔説文〕四下に「判金が、山木」に「君、形を刳り皮を去れ」とは形もので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をもので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をもので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をもので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をもので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をもので、曲刀をもって深く刳取し、たとえば「舟をりる」のようにいう。

呼 8 よぶ・さけぶ・ああ

一丁岁季

であるとしているが、金文では呼招の字にみな乎をとし、〔段注〕にこれを呼招の意に用いるのは誤りをよぶのに用いた。〔説文〕二上に「息を外くなり」で、板上に遊舌を結び、柄で振って鳴らす。もと神で、板上に遊舌を結び、柄で振って鳴らす。もと神形声 声符は乎。**が呼の初文。乎は鳴子板の形

置 8 かたい・もとより・まことに

会意 古と口とに従う。古は祝禱の呪能を護る意であり、固はそれに外囲を加の祝禱の呪能を護る意であり、固はそれに外囲を加えて、一そう厳重にこれを固守する意を示す。ゆええて、一そう厳重にこれを固守する意を示す。ゆえに固閉・堅固の意となる。また本来の意に用い、「論語、衛固定の意となる。また本来の意に用い、「論語、衛園定の意となる。また本来の意に用い、「論語、衛園での意となる。また本来の意に用い、「論語、衛園での意となる。また本来の意に用い、「論語、衛園での意となる。」と、「必ず」という。

好 8 しゅうとめ・しばらく

神 神 時 時 時

トし、婦がこれを禦ぐ祭を行なう例が多く、婦姑のいう。卜辞に、先王の妣が新婦などに祟することをとあり、しゅうとめ。親族称謂としては、おばをもとあり、しゅうとめ。親族称謂としては、おばをも形声 声符は古。〔説文〕二三下に「夫の母なり」

「しばらく」の意に用いる。 を作ることをいうものがある。功と通用し、副詞のを作ることをいうものがある。功と通用し、副詞のを作ることをいうものがある。功と通用し、副詞のを作ることをいうものがある。 みれば主として氏問題は上古以来のことであるが、それは主として氏

える。またおそれの甚だしいことを、股戦・股栗と

いい、股份公司とは株式会社のことである。いう。股は分岐するものであるから、株式を股分という。

の臣を、股肱といい、その語は〔書、

益稷」にみ

り」とあり、胯間の肉の意とする。信頼すべき補佐かの声をとるものであろう。〔説文〕四下に「髀な

情 8 たのむ・たよる

は、頼りにされて、力を借す意である。 おりにされて、力を借す意である。 は、頼りにされて、力を借す意である。 は、頼りにされて、力を借す意である。

活8 うる・かう

神心的

形声 声符は古。[論語、子字]「養賣を求めてこ形声 声符は古。[論語、子字]「養賣を求めてこれを沽らんか」のように、売る意に用い、また社の字を用いる。酒を買うことを沽酒といい、また社の字を用いる。酒を買うことを沽酒といい、また社の字を用いることがある。酤は一宿の酒、ひとよ酒の意であるが、沽に通じて酒の売買をいう。

股。また

声であることからいえば、そのいずれ、 会意 肉と殳とに従う。羖・股が同

原南 劇 選 選

というのと同じ語源と考えられる。饕餮は虎を文様化した、左右の展開図である。ト辞に虎方と称する東南に移されている。金文の図象に虎形を用いるも東南に移されている。金文の図象に虎形を用いるも東南に移されている。金文の図象に虎形を用いるも東南に移されている。金文の図象に虎形を用いるものがあるのは、古く虎の飼養に関与した部族がいたのであろう。

孤っみなしご

固

怙沽股

形声 声符は瓜。〔説文〕一四下に が 「父無きもの」とする。〔孟子、梁京 等孤独はみな天下の窮民とされた。また尊貴の人の 自称に用い、王侯は孤・寡と称する。孤臣・孤客の とうに用いるが、また人に限らず、孤雲・孤舟のよ なうに用いるが、また人に限らず、孤雲・孤舟のよ

弧。 ゆみ・ゆみなり

形声 声符は瓜。〔説文〕一二下に 「木弓なり」とあり、木を曲げて作っ 「社體寡し」とは木性堅直にして、弧形をなす往屈 弧といふ」とあり、「考工記、弓人」の文による。 ではまた。 がままでする。 がはずいない。 でものを弧、角をゆはずに用いるものを弓という。 たものを弧、角をゆはずに用いるものを弓という。 とは木性堅直にして、弧形をなす往屈 の少ないものをいう。往体は弦をはずしているとき、 をはなまでなる。

故。 もと・ことさら・ゆえ

村 古战站

旧・故事の意は、古の字義そのままである。また金すでに古のうちに含まれているところがあり、故古に支を加えるのは、ことさらにその呪能を害しよ古に支を加えるのは、ことさらにその呪能を害しよっとする行為であるから、事故を意味し、またそのうとする行為であるから、事故を意味し、またその会意 古と支とに従う。古は祝禱の器の上に、呪会意 古とせいに従う。古は祝禱の器の上に、呪

枯りかれる・つきる

村村

好のほね・かれる

の象。辜の古字とする説もあるが、辜は辠辜、刑罰と情の生気を失ったものを、枯槁という。高も残骨に「枯るるなり」とあり、歩は残骨の象である。とあり、歩は残骨の象である。の象。辜の古字とする説も力、がは古。古に枯の意があり、

胡 9 たれにく・えびす・なんぞ

形声 声符は古。古は祝禱を収めたり」とあり、牛のあごの下に垂れた皮をいう。狼にもその肉があるとされ、〔詩、幽風、狼跋〕に「狼、その胡を跋む」とみえる。また鳥では、鵜やペリカンにあご袋がある。芝にも、柄に装着した部分にそうてふくらみのあるところがあって、胡という。北方族を胡というのは、鎮下に瘤を病むものが多いからだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らだとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らがとする説もあるが、胡の字を用いるのは音の仮らがある。笑声を胡盧のようにいうのは、擬声語である。笑声を胡盧のようにいうのは、擬声語である。笑声を胡盧のようにいうのは、擬声語である。

個 10 ひとつ

性のように用いるのは、みな新しい翻訳語である。とうに)兄童に似たり」のように用いる。個人・個にそえて、韓愈の〔盆池の詩〕「老翁、眞個(ほんれ、相耦することのない、片方だけのものをいう。は、相耦することのない、片方だけのものをいう。は、相耦することのない、片方だけのものをいう。お声 声符は固。〔玉篇〕に「偏なり」というの形声 声符は固。〔玉篇〕に「偏なり」というの

法を網罟にたとえたもので、いわゆる法網をいう。「豊富を懷はざらんや」この罪罟を畏る」とは、まとして魚網の意に用いる。〔詩、小雅、小明〕主として魚網の意に用いる。〔詩、小雅、小明〕

庫

会意

广と車とに従う。兵車を蔵す

るところ。古く車の声もあったらしく

子10 Jのい牡羊・去勢した羊

会意 羊と殳とに従う。羊を殴って秦の穆公に贖われ、五羖大夫とよばれた。 大野する意。また羯ともいい、その字を用いることが多い。もと同系の語であろう。動物の去勢をいう語に、害・曷の声をとるものが多い。 もと同系の語であろう。動物はは、大きないが、その字をは黒羊、牝を織という。差を殴って秦の穆公に贖われ、五羖大夫とよばれた。

胯 10 また・またがる

枯10

さいわい

献

市古

礼が行なわれた。

という。〔礼記、楽記〕に「車甲は釁してこれを庫によると、今の上海でも、朱字庫を朱字舎とよぶによると、今の上海でも、朱字庫を朱字舎とよぶ

に藏す」とあり、収蔵のときに犠牲の血で清める釁

人の語で、「釈名、釈車」にみえる。「六書疏証」あるのは、差型の庫の意。車を居の音でよむのは発えれては発して、文王を「差里の車に拘す」と「戦国策、趙策」に、文王を「差里の車に拘す」と

俯してくぐった話は、「胯下の辱」として知られる。跨越するときに股を開く意。韓信が悪少年の胯下をる。[説文] 四下に「股なり」とあり、上方、一下方、一下方、一下方、一下方、一下方、一下方、一下方、一下方

いない。〔爾雅、釈詁〕に「福なり」と注する。〔詩、「説文」一上に「よっぱなり」とし、説解を加えて「説文」一上に「よっぱなり」とし、説解を加えて影声 声符は古。後漢の安帝の名であるため、

尾 11 つける・したがう

11 かれる・つきる

刻 11 ひさご

形声 声符は夸。夸には、中が空虚というほどの擬声語である。

岸 11 ほえる

厚 中学中一家一个

乎を感動詞に用いることはなく、感動詞としては虖これを振って神を降す。金文では乎を呼の義に用い、形声 声符は乎。乎は遊舌のある鳴子板の象形で、

留。香 香

呂10

簠を固の形にしるしていることも多い。

用いており、古く祜・簠は同声であったのであろう。の〔奮子簠〕〔伯其父簠〕に、器名の簠の字に祜を小雅、信南山〕に「天の祜を受く」とみえる。金文小雅、信南山)に「天の祜を受く」とみえる。金文

に「魚を好むものは先づ罟と罛とを具ふ」とあり、形声 声符は古。網をいう。〔淮南子、説山訓〕

口 庫 黏 罟 羖 胯 扈 涸 瓠 虖

壺 つぼ・ふくべ

* 。垂奏輪

昆吾匋を作る」と、その起原説話をしるす。「国語、 なり」とあり、また缶部玉下に「匋、瓦器なり。古に昆吾、圜器なり。象形。大に従ふ。その蓋に象る「昆吾、鷽器なり。象形。大に従ふ。その蓋に象る「 裔を祀る俗があったのであろう。〔爾雅、釈器〕に 鄭語、注〕に「昆吾は祝融の孫、陸終の第三子など り」とあり、陶冶の職能的祖神として、 壺の器と蓋の全形に象る。〔説文〕一〇下に 瓦器なり。古、 火神祝融の

器制は瓠を おり、壺の 名をあげて して康瓠の

壺の古名と

原型として



麗な制作のものがある。後漢の壺公は、仙を学んでが、のち方壺・扁壺も作られ、婦人の器も多く、華 つねに一壺を携え、その中に住んだ。ゆえに別天地 は礼器として酒器に用い、壺中の氤氲の気を壹とい いる。壺の字形も、これに蓋を加えた形である。壺 瓠形より出たものであるから、 もと円器である

> 湖 のことを「壺中の天」と

√,/ψ

形声 江湖の客とは、地方を旅する漂泊者の意に用いる。 遠のところ、宮廷に対して世間、また自然をいう の地には湖水多く、江とあわせて江湖とは地方の広 文〕 ニェに「大陂なり」とは大池の意。江南呉楚袋のように、大きくふくらむものの意がある。〔説 袋のように、大きくふくらむものの意がある。 声符は胡。胡にはたとえばペリカンのあご

絝 はコ かま

鮬 剣」とあり、当時のだて姿であった。[倭名頻紫剣」とあり、当時のだて姿であった。[倭名頻紫』の類をいう。[漢書、景十三王伝] に「短衣大絝長の類をいう。[漢書、景十三王伝] に「短衣大絝長 の式を袴着という。 は異なる。袴は袴褶、すなわち馬騎りばかまの形か また「うはも」は襲のことであるから、これも袴と 訓をあげている。古のはかまは褌をいうこともあり、 り」とは、両脛にあてるもので、ももひき、はかま ら出たものであろう。のち男子の正装となり、元服 〕に袴をあげ、「はかま」「うはみ(うはも)」の る意がある。〔説文〕一三上に「脛衣な 形声 声符は夸。夸にすそのひろが

觚 さかずき

「郷飲酒の爵なり」とあり、まずいより 声 声符は瓜。「説文形声 声符は瓜。〔説文〕四下に 儀礼のと

> が多いが、觚稜とい 載にはすこぶる混乱 酒器の觶との区別に 出土のものに精品が多い。自名の器がなくて、同じ きに用いた。細長く、上の開いた形の酒器で、 ついても、文献の記

う語があるように、 稜飾をつけているものが多い

計 12 よコみ

〔詩、毛伝〕は正しくは〔詩毛氏詁訓伝〕である。り」とあり、古言を今語をもってよむことをいう。 形声 漢人は詁の意に故を用い、経注に「故」「解故」と言の語を釈する。〔爾雅〕に〔釈詁〕〔釈訓〕がある。 訓詁を分っていえば、話とは古言を釈し、訓とは重 いう例が多い。 声符は古。〔説文〕三上に「故言を訓むな

辜 12 つみ・ころす・はりつけコ

華麗 景

の従隷とすることが多く、ゆえに鼻・辜の字はみなとなる刑をいう。古代の刑罰には、入墨して神 形声 に「摹なり」とあり、辠は罪の初文。辠とは尊に入きの針器で、辜とは入墨の罪をいう。〔説文〕一四下 声符は古。辛は刑罰として入墨を加えると

れる。それで磔刑のことをもいう。 の義があるのであろう。弦の声義を承ける字とみら まらず、磔殺の意をも含むもので、古声のうちに殆 裂く意である。これによると、辜は入墨の罪にとど 率して候穣す」 とみえる字がそれであるが、「周礼、小子」に「沈いる。〔説文〕が部四下に跣をあげて「枯るるなり」 は、屍と古とに従い、「詛楚文」にその字がみえて 辛に従う。〔説文〕に重文として録する古文の字形 また〔大宗伯〕に「職拳」というのは、犠牲をして侯穰す」とは、犠牲を磔して祭ることであ

酤 ひとよざけ

があった。 「沽酒市脯は食はず」とみえ、当時すでに沽酒の風いる。沽と通用する字である。[論語、郷党]にいる。沽と通用する字である。[論語、郷党]に 祖毎に酤うて留飲す」のように、酒を沽う意にも用 とあり、祭祀に用いた。〔史記、高祖本紀〕に「高 という。〔詩、商頌、烈祖〕に「既に清酤を載す」酒である。〔繁伝〕に当時鶚鳴酒とよばれたものだ酒である。〔繁伝〕に当時鶚鳴酒とよばれたものだる。 形声 声符は古。〔説文〕一四下に

雇 [雇]12 ふなしうずら・やとう

₽_N

説話は「左伝」昭十七年、郯子が魯に来朝したとき、桑の候鳥なり」とし、九雇の名を列している。その 声符は戸(戶)。〔説文〕四上に「九雇、農

> 顧はその神占を受ける字であると思われる。雇用の収めるところ、隹はその神占を伝えるものであろう。 の上に隹をしるしており、戸はおそらく祝禱の器を〔月令〕類の書に多くの記載がある。卜文の雇は戸 じたという。鳥を農耕の節候を示すものとするのは、 義に用いる例は、後漢のときよりみえる。 古い農耕民族においては極めて普遍的なものであり、 官を失ひて、學は四夷に在りと。なほ信なり」と嘆 に近い伝承である。孔子がその話を聞いて、「天子、 少。皞氏鳥官の由来を述べた話にみえ、鳥ト ・ーテム

痼 ¹³ 活。 久しくなおらぬ病

声義を承ける字である。 を痼疾、頑固でなおらない習癖を痼癖という。 り」という。 形声 いま痼の字を用い、久しく治らない病 て痞に作り、〔説文〕セドに「久病な 声符は固。字はまた古に従う 固の

誇 13 ほこる・おごるコ・カ(クヮ)

るから、 いう。 に引く〔説文〕に「誕なり」とみえる。 、浮誇といい、また誇誕という。〔文選、注〕誇るときは、大てい誇大にしていうものであ 形声 り、その言辞にあらわれるものを誇と 声符は夸。夸に跨越の意があ

賈 13 あきなう・かう

会意 0 貝は財貨。財貨を覆うのは商賈の 一世と見とに従う。 一は覆うも

> 人の姓のときには賈詛・賈后の音でよむ。が餘勇を賈へ」とあり、賣(売)・買両義に用いる。 **襾声とする。〔左伝〕成二年「勇を欲するものは余** じである。〔説文〕云下に「賈市なり」とし、字を ことで、買が网と貝とに従うのと、字の構造法は同

跨 3 コ・カ (クヮ)

渡る意とするものであろう。 る。〔説文〕ニ下に「渡るなり」というのは、 配すること、跨陵のように敵地を侵冦する意に用い 鶴のように乗る意から、跨有のように広域を領有支 形声 ものを跨越することをいう。跨馬・跨 声符は夸。夸に胯の意があり

鼓12 (鼓)12 (鼓)14 つづみ・うつ

봞 曹紫阳道 益 弘

会意 正字は鼓に作り、壴と攴とに従う。 豆は鼓

が、恵王、上」「塡梁 恵王、上」「塡撃つ 形。〔孟 子、の象形。鼓は壴を の楽器についても 然としてこれに鼓 し、兵刃旣に接 」とは軍鼓。他

55

鼓琴・鼓籥という。「説文」三下に「撃鼓なり」 ح

コ 滸(汻) 糊 錮 盬 瞽 顧(顧)

字である。「郭なり」とその字形を用いる。両形あるも、同じれを鼓て」とその字形を用いる。両形あるも、同じれを鼓で」とするが、金文の鐘銘に「永く保ちてこし、また別に鼓五上の字をあげて鼓と別解を施し

滸は「汻」でほとり

ド声 〔説文〕の正字は汻に作り、 「水崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「水崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「赤崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「赤崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「赤崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「赤崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には 「赤崖なり」とし、水のほとりをいう。経籍には であるう。

糊 15 かゆ・のり

形声 声符は胡。米などをやわらかく炊いたもの。 粗末な食事に用いる。孔子の先祖と伝えられる宋の 出き父の鼎の銘に、「是に鱧(かゆ)し是に鬻し 以て余が口を糊す」としるされていたことが、〔左 以て余が口を糊す」としるされていたことが、〔左 は、昭七年にみえるが、いま存する鼎銘にはこのような箴言風のものはなく、作り話であることが知られる。このことが知られる。このことから、生活することを糊口という。また模糊はぼんやり、糊塗はうわべをごまかし、こまた模糊はぼんやり、糊塗はうわべをごまかし、こまた模糊はぼんやり、糊塗はうわべをごまかし、こまた模糊はぼんやり、糊塗はうわべをごまかし、こまた模糊はぼんやり、糊塗はうわべをできない。

超 16 きぐ

に借用し、錮疾のように用いる。 後漢のとき、宮廷の腐敗を攻撃する在野の清流る。後漢のとき、宮廷の腐官勢力とが対立し、清流派のものが多く禁錮された。これを党錮という。また痼の意が多く禁錮された。これを党錮という。のち禁錮の意に用いまを鋳かけて補うことをいう。のち禁錮の意に用いまを鋳かけて補うことをいう。のち禁錮の意に用い

医 18 しおいけ・あらしお・やむ

慰した。

形声 声符は古。鹽の省文に従うもので、塩池をいう。〔説文〕二二上に「河東の鹽池なり」とあり、いう。〔説文〕二二上に「河東の鹽池なり」とあり、いう文があり、門東安邑の天塩の産地であった。塩周回百十六里、河東安邑の天塩の産地であった。塩パラ文があり、間漿を使う意である。〔通訓定声〕にとよれ、王事の厳しい意と解されているが、その字は〔玉篇〕〔広韻〕に「戯は見むなり」という今字の仮借で、〔方言〕に「壁は且なり」というのも戯の意である。従って「王事靡壁」は「王事、壁に、王事靡壁」という何があって「王事靡壁」というのも戯の意である。従って「王事靡壁」は「王事、壁に、王事靡壁」という何あって「王事靡壁」というのも監の意である。従って「王事靡壁」は「王事、壁に、王事靡壁」とよむべきである。王符の〔潜夫論、というのも戯の意である。従って「王事靡壁」は「王事、壁は上なり」というの意である。だって「老事なり」というのも戯の意である。だって「王事靡壁」は「王事、壁は上なり」というのもないまでにその解があった。〔周礼、塩人〕の〔鄭司農、かつう字の仮借で、〔方言〕に「塵を苦の音でよみ、壁・様・苦は息むなり」とあり、苦は戯(やむ)の意である。とあり、苦は虚(やむ)の意である。とあり、苦は虚(やむ)の意である。

瞽 18 めくら

化の指導者であった。〔周礼、 化の指導者であった。[周礼、大司楽]に伝える周学を瞽宗といい、その楽官は瞽人で、古代の礼教文 語〕などには「瞽史」「瞽師」などの職がみえ、 代の礼教文化も、なおその伝統によっている。「国 また盲という。〔説文〕四上に「目にただ朕のみあ 多く神事に参与したものであろう。〔国語〕はその もよばれた。わが国の語部のような伝承者として、などの書名がみえる。瞽史のすぐれたものは神瞽と もまたその原資料をこの系統の記録のうちにえてい た瞽史の伝承するものとして〔瞽史記〕〔瞽史之記〕 その言を瞽説という。 る。これら巫史の言説には虚妄のことが多いので、 ような伝承者の記録とされるものであり、〔左伝〕 目睛あるも視力のない者をいう。殷代の 形声 楽官には瞽者が多かったからであろう。 声符は鼓。瞽が鼓に従うの

顧 21 (顧) 21 かえりみる・おもう

「書、太甲、上」「先王、諟の天の明命を顧る」、「康彦を伺うことを顧という。「説文」九上に「還り視意を伺うことを顧という。「説文」九上に「還り視意を伺うことを顧という。「説文」九上に「還り視らを伺う」と後ろを顧みる意とし、雇声とするが、るなり」と後ろを顧みる意とし、雇力とに従う。雇は祝禱を収めた金意を雇(雇)と買とに従う。雇は祝禱を収めた金意を雇(雇)と買いた。

反・一顧・顧念のように用いる。 をころを視て、反省する意をもつようである。[詩、ところを視て、反省する意をもつようである。[詩、ところを視て、反省する意をもつようである。[詩、大雅、雲漢]「大命止むに近し 瞻る靡く顧る靡し群公先正 則ち我を助けず」のように、神意の顧為をうることが字の原義であり、これを人の行為になるでうることが字の原義である。顧望・顧さいうのは、その引伸の義である。顧望・顧さいうのは、その引伸の義である。顧望・顧さいうのは、その引伸の義である。顧望・顧さいうのは、その引伸の義である。顧望・顧さいうのは、との引伸の義である。

ま23 ココン まじない・まどわす・こびる

会意 過と皿とに従う。[説文] 二三下に「腹の中な意 過と皿とに従う。[説文] 二三下に「腹の中の蟲なり」とする。字は蠱・巫蠱といわれる。字を取り締る意である。漢代の賊律では、これを棄ってある。漢代の賊律では、これを棄って真ふ。王の尚(禍)あるは、これ蠱ならざるか」のように下する例が多く、「媚蠱のことは下辞にもすでにみえ、深い皿の中に二虫あるいは三虫を加えている。「真ふ。女丙(死者の名)は蠱することは下辞にもすでに入う。これ媚蠱なるか。これ姻蠱ならざるか」のように下する例が多く、「媚蠱左道」とよばれる呪いる。「真ふ。女丙(死者の名)は蠱することにきか」のように下する例が多く、「媚蠱の法とで記。漢代に媚蠱とよばれる呪詛が流行し、〔史記、建元以来侯者年表〕に「婦人の初産の管・膝を盗斷して、以て媚蠱を爲す」、〔漢書、外談官・膝を盗斷して、以て媚道を爲す」、〔漢書、外談官・膝を盗斷して、以て媚道を爲す、〔漢書、外談官・膝を盗斷して、以て媚道を爲す、〔漢書、外談官・膝を盗斷して、以て媚道を爲す、〔漢書、外談官・膝を盗斷して、以て媚蠱を爲す」なと意と、後宮の身める者、王美人を祝詛す」なの蟲なり、後宮の身める者、王美人を祝詛す」ない。

とよんで差支えないようである。卜文には、媚蠱の 蟲に中るなり」と改め、「腹内、蟲食の毒に中るを 霊をもつものとされた。これをひそかに人に食わせ 中に入れ、相食らわしめ、最後に残った一匹が、呪 ちに没する。蠱法は、五月五日に百種の虫を一器の のであろう。 とあり、そのような媚薬が古くこの時代からあった をして自ら知らしめざるもの、これを蠱毒といふ」 のである。その〔疏〕に「毒藥を以て人に藥し、 づくは、疾むこと蠱の如し」とは、蠱惑を戒めたも 誘引しようとした。また〔左伝〕昭元年「女室に近 文夫人を蠱せんと欲す」とあり、 といわれるものも、すべて蠱を祓うためのものであ る。これを祓うために、埋牲を行なう。大儺や歿改があり、木偶を用い、ときにはまた鶏などをも用い ているものがある。媚蠱の法としてはまた埋蠱の法 邪霊を示すと思われるものの下体を、獣形にしるし 謂ふ」とするが、〔説文〕の文は「腹の中の蟲なり」 るのであるという。「段注」に「説文」の文を「腹、 よってその最愛のものを失い、晩年は寂莫失意のう 夫人が殺されるという兇変で、武帝は近臣の詐謀に 変とよばれる事件が起った。そのため太子やその母 どの記事がみえ、武帝の末年には、いわゆる巫蠱の 万舞などに託して

ゴ

互 4 ゴ たがう・たがいにする

するものは互訓。入り乱れることを紛互という。 すべて相互の関係にあるものをいう。互市は交易。 すべて相互の関係にあるものをいう。互市は交易。 すべて相互の関係にあるものをいう。互市は交易。 で交互の意を生じ、引伸して で交互の意を生じ、引伸して ででする。交

五人いつつ

仮借 交錯する木をもって作られた器物の蓋の形。 これを数の五に用いるのは、仮借である。〔説文〕 これを数の五に用いるのは、仮借である。〔説文〕 これを数の五に用いるのは、仮借である。〔説文〕 にはこの形を開いていることが多い。数字は一よりにはこの形を開いていることが多い。数字は一よりにはこの形を用いていることが多い。数字は一よりにはこの形を用いていることが多い。数字は一よりにはこの形を開いたが、五は明らかに器物の形として用いられることがある。たとえば祝禱の器であるから指事としてよいが、五は明らかに器物の形として用いられることがある。たとえば祝禱の器であるから指事としてよいが、五は明らかに器の形をある。〔毛改撰〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難〕に「乃の族を以るて、王の身を干吾せよ」とな難の意。吾の字形には、ときに五を重ねた二重を書かる。

ゴ 午 伍 冴〔冴〕[冱〕 呉〔吳〕 吾されるおそれがあるため、吉・古・歳のように親られることがあり、五で蓋するのもまたことがあり、五で蓋するのもまたこれを護るものであるから、干吾の語が生れるのである。吾を代名詞に用いるのは仮借義。〔説文〕は数をみな陰陽五行の説をもって説くが、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説くが、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説が、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説が、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説が、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説が、数の起原やそをみな陰陽五行の説をもって説が、数の起原やそをみな陰陽五行の説をしている。

午4 ざからう・うま

た、逆らう意を生ずる。御は道路においてこの呪器の、逆らう意を生ずる。御は道路においてこの呪器をして用いた。 をでして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を もって説く。四月は純陽、五月にはじめて陰気が生 もって説く。四月は純陽、五月にはじめて陰気が生 もって説く。四月は純陽、五月にはじめて陰気が生 と、、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がして、地を冒して出づるなり」と、陰陽五行を がしてがあり、その祭儀を御(御)という。 なびう。幺は糸たばの形で、わが国の白香のような に従う。幺は糸たばの形で、わが国の白香のような に従う。幺は糸たばの形で、わが国の白香のような に従う。幺は糸たばの形で、わが国の白香のような に従う。幺は糸たばの形で、わが国の白香のような ものであろう。ト文には上形に作るものが多い。この呪器をもって禦 ない。年は行なうが、それは防禦的な意味の祭儀であるか に従う。ちは糸たばの形で、わが国の白香のような ものであろう。ト文には上形に作るものが多い。この呪器として用いた。 を持たすが、それは防禦的な意味の祭儀であるか に従うう意を生ずる。御は道路においてこの呪器

> **・ 一文獣に配して、うまをいう。 ある。十二支獣に配して、うまをいう。** をおき、それを拝する形で、午の声義を承ける字で

低 6 まじわる・くみ・なかも

冴 7 [冴] 6 [冱] 6 ごおる・さえる

呉っ〔吳〕っ だのしむ・くれ

会意 矢と口とに従う。口は凹で、祝禱の器。矢

エクスタシーの状態となることをいう語である。 エクスタシーの状態となることをいう語である。 それらはみな、もと神を楽しませるためのものであった。 矢は身をくねらせる形で、疾疾(虞) の諸字がある。 俣は舞容、 假以下には娯楽のであるが、字形では 口は手の上にささげられているであるが、字形では 口は手の上にささげられているであるが、字形では 口は手の上にささげられているであるが、字形では 口は手の上にささげられているの意があり、それらはみな、もと神を楽しませるためのものであった。 矢は身をくねらせる形で、 疾の意があり、それらはみな、もと神を楽しませるためのものであった。 矢は身をくねらせる形で、 チェッのきがあり、それらはみな、もと神を楽しませるためのものであった。 矢は身をくねらせる形で、 チェッの字はこれに従う。 妖・笑はもと神に祈って、エクスタシーの状態となることをいう語である。

五口 7 まもる・われ

大きな、面と口とに従う。五は木を交叉して器の蓋がでな借義。「也設」に「吾が考」という語が両見に「王身を干害せよ」とは孜敔の意で、吾は敔の初に「王身を干害せよ」とは孜敔の意で、吾は敔の初文。ときに五を二つ重ねて厳重にする意を示す字がある。〔説文〕ニ上に「我自ら稱ふなり」とは一人ある。〔説文〕ニ上に「我自ら稱ふなり」とは一人ある。御と声義近く、通用する。

件7 「悟」」に さからう

(4,4)。 以

大に屈することなく正視することをいう。 り」とみえる。午も吾もともに「御ぐ」「耽る」のり」とみえる。午も吾もともに「御ぐ」「耽る」ののまであるから、「逆ふ」意となる。 忤視とは、形声 声符は午。〔説文〕 ロアに「悟は逆ふな

子 8 さからう・たがう・おかす

14

後の ゴ・コウ

"後路後衛邊

各をつける字形もある。あるいは各を略して祝禱のの下に匁をつけ、また〔中山王方壺〕のように、えに歩行におくれる意とする。金文の字形では、幺えに歩行におくれる意とする。金文の字形では、幺えとなとに従う。〔説文〕ニ下に「遅金意」 てきょう ま

後車に命ず」のようにいう。場所的なものから時間 その方法は概ねこのような呪儀によるものであった。 先・前はともに足を清め爪を剪って安全を祈り、ろう。先後あるいは前後と相対する語であるが、 儀を示す字である。後の古い字形に各や幺を含むの を離れて、他の地に赴くときには、その安全を守る 先行前駆をなすことであり、後もまた呪儀によって であったからであり、後とは後退を意味する字であ は御の古い字形の従うところで、御は禦ぐための呪であろう。各は神を呼んでその霊の降り格る意。幺 的なものに移されて、子孫を後嗣・後人・後裔とい のち前後をいう語となり、〔詩、小雅、緜蛮〕「彼の ために、先後にわたって十分な警戒が加えられるが、 敵の後退を祈るものである。守護霊をもつ本貫の地 は、後が神を降格し、 を示す字で、後は道路における呪的儀礼に関する字 器の形であるDに従う形もある。幺やDは呪的儀礼 後学を後進、支援することを後援という。 敵を禦ぐための呪儀を示す字

妈の「妈」の だのしむ

低10 ごとる・めざめる

智養 到

意があり、覚悟とは、心意が明確となることをいう。の明らかでないことをいう。悟には心の爽明を殺るの事だに発し発し。興たず、悟めず」とあり、意識の字形にも発し発し。興たず、悟めず」とあり、意識の字形になる。 ないことをいう。 信には心の爽明を殺るの話のがある。 (書、顧命)「いまの字形になる。 (書、顧命)「いまの字形になる。 (説文) 〇下に「覺るなり」と形声 声符は音。〔説文〕〇下に「覺るなり」と形声 声符は音。〔説文〕〇下に「覺るなり」と

西 11 あきらか・あう

意。いまも、長上の人に会うことを面晤という。 ・時間では、東門之心」に「ともに晤歌すべし」「ともに呼風、東門之心」に「ともに晤歌すべし」「ともに勝ってと響に作る。「詩、郷風、柏舟」「晤めて辟つこと漂たるあり」の詩句を引くが、今本は字を寤に作る。「詩、本語、「ともにいる」とという。

第14 ゴめる・さとる

として録する籀文の字は、夢に吾声を加えたもの省形に従う字とする。〔周礼、占夢〕に「寤夢」に「寐覺して信(言)あるを寤といふ」とあり、夢に「寐覺して信(言)あるを寤といふ」とあり、夢に「寐覺」できごとを夢にみることをいう。重文とは「なり」を呼ばれる。

迕 後

で、夢より覚めることをいう字である。

14 かたる・つげる・ことばゴ・ギョ

「言々語々」は、言霊による地霊慰撫の方法をいう 劉〕は都作りのことを歌う詩篇であるが、地を定と非の論を加えないことをいう。〔詩、大雅、公 「説文」三上に「論なり」とし、是非を弁論する意 双声にして対文。言が攻撃的な言語であるのに対し して祀ることをいう。「言々語々」とは、おそらく いて言々し、ここにおいて語々す」という。〔毛伝〕めてそこに旅寝することを述べたのち、「ここにお 是非の論を加えないことをいう。〔詩、大雅、公とする。〔礼記、雑記〕に「言ひて語らず」とは、 て、語は防禦的な言語を意味したものであろう。 古く言霊的な方法があったものと思われる。 口合戦的な方法による呪儀であろう。言語謀議には、 ものであろうと思われる。次章に神霊を迎え、供薦 ここで論議がなされるのはことの次第に合わず、 に「直言を言といひ、論難を語といふ」とするが、 声符は吾。吾に敔・禦の意があり、言語は

14 (誤)14 あやまり・まどうゴ

そのような状態のなかで発する語に、正常でないも 祈り、舞うてエクスタシーの状態にあることをいう。 声符は呉(吳)。呉は祝禱の器をささげて

一般の名を記録でしています。 とかい まいしてい するしょう

伝〕「その亢を溢る」など、咽喉の部分をいう。表(史記、張耳伝)「亢を絶ちて死す」、〔漢書、宴覧に「人の頸なり」とし、「頸脈に象る」という。に「人の頸なり」とし、「頸脈の象形である。〔説文〕 IO下

人の咽喉。胡脈とよばれる動

衡(佩玉の名)などの衡に用いるが、黄佩の形が似語・抗世・抗躓の意となる。金文では字を朱衡・幽語・抗世・抗躓の意となる。金文では字を朱衡・幽語・智・はのときに、首をあげてここをあらわすので、誤る

ているための、仮借の用法であろう。

古・召・名・各・吾・吉・舎・告・害・史・兄なき、まために、字形の解釈を誤るものは極めて多く、るために、字形の解釈を誤るものは極めて多く、

いう。〔荀子、正論〕に「これただ姦人の亂說に誤は繆れるという意をもつ語であり、あわせて誤謬とのが多く、〔説文〕三上に「謬りなり」という。謬 それより後に文献例がある。 ひて、以て愚を欺くものなり」と迷誤の意に用い、

酮 ちちしる

味という。 本来は一宿造りの薄味のものをいう字である。 り、牛の乳の精醇なるものをいう。醍醐の字に用い るほかには、用法はない。仏教ではその正法を醍醐 醍醐は五味の最高のものとされた。 形声 に「醍醐、酪の精なるものなり」とあ 声符は胡。〔説文新附〕一四下 醍は

護 まづる

し、占って護ることをいう。もと軍事的な目的のもが、これは鳥占いの意で、祝禱して鳥の様子を注視 注〕に「これを監視するをいふ」、〔張良伝、注〕 灩 ので、秦に護軍をおき、漢以後その軍官があった。 く守護する意に用いる。蒦は鳥を手にとる形である に「これを保安するをいふ」というように、注意深 脱するなり」とあり、「漢字・李広伝、 形声 声符は篗。「説文」三上に「教

語 22 くいちがう

て、 兴 かみ合わないことをいう。それで予期に反する 近い。齟齬とは上下の歯が食いちがっ 形声 声符は吾。吾と互・牙と声が

意に用いる。山勢の突兀たるを嵯峨というのも、 齬と同じく畳韻の語である。

コウ

ナイフコウ(カウ)

ブ ずす

『記文』五上に「雪、舒びて出でんと欲し、勺上、「説文」五上に「雪、舒びて出でんと欲し、勺上、取る曲刀の形である。吹・巧などの字もこれに従う。 の関係もない。 *だ。刳などその形に従うもので、気の上出とは何古文と同じ。 万・号は彫刻刀である剞劂の象。 万に作り、字形を写に作ることもあって、〔説文〕留の象とはしがたい。金文に皇考・寿考を皇方・寿 の形とし、それより考察の義となったとするが、稽 う。〔群経正字〕に字形をものをとどめておく稽留古文以て亏字と爲す。また以て巧の字と爲す」とい「に礙げらるるなり」とその字形を説き、また「万、一に礙げらるるなり」とその字形を説き、また「万、 象形 曲刀の形。夸の下部と同じで、ものを刳り

□ 3 くち・ことば

る。従来の説文学において、 はとんどなく、概ね祝禱の器の形である日の形に作 文にみえる字形のうち、口耳の口とみるべきものは 口耳の口に従うと解す

The state of the state of

紫、正月〕「好言口よりす」、〔十月之交〕「畿口雅、正月〕「好言口よりす」、〔十月之交〕「畿になむっとも口という字は〔書、般[大]。また〔詩、小もっとも口と従う字は、概ね後起の形声字である。 「康宮の王の臣妾・百工を官嗣せよ」、〔師毀段〕「併分のものとして神事に奉仕したもので、〔伊殷〕に 盤]や〔不娶設〕に、玁狁との戦いを「戎工」と称対応する。軍事行動も戎工とよばれ、〔號季子白対応する。軍事行動も近れ、「號季子白がなる」といいる。 稷〕にその義に用いるのは、戦国期の用語である。 る。百工はのち百官の義となり、〔書、皋陶謨〕 〔益原的には職能的品部として使役されていたものであ せて我が西編東編の僕馭・百工・牧・臣妾を飼め 諸職のことをしるす部分を、「考工記」という。 る。〔周礼〕において、器物の制作や造営に関する のち殆ど工作・工芸、また巧工などの意に用いられ よ」のように、宮廟や特定の機関に属しており、起 の全般を総称する語であろう。百工はもと奴隷的身 土木造営のことにまで及び、いわゆる百工とは、そ ち工には、工祝の儀礼のことから政治や軍事、また 営を完成し、これを引き渡したことをいう。すなわ 成周における儀礼の執行にあたって、その式場の設 ることをいう。〔書、酒誥〕に、宗工・百宗工とい の工を廣成す」は高位にあってその治績を成就す もので、いずれも工の義に近い。また「班袋」「米め」とある工祝は、はふり、臣工は神事につかえる

I 将

I

III

工具の形。〔説文〕五上に「巧飾なり」を

形である日との異同を、確かめることはできない ト文・金文にその明確な用義例がなく、祝禱の器の 囂々たり」のように、早くから用いられているが、

工 3 たくみ ク

臣工」「ああ臣工 爾の公(宮)に在るを敬いれ、楚天〕に「工祝告ることを致す」、「愚いれ、楚天」に「工祝告ることを致す」、「愚いれている」といいまして祈禱の効をあげた意であり、「神祇官として祈禱の効をあげた意であり、 亢 くび(カウ)

代技術史研究の重要な資料である。

闷 \ | | 公4

おおやけ

0 ብ 八〇合

方形の空圏は宮室の象。その廷前に、左右に屏 障ず、長方形の空圏の上に二直線を左右にしるす。長 ず、長方形の空圏の上に二直線を左右にしるす。 『平分なり』と公平に分配する義とし、字形を〔韓廷前の左右に障壁のある形である。〔説文〕ニよに もので、 公の初義は公宮。〔詩、召南、小星〕は祖祭を歌う るものではない。ト文・金文の字形は八の形に従わ 及ぶなり」とあって、そこに公の義があるとされて る説をとっている。人部ハ上の伀字条に「志、衆に 非子、五蠹〕に「厶 に背く、これを公と謂ふ」とす を設けて儀礼を行なう。その式場の平面形が公で、 いるが、伀はのちに作られた字で、公の初義を承け 儀礼を行なう宮廷の廷前のところの平面形 公に在り」とは公宮の祭事に従う

コウ エ 亢

臣工」「ああ臣工

爾の公(宮)

とは、祈禱の功をいう繇工の意で、魯侯たる大祝伯とは、祈禱の功をいう繇工の意で、魯侯たる大祝伯 ろがある。たとえば、明公設」「魯侯に阻工あり」かなり多端であって、一義をもって律しがたいとこ ことをいう字のようである。ただその古い用義法は いうよりも、鍛冶の台の形ともみえ、器物の制作の巫とは関係がない。工具としての工は、規榘の形と するが、巫は呪具としての工をもつ形であるから、 字義とし、人が規榘をもつ形で、巫と同意であると

れたことを、「その私人を遷す」という。私とは非築邑のことを歌い、王家の私人が多く申伯に分与さ属の耕作者を私といい、〔詩、大雅、崧高〕に謝城属があったとされるが、この句は「我が公の田」関係があったとされるが、この句は「我が公の田」 田」に「我が公田に雨ふり、遂に我が私に及べ」の者とその服属者という関係である。〔詩、小雅、大なこれを訟という。公私を対称するのは、従って支配 窃の意があるが、公私は本来支配関係の語で、正邪ます。 用いられるのと同じ。これに対して私には私曲・私り、それは征服を意味する正が、中正・正義の意にり、それは征服を意味する正が、中正・正義の意に ある。公義・公正とはそのような支配者の論理であ 用語が、政治的行政的関係にそのまま移行したので 私は官民という関係となる。氏族共同体のなかでの ら、そこから公共の意となり、 であった。氏族は共同体的性格をもつものであるか その祭祀権をもつ公が、またそこに祭られるべき人 は族長領主をいう。公宮はその氏族の宮廟であり、 独立的なものである。私を支配するものは公、公と 句があり、古代の田制に公田と私田、共有と私有の 重要な裁判事件なども、その形式で審理されるので、 祖霊に対して哀告することを訟という。氏族内の そのような宮廟に祭られる人を公といったのであろ な「齋庭」である。殷の神都天邑商に公宮がある。 式場より退出する意。 こと、また〔羔羊〕の「公より退食す」も、公宮の の意をもつものではない。 公宮の祭場で、祖霊に対して捧げる廟歌を頌、 公とは儀礼の行なわれる神聖 官府の意となり、公

勾 4 コウ・ク

太 4 かいな

33

象形 右のかいなを引いている形。〔説文〕三下に 「臀"の上なり」とし、又と古文太とに従うとする。 「臀"の上なり」とし、又と古文太とに従うとする。 「製姿伝〕昭三十一年の邾黒肱を、〔公羊伝〕に た「穀梁伝〕昭三十一年の邾黒肱を、〔公羊伝〕に ないで、一次ではある語で、字はおそらく 別弦の象。弘と声義の関係がある。

孔4 あな・とおる・おおきい・はなはだ

アデザ

に玄鳥(燕)至る。至るの日、大牢を以て高禖(結請ふの候鳥(季節鳥)なり。乙至りて子を得。これ語、月令〕に「仲春を嘉美するなり」と説く。[礼記、月令〕に「仲春を嘉美するなり」と訓し、「乙子に従ふ。乙(燕)は子を象形 子の後頭部に繋のある形。[説文〕二三上に

「古人、**となる。」と名字対待の例を出しにして元成す」のように用いる。〔説文〕 ニニに して光あり」、「沈児鐘」「元鳴孔だ皇いに、孔だ嘉る。金文の用例はすべて孔甚の義で、「號季子白盤」をかみ」、「孔だ親がにない。金文の用例はすべて孔甚の義で、「號季子白盤」ともみえず、孔竅(あな)を示したものとみられ も知れない。〔孔作父癸鼎〕にみえる孔の字形は、毛をそり落して修改とするようなことであったかの意味する儀礼の方法は明らかでなく、その部分の 頌、玄鳥)に歌われている。しかし字は乙に従うの祭祀が行なわれるが、その起原説話は〔詩、商 つそ日ドゴなわれるが、その起原説話は〔詩、商婚の神〕を祠る。天子親ら往く」とあって、子求め 金文には専らその義に用いている。 孔穴の意となり、その深いことから孔甚の義となり、 頭上に長毛を残しているらしい形である。字はのち 嘉は生子儀礼に関する字、嘉と名字対待に用いる孔 するとき、「娩するに嘉なるか」という例があり、 なう意であったが、またト辞には、男子の出生をト と農耕儀礼において、耜に生産力を与える儀礼を行 ている。素の初文は、女子の前に耜をおく形で、も ない。これを乳穴とする説もあるが、字は授乳の形 に何らか儀礼的なことがなされたのか、よく知られ 部が、まだ固定していない意味なのか、あるいは他 形でなく、 な曲線が加えられており、それは幼児の後頭の縫合 またもと生子儀礼に関する字であろう。 金文の字形によると、子の後頭部に小さ ただ孔

▼ 4 まじわる・ちぎ・ちぎのあるいえ

子 本 等 答 者 章 縣 熱 意

and the second s

象形 千木のある建物の形。「説文」三下に「交はるなり」と訓し、「易の六爻の頭交はるに象る」とるなり」と訓し、「易の六爻の頭交はるに象る」とすべて易卦の象をもって説く。金文の図象にも爻形のもの、また三爻を重ねたものなどがあり、近時のるべく、ト辞においては爻を学の初文として用いて、いる。学はメンズハウスで、一定年齢のものがこている。学はメンズハウスで、一定年齢のものがこている。学はメンズハウスで、一定年齢のものがこている。学はメンズハウスで、一定年齢のものがこている。学はメンズハウスで、一定年齢のものがこている。また学の正字「學」や教の正字「教」のうちに、その形を含む。ト辞に学戊を爻戊としるしてれたらしく、わが国の神社建築にその形式が残されたらしく、わが国の神社建築にその形式が残されたらしく、わが国の神社建築にその形式が残されたらしく、わが国の神社建築により、その形を含む。ト辞に学戊を爻戊としるしており、学の初文。これを六爻の義である。

功 5 いさお・わざごと・たくみ

野山工工

のことをいう語であるが、農事に限定したものが功るが、力を意符とするときは農作の功をいう字である。〔説文〕二三下に「勞を以て國を定むるなり」と、る。〔説文〕二三下に「勞を以て國を定むるなり」と、という字。工は器物の制作や設営など、およそ百工をいう字。工は工作の具、力は耒の形であ

であった。しかし字義はもと工で示したものをすべて含むようになり、金文に成工・双工・又(有)工というものは成功・戎功・有功の意。〔周礼、肆師」というものは成功・戎功・有功の意。〔周礼、肆師」というものは成功・戎功・有功の意。〔周礼、肆師」の「鄭注」に「故書、功を工と爲す。解司農、讀みて功と爲す」とあり、両字を通用する。茶のころより年間を通じて日々に所業の善用する。茶のころより年間を通じて日々に所業の善用する。茶のころより年間を通じて日々に所業の善くの成績によって人の禍福や天寿が定められるという信仰があった。

口 5 たたく・ぬかずく・ひかえる

を叩へて諫め」た話が、〔史記、伯夷伝〕にみえる。を吹って諫め」た話が、〔史記、伯夷・起答が武王の「馬をひくときにも用い、のち桓公に用いられた話がある。たたいて街に歌い、のち桓公に用いられた話がある。たたいて街に歌い、のち桓公に用いられた話がある。たたいて街に歌い、のち桓公に用いられた話がある。たたいて街に歌い、のち桓公に用いられた話がある。たたいて街に歌い、のち桓公に用いられた話が、〔史記、伯夷伝〕にみえる。

巧 5 コウ (カウ)

広 5 (廣) 15 ひろい・おおきい

廣電電電

またのちの用法である。
またのちの用法である。
またのちの用法である。
またのちの用法である。
またのちの用法である。

弘 5 おおきい・ひろい

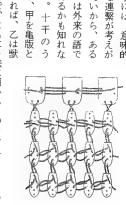
象形 弓の朔のところに、突出したしるしをつけることから、弘大・弘毅の意となり、それを人の心とからの引伸義であろう。その部分を特に強固に作ることからの引伸義であろう。その部分を特に強固に作ることからの引伸義であろう。その部分を特に強固に作るからの引伸義である方。、次出したしるしをつけることからの引伸義である方。、次出したしるしをつけることからの引伸義である方。との部分を特に強固に作ることからの引伸表である方。その部分を特に強固に作る。ならの引伸表である方。その部分を特に強固に作ることからの引伸表である方。その部分を特に強固に作ることからの引伸表である方。その部分を特に強固に作ることからの引伸表である方。その部分を特に強固に作ることから、弘大・弘毅の意となり、それを人の心ることから、弘大・弘毅の意となり、それを人の心ることから、弘大・弘毅の意となり、それを人の心ることからの引伸表である。

甲 5 意の上に移して、弘達・弘遠のようにいう。 よろい・はじめ・きのえ・かぶとコウ(カフ)

P \oplus

支の成立過程は知られず、ことに十二支に用いる文 れていて、殷の上甲と同じ字形である。十干・十二おり、金文においても〔兮甲盤〕の甲は田としるさ 上甲を田、報乙以下を区・匠・団のようにしるして 丁など、干名をもって称するものが多く、卜文では 文字はト法の発達とともに形成されてきており、そ なしている。亀卜は安陽期に入ってあらわれるが、でこれと交叉する横の縫線とが、あたかも十字紋を あるが、字形からいえば、亀版の縁文と解するのがも古文に通じた人で、それぞれ根拠とするところが 若の鱗甲説などが注意すべきものであろう。何れ 形を論ずるものは甚だ多いが、兪樾の亀甲説、郭沫水を論ずるものは甚だ多いが、兪樹の亀甲説、弥まふ」とするが、全く字形に合わぬ説である。その字 (陽) 气萌動す。木の字甲(若芽)を戴くの象に従 説をもって字形を説き、「甲は東方の孟なり。参うている形に象るものであろう。〔説文〕一四下に五行 古文の字形と大いに異なる。十字形は、亀甲の坼け象形 ト文・金文の字形は十字形に作り、小篆や の名にも、 のとき日の干支がすでに用いられている。 亀の腹甲中央を走るいわゆる千里路と、中央 文献では上甲より以下、報乙・報丙・報 また祖神

> ち、甲を亀版と あるかも知れな 字には、意味的 いは外来の語で な連繋が考えが 十干のう ある



甲科・甲榜などはその例である。ものを、甲を冠していうことが多い。甲第・甲姓ものを、甲を冠していうことが多い。甲第・甲姓 骨で、 えないのである。十干の首にあるところから、すべ てもののはじめをいい、官位秩禄や考科の首にある して作った。孚甲の説では、すべて甲の形義を説き は古くは獣皮を綴り、のちには鉄の小札を緒通しに に用いるのも字義との関連がえられる。甲衣(挿図) るいはその形を写したものともみられ、甲冑の意あろう。甲は甲羅の形であるから、小篆の字形はああろう。 ともにト法に用 いるものを一組としたもので

日 6 <u>国</u> めぐる・わたるコウ・セン・カン(クヮ

<u>e</u> Đ

本経訓」によると、殷の宮名で獄舎のことであるとと思い、「本ない」の形のように思われる。宣室とは、「本教で、式の垣の形のように思われる。宣室とは、「本教で、 いう。垣牆をめぐらし、外界との交通を絶つ建物 形に従うところから考えると、建物の周囲を繞る形 の初形を定めがたいが、金文の洹・絙・宣などの字象形(篆文と古文との形が著しく異なるので、そ

> 亙の字義である。 亙にはその声がない。亘・亙の二字はもと異なる字をったものであろう。宣には書・程の声があるが、 がある。わたる・連なるの訓は、もと舟の形に従う が同字異文と考えられたため、混乱を生じたところ である。ただ恒をまた恆ともしるし、亘・亙の両字 もに異なるものであろうが、同声にして通用するに にわたって舟を横たえている形であるから、 形に、亙と釈される形のものがあるが、それは両岸 のようである。〔説文〕木部六上にみえる古文の字

交 まじわるコウ(カウ)

會

ጵ

要するに相交わり、相合することをいう。 邪(斜)行を錯といふ」とあるのは、強いて分別を 「交脛なり」という。転じて交錯の義となり、交 加えたもので、そのような区別があるわけではない 友・交遊のような人間関係、交易・交換・交互のよ 獻醻、交錯す」の〔毛伝〕に「東西を交といひ、 な事物の取与の関係に用いる。〔詩、小雅、楚茨〕 人が脚を組んでいる形。〔説文〕一〇下に

伉 たぐい・あたる・おごるコウ(カウ)

〔説文〕の説解にない形式のもので、その本訓を脱 ものの意がある。〔説文〕ハ上に「人名」とするが、 形声 立するもの、剛強なるもの、相対する 声符は亢。亢はうなじで、

儷とは夫婦をいう。相並び、相対するもので、また しているのであろう。字は多く伉儷の意に用い、伉 الله ē

光

ひかりコウ(クヮウ)

出る器とす

参月 人然

¥

敵対の意があるのは抗と同じ。

義に用いる。毓・后・後の三字は一系の字であるがはなく後の意である。すなわち后はまた前後の後の 后祖乙・后祖丁を毓祖乙・毓祖丁としるしており、ので、それは母后分娩の象を示す字である。卜辞にので、それは母后分娩の象を示す字である。卜辞に 后のもとの字形は、のち毓と釈されている字形のも要するに后とは、継体直系の君をいう語であった。 |不又三・二十||不のように、世代数でいうこともある。の王を祀る衣祀といわれるもので、六示・九示・十 后に至る」祖王を合祀する祭儀があり、それは直系 りであろうともいわれるが、ト辞に「上甲より多かった。それで后と称するものは母系制時代のなごあった。 后をいう語であり、字もまた母后の形に作るもので を説くが、厂に従う字形とはしがたい。夏后・后羿る。一に従ふ。號を發するものは君后なり」と字形 〔説文〕 九上に后を「繼體の君なり」とし、「人の形 祈禱する意であるから、君と似たところがある。 会意 またそれぞれ用義を異にする字である。 乙・毓祖丁は後の祖乙・祖丁の意であるから、后で の字で、毓は母后を示す字形であるが、殷王の毓祖 毓が后の字に用いられている。毓・后はいわば古今 のように神話的な古帝王の名に用いるが、もとは母 に象る。令を施して以て四方に告ぐ。故にこれを广 口は口、祝禱の器の形で

掌るものがあった。殷器にはまた光の下部を女人できるものがあった。殷器にはまた光の下部を女人極めて神聖なものであったから、これを聖職として

先・薬などの字形にみえるもので、みなその行為

このような造字法は見・望・聞の初形、聖・火と人とに従う。人の頭上に火光をしるす

の意味を明示する方法であった。火は古代において

「厥の光刺に敏揚す(こたえる)」などの例がある。て光あり」、〔毛公鼎〕「文武の耿光」、〔晋姜鼎〕

口 6 むかう・まど しショウ (シャウ)・コウ (カウ)・キョウ (キャウ)・

蟄居する用意をいう。*響は向に響うのが原義、まいた。 では、その象形。ただ屋形のみをしるし、祀る意う四が、その象形。ただ屋形のみをしるし、祀る意う四が、その象形。ただ屋形のみをしるし、祀る意う四が、その象形。ただ屋形のみをしるし、祀る意うに、 り。宀に從ひ、口に從ふ」と会意とし、〔繁伝〕に、るところである。〔説文〕セ下に「北に出づる牖を 牖郷は窓の義であるという。郷は向の意。窓明りの 礼、士虞礼記)に「祝從ひて牖鄕を啓く」の注に、忠い、は、いいない。ない。ないない。ないないない。ないないない。ないないないない。これであるとする。〔儀には凹は口でなく、窓わくの形であるとする。〔儀 窓は人の気を通ずるところであるといい、〔段注〕 める器で、窓光のあるところは神を迎え、これを祀る会意 窓の形と、口とに従う。口は D、祝禱を収 ショウの音でよむ。 両義に用いる字である。 た「嚮に」のように時間的にも用いるが、向もそ 向秀など人名のときには 0

夅 くだる(カウ)

の二夕の正反相背く形を、「敢て並ばざるなり」、「説文」五下に「服するなり」と降服の義とし、 臨する形である。降伏とはもと「まつろはぬ神」のは神梯によって神が陟る形、降は神梯により神の降 哥 者と勝者と相並ばぬ意とするが、奉は歩の倒文。 伏することをいう語であった。 会意 より降る形で、神が上より降下する意。 二夕に従う。左右の足が、 敗 そ 陟

の従うところ、鍋の下に火を加えている形で、

光と

は関係のない字である。

きみ・きさき

文〕一〇上に「明なり」という。その録する古文二

何れも字形の崩れたもので、殊に第二字は庶

いずれも宗廟の祭祀に関して用いられている。〔説

好 6 コウ(カウ)

中种版 学界号

は「焜鑵」「用て好賓を除しましめん」、「杜伯恕」・小雅、常様い「妻子好合す」のようにいい、金文に小雅、常様い「妻子好合す」のようにいい、金文にことを示す字である。のちその語義を広めて、〔詩、ことを示す字である。のちその語義を広めて、〔詩、 歌を作りて、以て反側(心変り)を極む」と歌う。のであるが、その歌の呪能を強めるために「この好 〔詩、小雅、何人斯〕は人を呪詛することを歌うもうに動詞に用いる。またすべて賞讚するときに用い. 「それ用て皇神祖考と好倗友とに享きない」のよう 形に作るものがあって、婦人がその子女を愛好する 殷では同姓婚が行なわれていたとする。ただ殷が本 多数の遺品が出土したが、その器の銘文にしるされ 近年殷墟の婦好墓が発掘されて、彝器や玉飾品など に好せん」「用て倗友と百 諸婚媾とに好せん」のよいとなる。これでは、「平伯殷」「用て宗廟に好を冠して美称とし、また〔平伯殷〕「用て宗廟 色なるもの、これを好と謂ふ」とあり、美好の意と り、〔方言〕に「關よりして西、秦晉の閒、凡そ美 来子姓であったとする確証はなく、周の姓組織にお す字と考えられている。唐蘭は同姓不婚は周の制で れている。殷は子姓の国とされ、好はその子姓を示 ている婦好の字は、字の結構がまことに自由にかか する。卜文に女を母の形に作り、 女と子との会意。〔説文〕「二下に「美な あるいは子を抱く

として扱われたのではないかと思う。として扱われたのではないかと思う。

元 6 むなしい

The state of the s

打 6 あげる・かつぐ

扣6 ひかえる

「推南子、繆称訓」「繆公の駿を扣く」などみなそり、「左伝」と十八年「太子、郭榮と馬を扣く」り、「左伝」と表十八年「太子、郭榮と馬を扣く」とあり、「左伝」と表が、「馬を奉くなり」とあり、「馬をひかえる意。

1 コウ(カウ)なくて確かめがたい。字はまた叩・控と通用する。なくて確かめがたい。字はまた叩・控と通用する。なくて確かめがたい。字はまた叩・控と通用する。

/ 6 場子江 (カウ)

IX,

形声 声符は、工にゆるやかにまがる意がある。 形声 声符は、工にゆるやかにまがる意がある。 をいう。秦の〔、野君啓節〕(野君啓に与えた通行 変をいう。秦の〔、野君啓節〕(野君啓に与えた通行 証)で、その舟行の次第指定によって、江水と諸水 との交通の状態をみることができる。その虎符には、 を対していた。

考 6 ちち・かんがえる

予ます**き**素

えたもので、丂を考の意に用いることもある。考妣は長髪の老人の象に従うており、声符として丂を加あって、亡父を考といい、亡母には妣という。字形あって、亡父を考といい、亡母には妣という。字形形声 声符は污。〔説文〕八上に「老なり」、また形声 声符は污。〔説文〕八上に「老なり」、また形声 声符は污。〔説文〕八上に「老なり」、また

の意に用いるのが字の原義。金文に文考・皇考・皇の意に用いるのが字の原義。金文に文考・皇考・とは、おそらく「召公の殷(祭器の名)を作る」の意で、考は殷の仮借。考・殷はともに幽韻の字である。考案・考験・選考などはみな校(しらべる)のる。考案・考験・選考などはみな校(しらべる)のる。考案・考験・選考などはみな校(しらべる)の義はまた攷の仮借。「周礼、考工記」は攷工る)の義はまた攷の仮借。「周礼、考工記」は攷工る)の義はまた攷の仮借。「周礼、考工記」は攷工を記、器物の制作の法をいう。

行 6 ゆく・おこなう・みち コウ (カウ)・ギョウ (ギャウ)

* 并分八八

象形 十字路の形。交叉する大道をいう。[説文] また「人の世間なり」というのは、字を右歩・左ボ・行道・行師のように之往(ゆく)の意に用いる。行・行道・行師のように之往(ゆく)の意に用いる。行・行道・行師のように之往(ゆく)の意に用いる。で、そこにはちまたの神がいるとされ、術・街・衢など、道路で行なわれる呪法の字は、多く行に従う形である。

字 7 コウ (カウ)・キョウ (キャウ)・ホウ (ハウ)

もとみな同字とされ、烹飪の器の形から分化したもい。 象形 烹飪(にたき)する

コウ

行

亨

匣

吼

坑[阮]

孝

は音キョウ、亨煮・亨人・亨飪の音はホウである。よんで音はコウ、〔左伝〕昭四年「以て神人を亨す」と生じた。〔易〕の「元亨利貞」は「元いに言る」とのであるが、慣用によって分岐し、声義にも異同をのであるが、慣用によって分岐し、声義にも異同を

匣 7 はこ (カフ)

(中) 形声 声符は罪。〔説文〕一二下に では である。 [准翰子、精神訓〕「種優してこれを藏す。 育の至なり」とみえる。 [玄応音義〕に「今、刀劍寶の至なり」とみえる。 [玄応音義〕に「今、刀劍を盛るものを謂ふ」とあり、字形からいえば、古くは甲冑を蔵めたものであろう。 匱は貝を蔵める形である。 玉匣・漆匣など、象嵌を加えたり、漆塗りにしたものが多かった。

吼 7 コウ・ク

の名である。大衆の叫喚するものを唱吼という。に「牛鳴くなり」とあり、字はまた吽に作る。獣の大声に吼える声をいう字。漢魏以後の用例があり、大声に吼える声をいう字。漢魏以後の用例があり、大声に吼える声をいう字。漢魏以後の用例があり、大声に叫える声をいう字。以表述以後の用例があり、正言の字なく、[玉篇]形声 声符は孔。[説文]にこの字なく、[玉篇]形声 声符は孔。

坑 7 [阮] 7 コウ (カウ)

声〕に壙・坑と通ずる字であるとしている。殷墟の作る。阬は神梯の前に竪穴を作ることで、〔通訓定い。り、坑とは竪穴をいう。字はまた阬にいり。をはいり、坑とは竪穴をいう。字はまた阬にをがった。方に直下の意があ

孝 7 孝行・おやおもい (ケウ)

· 静孝 卷

儒家によって倫理説として組織され、「孝経」に至 「孝なるものは畜なり。道に順びて倫に逆らはず。 これをこれ畜ふといふ」とその声義を説き、畜養の これをこれ畜ふといふ」とその声義を説き、畜養の さ者なり。老の省に従ひ、子に従ふ。子、老を承く るなり」と、老者に承順する意とする。金文に祖考 を祭ることを追孝といい、「用て享し用て孝す」の ように享孝・孝享という。自ら称して孝孫といい、 また廟号に冠して、「皇考、孝武なる超公」のよう にいう。孝を徳目の名とすることは、「左伝」文二 にいう。孝を徳目の名とすることは、「左伝」文二 にいう。孝を徳目の名とすることは、「左伝」文二 にいう。孝を徳目の名とすることは、「左伝」文二 年「孝は禮の始なり」、「国語、周語」「孝は文の本 なり」、「礼記、祭義」「衆の本經を孝といふ」など、 なり」、「礼記、祭義」「衆の本經を孝といふ」など、

いたらの「特、、生、では、「最もない」、 コウ 孝 宏 炕 抗 攻 更〔夏〕 杠

の用法である。 「詩、小雅、六月」「張 仲(人名)って大成する。 〔詩、小雅、六月〕「張 仲(人名)

多っ ならう・まなぶ コウ (ケウ)

宏っ ひろい・おおきい

を漢・宏文・宏致・宏器のように用いる。 下書 声符は太。〔説文〕七下に「屋 で表に弦の字があり、「屋、響くなり」という。次条に弦の字があり、「屋、響くなり」といいう。次条に弦の字があり、「屋、響くなり」といいう。次条に弦の字があり、「屋、響くなり」といいう。

仇っ なげく コウ (カウ)

を抱いて慨くことをいう。〔楚辞、九歌、哀郢〕にる。〔説文〕一〇下に「忧慨なり」とあり、心に不平ろ。これをあらわすのは抗直を意味すれ。 元 は戦派のとこれをあられる。 元 は戦派のとこれが

「夫の人の伉懷するを好しとす」の句がある。項羽 「大の人の伉懷するを好しとす」の句がある。項羽 「大の人の伉懷するを好しとす」の句がある。項羽 「大の人の伉懷するを好しとす」の句がある。項羽

抗っ ふせぐ・あたる

攻っ おさめる・せめる

可以以下方

ことを攻学・攻究というのもその意である。すべてことを治める意に用いる。ものを学び究める

更ィ「鬼」ョ かえる・あらためる・さらに

雪 一个 图 图

これによって祟を祓うことをいう。改三下にもまた改とは穀改、すなわち呪能のある動物霊を殴って、 〔説文〕 三下に「變は更なり」とあり、變は呪詛を その機能が更新され、継続しうるので、また更ぐ意 更改を意味する字であろう。更改することによって、 丙を重ねて、これを撃つ形であるが、おそらく修治 番・ 商 などの字がこれに従う。金文の字形は、会意 丙と攴とに従う。丙は武器などの台座の 誓)、改は蠱霊をもつ虫(巳)。更の従う丙形のもの を祓う呪的な方法である。變は呪飾をつけた言(祝 係にある。かつ何れも、支を加えることによって祟 「更なり」とあって、更・變・改の三者は互訓の関 改とは歿改、 * る意である。〔説文〕三下に「更は改なり」とあり、 示す縁に支を加えてこれを撃ち、その呪詛を変更す となる。 も、呪器としての意味をもつものであろう。 丙と攴とに従う。 丙は武器などの台座の形 變(変)の字もまた支に従う字である。

- 1 よこぎ・はたざお・こばし 7 コウ(カウ)

料

り」とあり、すべて横にわたした木をいう。〔孟子、形声 声符は江。〔説文〕六上に「牀前の横木な

字。槓桿(てこ)のときには、槓の字を用いる。等で、槓桿(てこ)のときには、槓の字を用いる両は、杠の俗るものをいう。工とは左右にわたって多少反りのあうち橋をいう。工とは左右にわたって多少反りのあい。(と あり、徒杠は歩行して通るべきもの、離裏、下」に「蕨の十一月、徒代成る。十二月、興業業、下」に「蕨の十一月、徒代成る。十二月、興業業を

上月 7 むなもと

下声 声符は世(亡)。亡に元の声がある。〔説文〕四下に「心の下、高い疾が重くなったので、医を秦に求め、秦伯が医院の疾が重くなったので、医を秦に求め、秦伯が医院という名医を派遣することになった。そのとき晋侯という名医を派遣することになった。そのとき晋侯という名医を派遣することになった。そのとき晋侯という名医を派遣することになった。そのとき晋侯という名医を派遣することになった。その一曰く、晉侯となり。関らくは我を傷らん。焉くにかこれを逃れんと、その一曰く、晉侯となり。官の下に居らば、我を若何せんと。瞥至る。曰く、疾為むべからざるなり。肓の上、齊の下に在り。こ疾為むべからざるなり。肓の上、齊の下に在り。こ疾為むべからざるなり。肓の上、齊の下に在り。こ疾為むべからざるなり。肓の上、齊の下に在り。これを攻むるも不可なり」とみえる。

上っ はれる・しりのあな

大腸の末端である肛門とその形が似ている。を設め、中に、磨滅をふせぐために挿入する鉄管で、門の意は、釭と関係があるかも知れない。釭は車のとみえる。工にゆるくそりのある形の意がある。肛とみたる。下にゆるくそりのある形の意がある。肛形声 声符は工。[広雅、釈詁]に「踵るるなり」

効のの対しいたす・ならう・ききめ

コウ 肓 肛 効(效) 臭 岡 岬

って力とし、何の意味をも示しえない字である。 とに従うて效に作るが、字の正形ではない。「説文」とに従うて效に作るが、字の正形ではない。「説文」とに従うて效に作るが、字の正形ではない。「説文」を下に「象る(像る)なり」と訓し、交声とする。撃って直すのを效という。それで法則の意となり、ない、大の法則に従い效う意となる。「毛公鼎」に「乃のた正(友官)を善效せよ」とはその意。その效験のもなごとを效功(功を対す)といい、それに效うことを放力(功を対す)といい、それに效うことを対して、方のが験のは、大とでは、大と支とに従う。のち交と支金意 字の初形は、矢と支とに従う。のち交と支金意 字の初形は、矢と支とに従う。のち交と支金意 字の初形は、矢と支とに従う。のち交と支金意 字の初形は、矢と支とに従う。のち交と支金

見 8 しろ・つや ・セキ・タク

いて、古義を失うところが多い。 獣屍を米(獣爪)をもするが、その字も獣屍の象。獣屍を米(獣爪)をもって釈くものは、と部の白を白色の義とするものであるが、それは獣頭の白骨化したもの、白はものであるが、それは獣頭の白骨化したもの、白はものであるが、それは獣頭の白骨化したもの、白はものであるが、それは獣頭の白骨化したもの、おして、古義を失うところが多い。

岡 8 おか (カウ)

|| 8 やまあい・みさき || 8 コウ(カフ)

語がある。〔日本紀私記〕に「三佐木」の訓がみえ、り、〔准南子、原道訓〕に「山岬の旁に彷徨す」の形声 声符は甲。〔玉篇〕に「山の旁に彷徨す」の形声 声符は甲。〔玉篇〕に「山の旁にちしとあ

わが国では両水の間のところをいう。国語としての用いかたである。中国では両山の間、海中に突出して屈曲したみさきにこの字をあてるが、

半 8 さいわい・ねがう

象形 手械の形。〔説文〕 □○下に「吉にして凶を免るるなり」とし、字をずと天とに従う会意字とす免る。天は天死、ずに従うてその逆であるから、天死を免れる意の会意とするのであるが、このように否定の意を加えた会意とするのであるが、このように否定の意を加えた会意という造字法はなく、字は明らかに手械の象。罪人を執えるを執い、報復刑を加えることを報という。幸た幸福の義に遠い字で、悻は「もとる」、婞にも「もとる」意があり、従順でないことをいう。幸はもと僥倖の意に用い、〔荀子、王制〕「朝に幸位なく、民に幸生なし」とは、僥倖をもってことを望みがたい意。のち天子のことに用いることが多く、行幸・侍幸・幸愛という。また幸生・幸とが多く、行幸・侍幸・幸愛という。また幸生・幸とが多く、行幸・侍幸・幸愛という。また幸生・幸ささいのであろう。

庚 8 きねつく・かのえ

前角半角雀

業所属新編を用

す 8 とらえる・かかわる・かがむ

門的

それで変通することを知らず、旧に拘泥することを用いる。その身を屈して、自由を失わせる意である。り」とし、字を会意とするが、〔意琳音義〕に引いり」とし、字を会意とするが、〔意琳音義〕に引い引、引いてとらえる意。〔説文〕三上に「止むるな引、引いてとらえる意。〔説文〕三上に「止むるな引、引いてとらえる意。〔説文〕三上に「止むるな引、引いてとらえる意。

『印 8 あがる・たかい・たかぶる 拘俗・拘恋という。字はまた俗に拘に作る。

昊 8 「界」 9 37 (カウ)

果。果

とは、天の光耀をいう。〔詩、周頌〕に〔昊天有成とは、天の光耀をいう。〔詩、周頌〕に〔昊天有成。 をする。また字を「日介に従ふ。介は亦聲なり」とし、介に広大の義があるとするが、その字形は臭にし、たに広大の義があるとするが、その字形は臭にしているが、のちの儒釈天」にこれらを季節名に配しているが、のちの儒釈天」にこれらを季節名に配しているが、のちの儒釈天」にこれらを季節名に配しているが、のちの儒釈天」にこれらを季節名に配しているが、のちの儒宗説である。景の字形は「石鼓文、田車石」にみえ、金文の〔単伯界生鐘〕にもみえるが、その字は矢金文の〔単伯界生鐘〕にもみえるが、その字は矢金文の〔単伯界生鐘〕にもみえるが、その字形は臭にである。景の字形は〔石鼓文、田車石〕に入え、また大の形に従う。字はまた曜しているが、のちの儒釈文〕に、また昊に作るという。〔楚辞、九思〕に「これ昊天の昭靈なる」とは、天の光耀をいう。〔詩、周頌〕に〔昊天有成。

に用いる。(ちょうだい)とみえ、皇天・蒼穹の意い、「ちょうだ」とみえ、皇天・蒼穹の意い、「曹、先典」に「乃ち豢和に命じ、から、知らの篇があり、「曹、孝・氏」の篇があり、「曹、孝・氏」という。

杭 8 コウ (カウ)

形声 声符は亢。亢は顔のように太く短い部分をいう。その形の舟を航といい、その舟で水をわたるいう。その形の舟を航といい、その舟で水をわたることを杭という。[詩、衛風、河広]「一葦(あしてい」の意に用いる。また杭を用いることもあり、「気災を名義抄」に杬を「ささくり・くひ」と訓し、村には「くひ・うちくひ」と訓している。村は弋声代には「くひ・うちくひ」と訓している。だはであるが、またその形によって名づけたもので、の字であるが、またその形によって名づけたもので、くいの本字である。

日 8 あきらか・たかい a カウ(カウ)

BDE 会意 日と木とに従う。[説文] 六上田田 会意 日と木とに従う。[説文] に「明なり。日の木上に在るに從ふ」とみえる。東六上についても「説文」には「日、木中に在り」と説き、東・杲・杳を一系のは「日、木中に在り」と説き、東・杲・杳を一系のは「日、木中に在り」と説き、東・杲・杳を一系の字とする。しかし東の初形は葉の象形字であり、杲が日出の字である。[詩、衛風、伯学] に「杲々として日出づ」、「楚辞、遠遊] に「陽、杲々としてそれ未だ光あらず」とあり、日の漸く昇ることをいう。「管子、内業」に「杲乎として天に登るが如く、杳野として淵に入るが如し」とあり、日が没して虞淵に入るが如し」とあり、日が没して虞淵に入るが如し」とあり、日が没して虞淵に入るが如し」とあり、日が没して虞淵に入るが如し」とあり、日が没して虞淵に入るという太陽説話によって、東・杲の字形に含いた。

字である。
字である。
字である。

年 8 なれる・あなどる

形声 声符は甲。〔説文〕 IO上に ですいことをいう字とする。 [書、多方」「内亂に甲る」、〔詩、衛風、芄闌」「我に甲るること能はず」 のように、甲をそのままに用いる例が古く、のち [左伝] 昭二十年「民狎れてこれを流ぶ」、[論語、野流 党]「邓ると雖も必ず變ず」のように押を用いる。 「書」を、狎にも古く習・都と同じように、翫褻し狎を軽んずることをいう字であり、「左伝」、三十七年「智がることをいう意味を含むことがあったものと思われるが、いまその初義を確かめることはできない。 [方言] に「蝶むなり」とあり、人を軽侮する意とするが、いまその初義を確かめることはできない。 [方言] に「蝶むなり」とあり、人を軽侮する意とするが、「爾雅、釈詁」に「習ふなり」とあり、もとは神明に対する行為を意味した字であろう。

青 8 □月□6 骨についた肉・うべなう

肉、肩々として箸くものなり」という。肯は俗字とに密着している肉の形で、〔説文〕四下に「骨閒の象形 正字は肩に作り、上部は骨、下部は肉。骨

版 8 かな・ひじ

形声 声符はぶ。太は弓を引くときれてこれを枕とす」とは、気楽な生活をいう。わ曲げてこれを枕とす」とは、気楽な生活をいう。わ曲げてこれを枕とす」とは、気楽な生活をいう。わが国では肱の曲る部分だけをいうが、もと肩から肱をが国では肱の曲る部分だけをいうが、もと肩から肱をが国では肱の曲る部分だけをいうが、もと肩から肱を

看 8 さかな カウン

の侯が、本来の侯のありかたであった。

に作り、その骨肉を撃って分つ意味で、肴雑・肴乱 の意となる。肴核は肉と果物、字はまた殽核に作る。

侯。[矣]。 まと・うかがう・五等の爵名コウ

夏灰 歴

ので、 射儀の記述によるものであり、侯を射侯の字とするその祝りの辞をも録するが、みな後世の礼書にいう射義は田害を避けるためのものであるという。また 係にあったもので、周初の〔大盂鼎〕に殷の滅亡の朝の辺境にあり、外服の邦伯として政治的な服属関 に作り、かつト辞にすでに周灰のように侯名に用いのもその初儀ではない。字の初形は卜文・金文に灰 糜、士は鹿・豕を射侯とすることをいい、それらのび、天子は熊・虎・豹、諸侯は熊・豕・虎、大夫は その下に在るに象る」という。ついで射的の制に及 ろの矦なり。人に從ひ厂に從ふ。布を張りて、矢のもとの本義とし、「春饗(春の饗宴)に射るとこ的を字の本義とし、「春饗(春の饗宴)に射るとこ れぞれの成立をもつものであった。侯はもと古代王 るものであるが、五等の爵制は後に至って整ったも ており、爵名とする。いわゆる古代封建制とよばれ 祓う侯 穰の儀礼を示す字である。 〔説文〕 五下に射 また屋上にも人が上って祓う形に作り、弓矢を以て 事情を述べ、「我聞くに、殷の(その)命を墜せる 公侯伯子男はもとそれぞれの語義をもち、そ 人と厂と矢とに従う。屋下に矢を射て祓い

ときには、 宜侯に遷された虎侯はおそらく殷の虎方ののちであ でいる井侯は周公の胤であり、屡侯は召公の族である。 ち射す。駿方、王の射に鄔(会)す」とあって、会「駿方、王に侑(薦)す。王、休宴(賜宴)す。乃は三侯駿方が王の南征を迎えたときのものであるが、は三侯駿方が王の南征を迎えたときのものであるが、 桑弧棘矢をもって天地を射て祓う儀礼があるが、外等いでといる。とと関係があろう。男子が生れると、の名も侯穰のことと関係があろう。男子が生れると、 悪を祓うことにあり、 また〔令彝〕にも「諸侯、侯田男に、四方の命を舍り」とみえ、外服のものを「遵侯甸」とよんでいる。 率あて酒に肄ひたればなり。故に師を喪ひたるない。 これ殷の婆侯甸と殷の正百辟(氏族首長)と、は、これ殷の婆侯甸と殷の正百辟(氏族首長)と、 り、噩侯駿方はおそらく南方の異族であろう。関外 射が行なわれている。侯は射儀による侯禳を行なう 射儀はまた諸侯が参朝したときなどの盟誓の儀礼と 族に対してもそのような射儀をもってこれを祓った。 その方法は、弓をもって祓う射儀によるもので、侯 職とするところは、王朝の周辺を清めて、異族の邪 侯は外服辺境の侯穰守護に任ずるものである。その 廟の祭祀に参加する内服の貴族であるのに対して、 衞邦伯」とよんでいるのと、ほぼ一致する。*ベドド であった。〔書、酒誥〕に、外服の諸侯を「侯田男 く」とあって、それらは四方に配置されているもの のが侯となることもあり、いわゆる周初の大封建の け、王朝の守護に任じた。また王室の同姓近親のも ことを字の本義とする。のちには侯として封冊を受 しても、会射という形式で行なわれた。「噩侯鼎」 そのようなものが多かった。金文にみえ すなわち侯禳を任務とする。

厚 厚区 P 朝

厚。

あつい

『詩、小雅、正月』「地をば蓋し厚しと謂ふ」、『易、記、楽記』の「深厚を測る』を山川の深厚とし、なり」とし、厂を山陵の形と解するが、それは〔礼なり』とし、厂を山陵の形と解するが、それは〔礼なり』と、 会意 文の字形は、おそらく譌形であろう。 り、神の恵貺をいう語である。〔説文〕に録する古 安鐘」に「余に厚多福を降すこと無疆なり」とあ 『大学』「坤は厚く物を載す」など、地の深厚をいう意から出ている。[井人は、『また』は、『中の本のでは、『また』は、『また』は、『また』は、『また』は、『また』に、『また』「坤は厚く物を載す」など、地の深厚をいうになか』「坤は厚く物を載す」など、地の深厚をいうになか。 ことを厚い・厚虯といい、その人を厚徳・厚望とて厚礼の意となる。すべて他に対して篤厚を尽くす 奉ずる象で、 とは、廟中に厚く享饌することであり、それよりし 文〕五下に「厚なり。反享に從ふ」とみえ、 厂と學とに従う。厂は廟屋の象。學は 享饌を意味する字である。 従って厚 鬯を

咬。 かむ・とりのこえコウ(カウ)

形声 の声とする。鳥声としては交を用いることがあり、 声符は交。〔説文〕にみえず、〔玉篇〕に鳥

「小学」にもみえていてよく知られており、 声語としての用法である。のち齧む意に用いる。 含む語である。 「人常に菜根を咬みえば、則ち百事做すべし」とは、 〔詩、秦風、黄鳥〕に「交々たる黄鳥」という。 擬 真意を

垢 。 あコかウ

異の變多きときは、則ち俗、辯に惑はさる」の解垢 は、邂逅の意。逅はうまく組合せるというほどの語 垢・垢穢のように用いる。〔荘子、胠箧〕「解垢同ある。垢を〔説文〕」三下に「濁るなり」とし、汚ある。垢を〔説文〕」三下に「濁るなり」とし、汚

垣 女のあざな

東訓』に、「絜(古帝王の名)、不死の藥を西王母に祭派」に、「絜(古帝王の名)、不死の藥を西王母に祭派 一声符は亘。姮娥は月の異名 「光髯三・『 という。〔説文〕には、この字を収めていない。 ち漢の文帝の名の恒を避けて常娥といい、また嫦娥の薬によって仙となり、月の精と化したという。の の薬によって仙となり、月の精と化したという。 請ふ。姮娥これを竊みて、 声符は亘。姮娥は月の異名。〔淮南子、 月宮に奔る」とあり、 そ

巷。 12 ちまたコウ(カウ)

部六下に属し、「里中の道なり」とし、 共にするところの意であるとするが、共は声。巷 ・の道なり」とし、その道は色い、共声。〔説文〕に字を観い、共声。〔説文〕に字を観い、 また。 正字の字形は闘に従 形声

コウ

垢

巷〔衖〕

恒(恆)

柙

洚

柙

なり」とあって、街巷をいう。風、叔于田」「巷に居人なし」の〔伝〕に「里の塗とは、その邑門の外で哭することをいう。〔詩、鄭 に従い、境界の榜示をなす意とみられ、関(邑中の境界を画定する意。璺の字は土主(土地の神)の形 道)と声義の同じ字であろう。「出でて巷に哭す」 があり、それは「立みて塞ひ、蟹を成す」とよみ、とするもので、銘末の部分に「立塞成壁」という語 の「倗生設」は、土地の境界を画定する契約を内容 儀礼を行なうところを巷と称したようである。金文 まさに出でて巷に哭せんとす」とあり、邑門の外で 上〕に「曾子、客と門側に立つ。その徒機りて出づ。たその邑の上部を略した形である。「礼記、檀弓、の篆文はその一邑を省いたもので、いまの字形はま

恒9 恆。 つコねウ

D Ē

し」とあるのがその原義である。月中の女神を恒娥加えたもので、〔詩、小雅、天保〕「月の恆るが如形声 声符は亘。重は上下二線の間に弦月の形を形 た形である。 形(恆)は弦月の形を舟の形とするが、のちの誤っ 「恆産無きときは恆心無し」の語がある。篆文の字 り」とあり、恒久の義。〔孟子、梁恵王、 といい、字はまた姮に作る。「説文」一三下に「常な 上 13

おり・とらえる・はさむコウ(カフ)

いる。 「虎兕、柙より出で、龜王 櫝中に毀る」の語があり、 〔説文〕はこの〔論語〕の文によって説解を加えて 文の字形は、牢の形に似ている。〔論語、季氏〕にである。木組みの頑丈な作りのものを柙という。古 虎兕を臧るる所以なり」とあり、猛獣を入れる檻い。 意 がある。〔説文〕六上に 刑具として用いるはさみ板を柙板という。 声符は甲。甲に匣の

洚 おおみず・くだるコウ(カウ)

形声 ざるもの」とあり、溢流するものをいう。 して降されるものである。「いれ、これも天識と來れ禹よ。洚水、予を儆む」とあり、洚水も天識と來れ禹よ。洚水、予を儆む」とあり、洚水も天識とよそ上より降るものをいう。「書、大禹謨」「帝曰く、よそ上より降るものをいう。「れれ、だっれ にいい改めている。〔説文〕二上に「水、道に遵はの文を引き、「洚水とは洪水なり」と、当時の用語 して降されるものである。〔孟子、告子、下〕にこ 声符は条。条は神霊の降る意であるが、

洪。 おおみず・おおきい・おおいに

用いる例が最も古いが、それも洪水の意から出て (幼主)を惟い水の字を用い と副詞に にのに

洸 水の光るさまコウ(クヮウ)

の汪洋として自在であることをいう。 を、〔史記〕に「その言洸、洋自恣」と形容する。そいうことがある。〔荘子〕の文の端倪しがたいことは水勢のすさまじいさま、また人のはげしい怒りを 「水涌きて光るなり」とするが、洸々 形声 声符は光。〔説文〕ニー上に

うるおう・なコウ(カフ) あまねし

に洽し」とみえる。博洽・冷聞のように用いる。また。また。また。また。また。また。また、またのは、民心がことをいう。〔書、大馬謨〕に「好生の徳、民心がことをいう。〔書、大馬謨〕に「好生の徳、民心 雅、江漢〕「この四國に治くす」とは、広く徳の及とあり、治く水がゆきわたることをいう。〔詩、大とあり、結 声符は合。〔説文〕一上に「霑ほすなり」

狡, わるがしこい・ずるいコウ(カウ)

とあり、「急就篇、注]には赤身とする。「荀子、とあり、「急就篇、注]には赤身とする。「荀子、なり。例次の地に狡犬あり、巨口にして黑身なり」 で制しがたい獣をいうが、のち人の性情の上に移し たまでである。 「説文」 - 〇上に「少狗 形声 声符は交。 交声に敏捷・別 声符は交。交声に敏捷・狡

> 移り気な男をそしる語である。 て狡譎という。〔詩、鄭風、狡童〕に歌う狡童は、

きみ・かがやく・おおきいコウ(クヮウ)

皇 ¥ T 工幕工育工局工

る。聖職者には「皇天尹大保」のように皇天尹を冠皇妣・皇考皇母」など、祖考母妣の上に冠して用い その意味では、「風俗通、皇覇」に「皇は光なり」 うものでなく、その部分は玉とその光の形である。 の形で、王位を示す玉座の儀器。鉞は刃を下部にし象形 王の上部に玉飾を加えている形。王は鉞頭 とするのが、字義に合う。もと神聖を示す儀器であ それは三皇をいうと解するのであるが、字は自に従 意があるとする。すなわちはじめて王たるもので、 「大なり」と訓し、字形を自王に従うて、自に始の 皇とはその光の皇曜たるをいう。〔説文〕 のが多い。その玉光の放射する形を加えたものが皇。 ておき、上部の銎首のところに、玉を象嵌したも

をおうなど、その例が多い。これを動詞に用いては、接す」など、その例が多い。これを動詞に用いては、辞者に事ふ」、〔師設設〕「敢て皇君の休(賜)に對なった。ない。ないない。ないない。ないない。ないないなど、 ということもあり、〔置・卣〕「進事奔走して、皇・ということもあり、〔置・卣〕「進事奔走して、皇・ということである。また現王には、はれている召公奭のことである。また現王には、はばれている召公奭のことである。また現王には、はばれている召公奭のことである。 巫は神霊のことを皇とよんだ。また「皇、魔て余を騒〕に「皇、剡々としてそれ靈を揚ぐ」とみえ、楚いてその功を賞する旌表を受けている。〔楚辞、離れて、官に各る」とあり、このとき競は、軍門んとして、官に各る」とあり、このとき競は、軍門 〔競卣〕に「伯辞父 (人名)、競 (人名) を皇かさまます。など、その例が多い。これを動詞に用いては、揚す」など、その例が多い。これを動詞に用いては、 「煌々樾々」のようにいう。〔説文〕に「大なり」と では鐘声を形容する語に「元鳴孔だ皇いなり」とかれ皇いなり」とは、祖霊の威徳をほめていう。金文和 に関していい、民間には用いない語となった。 皇々とは花の光華あるをいう。のち多く天子のこと はもと玉鉞の光耀によって神霊を示すものであった。 訓するのは、そのような形容的な語義であるが、字 の皇考の意である。〔詩、小雅、楚茨〕に「先祖こ 初度に揆る」のように、亡父を皇とよぶのは、金文 していう例があり、皇天尹大保とは、文献に君奭と

紅9 くれない・あか・べにコウ・グ

킦

経籍にはみえない字である。〔説文〕一三上に「帛の形声 声符は工。〔詩〕〔書〕〔易〕〔礼〕など古い られているのみで、古くは絳を用いたともされるが、 わち桃紅である。先秦の文献には、地名として用い 赤白色なるものなり」とあり、白味のある赤、すな

しく作られた字であろう。 絳は大赤で濃紅色をいう。 色の多様化につれて、 新

考9 としより

為常

を写る」という吉祥語に用いる。黄とは黄髪。耇 であろう。金文に「用て眉壽、黄・耇吉康ならんことであろう。金文に「用て眉壽、黄・耇吉康ならんこととをいうとするが、字は、句の声義を承けるものことをいうとするが、字は、句の声義を承けるもの 面、東黎(黒ずむ)にして垢の若し」と顔色の黎いあり、者とは老人をいう。〔説文〕ハ上に「老人のあり、者とは老人をいう。〔説文〕ハ上に「老人の いう。鮐はふぐ、ふぐのような斑点のある意である。 老・耇徳とは、老を尊んでいう。凍黎はまた耇鮐と 声符は句。句にまがったもの、句曲の義が

かりそめ・いやしくも・まことにコウ

古人がよみちがえたものであろうという。 と、古い支銘に「父の日は辛なり」とあるものを、 〔大学〕の「荷に日に新たなり」は、郭沫若による れと似た形の背は敬の初文で、異なる字である。 (一時の安らぎ)・荷誠(まこと)の意に用いる。こいう草の名とするが、字は苟且(かりそめ)・苟安いう草の名とするが、字は苟且(かりそめ)・苟安 なり」とあり、〔急 就篇〕に貞夫となり」とあり、〔急 就篇〕に貞夫と形声 声符は句。〔説文〕二下に「艸

あれる・すさむ・おおきコウ(クヮウ)

う。荒蕪・荒遠より荒淫・荒誕・荒放・荒唐など、馮る」とは、壺匏を腰舟として河を渡ることをいていた。に作る。包流とは匏虚、「包流して用て河を流」に作る。包流とは匏虚、「包流して用て河を流」に作る。包流とは匏虚 二〕「包荒」を、〔説文〕一下元字条に引いて「包 あり、八荒の意。巟が荒の初文で、〔易、泰卦、九荒という。金文の〔楚公道 鐘〕に「八巟」の語が荒という。金文の〔楚公道 鐘〕に「八巟」の語がのこともなく、荒廃の地であるから、辺への すべて生色なく、 と爲す」というのは、凶歳の意。荒遠の野には耕耨ことをいう。〔爾雅、釈天〕に「果の熟せざるを荒ことをいう。〔爾雅、釈天〕に「果の熟せざるを荒 めに多数の餓死者が出て、野にうち捨てられている とするが、ただの荒野をいう字ではなく、荒凶のた がある。〔説文〕「下に「蕪るるなり」と荒蕪の意 棄てられていることを荒といい、荒野と荒饉の意と 形声 その残骨にはなお毛髪が残っている。それが草間に 旧字は荒に作り、巟声。木は死者の象で、 無秩序な状態をいう。

虹 9

兄はその頭の形。その体は工形に反りのある形であ なり。青赤或いは白色、陰气なり」とする。卜辞になり。青赤或いは白色、陰气なり」ニー下に「屈虹という。蜆はまた霓に作り、〔説文〕ニー下に「屈虹の獣と考えられていた。その雄を虹といい、雌を蜺の獣と考えられていた。その雄を虹といい、雌を蜺り」という。 郷竦は虹。虹は古くは天界に住む竜形り」という。 郷竦は虹。虹は古くは天界に住む竜形 がそれであるとされ、霓は両頭の竜形にかかれる。 虹霓を卜する例があり、天より降って河水を飲む姿 いう。〔説文〕一三上に「蟒蟀なり。狀、蟲に似た にわたって反りのあるものを 声符は工。工は左右

> 指さす莫れ」とあり、指させば指が歪むという。わ 〔詩、鄘風、蝃蝀〕に「蝃蝀東に在り 姻錯乱し、男女の道が失われるからだともい が国でも虹に対するこのような禁忌が、種々俗信と という。また虹があらわれるのは、陰陽和せず、 のとし、〔漢書、燕王丹伝〕には下って井水を飲むる。〔釈名、釈天〕にも、虹は水気を求めて下るもる。〔をなより して伝えられている。 これを敢て

婚

郊 まちはずれ・くにざかい・まつりコウ(カウ)

礼、肆師」に「祝と畺(彊)及び郊に侯譲す」ところは、つねに祓譲して清める必要があり、「周ところは、つねに祓譲して清める必要があり、「周めや若は、のちに作られた形声の字である。境界の郊や巷は、のちに作られた形声の字である。境界の いう。金文に墾の字がみえ、巷の初文であるらしく、策、斉策〕「邯鄲の郊に軍す」の注に「境なり」と他の邑と相接するところの意であるらしく、〔戦国 みえている。 その字はまさに両邑の間を示す形で、郊と声義同じ。 〔詩、商 頌、玄鳥〕に歌われている。郊は邑外、古く迩蝶という子求めの俗があって、そのことは 文にその証がなく、秦漢以後のことであろう。ただ に出て天を祀ったことが礼書にみえるが、卜辞・金 といい、都邑の周辺の附属地である。古く天子は郊 国都の外をいう。〔国語、周語〕に「國に郊牧あり」 形声 を距ること百里を郊と爲す」とあって、 声符は交。〔説文〕六下に「國

香 9 かおり・におい・かんばしいコウ(カウ)・キョウ(キャウ)

耇 苟 荒(荒) 虹 郊 香

えず、〔玉篇〕に「倥偬、窮困なり」形声 声符は筌(空)。〔説文〕にみ

(類)は、米と犬とを焚く祭儀であった。〔詩、周また羔豚の宵香などで祀り、天を祀る祭である気 享を知るものであるから、黍稷の香、鬯酒の香、 るが、それは明徳によって裏づけられたものでなけ 馨しきに非ず。明德これ馨し」「明德以て馨香を薦粋がいて神を祀ることを示す。[左伝]僖五年「黍稷おいて神を祀ることを示す。[左伝]僖 美の字でなく、字形も曰とみるべきである。 うことが多い。 高雅な嗜みとなり、また高雅の形容に香を冠してい 供えるものには香を第一とした。のち香薫のことは ればならぬとの意である。神は馨香によってその祀 む」というのは、もと黍稷の馨香をもって神に薦め に祈るときの祝禱を収める器で、その上に黍稷を し、黍と甘との会意字とするが、甘は嵌の初文で甘会意字。〔説文〕七上に「芳なり」と 載支」「飶たる香あり」というように、廟祭に 正字は黍に従い、黍と曰との 日は神

倖 10 さいわい・しコウ(カウ) しあわせ・へつらう

詭使〕に「姦軌を行うて以て世に倖偸す」とあり、きょうな。 きょうない。 の義としての解で、本義ではない。字は「韓非子」 爲す。車駕の至る所、 幸より分化した字である。 〔荀子、王制〕には幸位・幸生を倖の意に用いる。 **倖偸とは万一の僥倖をねらう意。秦漢以後の語で、** 倖と爲す。故に幸といふなり」とするが、幸を行幸 「独断」に「世俗、幸を謂ひて僥倖と 形声 声符は幸。幸は手続の於。 民臣その德澤を被る。以て僥

> 候 10 うかがう・ものみ・まつ・ときコウ

べているのは、軍使の派遣なども、敵状の偵察をかの軍使に対して「豊敢て候人を、辱、くせんや」とのの方法であった。宣十二年の際の戦いにおいて、敵の方法であった。宣十二年ののの戦い戦いにおいて、敵の方法であった。宣十二年ののの戦い戦いにおいて、敵の方法であった。宣十二年ののの戦い戦が、まじない)をと候望・大候をなすことをいう。〔左伝〕襲十八もと候望・大候をなすことをいう。〔左伝〕襲十八もと候望・大候望・大くないるのは、軍使の派遣なども、敵状の偵察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の偵察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の偵察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の偵察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の債察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の債察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、敵状の債察をかるとはいるのは、軍使の派遣なども、 「殷の邊侯甸」の名があり、〔書、酒誥〕に外服の諸 「賓客の來るものを候迎す」るものであるが、 (たん) とことに任ずるものであった。〔大盂鼎〕 とうじょう 分ち、また気候の義となった。 思われる。候望の意より、時季の推移を七十二候に によって、 また人を加えたもので、重複の字形であるが、慣用 の義をもつもので、侯・候はもと同じ字。候は侯に ねていたのであろう。候の本義は、侯に従うて侯穰 あり」の語を加えている。[周礼、候人]の職はとし、侯声とする。[玉籥]に引いて「周禮に候人とし、侯声とする。[玉籥]に引いて「周禮に候人 ことを任務とした。〔説文〕八上に「伺望するなり」 外族の動静を候望し、これを祓禳して邪気をふせぐ 候を「侯田男衞邦伯」とよんでいる。この辺侯は、 て、その周辺部にあって外族と相対し、これを纏うちの字形では侯を用いるが、侯は古代の王朝におい 五等の侯と候望の候とが分岐したものと の初形は灰に作り、のち矦に作る。 声符は矣。矣は候の初文。 13 0

倥 10 せわしい

候は たにも、 また郭沫若は篝の形であるとするが、その上下また郭沫若は篝の形であるとするが、その形とは象る」といい、「六書品」(~1) 井 善 10 とする。 ろう。「詩、 とき、飾り紐に種々の祝紐を用いた。その結びか 冉を上下につなぐものであるが、大きな布帛とする やその重さを数える稱(称)の初文である。毒は 糸の形、これをもち上げる形は、舞、すなわち糸数右に糸が流れている。その単一の形のものは、再で織 象形 状態をいう語である。 兵馬のことにせわしく、暇のないことをいう。また とあり、行きなやむ意である。「兵馬倥偬」とは、 とを金文に婚媾というが、媾は冓に従う字。婚儀の を象徴する儀礼に用いるものと思われる。結婚のこ のでなく、おそらく組紐などを繋いで、両者の結合 の形は紡績の紡具に似ており、末端にはそれぞれ左 を組んだ形とし、「材を交積するなり。對交の形に象形 上下の組紐をつないだ形。〔説文〕四下に木 |怪||は無知なさまをいう。みな二字畳韻の連語で、 しくその縭を結ぶ」という縭なども、螭(虫の名) 吉祥を示すそれぞれの方法があったのであ *** 劉向の〔九歎〕に「愁へて山陸に倥偬す くむ・くみあわすコウ 豳風、東山」「之の子ここに歸ぐ……親なんとうぎん」

形としては、この一系の字を解することができない。 おそらく婚儀に関する字であろう。木材を交積する があり、それはこの吉祥の祝紐を拝している形で、 金文に婚媾の字を媾また遘に作る。また觀に作る字 は、婚儀のときの組紐の形で、結合を象徴するもの。 の相交わる形に結ぶ祝紐の類であろう。すなわち轟

哮 10 ほえる コウ (カウ)

な擬声音をとる語である。號(号)・鳴なども同じ。に怒るなり」とみえる。哮唬・哮吼・哮咆など、みば忽の外が声の擬声語。[玉篇] に「哮は哮赫、大い獣の叫ぶ声の擬声語。[玉篇] に「哮は哮赫、大い獣の叫ぶ声の擬声語。[玉篇] に「哮は哮赫、大い 形声 の驚く聲なり」というが、豕に限らず、 声符は孝。〔説文〕ニ上に「豕

哽10 むせぶ・どもる・ふさがるコウ(カウ)

晃 え、王の前後に祝がいて、 明帝紀〕に「祝喓前に在り、祝噎後に在り」とみれている。「祝喓前に在り、祝噎後に在り」とみときは則ち嗄がる」と梗塞の義とする。〔後漢書、ときは則ち嗄がる」と梗塞の義とする。〔それに の出ないことをいう。〔荘子、外物〕に「雑ちるる 舌の介るところと爲るなり」とあり、哽咽して声 あきらか・ひかるコウ(クヮウ) 梗塞の義がある。〔説文〕二上に「語、 声符は更。更にものの梗がる むせぶのを防いだという

のように用いる。光の限りなく輝くさまを晃々とい) る。日光の専字として作られたもので、晃耀・晃朗る。日光の専字として作られたもので、 晃耀・晃鍋 コウ に「明かなり」とあり、光明の字とす 哮 日と光とに従う。〔説文〕七上 哽

晃 校 桁

浩(浩)

旁の形に作る。 日光山を晃山ともいう。字はもと篆文のように、 い、また晃蕩という。日光を合せた字であるから、 偏

校10 かせ・ませ・まなびや・ならう・はかるコウ(カウ)・キョウ(ケウ)

加える校具をいう。字は他に校猟(かり)・比校〔上九〕「校を何ひて耳を滅す」のように首や足に意。〔易、噬嗑、初九〕「校を履みて趾を滅す」できる。ない、ないのでは、ないのようには、大口なり」とあり、囚人に加える械の文〕六上に「木口なり」とあり、囚人に加える械の文〕六上に「木口なり」とあり、囚人に加える様の 比挍す」とみえる。 はもと挍に作り、〔国語、斉語〕「民の道あるものを書・校讐という。讐とは二人相対する意。その字 合う。 を校というからであろう。異本を対校することを校 というのは、土壁をめぐらした軍営、すなわち営壘 ずれも木を交積して成るものである。また軍官を校 なる。校倉・校猟・校具は大小異なるとしても、 交に従うて木を交積する意であるから、校猟の義と をいう。[句読]にそれを虎城とよんでいる。校はの逸走するのを遮り、そのなかに獣を逐いこむ猟法 ころは校猟の校のみとなる。校猟とは木を組んで獣 (教)・學(学)の字がその初形であるから、残ると用の義であり、また学校の字は、爻に従う 教 (校正)・学校などの諸義があり、字の本義をどこに 材を井形に交積すると、 り、木を組み合せたものをいう。 声符は交。交に交積の意があ 校倉形式の建築法と 說

10 けた・ころもかけ・かせコウ(カウ)

し」の訓がある。のち算盤の位取りを桁という。 けたの意に用いる。[類聚名義抄]に「けた・なげけたの意に用いる。[類聚名義抄]に「けた・なげまた衣祈やかせの意にも用いるが、わが国では多くまた衣祈やかせの意にも用いるが、わが国では多く 大なるものは棟梁、小なるものは橡と桁とである。〔玉篇〕に「屋の桁なり」とあり、架けわたす木の〔玉篇〕 声符は行。行にならぶものの意がある。

浩 10 (浩)10 みずのゆたかなさま・ひろいコウ(カウ)

耀 alfo Oliver

浩と双声、その声義が近い。 流は流徹・莽流のように果て知れぬ水勢をいう語でするが、〔段注〕に「流なり」に改めるべしとする。て天に滔る」という。〔説文〕一上に「薨ぐ」と訓 て天に滔る」という。〔説文〕一上に「澆ぐ」と訓[書、尭典]に大洪水の状態を述べて、「浩々とし形声 声符は告(告)。告に時・誥の声がある。

烄 ひまつりコウ(カウ)

虓 \$

きは從き雨あるか」「貞ふ。姣する勿きときは、そ交脛の人を焚く形に作る。卜辞に「貞ふ。姣するといます。 れ從き雨亡からんか」とトする例があり、交脛の人 と補足する。ただ烄は経籍にみえず、 形声 くなり」とし、「玉篇」に「以て天に燎柴するなり」 声符は交。〔説文〕一〇上に「木を交へて然 ト文の字形は、

雨を祈ったという説話がある。う。殷の湯王には、久しいひでりのとき、自焚してう。殷の湯王には、久しいひでりのとき、自焚してとは足なえの巫暦。字は焚巫の俗を示すものであろとは足なえの巫暦。

打 0 おびるたま・たま

果口「皐」」」 しろい・さわ・たかい

にまた「禮に、祝りて曰く、皋」と「儀礼、土喪、礼」の文を引く。死後の復の儀礼において、復するものが一人、屋上に升って、衣をもって招き、「皋、某復れ」と三たびよぶ。それで皋に「よぶ」の意がある。その声は長く緩やかに発するので、また「緩やか」の意がある。字を沢(澤)の義に用いることは、字形からは直接に説くことはできないが、ただ皋と案とはともに獣屍の形であり、「本門」に作る。皋を沢の意に用いる関係が明らかでなく、「鶴鳴」の「九皋」の「鄭婆」に「皋とは、澤中に水の溢れ出で、坎(穴)を爲すところなり」というも、字義に適切でない。「説文」に「皋」は、「皋門の督」に作る。皋を沢の意に用いる関係が明らかでなく、「鶴鳴」の「九皋」の「鄭婆」に「皋とは、澤中に水の溢れ出で、坎(穴)を爲すところなり」というも、字義に適切でない。「説文」に「皋とは、澤中に水の溢れ出で、坎(穴)を爲すところなり」というも、字義に適切でない。「説文」「平記、武帝「皋門の督」に作る。泉を沢の意に用いる関係が明らかでなく、「鶴鳴」の「九皋」の「鄭婆」に「皋とは、澤中に水の溢れ出で、坎(穴)を爲すところなり」というも、字義に適切でない。「説文」「中記、武帝でよるものであろう。「皋白の气」とは聴・瀬の字義にあたり、湖沼にはその気がみちるものであるから、それで大沢の義となったとすれば、皋は皋白を原義とするもので、九皋の義は仮借である。は皋白を原義とするもので、九皋の義は仮借である。

本名 10 おおう・あう・なんぞ

中に血あり。上よりこれを覆ふ。覆ふものは必ず下大の聲なり」とするが声も合わず、〔段注〕に「皿に從ひ、を引きなり」と訓し、「血に從ひ、器に蓋をする形。〔説文〕五上

何・不の二音を合せて、否定を伴う語法である。血ではない。「なんぞ」と疑問詞に用いるのは仮借、倫説である。上部は鈕のある蓋の形。下は必ずしもよりも大なり。故に大に從ふ」とするが、いかにもよりも大なり。故に大に從ふ」とするが、いかにも

紘10 「紙」11 かんむりのひも・ひろい

おいまれ 作り、弘声。「説文」一三上に「冠を卷く維なり」とあり、くみひもの一端を左の「冠を卷く維なり」とあり、くみひもの一端を左のいときには、あごで結んで垂れて飾りとする。笄を用いないときには、あごで結んで垂れて飾りとする。笄を用いないときには、あごで結んで垂れて纏(首飾り)とする。紘は宏、組は弘と通用し、「淮南子、精神訓」る。紘は宏、組は弘と通用し、「淮南子、精神訓」を地の道は至紘にして大なり」のように用いる。天下を覆うことを紘覆といい、八方を八紘という。また中央を含めて八紘九野とする。「列子、湯間」にみえる語である。「八紘を掩うて字と爲さん」とにみえる語である。「八紘を掩うて字と爲さ」は同じく「文漢、呉都賦」にみえる。

羔 10 こひつじ

定まるものは美、足の跂立する形が羔である。[周適するので火に従うとする説もあるが、羊の体格のの省聲」とするが、形も声も合わない。小羊は炎にある。[説文]四上に「羊の子なり。羊に從ひ、照ある。[説文]四上に「羊の子なり。羊に從ひ、照める。[説文]四上に「羊の子なり。羊に從ひ、照める。[漢碑]には小に従う字形が

るが、羔とは別の字である。と大夫の相見の礼には、羔を贄(贈りもの)とすることをがであった。ト文に羊と山とに従う形のものはまな、岳は嶽の初文で姜姓の始祖神。字形は似ていた。岳は嶽の初文で姜姓の始祖神。字形は似ていた。千人〕の職は、祭祀に羔を供することを掌る。礼、羊人〕の職は、祭祀に羔を供することを掌る。れ、羊人〕の職は、祭祀に羔を供することを掌る。れ、羊人〕の職は、祭祀に羔を供することを掌る。れ、羊人〕の職は、祭祀に羔を供することを掌る。

会意

耳と火とに従う。耳は聖・聡の意。火をも

医多形式 阿安斯特 有名

中華 五年 時間 帶 照 有 原 原 原 原

耕口(耕)口 たがやす・ならす

耗10【耗】10 つか(カウ)・ボウ(パウ)・モウ

また。 声符は拼の省文。また毛声。 [詩、大雅、 漢文] 「下土を耗数す」のように古い例がある。 [説 文] にみえず、 [近雅、釈詁] に「減るなり」とい う。 [大戴礼、易本命] に「耗土の人は醜し」とあ り、耙上は疎薄の地。 遺棄された耕地で、野草が茂 り、地味の乏しいところ。 転じてすべてものの荒損 するをいい、 金銭を費やすことを耗財、精神を費や するをいい、金銭を費やすことを耗財、精神を費や するをいい、金銭を費やすことを耗財、精神を費や

大 10 おきらか・きょらか コウ (カウ)・ケイ

コウ

耕〔耕〕

耗[耗]

耿胱

航(抗)

虓

既にこの中正を得たり」とは、神巫がその清明の心既にこの中正を得たり」とは、神巫がその清明の心を踏を清めることである。「楚辞、離騒」「耿として「知或いは耿に作る」とあり、いずれも神事のとき、聖火によって、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」は頃に従う字で、頃は拝礼をする顕音の形。「玉篇」として「知ずいは歌に作る」とあり、いずれも神事のとき、聖火によって清める意の字である。水によるみそぎは、いまないはいまない。「とは、神巫がその清明の心にいるが、水を掲げて神を迎えるときは類による。

脱 10 ぼうこう

をえたとすることをいう。

の膀胱は正饌に加えない意である。〔高誘注〕に[淮南子、説林訓]に「旁光は俎に上らず」とは猷膀胱は〔広雅、釈親〕にみえ、字はもと旁光に作る。形声 声符は光。光にひろがるものの意がある。

ふくろ」の訓があるという。[類聚名義抄]には名 類緊抄」によると、[楊氏漢語抄]に「ゆはり名 類緊抄」に「ゆはり、 (別して)に、 (別して)になり」とあり、うすい袋状のものとする。 ほ

形声 声符は流。 亢は顔の形で、杭の正字は「説文」八下に抗に作り、「方舟なり」とする字である。 「説文」八下に抗に作り、「方舟なり」とする字である。 「説文」八下に抗に作り、「方舟なり」とする。 古くは浮梁、すなわち船橋を意味し、字も多く杭を用いた。 〔詩、衛風、河広〕「誰か河を廣しと謂ふ 一葦(草詩)もてこれを杭る」においては、動ふ 一葦(草詩)もてこれを杭る」においては、動とより航を用いる。 左思の〔呉都の賦〕に「舟航を影調に用いている。左思の〔呉都の賦〕に「舟航を影談(湖の名)に汎ぶ」の句がある。もと水をわたることをいう字であるが、いまは航空のように空を飛ぶことにも用いる。

城 0 とらのこえ・うそぶく・いかる コウ (カウ)・キョウ (ケウ)

「爾雅、釈獣」に「後蹙」というもので、[郭注] の如し」とみえ、虎の吼える声の擬声語。獅子は り」という。[詩、大雅、常武]に「概念こと城京 り」という。[詩、大雅、常武]に「概念こと城京 があり」とし、「一に曰く、師子な

に、陽嘉中、疏勒国より献じたことがみえる。に、卽ち師子なり。西域に出づ」という。〔東漢記〕に「卽ち師子なり。西域に出づ」という。〔東漢記〕

記 10 あらそう・せめる・みだれるコウ

るもの)、内に訌む」の〔鄭箋〕に「爭訟して相陷乱することをいう。〔詩、大雅、召旻〕「蟊賊(われ 工は攻の声義をとるものであろう。 入するの言なり」とみえる。内にあって相攻める意 「讃るなり」とあり、 形声 り」とあり、内証によって遺れて、気に、大力によって遺れて、「説文」三上に

貢 みつぐ・みつぎもの・たてまつるコウ

名は賜。貢とは別義の字である。 である。孔門の子貢の貢の正字は贛で、賜与の義。 貢があり、みな貢という。百工の頁するところの意 を獻ずるなり」とあり、功すなわち生 声符は工。〔説文〕 六下に「功

くだる・おりる・ふるコウ(カウ)

路路派

曽と条とに従う。曽は神の陟降する神梯の *

「祖丁を降さんか」の例がある。〔詩〕〔書〕にも降 きは、帝は田を降さざるか」、また「帝は大英(暵)に田を降すこと亡きか」「卵(犠牲を卵く)するとまた上帝が地上に災禍を下すことを卜辞に「茲の邑また上帝が地上に災禍を下すことを卜辞に「茲の邑 降ることを、〔大豊設〕に「王、天室に祀る。降る ようになって、「大保殿」「王、征命を大保(召公)わゆる天命の思想である。神の権威が王に移される には降神の儀礼を行ない、「楚辞、九歌、湘夫人」の字はその義に用いるのが本義であり、祭祀のとき 辞に「貞ふ。唐(湯)よりして吿るに、降らんか」、がある。古くは祖霊が自ら降格すると考えられ、ト 喪を四國に降す」、「師詢設」「天、疾畏降喪」の語言。……余に多福を降す」、「禹鼎」「用て天、奕在り。……余に多福を降す」、「禹鼎」「用て天、奕を高。金文では「宗商」を関す、「先王それ嚴として上には、それ降すことありてそれ雨ふるか」とトしてい うにいう。降雨も帝意によるものとされ、「茲の雲を降さざるか」「貞ふ。疾を降すこと勿きか」のよ 理に合わない。〔書、多士〕「これ帝、降格す」といそれで止(あし)を並べないでしるすというのは、 形。

*
は歩の倒文で、歩は陟る、奉は降るときの左

** に降す」という。また儀礼が終って、その聖所より 縢〕「天の降せる寶命を墜すこと無かれ」とは、 の子孫として地上に降されたことをいい、〔書、金に「維嶽、神を降す」とは、姜姓四国が、嶽神伯昊 うように、降格するものは上帝であり、神霊である。 り」「相承けて敢て並ばざるなり」と降服の意とし、 「帝子、北渚に降る」と歌う。〔詩、大雅、崧高〕 (説文) 五下に夅を正字として、「夅は服な

> う降服の義は、春秋期以後のものに用例がある。 思う人に觀うて心のやすらぐをいう。「説文」の 草虫〕に「亦旣に觏ひ善我が心則ち降る」キャッタッ。のち心の安らぐことをいい、〔詩、という。のち心の安らぐことをいい、〔詩、 我が心則ち降る」とは、 召南、

高 10 たかい・とうとい・すぐれるコウ(カウ)

高 商 0 **高高**

(獣などを殴って祓う)のことがしるされている。 呪禁とする)や侯穰の礼がみえ、〔司市〕にも鞭度 〔犬人〕などにも、疈 辜(獣皮を披いて城門に張り、 れた。〔周礼、大宗伯〕をはじめ、〔小子〕〔羊人〕あるから、そこで悪邪を祓う侯、禳の儀礼が行なわあるから、そこで悪邪を祓う侯、禳の儀礼が行なわ ろにおいて祝禱を加える。門は内外を分つところで 楼観の形で、京や亭の形と同じく、その門闕のとこ 同意なり」と口を建物の形と解するが、卜文・金文 門。口は当、祝禱を収める器の形。 会意 を行なう意であることを示している。上部は望楼・ の字形は口に従うており、そこで祝禱や盟誓・呪詛 し、「臺觀の高き形に象り、□・口に從ふ。倉舎となる。 なうことをいう。〔説文〕五下に「紫きなり」と訓 の遺棄屍体を収めて、これを塗りこんだアーチ状の 京の省文と口とに従う。京は凱旋門。戦場 そこで祝禱を行

大路 給 关升 高の図象

尚・高貴の意となり、人を尊ぶときにそえる語となより以上の人を高祖・高祖妣のようにいう。また高 る。高楼・高門の意から、すべて高大なものをいう。 と祖霊の徳をほめる語となる。卜文・金文では、祖 ら高明の意となり、〔秦公殷〕「高弘にして慶あり」 ので、高大の意となり、神の近づくところであるか には、暫く下して以て牛馬を驚かす」のであるといいまで、まさに入るべからざるに入らんと欲する者を懸け、まさに入るべからざるに入らんと欲する者 〔説文〕 殳部三下殺字条に「城郭市里に、高く羊皮 高大な門闕においてそれらのことが行なわれる

婞 ¹¹ したしむ・もとるコウ(カウ)・ケイ

ったのはのちの義で、漢以後にその例がある。が婞の本義であろう。幸を天子の行為に用いるに至 めていない。また親幸・嬖幸の義にも用いる。それ 引く。その義はまた悻に作るが、〔説文〕に悻を収 「鯀(禹の父)婞直にして以て身を亡ぼす」の句をは、「復るなり」と訓し、〔楚辞、離騒〕 形声 声符は幸。〔説文〕一三下に

寇 あだする。せめいる。かたきコウ

爾 0

為であろう。〔説文〕=下に「暴なり」と訓するも、 の前で殴つのは、外賊に対する呪的な意味をもつ行 は虜囚として廟中に連行されたもの。これを祖霊元は結髪している人で、元服の式を冠という。寇元は 会意 完と支とに従う。完は廟中に 人のある形。

だ康しむこと無かれ」の句がある。廟中の康楽をいう。〔詩、唐風、蟋蟀〕に「はなは え、康静の語がある。また金文に帰に作る字があり じ能む」、「師詢毀」「民、康靜ならざる亡し」とみ 薡 康は脱穀精白の意である。〔説文〕にこの字なく、会意 庚と米とに従う。庚は午(杵)を奉ずる形会意 康 年「凡そ兵、内に作るを亂と爲し、外におけるを寇 を の臣十夫と、晉の系十秭(穀量の名)を寇れり」と の臣十夫と、晉の系十秭(穀量の名)を寇れり」と といい、[晉鼎] に「昔、饑蔵に、[雲] といい、[晉鼎] に「昔、饑蔵に、[雲] 司敗といったが、敗に灋(法)の意があり、司寇のなったものをいう。春秋期の楚では、司寇のことをなったものをいう。春秋期の楚では、司寇のことをなったものをいう。 と爲す」というように、外寇を意味する字である。 ころで、財物を掠取することをも寇による寇略のみでなく、財物を掠取することをも寇 寇にも糾察の意があって、相通ずるのである。武力 とするが、この字形中の完は、首を全うして虜囚と〔説文〕に、「その完、聚するに當りて亦これを寇つ」ただの暴力行為ではない。〔意歌音義〕などに引くただの暴力行為ではない。〔意歌音義〕などに引く やすらか・たのしむコウ(カウ) 漸漸漸

悾 まこと

> あろう。〔篆韻譜〕に篆字を録している。 くては話にならぬとの意。空に虚心の意を含む字で にみえるものには信がとりえであるから、それがな ること。狂には直、侗には愿がとりえで、正直そう すなわち処置なしという。悾々はまことらしくみえ む)ならざる」ものと合せて、「吾はこれを知らず」、 を「狂にして直ならず、侗(おろか)にして愿(謹竹」に「怪々として信ならざるもの」を「いる」を「ならざるもの」を「ならざる」を「いる」を「なっている」を「なっている」を「なっている」を「なっている」を

控" (控)11 ひく・つげる・ひかえるコウ

とをいう。 という。わが国では人を待ち、またものに備えるこ の頤を控つ」という。赴き訴えることを控告・控訴 する大儒小儒が、死者の口中の珠をとるために「そ 赴告する意であろう。〔荘子、外物〕に、墓盗人をいい、〔詩、鄘風、載馳〕「大邦に控ぐ」とは、馬で いい、〔詩、鄘風、載馳〕「大邦に控ぐ」とは、馬でと、また矢の落ちることをいう。馬を控くことにもと、また矢の落ちることをいう。馬を控くことにも 上に「引くなり」とあり、 形声 声符は空(空)。〔説文〕一二 弓を引くこ

梗坦 やまにれ・あらいコウ(カウ)

枌楡、すなわち山にれであるという。棘のある木で きなり」とする。木名としては、「説文」六上に山 頌〕に「梗としてそれ理あり」とあり、注に「強 魚骨を鯁、つるべ縄を綆という。〔楚辞、 膤 形声 `るべ縄を綆という。[楚辞、九章、橘*うち固める意のある字で、石には硬、 声符は更。更はものを打って

コウ

はまた鯁直に作る。

滑 11 みだす・にごる

である意。これを撃って煮こみ、食事に供するを発う。水によってかきまぜた状態となることを淆雑・う。水によってかきまぜた状態となることを淆雑・ない。これを撃って煮こみ、食事に供するを発きいる。 本によってかきまぜた状態となることを済雑・る意という。

較 1 あきらか・しろい・きよい コウ(カウ)・キョウ(ケウ)

金11 ぽたん・さわぐ

は亦聲」とするが、叩いてへりを作りかざる意である。 「金もて器口を飾る。金口に從ふ。口と 形声 声符はい。〔説文〕一四上に

黄川「青」2 き・きいろ・きばむ コウ (クヮウ)・オウ (ワウ)

· 黄黄 黄鱼小

象形 ト文の形は火矢の形にみえ、金文の字形は (風玉の衡の形のようである。字に両系があるらしく (風玉の衡の形のようである。字に両系があるらしく 事」にいう黄矢の象で、黄とはその火光をいう字で 動る。また金文の字形は佩玉の金体形で、佩玉を金 ある。また金文の字形は佩玉の金体形で、佩玉を金 たるが、その玉 というに近いものであろう。「説文」 ニードは五行説 の・米衡・幽衡というときの衡にあたるが、その玉 というに近れるのである。字に両系があるらしく というに近れるのである。字に両系があるらしく というにいるの形は火矢の形にみえ、金文の字形は をもって説き、「地の色なり」と土色とし、字形を をもって説き、「地の色なり」と土色とし、字形を



「田に從ひ艾に從ふ。 英は古文光なり」、すなわち田の色にして土色であるとする。また光の亦声とするが、字の初形からいえば火矢、すなわち黄矢の形が、字の初形からいえば火矢、すなわち黄矢の形、〔詩、周南、巻耳〕に「現が馬玄黃」、「小雅、「詩、周南、巻耳」に「我が馬玄黃」、「小雅、「草木黄」に「何の草か玄まざる」のようにいてすえるという考えかたは、すべて五行思想以来のものである。田斉の器には黄帝を高祖とし、田氏をその子孫とする語がある。金文の字形は佩玉の全形から出ているが、洛陽金村(種図)や輝県から出土した遺品の遺制から考えると、まさにその形と一致ものである。田斉の器には黄帝を高祖とし、田氏をその子孫とする語がある。金文の字形は佩玉の全形から出ているが、洛陽金村(種図)や輝県から出土した遺品の遺制から考えると、まさにその形と一致ものである。これを帯に佩びた形が、金文の黄の字となる。古るの色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、〔書、牧誓〕「王、左に、黄金の色がこれに近く、「書、牧誓」「日本のおり」は、大田という。

傚 12 コウ (カウ)

微はその繁文として作られた字である。 、「玉篇」に「學做なり」とみえ、學(学)がある。〔玉篇〕に「學做なり」とみえ、學(学)がある。〔玉篇〕に「學做なり」とみえ、學(学)がある。〔玉篇〕に「學做なり」とみえ、學(学)がある。「玉篇」に「學做なり」とみえ、學(学)がある。「大師文(ならう)の意

形声 声符は候。〔説文〕二上に「咽 は嘘ぶ声、喉は咽喉のなる声を写した擬声的な語 であろう。狭くして切要のところであるから、その 地を制することを「その咽喉を扼す」という。〔詩、 地を制することを「その咽喉を扼す」という。〔詩、 大雅、派民〕に「王命を出納し、王の喉舌となる」 大雅、派民〕に「王命を出納し、王の喉舌となる」 とあり、それは宰相たるものの任務であるから、宰 はない。 とあり、それは宰相たるものの任務であるから、客

喤 12 こどものなくこえ

明生 形声 声符は望。〔詩、小雅、斯干〕 「小兒の聲なり」とし、この字の前後に呱・啾・喧「小兒の聲なり」とし、この字の前後に呱・啾・喧响語字を列し、小児の声であるとしている。みな擬の語字を列し、小児の声であるとしている。みな擬の語で、呱・喤は生れおちたときの第一声を写した

徨 12 コウ (クヮウ)

惶 12 おそれる・にわか

ルー 形声 声符は皇。〔説文〕一〇下には恐惶・頓首・死罪などの語をそえたものであった。は恐惶・頓首・死罪などの語があり、同なその意の連語。皇に遑・惶などの意があり、同なその意の連語。皇に遑・惶などの意があり、同なとしない。

慌 2 【慌】12 くらい・あわてる

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

近世語として用いられる。

入行 1 まじる・みだれる

会意 肴ととに従う。肴はその殴つ対象を示したものである。 (骨) と肉の形で骨つき肉。殳はもと声義同じく、通用する。〔説文〕三下に「相雑錯と声義同じく、通用する。〔説文〕三下に「相雑錯さの形に作り、肴を殴って砕きまぜる意を示す。肴なるの形で骨つき肉。殳はもとなの形に作り、肴を殴って砕きまぜる意を示したものである。

港12【港】12 みなと カウ)

あった。笛声の谷にひびきわたるのを港洞という。巷の声義を承ける。水の分流する河口が舟着き場で

猴 12 コウ

下声 声符は侯。〔説文〕一〇上に 「爨なり」、また甕字条玉下に「貪獣なり。一に曰く、母猴なり」という。この母猴が彌り。一に曰く、母猴なり」という。この母猴が彌り。一に曰く、母猴なり」という。この母猴が彌かった後孫といい、夔は孫と声が近い。楚の人が礼容なくして衣冠を服することを罵って沐猴冠といい、老されて大流記を服することを罵って沐猴冠といい、老されている。またとしなくして衣冠を服することを罵って沐猴冠といい、老されている。

皓 12 (皓) 12 コウ (カウ)

老人を皓首・皓髪という。 老人を皓首・皓髪という。

便 12 かたい・つよい

俗の語に対して、硬骨の言をいう。

がい、人に及ぼして硬骨・硬漢という。硬語とは世いい、人に及ぼして硬骨・硬漢という。硬語とは世いい、人に及ぼして硬骨・硬漢という。硬語とは世い、人に及ばして硬骨・硬はものを打ってうち固める意

喤

徨

12 あなぐら・あな・ふかいコウ(カウ)

ものを窘という。〔礼記、月令〕に「竇窖を穿つ」穀類を蔵する土坑をいう。まるいものを覧、方形の とあり、古くから儲蔵法として利用された。 穴蔵の意。〔説文〕七下に「地の藏なり」とあって、 井形に組んだものの意がある。井形の形声 声符は告(告)。告には椎、 声符は告(告)。告には梏、

絞 12 くびる・しめる・きびしいコウ(カウ)

う。〔説文〕一〇下に「縊るなり。交糸に従ふ」と会 字を絞り染のように用いる。 るときにも麻などの縄帯を用いた。わが国ではこの び締める意。人を縊殺することを絞といい、絞首と 意に解するが、亦声とすべき字である。縊は糸を結 いう。死者を葬るとき絞帯を葬衣に施し、喪に服す 形で、すべてものの交叉するさまをい 形声 声符は交。交は人が足を組む

絳 12 あか (カウ)

終ると絳帳を開いて、後ろの女楽を楽しんだというの馬融が高堂に坐し、絳帳を後ろに垂れて教授し、淡いものは朱紅。絳帳とは学者の講席をいう。後漢淡いものは朱紅。絳帳とは学者の講席をいう。後漢といふ」とみえる。紅は紅紫、絳は大紅、色のややといふ」とみえる。紅は紅紫、絳は大紅、色のやや また纁ともいう。〔広雅、釈器〕に「纁、これを絳 「大赤なり」とあって、濃い赤をいう。 声符は番。〔説文〕一三上に

腔 12 うつろ・からだコウ(カウ)

をいう。〔近思録、道体〕に「滿腔子、これ惻隱の「内空なるものなり」とあり、体内の空洞のところ 心」とあり、心の限りを尽すことを満腔子という。 いま満腔の語を用いる。 形声 空洞の意がある。〔説文新附〕四下に 声符は空(空)。空に空虚、

蛟 みずち コウ(カウ)

二竜の相交わる形である。字は交の声義を承ける。 るのは、壺が水器であるからであろう。その文様は 類の王とされる。〔頌壺〕などに華麗な蛟竜文を飾

蛤 12 はまぐりコウ(カフ)

ところと文に小異がある。服翼は蝙蝠で、三種の蛤を加えているが、「爾雅、釈魚」の「釈文」に引く名復累、老服翼の化する所なり」という奇怪な解説ない。、又いふ。百歳の燕の化する所なり。魁蛤、一十歳にして化して蛤と爲る。秦にはこれを牡鹿と謂千歳にして化して蛤と爲る。秦にはこれを牡鹿と謂千歳にして化して蛤と爲る。秦にはこれを牡鹿と謂 髩 とは千歳雀・百歳燕・老蝙蝠である。燕雀化生のこ とをいう文献は甚だ多いが、そういう伝承があった 「蜃の屬なり。三ありてみな海に生ず。 声符は合。〔説文〕 - 三上に

> 老雀群りて海に入り、仍りに奮ひて出づ。三出三入 渡り鳥の神秘を物語化したものであろう。蛤粉はご 伝えている。鳥が海に入って貝となるという話は、 海を距ること百里にして遙かなり。聞く深秋の時、 のであろう。清の王筠の「説文釈例」に、「吾が家、 ふん。その殼を粉にしたものである。 し、化して蛤と爲る」という話を、まことしやかに

隍 12 からほりコウ(クヮウ)

じまり、隋唐のころより盛行し、唐宋の詩文に、多のちその城隍を祀ることが行なわれた。六朝には くその祭祀のことがみえている。 〔爾雅、釈詁〕に「虚なり」と訓するのもその意。 ****を隍といふ」とあって、いわゆるからほりである。を整といふ」とあって、いわゆるからほりである。水無 声符は皇。〔説文〕一四下

項 うなじ・おおきいコウ(カウ)

強項侯の名を賜うた。 されたが屈せず、伏謝を拒んだので、 されたが屈せず、伏謝を拒んだので、 がの令となり、朝陽公主の象僮の不法を収めて、だ。 の令となり、朝陽公主の家僮の不法を収めて、光分、項は後ろの骨の部分である。後漢の董宣は洛陽か、項は後ろの骨の部分である。後漢の董宣は洛陽が、項は後、頭下」とあり、頸は前方の頸脈のある部では、 なり」 とあって、うなじをいう。〔急 就篇、注〕支柱のある形。〔説文〕九上に「頭後 形声 声符は工。工は上下を支える

嗥 13 [嘷]15 なく・さけぶコウ(カウ)

声をいう。皋の声義を承ける字である。 発する声である。〔説文〕ニ上に「咆ゆるなり」と 獣の遠吠えの声をいう。高く澄んだ、よく透る び返す復の儀礼において、復する者が 声符は皋。皋は死者の魂をよ

媾 したしむ・あうコウ

数 基

幌 (赤黒い色) の東帛と儷皮(一対の鹿皮)とを用い(赤黒い色)の東帛と儷皮(一対の鹿皮)のとき、玄纁(赤黒い色) の東帛と儷皮(一対の鹿皮)とを用いて、また、とするが、結婚を象徴する飾り紐を結ぶ形。 [鉄たいとするが、結婚を象徴する飾り紐を結ぶ形。 [鉄たい るが、東帛は両端より巻いて一両二巻とする定めで ある。この束帛の制が、古い冓のなごりであろう。 た婚遘に作る。犇を〔説文〕四下に材を交積する形 る説がある。婚媾の語は金文にも多くみえ、字はま 古い時代の奪略結婚を歌う歌謡の遺文であろうとす を「馬に乘ること班如たり、泣血捷如たり。 寇するにと班如たり」につづくもので、その〔上九〕にまたと班如たり 二〕の爻辞を引く。その文は「屯如たり、適如たするに匪ず、婚遘せんとするなり」と〔屯卦、六〕。 と班如たり」につづくもので、 り(馬を乗りまわして進みかねる形)、馬に乗るこ この象徴的な方法によって、両者の結合を示す。 婚遘せんとするなり」とあり、これらの句は、 かみつつみ・ほろコウ(クヮウ) 声符は犇。 構は同形の飾り紐をつなぐ形。

とはできぬという喩えである。 空間を、 熊 歌 13 するもので、幌とは異なる。鳥の脇羽根をほろはと き背にかける大きな布で、流れ矢をふせぎ、標識と 覆うためのものである。国語のほろは、いくさのと みえる。車の上に張ったものはほろ。すべて日光を いい、矢羽などに用いる。 る。またとばりをいい、〔玉篇〕に「帷幔なり」と 廓覆するもの」とあり、それを斉では幌というとす ゆみをはる・やごろコウ 声符は晃。〔釈 名、釈首飾〕に「髪の上を 形声 一二下に「弩を張るなり」とあり、 声符は彀。嗀は空殼。〔説文〕

穀率を易へず」とは、真理を人によって加減するこに「羿(弓の名手と伝える神) は拙射のためにその きしぼって矢を放つことをいう。弓の満を引く弧の 彀と称したのであろう。[孟子、尽心、上] . 31

溘 13 にわかに・すみやかコウ(カフ)

盗死・溘逝・溘焉のように用いる。このような副詞にすとも 余この態を爲すにそて、 あるからであろう。 隘 亡すとも、余この態を爲すに忍びざるなり」という。である意。〔楚辞、離騷〕に、「溘かに死して以て流 を辞、離騒〕に、「溘かに死して以て流に「竜忽なり」とあり、ことの速やかに「竜彩 形声 ,声符は盍。〔説文新附〕二上

溝13 (溝)13 みコぞウ

> 梁 恵王、下」「老弱は溝壑に轉ず」のように溝壑と 老いて子無し。溝壑に擠つることを知る」、〔孟子、老いて子無し。溝壑に擠つることを知る」、〔孟子、川は自然の溝であるから、〔左伝〕昭十三年「小人 て隔絶するので溝絶といい、城池を溝池という。谷 路である。陵墓のような重要な聖地には、溝を掘っ は、溝湾みな盈つ」とあっていずれも灌漑用の水いう。〔孟子、離婁、下〕「七八月の閒、雨集るときいう。〔孟子、離婁、下〕「七八月の閒、雨集るとき 〔周礼、匠人〕に「十夫ごとに溝あり」とあり、井いらに「水瀆なり。廣さ四尺、深さ四尺」という。 いう。貧窮の死者は、溝壑に遺棄されたのである。 田の周囲をめぐる水路、その深広二仞のものを澮となる。 、二者相遘通する意がある。 〔説文〕 -旧字は溝に作り、冓声。 毒に

煌 ¹³ かがやくコウ(クヮウ)

「光明なり」とあり、 られた。〔説文〕一〇上に「輝くなり」、〔玉篇〕 られた。〔説文〕一〇上に「輝くなり」、〔玉篇〕に三皇・皇帝の義に専用するに及んで、煌輝の字が作 の玉光の輝くさまをいう字で、皇が煌の初文。皇を される玉城の上部に玉飾を加え、 きらめくような輝きをいう。 声符は皇。皇は王位の儀器と

綆 つるべなわつか(カウ)

龗 形声 む綆なり」とあり、つるべ縄。声符は更。〔説文〕 | 三上に

「推南子、説林訓」にみえる。 (推南子、説林訓」にみえる。 (本など ばんてん) になえる。

觥 13 [觸] 19 コウ (クヮウ)

(説文)四下に横を正字とし、「兕牛の角、以て飲むごまをいう語であるが、横の形状の勁健のさまをいうものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼うものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼うものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼うものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼うものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼うものであろう。〔詩、周南、巻耳〕に「我姑く彼がにいるが、自名の器もなく、古名であるか否かを確かめがたい。〔国語、越語〕「觥飯は壺燈に及ばず」の注に、觥飯を盛饌大飯の意とするが、光・黄は同声、橋の上で精品というべきものが多い。光・黄は同声、筒吹び〕に黄の古文に光に従う形のものがある。

記 はじ・ののしる

「曹人、これを詬る」とあり、〔礼記、儒行〕に「今 「東八年「晉の詬を以てこれに語る」、哀八年 「家詬なり」とあり、また談字条に「謑詬、恥なに「謑詬なり」とあり、また談字条に「謑詬、恥なに「謑詬、恥な」とあり、「れご語」である。〔説文〕三上

怒・詬疾のように、罵詈詬辱の意に用いる。するのは、漢以後のことである。詬恥・詬譽・詬とは、儒とよぶことが詬罵を意味した。謑詬を連言衆人の儒に命づくるや妄、常に儒を以て相詬病す。

追 13 いとま・いそがしい

鉤 13 かぎ・はり

をし、句の亦声とする。「説文」一四上に「曲鉤なり」
とし、句の亦声とする。手かぎ、釣針・革止め・鎌とし、句の亦声とする。手かぎ、釣針・革止め・鎌とし、句の亦声とする。手かぎ、釣針・革止め・鎌といる。「易、繋辞、上」に「深きを鉤沈という」である。「説文」一四上に「曲鉤なり」

鉱 13 【鑛】23 【磺】17 あらがね

ており、黄の声義を承ける。字となった。磺はその樸石、黄色の土塊の状をなし

間3 すいもん・ひのくち

形声 声符は甲。甲は押・柙の従う れを閉塞する意がある。〔説文〕 二上に「門を開閉れを閉塞する意がある。〔説文〕 二上に「門を開閉れを閉塞する意がある。〔説文〕 二上に「門を開閉が、字は水門の意に用い、それが字の本義であろう。水運漕艇のことが盛んとなるに及び、閘官をおいて水運漕艇のことが盛んとなるに及び、閘官をおいて、これで削を管理させた。

慷14 「炕」7 なげく・いきどおる・たかぶる

記 4 うつ・たたく

なり」と訓し、高声とするが、屍体を撃つことは、 をもつ行為である。〔説文〕三下に「横さまに擿つ となる意で、屍骨の象、その上体を存する形である。 となる意で、屍骨の象、その上体を存する形である。 となる意で、屍骨の象、その上体を存する形である。

たとえば放・敖・敷・黴・、微・ど、みな共感呪術的な呪儀としてなされるものであり、敲にもそのう字に作り、熟は頭顱(されこうべ)を敲つ字。のう字に作り、熟は頭顱(されこうべ)を敲つ字。のち字の初義は忘れられ、談がは罪人をうつ短杖、まち字の初義は忘れられ、談がは罪人をうつ短杖、まち字の初義は忘れられ、談がは罪人をうつ短杖、まち門を敲いて人を訪う意などに用いる。推敲は詩句の用字を検討すること。また敲詩は詩謎の一で、詩中の一字を伏せて当てさせる遊戯をいう。

昌 4 コウ(カウ)

稿 14 「東」14 コウ (カウ)

全原 形声 声符は高。高は白骨化した屍もいう。〔説文〕六上に栗を正字とし、「木枯るるなもいう。〔説文〕六上に栗を正字とし、「木枯るるなは屍骸の意。〔礼記、曲礼、下〕に、神に供える乾は屍骸の意。〔礼記、曲礼、下〕に、神に供える乾は屍骸の意。〔礼記、曲礼、下〕に、神に供える乾は屍骸の意。〔礼記、曲礼、下〕に、神に供える乾は屍骸の意という。離露・蒿里の蒿は墓地。屍骨を槁くをれを葬るのを楽葬というのは蒿と同義。この系統の高と、軍門における呪儀を示す高亭の高とは、系統の高と、軍門における呪儀を示す高亭の高とは、

構は「構」は、かまえる・しくむ・つくる

古阿 1 あたまをうつ・たたく コウ (カウ)・カク

ている。ただ殳部の字には殿・段・段・殺など、 用の字とするが、毃は誤字、経籍には多く敲を用い 呪詛を加える呪儀をいう。〔正字通〕に敲・毃を通 この字には「頭を擊つなり」とする。訓義はこの方 とし、毃を誤字とすべきであるが、「説文」三下は など、本来支に従うべき字を、誤って殳部に属して の殳部の字には殿(殴)・殿・殿・段・骰・毅・毅・ 衆に作る字が正しく、毃は誤った字形である。〔説文〕 **殳は兵器で、ものを殴つべきものではないから、敲いに擿つなり」とあって、枯槁した人骨を殴つ形。** 高に従う。〔説文〕支部三下に敲の字があり、「横さ に従う慣用をもつものが多い。 がよく、枯骨の頭を殴って、その呪霊によって他に いる例が多い。従ってこの字についても、敲を正字 鹟 会意 枯槁した人骨。蒿・薨・槁はみなその 高と殳とに従う。高は死して

偏4 あつい・やく・きびしい

形声 声符は高。高は屍骨の象である高の声義を承けるものである。 では屍骨を焼く意。コク・カクの声はその焼きが、字は屍骨を焼く意。コク・カクの声はその焼きが、字は屍骨を焼く意。コク・カクの声はその焼きが、字は屍骨を焼く意。コク・カクの声はその焼きが、字は屍骨を洗しい。高、高は屍骨の形。

14 コウ(カウ)

形声 声符は高。高に軍門と屍骨の両系の字があり、犒の従うところは、おそらく軍門の意であろう。 「軍事にはその犒牛を供すしな」、「周礼、牛人」「電」とあり、「淮南子、氾論訓、注」に「その枯ることをいう。「淮南子、氾論訓、注」に「その枯高に供するなり」と、高を枯槁の意に解するが、高は京と同じく軍門の象であろう。「広雅、釈詁」に「学ぶなり」とみえ、師を労うことをいう。

| さわ・たかい・陰丸 コウ(カウ)

であろう。獣の牡器は、鍋・屬(属)においては、ので、字の上部は陰嚢の象形、他は獣屍の形ともみられ、また幸声に用いたともみられる。字に三義あられ、また幸声に用いたともみられる。字に三義あられ、また幸声に開いたともみられる。字に三義あられ、また幸声に開いたともみられる。字に三義あられ、また幸声に開いたともみられる。字に三義ので、字の上部は発達の象形、色は獣魔の解して考えるべき字であろう。獣の牡器は、鍋・屬(属)においては、形声 声符は幸。古い字形がなく、いまの字形に形声

コウ

虫形の部分がそれである。

綱 つな (カウ)

張る意であろう。 本にあるもの、紀綱をいう。その要項を綱要・綱目 大雅、巻阿〕「四方、綱と爲す」のように秩序の基 「網の綱に在りて、條ありて紊れざるが如し」、〔詩、一三上に「网の 紘 なり」という。〔書、般庚、上〕ある。綱はその声義をとるものであろう。〔説文〕 という。古文の字形は木と糸とに従い、綱を繋げて 高熱が加えられて剛強の意が 声符は岡。 岡は鋳型

膏 あぶら コウ(カウ)

A PL

伝〕成十年、病が二豎子となり、肓の上、霄の下に脂、膏は膏油。骨肉の間にあるあぶらをいう。〔左 祝禱と肉をおく形の字がみえるが、別義の字である。 するが、〔段注〕に脂の誤りであるという。脂は凝形するが、〔段注〕に脂の誤りであるという。脂は凝り、と の脂膏をいうのであろう。卜文・金文に高亭の下に は横隔膜のことで、この条の膏も、そのような腹部 かくれこんで不治の疾をなしたという話がある。膏

高 14 はかば・よもぎコウ(カウ)

為 為

> の古楽府である〔薤露〕〔蒿里〕はその送葬曲であその地を蒿里といった。すなわち墓域のことで、漢 することがみえる。
>
> 高里は近郊に営まれる定めであ ものであろう。「周礼、載師、注」に蒿と郊と通用明らかに高亭の形に従うており、蒿里の里門を示す明らかに高亭の形に従うており、蒿里の里門を示す る。高には屍骨の意もあるが、卜文・金文の字形は も死者を葬るための建造物で、これを近郊に立て、 を塗りこんだ門で、軍礼に用いるものであるが、 加えている。京は戦場の遺棄屍体をあつめて、これ アーチの形に作り、高は門下に祝禱の器であるJbをるす。その建物は京の字形と近く、京の字形は両門 文・金文にみえ、その字は草間に高亭の高の形をし 下に、「かわらにんじん」であるという。字はト 鳴の帯を食む」とあるものは草名。〔説文〕一形声の帯を食む」とあるものは草名。〔説文〕「晩々たる鹿 った。墓地にはのち桓表のような表木を樹てた。 高

誥 14 つげるコウ(カウ)

龌 再至恐

二公は当時の聖職者であった。もと祝禱に対して、 小子に誥教す、〔召誥〕「庶殷とその御事とに誥告は上より下に告げることをいう。〔書、酒誥」「文王、意。〔説文〕三上に「告ぐるなり」とあるが、誥と 形声 ものであるが、「五誥」の誥命者は周公と召公で、 す」など、誥命・誥教をいう。のち王者の誥命布告 の文体をいう。〔書、周書、五誥〕がその最も古い 声符は苦(告)。告はもと神に告げて祈る

> 遘 14 神の告げるものが誥であったと思われる。 あう・ゆきあうコウ

1¥ 1¥ * A A 獲養 X

婚儀を象徴するものであるから、その意が原義。こ 〔敝鋒〕に「ここに王の休(賜)に遘ふ」のほか、「遇なり」とあり、遭遇の意とするが、金文では れを遭遇の意に用いるのは、引伸義である。 多くは「婚遘」、すなわち婚媾の意に用いる。冓は 下に「遇なり」、遇字条に「逢ふなり」、逢字条に 者の結合を象徴する結び紐の形である。〔説文〕 声符は冓。冓は婚媾(結婚)のように、両

酵 14 さけのもとコウ(カウ)

醸熟してあわ立つことを、また酵という。 酒母をいう。これによって醱酵作用をおこす。その 声符は孝。〔玉篇〕に「酒酵なり」とあり、

閤 14 宮中の小門・くぐりど・ねやコウ(カフ)

睯 鏡〕のはじめに、むかし物語する老翁たちが、 書を呈するときには閣下と称した。わが国では「大 三公に東南西の三閣があり、相呼んで閣老といい、 なり」とあって小さな門、また小鼠をいう。むかし 形声 戸をいう。〔説文〕 二上に「門旁の戶 声符は合。大門の旁のくぐり たが

いに「閤下はいかに」という挨拶をしている。

稿 〔稟〕15 むぎわら・したがきコウ(カウ)

らを棄といい、「周礼、栗人」は弓箭のことを掌る。ものを、栗という。栗砧はわらをうつ砧、またやがものを、栗という。栗砧はわらをうつ砧、またやが 以後の用法である。 という。禾藁の散乱するさまに似ているからで、漢のち多く稿の字を用い、走り書きのものを稿・草稿 に「禾莖なり」とみえる。その枯槁して光沢のある 七上に稾を正字とし「 稈 なり」とあり、前条の稈な上に稾を正字とし「 稈 なり」とあり、前条の稈です。 形声 声符は高。高は屍骨の形で、 なり」とあり、前条の程

篁 15 たかむら・たけやぶコウ(クヮウ)

竹渓の六逸など、竹林の高士の話を伝えるものが多 朝以後、その風韻を愛する風が起り、竹林の七賢、 ず」とあり、幽篁は山鬼の住むところとされた。六ず」とあり、幽篁は山鬼の住むところとされた。六九歌、山鬼〕に「余、幽 篁に處りて「終に天を見 九歌、山鬼」に「余、幽篁に處りてない。 田なり」とあり、藪を また竹譜の類も作られている。 ごとあり、藪をいう。 〔楚辞、声符は皇。 〔説文〕 五上に「竹

膠 にかわ(カウ)

堅固の意に用いる。膠漆は附着力の最も強いもので、 る。〔詩、小雅、隰・桑」。「徳音孔だ膠し」のように、を作るに皮を以てす」とあり、獣の皮角をもって作 ある。〔説文〕四下に「昵なり。これ形声 声符は翏。翏に塚。樛の声が

稿(稟)

篁

膠

嚆

穅

篝

縞

興

義の多い字であるが、膠糾通用の例があり、糾す古代の遺品にこれを用いているものが多い。翏は声 なわち交加の意をもつようである。

賡 つぐ・つぐなうコウ(カウ)

〔賡載歌〕のほかに用例がない。 本を賡はざるの事あり」と償の意とする。 [賡載歌] がある。また「管子、国蓄」に「愚者は 程」に帝舜の歌を賡いで、皋胸が歌ったとする が、賡続の意をもつ呪儀なのであろう。「書、益な年(杵)を両手に奉ずる形。」同にそれを加えること るが、賡と続とは別の字である。東は呪具としての 蘭 また賡字をあげ、「賡、古文續は庚貝に從ふ」とす 会意 (続)字条「三上に「連なるなり」とし、 庚と貝とに従う。「説文」續 経籍には

嚆 さけぶ・なる・なりかぶらコウ(カウ)

とのはじまりの意に用いる。 矢という。またすべて、ことの先蹤をなすもの、こ にかぶら矢を発するので、ことをはじめることを嚆 嚆矢はなりかぶら。戦争を開始するとき、まず敵陣 形声 声符は嗃。嗃にさけび、さわぐ意がある。

糠 ぬか・むなしいコウ(カウ)

重文として康を録している。糟糠は貧苦をともにし糠の初文。〔説文〕セ上に「穀の皮なり」とあり、 纐旗 あげて脱穀精白をする形で、 声符は康。康は杵を

> をいう。字はまた糠に作る。 た妻、糟は酒糟。藤秕とは実のないつまらないもの

篝 16 かご・ふせご・かがりコウ

縞 籠を篝といい、篝火という。字は冓の声義を承ける。 籠で、上大下小のものを篝笭という。のち篝火用の薫衣の俗は当時すでに盛行していた。また竹の負い煮水の俗は当時すでに盛行していた。また竹の負い香を焚きこめるもの。淮南王に〔薫籠の賦〕があり、 とあり、火の上に籠をおき、衣を乾かし、あるいはきのをいう。〔説文〕五上に「箸なり」 しろきぬ・しまコウ(カウ) 形声 声符は義。 毒は組みあげたも

綸

編の意に用いるが、その字にはもと島を用いた。素・縞冠・縞巾はみな練をもって作る。わが国では素・縞が、緑が、大きな、の〔伝〕に「練なり」とあり、縞・キーのが、緑のでは、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、鄭風、出は、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、『紅』しば、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、『紅』しば、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、『紅』しば、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、『紅』しば、ちりめん。うすい白絹である。〔詩、『紅』しば、ちりめん。 のあるものをいう。〔説文〕」三上に「鮮巵なり」と形声 一声符は高。高は枯槁した白骨で、白くつや形

興 おこる・おこなう・さかんにするコウ・キョウ

则 0 黒 雪山 気器

祀るもので、灌地の礼をいう。〔礼記、楽記〕に 想法は、この呪儀に起原する修辞である。賦・比・その呪詞を興という。詩篇において興とよばれる発 す」をはじめ、〔周礼、舞師〕「小祭祀には則ち興舞なうのが興で、〔礼記、秦記〕の「上下の神を降興なうのが興で、〔礼記、秦記〕の「上下の神を降興 側身形である。釁はのち牲血をもって器を清め、制 (酒)、次の分の形の部分が、酒を灌がれている人ので酒をふりそそぐ。その字は繋、上部は興、次に酉まつ行為であった。人を清めるときにも、この酒器もつ行為であった。人を清めるときにも、この酒器 **発く字義をえていない。同は〔書、顧命〕に「同金く字義をえていない。同は〔書、顧命〕に「同** 形は舁と同に従い、同は共力の意であるとするが、 作物を清める儀礼の意にも用いるが、もとは酒で人 瑁」とみえるもので、酒器。〔顧命〕ではこの酒器 「上下の神を降興す」とあり、上帝には降、下神に ことをいう。儀礼を行なうにあたって、まず地霊を 下よりもつ形。酒をふりそそいで、地霊をよび興す 舞の呪儀によって地霊を興すことばであり、わが国 よって対象にはたらきかけること、興はいわゆる興 この地霊を興す呪儀が、呪詞的な表現を伴うとき、 ただ小祭祀のときには、その祭儀を略するのである。 せず」の興舞も、灌地して神をよび出す祭儀をいう。 を清める儀礼であった。その釁を、地霊に対して行 で酒を飲みかわす儀礼があり、それが授霊の意味を は興という。〔説文〕三上に「起るなり」とし、字 の序詞や枕詞と、 とよばれる詩の発想法のうち、 臼と同と廾とに従う。酒器である同を、 興起とは地霊を興起して、 その起原的性格において通ずると 賦はことだまに そこで行な

> 様礼を意味したので、通用するのである。 ・興・興隆の意となる。[礼記、文王世子]に「器を興す ・興・興隆の意となり、興雲・興雨といい、興会・ ・興・興隆の意となり、興雲・興雨といい、興会・ ・興・興隆の意となり、興雲・興雨といい、興会・ ・興・

衡 16 うしのつのぎ・よこ・はかり

颁柬 領

16 はがね (カウ)

形声 声符は岡。岡は鋳型。高い熱度でその土質

鋳型を刀で裂きはなすことを剛という。とあり、ねりがねをいう。〔玉篇〕に「煉鐵なり」のは錬冶を加えた鉄をいう。〔玉篇〕に「煉鐵なり」とあり、なりがねをいう。〔玉篇〕に「煉鐵なり」とあり、が剛くなっているもの。〔列子、湯問〕「煉鋼赤型、

糠17 コウ(カウ)

のち糠の字を以て行なわれる。 おない字である。〔説文〕には、康・糠を一字とするが、字である。〔説文〕には、康・糠を一字とするが、である。〔説文〕には、康・糠を一字とするが、なった。 「説文」には、康・糠を一字とするが、字である。〔説文〕には、康・糠・一田の中の米を杵く意ののち糠の字を以て行なわれる。

薅17 【茠】10 コウ(カウ)

鬱膩點

をあげ、〔脱苑、政理〕に「吾その境に入るに、田をあげ、〔脱苑、政理〕に「吾その境に入るに、田草を切ることを掌る」とみるべきである。田草を切るでは三字合せて会意とみるべきである。田草を切る学は三字合せて会意とみるべきである。田草を切るが、形声の字には辱に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は蓐草、薅が女に従うのは、そのことが女子の作尊は夢は夢ない。「説文」「下に「田艸さない、「説苑、政理」に「吾その境に入るに、田艸さない、「説苑、政理」に「吾その境に入るに、田神ない、「説文」に「吾その境に入るに、田神ない、「説文」に「吾その境に入るに、田神孝といい、「説文」に「吾その境に入るに、田神孝とない、「説苑、」では、「田神ない」に「田神ない」に「田神ない」に「田神ない」に「田神ない」に「田神ない」に、「田神なり、「田神ない」に、

夢・茠の音が近かったのであろう。 軟荒線して(株)。 よくしています」とある休は、 休字の義。 古く

売17 はかば・かわく

17 しぬ・みまかる

は関してトう例があり、呪詛をなすものとしておそである。その夢魔によって死に至ることを薨という。「説文」四下に「公侯の解するなり」というように、「武文」四下に「公侯の解するなり」というように、「武文」のである。その夢魔によって死に至ることを薨という。を致す意の会意字とみるべきである。ト辞には夢魔に致って死に至ることを薨という。を致す意の会意字とみるべきである。ト辞には夢魔に入って死に至ることを薨という。を致するのとしておそ

れられている媚蠱の媚も、そのような夢魔を使うもれられている媚蠱の媚も、そのような夢魔を使うを見いな区別はもとより後に加えられたもので、金文にはな区別はもとより後に加えられたもので、金文にはな区別はもとより後に加えられたもので、金文にはな区別はもとより後に加えられたもので、金文にはな区別は、あるいは不淑という。高貴の人の死を薨というのは、高貴のものが、夢魔や邪霊に襲われて死いるが多かったからであろう。その昏睡状態にあるときの声を薨々という。

売 17 あう・みる

明代 形声 声符は溝。溝は盾端の 番、紅を上下に繋いで結合の象徴とするもの、それで相違う意をもつ。〔説文〕ハ下に「遇見の、それで相違う意をもつ。〔説文〕ハ下に「遇見の、あってある。〔詩、召南、草・虫〕「亦既に見 亦見るかである。〔詩、召南、草・虫〕「亦既に見 亦見るかである。〔詩、召南、草・虫〕「亦既に見 亦見るかである。「大雅、公劉」「廻ち京を観る」は、都遷りにその地を観ることで、国見的な意る」は、都遷りにその地を観ることで、国見的な意を入れる。

生時 17 【生時】 17 はかる・おしえる

購17 (購)17 あがなう・かう

1. N. W. W. W.

野体 形声 旧字は購に作り、溝声。 講は 野人の意とするものであろうが、もとは講と関連する字である。字は本の形。 を所えて、「財を以て求むる所あるなり」とは、購求・ 大下に「財を以て求むる所あるなり」とは、購求・ は講、財をもってするものが購である。〔説文〕 といて求むる所あるなり」とは、購求・ はいである。「説文〕 といて求むる所あるなり」とは、購求・ はいである。「説文〕 といて求むる所あるなり」とは、購求・ はいである。「説文〕 といて求むる所あるなり」とは、購求・ はいである。「説文〕 といて求むる所あるなり」とは、購求・ はいである。「説文〕 といてするものであろうが、もとは講と関連する字である。字は本の声義を承ける。

鮫 17 コウ (カウ)

鴻っ ひしくい・おおきい

名づけたものであろう。のようにいう。鴻鵠のような鳥名は、その鳴声をとることが多く、字は古く工声に従い、鳴声によっては天地の元気、また鴻博・鴻恩・鴻範・鴻儒・鴻徳

援 8 つかあな・のはら・むなしい

さまを形容する。官位をもたぬことを壙僚という。また曠と通用し、空曠の意に用い、壙々とは荒野の下に「塹穴なり」とあり、墓壙をいう。上生 声行は廣(広)。〔説文〕一三年

獲 8 あらあらしい・わるい

We 形声 声符は廣(広)。〔説文〕一〇 上に「犬獺々として附むべからざるなり」とあり、犬が人になつかぬ意とする。獺介・瀬 戻など、たけだけしい意に用い、蛮風を獺俗という。 戻など、たけだけしい意に用い、蛮風を獺俗という。 戻など、たけだけしい意に用い、蛮風を獲俗という。 に「獺々たる亡秦、我が聖文を滅ぼ がいます」とは、焚書の暴挙を刺るものである。廣は礦、 では、秋なりに「獺々たる亡秦、我が聖文を滅ぼ がいます」とは、焚書の暴挙を刺るものである。

銅 18 地名・なべ

文」 一四上には「温器なり」と鍋の類とするが、それで死者を葬るところの名となり、周の鍋れる。それで死者を葬るところの名となり、周の鍋れる。それで死者を葬るところの名となり、周の鍋鍋である。それで死者を葬るところの名となり、周の鍋鍋のような建物をいう。金文に茻中に高をしるす字形があり、もと蒿里(墓地)を意味する字であったと思わり、世界は高。高は白骨と化した

れは別の一義である。周の神都である鎬京辟鑑のよい。 をは〔詩、大雅、紫芝、文王有声〕などにみえ、とは〔詩、大雅、紫芝、文王有声〕などにみえ、とは〔徳が鼎〕に嵩としてみえるものがそれであろ。その字は輝に従う字形である。鎬京に遷る以前の神都は蒼京にあり、金文では印鑑は蒼京辟鑑してみえるものがそれである。 関の神都である鎬京辟鑑のこれは別の一義である。周の神都である鎬京辟鑑のこれは別の一義である。周の神都である鎬京辟鑑のこれは別の一義である。周の神都である鎬京辟鑑している。

18 とじる・おさめる・すべて

形声 声符は蓋。素は器に蓋をして 関じることをいう。関連は家。圏棺は 死をいう。[経南子、墜形訓] に、西極の山に間とい の門があるというが、それは太陽の入りかくれる門 の門があるというが、それは太陽の入りかくれる門 であった。門は開閉するものであるから、「老子」 をいう。「電報子、墜形訓」に、西極の山に間 をいう。「電報子、墜形訓」に、西極の山に間 であった。門は開閉するものであるから、「老子」 をいう。「であった。門は開閉するものであるから、「老子」

19 あきらか・むなしい・ひさしい・とおい

#15 FB 20 10 (カウ) 新月 FB 20 10 (カウ)

9 3中(カウ)

形声 声符は堅、《礼記、楽记》に「鐘聲は鏗鏘」とみえ、金石や琴瑟の音の高くしまった調子をいう。金文の鐘声をいうものには、〔宗周 鐘〕〔號な、金文の鐘声をいうものには、〔宗周 鐘〕〔號な、旅鐘〕に「覧々な、〔王孫遺者 鐘〕に「関々たる綵鐘」のようにいう。〔論語、先進〕「壁爾として琴を舍きて作つ」は、琴をうちとめる音。その擬声音をしるす字である。

早紀 2 そらの白い光・しろい・おおきい百日 コウ(カウ)

て老齢白首の人を顯首といい、秦のとき商山にか天を顯穹、西天を顕天、天日を顯々という。転じ天を顕穹、西天を顕天、天日を顯々という。転じた。 西天を顕穹、西天を顕う、 漢は儀礼の容であるから、天を顕穹、西天を顕う、 漢は儀礼の容であるから、天を顕穹、西天を顕うとに従う。 景は日景でいる。

た通用の字である。た四皓に作る。顕・皓(皓)は声義同じく、昊もまた四皓に作る。顕・皓(皓)は声義同じく、昊もまくれた四人の高士を「商山の四顥」という。字はまくれた四人の高士を「商山の四顥」という。

瀬 24 しろい・あきらか

夏 25 まなびや コウ (クヮウ)

ゴウ

号 5 【號】13 ざけぶ ガウ・コウ (カウ)

も祝禱を呵して責め、その成ることを求める意で、(木の枝)の形。祝禱の器を下にする形は可。何れ稿を収める器の形で祝詞、万は柯枝のという。 日は D、祝

コウ 灝 黌 ゴウ号〔號〕合 拷し

の略字である。いま常用字に用いる号は、號はもと別の字である。いま常用字に用いる号は、號といむ聲なり」とするが、神に訴えることをいう。號といを聲なり」とするが、神に訴えることをいう。「説文」五上に「痛」

△□ 6 あう (ガフ)・コウ (カフ)

AP AP

誓に応ずる意であろう。〔左伝〕宣二年「旣に合へ て來り奔る」とは、盟約に同意しておきながら、こ いる。また答を金文に合きもってしるし、〔因斉錞〕行なわれるので、郷射のことを金文には噼射として に「厥の徳に合(答)揚す」という。これもその盟 意味する字。その盟誓の誠信を証するために郷射が 卿は誓盟の書を前にして二人対坐する形で、会盟を するに迨ふ」とは、その祭祀に参会することをいう。 意。「麦萼」に「王の、葬家に客りて酹祀(祭名)にその地に赴き会することで、合とはその協定書の 郷射礼の郷の初文である卿がある。 迨は会盟のため 形に含む金文に、会合の会の初文である論、のちの 「獨生、事あり、蠶(召伯虎)來りて事を合す」と約・盟誓の成ることを合という。〔獨生設、二〕 は、琱生と召との協議が成立した意である。合を字 り、これを載書として祝禱の器に収めることで、契 合とする。字は祝禱の器に蓋をする形で、約定が成 字を△・口に従うもので、△は集、衆口を集めるを 象形 いる形。〔説文〕玉下に「口を合せるなり」とし、 祝禱を収める器である口の上に、蓋をして

とう ゴウ (ガウ)・コウ (カラ)が、なお文献に残されている例となしうる。 金文の用語れに違背することを批難する語である。金文の用語

拷 9 ゴウ(ガウ)・コウ(カウ)

(玉篇)

う。拷は唐律などに至ってみ う。拷は唐律などに至ってみ う。拷は「指をいため る)その他種々の方法を用い る)その他種々の方法を用い た。その責め道具を拷具とい た。その責め道具を拷しい た。その責め道具を拷しい

別 10 がたい・つよい ガウ (ガウ)

える法律用語である。

文〕の重文の字形は、楚器に「侃師」とみえるもの、は鋳型で高熱を受けるもので、赤の意がある。[説文]四下に移して、剛とはそれを断つ剛刀をいう。人の性情勢型の意、剛とはそれを断つ剛刀をいう。人の性情勢型で高熱を受けるもので、赤の意がある。[詩、智様、関密]「白牝野側」の幹剛は、赤色の牲。岡島県、関密」「白牝野側」の解析・剛猛の意とする。[説文]四下にいてはずすので、剛の意が生れる。[説文]四下にいてはずすので、剛の意が生れる。[説文]四下に

敖 字はまた但に作り、旁は鋳こみ用の鍋の形である。 あそぶ・たわむれる・おごるゴウ(ガウ) ゴウ 傲 號 嗷

特對

と呪的儀礼を意味する字である。すなわち放と同もと呪的儀礼を意味する字である。すなわち放と同もと呪的儀礼を意味する字である。すなわち放と同長老の人。敖とはその長老の架屍を支して敲つ形で、 分は長髪の象。また字は遊遨のように用いるが、遊 **ラ **ラ *のものは敖。悪邪を祓う共感呪術的な方法で、 り、そのような行為を敖・遨という。敖遊・翱 翔るが、その呪霊を駆って敵に呪詛を加える呪儀があるが、その呪霊を駆って敵に呪詛を加える呪儀があ 放・敷と同じくさらし首の祭纂の俗を示す字であので、のちの遊楽の意とは同じでない。敖は古くは 遨はもと神の出遊する意。あるいはそれにならうも に従うものとし、「出遊なり」と訓するが、出の部 は放部四下と出部六下とに字を重出、何れも字を出 傲・遨はみなその声義を承ける字である。 〔説文〕 れで倨傲の意となる。 す語に用いるが、もとは神威を示す用語であり、そ は、詩篇においては軍容を誇示する示威的行動を示 方は架屍の象。その長髪のものは老人で、

ほそいけ・こまかい・ふでゴウ(ガウ)

〔老子〕第六十四章「合抱の木も毫末より生ず」な梁 恵王、上〕「明は以て秋 毫の末を察するに足る」、シャッパ からいは豪と同字とするものであろうが、「孟子、 声符は高の省文。字は「説文」にみえず、

> 書画に遊ぶ意である。 を用いることを揮毫という。「耄墨を弄す」とは、る。毫毛をもって筆を作るので毫疑・毫錐、また筆 微細なものの意とし、毫釐・毫繊のように用い

奡 12 あなどる・つよいゴウ(ガウ)

~ ~ ~

果

敖 はさらし首の祭梟の俗を示す字であるが、奡はき ている形で、神像を思わせる字形である。 おそらくその正面形であろう。夰はその手足を垂れ

傲 13 おごる(ガウ)

いという。詩人李白には、この傲骨があったと伝えその骨のあるものは、人に身を屈することができな た。のち傲倨・傲慢の意となる。敖骨は腰にあり、 とは呪霊によって敵を威圧する行為をいう語であっ である。〔説文〕八上に「倨るなり」とするが、も を示す字。その呪霊を呵して責め、呪詛を行なう意してこれを殴つ形で、祭梟(首祭) られる。敖の声義を承ける字である。 形声 れを殴つ形で、祭梟(首祭)声符は敖。敖は長髪の人を架

號 さけぶ・な・しるしゴウ(ガウ)

> 性幣(神名とその供えもワンファル・とは、神示と互訓。 [周礼、大祝]「六號を辨ず」とは、神示とう。 「周礼、大祝]「六號を辨ず」とは、地ではない。 「「今は就くなり」、口部二上に「噂は號くなり」、「 義の字であるが、いま號の常用体として用いる。 ことをいう。号は祝禱のときの声で、もと號とは別 (神名とその供えもの) の名號をいう。 声符は号。〔説文〕五上に「噂

嗷 かまびすしい・うれえるゴウ(ガウ)

嗷々たり」とは、鴻雁の声を写す擬声語である。そを嗷々という。〔詩、小雅、鴻雁〕「哀鳴することを戦々という。〔詩 の声は哀鳴に似ている。 る声をいう。 文〕 ニ上に「衆口もて愁ふるなり」とあり、 使う呪儀。その呵して責める声を嗷々という。〔説 形声 して祭梟(首祭)とし、その呪霊を形声 声符は散。散は長髪の人を架 敷も祭梟のことをいう字で、その声

傲 おごる ゴウ (ガウ)

釈詁]に「裾なり」とあって、〔説文〕の傲字条の文とみてよい。〔説文〕にこの字を収めず、〔ふぎ、 梟の俗を示す字。その呪霊を呵して敵に威圧を加発す 声符は放。敖は長髪の人を架して殴つ祭 訓と同じである。傲と同じく、敖の声義を承ける。 えることをいう。字は傲と声義同じく、殆ど同字異

濠 17 ほり (ガウ)

14

やまあらし・すぐれたひとゴウ(ガウ)

ともに収めていない。 らんや」と反論し、「我これを濠上に知れり」と答は我に非ず。安んぞ我が魚の樂しむを知らざるを知 ぞ魚の樂しむを知らんや」と論難する。荘子は「子 がある。荘子が水中に遊ぶ魚をみて、「これ魚の樂 である。字はまた壕に作るが、 ** ^ ^ 。 Pまトと豪こ作るが、「説文」には濠・壕えた話がある。荘子の認識論の立場を示す著名な話られまして しむなり」というと、恵子が「子は魚に非ず。安ん に、池に遊ぶ魚の楽しみを知ることについての問答 声符は豪。城下の池をいう。〔荘子、秋水〕 〔説文〕には濠・

ない。南郡に出づ」とする。〔山海経、西山経〕になり。南郡に出づ」とする。〔山海経、西山経〕に

「鹿臺の山、その獣に白豪多し」といい、「穆天子伝」

に豪牛・豪羊の名がみえ、長毛のものをいう。多毛

人に移して豪俊・豪俠の意とする。

毛の獣。〔説文〕カトに「豕の

←に「豕の鬣、筆管の如きもの部は豕あるいは象に従うて長部は豕をしている。 ・ 一声符は高の省文。下

贅 17 ききいれない ゴウ (ガウ)

「左伝」宣二年に、晋公が趙盾を奏にけしかけて追

人の心の如くにして使ふべきもの」とは猟犬の意。

猛犬をいう。〔説文〕一〇上に「犬の、

猟犬二匹は、首に金鐶を加えて陪葬されていた。そ わせた話がみえる。近年、中山王墓より出土した

の愛犬であったのであろう。

獒 15

いぬウ (ガウ)

形声

声符は敖。敖に傲の意があり

の意より豪華、

う語がある。字はまた囂・瞥と通用し、囂々・警々敗盤(周の誥命、殷の盤銘)の佶屈聱牙なる」とい敗盤(周の誥命、殷の盤銘)の佶屈聱牙なる」とい敗!(周��)に「周誥ない文章を贅牙という。韓愈の〔進学解〕に「周誥ない文章を贅牙という。韓愈の〔進学解〕に「周誥ない、すなおでうことを聴き入れない老人を贅叟といい、すなおでうことを聴き入れず」という。人の言り、〔玉篇〕に「人の語を入れず」という。人の言り、〔玉篇〕に「人の語を入れず」という。人の言 はみな人言を聞かぬことをいう。 精 形声 る。〔説文新附〕一二上に「聽かざるな 声符は敖。敖に倨傲の意があ

遨

あそぶがり)

整 18 ききいれない・おろかゴウ(ガウ)

を行なう。その呪霊の出遊することを邀という。も

(首祭)の俗で、その呪霊を呵して種々の呪詛を一一声符は敖。敖は長髪の人を架してさらす祭

_ ヘ _ ヒゥ _ ザ、 ピシッシッ と神霊の遊遨をいう字であるが、〔詩、斉風、載駆〕 齊子遊遨す」とは、軍事的な 醬 なり」とあり、贅と声義同じ。分別していえば、膂 は傲って人言を聴き入れないこと、警は傲って言い る。〔説文〕三上に「人言を省みざる 声符は敖。敖に倨傲の意があ

> よって心を動かすことのない、傲然孤高の意である。 大なるかな、獨りその天を成す」とは、人の毀誉に たてる意であろう。[荘子、徳充符]「鳌乎として

器 かまびすしいゴウ(ガウ) 0

ig N A CARACTER A CARACTER

援の意に用いる。[孟子、尽心、上]「人これを知いる。[孟子、尽心、上]「人これを知い。 というなど、何れも喧譁騒いをいる。 (左伝) 成十六年、楚は晋軍の敗走を望んでまた〔左伝〕成十六年、楚は晋軍の敗走を望んで 交〕「讒言囂々たり」、「車攻」「徒を選ぶること囂々い。 などの字形を解しえない。「詩、小雅、十月之いなどの字形を解しえない。「詩、小雅、十月之い。」を口気と解するものであるが、それでは器(器)・ 「聲なり。气、頭上より出づ」とする。頁を首、品その祈りの声の囂々たるをいう。〔説文〕三上に 会意 また外・警に通じ、他の言を聞き入れぬ意である。これは「荘子」のいう警平と同じ意であろう。字は とは、他に左右されず、自得無欲のさまであるが、 るも亦囂々たり。人これを知らざるも亦囂々たり」 たり」、「荘子、騈拇」「天下何ぞそれ囂々たるや」、 多くの祝禱を列し、そのなかで祝禱をしているので、 列している形。真は神に祝禱するときの礼容を示す。 品と頁とに従う。 a は祝禱の器である J を

車 くるまのひびき・とどろくゴウ(ガウ)

車の聲なり」とあり、群車の走る音をいう。古くは 職々たるを示す。

〔説文〕 −四上に「群 三車を合せて、その車の音の

獒 遨 濠 聱 鰲 囂

猟を意味したが、獣はもと霊的な化身のもの、霊の

わが国で古く「あそぶ」とは、狩

示威行動をいう。

蕩たるあり

遊ぶものとされたのであった。

ゴウ

語もあり、元好問の「轟醉す春風一千日」とは、そは戦場を圧したことであろう。轟笑・轟飲のような 車戦を主とし、車を走らせて戦ったので、その轟音 の憂悶を遺る句であろう。

整 24 すっぽん ゴウ (ガウ)

した。神話では、天柱地維が断たれたとき、女媧がのちこれを山車に作って鼇山といい、神仙の遊に擬をもってこれを背に載せさせたという話がみえる。 湯問〕に渤海の東、大壑のうちに五山あり、帝は西 に「海の大鼈なり」とみえる。〔列子、 れたが、 彩香・ドラー 声符は敖。〔説文新附〕」三下 鼈を切って四極を立て、地を支えたという。それがした。神話では、天柱地維が断たれたとき、支媧が 極に流されて群仙の居を失うことをおそれ、十五鼈 神仙の世界とされる鼈山の起原である。

コク

克ィ よくする・かつ・たえるコク

令 0 岁 \$ 岁 京 -DA Ha

屋下刻木の形に象る」とするが、そのいうところが下は曲刀の象である。〔説文〕七上に「肩ぐなり。本なり。本をいり刻む刻泉の器の形。上部は把手、 明らかでない。支え木に用いる肩木のことであるら

> あること鮮し 己の意に用いるものに〔論語、顔淵〕「克己復禮」 元年「鄭伯、段(弟の名)に酅に克つ」という。克あること鮮し、また克勝の意があって、〔左伝〕隠 ものが多く、「大雅、蕩」「初あらざる靡し 克く終 る。克は克識の意で、〔鄭箋〕に「克は當に刻に作 ず」、下土を耗斁(荒れそこなう)することを訴え なく、〔詩、 ることが知られる。字をその初義に用いる例は殆ど があり、また頸部に鐶形の把手をそえている。刃部 形である。しかし金文の字形は、上部に大きな握部 しいが、古文の字形は、明らかに刻彖(錐もみ)の るべし。識すなり」という。他は克能の意に用いる でもつ形のものなどもあって、刻鑿のための器であ ある。それで上部に握部が二つあるもの、また両手 はゆるやかに曲り、錐ではなく刳りに用いるもので することをもいう。 に克って旧状を回復することであるが、正道に回帰 があり、字義は次第に内面化してゆく。克復とは敵 大雅、雲漢」「后稷克さず 上帝臨ま

告 7 告 いのる・つげる・かたるコク・コウ(カウ)

뽒 Ŧ, Ψ, ¥# A 北北

象形 〔説文〕ニェには牛と口とに従う字とし、「牛、 告する意で、告とは神に訴え告げることをいう。 る形。祝禱の器を木の小枝につけてささげ、神に祈 木の小枝に祝禱を収める器の口を懸けてい

> の字も (外族)を上甲(祖王の名)に告らんか」、「気に祈りごとをする意であった。 卜辞に「貞ふ。 う。また〔毛公鼎〕「余に先王の若き德を告げよ」 東宮(人名)に告ぐ」とは、上に提訴することをい り告げる語を誥といった。〔晉縣〕「匡季(人名)をのち上に告げ訴えることをいい、それに対して上よ ことをいう。もとは神に告げ祈ることを意味したが うな形のものと考えてよい。告の初義は告祭、 れを小枝に懸けて神に捧げる。わが国の申し文のよ 卜文・金文の字形において明らかである。かつ口形 けた口をすり寄せてくると解するが、上部は牛の形 り、牛が人に何かを訴えようとするとき、横木をつ 史・事は一系の字をなしている。 事には「つかひ」と「まつる」の両義がある。 た形であるが、これを大きな枝に著けて祖霊を祭る も、王に告げることをいう。告は小枝に祝禱を著け 游(はた)を著けて祭の使者となることを事という. ことを史祭、さらに大きな叉枝のある木に著け、優 角に横木を著く。人に吿ぐる所以なり」とあ ものを懸ける木の小枝の形であることは、 祝禱の器の形で、なかに祝詞を入れ、こ 土ヒ 先 方サ 祖

谷7 たに・きわまる

・ハノロ

声義ともに別の系統をなしている。谿谷の間は山気 に関するもので、谿谷の字と異なる。容・欲・浴は 噱とかかれる字である。 口の上のみぞを各というのは、別の字。 第四十一章「上德は谷の若し」、第六十六章「能く 六章「谷神死せず」、第十五章「天下の谷と爲る」、 は日に従う形であるが、日に従うものは祝禱の儀礼 百谷の王と爲る」など、谷を神霊化した表現が多い。 の深奥なるところであるから、神霊の依るところと がるに従ふ」とするが、口に従う字ではない。 篆文 て川に通ずるを谷と爲す。水、半ば見えて口より出 なっており、口ではない。〔説文〕一下に「泉出で `狭まった形を示す。金文の字形では下が>字形と 民間的な信仰の対象でもあった。〔老子〕第 谷口の形。左右から山がせまり、谷口が低 文献には

けずる・きざむ・しるす・きびしいコク

とするので、刻印・時刻の意に用いる。 厳急苛酷の意に用いることが多い。刻鏤(ほりも刻削・刻治・刻痛・刻薄・刻法・刻意・苛刻など、 るなり」とし、「爾雅、釈器」に金には鏤、木には に至るまで刻剝する意である。[説文]四下に「鏤」 従うところで、その骨骸をいう。骨骸 の)の意とするのは、 刻というとするが、もと獣を刻剝する意であるから、 声符は亥。亥は骸・核の字の のちの用義である。 刻して印

玉 (國)11 くに・みやこ

コク

刻

国(國)

剋(尅)

哭 梏

> 1 沙屋 图 适

に限定の意があるので、なかを八方にかえた。光圀、国家という。圀は唐の則天武后新字の一。或(域)のものであった。国都に軍政の中心が移ってから、のものであった。国都に軍政の中心が移ってから、 〔説文〕六下に「邦なり」とし、邑部六下に「邦は國 に作る。国家は古く邦家といい、王家と邦とは同一に至って王國・下國のように國を用い、あるいは閾 或・内或など、国の字に或を用い、西周後期以後 相反するが、字の原義は異なる。金文には四或・南 「小なるを邦といひ、大なるを國といふ」とあって 邦といひ、小なるを國といふ」、また〔玉篇〕には 國は国都で武装都市を意味する字であるから、必ず にさらに外囲を加えたものが國で、国都をいう。 と戈とに従い、武装した城邑を示し、國の初文。或 会意 の名はその字である。 なり」と互訓するが、邦は封樹して邦域を示す字、 しも同義でない。〔周礼、大宰、注〕に「大なるを 旧字は國に作り、 口と或とに従う。或は口

剋。〔尅〕10 きざむ・よくする・かつコク

ち、剋によってその初義を存したものであろう。漢が刻が作られたのは、克が克能・克己の意となったの それならば克をもつ形となって理にかなう。 以後に至って用いられる。俗に尅に作ることがあり、 下部はその曲刀の形である。それに別に刀を加えて 声符は克。克は刻木の器で、上部が把手、 克と同義に用いることが多い。 剋己・

> 哭 10 なコくク

するが、字の形義に合わず、〔段注〕には、家が豕文〕ニ上に「哀しむ聲なり。即に從ひ獄の省聲」と哭は送葬の際の儀礼で、哭泣・哭踊という。〔説 光 に、羅門子が哭をもって孟嘗君に見えた話がみえに声のよいものがえらばれた。〔淮南子、覧冥訓〕に声のはいものがえらばれた。〔淮南子、覧冥訓〕に(亡)を加えた形が喪。喪祭のときには、哀哭 学派の死生観を示しているが、〔礼記、檀弓、学派の死生観を示しているが、〔礼記、檀弓、 泣・衰経・降殺の服は、哀の末なり」とあり、 して哀しむことをいう。 る。慟哭の慟は身を震わせて泣くこと、哭は声を発 「哭踊すること節あり」とは、儒家の礼である。哭 もって祝禱する儀礼である。〔荘子、天道〕に「哭 している。家は餐基に犬牲を用いる字、哭も犬牲をに従うように、哭も犬の泣き声を人に移したものと たものは器(器)で、喪祭に用いる明器を意味する 犬牲を供えて祝禱する意である。さらに二口を加え 会意 禱の器のUを二つ並べた形。犬は犬牲 二口と犬とに従う。 二口は祝 荘子 占

档 かせ・しばる

とする。 「かせ」の意をもち、 木を組んだものを格・梏・械・拳といい、みなり」と相対するものであるが、当時の音義説である 程字条六上に「足械なり。地に質す所以ない。 に「手械なり。天に告ぐる所以なり」形声 声符は告(告)。〔説文〕六上 声義に関係のある字である。

に良識の失われることをいう。 告子、上」「その旦晝の爲すところ、これを梏亡す告子、上」「その旦晝の爲すところ、これを梏亡するものあり」とは、利を逐う生活の中で、知らぬまる。

牿ロ つのぎ・おり

サー ・ を組んで物を制することをいう。 ・ と組んで物を制することをいう。 [説 ・ では、「牛馬の牢なり」とするが、「通訓定声」 では、「牛馬の牢なり」とするが、「通訓定声」 では、「牛馬を告牲す」の「鄭注」に、梏を足に施 できた。 「童牛の牲」とは程、すなわ す意とし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ す意とし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ す意とし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ す意とし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ するとし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ するとし、「易、大畜」「童牛の牲」とは程、すなわ するとし、「あった。」

黒コ(黑)ロマラ・くろい

案の上部の穴は蒸気抜けの形である。黒に近い幽も、なっ上部の穴は蒸気抜けの形である。、黒に近い幽も、なっとのものを薫蒸し、黒めてその色をとる意。、「説文」一〇上に深し、黒めてその色をとる意。、「説文」一〇上に深ら、中のものを薫蒸する意である。「周礼、鍾形で、中のものを薫蒸する意である。「周礼、鍾光の、中のものを薫太して色を染める。朱も、薫をは架糸の形、田は染色鍋、東は濃の形。その嚢の下のものを薫太して色を染める。朱も、薫をは、強い、東する所の色なり。炎の上部の穴は蒸気抜けの形である。黒に近い幽も、ないといいとない。東は、大いの中のものを薫えして色を染める。朱は、大いの中のものを薫太して色を染める。米は、大いの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないの中である。黒に近い幽も、ないといいましている。東は、大いの中である。東は、大いの中である。東は、大いの中である。まに近いといい。

はでいる。黒は五行において北方の色とされ、その五行説によって、暗黒にして死の色とされる。「黑牛、行説によって、暗黒にして死の色とされる。「黑牛、行説によって、暗黒にして北方の色とされ、その五句犢を生む」とは

製 14 こうぶ

影響 「楮なり」とあり、その紙は楮皮紙・であるが、その樹皮をもって紙を作る。潔白にしてであるが、その樹皮をもって紙を作る。潔白にして「髪に樹檀あり」その下はこれ穀なり」と歌われて「繋に樹檀あり」その下はこれ穀なり」と歌われて「繋に樹檀あり」その下はこれ穀なり」と歌われて「精は穀なり」とあり、「韓詩外伝」に、殷の湯王の庭に、生じて三おり、「韓詩外伝」に、殷の湯王の庭に、生じて三おり、「韓詩外伝」に、殷の湯王の庭に、生じて三おり、「韓詩外伝」に、殷の湯王の庭に、東本とされるもので条に「楮は穀なり」とあり、その紙は楮皮紙・かった。

売末 1 【売末】 1 こくもつ・やしなう・さいわい

常 当

方。〔管子、山権数〕に「穀は民の司命なり」といい。 という。〔管子、山権数〕に「穀は民の司命なり」といい。 という。〔管子、山権数〕に「穀となる。 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 実のある形は穆、これを撃つ形が殺となる。〔説文〕 といる。 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 で、その例による。三は穀実のある部分、そこに穀 といる形であるが、 があるの で、その例があるの で、その例があるの で、その例があるの で、その例があるが、 で、その例があるの で、その例があるの で、そこに穀 で、そこに穀を上ている形であるが、 の置といるが、 で、そこに穀である。 で、そこに穀 で、そこに穀と木とに従う。字の初

るのは、殼の形声字である。

正 4 【正】4 つよいさけ・きびしい・はなはだ

器。 器

形声 声符は告(告)。[説文] -四下に「酒味厚きなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味の強烈なものをいう。転じきなり」とあって、酒味厚

高角 1 角の杯・さかずき・つきる 几又 7 コク・カク

17 こしき

生 1 くぐい・こうのとり

形声 声符は告(告)。[説文]四上製作 (音)。「説文]四上製作 (音)。「説文]四上製作 (音)。「記述 (音)。「記述 (音)。 (記述 (記述 (音)。 (記述 (記述 (音)。 (記述 (記述 (音)。 (記述 (音)。 (記述 (音)。 (記述 (音)。 (記述 (言)。 (記述

20 古帝王の名

王の名としては、「山海経、海外南経」の狄山の条なり」と刻急の義とするが、その用例はない。古帝なり」と刻急の義とするが、その用例はない。古帝となる。「説を持ちない。」をはいる。「説をはいる。」をはいる。

に「帝嚳は際に葬らる」、注に「堯の父なり」とみという。「管子、修縢」「史記、三代世表」に字あるという。「管子、修縢」「史記、三代世表」に字を告に作る。「武梁祠堂画像」にも「帝佳」とあり、当時その字を用いた。帝嚳の説話を整理すると、舜とその神格が同じであることが知られる。王国経のとその神格が同じであることが知られる。王国経のとその神格が同じであることが知られる。王国経のとその神格が同じであることが知られる。王国経のとその神格が同じである。おそらく古い説話が、のも相通ずるところがある。おそらく古い説話が、のも相通ずるところがある。おそらく古い説話が、のち嚳と舜との二系に分化したのであろう。

ゴク

獄 4 ゴク

橋級

コツ

1 3 かみをきる・はげる・たかい・あしきる

象形 頭の髪をおろした形。元は計のが工、髪を切りおとした軽首の形。〔説文〕ハ下のが工、髪を切りおとした軽首の形。〔説文〕ハ下に「高くして上平らかなり」というも、髡首の象でに「高くして上平らかなり」というも、髡首の象では「かり」の句がある。〔荘子、徳 充符〕「魯に 工者 しょう いしょう いっしょう いっしょう

至 5 たがやすッ

屋。如里里边

に収、すなわち左右の手を加えている。土主を奉じた収、すなわち左右の手を加えている。土を祀る意で、開墾のとき地霊を祀ることをいう。土を祀る意で、開墾のとき地霊を祀ることをいう。金鴦 土と又とに従う。土は土主。又は手の形。

コク

古代の墾田の儀礼を伝える字である。 し、その音を窟とする。卜辞以後の用例はみえず、 (河南中央部)、力を地に致すを謂ひて圣といふ」と 地霊を祀る意である。〔説文〕「三下に「汝潁の閒

ひらく・こじあけるコツ

谷を担る」、「呂氏春秋、安死」「これ招かれざるのりて甘泉を得たり」、「列子、説符」「機にしてそのりて甘泉を得たり」、「列子、説符」「機にしてそのれを啓くことを智・音という。 扫は昏の異文とみられを形す 会意 祝禱の器をむりに啓くことで、舀がその初文。曶は その形声の字である。 墓なきなり」など、みな掘鑿の意に用いる。もとは 手と日とに従う。日は祝禱を収めた器。こ

汨 みずをおさめる・ながす・みだれるコツ・イツ

まさに及ばざらんとするが若し」の句がある。 その溜滞を流す意である。招開するときの音は招い 字を録して「水流るるなり」という。水を扫開して、 沿流・汨急はイツ。〔楚辞、離騒〕に「汨として我ららら、治さらの音はイツ。汨没・汨乱・汨陳は抇の音、流れるときの音はイツ。汨没・汨乱・汨陳は抇の音、 に「水を治むるなり」とあり、川部ニー下に 省文で、その声をとる。「説文」ニト 声符は日。その日は智・旨の も同じ

忽 8 たちまち・ゆるがせにするコツ

多世

形声 う。忽然・忽怳・忽徴・忽略などの意は、 ロー なり」とするが、忽は曶と通じ、一〇下に「忘るるなり」とするが、忽は曶と通じ、 こから導くことができる。 を啓くことで、その極度の緊張・放心の状を忽とい す」とみえ、忽略の義。曶開は祝禱・盟誓などの書 に作る。〔漢書、揚雄伝、賛〕に「時人これを留に「論語、徴子〕の仲忽は〔漢書、古今人表〕に仲智 声符は勿。勿に曶・笏の声がある。〔説文〕 みなそ

智。〔省〕。 ひらく

0 (e)

「鄭注」に督、〔史記、夏本紀〕に滑に作る。汨・いている。〔書、益稷〕「治忽を在にす」の忽を、の「韓勅碑」にこの倒形の字があり、争の義に用の「衆かな」と の出づる形に象る」というのは、日五上を「口气の〔説文〕五上に「气を出すの詞なり。日に從ひ、气 ない る」とあり、曶とはその「啓籥見書」の意に外なら 留の形である。〔書、金縢〕に「籥を啓きて書を見 出づるに象るなり」と解するからであるが、曰は祝 う。のち曶の字に作るが、舀より誤った字形である。 会意 थ・滑に「みだる」の訓があるが、何れも
の声義 禱の器を昏開する形。その蓋に手をかけているのが 手を加えてこじあけるようなあけかたを、俘開とい で、中に収めた文をよむことをいう語である。上に は祝禱を収めた器。その蓋を開く形が「曰く」の字 こじあける意から、乱れる意が生れる。漢碑 初形は旨。日の上に手を加えている形。日

> 笏 をとるものである。

勞 古くは曶開の用をも兼ねたものであろう。 長さ尺であるので尺と称した。笏は曶の声義を承け 笏が骨の音であるのを避け、字をそのままにして、 以来、手板と称した。わが国でシャクとよむのは、 で長は魚り道や文竹、士は竹を用いたという。晋宋とする。〔礼記、玉 藻〕に天子は珠玉、諸侯は象牙、八・一 いた いう。いわゆる手板で、これに奏事をしるして備忘いう。 の 搢む所なり」とあり、朝儀のとき帯にさす笏を 形声 ある。〔説文新附〕五上に「公及び士 声符は勿。勿に忽・留の声が

骨 10 ほね・からだ・かたいコツ

局 夸

「匫は古器なり」とあり、董は整理の意。整理され ている古物というほどの意である。 骨力・骨硬という。骨董とは匫董、〔説文〕一二下に 覧〕に引く〔説文〕に「骨は體の質なり。肉の核な を伴うているので、もと骨まじりの肉、肴穀の類を 会意 り」というのが判りやすい。その直硬の質よりして るが、覈は骸・核とも通ずる語である。〔太平御いう語である。〔説文〕四下に「肉の覈なり」とすいう語である。〔説文〕四下に「肉の覈なり」とす 門と肉(月)とに従う。円は残骨の形。肉

惚 うっとりする・ほれる・ほのかコツ

をいう。わが国で「惚れる」とよむのは、よく字義 たり」とは、悲傷にすぎて茫然として自失するさま 要〕に「心帳焉たり、愴焉たり、惚焉たり、懷焉として容易に知覚しがたいことをいう。〔礼記、問にして容易に知覚しがたいことをいう。〔礼記、問〔老子〕第二十一章「これ恍これ惚」は、道の微妙 「老子」第二十一章「これ恍これ惚」は、道の微妙形声 声符は忽。忽は恍惚の状にある意の字。 にかなう訓である。

鶻 はやぶさ・かむりどりコツ

国字 込5

ここに一人に由る」の語がある。

(込) 6 こむ

な状態のものをいう。〔書、秦誓〕に「邦の杌隉は、篇〕に「樹の枝無きもの」とあり、厚がらいった。

木の枝をおとした短い木、まるたを杌という。〔玉

声符は兀。兀は結髪を切りおとした頭の形。

いる。国字には云る・辻・辿る・迚も・這うなど、一度に重なり合う、手数や費用を要する意などに用画字 つめこむ、場所一ぱいになる、用事などが

どりとするが、通訓ははやぶさ。唐代に鶻を狩猟に う。〔詩、 用い、これを飼養するところがあって鶻場といった。 族があったのであろう。鶻は〔説文〕四上にかむり 古俗のことがみえ、あるいは鳩をトーテムとする部 なかれ」と、女が情愛におぼれることをたしなめて いる。〔左伝〕昭十七年に、鳩をもって官名とする 衛風、氓」「于嗟、鳩や「桑葚を食ふこと」。 いかるが」。桑の実をたべて酔うとい 形声 声符は骨。鳥の名。鶻鳩は

> とが多い。込むも道路に人のこみ合うことをあらわ 辵部の字を作り、また独自の訓義を与えて用いるこ

そうとした字であろう。

コン

ゴ ッ

6 うごく・ゆれるゴッ

是を以て大いに扤く」など、揺り動かす意である。 短木で、 正月〕「天の我を扤かす」、〔周礼、輪人〕「則ち これを梃子にしてものを動かす。〔詩、小 とした頭の形。また杌は枝をおとした 形声 鶻 声符は兀。兀は結髪を切りお ゴツ 扤

が、 〔説文〕に二形二義をもって説くものは、他に例が ない。〔説文〕はこの部に中など二文を録している 字は草の初生とされるものであるから、象形となる。 するは、讀みて退(很)の若くす」という。上行の引いて上行するは、讀みて囟の若くし、引いて下行 何れも旗桿の形である。 〔説文〕一上に「上下、通ずるなり。 指事 上下の通ずる関係をあらわす

いま・ただちに・コン・キン

杌

まるた。あやういさまゴツ・ゲツ

形声

えこだう形とし、「是の時なり」と訓するが、トもつ字である。【説文】五下に字を人(集)と古文もつ字である。【説文】五下に字を人(集)と古文と、という。概ね蓋栓を加え、閉塞する義を思うものを念という。また雲(云)気のこもる姿を ものは含い 義は、のちの噤の声義のうちに残されている。文・金文の字形は明らかに蓋栓の形。今の本来の声 た。「説文」に今声とするもの約三十字。口に含む を昔時の意に専用するに至って、別に腊字が作られ という。今昔と対称する昔もほし肉の腊の初文。昔 われている。このような関係を、六書において仮借く、これを古今の今の意にのみ用い、その初義は失める蓋の形であるが、今をその義に用いることはなある蓋の形であるが、今をその義に用いることはな ***^*のである。今は酒壺などの栓の酒壺の西に施したものは***。その酒を飲むことを 仮借 もと象形で、栓のある器物の蓋の形。これを わずかに声に発するものは吟、 心に深く

艮 もとる・なやむコン・ゴン

7 て、侵入者を卻ける意。これを神の陟降する神梯 がたいことを、製という。 の前に施すのを、 後ろ向きに退く人の形がかかれている。邪眼をもっ目的で掲げられている邪眼、その下に 限という。この邪眼に会うて進み 目と人とに従う。 〔説文〕ハ上に「很る 目は呪的

込[込] 艮

杌

困 くるしむ・きわまる・こまるコン

爾米

「荀子、大略」に「井里の厥」、「晏子春秋、雑上」にない。 めいまるが、字の本義ではない。 闇の初文。〔説文〕 六下に「故廬なり」というのは、 義であるが、 う。困窮・困乏・困極・困頓・困弊は、みな引伸の に「井里の困」というのは橛・閾の意で、里門をい 地図〕に「困殖の地」、すなわち開墾地の 枠に木をはめて、出入をとめる門限の形、 いまその義に用いる。

その卦象によって字を解する。〔易〕に、乾坤天地 まに解するとすれば、申は電光の象である。〔易〕 は婦徳をいう。すべて乾の対義語として用いる。方 の卦象によって大地の義とし、坤輿は大地、坤徳と の義とする他に、訓義のない字であるが、字形のま 下に「地なり。易の卦なり」とあり、会意 土と申とに従う。〔説文〕」三

〔夏小 正〕に「昆小蟲」という語があり、昆は群衆 後昆に垂る」の後昆は後裔。仮借の義であろうが、 義である。字は昆虫の象形。〔書、仲虺之誥〕「裕を意の法はあるはずがなく、「同なり」の訓も混の字 るもので、日と比の会意字とするが、そのような会 七上に「同じきなり」と訓するのは、混同の義とす ず」などの用義は、繋(兄)の仮借である。〔説文〕 があり、〔詩、王風、葛藟〕「他人を昆(兄)と謂をあてるべきであろう。字を昆弟の意に用いること 同格の語とみてよい。群虫の意では、むしろ蛇の字 その正字を知りがたい。 ふ」、〔論語、先進〕「人、その父母昆弟の言に聞か の意とされるが、昆は小虫の象形で、昆と小虫とは 昆虫の形。比の部分はその足の形である。

昏 くれ・よる・くらいコン

ST. 6

「画轎」の字も、やはり爵酒の形で、その音は昏で の昏・婚の字形は、爵によって酒を酌む形であるか昏は文献では昏礼の意に用いることが多いが、金文 これによって共同聖餐を行なうので、氏族の字となの意味がよく知られない。氏は肉を切る小刀の形。 まで雨ふらざるか」、「昏に至るまで雨ふらざるか」 会意 る。日の形はあるいは肉の形であるかも知れない。 とトする例が多い。字は氏に従う形であるが、会意 ト文の昏の字形とは別系のものである。

車器の 氏と日とに従う。ト辞に「旦より昏に至る

> う形でなく、また民声とするのも音が合わない。トり」という。日の低るるを昏とするが、字は氐に従に従ふ。氐なるものはできなり。一に曰く、民聲な 飲のことに関する字形であることが注意される。 その関連をうることが困難である。ただ何れも、 文と金文との間に、字形字義の断絶するものがあり、 ある。〔説文〕七上に「日冥きなり。日と氏の省 饗

很。 もとる・たがう・あらそうコン

れが施されていて、志のままに行きえないことから、 は戻・很愎の意となる。[説文] ニ下に「聽從せざ で表なり」とは、のちの用義。[左伝] 葉二十六年 で表なり」とは、のちの用義。[左伝] 葉二十六年 で表なり」とは、のちの用義。[左伝] 葉二十六年 なり」とは、のちの用義。[左伝] 葉二十六年 が、上]「彼いに勝を求むること ない。[説文] に「一に曰く、行 のように用いる。[説文] に「一に曰く、行 会うて、進みえない形。很は道路にそ形声 声符は艮。艮は呪眼の邪視に 声符は艮。艮は呪眼の邪視に

恨。 うらむ・くいる・おしむコン

義を承ける字である。 が、呪眼によって、志をえずして卻くという艮の声 義。〔説文〕一〇下に「怨むなり」とし、艮声とする とを知らずんば、のち必ず恨あらん」とは、悔恨の 悔恨のように用いる。〔荀廴、成相〕に「戒むるこ えないことを恨という。 会うて、進みえない形。そのため志を 形声 声符は艮。艮は呪眼の邪視に 声符は艮。艮は呪眼の邪視に 怨恨・恨憤・恨怒・恨望・

根拠の意となり、容易に絶ちがたいものを宿根とい う。これを絶ちきることを根絶・根治という。 り、人の生れつきの気性を根性という。また根源・

り。故に婚といふ」とし、昏の亦声とする。金文の家なり。禮、婦を娶るに昏時を以てす。婦人は陰ないるが、正しい字形ではない。〔説文〕一三下「婦のいるが、正しい字形ではない。〔説文〕一三下「婦の

て酒を酌む形。〔説文〕充文の字形はいくらか似て

では

衮 10 天子、上公の服コン

恋 0

会意 衮・巻の音が古くは通じていたからであろう。 れており、祭服である。衮竜を巻竜ともいう 玄衮衣は秬鬯その他の礼器・祭器と合せて賜与さばんだ。 Maria Mari 司は三公。天子の衮服には竜・山・華虫など十二章 祭服となり、竜の繡文を加えた。衮職は天子、衮その神容を示す衣裳とみられる。のち天子・三公の の霊容を拝したいと欲する意をいう。従って衮は、 ころと同じく、谷に従う。容は先祖の霊容、欲はそ 字形には公に従う形とするが、もと容・欲の従うと わゆる衮竜の服とし、公声であるという。のちの 天子が先王を祀るときの祭服で、竜を締とするいは神霊の衣裳をいう字であろう。〔説文〕八上に、 Dの上に、神霊の気象を示す八を加えたもの。もというの上に、神霊の気象を示す八を加えたもの。もという。 そう **** 衣と公とに従う。公はまた谷に作るものも のは、

婚ュュ よめいり

電 菲 当

形声 声符は昏。 金文の字形は象形で、 爵をも 2

> 崑 山コ の名

るものである。

れるものであろう。三酳はわが国の三々九度にあた

婚礼においては、それは三飯三爺の礼として行なわるものでなく、香には共祭の義があるようである。るものでなく、香には共祭の義があるようである。は初春をもってはじまるもので、その次第は〔儀礼は初春をもってはじまるもので、その次第は〔儀礼

字形に従っており、それを声字に用いている。婚礼 であったのであろう。また車輌の輌も、金文の婚の いる字形に聞がある。いずれも爵を挙げて行なう礼とよく似た字形のものに敷があり、また耳を加えて 字形は、酒を酌んで婚儀を行なう形であるが、それ

の観念の東漸した形迹が考えられる。 という観念となる。その過程に、西方のジグラッ り、そのような巫祝の信仰が、のち神霊の住む世界 離騒〕に、崑崙に至る天路歴程の世界が歌われております。 われ、〔淮南子、墜形訓〕に「その高さ一萬一千里天問〕に「增(層)城九重(その高さ幾里ぞ」と歌天問〕に「増(層)城九重(その高さ幾里ぞ」と歌天問)に「増崙、山の名なり」とみえる。〔楚辞、 霊魂の帰するところという信仰に発展した。「楚辞、 三角ある山とも伝え、日の入るところであり、のち 百千一十四步二尺六寸」とする。三成の山、三峰、 形声 声符は昆。〔説文新附〕九下に

捆 根 衮 婚

地・つち

位にあてて、ひつじさる(西南)をいう。

昆 むし・おなじ・おおい

EL.

垂

10

ぶたごや・かわやコン

があり、 であるからである。人の用いるところは人廁という。 大下に「厠なり」とあり、豕厠。また豕牢という。 (説文) とあり、豕厠。また豕牢という。 (説文) とこれです。 (説文) とこれです。 卜文に、豕牢中に一豕あるいは両豕をかく形のもの 豕牢をいう。 豚小屋をいう。〔説文〕

10 まこと・まごころコン

根10 をいう。〔後漢書、章帝紀〕「悃愊無華」、 える。悃愊とは漢代の語で、素朴に誠意を尽すこと り」とあり、〔玉篇〕に「志、純一なるなり」とみ む意がある。〔説文〕一〇下に「悃惺な形声 声符は困。困にうちに包みこ

るところ、いわゆる蟠根錯節をいう。木はその根に 株なり」とするが、株よりも下、根柢のかたく交わ てかたまるものの意がある。〔説文〕 六上に「木の よって生育するものであるから根本・根幹の意とな 進みがたい意象の字で、 声符は艮。艮は呪眼に会うて 一所に渋滞し

11 おろか・くらい い・みだれる

して亡きが若くにして存す」とは、その有無をも定忘・惛乱のように用いる。〔荘子、知北遊〕「惛然とり」、〔広雅、釈詁〕に「爨なり」とみえ、「帰患・惛り」、〔広雅、釈詁〕に「爨なり」とみえ、「私で めがたい状態をいう。 る。〔説文〕一〇下に「憭かならざるな 声符は昏。昏に昏冥の意があ

混 まじる・あわせる・おおきいコン

冥・混沌の意となり、盛大の義をも生ずる。〔老子〕義ではない。もと混雑の意より、混同・混一・混滚々・渾々など擬声的な語からの引伸義で、字の本 第二十五章「物ありて混成す。天地に先だちて生 ず」とは、その混沌盛大の象をいう。 一上に「豐かなる流れなり」というのは、混々・ 群集して、混雑する意がある。「説文」 声符は昆。昆は昆虫。昆虫の

痕 きずあと・あと・あとかたコン

その方法を瘢痕という。ほかに、皮肉を傷つけて文様を付するものがあり、 癥」の句がある。文身の方法として、絵身・入墨の 「根を痕という。蔡琰の〔胡歌十八拍〕に「刀痕箭状を痕という。蔡琰の〔胡歌十八拍〕に「刀痕箭状を入の形で、跟迹の意がある。傷形声 声符は艮。艮は呪眼に会うて

組加 こんいろン

> 脩 務訓」「黑質を抑へて赤文を揚ぐ」の意で、表面となる。とあり、また紅青ともいう。揚とは「淮南子、り」とあり、また紅青ともいう。揚とは「淮南子、 して紺地句文錦三匹などを与えたことがみえている。に、卑弥呼に対して紺青五十匹、またその使者に対いる。紺青は色料に用いるもので、〔魏志、倭人伝〕 書名に、「紺珠集」「小学紺珠」のようにその字を用 ると記憶がすべて蘇るという。それで説話や類書の にあらわす意。紺珠はふしぎな宝玉で、これを撫す 「帛の深靑にして赤色を揚ぐるもの」。 声符は甘。「説文」 - 三」 声符は甘。〔説文〕一三上に ts

渾 12 あつまる・すべて・さかんコン

渾大・渾盛・渾沌の義となる。渾沌は混沌と同じ。 それ濁れるが若し」とあり、それより渾然・渾一・ 盛んなさまをいう。〔老子〕第十五章に「渾として のを、渾天儀という。 天象を渾天、その宇宙の渾流するさまを計測するも の意とする。混々・滚々と同じく擬声語で、水流の 形声 「溷りて流るる聲なり」と濁流・渾濁 声符は軍。〔説文〕一一上に

虫 むコしン

왕

それならば昆虫の義である。昆虫といっても秋の螟 の總名なり」とし、「讀みて昆の若くす」という。 蟲。三下に足のある虫とし、蚰ニ三下においては「蟲会意 二虫に従う。〔説文〕は虫ニ三上に蝮とし、 二虫に従う。〔説文〕は虫=三上に蝮とし、

> 虫除けの行事は、のちにも伝承されており、「周礼、 その名を用いるものもあり、みなその祭祀に関係あ 「貞ふ。河(族名)を召して蚊に繋せしむるに、雨 秋官〕に、〔庶氏〕などその関係諸職がある。 から、これを神として祀ったことがト辞にみえる。臘の類で、農作に甚大な被害を与える大敵であった。 は、神格としての蚰に代表される意で、このような るものであろう。「蟲の總名」という抽象的な説明 の対象とされる神名である。また地名・族名として せしめんか」「蚰は我に壱せざるか」とあり、舞掌 ふることあらんか」「貞ふ。 蚊に舞 (雨乞いの祭)

虚 13 宮中の道・ひろい・さいわコン・コ

の中の下三句に韻する例はなく、これは上二句のものとするが、字形は壺と殆ど異なるところがない。またその音についても、「詩、大雅、既酔」に「威はこれ何ぞ 室家の壺なり 君子萬年 永く祚胤はこれ何ぞ を錫ふ」という。段を記載の「音均表」に「威を発している。 書、叙伝〕に「壼闌」など臘の義に用いる例はある皆、叙伝〕に「壼闌」など臘の〔答賓戲〕に「壼奬」、〔漢なめのと思われる。班固の〔答賓戲〕に「壼奬」、〔漢がの韻である。吉祥語として輔・#などに仮借した部の韻である。 下二句の年・胤がそれぞれ韻、何・壼は魚 80 なり」とし、字形を口に従い、宮垣や道の形に象る であろう。〔説文〕 ボドに「宮中の道象形 壺の形で、おそらく壺の異文

訓義は疑うべきである。 が、「宮中道」の意に用いた先秦の例はなく、 その

跟 13 したがう・つけるコン

あって、歱と互訓。歱をみせて卻くので、そのあと「足の踵なり」という。歱字条ニ上に「跟なり」と 字で、 を追迹する意ともなる。 かかとをみせることをいう。「説文」ニ下に に会うて進みえず、卻く形の 声符は艮。艮は呪眼

髡 かみをきる・かる

「髪を動るなり」とあり、 を切る形。〔説文〕 九上に 形声 重文の字は元声に従う。 声符は兀。兀は首髪

という。結髪していないもの被を加えるものがあって髪錐なを加えるものがあって髪錐なけの刑罰に、髪を切り、首な う需は、雨請いする而(兀キビター)とみえる。儒の従守らしむ」とみえる。常の従 「髡者に積(積聚のもの)を あった。〔周礼、掌戮〕には、受刑者か特定の賤職者では、受刑者が 9

髡刑図

ている。仏者も鬅髪しているので、髡人という。属するものであることは、その字形のうちに示され 者)の意で、儒の源流をなす階層が、巫祝の系統に

褌 したばかま・したおびコン

コン 跟 髡 褌 魂 閩(梱)

墾

諢

く意がある。字はまた幝に作る。 声符は軍。軍に運ってとりま

それを被って舞うのを褌脱舞という。猿楽の一種で (わたくず)に匿れ、自ら以て吉兆 (吉宅) と爲す あった。 なり」とみえる。動物の縫いぐるみを神脱といなり」とみえる。動物の縫いぐるみを神説とい (で)に「群風の褌中に處るや、深縫に逃れ、壊架と伝」に「群風の褌中に處るや、深縫に逃れ、ばいないない。「智慧、阮籍を撰字鏡」に「したのはかま」という。「智慧、阮籍を撰字鏡」に「したのはかま。字はまた幝に作る。〔新 したおびとはふんどしをいう。

魂 たましい・たま・こころコン

を用いるが、わが国の位牌と同じ。霊座の上に死者の衣をおいて祭る。のち祖祭に魂界霊座の上に死者の衣をおいて祭る。のち祖祭に魂界でおり、云・魂の声は近い。魂衣はまた鬼衣といいており、云・魂の声は近い。魂衣はまた鬼衣といっている。 形である。〔荘子、馬蹄〕に神・魂・云・根を韻し うのと相対するもので、白とは生気を失った頭骨の 『陽气なり」とは、魄字条九上に「陰神なり」といい。 文で雲気の象。魂は雲気となって浮遊 云と鬼とに従う。云は雲の初

關 15 [梱] 11 もんのしきみ

婦徳を闐徳という。軍務のため外にあることを闔外 た壺と通用する といい、外征の将軍を「闖外の任」という。字はま ころを脳やしいう。

 は婦人の鬣門に用いるので、

ではなり、という。これより奥に入るので、深奥のと

概なり」という。これより奥に入るので、深奥のと の。〔説文〕六上に字を梱に作り、「門形声 声符は困。困は木組みしたも

> 16 たがやす・ひらく・おさめるコン

がある。開墾を墾というのは、猪のように地を掘鑿ない。などでは、それである。まには很戻(もとる)の意すことをいう字である。まには很戻(もとる)の意 地に入ることをいう。猪が作物を掘り起して、 篇〕に「豕、地を齧むなり」とあり、その歯が深く 墾 して、のちに耕すからである。 〔説文〕丸下に「豕の齧むなり」、〔玉形声 声符は貇。貇の正字は豤。 声符は銀 荒ら

譚 16 おどけ・たわむれコン

ある。 う。護詞小説は俗語体の小説、わが国の講談の類でた服で、唐の穆宗はこれをもって宮女と戯れたとい た服で、唐の穆宗はこれをもって宮女と戯れたという。譚語・譚話はおどけ話。譚衣は戯言淫詞をかいう。 形声 諢名とはあだ名をいう。 声符は軍。唐宋以後の字で、戯弄の言をい

16 もんばん ばん

は墨刑を受けたものを用いる。古くは異族を宮刑に る。天子五門のうち、雉門より内は奄、庫門より外 寺という。寺人とは奄人・宦官(宮刑のもの)であま守らしむ」とあり、多く受刑者を用いた。また闡言り、以て啓閉するものなり。刑人墨者をして門 して、用いたようである。 とあり、昏の亦声とする。[周礼、閣人]に「王宮とあり、昏の亦声とする。[周礼、閣人]に「王宮(また)に「王宮(常に昏を以て門を閉づるの隷なり」 形声 声符は昏。〔説文〕 ニュ上に

懇 ねんごろ

文新附了一〇下に「悃なり」とあって、懇篤悃誠の 声義の通ずる字である。 意。懇願・懇誠・懇切・懇到のように用いる。悃と 荒地の土を深く掘って耕作の地とすることを墾とい い、また深く人の心に達することを懇という。「説 形声 を深く掘りかえすことをいう。ゆえに 声符は銀。狠は猪が牙で作物

第17

篇〕に「他人を昆と謂ふ」の昆も晜の意で、兄弟を 女性の象徴であるから、亡妻に哭して眾するものを老いて妻なきを鰥といい、その字も眾に従う。魚は また昆弟という。翳が眾に従う意は明らかでない。 「父の從父晜弟」と晜の字を用いる。〔詩、王風、葛の人の語ではない。〔爾雅、釈親〕に「父の晜弟」も周人の語ではない。〔爾雅、釈親〕に「父の晜弟」 に「今江東通言して晜といふ」とあるから、必ずし 鼻に作り、〔国語、呉語〕に「父子晜弟」、〔郭注〕 のが

繁、すなわち

弟を失った

兄をいう

語であろう。 鰥という。これより類推するならば、弟に深するも の象形字で、「目相及ぶ」ものではない。字はまた かず、ただ「衆は目相及ぶ」意であるとする。衆は涙 であろうと思われる。 に「周の人、兄を謂ひて鄴といふ」と 駅と弟とに従う。

「説文」 五下

> 鯀 **越**

줾

ぜられるが、成らずして羽山に殛され、その子の禹典〕に「於、鯀なるかな」と一たび治水のことに任寒」に「於、鯀なるかな」と一たび治水のことに任知れず、神話においては禹の父とされる。〔書、尭 知れず、神話においては禹の父とされる。〔書、・尭・あるいは鮌が初文であろう。魚としては何の魚とも 形声 組み合せた形で、その字はその神話的図像から出て 象しているように思われる。鯀は魚形、禹は二竜を 羌系、また東方系の洪水説話と複雑にからんでいます。 形ではないかと考えられる。 かかれているあの人面魚身の図像などが、その原初 たものらしく、西安半坡出土の彩陶に、神像として いるものであろう。もとは禹も魚形で表現されてい が治水に成功する神話である。その洪水説話は他の い。鯀が玄魚に化したとする古い伝承があるので、 れも声符として疑問があるが、古い確かな字形がな 古代における諸族の葛藤の歴史を、神話的に表 声符は系。字はまた鮫に作り、玄声。いず

叉 3 はさむ・さすまた・わかれるサ・シャ

Ą なり」とする。 象形 形。〔説文〕三下に「手指、相錯はる 〔玉篇〕には「指相交はるなり」と 指の間に爪のあらわれている

> ない状態をいう。 という。叉手は拱手というのと同じく、為すことの のち交叉するものをいい、叉手・叉枝、また笄を釵 二爪、何れも爪をもって叉取することを原義とする るが、叉の字形と比較していえば、叉は一爪、叉は し、〔段注〕に「手指と物と相錯はるなり」と解す

つくる・たちまちサ・サク・ソ

(迮) ぐ」「乍(酢)す」「乍(酢)す」のようにもい」とトするものがある。金文においてはなお「作西貞ふ。王は三師、左中石を乍らんか」と軍の編成をトし、あるいは「これ大庚(祖王の名)告を乍すをトし、あるいは「これ大庚(祖王の名)告を乍すをトし、あるいは「これ大庚(祖王の名)告を乍すをトし、あるいは「これ大庚(祖王の名)告を「する」「「下大人か」のほか、「乍邑」「乍家」「乍庸(城)」「乍大んか」のほか、「乍邑」「乍家」「乍庸(城)」「乍大 いは亡ぶ」のように用いる。ほか、〔史記、旨者伝〕「先王の道、 ほか、〔史記、日者伝〕「先王の道、乍いは存し、乍などの字が分化した。副詞としては「たちまち」の 用いる。のち作の字がこれに代り、また迮・祚・痄 造作の意となる。ト辞に「貞ふ。大邑を唐土に乍ら 意を示すものがある。設営の基礎作業であるから、 の崩壞を防ぐもので、卜文には孝を加えて、固結の乍の字形は小枝をおしまげ、それを結んで固め、土 竹を編みて相連ね、迫迮するなり」というのが近い は関係がない。〔非ない、釈宮室〕に「乍は迮なり。 「止むるなり。 ئے とするが、亡は人の屍骨であって、乍の字形と 形。作の初文である。〔説文〕ニートに 一に曰く、亡なり。亡に從ひ一に從 小枝を撓めて、垣などを作る

左5分之

Ē Ø

۶°

E

11

形声

゙声符は左。左は佐の初文。□説文〕にみえ

夫差鑑」の差の字も、工の部分を切の形に作る。左右せよ」という。言もまた祝禱の器をいう。[呉王なら合彝] に「爽かに乃の寮(自)と乃の友事とを言いて命奉」に「爽かに乃の寮(自)と乃の友事とを言いている。 念によるものであるが、左には本来呪術の意が含ま を呪術巫儀の左道の意に用いるのは、右尊左卑の観 れている。 〔班毀〕に「毛父(人名)を左比せよ」「毛父を右比ば。 た。のち人のために祈ることから、佐ける意となる。て神に祈るので、左右とはもと神に祈る行為であって神に祈るので、左右とはもと神に祈る行為であっ るロ(ID)をもつ。左に呪具、右に祝禱の器をもっ呪具である。これに対して、右手には祝禱の器であ の象形。左の手に工をもつ形が左。工は巫祝のもつの象形。左の手に工をもつ形が左。工は巫祝のもつな意。 ナヒエとに従う。ナは左の初文で、左の手

些7 いささか・すこし

事のようにいう。 句末にこの字を用いる。 よ歸り來れ 詠嘆の語気となる。〔楚辞、招魂〕「魂 東方以て託すべからず些」のように、 細少の意を含む。些は助詞としては告 声符は此。此は雌の初文で、 唐宋以後、些細・些々・些

佐ィ たすける・そえるサ

左(上)

些

佐 沙 查

砂

唆

差

心 0

沙

すな・シャ

書の意であろう。漢簡の類がその書である。に佐助させたからであるというが、おそらく佐史の

〔周礼、内司服〕の「素沙」の沙は紗の意。みな仮沙」の語があり「彤緌(あかい呪飾の紐)」、また沙」の語があり「彤緌(あかい呪飾の紐)」、また即していえば、形声の構造法である。金文に「彤の散乱する形で、字の全形は象形。ただ沙の字形にの散乱する形で、字の全形は象形。 借義である。 沙見ゆ」と会意とするが、金文の字形では、少は砂 - 1-1とに「水の散らせる石なり」とし、「水少くして 形声 声符は少。少は小さな砂模様の形。〔説文〕

查。 しらべる・ほしいままサ

を佐佑は左右の繁文。隷書のことを佐書という。隷人のち人事に及ぼして用い、輔佐あるいは佐貳をいう。以て上帝に佐事せよ」は、なお古い用義法である。映 降(天に升降)して、我が先王の左右に在り、時、降(天に升降)して、我が先王の左右に在り、 ある。 〔説文〕に収めず、六朝期には槎の義に用いた字で 考察の義と爲す」とあり、査察・考査の意となる。 達放縦をいう語であった。〔正字通〕に「俗に以て 「近代の流俗、丈夫婦人の縱放にして禮度に拘せ で、近年の流程、丈夫婦人の総放にして禮度に拘せら 「こぼけ」をいう。唐の封演の〔封氏聞見記〕に形声 一声符は且。字はもと櫨に作り、木の名で 人の姓としても、五代以後に至って多い

砂 すりな

った。〔左伝〕昭七年「襄公に追命して曰く、叔父、った。〔左伝〕昭七年「裴公に追命して曰く、ぬくば、 はもと神事に用いる語で、神の佑助を求める意であ ず、〔広雅、釈詁〕に「助くるなり」という。左右

夜明砂などの名がある。その鉱脈を砂床という。 |交打||からない。 | 保砂・丹砂・辰砂、その他明月砂・多く用いられ、朱砂・丹砂・辰砂、その他明月砂・とともに去ったという話がある。 [水等] の薬名にとともに去ったという話がある。 [水等] 砂は砂石で、形のあるものをいう。〔捜神記〕に雍 州に神樹あり、年々祭費多く、武王が怒って兵をも って囲むと、砂を飛ばし石を走らせて、樹神は霹靂 形声 声符は少。沙と同じであるが、 沙は細沙。

唆 そそのかす

明律に唆詐という語があり、教唆の罪をいう。それに、またないである。子どもたちが答えあうときにも、この声を用いる。子どもたちが答えあうときにも、この声を用いる。 使嗾する意であるが、そのときの擬声語であろう。 声符は愛。愛に梭の声がある。人に教唆・

差 10 すすめる・えらぶ・たがうサ・シ

. 筐 李善

詹 為人樣

字であるように、差は未稷を神に差める意であろう。字形はすべて禾に従うており、羞は羊を神に羞める衡を失う意とするが、字の初形と合わない。全文の らぶ)の意となり、またその参差として不揃いであめるために、その善否をえらぶことから、差択(えのち人を他に使する差使・差遺の義となる。神に差 国差に作る。また〔蔡侯鑵〕に左右の左を鹺に作せしむ」と佐の義に用い、[国佐蟾] にも、国佐を [叔夷鐘]に「余、女に命じ、正卿を裁差(補佐)」をいい。ななない、のちの定着した字形によって、左の形声とする。 従うが、蓋の字形によって誤ったもので、古い字形 系統の訓を差の本義とするものであるが、みな双声 語で、蹉跌というのと同じ。〔説文〕の訓は、この 年「何ぞ敢て差池せん」、「荀子、正名」「差々然とをまた差池といい、差差という。〔左伝〕『寒二十二 択・差次から生れる訓で、差の初義ではない。参差なる。〔説文〕の「貳ふなり」とする訓は、この差 ることから、順序次第を意味する差次・差等の意と 文〕五上に「貳ふなり。差ひて相値はざるなり」と る。差に左・佐の意があったものと思われる。〔説 て祝禱する意であるから、左・右はもと意符である 他に、禾と右に従う形のものもある。禾を神に差め はすべて禾を薦める形である。 って考えるべきである。差のいまの字形は羊の形に あるいは畳韻の語にすぎない。初義はその字形によ して齊じ」のようにいう。差池はまた蹉跎と同源の し、左と垂との会意字とし、左方が垂れて左右の均 声符は左。金文の字形は禾と左に従う形の

紗 10 うすぎぬ

使をおいて、その生産を管理した。 ものをいう。紗縠はちぢみ。紗絹・紗羅・沙籠のように、うすぎぬをいう。窓に張って紗窓、また襖にものをいう。紗縠はちぢみ。紗絹・紗羅・沙籠のよろに、うすぎぬをいう。窓に張って紗窓、また襖にもみえる。特産であるため、のちには紗羅・投籠のような状態の形声 声符は少。少は沙、沙模様のような状態の形声 声符は少。少は沙、沙模様のような状態の

貨 10 サークリー かさな貝・こまかい・くだくだしい

・ 会意 小と貝とに従う。〔説文〕六下れ合う音の擬声語と解するものであろう。玉部一上れ合う音の擬声語と解するものであろう。玉部一上へ貫と見とを連鎖したものが貨で、貫は弾・鎖の初小貝と貝とを連鎖したものが貨で、貫は連なり」としている。小は小貝の象。が見と東であるが、貫がその形である。小貝を連ねたものであるから、細砕のものの意となる。

梭11

言 12 サールつわる

形實 声符は乍。〔説文〕三上に「欺くなり」とするが、もと盟誓にたがう意。〔詩、大雅、蕩〕「これるが、もと盟誓にたがう意。〔詩、大雅、蕩〕「これでしこれ訳す」の作は酢の意。〔吉た伝〕宣十五年、大雅が楚と和したときの盟誓に「我、爾を許ることなく、爾、我を襲ることなからん」という。もと神の祝誓についていう語で、〔論語、子罕〕に「久しいかな、由(子路)の許を行ふや」と、子路が神に偽る祝禱をしていることを、孔子がたしなめて、「吾、誰をか欺かん。天を欺かんか」と述べている。天を欺くことを、許を行なうという。人を欺くことを欺くことを、許を行なうという。人を欺くことを

13 とる・およぶ

斯克盆

雪帽雪

に「取る」、〔広雅、釈詁〕に「叉なり」とし、字をに「取る」、〔広雅、釈詁〕に「叉なり」とし、字では儀礼に関するものが多く、これに手を加えているが、いまその初義を伝えるものがない。〔説文〕るが、いまその初義を伝えるものがない。〔説文〕るが、いまその初義を伝えるものがない。〔説文〕五上に「虎、柔ならず、信ならざるなり」とみえる。虎頭の字に柔ならず、信ならざるなり」とあり、とし、字をは、「取る」、「のは、釈詁」に「叉なり」とし、字を

また攅に作る。金文には語詞に近い用法で、「小野となっての俄容をいうものであろうが、金文の用義についての俄容をいうものであろうが、金文の用義ところがある。字はもと戯・劇などと同じく、武事についての俄容をいうものであろうが、金文の用表ところがある。字はもと戯・劇などと同じく、武事についての俄容をいうものであろうが、金文の用表ところがある。字はもと戯・劇などと同じく、武事についての俄容をいうものであろうが、金文の用表ところがある。字はもと戯・劇などと同じく、武事についての俄容をいうものであろうが、金文の用義についての俄容をいうものであろうが、金文の用義についての俄容をいうものであろうが、金文の用義についての俄容をいうものである。

嗟 13 ああ・なげく

嵯 13 やまのけわしいさま

サ嗟嵯槎瑣蓑磋蹉髽

槎 14 きる・いかだ

差の木を組んで用いるからであろう。 差の木を組んで用いるからであろう。

質は かいさい・うつくしい・つらなる

形声 声符は賞。賞は小さな貝を綴れずく美しい意をもつ字である。
 形声 声符は賞。賞は小さな貝を綴れずなどみな細小の義に用いるが、ものを環に留まらんと欲す」とは、その神域をいう。この靈瑣に留まらんと欲す」とは、その神域をいう。とは小さく美しい意をもつ字である。

衰 14 みのサイ

者の身に着けるものであった。
をしるしている。わが国では、菱笠は神の使者や死衰さを載す」とあり、送葬の車に菱笠を載せることをしるしている。わが国では、菱笠は神の使者や死があるようである。〔儀礼、既夕礼記〕に「稟車にがあるようである。〔後礼、既夕礼記〕に「稟車にがあるようである。〔後礼、既夕礼記〕に「原本ではることに何らか呪的な意味のは、その菱・笠をつけることに何らか呪的な意味

磋 15 みがく

のではまた切磋ともいう。 のであるう。 達は磋の異文とみてよい字で、 である。低にかけて磨くことをいう。 「爾雅、釈意がある。低にかけて磨くことをいう。 「爾雅、釈意」に切磋琢磨の語があり、切は骨を切る意であるから、磋を象骨をみがくとする解がを切る意であるから、磋を象骨をみがくとする解が、釈意がある。という。 という。 「爾雅、釈意がある。」という。 という。 「爾雅、釈意がある。」という。 という。 「爾雅、釈意がある。」という。

蹉 17 つまずく・たがう

長全 17 婦人の喪中のくずし髪

の礼の起原について、〔礼記、檀弓、上〕に、魯の女子は髽衰す。弔ふときは則ち髽せず」という。そ女子は鹙衰す。弔ふときは則ち髽せず」という。その結響なり。禮に「寒の結響なり。禮に「寒のおきなり。禮に

は、その形であろう。
は、その形であろう。
ない、その形であろう。
は、その形であろう。
は、その形であろう。
は、その形であろう。

鎖18【鎖】18 〔鏁〕19 せざす・かけがね

ザ

坐っ かみになる・すわる・いながら

田主 小生 会意 土と二人とに従う。 田主 小生 土を中心に、二人のものが坐する形。土は土主、神を祀るところ。その左右に人する形。土は土主、神を祀るところ。その左右に人する形。土は土主、神を祀るところ。その左右に人をいり」とし、土とはその止まるところ、また二人を当事者となることである。〔説文〕一三下に「止まるなり」とし、土とはその止まるところ、また二人を当事者となることである。〔説文〕一三下に「止まるなり」とし、土とはその止まるところ。その左右に人をの者文卯であるとするが、坐はもと表するが、坐と為ることは、二人とに従う。

|| 10 ずわるところ・しきもの・つどい

原している。 単行は坐。坐は獄訟にかかわること。重要形置 声符は坐。坐は獄訟にかかわること。重要をの行なわれるところを座という。もと神の座を意味した。いま神社や寺観・山林を座をもって数えるのは、神霊のあるところを座という。もと神の座を意味した。いま神社や寺観・山林を座をもって数えるのは、神霊のあるところを座という。もと神の座を意味した。いま神社や・学は獄訟にかかわること。重要形置 声符は坐。坐は獄訟にかかわること。重要形置

挫 10 ぜく・そこなう

形声 声符は学。学は法に坐するこの語がある。

サイ

する あり・しるし・たち・はたらき



東形 標状として樹てた木に、横木を着けた十象形 標本として樹てた木に、横木を着けた十まで、その地は続い清められ、神の支配するところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところとなり、場所的にも時間的にも、清められるところに、横木を着けた十まない。

意。存は人にその聖標を加えて、これを聖化する意 ろを、 えたものであろう。当とは載書(祝禱の書)をいう。おそらく祝禱の器を意味する当に従うて、その声を 神意によってことをはじめる意をもつ。才の声は、 聖標の形であるが、これを戈に加えてきとなる。戈 に士の形を加えたもので、士は鉞の頭部。王や士的なものである。才は在の初文であるが、在はそれ 元であるから、最も根元的なものを天地人三才のよ 哉・裁・栽など、みな弋の声義を承ける。すなわち いるもので「哉める」意。戈声に従うものは載・ を清める意であるが、おそらく軍行を啓くときに用 で、その存続を保証する意となる。才はそのような り、神の支配するところとして、聖標を樹てたとこ のであるが、 は、この鉞の頭部を儀器としてその身分を示したも うにいう。才は材質・質料というよりも、 たものとして在ることを意味する。それが存在の根 さらに聖器で守る意で、その存在を確かめる 在においては聖器としてそえられてお なお根元

第一条《》》

わざわい

ものに「往來、低一きか」のようにトする。 低はとなり」と訓し、一が水を壅ぐ形とする。 「左伝」宣れるが、災は火災の意。 ト辞の往来や畋猟をトするれるが、災は火災の意。 ト辞の往来や畋猟をトするのに「往來 低一とに従う。 水流が壅がれて溢流する金意 水と一とに従う。 水流が壅がれて溢流する金意 水と一とに従う。 水流が壅がれて溢流する金

て用いている。きにす、(才) の形に従うことがあり、才を声符としきにす。

再 6 みたつ・ふたたび

严 瓦。百两

でない。みな布帛に関する字である。 ぐるなり」としており、この系統の字形把握が確か 四下は冓を「材を交積する」形、また爯を「竝び擧 にして二なり。冓の省に從ふ」とするが、〔説文〕 その織法に関する字である。〔説文〕四下に「一擧 形は明らかに冓における組紐の形と同じであるから また〔魔 羌 鐘〕に「廿又再祀」の語例がある。字 では、「斉侯轉」に「再拜」、「陳璋壺」に「再立事」では、「斉侯轉」に「再拜」、「陳璋壺」に「再立事」 摺畳の形が再であるとみることもできよう。金文 象形 **冓は一系の字である。稱は布帛の重さを称る意であ** *の重さ)の初文。冉を連ねる形は冓。冉・再・爯・の重さ)の初文。冉を連ねる形は冓。冉・再・爯・ 冉をもちあげる形は毎で、稱(称。織物の糸数、糸 しの意を示す。金文は下端に二を加える形とする。 ※その布帛をものに架して折り返す、いわゆる 組紐の形。博の上下に一を加えて、折り返続。

大 6 サイ つく

会意が、大と文とに従う。才は神聖の榜示で、その

災って裁」10 欠」でかがい、そこなう

兼 类 拱 呶 * ◎ * ≥ >

金意 《光火とに従う。《はもと祭に作り、水が金意 《光火とに従う。《はもと祭に作り、水が金章 がれて流流する形で、水災をいう。それに火を加えて、火災の意とする。〔説文〕一〇上に正字を規加えて、火災の意とする。〔説文〕一〇上に正字を規定、「天火を規といふ」とする。成は戈声の形声 字である。人火を火、天火を災という。天火とは落意によるものとされ、災谷・災之いう。天火とは落意によるものとされ、災谷・災之が、災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「天地に裁あるときは、則ち(楽を)擧げず、〔大宗怕〕「号禮を災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「天地に裁あるときは、則ち(楽を)擧げず、〔大宗怕〕「号禮を災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「天地に裁あるときは、則ち(楽を)擧げず、〔大宗伯〕「号禮を災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「大宗伯」「号禮を災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「八次遣・災遣・災は、則ち(楽を)。挙げず、「大宗伯」「号禮を災と為す」もその意。「周礼、膳夫」「天地に裁あるときは、則ち(楽を)。擧げず、〔大宗伯」「号禮を災しるを災(減)す」など、みなその天諱にこたえて、恭を殺(減)す」など、みなその天諱にこたえて、恭を殺(減)す」など、みなその天諱にこたえて、恭を殺(減)す」など、みなその天諱にていた。

妻 8 つま・めあわすサイ

费療 髪を整えた婦人の形

は取妻・妻子・妻帑・寡妻・豔妻などの語がみえる齊める季女あり」の齊は、齌の意である。〔詩〕に齊は、齌の意である。〔詩〕に称る李女あり、の齊は、齌の意である。〔詩〕にかる李をかる。 解釈にすぎない。齊の音をもつものは齎で、巫女を齊(斉)の音で妻を解したものであるが、音義的な 『説文』 三下に「婦、己と齊しきものなり」とは、いう字は、婚儀における夫妻の盛装した姿である。 結婚のときの盛装をいう。このとき夫も、髪に笄を 三本の簪を加え、それを手で挿して 長の妻としたことをしるしている。 公冶長〕に、孔子が自分の女を、刑余者である公冶あるう。妻とすることを「妻はす」という。〔論語、あろう。妻とすることを「妻はす」という。〔論語、 のときには、その語を用いることがなかったからで が、金文に全くその字がみえないのは、祭祀や儀礼 加えて盛装するので、大の上に笄を加える。夫妻と 要素を別けていえば、頭上に いる女の姿で、

采 つみとる・みつぎ・いろサイ

8 0

[説文]六上に「捋取するなり」とは、もぎとるこ会意 爪と木とに従う。木の実を采取する意。 とをいう。采取の意より、采地・采邑の意となる。

> 女は漢代の女官名。わが国の古代にも、各地より宋通じて采色・采藻の意とし、文彩・文様をいう。采 「趙等」「宋を賜ふ」、〔中方鼎〕「乃の宋と作せ」ない。 代宗教的な問題があるようである。 ど、西周初期にすでにその意に用いる。また彩に 女を貢するその制が行なわれた。その起原には、 古

哉 9 はじめる・かな・やサイ

戡 **找** 哉 戡

う。〔書、武成〕の「哉生明」、〔康誥〕〔顧命〕の生霸の哉の初義は、月の形がみえはじめることをいりなって「超々たれ哉」のように哉を用いる。哉知に至って「超々たれ哉」のように哉を用いる。哉いな」、「それない のようにす・弋を用い、列国とは詠嘆の助詞に用いる意であるが、金文には「哀とは詠嘆の助詞に用いる意であるが、金文には「哀とは詠嘆の助詞に用いる意であるが、金文には「哀 ことをはじめるときの呪儀であったと思われる。 るのが字の初義。字はまた載に作り、「孟子、滕文る語である。〔爾雅、釈詁〕に「哉は始なり」とあ 「哉生霸」の哉で、初の意。既生覇・既死覇に対す **禱の意の日を加える。[説文]三上に「言の閒なり」を同義に用いており、弋は哉の初文。哉はさらに祝** 祝禱を収める器で、祝禱を意味する。金文に戈・哉 会意 載も哉の意である。戈に呪飾を加えるということが 公、下」「葛(国名)より(伐つことを)載む」のい。 を加えた形で、おそらく戈を清める儀礼。口は聞、 我と口とに従う。 考は戈に呪飾としての才

柴 9 しば・まつり

> 常 などは、みな粗末な貧屋をいう。 れを燎いて天を祀るを紫という。柴籬・柴扉・柴門に「小木、散材なり」とあり、柴蒜の属をいう。こ 尖ったものの意がある。〔説文〕六上形声 声符は此。此に細少のもの、 声符は此。此に細少のもの、

砕。〔碎〕13 くだく・ひく

たなり という。片鱗というのと同じ。という。片鱗というのと同じ。名家の詩文の一斑を砕金くときの擬声語であろう。名家の詩文の一斑を砕金という。 陳 う。〔広雅、 「雅、釈詁」に「壞るなり」、「玉篇」に「散り」とあり、石臼などで糠き潰すことをい辞・姓の声がある。「説文」九下に辞・姓の声がある。「説文」九下に辞・姓の声がある。「説文」九下においている。 正字は碎に作り、卒声。卒に

字 10 つかさどる・おさ・おさめるサイ

廓

とするのは、辛を入墨のための針で、皋あるものと 下に「皐人なり。屋下に在りて事を執るものなり 従うのが宰の職務とするところである。〔説文〕セ にあって犠牲を宰割するものは、家老などの職にあれていることが多く、牲肉を切る庖丁である。廟中れていることが多く、牲肉を切る庖丁である。廟中 会意 解したのであろうが、宰は宰相・宰輔の職で、 自ら鸞刀を執ることもあったが、祭事にそのことに るものであった。特に重要な儀礼のときには、王が 刀の象。大きな把手のあるもので、曲刃の形にかか 宀と辛とに従う。宀は宗廟の建物、辛は曲 みだ

りに刑余の者を用いるはずはない。宰割・宰牲のこれがあり、その官名がすでにみえている。西藤角」があり、その官名がすでにみえている。西藤角」があり、その官名がすでにみえている。西藤角」があり、その官名がすでにみえている。西藤角」があり、その官名がすでにみえている。西藤角」があり、そのでは、

10 うえる・うえこみサイ

りがたい。前庭の植込みを前栽という。その儀礼があったと考えられるが、詳しいことは知 植樹のことは、封建・社樹として行なわれるもので しがたいところがあり、植培に関する字であろう。

岩10 とりで・まがき

ずる。木砦という語もあり、石や木を併せ用いた簡に用いる。砦は石材を用いた防塞で、寨と声義が通形声が一声符は此。此は柴の省文。柴は柴朮で防窓 単なものをいう。おおむね山砦をいう。

柴 10 てんのまつり

淝 声符は此。此は柴の

砦

祡

豺

彩[彩]

淬

夕に柴を焼いて天神を祭り、塩をその上に撒くといのであろう。程氏の〔稽古編〕に、いま聞俗では、除「血を薦むるを謂ふなり」とあって、血牲を用いた「血を薦むるを謂ふなり」とあって、血牲を用いたものか、あるいは〔周礼、大祝〕「隋纍」の注にものか、あるいは〔周礼、大祝〕「隋纍」の注にものか、あるいは〔周礼、大祝〕「隋纍」の注にも、その牲肉を加えるう。隋は裂肉の意。燔紫のとき、その牲肉を加えるう。隋は裂肉の意。燔紫のとき、その牲肉を加える 豺 10 壇に爆柴するは、天を祭るなり」とあって、壇を設山)に至りて柴す」とみえ、[礼記、祭法]に「泰・ゆる祭天の礼ではない。[書、舜典]に「岱宗(泰・ゆる祭天の礼ではない。[書、舜典]に「岱宗(泰・ う。おそらく古い火祭の形式を存するものであろう。 である。〔説文〕 - 上重文の古文は、隋の省文に従 けて祀る。柴薪を積んでその上に牲を加えて燎くの やまい ぬ

り、 獸を祭りて然るのち田獵す」とみえる。 「狼の屬、 、「狗足」とする。豺虎・豺狼 屬、狗の聲なり」という。〔爾 屬、狗の聲なり」という。〔爾

崔 たかい・けわしいサイ

採〔採〕 て高きなり 雀 Ĺ とは、山の崔嵬なるをいう。崔嵬は畳 声がある。〔説文〕九下に「大いにし形声 声符は隹。隹に誰・誰・熊の

> であったかも知れない。 う催・摧・離などが、みな催し誰める意をもつ字である。古い字形がなくて確かめがたいが、崔声に従 あることから考えると、崔はもと鳥占いに関する字 韻の連語。〔詩、周南、巻耳〕「彼の崔嵬に陟る 谷風〕「これ山崔嵬たり」など、その用例が

彩 彩』 あや・いろどり・かざりサイ

自然の示す文彩である。 れたからであろう。彩虹・彩雲・彩霞なども、 があるのは、色の感覚が多く花木の自然色からえら えたもので、采の繁文である。采に文彩・彩色の意 彩の意にも用いて彩の初文。彩は文彩を示す彡を加 形声 木の果などを取る形の字であるが、 旧字は彩に作り、采声。米は 文

採 (採)1 とる・つみとる・えらぶサイ

〔樂府〕に「採菱」「採芝」「採薇」などの曲がある。るに及んで、采取の字として採が作られた。漢の 訪・採摭のようにいい、選択を採択という。 ・こぎ。 草花の類だけでなく、事物の採集にも用いて、 取る形で、採の初文。采の字義が彩色などに分化す 形声 旧字は採に作り、栄声。米は木の果などを

淬 11 にサイ

の器なり」 とあり、 がある。〔説文〕一上に「火を滅する 形声 刀刃をにらぐときに水を入れて 声符は卒。卒に碎(砕)の

る。人の刻苦勉励することを淬礪という。 おく器の意とするが、にらぐことを淬また焠という。 いずれも卒声に従うが、そのときの音の擬声語であ

済1(濟)1 わたる・すくう・なるサイ・セイ

ME = 1

それが人を救うこと、ことの成就する意ともなった 済度・済渡というが、それはまた人を救済すること 年「世ゝその美を濟す」という。水をわたることを のであろう。 をも意味する語である。字の初義は水を済ること。

猜 そねむ・うたがう

猜疑の意。もと獣の猜疑のさまより、のち人に移し て猜忌・猜忍と 上に「恨みて賊とするなり」とあり、 形声 う。 声符は靑(青)。〔説文〕一○

祭 11 まつる

祭 烘 俗

新

祖霊の降臨を迎えて祭るを際という。ト文には祭卓神を祀るときの字である。廟中において祭るを察、神を祀る うが、祭は人を祭り、祀は巳(蛇)に従うて、自然肉を供えて祭る。〔説文〕一上に「祭祀なり」とい としての示をそえていない字形がある。 肉と又と示とに従う。示は祭卓。その上に

細11 かすか・ほそい・こまかいサイ

それがもとの形である。蔡邕の〔衣の歳〕に「帛はをあげているが、漢隷に囟の形に従うものがあり、恩、古文の細の字なり」とし、重文として悤の字形 その織目の細かいことをいう。〔玉篇〕に「微なり。 文〕一三上に「微なり」と訓するが、微細とはもと 君とは妻をよぶ称。 必ず薄細、衣は必ず輕煖」という。のち転じて、す 形声 のちその形を誤ったものである。〔説 正字は囟に従い、囟声。田は

菜』(菜)』 な・おかず

記、学記」「皮弁(礼長りらう」という。「説文」」「大学記」「皮弁(礼長りらう」、野菜をいう。「説文」」「ない。「神の食ふべきもの」とあり、野菜をいう。「説文」」「ない。「神の食が、いったり、「大き」の べきものを菜という。 に「芹藻の屬なり」とあり、凡そ蔬菜五味の供薦す 旧字は菜に作り、采声。 采は

釵

古くは男子も用い、素の穆公は象牙、敬王は玳瑁 いう。釵環・釵釧は婦人の用いるところであるが、に「笄の屬なり」という。両股であるから、釵とに「笄の屬なり」という。両股であるから、釵と 斜 象形で、釵の初文。〔説文新附〕 声符は叉。叉は両股ある笄の 一四上

文房 11 【一流月】17 【龍版】28 ものいみ・つっしむ

叅

に際してもの斎みすることをいう。「論語、述而」に際してもの斎みすることをいう。「論語、述而」 示す。〔説文〕」上に「戒絜なり」とは斎戒、神事いる形。示は祭卓。祭卓の前に奉仕する齋女の意を (斉) は神事に奉仕する婦人が、髪に簪飾を加えて 会意 でに化去したものの意で、ここでは尸主の象、その 〔説文〕重文の字形は眞(真)に従うが、真とはす 日」とあり、十日にわたる潔斎が必要であった。 「齊とは告祭の名なり。まさに祭祀せんとするとき 「子の愼む所は、齋・戰・疾なり」の〔皇侃疏〕に、 尸主を祭る形である。 女は斎女。わが国では、皇族を斎宮・斎女とした。 則ち先づ散齊すること七日、致齊すること三 旧字は齋で、齊の省文と示とに従う。齊 召南、

最12【最】12 [取]10 とる・あつめる・サイ 「もっとも

首功を最といい、すべて第一等のものを最という。 両義に解するが、〔玉篇〕以下、 り」と目を冒犯の義とし、冣ヒトに「積むなり」と 掩取する聝耳の意で、これを撮めるのを撮という。 上部は耳を蓋う形。〔説文〕七下に「犯して取るな で、戦場で討ちとった敵の耳を切る、いわゆる戦形で、戦場で討ちとった敵の耳を切る、いわゆる戦 耳、これによって軍功を数える。最はまた冣に作り、 、もと一字である。 冃は【*と同じく、蓋う形なするが、[玉篇] 以下、 冣を収めないもの と取とに従う。取は耳をも 旧字は最に作り、同

さい・かたい・するどいサイ

學

会意 をえがたい。その角皮によって、堅強の意がある。 について、特に尾のことを記述する例もなく、字説 たり」とし、尾声とするが、音が合わない。 牛なり。一角は鼻に在り。 尾と牛とに従う。〔説文〕ニ上に「南徼外の 一角は頂に在り。豕に似 また犀

裁 12 たつ・さばく・はかるサイ

重な態度を裁慎という。〔師縠毀〕に「內外を董哉れを他に及ぼして裁判・裁決・裁断といい、その慎 があって、 「裁衣の始」とあり、裁にもはじめて布帛を裁つ意 するなり」とあり、 そのことを裁察・裁制・裁成という。こ る意がある。 〔説文〕 八上に「衣を制 製の字義にあたる。初四下に 声符は哉。 *にことをはじめ

> る意の字である。 せよ」とあり、裁を哉に作る。同じく布帛を裁截す

靫 12 うつぼ・ゆぎサイ・サ

がある。 代紀、上〕に「千箭の靭」「五百箭の靭」などの語ゆき。〔万葉〕に「穀取り負ひ」のように歌う。〔神 ものを「靫負」という。宮門を護衛する武人を総称 り、矢入れ。うつぼ、またゆぎといい、ゆぎを負う 形声 し、衛門府をまた靫負府ともよんだ。ゆぎは古くは 声符は叉。〔玉篇〕に「箭の室なり」とあ 漢籍にはあまり用例のない字である。

催 13 もよおす・うながすサイ

る意となり、新しい行動を開催する意となる。 れによってその対応を迫るものであるから、催促す という語があり、強く非難し刺譏する意である。こ

債 13 かり・かけ

燗 の債務を免除することで、モラトリアムをいう。 に用いる。〔漢書、高帝紀〕「折券棄債」とは帳づけ納入の義務をいう字であるが、のち貸借関係の負債 賦貢を納入することをいう。もとその 声符は責。責の初形は資で、

> 新附〕八上に「負なり」とあり、負債をいう。 「逃責の臺」とよんだ。責は債の初文である。〔説文 けると高台の上に逃げこんだので、人々はその台を かし周の赧王は臣下に多くの借財があり、督促を受

塞13 とりで・ふさぐサイ・ソク

正邪を分って邪気を杜塞するものであるから、必ずはあるが、隔は神人の区別を分つものであり、塞は 封じこめるのである。*は土主(土地神)。これを に壺形の鬲を埋める隔離の儀礼で、塞と似たところ「塞ぐなり」とあって、互訓とする。隔は神梯の前三下に「隔つるなり」とあり、また隔字条一四下に 形に従うものであることから知られよう。〔説文〕 とは、左・巫・尋・隱(隠)・襄などの字が、この 神」にあたる。工がそのような呪禁の呪具であるこ 封ずる呪禁とするもので、わが国でいう「さへの 道路の要所や辺境の要害の地に設けて、異族邪霊を ある工を塡塞する形で、これによって邪霊をそこに しも同じではない。塞外は異族神の支配する世界で その外界を杜塞するところを塞という。 、塞の初文。穽は建物の内部に、呪具で 正字は算と土との会意。 穽は

歳 13 [歳] とし・まつり・もくせいサイ

。战醫教 (A)

裁

といい、夏には歳といい、殷には祀といい、周には、「萬歳まで以て尚とせよ」は万年と同じ。虞には載、独政始政の歳をもって年を紀している。〔蘇甫人温〕、「陳瓊壺〕「陳曼、再び立事するの歳」のように、「然と」 祭名で、年とは異なるものであるが、また一年に一年はもとより農穀の稔りの意である。歳はおそらくれてほぼ一年にあたり、ゆえに一祀を一年とした。 「來歲」という語があり、金文には「晉鼎〕に「昔、 ちその祭祀をもって年を数えたのであろう。ト辞に 用て政(征)せよ」とあって、歳を動詞的に用いる。 〔毛公鼎〕に車器礼服を賜与したのち「用て歳し、せられており、歳はこの犠牲を用いる祭儀である。 り、歳は祭名。その犠牲として赤い毛色の騂牛が供 祭・歳す。文王には騂牛一、武王には騂牛一」とあある。〔書、洛誥〕に「王、新邑に在りて、蒸・ りいえば、戊形が基本で歩はのちに加えられた形で なり」とし、歩に従うて戊声とするが、字の成立よ下部の少の形がそれである。〔説文〕二上に「木星 歳祀が行なわれたのである。その字形に歩が加えら 年というとされる。殷には五祀周祭とよばれる祖祭 おそらくその祭祀は年に一回行なわれるもので、 分って書く形となる。今の字形において、上部の止、 の形であった。のち戉の刃部のなかに、歩を上下に れたのはどのような意味であるのか知られないが、 の体系があって、その周祭の一周するのが三十五六 字の初形は戊形の器。犠牲を割く戊(鉞) 0

> す字かと思われるが、詳しいことは知りがたい。 らもたらされたものであろう。歳は祭儀の方法を示 伝〕以後のことであり、おそらく戦国期に、 ことは明らかである。歳星の記述がみえるのは〔左 があることからいえば、歳星の知識と無関係である ト辞の第一期、殷の武丁期のものにすでにその字形 西方か

养 はじめ・おこなう・のせるサイ 華庫華

載 13

に乗せることを載という。 れは軍事をはじめるときの儀礼を意味したものと思 **考は戈に呪符をつけて祓うことを意味する字で、そ形声 一声符は哉。哉にことをはじめる意がある。**

寒14 とりで

形声 った塞が寨。石を用いるときは砦という。〔玉篇〕を充塡して呪禁とするところを塞という。木柵で作 また牧羊の地を兼ねたからであろう。に「羊の棲宿する處」とするのは、辺塞の地では、 声符は弊。驛は塞の初文。工は呪具。四工

摧

推む」とあり、催・摧・誰はみなその義をもつ。の意とする。〔詩、邶風、北門、「室人交」編く我をか意とする。〔詩、邶風、北門、「室人交」編(我を上上に「擠すなり」とあり、他をおしのける排擠(光光・光光・ 〔大雅・雲漢〕「先祖于に摧む」というのも同じ。崔 摧敗など、挫折の意に用いる。 系の字に責め摧く意があるのは、崔に鳥を用いる呪 儀の意があるからであろう。字はまた摧折・摧辱・ 形声 ことをいう崔嵬の字とされているが、 声符は雀。雀は山のけわしい

綵 あやぎぬ

来盛んとなり、唐の中宗のとき、立春の日に、深あるもので、あやぎぬの意。綵花は造花、 形声 とに綵花一枝を賜うたという。 **采あるもので、あやぎぬの意。綵花は造花、漢魏以文采の意があり、自然の采色をいう。綵は織物の文** 声符は栄。米は草木を採取する字であるが

際 14 きわ・あいだ・さかい・いたる・おりサイ

万章、上」には殺(殺)に作る。鰒の下部は殺のに作り、〔史記、五帝本紀〕には遷(遷)、〔孟子、『なて、虞書に曰く、三苗を竄すの竄の若くす」と、みて、虞書に曰く、三苗を竄すの竄の若くす」と、意味した。〔説文〕七下に「塞ぐなり」と訓し、「讀 いて同形で、もと同じ字である。「舜典」の文は四に「蔡叔を蔡す」とみえるが、殺と蔡とは金文におるから、字は殺と声義が最も近い。[左伝]昭元年 **籔は竄、敷の字形には、放竄の古儀のありかたを伝** 語で、その流・放・窟・殛は語は異なるも義は同じ。 初文の形であり、竄・遷は音の仮借で通用の訓であ 共感呪術で、罪人を遠方に追放する放竄の刑などを廟所において、呪霊をもつ獣を撃って敵を呪詛する えるものがある。 凶放竄の神話をしるし、これを四極の呪鎮とする物 霊をもつ獣の象形。又は手、それを撃つ意である。 声をとる。一は廟所、祟は祟をなす呪会意 へと祟と又とに従うて、祟の

す」、「原道訓」「高くして際るべからず」など、道 限のところである。〔淮南子、精神訓〕「道と際を爲ここが神人相接する際会のところ、人の至りうる極

の極限の意に用いる。界なり、会うなり、

至るなり

前に呪眼をおいて、他の侵すものを禁ずる意。際は れでは際限・際会などの義は生れない。限は神梯の 祭声の字とする。壁と壁との間の意であろうが、そ るところであり、天と人とが相感応するいわゆる天

をおき、肉を供えて祭る。そこは神と人との相接す

映 降するときの神梯。その前に祭卓 会意 - 自と祭とに従う。 自は神霊が

皀と祭とに従う。皀は神霊が

人の際である。〔説文〕「四上に「壁の會なり」とし、

蔡 15 くさむら・ころすサイ・サツ の金剛輪の下底を、金輪際という。大地の底の果て(由旬は仏教でいう距離の単位、約三百八十四里) ことを際遇という。仏教では、地下百六十万由旬

うことを際会という。人事においては、君臣相遇う の訓義は、みな天人の際の意から生れる。天時と会

るところの意である。

くらう・かむサイ

禁

「炙を嘬ふこと母れ」とは、一臠の炙り肉を、一口みにまとめてつまみあげる意。[礼記、曲礼、上]みにまとめてつまみあげる意。[礼記、曲礼、上]形声 声符は最(最)。最は撮の初文で、一つま

[孟子、滕文公、上]「蠅蝲蛄、これを嘬ふ」とは、にたべてはならぬ意。また群がって食う意に用い、

「放つなり」とするが、蔡とは癜の意。 鰒は披簾の昭元年「周公、管 叔を殺し、蔡・叔を蔡す」、注に獣の字形に作り、金文の蔡器の字形と合う。〔左伝〕 儀礼をいう。殺・蔡はもと同じ字である。〔説文〕 毛の獣の形である。〔魏石経〕の古文に、蔡をその 字の初文は紫をなす呪霊をもつ獣の形。長

> 字の初形初義を存するものとしがたい 一下に「艸なり」とし、草のみだれる意とするが、

儕 16 ともがら・なかま・ひとしいサイ

廥 W.

形声 湯問〕「長幼儕居す」のように、副詞にも用いる。 たた (住む家) あり」のように用いる。〔列子、ないう。〔左伝〕襄十七年「吾が膺小人なるも、みをいう。〔左伝〕襄十七年「吾が膺小人なるも、みへ上に「等輩なり」とあり、その地位の斉しいものハ上に「等輩 んでいる形で、相斉しい関係のものをいう。〔説文〕 声符は齊(斉)。斉は簪の高さが斉しく並

瘵 16 やむ・つかれる・やぶるサイ・セイ

れ」のように用いる。〔一切経音義〕に、江東では民それ瘵む」、〔小雅、菀・柳〕「自ら瘵ふること無疑が、なり」という。〔詩、大雅、瞻卬〕「土をが あった。 僚があり、佗像とは疲れてとどまる意。楚の方言でない。それならば祟による病である。祭に従う字に の部分はもと蔡(祟)の形にかかれていたかも知れ 語であろう。古い字形がなくて確かめがたいが、祭 病を瘵というとしており、のちまでも残されていた 形声 声符は祭。〔説文〕七下に「病

縗 もふく・はねごろもサイ・サ

死者の胸もとにつける麻の喪章。 声符は衰。衰は喪葬のとき、 線は

瘵 縗

嘬

廒 蔡 儕

製 15

ころす

蛆のたかることをいう。

ないので、その衣を総斬という。 服喪のときに、衣につける喪章の布である。〔説文〕 こ三上に「喪服の衣、長さ六寸、博さ四寸、心に直 して生きざれば、生者は服を成す。線といる」とあ り、それには黒色のものを用いた。ゆえに墨線とい う。服喪を「線経の中に在り」といい、衣端を縫わ が、それには黒色のものを用いた。ゆえに墨線とい り、それには黒色のものを用いた。ゆえに墨線とい り、それには黒色のものを用いた。ゆえに墨線とい が、とあ

全16 そなえる・おこなう

蒙特特斯

Note 6 サイ・シそらく翻饗して祀るものであろう。

7月16 かなえ

京総。東

を構っている。「説文」と上に「鼎の圏にして上語。 「は、からのは列国期に盛行し、鄭器に「自ら似る。「詩、『『は、絲衣」に「飛鵬と南と」のように、在の意にも用いる。「詩、『『は、絲衣」に「飛鵬と南と」のように、開名を列している。「説文」とよった。「京本」のように、東名を列している。「説文」と上に重文としている。「詩、『『は、糸衣』に「飛馬と痛と」のよういる。「詩、『『は、糸衣』に「飛馬と痛と、「神の場にして上れる。」

賽17 せくいしてまつる・おれいまいり

風間 会意 塞の省文と貝とに従う。塞は神とするもので、「こへの神」にあたり、その神に神とするもので、「こへの神」にあたり、その神に、里社では田神に酒食を供する。古く蜡といったし、里社では田神に酒食を供する。古く蜡といったし、里社では田神に酒食を供する。古く蜡といったし、里社では田神に酒食を供する。古く蜡といったい、年社では田神に酒食を供する。古く蜡といったと、季に参詣して奉ずる銭を、賽銭という。「賽ころ」はもと神古の具であったが、のち勝敗を争う遊びとはもと神古の具であったが、のち勝敗を争う遊びとなった。一般の勝負ごとにも、神占の方法から起ったものが多い。

滅気 17 つつしむ・うるわしい

会意 鷲 (斎)の省文と女とに従う。 会意 鷲 (斎)の省文と女とに従う。 (斉) をいう。 癬はもの斎みする巫女。 [詩、召南、采蘋]をいう。 癬はもの斎みする巫女。 [詩、召南、采蘋]をいう。 癬はもの斎みする巫女。 [詩、召南、采蘋]をいう。 痛動の 季 女 あり」の 齊 でした。 「かん できない。 「かん できない。」 「かん できない。 「かん できない。」 「かん できない。 「かん できない。」 「かん できない。 「かん できない。」 「かん できない。」 「かん できない。 「かん できない。」 「かん できない。 「かん できない。」 「いん できないるい。」 「いん できない。」 「いん できないん できない。」 「いん できないるいん できないるいん できないるいん できない。」 「いん できないるいん できないるい。」 「いん できないるいん できないん できないん できないるいん できないるいん できないるいん できないるいん できないるいん できないるいん できないん で

麗 22 「洒」 9 そそぐ・きょらか

麗 23 | 晒] 10 さらす

形声 声符は驚。麗に灑・纖の声が をところがある。書の虫干しを吹きという。 そのが、ところがある。書の虫干しを吹きところがある。書の虫干しを吹きところがある。書の虫干しを吹きという。 がいない。 一次が、という。 一次が、という。 一般は、七夕の日、日中に仰臥していて、「我 後の通ずるところがある。書の虫干しを吹きという。 でが、という。 でが、という。 でが、という。 では、七夕の日、日中に仰臥していて、「我 でが、という。 では、七夕の日、日中に仰いしていて、「我

サイ

在 6 ある・おる・あきらかにする・とう

+ *****

在を対称しているが、いずれも存問の意である。「礼記」「往者を存ね來者を在ふ」とはその意。存立事」「往者を存ね來者を在ふ」とはその意。存せませた。「代表は、代表は、代表は、日本のありかたを問うのが在察の意である。「礼記、は人のありかたを問うのが在察の意である。「礼記、は、

材っ ざいもく・もちまえ・はたらき

以上 形声 声符はず。才は存在するもの
のであるが、材性・材幹・材能・材力など、なお才のであるが、材性・材幹・材能・材力など、なお才のであるが、材性・材幹・材能・材力など、なお才のであるが、材性・材幹・材能・材力など、なおすのであるが、材性・材幹・材能・材力など、なおすの声義による用法である。文献には才・材を通用する例が多い。

剤 10 【劑】16 けいゃく・わりふ

會學

を以てす」とあり、質も剤も、鼎に銘刻とすることを以てす」とあり、質も剤も、鼎に銘文を加える意。重要な契約関係のことは、方解に銘文を加える意。重要な契約関係のことは、方解に銘文を加える意。重要な契約関係のことは、方解に銘文を加える意。重要な契約関係のことは、方別。 って (質) とりとに従う。 った (質) とりといる (質) とりといる (質) とりといる (質) といる (質) とりといる (質) とりになる (質) とりといる (質) にもいる (質)

鼎の意であることが、知られていないからである。 いったらしく、「周礼、祖祝」に「監証の載辭(祝あったらしく、「周礼、祖祝」に「盟証の載辭(祝あったらしく、「周礼、祖祝」に「盟証の載辭(祝あったらしく、「周礼、祖祝」に「盟証の載辭(祝の鄭信を質かにす」という。周初の〔髪等〕に「二百家劑を賜ふ」とあり、剤とはその権利証書のようなものであろう。のち薬剤の意とする。〔説文〕四の鄭信を質かにす」という。「周初の意であることが、知られていないからである。

財 10 たから・もの・わずかに

罪 13 [皋]13 がみ

在

と難も、その罪に非ざるなり」、〔左伝〕 桓十年「璧と雖も、その罪に非ざるなり」、〔左伝〕 桓十年「璧多くみえていて、〔論語、公冶長〕「縲紲の中に在り多くみえていて、〔論語、公冶長〕「縲紲の中に在り 罪罟は法網に譬えていい、辠辜は刑罰の法をもって す」とあり、罪罟と辠辜と相対応する語であるが、 字とする。〔詩、大雅、召旻〕に「天、罪罟を降文〕七下に「魚を捕ふる竹网なり」とし、非に従う 文」七下に「魚を捕ふる竹网なり」とし、 を懷きて罪あり」など、その例が多い。罪は〔説 しがたい。竹网の象形とみる外はない。 いう。〔段注〕に罪を形声とするが、网は声符とは

榊 さかき

ŋ

の五百つま賢木を根こじにこじて」とみえる。そのをかぐはしみ」とあり、また〔神代記〕に「天香山神事に用いる木の意。〔神楽歌〕に「さかきばの香神事に用いる木の意。〔神楽歌〕に「さかきばの香 また賢木。〔記〕〔万葉〕には賢木、〔日本紀私記〕 なる。榊はつばき科の常緑小高木、山地に自生する。 などには坂樹の例がある。のちに今のさかきの名と 小枝や葉を神前にそなえた。 神事に用いる常緑樹の総称。さかきは栄木

サク

作 つくる・サク・サ おこなう・なす・はじめる

胩 L 图号 出的意 P.

る形などがあり、その作業のありかたを示している。 「独夷鐘」「女、戎 役を戒めよ」、〔慶 羌 鐘」「達ひて秦を征し齊を迮つ」は軍事をいう。本に従う字は 作。〔周礼、柞氏〕「草木及び林麓を攻むることを ない。 「とあり、柞薪をもって獣の陥阱を作る。そ 掌る」とあり、柞薪をもって獣の陥阱を作る。そ ない。 の陥阱中に、逆茂木として立てる逆木を作物という。 の陥阱中に、逆茂木として立てる逆木を作物という。 えるもの、それを撃つ形の铵に作るものなどがある。まげて垣などを作る意で、それを束ねた形の事を添関係のない字である。ト文・金文の形は、木の枝を 遮り止める意とするが、亡は死者の象で、乍とは***** 興の義とする。 〔説文〕 は亡部 三下に「乍は止むる は作為の義である。金文の字形には、また乍の上下る明刑」とは創始・制定、「余一人の咎を乍さん」で好に命じて宰と乍す」は任命、「先王の乍りたまへ」ない。 金文の銘末に概ね「寳障弊を乍る」というのは鋳冶、起・興・生・動・用・使・治・為などの訓がある。 まず垣・牆を作ることからはじまるので、作に始・ ト辞に「邑を乍る」「寢を乍る」「墉を乍る」などあ なり。一に曰く、亡なり」とし、逃亡するものを 支」「載ち支し載ち作す」、〔大雅、皇矣〕「これを作え、まな。だ。」、「私の作いのことを掌る。〔詩、『周 頌、載のまり、「はその作いのことを掌る。〔詩、『さんないまで、 に手を加えた形、辵を加えた形、旁に攴を加えてい 木工設営のことから、すべて人のなすところに拡大 が作られ、作為の字となった。作興・振作などは、 もと乍がその字であったが、字が多義化して別に作 しこれを屏す」は、雑木を伐去したり、垣を作る意 大規模な建設工事などにも用いる。その作業は 声符は下。〔説文〕八上に「起すなり」と作

した用法である。 かむ・くらう・おおごえサク

乍は嚙む音を形容するものであろう。 咋々とは大声虎を咋ふがごとし」 のように、 啖食の意に用いる。 形声 でよぶことをいう。 声符は作。〔漢書、東方朔伝〕「なほ孤豚の

削。 創。 けずる・わける・そぐ・さやサク

[周礼、築氏] はその書刀を掌る。鞞の義は最も後剛からては文を改めたからである。その刀は削刀、取・削除・削減が字の本義。削藁とは、古く木簡を取・削除・削減が字の本義。削藁とは、古く木簡を 本義とし、「一に曰く、析つなり」とするが、を削取する意である。〔説文〕四下に「轉なり」 起、鞘の仮借義である。 会意 小肉の形。それに刀を加えるのは、肉 肖(肖)と刀とに従う。 肖* は 削 を

昨 きのう・さきに

[周礼、司几筵]の「昨席」は阼席、酬酢を行なう含めていう。 昨・酢などに仮借通用することがあり 陶淵明の〔帰去来辞〕「昨非今是」の昨は、過去をいる。 昨日醉へり」など、秦漢以後の用語である。「吾、昨日醉へり」など、秦漢以後の用語である。 くは宿・昔と声近くして通用した。〔史記、灌夫伝〕七上に「繁ねたる日なり」とあって昨日をいう。古 빤 ところである。 形声 また過ぎゆくものの意がある。〔説文〕 声符は乍。乍には、たちまち

はサ はそ・ きる・せま

뺍

のりと・つげるサク

木を立てることを柞鄂という。柞鄂とは嵯峨・齟齬とんで、獣のわなをしかけることを柞格、なかに逆茂んで、獣のわなをしかけることを柞格、なかに逆茂んで、は木の小枝を搾める形であるから、これを組 〔詩、周頌、載交〕に「載ち芟し載ち作す」とあり、 除草し、木の小枝を切りはらうことをいう。乍 形声 うちに、その意が含まれている。 のように、ふぞろいの状態をいう語で、乍の原義の 声符は乍。木名としては、ははそをいう。

文〕五上に「吿ぐるなり」とするが、それは神に告

日は祝詞を収めた器をいう。

曹は

「説

の意となる。

の器の形であるから、曹と同字。おそらくその初文 げる祝詞の意。卜文に酉に作る字があり、口も祝禱 栅9 まがき・やらい・とりでサク

を卯し、五十牛を雪めんか」「五牛を卯し、血二牛 く祭儀で、「黃尹」、神名)に一豕一羊を燎き、三牛であろう。供機の前に、あらかじめ犠牲を清めてお

両冊は柵の扉である。城砦 に、両冊の間に牲獣の形を加えているものがあり、

期の都市には、要所に柵を設けて木戸とい 柵欄を設けることがあり、 として柵を組むこともあ 、・矢来門という。 江戸 矢来という。街路にも 2 た

柵の図象

はじ ける

形であるから、もとへはじきかえす力がある。炸は 声符は乍。乍(作)は木の枝を強く撓める

> が、乍の声義が正しく継承されている。 るのを炸破という。近代語として作られた字である 火薬が炸裂する意で、その火薬の力でものを破壊す

近9 「窄」10 せまる・たつ・おこる

瓢 新石市

「窄は迫陿なり」という。迮・段・窄はみな乍の声戎作は、戎铵と同じ。窄は迮の俗字。〔玉篇〕に いまででは、一声を迮つ」、また「叔夷鎗」に「女、「秦を征し、声を迮つ」、また「叔夷鎗」に「ない」ではその意。[願・記書」に「なな」とはその意。「別・記書」に「なった」といる。「説文」ニ下に形で、これをはじく力がある。[説文]ニ下に 義を承ける字である。 形声 雅、抑〕「用て戎作を戒めの用て蠻方を遏けよ」 を加えることをいう。すなわち迫迮の意。〔詩、大坂(軍事〕を戒めよ」の迮・悞は、ともに武力いる。 声符は乍。乍(作)は木の枝を強く撓める 0

毕 10 ほる・くさむらサク

鄂などと同系の語。繋はこれをもって刻鏤する意のいの状態をいう畳韻の連語。槎枒・嵯峨・齟齬・柞でいの状態をいう畳韻の連語。槎枒・嵯峨・齟齬・柞でいた字説であろう。幸嶽は、鋸鮨のようにふぞろ 「叢生する艸なり。丵嶽として、相並び出づる形に 器の形である。 象る」と草の生い茂る形とするのは、叢から思い |對(対)もこの形に従い、版築のとき土を撃つ 器の形。鑿の初文。〔説文〕三上に 上部に鑿歯形のついた掘鑿の

酉 柞 栅 炸 迮[窄] 柴 ち声義が分化した。

て用いる。冊・策はもと声義の同じ字であるが、 は他にも冊に従う字が多く、みな供犠と祝禱に関 礼であるらしく、この冊も策の意であろう。 職掌の名であるが、動詞としては戦勝を予祝する儀 (任命書) にあたる。 ト辞に番冊という語があり、 策命の策に冊の字を用い、冊命とは文献でいう策命 の犠牲などを神に告げる儀礼をいう。金文では廷礼 の、
西は予備儀礼としての修祓、
西は祝詞としてそ と思われる。冊は名詞で供犠の数などをしるしたも に備えて、あらかじめ清めておく修祓の儀礼である 牲数は、供犠の実数よりも遥かに多く、それは供犠 千牛を酉めんか」のようにいう。酉の儀礼を行なう を用ひ、百勿(物、毛色)牛を酉めんか」「貞ふ、

0

10 いク し・まじる・おく

結合したものであった。近出の殷墟婦好墓出上の多のうちでも最も早く進歩し、かつ古代権力と逸速く 数の玉製品は、そのことを明示するものといえよう。 べし」の錯は厝の意。玉石を磨く技術は、古代技術 いう。〔詩、小雅、鶴鳴〕「它山の石(以て錯と爲する。〔説文〕九下に「鷹石なり」とあり、礪ぐ石をる。〔説文〕九下に「鷹石なり」とあり、礪ぐ石を 形声 相重なるもの、交錯するなどの意があ 声符は昔。昔は乾肉の象で

朔 ついたち・はじめ・こよみ・きたサク

死覇という。吉は詰で実ちること。はじめて光を生に分ち、第一週の初吉より以下、既生覇・既望・既皇・既豊韻をもって説く。金文に一ヵ月の月相をほぼ四週豊韻をもって説く。金文に一ヵ月の月相をほぼ四週 方において、 また北方を朔といい、朔北・朔方・朔気という。四じて吉(実)に向かうので、第一週を初吉という。 七上に「月の一日、 声がある。 屰は**** 北を上とする観念があったのであろう。 始めて 、朔は遡(泝)の初文。〔説文〕疑母の字に、午(杵)のような 蘇るなり」と朔・蘇の紫 午(杵)のような

索10 なわ・もとめる・つきるサク・ソ

のである。〔説文〕六下に「艸に莖葉ありて、繩索という。そこより綯りはじめるところ。そこより綯りはじめるという。といるは、というない。というない。というない。というない。というない。というない。というない

を索尽、散居を索害と、う。"炎ニを索尽、散居を索害と、う。"炎ニュー」に関する。「楚辞、離騒」に「胡繩の索綱せよ」は縄なう意。〔楚辞、離騒〕に「胡繩の索綱せよ」は縄なう意。〔楚辞、離騒〕に「胡繩の家綱せん 義の関係があろう。素は糸たばの上部の色の染まら ないところである。

欶 すう・せきサク・ソク・ソウ

漱は一系の字である。 ことをいう。嗽上は一本に軟上に作る。軟・嗽・ に「冬時に嗽上の氣疾あり」というのは、咳こむ 声符は束。欠は口を開く形。

窄山 なわ・やねじた・せまいサク

編んだものを用いたのであろう。壁下地のようなも 板で屋竿といわれるものであるという。やはり竹を 샠 のである。また竹で編んだ箙などをいう。 なり。瓦の下、芬の上に在り」とあって、屋根下 に編んだものを韋笮という。〔説文〕五上には「迫 枝などを折りまげる形。細い竹を縄状形声 声符は乍。乍(作)は木の小 声符は乍。 乍* \dot{o}

斮 12 きる・たつ・うつサク・シャク

り、 また〔爾雅、釈器〕に「魚には之を斮るとい ..斤.は庖丁。〔説文〕 - 四上に「斬るな形声 声符は昔。 昔は腊で乾肉。 声符は昔。昔は腊で乾肉。

> は、対が冬の朝、老人が徒渉するのをみて、その脛倦。[書、泰望、下]に「朝渉るものの脛を斮る」のを削る意。〔礼記、内則〕「これを作す」は斮の仮た。「れい、大いさいたば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水」とあって削鱗の義とするが、字形からいえば乾水 開いたのであろう。 を斬ったという話であるが、斮というのは肉を切り

策 12 むち・つえ・ふだ・はかりごとサク

0

「その馬に策つ」、〔左伝〕哀十一年「矢を抽きて、 犠牲を入れる牢閑の象。金文にいう冊命・作冊は、をしるす簡策の策は冊が本字。冊はもと柵の初文で、 形声 策謀・策略のように用いる。 文献にいう策命・作策である。 その馬を策つ」とあり、ときには杖を用いる。文字 文〕五上に「馬の筆なり」 声符は束。 束は先のとがった長い木。 という。「論語、 のち簡策の意となり、 雍特也]

搾 しば な

他を犠牲とすることをいう。 形。それで穴をふさぐので狭い意となり、手を加え 形声 訳語であろう。また字は榨を用いる。 て狭搾・搾取の意となる。搾取とは利潤を貪って 声符は窄。乍(作)は木の小枝をたわめ 古い字書にみえず、 る

筴 13 めどぎ・はし・はかりごとサク・キョウ(ケフ)

形声 声符は夾。字はまた策と通用し、その音に

う。〔礼記、曲礼、上〕に「龜をトと爲し、筴を筮よむ。易筮のめどぎや箸など、細長く削った竹をいよむ。易筮のめどぎや箸など、細長く削った竹をい ない字である。 と爲す」というのはめどぎの意。古い字書にはみえ

嘖 14 いさかう・なく・せめるサク・シャク

はもと鳥声などの擬声語である。 噴とは煩言をいう。名声嘖々などというが、嘖々と る。〔左伝〕定四年「嘖として煩言あり」とみえ、 て作らせたもので、 いう。斉の桓公が、黄帝の明堂、尭の衢室にならっ 呼するなり」という。会議室を嘖室と 自由に討論を行なう室の意があ 声符は責。〔説文〕ニ上に「大

幘 ずきん・かみづつみサク

は 大髪を隠すため、また王莽 大髪を隠すため、また王莽 大変の元帝は額の いふ」とあり、髪を巾で包 七下に「髪に巾あるを幘とは責。〔説文〕 形声 声符

巾を加えたという。緑・赤・青を用いるものもあは禿を隠すために、冠下に た承露ともいう。 たが、後漢以後、これを用いることが盛行した。 り、もと冠を用いない卑賤の者の用いるものであっ ま

槊 ほサ こク

> 翻 いう。魏の曹操が呉を攻めたとき「槊を横たへて詩いう。

> > 17

おくぶかいサク

錯 16 逸事として歌われている。 を賦し」たことは、蘇軾の〔前の赤壁の賦〕にも、

る)・錯択(えらびとる)のように用いる。 る意と、 以て錯と爲すべし」とは錯鐘のことで、砥石で磨くき出す方法をいう。〔詩、小雅、鶴鳴〕「它山の石 字は錯鏤のように、地金の中に象嵌しておいて、磨 四上に ことをいう。交錯・錯落・錯乱・錯行など入りまじ , 「金涂なり」とあって鍍金の意とするが、「金涂なり」とあって鍍金の意とするが、誤文] また措と声義が通じて錯意(心にか まじる・みだれる・おく・あやまるサク・ソ 形声 声符は昔。昔は乾肉の形で、 H

簀 17 すのこ・ゆか・たかむしろサク・サイ

に「睢、佯りて死す。卽ち卷くに寰を以てす」とある。との竇という。またすのこをいい、〔史記、范睢伝〕という。またすのこをいい、〔史記、范睢伝〕との竇を易えさせ、まもなく没したことがみえ、死その簣を易えさせ、まもなく没したことがみえ、死 様のある)は、大夫の簀か」と注意されて、急いで の用いている牀が、「華にして院たる(美しい絵模 〔礼記、檀弓、上〕に、曾子が病の篤いときに、それば、枕ぐら、とあり、資牀をいう。牀の敷板のことであるなり」とあり、資牀をいう。牀の敷板のことである 矕 いわゆる簀の子巻きである。 の意がある。〔説文〕五上に「牀の棧形声 声符は責。責に細小なるもの 資床をいう。床の敷板のことである。

> 伝、上 形声

たものが多いようである。 は独自のものがあり、古く巫祝の間に用いられて 「賾とは幽深見難きを謂ふ」とする。 ものを養う根源のものである。〔易〕の用語に 声符は責。〔易〕にのみみえる語で、〔紫辞 以て天下の吉凶を定む」とあり、〔疏〕に に、「賾を探り隱を索め、深きを鉤し遠き 匝は乳房の形

整28 うがつ・のみ・あなサク

ところ、「七日にして渾沌死せり」という。穿鑿の 結果、真理が失われるとする寓話である。 じように七竅を穿つこととし、一日に一竅を穿ったで世話になった礼にと相談して、渾沌にも人間と同 鑿骸という語がある。儵と忽とが、渾沌のところ るのを穿鑿といい、「孟子、離婁、下」「智に惡む所 ろをまるく刻りこむことを襲という。むだ穴をあけ 〔説文〕 | 四上に「木を穿つ所以なり」とあり、銅鉄番が、 **** る業を執って、ものを掘鑿すること。 は、その鑿なるが爲なり」とは穿鑿の小智に走るこ の器で木を穿つものである。亀卜のとき、灼くとこ ゆえに空論を鑿空という。「荘子、 形声 声符は数。数は掘鑿の器であ 応帝王」に

笹

国字 竹葉・細葉のようにもしるす。〔古事記、 ささと訓する字に篠があり、また小竹・ 13

二・1三三「小竹の葉はみ山もさやにさやげども」と「天の香山の小竹葉を手草に結ひ」とみえ、「万葉」 する。笹は篠・小竹の意の国字であるが、どうして いう人麻呂歌は、サ行音の連続による寂寥感を強調 この字形をとったのか明らかでない。

サツ

冊5 (册)5 ふみ・かきものサツ・サク

0

のち册祝す」もなおその意であり、后妃・諸侯をあろう。それで祝詞をも冊といい、作冊(または作あろう。それで祝詞をも冊といい、作冊(または作書、はおそらく犠牲のことを祝詞として奏する意で書はいる。ト辞に、犠牲を祓う予備儀礼を囲といい、れる。ト辞に、犠牲を祓う予備儀礼を囲といい、れる。ト辞に、犠牲を祓う予備儀礼を囲といい、 札一長一短、中に二編あるに象る」とするものはい 冊が性獣を入れる牢閑を示すものであることが知ら し)なり。 うからである。〔説文〕ニ下に「符命(天命のしる 立てることをも冊立という。冊告してその礼を行な 図象に両冊の形の間に性獣の形をかくものがあり、 文。古くは棚の音でよみ、策の意に用いた。金文の わゆる編簡の形で、さきの冊と同じでない。また木 木をならべてうちこんだ柵の形で、柵の初 諸侯進みて王より受くるものなり。 その

> [易] 〔詩〕 〔書〕 の経は二尺四寸、〔孝経〕は一尺二 軽重によって長短の別があり、「易緯」によると、 の原義ではない。 後漢に符命のことが流行したからのことで、この字にない。というという。これを「符命」と解するのは、の例となしえよう。これを「符命」と解するのは、 字義の推移とともに、字形解釈も声義も推移した字 形と誤られて、編冊の字となったものと思われる。 となり、作冊・冊命のように用いられ、のち書冊の で、牢閑の扉である。冊はその形から出て祝詞の意 うことはありえず、その一長一短なるものは柵の形 あろう。書冊においては大小を併せ編することはな り、〔論語、尭曰〕の錯簡十六字は、八字簡二片で の編じ誤りであるから、概ねその字数を前後してお 乃至二十二字であったというが、いわゆる錯簡はそとし、の校書のとき、[古文尚書] は一簡二十五字、8000円 簡・竹簡を編んだ形のものに、一長一短の制なく、 く、〔説文〕にいうような「その札一長一短」とい 一長一短の形をなすものは柵の形。編簡には書冊の [論語]は八寸、字数は一寸一字の割合である。

札 ふだ・かきもの

書記のことを「刀筆の吏」という。また甲の各片をの葉のような薄片をいう。書札は削って用いたので、 また牒字条七上に「札なり」とあって互訓。業も木 用いられることはなく、字形を整えるため、 1 の木を加えたものである。〔説文〕六上に「牒なり」 会意 片の形で、札の初文であるが独立して 木としとに従う。しは木の薄 限定符

札といい、甲札という。

8 はらう・ふく・ぬぐう・するサツ・セツ

文〕四下に「刮るなり」とあり、〔段注〕にヘラの払拭することにかえて削る字が刷であるから、〔説 意とする。印刷の刷に用いるのは、版木の上をヘラ に作るのは、馭の仮借である。 ではくようにするからであろう。〔漢書、貨殖伝〕 會稽の恥を刷ぐ」の刷は、椒の意。〔史記〕に雪 会意 は腰に帯びる布で、 取の省文と、 、払拭するもの。、刀とに従う。取

拶 おす・ゆびぜめ・せめるサツ

のち獄吏が拷問のときに用いた。挨とは人をおしつ指攻め、〔荘子、天地〕に「歴情」というもので、もとは群衆をおしわけて前に出る意である。拶指はそれより古い例はない。挨拶というのは禅家の語で、 愈の〔雪の詩〕に排拶の語があり、迫る意に用いる。やわれるが、字の初形が知られず、用語例としては韓なわれるが、字の初形が知られず、用語例としては韓な会意がは残骨の象。これを拾い取る意の字と思いる。 語でなく、今もそのような意味に用いることがある けること、拶とは拶指をいう。挨拶とは素性のよい

殺』【殺】』「煞」」 ころす・へらすサツ・サイ

졺 灰 編料 * 肃

もと減殺を本義とする字である。〔説文〕三下に ている呪詛を祓う共感呪術的な方法を、殺という。 初文。その呪霊をもつ獣を撃って、自己に向けられ 希をなす獣の形と、殳とに従う。 希は祟の 劄 14

ったのであろう

かきもの(タフ)

る呪的な方法を意味する。それで減殺・相殺の意と するのは、のちの転義であり、もとは呪詛を減殺す 「戮するなり」とし、罪によって人を刑殺する意と 放き でにみえるが、明代の市井に盛んに行なわれ、わが東青を智青という。唐の段成式の〔酉陽雑俎〕にすばまいます。『なまいまでよまれている。雑記・雑志などというのと同じ。でよまれている。雑記・雑志などというのと同じ。 国でも江戸期に大いに行なわれた。 部記」、趙翼の〔二十二史割記〕などは、札記の音割記はまた札記ともしるす。清の閻者で歌の〔潜 昭常・また。また札記ともしるす。清の閻者で歌の〔潜 昭宗・また。智子は一種の上奏文・のちにあるが、のち冊

颯 風の音・かぜふく・みだれるサツ

など、〔楚辞〕以後に用いられる。 また宋玉の〔風の賦〕「風あり、颯然として至る」 颯々として木蕭々たり」は、秋風の寂しい声をいう。 いちおう形声説をとる。〔楚辞、九歌、山鬼〕「風いちおう形声説をとる。〔楚辞、九歌、礼遣〕「風 あるが、これを同例となしうるかどうか疑問がある。 ともしがたい。来母の魔が灑・纙の音となることものものなく、それで会意説も出されているが、会意 婚 形声 するもの十二文のうちに、これと同声 声符は立。〔説文〕の立声と

察 14

あきらかにする・みる・かんがえるサツ

会意

☆と祭とに従う。☆は廟、

に祭って神意をうかがうを察という。

「疾し」の訓がある。収束を収煞・煞尾という。代の用字。煞は急と支とに従う字であるらし代の用字。 殺す」のようにも用いる。字はまた煞に作るが、 十三年「隕霜、草を殺さず」、〔礼記、月令〕「草をするが、のちすべて死殺の意に用い、〔春秋〕僖三 を加えるを殺という。殺はそのような呪儀を原義と

近

撮 ¹⁵ つまむ・とる・あつめるサツ・サイ

道

「四圭なり」とあるのは、六十四黍を圭といい、二郎があり、撮の初文。[説文]「三上に撃」 幱 形声 声符は最。最につまみとる意

> 撮影の字に用いる。 学んだことを役に立てぬことを撮嚢という。 りまとめる意があり、要所を把握することを撮要、 かな地を、〔中庸〕に「一撮の土」という。また衽つ意の字であるから、撮はつまみもつ意となる。僅 の意。最は戦場でえた戦耳を、橐に入れてあつめもに用いるさじの意で、〔説文〕のいう四圭は四刀圭 ものあり。一撮とは四刀圭なり」という刀圭は、薬 ぼ同量。〔本草、叙例〕に「凡そ散藥に刀圭といふもて取るなり」も〔説文〕の旧文であるらしく、ほ 百五十六黍の量に相当する。 また〔玉篇〕に「三指

擦 17 する・こする

「擦々」のことを記している。 末〕に、海浜に泥の小塔をおいて、海災を鎮める 事〕に、流しで歌う女を擦坐、また〔元史紀事本るらしい。深元以来用いられている語で、〔武林旧 形声 声符は祭。祭は擦るときの音の擬声語で

<u>陸</u> 18

はない。菩薩の菩は普、薩は済度の意。能く衆生を作られた字で、字の構造に特別の意味があるわけで と伝えられている。 済度するものをいう。西蔵の薩迦は、釈迦得度の地 声符は産(産)。仏教語の音訳語のために

サツ 察 劄 颯 のであるから、祭ってその反応をみることを察とい 祭るを際という。祭は本来神意をうかがうためのも と、明察の義とする。廟中に祭るを察、神梯の前に 術〕に「讖微みな審かにする、これを察といふ」 「説文」七下に「覆審するなり」とあり、「新書、

雅 (雑)18 まじる・おおいザツ・ゾウ(ザフ)

ある。これを帯として用い、〔礼記、玉藻〕に君はに「雑帛を物と爲す」とあり、物には呪飾の意が [詩、鄭風、女曰鷄鳴]に「雑佩以てこれに贈る」 [尉線子、治本]に「雜學は通儒と爲さず」の語が 組み合せる意から、転じて佩玉や、他に組合せ、混 とあり、佩玉のことをいう。もと色彩のある織物を べて純に対して雑という。 うらをうさ 集聲」とあり、 大夫は玄華、士は緇を用いると規定している。 形声 とあり、雑帛をいう。〔周礼、司常」文〕八上に「五采相會するなり。衣に文〕八上に「五采相會するなり。衣に 旧字は集に従い、

扨。〔偖〕」」きて

い。偖も撦の誤字。撦は裂く、開く意の字で、さて扠の音をあてたのみで、字の用義をとるものではな 字を充てており、扨は近世以後の用字である。もと 「さて」は〔万葉〕に「然而」「然」「而」「乃而」の とは関係のない字である。 もと扠に作る。ものを叉み取る、うつ意。

サン

<u>=</u> みサ

= =

有飼(同)」のように特定の名数とするときである。 るときには、分数的な表現のときか、あるいは「参は三と通用するが、もと「簪の形、数字として用いは三と通用するが、もと「簪の形、数字として用いる」と、 指事 三において天地人の三才が備わるとするものである には「道は一に立つ」、一には「地の敷」とあり、 の。〔説文〕一上に「天地人の道なり」という。 た古い数とりのしかたを、そのまま字形に示したも 王字条二上にも天地人の三才を貰くものとするが、が、もとよりのちの思想によって説くものである。 いる。三の声義はおそらく参・纂など、纘めるとい 三は聖数とされ、その名数の語彙は千数百に及んで う語と関係があろう。 横画三本を並べた形。細長い木などを用

Ш з やま・セン

\emptyset W

に「宣なり。能く散气を宣べ、萬物を生ずるを謂ふ象形 山の地表に突出する形に象る。〔説文〕九下 高粱のように姜姓諸族の祖神とされるような例もあまれた。 は諸宗のおうに姜姓諸族の祖神とされるような例もあば請雨の対象とされ、古代の自然信仰の中心となり、 ある。山は雲気を生ずるところであるから、しばし 釈山〕に「産なり」と訓するのも、同じく音義説で なり」と、山・宣の畳韻をもって訓する。「釈名、 った。〔山海 経〕は、古代の山嶽信仰を神話的に記

述した貴重な資料である。

1/3

その意。影は髪、影は虎文。また音響や香気をも示示し、髪・形・彩・彦・彫・彰・影・修などはい、といいまないまない。また音響や香気をも示り」とあり、文飾をいう。すべて色彩や形態の美をという。 べきものであろう。〔説文〕九上に「毛飾の畫文なかり し、彭は鼓声、暫は酒の香をいう。 ので、象形というよりも、象意と 毛髪や彩色・光などを示すも

删 7 けずる・のぞく・さだめるサン

敝 字である。 とあり、剟四下は「刊るなり」、すなわち刊って改加除することをいう。〔説文〕四下に「剟るなり」 からみて、信じがたい。刪は先秦の用例のみえない選んだとする刪詩説があるが、逸詩が殆どないこと という。〔詩〕三百篇は、孔子がもと三千の詩より める意である。それで詩文を正すことを刪改・刪定 会意 形。それに刀を加えて、綴じを改め、 冊と刀とに従う。 冊は編冊の

杉

「古廟の杉松に水鶴巢ふ」と歌うように、廟寺にそ 形声 杉錦という。木の古名がのちの木名と異なることも の木が多い。杉の葉の文様を錦に織りなしたものを、 あって、古い文献にみえない字である。 声符はジ。杜甫の「古蹟を詠懐する詩」に

参。〔參〕11 かんざし・セサン・シン まじわる・みつ

ま)の仮借、従って曾参とよむべきである。数とし典。名字の対待をもっていえば、参は驂〈そえう用いる。〔史記、弟子列伝〕、賞子、名は参〈そえうは集まり至ること。わが国では社寺に参拝する意には集まり至ること。わが国では社寺に参拝する意に 会意・旧字は参。三本の簪を加えた人の側身形に、簪の玉の光ることを示すぎを加えた形。〔説文〕に、簪の玉の光ることを示すぎを加えた人の側身形 [荀子、解蔽]に「治亂を參稽す」という。参詣とる。また集める意より、参稽比較する義となり. がそろわず、参差不斉となるので、参差の意を生ず齊、(斉)、参は簪飾三本を中央に集め、左右の高低 齊(斉)、参は簪飾三本を中央に集め、左右刀틹氏***。するのは字の初義でない。簪飾を平列するものは り」とよむ説もあるが、 ては分数的な表示や、特定の名数のときに用いる。 らかである。また〔説文〕の説解を「参商は星な を加えた人の形に、彡を加えたものであることは明 の聲なり」とするが、金文の字形をみれば、簪 飾 また集める意より、参稽比較する義となり、 いずれにしても、星の名と

芟 8 かる・くさかりがまサン

心みて來륋の芟を下す」とあり、芟草除田のことは、 ふ」とみえる。[周礼、肆師] に「嘗(祭)の日、 「載ち芟り載ち柞る」の〔毛伝〕に「除草を芟とい がまをもつ形。〔詩、周頌、載芟〕 艸と殳とに従う。 殳は草刈り

> を刪って整えることを、芟正また刪正という。まにすることを芟蹂という。文章の繁蕪なるところけることを芟討・芟敵といい、また掠奪をほしいま り鎌をいう。悪草を刈り除く意より、賊をうち平ら ている。芟は剗・錢(銭)と声義近く、大きな草刈字はまた芟荑に作る。〔唐石経〕には字を荑に作っ 朽らせる方法もあった。夷はみなごろしにする意。

> > 桟10

(核)

12

10 かぞえる

記は異なるが、もと同じ字である。 文として祘を出している。祘・筭・算はそれぞれ表 もつ形。〔六書故〕に引く〔蜀本説文〕に、筭の異 もので、これが籌算の法であった。等は計数の器を九をⅢ、八をⅢとするのは、横画を五として算える 二画、縦六画の算法をいう。王莽の新の貨布の文に、 る。〔左伝〕襄三十年「亥に二首六身あり」は、横 横画を二馬、下部の三垂を三馬とし、合せて五とな 二馬に従ふ」という籌馬の法がみえ、示の上部の二字に用いる。その算法は〔礼記、投壺〕に「一馬、字に用いる。その算法は〔礼記、投壺〕に「一馬、和を輸ふるときは、則ち民安し」とみえ、祘を算のれを終れ となる。〔逸周書、本典〕に「均しく分ちて以てこ 視して以てこれを筭ふ」とし、示を視の義をもつも のと解するが、示は算木の形で、二示にして十の数 形で、 会意 数を示す。〔説文〕一上に「明 二示の形に従う。示は算木の

〔説文〕六上に「棚なり」、また「竹木の車を棧とい 檨 日記〕は陸游の「入蜀記」と併称されるものである 楼。

蚕 10【蠶】24 かサンこ

ふ」とする。すべて材質の薄少なるものをいう。

赞品 A *******

王后夫人には親蚕の礼があり、神衣・祭衣を織る定 形声 室をも蚕室というのは、その温密の度が蚕室と同じ に蚕室の儀礼が詳述されている。のち宮刑を加える な産業とされ、農耕に王の親耕のことがあるように の名があり、採桑養蚕のことは、農耕と並んで重要 たことが知られる。〔詩、豳風、七月〕に「蠶月」加えているものがあり、古くから蚕糸を利用してい 加えているものがあり、古くから蚕糸を利用して くものなり」とする。卜文に桑の葉の上に虫の形を に「絲を妊く蟲なり」とあり、〔玉篇〕に「絲を吐 であるからという。 めであった。その室を蚕室という。〔礼記、祭義〕 正字は蠶に作り、声符は譬。〔説文〕一三下 絹は中国の特産として重要な貿

またト辞 を示して、その西方への交易路をシルク・ロードといっ、後漢のとき蚕神を祀り、『後漢書』、礼儀志、上』が、ト辞にすでに「蠶示」を祀ることがみえている。 が、ト辞にすでに「蠶示」を祀ることがみえている。

トす。蠶を、ば、「戊子、に、たとえ

1000年 200日 大日本 100日本 10

みずをいう字である。 蚕食という。いま常用字として用いる蚕は、もとみている。蚕が桑の葉を食するように他を侵すことを、か」のように、蚕室のことを省する儀礼が行なわれ省せしめん

惨 11 【惨】14 そこなう・いたむ・さびしい

が国のサ行音と同じく、悲酸の意をもつものが多いの悲しいさまをいう。参声・夋声・替声の字に、わ惨酷の甚だしいことをいう。惨澹はうすぐらく、も惨酷の甚だしいことをいう。惨澹はうすぐらく、も惨酷の甚だしいことをいう。惨澹はうすぐらく、も

産ュ「産」コーラむ・はぐくむ・くらし

き、額に加入儀礼としての文身を加えることを示すき加えるもの。厂は額の象形。生は出生。出生のと通過・加入儀礼として、一時的に朱や墨で文様を画会意 旧字は産、文と广と生とに従う。**は文身、

字である。男子の成人のときに加えるものは、意でした。という。産は〔説文〕六下に「生るるなり。生に従ふ。たが国では生後の文身をアヤツコといい、アヤは霊、わが国では生後の文身をアヤツコといい、アヤは霊、すでに霊の宿るところであることを研える。儀礼とれが国では生後の文身をアヤツコといい、アヤは霊、すでに霊の宿るところであることを示して、邪霊の悪ることを防ぐものであった。中国にも古くその儀憑ることを防ぐものであった。中国にも古くその儀憑ることを防ぐものであった。中国にも古くその儀憑ることを防ぐものであった。中国にも古くその儀憑ることを防ぐものである。斉器の〔沈時改〕に「励然」という語があり、その字は初に従う。初は産衣、わが国の「襲会」のようなものであろう。出生の意より、すべて生産・産業の意に用いる。

A 12 からかさ

献 12 ちらす

れを撃って、茎皮をほぐすことをいう。〔説文〕七会意 - 林と支とに従う。林は麻茎の繊維。巌はこ

意においては、いずれも通ずる。 で、両字はもと別の字である。ただ分散・散乱の形で、両字はもと別の字である。ただ分散・散乱の磨す」というが、厳は麻茎を撃つ形、散は肉を撃つ磨す」というが、厳は麻茎を撃つ形、散は肉を撃つをいうが、厳は麻茎を撃つ形、散は肉を撃つが、大きにのである。

野 1 ちらす・はなれる・ほしいまま

曹 黄坞

会意 筋肉の形と支とに従う。筋腱の固い肉を、 撃って柔らげることをいう。〔説文〕四下に「雜肉 撃って柔らげることをいう。〔説文〕四下に「雜肉 撃って柔らげることをいう。〔説文〕四下に「雜肉 なり」とし、擬声の字とするが、敝は麻茎を撃って その繊維をほぐす意であり、散は筋肉を撃ってほぐ す意であるから、撃つ対象が異なる。散の従うとこ ろは筋肉で、筋もその字形に従う。散肉の意よりして、美肉正味に非ざるものとされ、官途に棄てられ て、美肉正味に非ざるものとされ、官途に棄てられ ることを散棄といい、位あって職掌のないものを散 位・散官といい、自ら無用の人となして散人と称し、 でで信優をかね、百戯の類をも含むものであった。 ので信優をかね、百戲の類をも含むものであった。 すべて放散するもの、無用のものに冠して用いる。 すべて放散するもの、無用のものに冠して用いる。

売 12 サン・セン

となる。警は譜の初文とみてよい。〔説文〕五上にとなる。警は譜の初文とみてよい。[詩、大雅、民常]「替ち明を畏れず」、[実際]「悟ちその故を知ら労」「替ち明を畏れず」、[実際]、「悟ちその故を知ら労」「特を明を畏れず」、[実際]、「悟ちその故を知らず」、「小雅、十月之交」「椒ぞ悟ち懲りること莫き」など、みなその用義であるが、字の本訓ではない。譜・悟・僭(僭)はみな替に従う一系の字で、その原義は妊・替から出ている。簪に呪能があるとする考えかたは、わが国にも古く「忌み櫛」の俗があり、「万葉」に「櫛も見じ屋ぬちも掃かじ草枕旅あり、「万葉」に「櫛も見じ屋ぬちも掃かじ草枕旅めく君を齎ふと思ひて」一九・四二六三の歌がある。「時は簪をもって祝禱の呪能を阻害することを意味する呪的行為であり、この字を語詞に用いるのはもとより仮借にすぎない。

剤 3 サン・セン

多い。剃と声義の通ずる字である。 移にみえるもので、後世の造字にはこの類のものが後にみえるもので、後世の造字にはこの類のものがいれいまで草を刈ることをいい、鍵の声義を用いる割はかまで草を刈ることをいい、鍵の声義を用いる形を 声符は産 (産)。鍵の省文で、鍵はかま。

13 せかずき・あぶらざら

臻。 紫

杯をいう。また灯火皿にも用いる。 脱に斝、周に爵というとする。盞は最も浅く小さい殷に斝、周に爵というとする。盞は最も浅く小さい殷に母、周に爵というとする。盞は最も浅く小さい殷に母、周に母なり、「玉爵なり」とし、夏には琖、

サン剤蒸筹粲算酸質

字 3 せんぎ・かぞえる・はかりごと

名 13 せン まきらか・きよい

算 4 かぞえる・かず・はかりごと

会意 竹と具とに従う。〔説文〕五上 (京教ふるなり」とし、第と同声とする。等は業具で名詞、算は動詞的な語。算に選の音があって通用し、〔詩、邶風、柏舟〕「選ふべからざるなり」、〔小雅、車攻、序〕「田獵に因りて車徒を選ふ」などは、みな数える意。〔然に走っ〕に「弋を選ふ」などは、みな数える意。〔然に走っ〕に「弋を選ふ」などは、みな数える意。〔然に走っ〕に「弋を選ふ」などは、みな数える意。〔然に走っ〕に「弋を選ふ」などは、みな数える意。〔然に走っ音があっ。前も算法を示す字。前・第・第・2によりである。 法を異にするが、算木の形を含み、一系の字である。 法を異にするが、算木の形を含み、一系の字である。

酸 14 サン

既日 15 いたむ・うれえる・かなしい・すなわち

撒 15 まく・はなつ

った。京房は、京房易をはじめた易の大家である。意。ものを撒き散らすことを撒というので、豆撒きして纏ったことから、故事とな漢の京房の女が、翼拳の子に嫁する日が凶日である漢の京房の女が、翼拳の子に嫁する日が凶日であるで、立場をして纏ったことから、撒科は演劇をいう。撒科は演劇を下声 声符は散。散は筋のある肉を撃ってほぐす

|| 15 | 「順| 」 15 なみだのながれるさま

と考えてよく、字義も散の意を承け、涙の流れるさるが、のち誤って曰となった。散の省文に従うものを考えてよく、字義も散の意を承け、涙の流れるさまをいう。〔説文〕ニーと「浣流るる見なり」とみまをいう。〔説文〕ニーと「浣流るる見なり」とみまをいう。〔説文〕ニーと「浣流るる見なり」とみまをいう。〔説文〕ニーと「浣流るる見なり」とみまをいう。「満たくして涙を出す」と歌う。泫然は涙が姿に、「潜鳥として涙を出す」と歌う。泫然は涙が姿に、「潜鳥として涙を出す」と歌う。泫然は涙が

| 大貝 | 19 | かまける・みちびく・すすめる

は枕と同じく簪笄を用いる呪儀であろう。貝にそれいます。 従う。〔説文〕ス下に「見ゆるなり」するが、字は賛成・賛述・賛頌の意などに用いる。と訓し、進見のとき貝を贈りものとする意であるとと訓し、進見のとき貝を贈りものとする意であるとと訓し、進見のとき貝を贈りものとする意であるう。貝にそればない。

餐 16 サン

餐霞・餐玉は仙家の語、餐霞子とは道士をいう。[古詩]に「努力して餐飯を加へよ」の句がある。

| 1 あきらか・あざやか・かがやく

形声 声符は粲。粲は精米。その白版(パーケ) では桑と山田する。 「女理燦然として厚し」の語があるが、先秦の用なる見なり」とみえる。「春・秋、繁露、王道通三」なる見なり」とみえる。「春・秋、繁露、王道通三」なる見なり」とみえる。「春・秋、繁露、王道通三」なる。 「女はない。 「女はない。 「女はない。 「女はない。 「女はない。 「女はない。 「女はない。 「女はいいっぱっぱい 「女は精米。その白いは、 「女は精米。その白いは、 「女は精米。その白いは、 「女は精米。その白いは、 「女は精米。その白いは、 「女は精米。 「女は精米」といいます。

第 17 かたみ・のべる・そなえる

形声 声符は算。算に数える、そろえるの意がある。〔礼記、明堂位〕に「薦むるに玉豆雕寝を用ふ」る。〔礼記、明堂位〕に「薦むるに玉豆雕寝を用ふ」とあって、それは神に供物をする遷豆の類。字を撰述の意にも用い、〔漢書、叙伝、下〕「書を暮め、詩を刪る」とあり、撰集する意。またものをそろえると刪る」とあり、撰集する意。またものをそろえると問る」とあり、撰集する意。またものをそろえるところの已は、何の形象であるが、等の字に従うところの已は、何の形象であるのか明らかでない。もし人の形でなければ、巻と同じく書巻(巻)の形であるかも知れない。

文生 9 サン・セン

は平薄な板のことである。うのは鏟の省文に従うもの。また剗と通用し、戔とうのは鏟の省文に従うもの。また剗と通用し、戔といを刈ることを攤とい

算条 20 くみひも・あつめる・つぐ

(似て赤し」とあり、「漢書、景帝紀」「発生ない。 たるの意がある。「説文」「三上に「経に似て赤し」とあり、「漢書、景帝紀」「錦繡纂組」の注に「纂は今の五彩の屬、綷これなり」という。 もと練纂、色糸を刺繍のように織りなす意で、それより編集・編纂の意となり、また鏡にすぎで、それより編集・編纂の意となり、また鏡に通じて纂承の意となる。「国語、周語、上〕「その緒を纂修す」のようにいう。

下 20 サン・セン

覧 21 きる・セン

形声 声符は贊(賛)。〔玉篇〕に「減らすなり」

纂

霰

劗

驂 攢

瓚

纘

鑱

讚

正内 21 そえうま・そえのり

★記 会意 馬と参 (参)とに従う。[説 会意 写は一次。 本名はいるのである。

撹22 あつまる・うがつ

形声 声符は贊(賛)。「倉頭篇」に「紫るなり」 とみえ、攢集の意に用いる。「墨子、備城門」にい とみえ、攢集の意に用いる。「墨子、備城門」にい を割というのも、攢集の意によるものであろう。ま を割というのも、攢集の意によるものであろう。ま ない。「からない」にい がない。「ない。」に「紫るなり」 を穿つことをいう。賛声の字にその義がある。

費 23 サン さけをそそぐうつわ

制〕に「圭瓚を賜うて然る後に轡を爲る」、また 「課書は尺有二寸、瓚あり、以て廟に配る」とみえ、「課書は尺有二寸、瓚あり、以て廟に配る」とみえ、「課書は尺有二寸、瓚あり、以て廟に配る」とみえ、「課書は尺有二寸、瓚あり、以て廟に配る」とみえ、「課書は尺有二寸、瓚あり、以て廟に配る」とみえ、「課書は下書」という。「周礼、玉人」に「記書は下書」を表している。

焼 25 つぐ・つづける

大声 声符は贅(贊)。〔説文〕」三 を実は綵色を纂集する意、續は續述・續業のよ ある。纂は綵色を纂集する意、續は續述・續業のよ ある。纂は綵色を纂集する意、續は續述・續業のよ が、という。〔爾雅、釈詁〕 とあって同訓、纂と通用する字で が、願風、 という。〔前、願風、

金銭 25 きり・するどい・うがつ

本本 のの意がある。[説文] 一四上に「鋭し」と訓する。[書、顧命]「一人冕して劉を執るし」と訓する。[書、顧命]「一人冕して劉を執る」を称が、無理なの類を、「疏」に「蓋し今の鑱斧ならん」という。 鍵形は「物料子、逸気」にみえ、く尖った石をいう。鑱飛は「物料子、逸気」にみえ、く尖った石をいう。鑱飛は「物料子、逸気」にみえ、く尖った石をいう。鑱飛は「物料子、逸気」にみえ、く尖った石をいう。鑱飛は「物料子、逸気」にみえ、く尖った石を加えることであろう。鑽刻の意の鑽とによって銘を加えることであろう。鑽刻の意の鑽と

弐貝 26 ほめる・たたえる・たすける

「佐くるなり」とあり、賛の声義を承ける字であるするなり、〔方言〕に「解くなり」、〔周礼、注〕にがるなり、〔周礼、注〕にが高、声符は賛(賛)。〔8、名、釈言語〕に「録

車と斤とに従う。車を作るた

四上に「截るなり」とし、車裂の刑をいうとするが、

めの材を斬ることをいう。

。〔説文〕 -

するを讚仏乗、キリスト者では讚美歌という。 字に用いる。君主に朝見することを讚拝、仏を礼賛 が、〔説文〕にみえない。漢魏以後、讚称・讚嘆の

27 ほる・のみ・きり

を鑽穴という。亀ト をいう。火をとることを鑽燧といい、穴を穿つこと 。上に「穿つ所以なり」とあり、錐の類形声 声符は贊(賛)。〔説文〕一四

も遥かに多い鑽灼 亀版には、それより るというが、出土の には七十二鑽を加え

錯灼

通ずる字である。 ある。髪を切ることを鑽髪という。劗・剪と声義の****^* *** のあとをもつものが

製 29 かしぐ・かまど

を爲ること孔だ碩いなり」とあり、君婦がそのことで、となる。となる。となる。となる。となる。となること聞々たり(俎、一年、小雅、巻で)に「爨を執ること聞々たり)(4)に、小雅、巻で)に、「紫、」と ころであろう。籀文の字形には、上の部分がない。 とをいうものである。 なわれる次第を歌う。祭事としてなされる炊爨のこ に従って神保を迎え、家廟の祭祀、ついで族餐の行 あるとする。上部の卣に似た部分は、蒸気の出ると形。「を竈口、下部は二木をもって火にくべる形で 「説文」三上に、上部を飯の 会意 炊爨のことを示す。

ザン

7 えぐる・ほねつきのにくザン

A A

肉をいう。〔説文〕四下に「殘穿なり」とあり、骨会意 片と又とに従う。片は残骨の形。骨つきの の従うところである。 谷の象とするものであるが、字は声義ともに粲・餮

残り「残」などなからのこる

*残余のものをいい、残月・残灯・残照・残年という 斬 の意とし、人に施して残忍・残賊の意とする。すべて る。獣が獣を食うさまは残虐を極めているので残酷 に胡を月に従うて缼の意とするが、月は肉の形であ 食するところの餘なり」とするが、残・胡は同字。 骨・残片の意である。〔説文〕四下に「賊なり」と 一は骨の戔、一は肉に従うて残肉・残余の意。〔段注〕 人を害する残賊の義とし、別に朗字条四下に「禽獸 きる・ころす 形声 浅小偏薄のものの義があり、残とは残 旧字は殘に作り、戔声。戔に

斬新は甚だ新しい意、

唐代以後の俗語である。

各部に用いる材)を斬る」の意でなければならない。 とであるから、斬とは〔周礼、輪人〕「三材(車の るなり」とする字である。車裂の刑に斤は不要のこ その刑は轘。轘は「説文」一四上に「人を車裂にす

嶄 14 本紀〕に「壘を高くし、塹を深くす」とみえる。坑中に木を組んで坑道を作るもので、〔史記、高祖 蝩 <u>塹</u> あな・ほり たかくけわしい・うがつザン 「阬なり」とあり、塹柵・塹壕をいう。 形声 声符は斬。〔説文〕一三下に

墓志銘〕に「嶄然頭角を見す」の語がある。 司馬相如の〔上林の賦〕に「嶄巖嵯峨」とあり、北京は一年では、本本の賦〕に「嶄筬光。、水声」一声符は斬。斬は木を斬って、層をなすこと ある。嶄然は他より挺出する意で、韓愈の〔柳子厚山の高峻なるをいう。嶄新は斬新、斬に甚だの意が 山の高峻なるをいう。

慙15 (慚)14 はじる・はじ

愧・慙懼・慙憤のように用いる。〔書、仲虺之誥〕も「慙なり」とあって互訓。字はまた慚に作る。ぎ 轗 に「桀を南巢に放ち、これ慙德あり」とみえ、〔左 とあって互訓。字はまた慚に作る。慙に塊づるなり」とあり、媿字条二下に 形声 声符は斬。〔説文〕一〇下に

ある。字はまた慚に作る。 を不徳として自責するもので、極めて儒教的な語で は、徳を以て化することができず、刑を用いたこと 伝〕襄二十九年にも「慙徳」の語がみえる。慙徳と

暫 しばらく・わずか・にわかにザン

字である。 的に、漸は次第に他に及ぶ意で、空間的に進む意の 留のように用いる。漸と声義近く、本来は暫は時間のように用いる。漸と声義近く、本来は暫は時間のいる容易に放免したことを批難する。暫時・暫

槧 15 はんぎ・ふだ ザン

で印行することをいい、板本をまた槧本という。 たという。鉛漿は鉛筆と筆記帳であるが、のち木版 「常に鉛を懷にし槧を提ち」、絶域四方の語をしるしその異語を問ふ」とあり、〔西京雑記〕によると 「劉歆に答ふる書」に「油素四尺なるを齎し、以て 「大きなり」とあり、書版をいう。揚雄の 「なり」とあり、書版をいう。揚雄の 「なった。」 「なった。」 「おきないう。 「おきない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。」 「おない。 「ない。 「。 「。 「ない。 「な、 「。 「。 「。 「 「 「 「 「 「 「 「 「

毚 はしこい・わずかザン

きものなり」という。〔詩、小雅、巧言〕「耀々たる きの姿である。〔説文〕一〇上に「狡兔なり。兔の駿いをである。〔説文〕一〇上に「狡兔なり。兔の駿いない。矢走してのがれると 会意 暫 二兔に従う。一兔が跳躍して 槧毚 鼠 艬 讒

> のは、 危急の状態などの意をもつ。優とはその不斉の状をげるさまをいう。毚に従う字は、高く跳んでこえる、 いう。毚微はわず **繁免 犬に遇ひて獲られたり」とみえ、跳躍して逃れた。** いずれも才の仮借である。 か。また纔をわずかの意に用いる

人を毀敗する意。〔荘子、漁父〕に「好んで人の惡 いう。〔左伝〕昭五年に「敗言を讒と爲す」とは、

るなり」とあり、人を讒毀することを

声符は髪。〔説文〕三上に「諸

簋 18 かくれる・すてる・のがれるザン

である。 また改竄という。旧字を墨で塗りつぶして消すから 人を拘囚する意である。文字を改め直すことを点竄、 ゆえに放竄という。その意味での竄は、辺裔の地に う共感呪術的な儀礼で、もと追放のために行なう。 字は鰒。鰒は呪霊をもつ獣を廟中に撃ち、呪詛を祓 [書、舜典]「三苗を三危に竄す」とみえる竄の本 鼠の神話において、辺境に放竄することをいう。 で、叢社のなかに竄れ住む鼠は、容易に処置しがたふ」とみえ、竄匿・竄伏をいう。いわゆる社鼠の類ふ」とみえ、竄匿・竄伏をいう。いわゆる社鼠の類に「匿るるなり。鼠の穴中に在るに從為門、 いものである。これを人に移して、たとえば四凶放 印 会意 穴と鼠とに従う。〔説文〕七下 す」という。西周末期の政治社会の混乱が、これできない。これで議会をは、議会をは、これでは、1月之交」「罪なく睾なきに、歳口囂々たり」とあれ、月之交」「罪なく睾なきに、歳口囂々たり」とあり、また〔音ú これを讒と謂ふ」とみえる。〔詩、小雅、を言ふ、これを讒と謂ふ」とみえる。〔詩、小雅、を言ふ、これを讒と謂ふ」とみえる。〔詩、小雅、

巉 やまけわし

生ぜず」とあり、嵯峨たる岩山をいう。 その語がある。〔李善注〕に「石勢ありて、草木を「巉巌、高く危し」とあり、宋王の〔高唐の賦〕にをまり、宋王の〔高唐の賦〕に形声 声符は髪。嶄と声義同じく、〔玉篇〕に形声

讒 24 そしる・そこなう・よこしまザン

 Δ

暴器のうちには一銘もない。 が、このように箴言的な銘文は、両周のや」とあるが、このように箴言的な銘文は、両周の

すすむン

のは系串、 するが、字として用いられることはない。 という。 上行するものは草の始生の形、下行するも ものを貫く形。一形で二字二義であると はシ、下行するものはコンの音でよむ 指事 〔説文〕一上に、上行するもの

 $\angle_{\frac{1}{2}}$ すき・わたく

δ 韓非日く、 、蒼頡の字を造るや、自ら營むをムと、蒼頡の字を造るや、自ら營むを入と的な耕作者。〔説文〕九上に「姦飛な 象形 おの形で私の初文。私は隷属

示したもので、一袋の上部の厶がその形、目も耜を儀礼の場所を示す形。田畯の唆は田神を耜の形でではいいこれを知れり」とみえるが、よは公廟のとは、 字形化した形である。 書を作るや、自ら環む者、これを私と謂ふ。私に背 爲す」という。〔韓非子、五蠹〕に「むかし蒼頡の exa to く、これを公と謂ふ。公私の相背くことは、蒼頡も

Ż ゆく・これ・この

Ā Ā

逍遥遊」「之の人や、之の德や」「之の二蟲、又何 大にして、之く所あるに象るなり」と、草の伸びる六下に「出づるなり。艸の叶を過ぎ、枝莖漸く益:なり、かない」と、などが字の初義。〔説文〕足の前に進むことを示し、之往が字の初義。〔説文〕 虎方(国名)を伐たしめたまへるの(之)年」とい え、〔中方鼎〕に「これ王、南宮に命じて、反せる介詞の「の」に用いるものは、周の金文に至ってみ 子〕には古い語法を伝えているところがある。また のように用いることは、「荘子」の他にみえず、「荘 をか知らんや」のような例がある。散文においてこ にも〔史瞦殷〕に「之の朝夕」とあり、文献ではがみえ、「之の日」「之の夕」のように用いる。金文がみえ、「之の日」「之の夕」のように用いる。金文 に用いるのは仮借であるが、すでにト辞にその用法 趾の前方に向かう形である。これを指示詞「これ」 形と解しているが、卜文・金文の字形は、明らかに 周南、 趾あとの形で、歩(歩)の上半にあたる。 桃天」「之の子ここに歸ぐ」、「荘子、

> 「それ永く之を用ひよ」、〔蠡彝〕「永く之を寶とせう。代名詞の用法は中期に至ってみえ、〔君夫殷〕 をしるし、裸圏の礼を加えている形がある。 に、之をしるしている。ト文にはまた土主の上に之 れも之往のときの儀礼を示す字であろう。 は之と王とに従う。王位の儀器である鉞頭の王の上 ものちに出ている。之は之往を初義とし、往の初文 よ」などがある。金文では、この代名詞の用法が最

 $\frac{\perp}{3}$ つかえるもの・おとこ・つわものシ

0 土士 ÷

 \pm

ある才に、鉞頭の聖器である士をそえて、その聖所字形に従うものに在・吉があり、在は神域の榜示で士と事とは畳韻の訓で、音義的な解釈である。この士と事とは畳韻の訓で、音義的な解釈である。この士と事とは畳韻の訓で、音義的な解釈である。この 戦士であり、氏族の有力な構成員であり、支配組織 続することを意味する字である。身分としての士は、 字は十と一とに分解しうる形でない。〔説文〕に 示す儀器である。その大なるものは王で、主の身分 象形 して鉞頭の士をおき、その祝禱の呪能を保衛し、持 また吉は、祝禱を収める器である。この上に、聖器と であること、神の支配するところであることを示す 「孔子曰く」とするものには、当時の俗説が多い。 く、十を推して一に合するを士と爲す」というが、 は一に始まり、十に終る。一と十とに從ふ。孔子曰 かえたものであろう。〔説文〕「上に「事なり。數 を示す儀器。士はおそらく戦士階級として、王につ

> 名が多いが、范氏・韓氏の族長・族人たる身分のも分、士某というものは、士匄・士起など晋地にその男子の字に子某というものは、もと公子・公孫の身男子の字に「 という。士は卿・大夫と合せて古代の治者階級を構に命じて司士と作し、女に命じて百寮を辟めしむ」とある士訊は裁判官、「牧設」に「昔、先王旣に女とある士訊は裁判官、「牧設」に「昔、先王旣に女とある士訊は裁判官、「 「父兄諸士」「士庶子」のような語があり、 立したものが儒教であった。 を求める一般士人の称となり、そのための士道を確 のであった。氏族制の崩壊とともに、士は宦遊仕官 に次第に低下し、のち一般の士女をいう語となる。 としての士の身分は、その経済的地位の低下ととも 国期には執政の地位を占めるに至った。貴族的戦士 経営の発展に伴って、大夫の地位が重要となり、列 ての身分をその原義とする。西 周後期以来、上地 職である。卿は廷礼の執行者、 成するとされるが、大夫は農地の管理者で、 とある士訊は裁判官、「牧設」に「昔、先王既に女豪族の構成員である。また「趙設」に「僕射士記」で後、から、「士郎子」のような語があり、いずれも「土庶子」のような語があり、いずれも の中枢にあるものであった。金文には「百 辞胤士」 士は貴族的戦士とし 後起の

子るおとこ・こ・ね

3 農

ナタチマ

兔业

山川

激器

「ね」と解して、「十一月、陽气動き、萬物滋入す。象形 幼子の象。〔説文〕 - 四下には十二支の

うな形にかかれ、一般の子の形と区別されている。 らの子は、両手を一上一下する釈迦降誕のときのよを示す字であることなどからも知られる。 ただこれ 頭に玉をおき、下に襲衾をそえて、霊の継承の儀礼 #中で字形のうちに含まれるものが、翼戴される形の族であることからも知られるが、また図象として 由るところ。また宰予、字は子我、予・我は同義の淵、淵は回水をいう。仲田、字は子路、路は人ので、名と対待の義をもつ字を用いた。顔回、字は子にまで及んで、字を子某といい、所領の地名にかえにまで及んで、字を子 のち五等の爵号となった子はこの系列のもので、 ものであること、 と称する六・七十名のものが、すべて殷の王子・王 もので、子の字を第一辰の「ね」に用いることはな において、干支に用いる子はその簡略形とみるべき ての愛、耜神としての一袋の下体と似ている。ト辞のかたしろとなる形であり、その下体は、穀霊としのかたしろとなる形であり、その下体は、穀霊とし ら生れる。籀文の字形は、神尸として、祖祭のとき語である。子を尊称・二人称とする用法は、そこか 鄭・雀を領するものを意味したが、その慣行がのち い。子がもと王子の称であったことは、卜辞に子某 この字形を冠する子鄭・子雀は、王子の身分にして のがあり、それは特定身分の王子たることを示す。 や殷の金文に、子の両手を一上一下している形のも の字形を用い、子はのちの已に用いる。子はいうま解するが、卜辞において、十二支の「ね」には籀文 でもなく生子の象で、子を意味する字である。ト文 以て稱と爲す」と生い滋ること、滋生の義をもって 保の字形のうちに含まれる子が、

と王子の身分称号であった。

しかばね・かたしろ・つらねる・つかさどるシ

7 3°

孫がこれに代った。〔儀礼、郊特姓礼、注〕に「尸郊特牲」に「尸は神像なり」とみえ、祖の霊位にはいる」で、死者に代って神位に坐するもの。〔礼記、しろ」で、死者に代って神位に坐するもの。〔礼記、また祭祀のときの尸主を尸という。いわゆる「かたまた祭祀のときの尸主を尸という。いわゆる「かた の字である。卜文・金文の夷は、尸と殆ど同形にか これを尸る。齊める季女あり」とみえる。漢碑にまた司主の意となる。〔詩、召南、采蘋〕「それ誰かまた司主の意となる。〔詩、召南、采蘋」「それ誰か たのであろう。 かれているが、やはり異なる字として識別されてい 尸を死としるすことが多い り」という。この尸が祭祀を司るものであるので、は祭らるる者の孫なり。祖の尸は則ち主人の宗子な に似たり」とあり、その姿を避けるべきものとする。 屍体をおく意。「論語、郷党」「寢ぬるに尸せず」 の注に、「四體を偃臥し、手足を布展するは、死人 ハ上に「陳ぬるなり。臥する形に象る」というのは、象形 屍体の横たわる形で、屍の初文。〔説文〕 。尸・死・屍はもと一系

 $\frac{\Box}{3}$ やむ・ああ・み

F ନ[®] U 2 ≥ Ł

> はない。金文では已と同系の字を嘆詞のと、あるいはない。金文では已と同系の字を嘆詞のと、あるいは也の義に用いる。「大盂鼎」「已、女妹辰(昧辰)に大服(事)あり」、「毛公鼎」「王曰く、父曆(毛に大服(事)あり」、「毛公鼎」「王曰く、父曆(毛大服(事)あり」、「毛公鼎」「王曰く、父曆(毛太」などが、それである。また「樂書缶」「已にそよ」などが、それである。また「樂書缶」「日にそよ」などが、それである。また「樂書缶」「日にそれの名)よ、日、本代の本人の字を用いており、巳を用いることも、「文では子の字を用いており、巳を用いることも、「文では子の字を用いており、巳を用いることも、「文では子の字を用いており、巳を用いることも、「文では子の字を用いており、巳を用いることも、「文では子の字を用いており、日本に、「文では子の字を用いており、日本に、「文を表して、「本の字を用いており、日本に、「本の字を用いており、「本の字を用いており、「本の字を用いており、「本の字を見いている。」といる。「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を用いており、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を用いており、「本の字を表して、」」を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表して、「本の字を表しい」」を表して、「本の字を表して、まのえのと、「本の字をまして、「本の字をまして、「本の字を表して、「本の子のま れない。 辰の字となるに至って、分岐したものであるかも知くは巳・巳は同音、巳・巳の二字は、巳がのち第六 は已、日とは異なる形である。また第六辰の「み」 象形」とあり、巳を「すでに」と解するが、その字 まる。萬物見れて文章を成す。故に巳を蛇と爲す。 〔説文〕 | 四下に「四月、陽气日に出で、陰气日に臧 象形 蛇の形。十二支の第六、「み」に用いる。 古くは第六辰には子を用いた。

支 えだ・わける・ささえる

「竹の枝を去るなり。手に半竹を持つに従ふ」とす「竹の枝を去るなり。手に半竹を持つに従ふ」とするが、竹とも定めがたい。〔詩、衞風、荒巓〕に「本文百世」、身体に及「対」とあるのが本義。それを氏族の上に移「対」の枝を去るなり。手に半竹を持つに従ふ」とす \$ 柱・支持の意である。 久を支ふるに足らざるを知るなり」は、いずれも支の支き。(製語)「皆その資材の以て、長の支行のところ」、[製語]「皆その資材の以て、長 余 枝の初文。[説文] 三下 会意 木の小枝をもつ形で、

止 4 あし・とまる・ただ

A. A. 田田

象形 趾あとの形である歩(歩)の上半。[説文] は上に「下基なり。艸木の出でて阯あるに象る。故に止を以て足と爲す」と、止・基の畳韻をもって解するが、草木の象とは関係がない。[説文] は之・止をすべて草木の象とは関係がない。[説文] は之・は、寝歌のとき、趾を向ける方向を問う意である。 [礼記、曹礼、上]「何くにか止せんと問ふ」とは、寝歌のとき、趾を向ける方向を問う意である。 [礼記、曹礼、上]「何くにか止せんと問ふ」とは、寝歌のとき、趾を向ける方向を問う意である。 社社記、曹礼、上司「四の日(四月)にが作られた。 [詩、豳風、七月〕「四の日(四月)に計作られた。 [詩、豳風、七月〕「四の日(四月)に計作られた。 [詩、豳風、七月〕「四の日(四月)に計が作られた。 [詩、豳風、七月〕「四の日(四月)に計が作られた。 [詩、豳風、七月〕「四の日(四月)にれていることを止むという。 [議書、子罕)「譬へばいるとした。 長村をおいた。 [記文] は之・春のにないては、足を挙げて相をふむ形である。 留止・禁いである、上むは吾が止むなり」とみえる。留止・禁なるも、止むは吾が止むなり」とみえる。留止・禁なるも、止むは吾が止むなり」とみえる。留止・禁なるも、止むは吾が止むなり」とみえる。留止・禁なるも、止むは吾が止むなり」というはいる。

氏4うじ

き ず でかす

に、巴蜀の地では、山岸の崩落しかけたものを氏と員であることから、氏族の意となる。[説文] ニテレスをいる肉切り用のナイフ。その共餐に与るものが氏族外のときに用いている。

員としての盟約の儀礼であり、これを汚すものは、 (盗)という。おそらく共餐の儀礼が、同時に氏族 血縁の共同体であり、その盟約に背くものを盗文には君侯を侯氏、夫人を君氏のようにいう。氏はから、氏族の象徴としては氏の方がふさわしい。金 多く、金文の図象によってその大体を察しうる。 王朝との関係において、職能的に組織されることが 郭沫若もその説に賛しているが、是は匙の象形でかまらい。の音は是と近く、段玉裁は是を氏の本字と考え、の音は是と近く、段玉裁は是を氏の本字と考え、った。ト文にはそれを皿の上におく字形がある。氏 巴蜀の山崩れの字で示されることは考えがたい。氏 代社会において最も基本的なものであり、 字をその象形と解するが、それは揚雄の〔解嘲〕いい、その崩落する声は数百里にも聞えると説き、いい、その崩落する声は数百里にも聞えると説き、 似ているが、これは彫刻刀である。古代の氏族は、 刻物用の小さな曲刀である剞劂の形で、氏の初形と 民は眼睛を失ったもので、隷民をいう。また厥もった。氏と民とは字形が似ているようにみえるが、 氏族の生活を離れたものをいうのが、盗の初義であ その盟約の離叛者として、盗とされたのであろう。 あり、氏は祭肉を頒ち、共餐の肉を頒つものである られる肉を裂く刀であり、氏族の象徴たるものであ 上の司会によって行なわれる。氏はその儀礼に用いなのとき氏族の長老が犠牲を割き、共餐の儀礼は氏ののとき氏族の長老が犠牲を割き、共餐の儀礼は氏の 餐に参加することは、最も重要な儀礼であった。そ 族制度の維持において、祖祭に参加し、その氏族共 氏の本義ではない。氏姓・氏族の制度は、中国の古 に「響くこと氏隤の若し」という例によるもので、 その字が

古礼を伝承する氏の名が多く残されている。撃壺氏・射鳥氏・方相氏・蜡氏・伊耆氏のように、別れ、の官制に、保氏・媒氏・馮相氏・保章氏・周れ、の官制に、保氏・媒氏・馮和氏・保章氏・『『』

方 5 しるしのき・とどまる

竹 5 よくする・こまかに

形声 声符は子。〔説文〕八上に「克」 「語、周頌、敬之〕に「仔肩」という語がみえ、は〔詩、周頌、敬之〕に「仔肩」という語がみえ、は〔詩、周頌、敬之〕に「仔肩」という語がみえ、いまは責任を負う意とされるが、他に用例がない。いまは責任を向う意とされるが、他に用例がない。いまはすだあろう。

仕 5 つかえる・しごととする・まなぶ

「宦は仕なり」という。〔礼記、曲礼、上〕に「宦はない。古く仕えることを宦といい、「常れ下になるととを臣といい、「常れ下になる」というも、その義に用いる例となる。「説えまる」というも、その義に用いる例

仕切など、行為を意味する語に宛字として用いる。て仕ふ」とみえる。わが国では仕立・仕掛・仕入・は禄仕の人をいう。〔詩、小雅、四月〕「盡瘁して以は禄仕の人をいう。[詩、小雅、四月〕「盡瘁して以いう。」という語があり、仕官のために学ぶことを學事師」という語があり、仕官のために学ぶことを学でに、

卮 5 [巵] 7 さかずき

「民人」 象形 大きな把手のある酒器の形。 「説文」九上に「製器なり」とし、門子の形に在り」とするが、卩は人ではなく把手の形、いわゆる整(とって)である。字はまた巵に作る。郷飲酒礼に用いる酒器で、「礼記、内則」に作る。郷飲酒礼に用いる酒器で、「礼記、内則」に「巵匜」の語がある。匜は水を注ぐ器。「荘子、宮が、「巵匝」の語がある。匜は水を注ぐ器。「荘子、宮が、「巵匝」の語がある。匜は水を注ぐ器。「荘子、宮が、「巵匝」の語がある。 である。字はまた巵という。 后は難と同じく杯、解ぎをあげてよりのちをいう。 后は難と同じく杯、解ぎをあげてよりのちをいう。 后は難と同じく杯、解ぎをあげてよりのおいて縦が高さる意とする説がある。

只 5 語詞・ただ

およそ詩句の終助詞に用いるものは、巳・之・止・のが字の原義であろう。詩句の終助詞に用いるが、八は口気の下引する形ではなく、党や容字におけるように、概ね神気を示すもので、その気配をいうとするが、概ね神気を示すもので、その気配をいうとし、「口に從うて气の下引する形に象る」とするが、人は口気の下引する形ではなく、党や容字におけるように、概ね神気を示すもので、その気配をいうとしている。日は一次、そのが字の原義である。八は神気に象るものである。「は、一人に従う。口は一次、そのが字のが表している。

楽しむさまをいう語であったのであろう。その本義とするところがあり、仮借して助詞に用いるの句が多くみえ、楽字の下にのみ用いる。もと神のの句が多くみえ、楽字の下にのみ用いる。もと神のは、ないである。只はその本義の用法がなく、初義をといるが多くみえ、楽字の下にのみ用いる。もと神のの句が多くみえ、楽字の下にのみ用いる。もと神のであろう。

史 5 まつり・ふみ

当事中心。

会意 中と乳とに従う。**社は橋の器であるごを会意 中と乳とに従う。**社は橋の器であるごを表がみえ、乳は侑、史は祝禱である。「我は又史せんか」「今の六月に、又史せんか、七月に又史せんか」「今の六月に、又史せんか、七月に又史せんか」など、月次祭の対象には、大乙・祖丁・小丁など祖王の名があげられている。史祭はいわゆる内祭であるが、河や嶽、山川の諸神を祀るときには、祭であるが、河や嶽、山川の諸神を祀るときには、祭の使者が派遣された。使者は祝禱の器であるごを大きな木の枝に著けて、これを奉じて使した。木は上部が枝となって分れる丫形のものを用い、さらに旗や吹流しをつけた。その字形が事で、使の初文である。使とは祭の使者である。その字形が事で、使の初文である。使とは祭の使者である。その字形が事で、使の初文である。使とは祭の使者である。その字形である事は、同時に祭事をいう語である。その字形である事は、同時に祭事をいう語である。その字形である」とは、祭の使者を出して、外祭を行なうことをいう。その重要な祭祀は、大事とよばれた。王朝の支配は、内祭を倉を記して、外祭を行なうことをいう。その重要な祭祀は、大事とよばれた。王朝の支配は、内祭

内史・作册内史・内史尹・作命臣工などの諸職があ る。 両者の結合した諸官名として、作冊尹・命尹・作命 の誥命を掌るものは、作冊・内史とよばれ、のちいないできるものとなったのであろう。また祝詞や王を保管するものとなったのであろう。また祝詞や王 うその職掌を通じて、のちには文書・記録そのもの その先例旧行によって伝統を保持し、記録するとい 意となるのは、もと史祭における祝詞などを保存し、 の形式をとる。史がのち史官、記録を司るものの は史を用いる。その使役形は「……史……事……」 を受けて「王事を出ふ」ことは、殷に服事することいい、武丁期には殷に服事していた。召が殷の使者える召はのちの召公奭の家で、殷の時代には召方とう)の意。田は史の字形とも関連がある。ト辞にみう)の意。田は史の字形とも関連がある。ト辞にみ 役の意に用いられる。殷王朝のような古代的祭政 を意味する。ト辞には諸邦族に対して、このように めるということであり、卜辞に「召は王事を出はん派遣する祭の使者を受け入れ、その祭祀の執行を認 王事という。王事の起源的な意味は、諸邦族が王の 行という祭政的な形態をもって行なわれる。それを 的な史祭、外祭としての使者の派遣、その祭祀の執 もと祭祀の執行者として、 している例が極めて多い。史は金文においては使 祭政時代には最も高 のち 叔やの

あると解した。これと殆ど同じころ、内藤湖南も史え、矢を入れる)」こと、すなわち矢器をもつ形でえ、矢を入れる)」 王国維はその説を承けて、大射儀において、史官が 『た海書の形とし、史とは簿書を司るものと解した。の〔周礼疑義挙要〕にすでに〔説文〕の説を疑い、の〔周礼疑義挙要〕にすでに〔説文〕の説を疑い、かれる旗竿の形であり、訳に従う形ではない。江永かれる旗竿の形であり、訳に従う形ではない。江永は中正を記録するものとするが、中正の**は中正を記録するものとするが、中正の*** 〔説文〕三下に「史、事を記すものなり。又(手) り、巫史とよばれる地位に下る。古代の聖職者とし化するに及んで、史は宮中の儀礼や内外の祭祀を司 その社会を知ることが必要である。 事に起るとする説を出している。しかしさきに述べ を盛筭(矢入れ)の器をもつ形とし、そのことは武 て数えるので、史はその「飾中舎筭(中をととの的中した矢数を数えるとき、中(矢の容器)に入れ の中を持するに従ふ。中は正なり」とあって、史官 なり」とは、巫史にその傾向があるからである。 る。〔論語、雍也〕に「文、質に勝つときは則ち史 史は〔周礼〕ではすでに礼官宗伯の下属とされてい して、「周礼」の史系諸職が成立するが、大史・小ての地位が失われるとともに、下級の祭祀執行者と 神巫たちとならんで、最高の執政者であったのであ 最も末期の、史官の落魄した姿であり、史官はもと た史の沿革よりいえば、それらは史の伝承において る。字形字義を解するには、字義の沿革とともに、 い地位を占めたものであるが、政治行政の機構が分

司 5 一 第 」 17 つかさどる・つぐ

可是好的强

癸・司戍などの司も、祭祀者の意をもつものであろ司には祀(まつる)の声義がある。また司妣・司には祀(まつる)の声義がある。また司妣・司に「王の廿祀」を「王の廿祀」を「王の廿祀」を「王の廿祀」を「王の廿祀」 (左向きの字)とし、「臣にして事を外に司るものなかがう)の意がある。 [説文] 九上に字を后の反文 む字であろう。祠・詞・嗣・嗣などは、みな司の声神意を何うもの、その祭祀を嗣ぐものなどの意を含 関しており、その祭祀を司るもの、祝禱をひらいて 〔宗周 鐘〕「我はこれ、司ぎて皇天王に配す」、〔叔とととをという例が多い。司を嗣続の意に用いることもあり、いう例が多い。司を嗣続の意に用いることもあり、 長官として政を執ることを死銅(治める)といい、をもつものに司るもの、司主の意がある。金文に、 会意 うに用いる。字形からみて、司はもと祝禱の儀礼に 向 父禹殷」「余小子なるも、朕が皇考を司ぐ」のよ せよ」、〔蔡設〕「王家の外内を死嗣せよ」のようにる・嗣ぐの意のある字である。〔康鼎〕「王家を死銅 形が亂(乱)で治める意。一で解くのが厠で、 ている形で、乱の初文。これを乙(骨ベラ)で解く 嗣は司に従う。 鬱は糸かせに架した糸に両手を加え う。司は祝禱の器をひらくに用いる器の形で、これ り」とするが、内外の区別のある字ではない。卜辞 をひらくものが司であろう。ゆえに司にまた伺(う るときの器、口はJJ、祝禱を収める器で、その祝禱 コと口とに従う。 司はおそらく祭祀に用 治め

義を承ける字である。

<u>万</u> 5 ようつ

0 T =

大学。 初文は繪文のように四横画を重ねた形で、物の四を示す。〔説文〕 「四下に「陰の數なり。四分数の四を示す。〔説文〕 「四下に「陰の數なり。四分数の四を示す。〔説文〕 「四下に「陰の數なり。四分数の四を示す。〔説文〕 「四下に「陰の數なり。四分数の四をではない。初形は算木四本を重ねた形。四は初形ではない。初形は算木四本を重ねた形で、四分数の意と関係があろう。

市 5 いち・かう・まち

学 学

象形 市の立つ場所を示すための標識の形。交易 の場所には高い標識を樹て、検査官を派遣してこれの場所には高い標識を樹て、検査官を派遣してこれの字形を説くが、市は東と同じく、標木の形の上ところなり。物の相及ぶに象るなり。之の省聲」と古文及なり。物の相及ぶに象るなり。之の省聲」と古文及なり。物の相及ぶに象るなり。之の省聲」と古文及なり。物の相及ぶに象るなり。之の省聲」と古文及なり。物の相及ぶに象るなり。之の省聲」と古文及なり。物の相及ぶに象るなり。一に従いる。 を監督した。「説文」エ下に「買賣するものの之くところなり。市に垣あり。□に従ひろに従いる形である。止が声符であるのか、別に意味するところがあるのか知られないが、金文にその字形がある。「唐六典」に市を「建」が、金文による。

て、これを監督するが、それは古くからとられていた方法であろう。市は近郊の広場などで行なわれ、た方法であろう。市は近郊の広場などで行なわれ、た方法であろう。市は近郊の広場などで行なわれた。ではでは、「市に即かしめざること邸れ」とあり、それるが、「市に即かしめざること邸れ」とあり、それるが、「市に即かしめざること邸れ」とあり、それるが、「市に即かしめざること邸れ」とあり、それるが、「市に即かしめざること邸れ」とあり、それを阻害してはならぬという趣旨の記述がある。「周をとは、司市」に「大市は、日景にして市す。商賈を主と爲す。東方の「中にして市す。販夫販婦を主と爲す。東方の「定場所に開設されることになり、営里を市井という。わが国でも古く「いち」とよばれるところがあり、歌垣の場所とされることが多かった。

比られこの

是 我

によって仮借するものであり、「相比次する」意は詞の用法は止(どに一を加えたもの)が之で、同音声の字で雌の初文。細小なるものを意味する。代名とととに従ふ。とは相比次(ならぶ)するなり」ととした。「説文」ニ上に「止まるなり。止形声 声符は止。「説文」ニ上に「止まるなり。止形声 声符は止。「説文」ニ上に「止まるなり。止

此

矢

弛旨

朿

名詞としての此字がみえる。 ない。戦国期の〔南疆 鐘〕に至って、はじめて代ない。戦国期の〔南疆

「負擔を弛る」、昭三十二年「周室の憂を弛うす」の「負擔を弛る」、昭三十二年「周室の憂を弛うす」の

ように用いる。〔礼記、雑記、下〕に「一張一弛は、

文武の道なり」の語がある。

矢 5 や・ちかう・つらねる

弛 6 かるめる・はずす・すてる

のをゆるめるのを弛緩という。〔左伝〕荘二十二年をはずす意。重文の虒に従うものも形声。すべてもをはずす意。重文の虒に従うものも形声。すべてもをはずす意。重文の虒に従うものも形声。すべてもあり、弓弦を解くなり」とあり、弓弦を解くなり、を描いる。とは蛇形を

□日 6 うまい・むね・おぼしめし

百番 子子

会意 氏と日(器中にもののある形)とに従う。 民は肉を切る小刀。氏族共繁のときに儀礼的に用いるものであるから、氏族の字にも用いる。日は祝いるものであるから、氏族の字にも用いる。日は祝いるものであるから、氏族の字にも用いる。日は祝いるものであるから、氏族の字にも用いる。日は祝器中の肉を食する意である。「説文」五上に「美し」とし、「甘に從ひ上聲」とするが声が合わず、かつとし、「甘に從ひ上聲」とするが声が合わず、かつとし、「甘に從ひ上聲」とするが声が合わず、かつる、すなわち挟一般の字で、甘美の字ではない。斉器の「国差鰡」に「以て旨酒を實たす」とあり、その旨字は「説文」重文の字形に近い。本来は旨肉をいう字であるが、酒にも旨酒という。同形に釈するものに指・稽の従うところの旨である。旨肉の旨は指・で、彷彿として霊の詣る意である。旨肉の旨は指・情の従うところで、この両者は字源が異なり、その声義を異にする字である。

東 6 しるしのき・とげ

‡ ° ↑ ° ↑

帯

象形 標識として樹てた木の形。すも本来はこれ

三六三

と似た形のもので、縦横の木の交叉するところに祝れてある。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹てる。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹てる。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹てる。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹でる。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹でる。市はこれに止声を加えた字である。「原気で樹てる。市はこれに止声を加えた字である。「豚気で樹でる。市はこれに止声を加えた字である。「豚気で樹であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚気であるが、東には刺突の意があるのであろう。「豚のたっぱく似た形のもので、縦横の木の交叉するとされて、

死 6 しぬ・ころす

新州州 高州村

> る巫祝の徒、荘子学派は古代の祭司階級の人びとで 克する思想的努力がなされた。儒家は葬礼を主とす とは儒家に至って論ぜられ、荘子に至ってこれを超 薙露・蒿里は挽歌、蒿里とは墓所をいう。死生のこま。。 こうの 草間にある形。その枯槁の骨をおくところは蒿で、の草間にある形。その枯槁の骨をおくところは蒿で、 どの文献に至ってからのことである。 葬は死 (屍) である。死を生死の意に用いるのは〔詩〕〔書〕な とがないのは、わが国の古俗と大いに異なるところ 治の義に用いて、これらの字を不祥として避けるこ い。何れも仮借義である。尸を「主る」、死を司・に在るを動せしむることなかれ」など、その例が多 我が家を死めしむ」、〔毛公鼎〕「死めて余一人の位 「師\いっている。」 「好まだこれ小子なるも、 [康鼎]「王、命じて王家を死嗣(治める)せしむ」、 屍の意に用いる。金文では死を司・治の義に用いる。 漢據にもなお「死、この下に在り」とあって、死をはもと生死の字でなく、屍を意味する字であった。 形で、明らかに複葬の形式を示している。それで死 人のある形。いまの死字の形は、片の前に人の跪く あったと思われる。 余、女に命じて

糸の【絲】はきいといいと

糸たばの形。絲は生糸をいう。〔説文〕 - 三上に 会意 旧字は絲に作り、二糸に従う。糸は音べキ。

を「茲の」のように用いる例がある。 なて 「茲の」のように用いる例があり、また蚕ごとしてそのの葉の上に蚕をかく字があり、また蚕ごとしてそのの葉の上に蚕をかく字があり、また蚕ごとしてそのの葉の吐く所なり」とあり、絹糸をいう。卜文に桑を「茲の」のように用いる例がある。

至 6 いたる・およぶ・きわまり

要な儀礼の際の作法であったらしく、卜辞に「父乙 字形によって考えると、室・臺(台)などはこの方などの設営には、ト宅占地のことが行なわれたが、 形に従う。矢を放ってその至るところをみるのは占 会意 に禦るに商に至る」、〔書、召誥〕「王、朝に歩して 法によるものであろう。また歩して至ることが、重 地の方法で、これによって地をえらぶ。重要な建物 は矢の到達するところを示しており、到の字はこの り。一に從ふ。一はなほ天のごときなり。象形」と る。不一三上に「鳥飛んで上翔し、下り來らざるな 下に至りて來るなり」と、鳥が地に降り来る形とす そこに矢の至ることをいう。「説文」「二上に「鳥飛 あるのと、対応する字説である。卜文・金文の字形 一はなほ地のごときなり。象形。上に去らずして、 んで高きよりし、下りて地に至るなり。一に從ふ。 矢の倒形と一とに従う。一は矢の到達点。

している。上の意に用い、「荘子」には人の理想態を至人と称上の意に用い、「荘子」には人の理想態を至人と称宗周に至る」のようにいう例が多い。のち至極・至周より則ち豐に至る」、「多方」「王、竜より來り、周より則ち豐に至る」、「多方」「王、竜より來り、

★ 6 神草の名・しば

何っ うかがう・まつ・たずねる

低っ といし・みがく

址へ「肚」であいっきとい

孜っつとめる

ものは、仮借である。 を意してあり、「史記、夏本紀」に「孶々」に作るに「孜々は汲々なり」という。字は教で同じく支に「孜々は汲々なり」という。字は教で同じく支に「孜々は汲々なり」という。字は教で同じく支に従う。〔書、益理)に「予、日に孜々せんことをいる。」とうとうとに従う。子を撃って、ものは、仮借である。

志っ こころざし・しるす

条

形声 字の初文は之に従い、之声。士はその楷書 を意とし、「段注」には亦声とする。古くは誌・識の意に用いた。

私っかたくし・ひそかに

会意 未と山とに従う。**は耕作のまたその財はなく、私とは和の象形。和を用いて耕作する人をいう。「説文」七上に「禾なり」というがその用例はなく、私とは私属の耕作者で、隷農的身分のものをいう。「韓非子、五蠹」に「ムに背くを公と爲す」というが、**びは祭祀儀礼の行なわれる場所の象形で、ムに従う字ではない。公は族長貴族、私はその私属の隷農である。〔詩、小雅、大田〕「我が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり 遂に我が私に及べ」の私は私有が公の田に雨ふり、私属の農夫を入殖させることをいう。私とはその身分をいう。「私かに」の意に用いる窃私・私親などは、その転義。わが国では自称の「わたくし」の字に用いる。私の字義との関係に、興味がもたれる。

不り がた

シ 使 侈 刺 姉[姊] 始 枝 祀[禩]

使のかい・つかう

美美事 得

でもと同声。事・吏の声は、選・麓の関係と同じでもと同声。事・吏の声は、選・麓の関係と同じでもと同声。事・吏の声は、選・麓の関係と同じでもと同声。事・吏の声は、選・麓の関係と同じでの使には事を用いる。〔叔隋器〕「王姜、史叔事于大の使には事を用いる。〔叔隋器〕「王姜、史叔事于大の使に主姜、叔をして、大保になりと思い、祭の使者保(王姜、叔をして、大保になりと問じでなった。 祝禱を奉じて遠く使し、その地で祭事を行なう意の字である。

侈 8 おごる・おおい・ほしいまま

とをするのを、侈靡という。身分にすぎたこすべて外見を張ることを侈という。身分にすぎたこて他に誇ること。広い袂を侈袂という。多は多肉。

刺 8 さす・そしる・せめる

姉の「姊」のあれいはは

##

展書 正字は姊に作り、売声。〔説文〕 二下に で女兄なり」とあり、また女子を親しみ、尊敬して なこともある。屈原の姉といわれる女須は、おそ 大ぶこともある。屈原の姉といわれる女須は、おそ 対立者たる女須は、女巫を代表する立場にあったも のであろう。姐は母、また通用の字である。姉・ がまれる女須は、女巫を代表する立場にあったも のであろう。姐は母、また通用の字である。姉・ がまれる女須は、おそ

始 8 はじめ

部 化中雪

形声 (すき) 「女の初」とは意を成さぬ語であり、声もまた合わ ニ下に「女の初なり」とし、台声の字とするが、 耜を祓い清める儀礼をいう字である。 農耕の開始に 具を祓う儀礼。鼓声を加えることを嘉という。 (未)と祝禱の器に従うものに加があり、これも農 うちにひそむとされたからである。台と同じく耜 ぐために必要とされた。虫害をなす蠱霊が、器具の あたって、 それは加・嘉に対する語で、台に胎の声義があると れで始に「はじめ」という意がもしあるとすれば、 するものであろう。字はもと姓としての姒の字に用 いられ、〔詩〕〔書〕に至って始の義に用いている。 , 台は目に祝禱の器である口を加えたもので、 の形。始はもと耜声の字である。〔説文〕 字の初形は似に作り、以の初形は目で相 まず農具を清めることが、秋の虫害を防

枝 8 えだ

することが多い。 形声 声符は支。支は小枝をもつ形 がた、四肢・枝幹などの字が作られた。支と通用 が分化するに が分化するに がかがで、四肢・枝幹などの字が作られた。 で、枝の初文。「説文」 六上に「木、 で、枝の初文。「説文」 六上に「木、

祀 8 [禩] 16 まつる

祝服我 8 世紀

形声 声符は已。世は蛇の形。自然神を計ること無きを祀という。〔説文〕」上に「祭りて已むこと無きなり」とし、旁を「世む」と解するが、卜文・金文の字形は蛇に従うており、自然の精霊などを祀る。である。〔爾雅、釈詁〕「祀は祭るなり」の〔舎人だ」に「地祭なり」とみえ、〔周礼、司服〕「群小祀け」に「地祭なり」とみえ、〔周礼、司服〕「群小祀い」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖り」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖り」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖り」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖り」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖り」という。殷では祖祭を祀といい、殷末には、祖に一年を要したので、王の在位を数えるとき、五郎一年を要したので、王の在位を数えるとき、五郎・十祀のようにいう。自然神の祭祀が、祖祭に先祀・十祀のようにいう。自然神の祭祀が、祖祭に先祀・十祀のようにいう。自然神の祭祀が、祖祭に先祀・十祀のようにいう。自然神の祭祀が、祖祭に先祀・十祀のようにいう。自然神の祭祀が、祖祭に先祀・十祀のようにいる。東は鬼の正の形は、祖祭に、「御礼」の注に、「故書、祀を神の形」とみえ、「魏祖、の注に、「故書、祀を神の発の神の表えている。を刀はやつ、谿谷の意である。

社 8 [社] の さいわい

がず

形声 声符は止。〔説文〕」上に「福なり」とあり、 で既に帝の礼を受く」とあり、神より与えられるも のをいう。〔周頌、烈文〕にも、「茲の祉福を錫ふ」 のをいう。〔周頌、烈文〕にも、「茲の祉福を錫ふ」

肢。「胑」。できし

俟。 まつ・おおきい

作 形声 声符は矣。矣は喩母。喩母の 実は相に呪具としての矢を加えて、これを清め祓う 意の字である。俟を「説文」ハ上に「大いなり」と 意の字である。俟を「説文」ハ上に「大いなり」と するのは、「詩、小雅、吉田」「儦々俟々として 或 いは群し或いは友つ」によるものであるが、本義は 「姓風、辞さり」で我を城隅に俟つ」、「簑礼、」「香礼」 「佐んじて門外に俟つ」の俟つが正訓。農具を被う (様礼をいう字で、また竢に作る。立は儀礼の場所で ある。「中庸」「君子は易に居りて命を俟つ」のよう に用いる。

各 9 はかる・なげく・ああ

申して訴えることをいう。〔説文〕ニ上に「事を謀禱を収める器の形。各とは祝詞を奏し、さらに嘆き聞いて嘆き訴える形。口は可、祝会意・文(次)と口とに従う。次は

謀することをいう。 で、その人の形が姿である。咨は***の初文。神に診で、その人の形が姿である。咨は***の初文。神に診るを咨といふ」とし、形声とする。咨嗟哀告する意

R 9 尺度の名・あた

を声 声符は只。〔説文〕ハ下に「中 が」とあり、尺に対して八寸をいう。 皮沢とは極め な」とあり、尺に対して八寸をいう。 皮沢とは極め と咫尺」とは、至尊のま近で恐懼する意。 咫はわが と咫尺」とは、至尊のま近で恐懼する意。 咫はわが とたて、婦人が八寸。 尺は象形。 咫は声符を加 男の方が尺、婦人が八寸。 尺は象形。 咫は声符を加 また字。「八咫 鏡」のように用いる。

姿の「姿」の すがた・なり・かたち

形声 声符は次(次)。次は人のたまな。そのである。その嘆き訴える形を姿という。であろう。愛の字も、人が後ろを顧みて憂える形をであろう。愛の字も、人が後ろを顧みて憂える形をであろう。愛の字も、人が後ろを顧みて憂える形をである。

死 9 しかばね・むくろ

それで屍を尸主という。[礼記、曲礼、下]に「牀してなお葬らぬさきには、尸を立てることがなく、「然をなり」とし、屍体をいう。死の人

シ

を奏せしむ」とは、 大司楽」「屍の出入するときは、則ち肆夏(楽名)拝する形である。尸・屍の二字は通用し、〔闖礼、[編礼、に在るを屍といふ」とみえる。**とは、その残骨をに在るを屍といふ」とみえる。** 尸の意である。

シ屎(菌) 思指施

柿[柹]

屎の「菌」3 シモキ

民労〕「民の方に殿屎する」は呻吟の意。殿屎のこなう」、民の方に殿屎する」は呻吟の意。殿屎のこなうしとの意で、禅家の公案と似ている。〔詩、大雅、しとの意で、禅家の公案と似ている。〔詩、大雅、 ついに屎溺に在りと答える。道は在らざるところな を尋ねると、荘子は様稗に在り、瓦壁に在りとし、る。〔荘子、知北遊〕に、東郭子が道の在るところ作り、「糞なり」と訓し、字を胃の省文に従うとす 部を示し、米は屎の象形。〔説文〕一下に字を菡に とは、古くから苦業であったのであろう。 尸と米とに従う。尸は尾の従うところで臀

思 おもう・かんがえる・はかるシ

「客きなり」の誤りであろうとする。〔詩〕では助詞 無し」の思は、もと助詞の用法で、「思に邪無し られている語であるが、〔詩、魯頌、駉〕の「思邪百、一言以て之を蔽む。曰く、思邪無し」はよく知 に用いることが多く、「論語、為政」「子曰く、詩三 とよむべき句である。 「説文」「O下に「容なり」とあり、「恵記」に 頭脳の象形。その思惟するところをい 正字は囟に従い、囟声。囟は

> 9 ゆび・さす

るが、 指麾・指画・指導・指使・指趣・指摘など、指のは の旨の初文である。 たらきは多様である。また恉と通用する。恉は趣旨 を食指という。大指は巨指、また巨擘・拇という。 總 もと旨肉を指示する意があるらしく、第二指 る。〔説文〕二三に「手指なり」とす 声符は旨。旨に旨肉の意があ

施。 なびく・ほどこす・およぶ

濒

施へず」のように用いる。この訓は、旗の靡くといた、背のなびく形。斉の製施、字は子旗、郎のまで、は、孔門の巫馬施も字は子旗。施は吹き流しのなびた、孔門の巫馬施も字は子旗。施は吹き流しのなびた、孔門の巫馬施も字は子旗。施は吹き流しのなびた。子の製施、字は子旗、鄭の豊いい、旗のなびく形。斉の製施、字は子旗、鄭の豊いい、旗のなびく形。斉の製施、字は子旗、鄭の豊いい、旗のなびくだ。 らす) 形声 「讀みて施と同じくす」とする。歯の字形は、呪霊 に「帔なり」と互訓、施すの意に解しているらしく ろう。數は〔説文〕三下に「敷なり」、次の數字条 う意からは演繹しがたいものであるから、 の意があり、それはおそらく歯の仮借義であ 声符は也。也は喩母の字で、弛の声がある。 施の別の

> よばれる呪儀にあたる。〔左伝〕〔国語〕の例にみえをもつ也(蛇)を支つ形であるから、それは競改とをもつ也(蛇)を支っ 義例もなく、施字のうちにその訓義をとどめている なびくさま。施す・移す・及ぼすの意は、すべて飲 術を施すことをいう。毅改は呪詛を防ぎ改め、これ る施は、いずれもその正字は故、歿改という共感呪 の仮借義による訓であるが、帔の字は滅んでその用 を他へ移すものであるから、移すこと、施すことを いい、また及ぶ意となる。すなわち施の本義は旗の

柿。[秭]。 かシき

葉は肥大、懐素が蕉葉に習字したように、唐の鄭虔に供することがみえ、古くから美果とされた。そのに供することがみえ、古くから美果とされた。その が慈恩寺の柿の葉で習字した話がある。 その俗体である。「説文」六上に「赤 形声 正字は柹に作り、歩声。柿は

ണ 10 いくさ・せんせいシ

天 駉 支 鄆 1 ST. 台師然 B

る祭肉の形で、師の初文。市は市(めぐる)とは別会意 Bと市とに従う。音は軍の出行のとき携え

把手のある曲刀の刃部に、小さな叉枝のあるも 。 雨まと 恣

て軍礼において祭肉を頒つ賑膰の礼といわれるもの ある。 は廟寝の意。歸とは凱旋のことを廟に報告する意で れる帚は廟を清めるため酒気をふりそそぐ器で、帚 書・遺といい、追撃することを追という。戦が終っ に標木としての束を樹てて餗といい、「齊の餗に在すります。」 て帰還することを歸(帰)という。歸の字形に含ま には必ず自肉を携えるので、軍を分遣することを をもつ、最大の軍事基地をいう。軍の行動するとき り」のようにいう。京師とは、京とよばれる凱旋門 駐屯するところには、自を台上においた。自の下に 「自般」のようにいう。自は脤肉であるから、軍の 一あるいは二横画を附する字形のものがそれである。 左中右の三軍があって、三自という。その師長を 解釈はすべて誤る。卜辞では自は師の意に用いられ は脤肉の象、帀は曲刀の形で、〔説文〕のいう字形 とする。自を〔説文〕一四上は小さな阜と解してお に從ひ、 り、師をその阜を叩る意の字とするのであるが、自 その祭肉を頒って出発させる。遣(遣)とはその自 する。〔説文〕六下に「二千五百人を師と爲す。 肉を携える意。ゆえに自の旁に刃器をそえて、 神佑を祈り、その祭肉である賑胙を携えて出行するの。軍の出行するときは、祖廟や軍社などに祭っての。 たとえば途中で軍を分遣して行動するときは、 これら自系列の字に含まれる自の形は、すべ 師長には古く氏族の長老たるものがあたり、 自に從ふ。 自の四市なるは、 衆の意なり」

> 族国家のありかたの推移を反映している。 伝えるものである。師のありかたの推移は、 る師の職掌のなごりを、その退化した形式において に多く残されている師系の官職は、氏族時代におけ として若者の育成にあたり、師職となる。〔周礼〕師氏と称した。現役を退いたのちは、氏族の指導者師氏と称した。 古代氏

ほしいまま

「荀子、 るなり」 あり、 る意で、 o o o 放縦無為のさまをいう。 非十二子〕に「恣睢禽獸の行」という語が とあり、恣意の意とするが、もとは咨嗟す それをゆるめる心が字の原義であろう。 形声 く人の形。〔説文〕一〇下に 「縦にす 形声 声符は次(次)。次はたち容

疵 きず・やまい・

0 杨

は瑕、疵瑕は小疵、それより欠点・疵毀の意となる。を吹いて疵を求む」のように小疵をいう。玉のきず 七下に「病なり」とあり、〔漢書、景十三王伝〕「毛形声 声符は此。此に些少の意がある。〔説文〕

眥 10 まなじり・にらむシ・セイ

らせてみることを睚眥といい、決意を示すことをあり、まなじりの細くきれたところをいう。目を職あり、まなじりの細くきれたところをいう。目を職いう。〔説文〕四上に「旨 匡なり」と 图 形声 声符は此。此は細小のものを

恣

砥 「眥を決す」という。 といし・とぐ

往来するところであった。 こと矢の如し」と嘆く。その平坦な道が、 の搾取をうらむ詩で、「周道、砥の如くることを砥礪という。〔詩、小雅、大東〕 ることを砥礪という。〔詩、小雅、大東〕は、周人ある。砥礪の礪は粗砥、学術や品性の修為につとめかきものなり」とあり、みがきあげるときの砥石でかきものなり」とあり、みがきあげるときの砥石で 形声 ぐ形。〔説文〕九下に「厲石の最も 声符は氏。氏は曲刃の刃をと 搾取者の その直き 細

祗 つつしむ・まさに

醎 0 **湘** 八 至 小

紀〕に振に作る。また経籍に祇と混同している例が ある。祇は土地の神である。 経〕に祗に、〔皋陶謨〕の「祗敬」を、〔史記、夏本 般庚」「萬民を震動して以て遷らしむ」を、〔漢石 があったらしく、震・振と通用する例があり、〔書、り、祗敬・祗候・祗承の意に用いる。古くシンの音り、祗敬・祗 、 下流、 「説文」 - とに「敬むなり」とあ

祠 まつり

I

T.

で、 形声 その祭儀をいう。〔説文〕」上に「春の祭を祠 声符は司。司は祝詞をひらくことを示す字

令〕の文を引く。春祠は時祭、〔詩、小雅、天保〕 用ひず、圭璧及び皮幣を用ふ」という〔礼記: 月 韻をもって解する。また「仲春の月、祠るに犧牲をといふ。品物少くして文詞多きなり」と詞・潤の畳 に「喩祠烝 嘗」とあって、四時の祭名である。

秭 いねたば・つむ

に数倍する賠償をえている。〔儀礼、聘礼記〕によしるすものであるが、「禾十秭」を盗まれて、それ百乗にあたる。〔晉鼎〕は寇禾事件の裁判の結果を「五稷を秭と爲す」とあり、一稷は四十秉、秭は二五程を秭と爲す」とあり、一稷は四十秉、秭は二 ると、二百四十斤を一秉とする。一秉は十籔、 一秉は百六十斗という計算である。 一籔

10

えて繊維の強いものを作り、蔡侯紙とよんで珍重さりはじめたとき、樹膚・麻頭・敝布・魚網の類を加りはじめたとき、樹膚・麻頭・敝布・魚網の類を加りませい。 「後漢書、宦者列伝」に、蔡倫が紙を作った。 「紫一苦なり」とは、箔ですきあげた 紙の製法は、のち西欧にも伝えられて普及した。 にすでにあり、 れたという。 字はまた帋に作る。紙の名は蔡倫以前 ただその材料が異なるものであった。 声符は氏。〔説文〕一三上に

翅 はね・ただ

魚のひれを菜としたもの。副詞の「ただ」に用いる 小さな虫の羽をいう。翅蟷は「羽あり」、翅菜とは 仮借義である。 四上に 「翼なり」というが、 声符は支。〔説文〕

脂10 あぶら のは、

C PA

あり」とみえる。〔周礼、考工記、注〕に脂は牛羊四下に「角を戴くものは脂あり。角無きものは膏を取す、 声符は旨。皆に旨肉の意がある。〔説文〕 が国には、このような種類の語がない。 臓腑の間にあるものであろう。肉食をしなかったわ の属、膏は豕の属とあるも、脂は肉つきの脂、膏は

舐 10 [舓] 14 なシ める

召す。痔を舐むる者には、車五乘を得しむ」とみえ、 という。〔荘子、列禦寇〕に「秦王、病ありて醫を 人にとり入る手段をえらばぬことを「舐痔」という。 の初文で、その音がある。「舌を以て食を取るなり」 三上に字を舓に作る。易は賜 形声 声符は氏。〔説文〕

置10 むし・おろか・あなどる・わらうシ

뽛 0 业价

形声 声符は止。止は之の初文。〔説文〕「三上に

> 用例がない。蚩尤は黄帝と争って敗れたものとされ 布を抱きて絲を質ふ」とあって、その男はいそいそ。 いる人の物語を歌うものであるが、「氓の量々たる ない。〔詩、衞風、氓〕は、村の娘をかどわかす行 るものかと思われるが、その虫のことはよく知られ ときは、彗星に似た蚩尤旗とよばれる雲があらわれ るが、もと軍神であったらしく、天下に兵乱のある **蚩鄙・蚩愚など、痴愚の意とに用い、** のうごくようにいそしむ状態を形容する語であろう。 と、布を抱いて糸と交換をしにくる。蚩々とは、虫 **尤戯が伝えられていた。蚩愚の意は虫の名に由来す** るという。北方の冀州に、頭に角をつけて相争う蚩 「蟲なり」という。 字は古い神話にみえる蚩尤と、 虫名としては

匙 さじ・しゃくし・かぎ

転用する。 の形が似ているので、玉匙金鑰のように、鍵の意にとして是声とするが、字は是の繁文である。のちそ 分化して、さらにさじの形の匕を加えて、 ば声符化した字である。〔説文〕 ハ上に「匕なり」 プーンの形で、匙の初文。是の字義が 声符は是。是は足のついたス 是がいわ

徙 うつる

齛 殩

形声 二下に「多るなり」とするが、ト辞の征雨は長雨、 声符は止。卜文・金文に祉に作る。〔説文〕

【令彝】「浩でて卿事寮を同む」という。徙は遷る・いる。また祝禱の器である Uを加えて浩に作り、いる。また祝禱の器である Uを加えて浩に作り、金文には〔呂齋〕「大室に祉(侍)す」のように用 笥 11 の器が最もひろく知られて はシこ いる。字はまた磁に作る。

方なるを笥といふ」とみえる。 の注に「飯食を盛るものなり。圓なるを簞といひ、 で編んだ容器である。〔礼記、曲礼、上〕「簞笥」 形声 及び衣の器なり」とあり、 声符は司。〔説文〕五上に「飯 竹や葦など

ことに深い意味があり、そのために祝禱を加えるこ

避く・移るの意に用いるが、古くは「歩む」という

とがあった。祉・徃・徙は一系の字である。

11

紫 11 むらさき

六上に「楸なり」とする。農

声符は辛。〔説文〕

\$ \ \ \ \ 粉

という。伍子胥が死に臨んで、「我が墓に樹っるに桑梓という。梓は棺材に用いられ、天子の棺を梓宮家の近くには桑と梓とを樹えるので、故郷のことを

ところは北斗の北にあって、紫微という。紫宮はまた神仙のことをいう語である。天帝の居る 「論語、陽貨」に「紫の朱を奪ふを惡む」の語があるものなり」という。間色の美しいものであるから、 る。紫辰・紫禁など、多く宮中の語に用い、紫霞・「論語、陽貨」に「紫の朱を奪ふを惡む」の語があ 形声 声符は此。〔説文〕 三上に「帛の靑赤色な

耜1[枱]。

瓷

やきもの・いしやき・かめシ・ジ

える。木工のことに従うものを、梓匠輪輿という。亡を呪詛する語を残した話が〔史記、呉世家〕にみにいます。

梓を以てせよ。器(棺材)たらしむべし」と呉の滅

器なり」

とあり、唐宋以後に至ってみえる字である。 声符は次(次)。〔説文新附〕一二下に「瓦

縮 解

字。未は頭の鉄がわれている「かであるが、末を加えて形声化したであるが、末を加えて形声化した形声 文〕
ボ上に、正字を枱とし、 その両者を合せた字である。 らすき」。目は鍬状のもの。耜は 泛説

二を録する。台は耜に祝禱を加えて祓う意の字。 献には耜の字を用いることが多い

視 (視)12 みる・しめす

小雅、鹿鳴〕の〔箋〕に「視は古の示字なり」とあ り、示の形声化した字としてよい。 祭事のことであり、ゆえに視に示の意がある。「詩、 「瞻るなり」と訓し、示声とし、古文二形を録する。 形声 の降臨・降監をいう字である。視が示に従うのも、 また瞻四上に「臨視するなり」とあり、臨視とは神 声符は示。示は祭卓の形。〔説文〕八下に

趾 11 あし・あしゆび・あしあとシ

之趾〕に、「麟の趾」と歌われている。 となる。のち獣迹や趾の意に用い、〔詩、周南、麟本来は人のあしあとをいう字で、その左右の趾が歩 形声 声符は止。止はあしゆびの形で、趾の初文

<u></u> かて・くらわすシ・ショク

金

字は食器の前に人の坐する形。即(即)と字形が近 **釟繁(盤)のように用い、食とも通用する字である。** 「飲い歌舞」、また器名として飤盂・飤簠・飲飤器・とし、〔玉篇〕に飼と同字とする。金文の徐器にとし、〔玉篇〕に飼と同字とする。金文の徐器に 会意 食と人とに従う。〔説文〕五下に「糧なり」 金文の徐器に

紫 趾 勝る」の句があり、その器は軽くして且つ堅、

くときは哀玉の如き音を発するという。江西景徳鎮勝る」の句があり、その器は軽くして且つ堅、たた

を論じている。杜甫の詩に「君家の白碗は霜雪より寿・洪・邢各州の瓷器の制作をのべ、茶味との適否れている。唐の陸羽の〔茶経〕に越・鼎・婺・岳・れている。唐の陸羽の〔茶経〕に越・鼎・婺・岳・れており、その窯址が断江上環の各地から発見されており、その窯址が断江上環の各地から発見されており、その窯址が断江上環の

由来は極めて古い。後漢のとき、すでに越窯が開か 瓷器は殷代の白色土器に起原するものとされ、その

雷 まつり・ただ

としては、 意味が明らかでない。稀祭は天子のみに許された祭 〔説文〕二上に「語時、啻ならざるなり」というも、 天の礼。啻はまた奝にして嫡の初文である。副詞 初文であるが、のち禘とは別の字として行なわれる。 にそなえる祝禱の器。すなわち上帝を祀る意で禘の 適と同じく「ただ」とよむ。 配る大きな祭卓の形。口はひ、その前にる大きな祭卓の形。口はひ、その前になっている。帝は上帝を

廁 12 かわや・まじわる・ぶたごやシ

[草枕]にみえる乾屎橛である。 る。長い桟をわたして、その上に列んで用を足すし 雑わる、 あり、中国へは仏家がもたらしたという。漱石のかたであった。廁籌は糞かきべら。印度にその風が 廁して、上に在るもの一に非ざるを言ふなり」とす の訓があり、[釈 名、釈宮室]に「人の雑さなり」とあり、清とは圊でかわやの義。 形声 声符は則。〔説文〕丸下に「淸

弑 12 [紙]13 しいす・ころす

言〕「臣、その君を弑す」の文を引く。〔釈 名、釈 三下に「臣、君を殺すなり」とし、[彖、坤卦、文 三下に「臣、君を殺すなり」とし、[彖、坤卦、文 説文]をいう。[説文]をいう。

克その君の子奚齊を弑す」の弑を、〔左氏〕の経文 と同じ構造法ですである。[公羊伝] 僖九年経「里めあろう。のち弑殺・弑逆の専字となったが、もと殺 とを弑という。式は攻撃にも防御にも用いたもので 術的に減殺することを殺という。また呪具の工を用 これを撃って、他から加えられている呪詛を共感呪 喪制〕に「弑は伺なり。閒を伺ひて、しかるのち施 に殺に作っており、殆ど同義に用いる。 いて、この獣の呪霊を受けて、他に呪詛を加えるこ 字は弑に作り、左偏は殺(殺)の従うところと同じ すことを得るなり」と伺・施の音をもって説く。正 祟の初形。祟をなす呪霊をもつ獣の形である。

揣 12 はかる シ・スイ (スヰ)

応音義」に揣の音は北人、揣の音は南人の音であるといいうものがその術をよくした。〔説文〕にまた「一いうものがその術をよくした。〔説文〕にまた「一いうものがその術をよくした。〔説文〕にまた「一 伝〕昭三十二年「高卑を揣る」の注に、「高きを度な一二上に「量るなり」というのは、予量の意。〔左 ており、巫女の髪の形である。すなわち耑は巫女の るを揣といふ」とみえ、揣摩して臆測する意である。 象で、その予測するところを揣摩という。「説文」 その系列字。 る。耑は而に従うが、而は雨請いする巫祝で、需はない。 意味をもつ。ことを予知する意のある字のようであ また耑の上部は微の従うところに類し い字であるが、瑞兆のように予兆的な 形声 声府は耑。耑は形義をえがた

> ぞれの音がある。 という。耑声は而・需・耐の音の系列に属し、 それ

三七二

斯 12 さく・これ

淤

警斯に近し」とあり、魯の公子奚斯、字は子魚、まだいの。今俗語に斯白の字を鮮に作る。齊魯の閒、白なり。今俗語に斯白の字を鮮に作る。齊魯の閒、〔詩、小雅、〔注〕。 (類はり、これに脯を与えて「斯きてこれを食へ」という。 風、墓門」に「墓門に棘あり、斧を以てこれを斯上にものをおき、それを析く意であろう。〔詩、陳 会意 詞に用い、〔論語、子罕〕に「斯文」、〔礼記、檀弓、「など、」になっています。 炊の所を廝という。また特定のものを指示する代名た庾公之斯、字は子魚、斯はみな鮮の意。ゆえに烹 斤を加える性質のものでもない。あるいは兀(机) り」とし、字を其声とするが声が合わず、また其は 詞は、仮借義である。 下〕に「斯の道」、〔論語、微子〕「斯の人」、〔衛霊 公〕「斯の民」のようにいう。「すなはち」などの語 其と斤とに従う。〔説文〕 | 四上に「柝くな

楘 12 きび・神にそなえる穀シ

鬴 줆

に字を登盛に作り、「小宗伯」にいう元豊とは酒をと、まうに、神饌のものをいう。「周礼、肆師」という。「周礼、肆師」と、「大きな」と、「大きな」と、「大きな」と、「大きな」と、「大きな」と、「大きな」と、 の類で、粢糠・粢糲とは至って粗末な食物をいう。いう。神饌のものとしては齏が正字。粢はいねもちいう。神饌のものとしては齏が正字。粢はいねもち の類で、 力命」に「食には則ち粢糲」とみえる。

献 12 きりみ

ると、 に「蔵四豆、左に設く」とする。〔郷射礼記〕によ徹を左にし、蔵を右にす」とあり、〔骸礼、士虔礼〕う。〔礼記、曲礼、上〕「凡そ食を進むるの醴は、北京、曹存は戈。〔説文〕四下に「大臠なり」とい形声 声符は戈。〔説文〕四下に「大臠なり」とい 祭肉で、軍事の字に用いる。胾はその形声字である。 ある。その象形字は自であるが、自は軍礼のときの 肉の長さは尺二寸、殽は骨つき、胾は全肉で

12 / 番 13 あれた・わざわいシ・サイ

〔左伝〕 菑害は災害。〔詩、 形声 声符は甾。正字は當

に災の意にも用いる。菑禽は荒地を開墾したもの、 として甾をあげる。字は甾に従うてその繁文。ゆえ す。〔説文〕一下に「耕さざる田なり」とし、重文 災によって荒廃した地に、また草が生じたことを示 みな災厄をいう。 襄二十八年「その菑患を救ふ」のように用 大雅、生民」「菑無く害無し」、 に従い、上部は水災の象。水

菑(葘)

覗

觜 訾

詢

貲

歯(齒)

覗 12 みる・うかがう

神意を伺う意をもつものであるから、伺の初文。 形声 はその声義を承ける字である。 声符は司。司は祝禱の器をひらく形。その 覗

觜 けづの・くちばし

置 嘴などをいう。鼻まがりを觜鼻という。 形声 をいう。それで、梟の毛角、角のさき、 声符は此。 此は細小なるもの

訾 12 そしる・なげくシ・セイ

ある。警毀・警病・警怨など、人を護刺することをことを思はず」とあるによるが、連言の形容の語で 「潝々戦々」の〔毛伝〕に、「戦々然として上に稱ふとを思はざるなり」とは、〔詩、小雅、小旻」とを思はざるなり」とは、〔詩、小雅、小旻」 屬原 いう語である。 ざるなり」とは、〔詩、小雅、小旻〕をいう。〔説文〕三上に「意に稱ふこをいう。〔説文〕三上に「意に稱ふこをいう。〔説文 人を譏刺することを

詞 12 ことば・つげる・うったえるシ

〔楚辞、離騒〕「重華(舜)に就きて詞を陳ぶ」ととするものであろう。詞は祝詞、神に告げる語で、を外に司るもの」としており、詞を外に宣べる意を外に言るもの」としており、詞を外に宣べる意 ほどの意とされているが、〔説文〕は司を「臣の事 言外なり 」とし、字を会意とする。言外の意という らく形。〔説文〕丸上に「意内にして形声 声符は司。司は祝禱の器をひ

> いうのが、 原義に近

貲 12 あがなう。あたい

郎という。貲財・貲産の意に用いるのは、資と通うている。また金銭を収めて郎官となったものを、 の義である。 帽帽 形声 声符は此。此に細小なるもの

は・きば・よわ

幽鄉 9

ことが知られる。歯によって年齢を知りうるので、 あり、顱の字もみえており、古くから歯疾があった齒の形に象る」という。卜辞に疾歯を卜するものが止寒る」という。卜辞に疾歯を卜するものが形声 声符は止。卜文には象形の字がある。のち形声 徳の成就するものを歯徳という。 年歯といい、高齢のものには歯杖を賜うた。老いて

嗜 13 たしなむ・このむ

なわち耆・嗜は声義同じ。耆はおそらく老と旨との 形声 いう。耆欲のときは嗜の音でよむ。す形声 声符は耆。耆は六十の老境を

義である。 養である。 「人を殺すことを嗜まざるもの」は、その引伸 上」「人を殺すことを嗜まざるもの」は、その引伸 上」「人を殺すことを嗜まざるもの」は、その引伸 という。〔説文〕 ニ上に「喜びてこれを欲する という。〔説文〕 ニ上に「喜びてこれを欲する という。〔説文〕 ニとに「喜びてこれを欲する

1 つぐ・あとつぎ・よつぎ

解原 清麗斯縣

見可門

会意 冊と司とに従う。ときにさらに口(正)を会意 冊と司とに従う。ときにさらに口(正)を加えていることがある。司は祝禱の器をひらく意で、その祝禱を司ることをいう。〔説文〕三下に「諸侯、その祝禱を司ることをいう。〔説文〕三下に「諸侯、いる例がある。〔宗陽論〕「我これ司ぎて皇天正いる例がある。〔宗陽論〕「我これ司ぎて皇天正にいる例がある。〔宗陽論〕「我これ司ぎて皇天正にいる例がある。〔宗陽論〕「我これ司ぎて皇天正にいる例がある。〔宗陽論〕「我これ司ぎて皇天正にいる)す」、〔起公開」「叔天疾畏、司げる余小子、股が皇考を司ぎ、撃めて先文祖に帥井(帥型、手本とする)す」、〔毛公開」「叔天疾畏、司げる余小子、股が皇考を司ぎ、撃めて先文祖に帥井(帥型、手本とする)す」、〔毛公開」「叔天疾畏、司げる余小子、股が皇考を司ぎ、撃めて先文祖に帥井(帥型、手本とする)す」、〔七公開〕「叔天疾畏、司げる余小子、股が皇者を司ぎ、撃めて先文祖に帥井(帥型、手本とする)す」、〔毛公開」「叔天疾畏、司げる余小子、股が皇考を司ぎ、撃めて先文祖に帥井(帥型、手本とする)す」、〔元ないる)「我に対して、大き、大き、「我に対して、これをひらきよむ行為を示し、それで嗣統を命ずることから、嗣続の意となったもそれで嗣統を命ずることから、嗣続の意となったも会意といる。ときにさらには、「諸侯」「我に対して、これをいる。」

では、「一大の字は、「書、君美」 「我が後嗣子孫」の嗣の「魏石経」、また晋器の〔嗣 「我が後嗣子孫」の嗣の「魏石経」、また晋器の〔嗣 「帝狐君の嗣子」の嗣も、その形に作っている。相続のみでなく、すべて継承する意に用い、 「詩、大雅、思斉」「大姒、徽音を嗣ぐ」、「左伝」 「表」「大」の嗣も、その形に作っている。相続のみでなく、すべて継承する意に用い、こと有らん」のように用いる。禅家では、師法を嗣法という。

曜 13 わらう

笑・冷罵の言に用いる。 に「笑ふ貌」とみえ、嗤笑・嗤詆・嗤誚など、嘲彩声 声符は蚩。蚩に愚かの意がある。[玉篇]

寅13 おく・いたす・すてる

順。順

滓 13 おり・けがれ・にごる・かす

「澱なり」とあり、水底に沈澱した泥が上が、一声符は等。〔説文〕二上に

である。わが国では残りかすの意に用いる。黒色の帛をいうとするから、緇とも声義が通ずる字きものを滓といふ」とあり、〔説文〕一三上緇字条に黒の義があるとする。〔釈 名、釈采帛〕に「泥の黑思の義があるとする。〔釈 名、釈采帛〕に「泥の黑という。宰の声は茲に近く、楊陽達の説に、茲にはないう。宰の声は茲に近く、楊陽達の説に、茲には

13 うかがう・獄官

州

★を供えて獄訟のことを行なうので、獄と同じ造字性を供えて獄訟のことを行なうので、獄と同じ造字形でなく、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなく、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなく、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなく、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなら、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなら、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなら、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなら、その示すところを知りがたい。距は乳房のでなら、その一つととする。(玉篇) 「「祭するなり」と訓しており、「説文」の文は「「の一つであるとみられる。獄事に関して何察することを原義とする字で、何の初文と考えてよい。唐の司馬承(彼の書に、司馬の字をと考えてよい。唐の司馬承(彼の書に、司馬の字をと考えてよい。唐の司馬承(彼の書に、司馬の字をと考えてよい。唐の司馬承(彼の書に、司馬の字をと考えてよい。唐の司馬承(彼の書に、司馬の字をと考えてよい。唐の司馬承(後の書に、司馬の字をと聞いている。

獅13

りもたらされたという。その声は雷の如く、一吼ご後、麑というものである。漢の順帝のとき、西域よいかは、とあり、「爾雅、釈猷」に虎豹を食う「猛獣なり」とあり、「爾雅、釈猷」に虎豹を食う形声 声符は師。獅子の字に用いる。[玉篇]に

とに百獣が辟易するので、獅子吼という。

肆 13 「展」15 つらねる・ほしいまま・ゆえに

料 漏

武 3 シ ころみる・もちいる

13 あばく

れず」のように忘の意に用いる。その正字は藍に作例はない。金文にはこの字を、〔献彝〕「十世まで臨いにいる。全文にはこの字を、〔献彝〕「十世まで臨いとの字を、〔献矣〕」三といる。「説文〕三といる。

という。 という。 郷とは獄官、獄をまた犴獄とり望の繁文。忘に用いるのは仮借の義である。〔説り望の繁文。忘に用いるのは仮借の義である。〔説り望の繁文。忘に用いるのは仮借の義である。〔説

詩 13 うた・うたう

聴け」と歌う。〔小雅、何人斯〕も人を呪詛する詩 孟子 この詩を作爲す に投げ畀へん 有北も受けざれば 有昊(天の神)虎に投げ畀へん 豺虎も食はざれば 有北(神名)でともに謀れる 彼の人を讃するものを取りて 豺 [小雅、巷伯]「彼の人を讃するもの 誰をか適とし である。 呪誦であり、定められた儀礼の歌であって、人のじのは 甫、誦を作る その詩孔だ碩いなり その風肆く好と多からず 維を以て遂に歌ふ、また〔崧高〕「吉と多からず 維を以て遂に歌ふ、また〔崧高〕「吉と為す」による。〔詩、大雅、巻仰〕「詩を矢ぬること為す」による。〔詩、大雅、巻仰〕「詩を矢ぬること為す」による。〔詩、大雅、巻仰〕「詩を矢ぬること 之く所なり。心に在るを志と爲し、言に發するを詩 「この好歌を作りて で、「この三物を出して に投げ畀へん」と呪詛の語をつらね、 からず」として、即興の歌をもってこれに加えるの のみでは不十分であるゆえに、「詩を矢ぬること多 心情を即興的に自由に歌うものではない。定式の詩 三上に「志なり」とする。〔毛詩〕の序「詩は志の 以て申伯に贈る」の句によると、詩は誦すべき 詩が本来呪誦的なものであったことは、 以て反側を極む」としており、 は之に従うて之声。〔説文〕 形声 かられて 凡百の君子 敬んでこれをの語をつらね、最後に「寺人 以て爾を詛す」といい、 声符は寺。古い字形

飼〔飼〕 屣

漬 禔

緇

であったと考えられる。 詩の起原は呪誦、詩の字義は、その呪能を保つもの 持続する力があるとする観念が、あったのであろう。 持し持続する意がある。詩にも、その呪霊を保持し 「萬年に至るまで、分器をこれ寺で」のように、保 が存するものとしている。寺には〔邾公蛭鐘〕に極憂には、時に則ち詩妖あり」とみえ、詩には呪霊 「言の從はざる、これを不艾(不治)と謂ふ。厥の詠歌」にあたるものであろう。 〔後漢書、五行志〕 に 詠歌」にあたるものであろう。「後漢書、 矢ぬ」とは、わが国でいえば、「万葉」の「当所誦言や歌は、本来呪歌であり、呪誦であった。「詩を詩や歌は、本来呪歌であり、呪誦であった。「詩を

資 13 (資)13 もとで・たから

資質のようにいう。 用ははたらきのもとであるから、これを人に施して 形声 に「貨なり」とあり、資財をいう。財 声符は次(次)。〔説文〕六下

雌 めシ す

「この故に聖人は、淸道を守りて雌節を抱く」とみ 謙下不争の道を雌といい、〔淮南子、原道訓〕に以れず。 ら出ている。雌雄の意より、 える。雌を守って争わずという思想は、〔老子〕か の意がある。此はもと牝を示す匕の形形声 声符は此。此に細小なるもの 優劣の意とする。

飼13【飼】14 かう・やしなう

> 字である。 はその形声字である。飼は唐宋以後に用例のみえる 字を用いるが、食の初文。食がその正字で、針・飼 声符は司。字はまた飫に作り、金文にその

> > 蒔 14

うえる・まく

緇徒または緇流という。

屣 ぞうり・つっかけシ

草履をつっかけること。また倒屣ともいう。 形声 みなこの形に従う。屣履は急いで客を迎えるとき、 声符は徙。尸は履物の形。屐・履・屨など

> 蒔秧とよんでいるという。わが国で蒔くとよみ、種しず どで、「段注」に、江蘇の人はいまも移秧のことを

えかえることをいう。

「更めて別に種うるなり」とあり、

声符は時。〔説文〕一下に

水稲の苗をうえかえることな

蒔きの意に用いる。本来の字義とは異なるものであ

るが、〔万葉〕にすでにその用法がある。

漬 14 ひたす・つける・しみるシ

伝に とあり、 こと、漬は深くひたる意である。 「失教に漸潰す」とあり、漸は次第にひたる、水に洗いひたすことをいう。「史記、貨殖 形声 い東声。〔説文〕一上に「漚すなり」 声符は責。古くは責は束に従

禔 14 さいわい・よろこび

習、坎、九五〕「旣に平らかなるを禔す」は、祗またいが、九五〕「旣に平らかなるを禔す」は、祗またの父老を難ず〕に「中外禔福」の語がある。〔彖》 漏 坻の仮借義。他に殆ど用義例はない。 らかなり」とみえ、司馬相如の「 形声 声符は是。〔説文〕一上に「安声行は是。〔説文〕一上に「安 易

緇 くろぎぬ

黒となるものを緇という。僧衣に用いるので、 染色のことを掌るもので、七入してあると 声符は留。 [周礼、鍾氏] は 僧を

> 耆 14 めどぎ・ぜいちく

層 と伝える。 三百莖。易に以て數と爲す。天子の蓍は九尺、 につねに青雲があり、下には神亀がいてこれを守る に用いて蓍筮という。 は七尺、大夫は五尺、士は三尺なり」とあり、筮竹 「蒿の屬なり。生ずること千歳にして 蓍の百莖なるものは、その上 声符は耆。〔説文〕一下に 諸侯

誌 14 しるす・かきつける・おぼえるシ

識の意があり、呉楚の地では痣を誌という。 「記誌なり」とあり、記憶する意。標 形声 声符は志。〔説文新附〕三上に

臧 のぼり・はた・しるし

けている形で、標識の意がある。 声符は哉。散は戈に呪飾を著 それ

識・誌と声義の通ずる字である。 器〕に「幡なり」とあり、〔一切経音義〕に、長さの屬なり」とあり、のぼりの類をいう 「反邪 釆 の屬なり」とあり、のぼりの類をいう。[広雅、釈を旗幟とするものが幟。[説文新附]七下に「旌旗 半幅の布帛を垂らしたものであるという。 · 「旌旗

斯 15 めしつかい・いやしい

召使をいう。賤役を廝役、その人を廝徒・廝養といを意味する。〔広雅、釈詁〕に「使なり」とあり、 戦国以後にみえる字である。 声符は斯。斯に鮮魚の意があり、廝は台所

撃 15 つかむ・うつ

贄と通用することがある。 声符は執。執に執持・拘執の意がある。

賜 たまう・たまもの・めぐむシ

.g **/** 罗 ¢; -

〔説文〕 形声 形で、賜の初文。交易の易とは異なる字である。 六下に「予ふるなり」とあり、 声符は易。易は爵から酒を注ぐ形の部分象 もと爵をも

> 轁 と、すなわち殺されることである。 檀弓、下〕に「賜を受けて死す」とは、死を賜うこ 名古屋、六幽書院刊)にすでにみえている。上より恩命 者である青井貝次郎の〔漢字一元論稿〕(昭和八年、た。ただその字形解釈は、昭和初期に、市井の研究た。ただその字形解釈は、昭和初期に、市井の研究 ッピ。。。として与えられることを、すべて賜という。〔礼記、 の易はその部分象形の字であることが明らかとなっ 土し、その銘文に易の全形がしるされていて、金文 たものであるが、のち〔叔徳殷〕など徳諸器が出 金文に用いる易の初形は久しくその声義をえなかっ って賜の字を用い、経籍には多く錫の字を用いる。となった。金文には賜に易を用い、西周後期に至となった。金文には賜に易を用い、世により の儀礼であるから、すべて任命賜与のことをいう字 って酒を賜う意。官職を任命され、賜与を賜うとき ほろぐるま 形声 声符は甾。甾は錙、軽少なる

後を蔽ふ、これを輜車といふ。物を載するに必ず重べきもの」とあり、〔左伝〕宣十二年〔疏〕に「前 轠 り」という。要するに輸送車のことである。 なるもの、これを重といふ」とし、 「郷師車輜」の注に「車の防蔽あり、以て重を載す を載せる車。 婦人の乗るものである。輜重とは、その衣車と荷物 車なり。前後に蔽あり」としており、ほろ車の類で のち軍の輸送車をいう。「管子、 ものの意がある。「説文」一四上に「衣 かつ「一物な 問

駛 15

春、 古い用義例はない。梁の簡文帝の詩に、「馬を駛す」 駛せんと欲す」などの語がある。 あった。 。 六朝以後 朝以後に作られた字で、 もと吏に従う字で

駅 四頭だての馬車

耞

で武威を誇示する軍事行動を譏る詩で、「駟介旁々」り」とあり、一乗四馬。〔詩、鄭風、清人〕は国境り」とあり、一乗四馬。〔詩、鄭風、清人〕は国境 の句がある。馬にも防具を施したものである。 会意 馬と四とに従う。 「説文」一〇上に「一乗な

髭 [2] 17 くちひげ

あごひげ、髯はほほひげをいう。唐の文皇帝はその 須なり」とし、字形も頾に作る。 髭が殊に立派であったので、髭聖と称された。 の意がある。〔説文〕九上に「口上の 声符は此。此に細小なるも 髭は口ひげ、 鬚は 0

熾 さかん

線 Et E

劚

盛んなるをいう。〔石鼓文、而師石〕に「滔々とし小雅、六月〕「玁狁孔だ熾なり」とは、その軍勢の小雅、六月〕「玁狁孔だ饿なり」とは、その軍勢のに「盛なり」とあり、火勢の盛んなるをいう。〔詩、 識の意があり、また赤色の意がある。〔説文〕一〇上 声符は哉。哉は戈に呪飾をつけた形で、

用している。 て是戠なり」とは熾の省文で、水勢の盛なる意に転

16 おくりな

「厥の益を義子といふ」とあって、名号の意に用いといふ」、また「薛氏款識」に載せる「褱石磬」にといふ」、また「薛氏款識」に載せる「褱石磬」にない。 その字形がのち諡・諡と誤り釈されたのであろう。 ばらく盆に従う字で、金文にみえる盆の繁文とする。 にみえる諡法は、さらにのちのものである。いまし 春秋期以後の考えかたであり、「逸周書、諡法解」たと考えられる。諡号に襲いの義があるとするのは、たと考えられる。諡号に襲いの義があるとするのは、 り明らかでなく、 これを確かめることはできない。諡号の起原はあま その意をもつものと思われるが、古い字形において 兮や乎は神を降すときに用いる鳴子板であるから、**** 祭器を作ってこれに釁することが、命名の儀礼であ る。その字形は血に従うており、新たに器を作った 明らかでない。〔説文〕三上に「行の迹なり」とあ ったのであろう。もし字が兮に従う形のものならば、 諡号の意。金文に益の字がみえ、「班段」に、 それに牲血を塗る釁礼を示すものとみられる。 部分であろうが、その声義が知られず、 西周期の王名はみな生号であっ 声符は兮・皿に従うその旁の

部16【豁】16 はかる

る意象の字で、諮謀する意があり、諮はその繁文と形声 旧字は諮に作り、咨声。咨は神に嘆き訴え

親・諮難などの語がみえている。んで、別にこの字が作られた。〔左伝〕に諮謀・諮みてよい字である。咨が咨嗟の意に専用されるに及

氏 16 とび・ふくろう

形声 声符は氏。鴟梟・鴟鴞はふくろう。鴟鵂はみみずく。鴟夷も鳥名とされるが、馬革のように大みみずく。鴟夷も鳥名とされるが、馬革のように大みみずく。鴟夷に包んで海に流しばうことを示す字で、呉王夫鴟夷に包んで海に流しばうことを示す字で、呉王夫曵を諌めて殺された伍子胥は、鴟夷に包んで海に投げられた。鴟夷子皮と名を改めて海に浮かんで亡命げられた。鴟夷子皮と名を改めて海に浮かんで亡命げられた。鴟夷子皮と名を改めて海に浮かんで亡命げられた。鴟夷子皮と名を改めて海に浮かんで亡命がれた。鴟夷子皮とったものである。

贄 18

用意して出かけるのである。 用意して出かけるのである。 用意して出かけるのである。

第 19 角の酒器・さかつぼ

解解

ば、細長い花瓶のよと獣角を用いたものであろうが、いまの遺器でいえり」とあり、郷飲酒礼で用いる角の酒器とする。もり」とあり、郷飲酒礼で用いる角の酒器とする。もと獣角を用いたものであろうが、いまの遺器でいえを獣角を用いたものであるうが、いまのである。「説文」という。単は古く歯音であったの形声 声符は聞(単)。単は古く歯音であったの形声

〔義楚耑〕のように 名を加えた銘文がな くて定めがたいが、 **し

AŸ

用いる。 端は東周期の器名に用い、殷周器のものには觶を 端と銘するものが、その器制を伝えるものであろう。

19 | 泰稷を盛る器

意 学 學 學 養 童

斉に方形に整うて方斉なるものの意がある。 斉に方形に整うて方斉なるものの意がある。 斉に方形に整うて方斉なるものの意がある。 音に方形、空も方形であるらしく、方鼎を漸という。 これを薬号という。 柔稷を盛るものは、 を文では違といい、「上免護」「史免、旅館を作り、 これを薬号という。 柔稷を盛るものは、 を文では違といい、「上免護」「史免、旅館を作り、 を文では違といい、「上免護」「史免、旅館を作り、 を文では違といい、「上免護」「史免、旅館を作り、 を文では違いいい、「上免護」「史免、旅館を作り、 を文では違いいう。 柔稷を盛る」のように、 本でいう。

第 22 あらどり・とらえる・うつ

形声 声符は執。〔説文〕四上に「撃む」とし、名の島なり」とし、字を会意とする。〔荘子、在宥〕の「卓鸞」は正しく進まないさま、〔管子、五輔〕「下、愈ゝ覆鷙(本心をかくす)ま、〔管子、五輔〕「下、愈ゝ覆鷙(本心をかくす)ま、〔管子、五輔〕「下、愈ゝ覆鷙(本心をかくす)ま、〔管子、五輔〕「下、愈ゝ覆鷙(本心をかくす)ま、〔管子、五輔〕「下、愈ゝ覆鷙(本心をかくす)まで、変さのは陰距(疑ってとどまる)す」は疑惑とする意。ものは陰距(疑ってとどまる)す」は疑惑とする意。

変化 25 つらなる・かんむりのひも

をいいます。 をいいう。冠の纓のときは縞の音でよむ。 ことを、縄迤という。冠の纓のときは縞の音でよむ。 ことを、縄迤という。冠の纓のときは縞の音でよむ。

1 26 くつ ・サイ・リ

ジ

八 5 がみ・しめす・つげる・おく

承祚の〔説文中之古文考〕も同説である。舒景連、光煌や高鴻縉のように木主説をとる人もあり、商海波の〔古文声系〕には字を神主の形とし、また胡海波の〔古文声系〕には字を神主の形とし、また胡ない。(従来その解釈について諸説があり、たとえば孫に、従来その解釈について諸説があり、たとえば孫に、従来その解釈について諸説があり、たとえば孫には、 天、 一に從ふ。三垂は日月星なり。天文に觀て以て時變二に從ふ。三垂は日月星なり。天文に觀て以て時變 象形 あるという。唐蘭の〔古文字学導論〕に字を几の象首講解〕にその説を承けて、両旁の小点は毛の形で る適例がない。郭沫若の〔釈祖妣〕には字を陽茎 とする。しかし 氏族及其制度〕には、トーテム的な神桿の形である らの連想によるものであろう。丁山の〔甲骨文所見同じく神主説であるが、それはおそらくドルメンか 作るものがあり、それより次第に増益したもので、 て人に示すことをあらわす字とするが、ト文に下に を察す。示とは神事なり」という。天が三垂をもっ 形であるとし、それが比較的穏当な解釈のようであ の形とし、生殖神の偶像であると説き、黄綺の〔部 の〔説文古文疏証〕には社の石主である祏と解し、 象を垂れて吉凶を見す。人に示す所以なり。神を祭るときの祭卓の形。〔説文〕一上に ト文や金文の図象に、神桿と解しう

通じ、「示す」とはその通用の義である。また祝とに置とよむという。實は顧死者を葬る意。また祝とに置とよむという。寅は顧死者を葬る意。また祝とに置とよむという。寅は顧死者を葬る意。また祝とにでいる。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。〔詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。〔詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、〔中庸〕る。「詩、小雅、鹿鳴」「我を周行に示く」、「中庸」は明な表し、一般である。また祝と通じ、「示す」とはその通用の義である。

字 6 やしなう・あざな・もじ

即原用

を施すことをいう。「礼記、冠義」「已に冠してこれを施すことをいう。「礼記、冠義」「已に冠してこれをを施する儀礼で、これによって奏育・字養のことが定まり、またそのとき字をつける。「説文」とが定まり、またそのとき字をつける。「説文」とが定まり、またそのとき字をつける。「説文」とが記められるのである。生子・養育に関する字資格が認められるのである。生子・養育に関する字資格が認められるのである。生子・養育に関する字で、は、概ねこのような加入儀礼として、顔に文身の文字、本が、経りは生れたとき、聖化のため額に画く文身、産ば、経りは生れたとき、聖化のため額に画く文身、産ば、経りは共力の出入儀礼として、顔に文身のと表す。

「文」に対して、字乳の文字を「字」という。 「文」に対して、字乳の文字と「字」とは女子の成年式をいう。生子のときの字は、字、成人してのちの字は、女子にあっては多母・客で、成人してのちの字は、女子にあっては多母・客で、成人してのちの字は、女子にあっては多母・客で、は、また〔公羊伝〕僖九年「字してこれに笄いる。

寺 6 もつ・てら

本の市人木

次の「次」のなげく・つぎ・やどる

清 湖 河湾

开手

象形 人の咨嗟して嘆く形。人が口を開いて、気のもれる形をしるす。[説文] ハ下に「前まず精しのもれる形をしるす。[説文] ハ下に「前まず精しの位次とするものらしく、形義ともに誤る。字は各匠の咨の初文で象形。杏は下に祝禱の器を加えたもので、神に沓き諮る意をもつ字。次・吝・諮は一系の字である。第二の意となるのは貳(弐)に仮借することからの転義で、副貳(そえるもの)の意。また再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、軍の宿るところを諫といいた再宿を次というのも、本の本義は杏・諮の子と、大が、次旦は双声の連語で形容の語である。ろうが、次旦は双声の連語で形容の語である。

一角 髪のない人・しこうして・しかも

京原 流 流

を改め、ひげの象形字とする。而に従う字には、た毛の形に象る」とあり、「段注」に「須なり」と文柄を需め需つ意である。〔説文〕九下に「頰毛なり。雨を需め需つ意である。〔説文〕九下に「頰毛なり。雨を需め無っ 薫り とはその巫祝によって雨請いをし、魚彩 頭髪を髪にした人の正面形。雨請いする巫魚彩 頭髪を髪にした人の正面形。雨請いする巫魚彩

も、糕と通用の義にすぎない。

耳 6 みみ・のみ

શ &

を、主さるものなり」という。耳は目とともに神霊にを、主るものなり」という。耳は目とともに神霊に接する最も重要な方法であり、その敏きものを、聴く形である。さらに目の徳を加えたものを、聴しいう。聴とは耳目の聡明を合せいう語である。という。聴とは耳目の聡明を合せいう語である。という。聴とは耳目の聡明を合せいう語である。という。聴とは耳目の聡明を合せいう語である。という。聴とは耳目の聡明を合せいう語である。

自もいる・みずから

自自員

0

象形 鼻の形。〔説文〕四上に「鼻なり。鼻の形に象を」という。卜辞に「……自り……至る」の用法があり、金文には他に「自ら實験を作る」のように用いる。〔書、皋陶護〕に「我が五禮を自ふ」のように用いるのは、もと鼻血を犠牲として用いるのように用いるのは、もと鼻血を犠牲として用いることからの転義。〔左伝〕に「人を用ふ」というときは、そのような犠牲の法をいう。〔穀梁伝〕僖十九年に「これを用ふとは、その鼻を叩きて、以て社九年に「これを用ふとは、その鼻を叩きて、以て社九年に「これを用ふとは、その鼻を叩きて、以て社れる。

似っにるこうぐ

(嗣)と通用するものであろう。

| 下下、「本日と釈すべき字である。また祝禱の器」の形を伴って、台の形をとることが多く、それでたとえば始と姒とは同形となる。似は「説文」ハ上に「象るなり」とあり、「孟子、告子、上」「履の相似たるは、天下の足同じければなり」という。〔詩、『類ない。と親記〕に「以て似ぎ以て續がん」と似続の義に用いるものが最も古く、それは词ん。と似続の義に用いるものが最も古く、それは词が、と通用するものであろう。

児、「兒」の みどりご・ことも

R "Un "27 1820

堅まらない意の字であるが、兒の従うところは幼児象者」とする。囟˙○下はその頭骨の縫合部がまだ子なり。凡に從ふ。小兒の頭の囟、未だ合はざるに子なり。凡に從ふ。小兒の頭の囟、未だ合はざるに象形 幼児の髪形を加えた形。〔説文〕ハ下に「湍

児(兒)

羈(たてよこ結びの髪)することをしるしている。則〕に、三月の末、日を択んで男角(あげまき)女の髪形で、いわゆる「みづら」である。[礼記**、内

事 8 まつり・つかえる・こと

美生 美

「用て皇宗に隣史せん」とは内祭、〔大豊設〕に「上別は金文においてもみられることで、〔令設〕に切の支配権を確立する方法であった。この内外祭の域の支配権を確立する方法であった。この内外祭の 文〕三下に「職なり」と職事の意とし、「史に從ひ とトする。河嶽の祭祀権を掌握することが、その地 ト辞に「人を嶽に事せんか」「人を河に事せんか」 政治的支配を意味するので、王事・政事の意となる ト辞には「史史」という。虫は侑の初文。外に赴い を意味する。内祭として祖祭、祖霊を祭ることを、 その省聲」とするが、史は内祭を意味し、事は外祭 使と事とに分岐するが、もとは一字であった。〔説者として行なう祭事の意とがあり、そのことはのち ける呪飾である。それで事には祭の使者の意と、使 となって丫字形をなし、また上部に吹き流しをそえ す。基本形は史と同じであるが、木の枝の上部が枝 祝禱の器を奉じて外に使し、祭事を行なうことを示 て山川の祭祀を行なうことを事といい、それはまた た形に作る。吹き流しは、外に使するときの旗につ 木の枝につけた祝禱の器と、又とに従う。

侍 8 はべる・つかえる

上」「先生に侍坐す」のように、尊長に近侍する意に論語、先進」「閔子、側に侍す」、「礼記、曹礼、武武、曹礼、曹符は寺。寺に侍の意がある。

児 8 りもののな

新門 電外

[周礼、函人] に兕 にして青色、その皮は堅厚、鎧を制るべし。象形」にして青色、その皮は堅厚、鎧を制るべし。象形」とあり、野牛は水牛。皮で作った鎧を兕甲といい、また。 (説文) ルドに字を累に作り、「野牛の如く

「我好く彼の児気に 「我好く彼の児気に 周南、巻耳」 「我好く彼の児気に 「我好く彼の児気に 」



兕觥

則 8 みみきりのけい

を劇則す」のように、鼻や耳を截る肉体刑があった。「耳を断るなり」とあり、古代には〔書、康誥〕「人質を断るなり」とあり、古代には〔書、康誥〕「人愛」という。〔説文〕四下に

を載ることを聴という。首をとることを馘という。黥は入墨である。戦場で、戦果を証するために左耳献で、『劓刵椓黥』の刑名をあげている。椓は宮刑、【書、呂刑】は、刑法の起原を神話的形態で説く文〔書、呂刑〕は、刑法の起原を神話的形態で説く文

治 8 おさめる・まつりごと・ととのう

という字であろう。【説文】二上に川の名とするが、もと治水の義で、それより理治の意となり、官が、もと治水の義で、それより理治の意となり、官が、もと治水の義で、それより理治の意となり、官が、もと治水の義で、それより理治の意となった。

序 9 ジ(デ)

恃 9 だのむ・よる・まつ

が、対

一〇下に「賴むなり」とあり、心中に自ら頼むとこ形声 声符は寺。寺に保持の意がある。〔説文〕

母を怙恃という。 をか怙まん 母無くんば何をか恃まん」とあり、父をか怙まん 母無くんば何をか恃まん」とあり、父ろのある意。〔詩、小雅、蓼莪〕に「父無くんば何

持 9 もつ・たもつ・たすける

可有以水木。黑

形声 声符は寺。寺にもつ意があり、持の初文。 「説文」二上に「握るなり」とあり、握持することなる。握字条に「捡持するなり」とみえる。[荘となる。握字条に「捡持するなり」とみえる。[荘となる。握字条に「捡持することより、守持・持中・持久の意をいう。とより、守持・持中・持久の意形声 声符は寺。寺にもつ意があり、持の初文。

時 10 どき・ときに・この

帮。 黑黑

に説文」七上に「四時なり」という。ト文・金文に のえず、〔詩、大雅、縣〕「ここに止まり、ここに時 みえず、〔詩、大雅、縣〕「ここに止まり、ここに時 な」は止と同義、時間の意ではない。また〔書、 がんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで民に時を授く」、〔論語、衛霊の〕「夏の時を でんで、「夏の「無極山碑」にもその字がみえる。

珥 10 ジ みがま・さしはさむ

東官は筆を耳に挿むので、珥筆の臣という。 玉で、また珥璫・充耳という。夫人は簪珥を用いる。 玉で、また珥璫・充耳という。夫人は簪珥を用いる。 はり」とあり、塡玉をいう。耳飾りの で、また珥璫・充耳という。

女 10 しげる・ます・この

88

会意 初形は然。上部の糸たばの末を結んだ形を 1 がある。ト文・金文には糸たばの上部の結びめを 1 がある。ト文・金文には糸たばの上部の結びめを 1 がる。ト辞には「然を用ひよ」といい、金文では 1 大保設」「然の乗を用て命に對ふ」という。絲は下部に糸を垂らした形で、然とは別の字。茲を滋益の部に糸を垂らした形で、然とは別の字。茲を滋益の部に糸を垂らした形で、然とは別の字。茲を滋益の部に糸を垂らした形で、然とは別の字。茲を滋益の部に糸を垂らした形で、然とは別の字。茲を滋益の部に糸を垂らした形で、然とは別の字。
立を水にひたすことをいう字で、水を含んで量の加ばを水にひたすことをいう字で、水を含んで量の加ばを水にひたすことをいう字で、水を含んで量の加めることをいう。金文には絲を〔音脈〕「絲の五夫」のように用いる例があるので、絲と弦の音は近かったものと思われる。茲は字形は似ているが、もと別の字である。

時 11 ぎつりのにわ・さかい

「天地五帝の基止するところの祭地な形声 声符は寺。〔説文〕一三下に

はないかと思われる。
はないかと思われる。
とあり、基止は畳韻の字をもって訓する。経書り」とあり、基止は畳韻の字をもって訓する。経書で高く設けるのみで、宮屋はなく、〔礼書〕にいて、諸畤を建てたのにはじまる。畤は祭天のためにて、諸畤を建てたのにはじまる。時は祭天のためにて、諸畤を建てたのにはじまる。時は祭天のためにて、初めて西畤を爲り、西垂に葬らる」とあり、のち雍の地に入るに及んで、雍の五畤を建てて五帝のち雍の地に入るに及んで、雍の五畤を建てて五帝のち雍の地に入るに及んで、雍の五畤を建てて五帝のち雍の地に入るに及んで、雍の五畤を建てて五帝のち雍の地に入るに入るに及んで、雍の五畤を建てて五帝のち雍の地に入るに及んで、雍の五寺を建て五帝の地に入るにとのが、西方から伝来したものであることを示すものとみられ、ジグラットなどにその原型を求めうるのではないかと思われる。

滋 12 ふえる・うえる

制

年「何の故に吾が水を滋らしむ」は、もと玆に従う 年「何の故に吾が水を滋らしむ」は、もと玆に従う を別べた形、茲は糸たばの上部をそれぞれ結んだ形、 を別べた形、茲は糸たばの上部をそれぞれ結んだ形、 を別べた形、茲は糸たばの上部をそれぞれ結んだ形、 下に糸の垂れるものが絲という関係である。それを 水に漬すのを滋という。水を含んで滋えるので、滋 金の意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕「余既に滋ゑたる臓の たの意となる。〔楚辞、離騒〕、

も玄も、古くはもと同じ字形であった。字。玆は黒い糸をならべた字で、濁の意をもつ。

1 性の耳の血で祭る・ちぬる

会意 血と耳とに従う。(玉篇)に「耳血なり」会意 血と耳とに従う。(玉篇)に「耳血なり」というが、犠牲の耳の血をとり、これを塗って祭るというが、犠牲の耳の血をとり、これを強力なうことをいう。異族を犠牲とするとき、その鼻血なうことをいう。異族を犠牲とするとき、その鼻血を取って用いるが、動物犠牲のときには、耳を截ってその血を用いた。[礼記、雑記、下」の「鄭注」に「先づ耳旁の毛を減ぎてこれを薦む。耳は謦を聴に「先づ耳旁の毛を減ぎてこれを薦む。耳は謦を聴に「先づ耳旁の毛を減ぎてこれを薦む。耳は臀を聴くものなり。神に告げて、そのこれを悪かんことをくものなり。というが、耳や鼻は清血をとるに適していることが、古くから知られていたのである。「説文」にはこの字を収めていない。

3 ジ・シ 1 しげる・いそしむ・つとめる

鹄

孳生・孳育を本義とする字である。

ジ

慈

慈いがらくしむ

8 8 8

辞』(解)19 「飼」17 ジとば・とく

門局 等 证

> 弁疏し、 い、文体の名として〔楚辞〕のようにいう。〔楚辞〕命・言辞の意となる。その文辞あるものを辞章とい 惑を弁疏することをいう。裁判用語より、さらに辞 (人名)、鄭伯の辭を攝く」とは、弁護人としてその ることをいう。成四年「鄭伯、許男と訟す。皇戌[左伝] 桓十年「辭有り」のように、異議抗弁のあ 用いるが、飼の字形が示すように、もと神に対して とから年を送ることを辞歳という。 主張を補佐する意。糸の紛乱を解くように、その疑 に通ずるところがあるためであろう。 る。鯛がのち辭の字に移行するのは、辛と司の声義 うに治める意にも用い、辭はそれより後起の字であ 禱の器であるDをひらく器の形で、神を祠り、祈り をかわして相別れるので辞去の意となり、相去るこ 神に訴え、弁疏する意の語であったからである、辞 をまた〔楚詞〕ともいうのは、辞・詞はともにもと 訴える意をもつ。嗣は金文にもみえ、「死嗣」のよ 一一一般であることをいう。のち裁判用語となり 文献には辭を

14 うつくしい・なんじ・のみ

爾。東南岛一条

文〕三下に「魔爾なり。なほ靡麗のごときなり」とえた形。後は文身の文様で、胸部の乳房を中心としえた形。後は文身の文身の形。それを字形化したものに変・奭があり、その爽の上半身を示すものが爾である。爾はその文身の形。それを字形化したものにない。 ある。爾はその文身の形。それを字形化したものにない。 かがあり、その爽の上半身と、その胸部に殺を加

破 14 じしゃく・いしゃき

その本字は瓷。陶器の堅密な質のものをいう。うな色をいう。のちいしやき・磁器の字に用いるが、おにはくろきものの意があり、黒ずんだ鉄のよう。玆にはくろきものの意があり、黒ずんだ鉄のよう。茲にはくろきものの意があり、黒ずんだ鉄のよ形声 声符は茲。〔玉篇〕に鉄に似た石とし、磁形声 声符は茲。〔玉篇〕に鉄に似た石とし、磁

舜 15 「辞」 12 ごとわる・ことば

(説文) 「四下に「受けざるなり。辛に從ひを示す。[説文] 「四下に「受けざるなり。辛に從ひ受に從ふ。辛を受くるときは、宜しくこれを勢すべし」と辞退の意とする。ただ刑罰は辞して避けうるものではないから、「段注」には辞譲の字とするが、おのではないから、「段注」には辞譲の字とするが、おのではないから、「段注」には辞譲の字とするが、辞が命を敬共せよ」「余、女に命じて辞が釐呂を嗣が命を敬共せよ」「余、女に命じて辞が釐呂を嗣が命を敬共せよ」「余、女に命じて辞が釐呂を嗣が命を敬共せよ」「余、女に命じて辞が釐呂を嗣が命を敬共せよ」「余、女に命じて辞が釐呂を嗣いる字で、「以表妻」「女、かないから、「我とは、」とあって、以の義に用いる字で、「叔夷妻」「女、かないから、「我とは、」とあって、以の義に用いる字で、「叔夷妻」「女、かないから、「我とは同じでない。「説文」におそらく辭を誤って舞と釈し、また辞を誤ってその籀文としたものでてかるう。「段注」に辞を「和悅して以てこれを卻ぐ。あろう。「段注」に辞を「和悅して以てこれを卻ぐ。あろう。「段注」に辞を「和悅して以てこれを卻ぐ。あろう。「段注」に辞を「和悅して以てこれを卻ぐ。

¶ 15 ジ こなもち・だんご・えさ

膩 16 ジ(デ)

ジ餌膩邇璽璽

シキ

式

育。

脈語という。 「靡額膩理」の句がある。やさしいことばを 皮膚のきめのこまかさを膩理といい、 「楚辞、招 皮膚のきめのこまかさを膩理といい、 「楚辞、招 でながま。 とあり、皮膚下の脂肪をいう。いわゆる凝脂である。

18 ジャい・ちかづく

19 19 17 第二 17 5子の印璽・しるし

押捺するもので、正倉院文書などにその例がある。

シキ

一 6 のっとる・もちいる

試・弑も、その儀礼を承ける字であることからみその初形を確かめがたい。"拭"の初文であり、また式・軌範とする意である。字は卜文・金文にみえず、云・軌範とする意である。字は卜文・金文にみえず、る、〔一茶高〕「南國にこれ式らしむ」 など、みな法 れないが、試は神に諮ることであり、弑は呪霊のあたらしい。車載や軾礼に用いる木との関係は知ら 用いるもので、天円地方に法る栻の形のものであっ じ、地の辰を別つ」とあり、日者とよばれる卜人の **栻なり。栻の形は、上は圓くして天に象り、下は方に「式を旋らし秦を正す」の〔索隠〕に「式は卽ち** いい、〔書、仲虺之誥〕「商の受命を式ふ」、〔左伝〕たと思われる。この呪儀を用いることを「式ふ」とて、呪具としての工を用いる古代の呪儀の一であっ ちに伝えるものがあったらしく、〔史記、 成二年「王命を式ひず」の例がある。式の古法をの なり」とあり、〔詩、大雅、烝民〕「古訓にこれ。www.とあり、〔詩、大雅、烝民〕「古訓にこれ。www.となる。〔説文〕五上に「法復するので、法式の意となる。〔説文〕五上に「法 である。これによって汚邪を去り、正しい状態を回 ろ。尋・隱(隠)・塞などの字に含まれているもの**エヒベ*メニヘ にして地に法る。これを用ふるときは則ち天網を轉 会意 用いるもので、巫祝が左手に執るとこ せと工とに従う。工は呪具に 日者伝〕

その木が呪具とされたのであろう。 る獣に式を加えて人を呪殺することをいう字である。

識 19 しるす・しる・かんがえシキ・ショク・シ

戈に呪符としての標識をつけている形で、熾・織の る能力をいう。戠はまた戦功の戦・馘につけて、そ 見・識量・識悟・識達・監識のようにものを認識す といい、誌の音でよむことがある。知識の意より識 識別・知識の意となる。鐘鼎の類に施す銘文を款識 字がこれに従う。人の認識すべきものであるから、 哉二下は「説文」にその説解を欠く字であるが、 を字の正訓とし、識知を一日の義とするのである。 織文のある旗のことで、[説文]は旗旘・旗常の意 た「一に曰く、知るなり」という。「常なり」とは、 標識とする意がある。〔説文〕三上に「常なり」、ま るしである。 とも関係する。旗旘の字は旘(幟)、戦功を示すし の功を記録するを職といい、 声符は哉。武は戈に呪飾を加えたもので、 識はその記録のこと

7 10 はじる・なれる ジク(ヂク)

忸の形で用いられ、丑声。〔説文〕 - 彩声 正字は恋に作り、而声。いま

子、万章、上〕に、舜の弟である象が舜を謀殺し○下に「慙づるなり」とあり、自ら恥じる意。[孟 であろう。 という話を載せる。忸怩は双声の連語で、形容の語 その室に帰って坐しているので、忸怩として恥じた えたと思って、その室に入ってみると、舜が無事に

8 あつい・インドジク(デク)・チク・トク

は遺棄することをいう字であろう。のち天竺の字に遺棄されたとする伝承をもつものであるから、竺と [漢書、元后伝]に載せる王章の封事に、羌胡には 簡〕にもみえ、古文俗体の字であろうかと思われる飲いにもみえ、古文俗体の字であろうかと思われるれたことをいう。竺は〔古文論語〕の字として〔穴 とは考えがたい。〔爾雅、釈詁〕の[釈文〕にまた二に從ひ、竹聲」とするが、字形からみて形声の字 竝 首子を殺す俗があることがみえ、稷も初名は棄で、 辞、天間〕に「稷はこれ元子なるに 帝何ぞこれ 篤に作るとあり、 では燠と韻している。 を竺(毒)とする」とあり、稷が初生のとき遺棄さ にもみえ、古文俗体の字であろうかと思われる 仏教語に多く用いるが、音の仮借。〔天問〕 会意 知られず、〔説文〕一三下に「厚きなり、 あるいは篤の俗体であろう。〔楚 竹と二とに従う。その初形が

衄 はなぢ・くじける ジク (デク)

をもつ字である。〔説文〕 五上に「鼻より血を出すて、強くものをつかむ形で、その声義 一声符は丑。 世は指の爪を立て

以後の文献にみえる字である。 とを折衄といい、敗北することを敗衄という。なり」とあり、鼻をうって血を出す意。人を採なり」とあり、鼻をうって血を出す意。人を採 とあり、鼻をうって血を出す意。人を挫くこ

舳 とも・かじジク(デク)

丈平方をいう。 身をいう。また船の大きさをはかる単位として、 舳を首、艫を尾とする解を出している。舳艫で一艇 一おう首尾を区別する名であるが、「小爾雅」ではする。舳には「一にいふ、舟尾なり」とあるから、 た艫字条に「一にいふ、船頭なり」とへさきの意と 〔説文〕ハ下に「艫なり」とあり、 形声 声符は由。由に軸の声がある。 ま

軸 12 じく・まきもの・かけものジク(デク)

態から宙・軸の義が生れる。喩母の字には炎類)の実が融化して油となり、内部が中空になる状類)の実が融化して油となり、内部が中空になる状類 義があり、その転音の字と考えられる。卣(瓠瓢の 考えることができない。油系統のものは歯の形から 軥 と同じような音関係をもつものが多い。 (淡)・也 (他)・台 (胎)・睪 (擇) など、 転化したものとみられ、宙・軸系統のものは中空の ト文・金文に由及び由に従う字がなく、 る。〔説文〕に由の字がみえず、 声符は由。 由に中空の意があ その形義を また

シチ

ŧ 2 +*

類も、 文学とみるべきものであった。「七」はこの場合に 字は切骨の象形。これに刀を加えて、その意を明ら 下に「陽の正なり。一に従ふ。微陰、中より邪めに おいても聖数的に用いられ、必ずしも実数ではない。 列挙的に賦誦することだま的な文学で、一種の呪誦 諫〕など多くの作品が残されているが、その初義は、 る語が多い。 ている字である。七は聖数とされ、名数として用い 数の七に仮借して用い、その仮借義のみが行なわれ 鋸のあとを残しているものがある。その音をもって 出づるなり」と陰陽五行説によって字形を解するが、 かにしたものが切で、骨を切ることをいう。甲骨の 鋸で切って修治した上でト事に用いたもので、 字は切り断った骨の形で象形。〔説文〕「四 文体の名として〔七発〕〔七啓〕〔七

叱 5 しかる・ののしる・せめるシツ

ある。 もと擬声語である。��呼・��嗟・��責のような語が という。「叱、叱」とは叱咤、舌うちして罵る意で、 形声 するなり」とあり、大評することを叱 声符は七。〔説文〕ニ上に「訶

シチ

七

シッ

叱 失

室

疾 執

失 うしなう・ あやまち

Ř 0

うに、 天と同じく象形の字である。天は巫祝の舞う形で、『説文』二上に「縱つなり」とし、乙声とするが、『説文』二上に「縱つなり」とし、乙声とするが、祝禱して、エクスタシーの状態にあることをいう。 に用い、 妖の初文。失は自失の意より、忘失・過失の意とな 象形 る。***。***。****などの字はこれに従う。失去・遺失の意 人事の万般にわたる得失のことに用いる。 手足を舞わせて自失の状にあることを示す。 失意・失業・失節・失望・失態・失礼のよ

室 9 へや・すまい・いえシツ

혤

会意 るのにも、 に歌う武将を殯祭するためのもの。その板屋を設け る板屋で、〔詩、秦風、小戎〕にいう板屋は、篇中 至は意符と解すべきである。屋は死者を一時殯葬す 屋・臺(台)があり、いずれも至声の字でなく、最も神聖とするところである。また至に従うものに 金文の大室・宗室はみな宗廟の祖霊を祭るところで、 室をいう。〔大豊殷〕に「王、天室に祀る」とあり、 「説文」七下に「實なり」と音義的に解し、また する。ト辞に中室・南室・血室の名があり、みな祭 屋字条ハトヒに「室屋はみな至に從ふ」と会意の字と 宀と至とに従う。 筆は矢の至るところ。 矢を放ってその地をト また地を祓う

> どを埋めて奠基とする儀礼を示す字であるのと同じ。 地・祓禳が行なわれたのである。家・家が大牲な 接するためのもので、また至に従う。 ことが行なわれたのであろう。臺も天を祀り神明に 矢による占

疾10 やまい・はやい・にくむ・なやむシツ

TE OF 桥

者の意である。 字形(第三字)は知、疾とは別の字である。疾病の意すものであるらしい。〔説文〕に籀文として録するて苦しむ形に作るものもあり、それは曹乱の状を示て苦しむ形に作るものもあり、それは曹乱の状を示 会意 よりして疾視・疾妬の字となり、 のように用いる。また別に牀上にあって手足をあげ 的な字で、「疾あるか」「齒を疾めるに、袴あるか」 にみえ、牀上に臥して流汗の淋漓たる形に作る象形 〔説文〕七下に「病なり」とし、疾病の字とするが、 声の字でなく、声も必ずしも一致するものでない ので会意の形を失い、形声の字となるが、本来の形 下に矢を受けた形の字である。 して鰥寡孤疾のものをあげているが、この疾は廃疾ど、速やかの意となる。〔国語、魯語〕に、窮民と もと創傷をいう字である。疾病を意味する字は卜文 ト文・金文の字形は、大と矢とに従う。 のち大を疒 また急疾・疾速な に改めた

11 とらえる・とる・つかさどるシッ

シツ

悉

の考である。〔説文〕にまた重文として溼の字をあは〔水経注〕や〔漢志〕に「深水」としている川は〔水経注〕や〔漢志〕に「深水」としている川はは隰と同声。〔説文〕二上に水名とするが、それ

輕 0 4 H 自愈入

郭舜

会意 り、執事・執職・執権・執行のようにいう。また執 することより執持の意となり、固く手に執る意とな 「辠人を捕ふるなり」とし、字を亦声とする。拘執 縄を加えることを繋という。 一・執礼・執慎など、よく礼節を守る意となる。金 える形で、罪人を拘執するをいう。〔説文〕一〇下に 文に虜囚を執訊といい、〔詩〕にもその語がみえる。 幸と刃とに従う。幸は手械。手に手械を加

悉加 つくす・ことごとくシッ

窓

||援|||の初文。獣掌を膰という。〔説文〕ニ上に「| 盡なり」と訓し、東二上にも「悉なり」と訓してい 祭祀に供えることもあったのであろう。来・審はこ 食の最も美なるものとしてみえ、それを牲肉として る。獣の膰肉、殊に熊膰は〔孟子、告子、上〕にも 獣爪をもって心臓を破る意となり、悉取の意を示す 意をもつのであろう。悉を字形のままに解すれば、 れを宗廟に供えている形で、神意を察し審かにする 省文の声に従ういわゆる省声の字となる。〔説文〕 これを供薦する敬虔の意を示すものとすれば、その こととなる。また米を案・審の省文にして、宗廟に

> 肉の形であろう。悉尽の意を主とするならば、字は古文の字形は囧・鹵に従う形とされるが、あるいは 会意とみるべきである。

桼 うるし

黹 桼

なり。 象形 水滴は、その漆液を示す。字はいま漆に作る。桼の 「周礼、職方氏」に豫州の漆を用いるという。金文[書、禹貢]の兗州・豫州の貢物中にも漆があり、 くは朱黒にも桼を加えて用いたらしく、殷代の朱墨漆の遺品は漢以後のものが多く遺存しているが、古 いが、〔曾侯爨簠〕にみえる爨はその字形に従う。字形中にすでに漆液の形を含む。古い字形はみえな 漆液の流れるものをとる。 〔説文〕 バトに「木の汁 歌うもので、漆などの木を樹えることがみえる。 る。〔詩、鄘風、定之方中〕は衛の都作りのことをのうち、いまもなお鮮明な色を残しているものがあ 漆は東アジアの特産で、その技術は早くから知られ 旅は黒、いずれも漆を用いて塗飾したものである。 ていたようである。 に形弓彤矢・旅弓旅矢を賜うことがみえ、彤は朱、 以て物に繋すべきものなり」という。字中の 漆の木より漆をとる形。木の幹を傷つけ、

併せて原隰という。

嫉

ねたむ・にくむ

用したものであろう。湿潤の地は神霊のあるところ 礼を行なうもので、のち湿潤の意となり、溼と通降すを、隰という。湿はおそらく原湿の地でその儀 **縁を拝する形である。これを神梯の前において神を** よぶのに用いる。神の顕れることを顕という。その う。日の形の部分は玉、それに二系糸をかけ、神を ず、会意とみるべき字である。暴は玉と二糸とに従 の溼字の意に用いる。字は暴声とされるが声が合わ げ、燥溼(かわく・ぬれる)の字で、湿はいまそ

として、信仰の対象とされることがあり、原(違) も畋猟の地として神聖とされたところであった。

湿 [濕] [溼] 1 うるおす (トウ(タフ)・シッ・シュウ(シフ)・

に従う。 会意 旧字は濕、濕と水と 暴は顯(顕)の初文。

情のはげしいものがあって、李益のごときは妻を疑おいて強いからであろう。ときには男子にも妬忌の うこと異常で、世に「李益の疾」といわれた。嫉は まさに疾の一種である。 いま嫉の字が用いられる。嫉妬の情は、特に婦人に おおごと・さびしいシッ 形声 る。 「説文」八上に餱を正字とするが、形声 声符は疾。 疾に疾悪の意があ 声符は必。〔説文〕

瑟13

颓

形声 に収める必声の字二十一文の

や泉流を瑟泊・瑟々のように形容するのは、もとよ涼であることから、蕭瑟などの語が生れた。風声 と神事に用いられたものである。その音の急弦・悲 経〕に、帝俊の子晏竜が琴瑟を作ったという。も 木に弦を張ったものであろう。「山海経、大荒北五絃、二十七絃に改めたものとされるが、古くは曲 り」とみえ、大琴をいう。もと五十絃のものを二十 り擬声語である。 るほかない。〔説文〕ニ下に「庖犧作る所の弦樂なうち、瑟声のものはこの一字のみで、必の転音とみ

うるし・くろぬりシッ

滁

禹貢〕に兗州(河北南部)・豫州(河南)の貢物と 独自のものであり、漢代の遺品にすでに精巧を極めあろう。漆は東アジアの特産物で、その技術は東洋あろう。 金文に霥の字がみえるが、その濡沢あるをいう語で れている。これを刷毛で塗るので、また爨ともいう。「漆林の征(税)」という語があり、特殊な産業とさて漆液をとることを示す象形字。「周代、載師」に形声 声符は漆。漆は漆の初文で、樹皮を傷つけ とがみえる。金文にみえる彤弓彤矢は丹塗り、 して漆をあげ、〔周礼、職方氏〕にも豫州の漆のこ 梓(あずさ)・漆(うるし)」を植えることを歌って りを歌うもので、「椅(しまめぎり)・桐(きり)・ たものがある。〔詩、鄘風、定之方中〕は衛の都作 声符は漆。漆は漆の初文で、 れも有用の材とされたものである。「書、

> 漆液の形である。 文〕一上には漆を川の名と解し、桼字条六下に「木 芸があり、「職員令」に漆部の名がみえている。 「説 水滴の如くにして下る」という。字中の小点がその の汁なり。以て物を纂すべきものなり。象形。桼は を用いたものと思われる。わが国にも古くから漆工 旅矢は黒塗りの儀礼用の弓矢であり、 いずれも漆法

膝 15 和13 ひざ・ひざこぶしシッ

語が生れる。 容縣(小さな室)・膝行(膝でいざりよる)などののなかで、膝下(親もと)・抱膝(寂しくくらす)・時両様の字が行なわれていたのであろう。坐る生活 用いるが、漢隷に膝の字形に作るものがあって、当 後起の字である。〔史記〕〔漢書〕には多く厀の字を膝はその象形字である卩を省いて肉旁としたもので、 卩は人が坐したときの膝頭の部分を強調した形で、 膝の初文。厀はそれに桼を声符として加えたもの、 録し、「脛頭の卩(節)なり」という。 形声 声符は漆。〔説文〕ヵ上に厀を

天 虫虫 15 しらみ

トする蝨トというのがあって、病をトする。蝨官と半風子という。身近なものであるから、蝨によってた虱に作り、風の一画を欠くものであるから、また 文」「三下に「人を齧むの蟲なり」という。字はま ないが、その初形は知りがたい。〔説 形声 声符は刊。刊声では声が合わ

> 君子を、褌中の蝨にたとえた。は姦悪な吏をいう。晋の清談の徒は、 世上の得意の

質 15 [劉] なる・ただす・したじ・かたちシッ・チ・シ

智

〔説文〕 メートに「物を以て相贅す」とあり、質に入 り、〔質人〕に、大市を質、小市を劑といふ」といち、「七に曰く、賣買を聽くに質劑を以てす」とあ ものである。「周礼、小き」の「官府の八成」のう契なり」とみえ、契とは木に繋歯形の契刻を加えた る。質は訓義の多い字で、〔経籍襲詁〕に列するも う。質は鼎に、劑(剤)は方鼎の驚に銘するのであ をいう。〔左伝〕文六年「質要を出す」の注に「券 ない。則も鼎に銘刻を加える意で、 不明とする。貝は鼎の省略体であり、財物の意では ことができず、その点については「闕」、すなわち れることであるが、それでは二斤に従う意を解する 辞などを鼎銘として加えることを、 もしくは仮借義である。 のは五十義を超えるが、質剤の義が本義、 二斤をもって銘刻を施すことをいう。契約・盟誓の 二斤と貝とに従う。貝はもと鼎の形。鼎に また盟約のこと 質剤という。 他は引伸

隲17 [騭]20 のぼる・さだめるシツ・チョク

隱 釈天」 13 「陞るなり」とあり、陟の声義を承ける字 形声 一〇上に「牡馬なり」とするも、「爾雅 正字は騭に作り陟声。〔説文〕

三八九

シツ

漆

それよりして、評価を加えることを品騰という。 意であろう。 「書、 ることをいう。鷺とは馬によってその神事を行なう って、天意によって黜・陟(進退)することをいい、意であろう。〔書、洪徳とと、「下民を陰騭す」とあ である。陟降とは、神梯によって神が陟り降りす

濕 さわ シュウ (シフ)

隰」の語があり、「石鼓文、攀車石」には「原溼」ら、合せて原隰という。〔詩、小雅、常棣〕に「原を」 (達)も戦猟の地として牲を供えるところであるかは隰・湿は何れも降神の儀を行なう地をいう。原は隰・湿は何れも降神の儀を行なう地をいう。原とといい、湿原の地で神を迎えることを濕(湿)といといい、湿原の地で神を迎えることを濕(湿)といい われる。 に作る。溼は〔史懋壺〕に「溼宮」とよばれる宮が その略形である。神梯の前で神霊を迎えることを隰 詳細を知ることはできない。 あり、それは養蚕や神衣を織るところであろうと思 の祈りに対して、霊の顕れることを顕という。現は 初文。日は玉の形。二糸は呪飾として系糸を加えた たものであろうが、その古儀は早く亡び、 もので、これによって神霊の顕れることを祈る。 湿地は聖地とされ、そこに隰を設けて祀っ 神の陟降するところ。㬎は顯(顕)の **魯と蒸とに従う。** 自は神梯で いまその そ

櫛19

形声 に「梳比の總名なり」とあり、櫛の類 声符は節(節)。〔説文〕六上

> 「男女、巾櫛を同にせず」とあり、櫛には障りのあたい。「小田伝店」を振うに非余を賜うことがみといい、「小田伝店」を振うに非余を賜うことがみといい、「小田伝店」を振うに非余を賜うことがみを批、密なるものを比とする。櫛は古く非余・比余を振、密なるものを比とする。櫛は古く非余・比余をいう。〔詩、周頌、良耜〕に「その比ぶこと櫛のをいう。〔詩、周頌、良耜〕に「その比ぶこと櫛のをいう。〔詩、周頌、良耜〕に「その比ぶこと櫛の み櫛」「櫛占」などの俗がある。 るものとされた。わが国には「ゆつつま櫛」や「忌

ジツ

実。 實」 みちる・み・まことジツ

會

相の意となり、木の実の意となり、また副詞に用 誠実の意となる。誠実とは祝詞や神饌に偽りのない の実の上部は宀ではなく、宀(蓋い)の形に近い。ち鼎実の意となる。〔国差鱠〕「用て旨酒を實たす」に従う字があり、それならば鼎に盛るもの、すなわ 充実の意となる。金文の字形には、「散氏盤」に鼎 ねたものであるから、その貫盈(みちる)の意より、会意 一と貫とに従う。一は宗廟、貫は貝貨を連 る。みな引伸の義である。 ことをいう。それより実事・実験・実行・真実・実 字は鼎中にものを実たして供薦する意より、充実・

暱 呢。 したしむ・なじむ・ちかづくジツ(ヂツ)

のように、暱の字を用いるが、いま昵懇(親しい) しみ近に曜しみ賢を尊ぶは、德の大なるものなり」を示すものであろう。〔左伝〕僖二十四年「親に親る、尼は二人身を寄せ合う意。いずれも親昵の関係 る、尾は二人身を寄せ合う意。 の字には昵を用いる。 作り尼声。 匿は匿れて祝禱す 声符は匿。また昵に

躾 しつけ

(応)とを偏旁にして「軈て」とよむ字がある。躱々身と空とを偏旁にしてうつけとよむ字、身と應 造字法は国字のものとよく似ている。 (かわす)・躸(ひとり)などは漢字であるが、その う。別に身と花を偏旁にしてしつけとよむ字があり、 身だしなみを意味する字で、 身と美とに従

シャ

写. (寫) 15 うつす・のぞく・そそぐシャ

移す、とり除くの意が生れる。〔礼記、曲礼、上〕く・除く」の訓を加える。屦をぬぎかえることから、 置くなり」と訓し、形声とする。〔玉篇〕に「盡 ぐ意などを含む語であろう。〔説文〕七下に「物を 廟中には市鳥など儀礼用のものを履くために屨をぬ いる履であるから、 従う。 会意 一は廟屋、鷽は儀礼のときに用 もと儀礼に関する字である。 旧字は寫に作り、一と爲とに

え、謄写・写真の意に用いる。常用字の写が冖に従 移すことから、伝写の意となり、〔漢書、芸文志〕「宮車それ寫く」は車よりとり放つ意である。他に うのは、誤りである。 蕭〕「我が心寫く」は憂を除く、〔石鼓文、田車石〕はない。というない。というない。これでは、一切ないのではいる。また、「詩、小雅、夢」のでは、「神」のでは、「神」のでは、「神」のでは、「神」のでは、「神 「器の概ふものは寫さず。その餘はみな寫す」 武帝のとき写書官をおいて書を写したことがみ 雅、黎

社「社」8 くにつかみ・やしろ

Ω' 'Δ'

木を以てす。遂に以てその社とその野とに名づく」 て、之が田主を樹う。各くその野の宜しきところの である。〔周礼、大司徒〕に「その社一稷の墳を設けである。〔周礼、大司徒〕に「その社一稷の墳を設ける。重文の字形が木に従うのは、そのゆえ とみえる。のち行政区として里社を立て、軍行のとき 社樹を樹え、その木によって槐社・櫟社・枌楡社の 周には家社があり、また各地にその地の社神があ 『共工氏に子あり。句龍といふ。后土となる」とあ土地の神、「うぶすな」をいう。[左伝]昭二十九年、土地の神、「うぶすな」をいう。[左伝]昭二十九年、 ようにいう。 となった。ト文・金文の土は、社の原字として用い られることが多く、土は土主にして社の原形をなす が多義化するに及んで、限定符の示を加えて形声字 社神とされる。 山川叢林の地はすべて神の住むところとされ、 声符は土。土の古音は社で、社の初文。 (重文の字形が木に従うのは、 殷の先公祭祀にも土があり、

> ようにいう。 的秩序をもつものの名となり、結社・商社・社会の 世まで維持することはできなかった。社はのち集団 に関するが、中国ではわが国のような社の形態を後 記録されている。社の存否は、古代的な伝承の基盤 づけられた。〔春秋〕哀四年、亳社の火災のことが の社は毫社・殷社として、その住民によって祀りつ あるから、たとえば殷の滅亡ののちにおいても、そ ることがある。社はその地縁的集団に固有の信仰で あるから、社鼠という。君側の奸を、社鼠にたとえ水を灌ぐこともできず、容易に処置しがたいもので** 束茅を束ね、これを土で塗りこんだオボ形式のもの にある。そこに住みこんだ鼠は、焼くこともできず、 〔周礼、大司楽〕に「土示」というもので、酒を灌で、それに裸鬯の酒を灌ぐ形に作るものが多い。 もあり、そのような字形を示すものも、ト文のうち はじめて儀礼が行なわれるのである。社の形式には いで土示を招くことを興という。神霊を興起して、 には軍社を立てて、軍礼を行なった。土は土主の形 酒を灌

車7 くるまキ

0 車 # 對 軼 **\$0\$** TO COL

の時、奚仲の造るところ」と事物起原説を加える。轅の形。〔説文〕一四上に「輿輪の總名なり。 夏后徐光 車の形に象る。籀文の字形は、二車とその

時、殷墟その他る」という。近 夏の車正と爲辞に居り、以て 「薛の皇祖奚仲、「左伝」定元年 の車制の詳細が 土が多く、古代 から車馬坑の出

「天子、德を以て車と爲す」は居の意である。 に居・孤・魚などと韻する例が多く、〔礼記、知られるようになった。 車の古音は居。〔詩 · · · 礼机

炙 あぶりにく・あぶる・やくシャ・セキ

今 火

を炙く。各自刀を以て割く。胡貊の爲より出づ」と 刀を氏という。その共餐に与るものが氏人であった。 いうが、肉食族にみなその俗があり、中国ではその いう。「釈名、 | ○下に「肉を炮くなり」とあり、炮はまるやき。 |会意 | 肉と火とに従う。肉を炙り焼く意。〔説文〕 重文の字形は串焼きの形である。まるやきを貊炙と 釈飲食」に「貊炙は全體のままこれ

者 (者)。 かくす・ものシャ

尚 坐 业 * 影

会意 叉枝と曰とに従う。 上部は叉枝を積み重ね、

埋匿する形である。邑をめぐる堵垣のうちに、呪符れ義ではない。金文の字形は、明らかに祝禱の日を 主語や指示的な句を承けて、「……とは」と区別し 字を白部四上に属して「事を別つの詞なり」とし、 う。者より遮・堵が分岐するのである。〔説文〕は 字である。また土部一三下の することをいい、誰(遮)の初文、遮はのちの形声 禱を土中に埋め、上に叉枝や土を加えた形で、遮蔽それに土を加えた形。日は祝禱を収めた器。その祝 字であるが、声が同じであるため互易した珍しい例 き字、煮(煮)は本来庶(煮炊きの形)に従うべき らしたものが都(都)である。遮は本来者に従うべ き、その方丈の単位を一堵という。高大な堵をめぐ の土堤を堵といい、堵絶の意をもつ。城壁を築くと の書を埋めたもので、その祝禱の文を書という。そ 規定するとぎの提示的な語とするが、もとより字の 堵の初文で、土垣をい

舎。〔舍〕。 すてる・おく・やどるシャ・セキ

器に達せしめないのであるから、字の構造的な意味 は捨(捨)の初文。いまの常用字は、針先を切って その呪能を失うので、捨てる意となる。すなわち舎 を突き通す形。これによって祝禱の呪能はやぶられ、 祝禱を収める器。その器の上から、長い針器でこれ会意 把手のある針器と、口とに従う。口は立で は失われている。〔説文〕五下に「市居を舍といふ」

たりえる意となり、(令鼎)に「余はそれない。 「合彝」「三事の命を含く」「四方の命を含く」という。 京鼎」「命を成周に含く」など、その例である。ま 克鼎」「命を成周に含く」など、その例である。ま たりえる意となり、「など、との例である。ま 「逝くものは斯の如きかな、晝夜を舍かず」と嘆じ となって、「論語、子罕」に、孔子が川上にあって、 慶舎、字は子之は、名字相対する。 さらに止息の意 とし、字形を凸(集)と中(屋根)と口(建物の 「散に田を舍ふ」のようにいう。その古音は余に近 家を舍へん」、〔晉鼎〕「矢五束を舍ふ」、〔散氏盤〕 た。いわゆる「川上の歎」である。 形)との会意と解するのは、字形の解釈を誤る。祝

卸。〔卸〕。 おろす・とく・のぞくシャ

午は杵の初形であるが、ここでは呪器である。ト文に対する解釈を加えず、〔繋伝〕には午声とする。止と午とに従うとするが、それぞれの要素的な字形 は幺形にかかれており、卩はそれを拝する形。午や 舒 九上に「車を含きて馬を解くなり」とし、字を卩と ことによって、災厄を禦ぐことができた。〔説文〕 幺は、呪器として用いられるもので、これを拝する 会意 の省体で、年の部分は古くは午、また 年の形と『とに従う。字は御*

> 卸す意や、卸問屋のように用いる。 退職する義の官庁用語である。またわが国では荷を 車駕を解く意ではなく、神霊を御え、 て、声義ともに異なるものとなる。卸事とは辞任・ めのものであった。のち車駕や装備を解く意に用い には御を午や幺を拝する形にしるす。 災厄を禦ぐた 従ってそれは

射 10 いる・あてる・いとうシャ・セキ・エキ

照 44

いたもので、「全株」「「敷方(噩侯の名)、王の射に、「から」、「全株」「有嗣(有司)と師氏小子と、「ないたもので、「全株」「有嗣(有司)と師氏小子と、いたもので、「全株」「有嗣(有司)と師氏小子と、いたもので、「全株」「何嗣」、古くは卿射とよばれていた。とが行なわれ、金文にもその例が多くみえている。ことが行なわれ、金文にもその例が多くみえている。 「弓弩、身より發して、遠きに中るなり。矢に從ひ形に躰のように誤ったものがある。〔説文〕五下にその形義をえがたいものとなった。すでに金文の字 〔礼記、射義〕に「射の言たる、繹なり。或いは日 無し」を〔礼記、緇衣〕に「射ふこと無し」に作る。があり、〔詩、周南、寛覃〕「これを服して数ふことがあり、〔詩、周南、寛宗 卿 す」のように、両班の間で行なわれる。郷射礼 身に從ふ」とするのは、誤った字形によって説くも 会意 の原型と考えられるものである。射にまたエキの音 だって、会射して場所を修 祓し、その清明を誓う ので、祭祀や饗宴・会盟などのとき、その儀礼に先 のである。射儀は古代の儀礼のうち極めて重要なも て、これを放つ形。いま弓矢の形を身と誤り釈して、 初形は弓矢と手とに従う。弓に矢をつがえ

同じである。 に釋の音があるのは、睪に釋(釈)の音があるのとり、また鳴弦・弾劾の弾も弓による呪儀である。射り、また鳴弦・弾劾の弾も弓による呪儀である。射 生子のとき、桃源林天をもって四方を射る儀礼があ なり」というが、射は古くは、祓邪の儀礼であった。く、含なりと。繹なるものは、各〝己の志を繹ぬるく、含なりと。繹なるものは、各〝己の志を繹ぬる

捨二(捨): すてる。おく。ゆるすシャ

ど、仏教では好んでこの語を用いる。 舎を行為の上に移した字が捨。捨施・捨心・捨身な ** その祈りの呪能を害する意である。〔説文〕 二上に くなり」と、声義の近い字をもって訓するが、 (釈)は獣屍(睪)を爪牙(米)で引き裂く意 祝禱を害する舎とは、形義の遠い字である。 文。舎は祝禱を収める器を針で刺し、 声符は舎(舍)。舎は捨の初

斜 ななめ・くむ・まがるシャ・ヤ

部二上に「抒は挹むなり」とあり、予にも序・舒めに用いるわけであるから、斜の意となる。また手 ある。また衰の字があり、 斜の字にまた邪を用いるが、それはもと正邪の字で の音がある。余・予はともに喩母の声である。のち いう。斗杓をもってものを酌むときには、斗柄を斜「挹むなり」とあり、斗をもってものを挹むことを 除などの声がある。「説文」「四上に 声符は余。余声の字に、徐・ それが邪悪の義の本字で

> 図11 あみ・うさぎあみシャ・ショ

M 羅 殭

形声 え、鳥獣を捕るための網をいう。 いう。〔詩、周南、兔賢〕に「肅々たる兔賢」とみ形声 声符は且。〔説文〕七下に「気をとしたり」と 声符は且。

赦 ゆるす

会意

その声があるのではない。 形である。※・跡の亦はもと朿に作るもので、亦にることからいえば、要するに赦は人に笞杖を加える 方法とも考えられるものであるが、字をまた亦に作 規定である。赤は人に火を加える形で、修祓の一 まさな ないに ことで こうのも同じ。〔書、「玄応音義〕に「寛 発なり」というのも同じ。〔書、「文はで、くならな、くならな」の訓があり、放免をいう。〔玉篇〕にまた「放なり」の訓があり、放免をいう。 「置くなり」と訓し、赦置すること、罪を赦す意。もって処刑にかえる意であろう。〔説文〕三下に 掌る」とあり、老幼愚蒙のものは、その刑事責任免する意。〔周礼、司刺〕に「三刺三宥三赦の法を免する意。〔周礼、司刺〕に「三刺三宥三赦の法を舜 典〕「貴災は建赦す」とは、不作為による罪は赦みぬい。 たとえば懲役刑を笞刑にかえて、その服役を免ずる を免れるとする規定があった。三赦は減刑の法で、 亦ならば腋の意となる。人を攴で撃つ形で、 はまた亦に作る字形もあり、 これを

這 むかえる・この・はうシャ・ゲン

> る。わが国では「這ふ」という動詞に用いる。 這箇・這裏・這麼など、「この」の意の俗語に用いている。というでは、これでは、これでは、これでは、この」の意の俗語に用めている。「一般などは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、 声符は言。古くは言声の字で、迎える義で

香 12 おごる・ほこる・たかぶる

畲 大学 0

字である。 (都)の従うところで城垣などをいい、それを跨越泰を去る」とみえ、驕泰を奢という。者は堵・ 都 形声。秦の〔詛楚文〕にもみえ、侈の初文であろう。 字は会意の構造である。輸文に変に作り、その字は することは驕泰の行為とされた。者の亦声とすべき [老子] 第二十九章「聖人は甚を去り、奢を去り、 〔説文〕 一〇下に「張るなり」とし、者声とするが、 めて呪禁とする土隄。それを跨越する形が奢である。 大と者(者)とに従う。 者は祝禱の器を埋

煮 12 【煮】13 にる・ゆでるシャ・ショ

巻 震震震

あるから、庶が煮の本字であるはずである。 従うべき字であり、庶は煮炊きすることを示す字で とがあり、遮蔽の恋はもと堵絶の意であるから者に 同声であるため、この両者が声符として互易するこ 者声の字とし、「烹るなり」という。者は無と古く 声符は者(者)。〔説文〕三下に駕に従うて

〔説文〕の正字が正形である。 火を加えて煮炊きの意に用いるべき字ではない。 また者は堵中に隠した呪禁の書であるから、これに を庶士のように用いるのは、本来のものではない。 庶は火の上に鍋をかける烹炊の形を示す字で、これ 庶を用いる。ほとんど慣用によるものであろうが、 用いる。このような混同は古くからあったらしく、 を用い、庶人・庶民・父兄庶士・庶子・庶女などに 金文においても諸侯・百諸婚媾・父兄諸士の字に者 (諸) は衆諸の意であるが、衆庶・庶民の字に庶を

榭14 うて な

の行なわれるところであった。その儀礼に用いる楽「樹は樂器を藏する所以なり」とするが、もと射儀堂室のない建物である。〔漢書、五行志、上〕に ここに蔵したのであろう。 形声 字にみえ、「臺屋あるものなり」とい 声符は射。〔説文新附〕六上の

賒 つけかい・はるか・ゆるやかシャ

ことをいう。 「周礼、 買するなり」とは、つけでものを買う形声 声符は余。〔説文〕六下に「貰 泉布〕に 声符は余。〔説文〕 六下に「貰 兄そ除ひするもの、

> ものにあたることを験死という。余に徐・除などの詩に「酒を験ふ」ということが多い。身体をはって 声があり、含(含)も古くは余に従う字であった。 祭祀に旬日を過ぐること無れ」とみえる。酒客の

遮 ¼ (遮) 15 さえぎる・たちきる

ぐことを遮辺という。天子の行幸のとき、警固の法きする形の字である。呪禁を加えて邪気の侵入を防きする形の字である。呪禁を加えて邪気の侵入を防 当時の俗語。「さもあらばあれ」に「任他」「遮渠」 にかえて庶声を用いるが、庶は鍋を火にかけて煮炊わち堵であり、その呪禁の符を書という。その者声 埋めてその上を遮蔽し、呪禁を加えた垣の意。すな 法をいう。遮は庶声の字であるが、古く庶・者 霊によって、 もあらばあれ」とよむ。唐の詩文よりみえる語で、 によって邪悪を遮断するのである。「遮莫」は「さ 遮も本来は堵に呪禁を加えることを意味した。それ として用いるが、逆は屍骨を用いて呪禁とする法。 遮は本来は者に従うて堵絶を意味する。者は祝禱を (者)の音が同じであるため互易することがあり、 儘教」などの字を用いることもある。 ものの通行することを禁遏する呪禁の ものの通行することを禁遏する呪禁の むるなり」という。過ぎま 形声 声符は庶。〔説文〕二下に「遏 形声

赭 あかつち・あかシャ

るのに、 鶒 赭や堊(白土)を用いた。〔詩、 形声 ▼望(白土)を用いた。〔詩、邶風、簡繁下に「赤土なり」という。 建造物を塗 声符は者(者)。〔説文〕一○

> 山谷に赤紅青色にして鶏冠の如きものを産し、蜀の如し」は、いずれも祝頌の意のある句である。斉の今』「顏、霪赭の如し」、〔秦風、終南〕「顏、霑米の兮」「顏、霪米の 舟」のように、赭を聖色として重んじたものである。 産にも蜀赭の名が知られる。わが国でも「朱のそほ

謝 17 さる・むくいる・かわる・わびるシャ

謝を受く」とは、時のすぎさることをいう。 とは代謝(移り代る)の意。〔楚辞、大招〕「靑春、少しとし、何をか多しとする。これを謝施といふ」 た拝謝・謝礼の意に用いる。〔荘子、秋水〕「何をか 表するなり」とあり、辞去・辞謝、ま形声 声符は射。〔説文〕三上に「辭 声符は射。〔説文〕三上に「辭

寫 そそぐ・のぞく・はくシャ

であろう。また吐瀉の意に用いる。 意がある。水流の急なるものを瀉下・瀉出のように ものであろう。それで寫にはとり除く、移すなどの の鳥を用いることで、廟中では履を鳥にとりかえた形声 一声符は寫(写)。寫は廟中にあって礼装用 いう。〔玉篇〕に「傾くなり」とするのは、その意

藉18 しきもの・しく・かりる・もしシャ・セキ

の。「礼記、曲礼、曲礼、 ものには則ち裼す」、〔易、大過〕「藉くに白茅を用の。〔礼記、曲礼、下〕「玉を執るに、その藉ある ふ」など、草を編んだ席を用いた。また借の義に借 藉なり」とあり、祭事に用いるしきも形声 声符は耤。[説文] 一下に「祭 声符は耤。〔説文〕一下に「祭

の意となる。「仮令」の義は仮借、籍とも通用する。ことであるから、また踏藉の意に用い、よって狼藉うに用いる。依頼の義である。耤は耜を踏んで耕すうに用いる。依頼の義である。耤は耜を踏んで耕すりに左伝)宣十二年「敢て君の靈を藉る」のよ用し、〔左伝〕宣十二年「敢て君の靈を藉る」のよ

ジャ

邪 (邪)7 よこしま・わるい・ななめジャ・ヤ

のとしてよい。竅は衣服の奇邪なることをいうもの であるから、この字の他の諸義は、衰と通用するも で、呪術者の身に服するところである。 第cを 好に形の不正なるものの意がある。〔説文〕 ハ 下に 琅邪郡」の字とする。邑部の字は多く国名・地名 子音が脱落し、それより転じたもの。 形声 旧字は邪に作り、牙声。牙の

衰10 ななめ・よこしま・わるいジャ

いる。巫蠱などによって呪詛されたものを邪穢といいる。巫蠱などによって呪詛されたものを邪穢といるという。となれた。となれた。というないでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、 〔周礼、宮正〕に「その淫怠と、その奇邪の民とを 正しからざるものは、奇邪の民としておそれられた。 去る」という。 は衣に従う字で、奇邪の服をいう字であろう。服の 互訓するが、蹇は文献にみえない字である。あるい 八上に「蹇なり」とし、蹇字条一〇下に「邪なり」と の不正なるものの意がある。〔説文〕 漢碑の〔曹全碑〕には、家に邪の字 声符は牙。邪と同声。牙に形

> 前後力を合せるときのかけ声である。 れた。終助詞として疑問・詠嘆に用い、また邪許は、邪気の致すところで、病因の知りがたい神聖病とさい。 い、その藉るところの神を邪神という。風邪も邪神

\$

5°

勺の形。〔説文〕 一四上に「枓なり。

挹み取

勺3

匀3

ひしゃく・くむ・わずかシャク

2

蛇

に恐れられ、最も忌むべきものを蛇蝎という。があって、のち区別して蛇の字を用いる。蝎とともがあって、のち区別して蛇の字を用いる。蠍ととも 形声 はその形声字である。它に他などの意 声符は它。它は蛇の象形。蛇

閣 うてなト

仏教語として、闍梨(阿闍梨)・闍維(茶毘)のよいなど、意。門によって悪邪を呵禁する意である。 うに音訳語に用いる。 闍なり」とは、門上に設ける物見台のことで、そこ より観望して出入するものを検するをいう。闡も 杜絶の意がある。〔説文〕二三上に「闉光」。 声符は者(者)。者に遮蔽・いれる。

麝 じゃこう

みえ、 する。香料として珍重される。 厳熱 腹にある鶏卵大の皮腺より、強烈な芳香を発

尺 しゃく・ものさし・ちいさいシャク・セキ

ある。

のをいう。杓はその繁文で

く、勺飲とは少しの飲みも ゃくをいう。その量は少な る所以なり」とあり、ひしゅがん

はない。 句・局 と形は似ているが、字は手首と指を誤っており、また尺の字形は、尸乙に従うもので を又に開いた形の象形である。尺寸は僅少、尺璧は 長文をもって解している。「人の體を以て法と爲す」 というのは正しいが、尺・寸ともに人体の取るところ 常仞の諸度量、皆人の體を以て法と爲す」と異例の 乙に従ふ。乙は識すところなり。周の制、寸尺咫尋さし)のことを指尺(斥)する所以なり。尸に從ひでし、のことを指す。十寸を尺と爲す。尺は規矩(もの脈を寸口と爲す。十寸を尺と爲す。尺は規矩(もの脈を寸口と爲す 文〕ハ下に「十寸なり。人の手、十分を紛ぎたる動尺度は、概ね人体を基準とするものであった。〔説 (握)」(指四本の幅)の四分の一にあたる。基本の 寸の十倍。寸は一本の指の幅。わが国でいう「つか 形である。 わが国の「あた(咫)」にあたる尺度で、 象形 げた形。上は手首、下は両指を展い 手の指の、拇指と中指とを展 た

声符は射。

シャク

衺 蛇 闍 麝 シャク 勺(勺) 尺

尺はこの虫の進みかたと形が似ているのである。 大きな壁玉、尺牘・尺素は手紙。尺蠖は尺取り虫。

斫。 きる・うつシャク

みえる。 夜目にもしるく「龐涓、この樹下に死せん」としる 斤で切りさく意である。 孫臏が馬陵で龐涓を破るとき、大樹を斫り、それが、「まる」「これ」と、声符は石。〔説文〕一四上に「撃つなり」と

借10 かる・かす・たといシャク・シャ

ことをいう。「詩、大雅、抑」「借ひ未だ知らずとい」。 もしの意に用いる字である。 ふも」のように、古くから借使・借如など、仮令や 声符は昔。〔説文〕ハ上に「假

酌10 (酌)10 くむ・さかもりシャク

「酒を盛れて觴を行らすなり」という。もと酒を酌 む意であるが、斟酌(とりはかる)・酌量(はか る)のように用いる。 、酒器より酒を酌み出す意。〔説文〕一四下に 声符は勺(勺)。勺は杓の象形。酉は酒器

【釋】20 とく・すてる・おく・ゆるす

形。風日に暴された形で、暴も獣屍の形に従う字。 や鬱結を釈く意となる。また仏家を釈氏という。 獣屍の分解する意より解釈の意となり、すべて紛乱 くことである。睪の上部は頭、幸の部分がその体の 上に「解くなり」とし墨声とするが、解は牛角を釈って獣屍を裂くことを釋(釈)という。〔説文〕ニ 従う。米は獣爪。睪は獣屍。獣爪をも 会意 旧字は釋に作り、米と睪とに

綽 ⁴ 〔繛〕 18 ゆるやか・しとやかシャク

形声 部に属している。素は糸たばのもとを括って、染め 「緩やかなり」という。その緩の字も、〔説文〕は素 〔説文〕一三上に字を素部に属し、素に従う字に作り、 て餘裕あらざらんや」とはゆとりのあるさまをいう。 緯々は形容の語。〔孟子、公孫丑、下〕 「綽々然とし 冰雪の若く、綽約として焼りの若し」という。 声符は草。卓に、淖約の淖の声がある。

体のモチー

爵17【爵】18 さかずき

震 *日春 書 N. 土河

> あり、雀とは関係がない。〔孟子、離婁、上〕「叢をに仮借したにすぎない。段玉 裁のごときも爵は雀形に象るとする古説を信じ、字形について「首・雀・啄、髪・足、具さに見る。爵形は即ち雀形なり」とするが、段氏の当時には、宋刻の金文によっり」とするが、段氏の当時には、宋刻の金文によっり」とするが、段氏の当時には、宋刻の金文によっり」とするが、段氏の当時には、宋刻の金文によっ 角・斝の類には鳥形を器器において、尊・卣・ない。ただ字を図象的に表示したものがある。また ある。殷周の爵は遺器が甚だ多いが、自名の器はにあげる古文の字形などは、全く信じがたいもので 雀と同音とし、その器形も雀に象るとするものでくれに又(手)を加えてもつ形とするのは、瞬をそれに又(手)を加えてもつ形とするのは、瞬を ても爵の字形を確かめうるはずであった。〔説文〕 あるが、卜文・金文の字形は明らかに酒爵の象形で なり」とし、字の上部を雀の形、中を鬯酒の形、 酒器の爵の形に象る。〔説文〕五下に「禮器

ーフとするもの

位、五等の爵制を生じた。 て恩賞とし、それより爵 がない。古く爵酒をもっ があるが、爵にはその例

爍 ひかる・かがやく・とかす・きえるシャク・ヤク・ラク

附] O上に「灼爍、光るなり」という。[周礼、ものがあり、爍、鑠。同例と考えられる。〔説文新ものがあり、爍、鑠。可例と考えられる。〔説文新来母の字には、麗に灑・驪の声をもつ 形声 声符は樂(楽)。楽は来母。

金・爍日のように用いる。 強熱を加える意。鑠と通用する字である。 総目〕に「金を爍かして以て刃と爲す」 爍と

繳 いぐるみ・おさめるシャク・キョウ(ケウ)

字として用いる。〔説文〕に敫声とするもの十四文 を繳納・繳報という。時代によって声義を異にする たのであろう。のちケウの音でよみ、政府への納入 が、繳の象形字であり、繳と叔とは古く音が近かっ を繳増という。金文の叔とよまれている字とできる。金文でありまり合せて大綸としくでるみを檄戈という。より合せて大綸とし シャク声の字はこの一字のみである。 「生絲の縷なり」とあり、戈射に用いた声。声符は敫。〔説文〕一三上に

22 かがりび・たいまつシャク

以てし、これを祓ふに爟火を以てす」とあり、古代 に犠獗を以てす」というのと、同じ儀礼を用いて る。〔淮南子、氾論訓〕にも「これを洗ふに湯沐を 以てこれを迎へしめ、祓ふに爟火を以てし、釁する って俘囚を解かれるとき、「桓公、人をして朝車を いることは、〔呂氏春秋、贊能〕に、管仲が斉に戻いることは、〔呂氏春秋、贊能〕に、管仲が斉に戻に祓った修祓の儀礼をいう。修祓のために聖火を用せる。 ,の文を引く。湯が伊尹を得たとき、これを廟中 シャク

> 難からずや」といって、尭が許由に天下を譲ろうと繋がらずや」といって、尭がいます。その光におけるや、またぬ。しかるに爝火息まず。その光におけるや、またぬ。しかるに爝火息まず。 た。しかるに爝火息まず。その光におけるや、またぬ。しかるに爝火息まず。その光におけるや、またることができる。〔荘子、逍遥が設〕に、「日月出でることができる。〔荘子、逍遥がなり した話を載せる。 における聖火の観念と、聖火による修祓の法とを知

鑠 23 とかす・ひかる・やく・うつくしいシャク・ヤク・レキ

策〕に「韓氏、鑠びたり」という。光芒を残して消鑠けて失われることを滅亡にたとえ、〔戦国策、秦續っとと、終。と、然。との光明あることをほめて、〔詩、周の光明あることをほめて、〔詩、周の光明あることをほめて、 滅する意である。 り」とあり、〔戦国策、魏策〕に「衆口、金を鑠かある。〔説文〕一四上に「金を銷かすな 形声 声符は樂(楽)。燥と同声で

粮 しゃく

国字が連語を作ることはめずらしいことである。 痙攣を伴うような胃腸の激痛をいう。癇癪のように、 の造字。 国字 あわせて癎癪という。癪もさしこみをいい、 癇は小児のひきつけ、 と積とに従う。心に鬱積して病をなす意 またてんかんをいう

ジャク

委 日がのぼる木・したがうジャク

桑

六下にこの字を扶桑若 この字を扶桑若木の桑の葉の形。[説文]

形を誤ったもので、その字は若にほかならない。 のことは次の若字の条にのべる。 形を省略したものであり、籀文の字形はまた若の字 正篆の字形は、明らかに重文として録する籀文の字 ら、字を若とよむならば、それは扶桑の木ではない。 とされ、 神話における神木である。若木は崑崙の西極にある 〔淮南子、天文訓〕に「日は湯谷に出で、咸池に浴 し、扶桑に拂る。これを晨明と謂ふ」とあり、太陽 それはおそらく若の字形を誤ったものであろう。 る籀文一字は、叒の下部に口と口とを加えた形で、の茂る形の象形とするものである。重文として録す 若と解して、「日、初めて東方の湯谷に出で、登る ところの榑桑、叒木なり。象形」という。字を桑葉 神話では太陽の没するところの地であるか

若。 したがう・わかい・なんじ・もしジャク

كلي W C A H

擇ぶなり。艸右に從ふ。右は手なり、これらい、ミの器口を加えたものである。〔説文〕一下に「菜をの器口を加えたものである。〔説文〕一下に「菜を とし、身をくねらせて舞う形を又とし、 いまの字形は、そのふりかざしている両手の形を艸いまの字形は、そのふりかざしている両手の形を艸 ようとしてエクスタシーの状態にあることを示す。 象形 若い巫女が両手をあげて舞い、神託を受け 艸右に從ふ。右は手なり」とするが、 のちに祝禱

段] 【条伯 茲鼎」【師虎段】【牧段】【省鼎】【蔡段】王命を伝えるときその形式をとり、【大盂鼎】【 世代 まり、「大盂鼎」 【 世代 まり、「大盂鼎」 【 世代 まり、「大盂鼎」 【 世代 まり、「大 玉郎」 (世代 まり) 「 世代 まり) 「 でいまま王の語を伝達する形式となった。金文でもそのまま王の語を伝達する形式となった。金文でも そのままに述べることが「若のごとく曰く」という はず、魑魅罔兩(怪物)も、能く之に逢ふ莫し」「左伝〕宣三年「民、川澤山林に入るも、不若に逢 あり、またのちの文献では、邪神を不若という。 鼎」「上下の若否を鯱 許(明らかに)せよ」の語が る。それで「若を降さんか、又(祐)を受(授)けが多く、「不若」とは帝意が承認を与えない意であ 若を降さんか、不若を降さんか」のようにトする例 字がみえ、巫女がエクスタシーの状態にあり、手を 左右してこれを芼ぶ」の〔伝〕に「芼は擇ぶな義ともに誤る。〔詩、周南、関雎〕「参差なる行茶は 王者がその神聖性を獲得して、神託の伝達形式が、 形式で、のち王者の語を伝えるときの形式となる。 巫女に憑りついて、神託として伝えられる。それを の義となり、それが最も字の本義に近い。神意は、 という。若とは帝意にかなうことであるから、若順 り、不若とは凶災をいう。金文においても〔毛公 (諾)とせんか」「帝は若とせざるか」、また「帝は わち諾の初文。ト辞に「王、邑を作るに、帝は若は、神がその祈りに対して承認を与えること、すなは、神がその祈りに対して承認を与えること、すな 祝禱するときの巫女の姿をいう。卜文・金文にその をその義に用いる例はない。字は艸とは関係がなく り」とあり、それと同訓としたものであろうが、若 んか」のようにいい、若は天の祐助を得ることであ 跪いて神託を受けている形である。その本義

なら、***
「世~これに若~」などは、みな若順の意に用いる。「世~これに若~」などは、みな若順の意に用いる。「世~これに若~」などは、みな若順の意に用いる。「世~これに若~」などは、みな若順の意に用いる。 〔者減鐘〕「羅(召)公の壽の若し」、〔叔夷鐘〕「靈は日若・越若(ここに)という発語となり、または日若・越若(ここに)という発語となり、また 梁恵王、上」「若のごとき爲す所を以て、若のごと とき人、徳を尚べるかな、若のごとき人」、「孟子、を知れや」、「論語、憲問」「君子なるかな、若のごを知れや」、「論語、憲問」「君子なるかな、若のごを知れや」、「論語、憲問」「君子なるかな、若のごとも対して (基本政策) に若へ」「乃の正(職事)に若敬せよ」、道であった。〔大盂鼎〕「文王の命じたまへる二三正 (この) 二月」「掌若(この)翌日」となり、経籍で 指示・比況の意が形式化した形では、〔麦尊〕「掌若がごときなり」は、みなその用法である。この強い それより引伸あるいは仮借して、他の数十義にも及 て、これに承順することを基本義とするものであり、 象形字であること、その訓義は、神意・神託を受け のは、まずその字形が、神託をうけるときの巫女の る若の訓義は凡そ三十義にも及ぶが、その主要なも 力あること虎の若し」のように用いる。字書にあげ き欲する所を求むるは、なほ木に繰りて魚を求むる る。その王命に若順することが、また臣たるものの の成立と考えられるものに、この形式がとられてい

> るところを求めるべきである。 であるが、その基本義の上に立って、字義の統貫す となったとみてよい。若・如いずれも訓義の多い字 若と近く、ほとんど同字である。ただ字形やアクセ 「はかる」意のある字であるが、その文字の要素は い字であるが、如も祝禱して祈る巫女をいう。茹はぶのである。如は若と声義において通ずることの多 ントの相違によって、その語義の領域が異なるもの

弱 多。 よわい・わかい・おとるジャク・ニャク

物は辞す。 象り、彡は毛氅(毛布り)) 皆だななる。〔説文〕九上に「焼むなり。上は橈曲するになる。〔説文〕九上に「焼むなり。上は橈曲するになる。〔説文〕九上に「焼むなり。上は橈曲するに乗り、彡は毛を の弓であろう。その呪飾のなびくさまを嫋々といかに弓の象形である。おそらく呪飾をつけた儀礼用物は丼す。故に二冡に従ふ」と解するが、字は明ら物は丼す。故に二冡に従ふ」と解するが、字は明ら う。搦はしずかにものをもつ意の字である。 会意 二夛を並べた形。曷は飾りを

雀 すず ず め ク

雀

職る」、〔荀子、礼論〕「小なるものはこれ燕と爵な述べているが、〔孟子、離婁、上〕「叢の爲に爵を述べているが、〔孟子、離婁、上〕「叢の爲に爵をある。」。 は は 野字条玉下にも雀形をとるものとの説を なり。 形声 小隹に從ふ。讀むこと爵と同じ」という。 声符は小。〔説文〕四上に「人に依るの小鳥 いずれも同音の仮借にすぎない。

《稽》首」を、ときに「卵段」「拜手韻手」、〔不嬰。るが、金文にその形に作るものはない。「採手韻るが、金文にその形に作るものはない。「採手韻〔説文〕」ニェに「峯なり」とし、古文の字形を録す 国でいえば「毛やり矛」などに相当するものと考え りや旄飾などを加える風があった。殳杖は、わがに「全羽を籐と爲す」とあり、旗旌の類に多く羽飾兵器には呪飾をつけることが多く、[周礼、司常]兵器には呪飾をつけることが多く、[周礼、司常] てよい。 羽飾をつける。殳の上部は、その羽飾の形であろう。に曰く、羽を執りて杸に従ふ」とみえ、その上端にに曰く、羽を執りて杸に従ふ」とみえ、その上端に の投字条に「軍中の士、持する所の殳なり。司馬法 竹刀のようなもので、それを車上に樹てた。この部とない。 る。柄は積竹杖、竹を八觚にして合せた、わが国のる。柄は繋ぎ

Ψ

华

¥ ¥

手の形。手首から上、五本の指をしるす。

手 4

て・もつ・てずからシュ

シュ

主 5 【主】 5 ひ・あるじ・つかさ・おもに

里 **5**°

手と首とが同音であったことが知られる。 殷〕「拜顓手」のように誤用していることがあり、

つえぼこ

∄ຶ

するところのものを柱という。る。炷は火主の意の主の繁文。建物において、る。ユルタ 意よりして、主席・主持・主張・主義のように用 聖火を執るものの意から出たものであろう。主客の たからで、〔礼記、少儀〕に、飲酒の際に主人が自 式のものであろう。字を神主、宗廟の主の字に用い 近時中山王墓から出土した十五連盞燭台は、神仙 王は象形、、に従ふ。、は亦聲」というが、その全鐘。の形である。〔説文〕五上に「鐙中の火主なり。をとと 灯火の火主なり。 コート ガー・エット ら火を執る礼をしるしている。主人・家長の意は、 るのは、古人に火主を神聖なものとする観念があっ や霊獣を盞盤の間に配するもので、最も完成した形 体を象形とみてよい。下は盏銭とその台の形である。 灯火の火主の形。上の小点が火主、下部は 主持

殳の長さ尋四尺」とみえ、戈や矛の柄をいう。尋四調をしるしている。〔廬人〕に「廬人、廬器を作る。

すなり」とし、「周礼、廬人」の文によって、そのげ槍の形である。〔説文〕三下に「杖を以て人を殊が槍の形である。〔説文〕三下に「杖を以て人を殊くなる」 んと又とに従う。 たは殳杖、すなわち投

尺とは一丈二尺、これをもって鹵簿の先駆をする。

衛風、伯兮〕「伯や殳を執り 王の爲に前驅

まもる・つとめ・おさめるシュ

0

自

す」、また「王、善夫蹶をして大を召ばしめ、厥のす」、また「王、等夫蹶をして大を召ばしめ、厥のす」、また「王、等、世界」によると干に作るものがあって、それに、大き、はれると干に作るものがあって、それならば武器をもって守る扞衛の意である。[大郎]ならば武器をもって守る扞衛の意である。[大郎]ならば武器をもって守る扞衛の意である。[大郎]ならば武器をもっている。 とするが、金文の古い字形には宀と又とに従う字形とするが、金文の古い字形には宀と又とに従う字形とするが、金文の古い字形には宀と又とに従う字形とするが、金文の古い字形には宀と又とに従う字形とするが、金文の古い字形には宀と又とに従う字形とするが、金文の古い字形には宀と又というである。 義である。世に佞らぬ生きかたを、守拙という。 ち去る」という。〔説文〕の解は、戦国期以後の用 |孫丑、下〕「官守あるものは、その職を得ざれば則 十年「道を守るは、官を守るに如かず」、〔孟子、公る字であった。のち官守の意となり、〔左伝〕昭二 と攼と互文。守とは王身や聖所を守ることを意味す 友(友官)を以ゐて入りて잱らしむ」とあって、守 從ふは法度なり」とし、官府において法度を守る意 ことを執ることをいう。「説文」七下に「守官なり。 一に從ひ寸に從ふ。一に從ふは寺府の事なり。寸に 〜と寸とに従う。 一は廟屋。廟屋のなかで、

朱 あか・あけ

業業

象形 するものならば株の意となり、株の初文とすべきで の意味するところが明らかでなく、もし本・末に対 木の幹の部分に肥点を加えた形。 その肥点

手 殳 主(主) 守

この杖頭に呪飾を著けている形とみられ

舞の具ともされたが、のち手矛の形となり、また長す」とみえる。古くは鉞黻(まさかり)の類をいい、

い杖矛となったものであろう。字の上部は杖矛の

りて、用て喪せしめたり」とあって、卯の父の不淑死嗣す(治む)。不淑なりしとき、我が家の案を取死嗣す(治む)。不淑なりしとき、我が家の案を取死嗣す(治む)。不淑なりしとき、我が家の案を取りて、用て喪せしめたり」とあって、卯の父、莽人を集事のように用い、すべて朱色をいう。〔卯慇〕により、後、 ら、金文に朱市・朱黄(衡)・朱旂・朱號が・虎宮の、金文に朱市・朱黄(衡)・朱旂・朱號が・虎宮字は一に従うものでなく、肥点を加えている形であ るべきであろう。〔説文〕六上に「赤心の木なり。れており、やはり朱の採取の方法に関するものとみ あるが、字は金文において、専ら丹朱の朱に用いら 用に供したことをしるしている。家臣の喪には賻贈(死喪)のとき、その主家から窠を賜うて、送葬の 松柏の屬。木に從ふ。一はその中に在り」とするが、 は衆に作り、上部はその蓋に蒸気抜けの穴をあけたているのも、その墓葬に用いるためである。その字 花土をなしていることがある。〔卯殷〕に朱を賜う**と、朱だけが器形のまま土に移って残り、美しいちて、朱だけが器形のまま土に移って残り、美しい ものが用いられており、ときにはその器がすでに朽 室から出土する明器の類には、多く丹朱を塗沫した では窪を賜うている。窪は朱の異構の字。いるの郷 錬法を意味するものではないかと思われる。それな れはあるいは、朱砂を固めて薫蒸するアマルガム精 その材質は肥点で示される団子状のものである。こ 案は上部に蒸気抜けのあるもので薫蒸されており、 かにその材質を入れ、下から火を加える形であるが、 形のもので、おそらく薫蒸して作るものであろう。 (死者への贈りもの)を賜うことが例であり、ここ らばその朱は、水銀からとられたものであろう。朱 一般の薫蒸法は、薫の字形が示すように橐の形のな

> ・ 不死の色と考えられるものであった。 不死の色と考えられるものであった。 を案のようにしるす字形があるのは、このように解

百 7 あたま・かしら

人の頭の形。〔説文〕

休 8 おろか・あざむく・こびと

本語 声符は朱。朱に株、太く短いものの意がある。〔広雅、釈詁〕に「短なり」とあり、侏儒(こびと)の意。〔左伝〕襄四年「朱儒をこれ使ふ」とびと)の意。〔左伝〕襄四年「朱儒をこれ使ふ」とびと)の意。〔左伝〕襄四年「朱儒をこれ徳、そのうち侏儒に身体に障害のあるものを列するが、そのうち侏儒に身体に障害のあるものを列するが、そのうち侏儒に身体に障害のあるものを列するが、そのうち休傷として宮中につかえ、戯弄の対象とされるものであった。建物では短い支柱の木をいう。株職は西方の音楽、転じて夷語をいう。

取 8 耳を切る・とる・おさめる

西南

会意 耳と又とに従う。耳を取るのは戦耳の意。 「説文」三下に「捕取するなり」とし、討ち取った敵 で大耳を切り、その職を廟に献ずるのである。転じたのときには、その職を廟に献ずるのである。転じた他国を侵すことをいい、すべて他の物を獲得する ことをいい、また妻を娶ることをいう。古くは取・ たの一義に用いた。小さなものを集めて取るを最と りの両義に用いた。小さなものを集めて取るを最と がい、また撮という。

行9 かり・かりする・めぐる

新 好 ¥ 等

形声 声符は守。もと狩猟の狩には獣の字を用い、形声 声符は守。もと狩猟の狩には獣の字を用い、草原を焼いて巻狩りをしたので、狩をまたとあり、草原を焼いて巻狩りをしたので、狩をまたたとあり、草原を焼いて巻狩りをしたので、狩をまたたとあり、草原を焼いて巻狩りをしたので、狩りに面して焚す」の注に「火田なり」という。[員鼎]にて焚す」の注に「火田なり」という。[員鼎]にて焚す」の注に「火田なり」という。[員鼎]にて焚す」の注に「火田なり」という。[員鼎]にて焚さいる。 中山王墓に殉葬する二犬たのものが従っている。中山王墓に殉葬する二犬などは、狩猟に用いたものであろう。*戦(獣)は関(単)、すなわち盾をとって、獣の奔突するのを防ぐ意であるから、その字はもと獣畜の意でなく、狩猟を意味する。字が犬に従うのもその故である。行猟を意味する。字が犬に従うのもその故である。

字形によって説くものである。符には、神饌とすべ字形によって説くもので、金文にその例なく、古礼という。〔春秋〕僖二十八年「天王、河陽に狩す」という。〔春秋〕僖二十八年「天王、河陽に狩す」という。〔春秋〕僖二十八年「天王、河陽に狩す」とは、天子が晋侯に召されて赴くという名分にあわぬは、天子が晋侯に召されて赴くという名分にあわぬは、天子が晋侯に召されて赴くという名分にあわぬは、天子が晋侯に召されて赴くという名分にあわぬい。

首 9 くび・はじめ・きみ・もうす

M OF CY.

象形 頭髪のある首の形。古文は百に作る。首の をつけた礼容、真はその全身形である。

株 10 かぶ・きりかぶ

种业

侏儒(こびと)はまた株檽といい、つかばしらの意。のを根、土上にあるものを株という。株盤は丸太柱。のを根、土上にあるものを株という。株盤は丸太柱。脱文〕六上に「木根なり」とあり、土中にあるも形声 声符は朱。朱にまるく短いものの意がある。

一定の額の出資金を出しあうことを株式という。同じ長さに切りそろえて列柱とする。わが国では、

殊 10 ころす・ことなる・ことに

脒 行 義となったものであろう。徳行のすぐれたものを殊 る。死を決するものを殊死といい、それより特異の 名)に殊異なり」とは、特にすぐれたものの意であ 義はその転義。〔詩、魏風、汾沮洳〕に「公路(官 は、殊異の義をもって解するものであるが、殊異の に「死罪のものは首身分離す。故に殊死といふ」と れを殊すべし」とあって、斬罪の意である。〔段注〕 た「漢令に曰く、蠻夷の長の罪あるものは、當にこ 殊死するもの相枕す」とは誅死の意。〔説文〕にま いう。字は誅と声義同じく、〔荘子、在宥〕「今の世 恩寵の甚だしいものを殊寵・殊遇という。 形声 すなり」とあって、死罪とすることを 声符は朱。〔説文〕四下に「死

珠 10 たシ

北山 形声 声符は紫。朱にまるいもののと言じ考えかたである。

酒 10 さけ

珠

宴の際に供する酒を掌る。〔漢書、食貨志、下〕にれた。〔周礼〕に酒正・酒人の職があり、祭祀や饗むって神を降し、聖地を祓、禳する力があるとさをもって神を降し、聖地を祓、禳する力があるとさ多い。また鬱鬯で香を加えている酒は、その芳香 という。就も造も、酒と声の近い語によって語源また「一に 曰く、造りなり。吉凶の造る所 なり」とし、「就すなり。人性の善惡を就す所以なり」とし、「就すなり。人性の善惡を就す所以なり」とし、 の初文。 形声 ミューロー では、一ついに儀狄を疏んじ、杜が嘗めてこれを美しとし、ついに儀狄を疏んじ、杜が書めてこれを美した。、『秋が酒を作り、馬る。また事物起原説話として、儀秋が酒を作り、馬 る。また事物起原説話として、儀狄が酒を作り、禹を説こうとする音義説で、何の根拠もないことであ 「酒は百藥の長、嘉會の好なり」と、その徳を賛し 器種にも富み、その制作は精美を極めているものが 酒によって神人一体の至境を具現することが、政治 るものであるとしているが、古い祭政的国家では、 酒誥〕や金文の〔大盂鼎〕に、殷の滅亡は酒淫による言い、というない。と言いる。というないのでは祭祀に多く酒を用いた。〔書、事に用いられ、殷では祭祀に多く酒を用いた。〔書、 なった。酒は水穀の精、熟穀の液として古くから神 魏策〕にみえるものである。杜康はのち酒の異名と 康がきび酒を作った話をしるしている。〔戦国策、 る。晋の劉伶に〔酒徳頌〕の一篇がある。 の要諦とされた。それで殷代の彝器には酒器が多く、 声符は酉、爸の省文。酉は酒尊の形で、酒 いまの字形は形声字である。「説文」「四下 酒を詩文に歌うことは、 魏晋の際にはじま

めシュ る

\$CH.

婦を取るを娶といい、女が他に適くのを嫁という。〔左伝〕昭二十八年「妻を娶りて美なり」とみえる。 り」とあり、もと取をその義に用い、のち娶に作る。 声符は取。〔説文〕一二下に「婦を取るな

須12 ひげ・もちいる・まつ・すべからくシュ

制制 教

(葬儀役) 手を爪きり、須を剪る」とあって、面毛毛髪を洗う形に作る。〔礼記、喪大記〕に「小臣鬚も含めていう語であるらしく、金文の盨の字形は、 会意 〔段注〕に「頤の下の毛なり」とするが、須は髪も 関係のない使いかたで、みな仮借義である。 すぐ、必須は要用の意であるが、これらは鬚髯とは 二義があるとすべきである。須は男子の儀容上、 り」とみえ、頤ひげと頰ひげとを区別する。広狭のを剃ることをいう。〔漢書、高帝紀〕に「美須髯あを剃ることをいう。〔漢書、高帝紀〕に「美須髯あ 事なものとされた。須留・須待はしばらく、 の全体を象形としてよいかきかたである。〔説文〕 人の形。彡はひげ。金文の薀の字形からいえば、そ 「面毛なり」とし、会意とする。鬚の初文。 頁と彡とに従う。 頁は儀礼を行なうときの 大

はれもの・むくみ・やまいシュ・ショウ

に瘍医の職があり、腫瘍・潰瘍などの治療に当った。 兪は癒(癒)の初文である。 その膿血を、手術刀で盤中に移すことを兪という。 れものがふくれあがることを癰腫という。〔周礼〕 を腫という。〔説文〕四下に「は 〔説文〕四下に「雑なり」とあり、は豪の形で、できもののふくらむこと 声符は重。重はふくらんだ

種14 たね・うえる・おくて・たぐいシュ・ショウ

おくての稲、橙を種芸の字とする説がみえるが、両種樹・種芸・種類の意となる。〔経典釈文〕に種を「いった」 者は同じ字で、区別を立てる要はない。 承を歌うもので、種とは穀種が字の原義。それより 形声 声符は重。〔説文〕七上に「先

嬃

楚巫の集団の内部に、そのありかたについて、意見 「女の字なり」とし、「楚詞に曰く、女形声 声符は須。〔説文〕一二下に

> 女嬃の語が分化したものと思われる。 を孀に作る。孀はまた嬬に作り、女須とは嬬のこと に「妹を歸ぐに須を以てす」とあり、[釈文] に字の対立を生ずるに至ったことをいう。[易、帰妹]の対立を生ずるに至ったことをいう。[易、帰妹] ものであり、それで女巫を嬬といい、そこから婆・ で女巫をいう。儒は巫祝の伝統の中から生れてきた

諏 はかる・とう

〔曹全碑〕「聖主諮諏す」のようにいう。 を下することをしない。のち人に問う意に用いて、賃食の禮には、日を諏らず」とあり、筮してその日諏する意であった。〔儀礼、特性饋食礼〕に「特性」は、 を諏と爲す」とみえ、諏謀とは、もと神に対して諮 あるものと解している。〔左伝〕襄四年「事を諮る 「聚り謀るなり」とし、取に聚る意が形声 声符は取。〔説文〕三上に 声符は取。〔説文〕三上

趣 おもむく・すみやか・うながす・むかうシュ・ソウ

觶

なるが、 他を趣かせる意より、催促の意となり、促急の意と とするところを趣旨、興の趣くところを趣味という。 とあるのは取と同義。進退を趣舎といい、その目的 趣・走は古く通用の字。また金文に「吉金を趣る」 趣・疾の双声をもって解する。〔周礼〕に「趣馬」ともと。 声符は取。〔説文〕二上に「疾やかなり」と形声 一声符は取。〔説文〕二上に「疾やかなり」と の職があり、金文に「走馬」としてみえるもので、 もとは自ら赴く意であろう。

16 おおしか・ほっす

ジ

ュ

「説文」四下に「相付すなり。受に從ひ、舟の省聲」

象形。盤中にものを入れて授受することをいう。

受と舟とに従う。受は上下の手。舟は盤の

仏家では払子を用いた。を揮って談説したというのは、俗説のようである。 で、のちに六朝期の談者が、それにならって塵尾鹿が群鹿を率い、その塵尾を振って動向を定めたの 本には、なお「大力にして一角」の語がある。この 「糜の屬」とし、〔六書故〕に引く唐をれた。 をはいるとし、〔記文〕一〇上に形声 声符はよ。〔説文〕一〇上に

戍

まジュ る

会意 旅

柜。

被被

戈と人とに従う。人が戈を負うて守る形。

股がにる。

般ぶなどは、みなその形に従う字である。その字形がみえている。舟はものを盛る盤で、

り手で授受する形に作る。〔三体石経〕や〔汗簡〕 はない。卜文・金文の字形は、明らかに舟を上下よ とするが、舟は盤であるから、その声を用いるはず

「戈と殳とを何ふ」とあり、戍は戈を何う形である。ふ」とあり、征戍・戍人をいう。〔詩、曹風、候人〕ふ」とあり、征戍・戍人をいう。〔詩、曹風、候人〕に、後を守るなり。人の戈を持つに従

寿ィ【壽】はいのちながし・ひさしい

盨 祭器・穀物をもる器

0 多点是 쩇

THE SHAPE AREA SOFT

初文は般、般とは舟(盤)を撃つ形であり、楽器と用いたことが、〔左伝〕僖二十三年にみえる。盤の

く授・受両義に用い、金文に「王、作册尹に書を受してもうち鳴らして楽しんだものであろう。受は古してもうち鳴らして楽しんだものであろう。受は古

く」「尹氏、王に命書を受く」といい、また「天命

を確受す」のようにいうときとがある。

盤の初形であった。人に食事を饋るときに、盤飧を器)下の臺なり。今時の槃の若し」とするが、舟がいている。皆舟あり」の舟を、注に「舟は尊(酒を用てす。皆舟あり」の舟を、注に「舟は尊(酒

[周礼、司尊奉]「春祠夏輸に、課するに雞蜂・鳥蜂

A DE PROPERTY AND SOLD

供えた。字形は盤水によって須をあらう形であるか金文では祭器の名に用い、これに稲粱を盛って神に のは、その転義である。 が、その用例はない。稲粱を盛る祭器の名に用いる ら、本来は盤盤の用をなすものであったはずである る。すなわち格木とか裏数といわれるものにあたる。なり」とあり、ものを負戴するときに用いる器とす 声符は須。〔説文〕五上に「横盨、負戴の器

鬚 22

あるところとされ、鬚を俗に流蘇(飾りふさ)とい化するに及んで、鬚が作られた。鬚眉は男子の美の形声 声符は須。須は鬚の初文。のち須字が多義 すりをいう。 う。「鬚を掀ぐ」は喜ぶさま、「鬚を拂ふ」とはごま 声符は須。須は鬚の初文。

Ä THE STATE OF THE S

形声 とあり、 〔詩、秦風、終南〕「佩玉將々たり 壽考忘まず」金文に「眉壽萬年」「眉壽無期」のような語がある。 禱の初文。〔説文〕八上に「久なり」という。 声符は馨。雩は田の疇で豊穣をいのる字 考もまた長寿をいう語である。

受 8 うける・さずかる・とるジュ

P 関

18 18 A

後漢以後に至ってみえる字である。馬王堆一号漢墓された。ままた、なて祈るので、字はまた咒に作る。古い文献にみえず、て祈るので、字はまたじ。 呪詛のときに用いる。兄は祝禱の器を戴いて、祈る 会意 桃の木で作り、墨で目鼻をつけた小俑を、編簡のよ うに編んで連ねた形のものがある。桃の木には辟邪 には、麻衣や糸衣を着せた両手のある呪俑の他に、 人の形。そこに神気の下るのは兌。祝禱の器を列ね いのる・のろうジュ・シュウ(シウ) もとの字は祝。呪は祝より分化した字で、

シュ 塵

盨

鬚

ジュ

戍

寿〔壽〕

受

呪

〔敏達紀〕に呪禁師の 禁博士をおくことは隋皇を録していない。呪 た。〔説文〕には呪の も大宝令でその制をと にはじまり、わが国で の力があるとされて た。それより前、



り、わが国の遊部のなかにも、その呪禁の法が多く渡来がしるされてお なく、禁忌全般のことにわたるもので、古くは祝の関係が考えられる。呪は必ずしも呪詛のことのみで ある〔皇極紀〕〔斉明紀〕の各三首は、みな渡来とり入れられたであろう。わが国の最も古い挽歌でとり入れられたであろう。わが国の最も古い挽歌で 字を用いた。 人の手によって伝承されていたもので、呪禁師との 禁忌全般のことにわたるもので、

授 ¹¹ さずける・さずかるジュ

に「興ふるなり」とし、字を会意亦声とするが、受受く」と、受を授受の両義に用いる (調)ないここと 長)、王に命書を受く。……頌、拜譲首して命册を授与の字が作られた。〔頌鼎〕に「尹氏(史官の授与の字が作られた。〔頌鼎〕に「尹氏(史官の の繁文とみてよい字である。 には古く授・受の両義があったが、のち分岐して、 と、受を授受の両義に用いる。〔説文〕 二上 形声 中のものを授受する形の字である。* 声符は受。受はもと舟(盤)

綬 14 ひざかけのひも・くみひもジュ

とあり、 のものなり」ともあって、玉を佩びるときに用いる 薬、注〕に〔綬は佩玉を貫き、相承けて受くる所以薬、注〕に〔綬は佩玉を貫き、相承けて受くる所以辞することを「綬を解く」という。〔礼記、玉字で は印璽を帯びるのにも用いて、印綬という。官職を ものであった。のち表彰に綬を用いることが多い。 礼装用の蔽載につけるくみひも。漢以後に 声符は受。 「説文」一三上に「敵の維なり」

需 14 あまごい・もとめる・まつジュ

票 亦

巫祝の形で、 大きでで、 雨と その人をまた優小上といい、〔説文〕に「儒、弱なとはその髡頭の人を請雨の儀礼に用いることをいう。 **焚巫のように巫を焚いて犠牲とすることがあり、需なゞの形であることからも知られる。請雨の儀礼には、** 需・儒は一系の字で、儒はこの系統の巫祝の階層か 実に作るものがあり、天とは顚 頂をあらわした人 而に彡を加えている形であること、また需の異文を 「罪、髡に至らざるものなり」といわれるように、 つの意がある。〔説文〕二下に「翌つなり。雨に遇いれの形で、雨請いをするもの。ゆえに需める、需会意 雨とにんろ。而は髡頭(まげなし)の ら起った。儒の主とするところが喪祝のことである り」という。耎は而の繁文である。而・耎・偄・ する。而が髡頭の人の形であることは、耏れ下が ひて進まず、 止まりて翌つなり」とし、字を而声と

その前身を示すものである。

じゅがく・じゅしゃ・やわらかジュ

を必要とするのであろう。 思想の成立には、何らかの意味での、宗教的な体験 うな巫祝の伝統のなかから、普遍的な人間の道を求 の考えかたで、墨子学派からみた当時の儒学は、そ 義は儒学が国家の正教となるほどの勢力をえたのち を以て、能くその身を濡ほす」とするが、これらの 能く人を服す。又、儒なるものは濡なり。先王の道 に「儒の言たる、優なり、柔なり。能く人を安んじ、 術士の稱なり」とあり、「礼記、儒行」の「鄭目録」 い司祭階級からは、極めて思弁的な荘子学派が出た。 めた。巫祝は神明の道にかかわるものであるが、高 るものが多いのも、そのゆえである。孔子はそのよ する葬儀屋であった。儒家の経典に喪葬儀礼に関す の〔節葬篇〕に指摘するように、富家の喪をあてに のであるから、儒という。〔説文〕八上に「柔なり。 級の巫祝。儒はその階層から起ったも 声符は需。 需は雨請いする下

樹 16 き・うえる・たてるジュ

鼓を撃って邪気を祓うことを意味する。樹芸(植えた耜の象に従うものがあり、農耕儀礼に関する字で、を樹の初文とするものである。卜文に、壴(鼓)とを樹の初文とするものである。卜文に、壴(鼓)と 總名なり」とし、重文として籀文の尌をあげる。 對 形声 六上に「木の生植するものの 声符は尌。〔説文〕 尌

る)の意より、すべてものを樹立すること、転じて 功を樹つ、党を樹つのように、 裘濡るるが如し」とは、その濡沢あるをいう。 溼(ぬれる)が字の本義。〔詩、鄭風、羔裘 鄭風、羔裘」「羔

シュウ

嬬

よわい・みこ・つま・そばめジュ

他にも及ぼして用いる。 善を樹つ、徳を樹つ、

<u>}</u> あつまる (シフ)

分の低い巫祝。〔説文〕一三下に「弱な

声符は需。需は雨請いする身

のではない。〔説文〕「人部に録する字は六文、 るが、それは器の蓋の形であり、三合の意によるも ゆる三合の形に従うものは、一例もない。 くす」という。会(會)・合など、これに従うとす 三者相合する意とし、「讀みて集の若を入れている」と 〔説文〕玉下に「三合なり」 い b

収 5 (收)。 おさめる・もつ・とらえるシュウ(シウ) ることが多い。中国では士夫の妻を孺人という。 のとみられる。「万葉」ではこの字を妻の意に用い

ちのみご・つま・たのしむジュ

る。もと儒に対して、女巫を嬬と称したものであろ こともあり、須は饗にして女須、女巫をいう字であり」とあって儒物の意とするが、字は須と通用するり」とあって儒物の意とするが、字は須と通用する

側妾などの意があるのも、女巫の一面を示すも

あり、 名で髪をくくり包みこむ形式のものである。 「儀礼、士冠礼、記〕に「夏收」の語があり、冠の 収束するものを收という。 縄をなう形。攴はそれを締める意。〔説文〕 従う。半三上は「樹料線するなり」と会意 旧字は收に作り、早と支とに すべて

〔礼記、曲 礼、下〕に、天子の妃を后、諸侯を夫人、 らい。 *******

用いる語である。児が親を慕うことを孺慕という。

成王をさす。身分にかかわらず

ざらんとす」とは、

り、稚子をいう。〔書、金縢〕「公將に孺子に利あら

る。〔説文〕一四下に「乳子なり」とあ

声符は需。需に懦弱の意があ

である。〔詩、小雅、常棣〕に「和樂し且つ孺し 士夫には孺人というとみえる。稚子や婦人をいう語

む」とあり、和楽する意にも用いる。

とらえる・とらわれびとシュウ(シウ)

うるおう・ぬれるジュ る。〔説文〕一一上に水名とするも、 でコーニ上こ水名とするも、濡声符は需。需に請雨の意があ

ジュ

嬬

孺 濡

シュウ

 ∇

収(收)

囚

濡

Ŋ

大学で、大室においた。「周礼、比長」の「鄭注」に が、房囚の意。「書、武成」「箕子の囚を釋く」、 をようで、できるが、とあり、これを になった。「書」が、となり、 の人をいう。「説文」六下に「繋ぐなり」とあ が、できるが、とない。と にまった。「書」が、とない。 におった。「かし」とあ が、の人をいう。「説文」六下に「繋ぐなり」とあ が、の人をいう。「説文」六下に「繋ぐなり」とあ が、の人をいう。「説文」六下に「繋ぐなり」とあ ?}} 州 る。 棺中に死者のある形で、死の初文と思われる字であ 「圜土とは獄城なり」とみえ、他と隔絶するところ 死の初文、井は棺槨の形である。卜文と後の文字と まを棺中に収めるものが囚の形で、 あるから、人の始めて死する形ではない。屍体のま の間には、ときに字の声義の異なるものがある。 って、字形は囚に近いが、その文例から考えると、 をいう。卜文の字形に、井中に人をしるすものがあ 死は残骨を拝する形で、複葬の形式を示す字で す・しま シュウ (シウ) 川の州の形に象る。 すなわちのちの

道〕に「文王、倜然として、乃ち太公を州人より零あろう。〔墨子、 造野」「むかし傳説、北海の州、大きな辺裔の地に設けたのような辺裔の地に設けたの思うな辺裔の地に設けたのではないが、デルタ状の地形をいうものできところではないが、デルタ状の地形をいうものできところではないが、デルタ状の地形をいうもので げて、これを用ふ」というのは、太公望を魚釣の人 中居るべきを州といふ。水その旁を周繞す。重川の州の形に象る。〔説文〕一下に「水 に從ふ」とする。川中の州は、必ずしも人の居るべ 州渚に釣する人の意で州人と称したものと

とあり、水流によって自然に区画されている地域を 思われる。「淮南子、墜形訓」に「崑崙弱水の洲」 九州・州県などはその意である。

拍 ふね・ばん・うけだらいシュウ(シウ)

A I W

る賸は舟に従う形で、朕系統の字はみな同じ。前の初受は盤をもって授受する形である。人にものを賸ら、盤形は舟で示される。ものの授受には盤を用い、ら、盤形は舟で示される。ものの授受には盤を用い、板を合せて作った。刳り舟はまた盤と同形であるか 説話を加えている。[世本]と「易、繋辞伝、 出して舟(盤)に移す形。それで兪(艅の異文)はまた治癒の癒(癒)の初文は艅、余(針)で膿血をまた治癒の癒(癒)の初文は艅、余(針)で膿血を 文は病、病は盤で止(趾)を洗う形で、洗の初文。 の文とによる。舟は古くは刳り舟であったが、 を削りて楫と爲し、以て通ぜざるを濟す」と、起原 のままでなく、そのため原意のあらわれないことが 輸(輸)るの意となる。舟はこれらの字形では原形 し、「むかし共鼓・貨狄、木を刳りて舟と爲し、 舟の形に象る。〔説文〕ハ下に「船なり」と 盤形の器の形として用いられている。 のち 正 木

秀 ひいでる・はなさく・はなシュウ(シウ)

考

象形 から華を吐いている形である。〔説文〕七上に「上れまれ、 未教の穂が垂れ、花が咲いている形。 禾頭

> 穆・禿はみな象形にして、 ているが、秀は実の前、禿は実の後である。英華は 秀よりして実のり、その実ったものを穆という。穆 であるというが、「論語、子罕」に「秀でて實らざ 武帝の名は劉秀、その諱を避けたのである。[段注]**の諱なり」とあり、説解を加えていない。後漢の光が、 その秀のときのことであるから、秀英・秀麗・秀美 より実の脱したものを禿という。秀と禿と字形は似 に字を禾と人とに従う会意の字とし、人は実(米) の義を生じ、また人に移して秀逸・秀俊・優秀とい るものあるかな」というように、秀と実とは異なる またすべて卓抜秀偉のものをいう。禾・秀・ 一系の字である。

舸 あまねし シュウ (シウ)

での意をもつものでなく、知が周市の義の本字であいは周(周)を用いる。周は彫盾の象で、本来周には周(とあり、あまねくめぐることをいう。文献(なり)とあり、あまねくめぐることをいう。文献(なり) 人の形となるが、盥浴のときには皿の形に従う例で舟は概ね盤を示す字形であるから、それならば勹は [左伝]襄二十三年の華周を、 [説苑、 立節] に華舟 廖 に作る。早くから通用した字であろう。 あり、それとも定めがたい。舟と周とは声が近く、 く、字の初形を確かめがたい。古い造字法によれば る。金文にこの字がみえず、漢碑の類にも用例がな ものの意がある。〔説文〕九上に「正会意」「と舟とに従う。 †にめぐる

周。(周)。 国名・めぐる・あまねしシュウ(シウ)

周 田 開

る形、 を加えた形で示されており、楯面 の解こすぎない。金文図象には、方形の盾に彫 飾文・金文の字形は用に従うものではなく、全く望文 則ち密なり」とことばがゆきとどく意とするが、 意とする。〔段注〕に「善くその口を用ふるときは、 「上に「密なり」と周密の意とし、字を用・口の会 り、のち祝禱の器を加えるようになった。周の国号 会意 の解にすぎない。金文図象には、方形の盾に彫 の字で、卜辞には圏侯の名であらわれる。〔説文〕 口はID、祝禱を収める器の形。もと囲形に作 題と口とに従う。題は方形の盾に文様のあ 周の図象

稠 密なるものの意がある。 周がいずる ×

なその文飾が全面にわたることをいう。その繁壮王に彫文を施したものを現という。周密・周できまいま える「周玉」は彫玉、「玄周戈」は玄彫文である。周・彫・畫・劃は一系の字に属している。金文にみ その武威を示す固有の盾をもって、自己を表示した 縟なるものを稠・綢という。周到・周緻はゆきといえ ている。その彫文の美を彫(彫)という。 を加えた形であり、文様を区画する劃もそれから出 のであろう。 に辛器を樹て、その賞罰権を誇示したのと同じく、 その方形の盾をもって国号とするのは、裔が台座 周旋は世話する意。周は一周、周年は一年 畫(画)は周に彫文を加える筆(聿) すなわち

周甲は甲子一周にして六十歳となるをいう。

8 みたまや・たっとい・むねシュウ・ソウ

偷偷

を宗旨、 念を加えて、百姓の宗という意味に転じたものであ の祭器を宗彝という。周のことを宗周というのは、宗室・宗子・宗祠・宗社・多宗などの語がみえ、そ 霊の祭祀が盛んであった。周に至って宗法制が行な小宗、また大乙の宗・祖乙の宗などの名がみえ、祖小宗、また大 のを宗師・宗匠といい、教学の本旨のあるところ もと宗廟のある周都の意であるが、のち宗法的な観 それで宗は宗廟の意となる。ト辞に大宗・中宗・ 祭るときの祭卓の形。廟中の祭卓には神位を奉じた。 の意よりの転義である。 われ、本宗・小宗の本支の制が定まった。金文には また徳望・技能をもって人の崇敬を受けるも 一と示とに従う。 信教の上では宗旨という。みな本宗・宗室 宀は廟屋の形。示は神を*

いわあな・くき

抄」にこの字を録し、「和名、 この字はみえない。 意がある。「説文」九下に「山に穴あるなり」とい 心無くして以て岫を出づ」の句がある。 [和名 類聚心無くして以て岫を出づ」の句がある。 [和名 類聚この字はみえない。陶淵明の [帰去来の辞] に「雲 う。〔爾雅、釈山〕にその訓がみえるが先秦の文に 声がある。由にはまた中空の 声符は由。由に袖 久岐」という。 [景

> は洩れたるところの意の古語である。 行紀、注〕〔新撰字鏡〕にもみえる古訓で、 「くき」

員 9 ささやく・そしる

H さまをいう。咠がその初文である。 して「謀りて人を讃せんと欲す」とは、 雅、巷伯〕は讚人を刺る詩であるが、「緝々酈々と舌の聲なり」とあり、もと擬声語である。〔詩、小 会意 に「聶語なり」「玉篇」に「咠々、 口と耳とに従う。〔説文〕ニ上 その密謀の

拾 9 ひろう・あつめる・ゆごてシュウ (シフ)・ショウ (セフ)

あがること。「礼記、曲礼、上」に「級(階)を拾続収・拾遺のほか、「拾談」は一段ずつ足をそろえて「まいま」といる。「私記」をいる。 音が転じたものであろう。拾きの音があるように、音が転じたものであろう。拾 の神社では、なおその法による。 るに足を聚め、連歩して以て上る」とあり、 会意説をとる人もあるが、原母の恵に 形声 声符は合。声が合わないので わが国

す・しま シュウ (シウ)

形声 にいう。 県の字と区別して用いる。また大陸を五大洲のよう 声符は州。もと州の俗字であるが、 のち州

秋 「龝」 あき・みのり・ときシュウ(シウ)

26

胍 糠 强 领

> 場 臭。〔臭〕』 [前の出師の表]に「これ誠に危急存亡の秋なり」 籍文の字形がみえるが、季名であるのかどうか定辞中に四季の名を確かめうる資料がなく、漢碑に しと、 会意 や衰残の意を含めて用いることが多い。 あるから、最も重要な時期を秋という。諸葛亮のあるから、最も重要な時期を秋という。諸葛亮の り」のようにいう。豊凶は人の死命を制するもので に「農、田に服し穡に力むるときは、乃ち亦秋あめがたい。古くは穀熟の意に用い、〔書、殷庚、上〕 う。龜の形に写した字は、虫害をなす螟螣(ずいむ めるときであるから、秋髪・秋士・秋思など、 の句がある。秋は清爽にして寂寞、万物が衰えはじ る。〔説文〕七上に「禾穀熟するなり」とする。ト はくいむし)の形で、それを火で焼く形であ 正字は穮に作り、禾と龜(亀) におい・くさいシュウ(シウ)・キュウ(キウ) と火とに従

推

と芳臭を分たずに用い、〔易、繋辞伝、上〕「その臭、ぎてその迹を知るものは犬なり」という。臭は、もづかぬようである。〔説文〕一〇上に「禽走りて、臭が、 自(鼻)の字にかえた。臭・器(器)・類(類)は をもって臭の字とするが、 これをもって字形の統一を成就したと考えたのであ すべて犬に従う字であるが、いまはみな大に改めて 犬の鼻は臭覚の極めて鋭いものであるから、犬の鼻 旧字は臭に作り、自と犬とに従う。 いまの常用字は、 自は鼻 大なる

意となり、人に移して臭聞・臭名のようにいう。は香嚢。のち香に対して臭といい、臭腥・臭穢の蘭の如し」は芳香、〔礼記、内則〕「皆容臭を帶ぶら歳の如し」は芳香、〔礼記、内則〕「皆容臭を帶ぶらぬの」という。

色 9 ふるさけ・かしら

東形 西は梅酒の形。その上に八形 東京 である。「説文」一四下に「經濟なり」とは久酒の義。「方面の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なり。昔酒の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なり。昔酒の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なり。昔酒の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なり。昔酒の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なり。昔酒の名があり、注に「事酒は則ち今の醒酒なるものなり」という。酒官の長を大貧といい、「礼記、月令」「仲冬の月、則ち大貧に命ず」とは、冬酸の酒の用意を命ずるのである。酒正や大貧は官府の酒を掌るもを命ずるのである。酒正や大貧は官府の酒を掌るものであった。酒は祭事に用いることが多く、貧もそのために醸造するもので、その成るや大性を加えてからに醸造するもので、その成るや大性を加えてのために醸造するもので、その成るや大性を加えてのために醸造するもので、その成るや大性を加えてのために醸造するもので、その成るや大性を加えてからに醸造するもので、その成るや大性を加えている。 首案 (蛮族の長い)に関いる形を示している。 首案 (蛮族の長い)に関いるものはおそらく仮借。金文には虜 6の字を響いるものはおそらく仮借。金文には虜 6の字を響いるものないう。首とは、外族う。それが虜首の字の本字であろう。首とは、外族う。

修 10 きよめる・おさめる・よい

牌。 传

会意 (物と)とに従う。(がは人の後ろから水をかけて洗う形で、沐する意。いわゆるみそぎ。みそぎは文彩の意をもつ記号的な文字。修成して身を清め、その清らかさを示す)を加える。)とは文彩の意。[段注]に「その塵垢を去らざれば、これを修と謂ふべからず」とするが、修は祭事にのぞむための修被で、縟彩を加えることをいうものではない。修献・修禊が字の本義。それより修身・修飾の意となり、修治・修正・修理の意に用い身・修飾の意となり、修治・修正・修理の意に用いり、「中庸」「その宗廟を修む」というように、修辞・修撰の意となる。「左伝」昭三年「宋の盟を修辞・修撰の意となる。「左伝」昭三年「宋の盟を修む」、「中庸」「その宗廟を修む」というように、

袖 10 「褎」 15 そで (シウ)

形声 声符は由。由に岫の を悪いていたことが知られる。 を用いていたことが知られる。 を用いていたことが知られる。 を記義的な関連があろう。 をは、歌衣服)に 神は漢以後の文献にみえる。 「歌名、釈衣服」に 神は一の神 を用いていたことが知られる。

終日【終】日 おわる

声符は冬(冬)。冬は古音終。糸のま

を対して、終ったとは永遠の意である。 を持なり、形声字の終が作られた。[説文] ニュに「縁なり、形声字の終が作られた。[説文] ニュに「縁続なり」とあり、糸を締める意とするが、糸の末端を枯んで止めること、すなわち終結の意である。またすべてことの終るをいい、終竟・終極・終熄、またすべてことの終るをいい、終竟・終極・終熄、またすべてことの終るをいい、終竟・終極・終熄、またすべてことの終るをいい、終竟・終極・終熄、またすべてことの終るをいい、その全体を始終たまで、表示により、表示という。終天とは永遠の意である。

差 1 すすめる・たべもの・はじ

第4表更以 14 48。 重

羽白 11 【羽白】 11 ならう・なれる・かさねる

いて呪詛を加える方法で、譜の初文である。これに約のしかたを示し、友の初文、贊は両簪を日上にお 味をもつ行為である。たとえば脊は日の上に両手 皆・習・簪はそれぞれその呪能にはたらきかける意 〔説文〕が白部にあげている文字は、皆・魯・者・ 字で、翫習・褻翫の義となる。〔説文〕四上に「數激し、そのような行為をくりかえすことを意味する 意ともなるのであろう。慴が習声に従うのも、関連 とがあまりに頻繁にすぎて、かえって神を褻翫するとがあまりに頻繁にすぎて、かえって神を褻翫する その祝禱の成就を求めることであろうが、 よっていえば、習は日上に羽をおいてこれで摺り、 おいて誓い、神霊を宥和する意味をもつ同族間の盟 らは何れも祝禱の器に対して加えられているもので、 に皆・啓・譬(曹)・替(替)・替などがあり、それったと思われる。日の上に両形をならべる形のものったと思われる。日の上に両形をならべる形のもの るから、習も白に従うものでなく、日に従う字であ 智など、百を除いて他はすべてもと曰に従う字であ 気息が白くなるという話は、聞いたことがない。 急となって白くなると会意説を述べているが、鳥の それで〔通訓定声〕には、数、飛ぶときは、気息が 器。この器の上を羽で摺って、その祝禱の呪能を刺 ^飛ぶなり」とし、 あることと思われる。すべて積習のことを習とい 羽(羽)と曰とに従う。曰は祝禱を収める 白声とするが、声が合わない。 そのこ Ě

神習の意となり、久しい間に習弊を生ずることとなる。習の古い字形がなくて、確かめがたいところもあるが、この系統の字形構造の意味に一貫性があり、その造字の意を推測しうるのである。羽は呪飾としその造字の意を推測しうるのである。羽は呪飾としれ、繋がり、されて習慣の意となり、習用することによって、非、それで習慣の意となり、習用することによって、非、

脩 1 ほじし・おさめる・ながい

减脂 循

形声 声符は他。ほした肉で、儀礼のとき贈答用に用いる。〔説文〕四下に「脯なり」とあり、精字に用いる。〔説文〕四下に「脯なり」とあり、内を薄く切って乾し、蓋柱を加えたもの。礼物として贈るとき、これを束ねて用いるので束(修)、心づ高い、は束脩のなごりで、もとはあわびなどの貝を用いたが、いまは印刷ですませていう。わが国の「のし」は束脩のなごりで、もとはあわびなどの貝を用いたが、いまは印刷ですませていう。わが国の「のし」は束脩のなごりで、もとはあわびなどの貝を用いたが、いまは印刷ですませている。他はみぞぎを意味する字。他に従う修・脩・條(条)・滌の音は近く、みな祭事の修潔に関する字である。條は修う線に用いる長い束ねた枝の形で、脩はその意味の音は近く、みな祭事の修潔に関する字である。條は修う線に用いる長い束ねた枝の形で、脩はその意味の音は近く、みな祭事の修潔に関する字である。條に修う線に用いる長い束ねた枝の形で、脩はその意味が、まないですませている。條は、たいで、後、水にで、ないで、ないの目のです。他に従うを承げるところがあろう。来の歌陽(は、一般)と、おいまはいる。また〔周礼、僧人、注)に「脩、讀んで自といふ」とあり、脩にも他の音があったことが知られる。

週11【週】12 めぐる (シウ)

週刊・週報のように用いる。その俗字。いま七日一週の字に用いることが多く、り、一めぐりすることをいう。周がその初文。週は形声 声符は周(周)。周に周密・周回の意があ

口口 2 シュウ (シフ)

就 2 なる・つく・おわる

大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完成。 大性の意。この名の別族門にあたる。大は大性。 類基として埋めることもあり、落成にあたって繋礼を行ない、性血を灌ぐこともある。この字においては、おそらく繋を灌ぐこともある。この字においては、おそらく繋を灌ぐこともある。この字においては、おそらく繋を灌ぐこともある。この字においては、おそらく繋を灌ぐこともある。この名を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。この礼を行なうことによって、建物は完大性の意。

シュウ

りかかる意。[礼記、孔子間居]「日に就り月に將常武」「三事、緒に就く」とは、行政的な活動にといる。 む」とは、ことの進捗する意である。 位・就学・就業・就職のようにいう。〔詩、大雅、 成する。成就によってことが開始されるので、就

衆12 (衆)12 (既)11 多くの人・おおい

60 羽扇 0行品州 当份

〔師旂鼎〕 には、師旂(人名)の衆僕が戦争を忌避 る例がある。西周期の金文では身分的呼称となり、に服した。卜辞には衆を農耕、また軍役に用いてい 耕作者は、農閑期に一定地区に邑居して、他の用務 衆は集合名詞で、もと耕作者を意味したようである。 導こうとしたもので、正しい文字学的方法ではない。 たのは、そのような字形解釈から、その奴隷制説を 郭沫若が、日下に多数の人をしるすのは、炎天下 それは日月の字に、実体のあるものとして点を加え □に従い、ときに□を日の形に作ることがあるが、 る。〔説文〕ハ上に「多なり」と衆多の意とし、目 下に三人の形を加えたもので、衆とは邑中の人であ 口は邑の外郭、邑はその中に人のいる形。衆は口の に労働する被搾取者たる奴隷の姿を示すものと解し て示すのと同じ意味であって、日に従う字ではない。 と人との会意とするが、字の初形ではない。ト文は 目と三人の形に従う。目は古くは口に作り、

> う。いま民衆のように連ねて用いるが、民は神の徒形初義が、そのころすでに忘れられていたのであろ衆がすでに目に従う形にかかれているのは、字の初 ちすべて衆多のものをいう。 する語。人は州人・庸人のようにその部族名でよば (農具)を庤へよ」の句がある。卜辞では人と相対 の連想があったのであろう。衆は農奴的な耕作者で、 な眼形の字で、数のようにその眼睛をやぶる字があ 隷として、その眼睛を失ったものであり、臣も大き ように農奴が提供されている。〔師宴設〕の字形に、 すものであるが、寇禾の賠償として、「衆一人」の るしており、また「晉鼎」は寇禾事件の顛末をしる れ、虜囚・生口などをいうものと思われる。衆はの る。衆が目に従う字形となるのは、民や臣の字形へ し、師旂がその責任者として処罰を受けたことをし 周頌、臣工」に「我が衆人に命ず 乃の錢縛

萩 かわらよもぎ・はぎシュウ(シウ)

るのと同例である。 花始めて發く」の句がある。萩をはぎにあてるのは 秋咲く花の意で、椿をつばき、柊をひいらぎと訓す いる。〔新撰万葉集〕の菅丞相の詩に「曉露鹿鳴、 はぎをいう。「類聚名養抄」に鹿鳴草の名をあげてを焼いて、室を祓うことがみえている。わが国ではを焼いて、室を祓うことがみえている。わが国ではがある。〔管子、禁蔵〕に、新造の室では三月に萩 という。かわらよもぎ。また楸に通じて用いることという。かわらよもぎ。また楸に俥り、「繭なり」「紫石をかえた字形に作り、「薫り」 形声 声符は秋。〔説文〕一下は秋の

> 集 「雧」28 あつまる・つどう・なるシュウ(シフ)

奮 亨 0

ごときも應(応)・膺と声義の関係をもつ字であるに成就の意が生れてくることも考えられる。鷹のにない。 経〕に就に作り、〔小雅、小旻〕の集を〔韓詩〕に 「よく殷の集せる大命を達せしむ」の集を、〔漢石 す」とあり、早くからその義に用いる。〔書、顧命」文においても〔毛公鼎〕「編天おほいに厥の命を集あり、「小雅、小旻)「是を用て集らず」、また金あり、「小雅、小旻)「是を用て集らず」、また金 る」というのが初義。「大雅、大明」「命すでに集るみなその形である。〔詩、唐風、鴇羽」「苞栩に集まなり」とあり、のち集の字を用いる。ト文・金文もなり」とあり、のち集の字を用いる。ト文・金文も 会意 就に作る。音の上で通用したともみられるが、古代 と思われる。 鳥の群集することを瑞祥とする観念があって、 においては鳥占によってことを決することも多く、 あり」、「小雅、小旻」「是を用て集らずる」というのが初義。「大雅、大明」「命 の枝に止まる形。〔説文〕四上に「群鳥木上に在る 正字は鎟に作り、群鳥が木に集まって、そ

廋 13 かくす・もとめるシュウ(シウ)・ソウ

んぞ廋さんや、人焉くんぞ廋さんや」とみえる。『廋っところを觀、その安んずるところを察せば、人焉くところを觀、その安んずるところを察せば、人焉くるが、その字には捜を用い、廋は隠匿する意に用いるが、その字には捜を用い、廋は隠匿する意に用いるが、その字には捜を用い、 形声 る意の字。それで廋は、室内を探索する形の字であ 声符は叟。叟は火燭を照らして物を探索す

語・廋辞とはなぞなぞをいう。

愁 うれえる シュウ (シウ)

て、色を作して對ふ」のように形容の語として用い、うに用いる。愀は〔礼記、哀公間〕「孔子愀然としうに用いる。愀は〔礼記、哀公問〕「孔子愀然として互訓。主として動詞、また愁思・愁苦・愁傷のよて互訓。主として動詞、また愁思・ 悄の音をもってよむ。 り」とあり、憂字条一○下に「愁ふるなり」とあっ ともにすこしく異なる。〔説文〕一〇下に「憂ふるな 形声 するものに愀があるが、愁とは声義 声符は秋。同じく秋を声符と

戢 13 おさめる・あつめる・やめるシュウ(シフ)

り」という。〔詩、大雅、公劉〕「戢めて用て光いを戢む」とあり、〔説文〕一二下に「兵を臧むるな。 に「緊むるなり」としている。 にせんことを思ふ」も、輯める意の用法で、[毛伝] ある。〔詩、周頌、時邁〕「載ち干戈ある。〔詩、周頌、時邁」「載ち干戈なかない。」とは、かないかない。

相13 かじ・かいシュウ(シフ)

手部一三上の「攉、引くなり」をその字としている の櫂なり ようである。長いものを櫂、短いものを楫という。 あらう・いばりシュウ(シウ)・ソウ(サウ) 」というも、〔説文〕には櫂の字がなく、 形声 ものの意がある。〔説文〕六上に「舟 声符は旨。旨にひらひら動く

昔

シュウ

戢 楫 溲 溼

葺 遒

酬(讀)

そのような擬声音をとる字であろう。溲器(便器) の意に用いるのも、おそらく擬声語であろう。 そぐことをいう。米をとぐ音を叟々といい、溲々は 「沃汏するなり」とあって、あらいそ 声符は叟。〔説文〕一一上に

溼 13 うるおう シュウ (シフ)

「原溼陰陽」の語がみえるが、それは原隰(低隰の「ツイヒール の字である。 野原)の意。 であろう。のち隰と通用し、〔石鼓文、鑾車石〕にであろう。のち隰と通用し、〔石鼓文、鑾をなるが絲に従う形であるのは、その水涯蚕室を示すものが絲に従う形であるのは、その水涯蚕室を示すもの を清め、そこで織った布で神衣・祭衣を作った。溼 れない。公桑蚕室のことは「礼記・祭養」に詳しくれない。公桑蚕室のことは「礼記・祭養」に詳しくはあるいは親蚕の儀礼を行なうところであるかも知はあるいは見い 糸を踏む形で、おそらく糸を漚う意であろう。溼宮う字形である。ト文に止を加えた形があり、それは 人、世婦の吉なるもの」が、親しく川に浴して蚕種 [散氏盤] に「溼田」の名がみえ、いずれも絲に従 に要領をえない説である。〔史懋壺〕に「溼宮」の。故に溼ふなり。 累の省聲なり」とするが、一向り。故に溼ふなり。 累の省聲なり」とするが、一向訓し、「水に従ふ。 一は覆ふ所以なり。覆ひて土あ訓し、「本に従ふ。 「説文」 一上に「幽溼なり」と形声 声符は竪。〔説文〕 一上に「幽溼なり」と形声 川に近く建てられた織殿で、「三宮の夫 ただ溼と隰とは字形も異なり、 **鑾車石**」に もと別

ふく・おおう・かさねるシュウ(シフ)

客を待つ」とあり、重要な建物には、牆も茅葺きに う。〔左伝〕襄三十一年「葺牆を繕完して、 した。茅葺きの家を、草屋という。 くなり」とあり、草を次第して屋根を狹くを葺と 精める意がある。〔説文〕 「下に「茨・形声」 声符は骨。「骨に小さな薄片を 声符は骨。骨に小さな薄片を ,以て賓

遒 せまる・つよい・かたい・うるわシュウ(シウ)・ユウ(イウ)

主(社)を作り、そこに酒を灌ぐ灌地の礼が行なわ祓する意の字であろう。重要な儀礼のときには、土 「令を宣ぶる官なり」とみえる。字は酋に従うが、胤征」「遺人、木鐸を以て路に徇ふ」の〔孔注〕にいるが、本義が明らかでないところがある。〔書、いるが、本義が明らかでないところがある。〔書、 れた。迫近・勁急の義は、その引伸義であろう。 あり、字義よりいえば、ともに酒をもって道路を修 したという。遒・逌はいずれも酒器の形に従う字で また逌人に作り、揚雄は逾軒使者として方言を採集 **歯は酒正の掌るところの熟酒である。金文の隣に** は酉に従う字形もあり、 とあり、迫急の意とする。また遒健・遺集の義に用 形が用いられている。〔説文〕ニ下に「迫るなり」 蠡 形声 に従うものであるが、遒の字 声符は酋。正字は酉

酬 13 (醻) 21 むくいる・こたえる・かえすシュウ(シウ)

(寿)声。〔説文〕に「獻酬して主人客に進むるなり」 **5** 形声 一四下は正字を蔭に作り、壽 声符は州。〔説文〕

また酬報のことから、いまでは賃銀のことをいう。 **獻・酢・隣の三者備わるを三爵という。賓・主が飲以、き、『詩、小雅、楚茨』に「獻醻交錯す」とあり、という。『詩、小雅、楚茨』に「獻醻交錯す」とあり、** をも応酬といい、恩誼に報いることを酬恩という。 み終って、さらに賓に酌む意である。のち応対のこと

殠 わるいにおいシュウ(シウ)・キュウ(キウ)

強烈なものであった。〔漢書、揚惲伝〕に「單于、〔説文〕四下に「腐气なり」とあり、その臭は殊に〔説文〕四下に「腐气なり」とあり、その臭は殊に 漢の美食好物を得て、以て殠惡と爲す」とみえ、す べて異臭は嫌悪すべきものとされた。 象。腐屍に臭気を生じたものをいう。形声 声符は臭(臭)。歩は残骨の

甃 14 いしだたみ・やねがわらシュウ(シウ)

んだ瓦をいう。石だたみや屋根にも用いる。 「井壁なり」とは、井戸の周囲をたたまな。 声符は秋。〔説文〕一三下に

聚 14 あつまる・むらシュウ・ジュ

言〕に「萃雑は集なり。東齊には聚といふ」とするのち人に限らず、ものを集積する意に用いる。[方 「會するなり」とあり、乑は衆。村落を聚落という。 が、聚集・聚斂・聚会のようにひろく用いる。 とる)の意がある。〔説文〕ハ上に 声符は取。取に会撮(あつめ

鬼14 かり・あつめるシュウ(シウ)

> 電

いい、蒐集の義とする。古くは春蒐、すなわち春行の語であろう。[爾雅、釈詁]に「蒐は聚なり」と「聲、茅蒐の如し」とあり、茜・墠・蒐は同じ系統では墠といい、[小雅、瞻彼洛夫、疏]によると、では墠といい、[小雅、瞻彼洛夫、疏]によると、では墠といい、[小雅、瞻彼洛夫、疏]によると、のであろう。異名が多く、斉では茜、「韓は聚なり」と 〔説文〕「下には会意の字とし、「茅蒐・茹藘(あか形声 声符は鬼。おそらく聞の省声であろう。 では、秋狩を蒐とする。 とあり、蒐狩が字の本義かと思われる。〔公羊説〕りて以て武事を習用するは、醴の大なるものなり」 を蒐と爲す」とみえ、〔穀梁伝〕昭八年「蒐狩に因 なわれる狩猟の名に用い、〔爾雅、釈天〕に「春獵 艸鬼に從ふ」とする。あかねぐさはまた地血ともい ねぐさ)、人血の生ずるところ、以て絳を染むべし。

組15 糸をうむ・あつめる・おさめるシュウ (シフ)

H 意に用いる。 むべし」という。その糸を緝めるので、緝合・緝治〔詩、陳風、東門之池〕に「東門の池 以て麻を漚「績むなり」とあって、糸を水でゆるめてつむぐ意。 の意となり、すべて細小のものを会聚し、緝理する 形声 て多いものをいう。〔説文〕一三上に 声符は咠。咠はひらひらとし

増 15 きくいむし (イウ)

君侯の夫人を迎える祝頌の詩であるが、「領は蟾蟾いう。白くて長い虫である。〔詩、衞風、碩人」は、いう。白くて長い虫である。〔詩、衞風、碩人」は、いる。 た「螓首蛾眉 巧笑倩たり」という句もあって、その如し」と、そのえりもとの美しさを形容する。ま に似ている。 の美意識は、〔堤中納言物語〕の「蟲めづる姫君」 「蟷螂なり」とあって、 声符は脅。〔説文〕一三上に

輯 16 くるまのこし・あつめる・おさめるシュウ(シフ)

朝 散佚のものを拾集するのを輯佚といい、全体を案し、脣吻の和に急緩す」とあるのも、その意である。 安なるをいう。〔列子、湯問〕に「轡銜の際に齊輯の和輯なるなり」とあって、車の安定したさま、輯 じて次序するのを編輯という。 形声 集める意がある。「説文」「四上に「車 声符は咠。咠に小さなものを

螽 いなむし・ずいむしシュウ

う俗信をしるしている。。螽斯はばった。〔詩、周南、害のときには、魚子がみな蝗となって群飛するとい 外貌 重文として衆声の字を録する。陸璣の〔疏〕に、旱「蝗なり」、前条の蝗字下に「螽なり」とあって互訓。 螽斯〕は子孫の衆多なることを祝う詩である。 形声 は終の初文。〔説文〕一三下に 声符は冬(冬)。

醜 みにくい・わるい・はじる・たぐいシュウ(シウ)

呪詛の意。州に醜竅(尻の穴)の意があり、醜に***。と同声で、その義に通ずるところがあり、詶はに、その儀礼を行なうことをトするものであろう。 ……に醜すること虫るか」とは、その襲を祓うためい、「ここに雨ふらざるは、茲の邑に襲あるか。辞にその字を「醜すること虫り」のように動詞に用 はなく、字の本義は別にあると思われる。金文の図 むべきなり」とするが、人鬼はもと悪むべきもので と同字であった。〔説文〕九上に「悪形声 声符は酉(酉)。酉は62とも 事》 亞醜形図象 面蛮があり、満面に文身を施した。〔楚辞、招魂〕のない、縄屏・縄。毬という。〔唐書、南蛮伝〕に縄いる。「唐書、南蛮伝〕に縄いる。刺繍は、衣裳の他にも、これを器具の類にである。刺繍は、衣裳の他にも、これを器具の類に 書もまた聿と規とを字形のうちに含み、ただ畫の施 備はる、これを織と謂ふ」とみえる。繡は礼装用の「周礼、考工記」に「畫繪の事、五采を雜へ、五采頌の詩で、「献衣繡・裳」とその礼服の美盛をほめる。「詩、秦風、終南」は祝て刺繍を加える意とする。〔詩、秦風、終南〕は祝 に、南方の「雕題黑齒」というものがそれであろう すところは盾(田形の部分)で、従って画文・彫文 があった。繡と畫(画)とはその方法を異にするが、 衣裳に施し、天子の衣裳には十二章といわれる繡文

形をかく。亞は墓壙玄室の形でああり、亞(亜)字形の中に醜の字

象に「亞醜形」とよばれるものが

は、礼冠をつけて鬯酌するものの形であろう。

関する字であるらしく、鬼の部分 るから、その醜形は喪葬の儀礼に

飲20 「鮭」20 どじょう・うなぎ

「爾雅、注〕に泥鰌であるという。字はまた旁を習制〕にみえている。〔説文〕一下に鰌を録しており、 同じであろうという。 ごは語形が同じで、むなぎは蛇・虹の意の琉球語と 古語ではむなぎ、〔万葉〕にみえる。むなぎ・あな あるが、わが国ではこの字をいなだ(ぶりの幼魚)、 (習)・單(単)とするものもあり、鰍もその一体で かじか(渓流の小魚)、さらにうなぎの字に用いる。 脅声。鰌と鱣は、すでに「荀子、王 よう。 とき、 こまに しょくし ・ 一声符は秋。正字は鰌に作り、 ・ 一声符は秋。正字は鰌に作り、

徳齊し」は、おそらく儔の仮借義。訓義多く、

その

ろう。〔孟子、公孫五、下〕「いま天下、地醜しくろう。〔孟子、公孫五、下〕「いま天下、地醜しく 鬯酌によってその醜穢を祓うことを意味した字であ

も尻の意がある。図象の字がもし醜の初形とすれば、

由るところを確かめがたいものがある。

襲 かさねる・おそう・つぐ・きるシュウ(シフ)

きの筆(聿)と規(ぶんまわし)の形

声符は漸(粛)。肅は画くと

繡

ぬいとり・えぎぬシュウ(シウ)

Į.

・ という。 ・ とい 「讀みて沓の若くす」という音であり、字は会意となり。衣に從ひ、龖の省聲」とするが、龖二下はなり。衣に從ひ、龖の省聲」とするが、龖二下は一杯を左にしたる袴がが、一点が、一点が、一点が、一点が、一点が、 用いるのは、のちの用法である。 界に入り、同化することを意味した。襲取とは、そ 宗師〕「伏蔵これを得て以て气母に襲る」とは、こ〔左伝〕昭二十八年「故に天祿を襲く」、〔莊子、大統 こと、その衣が嗣襲(位をつぐ)の意をもつもので のような方法でこれを奪うことである。襲撃の意に の呪衣をつけることによってこれを承襲し、その世 を加えたのであろう。襲が上に重ねてきる衣である すべきである。死者の衣上に、呪飾としてその文様 上に襲衣するは不祥のこととされている。

響 23 こたえる・かたき・あたる・ひとしシュウ(シウ)

離

会意 が、錐も獄訟をなすときの要件である。また「磨ふ〔説文〕三上に「磨ふるなり」と訓し、錐声とする るなり」とは、普通の応対の語ではなく、 ら、讐とは当事者が獄訟のことを争う意である。 するときは自ら罰を受けるとする自己詛盟であるか贄として提出した鳥。言は神に誓約して、もし違背 雌と言とに従う。雌は当事者の双方から、

三上に「五彩備はるなり」とあり、五彩の糸をもっ 厳密に構成する意をもつものであろう。〔説文〕 -で、絵文のことに関する字である。細かい文様を、

であろう。***。 であろう。**。 であろう。**。 原・被告の自己詛盟、曹(簪)が両東、すなわち原・被告の提供する東矢鈞金と自己詛盟の日とから自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。仇讐(かたき)の自己詛盟の言から成る字である。 だされていた。 であろう。***。

京長 23 わし (シウ)・ジュ

取24 はしる (シウ)

ジュウ

一 2 ジュウ(ジフ)

•

形式である。 形式である。

什 4 サ人・あつまる・とお

会意 人と十とに従う。十人を一組 とする意。〔説文〕八上に「相什保するなり」という。五人を伍という。隣保の制が生れるなり」という。五人を伍という。隣保の制が生れてからの語である。また「詩」の〔雅〕〔頌〕十篇を合せて什とよび、詩篇を篇什という。また日常を合せて什とよび、詩篇を篇什という。また日常を合せて什とよび、詩篇を篇什という。十人を一組がない。十人を一組になった。

人4 けもののあしあと (キウ)

相まつわる形。〔説文〕一四下に「獸足、会意 九と厶とに従う。大小の虫の

地を磔むなり。象形にして、九臀」と象形・形声の解をなし、また「爾雅、釈獣」の文を引いて「その深をあげている。もし蹂の異文ならば九声とするのは疑うべく、また公を獣迹の意に用いる例もない。公・蹂はおそらく別字別義。公は二虫相合する形で、名・蹂はおそらく別字別義。公は二虫相合する形で、名・蹂はおそらく別字別義。公は二虫相合する形で、名・蹂ばおそらく別字別義。公は二虫相合する形で、名・蹂ばおそらく別字別義。公は二虫相合する形で、名・ないら、ない。

十 4 にじゅう (ジフ)

指事 算具に用いる縦の木の形。〔説文〕三上に「二十、丼せたるなり」とあり、縦の算木を二本ならべた形。三十・四十までは、この方法で数える。(漢石経、論語〕や古文系の典籍は、二十をみな廿としるしている。

十 5 しる・なみだ しる・なみだ

内 5 【九】4 がュウ(ジウ)

充 6 みちる・あてる・こえる

戎 6 兵器・いくさ・えびす

"并"我称我

金文は戈と于とに従い、于を戈身に結びつけているふ」とするが、卜文・金文の字形と異なる。卜文・篆の字形は甲に従う形に作り、「兵なり。戈甲に從篆の字形は甲に従う形に作り、「兵なり。戈甲に從をで、兵器・軍事を示す。[説文]二下にあげる小せて、兵器・軍事を示す。[説文音

ものもあり、合せて一組の武器とする意。それで軍事をいい、金文に戎工・戎攻・戎役・戎兵などの語がある。また「谷甲紀」に戎狄(異民族)の意に用い、「္
、 このではつい。 一次の辞なる韓宗」という語があって、 顕羌は自らを戎と称している。おそらく羌族出自のものであろう。戎を西戎のように四夷の護称とするのはのちのことで、春秋期には中原になお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎や夷がいたのである。[詩、『賈頌、烈なお多くの戎功を念へ』、「大雅、総】「龙磯の石くという三ない。

住っ【住】マ すむ・とどまる

ル上 形声 声符は主 (主)。主は灯蓋の にみえず、六朝頃より用いられる字である。主は 住であるから停止するものの意があり、老寰を防ぐ ことを住嚢という。「水経、肥水注」に、方術の徒 八公が悉く竜形となって、人を驚かせた話がみえる。

子 9 「暖り」25 やわらか ジュウ (ジウ)・ニュウ

くす」とあり、おそらく櫦の省変の字であろう。そす」とあり、おそらく櫦の省変の字であるう。 高部九上に「脜、面和するなり。讀みて柔の若でなく、これを柔和のように用いるのは仮借義であでなく、これを柔和のように用いるのは仮借義である。 首部九上に「脜、面和するなり。讀みて柔の若でなく、これを柔和のように用いるのは仮借義である。 首部九上に「脜、面和するなり。讀みて柔の字に鱫を用いる。 首は酒器。その直酒を酌んで柔の字に鱫を用いる。 首は酒器。その直酒を酌んで柔の字に鱫を用いる。 首は酒器。その直酒を酌んで柔の字に鱫を用いる。 首は酒器。

重 9 おもい・かさなる

意念 東と土とに従う。東は東の初文でその象形[説文] ハ上に「厚きなり」と訓し、「五に從ひ、東でいうも字形と合わず、字は明らかに橐の下に対かるものであり、その括橐の部分に、穀を入れるはかるものであり、その括橐の部分に、穀を入れる口を加えた字は量。ここに穀を入れて、その重量をはかる。重はもと穀の重さを量る意の字で、重量をいい、これを重圧・重層・重累・重宝・再重などのいい、これを重圧・重層・重累・重宝・再重などのに用いるのは、みな引伸の義である。

従10【從】11 したがう

水引 新 於 於 於 於 於 於 於 於 於

ジュウ 内[公] 充 戎 住[住] 柔[體] 重 従[從]

る意に用いることが多い。 る意に用いることが多い。 る意に用いることが多い。。 を意じてある。軍事や祭事に随行・随従するが、ト文・金文の字形は从、のち従の字形となけるが、ト文・金文の字形は从、のち従の字形とない。 とし、聴許の意とする。また従八上について は「隨行するなり。 差人从とに従う。 人は従 は「随行するなり。 差人从とに従う。 人は従 は、随行するなり。 差人人とに従う。 人は従

渋 11 【澁】15 【咖啡】14 しぶる・しぶい

会意 正字の置は両止が上下相対う 所収 形。刃は止の倒形、止はあし。彼より し来たり、此より両止が向かって、双方相対して 進みえない形であるから、洗いが 進みえない形であるから、洗いが 進みえない形であるから、洗いが できるなり」とあ り、進退の自由でないことをいう。進退のみでなく、 さる、造のよびないがである。 とあり、とあり、とあり、とあり、とあり、 ででて行動や状態の自由円滑でないことをいう。い すべて行動や状態の自由円滑でないことをいう。い すべて行動や状態の自由円滑でないことをいう。い

採12 もむ・ためる・やわらげる

「詩、大雅、崧高」に「萬邦を揉ぐ」の句がある。 木のみでなく、革を柔らかにすることを揉革という。 入りまじることを雑揉、また揉紛のようにいう。 揉す、揉ます。揉輪は車輪を作ること。やわらげて 揉り、揉ます。揉輪は車輪を作ること。やわらげて 揉り、揉ます。揉輪は車輪を作ること。、探は という。

純 12 けおり・ねりいと

形声 声符は戎。もとは細い布、よく練った糸を

がで、その語の連想がはたらいているようである。 級・縦の意に用いられる。裘 毛の状態を蒙 戎という銭・縦の意に用いられる。裘 毛の状態を蒙 戎という

金 14 てっぽう

ものを砲、小なるものを銃という。が発明されて、その名に転用された。火器の大なる斧の柄にさしこむ穴をいうのが原義である。のち銃斧の柄にさしこむ穴をいうのが原義である。のち銃形声 声符は充。[玉篇]に「翌なり」とあり、

獣 16 (獣) 19 ジュゥ (ジゥ)



のを獣という。狩猟の対象となるものである。 を獣という。狩猟の対象となるものである。 まはびじょう いまが (発達を) するに、それ一牛を獣 (狩) するに、それ一件を獣 (狩) するに、それ一件を獣 (狩) するに、下乙(祖 (本) (祖) は若とせざるか」「丁卯貞ふ。それ父丁と称が、 (祖) は若とせざるか」「丁卯貞ふ。それ父丁と称が、 (対) するに、下乙(祖 (本) は若とせざるか」である。 まは丁巳(の日)において獣 (狩) するに、下乙(祖 (本) は若とせざるか」である。

縦16 【縦】17 だて・ゆるす・ほしいまま

大国が和協する政策を連衡(横)とよんだ。 一三上に「緩やかなり」とするが、もと縦糸の状態をいう語であろう。また「一に曰く、含つなり」とをいう語であろう。また「一に曰く、含つなり」とをいう語であろう。また「一に曰く、含つなり」とをいう語であろう。また「一に曰く、含つなり」とをいう語であろう。また「一に曰く、含つなり」とをいう語である。「説文」とは、一般に対して、一般に対し、一般に対し、一般に対して、一般に対し、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、一般に対して、他のは、他のは対し、対し、一般に対して、他のは対し、対し、対し、、他のは対し、対し、、他のは、他のは、対し、他のは、対し、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、対し、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他のは、他

跳 6 「去」 4 ぶむ・いねふみ

新の作業をいう。古くから用いられている字である。 「獣の足、地を踩むなり」とする。 足でふみあらすことを踩藉・蹂躙という。〔詩、大 とでふみあらすことを踩藉・蹂躙という。〔詩、大 となる。 となる。 ことである。 ことでな。 ことでなる。 ことでなる。 ことでな。 ことでなる。 ことでな。 ことでな。 ことでな

正篆の字形は、夕と丸とに従う。夕を奉ず

10

万

6

つとめて・

つとに・はやい

シュク

叔 8 しろい・わかい

相相 知為

ない。金文や〔詩〕に「夙夕」「夙夜」の語が多くを拝する形で、夙早(よあけ)の意となる。〔説文〕を拝する形で、夙早(よあけ)の意となる。〔説文〕を拝する形で、夙早(よあけ)の意となる。〔説文〕を拝する形である。ト文を本来の字形とすれば、それは月る形である。タは卜文では月、金文では肉ともみえる形である。タは卜文では月、金文では肉ともみえる形である。タは卜文では月、金文では肉ともみえる形である。タは卜文では月、金文では肉ともみえ

みえ、みな晨暮の意で、「夙夜を敬む」「夙夕を敬

意。不弔は不淑で、人の死を不淑という。 は、「おいな」の「不弔昊天」は「不淑なる昊天」の、「不弔昊天」は「不淑なる昊天」の、「不弔昊天」は「不淑なる昊天」の、「おいな」の「不弔昊天」は「不淑なる」で、

祝り【祝】10 いのる・はより

旅客玩。 高头

金意 示と兄とに従う。赤は祭卓。兄は祝禱の器院を奉ずるもので、祝禱する人をいう。[説文] - 上に「祭に贊詞を主るものなり」とあり、〔詩、小正、祭に贊詞を主るもので、現の奉ずるものである。 以て神に交はる者」とは、祝の奉ずるものである。以て神に交はる者」とは、祝の奉ずるものを口耳の口と解するものであるが、別は祝禱を収める器の形の以て神に交はる者」とは、祝の奉ずるものを口耳の口と解するものであるが、別は祝禱を収める器の形のは開・祝詞を主るもので、その最高の地位を大祝という。『智公は明保とよばれる周の聖職者であり、会職」を残している。また「禽殴」には周公父子の東征のことをしるすが、「周公集、(謀)り、禽親る」ともあって、积も祈る意。祝は祈るときは祝の音でよむが、积がおそらくその本字であろう。伯禽は周公家の長兄として、大祝の官に就いたもので、周公の家を嗣ぐものは明公・明保と称した。祝は保・史と並んで古代の最高の聖職者とされた。しかしその地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀が地位も王朝の興廃によって推移し、たとえば「儀がいる」には、「は、「は、「ないないる」といる。「は、「ないないる」といる。

大 6 まさかり・まめ

意より、

用いる形であり、夙早とは別義の字である。夙早の古文の二形は宿の初文。人が丙席(しきもの)をむ」とは、もと祭祀用語である。〔説文〕に録するむ」とは、もと祭祀用語である。〔説文〕に録する

| 夙成・夙達・夙敏の意となり、また宿と通

じて夙儒のようにいう。

シュク 夙 尗 叔 祝〔祝〕 白を意味する 叔の初文。〔説文〕セ下に「豆なり。 その下に刃光の放射するさまをしるす。 ・*** 鉞の頭部の形。上が鉞頭、

「祝ふ」は「齋ふ」、その人のために邪気を祓うこといるのは、わが国の「祝ふ」という語にあたる。 祀儀礼に与ることもなく、喪祝のことに従い、巫祝 る。祝は祝禱を本義とするが、祝頌・祝賀の意に用 のうち最も卑賤とされる職事に従うものとされてい

倏叫 すみ や カ ンュ ク か・たちまち・ひかる

字はまた條に作るものがあり、この方が形義をえや 策、楚策〕に『倏忽の閒』と倏忽の意とするが、きょり』とし、「讀みて叔の若くす」という。〔戦国 身を清める意の字。〔説文〕一〇上に「犬走ること疾 禳 に関する字であろう。 めるにはまた火を用いて祓うこともあった。もと祓すいようである。みそぎには水を用いるが、身を清すいようである。 形声 ある。 飲はみそぎ、水でみそぎをし、 声符は攸。攸に修・脩の声が

やどる・とのい・とどまるシュク

礼器」「三日宿す」とは、 また致斎の意があるのもそのゆえであり、〔礼記*、とするが、留宿して廟所を守るのが字の原義。宿に 文とみてよい。〔説文〕七下に宿を「止まるなり」 **価を夙字条七上に録してその異文とするが、宿の初** が廟中に宿直することを示す字である。〔説文〕は 宀と仮とに従う。宀は廟屋、西は丙席。<^^^ しゅく いわゆる斎宿すること三

り、次第に演繹してその義を生じたものである。 醒という。みな宿の原義である斎戒宿直の意よ

淑 「毘」の「毘」の よい・しとやか · 本本 岩 人

黼

の「不盡」は不淑にして人の死をいい、「沈児鐘」の「不盡」は不淑を不弔、淑穆を弔穆のようにいうれたと、かつ弔の字形を置・悪に作る。「卵散」ない、そういう関係ではない。金文に淑の初文をもが、そういう関係ではない。金文に淑の初文を 繳 (いぐるみ) り良ぎこえよう。「威義を思くす」は淑善の意である。弔の字形は「威義を思くす」は淑善の意である。弔の字形は 形声 惜する句であるが、旧説ではこの夫人が浮気をされ 不淑なる ここに之を如何せん」とは、その死を哀君子偕老〕は国君夫人の死を悼む送葬歌で、「子のよいな、それは「不淑なる昊天」の意。「鄘風、によむが、それは「不淑なる昊天」の意。「鄘風、 **盄・思のように形声字にして用いるものがある。文徽 (いぐるみ) の象形で仮借。淑字の義には、** し、〔段注〕に叔善の意を清湛よりの引伸の義とす一上に「清く湛むなり」として水の清澄なる意と たと解する。淑の初文は弔(繳)で仮借、盟・思は 節南山〕「不弔昊天」を「昊天に弔まれず」のよういなない。「不弔」の字のままで伝えられ、〔詩、小雅、献には「不弔」の字のままで伝えられ、〔詩、小雅、 声符は叔。叔に叔善の意がある。〔説文〕

> 粛 淑善の意の形声字、 (肅)12 淑もまた形声の字である。 つつしむ

0 肅 颇勇 表 未祝

の意である。〔王孫遺者鐘〕の「肅哲聖武」の粛は、前の初文であろう。〔師望鼎〕の「不妻」も、不粛計の初文であろう。〔師望鼎〕の「不妻」も、不粛計の初文であろう。〔師望鼎〕の「不妻」も、不孝にしばなく、筆をもって淵に臨むはずもない。卜辞にではなく、筆をもって淵に臨むはずもない。卜辞にではなく、筆をもって淵に臨むはずもない。卜辞に 「事を持すること振敬なるなり。聿の朏の上に在る敬・粛慎・厳粛などの意が生れる。〔説文〕三下に ることは、器物を聖化する所以であり、そこから粛付するための筆と規との形。そのような文様を加え 加えられている文様をいう。粛はそのような画文を 盾(周)を加えると畫(画)となるが、畫とは楯に等。 この下に文様のある方形の円形を画くのに用いる。この下に文様のある方形の 会意 ことができる。 の方法であったことは、肅・畫系統の字からも知る 正篆にいくらか近い字形である。古代の文様が聖化 に從ふ。戰々兢々たるなり」とするが、下は開の形 もと窓形に作り、いわゆる「ぶんまわし」の形で、 旧字は肅に作り、聿と規の形に従う。

西11 したむ・さけをこすシュク・ユウ(イウ)

会意 酒を漉すことを示し、 ことを示し、神酒として用い酉(酉)と艸とに従う。茅で雪

無し」とあり、楚もそのことを認め「豊保給せざらの貢する包茅入らず、王祭に共せず、以て酒を縮すの上の塞なり」という。〔左伝〕僖四年の城 濮の戦略した。 第66年代が楚を問責する条項のうちに、「爾の上の塞なり」という。〔左伝〕僖四年の城 濮の戦略(そ)を、 酒のことを示す字形とみられる。文に酉の旁に束茅を奉ずるような字形があり、 とき、蕭茅に酒を灌ぎ、これで祭場を清めた。 師〕「祭社蕭茅」のように蕭字をも用いる。裸鬯のんや」と対えている。縮は茜の仮借字。[周礼、町んや」と対えている。縮は茜の仮借字。[周礼、町ん 歌くるに象るなり」とし、また「一に曰く、 歌くるに象るなり」とし、また「一に日く、茜は楹からるに象るなり」とし、また「一に日く、茜はなを加へ、鬯酒を灌ぐ。是を茜と爲す。神のこれを多い。 『説文』一四下に「禮、祭るに茅を束ねて課主』る。『説文』一四下に「禮、祭るに茅を束ねて課主』

粥 かゆ シュク・イク (ヰク)

施すところを粥廠といい、粥養の意。粥飯僧とは下に鬲を加えて、繋に作ることもある。粥を貧民に下。 粥の食」の簡はこいかゆ、粥はうすいかゆである。 米を炊く意。かゆをいう。[礼記、檀弓、上]「饘 会意 大食無能の僧、 米と明とに従う。明は烹炊のときの湯気で、 ごくつぶしをいう。

まシュ め*っ*

で、その声符に特別の意味があるとはしがたい。 その字は鉞頭の形に、下に放射する光を加えたもの 形声 という。〔説文〕セドは未を菽の初文としているが、 「菽を啜り水を飲む」とは、極貧の生活をいう。 白の意をもつ、叔の初文。艸部の字は概ね形声 声符は叔。大豆をはじめ、豆類をすべて菽

> 踧 おどろく・ つつしむ

声義の異なる用法である。 〔伝〕「踧々は平易なり」とある訓によるが、それは

縮 ちぢむ・たて・ひたすシュク

蹙 せまる・ちぢまる・しかめるシュク・セキ

とは、 「孟子、梁恵王、下」「擧首を疾ましめ、額を蹙む」ることをいう。縮・蹴と声義の近い字である。なり」とあり、追いつかれて窮迫することをいう。 躛 苦悩哀痛する意。慽に通じて憂慽の意がある。 形声 声符は戚。〔説文〕ニ下に「迫

蹈 足がせまる・ちぢまるシュク

シュク

粥

菽

踧

縮 蹙 蹜 儵

蹴

ジ

ュク

蹙 と声義の通ずる字である。****、つき従うような歩きかたをいう。**** 党」「足路々として循ふこと有るが如し」とかり、「いっぱっぱっぱっぱいない」という。「論語、郷形声 声符は客。存に縮の意がある。「論語、郷形声

19 あおぐろ・たちまちシュク

る。 子、『帝王』に、南海の帝儵と、北海の帝忽とが、く、ほとんど倏と。(たちまち)の意に用いる。〔荘 たところ、七日にして渾沌が死んだという話をのせ 七竅(穴)を与えようと相談し、 色を發するものなり」というも、その義の用例はな 央の神渾沌に報いようとして、 分別智が真智を殺すというたとえである。 「説文」一〇上に「青黑の繪にして、 形声 声符は攸。攸に倏の声がある。 一日に一竅を穿っ 人間と同じように 白

蹴 ふむ・ける (シウ)

上」「會西、蹴然として曰く」、「礼記、哀公問」「孔子を改めることを蹴然といい、「孟子、公孫丑、つける、蹴るというはげしい動作に用いる。急に様つける、蹴るというはげしい動作に用いる。急に様 蹴然として席を避けて曰く」のように用いる。 形声 むなり」と足でふむ意とするが、 声符は就。〔説文〕ニ下に「躡 公孫丑、 ふみ

ジュク

郭1 [朝]20 にジるユ a・たれ・なんぞ 1ク

て行なわれるものであった。のち、秫の義に用いら

れ、朮酒とはもちあわで作られた酒をいう。

島

用いるのは、声の仮借である。 問詞「たれ・なに・いづくんぞ・なんぞ」のように 形で、献享する意。すべて醇熟するものをいう。疑 「食飪なり」とし、臺声とする。凡はものを奉ずる は烹飪の器。それで羊肉を煮る意。〔説文〕三下に 正字は朝に作り、髙と羊と丸とに従う。書

塾 14 門のわきの室・まなびやジュク

に塾あり」とみえる。後進を教えるための共同的な をいう。〔礼記、学記〕「古の教ふるものは、家ごと などの儀礼を行なうのに用い、さらに学習のところ みえるものであるが、のち室を設けて冠礼(元服) 義塾という。 形声 に「門側の堂なり」という。古くは基 周頌、絲衣」「堂より基に狙く」と 声符は孰。〔説文新附〕一三下

熟 15 にジュ ク

[論語、郷党]に「君、腥(生肉)を賜ふときは、ものが熟である。[説文]にはこの字を収めない。 読・熟慮のように用いる。 すべて習熟する意に用い、熟計・熟視・熟達・熟 熟せず」として、その宰夫が殺された話を載せる。 年に「宰夫(料理人)、熊蹯(熊の掌の肉)を腼て 必ず熟してこれを薦む」とあり、また〔左伝〕宣二 声符は孰。 孰は熟の初文。孰に火を加えた

シュツ

出 5 でシュッ ゆく・だす・あらわれる。スイ(スヰ)

戌

Ų

下に祝禱の器の形である日を加えているものがあり、文・金文の字形は明らかに趾形に作る。ときにそのなり」と、草木の伸張する象とするが、トなど。艸木の益滋して、上に出達するにた。 意があり、 納の意に用い、行為については出処進退の意となり、 われるものである。出行の意より、すべて出入・出 れたのであろう。わが国では「馬のはなむけ」とい 出行のときに、これを祓い祈る祖道の儀礼が行なわ 仏教では俗世を棄てることをいう。出身にも棄生の 卓出挺発の意となる。出世とは立身の意であるが、 歩行を示す止のかかとの部分に、 また出仕の意がある。 かかとの

ジュツ

朮 5 たたりをなすけもの・もちあわジュツ

R 呪術をいう字である。それは道路の呪儀と 象形 (述)・術(術)はいずれもこの字形に 呪霊をもつ獣の形。述

> 术 く成り、陽下りて地に入るなり。五行は、土は戊に四下に「威ぶるなり。九月、陽气微にして萬物、畢と、彼の刃部を、複線にしるす形。〔説文〕一 。战战战

加 8 つつしむ・うれえる・あわれむジュツ

は関係がない。

が、卜文・金文の形は斧鉞の象、剝削に用いる器で

生じ、戌に盛んなり。戊の一を含むに從ふ」とする

ある。十二支の名に用いるのは仮借で、字の本義と

凇

敬卹(つつしむ)することを本義とする。 盟祀を敬卹せよ」のように、盟祀のことに関してて、以てその祭祀盟祀を卹め」、「邾公銓・鐘」「用でて、以てその祭祀盟祀を卹め」、「邾公銓・鐘」「用の療療を勝くをした。」、「邾公等をしている」、「邾公等をしている ある。〔師寰殿〕に「師寰よ、虔みて彖(墜)さず、なり」と訓し、卩声とするが、字は会意の構造法でなり」と訓し、卩声とするが、字は会意の構造法で 会意 盟誓をつつしむ意を示す。□説文□五上に「憂ふる もの。その前に人の坐する形をそえたもので、 血と卩とに従う。血は盟誓のときに用いるけっせっ のち

少なり」というのは、のちの俗語に「些剛」「一卹」る)の意に用いる。〔説文〕にまた「一に曰く、鮮以て余殿が身を卹へよ」のように、憂卹(うれえば、安・安・安・東、観)喞に専けたり」「女、「女・安・とき」な はじめ敬卹、のち憂卹に用いる字である。 あったのであろうが、もとより字の本義ではない。 などの語があり、〔説文〕の当時その意味の俗語が

述。〔述〕。 したがう・のべるジュツ

碰

を〔墨子、非儒〕に「循べて作らず」に作る。述・術に作る」とあり、〔論語、述而〕「述べて作らず」「適は古の述字なり」、また〔日月、釈文〕に「本、「適は古の述字なり」、また〔日月、釈文〕に「本、 郷風、日月、伝〕に「遹は循なり」、〔孫炎注〕にいるなり」と訓し、形声とする。〔爾雅·釈詁〕〔詩、ふなり」と訓し、形声とする。〔爾雅·釈詁〕〔詩、安全を祈る呪的な行為をいう。〔説文〕ニ下に「循語・ において、呪霊をもつ獣である朮を用いて、行路のにおいて、呪霊をもつ獣である朮を用いて、行路の [小臣諫設]「述に東す」は遂の意。 柔も犠牲の獣 ぐ呪的な方法である。字はまた遂(遂)とも通じ、 を用いて、 る儀礼であり、また述・衞は、ともに呪霊をもつ獣 もって道路を按行することで、ともに道路を修祓す が、遹は矛を台座に樹てて巡行すること、循は盾を 術・遹・循は声義近く、相通ずる意をもつ字である 旧字は、朮と辵とに従う。辵は道路。道路 道路で呪詛を行ない、 ジュツ 述(述) 邪霊の侵すのを防

> 述の古義は、術の声義のうちに存している。 や〔孟子〕に古く諸侯述職の制があったとするが、 樂の文を知るものは、能く述ぶ」という。[左伝] のも、その義に外ならない。[礼記、楽記]に「禮ことであり、[論語、述而]「述べて作らず」ということであり、[論語、述而]「述べて作らず」という ものである。述義とは、古義に循ってその意を説く 述に「循ふなり」と訓するのは、その古義にかなう るもので、これによって循道・遂行の意が生れる。 することを意味する。述と遂は、道路の安全を求め を意味し、これを道路に用いる儀礼は、行為を継続

恤 9 うれえる・あわれむ・すくうジュツ

形はみえない。 示す後起の字である。金文には卹のみを用い、 坐する形で、盟誓して神に祈る意。恤はその心情を なり、救ふなり」に作る。衂は血盟を前にして人の り」とするが、収は救の誤字。〔玉篇〕に「憂ふる である。〔説文〕一〇下に「憂ふるなり、收むるな 字は金文に卹に作り、恤はその形声字 形声 声符は岬の省文である血。正 恤の

術『【術】』 わざ・みち(スヰ)

F 行路の安全を祈る目的のものであろう。〔説文〕ニ 霊をもつ獣の形。この朮を用いる呪儀を術といい、 줾 では古代の重要な儀礼や呪儀が行なわれた。朮は呪 「邑中の道なり」とし、〔段注〕に「引伸して 会意 は十字路。十字路は街衢といい、そこ 旧字は、行と朮とに従う。行

> きる。 なった。〔漢 術の意から、 時の術数(卜筮や五行の術)の大体を知ることがで 精粋として、展開してきたものである。術は古い呪 て、これに論評を加えているが、思想はその道術の 思想である儒墨以下の諸学派の主張するところをあ 法を意味する語となった。〔荘子、天下〕に当時の 進むところであり、途とは、路上に余(大きな針)道とは、異族の首を携えて行道を祓い清めながらいた。といいました。 げて論じ、「古の道術、ここに在るものあり」とし る呪法を意味する語であったが、のちその思想的方 法である。道術は、いずれも古代的な、道路におけ をうって、邪霊の進入することを杜絶する呪的な方 霊と接触する最も危険の多いところであるから、道 通ずるところで、古代的な観念においては、異族邪 明らかでない 技術と爲す」とするが、それだけでは引伸の過程が 道が修祓されるからである。道路は内外を 書、芸文志〕に「術数略」があり、 のち技術・思想の万般を意味する語と 。 道を術というのは、そこで術が行な 当

シ ュン

夋 すきのかみ

桑 文で稲魂、 夋は耜の神像である。 変は耜の神像である。〔説文〕 玉下にととその形が似ている。 髪は稷の初 象形 耜(ム)を頭にした神像の形。

術(術)

シュン

夋

「一に曰く、倨るなり」というのは、もとその神像「行くこと發わたるなり」と歩行を形容する語とし、「行 を形容する語であろう。唆は田の神として祀られる やはり耜の神像である。

俊 すぐれたものシュン

尹・畯民の語があり、俊と声義が近い。かんとやなって三儁才あり」のようにいう。宣十五年「三儁才あり」のようにいう。 尭 典〕に「俊德」、〔洪範〕に「俊民」の語があり、 いずれも修飾語的に用いる。俊才の意には雋・儁を 〔左伝〕荘十一年「儁を得るを克つといふ」、 形声 る。〔説文〕ハ上に「材、千人に過ぐ 声符は変。変に高倨の意があ 金文に

恂。 まこと・おそれる・つつしむシュン

とあり、 さまをいう字である。おそれあわてるさまを恂然、 ど控えめな人であった。〔史記〕にその恂々を悛々 鄙人の如く、口に辭を出だすこと能はず」というほ をいう。漢の将軍李広は匈奴にその勇名をとどろか党〕に「恂々如たり」とあり、温和でまじめなさま 形声 おそれて目くらみすることを恂目という。眴と声義 に作る。字はまた峻に作ることもあり、恂は謹厳の せた人であるが、〔漢書〕に「李將軍は恂々として おそれつつしむさまをいう。〔論語、郷声符は旬。〔説文〕一〇下に「信の心なり」

> 静女〕に「洵に美にして且つ異なり」と副詞に用いた。 **** の通ずる字である。また洵と通用し、〔詩、邶風、 る。〔韓詩〕には恂の字を用いている。

はシュン

*** 煮

ば「今屯、年を受けられんか、九月」は時期に合わ辞綜述」に、屯・㈱を春、鷽を秋とするが、たとえ辞綜述」に、屯・㈱を春、鷽を秋とするが、たとえおその徴がなく、ト辞中に四季の名に擬せられていおその徴がなく、ト辞中に四季の名に擬せられてい 「春秋」に四季をもって月の名を繋け、「春正月」の ものではない。夏は〔秦公殷〕に「縁夏」の語があ 二月に秋はそれ至らざるか」は螟螣(穀物の害虫)ず、また「今歳、秋(虫)は茲の商に至らざるか。 符とみるべきである。「越王鐘」「これ正月孟春、るが、屯は純縁(へりぬい)の象であるから、声 のとき、屯蹇 亦聲」とする。 屯を亦声とするのは、屯を草木初生なり」と訓し、字形を「日と艸と屯とに從ひ、屯のなり」と訓し、字形を「日と艸と屯とに從ひ、屯のた。〔説文〕一下に「推 るも、これを春夏の意に用いた例がない。ただ魯の る時期とする。四季の名は、西周の金文に至るもな の害を秋とよんでいるもので、季節名として用いる (伸びなやむ) の象とみるものであ

> 動く、かがやくの意をもつ語であろうと思われる。 ようにいう。春はおそらく陽光と関係のある字で、

峻 たかい・けわしい・きびしいシュン

う字としては峻・峭が正字であろう。山容の峻嶮で 「高なり」と訓する。陖一四下は「附高なり」とみえ あることから、 る字であるが、曽は神梯の象であるから、山容をい 人の峻厳・峻刻なる意に用いる。

悛 あらためる・つつしむシェン

さまをいう。字はまた恂々に作る。形況の語である に「悛々として鄙人の如し」とあり、素朴・誠実な | 怪は改むるなり。山より東にては或いは悛といふ」 とみえ、改悛の意である。〔史記、李将軍伝、賛〕 「止むるなり」、また〔方言〕に「悛 形声 声符は夋。〔説文〕一〇下

隼10 はシュ シュン さ

飛隼 て隼を高墉の上に射る。これを獲て利しからざるな 產 た。〔詩、小雅、采芑〕は征役の詩で、「鴥たる彼の し」とあり、隼を獲ることを占卜とすることがあっ もなくて、 それ飛んで天に戻る」の句があり、 。確かめがたい。〔易、解卦、上六〕「公用。なかめがたい。〔易、解卦、上六〕「公用。あろう。〔説文〕に収めず、古い字形 象形 隹(鳥)の迅く飛ぶ形の字で これも軍

終ならんことを」、「晋姜鼎」「晩くその孫子を保護」「財、「南侯、人名)それ萬年にして、晩く四或鐘」「財、「南侯、人名)それ萬年にして、晩く四或領」「古、「南侯、人名)それ萬年にして、晩く四或鼎」「四方を匍有し、厥の民を晩正す」、「宗周、明」「四方を制有し、厥の民を晩正す」、「宗周、明」「四方を制有し、厥の民を晩正す」、「宗周、明」「四方を制有し、厥の民をいたす」、「公司、「京の民事の神、すなわちり」とみえる。先音・司嗇は農事の神、すなわちり」とみえる。先音・司嗇は農事の神、すなわちり」とみえる。 として、 字である。 は耜頭の人で耜の擬人化した字、畯はそれを田の神 文の晩は、のちの畯の字にあたるものであろう。允 晩保を連用していて、〔晋姜・鼎〕の用語と同じ。金 司嗇を祭るなり。百種を祭りて、以て嗇に報ずるな の祭祀を行なう。それは蜡の祭りといわれるもので、の祭祀を行なう。それは蜡の祭りといわれるもので、 を擬人化したもの。夋を煎畝に招いて、収穫の報恩とばである。夋は耜を擬人化したもの、稷は穀霊とばである。夋は耜を 供薦を享ける意で、田中に畯を祀るのである。「詩、 ん」とは、螟螣(害虫)を駆除するときの祈りのこれず、ことと 小雅、大田)に「田祖、神あり 乗りて炎火に界へ す」とは田大夫のことではなく、田の神が来てその って、明らかに田神と解している。「田畯至りて喜 郊特性」に「蜡の祭や、先嗇を主として、 また畟は穀神として、それぞれ神像化し

の管理者)の意で辭官(農官)であるとするのによの管理者)の意で辭官(農官)であるとするのによ 農注〕に「田畯は古の先づ田を教へし者なり」とあい。『女を撃つて、以て田畯を樂します』とあり、『鄭司鼓を撃つて、以て田畯を樂します』とあり、『鄭記』る。『爾雅、釈言』も同じ。『鳥』、巻とよりに「上と 竣 おわる・とどまる・うずくまるシュン

> しては舜に近いものであるが、智に従う形のものががあり、舜とも、また譽とも釈されている。字形とがあり、舜とも、また譽とも釈されている。字形と た重華と号したことと、関連して説く説もあるが、 考えかたがある。〔説文〕の蔓地連華説も、舜がま あって、その声は嚳、それで帝嚳舜をこれにあてる である。ト辞に高祖神とされる夔の字形に作るもの領をえない字形で、字形の伝承が失われているよう みえない字形である。また古文の字形もすこぶる要 して華を連ぬ。象形」とするが、蔓草連華の形とも はこれを蕾といひ、秦にはこれを蔵といふ。地に蔓下に字を驛に作ってあさがおをいう字とし、「楚に 羅 垂らしている形。〔説文〕五

雋 13 こえる・うまい・すぐれるシュン・セン

を加えている。

べく、〔説文〕は蕣一下に「木菫なり」とし、別解もとより推測にすぎない。燮地連華の字は蕣に作る

竣 舜[舜]

「農夫なり」というのは、〔詩、豳風、七月〕「田畯 至りて喜(饎)す」の田畯を、〔伝〕に田大夫(田

田神の像。その田神を畯という。〔説文〕」三下に

声符は夋。夋は耜の頭部(ム)を頭とする

æģ

畯

たのかみ・たおさ・たつくりシュン

す」とみえるが、逡速の意は駿の仮借である。 の「悛々」も同じ語。〔礼記:大伝〕に「逡く奔走 言ふこと能はざるものに似たり」を、漢碑に 〔論語、郷党〕「孔子、鄕黨に於ては恂々如たり。るから、類想的な意味がつけられるのであろう。) Pario として下るのである。変は耜の頭部(ム)あとずさりして下るのである。変は耜の頭部(ム)の「三たび退く」は三途循の意で、くなり」の訓がよい。すなわち後循が、義である。

とするが、「爾雅、釈言」「退くなり」、「玉篇」「卻をするが、「爾雅、釈言」「退くなり」、「玉篇」「記をするなり」とあり、「段注」に往来の義

声符は愛。〔説文〕ニ下に「復

逡

しざる・はやいシュン

行の予祝の意である。

の田神の像で、その容は高く、動きのないさまであ

舜

厂 舜 山 16

神話の神の名・あさがおシュン

舜の神像で、両足を

える意に用いる。 をいう字であろう。 改め、

所・位をいう字、竣とはその儀場の設営が成ること

のちひろく建築や設営の功を終

が不明であるため、〔段注〕には「居するなり」と 文〕10下に「偓 竣なり」とみえるが、偓竣の語義をなる。 高い姿勢で蹲踞するさまに作る。〔説

声符は変。変は田神の像で、

蹲踞の意とする。立は儀礼の行なわれる場

「説文」はその義をとるが、雋永の他に用例はない。 「説文」四上に「肥えたる肉なり。弓に用い、れで雋敏・雋異の意となる。雋・堂・雋逸のようにはみえず、足をあげ、翼を振う姿ともみられる。そはみえず、足をあげ、翼を振う姿ともみられる。そはみえず、足をあげ、翼を振う姿ともみられる。そはみえず、足をあげ、翼を振う姿ともみられる。それで雋敏・雋異の意となる。雋・堂・雋逸の永翔しようとするときの金幣

儁 5 すぐれる

たました。 「神鋒太だ傷なり」とあって、意識の甚だ傷鋭なる を変えた傷なり」とあって、意識の甚だ傷鋭なる で、説文」にこの字を収めないが、「左伝」荘十一 う。「説文」にこの字を収めないが、「左伝」荘十一 で、その字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の字で、戦場で にその字をまた後に作る。後と同義の書だ偽鋭なる で、それを人に及ぼして儁とい う。「説文」に表する形で、 を変えた儁なり」とあって、意識の甚だ儁鋭なる

寅 16 またたく・まじろぐ

全し 1 たべのこす・あまりもの

形声 声符は愛。「説文新附」五下に 「食の餘なり」という。「礼記、祭統」 「古の君子曰く、尸もまた鬼神の餘を鮻ふなのものは供上」に「峻鉾は祭らず」とは、人の食余のものは供上」に「峻鉾は祭らず」とは、人の食余のものは供上」に「峻鉾は祭らず」とは、人の食余のものは供上」に「峻鉾は祭らず」とは、人の食余のものは供上」に「地社」とは、新食の余を食するので、古くは朝夕二食、ことは、朝食の余を食するので、古くは朝夕二食、これを大菜・小菜といった。

1 すぐれたうま・すぐれる・はやい

形声 声符は愛。〔説文〕一〇上に 「馬の良材なるものなり」とあり、変声。変声の字にすぐれたるものの意をもつものが多く、人においては後、山には峻という。「穆天子伝」に天子八駿の名がみえ、穆王はこれを駆って遠遊した。当時はもとより車馬であった。人に施して駿た。当時はもとより車馬であった。人に施して駿た。当時はもとより車馬であった。人に施して駿た。当時はもとより車馬であった。人に施して駿か・戦機・駿逸という。またたかくきびしい意があり、〔詩、大雅、文王〕に「宜しく殷に撃るべしりからがあり、後のは、大雅、文王」に「宜しく殷に撃命という。

解 18 シュン

であろうが、のち瞬の字が用いられる。陸機の〔文〔説文〕にはこの字を収めず、瞚を正字とするもの作る。寅・矢は矢、これで目のまじろぐことをいう。声符は舜。正字は瞚に作り、字はまた昳に

大型 21 うごめく・おろか 賦〕に「四海を一瞬に撫す」の句がある。

形声 声符は春。〔説文〕 世紀 単紀 単記 単語 下に「蟲動くなり」とあって蠢動の意。〔詩、小雅、深芑〕「蠢願たる蟹押」って蠢動の意。〔詩、小雅、深芑〕「蠢願たる蟹押」の〔伝〕に「動くなり」とあり、敵をうかがって動の〔伝〕に「動くなり」とあり、敵をうかがって動いたともい。を所書〕にみえ、〔書、大誥〕「西土に大皷あり。西土に大郎あり。の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形で、〔古文の字と解する。古文の字形は才に従う形を達するものはなり、本語の字であるから、軍事的な騒擾であることを、それによって示したものであろう。

ジュン

巡 6 「巡」 7 めぐる・まわる・やすんずる

るなり」、すなわち視察巡行の意とする。巡撫・巡ぞ)を意味する字である。〔説文〕ニ下に「視て行や声 声符は巛。巛は川で、もと晄澮(田畑のみ

意味をもつ字である。の同じ字に、遁・徇などがあり、いずれも軍事的なの同じ字に、遁・徇などがあり、いずれも軍事的な祭・巡遊のように用い、天子には巡狩という。声義

旬 6 どおか・あまねし・ひとし

『 ゆったなる。 る

頭をかくした竜形の神であり、 間の予祝という意味のものであろう。卜辞の主要な 日を加えた形である。殷の暦法は十日を単位とする あろう。旬と雲(云)とは字形が近く、雲は雲中に 配する神霊として、竜形の神が考えられていたので 修 祓することにあったようである。その一旬を支いられる。 トロー りょうしゅう といい ト間することによって、場所と時間とを目的は、ト間することによって、場所と時間とを ある。紀事を加えることはほとんどなく、これは時 あったらしく、卜辞の形式も極めて定型的なもので が、予祝的な意味をもつ、お祓い的な儀礼の行事で あるが、これは上辞の全期にわたって行なわれてお 末の癸の日に、次の一旬の間の吉凶をトするもので 従う。〔詩、大雅、江漢〕「王、召虎に命じ 旬くしとする。重文として古文を録するが、その字は『に くするなり。十日を旬と爲す。勹日に從ふ」と会意 のち旬に作り、日をそえた形。〔説文〕ヵ上に「編 ト問するというよりも、この貞卜を行なうこと ...その義に用いる。卜辞に卜旬の辞があり、旬 ト文の字形は、尾部を捲いた竜の形に象る。 旬はその雲にかえて、

> まか」と祈る。ト旬と同じ性質の儀礼である。 きか」と祈る。ト旬と同じ性質の儀礼である。 きか」と祈る。ト旬と同じ性質の儀礼があった。毎日 日間には、天子に毎日招魂の儀礼があった。毎日 日間によって大小の別があった。わが国にも

徇。 となえる・したがう・もとめる

洵。 まこと・ひとしい・とおい

盾。ジュン・トン

を る形。〔説文〕四上に「駿なり。身を を目の上に掲げて、防ぎ衛

旬

徇洵

盾

出き、 自ら職ふ所以なり」とあり、 戦字条に「盾なり」とあって互訓する。盾は部族によって形や画文を異にし、名もまた異なり、干・盾・ 献という。を異にし、名もまた異なり、干・盾・ 献という。を異にし、名もまた異なり、干・盾・ 献という。でき、「たら、一大の魔なり」とあり、それは並べ立てて隊列をはずための魔なり」とあり、戦字条に「盾ながあった。 ことなき盾とは両立せず、矛盾という。

剃 9 うちひも

准 10 なぞらえる・ゆるす

准后の号を賜うことがあった。 と言うの子を賜うことがあった。 を言うの子という。権可・准拠してものを処理することを准という。権可・准拠してものを処理することを准という。権可・准めるが、官庁用語として慣用されており、規定に準あるが、官庁用語として慣用されており、規定に準あるが、官庁用語として慣用されており、規定に準拠してある。

列 0 じゅんし・したがう・もとめる

節・殉義のように用いる。〔玉篇〕に「人を以て死あり、死をもって徇うことを殉という。殉死・殉形声 声符は旬。旬は徇の省文。徇に徇服の義が

れは墓葬の人に対する、一種の魂振り的性格をもつが、初期のものには女子や幼少年の遺骨が多く、そ を送るなり」とは殉葬。殷墓には多くの殉殺を用い ものであったと考えられる。 ており、古代奴隷制の最も有力な徴証とされている

純 いと・もっぱら・よい・へりジュン

も事多が

(礼記、祭統」「君、純冕して阼(階)に立つ」の既を礼」「緇純」の注に、「衣に飾るを純といふ」、既を礼」「緇純」の注に、「衣に飾るを純といふ」、は恭純、純徳の意。縁飾りには黒を用い、〔儀礼、また。 義に屯を用い、〔伯亥 卣〕「德を秉ること共 屯」と義に屯を用い、〔伯亥 卣〕「德を秉ること共 屯」と 〔疏〕に「純もまた緇なり」とみえる。純一無雑の 純はその形声字である。金文の賜与に「玄衣備屯」 純孝・純儒のようにいう。金文に「屯魯」「屯叚」(京会)による。これでは、純潔・純粋・純正・純玉、また純熟・意よりして、純潔・純粋・純正・純玉、また純熟・ をつけること、すなわち総飾りである。また純粋の を賜うことが多く、黹屯は黻純、純とは縁に糸飾り などの語があり、字はみな屯の字を用いている。 に「絲なり」と訓し、屯声とするが、屯がその初文 へりかざりをいい、 声符は屯。屯は糸の末端を結びとめた形で、 純の初文である。〔説文〕一三上

淳 あつい・きよい・すなおジュン

急派

正字は虊に従い、臺声。臺に純熟の意があ

淳・醇にはともに醇正濃密の意がある。 る字である。字は純熟の義を承けるところがあり、 するが、淳厚・淳正のように用い、醇とも通用する。朝は熟の初文。〔説文〕二上に「淥すなり」と

循12 したがう・めぐる・なつくジュン

行動をいう字である。〔説文〕に遁を逡遁の義とす 字であろう。 るが、それは遁逃の意。循と遁とは正反の義をも 義。遹は矛を台座の上に樹てて巡察する、軍事的な に「適・遵・率は循なり」とあり、循行は適正と同り」とは循行、すなわち循撫の意。〔爾雅、釈詁〕り」とは循行、すなわち。 形声 る意である。〔説文〕ニ下に「行くな 声符は盾。盾をもって循行す

筍 12 たけのこ・わかだけジュン・シュン

6 H

形声 に伯 筍父の諸器があり、その字は旬に従うている。て、歳ごとにこれを食膳に上す定めであった。金文て、歳ごとにこれを食膳に上す定めであった。金文 り、〔唐書、百官志〕によると、司竹監の職があっって、たけのこをいう。早くから食用に供されておって、たけのこをいう。早くから食用に供されてお もと旬声の字で、筍と同じ字であろう。 声符は旬。〔説文〕五上に「竹胎なり」とあ

閏 12 うるう・ニン

形は閏に作り、 に作り、王に従う会意字とされ声符はおそらく王。いまの字

> の意がある。閏もおそらくその意であろう。閏の字 あげる〔楊氏阡銘〕の閏字は、古文の玉に従う形に形を改めたものではないかと思われる。〔汗簡〕に古文家の説くところで、字もまたその説によって字 閏を「十三月」といい、金文にもときにその例があ は卜文・金文にみえず、卜辞においては年末におく ふ」とあり、壬には任大(大きい)・潤余(あまる)れない。〔爾雅、釈天〕に「月、壬にあるを終とい 作るが、それは玉潤(潤う)の意によるものかも知 これを証しうるものがなく、その説は〔周礼〕など 從ふ」としているが、このような閏月告朔の礼は、 廟に居り、閏月には門中に居る。王の門中に在るに び閏す。告朔の禮(毎月一日の儀式)に、天子は宗 ている。〔説文〕一上に「餘分の月なり。 とは、暦法の上からも信じがたいことである。 おくこともあり、〔説文〕のいう閏月居門というこ る。曆や季節との対応において、閏月を年の中間に 五歳に再

順 したがう・おさめる・ただしいジュン

缆

装した儀礼の容であるから、 て川聲をとる」と、亦声の解を試みている。頁は礼 順の至りなり。故に字、頁川に從うて會意、 形声 し、字を会意とする。〔段注〕に「川の流るるは、 声符は川。〔説文〕九上に「理むるなり」と 川流の順なるにこの形 しかし

であった。 に作っていて、瀕がその初文であり、もと会意の字 に順子を瀕子に作り、〔井侯殷〕に順福の字を瀕福 自然の勢に従うことを順といったのである。〔效尊〕 順・順導・順逆などの意は、その引伸の義で、もと を保証されることが、順の初義であろう。従順・和 祈る儀礼を意味する字とすべく、安全を祈り、安全 これは水の徒渉すべきところに臨んで、その安全を 従う形に作り、人の渉るところで行なわれる儀礼を 「順子」という語がみえるが、その字は渉(渉)に いう字であろう。字形のままに釈すれば、瀕となる。 らかの儀礼を意味する字のはずである。〔效尊〕にを用いる要なく、これは水流に臨んで行なわれる何

楯 たて・てすりジュン

意は、宮門に三矛戟をならべる列戟のように、古くみえる。しかし字は多く盾の意に用い、おばしまの注〕に「縦なるを檻といひ、横なるを楯といふ」と注〕に「縦なるを檻といひ、横なるを楯といふ」と 義に転じたものかと思われる。 は盾をならべることなどがあって、それから欄檻の いう。 それが字の本義。「楚辞、招魂」の「王逸 権なり」とあり、てすり・おばしまを 権なり」とあり、てすり・おばしまを

準 13 のり・なぞらう・たいらか・はかるジュン・セツ

水平をはかるもので、標準・準則の意となる。規定 「平なり」とあり、平準の義とする。 形声 声符は隼。〔説文〕ニー上に

楯準

遵[變]

祖は「隆江 * 」のであまって、 ない 「日氏春秋、君守」や漢碑にすでにみえる。 いことを準という。 によって用意することを準備という。のち准の字 準にして龍顔」といわれるが、鼻梁の高せっ

詢 ¹³ はかる・とう・まことジュン

F

ていうもので、必ずしも字の原義ではない。 に咨るを詢と爲す」とは、〔皇々者華〕の篇によっ う。〔左伝〕襄四年「善に訪問するを咨と爲し、親 とあり、もと徇察して諮謀(はかる)する意であろ という。〔詩、小雅、皇々者華〕「周く爰に咨詢す」形方 一声符は旬。〔説文新附〕三上に「謀るなり」形方 声符は句。〔説文新附〕三上に「謀るなり」

期 なれる・みちびく・したがうジュン

「大費(人の名)、鳥獸を調馴す」とみえている。記、秦本紀〕に秦の鳥トーテム的な伝承をしるし、記、秦本紀〕に秦の鳥トーテム的な伝承をしるし、 ことを馴擾という。馴らすことを調馴といい、〔史 ける字であろう。次第に馴れるのを馴致、馴れきる 家畜であるから、馴狎の義がある。順の声義を承「馬、順ふなり」とする。馬は従順な 形声 声符は川。〔説文〕一〇上に

潤15 うるおう・つや・かざるジュン・ニン

「水には潤下といふ」とは、〔書、洪形声 声符は閨。〔説文〕一一上に

潤筆料という。 滑という。書画を揮毫することを潤筆、その謝礼を 加えることをいう。〔大学〕に「富は屋を潤し、德 や他に及ぶことを潤沢、円滑にものの進むことを潤い、円滑にものの進むことを潤いなります。 水の浸潤するようには身を潤す」という語がある。水の浸潤するように い)・閏余(あまる)の意がある。潤色とは文彩を ある。閏はおそらく壬声に従う字で、任大(大き戦〕の文をそのまま引いて、説解の文としたもので

諄 15 あつい・ねんごろジュン

ねんごろに教誨することをいう。字はまた惇に作る。大雅、抑〕「爾に誨ふること諄々たり」のように、曉らしむることの孰(熟)するなり」とあり、〔詩、**** ることをいう。諄は「説文」三上に「告げてこれを 形声 醇・熟の意があり、醇正にして濃密な 正字は蘗に従い、臺声。蘗に

遵 15 〔奠〕 したがう・よるジュン

みな法度に遵う意である。 ひて過つものは、未だこれあらざるなり」とみえ、 「王の路に遵ふ」、〔孟子、離婁、上〕「先王の法に遵 行動を意味する字、遵は遵教・遵道・遵承・遵節の 談 ように、教化に関する語に多く用いる。〔書、洪範〕 い字である。循・遁は盾に従うており、軍事的ない字である。循・道へきでくた。その人に「循ふなり」とあり、循と声義の近 形声 声符は尊(尊)。〔説文〕ニト

醇 15 こいさけ・まこと・もっぱらジュン

という。 粋・醇篤の意があり、 水増しをしない酒、醇醪をいう。ゆえに醇 文」一四下に「焼らざる酒なり」とあ 正字は孽に従い、臺声。「説 純乎たる問学求道の人を醇儒

ショ

且 5 まないた・せんぞ・かつショ・ソ

A A 0

宜に榝(さかな)の意があることなどから、且が俎それは「懈宜」ともいわれて供薦の意である。また説などもあるが、且(俎)上に肉をおく形が査で、 俎の形で、祖の初文。郭沫若は且を男根の象とし*| | 工横あり。一はその下地(台)なり」とする。字は った。 殷〕に祖の字形がみえる。古くは祖音でよむ字であ * 7祖の義に用い、〔師虎殷〕に「取考」、〔陳逆簠・74* の初文であることは疑いない。卜文・金文ではすべの初文であることは疑いない。卜文・金文ではすべ て、家系の由るところを示すとする。他にも生殖柱 て仮借である。 など多くの訓義のある字であるが、その用法はすべ 、〔説文〕一四上に「薦むるなり。几に従ふ。足にルー 俎(まないた)、また供えものをおく机の 語詞としては、「かつ・しばらく・まさに」

処 ₅ [處] 11 おる・ところ・おくショ

> 扒 氚 中军 全分 電

会意 虎皮を被って、戯劇などの神事的な所作を演ずるもものが凡(腰かけ)にかけている形。虎はおそらく まりて宗室に處らん」、〔叔夷鐘〕「禹の堵(水土をこは人の処るべきところではない。〔卅人鐘〕「蹇」とは、「かんばり」を 處はその虎頭の神の倨然たる姿を写したもので、そ もつ字には、戯・劇など軍戯に関する字が多いが、 形はすべて處に作り、處が正形である。虎頭の形を り」とし、別体の字として處を録するが、金文の字 るなり、夕几に從ふ。夂(足)、几を得て止まるな のであろう。〔説文〕「四上に処を正字とし、「止ま いう。所も神位のあるところ、戸とは神の入る戸棚各、その處る所あり」とは、霊の安んずるところを る。〔左伝〕襄四年「民に寢廟あり。獸に茂草あり。 治めた地)に處る」はいずれも聖所に処る意に用い である。所は名詞的、処は動詞的な語で、居・留・ 安・定の意がある。 旧字は處に作り、虎と凡とに従う。虎形の

疋 あし・たすける・しるす・雅ショ・ガ

Ę

形である。〔管子、弟子職〕に「疋は何くに止せんり、下は止(趾)に従ふ」という。足とほとんど同り、下は止(趾)に従ふ」という。足とほとんど同り、下は止(趾)に従ふ」という。とは非腸(こぶら)に象をが 足の下半部の形、膝から下の象形字である。 かと問ふ」とは、足をどの方向にして臥するかの意。

「佐疋」としてみえ、佐胥・佐助の意で、疋は胥の文の断代を誤ることとなった。疋はまた〔善鼎〕に文の大を一代前として世代の計算を誤り、その結果金の人を一代前として世代の計算を誤り、その結果金 しむ」のように用いる。郭沫若は足を嗣総の義と師縁父を足け、左右走馬・五邑走馬(官名)を嗣め足け、林を鯛めしむ」、〔師兌設〕「師兌に册命して足の形に作る。〔免設〕「女に命じて周師(人名)を足の形に作る。〔免訟〕「女に命じて周師(人名)を 同じである。金文には足と疋との区別がなく、みな 〔礼記、内則〕「何くに趾せんかと請ふ」というのと は疏記(注釈)の意。また「古文以て詩の大疋初文である。〔説文〕に「一に曰く、疋記なり」と したため、「師龢父を足ぎ」とよみ、そのため現存 ぜ雅の意に用いるのかを説かず、清の考証学者たち (雅)の字と爲す」としるしている。しかし疋をな 『楚人は楚に安んじ、君子は雅に安んず』、〔儒効〕 どがあり、またその舞楽をいう。「荀子、学校をいう。夏には楽章の名として大夏・昭夏・肆夏な 〔叔夷鐘〕に「頌司」の語があって、夏祀(夏王朝) 字で、その夂(足)を偏に移したものが頭である。 文であり、碩は夏の異体字である。夏は舞容を示する理由とはしがたい。思うに雅に用いる疋は碩の省 とするが、それならば正に用いるとしても雅に用 を用いている。〔通訓定声〕に「疋正の形相似たり」 も、その説を得ないままで、大雅小雅の字にみな疋 もって、 ると、雅と夏とは通用の字、それで頭の省文の疋を 「越に居りては越、夏に居りては夏なり」の例によ 形があり、 雅に用いたものである。夏の初文に頙の字 疋はその省文であることを知らなくては

の所に辟ふ」というのは、その引伸義である。のちうに用いるのが本義。これを生人に及ぼして「齊侯いるのであろう。ゆえに「帝所」「靈公の所」のよい 同じく声の仮借である。 居所・住所のように用いる。また関係代名詞的に用 を用いるもので、戸中にはおそらく神位を安置して る。聿は戸中の祝禱をいう。所はその戈にかえて斤 る意。その戸を啓くことを肇といい、肇始の意があ 撃に作り、その戸を閉ざして、これを戈をもって守 これを啓くことを啓・肇という。肇は金文ではまたとするが、戸は祝禱の書などを収めるところの扉で、とするが、戸は祝禱の書などを収めるところの扉で、 所を行在所といふ」とみえる。〔説文〕に字を戸声 は、その行在をいう。〔独断、上〕に「天子の在るもいう。〔春秋〕僖二十八年「公、王所に朝す」と い、受身の語法もある。木を伐る声は、許々などと の象で、字形の由るところが異なる。 と声義の通ずる字であるが、延は窓飾り、疏は生子 がある。〔説文〕ニ下に「通るなり」といい、 条一四下にも「通るなり」と訓して同訓である。 から交変とい

きね・きぬた・つちショ

れを列ねるもの、杵とは異なる。またきぬたを杵砧漂はす」の杵は、櫓とよばれる盾で、矢どめにこ漂はす されて、御(禦)の初形は印とかかれ、御は午を呪いた。この午形のものが古くは呪具といる。この午形のものが古くは呪具と粋なり」とあり、春・秦などの字の上部は、両手で料なり」とあり、春・秦などの字の上部は、両手できる といい、衣を擣つ声を杵声という。 黒いする祭儀であった。 〔書、武成〕 「血流れて杵を 形声 り、春・秦などうミゥ の初文である。〔説文〕六上に「春く の初文である。〔説文〕六上に「春く 声符は午。午は杵の形で、

延。 とおる・とおいショ・ソ

たすける・ともにショ・ソ

ともに・みな・まつ・みる」などの訓義もあるが、 おいて古く左疋・左胥のようにみえて佐助の義に用 いうが、〔説文〕のいう蟹胥の字は蛋。字は金文に5~ る。〔説文〕四下に「蟹の醮なり」と みな仮借義である。 形声 京文〕四下に「蟹の 醢 なり」と声符は疋。疋に佐助の意があ

芦 9 しきもの・つと・つつむショ・ソ

Ä

る苞苴などに用いるもの。天子が諸侯を封建するとり」というが、履の中に敷くものでなく、神に供えを一声符は且。〔説文〕一下に「履の中の艸な 字は蒩であるが、 き、五色の土をこれに包んで与えることを苴茅とい い、魚を草に包んで贈るものを苞苴という。その正 ト文に舞と虚に従う字形があり、

覲礼」「伯父、乃の初事に帥へ」とは、初を継承しきに、「快き」なる。 [礼記、檀弓、下」「それ魯に初あり」、「儀礼、方。 [礼記、 煙ぐ。 するとをいうものであろ衣・祭衣などを制するときのことをいうものであろ 肇・基など、始と訓ずる字を列するが、それらは衣の始なり」という。〔爾雅、釈詁〕に初・載・ て故事とすることをいう。 いずれも儀礼的な意味を背景にもつもので、初も神

〔説文〕四下に「始なり。

という。〔爾雅、釈詁〕に初・哉・「姶なり。刀に從ひ、衣に從ふ。裁

裁

会意

衣と刀とに従う。刀をもって衣を裁つ意。

初

はじめ・もと

みの形。斜めに組み合せたものである い、疎い組みかたであるから疏通の意

疏字

声符は疋。爻は窓飾りの木組

ÛĴ

大疋小疋の義を解くことはできな

所。 「所」8 ところ・ばかり

界所脈

祀る所をいうのが原義で、のち君王の在るところにき、「靈公の所に獻ず」の句が二見している。祖霊をに「靈公の所に獻ず」の句が二見している。祖霊を "木を伐る聲なり」と、斧の音の形容の語とするが、 戸(戶)と斤とに従う。〔説文〕一四上に

涎 胥 苴

として用いる字であろう。〔爾雅、釈草〕にも产をあげている。苴はその略体にが

書 10 ふみ・かく・しるす

唐 李老王

「尹氏、王に命書を受く」のように、重要な問題をに書を受け、免(人名)に册命せしむ」、「免股」「王、作册尹(人名)に告げて、書せしむ」、「頌鼎」「弘(人名)以て中したものを書という。「師旂鼎」「弘(人名)以て中したものを書という。「師旂鼎」「弘(人名)以て中 とは呪禁として用いる文字、祝詞をいう。文字には津(筆)を加えて、器中の書を示す字とした。書書は書の初文。のち者が多義化するに及んで、上に 悪なものを、杜絶しうるとしたのである。その祝禱 の垣を堵という。その呪能によって、外部からの邪周囲にめぐらした土垣のなかに、これを封じた。そ 形のうちに定着させる力をもつと考えられたのであ 安定的に宿るものとされた。文字はことだまをその 呪能があり、祝詞のもつことだま的な力は、ここに の器中におかれた呪符の文を、書という。すなわち 埋め、その上を小枝や土で蓋う形で、古くは聚落の 意とすべきである。者は祝禱の器である日を土中に に「箸すなり」と書・箸の畳韻をもって訓し、者声 る。のち重要な盟誓や案件をしるすこと、またしる の字とするが、書の実体はこの者にあるもので、会 を掌るものに書史があった。祭祀的な文章が、 し、あるいは任命賜与の文書を書という。これ 正字は聿と者(者)とに従う。「説文」三下

をなしている。わが国では書道という。の意となり、書はその国の文化を荷なうものとなっの意となり、書はその国の文化を荷なうものとなっお主要なものであったからである。のち文字・書冊お主要なものであったからである。

正 11 にる・おおい・もろもろ・ねがう

《原图》原

羞」の注に羞を肴、庶を多品の意とするが、正饌はり、衆庶の意を含む。〔儀礼、公食 大夫礼〕の「ほり、衆庶の意を含む。〔儀礼、公食 大夫礼〕の「ほるが、庶の語例には諸といくらか用義上の区別があるが、庶の語例には諸といくらか用義上の区別があ 字形が互易している例がある。烹炊に煮を用い、遮字形ではない。者と庶とはその声が近く、そのため 本字である。者(者)は堵中に書を埋めて堵とするのを烹炊し、煮ることを意味する字で、1歳(煮)の 会意 これを陳設するときに一々祭るのに対し、庶羞には 民・庶士・士庶子・庶女のように庶を用いる例もあ な諸侯・諸士である。また金文に庶人・庶右・庶者侯・百者婚遘・父兄者士・者兄者父・群者侯はみ が遮蔽の字である。また金文に者を諸の意に用い、 蔽に遮を用いるが、本来は庶が烹炊の字であり、者 ても衆庶の意となるはずがなく、また炗は光を示す 炗は古文の光の字なり」というが、屋下に光を加え ある。〔説文〕九下に「屋下の衆なり。广炗に從ふ。 きるものではなく、庶が烹炊の初文であり、正字で 意の字であるから、これに火を加えて煮ることので など烹炊に用いる器。その下に火を炊いて器中のも

そのことがなく、かつこれを盛る豆(器名)の数もそのことがなく、かつこれを盛る豆(器名)の数もに、この正饌と庶羞という関係から、正鱗に対して庶孼、妾服の庶子の意が生れたのであろう。庶ൗは、公寺伝」寝二十七年「臣僕庶孼の事なり」とみは、公寺伝」寝二十七年「臣僕庶孼の事なり」とみた、臣僕と併称されている。庶幾は〔詩、小雅、章書」に「冒酒無しと雖も一式て庶幾きものを食せしめめん。嘉毅無しと雖も一式て庶幾きものを食せしめめん。嘉毅無しと雖も一式て庶幾さものを食せしめめん。高初無しと雖も一式て庶幾さものを食せしめめん。高初無しと雖も一式て庶幾さものを食せしめめん。高初無しと雖も一式て庶幾さものを食せしめめん。高初無しと雖も一式て庶幾さものを食せしめめん。高初無しと雖も一式て庶幾な「詩へいた」にある豆、田、美に、「古がな」の意に引伸する。庶・幾れで「ちかし」「ねがな」の意に引伸する。庶・幾れて「ちかし」「ねがな」の意に引伸する。庶・幾れて「ちかし」「ねがな」の意に引伸する。庶・幾れて「ちかし」「ねがな」の意という。

渚川【渚】12 なぎさ・す

暑 12 【暑】13 あつい

に「熱きなり」とあって暑熱をいう。 形声 声符は者(者)。〔説文〕七上

圖

の句があり、寒暑とは冬夏、一年をいう。
「詩、小雅、小明」に「載ち寒暑を離(経)たり」といる。
「詩、小雅、小明」に「載ち寒暑を離(経)たり」をは底の意によって暑熱の意を含むのであろう。

季 12 きび

会意 本され、 会意 かれ、 大きないなり。大暑を以て種う。故にこれを での字形では、黍と水とに従う。醸酒の意。黏あ るものは醸酒に適する。殷人は祭祀に多く酒を用い、 一辞には黍の受年(みのり)をトする例が多い。 「書、君陳」に「黍稷 馨しきに非ず。明徳これ馨 し、〔酒語〕「純いにそれ黍稷を藝ゑよ」など、間 に至っても黍稷をいう例が多い。

署13 【署】14 つめしょ・やくしょ

東に及ぶので、この著(著)は署の意となったようなものであろう。[呉都の賦]に「解書基布す」ようなものであろう。[呉都の賦]に「解署基布す」なる。署が例に従うのは、遮蔽の遮と近い字義をもえる。署が例に従うのは、遮蔽の遮と近い字義をもえる。署が例に従うのは、遮蔽の遮と近い字義をもえる。といる。「解書基布す」とみる。といる。下章に庭・堂とあって次第に解の閒なり」という。下章に庭・堂とあって次第に解の閒なり」という。下章に庭・堂とあって次第に解の閒なり」という。下章に庭・堂とあって次第に解の間なり」という。

全近 13 すき・くわ・すく

雎 13 みさ

形声 声符は 1 (詩、周南、関雎)に「關々た としてもふさわしいものでなく、おそらくかもめ 想としてもふさわしいものでなく、おそらくかもめ 想としてもふさわしいものでなく、おそらくかもめ のような川鳥であろう。都鳥というような発想でな くては、この房中歌にはふさわしくない。原歌は鳥 くては、この房中歌にはふさわしくない。原歌は鳥

野14 いなかのやしき・しもやしき

会意 野と土とに従う。もと穀物を収める『&を園みて、別墅を賭く」とあり、当時の豪族の驕奢を園みて、別墅を賭く」とあり、当時の豪族の驕奢を園みて、別墅を賭く」とあり、当時の豪族の驕奢を園みて、別墅を賭く」とあり、当時の豪族の驕奢を園みて、別墅を財く」とあり、当時の豪族の驕奢を園みて、別墅を財く」とあり、当時の豪族の驕奢を聞みて、別墅を財子に従う。もと穀物を収める『&を

条件 1 【文件】 15 いとぐち・お・はじめ・こころ

をいう。また心をたとえて、心緒・情緒という。なり」とあり、糸の末端をいう。〔詩、魯頌、関は垣の下に祝禱の日を埋めて、そこで外から邪気の入るのをとめるもの。緒も糸端を結びとめる意で、糸をほぐすにはそこからはじめる。ゆえに端緒・緒糸をほぐすにはそこからはじめる。ゆえに端緒・緒糸をほぐすにはそこからはじめる。ゆえに端緒・緒糸をほぐすにはそこからは世がある。「説文」一三上に「絲の間形声」声符は者(者)。〔説文〕一三上に「絲の間形声」声符は者(者)。〔説文〕一三上に「絲の間形声」声符は者(者)。〔説文〕一三上に「絲の間形声」をいう。

書 15 【音】16 もろもろ・おおい

として、分別することよりして諸多の意を生ずるととあり、「爾雅、釈訓」「諸々便々は辯なり」の誤りとあり、「爾雅、釈訓」「諸々便々は辯なり」の訓を形声 声符は者(者)。「説文」三上に「綵なり」形声

黍署〔署〕 鉏 雎 墅 緒〔緒〕 諸〔諸〕

という。 いえば同義ではない。諸字の従ふ儲・諸には、みなうときの語義に差違があり、諸多と衆庶とは厳密に また〔爾雅、注〕に「言辭辯給(早くいう)なり」 〔玉篇〕には「一に非ざるなり」という。堵中の書 もと書についていうもので、猪中に埋めた祝禱を書 収蔵する意がある。 れる。しかし諸侯・諸士の用法と、庶人・庶士とい には、多くの祝禱の辞がしるされていたのであろう。 にいう辯とは遍で、あまねしの意であるらしく、 といい、その辞を諸といったものであろう。〔説文〕 百者婚遘とい いう。金文には者を諸の義に用いて、者侯・者士・ 音の関係でいえば、庶は衆庶の意に用いら い、庶人・庶士には庶を用いる。諸は ジョ 序

曙 あけぼの

日の計画を、早朝に検討することをいう。 子、形勢〕に「曙戒怠ることなかれ」とみえ、その 形声 七上に「曉なり」とあり、署声。〔管 声符は署(署)。〔説文新附〕

ジョ

女3 おんな・むすめ・めあわす・なんじジョ(ヂョ)・ニョ

あずかか R 7 多遊

> (長女)」のほか、「男女無期ならんことを」と、子さえて跪く姿である。金文に「齊侯の女」「元女でえて跪く姿である。金文に「齊侯の女」「元女に婦人なり。象形」とあり、手を前に交え、*** 文。二人称の如・乃も同じく仮借の用法である。 孫の多きを願う。また二人称に用いるのは、汝の初 象形 女子の跪いて坐する形。〔説文〕二二下に

如 ごとし・したがう・しく・いかんジョ・ニョ

魯 * 大男中的 电

「如くす」の意となる。如何というのも、もと神の「したがふ」が字の原義であり、それに従うゆえに り、神託を受けるのである。卜辞に「王はそれ如らはなく、両手をあげて舞う形。これによって神にな著の異体字というべきもので、上部はいずれも艸で 禱して神意に諮ることをいう。ゆえに「はかる」んか」「如ること勿からんか」などの例があり、祝 るなり」の〔郭注〕に茹と同音としているが、茹は によって神託を受ける。〔爾雅、釈詁〕に「如は謀ずるのである。如もまた巫女の祝禱する意で、これ 託を受けさせる。ゆえに若順(したがう)の意を生 状態となる意を示し、その状態で神が憑依して、神 禱を前にした巫女が、舞うて祈り、エクスタシー 女子を命のままに従うべきものとし、口を命令と解 〔説文〕一二下に「從ひ隨ふなり」とし会意とする。 の器の形で、巫女が祝禱を前にして祈る形である。 会意 したのであろう。字の構造は若と似ている。若は祝 女と口とに従う。女は女巫。口はひ、祝禱 n

> 指示を問う語であった。若と如とは若順の義、二人 違にすぎぬ語であったと思われる。かついずれも極 の形義ともに近く、 称、仮設の辞など、共通義が甚だ多いが、それは字 託を受ける状態をいう。 めて訓義の多い字であるが、その初義は、巫女が神 おそらく古くはアクセントの相

汝 なジョ んじ

뺆 禮

のは、 える。 形声 称に用い、汝を用いることはない。経籍にみえるも 商」のように用いるが、金文にはすべて女を二人 川の名とし、〔詩、周南、 、二人称として、〔詩、大雅、蕩〕「咨、汝殷名とし、〔詩、周南、汝墳〕にその川の名がみるとし、〔詩、周南、汝墳〕にその川の名がみ声符は女。 女は汝の初文。〔説文〕一上に のち書き改めたものが多いのであろう。

助 たすける・ますジョ

すべて他に助勢することをいう。が最も労力を要することであった。助耕の意より、 「左くるなり」とし、且声とするが、 の。古代の助法とよばれる税法も、 者を併せて助耕の意をあらわす。〔説文〕一三下に して租税にあてたとされる。助耕というも、草とり 会意 は耒のそれぞれ象形字であり、その両 且と力とに従う。且は鉏、力* 一部を共同耕作 且は草切るも

かき・ひさし・ついで・いとぐち・はしがきジョ

に「爵を序するに賢を以てす」とあり、すべて序 礼を講習するところであった。〔詩、大雅、行葦〕 あろう。そこが庠序(古の学校)ともされて、儀 く宣榭とよばれ、射儀の行なわれたところの遺制で なるものは榭なり」と同音によって説く。榭とは古 杼に作り、樹に作る。〔孟子、滕文公、上〕に「序 とあり、堂前の東西の廂のある垣をいう。字はまた ある。「説文」れ下に「東西の牆なり」 声符は予。予に抒·舒の声が

抒 くむ・とる・のぞくジョ

次・秩序のあることをいう。

そぐように、心情を渫らすことを抒情という。 うに、つるべで井水を挹む意である。井水を抒みそ 訓する。〔管子、禁蔵〕「井に抒みて水を易ふ」のよ 「挹むなり」、また挹字条二三上に「抒むなり」と互 に対する語である。 やか)にして扱うことを抒という。〔説文〕 二上に ある。予は杼の形。それを舒緩(ゆる形声 声符は予。予に序・舒の声が 叙事

杼 8 ひ・そぐ・うすいジョ・チョ

その器はけずってうすく、 り」とあり、予はその末端に糸のあらわれている形。 声の字。〔説文〕☆上に「機の緯を持するものな またその意ともなる。長寿の人を杼首というの器はけずってうすく、細長く作るものであるか ある。予は杼の象形字で、杼はその形 声符は予。予に序・舒の声が

杼

叙(敍)

徐

叙 は、老健の人にその相のものが多いからであろう。 9 (敍)11 のべる・ついでる・はしがきジョ

艌

すべて次第のあることを叙次・叙任・叙述・叙録の 叙事とは、次第をもってものを述べること。それで 原義。次第に回復するので、舒次の意となる。その は、ものを汲み出すように心情を外に洩らすこと、 舒次をもってことを述べるのを叙事という。抒情と る)にするのを叙という。叙とは舒緩にすることが もって治癒を行なうて、その苦痛を舒緩(ゆるめ といい、艅の別形が兪で、癒(癒)の初文。これをといい、艅の別形が兪で、癤(癒)に移すのを艅のいたるもの。その膿血を舟(盤)に移すのを艅のは把手のある大きな針。治療に用いるメスの類で、は把手のある大きな針 三下に「次第するなり」と訓し、余声とするが、 会意 『ミナらより』と訓し、余声とするが、余旧字は敍に作り、余と支とに従う。[説文]

徐 やすらか・おもむろ・ゆるやかジョ

たり」の意であるが、本来は道路を祓除することを り」というのは、「易、困卦、九四」「來ること徐々かにすることを徐という。「説文」ニ下に「安行なかにする この針を立てて、地下の邪霊を除き、その道を安ら これを医療に用い、また呪器として用いる。道路に 徐 形声 ある。余は把手のある大きな針の形で、 声符は余。余に除・叙の声が

> えた道である。 その儀礼を行なうことを途という。 示す字であろう。外族の侵寇を防ぐために、 加える形で、これも邪霊の侵入を防ぐための呪儀を いう。卜文に産の字があり、これは止(趾)に余を 途とは祓除を加

虹 10 ゆるす・おもいやり

[玉篇] に恚怒の字とするもので、怒と声義同じ。 を推測させる。〔説文〕に古文として録する字は、 が、そのような巫道を基盤とするものであったこと がうことから発想をえているものであり、原始儒家 これより近きは莫し」という。儒家がこの恕をもっ 尽心、上」に「遭恕して行ふ。仁を求むること、 は如にあり、神意を推すことを原義とするものであ 子の道は忠恕のみ」によるものであるが、その初義 て仁の道とするのは、女巫が神託を受け神意をうか □○下に「仁なり」というのは、〔論語、里仁〕「夫えに他を推してその心をはかる意となる。〔説文〕を恕といい、これによって神意をうかがうこと、ゆを恕といい、これによって神意をうかがうこと、ゆ 態となり、神意を茹ることをいう。その状態の心意 他を推して自ら知ることを恕という。「孟子、 串 が祝禱してエクスタシー 声符は如。如は女巫 の状

紓 ゆるい・ゆるやか・やわらぐジョ

「緩やかなり」、また「一に曰く、舍くなり」とし、ある。予は杼の形。[説文] | 三上に 形声 ある。予は杼の形。 * 声符は予。予に序・抒の声が

舒緩にすることをもっていう。 予声とする。[左伝] 僖二十一年 が、叙は病を治癒する法をもっていい、紆は機杼をとは、緩めて解除する意である。叙と声義が通ずる 叙と声義が通ずる 「禍を紓くなり」

茹 くらう・はかる・なジョ

[方言]に「吳越の閒、凡そ飮食を貪るもの、これ 舞する巫女の形である。字に二形二義がある。 受けることをいう。若と字の要素が同じく、その狂 巫女が狂舞してエクスタシーの状態となり、神託を 「茹とは咀嚼の名なり。以て菜の別稱となす」とあ を茹といふ」とする。〔詩、豳風、七月、疏〕に が、〔荘子、 菜食をいう。「茹る」の訓は若・如と同じく、 大間世」「葷を如はず」と人にも用いる。に飲ふなり」と馬を飼養する意とする。に飲ふなり」と馬を飼養する意とする。 声符は如。〔説文〕一下に「馬

除 10 のぞく・きよめる・きざはしジョ(ヂョ)

う。〔説文〕一四下に「殿陛(きざはし) 手のある大きな針。これを呪具として、祓除を行な 叙など、余に従う字の形義によってそれを知るこ 余がその呪儀に用いる呪器であることは、徐・途・とするが、諸説みな誤る。字の本義は祓除の意で、 除の義を転義とし、〔通訓定声〕にはそれを仮借義 階除の意は字の初義ではない。〔段注〕に祓 声符は余。余に徐・叙の声がある。余は把 なり」とす

> 「地を除す」といい、邪気を除去する意。 歳末を除歳という。 任・除夕のように、旧を捨て新を迎える意となり、 う。殿陛の義は後起、除去の意よりして除外・除 祭壇の意。すべて出入のところを祓うことを除とい「諸侯をして日中に除を造らしむ」の除とは、その 儀や盟誓のことが行なわれた。〔左伝〕昭十三年 る祭壇を作ることを「壇を除す」といい、 神梯をいう。そのところに祓除を行なうことを、 とができる。除は自に従う字で、自は神の陟降する 神を迎え そこで祭

絮 12 わた・わたいれジョ

柳絮という。柳の花は、 する。綿わたの古いもので、最も扱いにくいもので |三上に「散れたる緜なり」、すなわち古わたの意と あるから、そのようなくり言に近い言動を絮々とい 柳の花は、絮のちぎれ飛ぶさまに似ているので くくだかれたものの意がある。〔説文〕 声符は如。如には茹、柔らか

舒 12 ゆるやか・おもむろ・のびるジョ

字で、舎す・舎つの訓義のある字。ゆえにその両義器を針器である余で突き通し、その呪能を破る意の びるなり」と訓し、予声とする。舎(舎)は祝禱の公るなり」と訓し、予声とする。*** ところで杼の形。〔説文〕四下に「伸 字義に通ずるところがある。 を承けて舒緩・舒展の意となる。紓と声義が近く、 形声 声符は予。予は抒・紓の従う

> 耡 すく・たがやすジョ

す」とあり、〔礼記、王制〕に「古は公田は藉してれ、里宰〕の〔鄭司農注〕に「耡は讀んで藉と爲れ、里宰〕の〔鄭司農注〕に「耡は讀んで藉と爲れ、里宰〕の〔鄭司農注〕に「耡は讀んで藉と爲して貢し、殷人は七十にして助し、周人は百畝にしとする。〔孟子、滕文公、上〕に「夏后氏は五十にとする。〔孟子、滕文公、上〕に「夏后氏は五十にとする。〔孟子、滕文公、上〕に「東后氏は五十にとする。〔五子、滕文公、上〕に「東后は公田は藉して す」とあり、 いて合耦し、相佐助せしむ。因りて放ひて名と爲宰の治する處なり。今の循葉の室の若し。此にお 七十にして耡す。耡は耤稅なり」と、助法をいう字 繁文というべき字である。〔説文〕四下に「商人は これは耡の別の一義である。 のちの申明亭にあたるもので、民事の相談所であり、 を以て耡に合耦す」の〔鄭注〕に「耡なるものは里 は耤(藉)稅なり」という。〔周礼、里宰〕「歳時 稅せず」というのも、助法の意である。ゆえに「耡 いう。耡はさらに耒を加えたものであるから、助の 貧民救済の施策をいう。街弾の室は、 とを合せた字で、草をすきとることを 形声 声符は助。助は鉏と耒(力)

鋤

形声 除くことを鋤治という。 に耕鋤することを鋤社という。転じて奸悪のものを 耰・鋤芸は鋤で草を除くこと。十家が協同して順次を、 ピース その本義を示す形声字が作られた。鋤 化によって、その本義を示す形声字が作られた。鋤草をすきとることをいう。助は鋤の初文。助の多義

献するものがないことを「五穀升らず」という。 地位に陸進する意。もと〔呂氏春秋、孟夏〕「農乃問〕に「文子と同じくこれを公に升す」とは、公の ち麥を升む」とある昇献の意から転じたもので、 問〕に「文子と同じくこれを公に升す」とは、 昇

すくない・すこし・へる・おとるショウ(セウ)

3

ちいさい・こまかいショウ(セウ)

1

ショウ

墨 0

は玉

微小のものに象る。その形は貝あるい

みられる。妙・杪などはその形に従う。ものを加えており、小さな貝・玉の類を綴った形とものを加えており、小さな貝・玉の類を綴った形と わない。金文の少の字形は、小の下に斜めに糸状の らざるなり」とし、字を丿声とするが、その声は合象形 小貝などを綴った形。〔説文〕ニ上に「多か

爿 ねだい・きれはしショウ(シャウ)

貝・小玉の形かと思われ、

小貝を示す貨、また瑣・**

小

堕ちた説である。卜文・金文の字様からみて、 す」とし、一なるものを八分する意とするが、理に るものなり。八に従ふ。―にみえて、これを八分を写したものであろう。[説文] ニ上に「物の微な

殷の遺址として発見された城壁は、約四キロに及ぶトの流しこみと同じ方法で城壁などを築く。鄭州の 立て、中に土を入れてこれを撞き固め、コンクリー片の反文としての爿は、版築のとき左右にこの板を H 版築形式のものであった。その工程も、この遺址に 概ね病疾に関するもので、牀の象形である。しかし 若くす」とみえる。文字としてこの形に従うものは、 よって明らかにされている。その一版の大きさが、 と「唐本、説文」に「反片を爿と爲す。讀みて牆のく「唐本、説文」に「反片を爿と爲す。讀みて牆の上記。 象形 片の反文。版築のとき、 土の

> 形両義に用いる字である。 の形であり、また牀几の形とも同じであるから、一堵とよばれるものであろう。字形はその版築の板**

召5 / (国) (24) まねく・めす・よぶショウ (セウ)

J_®

は、しまった。 別学のとき皇天尹大保という聖号を称した聖職者で、 おそらく降神の儀礼を掌る聖職の伝統をもつ家で 召各がその初文。各もまた、祝禱に対して降臨する であろう。それで周の創業のとき、また皇天尹大保 のは、そのときすでに周との連携をもっていたから するものとの地位を与えられていた。のち殷に離叛 「西史召」、西方の祭祀官として、王朝の祭祀を代行 とあって互訓。また〔説文〕は字を刀に従うものと に「評ぶなり」とあり、言部三上に「評は召なり」ものの、足(夂)がみえる形である。〔説文〕三上 招の初文である。霊の降ることを昭格といそれにこたえて霊の降るのを召という。すなり 口はID、祝禱を収める器の形。祝禱して霊を招き、 し、「召方」という外族としての扱いを受けている して刀声とするが、卜文・金文の字形は明らかに入 人と口とに従う。人は上から降下する形。 すなわち

升 十合・ます・のぼる・みのるショウ

・杪などがこれに従う。みな同系の語である。

小なるものを連ねたものを少といい、

7 イママ

昇・陸と通用して、のぼる意に用いる。〔論語、 升とも、その勺形の器で糧をはかるのである。字は に極めて近く、勺の中に一を加えた形である。斗・ [秦公殷] の蓋の刻銘に升の字がみえるが、斗の形 憲法

ショウ 小 少 爿 召[盟]

東のので、「馬鼎」「師詢設」に「夾鷹」、「晋姜鼎」である。『『公の支配した「詩、周南」の地もほぼである。『公の支配した「詩、周南」の地もほぼである。『公の支配した「詩、周南」の地もほぼである。『公の支配した「詩、周南」の地もほぼである。『公の支配した「詩、周南」の地の歌謡南方の附近で、〔詩、召南〕の詩篇はその地の歌謡南方の附近で、〔詩、召南〕の詩篇はその地の歌謡 字であり、 鐘〕に「用て丕いに顯かなる祖考先王を卲各す」 とあり、卲各はのちの文献では昭格という。 この義にはのち詔の字を用いる。召は神霊を迎える に「墨匹」の語があり、いずれも輔相の意である。 った。 から 迎えてこれを拝するを邵という。 〔宗 周

丘 だいく・たくみ・つくるショウ (シャウ)

「匠人、國を營む」「匠人、溝洫を爲る」とあり、 る所以なり」という。[周礼]に「匠人、國を建つ」の**へ、「本式」に「匠人、國を建つ」に下に「木工なり。」と斤とに従ふ。斤は器を作った。 用いる字で、匠はその匚に従う字であろう。〔説文〕されるが、匚は卜文において区・囡のように祀処に 制作することを匠という。のちそれぞれの術に達し 弓・廬・匠・車・梓をあげる。大は国都の建設より、 また〔考工記〕に「攻木の工、七」として輪・輿・ たものをいい、宗匠・師匠・鵜匠・鷹匠という。 小は車輿弓矢の属に至るまで、すべて斧斤をもって

庄。[莊]。[莊]。 たいらか・いなかショウ(シャウ)

> の名主を庄屋という。国では「庄子」とかく。庄家は農家。わが国でも村国では「庄子」とかく。庄家は農家。わが国でも村あるが、荘の俗字として用い、「荘子」もいまの中 形声 を略して土に従う。もと平らかな地を意味する字で 正字は莊で壯(壮)声。庄はその俗字で壮

劭 つとめる・すすめる・よいショウ(セウ)

字である。またすすめ賞することから、劭美・劭令 る。力は未の形で、農事を示す。もと勧農に用いる 紀〕に「先帝、農を劭む」のように勧奨の意に用い は徳行の善美なる意に用いる。 「勉むるなり」とあり、〔漢書、成帝 形声 声符は召。〔説文〕」三下に

卲 7 あきらか・たかい・すぐれるショウ(セウ)

THE PERMIT 107

考の命を告ぐ、、〔宗周 鐘〕「用て丕いに顧かなるいの初文とみてよい。また〔也段〕「卲かに朕吾が昭の初文とみてよい。また〔也段〕「卲かに朕吾が昭明の意に近い。金文に昭王・昭穆の昭を卲に作り、 格の字を用いる。 祖考先王を邵各す」のように用いる。邵各はのち昭 う。〔説文〕丸上に「高きなり」とするが、むしろ とをいう字で、その霊を迎えて拝することを卲とい 形声 声符は召。召は祝禱して祈り、霊を招くこ

床 とこ・ゆかショウ(シャウ)

正字は牀で爿声。床はその俗字。〔玉篇〕

間・床山(髪結い所)などの意に用いる。 わす礼をいう。わが国ではとこ・ゆかの意で、 れ、床頭は小作頭、床盃は婚礼の夜、寝所で杯を交 にその字がみえるが、中国では近世に至って用いら

すくいとる・うつす・かすめるショウ(セウ)

の漢籍の国字解を抄物といい、初期口語の資料と 鈔の別体の字とされるが、鈔は「叉取する」意の 形声 み、抄写はぬきがき、その書を抄本という。室町期 字であるから、連なったものをたぐりとる意。また して重要なものである。 小さなものをすくいとる意となる。抄撮は一つま 声符は少。少は小さな貝や玉をつらねる意

肖 7 (省)7 にる・: ・ちいさいり(セウ)

岭 7

字は屑・梢の従うところで、小肉が原義。肖似の「趣(桓)文を佻嗣す」の句があり、字を仦に作る。り」とあり、肖似の意とする。斉器の[放斉敦]に別」とあり、肖似の意とする。斉器の[放斉敦]に肉相似るなり。その先に似ず。故に不肖といふな肉相似るなり。その先に似ず。故に不肖といふな どの連なるものは貨、小肉の連なるものが肖、不肖 字は悄に作るべく、仦はその初文であろう。 の意であろう。 とは「仦嗣せざるもの」、すなわち「嗣がざるもの 旧字は肖に作り、小声。〔説文〕四下に「骨 小貝な

娑 8 はしため・めかけ・わらわショウ(セフ)

の妾、妣甲」のようにいう例があり、ときには「河「示王(祖神の名)の妾、妣庚」「示癸(祖神の名)には「元癸(祖神の名)の妾、妣庚」「示癸(祖神の名)に隷属する、奴婢的な身分のものであった。卜辞にはませ 童といい、僮という。語がある。女を妾とい [礼記、内則] に「奔るものは則ち妾たり」とあり、 夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妾ありという。りかたを示している。のち人妾となって、天子に三りかたを示している。のち人妾となって、天子に三 僕駿百工牧臣妾」というのも、特定の宮廟聖所などはできょ 【伊設】に「康宮の王の臣妾百工」とは、康宮についます。 れた。〔書、 正規の手続きを経ないものは、その身分権を剝奪さ みなその神霊にささげられたもので、妾の本来のあ の妾」のように、自然神の妾とされるものがある。 爲し、女を人妾と爲す」というのは後世のことで、 の奉仕者とされた。〔左伝〕僖十七年「男を人臣と ものであり、その贖罪として、罪人はすべて神へ 「神に接する」ものであった。罪は本来神に対する 「君に接する」と接の義をもって解するが、もとは 接することを得るものなり。辛女に從ふ」とする。 上に「辠あるの女子なり。これを給事せしめ、君に のとして、犠牲とされることもあった。〔説文〕三 額に入墨された女で、古くは神につかえるべきも から、これを加える。妾はその罪を受けて、あるものにこれを加える。妾はその罪を受けて、 辛と女とに従う。辛は入墨に用いる針。罪) 女を妾というのに対して、男の入墨者を 費誓〕に「臣妾逋逃(亡命者)」という

> 8 (尙)。 ねがう・たっとぶ・なショウ(シャウ)

尚 间角山

文として「尚る」の意がある。 る。尚志・尚賢・尚文のように用いる。また掌の初る。 「尙へる」「尙い」「尙ぶ」などは、上にも共通する。意。その音は上と近く、声義の通ずるところがあり、という。神気にふれて、エクスタシーの状態にあるという。神気にふれて、エクスタシーの状態にある 神の示すところであるから、典尚・尊尚の意ともな とは関係がない。尚の従う八は兌と同じく、祝禱し よ」など、金文に字を常の意に用いることが多い。 尚はねがうが本義、その神の憑りつくさまを惝怳 て祈り、そこに神気のあらわれることを示すもので すものとするが、曾は飯から湯気の上る形で、語気条に「曾は詞の舒なり」とあり、八をその語気を示 なり。庶幾するなり。八に從ひ、向聲」と形声に解であるから、「尙ふ」意となる。〔説文〕ニ上に「髻あらわれることを示す。神にねがうところを祈る意 会意 にそえた形である。「曾なり」の訓は、〔説文〕の前 するが、向が字の本体であり、八は神気を示すため ろに神を迎えて祀る。上の八の形は、そこに神気の 向と八とに従う。向はまど、光の入るとこ

ころす・そこなうショウ(シャウ)

壯

といひ、 うも、 るに戈矛の類で人を刺傷することをいう。 形声 をいう。〔左伝〕宣十八年「凡そ自ら君を虐すを弑 戕は多く動詞に用い、槍で人を刺殺すること 外よりするを戕といふ」とみえるが、要す 声符は爿。〔説文〕一二下に「槍なり」と

ささげる・うける・たすけるショウ

爾 چ چ

招。 が、丞は下にあるものをひき上げて、拯う形である。承継・承接の意がある。字は、丞と字形が似ている承といい、承旨・承教・承順のように用いる。また 文〕一二上に「奉ずるなり、受くるなり」という。 左右の手。左右から人を捧げている形である。〔説 人を捧げて承奉する意で、尊者の命を受けることを まねく・よぶ・いたすショウ(セウ) 卩と収とに従う。卩は人の坐する形。収はま。**

形声

招賢・招聘・招隠のように用いる。 文とみてよい字である。死者の霊を招くを招魂とい 文〕一二上に「手もて呼ぶなり」とするが、召の繁 い、〔楚辞〕に〔招魂〕〔大招〕の二篇がある。 よぶことを示す字で、招の初文。√説 声符は召。召は祝禱して神を のち

昇 8 のぼる・あがる

旦日 8 あきらか・さかん

会意 星の二つある形。日は星の象形。二星を合せて、星の明るい意とする。〔説文〕七上に「日のり」の句を引く。また字の本義を「美言なり」とし、り」の句を引く。また字の本義を「美言なり」とし、であいて、それは〔書、大禹淳とするも、字義は明らかでなく、卜文の字形は星沙の形、その三光あるものは、温。その晶について光の形、その三光あるものは、温。その晶について光の形、その三光あるものは、温。その晶について、といいで、その三光あるものは、温。その晶についても「説文」七上に「精光なり。三日に從ふ」とする。とは古く晶に従う字形であった。

朴 8 えだ・すえ・ちいさい

なり、末なり」とし、互訓。標は標識に用いる先標なり、末なり」、前条に「標、木杪の、東なり」、前条に「標、木杪のでは、一般を表して、一般を表して、「木地のでは、一般を表して、「木地のでは、「木地のでは、

松 8 きつ ウョウ

粉彩

を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 を対して、 をがして、 をがい、ことは、その字形によっていう。常緑の木できなり」とは、その字形によっていう。常緑の木できなり」とは、その字形によっていう。常緑の木できなり」とは、その字形によっていう。常緑の木できなり」とは、 を対して、 をがいる、 でがいる。 でがい。 でがいる。 でがい。 でがい。 でがいる。 でがいる。 でがいる。 でがいる。 でがい。 でがいる。 でがいる。 でがいる。

沿 8 ぬま・いけ

形声 声符は召。(説文)一上に 「地なり」という。「風俗通、山沢」 金文の「辟雅(神宮)大池」を〔詩、大雅、霊台〕 に「靈沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「靈沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「靈沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「霊沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「霊沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「霊沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ に「霊沼」とよんでいるから、形の区別があるわけ

8 いる・あぶる

その器を「炒爐」とよんでいる。「倭名頻繁抄」に煎ってこがするとをいう。戦国期の「嬰次炉」に、上するが、土鍋などであぶりこがす意で、炒乾とはとするが、土鍋などであぶりこがす意で、炒乾とは形声 声符は少。[玉篇]に「火もて乾かすなり」

走 8 「生」10 はやい(セフ)

ま世 象形 髪を結いあげた婦人が、廟中 ま世 の祭事に奔走する形で、敏捷の捷の初った。 ** (敏) も婦人が髪を結いあげて、祭事に奔走する形で、敏・捷はもと同義の字。 走は捷の本字でする形で、敏・捷はもと同義の字。 走は捷の本字でする形で、敏・捷のもれず、捷の字を用いる。 「説文」にはなお使・達のうちに残されている。 「説文」にはなお使・達のうちに残されている。 「説文」ときに用いる語である。字の上部は妻・毎(母)・ときに用いる語である。字の上部は妻・毎(母)・には次条に、字の上部を入に従う字をあげ、「機下の足の援むところのもの」とするが、字形にふさわしくない。 走に従う字は、みなその声義を承け、もと女子に関していう語である。

プロ 8 地名 (セウ)

咲。【唉】。「笑」」のからう・さく

形声 旧字は唉に作り、声符は尖。 (後笑)」にも「可唉(笑ふべし)」、「微笑(微笑)」には「可唉(笑ふべし)」、「微笑(微笑)」には「可唉(笑ふべし)」、「微な。「知をとればころびるさまを花にたとえたのである。「類な名義抄〕には「可唉(笑ふべし)」、「微く(微笑)」の語がみえるが、花咲くという例はなく、「色葉字を表がした。」にもなおその訓はない。

字 9 まなびや (シャウ)

ふ。夏には校といひ、殷には庠といひ、周には序とよる。[説文] 九下に「禮官、老を養・ある。[説文] 九下に「禮官、老を養・・詳の声が

(礼記、学記)に「古の教ふるものは、家に塾あり、信礼記、学記)に「古の教ふるものは、家に塾あり、り。のように、その地をもっていう。また〔内則〕に有虞氏は庠、夏后氏は序、殷人は学、周人は廖・庠において、それぞれ国老・庶老を養うとする。こ年において、それぞれ国老・庶老を養うとする。こ年において、それぞれ国老・庶老を養うとする。こ年において、それぞれ国老・庶老を養うとする。こか、斉と大きの表表を教学とが同一のところとされるのは、古くは氏族の長老たちが、特定の機関において、氏族の若者たちを教育するメンズハウスの指導者とされていたからであろう。殷では卜辞に学、また周では「大活鼎」に小学、「静設」に学宮の名がみえるが、庠序などの名はみえない。庠序は建物の宮室などの名で、所伝のように古いものとは思われない。どの名で、所伝のように古いものとは思われない。どの名で、所伝のように古いものとは思われない。と言代は、「ないないないない。

> あるが、その用義にも変遷がある。 星光の天に流れることをいう。邵・昭は古今の字で上来、雲漢」「倬たる彼の雲漢 天に昭 回す」とは大雅、雲漢」「倬たる彼の雲漢 天に昭 回す」とは

毎 9 はかり・あげる

A PA

稱

会意 手と冉とに従う。冉は稱(称)の重りの形。 それをもつ形は稱。これをもった母量を称るのを稱 (称)という。〔説文〕四下に「丼せて擧ぐるなり。 爪と毒の省とに従ふ」とするが、犇とは関係がない。 爪と毒の省とに従ふ」とするが、毒とは関係がない。 があり、冊を称げて祝禱をなすことをいう。わが国があり、冊を称げて祝禱をなすことをいう。わが国がなり、一般を持て祝禱をなすことをいう。わが国がより、一般を持て祝禱をなすことをいう。わが国がより、一般を持て祝禱をなすことをいう。わが国が、

倡 10 あそびめ・わざおぎ・となえる

を声 声符は書。「説文」八上に「祭祀」におり、「古妻所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えに来所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えに来所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えの歌が所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えいる。「古楽所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えいる。「古楽所」「古詩」の類も、古く倡・娼によって伝えいる。「記述の歌の類は、古く唱・娼によって伝えいる。「おたものであった。

便10 はやい・さとい・すこやか

咲〔唉〕〔笑〕 庠昭〔卲〕 爯倡 倢

並ぶものであった。 使はその声義をとり、身動きのよいことをいう。漢 〔説文〕七下に「居ることの速やかなるなり」とみ り」と訓する字で、敏捷の捷の本字。疌の上部は妻形声 声符は声。疌は〔説文〕ニ上に「疾やかな の女官に倢伃があり、位は上卿に比し、爵は列侯と える。祭事ほ奔走することから、敏捷の意となる。 形。廟中にあって奔走することを示す寁の字もあり、 の上部と同じく、婦人が祭事に奉仕するときの髪の

宵四(宵)四 よい・よるショウ(セウ)

廖 會

のさしこむ形のようである。明の正字は찁に従う形に従わず、月と小とに従う字形にみえ、廟中に月光 とし、一には冥い意があるとする。金文の字形は肖形声 一声符は背(肖)。〔説文〕七下に「夜なり」 ものであろう。 で、窓からの月光、宵も月光によって宵夜を示した

将10 (將)11 ひきいる・おこなう・まさにショウ (シャウ)・ソウ (サウ)

とをいう。軍の行動のとき、将帥はその祭肉である は几の形、 会意 次、肉をその上において奨め、神に供えるこ旧字は將に作り、爿と肉と寸とに従う。爿

> のものであろう。軍政の の上部は爿の形で八、その下に手を一上一下するもの図象をもつ王族のなかから出たのであろう。図象 要な軍征や祭事に関するものが多く、将軍家は、 に、この図象が用いられる。また銘文の内容に、重 り、小子・小臣など、親王家に相当する関係の器銘 肉を祭る人をいう。金文の図象に豊や形のものがあ ゐるなり」と訓し、醬の省声とするが、将とはその また師といい、帥という。〔説文〕三下に将を「帥」自(肉の形)を携えて行動したので、その指揮者を すな

115

第一線に立つものはこの

りこむ形である。将享の将は、おそらく雛がそのの字形は、将の寸の部分を刀に作り、肉を鼎中に切 将に従う字に難があり、肉を烹る鼎をいう。その将 原義、他はすべてその引伸義、もしくは仮借である。 書に列するものは五十数義にも及ぶが、将帥が字の 将軍を意味する字である。将は訓義の多い字で、 社に祭って出行するが、その祭肉を奨める形が将、 公族にあたるもので、この図象はおそらく爿の音で るところがある。 初文であろう。壯(壯)の声義もまた、将と関連す よまれたと思われる。その出征のとき祖に祭り、軍 字

峭 けわしいショウ(セウ)

形声 木の枝の末端を梢、 声符は肖 (肖)。 山の険峻なるを峭といい、肖は末端の鋭いものをい

> 悄 人に施して峭厳・峭抜・峭直・峭勁のようにいう。 10 うれえる・しずかショウ(セウ)

₩ ₩ 心のしおれるをいう。 形声 声符は肖 (肖)。 肖は末端の

消10(消)10 きえる。つきるショウ(セウ)

「盡るなり」とあり、水のひくように消える意。消 うに用い、気力を欠くことを消極という。 消長して盛衰をくりかえす。消滅・消散・消耗のよ 息の消は尽、息は生。その安否を報ずる手紙をいう。 形声 小さなものをいう。〔説文〕一上に 声符は肖 (肖)。肖は末端 0

症 病気のしるし・やまいショウ(シャウ)

形声 症候といい、病状を症状という。 にみえるもので、近世の俗字である。 この字が用いられるようになった。〔水滸伝〕など 声符は正。古くは証の字を用いたが、 病気の徴候を 0 5

祥 10 (祥)1 さいわい・しるし・きざしショウ(シャウ)

养

一上に「福なり」とし、「爾雅、釈詁」に「善なり」形声 声符は羊。羊に摩・詳の声がある。〔説文〕

の多い字である。 ただ祥雲・祥瑞・祥応など、吉善の意に用いること す」の注に「變異の氣なり」というように、祥は必 吉凶焉くにか在る」は、予兆のあらわれに対して吉 凶を問うもの、 していて、解釈が一貫していない。漢代の鏡銘に祥「羊は祥なり」とするが、祥字条一上では羊声と解 いる省略体が多い。〔左伝〕僖十六年「是何の祥ぞ。 を羊としるすことが多いが、鏡銘には声字のみを用 となるものを祥という。〔説文〕の羊字条四上に と吉祥の意とするが、本来は吉凶ともに、その予兆 しも吉祥に限らず、妖祥を意味することもあった。 。 また昭十八年「まさに大祥あらんと

称1(稱)1 はかる・あげる・ほめる・いうショウ

であるが、のちその義に称を用いる。 称という。「いう」「となえる」の訓は偁と通用の訓 「銓なり」とみえる。のち糸数を数えるときにも、 また。 る意となり、はかりを称 錘という。〔説文〕七上に (称) はその繁文。重りをもちあげることからあげ もと禾穀の重さをはかることを示す字であった。稱 (称)の重りを称げている形で、形声 旧字は稱に作り、母声。番は

型 10

のぼる・すすむ

相楽しむのである。

人妖。神と人との世界は、

この笑において相接し、

笑10 わらう・ほほえむショウ(セウ)

は同じく巫女の狂舞する姿である若が、かざした両 たまたま竹の形に字形化されたもので、それ て舞い祈るさま。竹は両手をかざした 称[稱] 巫女が手をあげ、首をかしげ

る意を示す。その下段を隆という。

の陟降するところ。その前に土階を作り、そこに陸せよ」と天上に往来する意に用いる。自は神梯で神せよ」と天上に往来する意に用いる。自は神梯で神

とあり、「楚辞、離騒」「勉めて陸降して以て上下形声 声符は升。「広雅、釈詁」に「上るなり」

陞 偁 偁

笑

以以

神意をやわらげようとするもので、これも一種の呪 状態を示す字であるが、笑は「笑ひゑらぐ」状態で

天 は身をくねらせて舞う形。若はエクスタシー**** 手を艸の形に字形化されているのと同じである。

揚の義には偁がその本字である。 の稱は、重りをつけて穀量を称る意であるから、

唱 となえる・うたショウ(シャウ)

祝轎の器の日をそえたものが咲である。笑の従う天の芙より、さらに略体となったものであり、それに

の笑」など、关を用いることもある。关は笑の省体書、叙書〕「談笑して大いに噱ふ」、[谷永伝]「倡優書、叙書〕「談笑して大いに噱ふ」、[谷永伝]「倡優丹伝、注〕に「唉は古の笑の字なり」とみえ、[漢書、史行為である。笑はまた咲(唉)に作る。〔漢書、史行為である。笑はまた咲(唉)に作る。〔漢書、史

,,。 w ままこ关(吳)に作る。〔漢書、史説である。笑とは神に対するもので、もと神事的なて犬を借りて引そゝ と て犬を借りて示そうとするのか、まことに笑うべき うのであると論じているが、人の哭き笑いをどうし を出し、哭が犬に従うのと同じ理由で、笑も犬に従 儀であった。 〔段注本〕 に竹と犬とに従う形の篆文

妖幻の行為をいう。示部の禊は地妖、妖・笑の属は

は、妖の初文。妖・笑はいずれも巫女の呪儀をなす

〔古詩〕などに、それぞれ唱導の形態があった。 式であった。民謡や民話など、特定の伝承者によっ 「予に倡へて女に和す」の倡和はその義。"倡はそのお。ななり」とあり、〔詩、鄭風、藩令〕と。 くなり」とあり、〔詩、鄭風、藩令: いまい 大声 声符はよう 〔説文〕二上に「導 て成立するものを唱導文学とよぶ。〔楚辞〕〔楽府〕 人をいい、唱はその歌をいう。互唱は民謡の古い形

店 11 はかる・あきなう・あきらかショウ(シャウ)

高高歌 歌

な針器。 会意 辛と四と口とに従う。辛は把手のある大き 入墨に用いるもので、刑罰権を示す。尸は

四四四

から、商ることを原義とする。古代王朝としての商禱を収める器。これに祈って、神意を問う意である 文として明らかの意、下の南に内の意があるとする 意とするのは、字形解釈を誤る。上部の辛を草の省 よりして内を知るなり」、すなわち商権、推測する 権を示す字形であるのと同じ。「説文」三上に「外 台座の形。この台座の上に辛を樹てる。口は日、祝 のち行商に従ったからであるとする説もあるが、商 業・商賈の意があるのは、亡殷の余裔が、国亡んで の形とを主とし、南形に従うものではない。商に商 ものであるが、卜文・金文の字形は、辛とその台座 行為を意味するものとなったものと思われる。〔昏われるようになり、のちそのことが形式化して、高 には賞の意があり、代償・償贖のために賞が行な ることを原義とし、そこから商関・商量の意が生れ、 は、もと性質の近いものであった。商は神意をはか のち賞・償の意より商賈・通商の意となったもので あろう。賞賜に用いる字は、商の下に貝を加えた賛 殷の正名で、その都は大邑商といった。商は (周)が方形の彫 盾に祝禱を加え、その支配 賠償の字に賞を用いており、賞賜と賠償と

うたひめ ショウ(シャウ)

がその本字である。

家・娼楼の字に用いる。もと倡より分岐して、慣用 を異にする字となったが、通用することも多い。 声符は昌。倡の俗字。倡を倡優、娼を娼

> 「秦氏の女」たちは、倡であるとともに、また娼、くは倡は娼であった。〔古楽府〕を伝えた邯鄲の 〔古詩〕にみえる「樓中の女」であった。

婕 うつくしいショウ (セフ)

るす。[古楽府]に〔婕妤怨〕があり、班婕妤のこ婕という。漢の女官である倢伃は、また婕妤ともし 髪を結んで簪飾をつけた形。その姿をした婦人を 同様の字形で、敏捷という。疌の上部は妻と同じく とを歌ったものだという。 る婦人の姿で、婕の初文。微(敏)も形声 声符は声。 蹇は祭事に奔走す

寁 **すみやか** ショウ (セフ)

走する姿であるから、敏捷の意である。 捷・嫌のるが、意味が明らかでない。廟中にあって祭事に奔るが、意味が明らかでない。廟中にあって祭事に奔 [説文] 七下に「居ることの速やかなるなり」とす 敏(敏)などもみな祭事に従う婦人の姿である。 本字であろうが、用例は殆どない。 会意 **疌は祭事に奔走する婦人の姿。妻・** 一と更とに従う。一は廟堂、

悄 われをわすれる・おどろくさまショウ(シャウ)

気の彷彿としてあらわれる意。その神気を迎えて忘失の状をいう。尚は窓明りのところで神を祀り、神 形声 我の状にあることを、惝怳という。怳も巫祝の自 に、君惝然として亡ふことあるが若し」とは、 声符は尚(尚)。〔荘子、則陽〕「客出づる 自

> 状態をいう。 失の状をいう字。目にものを見ず、 耳に声を聞かぬ

捷 かつ・すみやか・さといショウ(セフ)

捷には捷径・捷點(すばしこい)・捷急(はしこに用いる。敏捷の意には捷・建・電の字があり、ば吾、女を以て夫人と爲さん」など、みな捷利の意で、大きな以て夫人と爲さん」など、みな捷利の意を以て夫人と爲さん」など、みな捷利の意をは、また、という、勝利を本義とすべきである。〔詩、小雅、宋から、勝利を本義とすべきである。〔詩、小雅、宋 三十一年「齊侯來りて戎の捷を獻ず」の意によるもたるものなり」と俘虜の意とするのは、「春秋」荘たるものなり」と俘虜の意とするのは、「春秋」荘にるとなる。「説文」一三上に「獵なり。軍後の得 のであろう。捷は勝利の意。軍獲はその結果である い)など、いくらか譏刺を含んだ語意のものが多い。 形声 る婦人の姿。祭事にいそしむので敏捷 声符は走。

疌は祭事に奔走す

梢 1 (梢) 1 こずえ ショウ(セウ)

う。梢子はまた「越中ふんどし」風の三尺布をいう。 梢子・梢人は舟乗り。細長いボート風の舟を梢とい 上に木の名とするが、杪末の意に用いることが多い。 形声 細く鋭いものの意をもつ。〔説文〕六 声符は肖 (肖)。肖は末端

渉1 (涉)1 わたる(セフ)

:[*} 淵

。 登

から、字義が多義化した点において、文と似ている。服、法の規範を憲章という。文身の著明であること の意であろう。法式をしるすものを章程、礼服を章 詩文の章節をいう語となる。楽章の名とするのもそ 意となる。また完結性をもつものであることから、 である。入墨の美の意より章明の意となり、表章の うものではなく、下部もまた十ではない。〔説文〕 方はない。また字形においても金文の字形は音に従 するという意味であろうが、そのような楽章の数え 十は敷の終なり」とする。それは楽章十篇を一章と 解し、「樂の竟るを一章と爲す。音と十とに從ふ。 は楽章の解をなすために、字形の解釈を誤ったもの いう。〔説文〕三上にこれを楽章を本義とする字と 文彩あるものを文章といい、その美しさを対彰と のある形。これによって入墨を行なう。その文身の 象形 入墨の器である辛の針の部分に、墨だまり

貞ふ。庚子に、王は渉らんか」のように、王の渡水先づ荒に河を渉らしめんか」と卜し、また「ご未、発づ荒に河を渉らしめんか」と卜し、また「ご未、解真ふ。子商に命じて、

字形を録する。川を徒渉することは危険を伴うこと 鷹るなり」とあり、かちわたる意。重文として渉の間を渉る意とする。[説文] 二上に「徒行して水を

旧字は林に従い、両水の間に歩を加え、水

11

うすつく・うつショウ

であり、ト辞には、異族のものをさきに徒渉させる

「王、朝に周より歩して、則ち豐に至る」というの要な条件とされていたのであろう。〔書、召 誥〕にな例があるのは、王の徒渉が、その儀礼の執行に必な例があるのは、王の徒渉が、その儀礼の執行に必な例があるのは、

(水名)を渉るに災亡きか。雨ふらざるか」のよう の日を卜するものがある。「王はそれ省するに、商

紹加 つぐ・うける・たすけるショウ(セウ)

貂彩 類

跋渉の意より、渉猟・渉歴のようにいう。また衆に渉というのが、祭礼のときの定めであった。のち は瀕の字形にかかれている。陸行に歩といい、水行 れによって祖霊にも接しえたので、順子・順孫の字 の初文が渉に従う形であることからも考えられ、こ 要な意味をもつ行為であったことは、たとえば 要な意味をもつ行為であったことは、たとえば、順かったのであろう。水を渉ることが、霊に接する重 その地霊に接するための、呪的な意味をもつ行為で と同じく、王の歩行・徒渉は、その地に親しく臨み、

書を歴覧する意にも用いる。世事を多く経歴するこ

「先王の大業を紹復す」、「康誥」「衣(殷)の徳言を「先王の大業を紹復す」、「康誥」「衣(殷)の徳言を 紹聞す」など、古い用例がある。 迎える意。祖霊を継承する意をもつ。〔書、般庚〕 するが、その字形は邵に従うもので、邵は祖霊を題(桓)文を仦嗣す」とあって、王統を継ぐ意といった。 声符は召。〔説文〕一三上に「繼ぐなり」 紹、緊糾なり」とは、三本の縄紹、緊急を (説文) 一三上に「繼ぐなり」と

赴き、 「稟人」の職は、祭祀に米物を供することを掌るも これで、Kan 【説文】セ上に「栗を擣くなり」という。漢の刑罰両手。両手で杵をあげて、臼中のものを春く形。 会意 のであるが、それには女囚の徒があてられる定めで 赴き、女子は臼杵のことに従う。〔周礼...春人〕に城旦春というのがあり、男は朝早くから築城にに城旦春というのがあり、男は朝早くから築城にいまれる。 午と収と臼とに従う。午は杵の初形。収はいます。

訟 うったえる・せめる・あらそう・ただすショウ

あった。きねうたを舂歌という。

郡

棘、三本の槐の前で、嘉石・肺石を左右にして行に用いる。〔闖礼、朝士〕に、外邦の訟事は九本の金文では訳訟・罰訟など、すべて獄訟(裁判)の意金文では訳訟・罰訟など、すべて獄訟(裁判)の意 の字形に容に従うものがあるので、公声を認めない また「一に曰く、歌訟なり」と別訓を加えている。 ければならぬ。〔説文〕三上に「爭ふなり」とし、 であることからいえば、 る争訟・祝頌を示す字であるから、会意とすること なは公廷の象形字であり、訟・頌はその公廷における。 説もあるが、頌は金文にみえ、公に従うものが初形。 もできる。ただ公声六文のうち、四文が訟・頌の声 声符は公。公に頌・松の声がある。頌・松 公にその声があったとしな

章 紹 舂 訟

ショウ

の辞を傾という。「歌頌」。頌は公廷で歌舞して祖霊を祭るもので、そ「歌頌」。頌は公廷で歌舞して祖霊を祭るもので、そなうことがみえる。内邦の訟事は、おそらく公廷でなうことがみえる。内邦の訟事は、おそらく公廷で

逍ュ きまよう

勝12【勝】12 たえる・まさる・かつ

りない

と二義無し」というが、字が勝敗の意をもつのは、と二義無し」というが、字が勝敗の意をもつのは、された擧げ、能くこれに克つを、みな勝といふ。もこれを擧げ、能くこれに克つを、みな勝といふ。もと二義無し」という。任とは肩にかつぐこと。〔段注〕に「凡そよくう。任とは肩にかつぐこと。〔段注〕に「凡そよくう。任とは肩にかつぐこと。「段注〕に「凡そよくる。任とは肩にかつぐこと。「段注〕に「凡そよくが、能くごれに克つを、みな勝といふ。もと二義無し」というが、字が勝敗の意をもつのは、と二義無し」というが、字が勝敗の意をもつのは、と二義無し」というが、字が勝敗の意をもつのは、

国の北面などというのと同じよび方である。 で、もと左右の廂に分置したことから起った。わがで、もと左右の廂に分置したことから起った。わがの、またひさしをいう。東廂・西廂というときは、の、またひさしをいう。東廂・西廂というときは、の、またひさしをいう。東廂・西廂というときは、の、またび、東京は相談。〔説文新附〕九下に「鹿」

1 うれえる・つつしむ ショウ(セウ)・シュウ(シウ)

して襟を正し、危坐して客に問うて曰く」とみえる。いう。蘇軾の〔前の赤壁の賦〕にも「蘇子、愀然と問〕「孔子、愀然として色を作して對ふ」のように思い、「れ記、哀公をは、「ない」をいい、「ない」をいい、「れい ない しょう はい ない あいま 一声符は秋。同じく秋声に従うものに愁があ を声 一声符は秋。同じく秋声に従うものに愁があ

学 12 たなごころ・てのひら・うつ

| たかくたいらか・たかい・ひろい ショウ(シャウ)

形声 声符は尚(尚)。尚は窓に神とすべきところをいう。「説文」三下に「高土を平治するなり。遠望する所以なり」とするが、本来は堂基とすべきところをいう。「説文」三下に「高土を平治するなり。遠望する所以なり」とするが、本来は堂基とすべきところをいう。その地は高敞、また広敞・とすべきところをいう。その地は高敞、また広敞・総でいる。「から、」という。「から、」に、「から、」という。「から、」に、いっしい。」に、いっしい

日日 12 あきらか・ひかり

れ、新星の出現がしるされている。星の観測は、占に説文」七上に「精光なり。三日に従ふ」とするが、三日が並んで出るはずはない。晶光は水晶のように一一ででは、上に「精光なり。三日に従ふ」と立びに従う。ト辞に「新大星ありて、火(火星)と立びに従う。ト辞に「新大星ありて、火(火星)と立びに従う。ト辞に「精光なり。三日に従ふ」とするが、三星をもってその晶光を示す。

星的な目的で行なわれていた。

椒 2 さんしょう

語詞。人を思慕することを歌う詩である。 野は、遠き條よ」というリフレーンを用いる。聊は、を除去したので、後宮の建物を椒敷・椒房・心状を除去したので、後宮の建物を椒敷・椒房・心状を除去したので、後宮の建物を椒敷・椒房・心状を除去したので、後宮の建物を椒変を保ち、臭気を除ちしたので、後宮の建物を椒酒という。まれば、水は山椒をいう。香味の強い形声 声符はぬ。椒は山椒をいう。香味の強い

湘 12 かわのな・にる

形声 声符は相。川の名で、南のかた街山より北流して河庭に入る。沅水と合せて沅湘といい、また流して河庭に入る。沅水と合せて沅湘といい、また流水と合せて瀟湘という。景勝の地として知られ、瀟湘八景は近江八景の藍本とされる。酈道元の「水源和八景は近江八景の藍本とされる。酈道元の「水源があろう。その神を湘君・湘夫人といい、「楚辞、九歌」にその祭祀歌がある。舜の説話を伝え、また屈原の説話も、その地の民俗のうちに残されている。

無 東 東 東

字に作り、「火の傷つくるところなり」とし、重文金惫(隹と火とに従う。〔説文〕一〇上に雥に従う

ショウ 椒 湘

焦

焼〔燒〕 硝(硝)

って、焦臭いことをいう。無燥という。〔礼記、月令〕に「その臭は焦」とあて焦、灼するものをいう。また人の心情に移して、として焦を録する。鳥を焼く意であるが、のちすべとして焦を録する。鳥を焼く意であるが、のちすべ

焼1(焼)16 ショウ(セウ)

硝12【硝】12 火薬の原料となる石

実用化されていたようである。 実用化されていたようである。 ガラス状の結晶体 形声 声符は肖(首)。硝石。ガラス状の結晶体 形声 声符は肖(音)。硝石。ガラス状の結晶体 形声 一声符は肖(音)。硝石。

利 1 すえ・やや・すくない

はもと「やゝやゝ」「次第に」の意である。の意。ただ〔膳夫〕にみえる稍食は扶持米をいう。の意。ただ〔膳夫〕にみえる稍食は扶持米をいう。また〔漿人〕「賓客の構蔵を供す」も同義で、間食また〔漿人〕「賓客の構蔵

| かっしむ・おそれる・おどろく ショウ

おのでは、中では、中では、中では、中では、中では、中では、できます。 では、中では、「自らいきしめる意であり、東とは、「自らいきしめる意であるという。」なは儀礼の行なわれる場所。、東は東と同じく標識とする木。 竦々とはれる場所。、東は東と同じく標識とする木。 竦々とはれる場所。、東は東と同じく標識とする木。 竦々とはれる場所。、東に悚の声がある。 身をすくめる意がある。

粧12 「妝」7 よそおい・かざる

粮幣鄉

翔12【翔】12 とぶ・かける・めぐる

とあり、鳥が羽をひろげて、ゆるくとびめぐるのをある。[説文]四上に「回飛するなり」が、 下声 声符は羊。羊に痒・羊がの声が

自12 しょうぶ

証 12 【器】19 あかし・しるし

形声 正字は證に作り、登 もと微と声義の通ずる字であった。証はその略字と して用いるもので正声。もと別の字で、証は「告ぐるな 文〕三上に「諫むるなり」、また證三上は「告ぐるな り」とあって、操物 (人名)、微を爲す」とは證言の 伝〕成八年「欒卻 (人名)、微を爲す」とは證言の 伝〕成八年「欒卻 (人名)、微を爲す」とは證言の 一方。 (中庸) に「微なきは信ぜず」の「釈文」に、 後を證に作る本があるという。微・證は声義の近い 学。証・證はもと別の字であるが、いま證の常用字 として証を用いるので、一字として扱う。

三口 1 つげる・たすける・おしえる **

久 12 ぞう・かたち (ジャウ)・ゾウ (ザウ)

そうができるまつぎ。「発文」かでころまったで

雺

(様)とそれぞれ声義の関係があろう。
(様)とそれぞれ声義の関係があろう。。
(様)とそれぞれ声義の関係があろう。。

全 2 とる・ぬきがき・かすめる

本面 下声 声符は少。〔説文〕一四上に本面 「叉取するなり」とあり、指先でかすめとる意とする。〔玉篇〕に「強取す。掠するなり」という。〔書、微子〕の「草竊姦宄」の草は鈔の仮という。〔書、微子〕の「草竊姦宄」の草は鈔の仮という。〔書、微子〕の「草竊姦宄」の草は鈔の仮という。鈔盗とは盗窃のことに外ならない。

傷 3 きず・やぶる・いたむ・そしる

職能を示すものであろう。また〔左伝〕定四年に燧は、様図の金文図象は、そのような象をとり扱う部族の

の危機をもたらすので、傷の意をもちうるのである。の危機をもたらすので、傷の意となったもので、人を諧りすべて悲傷のことに及んだものであろう。また敗りすべて悲傷のことに及んだものであろう。また敗りすべて悲傷のことに及んだものであろう。また敗りすべて悲傷のことに及んだものであろう。また敗りすべて悲傷のことに及んだものである。傷はおそらくもと死き嘆く字で、傷魂・傷神・傷逝を原義とし、それよを嘆く字で、傷魂・傷神・傷逝を履う」ことが生命へすることをも傷という。「陽を覆う」ことが生命へすることをも傷という。「陽を覆う」ことが生命へ行為であった。〔説文〕ハ上に「創なり」とし、字行為であった。〔説文〕ハ上に「創なり」とし、字符為であった。〔説文〕ハ上に「創なり」とし、字符為であった。〔説文〕ハ上に「創なり」とし、字符為であった。

授 13 【終】14 「終】15 すすめる・たすける

(説文) 一〇上に「犬を懐かしてこれを属ますなり」とするが、犬を使嗾するためにこれを属ますなり」とするが、犬を使嗾するために子を作るとは不都合なことである。〔左伝〕定四年「以て天家を奬う語であるとする。〔左伝〕定四年「以て天家を奬う語であるとする。〔左伝〕定四年「以て天家を奬ってこれを落(落成)する意であり、奬も犬牲をもってこれを落(落成)する意であり、奬も犬牲をもってこれを落(落成)する意であり、奬も犬牲をもってこれを落(落成)する意であり、奬も犬牲をもってこれを落(落成)する意であり、奬も犬牲をもってこれを落(落成)する意であり、受したいあり、でいたば、京観(凱旋門)の完成のとき犬牲をもってこれを落(落成)する意であり。将には祭事を行なう意があり、との成就を愛める意があり、褒奨・奨励という。下部を大に作るのは俗字である。

13 てらす・あきらかにする

睫 3 まつげ・またたく

形声 声符は速。走は妻の上部と同じく、婦人が のの、またたくことをいう。

像 3 はばたき・はやい

計 3 ショウ(シャウ)

は 詳ぐべからず」の詳を、「韓詩」に揚に作る。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を佯という。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を佯という。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を佯という。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を佯という。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を怪という。 をのことを詳かに察するのが詳。虚妄を怪という。

詳が揚の音でよまれることがあったのであろう。

全班 13 ショウ(シャウ)

鉱鉱

形声 声符は正。〔説文〕一四上に「鏡なり。鈴に では、 では、 を下さ、 をできるとよばれているものである。〔詩、小雅、 では、 をできるのである。〔周礼、鼓人〕に鐸・鏡を用いることをしるすが、鏡は殷人の器、鉦は列国の器であり、時代 によってその器制と名とを異にする。殷鏡の遺品は によってその器制と名とを異にする。殷鏡の遺品は をとして江南にあり、巨大な器制のものが多く、そ をとして江南にあり、巨大な器制のものが多く、そ の遠隔のものは湖南寧、郷の山中より出土する。お そらく殷が南人に対す

のと思われ、祭時にこ前線において用いたもる呪器として、その最

鉦

れを鼓ち、終れば丁重に埋置されていたものである。近は 大きなくにったが悪い。その点では、南人が用いたと思 ただ南が農耕文化との密接な結合をもつ のである。ただ南が農耕文化との密接な結合をもつ ので対して、鏡は饕餮文など重厚怪異な制作のもの で、呪器としての性格が著しい。ト文に融の字があ で、呪器としての性格が著しい。ト文に融の字があ

慴

で、鐃ももとより古制のものではなく、北人の用い の類があるが、その鼓吹曲は北方より移入したもの に軍行用の楽器であろう。漢に至ってまた鼓吹鐃歌列国期のもので、形制甚だ小、〔周礼〕にいうよう たドラ形式の鉦であろう。

頒13

100

「説文」九上に「完なり」と訓する。重文として録 宮・公廷の形であるから、またその声義を承ける。 ものであるが、金文の字形はすべて公に従う。〔漢する籀文の字形は容に従っており、容貌の意とする。 「頌は讀むこと容と同じ」とあり、阮元の〔釈頌〕書、儒林伝〕に「魯の徐生、善く頌を爲す」の注に、と 國の吏、 があるが、確かでない。思うに公は声符であるが、 したものとする。また張西堂に頌を鐘鏞とする説また王国維は、頌詩を廟祭における礼容に合せて奏 に、これによって頌の本義をその舞容にありとし、 るのが訟であろう。〔漢書、呉王溥伝〕に「它の群霊を頌するを頌といい、族内の争訟をそこで審判す また公宮・公廷の象形字であり、そこで歌舞して祖 という。なおその声があったのであろう。 もに禁じて與へず」とあり、この頌は公の意によむ 声符は公。公に訟・松の声がある。公は公 來つて亡人を捕へんと欲するものは、頌と

なめる・こころみる・かつてショウ(シャウ)

魯 下八百 管

字形の全体は、髣髴として神がそこに臨み、その供下に旨をしるし、上に小点を八字形に加えるもので、 すなわち神嘗・新嘗が字の原義である。秋祭を習る)するを謂ふなり」とあり、神が嘗めるのが原義 「百鬼迪て嘗す」の注に「これを歌饗(祭祀をうけ 薦を受ける意を示すものであろう。「漢書、礼楽志」 ふなり」とし、尚声とする。金文の字形は『形の台 膳夫〕「膳夫、祭に授くるに品ごとに嘗食(試食)いうのも、その意であろう。嘗試の義に「足祚 「嘗て」という過去をいう語となる。 が農功に報いる儀礼である。すでに嘗食したものは、 することであった。當新・當麦・嘗庶は、みな天子 し、王乃ち食す」とあって、もと神聖のために嘗食 こうのも、その意であろう。嘗試の義は、「周礼、うのも、その意であろう。嘗試の義は、「周礼、」 声符は尚。〔説文〕五上に「口にてこれを味

彰 14 あきらか (シャウ)

終る意とし、竟の字形との関連を考えようとしてい ることを示す字である。〔説文〕は章三上を楽章の 妙もまた文身を示す文に彡を加えて、その文彩のあ とを示す。〔説文〕ヵ上に「彣彰なり」と訓する。それに文彩を示す彡を加えて、文彩の彰明であるこ 字の形義が異なる。文身は通過儀礼として、身体装 飾的に行なわれるものであり、文系統のものは、丹 るが、竟は音に従う字、章は辛に従う字であって、 会意 加える辛(針)の墨だまりのある形。 章と彡とに従う。章は文身を

> 朱などの色彩を施す絵身の方法、章系統のものは、 文身の俗があったことは疑いない。 関係の文字が多いことからみて、中国の古代にも、 飾を誇った。それが彣彰の本来の姿であった。文身 に至るまでその俗を伝えるものがあって、満身の文 った。南方の諸島や太平洋沿海諸族の間には、近年 入墨の針によって色素を注入する永久的なものであ

慴 おそれる ショウ (セフ)

さるなし」の〔伝〕に「疊は慴なり」とみえる。畳をいうものであろう。〔詩、周頌、時邁〕「震疊せをいうものであろう。〔詩、周頌、時邁〕「震疊せり」というのは、祝禱の効によって慴伏させることり」というのは、 慴 伏させる意となる。〔説文〕一〇下に「懼るるない。 broky かえすことによって、その祝禱を翫ぶ意があり、 う。習に従う字はみなその呪儀に関する字である。 は慴の意であり、慴伏を求める呪儀であることを 器の上を羽で摺る呪儀で、それをくり形声 声符は習る呪儀で、それをくり

摺 する・やぶる・おりたたむショウ(セフ)

間 習が多義化するに及んで摺が作られた。〔説文〕「 転義である。 折り畳み、しわのあるものを摺というのは、のちの ニ上に「敗るるなり」とは、摺り敗れる意とするも のち折り畳むことを摺畳、扇子を摺畳扇という。のであろうが、本来は祝禱の呪効を敗ることをいう。 器の上を羽で摺る呪儀で、摺の初文。 声符は習(習)。習は祝禱の

14 まつる・たまよばい・ついなショウ (シャウ)・ヨウ (ヤウ)

で下り溺するは、その道禮なり」とみえる。酒食鶏を下すの禮、今世或いは死して旣に斂し、巫に就きを下すの禮、今世或いは死して旣に斂し、巫に就きを下すの禮、今世或いは死して旣に斂し、巫に就きない。等は竭の字の誤りで、祭楊は魂よばい。〔周礼、司簿は竭の字の誤りで、祭楊は魂よばい。〔周礼、司 ***ままりそり呉りで、祭陽は魂よばい。〔周礼、司「征祭は羨の道中なり。今の祭 殤の如し」とするが、ネーラネン・イーン・ 礼、大祝」「彷祭」は羨祭、その「鄭司農注」になっている。「意然」というで、そこで魂よばいなどをする。「周泉、ないない。」というでは、「説文」一上に「道上祭なり」とあるが、道とはは〔説文〕一上に「道上祭なり」とあるが、道とは 打昌といふ」とあり、昌はまた鬺の仮借。この打昌神を求める者二人、神を興して道上に遊行するを、 い、その傷は鷊の仮借。楊樹達の説に「長沙の舊俗、血をもって、死鬼の霊の力を借りることを起傷とい 玉をおき、下に玉光の放射する形で、陽の初文。楊 追儺の俗を伝えるものであろうと思われる。 って魂振りの儀礼を行なう意。台上に 声符は易。易は玉の陽光をも

爱14 ひつぎかざり・はねかざり・おおい・うちわショウ(セフ)

の中に立てた。古くは羽飾を用いたので、霋という。をつけて掲げて喪葬に従い、葬り終ってこれを墓壙をつけて掲げて喪葬に従い、葬り終ってこれを墓壙を とあり、その数は〔礼記、礼器〕の文に拠る。漢代天子は八、諸侯は六、大夫は四、士は二、下垂す」 声符は妾。〔説文〕四上に「棺の羽飾なり。

ショウ

碭

翣裳

誚〔譙〕

誦

である。爨を〔古今注〕に雉尾扇と称しており、雉用い、上に璧を載せ、五宋の羽を下に垂らしたものとあり、これを棺飾に用いて爨・柳という。画絵を有度〕「冬は爨を用ひず」の注にいずれも「扇なり」 ぶために用いるのは、本来の用途でない。 扇・翣はもと同制のものであった。これを清涼を呼 * (本) 「「大」では、一点である。「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、「大」では、 羽が古く呪的な意味をもつものであったからで、 尾を用いるものがあった。これを棺飾に用いるのは、 〔礼記、少儀〕「侍坐するには饗せず」、〔呂氏春秋、 そ

裳 も ショウ (シャウ)

常 上を衣、下を裳とする。裳には繡を施すなどして飾る。〔詩、邶風、緑衣〕「緑衣賃、裳」の〔伝〕に、常・裳を一字とするが、字は区別して行なわれてい に柏常騫、漢碑の『殺阮君神祠碑』に、楊常、字常・裳がもと通用の字であったことは、『呂氏春秋』 て名字対待としている例がある。 は子騫があり、騫は褰、裳(常)を褰るの意をもっ は下帬なり。常、或いは衣に從ふ」と 形声 声符は尚。〔説文〕七下に「常

消 [譙]19 せめる (セウ)

3 文〕三上に正字をあげて「嬈譊するなり」というの 醎

> 誦 14 となえる・そらんずる・うたショウ・ジュ

代に誚譲の語が多く用いられるが、当時におい 「王も亦敢て公を謂めず」と、謂の字を用いる。は謂 譲の意で、責めることをいう。〔書、金縢〕

は漢なに

古典語であったはずである。

では、まった。 「おいなり」その風ここに好し、以て申伯に贈る」と がいる」との風ここに好し、以て申伯に贈る」と がいる」は呪誦、「古甫、誦を作る。その詩孔だ は祝誦の木章にも「吉甫、誦を作る。その詩孔だ は祝誦の末章にも「吉甫、誦を作る。その詩孔だ は祝誦の末章にも「吉甫、誦を作る。その詩孔だ は祝誦の末章にも「吉甫、誦を作る。その詩孔だ はなる。 は祝誦の誦である。 はなる。 はない。 そえているものが多い。「左伝」に多くみえる「國 いわゆる楽語、韻律をもつ語をいう。注に「倍文とあり、「周礼、大司楽」の「興道諷誦言語」とはとあり、「風礼、大司楽」の「興道諷誦言語」とは係をもつものが多い。〔説文〕三上に「諷するなり」 母の字に羊(祥)・攸(修)・酉(酋)など、その関るが、喩母の甬と互通する音であると思われる。喩 歌謡のなごりが著しく、篇末に誦を独立した形式で 〔九歌〕や、その系統の〔九章〕 〔離騒〕 には、祭祀 「桑柔」に「誦言醉ふが如し」というように、祝誦 あるが、その自作の誦を「孔だ碩いなり」と讚めてあり、申伯が謝城を築いて入居することを祝う詩であり、申 (暗誦)を諷といひ、聲を以てこれを節するを誦と には修辞を尽したものであるが、「楚辞」文学の いるのは、その祝辞の呪能を鼓舞するためである。 一文のうち、誦声はこの一字のみであ 声符は甬。〔説文〕の甬声十

の遺響を存するものである。奥誦をまた奥論という。あるいは謳・諺・童謡形式のものも、みな古い呪誦人の誦」(襄三十年)、「郊の奥人の誦」(襄三十年)、「人の誦」(襄三十年)、「人の誦」(襄三十年)、「人の誦」(いま世論の字をあてる。

障 14 ふせぐ・へだてる・まもり・ついたてショウ(シャウ)

るもの、 他にも附と坿など、両部に属する字の例が多い。 下にも墰があり、〔説文〕に「擁ぐなり」とみえる。 その聖所を防ぎ守るためのものであろう。土部一三 障は自、神の陟降する神梯の形に従う字で、 とをいう。〔左伝〕定十二年の「保障」は堡障の意。 いもその声義は同じ。障翳・障扇はかざしに用い 障子はもとものを隔てるための襖であった。 *「隔つるなり」とあり、障壁をなすこ 声符は章。〔説文〕一四下に 本来は

14 楽の名 (セウ)

ていたものであろう。〔論語、述而〕に「子、齊に招神の楽を示す字で、その楽は古楽として伝承され 招〕のように招を用いることがある。韶はおそらく なり」と紹継の意があるとするが、字はまた〔九 うという。〔漢書、礼楽志〕に「能く堯の道を紹ぐ す」とあり、その楽の瑞応として、鳳皇が来たり舞 とあり、「書、 、益稷」に「簫韶九成して、鳳皇來儀。」に「麓子の祭なり」る。〔説文〕三上に「慶帰の樂なり」をいる。〔説文] 三上に「慶帰の樂なり」をいる。「記神の意があれた」といる。

> その楽を、「美を盡せり。 している。 また善を盡せり 」と賛嘆

嘯 うそぶ ふく(セウ)

作り、 南、 って知られた。嘯光・嘯傲のようにいう。後人の阮籍の嘯は数百歩の間に聞え、孫登もまた長嘯をもいた。 るようである。六朝の士人に反俗を好む風があっあるから、嘯や歌には、呪詛的な意味が含まれてい 歗に作る。その詩は、自分を棄てた女を怨むもので うが、嘯風はまた虎の異名でもある。 めくら判を嘯諾といい、風に嘯くことを嘯風とい なしたことがあるが、また長嘯を愛するものがあり て、たとえば宴席に挽歌を歌うことが一時の流行を り、口をすぼめて声を出すことをいう。籀文は歗に 粛の意がある。 〔説文〕 二上に「吹く聲なり」とあ 江有汜」「その嘯するや歌ふ」を引いて、字をいます。 は緊密な文様を示す字で、 声符は肅(粛)。 緊

廠 たてもの・うまやショウ(シャウ)

う。 形声 獄・厰房 廠は〔玉篇〕に「馬屋なり」とあり、 声符は敞。敞は高平の地。ひろい建物をい (工作所) の意に用いる。 のち廠

悠 すすめる・おどろくショウ

形声 下に「驚くなり」とし、「讀みて悚の 声符は從(従)。 〔説文〕 -0

> 「南楚にて、凡そ己の喜ぶことを欲せざるに、なる。〔方言〕に「慫慂は勸むるなり」とみえ、る。〔方言〕に「慫慂は勸むるなり」とみえ、 とは悚然起敬の意で、別義とみるべきであろう。 める意である。いまもその意に用いる。「驚くなり」 る、或いはこれを慫慂といふ」とあり、むりにすす これを説び、怒ることを欲せざるに、旁人これを怒 如くす」とあり、〔玉篇〕にも「悚るるなり」とす

憔 うれえつかれる・やせるショウ(セウ)

形容枯槁す」とみえ、憂怒りを…、経衰弱である。〔楚辞、漁父の辞〕に「顔色憔悴し、悴す」、注に「痩する病なり」という。いわゆる神悴す」、注に「痩する病なり」という。いわゆる神悴す」、注に「痩する病なり」という。 声符は焦。〔国語、呉語〕に「日に以て

量 15 あこがれる・おろかショウ

帽 とあり、遠く遥かなさまをいう語である。 ことを憧憬という。憬は〔玉篇〕に「遠行の貌」(おろか)の意がある。遥かなものに思いをはせる なり」とあり、心の不安定な状態をいう。また昏愚 形声 ある。〔説文〕一〇下に「意定まらざる 声符は童。童に撞・鐘の声が

殤 わかじにショウ(シャウ)

礼を意味するが、それを覆うことは死喪の意をもつ。う形。易は玉光を示す字で、確振り儀 るなり。人、年十九より十六に至りて死するを長殤 また愚かの意である。〔説文〕四下に「人を成さざ 声符は瘍。瘍は易(陽) を覆

「今時の竪會、これなり」とあり、漢代にもそのことがあり、死人に嫁することをいう。〔鄭司農注〕にがあり、死人に嫁することをいう。〔鄭司農注〕に るから、殤という。〔周礼、媒氏〕に「霧陽」の語没者を弔う歌である。戦争による死は非命の死であ が行なわれていたのである。 いる。〔楚辞、九歌〕に〔国殤〕の一篇があり、 以て社稷を衞る。殤とすること無かるべきなり」 嬖童(小姓)の戦死したとき、「能く干戈を執りている。(小姓)の戦死したとき、「能く干戈を執りている。(左伝)哀十一年、為のときは成人の喪葬と異なる。〔左伝〕哀十一年、十一より八歳に至りて死するを下殤と爲す」という。 一般戦死者のとり扱いをすることが提議されて 十五より十二に至りて死するを中殤と爲し 戦 設」では漂音四・繋・宗彝一とともに、賜与されて などの名がみえ、〔師逮彝〕には圭とともに、〔明などの名がみえ、〔師逮彝〕には圭とともに、〔明ず幸所とした玉器を瓚といい、合せて瓚璋といの璋を柄とした玉器を瓚といい、合せて瓚璋とい

漿 15 のみもの・こんずショウ(シャウ)

組15

あさぎ ショウ (シャウ)

形声

声符は相。〔説文新附〕一三上

そぐのである。

璋はいわゆる裸鬯の玉器で、これをもって酒をそ 器で、金文の璋の賜与が偶数であることと一致する。

出土の璋は、その文理が左右の対称をなしている二 賓に対して贈る幣物とされている。輝県第七六号墓

いる。「史頌設」に「章・馬四匹を實らる」とあり、

えたので、もとより魂振りとしての呪器である。こむ」とは、出生した男子にこの玉器を弄玉として与む」とは、出生した男子にこの玉器を弄玉として与 玉の名。〔詩、小雅、斯干〕「載ちこれに璋を弄せし

六酒を酒府に入れることを掌る。[礼記、玉藻] ・***と、『まと、『ない。」、***でき、の歌は、や飲料の総称として用いる。[周礼、漿人]の職は、 水を玄酒として神饌としたからであろう。 に漿酒醴など五飲のうち、水を第一としているのは 四飲、また六飲の一とされる酒の一種。またおもゆ

たまのな・かたそぎのたま・ひしゃくショウ(シャウ)

種15

(京東) (京東) (25)

かさねる・つぐショウ

れているが、相声にその意があるのであろう。湘水はその水が緗色であることから名をえたとさの初生の色であるとするが、音義説で信じがたい。

帙を緗帙という。〔釈 名、釈采帛〕に、緗とは桑

あさぎ染の布をいう。写本に用いる帛を緗素、その

に「帛の淺黃色なるものなり」とあり

\$\bar{\bar{3}}{\bar{3}}\bar{1}{\bar{3}}

圭と爲し、 声符は章。 半圭を璋と爲す」とあり、片そぎの形の 〔説文〕一上に「上を剡ぎたるを

ショウ

漿

璋

緗 緟[灩]

蔣

衝

##

す」とあって、次第に色を深めてゆく染色法である。 「三入を纁と爲し、五入を緅と爲し、七入を緇と爲 鍾はもと鍾に作るべく、鍾氏は染色の法を掌る。る、反覆する意のある字である。[周礼、鍾氏]のる、反覆する意のある字である。[周礼、鍾氏]の る、反覆する意のある字である。[周礼、鍾氏]の認証することを離 豪というが、この両字とも重ね 鍋の形。この中に三入・五入して、次第に色を深め ある雛によって説くべきである。金文に官職を再命 くが、重はのちの声符にすぎず、字義はその初形で するなり」とあり、「段注」に重の字義によって説 るので、かさねる意となる。〔説文〕「三上に「増益 中に糸たばを入れる。下の田形は染色の汁を入れ 糸かせの上下に手を加えた形。東は橐の象形。 た

蔣 まこも・しとねショウ(シャウ)

な双声通仮の字であるとしている。苽は次条に「一根を葺いたという。〔通訓定声〕に藉・薦・蔣はみ 超 名、蔣」としてみえ、その実は食用にした。その字 とがしるされている。〔荘子、則陽〕に、 蓆を作る。〔僮約〕に、それを編織するしごとのこと。 にっぱい に「苽なり」とあり、それを編んで はまた菰に作る。 形声 「苽なり」とあり、 声符は將 (将)。 〔説文〕 一下 それで屋

衝 つく・むかう・あたるショウ

であろう。〔詩、大雅、皇矣〕に臨衝という戦車の あり、字を童に従う形とする。憧の声義をとるもの 形声 ある。〔説文〕ニ下に「通道なり」と 声符は重。重に踵・鍾の声が

0

と離に作り、糸を染めるのに色をかさねる意。 働は形声 一声符は重。重に衝・踵の声がある。字はも形

た。それで「衝く」「衝ふ」の訓がある。名がみえ、大鉄を轅端につけて装備したものであっ

質 15 あきなう・たまう

下海 声符は高。「説文」六下に では古く南の主しており、それに対して賛を行商をいうとする。 のとしており、それに対して賛を行商をいうとするのとしており、それに対して賛を行商をいうとするが、字は賞の初文。金文では賞賜の意に用いる。金が、字は賞の初文。金文では賞賜の意に用いる。金が、字は賞のお尚声として作られた形声字である。すた。賞はのち尚声として作られた形声字である。すたって学を解するのは、商の転義の一をもって学を解するのは、商の転義の一をもって説くもって字を解するのは、商の転義の一をもって説くもので、本来の字義をえたものとしがたい。

賞 15 ほめる (シャウ)

章 素

「有功に賜ふなり」と賜与の義とするが、本来は賞商声。金文にはその字形を用いる。〔説文〕六下にた。 声符は尚。字の初形は商と貝とに従う字で、

全野 1 とかす・つきる・おとろえる

水子 形声 声符は背(肖)。背に末細き がう。消と声義近く、消夏を銷夏、消閑を銷閑、 いう。消と声義近く、消夏を銷夏、消閑を銷閑、 いう。消と声義近く、消夏を銷夏、消閑を銷閑、 で鍵がすなり」とあり、熱を加えて銷毀することを を鍵がすなり」とあり、熱を加えて銷毀することを をの意がある。

育 15 みぞれ・くも・そら

下海 下海 声符は肖(肖)。肖に細小な
「霧 雨るを霄と爲す」とし、斉の語であるという。
霰の消えかけたものが霄、光の消えかけるときが宵、
変の消えかける果てが宵外である。
霄壌とは天
地。極端に対照的なもの、絶対的な差のあることを
「霄壌の差」という。

樵 16 たきぎ・きこり・やく

> もない意である。 もない意である。 は新奏がず」とは、煮炊きするもの

焦 6 たいまつ・やく・こげる

瘴 16 南方の熱病・マラリア

篠 16 「筱」コ しの・ささ・あじか

のような表現があり、湯神楽などにも用いた。「古事記」に「天の香山の小竹葉を手草に結ひて」が本来の形であろう。これでまた竹器を作り、あじが本来の形であろう。これでまた竹器を作り、あじか本来の形であろう。

形声

声符は重。重に衝・鐘の声がある。重にか

蕉 16 ばしょう・こげる

緑青を示すのには錆の方がふさわしいようである。というはさびの意とする。さびの本字は銹・鏽であるが、はさびの意とする。さびの本字は銹・鏽であるが、字であるが、その義に用いることはなく、わが国で

形 結 16

声符は靑(青)。「精なり」という訓のある

さび (シャウ)

閶

天門・宮城の門ショウ (シャウ)

がわらよもぎ・さびしい かわらよもぎ・さびしい

踵 16 おう・つける・ふむ・かかと

ショウ

蕉

蕭踵錆

閶

償

燮

形声声符

(三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。 (三輔黄図)では紫微宮の南門の名とする。

償 7 つぐなう・あがなう

順會

形声 声符は賞。賞はもと償 贖・賠償の意を含

償という。償をまた贖罪という。 で、身体刑的なものが報、財産刑的なものを 意とするが、返済というよりも、もと贖罪的な意味をもつものであった。報は反映刑的な刑罰を意味 する語で、身体刑的なものが報、財産刑的な刑罰を意味 は要ら賠償の

ぐ・踵む・踵ねるなどの訓義がある。 に「追ふなり」とあり、追蹤することをいう。踵 さねる・くりかえすなどの意がある。〔説文〕こ下

灯 1 やわらぐ・おさめる

であるから、變にその音があったのであろう。

燮 やわらぐ・ショウへセ

「大いに熟るなり」とし、「辛とは物の熟えたる味な 印燮す」の語があるが、その燮は丁形に両火を加えに「百邦を柔燮す」、〔曾伯簠〕に「繁湯(地名)を に「百邦を柔變す」、〔曾伯簠〕に「繁湯(地名)をこれを清める儀礼をいう。燮も声義同じ。〔秦公設〕 字形の理解を誤る。両火は聖火、言は盟誓の器で、 字形のものに變があり、「和なり」と訓する。〔説 の義に用いた例はない。 る」と解するのは、〔説文〕以来の誤りで、字をそ の変形したものに外ならない。字書にこの字を「熟 ている形のものもあり、言や辛の形に作るものもそ 解を加えているが、言や辛は煮るべきものでなく、 文〕はその燮字条三下においても、なお和味大熟の り」とするが、道理のないことである。これと似た 辛と両火と又とに従う。〔説文〕 - 〇上に

牆 かき・さかいショウ(シャウ)

111

土垣をいう。のち住居の周囲にめぐらす垣墉をい 牆は穀物倉のために土壁を築くことを意味し、その 築のとき土をかためるのにそえる木の形であるから、 建物と合せて牆屋・牆宇・牆門といい、門外漢のこ 声符は爿。嗇は穀物倉の形。爿はまた版

> まれていたのであろう。 う。かこうこと、覆うことに、もと呪的な意味が含 をも牆という。また香炉の上に伏せる籠を牆居とい る。柩車の両わきに立てるわき板や、柩を飾る棺衣 に「兄弟牆に鬩ぐも、外その務を御ぐ」の句があとを牆外漢ということがある。〔詩、小雅、常様〕 小雅、常棣」

礁 水面下の岩ショウ(セウ)

形声 には珊瑚礁という。 退しがたいことを座礁、その礁が珊瑚より成るとき いものであるから暗礁という。舟がこれに触れて進 声符は焦。水面に隠見する岩で、見えがた

鍾 あつめる・かさねる・さかつぼショウ

繡 1

通用し、「詩、小雅、 伝〕昭三年に、斉の量器に豆・區(M)・釜・鍾が「聚るなり」とあり、容器、容量のことをいう。〔左 形声 は百觚」などの文によって知られる。字はまた鐘と 千鍾を聚む」、〔孔叢子、儒服〕「堯舜は干鍾、孔子 があり、穀糧を量るに用いた。また酒器の名にも用 あるといい、その青銅器の遺品にも釜と銘するもの ある。〔説文〕 四上に「酒器なり」、〔玉篇〕に 嚢の底におもりをつけた形、もと容量をいう語で いたことは、「列子、楊朱」に「公孫朝(人名)、酒 列国期の楚・邾の鐘に字を鍾に作り、漢碑に 声符は重。重に衝・踵の声がある。重は 鼓鍾」には鐘を鼓するに鍾を

> 用字法によったものであろう。 もなおその例がある。〔詩、 いるのは、おそらく〔詩〕をテキスト化する時期の 鼓鍾〕のように鍾を用

肅 しょうのふえショウ(セウ)

古代の人は、簫声に神を感じていたのであろう。 の一方に去ったという。舜の楽を簫韶といった。に似ているので、ついに鳳凰に従って夫婦ともに天 き、弄玉を娶って鳳台におり、その吹くこと鳳声ものは十六管。秦の穆公のとき、簫史はよく簫を吹ものは十六管。秦の穆公のとき、簫史はよく簫を吹 九歌、湘君〕に「參差を吹いて誰をか思ふ」とあ するものである。それで簫を参差ともいい、「楚辞、 る」とあり、長短の竹を序列して、翼形に左右相対 洞簾をいう。大なるものは二十三管、 に「參差たる管樂なり。鳳の翼に象 声符は肅(粛)。 〔説文〕五 小なる

晶 ささやく・とるショウ(セフ)

あり、 晶 擬声的な語であろう。攝と通用することがある。 口部二上量字条に「聶語なり」という。もと「耳に附けて私かに小語するなり」と「葉ニント」という。「説文」一三上に

觴 さかずき ショウ (シャウ)

ぞれ酒器の名である。 虚なるを觶といふ」と虚実をもって解するが、 彦 四下に「實てるを觴といひ、 形声 もと獣角をもって作ったが、 声符は易。〔説文〕 それ

崇福宮に泛觴亭の遺構があり、 羽觴を用いる。河南登封の城北、嵩山の南麓にある羽觴を用いる。河南登封の城北、井。 との起原を濫觴という。いわゆる曲水の流觴には、 うやく觴を濫べるほどの小流であるというので、こ が出土している。長江千里の流れも、その源流はよ るので羽觴という。馬王堆漢墓などから、その遺品のち漆器のものが用いられ、両耳を羽のようにつけのち漆器 亭上の流水渠は方一





くのは、曲水宴の実際とは甚だ異なるものである。流水に浮かぶ酒杯を竹棹で岸に寄せるさまなどを描 であったらしい。わが国の京都小御所の障壁画に、 曲水の遺構と称するものがあり、同様の規模のもの るにすぎないという。朝鮮の慶州にも、新羅時代の その周囲に詩客が坐するとしても、七人ほどを容れ こに緩やかに水を流す。流水の全長は六間にみたず、

蹤

迹断絶す」 用する。 人の消息を蹤迹といい、 という。 言語〕に「從ふなり」とあり、従と通 形声 声符は從(従)。〔釈名、釈 行方不明を「蹤

間ほどの大理石床上に、 あと・あしあと・つけるショウ 細い溝を迂曲して穿ち、そ

繡 鎺

形声

ししびしお・みそショウ(シャウ)

一四上に

り、祭事や宴 鐘なり」とあ

000

鐘

超 18

脂

大麦を塩につけて、 塩をまぜ、酒を加えて密蔵したもの。醬油は大豆と 形声 一四下につい 声符は將(将)。将は肉をもつ意。〔説文〕 醢 なり」とあり、肉を細く切り、 しぼったものである。

また。 に「用て不い 「宗周 鐘」 席に用いた。

かみがみだれる・あらいショウ・ソウ

を蛔み、台て大夫を樂しましめ、以て士庶士を樂し考先王を卲各す」、「邾公華鐘」「用てその祭祀盟祀に願かなる祖

語である。 鬆という。もとは髪のみだれそそけた状態をい 0 例はみえない。 形声 声符は松。宋元以来の新しい語で、古い用

瀟 川の名・ふかいショウ(セウ)

쀎 その字を川の名とするが、 に従う形とする。〔山海 経〕〔字林〕〔水経注〕には、火がきまり、とあり、字を肅(粛)が、となり、字を肅(粛)が、 瀟湘には景勝多く、八景の名が著聞している。 形声 声符は蕭。〔説文新附〕一 いま瀟の字を用いる。

鐘 かね・つりがねショウ

声符は竜。 童に撞・憧の声がある。〔説文〕 金 金 金

> 唱 ささやく ショウ (セフ)

階楽器としても用いられた。

戦国期には律呂の計算も甚だ精密なものとなり、

音

届 東坡にとって、白詩は囁嚅の語と聞えたのであろう。 囁 嚅という。蘇東坡は白楽天を囁嚅翁とよんだが、言となりやすいものである。言いかけてやめるのを言となりやすいものである。言いかけてやめるのを また「亦私かに罵るなり」とみえる。多言は罵詈の形声 一声符は聶。〔玉篇〕に「口に節無きなり」、 おそれる・したがうショウ(セフ)

23 Mで 「気を失ふなり」とあり、恐懼して失神するをいう。 Mで・撃などは声義の近い字である。神するをいう。 Mでもないとあり、恐懼して失い。 ティース・コース・に おそれる(セフ) 形声 声符は聶。〔説文〕一〇下

整

は襲の声義を承けるもので、 形声 声符は龍 (竜)。 磐

ショウ 蹤 醬 鬆 瀟 鐘 囁 傴 馨

とあり、偏と同義。する字であろう。「説 以後には偏・瞥の意にのみ用いるが、字の古義が早 る呪詞がおそらく響、ゆえに忌み憚る意がある。漢という。霊の授受をいう字である。そのときとなえ 霊を衣に移すものであるから、承けつぐことを承襲 襲は死霊を衣に移す呪儀をいう。譬もその呪儀に関 く失われたのであろう。 「説文」三上に「气を失ふ言なり」 また警伏は慴伏と同じ。襲は死

ジョウ

丈。 十尺・たけ・としよりジョウ(ヂャウ)

〔論語、微子〕の丈人は杖人。〔説文〕は夫字条1○ 尺、尺は親指と中指との間をひろげた形で、 十は手にもちうるものでなく、杖をもつ形。丈は十 上に「十尺なり。又の十を持するに從ふ」とするが、 の「あた(咫)」にあたり、その十倍を丈とする。 夫とは兵杖をもつものがその原義であろう。〔穀 梁る者の意である。杖に兵杖・喪杖・歯杖があり、丈 「以て六尺の孤を託すべし」とは未成年者、幼少な 下に「八寸を尺と爲し、十尺を丈と爲す。 る」とあり、杖の長さは一定であった。〔礼記、曲夫に列す」という。〔左伝〕襄九年、「巡りて城を丈伝〕文十二年、「男子は二十にして冠す。冠して丈伝〕文十二年、「男子は二十にして冠す。冠して丈 なくせぎ こ めに丈夫といふ」とする。〔論語、泰伯〕に がける尺と爲し、十尺を丈と爲す。人は長八 杖をもつ形で、杖の初文。〔説文〕三 杖の形と又(手)とに従う。 わが国

> 礼、上〕に「席閒、丈を函る」とあり、尊者への手 紙の脇付けに函丈という。

上 3 うえ・かみ・のぼる・たっとぶ ジョウ (ジャウ)・ショウ (シャウ)

。 1

[説文] |上に古文の字形をあげ、「高なり。これ古 指事 貴・監の意があり、下はそれと対照的な状態に用い 文・金文によると掌を上に向けた形。上に高・尊・ 文の上、指事なり」という。その古文の字形は、ト る。天子のときは、区別して清音によむ。 掌上に指示点を加えたもので、掌上をいう。

仍 よる・かさねる・しきりにジョウ

113 いう。〔論語、先進〕「舊貫(慣習)に仍らば如何」のまま用いる意。仍然・仍旧・仍世・仍孫のように 事には几に仍る」とは、凶事のときは死者の几をそ の意。〔周礼、司几筵〕に「吉事には几を變へ、凶 をいう。〔説文〕八上に「因るなり」とあり、因 とは、先例による意である。 形声 又〕ハ上に「因るなり」とあり、因 仍た形。弦を張らずにそのままおくこと 声符は乃。乃は弓弦をはずし

冗4(定)5

文〕セドに「散あるなり。宀儿に從ふ。金意 正字は宀と儿とに従う。〔説 ひま・わずらわしい・むだジョウ

栗人」は外内朝の冗、食者の食を供することを 掌おそらく廟中に入の跪坐する形であろう。 [周礼:人、屋下に在りて、田事無きなり」というも、字は、人、屋下に在りて、田事無きなり」というも、字は 人、屋下に在りて、田事無きなり」というも、 祭事のないときをいう。のち冗官の意となる。冗談 宿直者のことである。これを冗散のこととするのは、 る。冗食とは上直するものに給する食事で、冗とは とは常談の宛字である。冗は俗字。

仗 5 兵器・よる・まもる・つえつくジョウ(ヂャウ)

形声 天子の宮中には内仗があり、儀礼で出行するときに 語である。 仗る」、勢を恃むことを「勢に仗る」という。丈夫は儀仗がある。義節によって行動することを「義に ものを仗といい、兵仗という。仗「穀を儀衞に用い、形声 声符は丈。丈は杖。その兵器として用いる とは兵仗を持つ人の意であろう。戦国以後にみえる

扔 つく・ひく・よるジョウ

弦を懸けることをいうのであろう。乃・仍・扔はみ [広雅、釈詁] に「引くなり」とあり、その解いたであること。 扔は[説文] | 三上に「掤くなり」、 な弓弦に関する字であると思われる。 た状態、他はその解いた状態のまま形声 声符は乃。乃は弓の弦を解い

丞 すくう・たすける・うけるジョウ

爾 A. A. 0 3

據などがあった。南北朝のとき、国を奪うものは、 煮となる。いずれも秦官で、その下属に丞史・丞 の関係が異なる。救拯の意よりして丞相・丞監の 篆文による字形解釈の誤りである。 ある。 まず相国丞相の人というのが例であった。 上に奉承する字は承。声義の近い字であるが、上下 り、その字が丞、すなわち、拯の初文である。人を の人に、両手を上から加えて救出する形のものがあ う字と解して、「山は高し。奉承するの義なり」と いうが、山を奉承することなど、できる話でない。 坎中にある人を、左右から引き上げて拯う形で 〔説文〕 三上に「蛡くるなり」とし、山に従 ↑と口と収とに従う。↑は坐する人、】はまった。** ト文に、坎阱中

杖 つえ・よる・むちうつジョウ (デャウ)

杖期という。晋の阮籍は杖頭に百銭を繋け、酒舗を 遇とされた。国老には霊寿杖などを賜う例であった。 いる。漢魏以後、賜杖免朝は、臣下として最高の礼と訓するが、持杖の意。兵器に用い、また儀仗に用と訓するが、持杖の意。兵器に用い、また儀仗に用 みれば杖をとどめて酒を求めたという。 えることもあり、甚だしいときには、皮肉が破れて では六十より百まで五等、時代によって数百杖を加 刑罰として答に杖を用い、杖刑・徒刑という。唐律 を生じたという。喪礼のとき杖を用い、喪中を 杖の初文。〔説文〕六上に「持つなり」 声符は丈。丈は杖をもつ形で、

条 7 (條)11 えだ・すじ (デウ)

ジョウ

杖

条[條]

状[狀]

羍 帖

> 「椒聊よ」遠き條よ」と木の枝の意に用いるが、そ周南、汝墳」「その條枚を伐る」、「唐風、椒聊」されたものを条里、ことの道理を条理という。「詩、しますよう はずである。 の用義の以前に、この字は修禊のための字であった といい、条目・条件という。また邑里の細長く区分 意となり、各条を条記する規定を条項・条文・条令 条暢・条直の意となり、順方法の詳細は知られない。 わが国の湯立・湯神楽は、木の枝に熱湯を含ませて 「小枝なり」として攸声とするが、攸は修禊の意。 て滌うので、また滌の初文である。〔説文〕六上にそのとき身をあらう木の枝を條という。これを束ね 人を修祓するものであるが、條の字の示す修禊の ・条直の意となり、順次に列するので条列の う。攸はみそぎして身を清めること。 旧字は條。條は攸と木とに従 小枝であるから条長・

状 級影 ようす・さまジョウ (ジャウ)

棜 ぶ」は形状、〔左伝〕僖二十八年「狀を獻ぜよ」 ことからいえば、状は版築にあたって犬を供犠とし て、犬牲をもってこれを清める釁礼を示す字である 「犬の形なり」とするが、犬のどのような状態であ れるのであろう。〔戦国策、秦策〕「王后その狀を悅 て用いる意で、これによってその進行状態が定めら 版築に用いる板の形。〔説文〕一〇上に 形声 また字をその意に用いた例もない。 旧字は狀に作り、爿声。爿は は

> 成績の報告を状、その首席の合格者を状元という。 に類すという。状を報ずる書を書状といい、科挙の もいうに至り、孔子の状は供面に似たりとか、陽虎工事の進捗の状態より、ものの形状、人の状貌を工事の進歩の状態より、ものの形状、人の状貌を かにし易き所なり」というのは、全く臆解である。 〔繋伝〕に「犬は動止多狀、人の意を曉り、人の審事情や経過の報告を求めるもので、文書をいう。

李 8 おどろかす・かせジョウ (デフ・ゼフ)・コウ (カウ)

♦

羍

〔説文〕の字説に誤りがあることを示すもので、字とするなど、声義ともに混乱がみられる。それは る執・圉・盩・報・輸は、みな手械である卒の義るべきである。〔説文〕がこの卒部一〇下に属しているべきである。〔説文〕がこの卒部一〇下に属してい 執。〔説文〕一〇下に「人を驚かす所以なり」とし、象形 手に施すかせの形。これを手に施した形は を承けており、獄訟に関する字である。 は手械の形でおそらく執の初文。その系統の音であ いても「讀みて瓠の若くす」「讀みて籥の若くす」 す」というが、そのような用例もない。 た一解として「俗語に、盜の止まざるを以て卒と爲 大と芋との会意とするが、字形の意がえられず、 また音につ

帖 つづったかきもの・おりほん・うわがきジョウ(デフ)

帅 書署なり」、〔段注〕に木の書署を検、 形声 たものの意がある。「説文」七下に「帛の形声 一声符は占。占に黏、はり合せ 帛の書署を

生れる人を浄華衆という。

という。帖々はものの垂れ下るさまをいう。という。帖々はものの垂れ下るさまをいう。
い、詔勅の類を帖勃・帖黄、手紙や書冊を折本としい、詔勅の類を帖勃・帖黄、手紙や書冊を折本としい、王羲之などの雅醇の体を宗とするのを帖学といい、王羲之などの雅醇の体を宗とするのを帖学といい、王羲之などの雅醇の体を宗とするのを帖学といい、王羲之などの雅醇の体を宗とするのをいい。
いるさまをいう。

乗り【乘】10 のる・のほる・つけこむ

栗 奔 李 李 李

会意 旧字は、高い木の上に人が二人登っている 会意 旧字は、高い木の上に立つ形に作る。遠く形。卜文では、一人が木の上に立つ形に作る。遠く下には「覆ふなり」と訓し、字形について「入桀に従ふ。桀は點なり。軍法に乗といふ」と説く。點とは奸悪。奸悪にして人を陵ぐことを乗というとするが、字の本義ではない。「説文」は字を桀に従うものとするが、桀は梟殺、乗は候望をいう字である。高きに登るところから、戦車に乗ることをも乗といい、それよりして一車四馬を一乗という。馬の他にい、それよりして一車四馬を一乗という。馬の他にい、それよりして一車四馬を一乗という。馬の他にい、それよりして一車四馬を一乗という。馬の他にい、それよりして一車四馬を一乗という。馬の他にも乗り、その職掌をもって名とするものであろう。すべて上に乗り、その勢を利する意に用いる。

城。【城】ロ しろ・きずく

新編 ·數數 员

拯 9 「拚」で すくう・たすける

といい、升声とする。また異文一を録する。 といい、升声とする。また異文一を録する。 がいあげる字であるから、拯の初文である。 では沈吹がである。 また異文一を録する。

浄の「淨」」 きょい (ジャウ)

形声 声符は丞。「説文」「〇上に「火气、上行するなり」とあり、蒸気で熱気のこもることをいう。 それで衆多の意となり、「詩、大雅、延見」「天、 を烝というのも、下より上を犯すことからの引伸で を烝というのも、下より上を犯すことからの引伸で を烝というのも、下より上を犯すことからの引伸で を添というのも、下より上を犯すことからの引伸で を添というのも、下より上を犯すことからの引伸で を添というのも、下より上を犯すことからの引伸で あろう。君・冬祭の義には、金文に資を用いる。 「大盂鼎」「四方に登たらしめよ」、〔段設〕に「王、 軍(地名)に在りて登す」とみえる。すなわち 賞が これも 賞った。 豊年」「祖妣に 派売る か」は進める意。これも 賞字の義である。すなわち 営はまた 蒸嘗の蒸の初文である。

乗 11 【剩】12 あまる・あまつさえ

形声 声符は乗(乗)。 腰の俗字と 「説文」 騰字条六下に「物相増加するなり」とあり、 「設注」に「今義訓して贅疣(無用のもの)と爲す。 古義と小しく異なり」とする。 形義ともに分岐した 字で、いま余剰、また「あまつさへ」の意に用いる。 で、いま余利、また「あまつさへ」の意に用いる。

常 為 常

上子 これに常の意がある。「説文」と下下着なり」とし、重文として実をあげるが、常いで、これで大常の旗を作る。金文には尚を常の字に用い、「常なり」とし、重文として用いる。常は一定幅の中で、これで大常の旗を作る。金文には尚を常の字に用い、「常雅」「必ず尚に厥の邑に處らしめよ」、「大学」「永く典」向と爲せ」とは、常の意。不変の倫理を五常という。常時の意に用い、常談とは日の倫理を五常という。常で、本学の音の不話をいう。「常て」は、當の音の表話をいう。「常て」は、當の音の表話をいう。「常て」として表表の意がある。「説文」として表表の意がある。「説文」として表表の意がある。「説文」として表表の意がある。「説文」という。

情』「情」」 こころ・なさけ・まこと

場っぽい にわ・神をまつるところ・ば

場場

わゆる「祭の場」であった。のであろう。場とはもと神霊を迎えるところで、 する場を設けたことがあり、そのなごりを存するも る」という。おそらく古くは田中や圃中に、神に供 地を築きて墠を作り、季秋に圃中を除してこれを爲その果蓏珍異の物を供するものとし、注に「場とは 義として、「田の耕さざるもの」、また「穀を治むる 田なり」をあげる。〔周礼、場人〕に、祭祀資客に 意で、そこで墓祭が行なわれた。〔説文〕にまた一 り」とみえる。墓中の羨道と称するものもまたそのる」という。〔楊注〕に「孔子の冢場、祭祀壇場なる」という。〔楊注〕に「孔子の冢場、祭祀壇場なる」という。〔楊注〕に「孔子の豕場、祭祀壇場な は「室を場に築き、獨居すること三年、然る後に歸年の喪も終り、門人はみな離散したが、ひとり子貢 とする。〔孟子、滕文公、上〕に、孔子が没して三称するもので、〔爾雅、釈言〕にも「場は道なり」 間を場という。〔漢書、郊祀志〕に「犠牲壇場」と 南側に北面して壇を作る。周公はその南の壇上に立 って珪璧を供えて先王を祭っているが、この両壇のってはない。 金縢〕に、壇上の北側に南面して三王の壇を作り、 『神を祭る道なり」とあり、それが字の本義。〔書、 の行なわれるところを場という。〔説文〕「三下に 玉による魂振りの儀礼を意味する。そのような儀礼 上に玉をおき、その玉光が下方に放射している形で 形声 声符は易。易に湯・湯の声がある。揚は台

世日 12 「晶田」 22 だたむ・たたみ

会意 旧字は疊に作り、計。準 があったは、大だ盛なりと。改めて三田と爲 をの直を得て乃ちこれを行ふ。晶(三日)に從ひ、 室に從ふ。亡新(王莽の新)以爲へらく、疊の三日 (太陽)に從ふは、大だ盛なりと。改めて三田と爲 をの直を得て乃ちこれを行ふ。晶(三日)に從ひ、 で、能し、という。金文の〔鋳甫人匜〕に嫚の字があり、 下部は宜、上部は三玉を累ねた形である。亡新のの ちにも字はなお正形をもって行なわれ、後漢の〔孔。 をで、当時間とは、大だ盛なりと。改めて三田と爲 という。金文の〔鋳甫人匜〕に嫚の字があり、 下部は宜、上部は三玉を累ねた形である。亡新のの ちにも字はなお正形をもって行なわれ、後漢の〔孔。 が碑〕には字を疊に作る。いまの字は省形の畳に作り、いよいよ字形の意味が失われている。〔詩、周 り、いよいよ字形の意味が失われている。〔詩、周 り、いよいよ字形の意味が失われている。〔詩、周 り、いよいよ字形の意味が失われている。 「時邁」「震煙せざる罔し」は、慴・鸜の音に通 は、時邁」「震煙せざる罔し」は、慴・鸜の音に通

好 3 しなやか (デウ)

形声 声符は弱(弱)。

『はなどの長く垂れてしなやかなとあり、嫋娜は柳の枝などの長く垂れてしなやかなきまをいう。〔楚辞、九歌、湘夫人〕「嫋々たる秋風になる。

『庭波だちて木葉下る」は、佳句として知られる。
『『ないまれる。
『おいまれる
『『なれる
『おいまれる
『まれる
『まれるる
『まれるる

ー下に「析きたる麻中の幹な 形声 声符は烝。〔説文〕

ジョウ 常情〔情〕場 畳〔疊〕嫋 蒸

てみえるもので、より合せて縄状にして用いるこという。〔周礼、甸師〕〔管子、軽重、甲〕に薪蒸としい る。本義は麻のおがら、他は通用の義である。 もある。字は雲蒸(雲がわきおこる)、蒸民(多く り」とあり、燭や炬火に用いるおがら。麻の皮の部 の民)、蒸祭(祭名)の意に用い、また蒸と通用す その中茎を用いるもので、俗に麻骨棓と

縄 [繩]19 なわ・すみなわ・ただすジョウ・ヨウ

〔晋書、王羲之伝〕に「繩文鳥跡」の語があり、 武」に「その祖武(祖のあと)を縄ぐ」の句がある。 うに音の変化するものがある。「説文」 一三上に「索 字の起原をいう。 従うて黽声。喩母の字に陽(場)のよ形声 旧字は縄に作り、蝿の省文に

壌16【壊】20 つち (ジャウ)

があり、〔鄭注〕に墳壌は潤解(しめった細土)、地表の耕土の意。〔周礼、草人〕に墳壌・勃壌の語地表の耕土の意。〔周礼、草人〕に墳壌・勃壌の語う。〔書、禹貢、伝〕に「塊無きを壌といふ」とみえ、 「柔らかき土なり」、〔玉篇〕に「地の緩肥なるを壌 勃壌は粉解(乾いた細土)であるという。 といふ」とあり、一度砕いて柔らかとなった土をい 形声 ゆたかの意がある。〔説文〕一三下に 旧字は壌に作り、襄声。賽に

> 嬢 〔孃〕20 はは・むすいジョウ(デ めゃり)

> > 16

たかつき・なべ・じょうジョウ (デャウ)・ティ

憾

「大、嬢」「娘子」の字を用いる。「君!! 40%」である。 もと嬢は母、娘は少女をいう。〔万葉〕 にもいる。 もと嬢は母、娘は少女をいう。〔万葉〕 にも 形声 ある。〔説文〕二下に「煩擾なり」と擾の義をもっ 女子の肥大なるものの意で、母にも、また娘にも用 て解するが、また「一に曰く、肥大なり」という。 旧字は孃に作り、 裏声。襄にゆたかの意が

堯 16 かりくさ・きこりジョウ (ゼウ)

饕 薪ここにその楚を刈る」と、小なるを蕘という。〔詩、周南、 重、甲」「その薪蕘を賣る」の注に、大なるを薪、 るものであった。 なっており、采薪の俗は、古く神事や祝 頌に関す を刈ることをいう。この句は結婚を祝う詩の発想と と訓し、薪字条にも「蕘なり」と互訓。〔管子、軽 ここにその楚を刈る」と、その楚蔞(細い枝) 意がある。〔説文〕一下に「薪なり」 声符は堯(尭)。尭に饒多の 漢広」「翹々たる錯

遶 めぐる・かこむジョウ(ゼウ)

げてその人を祝福した。これを逸殿雷という。字その名をよみあげると、階下のものが一斉に声をあ る。 はまた繞に作る。 遼は繞回の意。進士の合格発表のとき、宰相が 声符は堯(尭)。尭に饒多・繞回の意があ

鍋物に用いる炉つきのもので、「甗に似ている。」にあしのあるもの、いわゆるたかつきをいう。ま ット形式の薬である。 た錠前の意に用いる。錠子はつぶ銀、錠剤はタブレ 「鐙なり」とあり、豆とよばれる食器 声符は定。〔説文〕-四上に また

嬥 あでやか・おどる・かがいジョウ(デウ)

「嬥歌会」の語があり、みな「かがひ」と読む。「を う句を引く。嬥歌の俗は、巴蜀より西南アジアの方「巴人謳歌して相引奉し、手を連ねて跳歌す」といった。 く、嬈なり、繞字条一二下に「擾れて戲弄するな」、「直好の見」とするが、また「一に日愛に 形声 声符は翟。〔説文〕一二下に 九のように、嬥は動詞にも用いる語である。 とめをとこの 面にわたってさかんであった。〔万葉〕に「嬥歌」 明發にして嬥歌す」とあり、〔李善注〕に何晏の戯弄のさまをいう。左思の〔魏都の賦〕に「或いは り」とあって、嬲は嬈の俗字。嬥は歌垣などの歌舞 住き集ひ かがふ嬥歌に」九・一七五

嬲"〔嬈〕15 なぶる ジョウ (デウ)

ることが多い。「隋書、経籍志」に「釋迦の苦行す正字は嬈で苛める意。仏典の訳語には嬲の字を用い正字は嬈で苛める意。仏典の訳語には嬲の字を用い 間に女を加えて、相戯弄する意を示す。会意 二男と一女とに従う。二男の

心を亂さんとす」とみえる。 るや、是の諸邪道、竝びに來つて嬲婚し、 以てその

襄 はらう・たすける・のぼるジョウ(ジャウ)

影响 霧火火



を重ねた字で、左に呪具の工、右に祝禱の豆をもち、「これ遐と同意なり」とする。尋(尋)は左と右とついて解説するところがない。また舜字条三下に交・工・交・間に從ふ」とするも、これらの字形に な呪具と祝禱の器を胸もとに入れて、祓うためであ 用いる。襄の字形が二口四工に従うのは、そのよう は、襄の引伸義とみてよい。 神に祈ること。神の所在を尋ねるときにも、これを 形声とし、製声とする。製字条二上に「亂るるなり。 ときの用法で、字の初義ではない。〔説文〕は字を で、禳の初文。〔説文〕八上に「漢の令に、衣を解屍体に邪霊の憑るのを防ぐ祓禳の儀礼を示すもの きて耕す、これを襄と謂ふ」とするも、それは漢の ならべ、また邪気を禳う呪器である工を塡塞して、 ている衣襟の形。その襟もとに祝禱の器であるご会意 衣と二口と四工とに従う。衣は死者のつけ 尭典」「山に襄る」は驤の仮借。 攘奪・攘去

> す」の語がある。〔篆韻譜〕に文字を収める。 えて書を論ずるの書〕に「穠纖、法あり、肥瘦相和 とは肥痩というのと同じ。梁の武帝の〔陶弘景に答っき。いうの機艶、ものの禮秀なるをいう。禮繊とあり、花の禮詩な

擾 18 「 擾 」 22 みだれるジョウ(ゼウ)・ドウ(ダウ)

ジョウ

襄

擾(饗)

穠

穣(穰)

繞 襛

攘

譲(譲)

〔史記、滑稽列伝〕に、豚の蹄と酒を田の側に供えの祈禱をする意であろう。ゆえに豊穣の意となる。 あるから、穣とは耕作に当って、虫害を避けるなど にはもと、祓う意があり、祓棄を本義とする字でたり」のように、作物のよくみのることをいう。寒 頌、烈祖〕に「天より康(福)を降す 豐年穰らをいうとするが、その用例は殆どない。〔詩、らをいうとするが、その用例は殆どない。〔詩、 穣 18 【穰】22 ゆたか・みのる・みだれる 形声 ^るが、その用例は殆どない。〔詩、^酷文〕七上に、黍の茎皮を去ったきびが 旧字は穣に作り、襄声。〔説 豊年穰々

> に多くして穣れる意ともなる。ころから、すべて盛大で多い意となり、またあまり 慾ふかい農夫の話がみえる。祈禱をさかんにすると て、「五穀蕃熟し、穣々として家に滿てよ」と祈る

繞 18 めぐる (ゼウ)

繞 れ乱れること、繞領は衣のもすそをいう。 一纏ふなり 」とあり、囲繞する意。また繞乱はもつ 遠囲の意がある。〔説文〕 - 三上に ・ 下声 声符は堯 (尭)。尭に饒多・

襛 18 さかんなさま・まとうジョウ(ヂョウ)

襛

形声 ある。

「玉篇」に「花木盛んなるなり」

声符は農。農に襛・濃の意が

穠 18

しげる(ヂョウ)

援々として萬緒起る」のように用いる。 にして煩わしい意。〔列子、周穆王〕「哀樂好惡にして煩わしい意。〔列子、周穆王〕「哀樂好惡」

に酸の字があり、酒乱をいう。

擾々とはことの繁多

む形であるから、攖に作るものがよい。〔大盂鼎〕

は手足を舞わせて躍る形、憂は人を喪うて憂愁に沈 一三上に「煩なり」とあり、煩雑・煩乱をいう。夒

正字は饗に作り、夒声。擾は俗字。〔説文〕

HOS CON

彼の襛たる「唐棣(からなし)の華」とみえる。というのが原義。〔詩、召南、何彼襛矣〕に「何ぞというのが原義。〔詩、召南、何彼襛矣〕に「何ぞ ある。〔説文〕ハ上に「衣厚き見なり」 形声 声符は農。農に穠・濃の意が

攘 はらう・しりぞける・とるジョウ(ジャウ)

を攘という。 呪具をもって襲い、邪気を醸斥する字で、その行為字を用いている。いまその字には譲を用いる。襄は字を用いている。 敢て攘らん」など、みな譲の意。退譲の意に、攘の敢て攘らん」など、みな譲の礼をいう。〔漢書、礼楽り」とは相手に譲る推譲の礼をいう。〔漢書、礼楽り」とは相手に譲る推譲の礼をいう。〔漢書、礼楽でり」とは相手に譲る推譲の礼をいう。〔説文〕二上に「推すない。 癴 形声 声符は襄。襄に祓禳・禳斥

譲20 (譲)24 せめる・ゆずる)ジョウ (ジャウ)

す」と、両字を同義に用いている。 て禮を明かにす」、また「左右攘辟(避けて退く)讓の字をも用いる。〔礼記、曲とうと言という。〕に「退讓以讓 責め譲むるなり」とあり、人を責める譲責が字の本 推譲・揖譲の字にはもと攘を用いるが、また 祓禳の意がある。〔説文〕三上に「相 形声 旧字は讓に作り、襄声。襄に 旧字は讓に作り、襄声。襄に

醸20 (釀)24 かもす (デャウ)

うに、時を経てことを用意することを、醸成という。 あって互訓。合せて醞醸という。酒を醞醸するよ醸といふ」とあり、電字条一四下に「醸すなり」といる。 形声 文〕一四下に「醞すなり。酒を作るを 旧字は醸に作り、襄声。〔説

饒 21 ゆたか・おおいジョウ (ゼウ)

訓があり、饒多・饒衍・肥饒の義。多弁を饒舌とう字で、〔玉篇〕に「豐なり・餘なり・厚なり」のう字で、〔玉篇〕に「豐なり・餘なり・厚なり」の いうのは、引伸の義である。 と飽食の意とするが、もと食事のゆたかなことをい 意がある。〔説文〕五下に「飽くなり」 声符は堯(尭)。尭に饒多の

穰 はらう ジョウ (ジャウ)

廖 文)一上に「磔禳なり。厲殃を祀り除くなり」とあえて、邪気を禳う意のまで、譲の初文。禳は〔説えて、邪気を譲う意のまで、譲の初文。禳は〔説 形声 うちに、祝禱の日や呪具の工などを加 声符は襄。襄は死者の衣襟の

> える。「周礼、女祝、注」に「變異を卻くるを禳と歴するが爲に、これを禳うて以て災凶を除く」とみた。「たい」の注に「祭名なり。行道して不祥を累乃も入る」の注に「祭名なり。行道して不祥を累乃も入る」の注に「祭名なり、行道して不祥を累り死喪のときの礼である。他の地から来た人を迎えり死喪のときの礼である。他の地から来た人を迎え 祭儀である。殷代の宮室などにも、犬牲が多く用い 扱いて、その反を城の四門の上に掲げ、艪気を祓う〔周礼、大宗伯〕にそのことを鵬幸という。犬牲をが若し」とあり、漢代にも行なわれていた俗である。 磔禳し、 のであるが、禳の字形に即していえば、それはやは 以て祭る。今時の狗を磔して祭り、 被う祭儀である。[鄭注] に「辜とは牲を破磔してて大儺秀磔せしむ」とあり、いずれも犬牲を用いてに、然を持た り、犠牲を扱いて祓う磔禳をいう字とする。〔礼記、 なわれた。 られており、 月令〕に「季春の月、國に命じて儺せしむ。九門に いふ」とあり、生死を論ぜず、不祥を祓うために行 以て春氣を轟ふ」「季冬の月、有司に命じ その俗はのちまで久しく行なわれたも 以て風を止むる

変23 やすらか・なれる

語がみえる。〔説文〕こ上に、犪を「牛、柔謹なる これをもって神意を終えずることを「鑁らぐ」といそれでその舞客の煩わしい状態を「鑁れる」といい、 う。金文には「遠きを髏らげ、近きを能む」という 夒は神前に舞楽して神意をやすんずる形とみられる。 形声 に「貪獸なり」として母猴の意とする。形声 声符は虁。變は〔説文〕五下

> 酒を酌んで神人相和する状態を、〔大盂鼎〕に を作ることはありえない。おそらく犠牲を供え舞楽 る」という。「なれる」の訓はその義にあたる。 して、神意をやわらげることをいう字であろう。 なり」と訓するが、牛の状態のためにこのような字

ショク

色 いショ ク・

名 を正色という。彩色のことは古くは楽だいった。 って寵を受けることを色授、顔容の犯しがたいこと り顔色の意となり、また容色の意となる。容色をも んで怒る意。驚くさまを色然・色斯という。 である。〔左伝〕昭十九年「市に色す」は、気色ば ところである。尾も字形が近く、親昵の状を示す字 をいう字ではない。飲食男女は、人の大欲の存する が、自然に顔色にあらわれると解するが、顔色など 人に從ひ卩に從ふ」とあり、人の儀節とするところ で相交わることを示す。〔説文〕ヵ上に「頽气なり。の後にまた人がおり、抱く形 会意 人と口とに従う。人 それよ

昃 日がかたむく・ひるすぎショク

KO

Pa

影の傾く意。〔説文〕七上に「日、西方に在るの時、 会意 正字の形は日と矢とに従う。日を受けて人

く、日の没する前の夕暮れどきをいう。 形がある。卜辞に明と昃と相対して用いることが多 影の横斜する形。漢碑・[魏石経] にもなおその字側 くなり」という。卜文の字形は、日を受けた人

拭 ぬぐう・きよめるショク

形声 声符は式。式は呪具の工をもってものを清 いずを傾く」とは、注意して視聴すること。[公羊・好声を傾く」とは、注意して視聴すること。[公羊・好う意。[爾雅、釈詁]に「清むるなり」とあり、 ができ、張 敵伝]「目を拭 り」としるされている。 るや」と「袂を反して面を拭ひ、涕、袍を沾ほせと、孔子は「なんすれぞ來れるや、なんすれぞ來れと、孔子は「なんすれぞ來れるや、なんすれぞ來れ 声符は式。式は呪具の工をもってものを清 袍を沾ほせ

食 たべもの・くらう・やしなうショク・ジキ・シ

會

た「王孫遺者鐘」に「誨猷」いたず」のように用いまた動詞に用いて、徐器の鐘銘に「飲以調舞」、ままた動詞に用いて、徐器の鐘銘に「飲む調舞」、まの自名に似盃・似籤・似器・似器というものがあり、 は下文に「釟は糧なり」と名詞に解する。金文に器 く飤に作る。殷の前に人のある形である。〔説文〕 に盛った食事をいう。字は卜文にみえ、金文では多 五下に「米を多りのとに従ひ人聲」とするが、 **人は殷の蓋で、殷の一部をなしている。食とは、殷** 金文に設に作り、文献には簋の字を用いる。〔説文〕 段(皀)に蓋をした形。 設は盛食の器で、 ショク

拭

食 畟

埴

寔 植 埴

らく、 食事をしたようである。食貨は経済、食頃はしば 入を送迎する大采・小采という礼があり、そのときいう語があって、一日両食の定めであった。日の出いう語があって、一日両食の定めであった。日の出 る。卜辞には食を日月の蝕に用い、また大食小食と 食言とは偽言をいう。

寔 12

まことに・これショク

畟10 たのかみ・すくショク

のであろう。 墅 田神として祭られる。櫻の初文で、おそらくは鬼頭 むなり」とし、耜をおろす音の擬声的な語とするがる。〔説文〕丘下に「稼を治むること愛々として進る。〔説文〕丘下に「稼を治むること愛々として進 その下に手足をつけた田神の神像であ 象形 田主の象。上部は田主の頭、

埴 はシ にョ ク

明器・祭器の類を作った。埴は〔鄭玄本〕に散に赤い陶土。〔周礼、考工記〕に〔塼塩の工〕があり、のをいう。〔書、禹貢〕に「厥の土は赤埴」とあり、のをいう。〔書、禹貢〕に「厥の土は赤埴」とあり、陶土として用いるも であった。 埴輪などがさかんに作られ、埴安の神がその守護神どり。 酸に赤の意があり、はにをいう。わが国でも作る。 酸に赤の意があり、はにをいう。わが国でも あり、また挺直の意がある。〔説文〕 形声 声符は直。直に植・殖の声が

〔詩、召南、小星〕「蹇に命猶しからず」を〔韓詩〕なり」とするのと同じであるという。実と声義近く、なり」とするのと同じであるという。実と声義近く、 いま形声としておく。 意味があるかも知れないが、その意が明らかでなく 従う是は匙の形。匙を廟中におくことに、何らかの に「實」に作る。實(実)は鼎実の意であり、寔の 〔段注〕に「正なり」の誤りとし、古い訓詁に「是 圕 形声 〔説文〕七下に「止なり」とあるも、 声符は是。是に湜の声がある。

植12 たてる・うえるショク・チ

ことを植民、また殖民という。 木の類を植物という。国外に土地を開き、 樹木のことは古く種樹という。のちに植を用い、草 植を置に作る。立てる、立てたままおくの意がある。 後子」「その杖を植てて芸る」とあり、〔漢石経〕にの字は置に従うが、その音もある字である。〔論語、の字は置に従うが、その音もある字である。〔論語、 る鎖値をいう。また建物の柱の意にも用いる。重文 とあり、たての賞の木の意とする。戸をささえてい 尴 るものを直という。〔説文〕六上に「戸の植なり」 殖の声がある。また挺直な形声 声符は直。直に埴・ 人を移す

殖 くさる・ふえる・しげるショク

ある。〔説文〕四下に「脂膏久しうし彩声 声符は直。直には・植の声が

で殖るなり」と腐殖の意とする。 声(歹)は残骨ので、また、もと土地に産するものは動物性のもので、となる。〔列子、湯間〕「山川の觀、殖物の阜なる」となる。〔列子、湯間〕「山川の觀、殖物の阜なる」となる。〔列子、湯間〕「山川の觀、殖物の阜なる」となる。「何」と腐殖の意とする。 声(歹)は残骨ののまうに、人に移していう。いまは利殖や殖財などの意に用いる。

本口 3 こくもつぐら・おしむ

管盘 给 好 好 好 田

会意 來と向とに従う。來(来)は農作物、向は会意 來と向とに従う。來(来)は農作物、向はである。字は稼穡(農耕)を本義とし、その稟蔵をいい、稟蔵して散じないことから、倹嗇の意となる。いい、稟蔵して記を讃す。故に田夫これを商夫といふ」と可の形と似ている。〔説文〕にまた「來なるものは文の形と似ている。〔説文〕にまた「來なるものは文の形と似ている。〔説文〕にまた「來なるものは文の形と似ている。〔説文〕にまた「來なるものは文の形と似ている。〔説文〕によると、嗇夫は農官である。「國語」によると、嗇夫は農官である。「國語」によると、嗇夫は農官である。「國語」によると、嗇夫は農官である。「慶蔵のことを掌るものには、「周礼」に際人・舎人などの諸職がある。嗇はまた穡の初文。「後子、問下」に、晏子と収しば、「周礼」に際人・舎、「大・倉人などの諸職がある。嗇はまた穡の高と名愛に関する。「四元年に、穡を吝嗇の意に用いている。穡は不能して、穀の收むべきを穡といふ」とあり、また、「韓蔵をいう字である。

・ 三日 13 あか・はに

京京 京京

蜀 13 あおむし・国名

影 家。家

虫に從ひ、上目は蜀の頭形に象り、中はその身のを獨(独)という。〔説文〕二三上に「葵中の蠶なり。象形 牡の獣の形。虫の形は獣の牡器で、その獣

を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。 を通じて、蜀の初形初義を知ることができよう。

触13【觸】20 ふれる・さわる・おかす

MY SERVICE SER

形声 旧字は觸に作り、置声。いま略して触に作れ、意識にふれることを触忌・触諱という。触器とい、、意識にふれることを触忌・触諱という。触器とい、、意識にふれることを触忌・触諱という。触器とい、意識にふれることを触忌・触諱という。触器とて性器のはりかたで、また角先生といい、金をもってこれを作るものがあった。

13 車の横木・しょく

「車前の木なり」とあり、車奥の前の形声 声符は式。〔説文〕一四上に

た「軾に憑る」という。「左伝」 荘十年の長りの戦いに、曹潔徳は高さ三尺三寸」という。車上から人に礼すると載は高さ三尺三寸」という。車上から人に礼すると載は高さ三尺三寸」という。車上から人に礼すると載は高さ三尺三寸」という。

飾 13 (飾) 14 ぬぐう・かざる・きょめる

総論

金意 以上で、後のとき巾を帯びて、器などを刷拭するのに用いる。「説文」セ下に「刷ふなり」として食声とするが、金文は食をみな似に作り、として食声とするが、金文は食をみな似に作り、に拭の字を収めないが、飾と拭とは声義が同じくに拭の字を収めないが、飾と拭とは声義が同じく、「はは呪具をもってものを清め祓う意。飾は巾をもって刷うもので、刷もまた腰に巾を帯びた形に従う。って刷うもので、刷もまた腰に巾を帯びた形に従う。って刷うもので、刷もまた腰に巾を帯びた形に従う。も払拭して清潔にすることで、もとは神事の際の行為を意味した。すなわち「その牛牲を飾ふ」というのが、字の本義である。

嘱 15 【囑】24 たのむ

形声 旧字は囑に作り、屬(属)声。属に連属す

ショク

飾(飾)

嘱[屬]

稷

蝕燭

謖

ことを依嘱するを嘱託といい、職名にも用いる。言は伝言、嘱付は人に依嘱することをいう。臨時に言は伝言、嘱付は人に依嘱することをいう。臨時にるものの意があり、嘱は人に付託してこれを行なうるものの意があり、嘱は人に付託してこれを行なう

稷 15 たかきび・穀神

野南 声符は髪。 愛は田神野市の学とよばれた。

「ととするが、「左伝」昭二十九年「稷は田正なり」、「周礼、大司徒」「その社稷の遺を設め、「四正なり」、「周礼、大司徒」「その社稷の遺を設め、一個業神で、地神である「社」とともに、城邑には社・稷の二神を祀ったので、国をまた社稷という。 育の稷門は、宣王・威王のとき、天下の学者を招いて居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、て居らしめたところで、諸子の学が大いに興り、

配 15 むしくい・むしばむ

金意 食と虫とに従う。食事のものである。

燭 17 ともしび・てらす

説 17 おきたつ・たつ

形声 声符は愛。要は田神の神像。「剛雅、釈言」 形声 声符は愛。要は田神の神像。「剛雅、釈言」 を認みといい、また松風の起るのを謖々という。 を認めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く挺出するさまを数めて興つ」とみえる。長松の高く延出するさまを数めて興つ」とみえる。

稿 18 ショク

れる穀物の意。農事は生活の基本であるから、〔書、「穀の收むべきものを穡といふ」とあり、嗇に入い、「穀の收むべきものを穡といふ」とあり、嗇に入い。「敵なべきものを穡といふ」とあり、嗇に入れる。一番は穀物を入れる

形声

声符は屬(属)。属につづく・つらなる意

嘱の意をも含

26

みショ ク

牆事を卹め」というのも、その意である。 湯誓〕に「檣事」の語があり、[師袁設] に「厥の

織 18 おる・はたおり・おりものショク

る。漢のとき、呉都・楽浪は名練の産地として知らといわれるような模様織りのものでないかと思われ 金文にみえる准夷の貢物とされる質も、のちに貝錦る礼服を賜うたのであろう。色糸の模様織りである。 「女に戠玄衣を賜ふ」とあって、おそらく織文のあ り、「豆閉段」に「女に哉衣を賜ふ」、「戴き」に 染めてこれを織るなり」という。金文に織を散に作 また〔礼記、玉藻〕「士は織を衣ず」の注に「絲を「厥の篚は織文」の〔伝〕に「細綺の屬」とあり、 「厥の篚(貢物)は織貝」の〔伝〕に「細紵」とし、 たおりの意とするが、織物のうちでも模様のある、 を極めたものがある。 いわゆる織文、模様織りのものをいう。〔書、禹貢〕 一三上に「布帛を作ることの總名なり」、すなわちは しるしとするもの、赤色のものの意がある。〔説文〕 馬王堆出土の織物には、眼を奪うほどの精巧 声符は哉。哉は戈に呪飾をつけている形で、

職 18 つかさどる・しごとショク・シキ・シ

響

形声 声符は哉。哉は戈に呪飾をつけた形で、 L

> ものである。字の原義は、験・黻に截をつけて、そいない。と文だこれ由る」はその義。金文には〔曾姫無いる。」に「後嗣これを用ひ、職として王室に在れ」の語があり、字は百(首)に従う。耳や首に設をつい話があり、字は百(首)に従う。耳や首に設をついます。 「識は主るなり」とみえ、〔詩、唐風、蟋蟀〕「職 って、 識字条三上に「常なり。 の戦功を記録することであった。 なり」とあるのは、「記識なり」の誤りであろう。 るしとするものの意がある。「説文」一二上に「記念」 この字と通用の例がある。〔爾雅、 一に曰く、 知るなり」とあ 釈詁」に

蝎 あおむし

豳風、東山」「蜎々たるものは蠋」の〔釈文〕の象形字。蠋は形声の字で、あおむしである。「 (独)・屬(属)の字形から考えられるように、 形声 「桑蟲なり」とみえる。 声符は蜀。蜀はあおむしとされるが、獨 詩 牡獣 に

贖 あがなう

臢 0 場を \$ ₹¥

贖うことをいう。もと教済のための字であるからは、とみえ、贖、財、すなわち財をもってその罪をよ、とみえ、贖、財、すなわち財をもってその罪をに作るものがあり、〔君夫設〕に「乃の友を優求せに作る。金文に字を優形声 声符は質。正字は贖に作る。金文に字を優 **値に作り、のち贖の字となった。**

辱 むようである。 けてみることを矚目・矚望という。 がある。注目してよくみる意に用い、また期待をか 10 ジョク

くさぎる・はずかしめる・かたじけないジョク

耕時を失ふときは、封畺上においてこれを戮する で、〔左伝〕襄三十年「吾子をして 辱 く泥塗に在と辱とを相対する。また「 辱 く」は一種の尊敬語 と辱とを相対する。また「辱く」は一種の尊敬子〕第十三章に「寵辱驚くが如し」とあって、 す。田つくる候なり」と説くが、封疆上において時 意味での尊敬語である。交友を辱知・辱友といい 感ずるおそれのあることを、敢てすることを詫びる らしむること久し」のように用いる。尊者が恥辱と るのは、おそらく黷・衄などの仮借であろう。〔老 あるのか知りがたい。これを恥辱・汚辱の意に用い を失うものを戮するなど、字形とどのような関係が なり。辰なるものは農の時なり。故に房星を辰と爲 一四下に「恥づるなり。 耨する意であるから、辱は耨の初文である。〔説文〕 耕耨に用いるもの。それを手(寸)にもつのは、耕 会意 うちかいて作った農具としての蜃器で、 辰と寸とに従う。辰は貝殻を すの辰の下に在るに従ふ。

いられる。 は耨の上に移され、 許されることを謝する意味で辱収という。字の本義 黷・衄などの仮借義において用

蓐 14 しとね・し きもの・むしろ

造 藁 世 料用

席を設けるからである。 蚕を飼うまぶし。産月を蓐月というのは、産室に蓐 の蓐席をいう語である。「一に曰く、蔟なり」は、釈器〕に「蓐これを茲といふ」とは負茲、しきもの 宣十二年「軍行は轅を右にし、左に蓐を追ふ」 簇なり」という。野処には草莓を用いた。〔左伝〕 一下に「陳き艸復生ずるなり」とし、「一に曰く、 - 二年 · 軍行は轅を右にし、左に蓐を追ふ」とあって年 · 軍行は轅を右にし、左に蓐を追ふ」とあ 声符は辱。 辱に草ぎる意がある。〔説文〕

褥15 しとね・しきものジョク

たもの、あるいは蒲団の類を海という。 蓴の意。草席を、蓴といい、それに帛でへりとりしる。〔取 名、釈珠帳〕に「辱なり」とあるのは、 形声 声符は辱。 唇は草ぎることで、蓐の意があ

縟16 いろかざり・おおいジョク

飾りの 采飾なり」 多いこと、縟は褥席の多彩なるをいう語で、 とあり、 ジョク 夢の意がある。「説文」─三上に「繁き 形声 声符は辱。辱は草ぎることで、 繁縟なることをいう。 蓐 褥 縟 繁は髪

> 礼に煩わされることを、繁文縟礼という。 のを縟毛、修飾の多い文を繁文 縟旨、形式的な儀祭事や儀礼のときなどに用いた。毛皮の密毛あるも

シン

先 かんざし・こうがいシン

ている形である。 夫 妻や齊(斉)・多(参)の字形は、簪笄を用いに笄を加えた。簪笄はすべて儀礼のときに用いる。 笄字条五上に「簪なり」という。先は簪の初文。ト き 文に女子が二先を加えている形がある。男子も冠礼 〔説文〕ハ下に「首笄なり」とあり、象形 こうがいをさしている人の形

こころ・むね

∜ 中心的心

「少心慢忌せよ」などの用法がある。心は生命力の 「克く厥の心を盟かにす」「乃の心を敬明にせよ」は火、心は土、肝は金、腎は水とされた。金文には火、心は土、肝は金、腎は水とされた。金文に 象形 は土、肺は金、腎は水、古文尚書説では脾は木、 が行なわれ、今文尚書説では肝は木、心は火、脾の当時には、すべてを五行説によって配当すること 火の藏と爲す」とあり、藏(蔵)は臟(臟)。許慎な なり。土の藏、身の中に在り。象形。博士説に以て 心臓の形に象る。〔説文〕一〇下に「人の心 肺

> 金文では神霊を安んずる寧の儀礼、神判における勝ず、ただ聖化儀礼としての文の字形中にあらわれる。根源と考えられていたが、卜文にはまだ心字がみえ根源と考えられていたが、卜文にはまだ心字がみえ の発達を、 とができる。文字の展開を通じて、その意識や観念 の他徳や愈など情性に関する字も二十数文をみるこ 訴を示す 慶など、やはり神事に関する字にみえ、そ あとづけることが可能である。

参5 ゆたかなかみ

包 0

もと

参と

珍と

両系の

字があって、 を付しており、疹・冷の初文であろうと思われる。また金文の字形に含と似た字があって、腋下に小点 字は、金文の盨の字形にみえる須が、それに近い。 なり」とあり、〔詩、鄘風、君子偕老〕「今髪雲の如なり」とあり、〔詩、鄘風、君子偕老〕「今髪雲の如はなる。〔説文〕九上に「棚髪 ものであろう。 し」の句を引くが、 いまその字は鬒に作る。鬒髪の のち混じた

‡ かみ・のびる・

ы ø E E ちょう

0 るるるの

「四下に「神なり。七月、陰气體を成し、自ら申東の下部甲は、その電光の屈折して走る形。〔説文〕 象形 電光の走る形に象り、神の初文。電光の電 自ら申束

シン 心 彡 申

屈伸の意よりの引伸の義である。

「田に從ふは、自ら持するなり」を説は臨時を以て事を聽く。皇の政を申ぶるなり」と説くも、すべて当時の俗説で、字は明らかに電光が斜めに屈折してきる姿と考えられた。申が多義化して神が作られるので、申がその初文。[大克鼎]に「申(神)祖考に享孝す」、〔杜伯潔』「それ用て皇申(神)祖考に享孝す」のように、なおその字を用いている。[書、表表す」のように、なおその字を用いている。[書、表表す」のように、なおその字を用いている。[書、表表す」のように、なおその字を用いている。[書、表表]「申ねて義叔に命ず」、〔詩、小雅、采表表]「福東これを申ね」のように、かさね加える申重の意に用い、また上申・申張・申明などに用いるのは、配伸の意よりの引伸の義である。

伸っ のびる・なおくする

形声 声符は中。中は電光が斜めには、てものの伸縮するものに及ぼしていう。伸にすべてものの伸縮するものに及ぼしていう。伸にすべてものの伸縮するものに及ぼしていう。ゆいが、「説文」ハ上に「屈伸するなり」とあり、中の初文。「説文」ハ上に「屈伸するなり」とあり、単は電光が斜めに

今 7 みね・やま

高きなり」とあり、嶮峻のところをいう。〔荘子、の字では声符である。〔説文〕九下に「山小にしてる。今は壺などの蓋栓(ふた)の形であるから、こる。今は壺などの蓋栓(ふた)の形であるから、これであるがあり、 原音より転化したとみられるものがあいますが、原音より、一般・大学・「説文」に収める

は、ギンの声でよむ。は、ギンの声でよむ。

日 7 けらい・つかえる・おみ

はじめ、文献では「墨子、尚賢、下」〔楚辞、職の長である。湯をたすけた伊尹は、〔叔美鐘〕 をもって数え、〔熒段〕に「臣三品を賜ふ」とは、船」「余はそれ女に臣十家を舎へん」などは臣を家名)に貝十朋・臣十家・鬲百人を商(賞)す」、〔令、に見十朋・臣十家・鬲百人を商(賞)す」、〔令(八)に 象形 を臣僕としたものであろう。臣はもと神の常隷とし その出自の種族をもって数えるものである。 虜 囚 はのちそのような臣僕の徒をよぶようになった。金 える者には、また異族犠牲や異常者などもあり、臣 につかえる者とされたのであろう。しかし神につか く神事など聖職に従うものと思われる。臣はもと神 辞にみえる小臣は、王族出自の身分称号で、おそら げてみる形で、望の初文はその形に従うている。ト る」とするが、 形について「君に事ふる者なり、屈服する形に象をの畳韻をもって解するが、臣に牽の義はない。字 **牽の畳韻をもって解するが、臣に牽の義はない。** である。〔説文〕三下に「牽かるるなり」と、臣・ て、神にささげられたものを意味し、小臣はその聖 目を上げて上を視る形。目の瞳を示す字形 卜文・金文の字形は明らかに目を上 を

〔儀礼〕においても夏祝・商祝は、屍体を扱う最も 低い職分のものとされた。もともと臣は神殿に捧げ 器の〔小臣告鼎〕に、小臣告が大子乙の家祀に事間〕〔呂氏春秋、尊師〕にも小臣と称している。説 この臣の身分のものから出ている。 傷つける字、その人を賢といい、賢とはもと盲目に は望・監・臨などの字形のうちに含まれており、望ん」など、すでに君臣の義の用法である。臣の字形 神殿経済が次第に王室経済に摂容されてゆくととも 盂に賜与されたことをいう。もと神殿の奉仕者が、 伯、人属于又五十夫を賜ふ」とみえる。人鬲とよば あたるものが生れ、〔大盂鼎〕に「夷嗣王臣十又三 生産が拡大されると、 臣工」には、神事に奉仕することを歌う。のち農業 奉仕するもので、また臣工ともいう。〔詩、周 頌、ばれるものがあり、かれらはいわばその神殿経済にばれるものがあり、かれらはいわばその神殿経済に 地位は、王朝の代るごとに転落してゆくもので、 は喪祭に従う賤職のものとされるが、神祇官などの えることをしるしているから、小臣告は大子の家か して神につかえるものであった。神聖の徒は、 が下地に監臨することを示す。また臤はその眼睛を は望祭で天意を望み見ること、監・臨は天上より神 に「朕く天子に臣へん」、「克盨」「畯く天子に臣へ に、王臣という関係に移ったものであろう。〔焚設〕 もの十三人が、これを管理するという体制のままで れる農奴千五十人に対し、夷系出身で王臣となれる られたもので、〔伊設〕に「康宮の臣妾百工」とよ ら出た人であることが知られる。〔周礼〕では小臣 かれらのうちからその管理に

身 7 みごもる・み・みずから

身形 みごもっている人の側身形。「説文」八上に 「別なり」とするが、字はみごもった人が、前足を 出している形である。〔詩、大雅、だ説」「大任(母 の名)。 り、孕妊をいう。身が初文、続はその形声字である。 ト辞に疾病を示すものに、腹部の膨張するものがあ り、また腹部に子を加える形の字がある。身体・自 り、また腹部に子を加える形の字がある。

辛ィ はり・つらい・かのと

* * * * * * *

象形 把手のある大きな直針の形。これを文身・ 入墨に用いるもので、その関係の字は多く辛に従う。 に説文) 一四下に「秋時、萬物成りて熟す。金は剛、 味は辛なり。辛痛しては即ち泣出づ。一に從ひやに 従ふ。辛は鼻なり。辛は庚を承く。人の股に象る」 とするが、その説くところは五行説によるもので、 全く要領をえない。辛は直刀、等は曲刀であるが、 辛は辟のように肉を切るときもあり、また***のように入墨に用いるものもあって、その形からは必ず しも一義を定めうるものでなく、その従うところの シン 身 辛 辰 呻 芯

> 字形によって、その器形とはたらきとを区別しなけった、庚は杵の形、辛は針器ということになる。 と、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。 ち、、東は杵の形、辛は針器ということになる。

辰 7 かい・とき・たつ

南南南門門門門

ト文・金文の字形においては明らかなことであり、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることは、 ともに当るところがない。字が蜃の象形であることであり、

> のうちに、蜃器である辰の観念を含んでいる。 をいっちに、「祭祀には廣器を供することを、まっになった。蜃は古く草刈りの器として農耕に用いられ、まった。「祭祀には廣器を供することを、まっになった。それで農時の意ともなり、字の解釈になった。それで農時の意ともなり、字の解釈になった。それで農時の意ともなり、字の解釈にその観念が入りこんで、「説文」のようになった。それで農時の意ともなり、字の解釈にその観念が入りこんで、「説文」のように不可解ない。長にである。星宿の説が行なわれるようになって、辰を蠍座の大火などにあて、農時を定める儀礼と関連するようになった。それで農時の意ともなり、字の解釈にその観念が入りこんで、「説文」のように不可解な解釈を生じたのであろう。日月の交会を辰とよぶこかになった。それで農時の意ともなり、字を繋座している。

伸 8 シン

おり、また吟字条二上に「吟なるものは中の急、渾言するときは則ち分たざるなり」という。申に舒伸、今に緊急の意があるとすなり」という。申に舒伸、今に緊急の意があるとすなり」という。申に舒伸、今に緊急の意があるとするが、〔詩、大雅、极〕「民の方に殿戻する」のるが、〔詩、大雅、极〕「民の方に殿戻する」のるが、〔詩、大雅、极〕「民の方に殿戻する」のるが、〔詩、大雅、极〕「民の方に殿戻する」のるが、〔詩、大雅、极〕「民の方に殿戻する」の皆事にいる。

い 8 しん・とうしんそう

ており、宋元以後の字であろう。 字を用いる。〔六書故〕に「草木華葉の心」と解し 中心の心がその初文。これを草木の類に移して芯の う字であるが、のちものの中心をなすしんをいう。 声符は心。もと藺の一種で「ほそい」をい

侵 ⁹ 【侵】9 おかす・そこなう

劇

馬を歐るを侵といふ」とは、人畜の俘獲を目的とす 意である。〔穀梁伝〕隠五年、「人民を苞にし、牛 侵といふ」とみえる。鼓を鳴らすのは、罪を責める 二十九年、「凡そ師、鐘鼓あるを伐といひ、無きをれを兵事に移して、侵略・侵暴をいう。 [左伝] 荘 たることをいう。その義の本字は浸(浸)。侵はこに従う字であった。その酒気が次第に儀場にみちわ どを清めることをいい、寢(寝)も古くは侵(侵) 掃除とは、儀場を清めることである。〔説文〕ハ上 気などをふりそそぎ、清め祓う意で、掃除をいう。 形声 る侵略である。 き進める意とするが、受は帚に酒をかけ、寝廟な に「漸く進むなり」とし、人が帚をもって次第に掃 旧字は侵に作り、浸声。受は帚をもって酒

信9

Ť. 香

会意 人と言とに従う。 言は誓言。神に誓う語で

> 〔書、君奭〕に「天は信ずべからず」とあり、その で行なわれている。 の語がみえる。大ていの政治は、これを倒逆した形 食を去るも、 ずその政策を放棄するときは、先ず兵を去り、 民を信ぜしめることの三者にあるが、もしやむをえ 〔論語、顔淵〕に政の大本は、食と兵とを充足し、 字がなく、〔説文〕古文の字形も〔魏石経〕と異な 語は周初の言としては疑わしい。卜文・金文に信の 言と爲さん」というように、もと盟誓の言をいう。 僖二十二年に「言にして信ならざれば、何を以てか*ある。〔説文〕三上に「誠なり」という。〔穀梁伝〕 る。信を強調することは〔論語〕に至ってみえ、 信は政治の絶対条件であるとする孔子 次に

津 9 しみでるもの・つ・わたしばシン

「气液なり」というのは、その津液のことである。 液を器皿に収めることを載といい、蓋字条五上に る。〔説文〕一上に「水渡なり」と渡し場の意とす ーフとする文身、奭とはその文身の美をいう字であ そのときの傷痛を遭という。 蓋の字に含まれる 皕***を加えることをいうもので、その津液は盡(尽)、 これによっていえば、「説文」のいう聿飾とは入墨 皮膚を刺し、そこより津液のにじみ出る形。その津 三下に「聿の飾なり」としてが、非は辛器をもって形声 正字は非に従い、非声。非は〔説文〕事が は爽の字にも含まれているもので、皕は両乳をモチ

> ときにあたって、鳥占を用いたなごりであろう。 のは、進が隹に従うのと同じく、水陸ともに進退の 系の訓義が一となっている。重文の字形に隹を含む は津液から、津涯の字は舟に従う字の引伸義で、二 とに従う字で、 るのは別の字義。すなわち重文として録する舟と淮 「説文」はこの両字を誤って一字と

矧。 (族)8 ひきしぼる・いわんやシン

辨 を生ずる。〔礼記、曲礼、上〕「笑ふも矧に至らず」訓し、引きしばって長く力を加える意で、加上の意 その字形が用いられている。 は佚といふ」、また「広雅、釈詁〕に「長なり」 のと思われる。〔方言〕に「矧は長なり。東齊にて 用いるのは字の本義でなく、別に字の原義があるも あって、 まして、いわんやの意とするも、語詞的に 従う。〔説文〕五下に「況詞なり」と会意 正字は改に作り、弓と矢とに

神 「神」10 かみ・たましい・こころ

Signal Signal TS

形で、 上に 形声 「天神なり」とし、「萬物を引き出すものな 神威のあらわれるところ。神の初文。〔説文〕 声符は申。申は電光が斜めに屈折して走る

な課題をなしている。 神爽・神悟のようにいい、人智をこえるものを神秘のみでなく、精神のはたらきやそのすぐれたものを 「皇上帝百神」のうちには、祖霊をも含むものとみ という。神の観念の展開は、古代宗教思想の中心的 して覭孝という祖霊に対する語を用いている。神事 られ、〔大克鼎〕「申(神)に親孝す」には、神に対 右にあると考えられるようになって、〔宗周鐘〕 には鬼という。しかしのち、祖霊が升って上帝の左 わち自然神であり、祖霊を含むことはなく、人の霊 代の語源学に共通するものである。神は天神、すな とあり、同じように音義的解釈を加えているが、漢 物を引きて出さしむ。祖廟山川五祀の屬を謂ふ」選』「鬼神に列す」の〔鄭注〕に「神なるものは、選」「鬼神に列す」の〔鄭注〕に「神なるものは、り」と、神・引の畳韻をもって訓する。〔忿悲〕、忿悲

ころである。非は気液の流れる形で津潤の意。津の 字に含まれる。皕はまた文身の美をいう爽の従うとなり」とあり、このときの傷痛を盡という。 豊の れで入墨するとき津液の流れる意。ま五上に「气液 に書の好きを以て事と爲す」というが、聿は針、 を示す。〔説文〕三下に「聿の飾なり」とし、「俗語 **事に従う字である。** 会意 をもつ形。写はその針からしたたる液 聿と彡とに従う。聿は細い針

唇10 おどろく・くちびるシン

3 ン 非 唇 娠 宸 振 晋[晉]

法を示す字であろう。唇の口もD、古くは祝禱を収に水滴を垂らしている形が多くみられ、蜃によるト 振動するものの意がある。 う。これを口脣の意に用いるのは仮借。辰にはまた ある。〔説文〕にいう震驚の初文は屋。その止の上 める器の形で、蜃に対する祝禱を意味する字であろ あって、要するに大衆の騒擾することをいう語で また「玆の邑は、蜃すること亡きか」というものも て、混乱を招くようなことが多かったのであろう。 用いるが、おそらく軍旅が、夜中に何ごとかに驚い が多く、「今夕、師は壁すること亡きか」のように卜辞ではその字を壁に作る。軍旅の震驚をトする例 舜典〕〔公羊伝〕僖九年に「震驚」の語がみえるが、ニ上に「驚くなり」と訓するのは、震驚の意。〔書、ニ上に「驚くなり」と訓するのは、震驚の意。〔書、 く、辰に従う字にその意を含むものが多い。〔説文〕 く蜃によってトすることがあったらし 声符は辰。辰は蜃の初文。古

娠 はらむ・みごもる・はしためシン

官婦女厮(召使)、これを娠と謂ふ」とあり、それなな」、「燕・齊の閒、馬を養ふ者、これを娠と謂ふ。言〕に「燕・齊の閒、馬を養ふ者、これを娠と謂ふ。 借である。 正字。娠はその形声の字であり、女隷の義は侲の仮 は侲字の義である。妊娠を意味する字としては身が に曰く、 妊みて身動くなり」とあり、妊娠をいう。また「一 女隷、これを娠といふ」というのは、〔方がれい 形声 ものの意がある。〔説文〕一三下に「女 声符は辰。辰は蜃、辰に動く

> 際・宸慮のようにいう。そのような用法は、六朝まじて空をいう。また天子のことに冠して宸翰・良ないで空をいう。また天子のことに冠して宸翰・良ないで神聖の居処の名に用いて紫宸・宸極といい、 雨だれのおちる屋っにあたるところを宸という。 形声 宇なり」とあり、屋根の中極のところ、 声符は辰。〔説文〕七下に「屋

園

宸

ごてん・のき・そらシン

10 ふるう・おさめる・すくうシン

以後に至って多くみえる。

(語)「旅を振むること関々たり」とみえ、〔左伝〕 『書、大禹謨』「師を班し、旅を振む」、〔詩、小雅、 『書、「辞脈の禮」があり、これを振旅という。 いずれも軍礼に用いる。振動の義は引伸の義である。 隠五年「三年にして兵を治め、入りて振旅す」と、 軍事が終って凱旋するときは、その脈肉を祖廟に帰 行のとき奉ずる祭肉の脈であり、振はその脈肉をも つ形で、これによって軍力を奮励振起する意がある。 とあり、これは震驚・震動といくらか近い。辰は軍 としがたい。〔説文〕にまた「一に曰く、舊ふなり」 であるから、この振は賑の仮借義であり、振の本義 とする。〔礼記、月令〕「乏絕を振ふ」は賑給の意文〕 三上に「擧げてこれを救ふなり」と振教の意文 の屋肉は祭肉として用いられる。〔説 声符は辰。辰は蜃の初文。

晋四(晉)四 や・すすむ・国名シン・セン

原核条

というのは矢箭の意。〔儀礼、大射儀、注〕に「古ままである。〔師湯父鼎〕の賜与中に「矢臺彤厥」や〔晋公蠡〕にみえる字形は、すべて鏃の鋳型その とするが、下部の字は日ではない。「格伯晋姫段」とするが、下部の字は日ではない。「格伯晋姫段」 晉なり」と〔晋卦、象伝〕の文を引く。晋・進は畳 部の二至は鏃をならべた形。日形のところは鋳こみ 全く別義の字として用いられているのである。 象形字が忘れられ、別に形声字の箭が作られて別行 例が多く、晋は象形、箭は形声の字である。もとの 文、箭を晉と爲す」とあり、他にも晋・箭の通ずる 韻の訓。〔爾雅、釈詁〕も同じ。日が地上に出る形 臸に從ふ」とし、「裼に曰く、明、地上に出づるは 初文象形の字、箭はその形声の字である。〔説文〕 もと鏃を意味する。また箭の意ともなり、晋はその の流し口。ここから流しこんで、鏃を鋳こむので、 またもとの晋は晋国の名や〔易、晋卦〕など、 「進むなり。 旧字は晉に作り、矢の鋳型の象形。字の上 日出でて萬物進む。日に從ひ、

業 10 はしばみ

「BPA 会意 辛と木とに従う。辛は針。神事に山の木を用いるとき、針や矢をうってその木をえらぶことがあり、そのえらばれた木を美という。〔説文〕☆上に「實、小栗の如し」とってその木をえらぶことがあり、そのえらばれた木の字に従う。中は針。神

である。 葉・新・親は一系相承ける字に関するもので、新はおそらく入山儀礼における初な入山伐採の儀礼に発するものであった。 葉・新はその伐採儀礼を示す字であり、親はその用いるとはその伐採儀礼を示す字であり、親はそののは採儀礼を示す字であり、親はその用いるとはその伐採儀礼を示す字であり、親は一系相承けるぞに関するもので、新はおそらく入山儀礼における初に関するもので、新はおそらく入山儀礼における初に関するもので、新はおそらく入山儀礼における初

浸10【浸】10【覆】16 かたす

作 形声 旧字は浸に作り、製声。要は ・ で、「論語、類淵」に「浸潤の譜」という語 ・ とかり、とあり、疾病を被う儀礼として ・ という。ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 という。ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 という。ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 をれる。すなわち帚に鬯酒などをそそぎ、これを振 られる。すなわち帚に鬯酒などをそそぎ、これを振 られる。すなわち帚に鬯酒などをそそぎ、これを振 られる。すなわち帚に鬯酒などをそそぎ、これを振 られる。すなわち帚に鬯酒などをそそぎ、これを振 られる。がある。必がり、とあり、疾病を減う儀礼として などいう。ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 などいう。ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 などいう。 ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 などいう。 ト辞に「己未トす。聖子(人名)に浸 などいう。 ト辞に「己未トす。 とう などいう。 ト辞に「己未トす。 とう などから、 に浸 などいう。 ト辞に「己未トす。 とう など、 ころを などいう。 ト辞に「己未トす。 とう などいう。 ト辞に「己未トす。 とう など、 ころを など、 ころと など、 ころを など、 ころと など、 ころと など、 ころと など、 ころを など、 ころを など、 ころを など、 ころと など、 こん など、 ころと など、 ころと など、 こん など、 ころと など、 ころ、 ころと など、 ころ、 ころと など、 こと など、 ころと など、 ころと など、 ころと など、 ころと など、 ころと など、 ころと など

10 あぜみち・さかい

きをいう。「周礼、遂人」「十夫に溝あり、溝上に畛田」 「井田の閒の陌なり」とあり、あぜみ 一下井田の間の「おなり」とあり、あぜみ 一下 一声符は ②。「説文」 一三下に

とは、茫々として境界の知られないことをいう。界・吟ばをいう。〔荘子、秋水〕「畛域する所無し」略」は「塗の經るところ」と注するが、要するに田略」は「塗の經るところ」と注するが、要するに田の時、〔左伝〕定四年「封畛土のり」による解である。〔詩、周頌、載艾」「鰮にあり」による解である。〔詩、周頌、載艾」「鰮にあり」による解である。

疹の「胗」のかさ・はしか

直八10 【追】10 まこと・うまれつき・もと

会意 旧字は真に作り、心と県とに従う。*とは死ん)の初文で死者、県は首の倒形、合せて顧死の人をいう。〔説文〕ハ上に「僊人なり。形を變へてで「八は乘載するところ」、すなわち乗物の形とする。雲気のようなものとするのであろう。また「こって「医るるなり」とあり、真とは化した人が姿を匿して人に見えず、雲気に乗じて登仙する意とするが、すべて附会の甚だしいものである。真とは死んが姿を 旧字は真に作り、心と県とに従う。*とは死るが、すべて附会の甚だしいものである。真とは死んが

世俗的なものとなった。 た理念の一であるが、のち道教の徒によって著しく よう。真は中国の古代思想が達しえた、最もすぐれ 「真宰」「真君」のように人格的なよびかたをしなが 存在の根源、その根源に達したものの意に用いるの また〔秋水〕に「これをその真に反ると謂ふ」など、子、大宗師〕に「眞人ありて、而るのち眞知あり」、「在子〕〔荘子〕の書に至ってはじめてみえる。〔荘 の思想の根柢にある現実的性格を認めることができ ら、特定の信仰対象を設けなかったところに、中国 ものであろうと思われる。ただ〔荘子〕がこれを あろう。荘子学派は、古い司祭者の伝承の上に立つ は、おそらく宗教者の立場においてえられたもので る字である。この真の字は経籍にほとんど見えず、 寘・塡は、いずれも顚死者と、その呪鎮の法に関す 屋舎を設けてその霊位を設け、そこに渡くのである。い葬り、その賑りを鎮めなければならない。それでい なわち真を字形のうちに含む顔・慎・塡・鎮・瞋・また玉をもってその霊を鎮めることを塡という。す のであるから、これを愼(慎)み、塡めて鎭(鎮)ような非命の死者の怨霊はおそるべき呪霊をもつもような非命の死者の怨霊はおそるべき呪霊をもつも る。顚は顚死の人。眞がその顚死者であるが、その 分析して、そこから帰納する方法をとることができ するには、真をその構成要素とするそれぞれの字を 永遠にして真実なるものの意となる。真の字形を解 者、それはもはや化することのないものであるから

秦 10 国名

秦

針〔鍼〕

晨(殿)

深

深川 ふかいジン

深という。深いところにあるものを探すので、深邃、水を測るを深という。架は深、水中のものを探す意である。「説文」二上に深を桂陽の水名とするが、「爾雅、釈言」に「測るなり」とその水深を測る意とする。「記文」二上に深を桂陽の水名とするが、「爾雅、釈言」に「測るなり」とその水深を測る意とする。「記念、歌で、『神るなり」とその水深を測るを深という。架は歌、水中のものを探るを厚、水を測るを深という。深はという。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌とで、歌とで、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌とで、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌とで、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水で、歌という。深いところにあるものを探すので、深邃、水を測るを表し、いまない。

京 章 章

針 10 「鍼」17 はり・ぬいばり・いましめ

晨 11 「農」19 あさ・あした

星なり。民の田時を爲すものなり」とし、星の名と形声 正字は晶に従い、辰声。〔説文〕七上に「房

シン 紳 脣 賑〔祳〕 進〔進〕 寑

の上に移して深沈・深博・深思・深謀・深慮という。の意となり、深遠・幽深の意となる。また人の性情

神 11 シンン

屑 11 くちびる

脈11 [脈]12 祭内・ひもろぎ

り、「社肉なり。盛るに蜃を以てす。故にこれを碾水 内をいう。〔説文〕一上に字を碾に作形声 声符は辰。様にほで蜃器・蜃

野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 野の肉であるとする説などがある。 大宗伯」に「脈膰の礼」といわれた。 大宗伯」に「脈膰の礼」といわれた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といれた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈膰のといわれた。 大宗伯」に「脈膰の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのと 大宗伯」に「脈腫の心といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といた。 大宗伯」に「脈腫の心とのを膰といわれた。 大宗伯」に「いた。 大きないた。 大き

進川【進】にまずむ

表。字の初義は、おそらく鳥占によって進退を定め 、に「百官な当りでこれを徹す」の進は、酸の仮統」に「百官な当りである。これらは同声通用の は、後とその声が近かったのであろう。隹を声符と は、というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」とは「玉篇」に「乳すない」とは「玉篇」に「乳すない」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、般庚、中」「乃ち厥のり」というのと同じく、「書、としており、というのと同じく、「書、としており、というのと同じく、「書、というのと同じく、「書、というのと問うとは、則ちたり、日本に、「から、」というのというのである。これらは同声通用のを表しており、「れば、祭事をしている。」というのである。これらは同声通用のにおける供薦をいう字である。これらは同声通用のにおける供薦をいる。

優 12 シン・みたまや・やめる

屬屋 全国

森 12 もり・しげる

ながれば

た。〔万葉〕では「神社」を「もり」とよんでいる。踏のところが多く、そこには神が住み、神秘があっ万象という。古代には大樹林が各所にあり、人跡未森が・森然・森厳のように用いる。また万物を森羅森立・森然・森厳のように用いる。また万物を森羅森立・森然・森厳のように関文〕六上に「木多き気と会意 三木に従う。〔説文〕六上に「木多き気と

一校 12 わざわいの気・しるし・ひのかさ

を殺という。ト辞にも震気や天象で吉凶をトする例 いで、その酒気がただようことをいう。 「説文」一上に「精气感祥す」とあり、吉凶の祥を 弁ずることをいう。「闖礼、保章氏」に「五雲の物 を以て、吉凶水旱の降ること、豊荒の殿象を辨ず」 を以て、吉凶水旱の降ること、豊荒の殿象を辨ず」 を以て、吉凶水旱の降ること、豊荒の殿象を辨ず」

森

寝[寢][驛]

慎(愼)

があり、また〔左伝〕には、昭十五年「赤黒の殿をだされ、「周礼、眡殿」に「十輝の法」をもって妖とされ、「周礼、眡殿」に「十輝の法」をもって妖に古凶を弁ずることがしるされている。受は邪気を譲う方法であり、それを吉凶の気に及ぼしたものが緩う方法であり、それを吉凶の気に及ぼしたものが親ればである。〔釈名、釈天〕に「祲は侵なり。赤黒の頼をずなり」とみえ、嗣といえば概ね悪気をいう。

形声 声符は炎。参は人に発疹のある形。〔説文〕三上に「視るなり」とあり、〔列子、力命〕「その疾む所を診る」のように、診察の意に用いる。診脈・診候など、医療の用語が診察の意に用いる。診脈・診候など、医療の用語が診察の意にまた診響の意があり、診は行きては告知の義。参にまた診響の意があり、診は行きては告知の義。参にまた診響の意があり、診は行きている形式を表する意をもつ。

寝は「寢」は「鷹」26 ねる・みたまや

源。食

う。寝はみたまや、寝廟の意であるから、もと寝臥である。【説文】七下に「病みて臥するなり」とし、夢の省に従い、需の省声に従う字であるという。寥に前条に「寐ねて覺むることあるなり」とし、夢のは前条に「寐ねて覺むることあるなり」とし、夢のは前条に「寐ねて覺むることあるなり」とし、夢のは前条に「寐ねて覺むることあるなり」とし、夢のは前条に「寐ねて覺むることあるから、もと寝臥

承ける字である。

慎ι 【愼】13 つつしむ・おそれる・まこと

参。

形声 旧字は愼に作り、眞(真)声。真とは疑死 者をいう。[説文]一〇下に「謹むなり」とあり、謹 者をいう。[説文]一〇下に「謹むなり」とあり、 で互訓。真は顚死者であり、おそるべき呪霊をもつ ものであるから、慎重にこれを塡め、祭所に寘き、 その瞋りを鎮(鎮)めることが必要であった。いわ ゆる鎮魂である。そのように鄭重に扱うことを慎 という。[説文]に重文として、古文の督の字形を という。[説文]に重文として、古文の督の字形を という。[説文]に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を という。「説文」に重文として、古文の督の字形を は、大変に、「なり」とあり、古印にもその字がある。古印文に玉と心とに従う形のも のがあり、玉を鎮魂・魂振りとする意象の字である。 「ばれ、上きに、ではするに自一線を用ふ」は、死者 の耳につめるもの。「釈名、釈首飾」に「頑は鎖な り」とあって、塡はもと呪器として塡塞したものである。 り」とあって、塡はもと呪器として塡塞したものである。 「ではると呪器として塡塞したものである。真に従う字は、すべて一系の義をなしている。

搢 13 はさむ・さしはさむ

る。 長さ二尺六寸、幅二寸の板形のもの。玉や象牙で作 貴顕高官の人をいう。笏は廷礼のときもつ礼器で、 さすこと、搚紳とは笏を大帯にさすことで、ともに ことから摺の意となる。〔説文新附〕一二上に「「種 むなり」とあり、箭を帯びる意。揺笏とは笏を帯に 仮借義である。 **搢紳を縉紳に作ることがあるが、縉は赤色の帛** 作る鋳型で箭の意もあり、箭を帯びる 形声 声符は晉(晋)。晋は矢鏃を

13 くむ・とる・おしはかるシン

よ この半生の親を敍べん」という。他人の事情を蘇武の詩と伝えるものに「顯はくは子留りて斟酌せまま む意とするのは、字形の解釈を誤る。甚は、煁の初 甚声とする。〔説文〕が甚五上を甘匹に従うて媽し酌む意である。〔説文〕一四上に「勺むなり」とあり、 酌んでことを処置することをも、 ものを酌むを斟酌という。斟は料理、酌は酒。 烹飪の器のある形。斟はこれを斗杓で いた。 甚と斗とに従う。 甚に輩に 斟酌という。

新 13 あたらしい・はじめ

科科

用いる。 [書、金縢]に「予小子なるも、新たに三王に命ぜ 選木の儀礼があって、神に供すべきものを定めた。 である。ト辞に新廟・新宗・新家などの語があるが、 「木を取るなり」とあり、薪の義と解しているよう とき、木をえらぶのに矢を放ち、辛をうつなどする のように、 られたり」「これ朕小子なるも、それ新たに逆へん」 をおく意であろう。ト辞にこれを「御新」という。 新もまたト文に新に作るものがあり、はじめて神位 にその字をまた親に作る。廟中に神位を拝する意。 祭事詩の発想とされる。神位を拝するのが親、金文 鳥形霊で、 あるが、詩の発想として伐木と鳥鳴とを歌う。鳥は であった。〔詩、小雅、伐木〕は祖祭を歌うもので て行なわれており、その入山の儀礼も、厳粛なもの に多くみえる採薪の俗も、神事や新婚の儀礼に関し も新旧の意で、これを薪に用いた例はない。〔詩〕 いずれも寝廟に関しており、また新鬯・新射など の神位を拝する形である。新は〔説文〕一四上に をもって祭られるものを親という。親の字形は、そ 新とは、新死者のための神位を作る意で、その神位 辛と木と斤とに従う。辛は針。新木をとる 新は神意によってことを新たにする意に 祖霊を暗示する。ゆえに伐木と鳥鳴とが、

屋 かシいン ・はまぐり

して、 祭儀や予兆のことに用いられた。またその殼 形声 文。その肉は呪的な意味をもつものと 声符は辰。辰は象形で蜃の初

> はます。 り、十月、玄雉、淮に入りて蜃と爲る」という。ままた〔夏小正〕に「九月、雀、海に入りて蛤と爲また〔夏小正〕に「九月、雀、海に入りて蛤と爲る」、て蛤と爲り、十月、雉、大水に入りて蜃と爲る」、 る」とし、 意味をもつものであり、辰に従う字形のうちに、 える。ト文に屋の字があり、蜃の動きによって予兆に蜃炭をもって、それぞれ虫害を祓除することがみ飾りにも用いた。「周礼、匠人以に白蜃、「赤莢氏」 疑いない。蜃は蜃気楼の話などもあって、殊に霊異水に入って貝となるという古い伝承があったことは 〔杜注〕には丹鳥とするなど、異説も多いが、鳥が た〔逸周書、時則訓〕には野鶏、〔左伝〕昭十七年 ている。〔礼記、月令〕に「九月、雀、大水に入りている。〔礼』 〔説文〕一三上に「雉、 おそのなごりを残している。 としたらしく、震驚の意に用いる。蜃は古く呪的 のものとされていたようである。蜃器はまた祭器の 耕耘の器として古くから農耕に用いられた。 〔段注〕に「大蛤なり」の二字を補足し 海に入りて、 化して蜃と爲

滲 14 こす・にじむ

灣 することがみえる。 ことともなる。「南史、梁豫章王綜伝」に、生者の 血を死者の骨にそそぎ、滲みるときには肉親の証と 淫・滲漏はみなしみとおること。滲透の結果、漉す 形声 上にものを漉す意とするが、渗透・滲 声符は参(参)。〔説文〕一

賑 すくう・にぎやかシン

民を賑ふ」とあって、賑卓が字の初義。賑貨・賑記、平準書〕「郡國の倉庵(蔵)を虚しうして、貧記、平準書〕「郡國の倉庵(蔵)を虚しうして、貧という。〔説文〕六下に「富むなり」とするが、〔史 りする意の字であり、財物をもって振救するのを賑 ある。振は魔肉をもって、いわば魂振形声 声符は辰。辰に振教の意がたまれ

審
15

[案]10

つまびらか・つつしむ・さだめるシン

0

晨 14 あした

みな貧民を救済する方法であった。

晨 神 過過

「師晨鼎」の字は屋に作り、 事をおそれる心情が強かったからであろう。それで 味する字であった。ト辞に「盛すること亡きか」と「顧鼎」の字は歷に作り、それは夜中の震驚を意 爽の義はその祭祀を行なう時の意であろう。金文の爽の義はその祭祀を行なう時の意であろう。金文の もみられる。いずれにしても祭祀に用いる肉で、昧 (貝)の形であるが、また祭肉を意味する脹の意と るものではない。夙の初文は夙、肉を捧げて祀る意 辰(時)を持つ形であるというが、月や時はもちう であり、晨もまた辰肉を捧げる形である。辰は蜃 夙 夕の夙が夕(月)を持つ形であるように、晨はいままなり」と早朝の義とする。字形については、まます。 辰と臼とに従う。〔説文〕三上に「早なり。 することが多いのは、古代においては、夜中の変 夕の夙が夕(月)を持つ形であるように、晨は 妹辰に大服(重要な行事)又り」とみえる。 ち晨を用いるが、 辰と臼とに従う。〔説文〕三上に「早なり。 それは形声の字である。

> 用い、審理・審議の字とするが、もとは性字を吟味ものであることを要した。審査・審定・審議の字に ところがあっても十分とされず、犠牲はまず義しい犠牲に用いるものは、角に傷があり、手爪を損する 器を破り尽す意で、審諦の義と関するところはない は悉の意を含まない。また悉とは、獣爪をもって臓 会意とする。釆を悉の意とするものであるが、釆に ること実譜(つまびらか)なるなり」とし、一米の しらべる意である。〔説文〕二上に「悉すなり。知全なものでなければならないから、その獣掌をよく 部分を加えた字。廟に供薦するものは、牲として完 り、番に従う字とする。米は獣爪、番はそれに掌の 会意 正字は案。宀と釆とに従う。篆文は審に作 金

瞋 15

しいものである。 することであった。

審美のような用法は、かなり新

順 赚 形声 声符は眞(真)。眞

は夜蚤を撮り、毫末を察するも、豊出でて目を瞋らとがあった。[荘子、秋水]に「鴟鴞(ふくろう)のため多数の餓死者や道殣(行きだおれ)を出すこのため多数の餓死者や道殣(行きだおれ)を出すこに「目を張るなり」とする。古代にあっては、災害に「目を張るなり」とする。古代にあっては、災害 の情を含む。これを「瞋る」という。[説文] 四上は顚死の人で、目にその怨恨

> すると、みな辟易すること数里であったという。 に、垓下に敗れた項羽が、目を瞋らせて追迹者を叱すも丘山を見ず」とあり、また〔史記、項羽本紀〕

箴 15 はり・さす・いましめシン

あり、 をその義に用いるのは仮借である。 うに治療することから鍼戒の意となったもので、 鍼は鍼灸の字に用いる。鍼砭(医療のはり)の を用いる。慣用によって、 しつけをする針のことである。縫い針には鍼 〔説文〕五上に「衣を綴ふ筬なり」と形声 声符は成。針・鍼と同声。 針は縫い針、箴は箴戒、 箴

震 ふるう・おどろく・かみなりシン

「茲の邑に髭すること亡きか」「今夕、自(師)は蜃神異のことに感じて人々が騒擾することをいう。 があり、 とあり、 大雅、常武〕に「雷の如く霆の如し、徐方震驚す」 が、それは電光と雷火とを示すものであろう。〔詩、 として録する籀文の字形は、両爻・両火などに従う 雷撃を受けて炎上したのであろう。

「説文」に重文 いう。〔春秋〕僖十五年「夷伯の廟に震す」とは、 振はすものなり」とあり、辟歴とは擬声語で雷鳴を とをも蜃が予兆した。〔説文〕一下に「辟歴、物を **靨の状態によってトう方法があり、震動・震驚のこ** また震驚の意に用いる。それは夜中などにその武威を雷霆にたとえる。卜文に歴の字 の意がある。辰は蜃の象形で、 声符は辰。辰に振動

晨

審[案]

箴

は歴がその初文、雷霆の字には震を用いた。 るというようなことがあったのであろう。震驚の震 の異変があれば、それを不祥として、群衆が震驚す う。軍行のときに奉ずるもので、その脈肉に何らか 加えた形の字があり、それは脤肉を奉ずる象であろ すること亡きか」のようにトする。また辰に両手を

臻 16 いたる・およぶ・しきりにシン

房本〕に、「水臻に至る」に作る。 通用して、[易・外卦、象伝]「水溶に至る」の〔京通用して、[巻・外本・上・ 水」に「温やかに衛に繰らん」とあり、また液・蓉と 「至るなり」とあり、 ど、衆多の意がある。「説文」 形声 至り集る意。〔詩、 声符は秦。秦に溱々・蓁々な 邶風、泉 二二上に

薪 16 たきぎ・まき・しばかるシン

祭祀の薪燎(あかり)に供えることをいう。〔淮南頌詩であるが、「以て薪し以て蒸す」と薪蒸をとり、「塩・のを蒸という。 〔詩、小雅、無羊〕 は牧場開きの 祝って 薪蒸を以てす」とあり、大なるものを薪、小なるも り」とみえ、〔周礼、甸師〕に「その徒を率ゐるに軽重、甲〕に「山林菹澤草萊は、薪蒸の出づる所な 薪なり」とあって互訓、薪木の意とする。〔管子、 薪は〔説文〕一下に「蕘なり」、また前条に「蕘は 以て宗廟及び百祀の薪燎に供す」とみえる。〔詩〕 、時則訓〕に「乃ち四監に命じ、薪柴を收秩し、 形声 し、また神位を作るべきものである。 声符は新。新は新木を神に供

> 柴の意があるのであろう。 と似たところがある。字が新に従うのは、薪にも初儀礼、年木を飾り新年を迎えるなど、わが国の古俗 詩においては多く予祝の意に用いる。初春の入山の ともに神事・祝頌に関して行なわれるもので、恋愛 に采薪・伐薪を歌うものが多く、それは采草の俗と

親 おや・したしむ・みずからシン

飘 的

0

ŦŸ 麻 歌

あり、 自親(みずから)・親属の意となる。 作る。親の廟中でその儀礼を行なう意である。 を拝するを親といい、金文に親命・親賜の字を親に とし、〔段注〕に至を至親の義であるとする。神位 だ木で、これを切るのは新、これで神位を作って祭会意 業と見とに従う。棄は、辛をうってえらん るものは親である。〔説文〕ハ下に「至るなり」と また宀部七下の窺字条に「至るなり」と同訓 のち

鍼 17 はり・さす・いましめシン

維 術の精密を極めた分野をなし、唐代には鍼博士があ はのち鍼灸・鍼石・鍼砭(医療のはり)の意に用いり」とあって、縫い針をいう。箴はしつけばり。鍼 る。経脈をさぐって治療を施すもので、古代東洋医 形声 が近い。〔説文〕一四上に「縫ふ所 声符は筬の省文成。筬と声義 以なな

> 「鍼たて」といった。砭針(いしばり)を加えること。など、など、いしばり)を加えること。など、など、いしばり、かが国ではような医術において証明されている。わが国では とから鍼戒の意となる。いま箴と通用する。 って鍼生を教えた。経脈の理論は、いまも鍼麻酔の

齔 はがぬける・いとけなしシン

みえ、 置 児、鬢は下げ髪。歯のぬけかわるころの幼児をいう。 乳歯の抜けおちることをいう。「髫齔」は幼 (化)。〔説文〕ニ下に「毀齒なり」と会意 歯と七とに従う。七は化

簪 かんざし・こうがいシン

糖 禱を収めた器の形である日の上に、両先をおく形。 ときの呪儀の方法を示す字である。その方法は、 俗体の字とする。先は象形。簪は形声の字。文献に 簪はその呪具として用いられたのであろう。 は簪の字を用いる。 古く忌み櫛の俗があった。 形声 正字とし、「首笄なり」と訓し、簪を **替は潜の初文で、人を諧毀する** 声符は替。〔説文〕ハ下に兂を わが国 祝

親19 したしい・いたるシン

뼮 (R) **F**

会意 路筭を命ず」とあり、寴は自ら廟中に行き拝する形 るなり」と同訓。〔史懋壺〕に「王、親しく史懋にるなり」と同訓。〔史懋忠 形。〔説文〕七下に「至るなり」とあり、親ハ下「至 一と親とに従う。 親は新しい神位を拝する

それによって尊親の人を示すものであることは、寂で、親自(自ら)の意となる。親は神位を拝する形。 の字形によって確かめうるのである。

19 そしる・うったえる・しいるシン

摺って慴伏・翫弄を加える意である。 習は両手を加えて友親・宥恕を示し、**** ころで、 方法を示し、その語を譜という。 振舞があるのをみて、父がその笄を折った話を載せ 晋語〕に、范文子が年少でありながら、人に譲らぬ であろう。 ているが、 と、これでは、これである。「国語、譜とはその呪詛の詞をいうものであろう。「国語、 は両先を祝禱の器である5日上におく形であるが、先が、むしろ人をそしる讒謗を意味する字である。替が、むしろ人をそしる讒謗 である。「説文」三上に譜を「想ふるなり」とする は呪器として人を呪詛するときに用いることがあり、 意とする。 みな讃毀の意があり、 祝禱の器の日に呪儀を加える字が多く、 笄を折るということも、不祥を示す行為 その字は譜・僭、僭などの諸字の従うとに「曾なり」と語詞の「すなはち」の 声符は替。替は〔説文〕五上 替の声義を承ける字 譜も譜譏の

櫬

の人の意があり、尊貴の人の死にあたって、殯宮でう。死者を直接に収める棺の意とするが、親に新死 「棺なり」、〔玉篇〕に「身に親づくる棺なり」とい 形声 った神位を拝する形。〔説文〕六上に 声符は親。親は新しい木で作

> 木主・位牌で、これをおくところを櫬という。 に移すまで安置するところを、櫬宮という。親とは

鬘 2 「 含 」 5 ゆたかなかみ

鬚眉あり」とは、色白で毛が深いことで、魅力ある美容をほめる。〔左伝〕昭二十六年「白皙にして鬣炭客をほめる。〔左伝〕昭二十六年「白皙にして鬣炭雲の如し」と、その国君夫人の悼亡の詩で、「鬣炭雲の如し」と、その 重文として鑑をあげる。〔詩、鄘風、君子偕老〕はは今を今に作り、私養など」と割し 剛 人とされた。 形声 に字を含に作り、「稠髪なり 声符は眞(真)。〔説文〕九上 と訓し、

ジン

<u>\</u> ひと ・ニン

0 K

儿 に儿があり、「古文奇字の人なり。象形、孔子曰く、 作る。〔説文〕にまた人の古文・奇字と称するもの 金文の字形もこれに近く、いくらか膝を屈する形に 象形 下に在り。故に詰詘す」というが、当時の俗説 人の側身の形。〔説文〕ハ上に「天地の 性、

> の形に作っている。

刃。〔刃〕。 は・はもの・やいばジン

5) 刃である。 とし、「刀に刃あるに象る」という。字を指事とす。などがない。これで、「刀吹きなり」でに「刀撃きなり」 べきであろう。剣が双刃であるのに対して、 であるから、刃のような具体的なものは、象形とす る説が多いが、指事は場所や時間などの関係的表示 象形 刀の刃部に光のあることを示 刃は片

いつくし む・したしむ・めぐむン

)[= るで

昏礼]「衽(しきもの)を奥に御む」の注に「臥席法には任で任載(のせる)。仁・任の声近く、〔儀礼、士は任で任載(のせる)。仁・任の声近く、〔儀礼、士 きものの衽席の象であろう。〔尸子〕に「木食の人 会意 おいて木・仁が春に配当されているからである。 は、多く仁を爲すものなり」とあるのは、五行説に 点を加えるもので、二人相偶する形とはみえず、 であるが、金文や占陶文の字形は人の後の下に二小 は声義相同じとする。二人相人偶する意とみるもの 記、表記〕や〔中庸〕にも同じ語があり、仁と人と で、〔孟子、尽心、上〕に「仁は人なり」、また〔礼と親愛の義とする。儒家が人の最高の徳とするもの 人と二とに従う。〔説文〕八上に「親なり」 士に仁

ジン 壬 仞 尽[盡] 迅[迅] 甚の物の形である。とがあり、それは貧置するときの敷物の形である。これを人に施したものが仁で、工の横画を加えることがあり、それは貧置するときが、寛が道路の修祓、徳が適常巡察の字から、それぞ道が道路の修祓、徳が適常巡察の字から、それぞ道が道路の修祓、徳が適常が高まり、引伸して和親・慈愛和次第に高度の価値概念に転じていったように、仁れ次第に高度の価値概念に転じていったように、仁れ次第に高度の価値概念に転じていったように、仁れ次第に高度の価値概念に転じていったように、仁れ次第に高度の価値概念に転じていったように、仁いったものであろう。

土 4 がねをうつ台・ふくらむ・みずのえ・になう

I I I I

家形 工具の形。同じく工具である工の中央の支 を受説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 で説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 で、治ど支離減裂というほかない。 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を記さるが、五行の消長を以て十 での序を説くもので、殆ど支離減裂というほかない。 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を記さるが、五行の消長を以て十 ないう長い説解を加えているが、五行の消長を以て十 での序を説くもので、殆ど支離減裂というほかない。 を説としては妊・任との声義の関係、また巫と関係 を記さるが、五行の消長を以て十 での序を説くなので、殆ど支離減裂というほかない。

任載するもので、壬と癸とは対待の意をもつ。と相連なり、癸は台器の柎足の形。壬も下にあってに従うていて工は呪具。また十干の名に用い、壬癸。

何 5 ひろ・はかる

る。 例にはなお七尺説・五尺四寸説などがある。 とあり、尋(尋)と声義同じ。尋は左右に従う会意とあり、尋(尋)と声義同じ。尋は左右に従う会意とあり、尋(尋)と声義同じ。尋は左右の字を上下に合せると尋の字形となる。字で、左右の字を上下に合せると尋の字形となる。字で、左右の字を上下に合せると尋の字形となる。字で、左右の字を上下に合せると尋い方に従う会意とあり、尋(基)と声音は以(因)。

尽 6 【盡】14 つきる・きわめる

盡、故極。季四

会意 旧字は当と皿と水滴の象とに従う。器中に ない。 を洗う意で、器中を洗い尽すことをいう。「説文」 を洗う意で、器中を洗い尽すことをいう。「説文」 を洗いる。空になった器中を洗いおとす意。篆文 の字形は火に従うが、それはもと洗滌の水の形。器 中を洗滌する形によって、終尽の意を示す。また終 の言より傾注する意となり、尽心・尽力・尽奈、ま る意より傾注する意となり、尽心・尽力・尽奈、ま る意より傾注する意となり、尽心・尽力・尽奈、ま る意より傾注する意となり、尽心・尽力・尽奈、ま る意より傾注する意となり、尽心・尽力・尽奈、ま など、まれで、まない、ことの意となる。

迅の「迅」ではやい・はげしい

世ら 9 おきかまど・はなはだ・はげしい

Ga AK BE

意、「説文」五上に「尤も安樂なるなり。甘匹に従意。「説文」五上に「尤も安樂なるなり。甘匹に従意。「説文」五上に「尤も安樂なるなり。甘匹に従意。「説文」五上に「尤も安樂なるなり。甘匹に従意。「記文」五上に「尤も安樂なるなり。甘匹に従意。」の表に「意文のであるが、字形は古文の形が示しているように烹炊の形。よく煮たものを甚という。甚は斟酌の斟の従うところで、烹炊のものを計きかまどの影形であり、飪は光の一人であるらしく、甚・竈は対待の字で、分って名のを斟酌という。「甚ば無別の甚は、竜電と同一人であるらしく、甚・竈は対待の字で、分って名がに作る。「左伝」にみえる神話は、神電とのを掛酌という。「左伝」にみえる神話は、神電と同人であるらしく、甚・竈は対待の字で、分って名で、高人であるらしく、甚・竈は対待の字で、分って名で、過甚といい、甚大という。

何 9 えり・すそ・おくみ

実 10 もえのこり・たきぎ

★ 会意 業と火とに従う。聿はもえの 会意 業と火とに従う。聿はもえの 会意 業と人とに従う。聿はもえの を協の木である。 大の計であるところは、その計である。 すなわち聿をとる形のものにも、それ でれその乗るところが異なる。 表の乗るところが異なる。 機は美の形声の字。 文献にはすべて をしての事るところが異なる。 表の乗るところは、 でれその乗るところが異なる。 表の乗るところが異なる。 大の乗るところが異なる。 表の乗るところが異なる。 本といる。 本

紅 10 はたいと・きぬ

形声 声符は式。〔説文〕」三上に「機の纏なり」 を文ではその縦画のところに肥点を加えており、そと。その巠の下部の工の形のところが紅器の形で、と。その巠の下部の工の形のところが紅器の形で、と、はたおりの紅器の意。經(経)は巠でたていた。

10 どう・たずねる・つげる

形声 声符は刊。〔説文〕三上に「問ふなり」とあ 形声 声符は刊。〔説文〕三上に「問ふなり」とあ 形声 声符は刊。〔説文〕三上に「問ふなり」とあ を表示す字で、艦が訊の初文、訊はその形声の字 ことを示す字で、艦が訊の初文、訊はその形声の字 である。信と通用し、通信をまた通訊という。 「対首執艦」、「號季子白盤」に「執監を行なう に「折首執艦」、「號季子白盤」に「執監後で である。信と通用し、通信をまた通訊という。

車10 (験)15 じん・つらなる・しく

と意 正字は敷に作り、陣はその俗という。 本文に二形があり、陳列の陳、国名の東の部分は、 田斉陳氏の陳の字は墜に作る。敷・墜の東の部分は、 いずれもその上部が屈折した若木の形。自は神梯の 象であるから、その前に神木としてその木を樹てる 象であるから、その前に神木としてその木を樹てる まであるから、その前に神木としてその木を樹てる なことを示す。敷はその神木の根を強くうち堅める意。

所の内部をいう。

が内容をいう。

が内容をいう。。

が内容をいう。。

が内容をいう。

が内容をいった。

が内容をいった。

が大のが、二字とも聖所に木を樹属するものか知りがたいが、二字とも聖所に木を樹えて、その社にめぐらす意がある。〔顔氏衆訓、書にはじまるとしており、先秦の書にはみえない字でにはじまるとしており、先秦の書にはみえない字で、聖の大部の大部を大きで、そのいずれの系統にある。

はは古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

は古い字形がなくて、そのいずれの系統にある。

尋 12 【尋】12 【縛】15 だずねる・ひろ・っぐ

に於てせんか、此に於てせんか」と神を尋ねる。牲」に、訪とよばれる祭儀があり、祭るときに「彼牲」に、弱 その隠れたる神を尋ねることである。「礼記、郊特 て四工二口を加えて、邪気を禳うことを示す字であ尋ねる字であり、襄 は死者の襟もとに、呪禁としいうところの意味が明らかでない。尋は神の所在をいうところの意味が明らかでない。尋は神の所在を のであり、その隠れるにも工を用いる。尋繹とは、 すところに従って祭る。神はもと隱(隠)れたるも のであった。祭るものは、神の所在を尋ね、その示 る。神は古くは定処することのない、所在不明のも 理むるなり。彡聲。これ騣(襄)と同意なり」といひ、又寸に従ふ。工口は亂なり。又寸はこれを分ち 三下に字を縛に作り、「釋ね理むるなり。工口に從 がら、神の所在を尋ねることを尋という。〔説文〕 うも、工口がどうして亂(乱)であるのか、説解の 右には祝禱を収める器をもち、左右の手でたどりな るときの動作を示す字で、左には呪具の工をもち、 会意 を上下に組み合せた形。左右は神を祀る 左と右とに従う。左右の両字 左と右とに従う。

「説文」は字をジ声とするが声が合わず、漢碑にも その字形に作るものをみない。彡はあるいは神気の が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋繆すること、尋求・尋察・尋 が字の原義。それで尋ねどの意に用い、「左伝」哀 を を 十二年「盟を尋む」のようにいう。

野12 じんぞう

制

形声 声符は欧、壁・賢と声が異なり、その声の 関係は明らかでない。「説文」四下に「水の減(臓) なり」とあり、五行説では肺を金、脾を土、肝を木、 心を火とする。腎は精の存するところで、腎子は睾 が、腎水は精液、その精の尽きることを腎虚という。 丸、腎水は精液、その精の尽きることを腎虚という。 丸、腎水は精液、その精の尽きることを腎虚という。 丸、腎水は精液、その精の尽きることを下に 肝と腎とは人の活動力の源であるから、合せて肝腎 という。五臓を五行に配当することは、〔礼記、月 令〕にみえる。

靭 12 つよい・じんたい

靭という。
一声符は刃(刃)。靭帯は両関節の骨をつな を調節する機能がある。強くて弾力に富むことを強 を調節する機能がある。強くて弾力に富むことを強 を調節する機能がある。強くて弾力に富むことを強

煁 13 ジン

地 ・ 泉形で、堪の初文。〔説文〕一〇上に に大炉をいう。〔説文〕五上に甚を甘匹の会意とし、 に大炉をいう。〔説文〕五上に甚を甘匹の会意とし、 に大炉をいう。〔説文〕五上に甚を甘匹の会意とし、 に大炉をいう。「説文」五上に甚を甘匹の会意とし、 に大炉をいう。「説文」五上に甚を甘匹の会意とし、 に大炉をいう。「説文」五上に甚を甘匹の会意とし、

塵 4 つちけぶり・ちり

大きないう字である。「説文」「○上に「鹿行きて土を揚ぐいう字である。「説文」「○上に「鹿行きて土を揚ぐいう字である。「説文」「○上に「鹿行きて土を揚ぐるなり」という。古代の人々は、そのような鹿の群でするさまを見ることができたのであろう。塵埃・塵垢などの意に用い、俗事を塵事という。世俗のことな塵労・塵事、世外のことを塵外という。世俗のことな塵労・塵事、世外のことを塵外という。世俗のことな塵労・塵事、世外のことを塵外という。世俗のことなど、

儘 16 ジン

用いる。また儘看・任教のようにもいう。 おれ」の意。劉克荘の〔乍ち帰る詩〕に「 儘 教あれ」の意。劉克荘の〔乍ち帰る詩〕に「 儘 教あれ」の意。劉克荘の〔乍ち帰る詩〕に「 儘 教がして 喚んで嶺南の詩と作すを」のように

月 16 にる・あたためる

清 声符は尋 (尋)。 煙と声義同じ。 煙は〔説

計16 まこと・まことに

燼 18 ジン

形声 声符は盡(尽)。初文は表に作り、燼はそれが、盡の字形には水を含むも、火を含んでいない。 るが、盡の字形には水を含むも、火を含んでいない。 るが、盡の字形には水を含むも、火を含んでいない。

21 おくりもの・はなむけ

近く、その意に通ずるところがある。

ズ

図 7 【圖】14 え・えがく・はかる

会意 旧字は「と聞とに従う。置は倉廩の形、職なものを、圖(図)という。平面図にその所在を記またものを、圖(図)という。平面図にその所在を記まなり」とするのは、図を図謀と解するものである。「説文」へ下に「畫計、難きなり」と計画の意とし、「量は難き意なり」とするのは、図を図謀と解するものであるが、図字の本義ではない。「周礼、大司徒」「邦を建てその土地の過を掌る」、「内字」「版圖を書するの法を掌る」など、みな地図の意である。その図はもと、図字の本義ではない。「周礼、大司徒」「邦を建てその土地の過を掌る」、「内字」「版圖を書するの法をする」など、みな地図の意である。その図はもと、図字の本義ではない。「周礼、大司徒」「邦を建てその土地の圖を掌る」、「内字」「版圖を書するの法をする。という。「左伝」褒四年に「難を答るを謀と爲す」とあり、「記文」の解はその文によるものであるが、図字の本義ではない。「周礼、大司徒」「邦を建てその土地の過を掌る」、「内字」「版圖を書するの法をする。との選はもと、別字の本義ではない。「周礼、大司徒」「邦を建てるものである。との選求と同じ、大きに、対象に、大きに、対象に、大きに、対象に、大の農耕地や版図の経営に関して、謀議することをいう。古代の地図については、中山王墓からとをいう。古代の地図については、中山王墓からとなり、「おいま」といる。

が出土していて、その様式を知りうる。からは、湘南の詳細な地図・駐軍図・街坊図などからは、湘南の詳細な地図・駐軍図・街坊図などをの筌域図が出土しており、また馬王堆第三号漢象

7

夕 3 みイ (スキ)

A*

象形 止の倒文。〔説文〕ェドに「行くこと遅くし なり」とするが、字は両脛の形ではなく、止の倒文。 「玉篇」に〔詩、衛風、雄狐」「雄狐殺々たり」を引 いて父々に作るが、タ々は擬声的な語である。 地である。 したの間で、 したの間である。 したの間で、 したの間である。 したの間である。

水 4 みず (スキ)

き、また「衆水並び流れ、中に微陽の气あるに象がなるなり」と水準の義とするのは、古くその音が近かったからであろう。[周礼、輔人、注]に「故書に準を水に作る」とみえ、水を水準の器に用いた。「説文」はまた「北方の行なり」と水準の器と用いた。「説文」一上に「準象形」水の流れる形に象る。〔説文] 一上に「準象形」水の流れる形に象る。〔説文] 一上に「準象形」水の流れる形に象る。〔説文] 一上に「準象形」水の流れる形に象る。〔説文]

るが、字形とは関係のないことである。略)にこれを〔湯、炊卦〕の体にあたるとしていい。[六書]とよりただ水流を写したものにすぎない。[六書]と、中の一画を陽、両旁を陰の象とするが、もる」と、中の一画を陽

吹 7 スイ (スキ)

THE THE

くなり」とは、大気の動きをたとえていう。 の字はそれに囚をそえる。祝禱の器に対する何ら 文の字はそれに囚をそえる。祝禱の器に対する何ら かの呪儀を示す字形である。【荘子、逍遥遊】に がの呪儀を示す字形である。【荘子、逍遥遊】に がの呪儀を示す字形である。【荘子、逍遥遊】に がのいのではそれに囚をそえる。祝禱の器に対する何ら かの呪儀を示す字形である。【社子、逍遥遊】に がのいのではそれに囚をそえる。祝禱の器に対する何ら かの呪儀を示す字形である。「社子、逍遥遊」に がある。「記文」には口部三上と欠

垂 8 たれる・ほとり・なんなんとす

炊 8 かしぐ スキ)

会意 火と欠とに従う。欠は気息でいたのちの電神にあたるものであろう。

生 8 とり・これ

全生 象形 鳥の形。〔説文〕四上に「鳥の文では、鳥は鳥星のように特定の神話化されたもの文では、鳥は鳥星のように特定の神話化されたもの文では、鳥は鳥星のように特定の神話化されたものを図象的にしるし、他の鳥はすべてこの形にかき、程に用い、その字はのち唯・惟・維とかかれる。ま年に用い、その字はのち唯・惟・維とかかれる。まり・雖などの用法もある。これらが音による仮借とすれば、隹にはもと、それらの音があったものと考さられる。

多 9 したがう・ついに・おとす

從ふなり」とは、願うところを達するをいう。〔説遂行するもので、遂の初文。〔説文〕ニ上に「意に必行するもので、遂の初文。〔説文〕ニ上に「意にとれている歟を称して殺殺されている歟

文」にまた字を八に従うとし、八は背く意であるとするが、それは獣が耳を垂れている形とみるべく、その全体が象形である。金文には、八に従う形のものはない。また金文では、この字を墜の義に用いる。「変し」「敢て家すこと母く、ちへの服(事)に在れ」、「克が取て家すこと母く、乃の服(事)に在れ」、「克が取て家すこと母く、乃の服(事)に在れ」、「克が取て家すこと母く、たがう意には、たの字を用いるが、述は路上において呪獣を犠牲とする形であるから、遂と声義の近い字である。遂と述とは、おそらくもと同源の語であろうと思われる。

中 9 したがう・ひきいる スイ (スキ)・シュッ・ソッ

所於 清 由自 目

れるものは、他をひきいるもので、ひきいるの義がれるものは、他をひきいるもので、ひきいるの義が自然を表示という。自は師の従うところの自然を対し、典型とする意。「師先段」「今余これ先王の命に帥井す」、「師望鼎」「望(人名)雖めて皇考に前のように用いる。神戸棚を取くして帥命に帥井す」、「師望鼎」「望(人名)雖めて皇考に前井す」のように用いる。神戸棚を取くしていた。典型とする意となり、内は神戸棚を取くしている。神戸棚を取くことによった。神意を奉ずる意となり、典型とする意となり、中戸棚を取くことによった。神意を奉ずる意となり、中戸棚を取くことによった。神意を奉ずる意となり、中戸棚を取くことによった。神意を奉ずる意となる。これを逆にいえば、前従さんに帥従する意となる。これを逆にいえば、前従さんに帥従する意となる。これを逆にいえば、前従さんに帥従する意となる。これを逆にいえば、前従うところの自

と無れ」と歌われているものである。と無れ」と歌われているもので、「儀礼、士賢礼」に、悦は女子が身につけるもので、「儀礼、士賢礼」に、悦は女子が身につけるもので、「儀礼、士賢礼」に、せれる。「説文」に異体の字として悦を録するが、生れる。「説文」に異体の字として悦を録するが、生れる。「説文」に異体の字として悦を録するが、

半 10 たたり

· 素颜。用好人

て呪詛を祓う共感呪術を意味する字であり、殺やいい。というであり、我やいい。というでない。「我はこの呪獣を殴っ祟は手にもちうるものでない。」数はこの呪獣を殴っ の字があり、「楚の人、吉凶を卜問することを謂ひ深い獣の形にかかれている。〔説文〕にまた觏三下 象形 祟とは、同じく呪霊たりうるものである。 (真)に従う。真は顚死者であるから、その死霊ととしてあげる字形はその用例をみないが、字は眞 敷・竅・殺はみな一系の字である。〔説文〕が籀文(尭典)三苗を鰒すの鰒の若くす」とあり、祟・ (尭典) 三苗を鰒すの鰒の若くす」とあり、 〔説文〕の寂字条七下に「塞ぐなり。讀みて、虞書 弑の従うところも、この呪獣の形である。 り」というが、〔説文〕の祟字の字形解釈によると、 て製といふ。又の祟を持するに從ふ。祟は亦聲な 示される意とするが、卜文・金文の字形では、 なり」とし、示と出、すなわち神意がそれによって 呪霊をもつ獣の形。〔説文〕一上に「神の禍 また 毛の

粋 10 (枠) 14 まじりけがない・うつくしい

衰10 「衰」10 もふく・おとろえる

会意 正字は衣と料とに従れて表体、合外 会意 正字は衣と料とに従いない。「説文」の上に「対するなり。 素にはこれを草と謂ふ。衣に從ひて、象形」とし、蓑と解するが、蓑が半って、泉の初義ではない。「説文」は「私は、死者の穢れを被う意がある。「説文」の上に「訓練」とし、蓑と解するが、蓑は形声の字であって、衰の初義ではない。「説文」は、新二三上に織をあげて喪服とするが、衰がその初文。衰は「儀礼、喪服で悪服とするが、衰がその初文。衰は「儀礼、喪服で悪化」に「直経」というもので、喪に用いるときは衰極という。緩は「説文」に「服する衣なり。長六寸、特四寸、心の下に直る」とあり、死者の胸の部分にそれをまとうのである。喪礼のときには、すべて平生の礼をひかえるもので、減殺することをまた衰という。それで衰後の意となる。「論語、微子」に、れ子の門を過り、「鳳や鳳や 何ぞ徳の衰へたる」と、時勢に合わぬ孔子の行動をそしって歌うものがあったという。

11 ほうき スイ (スキ)

對類

会意 帯をもつ形。〔説文〕三下に「掃きなし、重文として竹に従う字を録する。ト文に両帚をも、重文として竹に従う字を録する。ト文に両帚をるのに用いる。また彗星の意とし、〔左伝〕昭十七名のに用いる。また彗星の意とし、〔左伝〕昭十七名のでかる。また彗星は空を掃除するものと考えたのであろう。古文として竹と習とに従う字を録するが、習は摺ってかと習とに従う字を録するが、習は摺ってある。

形声 声符は卒。卒に粋(粋)の声がある。**は卒衣。死者の襟もとを結ぎである。〔説文〕 | ○下に「憂ふるなり」とあり、態である。〔説文〕 | ○下に「憂ふるなり」とあり、をである。〔説文〕 | ○下に「憂ふるなり」とあり、がある。**

捶 11 ラフ・むち

推 11 おす・うつる・せめる

とうか苦心したという話から、推敲の語が生れた。 に推測・推察の意があるのも、その俗と関係があろう。「説文」二二上に「排するなり」というも、推 力・「説文」二二上に「排するなり」というも、推 かという。というも、推 がもとの意であろう。鳥占によってことを がというも、推 がもとの意であろう。鳥占によってことを がというも、推 がもいうというも、推

酢 11 【醉】15 よう・よいしれる

見て心醉す」、「釈文」に「その道に迷惑するなり」ことを、心酔という。〔荘子、応帝王〕「列子これをことを、心酔という。〔荘子、詩でき 「小雅、楚茨」に、「神も具醉へり」とは、祭祀のとるから、古人もまた酔えば酔態を演じたのであろう。 とみえる。 とを酔という。心に分別を失うほどものに傾倒する 「ただ酒は量なきも、亂に及ばず」とあり、 きのかたしろのことで、祭って神がこれを享けるこ 小雅、賓之初筵」には酔乱の蹣跚たる態を歌うてい 散乱の意があり、酔にもまたその意がある。「詩、 たとえば卒をはじめ。碎(砕)・悴など、みな細砕・ 乱に及ばざるは、聖賢の徒である。卒声の字には、 四下に「卒ふるなり。その度量を卒ふるも、 らざるなり」と会意に解する。〔論語、郷党〕に 萃・粹(粋)の声がある。〔説文〕 一 *** ** 北声 旧字は醉に作り、卒声、卒に 旧字は醉に作り、卒声。卒 亂に至 酔うて

11 ほとり・あやうい スイ(スキ)

文 12 スイ (スキ)

赞 "斧

形声 声符は等。卒に細砕なるもの、散乱するも形声 声符は等。卒に細砕なるもの、歌れる音をり、草の聚まる意とする。衣ずれのことを萃奏というものであろう。〔孟子、公孫・丑、上〕に、人の卑出するものを「その萃を拔く」という。書中の要卑出するものを「その萃を抜く」という。書中の要卑出するものを「その萃を抜く」という。

遂 12 【遂】13 とげる・ついに・みち

新進 後等 · 高田

形声 旧字は遂に作り、��声。象は呪霊をもつ獣 の形。この獣を用いて、行為を継続するかどうか、 の形。この獣を用いて、行為を継続するかどうか、 を〔説文〕二下に「亡ぐるなり」というのは、字義 を〔説文〕二下に「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」というのは、字義 を「説文」には「亡ぐるなり」とありている。

> 義の通ずる字である。 は〔説文〕二上に「意に從ふなり」として、遂げる に、強くでは家を墜の義に用い、「登設」に「それ世、子孫、永く寶用して凌さ」となかれ」とあり、 な・遂(遂)・墜(墜)は「流に東す」と た、述(述)に作り、「小臣聴設」に「流に東す」と た、述(述)に有い、「礼記、学 いい、道路の修蔵や呪詛を意味するが、「礼記、学 いい、道路の修蔵や呪詛を意味するが、「礼記、学 に、疏」に「術は遂なり」とあって古音も近く、声

睡 3 スイ(スキ)

形声 声符は垂、**
 は文〕四上に「坐して寐ぬるなり」とし、字を会意とする。垂は華葉の垂れる形であるから、別と会意をなすことはできず、字は形声である。睡臉は美しいものとされ、瓣をたたむ蓮を睡蓮る。睡臉は美しいものとされ、瓣をたたむ蓮を睡蓮る。睡臉は美しいものとされ、瓣をたたむ蓮を睡蓮る。睡臉は美しいものとされ、瓣をたたむ蓮を睡蓮。

★介 13 車のとりて・やすんずる

照 被 中

り」とあり、「論語、郷党」「車に升るに必ず正しる意がある。「説文」」三上に「車中の把るものなる意がある。「説文」」三上に「車中の把るものないはな子の上に手を加えている形で、これを安撫するのとになった。

形声 声符は卒。卒に萃・醉(酔) 製衣 の声がある。〔説文〕四上に「青羽雀 なり。鬱林に出づ」とあって翠鳥。雄を翡といい、 あわせて翡翠という。その色よりして翠色の義となる。深い色であるから、山色は翠微、空には翠霞、 人に移して翠黛・翠眉、また翠鬢のように用いる。 大子の旗は翠羽で飾り、翠華といい、婦人の髦には その長毛を飾って、翠 魁という。

穂は「穂」に「采」。 ほい(スキ)

新 不 "下本

なわち 〔無恵鼎〕の恵は、上部に中形が三つ並んではわち 〔無恵鼎〕の恵は、上部に中形が三つ並んでは、でいる字と思われる。それで未変の穂が、「みつめぼこ」のように並立する形を、その恵の字によっかぼこ」のように並立する形を、その恵の字によっかぼこ」のように並立する形を、その恵の字によったものとすれば、穂は会意の字となり、声符としての不適合を避けることができる。いましばらとしての不適合を避けることができる。いましばらとしての不適合を避けることができる。いましばらいでは、上部に中形が三つ並んでなわち 〔無恵鼎〕の恵は、上部に中形が三つ並んでなわち 〔無恵鼎〕の恵は、上部に中形が三つ並んでなわち 〔無恵鼎〕の恵は、上部に中形が三つ並んで

能 15 たれ・とう

錐

きり・はりスイ (スヰ)

女子 15 せめる・つげる・いさめる

誰

辞 錐 錘

隧燧

雖

狭小な地を、立錐の地という。り」とあり、先端の鋭利なきり。その先端のようなり」とあり、先端の鋭利なきり。その先端のような

「銳なり」、〔釈名、釈用器〕に「利な形声 声符は隹。〔説文〕一四上に

16 地下の道・トンネル・みち

ゆる羨道のことで、「左伝」僖二十五年に「隧せんち墓中に棺を収めるために、斜めに掘り下げたいわ用いて道路を清めることをいう。隧は遂道、すなわ用いて道路を清めることをいう。隧は遂道、すなわ形声 声符は遂(遂)。遂は除道の儀礼。犠牲を形声

地を示す。いまトンネルを隧という。る。墓室のあるところは、邃遠の地。昌(阝)は聖ことを請ふ」とは、羨道を設けることを請う意であ

爆17 たいまつ・ひ

惛え

〔詩、小雅、雨無正〕「曾ち我が勢御(侍者)

字形が訊と近く、そのため混用されることもあるが「説文」三上に「譲むるなり」とあり、人を罵る意。の声があり、また細砕の意がある。

声符は卒。卒に萃・碎(砕)

として日に瘁ふ

凡百の君子がて用て訊ぐること

「楚辞、離騒」に「響として朝に許めて夕に替てらなかれ」は、押韻の上からも許でなくてはならぬ。

る」とあり、責譲・責諫の意のある字である。

形声 声符は遂(遂)。〔説文〕 - 四下に「塞上の とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。烽火のとき とするのがよく、火種をとる法をいう。 な、特に燧燧ということが多い。年ごとに鑽火して は、特に燧燧ということがあるのは、その がれており、〔周礼〕にも「司炬氏」の職がある。字が な、り、〔周礼〕にも「司炬氏」の職がある。字が は、特に燧燧ということがあるのは、その とするが、「玉篇」に、

唯 17 スイ (スキ)

文」 三上は蜥蜴 (とかげ)に似た大きな虫の名で文) 三上は蜥蜴 (とかげ)に似た大きな虫の名に用いた例はなく、また「雖も」の用義をも、そこから説た例はなく、また「雖も」の用義をも、そこから説りと雖も」の語が二見するが、古くは〔師設設〕りと雖も」の語が二見するが、古くは〔師設設〕りと雖も」の語が二見するが、古くは〔師設設〕りと雖も」の語が一見するが、字を虫名に用いた。

18 死者の衣・はなむけ

変 8 ふかい・とおい

18 あしげのうま

繁华

歌」にも歌われ、名馬の名として知られている。にもその名がみえるが、項羽の愛馬騅は『垓下のにもその名がみえるが、項羽の愛馬騅は『垓下のにもその名がみえるが、項羽の愛馬騅は『垓下のを開発している。

燧 19 スイ (スキ)

り物で儀礼を行なったので、諸侯に信を失い、そのり物で儀礼を行なったので、諸侯に信を失い、そのものとする。[周礼、司常]の文によるもので、「司ものとする。[周礼、司常]の文によるもので、「司を羽を竿頭に著けた。非常に貴重なものであったらしく、「左伝」襲十四年、晋の池宮子が羽旗を斉にしく、「左伝」襲十四年、晋の池宮子が羽旗を斉にしく、「左伝」襲十四年、晋の池宮子が羽旗を斉にしく、「左伝」襲十四年、晋の池宮子が羽旗を斉にしく、「左伝」襲十四年、晋の池宮子が羽旗を斉にし、また定四年、晋の人が鄭に羽旋を借り、その借借りて帰さなかったために、晋・斉には遂(遂)。〔説

離叛を招いたという話があったと考えられる。 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊 をし諸侯卿士が旅中に没したときは、その旞をもっ もし諸侯卿士が旅中に没したときは、その旞をもっ をしました。庭には、霊 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊 で復、すなわち招魂の儀礼を行なった。旞には、霊

スイ

心心 2 しべ・うたがう イン スイ (ズヰ)・サ

会意 三心に従う。心はしべの形で、 総はその集まる形。「説文」一〇下に に近いが、おそらく花蘂の象形であろう。三心を合せて いが、おそらく花蘂の象形であろう。三心を合せて いが、おそらく花蘂の象形であろう。三心を合せて いが、おそらく花蘂の象形であろう。三心を合せて

上面 2 ガイ(ズヰ)・スイ(スヰ)

風、黄鳥」は穆公に従死する三良を哀しむ詩で、 魔えおそれることをいう。端は長髪の巫女の形で、 憲に従う字にはその意を承けるものが多い。端は定 かられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 がられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 がられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 がられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 がられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 がられた位置(立)にあって端然として祈る姿、 に従う字にはその意を承けるものが多い。端は定 とあり、

る。生きながら葬られたのである。 「其の穴に臨みて 惴々としてそれ慄る」の句があ

作 2 さきにく・うずめる・おちる

阿高

随 12 (隨) 16 Lt (X +)

瑞

蕊

髄(髓)

れを祀るので、それより随従の義となったものと思れを祀るので、それより随従の義となったものと思い、便宜に従うて随事といい、また随時・随所のよい、便宜に従うて随事といい、また随時・随所のよい、便宜に従うて随事といい、また随時・随所のよい、便宜に従うて随事といい、また随時・随所のよい、は、「隆神」を求めることを本義とする。〔統紀〕に「隆神」を求めることを本義とする。〔統紀〕に「隆神」を求める。随分・随手は勝手気まま、筆にまかせて書くのを随筆という。

のために加えているものであ

ሐ

る。経籍に綏と緌とを混用して

いる例が多いが、綏は車上より垂れるとっての紐

している形のものが多い。綴安内、ほぞ)の部分に緌飾を垂られ、ほぞ、のなりにその図象に、して用いた。以上の文形の字やその図象に、して用いた。以上の文形の字やその図象に、

戈の

13 玉器の名・しるし・めでたい

とあり、「然後本」は会意、「繋ばる」によって、現場に「玉を以て信と爲すなり」とあり、「然後本」は会意、「繋ばる」に帯声とする。「周礼、典瑞」に「玉瑞玉器の藏を掌る」とあり、注に「人の執りて見ゆるを瑞といひ、神に禮するを器といふ」とあって、瑞は礼見、器は明器であるを器といふ」とあって、瑞は礼見、器は明器であるを器といふ」とあって、瑞は礼見、器は問題であるを器といふ」とあって、現場では、常は、一下、大きないであるから、場づいる。

女 4 ズイ(ズキ)

である。冠郷のみでなく、人にも器物にも、呪飾とくる纓なり」とあり、〔礼記、檀弓、上〕に「隣に喪あるときは、……喪、冠は縁せず」という。華形喪あるときは、……喪、冠は縁せず」という。華形恵るときは、……喪、冠は縁せず」という。華形である。「瀬雅、釈詁」に「縞は縁せず」という。華形である。「瀬雅、釈詁」に「縞は縁せず」という。華形である。「瀬郷の本でなく、人にも器物にも、呪飾と

19 「覧」23 ほねのずい・すね

スウ

枢 8 【樞】15 戸の回転軸・とぼそ

抄〕に「とぼそ」の訓がある。 ままり、運旋の軸となるものをもいう。〔類聚名義意より、運旋の軸となるものをもいう。〔類聚名義を言葉始・継続をいう語である。枢はひろく門扉・門枢の始・継続をいう語である。枢はひろく門扉・門枢の を啓 ことの枢機に関するところであった。その戸を啓く 枢に戸枢の他に枢要・枢密・枢軸・中枢の意がある 声とするが、区は軀・駅の声。謳・欧の声や枢の声という。〔説文〕☆上に「戸樞なり」とし、字を区 要な祈りが行なわれる。その入口の扉の回転軸を枢 のは、そこに重要な祝禱が収められているからで、 は相通ずるところがなく、会意とみるべきである。 を収めたところで、そこは秘匿のところとされ、重 肇といい、みな神事など重要な儀礼の開 会意 (区)とに従う。區は多くの祝禱の器 旧字は樞に作り、 とし、字を区 木と區

第10 かりくさ・まぐさ・まぐさかう

森森。 次, 魚

東形 ト文の字形は、**(手)中に両いを挟む形に作り、草を刈り、まぐさかう形。「説文」ー下にに作り、草を刈り、まぐさかう形。「説文」ー下にるが、字はもと包に従う形ではなく、手の指を広げるが、字はもと包に従う形ではなく、手の指を広げて草をもつ形。「詩、小雅、白駒」に「生物」束」とするか、神に捧げるものであった。東等の類で人のとあり、神に捧げるものであった。東等の類で人のとあり、神に捧げるものであった。東等の類で人のとあり、神に捧げるものであった。東等の類で人の形を挟む形とが上げる。

宗 11 たかい・たっとぶ

松 11 たかい・そばだつ

織。ト辞に岳として祀られるもので、岳の上部は羊麻、神を降し、甫(呂)と申とを生む」とあり、東・申は姜姓四国のうちの二。他に許と斉とがある。みな嶽神伯夷の裔と称するものである。崧は崧高のみな嶽神伯夷の裔と称するものである。崧は崧高のみな嶽神伯夷の裔と称するものである。崧は崧高のみな嶽神伯夷の裔と称するものである。崧は崧高のみな嶽神伯夷の裔と称するもので、岳の上部は羊が

首の形にかかれている。

取 11 すみ・むらざと

書 13 たかい・そばだつ

| 会意 山と高とに従う。[説文新附] | 会意 山と高とに従う。[説文新附] | 公意 | 出きに従い作る。[詩、大雅、崧高] に歌うところはまた崧に作る。[詩、大雅、崧高] に歌うところはまた松に作る。[詩、大雅、崧高] に歌うところはまた松に作る。[詩、大雅、崧高] に歌うところはおこの山で、ト辞に缶として祀る。岳神伯夷の後はまたが、伯夷・叔斉は、この姜姓族の伝承するところで、武王の伐紂を諫めたのもこの神である。ところであった。

米女 13 【事女】 15 せめる・かず・ことわり・さだめ

て乱れるのが字の原義。それは人を責める行為とし加えてその髪形を乱すを数という。ゆえに数々とし子の髪を高く結いあげて髻を作った形。これに支をはない。田字は數に作り、婁と支とに従う。婁は女

字形字義を通じて語義の展開を考えることができる。 それもなお数の音である。その髪の乱れて多く、数 えがたいことから数の意となる。数にはその数えか た、計数・数術の上に一定の法則性があることから、 必然の意となり、暦数となり、理命となり、世運の 動きをもいう。「説文」三下に「計るなり」として 要声とするが、要に数の声はない。結い上げた高響 を殴って乱すのは、おそらく祭祀に奉仕する女子を 殴つもので、これを責める重要な事由のあることで あろう。金文第一字の字形は「中山王大脈」及び 「方壺」にみえるものであるが、その上部は馬王地 島書「老子、甲・乙本」の字形と近く、「三体には という。 「方壺」にみえるものであるが、その上部は馬王地 島書「老子、甲・乙本」の字形と近く、「三体には という。 「おいたいが、象形文字においては、その 字形字義を通じて語義の展開を考えることができる。

13 国名・シュウ

地 1 はしる・おもむく・すみやか

スウ 鄒 趨 雛 騶 辷 スン 寸

99 18 ひな・ひなどり

離

という。
という。
声符は綴。〔説文〕四とに「雑子なり」とするが、鶏に限らず、鳥のひなをいう。幼少にしてするが、鶏に限らず、鳥のひなをいう。幼少にしてするが、鶏に限らず、鳥のひなをいう。

肝内 20 うまかい・うま **知**り スウ

新されるものであるが、その実態は知られない。 翳劇といい、従者を雛僕という。 「鬱御なり」とは馬飼いの意。 騎士を を が で のであるが、その実態は知られない。 を かされるものであるが、その実態は知られない。

こち すべる

字を用いた。いまも滑走・滑降のようにいう。辵部一を加えたものであろう。すべるにはもともと滑のいう意味で、道路での行為を示す辵に、平面を示す国字 なめらかなところを、すべるように動くと

して作られたものが多い。の字には辷のほか、込(込)・辻・迚など、国字の字には辷のほか、込(込)・辻・迚など、国字

スン

寸 3 ーオ・ソン

なわち一丈六尺にあたる。 である。 尋は左右の手をひろげた長さで、仞はその形声字寸は指一本の幅、尺は拇指と中指とをひろげた長さ、 ある。 例の諸度量は、みな人體を以て法と爲す」という。 ※多く、〔説文〕ハ下尺字条に「周の制、寸尺咫尋常 これは計測の法をいうものでなく、医術上の用語で 〔疏〕に「陽明は大拇指本の骨の高きものと第二指 の閒、寸口は大拇指の高き骨の後一寸」とあるが、 注〕に「脈の大候、要は陽明寸口にあり」とみえ、注〕に「脈の大候、要は陽明寸口にあり、〔周礼、疾医、と、いわゆる寸口をもって解する。〔層礼、疾医、 手、一寸を卻くところの動脈、これを寸口と謂ふ」四分の一である。〔説文〕三下に「十分なり。人の 計測法が知られる。尺は「あた」、寸は「つか」の て寸を知り、手を布きて尺を知る」とあって、その 十分の一にあたる。〔大鱗礼、主言〕に「指を布きを広げた形は尺、それに対して指一本の幅はそのあたり、その指一本の幅を寸とする。拇指と中指とあたり、その指一本の幅を寸とする。拇指と中指とのである。 3 古代の計測法は身体にその法を求めることが 常は尋を折り返した長さで八尺の倍、 会意 手指の形に一をそえる。手指

ゼ

巨足 9 きじ・ただしい・よい・これ

更 @ O+> O# 早 //

セイ

,

井 4 いど・いげた

°# #

韓(いげた)の形に象る」とし、また篆文の字形に、象形 いげたの形。〔説文〕玉下に「八家一井。 精

井中に一小点を加えることについては「鸚(みずくみがめ)の象なり」とする。井形をもって示すものに、ト文・金文の字には、水を汲む井の形、丹をとる丹井の形、首や足に加える枷の形、人や獣を陥れる陥阱の形、死者を収める棺の形、また器物を作るときの範型の形などがあって、必ずしも一義に定めがたいものがあり、声義もまた異なる。水が生活必がたいものがあり、声義もまた異なる。水が生活必がたいものがあり、声義もまた異なる。水が生活必がたいものがあり、声義もまた異なる。水が生活必能に対してあることからいえば、まず井韓(いげた)の形を示すものと考えてよい。ただ井中に一点を加えるものは、蟹の形でなく、金文の例では井はた)の形を示すものと考えてよい。ただ井中に一点を加えるものは、蟹の形でなく、金文の例では井は、大いの形を示すものと考えてよい。ただ井中に一点を加えるものは、蟹の形でなく、金文の例では井は、大いである。「出するものがたいものである。

世 5 よ・よのなか・とし

であろう。三十の表記法である冊とは、字形に明らす。それによって新しい時期・世代をあらわすものを加えており、草木の枝葉の新芽の出ている形を示を加えており、草木の枝葉の新芽の出ている形を示象形

「三十年を一世と爲す。市に從ひてこれを曳長す。亦その聲を取るなり」とするが、市の形によるもの亦その聲を取るなり」とするが、市の形によるもの亦その聲を取るなり」とするが、市の形によるもの亦を生ずるを世といふ」とあるのがよく、むしろ生と近い字である。新生による世代の改まりを、世生と近い字である。新生による世代の改まりを、世生と近い字である。金文に世を枻・集・舞・笠などに在り」とみえる。金文に世を枻・集・韓・笠などに在り」とみえる。金文に世を枻・集・韓・笠などの形に作る。みな草木にその象をとる。〔説文〕三上にんだう字形は、世代の観念を含めたものであろう。に従う字形は、世代の観念を含めたものであろう。に従う字形は、世代の観念を含めたものであろう。

丼 5 セイ・ケイ

#↑ 象形 井形のわくの形。〔説文〕五下に加戻の邢の字とする。井も刑・型の義に用いる。 ト文・金文に井・井を井戸の意に用いる例はなく、 その義は後起。わが国ではこの字を「井のもと」と その義は後起。わが国ではこの字を「井のもと」と

正 5 ただしい・ただす・なおす・おさ

化するに及んで、征の字が作られた。正はもと征服その邑を征服することをいい、作びの初文。正が多義こまれている邑。止はそれに向って進撃する意で、また。 正字は一と止とに従う。一は口、城郭でか

正朔・正気・正統・正嫡・純正のように用いる。 語義の推移は、征服・征取・政治のように支配のし ある。 かたによって拡大され、 く査察して不正を許さぬということにあった。正の よ」、「小克鼎」「八師を適正せよ」のように、 よ」とは、執政としてその僚官の指導に任ずる意で 盂鼎〕に「殷の正百辟」とあり、ご朝の支配に参与のは、もとその行為者をよぶ語で、官長の意。〔だっのと同じく、前進を意味する。官の長を正という する諸侯をいう。〔毛公鼎〕に「乃の友正を善效せずる諸侯をいう。〔毛公鼎〕に「乃の友正を善效せ 征服支配こそ、強者の正義であった。止は歩武とい は正義という観念が成立したのちの解釈で、本来は るべきところに止まるを正とするのであるが、それ 「止に從ふ。一以て止まる」という。すなわち止ま 義とするに至る。〔説文〕ニ下に「是なり」と訓し、 政という。そしてそのような行為を正当とし、正***。いい、重圧を加えてその義務負担を強制することをいい、重圧を加えてその を意味し、その征服地から貢納を徴することを征と のち中正・正義の意となり、 厳し

生 5 うまれる・いきる

来 不 不 不 不 不

ト辞に多子と多生とを対称している例があり、多子韻をもって訓したものであるが、声義の関係はない。 は耕・真の韻で古く合韻であるから、〔説文〕は畳艸木の生じて土上に出づるに象る」という。生と進艸木の 草の生え出る形。〔説文〕☆下に「進むなり。象彩 草の生え出る形。〔説文〕☆下に「進むなり。

セイ 生 成[成] 西 声[聲]

は王族、多生は多姓の意である。「養熊」に「余門 なが宗子と百生とを巻さん」と、宗子・百生を対 称するのと同じ。金文には他にも「史原設」「満 などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪鐔」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪廻」「用て写(考)ない」などの例がある。また「輪廻」「一般というでは、多くないない。

成 6 【成】7 なる・なす (ジャウ)

考えられる。が多く、これを戈身に繋けているものが成であるとが多く、これを戈身に繋けているものが成であるとか多く、これを戈身に繋がを垂れている形のもの金文図象の内の部分に、縁飾を垂れている形のもの

西 6 にし・サイ

888 8 H

は崑崙信仰の形態をとっている。 種の信仰をもつものであるが、中国にあってはそれ う形のものはない。西方に対しては、どの民族も一 生じたものであるが、卜文・金文の字形に、鳥を伴 の巣の形とする説は、棲・栖の通用するところから彙のようなその形声字が作られたのである。西を鳥 ある。 **掌の形で、東が方位の字に専用されるに及んで、** 籍文の二形を録する。それは籠の形に近いもので 東西の西と爲す」とし、重文として棲、また古文・東西の西と爲す」とし、重文として棲、また古文と方に在りて、鳥西(巣に入る)。故に因りて以て方に在りて、鳥西(巣に入る)。 文〕三上に「鳥、巣上に在るなり。象形。 もって行なわれる字であるから、仮借である。 に専用する。字の原義と関するところのない訓義を において用いられることがなく、方位の西を示す字 そらくもと籠を称する語であろうが、字はその原義 方位の字はみな仮借でもとその字なく、東は 字は卜文によると荒目の籠の形で象形。お 旦 泛説 西

声ィ【聲】エ たえ・ショウ(シャウ)

降りて、夜除れ、星見るるなり」

とあ

声符は生。〔説文〕七上に「雨

声を示した。いまの略字声は磬の象形であり、磬の 石(楽器)を鼓つ形。耳にその音を聴く意をもって、紫。 旧字は聲に作り、殸と耳とに従う。 퀁は磬 物によるものであるが、声がもと磬に従う字である 招くときに磬を用いた。声は口に発するもの、音は を収める器の単の形をそえた字もあり、祈って神を は会意字とみるべきである。ト文には殸の下に祝禱 は磬と同声、それに耳をそえたものであるから、聲 一二上に「音なり。耳に從ひて殻聲」というも、殻 初文。聲とは声義ともに異なる字である。〔説文〕 沙汰というべきである。 聞・声勢など、人の名聞の上に用いるのは、僭越の 在や神意を示すためのものであった。その字を声 ことは、神を招き、神の声を聞くことを原義とする ものであろう。音も古くは神の自鳴、神が自らの存 旧字は聲に作り、殷と耳とに従う。製は磬

阱7 おとしあな・あなセイ

無禁

五下に「、陥るなり」とし、自と井とに従うて亦声形声 声符は井。井はおとしあなの形。〔説文〕 のである。〔周礼、冥氏〕に「阱獲を爲すことを字である。〔周礼、冥氏〕に「牀をである。井がその象形、阱はその繁文、すなわち形声のる。井がその象形、阱はその繁文、すなわち形声の であるという。重文として穽、また古文一字を録す けるものである。小獣を捕るときには、卜文に陥形 掌 る。以て猛獸を攻む」とあり、猛獸のために設

> だいない。 「一番ではあればない」では、「一番では、「おいい」では、「おいい」では、「おいい」では、「おいい」では、「一番では、「一番では、「一番では、「一番では、「一番では、「一番では、「一番では、 対しては井形の穽を設けたのであろう。古文の字形 で聖域を示す字であるから、阱はもとその聖地に設 は井下に二人を列しており、人を陥れるためのもの を作り、その上に獣をしるすものが多いが、猛獣に けた陥阱をいう字であろう。

制 8 きる・つくる・おさえるセイ

制

会意 子、主術訓〕に「なほ巧工の木を制するがごとし」あり、制は木を切って製材することである。〔淮南裁八上に「衣を制するなり」とあって製衣のことで繋が、し、というが、その枝葉を切りそろえる意。断すべし」というが、その枝葉を切りそろえる意。 を切りそろえるを制という。制裁とは切り絶つ意。 切りそろえることを整という。〔説文〕四下に「裁 声義通じ、〔左伝〕にみえる鄭の石制は字は子服、声義通じ、〔左伝〕にみえる鄭の石制は字は子服、許を制可という。もと木材にいう字であるが、製と許を制可という。もと木材にいう字であるが、製と つなり」とし、「未は物の成りて滋味あるもの、裁 すなわち制は製にして服と対待の義となる。 作のことをいう字となる。天子の命を制といい、勅 とあり、「木を制する」ことが字の原義。それより して規制・制定・制圧・制裁の意となり、すべて製 木と刀とに従う。木は枝葉の茂る形。それ

東京教育ないをおなる

製と

[韓非子、説林、下]に「雨ふること十日、夜星れ定之方中]の「星みてここに夙に駕す」の星は、の星は、突をが晴れることをいう字とする。[詩、鄘風、り、夜空が晴れることをいう字とする。[詩、鄘風、り、夜空が晴れることをいう字とする。[詩、鄘風、 たり」の星と同じく姓の義。文献に星を用いており

生は星の省文であろう。 鮏 姓 血縁のせい・かばね・やからセイ・ショウ(シャウ)

些

周の親族法は、このとを各さん」とあり、 |二下に「人の生るる所以なり。古の神聖、母、天団間に行なわれる交替婚などの原則をもつ。[説文] 姓は古く母系をもってその血縁の集団を名づけた親 形声 族法で、その姓組織の上に同姓不婚、また一定の集 の初文。生が多義化して、形声字の姓が作られた。 話に由来することが多いからであろう。すなわち姓 に及んでいるのは、姓の起源がそれぞれの出自の神 に感じて子を生む。故に天子と稱す」と感生帝説話 でしるす。〔善鼎〕に「余はそれ余が宗子と百生と 金文に姓を、百生・子性のように、なお生・性の字 には、古代母系制のなごりを存するところがある。 とするが、姫・姜の間には連続的な交替婚が行なわ 声符は生。ト文・金文に生に作り、生がそ この姓組織による同姓不婚を原則 これは本支の関係に用いる。

風は甚だ盛んとなった。 祖祭と血統を重んずる中国では、姓譜の書が多く行 なわれ、六朝期の門閥貴戚が興るに及んで、その く、それぞれの血縁表示の意味をもつものであろう。 めのものとは思われない。殷には姓組織の有無は確 かめがたいが、卜文に女に従う固有名詞がかなり多 れており、その組織は必ず しも近親婚を忌避するた

征 とる・うつ・ゆくセイ

心证他反 誕 14°

と賦責・税金をいう。それを管理することを政といむ)の会意で、征服・征取を意味する字。征とはもむ)の会意で、征服・征取を意味する字。征とはも 作ることもあるが、正は囗(邑)と止(向って進の字とし、「正行なり」と訓する。金文に征を延に 文。〔説文〕ニ下に正字を延に作り、征をその別体 い、正・征・政は一系の字である。 声符は正。正は征服を意味する字で征の初

性 8 さが・たち・うまれつきセイ・ショウ(シャウ)

るのは、 「地の性に因る」、「孟子、告子、上」「これ豈水の性語」(孟子)に至ってみえる。 〔左伝〕昭二十五年 ある。性情の字は卜文・金文にみえず、 漢代儒家の性説をもって字を解するもので 「人の陽气、性善なるものなり」とす 声符は生。〔説文〕一〇下に 性説は「論

征性

青(青)

斉〔齊〕

るところのものをいう。 ならんや」のように、ものの本質や、 その属性とす

青。〔青〕。 あお・あおい セイ・ショウ (シャウ)

煮 * 事

石という。丹は多く西蜀の地に産し、李斯の〔逐客に神経、大荒西経〕に白丹・青丹、「南山経〕に「神経、大荒西経」に白丹・青丹、「南山経」に「神経、大荒西経」に白丹・青丹、「南山経」に「神経、神経、神経、 深く井戸形に掘り下げてゆくので丹井といい、丹は り耜をもつ形、それに丹青を加えて聖化する儀礼を 相にこれを加える字は靜(静)。爭(争)は上下よいな。 器物を聖化するために用い、たとえば農耕に用いる は、その色の不変であることから生れた語であろう その朱色を保つものがある。「丹青の信」というの その大版のものには、刻字のところに塡朱し、なお 出土品にもその色料を存するものがあり、甲骨文もがあり、古くから神明のことに用いられた。殷墟の 朱・丹青は鉱物質のもので変色せず、腐敗を防ぐ力を諫むる書〕にも「西蜀の丹靑」の語がある。丹 五行説によって、木(青)が火(丹)を生ずるとす 言必ず然り」というが、まとまりのない解説である。 のは、清められたものの意である。丹を取るには、 方の色なり。木、火を生ず。生丹に從ふ。丹靑の信、 いう。神に供えるものを「遼豆靜嘉」のようにいう 正字は生に従い、生声。〔説文〕五下に「東

> その井中に丹石のあることを示す象形の字。青はそ の石が青丹であることを示す形声の字である。

斉 (齊)14 ととのう・ひとしい・つつしむセイ・シ・サイ

亷

字はまた斎に通じて斎戒をいう。喪服の斉袞のときする婦人たちの整斉・斉敬・斉荘の容をいうもので、 これを尸どる一齊める季女あり」の齋は、〔玉篇〕状に挿した形である。〔詩、召南、采録〕「それ誰か状に挿した形である。〔詩、召南、采録べ 響飾としたもので、斉のように平列でなく、放射 、メーントーーで、徳の形などではない。参(参)は同じく珠玉をて、穂の形などではない。****。のものは、すべて祭祀の粛敬の意を示すものであっ 上平らかなるなり」と未穂の象とするが、この系統 を齎という。〔説文〕七上に「禾麥、穂を吐きて、ら、祭祀に奉仕することを齎(斎)といい、その人 それは祭祀に奉仕するときの婦人の髪飾りである 蒙の言を斉東野語といい、その人を斉東野人という 斉東の地は後進で迷信なども多く行なわれ、凡そ愚 書に列するものは五十義に近いが、概ね引伸もしく を躓という。斉に斉一の義があるのは、祭祀に奉仕 は簪飾の直立する形であるから、鼎の方形なるもの に引いて字を齌に作り、美しい斎女の意である。斉 は仮借である。列国期の斉は山東の大国であるが、 は、音が異なる。この字は他にも訓義頗る多く、字 髪の上に、三本の簪笄を立てて並べた形。

政 まつりごと・ただす・つかさどるセイ

明明、明

形声 声符は正。正は他邑を攻撃征服することを政と示す字。その支配のために支撃を加えることを政という。正は征服、征は賦税、政が支配の形態を示す字である。〔説文〕三下に「正なり。支に從ひ正に字である。〔説文〕三下に「正なり。支に從ひ正に字である。〔説文〕三下に「正なり。支に從ひ正に字である。〔説文〕三下に「正なり。支に從ひ正に字である。〔禹鼎〕に「井(邢)方を政めよ」、〔毛ないる。〔禹鼎〕に「井(邢)方を政めよ」、〔毛ない、賦税を主とするものであることを示している。「馬鼎」に「小大の政」「命を敷き政を敷き、小大の政計(青賦・賦税)を摂めよ」、「令甲盤」「成周の四方の資を政嗣せよ」など、政治の内容とするところが、賦税を主とするものであることを示している。ときには「今甲盤」「我が三軍を政めよ」、「號等子ときには「今甲盤」「我が三軍を政めよ」、「號等子ときには「今甲盤」「我が三軍を政めよ」、「號等子ときには「今甲盤」「我が三軍を政めよ」、「號等子ときには「今甲盤」「大の政」に、なおの字と対している。ときには「今甲盤」「大の大の内容とするとのであることを表している。

星のほして

學 学 学 学

星(木星)の知識とともに西方の天文学によってもきに生声を加えているものがある。星象の名は、歳光の星々たるをいう。ト文に晶を星の字に用い、とに「萬物の精、上りて列星と爲る」という。もと玉形声 正字は書に従い、声符は生。〔説文〕七上

するものとして正史に記録されている。占星の術はその後も久しく行なわれ、多く祥瑞に関のち〔聞礼、硩旅氏〕が二十八星の号を『夢』ったが、たらされたもので、古くは占星の術に用いられた。

性のいけにえ

机。数

り、三王を合祀するに牲を用いている。殷代の墓葬鼎〕に「牲を用ひて周王・武王・成王に禘す」とあれや」という孔子の語がある。周初の金文〔小盂・なること勿からんと欲すと雖も、山川それ諸を含て、なること勿からんと欲すと雖も、山川それ諸を含て、 字は生に従う。わが国においても生贄というの トす。從はず。乃ち牲を免す」とあり、また成七年用否を定めた。〔左伝〕僖三十一年「郊することを 形声 生きながら供えたからである。 犠牲は本来生体のままで用いたものであろう。牲の を用いるのが普通で、それは祓禳のためであった。 牲とした。古い殷墓には単葬坑においても一墓十狗 には、殉葬のほか牛・馬の牲、また特に犬を多く犠 牛(雑毛の耕牛)の子も騂く の毛色と角とを大事とした。〔論語、雍也〕に「犂れたので牲を免したことがみえる。犠牲には特にそれ 改めて他の牛を卜したところ、その牛も角をかじら には、郊祀に用いる牲牛の角が鼠にかじられたので、 の皮毛筋角の完全なものをえらび、かつトってその り」とあって、祭祀に用いる犠牲をいう。牲獣はそ 声符は生。〔説文〕ニ上に「牛、完全なるな して且つ角あらば、用 は

省 9 みる・かえりみる・さとる

声像 ** **

[礼記、月令]「有司に命じて囹圄(受刑者)を省せ省悟の意となり、徳性への自覚となる。省略の意は 古代にも「など黥ける利目」といわれる黥目の俗がき、眉飾を加えてその呪力を示すことは、わが国の (農耕地)を省せよ」のようにいう。外地に赴くと 疆土とを適省せよ」、「宜侯大設」「ゆきて東國の圖書をと することを適省といい、「大盂鼎」に「我において、ものがある。また武威を示して、その文配地を巡察 を卜して、「王省するに、往來災亡きか」と卜する 文・金文の字形は上部を生の形に作り、おそらくは す。故に引伸して減省の意と爲す」と説くが、ト だ目に見はれざるなり。中に従ふものは、これを微切めて生じ、財に見ゆるなり。眉に従ふものは、未ひ、中に従ふ」とする。〔段注〕に「中は音徹、木 四上は中に従うも ある力能のあらわれであるということから、省心・ うに外に対して示される呪力が、本来はその内部に で、その初文は省と極めて近い字形である。そのよ あった。徳の古い字形も、目の上に呪飾を加えた字 先王の受けられたまひし民と、受けられたまひ もと眉の上に加えた呪飾であろう。卜辞に王の巡省 に察するなり。凡そ省することは、必ず微において しむ」の省察の意から、その去るべきものを去る意 もとの字形は生に従い、声符は生。〔説文〕 のとし、「視るなり。眉の省に從

の名となって、道州制に代るものとなった。中を省中と改めたのは漢の元帝のとき、その皇后の孫の機関を省という。元以来、また地方の行政区画中を省中と改めたのは漢の元帝のとき、その皇后の孫となって、道州制に代るものとなった。

外 9 おとしあな・あな

無財教

南子、原道訓」に「汚壑穽路」の語がある。 ち分化したものであろう。阱はもと聖所に呪禁として設けられたものであろう。阱はもと聖所に呪禁として設けられたものであろう。阱はもと聖所に呪禁として強けられた。〔韓非子、姦妨討しに「穽井」、〔淮水下)、「東京」に、「海ができない。」、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」に、「東京」の語がある。

凄ロ さむい・すさまじい

凄と通用する字である。 で寒涼の意。氷の寒冷なるをいう語であるが、またて寒涼の意。氷の寒冷なるをいう語であるが、また

栖 10 せて ねぐら・やどる

書、顕祖紀〕に「心を栖むること浩然たり」とみえる。 然にう (養生論)に「愛憎情で極めず」、また〔魏に鳥のいる形とされ、この字形の方がその義に合う。に鳥のいる形とされ、この字が適している。西は巣の中に鳥のいる形とされ、この字を用いることも多く、また (大き) といるにはこの字が適している。西は巣の中に鳥のいる形とされ、この字を用いることも多く、また (大き) とみえる。 一番 (大き) とかえる。 一番 (大き) といる。 一番 (大き) といるには、 (大き) といるに、 (大き) といる。

生目 10 あやまち・わざわい・あやしい

逝っ【逝】コーゆく・しぬ・ここに

形声 声符は折。「説文」ニ下に「往れ道・しとき」、「詩、小雅、小弁」「我が梁に逝くとと無れ」のような古い用例がある。「方言」に逝れる。「音秦の語」とするが、「詩」にはなお「郷風、を「音秦の語」とするが、「詩」にはなお「郷風、を「音秦の語」とするが、「詩」にはなお「郷風、を「音秦の語」とするが、「詩」にはなお「郷風、を「音秦の語」とするが、「詩」にはなお「郷風、な「音楽」に「強にまさに女を去り」かの樂郊に往かん」のような、語詞の用法がある。のち多く長逝の意に用いる。

感があるのであろう。秦漢以後に用語例がある。妻とも通ずるところがあるのは、その音に悲痛の楚・悽惻など、みな悲痛哀傷の意をいう語である。なり、悽々・悽愴・悽迷れ

旌 11 せて・あらわす・しるし

形声 声符はま。〔説文〕七上に「游のであろう。

凄 11 すごい・さびしい

心の悲しむことをいう。転じて凄楚・凄悲など、さびしい状態を凄々という。転じて凄楚・凄悲など、陰雨のものとのましい状態を凄々という。転じて凄楚・凄悲など、かの悲しむことをいう。

清川(清)川 きよい・きょらか・あきらか

形声 声符は青、(青)。「説文」 - 一 とに「腹かなるなり。激める水の見な り」とあり、清水をいう。青は青丹、腹は月明をい う字で、月光の青白い光をいう。微水は澱んだ淵の が、清閑といい、後漢末の党人と宦官との抗争のと き、党人たちは自ら清流と号した。高尚の談論を清 き、党人たちは自ら清流と号した。高尚の談論を清 が、在野をもって終るを清節という。清節は道家の とないる。との激激を脱俗にたとえて、清 が、着間といい、後漢末の党人と宦官との抗争のと をいるを清節という。清節は道家の とないる。

靜を天下の正と爲す」とみえる。

盛 11 【盛】12 もる・さかん (ジャウ)

製 2 せイ・スイ(スヰ)

金意 祟と又とに従う。***は呪詛を金意 ニュー なすときに用いる呪霊をもつ獣。これが祟をなすので、これを殴って祟を防ぐ共感呪術を殺・弑という。〔説文〕三下に「楚の人、吉凶をト戦・弑という。〔説文〕三下に「楚の人、吉凶をト武礼、注〕に「筮は吉凶を問ふ所以なり」とあって、声義が同じであるから、同系の語であろう。ト文・金文にみえないが、殺・弑・竅と一系のきで、みな呪獣を用いる方法である。羅振玉のう。ト文・金文にみえないが、殺・弑・竅と一系の言で、みな呪獣を用いる方法である。羅振玉の言きが、これ、大文の歌をこの字にあてて解するが、叙は紫祀で異なる字である。

婿 12 「壻」12 to こ・わかもの

字に作るが、由来の知りがたい字である。 学に作るが、由来の知りがたい字である。俗に聲のの音でよむという。情には借る意がある。俗に聲のの音でよむという。情には借る意がある。俗に聲のの音でよむという。情には借る意がある。俗に聲のの音でよむという。情には借る意がある。俗に聲のの音でよむという。情には借る意がある。俗に聲のの音でよむという。「説文」

掣 12 ひく・おさえる

形声 声符は制。制に拘制の義がある。「爾雅、 釈訓」に「粤条は掣曳なり」とあって、人を制して 記に従わせることを掣肘という。「呂氏春秋、具備」 由を制することを掣がという。「呂氏春秋、具備」 に、人が字を書く旁で、その肘をおさえて妨げる話 に、人が字を書く旁で、その肘をおさえて妨げる話

睛12 (睛)12 はれる・うららか

棲 12 すむ・とどまる

男 12 おい・むこ

雅、頬弁」に「兄弟甥舅」の句があり、甥は姉妹の謂ふ」とあり、〔爾雅、釈親〕の文による。〔詩、小謂ふ」とあり、〔爾雅、釈親〕の文による。〔詩、小野と言ふものは、吾これを甥と言。

語である。子、舅は母の兄弟であるから、女系の同族者をいう

主円 12 にらのはな・かぶら・くさのしげるさま

妻 12 くさのしげるさま

賞 12 かす・ゆるす

タブ 13 いきおい・ちから・なりゆき・ありさま

会意 熱と力とに従う。執は藝術 (芸)の初文。草木を植樹すること。それに力(耜)をそえ、深く耕して植えこむ意で、その生成の勢をうる意となる。〔説文新附〕ニ三下にで盛力にして權あるなり」と権勢の意に解するが、下盛力にして權あるなり」と権勢の意に解するが、下盛力にして權あるなり」と称うように、もと自然の生成力をいる。執は藝術の勢あり」というように、もと自然の生成力をいる。執は藝術ののあり、というように、もと自然の生成力をいる。

聖 3 【聖】 3 セイ・ショウ(シャウ)

有明文明

例がみられるが、望が目を挙げて遠くを望む望気を例がみられるが、望が目を挙げて遠くを望む望気を強調した人の形。壬は呈〔呈〕・逞・望〔望〕のき強調した人の形。壬は呈〔呈〕・逞・望〔望〕のたっ従うところで、人のつま立ちする形。口は元が合わない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりえない。文字の構造において、人の特殊な機能やりるを強調するという。耳と壬とは耳を強調するという。耳と壬とは耳を強調するという。ことに従う。耳と壬とは耳を強調するという。ことに従う。耳と壬とは耳を強調するというにないます。

若きは、則ち吾豈敢てせんや」と述べている。高く、孔子自身も、[論語、述而] に「聖と! 容を与えたのは儒家で、その標置するところは頗る と謂ふも たらしい。〔詩、小雅、正月〕に「具予をば聖なり西周後期にはすでに多くの人に用いられる語であっ 子耶というものであろう。聖は西周期の金文にみればというのであり、殷の泉父はおそらく金文に泉和に作ることがあり、殷の泉父はおそらく金文に泉の徳を聴といい、その人を聖という。聖の初文をその徳を聴といい、その人を聖という。聖の初文を ある。 ろう。この聖に倫理的な意味、仁の実践者という内 人はみな、自ら聖と称してはばからなかったのであ 語であったものが、ひろくその徳性をいう語となり、 て聖武・哲聖のようにもいう。本来は聖職者をいう また〔史牆盤〕「憲聖なる成王」と、その徳を讚しように、その家系を尊んで特に聖の字を加えている。 人の後を忘れず」、〔師詢殷〕「乃の聖なる祖考」のえ、〔衆殷〕「戈王王姒の聖孫」、〔師望鼎〕「王、聖え、〔知望鼎〕「王、聖 風競はず 死聲多し」と、楚の敗北を予言した話が て、 〔左伝〕 襄十八年、晋と楚とが相戦うときにあたっ 聞のト文も、人の上に耳をかく形である。祝禱し った。聖の初義は神の啓示を聴きうるものであり、 て神の啓示するところを聞くのは、いわゆる神瞽の とを示す字で、聽(聴)の従うところも聖と同じ。 せて神の応答するところ、啓示するところを聴くこ 示す字であるように、聖は祝禱して祈り、耳をすま 晋の師曠が風声によってその勝敗をトし、「南 師曠は瞽官で楽師、神瞽といわれるものであ 瞽者はその神意にかなうものとされた。 誰か鳥の雌雄を知らんや」の句がある。

腥 13 セイ

誠は、誠」は まこと・まごころ

でする字であるから、誠とは誓約を成就する意味する字であるから、誠とは誓約を成就する意である。〔書、太甲、下〕に「鬼神には常享無し。克ある。〔書、太甲、下〕に「鬼神には常享無し。克ある。〔中庸〕に「誠なるものは、天の道なる道である。〔中庸〕に「誠なるものは、天の道なる道である。〔中庸〕に「誠なるものは、天の道なる道である。〔中庸〕に「誠なるものは、天の道ない。〕とは、その意。誠を重要な徳目としたのは子思、り」とは、その意。誠を重要な徳目としたのは子思、り」とは、その意。誠を重要な徳目としたのは子思、り」とは、大の意味といい。

靖13 (靖)13 やすんず

は立、すなわち儀礼の場所を清める意の字である。(静)と声義が近いが、静は期を被う儀礼、靖・竫り靖安・靖乱(乱をおさめる)の意となる。竫・静り靖安・靖乱(乱をおさめる)の意となる。竫・静の位を靖・戦にせよ」とあり、それよた「一に曰く、細き克なり」とする。〔詩、小雅、た「一に曰く、細き克なり」とする。〔詩、小雅、た「一に曰く、細き克なり」とする。〔説文〕一〇世代

青は神聖な色料として、ものを清めるときに用いる

精 14 【柄】14 セイ・ショウ(シャウ)

製14 したてる・つくる

打言 14 ちかう・つげる・つつしむ文・書画を作ることをも製作という。

是 等等

形声 声符は折。折に従うものに響・哲があり、その語義に相関連するところがある。枝を折るという行為が、響・哲と関係があるものとみられる。〔説文〕三上に「約束するなり」とあり、枝を折って約束とすることがあったのであろう。〔番生設〕に「心臓なる皇祖考、穆々として克く厥の德を誓に用いる。哲は祝禱を収める器の切の形に従い、意に用いる。哲は祝禱を収める器の切の形に従い、意に用いる。哲は祝禱を収める器の切の形に従い、意に用いる。哲は祝禱を収める器の切の形に従い、夢は言に従うが、字の立意は殆ど同じである。折は枝を折る意であるが、そのことが誓約の儀礼と関係があるらしく、〔格伯設〕に契約することを「則ちがあるらしく、〔格伯設〕に契約することを「則ちがあるらしく、〔格伯設〕に契約することを「則ちがあるらしく、〔格伯設〕に契約することを所す」という。書券を分つ意である。ト文に折を矢を折る形に作るものがあり、古い時代の約束には矢を折る形に作るものがあり、古い時代の約束には矢を折す」という。書券を分つ意である。ト文に折を矢を折る形に作るものがあり、古い時代の約束には矢を打る形はののに響・哲があり、

事 1 「新」 6 セイ・ジョウ (ジャウ)

即期等

にいう静とは瀞の意で、清酒をいう。静が争に従う 酒の清きをいう字には、澱を用いる。「説文」二上を修蔵する意の字で、字の用いるところが異なる。 に「垢蔵(汚れ)無きなり」とあるが、〔国差蟾〕 して、鼓をうち、祝禱を加えて祓うことをいい、静「籩豆靜嘉」という。嘉もまた力(耒耜の形)に対薬鑑の清らかであることを、〔詩、大雅、既酔〕に 祓に関しており、竫・靖は立、すなわち儀礼の場所 とあり、静と声義の近い字であるが、静は農具の修 に「竫、齊安なり」「靖、立つこと竫らかなるなり」ともなりうるのである。〔説文〕にはまた立部一〇下ともなりうるのである。〔説文〕にはまた立部一〇下 旨からしめ、靜からしめん」のようにも用いる。もとであるから、「国差鱠」に「用て旨酒を實たし、いう。その鎮静に帰することは、また清寧をうるこいう。その鎮静に帰することは、また清寧をうるこ と嘉とは同じ性質の儀礼を意味する語、従って連語 しまた農耕儀礼から出た語であるから、神に供えるともと農耕儀礼から出た語であるから、神に供える 、と、「民康靜ならざるなし」とは、静謐なることをといて、「大いに從れて靜かならず」とは擾乱、「師詞ないものを鎮圧・鎮撫する意に用いる。〔毛公鼎〕ないものを鎮圧・鎮撫する意に用いる。〔毛公鼎〕廷(朝服せざるもの〕を鎭靜す」とあって、服従し廷(朝服せざるもの〕を鎭靜す」とあって、服従し とするが、字は寧静を本義とするもので、耜を修い、「丹青明審なるなり」と、栄色を施す意 年、東或(國)を靜んず、また〔秦公改〕に「不敬する儀礼からその義が導かれる。〔班改〕に「三 訓し、争声とするが、声としてはむしろ青が近い。 る意がある。〔説文〕五下に「審かにするなり」と虫害を避ける予祝の意味をもつもので、清め靖んず虫害を避ける予祝の意味をもつもので、清め靖んず 争と静とを反訓の義とする説もあるが、

はもと争とは異なる字形である。

ま門 15 【主門】 15 こう・もとめる・うける

する。束ねたものを攴ってそろえることを「較といふるなり」と訓し、攴・束・正に従うて正の亦声と意で、敕にその意がある。整は〔説文〕三下に「齊湯で、敕にその意がある。整は〔説文〕三下に「齊湯

朝

醒

さめる・さとる

形声

声符は星。〔説文新附〕一四下

戒軟の意があるのは、なお軟の意を承けている。り、すべて斉整にすることをいう。整飾のようにでよむ。[晋公鏊]に「爾の容を整へ辟めよ」とあい、上下をととのえる意をもって正を加え、その音い、上下をととのえる意をもって正を加え、その音

主円 15 よそおう・よぶ・うるわしい

たまではないでします。 かまなのかで、静狂に対して醒狂という。朱でよく狂うものを、酔狂に対して醒狂という。 はできり 文字の正誤を醒誤ということがある。酒を飲まずし、

いがさめること。のちすべて迷誤の解ける意に用い、に「醉、解くるなり」とあり、酒の酔

を を を に「召すなり」というが、〔玉篇〕に に「召すなり」というが、〔玉篇〕に 字である。粉白黛黒の色の明らかなさまで、匈奴に ないう。 『部の影字条九上に「影、清飾な あったという。 『部の影字条九上に「影、清飾な あったという。 『部の影字条九上に「影、清飾な あったという。 『部の影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字条九上に「影、清飾な あったという。 『おの影字をかある。 視は儀礼

東丘 16 ととのえる・そろう・おさめる

0

が 17 おしおとす・そこなう・くじく

して多く物に忤ふ」の句がある。

子の「府判張」、大に呈する詩」に「我もまた醒狂に

17 のぼる・おちる

形声 声符は齊(斉)。〔書、顧命〕に「實階より

右旁・形声・声の

形声 声符は正。敕(勅)は不整のものを敕える

とは、虹の意。この字は〔説文〕にみえず、上に隮うである。〔詩、鄘風、蝃蝀〕に「西に朝隮あり」 事に関する語である。 などの の祭る順序をくりあげることをも隣といい、もと神の祭る順序をくりあげることをも隣といい、もと神 隮る」とあり、儀場に入るをいう。祖祭のとき**、**そ るには、のち躋の字を用いる。

騂 17 あかうま・あかい

表表表 春葵

子も繋ぐして且つ角あらば、用ふること勿からんとられた。〔論語、雍也〕に「犂牛(雑毛の耕牛)のられた。〔論語、雍也〕に「犂牛(雑毛の耕牛)の一〇上に「馬の赤色なるもの」とあり、犠牲に用い みえる。 せたものである。 意にかなうものは、必ず世に用いられるとの意を寄 欲すと雖も、山川それ諸を含てんや」とみえる。神 形声 もと驊に作り、声符は幸。ト文にその字が 赤黄色の馬、また牛をいう。〔説文新附〕

臍 ほぞ・へそ

玉気の由るところは、臍下三寸にあるという。臍下丹田は、体力を養うもとがここにあるとされた。 |君臍を噬まん」とは、後悔するも及ばぬ意である。||左伝〕 荘六年「若し早く圖らずんば、のちある。 〔左伝〕 荘六年「若し早く圖らずんば、のち の字は齊下に肉(月)を加えた字形で 声符は齊(斉)。 〔説文〕四下

瀞 きよい・とろ (ジャウ)

て、水の清澄な意とする。すなわち浄と声義の通ず上に「垢蔵(汚れ)無きなり」とあった。 一声符は群(静)。〔説文〕 一

る字である。わが国ではとろとよみ、水流に浸食さ れてできた深い淵のところをいう。水の淀んだとこ ろに、その地名をもつものが多い。

鯖 19 よせなべ・にしん・さばセイ

門に遊んで奇膳を餉られ、婁はこれを合せて寄鍋と のであろう。 字である。その背が青いので、この字がえらばれた 旁とする字をも用いるが、鯖はあおさばと訓する ある。〔西京雑記〕に、婁護が毎朝五侯(王族) に用いる。古くは他に魚偏にそれぞれ巣・惠・也を してはにしんにあてられるが、わが国ではさばの字 した。世にこれを五侯鯖とよんだという。魚の名と 西京雑記〕に、婁護が毎朝五侯(王族)のいます。 京学が田朝五侯(王族)の声符は靑(青)。古い字書にみえない字で

躋 のぼる・おちる

睮 新沙介沙

通仮の義。隋・躋は升る、擠は排墜の意である。齊と謂ふ」とし、これを反訓の一例とするが、それはことであるから、〔段注〕に「升降ともにこれを躋 と訓し、 形声 今本は顚隮に作る。顚躋の顚は顚越して下に落ちる (斉)の声にその両義を含むようである。 ・〔書、微子〕〔予は顚踏せん」の文を引く。 声符は齊(斉)。〔説文〕ニ下に「登るなり」

齎 もたらす・おくる・すすめるセイ・シ

· 同

形声 爲し……萬物を齎送と爲す。……何を以てこれに加 るものをいう。死者とともに埋葬するものを齎送とに供えるものをいったのであろうが、のち人に与え 礼、小祝〕に「道齎の奠を設く」とみえ、もとは神 く断った話がみえている。 へん」と、荘子がその死に臨んで、陪葬のことを固 いう。〔荘子、列御寇〕に「吾は天地を以て棺 槨という。〔荘子、列御寇〕に「吾は天地を以て棺 槨と るなり」とあり、 とあり、人にものを贈ることをいう。「周声符は齊(斉)。〔説文〕六下に「持して意

霽 はセ れイ る

と、 崇朝にしてそれ雨ふる」の朝隋は虹。〔周礼、眡 秀をいう。〔詩、鄘風、蝃蝀〕に「西に朝傍あればせ、い。 が解けることをそれにたとえて、霽威という。 われるような気象を霽というのであろう。人の怒り 祲〕の十煇の九にみえる隮とはその虹で、 下に「雨止むなり」とあり、雨後の 形声 声符は齊(斉)。〔説文〕一 虹のあら

22 いそしむ・ひとしいセイ

えた形、 實 5 いわば重複した構造をもつ字である。〔説文〕 妻もまた髪飾りをつけた婦人の姿であるか 婦人が祭事に服するときの簪飾を加 会意 齊(斉)と妻とに従う。 斉*

従うときの盛装したようすを示し、斎敬の意がある。するものであるが、斉・齌と同じく、婦人が祭事に七上に「等しきなり」とは、斉の義をとって斉等と七上に「等しきなり」とは、斉の義をとって斉等と

7 かわのくま・みぎわぜイ

脆

/ | | 10 もろい・よわい・やわらかい

帨を感かすこと無れ」の句がある。 紫 いっぱい ないであった。〔詩、召南、野有死麕〕に「我がるものであった。〔詩、召南、野有死麕〕に「我が

帨と縭(組紐の纓)は、女子の嫁するときにも用い象、男子のときは弧(弓)を門左に設けるのである。 に佩巾をかけることをしるしている。佩巾は女子の う。〔礼記、内則〕に、女子の出生のとき、門の右下に、その異体字として帨をあげており、佩巾をい

ころ) (娥皇・女英)を嫋が、嬪水のほとり、舜の居るとするところの水涯をいう。〔書、尭典〕に「二女するところの水涯をいう。〔書、尭典〕に「二女に説文〕二上に「水相入るなり」とあり、二水の合 るが、別と同じく古くその音があったのであろう。 に

盤め降す」とみえる。 芮伯の芮に用いる。内は泥母の字であれた。 ・ 声符は内(内)。金文に内を

芮 8 草の芽生えるさま・ちいさいゼイ

Ä $\widehat{\mathbb{N}}^{\circ}$

また〔文選、注〕に引いて「小なる貌」とする。金〔説文〕一下に「芮々は艸の生ずる兒なり」とし、いる。汭と同じく、古くその音があったのであろう。 文に芮伯を内に作り、経籍には芮に作る。 声符は内(内)。金文に内を芮伯の芮に用

悅 てふき・ぬぐう

(説)の声がある。 〔説文〕は帥字条七 声符は兌。兌に稅(税)・ 說ば

汭

芮

帨

脆[麗]

毳 税[稅]

筮

毛 12 にこげ・けがわ・やわらかいゼイ

が、絶とは関係がない。

禁禁

も毳衲がある。 の訓も同じ。〔礼記、内則〕に「羊は冷毛にして毳」 に引く〔三蒼〕に「羊の細毛なり」とあり、〔字林〕 り」とあり、細毛の密生するをいう。[玄応音義]のとあり、細毛の密生するをいう。[対なりをなる)のでは、これに「獣の細毛な会

税12 (稅)12 みつぎ・とく・

> 則とした。駕を解くことを税駕というのは、税と脱十五年「初めて畝に稅す」とあり、古くは一割を写て、米粟の類を収めさせることをいう。〔春秋〕宣 とが古く音が近かったからであるが、税は容易に脱 上に「租なり」、また租七上には「田賦なり」とあっ しがたいものである。 戦・説(説)の声がある。[説文] 七形声 旧字は稅に作り、兌声。兌に 旧字は稅に作り、兌声。兌に

筮 13 めどぎ・うらなうゼイ

髓 粪

をいう。〔説文〕四下に「小耎(小さく柔らか)にである。肉の柔弱な意より脆美、また人の脆弱なる

分の肉を脳と称したのであろう。危に從う字は誤り

従う。色は人の相交わる形で、その部

会意

正字は脳に作り、肉と色とに

して、斷ち易きなり」とし、絶の省声に従うとする

〔左伝〕襄公期以後にみえ、それ以前にみえるもの える易流に発展したものであろう。いまの周易はれがのち、上下卦爻を連関的に、数的象徴として考れがのち、上下卦爻を連関的に、数的象徴として考れがのち、上下卦爻を連関的に、数的象徴として考ればいる。 初にすでに行なわれていたことが知られている。そ の数を重ねて六とし、これによってトする方法が周 から出ているものが多い。亀卜の占卜法から、正奇 の卦爻の辞には、ト法に関する語や、その片経れている。筮はそのト法から分化したもので、ている。筮はそのト法から分化したもので、 させることがみえている。〔左伝〕僖四年に「筮は陽に命じて、下界の魂魄離散せるもののために、筮 短にして龜は長なり」と、亀卜の正統性が主張され ト法に関する語や、その占鯀の辞 易

いる。古筮法の起原は、殷周期に遡るものがある。 は〔連山〕〔帰蔵〕などの古易であると考えられて

蜕 ¹³ ぬけがら・もぬけゼイ

文〕は蛻を投の省声字とするが、兌は兄(祝)が祈があるが、解はもと角が落ちる意である。また〔説 に脱の声義が含まれているのである。 いう。〔淮南子、精神訓〕に「蟬脫蛇解」という語の解く所の皮なり」とあって、脱皮したものの皮をの解く所の皮なり」とあって、脱皮したものの皮を って惝怳として意識を失う意の字であるから、 の声がある。「説文」「三上に「蛇・蟬 声符は兌。兌に帨・稅 稅

噬 かむ・くらう

臍の悔」という。 だいない ないない ないない でんせい でんしゅう いっかぬ 過失は悔いても及ばぬもので、それを「噬のつかぬ過失は悔いても及ばぬもので、それを「噬 賢人を嫉み害するものを噬賢狗という。とりかえしにしてたべることをいう。齧み癖のある犬を鑑物、 形声 ふなり。 喙ふなり」とあり、齧むよう 声符は筮。〔説文〕ニ上に「啗

贅 18 むだ・よぶん・しちいれぜイ

ふ。敖なるものは、なほ放のごとし。貝はまさに復う。〔説文〕六下に「物を以て錢を質る。 敷貝に從問の義。その卜問のために財を費やすことを贅とい 凶を卜問することを謂ひて慜といふ」とあって、卜 る。繋は〔説文〕三下に「楚の人、吉会意 正字は黙と貝とに従う字に作

字で、 ことを贅疣といい、役に立たぬ意。借金の保証とし費を用いるのを贅といったのである。それで余分の 請け出しの意とするのであろうが、字義をえたもの これを取るべし」とあり、つまり放は質入れ、貝は て子を預けることを贅子、妻の家に寄食する男を贅 としがたい。懟字条にまた「讀みて贅の若くす」と あるから、煭と贅とは同声、もともと贅は煭に従う よけいな議論を贅説という。 ****。
おの声義とは関係がなく、ト問などに多くの

セキ

夕 3 ゆうべ・よる

P D

るものがあり、王のために「今夕田亡きか」とトす夕の礼は日々のことであった。ト辞にトダとよばれ好と同声で、すなわち皆辨の礼であるとするが、朝辨と同声で、すなわち皆辨の礼であるとするが、朝鮮と同声で、すなわち皆辨 采・小采という。金文に「夙夕を敬む」という語まれている。金文に「夙夕を敬む」という語れている。その礼を大祭。これでは日を迎えた。その礼を大祭 とがある。古く朝夕の礼とよばれるものがあって、に小さな縦の線を加えるときと、加えていないとき き、政務がとられたからであった。〔徐箋〕に夕はがみえ、政務の大本を意味する。その朝夕の礼のと 字は、時期によって月の字形と互易しており、 半ば見ゆるに從ふ」と半月の象とする。卜文の夕の 象形 夕の月の形。〔説文〕七上に「葵なり。月の なか

> [国語、魯語]「少采に月に夕す」とは、夕に月を迎 えて祀る礼をいう。 る。また邑人や師旅の震驚を卜する例もあり、夕は 一種の危機的な時間と考えられていたようである。

斥 しりぞける・さす・ひらくセキ

中 るところがある。排斥とは人を棄逐することで、 り卻くなり」とするが、古い字形がなくて確かめが めは、禮の以てこれを斥くる無し」のように用いる。 ら卻くことではない。〔左伝〕昭十六年「大國の求 たい。屰は朔の初文で、遡る意があり、声義に通ず 文〕カトに磨を字の初文とし、「屋よ 象形 斤によって木を析く形。〔説 自

いし・シャク

6 四阳后品 (b)

室あり。一に曰く、大夫は石を以て主(神主)と爲 る。示部一上に「柘は宗廟の主なり。周禮に郊宗石 らない。琅邪・繹山の二碑にみえる字形も同じであ祝禱の儀礼に関する意味をもつものとしなければな 神事的な儀礼を示す字であるから、石の従う口も、 宇は廟形に従い、祏も祭卓に従うていて、明らかに、 形に従うものが多く、宕の字形もなおその形である。 とするが、口は卜文・金文において祝禱の器とする 九下に「山石なり。 祝禱を収める器の形で、石塊の形ではない。 会意 厂と口とに従う。 厂の下に在り。口は象形なり」 厂は崖岸の象、口は≒、 [説文]

った。〔山海経〕にも石に関する記述が多い 怪に至るまで、古代の信仰と深くかかわるものでちきである。石は啓母石の神話以来、〔石頭記〕の諸 (厳)など、 なお望文の解であり、字は宕・柘、あるいは嚴がた字でないことは明らかであるが、開坑採鉱の説は るなり」とする。「祿々たる小石」のために作られ の坑道の入口と解し、「祿々たる小石を指すに非ざ ろう。中島竦の〔書契淵源〕に、石を採鉱のためその征伐にあたって祝禱の儀礼が行なわれる意であその征伐にあたって祝禱の儀礼が行なわれる意であ れる。宕は〔不攀段〕に「玁狁を宕伐す」とあって、の古いものであり、石はその石主を示すものとみら す」という。石を社主・廟主とすることは、甚だ起原 同形を含む字との関連において解すべ , 古代の信仰と深くかかわるものであ これによってすべてが祓い清められるので、赤心・ 儀礼を掌る。赤犮という語が、赤が修祓の儀礼で 赤忠のように純一であること、赤貧・赤地・赤手の あり、赦免のためのものであることを示している。 できた。 があり、薫・焚など火を用いて、禍害を防ぎ清めるがあり、薫・気に 『赤』に 『赤文氏』また 『繋氏』の職款である。 『周礼』に 『赤文氏』また 『繋氏』の職業科は赦免されるのであろう。 赤に支を加える形が罪科は赦免されるのであろう。 赤に支 かと思われる。おそらくこの修成だよって、その えず、火によって人の罪科を減う古儀があったもの火光を浴びている人の形であるが、焚殺の意ともみ

しお・うしお

タしおを汐、あわせて潮汐という。[頻聚名義抄]形声 声符はタッ。朝しおを潮というのに対して、 謂ふ」とあり、汐を干潮の意としている。 上るときは則ち江湖の水、滄海に歸す。これを汐と きは則ち滄海の水、江に入る。これを潮と謂ふ。地 するのである。東海漁翁の〔海潮論〕に「地下るとに、「ひきしほ」の訓があるのは、汐をひきしおとに、「ひきしほ」の訓があるのは、汐をひきしおと

答簿

ॐ

昔 8

むかし・ひさしい・きのうセキ・ジャク

ように一切空であることを意味する。

赤 あきらか。あか・はらう・ほろぼすセキ・シャク

灰 烾

意味を腊で示すようになった。のち昔を腊に用いる 疇 昔(昨夕)などの意に用いるに及んで、もとの肉をするもので、昔は腊の初文。昔を旧昔、また肉を (電) できた * 以てこれを晞かす。俎と同意なり」 の形。〔説文〕七上に「乾肉なり。残肉に從ふ。日

大小の意とするものであろう。卜文・金文の字形は、 の色なり。大に從ひ、火に從ふ」とするのは、大を に火を加えている形である。〔説文〕一〇下に「南方 大と火とに従う。大は人の正面形。赤は人 析 る。時を示すものには、今・来などその例が多い。 ことはなく、従って時の意に用いる昔は仮借字であ さく・わかつ・くだくセキ・シャク

判 *r

会意 のように、詳細にしらべる意にも用いる。 に供え、祝 頌に用い、予祝に用いた。分析・析理 採薪をいう。〔詩〕に多くその俗を歌うが、薪は神 〔説文〕メ゙トムに「木を破くなり」とあり、析薪とは 木と斤とに従う。斤をもって木を析く意。

席10 むしろ・ざせき

席は捲いて収めるが、猛烈な勢いで敵の陣地を侵す にも函文という。「席閒、丈を函る」の意である。その座席の間は一丈の間隔をおくので、手紙の脇付 その上に重ねるものを席という。〔説文〕に「藉く ものをおくためのものである。長者は席に坐するが ものなり」というのはいわゆる祭藉。神への供薦のものなり」というのはいわゆる祭藉。神への供薦の ものではない。地上に直接に敷く一重のものは筵、 わした象形で、 「石の省に従ふ」とするが、それも席の編目をあら は関係のない字である。また重文として古文をあげ、 省に従うとするが、庶は烹炊の形であるから、席と [説文] 七下に「藉くものなり」と訓し、字を庶の 广と席の象形とに従う。室中に席を布く形が、また ト文の宿の字と形が近く、石に従う 手紙の脇付

うす切りの肉と、日とに従う。肉はほ

し肉

とするのは、保

意で、気宇の広大なるにたとえる。 のを席捲という。 幕天席地とは、天地を座席とする

祏 いはい・いしびつセキ

用いるなど、神事に関わりが多い。わが国でも磐座請子儀礼には啓母石、獄訟のことには嘉石・肺石をが、中国では神主や社稷・叢社に石を祀り、またが、中国では神主や社稷・叢社に石を祀り、またなわれ、各地の巨石文化のごときはその遺迹である 函を合せて祏といい、宗祏・主祏という。 ことが、〔左伝〕昭十八年〔疏〕にみえている。石 収め、祭るときに取出し、終ってまた石函に収めた 多い。祏は本来は木で作った木主で、これを石窗にをはじめ、雨乞い石や誕生石など、その類のものが あるから、祏は形声である。石の崇拝は古くから行 り」とする。石の繁文とみるならば、示は限定符で 大夫は石を以て主と爲す。示石に従ふ。石は亦聲な「宗廟の主なり。周禮に郊宗石室あり。一に曰く、 すもので、祏の初文。〔説文〕一上に 声符は石。石はもと石主を示

脊10 せ・せなか・せぼねセキ

り。、季に從ひ肉に從ふ」という。季一二上も「背呂 すべてものを統貫するものを脊梁という。また最擧ぐ」の注に「脊は正體の貴きものなり」とあり、 て脊肉の全体を示す。〔儀礼、特牲饋食礼〕「肺脊をて脊肉の全体を示す。〔儀礼、特性饋食礼、肺脊を なり」とあって同訓。背呂のみならば秊、肉を加え 肉とに従う。〔説文〕二上に「背呂な会意 脊の骨肉すなわち膂肉の形と

迹 10 「遺」17 「速」10 をき: も高いものを、屋脊・山脊のようにいう。 いさおク

参豐縣 读 錦

うのは、「詩、小雅、河水」に「不蹟」というのときは弗速・不蹟という。「師袁盤」に「非速」といきは外速・本蹟という。「師袁盤」に「非速」といとを資といい、賦貢を得ることを成實、然らざるととを資といい、賦貢を得ることを成實、然らざると 資に願宅す」というのは、禹の治水した禹迹を奄有また。 なるため費を用いることもあり、〔秦公殷〕に「禹が合わず、また字義をえがたい。速が正形、同音でが合わず、また字義をえがたい。速が正形、同音で 「歩む處なり」とし、亦声の字とするが、亦では声 跡もまた俗字である。 の字には跡を用いるが、〔説文〕にその字を収めず、 同じ。速・賽・績・蹟はみな一系の字である。足跡 する意である。その支配する地より賦貢を徴するこ であるから、速を正形としてよい。〔説文〕ニ下に に祭肉をおき、朿を樹てて餗という。賽はその繁文 として樹てるもので、たとえば軍の駐屯するところ 速・遺で、迹はその俗字であろう。 束は神聖の表示 正字は「説文」ニ下に重文としてあげる

隻10 とり一羽・ひとつ

は隻を獲の初文とし、鳥獣はもとより、人を俘獲すひ、二隹を持つを雙といふ」とする。ト文・金文にひ、二隹を持つを雙といふ」とする。ト文・金文に 又(手)もて隹を持つに從ふ。一隹を持つを隻とい 奪 会意 つ形。〔説文〕四上に「鳥一枚なり。 **隹と又とに従う。隹を手にも**

> (獲)酸」の語がある。隻・雙は後起の義である。トする「獲羌」の辞が多く、金文には「執訊」隻トする「獲羌」の辞が多く、金文には「執訊」隻 るのをも隻という。卜辞に「羌を隻(獲)んか」

叙1 しずか・さびしい・やすらか

のうちに義を含むものとしてよい。さまをいう字であろう。寂・寞はいずれも、その声 ないが、戚にも感寛の意がある。寞も廟中の暮れる にひとり戚を守る形であるとしても、声義に密接で さまの字で、叔はその戚をもつ形である。ただ廟中 し、赤声とする。赤は、戚の刃部、その光が発する 形声 七下に「人の聲無きなり」と 声符は叔。〔説文〕

惜 おしむ・いたむ

痛惜とは哀惜をいう。〔楚辞、惜誓、序〕に「哀な 惜春は春の過ぎるのを惜しむ意。文字を記した紙を **惜別とは離別を哀しむ意である。惜陰は時を惜しむ** た。身を捨てて惜しまぬことを、不惜身命という。 大切にする俗があって、惜字会などが組織されてい り」とし、〔広雅、釈詁〕に「愛なり」とみえる。 「痛なり」とあり、痛惜の意とする。 形声 声符は昔。〔説文〕一〇下に

戚 おの・まさかり・うれえるセキ

辦

形声 声符は赤。 未は 戚の頭部の形。 刃部の下

類にもなおその字を用いている。 務を負担することを意味した。正字は賽で、漢碑の の責任を課することを債という。責任とは賦實の義といい、資・蹟の字を用いることがある。その賦實 ることを成績という。その賦貢義務をもつ地域を建績は織物の賦貢をいい、その賦貢が好都合に進行す * 成周の貯」のようにいい、収蔵の物を貯積という。 賦貢として献ずることをいう。その収蔵所を貯

晰 12 哲 あきらか

〔明堂位〕に「朱干玉戚」など、みな干と戚とを執き舞ふことを學ふ」、また〔楽記〕に「干戚羽旄」のであった。〔礼記、文王世子〕に「大樂正、干戚のであった。〔礼記、文王世子〕に「大樂正、干戚

は鉞なり」とあり、成は武舞に儀器として用いるもは鉞なり」とあり、成は武舞に儀器として用いるも劉〕「干戈崩揚まり」(・/-劉〕「干戈戚揚あり」の〔伝〕に「戚は斧なり。揚い。 かんくりょき

みてよい。〔説文〕ニ下に「戉なり」とし、未声と 戚は尗に戈形を加えて、戚の全体形を示したものと

赤は戚の頭部の形である。〔詩、大雅、

公言

るが、

に刀光の放射するさまを加えたもので、

戚の初文

用例のない字である。 なことをいう。字はまた晳に作る。文献にはあまり 寂しい状態を示すものがあり、晰とは光のあきらか 形声 声符は析。析声の字に淅瀝のようにすんだ

腊 12 ほじし・ひもの

責
11

せめる・つとめ

とは素市をいう。尗・叔・戚はみな一系の字である。 がある。叔金は銀、尗・叔に白の義があり、起でないま存する遺器にも、天子の儀器かと思われるものいま存する遺器にも、天子の儀器かと思われるもの 玉戚のように玉飾を加え、玉で作ったものがある。 宝玉を削って戚の秘(柄)とする話があり、戚にもいて武舞を行なうことをいう。 〔左伝〕昭十二年に、って武舞を行なうことをいう。 〔左伝〕昭十二年に、

のであるから、時にはげしい毒を生ずることがあり、 い。〔周礼、腊人〕は腊肉を掌る。腊肉は久蔵のもれた。〔説文〕には昔七上を録し、腊をあげていなれた。〔説文〕には昔七上を録し、腊をあげていな 昔を往昔の意に用いるに及んで、形声字の腊が作ら 声符は昔。昔はほじしの象形で、腊の初文:

むるなり」とし、東声とする。〔繋伝〕に「追迮しむるなり」とし、東声とする。〔繋伝〕に「追迮し

正字は資に作り、東声。〔説文〕六下に「求

。古中的

寫 12 ぬセ いキ ぐ う・ かさねぞうり・かささぎ

雑 She she 発売

る履の形。〔説文〕四上に「鵲なり。象形」として象形 縫いぐつの形。礼装用のもので、飾りのあ

の字形が誤りやすい意。魯魚というのと同じ。る。「舄鳥虎帝」という語があり、舄と鳥、虎と帝る。「舄鳥虎帝」という語があり、舄と鳥、虎と帝の唶々たる」とあって、その鳴き声から名をえていせ。 くもと別の字であろう。〔淮南子、原道訓〕に があるが、それは音の仮借である。鳥・誰はおそら 注〕に「複下を舃といふ」とあって、二重底のとこ 韤とよばれる類のものに近い。字を鵲に用いること Yo ろに縫いかざりなどを加えたものであろう。のちに り」という。達は沓で重沓(二重底)。[周礼、腰人り」という。達は沓で重沓(二重底)。[島本流 文となに「赤市金鳥」の句があり、[伝] に「鳥は達履なに「歩きさきない。 の部分に大きな飾りを加える。〔詩、小雅、 金文に礼服を賜与するときに、併せて市爲を賜うこ鵲の本字とするが、その字形は鳥の形とはみえない とが多く、市とは黻、縫いとりをした爲で、前の 車攻

跖 あしのうら・

大盗を好んで、 は同じ。魯の賢人柳下恵の弟という。荘周はこののはふしぎである。盗跖の跖はまた蹠に作り、声義 以て珍重と爲す」という。いまも豚蹏を珍味とす「病方異物志」によると、「鳥滸の人、人の掌蹠を 足るが若し」とあり、鶏の脚掌は珍味とされた。 〔淮南子、説山訓〕に「善く學ぶものは、齊王の雞 を食ふに、必ずその跖數十を食ひて、 0 その書中にしばしば登場させ、 下なり」とあり、 り」とあり、いわゆる脚等。声符は石。〔説文〕ニ下に「足 しかるのちに

晰(哲) 腊 は四方の責で、積の初文。農作物やその他の物産を 隷)、その貯を出さざるなし」とあり、四方の資と

彰する論文が発表され、その山窟の写真というもの もに盗跖もまた時代の脚光を浴び、盗跖の遺迹を顕 を罵倒させている。四人組時代には、 非孔の説とと

ひとえ・かたぬぐ・むつきセキ・シャク・ティ

ぎの歌で、女子が生れると「載ちこれに裼を衣せし意に用い、袒裼という。〔詩、小雅、斯干〕は室寿意に用い、袒裼という。〔詩、小雅、斯干〕は室寿に服の襟からみえるように着る。また肩はだをぬぐ であった。保の古い字形にそれをそえたものがある。 む」というのは褓の意。新生の霊を包むための魂衣 形声 ある。上衣の下に着るひとえの皮衣で、 声符は易。易に蜴・錫の声が

跡 13 あしあと・ふむ・たずねるセキ

束・賽(責)が一系をなしており、 り」というのは、音義説である。跡と蹟とは同字、 「釈 名、釈言語〕に「跡は積なり。積累して前むな 文〕ニト迹字条に、別体として跡をあげている。 声符であるが、のち誤って迹・跡とかかれる。〔説 ったものである。 正字は迹に作り、その初文は速。束がその 亦はその形を誤

摭 ひセろう

録する。摘字条一二上に「果樹の實を拓ふなり」とみ なり。陳宋の語なり」といい、重文として摭の字を 一三上に正字を拓とし、「拾ふ**形声** 声符は庶。〔説文〕

羰卵

は摭を用いる。庶は煮炊きする意で、廚房で鍋にえるが、採摭(ひろう)・擦摭(あつめる)の字にえるが、採摭(声義ともに別の字である。 さわしい字である。「拓はいま拓本・打拓の意に用い 火をあてている形であるから、摭はつまみ食いにふ

おおきい・さかんな・かたいセキ

「頸」には「妖大の人」とあって、碩はもと神事の「碩人」の〔伝〕に「大徳なり」、〔小雅、白華〕の大・碩言・碩鼠などの語があり、〔邶風、簡号〕のやしているのである。〔詩〕には碩人・碩女・碩やしているのである。〔詩〕には碩人・碩女・碩 がその自ら作った詩を「孔だ碩いなり」とほめていの風ここに好し、以て申伯に贈る」とあり、尹吉甫の風ここに好し、以て申伯に贈る」とあり、尹吉甫(人名)、誦を作る、その詩孔だ碩いなり、そ で文などの名がある。〔詩、大雅、崧高〕の末章に くれを意味する字であろう。金文に人名として 200 た石も祝禱の器を含む形であるから、もと何らかの 大頭の義とするが、頁は礼装した人の姿であり、ま形声 声符は石。〔説文〕ヵ上に「頭大いなり」と 意を含むものであるかも知れない。 関係に用いた語と思われる。予は石室・石主などの るのは、祝、頌詩として、その言霊を大いに歌いは 「吉甫(人名)、誦を作る。その詩孔だ碩いなり 声符は石。

耤 14 藉田・かる

好好

礼、甸師〕口 を歌うものとして理解すべきである。 西 周晩期に 文では〔令鼎〕に「王、大いに諆の田に精農す」とれ觀 耤せんか」という卜辞によって知られる。金くなど。 されたのであろう。そのことは古く殷代に発してお 国の悠紀・主基にあたる神事的な性質をもつ農耕で、の次第が最も詳細にしるされている。おそらくわが [漢官儀] などにみえ、[国語、周語] にはその儀礼 借るが如し。故にこれを耤といふ」とするが、卜文 とあって、藉田のことをいう。「古は民を使ふこと はこの藉田の礼も廃して行なわれず、宣王三十九年 ずる史家が多いが、それらは廟歌であり、 ために、これらの詩篇を古代奴隷制の確証として論 も知られるように、それは本来神事的なものであっ あるが、それらの詩篇が頌詩に属していることから 芟〕〔噫嘻〕なども、その耕藉のことを歌うもので その管理のことを命じている。〔詩、周頌〕の〔載「女に命じて飼土と作し、耤田を官嗣せしむ」と、「女に のであった。王もその儀礼に臨んだことは「王はそ は神事に奉仕するものであり、小臣は王族出自のも り、ト辞に精臣・小耤臣などの官名がみえる。臣と その始耕のとき、天子百官が臨んでその耕作が開始 示す。藉田は、神饌を得るために天子親ら耕藉する の字形は耒を踏んで耕す形で、 た。そこには多数の共同耕作のことが歌われている あって、親耕の儀礼が行なわれており、〔懿殷〕に 声符は昔。〔説文〕四下に「帝耤千畝なり いわゆる踏藉の状を

〔説文〕に奭を盛大の義とするも、その用義例はな とみえる。〔書、君奭〕には君奭、また金文では上白馬を賞す。大(人名)、皇天尹大保の「宮に揚ふ」中、武王・成王の異(祺)鼎を鑄る。公、作冊大に京、武王・成王の異(祺)鼎を鑄る。公、作冊大に京公東としるされている。[代書だは京に、文では東としるされている。[代書だは京に ら、最高の聖職者の地位にあったものであろう。 文のように皇天尹大保という聖号でよばれているか 趞 15 はやい・あるくさまセキ・シャク

潟 かた・ひがた

ところがある。 江・入海のところをいい、本来の用義と多少異なる い地を潟廟といい、また舃廟という。わが国では入るひがたをいう。沙礫が多くて、耕作などに適しな りぞくものの意をもつようである。潮がひいてでき形声 一声符は囂。囂はଜ(斥)と声が通じて、し

婦人に施すときには奭・爽といい、両乳のところにの字形中に、百に似た文様を加えるものもあるが、

の憑ることを防ぐ呪禁とすることを、文という。 の憑ることを防ぐ呪禁とすることを、文という。文書書の人の没したとき、胸に朱で文身を施し、邪霊

人の両乳の部分をモチーフとして加えた文身の文様。

大と皕とに従う。大は人の正面形。皕は婦

¥ ¥

であろう。

爽には「聖化の儀礼を受けたるもの」の意があるの 妻の義であり、「大乙の妻なる妣丙」の意で、奭・ 先王の名の下、先妣の名の上につけて用いるのは、

会意

爽

あきらか

う。下に敷かれるものの意である。

の意に用いる。人のために用をなすことを蓆薦とい声に碩大の意を含むものであろう。のち殆どむしろ 声に碩大の意を含むものであろう。のち殆どむ い、大きな発表の意であろう。〔説文〕の訓は、〔詩、が、大きな発表が

多なり」とあって、広く多い意とする

声符は席。〔説文〕一下に「廣

その

の爽、妣丙」「祖甲の奭、妣戊」のように用いる。ト文に奭または爽と釈すべき形の字があり、「たこんど、すべて赤色の文様のかがやかしいさまをいう。

など、すべて赤色の文様のかがやかしいさまをいう。に触彼各矣」「靺���(礼装用の前かけ)奭たるあり」、「���、「���(礼装用の前かけ)奭たるあり」、く、〔詩、小雅、栄芑〕「路車(大車)奭たるあり」、

席14

むしろ・おおきい

壊を意味するものであったと考えられる。

礼の廃絶は、そのような古代的な社会の体制の、 耕藉の地であろう。古代の祭祀共同体の中心的な儀 姜氏の戎と干畝に戦って敗れたというのは、その

やせる・へらす

とあり、召公奭の名とする。召公奭は周公旦と並 形。 形声 ゆえに病によって瘠せる意をあらわす。〔説文〕 声符は脊。脊は背の骨肉のあらわれている

> 子学派を瘠墨という。「「香地の語があり、また節葬をとなえた墨 なり」と訓する。〔国語、魯語〕に瘠土、〔淮南子、にこの字を収めず、肉部四下に膌の字があり、「痩

その字を用いるのは、別に本義のある字であろう。 声的な語である。金文に〔趙曹鼎〕があり、氏号に あり、足どり早く歩く意の字で、速などと同じく擬 文〕 ニ上に「趙々なり。一に曰く、行く克なり」とう。 さく重なりたるものの意がある。〔説 声符は昔。昔はほし肉で、

踖 15 ふむ・つつしむさまセキ・シャク

足をすくめた恭敬の状をいう。
「論語、郷党」「君在すときは踧踖如たり」とは、 とみえ、構と声義が近く、擬声的な語とみられる。のようである。「爾雅、釈訓」に「踖々は敏なり」 に「席を踏むこと母れ」とあって、無雑作に歩く意「長脛にて行くなり」というも、[礼記、曲礼、上] たるものの意がある。[説文] ニ下に 声符は昔。昔に小さく重なり 釈訓〕に「錯々は敏なり」

積 つむ・かさねる・ たくわえる

积

するものをいう。積は〔説文〕七上に「繋むるな 形声 声符は貴。 責の初文は費。賦徴として貢約

潟 瘠 趞

元勲となった人で、

金

んで周初の創業の臣とされ、

名なり。讀みて郝の如くす。史篇に名は醜なりと」 「説文」四上に「盛なり」と訓し、「これ燕の召公の 加える。爽・爽いずれも爽明の義のある字である。

籍

(籍)20

「その實、その實、その進人、その貯」とあり、自 (貯蓄米)をいう。資は〔兮甲盤〕に「四方の資」 芝」に「實てる積あり、萬億及び秭」とあり、悉えり、とあり、農作物を積聚する意。〔詩、周頌、り」とあり、農作物を積聚する意。〔詩、『詩』。 また積極のような語もある。 **積善・積悪・積弊のように久しく重なる意に用い、** は織物、賷は積で穀物をいう。のち引伸して積年 萬億及び秭」とあり、委積慎聚する意。〔詩、周頌、載

錫

野鹭

字を用いている。また喪服に用いる細い麻の衣を錫で、象形の字。金文では「雪伯簠」にはじめて錫の義に用いるが、それは爵酒を賜うときの爵の省略形 の呪儀のなごりである。 鳴らす。悪邪を祓うためのもので、 錫 杖 は、杖頭に錫の輪をかけ、地を突いてこれを また阿錫ということがある。道士や僧侶が用いる 声符は易。易に蝎・裼の声がある。〔説文〕 古い時代の道路

績 いとをうむ・つぐ・いさおしセキ

0 索

穀物を積といい、織布を績という。〔説文〕「三上に 声符は貴。責の初文は賽で、賦貢をいう。

として課するのである。ことの失敗するを敗績という。金文に「弗速」とみえるものである。賽を責任ことを成績といい、規定に達しないことを不績とい ことがあり、〔兮甲盤〕にまた「成周四方の資」の 語がある。四方から貢納され、成周の屯倉に収めら 訓。〔兮甲盤〕に「その賞、その賽」とあり、織布「舞いかなり」と訓し、「緝は績なり」というのと互「舞いなり」と訓し、「緝は績なり」というのと互い 績せんことを恐る」の句がある。 ことをいい、〔楚辞、離騒〕に「皇輿(王葉)の敗い、〔春秋〕には軍の大敗をいう。 すべて志と違う れるものをいう。その納入が規定の通りに進行する の貢はもと夐といった。贅は賦貢の全体を意味する

螫

쵉 の意があるからである。 ろう。奭を仮借して用いることがあるのも、奭に赤 くはれあがるところから、赦を声符としたものであ 「蟲、毒を行ふものなり」とあり、赤 声符は赦。〔説文〕-三上に

蹟 18 あセ

文の「弗迹」と同じ語で、不成績をいう。今はその小雅、汚れ」に「彼の不蹟を念ふ」とあるのは、金正形は賷であるから、もと同系の字である。〔詩、正形は賷であるから、もと同系の字である。〔詩、 意に績の字を用いる。 とし、一体として蹟をあげる。迹の初文は速。責の 쀍 辦 で、〔説文〕ニ下に迹を正字 声符は責。迹と同字

る。のちに簡といい、秦漢以後、晋簡に至るまで、人、大司馬」「九畿の籍」は名籍。天子の位をも籍れ、大司馬」「九畿の籍」は名籍。天子の位をも籍のに籍氏の名がある。また襄二十五年に「賦事籍のに籍氏の名がある。 「尺籍伍符」とあり、籍簡の長さは一尺を原則としょいます。 「説文」五上に「簿書なり」とあり、書籍や記帳の意がある。それで簡片を集めたものを籍という。 二尺四寸の簡を用いた。〔礼記、祭義〕に籍田の字 たが、典籍の類には大中小の区別があり、大経には 木簡・竹簡の類が行なわれた。簡札を陳籍すること 類とする。〔左伝〕昭十五年に、晋の典籍を掌るも とるもので、 に用いるが、その本字は耤田であり、また藉と通用 かりるの訓は、 昔はほし肉、細小にして重なるものの (ふみ耕す)を加える意。 ふみ・かきつけ・しるす・かりるセキ す)を加える意。昔の声義を声符は耤。耤は耕耤で、踏藉 藉と通用の義である。

セ

2 [7] 3 ひざまずく

3 8 4

象形 人の跪坐する形。卪も同じ。〔説文〕九上に

Pの音はおそらく都の音と関係があり、都を屈する身を巻曲するときは宛・馨・危・色などの形となる。 即・御・印・叩・刺などみなその形に従い、またまで、サラヤィ サトイ サドタ トロ゙ トロ゙をあるものであろうが、字形は人の跪坐する形。サチャト [周礼、掌節] の文による。字を符の半体の形とすには旌卩を用ふ。相合するの形に象る」とあって、 門關の者は符卩を用ひ、貨賄には鷹卩を用ひ、道路ひ、土邦の者は人卩を用ひ、澤邦の者は龍卩を用ひ、 声義を「闕」とするが、それは卿の両旁の字形である。 形である。〔説文〕丸上にまた卩の反文をあげて、 るものは角卩を用ひ、山邦に使するものは虎卩を用 「瑞信なり。國を守るものは玉卩を用ひ、都鄙を守

という。 であるから、緊切・切要の義が生れ、また切磨を人 るが如く磋するが如し」の〔伝〕に、「骨を治する り離すので、切断という。〔詩、衞風、淇奥〕「切すするが、七は厀と同声で骨節の義がある。そこを切するが、七は厀と同声で骨節の義がある。そこを切 てetの音となる。 結の切。子の頭音のsと結の尾韻のtをとり、 す方法を反切というのは切略の意。たとえば切は子 の修為に及ぼして切瑳、切責の意とする。字音を示 を切といふ」とみえる。その要所を切断処理するの 「説文」四下に「刌るなり」とし、七声と 会意 形。その骨節を刀で切り離すことを切 七と刀とに従う。七は骨節の 合せ

刹。〔刹〕8

洲 おお野 淅 初形は両中と斤とに従い、 州

疏証」に両中の形でないとするのは、金文の字形ととあり、金文の字形はまさにその形に作る。「六書に説文」一下に「断つなり。斤もて艸を断つに従ふ」 会意 無綱折」という神名がみえるが、それは「大巫司無綱折」という神名がみえるが、それは「大巫司の折にその字がある。また〔洹子孟姜壺〕に「大みないからであり、金文に多くみえる「折首執訊」 * 草木を折るようなことが行なわれたのかも知れない。 誓」という神で、誓の字は折に従う。〔説文〕に録 があるとされていたのであろう。 矢を折る形である。折るという行為に、特別の意味 哲もいまの字形は折に従うが、その初形は矢に従い する籀文の字形が、それに近い。誓うときの形式に、 草木を折る形。

4

きる・せまる・するどいセツ・セチ・サイ

拙 8 つたない

とあり、 字はまた謙称に用いる。 守拙・養拙とは高尚な生活態度とされている。芸術 意。〔老子〕第四十五章に「大巧は拙なるが若し」 の分野においても、それは重要な理念の一とされた 器用さを示さないことを尊ぶ風があった。 「巧ならざるなり」とあり、 声符は出。〔説文〕一二上に 不器用の

はたばしら・てらセツ・サツ

音訳である。刹は通用の字体である。 の Kṣeira の音訳で寺の意。刹那も梵語 Kṣaṇa のであろう。〔玉篇〕に「柱なり」とするのは、梵語 共感呪術的な呪儀をいう字であるが、その初義は明 字である。この獣を刀で殺すのは「殺」と同じで、 のある獣の形。希(蔡)また祟の形に釈されているい。(殺)・弑(弑)の従うところで、呪霊 らかでない。おそらくもと殺と同字異文とみるべき 柔と刀とに従う。 柔は殺

窃。 [編] ぬすむ・ひそかにセツ

ない。 ひ、米に從ふ。萬世はみな聲なり。世は古文疾、禼 文」七上に「盗、 虫をいう。窃は竊の略字として用いる形声字である。 また東(橐)と蚊とに従う形で、橐の中の穀を食う えにこれを盗窃という。窃私はその引伸の義。蠢も りをなしている形。字は穀中の小虫が、穀実を食っ が、蠹食されることが多かった。外から察知しえな は古文偰なり」とするが、声符が二つもあるはずは いうちに、中から蠹食されて内実が空虚となる。ゆ なかがぬけがらとなっていることを示す。〔説 穴は土倉。古くは穀倉に坑蔵したものである 会意 う。离は小さな虫が集まって、かたま 中より出づるを竊といふ。穴に従 旧字は竊。穴と米と禼とに従

屑10 くず・いさぎよい・つとめるセツ

形声 肉。 屑は「説文」ハ上に骨に従う字と 声符は肖(肖)。 肖は細小の

たつ・おる

否定語を伴う用法である。と與にすることを層しとせず」のように用いるが、と與にすることを層しとせず」のように用いるが、な層に作る。細小のものの意があり、また「潔みな層に作る。細小のものの意があり、また「潔し、「動作すること切々たり」というが、字書にはし、「動作すること切々たり」というが、字書には

便!! きょい

接 11 まじわる・ちかづく・つづく

られたものをいう。〔説文〕一二上に「交はるなり」上辞には「河の妾」のような語があり、河神に捧げい。 られた女で、神に接するものであった。 一葉 おいま 一声符は妾。 きはもと神に捧げ

は、もと神人の間のことであった。接臘・接神のとは、もと神人の間のことであった。を贈えることなる。 [礼記、表記] に「君子の接すること水の如し」という。 [孟子、万章、下] に「その交水の如し」という。 [孟子、万章、下] に「その交がの如し」という。 [本記、表記] に「君子の接することがあり、交と接とを分別していう。

折日 11 あきらか・さとし

形声 声符は折。「説文」七上に「明 を「昭明、哲明なり」とし、「哲明に事を行ふ」 を「昭明、哲明なり」の誤りとし、字を昧爽(よあを「昭明、哲明なり」の誤りとし、「哲明に事を行ふ」の文を引く。いま「質明に 事を行ふ」に作り、「儀礼、聘礼」(礼記、礼器)に も質明の語を用いる。「群経正字」に、「説文」の文 を「昭明、哲明なり」の誤りとし、字を昧爽(よあ を「昭明、哲明なり」の誤りとし、字を味爽(よあ

紲1 [機]12 きずな

配り 1 もうける・つらねる・おく

会意 言と党とに従う。〔説文〕三上会意 言と党とに従う。〔説文〕三上会意 であるから、誓約の意を示す言に、その呪飾をそえる意となって、神明に対する誓約の儀礼を示す字となる。 安に杖矛の義もあるが、この字においてはなる。 安に杖矛の義もあるが、この字においてはかる。 マースを離れて祭祀や儀礼の場を設定することで、〔詩、大雅、行薬)「鑑を肆ね席を設するで、〔詩、大雅、行薬」「鑑を肆ね席を設する意となって、神明に対する誓に用いる。

雪 11 【雪】11 ゆき・すすぐ・のぞく

ででは

であるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義とであるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義となる。ト文の字は小さな羽状には、雪・説の畳韻字をもって解したものにすぎず、は、雪・説の畳韻字をもって解したものにすぎず、は、雪・説の畳韻字をもって解したものにすぎず、は、雪・説の畳韻字をもって解したものにすぎず、は、雪片を写した形。また小枝などに附着した形とみられるものもある。ト辞の神名に獨があり、請ないのの儀礼が行なわれている。弱はあるいは雪の一体であるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義とであるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義とであるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義とであるかも知れない。雪ぐ意は、刷や拭の通用義と

曲では楔子を序幕・開幕の意に用いる。
り」とあって互訓。門の両旁の木を楔という。元

宮 12 むしッ

みられる。

新屬

いる形。鵯(窃)は离が穀実象形 小さな虫が集まって

節 13 一節) 15 なし・しるし・さだめ・みさお

形声 り青銅である。潘元茂の〔魏公に九 錫を冊するの金、出入には竹符を用いるが、金というのももとよ 懐王の六年、鄂君に与えられたもので、車節と舟節のちの竹使符である。近出の〔鄂君啓節〕は、楚の第のために作られたものでなく、竹符を原義とする。 もその推移の間に区切りがある意である。 気候には節候、楽曲には曲節・節奏という。 節制といい、節制の意より節倹・節約の意となる。 意となり、 て定められるものであるから、節度・節義・節操の 文〕によると、金虎は五枚、竹使符は十枚で一套で 符節、都鄙の管節はみな竹で作る。すなわち遠行に の人節、沢国の竜節はみな金、道路の旌節、門関の 小行人〕に六節の規定があって、山国の虎節、土国 符節が実際に行なわれていたのであろう。〔周礼、作られているが竹節の飾を加えており、古くは竹の 過するところと、取扱上の規定を刻している。銅で とがあり、それぞれ二百字近い文をしるし、その経 は「を節の初文とするが、即が声符である。字は竹り」とあり、屈曲し結節するところをいう。〔説文〕 あったらしい。使節の行動はすべてその符節によっ 声符は即(即)。〔説文〕五上に「竹の約な すべて節度・節義に合することを節行・ いずれ

截 14 たつ・きる・ととのえる

説 4 【説】 4 セッ・ゼイ・エッ

形声 旧字は説に作り、党声。発力の状態にある意で、悦・脱と声義の通ずるところがの状態にある意で、悦・脱と声義の通ずるところがの状態にある意で、悦・脱と声義の通ずるところがの大態にある。「説文」三上に「説き釋くなり」とし、また「一に曰く、談説するなり」としてあって、「鳥れ、大祝」のうちに「説」がある。神に祈り、神意を承けてその問題が解決されるので、それを悦びとを承けてその問題が解決されるので、それを悦びとを承けてその問題が解決されるので、それを悦びとすること、その困難から脱する意となる。〔詩、大雅、瞻卬〕に「女饕ってこれを説す」のように用いる。悦と同義に用いるが、[論語]には説を用いるが、[論語]には説を用いるが、[論語]には説を用いる。説の方が古い用字法である。談説・論説はのちの引伸義、もとは神に対してる。談説・論説はのちの引伸義、もとは神に対してる。談説・論説はのちの引伸義、もとは神に対してる。談説・論説はのちの引伸義、もとは神に対してる。

辞 15 おさめる・つみ

「説文」六上に「機なり」とあり、機字条に「楔なる。 意。そこにうちこんで補強することを楔という。 気意。そこにうちこんで補強することを楔という。 気がある。契は契みつけ、われめを作る 筋・ 楔 13

くさび・うつセツ・ケツ・カツ

とを、基督教では摂理という。

けることを摂み、生を養うことを摂生、衆生を助みだれを治めることが基本義のようである。政を佐みだれを治めることが基本義のようである。政を佐

あげる訓義は三十義に近いが、衣のすそをとって、あり、衣を摂って守る意とするようである。字書に

けることを仏教で摂取不舎といい、神が人を救うこ

摂13 [攝]21

ひく・とる・たすけるセツ・ショウ(セフ)

形声

旧字は攝に作り、聶声。〔説

文〕一二上に「引きて持するなり」と

を用いており、もと象形の字。禹が二虫を組み合せ書、古今人表〕にはなお离の字を用いる。卜文に离文偰なり」とあり、偰はまた契(契)に作る。〔漢文偰なり」とあり、偰は言た契。(契)に作る。〔漢とあり、公も二虫に従う形。竊字条七上に「禼は古

に「蟲なり。去に從ふ。象形。讀むこと偰と同じ」

を食べて、中を空虚とする意である。〔説文〕一四下

たのと、同じ構造法の字である。

ツ 禼 摂[攝] 楔 節[節] 截 説[說] 蛭

野野

われる。 刑なり」と訓するのは、辟と誤り訓したものかと思 初形である。〔説文〕に「皋なり」、〔玉篇〕に「死 金文の薛侯の薛は、肉と考とに従うており、それが はいわゆるや(考)の形で、本来は雙治の義である。それを意符とみたのであろうが、省は懸肉の象、辛 辛に從ひ、省聲」とするのは、辛を入墨の器とし、 おり、 いる形。 肉を切る刀である。〔説文〕一四下に「辠なり、、辛は把手のある曲刀で、先がゆるく曲って 省と辛とに従う。省は自肉を上から繋けてど。 ** 辟は肉刑を加える意の字である。

蕝 まつりのにわセツ・セイ

代の朝会が、八百万の神々の集会という形式をもつ 承されることのないものであるが、その方法は、古 が、その弟子百余人と蘇蕞(儀礼を習う所)を作っ 位置とするのである。この礼は、のち漢の叔孫通 神を奉じてここに集まり、それぞれの祀所を自己の ことを意味する。すなわち諸侯は、それぞれの守護 は酒をひたすものであるから、それは神位を設ける 置き、望表を設けたことをしるしている。その束茅文に、周の成王が諸侯を岐陽に会したとき、著語文 蕝といふ」とし、 ものであったことを、推測させるものである。蕞は 野外で古礼を習ったことがみえるほか、殆ど伝 に「朝會に茅を束ねて位を表するを形声 声符は絕(絶)。[説文] 一下 [国語、晋語] の文を引く。 その

> と思われる。 のようにいうが、もと茅蘊のことをいう字であっ 蕝と通用する字で、〔左伝〕昭七年「蕞爾たる國」 た

褻 17 ふだんぎ・けがれる・なれセツ

瘳 粉分

子偕老」「是を褻袢とす」の句を引くが、いま継袢とあり、ふだん着の意とする。また〔詩、鄘風、君とから、ふだん着の意とする。また〔詩、鄘風、君れるもので、その初文。〔説文〕八上に「私服なり」 形声 できたが警御」とあるのは褻事の意である。のちている。と称しており、〔詩、小雅、雨無正〕に「殿が褻事」と称しており、〔詩、小雅、雨無正〕に を褻器という。 猥褻・褻翫・褻瀆・褻狎のように用いる。また便器やはせっ せがん せつどう 褻には昵近の意がある。〔毛公鼎〕に近侍の臣を に作る。紲も褻もいずれも形声の字であるが、ただ 声符は埶。埶は金文では邇近の邇に用いら

製り のむ・すする

上」に服喪中の人の生活を「粥を歡りて深墨」、粥だとのであろう。〔礼記、曲礼、上〕に「流歠するこので、流歠という。歐はそのすすり飲む音をとるので、流歌という。歐はそのすすり飲む音をとるので、流いかなかたが異なり、歠はすすり飲みをするいくらか飲みかたが異なり、歠はすすり飲みをするいくらか飲みかたが異なり、歠はすすり飲みをする 龤 けをすすり、顔がやつれて顔色を失うという。 前条の歓には「歠るなり」とあって互訓とするが、 形声 八下に「飲むなり」とあり、 ,声符は叕。〔説文〕

が居喪の礼とされた。重文の字は声義ともに異なる

ゼツ

舌 した・ことば

꿉 录

だれたが、これを舌学と号したという。自分の掌に書しては舌で嘗めて消し、ために掌がた 略〕に「吐舌の形に象る」とするのがよく、形を説くが、あまりにも拘泥した説である。[干があるはずはない。〔段注〕に「言は口を犯してきた「干に從ふ。干は亦聲なり」とするが、口中に上に「口に在りて言ひ、味を分つ所以なり」とし、が二つに分れている形に書かれている。〔説文〕三が二つに分れている形に書かれている。〔説文〕三 捫舌(舌を捫える)といい、物言わぬことを結舌と 舌妙といい、 吐舌して舌のはたらきを示す形とみてよい。巧弁を たとえば卜文の聞・歓においても同じであるから、 出で、食は口を犯して入る」と干犯の義をもって字 に疾舌をトする例がある。舌端を分岐しているのは、 いい、驚嘆することを舌を捲くという。漢の董蕩は、 口中より舌のみえる形。卜文の字形は舌端 争論を舌戦といい、人の言を封ずるを でった。などあまりにも拘泥した説である。〔六書 卜辞

絶1(絕)1(蠿)1 たつ・はなはだ

絶はもと色糸の義で、絶妙・脆美の意がある。絶妙が重文としてあげる蠿で、糸を断截した形である。と会意とするが、色声とみてよい。初文は〔説文〕と会意とするが、色声とみてよい。初文は〔説文〕 ものであろう。漢碑にすでに絶の字を用いている。 よりして絶無・絶高など、比類を絶する意となった 上に「断絲なり。糸に從ひ、刀に從ひ、卩に從ふ」形声・ 声符は色。色に脛の声がある。〔説文〕|三 。初文は〔説文〕

セン

せん・ち

3°

区別する。〔説文〕三上に「十百なり。十に從ひ人 に從ふ」とするが、「繋伝」に人声とする。人と千 てしるす。 に二千・三千・五千を、人に横画二・三・五を加え 人・千・年は古くは同韻の字であった。卜文 声符は人。人の下部に肥点を加えて、人と 金文に「萬年」を「萬人」とかく例もあ

]][3 かわ・ながれ

0

通流する水なり」とあり、 川の古音はおそらく巡・順の声と近いもので呼する水なり」とあり、川・穿の声をもって説くいる。 水の流れる形。〔説文〕一下に「貴穿して

> 字に用いられ、漢碑にはみな巛に作る。巛は川と同音であろう。川の初文とされる巛はまた乾坤の坤のまである。「説文」のいう穿の音は漢代のれている字である。「説文」のいう穿の音は漢代のお。返詩・遯と韻している。 国語のつ・ツの字源と考えらば・遯と韻している。 [詩、大雅、繁漢] に焚・薫・あったと思われる。 [詩、大雅、繁漢] に焚・薫・あったと思われる。 [詩、大雅、繁漢] に焚・薫・ 字とする説もあるが、声義ともに異なる字である。

仙 5 優」 やまびと

現実を超えた世界を仙といい、また天子や上皇のこ 成であるが、その大部分が道術の書である。すべて である「道蔵」は、「大蔵経」に匹敵する大部な集 中国人ほどその熱心な探求者はなかった。道家の書 神仙道術のことは人の至願とするところであるが、 その字を制する、人の旁に山に作るなり」という。 仙といふ。仙は遷なり。遷りて山に入るなり。故に 作られた。「釈名、釈長幼」に「老いて死せざるを生をうるものと考えられるようになって、仙の字が 不老不死の仙ではない。その僊が、 零は死者を他に遷すことを示す字で、死去すること 厳然たる世界であった。 国の神仙の世界もまた、 とに冠して、仙遊・仙洞のように用いる。しかし中 声符はは、正字は優に作り、その声符は器 その人を僊というのであるから、 仙官とよばれる官位階級の 山中に住んで永 いわゆる

うらなう・しめる

占 5

횬 J. 位

> ふ」「動きては則ち變を觀、その占を翫ぶ」という繋辞伝、上〕に「數を極め來を知るをこれ占と謂いました。 下辞である。神意は絶対のものであるから、のち占 な韻文である。韻文は神の語とされたのであろう。 のは、〔易〕がものの変化を通して占トすることを 三下に「兆を視て問ふなり」とし、会意とする。 きのト兆の形。口は日、祝禱を収める器の形で、 有の意となる。 がしるされており、そのトの次第をしるしたものが ってはじまる。固は大きなト骨のなかにトや占の字 語を占鯀という。〔左伝〕に多くその例がみえ、 みて吉凶を定めるものであった。その吉凶を定める 神に祈りながら卜問することを占という。〔説文〕 卜辞の占繇の語は「王、 いうものであるが、本来の卜占は神に祈り、卜兆を 下と口とに従う。下は甲骨による下いのと 固 て曰く」という語をも 祝禱の意である。「易、

先 さき・すすむ・むかし・まずセン

炭 + * 残火

「前進するなり」と先・前の畳韻をもって解する。 や耳を人の上にしるして、その主とする行為を示す のと同じで、先は先行の意を示す。〔説文〕ハ下に 之と人とに従う。之は趾の形。これを人の 目

セン

千

南宮(人名)に命じて、反せる虎方(外族の名)域に対する作戦をしるすものであるが、「これ王、域に対する作戦をしるすものであるが、「これ王、は先行を派遣した。周初の〔中方鼎〕は江漢の 名)をして『先づ歸らしむること勿からんか」のよ (地名)に先んぜしめんか」、あるいは「皇乘(人 こと勿からんか」「婦好を手び、収(供) (身分の名) を乎びて、 **卦**(国名、甫)に至る」という。省は眉飾をつけた "また省導ともいい、〔寂鼎〕に「肺難父、省導して南國を省せしむ」とあり、省とは除道のことである。 を伐たしむるの年、王、中(人名)に命じて、先づ南宮(人名)に命じて、反せる虎方(外族の名)ない。 犠牲としての意味があったのであろう。征役のとき 多いものであるから、「先づ羌をして河を渉らしめ うに、先行のためには衆人・供人のような身分の低 その安否を確かめることが行なわれている。「衆人 例が多く、軍行のとき人を除道のために先行させて、 先行は一種の道路儀礼である。ト辞に先行をトする 先後のように前後の意とし、先見・先知のように未 意である。先行の先の意より、すべてはじめのもの を洗うてその穢れを去るを洗という。洗とは洗足のといい、字を改めて洗馬という。先行を終えて、趾 うな除道の意味をもつ行為である。のち先駆を先馬目、導は首を携えて行く意の字で、先行とはそのよ んか」のように、異族を用いることが多い。もとは いる。前駆のような役割である。渡渉は最も危険の いもの、または望乗のような特定の職能者を用いて を首先といい、先祖・先賢のように往昔の意に用い、 菱(地名)に先んぜしむる 人を寵

> 尖。 とがる・するどい・さきセン

示す。 会意 れた字である。 六朝期以後にみえる字で、そのころに作ら 小と大とに従い、先端が尖っていることを

舛 下路 16 そむく

とあり、 舛の反文は虚、發(発)の従うところで、これもま 方にしてその書五車、その道舛駁」のようにいう。 混乱して乖誤する意に用い、「荘子、天下」「惠子多 則ち川を同にし、臥するときは則ち足を解けす」交趾の解釈からえたもので、注に「浴するときは 〔説文〕の解は、おそらく〔礼記、王制〕にみえる [説文]五下に「對ひて臥するなり」というが、左 た「ばらばら」の意である。 重文として録する。舛は足の相違う意から、 右の足が開いて、相違うて進みえない意である。 **| 例と外と同声である。〔説文〕にまた睶を** 会意 右の足が外に向かって開く形 **欠と午とに従う。左** さのの

あぜ・はかみち

君が阡陌を開いて富強を致したというのは、〔漢書〕 なく、貴族の土地所有を制限し、新しい開発による 食貨志〕にいうような井田の破壊を意味するもので るを阡と爲す」とあり、あぜみちをいう。秦の に「路の東西なるを陌と爲し、南北な形声 声符は干。〔説文新附〕 | 四下 秦が南北南北な

> る。欧陽脩に「瀧岡阡表」の文がある。 租徴の増収を図ったものと解される。阡陌の字を用

夾

是なり」という。当時の語に陝輸・閃輸などがあり、る所あるに従ふ」とあり、「俗に敵人傳夾と謂ふは「説文」一〇下に「盗竊して物を寝すなり。亦に持すて「盗竊して物を寝すなり。亦に持する。」(『『記文』) ずる字である。 みな同義の語で、不定の意がある。閃とも声義の通 会意 に「盗竊して物を嵏すなり。亦に持す正面形。両入は両腋にものをかくす形。 大と両入とに従う。大は人の

次 うらやむ・よだれセン・エン

膿 奶糕

盗(盗)の字を属する。羨道とは墓中の道で、またがたいことがみえる。〔説文〕八下の次部に、羨・ 会意 が次に従うことからいえば、次はただ凝の初文であ その余肉を人に頒つので羨余の意が生れる。また盗神道ともいい、そこに犠牲を供えて腆薦を行なう。 韶に、葡萄酒を醸す話をするだけで、流 涎を禁じ 液はよだれ。「説文」ハ下に「慕欲の口液なり」と 形。口中より口液の出るのは羨む意であり、その口 は、血盟(皿)の中に水を垂らしてその盟約をけが し、破棄する意で、盟約の背叛者をいう。この両字 水と欠とに従う。欠は人が口を開いている。

のであったように思われる。 るのみでなく、何らかの行為としての意味をもつも

**\ 8 たつ・きる

ト文に党を用いる。一人を伐つを伐、二人を党といその田器の名は明らかでない。字は殲滅の殲の初文。 る意である。〔説文〕「二下に「絕つなり」とし、 う。二人に限らず、多数の人を殲す意である。 「一に曰く、田器なり」としてその音を咸とするが、 | 戈と二人とに従う。二人ともにその頸を截

戔 そこなう・すくないセン・サン

う形の字がある。戦はもと狩猟の字であるから、戔賊、人をそこなう意である。ト文に両戈上下に相対殊し、人をそこなう意である。ト文に両戈上下に相対ない。というのは残残にしている。「説をなった。」というのは残 **戔**とはまた別義である。 戔に淺(浅)薄の意がある。それは武闘を意味する が相闘う字であった。残(残)肉を残というように、

うるおう・ぬれる・そえるセン・テン

用いる。 であり、添を後起の字とするが、多くは沾濡の意に文〕二上に「益すなり」とし、「段注」に添と同字 〔広雅、釈詁〕に「溢るるなり」 に、ある小さな部分を意味する。「説 党 声符は占。占は坫・店のよう というの

戔

沾 孨 宣

> ことをいう字である。 「泣涕して襟を沾ほす」のように、 するをいう。その音はすべて占。〔荘子、応帝王〕がよい。溢れてものを沾濡すること、沾湿・沾潤がよい。違れてものを沾濡すること、沾湿・沾潤ない。 わずかに濡れ

つつしむ・よわい

に「仁謹の貌」とし、「孟康注」に「冀州の人、懐に「仁謹の貌」とし、「孟康注」に「冀州の人(東昭注)「長が王は孝王なり」の〔章昭注〕三子に從ふ」という。字は多く孱弱の意に用いる。 会意 弱なるを謂ひて孨と爲す」とみえる。のち多く孱の 字を用いる。 三子に従う。〔説文〕「四下に「謹むなり。

宣9 宮室の名・のべる・あきらせン かにす



阃

や獄治に関する施設であったらしい。「准南子、本気が、気制)を受けて宣室に坐す」とみえ、それは裁判 されるが、〔史記、賈誼伝〕に「孝文帝、まさに釐黄図〕などにみえる。古くは獄を圜丘に治めたと赤が、〔三輔故事〕〔三輔本央殿前に宜室のあったことが、〔三輔故事〕〔三輔 これを宣といふ」とあり、亘の形が渦巻形で示されものをいうことが多く、〔周礼、車人〕に「半短、色意 一と亘とに従う。一は廟屋、亘は半円形の 〔説文〕ゼ下に「天子の宣室なり」とあり、漢にも ているのは、その内部構造を示すものとみられる。

> 宣布の意となり、宣明・宣撫の意に展開するのであ 行ない、「王、周廟宣榭に至りて、ここに饗す」と「號季子白盤」に、號氏が儼狁を伐って献誠の礼をいています。 ろう。宣字の従う渦巻状の形は、古代の迷宮のよう なわれるところで、そこで発令されるものが宣言・ ではない。おそらく古くから軍事や獄訟のことが行 王在世のときの器であるから、宣王の名をとるもの 白盤〕にもみえており、その器は宣王五年前後、宣 宣榭、火あり」とその炎上のことがみえ、「何休注」 たのである。宣榭の名は〔春秋〕宣十六年「成周の設であり、宣榭というのは、射義もここで行なわれ な獄舎の構造を想わせるものがある。 に「宣王の廟なり」とするが、宣榭の名は〔虢季子 あって、宣榭ともよばれている。周廟に附属する施 対が宣室で殺されたことがみえている。

専9 [專]11 まるめる・うつ・つむぐ・セン・タン「もっぱら

岁 南

固めたものは魘(団)、土を固めたものを導という。たものをうち固める意の摶の初文であり、そのうちするものである。字の構造からいえば、橐中に入れ に「六寸の簿なり」とあって、メモ用の手版の意とたものを、手でうち固める意である。〔説文〕三下 は瓦塼で糸をつむぐ円錘形の器であり、紡塼の意と し、また「一に曰く、專は紡專なり」という。 橐の上部を括った形、寸は手、専は橐の中に入れ 会る 旧字は專に作り、衷と寸とに従う。衷は

て、浅黄・浅見・浅学・浅慮・浅陋のようにいう。

貫を失うている。 専に非ず、形義を誤るのみならず、甚だしく字の統 は塼。また「夗專」という。宛転の意がある。專は専・摶・塼・團は一系相承ける字である。紡專の字・**** いま旧字を略して専に作るが、その字は専に非ず、

染 9 そめる・しむ・けがすセン

ことが多い。〔説文〕一上に「繒を以て染めて色を 泉陶・伯益はみな姜姓の祖、嶽神伯夷の異名で、古み、禹は泉陶・伯益に染む」という。許由・伯陽、 いる。[呂氏春秋、当染]に「舜は許由・伯陽に染濡染して他に及ぶことをいい、影響を受ける意に用 いう。古くは染料は多く草木の類を用いたので、染雨部二下に染に従う字があって「濡るるなり」と 朵は〔説文〕にみえず、声もまた異なる字である。 爲す」と染色の義と解し、字を朵声であるとするが、 たながでいるとをしるしている。〔詩、小雅、巧言〕水につけて、染色をうる意であろう。〔周礼、染八〕 水につけて、染色をうる意であろう。[周礼、染人]がい の枝葉がしだれている形。染はこれを はそれによって染色することをいう。染色の義より、 を屈撓する意であろう。染色のことには草を用いる 「荏染たる柔木」の〔伝〕に「荏染は柔らかき意な く姜姓が占めていた神話的地位の重要さを知ること とあり、朵はその柔木の形、すなわちその条枝 水と朵とに従う。朵は朶、木

泉。 いずみ・わきみずセン・ゼン

生 不 1 子 医 2 名 名 名 图 套

巾 TR. 國界洞

[後漢書、光武帝紀論]にみえる。 といい、「白水(泉)眞人(貨)」と称したことが、 象形 象形の字である。のち王莽が貨銭の字に用いて貨泉文は岩の間から流れおちる水の形で、原がその全体 に「水原なり。水の流出して川を成す形に象る」と ち水、沈泉は穴から出る水とするが、泉の卜文・金 いう。[爾雅、釈水]に、濫泉は涌き水、沃泉は落 崖下から水の流れおちる形。〔説文〕一下

会意

穿。

うがつ・きる・あな

0

圓

深と対待の語に用いる。

〔説文〕セ下に「通るなり。牙の穴中に在るに從ふ」

穴と牙とに従う。牙をもって穴をあける意。

とあり、鼠などが牙で穿穴するのをいう。〔詩、

召

洗 あらう・きよらかセン

行」に「湯を煖めて我が足を濯ひ「紙を剪りて我が旅が終ると足を洗い、祓う俗があり、杜甫の「彭衙旅が終ると足を洗い、祓う俗があり、杜甫の「彭衙だが終るとその足を清めた。後世にも 魂を招く」という魂振り儀礼を歌うている。 がある。盤をもって洗う意。古代には旅するとき先 えている形とし、ときに下に鼎盤の形を加えたもの を洒ぐなり」とあり、ト文に先の字の上に水滴を加*** 洗は足を洗う意。〔説文〕一一上に「足 声符は先。先に足の意があり

浅り【後】ロ かさいサン

功の少ないもの、理解の十分でないことなどにつけ さねる意がある。水の浅い意より、色の淡彩のもの、 形声 旧字は淺に作り、菱声。巻に薄いものをか

> 뱋 が墉を穿つ」とあり、[論語、陽貨]に「穿窬の盗」南、行露]「誰か鼠に牙無しと謂ふ」何を以てか我 という語がある。窃かに悪事をなすものをいう。 とま・こも・むしろ 形声 声符は占。〔説文〕一下に「蓋

占9

寢ね、 をしてなる。「儀礼、既夕記」に「倚廬に居り、寝臥する。「儀礼、既夕記」に「倚廬に居り、 は佗住いをいう。 服喪のとき、 塊を枕にす」という。わが国では、苫屋という。 他と隔離して倚廬に居り、 ふなり」とあり、 苫葺きの屋根をいう。 苫を敷いて 苫に

西 9 あかね・あか

「詩、鄭風、東門之曜」の「陸疏」に一名地血、斉 「詩、鄭風、東門之曜」の「陸疏」に一名地血、斉 り、ま 「夢なり」とあり、あかね草をいう。 ずるところとする。その根が赤く、染料とする。 前条蒐字下に「茅蒐、茹蘆なり」とあり、人血の生 では茜、徐州では牛蔓という。茅蒐は〔説文〕の 1 形声 声符は西。〔説文〕一下に「茅

や)に更に茜金を覓めて栽ゑん」の句がある。 に「自ら揣る明年なほ健在ならば 東廂(東のへ 燃えるような色のものを、茜金という。陸放翁の詩 す日」「赤根さし照る」と歌うものが多い。 【万葉】には「茜草さす紫野ゆき」のほか、「赤根さ 対サ州の

10 みめよし・やとうセン・セイ

だという離魂譚で、のち離魂が本身に復るという結女離魂」は、生霊が愛人のもとに嫁して二女を生んよき若ものというほどの語であろう。元神を生んは『目の清きもの、倩は口もとのよろしきものの意。 末のものである。 蕭、望之、字は曼倩、東方朔も字は曼倩という。曼 に「人の美き字なり」とあり、漢の形声 声符は靑(青)。〔説文〕八上

剗 けずる・かる・ほろぼすセン・サン

草を除く意があり、剗鋤のようにいう。鏟・銭はそ 〔広雅、釈詁〕に「削るなり」という。 のような農具であり、声義が近い。 声符は萎。 戔は薄いもの、それを重ねる意。 土を削り、

(扇)10 とびら・おうぎ・うちわセン

〔唐本説文〕に会意とする。 [礼記、月令、注〕に木 こ上に「扉なり」とあり、翅声の字であるとするが、 を用いるものを闔、竹葦を用いるものを扇とする。 羽は両翅あるものをいう。〔説文〕「 戸(戶)と(羽)羽とに従う。

> おだてることを扇動という。 南蛮あるいは東夷からの貢物であったという。 徴 畳 扇といったもの。元明以後に行なわれ、というなり、 はないはないのではない。 いまいう扇は折り畳み式で、また閃漾 もと もと 人を

旃10 [旜]19 はた・これ

媍 颅 UM.

にも晋の記事に数例みえる。晋地の方言とみてよい旃を舍け」のように魏・唐の詩にのみみえ、〔左伝〕 を謂ふ」とみえる。画飾のない赤一色のもので〔麦と爲す」とするのがよい。注に「通帛とは大赤 をもっていうもので、「周礼、司常」に「通常を旃曲 旃は大夫の立てるものであるが、旃はその布帛をない。 たまず しょう はんがあり、旌表の字としてふさわしい形である。ものがあり、旌表の字としてふさわしい形である。 表する所以なり」とする。ト文にまた偁に従う形の その音は「者焉」を急言したものであるという。 〔説文〕七上に「旗の曲柄なるものなり。士衆を旌 字形のものがあって、声符はおそらく冉であろう。 形声 いまの字形は丹に従うが、卜文に冉に従う

栓1(栓)1 せん・つめ

> 形声 形である。 にのみ用いる。全や今は、ものに蓋し、せんをするのち瓶などのせんの意に用いる。わが国ではその意 り」、〔玉篇〕に「木栓なり」とあるのが古い用法で、 声符は全(全)。〔広雅、釈器〕に「釘な

延 よだれ・エン

腿 猕纖

文〕ハ下に「次は幕欲する口液なり」、すなわちよだれ(盗)はこの字に従う。 凝は次の形声の字で、〔説 皿中のものに慕液を垂らすような小盗の類ではない。 で、同族血盟の離叛者、族盟を捨てたものをいう。 にも用いる。盗とはその口液をもって血盟を穢す意の意とする。それは慕欲のときもあり、また穢す意 人が口を開いて多く涎を垂れている形である。 正字は次。籀文の字形は二水に従うもので、 盗き

牷 いけにえ

牲を攘々(かっぱらう)」としるしている。 用ふ」という。牷物は完全な犠牲。その毛色も、た〔周礼、牧人〕に「凡そ時祀の牲には、必ず牷物を 微子」に殷末の腐敗のさまを述べて、「神祇の犠牷v」に殷末の腐敗のさまを述べて、「梲*にかじられ、二度までも廃したことがみえる。〔書、 した。〔春秋〕成七年に、郊祭に用いる牛の角が鼠 とえば東方にはその方色の青を用いることを原則と 形声 に「牛の純色なるものなり」とあり、 声符は全(全)。〔説文〕ニ上

倩

剗

扇(扇)

全10 香草の名・からしあえ

子 10 しきむしろ・しきりに・あつまる

11 10 セン・サン

り、理由なく非謗することをいう。 「下流に居りて上を訓る者を惡む」という。〔荀子、「下流に居りて上を訓る者を惡む」という。〔荀子、「で流に居りて上を訓る者を惡む」という。〔荀子、詩。〕に

関10 セン

会意 門と人とに従う。門中に人が に「頭を門中に関ふなり」と、のぞき見の意 とするが、出入するのは門中の人である。「後漢書」 とするが、出入するのは門中の人である。「後漢書」 という。字は夾と通じ、夾はかくす、出没し をいっ。字は夾と通じ、夾はかくす、出没し をが、という。字は夾と通じ、夾はかくす、出没し をが、という。字は夾と通じ、夾はかくす、出没し をが、という。字は夾と通じ、夾はかくす、出没し で定まらず、人に媚びる態を閃揄という。

灰 10 地セ

形声 声符は表。陝西・陝県のよう
「陝より東は周公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝大り西は召公これを主り、陝より西は召公これを主り、陝西・陝県のようれたが、その陝は陝県の陝、洛陽の西の三門峡に近れたが、その陝は陝県の陝、洛陽の西の三門峡に近れたが、その今峡の地で、岐山の地ではない。ゆえに二南のその分陝の地で、岐山の地ではない。ゆえに二南の

旋 11 めぐる・かえる・たちまち

拉 惊人 友

会意 がと正とに従う。正は足をかえして旋る形。 「説文」七上に「周旋するなり。 旌旗の指麾するなり。 とあり、旗をめぐらして旋る意。 周旋はもと戦う意に用い、[左伝] 僖二十三年「君と周旋せん」とは、戦場において馳駆角逐することをいう。のちとは、戦場において馳駆角逐することをいう。のちとは、戦場において馳駆角逐することをいう字である。

生 11 むち・きのふだ

船二(船)工程

船野

形声 声符は分。 合は沿・鉛の声で船の声と合わず、「説文」ハ下に「鉛の省聲」とするが、省声と循って行くなり」と音義を説くから、当時その音循って行くなり」と音義を説くから、当時その音であったことが知られる。 「越絶書、呉内伝」にで越人、船を謂ひて須遠と爲す」とあり、大船は沿であったことが知られる。 「をおいたと思われる。

老11 「卵」16 かばる・うつる

前後よりこれを昇ぐ形である。上部はその頭部、下会意 人の死屍の形と、廾とに従う。死葬のとき、

作り、「高きに升るなり」とし、図声とするが、図はいわゆる鬼頭の形で、すでに死没した人を嗅ぐ意。はいわゆる鬼頭の形で、すでに死没した人を嗅ぐ意。おそらくこれを殯屋に移し、その風化を待って改めて葬ったもので、複葬の形式が行なわれていたことを証する字である。これを登署の字と解するのは、のちの神僊の思想によるもので、本来は神霊を他にいたことを証する字である。これを登署の字と解するのは、図声とするといるといる。とし、図声とするが、図声といる。とし、図声とは、みなその声義を承ける。

到 11 セン

をといえば婦人のことをさす。 形声 声符は川。「説文新附」一四上 があった。のち婦人の専用するものとなり、釧 なに用いたもので、もと辟邪、被振りの意味をもつ いう。わが国の「くしろ」にあたる。古くは男女と いう。となって、うでわを がなり」とあって、うでわを

セン釧孱揃湔牋筅筌僉

前12 きる・そろう・さする

形声 声符は前(前)。前は足指の にして「挟るなり」とするが、焼には炭除の意もあり、「急、就篇」にいう「沐浴揃揻」とは、沐浴し、 り、「急、就篇」にいう「沐浴揃揻」とは、沐浴し、 等でしてりを清める意である。「養れ、土喪礼」「蛋 がすること他日の如し」とは、死者の爪を剪り、鬚 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がりそろえることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は指爪を切る意で、 がすることをいう。前は別に手を加えている

が12 あらう・そそぐ・けがす

形声 声符は前(前)。前は足の指 「「た切り、清める意。〔説文〕二上に 「大でなり、流が、釈詁〕に「洒ふなり」とみ な、光と声義同じ。生は趾を洗うこと、前は趾の爪 を切ることで、先・前に従う字は一系をなしている。 を切ることで、先・前に従う字は一系をなしている。 を切ることで、先・前に従う字は一系をなしている。 を切ることで、先・前に従う字は一系をなしている。

比 12 かきつけ・かみ

その文体の名となり、牋奏・牋疏のようにいう。のものであるため、君上や貴戚に上奏するのに用い、う。箋は竹簡から出ている字である。大事をしるする。片は木片であるから、もと木簡をいう字であろる。声は木片であるから、もと木簡をいう字であろれる。

ち書翰をいう字となり、その用紙を牋という。

先 12 ささら

わが国では茶筅の字に用いる。形声が一声符は先。鍋や釜を洗うささらの類をいう。

全12 うえ・ふしづけ

用いたものは放擲されることをいう。 を得て筌を忘る」とあり、ことが成ればその手段にれで初学入門の意に用いる。[荘子、外物]に「魚れで初学入門の意に用いる。[荘子、外物]に「魚をとる漁器。「うえ」をいう。 発を捕る蹄とあわせをとる漁器。「うえ」をいう。 発を捕る蹄とあわせを得て筌を忘る」とあり、ことが成ればそのは放擲されることをいう。

● 13 みな・ことごとく・ともに・えらぶ

(検)・驗(験)はみなその声に従う。 っており、古く剣の声であったのであろう。檢 「僉曰く」とあり、本来は神意を承ける者の言が、 すべて一致する意である。金文に剣銘の剣を僉に作

僊 やまひと・まうさま

に「高きに升るなり」、また遷ニ下にも「登るなり」に從ふ。零は赤聲なり」という。零を〔説文〕三上〔説文〕ハ下に「長生、僊去す」とし、「人に從ひ罨 羽化登仙の人とした。礬は屍を運ぶ形で、礬・僊・ 死者である真(真)を、存在の本源に達したものと 形、遷は屍体を遷す形である。すべて神霊を遷する 遷は一系の字である。 は荘子学派によって完成されたもので、かれらは顚 ことを遷座・遷御という。死を永生とする考えかた と訓して登仙の意とするが、署は屍体を挙げている 式を示す字である。その遷された人を僊という。 者をおき、その風化を待って、改めて葬る複葬の形 して真人とよび、死して朽廃したものを僊として、 す形。一時邑を離れた板屋のなかに死形声 声符は器。零は死者を他に遷

專 13 きる・さく・たつ

てあげている。王褒の〔聖主賢臣を得るの頌〕にた形とし、「截るなり」と訓し、剸を別体の字とした形とし、「截 切る意である。〔説文〕九上に正字を斷と首を合せ れてものをうち固める意。剸はそれを 声符は專(專)。專は豪に入

養養 華華 聖聖 聖後 奉お あかり あちつかいこう

「陸に犀革を剸る」とあり、そのように強 靱なもの を截るときに用いる。

13

尠 13 「製」13 すくない

〔説文〕ニ下に「是少きなり。魁きも俱に存するない。 とは匙、匙で少しく酌む意。とは匙、匙で少しく酌む意。 正字は尟に作り、是と少とに 斗は斗杓の形。尠では斟む意とならない。 尠は斟酌の斟の字形になぞらえたものであるが、 れている。甚は烹炊の意。鍋を火にかけた形である。 是非の是ではない。俗に尠に作り、その字が用いら り」というが、文に誤脱があろう。是も匙の意で、

煎 13

いる・につめる

風という。扇の動詞形である。

子で頭をうったものであろう。扇で風を起すのを搧 て搧といふ」とみえる。もとは落語家のように、扇

〔通俗編〕に、「今、手を以て面を批つを謂ひ声符は鬅(扇)。 扇で手や頭をうつことを

戦 13 (戦)16 たたかう・おののく・そよぐセン

黻 罪 重 - 10+0

戈を執って戦うのである。〔説文〕二下に「闘ふな飾などをつけてある形。これを執って身を守り、 のなどをつけてある形。これを執って身を守り、 はたがある。単(單)と戈とに従う。單は盾の上部に羽 にも用い、狩の初文である。獣は狩猟を執る形のものがある。単は狩猟 つ形。金文の図象に、左右に干戈 は隋円形の盾で、戦とは干戈をもだれ り」とし、単声の字とするが、単 単(單)と戈とに従う。單は盾の上部に羽

通用する仮借義であろう。 (獣) もその形に従う。 戦慄の意は、 おそらく頭と

斯贝 〔方言〕〔玉篇〕に「火乾」、〔広雅、釈詁〕に「乾 茶・煎薬のように用いるのは、のちの用法である。 なり」というように、いりつけることが本義、 つめることをいう。煎茶の法は唐の陸羽にはじまるという。煎茶の法は唐の陸羽にはじまるという。煎茶の法は唐の陸羽にはじまる。 とされ、それ以前には団茶にして煮出して用いた。 声符は前 (前)。〔説文〕一〇

羨 13 うらやむ・あまりセン・ゼン・エン

饒の意に用いる。「墨子、節葬、下」に「羨道」のれ、小司徒」「その餘を以て羨と爲す」などは、余公、下」「羨れるを以て足らざるを補ふ」、また「周さい、下」「羨れるを以て足らざるを補ふ」、また「周さい、下」「羨れるを以て足らざるを補ふ」、また「周さいを多養嬢の羨道の意に用いることもあって、そのこ字を臺壙の羨道の意に用いることもあって、そのこ 煮 「善を進むるなり」とあるも、次との関係が明らか し、字は次と羑の省に従うという。羑は羊部四上に 羊肉に垂涎する意とする人が多いが、この 形声 る。〔説文〕ハドに「貪欲なり」と訓 声符は次。次は凝の初文であ

ることができない。 それと似た意味があるかと思われるが、いま確かめ を穢す行為であることからいえば、羨の従う次にも 邪曲・過愆の意がある。次が盜(盗)において族盟 ことなどがあって、羨余の義を生ずるのであろう。るところである。その祭肉の余りをもって人に煽つるところである。 語がみえ、それは神道ともよばれ、犠牲を供えて祭 **羨望の意は、その転義とみられる。羨にまた**

腺 せん・体中の分泌作用をする器官セン

腺病質という。 うである。淋巴腺・扁桃腺などのはれやすい体質を形声 一声符は泉。泉に線の意味をもたせているよ

詮 13 そなわる・あきらか

次第して前後を明らかにすることを詮次、しらべま 義せよ」とは詮議の意。訓釈を加えることを詮釈、 わることを詮索という。 識する意で、〔呉越春秋〕に「ただ夫子、これを詮い」という。つぶさに詮います。 声符は登(全)。〔説文〕三上

詹 13 くどくどいう・たるセン・タン

のところ。言は祝藤・祝誓などを意味する字。と、詹は广と八と言とに従う。广は崖下などの秘覧と、詹は广と八と言とに従う。广は崖下などの秘覧と、詹は「田差鱠」の鱠の字形によって考えるのと、 の祝禱を示す言の上に八を加えるのは、神気の髣髴 いまの字形は正形でなく、

践12 (踐)15 ふむ・おこなう

相重なる意。〔説文〕ニ下に「履むなり」とあり、 薄いものを重ねる意があり、足あとの 旧字は踐に作り、菱声。 戔*

> う考えがあったものと思われる。反閉的な儀礼には のちに舞踊化されたものがある。 の地を履践することによって、支配が成立するとい 件の授受という事務的なことだけでなく、 土地を履践することが行なわれているのも、ただ物 儀場に赴くことが原則であるが、それも践土の意味 土地の授受のとき、新しい所有者がその地に臨み、 をもつ行為である。金文の土地関係の銘文において、 歩して周より豐に至る」のように、王が歩してそのらう。〔書、周書〕の諸篇には、〔召誥〕「王、朝にろう。〔書 トしており、また先とよばれている儀礼もそれであ 辞には、王の出行のたびにその地を「後む」ことを 訓。これらの字はみな践上の意をもつもので、新し ニドにも菚に従う字があって「迹なり」とあり、 にあたる。〔説文〕ニ下に「後は迹なり」、また行部 い地に入るときなどに、その儀礼が行なわれた。ト 礼があり、わが国で反閉と称する地霊を鎮める儀礼優践とはまた実行を意味する語である。古く践士の優哉 古くはそ

遄 ¹³ すみやか・しばしばセン

大水子ない

速・数は声義の通ずる字である。耑・亶が同声であ 『「故書に、速をあるひは數に作る」とみえ、遄・に「故書に、速をあるひは數に作る」とみえ、溰に「疾なり、速なり」、また〔周礼、弓人、注〕 「往來すること敷かなるなり」とする。〔爾雅、釈 亶いずれにも顓・氈の声がある。[説文] ニ下に 形声 声符は湍。 常は端母の声で亶と同声。 端・

跣 13 贈、ただ自ら憺しむのに近い。詹に従うこれらの贈、ただ自ら憺しむのに近い、斉の音声は澹、その語はの呪誦は殆ど譫言に近く、その音声は澹、その語はどうして多言の意となるのか知られない。巫祝たちどうして多言の意となるのか知られない。巫祝たち ニ上に「多言なり。言に從ひ、八に從ひ、产に從とあって、聞きとりにくいような語をいう。[説文] 詹という。〔荘子、斉物論〕に「小言は詹々たり」あらわれることを示すもので、その多言なるさまをあらわれることを示すもので、その多言なるさまを ふ」とするが、その会意の義を説かず、その解では しきりに呪・誦などをとなえ、それに対して神気のち詹は、巫術が岩窟などの秘匿のところで祝禱し、ち詹は、本学、 ただ自ら憺しむのに近い。詹に従うこれらの 多くその声義を承けている。 はだし・すあし・ふむセン 形声 声符は先。先は先行の儀礼を

地を践むことに意味があったのであろう。 も被髪徒跣、すあしで罪を請う定めであった。古代ではらとなる。 〔礼記、喪大記〕に「主人、徒跣す」とあって、死なり」とあって徒跣をいう。跣・親は畳韻の訓。なり、とあって徒跣をいう。跣・親は畳韻の訓。いう。〔説文〕二下に「足、地に親く に、先行して除道する儀礼があったが、それも足で

詹 跣 践(践) 遄

に死せざる」の句がある。
「詩、「「胡や満やか」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」で、「おいま」では、「遠とも声義の通ずる字であろう。

佐14 「佐」4 おかす・たがう・そしる

博 14 かわら

う。漢代の瓦塼には、神話伝説より当時の風俗に及を用い、図画を附刻することが行なわれ、画塼といい、字はまた甎に作る。古く墓所を営むに瓦塼たいて、固くまるめる意。土を固めて焼いた瓦を塼たいて、固くまるめる意。土を固めて焼いた瓦を塼たいて、固くまるめる意。土を固めて焼いた瓦を塼を形声 声符は蓴(専)。專は橐のなかのものをた形声

出土品がある。出土品がある。



好 4 うつくしい・もっぱら

形声 声符は繋(専)。〔説文〕ニー 「姨らなるなり」とあって専一の字とする。〔玉篇) 「娘らなるなり」とあって専一の字とする。〔玉篇) 「なり」とあって専一の字とする。〔玉篇) 「なり」とあって専一の字とする。〔玉篇) 「なり」とあり、「説文」に「一に曰く、 なり」とあって専一の字とする。〔玉篇)

至日 1 うつ・ほろぼす・もとめる・さいわい

形声 声符は音(音)。音は歩く を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、 を散めしむ」とあり、「伝」に「福なり」とあって、

礼に代る方法であったと思われる。
してそえ、鏃を清める意を示したものであろう。釁之を用いる必要もないことであるから、戈は聖器と文を用いる必要もないことであるから、戈は聖器との鏃を鋳こむ鋳型であるが、その鋳型をひらくのに

煽 14 おおる・さかく

(扇動家である。 形声 声符は弱(扇)。扇はあおぐ偏動家である。

多 14 はりふだ

全近 14 つやのあるかね

いい、「周礼、鳧氏」に「兩欒(口の両辺の角)こ光沢のあるものをいう。また鐘の口縁の部分を銑と光沢のあるものをいう。また鐘の口縁の部分を銑と火水のであるものをいう。また鐘の口縁の部分を銃と火水のでは、

れを銑といふ」とみえる。その両銑の間を干という。

全は はかり・えらぶ

銭 1 (銭) 16 セン

輝 15 セン

に「女、嬋媛として我が爲に太息す」とあり、女巫離騒〕に「女婆の嬋媛なる」、また〔九歌、湘君〕に「嬋娟・嬋媛など、連語として用いる。〔楚辞、『媛は『媛など、連語として用いる。〔楚辞、『神媛は態なり』とあり、女の姿態あることをいる。『覚覚』(単)。単に蟬・禪出

銓

銭[銭]

嬋撰

潜[潛]

渥

の嘆き訴える姿態などをいう語であった。

世、15 そなえる・えらぶ・つくる

形声 声符は巽。巽は神前の舞台で、二人並んで 理楽する形で、神に献ずる舞である。[説文]二下 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞容をいい、撰は供撰を主とする字。[論語、先 は舞なるとき

潜 15 【潜】15 くぐる・ひそかに

湖 失出 樹

形声 旧字は潜に作り、替声。替は祝禱を収める 器の日の上に簪をおいて、ひそかに人を呪詛し讃歌する意。ゆえにひそかに行為する意がある。〔説文〕「上に「水を渉るなり」とし、「一に曰く、藏なるるなり。一に曰く、漢水を潜と爲す」とあり、漢水に伏流するところがあるので潜という。「水を渉る」というも、潜行する意である。水に潜って渉ることから、人に知られずに行動することをいい、潜行・潜伏・潜匿・潜入のようにいう。天子の微行することをも、潜幸という。また一事に没頭することを沈潜・潜精、賢者が世に出ず、その時機を待つことが潜・潜精、賢者が世に出ず、その時機を待つことを潜奪という。〔易、乾針・初上」に「潜龍なり。用ふること勿れ」とみえる。漢の王符は、乱世にか第、線〔後〕

徳を抱いて世に出ない賢者を、潜徳という。くれてその俗をにくみ、[潜夫論]十巻を著した。

| 15 水の流れる音

して用いる。擬声的な語であろう。 (説文新附〕二上に「潺潺なり。水聲」とあり、潺々・潺湲など、連語とぽがある。[説文新附〕二上に「潺潺いなり。 異に孱弱なるもの

全月 15 や・やだけ・やがら

等 些月

形声 声符は前、前)。「説文」五上に「矢なり」 とあり、矢竹をいう。「方言」に関東では矢、関西 では箭というとするが、通語である。「周礼、職方 では箭というとするが、通語である。「周礼、職方 氏」に揚州に竹箭を産することをしるし、注に 野をまた晉(晋)に作るとする。 である。「周礼、職方 に揚州に竹箭を産することをしるし、注に では箭というとするが、通語である。「周礼、職方

線15 「綫」1 いとすじ

(大きに、後は現代語に用いる。 を外が 基底 である。「説文」二三上に「縷なり」とあり、[玉篇] に「以て衣を縫ふべし」とあるから、縫い糸である。字はまた線に作り、泉声。〔周礼、縫人〕にある。字はまた線に作り、泉声。できる。字はまた線に作り、泉声。正字は綫に作り、裏ではまる。

前 15 きる・さく・つくす

の「整要文身」の語がある。俗に剪に作るが、刀は前の字形のうちにすでに含まれているのである。 「正常」に「齊断なり」とかる。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。「説文」四上に「羽、生ずるなみなその義がある。俗に剪にてるが、刀は前の字形のうちにすでに含まれているのである。

賤 15 やすい・いやしい

形声 声符は茎。茎に薄いものを重に、謙して賤人・賤妾という。

遷 15 【遷】16 うつす・さる

灣極際

「登るなり」と登僊(仙)の意と解するのは、当時屋などに遷す意の字で、遷の初文。〔説文〕ニ下にとなどに遷す意の字で、遷の初文。〔説文〕ニ下にとなどに、といる。 声符は器。 響は死者を 殯 するために、 気

二十九年 人名英格兰 医阿斯特氏病 医阿斯特氏病

一人以於西京年等勘照城中也勢由過等

の神仙の思想をもって説くもので、字の原義ではない。字は神霊を他に選すこと、すなわち選挙・遷座い。字は神霊を他に選すこと、すなわち選挙・遷座い。字は神霊を他に選すこと、すなわち選挙・遷座い。字は神霊を他に選すこと、すなわち選挙・遷座い。字は神霊を他に選すこと、すなわち選挙・遷座い。字は神霊を他に選すことを選次といい、配流を遷逐とち人の居所を移すことを遷徙といい、配流を遷逐とち人の居所を移すことを遷徙といい、他人に当たり散また国都を棄てて大去するときも遷といい、他人に当たり散また国都を棄てて大去するときも遷といい、配流を遷逐といい、旅宿を重ねることを遷次といい、他人に当たり散ってことを遷怒、その動作の掛らぬことを遷延といい、旅宿を重ねることを遷次といい、他人に当たり散らすことを遷怒、その動作の掛らぬことを遷延という。古文の字形は李陽がの「庾公徳政頌」などにう。古文の字形は李陽がの「庾公徳政頌」などにからすことを遷怒、その動作の掛らぬことを遷延といい、からすことを遷怒、その動作の掛らぬことを遷延といい、からとととを選をいる。

選 15 「選」 16 そろう・えらぶ

新型。

二人並んで舞楽する形で、頭は立って舞う形、異は、こ人並んで舞楽する形で、その舞楽するさまを選といい、その舞楽をもって神に献ずることを撰という。 [説文] ニ下に「遺はすなり」というのは、選と遺と畳韻をもって訓するものであるが、字義に関連するところはない。[詩、斉鳳、猗嗟]「舞へば則ち選るところはない。[詩、斉鳳、猗嗟]「舞へば則ち選るところはない。[詩、斉鳳、猗嗟]「舞へば則ち選るところはない。[詩、斉鳳、猗嗟]「舞へば則ち選るところはない。[詩、斉鳳、猗嗟]「舞へば則ち選るところはない。[詩 大青鳳、猗嗟]「舞へば則ち選とし、その舞楽する形で、頭は立って舞う形、異は

が、のち躩の字を用い、羽衣蹁躚のようにいう。供えるものを撰・饌という。選は揃って舞う意で、供えるものを撰・饌という。選は揃って舞う意で、低く舞う形で、下に舞台の形をそえている。神前に低く舞う形で、下に舞台の形をそえている。神前に

薦 16 すすめる・そなえる・しきりに

為 类类常见

配 17 せンしろ・もうふ

形声 声符は宮。宮に雉・腹の声が り」とあり、毛織の敷物などをいう。北方の諸族は 大難帳をめぐらして、そこを儀場として集会を行なった。「顔氏家訓、帰心」に、当時の北方族に千人 を容れるに足る氈帳があったとしるしている。匈奴 は驚嘘を用いるので匈奴の異称とし、その君を獣 は野嘘を用いるので匈奴の異称とし、その君を獣 ないない。

越 17 (織) 28 ほそいいと・ほそい・こまかい

腫 1 なまぐさい・かたぬぐ

り」とは肩はだをぬぐ意であるが、その字は「爾がある。〔説文〕四下に「肉膻するないある。〕に質と増の両声をはない。

雅」に徹に作り、また略して祖に作る。 内膻は降服れて、「左伝」宣十一年「鄭伯内祖して牛を牽き、以て逆ふ」とみえる。字は多く肉のなまぐさいこと、対理にの義に用いる。 増の異文とみてよい。悪臭を放増腥の義に用いる。 増の異文とみてよい。悪臭を放っことをいい、「列子、周禄王」に「王の嬪御、膻悪にして親しむべからず」というのは、わきがの類のであろう。

餞 17 はなむけ・おくる

新 7 あたらしい・あざやか・すくない

類 美女美 新

鮮少の意に用いる。鮮少の意は匙(粉)の仮借であの省聲に從ふ」という。経籍にはすべて新鮮、また、説文] 二下に「魚の名なり。黎國に出づ。魚と羴に説文] 二下に「魚の名なり。黎國に出づ。魚と羴ときは羴と同声。鮮はあるいはその両字を略して組ときは羴と同声。鮮はあるいはその両字を略して組をきは羴と同声。鮮はあるいはその両字を略して組

美の意となる。

贈 18 みる

華18 「羶」19 せかにおい

せるものは品・森・龘などすべて群衆の意をもつ。とあり、その腥臭あることをいう。凡そ三形を合とあり、その腥臭あることをいう。凡そ三形を合き。 三羊に従う。〔説文〕四上に「羊の臭なり」

の初文であろう。
幸は羼、「羊相廁るなり」の意で、羼字であろう。羴は羼、「羊相廁るなり」の意で、羼ままま

蝉 18 セン・ゼン

僧 18 セン

大学 の歌前なり」とあり歌隊、ひざかけをいう。〔詩、小雅、栄禄」に「終朝に監を宋るもいう。〔詩、小雅、栄禄」に「終朝に監を宋るもいう。〔詩、小雅、栄禄」に「終朝に監を宋るも一機に盈たず」と歌う。この詩は予祝としての草摘みを歌うもので、七日を期として神に約し、草摘みみを歌うもので、七日を期として神に約し、草摘みみを歌うもので、七日を期として神に約し、草摘みみを歌うもので、七日を期として神に動きない。「説文」八上に「衣をする。

頭 18 ならんでまう

の装いをした人で、その人が二人並ん会意 二頁に従う。頁は神事のため

えるものを饌という。とし、また既正上に「具するなり」、人部八上に「僕は具なり」とし、また既正上に「具するなり」、人部八上に「僕は具なり」とし、また異正上に「具するなり」、人部八上に「僕は具なり」と、また異正に「具するなり」とし、またという。異と声義ともにで、神に舞楽を献ずることをいう。異と声義ともにで、神に舞楽を献ずることをいう。異と声義ともに

18 うやうやしい・おろか・もっぱら

19 のべる・つくる・そなわる

前に舞う形で、神に舞楽を献ずること形声 声符は業。巽は二人並んで神

をいう。その舞う姿を選々という。異に従う字はみなその声義を承けるものであるから、課とはもと、神に奏する語をいったものであろう。〔説文〕三上神に奏する語をいったものであろう。〔説文〕三十者の撰に異なり」の〔鄭玄注〕に「撰は讀みて課といふ。誤は善なり」とあり、〔説文〕は専譔の畳といふ。誤は善なり」とあり、〔説文〕は専譔の畳といふ。誤は善なり」とあり、〔説文〕は専譔の畳というように、神霊にささげる歌詞を譔という。〔論話、為政〕「酒食有るときは、先生に饌す」の饌も、本来は神饌をいう語であった。一般の著作などに課本来は神饌をいう語であった。一般の著作などに課本来は神饌をいう語であった。一般の著作などに課本をいう。

長可 1 かみきる・きりそろえる

下方 声符は前(前)。前は足の指標が、剪り揃えることをいう。 「女の鬢の垂るる見」とするが、「礼記、曲礼、「女の鬢の垂るる見」とするが、「礼記、曲礼、「小学をいう。」とあって、爪や髪を切りそろえないことをいう。いわゆる断髪文身」という。いわゆる断髪文身で、髪を結びれことをいう。いわゆる断髪文身で、髪を結びれているげず、剪り揃えることをいう。

20 カカごと・たわごと

でうわごとをいう意。ひたすら祈禱するものの語を【素問】に「食を欲せずして譫言す」とあって、熱聞きとれないようなくどきのことばを詹々という。とが続の声のくだくだしいことをいう字である。との祈禱の声のくだくだしいことをいう字である。をはひそかに隠れて神に祈り、彩声 声符は詹。詹はひそかに隠れて神に祈り、彩声

文に、他の文の混入があることを、羼入という。とあり、羊小屋に羊が集まるさまをいう。書籍の本とあり、羊小屋に羊が集まるさまをいう。書籍の本とあり、一種では、一種では、一種では、一種では、一種では、一種では、

経 21 「**答**」 23 そなえる・たべもの

だったむし・ひぜん

起の形声の字であろう。秦漢以後の文献にみえる。あるが、その意を用いるものではなく、おそらく後

の語を引く。幽冥のところを開く意。單は盾の形で

「開くなり」とあり、[易、繋辞伝、下]「幽を聞く」「いっぱ」(禅)の声がある。[説文]一二上に「いっぱ」

声符は單(単)。単に嬋・禪

闡 20

ひらく・あきらか・あらわすセン

の意に用いて贍富・贍智のように用いる。

のようにいう。口舌の才を贍辞といい、すべて十分

ものを供して教うことを贈卹・鵙賑六下に「給すなり」とあって、つぎ足状なった。 つぎ足がる声の、くどくどしく多い意。贈は祈る声の、くどくどしく多い意。贈は

す意とする。〔説文新附〕

贈20 たま

たす。すくう。ゆたか。おおいセン

声符は鷽。鷽はひそかに神に

解析 (こけ)の声義を承けるものであろう。 (こけ)の声義を承けるものであろう。 「説文」七下に「乾燥」とあり、たむし・ひぜんの類をいう。「釈 名、釈疾病」に「癖は徒なり」とあり、たむし・ひぜんの類をいう。「釈 名、釈疾病」に「癖は後なり」とあり、癖をまた後に従う字に作ることもある。これもその疥癬の部分が徙りひろがる意である。

殲

ころす・みなごろしにする・つきるセン

直旦 22 かゆ・かたがゆ

を殲さんとす」など、〔左伝〕にはしばしば殲滅のをいう。〔左伝〕襄二十八年「それまさに聚めて旃えいするなり」とあり、殲滅とは全滅・根絶することにするなり」とあり、殲滅とは全滅・根絶すること

骨の形で、その残骸をいう。〔説文〕四下に「微盡なりの形で、その残骸をいう。〔説文〕四下に「微盡なり」を伐る意で、殲の初文。戌(歹)は残

を伐る意で、殲の初文。哲(歹)は残を伐る意で、殲の初文。哲(歹)は残を伐る多くの人の首

い、宋(河南)では餬というとみえる。〔左伝〕昭り、かゆをいう。〔方言〕に鳰(陝西)では饘といり、かゆをいう。〔方言〕に鳰(陝西)では饘といり、かゆをいう。〔方言〕に鳰(陝西)では饘といった。

では、このような箴言風のものはない。「是に値し是に驚くかゆ」し、以て余が口を聞す」の語があり、その貧窮自足の情をいうが、いま存する泰器の器銘に、このような箴言風のものはない。「ないない。」というでは、

変え 23 くじ・ためす・しるし

細長い紙に書名を題するものを、籤題という。 知識 の意がある。〔説文〕五上に「驗すなり」、〔玉篇〕に「竹籤、トするものなり」とあり、神道を問うためのおみくじをいう。神社などで、神神意を問うためのおみくじをいう。神社などで、神神意を問うためのおみくじをいう。神社などで、神神意を問うためのおみくじをいう。神社などで、神神意を関するものを、籤題という。

変 まうさま・めぐる

を 24 セン ぶらんこ

戦 韆はぶらんこ。北方の山戎が遊戯に用いたもの形声 声符は遷(遷)。遷は遊動するものをいう。

セン 贍 闡 殲 羼 饌(餐)

翼 21 ことがみえている。

贈聞殲羼饌(養) 癬 饘 籤 蹬

轣

と馬のしりがいをいう字である。字であるので、音をとってまた秋千という。鞦はもなわれ、後宮では鞦韆の楽がなされた。むつかしいとされているが、のち中国の婦女子の間にひろく行

焦魚 33 セン

中中中

字はおそらく鮮魚の鮮の初文であろう。 三魚に従ふ。變らざる魚なり」という。「段注」り。三魚に従ふ。變らざる魚なり」という。 瓦侯鯖は、漢の時代に行なわれた寄せ鍋の類で、その奇は、漢の時代に行なわれた寄せ鍋の類で、その奇は、漢の時代に行なわれた寄せ鍋の類で、その奇は、漢の時に従ふ。變らざる魚なり」という。「段注」

14 15 センチメートル

ゼン

冉 5 □号□4 よわいけ・しなやか

少女人 第一种

象形 死喪のとき、衣襟の間に加える衰経(麻の

为一九八郎 等 等 等 多人學 等 多人会心教育

ひも)の形。[説文] 九下は字を冄に作り、「毛禄々 の形を加えたものが衰であるから、冄はその衰経 の形を加えたものが衰であるから、冄はその衰経 の形とみられる。死喪のときには、魂振り や呪禁のために、衣襟の間に種々の呪物を加えることが行なわれる。祝禱の器である」を加えることが行なわれる。祝禱の器である」を加える形は、弦楽、玉をおくのは繋(選)、聚をそそぐのは要な、、玉をおくのは繋(選)、四や工などの呪具をおくのは賽(譲)である。「徳)、田や工などの呪具をおくのは賽(譲)である。「徳)、田や工などの呪具をおくのは寒(譲)、田や工などの呪具をおくのは寒(譲)、田や工などの呪具をおくのは寒(譲)、田や工などの呪具をおくのはり、「社様の関にため、「大きない」という。「はいる形と解するものであろうが、その字は形声であるから、字の初形初義を存するものとしがたい。漢碑に冉の字形がみえ、のちその字形が行なわれている。

全の「全」のまったし・すべて

★形 おそらく佩玉の形で 大王 全外 あろう。〔説文〕五下に字を 全に作り、「完きなり。入に從ひ工に從ふ」とし、 である。なお古文の一字を録するが、その字形をあげて、「玉に從ふ。純玉を全と いふ」とする。なお古文の一字を録するが、その字形が似ており、金は鋳塊を示す黒点二を加える。純 までの言より、全智全能、全身全霊のように、一 を対している形のようである。金と をは玉の下に縁飾を垂れている形のようである。金と は玉の下に縁飾を垂れている形のようである。金と は玉の下に縁飾を垂れている形のようである。絶 を包括する意に用いる。

狀 8 犬の肉

内なり」とし、「讀みて然の若くす」という。古文として捧げる意。〔説文〕四下に「犬の意を、「説文」四下に「犬のなり」という。大肉を犠牲

を供える字形である。
を供える字形である。
を供える字形である。
然と同字である。
を供える字形である。
が、「「「「「「「「「」」」」といい、それは犬牲と穀と大を祀る祭儀を類(類)といい、一辞には上帝や自然犬牲は上帝百神を祀るに用い、「一辞には上帝や自然犬牲は上帝百神を祀るに用い、「「辞には上帝や自然

前の一前の一切のかきる・すすむ・まえ

前衛

岁

言・前事・前兆のようにいう。〔史記、蒙恬伝〕に用い、前に前む意となり、また時間の上に移して前 るが、字形の意象を全く解しない説である。そのた 刀が重複した形となる。〔説文〕四下に「齊へて斷、示す字であるから、前は郭の初文。剪においては、 会意 湔ぐ意である。 〔説文〕 は歬ニ上に「行かずして進 るなり」とし、歬声の字とするが、歬は洗の初文で ぐ意となる。それに刀を加えて、指爪を剪ることを 盤で趾を洗うこと、この二字で歬の字形となり、 病・前・剪・揃・湔など、みな

一系の字である。 ることからの、象徴的な儀礼である。揃の初文は前 「周公自らその爪を揃り、河に沈む」とあって、神 を失っている。字は足の指さきの意から前後の前に め〔説文〕のこの系列の字形解釈は、すべて一貫性 む。これを歬といふ。止の舟上に在るに從ふ」とす した。喪礼のとき蚤鬋(爪や髪を切る)が行なわれに祈るとき、古くは爪をささげ、自己犠牲の意を示 止と舟と刀とに従う。止は趾で足指、

よわい・やわらかい・しりぞく 受け、善 受け、善

(広雅、釈詁)に「奥は弱なり」とあり、便・儒系に近来、釈詁」に「奥は弱なり」とあり、一貫文である。面に従う字に続いまり、一覧文」九下に「罪、気に至らざるなり、があり、「説文〕九下に「罪、気に至らざるなり、所に髪の形である。金文に霙の字があり、一門に至らざる人の形である。金文に霙の字があり、雨請いに用いる巫をいう字と思われる。霙に従う天の字は而に近く、光頭の人の形である。金文に霙の字があり、雨請いに用いる巫をいう字と思われる。霙に従う天の字は而に近く、光頭の人の形である。金文に霙の字があり、雨請いに用いる巫をいう字と思われる。って気に至らざるもの」であったと考えられる。栗の初文で、儒の源流をなすところの巫祝の徒、それが、弱なり」、「儒、柔なり」とあり、いずれも柔いの「気に至らざるもの」であったと考えられる。栗の初文で、儒の源流をなすところの巫祝の徒、その「気に至らざるもの」であったと考えられる。栗の「気に至らざるもの」であったと考えられる。栗の初文で、儒の源流をなすところの巫祝の徒、その「気に至らざるもの」であったと考えられる。栗の初文で、儒の源流をなすところの正祝の表に、表がの言をとっ致している。

主日 12 「美計」20 ぜン・ただしい・たくみな

いまれる。

担盟することを意味する。獄訟のことに当っては、 きは辛と祝蘇の器であるびとに従い、盟誓して自己 きは辛と祝蘇の器であるびとに従い、盟誓して自己 を禁む、解薦とよばれるもの。両言は原告と被告。 を意 正字は羊と両言とに従う。羊は神判に用い

告当事者のいわば宣誓をしるした字形であるから、 神を穢した罪を祓うことをいう。それで灋は、金文 訴者)と仏(田の蓋をはずした形)である。 遊はの 灋はそのことを示す字で、 廌は神羊、去は大(敗濃は不正であったので Dの蓋を去り、ともに流す。 た。両者は血をすすって誓い、それぞれの提供した題について実施されるもので、斉の神社で行なわれ知られる。それは一般審理で解決されない困難な問知られる。それは一般審理で解決されない困難な問知られる。 る。羊神判の方法については、〔墨子、明鬼、下〕は瞽で曹の初文。こうして裁判が開始されるのであれた。(東)に入れて提供し、誓約をした。その字れた。) 者はまた東矢鈞金を提供する義務があって、各、そ 者の羊には、 者の羊には、神籠を示すための文彩を、心の字形では廢(廃)の意に用いられる。これに対して勝訴 て殪れ、敗訴となった。その敗訴者は、その羊とととなる。このときは一方の羊が躍り狂って足を折っ 羊の頸血を社にそそぎ、羊が異常を示した方が敗訴 薦するものであって、審判に用いる神羊とは同じで り」とするが、義・美の従うところは犠牲として供 心字形の文様を加えた形。善は神羊を中心に、原被 で加える。それが慶である。字は神羊の側面形に、 ち略して法となるが、法とは敗訴者を水に流して、 もに皮袋に包まれ、水に流される。敗訴者の自己詛 にその実際のことが記録されていて、大体のことが ない。また両言は、当事者の自己詛盟であり、当事 なり。語に從ひ、羊に從ふ。これと義・美と同意な 当事者の双方が神に誓った上で、神羊の前で審判を 善否を決するのである。 〔説文〕 三上に

とによって完成されるとしている。とによって完成されるとしている。

喘 12 あえぐ

形声 声符は荒。湍に満・臓の声が をみて、これは天地の異変でないかと、宰相である。 「引くなり」とあって、これは吸うときの音である。 「漢書、丙吉伝」に、道で「牛喘ぎて舌を吐く」の をみて、これは天地の異変でないかと、宰相である。 をみて、これは天地の異変でないかと、宰相である。 たみで、かざわざ車をおりて審問した話がある。路 上の騒 後を、警察にまかせてよいと見過し、空車 に喘ぐ牛を、天下の大事とするこの話のうちに、当

外 12 もえる・しかり・しかれども

が多く、天神を祀るには焼き、地神を祀るには犬牲あり、その犬肉を焼く意。卜辞に犬牲を用いることひ、朕聲」という。肉部四下に「恍は犬肉なり」と脂のもえる意。〔説文〕一〇上に「燒くなり。火に従脂のもえる意 肉と犬と火とに従う。犬肉を焼いて、その会意 肉と犬と火とに従う。犬肉を焼いて、その

を埋めた。然否の意や、接続の用法は、みな仮借義 **甕 禅〔禪〕漸 髥 蝡**

宽 なめしがわ・やわらかいかわぜン・シュン

である。接続のときには逆接に用いる。

簡別角

をしるしたものであろう。〔説文〕ハ上にまた夏のとを示すために、特に牡器の形を加えて、その部位 て柔らかい部分、すなわち腋下や髀間の皮であるこんで鞣栗の栗と爲す」とあり、葉とは皮の濡沢にしんで縁栗の栗と爲す」とあり、葉とは皮の濡沢にし 需・更の音に近い。〔周礼、鮑人、注〕に「需は讀いであることは明らかである。また音をもっていえば、であることは明らかである。また音をもっていえば、 記、総目〕の〔鄭司農注〕に〔倉頡篇〕を引いて、って、その説解は支離を極めている。〔周礼、考工って、その説解は支離を極めている。〔周礼、考工「讀みて耎の若くす。一に曰く、偽の若くす」とあ 声もともに誤るものである。その音について、また に從ひ、皮の省に從ひ、鬘の省聲」とするが、形も文〕三下に「柔韋なり」とし、字形について、「北 字は殆ど用例がなく、〔広韻〕に「獵の章袴なり」字形は、その字に外ならない。甕はその繁文である この字もまた髀間に手を加えて、その柔腰なる部分 字があり、「柔皮なり」とあって声義が同じである。 形は瓦ではなく、獣の牡器の形。獣皮を表からでな としているが、のちの用法であろう。 を示す字である。〔説文〕が甍の古文として録する |鞄装||という語をあげているから、字が柔皮の意 裏からみた形で、柔皮のある部分を示す。〔説 上部は獣頭、冗形の部分は獣体、下部の瓦

禅 ¹³ 禪]17 天のまつり・ゆずるゼン

す」と封禅の二者を分別する。禅とは祭壇である墠なる。[大戴礼、保傅]に、「泰山に封じ、梁父に禪するなり」とあって、各地域の聖山を祀るものとすとは、天子、邦國を巡行し、方岳の下に至りて封禪とは、天子、邦國を巡行し、持続で 知識社会の支持をうけた。 道元の曹洞禅、隠元の黄檗禅が伝えられ、それぞれと言語の恵想的宗教となった。わが国にも栄西の臨済禅、自の思想的宗教となった。わが国にも栄西の臨済禅、 の思索のしかたは荘子の弁証法と似ており、中国独 をいう。以心伝心、公案をもって工夫とするが、そ て封禅が行なわれるからである。のち禅宗・禅学 墠は壇の意。禅に禅譲の意があるのは、禅位によっ を設けて、そこで天を祀る祭儀をいうのであろう。

漸 ひたす・すすむ・ようやくゼン

뺆 \$\tag{\chi}{\chi}

氓」に「車の帷裳を漸す」というのが初義であろう。字義は「書、顧命」「疾大いに漸む」のように、次字義は「書、顧命」「疾大いに漸む」のように、次を義は「書、顧命」「能大いに漸む」のように、次形声 声符は斬。〔説文〕一」上に水名とするが、形声 声符は斬。〔説文〕一」上に水名とするが、 それよりして漸次・漸進・漸習などの意となる。

ほおひげ

形声 されたことがある。髯奴はその愛称。羊のことを髯官誅滅のとき、鬚髯をもたぬ男子が、誤って多数殺官誅滅のとき、鬚髯をもたぬ男子が、誤って多数殺あり、顔容を整えるためのものとされた。後漢の宦あり、顔容を整えるためのものとされた。後漢の宦 鬚参軍という。 また〔釈 名、釈形体〕に「頻の耳旁に在るを料と形す。」を必ず、説文は、記文〕九上に「頻の須なり」、 いふ。口に從ひて動搖すること冄々然たるなり」と

蝡 うごめく ゼン

るものが多く、耎は髠頭の巫、需は雨請いする巫を る。蠕動するものをいう。「香子、勧学」に「蠕し は多く蠕を用いる。栗・帯に従う字には声義の通ずて動く」、〔新語、道基〕「蜎飛蠕動の類」など、字て動く」、〔新語、道基〕「蜎飛蠕動の類」など、字 いう字である。 「動くなり」とあり、字はまた蟠に作 形声 声符は耎。〔説文〕 ニミ上に

膳 16 そなえもの・すすめる

性肉なり」というが、膳夫の職は、宰がもと犠牲をの饗と同訓である。[周礼、膳夫、注]に「膳とはば、ばば、ばば、はいい、食部五下の人 克の作器で、「毛公鼎」となんでこの期を代表するあった。西周後期の「大克鼎」は、善夫(膳夫)ないと、西周後期の「大克鼎」は、善夫(膳夫)ないと、「大き」を表している。 大鼎であり、克は王命を出納する当時第一の重臣で 形声 声符は善。〔説文〕四下に「具

繕 18 あった。他に善夫山、善夫梁其の諸器がある。 つくろう

299

あるが、それは〔説文〕九上「鸛、倨して人を視る在り。その怒を急繕にす」の繕は、強勁をいう語で が多い。〔礼記、曲礼、上〕「招搖(旗の名)上に「干戈を繕修す」のように、武器についていうことで、武器についていうことを繕ふ」、〔漢書、息夫躬伝〕とあって補修の義。〔左 うことを繕性、筆録することを繕録という。 なり」の意で、その字の仮借であろう。また性を養 形声 声符は善。〔説文〕一三上に

咀 8 かむ・あじわう

品、上〕「英華を咀嚼す」とは、その精粋を身につ 嚼するところと爲る」とは、嚙み殺される意。 〔詩 ことをいう。〔後漢書、左雄伝〕「生きては天下の咀味するなり」とあり、咀嚼し玩味する けることをいう。 声符は且。〔説文〕ニ上に「含

はは・あねソ・シャ

にはこれを社といふ」と、すべて方言をもって解す ゼン 「蜀の人、母を謂ひて姐といひ、淮南形声 声符は且。[説文] ニニ下に 繕

徂(退)[瀘]

わが国では姐衛という。る。各地とも似た音であった。姐々というのは敬称、る。各地とも似た音であった。姐々というのは敬称、

徂。[退]。[遣]15

担

雅、桑柔」「西より東に徂く」、「衛風、氓」「我よには徂、宋魯には適というとする。しかし〔詩、大には徂、宋魯には適というとする。しかし〔詩、大には徂、宋魯には適というとする。しかし〔詩、大・だ」 声符は且。〔説文〕ニ下に字を退に作り、形声 声符は4 いる。夙部七下の置の籀文の字形も、虘に従うてい、沈兄鐘〕に「中に稼く敷揚る」のように、觑を用〔決兄鐘〕に「中に稼く敷揚る」のように、觑を用〔詩〕の「終に安く且つ寧し」という形式の句を、ものがある。重文の晝に従うものは、且の繁文。ものがある。重文の晝に従うものは、見の繁文。 ずれも且に従い、送往・送終の意がある。 徂歳のように往年の意にも用いる。徂・雅・祖はい り爾に徂く」など、他の地でも徂を用いており、 る。徂往の意より殂落(死ぬ)の殂に借用し、また る字が多く、後や御の字は、金文では辵に従う形の は当時の通語とみてよい。そ部と辵部とには共通す 徂

沮 はばむ・ふせぐ・やぶれるソ・ショ

* B#*

沮 されるので、沮止・沮敗の意となり、 わち低湿の地をいう語であろう。それで交通が沮害り江水に入る川の名とするが、もと沮洳の地、すなり 泝 声符は且。〔説文〕二上に、漢中の房陵よ 中途にして気

い、阻隔の意がある。
**でいう。山地ならば岨・阻とい落ちすることを沮喪という。山地ならば岨・阻とい

泝 8 さかのぼる

式をとる祭儀で、この詩はその歌謡である。 として水の中央にあり」と歌う。水神を追迹する形で且つ長し「※近してこれに從はんと欲すれば「宛 に「遡洄してこれに從はんと欲すれば 道阻しく これに違うて上るなり」という。「詩、秦風、蒹葭」これに違うて上るを泝洄といふ。水下らんと欲するに、ぎょうて上るを泝洄といふ。水下らんと欲するに、ぎょ は彦。〔説文〕二上に「流に 声符は斥。その正字

狙 さる・ねらうソ・ショ

足した話を載せる。犬とする説は狙伺、狙撃の意か大反対であった猿どもが、朝四暮三というとみな満 犬なり。暫く人を齧むものなり。一に曰く、犬の人 人を伺う意と解している。 ら導かれたものであろう。伏を〔説文〕八上に犬が が、猿にとちの実を与えるのに、朝三暮四の条件に の両解がある。〔荘子、斉物論〕に、猿飼いの狙公を齧まざるものなり」とあり、要するにさると犬と 「獲の屬なり」とし、「一に曰く、狙は 声符は且。〔説文〕一〇上に

8 けわしい・はばむ・なやむ・たのむソ

題 「險なり」とあり、[周礼、司険]形声 声符は其。[説文] |四下 司険」に

「詩、邶風、雄雉」「自ら伊の阻を治せり」のようにいう字であろう。〔書、舜典」「黎民、飢に阻む」、いう字であろう。〔書、舜典」「黎民、飢に阻む」、山に岨という。阻とは聖所における阻隔のところをの困難なところ、要害のところを管理した。水に沮、の困難なところ、要害のところを管理した。水に沮、 「周ねくその山林川澤の阻を知る」とあって、 も用いる。 殂 祖(祖) 胙 租素 往来

作 8 主人ののぼるかいだん・きざはし

の席を阼席、主人の前におく饌を阼俎という。に「阼を踐みて祭祀に臨む」とみえる。祭時の主人 こより升るので、 こより升るので、践阼という。「礼記、曲礼、下〕るときの東の階段をいう。天子の即位のときにもこ 「主の階なり」とあり、主人が堂に升 形声 声符は乍。〔説文〕 一四下に 曲礼、下〕

性をのせる台・まないた

に三俎五俎、[儀礼、士昏礼]にヒ俎従設のことが半肉の且上に在るに從ふ」という。[礼記、玉藻]俎であることを示す。[説文]一四上に「禮俎なり。 の象形。俎上に大きな肉きれをおく形は宜である。 会意 且のみでも俎の象形であるが、それに肉を加えて礼 えてこれに代らず」という。 肉の形と且とに従う。仌は肉の形、且は俎

9 しソぬ

録する。金文に段を用いており、乍と且と声義の通古文の字形は乍に従うており、〔汗簡〕にその字を 「帝(舜)乃ち殂落す」とみえ、貴人の死をいう。「往くなり、死するなり」とあり、〔書、舜典〕に ずることが多い。 帷 の意がある。〔説文〕四下に 声符は且。且に徂往

祖。(祖)。 せんぞ・そふ・ おや

A M A (B) (i,i)

る飲餞の礼、 なり」という。郭沫若は且を牡器の象としたが、金文は且を祖の字に用いる。〔説文〕」上に「始願る 字形からいえば、薦俎のための机の形であることは字形に合わぬ説である。その上に肉をおく俎や宜の 外戚伝〕に「易の祖師」の語があり、のち仏教など となり、祖述・祖型・祖本のように用いる。〔漢書、となり、祖述・祖型・祖本のように用いる。〔漢書、 なれ、「有司、祖の期を請ふ」とは、死者に対す既*****、 「有司、祖の期を請ふ」とは、死者に対すにしるしている。且にまた送終の意がある。〔儀礼、にしるしている。且にまた送終の意がある。〔儀礼、 疑いない。〔斉侯鎛鐘〕に、祖を几上に且をおく形 で一派をなす人を、祖師・開祖という。 とをいう。先祖の意よりして、これを規範とする意 声符は且。且は俎の象形であるが、卜文 また祖道・祖餞は、旅立つ人を送るこ

ひもろぎ・たまう・さソ

つ意。〔左伝〕僖九年に「王、宰孔をして齊侯に胙の福肉なり」とあって、祭の余肉を頒表した。〔説文〕四下に「祭 〔詩、大雅、既酔〕 「永く胙胤を賜ふ」 は祚胤。〔説族共餐の儀礼から起ったものである。 また祚に通じ、 殊寵を意味した。〔周礼、大宗伯〕に「脹膰の禮をとという。」というない。これがないないないないないないないないに与えられるのはを賜はしむ」とあり、異姓のものに与えられるのは 文〕に祚を収めないが、両字通用の例が多い。 以て、兄弟の國を親しうす」とあるように、もと同

租10 みつぎ・かりしろソ

意に用いている。古くは租は薦俎として用いるもの 従 鼎] に「鬲從の且を付す」とあって、且を租の weeks * vet * but * れが徴税の大義名分であった。 で、諸税の起原は、概ね祭祀の料に発している。 声符は且。〔説文〕七上に

素 しろぎぬ・もと・もとより・ソ

鸞

澤あるを取るなり」とするが、垂れた部分が糸の上三上に「白の「緻」き繒なり。糸と垂とに従ふ。そのの生地のままで残った部分を素という。〔説文〕 一の生地のままで残った部分を素という。〔説文〕 一 めるので、その部分だけ白い生地のままで残る。そ象形 糸を染めるとき、束の上部を固く結んで染

を擁するものを素封という。〔詩、魏風、代權〕は分のないものを素門・素族、身分なくして王侯の富 びとめた形である。 ずである。索も素と似た字形で、糸の上部を固く結 とは粗飧せず、すなわちご馳走をたべる意となるは 領主の搾取をそしる詩で、「彼の君子は素飧せず」 の色であるから、素性・素養・素質の意となり、身なわち糸の縮頭をいう。白素が染色しない前の本来 もその形に作り、糸頭を両角の形に結んでいる。 の上を、強くねじて結んだ形である。〔輪轉〕の輪 意があるわけはない。金文の字形によると、糸たば 部にあるというのも不審であり、また白素に色沢の す

措 おく・ほどこす・はからうソ・サク

であったが、のち貧土・貧書生をいう語に用いる。 を措大(書生)という。措大はもと秀才をいう語 の使いかたを措辞といい、よく大事を挙措するもの またそのような状態に処置する意に用いる。ことば こと、措置とは手足を伸ばして安んずることをいう。 〔説文〕二上に「置くなり」とは赦す 形声 声符は昔。昔に錯の声がある。

梳 し・くしけずる

いい、辮髪の飾りにするもりでうっこ。までよって記、匈奴伝〕にみえ、〔集解〕に疏比また比疏ともに、といい、〔史 六上に「髪を理むるものなり」とあり、 声符は充で疏の省文。〔説文〕

組

疎(疏)

訴(愬)

詛

をとるものであろう。 の意である。疏通の意 ふ」とあり、 もの、これを疏とい 粗、髪を理むる所以の 注〕に「櫛の大にして すきぐし



粗 精白しない米・あらいソ

である。 すべて粗悪なものをいう。旒・麤と声義の通ずる字 人には粗才・粗率のように用いる。 形声 なり」とあり、粗米をいう。それより 声符は且。〔説文〕七上に「疏

組 くみひも・くむ

爿 組織

組を手にもつ形で、組には経飾のように呪飾とし氏子組」の組の字は縵に作り、且の下に又を加える。ものであり、大なるものを綬という。金文の「號季ものであり、大なるものを綬という。饗は組の細い諸侯より士に至る冠纓のことをいう。纓は組の細い 玉 藻〕に「玄冠、朱組纓は、天子の冠なり」以下、その小なるものは冕の纓と爲す」とみえる。〔礼記、その小なるものは冕の纓と爲す」とみえる。〔礼記、形声 声符は且。〔説文〕一三上に「綬の屬なり。 の意に用いる。 ての意味があったのであろう。概ね織文のものを用 い、組織・組繡という。組織はいま機能的な構造体

疎 二 疏 12 とおる・うとい・あらいソ・ショ 「つらねる

> 通・義疏などのときに、疎を用いることはない。 俗の字の間に、用義上の区別のある例である。 多く通用する字である。また疏通の意より、注疏・ 爻に代って梳の意の夼を加えたものである。[説文] は殆ど疎略・疎忽のときに用いる。上疏・疏書・ 疏の俗体の字であるが、慣用の上に区別があり、疎 上疏のように書名・文体の名に用いる。常用の疎は また硫食・疏布・疏野・疏漏のように用いる。 一四下に「通ずるなり」とし、疏通・疏遠・疏隔、 涎の意で、爻はあらめのもよう。疏は 正字は疏に作り、疋声。疋は 粗と 正 疏

訴12 「愬」は うったえる

饕

「膚受の愬」というのも、 形声 ることをいう。〔論語、憲問〕に「子路を季孫に訴作る。〔説文〕三上に「告ぐるなり」とは、上訴す ふ」とは、讃毀の意を含んでいる。また〔顔淵〕に 声符は斥。斥の初形は節で、字はまた愬に かけこみ式の哀訴をいう。

12 のろう・そしる・ちかうソ

驅 <u>F</u>

形声 り、いる呪詛の意。〔書、無逸〕に「詛祝」、〔呂刑〕 することがないと誓うもので、 に「詛盟」の語があるが、詛盟とは神に対して違背 声符は且。〔説文〕三上に「詶ふなり」 自己詛盟の形式をと

詛祝は、分けていえば、詛を滅うことを祝という。 宋代に出土し、欧陽脩の〔集古録〕に〔詛楚文〕ている。秦の昭襄王が楚王を詛祝する刻石文が、ている。秦の昭襄王が楚王を詛祝する刻石文が、の類であろう。〔左伝〕には詛盟のことが多くみえ を提供した。[左伝]隠十一年に、鄭伯が犬鶏を出を出して「以て爾を記す」とあって、呪詛には供物を出して「以て爾を記す」とあって、呪詛には供物 ることが多い。〔詩、 [左伝] 昭二十年「その善祝と雖も、豈能く億兆人 な関係についても、行なわれていたことが知られる。 として収められており、そのような詛祝が、国際的 させて人を詛祝した話がみえるから、三物とは犬鶏 の詛に勝たんや」とみえている。 小雅、何人斯〕に「この三物 塑〔塐〕 楚 溯[沂] 鼠

す・むくいるソ・サク

を献、客より爵をかえすことを酢という。 行葦〕「或いは獻じ或いは酢す」とは、客に進める 神に対して行なうもので、報祭をいう。〔詩、大雅、

塑 13 土をこねて作る・でくソ

うのはその意であろう。古く殷の帝乙が偶人を作っ人で、焼成を加えない。字はまた紫に作り、素に従れて、焼成を加えない。字はまた紫に作り、素に従れて、人の像などを作る。いわゆる泥塑を声を声をは朔。木骨を心として土をこねて塗り、

の制作が盛んとなった。宋元以後の文献にみえる。教の流行とともに、尊像の需要も急激にふえ、塑像 て天神に象り、これを辱しめた話がある。仏教・道

楚 ¹³ しば・むち・国名ソ

· i 慰 料色楚 林品村

となった。 という語にも用いる。期楚の名は、西、周中期の〔杖いう語にも用いる。期楚の名は、西、周中期の〔杖いう語にも用いる。期楚の名は、西、周中期の〔杖がうだったるものは莢〕とあって、荆棘の類のさまを整を流さず」などは束薪の義。〔小雅、楚类〕に 連言し、また〔過伯殷〕に「反荆」の語があり、楚 漢広」「ここにその楚を刈る」、「王風、揚之れ」「束 が 対なり」とあって、叢木を本義とする。〔詩、 形声 声符は疋。〔説文〕☆上に「叢木なり、 ないが、殷周文化の南辺に沿うて、安徽西部よりている。楚は南方の強族で、その故地を明らかにし より以前には荆と称し、僖公より以後には楚と称し の謀叛することをいう。〔春秋〕の記述では、荘公 いう楚狂接興の〔鳳兮歌〕は、〔楚辞〕の先声をな微子〕にみえる「鳳や鳳や『何ぞ德の衰へたる」となところで、のち〔楚辞〕の文学が生れた。〔論語、なところで、のち〔楚辞〕の文学が生れた。〔論語、な 湖北に入ったものであろうと思われる。巫俗の盛ん たその遺響であろう。 た。〔孟子、離婁、上〕にみえる〔滄浪歌〕も、ますものであるが、その思想もまた楚地のものであっ 声符は足。〔説文〕六上に「叢木なり。一名 周南、

13 [派]。 さかのぼる

水を遡るのが原義であるから、溯あるいは泝の字が その義にふさわしい。 さかのぼる意がある。字はまた遡に作る。 じめの意がある。字はまた派に作る。 形声 声符は朔。朔はついたち、

鼠 13 ねずみ

血」、〔正月〕「鼠憂して以て痒む」は、ともに瘋のさるような字形である。〔詩、小雅、雨無正〕「鼠思泣れである。下文の字は、頭と須の形でそれと知られ式である。下文の字は、頭と須の形でそれと知られる」、鳥四上を「長尾禽の總名」とするのと同じ形名」、鳥四上を「長尾禽の總名」とするのと同じ形名 省文、癙憂(憂える)の意である。 二十文を録する。隹四上を「鳥の短尾なるものの總ぐらの類をも含めたもので、〔説文〕鼠部一〇上には 象形 に「穴蟲の總名なり」というのは、も 鼠の形に象る。〔説文〕一〇上

恕14 うったえるソ・サク

[論語、顔淵]にも「膚受の愬へ(かけこみ訴え)」 愬々たらば、終に吉なり」とは恐懼のさまをいう。 嘆きを歌う。[彖、履卦、九四]に「虎の尾を履む。 往きて愬へ 彼の怒に逢へり」と、棄てられた女の 情をいう。〔詩、邶風、柏舟〕に「しばらくここに の語があり、古籍にみえる字であるが、古い字書に 形声 る。 訴は訴訟、愬は訴えようとする心 声符は朔。訴と同源の語であ

はみえない。「説文」に訴三上の異文とする

16

な・やさい

聖14 「甦」12 「無」16 よみがえる

であろう。更は變(変)と同じく事態を変更させる 後世の造字のように思われる。 呪儀をいう。甦は梁の武帝の文にみえるとされるが、 生の意があるのは、もと魚を蘇息させる法をいう字 更の形で用いられる。更生はすなわち蘇生。蘇に蘇 会意 また蘇。更の初形は竪であるが、のち 更と生とに従う。本字は穌、 彩声 声符は疏。疏に疎大なるものなり」という。〔礼記、曲礼、下〕「稻を嘉疏といる。、心、表」のように、穀実をいうこともある。嘉疏とは神楽」のように、穀実をいうこともある。嘉疏とは神楽」のように、穀実をいうこともある。嘉疏とは神楽」のように、穀実をいうこともある。嘉疏とは神楽」が、水を飲み、拡大が、通用し、〔論語、述而〕「硫食を飯ひ、水を飲み、拡大が、通用し、〔論語、述而〕「硫食を飯ひ、水を飲み、拡大が、通用し、〔論語、述而〕「硫食を飯ひ、水を飲み、拡大が、

遡 さかのぼる

礎 18

いしずえ

とは、孔子の述懐するところである。

を曲げてこれを枕とす。樂しみまたその中に在り」

囕

形声

声符は楚。〔説文新附〕九下に

わない。それで泝と同字であるが、慣用を異にする施の前に遡って及ぶとき遡及というが、泝及とはい異にするところがある。法律行為の効力が、その実 字として改めて録する。 るが、二形ともに行なわれており、 形声 を正字とし、重文として遡を出してい 声符は朔。〔説文〕二上に泝 いくらか慣用を

駔 よいうま・あらい・なかがいソ

粗僧なり 親分というほどの意である。 買をいう字であろう。馬の仲買などで巨富を占め、 に「段干木は晉國の大駔なり」とあり、もと馬の仲 一時の大親分となるものもあらわれた。大駔とは大 形声 声符は且。〔説文〕一〇上に

蘇 よみがえる・しそ・くさかりソ

ものをいい、礎案・礎業のように用いる。

う。建物の礎石の意より、すべてものの基礎となる

「礩なり」とあり、柱下におく石をい

養養 源

めがたい。 れない。国名以外の古い用法がみえず、字義を確か を加え、生気を保たせる意をもつものであるかも知 字を穌に作る。その字形は、あるいは魚に桂荏など また蘇息・蘇生の意に用いる。金文には国名に用い、「桂荘なり」とあり、紫蘇の類であるとする。字は 形声 声符は穌。穌が蘇の初文。〔説文〕一下に

鮂 離 26 かソ む

嵯峨というのと同じく、擬声的な語である。 、「いる」とを齟齬という。不揃いの状態を、 形声 正字とし、虘声とする。上下の歯のよ 声符は且。〔説文〕ニ下に艫を

度 能 33 あらい・そまつ・とおいソ

精密に対して麤雑なものをいう。 魔字条にも「旅行するなり」とあって、鹿には群***。遠なるなり」とあり、鹿のよく走ることをいう。遠な 会意 た麤雑・麤笨の意に用い、麤飯・麤布のようにい 行の性がある。卜文に二鹿に従う字がある。麤はま 三鹿に従う。〔説文〕一〇上に「行くこと超

4 三十(サウ)

して立つ」を、「漢石経」に卅に作る。ト文・金文り。丼せたるなり」という。「論語、為政」「三十に。 会意 であった。縦線の中央に肥点を加えて、数であるこ にこの字形があり、むしろこの形にしるすのが正体 こたるなり」という。 [論語、為政]「三十に十を三つ合せた形。 [説文] 三上に「三十な

とを示している。

叉 つめ(サウ)

礼に従うて、爪や髪の手入れをしないことをいう。 きは蚤蕎せず」とは、国を大去するときは、居喪の 掌を喪ふ」とは、爪ほどの利を争うて大損を招くよう。とな、人略〕に「利を叉甲に争うて、そのいう。〔荀子、大略〕に「利を叉甲に争うて、そのい 〔説文〕 三下に「手足の甲なり」とは、人の指爪を 叉はまた蚤に作ることがある。 ある。〔礼記、曲礼、下〕「大夫・士、國を去るとことをいう。派・叉は同音。爪は鳥獣の爪の象形で 又(手指)の間に、爪のあることを示す。

双4〔雙〕18 ならぶ・ふたつ・たぐいソウ(サウ)

手・双玉・双闕のように用いる。並ぶもののないこ 字の外辺の線を写し、なかを埋める写字法をいう。 とを「国士無双」のようにいう。書に双鉤の法があ 引伸して、 り、筆に中指・食指をかけて運筆すること、また文 二物にして一対となるものをいう。双 〔説文〕四上に「隹二枚なり」とあり、 会意 旧字は雙。雌を手に持つ形。

めぐる・あまねしソウ(サフ)

從ふ」、 すなわち之の反文とする。之はかく、そのに「周るなり」とし、字形を「反之に 象形 に「周るなり」とし、 帯をめぐらす形。「説文」六下

一方 治 有一等一等

\$... \$\frac{1}{2} \cdots

沙、宝 等 答 卷

を包囲することを、〔漢書、高帝紀〕「圍むこと三いい、やはりめぐる意があり、周市と同系の語。城 重ねても市の形とはならない。十二日を「浹辰」と往反によって周市の意をうるとするが、之の反文を えた形と思われる。 がなくて確かめがたいが、帯に彩飾としての巾を加 币」のようにいい、漢以後の書にみえる。古い字形

爪 4 つめ (サウ)

して、爪牙と爲る」の語がみえ、その字は叉と極めのことをいう。〔師克盨〕に「王身を丁吾(守る)いふ」とは、鳥獣がその爪をもって獲物をとるときいふ」とは、鳥獣がその爪をもって獲物をとるとき 字形を異にしている。 て近い。声義は同じであるが、鳥獣と人とによって、 三下に「凡るなり。手を覆すを爪と象形 鳥獣の長爪をいう。〔説文〕

争 6 争]8 あらそうソウ(サウ)

角 よい。これを引き争うことから、争闘・争論・争議 の異なるものである。 文字としての字形は同じであるが、もとの字の構造 の従うところは耒(力)を上下からもつ形である。 ろがあるが、。
*
「靜)の従うところと異なり、静字 などの意となる。古い字形がなく確かめがたいとこ うものとするが、両手の中間にあるものは杖とみて に「引くなり」とし、字形を受(両手)と广とに従いりくなり」とし、字形を受(両手)と「私ない」となる。 会意 旧字は爭。杖形のものを、前

> 壮 (批) つよいひと・さかんソウ(サウ)・ショウ(シャウ)

壯 0

狀(状)・牆などこれに従うものも多く、その字形には、版とみえる。〔説文〕には爿の字がみえないが、斨・るもの、これを奘と謂ひ、耳しし 形声 二系がある。壯の従う爿は、あるいは殷の公族身分 があったことは疑いがない。ただその字形には、 なり」とし、〔方言〕に「秦晉の閒、凡そ人の大な 勇・壮健の意より、すべて盛大なものをいう語とな 十を壯といふ」といい、〔広雅、釈詁〕に「健なり この図象と関係あるものと考えられ、それが戦士集 その蹤迹をたどることができる。將・壯などの字は、 のものが、王朝の軍政に従うて、将軍としても出征 で、公孫の身分を示すものかと思われる。この身分 で王子身分を示し、下の大の形は王子を翼戴する形 上部は牀の形。子字形は左右の手を一上一下する形 を示す図象の豊全から出ているものかも知れない。 築の板とみられるものと、牀の形とみられるものと したものとみられ、サササート形図象をもつ金文によって、 うに用いる。古い用法としては、「詩、 り、壮烈・壮節をいい、また壮大・壮麗・壮観の 旧字は壯に作り、爿声。〔説文〕一上に「大 小雅、采芭

の句がある。 に「方叔(人名)元老 克くその猶を肚にす」

早 はやい・あさ・すみやかソウ(サウ)

常

*

国ソ **名**ウ

「早物」は草物の意で、〔釈文〕に字を阜に作る。く」など、みなその例である。〔周礼、大司徒〕のく」など、みなその例である。〔周礼、大司徒〕の すべてことの速やかなる意に用いる。 匙系の早とは、別系の字である。早朝の意よりして、 「古文、早を蚤に作る」、〔孟子、離婁、上〕「蚤く起 蚤し」、また「儀礼、士喪礼」「日の早晏」の注に、は、「また」(儀礼、士喪礼」「日の早晏」の注に、ともあり、〔詩、豳風、七月〕「四の日(四月)それともあり、〔詩、豳風、七月〕「四の日(四月)それ ともあり、〔詩、豳風、七月〕「四の日(四月)それ扱うのがよい。早の意には、蚤を仮借して用いるこ 仮借して蚤(早)の意に用いる。早をその初義にお の早晩とは、もと関係のない字であるが、その音を 草の字形は、〔呉人石〕の是の形に従うている。日 全形は是であり、匙の初文。〔石鼓文、作原石〕の ているようである。字は匙の形で、その柄をつけた いて用いることは全くなく、従って字は仮借として の意味も明らかでなく、〔説文〕はその字形を失し 甲上に在るに從ふ」とするが、その甲上 「説文」七上に「晨なり。日の

う。周初の〔大保設〕は、景父の叛を伐つことをして、時初の〔大保設〕は、景父の叛を伐つことをして悪國の社はこれに屋す」とあり、これを勝社とい形が宋であるという説もある。〔礼記、郊特性〕に形が宋であるという説もある。〔れま、河をまれているといる。

₩ 6 くさ(サウ)

であるが、 のち草の字と通用する。 両中に従う。〔説文〕-下に

> 走, はしる・かける・さるソウ

稥 龙坡妆

るなり 象形 と訓し、趨字条の「走るなり」とあるのと人が手を振って走る形。〔説文〕二上に「趨

五三九

いても疑問がある。宋は亡殷の後であり、亡国の社以て人を居らしむる所以なり」というが、字形につ以て人を居の義に用いた例はなく、徐鉉は「木は室を成し、を居の義に用いた例はなく、徐鉉は「木は室を成し、を居の義 投一「克く上下帝に奔走す」、また〔詩、周頌、清文の〔大克鼎〕「克く奔走して、天畏を畏れよ」〔爻で、会意的な構造ではない。走はもと祭祀用語。金で、会意的な構造ではない。走はもと祭祀用語。金 形に作るものがある。 駆することを命ぜられている。先駆として除道(道 成 周走亜という職があり、軍中の儀礼に奉仕する等によう。 廟」「駿いに奔走して廟に在り」など、みな祭祀のという。「韓いこ在とのです」で、「「ちなく上下帝に奔走す」、また〔詩、「周頌、清」 の手先となることをいう。漢隷には、走を犬の走る を祓う)のことに任ずるのである。走狗は猟犬、 ろう。 〔令鼎〕 に先馬走の語があり、 王のために先 ものらしく、他に走馬というものも先駆のものであ 下方の上はあし。その部分を分節的に強調したもの なり」とするが、天は頭を傾け手を振って走る形。 互訓。字形について「秀」に從ふ。天止とは屈する

變 9 あしをすくめるソウ

字は、明らかに廟屋中の木の形で、他に用義例のなで、あるいは宋の初文かと思われる。列国期の宋のという。この余の字は余の形と異なり、下は木の形という。

るし、その征命を完うした大保に「余の土」を賜う

一時の小利のためひび薬の秘法を失う不亀手の話な受け、株を守る待ちぼうけの話、苗を抜く助長の話。

い字である。宋人は亡国の余民として愚民の扱いを

どは、みな宋人のこととされている。周系諸族のな かにあって、はげしい差別を受けていたのであろう。

句は〔爾雅、釈鳥〕の文による。〔説文〕は字を鳥もに鳥名〕は醜、其の飛ぶこと變」という。この二もに鳥名〕は醜、其の飛ぶこと變」という。この二形であるから、兇懼疾走の意を示す字とみられる。形であるから、兇懼疾走の意を示す字とみられる。 文、作原石」に鰻の字形がみえ、その凶の部分を鬼變も兇悪の意をもつ神像であるべきである。[石鼓變も兇悪の意をもつ神像であるべきである。[石鼓響] 耜)、田神を祀るものが憂(稷、穀神)であるから、 をとるものでは、粘を頭とする神像が夋(ムの形がの疾走するさまと解するものであるが、この造字法 象形 人を示し、下部は手を振って疾走する 上部は凶で兇懼のことのある

早

原形であろう。兇懼疾走の義は、それより生れたも 頭の形に作る。おそらくその鬼頭に作るものが字の のと思われる。

奏。 かなでる・すすめる・もうすソウ

に玆の、关を易ふ」とあり、关は贈の初文で、またする。それが字の原義であろう。〔毛公鼎〕に「女ならない。それが字の原義であろう。〔毛公鼎〕に「女なり」とあって、奏楽の意と 〔説文〕一〇下に「進み趣くなり」と訓する字である あり、奏楽してのち饗食する。〔儀礼〕の〔燕射〕ときに用いた。〔礼記、玉藻〕に「奏して食す」と送の義がある。奏楽はもと神を降し、また神を送る 添のおそれもある。〔詩、商頌、那〕の〔鄭箋〕にれらは本来の形象を示すものとしがたいようで、続 從ひ中に從ふ。中は上進の義なり」とする。夲も る。〔説文〕一〇下に「奏進するなり。卒に從ひ廾に とみえる。字形は笙などを吹奏する形のようである。教業・奏曲・奏歌・奏鼓・吹奏などが、字のある。奏楽・奏曲・奏歌・奏鼓・吹奏などが、字のある。奏楽・奏曲・奏歌・奏鼓・吹奏などが、字の 〔郷飲酒礼〕の諸儀に、その前後に金奏を用いると また〔説文〕は重文として古文二字を録するが、そ が、奏の字形はそのように分析しうるものではない。 のを奉じ進める形で、神に奉進する意を示す字であ を奉ずる形。下部の天の形は关の省文で、これもも いう。金奏は降神・送神のときに鐘を用いることで 字の上部は奉の従うところと同じく、 もの

> から湊まる、湊集の意ともなる。〔詩、大雅、緜〕を致すことを奏功という。舞楽を合せて献ずること 言・奏書など高貴の人に奉進する意となり、また功 れによって祝禱することをいう。それより上奏・奏 楽に限らず、楽舞を献ずることを奏といい、またそ にみえる「奔奏」は奔走の意で、通用の義である。

制 相 みる・たすける・かたちソウ(サウ)・ショウ(シャウ)

〔説文〕にいう「省視」とはその意に解してもよいばしばみられるのも、同様の発想によるものである。 竹猗々たり(うるわしい)。また〔小雅、南山有いが多く、〔衛風、漢史〕「彼の淇奥を瞻るに善綠ことが多く、〔徐風、漢史〕「彼の淇奥を瞻るに善綠 説くことがない。〔詩、大雅、棫樸〕に「その相を字を会意と解するが、どうして省視の意となるかを 会意 〔万葉〕に「みる」「みれど飽かぬ」という表現がし る意の会意であろう。〔詩〕の祝 頌詩に樹木を歌う その本質にせまる行為を意味するが、字は樹木を視 金玉にす」、また「桑柔」に「その相を考へ愼む」説くことがない。〔詩、大雅、棫樸〕に「その相を が、**
は目の上に呪飾を加え、その呪力によって巡 せまり、祝頌の意を示すものとされた。わが国の とあって、それは本質の意とみられる。みるとは、 なり」とあって、視ることを字の本義とする。また 木と目とに従う。〔説文〕四上に「省視する

> (居るべきところ)を相る」、「礼記、月令」「善く丘【書、召詰」「これ太保(召公)、周公に先んじて宅内在する本質の外にあらわれたものという意である。 のであろう。 呪儀としての相るという行為を、なお残しているも 陵を相る」のように、相地相宅の意に用いるのは、 人相・墓相などのときはソウの音でよむが、それは また助け導く意も、そこから引伸しうるものである。 ことによって両者の交霊が可能となるからであろう。 が異なる字である。相が相互の意となるのは、視る 察省視を加えるものであるから、相とは会意の意味

莊。〔莊〕』 おごそか・さかんなさまソウ(サウ)・ショウ(シャウ)

##

意。また「虢季子白盤」に「戎工(軍事)に蛪武な「隹天朝」に厥の命を集す」とあって、蛪は将大ののちに作られた形声の字であろう。〔毛公鼎〕に している。〔説文〕一下には「上の諱なり」としていを加えた字形に作る。古文の字形はその系統に属いを加えた字形に作る。古文の字形はその系統に属の〔越玄雅〕に、荘公を齧公としるしており、歯に 厳荘の意より、それぞれ転化した用法である。 字であることが確かめられる。荘はその字に代って、 意がある。字の初形は金文に届の形に作る。由は祭 Dを加える字形もあって、そのような儀礼に関する 旧字は莊に作り、壯(壮)声。壮に盛大の

字を改めている。厳荘の義によって、その同義の字当時荘を姓とする人名は、みな厳助・厳安のように に改めて、明帝の諱を避けたものである。 説解を加えていない。後漢の明帝の諱であるので、

草 9 くさ・あらい・いやしい・はじめソウ(サウ)

常

おり、また清の何紹基にも東洲草堂の別号がある。杜甫の浣花草堂、白居易の廬山草堂に、だい。別署原外にも東洲草堂の別号がある。だ。別署原外に、 在野の人を草茅・草莽、その居を草廬・草菴という。手に書く字を草書、倉卒にことを成すを草次という。めるからである。それで詩文の稿を草稿という。早 隠居して自ら楽しむものは、多く草堂を営んで住ん のは、草昧(ひらけはじめ)のときよりことをはじ から、草芥・草萊・草穢という。草創の意に用いる草は艸の意に用いる。雑草は無用蕪穢のものであるとちのみの意と解し、草をその一体の字とするが、 声符は早。〔説文〕一下に早に従う字とし、

0

の关を易ふ」とあり、また〔説文〕人部八上にずる。なり」と訓する。关は〔毛公鼎〕に「女に茲を言うるなり」と訓する。关は〔毛公鼎〕に「女に茲を持げ、人に奉ずる形で送の初文。〔説文〕ニ下に持げ、人に奉ずる形で送の初文。〔説文〕ニ下に 形声 旧字は送に作り、癸声。矣は両手でも のを

> 朕はそれを盤中におく形で、媵・賸・勝などはみするのは、魂振り的な意味をもつものと思われる。であろう。これをもって人に贈遣し、また人を送迎であろう。これをもって人に贈遣し、また人を送迎 〔礼記、曲礼、上〕「使者歸らんとするときは、則奉持する形で、奏や賸系統の字はみなその形に従う。[玉篇]に火種を奉ずる形とするが、すべてものを なその声義を承ける字である。 のは一を中肥の形に作るもので、貝あるいは玉の類 が、もとは送遣を本義とする字である。そのもつも ち必ず拜して門外に送る」とあり、送迎の意とする 女に侯(媵)す」とあって、媵の字に用いる。矣は 送るなり。呂不韋曰く、 有信氏、伊尹を以て

倉 10 くら・ひとや

倉 全 Ð 0 ABB

これを倉と謂ふ」とあって、倉黄という語から字義 また字形を「食の省に從ふ。口は倉の形に象る」と穀の熟する意とするのは、いかにも牽強の説である。 語であるから、字義に関しない。〔繋伝〕に倉黄を 「穀の藏なり。倉黃として取りてこれを藏む。故に するが、金文の字形は を説くが、倉黄はあわてふためくことをいう形況の 象形 穀物などを入れる廩倉の形。〔説文〕五下に

形をそえる。口形の部 避けたもので、下に口 ね、上に覆蓋して雨を 穀物を梱包にして重



の字で、〔素問〕には臟(臓)に倉を用い、五臓を ・3、 という。〔説文〕には藏字を収めていない。〔周 ・3、 という。〔説文〕には藏字を収めていない。〔周 ・4、 にん、注し、 だっ。 を囷という。囷も擔集(集める)の意のある字である 分は坑蔵の入口の形である。倉と藏(蔵)とは通用

叟10〔变〕9 としより・さがすソウ(サウ)

弯門灣

とである。火をあげて物を捜すので捜の字となり、にも童子執燭のことがみえ、平常には童子のするこ 檀弓、上〕に、曾子の疾篤いとき、童子が燭を執った。 ない きょい かまい かまい は多く夜を徹して行なわれるものであった。 [礼記: またものの陰に廋すので廋の意となる。 会意 て隅坐していることがみえるが、〔管子、弟子職〕 の儀礼を司会するものは、長老に外ならない。 るが、又は火をもつ意で燭火、廟中に燭を執ってそ の脈の衰える意であるから、老人の称となったとす 注〕に灾は災であり、手(又)の災とは手首の寸口 ひ灾に從ふ。闕」とする。叟・老は畳韻の訓。〔段 長老を曳という。〔説文〕三下に「老なり。又に從 は廟屋。廟屋中に火を執る者は家の長老であるから、 正字は変に作り、ごと火と又とに従う。

奘 10 おおきい・さかんソウ(サウ)

「大駔」、 弉 〔爾雅、釈言〕に「駔」、玉篇に「大」と訓 下に「駔、大なり」とあり、 声符は肚(壮)。〔説文〕一〇 唐写本に

に与った。 よると、秦・晋(陝西・山西)の間では、人の大な大魁とは大親分というほどの意である。〔方言〕にする。魁は〔説文〕一〇上に「壯馬なり」とするが、 言として残されていたのであろう。サロヤーの上部は牀かし奘はあまり用いられた形迹がなく、秦・晋の方 その集団の身分を示す語であったと考えられる。し 集団で、かれらは近衛部隊として、国の重要な軍政 係があろう。豊全は多子族とよばれる王族出身者の の字は、おそらく殷器の図象標識にみえるササーと関るものを奘または壮とよぶという。壮・奘・将系統 略した形である。 几の形。下は王子を翼戴する人の形、奘はその子を いわば将校集団であった。壮・奘・将は

挿』(插)12 さす・さしはさむソウ(サフ)

で土を掘り、植えこむことをいう。田植えを挿秧、で土を掘り、植えこむことをいう。田植えを挿秧、 花を髪飾りとすることを挿花という。 〔説文〕二三上に「刺して內るるなり」とあり、 形声 すき。土中にものを植えこむ形である。 旧字は插に作り、臿声。臿は *す き

搜1(搜)1(搜)12

さがす・たずねる・えらぶソウ(サウ)・シュウ(シウ)

叟という。ものを探すときにも火燭を執るので、捜 とは暗中を火燭で捜索する意である。「説文」一二上 とにあたる人は、氏族の長老であるから、その人を 形声 廟中に火燭を執る意で、祭時にそのこ 正字は接に作り、変声。変は

> ものであるが、その義は蒐の仮借。捜は捜索・捜求〔詩、魯頌、泮水〕「束矢それ捜し」によって訓したに「衆き意なり。一に曰く、求むるなり」とする。 の字である。

桑 10 くわ(サウ)

大木もあり、晋の公子重耳の説話とされる貴種流離 木なり」とするものであるが、その枝葉の象形とみ木に従ふ」という。蚤は〔説文〕六上に「扶桑 蚤木に従ふ」という。 国期以後は採桑養蚕のことは甚だ盛んとなり、文学 葉上に蚕の結繭したものや、また銅器にも蚕の文様 話がある。養蚕のことは殷代にすでに行なわれ、桑脱走の計画を、採桑女がその樹上でぬすみ聞きする 譚のうちに、公子が斉にあるとき、従者たちの国外 てよい。桑は自然木のままで採桑を行なったので、 にも採桑女が多く登場する。桑林は歌垣の場でもあ が加えられており、その品種も推定されている。列 神話や民俗に多くそのなごりを伝えている。 象形 六上に「蠶の葉を食ふ所の木なり。 桑葉の茂る形に象る。〔説文〕

笊 10 ざる ソウ (サウ)

形声 目が荒くて水の洩れるものであるから、聞いたこと 賜うた品目をあげており、その中に銀笊籬がある。 える。「酉陽雑俎」に、安禄山が玄宗の殊寵をえて「書故」に、米をとぐざるを爪離ということがみられた。 のひらくような形のすくいざるをいう字である。 声符は爪。割り竹で編んだ竹かごで、手爪

蚤10 をすぐ忘れることを笊耳、下手な碁を笊碁という。 上に「人を齧む跳ねる蟲なり」とあって、のみをい形声 一声符は奚。叉は人の爪である。〔説文〕一三 暴暴 のみ・はやいソウ(サウ)

巣ュ【巣】コ サ・すくらう・あつまる

りそろえぬことをいう。

[礼記、曲礼、下] 「蚤鬋せず」とは、爪や髪を切 死を予言する歌を歌ったという。また爪に通じ、

M ¥.

むかし禽獣多くして人民少なく、人は巣上にその難、父は、木上に住んだといわれる。[荘子、盗跖]に、に棲むものをも巣居といい、「高士伝]にみえる巣をいう。穴中にあるものは、葉という。人の木上、紫をいう。穴中にあるものは、葉といふ」とあって、鳥、木上に在るを巣といふ」とあって、鳥 象形 を避けたとするが、 しい時代である。 木の上の鳥の巣に、雛のいる形。〔説文〕 いまは鳥獣に安泰な巣窟のとぼ

悤≒ [忽]。 あきらか・いそがしソウ

曹川 「轉」20 つかさ・ともがら・つれソウ(サウ)

京人 等等

뾀 雙

声符は図。〔説文〕一〇下に「多遠にして

女 虁

草の仮借である。

はく ソウ (サウ)

£

た形に作るものが、その初文であろう。忽卒の義は 金文に蔥衡(玉名)の蔥を、心の字形に一点を加え 義には匆・忽の字を用いる。悤は聰(聡)明の字で、象形でその初文であるから、急遽の義はない。その

もの、 約の意がある。また〔国語、斉語〕に「訟を索むる東矢鈞金は訴訟費用の負担というよりも、神への誓 乃ち朝に致し、然るのちにこれを聽く」とあり、疑い民の獄を禁ず。鈞金を入れしめて、三日にして以て民の獄を禁ず。鈞金を入れしめて、三日にして める器である世に従う。盟誓の辞を入れたものを日言は刑罰のための入墨を加える辛と、盟誓の辞を収言は刑罰のための入墨を加える辛と、盟誓の辞を収 の規定するところによると、東矢鈞金を出して、獄供すべきものが、入れられている。[周礼、大司寇]文。その案のなかには、裁判の当事者として負担提文。その案のなかには、裁判の当事者として負担提 会意 (解決) すべからざるときは、 れしめ、然るのちにこれを聽く。兩劑(契約書)を 司寇〕に「兩造を以て民の訟を禁ず。束矢を朝に入 ついて何の理解もないことが知られる。〔周礼、大 事を治むるものなり。曰に從ふ」とするが、字形に 五上に「獄の兩曹なり。廷の東に在り。棘に從ふ。 といい、曹は二東と曰とに従う字である。〔説文〕 神罰を受けるという内容のもので、これを言という。 自己詛盟形式のもので、もし盟誓にたがうときは、 金を橐に入れて提供し、かつ宣誓を行なう。宣誓は 訟が開始されるという。当事者からそれぞれ束矢鈞 ジ すべからざるときは、坐(裁判の構成)成 三たび禁ずる(和解を勧告する)も、上下 正字は瞽、二東と曰とに従う。東は彙の初

> 語となり、部屋住みの貴公子を御曹司という。曹・曹司という。曹司はわが国では女房部屋をいう 法曹といい、これを一般の官署にも及ぼして、分 よって裁判の要件が整うことを曹という。裁判官を うような廷東の意ではない。また日は宣誓、これに る。東(橐)はそれを入れるもので、〔説文〕の る」とあり、そのとき束矢を入れる定めであっ 小匡〕〔中匡〕にも、束矢のことがみえて

爽 あきらか・さわやか・たがうソウ(サウ)

察

爽

会意 用いられ、たとえば「武丁の爽、妣辛」のようにい としてのものであるから、朱でえがく絵身という方するものであるから爽・奭となる。それは通過儀礼で、文の字となり、婦人のときは両乳をモチーフと 身の形である。焱に従うものにまた爾があり、爾も がさしこむので、昧爽(朝)の爽の意となると解す ついて、叕は窗の交疏麗明の形とし、そこから日光う。〔説文〕三下に「明なり」と訓し、また字形にう。〔説文〕三下に「明なり」と訓し、また字形に 法によった。爽・爽は王后の妣の廟号をいうときに の屍体を祓い、邪霊の憑くのを防ぐために文身を加の左右に加える文身の文様。婦人の死喪のとき、そ また婦人の文身の美をいう語で、美麗の意がある。 ろがない。字は奭と同じく、婦人の死葬のときの文 るが、字の本体である大の字形については説くとこ えるが、その文様は、男子のときは胸郭に加えるの 大と叕とに従う。大は人の正面形。叕は胸

〔史記、日者伝〕に「ト筮するもの、掃除して坐を掃除した室を寢(寝)という。 正寝の意である。 設く」というのも、 子、難三〕に「宗廟をして掃除せしめず、社稷をし 文であり、愛が掃のもとの字であろう。〔説文〕は とを「地を掃うて空し」という。 を掃う酒を掃愁酒、興ざめを掃興、何一つ残らぬこ て血食せざらしむ」とは、国の滅亡する意である。 ・ 特除とはもと廟寝を清めることであり、「韓非う。掃除とはもと廟寝を清めることであり、「紫なな」とないで洗うことをい糞は塵を取ること、灑は水をそそいで洗うことをい 摕の字とし、掃を収めない。帚はもと婦(婦)の初 (掃)= (埽) 旧字は掃に作り、帚声。〔説文〕七下は帚を 神明を迎えるためである。憂愁 11

掃〔掃〕〔埽〕 曹〔曹〕

用いられているのである。

用いられているのである。、
東明とは、朱を以て加えられた絵身の美しさをいう。
「散氏盤」は田土の譲渡契約を内容とするものであるが、もし爽変・爽実のことがあらばするものであるが、もし爽変・爽実のことがあらばませよという誓詞をしるしている。 爽差(だがう)の意があり、早くからその義に用いられているのである。

窓11 (四) 6 (図) 7 (窗) 12

「熄」5 まど・てんまど

廖 四 ⊗ 向

形声 声符は窗、その省文に従う。〔説文〕一〇下ものを函といふ。象形」という。てんまどのことでものを函といふ。象形」という。てんまどのことである。重文として窗と困とをあげる。穴部七下にある。重文として窗と困とをあげる。穴部七下にある。重文として窗と困とをあげる。穴部七下にある。単れなり」とするが、窗の繁文とみてよい。

創12 「柳」8 きず・はじめ

從ひ、倉聲」とする。経籍には多く創を用いる。創傷つくなり。孙に從ひ一に從ふ。創、孙或いは刀に形声 一声符は誊。[説文]四下に办を正字とし、「孙、

ど廃して用いられず、創を創始の意に用いている。出すので、刱始・刱作の意となる。いま刱の字は殆創始の正字は刱。井は鋳型、これを裂いて器をとり創始の正字は刱。井は鋳型、これを裂いて器をとりに創傷と創始の二義があるとされるが、創は創傷。

近2 しぬ・も・うしなう・ほろぼす

图 电路

金意 哭と亡とに従う。哭は祝禱を収めた器団をならべ、犬牲を加えて哀哭する意。亡は死者。死者ならべ、犬牲を加えて哀哭する意。亡は死者。死者が、仮借の用法である。金文には死をも司の意に用い、死・喪などの字を避けることがなかった。また要を葬の意に用い、「別談」に「不淑(死の意)なりしとき、我が家の案(朱)を取りて、以て喪きえられている。また天が災害を降すときにも、方にいう。ト辞には喪衆・喪師をトするものが多いが、夜間など怪異のことに驚いて、群衆が逃亡したりしたのであろう。亡命者あるいは降服したものは、自ら亡人といい、喪人といった。かれらは死喪の礼官ら亡人といい、喪人といった。かれらは死喪の礼官ら亡人といい、喪人といった。かれらは死喪の礼官ら亡人といい、喪人といった。かれらは死喪の礼官ら亡人といい、喪人といった。かれらは死喪の礼官をもって扱われる。管仲が斉の桓公に俘囚として扱われており、没で表して扱われる。管仲が斉の桓公に俘囚としてともって扱われる。管仲が斉の桓公に俘囚として過えられたときにも、一度死者として扱われており、近出の「滅毀」」にも、とりかえした俘人に再生の近出の「滅毀」」にも、とりかえした俘人に再生の近出の「滅毀し」にも、とりかえした俘人に再生の

徒から出たものであることを示している。経典の大部分は葬礼に関するもので、儒家が喪祝の儀礼をしている。喪には多くの禁忌があり、儒家の

惣12 「惣」12 すべる・すべて

べて合せるというような意味の字ではない。惣の字を用いるが、それは惣の異体字で、物心をす端を総にして結び、聚束するのである。わが国では端を総にして結び、聚束するなり」とあり、糸の末〔説文〕 | 三上に「聚束するなり」とあり、糸の末近を

惚12 「惚」14 きそいあらそう

であろう。惚はその俗字。 いう。得んと欲するも容易にえがたいという意の字所の門に惚恫す」とあって、出仕を競い争うことを形の門に惚恫す」とあって、出仕を競い争うことを正字は惚で恩声。[地朴子、交際]に「官

僧12 こしき・かさねる・かつて・すなわち

曾山里山里山

(段設) に「王、聖。(地名) にありて蓋。 然、祭名) 象形 こしきの形で飾の初文。八は飯の上に湯気の上る形である。〔説文〕ニ上に「詞の舒やかなるものなり」とし、「すなはち」というゆるい承接を洗き、湯気の上る形で、釜飯をいう。金文に「管子おき、湯気の上る形で、釜飯をいう。金文に「管子おき、湯気の上る形で、釜飯をいう。金文に「管子おき、湯気の上る形で、金銭をいう。金文に「管子おき、湯気の上る形である。「説文」ニ上に「詞の舒やかなる

世義である。 「すなはち」「かつて」などの語詞の用法は、みな仮 重ねたものの意があり、層重・増益の意に用いる。 重ねたものの意があり、層重・増益の意に用いる。 ですなはち」「かつて」などの語詞の用法は、みな仮 ですなはち」「かつて」などの語詞の用法は、みな仮 ですなはち」「かつて」などの語詞の用法は、みな仮

東東 12 なつめ (サウ)

本でである。 東を重ねた形。〔説文〕七上に本席である。 「横という。「左伝」 荘二十四年「女の贄は榛栗棗脩に過ぎざるのみ」とあり、脩は乾肉の野は榛栗棗脩に過ぎざるのみ」とあり、脩は乾肉の野は榛栗棗脩に過ぎざるのみ」とあり、「は乾でいう。「左伝」 荘二十四年「女のけるそのを棗脩という。「左伝」 荘二十四年「女のける様栗棗脩に過ぎざるのみ」とあり、脩は乾肉のかってある。

凑 12 あつまる・みなと・いたる

とあり、物資の集まることを輻湊という。 凌集の義とする。〔広雅、釈詁〕にも「會まるなり」 とあり、物資の集まることを輻湊という。

12 ほうむる (サウ)

HA

上入 12 【比入】 13 よそおう・おさめる (シャウ)

上版 形声 声符は壮(壯)。〔説文〕八上版 に「裹むなり」とあり、〔段注〕に「その外を束ぬるを装といふ」とする。字が衣に従「その外を束ぬるを装といふ」とする。字が衣に従う。表具のことを装潢、書物には装釘という。いまされている。

僧13【僧】14 そうりょ

形声 旧字は僧に作り、賞声。梵言 の僧伽 Sangha を略した語。「説文新聞」八上に「浮屠道人なり」という。浮屠は仏、仏附」八上に「浮屠道人なり」という。浮屠は仏、仏附」八上に「浮屠道人なり」という。浮屠は仏、仏内ではたが、幼名は賤しむものをもって名づけると、名づけたが、幼名は賤しむものをもって名づけると、名づけたが、幼名は賤しむものをもって名づけると、名づけたが、幼名は賤しない。

子 3 ソウ(サウ)

嫂13 「嫂」1 あによめ

につかえるものであるから、叟に準じて嫂とよばれ謂ひて嫂と爲す」という。兄嫁は家刀自として祭事るものをいう。〔爾雅、釈親〕に「女子、兄の妻をが、「大族の長老た」という。 下声 正字は竣に作り、姿声。変は

五匹六

は甚だ重要なものであった。

札13 おもう・ねがう

根や 下声 声符は相。〔説文〕一〇下に 「冀思するなり」とあり、その形容を 想いうかべることをいう。〔史記、屈原伝〕に「その書を讀み、その人となりを想見す」とあり、また 「雑氣、形想すべきに似たるあり」とあり、謝論説 「江中の孤嶼に登る〕の詩に「崑山の姿を想像す」 の句がある。もと形態に即したものであるが、のち 想念・思想のように用いる。

13 いたむ・かなしむ

搔 3 かく・さわぐ

(財風、静女)「首を掻いて踟蹰(徘徊)す」という。 は、まじょ げしいとき、髪を掻くなどの動作をもいい、〔詩、 る意があり、爪で掻くほどの意であろう。悲痛のは る意があり、爪で掻くほどの意であろう。悲痛のは いいとき、髪を掻くなどの動作をもいい、〔詩、 という。蚤に爪切

が、いまは特定の意味に用いる。は、髪を掻くに用いるからである。のち搔爬というは、髪を掻くに用いるからである。のち搔爬というのはげしくなやむ意である。また簪を巻き

滄 3 ソウ(サウ)

をするような大きな変化を、滄桑の変という。 「寒きなり」というのは、〔逸 周書 「寒きなり」というのは、〔逸 周書 「寒きなり」というのは、〔逸 周書 にも「滄々涼々」の語がある。もと ったなり、滄海・滄流のように用いる。滄海が桑田に をなり、滄海・滄流のように用いる。滄海が桑田に をなり、滄海・滄流のように用いる。滄海が桑田に

葱 13 「蔥」15 ねぎ・あおいろ

いう。金文に蔥衡(佩玉)を賜う例が多い。 一下に「菜なり」とあり、ねぎをいう。[正字通]に本白を白、末青のものを袍というとみえ、その両に本白を白、末青のものを袍というとみえ、その両に本白を白、末青のものを袍というとみえ、その両があった。正字は蔥に作り、悤声。[説文]形声 声符は忽。正字は蔥に作り、悤声。[説文]

増 3 たこ・あしたかぐも (セウ)

層 14 【層】15 かきなる・だん

されるのは、恥ずべきことである。

下海 旧字は層に作り、賞っ。曾は 「説文」八上に「重屋なり」とあり、重層の家層は〔説文〕八上に「重屋なり」とあり、重層の家をいう。ト文・金文に、図象的にしるした重屋の形がある。すべて重畳するものをいい、層雲・層機がある。すべて重畳するものをいい、原雲・層機がある。すべて重畳するものをいい、層雲・層機がある。すべて重畳するものをいい、「荘子」が最も多くりかえす修辞を層畳法といい、「荘子」が最も多くりかえす修辞を層畳法といい、「荘子」が最も多くの大巧で、わが国の祝詞や、オリエントの古代宗教文学に、その手法がみられる。

槍 14 ツウ(サウ)・ショウ(シャウ)

るが、世字条二上にも「搶くなり」とあって、そのなり」とあり、けずねの字を以て解すが、 上に「駐」

権両族は茶人の最も珍重するものであった。 本の新芽を槍、そのやや開いたものを旗といい、一茶の新芽を槍、そのやや開いたものであるから、 なり」とする。槍でふり獲うようにすることを をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ をがある。「説文」はまた「一に曰く、槍もて推っ。

曹 14 はこぶ・こぐ

山東の栗数十万石を、都に漕運させたという。 漕運の義に用いるのは漢以後のことで、漢の高祖は変に開いるのは漢以後のことで、漢の高祖はない。字は春秋期の地名にみえる。 を転、水運を漕という。字は春秋期の地名にみえる。 を運

漱 14 ソウ

形声 声符は軟。〔説文〕一上に に「諸母には裳を漱はしめず」とあり、くちすすぐ、 ことをいう。ものを洗う意にも用い、〔礼記、曲礼、 洗い、またすすぎ洗いをいう。〔晋書、孫楚伝〕に、 をは才藻卓絶の人であるが、あるとき隠居の志をの をは才藻卓絶の人であるが、あるとき隠居の志をの だようとして、枕石漱流というべきところを、誤 べようとして、枕石漱流というべきところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤 でようとして、枕石漱流というできところを、誤

第 14 ほうき (サウ)

いうので、竹を加えて作られた俗字。ただ帚は古く形声 - 声符は著。帚がその初文。竹の帚であると

う幻の木である。 信濃の国みなその原にあるといれる字で、郷木は、信濃の国みなその原にあるといれる字で、郷木は、信濃の国みなその原にあるといれる字で、郷木は、信濃の国みなその原にあるといれる字は、44

約 14 へ・いとかけ・すべる

総は「總」ないないふさいむすぶ

聡は【聰】17 さとい・きく

の意とした。聡明とは、耳目の明察なるをいう。にす」とあって、悤を用いる。のち耳を加えて耳聡とあり、明察をいう。〔大克鼎〕に「厥の心を悤 襄とあり、明察をいう。〔大克鼎〕に「厥の心を悤 襄をあり、明察をいう。〔大克鼎〕に「際の心を悤 襄にを

を 14 おおい・しげる

灣

形声 声符は倉。「説文」「下に「艸の色なり」とあり、水の色を滄というのに対して、草の色をいう。人たり」「深々たり」「蒹葭蒼々たり」、下章に「凄々たり」「深々たり」はみな草の茂るさまをいう。人たり」「深々たり」はみな草の茂るさまをいう。人たり、「然なたり」はみな草の茂るさまをいう。人たり、「然なたり」という。

遭は「遭」5 あう・めぐりあう

形声 声符は曹。曹には二人相並ぶ がある。[説文]ニ下に「遇ふなり」 とあり、期せずして会うことをいう。遭遇の意より して、時勢によって人の進退が定まり、運命が決せ られる意となる。君臣が時をえて相遭うことを遭際 られる意となる。君臣が時をえて相遭うことを遭際 さいい、また遭逢という。文天 祥の「零ご洋を過 でる詩」に「辛苦遭逢一經より起る 干文落々たり での詩」に「辛苦遭逢一經より起る 干文落々たり

噌 15 こえ・みそ)

という。また未概としるすのはあて字であろう。 は味噌の字に用いる。みそは韓土の方言に由来するり」とあり、市井のやかましい声をいう。わが国でり」とあり、市井のやかましい声をいう。わが国できた。

槽 15 かいばおけ

「馬槽なり」とみえ、槽櫪ともいう。 (獣)の食器なり」とあり、〔玉篇〕に (獣)の食器なり」とあり、〔玉篇〕に まるま

瘡 15 かさ・できもの

より分化した字である。 とり分化した字である。 傷あとを瘡という。傷あとにかさができることが多く、瘡疥・瘡疹・瘡腫はできものをいう。 創まり分化した字である。

痩15 やせる・ほそい

文相 15 はこ・車のにうけ・こめぐら

けの箱をいう。〔詩、小雅、大東〕は殷人の子孫が 事の牝服なり」とあって、車上の荷受 形声 声符は梢。〔説文〕玉上に「大

か」と、収穫の多いことを祈っている。 光る)かの牽牛 以て箱を服けず」と、名実の異なる世相を恨む。農穀を収めるものをもいい、〔詩、の搾取をにくむ詩であるが、「院々たる(美しく周の搾取をにくむ詩であるが、「院々たる(美しく周の搾取をにくむ詩であるが、「院々たる(美しく

族 15 みつまる・まぶし

噪 16 さわぐ (サウ)

おする。 「大力」である。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。 「大力」でなる。

保 16 うれえる

らざるなり」とし、〔詩、小雅、白華〕「子を念ふこて神に祈るのである。〔説文〕「○下に「愁へて安かて神に祈るのである。〔説文〕「○下に「愁へて安かである。集は多くの祝禱の

とという(サウ)の句を引く。〔詩〕はいま「惨々」にと懐々たり」の句を引く。〔詩】はいま「惨々」にといった。他にも〔陳風、月出〕〔小雅、正月〕〔北山〕「月出でて照たり(校人燎たり)がとして表紹たり(労から)の惨は、懆の字に改めてはじめて韻に入るもので、もと懆に作る字であったことが知られる。

操 16 とる・みさお・おもむき

、保 16 みらう・すすぐ

「手を洒ふなり」とあり、澡沐の意。形声 声符は桑。〔説文〕ニー上に

たものを澡麻といい、喪服に用いる。湯屋のことを漂覚という。また牡麻をうって白くし

艘 6 ソウ (サウ)

る字である。 漢魏以後の文献に至ってみえを数えるのに用いる。漢魏以後の文献に至ってみえを数えるのに用いる。漢魏以後の文献に至ってみえを数えるのに用いる。漢魏以後の文献に至ってみえを数えるのに用いる。漢魏以

炯 17 かわく・こげる

形声 声符は繋。案にはせわしくさいのすることを燥物といい、思うような表現がでいますること。乾燥すること。乾燥することによって堅固となる性質のものがあり、燥剛・まがの語がある。また人の心情の上に移して、いらずることを燥物といい、思うような表現がでいらすることを燥物という。

17 いぐるみ・や

に糸をつけ、鳥の羽にからませるもの。その象形字 射なり」とあり、いぐるみをいう。矢 りをあり、いぐるみをいう。矢

もいぐるみの矢をいう。 いずれ「増矢・茀矢はこれを弋射に用ふ」とあり、いずれは"繳、合せて 増繳をいう。 [周礼、司弓矢] には"繳、合せて 増繳をいう。 [周礼、司弓矢] には"繳、合せて 増繳をいう。 [周礼、司弓矢] には散いない。 ないでは伯叔の叔、また叔善は古くれば、

だ 17 むらがる・あつまる・ささだけ

形声 声符は族。族に族集の意がある。「史記、 で「太簇」に作り、「簇なるものは湊なり。萬物始に「太簇」に作り、「簇なるものは湊なり。萬物始に「太簇」に作り、「簇なるものは湊なり。萬物始に「太簇」に作り、「簇なるものは湊なり。東記、新知、大、地に湊りて出づるなり」という。漢以後に放集の意がある。「史記、

和 17 しも (サウ)

18 むらがる・あつまる・くさむら

大声 声符は取。 学は掘撃の器で、 でう。 農生の草をいう。 は合を養生、いい、樹 声の字。 農生の草をいう。 は合を養軟といい、樹 声の字。 農生の草をいう。 は合を養軟といい、樹 本中の社を養社・業詞という。 すべて叢聚するもの を叢雲、集成したものを叢書、その残余のものを叢

(乱) は骨べらで糸の紊れを解き治めるので、「乱」確証とされるものであるが、 、 気がみだれる、 亂 屈原の代表作とされる。楚巫の集団的活動のなかからだ。(一体に「騒」とよばれるものがあり、〔離騒〕はの一体に「騒」とよばれるものがあり、〔離騒〕は は慅の仮借、乱治は字の正訓にすぎない。 なり」「亂は治なり」の二条があげられるが、 む」とは字の正訓である。反訓の証として「騷は憂 くの誤解である。たとえば「亂は治なり」は反訓の ではない。反訓によって、中国の古代の訓詁のうち るが、その義は慅の仮借であるから、 があり、騒擾の義と相反するので反訓であるとされ ら成立したものであろう。騒に愁なり、憂なりの訓 であるが、やはり騒擾が字の本義であろう。楚賦馬を摩くなり」というのは、蚤に掻の義をとるもの 弁証法的思惟がはたらいているとするのは、 形声 文〕一〇上に「擾るるなり。一に曰く、 旧字は騒に作り、 わゆる反訓 蚤声。 〔説 全

艘

19 あおいきれ・くるソウ(サウ)

言・繰り返し、また繰人形のように用いる。糸と意にも用いる。わが国ではその義に用いて、繰り とあって、それが字の本義。繰繭のように糸繰りの 操とを合せた字とみたのであろう。 紺や濃紺の布をいう。〔広雅、釈器〕にも「青なり」 ・「帛の紺の色の如きものなり」とあり、 声符は桑。〔説文〕一三上に 釈器〕にも「青なり」

藻 19 〔薻〕18 も・あやソウ(サウ)

漢に作り、巢(巣)声とし、形声 〔説文〕 「下に正字を

文藻・才藻といい、作品を詠藻という。 となって、藻絵・藻麗といい、五采の糸で通した玉 藻をその一体の字とするが、藻の字形が用いられて を玉藻といい、また文彩・文章をいう語となって、 いる。水藻の意より、その文様的な美しさをいう語

藪

両者にかなりの異同があるが、〔説文〕は〔周礼、藪名をあげる。〔爾雅、釈地〕に十藪の名があり、 は、文学にもしばしばみえ、司馬相如の〔子虚のの地として知られる叢沢の地である。殊に雲夢の遊の地として知られる叢沢の地である。殊に雲夢の遊 〔淮南子、墜形訓〕に九藪をあげており、みな遊猟 職方氏〕の説による。他にも〔呂氏春秋、有始〕 に「大澤なり」とあり、以下に九州の 声符は數(数)。〔説文〕一下

> 藪はまた叢林の地をもいう。 賦〕には、楚王畋猟の盛んなさまを叙して いる。

賴 ひたいソウ(サウ)

類という例はない。稽頼はいわゆる頓首、叩頭の礼に、とあるが、金文には「顕(稽)首」といい、稽、礼」「拜して稽頼す」の注に「頭、地に觸れて容無・見は額、東斉では頼というとする。[儀礼、士喪中 夏は額、東斉では頼というとする。[儀礼、士喪・ をいうものであろう。 また。 東斉では頼というとする。【雑礼、土喪東斉では頼というとあり、領は額。【方言】に、「領なり」とあり、領は額。【方言】に、「歌」を、「説文」九上に形声 声符は柔。「説文」れ上に

課 20 さわぐ・よろこぶソウ(サウ)

神に祈ることをいう語であった。 〔左伝〕定十年にみえる。譟はもと、さわぎ立てて せると、孔子が毅然としてその非礼を退けた話が、 のとき魯の定公を佐け、斉が萊人を鼓轢して乱入さとあり、群呼してさわぐをいう。孔子が夾谷の会とあり、群呼してさわぐをいう。孔子が夾谷の会 ましく祈る意がある。〔説文〕三上に「愛 器であるobを木の枝につけた形。やか形声 声符は美。乗は多くの祝禱の

躁 はやい・あわただしい・さわぐソウ(サウ)

なるをいう。〔淮南子、主術訓〕に「人主は靜漠にある。〔広雅、釈詁〕に「疾きなり」とあり、躁急形声 声符は奏。彙にはせわしくさわがしい意が なりやすいので、躁怒・躁忿・躁狂などの語がある。して躁ならず」とみえる。躁急のものは心が暴虐と

窻

竈 21 かまど ソウ (サウ)

冥は井に祀り、后土は中雷(雨だれ落ち)に祀る」は戶に祀り、祝融は竈に祀り、蓐收は門に祀り、玄は戶に祀り、成融を祀る」という。〔左伝〕昭二十八年「句話・たき・き・ま 電を正形とし、「炊竈なり」とし、「周禮に、竈を以 に竈に作る。杜子春、 とみえる。造次はあわて 大祝〕の六祈の第二に造があり、注に「造は故書 とそれぞれの神の祀所をいう。祝融は火神であるか ら、これを竈に祀る。字は造と声義通じ、〔周礼、 声符は竈の省文。〔説文〕七下に黽に従うて 竈を讀んで造次の造と爲す」

「秦公鐘」に「下國を寵 有す」「四方を匍有す」 る竈は秦公の器にみえ、 る。 〔説文〕 の正字とす ること、草率の意であ

竈(漢代)

では「禹賚(迹)に帰宅すとある部分を、〔秦公段〕 正字とするところは、奄有の奄に相当する字と考え 空気抜けのある蓋で覆う意であるから、〔説文〕のる。発有の意である。奄は黽を覆う形の字で、竈はる。 れ、年末には鄭重にこれを祀ったものである。その の成績を上帝に報告するというので、大いに畏敬さ 配祀される。年末には上天して、家族の年間の功過 られる。竈神は老婦とよばれる婦人の神で、竈王に 」「四方を寵有す」

八年 ちゅうないなど

採点基準を功過格という。

21 頭にものをのせる台・ざるソウ

るものである。この字に「やぶ」の訓はない。 定させる環状の竹器。わが国では大原女などの用い 意がある。〔説文〕五上に「炊きものの箋なり」とがた髪を乱す意で、編みあげたものの は婦人が頭上に物を載せるとき、その台に用いて安 声符は敷(数)。数は編みあ

鰺²² [鱢]²⁴ あじ ソウ(サウ)

地名があり、〔新撰字鏡〕に「阿知」、〔倭名頻聚地名があり、〔新撰字鏡〕に「阿知」、〔倭名頻影という名あじに用いる。〔続日本紀〕に「鰺生野」という縁はその一体の字で、わが国では魚のMany) 青筴魚というものであろう。 〕には鱢を出して阿知と訓している。中国では 正字は鱢に作り、腥い意。

ゾウ

造『【造】』 いたる・つくるゾウ(ザウ)

鎚

愈贱

会意 字の初形は艁・鰩などに作り、盤(舟)に 籔 鰺(鱢) ゾウ

造(造)

像

增[骨]

慥

借して、 う。〔麦尊〕「終に用て徳を注す」も、みなけば、関うの意があり、〔髪段〕「拜して頃(稽)首し、天す」の意があり、〔髪段〕「拜して頃(稽)首し、天す」の意があり、〔髪段〕「拜して頃(稽)首し、天神意によってことが成就するので、造にまた「呉神意によってことが成就するので、造にまた「呉神意によってことが成就するので、造にまた「呉神意によってことが成就するので、造にまた「呉神意によってことが成就するので、造にまた「呉神恵」となった。 をいう。おそらく慥の仮借義であろう。また曹に仮 「造次顚沛」の造次は、草率(にわか)の際のこと 主宰のものを造物主・造物者という。〔論語、里仁〕 ぶものはないから、自然を造化・造物といい、その 深造という。およそものを作る力は自然の妙工に及 端・造始とい 造の貯を監嗣せよ」は、新しく屯倉を設ける意。す 賓客に造る」、〔儀礼、士喪礼〕「西階の下に造る」って祝禱する意である。〔周礼、司門〕「凡そ四方のって祝禱する意である。〔周礼、司門〕「凡そ四方の のがその初義。(周礼、大祝)の六祈に「造」があって、造る意に用いる。造とは廟に造って祝禱するって、造る意に用いる。造とは廟に造って祝禱するに饗し、用て寮人(従者)に廢(供食)せん」とあまれ となり、造営・造成といい、ものを始めることを造 なわち造作するをいう。それよりものを製作する意 して用いるものであるが、西周後期の「頌鼎」「新 は、みな儀礼の場所に臨むことをいう。神に祈り、 り、〔礼記、王制〕に「禰に造す」とは、父廟に至 文の字形と同じ。〔令彝〕に「用て王の逆造(出入) が合わない。古文として艁の字形をあげており、金 て訓し、成就の義とする。また告声とするが、声える意。〔説文〕ニ下に「就るなり」と畳韻をもっ の艁を略した字形に従うものと解してよく、往き訴 入れたものを廟前に薦め訴え禱る意である。造はそ 獄訟における両曹を両造という。 い、その奥所に至りうることを造詣・

> 像 14 にる・かたち ソウ (ザウ)・ショウ (シャウ)・ヨウ (ヤウ)

「像、書の室に設けたり」など、「楚辞」に多く用いふ」、「橘頌」「置きて以て像と爲さん」、「招魂」ったらしく、「楚辞、懐沙」「志の像あらんことを願ったらしく、「楚辞、懐沙」「志の像あらんことを願みて養字の養の若くす」とする。もと楚の方言であみて養字の養の若くす」とする。もと楚の方言であ ている。様と声義の関係があるものと思われる。 形声 るなり」と訓し、象声とし、 声符は象。〔説文〕ハ上に「似 また「讀

增 14 [增]15 ます・くわえる・かさねるソウ

置

する語であった。 「增長逆流」の語があり、仏教語にも「増上慢」がて増大・増加の意に用いる。〔後漢書・桓帝紀〕にて増大・増加の意に用いる。〔後漢書・桓帝紀〕に り」と増益の義とするが、積み累ねる意。のちすべものを重ねる意がある。〔説文〕一三下に「益すな 形声 ある。増上はもともとは刺激を与える増上心を意味 旧字は増に作り、曾声。曾はこしきの形で、

慥 14 せわしい・たしかにゾウ(ザウ)

が国では「慥かに」の意とする。されるが、ひたすらそのことに従う意であろう。 爾たらざらん」とは、言行の一致する篤実なさまと心意を含む字であろう。[中庸]に「君子胡ぞ慥々 祈る意より、そこに到る意に用いる字である。その 声符は造(造)。造は廟前にものを供えて わ

憎 14 (僧)15 にくむ・はばかるゾウ

ゾウ

り、憎みてその善を知る」、また〔管子、覇言〕に悪をいう。〔礼記、曲礼、上〕「愛してその惡を知い」とあり、憎している。 外なり」という。みな箴言的な語である。憎には、 「聖人の憎惡するや、內なり。惡人の憎惡するや、 いや増しに憎いというような感じがある。 形声 旧字は憎に作り、 曾声。○説

臧 4 よい・おさめる・しもべ

「詩、邶風、雄雉」「何を用て臧からざらん」、〔小雅、 子、騈拇〕に「鍼と穀と、二人相ともに牧して、と臣は臣僕。戦争などによる俘虜を臧獲という。〔荘 ときに藏(蔵)に作ることがある。〔漢書〕では藏をぞ臧からざらん」など、みな善の意に用いる。字は 甫田]「我が田既に臧し」、〔十月之交〕「ここに何 みな臧に作る。字の原義は臣によって示されており、 もにその羊を亡ふ」の臧穀は、臧獲と同じく、しも はあるいは俘虜とした臣を、聖器をもって祓う意で べ。古陶文に、戕の下に祝禱の日を加えている字形 あろう。ゆえに臧獲という臣僕の意と、また清めら である。 **・ ** などもその意を示す字であるが、 臧 れたものとして臧善の意をもつのであろう。 声符は戕。〔説文〕三下に「善なり」とあり、 戕は聖器としての兵器をもって清め祓う意

> 蔵 5 (藏) 18 くら・かくす・たくわえるゾウ(ザウ)

弓、上〕に「葬なるものは蔵なり。蔵なるものは、従ふは、後人の加ふる所なり」とする。「礼記、校総鉉の按語として、「漢書に通じて臧を用ふ。艸に 人の見るを得ざるを欲するなり」とあり、蔵匿の意 徐鉉の按語として、「漢書に通じて臧を用ふ。 である。 能をかくすことを蔵光、書の筆鋒をあらわさぬもの であるから、臧とは別義の字である。ただ蔵がどう 疾という。蔵して楽しむべきものは、書画文房の具 は臣僕の逃亡者が、草野の間にかくれる意であった は隠匿の義であり、臟も盗蔵のものである。あるいして蔵匿の意となるのか明らかでないが、その初義 を蔵鋒、怒りをうちに包むを蔵怒、悪をかくすを蔵 かも知れない。人の行迹を示さないものを蔵跡、才 形声 文新附〕一下に「匿すなり」と訓し、 旧字は藏に作り、臧声。〔説

贈』(触)19 おくる・はらうゾウ・ソウ

體 一月丁卯、王、畢(地名)にありて烝(祭名)す。は曾とかかれ、〔段鹍〕に「これ王の十又四年十又もと魂振りに用いる玉器をいう字である。贈の初文もと魂振りに用いる玉器をいう字である。贈の初文もと神本。 送るなり」というが、もと悪霊を追い払う意をもっ 儀が行なわれている。[周礼、男巫]「冬、堂贈す」戊辰、曾す - とあり、冬祭の烝の次の日に、曾の祭成に、常な、世界の景の祭の名の次の日に、曾の祭 文] 六下に「玩好(手遊びのもの)相形声 旧字は贈に作り、曾声。〔説

> 王、拜してこれを受く。乃ち四方に舍萌(釈菜」に「季冬、王の夢を聘ふ。吉夢を王に獻ず。の〔杜子春注〕に「痰を逐ふを謂ふなり」、また 他に移して、これを祓う方法である。死者におくる 祭)して、以て惡夢を贈る」とあり、悪夢や悪疫を 意味をもつものであった。 ものを賻贈というが、これももと祓邪の意を含んで いたものであろう。贈りものは、一般に魂振り的な

臓 1 (臓) 2 はらわた

古くは蔵を用いたが、 形声 声符は蔵(藏)。五臓六腑、内臓をいう。 のち臓を用いる。

1 25 (贓) 21 かくす・まいない・盗品ゾウ(ザウ)

脊

形声 瑞〕にみえる。驪私汚職のことは、官民あって以来、た物をいう。驪かは智べ、すでに〔列子、天 るなり」とあり、また賄賂を受けること。盗んでえ形声 正字は贓に作り、臧声。〔玉篇〕に「藏す 絶えることのないものである。

ソク

仄 4 かたむく・ほのか・いやしいソク・ショク

文の字は矢に従うており、 会意 だと人とに従う。 重

R

なることである。 中するや、仄す」とみえ、それならば日影が斜めと 声義による字である。〔逸 周書、周祝解〕に「日の人の厂下に在るに從ふ」というが、側頭ならば矢の れならば大声である。〔説文〕カ下に「側傾なり。 ¥ 「縛るなり。口木に從ふ」とするが、いわゆる束薪

束 7

つかねる・たば・つつしむソク

2. 不多的人

大 かたむくソク・ショク

* *

束帯、礼物のときは束脩という。脩はほし肉、

い

きは束矢などを提供する定めであった。また束髪・ があり、一定数を一束とする表示である。獄訟のと の形。金文に「帛束」「絲束」「矢五束」のような語

薪などを合せて束ねる形。〔説文〕六下に

≬*

ቑ

まの「のし」にあたる。結束・緊束のようにも用い、

また身をつつしむことを謹束という。

ときは呉、神を娯しませる意となる。〔説文〕一〇下どをいう語で、もし祝禱の器である豆を奉じて舞うとまた。 人が頭を傾けている形。祭のときの舞容な ঽ タシーの状態となることをいう。みな頭を傾けてい 〔説文〕 一〇下に「屈なり」とあり、祝禱してエクス に「傾頭なり」とし、その天屈の姿勢をいう。夭も いわゆる「かぶく」形である。

足 7

あし・ふむ・たす・たるソク

息。 つく・すなわちソク

B P®

用い、同一の関係、速やかな状態にいう。 「命に卽く」という。 形式をしるすものに「位に卽く」、命を受けるとき 『下を節にして節食の意とするのは誤る。金文の冊命 「説文」 玉下に「食に卽くなり」とあり、〔段注〕に で、その食器の前に坐ること、席に即くことをいう。 文献にみえる簋で盛食の器。1は跪坐する形 旧字は即に作り、皀と口とに従う。皀は 坐に即くを即坐、また副詞に

せまる・うながすソク・サク

ある。卜文・金文では正・足・疋の形が近く、その

ため文が誤読されていることがある。

を正らしめんか」「帝は雨を正らしめ、年あらしめの関節の形。下辞では正と同形にかかれ、「帝は雨足なり。下に在り。止口に従ふ」とするが、口は除り、「いいない」とするが、口は除り、「いいない」という。「説文」 ニ下に「人のいった。「説文」 ニアに「人のいった。「説文」 ニアに「人のいった。「いいない」という。「いいない」という。「いいないない。「いいないないない。」 しばしばみえるこの形は疋で佐胥、補佐をいう語で んか」など、みな「足る」の意である。また金文に ₽° Ş

促。

る意を示すもので、〔説文〕 八上に形声 声符はキャ。 人の背後に人の迫

のようにいう。 「迫るなり」とあり、督促・催促・促進のように用 いる。短促の意にも用い、 人生を「促々たる百年」

則。〔删〕15 のっとる・すなわちソク

常影 開婚界外 剔 剔

とみえ、重要な契約は蜂銘にしるすことを規定して び萬民の約劑を掌る」「凡そ大約劑は宗彝に書す」六国以後のものである。〔周礼、司約〕に「邦國及六国以後のものである。〔周礼、司約〕に「邦國及 楚文〕にもなお字を馴に作っており、正篆の字形はるもので、古文の第一字はその略形。[石蔵文][# ろう。両剤・約剤の斉は薫の省文で、巓とは方鼎をねていることもある。いわゆる両劑(剤)の意であ 「説文」は鼎部七上に「籀文は鼎を以て貝と爲す」 [説文]四下に「物を等畫するなり。刀に從ひ、貝 する意。いわゆる銘文で、重要な契約事項は鼎銘と 会意 である。金文には字を劚に作り、ときには両鼎を重 とするが、鼎が本来の形であり、貝はその省変の字 契約を鼎銘に刻すること、 割する意とするが、金文の字形は鼎に従うており、 いる。金文には官職冊命、賜与褒賞をはじめ、 いう。両鼎に同文を銘して、契約の当事者が保有す に從ふ。貝は古の物貨なり」とし、物貨を等分に分 して保存し、それが証書的な機能をもつのであった 正字は쀎に作り、鼎側に刀を加えて文を刻 いわゆる約剤である。

束 足 促 則(鵬)

は、「アレハコレハの則ち」という。 「レバ則」、また列挙してものを区別する別事のとき うにいう。のちの文章では、上が条件であるときは は行為の儀節の間に「則ち拜す」「則ち誓ふ」のよ ることを則傚という。また承接の詞に用い、金文に それで典型・法則・常則の意となり、これに準拠す ものであるから、不変の規範とすべきものであり、 ことができる。鼎銘は桑器に銘して祖霊にも告げる 土地の授受の方法などについて、詳細な事実を知る その用益権者など利害関係者を含む境界の画定や、 氏盤〕には土地人民の侵害に対する土地の譲渡と、 しだ。 との時償裁判とその履行の実際について、また〔数での賠償裁判とその履行の実際について、また〔数しるすものなどがある。〔晉鼎〕は寇禾事件についしるすものなどがある。〔晉鼎〕は寇禾事件につい 人民の授受や境界の画定、争訟事件の経過や裁定を

息 いき・そだつ・いこう・やむソク

用いる。〔荘子、大宗師〕に「眞人の息するや踵をぐなり」とあり、また大息・嘆息など、息つく意に 子をいう。そこから利息・利子の意となった。 浅の異なるをいう。生息・慈息(ふえる)の意に用 以てし、衆人の息するや喉を以てす」とは、息の深 が気息にあらわれる意である。[説文] 二〇下に「喘気会 自と心とに従う。自は鼻の初文。心の状態 いる。〔戦国策、趙策〕に「老臣の賤息」とあり、

捉10 とる・とらえるソク・サク

> 溺死したと伝えられる。 捉るという。李白は酔うて江中の月を捉ろうとして、 捉る、激したときは臂を捉る、不快なときには鼻を 追う意、これに及ぶを捉といい、把捉するをいう。 り」という。いずれも畳韻の訓である。促は後より 転じてすべて手にとることをいう。急ぐときは髪を 「溢むなり」とし、「一に曰く、握るな

速』(速)』 すみやか・まねくソク

訟をいう。〔大盂鼎〕に「罰訟を飯敕す」という語 ば東薪、獄訟ならば東矢であり、青は盟誓の辞で獄を速く」は、みな獄訟に関している。東は祭祀ならを譲く速く」、〔左伝〕閔二年「身を危くして以て罪を獄に速く」、〔左伝〕閔二年「身を危くして以て罪のである。また〔詩、召南、行為〕「何を以てか我のである。また〔詩、召南、行為〕「何を以てか我 諸父を速く」とあり、〔叔家父驚〕にも、「以て諸兄とれ、ととない。〔詩、小雅、伐木〕に「以てとを示すとみてよい。〔詩、小雅、伐木〕に「以てとを示すとみてよい。〔詩、小雅、戊ロヤン 言部に収めている。言に従う字があるのは、この字と同字であるかも知れない。〔玉篇〕にはその字を 言に従う。古文の字は、金文の〔小臣聴毀〕の聴 形声 があり、勅戒の意。これもまた獄訟についていう語 である。 を速く」の語がある。みな祭事に参加するよう招く が何らかの祝禱の儀礼に関係のあるものであったこ いう。重文として録する籀文は軟に従い、古文は軟

声符は足。〔説文〕 ニニ上に

声符は束。〔説文〕ニ下に「疾やかなり」と

唰 11 かたわら・ほのか・そばだてるソク

棉

た仄・特の意に用いる。メームンー、トールンー、トールンー、とあり」とあり 形声 「旁なり」とあり、 声符は則。則に鼎側の意がある。〔説文〕 正に対して側という。ま

侧 12 いたむ・かなしむソク



孫丑、上〕に「惻隱の心は仁の端なり」とあり、 形声 ***た。「痛むなり」とあり、悲傷する意。〔孟子、下に「痛むなり」とあり、悲傷する意。〔孟子、 人の身になって思うことをいう。 畑むなり」とあり、悲傷する意。〔孟子、公声符は則。則に測の意がある。〔説文〕一〇

測 12 はかる・おしはかるソク

らず」とあり、もと水深を測ることをいう字であっ り」という。〔淮南子、原道訓〕に「深さ測るべか とを推測という。 た。のち測量・測候・測定に用い、また推量するこ る。〔説文〕二上に「深さの至る所な 声符は則。則に準則の意があ

ゾク

9 ならい・よのつね・いやしゾク

と 野生瀬の できょう かんしょう こうこう ある 変を変わる 気がし

たいまでは、この身を干音(孜畝)せよ」など、みなど、毛父、人名)の征に從へ」、「毛公鼎」「乃の族を以ゐて、或(國)を伐たしむ」、「班骰」「乃の族を以ゐて、或(國)を伐たしむ」、「班骰」「乃の族を以ゐて、東京、「以北。」(文)。 大大島 「八人の族を違はして東京、「大人島」「八人の族と以及て、王の身を干音(孜哉)、金文には疾い。多子族・三族・五族などの語があり、金文には疾い。 そえる字形があり、その儀礼的な意味が確かめられ盟の儀礼を示す。ト文には下に祝禱の器であるoffをその氏族軍をいう。族の初義は氏族軍、その宇は結 る。氏族以外の用義は、みな仮借である。 ては必ずその族旗を奉じたもので、遊・旅の字はみ族の標識とするところであるから、出行するに当っ 古代の軍旅は族を単位として編成され、ト辞に王 な旗に従う。その旗を奉ずるものが、族人であった のがあり、 み、誓の古い字形には、矢を折った形と言に従うも、**゚ いて盟誓的な意味をもっている。矢は「矢う」とよいい、設ごとに一箭を賜うたとあり、矢は軍礼におり。〔唐書、突厥伝〕に、国を十部に分って十設とう。〔唐書、突厥伝〕に、国を十部に分って十設と 後起の字。族とは氏族旗のもとに結集するものをい 鏃の意にして簇集の義とするが、鏃は形声の字でやだり 七上に「矢鋒なり。これを束ぬること族々たり」とおる軍士であり、その族人たるものである。〔説文〕 族旗のもとで誓約を行なうものは、氏族の構成員で たるものであり、矢は矢誓を意味する字である。氏 立誓の法を示すものとみられる。旗は氏 これを東ぬること族々たり」と

栗

こくもつ・あわ・かてゾク

南来 真架

**

属。望といい、字はまた嘱を用いる。

ますことを属耳、

わずかに人に望みを託することを

を属文・属辞、壁に耳をつけて他人の語を聞きす

無を確かめることを属績という。

文を連ねること

意に用いる。死者の口に軽い纊をあてて、気息の有属するもの、直接に接触するもの、附属するものの 虫ではない。牝牡相属することよりして、すべて連

いう字である。その虫の形は牡器の象形であって、 牡獣、数とは牡獣の性器を殺って、去勢することをの従うところの蜀で、獨はその匹をえざるところの もなお人の構精するを属という。蜀は獨(独)・ り」とし蜀の形声とするが、形声の字ではない。 ゆえに連属の意となる。〔説文〕ハ下に「連なるな

す形であるから、屬とは獣の牝牡相連なるをいう。

のの辟を以て囏(艱)に陷れざらしめんことを俗なり、 でいい。 文では欲の意に俗の字を用い、〔毛公鼎〕「女の、 文では欲の意に俗の字を用い、〔毛公鼎〕「女の、

いい、その神霊に接することを願うを欲という。金気のあらわれることを示す。その神霊のさまを容と ある。谷は祝禱の器であるDの上に、彷彿として神 俗を問ふ」とは、俗の禁忌とするところを問う意で

所なり、また〔礼記、曲礼、上〕「國に入りては民を馭む」の注に、「禮俗は昏姻喪紀、輩より行ふ「風俗なり」という。〔周礼、大宰〕「禮俗以てその「風俗なり」という。〔周礼、大宰〕「禮俗以てその「風俗なり」という。〔84、

八上に「習はしなり」と習俗の意とし、〔玉篇〕に

声符は谷。谷に容・欲の声がある。〔説文〕

属12 (屬)21 つらなる・ともがら・したがうゾク・ショク

会意

従う。 尾は獣の牝、蜀は獣の牡器を示 旧字は屬に作り、尾と蜀とに 뺽

会意

族

属(屬)

粟

続[續] 氏族軍の象徴 10 10 1

義ともに異なるもので、別系の字である。 承されることが多い。俗の従う谷は、川谷の谷と声

俗にわたることもあるが、もとは神霊に接すること から起り、その民俗や祭祀儀礼のうちに、古俗が伝

風俗をなし、礼俗をなす。土俗のことは、俗悪・鄙のの欲するところは同じであるから、それは習慣的に ある。共同の信仰をもつ集団や地域においては、そ であり、神に祈って、そのことの実現を求める意で を俗す」のようにいう。すなわち俗・欲はもと一字(欲)す」「我の、先王の憂を乍(作)さざらんこと

続13 (續)21 総称としても用いる。

つぐ・つづく 声。賣は寶の省文で、正字は形声 旧字は續に作り、賣

雅、生民〕に「誕いに嘉種を降す」とあって、禾黍まず文として三肉に従う字形を出している。〔詩、大重文として三肉に従う字形を出している。〔詩、大

の名を列する。粟はゾクの音でよむときは、穀類の

七上に「嘉穀の實なり。歯に從ひ、米に從ふ」とし、象形 上部は粟など穀類の実のある形。〔説文〕

五五五五

また正に対して続ということが多い。 連続・続行などの義には、この字の方がふさわしい。 義は属に近いが、糸の連なる意であるから、継続・ 続の意をもつ字であるが、続とは別の字である。声 なり」と訓し、重文として寮をあげている。寮も寮 もと貸に従う字であった。〔説文〕「三上に「連なる

賊 (賊)13 そこなう・あだ・わるものゾク

爰、鍰、罪金)千・罰千ならん」という自己詛盟、氏盤」に「余に、散氏を心に賊とすることあらばるが、則は声符でなく、鼎銘そのものである。〔散 こ、則は声符でなく、鼎銘そのものである。〔散〔説文〕 二下に「敗るなり、戈に從ひ、則聲」とす 会意 賊と爲す」とは、本来は彜銘を刊落することであっ 行為をいうもので、〔左伝〕文十八年「則を毀るを 賊とは、故意に銘文を刊取し、その契約を破棄する とができず、その部分を刊落して用いたのであろう。 らかの不都合な理由があって、これを廟中におくこ に刊りとったと思われる例がときにみられるが、何 銘を刊りとる意を示す。金文には、人名などをのち の語があり、その字は則の上に戈を加えていて、鼎 れを戈で刊りとる行為を賊という。すなわち鼎銘とで、彝器に銘して神霊の照鑒をえたものである。そ その鼎銘としてしるすところは、重要な誓約のこと して加えた盟約を、破棄する行為をいう字である。 人を賊害する意にも早くから用いられ、 正字は鼎(貝)と戎とに従う。鼎は鼎銘。 また諧

> のありかたを示している。 このような文字の成立した背景としての、氏族社会 ものではなく、族盟や盟誓の破棄者をいう語であり いう。 り、賊とは鼎銘を刊ってその盟約を破棄するものを 毀する意にも用いるが、みな転義である。盗賊の盗 血盟を穢し、族盟を破棄する違反者のことであ 盗賊とは、他人のものを剽窃する窃盗をいう

鏃 やゾ じり

ものであろう。〔説文〕は族七上についても「矢鋒を篇矢といふ」とあり、〔説文〕は軽利の意とする 注〕「鏃矢輕利なり。小なるを鏃矢といひ、大なる する。〔玉篇〕に「箭の鏃なり」、〔呂氏春秋、貴卒、公配 ある。〔説文〕一四上に「利きなり」と 形声 声符は 族。族に族集の意が

文とみているが、族なり」とし、鏃の初 矢鋒の訓は鏃に対し は族盟の字であり、

て施すべきものである。

ソツ

卒 しぬ・おわる・ついにソツ・シュツ

突 **₹**

象形 衣の襟の一端を結びとめた形。死者の衣を

夫死するを焠といふ」とするが、卒がその初文、 いるので卒という。死卒の字はず部四下に「焠、大らの服するところは、衣の前を結んでその形が似て をつけたもので、受刑者などの服役するさまをいう 加えられている一を題識とし、法被のようにしるし卒衣とは題識あるものなり」という。すなわち衣に 死者の霊が迷い出るのを防ぐのである。〔説文〕 は後起の字である。 す。それで卒終・急卒の意となる。また下僕・役卒 と解するが、字は死卒の意で、卒とはその卒衣を示 いう。死没のとき、襟の前に交わるところを結んで、 衣のあわせるところに斜線を加えて結ぶ意を示 隷して事を給するものの衣を卒と爲す。 焠*大

率 (率)11 ひきいる・したがう・おおむねソツ・シュツ・リツ

您然

ことから率尽(すっかり)の意となり、 すなわち鳥繝の形であるとするが、その義に用いた撃なり。糾罔に象る。上下はその竿柄なり」という。るときの作業であろう。〔説文〕一三上に「鳥を捕るるときの作業であろう。〔説文〕一三上に「鳥を捕る る意。旁にみえるものは水滴である。強くしぼる 例がなく、字形もまた鳥網の形とはみえない。金文 通し、これを拗じて水をしばる形で、麻糸などを作 の字形によると、糸束を拗戻している形で水をしぼ 象形 糸をしぼる形。糸束の上下に小さな横木を 率従(従

准夷を率さ ることが多い。 る用義である。軍征のときには、特に達の字を用い せよ」のように用いる。みな字の原義より引伸しう の友(友官)を率以して、王の身を干吾(扞敔) 「不廷方(まつろわぬもの)を率懐す」、「師詢殷」 「不廷方(まつろわぬもの)を率懐す の意となり、率領(ひきいる)の意となる。の意となり、率領(ひきいる)の意となり、率領によいたり、「馬鼎」に「南により、本領(ひきいる)の意となる。

6 ある・いきる・ながらえる・おもう・とうソン・ゾン

器としての士(鉞頭の形)をそえ、その地を聖化するものであり、在の初文である。在はその標木に聖つけた標木で、神の占有支配を榜示する。 すと子とに従う。ずは祝禱を であり、また存続・存置の意となる。本来的に存す ど、すべて性命に関することをいうにふさわしい語 聖化されたものをいう。存神・存心・存命・存養な 原義とはしがたい。字は存亡の存。存在は事物の根 るものを存といい、そのままの状態にとどめること 元に関するものであるが、 〔説文〕「四下に「恤ひ問ふなり。子と在の省とに従 生存を保証する魂振り的儀礼であろうと思われる。 において、これを聖化する儀礼を示すもので、その ふ」とするが、存間の語は秦漢以後のもので、字の ることを示す字である。存とはおそらく生子をここ いずれも聖標識によって

> と韻し、「楚辞、遠遊」に伝・然・先と韻している。である。〔詩、鄭風、出其東門〕に門・雲・巾・員である。〔詩、鄭風、忠をきたり。 だっぱい ないまい はんけい ままにすること、捨てておく意 をもいう。〔荘子、斉物論〕「六合の外は、聖人存

付 はかる・おしはかる・おもうソン

るなり」とは、忖度の意である。 これを忖度す」とみえる。〔説文新附〕一〇下に「度ながある。〔詩、小雅、巧言〕に「他人心あり」ないがで、長さをはかる 形声 声符は寸。寸は手の指四本を

村、「邨」で むら・いなかソン

う。 る。陶淵明の〔田園に帰るの詩〕に「曖々たり遠人 の村」というのが、早い時期のものである。 下をただ「地名」とするのみで、字義に及んで 、朝以後にみえ、唐宋に至って多く用いられ (広韻) に「野なり」とあり、田野や聚落をい 屯に屯聚の意がある。〔説文〕に邨六米が本。 ・シネー・声符は寸。正字は邨に作り、 いな

孫 まソごン

STANCE OF THE ST 隔

義のとき、尸として立つときなどに、これを加えた金章 子と系とに従う。系はおそらく呪飾で、祭

孫

ろう。荃はまた蓀に作り、荃・蓀はともに霊脩と に愆と韻しており、【楚辞】にみえる荃と同声であその尸は鬼頭に似た字形である。【詩、小雅、楚茨】 父(祖)の尸と爲る」、また〔曲礼、上〕るもので、〔礼記、祭統〕に「夫れ祭の道、るもので、〔允郎 し、ゆえに呪飾をつけた形で示されるのである。 もよばれる霊媒者である。孫も尸たることを本義と は両旁に呪飾が施されており、それが系糸である。 されるものがあり、またその繁文とみられる字形に その尸たる子と思われる字形に、甲子の子の初文と に曰く、君子は孫を抱きて、子を抱かず」という。 その孫たるものが尸として神位にあって祭を享けりとして髪の間から垂れている。祖祭のときには、 思われる。婦人には繁纓を加えることがあり、敏はいるものが多く、儀礼のとき加える呪飾であろうと 繁纓を加えた形を繁という。その糸(系)も、髪飾 婦人が祭祀に奉仕する姿をいう字であるが、それに ト文・金文の字形は、腋下のあたりから系が垂れて によってそのような関係を示すことは困難である。 血統の継続することを示すと解するのであるが、系 子に従ひ系に従ふ。系は續なり」とする。系はその のであろう。〔説文〕「三下に「子の子を孫といふ。 上〕に「禮 孫は王

尊 12 (尊)12 さかだる・とうとぶ

記録 两 两两两 滑 関

礼」にみえる六尊の名をあげている。〔周礼、司尊なり。酋に從ふ。廾は以てこれを奉ず」とし、〔帰これを置いて祀るのである。〔説文〕 四下に「酒器 礼によって、 は酒尊(樽)の意より、尊卑の意に用いる。尊爵の き、「寶隆壺」「寶隆鼎」のように、器種にかかわら 神梯の前におく形で、金文では作器・器名をいうと 礼に用いるものは、みなこれを際という。際は尊を 酒器としての尊のほかに、凡そ彝器として祭祀・儀 奪〕〔小宗伯〕に、祭祀・賓客に用いる酒器とする。 寸または廾に従うて、これを奉ずる意。神霊の前に器。上部に酒気のあることを示して八を加え、下は ずに障を加える。祭器というほどの意であろう。尊

第が定まるか その尊卑の次 て用いる。 て、尊を冠し のち敬語とし らであろう。

鸮尊

巽 したがう・そなえるソン

解辨

拝跪する姿勢をとる形。丌は神殿前の舞台である。会意 字の初形は、批と丌とに従う。批は二人が すなわち二人が舞台で並んで楽舞し、神に献じてい る形で、撰の初文である。〔説文〕五上に「具はる

がなく、 〔巽卦〕に用いる諸義は、巽の本義を承けるところ ことである。随う、譲るの訓は悉の仮告。〔易〕のませるといい、饌といい、その舞う人を僕といい、舞容をといい、書いい、また。 で舞楽を献ずる形。それで神前に供薦することを撰い。卩は人の拝跪する形、��は二人拝舞、異は舞台 形や巽及びその系列字について、理解に達していな はこれに從ふ。闕」として説解を加えず、二卩の字 概ね仮借義による。

飧 12 めし・ゆうげソン

に予、子に粲を授けん」というのは、いわゆる据え牢・五牢の規定がある。[詩、鄭風、緇衣]「還やか牢・五牢の規定がある。[詩、鄭風、緇衣]「湯やか とは限らぬようである。「周礼、掌客」に、 「左伝」昭五年に「飧に陪鼎あり」とあって、食余 聘礼、鄭注〕に「禮を備へざるを飧といふ」とする。 で、饔が正食、飧にはその残余を用いた。[儀礼、で、饔が正食、飧にはその残余を用いた。[儀礼、に投じて解散するなり」という。当時は一日に二食 えるが、〔釈名、釈飲食〕に「飧は散なり。水を中飧は孰食なり。朝を甕といひ、夕を飧といふ」とみ とうで、上」に「饗飧して治む」とあり、注に「饗きずさ、上」に「饗飧して治む」とあり、注に「養ないない。 五下に「餔なり、夕食に從ふ」と晩餐の意とするが、 膳を歌うものであるが、粲を〔伝〕に餐とし、〔釈 文〕に飧をあげる。みな通用の字であろう。 文。粲・餐と同系の語である。〔説文〕 夕と食とに従う。夕は肉の省 飧三

> 13 る・そこなう・うしなう

損するのか、あるいは円鼎そのものを毀損するのか、 述べている。損益はもと増減の意。〔論語、為政〕 蹇にして、足を毀損するをいう。おそらく鼎足を損なお明らかでないが、孔門の閔損は字は子騫、騫はなお明らかでないが、孔門の閔貴は字は子騫、騫は く偽っていうことを損年という。 とを〔荘子、山木〕に「絕學損書」といい、年を若 という。自己をおさえることを損己、書を廃するこ 者三樂」とあり、楽にもまた損益の道があることを する意であろう。〔論語、季氏〕に「益者三樂、損 し、員声とするが、声が異なる。円鼎中のものを減 ろうと思われる。〔説文〕 三上に「減らすなり」と 殷は夏の禮に因る。損益するところ知るべきなり」 会意 文で円鼎。この円鼎を減損する意であ 手と員とに従う。員は圓の

愻 したがう

麗 0 \$ C.S.

文の〔者辺鐘〕に「愻學」の字がみえるが、文が孫にして以て勇と爲す者を惡む」のようにいう。金 「論語、衞霊公」「孫以てこれを出す」、「陽貨」「不 順の意に用いるものであろう。 残欠していて文意を知りがたい。おそらくすでに遜 くが、今本は孫に作る。経籍には殆ど孫の字を用い、 し、〔書、舜典〕「五品(人倫)愻はず」の文を引形声 声符は孫。〔説文〕一〇下に「順ふなり」と

遜 のがれる・ゆずるソン

の用語である。 という。見おとりすることを遜色というのは、のち して用いる。位を遜ることを遜譲、逃げ口上を遜辞荘元年「夫人、齊に孫る」など、みな遜の義に仮借 孫を用いる。〔詩、大雅、文王有声〕「厥の孫謀を治は「遯るるなり」という。経籍には遜光の字にみなは「遯るるなり」という。経籍には遜光の字にみなは「遯るるなり」とあり、〔爾雅、釈言〕に、遣、 す」、〔論語、衛霆公〕「孫以てこれを出す」、〔春秋〕

鱒 23

うものであろう。巽と声義の近い字である。

ことを蹲々というのも、腰をかがめるその姿勢をい う。蹲踞は礼にかなわぬ姿勢とされる。起って舞う

形声

声符は奪(尊)。〔説文〕ニド

に「居するなり」とあって、

蹲踞をい

うわ さ

て「傳、聚まるなり」とする。〔三家詩〕は字を傳という語があり、その〔釈文〕に〔説文〕を引い 声的な語とみられる。 に作る。噂沓は噂々沓々、口やかましくしゃべる擬 ゆるうわさ話。〔詩、小雅、 吗。〔詩、小雅、十月之交〕こ「に「聚まりて語るなり」とあり、 形声 声符は尊(尊)。〔説文〕ニ上 月之交」に「噂沓」 ずわ

たる・さかだる

酒食の間の外交によって、敵の威をしりぞけること 甕の酒樽を罇という。 声符は尊(尊)。尊は酒尊。

19 うずくまる

> 他 ほか・よそ・ふたごころタ

「王、顧みて他を言ふ」など、古くから用いられて 山の石。以て玉を攻むべし」、〔孟子、梁恵王、下〕 戸がある。他とは他人をいう。〔唐風、山有戸がある。他とは他人をいう。〔詩、鄘風、柏戸符は也。世のもとの形は它であり、也に 他

> て、也は他。典籍にも古くは也・它を用いていたのであるが、〔羋伯殷〕に「自也邦」という語があって「誰かなり」という。卜文・金文にもみえない字で「誰かなり」という。卜文・金文にもみえない字 加えて他の字となった。 であろう。它は蛇の象形の字であるから、のち人を いる字であるが、〔説文〕に収めず、〔玉篇〕に至っ

它 5 へび・ほか

〔詩、小雅、鶴鳴〕の「他山の石」を、[釈文本]が加えられることの有無をトしているのである。 他の初文。他は它の形声字である。

だいにに作り、ほかにもそのような例が甚だ多い。 禍の有無を卜して「告無きか」といい、「父乙は王後になっての」を無きか」というのと同じ。卜辞に災る。のちの「言無きか」というのと同じ。卜辞に災る。のちの「言無きか」というのと同じ。卜辞に災 冤曲垂尾の形に象る」とし、「上古艸居して它を患きない。から、「上古艸居」では、これではなり。虫に從ひて長し。」 の害をいうものではなく、その呪霊によって、災禍 に壱するか」のように、祟の意に用いる。草間の蛇 故に相間ひて它無きかといふ」と相問う辞とす 象形 蛇の形で蛇の初文。〔説文〕

風土記〕に鱒魚を献じた話がみえる。 「逸文肥後間に川を溯り、急流に至って産卵する。 〔逸文肥後間に川を溯り、急流に至って産卵する。 〔逸文肥後

處々にこれあり」とするが、ますならば五・

魚であるという。李時珍の説によると、「鱒魚は暖(細かい網)の魚、鱒魴」とみえる。赤眼細鱗の

「赤目魚なり」とあり、〔詩、豳風、九 罭〕に「九

に従うこともある。「説文」ニー下に

形声

声符は尊(尊)。字はまた巽

多6 お**お**い・ まさる・あまる

R D H

重夕、重日の説はいずれも字形に当らず、 意である。〔説文〕七上に「重ぬるなり。重夕に從 会意 「重夕を多と爲し、重日を聲と爲す」とするが、 二夕を重ねる。夕は肉の省略形。 多とは多 肉の多い

多能・多識のようにいう。 文・金文は多に従う。もと牲薦の肉の多いことをい 肉をいう。宜七下は俎上に肉をおく形であるが、ト のちすべて繁多なるものを多言・多感・多事・

汰

義の通ずるところがあり、奢ることを汰侈という。 〔左伝〕昭元年に「楚王汰侈なり」としるしている。 次、沙礫をえらびわけることを沙汰という。泰と声をかった。 を一声符は太。水で洗いわけることを陶汰・淡

詫 13 ほこる・あざむく・わびるタ

が国ではわびる・かこつなどの意とする。もと侘び 達生〕に「門に踵りて子扁慶子に詫ぐ」とあるのが形声 一声符は宅。宅に寄託の意がある。〔荘子、 字をそれにあてたのであろう。 ごと、かなしく嘆くことから詫びる意となり、詫の 古い例である。のち誇る・欺くなどの意に用い、わ

ダ

5 うつ・たたく

るが、丁は打・ 頭語として、打聴・打量・打睡のように用いる。わるが、丁は打・釘の初文。のち動詞の前につける接 こ上にみえ、「撃つなり」とし、丁声とす の形。 会意 それを撃ちこむ意である。「説 手と丁とに従う。丁は釘の頭

を接頭語として用いることがある。 が国でも「うち聞き」「うち興ずる」など、「うち」

朶。〔朵〕。 しだれる・えだ・うごかすダ

自ら誇った語である。 めて、朶雲というが、もとは唐の章陟が、その書ををするのを朶願という。他人から寄せられた書をほ とう こればい みてよく、その垂れているさまを朶という。その揺ゅ 穂の秀でる形である。朶の上部は秀の下部と同じと木に從ひ、象形。これ采と同意なり」とする。采は木に從ひ、象形。 れ動くさまが、頤と似ているので、食べたいようす 象形 文〕六上に「樹木垂るること朶々たり。 木の花が垂れて動く形。〔説

兌 7 よろこぶ・われをうしなう・かえるダ・エツ・タイ

货 71.0

「皇矣」では抜と韻し、「鬼谷子」には決と韻する例「凡に從ひ合声」というのは声が合わず、字は台・凡に從ひ合声」というのは声が合わず、字は台・別がなり、と訓するのはその意であるが、A下に「説ぶなり」と訓するのはその意であるが、 といい、 会意 示す。巫祝はそのとき我を失った状態となり、 に用いる。のち兌換の意に用いるのは、唐代に兌便がある。字は脱と悦との意を含んでおり、その両音がある。字は脱と悦との意を含んでおり、その両音 が乗り移ったりするのである。その状態を脫(脱) るうちに、 八と兄とに従う。兄は祝。祝禱して神に祈 その忘我の境を悅(悦)という。〔説文〕 神気が髣髴としてあらわれてくる状態を 神気

> すなわち切手の意に用いた語のなごりである。 ほとんどその語にのみ用いる。 ま

妥7 (妥), やすらか・おだやか・くだるダ

4

拜して 尸を安んず」とあるのが、原義に近い。程字である。〔儀礼、少牢饋食礼〕に「祝、主人、皆字である。〔儀礼、少牢饋食礼〕に「祝、主人、皆に「安坐するなり」というが、もと綏撫を意味する 会意 補入して「安んずるなり」と訓する。〔爾雅、釈詁〕 これを綴んずる形。〔説文〕にみえず、 妥結といい、適切であることを妥当という。 度の適当であることを妥帖といい、話合いを妥協・ 手と女とに従う。女の上から手を加えて、 「段注本」に

吃 ななめ・くずれるダ

のは、 い、その系統の連語として〔職職字典〕に録するもあり、みな同系の語である。連語としては季陀とい ま。字はまた陁に作る。〔説文〕一四下に灺の字があ 文で、屈曲して平らかでないことをいう。陀羅はこ 形声 り、「小崩なり」、 〔玉篇〕に「陂陀、險阻なり」という。它は蛇の初 八十三語に及んでいる。 声符はだ。〔広雅、釈詁〕に「邪めなり」、 また隊一四下に「落つるなり」と

娜 しなやか か

美しさをいう。 賦〕に「華容娜々たり」とあり、女人のしなやかな意があり、娜はその繁文である。曹植の〔洛神の形育 声符は那(那)。那に阿那(しなやか)の

会意

雫

しダ ず く

(拏) もつ・とらえる

の字にも拿を用いる。 の説解が互易している。 って、挐字条の訓が拏・拿の義であるらしく、 撃字条に「持つなり。一に曰く、誣ひるなり」とあいられる。〔説文〕 二上に「牽引するなり」、またいられる。〔説文〕 形声 その俗字であるが、 正字は拏に作り、奴声。拿は 拿破崙はナポレオン、 いまこの字形が用 拿炸両 捕¤条

とするが、

, 隓は隳廃の字である。堕には堕落・堕涙

声。〔説文〕 一四下に正字を隓り、隋 旧字は墮に作り、隋

と堕闕・堕損の意があり、

後者は隓と同じ声義であ

るが、前者と声義が異なり、転音の関係も考えがた

いものであるから、もと別の字であろう。隋は裂肉

腥

院士 12 【隋二】15 【隓】13 ダ・キ 「おちる

古くは滴・液・瀝などの字があてられていた。葉〕にその語は多くみえるが、雫の字はみえない

唾 つば・つばはく

壺・唾盂をおくことをたしなみとした。掌という。六朝の士人は談論を好み 掌という。六朝の士人は談論を好み、牀上に唾を唾罵・唾面、元気よく仕事にかかるのを唾手・唾で、つばをいう。人を罵るときに唾を吐きかけるのて、つばをいう。人を罵るときに唾を吐きかけるの のの意がある。〔説文〕ニ上に「口液なり」とあっ の下に垂れる形で、落ちるも 形声 声符は垂。垂は華葉

大祝」にみえる「隋釁」は、聖所における呪禁のを聖所に埋める意で、左は呪祝を意味する。[周礼、を聖所に埋める意で、左は呪祝を意味する。[鳥礼、

方法として行なわれる血祭であるが、それは聖所を

師・舵公・舵工・舵子という。「舵後生風」とは、 右行して進むもので、方向舵をいう。舵とりを舵形声 声符は它。字はまた柁に作る。它は蛇。左

順風に乗じて、万事好調の意である。 拿〔拏〕 唾 舵 雫 堕(墮)(隓)

説かない。わが国ではしずくをいう字とする。〔万 寛の二切、すなわちダ・ダンの音であるが、字義を 雨と下とに従う。〔竜龕手鑑〕に奴寡・奴 にみな涙を流したというので、堕涙の碑という。百姓がその徳を慕うて岘山に碑を立てたが、祭の時ようなものである。晋の羊結びまる。 の男たちは喜んだのであろう。時代の風尚とはその

惰12 [橢]15 「 婚 」 12

の意に用いる。情・媠は肉の委婚たるさまをいう語でですが、ことをいう。多くの肉を用いて重ね、なった。というのは、というのは、裂肉をもって聖所に埋め、さらにり」というのは、裂肉をもって聖所に埋め、さらに るを隓といふ」とあり、その篆文として橢をあげる 「隋は裂肉なり」、また自部一四下に「隓、 「敬まざるなり」とし、"†の省声とする。〔左伝〕僖*(で)。 正字は憜に作り、隋声。〔説文〕一〇下に であるから、謹みのない崩れた姿勢をいう。 一年「玉を受けて憜る」とみえる。肉部四下 城皇を敗 13

駄 14 [默] 13 馬ダ の 荷

にみえる堕祭は尸を逆える儀礼であり、その隋釁の攻守とも同じ方法をとるのが原則である。〔大祝〕 **瞭廃する方法でもあったと思われる。共感的呪術は** 護るためのものであり、また同時に聖所を攻撃

礼のなごりである。堕は堕落・隳廃を意味する字で

しどけなく形の崩れたさまをいう。

あるから、

駄賃という。 とあり、駄載することをいう。 文新附」「〇上に「馬の負ふ兒なり」 正字は駄に作り、大声。〔説 駄載して運ぶ賃金を

橢 ちいさなおけ・だえんダ

そして腰をまげ、齲歯をあらわして笑うのを、

当時

髻とは落馬のさまで、

一方に傾けた髪型であろう。

折腰歩・齲歯笑をもって媚態を誇ったという。堕馬等できょい。 ときりの時代に、婦人がことさらに愁眉啼 妝し、堕馬響いの時代に、婦人がことさらに愁眉啼 散し、堕馬響い

小判型の桶であるから、その形を橢円という。の左右に備えておく細長い形の桶をいう。いわゆるのを右に備えておく細長い形の桶をいう。いわゆるが、車箱が、 声 声符は降。〔説文〕 大上に「車

作 17 よわい・ゆるい・おとる

性 21 おにやらい・おだやか

とがある。 生の鬼やらいである。また墓の羨道で行なわれる道とがある。

1 2 まだらうま ダ・タ

置 25 わにのるい

能、卵を生む。大いさ鷲卵の如し。甲は鎧の如く、 を選ぶ、の銘に、大鐘とともに四鼓を繋けることがみ は以て鼓を置ふべし」の語がある。〔詩、大雅、霊 は以て鼓を置ふべし」の語がある。〔詩、大雅、霊 は以て鼓を置ふべし」の語がある。〔詩、大雅、霊 は以て鼓を置ふべし」の語がある。〔詩、大雅、霊 に「職鼓逢々たり」とあって、逢々とは鼓声を があり、あるいは職勢の形を写したものであろう。 では江水の下流にもいたものであろう。音器の〔部 える。その字形は、単声というよりも、単の部分は を変〕の銘に、大鐘とともに四鼓を繋けることがみ える。その字形は、単声というよりも、単の部分は を変〕の銘に、大鐘とともに四鼓を繋けることがみ える。その字形は、単声というよりも、単の部分は を繋、疏〕に「温の形を写したもののようにみえる。 を壊、疏〕に「温の形は蜥易に似て四足、長さ丈 で、郷、変」に「紫、変」にいることがみ ないっから、単の部分は を変」の銘に、大鐘とともに四鼓を繋けることがみ ないる。その字形は、単声というよりも、単の部分は を変」の銘に、大変とともに四数を繋けることがみ ないる。といるといる。 を変したもののようにみえる。

ても鰐のことであるらしい。その皮堅厚、以て鼓を冒ふべし」とあって、どうみその皮堅厚、以て鼓を冒ふべし」とあって、どうみ

タイ

大 4 「泰」10 おおきい・ふとい・はなはだ

(関) (関) とされる異体字であるが、大から分岐したものであろう。[玉篇]に「甚だしきから分岐したものであろう。[玉篇]に「甚だしきなく用いた。金文には大宗・大子・大室・大廟・大なく用いた。金文には大宗・大子・大空・大廟・大なく用いた。金文には大宗・大子・大室・大廟・大なく用いた。金文には大宗・大子・大宮にと、大一本の区別されるに至り、太一神・太陰・太陽・太優・太陽・太優・太陽・太優・太陽・太優・太陽・太優・太陽・大極・太のまである。

白口 6 こやま・軍社の祭肉

象形 軍が出征するときに奉ずる祭肉の形で、師がでその音は歳、軍行にはこれを奉じて行動するの形でその音は歳、軍行にはこれを奉じて行動するの形でその音は歳、軍行にはこれを奉じて行動するの形でその音は。 (単) なり。 象形」とする。 自を大喜とし、 自を小卓と解し、いずれも山や岡の形とするとでその音は歳、軍行にはこれを奉じて行動するの形でその音は歳、軍行にはこれを奉じて行動するの象形でその音は歳、軍が出征するときに奉ずる祭肉の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形で、師りを下るの話の形である。 ト辞に「王は三自、

うにいう。征討するときには自肉を分賜され、これ その字は餗、基地をいう字に用いて永餗・斉餗のよ がある。また標識として木を立てることもあって、 自の下に台座を示す横線一もしくは二を加えたもの ある。軍の駐屯するところにはこの自肉を安置し、 者は自好・自貯のようによばれ、師好・師貯の意で 衆が震驚することが多かったのであろう。軍の指揮 にいうものもあり、何らか神怪のことに感じて、軍 するものである。「自、屋すること亡きか」のよう おいて、軍衆が騒擾するような異変がないかをト し、「今夕、自に田亡きか。寧きか」とは、夜間に 右・中・左を作らんか」と三軍を編成することをト 歴といい、震驚というときの震の初文である。このはといい、震驚というときの震の初文である。ことける肉は脈肉であり、その脈肉に異常のあることを 字はシの条に加えるべき字であるが、いま旧音によ ってここに録し、別にシの音を加えておく。 した解釈を与えることができない。軍社に祭って受 たその解では、自を要素とするその系列字に、一貫 するが、自をその声義をもって用いる例がなく、ま いたのである。〔説文〕は字を小阜とし、音を堆と え、軍行中に奉ずる脤には、神の大節が寄せられて 配に執縢あり、戎に受脹あり。神の大節なり」とみ〔左伝〕成十三年に「國の大事は祀と戎とに在り。

体で「體」なからだ・かたち・もと

帰る。

対って對」4 タイ・ツイ(ツキ)

管理性性

としるす例があり、また(陳純壺)に「敦するも〔師旂鼎〕に、銘を鼎に加えることを「隣彜に對す」形は口や士に従わず、土を業をもって撃つ形である。 説を加えているが、当時の俗説であろう。金文の字故にその口を去りて、以て士に従ふなり」という解 とき、 對揚す」「敢て天子の丕顯なる休に對揚して、寶摩金文に「對揚」という語が常見し、「敢て王の、休にない。」、「敢て王の、休にない。」、「禁むの」、「禁むの」、「禁むの」、「難ない」、「難ない」、「ないない であろう。 く、責對して面のあたり言ふは、多くは誠對に非ず。寸に從ふ。對あるいは士に從ふ。漢の文帝以爲へらす。從、《 従う形とし、「鷹ふること方無きなり。 丵口に従ひ、 突き固める方法である。〔説文〕三上に正字を口に れをもつこと。丵をもって土を撲つことを對という。 彝を作る」のようにいう。対揚とは口でこたえるこ 對がその本字、敦は仮借字である。土を撲つことか は銘を加える意で、〔師旂鼎〕の「對す」と同じく、 のを陳純といふ」とあって、敦を用いるが、この敦 いわゆる版築などの作業である。版築は城壁を作る のであるが、土を撲つときにも用いる。寸は又でこ は掘鑿などをする器で、上に歯状の刻みをつけたも 挟板の中に土を盛り、これを棒状のもので 旧字は對に作り、学と土と寸とに従う。学

は肉を供薦する意の字である。その肉を賑という。

は「社に宜する」という軍社における祭祀で、宜とを携行するので追といい、その自を携えてゆくことを携行するので追といい、その自を携えてゆくことを携行するのの自、右が単行のときに携行する祭肉の象形であることがあり、その字が節族の字に用いられる。自は軍のいわば守護霊のあるところであり、これに自は軍のいわば守護霊のあるところであり、これに自は軍のいわば守護霊のあるところであり、この祭肉を傷つける意味で、把手のある曲あった。この祭肉を傷つける意味で、把手のある出あった。この祭内を傷つける意味で、把手のある出る。このように自の系列字の形義を考えることによって、のように自の系列字の形義を考えることによって、のように自の系列字の形義を考えることによって、のように自の系列字の形義を考えることによって、自とで持ている。「周礼、大説で、大師を興するののときに携行する祭内の象形であることが関うには、大師を興する祭内の名に、大師を関するので追といい、その自を携えてゆくことを携行するので追といい、その自を携えてゆくことを表情になって、宜とを携行するので追しいい、その自を携えてゆくことを表情によります。

古法は、殷前期の鄭州二里岡の故城にも、すでに壮字の最も古い用義例では対揚の義であるが、版築の 業のしかたから生じた意味であろうと思われる。文 うときの対は、版築のとき相向うて土を撃つなど作 大な遺址をみることができるので、その用義も古い 義からの引伸であろう。また対言・相対・対等とい の休賜に報ずる意である。応対の義は、この対報の とではなく、これを彝銘に施して、これによってそ ものであろう。

けもの・神判に用いるけものタイ・チ

略形かともみられる。廌の字形は灋(法)の字形の こと豸々然として、司(伺)殺する所あらんと欲すも用いる。〔説文〕カトに「獸の長脊にして、行く うちにみえており、豸はその側面形であろう。 ふ」とするが、その正体が知られない。解廌の廌の るの形」とし、「爾雅、釈虫〕に「足無きを豸とい 解豸とよばれるものがあり、その字に象形 一獣の形。神判に用いる神羊に 獣の形。神判に用いる神羊に

山タ のイ 名

「説文」カ下に「大山なり」とあり、「周礼、 る。秦の始皇の建てた碑は、いまは明拓によって、志」に岱を河東袞州の鎮とする。いわゆる東嶽であ志」に岱を河東袞州の鎮とする。いわゆる東嶽であ その俤を偲びうるのみである。 られ、古代には天子の封禅の儀礼が行なわれた。 ともいう。東方の聖山で岱宗として祀まる。 声符は、代。泰山、また太山 職方

隶 8 およぶ・あたえる

待 。 ものであり、宗教的な汚穢を受けたものを意味する。本来の意味は、その禍尤を移されて、穢れを負える。 神に従隷としてささげられるものであった。奴隷のの隷は、そのように禍尤を移されたもので、それは うにして神の禍尤を移されたものを隷という。奴隷 この字を要素とする隷によって考えることができよ なわち転移の呪儀を示す字であるから、「及ぶ・與 その獣尾をもって、祟を他に移すことができる。すをもつ形。この獣は呪霊をもつもので 六年に、君主の禍を臣下に移す禜祭のことがみえる。 そのような転移の祭儀に、また祭があり、「左伝」哀 「説文」三下にいう「隷は附著するなり」の原義は、 の呪霊をもって、他に附けることを意味し、そのよ 祟をなす獣の尾をもつことが隷であるが、それはそ う。隷の左偏は祟をなす獣で、祟がその初形。その いる字であり、獣を逐う字ではない。字義はむしろ、 ぶ意と解したものであろうが、逮捕のように人に用 を追うて及びつく意であるから、隶を獣を逐うて逮 よりこれに及ぶなり」と、速及の義とする。及は人 又と尾の省とに従ふ。又(手)もて尾を持つは、後 へる」の義が生れる。〔説文〕三下に「及ぶなり。 ない。隶はその初文で、獣体を略している形である そのような転移の呪儀であり、附属・附隷の意では まタつイ 獣尾の形と又とに従う。獣尾

形声 つ意である。ト文に「祉し」、金文に「祉く」のよ遇・待詔・待罪など、みな心構えしてそのことを待 うに祉を用い、それから待の字が分化するのであろ り、待ちうけていて用意する意。待機・待賈・待 う。待は列国期以前にはその用例がない。 声符は寺。〔説文〕二下に「竢つなり」とあ

怠 9 おこたる。あなどる。あきるタイ

E F

「思うて學ばざれば則ち殆し」を、一本に怠に作る。 加えて清める能礼で、恰ぶ意のある字である。〔説形声 声符は台。台は、(耜の頭) に祝禱の刊を に関係のある語であろう。 また台・心を偏旁とすれば怡の字となる。怡と声義 る。殆と声義に通ずるところがあり、〔論語、為政〕 一〇下に「慢るなり」とあって、 怠慢の義とす

殆。 あやうい・やぶれる・ほとんどタイ

それに近い状態をいう。同訓の字に幾があり、 の願う状態に殆づこうとする意で、「殆ど」とは、風、七月」「殆はくは公子と同に歸らん」は、自らい。 う。ダは残骨で、死を意味する字である。〔詩、 とあり、おそらく危害に殆づくことをいうのであろ 形声 意がある。〔説文〕四下に「危きなり」 声符は台。台に怡・怠などの

る。聖所を護るに用いる呪杖を、殺という。ゆえる。聖所を護るに用いる呪嫉)をもつ形で、呪飾に用いい。 殳は羽旋 楽記、注〕に引いて綴に作る。綴も呪飾のあるものい。かなり長い兵器であった。この殺を、〔礼記、り、かなり長い兵器であった。この殺を、〔礼記、 をいう語で、旗につけるものを綴旒という。 う。〔詩、曹風、候人」に「戈と殺とを荷ふ」 , かなり長い兵器であった。この殺を、〔礼記、〔詩、曹風、候人」に「戈と殺とを荷ふ」とあ

祋。

示と殳とに従う。

くその両義をもつ。

· 成型 · 经收入证据 · 数据 · 数据 · 人名英克拉斯 · 人名英克拉斯

耏₉ ひげをおとす刑タイ・ダイ・ジ

に「杸を以て人を殊すなり」とあって殊と同声。ま「殳なり」と訓して示声とする。殳は〔説文〕三下に示に従う。〔説文〕三下にこの字を示部に収めず、に示に従う。〔説文〕三下にこの字を示部に収めず、

髪をすこし残す意であろう。 巫祝の形とみるべきである。「髡に至らず」とは、いる。ことのない雨請いの巫祝を需といい、而はそのすることのない雨請いの本代を無といい、而はその とする。また耐の字をあげて「或いは寸に從ふ」と 切りそろえる意であろう。「説文」九下に「罪ある ことを示す記号的な字であるから、耏とはもと髪を を切った形で、耏の初文。彡は色や形の美しく整う合一 一 布に耐の声がある。而は髡のように髪 いう。〔玉篇〕などに、耏を須の形とするが、 も髡に至らざるものなり。彡而に從ひ、而の亦聲」 而と彡とに従う。耐の正字。 結髪

ひげをおとす刑・たえるタイ

市」「凡そ市には、入るときには則ち胥(吏)鞭度示の意でなく、神卓の象である。また〔周礼、司故に示殳に従ふ」とするが、示は〔説文〕にいう垂故に示殳に従ふ」とするが、示は〔説文〕にいう垂

るときは、暫く下して以て牛馬を驚かすを殺といふ。 まさに入るべからざる者にして入らんと欲する者あ 説ふ」として、「城郭市里に、高く羊皮を縣けて、は、呪禁としての意味がある。 [説文] に「或いは をつけた形であり、これを神卓(示)の旁におくの 羽とは羽旞。呪飾として杖につける。殳がその呪飾 なり。司馬法に曰く、羽を執りて杸に從ふ」とあり、 た杸は〔説文〕三下に「軍中の士、持つところの殳に一杸を以て人を殊すなり」とあって殊と同声。ま

〔説文〕カ下に「耏、罪あるも髡に至らざるものな ていて態の声があり、而・能・態はもと同声である。而は能と通用し、能は〔楚辞、離騒〕に佩と押韻し不は能と通用し、能は〔楚辞、離騒〕に佩と押韻しを録するが、のち両字は別義の字として用いられる。 として、髡刑の軽いものであるという。耏は人の鬚。り。耐、或いは寸に從ふ。諸法度の字は寸に從ふ」 繋を去る意であろう。請雨に用いる巫を需とい 会意 は正字として耏をあげ、重文として耐 而と寸とに従う。〔説文〕九下

> 「遠きを柔らげ爾きを而くす」と、能の字に而を用以て一家と爲す」とみえ、漢碑の〔督郵斑碑〕に ように も能と通用し、「礼記、礼運」「故に聖人耐く天下を需の下部の而は彫の意。儒は需に従う字である。」 いる。耐に能くする意があり、耐忍・耐寒・耐久の いう。

胎。 はらむ・はらごもる・はじめタイ

むところを、仏教では胎蔵界という。 児を胎といい、万物生成の根源である万法の理を含 り、 めの草摘み歌で、芣苢の音は胚胎の音と通じる。 せて胚胎という。〔詩、周南、芣苢〕は子求めのたり、また胚に「婦孕みて一月なるなり」という。合 る。〔説文〕四下に「婦孕みて三月なるなり」とあ 化する儀礼で、生産を用意する意があ 声符は台。台は厶(耜)を聖

苔の「若」に かけいみずごけ

筵は国語で、「万葉」にみえる。 はない。 若衣の石にあるものは石濡、瓦ま苔の字を用いる。 若衣の石にあるものは垣衣、地にあま苔の字を用いる。 若衣の石にあるものは石濡、瓦ま苔の字を用いる。 若衣の石にあるものは石濡、瓦ま苔の字を用いる。 おおいまだい を若に作り、治声に従うとするが、い形声を一声符は台。〔説文〕一下に正字

迨 およぶ・ねがう

形声 に「及ぶなり」というのは、 ぶなり」というのは、〔詩、召南、摽有梅〕声符は台。逮と同声である。〔爾雅、釈言〕

耏 耐 苔(若) 昊天・上帝・日月・星辰を祀るとき、「疈辜を以て

る。いわゆる疈辜という法で、「周礼、

ときに、九門に犬皮を磔滅するのと似た儀礼であ 刻するのみ」という。羊皮を高懸するのは、大儺の以て人衆を威正す。度とは是を謂ふ。因りて丈尺を以て人衆を威正す。度とは是 を執りて門を守る」とあり、注に「必ず鞭度を執りて

磔。鞭の方には、殺のように呪飾を著けたのであろぞ。それです。というのに当る。度とはおそらく四方百物を祭る」というのに当る。度とはおそらく

すよと、男を誘引することを歌う詩である。投果の俗を歌うもので、投果の女が、今こそ好機で「その吉なるに追べ」の〔箋〕と同じ。〔摽有梅〕は

退の「退」の「復」のしかぞく

門納題 透

礼〕「主人少しく退く」の注に「なほ少しく辞くる で退く」の注に「三たび変 遁するなり」、郷射行くこと遲きなり」という。〔儀礼、聘礼〕「賓三た行くこと遲きなり」という。〔儀礼、聘礼〕「寛三たがいまの字形である。〔説文〕にまた、「一に曰く、がいまの字形である。〔説文〕にまた、「一に曰く、 日夕に從ふ」といい、また衲を出して「復、或いは ある。〔説文〕に下に復を正字とし、「卻くなり。イ なわち字は撤饌の形、神に供えたものを下げる意で 向きの足で、 日は設とよばれる祭器の形を略したもの。夕は後ろ [卵設]に「先公、進退することあり」、「堕盨]にあるが、日が退いたりするものではない。 金文では 義とするのは、字形中の日を、陽光の義とする解で なり」とあって卻く意。また〔段注〕に日々遅曳の 内に從ふ。遏、古文は辵に從ふ」とする。その古文 道路の呪儀に関するものであろう。缘が退卻、復は [卵段]の字は後に作り、これは進に対する字で、 は殷の器形に従うていて、撤饌の義が明らかである。 も「進退することあり」の語があり、〔蟶盨〕の字 撤饌を原義とする字であろうが、のち退却にも退の 字が用いられる。 正字は復に作る。復は孑と日と夊とに従う。 日が退いたりするものではない。 そと併せて、是の逆行の形となる。 す 金文では

帯10【帯】11 おび・おびる

には必ず巾あり、巾に従ふ」とい 子は鑿帶、婦人は帶絲。佩を繋ぐるの形に象る。佩 がない。 りの形。〔説文〕セ下に「神なり。男 がない。男

である。攀帯に用いるとめ金の金具である。攀帯に用いるとめ金の金具である。攀帯に用いるとめ金の金具における美術工芸の先駆的な分野国における美術工芸の先駆的な分野国における美術工芸の先駆的な分野国における美術工芸の先駆的な分野国における美術工芸の先駆的な分野は過少す。



及ぼして帯笑・帯雨のようにもいう。弓といい、人と結ぶことを連帯といい、他のことに

表 10 おおきい・ゆたか・やすらか・はなはだ

> は、水で洗いえらぶ意である。大・太・泰はときに の差があるに過ぎない。山名の泰山は古来天子封禅 の差があるに過ぎない。山名の泰山は古来天子封禅 のれを行なう名山で、北斗が天極にあって動くこと のないのと並んで尊ばれ、最高の権威を泰斗という。 「老子」二十九章に「聖人は甚を去り、奢を去り、 をを去る」という。老と儒との異なるところである。 参を去る」という。老と儒との異なるところである。

生 1 ちいさなおか・うずたかい

形声 声符は性。〔説文〕に収める佳声三十九文のうち、碓・唯の声をもつものが六文ある。〔説文〕のうち、碓・唯の声をもつものが六文ある。〔説文〕の方ち、碓・唯の声をもつものが六文ある。〔説文〕をいい、河中の堆沙を激滪堆のようによぶ。前に進むを進といい、戸中の堆沙を激滪堆のようによぶ。前に進むを進といい、上に積むを堆といい、前に推すを推むを進といい、上に積むを堆といい、前に推すを推むを進といい、方にである。

外 1 いとがよわる・あざむく

16 86 86

「公子の給くを惡む」と、欺の義に用いる。「公子の給くを惡む」と、欺の義に用いる。「独南子、氾論訓」「百死を出でて一生に給る」というのは、漸くにして至る意で、て一生に給る」というのは、漸くにして至る意で、字の初義に近いものであろう。「穀」が、字は飴と通用して、「疑ふ・欺ち給し」とあるが、字は飴と通用して、「疑ふ・欺ち給し」と、欺の義に用いる。

袋川「俗」8 かくろ

逮ュ「逮」」 およぶ・とらえる

那 看 新

形声 声符は求。素は呪霊のある獣の尾をもつ形で、それによって災禍を被う意。逮はその呪儀をもって、他に及ぼすことを示す字であろう。〔説文〕ニ下に「唐逮、及ぶなり」とみえるが、唐逮は語義不明。〔段注〕に「蓋し古語ならん」という。おそらく唐突と同じ語であろう。逮捕・逮繫の意に用い、漢以後にみえる語である。隶は隷のように災禍を他漢以後にみえる語である。隶は隷の声義を承けるものに転移する呪儀を示す。逮は隶の声義を承けるもので、おそらく古い語であろう。

| 大日 12 | 一立日 | 14 すてる・かわる

曾婚粉

会意 正字は暜に作り、並と曰とに従う。並は二

タイ

袋[併]

逮〔逮〕 替〔暜〕 貸

隊(隊)

廌

用いる。一方が替廃されるりでうう。「左伝」僖七年「君の盟、替てられたり」のように「左伝」僖七年「君の盟、替てられたり」のように 文は二先に従い、その隷体を贊に作る。〔説文〕の字があり、その替の古文は尸・炎・白に従う形、篆 隆替のときの音を、潘先の「西征の賦」の「文選 從ふ」という。また「或いは就に從ひ、曰に從ふ」一偏下る。並に從ひ、白の聲」とし、「或いは曰に 字のあったことが知られる。 重文はそれによるもので、当時すでにそのような誤 なり、交替の意となり、 の原義。〔書、旅葵〕「厥の服を替つること無れ」、と、その敗者は替廃して棄てられるので、替廃が字と、その敗者は替廃して棄てられるので、替廃が字と、その敗者は替廃して棄てられるので、替廃が字といる。 すでに盟誓して相争い、審判を受けて是非が定まる としてその字を録するが、それは簪で別の字である。 義をもつ字である。〔説文〕一〇下に「廢するなり。 は必ず不正として廃すべきものであるから、替廃の 盟誓を示す。獄訟において相争うものは、その一方 ろう。日は祝禱や盟誓を収めた器で、獄訟のときの 人の並び立つ形、獄訟のときに二人相並ぶ形であ 《替の意となり、隆替(盛衰)の意となる。一方が替廃されるのであるから替滅の意と

貸12 かす・ゆるやか・こう

> | 12 | 12 おちる・つち・くみった。ゆえに代に従うのである。 | 2 タイ タイ

「行貸して食す」というのは、乞食行の意である。

書を貸すものを愚とし、借りて返すものをさらに愚

13 神判に用いるけもの・かいたい タイ・チ

y °

誓書を入れた器の蓋を除いた山の形、人は*大の形に慶である。またその敗れたものは、去(人と、宣きである。またその敗れたものは、去(人と、宣のとして、胸に心字形の文彩を加える。その字が その神判に勝利をえた際には、神の恵寵を受けたも その形態はよく知られていない。 の用いる法服の冠に獬豸冠を用いたと伝えられるが、略して法となる。獬廌をまた獬豸といい、のち法官 かく)とともに、水に廃棄する。その字は灋、のち ているので、いわゆる羊神判であることが知られる 子、明鬼、下〕にみえる神判には、羊を用いるとし く、鹿・羊・熊などに類するともいわれるが、〔墨ものは豸で、廌と同声。その獣の形状は明らかでな 「牛に似て一角」に作る。この獣の側面形をしるす 不直なるものに觸れしむ」とあり、〔玉篇〕には

滞13 (滞)14 とどこおる・とどまるタイ・テイ

世と推移す」とみえる。凝滞はすべて清新を妨げる [楚辞、漁父の辞]に「聖人は物に凝滯せず 能く より、転じて滞留・滞久・滞貨・滞納の意となる。 して凝滞することをいう。凝滞・沈滞・停滞の意 上に「凝るなり」とあり、帯状をな形声 声符は帯 (帯)。〔説文〕ー

碓 からうす・ふみうす

とあって、 ふみうすをいう。のちには獣に牽かせる ある。〔説文〕九下に「舂く所以なり」形声 声符は隹。隹に堆・雕の声が形声

た。椎と声義が近いが、春のように手で杵く形式とものや、水車を利用する形式のものが多く行なわれ は異なるのである。

態14 すがた・わざと

と佩とを韻し、能は態の意。[荀子、成相]「人の態繁文とみてよい字である。[楚辞、離騒〕に「修能」「意なり」とし、能と心との会意字とするが、能の 勢のようにいうが、あまりよい意味でなかったらし には備ふるに如かず」の態は詐態をいう。態度・態 が、字の古義をえているようである。 い。わが国で、「わざと」「ことさらに」と訓するの 態と同声。「説文」一〇下に 声符は能。能は耐・

はぎ・もも

を腿腕という。 とするが、脛と股との間の肉、ももを含めていう。とするが、脛と股との間の肉、ももを含めていう。とするが、脛と股との間の肉、ももを含めていう。 一声符は退(退)。〔玉篇〕に「腿は脛なり」

颱 たいふう

[荘子、逍遥遊] の巻頭を飾るあの扶揺風は、おそ る。清以来の用例しかなく、新しい字であるが、 ものであろう。 らく颱風現象を写して、自然の活動力を象徴化した 声符は台。モンスーン地帯に吹く季節的な わゆる二百十日前後、八・九月を中心に起

隤 15 くずれる・おちる・なやむタイ

声義で解すべき字と思われる。 **穨の意。揚雄の〔河東の賦〕に「祥を發し祉を隤**然 〔詩、周南、巻耳〕「我が馬虺 隤」は畳韻の連語で、 馩・頽に作り、その禿の音が隤の字に移されたものた。 の意を導くことはできない。 思うに字はまたちる)の意を導くことはできない。 思うに字はまた で、神梯の前に貝を奉じても、隤落・隤瘁(崩れ り」とし、〔唐写本玉篇〕などに「墜下」に作る。 たいようである。〔説文〕一四下に「下り墜つるな それで字を会意とする説もある。貴は貝を奉ずる形 たのちの用法であろう。穨と通用の例が多く、 す」という例があるが、すでに穨の声義が隤に移っ らしく、穨の省声とする以外に、その声義を求めが 声はあるが、隤の音をもつものがなく 声符は貴。貴に潰・愦・績 穨の お

駘 はずれる・おろかタイ

去った群馬の姿をいう語であろう。 どかなさまをいう語となるが、曠遠のところに走り たえて混乱する意、駘蕩はとりとめのない意で、と もに馬の状態から出ている語である。駘蕩はのちの のように用いる。駑駘は駘藉というのと同じくうろとして役立たない馬の意であろう。字は駑駘・駘蕩として役立たない馬の意であろう。字は疑貽・駘蕩 こない馬の意であろう。字は駑駘・駘蕩「馬の銜脱するなり」とするが、乗馬「馬の銜脱するなり」とするが、乗馬 形声 声符は台。〔説文〕一〇上に

憝 うらむ・にくむ・わるいタイ

「凡そ熟ちたる國九十有國」のように用いる。字は のある字である。 また懟と通ずる。敦・對は、 ついに「怨むなり」という。[書、康誥]「怒みざついたに「怨むなり」という。[書、康誥]「怒みざ 金文に「乾代」の語がある。「説文」を東 声符は敦。敦にうつ意があり いずれも相手を撲つ意

頹 くずれる・すたれる・おとろえるタイ

然、衰運を頽勢という。穨も声義同じ。の崩れたしどけない姿をいう。酔い崩れることを頽 を失った頽齢のものを、頽という。頹髪・頹容・頽 穂が秀で、実が入って穆け、その実が落ちて穀にな 額のように用いる。 った状態をいう。それを人に及ぼして、すでに顔容 ハ下に「禿なり」とみえる。禿は穀の 頽唐・頽廃・頽放など、みな形 声符は禿。正字は穨。〔説文〕

戴 17 いただく

哉は祝冊、裁は神衣、載は車を清めて行動をはじ**ピーーターヤーン゙ーータンテン゙、*ルジ 文〕は、異に分異・分与の義があるものとして字義 を解するが、戈に従う字は、みな聖器をもってこれ 戴といふ」とあって、頂戴加上の意とする。〔説られる。〔説文〕三上に「物を分ちて增益を得るを (堆)・専(團)・是(題)などに、同様の関係がみだった。だったが、のち声が転じた。寺(待)・生か、のち声が転じた。寺(待)・生からない。 しかるのちことをはじめる意をもつもので、

> 華勝・玉勝ともいう。 を「蓬髪戴勝」とするが、戴勝は婦人の首飾りで、 戴する意となる。[山海経、西山経]に西王母の状鬼頭のもので、人鬼をいう。それで神異のものを翼鬼頭のもので、人鬼をいう。それで神異のものを翼 である。戴は異の形のものを護る意であるが、異はめることをいう。 世は戈に呪符の出をつけている形

擡 17 うごかす・もたげるタイ

[玉篇] に「動かし振ふなり」、また〔広韻〕に至っ る。抬はその俗字である。 りのちの用法である。いまは、籠をかつぐ意に用いて「擡げ擧ぐるなり」とあるから、擡頭の義はかな 声符は臺。〔広雅、釈詁〕に「動かすなり」、

黛 17 「騰」 22 まゆずみ

黱もその意をもつものであろう。 その處に代ふるなり」とするのは、黛の字を用いる 「代なり。眉毛を滅じてこれを去り、この畫を以て あった。化粧は神事のときに行なうものであるから、 れて奉ずる形で、もと神に薦め、貴顕に奉ずる意で に至ってからの音義説であろう。朕はものを盤に入 『或いは代に從ふ』という。[釈 名、釈首飾]に「或いは代に從ふ」という。[釈 名、釈首飾]にを鰧に作り、「眉に畫くなり」とし、『論釈 形声 声符は代。[説文]一〇上に字

重 さそり

夏 B w ®

> ろう。とんぼの幼虫やごを水蠆という。 があって、そのころさそり型の髪が喜ばれたのであ している。〔詩、小雅、都人士〕に「彼の君子の女 「毒蟲なり。象形」とし、 が、それにさらに虫形を加えた字。〔説文〕一三上に 象形 さそりの形。 萬もさそりの類の虫の形である 卷髪蠆の如し」とあり、古い時代から髪型の流行 さらに触に従う字形を録

*J*z すなわち・なんじ・もしダイ・ナイ

了气彩 ??

い、それで旧状のままにすることを因仍というので 意。おそらく弓弦をはずしたままおくことを乃とい 死者の用いたものをそのまま用いる意で、因仍のである。[周礼、司几筵]「凶事は几に仍る」とは、借によるものであるから、字は別に本義があるべき 法は、もとその本字とすべきものがなく、すべて仮 辭の申ぶることの難きなり」とするが、いずれもだし難きに象る」とし、〔唐写本玉篇〕に「乃とはだし難きに象る」とし、〔唐写本玉篇〕に「乃とはり。≒の出いない。≒の出いない。≒のはおそらく弓の弦をはずした形であろう。 「すなはち」という語詞の用法とする。語詞的な用 金文では二人称の所有格に用い、〔班段〕

頹

罰大なり」、〔甌侯鼎〕「王、休宴す。乃ち射す」の「乃の人を求めよ。乃し得ぎれば、女 匡(人名)の祖南公の旅を賜ふ」のように用い、まれに〔晉鼎〕祖南公の旅を賜ふ」のように用い、まれに〔晉鼎〕 思われる。 「引くなり」とあって、弓弦を引くことをいう字と 義を伝えるところがあろう。扔は〔広雅、釈詁〕に 字の初訓ではない。乃は仍・抄などの字に、その声 「別の自を以いて毛父を左右せよ」、「大温鼎」「乃の「乃の自を以いて毛父を左右せよ」、「大温鼎」「乃の「かの自を以いて毛父を左右せよ」、「大温鼎」「乃の ように、語詞に用いる。ただこれらはみな仮借義で、

大 おおきい・さかん・すぐれるダイ・タイ

个 大大

れた体格の形にしるすものがある。広大・長大・多 り」による。金文の大保関係の器に、大を特にすぐ の形に象る」というのは、〔老子〕第二十三章「道 大なり。 象形 大など、すべて盛大の義に用いる。 は大なり。天は大なり。地は大なり。 地は大なり。人もまた大なり。故に大は人 人の正面形に象る。〔説文〕一〇下に「天は 王もまた大な

代 かわる・よ

極・徳・力・代が韻、「素問、宝命全形論」にも石〕では極・楊・北と韻し、「管子、勢篇」では不しては極・楊・北と韻し、「管子、勢篇」では別では極・楊・北と韻し、「管子、勢篇」ではませい。 惑・代・賊を韻している。〔説文〕八上に「更るな り」と更代の義とし、心部一〇下「忒は更ふるなり」

る形を示す。忒の従うところも、おそらくこの未で感の頭刃の部分の形で、未はその下に光の放射するみ)の弋でなく、赤(戚の初文)の初文であり、まままりの弋でなく、赤(戚の初文)の初文であり、まままり (変)や更は楽器などを撃つこと、毅改は呪霊をも呪霊をもつ獣などを用いて行なわれたもので、變いないを変更の儀礼は、聖器としての兵器や楽器、またける変更の儀礼は、聖器としての兵器や楽器、また 交替を代という。 人それ之に代る」も、すでにその意である。世代の の意となったものであろう。〔書、皐陶謨〕「天工、 義は、更代ではなく更改であろう。すべて古代にお という差忒の字と、 うて、その差忒を改める意の字、それで更代・代理 である。代はおそらく弋(尗の略形、尗は戚) 忒を更める意があるものと思われる。従って代の初 あろう。尗(戚)は聖器で、その器によってその差 忒の声があるのは、弋は尗の初文であり、督が尗の つ獣や虫を撃つことによって行なわれた変改の儀礼 もと声義の同じ字である。弋に に従

台5 [臺]14 うてな・だいダイ・タイ

<u>R</u> 0 KWITY

之に從ひ、高の省に從ふ。室、屋と意を同じうす」 二上に「觀の四方にして高きものなり。至に從ひ、 高上に標木として木を樹てた形である。〔説文〕」 会意 とあり、三字みな至に従うことをいう。その至に従 旧字は臺に作り、高の省形と、至とに従う。

られる。周の様王も臺を築いて佚遊したが、諸臣に鹿臺、楚の荘鑑の章華臺などは、その壮麗を以て知た紫、楚の荘鑑の章華臺などは、その壮麗を以て知た紫、大の神田いられることもあった。別の紂王の府庫や獄舎に用いられることもあった。別の『は するが、 明のせまるところであるから、呪飾として標木を ろに、アーチ状の高楼を立てる形である。 形である。楊寛氏は、この陵上の建物を、いわゆるすなわち臺は、陵墓の上に高堂あるいは楼を立てる 近年発掘された中山王墓は、地下に槨室のある陵起原的には、臺とは廟所をいう語であったらしい。 旋門的な性格をもつものであった。臺は古くは望気 例が多いが、禾は軍門に樹てるものであるから、 樹てた。金文の図象には、禾形のものを樹てている に近い性質のものであろう。臺はその占地したとこ 陵寝の寝であるとする。要するに地下の室と関連す 上に、廟所として高堂を築いた形式のものである。 居るところであって、人の止居するところではない 板屋で一時屍をおくところ、室は血室・宗室のよう みな「至り止まる所なり」、 う意については、〔説文〕に室字七下・屋字八上条に 多くの債務を負い、督責を受けるとその臺上に逃げ など、軍事的な機能をもつものとして作られ、 ともと京・高などアーチ状の門形をもつ建物は、凱 のような臺は軍事的な意味をもつものであろう。 く臺とよばれたものに当ると考えられる。後世の塔 る建物で、自銘に王堂と称しており、字形的には古 に用いて神霊の安んずるところ。みな神明・鬼神の 矢を放って卜したことを示すものと思われる。屋は 至は矢の至るところ、建物の占地のために、 すなわち止居する所と 高楼は神 € そ

り、嬯はもと女囚として に臣嬉というものがあ あろう。神に仕える徒隷ところとされていたので 神殿的なもので、神聖な を逃費臺とよんだ。もとこれだので、世人はこれ

> 問室 中山王墓

れる。 して古くから存するもので、混乱するおそれがある **臺観に属したものと思わ** いま略字として台を用いるが、台も別の義と

柰 [奈]。 からなし・なんぞ

ため、本条はすべて旧字の臺を用いた。

製(祭名)の初文であろう。また疑問副詞に用い、に 祭らんか」のように祭名とする。それはおそらくに 禁らんか」のように祭名とする。それはおそらく 有の果でない証拠である。晋の〔起居注〕によると、 であろうが、白馬寺に植えて珍しがられるのは、固 葡萄の実は麋の実よりも大であったという。〔説文〕 六上に「柰果なり」とはこの柰林、からなしのこと めがたい。冷陽の白馬寺に柰林・葡萄が植えられてに誤りがあると思われるが、古い字形がなくて確か て、その実は甚だ大きく、重さ七斤に達し、また 召誥」「曷ぞそれ柰何ぞ敬せざる」、 ず、而・冄などがその音に近い。字形兆声 声符は示。示はその声が合わ (国語、

> 仮借字として用いられた。奈はその俗字である。 に入ってのち、 晋語」「吾が君を柰何にせん」のようにいう。西 周 古代の祭儀は廃してその義も失われ、

迺 : [廼] , すなわち ダイ・ナイ

Ø



む値」とこの字を文献の攸と同義に用いている。くす」という。〔行鼓文、田車石〕に「君子の樂しくす」という。〔行鼓文、田車石〕に「君子の樂し返れる。〔説文〕五上はまた乃・鹵の次に極と同字とする。〔説文〕五上はまた乃・鹵の次に とを職とするものであろうが、その字はまた直人に 用いる。遒人はおそらく酒をもって道路を清めるこ 〔説文〕ニトにまた酒の字があり、文献に遒の字を 写本玉篇〕に「廼、説文古文の鹵なり」とあって、 す」とあって、声義ともに迺・廼とは異なり、〔唐 また「或いは曰く、鹵は往くなり。讀みて仍の若く 乃の省に從ひ、西聲」とする。字を西声とするが、 の字を、〔説文〕五上に國としてあげ、「驚く聲なり の字形はみえない。ただ金文にみえる酒・廼と同形 の命を出す」のように用いる。〔説文〕には逎・廼的な用法はない。「廼ち賜ふ」「廼ち許す」「廼ち厥 詞とする。乃とほとんど同義に用いるが、ただ仮定 文では「すなはち」とよむ副詞に用い、上を承ける ることがあり、その器をいう字であろうが、 出ている。古くは自然に発酵する果酒を神にそなえ 形。卣は酒器の形で、もと瓠瓢の類の果物の形から 象形 字の初形は卣形のものを下部を包んでおく のち金

> 承けるところがある。 と一系の字、その儀礼を行なうことを酒・ 分岐したものであろう。卣は酒器であるから、いず 作ることもある。これを以ていえば極・極 れも酒を用いる儀礼に関する字であり、 たもので、もとみな卣の形に従い、それより二系に その声義を ・廼といっ

第11 しだい・やしき・ただダイ・ティ

その品第によるので、邸宅を第館・第観のようにい列の意となり、品第の意となる。邸宅を賜うことも 字で、その順序を定めることを第という。それで序 皮ひもでものを縛る形。第は竹簡などの次第をいう また副詞として、ただの意に用いる。 形声 文〕五下に「韋束の次第なり」とあり、 声符は第の省文。弟は「説

鼐 大きな鼎

釈器」 ゆるめた形で、 【魯詩説】を引くものはこの一条のみである。【沓のと、小鼎とする説を録している。【説文】中にいて、小鼎とする説を録している。【説文】中に 帰 な大鼎であるが、鼐鼎という例はない。乃は弓弦を 鼎と称し、また殷器に牛鼎・鹿鼎があり、 鼎〕の銘には「驚 牛鼎を作る」、すなわち牛を蹴る も同じ。〔説文〕にまた〔詩、魯詩説〕を引の絕だ大なるもの」とあり、〔爾雅、 形声 大の義のある字である。 声符は乃。〔説文〕七上に「鼎 みな非常

醍 清酒・うまいさけ

餒[餧]

る意にたとえる。 仏教に「醍醐灌 頂」という語があり、智恵を受けなり」とあり、いわゆる醍醐、また清酒をもいう。 「説文新附」 一四下に「酪の精なるもの わゆる醍醐、また清酒をもいう。 声符は是。是に題の声がある。

餒 [餧] うダ える

る。綏をまた緌に作るのと同様である。 「餧は飢うるなり」と 形声 声符は妥。〔説文〕 五下に いう。〔玉篇〕に

嬯 にぶい・おろかダイ

う。臺には神殿の意を含むようである。 臣嬉とはその臣臺にあたる。臣嬉はともに神の徒隷な伝〕昭七年に「僕臣臺」など十等の奴隷の名があり、 に臣嬉十人、貝十朋、羊百を賜ふ」とみえる。〔左 たるもので、嬯はもと女囚を徒隷としたものであろ 「遅鈍なり」とあり、〔段注〕にいまの 声符は臺。〔説文〕「ニ下に

題18 ひたい・しるすダイ

野。

形声 「頟なり」とあり、〔爾雅、釈言〕や〔詩、周南、 声符は是。是に健の声がある。〔説文〕九上

趙策〕に「黑齒雕題」、また「楚辞、天問〕に「雕むから。「礼記、玉藻」に「雕題交趾」、「戦国策、いいの「伝」に「定は題なり」とあって、定と麟之趾」の「伝」に「定は題なり」とあって、定と のがあった。〔詩、商 頌譜、正義〕に「題は名な題黑齒」とみえ、南方に額に入墨を加える習俗のも 冊においては題署・題簽という。題記・題字・題 を書きしるすことを題句という。 跋・題名・題目・問題など、みなその引伸義。詩句 う。故に中央に扁額をあげることを題額といい、書 り」とあり、名は眉目の間、額の中央のところをい

七3 くさのは な

7 に根有り。象形」という。卜文・金文の字形は必ず 「艸の葉なり。垂るる穂に從ふ。上は一を貫き、下のに寄り託する形。〔説文〕 ニ下に ない。単独で用いることのない字である。 字であろうと思われるが、具体的なことは明らかで ことが多いのは、建物の造営のときの儀礼に関する であることが知られる。託寄の意もそこから生ずる の毫は、明らかに草葉の形に作っており、その象形 *** しも〔説文〕の字形と同じでないが、たとえばト文 のであろう。キヒン *など、建物に関して用いられる 象形 草の葉が伸びて、その先がも

のと思われる。

宅 すまい・おる・はかタク

宅らんか」のように、みな廟寝に宿することをトす 「三帯(婦)、新寢に宅らんか」「今の二月、新寢に 本来は廟中に居る儀礼をいう字であろう。 の者を謂ふ。官を去りて、宅に居るなり」とするが、 夷に宅る」、また「儀礼、土相見礼、注〕に「致仕なり」とし、古文二字を録する。〔書、尭典〕「嵎なり」とし、古文二字を録する。〔書、尭典〕「嵎なり」とし、古文二字を録する。〔書、元典〕「呉の託居する所 南 0

ト辞に

中耳 甪

タク

托 おす・うける・たのむタク

て神の憑依を受け、神意を度り受ける意があったもト辞の廟寝に宅ることをトするものは、そこに宿し

筮す」という。これらの例によって考えると、宅は また〔儀礼、士喪礼〕に葬居を卜することを「宅を 「亦これ王を助けて、天命を宅む」のように用いる。 大雅、文王有声」「この鎬京に宅る」、〔書、康誥」ことがあり、神霊の依託を受けたのであろう。〔詩、 る辞である。あるいはこれによって、神意をはかる

人の居るべきところではなく、神聖のあるところで、

託はその声義を承ける字であろうが、 ようである。たとえば宅は、廟寝に宿して神託を受 先が垂れている形とするが、占卜の法に関する字の形声 声符はむ。そは〔説文〕六下に、草の穂の ける行為を意味する語であったと考えられる。托・ いまは茶

義舜 秦 秦門 「父の書を讀むこと能はず。手澤存するのみ」とある」とみえる。光潤は別の一義。[詩、秦風、無衣]る」とみえる。光潤は別の一義。[詩、秦風、無衣]の書を讀むこと能はず。手澤存するのみ」とある」とみえる。光潤は別の一義。[詩、小雅、鴻雁]「鴻雁ここに飛び 中澤に集ま 〔詩、小雅、鴻雁〕 「鴻雁ここに飛び 沢〕に「水草交錯の處」とし、水の発源の地をいう。「水停まるを澤といふ」の語を加える。〔風俗通、山

択,

【擇】16 えらぶ・やぶれる

托・托子のようにうけ台をいう。

卓 8 おおきなさじ・たかい・すぐれるタク

り、その書を「手沢本」という。

ある。睪は獣屍が風雨に暴されて、その形が殬解し形声 旧字は擇に作り、睪声。睪に殬・鐸の声が

9 ħ 0

すべて卓出の義に用い、人の超絶するものを卓爾・大きな匙の象形。日の形がスプーンの部分である。 卓異・卓犖、議論を卓見・卓識・卓論という。 ったとするが、早・是・卓は一系の字で、卓は最も と爲す」とあり、早さのヒ(比較)よりその義とな をあらわす。〔説文〕ハ上に「高きなり。早匕を卓 早(匙)の大きなもので、卓大・卓高の意

坼 さ り る

沢には音の関係のないことである。

7

澤]16

さわ・うるおす・つやタク

を釈とするのは尺を声符とするものとしても、

択

を他に及ぼして擇・澤をも択・沢の形に略する。釋迦の字を略して釈・尺とすることが行なわれ、それ

獣爪をもって獣屍を破るのを釋(釈)という。釋る。字は両手に従うており、会意字の構造法である。

に用いる。金文に「その吉金を爨ぶ」の語が習見す択行・択交・択地など、すべて是非・取舎を分つ意

その選ぶべきものは、すでに殬敗している獣屍であ

有用のところを択び取る意より、選択・択言・

ぶなり」とし、〔玉篇〕に「簡び選ぶなり」という。意から、選択の意となる。〔説文〕 ニェに「柬び選 てくずれている形。その采るべきところを択び取る

とをいう。 の正形は)。 母姜嫄の身を傷めることがなかった意である。斥ず副けず」というのは、戸でなかった意である。斥ず副けず」というのは、戸でな め。これを人に及ぼして、〔詩、大雅、生民〕「坼け旱魃などで地の裂ける意とする。またト兆のわれたは、『説文』一三下に「裂くるなり」とあり、「九十 辨 順に対する逆で、むりな状態となるこ 形声 声符は斥。斥に柝の声がある。

拓 /摭 ひろう・ひらく

「果樹の實を拓ふなり」とあって拾果を意味する字 摭といふ」とみえる。拓は上文の摘字条:ニ上に繋いる。〔方言〕に「摭は取るなり。陳宋の閒には、用いる。〔方言〕に「摭は取るなり。陳宋の閒には、 刻画を墨拓して、拓本をとることをいう。 ように用い、摭とは声義ともに異なる。また刻文・とする。のち土地の開墾の意として拓殖・開拓の る意であるから、鍋の中のものを掘うのが原義であは庶声。庶は火の上に鍋をかけて、ものを煮炊きす 宋の語なり」とし、異文として摭をあげている。 ろうが、すべてものを寄せ集めること、攟摭の意に 形声 ある。「説文」一二上に「拾ふなり。 ぎてコーニ上に「拾ふなり。陳た 声符は石。石に宕・妬の声が 摭

柝。 さく・ひらく・ひょうしぎ

邾に聞ゆ」とあって、魯国の夜を戒める柏子木の音は、本を相撃つのは撃柝。〔左伝〕哀七年「魯の撃柝、木を相撃つのは撃柝。〔左伝〕また年「魯の撃柝、木 「剣つなり」とあり、木を両分することをいう。両「剣つなり」とあり、木を両分することをいう。両に逆に力を加えて、木が裂ける意。〔説文〕六上に が、邾まで聞えることをいう。 形は節。逆に力の加えられることをいう。柝は木理 形声 ものの裂けることを意味する。斥の正 声符は斥。斥に坼の声がある。

託 よせる・たのむ・まかせる・かこつける タク

新 するなり」と寄託の意とする。でとは 声符はぞ。〔説文〕三上に「寄

旧字は澤に作り、墨声。睪に擇・鐸の声が #**\$**°

ある。〔説文〕一上に「光潤なり」、〔玉篇〕になお

択〔擇〕 沢〔澤〕 卓 坼 拓(摭)

語がある。〔論語、泰伯〕に君子人を規定して、「以とをいい、託言・託興・託咎・託夢・附託などのとをいい、託言・託興・託舎・ という語がある。 て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし」 はその神託をいう。それよりすべて他に仮託するこ 廟中に仮寝などして、神託を求める意であり、託と

啄 ついばむ・くちばしタス

啄はその木を啄する音で、 く音である。 ろう。啄木鳥の音は、静寂な森の中では、かなり響 嘴で木をつついて、虫をついばむことをいう。 の食ふなり」とあって、啄木鳥のよう形声 声符は豕。〔説文〕ニ上に「鳥 啄々とはその擬声語であ

涿11 したたる・ うつ・みがく

H.

「炮土の鼓を以てこれを歐ち、焚石を以てこれに投氏」は、水中の虫を除くことを掌るものであるが、氏」は、水中の虫を除くことを掌るものであるが、に作る。雨滴の落ちる擬声語である。[編代、蓋塚)り」とあり、〔唐写本玉篇〕に「流下する適深なり」 思われる透彫の古い青銅鈸などが、山東から出土し ている。 蚩尤は荒ぶる軍神となった。蚩尤の面を写したかと ず」とあり、涿は濁、石灰などで害虫を殺すことを いう。涿鹿は蚩尤が黄帝と戦って敗れたところで、 声符は豕。〔説文〕一上に「流下する滴な 額に入墨する刑を涿鹿黥という。

> 11 琢]12 みがく・かざる

という。 玉を治めることをいう。玉には琢といい、石には磨むるなり」とあり、彌・理と同訓。瑚琢は双声の語むるなり」とあり、彌・理と同訓。瑚琢は双声の語いるなり」とあり、彌・理と同訓。現琢は双声の語いる。〔説文〕一上に「玉を治 形声 声符は豕。豕に啄、うちたた

毅 うつ・たたく

であるから、その声義は斀と近い。斀字の蜀は、獣とあるが、ただ撃つだけでなく、撃って去勢する意 字である。 とその陰を示す形。豥はなお磔殺の意をも含みうる ことを示す字である。〔説文〕三下に「撃つなり」 陰せられたもの。攴を加えて去陰する **豕と支とに従う。豕は獣の去**

断4〔

劃 16 きる・ちりばめるタク・チョク

会意 央に凹みがあって執りやす 左偏は盾の形で、 中

して觀をあげている。畫(画)も画盾の象で、觀はただ。〔説文〕一四上に「葡るなり」とし、或る体とる意。〔説文〕一四上に「葡るなり」とし、或る体と 族・家門を示すもので、 の従うところ。盾の彫飾は、それぞれの部族・氏 やはり盾に彫飾を加える意である。正字は鬭(鬪)その画盾をもつ形であるが、正字の字形からいえば、 形に作る。これに斤を加えるのは、盾に彫刻を加え それを執って戦陣に臨んだ

ものである。

磔 はりつけ・

法であった。また埋盤のように地中より盤気が侵すに乗じて侵入する風蠱に対して、その邪気を祓う方人牲の桀と方法を異にするものがある。祭風は、風人牲の桀と方法を異にするものがある。祭風は、風 風を止むと」、また【李巡注】に「風を祭るに、牲に「今、俗に大道中に當りて狗を磔す。云ふ、以て の義で、石を声符とするものであるが、石に宕・拓玉に「辜するなり。桀に從ひ、石磬」とする。桀 以てこれを風散す」とあり、この披磔風散のことは、 の声はあるとしても、字は形声字の構造とはしがた 五下に「辜するなり。桀に從ひ、石聲」とする。 牲を埋めてこれを防いだ。 こともあり、これに対しては伏瘞のように、地中に び〔孫炎注〕に「旣に祭りては、その牲を披磔して、 の頭・蹏及び皮を以てこれを被り、以て祭る」、及 い。〔爾雅、釈天〕に「祭風を磔といふ」とし、注 会意 左右に人を磔にして殺す形。〔説文〕 石と桀とに従う。禁は木上の

踔 15 ふむ・とぶ・こえるタク

安定の意がある。〔説文〕 「下に「踶むなり」とあって、高大の義があり、また一本足で不 して行く」とあり、跛者の行くさまをいう。また踸踔は〔荘子、秋水〕に「吾、一足を以て踸踔 論の卓抜にして当るべからざるを、踔厲風発という。り、この踶の声符である是も、匙の象形である。議 形声 声符は卓。卓は大きな匙の形

橐16 ふくろ・ふいごうタク

意の

注〕も同じ。〔詩、毛伝〕には橐を小、嚢を大とす を業といふ」とみえる。〔戦国策、秦策〕の〔高誘文〕に引く〔説文〕に「底無きを囊といひ、底ある文〕に「嚢なり」とあり、〔詩、大雅、公劉〕の〔訳、下に「嚢なり」とあり、〔詩、大雅、公劉〕の〔訳、 発想をここに求めている。 である。橐籥は皮袋で作ったふいごで、冶金鋳造の か」とは、虚無なるものの作用をいい、老子は無の 子〕第五章「天地の閒は、それなほ橐籥のごとき 術が進むにつれて、その利用が盛んとなった。〔老 る。底無しとは、東のように上下を括った橐のこと 東に代って形声字である橐が作られた。〔説文〕六 東が方位の東に仮借され、その専字となるに及んで、 東。東は上下を括った嚢の形で、橐の初文であった。 石を除く全体は嚢の形で、その初形は 声符は石。石に拓の声がある

去勢する・うつ

蜀はその牡獣である。獣を去勢することを、また蠲 獣の配匹をえざるものを獨(独)という。斀はその するが、字は獣を去勢することを示す会意字であり う。〔説文〕三下に「去陰の刑なり」とし、蜀声と 牡器を撃ってこれを核破し、去陰を行なうことをい 主とする象形字で、その虫の部分が牡器である。牡 する形であることから知られるように、獣の性器を (属)が牝牡、すなわち尾と蜀と相接 会意

> の一とされ、〔書、呂刑〕に刖劓斀黥をあげている。 除するものが蠲である。斀の異文に劅に作るものがいち、これを吉蠲という。稼撃による方法を斀、縊犠牲として用いるときの一種の清めの方法でもある 女子には宮刑という。 人に及ぼして、奄人という。 あり、これは刀で除去する方法である。 とを示し、益(縊)に従う。獣を去勢することは、除という。竇は牡獣の性器を縊って去勢を行なうこ 奄人は宦官。また肉刑* のちこれを

濯 [濯]17

ME

生観が、美しく歌われている。 るものであるが、世の清濁につれて自在に生きる処 以て我が纓(冠のひも)を濯ふべし 滄浪の水濁離婁、上」に〔滄浪歌〕があり、「滄浪の水清まばり。 水中で羽ばたきする意より、洗う意となる。〔孟子、 する形。〔説文〕二上に「澣ふなり」とみえ、鳥が形声 旧字は濯に作り、翟声。翟は鳥の羽ばたき 以て我が足を濯ふべし」という。船歌とされ

調18 一調 22 つみする・ながす

とは、天譴をいう。天帝の罰を受けて、一時下界にる。[左伝] 昭七年「自ら謫を日月の災に取るなり」 〔説文〕に「罰するなり」とあって、謫貴の意とす は啻に従うが、啻は啇の初文である。 形声 声符は商。「説文」三上の正字

謌[邁]

守ることを謫戍という。字はまた譴に作る。よばれた。罪によって流罪となるのを謫居、 下るものを謫仙という。李白は道教の徒で、謫仙と

鐸 21 大鈴・かね・ふうりんタク

**

鎽

はみな懸繋して用いる。 る。わが国の銅鐸にも舌があり、器形の大きなもの鐘の系統のうち、舌のあるものは鈴と鐸とのみであ 木鐸といい、文事には木鐸、武事に金鐸を用いた。 とあり、「周礼、司馬職」の文による。金鈴木舌を伍と為し、五伍を兩と爲す。兩の司馬、鐸を執る」ある。「説文」 | 四上に「大鈴なり。軍法に、五人をある。「説文」 | 四上に「大鈴なり。軍法に、五人を 形声 い。ともに聖所に埋 声符は攀。睪に擇(択)・澤(沢)の声が その用法は南方の銅鼓に近

して用いた。その鋳 の儀礼のとき掘り出 蔵されており、農耕

型を爲すものは、殷代の鐃であろうと思われるが、成の方法も、両者に共通するところがある。鐸の初 けるものに、列国期の句鐸があり、鐃と同じく柄を に、相似点のあることが注意される。 南の山の中腹などから出土しており、この三者の間 わが国の銅鐸と似ている。殷代の鐃も、ほとんど江 これもまた聖所に埋めておき、祭時に掘り起して用 いたものとみられ、その用法はのちの南方の銅鼓、 The state of the s 鐃の形式を承 句鐸

樹ててこれを鼓した。江南呉越の地より

風の省略形と巾とに従う。風を受けてあ

祭祀宴饗のときに用いる器である。 器に句鑵というものがあり、銘文によって考えると し、ときに長文の銘をもつものがある。自銘の

籜 22

としては謝霊運の詩など、六朝期に至ってみえる。草名として「山海経、中山経〕にみえ、緑篠の意味がある。などでは、大きない。ないでは、東大はない。ないでは、東大は、大いでは薄を収めており、篠の字はない。 篠は たけのこを籜竜といい、竹の皮で籜笠を作った。 の意がある。。蘀はおちば、籜は竹の皮である。〔説 声符は擇(択)。擇に解きほぐされるもの

ダク

やダ まり

もあるが、その用義には確かめがたいところがある。 て発汗の状を示し、また手足を狂げて苦しむ形の字苦しむさまに象る。卜文には人の周辺に小点を加え 倚著するの形に象る」とする。疾病のときに臥床し、 七下に「倚るなり。人の疾病あるとき、象形 牀上に人の臥する形。〔説文〕 人の疾病あるとき、

諾 15 こたえる・うけがうダク

本部分

タツ 形声 羍 窋

いう。〔礼記、玉藻〕に「父命じて呼ぶときは、唯えるものは神である。のち応答の語となり、唯諾とするが、もと承諾を意味する語であり、またその応するが、もと承諾を意味する語であり、またその応 加えて、これを鳳尾諾という。 の箋奏に手批を加えるとき、その懸針をなす末筆をがき、まいという。 をしるしている。漢簡の末筆に、ことさらに破磔を得るは、季布の一諾を得るに若かず」という楚の諺 「説文」三上に「磨ふるなり」とあって応答の意とるか」と問うものは、「諾とするか」の意である。 唯々諾々という。〔史記、季布伝〕に、「黃金百斤をにして慢となる。何でも逆らわずに従うことを、 す字で、古くは若がその字であった。ト辞に「若な 形で、そこに神意が示される。神の承諾・承認を示 して諾せず」とあり、唯は速やかにして恭、諾は緩 シーの状態となって神意を問い、神託を受けている 声符は若。若は巫女が神に祈り、エクスタ 羍 るたこ。この字形からみると布を用いることもあっ

濁

图

としているが、字は清濁の意に用いる。水の清濁の形声 声符は蜀。〔説文〕一上に斉の水名である

窋

あなにかくれる・いわやタツ・チュツ

に羍を大声の字とするが、字は全体象形である。 するさまを羔という。それが小羊である。〔説文〕 の仮借字である。羊子が生れ落ちて、わずかに跂立生るること達の如し」とある達は、羍の意。達はそ 大雅、生民派に、后稷の初生のことを歌い、「先づ 生れてすぐに立ち上り、歩くことができる。〔詩、 形を示す字である。羊の子は生れることが早く、また 「生るるなり」とあり、両者を合せて、小羊の生れる 衡の魚形のところが、牛を後ろからみた形である。**^。 羍 殆ど「説文」にみえないものである。 部の字には、中国の文字にもこの種の造字が多く、 う。これと似た造字法の国字に、凩・凪がある。几まる。上方ではいかのぼり、江戸ではたこあげといある。上方ではいかのぼり、江戸ではたこあげとい う。これと似た造字法の国字に凩・凪がある。 に書くことも多くて、竹の骨組に紙を張ったもので たかと思われるが、また紙鳶・紙鴟・紙老鴟のよう 9 タツ 小羊・羊が生れるタツ

にごる ダク・タク

のと同じ。〔説文〕四上に「小羊なり」、〔玉篇〕に

象形

大きな母羊の後ろか

ら、小羊が生れ落ちる形。

り、それが古音であろう。

帰 5 たこ・いか

士を窋室に伏せておいた話がある。窟と形義の通ず光、のちの呉王夫差が、王・僚を暗殺するとき、甲あるのと同じ。窋室はいわや。〔呉越春秋〕に公子あるのと同じ。窋室はいわや。〔呉越春秋〕に公子 る兒」とし、出声とするが、屈が獣尾を屈する形で にみえる意である。〔説文〕セドに「物の穴中に在 出入の出ではない。穴中に獣が身をかくし、尾が外 においては、獣の尾を巻いている形で、 会意 穴と出とに従う。出はこの字

敓

る字である。

とまい、奪と声義が通ずる。「魔 羌 鐘」に「楚京に作り、奪と声義が通ずる。「魔 羌 鎧」に「楚家」の語を引く。いま「奪獲」をいう。「説文」三下に「彊ひて取るなり」とあり、をいう。「説文」三下に「彊ひて取るなり」とあり、 脱去することをいう。 を露放す」とあるのも奪の意。奪は霊が鳥形となっ て脱化することを示す字で、敚・奪はいずれも霊の 態にあること。これを殴って、その状態を破ること 兌と支とに従う。兌は兄 (巫

達12 (達)13 とおる・およぶタツ

淮

とをいう。〔説文〕ニ下に「行きて相遇はざるなり」 で凝滞することのない意となり、道路の行き通るこ むさまの脱然として安らかであることをいう。それ 声符は羍。 羍は羊が子を生む形で、その生

> 達孝・達生・達節とし、至極に及ぶものを達道・達 う。これを人に及ぼして、行為の始終あるものを、 承ける字であるから、往来の自由な、通達の道をい 生るること達の如し」は羍の仮借。達はその声義を 尊・達悟のようにいう。 声連語の形況の語である。〔詩、大雅、生民〕「先づ たもので、字の本訓ではない。挑達は擬声語で、双 [毛伝] に、「往來相視る貌」とするのと相反する訓 であるが、要するにその詩句によって解しようとし というのは、〔詩、鄭風、子衿〕、挑たり達たり」の

撻 うつ・むちうつタツ

こ上に「郷飲酒に、不敬を罰するとき、その背を撻があり、長鞭を加えることを撻という。〔説文〕「郷飲酒」、一種を加えることを撻という。〔説文〕「おり、という。」をは違(達)。達に長く伸びたものの意 がある。撻は鞭笞を加えることで、 に、射者に過ちあるときは、これを撻つとする規定 つ」と〔儀礼、郷飲酒礼〕を引くが、〔郷射礼記〕 また撻笞という。

妲 おんなのな

り」とあり、 閂 紂はこの妲己に惑うて淫楽に耽り、 〔説文新附〕 三下に「妲己、紂の妃な 形声 声符は足。旦に怛の声がある。

> 首を斬って、 人を棄てて滅んだ。有蘇氏の女で己姓。武王はその 小白旗に懸けたと伝えられる。

但 いダ たツ む

と怛々たり」を引く。 「惛むなり」といい、〔詩、衞風、氓〕「信誓するこ」が、 声がある。〔説文〕一〇下に り」と心の労苦することをいう。 甫田〕にも「遠人を思ふこと無かれ 音で韻に入る。女が男の違約を嘆いて痛恨する意と 門馬 するが、心をこめて思うほどの意であろう。〔斉風、 いま「旦々」に作るが、旦の 声符は旦。旦に妲の 勞心怛々た

脱 (脱)11 ぬダ ぐッ・ タツ

ことを、 ての制約から免れることを脱然といい、 のを脱という。抜け落ち、脱落すること。またすべ なり」という。心の脱するを悦といい、肉の消える さまである。〔説文〕四下に「肉を消らして臞する タシーの状態にあって意識を失う意で、心の脱する 脱然貫通などという。 党・敓の声がある。父は巫祝がエクスと、ちの声がある。** はせきで お声。 沿に作り、分声。 兌に 禅理を悟る

奪14 うばう・とる・うしなうダツ

斖 介

衣中に隹を加え、下に手をそえている。 会意 大と隹と寸とに従う。金文にみえる初形は、 いまの字形

敓 達〔達〕 撻 ダツ 妲 怛 脱(脱) 奪

で、己れのものをなすことを換骨奪胎という。 って、己れのものをなすことを換骨奪胎という。 用いるのは、本来の用義ではない。他人のものによ 形が近く、みな死喪のときの、魂振り的儀礼に関す隹を加え、田はその鳥籠の形である。奮・奪はその 奮の金文の字形もまた衣に従う字で、衣襟の中に 去することをいう。これを世上の争奪・与奪の意に 〔説文〕に「鳥、毛羽を張りて、自ら奮ふなり」と 持ち、これを失ふなり。又奞に從ふ」とする。奞を る字であろう。 ふときは則ち虚なり」とあり、奪とはその精気を奪 ものとみられる。〔素問、通評虚実論〕に「精氣奪 は雀の形に従うており、それは衣の襟の形が残った 託することを示す字。漢碑の「北海相景君碑」の字 るところが異なる。奪は死者の奪去する霊を鳥形に われる。奪は脱・敗と通用するが、それぞれ奪去すするが、それは羽旞(羽飾)をいう字であろうと思するが、それは羽旞(羽飾)をいう字であろうと思 奪とは霊の脱去をいう。〔説文〕四上に「手に隹を 人の死喪のときには、種々の招魂儀礼が行なわれるの大は、衣の上部、その下部の形は省かれている。 し、再帰のときを待つ意を示すものであるらしく、 が、衣中に隹を加えるのは、霊が鳥形となって脱去

7月 19 がわうそ

「孟春の月、獺、魚を祭る」、注に「獺まさに食はん「孟春の月、獺、魚を祭らざるときは、國に盗賊多時訓解」に「獺、魚を祭らざるときは、國に盗賊多時訓解」に「獺、魚を祭らざるときは、國に盗賊多時訓解」に「獺、魚を祭る」、注に「獺まさに食はんてて修飾することを獺祭という。 李商隠はこれをてて修飾することを獺祭と称した。

タン

24 タン

A

はれる記念的な意味をもつものには、刻字に鮮明なた墓壙中の葬器の類にも、その色を多く用いており、その木器などが朽廃して、丹朱でしるした文様が上れ、一般である。すべて丹朱を加えることは、聖化の方法であった。のち神仙の術とともに煉料の法が研究され、「物料子、金丹」、陶弘景の「本料の器にも丹塗りにするものがあり、廷礼の賜与れのに形弓形矢がある。すべて丹朱を加えることは、聖化の方法であった。のち神仙の術とともに煉料の法が研究され、「物料子、金丹」、陶弘景の「本料、聖化の方法であった。のち神仙の術とともに煉料を採取する技術があり、その職能者が全国的に替及していたことは、丹生系の神社の分布と、その野族の移動をたどることによって、知ることができる。古墳期の須恵器に「はそう」とよばれる土器があり、水銀を蒸溜して金をとるアマルガム精錬法に用いたものと考えられている。

日 5 よあけ・あさ

象形 金文の字形は、雲上に日が半ば姿をあらわとた形である。〔説文〕七上に「明なり。日の一上で見るるに從ふ。一は地なり」とする。地より出るのでなく、朝雲の上にあらわれる形である。金文の廷礼冊命をしるすものに「旦に王、大室にある。金文のようにいうものが多く、儀礼は朝早く行なわれた。ようにいうものが多く、儀礼は朝早く行なわれた。ようにいうものが多く、儀礼は朝早く行なわれた。のでなく、朝雲の上にあられる。

但 7 かたぬぐ・ただ

独・徒・特なども声近く、みなその義に用いる。 「総ななり」という。但初の字には祖または禮を用い、みなり」という。但初の字には祖または禮を用い、みなり」という。但初の字には祖または禮を用い、みなは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、鄭風、たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、鄭風、たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、鄭風、たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、東風、大ない。 たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、鄭風、たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、鄭風、たはない。 たは降服のときに行なう凶礼である。〔詩、八上にたばない。 たはと、またい。 一に曰く、徒

日 8 やすらか・たいらか・ひろやか

田 形声 声符はは、〔説文〕 ニミ下に でいて気に入られ、婿に選ばれたという話がある。 でいて気に入られ、婿に選ばれたという話がある。 でいて気に入られ、婿に選ばれたという話がある。 でいて気に入られ、婿に選ばれたという話がある。 でいて気に入られ、婿に選ばれたという話がある。

担 8 【擔】16 【儋】15 になう・たすける

のを罵る語である。でいて一方がみえぬこと、一を知って二を知らぬもでいて一方がみえぬこと、一を知って二を知らぬも極度の貧乏をいう。禅語でなばなど

単の「單」12 ひとつ・うすい・つくす

単寒という。訓義の多い字であるが、「亶・殫す 〔詩、大雅、公劉〕に「その軍三單」とあり、その 周書、大明武」「老弱 單處す」の注に、「單處ば、それは「大盾なり」というべきであろう。〔逸ば、それは「大盾なり」というべきであろう。〔念のような用義例はない。もし大の義を加えるとすれ 象形 りして単衣・単行の意となり、孤独で貧しいことを 保衛するので、それを「單處」と称したのであろう 設が無いところでは、大きな盾を列べてその居処を とは保障無きなり」という。すなわち十分な防備施 る。〔段注〕には「大言なり」の誤りとするが、そ おり、また「大なり」の訓も要領をえないものであ ともと象形の字を分ったもので、全く字形を失って としながらも、その説を得ずして「闕」という。も するが、字形については「四甲に從ひ、 従う字である。〔説文〕ニトに単を「大なり」と訓 狩の初文は獣で、盾と犬とに従い、戦は盾と戈とに ともに盾を用いて身を防ぎながら行動する。それで けている。古くは狩猟と軍事とは相関するもので、 る。その一隊のみであることを単一という。それよ 一隊を単という。三単を軍とし、その隊が単位とな 楕円形の楯の形。その上に二本の羽飾を著 叩の亦聲」

に引伸したものである。字は盾の象形。軍の一隊の名とされ、そこから諸義と声が通ずるので、その字に仮借する用法がある。

多 9 豕が走る

象形 獣の形。「説文」九下に「豕走り悦ぶなり」とあるが、おそらく遯走の意であろう。遯逃のり」とあるが、おそらく遯走の意であろう。遯逃の窓を、象に従う字形に作る例が、〔後漢書・馬援伝」にある。象形に従う家・瑑・縁(縁)などが、みな周辺を続る意をもつ字であるのは、猪や豚が走るとき、周辺に沿うてめぐる習癖をもつことと、関係があるかも知れない。〔易、象伝」の義は、〔易〕の独あるかも知れない。〔易、象伝」の義は、〔易〕の独あるかも知れない。〔易、象伝」の義は、〔易〕の独あるかも知れない。〔易、象伝」の義は、〔易〕の独ある。

炭の「炭」の すみ・もえさし

会意 山と广と火とに従う。〔説文〕
・ 「一」とみえる。 「他村子、 大変に、 大変に、 大変である。 「淮南子、 時則訓って炭焼きをする意である。 「淮南子、 時則訓って炭焼きをする意である。 「淮南子、 時則訓」に「季秋の月、草木黄落す。 乃ち薪を切りて炭とに「季秋の月、草木黄落す。 乃ち薪を切りて炭とに「季秋の月、草木黄落す。 乃ち薪を切りて炭とに「季秋の月、草木黄落す。 乃ち薪を切りて炭とに「季秋の月、草木黄落す。
「本野、 京僮の仕事とされた。
炭素化したものが保とあり、
京優が〕に「薪を焚いて炭を作る」とあり、
京僧が〕に「薪を焚いて炭を作る」とあり、
京僧がこれた。
大変によって、
大変によって、

上面 9 わかいみこ・ただしい・はし

五七九

0

〔説文〕のような字形解釈はそこから生じているよ を耑としるしており、〔義楚耑〕や〔徐王耑〕にそ儀に関するものと思われる。列国期の觶はその自名、上部もまた徴の従うところと一致していて、字は巫上部もまた徴の従うところと一致していて、字は巫 帯に従う字に端・瑞・遄・喘などの字があり、耑のという。すなわち草の伸びたその先端の形とするが、という。 を初義とする字である。瑞は瑞玉の字で呪祝のとき 字形解釈は、それらの字の声義にも適応するもので のはじめて生ずる形とし、「物初めて生ずるの題なじく、髪の形を示すぐに従う。〔説文〕七下に草木 その呪力を微くする意の字)の従うところの山と同 姿容となる。上部の山に近い形は微(巫女を殴って、 とかかれるが、髪飾りをつけるときは耑、端然たる 髪を結ばず、髪を切った髡形に近い姿であるから而 る巫の姿で、需がその雨請いを示す字である。巫は象形 而の上部に髪飾りのある形。而は雨請いす **耑はこれら系列諸字の形義を含みうるものでなくて** 字であり、 うに思われる。しかし耑は端の初文で、端正・端厳 の名がみえ、かなり変化した字形となっている。 なくてはならない。字の基本は、下部の而にあり、 り。上は生ずる形に象り、下はその根に象るなり」 をなしうるであろうと思う。 はならない。耑の字形には列国期以後の資料しかな に用いられる玉、遄は遄急の義で、巫の舞容をいう なお確かめがたいところがあるが、一応右の解 喘はその祈る声であると解されるので、

胆 (膽)17 きも・きもだま・こころタン

10

寒うす」という。 汁を分泌する器官。二人よく心の合うことを「肝髪を連ぬるの府なり」とあり、肝臓の右にあって、原 の力があるとするもので、驚怖することを「心膽を 膽相照らす」という。胆略・胆勇とは、ここに智勇 その略字で旦声。[説文]四下に「肝・化字は膽に作り、詹声。胆は肌」1 きそ・ミンー ン

站 10 たつ・えき・たたずむタン・テン

用いる字である。 形声 といったが、今の速達便にあたる。站は元明以後にうものを站戸・站夫という。元代に軍事郵便を站赤 不動の姿勢で立つ意であるから、姿見のことを站に「俗に獨立を言ふ」とあり、独り立つことをいう。 鏡という。また宿駅の意に用い、駅逓の賤役に従 声符は占。占に店・沾の声がある。〔広韻〕

耼 10 みみ た ぶ

に聞けり」の注に「老耼とは、古の壽考者の號ないう語であろう。〔礼記、曾子問〕「吾これを老耼老子、名は耼。伝説的な人で、あるいは寿考の人を (献)・爾 (願) の声がある。〔説文〕 二上に「耳曼 ・ その部の字には若(諾)・而 ・ をの部の字には若(諾)・而 ・ 声符は针。 持は日母 り」とみえる。 いなるなり」とあり、耳たぶの大きいことをいう。

耽湎は酤湎の仮借。耽思・耽学には耽を用いる。垂れることをいう。虎視眈々の字は眈、耽楽は媅楽、子、墜形訓〕の「夸父耽耳」は、その耳が肩にまです。歩烈公 とあり、〔詩、衛風、氓〕「士の耽しむはいい。」とあり、〔詩、衛風、氓〕「士の耽しむはるない。」とあり、〔詩、衛風、氓〕「士の耽しむはるない。」とあり、〔詩、衛風、氓〕「士の耽しむはい。」とあり。〔説文〕 ニ上に「耳大いに垂るい。 たれみみ・たのしむ・ふけるタン 声符は沈。 宏に沈・酖の声が

袒 はだぬぐ・ほころびるタン

を求めたことから、故事となった。祖跣は罪を請う呂氏の叛乱のとき、周勃が同意者に左袒すること刑者は右をぬぐ。同意を示すときは左袒する。漢の刑者は右をぬぐ。同意を示すときは左袒する。漢のを用いる。はだぬぐときは、吉凶ともに左。ただ受 る」という。但はのち別義に用い、袒裼の字には袒 とき、自ら受刑を求めて謝する意である。 鲫 形声 を但とし、「裼ぐなり。 声符は旦。〔説文〕ハ上に正字 或いは袒に作

啖 くちう・むさぼる・かむタン

とあって、 畤 とを、啖呵という。啖は舌を鳴らす擬声語から出て人肉を相啖うことがあった。歯切れよく人を罵るこ 人相啖 食す」とあり、大饑や喪乱のときには、 形声 声符は炎。炎に淡・談の声が

いるようである。

探ュ さぐる・うかがう・たずねるタン

繋辞伝、上〕に「隨きを探り、隠れたるを索む」とに用いる。推測し、試行することをもいい、〔易、に用いる。推測し、試行することをもいい、〔易、すべてものを捜求すること、また探訪・探勝のよう 贕 に「遠くこれを取るなり」とあり、穴中に限らず、 幽微の理を探り極めることをいう。 形声 声符は架。架は穴中に火をか

淡川 あわい・うすいタン

るが、 態について淡彩・淡泊のように用いる。澹と通用す山木〕「君子の交は淡きこと水の若し」、また色や状 山木〕「君子の交は淡きこと水の若し」、また色や状り」のように、味の濃淡をいうのが原義。〔荘子、とあり、〔管子、水地〕「淡なるものは五味の中なとあり、〔管子、水地〕「淡なるものは五味の中な 澹は澹蕩として揺れ動く意の字である。 形声 ある。〔説文〕一上に「薄き味なり」 声符は炎。炎に啖・談の声が

蛋" 「錘」3 あま

蛋という。卵のしろみを蛋白という。 タクわゆる「かづきめ」である。また卵を蛋、鶏卵を鶏そのような海人をあまとよび、蛋の字を充てた。い れた。よく水に潜って蚌珠をとるので、わが国でも 陸居を許されず、舟を家として漁に従い、賤族とさ 謎の声がある。南方の異族で、蛋家・蛋戸とよばれ、 字はもと蜑に作る。声符は延(延)。延に

負 むさぼる

もと鼎形の字であったと思われる。〔史記、賈誼伝〕下部は貝の形に従うが、収蔵の器のことであるから、字形からも知られるように蓋栓の形。いまの字形は、字形からも知られるように蓋栓の形。いまの字形は、 ひ、楚にはこれを食と謂ふ」とする。今は酓・歓の言〕に「晉・魏・河内の北には、愀を謂ひて殘といるなり」とし、今声とするが、声が合わない。〔方 に「貪者は財に殉ふ」という語がある。 ゆえに貪吝の意となる。〔説文〕 六下に「物を欲す 飠 蓋栓の形で、器中にものを蔵する意。 今と貝とに従う。 今は器物の 今と貝とに従う。今は器物の

酖 ふける・どくざけタン・チン

躑 に「酒に荒湛す」とあって、酖・湛は司義。耽・ り」とあり、敵は耽溺の意である。〔詩、大雅、抑〕ある。〔説文〕」四下に「酒を樂しむな に耽溺する意がある。また鴆毒の酒をもいう。 耽・酖などみな声義近く、それぞれその従うところ 形声 声符は沈。沈に耽・眈の声が

媅 たのしむ

憾 , **4** P

形声 声との間に、通用する字が多い。 による。字は湛・耽・酖などと通用する。甚声と冘 ||三下に「樂しむなり」とあり、〔爾雅、釈詁〕の文 声符は甚。甚に堪・湛の声がある。〔説文〕

12 はやせ・はやい・うずまくタン

「淺水、沙上を流るるを湍といふ」の文がある。そ の意。〔淮南子、説山訓〕に「湍瀬の流」という語文〕「上に「疾き瀬なり」とあり、急流のところ いう。滝には「たるみ」という。 の急なるものは激湍、わが国の古語では「たき」 がある。〔玄応音義〕に引く〔説文〕には、なお があり、速やかなることをいう。〔説 形声 声符は耑。耑に従うものに遄

湛 しずむ・たのしむ・やすらか・ふけるタン・チン

能機

に「趣るる余小子、家、皷に湛めり」と湛を沈没の『うな」に茶・琴・湛・心を韻し、『常味』に琴・湛、『変之』に玉・林・湛を韻している。「毛公鼎』に茶・湛、『ないい。湛・沈はもと通用の字で、〔詩、小雅、鹿 耽と通ずる仮借の義である。 3 f 、。 b・ たまもと通用の字で、〔詩、小雅、鹿一上に「沒するなり」とあり、浮沈の沈と、 声義男 データン・ 意に用いる。それが初義であろう。湛楽の意は媅、 声符は甚。甚に堪、媒の声がある。〔説文〕

短12 みじかい・おとる・そしるタン

をはかる意とする。豆はその器形よりして短頸の意 あるときは、矢を以て正と爲す」とあり、矢で長短 である。〔説文〕五下に「長短する所 声符は豆。豆は頸部の短い器

のをいい、また優劣の義に用いる。とは、うなじの短い人の義。転じてすべて短小のもとは、うなじの短い人の義。転じてすべて短小のもがあり、短い矢をいう。〔周礼、梓人〕の「短腔」があり、短い矢をいう。〔周礼、梓人〕の「短腔」

耳 12 うまい・ふかい・おおきい

#(8) - (8) - (8) - (8)

象形 壺状の器中に、ものを実たしている形。 (説文) 五下に「長味なり」、「広雅、釈詁」に「長きなり」とは、長期にわたって味つけし、熟する意である。古文の字形は歯に従う。塩を加えて貯蔵する意であろう。それで草久・草深の意となり、草緑る意であろう。それで草久・草深の意となり、草緑のとは深い恩恵の意。〔詩、大雅、蕩〕「鬼方に草及ばる意とを研精草思という。

和 12 はじる

会意 赤と炭とに従う。戻は〔説 ・ 文〕ハ上に「柔皮なり」と訓する。また赧一○下に「面慙ぢて赤きなり」とし、戻声とする。戻は人の背後から恥部に手を加えている形で、る。戻は人の背後から恥部に手を加えている形で、これによって愧赧・赤面の意となる。〔方言〕にこれによって愧赧・赤面の意となる。〔方言〕にこれによって愧赧・赤面の意となる。これを赧と「秦晉の閒、凡そ愧ぢて上に見はるる、これを赧と「秦晉の閒、凡そ愧ぢて上に見はるる、これを赧と

9 13 まこと・あつい・つくす

嘆は「嘆」は なげく・いたむ

形声 声符は葉。葉に敷声があり、 を吞むなり」とし、「一に曰く、太息するなり」とし、「一に曰く、太息するなり」とし、「一に曰く、太息するなり」とをををををををした。「説文」は敷を喜びに、嘆を哀嘆いう。「段注」に、「説文」は敷を喜びに、嘆を哀嘆いる。「最近、「一に曰く、太息するなり」とし、「一に曰く、太息するなり」とををである。

痰 13 たん

博は ラン・まるめる・あつめる

形声 声符は繋(専)。専に團(団)ます。 これを外から撃ちたたいて砕き、団めることをいう これを外から撃ちたたいて砕き、団めることをいう である。〔説文〕二上に「鱧くするなり」とあり、 に「手にて團めるを摶といふ」とする。 り」というが、専は橐の中のものを撃って一丸とする意で、撃はそれに手を加えた繁文である。徒って専が摶の初文。摶はそれに手を加えた繁文である。様って一丸とするのであるから専という。土を固めたものは壊って一丸のものであるから専という。土を固めたものは壊って一丸のものであるから専という。むかし女媧氏が人を作ったとき、はじめは黄土を摶って人を作ったが、のちその煩にたえず、縄を泥中に引いて、そのかたまりを人とした。それで黄土の人は富貴、泥縄の人は貧賤凡庸の者となったという。

溥 14 まるい・つゆ

地で (団)の声がある。露のしとどなる草」に「零露薄たり」の句がある。露のしとどなる草」に「零露薄たり」の句がある。露のしとどなるさまを、溥々という。

・近 1 ただしい・まこと・はし・いとぐち

紀 1 ほころびる・ぬう

訓する字である。 動する字である。 「補縫するなり」と 文」 「三上に収める組であろう。「補縫するなり」と また縫う意に用いることもあるが、その本字は〔説 また縫う意に用いることもあるが、その本字は〔説 である。「補縫するなり」と

儋 15 になう・たす・こがめ

(擔)と声義が同じく、通用する字である。

「負任儋何」とあり、背に負い、肩にかつぐもの、自任儋何」とあり、背に負い、肩にかつぐもの、含せて負儋という。儋石は肩にかつぎうる程度の重さと、石(斛)の量、僅少の資をいう。極度に貧しさと、石(斛)の量、僅少の資をいう。極度に貧しさと、石(斛)の量、僅少の資をいう。極度に貧しまない。

15 はばかる・なやむ・いかる

タン

綻

儋

憚

歎潭

誕[誕]

憺

形声 声符は單(単)。「説文」一〇下に「忌み難ななり」とし、「一に曰く、難むなり」とする。畏惧すに威を以てす」とあって、他を威すことをもいう。字は彈(弾)と関係があるらしく、弾数とは悪力。字は彈(弾)と関係があるらしく、弾数とは悪力。字は彈(弾)と関係があるらしく、弾数とは悪力。字は弾(弾)と関係があるらしく、弾数とは悪力。字は弾(型)とあり、憚の初義は、弾射などのよって憚れしむ」とあり、憚の初義は、弾射などによって憚れしむ」とあり、憚の初義は、弾射などによって憚れしむ」とあり、煙が

¥ 15 なげく・ほめる・うたう

潭 15 タン・シン

形声 声符は覃。覃は器中に久しくものを封じて、

(抽志)では、潭・心を韻している。 「抽志」では、潭・心を韻している。 「抽志」では、潭・心を韻している。 「抽志」では、潭・心を韻している。

誕 15 【誕】14 いつわる・あざむく・おおきい

麗養 "出

作 1 やすらか・たのしむ・しずか

形声 声符は驚、説文」一〇下に を情に留まりて憺しみて歸ることを忘る」、(近来) 「靈脩に留まりて憺しみて歸ることを忘る」など「靈脩に留まりて憺しみて歸ることを忘る」など「楚辞」にその用例が多い。〔予虚の賦〕に「怕乎として爲すことなく、憺子として自ら持す」とあり、「性乎として爲すことなく、憺子として自ら持す」とあり、「社会」では安静をいう。〔説文〕の次条に「怕は爲すに、「は子として爲すことなく、憺子として自ら持す」とあり、「社会」では、一次には、「は、」

難は泥母。

〔説文〕 一上に「水濡れて乾くなり」というも、字

殫 つきる・たおれる・やむタン

[呂氏春秋、本味]に「智を殫し力を竭す」、〔戦国すこと能はず」とみえ、殫は秦漢以後に用いる。 を用いることもあり、[荀子、宥坐]「以てこれを單に「極盡するなり」という。古くは単 策、楚策〕に「殫悶」の語がある。 声符は單(単)。〔説文〕四下

澹 うごく・しずか・やすらかタン

あって、 とあって、澹静なるをいう。淡と通用する字である れ動くをいう。〔広雅、釈詁〕に「安なり、靜なり」 が、〔上林の賦〕や〔七発〕に「澹淡」という語が る。憺怕はのち澹泊の字を用いる。 もと別の字。淡は淡味、澹は安静の意であ 「水揺くなり」とあり、水の静かに揺 形声 声符は詹。〔説文〕一一上に

癉 やむ・つかれ・おこりタン

のち悪疾をいう。〔韓非子、解老〕に癉痔の病がみ「善を彰はし悪を癉ます」など、古い用例がある。 う。〔詩、大雅、松〕「下民卒〈癉む」、〔書、墨命〕 とあり、心力を尽し果たし、 え、癉は今のおうだんにあたる病である。 形声 がある。〔説文〕七下に「勞病なり」 声符は覧(単)。単に殫の意 労の甚だしいことをい

17 きたえる・たたく

製作の方法を異にし、薄片をうちきたえて器を作る。 錬して縛器を作ることを掌る。鍛冶は、鎔鋳とは 鍛冶のことをいう。[周礼] に段氏の職があり、鍛絵や 段はその薄片を打つ形である。 「説文」 一四上に「小冶なり」とあり、 形声 声符は段。段は鍛の初文。

かたみ・めしびつ

0 ዾ

さなものは簞。、儀礼、士喪礼〕では櫛入れ、〔左「簞食壺漿」のように用いる。大きな竹器は筐、小い論語、雅也〕「一簞の食」、〔孟子、梁恵王、下〕 また笥字条五上に「飯及び衣の器なり」とあって、形声 声符は單(単)。〔説文〕五上に「笥なり」、 用いる。 伝〕哀二十年には「一簞の珠」とあって、宝石箱に (論語、雍也]「一簞の食」、〔孟子、梁恵王、食器のめしびつ、また衣類を入れる竹籠の類を また衣類を入れる竹籠の類をいう。

譚 かたる・おおきいタン

(莊子、 譚・**は通用の字であるが、覃は食物などを熟成す を、 がふさわしい。物語集を譚海という。 る意であるから、古い物語などをいうのには譚の方 - 一本に談に作る。談笑をまた譚笑ともいう。T、則陽J「夫子、何ぞ我を王に譚らざる」の譚声符は覃。覃は器中のものを熟成する形。

灘 せ・みぎわ

> み、波の荒い沖辺をいう。難の意味を加えてよんだは多く急流・急湍の意に用いる。わが国では灘とよ る。 ものであろうが、 もと急流の水声をいう擬声語であ

寸 6 (團) 14 まるい・あつまり・かダン かたま

1 **8**

の声がある。事は橐の中のものを撃ち固めて一団の形声 旧字は團に作り、専(専)声。専に摶・薄 ない。団子・団茶、人ならば団欒・団結、円いものに 「圜きなり」とするが、圜と團とは必ずしも同じで表。 も団扇という。万事めでたく収束するを団円という。

男 おとこ・きみ

明州 BJ ₽^l **B**

会意 に從ひ、力に從ふ。男は力を田に用ふるを言ふな その管理者をいう。〔説文〕「三下に「丈夫なり。田 の耒とを合せて耕作のことを示すが、古い用法では 田と力とに従う。力は耒の象形。田と農具

り自由である。〔令彝〕に「諸侯、侯・田・男に、ある。卜文では、田と耒との組み合せかたは、かな りょとするが、力は筋力の字ではなく、未の象形で 断 り、段階のように層々相連なるものをいう。 11 (斷)18 たつ・きる・ことわるダン

物物

る意。 と糸の断絶するをいう。蠿は機にかけている糸を截 なり」とあり、糸の断絶した形と斤との会意字。 会意 ことを、断腸・断魂という。 た決断・断罪・断案のように用いる。悲痛の極まる はのち断首・断弦より断水・断橋・断雲・断章、ま 一四上に「截るなり。斤と鐵とに從ふ。蠿は古文絕 絶は染めた糸が弱くて切れることをいう。断 旧字は斷に作り、蠿と斤とに従う。〔説文〕 b

・ 52 「百斯男」の語はまた〔詩、大雅、思斉〕にもみえ「百斯男」の語はまた〔詩、大雅、思斉〕にもみえ

る室寿ぎのことを歌う。

一般に男子は、詩篇では士

盤だや

「慶祝匜」に「男女無期」などの語があり、

【が後男」、列国期の『叔夷鐘』に『百斯男』、『斉侯が後男』、列国期の『叔夷鐘』に『古いまた』に『秋山だ』、『はいれば、かなり時期の下る後期の『師景煌』に『秋田法は、外域》諸侯の一にあげられている。男女のて外服(外域)諸侯の一にあげられている。男女の

四方の命を含く」とあって、男は農耕の管理者とし

弾12(彈)15 ただす・はじく・うつ・たまダン

えず、 犠牲として祓う方法で、古い時代の弾劾の術であろ 「羌五十を彈せんか」のようにいう。おそらく人をいるものがあり(揮図)、「それ二十人を彈せんか」、 中断した形のもの、弓に祝禱の器である日を加えて 弓の丸を持するに從ふ」という。卜文に別に弓弦を り、〔汗簡〕に収めるものに小丸を加えたものがある。 「丸'を行るなり」、また一体の字について「或いはのち形声字となったものであろう。〔説文〕||三下に 爪を加えるもの、また弓形のままのものもあ 形声 文〕二三下の重文に声符を加 声符は単 (單)。 〔説 おそらく人を

段石の形と、支とに従う。鍛冶の素材を打

段9

だん・きたえる・わかつダン・タン

局海

められたのである。男まヒモフィスの管理者である大夫の地位が、政治的な階級に高いの管理者である大夫の地位が、政治的な階級に高いない。

のちには大夫といい、卿・大夫・士のように士の上の男は夫といい、概ね農夫であった。その管理者を、 階層のもの、男は耕作地の管理者を意味する。下層 といい、士女と対称するのが例であった。士は戦士

> 辟くるを觀る」とは、その悪行振りを示す話である伝〕宣二年「晉の靈公、臺上より人を彈ち、その丸を ものとされ、呪儀に用いられることが多かった。「左

わゆる鳴弦。弓矢などの兵器は、呪的な力をもつ

暖 13 (暖)13 あたたかい・あたためるダン・ケン

〔説文〕には煖・燠の字があるも暖・暄の字がなく、 関係をたどりえないわけではないが、暖は燠と声義 母の字であるから、炎(談)・也(蛇)など、音の暖・暄は宋以後の字書に至ってみえる。爰はもと喩 記、楽記」「これを煖むるに日月を以てす」は暖のの異文。また煖は煙と同字でその異文である。〔記あるが、煖も爰声に従う。暖は暄と同字で、もと暄かるが、煖も爰声に従う。暖は暄と同字で、もと暄って、 ある。〔説文〕一〇上に煖があり、暖と声義が同じでは暖の声がなく、この形声には混乱が の混じた字のように思われる。 と雖も煖かならず」の煖は、煗がもとの字である。 また〔礼記、王制〕「七十は帛に非ざれば煖かなら 意であるが、その音は許袁の反、すなわち暄の異文 八十は人に非ざれば煖かならず。九十は人を得 旧字は暖に作り、爰声。

煗 13 あたたかい・あたためるダン

氏春秋、仲春紀〕「煉氣早く來るときは、蟲 螟害をり」とあり、爲は火にかけてものを温める意。〔呂

段 断(断) 弾(弾) 暖[暖] 煗

鳴らすのは

爲す」と、気節の煗気をいう。 暖の正字である。

談 15 かたる・はなすダン

「かたる」には形成と虚誕の意があり、談をはじめ 準・謎と声義近く、通用することがある。国語の 準・ とう きょく はんしょう はいいい 話にまで拡げて話柄という。わが国で談義に用い、話にまで拡げて話柄という。わが国で談義談論したという。談柄はのち話の種というほどの意談論したという。談柄はのち話の種というほどの意 談は日常的な談話をいう。斉の鄒がは天を論じて博如し、敢て戲談せず」とあり、戲談・談笑のように、あるという。『詩、小雅、節南山』に「憂心惔くがあるという。『詩、小雅、節南山』に「憂心惔くがあるという。『詩、小雅、節などは、「語るなり」とあり、「段注』に平淡の語で 譚・誕にも概ねその傾向がある。 う払子のようなものを手にして、それを振りながらった。 弁を極め、「談天衍」とよばれた。六朝清談の徒も 三上に「語るなり」とあり、 声符は炎。炎に淡・啖の声がある。〔説文〕

壇 だん・建物の基壇・ところダン

通ずる羨道をいうことが多い。〔説文〕は次条に 壇、土を低くしたところが場であるが、場は墓室に 設けたところをいう。土を高く盛りあげたところが 三下に「祭の壇場なり」とあり、祭祀の儀場として 「場は神を祭る道なり」という。〔書、金縢〕に「三 形声 物のある形で、壇の初文。〔説文〕一 声符は亶。亶は土壇の上に建

我知此我以上打不知打犯的知知知知知我我我們們的我們就們就可以的我們

を設け、日神などを祀った。中国の封禅・郊祀もそ栄えたところでは、いずれも方形の高い壇上に祀処 のなごりで、天壇のごときはその最後の遺制である。 だ古い時代から行なわれていたことで、古代文明の いる。このような祀壇を設けることは、おそらく甚

檀 せんだん・まゆみダン

主を檀那、布施によって衆曽りをデーー本なり」とあり、まゆみ。梵語の音訳とが多く、檀越は布施、布施となり、まゆみ。梵語の音訳として、東京の「東京」とあり、まゆみ。梵語の音訳として、東京の「東京」という。 院文書〕にその名がみえる。 紙は、まゆみの樹皮を用いた上質のもので、「正倉 林という。わが国の東北地方で古く作られていた檀 声符は亶。〔説文〕六上に「檀

チ

夕 3 く だ る

する拳・奉は、みな神が上より降下することを意味平面を歩行する形ではない。〔説文〕がこの部に属 7 する字である。 の形である。〔説文〕五下に「後より至るなり。人 の兩脛、後よりこれを致す者あるに象る」とするも、 の形。上より降り来るときの、あと足象形 歩の倒文である季の上の部分

> ∲± ° 地 6 〔墜〕15 〔墜〕15 〔埊〕10

墜蹬

て昜(陽)なるものは天と爲り、重濁にして会まる。〔説文〕二三に「元气始めて分れ、輕清にしないの字形に、自と彖とに従うて隊(隊)に作る字が 后の新字十九文の一としてみえるものである。 がの状を示すものとされたのであろう。 墨は則天武の字に用いることが多い。 **は蛇の形で、地勢の起の字に用いることが多い。 ** ようになった。漢碑及び〔漢書〕には、なお墜を地 地に陳列の意はない。〔説文〕の解は、〔淮南子、墜地に陳列の意はない。〔説文〕の解は、〔淮南子、墜 なり」とあって、地と敶の双声によって訓するが、 (陰) なるものは地と爲る。萬物の敶列するところ 霊の降下するところ、すなわち墜(地)である。金 う。鲁は神霊の陟降する神梯の形。彖はその前に 墜(墜)に作り、その字は会意。自と象と土とに従り、 声符は也。也に池・馳の声がある。初文は のち墜落の字に用いられて、両字が別に行なわれる 形訓〕の文による。地は墜の形声字であるが、墜は 土(社)を設け、その社神に供える牲で、そこが神 声符は也。也に池・馳の声がある。初文は

池 いけ・ほり

池をいう。〔西都賦、 〔説文〕二上に「陂なり」とあり、堀 形声 李善注〕に引く〔説文〕には、 声符は也。也に地の声がある

坻 がために黒くなったという「墨池」の故事がある。 いものとなった。張芝が池に臨んで書を学び、池水 「城に水あるを池といふ」とあり、城の濠のことを いう。のち池苑・池亭など、邸苑の文雅に欠かせな なかす・なぎさ・き-

至ることによって、祭事は終るのである。 あり」と歌われている。女神が無事に男神のもとにたちの追迹を避けるさまは、「梵として水の中域にたちの追迹を避けるさまは、「梵として水の中域に水神祭祀の歌謡であるが、水神たる女神が、祭る者 水神祭祀の歌謡であるが、水神たる女神が、 り」とあり、小さな洲の意。〔詩、秦風、蒹葭〕は ったところを坻という。〔説文〕一三下に「小渚なったところを坻という。〔説文〕一三下に「小渚な かに削りとる意。水中の土が盛り上って、中洲とな 声符は氐。氐は剞劂(彫刻刀)で底を平ら

知 しる・さとる・つかさどるチ

識されるのである。〔左伝〕襄二十六年「子産それする。神に約してはじめてそのことが確知され、認する。神に約してはじめてそのことが確知され、認 まさに政を知らんとす」とある知が字の原義に近く、 べていない。〔玉篇〕に「識るなり。覺るなり」と 字を矢口の会意とするが、その会意とする理由を述 るのである。知は〔説文〕五下に「詞なり」とし、 る意の字で、これによって為すべきことが確認され 口はD、祝禱を収める器の形。神に祝禱し、誓約す 意があって、誓約のときに用いるもの。 矢と口とに従う。矢に矢誓の

> いい、分を知ることを知足・知退という。 られるものである。人の相知るものを知己・知友と 識・知能は、神を祀ることによって神によって与え て、知悉の意となる。知事・知県は司主の意。知は司の誤りで、司主の意であろう。司ることよりしは司の誤りで、司主の意であろう。司ることよりし 司る意がある。〔説文〕の「詞なり」は、ある

値 あたる・もつ・おく・あう

することから、等価・対価の意となる。 羽を値つ」の〔毛伝〕に「持つなり」とあるによるなり」の誤りとする。〔詩、陳風、宛丘〕「その鷺 カ たの誤りとする。 〔詩、陳風、宛丘〕 「その鷺なり」の誤りとする。 〔詩、陳風、祝きう に 「持つ〔説文〕八上に「措くなり」とし、〔段注〕に「持つ ことで、値は人に値うことをいう。 もので、字の初義としがたい。「値つ」は植てて持 随 形声 声符は直。直は人を直視する

恥10[耻]10 はじ・はじる・はずかしめる

致 10 い。俗に耻に作るのは、字形を誤ったものであろう。 るが、左声右形は形声字の造字法としては常例でな る。〔説文〕一○下に「辱づるなり」とし、耳声とす る心は、 会意 耳と心とに従う。ものに恥じ まず耳にあらわれるものであ

いチ たす・おくる・きわめる・おもむき

とに従う。 っ。もと矢の至るところに、人字の初形は致に作り、*\$

Ψį

雅致・遠致・致趣のようにいう。 とを致知という。風韻・風趣に富むことを致といい、 を返すこと、致命は命を棄てる意。知を究め尽すこ つける意にも用いる。また致仕・致政は職を辞し官 すことをいう字であるが、召致・坐致のように呼び む」など、みな送致の意である。此よりして彼に致 君の敝器、下臣をしてこれを執事(使者)に致さし 竟に送致す」、文十二年「不腆なる(粗末なる)先 いように致送の意に用い、[左伝] 文六年「これをのように致送の意に用い、[左伝] 文六年「これを 詣るなり」という。〔晉縣〕に「用て玆の人を玐す」。 の到ることを示す字である。〔説文〕 五下に「送りの到ることを示す字である。〔説文〕 五下に「送り

宮11 「螭」17 神獣の名

离の形象を文様化したものと思われる。 离も同じ。[頌壺] に華麗な蟠螭文を飾っており、卜文・金文に龍(竜)・虎・鳳にみな冠飾があり、 に従う字は、すべて左右・上下の相交わる形をとる。 飾。下部は二虫の相交わる形で、 従ふ」とし、「猛獸なり」とする欧陽 喬の説をあげて 满 いる。〔説文〕一三上の螭がその字である。 四下に「山神。獸形。禽頭に從ひ、 象を変し、 、 螭の初文。〔説文〕 一 冠飾をもつ獣の形に いわゆる蟠螭。离 上部は冠

答 11 むち・たたく・せめるチ

督 刑罰の一としての笞刑をいう。肉刑に代って笞杖を 〔説文〕五上に「撃つなり」とあり、 声符は台。台に治の声がある。

知

あるいは笞殺してしまうことがあった。 加えるのであるが、 しばしば皮膚が破れて虫を生じ、

智 12 ちえ・さかし い・はかりごと

中国包

〔孟子、公孫丑、上〕「是非の心は、智の端なり」 「を智らず」、また〔耕柱〕に「豈能く數百歳の後を経説〕に、「逃臣はその處を智らず。狗吠はその名はい。 金文の字形には白に従うものはない。〔墨子、が、金文の字形には白に従うものはない。〔墨子、 「識る詞なり」と訓し、白・亏・知の会意字とする 字にして、のちに知と智とに分化したものであろう。 のように、名詞的に用いるのが普通である。もと同 智らんや」など、動詞として知と同じように用いる。 神に誓約することを示す字で、知と字の立意が同じ 聖器として用いられる。口は口、祝禱を収める器。 いずれも誓約のときに用いるもの。兵器はしばしば さらに干を加えた字形である。〔説文〕四上に 字の初形は、矢・干・口に従う。矢・干は

遅 [遲]16 おそい

郛 韗 極遠 題 神

(池)・台(治)のような例が多い。〔説文〕ニ下に作り、屋がその声である。屋は喩母。その声に也、形声 旧字は遅に作り、犀声。金文の字形は遅に形声 旧字は遅に作り、犀声。金文の字形は遅に

「徐行するなり」とあり、「詩、邶風、谷風」「道を 「説文」のあげる重文は尸、籀文は犀に従う。 「嗣子 るをいう語である。 壺〕に「屖(遅)々康淑」の句がある。その舒緩な 行くこと遅々たり」の句を引く。遅々は擬声的な語。

黹 12 ぬかとり

黹 ** 新雅

とあり、絲もまた刺文あるものをいう。雅、宋菽りの〔箋〕に「黼黻とは絲衣を謂ふなり」 伝」に「刺したる文に象る」の語がある。〔詩、《ぬいとり》を施す形。黼黻の文様あるをいう。「 『如いとり』を施す形。黼黻の文様あるをいう。〔繋』の上部は帯のところに連なる形で、その衣裳に黼黻の上部は帯のところに連なる形で、その衣裳に黼黻ななり」とし、丵の省に従う字形であるとする。字 る。〔説文〕七下「箴縷(竹針)もて鉄したる所の 象形 」とし、幸の省に従う字形であるとする。 ぬいとりをした巾の形で、蔽膝などに用い 小

痴 (癡)19 おろか・くるう

語がある。後世の文人は自ら好んで詩癡・書癡のよ る薬草の記述があり、「淮南子、俶真訓」に癈狂の「山海経、北山経」に「これを食へば豪無し」とすいいます。 疑声とするが、声が合わない。古い用例がなく、 という。〔説文〕七下に「慧ならざるなり」とし、 ことを決しがたいことをいう。その病的な状態を癡 うに称した。痴は癡の俗字である。 従う。 会意 疑は神思足らず、猶予疑惑して、 旧字は癡に作り、疒と疑とに

稚 「釋」17 「釋」15 わかい

形声の字である。 する。いまは稚の字が用いられる。稚・穉はともに 王」の語があり、〔伝〕に稚子を以て王と為る意と の字に通用する例が多い。〔書、立政、伝〕に「孫子の字に通用する例が多い。〔書、立政、伝〕に「孫立なり」 とあり、またおくてのものをいう。 屖を遅声 遅の声がある。〔説文〕七上に「幼禾を形声 正字は稺に作り、摩声。屖に

繙 こまかいくずぬの・かたびらチ

らいものを絡という。多く祭服に用いた。 たそれで作った夏のかたびらなどをいい、布目のあ

置 13 おく・ゆるす・はなすチ

に「湯、祝りて網する者の、四面に置くを見る」とゆる「かすみ網」の類である。[呂氏春秋、異用]であるが、鳥網などを懸けておく意であろう。いわであるが、鳥網などを懸けておく意であろう。いわ **网直に從ふ」と会意に解する。正直なるものに誤** って網を加え罰する形とし、これを赦すという解釈 意がある。〔説文〕七下に「赦すなり。 声符は直。 直に植てるものの*

に用いる。また放置・舎置のように用いる。 は、網を張りわたす意。それよりすべて設置する意

生 3 きじ・たいらげる・つらねる

發輸

るもので、草切る意の薙と同義である。 り、卜文の字は夷に従う。雉氏は草を殺すことを掌 た〔易氏〕ともかかれ、雉と易・夷は古く同音であ 飾、また羽舞などにも用いた。〔陽礼、雉氏〕はまの名がみえる。雉は瑞鳥として冠冕や婦人祭服の画 神であるが、〔説文〕には雉と鸛字条に四方の神鳥 風神であったことのなごりである。ト辞では鳳が風 四方の風名をあげているのと関連があり、雉がもと 雉の名をあげている。それは卜辞や〔山海経〕にり」として各地の雉の名をあげ、なかに東西南北の 声符は矢。〔説文〕四上に「雉に十四種あ

馳 はせる・おもむく・おう・きそう

奔走することをいう。 弁・馳名のように用いる。馳走とは、接待のために り」とあり、疾駆することをいう。転じて馳心・馳 ある。〔説文〕一〇上に「大いに騙るな形声 声符は也。也に池・地の声が

のべる・しく・ひらく

雉 馳 摛 疐 墀 緻

褫

といい、彫刻を施すことを摛鏤という。ることをいう。それで文辞を作ることを摛縠・摛蘂ることを水り、手でひろげ〔説文〕二上に「鄶ぶるなり」とあり、手でひろげ 們 形声 それを引きはなすことを摛という。 声符は离。离は虫の連なる形。

ء うえる・とどまる・へた・つまずくチ・ティ

齓

華(四つ切り)にし」「士にはこれを疐す(へたを顳(たてるこ)、セー、 たの意とする。〔礼記、曲礼、上〕に瓜を食うとき義。花菓のへたも堅くとどまるものであるから、へ 副(たてよこ八つ切り)し」「國君の爲にはこれを の作法を述べて、「天子の爲に瓜を削るにはこれを 鐘〕に「晩く雹まりて位に在り」とみえ、留止の 曜にして、馻く寔まりて天に在り」、また〔秦公。曜にして、馻く寔まりて天に在り」、また〔秦公段〕に「眉壽無なたことを示す字とみられる。〔秦公段〕に「眉壽無なたことを示す字とみられる。〔秦公改〕に「眉壽に の字形によって考えると、苗木の根の部分を包んで 同意なり」という。馬の鼻に穴をあけて繋ぎ牽く意ものは、馬の鼻を叀ぐが如し。口に從ふ。これ聲となり。叀に従ふ。引きてこれを止むるなり。叀なる に牛に穿鼻を施すことの誤りであろうとする。金文 とするが、馬に穿鼻を施すことはないから、[段注] ることをいう。〔説文〕四下に「礙られて行かざる形は、もと止に作り、根の形。植えこんで根の定ま 若木の根を包んで植えこんだ形。下の疋の

> きの仮借義である。 蹇(つまずく)の意に用いるのは、翼と通用すると

墀 15 漆喰い塗り・きざはし

stands いう漆喰である。漢の未央宮は青瑣丹墀、後宮はいう漆喰である。漢の未央宮はませた。 を丹墀といふ」とあり、塗るに丹漆を用いた。い を丹墀といふ」とあり、す」とり、 る地なり」、また「禮、天子は赤墀(赤い漆喰)にの声がある。[説文]一三下に「涂りた」 という。〔漢官儀〕に「天子は赤墀にす。殿上 声符は犀。犀に遅(遅)・穉 後宮は玄いた。いま

緻 15 こまかい・ぬう・つづれチ

〔詩、大雅、仮楽〕「威儀抑々たり」の〔箋〕に、「密なり」と訓するが、きめの細かいことをいう。〔説文〕新修十九文の一で、徐鉉が補入したもの。 「緻密にして失ふ所無し」とあり、 い意である。 蠸 形声 声符は致。漢代に致密という 一分のすきも

褫 ころもをはぐ・はぎとる・ぬぐチ

魄という。 を免ずることは、その官服を奪うことであるから、 寒ふなり」とあり、人の衣を褫奪するをいう。官職(ることをいう。[説文] 八上に「衣を 形声 心奪われて驚くことを、 声符は虒。虒は虎皮を剝ぎと 奪気褫

16

にもその名がみえる。 子を合せて人を讃することを歌う。〔周礼、笙師〕「伯氏は壎を吹き」仲氏は篪を吹く」と、二人が調 るいは八孔の横笛である。〔詩、小雅、何入斯〕に の字として篪をあげている。竹管一尺四寸、 用いる。〔説文〕六上に「管の樂なり」とし、 痲 に作るが、経籍には篪の字を 形声 声符は虒。正字は鯱 七孔あ 別体

螭

絳螭」とあり、赤色の竜。竜身にして鱗あり、虎をターッ。「赤螭青虯」、また揚雄の〔解嘲〕に「翠虯赤螭」「赤螭青虯」、また揚雄の〔解嘲〕に「翠蝋赤螭」とする。〔上林の賦〕に「蛟龍 るものがあり、連鎖状のものが多い 食うという。青銅器の文様に螭文・蟠螭文といわれ 北方にてはこれを地螻と謂ふ」 れる形。〔説文〕「三上に「龍の若くに形声」 声符は离。离は二虫の相もつ とし、 また

嚔 くさめ・はなひるチ・ティ

篇〕に「噴鼻なり」とは、くさめである。〔詩、邶、悟りて解する气なり」とあり、げっぷをいう。〔玉 風、終風」「願うて曰に則ち嚏す」の〔鄭箋〕に、篇〕に「噴鼻なり」とは、くさめである。〔詩、邶 誰かが自分のことを噂していると、 ぼれている形。嚔は〔説文〕ニ上に 形声 声符は疐。疐は木根の堅く結 嚔が出るという

> のは、古い遺語であるという。わが国でいう「一そ しられ」である。

魑 おに・もののけ・すだまチ

似たもの、 に「魑魅网兩」とあって、山川の怪、山獣の形に附〕カ、トニィド魑は鬼なり」という。〔左伝〕宣三年 山鬼の類をいう。 形声 わる形で神獣とされるもの。〔説文新 声符は离。离は二竜の相まつ

書がある。

豚を去勢する・ゆきなやむチク・チョク・タク

象形

豕を核して去勢する形。 〔説

をそえている。晋の戴凱之、元の李衎に[竹譜]のあり、竹の文化は、文学や絵画の上にも特殊な風趣 形である。〔説文〕の竹部に属するものは一四四文 り。象形。下垂するものは筈籍なり」とあり、筈

竹の葉に象る。〔説文〕五上に「冬生の艸な

箬とは竹笣をいう。字は竹の皮ではなく、

竹葉の象

象形

躓 つまずく・たおれるチ・シツ

贕 跋〕に「載ちその尾を躓む」とみえる。老いたる狼ばっ ***** しては尾につまずき、進退に窮する意である。 は、進もうとしてはあご肉(胡)をふみ、退こうと 「跲くなり」とあり、〔詩、 り」とあり、〔詩、豳風、狼声符は質。〔説文〕ニ下に

靏 とりもち・ねばるチ

り、冢がその初文。〔説文〕の義はイ・丁の字に仮呂刑〕「椓黥」の〔鄭注〕に「椓は破陰なり」とあいま。は去陰の刑なり」とあって、冢と声義同じ。〔書、は去陰の刑なり」とあって、冢と声義同じ。〔書、

〔説文〕三下に「豥は撃つなり」とあり、また「斀

そのために字を作ることも考えがたい。

こと豕々たるなり」とするが、豕の足を絆ることを

文〕九下に「豕、足を絆るなり。行く

聞かず、

りもち竿のことを黐竿という。宋の洪邁の〔容斎随みえ、ねばりのあるもので、とりもちに用いる。と称まれ、はばりのあるもので、とりもちに用いる。と形声 声符は离。〔広雅、釈詁〕に「私なり」と 人の不仁なることを嘆いている。 筆〕巻一三「虫鳥の智」の条に黐竿のことがみえ、

チク

竹 6 たチ

以上一十分以外 然然不然然此以此為此以此為此以不必然 問題 學

の意となる。〔説文〕一三下に「田の畜なり。准南けて染色する。久しく漬けて色を深めるので、停むけて染色する。久しく漬けて色を深めるので、停むでかたばを染める鍋の形。その染汁のなかに糸を漬なと田とに従う。玄は糸たばの形。田はそ

多量

8⊕

畜 10

たくわえる・やしなうチク・キュウ(キウ)・キク

借したものにすぎない。

[釈文]に、筑に作る本があるという。竹はおそら「凡そ大木の偃する所、」 盡く起ててこれを築く」の「凡そ大木の偃 は築で、 く土籠。これに土を盛り、基礎を築くのであろう。 は工作の器である工を固く執る形で、鞏の初文。筑 名に用いるのは仮借で、筑は繁の初文であろう。現のは琵琶の類である。字形よりいえば、字を楽器の 祖本紀〕に「高祖、筑を撃つ」とあり、 土をうち固めて築く意である。「書、金縢」

蓄 13 たくわえる・あつめる・やしなうチク

髪・蓄妾のようにも用いる。 ように積聚するもののほか、蓄思・蓄念、また蓄 蓄は草を積聚する意で、合せて蓄積という。 る。〔説文〕「下に「積むなり」という。積は禾、 形声 たばを漬けておく形で、停畜の意があ 声符は畜。畜は染色の鍋に糸 貯蓄の

築16【築】16 きずく

至

とあり、 き固めるのである。[広雅、釈詁]に「刺すなり」 「畚築」の語があり、🏂で土を入れ、これを杵で擣いた。 (左伝) 宣十一年に上に「築くなり」と互訓する。 [左伝] 宣十一年に う。〔説文〕六上に「擣くなり」とあり、擣字条一二 それに木を加えて、版築によって垣牆を作るをい礎を作ることを意味する字。竹は土籠の意であろう。 形声 〔三蒼解詁〕に、土をうつ杵の頭には鉄沓 声符は筑。筑は工具を執って土を築き、 基

> いう。殷のをつけたと によって築

造された巨

撃つという

大な古城壁が残されている。その各土層の上に、 版築の仕組

(林 巳奈夫『漢代の文物』より)

チツ

さな杵頭のあとが残されているという。

小

帙 8 ふまき・ふくろ

零 鉄の声がある。〔説文〕セ下 声符は失。失に秩・

秩10 む・ととのえる・ついでる

に作るものは〔三家詩〕である。その次序あること り」の句を引くが、今本は「栗々」に作る。「秩々」 とし、「詩、周頌、 ある。 形声 良耜」「これを積むこと秩々た 「説文」七上に「積む見なり」 声符は失。失に帙・鉄の声が

罵って「畜生、何ぞ大事を付するに足らん」とい ったが、畜の音はキウとよむべきである。 の音は積聚、許六の切(キク)の音は飼養、許教のの意とみてよい。畜に三音あり、勃六の切(チク) (キウ)の音は六畜である。隋の文帝は太子を

逐 (逐)" おう・あらそう・はしるチク

冷 女世 数 A T

筑 12 会意の字である。獣が相逐うて争うのを角逐という。 自は脤胙の肉。軍を起すときに携える祭肉で、追も 牲の字で逐とは関係がない。追ば自に従うていて、に「追ふなり」と訓し、豕の省声とするが、豕は豕 逐といい、軍を迫うことを追という。〔説文〕ニ下 豕と辵とに従う。豕は獣。獣を逐うことを

楽器の名・きずく

あるとともに、竹声の字であるとする。〔史記、 ろもまた各異なるが、 筝と似ており、撃ってこれを鳴らす。竹器で の文には混乱があり、各書に引くとこ 竹と現とに従う。〔説文〕五上 竹をもって作った五絃の楽

逐[逐] 筑 蓄 築[築] チッ

帙

チツ 窒蟄 轋 チャ 茶 チャク 辵 着

筵するや を秩序という。〔詩、小雅、賓之初筵〕「賓の初めて 禄・秩俸という。 をいう。官職の次序によって禄を受けるので、秩 左右秩々たり」とは、その威儀あるさま

室 ふさぐ・つまる・ささえるチツ・テツ

國

七下に「塞ぐなり」とあり、塞いで通行を禁ずるを 形声 墓壙の羨道を室皇ということがある。皇は隍で、地いう。塞は呪具の工をもって塡袰する意のだった。地いう。 て、会意であることが知られるが、窒も矢を呪具と 下の甬道をいう。室には金文に蛭に従う字形があった。 室・臺(台)はいずれも会意とみられる字である。 して塡塞するもので、会意の字とみることもできる。 塞は呪具の工をもって填塞する意の字である。 声符は至。至に姪・姪の声がある。〔説文〕

蟄 かくれる・とじこもるチツ・チュウ(チフ)

ごもりすることをいう。伏蟄の終ることを啓蟄という。伏蟄の終ることを啓蟄という。 う。[左伝]紅五年「凡そ祀は啓蟄して郊す」とあ といい、また刑罰の方法として科せられることがあ が国では世にかくれて出でず、家居することを蟄居 り、そのとき蟄雷が蟄虫を驚かせるのだという。 った。 形声 声符は執。〔説文〕一三上に わ

豑 爵の次第・ついでるチッ

字を「平秩」に作り、「周礼、鄭注]には「辨秩」、[書、楽典)「東作を平豒す」の文を引く。今本は「書、楽学院」 〔史記〕に「便程」に作る。秩は積秩の意であるか は次第の意。〔説文〕五上に「爵の次第なり」とし、 用例のない字であり、また弟を次第の意とする会意 字であるから、後起の字であろうと思われる。 ら、豑が秩序の秩の本字であろう。〔書〕のほかに 酌むもので、礼を行なうときの器。弟 会意 豊と弟とに従う。豊は醴酒をない。

チャ

茶。 ちゃ・サ・タ

とあり、「釈文」に「荼は茗の類なり」という。茶絵の声がある。「爾雅、釈木」に「檟は苦荼なり」をあり、「釈文」に「荼は茗の類なり」という。茶彩の声がある。「爾雅、釈木」に「檟は苦荼なり」をある。 法などが詳記され、宋元以来、士人の愛用のものとは唐の陸羽の〔茶経〕に、その由来・製法・飲用 なった。わが国では特に賞翫愛用されて、その作法 である茶道は、わが国の風雅の一領域を占めている。

チャク

辵 はしる・こえるチャク

止は歩。道を行く意である。〔説文〕 · 会 と止とに従う。そは小径、

二下に「乍ち行き、乍ち止まるなり」とするが、 是に従う両形をもつ字が多く、 □ 是に従う両形をもつ字が多く、遺・追・適・遺にイは歩の意である。金文の字形に、 イに従いあるいは 乏えて走るといふが若くす」とあり、今本は足を踏 に従う字形があり、後・復・御に辵に従う字形があ 一足ずつ足を揃えて上るのを拾り、左右を一段ずに作る。輩は走って超える意である。階を上るとき、 る。〔説文〕にまた「讀みて、春秋公羊傳に、階を 歴階の意。拾級という上りかたは、いま神社や特定 つ高く上るのを歴階あるいは栗階という。躇階とは の儀礼のときに、わが国で行なわれているが、もと 中国の古礼であった。 階を上るとき、

着12 つく・きる

形声 碑の〔成陽霊台碑〕に、すでに着が用いられている。その義はあるが、慣用の上で区別する。中国では漢と区別して、到着やまた着物の意に用いる。著にも はその義のときの俗字。わが国では著明・著作の義 がある。著は附著のときにはチャクの声でよむ。 正字は著に作り、者(者)声。者に楮の声 着

嫡 正夫人・よつぎ

零

形声 文〕二下に「孎むなり」とするが、「大盂鼎」にしている。 直系者であった。ゆえに耐は嫡の初文である。〔説 示す字で、そのような禘祀をなしうるものは、帝の 声符は高。商は帝を祀る祭儀の啻(稀)を

り正夫人を嫡室、世嗣ぎを嫡嗣、孫を嫡孫という。 を啻(禘祀)することがみえる。嫡は正嫡。それよ 周王・武王・成王を啻(禘祀)し、「刺鼎」に昭王

チュウ

4 爪を立てる・かたくもつ・うしチュウ(チウ)

A

る。要するに十二支の丑をもって解しようとするも時なり」というが、意味の明らかでないところがあ 文〕一四下に「紐なり。十二月、萬物動きて事を用又(手)の字形の、爪を立てている形である。〔説 象形 の寸は、 形の又を、丑形に作っている。形声字に用いる サホッサッ すぎない。ト文や金文の字形は、爪をあらわして強 み合せて日の干支に用いたもので、記号的なものに ので、字の初形に関しない。十二支はもと十干と組 くものを執る形で、〔叔卣〕の叔の字も戚をもつ ふ。手の形に象る。時に丑を加ふ。亦手を擧ぐるの 丑の省略形とみてよい。 手の指先に力を入れて、強くものを執る形

なチ かュ ウ

A A 1 11/211 4

仲 の間にあって私腹をこやすことを、中飽という。 する。また中間に介在するものをいい、役人が官民 意となり、また外に対して内、体に対して心を意味 る器であり、これは祭祀に用いるもので、木の枝に 文や古文の形はJiに従うているが、Jiは祝禱を入れ は吹流しを加えず、軍の左中右の中と字形に区別が をえらび任命する意であろう。大中小のときの中に ることを示す。ト辞に「中に立まんか」とは、元帥のは、中軍の将がすなわち元帥で、軍の統率者であ 左中右三軍の編成で、 軍旗で、中軍の将の樹てるものであった。殷の軍は 「和なり」と訓するのも、なおその意による。中は すると解するのは、全くの附会である。〔玉篇〕に に從ふ。上下通ずるなり」と、上下の意がよく通達 り」とするのがよい。また〔説文〕に字形を「ローなおそらく内の誤字と思われ、宋本の一部に「内なには「和なり」とし、これに従うものが多い。而は 文〕に「而なり」とするも訓義が合わず、「繋伝」がいに左右に靡く形とするのは理に合わない。(説 これを加えるものは史。全く系統を異にする字であ あるが、なお旗竿の形である。〔説文〕にあげる篆 象形 る。中軍の中よりして、すべて中央・中心・中正の ないが、籀文は上下に吹流しがあり、ただ上下がた る。〔説文〕-上の篆文及び古文の形はみな正しく つけた形のものがあり、中軍の将がもつ旗の形であ 旗竿の形。卜文・金文には上下に吹流しを その中に吹流しをつけている

14 ф

形声 に出に従う形に作るのは、誤りである。繁文の字形ない。両者はその字形を異にしている。繁文の字形 の中には、中軍の中のように吹流しをつけることは 声符は中。〔説文〕八上に「中なり」とあり

史 6 (蟲) 8 むし・キ

〔荘子、在宥〕「災草木に及び、禍止蟲に及ぶ」のを考と謂ふ。三虫に從ふ」という。足の有無が逆で、をきた。 「足有るもの、これを蟲と謂ふ。足無きもの、これ ş かに、鳥虫の態を加えたものを「鳥虫書」という。 また毛羽鱗介の総称として用いる。篆文の字形のな 止は豸。蛇などの虫には足がない。 虫に従う。〔説文〕一三下に 会意 正字は蟲に作り、三 **蟲は昆虫の総称**

沖 わきうごく・おき・ふかい・むなしいチュウ

(A) 0 淵

深く静かなさまをいう語に用いる。道家の語に沖 態であろう。〔書、 和・沖淡・沖虚・沖妙などがある。沖天のような語 り」と水の動くさまをいう語とするが、むしろ水の もあるが、むしろ動をうちに秘めた静というべき状 声符は中。〔説文〕一上に「涌き搖るるな 金縢〕に「惟予沖人、知るに及

チュウ

<u>#</u>

中

語に用いる。 ばず」とは幼弱の人をいう。 わが国では沖べをいう

肘 ひじ・おさえるチュウ(チウ)

指先にも力が入るので、丑の略形としての寸を加え である寸口とは、関係がない。肘に力を入れると、 寸は手の寸口なり」というが、肘と手首の脈どころ う。丑は指先に力を入れて、ものをもつときの形で ある。〔説文〕四下に「臂の節なり。肉寸に従ふ。 たものであろう。 あるが、おそらく丑の省略形であろ 声符は寸。寸に対・討の声

8 たぶらかす・おおいかくす・いつわるチュウ(チウ)

かすなり」とみえる。譸には籌の声義との関係をも壽張とは相欺くこと。〔爾雅、釈訓〕に「佛張は証で民胥譸張して幻を爲すこと或ること無し」とあり、「はない」とあり、「はない」とあり、「はない」とあり、「はない 陳風、防有鵲葉」に「誰か予が美(愛人)を俯かれている。 考えうるが、侜はおそらく後起の形声字であろう。 とあり、 そら(チウ) 蔽することあるなり」という。 壽と声義が通ずる。〔書、無逸〕に 声符は舟。〔説文〕八上に「雕 〔詩、

H H

形声

であろう。〔淮南子、斉俗訓〕に「往古今來、これの果てまでを覆う意とする。天が地を覆うという意 宙を時間の意とする。宇宙はともに一に従うていて を宙と謂ひ、四方上下、これを宇と謂ふ」とあって、 簷、宙を棟梁の意としているが、その方が初義でたった。 うう。『推南子、覧冥訓』の「高誘注」に、宇を屋が、のち分別して空間を字、時間を宙としたのであが、のち分別して空間を字、時間を宙としたのであ 建物の象であり、空間を示す語であったはずである を確かめがたいが、おそらく初文は卣にして、果実は〔説文〕にみえず、占い文字資料にもなくて字源 あろう。由に軸の意があり、棟梁の義に通ずる。由 それで外殼のみあって、内実のないものを宙という。 が熟して中が油化し、空虚となったものであろう。

忠 まごころ・まこと・ただしいチュウ

忠 まず

あり、 形声 上に奉ずるを忠といふ」という忠君の意は、のちの 信・忠恕、また〔左伝〕〔国語〕にみえる忠もみな 心を尽す意で、「逸周書、諡法解」「身を危くして で、臣は道によって進退を決するものとしている。 ものである。〔孟子〕の君臣観は契約関係的なもの 心を尽すことをいう。〔論語〕に敬忠・忠 声符は中。「説文」一〇下に「敬むなり」と

抽。〔擂〕15 ぬきとる チュウ (チウ)

争 擂

> 形声 策つ」とあり、とり出す意。由は直、果実の熟し抽出の義。〔左伝〕哀十一年「矢を抽きてその馬を抽出の義。〔左伝〕哀 注 8 いわゆる属纊、死に臨んで気息の有無を纊を属け、声。また『荀子、礼論』「注纊、聽息の時』とは、『鬼に』に「薬を祝る」というとなっています。」とは、第医』に「薬を祝る」とあり、祝は注と同じない。 主声とするが、 淵 いう。誠心を尽すことを、抽心・抽腸という。 る。抽象とは、物の本質的なものを抽出することを た形から出た字で、抽とはその実をとり出す意とな | 三上に擂を正字とし、「引くなり」という。抽引・ 注。 声符は由。由に宙・鼬の声がある。〔説文〕 形声 形。〔説文〕二上に「灌ぐなり」とし、 もと鐙に油をそそぐ字であろう。 そそ く く 声符は主(主)。主は燭台の

の意であるが、のち註の字を用いる。 て確かめるのである。注釈の注は、この「属ける」

冑

かぶと・よろいチュウ(チウ)

胄 串 PUT- 600 000

一」とあり、〔詩、魯頌、閟宮〕にもその名がみえ、り、深くかぶる曹の形。殷代にはすでに青銅の冑がい、深くかぶる曹の形。殷代にはすでに青銅の冑がい。安くかぶる曹の形。殷代にはすでに青銅の冑がある。金文の字形は、なお下に目を加えたものがあ 文〕セトに「兜鍪なり」とし、由声とするが、由の象形 兜の上の鍪飾をも含めた全体の形。〔説 部分は鉢型の盛と、その上につけられている飾りで

七下に「舟興の極り覆ふ所なり」とあり、水行陸行形声 一声符は由。由に抽・詘の声がある。〔説文〕

に用いるが、本 では冑を鎧の意 貝飾のある頭盔 わが国

· 安女女子 · 女女女女女女女女

30,0



殷代の青銅製の胃

別されているが、おそらく同字異訓であろう。 に「冑は胤なり」と訓する字があり、甲冑の字と区 来は甲は鎧、冑はかぶとである。〔説文〕四下に別

ひる (チウ)

昼。【書】二



をもって 字がなく、家文も籀文も確かな形のものでない。も 從ひ、日に從ふ」とするが、昼夜を区画するために、 辺にそれぞれ小線が加えられていて、暈のある形、会意 旧字は晝に作り、幸と日とに従う。日の周 えている意を説くことができない。 日光を記録する意となるが、それでは日暈の形を加 のであろう。もしまた聿(筆)に従うものならば、 は、「周礼、眡祲」にいう十煇の瞢などにあたるも し字の上部が聿三下に従うものならば、それは呪符 ず、また日暈の形を説きがたい。卜文・金文に昼の 晝(昼)の字が畫(画)に従うとするのは理に合わ 「日の出入して、夜と界を爲す。畫(画)の省に すなわち昼の晦い状態をあらわす。〔説文〕三下に 一
祓う形となる。昼にして日光に暈があるの

柱。(柱)。 はしら・みき・さおチュウ

声符は主(主)。主は燭台の

角柱などにも用いる。 宮廟の建物に用いるものである。楹には盈満の意が六上に「楹なり」とあり、まるく削った主柱をいう。 あり、エンタシスのあるような円柱であろう。 形で直立し、上端に蓋がある。〔説文〕 柱は

約9 しりがい・殷王の名チュウ(チウ)

等] 「牧誓」「武成」にもみな「商王受」と称しておい。 「説文」「三上に「馬の緧なり」とし、財の省声とする。殷の最後の王である帝辛の諡とされるが、 「書、無次」に「殷王受の迷亂」とあり、また「奈 では、「まない。」に「殷王受の強なり」とし、財の省声と は、「おない。」とし、財の省声と は、「おない。」とし、財の省声と が、ない。」とい、財の省声と が、ない。」とい、財の省声と が、ない。」とい、財の省声と が、ない。」とい、財の省声と り、紂はその仮借字であろう。

紐 10 ひも・むすぶ・つまみチュウ(チウ)

母音の部分を韻という。古音の語頭音を古紐と て用いるので、つまみを紐・鈕といい、その飾りにり」とあり、組み紐をいう。印のつまみに紐を通し 三上に「系なり。一に曰く、結びて解くべきものな 古代音韻研究の最も重要な部分をなして たとえば紐は女九の切、女の子音の部分が紐、九の よって亀紐・獣紐という。反切の子音を紐といい、 形声 れて、強くものを執る形。〔説文〕一形声 声符は丑。丑は指先に力を入

衷 なか・こころ・まこと・ただしチュウ

形声 襄二十七年「甲を衷にす」とは、鎧を下に着こんとう。 (左伝)とあり、衣裳の下に着こんだ肌着をいう。 (左伝) われないものを、衷情・衷心・衷誠という。 で、かくすことをいう。それで内にあって外にあら 声符は中。〔説文〕八上に「裏の褻服なり

酎 こいさけ・かもすチュウ(チウ)

酎、金の制があり、この宗廟祭祀のとき、諸侯に祭らされた。天子がこれを飲み、宗廟に薦める。漢代に成るや、天子がこれを飲み、宗廟に薦める。漢代に酒なり」というように、芳醇な濃い酒をいう。その酒なり」というように、芳醇な濃い酒をいう。その酒なり 領を削った。酒税の起原ともいうべきものである。 酒料として献金を命じ、その数量の少ないものは所 形声 【説文】 一四下に「三たび重ねたる 声符は寸。寸は丑の省略形。

啁 なく・たわむれるチュウ (チウ)・トウ (タウ)

渊 語である。 など、小鳥などがせわしく鳴く声をいう。擬声的な 形声 性・啁哳

註 12 ときあかす・しるすチュウ

た。〔方言〕に、南楚ではくだくだしい語を支註と義を明らかにすることをいう。古くは注の字を用い 釈言〕に「疏なり」とあり、解説してその 声符は主(主)。主に注・柱の声がある。

チュ

あり、細密に注記することをいう。いうとする。〔広雅、釈詁〕にまた「識すなり」と

鈕 12 つまみ・ボタン

利 3 チュウ (チウ)

形声 声符は周(周)。周に雕の声をなり」、〔玉篇〕に「密なり」とあって、禾穀の多きなり」、〔玉篇〕に「密なり」とあって、禾穀の多きなり」、〔玉篇〕に「密なり」とあって、禾穀の多まなり」、〔玉篇〕に「密なり」とあって、禾穀の多まうに用いる。

** 13 うつ・ころす・せめる

The second secon

業

厨 15 (厨) 12 くりゃ

鋳 15 【鑄】22 いる・いこむ

て鋳こむのである。初期の金文にみえる字形は、鬲〔説文〕一四上に「金を銷かすなり」とあり、銷かした。 声符は寿(壽)。寿に疇・躊の声がある。

他に及ぼして、若さを失わぬことを「鍼を駐む」、 を駐兵、使者を派遣することを駐割という。のち を駐兵、使者を派遣することを駐割という。のち を駐兵、使者を派遣することを駐割という。のち を駐兵、使者を派遣することを財割という。のち を駐兵、使者を派遣することを財割という。のち

停 16 なかま・とも

精神をうちこむことを「魂を駐む」という。

に 2 とばり・たれまく・おおう チュウ(チウ)

عوم المورد المالة

シュ 17 うつつ (チウ)

をを

会意 幸と支と血とに従う。幸は手械、血は歃血して盟う意。それに支を加えて、盟誓してのち、そして盟う意。それに支を加えて、盟誓してのち、そに「引きて撃つなり。幸せして血を見るに従ふ」という。[呂氏春秋、節義]に「民の利に於けるや、いいう。[呂氏春秋、節義]に「民の利に於けるや、いいう。[呂氏春秋、節義]に「民の利に於けるや、いいう。[呂氏春秋、節義]に「民の利に於けるや、に「引きて撃つなり。」と数さい方。「とは誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に関するものと思われ、「史頌設」に「王、は誓約に大きであり、かれらに対しては適時に適らはその遺民たちであり、かれらに対しては適時に適らはその遺民たちであう。「石鼓文、作原石」に整道、また地名に整定があるほか、他にはほとんど用例のない字である。

繁 1 □ 同中 □ 14 きずな・ほだす・とらえる

(詩、小雅、白駒)に「これを繋ぎこれを継ぐ」、まて説文」「〇上に「馬(足)に絆するなり」という。馬足に中を加えた形で、覊束する意。 お声 声符は執。正字は學に作り、

チュウ

整 繁(曜)

疇

籀(籀)

いる。執の声義を承ける字である。 文献には肇を用いることはなく、すべて繋を用る。文献には肇を用いることはなく、すべて繋をである。文献には肇を用いることはなく、すべて繋を投の馬を繋いで、降服時の所作を再現させる摸擬儀礼である。文献には肇を用いることはなく、すべて繋を投げ、以た [周 頌、有 名] に「ここにこれに繋を投げ、以た [周 頌、有 名] に「ここにこれに繋を投げ、以た [周 頌、有 名] に「ここにこれに繋を投げ、以

形声 字の初形は田疇の象形。その田疇の形が、 の繁文である。〔説文〕二三下に「耕治の田なり。 型でに従ふ。耕田の溝の詰詘(曲りくねる)するにずなるなり」という。壽はまた韀の初文で、壽はもと田疇で豊作を祈ることをいう字であった。田疇以外の訓は、みな仮借義である。

簡19 (奮) 21 よむり(チウ)

大学 一二上に「引くなり」とし、別体の字として抽をあげている。また籀字条玉上には「書を讀むなり」とする。「方言」に「抽は讀むなり」、「詩、鄘風、牆有茨、伝」に「讀は抽なり」とあり、「史記、太史公自序」に「史記を紬む」とみえる。これによると抽・紬・籀・饕(読)はみな声義通じ、これによると抽・紬・籀・饕(読)はみな声義通じ、これによると抽・紬・籀・饕(読)はみな声義通じ、書を読むことをいう字である。「逸、周・書、世俗解。」

類を読むことをもいう。〔漢書、美文志〕に〔史籀、意であったのであろう。それよりして祝詞や誥命には、もと占卜の詞をよみ、占卜の意味を抽繹するは、もと占卜の詞をよみ、占卜の意味を抽繹するである。これらによって考えると、「書を籀む」と 篇]の字がその字体でしるされていたからで、〔説ことをいう。金文の字体を籀文というのは、〔史籀 卦爻の辞をよんで占卜の結果を考えることである。からのおり、書名や人名ではないとする。ト籍とは、「大史、書を雑む」の意で、四字句の識字書の第一 る。「説文、叙」に、大史籀が「大篆、十五篇」をところで、漢の建武のときその六篇を失ったとされた五篇」を録する。この書は周の覚王の太史の作る十五篇」を録する。この書は周の覚王の太史の作る するものがあり、いわゆる大篆は金文後期、 の字体もまた茻に従うている。金文にその字形に合 を列するが、その字は茻に従うており、〔石鼓文〕 文〕艸部「下の末に、いわゆる「大篆、五十三文」 の字も、概ね籀文と一致している。たとえば「説 であったらしく、「石鼓文」や「秦公鐘」「秦公段」 するものが多い。秦が小篆を定める以前の古い字体 文〕所収の籀文の字形は、確かに金文の字形に符合 示すところを読み、その意を紬繹し、その意を悟る きて書を見る」というのと同じく、いずれも神霊の また「大史籀書」とは〔書、金縢〕にいう「籥を啓 王国維ははじめてこれを疑い、「大史籀書」とはから許慎が採録したものとするのが定説であった。 著したとあり、「説文」中に録する籀文は、その書 繇の字を用いるが、その古音は冑にして鑵と同声業が、に「北向して書を兩楹の閒に繇む」とあって

前の字体であることが知られる。

チュウ 籌 濤 躊

チ

ッ

籌 20 かずとり・はかる・はかりごとチュウ(チウ)

籌をもって昼夜家財の計算をしていたという。 りの器で、〔礼記、投壺〕にその法が詳しくしるさ なり」とは、投壺という矢なげの競技における数との声がある。〔説文〕五上に「壺の矢 の意より、計画・策謀の意となる。 して知られる王戎は無類の守銭奴で、常に象牙の も用いた。王隠の〔晋書〕に、竹林の七賢の一人とれている。また射儀のときにも用い、一般の計算にれている。 形声 声符は壽(寿)。壽に儔・疇 計算

壽 21 のろう・はかるチュウ(チウ)

は声義通じ、祝の系列に属する字で、みな人を呪詛は声義通じ、祝の系列に属する字で、みな人を呪詛し」の〔伝〕に「誑すなり」という。傍・淵・壽・し」の〔伝〕に「誑すなり」という。傍・淵・壽・湯・明祖して禱ることをいう。〔書、り」とあって同訓。呪詛して禱ることをいう。〔書、り」とあって同訓。呪詛して禱ることをいう。〔書、 すること、詛祝をいう。

躊 21 ためらうチュウ(チウ)

を、従容・容豫という。 と同じく、 擬声的な語である。そのゆるやかな状態

チ ュ ッ

絀 11 かがむ・しりぞける・ぬうチュツ

に用いる。また點と通用して、逐臣を絀臣といい、る。[説文] ニミ上に「絳きなり」とするが、その義に用いた例なく、繰り通用して縫う意るが、その義に用いた例なく、繰り通用して縫う意の意があります。 用義のときには、出は屈の義を承けている。 人の進退することを黜一陟、また絀陟という。その

黜 おとす・しりぞける・のぞくチュッ

とは、欲望を棄去することをいう。
「君子、徐元鬼」「まさに嗜欲を黜けんとす」をは、欲望を棄去することをいう。 とあり、「書、舜典」に「三載、績を考へ、三考し 明へ赴くことをいう。人材を進退する意である。 て幽明を黜 陟す」とみえる。黜は暗黒へ、陟は神 る。〔説文〕一〇上に「貶し下すなり」形声 声符は出。出には歴の意があれています。

ことをいう。

チュン

速 ゆきなやむ

形声 の止まることをいう。〔易、屯卦〕に「屯如たり、形声 声符は屯。屯に括り束ねる意があり、進行

ら、〔易〕にいう屯っの意には、迍に作るのがよい。すをいう。屯は純縁(へり飾り)の象形であるかっないり」とみえ、馬の行きなやみ、馬首をめぐらっかり」とみえ、馬の行きなやみ、馬首をめぐらい。

チョ

たくわえる

出申 H

横に矢を加えたもの 象形 で貯の初文。金文の図象には、中に戈を収めたもの、 形に下に、貝を加えたものがあって、貝を蔵する器 一四下に「物を辨ち積むなり」とみえる。ト文の字 貝や武具などを貯蔵する箱の形。〔説文〕

財貨を集積貯蔵する などがある。すべて II

佇 立 以 10 たたずむ・まつチョ

て泣く」とみえる。待ちこがれることを、佇結とい〔詩、邶風、燕々〕「瞻望するも及ばず善佇立して以に「久しく立つなり」とあり、佇立することをいう う。字はまた竚に作る。 停滞する意をもつ。〔説文新附〕八上 形声 声符は宁。宁は貯で、そこに とあり、佇立することをいう。

猪二【猪】二【豬」后 いチョしし

ret V

[頌鼎]に「女に命じて成周の貯を官嗣(司)せしいない。 はき まいり くない であろう。賦貢を収納するところをも貯といい、 ロ(奴隷)の意であろう。[伽生設] は良馬の売買 貯、その進人」の語がある。貯は献貢、進人とは生 貯、その進人」の語がある。貯は献貢、進人とは生 に「その 貨を貯といい、農穀を積という。また他より賦貢と〔説文〕六下に「積むなり」とあり、貯積の意。財 「その貯卅田なり」という。租収を代価に充てる意 った。また塵(店)の意に用いる。 ことをしるしており、その貯蔵のところをも貯とい のである。〔毛公鼎〕に「庶民の貯」を保護すべき の類であろう。成周にまた新たに屯倉が加えられた む。新造の貯を監飼せよ」とあり、この貯とは屯倉 をしるすものであるが、その代価を提供することを 貝をしるすものがあり、宁は貝を収める器である。 声符は宁。宁は貯の初文。卜文に宁の下に 儲 18 ある。 淄 形声

約11

ほそあさぬの・いちびチョ

形声

声符は守。〔説文〕

一三上に「麻の屬なり。細き

どの意である。

た部隊を、豬突豨勇と名づけた。向う見ずというほ字に誤りがあろう。王莽は囚人などをもって編成し字に誤りがあろう。王莽は囚人などをもって編成している。

豬を正字とし「豕にして三毛叢居するもの」という。 (著)・褚の声がある。〔説文〕九下に 一下 一声符は者 (者)。者に著

楮 13 こうぞ・かみ

著

(著)13

「着」12 つく・あらわす

形声

声符は者(者)。者は堵・書

の従うところで、呪祝をそこに含める

紵衣は貴重な贈物として扱われている。 [周礼] にとみえ、上質の布をいう。 [左伝] 襄二十九年に、ものを絵といひ、布白くして細きものを紵といふ」

典枲の官があって、その生産を管理した。

の武帝のときの皮幣が最も古い。楮はまた書字に用 もので、桑科の落葉喬木。葉も実も桑に似ている。 六上に「穀なり」とあり、穀桑・楮桑ともよばれる い、詩文を毫(筆)楮・楮墨のようにいう。 形声 (猪)・著(著)の声がある。〔説文〕 声符は者(者)。者に

箸 15 [筋] 13 はし・たけづつ・たるチョ

う。飯箸の意は〔急 就篇〕にみえている。 食事に用いるはしは比節といい、箸箱を節籠子といる外もあるが、秦漢の碑銘の字には著がみえている。 文』に著の字を収めず、それで著撰の字に箸を用い

そなえる・たくわえる・そえるチョ

- 説文〕五上に「飯の献なり」という。〔説文〕五上に「飯の献なり」という。〔説声符は者(者)。者に堵・著(著)の声が

0

部

諸に諸多・多数の意がある。〔説文〕ハ上に「傍ふ 備えて用意する意であるから、太子を儲位・儲君・ を儲価という。 儲后・儲弐といい、予備米を儲米、かけねすること るなり」とあり、儲積することをいう。あらかじめ 著(著)・褚の声があり、諸も同じ。形声 声符は諸(諸)。者(者)に 諸も同じ。

躇 19 [踞] 19 ふむ・ためらう

礼のことであった。 年に「階を躇えて走る」とみえ、それは甚だしく非 ろえずに升ることを、躇階という。 [公羊伝] 宣六 の語は、連語の擬声語である。階段を左右の足をそ に字を踞に作るが、躊躇・イテなど形声 声符は著(著)。〔説文〕ニト

チョウ

中 チョ 紵 0 中戶官 皆

貯 12

たくわえる

字の慣用上に区別がある。

意図が明らかにされる意味の字である。著と着とは を録している。本来は者の声義を承け、そこにある 着はその用義のときの俗字。〔説文〕五上は箸のみ 意である。著明のときはチョ、附著のときはチャク、

ぎョゥウ ひのと

ば丙を魚尾とする。郭沫若はその説によるが、ト〔爾雅〕では干名をすべて魚の部分名とし、たとえ 形義ともに当るところがない。卜文・金文の字形は と獣骨、丙丁は丙は柄で台座あるいは礎質(うちたは二干ずつ一連をなす話と思われるが、甲乙は亀版 文・金文の字形は、魚骨に似たところはない。十干 の形に似ているので頂という。十干の義はみな仮借。 まさに釘頭の形である。人においては、頭頂がそ 心に象る」とする。丁実とは丁壮成実の意であるが 時には萬物みな丁寳あり。象形。丁は丙を承く。人 たく台)の形、丁は釘頭でうちたたいた頭の形で、 それぞれ相対する語である。 釈魚〕に「魚枕、これを丁と謂ふ」とあり、 釘の形で、 釘の初文。〔説文〕一四下に「夏

弔 とむらう・いたむ・あわれむチョウ(テウ)

弔の字形は、繳の形にして叔の音でよみ、『中喪の字》です。 れており、叔・繳の音は同じ。金文の 骨を収めるので、その骨を拾うとき、獣を追うため とする。古くは屍を草野に棄て、その風化を待って すなわち弔問の意とし、字形を「人と弓とに從ふ」 とは別である。〔説文〕ハ上に「終りを問ふなり」、 に弓を持参することを示す字と、解したのであろう。 象形 繳の形。字は従来叔と釈さ

の形で、その白光を叔(叔し)という。弔喪のことる。叔には弔とは別にその字があり、滅の刃部ある。叔には弔とは別にその字があり、*****。 男子に淑しとせられず」の意であれる。とかしそれは誤釈によるもので、も 「神の弔る」とよまれている句も、「神の淑しとす とは戦国期以後の文献にみえる。〔詩、小雅、天保〕 うによまれ、その「不弔」という語が〔詩〕〔書〕 ず」、〔詩、小雅、節南山〕「昊天に弔はれず」のよ 弔と釈する例が多く、〔書、多士〕「昊天に弔はれ伯叔の字とすべきものであるが、文献にはそのまま 弋 繳の形で、その字は繳の音であるから叔と釈し、たことがみえる。 弔と釈すべきト文・金文の字形はたことがみえる。 弔と釈すべきト文・金文の字形は 収めるために弓を携えてゆき、「弾竹の歌」を歌っ にもみえ、また〔呉越春秋〕に、孝子が父母の屍を 草野の間に屍を棄てることは「孟子、滕文公、上」 を示す字は、ト文・金文にその字がない。弔喪のこ る」の意である。

庁 5 「廳」25 やくしょ

[玉篇]に「客廚なり」とあって、客間の意とし、 古く廷・庭といった語で、事を聴き、訟を察する。そに、そに、といれて、題(聴)声。庁は丁声。形声 旧字は廳に作り、聽(聴)声。庁は丁声。 に用いる。もと神事を扱うところであった。 いまもその意に用いる。わが国では庁を社務所の意 ところをいう。官府の政務をとるところである。

火 6 うらかた・きざし

いう。ト兆によって予兆し、その兆証を判断する。「分るるなり」とあり、灼によって生じたわれめを 千里縫を界として、その左右対称に灼くト法によっ よって数えた。 また数の兆に用いる。古くは万・億・兆は十進法に て、あらわれるト兆の形である。〔説文〕ニ上に われめをいう。亀版の中央の 亀きばく などの、灼けた

吊 中山 つるす チョウ (テウ)

問の弔と解している。吊は〔字彙〕に弔の俗字とし淑、弔は淑の仮借)を「弔はれず」の意に用い、弔〔詩〕〔書〕などの文献では、たとえば「不弔」(不 釣と関係のある語であろう。わが国では近世以後 に用いる字である。 てみえるが、吊を弔の意に用いることはなく、吊は 象形 ち繳の声であるが、金文のこの字形は 正字は弔で、繳の形。すなわ

町 7 あぜ・うね・まちチョウ(チャウ)

ことである。わが国では「まち」、市街の意に用い、 また土地の区画をいう。 「殘田なり」の訓があり、隄防などに用いる間地の る處」としているのがよい。下文の畸字条などに に「左伝、正義」に引くところによって「田の残れ ぜ道をいう。〔段注〕に践を衍字とするが、〔義証〕 「田の踐む處を町といふ」とあり、あ 形声 声符は丁。〔説文〕一三下に

耴 7 たれみみ (テフ)

字を子張といい、張耳の意である。 いうものがあり、字を子耳という。魯の叔孫輒ものものはなく、鄭の七穆(王族)のうちに公孫輒とのものはなく、鄭の七穆(王族)のうちに公孫輒と り、秦の公子耴の例をあげている。秦にはその人名 〔説文〕 二上に「耳垂るるなり」とあ 象形 耳たぶの大きく垂れている形。

かるい・おろかチョウ(テウ)

うに用い、得意気に往来することを佻々という。 釈言〕には「偸なり」という。〔説文〕ハ上に「愉 しきなり」とするのは、偸の誤り。軽佻・佻巧のよ 形声 であるが、古くは偸と通用し、「爾雅、 声符は兆。跳と声義の近い字

長 ながい・かしら・たっとぶチョウ(チャウ)

0 茶 爱 禄 大秀

兀なるものは高遠の意なり。久しければ則ち變化す。 字説によって形を改めたところがある。卜文・金文 が、その部分が長髪の形である。篆文の字形には、 亡聲」とし、その亡は亡を倒にした形であるという 「説文」カ下に「久遠なるなり。 工に從ひ七に從ふ。象形 長髪の人の形。氏族の長老を意味する。 の字形は、長髪を垂れた人の側身形に作り、字意は

チョウ

耴

佻

長

肉 挑

迢

凋

意より長短・長久、また優秀の意となる。秦の〔釋〕敵の長老に、徴罰を加えている字形である。長老の 字の中央は挺立する長髪の人の形。虜囚となったで、長老の象徴とされた。徴は長髪の人を撃つ形で、ものであろう。長髪は長老の人のみに許されるもの 字形を失ったものである。 山碑〕の字形はすでに〔説文〕正篆に近く、本来の を合理化しようとして、かえってその字説を誤った ような頭の人の形)とする俗説があり、許慎は字形 極めて明白である。許慎の当時、長を馬頭人(馬の

夕 タ チョウ(テウ)

挙要〕には、肉を卣の古文としている。のような形容語であったかも知れない。「古今韻会 疑うべきである。ただ三肉を重ねる籀文の字は、 属する字で、「讀みて調の若くす」という囱の声は 弧形の器で、もと瓠の中を刳ったもの、瓢簞の類で直も由も、〔説文〕に録していない字である。卣はまた〔群経正字〕には由の初文ではないかという。ではないかと考えられる。〔段注〕にその説があり、ではないかと考えられる。〔段注〕にその説があり、 と考えられる。それならば歯・卣・由はもと一系に あろう。その果実が熟して油化したものが事である る例はなく、その字形からいえば、むしろ卣の初文その実の形である。ただ鹵をその声義において用い に「艸木の實垂るること歯々然たるなり。象形」と いう。栗・粟はこの部に属する字であるから、肉は と垂れ下る形。〔説文〕七上 象形 草木の実がふさふさ

9 たわむ・いどむ・かかげるチョウ(テウ)

A COLUMN

「説文」 二上に「撓むなり」とあり、力を加えてまな。 はじけ裂けたさけめを示す字である。 跳躍の字であるが、声義の通ずるところがある。 げることをいう。筆勢の強くはねるものを挑剔、 立ちまわりを挑刀、 形声 声符は兆。兆はト兆の形で、 割礼のことを挑筋という。跳は

迢9 はるか・とおいチョウ (テウ)

九首〕に「滔々たる牽牛星」とみえる。迢遥・迢礁とあり、遠く遥かなところをいう。〔文選、古詩十とあり、遠く遥かなところをいう。〔文選、古詩十人の「治なり」 など、みな漢魏の詩文にみえる語である。 形声 説文新附〕二下に「遭なり」声符は召。召に超・鬢の声が

倀 くるう・たおれるチョウ(チャウ)

〔山月記〕にみえるようなものであろう。 は、虎に食われて虎に憑りつく霊をいう。中島敦の なり」とし、また「一に曰く、仆るるなり」とあっ〜 恨の意がある。〔説文〕八上に「狂ふ 人の衰老のさまをいう語のようである。倀鬼と 形声 声符は長。長に悵のように傷

凋 しぼむ・いたむ・おちるチョウ(テウ)

墹 ものをいう。 それで稠文を生ずることを凋という。 ある盾の形で、その画文の稠密なる形声 声符は周(周)。周は彫飾の形声

六〇二

巡し10 においざけ・においぐさ

象形 酒器のなかで、香りをつける鬱草を酒にひたしている形で、その酒を鬱幽という。[説文]玉下に「租を以て鬱草を醸す。 分芳の服するところ、「に、和を以て鬱草を醸す。 分芳の服するところ、「は、象る。 とはこれを扱ふ所以なり」とする。米の形は鬱草、ヒ形のところは器の圏足の部分である。トロという。」とは、一世幽一 自」を賜与する例が多くみえる。その器とともって神を降すなり。 間という。「関礼」に「響学や」が、「製」」を賜与する例が多くみえる。その器とともに下賜されたものであろう。「周礼」に「響学字条五下に、鬱鬯百草の華を合醸し、その芬香を鬱字条五下に、鬱鬯百草の華を合醸し、その芬香をもって神を降すものであるという。祭儀のときにはないない。

| 1 とばり・まく・ちょうめん

用いることがあるが、字書にみえない字である。 には、出納のことを記入するものであるから、腹をには、出納のことを記入するものであるから、腹を 長の声義をとる。張りめぐらすものの意。帳簿の字

正文 11 はる・ひろげる・おおき

精练

た。 「一張一弛は、文武の道なり」という。のちすべて る意とする。〔詩、小雅、香口」「既に我が弓を張る意とする。〔詩、小雅、香口」「既に我が弓を張る」というのが字の初義。〔礼記、雑記、下〕にる」というのが字の初義。〔礼記、雑記、下〕にる」というのが字の初義。〔礼記、雑記、下〕にる」というのがを飲る形声 声符は長。〔説文〕ニ下に「弓の弦を飲る形声 声符は長。〔説文〕ニ下に「弓の弦を飲る

彫 11 【彫】11 ほる・かざる

という。「説文」九上に「珍文なり」とあって、また。「表」とうとに従う。周はという。「説文」九上に「珍文なり」とあって、明なという。「説文」九上に「珍文なり」とあって、「形木は彫るべからず」とみえ、材質にかかわらず「朽木は彫るべからず」とみえ、材質にかかわらず「大人は彫るべからず」とみえ、材質にかかわらず「大人間」などに「文句」とあって、また。「大人間」という。西周中期の金文「休盤」などに「文句」ないます。「大人間」という。西周中期の金文「休盤」などに「文句」ないます。「本人にいるのである。

長 11 いたむ・うらむ・なげく

11 ながめる (テウ)

し」とあり、秦漢以後に用例がある。 形声 声符は兆。〔説文〕四上に「目 がいる明(の所)に居りて、以て遠く眺望すべ がいるのであろう。〔礼記、月令〕に「仲春の であるが、を漢以後に用例がある。

グラ 11 ふかくひろい・しとやか

金 1 (金) 11 つり・とる・もとめる

(詩)に釣魚を発想とするものが多く、みな結婚のするなり」、〔玉篇〕に「魚を釣るなり」としている。 おの針の象形であろう。〔説文〕 一四上に「魚を鉤がら、字はもと刁に従う字で、から、字はもと刁に従う字で、

の象徴とする考えかたがあった。

頂1 いただき (チャウ)

不 情 縣 山

下面 声符は丁。丁は釘の平頭の意であるから、 をつけ、これによって九品の官位をあらわした。 下質なり」とする。顕は顚倒の字であり、山頂な に「頗なり」とする。顕は顚倒の字であり、山頂な との玉を頂子という。頂上の一鍼とは、急所をとら その玉を頂子という。頂上の一鍼とは、急所をとら であること。頂戴・頂礼は、もと仏教徒の敬 えて戒めること。頂戴・頂礼は、もと仏教徒の敬 えて戒めること。頂戴・頂礼は、もと仏教徒の敬 れのしかたであった。

鳥11 とり (テウ)

声 家教 黄

象形 鳥の全形。「説文」四上に「長尾の禽の總名象形 鳥の全形。「説文」四上に「長尾の禽の總名の長短にはかかわりなく、その示しかたの上に異なの長短にはかかわりなく、その示しかたの上に異なの長短にはかかわりなく、その示しかたの上に異なの意識があるものとみられる。

蝶12 しゃべる アフン

形声 声符は葉。葉に蝶・蝶の声がある。[玉篇] とは、巧みに淀みなく話す意。 を京師に喋む」とは、巧みに淀みなく話す意。 を京師に喋む」とは、諸呂の叛に、多くの流血のあを京師に喋む」とは、諸呂の叛に、多くの流血のあを京師に喋む」とは、諸呂の叛に、多くの流血のあを京師に喋む」とは、諸呂の叛に、多くの流血のあを京師に喋む」とは、諸呂の叛に、多くの流血のある。[玉篇]

塚に「塚」は「冢」はつかっ

界 多到

形声 声符は冢。冢はばと豕とに従う。冢は犬牡。 これを埋めて、その上を土で覆うた形で、塚(塚) をいう。〔説文〕九上に「高墳なり」とし、冢声と する。廟屋のあるものは家、ただ土を覆うのみのも のが冢である。〔説文〕に字形を勺に従うものとす るが、金文にみえる家司徒・冢司馬の字は、墳形に るが、金文にみえる家司とを管理する。塚は冢の俗字で、 その封丘や喪祭のことを管理する。塚はそのちのとす

朝12【朝】12 あさ・まつりごと

朝かずずり

全意 艸と日と月とに従う。草間に日があらわれ、 なお月影の残るさまを示す。金文には月に代って水なお月影の残るさまを示す。金文には月に代って水をかき、潮汐の意を示す形のものがある。「説文」と上に「旦なり。軟(旗)に從ひ、舟聲」というのは、その篆文の字形によっていうものであろう。ト文・金文の字形は草間に日の升る形であり、旗の形に従うものではなく、また舟に従う形のものであろう。ト文・金文の字形は草間に日の升る形であり、旗の形に従うものではなく、また舟に従う形のものである。於代に「朝朝夕の字はそのまま潮汐の字となる。殷代に「朝明夕の字はそのまま潮汐の字となる。殷代に「朝時に政務の行なわれるときであったので、朝政・朝年がの意に用い、来朝・朝宗の意となった。「三体石経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易しているが、なお金経」の古文の字形は扁蒡を互易している。

明 12 みがく・ほる

湖 雷曹

大の秘部などに彫飾を加えた、儀礼用の玉戈の名で ある。周は彫飾のある盾の形。彫琢を加える意がある。周は彫飾のある盾の形。彫琢を加える意がある。〔説文〕一上に「玉を治むるなり」とあり、琱玉をいう。金文に〔琱生殷〕があり、その字は周正をいる。ただ治玉のみでなく、彫文を加える意がある。金文の賜与に「戈瑪威」というものがあり、那がある。金文の賜与に「戈瑪威」というものがあり、那になった。

あろう。

眠 1 ふくれる・はれる

形声 声符は長。長に張大の意がある。〔急・記念、注〕に「腹の鼓張するをいふなり」とあり、腹(な)成十年「まさに食はんとす。張る。厠に如く」というのは、急に腹が張って苦しむ意。その注にというのは、急に腹が張って苦しむ意。その注にというのは、急に腹が振って苦しむ意。その注にというのは、急に腹が振って苦しむ意。その注にというのは、急に動がしている。

上 1 はりつける・おぎなう

形声 声符はば、占に貼り声がある。 で質にして以て葬する無し。身自ら販貼す」とあって、金を前借りして働く意。貼身すなわち召使いとなることからの転義であり、『説文』に附入すべきなることからの転義であり、『説文』に附入すべきなることを貼職という。上に貼り足すことが原義で、唐代には詔勅を改めることを貼黄という。黄紙にかかれた詔勅の上に、更に黄紙を貼付するので表で、唐代には詔勅を改めることを貼黄という。黄紙にかかれた詔勅の上に、更に黄紙を貼付するのである。ただ貼付・貼膏のときの音はテンで、音を異ある。ただ貼付・貼膏のときの音はテンで、音を異ある。ただ貼付・貼膏のときの音はテンで、音を異ある。まだ密通者を貼失という。

四 12 こえる・とおい・おどる

牒 3 よだ・かきもの

腸 3 ちょう・はらわた・こころ

形声 声符は易。易に暢の声がある。 「説文」四下に「大小の腸なり」とあり、字をまた、腰に作ることがある。いずれも伸長動することを心に瀝ぐ、悲痛の甚だしいことを断腸動することを心に瀝ぐ、悲痛の甚だしいことを断腸かすることを心に瀝ぐ、悲痛の甚だしいことを断腸かする。とないう。〔世説新語、紫光〕に、蜀の三峡で子を失という。〔世説新語、紫光〕に、蜀の三峡で子を失という。〔世説新語、紫光〕に、蜀の声がある。

13 いどむ・たわむれる・からかう チョウ(テウ)

形声 声符は光。光に挑の意がある。 「説文」三上に「相評びて誘ふなり」とあり、挑と声義が近い。また人をからかう調ととあり、挑と声義が近い。また人をからかう調ととあり、挑と声義が近い。また人をからかう調と

比 3 とぶ・おどる・つまずく

形声 声符は兆。兆はト兆の走り裂いなな勢いではびこることをいう。

徴1 【戦】15 めす・しるし・あらわれる

題精 一一一一一一一一

会意 旧字は微に作り、でと堂と支に従う。宝宝字形にみえるものは、人の長髪の形で孔。この長髪の人を路上(イ)において支つのは、これによってその求めるところは、挺立する人の形で孔。この長髪の人を路上(イ)において支つのは、これによってその求めるところを得ようとする呪的行為でよってその求めるところは、挺立する人の形で孔。これにする。これでは、京の大きの人を路上(イ)において支のの形で孔。これにする。これであるう。いずれにしても、その部族を代表するなってあるう。いずれにしても、その部族を代表するなってある。

本来は「微し」とよむ字である。徴は同じく長髪の 義とし、その効験のあらわれることを徴験、またこ 懲らしめる呪的行為をいう。ゆえに徴召・徴求を原 化することを微という。微は微小の意とされるが、 を抹殺する。これを殺すのを蔑といい、これを無力ので、戦に勝つとまずこの巫女を殴って、その呪力 とき、軍の先頭にあって呪的な厭伏の祈りをするもつ形。字の中央は長髪の巫女の側身形。戦争などの 両者を関連させたのであろう。徴は長髪の巫女を殴 が近く、それで微賤よりして徴招を受ける意と解し、 〔説文〕の説解もその意と思われる。微と字の構造 る字である。 徴はいずれも、 れによって懲止させるので、懲罰の意となる。徴・ 人を殴って、その要求するところを徴し、また敵を ない。〔慧琳音義〕に「凡そ士、微(卑賤)に行ふ す」というが、文に誤脱があるらしく、文意が通じ に行ひて、しかも文の達する者は、即ちこれを徴 なり」と訓し、「微の省に從ふ。王を徴と爲す。微 ある。従って徴は懲の初文。〔説文〕八上に「召す に足るものに対して、この徴求の呪儀を行なうので 朝廷に聞するときは卽ち徴せらる」とあり、 そのような共感呪術的方法を意味す

14 のびる・やわらぐ チャウ)

にも「舊國舊都、これを望むに暢然たり」など、滕文公、上〕に「草木暢茂」とあり、〔荘子、則陽〕となれた。上、に「草木暢茂」とあり、〔荘子、則陽〕形声 声符は易。易に腸の声がある。易は陽光、形声 声符は易。

チョウ

肇(肇)

肈

蔦

早い文献にもみえる語である。

肇は「肇」は はじめ・もと・うつ

常 阿野野山縣

会意 戸(戸)と戈と聿とに従う。戸は祝禱の器

| 14 つた・つたかずら

とされ、祝、頌詩の発想に用いられた。
とおれ、祝、頌詩の発想に用いられた。
とされ、祝、頌詩の発想に用いられた。
とされ、祝、頌詩の発想に用いられた。

14 こえる・国名

学 大学 金兴

通ずる。金文にみえるが、国名にのみ用いる。 はみな消・削の声。趙はおそらく超と通ずる字であろう。〔説文〕ニ上に「整ること 趙し」というが、ろう。〔説文〕ニ上に「整ること 趙し」というが、ろう。「説文」ニ上に「整ること 趙し」というが、ろう。「説文」に収める肖声の字を表す。 声符は背・削の声。趙はおそらく超と通ずる字であれる。

14 くるまのひさし・すなわちチョウ(テフ)

仮借義である。 ているのでいう。「すなはち」という語詞の用法は、 なり」とあり、車輿の両旁のひさしが、耴の形に似 〔説文〕 一四上に「車の兩輪(おおい) 声符は耴。 乳は耳の垂れる形

銚 14 なべ・すき・ほチョウ(テウ)

国策、秦策〕に「銚を把り耨を推す」とあって、草の類。また「一に曰く、田器なり」とはすき。〔戦 を銚子という。 をすきとるものである。わが国では、酒を温める器 「温器なり」とあり、ものを温める鍋形声 声符は兆。〔説文〕一四上に

あざける (テウ)

「嘘るなり」とあって、嘲笑することをいう。調はきには調弄、からかう意である。[説文新附]ニ上には誤った。 ものがあり、嘲風という。 に用いる。宮殿屋上の隅の飾りに、獣角の形をした また。啁に作り、三字みな同じ語で嘲戯・嘲罵の意

潮 5 【潮】 5 [淖] 1 うしお (テウ)

〔説文〕の正字はその扁旁を互易したものにすぎな 形声 潮の干満を、のち潮汐の字によって示した。 旁を水に作り、潮汐の意をあらわすものがあるが、 に作るが、それは朝の異文である。朝の初形のうち、 い。朝の初形の水に従うものが潮の初文で、朝夕の 声符は朝(朝)。〔説文〕一上に正字を淳

澂 ¹⁵ すむ・きよらかチョウ

とあり、 を用いており、正俗の字ではない。 俗字であろうとする説もあるが、漢碑にはみな澄字 徴の省声とする。激は〔説文〕一上に「淸むなり」 清澄の意。澄も声義ともに同じ字で、澂の 形声 文〕には旁の形の字を収めず、すべて 声符は黴(黴)の省文。〔説

澄 15 すむ・きよらかチョウ

激 澈なるものをいう。〔方言〕に「澂は淸なり」と の意より、すべて清澄・透明なことをいい、心に移 な澄を用いており、澂の異文としてよい。水の澄明 あり、澂が正字、澄は俗字とされるが、漢碑にはみ して澄心清意のようにいう。 形声 声符は登。字はもと澂に作り

蝶 15 ちょう (テフ)

形声 ある。業は葉、うすくひらひらするも 声符は葉。葉に喋・牒の声が

> (莊子、 てまた多くみえる。 ら用いられている字である。詩文では唐以後に至っ 蜨なり」とする。二字畳韻の語。また胡蝶という。いかの意がある。〔説文〕「三上に蜨を正字とし、「蛱のの意がある。〔説文〕「三上に蜨を正字とし、「蛱 斉物論〕に胡蝶夢の話がみえ、蝶は古くか

調 15 「調」5 ととのう・やわらぐ・あざむく

えらび調える意である。調和・調戯のときは平声、うに、調和の意を含めた用法もあるが、もと、ものをうに、調和の意を含めた用法もあるが、もと、ものを 徴召のときは去声。声によって訓義を異にする。 調召・調遷という。調度の調も徴の意で、予定を立て 啁 と通じ、欺弄の意をもつ。租庸調に用いる調は、****・。調謔となって、嘲弄の意となる。調はまた、嘲・ 和適の状態が過ぎると、多言となり、調笑となり、 ふ」のように、和適の状態となることをいう。その いる。調達は阮籍の〔楽論〕に「陰陽調達す」の て準備すること、殊に武器などを調達する意味に用 おそらく徴の意であろう。召されて栄転するのを 形声 声符は周 (周)。周は彫飾

髫 15 たれがみ (テウ)

きを垂鬢といい、鬢齔とは歯の抜けおちる七・八れたる結なり」とあって、垂れ髪をいう。幼年のとれたる 形声 ある。〔説文新附〕九上に「小兒の垂 声符は召。召に迢・超の声

聴 のが正しく、〔詩〕の鞗革はその誤であろう。 「塩心」2 きく・ゆるす・まかせる

騬 0 即地

「賊諜を斬殺して、これを搏つことを掌る」とみえるものなり」とあり、間諜の意。「周礼、掌戮」にったさいある。〔説文〕三上に「軍中の反閒す

る。〔左伝〕に間諜のことが多くしるされており、

第十三篇に〔用間〕がある。

課

まわしもの・うかがうチョウ(テフ)

形声

声符は葉。葉に喋・蝶の声が

歳の子をいう。

形にかかれている。これも神意を聴く意である。「王の聽はこれをあるか」「王の聽になされるとの字は耳の旁に二世をそえたとするものがあり、その字は耳の夢になさか」と字で、今は跪いて神意を聴く意の字である。ト辞に 聆に「聽くなり」と互訓しているが、聆も令に従うた!! を聞き、その意を聡る意である。〔説文〕は次条の聞くものを聖といい、その聡聞を聴という。神の声聞くものを聖といい、その聡聞を聴という。神の声 たい形である。ト文の聞・望は、みな人の挺立するり」とあり、王声とするが、王は耳と切りはなしが目の呪力をいう字である。〔説文〕二上に「聆くな 会意 形に従い、遠く聞き、遠く見る意を示す。そのよく 字である。旁は呪飾を施した目と心とに従い、もと 意で、その旁に祝禱の器の出をそえると、聖となるの毛、卜文の聞はその形に作る。神の声を聞く人の 旧字は聽に作り、偏は耳と人の挺立する形

報17 ゆみぶくろ チョウ (チャウ)

〔説文〕に「鐵なり。一に曰く、轡首の銅なり」と

し、以周切でイウの音。金文に「鞗勒」を「攸勒」

とあって、ともに大幺切、テウの音である。鋚は

亦鋚に作る」とし、「鋚、鐵なり。又轡首の銅なり」

〔説文〕にみえず、〔玉篇〕に「鞗、轡なり。

鞗

たずな・かはのたずなチョウ(テウ)・ジョウ(デウ)

盾の象。その文彩あるものを彫という。それできるいが、その正字は彫(彫)である。周は彫刻したまない。

雕像・雕鏤など、むしろ雕をその意に用いることが もいい、雕鶚という。また彫と通用して、雕刻・に「鷲なり。能く草を食ふ」とあり、また一名鶚と

を観にす」とみえる。〔秦風、小戎〕に「虎観」のり」とあり、〔詩、小雅、宋禄が〕に「ここにその弓り」とあり、〔詩、小雅、宋禄が〕に「ここにその弓がない。 形声 声符は長。韋は韋皮、なめし

> に作る。字はまた鬯を仮借することがある。らしむ」は、いずれも張大の意。ゆえに形声字を韔 「天命を惠遹す」、〔毛公鼎〕「我が邦我が家を適な 中に動がみえ、画はその象形字。「象伯 茲設」に語があり、虎皮で作ったものもあった。金文の賜与

懲 18 【懲】19 こらす・とどめる

よる膺懲を意味する。〔詩、小雅、沔水〕「寧ぞことも膺懲を意味する。〔詩、小雅、沔水〕「寧ぞことは艾と同じく艾治の意である。懲は呪的な方法に懲の初文。〔説文〕一〇下に「怂りるなり」とするが、 變 で懲戒・懲罰・懲治の意となる。 れを懲むる莫き」と懲らし止める意に用いる。 形声 人を殴って、徴求・徴責する意の字で、 声符は徴(徴)。徴は長髪の

雕 〔孫子〕

わし・きざむ

声符は周 (周)。周

とあり、また一名鶚と

記 18 うみがめ・あさチョウ(テウ)

最影 電

ろうと楊樹達はいう。ただ古文の字形は皀に従うてで、旦と朝とは古く同義、その声も近かったのであ 量とはその音を異にするが、量は朝に仮借する字形声 声符は旦。いまの字音にましてに Eと **鼂」のように朝の字に仮借するのは、字が旦に従** ***(朝のまぐわい)を快くす」、〔九章、哀郢〕「甲の(朝のまぐわい)を快くす」、〔九章、哀郢〕「甲の ならば字はもと象形であろう。〔楚辞、天間〕 「最飽は頭部の象形より変化したものとも考えられ、それ おり、字形になお不確かなところがあって、その形 声符は旦。いまの字音においては、旦と その字音を仮りたものとすべきで

彫反とする。皮の馬勒であるから、字も鞗勒とする 諜 雕 韔 懲[懲] 鼂

〔詩、小雅、蓼蕭」に「鞗革」に作り、〔釈文〕に徒

としるすことが多く、おそらくそれが古音であろう。

た形で、

字はまた晁に作る。・「説文」「三下に海亀の類とみて「送記」なりある。〔説文〕「三下に海亀の類とみて「送記」に「海邊というが、その実体が知られない。〔広韻〕に「海邊というが、その実体が知られない。〔広韻〕に「海邊というが、その実体が知られない。〔だ記文〕「三下に海亀の類とみて「送記」なりある。〔説文〕「三下に海亀の類とみて「送記」なり

写 19 いつくしむ・めぐむ

源 食

会意 べと龍(竜)とに従う。龍は****。****、高いと龍(竜)とに従う。龍はその神像を配りがることが行なわれるので、龍はその神像を配りがることが行なわれるので、龍はその神像を記りがることが行なわれるので、龍はその神像を安置するとことが行なわれるので、龍はその神像を安置するとことが行なわれるので、龍はその神像を安置するとことが行なわれるので、龍はその神像を安置するとことが行なわれるので、電はその神像を安置するところ、またその恩寵を受ける意である。「説文」というのと何から与えられる恩寵をいい、その寵幸を受けるものを寵姫・寵臣という。「老子」第十三章「龍谷」という。「老子」第十三章「龍谷」という。「老子」第十三章「龍谷」という。「老子」第十三章「龍谷」という。「老子」第十三章「龍谷」という。「本子」のものから与えられる恩寵をいい、その龍幸を受けるものを寵姫・龍田という。「老子」第十三章「龍谷」という。「本子」第十三章「龍谷」という。「本子」第十三章「龍谷」というない。「本子」第十三章「龍はそのから与えられる恩寵をいう。「本子」というない。

無 1 (無) 19 魚のやわらかい骨・たい

の意とするが、その用例をみない。鯛は〔万葉〕にの意とするが、その用例をみない。鯛はまた棘「驚魚ともいう。ひれのつよい魚のい。鯛はまた棘「驚魚ともいう。ひれのつよい魚のい。鯛はまた棘「驚魚ともいう。ひれのつよい魚のい。鯛はまた棘「驚魚ともいう。ひれのつよい魚のい。鯛は「食経」に「味、甘冷にして毒無し」ともみえ、「和名類深を対して「多比」ともみえ、「からが、わが国では美味第一とされるものである。いうが、わが国では美味第一とされるものである。いうが、わが国では美味第一とされるものである。

ふ」とする。〔大学〕の「十目の視る所」の意とす

る。〔説文〕一三下に「正しく見るなり。

十目に従

ことを省道といい、直はその省から分岐した字であ

監査を行なうことをいう。地方を巡察する

出来 25 うりよね チョウ (テウ)

緊急のときには放出するという政策をとった。 常平糶糴の法が行なわれ、安価のときには買上げ、 府による穀の売買をいう。穀価を安定させるために、 軽価を安定させるために、 類性 形声 声符は翟。〔説文〕七上に「穀

チョク

一丁 3 とまる

くり は、イデを合せて、躑躅の字と解しての訓である。 は、イデを合せて、躑躅の字と解しての訓である。 は、イデを合せて、躑躅の字と解しての訓である。 まちよち歩きするさまをいう。

直8 あう・あたる・ただしい

直秦

るものであるが、上部の十の形は目に呪力を加えるものであるが、上部の十の形は目に呪力を加えるに、本条の古文の字形に似ている。〔嗣子壺〕やは、本条の古文の字形に似ている。〔嗣子壺〕やは、本条の古文の字形に似ている。〔嗣子壺〕やみえる。しは隔てる意を示すものであるらしく、その呪能を匿す意であろう。徳と声義ともに近い字であり、その呪能の内面化したもの、その能力がその人格に固有のものとなったとき、これを徳という。直はいわばその直接的な呪力の表現ということができよう。またその呪力は、正しく立って相対うときに威力を発揮するので、相値う意となり、植てる意となる。その呪力によって悪邪より人を護衛するので、宿直の意となる。省・直・恵・徳は一の系列をなす地面の意となる。省・直・恵・徳は一の系列をなす地面の意となる。省・直・恵・徳は一の系列をなす

動の【軟】11 いましめる・みことのり

敕の俗字として用いる。敕は束薪などを束ねて、こ清めるための儀礼を意味する字であるが、文献には会意 束と力とに従う。力は素の象形。もと来を

義ではない。 字である。いま勅を詔勅の意に用いるのは、その本

抄 10 おさめる・はかどる

じて用いる。 おが国では進歩のように、声義ともに、時に通る。わが国では進歩のように、声義ともに、時に通れる意に用い

10 のぼる・すすむ・たかい

野鄉 乳粉

会意 自と歩(歩)とに従う。書は神霊の上下するときに用いる神梯。陟降とは神霊の陟降往来することをいう字である。〔説文〕一四下に「登るなり」というも、もと神霊についていう語であり、「祖、関予小子」「庭に陟降す」というのがその原義。旋ば延にして、神を迎えるところをいう。「周頌、訪落」にはまた「厥の家に陟降す」というのがその原義。旋ば延にして、神を迎えるところをいう。での義。旋ば全近にして、神を迎えるところをいう。と歌う。ト辞に神霊の陟降を下する例があるが、また「祖乙に陟告せんか」「祖甲に陟せんか」のように祈る儀礼がある。すべて神霊に関していう語であった。のち〔詩、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟りてて帝のち〔詩、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟りてのち、前、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟りてのち、前、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟りてのち、前、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟りてのち、前、魏風、陟岵〕「彼の岵に陟ることをいう。

って帖に陟るのは、磯振り的な儀礼のためであった。この詩もなお、国見的な望郷の詩である。他郷にあ

敕 11 いましめる・みことのり・つつしむ

村業

会意 東と支とに従う。東は東薪・東嶺など、た会意 東と支とに従う。東は東薪・東嶺など、たに説文] 三下に「誠むるなり」と面則している。〔続文] 三下に「誠むるなり」とあり、その字は東に従うていて、嚢中にもののある形。それを撃ち整える意であるが、東ならば形声の字としがたい。言部を記述す」、また〔极夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔极夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔极夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔秋夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔秋夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔秋夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴な謎す」、また〔秋夷鐘〕に「敗が左右の庶民を聴ない。言説をもってするを諫というのであろう。〔説文〕に「一に曰く、地に話すを取らのであろう。〔説文〕に「一に曰く、地に話すを取らである。東・東・東に従う字形の間には、いくらかの混乱があるように思われる。の間には、いくらかの混乱があるように思われる。の間には、いくらかの混乱があるように思われる。

的 3 チョク

し、力を致す意と誤り解したものであろう。似は食り」とし、食声とするが、それは字を力に従う字となどの意となる。〔説文〕一三下に「堅きを致すななどの意となる。〔説文〕一三下に「堅きを致すななどの意となる。〔説文〕一三下に「堅きを致すななどの意となる。〔説文〕一三下に「堅きを致すない。力は巾の形

武備の成る意にも用いる。また〔詩、小雅、六月〕「戎 車旣に飾ふ」のように、り飭整の字となった。のち飾身・飭正の意にも用い、の初文、巾は拭き清めるのに用いるもので、それよ

チン

沈っ しずむ・かくれる・しずか

枕 8 まくら・ねむる

チョク

本作 形声 声符は光。 欠に沈・鴆の声が 「枕中の鴻寶」は、漢の淮南王安が、その道術の秘生」は挽歌であるが、「角枕、粲たり」とは棺中の生」は挽歌であるが、「角枕、粲たり」とは棺中の生」は挽歌である。「枕流漱石」は枕石漱流というべく、人の姿である。「枕流漱石」は枕石漱流というべく、人の姿である。「枕流漱石」は枕石漱流というべく、

珍 9 めずらしい・たから

形声 声符は念。卜文に貝を包みこれを連振りに用いて珍玩という。

朕 12 (段) 12 (段) 12 かれ・きざし

胸財的外別

て、その形義ともに不明であるとしている。代名詞[説文]ハ下に「我なり」とし、また「闕」とあっ両手をもってものを奉ずる形で送(送)の初文。会意 正字は舟と笑とに従う。舟は盤の形。笑は

「朕が福盟を部かにし、朕く天子に臣へん」とあり、朕のような複用の例もみられる。周初の〔爻殷〕にと、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない」と、「ない にいいられ、また朕吾・余は一人称所有格の語として用いられ、また朕吾・余は一人称所有格の語として用いられ、また朕吾・余 関わりのないものである。ことを神聖にするために、 子の自称は、秦の始皇帝にはじまるとされているが 無きもの、これを瞽と謂ふ」とみえる。朕という天 その音はチン。「周礼、序官、警蒙、注」に「目睽斉物論」「ひとりその睽を得ず」とある字である。というないは、おそらく睽字の誤用であろう。〔荘子、とするのは、おそらく睽字の誤用であろう。〔荘子、とするのは、お 副詞にも用いる。朕とのようにもののきざしの意 てその語はのち代名詞となった。金文においては朕 それらはもと身分称号であったが、その伝統によっ 王子に用いられる子・余・我・朕などの語があり、 賸の初文であり、その音も賸送の音でよむべき字でいくとといいました。 誤用のままに今まで伝えられていたもので、朕・勅 われる。ト辞に王位継承の順位者を示す語として、 ある。のち天子の自称に用いて音を改めたものとい は仮借の用法であるから、字の本義とはしがたい。 人はしばしば滑稽な誤りをおかすものである。 などの字は、その字の本義において、その用法とは

陳 11 からねる・のべる・ひさしい

開門 整制減量

会意 自と東とに従う。金文の字形は敷・墜の両

たこれを次第して述るので陳述の意となる。〔墨制〕「大師に命じ、詩を陳ねて以て民風を觀る」、『礼記、王伝〕隠五年「魚を陳ねてこれを觀る」、『礼記、王伝〕隠五年「魚を陳ねてこれを觀る」、『紀代』であろう。陳設・布陳してものを察するので、『左 器は、 作る。 らなり - とし、敷を陳列の意とする。金文では、陳東(橐)に従う形である。また敶については「列すいり」とするが、もと申の字形を含むものでなく、・・・ [説文]一四下に「宛丘なり。舜の後、嬀滿の封ぜら入れたものを列する形で、陳列の意がある。陳は う。〔詩、豳風、七月〕「我その陳きを取りて 我がとが久しいことから陳久・陳腐の意となるのであろ 形。豪中のものはおそらく農穀の類であるらしく、 蔡の陳は敶の形に作り、また田斉の陳氏は鏖の形にまるなり」とし、敶を陳列の意とする。金文では、陳るなり」とし、敶を陳列の意とする。金文では、陳え 系に分れているが、いずれも神梯の前に橐(東) り、陳・田は古く同声であった。ただ田斉諸侯の彝子、号令〕にみえる陳 表を、〔雑守篇〕に田表に作 農夫を食ふ」とは、陳薦の久しいものを放出したの から陳列の意となり、陳設の意となり、供薦するこ 社神の前におく形とみられる。陳々相列するところ 敶はその橐を撃って脱穀する形であり、墜はこれを れし所なり」とし、「自に從ひ、木に從ひ、申の聲 田はのちの仮借字である。 すべて墜侯と称しており、 いずれも神梯の象に従い、その前に橐をおく 田に作るものはな

椹 3 あてぎ・さわらぎ

た磁に作り、木のあて木を椹という。椹質とは首切形声が一声符は甚。甚に堪・湛の声がある。砧をま

を「さわらの木」に用いる。実を桑椹といい、桑酒を椹酒という。わが国では字実を桑椹といい、桑酒を椹酒という。わが国では字り台。肉刑を加えるときのあて木である。また桑の

椿 13 つばき

などは珍の仮借。わが国だけの使いかたである。ものは椿、臭なるものは樗、材質の堅い木であるとり。八千歳を以て春と爲し、八千歳を以て秋と爲り。八千歳を以て春と爲し、八千歳を以て秋と爲いう。〔荘子、逍遥遊〕に「上古に大椿なるものあり。八千歳を以て春と爲し、八千歳を以て秋と爲いる。〔在子、逍遥遊〕に「上古に大椿なるものあいる。

賃 3 やとう・かりる

順循標

はジン、チンは慣用の音である。 篇〕に「借傭するなり」とあって、賃銀を払って人篇」に「借傭するなり」とあって、賃銀を払って人 であって、賃銀を払って人

15 毒ある鳥の名

毒酒を耽といい、誤ってこれを飲めば即死、この鳥たすと激毒をうることができるとされている。そのうてその毒をたくわえているので、その羽を酒にひあり、また「運日」の名があるという。鳩は蝮を食あり、また「運日」の名があるという。鳩は蝮を食あり、また「運日」の名があるという。鳩は蝮を食あり、また、沈の声が影声がある。

え、その毒を解くには犀角が有効であるという。れる。鴆毒をもって人を殺したことは多く史伝にみの巣のある下数十歩の間は、草を生じないと伝えら

鎮 18 【銀】 18 しずめる・おさえ

はてこれを (では、) の (では

楚墓には特に怪奇な形状のものが多い。呪霊鎮撫の であった。[職方氏]に「山鎭」、〔天府〕に ものであった。[職方氏]に「山鎭」、〔天府〕に ものであった。[職方氏]に「山鎭」、〔天府〕に ものであった。[職方氏]に「山鎭」、〔天府〕に をのは、その神霊を鎮めるための呪玉である。〔楚 るのは、その神霊を鎮めるための呪玉である。〔楚 るのは、その神霊を鎮めるための呪玉である。〔楚 さいた。また墓鎮として怪獣の状を作るものがあり、 は、遠くその初義を離れたものである。〔周礼、大は、遠くその初義を離れたものである。〔周礼、大は、 は、京社)に「白玉を鎮と爲す」とあり、 である。「東礼」とあり、 である。「東礼」とあり、 である。「東礼」とあり、 である。「風礼、大は、遠くその初義を離れたものである。「風礼、大は、遠くその初義を離れたものである。「周礼、大は、ないた。」。

用いる。

18 とびだす・うかがう

会意 門と馬とに従う。〔説文〕二三 に流がある。 会意 門と馬とに従う。〔説文〕二三 を意 門と馬とに従う。〔説文〕二三 を意 門と馬とに従う。〔説文〕二三 を意 門と馬とに従う。〔説文〕二三

ツィ

追の「追」ロ おう・およぶ・したがう

鎮墓獣

が、変は獣を逐う意で狩猟の際のことであり、追はに、前条の逐には「追ふなり」と互訓している。「説文」ニ下に追を形声字として「逐ふなり」を追という。軍を分って行動するときは、自肉を領け与えるので遭という。遺肉を受けて敵を追うのを追という。軍を分って行動することをいう字である。「説文」ニ下に追を形声字として「逐ふなり」と訓し、前条の逐には「追ふなり」と互訓していると訓し、前条の逐には「追ふなり」と互訓している。皆は軍行のとき、軍社に会意 自と是とに従う。皆は軍行のとき、軍社に会意 自と是とに従う。皆は軍行のとき、軍社に

語である。 追はのちに語義を誤って加えたもので、 的に遡った対象に対する行為をも追といい、追孝・ 西に羞追せしむ」「戎、大いに同まりて、女に追從追撃で軍事行動にいう。〔不饗覧〕「王、我に命じて 司尊彝」にも追享の語がある。追儺はただ儺といい、 追祀・追享のようにいう。みな金文にみえ、 す」のように用いる。後より追う意であるが、時間 わが国の造 一周礼、

椎 つち・うつ・たたく ツイ (ツヰ)

また椎形の髻を椎髻という。とあって、槌の意。椎撃・椎殺・椎破のようにいう。 ある。 形声 〔説文〕 六上に「撃つ所以なり」 声符は焦。隹に堆・ 確の声が

槌 つち・うつ・たたくツイ(ツヰ)

椎と声義同じ。ゆえに金椎を鎚という。 東にてはこれを槌と謂ふ」とあって、方言である。 形声 に蚕棚の柱の義とするが、また「關 声符は追(追)。〔説文〕六上

墜 15 [墜] 15 おちる・おとす・うしなうツイ(ツヰ)

秀秀 髭

* 会意 旧字は墜に作り、隊(X 旧字は墜に作り、 隊(隊)と土とに従う。 そこは神が神梯よ

語、晋語〕に「敬みて命を墜さず」というのは、 の遺語である。

縋 すがる・かける・なわツイ(ツヰ)

これに鋒をつけて、縄を安定させて下りるので、これに鎌を縄で縋って下りることをいう。縋るときには、 あり、〔左伝〕僖三十年「夜、縋りて出づ」とは、 れを県鎮という。 形声 上に「繩を以て縣くる所あるなり」と 声符は追(追)。〔説文〕一三

懟 18 うらむ・うれえるツイ(ツヰ)

뾀 解〕に「凡そ熟國九十有國」とあって、また悪戻を然は〔書、康誥〕に「元惡大熟」、〔逸周書、世代とし」とあって、懟は狼戻(みだりがわしい)の義。って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「彊禦に懟多って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「彊禦に懟多って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「彊禦に懟多って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「彊禦に懟多って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「彊禦に懟多って同訓である。〔詩、大雅、蕩〕に「帰禦に対象 はたらくものをいう。 じ。憝にも〔説文〕一〇下にまた「怨むなり」とあ 下に「怨むなり」とあり、熟と声義同 声符は對(対)。〔説文〕一〇

ツウ

通10 (通)" とおる・いたる・かようツウ・トウ

鏅 増 遞

るが、 にいう。金文に「通彔(禄)永命」の語が多くみえ わたることをいい、通年・通史・通論・通算のよう するのみでなく、すべて凝滞することなく、全体に もまた凝滞することのない意である。通路の通達 のをいう。〔説文〕ニ下に「達なり」とあり、達ニト は桶の形で、桶の声がある。空洞にして通達するも (湯)・兪 (偸) 通禄と永命とを対文とする語である。 声符は甬。 のように音の転ずるものがある。甬 角は喩母。 喩母の字に

痛 いたむ・なやむ・おしむ・きびしいツウ

痛傷を深く感ずる意。 の意がある。〔説文〕七下に「病むなり」とあり、 痛飲・痛快・痛罵・痛恨のように用いる。 形声 がある。 声符は甬。甬に通(通)の声 甬は桶の形で、通達するもの 徹底してことをなす意に用い

迁 つじ・十字路

平安初期の点本にその訓がある。 四道交出の道をいう。辻は古くは「つむじ」といい、 する十を加えた。その意にあたる漢字に逵があり、 通路・通行を意味する辵に、十字路を意味

テイ

4 ぬきでる

?*

これを掲げて挺立する人の姿が王である。そとはそ ある日を掲げて、これを神に呈示する形の字であり、 る。非望をねがうを逞という。 見ようとする字、壬も呈示・呈奏の呈に従う字であ ある。呈・聖・望の初字はみなこの挺立する人の形 説もあるが、廷の初文はこの形に従うものでなく、 立つ形にすぎず、挺抜の意をもつものではない。ま なす意と解するようであるが、字は人が上を望んで は事なり」とし、士人は他に挺立するもので、善を であり、天を望んで立ち、神意を聞き、妖祥を望み 土主のある聖地に障壁を施して、儀礼を行なう形で た字を廷・庭の廷との関係において考えようとする はない。〔説文〕 八上に「善なり。人士に從ふ。士 の形が異なる。ただこの壬を、文字として用いた例 呈(呈)の字の下部の形。呈は祝禱の器で

たのむ・ねんごろ

丁寧はもと楽器の名であるから、慇懃の意のときにざい。 り」とあり、人にものを依嘱することをいう。 声符は丁。〔玉篇〕に「叮嚀は囑付するな £ 依頼

灯

低

呈(呈)

廷

は、叮嚀とかくのが本字である

氏 5 もと・いたる・ひく

による平地の意とする。底・低・抵・郡はすべて下 [説文]は氏一三下を土崩れと解し、従って氐を土崩 垦 砥礪はそれを礪石にかける意である。 部を低平にする意。卜文・金文に氐の字をみないが る意。〔説文〕「二下に「本なり。 氏は曲刀の形で、これを用いて氏族共餐を行なう。 一は地なり」とし、地の平らかな意とする。 刻刀の形。それで削って底を低平にす 氏と一とに従う。氏は細長い 氏に従ひ、下に一

みぎわ・たいらかテイ

なところ、 文〕一上に「平らかなり」とあり、洲渚の平らか 水打際をいう。 形声 で、平らかの意がある。 〔説 声符は丁。丁は釘頭

ひ・ともしび

の字である。〔類篇〕に「烈しき火なり」とする。〔類篇〕に燈・灯をそれぞれ分載しており、もと別 形声 のち燈と通用し、燈火の意に用いる。 声符は丁。燈の俗字とされるが、 〔玉篇〕 もと別

低 ひテくイ い・たれる・ふす

腄 「下きなり」とする。 らり」とする。、氏に低平の意が声符は氐。〔説文新附〕 ハ上に

は頭を低れて考えるもので、低迷という。あり、人に及ぼして低という。思案にあまるときに

呈 呈元 すすめる・さしあげるテイ

る。呈は側身形。その正面形は藁である。献呈し、また露呈のように外にあらわれる意に用い 呈はその神に呈示・呈上する形の字である。尊上に にもその字はみえないが、壬は聖・望また聞の初文 の従うところで、すべて神意を伺う形の字であり、 くなり」とするが、その用義例はない。卜文・金文 に「平らかなるなり」、また〔広雅、釈詁〕に「解 立って祝禱の器を捧げ、 会意 従う。口は形で祝禱を収める器。人が 旧字は呈に作り、口と毛とに 神に祈る形。〔説文〕ニ上

廷, ひろにわ・たいらか・やくしょティ

徭 0 国廷 国国

のところで、 らく金文にいう中廷の意であろう。〔小盂鼎〕にし なる。〔説文〕ニ下に「朝中なり」とするが、 とは庭前にただ障壁などを加えて区画を施したのみ れる。庭は廷に屋廡の形を加えたものであるが、も るが、冊命賜与などの儀礼は、すべて中廷で行なわ るすような大規模な献馘の儀礼は、大廷で行なわれ に肉を供える形に作るものがあり、 礼の場を示し、そこに酒をそそいで灌鬯し、とき 声府は王。金文の字形は、土主をおいた儀 そこに土主を祀り、灌鬯して神を降し、 いまの字形と異 おそ

様礼を執行した。饗宴のときにもここに酒を灌いで地を祀ったが、そのとき鴆毒などを用いるものがあると、土が墳盈して発覚するという話が、〔左伝〕 「クロッのをのをでは、公字の障蔽のとりかたと似てる区画のとりかたは、公字の障蔽のとりかたと似てるの画のとりかたは、公字の障蔽のとりかたと似ている。いずれも廷前の、平面の見とりの形を字にしたものである。

弟 ア しだい・おとうと

表演·皇·安全

また。 「電味の大学なのとである。 「電味の大学なり」として古文をあげるが、ト辞のの方長短を次第する意となる。 「説文」には第の字のち長短を次第する意となる。 「説文」には第の字がなく、弟がその初文である。 「説文」には第の字がなく、弟がその初文である。 「説文」には第の字がなく、弟がその初文である。 「説文」 エ下に

下 8 さだまる・おさまる・やすらか

画家 拿

定めることを定といい、定礎という。のち安定・規の詩にも定星のことがみえる。建物の位置、方位を劇風、定之方中」は衛の都作りを歌うもので、そいないで、でしていまた営堂ともよばれた。〔詩、定星は方位を正し、また営堂ともよばれた。〔詩、定星は方位を正し、また営堂ともよばれた。〔詩、定星は方位を正し、また営堂ともよばれた。〔詩、

びん。ディーでの意となった。奠と声義が近い。

底 8 テイ・いたる・およぶ

唐。西。市

物」といい、その等が底に転じたものとみられる。 う疑問副詞に用いる。「何等のものぞ」の意を「等意。氏には下を平らかにする意があり、設営のときに地を平らかにし、固めることをいう。それで安定に地を平らかにし、固めることをいう。それで安定に地を平らかにし、固めることをいう。それで安定に地を平らかにし、固めることをいう。それで安定に地を平の意が生れる。唐宗の詩に「なんぞ」という疑問副詞に用いる。「仲は建物、氏は低平の意である形声」を対していい、その等が底に転じたものとみられる。

名 8 たたりをするけもの・たたり

景系属

ト間の意である。また販セトは殺(殺)・蔡・竄と上に「脩毫の獣なり。一に曰く、河内の名冢なり。上に従ひ、下は毛足に象る。讀みて弟の如くす」とし、重文として籀文・古文の字形をあげている。その字は、ト辞では崇の意に用いられるもので、〔説文〕」上崇の条に「神禍なり」とあるものと同じ字文〕」上崇の条に「神禍なり」とあるものと同じ字文〕」上崇の条に「神禍なり」とあるものと同じ字文〕」上崇の条に「神禍なり」とあるものと同じ字文〕」上崇の条に「神禍なり」とあるものと同じ字を形である。またその字に従うものに数三下があり、

声義の通ずる字で、蔡は崇の象形、殺・弑(弑)は 神を減殺する共感呪術的な呪儀をいう。これら一系 の字の関係よりいえば、祟・蔡・君の字は、それぞ の字の関係よりいえば、祟・蔡・君の字は、それぞ の字の関係よりいえば、祟・蔡・君の字は、それぞ の字の関係よりいえば、祟・ないから分化したとみ たれる。すべて呪霊をもつ長毛の獣の象形から出て いる字である。

抵 8 おす・こばむ・いたる・あたる

8 テイ・ネイ

★形 台上の皿に血漿のある形。 ★形 台上の皿に血漿のある形。 「周礼、小祝」に「風旱を寧んず」とあって、ト辞できか」というトラの辞にも、この字を用いる。 「周礼、小祝」に「風旱を寧んず」とあって、ト辞できか」というトラの辞にも、この字を用いる。 「周礼、小祝」に「風旱を寧んず」とあって、ト辞できた。 「あれ、小祝」に「風旱を寧んず」とあって、ト辞できた。

耶 8 やしき・やど・はたごや

形育 声符は氏。氏に低平の意がある。「説文」 木下に「屬國の舎なり」 とあり、諸侯が都に参上したときに宿るところ。そという。 邸閣とはもと食糧を貯蔵する官有の建物でという。 邸閣とはもと食糧を貯蔵する官有の建物でという。 邸閣とはもと食糧を貯蔵する官有の建物でという。

亭 9 やど・ものみだい・あずまや

◆杯 &形 高と同型の建物で、ときに楼 して亭々という。〔説文〕五下に「民の安定すると ころなり。亭に樓あり」とし、丁声とするが、下に 加えられているものは、左右出入のところを示す形 で、丁ではない。また亭・定の畳韻をもって訓とす るが、この建物は宿舎と候望(ものみ)とを兼ねた もので、いわゆる駅亭である。〔漢書〕百官公卿表〕 に「十里に一亭、十亭に一郷……、凡そ亭二萬九千 六百三十五なり」とみえる。〔関礼、遺人〕に「五 十里に市あり、市に候館あり」とみえて候館といい、「風俗通〕に「春秋國語に、書、(疆)に寓望あり。 今の亭を謂ふなり」とみえる。〔戦国策〕に亭の名があり、漢制はそれによるものであろう。漢簡や地 参の類に、地方行政区として亭部の名がみえている。 巻の類に、地方行政区として亭部の名がみえている。

〔玉篇〕に「髮を除くなり」とあり、 形声 声符は弟。正字は翳に作る。

亭

剃[髴]

帝柢

牴[觝]

みゆいを剃蒻工という。れた字である。剃刀はかみそり。理髪師を剃工、かれた字である。剃刀はかみそり。理髪師を剃工、か剃髪とは落飾して僧となること。仏教語として作ら

守 9 あまつかみ・みかど

南高 平京

象形 神を配るときの祭卓の形。示も祭卓の形であるが、帝はそれに締縛(くくった足)を加え、左右より交叉する脚を、中央で結んで安定した大卓をいう。最も尊貴な神を祀るときのもので、その祭祀の対象となるものをもその名でよんだ。すなわち。市を祀る祭卓の意である。〔説文〕一上に「諦かにするなり」とし、「独断」にも「帝なるものは諦なり。能く天道を行ひ、天に事ふること審諦なるなり」とあって、帝・諦の同声をもって解するのは、当時行なわれた音義的解釈である。また字形について、「説文」に「上に從ひ、東聲」とするが声が一て、「説文」に「上に從ひ、東聲」とするが声が一て、「説文」に「上に從ひ、東聲」とするが声がって記する、字はまた上に従う形ではない。呉太・淡のり」とあって、帝・諦の同声をもって解するのは、当時行なわれた音義的解釈である。また字形について、「説文」に、字は花奈の象形であり、そこに万有の始源の意があると解するが、ト文の字形は大きな祭卓の形で、上帝をはじめ自然神系列のものを帝として祀ったもの。その最高神は上帝とよばれ、金文にも「大豊設」「元くと下帝に奔走す」、「奈川の道道で、「大豊設」「元く上下帝に奔走す」、「奈川の道道で、「大きという。」といるという。

「文学、 君子偕老〕は、国君夫人の悼亡の挽歌であるが、然しなきがいた異なるからであろう。〔詩、鄘風、が殷周において異なるからであろう。〔詩、鄘風、 代の帝の観念とは、すでに異なるものであった。 神仙の居るところを帝郷・帝宮としたが、それは古 くなる」と、その死を荘厳する。のち道家において、 「なんぞかく天のごとくなる」なんぞかく帝のごと 声義は、諦よりも嫡の声義のうちに伝えられている。 である嫡系のものであることを示すのである。帝の えた形に作る。その字は香、のちの字形では商であ されるが、金文では帝の下に祝禱の器である口をそ 祖王の霊は、天にあって上帝の左右につかえるも した。殷王にすでに帝甲・帝乙の名がみえている。 いうのも、嫡主の意である。 り嫡であって、その禘祀をなすものが、帝の直系者 の字は帝の字の中央に、横長の方形を加えた形で示 は帝の直系者である王の特権とされた。卜文ではそ とされた。上帝を祀る祭祀は藩とよばれ、その執行 の歴王に帝を称するものがないのは、帝の観念 道徳〕に「帝なるものは天下の適なり」と のち王者自ら帝号を称

低のかれるぎす

牴g [紙] 12 stra·sta

貞酊

に作る。角力を角觝、また角抵という。 . Ⅲ ♪ キーワ゚ セーマ゙ 出るるなり」とあって互訓。禁また鵤宇条≧ティピ 「牴るるなり」とあって互訓。禁また鵤宇条≧ティピ 「牴るるなり」とあって互訓。禁 また觸字条四下に「牴るるなり」とあって互訓。 の字である。「説文」ニ上に「觸るるなり」とあり、 あり、獣が頭を下げて角で角牴する意 声符は氏。 氏に低・抵の意が

訂 9 **はかぶ・ただす・さだめる** テイ

を結ぶことを訂交という。 三上に「平議するなり」とあり、議定することをい のち文章の誤りを正すことを訂正・校訂、交り 形声 いて平らかにする意がある。〔説文〕 声符は丁。丁は釘の頭。たた

貞 ただしい・まこと・あたるテイ

į° į 日件

貝を提供してト問する意とするが、ト文の字形に鼎 るなり。ト貝に從ふ。貝は以て贄と爲すなり」とし、 法であることは疑いない。〔説文〕三下に「卜問す 明らかにしがたいが、ともかく鼎を用いるト問の方の犠牲のようすによるものであるのか、いずれとも か、湯神楽のような方法であるのか、あるいは鼎中か、場神学のなりな方法であるのってトするもので、探湯盟誓のような方法であるのってトするもので、探湯盟誓のような方法であるの 会意 に従うものがあって、それが字の初形である。〔説 鼎とトとに従う。鼎をも

トす」、〔国語、呉語〕「貞ふことを陽下(ト人の名) 意に用いることは、〔左伝〕哀十七年に「衞侯、貞意に用いることは、〔左伝〕哀十七年に「衞侯、貞あったことが知られていたのであろう。貞を貞下のあったことが知られていたのであろう。貞を貞下の文〕にも「一に曰く、鼎の省聲なりと」とあり、文〕にも「一に曰く、鼎の省聲なりと」とあり、 られていたのである。ト辞は「甲子トして殻(貞人〔鄭司農注〕に「貞は問ふなり」とあって、よく知に請ふ」とあり、[周礼、大卜]「凡そ國の大貞」の 考釈」にはじまるようである。ト問によって神意を ト問の訓義に注意したのは、羅振玉の『殷虚書契義がはじめ知られないため、解読に困難があった。 とを貞一・貞素・貞信という。 知るので、そのことを貞正といい、その正を保つこ の名)貞ふ」という形式ではじまるが、この貞の字 す」、「国語、呉語」「貞ふことを陽ト

酉

士人がその陶酔境を楽しむことは、魏晋のころより〔晋書、山簡伝〕に「酩酊して知る所無し」とあり、しいことをいう。酩も〔説文新附〕一四下にみえる。 はじまったようである。 酐 「酩酊なり」とみえ、酔うことの甚だ 声符は丁。〔説文新附〕 | 四下に

庭10 にわ・ひろま・やくしょテイ

廷礼は、すべて中廷において行なわれている。〔説 の形である广を加えた字が庭である。金文にみえる 行なうところで、庭の初文。廷に屋無形声 声符は廷。廷は公宮の儀礼を

> 灌鬯して儀礼を行なうところをいう。本来屋廡のかです。「宮中なり」とするが、廷は土主を祀り、 〔論語、李氏〕に、孔子の子である鯉が、庭を過 魔を家庭・庭園の意に用い、家訓を庭訓とい たとき、孔子の垂訓をえた故事による語である。 ないものであるが、のち广を加えた。いまは广のな いところを庭といい、广のあるところを廷という。

悌 すなお・やすらかテイ

ている。古くは弟の字を用い、〔詩、大雅、旱麓〕〔新附〕一〇下に録して「兄弟に善ろしきなり」とし 州 重しとした。 〔孟子、滕文公、下〕に「入りては則ち孝、出でて は則ち悌」とあり、 は悌なり。心順にして行ひ篤きものなり」という。 「豊弟の君子」は愷悌の君子の意。[白虎通]に「弟といている。古くは弟の字を用い、[詩、大雅、早麓]ないる。古くは弟の字を用い、[詩、大雅、早麓] 碑にすでにみえているが、〔説文〕にその字なく、 形声 り、その専字として悌が作られた。漢 外の交わりには特に長幼の序を 声符は弟。弟に悌順の意があ

挺 ぬく・ぬきんでる・さきにするテイ

秀の意である。のち挺直の意に用い、また挺剣・挺 身の意となる。挺身はもと身を退けて免れる意であ あり、剣を抜く意とするが、もとは挺立・挺抜・挺 に挺立の意がある。〔説文〕ニ上に「拔くなり」と 禱をささげ、神に祈ることを呈 (呈)という。 ゆえ 形声 だてて挺立している形で、挺立して祝 声符は廷。
壬は人が足をつま

涕10 ったが、のち抜刀や挺身の意に用いる。 なみだ・なく・はなしるティ

〔詩、陳風、沢陂〕「涕泗滂沱たり」の〔伝〕に、あり、〔太平御覧〕に引いて「鼻液なり」に作る。あり、〔太平御覧〕に引いて「鼻液なり」に作る。形声 声符は弟。〔説文〕二上に「泣くなり」と を寰といい、懷(懐)の初文である。もと淚の象形である。死者の衣襟に哭もと淚の象形である。死者の衣襟に哭 文・金文に「聚ぶ」、 「目よりするものを涕といひ、鼻よりするものを泗 といふ」とする。涕はもと衆に作り、衆は象形。 すなわち遝の意に用いるが、 死者の衣襟に衆をそそぐこと

逓10 (遞)14 おくる・かわる・たがいにティ

逓信・逓送、また逓減の意となる。虎皮をもつこと るように思われる。 に、禍を他に移すような、何らかの呪的な意味があ 遞に廢し遞に興る」とあり、順次交替する意より *** するなり」とあり、代り合う意。代で、逓廃の意のある字である。〔説文〕 形声 声符は虒。虒は虎皮を削ぐ形

釘10 のべきん・くぎ

金なり」 とあって、 釘の初文。〔説文〕 - 四上に「妹絣の黃形声 - 声符は丁。丁は釘の頭の形で、 金ののべ板の義とする。 いわゆ

逓(遞)

掟

逞

啼

まは釘の意に用いる。 のであろう。形が釘頭に似ているので釘という。 含まれている隋円形の形が、その鉼金の形に近いもる餠金で、黄金一斤を餠という。金文の金の字形に V

停 ¹¹ とまる・いこう・さだまるティ

滞の意に用いる。 附〕八上に「止まるなり」とあり、停止・停留・停 (ものみ)を兼ねて、道路の要所に設けた。〔説文新 る。亭はもと駅亭。古くは宿舎と候望があれ声 声符は亭。亭に停留の意があ

偵 ¹¹ うかがう・とう

情を調査することをいう。 がある。偵は偵候・偵視のように用い、ひそかに事間といい、また課といった。〔孫子〕に〔用間篇〕間といい、また課といった。〔孫子〕に〔用間篇〕間といって偵察し、探偵することをいう。古くは耳目によって偵察し、探偵することをいう。古くは 順 る。〔説文新附〕ハ上に「問ふなり」とあり、人の 形声 り、神意に問うことを意味する字であ 声符は貞。貞に貞問の意があ

掟 はりだす・おきて テイ・トウ (タウ)

用いる。 形声 で掟書きに用いた語で、国語でも「おきて」の意に あり、規定の条目などを張り出すことをいう。 声符は定。〔玉篇〕に「揮張するなり」と 道教

梴 つえ・ほこ

> 子、梁恵王、上〕に「梃を制して以て秦楚の堅甲 「繋に」に「一枝なり」とあり、木の枝をいう。〔孟 る。〔呂氏春秋、簡選〕にこれを白梃という。 利兵を撻たしむべし」とあり、梃を兵仗の意に用い ある。〔説文〕六上に「一枚なり」、 声符は廷。廷に挺直の意が

梯" はしご・きざはしティ

觽 漢の揚雄は階上に書斎を設け、その梯を撤して読書 (備様に) (備高臨)の篇がある。階梯とは手引きの意。 したという。 梯沿 をいう。攻城の用具として、〔墨子〕に る。〔説文〕六上に「木階なり」とあ 形声 声符は弟。 弟に次第の意があ

逞 ほしいまま・たくましい・はやい・きわめるテイ

髭

呈して祈ることに、恣意のことが多いからであろう。 方言のようである。逞志・逞意の意に用いるのは、 行を速といひ、楚にては逞といふ」とあって、楚の 形声 らん」の文を引く。〔方言〕に「東齊海岱の閒、 い、〔左伝〕昭十四年、「何ぞ欲を『逞』にせざる所あ 神に祈ることをいう。〔説文〕ニ下に「通るなり」 また「楚にては疾行を謂ひて逞と爲す」とい 声符は呈(呈)。呈は祝禱のDを捧げて、

嗝 12 なく・さけぶ

堤 12 ラブル・とどこおる

影。

ための土堤であろう。 とに提・題の声がある。〔説文〕とはもと同声。堤はまた隄に作る。隄は聖所を守るとはもと同声。堤はまた隄に作る。隄は聖所を守るとはもと同声。堤はまた隄に作る。隄は平がある。〔説文〕

悼 12 テイ・チョウ(チャウ)

上部を幀首といい、そこに詩文を題することが多い。のち一幀を一幅のようにいうのは、いわゆる軸物風のち一幀を一幅のようにいうのは、いわゆる軸物風では、いわゆる軸物風である。 [類篇] に「張りたる繪譜なり」

年 12 いのこ・ぶた

着"垂路"的

猪を意味する字であったと思われる。〔説文〕九下会意 字の初形は豕と矢とに従うており、もと野

以て麥を嘗む」とあり、嘗麦の儀礼に用いる。「後の蹠、廢す」とは字形を誤って解したものであろう。「礼記、月令〕に「孟春の月、天子乃ち彘をろう。「礼記、月令〕に「孟春の月、天子乃ち彘をた声とするが、矢は豕を貫いている。「説文〕のに「豕なり。後の蹠、廢す。これを彘と謂ふ」とし、に「豕なり。後の蹠、廢す。これを彘と謂ふ」とし、に「豕なり。後の蹠、

提12 きげる・あげる・もつ

90年 形声 声符は是。是に堤・鯉の声がとが作法であった。提携の意より、それを人に表示とが作法であった。提携の意より、それを人に表示する意となって提示・提起・提挙といい、またそのする意となって提示・提起・提挙といい、またそのがある意となって提示・提起・提挙といい、またそのする意となって提示・提起・現がという。

棟 12 にわうめ・しで

はなり」という。「詩、小雅、常禄」に「常様の華 駅本(学)韓々たり」と、その華 のそろい咲く美しさを、兄弟の情を棣鄂という。また棣々とえて歌うので、兄弟の情を棣鄂という。また棣々とは威儀のあるさまを形容し、字はまた逮々に作る。とは威儀のあるさまを形容し、字はまた逮々に作る。

第 12 ながしめ・わきみ

含んでまた笑ふに宜し」と歌う。[礼記、内則]にんだ目をいう。〔楚辞、九歌、山鬼〕に「旣に睇をんだ目をいう。〔楚辞、九歌、山鬼〕に「旣に睇をかだ。〔説文〕四上に「小彩声 声符は第。〔説文〕四上に「小

て、それは甚だ礼を失する行為とされた。「父母舅姑の所に在りては、敢て睇視せず」とあっ

程12【程】12 はかる・わりあて・みち・ほど

電配 彩声 声符は宝(呈)。宝は祝禱の世に「品なり。十髪を程と為し、十程を分と為し、十分を寸と為す」と長さの単位とするが、その義はもと穀量をはかる意である。のち程限・程量より、もと穀量をはかる意である。のち程限・程量より、もと穀量をはかる意である。「奇子、致仕」「程なるものは、ものの準なり」とは法程、すなわち標準・規範ないう。ほどあいを程限という。

三日 12 しかる・そしる・はずかしめる

e T

形声 声符は氏。氏は曲刀で底部を勢りとる形で、が似ており、話も本来は訛言、作りごとをいう字でが似ており、話も本来は訛言、作りごとをいう字である。武は武装・武士のように、人を欺きそしるこある。武は武装・武士のように、人を欺きそしることをいう。

植って順」4 さいわい・ただしい

「説文」一上に「祥なり」とあり、〔詩、周、頌、維問い、その正しい道をうる意である。「います」 声符は真。真はトして神意を

艇 13 ティ

作「一版の舟なり」とみえる。

| 下一版の舟なり」とみえる。
| 下一版の舟なり」とみえる。
| 下一版の舟なり」とみえる。

13 かもじ

形声 声符は也。也に地・他の声が という。 とおり、そえ髪をいう。 「詩文」 人上に (な) 「髪なり」とあり、そえ髪をいう。 「詩文」 人上に (を) 「髪なり」とあり、そえ髪をいう。 「詩文」 人上に (を) 「となず」とは、そえ髪をいう。 「詩文」 人上に (を) 「となず」とは、そえ髪をいう。 「詩文」 人上に (を) 「となず」とは、そえ髪をいう。 「黄葉雲の如し など、「など」 (本) 「大」 (本) 「大」 (本) 「大」 (本) 「大」に (を) 「となず」とは、そえ髪をして豊かに後ろ

13 かなえ

智料用泉水源

五味を和するの寶器なり。昔、禹、九牧の金を收め、象形 鼎の器形に象る。〔説文〕七上に「三足兩耳、

艇

髢 鼎

稀綴

「左伝」宣三年にみりた任」宣三年にみりた任」宣三年にみりたるも、螭魅問います」とその起原説話を説く。青銅器は、河南優が二里頭の殷文化にまで遡りうるもので、ほぼ前十五・六世紀にはじまると推定されるが、夏禹の時代にまで遡りうるものではない。禹の九鼎のことはにまで遡りうるものではない。禹の九鼎のことはにまで遡りうるものではない。禹の九鼎のことはいる。



鼎

は制作の時代の宗教観念を背景とするものであった。 また鼎は五味を和する器というよりも、高い足のある烹飪の器で、その器底に燻痕を残しているものもである。探湯のような神判形式のものか、その方法は明らかである。探湯のような神判形式のものか、果中の懐性の状態によってトするものか、その方法は明らかでないが、ともかく神聖な拳器として、神意を問うをが、ともかく神聖な拳器として、神意を問うをの推正が陸渾の戎を伐って雒(今の洛陽、東周をの推正が陸渾の戎を伐って雒(今の洛陽、東周をの推)に近づいたとき、兵を国境に観し、「鼎の響をして用いられたのであろう。「左伝法」を見るとして用いられたのである。

浦 14 まつり

京 条 零

祭に加えるべきものではない。禘はその字形の示す た〔礼記、王制〕に「祚禘嘗一蒸」を四時の祭名とうに、祖先を合祀する大祭となり、禘祫という。まある。禘はのち「五歳に一たび禘す」といわれるよある。禘はのち「五歳に一たび禘す」といわれるよ 牲を大室に用ひ、邵王を啻(禘)す」とあり、啻は 王に啻(禘)す」、 て、〔大盂鼎〕に「牲を用て周王・□(武)王・成の祭儀を用いる。金文では直系の王を祀るのに用い 関係を諦審にするための祭祀と解しているのであろ 「諦かにするなり」としているので、禘祭を祖宗の祭なり」とするが、〔説文〕は帝字条一上において 動詞的な字であることを示す。〔説文〕」上に「禘 形声 のが帝の直系者、 ように帝を祀るのが字の本義であり、それを祭るも するが、禘は本来上下帝を祀る祭儀であるから、時 禘の初文。帝として祀るというその祭儀を示す字で あり、また祖宗以前の先公先王を祀るときにも、 う。卜辞で禘祀するものは、上帝をはじめ自然神で を示す名詞であるのに対して、禘はその祭儀であり、 下に、祝禱の器であるごをおく。いずれも帝が上帝 長の方形、あるいは円束を加える。金文では帝字の 形は、動詞としての禘のときには、帝字の中央に横 これによって上帝を祀ることを禘という。卜文の字 声符は帝。帝は上帝を祀る大きな祭卓の形 すなわち嫡とされるものであった。 また〔刺鼎〕「王、啻(禘)す。 ٢

形 14 つづる・つらねる・むすぶ

り合せることをいい、とばりを綴衣、吹き流しを綴らし」の形である。のち甲衣に限らず、すべて紐で綴し」の形である。 文]「四下に「合せ著くるなり。叕糸に從ふ」と会 意とするが、糸はこの場合、限定符である。 ・綴斿という。 秦策〕に「甲を綴る」とは、いわゆる「をど 形声 り合されている形で、綴の初文。〔説 声符は叕。叕は象形、糸の綴 〔戦国

締 むすぶ・しめる

以てし、終るに結不解を以てす」という。〔万葉〕 紐の結びかた。漢の〔古詩〕に「著くるに長相思をいる。固く相約束することをいう。「結不解」は祝います。 三上に「結びて解けざるなり」とあり、締結の意と という表現が多い。 にも、愛情を示すときに「紐を結ぶ」「紐を結ふ」 形声 脚部を交叉して結んだ形。〔説文〕「 声符は帝。帝は大きな祭卓の

鄭 15 国え名は

Ŧ Ä

る。殷はかつて鄭に都したことがあり、鄭州二里岡ばられた国とするが、その都したところは新鄭であぜられた国とするが、その都したところは新鄭であ はその遺址で、当時の壮大な版築城壁の一部が残さ に作る。〔説文〕 ホトトに周の厲王の子である友が封形声 声符は奚。 奠は鄭の初文。 ト文の字形は奠 れている。 一辺が約一粁に近い規模のもので、

滅亡のとき、その職能者は多く周の陝西の地に移さ 王子と考えられる子鄭が、この地を領して治めていた重厚壮重な完成した様式のものもある。武丁期のの青銅器も出土しており、古拙な様式のものや、ま 鄭重は不必要に重ねる意で、頻繁を意味する語で、ような条件のなかで生れた。鬓は奠定・奠治の意。 く語られている。鄭の商人弦高などの活動は、こののことは〔左伝〕昭十六年に、子産の語として詳し 治への参加を制限する契約国家の形態をとった。そ の余裔である殷人の経済的活動の自由を保証し、政 入り、鄭の桓公となった。その建国に際しては、殷があり、周の東遷のとき、また諸鄭を率いて新鄭に 名がみえる。鷹王の子友はその諸鄭を支配して声望れたらしく、陝西には南鄭・西鄭・鄭宮・鄭などの 当時手工業生産の中心地であったのであろう。殷の 殷の旧都であり、その工房も残されているこの地は、 あるが、 のち丁寧の意となった。 ト辞に子鄭・鄭関係の遺片がかなり多い。

霆 かみなりのとどろき・いなずまティ

発するときの擬声語である。 くことをいう。また霹靂ともいうが、霹靂は電光を 挺出の義は音義説である。〔左伝〕襄十四年「これ 出(抜き出るように出る)する所以なり」というも、 文〕二下に「雷の餘聲、鈴々たるなり。萬物を挺厚。 を畏るること雷霆の如し」とあって、雷声の遠く轟 声符は廷。廷に挺直の意があ

> 諦 16 あきらか・つまびらかにする・まことテイ・タイ

する。 語としては諦観のようにタイの音でよむ。 蘄 諦視・諦聴のように用いる字であるが、 かにするなり」とあって、諦審の意と 声符は帝。〔説文〕三上に「審

蹄 16 ひづめ・うさぎわなテイ

〔莊子、 形声 語辞説も、また要するに筌蹄にすぎないものである。 り、兔を捕るに蹄があり、その目的を達しては筌蹄かけるもの。〔荘子、外物〕に、魚を捕るに筌があ り、ひづめをいう。また兔をとるわなで、その足に を忘れるという。筌蹄は手段にすぎず、すべての言 馬蹄〕に「馬蹄以て霜雪を踐むべし」とあった。帝に「締める」の意がある。 声符は帝。

薙 なぐ・のぞく・そるテイ・チ

薙髪は仏教の語。髪を切ることであるから、 では、焼薙することがしるされている。薙刀は国語の用法、焼薙することがしるされている。 薙髪 は草を殺すことを掌る。〔礼記、月令〕、季夏に草をを除くなり」とあり、〔周礼、薙氏〕 は鬄という。 形声 なり」とあり、「周礼、薙氏」声符は雉。「説文」一下に「艸 普通に

鴺 がらんちょう・ペリカンテイ

標 る。 鐵 (鉄) 形声 を銕としるすのも同じ。〔説文〕四上 り、前条の薙はまた夷に従うて荑に作形声 声符は夷。夷にテイの声があ

である。 語であるが、この鵜はがらん鳥、すなわちペリカン 濡らさず」とは、魚を捕ろうとしない鵜を嘲弄する。 ることが多かった。〔詩、曹風、候人〕は初心の男 を誘引する詩で、「これ鵜、梁に在るも 鷞はまた鶫にも作り、夷・弟は古く同声にして通ず に投ぜられた話をのせる。鴟夷はまた鴟鷞に作る。 られず、かえって殺され、その屍は鴟夷に盛って江 [国語、呉語] に、伍子胥は呉王夫差を諌めて納れ るペリカン。鶫胡の胡は、頷下の大きな袋をいう。に「鶫胡、汚澤なり」というのはがらん鳥、いわゆに「鶫胡、 その翼を

鬄 18 かもじ・そる・のぞくテイ・テキ

とするが、〔儀礼、士喪礼〕にみえる鷺は、剔あると声義同じ。〔説文〕九上に「髪なり」とし、易声と声義同じ。〔説文〕九上に「髪なり」とし、易声 て髢の字を録する。 いは鯖の形に作るものがある。〔説文〕は重文とし それをかもじに用いるので、 稀 切りとった髪の意であるが、 形声 かもじの意とする。髢 声符の易は剔の省文。

鵜 がらんちょう・うティ

曹風、候人〕は、女の誘引の詩。「これ鵜、梁に在禁、それだい。」は、女の誘引の詩。「これ鵜、梁に在みこむので、河ざらえの意で汚沢という。〔詩、 汚澤なり」という。胡はあご肉。ペリカンのあごに 大きな袋があるので鷞胡といい、水をさらえるよう 四上に鷞を正字とし、「鶫胡、形声 声符は弟。〔説文〕

> 用い、これも古くから行なわれている漁法であった。 では海鵜を用い、古い伝統がある。中国では川鵜を ずれも黒きものの意をもつ語である。鵜飼はわが国 衝き拔けて」のように、鵜を用いている。鸕鷀はい おり、 鵜と解している。〔神代紀〕には鸕鷀の字を用いて 字を用いるが、誤用。〔新撰字鏡〕に鸕・鷀をあげ、 をあざける語である。わが国では、鵜飼の鵜にこの るも その翼を濡らさず」とは、気の弱い初心の男 「万葉」にも「鸕養伴なへ」 一九・四一五六、ま

> > 巅

形声

声符は爾。爾は文身の美しさ

泥 8 どろ・ぬかるみ・なずむ・ちかづくディ

脈 お話であろう。 正体を失うことを泥酔というとみえるが、 骨がなくて、 のにすぎない。尼は呢で、相泥む意。相泥む状態を相黏近せしむ」とは、泥・邇の近似音を以て説くも 「米 名、釈宮室」に「邇きなり。水を以て土に沃ぎ、 「米」を 酔うて一塊の泥のごとくであるという。それで酒で 泥という。〔異物志〕に、泥と名づける虫があり、 水があれば元気であるが、水を失うと 形声 の名とするが、字の本義は汚泥の意。 声符は尼。〔説文〕一〕上は川 おそらく

薾 うつくしい

鬄

ディ

泥 薾

禰

テキ

7

狄

あてる。 禰 爾19 も、禰という。 り」という。出行のとき、神主として奉ずる廟主を あり、「穀梁伝」成三年「新宮なるものは禰宮ない。「『記文新附』」上に「親の廟なり」と さくこと盛んなり」とあり、〔詩、小雅、 彼の繭たるはこれ何ぞ 父の廟・みたまやディ 形声 ルなり」とあり、〔詩、小雅、栄薇〕にをい**う**字である。〔説文〕一下に「華 わが国の神官のねぎに、禰宜の字を 声符は爾。爾に薾の声がある。 これ常の華」と歌う。

テキ

7 すこしすすむ

とするが、もとより人の足の形ではなく、行を左右 に分けたにすぎない。孑亍も、 む。〔説文〕ニ下に「人の脛の三屬相連なるに象る」となった。し、右半を言とする。躑躅の音でよ P いものである。 象形 交叉路を示す行の左半をイと 字としては用例のな

狄 えテ びキ ・ とおい

0 がない

会意 犬と火とに従う。 犬は犬牲で、 磔殺されて

また「管伯暴簾」に「淮夷を克狄す」とあって、い「猶」にその字がみえ、「不無(恭)を敷狄す」、「猶」にその字がみえ、「不無(恭)を敷狄す」、ひ、亦の省聲なり」とするが、形義ともに疑わしい。 る。〔穀梁伝〕荘十年、「荆なるものは楚なり。何は戦国期以後のことで、蛮夷の蛮も金文には鰶に作 ずれも逖ざけ卻ける意の動詞に用いる。火を亦に作 遠ざける意の字であろう。〔説文〕二〇上に「赤狄な呪儀を示すものと思われる。おそらく邀遠、これを て祓う意であろう。四夷を獣的な呼称で表現するの る字は〔曾伯霥簠〕にみえるが、亦も火を人に加え は、狄を逖遠の異種族とするものである。 すれぞこれを荆といふや。これを狄とするなり」と いる形。それに火を加えるのは、災禍を祓うための もと犬種なり。 狄の言たる、淫辟なり。犬に従

的 8 (的) 8 (的) 7 あきらか・まと

[広雅、釈器] に「白なり」とみえる。 提々たるものは射らる」の旳々は、めだつものをい い、〔淮南子、説林訓〕に「旳々たるものは獲られ、り、〔淮南子、説林訓〕に「旳々たるものは獲られ、(説文〕七上に「明かなるなり」とあ) ようにいう。射的の意はその転義であろう。 の擬声語。それより明確の意となり、的確・的当の 雅、釈器〕に「白なり」とみえる。的皪は畳韻**、的はその異体の字で、〔玉篇〕に「射る質なり」、的はその異体の字で、〔玉篇〕に「射る質なり」、 形声 正字は旳に作り、勺(勺)声。

· (迪)。 みち・みちびく・おしえるテキ

「書、 形声 康誥」に「今、 語〕に「今、民迪くとして適 声符は由。由に笛の声がある。

〔説文〕ニ下に「道なり」とするが、動詞的に用い ることが多い。由に因由の義があるのであろう。 哲を辿めり」とあって、道に従って進む意とする。 はざるものなし」、また〔無逸〕にも「茲の四人、

俶 すぐれる・よい・はじめテキ

쎼 X°

〔崧高〕「俶たる城あり」は卓絶の義。俶儻は〔広雅、また。」「俶たる城あり」は卓絶の義。〔大雅、既酔〕「令終、俶たるあり」、は始の義。〔大雅、忠孝、よいき、な 形声 義とする字であろう。 釈詁〕に「卓異なり」とみえる。人の卓異の意を本 は始の義。〔大雅、既酔〕「今終、版たるあり」、う。〔詩、小雅、大田〕に「俶めて南畝に載あり」、う。〔詩、小雅、大田〕に「俶めて南畝に載あり」に「善なり」とし、また「一に曰く、始なり」といに「善なり」とし、また「一に曰く、始なり」とい 声符は叔。叔に督の声がある。〔説文〕八上

個10 すぐれる テキ・チョウ (テウ)

劃 「倜儻非常の人」という。「倜然」という語は、〔荀俶と声義同じ。司馬遷の〔任安に報ずる書〕にはまた。「礪微、不羈なるなり」とあって、卓異の人をいう。「僬儻、不羈なるなり」とあって、卓異の人をいう。 子〕が好んで用いた語である。 形声 の声義がある。〔説文新附〕八上に 声符は周(周)。周に彫(彫)

剔 とりのぞく・えぐる・そるテキ・ティ

剔 るが、 剔出・剔除のように、狭いところからとり出 形声 〔説文〕四下に「骨を解くなり」とす 声符は易。易に惕の声がある。

> その本字は鬄、字はまた鬄に作る。 は髪をきりそろえる意。髪を剃るときは薙髪という。 刳剔す」とあって、孕婦の腹を剖くことをいう。鷺がぼす。とあって、孕婦の腹を剖くことをいう。鷺

惕 おそれる・うれえる・つつしむテキ

「易き 湯、 湯、 意である。 悸す」という。惕若・惕然は、みなおそれつつし、。 し」とあり、また〔列子、黄帝〕に「惕然としてi 下に「敬むなり」とするが、諸書に引く〔説文〕に 形声 乾卦〕に「夕に惕若たり。厲ふけれども咎无いか」に「ゆないませて」。まないなり」に作るのがよく、おそれる意である。 声符は易。易に剔の声がある。〔説文〕一〇 また〔列子、黄帝〕に「惕然として震ない「夕に惕若たり。厲ふけれども答だし、「夕に惕若たり。厲ふけれども答だし、

笛11 ふえき

ない。 底無く、その上を剡る」とあり、横笛のようにみえ説がみえる。馬融の〔長笛の賦〕に、「空洞にして 類である。「夢渓筆談」に、笛は尺八であるとするまた「羌笛は三孔なり」という。黛ならば洞籬のまた「光竹は三孔なり」という。黛ならば洞籬のまた。 と鳩笛形式のものをいう字であろう。 もの、ゆえに空洞の意となる。字形よりいえば、 由は瓠瓢の類の、実が油化して殼のみ存する 昭は三凡なり」という。筩ならば洞籬の〔説文〕五上に「七孔の筩なり」とし、下下一声では由。由に迪の声がある。

荻 おテ

ぎや、あし笛の意にも用いる。 徳紀〕にも「茅荻」の語がある。中国ではくさよも と注している。これらの例からいうと、おぎは古く 蔵」、また〔新撰字鏡〕に葭を出して「蒹葭、乎支」〔万葉〕にこの字を用いており、〔霊気に〕に「葦草で、葦よりも節短く、葉と花は茅に似ている。 あし・すすきなどの一類を含めていった語で、穴仁 声符は狄。イネ科の多年草。水辺に生ずる

逖 | 湯| | 12 とおい・はるかテキ

もつ字である。〔書、牧誓〕に、武王が殷が新王をとし、古文逷の字形をあげている。逷も剔除の意をとし、古文逷の字形をあげている。逷も剔除の意を 秋す」の狄はいずれも逖遠、遠くこれを追放すること。 - 不懈(赤)を畢多で」、11~~~~ 伐つとき、その属する諸小侯たちに、「逖かなり、 を示す字であろう。〔説文〕二下に「遠ざくるなり」 とをいう。狄は犬牲と火とに従い、その追放の儀礼 「不觀(恭)を敷狄す」、「曾伯爨簠」「准夷を克はなり、金文の「猶鐘」 形声 声符は狄。狄に逖遠 金文の「猪鐘」

14 つテ む・とる・ゆびさす

十八年、晋侯に命を賜うて「王愿を糾逖せよ」とあ西土の人よ」とよびかけている。また〔左伝〕僖二

王意に逆らうものを追放するよう命じている。

る意。〔説文〕一二上に「果樹の實を拓るなり」、 た「一に曰く、指もてこれに近づくなり」とは、指 る字で締の意がある。摘は指で摘みと形声 声符は商。商は帝から出てい 適[適] ま

テキ

逖[逷]

摘

滴

翟

敵

〔詩、鄘風、君子偕老〕「象の揺なり」の揺は、髪をること、摘除・摘発は邪悪をあばき出すことをいう。 摘んで締めるものをいう。 摘の意。摘要・摘出は必要なところだけをとりあげ

滴14 しずく・したたる

をあげている。 の分合を検した。〔陔余叢攷〕ニセにその滴血の例縁を識別する法があり、両者の血を水に滴らしてそ などは擬声的な語である。六朝期に血をもって血 もと擬声語であるらしく、 「水の注なり」とあって、 声符は喬。〔説文〕一上に 滴々・滴瀝(したたり) 水滴をいう。

翟 14 きじ・きじのはね

翟

詩説〕に「萬には夷狄の大鳥羽を以ふ」とみえる。舞は、また羽舞ともいわれる神楽舞であった。〔繋籥(ふえ)を執り「右手に翟を執る」という。その 車や衣服を翟羽で飾ることもあり、翟車・翟衣とい 『邶風、簡兮〕に「公庭に萬舞す」とあり、「左手に以ば、なば、もと雉を神鳥とする観念があったのであろう。〔詩、もと雉を神鳥とする観念があったのであろう。〔詩、 いう。〔爾雅、釈鳥〕に、雉の種類十四種をあげう。〔説文〕四上に「山雉、尾の長きものなり」と会意 羽と隹とに従う。羽の美しい鳥で、雉をい ト辞にみえる四方風神の名と同じ扱いかたである。 ているが、そのなかに四方に配する雉の名があり、

> とがみえる。翰は天鵝、赤羽にして、また晨風とも、 翟羽を飾ることがみえる。翟羽には厭勝(まじない)としての意味があって、呪飾どされたのである。〔逸周書、王会解〕に、蜀人が文翰を貢したこる。〔治紀、中軍〕や〔内司服〕に、王后の車服にう。〔周礼、中軍〕や〔内司服〕に、王后の車服にう。〔周礼、茂い いう。翟の一種で、神鳥とされるものであった。

適 (適)15 かなう・ ・ゆく・たまたま

「小雅、四月」「笑くにかそれ適歸せん」など、みなり、適くの訓が生れる。〔説文〕二下に「之くなり」という。〔詩、鄭風、緇衣〕「子の館に適かん」、という。「詩、鄭風、緇衣」「子の館に適かん」、といっ、といっ、 鳳鳥 適 至る」という。また「ただ・わずかに・も 示す字で鏑の初文。ゆえに敵る・適うの意があり、 る。字はもと啻に従う字であった。 し」などの意にも用いるのは、啻などの仮借義であ その義。それが適にそのときであることもあり、 仁〕に「適無し」とは、自己の主観に固執すること。適としてともに謀れる」は、嫡主の意。〔論語、里適と 形声 また相嫡う意がある。〔詩、小雅、巷伯〕「誰をか いる。〔左伝〕昭十七年「我が高祖少皞摯の立つや、 適 偶然であることもあり、副詞としては両義に用 声符は商。商は帝を祀るもの、帝の嫡系を

敵 15 あたる。あいて・たぐテキ

文章

譲る」とはその意。のち敵讐の意に用いる。 で、「仇なり」とするが、仇にも仇匹(相手)、相匹敵するものの意がある。ゆえに対等、同等の人をもいするものの意がある。ゆえに対等、同等の人をもいするものの意がある。ゆえに対等、同等の人をもいするものの意がある。ゆえに対等、同等の人をもいう。〔国語、周語〕「禮に在りて、敵には必ず三たびう。〔国語、周語〕「禮に在りて、敵には必ず三たびう。〔国語、周語〕「禮に在りて、敵には必ず三たび方。〔国語、周語〕「禮に在りて、敵には必ず三ない。

推 7 かく・のぞく・ぬきんでる

形声 声符は翟。翟は雉だ、長く美なり」とあり、その羽を抜く意であろう。その長くなり」とあり、その羽を抜く意であろう。その長くなり」とあり、その羽を抜く意であろう。その長くなり」とあり、その羽を抜く意であろう。その長くなり、となり、その羽を抜く意であろう。その長くなり、となり、その神に、とく美いの中に濯んで、これを群臣の上に立つ」のように用いる。秀抜の人を擢秀という。

類 18 なげうつ・すてる・ふるう

形声 声符は鄭。正字は擿であるが、擿は擿撃のわれている。

(力) 1 うつ・なげる・つまむ・のぞく () 8 テキ・チャク

形声 声符は適(適)。橋・擲と声にたく意に用い、ともに擬声的な語である。「説文」一また「一に曰く、投ぐるなり」とあり、この方が通また「一に曰く、投ぐるなり」とあり、この方が通また「一に曰く、投ぐるなり」とあり、この方が通いである。「説文」一をです。 一声符は適(適)。橋・擲と声にたく意に用い、ともに擬声的な語である。

一角 19 やじり・かぶらや

下声 声符は高。『説文』一四上に不動。 「矢縫なり」とあり、鏃に対して鏑矢をいう。鳴鏑は〔史記、匈奴伝〕に「冒頓、乃ちをいう。鳴鏑は〔史記、匈奴伝〕に「冒頓、乃ちをいう。鳴鏑は〔史記、匈奴伝〕に「冒頓、乃ちをいるものは、漢以後のことである。商に締の意に含ませる金具を「鐍資」と称しており、鏑矢の義に含ませる金具を「鐍資」と称しており、鏑矢の義に含ませる金具を「鐍資」と称しており、鏑矢の義に含ませる金具を「鐍資」と称しており、った。

22 かいよね

形声 声符は翟。〔説文〕七上に「穀脈 を市ふなり」とあり、うりよねを糶という。米穀などを政府が売買して、価格の調整を図り、有事にそなえた。吝嗇にして愚鈍の甚だしいり、有事にそなえた。吝嗇にして愚鈍の甚だしい。 でいっこう である。

記 22 みる・あう・しめす

形声 声符は質の省文質。「説文新れ、聘礼」「覧、「実験を奉じて以て観えんことを請れ、聘礼」「覧、「東錦を奉じて以て観えんことを請す、文は置すべからず」の語がある。観面とは、尊ず、文は置すべからず」の語がある。観面とは、尊ず、文は置すべからず」の語がある。観面とは、尊の速やかなことをいい、「天罰観面」のように用報の速やかなことをいい、「天罰観面」のように用報の速やかなことをいい、「天罰観面」のように用報の速やかなことをいい、「天罰観面」のように用報の速やかなことをいい、「天罰観面」とあり、「後

躑 22 「踊」18 たたずむ

WEB 形声 正字は瞬に作り、(新声。) 瞬は が声。〔説文〕ニ下に、瞬を足の垢とする。瞬頭・躑躅は双声の連語。行きつもどりつするさまをいう形況の語。躑躅はまたつつじの意に用いる。陶弘景の説によると、羊がその花を食べると死ぬという。行の字を左右にわけて、イーテを躑にあるという。行の字を左右にわけて、イーテを躑は

デキ

想 全型 無

り」という。〔詩、周南、汝墳〕に「怒として朝飢一○下に「飢餓なり」、また「一に曰く、憂ふるな形声──声符は叔。叔に俶・督の声がある。〔説文〕

があって、淑の初文、惄とは異なる字である。語で、食に飢えることではない。金文に思・思の字語で、食に飢えることではない。金文に思・思の字の如し」とあり、[爾雅、釈言] に惄を「飢うるなの如し」とあり、[爾雅、釈言] に惄を「飢うるな

13 デキ・ジョウ(デウ)

形声 声符は弱(弱)。〔説文〕一 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用 を接くに道を以てす」など、古くから溺没の意に用

作 4 デキ からう・すすぐ・のぞく

ド声 声符は條(条)。條は拠と木水をかけ、これを草を束ねたものなどで洗う意。み水をかけ、これを草を束ねたものなどで洗う意。み水をかけ、これを草を束ねたものなどで洗う意。み水をがけ、これを草を束ねたものなどで洗う意。みれの枝をいい、滌はみそぎをし、滌うことをいう。〔説文〕ニー上に「酒ふなり」とするが、みそぎとして洗うのであり、その清めたことを「鯵」という。となり、「韓非子、説なべ下」に「器に滌あるときとなり、「韓非子、説なべ下」に「器に滌あるときとなり、「韓非子、説なべ下」に「器に滌あるときとなり、「韓非子、説なべ下」に「器に滌あるときとなり、「韓非子、説なべ下」に「器に滌あるときいう。薬の滌除す」とあり、俗見を一洗することをいう。薬の滌除す」とあり、俗見を一洗することをいう。薬の滌除す」とあり、俗見を一洗することをいう。薬の水をいる。

ている。
は、落魄して、積鼻褌をつけて市中に器に、水など、みなその声義を受け、一系の字を成し、水がみそぎの初文。攸・悠・修・を滌うたという。攸がみそぎの初文。攸・悠・修・を滌うたという。攸がみそぎの初文

テツ

十 3 めばえ・くさ ・ カばえ・くさ

ることはあるが、徹の音で用いる例は殆どない。徹の若くす」という。この形のままで艸の字に用い一下に「艸木初めて生ずるなり」とあり、「讀みて一下に「艸木初めて生ずるなり」とあり、「讀みて意形 若芽のわずかにあらわれている形。[説文]

ヌ又 8 つづる・つらねる

象形 出ะ 綴り連ねる形に象を 続き とあり、とあり、「玉篇」には「連ぬるなり」とする。 で約」とあり、「玉篇」には「連ぬるなり」とする。 で絡互綴の形で、ト文にはその極めて繁々を形のである。 [本南子、人間訓〕に「愚人の思ひはです。 とあり、注に「短なり」というが、字形よび。 というがある。 [本南子、人間訓〕に「愚人の思ひはなった。 というが、字形よびからんで紊れる意であろう。

迭の「迭」の たがいに・すぎる

ある。失は巫女がかぶき舞う形。神に野声 声符は失。失に跌・秩の声が

新りながら踊り狂う形で、エクスタシーの状態にある意。〔説文〕ニ下に「ちょするなり」とあり、「詩、郷風、日月〕「何ぞ迭にして微くる」、「易、説卦」「迭ひに柔剛を用ふ」のようにいう。もとは巫女がたがいに低昂して舞うことから、その意となったもたがいに低昂して舞うことから、その意となったもたがいに低昂して舞うことから、その意となったものであろう。〔列子、湯問〕に「相携へて迭ひに話が回りながら踊り狂う形で、エクスタシーの状態にある意。〔説文〕ニアは、五間をいう。

蛭 9 からう・かむ

まをいう字に、嘘・啼など、擬声的な語が多い。 要でた女を、兄弟たちが罵り笑う声をいう。笑うさ 変でとしてそれ笑はむ」とあり、男に欺かれて家を でとしてそれ笑はむ」とあり、男に欺かれて家を でとしてそれ笑はむ」とあり、男に欺かれて家を ないす。 でとしてそれ笑はむ」とあり、男に欺かれて家を ないすべい。 でとしてそれ笑はむ」とあり、男に欺かれて家を ないすべい。 でいう字に、嘘・啼など、擬声的な語が多い。

姪。 めい・つきそい

う。もとはまことの姪娣であったが、のち異姓を伴するとき、その至親のものを伴い、これを姪娣というな意味があったのであろう。古く諸侯に夫人が嫁うな意味があったのであろう。古く諸侯に夫人が嫁うな意味があったのであろう。古く諸侯に夫人が嫁かまで、その至親のものを伴い、これを姪娣という。親族称謂には、形声の字が多いのである。「説文」とあり、男形声 声符は至。至に咥・経の声がある。「説文」

哲10 うようになり、脧という。 さとし・さとる 金文にもその媵器がある。

哲聖武」のように明徳をいい、〔詩、大雅、下武の心を淑悊にす」「天子明悊」、〔王孫遺者鐘〕「肅厥の德を悊にし、用て先王に辟ふ」、[大元雅]「厥厥の德を悊にし、用て先王に辟ふ」、「巻き」、「た元雅」「厥の心を盟かにし、「撃な」といる。 る人をいう。〔礼記、檀弓、上〕「哲人それ萎まんにも「殷の先哲王」の語があり、哲とは神明に通ずにも「殷の先哲王」の語があり、哲とは神明に通ず 輔けしめよ」とは聖職者伊尹をいい、〔書、酒誥〕う。〔書、伊訓〕に「敷く哲人を求め、爾の後嗣を城を傾く」とあり、亡国の因をなす婦人を哲婦とい城を傾く」とあり、亡国の因をなす婦人を哲婦とい にみえ、また〔番生殷〕には言に従う字がある。いまた三吉に従う字をあげている。心に従う字は金文また三吉に従う字をあげている。心に従う字は金文 (誅)・占(店)など舌音化する例が多い。字の初形 情をいう字である。〔詩、大雅、瞻卬〕に「哲婦、 なり」とみえ、金文では哲を悊の形に作るものがあ 心・口・言は神に祈り誓う意を示すものであろう。 ずれも折の形に従うものでなく、神梯と斤との形で、 こ上に「知るなり」とし、重文として心に従う字、 うているときの清明の心をいう字であろう。[説文] は神梯の形である自と斤とに従うており、神事に従 か」は、孔子が没する数日前の歌である。 って、同字である。もと神に仕える斉敬、清明の心 に「世々哲王あり」という。心部一〇下に「悊は敬 声符は折。折は照母。照母の字に

啜 すすりなく・なめる・くらうテツ

す。喫茶は古くは啜茶といった。杜甫の詩に「春風す。喫茶は古くは啄茶といった。とまった。それ泣く」は、啜り泣く声を写れた。 茗を啜るの時」の句がある。す。喫茶は古くは啜茶といっ 檀弓、下〕に「菽を啜ひ水を飲むも、その歡を盡す。だらなります。その啜る音を写した字である。〔礼記、ことをいう。その啜る音を写した字である。〔礼記、 これをこれ孝と謂ふ」とみえる。〔詩、王風、中谷 むるなり」とあり、汁気のものを啜る形声 声符は叕。[説文] ニ上に「賞

悊 うやまう・さとるテツ

凯凯

(誅)・占だ 要するに神明に接するときの心意を示すものとみら 「克く厥の德を悊にす」という。その字はまた直あ [大克舞]「天子明惁」、〔番生殷〕 〔井人妄鐘〕にだらい。 「説文」 こうでに、 敬ふなり」とあり、とみられる。 〔説文〕 一〇下に「敬ふなり」とあり、とあり、 初形は、神梯を示す旨と斤とに従う。神梯を刻む形 形声 れる。哲の初文とみてよい字である。 るいは貝に従い、また誓に作るなど異構が多いが、 (店) など、舌音化する例が多い。上部の 声符は折。折は照母。照母の字に朱

掇 ひろう・えらぶ・やめるテツ・セツ

り」とあり、 拾い集めてこれを綴連する意がある。 がある。〔説文〕二上に「拾ひ取るな 声符は叕。 叕に綴り合せる意

> 草摘み。 う。〔詩、周南、芣苩〕「薄くここにこれを掇る」 先人の遺事や遺文を集録することを撥遺、拾掇とい 細小のものを拾い集めることをいう。 は

経12 あさの おび

牁 をも節し、身体は毀瘠することが甚だしく、杖をつものを著ける。これを緩延という。服喪中は飲食 戴くものなり」とあり、弔問のときには頭に喪章と 章に類するものと考えてよい。 して弁経をつけ、 いて喪に服するので、合せて絰杖という。絰は喪をも節し、身体は毀瘠することが甚だしく、杖をつ 形声 ある。〔説文〕 三上に「喪のとき首に形声 声符は至。至に咥・姪の声が 服喪のときには首と腰とに帯状の 声符は至。至に咥・姪の

耋 12 としより

要するに衰老の人をいう。 鄭 いふ」とする。他に六十・七十とする説もあるが、 形声 ある。〔説文〕四上に「年八十を耋と 声符は至。至に姪・絰の声が

跌 12 つまずく・たおれるテツ

鉄13 「銭」21 くろがね・かたい・つよい

るが、 馬においても赤黒の馬を職という。鉄はその質が堅「黑金なり」とあり、戴声に黒の意があるらしく、 鉄面は戦陣に用いる防具で、また剛直にいう語であ 剛であるから、堅固なる精神を鉄石の心腸という。 無恥の甚だしいものを鉄面皮という。 旧字は鐵に作り、載声。〔説文〕一四上に

徹 15 ならべる・とおるテツ

M

従う。儀礼のとき豆・鬲の類を多く用いるので、そ支に從ひ、育に從ふ」とするが、古文の字形は厭に 撤とも通用する字である。**。となり、また転じて徹宵・徹夜などの意に用いる。 なう。〔説文〕三下に「通るなり」と訓し、「彳に從ひう。〔説文〕三下に「通るなり」と訓し、「彳に從ひ 扇などをならべる形。その陳設し終ることを徹といれます。 一声符は散。散は古くは副とかかれ、供薦の の陳設の終るを通徹といい、よって貫徹・徹底の意 声符は散。敵は古くは副とかかれ、供薦の

とりさげる・のぞくテッ

る。〔広雅、釈詁〕に「取るなり」、〔玉篇〕に「剝供薦の字。徹はその陳列、撤はその撤去の字に用い形声 声符は散。敵は歌の古文が副に従うように、 ぐなり」とするが、撤撰が字の原義である。

輟 くるまをなおす・やめるテツ

> に休んでその思念するところを、樹葉にしるして成輟耕という。明の陶宗儀に〔輟耕録〕があり、樹陰ない。 子」「耰りて輟めず」は手を休めないこと。農間をいたんだところを繕う意である。また〔論語、徴いたんだところを繕う意である。また〔論語、徴しく缺けたるを、復合するものなり」とあり、車のしく缺けたるを、復行するものなり」とあり、車の小 ったものだという。 声符は叕。叕にものを補綴す

> > 戎事に驪に乘る」とみえる。 「ഡき」に「驪なり」とあり、驪もくろくりげのうまにいている。「私記、檀弓、上」に「夏后氏は黒を尚ぶった。」とあり、驪もくろくりげのうま

〔詩、秦風、駟驖〕に「駟驖 孔だ阜んなり」という。 〔説文〕 | 〇上に「馬の赤黑色なるもの」とあり、

らしく、

声符は戴。戴に黒の意がある

鐡(鉄)とは黒金をいう。

餮 18 むさぼりくう

南方では於兔、北方では虎といった。 ている。饕餮は双声の連語で、楚語の於兔、すなわ食を貪るを餮といふ」とあって、三苗をいうとされ ている饕餮文は、明らかに虎の展開文である。虎は ち虎の古名であろうと思われる。古彝器に用いられ 饕餮と謂ふ」とあり、注に「財を貪るを饕といひ、 不才子あり、飲食を貪り、貨財を冒る。天下これを 声符は殄。〔左伝〕文十 八年に「縉雲氏に

轍 19 わだち・あと

る。車轍の水だまりにあえぐ魚を、轍鮒という。には轍迹無く、善言に瑕謫(欠点)無し」の語があてきまれる。できまれる。「きまれる」を前轍という。〔老子〕第二十七章に「善行の行迹を前轍という。〔老子〕第二十七章に「善行 の行迹を前轍という。〔老子〕第二十七章に「善行四上に「車の跡なり」とし、徹の省声とする。古人四上 で、通徹の意がある。〔説文新附〕」 声符は飲。敵は徹・撤の初文

融23 くろくりげ

> 邓 浬 くろつち・どろデツ・ネ 0 が

形声 日声とするが、日はその土をまるめた形である。星と,とするが、日はその土をまるめた形である。星文〕一上に「黒土の水中に在るものなり」とし、 字であろう。いまは涅槃の字に用いる。は轆轤台を回転させて、土器の形を作る。 声符は星。星はくろ土をまるめた形。〔説 土器の形を作ることを示す

テン

4 あめ・そら・うまれつきテン

不 大大 0 大 文 主人

加えた形で、人の巓頂を示す。〔説文〕一上に「巓 大は人の正面形。その上に頭部を示す円を

テツ

徹 撤 輟 餮 轍 驖 デッ 涅 テン 天

之の幣民(罪ある民)を自ひん」という誥命を発し、則ち天に妊告して曰く、余はそれ茲の中國に宅りて、別して祭場に臨み、「これ武王、旣に大邑商に克ち、武王克殷の礼をしるすものであるが、武王は天室よ武王克殷の礼をしるすものであるが、武王は天室よは祭天の祭儀が行なわれており、近出の〔阿尊〕はは祭天の祭儀が行なわれており、近出の〔阿尊〕はは祭天の祭儀が行なわれており、近出の〔帰漢〕は 「大盂鼎」に「丕顯なる玟王、 だった。 宗教的な儀礼としてすでにあった儀礼であろう。 に神聖の意を含めて用いていたようである。周初にといい、〔書、多方〕にもその名がみえている。天 の刑を受けた神である。ト辞に殷の都を「天邑商」 外西経〕にみえる刑天の神は、無首の神像で、鑿天 劇らる」の天は、首を斬る鑿天の刑。 [山海 経、 となる。 顚倒の字であるから巓というべく、更に天空の意と とその字形を解するが、一は頭頂の形である。顚はなり」と訓し、「至高にして上なし。一大に從ふ」 り」「克く奔走して、天畏を畏れよ」などの語があ けられ、珷王に在りて、玟に嗣ぎて邦を作したまへ ろをいう。〔易、睽卦〕に「その人天せられ、 の初文は墜にして、神梯によって神の降り立つとこ なる。天地にはもとその字なく、天は人の頭頂、地 概ね民という語と対応する関係において、用いられ て組織されたものであろう。〔書〕における天は、 って、古代の宗教的な観念が、新しく政治思想とし として表現されるとしており、殷周革命の体験によ る。〔周書、五誥〕の諸篇には、天命は民意を媒介 められる。天の思想は、思想として成立する以前に、 ている。〔周書、五誥〕の文にも、相似た語句が求 天の有する大命を受 且# つ 海

内 むしろ・したのたれたさまテン

中の百は、もと因の形に従うものであった。 中の百ま、もこ写う※‥‥.なり」とあり、それを編んだものが丙。宿の字形なり」とあり、それを編んだものが丙。ながりの字形は、「一に曰く、竹上の皮」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ いるが、字は席の形で、〔広雅、釈器〕に「丙席な垂れている形、あるいは舌で甜める形の字と解して である。〔説文〕三上に「舌の見なり」とし、 团 鹵 簟の初文で、簟はその形声字 敷きものの簟席の形 舌の

辿っ あるく・たどる

会意 しも山路をいうものではないが、難渋することでたどるは、おぼつかなく、まよいあるく意で、必ず り歩く意。わが国ではたどるの語にあてて用いる。 のことである。 は相通ずる語である。この字を用いるのは近世以来 **乏と山とに従う。山路を進むので、ゆっく**

典 8 ふみ・のっとる・つかさどるテン

쌪 樂 0 世典典典

王の書は特に尊ばれたので、典尚という。尤も典外史」に「三皇五帝の書を掌る」とあって、古帝二年に「三墳五典八索九邱」の名がみえ、〔周礼、二年に「三墳五典八索九邱」の名がみえ、〔周礼、二年に「三墳五典八索九邱」という。〔左伝〕昭十 〔説文〕五上に「五帝の書なり。冊の丌上に在るに 会意 冊と丌とに従う。机上に書冊をおく形。

> 設定を文書化することをいう。 格伯の田を典す」というのは典当、つまり抵当権の 冊・文書とすることをもいい、「棚生設」に「用て名)その先舊及びその高祖に典る。」という。のち書 う。その先例によることを、「叔夷鐘」に「夷(人 育敦]に「世萬子孫、永く典尙と爲せ」のようにしては、金文銘などもその資料とされたので、[[文献としては最も古いものである。また先例典故と 次第書きであった。〔書、周書〕の〔五誥〕の類が、 尚とされたものは、先例旧典としての祝詞や儀式の 金文銘などもその資料とされたので、「因

坫 8 ものおきだい・さかずきのだいテン・チン

をいう。 三下に「屛なり」とは、堂隅の物をおく台のところ 反坫は就一棚の礼に用いるものであった。〔説文〕 | 坫があり、 知れるか」という質問に対して、孔子は管氏には反 って、反坫をいう。〔論語、八佾〕に「管 仲は禮を 뱌 のち店の字となる。 諸侯の礼を僭するものであるとしている。 [玉篇]に「餠を反すの處なり」とあ 声符は占。占に店の声がある

店 8 みせ・はたご

に用いるのは六朝以後、またのちには旅館の意にるが、のち店はの意となり、商店をいう。店肆の意ろう。堂の隅に設ける反坫、あるいは物置き台であ 〔説文〕に店を収めず、 形声 に「爵を反すの處なり」とあって、站と同字とする。 声符は古。占に払・怙の声がある。〔玉篇〕 店はおそらく坫の異文であ

を発するような流行病は、病因不明のため神聖病と しておそれられ、しばしば殄滅的な猛威を振った。 し」とあり、神畏によって殄滅することをいう。疹

忝

はテ

かしめる・かたじけなくする

も用いる。

点。 (點)17 くろぼし・しるし・なおすテン

「辱かしむるなり」という。いま字を形声 声符は天。〔説文〕・〇ヿに 漢碑などの字はみな天に従うている。

声符は天。〔説文〕・〇下に

う。曾子の父曾点、字は子哲。点汚と明哲と相対しることである。死者の名を録するものを点鬼簿といることである。死者の名を録するものを点鬼簿といどで心を養うこと、点睛は眼睛を入れて画をしあげ 灸とよぶ病除けの俗があり、また点額ともいう。八月十四日、民家では児童の額に朱をつけて、天 黒点の意、汚点をいう。微細なるもの、 意味する。 が、額をうって流れに落ちることにたとえる。点 ことを点額というのは、竜門をのぼりそこなった魚 しを加えることの意に用いる。〔荆楚歳時記〕に、は、それにき た名字である。 合せること、点茶は茶を立てること、点心は茶菓な 検・点竄・点定は文を直すこと、点景は景物をとり わが国のアヤツコと似た俗である。試験に落第する 、月十四日、民家では児童の額に朱をつけて、 〔説文〕 - 〇上に「小黑なり」とは小さな 店・活の声がある。占は小さな部分を形声 旧字は點に作り、占声。占に 旧字は點に作り、占声。占に 微細なしる 天流

恬

やすらか・しずかテン

の意に用いる。

ふ」とする。我国ではこの字を、

かたじけなくする

するが、

恥・無感動のときにもその語を用いる。

る。恬然は安らかなさまをいう語であるが、また無

もと丙に従う字。字義もまた簟席の意によ

形声

O下に「安らかなるなり。心に從ひ、甜の省聲」と

ろ)の象で、簟席に安坐する意をいう。〔説文〕

正字は極に作り、丙声。丙は簟席(むし

〔説文〕-O下に怏を「靑・徐にて慚を謂ひて怏とい

こと無かれ」の句がある。また怏と声義が通ずる。

〔詩、小雅、小宛〕に「爾の所生(親)を忝しむる

忝に作るが、

かける・きず・けがすテン

とあり、 形声 より過誤のあることを玷汚・玷玦という。 べきなり」の〔伝〕に「缺くるなり」とあり、 小さな部分をいう。 いう。〔詩、大雅、抑〕「白圭の玷けたるは 尙磨く小さな部分をいう。玉に小さな環があることを玷と小さな 声符は占。占に店・站の声がある。占とは それ

展 10 のテ べる・ひろげる・しらべる

審視省関することを展という。「説文」はまた変八 周南、関雎]「展轉反側す」の句による訓であるが、ある。〔説文〕ハ上に「轉ずるなり」とあり、〔詩、ある。〔説文〕ハ上に「轉ずるなり」とあり、〔詩、 塡塞に用いる呪具。屍体に邪霊の憑るのを祓う意で が、展と同字、死喪のときの衣をいう。 上を出して「丹穀(あかいちりめん)の衣」とする に展牲、墓葬に展墓というように、神事にあたって 展は展屍(死体をあらためる)を原義とする。犠牲 尸と衣と琵とに従う。屍衣の

淀 [澱]16 よど・よどむ・どろテン・デン

引く。〔説文〕一上に澱を水底の泥の意とする。 通ず。淵の如くにして淺き處なり」と〔李善注〕を あまりよい字面ではない。〔玉篇〕に は同じ。淀川のことを詩文に澱江・澱水というが、 はその沈澱して動かぬものであるから、両字の声義 なり」としている。 形声 「文選江の賦注にいふ。澱、 声符は定。〔倭名類聚抄〕に 「淀は淺き水 淀と古字 淀

添 添]1 そえる・くわえる

語である。詩文の字句を删改することを添削という。また添加・添補の意に用いる。唐宋以後に用いる俗 とも通用して、食事のものを増し加える意に用い、 声符は忝。忝は天に従う字で天声。浩・弘

を度らず、生物の則で、天地の度に帥はず、 生物の則に儀らず。以て殄滅して胤無に帥はず、四時の序に順はず、民神の義 忝 恬 殄 点[點] 玷 展 淀(澱) 添[添]

声符は含。〔説文〕

親戚知友が祝いに来て、その浴盤中に銅銭を投げ入 に、盤水中に銭を投ずる俗がある。 れるのである。洗三また洗児という。 古く添盆の俗があり、生後三日目の浴児の祝いに、 いまもわが国

あまい・うまいテン

味」の語がある。の用例しかない。ま でなく、甘の初義ははめこむ意の批・嵌、甘苦の字り」という。甘を甘苦の意に用いるのは本来の字義 は苷に作るべきである。字は後起のもので、 訓し、舌甘の会意にして、「舌は甘きを知るものな のの意で、〔説文〕五上に「美し」と会意 ぎょな なった 話に甘いも 張衡の「南都の賦」に「酸甜滋を表する。字は後起のもので、深以後ある。字は後起のもので、次

転 (轉)18 まわる

「還るなり」とあり、車輪の転運すること、それより 意である。〔説文〕一四上に「運るなり」、〔繋伝〕に のの意がある。専は薬のなかのものをうちかためる してすべてことの転移・転変するをいう。 声があり、またまるいもの、めぐるも 形声 声符は專(専)。専に團(団)の

奠 12 そなえてまつる・すすめる・さだめるテン・テイ

丑

黃黃黃

まます。 また (人名) 教で表は、「いいのでは、「我が邦我が家を愛保す」、「師論院」「用て厥の辟を墜さず、尊いに王命を愛む」、また「私」前父禹とした。「中では、東京に用いる例があり、「克益」「克(人名)教での意に用いる例があり、「克益」「克(人名)教での意に用いる例があり、「克益」「たった。 ちの鄭にあたる。殷の安陽以前の故郷であり、その酉下に一・二の横画を引く形で、地名に用いる。の酉」というのがそれであろう。卜文の古い字形は、す」というのがそれであろう。卜文の古い字形は、 〔礼記、祭統〕に「書を受けて歸り、その廟に舍奠。」といい。これにいる。これにいる。これにいる。これにいる。これにする。これに字体である。 曾侯乙の宗彝を作りて、これを西爀に愛く」とあり、の意に用いるものに、〔楚王禽章,鐘〕「楚王禽章、寒でいる。」、大命を奠めたり」のようにいう。また奠置大戦。 故城址の城壁が残されている。 上に「置祭するなり。酋に從ふ。酋は酒なり。丌は 会意 その字は麌に作る。〔説文〕のいう置祭とは、窶の その下に在り。禮に奠祭あり」という。金文に奠定 上において、神に供薦することをいう。〔説文〕五 6世界とに従う。 6世の神酒。 奥はこれを台

五五 12 ふさぐ・みる

H とに加えることを展という。展はもと衰に作り、芸その芸で要所を塞いで塞の神とし、また死者の襟もがないで、死祝の用いる呪具。11 譲する字であることからいえば、展も死喪のとき 襄が鈓をもって呪禁とし、邪悪を塡塞し、悪霊を祓 なり」とするが要領をえず、 に従う字である。〔説文〕五上に「極巧これを視る 襄もまた旺に従う字で、禳の初文である。塞・ 四工に従う。 字義を知りがたい。 工は左・巫の字

> すべきであろう。 極巧と爲す」と説くが、基本的な字形の解釈を欠く を訪ねて探すことを尋(尋)といい、尋は左右を重 もので、俗解を免れない。띂はふさぐ意をもつ字と ねた字である。〔段注〕に「工を巧と爲し、 また隱(隠)は工をもって神を隠す意。その神隠れ が呪具であることは、左・巫の字形からも知られる。 に、屍衣に呪禁として芸を加える意の字である。工 四工を

腆 てあつい・うつくしい・おおいテン

る語で、 腰」とは、神につかえること厚からざる意。〔左伝〕十分なるを不腆、小腆という。〔書、大誥〕「殷小にまつることをいう字で、腆厚の意である。その不にまつることをいう字で、腆厚の意である。その不 先君の敝器」のようないい方は〔左伝〕に多くみえ として多きなり」というが、肉と祝禱とをもって神 を腆顔・ 僖三十三年「不腆なる敝邑」、文十二年「不腆なる 点 自国の謙称として用いる。のち厚顔のこと 腆冒という。 四下に「膳を設くること腆々 形声 声符は典。〔説文〕

覘 12 うかがう・みる・ねらうテン

ことを覘候・覘望という。 帽 とあり、〔国語、晋語〕「公、これを覘はしむ」の注 かたを覘という。〔説文〕ハ下に「闚ひ視るなり」 占は小さな部分、そこに焦点をおくみ 形声 声符は占。占に店の声がある

塡 13 ふさぐ・うずめる・みたす・ひさしいテン・チン

られる。 咽したと伝えられる。塡倉は正月二十五日の行事。 声を発して推し合うことを塡咽という。梁の陶弘景り、塡盈・塡補の意とする。人が会場に充満し、奇い、な然 う字はみな声義相承け、一系をなしていることが知 あり、「塞ぐなり」と訓し、塡と声義同じ。真に従 味をもつ字である。穴部七下にもまた真に従う字が 塞といい、鎮というのは、いずれも呪鎮としての意 る。塞も笠を埋めて呪鎮とする意。要塞のところを るが、単なる形声でなく、真の声義を承ける字であ った。〔説文〕一三下に「塞ぐなり」とし、真声とす を設けてその屍を躓き、鄭重に鎮魂の儀礼を行なあり、その瞋恚をやわらげるためにこれを塡め、屋 枉死の者であるから、おそるべき呪霊をもつもので この日の客には無理にもとどめて肉を馳走する。 が禄を辞して故郷に帰るとき、公卿貴紳の車騎が塡 、塡塞することよりして塡満・充塞の意とな の声がある。真は顚屍の象。顚死者は 声符は眞(真)。眞に滇・闐

椽 ¹³

きな木であるから、 るものを桷、まるい木を椽という。椽は用材中の大とあり、棟から檐にわたるたるきの木。その角材な 椽燭とは椽大の蠟燭で、 意がある。〔説文〕 六上に「棟なり」 文章の堂々たるものを椽大の筆 夜宴に用いた。 のの

塡

橡

瑑

墊

槙[槇]

瑱

声符は象。彖にまるいも

13 西南夷の名

明池のことをも、滇池という。その南辺の石寨山遺はかつて滇零羌の住む地であった。また雲南の昆(華陽国志)に「池中に神馬あり」とみえ、その地(東京)は「地中に神馬あり」とみえ、その地) ル♥ の声がある。〔説文〕二上に「益州の ・ の声がある。〔説文〕二上に「益州の 国の古俗と親近な関係をもつものが多い。 迹からは、青銅彝器・兵器など多数が出土し、羌系 西南夷の古代文化の一斑を知ることができる。わが 形声 る。〔説文〕二上に「益州の声符は眞(真)。眞に塡・闐

瑑 13 玉のあげぼり

もいう。文献に瑑・璏を誤用していることがある。のである。その玉は璏というべきもので、剣鼻玉と革帯に來む環形の玉で、金文に鞞剣の名でみえるも 新を加えることをいう。〔漢書、王莽伝、上〕に、 とないまなり」とあって、玉の縁辺に沿うて彫り。とあって、玉の縁辺に沿うて彫り。 「説文」」上に「圭璧上にない。 「説文」」上に「圭璧上にない。 える。この瑑は、佩剣のとき剣の昭文帯に繋けて斧が孔休にその玉剣の瑑を解いて与えたことがみ 声符は彖。彖にまる

墊 14 低い土地・ひくい・おちいるテン・チョウ(テフ)

るときは則ち墊隘す」とは、疲労困苦することをい あって、低温の地をいう。〔左伝〕成六年「民愁ふ 、ある。〔説文〕ニードに「下きなり」と形声 声符は執。執に蟄・繋の声が

> らっ 陥溺する状態が字義に反映しているようである。 の蟄するような状態をいう字であろう。 う。執には拘執の意もあり、墊陥・墊隘には土室に

槙』 【槇】1 こずえ・たおれたき・まきテン

という意もあり、それは縝密の意をとるものであろは顚倒の意によるものである。木の根がよくしまるよるものであり、また「作れたる木なり」というの 檜をいい、祭儀のときにはそれらの枝を用い、神いな。のと同じである。まきはもとすぐれた木の意で杉やのと同じである。まきはもとすぐれた木の意で杉や う。わが国で「まき」と訓するのは「真木」の意で、 殿にはいわゆる真木柱を用いた。まきとよばれる木 柾をまさ、樫をかし、椿をつばき、萩をはぎとよむ る。〔説文〕六上に「木の頂なり」とは巓頂の意に は地方によって異なり、 真に巓頂(頭上)、また顚倒の意があ * でかり ・ 旧字は槇に作り、眞(真)声 旧字は槇に作り、眞(真)声 約二十種に及んでい . る。

塡 4 テン・チン

冕上より両辺に垂れ、末端に玉瑱を著け、耳のとこ紅、弁師〕に玉瑱の制をしるしている。一条五栄、貴婦人の耳飾りに用い、また弁飾にも用いる。[鳥)貴婦人の耳飾りに用いる。みみだまはまた充耳といい、ことが歌われている。みみだまはまた充耳といい、 君子偕老〕は国君夫人の悼亡の歌で、「玉の瑱」の以し於言。」は国君夫人の悼亡の歌で、「玉の瑱」の呪器として死者の耳につめる玉をいう。〔詩、鄘風、 〔説文〕 「上に「玉を以て耳に充つるなり」とあり、 形声 声符は眞(真)。眞 に塡・鎭(鎮)の意がある。

ろに及ぶものである。

廛 15

市場の意となる。〔孟子、公孫・丑、上〕に「市は塵田野中の貯積の小屋であるが、のち市廛の意となり、農の教えを説く許行のような思想家もあった。廛はするものがあった。そのうちには南方の楚の国で神するものがあった。 「广・里・八・土に從ふ」と解するのは、字形を井 「説文」カ下に「二畝半なり」とあり、井田制におじで、广下の形は量・糧の字とみることもできる。 制するのみで、 て、一時井田法が施行され、諸国からもこれに参加 けて民と爲らん」とあり、滕国では孟子の説を入れ ある。耕田とその貯積の小屋とを合せて、一廛と称 てよい。廛とは農作物などを一時貯積するところで たものであるが、塵の字形は广と量とに従う形とみ 田法の方法によって分析し、その計算法と一致させ 八家で除すると二畝半となる。〔説文〕に字形を 家一井であるから八百畝を分ち、残り二十畝をまた ろう。櫜の下に土をそえている形は、量の字形と同 して征せず、法して廛せず」とは、店舗税を課する した。〔孟子、滕文公、上〕に「願はくは一廛を受 いては井田九百畝、公田一を除いて八百二十畝、八 って店を用 u用いるようになった。 杯台の意で別義の字であるが、のち廛に代 いみで、一切課税しないことをいう。店はも取引税を徴収しないこと、あるいはただ規 会意 の形は、農作物の類を収めたものであ 广と橐の形と土とに従う。臺 店はも

> 篆 書体の名

で、その刻画は尖鋭なものであるが、金文の字には わゆる篆文であろう。甲骨文は契刻してしるすも とは、筆を引いて同じ太さで書く書法のことで、 意がある。〔説文〕五上に「引書なり」 声符は彖。彖にまるいもの の

[石鼓文] の書体が大篆と のとなる。この後期金文や えず、かつ結体も均斉なも の金文に至っては肥瘠を加 よく示される。しかし後期 肥瘠破磔があって、筆意が



鳥篆文銅壺の蓋

地では春秋末ごろ特に鳥篆が行なわれた。満城漢あるから、装飾的な字様となることがあり、呉越の字体である。篆は筆を雕さず屈曲懸練するもので ど文字としての機能を失っている。香煙のゆるく舞 墓の鳥篆文銅壺はその風を摸したものであるが、殆 線化したものが隷、あわせて篆隷という。楷以前の額にもその体を用いて篆額という。小篆の字形の直 その体を用いるので篆刻といい、また碑文などの題のが、小篆であると考えてよい。印刻の字には多く いのぼるさまを、篆煙という。 いわれるものであり、それを整理して標準化したも

諂 15 超 23 へつらう・おもねる・こびるテン

声。閻に覘う意がある。また形声 正字は閻に従い、閻

げて諂笑するは、夏畦(夏の畑仕事)よりも病る」がて諂笑するは、夏畦(夏の畑仕事)よりも病る。「説文」三上に「諛ぶるなり」とあ調の声がある。「説文」三上に「諛ぶるなり」とあいた。 (説文) 三上に「諛ぶるなり」とあいた。 (説文) 三上に「諛ぶるなり」とあいる。 易ならぬことである。 という。「論語、学而」「貧にして諂ふ無き」は、容

霑 うるおす・うるおう・ぬれるテン

露酔という。 に濡れて、色のうつる意である。恩沢の人に及ぶことを露泳といい、泥酔して身体中に酒がまわるのをとを露泳といい、泥酔して身体中に酒がまわるのをいた。 りて、霙すなり」とあり、説解の字は染に従う。雨 形声 り、霑の初文。〔説文〕ニー下に「雨ふ 声符は活。浩に沾濡の意があ

澶 ゆきなやむ・めぐる

形声 屯卦」に「屯如たり、邅如たり」とあり、行きない。 こうでは 「大空は 大空に 大空に とあり、行きなやんで転回することをいう。 [易、光声 - 声名は置 [玉篇] に「刺なり、移るなり、光声 - 声名は置 [玉篇] に「刺なり、移るなり、 用いており、もと楚人の語であろう。 残片と考えられる。〔楚辞〕に「邅回」の語を多くやむ意。この爻辞は、古代の略奪結婚を歌う歌辞の 声符は亶。〔玉篇〕に「轉なり、移るなり

簟 18 たかむしろ・すのこ・ござテン

方形の蔽いを簟茀という。金文の車服賜与形式の金竹の簀の子を簟牀といい、車上の竹を編んで作ったます。 「席なり」とあり、たかむしろをいう。 形声 声符は罩。〔説文〕五上に「竹

ぎの歌で、「筦(まるすげ)を下にし簟(竹の簀子)える簟葉のことである。〔詩、小雅、斯干〕は室寿文に、金簟郷を賜う例が多いが、それは〔詩〕にみ文に、金簟郷を賜う例が多いが、それは〔詩〕にみ を上にし」て寝ね、夢見をすることが歌われて いる。

鄽18 たな・みせ

なる。〔玉篇〕に「市鄽なり」とあり、田野の廛に味し、鄽の初文。のちそれを市中に設けて、店舗と 対して、邑里にある廛であることを示す。のち店の 穀糧の類をおく形で、もと穀物を入れる小屋を意 く台をいう字であった。 字を仮借して用いる。店はもと杯の台、また物を置 声符は塵。塵は室の中に橐に入れたもの、

18 みちる・さかんなさまテン

ようこ用ハる。人が盈ち溢れて混雑することを、闐まをいう。[史記、鄭当時伝]「賓客、門に闐つ」のこと淵々たり「振旅覧」なり」と、軍行の盛んなさら,ナー・・・・ 溢・闡噎という。 いっ 1845 ように用いる。人が盈ち溢れて混雑することを、 見なり」とあり、 意がある。〔説文〕 二上に「盛なる形声 声符は眞(真)。真に塡塞の 〔詩、小雅、栄苣〕に「鼓を伐つ

颠 19 たおれる・おちる・さかさま・いただきテン

0

とに従うて、 声符は眞(真)。眞は七(化)と県(縣) 頭死者を意味し、顚はそれを拝する象

テン

鄽

顚

纏 巓

躔

デン

急のとき、癲覆はくつがえる意である。頂は巓の意。隕・顚墜・顚越をいう。顚沛は顚き倒れるような危、又は、まず、又」九上に「頂なり」というが、本義は顚倒で、顚 真に従う字はもと顚死者に関する字が多い。 - - - - - 「musp - というが、本義は顚倒で、顚であるから、もと顚死者を葬る意の字である。〔説

纏 まとめる・まとう・くくるテン

五代以後、足の発育をとめて歩行を困難にする、い人の纏足は、古く双行纏といわれるものであったが、人の纏足は、古く双行纏といわれるものであったが、後でまとめる意がある。〔説文〕一三上に「続らすなり」まとめる意がある。〔説文〕一三上に「続らすなり」まとめる意がある。〔説文〕一三上に「続らすなり」をまとめておく意。ゆえに纏にものを 轤 わゆる弓足が行なわれるようになった。 五代以後、足の発育をとめて歩行を困難にする、 形声 声符は塵。塵は橐の中にもの

巓 22 いただき・おちる

るは、死後の霊の至る世界であると考えられていた。 霊となって、高く登るものとされるからである。覚 頭の字とされ、山頂を巓という。壊は 頂の字とされ、山頂を巓という。字はまた顚と通 をする。道家において、人の死を巓霊という。魂は でする。道家において、人の死を巓霊という。魂は でする。道家において、人の死を巓霊という。魂は 狂気を巓疾という。

躔 ふむ・めぐる・わたる・やどるテン

あり、 鄽 歴り行くことをいう。日月星辰がそれぞれの*** 形声 ある。〔説文〕ニ下に「践むなり」と形声 声符は塵。塵に纏繞の意が

> 天を三百六十度に分つ。日月のめぐるところを躔離、軌道をめぐる意に用い、その運行を躔度といい、周 星宿のあるところを躔次という。

田 5 た・たつくる・かりデン

\oplus

ろう。 ぶ」というところであるから、陳・畋は声の近い字 を畋ぶ」のように畋を用いる。文献では「命を陳を用いる。金文には命を陳べるときに、「令罪」「命と所いる。金文には命を陳べるときに、「令罪」「命と、「命」を映っている。日は仮借字である。ト文には、文献には田という。田は仮借字である。ト文には、 く声通じ、いわゆる田斉は陳氏。金文には墜に作り、 り」とするが、その初形ではない。また陳・田は古 樹うるを田といふ。四口に象る。十は阡陌の制なぽ方形となる。〔説文〕二三下に「陳ぬるなり。豰をなく、一区画はみな長方形である。金文に至ってほ を縦に二分し、横を数画に分つもので、正方形では 田とその耕作者とが対応する形であげられている。 臣一夫」「田七田、人五人」のように連称しており、 であろう。金文に田土の賜与をいうとき、「田十田」 ろう。後期の〔大克鼎〕では「女に田を匽に賜ふ」一人の耕作面積に相当するものを一田としたのであ のように、田形の字を用いる。〔晉鼎〕には「田二、 田の区画の形に象る。卜文の字形は長方形

のように地名で列挙しており、その田は一田単位ののように地名で列挙しており、その田は一田単位ののように、田の字形によって、その区画で「説文」のように、田の字形によって、その区画は古くは畋猟の意に用いることが多く、「書、無いいっ」「叔ここに田す」はみな畋猟の意であり、四季四」「叔ここに田す」はみな畋猟の意であり、四季四」「叔ここに田す」はみな畋猟の意であり、四季四」「叔ここに田す」はみな畋猟の声であるが、畋猟はまたそのまま軍事の体制で、その演習としての意味で行なわれた。田主・田畯は田の神、中国では、田神の祭事は早くその古礼を失ったが、わが国では田楽が諸芸能の淵叢をなした。

伝 6 【傳】13 つたえる・おくる・うつす

漢 海 漫 後

ころに、もし契約を履行せず、この契約に遺恨を存ら、「散氏盤」は、土地の所有に関する権利関係をう。「散氏盤」は、土地の所有に関する権利関係をう。「散氏盤」は、土地の所有に関する権利関係をう。「散氏盤」は、土地の所有に関する権利関係をもる。「故とが、すなわち駅伝の意とするが、伝の古義は遠い古代の刑罰の法に発するもので、伝薬をいる。「被氏盤」は、土地の所有に関する権利関係をしるす約剤的な性質の銘文であるが、その末文のとしるす約剤的な性質の銘文であるが、その末文のとしている。これを撃ってきない。これを撃ってきない。これを撃っている。

諸国に歴遊する意で、なお伝の古義を残している。 伝記、脚色を施したものを伝奇、ま (孟子、万章、 た長篇の戯曲をも伝奇という るものを伝注という。一代の記録を 送・伝達、また伝来・伝習の意となり、 で、駅伝の制が生れてからの用義である。のち移 伝遽は駅伝・駅車によって、乗りつぎして行くこと ず」という。伝質とは、出仕するときの贄を負うて 故郷を棄てて四方に仕官を求めることをも伝といい いる形式に近い。すなわちのちの放竄の刑にあたる。国の神話でスサノオノミコト追放のときにとられて 「傳棄」とは、橐を負うて所払いとする意で、わが 棄の追放儀礼を司ることを示すものであろう(挿図)。 金文図象に東(橐)を負う形のものがあるのは、伝 れを傳棄せん」という自己詛盟の語をしるしている。するようなことがあれば、「罰千銭(罰金)千、こするようなことがあれば、「罰千銭(罰金)千、こ 下」に「庶人は傳質して臣と爲ら 経義を伝え

佃っ 小作人・つくりだ

#\\ #\\ #\\

が、佃はのち小作、小作人を意味する字となった。 「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、克が深水の東の巡撫を命ぜられたとき、「京鐘」に、「中なり」という形声 声符は昭。「説文」へ上に「中なり」という

つくだ、すなわち作り田の意に用いる。作を佃作、小作人を佃客・佃戸という。わが国では「説文」は甸を五服の甸、佃を甸車の意とする。小

旬 7 デンタ外・おさめる・かり

会意 田と人とに従う。〔説文〕二三下に「天子五百里の地なり」とし、字は包(包)の省声に従うとするが、金文の字形は田の旁に人をそえた形に作り、するが、金文の字形は田の旁に人をそえた形に作り、中国と称した。古くはただ田ということが多く、「気燥」に「諸侯、侯・田・男」また「大盂脈」に「財産・田」の名がみえ、諸侯邦賓としての礼を受けている。田官の支配する地はかなりの範囲に及ぶの変く、「全・田」の名がみえ、諸侯邦賓としての礼を受けている。田官の支配する地はかなりの範囲に及ぶので、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、旬車という。で、その地を按行するのには車を用い、甸車という。で、その地を按行するのには車を用い、旬車という。で、その地を按行するのには車を用い、旬車という。で、その地を按行するのには車を用いる。「詩、小雅、車次」に「田車既にり」とあり、また「石鼓文、田車石」にも「田車既にり」といるのである。、前へは対している。

町 9 たつくる・かり

会意 田と支とに従う。書は田土、その田土を詠れ、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあが、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあが、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあが、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあが、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあが、金文では「晉鼎」に「厥の田を田つくれ」とあり、田をそのまま動詞に用いている。文献では畋遊・畋猟・畋漁など、狩猟の意に用いる。冬季の休遊・畋猟・吹漁など、狩猟の意に用いる。冬季の休遊・吹漁・吹漁・では、一番猟を町とする説がみえる。

13 どの・やしき・しんがり

会意 屁と殳とに従う。屁は臀の初なり」とするのは字のとき、上功を最、下功を殿、合せて殿をいうのは、もと支に作るもので、おそらく神の鎮座する建物の意からの転義であろう。というのはでは、大きになお残されているのは、もと支に作るものである。「常文学ではない。とあり、「伝」に「鎭むるなり」と、宮殿・殿堂の意として何らかの意味をもつ行為とされていたのである。「常文学で作るもので、として何らかの意味をもつ行為とされていたのであとしてが、のち天子や貴戚の住む宮殿をいう。軍の先鋒を啓、おそらく神の鎮座する建物の意からの転義であろう。のち天子や貴戚の住む宮殿をいう。軍の先鋒を啓、おそらく神の鎮座する建物の意からの転義であろう。のち天子や貴戚の住む宮殿をいう。軍の先鋒を啓、おそらく神の鎮座する建物の意からの転義であろう。のち天子や貴戚の住む宮殿をいう。軍たとない。

ふるなり」とみえる字である。 通ずるものかも知れない。 屡は〔説文〕ハ上に「 偽 初義であろうが、殿堂の義は、あるいは魇と声義が

全近 13 かねかざり・かいかざり・かんざし田 3 デン

電 3 デン

雨 歌

用語、電光石火は仏教でいう語である。
「陰陽激燿するなり」とし、陰陽のなすところであることが知られていた。「番生設」に電の字がみえ、ることが知られていた。「番生設」に電の字がみえ、ることが知られていた。「番生設」に電の字がみえ、のまでは、できない。単は電光の走る形で、電

鮎 16 だン・ネン

字に用いる。あゆは一年にしてその生を終えるので、無し」とあって、なまずをいう。わが国ではあゆのある。〔爾雅翼〕に「身滑かにして、鱗ががなり、から、一般を表して、がいる。」といる。といる。といる。といる

鈿

電

のであろうという。
かり、に、鮎・年の声が近くて、のち鮎を誤用したかり、に、鮎・年の声が近くて、のち鮎を誤用したおくは年魚とかいた。
符谷棭斎の〔箋注倭名類聚古くは年魚とかいた。
ないませんにゅ

臀 17 しり・トン

ŀ

斗4一斗・ます

平 党汉良

いる。 いる。 に説文」一四上に「十升な り。象形、柄有り」とあり、斗 も升も、ものを酌むひしゃくの 形である。北斗星は、その形が 斗の器形に似ているところか ら、名をえている。質は一斗二 分、名をえている。 がは、その形が がのお形に似ているところか ら、名をえている。 がは、その形が がいるところか ら、名をえている。 がは、その形が がいるところか ら、名をえている。 がは、その形が のである。 とりえのない者



みえる。

吐 はく・だす・すてる

柔への対処を誤らぬ意である。 剛なるもまた吐かず」と仲山甫の徳をほめる。剛ろう。〔詩、大雅、忠宗炎は、「柔なるもまた茹はず、ろう。〔詩 の古音は社であるから、寫とも音が近かったのであ ぐなり」とあり、吐瀉の意とする。土 北京 一声符は土。〔説文〕ニ上に「寫 剛

やまなし・ふさぐ

杜)、また国名としては金文に杜伯の器がみえる。金文の字形によると、土の上に叉枝状のものを加えた形で、者(者)の上部と同じ構造である。者は堵、た形で、者(者)の上部と同じ構造である。者は堵、なっている。字はまた杜塞・杜絶の意に用いる。り、赤棠をいう。字はまた杜塞・杜絶の意に用いる。 社の義と近い。杜康ははじめて酒を作った人で、酒ことがある。わが国でも、杜に「もり」の訓があり、 る。杜は土と通ずる字で、殷の祖神相土を相杜に作その霊が杜鵑となって、啼血をつづけているとされ 厄をなし、祟神として畏れられた。蜀王の杜字も、たんが の異名にも用いる。わが国では酒のしこみをする人 ることがあり、 形声 宣王に殺された杜伯は、のち幽鬼となって種々の災 声符は土。〔説文〕六上に「甘棠なり」とあ また社に通じて、社中を杜中に作る

兔 「兎」っ うさぎ

A A 0

象形

さんな話である。兎は異体の字。 あるまじきことの起るをいう。兔角というのは、 れ甲兵まさに興らんとするの兆なり」とあり、世に に「殷紂の時、大龜に毛を生じ、兔に角を生ず。こ を免ぐ形で、声義ともに異なる。発角は〔述異記〕 いて、段玉裁らに同字異字の論があるが、免は甲一点があり、発(免)にはその一点がないことにつの尾を後にする形に象る」という。兔の字には後にの尾を後にする形に象る」という。兔の字には後に 兔の形。〔説文〕一〇上に「兔の踞して、そ う

妬 8 [好] 7 ねたむ・そねむ

てやまず、「妊娠」とよばれ、また「李益の疾」と 疾の甚だしいものがあって、唐の李益は日夜妬忌しいの本性ともみられて甚だ多いが、男子にもまた好きの本性ともみられて甚だ多いが、男子にもまた好聲」とするが、声が合わない。婦人の好忌の例は、聲」とするが、声が合わない。婦人の好忌の例は、 いう。男の妬を媢という。 なり」という。字は〔繋伝〕に「妒」 ある。〔説文〕 三下に「婦、夫を妬む形声 声符は石。石に宕・橐の声が に作り「戸婦、夫を妬む

徒10 かち・とも・いたずらに・ただト

多位 0 往

形声 初形は辻に作り、土声。土は社の意で、

> 歩の意となる。副詞として「ただ・ひとり」のよう ものが徒、すなわち歩卒であった。それで徒跣・徒に用いる。士は貴族出身のもので、それに従行する 徒駿」、〔叔夷鐘〕「國徒四干」のように、軍士の称と言。 こきくじょう であった。徒はのち〔師寝設〕「無謀(無数)なるわち社に属するものとして扱われた。すなわち氏子 司徒の職を司土と称しており、人民はその土、すな に用い、特・独などと声において通用する。 となり、人においては無為をいう字となる。古くは れで従者の意となり、軍において装備なきものの意 あり、車乗に対して徒行することをいうとする。 ものがある。〔説文〕ニ下に「歩して行くなり」と は俗字とされているが、金文にまたその字形に作る とその社に属するものを徒と称したのであろう。 そ

涂 10 ぬる・みち・のぞく

隃

という。〔荀子、勧学〕にも「涂巷の人」の語があの地と天下の涂數を掌り、皆書してこれを藏す」字がなく、[思礼]にも涂を用い、〔量人〕に「邦國字がなく、[思礼〕にも涂を用い、〔量人〕に「邦國字がなく、[思礼〕 関する字である。 を途にさてて除う呪器である。ゆえに涂には塗りこり」とあって塗の初文。余は大きな針の形で、これり」とあって塗の初文。余は大きな針の形で、これ上に益州の水名とし、また汚字条一上に「涂るな上でがある。[説文]一 る。涂・塗・途はみな一系の字。もと除道の儀礼に んで杜塞し、

(金)1

起の字。余は道路の修蔵に用いる呪器で、把手の行旅は涂陸に語る」の語がある。途は涂の異文で後行旅は涂壁に語る」の語がある。途は涂の異文で後 ある大きな針の形である。 〔桂陽太子周 憬功勲銘〕にも、「船人は水渚に嘆き、」といいい。 「途路なり」とみえるが、魏以後に用いられる字で、 が、 となっていると、 漢碑にもみな涂を用いており、は涂を用いた。 漢碑にもみな涂を用いており、 声符は余。余に涂の声がある。〔玉篇〕に

愈 とめる

4

大きな針で、道路の修祓に呪器として用いること会意(余と止とに従う。止は趾。余は把手のある。 字がみえ、外族に対してこの呪儀が行なわれている。 敵の進退に呪禁を加える方法であろう。卜文にその ぐときにも用いる。これを止(趾)に加えるのは、 る聖域を祓うことを除という。邪霊を塗りこめて塞が多く、これで修祓した道路を途といい、神梯のあが

茶 11 にがな・つばな・ちゃト・ダ

うのは、人のいう苦菜も、わが苦労の甚だしさから こと薺の如し」の〔伝〕と同じ。荼を薺の如しとい いえば、ものの数でないとするものである。〔書、 北風、谷風」「誰か茶を苦しと謂ふ その甘きば こくず 「説文」一下に「苦菜なり」とあり、 形声 声符は余。余に途の声がある。

途(途)

愈

荼

都[都]

堵

む話がみえているから、漢以来すでに飲料とされてのことがみえており、[呉志、韋曜伝]にも茶を飲のことがみえており、[呉志、韋曜伝]にも茶を飲いまで、 正要の [僮約]に武都の茶の正のがら字形も茶となり、 く摘みとったものを茗という。
いたことが知られる。早く摘みとったものが茶、晩いたことが知られる。早く摘みとったものが茶、晩 「寧ぞ荼毒を爲す」というように、荼毒は堪えがた いものとされた。のちこの字が茶の字として用いら 湯語」に「茶毒に忍びず」、〔詩、大雅、桑柔〕に

都11 (都)12 みやこ・みやび・すべて

精

族である艮子の侵寇に対してこれを伐ち、「厥の都いう。都は〔宗周〕鐘〕に至ってはじめてみえ、外いう。都は〔宗周〕鐘〕に至ってはじめてみえ、外にう。ないは宗周といい、武装都市は成周のように臣であり、神都には葬す・豊京といい、宗廟の存す らした都邑をいう。〔説文〕六下に「先君の舊宗廟単位として計った。都とは、そのような城壁をめぐ 形声 書」の諸篇や金文にみえるものはみな邑・大邑・新 は殷の国号でもあった。周初においても、〔書、周 では国都・神都をみな邑と称しており、「大邑商」と爲す」という〔司馬法〕の文を引いている。卜辞 あるを都といふ」とし、「國を距ること五百里を都 いい、その呪符を書という。城壁の大きさは、堵を 所に、呪禁として呪符を埋めたもので、これを堵と 土中に埋めた形。聚落の周辺にめぐらした堰堤の要 声符は者(者)。者は祝禱の器である臼を

> 孫の作った『輪轉』に「民人都鄙」「人民都邑」のわれている。また鄙に対していい、斉の鮑はの子となる。『詩、小雅、都人士』に、その都振りが歌意となり、また文化の中心ともなるので、都雅の意意となり、また文化の中心ともなるので、都雅の意 語がある。都市とは、もと都中の商賈のおる所をい う。古くは市は郊外に設けたものであった。 うものであろう。そこには人が聚居するので都集の を製伐す」とみえる。堵をめぐらした武装都市を

堵 12 かき・ふせぐ

がある。居所に安んずることを安堵といい、わが国室」、陶淵明の〔五柳先生伝〕に「環堵蕭然」の語室」、いるなさ、」とき、 る。 では所領の確認・保証されることをいう。 のち人の住居にも用い、「礼記、儒行」に「環堵の由である。古くは聖処にはみな堵をめぐらしたが、 高さ十米、上部の広さ五米あり、城壁上の行動も自 れを衝き固めてゆく方法で、鄭州の殷の都城址は、 す」とあり、版築のあて木五版の大きさを単位とす 呪禁を施した土垣で、聚落周辺の堤の要所に、呪禁 形声 である。〔説文〕「三下に「垣なり。五版を一堵と爲 として呪符を埋めたものを堵という。者が堵の初文 一辺が一・七粁から二粁に及び、基底幅三十六米、 か、いまな、一般を立て、中に土を盛って、 声符は者(者)。者に都の声がある。者は

屠 ほふる・さく・ころす

が口卒く屠めり」とあるのは、瘠むの意である。自刎ということが多い。〔詩、歸風、鴟鴞〕に「予自刎ということが多い。〔詩、歸風、鴟鴞〕に「予は、」とが、しまが、しているのはわが国独自のもので、切腹をいう。中国では にすることを「沛を屠る」のようにいう。屠腹といに屠殺するので、城市を攻めてその人をみなごろし とあって、牛羊の属を殺すことをいう。多くを一時 がある。〔説文〕ハ上に「刳くなり」形声 声符は者(者)。者に都の声 稌 陼 塗 覩[睹] 賭 斁

渡 わたる・すぎる

ぶ意がある。 いう。 僕は席を手でひろげもつ形で、此より彼に及 「濟るなり」とあり、水を渡ることを 声符は度。〔説文〕一一上に

稌 12 いね・もちいね・うるち

そえる定めであった。 ちいねをいう。祭祀に牛牲を供えるときには、稌を 〔説文〕 七上に「稻なり」とあり、も 声符は余。余に途の声がある

陼 12 なかす・しま・なぎさト・ショ

のをいうとする。〔爾雅、釈水〕に「小洲を陼とい水中の高きものなり」とあって、中洲の高平なるも とするが、自は神梯の形であるから、もと神事に関ふ」とあり、〔釈丘〕に陼丘の名をあげ、渚と同義 〔説文〕 一四下に「渚の如きものは階丘、形声 声符は者(者)。者は堵の意。

> ぐらした円丘上にあったとされ、また水渚が水神祭 する字であろう。周の辟雍(神宮)・霊台は水をめ

塗 13 ぬる・どろ・みち

目 誦、聞きかじりを道聴塗説という。 ととを塗殯という。塗ることは、呪禁として堵塞する方法であった。途の意にも用いて、流行歌を塗歌をした。 をした。 なの意にも用いて、流行歌を塗歌をした。 なのき棺に収めて、その上から塗る 訓による。 殯 のとき棺に収めて、その上から塗るの注に「泥なり」とあり、〔説文新附〕 | 三下もその 形声字である。〔孟子、公孫丑、上〕「塗炭に坐す」 るが、のち塗の義に用いる。塗は涂の 声符は涂。涂は途の初文であ

観16 「賭」はかる・しめす

記、礼運〕「陰陽を以て端と爲す。故に情睹るべし」。まであろう。陰微なものを見あらわすことで、〔礼意であろう。陰微なものを見あらわすことで、〔礼 しい字形である。 という。目の呪儀を含む字ならば、覩の方がふさわ して覩を録する。者は堵中に呪禁として書を埋めて四上に睹を正字とし、「見るなり」と訓し、古文と四上に睹を正字とし、「見るなり」と訓し、古文と いる形で、観とはそのような呪禁の有無を確かめる に堵・都の声がある。〔説文〕形声 声符は者(者)。者

賭 16 かけ・かける

してからなる 参考等

を賭けて碁を争ったことは有名である。命がけです ることを賭命といい、身命を賭するという。 の声がある。〔説文新附〕六下に「博・形声 声符は者(者)。者に堵・都・ 声符は者(者)。者に堵・

斁 ¹⁷ やぶる・いとう・えらぶト・エキ

0

等 果 樂

の字を用いる。縁の音をもってよむときの用義であれ、『祖記、緇衣』「これを服して射ふこと無し」は、射が、「周頌、清廟」に「人に射はるること無し」、が、「周頌、清廟」に「人に射はるること無し」は、数を用いるものであるりて数はるること無し」は、数を用いるものである 頌,大雅、 る。金文に無斁をいうときは、旲の字を用いる。 があり、 く形である。殬はその残骨をいう。斁にまた繹の音 なり」と同訓に解するが、釋は獣爪を以て獣屍を裂 ことができる。釈(釋)ニ上にも〔説文〕は「解く 暴露して、その屍体が、摩解(分解)する状態にあげる。 両訓をあげているが、それも獣屍の意より演繹する ある。〔説文〕にはなお「獣ふなり」「終るなり」の文〕三下に「解くなり」とは、獣屍の分解する意で る。その屍を撃って分解することを斁という。「説 振鷺」「彼に在りて悪まるること無く 『思考』「古の人、歌はるること無し」、「周、思考」「古の人、歌はるること無し」、「かり、財と音が通じて、「歌ふ」の意がある。〔詩、り、財と音が通じて、「歌ふ」の意がある。〔詩、 此に在

睾の初文とみられる字形である。 保す」、「師詢設」「肆に皇天笶ふこと問く、我が周に全公鼎」「肆に皇天笶よこと無く、我が有周に臨 と四方とに臨保す」のようにいう。異も獣屍の象で、

殬 やぶる

射」に作るのは、数と声が通ずるからであろう。字辨論な、繁盛、郊祀」に、〔詩〕の「耗数」を引いて「耗禁論な、ない。(失われる)」のようにいう。「春秋のなり、かと、終し、いためる)、〔書、決戦し雲漢〕「下土を 終シす(いためる)、〔書、決戦し雲漢)「下土を終シす(いためる)、〔書、決戦し雲漢)、かと、終したの敗壊する意に用いて、〔詩、大雅、あり、のちことの敗壊する意に用いて、〔詩、大雅、あり、のちことの敗壊する意に用いて、〔詩、大雅、あり、のちことの敗壊する意に用いて、〔詩、大雅、 義からいえば、殬に作るべきである。 したものをいう。〔説文〕四下に「敗るるなり」と 声符は睪。睪に斁の声がある。

蠹24 きくいむし・むしばむ・やぶれる

るが、 種々の呪禁のほか、毒液を流す方法などをもしるし 「説文」 一三下に「木中の蟲なり」と訓して橐声とす る。〔周礼、翦氏〕「蠹物を除くことを掌る」の注 その中にあって、中から穀実を食う虫を蠢という。 である。蠹の種類は甚だ多く、〔周礼、翦氏〕には、 り」とあり、蠹魚とは〔玉篇〕にいう白魚、しけ虫 に、「人の器物を穿食するもの。蠹魚もまたこれな いる。虫食いを蠹食、虫食い本を蠹書、書を読む **藁中の虫が、穀を鑑食することをいう字であ** 豪は穀類などを収めるもの。 金意 豪と蚰とに従う。 橐と蚰とに従う。

> さること万々である。飄(窃)も蠹と同じく、中にしそれでもなお鑑賞。 (汚職の役人)・蠹政の害にまのみで一向に活用の才なきものを蠹魚という。しかのみで一向に活用の才なきものを蠹魚という。しか あって穀実をそこなうものをいう。

1/3 つち・くに・ところド・ト

土 ۹

しており、寫(写)・寫の声をもって訓する。卜文り」とする。〔説文〕も吐三上に「寫ぐなり」と訓で古くは社声と近く、〔広雅、釈言〕に「土は瀉なる。土と吐と畳韻をもって訓するが、土は社の初文 要な祭祀や儀礼が行なわれている。殷の王畿はまた 圃土・亳土とみえるものは、みな社の意。そこで重礼を行なうことを示すものであろう。ト辞に唐土・ 象形 のであろう。田土の開発を圣田とよぶが、圣は土主 (豊作) などをトしていることが多い。その土は社 東土・西土など四方の土に区分され、そこで受年 作るものが多いのは、これに酒を灌いで裸鬯の儀 る。土が社の初文。〔説文〕一三下に「地の物を吐生 を両手で奉ずる形で、その土主を奉じて新しい農耕 を中心とする経営地として、王室の直轄に属したも の字形は土饅頭形に作り、その上に小点を注ぐ形に する者なり」とし、地中よりものを生み出す形とす 土をまるめた地主神の形。これを社神とす

> 域を土という。社において行なわれた。土は社主。 に従う鬲(奴隷身分のもの)千五十夫、宜(地名) をいう。〔宜侯矢設〕は周初の封建のことをしるす に神社を迎えるのと同じ。土とはそのような経営地地が営まれるのである。わが国で、新しい開墾の地 の庶人六百数十夫を与えている。その儀礼は、宜の ものであるが、「土を賜ふ」として邑三十五、農耕 社の支配する領

奴5 めしつかい・やっこ・とりこド・ヌ

增

男を奴僕という。奴才は謙称、奴輩は人を賤しめて 獲を目的とする。奴婢というときは、奴が男、のち 辠隷百二十人とあり、奚などをも加えると、罪によぎまだしるされたり」とみえる。〔周礼、秋官〕に丹書にしるされたり」とみえる。〔周礼、秋官〕に 奴籍である。〔左伝〕襄二十三年「裴豹は隷なり。とぎである。〔左伝〕襄二十三年「裴豹は隷なり。文を引く。奴隷の名は丹書にしるした。丹書はその 上奏のときに奴と称した。 いう語である。のち明では宦官が、 った。卜辞に「獲羌」のようにいうものは、その俘 ったと思われる。奴隷となるものは戦争俘虜が多か って官に没せられたものの総数は、莫大なものであ 清では満州人が

が、庶とは関係がない。庶は煮炊きする意の字であ

努っ かとめる・はげむ

い。国語では「努……なかれ」のようにも用いる。学形よりいえば、農奴が農耕のことに勤労すること飯を加へよ」とあり、「努力」は漢以後の語である。で、上をいう字である。漢の〔古詩〕に「努力して餐びを加へよ」とあり、「努力」は漢以後の語である。漢の〔古詩〕に「努力して餐びを加へよ」とあり、「共和、大学、「大学、」という字である。漢の〔古詩〕に「努力して餐びをから、一次によりのようにも用いる。

吸8 かまびすしい

形声 声符は 奴。〔説文〕 二上に 「離しき聲なり」とあって、酒宴でやかました。 「である」とあって、酒宴でやかました。 「をいうのであろう。〔詩、小雅、賓之初筵〕 うな大声をいうのであろう。〔詩、小雅、賓之初筵〕 くわめき立てることをいう。 呶々とは多言、おしゃくりすることをいう。

好 8 こども・めしつかい

形声 声符は奴。〔孟子、梁宗忠。 いう。〔書、甘誓〕〔湯誓〕に「予は則ち女を拏戮せいう。〔書、甘誓〕〔湯誓〕に「予は則ち女を拏戮せん」とは、妻子を合せて罰する意である。戦争俘虜は、奴隷として用いることが多かった。孥とはそのは、奴隷として用いることが多かった。孥とはそのは、奴隷として用いることが多かった。孥とはそのは、奴隷として用いることが多かったようである。、それがらみて、幼少のものが多かったようである。それが職長り的に効果があるとされたのであろう。

女介 8 ぬさ・おくりもの・かねぶくろ

形声 声符は奴。〔説文〕七下に「金宮が通用するのは、孥が帑とされることがあったこ字が通用するのは、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意。帑・孥の「その帑を送る」は、いずれも妻孥の意とを、示すものであろうと思われる。

多。 おおゆみ・いしゆみ

智。神兴

適する。諸葛孔明 『周礼、司弓矢』に四弩の制をしるしている。夾『鳥礼、司弓矢』に四弩の制をしるしている。夾『鳥礼、司弓矢』に四弩の制をしるしている。夾『『『記録』によるいではないではないではないではないではないでは、『説文』二下に「弓に臀あるも形声』声符は奴。『説文』二下に「弓に臀あるも形声』声符は奴。『説文』二下に「弓に臀あるも

重い型合うようこと、 ないう。のち砲という。のち砲という。のち砲という。のち砲は連弩を作り、一

努

車・砲台のようにという。のち砲

デ**ン** ド・タク して、これを用いることがあった。

度。 はかる・のり・ものさし・わたる

下に「法制なり」とし、又に従うて庶の省声とする・ウス う。席をひろげてもつ形。〔説文〕三・ウス (手) とに従って、 (手) とに従

る。〔漢書、律歴志〕に「長短を選る所以なり」とる。〔漢書、律歴志〕に「長短を度る所以なり」とより測量探度の方法には、数学的な方法が用いられ、を度る」、〔礼記、王制〕「地を度り、民を居らしむ」のように、土地を測量するにも用いるが、もとより測量探度の方法には、数学的な方法が用いられ、もり測量探度の方法には、数学的な方法が用いられ、をとより測量探度の方法には、数学的な方法が用いられ、の詳しい記述がある。その法度に合するものを制度、合わないものを度外れという。〔説文〕にいう法制合わないものを度外れという。〔説文〕にいう法制とは、最も後起の義である。

女心 9 いかる・しかる・あらそう

東想

慇

も用いられている。

発 15 鈍い馬・のろい・おろか

系・駘は糠・鞍に対する語である。
かって駄馬をいう。また人の魯鈍なるものをいう。
を、は、して、な雅、釈言」に「駘なり」と
形声 声符は奴。(広雅、釈言) に「駘なり」と

トウ

刀 2 かたな・はもの

), }

冬五【冬】五小

みえ、また「魏石経」にもその字形が残されている。 「説文」ニードに「四時盡るなり」とし、古文の字形は中に日を加えた形で、斉器の〔陳騂壺〕にない。 「説文〕ニードに「四時盡るなり」とし、古文の終結する時期をいる。古文のが、季節の終結する時期をいる。 「説文」ニードに「四時盡るなり」とし、古文の終記。 「説文」

灯 6 「燈」16 「鐙」20 ともしび・あぶみ

业1 6 「當」 13 あたる・かなう・まさに

圖管

代債として「その貯卌田」「用て格伯の田に典す」の声がある。**は神明を迎えるところ、その上に神の声がある。**は神明を迎えるところ、その上に神もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であったはずであり、尚の声もと農耕儀礼をいう語であるが、それは字の初義でなく、田租を返済に用いるような経済行為がなされるようになった。

光っ あかぬり・にぬり

片

いられた。 軒紫柱という。 い、彤庭という。また宮門を形闡といい、建物を形 宮殿建築にはそれらの彩色が多く用

投 なげる・すてる・おくるトゥ

ず」とあり、四凶を放竄することをいう。のち投擲〔左伝〕文十八年「これを四裔(四方のはて)に投〔左伝〕文十八年「これを四裔(四方のはて)に投 の意となる。古代の歌垣に投果の俗があった。 ことを意味した。それで遠く放流することをいい、 べきであろう。これで擿つことが、これを投棄する羽の形ならば、殳はその羽飾をつけた呪杖とみる 〔説文〕 三トに「鳥の短羽」としており、殳・杸も 仗をもって人を擿つものである。殳の上部の九を、 みな同声であるから一系の字とみてよく、 日く、投なり」とあって、投と擿と互訓。やはり兵 三上には「擿つなり」、また擿字条一二上に「一に またその次条に杸をあげ、「軍中、士の持つところ の殳なり」とあって、みな兵杖の類である。投字条 とあって、殳と殊と同声の訓。またその次条に「設 は殳なり」とあって、長さ二尺、車上に植てる杖、 字条三下に「桜を以て人を殊すなり」字条三下に「桜を以て人を殊すなり」と 九がもし

たかつき・まめ

豆 8 보 Ā A

を食する器なり」とあり、 足の高い食器の形。〔説文〕五上に「古、肉 〔国語、呉語〕に「觴酒

> 豆肉」の語がある。儀礼のときには数十豆を用いる 例があった。いま存する器は春秋期前後のものが多 その銘文に「蒸

礼にみえる多数の豆 にいうものがある。儀 隣豆」「善簠」のよう 木豆・瓦豆であっ



である。 た。豆菽(まめ)の意に用いるのは、 のちの用法

到 8 いたる・つく・およぶトウ(タウ)

政政

屋・室・臺(台)の字は、みなその形に従うている。 矢の至るところは、地をえらびトするときの方法で、 送と、もと同系の語より分化したものと思われる。 ** て茲の人を弘が」とあり、致の義とする。到達と致で茲の人を弘が、というで、 な文の字形は人に従うて致に作る。[晉] に「鳥 | 二上に「至るなり」と訓し、刀声の字とするが、 達するところ、そこに人の立つ形である。〔説文〕 会意 字の初形は、至と人とに従う。至は矢の到

匐 やきもの・すえものトウ(タウ)・ヨウ(エウ)

(4) 西面

会意 り」とし、包(包)の省声とする。包の声をとるも 窯で土器を焼く形である。〔説文〕五下に「瓦器な 勺と缶とに従う。勺は竈の形。缶は土器。

> 勲であった。匋を包声とするのは、この麞の声がな から、 祖又成惠姜」「皇考嬪仲皇母」の祭器を作るという お残されていたからであろう。 の家系を「齊の辟躍叔の孫、遭仲の子なる論」との交りをもって知られる鮑叔のことである。論はその交りをもって知られる鮑叔のことである。論はそ ものがある。また「輪螻」にみえる쀟級は、管鮑のであろう。金文の寶(宝)にも缶に従う形に作る 形をしるすものがあって、窯中の瓦器を示す。古くのとするが、古い字形には上部に煙抜きとみられる は包の声があり、それで包の省声とする説が生れた い、「皇祖聖叔・皇妣聖姜」「皇祖又成惠叔・皇家系を「齊の辟鑒叔の孫、遵仲の子なる輪」と家系を「紫と歩き」。 鮑叔はその曾祖父、「齊の辟」とよばれる元

岩 8 ひろい・おおまか・ほしいままトウ(タウ) मि

•

P

意である。 屋が字の本義。わが国でいえば、磐座というもの 室。 人、中國を佚宕す」というのも、思うままに振舞う 掃)す」という。〔穀梁伝〕文十一年「長狄弟兄三 近い。その室は宏奥、それで宕広の意があり、 また「一に曰く、洞屋なり」としているが、 の義があり、「不要と」に「獨狁を高陶に宕伐(一 ろ)の形である。〔説文〕 七下に汝南の地名とし、 会意 一は廟屋。いわゆる郊宗石室(上帝を祀るとこ 一と石とに従う。石は祏の初文で石主・石(**) 自在

弢 8 ゆみぶくろ・えびら・つつむトウ(タウ)

括った形である。金文に朱の皮製の颪を賜う例が多 異なる。金文は字を圓に作り、圓の上部は囊の口を くみえている。 の従うところと同じとするが、弓と鼓とではものが 衣なり」とし、字を会意に解し、中を垂飾にして鼓 を括った弓嚢をもつ形である。〔説文〕「ニ下に「弓 という である 一号を折った形で、弓を入れ、上会意 一号と中と又とに従う。中は弓 弓と中と又とに従う。中は弓

東 ひがし。あずま

♦ ₩ ₩

とされており、「説文」の字説はその説話を背景と を扶桑とする。太陽の運行については十日説話があ 木なり。日の出づるところなり」とあって、その木 の木の間から上る形とする。木部六上に「榑桑、神とし、「日の木中に在るに従ふ」、すなわち日が東方 仮借とする。〔説文〕六上に「動くなり、木に從ふ」 えた橐の字が別に作られた。東の初文は象形である 方位の東の字に専用されて、それに石(宕声)を加 類を提供し、誓約して裁判を受けたが、そのことを で、橐の初文。古代の獄訟に、当事者は束矢鈞金の が、のち仮借義にのみ用いられるものであるから、 いる東は、その提供物を納れた橐の形である。 している。卜文・金文の字形は上下を括った嚢の形 という。曹の初文は譬。瞽の上部に二つ並んで 日は交替してこの扶桑神木より天に向って上る 嚢の形。 素の上下を括った形である。 のち

東 沓 逃[逃] 倒

> 沓 けがす・かさなる・むさぼるトウ(タフ)

に「愚者の言は誻々然として沸がし」とみえる。をけがすことをいう。多言の字は誻、〔荀子、正名〕 る。〔説文〕五上に「語多くして沓々たるなり」と て忍なり」の注に「黷すなり」とあり、 義とするのであろうが、そのような比喩で文字が作 の祝禱をけがして、効果をなくするための行為であ られることはない。「国語、鄭語」「その民沓貪にし し、会意とする。水の流れるようにいうので多弁の 会意 収めた器。それに水を加えるのは、そ 水と日とに従う。日は祝禱を 沓とは祝禱

逃。(逃)1 のがれる・さける・かくれるトウ(タウ)

ちをいう。〔春秋〕の通例では、留まるべきものが、 牧誓〕に「四方の多罪逋逃」というのは、亡命者たい。 ひそかに去るときに用いることが多い。 逃走・逃亡をいう。跳躍して逃げるのである。〔書、 形声 〔説文〕ニ下に「亡ぐるなり」とあり、 声符は兆。兆に跳の義がある。

倒 さかさま・たおれる・しぬトウ(タウ)

[書、武成]「前徒、戈を倒にす」は倒戈、叛逆をいの原義。逆は向うより人の来るのを逆える意である。なまない。というが、疑問というよりも、倒逆が字るるなり」というが、疑問というよりも、倒逆が字 うより人の至る意である。〔説文新附〕八上に「仆なの至るところに至り達する意。倒は向 声符は到。到の初形は致。矢

> 順に反するものを倒という。 う。倒景・倒懸・倒装・倒置・倒流など、すべて正

党10 (黨) 20 ともがら・なかま・むらトウ(タウ)

〔周礼、党正〕に「その黨の政令・教治を掌る」とします。」とあり、また二百五十家とする説などもある。 「君子は黨せず」という。〔荀子、非相〕「博にしてず」、〔国語、晋語〕「比して黨せず」、〔論語、述而〕 意で、堂・當(当)の声があり、堂・當も、 黨正」は讜の仮借で善の意。「もし・ねがう」の訓 党・郷党の意となるが、党派的な立場は排他的とな 氏の党・某族の党という例が多い。親族法において は血縁の集団に発するもので、〔左伝〕には党を某 いう。その共同体に属するものを党人という。もと のがある。〔釈名、釈州国〕に「五百家を黨と爲 ち地縁的な集団とみてよい。漢碑に字を鄃に作るも は別の字である。党は郷党的な祭祀共同体、すなわ であるが、その字は日に従う字で、この郷党の字と るなり」とは党莽、すなわち光のない状態をいう語 であると考えてよい。〔説文〕一〇上に「鮮かならざ 所をともにするものを党という。一種の祭祀共同体 るものであることを示す。黒は竈突の意で、その祀 黨は尚に黒を加え、その祀所が久しく用いられてい れ社や田土に神を迎えて祀ることをいう字である。 も父党・母党・妻党のようにいう。それよりして朋 いものであるから、〔書、洪範〕「偏せず黛せ 旧字は黨に作り、尚(尚)声。 、それぞ

は儻の仮借義である。

凍 10 こおる・こごえる

唐10 「唐」10 国名・ほら・ひろい・むなしい

東」「中・唐に壁あり」の〔伝〕に「堂塗なり」、「爾 大きながら、唐は、農耕に関する儀礼を示す字 る器であるから、唐は、農耕に関する儀礼を示す字 であろう。杵をそなえて祈る意を示す字かと思われ であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるがら、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 であるから、字の初義とはしがたい。ト文に殷の始 という。といるので、唐とその 場所の意に用いることがある。「詩、東風、 いっと というない。といるのが、京といるの。 はいるのは、といるのが、京といるのは、

相通ずる語であるのと同じであろう。 となり、これを唐といふ。 堂舎、というものである。唐はまた「と唐、中庭の道)」というものである。唐はまた「と唐、中庭の道)」というものである。唐はまた「と唐、中庭の道)」というものである。唐はまた「とき」という。 世紀、本代、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「廟中の路、これを唐といふ。堂舎、雅、釈宮」に「南中の路、これを唐といる。

套 10 かさねもの・おおう・ひとそろい

会意 大と長(長)とに従う。長は長の異文であるが、長髪の人でその髪をいう。大はその髪を包みで、手と物の重沓するものを、套と爲す」とあり、一まとめにしたものを重ね合す意。近世以来の語でで、一まとめにしたものを重ね合す意。近世以来の語である。套印本とは朱墨両印の本で、明末清初に多くある。套印本とは朱墨両印の本で、明末清初に多くおいたが、俗本が多い。

島10 [嶋]14 しま(タウ)

(株) 10 トウ(タウ)

(10 トウ(タウ)

(11 トウ(タウ)

(12 トウ(タウ)

(13 トウ(タウ)

(14 トウ(タウ)

(15 トウ(タウ)

(16 トウ(タウ)

なり」とあり、桃をいう。〔説文〕は 形声 声符は兆。〔説文〕六上に「果

疼10いたむ

疼煞という。ともに近世の語である。 り」とある。痛は透母、冬は定母の字であるが、声 教に通ずるところがある。うずくような痛みを疼と いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを いう。溺愛することを疼愛、愛惜してやまぬことを

工 10 なみだ・みおくる

30 30 30

10 トウ(タフ)

会意 引と羽(羽)とに従う。習知、本できる。習は習押して祝禱をけがし、また弱は倒文。揚・蹋・蹋など、すべて蹂躪の意をもつもの例文。揚・蹋・蹋など、すべて蹂躪の意をもつもの例文。揚・蹋・蹋など、すべて蹂躪の意をもつものの主ととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし詛祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし記祝で、鳥飛のこととは関係がない。祝禱がもし記祝信のろい)のために加えられているときは、これを何ろい)のために加えられているときは、これを何ろい)のために加えられているときは、これを何をして祝禱をけがし、習は祝禱を関でいる。習は習押して祝禱をけがし、書に続いることによって、その呪能を耐ることが、書にいるといるといるとは、これを何をいるとは、これを何がないるといるとは、これを何をしているという。習いないるというない。

★□10 トウ(タフ) トウ(タフ)

0 3

多形 声符は含。含に答の声があり、それはおそらく拾の転音であろう。「説文」一下に「小 赤なり」とあり、未は菽、あずきをいう。答と通用するとが多く、「書、洛誥」「天命に奉荅す」、「論語、ことが多く、〔書、洛誥」「天命に奉荅す」、「論語、ことが多く、〔書、洛誥」「天命に奉荅す」、「論語、ことが多く、〔書、洛誥」「左伝〕宣二年「既に合意問」「夫子荅へず」、またまない。

計 0 たずねる・うつ・おさめる

形声 声符は寸。寸は垂の初形に近野 く、財の声がある。〔説文〕三上に「治むるなり」とし、字を会意とする。寸を法の意とするものであるが、形声とみてよい。〔書、皋剛討じて伐たず」、〔礼記、王制〕「畔くものは君討つ」はともに***。。 義で、誅・討はいずれも形声の字ではともに***。。 ま伐してこれを除くので、治める意となる。 ま伐してこれを除くので、治める意となる。 これを討論す」は、 「論語、憲問」「世版」(人名)これを討論す」は、 「検討の意である。

透10【透】11 とおる・もれる

荅

透[透]

水野 下跳ぬるなり。過ぐるなり」という。 「方言」や「広雅」「玉篇」にはシュクの音で驚く意とし、それが古い用義であるらしく、透徹・透光のとり、大調期以後のことである。透出がある。銅鏡であるが、いまもその大鏡のことは「夢渓筆淡」にみえるが、いまもその大鏡のことは「夢渓筆淡」にみえるが、いまもその大鏡のことは「夢渓である。

10 たたかう・あらそう

M° W

は断に従い、断は盾と斤(斧)とに従う。「兩士相對ひ、兵杖後に在り。門ふの形に象る」とするが、ト文の字形は、二人が髪をふり乱してつかみ合う形、すなわち手搏格闘の形である。のち声符み合う形、すなわち手搏格闘の形である。のち声符を加えて闘に作る。門は闘の初文である。というない。というないが、いうないが、はいいのである。というないが、はいいのである。「説文」三下に象形 二人相格闘(闘)する形。〔説文〕三下に象形

合脈 1 かりそめ・ぬすむ・とる

*は舟と余に従う字で、舟は盤、余は外科用のメスの形。これで膿血を除く意。それで一時の偸安をうることをいう。一時のかりそめのことであるから、ることをいう。一時のかりそめのことであるから、ることをいう。一時のがそめのことであるから、のようにいい、偸薄(人情に乏しい)の義。偸間をのようにいい、偸薄(人情に乏しい)の義。偸間をひさばる意よりぬすむ意となり、偸盗(盗人)のむさばる意よりぬすむ意となり、偸盗(盗人)の意とする。

兜 かぶと

ひさしで、両旁を帽という。股代の兜鍪の遺品とし盔とよばれていた部分。その左右は、左右に垂れる窓 て、虎盔の類がある。 白の部分が甲の本体で鍪。鉢形の鉄甲で、古くは虎 なり」とし、「見は人の頭に象るなり」とするが、 かたに見に従う字とし、「兜鍪、首鎖、 象形 兜をつけた人の形。 釜、首鎧、一〇説文

いたむ・かなしむ・おそれるトウ(タウ)

「・・・・ゝ~。「ワールm」に「哀なり」とあり、人の死れ記、曲礼、上〕に「七年を悼といふ」とは夭死む」、〔伝〕に「動なり」とに復見(・・・ を哀悼する意である。 は悼という。〔詩、檜風、羔裘〕に「中心これ悼 であるという。斉魯では矜…また晋秦では矜あるい「懼るるなり」とあり、陳楚の間の語ばなるなり」とあり、陳楚の間の語ばなる。『説文』一〇下に

掉 ¹¹ ふる・ふるう・ただすトウ(タウ)・チョウ(テウ)

ることを「舌を掉ふ」、拒絶には「顔を掉ふ」、勢い の末尾に強句をおくのを掉尾法という。よく弁舌す 形声 入〕 三上に「搖かすなり」とあり、ま一方に傾いた不安定な状態で、動く意 声符は卓。卓は大きな匙の形。

よく急に起つときには「臂を掉ふ」という。

すりとる・とりだすトウ (タウ)

形声 りを掏児という。淘の声義と関係がある。 いい、「元典章、刑部、諸盗」にみえる。す 声符は匋。近世の語で、 すりを働くことを

桶 おけ・つつトウ・ヨウ・ツウ

霜は上音下訓、ともに変則読みの例とされる。 「広雅、釈器」には斛を容れるという。坐したまま六上に「木の方にして六升を受くるもの」とあり、 【生するのを桶底脱という。湯桶は上訓下音、 往生するのを桶底脱という。湯桶は上訓下音、 木の方にして六升を受くるもの」とあり、 ある。通筒の形のものをいう。 声符は甬。甬に通・痛の声が 〔説文〕

淘 あらう・よなげる・さらうトウ(タウ)

とあり、 残りを棄てることをいう。淘鵝はがらん鳥、いわゆわけることを淘沙・淘金という。淘汰はよりわけて、りわけることを淘沙・淘金などを流し洗いしてより 形声 という。淘は掏と声義の通ずる字である。 るペリカン。一たびすくえば、数日の食に充てうる 米を淘ぐことをいう。水の中でゆすってよ声符は気。〔正字通〕に「米を漸ふなり」

盗 1 【盗】12 ぬすむ・とるトウ(タウ)

量 0 懲

会意 旧字は盗に作り、次と皿とに従う。おそら

學有思 一年五年

も与えられない盗であった。要するに盗とは、 「これを殺すもの罪無し」とされる、安全の保障を 治を行なっていた陽虎であり、孔子が最も畏れてい盗んだ男は、当時魯の権力を掌握して一種の僭主政 撃され、定八年、魯の国宝である宝玉大弓が盗に殺兄の摯が盗に殺され、定四年、楚王が雲夢で盗に襲年、鄭の諸公子が盗に殺され、昭二十年、衛侯の 命中は、亡命国の賓客として迎えられない限り、 その名を没して盗としるされるのである。孔子も亡 盗を信ず」「盗言孔だ甘し」というように、盗は社のなり」とするが、〔詩、小雅、巧言〕に「君子、物を利するものなり。次に従ふ。次は皿を欲するも に出て行動するときは盗とよばれ、公的記録にも、 た対立者であった。その権力者も、一たび秩序の外 その名が知られているもので、たとえば魯の宝器を まれたことなどをしるしている。これらの盗は概ね 十四年、鄭の子臧が末に亡命中に盗に殺され、襄十十四年、鄭の子臧が末に亡命中に盗に殺され、襄行る政治的な亡命者の集団をいう。『左伝』には僖二 従来の共同社会的秩序を拒否し、その変革を要求す 会的にも一の立場をもつものであって、決して皿中 の食を欲するような狗盗の属ではない。盗はむしろ の共同体に背くものをいう。〔説文〕ハ下に「私に の血盟の盤に水をそそいで、盟誓を破棄する意を示 に従う。皿はおそらく血で、 すものであるから、盗とは盟誓に離叛したもの、そ を加えている形で、〔石鼓文、汧殿石〕の字は二水 とされているが、字は器中のものに水を注ぎ、罵詈 くはもと次と血とに従う字であろう。次は垂涎で 血盟に用いるもの。そ

国盗りを企むものであった。次の籀文を、〔説文〕その字形は食を欲する小欲のものではなく、いわば 共同体的秩序からはなれた、圏外のものの意である。 意である。曲行のときはキの音でよむ。 う。句読点の読点は逗点、すなわち住まるところの

陶11 すえもの・せともの・やしなう・うれえるトウ(タウ)・ヨウ(エウ)

膊 野於

一型に を作ることから陶冶・陶鋳の意となる。鬱陶とは内匏を用ふ」とあり、天帝を祭る郊祭に用いた。陶器・ 皇を加えて陶という。[弘記、郊特性]に「器に陶筒である。焼いたすえものは聖所におかれるので、 「陶竈の如く然るなり」という。その上り竈の形が〔釈 名、釈丘〕にも「再成を陶丘といふ」とし、 形声 て心楽しむことを陶然という。 にこもって、いまだ外に発しないこと、すでに発し 「再成の丘なり」とあり、二段の坂をいう。 声符は匐。匒は窯で器を焼く形。〔説文〕

意味するものであった。〔詩〕にみえる盗は他所もをかけるという行為は、重大な汚辱を加えることを

注いで、その盟誓をけがすことを示す字である。水

誹謗のことをいう字であるが、沓は祝禱の器に水を小雅、十月之交〕に「噂沓」という語があって、

小雅、十月之交〕に「噂沓」という語があって、ときには誓約の盟書に水を注ぐこともあった。〔詩、ときには誓約の盟書に水を注ぐこともあった。〔詩、 棄するには、血の神聖を汚すという方法がとられる。 ハ下に二水に従う形のものをあげている。盟誓を破

塔 12 とう・てら が跋扈して取締りが困難であるという非難を受けて外盗を利用するため、これに好遇を与えたので、盗

「左伝」襄二十一年に、魯の季孫氏が亡命者である 的盟誓に叛いて、他に寄託しているものをいう。 の、〔左伝〕に異客と称するもので、氏族の共同体

盗は群団をなしていて、叛乱に加担し、

暗殺を請負

いる。また襄十年に「群不逞の人」という語があり、

また塔婆・兜婆など、そのあて字が多い。stūpa のいたがは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、そのあて字が多い。stūpa のいた。 糌 音訳語である。 形声 声符は答。〔説文新附〕一三下

婚 12 わるがしこい・ぬすむ・たのしいトウ・ユ

逗

とどまる・まがるトウ・キ

まるなり」とあり、

声符は豆。〔説文〕ニ下に

それを水で消す形に作る。

(蛮)を盗む」とあり、その字は皿上に火があり、 名將」とよばれた。近出の〔秦公鎮、二〕に「百織った。秦にまず叛旗を翻した原法は、当時「盗のった。秦にまず叛旗を翻したない。

声が近かったのであろう。逗留・逗宿のように用い おそらく古く住と から、愈(愈す)の初文。〔説文〕二下に「巧黠な用のメス)の形に従うて、膿血を除去する意である 形声 の声がある。 声符は兪。兪に偸・愉(愉) 兪は舟(盤)と余(外科

> 娯は愉娯。ユの音でよむ。 ・ 像薄ともしるす。一時の僥倖を貪ることをいう。 ともに偸に近い字である。婾生・婾薄はまた偸生 るなり、すなわちわるがしこい意とするが、声義

惕 12 ほしいまま・あそぶ トウ (タウ)・ショウ (シャウ)

[説文] |○下に「一放 にす」とあり、[荀子、修放射する形で、古代の強振り儀礼を示す字である。 身〕に「愓悍を加へて順ならず」という。愓悍は放 通用することのある字である。 蕩にして悍悪、手がつけられないものをいう。蕩と 易は台上に玉をおき、その玉光が下に 声符は易。易に湯の声がある

搭 12 うつ・のせる・おおうトウ(タフ)

語が残されているからである。 機や舟車に乗ることを搭乗・搭載のようにいう軍用 熊手を装備した車を搭車という。美人を搭子という 字であるが、常用字中に加えられているのは、 ともいう。搭の字は今では普通に用いることのない 謎である。搦と声義が通じて、搨写することを搭写 のは、「子を搭けている女」、すなわち好という字の うちかける動作をいう。熊手のような農具を搭爪、 の詩に「肩に道衣を搭けて歸る」の句があり、 いう字で、近世以来その意に用いられる。宋の林逋形声 声符は答。手でうつ、まぜるなどの動作を

棟 12 かしら

軍律の用語では、敵前で前進をやめることをい 逗 陶

東・棟梁の器という。 ・株梁の器という。 ・株梁といい、そのように重要な地位にある人を棟 ・株梁といい、そのように重要な地位にある人を棟 ・株梁といい、そのように重要な地位にある人を棟 ・株梁といい、そのように重要な地位にある人を棟 ・株子と、一様にわたした木を梁という。

実 12 やまなし・かいどう

たことを追募する詩とされ、裁判のことを業陰といたことを追募する詩とされ、裁判のことを業陰といたことを追募する詩とされ、裁判のことを業陰といたことを追募する詩とされ、裁判のことを業陰といたことを追募する詩とされ、裁判のことを業に、社会により、世業をいう。

棹 12 さお・さおさす

12 トウ(タウ)・ショウ(シャウ)

では

もので、陽の初文。〔説文〕一上に湯を「熱き水な上に玉をおき、その玉光の下方に放射する形を示す形声 声符は場。易に場・暢の声がある。易は台

り」とし、熱湯をいう。〔論語、季氏〕に「不善を見ること探湯の如し」とあり、探湯盟誓(くかた見ること探湯の如し」とあり、探湯盟誓(くかたち)の法が中国の古代にもあった。おそらく鶫がその方法を示す字であろう。鼎は貞の初文。貞間と貞正の意とをもつ字である。また湯で罪人を煮殺すことを鼎鑊・湯鑊という。鑊は大鼎の意。普通の祭器の鼎では、鱗牛鼎といえども湯鑊の器とはしがたい。高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事に供するための桑盛の料として与えら高減し、神事には、海が異なる。「湯補よみ」とは上郎では、東が異なる。「湯補よみ」とは上間下音、変則的なよみかたをいう。

痘 12 ほうそう・もがさ

痘も、今では絶滅したことが宣言されている。 疱瘡・痘瘡という。久しく人類を悩ませたこの天然彩香 声符は豆。豌豆ほどの水疱ができるので、

登12 のぼる・すすめる・みのる

る」というが、豆はふみ台である。ゆえに登位・登こ上に「車に上るなり」とし、「車に登る形になのふみ台に足をそろえて登ることをいう。〔説文〕のう形で、發(発)の初文。豆はふみ台の形で、それでは、など、ひと豆とに従う。癶は両足のそろうて前に

器の豆を奉ずる形の字義であろう。のを登熟、供えることを登麦のようにいうのは、食高、また登科・登庸の意に用いる。穀物が成熟する

全寸 12 ひとしい・はかる・ととのえる・ともがら

○ 大声 声符は寺。寺に待・様などので、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、宮で、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、意で、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、意で、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、意で、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、意で、それより等平の義が生れるとするが、「孟子、意だ。」と、上」「百世の後よりして、百世の王を等るに、これに能く違ふもの莫きなり」、「周礼、司勲」に、これに能く違ふもの莫きなり」、「周礼、司勲」に、これに能く違ふもの莫きなり」、「周礼、司勲」に、これに能く違ふもの莫きなり」、「周礼、司勲」に、これに能く違ふもの莫きなり」では、古の道なり、差等を明らかにする意に知いる。「礼記、楽記」「禮義立つときは、則ち貴賤用いる。「礼記、楽記」「禮義立つときは、則ち貴賤用いる。「礼記、楽記」「禮義立つときは、則ち貴賤の法に、おなど、みな差等をはかり、差等を明らかにする意に知い。注に「階級なり」とみえる。度と声の近い語でい。注に「階級なり」とみえる。度と声の近い語でい。注に「階級なり」とみえる。度と声の近い語でいる。「管子、各原」に使・等、賈誼のあったらしく、「管子、各原」に使・等、賈誼のあったらしく、「管子、各原」に使・等、賈誼のあったらしく、「管子、各原」に使・等、賈誼のからに対しまり、

筒 12 つつ・さかずき

の節句には、ちまきを入れて筒飯といった。わが国節の部分から切れば、容易に筒形がえられる。五月を奉ず」とあって、同は杯の名。〔説文〕五上にを奉ず」とあって、同は杯の名。〔説文〕五上にををす」とあり、筒形の楽器をいう。竹の間の部分から切れば、容易に筒形の楽器をある。同は筒形の器。

では円形の井戸を筒井、銃口を筒先という。

答12 こたえる・むくいる・むかう

形声 声符は合。合は古く答の意に用いて答の初来。
こ説文] は艸部二下に「荅、小・赤(小豆)なり」なり」に「歳は然りとするなり」とあって、古くは釈言」に「歳は然りとするなり」とあって、古くは釈言」に「「蓋は然りとするなり」とあって答揚の意。場もないに「對揚」と連用していう語で、ともにこたえるとよむ字である。「左伝」宣二年に「既に合へて來り奔る」の合も、答の意。
倉は然りとするなり」とあって答揚の意。場もないに「對揚」と連用していう語で、ともにこたえるとよむ字である。「左伝」宣二年に「既に合へて來り奔る」の合も、答の意。
倉はだいがあったものと思われる。
漢碑にもそれに似た字形を用いるのは、第代の用字と思われ、答問の字に答を用いるのは、
次に「野本尚書、洛語」にも「厥の師に意ふ」とその字を用いている。
漢碑にもそれに似た字形を用いるのは、
次は行の相字と思われ、答問の字に答を用いるのは、
次は
次は
のもあり、また答に作るものもみえる。
会や答は、
なおのちのことであろう。

統 12 すべる

掲3 うすつく・たたく

掲3 うつ・おさめる

とをもいい、搨・搭・拓は通用する字である。がある。その書を搨写・搭写という。拓とりするこがある。その書を搨写・搭写という。拓とりするこきする)を搨書といい、[唐書、百官志] に搨書手形声 声符は弱。弱は搨覆。臨摸(手本を写し書

13 はびこる・みちる・うごく

下の大勢の動かしがたいことを嘆く語である。 下の大勢の動かしがたいことを嘆く語である。 下の大勢の動かしがたいことを嘆く語である。 下の大勢の動かしがたいことを嘆く語である。 下の大勢の動かしがたいことを嘆く語である。

重 13 ただす・おさめる

は薬にものを入れた形である。〔爾雅、釈詁〕に形声 声符は重。重に童・種・動の声がある。重

「正すなり」とあり、〔書、だ為談〕「これを董すに「正すなり」とあり、「書また或いは董に作る。振董の「振動」の注に、「書また或いは董に作る。振董とは、兩手を以て相撃つなり」とあり、董とは、秦の中にものを入れ、両手で撃って引き締め、収まりやすくする意である。〔方言〕に「固むるなり」とおり、首といて「置す」意となり、董督・董事・道となり、董督・董事・董正のように用いる。骨董はもと匫董に作る。「説酌かれている祝禱で用済みのもの。これを蔵するのは、由緒のあるものであろう。董は秦の中に集めて一まとめにするようなものをいう。骨董の字義については諸説あるも、要するに由緒めかした雑物で、いては諸説あるも、要するに由緒めかした雑物で、いては諸説あるも、であるものである。

材 14 こしかけ・ねだい

いた。これを懸榻という。殊遇をいう語に用いる。しておいて、ふだんはこれを使わず、立てかけておけをいう。後漢の徐釋は、陳蕃のために一榻を用意はない。後漢の徐釋は、陳蕃のために一榻を用意をいう。後漢の徐釋は、陳蕃のために一榻を用意をいう。

稻 14 (稻) 15 いね (タウ)

看為原 是

文〕七上に「滁なり」とあり、黏りのあるものをある。舀は臼中のものをすくいとる字。稲は〔説形声 旧字は稻に作り、舀声。舀に滔・慆の声が

である。水を玄酒というのと同じ。 を嘉蔬といふ」とあり、嘉蔬は神饌とするときの名 簠に盛って神饌とした。[礼記、曲礼、下]に「稻の銘文に「用て稻粱を盛る」というのが常語で、 、ないものを杭、 総称しては稻という。金文の簠

惷15 おろか・くらいトウ (タウ)・ショウ

と声義の同じ字である。〔儀礼、土昏礼、記〕〔釈 文〕に引く〔字林〕に「丑降の反」とあり、「かいな」 義を承ける字であったのではないかと思われる。 頑冥」と諸侯自らいう語としているが、もと悉の声 ことはできない。〔礼記、哀公問〕に「寡人、憃愚 「敢て悉みて、命を外に專(敷)くこと又ること毋をなった。 春声の字であるが、戇と同様に用いる。別に金文に 教ふること能はず」と挨拶する語をしるしている。 結納のとき、女の親が「某の子、意思にして、また かと思われるが、その形義の推移のあとを確かめる れ」とあり、のちの惷の字と関係があるのではない 「愚かなり」とあり、「乱記、表記」の「愚かなり」とあり、「礼記、表記」の「愚ななり」とあり、「礼記、表記」の「おき」 形声 士昏礼、記〕に、

撞 つく・うつ・たたくトウ(タウ)・ドウ(ダウ)

は、鐘を撞くが如し。これを叩くに小を以てせば小きならす意。〔礼記、学記〕に「善く問を待つものきならす意。〔礼記、学記〕に「善く問を待つもの これを叩くに大を以てせば大鳴す」とみえる。 「迅く擣つなり」とあり、鐘などをつ 声符は童。〔説文〕一二上に

> 語末の助詞である。 さきがそろわず、矛盾すること。禅林の語で、 杵で撞くときにもこの字を用いる。「撞着」はあと 着は

樋 ひ・かけひ・みぞトウ

洗といった。すべて国語の用法であり、国字としたまたの壺をも樋といったらしく、禁中での掃除人を樋いれるもの。水のとり入れ口を樋の口という。かわいれるもの。水のとり入れ口を樋の口という。かわいれるもの。 中国に字の用例なく、わが国では水を通すひに用い てもよい字である。 る。かけわたしたものを、かけひといい、水を引き 声符は通。「集韻」に「木の名」とするも、

滕 わく・あがる・おくるトウ

「沸滕」に作る。それが字の原義である。水が水盤 雅、十月之交〕「百川沸騰す」を〔玉篇〕に引いてなり」とあって、水がはね出す意とする。〔詩、小なり」とあって、水がはね出す意とする。〔詩、小 でささげて賸る形。〔説文〕一上に「水、 に溢れ動くことをいい、それより水勢をいう字とな ったものであろう。 形声 の声がある。朕は盤中のものを、 声符は朕。朕に縢・ 超涌する 謄 (謄) 、両手

路15 [蹋]17 ふむ・おさえるトウ(タフ)

Ħ る。沓・易はいずれも祝禱の器に対して、その呪能 を害する行為を示す字である。沓は祝禱の器の日に 蹋に作り、 暴声。 「踐むなり」と訓す 声符は沓。「説文」ニ下に字を

> 思われる。 な民俗である。踏歌はまた踢歌という。蹋鼓は鼓上午に行なわれる蹋百草など、みな季節の魂振り的意味があり、上元の夜の踏歌、春の踏ま、楚地で端むきなる。踏むという行為には、それ自身呪的なむ意となる。踏むという行為には、それ自身呪的な 対して水を注ぐ形、霧は習の倒文で、習は羽で祝禱 で倡舞するもの、またけまりを蹋鞠という。踏・蹋 る。いずれも祝禱を蹂躪するものであるから、蹂れを倒覆して、その呪能を害することを示す字であ のあしぶみ、すなわち反閉的な意味があったものと には舞踏的な意味がある。舞踏には本来呪法として は声義の同じ字であるが、慣用上の区別があり、踏 の品を摺ってその呪能を刺激する字であり、暴はこ

書 15 いなびかり・かまびすしい・はやいトウ(タフ)・ヨウ(エフ)

〔説文〕に「一に曰く、衆言なり」とし、また雨音 響々とは、そのはげしい雷声をいうものであろう。いれなり」とあり、その光ることを雪煜という。 雷 の義とする。擬声的な語とみられる。 形声 靐の省声。 「説文」 一下に「雷電の 声符は言。言は靐の省文で、

糧 とばりのはしら・はたざおトウ(タウ)・ショウ・シュ

その遊戯がさかんに行なわれ、画塼などにその類の う。竿の上で軽技をすることを橦伎という。漢代に 絵が多く残されている。 形声 の柱なり」とあり、旗竿や帆柱をも 声符は童。〔説文〕六上に「帳

糖16 (糖)16(錫)18 あめ (タウ)

花・糖毬、白糖を糖霜という。 に字を鰑に作る。古くは鰑といった。金平糖を糖 七上に「飴なり」という。〔説文〕七上 形声 声符は唐(唐)。〔説文新附〕

「王道、蕩々たり」とは広平の義。根こそぎ洗い流

すようにとり除くことを、掃蕩という。

坦蕩(平らか)・放蕩の意に用いる。〔書、洪範〕るあり、〔論語、陽貨〕「今の狂や蕩」のように、るが、〔論語、陽貨〕「今の狂や蕩」のように、魯道蕩たに水名とするが、〔詩、紫風、南山〕に「魯道蕩たに水名とするが、

縢 16 しばる・なわ・ひも・ふくろトウ

螣

神蛇・はくいむしトウ・トク

形声

声符は朕。朕に騰(騰)・滕

匱の中に納めたものであった。 まて書を見る」とあって、重要な書はそのような念きて書を見るし、その兆を検するときにも、「籥を啓ら」としるされており、またその上文に卜占する啓く」としるされており、またその上文に卜占する たかを知りうる事件である。金縢は、籥をか め、籥をかけ縢を施したが、その祝禱が王を呪詛するなり」とあり、紐でくくる意。〔書、金縢〕は、るなり」とあり、紐でくくる意。〔書、金縢〕は、経世のものを人に謄る意。〔説文〕二三上に「緘股は盤中のものを人に いっつう」の類と考えてよい。文中に「金縢の書を て周公の精誠があらわれるという説話を内容とする もので、祝禱が古代においてどのように扱われて るものでないかという疑いを受け、のち天変が生じ 声符は除。除に騰(騰)・滕の声がある。 けた

頭

頭

あたま・かしら・ほとりトウ・ズ(ヅ)

「乗りて炎火に界へん」という句がある。無難という。〔詩、小雅、大田〕に螟螣を呪詛して、紫紫、紫紫、小雅、大田〕に螟螣を呪詛して、雲霧を興してその中に遊ぶという。また秋の虫害を雲霧を興してその中に遊ぶという。また秋の虫害を

湯 うごく・あらう・おおきいトウ(タウ)

なことをいう意がある。〔説文〕一上 声符は湯。湯に水勢のさかん

ゥ

糖[糖][餳]

螣 頭

擣

濤

盪

玉 藻〕に「頭の容は直なり」「頭頸は必ず中にす」である。〔説文〕九上に「首なり」という。〔礼記、である。〔説文〕九上に「首なり」という。〔礼記、形声 声符は豆。豆は食器。直立した頸の太い器 とあって、豆声には直立するもの、太く短いものの 意がある。人頭よりして首領・頭目の意となり、

擣 17 つく・うつ・たたくトウ(タウ)・チュウ(チウ)

> つことをいう。砧で衣を擣つことを擣衣・擣砧とい 椎するなり」とあり、砧で衣を擣つように、手で擣っていた。の声がある。〔説文〕一二上に「手もてい 声符は壽(寿)。壽に濤・籌

濤 なみ・おおなみ・うしトウ(タウ)

を擣虚という。

う。薬を粉にすることを擣薬、敵の虚をねらうこと

in the second

飛ぶ」を、〔大戴礼、勧学〕に「騰蛇」に作る。〔爾飛ぶ」を、〔芍子、勧学〕に「騰蛇、足無くしてり」とあり、〔芍子、勧学〕に「農蛇、足無くしてり」とあり、「荷蛇ない」といい。

雅、釈魚、注〕に「龍の類なり」としている。よく

後に用例のみえる字である。 語がある。その語は「論衡、感類」にもみえ、漢以涌」のようにいう。揚雄の〔反離騒〕に「濤瀬」の「説文新附〕二上に「大波なり」とあり、「淙瀬」の「説文新附」二上に「大波なり」とあり、「淙濱・紫沢 形声 声符は壽(寿)。壽に擣・禱の声がある。

盪 17 あらう・うごく・おす・はやいトウ(タウ)

ともいう。 古代の説話を載せる。討滅を盪滅、蕩尽をまた盪尽 [論語、憲問]に「臩(人名)、舟を盪かす」というい、器中の汚れがすべてなくなることをも盪という。 ことをいう。 中を洗う意。それではげしく器の動くことを蘯とい に「器を滌ふなり」とあり、滌とはものを束ねて器 ものを洗い流すように、すべてなくなる なさまをいう意がある。〔説文〕五上 声符は湯。湯に水勢のさかん

謄17 (謄)17 うつす・うつしとるトゥ

六五一

は古くから行なわれていたのである。 れは謄本的な性格をもつものとみられる。そのこと は契約関係について、同銘数器を作る例があり、そ を設けたことは〔宋史、選挙志〕にみえる。金文に始めてこれを用ふ』とするが、官府に始めて謄録院 う。〔通訓定声〕に「按ずるに謄錄の字は、元代に 度が、早くからとられていたことを示すものであろ ゆる謄本を作って、これを官府に保管するという制 それらは当事者の間で保有する原本のほかに、いわ うに、周府・盟府に納れることが多くみえており、 は、会盟などの載書を、僖五年「盟府に藏す」のよ あって、文書を写して送ることをいう。〔左伝〕に に「珍し書するなり」、〔玉篇〕に「傳ふるなり」とを容れて、これを人に賸る意がある。〔説文〕三上 (騰)・滕の声がある。朕は盤中にもの形声 声符は 朕(朕)。 朕に 騰

蹈 ふむ・うごく

の舞容をいう語であるが、蹈厲には反閉(呪法のあ ぐことを蹈襲、危険を犯すことを蹈火・蹈刃とい 「發揚蹈鷹」という。武王克殷の楽舞とされる大武 をいう語である。また勢よく足ぶみすることを、 楽記〕「手の舞ひ、足の蹈むを知らず」とは、喜び タビセニ _ とり出すように、足しげくふむことをいう。 [礼記:とり出すように、足しげくふむことをいう。 [礼記: 出す形。〔説文〕ニ下に「踐むなり」とあり、 しぶみ)としての意味がある。前人のあとを承け継 の声がある。舀は臼の中のものをとり 声符は留。留に滔・稻(稲) 手で

> 蹈歌が行なわれた。 味をもつことであり、それは地霊の鎮撫を意味した。としても、「ふむ」という行為が、古くは特別の意 れぞれ字源の異なる字である。ただどの字を用いる わが国でも古く禁中で、正月十五・六日に、男女の うところの沓・暑は、呪的な意味をもつ行為で、そ う。踏・蹋とも声義の近い字であるが、踏・蹋の従

權 18 [棹]12 かい・さおさすトウ(タウ)

唱という。 君〕に「桂の櫂「蘭の枻」と歌う。船歌を櫂歌・櫂がなるを、櫂といふ」とみえる。〔楚辞、九歌、湘 形声 声符は翟。棹と声義が同じ。

藤18 (藤)19 ふじ・ふじかずらトウ

「爾雅、郭璞注」に「いま江東、樂 を呼んで藤と爲樹のことが詩文にみえるのは、唐以後に至って多い。樹のことが詩文にみえるのは、唐以後に至って多い。藤市。 旧字は藤に作り、滕声。 「広雅、釈草」に る字である。 同声であるが、縢はつづら、まといめぐらす意のあ す」とあるから、もとは江東の方言であろう。縢と

闘 18 () 翻 20 **뻬** たたかう

形声 左手に盾を執り、右に斤を執って戦う 正字は鬭に作り、斲声。斲は

> に従う字である。〔説文〕三下に「遇ふなり」とは、 戯が起ったとする起原説話が伝えられている。 ことは秦にはじまるとされるが、蜀の闘牛について このでは、「独国のでは、「東書、馬 昭儀伝」える。また獣を闘わせることは「東書、馬 昭儀伝」たられる。また獣を闘わせることで、「荘子、達生」や「戦国策、斉策」にみたことで、「荘子、達生」や「戦国策、 て、競争することをいう。 相接して戦う意であろう。 形。鬥は手格の形で、この両字は声義近く、合せて てから水害がなくなったので、そのことから闘牛の は、江神が牛形となってあらわれ、これを射ち殺 に、闘鴨は「呉志、陸遜伝」にみえている。闘牛の 一字となったが、字の構造法からいえば、斲の声義 闘鶏は古くから行なわれ すべて闘争する意に用

禧 19 いのる (タウ)

滤黑 灣 泥 襲 THE THE

て録する籀文の字形は、眞(真)に従うているが、 眞はもと顚死者を意味する字である。行路の死者は そのことを祈るのを禱という。〔説文〕に重文とし 求むるなり」とあり、告・求・禱と同韻の字を用 初形は、田疇の形に従うており、その田疇の間に形声が一声符はい。一時に従うており、その田疇の間に形声がある。壽の のち壽康を祈る意となって、寿考・長寿の意となり、 て説く。寿にもとみのりを祈求する意があったが、 る意の字である。〔説文〕「上に「事を告げて福を 祝禱の器の形であるIDをおく形で、農穀のことを祈

これを塡めて鎮魂の儀礼を行なった。字形としては、 呪霊の最もさかんにして恐るべきものであるから、 坑、ともにあなぐらである。閨竇とはくぐり戸。正令〕に「竇響を穿つ」とあって、竇は円坑、窖は方

翿 20 かざし・はたぼこトウ(タウ)

門もない貧士の家をいう。

たという。また羽葆ということもあり、柩車に樹てまた。」と歌う。白羽・朱羽を旗に飾るものを、翻き執る」と歌う。白羽・朱羽を旗に飾るものを、翻り 「詩、王風、君子陽々」に「君子陽々たり」左に翻舞ふのはなり」とあり、舞人のかざして舞うもの。 たからである。 て用いた。羽飾には、邪気を祓う呪力があるとされ の声がある。〔説文〕四上に「翳なり、かだ」を符は壽(寿)。壽に濤・禱・禱・禱・禱・

という問答を載せている。特定のことを禱るのでな

つねに神に対しているという、孔子の平生の心

上下の神祇に禱ると。子曰く、丘の禱ること久し」

述而〕に「子の疾、病し。子路、禱らんことを請いる。 日く、これあり。誄(祈りのことば)に曰く、爾をふ。子曰く、これ(その礼)ありやと。子路對へて

すべて神に祈り求めることを禱という。「論語、

形を用いた例がみえず、漢隷にもこの形のものはな この籀文の字は甚だ興味深いものであるが、この字

騰20 (騰)20 あがる。のぼるトウ

下に「劔衣なり」とし、〔広雅、釈器〕に「弓藏な下に「劔衣なり」とし、〔広雅、釈器〕に「弓藏な

あり、また縚む意がある。〔説文〕五

,とする。弓の橐の字には弢があり、

韜19

たちぶくろ・ゆみぶくろトウ(タウ)

形声

声符は皆。皆に滔・蹈の声が

情を示す語であろう。

「傳なり」とは駅伝の意。〔意琳音義〕に引く〔説 字。物価の騰貴することを騰踊という。騰す」のように奔騰の意に用い、その義には滕が本 には疑問がある。〔詩、小雅、十月之交〕「百川沸さまた一義として、去勢した馬の意とするが、その義 文〕に「騰も亦乘なり」とあり、伝乗の意とする。 (謄)の声がある。〔説文〕 一〇上に 形声 声符は朕(朕)。朕に 滕等

嘉 21 はやくち

竇 20

あな・まるいあなトウ

べり立てることをいう。〔慶 羌 鐘〕に「楚京を露ったく言ふなり」とあり、早口にしゃっている。 三言に従う。〔説文〕三上に

> 飲す」とあり、楚京の地を攻略した意である。竊と く、祈り伏せる意であろう。 をいう。ただ早口にしゃべくることをいう字ではな は廟中に祈禱する意であるから、舙はその祈禱の声

黛 22 すぐれる・ほしいまま・あきらか・もしトウ(タウ)

位)の身に在るは、性命に非ざるなり。物の儻ちに語であった。儻蕩は放恣。〔荘子、繕性〕「軒晃(官らる」とみえる。倜儻大節の語は、漢の士人の好む〔任安に報ずるの書〕に「唯倜儻非常の人のみ稱せ の義に用いる。賭けて得たものを儻来のものという來り寄するものなり」とあり、たちまち・あるいは 形声 八上に「倜儻なり」とあり、司馬遷の八上に「倜儻なり」とあり、司馬達の 声符は黨(党)。〔説文新附〕

髪2 「卯」5 むさぼる・とうてつ

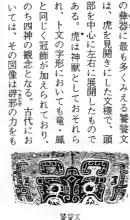
вS اُلِك

〔左伝〕文十八年、四凶放巓の説話のなかに、縉雲を以て誅死す」という。饕は饕餮と連語に用い、を以て誅死す は貪婦と熟して用い、「後漢書、党錮伝」に「貪叨 財を貪る意とする。また重文として叨をあげる。 **匣母の字であるが、匣母にはたとえば合を金文にそ形声であるから、饕も形声とすべきであろう。號は** 意とする説もあるが、字は饕餮と連ねて用い、餮は の例がある。〔説文〕五下に「貪るなり」と訓し、 のままの形で答の字に用い、各を諂声に用いるなど 声符は號(号)。声が一致しないため、会 叨

を櫝とい う。〔説文〕ゼ下に「穴なり」という。〔礼記、月 牘 みな落ちこんだところのあるものをい **犢の声がある。溝を瀆といい、箱** 声符は顫の省略形、賣。賣に

騰(騰) 震 儻 饕(叨)

ものとされ、渾敦は「山海経、西山経」に天山の「神異経」に牛身人面、目は腋下にあって人を食う 氏の不才子にして、貨賄を貪り、 神で六足四翼、目なくして歌舞するもの、窮奇は その説話は、〔書、舜典〕に共工・驩兜・三苗・鯀 合せて、これを四番に追放投棄することがみえる。 古語を音訳した語であろう。楚では虎を於兔という。〔春秋〕のように、楚の国の史記の名であり、楚の 〔神異経〕には、饕餮は西南の地にあるという。饕 恃君〕に、饕餮・窮奇の地は雁門の北にありとし、じく、 産にしておくるという。檮杌も〔神異経〕に、虎の 正直なるものを食い、鼻をかじり、悪人には獣を土 [神異経]に、翼のある獣で、人が争うときはその を四裔に放つというのとよく似た話である。饕餮は として饕餮をあげ、 は、虎を見開きにした文様で、頭 の弊器に最も多くみえる饕餮文 は檮・饕と同じ語で、その頭音であろう。殷周期 江南の語には古く語頭に母音を伴うものがあり、兔 餮と檮杌はその音に似たところがあり、檮杌は魯の 如くにして毛は二尺、人面虎足猪牙、尾の長さ丈八 他の渾敦・窮奇・檮杌の三凶と 凶悪を極めるもの



のち四神の観念となる。

Ŕ 飾からみて牛・羊と考えられるものがある。それら は本来の虎文から、供犠として用いられる牛・羊を て用いられるもののうちには、虎の外にも、その角 古い楚語の音訳語とみてよい。青銅器の饕餮文とし 訓を施しているが、殆ど単用の例のない字であり、 あろう。〔説文〕に饕を「貪るなり」、また餮にも同 つものとされ、儀器の文様として用いられたもので 同じ様式で文様化したものであろう。

謀 25 はたぼこ・おおはたトウ(タウ)

「漢書、 尾を飾った旗。「周礼、郷師」に、柩車を出すときな。 声符は毒。翻と声義同じ。纛は旄牛の尾や雉 行幸のことを大纛という。 方にこの旗を樹てた。秦漢以後、天子の車馬に用い、〔漢書、高帝紀〕に「黃屋左纛」とあり、乗興の左に、この旗で指揮することがみえ、羽葆輝ともいう。

登28 おろか・かたくな

悪態陋」、また〔大略〕に「悍態にして闘ふことをやきき わち神を拝する心情をいう。『荀子、議兵』に「狂わち神を拝する心情をいう。『荀子、議兵』に「狂わち神に対して、真はこれを礼拝する意、すな神が上より降臨する形、貝は供薦のもので、そこに 「説文」一〇下と同じく、「無極山碑」の字は額に作 認 好む」とあり、愚かで一徹なことをいう。〔説文〕 る。顖の字形によって字を解するならば、夂は夅、 い字である。漢碑に二見し、〔孔龢碑〕の字形は『鬱光』 あり、声義の由るところを確かめがた 形声 声符は貢。他にも異体の字が

> があり、〔漢石経〕にもその字を用いる。 とは神にものを供えて祈り、神頼みする愚人の情を 百七十人に及んだという。字形に即していえば、 を作った。のち節を守って刑死し、連累するもの八 直の意を寄せて居室を戇窩と名づけ、〔戆窩の記〕 いう語である。孔門の子貢の貢に、贛を用いること 一〇下に「愚なり」とあり、 明の方孝孺は、その愚 戇

6 あつまる・おなじ・ととのうドウ

Ä 日后

その杯で酒を地にそそぐことを興、物にそそぐことがい行なわれる。それで同にまた杯の意があり、媒介者である聖職者太保との間に、同瑁による献くない。 会意 うして、 なり」として字を会意とする。〔繋伝〕に「化同じ とをひという。これらの字の上部は、両手で同をも 康王即位の大礼をしるすものであるが、同瑁とよばい。 その盤は酒器のようである。〔書、顧命〕はおり、その盤は酒器のようである。〔書、眞命〕は 古い字形はすべて凡(盤)と祝禱の器の日に従うて て辭を同じうするなり」とし、 礼を示す字とみられる。〔説文〕七下に「合會する は盤の形。口はD、祝禱の器の形。会同のときの儀 しかるのち心同じ。しかるのち、 ト文・金文の字形は、凡と口とに従う。 口を言辞の意とする 謀らずし

別の時代を、「礼記、礼運」に「大同の世」と称す「同聲相應じ、同氣相求む」の語がある。一切無差 や、共餐の儀礼などが行なわれた。「易、乾卦」に化する意味の儀礼である。それには酒による修祓とあり、諸侯を大会同する礼で、同とはすべて一体とあり、諸侯を大会同する礼で、同とはすべて一体 であった。〔周礼、大宗伯〕に「殷見を同といふ」同は儀礼において一体化することを原義とするもの う世界である。 る。「大同の行なはるるや、天下を公と爲す」と する。〔論語、子路〕に「君子は和して同ぜず」と ること、その儀礼への参加者が合一することを意味 祓い清めること、祓い清めることによって一体となせ。 は、まま、せき、ままである。すなわち同はに用いられることを示す字形である。すなわち同は いうが、和は軍門において降服の儀礼を行なうこと、 これで酒を灌ぐことを示す形で、同がその儀礼

ほら・とおる・ふかいドウ

察・洞悉という。 入りこんだ洞窟や、 文〕 ニ下に「疾く流るるなり」とする。水の深くい。 中が空虚であるものの意がある。〔説 るところをいう。またすべて奥深いところを洞とい い、その奥深い幽暗のところを明察することを、 水勢のために洞徹、貫通してい

桐 きり・トウ

形声 声符は同。同に簡形のも σ

0 為 <u>*</u>

ドウ

洞

桐

胴

動

堂 猱 形声

た。人を呪詛するときにも桐木人を用い、漢の巫蠱る。桐人は桐材の人形で、送葬のとき俑として用い発」に、竜門七尺の桐で名琴を作ることがみえてい発」に、竜門七尺の桐で名琴を作ることがみえてい 桐梓漆 桐と異なるという。〔詩、鄘風、定之方中〕に「倚に、栄は皮白く、実なく、その材は琴瑟に適し、青榮字条六上に「桐なり」とあって互訓。〔通訓定声〕 の乱のときにも、これを用いたとされている。 ここに琴瑟を伐る」とあり、枚乗の〔七 声符は同。〔説文〕六上に「榮なり」、また

胴 10 からだのどう

中心部にあたるところをも胴という。 腹部は筒形をなしているので胴という。楽器などの 形声 声符は同。同は筒形の酒器。からだの胸・

動 うド ごく

疆

は「毛公鼎」に「死めて童(動)せしむること母なことをいい、動揺・動静のように用いるが、金文に す」の勤動も、労働の意である。それで身を動かす の字義にあたる。〔孟子、滕文公、上〕「終歳勤動 その部分が声。童はすなわち僮、力は耒の形。僮僕 と目に従う形で、目の上に入墨を加えた奴隷、下部動はもと童に従い、童声の字である。童の上部は辛 が耒をもって農耕に従うことを動という。 は東(橐)の形と、それに錘として土を加えた形で、 声符は重。 金文は童を動の義に用いており いまの働

> 作のことをいう字であった。 いる。〔説文〕一三下に「作すなり」という。もと耕れ」とあって、童の字形のままで動揺の意に用いて もと耕

堂 11 たてもの・たかどの・おもてざしドウ(ダウ)

严

堂よりはじめるので堂贈という。 巫が神意を承けて、その指示するところを祓うが、ており、年末に一年間の不祥悪夢の厄払いをする。 えられる。〔周礼、男巫〕に堂贈のことがしるされ 中心をなす施設で、 の制によっていう。明堂は古代の神都である辟雍の り、、「広雅」に「明なり」というのは、古代の明堂のであろう。〔釈 名、釈宮室〕に堂を「高顯の貌ないない。」といるい。 るものではない。殿堂とは殿の一部に堂があるので な台構造のものであったらしく、従って殿を主とす 明堂のように室のない建物であり、また霊台のよう なり」とし、古文・籀文の字形をあげている。堂は 所を設けるところを堂という。〔説文〕一三下に「殿 ある。尚は向に近いところに神を祀り、神気のあら形声 一声符は尚(尙)。尚に棠・鱉(党)の声が われることをいう字で、土は土壇。土壇を築いて祠 大池中の島に築かれていたと考

猱 12 さる・てながざるドウ・ジュウ(ヂウ)

「猱に木に升ることを教ふること母れる。」をなってながざるの一種。〔詩、小声符は柔。 小雅、

るものである。たわけて騒ぐことを猱雑という。 〔伝〕に、「猨の屬なり」という。 芝人が沐猴と称す

章 12 しもべ・わらべドウ

F 多 臺 黄草 黄

情が表されていることが多い。謡には呪歌としてのとして歌われたもので、そこに服役者の一般的な感 公鼎」に「死めて童(動)せしむること母れ」のよ力は耒の象形。それで童をもと動の意に用い、〔毛 〔天智紀〕などにみえる童謡も、中国の史書にみえって、呪能をもつとされておそれられた。わが国の 性格があり、それが歌謡の形式で歌われることによ やのちの史伝に多くみえている童謡は、その労働歌 童の字を用い、その労働歌を童謡といった。〔左伝〕 うに用いる。農奴の身分のものを僮という。古くは 役に服するもので、その農耕に従うことを動という。 山、角のない牛を童牛というのも、その意。童は労 をしない児童をまた童という。草木のない禿山を童 は受刑者であるから、結髪を許されず、それで結髪 というが、もとの字形には重の形を含んでいる。童 を妾といふ」とし、字は字に従うて重の省声である に「男の辠あるものを奴といひ、奴を童といひ、女 分が声符、 辛と目は目上の入墨、東と土とは重の字で、その部 正字は辛と目と東と土とに従う字であるが - すなわち字は重声である。〔説文〕三上

> されている。童僕の字はのち僮に作る。中国の文献にみえる童謡の類は、〔古謡諺〕に集録 る童謡と、同じ性質のものとしてあらわれている。

道12【道】13 みち・みちびく・いうドウ(ダウ)

香香意思

肾

る長秋は、 余を立てる形、路は各に従うが、各は祝禱して神を礼は厳重を極めるものがあった。途は除道のためのる霊に接触するところであるから、除道のための儀 周、首の北門に埋められた。このように、首はそのの門に埋められ、栄如は斉に捕えられて、その首はたが、まず僑如が魯に捕えられて、その首は子駒たが、まず僑如が魯に捕えられて、その首は子駒の代表がは、久しく中原に跳梁して諸国に畏れられる長秋は、久しく中原に跳梁して諸国に畏れられる長がは、久しく中原に跳梁して諸国に畏れられ (左伝) 文十一年の記述によると、山西の狄種であ 呪禁としての敵、歯の首を埋めることが多かった。というできたである。また外部との境界である門にも、よび下す形である。また外部との境界である門にも、 大道をさす。外界に通ずる道は、外族やその邪悪な字には行・首に従う字形があり、行は内外に通ずる 修 祓しながら進み導くこと、それが道の初義であと、すなわち除道の行為をいうものであろう。道をと、すなわち除道の行為をいうものであろう。道を 従うが、金文に辵と首と又とに従う形の字に作り、 意味をもつものであるかに、ふれていない。金文の 字を会意とするが、首がこの字においてどのような おそらく異族の首を携えて、外に通ずる道を進むこ のちの導の字にあたる。首を携えて道を行く意で、 った。〔説文〕ニ下に「行く所の道なり」と訓し、 首と辵とに従う。古文の字形は首と寸とにないます。

> その方法の意となり、道家では合せて道術という。 遠な世界をいう語となった。がも道路の呪詛を意道の儀礼の意より、次第に昇華して、ついに最も深 源にあるところの唯一者を道という。道は古代の除 の意となり、その術を道術・道法といい、存在の根から、人の行為するところを道といい、道徳・道理 を携えて進む形で、外地に赴くときの啓行の儀礼を 雍父、省道して獣に至る」とあり、その道の字は首等と、まだ。明力をもつものとされたのである。〔鰕鼎〕に「帰れ力をもつものとされたのである。〔鰕鼎弘〕に「帰れ 道路・関門を祓う厭勝(まじない)として、 味する字であるが、同じような思惟過程を通じて、 たものが道であり、人の安んじて行くところである つときの儀礼を道祖という。このようにして啓かれ 示す。すなわち道とは啓行の儀礼で、のちにも旅立

働 はたらく・つとめるドウ

する字。重の部分は童、すなわち家僮、召形声 声符は動。動はもと農耕に従うも にも入れられており、労働の字に用いる。 う。働はわが国で作られた字であるが、中国の字書 すなわち家僮、召使いを のを意味

僮 14 めしつかい・わかものドウ

厘 う。その約款を僮約といい、漢代の文例がある。 を示すために僮が作られた。僮は家奴、召使いをい を童という。のち児童の義に用いられて、 なわち入墨を加え、奴隷化されて労役に服するもの 形声 髪しないものをいう。目の上に辛、 声符は童。童は受刑者で、 その初義 す結

として売るものがあり、売買されていたという。 があったといい、[賈誼伝] によると、民に子を僮[漢書、司馬相如伝] に、卓王孫の家に僮客八百人祭託

働 14 なげきなく

喪ぼす」というほどの悲しみであった。「夫の人の髪をする定めであった。孔子にとっては、「天、予ををする定めであった。 進〕「子、これを哭して慟す」とあり、孔子が顔淵と死者との関係によってその礼が異なる。〔論語、紫に哭するなり」という。弔問のとき慟と哭とあり、 孔子はなお慟することをやめなかったという。 ために慟するに非ずして、誰がために慟せん」と、 慟せり」と注意されている。近親のものだけが、 の死を弔って、思わず慟したので、従者から「子、 すること。〔説文新附〕一〇下に「大い 声符は動。声をふるわせて哭 慟

雪

灚

銅14 あかがね

銅は各地に産したが、南方准域には殊に良質のものことがしるされている。当時は一般には金と称した。のり、周初の〔麦鼎〕や〔彔殷〕には、赤金を賜う形声 声符は同。〔説文〕一四上に「赤金なり」と 春秋期に入って、淮域への侵寇は一そう激しくなり、 には、南征して金を俘獲したことをしるしている。 を産するので、早くから注目され、周初の〔員鼎〕 魯頌、 洋水」 「閟宮」や金文の「曾伯黍簠」な

> 「曾伯爨簠」には「金道錫行」の語がある。その地には淮夷が来って「大路南金」を献ずることを歌い、といい、その作戦の成功をしるしている。〔泮水〕 Ŕ るほど、良質のものであった。晋の銅鞮、蜀の銅梁銅といわれるもので、その質は金に類するといわれ 金道錫行が啓かれたことが知られる。のちに丹陽の の良質の銅は南金とよばれ、これを獲得するために 銅をもって名をえたところである。

導 15 「導」6 みちびく・おしえる 76°F 0

ど、 「用て先んぜよ」、〔簸鼎〕「省導して獣に至る」なは、〔中方鼎〕「先んじて南國を省せよ」、〔中鱓〕礼には種々の方法があった。遠く外地に赴くときに に作り、 書多数が出土した。
書多数が出土した。
書多数が出土した。 形声 導は異族の首を携行するのである。〔霰鼎〕の導は、 の地を歩することで践士、省は目の呪力によるものど、先・省・導の方法がとられた。先は先行してそど、先・省・ 終えた道路をいう名詞として道を用いる。除道の儀 啓行を意味する動詞に導を用い、すでに除道啓行を ている。道と導とはもともと一字であったが、除道 語であるから、〔段注〕はただ「引くなり」に改め 「導引なり」というも、導引は道家の養生法をいう 、導が道の初文であった。〔説文〕三下に声符は道(道)。金文には道を首をもつ形

> 15 たわむ・みだす・かがむドウ(ダウ)

の意となり、娩では戯弄の意となる。の意となり、娩では戯弄の意となる。という。ゆえに遠・繞では繞纏(まとう)の意となり、焼きない。というでは、またが、というでは、またが、というでは、またが、これが、 轑 いる形。〔説文〕二上に「擾すなり」とあり、土器 形声 がある。堯は多くの土器を積み重ねて 声符は堯(尭)。堯に鐃の声

瞠 16 みる・みはる ドウ (ダウ)

形声 じ。瞠目ともいう。 り」の〔釈文〕に「直視する貌」とする。眼をみは っておどろきみる意。若は助詞。瞠然というのと同 声符は堂。〔荘子、 田子方」「後に瞠若た

耨16 くさぎる・すきドウ

会意 ことをいう字である。 たと辱とに従う。 未はすき、辱は辰をもつき、

獰 17 わるい・わるづよいドウ(ダウ)

「獰惡」 ず、韓愈の詩に「寧悠」)をはおい字書にみえ男・内も泥母の字である。この字は古い字書にみえん。 患」の語は、元の郝経の〔泰山賦〕にみえるも韓愈の詩に「獰飈」の語があり、強風をいう。紫**

慟銅

導[導]

撓 瞠

ので、古い語ではない。

瞳 17 ひとみ

要 9 「猱」 12 ドカ (ダウ)

いる。 〔書、舜典〕では楽祖とされ、夔が鼓楽すると、百 楽祖として祀られる夔の神像と極めて似ている。夔 神である。 母猴なり [番生設]や[大克鼎]に「遠きを饑らげ、拭きをけます。」という語は、金文ではきを柔らげ、近きを能む」という語は、金文では 獣率い舞うという。その字形は、頭に角飾を著けて は一足の怪獣で、木石の怪ともされるものであるが、 能む」に作る。鱫はすなわち柔にあたる字であるが、 ような神事的舞踊を意味する字であろう。「書、 ・顧命〕〔詩、大雅、生民〕などにみえる「遠・ その角飾のないものが變であるから、變もそ として象形とするが、その手足の状は穀 象形 「説文」五下に「貪獸なり。一に曰く、 神を祀るために舞楽する形。

とないう。「とない。」である。「大学・学は酒器の間に従うており、自酒を献じ、舞楽を奏いた。「遠きを纏らぐ」の鰻は、のち柔の字を仮とをいう。「遠きを纏らぐ」の鰻は、のち柔の字を仮あろう。「遠きを纏らぐ」の鰻は、のち柔の字を仮あろう。「遠きを纏らぐ」の鰻は、のち柔の字を仮あろう。「遠きを纏らぐ」の鰻は、のち柔の字を仮ある。「説文」の「一曰」の説を生じたのであろうが、それは声の仮借で、變が揉の象形であるのではない。要はその系列字からみても、神事的な舞楽を示す字である。

全近 20 じんがね・かまびすしい

> にいう鐸・鐃の類は、殷のうである。ただこの大鐃を 当時どうよんだのかは明ら かでなく、「周礼、大司馬」 かでなく、「周礼、大司馬」



その器制を異にしている。曲であろう。同じく鐃というも、時期によってみな短簫鐃歌は十八曲あり、その詞曲からみて、外来の用いる鐃・鼓は、また〔周礼〕にいうものと異なる。大鐃とは全く異なるものである。漢の短簫鐃髎に

峠り とうげ

トク

心っ かわる・たがう・うたがう

THE STATE OF THE S

がそれぞれみえており、異なる字である。複したものであろうとするが、漢碑には代・忒の字

元 7 はげ・はげる

差 10 かくれる・にげる

(A)

あることを示す字。人に知られないところに匿れて、のところ、若は巫女が祈ってエクスタシーの状態に会意 こと若とに従う。世は人に知られない隠僻

特10 おす・ひとり・ただ・ことに

特・獨(独)・徒はみな副詞として「ただ」とよむ 特・獨(独)・徒はみな副詞として「ただ」とよむ が、「秦風、黄鳥」に「百夫の特なり」の句がある。 い、「秦風、黄鳥」に「百夫の特なり」の句があると い、「秦風、黄鳥」に「百夫の特なり」の句があるを贈 が、三、大変をいう。人に及ぼして傑出したものをいい、「秦風、黄鳥」に「百夫の特なり」の句があると贈 が、三、大変を持といふ」とあり、よ勢しない牛をい でて、成獣をいう。人に及ぼして傑出したものをい が、三、大変なるを特といふ」とあ が、「秦の声が

字である。

得り うる・とる・さとる

学師是 写得

会意 べと貝と又(手)とに従う。他に赴いて貝を取得することをいう。〔説文〕ニ下に「行きて得を取得することをいう。〔説文〕ニ下に「行きて得を取得することをいう。〔説文〕ニ下に「行きて得いただ貝を持つ形に作り、金文もその形のものは、多く贖の初文として用いており、〔師が釈じものは、多く贖の初文として用いており、〔師が釈じものは、多く贖の初文として用いており、〔師が釈じものは、多く贖の初文として用いる。そに従う字形のものは、多く贖の初文として用いる。そに従う字形のものは、多く時の初文として用いる。そに従う字形のものは、多く時の初文として別がある。とれたのであるが、「定伝〕定九年に「凡その間大なり」とみえるが、「定伝〕定九年に「凡それに当る。とれている。とれたのである。というのが、それに当る。と文では「純を尋たり」の尋と、これらの得の字形を表する。

息 12 ただし

恵

会意 直と心とに従う。〔説文〕一〇下に「外には人に得、内には己に得るなり」という。〔段注〕に、徳にしてまた得に仮普するというが、字は徳の異文徳にしてまた得に仮借するというが、字は徳の異文徳にしてまた得に仮借するというが、字は徳の異文形には、心に従わないものがある。徳(徳)はこの字に子を加えたものであるが、子の有無は界・得の形には、心に従わないものがある。徳(徳)はこの字に子を加えたものであるが、子の有無は界・得のでれたものであろう。

を目 3 みる・ただす・いましめる

お声 声符は級。叔に級・怒の声が 「説文」四上に「察するなり」、「方言」に「理む」、 「流雅」に「促す」などの訓があるが、督正を原義とする字であろう。叔は、戚の頭刃の、白く光を発さる形である未に又(手)を加えた形で、王・父・士がみな鉞・斧によってその指揮権を示すのと同じであるから、叔の声義を承けるとすれば、督とは家長としての指揮権を意味する字となるはずである。長としての指揮権を意味する字となるはずである。長としての指揮権を意味する字となるはずである。長としての指揮権を意味する字となるはずである。「史記、越世家」に「家に長子あるを家督といふ」とあるのは、その意であろう。ゆえに督正・監督・達督の意となり、官名として督郵・督軍・督無・督挙・提督・督弁のように用いる。「漢書、 応書に 「督笞を謹まず」という語があり、笞刑を施すことを、ときに、瘡の有無をたしかめてから刑を施すことを、ときに、瘡の有無をたしかめてから刑を施すことを、

徳 14 【徳】15 トクしい・とく・めぐむ督笞という。すなわち督察の意である。

神传学 弘

(表意 イと省と心とに従う。繁文の字形は悪に従会意 イと省と心とに従う。繁文の字形は悪に従い、悪の声。〔説文〕ニ下に「升るなり」とあり、「湯、製計」に「君子、車に德る」、「礼記、曲礼、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を結ぶ」などその例もあるが、上」「車に徳り、旌を起めて近く、省から展開している字で、徳とはその省道によって示された呪的な威力をいう。目は呪力のあるものとされ、それに呪飾をわず、イと省の初形とに従う。省は目の上に呪飾をつけて、省道すなわち除道を行なうことを意味する字で、徳とはその省道によって示された呪的な威力をいう。目は呪力のあるものとされ、それに呪飾をかが「繋ける利自」をしていたことをしるしている。省・徳の字が目の上に加えているものは、その呪飾である。そのような威力が、呪飾による一時的なものでなく、その人に固有の、内在的なものであることが自覚されるに及んで、それは徳となる。金文に敬徳・正徳・元徳・東徳・明徳・懿徳・首徳・文に敬徳・正徳・経徳など、その語彙は甚だ多く、徳のを経っなの声をは、大の音楽は、大の音楽といる。

字形の展開の上にもあらわれているのである。次第に人の内面的な徳として自覚されてくる過程が、次第に人の内面的な徳として自覚されてくる過程が、大盂鼎」に及んではじめて心を加えた字もので、「大盂鼎」に及んではじめて心を加えた字もので乗が著しい。その字形はもと彳と省に従う

医 14 わるい・わざわい

形声 声符は匿。匿は人にかくれて呪詛を加える ような行為をいう。その心は邪悪なものであるから、 [詩、大雅、民労]「愿を作さしむることなかれ」、 [注 大雅、民労]「愿を作さしむることなかれ」、 [左伝] 億二十八年「王の麼を糾逃せよ(遠ざけよ)」、また〔詩、鄘風、柏子」「死に之るまで矢って、整靡し」のように、古い用例が多くみえる。〔左て 選 二十五年「愿未だ作らず」の〔杜注〕に「愿伝〕 荘二十五年「愿未だ作らず」の〔杜注〕に「愿かり、みな妖祥のなすところで、強気などの悪気・悪気をいう語であった。[調訓〕に「方慝」という語があり、みな妖祥のなすところで、強気などの悪気・匹害れて行なわれる呪詛の作用で、過熱・ 蠱言をすべて愿といった。 だば 悪いう字であるが、匿・慝と関係のある字で、おそらく匿れて行なわれる呪詛の作用で、過熱・ 蠱言をすべるものには、警戒を要するわけである。また惺は字の要素は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、の要素は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、ので表は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、ので表は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、ので表は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、ので表は感と同じであるが、声義ともに異なる字で、ので表は感という。

第 16 あつい・くるしむ

一般の 一般の 一般の 一般の 一般の かんかん かんかん かんしゅう しゅうしゅう

18 みぞ・けがす・にごる・みだら

形声 声符は聲。 資声の字に、樹・ 資など、細長い形のものを意味することがある。〔説文〕一上に「溝なり」、また溝字条 一上に「漬なり」とあって互訓。大小にかかわら ず瀆といい、江河准済の四大水を合せて、四瀆とい でででいい。江河推済の四大水を合せて、四瀆とい でででいい。江河推済の四大水を合せて、四瀆とい でででいい。江河推済の四大水を合せて、四瀆とい でででいる。

順 19 トク

トク

瀆

贖 犢 韣 觸 黷 灩

形声 声符は資。 資に漬・積の声が とがある。 「説文」 とおり、また細長い形のものを意味する ことがある。 「説文」 と上に「書版なり」とあり、 本簡をいう。書翰を尺牘というのはその長さによる は、道教では、北海靖王興伝」に「草書尺牘十 首を作らしむ」とみえる。大事は策にしるし、小事 には簡牘を用いた。まとめて綴るので、經牘という。 には簡牘を用いた。まとめて綴るので、經憶という。

形声 声符は置く 資に液・臓の声が 場合 でである。 「説文」 二上に「牛の子なり」 とし、以下に二歳・三歳・四歳の牛名を列している。 字はまた蜀声の字に作ることがあるが、同声である。 管鼻がにまわしの類。司馬相かは卓文式に炉に当 でので酒を客に酌ませ、自らは犢鼻褌を著けて皿を洗ったという。文人放蕩の元祖とされる。

22 ゆみぶくろ

形声 声符は蜀。蜀に觸・獨(独) 「弓衣なり」とあり、銀衣を韜、弓衣を靏という。金文には字を凾に作り、襲の初文。〔説文〕玉下に「弓衣なではない。金文にはまるなり」とあり、金文や〔詩〕にその字を用いている。その方が古語であろう。

四 23 されこうべ

の声がある。〔説文〕四下に「髑髏・形声 声符は蜀。蜀に觸・獨(独)

頂なり」とあり、[玉篇] には「頭なり」に作る。 とは、東南アジア一帯に行なわれていた古俗で、 その首狩り俗は今世紀にもなお多く遺存するところ があった。それは東アジア以外の未開族の間にもひ ろく行なわれていたことであるが、文字の構造を通 じて考えられる古代の漢字文化のうちにも、なおそ じて考えられる古代の漢字文化のうちにも、なおそ じて考えられる古代の漢字文化のうちにも、なおそ でてきないないたことが知られる。いわゆる酸首祭 かるその俗を示す字であり、中国の古代にその俗があ なその俗を示す字であり、中国の古代にその俗があ なその俗を示す字であり、中国の古代にその俗があ

27 トク・ドク

形声 声符は置い 實職という。 なり」とあり、「段注」に、握持すべからざるものなり」とあり、「段注」に、握持すべからざるものを握持するのであるから、汚辱の意となるとするがを握持するのであるから、汚辱の意となるとするががある。 「段注」に、握持すべからざるものを握持するのであるから、汚辱の意となるとするがいい、為すべからずして為すを難禁・驚武のようにいう。またその職掌とて為すを難禁・驚ばのようにいう。

震 29 うらむ

ある。〔説文〕三上に「痛み怨むなり」、形声 声符は寶。寶に濱・颢の意が

钀

(方言) に「誘るなり。痛むなり」とあり、誹謗や活動とする。〔左伝〕宣十二年「君に怨無し」、また昭元年「民に謗難無し」とあり、争訟のことにまた昭元年「民に謗難無し」とあり、争訟のことにおいる当事者、いわゆる両造、その裁判事件での怨痛ける当事者、いわゆる両造、その裁判事件での怨痛を驚という。

ドク

主田 8 てあつい・どく・そこなう・うらむ

象形 場形 婦人が祭事に奉仕するために盛装している姿。その髪飾りなどを多くつけているため、厚化粧の意がある。〔説文〕一下に「厚きなり。人を害するの艸、ある。〔説文〕一下に「厚きなり。人を害するの艸、ある。〔説文〕一下に「厚きなり。人を害するの艸、たってはず」とし、字を「叫に從ひ、毒の聲」とするが、声も合わず、草の象に従うものではない。とするが、声も合わず、草の象に従うものではない。た形で、垂飾をつけた字は繋(繁)、みなその響飾の盛んなる形である。後(数)もまた髪飾りを加えて形で、垂飾をつけた字は繋(繁)、毒とはその繁飾を毒厚とするものである。その繁飾を毒厚とするものである。その繁節を毒の意は、「説がを毒厚とするものである。その繁節を毒々しいとすることから、毒の意となるが、毒草の意は、「説がを毒厚とするものである。その繁節を毒で、毒をその義に用いるのは仮借。〔周礼、医師〕に「毒薬を聚めて、以て醫事に共す」の毒は、薊の仮情であるが、のち毒の字を用いる。すべて濃厚にすぎるものを毒という。

独。【獨】はいとり・ただ

形声 声符は蜀。蜀に縄の声がある。り」とし、「羊を群と爲し、犬を獨と爲す」というが、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣が、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣が、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣が、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣が、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣が、犬もまた群集を性とするものである。獨とは獣の匹偶をえないものをいう。蜀は中の尾と、牡の牡器と相違なる形。その牡器を縊取するを獨といい、懐性として用いるとき、蠲清を加えることがある。また殺してこれを去勢するを歌という。『説文〕三下に「去陰のれを去勢するを歌という。『説文〕三下に「去陰のれを去勢するを歌という。『説文〕三下に「去陰のれを去勢するを歌という。『説文〕三下に「去陰のれを去勢するを歌という。『説文』とあり、「本行・独立、群を離れて行為するを独歩・独往という。「礼記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「礼記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「礼記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「礼記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「九記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「九記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「九記、楽記」に「濁りその志を樂しむ」とあり、「九記、楽記」に「濁りその志を独立という。

読 14 【讀】22 よむ・かたる

> の書」ではなく、「大史、書を籀む」の意とする。 「孟子、万章、下」に「その詩を誦し、その書を讀 む」とあって、誦と読とは、よみかたが異なり、祝 記や命書の類は、これを読んだものであった。誦と は、詩篇の類を賦誦することをいう。〔穀梁伝〕僖 九年に「書を讀みて牲の上に加ふ」とは、祭祀に懐 社を供し、祝詞を読んで牲上におく儀礼の次第をい う。金文には、冊かを たった。〔免設〕に「王、下冊尹に書を受け、免に冊命せしむ」という。命書を読ませるので ある。「大史、書を籀む」とは、そのような祝詞や 冊命の文を読みあげることをいう。

板。 と

トツ

が子の生れるときの形である。羊子には達といい、て、忽ち出づるなり。倒子に從ふ」というが、これ(説文)一四下に「順ならずし象形 子の生れ出る形。

みおとしている形である。と、流となり、音の初文である毓は、婦人が子を生と、流となり、音の初文である毓は、婦人が子を生

□ 5 でる・でこ・なかだか

象形 中央が突出している形。中央がおちこんでいる形の凹に対して、その逆の形で、合せて凹凸といる。〔倉韻篇〕には穴の下にそれぞれ合・失を加えた字を連ねて凹突の字としており、凹凸はその俗えた字を連ねて凹突の字としており、凹凸はその俗の扁額は、遠く望むと凹凸があるようにみえ、世人の扁額は、遠く望むと凹凸があるようにみえ、世人の扁額は、遠く望むと凹凸があるようにみえ、世人の扁額は、遠く望むと凹凸があるようにみえ、世人の扁額は、遠く望むと凹凸があるようにみえ、世人の扁額は、遠く望むという。

合っ どもる・くちごもる

出 8 しかる・おどろく・はなし

トツ 凸 商 咄 突〔突〕訥・トある。〔説文〕ニ上に「相謂ふなり」形声 声符は出。出に絀・黜の声が

屯

舌うちするような調子の擬声語である。 とは怪しむことば、叱咄とは叱るように、咄嗟とはとは怪しむことば、叱咄とは叱るように、咄嗟とはとないう。いずれも、ことの余りに急なことに驚くさまをいう。咄々とよびかける語とし、〔漢書、李陵伝〕に、蘇武がとよびかける語とし、〔漢書、李陵伝〕に、蘇武がとよびかける語とし、〔漢書、李陵伝〕に、蘇武がとよびかける語とし、〔漢書、『825』

突の「突」のけむりだし・つく・にわか

会意 旧字は突に作り、など大とに従う。穴は電穴(かまど)、犬は犬性。犬の形はもと女の形に作り、竈穴を犠牲をもって減うことをいう。〔説文〕と下に「犬、穴中より暫に出づるなり、犬の穴中にあるに從ふ」とするが、穴は犬の居るべきところであるに從ふ」とするが、穴は犬の居るべきところである。ここに犬性を供えて祀ることが、古くは行なわれていたのであろう。突は竈のを起いたところである。ここに犬性を供えて祀ることが、古くは行なわれていたのであろう。突は竈の変起・突元の意となり、突如・突怒のように急突、寒起・突元の意となり、突如・突怒のように急突、寒起・突元の意となり、突如・突怒のように急突、寒起・突元の意となり、突如・突をあるところで、突出するところであるから、突起・突元の意となり、突如・突をある。

計 11 いいなやむ・どもる

である。「論語、子路」に「剛毅木訥は仁に近に敏ならんことを欲す」とあり、訥直・訥弁をいうに敏ならんことを欲す」とあり、訥直・訥弁をいうに敏ならんことを欲す」とあり、訥直・訥弁をいうに敏ならんことを欲す」とあり、いずれも擬声的意と解するが、字はまた咄に作り、いずれも擬声的意と解するが、字はまた咄に作り、いずれも擬声的

トン

14 あつまる・たむろする・なやむ

专业安子生

既夕礼、記」「緇純」の注に、「衣を飾るを純といふ。 概字記、記、というものが多く、それは儀礼用の縁飾などのある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。「儀礼、というものが多く、それは儀礼用の縁飾などがある。また賜与のものに「玄衣備で、だった。「康右(祐)电(純)魯」「屯右(純祐)眉壽」、その他「屯(純)時」「中(純)德」など、すべて純何の意に用いる。また賜与のものに「玄衣備で、ない。というものが多く、それは儀礼用の縁飾などのある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。「儀礼、というものが多く、それは儀礼用の縁飾などのある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 織物のある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 織物のある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 (儀礼、まずまにより) というものが多く、それは儀礼用の縁飾などのある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 織物のある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 織物のある祗膝、(礼装用の前かけ)をいう。 (儀礼、まずままにより、記、近ば、一次を飾るを純といふ。

トン 忳 沌 弴 惇 豚 敦 遁

たもので、字の形義とは関係がない。

作っ おろか・うれえる・みだれる

とあり、是非の分ちがたい状態をいう。る。〔玉篇〕に「悶ゆるなり」、また「亂るるなり」をた「亂るるなり」がある。 本にあつまる、かたまる意があ

流っ あつまる・ふさがる・みだれる

ず、渾沌たる状をいう。 な、沌々たり」は、忳の意であるが、沌は水の流れな、沌々たり」は、忳の意であるが、沌は水の流なるが、沌は水の流なるかを、 一声符は屯。 地にあつまる、かたまるなどの形声 一声符は屯。 地にあつまる、かたまるなどの

写 1 うるしぬりの弓

は黒弓」とあり、金文には形弓形矢・旅(黒)弓旅「荀子、大略」に「天子は彫弓、諸侯は形弓、大夫で向があり、〔毛伝〕に「畫弓なり」とみえる。大雅、行葦」は祖祭を歌うもので、「寶弓既に堅し」大雅、行葦」は祖祭を歌うもので、「寶弓既に堅し」とみえ、漆を塗った一種があり、〔毛伝〕に「畫弓はり」とみえ、漆を塗った「八十年」を開いている。「説文」に

(4) である。(5) である。(6) である。(7) である。(8) である。(9) である。(9) である。(10) である。(11) である。(12) である。(13) である。(14) である。(15) である。

停 11 あつい・まこと・つとめる

豚 11 ぶた・こぶた

南海南

会憲 肉と豕とに従う。〔説文〕九下に「小さき豕なり。彖の省に従ふ。象形」とし、また「又(手)の肉を持ちて、以て祠配に供するに従ふ」というのは、篆文の字形についていうものであるが、卜文の字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。おそら字はもと象形で、腹部に肉形をそえている。たれでは中羊豕の三性を用いた。「紅記、神社、下」にには中羊豕の三性を用いた。「紅記、神社、下」にには中羊豕の三性を用いた。「紅記、神社、下」にには中羊豕の三性を用いた。「説文」九下に「小さき豕を驚なった。

子を謙称して豚児・犬子という。ものであろう。豚・犬は獣の賤しいものであるから

表表表

「不要設」「現大いに毫伐

下王、辜伐してそれ至り、厥の都を對伐す」、 こ下に「怒るなり、謎るなり。一に曰く、誰何するなり」とあり、一曰の義は「孰か」の意である。礼器としては、器蓋同形で、合せるときは球形となり、器としては、器蓋同形で、合せるときは球形となり、器としては、器蓋同形で、合せるときは球形となり、器のする。列国期に行なわれた。敦厚の義は障の仮借。ある。列国期に行なわれた。敦厚の義は障の仮借。ある。列国期に行なわれた。敦厚の義は障の仮借。 なり」とあり、一日の義は「孰か」の意である。礼器で盛食の形声 正字は蘂に従い、蘂声。蘂は礼器で盛食の形声、正字は蘂にだい、蘂声。蘂は礼器で盛食の形声 正字は蘂にだい、蘂声の都を對けない。

の意。礼器のときも、敦震を鋪敷す」とは痛物です。のように用いる。

む」もその意。いま敦厚の字に用いる。の訓は整の仮借。〔詩、邶風、北門〕「王事、の音でよむ。「いかる」

我を敦せ

近 13 のがれる・はしる・うしなう

り、〔広雅、釈詁〕に「避くるなり」「去るなり」をいい、こうが、るなり」、また「一に曰く、逃るるない」では、これで、いるのない。これで、歌いるなり、「というない。」というでは、「いいでは、いいでは、いい

また遯に作り、形声の字である。「生を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁る」は、柴を曳きて偽り遁せいて砂塵をかくす術を遁せ、大理にそむいて罰を受けることをいう。「左伝」僖二十八年とあり、遁走することをいう。「左伝]僖二十八年とあり、遁走することをいう。「左伝]僖二十八年とあり、遁走することをいう。「左伝]僖二十八年とあり、過ぎにない。

逐 15 のがれる・しりぞく

形声 声符は版。〔説文〕ニ下に「逃れ。ただ遯心のように、法をのがれ人を欺く意もあい。ただ遯心のように、法をのがれ人を欺く意もあい。ただ遯心のように、法をのがれ人を欺く意もあい。ただ遯心のように、法をのがれ人を欺く意もある字である。

戦 16 日がでるさま・あさひ

楚語であろう。 いう。〔楚辞〕の他に古い用例がみえず、おそらくいう。〔楚辞〕の他に古い用例がみえず、おそらくしてまさに東方に出でんとす」と、日の上るさまを形声 声符は敦。〔楚辞、九歌、東君〕に「暾と

| 別 6 トン

(酒の燗)、燉茶(茶をつまむ)のように用いる。化の遺物が多く出土している。地名のほかには燉酒みえる。燉煌は西方への要路として知られ、古代文みえる。燉煌は西方への要路として知られ、古代文形声 声符は敦。〔玉篇〕に「火の盛なるぷ」と

F

呑っ のむ・のど

全近 1 にぶい・なまくら・おろかに 2 ドン・トン

13 まんじゅう

「醒睡笑」に仕事べたを罵って鑑飩食いという。のまるく集まることをいう。中国の餛飩の字に用いる。れた蒸し饅頭。わが国では饂飩の字に用いる。形声 声符は屯。**はよりで、中国の鼠跡は中に餡を形声 声符は屯。**はもと房飾りの結びで、もの

嫩 14 「候」12 わかい・よわい・やわらかい

曇 16 くもる

曇として疊結す」とあるのが、本来の声義であろう。 「雲布くなり」とあり、陸雲の〔愁、霖の賦〕に「雲、「雲布くなり」とあり、陸雲の〔愁、霖の賦〕に「雲、できた。」という。日光が雲に

那〔那〕 奈〔柰〕

というものが多い。梵字を悉曇といい、黒雲を形容くという。曇摩は達摩と同じ音訳語。僧の名に曇某くという。曇摩は達摩と同じ音訳語。僧の名に曇某くという。曇摩は仏典にみえるもので、三千年に一たび華さら続が する曇々とともに、タンの音でよむ。

那 (那) うつくしい

「爾雅、釈詁」に「多きなり」 のようによみ、その字はまた阿儺・猗儺に作り、木[爾雅、釈詁]に「多きなり」という。古くは阿那 六下に陝西の地名とするも、字の本義ではなく、 る。冄は 宣二年「甲を棄つるは則ち那ぞ」のようにいう。ま の枝のしなやかで美しいさま、花の美しく咲くさま た那何・奈何のようにもいうが、〔日知録〕に、そ をいう形況の語である。また疑問詞に用い、〔左伝〕 はこれ韓伯休(人名)なる那」のように用いる。 ることもあって、「後漢書、 れらは那を長言したものであるという。語末につけ しなやかで多いものを意味する。〔説文〕 日母。日母の字に燃・熱などの声があた。 旧字は那に作り、持声。 日は 、逸民、韓康伝〕に「公いった かんごう

奈。/ 李 9 きのな・いかんナ・ダイ・ナイ

あるから、 を示声とするが、声が合わない。而・丹系統の音でとれている。「柰 は柰果なり」と木名とし、また字とれ 字形に誤りがあるものとみられる。卜文 「か形 奈な声 正字は柰。〔説文〕 六上に

いは七實、酒泉に生ず」とあって、もと西域の果でいは七實、酒泉に生ず」とあって、もと西域の果でいて、真然に生ず」とあって、もと西域の果でいると、「漢武故事」に「圓邱の紫柰」の名との関係を確かめがたい。木名 に柰、また絜に作る字があって、祭儀の名に用いる 曲、礼、下〕に「奈何ぞ社稷を去るや」「奈何ぞ宗のようである。字はなお疑問副詞に用い、「礼記、て小なるものとする〔本草〕説と、また異なるものて小なるものとする〔本草〕説と、また異なるもの って、その奇味を楽しんだという。江南の林檎に似 ある。〔洛陽伽藍記〕に、白馬寺にその果樹があっ て、実の重さ七斤、宮人に賜うときには親戚にも頒 廟を去るや」のようにいう。

(为) うち・いれる

M M

内せよ」、〔大克鼎〕 「朕が命を出内せよ」のようになる。また王命を出内するとき、〔師望帰〕 「王命を出た。 たいのいのようにいう。 入と内とは通用の字であれる。 また廷礼に侍立するとき、〔師虎殷〕「井伯內りて師 りて中廷に立つ」を「門に内る」に作る例があり、 に入る戸口の象である。金文の冊命廷礼に「門に入 るなり」とするが、金文の字形は屋形に従い、屋中 るなり」とし、「と入の会意とし、「外よりして入 象形 家屋の入口の形に象る。〔説文〕五下に「入

> 系の字とみてよい。 用いる。また納饗の礼を、〔効卣〕「公東宮、饗を内 る」といい、みな納の意に用いる。入・内・納は一

Æ,

国字 | 凩 などは同じ造字法による国字である。| | 「薙ぐ」、すなわち平らかにする意であろう。 省略形と止とを組み合せた形。「和ぐ」の名詞形と の連用形は乙類音であるから、別系の語である。 薙』の字はすべて甲類音、「和ぎ」は上二段で、そ 風が止んで波がおさまることをいう。

捺 おす・おさえるナツ・タツ

物に文様を型染めすることを捺染という。また書法とあり、印を捺すことを押捺、捺印という。また織形声 声符は奈。〔広韻〕に「手もて按ふるなり」 訳語でまた捺落・捺落迦ともしるす。 を加えて磔をなすことを捺という。地獄は奈落。 において、人や大の字をしるすとき、斜め右に筆勢

ナン

南 9 みなみ サン・ダン

海 A A

(権図)。ト辞の第一期、武丁期の貞トを掌るものに まて、 なきと 上に懸けると、南の字形となる。これを撃つ形は敵 六下に「艸木、南方に至 銅鼓の形をした楽器であることが知られる。〔説文〕 融という貞人があり、その字形からも、南がのちの 用いた楽器で、懸繋してその上面を鼓つ。器は底が 左右の頸部に鐶耳があり、そこに紐を通して 南とよばれる楽器の象形。南は古く苗族が

りて枝任あるなり」とい

の器を Nan-yen という。すなわち南任の音を存す 南はいまいう銅鼓にあたるもので、苗族はいまもそ 南が鐘の類の楽器であることを示すものであろう。 える。楚鐘に「南蘇鐘」と銘するものがあるのも、 「韓詩醉君章句」にも「南夷の樂を南といふ」とみ 小雅、鼓鍾〕に「雅を以てし南を以てす」とあり、 とあり、「鄭注」に「南夷の樂なり」とする。「詩、 え、〔礼記、文王世子〕に「胥(官名)南を鼓す」く符合しない。南は楽器としてその名が経籍にもみく符合しない。南は楽器としてその名が経籍にもみ なやかに伸びる意であるとするが、字形において全 い、南方の草木の枝がし 船

> うに羌人と併称されることがあり、西方の羌人とと 南人ともよばれていた。卜辞に「三南・三羌」のよ 南の姜姓諸族と接触す 羌人のように多数ではないが、祖祭に犠牲として用 を祖辛に(侑せんか)」のようにトする例があって、 もに、南方の苗族もまた異族犠牲とされることがあ いられることがあった。 った。「礼子(祖神の名)に八南を侑せんか。九南 のは苗族固有の楽器であり、そのゆえに苗族はまた はじめて作ったものとされているが、その器制のも った。銅鼓は漢の伏波将軍馬援が南方を征したとき、 任を任柔(しなやか)などの義に附会したものであ 南任がもと銅鼓をいう古語であることを解しないで 代の書に「南は任なり」と注するものが多いのも、 南人苗族の故地は、河南西

には羌と南人たる苗族 前(また呂ともいう) したものである。そこ の神話的伝承を経典化 る地にあり、「書、呂

銅鼓の文様

にあり、 埋蔵されていることが多く、祭祀儀礼が行なわれる それより洞庭にわたって出土するものが、最も古式 との闘争のあとが、神話的な形態をもって表現され ときには、掘り出して用いたものであろう。 のものであろうと考えられる。銅鼓は鄭重に土中に あったものと思われる。銅鼓の北限は湖北の地で、 ている。当時の苗族は、江漢の域に近い湖北の方面 いまいう屈家嶺文化の農耕文化と、関係が 鼓面に

> 語にすでに神聖感が含まれている。〔論語、子路〕 漢広」「南に喬木あり 息ふべからず 漢に游女あ 定着したものと考えられる。そののちにおいても、 徴的な文化は、そのまま南方・南人を示す字として 大体において苗人の銅鼓と対坑する線をなしてい られる。殷人の大鐃が配置されている江南の遺址はろう。わが国の銅鐸と極めて似た性質のものと考えろう。 どを飾ることが多い。これを土中から掘り出して祀は粲々たる陽光を放射状にえがき、縁辺に蛙や鳥なま 地のことであろうが、なおその語感をもつものとし 雅、南有嘉魚〕は祖霊を祀る歌であるが、南というり、求むべからず」は、漢水の女神祭祀の歌、〔小 べき語感を含むものであったらしく、「詩、周南、 南は他の方位語と異なって、とくに異郷感ともいう ようである。南は暖と声が近く、この南人を示す象 て用いられている。 に、孔子が「南人、言へることあり」というのは楚 るのは、おそらく春耕開始の儀礼を行なうものであ た

軟11 [輕]16 やわらかい・しなやか・よわナン・ゼン

える。白居易の〔東南行〕に「輭美仇家の酒」の句 る。〔説文〕人部八上に「偄は弱なり」「儒は柔なして切り、結いあげない人の形で巫祝などを意味す音があり、またその字に軟を用いる。薬は髪を発に があって、 り」のように、耎には柔弱の意がある。 の意があり、〔史記、貨殖伝〕に ソ、またその字に軟を用いる。栗は髪を髡に正字は輭に作り栗声。慣用によってナンの あたりが柔かく味のよいことをいう。 「妻子輭弱」とみ 輭にも柔弱

方こつハては「任は南蠻の樂なり」とする。また漢らない。〔礼記、明堂位〕に四方の楽名をあげ、南のない。〔礼記、明堂に〕に四方の楽名をあげ、南 を解するのも、南任の語を分けて用いたものに外な るものであり、〔説文〕が「南方枝任」をもって南

軟をいう字となったものであろう。

東欧教の字には軟を通行し、軟派・軟体・軟禁のよりに用いる。「類聚和名 沙」に軟・輭のほか観などところであり、人の秘所にふれる意の字である。軟はいう。 反とはその秘所にふれる意の字である。軟はいう。 反とはその秘所にふれる意の字である。軟はいう。 反とはなく、欠はおそらく反より転じた形であろところはなく、欠はおそらく反より転じた形であろところはなく、欠はおそらく反より転じた形であるところはなく、欠はおそらく反より転じた形である。 実が車に従うのは、車を制作するときの木の硬勢をいう字であったものであろう。

12 くどくどしい

楠13 「枏」8 くすのき

難 18 【難】19 かたし ジン・ダ

> 〔中山王鼎〕や〔信陽竹簡〕にもその字がみえるが、「靈命老い難からんことを」とあり、また近出のまた。 だ菓の字形には、別に焚巫(雨請いのため巫を焚 文の字形では鏑矢の形と火とに従うて、 会意 を飲む 「靈命老い難からんことを」 難むの意となるのであろう。そして行き難む意から、ほおいて関係があるかも知れない。それで難かる、において関係があるかも知れない。それで難かる、 佩玉の形と両系があって混同しやすいが、難が火矢 というも声が合わない。黃の字形にも、火矢の形と えている形にみえる。〔斉大宰盤〕や〔叔夷鐘〕にの字形は、鏑矢を示す黄(黄)の形の下に、火をその字形は、鏑矢を示す黄(黄)の形の下に、火をそ のある字は、その焚巫の象に従う字とみてよい。難 く)の象を示すとみられるものがあり、饑饉に関係 て行なわれるものであろう。儺の儀礼と、字の声義 とするほかなく、それはあるいは呪的な目的をもっ と隹に従う字とすれば、火矢をもって鳥を驚かす意 とするが、字を鳥の名に用いた例がなく、また堇声 に作る。〔説文〕四上に「鳥なり」とし、堇声の字 みな黃の字形、もしくはその下に火を加えている形 のと推測される。「詩、魯頌、 旧字は難に作り、薬と隹とに従う。薬は金 火矢をもって佳をとる法かと思われる。 永く老い難きことを錫ふ」とみえる。 突、泮水〕に「旣に嗜酒。 のような用法となるも 火矢の形と

ت

一 2 ふたつ・ふたたび

尼山の巫女であったと考えられる。 である。顔氏と野合したとされる顔氏は、おそらく である。顔氏と野合したとされる顔氏は、おそらく たので、その尼と山とを丘と仲尼とに分ったものと たので、その尼と山とを丘と仲尼とに分ったものと

弐 6 【貳】12 そえる・たがう・ふたつ

京等對於

形声 旧字は貳に作り、式声。〔説文〕六下に「副益なり」とあり、正嫡に対して副弐(そえる)のものをいう。文書の副本は〔周礼、大司寇〕「大史・の史・司會及び六官、みなその貳を受けてこれを藏外史・司會及び六官、みなその貳を受けてこれを藏外史とあり、器物にも〔酒正〕「大祭には三貳、中祭には再貳、小祭には壹貳」を備える。数字としての弐・参(参)は比例数の表示に用い、〔現生設〕にそのような用法がある。副弐の意よりして疑弐・にそのような用法がある。副弐の意よりして疑弐・にそのような用法がある。副弐の意よりして疑弐・にそのような用法がある。副弐の意という。〔現生設〕にみえる字形は、二を弋の下に加えており、ま声の美にはみえる字形は、二を弋の下に加えており、ま声の書とはみえる字形は、二を弋の下に加えており、字の載が上れている。

乞、4 におう

ある。〔類聚名義抄〕にまた嬋媛や鬱・馥・芳など節、などの用字があり、丹を語幹とする語のようでは、などの用字があり、丹を語幹とする語のようでは、などの相字があり、丹を語幹とする語のようでは、などの本である句の転じた形。〔類聚名義国字 韵の秀である句の転じた形。〔類聚名義

字である。 をれは風韻の義を承けるものであろう。韻は韵の本それは風韻の義を承けるものであろう。また匂が韵の字から出たとすれば、同訓の字がみえる。もと色の美しさから香に転じた

ニク

肉を「肉」を「宍」でにないはだ

● 図下に「蔵肉なり」とあり、大きな切り肉をいう。[釈 名、釈形体]に「肉は柔なり」とあり、柔とその声義が近かったのであろう。俗に宍あり、柔とその声義が近かったのである。肩はだを脱意に用いる。竹と宍と韻を合せている。肩はだを脱節り 竹を續ぎ 土を飛ばし 宍を逐ふ」と、獣の断り 竹を續ぎ 土を飛ばし 宍を逐ふ」と、獣の断り 竹を續ぎ 土を飛ばし 宍を逐ふ」と、獣の断ので皮膚をあらわすことを肉祖といい、降服するとと。肉刑とは身体刑をいう。[左伝] 荘十年に「肉と。肉刑とは身体刑をいう。[左伝] 荘十年に「肉食する者は鄙し。未だ遠く謀ること能はず」とあり、食する者は鄙し。未だ遠く謀ること能はず」とあり、食する者は鄙し。未だ遠く謀ること能はず」とあり、食する者は鄙し。未だ遠く謀ること能はず」とあり、

ニチ

日 4 ユチ・ジッ

肉〔肉〕〔宍〕 ニチ 日 ニュウ

入

汽(頂)

匂

ニク

二十二二十五

指事 横線二をもって、数の二を示す。算木を横に二本並べた形である。ト文・金文の字形は、上下に二本、同じ長さのものを重ねる。〔説文〕二三下に二本、同じ長さのものを重ねる。〔説文〕二三下に二本、同じ長さのものを重ねる。〔説文〕二三下に二本、同じ長さのものを重ねる。〔説文〕二三下に二本、同じ長さのものを重ねる。〔説文〕二三下に二本、同じ長さのものを重ねる。「光気、繋辞伝、上〕「天は一、地は二なり、また「元气初めて分れ、軽にして地と爲る」とあるにより、自然の形成される過程を、数理によって説く〔易〕の思想に基づくものであるが、字はもとより計数の法を示すものにすぎない。数の二より、序数として第二、また再度、ものであるが、字はもとより計数の法を示すものに、立て紹介といる。「現せ設」に貳(式)の初形と思われる字があり、比例や分数の意に用いているようである字があり、比例や分数の意に用いているようである字があり、比例や分数の意に用いているようである字があり、比例や分数の意に用いているようである字があり、比例や分数の意に用いているようである字があり、比例を分数の意に用いているようである。のち数字の改竄を避けるために、文書に式を用る字があり、比例や分数の意に用いているようである。

尾 5 ちかづく・やすんずる・やわらぐ・あま

会意 人が二人前後にもたれあう形。 (説文)ハ上に「後よりこれに近づく」 意とし、字をピ声とするが、二人相接する形で、親な での状を示す。安んず、和らぐの意はそこから生れ る。そのような造字法をとるものに色・神・抑な どがあり、もと男女のことを示す字である。のち尼 どがあり、もと男女のことを示す字である。のち尼 どがあり、もと男女のことを示す字である。のち尼 どがあり、もと男女のことを示す字である。のち尼 と情尼の字に用いるが、最も不適当な使いかたをしたものである。尼に従う字は、みなその声義を承け たものである。孔子は名は丘、字は仲尼。名字の

話によって説くもの、あるいは黒点とする説なども 〔淮南子、精神訓〕 「日中に踆鳥あり」とする古い神 は虧けず」とは、「月は闕なり」と盈虚(みちかけ)同じ。〔説文〕七上に「實てるものなり。太陽の精同じ。〔説文〕七上に「實 ことを示す。ト文の月が月中に縦画一を加えるのと 象形 ものにすぎない。 あるが、ただ空圏と区別するために、小点を加えた **なだで の中国音では全く一致を欠いている。日中の点を、 説くもので、漢代に行なわれていた音義説である。 ていない。 ものとするが、〔魏石経〕の古文にはその形を用 日実・月闕は、当時において同音であったが、 するのに対する解であるが、何れも畳韻の語を以て 太陽の形。中に小点を加えて、実体のある 古文の形は乙に従い、鳥形を示す いま

ニュウ

入 2 いる・とおる・おくる

() 人 人 人

には邑への出入を卜し、また亀版を納入するときに(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。〔説文〕五下に「内るるなり。上より(内)となる。

とを入御・出御という。 はいます。 宮中に入ることを入内、天子が奥殿に出入されることをよれる。 をまた入木という。わが国では、皇后が女御としてをまた入木という。わが国では、皇后が女御として 「雀(国名)、五百を入る」のように、亀の腹背を連 筆力を示す逸話として伝えられ、それで書道のこと 痕が深く書版に入ることを入木といい、王羲之の は通用する字で、その形も繁簡の差とみてよい。墨 ねる部分である甲橋の裏に刻辞している。入と内と

乳。(乳)。 ちち・やしなうニュウ・ジュ

乞に従う形とし、その乞を玄鳥と解して、玄鳥説話 の日、高禖に祀る。以て子を請ふ。故に乳は乞に從ふ。乞なるものは玄鳥なり。明堂月令に、玄鳥至るふ。乞なるものは玄鳥なり。明堂月令に、玄鳥至る 生子を乳といふ。獸には產といふ。孚に從ひ乞に從れてくるのではない。〔説文〕二上に「人及び鳥の 抱く形で授乳の意。鳥に乳というのも事実に合わず、 るらしく、上から加えられている手は、その生子を に従う。孔は生子の後頭部の縫合部分を示す字であ に従う形でなく、玄鳥説話とは関係がない。字は孔 をもって字を解しようとするものであるが、字は乞 分の官なり」という、長い説解を加えている。乳を に來り、秋分に去る。生を開くの候鳥、帝少昊の司 ふ。請子に必ず乞至るの日を以てするは、乞は春分 いる字があるが、その形から乳の字形が直接に導か えている形である。卜文には授乳を象形的に示して 手と孔とに従う。孔は乳子、それに手を加

> 爾などはみなその儀礼に関する字である。過儀礼としての文身を加えることがあり、 過儀礼としての文身を加えることがあり、爽・爽・乳子の姿をそえたものではない。婦人の両乳に、涌乳子の姿をそれたものではない。婦人の両乳に、涌れている。 〔説文〕は母字条二下に「牧ふなり。女の、子を宴 る 盗跖の怒るさまを「聲は乳虎の如し」と形容してい もちの虎で、最も恐るべきもの。〔荘子、盗跖〕に するが、その字は婦人の両乳を示す形ではあるが、 く形に象る。一に曰く、子に乳するに象るなり」と また字を学に従うとするも、学は学の初文である。 乳虎は子 通

ニョウ

7 いばり (ネウ)

ったからで、いわゆる糞田のことは、殷代にすでに字がみえるのは、これを施糞として用いることがあ「殿上に小遺す」とみえる。卜文に尿や屎のような「 単に小ということもあって、「漢書、東方朔伝」に なり」という。また溲というのも同系の語であろう。〔左伝〕定三年「旋す」の〔杜預注〕に「旋は小便 音でよみ、溺と別字とする説もある。古く尿を旋と 前にあるものは尿、後にあるものは屎。尿をスイの 象形 いう例が多くて、尿の転音であるとも考えられる。 なり」とあり、卜文の字形はまさにその形を示す。 人の小便する形。〔説文〕ハ下に「人の小便

行なわれているのである。

ニン

任 Æ 杠。 あたる・になう・たえる・つとめニン・ジン Ι 盲

えることをいう。〔礼記、王制〕に「輕き任は丼せ、ふること能はず」とは、任載の意で、その重量に任保つなり」とするが、〔国語、魯語〕に「重きに任保のなり」とするが、〔国語、魯語〕に「重きに任保のを載せて工作する器である。〔説文〕ハ上にものを載せて工作する器である。〔説文〕ハ上にものを載せて工作する器である。 のである。 して道遠し」とあり、君子とは自ら道を任とするも らに課するものである。〔論語、泰伯〕に「任重く 頼まれたら引かぬのを任達というが、任とは本来自 命の意となる。頼まれずとも買って出るのを任俠、 任というのは転義。他に任せることより、委任・任 責任・任務という。車の下でその輿をささえる木を ぐこと、任は載せること。その負担に任えることを 生民〕に「これを任ひこれを負ふ」とあり、負は担ぎる。とはは分つ」とはその荷物をいう。〔詩、大雅、重き任は分つ」とはその荷物をいう。〔詩、大雅、 形声 の縦が中肥の形で、強くささえることを示す。 声符は壬。壬は工具。工形のもので、 中央 上に

妊 姐 はらむ

担

一般を変数な

妊衰の膵盤を作る」とあって、もと妊を用いていたまで、対しるしているが、金文の〔薛侯盤〕に「薛侯、叔とるしているが、金文の〔薛侯盤〕に「薛侯、叔としての妊を〔左伝〕に任姓として任と通用し、姓としての妊を〔左伝〕に任姓として たことが知られる。 解する。〔説文〕は壬部一四下に壬を「人の蹇妊の[説文〕二下に「孕むなり。女壬に從ふ」と会意に 形に象る」とするが、壬はその象形ではありえない。 声符は玉。玉に中央がふくらむ意がある。

忍 【刃心】 7 しのぶ・たえる・ゆるす

0 \$

〔国語、楚語〕に「彊忍にして義を犯す」というの 作り「柔なり」と訓するが、柔にしてよく堅なるも るなり」とあり、忍耐の意。その声義は靭と関係が のをいう。それを人に移して堅忍の意とする。堅忍 は、その意である。 して、人の性情に反することを敢てする意ともなり、 声符は刃(刃)。〔説文〕一〇下に「能くす

認 4 【認】4 みとめる・みつける・ゆるすニン

ところ、 [呉志、鍾雕牧伝]に、牧が荒田二十余畝を墾いた「頼むなり」、[広雅]に「難むなり」と訓する字。「頼むなり」と訓する字。ない。 「東をいるでは、「難なり」と訓する字。ない。 「東のでは、「ないでは、「ない これでは、「ないでは、「ないでは、」といる意がある。字はもと訒に作り、「説文」三上に その稲の熟するに及んで、「縣民にこれを 形声 に、性情に反することにたえ 声符は忍(忍)。忍

忍(忍) 認(認)

佞

寍

難題をもちこむことである。〔後漢書、ようと言うに 語として用いられる。 出を認といった。のちその主張を承認する意に転じ 認むるものあり」とあり、当時そのような苦情の申 は、馬について、かつての所有者として「その馬を も同じような語がみえ、また〔後漢書、卓茂伝〕に はその所有権について苦情を申し入れる意であり、 その田を与えた話がある。これらによると、認識と きに及んで、「これを認むるものあり」、悉くこれに て、認許・認可の意となった。認識はいまは哲学用 与えた。また〔晋書、郭翻伝〕にも、翻が荒田を墾認識するものあり」、牧は直ちにこれをその県民に いて表題を立てたが、数年後に稲を植えて熟すると

佞7 へつらう・よこしま

す字のようである。〔論語、雍也〕「仁にして佞ならろに符号的に加えられている。女子のある状態を示 [繋伝] には仁声とするが、声が合わない。また信いない。 「巧に調ふ高材なり。女と信の省に從ふ」とする。 で々^ (ふ) ず」は、 るところは知りがたいが、その点は女の肩先のとこ えば、安が佞の初文であろう。女上の二点の意味す の省に従うとするも、金文に安字があることからい 仁に似て非なるもの、〔論語、先進〕 形声 り、人名に用いる。〔説文〕一二下に 声符は安。金文に安の字があ

> 十三年「寡人不佞」のように、王侯の謙遜の語に用えている。佞は本来は才能をいう語で、〔左伝〕成えている。佞は本来は才能をいう語で、〔左伝〕成 膏肓に入るものなり」と、当時の宋版癖に一針を与かっかっ こう では則ち殺風景に近し。これ則ち佞宋の癖、るも、實は則ち殺風景に近し。これ則ち佞宋の癖、 に「愛妾美婢を以て書に換ふるは、事は風雅に似た 金・明の諸史に、それぞれ〔佞幸伝〕が立てられてれる。。然の諸史に、それぞれ〔佞幸伝〕が立てられて、得るものを佞幸といい、〔史記〕〔漢書〕、また宋・ に近づこうとするものをいう。口才をもって竈幸を また〔郷党〕「佞人を遠ざく」とは、巧慧にして人 「この故にかの佞者を惡む」とは、好弁の人をさす。 あり、のち姦佞の幸臣の意に用いる。 いる。佞媚の意に用いるのは〔論語〕以後のことで いる。ものに執することをも佞という。〔書林清話〕

寍 12 やすらか

燩

空空窟里

会意 文では寧安の字に「毛公鼎〕は寍、〔盂爵〕は寧を り」とし、寧安の義には本条の寍をあてている。金 を録し、寧五上「願ふ詞なり」、甯三下「願ふ所なること甚だしい。〔説文〕には他にもこの系統の字 七下に「安なり」とし、「心、皿上に在り。(皿は) 臓をのせて祭り、寧静を求める儀礼をいう。[説文] によって人の心を安んずる意とするが、字義を失す 人の飲食の器なり。人を安んずる所以なり」と飲食 ☆と心と皿とに従う。☆は廟所。皿上に心

別しているのは、全く理由のないことである。別しているのは、全く理由のないことである。「説文」が盗・寧・甯のように文字を分であろう。「説文」が盗・寧・富っことより「願はくは」を示す字であり、寧安を願うことより「願はくは」を示す字であり、寧安を願うことより「願はくは」からない。

寧は「寧」はやすらか

高高高高高

寧 7 ぬかるみ・どろ

は、大大大島

ネツ

捏 10 ネツ・デッ

を誕告するを捏控・捏陥という。 作るために轆轤をまわし、土をひねることを意味する字と思われる。土をこねて形を作るように、無より有を生ずるを提送・見がありません。 までいることを意味するを捏造・見が字の初形であろう。土器を

本が、15 あつい・のぼせる・ねつ

The same of the sa

情熱す」とあり、杜甫の詩にも「中腸を熱す」の句 書、周祝解〕に「天地の閒に凔熱あり」とは、寒暖 ずるような緊張した状態をいう。陶淵明の〔形影神「心熱して恐懼するなり」とあって、体中に熱を感 桑柔」「誰か能く熱を執りて(ここを以て濯はざきとう」となったとなった。それよりして〔詩、大雅、の推移のあることをいう。それよりして〔詩、大雅、 でしく、熱とは自然の温暖なる気候をいう。[逸 周みるべきであろう。植木の繁茂には温熱のときがよみるべきであろう。 熱烈のように用いる。 がある。断腸というのに近い語である。また熱心・ の詩」に「身沒して名もまた盡く 上〕「君に得ざれば、則ち熱中す」の中は心、注に る」のように、温熱の意に用いる。〔孟子、 り」と訓し、埶声の字とするが声が合わず、会意と 種芸のことを示す字。〔説文〕「○上に熱を「溫な 文〕三下に「種うるなり」とあって、 | 数と火とに従う。| 数は「説 ここを以て濯はざ これを念へば五 万烷

丸 18 やく

亀を灼くことを爇といった。軍礼において、降服者 を敷す慣例があって、これを熱視という。機とは 棺をいう。それらのことからいえば、熱は草を焼く をいう一般的な語ではなく、特定の儀礼のときに用 という一般的な語ではなく、特定の儀礼のときに用 という一般的な語ではなく、特定の儀礼のときに用 という一般的な語ではなく、特定の儀礼のときに用

オン

年 6 みのる・とし

等等等

形である。〔詩、周 頌、載英〕は、神田における耕化を被って人が舞う形で、近年のための農耕儀礼を被って人が舞う形で、近年のための農耕儀礼を被って人が舞う形で、近年のための農耕儀礼を被って人が舞う形で、近年の大めの裏を写した字でと奏とは、穀霊に扮して舞う男女の姿を写した字でと奏とは、穀霊に扮して舞う男女の姿を写した字でと奏とは、穀霊に扮して舞う男女の姿を写した字でと表とは、穀霊に扮して舞う男女の姿を写した字でと表とは、穀霊に扮して舞う男女の姿を写した字では稔の意。また字を千声とするが、ト文・金文の字は稔の意。また字を千声とするが、ト文・金文の字は稔の意。また字を千声とするが、ト文・金文の字には、下部をただ人の側身形に作り、千中の字形ではない。春秋期に至って、はじめて人の下部に肥点を加えているのは、そのころ千を声符とする意識を生加えているのは、そのころ千を声符とするのとない。

に閏をおいたからである。歳はおそらく歳星の知識 の盈虚によって数えるので、三百五十五日前後とな の意に用い、「年を受けられんか」「黍年を受けられ 周はその収穫をもって年を数えた。ト辞にも年を稔を、祭祀体系の一巡する期間に合せて祀と称したが、 を示す、注目すべき文字資料である。殷はその一年 歳」のように用いる。夏は歳、殷は祀、周は年とい り、それでト辞には十三月ということが多い。年末 なうという習俗が、中国の古代にも存していたこと うとされるが、歳は最も後起の名である。 によって年歳の意となったもので、斉器に「立事の んか」のようにトすることが多い。一年の長さは月 と委とは、穀霊に扮した男女が、性的模擬儀礼を行 南アジアにひろくみることのできる習俗である。年 時にその地で男女の模擬的儀礼を行なうことは、東 り」と歌う。大地の生産力を刺激するために、農耕 の中に、卒然として「その婦に思媚す 依たる士あ藉の儀礼を歌うものであるが、その農耕を歌う詩句

◆ 8 おもう・こころ・となえる

金文の〔大克鼎〕に「厥の聖保祖、師華父を巠、形である。〔武文〕一〇下に「常に思ふなり」とする。然になる。資格は大阪の一〇下に「常に思ふなり」とする。のでは、一〇下に「常に思ふなり」とする。今は栓のある蓋の形で、飲の初形声

(経)念す」、〔毛公鼎〕「玉畏の暢かならざるを敬念せよ」の「至念」「敬念」が、字の原義である。〔詩大雅、文王〕に「爾の祖を念ふこと無からんや」もその意。またいつまでも思いつづけることをいい、「論語、公冶長〕に「硝夷・叔齊は舊惡を念はず」とみえる。廿の音に借用して二十の意に用いることとから。時期でよって、音に変化があり、顧炎武の〔金石文字記〕に「元祐辛太陽月があり、顧炎武の〔金石文字記〕に「元祐辛太陽月があり、顧炎武の〔金石文字記〕に「元祐辛太陽月があり、顧炎武の〔金石文字記〕に「元祐辛太陽月があり、顧炎武の〔金石文字記〕に「元祐辛太陽月があり、時期でよって、音に変化があったものかと思われる。念に従う念には、アン・オンなど十個の音切がある。

指 8 ひねる・つまむ・もつ

形声 声符はば、占に松・店の声が こ上に「知るなり」とあり、抓字条二上にも「出るなり」とあって互訓。指さきで少しつまむことで、 るなり」とあって互訓。指さきで少しつまむことで、 をもつことを拈筆という。「拈華微笑」は、禅家の をもつことを拈筆という。「拈華微笑」は、禅家の をもつことを拈筆という。「拈華微笑」は、禅家の

捻11 ひねる・つまむ・もつ

販乱があった。村人たちが神を祭る賽会のときに、 ひねることをいう。清の豪慶のとき、淮北に捻匪の に「指もて捻るなり」とあり、指先で 形声 声符は念。〔説文新附〕□□上

旧字は惱に作り、

淄声。 圏は

その参会者たちが起したので捻匪という。 油紙を捻って紙燭とし、竜戯とする俗があったが、 すとき、鼻をつまむのを捻鼻という。 不快を示

私 17 はる・ねばる

を粘葉本という。粘と黏とは同じ字であるが、そ箋を粘準という。大和綴じのことを粘葉、その本いでは、大和綴じのことを粘薬、冊子の附のでは、大和綴じのことを粘液、冊子の附近がある部分をはりつけることをいう。〔説文〕七上に れぞれの慣用音で用いられる。 形声 ある。正字は黏。米や黍のねばりで、 声符は古。占に拈・店の声が

稔 13 みのる・と-

古音が同じであったのであろう。ただ年は稲霊を被 「年を受けられんか」「年を受けられざるか」のよ 五稔なるべからず」という語がある。 年穀の意には稔を用いた。〔左伝〕僖二年に「以て うにトする例がある。もと人声とされる字で、稔と 年穀の熟するをいう。 ネンである。〔説文〕に「穀孰するなり」とあって、 って舞う人の形で、農耕儀礼を示す字である。のち は而甚の切でジンであるが、慣用音は 声符は念。〔説文〕七上の反切 年もその意に用いて、ト辞に

撚 とる・ひねる・よる・もむネン

「執るなり」とあり、〔段注〕に、執と 声符は然。〔説文〕一二上に

> は捻鼻といい、鬚をひねるときには撚鬚という。撚い。捻と声義の同じ字であるが、鼻をつまむときにい。捻 にはひねりよじる意がある。 は罪人を捕える意であるとするが、その用義例はな

燃 もネ える

惱」の語があり、煩悩・悩害など、仏教語として用的な語のようである。梁の簡文帝の文に「六根の痛の人、恨む所あるを大썗と言ふ」としており、方言の人、恨む所あるを大썗と言ふ」としており、方言

||三下に作り、「恨む所あるなり」、また「いま汝南 ||艦(脳)の初文。〔説文〕に正字を燈

後にみえる字である。 たことを載せている。古くは然を用い、燃は漢魏以の怪を照らし出したところ、その祟のために急死し たのであろう。「論衡」に燃炭・燃炉の語がみえ、 犬肉を燃く意より、 声符は然。然は犬肉を焼く意で、燃の初文 用義が拡大されて、燃が作られ

て納々たるなり」と糸のしめるさまとするが、それ

声符は内(内)。〔説文〕一三上に「絲溼」

形声

納10

[納]10

おさめる・いれる (ダフ)

0

いられる。

8 18 もつ れる

糸のもつれる意に用いる。 ける字とするものであるが、字は撚の声義によって をいう。[急 就篇、注] に、紅色の最も深いもの三三上に「糸縈るなり」とあり、糸のもつれることます。 として用いる。[玉篇] に引く [説文] とするのは、火の燃える色、すなわち然の声義を承 形声 声符は然。ここでは撚の省文

゚゙ゥ

悩 10 [[12] 巡12 なやむ(ナウ)

〔大克鼎〕では、膳夫職である克に対して、「王命を

金文の〔蔡段〕では「姜氏の命を出入せよ」、

出内せよ」と命じている。

に命じて納言と作し、夙夜股が命を出納せしむ」とのちの尚書・侍中などにあたる。〔書、舜典〕「汝のちの尚書・侍中などにあたる。〔書、舜典〕「汝

納る」、〔詩、豳風、七月〕「十月、禾稼を納る」と

いう。下言に聴くことを納言といい、官名としては、

また納蔵の意とし、〔書、金縢〕「册を金縢の匱中に

納る」は娶嫁、納徴は結納で、みな奉納の意がある。を請ふ」は、王室に返還する意。〔晋語〕「その室を

る意より、〔国語、魯語〕「祿と車服とを納れんこと もに出入に作り、また出内に作る。もと賦調を納めして納入する意であろう。出納の字は卜文・金文として納入する意であろう。出納の字は卜文・金文と のは杭県の語である。字はもと、布帛の類を賦調と は苔々というのと同じく擬声的な語で、苔々という

穴があり、それを睫脳のなごりとする人もある。 も知れない。周口店の古人類の後頭部にはみな小ふ」とあり、「腦を盬ふ」ような古俗があったのか であることを示す。「左伝」傳二十八年に「晉侯、 夢に楚子と搏つ。楚子己れを伏せて、その腦を盬

13 | 13 | 20 たがやす・つとめる

草萊(草はら)を辟く意を示すものであろう。辰は 〔説文〕に重文として籀文一、古文二を録し、その をするもので、その字は田と辰とに従う。 儀礼に関するもので、その字は田と辰とに従う。 え、神饌に供する神田の共同耕作、すなわち藩50人 するも声が異なる。「令鼎」に「耤農」のことがみ図声の字とするが、声が合わず、「繁伝」に凶声と図声の字とするが、声が合わず、「繁伝」に凶声と 「説文」三上に「耕す人なり」とし、字を農に従い **産器で、又(寸)を加えて蓐(草刈る)となる。農** 貝で作った耕耨の器で、 はその意を含むものが多い。 事は忍耐持久を要することであるので、農声の字に 一は林と辰とに従う。卜文に艸に従うものがあり、 金文の字形は、田と辰とに従う。辰は蜃器。 田と合せて農事をいう。

儂 われ・きみ・かれノウ・ドウ

形声 喜んで吳音に效ふ。多く儂の語あり」とあって、一声符は農。〔隋書、五行志〕に「煬帝の宮

の神であった。西安半坡の彩陶にかかれている人面の神であった。西安半坡の彩陶にかかれている人扇が、『山海経』には魚婦とよばれており、もと魚身いう話がある。禹は二虫を組み合せた形の字である熊の姿となっているのをみておそれ、石となったと 子の禹も、妻の塗山氏が餉を持参したところ、禹が 子産の語に「昔、鯀帝命に違ふ。これを羽山に殛す。と爲る 巫何ぞ活かせる」、また〔左伝〕昭七年のったとする神話は、〔楚辞、天問〕に「化して黃熊 **黄 能の寢に入るを夢む」とあり、〔韋昭注〕に「能となった。**[国語、晋語〕に字を熊に用いる例があり、「晉侯、 能を韻している。字形と声義と、いずれもその本源然ある。その古音は態と近く、〔楚辞、離騒〕に佩・ある。 である。能の字形に従うものに羸・羸また羸があり 化して黄熊と爲り、以て羽淵に入る」という。その は熊に似たり」という。鯀が黄熊となって羽淵に入 を容易に明らかにしがたい字である。 左偏は胃に似て水虫の形であり、旁はその足の形で 魚身の神像と、伝承の上で相関するものがあるよう も用いられる字であった。〔左伝〕昭十七年、また はその字形の示すように昆虫の形であり、また熊に 可能・能賢の意に用いるのは字の初義でなく、本義

は熊に似たり」、〔周礼、司命〕の〔鄭司農注〕に鼈なり」、また〔国語、晋語〕の〔服虔注〕に「能魚〕に「鼈は三足の能なり」、〔玉篇〕に「能は三足

これであるのかを明言していない。〔爾雅、釈うな動物であるのかを明言していない。〔爾雅、釈

肚なるを能傑と稱するなり」とするが、能がどのよ ま「能獸は堅中なり。故に賢能と稱す。而して 蜑の系統の字形からみて明らかである。〔説文〕はな とするが、字の全体が象形であることは、金文のそ

「熊の屬なり。足は鹿に似たり」として、

目声の字

水中の昆虫の形に象る。〔説文〕一〇上に

10

よくする。おさめる・たえる

脳1 (脳)1 (路)1 のう(ナウ)

てはこれが古い。また周初の金文〔也殷〕に「文王公鼎〕〔番生殷〕などにもみえ、確かな用語例とし

近きを能む」という句があり、その語は金文の〔毛としては、〔詩、大雅、文王〕に「遠きを柔らげ、 三足の獣とはしがたいものである。動詞に用いた例 ず、獣名としての用例もない。その字形からみても 獣で鼈に近いものとするが、その獣の実態も知られ 「文昌宮(星の名)は三能なり」など、多く三足の

る」とするが、字は人が頭を垂れ、 ならぶ)するなり。巛は髪に象り、囟は匘の形に象に「頭の髓なり、匕に從ふ。匕は相匕箸(ぴったり 従う。甾は頭脳の形で、〔説文〕ハ上 正字は匘に作り、人と銜とに それが脳の部分

賢に非ざるなり」などの例がみえる。

ただこの字を

って、隠三年「豈能賢といはんや」、襄十三年「能用いる例は古い時期のものにみえず、〔左伝〕に至 可能の意よりして、賢能の意となるが、賢能の意に ること能はず」など、いずれも可能の義に用いる。能く福せん」〔縣改設〕「我、縣伯と萬年まで保たざ」。

濃 16 こまやか・こい (チョウ)

形声 声符は農。『説文』一上に 「露多きなり」として、『詩、小雅、 「な雅、釈訓」に震に作る字の訓である。濃は濃淡の字で、濃厚の意。古い用例は少なく、唐宋以後にの字で、濃厚の意。古い用例は少なく、唐宋以後にの字で、濃厚の意。古い用例は少なく、唐宋以後にの字で、濃厚の意。古い用例は少なく、唐宋以後に

膿 17 「鬼」」9 うみ・ただれる

長 21 さきに・ひさしい・むかし

意である。 「「乃者」に作る。「曩昔」の暦書」などにその語を「乃者」に作る。「曩昔」の副詞的な用法があり、また〔戦国策、趙策〕〔史記、副詞的な用法があり、また〔戦国策、趙宗、

裏 22 ふくろ・つつむ

形声 声符は異。聚は深母。その語のでは、「漢書、注」に底あるを嚢、底なきを嚢といふ」ともに形声の字である。「詩、大雅、公別」に都とあって、前条の楽に「嚢なり」とあるのと互訓。ともに形声の字である。「詩、大雅、公別」に都ともに形声の字である。「詩、大雅、公別」に都とし、「漢書、注」に底あるを嚢といひ、大なるを嚢といふ」とし、「漢書、注」に底あるを嚢、底なきを嚢といふ」とし、「漢書、注」に底あるを嚢、底なきを嚢といふ」とし、「漢書、注」に底あるを嚢、底なきを嚢といふ」という。

,

出4 とって・むし・うずまき

味が異なる。 とき千尋なり」とあるように、神話的な長蛇で、のところは人の坐する形で、似た形である。肥・配の従うところは人の坐する形で、青銅器でいえば鏨にあたる部分である。その鋬と器の一部と、器中の酒滴をそえたものが易、すなわち賜の初文である。肥・配の従うところは人の坐する形で、似た形であるがその意をといった。 長さ千尋なり」とあるように、神話的な長蛇で味が異なる。

把 7 にぎる・とる・つか・とって

形声 声符は巴。巴は把手、把は把 り」とあり、把手を握ることをいう。把握とは小さな一握りのもの、把持とは小さなものに専心すること、把捉は手でとらえること。臂を把るとは親しみと、把捉は手でとらえること。臂を把るとは親しみ

吸 8 つつみ・さか

波 8 なみ・なみたつ・うごく

形声 声符は皮。 安に坡陀、うねう に「水涌きて流るるなり」とは、「書、禹貢」 「炭波既に豬る」などの、経籍による訓である。「説文」 に、夏本紀」に「滎波」を「榮播」に作り、「周礼、 説、夏本紀」に「滎波」を「榮播」に作り、「周礼、 記、夏本紀」に「滎波」を「榮播」に作り、「周礼、 こ。 (史 こ。 (東 こ。) (東 こ。 (東)) (東 こ。 (東))) (東)

爬 8 かく・はう

を爬行といい、その虫類を爬虫類という。とれて、ことない。 「他羅剔抉」という。また手で匍匐して行くことない。」とみるる。ものをかき集めてくじり出すことない。 (絶交書) に「性また蝨多く、爬搔記むことない。 (絶交書) に「性また蝨多く、爬搔記むことが東の「絶交書」に「性また蝨多く、爬搔記むことが声」 声符は巴。爪でかき、またかき集める意。

世 8 ばしょう・はな

形声 声符は出。 芭蕉は中国原産の多年生のもので、甘蕉、芭蕉・ 選は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉万といわれる懐素は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉万といわれる懐素は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉万といわれる懐素は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉万といわれる懐素は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉万といわれる懐素は、家が貧しくて紙がなく、芭蕉の書聖が

派の「派」のわかれる・つかわす

形育 声符は感。底は水脈の分れる れたる水なり」とあり、水と底との会意とする。底 れたる水なり」とあり、水と底との会意とする。底 に従ふ」とあり、永は水脈の象形、その反文は底。 に従ふ」とあり、永は水脈の象形、その反文は底。 に従ふ」とあり、永は水脈の象形、その反文は底。 に状い。 にがあり、「いたる」と訓する字。水の溢流すること があり、「いたる」と訓する字。水の溢流すること を防ぐ祝禱の意であろう。分派より派出・派遣・派 を防ぐ祝禱の意であろう。分派より派出・派遣・派

破10 やぶる・ひらく・まける

琶 12 びハ

には制作の粋を尽したみごとな工芸品として、その匹域より中国に入り、わが国に伝えられた。正倉院で成域より中国に入り、わが国に伝えられた。正倉院で、第器・胡犬が馬上に鼓したというその器は、という楽器・胡犬が馬上に鼓したというその器は、というでは、一番では世。上部がその器の形は制作の粋を尽したみごとな工芸品として、その地域よりでは、

優品数器が保存されている。

比 12 ハ・ヒ

形声 声符は皮。〔説文〕ニ下に変なり」とあり、足を失って跛行するものをいう。〔荀子、王制〕に「傴巫跛撃」とあり、撃は覡、古くは男女の巫に、障害をもつ人が多かった。もとそれらの人たちは、神に仕えるべきもかった。もとそれらの人たちは、神に仕えるべきものとされたのである。〔荀子、修身〕に「蹠巫跛撃」とあの語があり、撓まざる功をいう。

記 はな・はなやか

月 4 かたよる・すこぶる

おす。
は、は、なり」とあり、偏頗の古いな。「すこぶる」は「少し」を状態化した語で、した。「すこぶる」は「少し」を状態化した語で、した。「すこぶる」は「少し」を状態化した語で、もと少しばかり、わずかにの意。その訓は頗の古いもと少しばかり、わずかにの意。その訓は頗の古いき、一般にいる。

「質」

「質」

「対している。

「対している。

「対している。

「対している。

「説文」九上に「頭

波

15 まハく うつる・

繙 彩

た。それた一稷、時の百穀を播け」とあり、〔詩、周に「汝」。これ、「命の百穀を播け」とかう。〔書、寿代、「説文」」二上に「種くなり」という。〔書、寿代、「説文」 形声 を播蕩という。 はげしく動かすことを播揚、 地をかえることを播遷・播越、刑を施すことを播刑、掌をひろげて播き散らす意で、分散播布の意がある。 頌、載芟〕にも「厥の百穀を播く」の句がある。 声符 は番。番は掌をひろげた形である。 所定めず漂泊すること

皤 かみがしろい・しろい

り」とあって、古代の略奪婚を歌うものと考えられ あろう。下句に「寇するに匪ず 婚媾せんとするな 腹の人を罵って「皤たる腹あり」という。 る。また大きな腹を形容し、〔左伝〕宣二年に、 あり、〔段注〕に顔色の意とするが、多く白髪の意 形声 七下に「老人の白きなり」と 声符は番。〔説文〕

簸 あおりあげる・ふるいすてる

形声

を揚げて糠を去るなり」とあり、箕を形声 声符は皮。〔説文〕五上に「米

取をのろう歌で、「維南に箕あるも、以て簸揚すべをいう。〔詩、小雅、大東〕は、殷の遺民が聞の搾をいう。〔詩、小雅、大東〕は、殷の遺民が聞の搾り動かし、米をふりあげて、もみがらを去ること 弄することを簸弄という。 星。簸揚は扇動の行為と似ているので、人を扇動戯 からず」と、天の助けもないことを悲しむ。箕は箕 ゆり動かし、

覇 19 [霸] 月の白い光・はハ・ハク

顐 廖

一書、 会意 〔書、康誥〕に哉生魄、〔武成〕に旁生覇、〔逸周書、いた。 まままは、 ままら いっぱっぱ にっぱっぱ にっぱっぱ はその説によるものであろう。字はまた魄に作り、 統暦〕には、死覇を朔と称しているので、〔説文〕 い光が生じていないときである。ただ劉歆の〔三の月相をもっていえば初吉にあたり、まだ覇のうす 三十日となる。〔説文〕のいう二日・三日は、金文 既死覇にそれぞれ八日、他には七日を配して、大月 鞶の聲」という。鞶について〔説文〕一下に「雨、は二日、小月を承くるときは三日なり。月に從ひ、 「月始めて生じて魄然たるなり。大月を承くるとき 文は鞶に作り、 に、鞶に月を加えて「霸」となる。〔説文〕七上に なっている形。のち月光の輝きのない光を示すため 正字は霸に作り、雨と革と月とに従う。 獣屍が雨に暴されて色が脱け、 白く 初

> するごとく人を化する意だと答え、 主 るもので、力をもって覇となる意だと答えた。マヤッシ゚ーのでに近に従うかと問うと、安石は西方は殺伐を 年に字説を好んだ話を載せている。ある人が覇字は 俗字である。「邵氏聞見録」に、宋の王安石が、晩 者の頭顱を、髑髏として保存するなどのことが行な伯もその初文は白で、頭顱の形である。偉大な指導 義が近い。覇を覇者の意に用いるのは、怕の仮借。 世俘解〕に既死魄の語がある。魄もまた精気のない やしてやめなかったという。これを望文の説という。 またある人が霸は雨に従う字だというと、時雨の化 力をもってするものを覇道という。覇に作るものは われたからであろう。徳をもってする王道に対して、 もので、獣屍の暴されている形である筆と、その声 また数百言を費

馬 10 うま・マ・

7 氡 深不多

野野

音義説を用いたのであろう。〔左伝〕襄六年に、 象形 は関係がない。馬は陽物であるとして、〔釈名〕 という。怒・武はともに畳韻の訓であるが、字義と なり。武なり。馬の頭・氅・尾・四足の形に象る」 馬の鬣のある形。〔説文〕一〇上に「怒る

なり、 玉の〔神女の賦〕「また人閒に婆娑たり」のように、それならば響うて楽しむ形であるから、婆の原義も、実とは舞うて楽しむ形であるから、婆の原義も、実は婆のもとの字である。般に般楽の意があり、婆娑は婆のもとの字である。般に般楽の意があり、姿ないはない。 舞い遊ぶ意であったかと思われる。のち老婦の意と また婆心という。 なり」と訓するが、〔韻会〕に引くところによると、 祖母を婆々、 老婆の心の周到なるを老婆心、

鳽 馬上祭・いくさのまつりバ

「説文」がその部に録 生活と関係が深く、 車馬を用い、馬はその

る。中国では古くから が近かったようであ

と称しており、その音 は司馬のことを司武

する字は一一五字、

康

(詩、 蒐田(狩)す。有司、表とがあったはずであり、 伯し旣に禱る」の〔伝〕に、「伯は馬祖なり」とあときに行なう儀礼である。〔詩、小雅、吉日〕「旣にいるるを薦といふ」とあって、要するに師祭、軍行のするを薦といふ」とあって、要するに師祭、軍行の 祭儀であった。〔礼記、王制〕の〔鄭注〕に「禡は 「伝」に、「内においてするを類といひ、野において また〔甸祝〕に「四時の田と表貉の祝號とを「掌鬼田(狩)す。有司、表貉す」の貉は禡の音でよむ。 師祭であるから、 師祭なり。兵のために禱る。その禮もまた亡びた り、この伯は禡と通用する字で、禡とは馬祖を祭る るもので、〔玉篇〕にこれを「馬上祭なり」と いう。〔礼記、王制〕に「征く所の地に碼す」とあ らんことを恐れ、下りてこれを祀るを薦といふ」と ´」とあって、 大雅、皇矣」「ここに類しここに碼す」の 形声 行きて止まる所、その神を慢にするあ その古礼は早く失われていたらしい。 こあり、〔周礼、大司馬〕 「遂に以て馬だけでなく、その地をも祀るこ 声符は馬。〔説文〕一上に「師 いう。

> 条に、 典〕巻二三二「皇帝親征し、征く所の地に薦す」る」とあり、そのとき犠牲を用いた。社ばの〔 当時の儀礼の詳細な記録がある。 地に鴯す」の「強ない」の

黑 のバ の し る

緊 「黥馴髡刖、笞傌棄市の法」という語があって、傌別の意味があるとしがたい。〔漢書、賈誼伝〕に別を責める意であるが、罵は馬に関することに、格盟を責める意であるが、罵は馬に関することに、格 を罵詈す」とあり、劉邦は殊に罵言を好んだ。のであろう。〔史記、魏約伝〕に「漢王、諸侯群 の字形と同じく网を被らしめて、罵の字となったも 字かと思われる。人々の罵詈を受ける刑罰の方法で 漢以後の書に至ってみえる字である。 あるから、のち罵詈という語を生じ、その字も、 から、これは人を馬に乗せて市中を引きまわす意の は笞杖を加えるのと同じ刑罰の法とされる字である に対する盟誓を意味する言に、ぬきかけて、その偽 るなり」とあって、罵詈の両字を互訓する。詈は神 るなり 形声 魏豹伝〕に「漢王、諸侯群臣 声符は馬。〔説文〕七下に また前条の詈字七下に「罵 晋

米 5 草木のしげるさまハイ・ハツ

め、「周礼」にもみえる。「漢書、芸文志」に相馬をすぐれたものがある。また馬政のことは金文をはじすぐれたものがある。また馬政のことは金文をはじ の書三十八巻、 主とする相方畜

具の遺品には、馬冠や当盧などに、工芸品としても

のが多く、当時の生活を想見することができる。馬 行・狩猟・戦闘などにおける車馬の模様をえがくも 帝陵には実物大の俑器があり、漢の画像石には出

伴うており、その遺品が多い。近年出土の秦の始皇 て著しかった。殷周以来の大墓には多く車馬坑をから、中国の古代においては、車馬具の発達が極め は古くより最も重要な交通及び戦闘の方法であった 熙字典には異体字を含めると四八一字に及ぶ。車馬

「隋志」には というものを録している。 〔伯楽相馬経〕

銅製の当盧

婆 舞うさま・ばば・はは

暖

形声 一二下に媻の字があり「奢る 声符は波。〔説文〕

である。〔詩、召南、甘棠〕「蔽芾たる甘棠」の 「伝〕に、「蔽芾は小なる貌」とあり、「玉篇」に詩を引いて字を宋に作る。宋は花のしべなどが垂れている形。そこに実がなりかける形が字、そのやや充実するさまが数、実が成り終るのが専・業で、あつまる意となる。宋・字・勃・痺・彙はその発芽よりまる意となる。宋・字・勃・痺・彙はその発芽より成熟までの過程を示す一系の字であり、宋・字・勃成熟までの過程を示す一系の字であり、宋・字・勃には声の関係がある。

成 6 かかれる

派の初文とみてよい。 象形 水の分流する形に殺る。永を な。金文には、銘文に正反の字を用いることが多く、 る。金文には、銘文に正反の字を用いることが多く、 とする。金文には、銘文に正反の字を用いることが多く、 をするで、「説文」ニト

吠っ いイ・ハク・バイ

明時

安意 口と犬とに従う。〔説文〕ニ上に「犬鳴くない舎・吠陀などの音でよむ。 「説文」ニ上に「犬鳴くないれ」の句があって、古い語であいえしむることなかれ」の句があって、古い語であいまない。 「はいって、古い語であいまない。」 という。 梵語の音訳語のときには、 ない舎・吠陀などの音でよむ。

字っ かくれる・みがつく

(f) **季**°

浦っ さわ・さかん・ながれる

形声 声符は市。市は木の葉の茂る は悪に作り、需素という語がみえる。 できま、広くあまねくゆきわたるさまなどをいう。 くさま、広くあまねくゆきわたるさまなどをいう。 はたい方で、勢いのさかんなもの ができるが、「管子、 できるが、「管子、 できるが、「管子、 できるが、「できるが、「できるが、「できる。 できるで、一はたいでするが、「できる。 できるで、一はたいできるが、「できる。 できるで、一は木の葉の茂る

佩 8 おびるもの・大帯につける玉飾

めに帯びるもので、必ずしも玉飾の意ではない。飾といふ」とあって佩玉の意とするが、巾は拭のた〔説文〕ハ上に「大帶に佩するなり。人・凡・巾にいる巾。これを身につけて飾りとするのを佩という。いる巾。これを身につけて飾りとするのを佩という。へいない。 人と凧とに従う。 凧は帯と、帯より垂れて会意 人と凧とに従う。 凧は帯と、帯より垂れて

稽首し、命册を受け、佩び中の象で佩巾をいう。[頌 大名] 拜して壺」に「頌 (人名) 拜して壺」に「頌 (人名) 耳してった。

25)

佩玉

拝8 「拜」の ぬく・おがむ・うける

雅幹等 "料料料

杯 8 [格] 11 [盃] g chijte

ハイ 杯(桮)(盃) 林 芾 邶 肺

盤狼藉のことは、中国ではあまり聞かぬようである。盤狼藉のことは、中国ではあまり聞かぬようである。は、中国でよく行なわれたが、酒席で大騒ぎする杯は、中国でよく行なわれたが、酒席で大騒ぎする杯

れ 8 あさ・あさぬの

〒 8 おいしげる・ひざかけ

には字を市に作り、黻の象形。米とは声義ともに異いる。草木の生い茂るさまをいう。字はまた黻の意に用い、〔詩、曹風、候心》に「三百の赤市」とあり、赤市は士人の礼装用の蔵と、「三百の赤市」とあり、赤市は士人の礼装用の蔵と、「一三百の赤市」とあい、「詩、曹風、候心》に「三百の赤市」とあいる。草木の生い茂るさまをいう。字はまた黻の意には字を市に作り、黻の象形。米とは声義ともに異いる。草木の一葉の意といる。「一葉の意といる。「一葉の意といる。「一葉の意といる。「一葉の意といる。」に、「小なり」と形声 声符は市。「一貫をいる。「一葉の象形。「一葉の意といる。」に、「一葉の象形。「一葉の象形。「一葉の意といる。」に、「一葉の象形。「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の事」に、「一葉の事」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」に、「一葉の意といる。」には、「一葉の意といる。」には、「一葉の事」に、「一葉の事」に、「一葉の事」に、「一葉の事」には、「一葉の事」に、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉のま、「一葉

なり、もと別の字である。

北 8 累介

F F

形声 声符は北。占くは北を邶に用いた。[説文] だ下に「故の商の邑なり。河南朝歌より以北、これなり」とし、北声とする。殿が滅んだのち、その芸能を分って邶・鄘・衞とし、三監をおいた。その詩が邶風・鄘風・衛風の詩である。金文に北子・北伯の器があり、邶の初文。北伯諸器は直隷永水県、張淳の出土。王国維はその地を邶の故地とするが、郷風の詩はそれほど北方のものではなく、衛に隣接する地である。その故城は汲県の東北で、安陽からする地である。その故城は汲県の東北で、安陽からはなお東南にあたる。

肺のはい

ハイ

北月 9 せ・うしろ・そむく

に用いる。背水は死地に一生を求める陣取りをいう。ら遠背の義となり、背任・背位・背馳・背叛のよう形である。身の背後は、正面に対して背後であるか形である。身の背後は、正面に対して背後であるかである。身の背後は、正面に対して背後であるが、育とは脊肉のである。

胚の「胚」のはらむ・ほじめ

(本声) 本声 声符は不。 正字は胚に作り、水あり、字義と合う。〔説文〕四下に「婦学の象があり、字義と合う。〔説文〕四下に「婦学のまがあり、字義と合う。〔説文〕四下に「婦学での実をつけはじめて、やや肥大したものが丕である。〔詩、周南、芣貰〕は草摘みの歌であるが、子との実をつけはじめて、やや肥大したものが丕である。「詩、周南、芣貰〕は草摘みの歌であるが、子との事をつけはじめて、芣苢には胚胎の音が求めの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芣苢には胚胎の音がなめの予祝として歌うもので、芥菓にはいいます。

作10 たわむれる・わざおぎ

作諧は、軽みを主とする付け合いの文学である。 を主とし、優は悲劇を意味する字である。わが国のを主とし、優は悲劇を意味する字である。わが国のを主とし、優は悲劇を意味する字である。わが国のを主とし、優は悲劇を意味する字である。わが国のを主とし、優は悲劇を意味する字である。わが国のと言い、では、一般では、いい、その人を俳優ない。 (説さいまするである。かが国のと言います。 を主とし、優は悲劇を意味する字である。かが国のと言います。 を主とし、優は悲劇を意味する字である。

学 10 もとる・さからう・そむく

経り 形声 声符は学。学はしべがふくらいまた悖の字をあげているが、いま悖乱・悖逆のし、また悖の字をあげているが、いま悖乱・悖逆のし、また悖の字をあげているが、いま悖乱・悖逆のし、また悖の字をあげているが、いま悖乱・悖逆のと、また悖の字をあげているが、いまけば、学はしべがふくらい。

旆 10 いていはたあし

枝10 しげる・まつわる

西 10 あう・くばる・めあわす

会意 西と己(巴)とに従う。西は酒樽の形。己会意 西と己(巴)とに従う。西は酒樽の形。己して、その配膳に即く意を示す。「説文」一四下にして、その配膳に即く意を示す。「説文」一四下にして、その配膳に即く意を示す。「説文」一四下にして、その配膳に即く意を示す。「説文」一四下にく、配は酒樽の前に坐する意。「書、君牙」に「前く、配は酒樽の前に坐する意。「書、君牙」に「前く、配は酒樽の前に坐する意。「書、君牙」に「前く、配は酒樽の前に坐する意。「書、君牙」に「前く、配は酒樽の前に坐するとは、天命にあたる意。「ま、君藥」「殷禮昇りて天に配し、多大等」とという。天命に配す」「肆に皇天哭ふことなく、我が有周に臨保し、告という。「肆に皇天哭ふことなく、我き、我が有周に臨日、「自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆるここに命に配し、自ら多福を求む」とは、いわゆる。のち匹敵・匹配の意より記述を、我が有別に臨保し、「まな罪」「という。大部に配するとは、天命にある。のち匹敵・西となり、またその所に就く意より配属・配下の意となり、またその所に就く意より配属・配下の意となり、またその所に就く意より配

律コ こまよう

《てその地を過ぎるとき、「則ち必ず徘徊し、鳴號(荀子、礼論)に、鳥獣はその匹を失うと、時月をは便旋なり」とあり、さまよい歩くことをいう。は受放なり」とあり、さまよい歩くことをいう。はない。 (広雅、釈訓)に「徘徊郡一声符は非。〔説文〕八上に俳を正字とするが、

り)、然るのちよくこれを去る」という。徘徊してり)、然るのちよくこれを去る」という。徘徊してし、躑躅し(たちどま

排 11 おす・はらう・ならぶ

形声 声符は非。非に二つ相並ぶも のの意がある。〔説文〕二上に「擠す なり」とは、二つ並んでその一方が相手を擠すので ある。親族の間で、祖父・父・兄弟・子の世代を一 ある。親族の間で、祖父・父・兄弟・子の世代を一 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 排行という。。 非行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 非行という。韓愈の〔十二郎を祭る文〕、南震雲の 神どいる。 おる。 三人争うことから排斥・排撃・排除の意と なる。 詩体の排律は、対句で六句以上を列するもの、 なる。 一人争うことを排次という。

敗 11 やぶる・まける・そこなう

門門 似然 見明

違青する行為を賊という。敗が貝に従うとすれば、会意 貝と支とに従う。貝は宝器とすべきもので、代設つなり。支貝に從ふ。敗・賊はみな貝に從ふ。會意」とし、籀文の字形をあげる。籀文は二貝の形に従う。戈部二下に「賊は敗なり。戈に從ひ、則に従う。支部二下に「賊は敗なり。戈に從ひ、則に従うるが、則・賊はともにもと鼎に従う形の字で、鼎に銘文を加えて誓約とすることを則、その鼎盛として加えた則を毀滅することによって無効にし、則をない。

俗のように用いる。負と声義の近い字である。貝に従う。ものを毀敗する意より、敗徳・敗軍・敗のと、鼎を支つ形のものと二形あり、金文の字は両財貨を毀敗する意となるが、卜文に貝を支つ形のも財貨を毀敗する意となるが、卜文に貝を支つ形のも

廃12【廢】15 やめる・すてる・かわる

帝位を退けられたものを廃帝という。乱を撥めるこ 邑とは亡国によって廃都となったところ。のち廃 [管子、地図]に「名邑・廢邑」の語があるが、廃なる。灋は神判、廃は軍礼より出ている字である。 が命を灋(廃)すること勿れ」のようにいう。灋はであろう。金文に廃の字には灋(法)を用い、「除注」に「頓くなり」とあり、当時その義に用いたの注」 とする。〔淮南子、覧冥訓〕「四極廢く」の〔高誘〔説文〕九下には「屋帳くなり」とあり、傾頓の意 とを撥乱というが、発・廃・撥は一系の字である。 宗廟が廃壊されては、すべてのことが終る。 の意となる。廢(廃)とは征服を受けた廟のことで、 棄して無用となったもの、さらに廃事・廃業・廃除 舎・廃屋など、放棄した施設をいい、のちすべて廃 とは、その声義近く通用する字であるが、字源は異 て水に投棄することを示す字で、法の初文。灋と廃 羊神判に敗れたものを、その羊とともに皮袋に入れ のような軍征を受けたことを示すものと思われる。 の儀礼である。字が广(廟)に従うのは、廟屋がそ ろえた世と、弓を射る形とに従う。軍を発するとき 發は出発の儀礼を示す字で、両足をそ 形声 旧字は廢に作り、 發 (発) 声 それで

12 みずのさかんなさま

湃という。連語として用いる擬声語である。 形声 声符は拜 (拝)。水勢のさかんなさまを澎

牌 12 みだ・わりふ・たて

骨牌とはカルタのことである。また俗に楯をいう。 る割符、清代には地方への送達文書をいう。牙牌・あり、掲示用の木札をいう。唐宋以後、駅伝に用いあり、掲示用の木札をいう。唐宋以後、駅伝に用いあり、掲示用の木札をいう。『玉篇』に「牌牌なり」と形声 声符は卑(卑)。『玉篇』に「牌牌なり」と

13 ひえ・ちいさい・いやしい

でいい。 を解する。「説文」七上に「禾の別なり」というように、五穀のうちにも入らぬものであった。稗に数種あり、自生のものもある。「段注」に「草の穀に似たるもあり、「左伝」の「杜預注」に「草の穀に似たるもの」というように、五穀のうちにも入らぬものであった。稗に数種あり、自生のものもある。「段注」に小説を神史というのは細小の義をとるとするが、に小説を神史というのは細小の義をといる。中に卑小の意がある。中に卑小の意がある。中に卑小の意がある。

表は 長い衣のさま

する例があるので、それと声義の近いものであろう。その毛皮を中にしたてたものと思われる。*と通用例はない。非を衣中に加えるとすれば、たとえば、まである。〔説文〕ハ上に「長衣の兒」とするが、法である。〔説文〕ハ上に「長衣の兒」とするが、法である。

貝

多く姓氏の名に用いるが先秦にみえず、後起の字で

詩 14 「墓」16 みだす・そむく・たがうハイ

0 101

〔段注〕に「兩國相違ひ、戈を擧げて相向ふ。亂のまた籀文の字形として諡の字形を出している。諡を まなり」とするが、或は國(国)の初文。国の疆界 意なり」とするが、
** 〔説文〕三上に「亂るるなり」とし、重文として悖、 声義は悖・詩と同じであるとしても、聲はその形義 が参差出入する形を示したもので、混乱の意となる。 の由るところを異にする字である。 声符は字。字に悖(もとる)の義がある。

非15 ともがら・なかま・やからハイ

排行という。字はまた輩行に作る。なかまを群輩と それぞれの列中にあるものを排といい、その序列を 「軍の車を發するときの若し。百兩を輩と爲す」と いい、その一団に人材多ければ輩出、相互に前輩・ のを同輩という。親族関係で祖父・父・兄弟・子の 一輩をもって戦闘の集団とした。その軍に属するも いう。〔六韜〕に「百車に一將」とあるから、百車 相並ぶものをいう。〔説文〕一四上に 声符は非。非はすき櫛の形で

憊16 「愉」14 つかれる・くるしむハイ

The second secon

老いてものに疲れるのを老憊という。 子、山木〕に「何ぞ先生の憊れたるや」とあり、 に作り、葡が声符。 声符は備。 正字は惴 葡は額。

年

癈

字である。〔礼記、礼運〕に鰥寡孤独の他になお 廟を破壊するを廢(廃)という。ゆえにすべて廃毀を発する形で軍の出発をいい、敵都を攻めてその宮 救すべきものであるとしている。 「癈疾の者」を加え、これを天下の窮民で、まず振 その機能を失うことを癈という。廃と声義の通ずる を受けたものを廃といい、これを身体に及ぼして、 形声 をそろえて出発する姿勢)に従い、弓 声符は發(発)。發は血(足

擺 ひらく・のがれる・ならべるハイ

〔西京の賦〕に「牲を擺ぶ」の語があり、陳列の意とするが、擺脱を本義とする字である。 張 衡の 形声 であるが、それは排と声義の通ずる用法である。 するを擺という。〔玉篇〕に「兩手もて撃つなり」 れようとしてあがき苦しむ意。その網を開いて脱出 声符は罷。罷は獣などが網にかかって、擺

バイ

倍 10 帯の類は、秦漢のころにもなお広く行なわれていた語があり、青貝などで嵌飾を施したものである。貝 ことが多く、〔詩、魯頌、閟宮〕に「貝冑朱縵」の子安貝の他にも、貝を象嵌のように装飾的に用いる ものであることは、その事実を端的に示している。 いた。貨財関係の字が、すべて貝に従う構造をもつ するまで、貝は通貨的な財宝としての地位を占めて は銭のことである。金属類のものが通貨として普及 おおくする・ばいまし・そむくバイ・ハイ た

をいうものに「貝三十朋」「貝五十朋」というものれて、宝貝とされたものであろう。金文の廷礼賜与 産のものであるから、沿海より遠く中原の地に運ば その産地は明らかにしがたいが、いずれにしても海 や明器の類に、これに摸した玉石の類もみられる。

にみえる貝は子安貝の形であり、殷周期の装飾品でに刀貨・布銭などが行なわれている。ト文・金文でに刀貨・布銭などが行なわれている。ト文・金文

我に百朋を錫

뗴 谘

の意に用いる。 のち叛く意となり、倍譎・倍心・倍徳のように背叛が原義。賠償は倍償で、違約のときには倍返しする。 「師死して遂にこれに倍く」とみえる。剖判・倍加ずるので、背叛はその転義。〔孟子、縢文公、上〕 れを字の本義とするが、両分よりして部門の意を生八上に「友くなり」と背叛の意とし、〔段注〕にそ八上に「友 る。音は字(草木の実)の熟して剖ける意。〔説文〕形声 声符は音。音にはものを二つに剖く意があ

甲盤〕に、淮夷を「資敵の臣」とよんでおり、それであろう。亀も宝貨とされ、〔漢書、芸文志〕に元亀は大貝十朋、一朋の直二百十六とする。古くはのであろう。亀も宝貨とされ、〔漢書、芸文志〕にう記録もあり、かなりの価格のものとして通用したう記録もあり、かなりの価格のものとして通用した

器を制作する費用として「貝十四朋」を要したとい って功があり、「貝三十朋」を賜うた例や、弊器一 (鍰)」のように、重さでいうときもある。軍征に従 のであるから、奇数ではない。金文には「貝三十守のであるから、奇数ではない。金文には「貝三十守 貝を朋と爲す」というが、前後両系で一連をなすも !・ 】 ・・・ 朋は前後一連の貝を荷なう形の字。〔鄭箋〕に「五朋は前後一連の貝を荷なう形の字。〔鄭箋〕に「五 _ふ」のような句があり、一種の祝頌語とされている。 菁々者莪〕に「旣に君子を見るに 我に百朋を錫****があり、それは非常な重賜とされた。〔詩、小雅、があり、それは非常な重賜とされた。〔詩、小雅、

唄 10 うた・ほめうたバイ

する。〔法苑珠林〕に「西方の唄あるは、なほ東國音の聲なり」とあり、梵語の pathaka を唄置と釈形声 声符は貝。いわゆる梵唄。〔玉篇〕に「梵 いう。わが国では小唄や俗謡の類にこの字を用いる。 の讚あるがごとし」とあり、仏徳をたたえる讚歌を

〔国語、周語〕に、景王の二十一年前五二四年、大銭 を鋳たことをしるしている。斉ではこれよりさき、

思われるが、泉は〔周礼〕に至ってみえ、また銭はのとして、一定の条件のもとに流通していたものと であったかも知れない。貝は古く交換価値をもつも

禹貢〕にいう織貝のような、特殊な生産品 光夷を「寛畝の臣」とよんでおり、それない。

> 売 【賣】15 うる・マイ

事を掌る」とあって、それは厳重な規制のもとにてす」、また〔司市〕に「その賣價(つぐない)のです」、また〔司市〕に「その賣價(つぐない)の交換が行なわれていたことを示すものであろう。 肾 従うとされる濱・臏などの賣は、もと贖賕を示す價質をつて多くみえるもので、古い語ではない。賣声に の省文である。 行なわれるものであった。売買という語は漢以後に く交換的な経済行為となる以前に、賠償・贖罪的な の目的でなされることがあることによるもので、 ゞららが、それは別の字である。金文に贖に作る字とするが、それは別の字である。金文に贖に作る字とすっす。 出すなり」という。〔玉篇〕に「或いは鬻に作る」 ることを賣(売)という。「説文」六下に「物貨を 出と買とに従う。買に対して、 旧字は賣に作り、その初形は 全

貝 7 かい・かいがら

Ħ ()° m° A

文〕 メトトに 「海の介蟲なり。陸に居るものを猋とであり、呪飾として珍重されたものであった。〔説 象形 を貨とし、龜を寶とす。周よりして泉あり。秦に至名づけ、水に在るものを鰯と名づく。象形。古は貝 つて貝を廢して錢を行ふ」とするが、列国期にはす 貝の形。子安貝の象形。子安貝は古く呪器

音聲」、また「梵聲」とのみあって、「うた」という 〔類聚 名義抄〕にこの字を両出し、「吟佛德聲」「梵 訓はない。

梅1(梅)1(棵)1(槑)1 うバ めイ

朝期より梅花を艶賞する作品があらわれる。明清の「楽府」横吹曲辞に〔梅花落〕があり、のち穴の〔楽府〕横吹曲辞に〔梅花落〕があり、のち穴の〔楽府〕横吹曲辞に〔梅花落〕があり、のち穴の「楽府」横吹曲辞に〔梅花落〕があらわれる。漢 以後には、寒梅の姿が好画題となった。 た梅の異文として好事の人の愛用する槑は、某のよ に掲げ、神意に謀ることを示す字で、謀の初文。まうもので、木の枝の先に祝禱の器を結れつけて神前いる。某はもと祝禱を収めた器である曰と、木に従が、梅枏は楠の初名であり、また梅は酸果の名に用が、梅枏は楠の初名であり、また梅は酸果の名に用 とする。梅・楳・某はのち梅の字として用いられる 割州では梅といい、揚州では枏という。〔説文〕は録し、某声とする。前条の「枏は梅なり」と互訓。∢し。木に從ひ、毎聲」とし、また重文として楳をべし。木に從ひ、毎聲」とし、また重文として楳を また某字条六上に「酸果なり」とし、某を梅の本字 横 形声 文〕六上に「榾なり。食ふ 声符は毎 (毎)。〔説

狽 けものの名・うろたえるバイ

THE STATE OF THE S

形声 あり、狼は前二足が長く、後二足は短く、狽は前二 声符は貝。〔玉篇〕に「狽は狼狽なり」と

唄 梅[梅][楳][槑]

倍

「輕重九府の制」を定めているが、軽重と

バイ 培 陪 媒 買 煤 祺 聪

とり、うろたえることをいう。ちく狼跡・剌趾と同じ系統の語であろう。前後相もらく狼跡・剌趾と同じ系統の語であろう。前後相もけなければ、進退することができないという。おそ足が短く、後二足が長い。それでこの両者は、相助

培ュ ます・つちかう

天を負ふ」とあり、その厚みの上にのることをいう。に用いる。「荘子、逍遥遊」に「風に培り、背に靑いう。培は土を盛りあげる意で、培植・培養のようた倍・常に作るが、培が正字。培敦は丘陵性の地をた倍・常に作るが、培が正字。培敦は丘陵性の地をた倍・常に作るが、培が正字。培敦は丘陵性の地をおは土を盛りあげる意で、培植・培養のようとをいう。

11 かさねる・そえる・たすける

形声 声符は音。音にふくれる意が り」という。特に通用する字であるが、自は神梯で あるから、もと聖所に関する字であるが、自は神梯で あるから、もと聖所に関する字で、そこに附属する あるから、もと聖所に関する字で、そこに附属する たの家来を陪臣、法官以外のものが審理に参加する ことを陪審という。

媒 12 なこうど・なかだち・おとり

現所 神に謀る意。「説文」」二下に「謀るな形声 声符は某。某は謀の初文で、

買12 かう・もとめる

A (?)

闸

ことを煤、また煤炭という。が物に附著して、炭のようになったもので、石炭のが物に附著して、炭のようになったもので、石炭のが物に附著して、炭のようになったもので、石炭の形声 声符は某。[呂氏春秋、任数]に「煤炭

棋 4 バイ

胎 15 つぐなう

賠は人に財物の損害を補償することをいう。もとは形声 声符は苦。音にものがふくれる意がある。

The same of the sa

16 かおあらう

象形 頭を垂れて、顔を洗う形。顔 の初文の象形字である。〔説文〕九上に「味前なり」 というのは意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのは意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのは意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのは意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのは意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのな意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というのな意味が明らかでなく、おそらく沫う意で というの複を〔説文〕では、沫の異文とすることで、 この額を〔説文〕では、沫の異文とすることで、 この額を〔説文〕では、沫の異文とすることで、 この額を〔説文〕では、沫の異文とすることが、 に経典釈文〕にみえている。沫・沫・沈は、声義の にい字である。金文には顕を眉寿万年の眉の字に用 いるが、もとより仮借義の用法である。

18 バイ・マイ・リ

寶 乡 头 东) 也

薶霾

ハク

埋めることを示す象形の字である。 埋めることを示す象形の字である。 埋めることを示す象形の字である。 埋地は出手家などの性 された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に はいる埋盤を、その嗅覚によってよく防ぐものと された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に はいまる埋盤を、その嗅覚によってよく防ぐものと された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に された。「文の薶の字は、それぞれの牲獣を土坑に

重2 つちふる・つちぐもり

電 多原子

形声 声符は舞。〔説文〕一下に「風ふきて土を雨ふらすなり」とみえ、〔詩、邶風、終風〕「終に雨ふらすなり」とみえ、〔詩、邶風、終風〕「終に、漢の昭帝元鳳三年、「天、黄土を雨ふらし、書に、漢の昭帝元鳳三年、「天、黄土を雨ふらし、書に、漢の昭帝元鳳三年、「天、黄土を雨ふらし、書いたとがあったという。卜辞にもこの字形のものがみえるが、「貞ふ。兹の雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。弦の雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。なの雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。なの雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。なの雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。故の雨は、これの字形のものがみえるが、「貞ふ。故の雨は、これでいるようである。

2 かび・くろい・すすける

「黴黴」の語があり、色を主とする語。梅と通用し、 注前子、脩務訓」に「黴黑」、「楚辞、九歎」に「進前と、帰務訓」に「黴黑」、「楚辞、九歎」に「火雨に中りて靑黑きなり」とは、湿ってかびが生じ、青黒い斑点となる意。

徽雨・徽毒という。

ハク

日 5 しろ・あきらか・もうす

A° 6

0 0

象形 頭顱の形で、その白骨化したもの、されこうべの象形である。ゆえに白の意となる。偉大な指導者や強敵の首は、髑髏化して保存される。ゆえに伯(霸、はたがしら)の義となる。[説文]セ下に伯(霸、はたがしら)の義となる。[説文]セ下に八西方の色なり。陰、事を用ふるとき、物色白し。れた当時、そのような観念があったとは考えがたい。の説をもって解するが、字形と合ず、かつ字が作られた当時、そのような観念があったとは考えがたい。がまずまでは白を提指の爪の部分の形とし、親指をもずに表古は白を提指の爪の部分の形とし、親指をもずに表古は白を提情の爪の部分の形とし、親指をもずに表古は白を提情の爪の部分の形とし、親指をもずに表古は白を提情が、字形と合ず、かつ字が作られた当時、そのような観念があったとは考えがたい。方が、字形と合ず、かつ字が作られた当時、そのような観念があったとは考えがであり、これも発験というが、その上に頭顱を加えた形は整ってある。微・微・数・微などの字は、みなその系列に属する。殷の甲骨文に、頭骨に刻字し、その系列に属する。殷の甲骨文に、頭骨に刻字し、その刻文によっ

8

うつ・たたく・ハク

0

告白・自白の意となる。 白はその頭顱の皤然として白いことから、白色・明 ては、酒杯や便器などの器用に供することもあった。 に多く遺存している。またこれを辱める方法とし 法で装飾し保存する風習は、のちまでも未開の社会 のであることが知られる。偉大な指導者であった者 て、異族の方伯首長を俘獲したとき、このようにし 白・潔白の意となり、そのことを主張する意から、 の頭顱や、あるいは強力な虜。歯の首を、種々の方 て頭顱を保存し、その呪霊を守護霊として用いたも

かしら・あにハク・ハ

「宜侯失設」に「鄭の七伯、厥の鬲千又五十夫を賜伯は〔大盂鼎〕に「邦司四伯、夷司王臣十又三伯」、文には〔令彝〕に侯・田・男がみえるが伯はなく、文には〔令彝〕に侯・田・男がみえるが伯はなく、 族の有力なるものを方といい、内附したときに方伯 鄭地の殷の遺民であるから、古く方伯と称した異族もに賜与の対象ともされている。「鄭の七伯」とは と称する。 する。卜辞に「虎方伯」のように称するものは、 とあり、〔繋伝〕に「諸侯の長なり」と覇者の義と 首長たる伯の初文である。〔説文〕ハ上に「長なり」 首長たちの首は白骨化して保存された。従って白は ふ」のように、農耕の管理者とされ、その農民とと の首長をいう語が、ここに残されているのであろう。 声符は白。白は白骨化した頭顱の象形で、 五等の爵名としては、卜辞に侯・伯、金 外

> の伯は、 伯夷・叔斉の実名は、夷・斉である。爵号としては、「歩くだのようにいい、伯氏・伯大師のように用いる。仲でが立めようにいい、名の上に冠して伯懋父・伯蘇な・神がない。 ちょうしゃ かんしょう かんしょう かんしょう あの用語法としては、兄弟の序列をいうときに信め 周の用語法としては、兄弟の序列をいうときに信じ ろうと思われる。 また伯楽の伯は、馬祖を伯というので、その意であ 叔の伯を加えて称するものか、その何れかであろう。 もと内附の外族の称であるか、あるいは伯

帛 きぬ・しろぎぬ・ぬさハク

るが、搏は繋に入れたものを搏つ字で、亦声の関係らして拍子をとることを、拍板という。薄と通用する。手を拊つことを拍手・拍掌といい、板を拍ち鳴る。手を拊つことを拍手・拍掌といい、板を拍ち鳴

し、百声とするが、〔釈(名〕〔広雅〕はみな拍に作に写した字である。〔説文〕 ニュに「拊つなり」と

があり、拍は全く擬声的な形声字である。

河河。

とまる・とどまる・しずかハク

<u>Ö</u>°

0

金文の〔今甲盤〕に「淮夷は舊我が夏鰤の人なり」帛束璜は〔後は、鴨社〕にいう束帛加璧であろう。って互訓。金文の賜与に帛束・帛束璜の名がみえ、って互訓。金文の賜与に帛束・帛束璜の名がみえ、っすぎぬをいう。糸部一三上に「綘、帛なり」とあうすぎぬをいう。糸部一三上に「綘、帛なり」とあ 「帛旆は殷の旌なり。帛を以て旐の末に繼ぐなり」「白旆央々たり」の白は帛の意。〔釈 名、釈兵〕にとであろうかと思われる。〔詩、小雅、六月〕のとであろうかと思われる。〔詩、小雅、六月〕の 形声 経籍の書写、郡国の地図、墳塋の呪書などに、ひろいまでは漢代の帛書・帛画の類が多く出土していて、 を用い、「史記、封禅書」に帛書の名がみえるが、 とみえ、白絹を用いた。書画をしるすのに古くは帛 とであろうかと思われる。〔詩、小雅、六月〕のに、この地の貢物としてしるす織貝という織物のこ く用いられていたことが知られる。 ているが、負は帛と貝とを合せた字で、「書、禹貢」 とあり、その生産品を貢納する義務をもつものとし

狼

かなさまをいう。ゆえにまた淡泊の意となる。 それ未だ兆あらず」とは、泊乎・泊焉として、しずところをいう。〔老子〕第二十章「我獨り泊として、

あって、水波のしずかな、舟を碇泊するのに適した き水なり」とし、〔玉篇〕に「舟を止むるなり」と

声符は自。〔説文〕一上に酒に作り、「淺

形声

声符は白。白は手を拍つときの音を擬声的

Å

声符は白。〔説文〕七下に「繒なり」とあり、 泊 形声 酮

ļβ のである。楚墓に異形の呪鎮を用いることが多く、前におく石彫などの獣の像で、もと呪鎮のためのも 牧羊に用いる犬をいう。わが国では高麗狛、神殿の こまいぬ 形声 「狼の如し。善く羊を驅る」とあって、 声符は白。〔説文〕一〇上に

強い彩色を施したものである。

迫。〔迫〕。 せまる・きびしいハク

通用するが、専は橐中のものを撃つ意がある。名)を瓜州に迫逐す」とみえる。拍と搏、迫と薄と名)を瓜州に迫逐す」とみえる。拍と搏、迫と薄といる。〔左伝〕襄十四年「昔秦人、乃の祖吾離(人り、肉迫・緊迫の意より迫劫・迫脅・迫逐の意に用り、肉迫・緊迫の意より迫劫・迫脅・迫逐の意に用 に「近づくなり」、〔広雅、釈詁〕に「急なり」とあ 近接して拍つ意がある。〔説文〕ニト 声符は白。白に拍・敀など、

敀。 うつ・せまる・おこすハク

る。〔史記、索・〕に引く〔説文〕には、「追答する〔玉篇〕に「強ふるなり」とあるのは、その意であ なり」に作る。迫と声義が通ずる。 る呪的な方法で、その呪霊を刺激し、その呪能をは一形。髑髏を殴つのは、祭梟とよばれ かせる呪儀である。〔説文〕三下に「迮つなり」、 会意 白と支とに従う。白は頭顱のはている。

陌 9 あぜみち・みち・さかいハク

ちあぜをいう。字が神梯の象である自に従うことか では南北を陌とするが、要するに田間の路、すなわ 爲す」、また〔玉篇〕に「阡陌なり」という。河東 「陌上桑」があり、 もと聖域の区画の名であろう。 に「路、東西を陌と爲し、南北を阡と 形声 声符は百。〔説文新附〕 | 四下 また「豔歌羅浮行」 漢の楽府

> に展開したものとみられる。 ともいう。もと門つけの祝い歌から、 物語的な内容

亳 10 殷の都の名

南

を伐つ。三年、亳と戰ふ。亳王、戎に奔る。遂に蕩丘〔史記、秦本紀〕に「寧公二年、兵を遣はして蕩社〕 魯には亳社と周社とあり、陽虎が叛いたとき、陽虎が湯の名号を称するもののあったことが知られる。 あるから、毫社は殷の遺民の奉ずるもので、なかに 社を滅ぼす」とみえる。注に「亳王、湯と號す」と 「亡國の社は蓋しこれを掩ふ。その上を掩うて、そ〔礼記、郊特牲〕に字を薄社に作り、〔公羊伝〕にはむない。〔公羊伝〕及びむる社の存したところであった。〔公羊伝〕及び祀る社の名は、 を加えたものであろう。秦の地にも亳社があって、の下に柴す(柴をおく)」というのは、のちの解釈 で、北亳・南亳の三亳があった。〔書、立政〕に、北の杜隆でなり」と地名に解するが、古くは西北の杜隆でなり」と地名に解するが、古くは西な門形の高い建物の形である。〔説文〕五下に「京な門形の高い建物の形である。〔説文〕 字であると思われる。上部は高の省文で、京のよう に用いられており、もと神を祀るところの意をもつ り託する形であろうが、宅・亳など建物に関する字 高の省文と弋とに従う。モは草がものに寄 陽虎が叛いたとき、陽虎

> き事実である。 子が、自ら殷人の後と称していたことも、注意すもっていたのであろう。陽虎の対立者とみられる。 の僭主的な独裁者の進退に関与するほどの、勢力を が、亳社の祀を奉じて聚居しており、当時なお、 盟うたのは、魯の封建のときに分与された殷民六族 たことが、〔左伝〕定六年にみえる。亳社においては魯侯及び三桓と周社に盟い、国人とは亳社に盟う 注意すべ

剝 10 さく・はぎとるハク

をもって奪うことを剝奪・剝削、はがれておちるこ 剝瓜・剝棗のように、果物を割く意にも用いる。力の字である。のち剝皮の意に用いる。また引伸しての字である。のち剝皮の意に用いる。また引伸して 〔詩、小雅、楚茨〕に「或いは剝し或いは亨る」の泉を刻と解するのは誤りで、もと獣の形である。 とを剝落・剝離、せわしくたたく音を形容して剝 思われる。すなわち殺・弑・毅などと、相似た意象 り、これを剝削するのは呪的な意味をもつことかと 〔箋〕に、「その皮を解剝する者あり。これを熟る者 の会意字とみられる。泉の形は紫をなす名と似てお あり」という。重文としてあげる字形は、骨と刀と 彔は刻なり。一に曰く、剝は割くなり」とするが、 取る意。〔説文〕四下に「裂くなり。刀・彔に從ふ。 の皮の象形で、錐もみの形の泉ではない。むしろ象なりではない。むしろ象ない。 に近い字形である。剝は刀をもってその獣皮を剝ぎ 15 会意 刀とに従う。录は毛の深い 獣皮の形である彔と

粕 かハ すク

とあり、 その精粋を失ったものを糟粕という。 〔説文新附〕七上に「酒の滓なり」 声符は白。酒をこした残りの

舶11 おおきなふね・ふね

とあり、 れた。舶来品を舶物という。 みえ、外国貿易が起るに及んで、その貿易に用 海上交通に用いる大船をいう。 毎上交通に用いる大船をいう。唐宋以後に声符は白。〔広韻〕に「海中の大船なり」 いら

字であるが、

博12 「博」12 ひろい・ おおきい・すごろく

∯t

で、字は干に従うものであろう。繋と声義近く、金を洛(川の名)の陽に轉伐す」とある博がその初文を洛(川の名)の陽に轉伐す」とある博がその初文を用いる。字が十に従うのは、[號文] にいうようを用いる。字が十に従うのは、[説文] にいうよう 形。その若木を土に扶植することを尃という。政令 専は甫と寸とに従う。甫は若木の根を縛って包んだ 受く」のように副詞に用いる。のちその意に博の字 より博大の意となり、また「專いに食く」「專いに專き、政を専く」のように、敷く意に用いる。それ *を施すことをそれにたとえて、〔毛公鼎〕に「命を り。十尃に從ふ。尃は布くなり」とし、 文にまた對伐の語があり、その仮借義とみてよい。 そに従ふ。専は布くなり」とし、亦声とする。声符は尊。〔説文〕三上に「大いに通ずるな



六博弈棋石盤(中山王墓)

代に博弈という遊びがあり、攻守兵法の義を寄せた とともに出土している。中山王墓の石製棋盤の文様 期の中山王墓や前漢馬王堆墓などから、その備品 博弈は六博弈棋ともいわれるもので、その器は戦国 博弈をして遊ぶ方がなお賢るという孔子の語がある。 すること終日にして、心を用ふる所無き」よりも、 べて対称的な図柄である。〔論語、陽貨〕に「飽食ものといわれる。面は九面、中央を除いて、他はす はのち専・敷の系列の字として用いられている。古 は、鏡の文様とも関連するところがあるようである。

搏 ¹³ うつ・たたく・とらえるハク・フ



子と搏す」の注に「手もて搏つなり」とあり、手搏るものであろう。〔左伝〕僖二十八年、「賢侯夢に楚なものであろう。〔左伝〕僖二十八年、「賢侯夢に解す と搏・索の畳韻をもって訓し、縛る意とする。 搏・縛の初文。〔説文〕二三に「索もて持つなり」形声 声符は尊。専は若木の根を堅く縛る形で、 また

干の形を加える。白・専・業の声にみな撃つ意があた。ものをもって撃つときには、「銃拳子白意である。ものをもって撃つときには、「銃拳子白線るときには縛といい、木の根を包んで縄をかける るのは、撃つときの擬声的な音による。 を敖(地名)に搏にす」とあって、また手搏をいう。 して争うことをいう。〔詩、小雅、車攻〕にも「獸

雹 ひょう・ひさめハク・ホク

粤

らんか」「九日辛未、 意であろう。ト辞に「真ふ。今二月に及んで、 ト文中に、申(電光の形)の両旁に小円点を加えてとして、雨の下に三つの小円を加えた字形をあげる。 がある。 形声 る。卜文の字は象形、雹はその形声字である。 るとき烈しい雷鳴・霹靂を伴うことがあるからであ 雲ありて北よりす。雹ふる」とあって、北雲のもた らすものとする。卜文の字が申に従うのは、雹のふ いる字形のものがあり、電光とともに飛散する雹の 〔説文〕二下に「雨冰なり」とあり、古文 声符は包(包)。包にまるい形のものの意 大采(朝の時刻の名)、 各れる 雹ふ

箔 14 すだれ・はく

るまぶし、すなわち蚕簿をいう。いず 尃は通用の関係にあり、拍と搏、箔と薄のように通 する字である。また金箔・銀箔の意に用いる。白・ し、すなわち蚕簿をいう。いずれも簿と通用声符は泊。もと簾をいう。また養蚕に用います。

用する字がある。箔をうつ技術は、唐のころ盛んと すぐれた金銀器の制作が行なわれた。

14 ほじし・ひらく・さらすハク

とは、磔殺のことであるが、また肉などを日にさら かった。 すことをいう。 することをいう。乾肉は当時軍用としても需要が多 たたいて板などに張りつけ、屋上で乾かし、乾肉と 「薄脯なり。これを屋上に膊す」とあり、肉をうちは、は、いものの意がある。〔説文〕四下に 〔左伝〕成二年「殺してこれを城上に膊す」 声符は専。専に搏つ、 また薄

たましい・からだ・しろいハク

文献には多く生魄・死魄の字を用いる。皮の白いことをいう。やはり生気のない 死覇の四週とするが、覇(霸)は雨にさらされた獣金文に月相によって一月を初吉・既生覇・既望・既金文に月相によって一月を初吉・既生覇・既望・既仮面であるから、もとより生気のないものである。 て類魄の若し」とあり、類面は鬼やらいに用いる面。柏の意。〔列子、仲尼〕に「南郭子を見るに、果し粕の意。〔列子、仲尼〕に「南郭子を見るに、果しれの意。〕 神の盛なり。魄なるものは、鬼の盛なり」という。 氣を魄と爲す、〔礼記、祭義〕に「氣なるものは、生を陽、死を陰とする。〔淮南子、主術訓〕に「地生を陽、死を陰とする。〔淮南子、主術訓〕に「地 を魄という。〔説文〕カームに「陰の神なり」とあり、 譲。精気を失って、白骨と化したものま。精気を失って、白骨と化したもの 声符は白。白は頭顱の形で髑 やはり生気のない白さである。 落魄とはお

> は分離するものとされた。 は天に歸し、死魄は地に歸す」とみえ、死して魂魄 ちぶれ果てた姿をいう。〔礼記、郊特牲〕に「魂氣

璞 16 あらたま

語である。木には樸といい、玉に璞という。 王に説くとき、璞玉の名を用いているから、璞は通 形声 の方言とする。〔孟子、梁恵王、下〕に、孟子が斉の末だ治めざるものを謂ひて璞と爲す」とあり、鄭 の未だ治めざるものを謂ひて璞と爲す」とあり、 るもの」とあり、〔戦国策、秦策〕に「鄭の人、玉 また樸素の意がある。〔玉篇〕に「玉の未だ治めざ 声符は業。業は撲、鑿して切り出すもの、

下 16 まじる・まだら

「椊ならば王、駮ならば霸」とあって、不純雑駮の王会解〕にも奇獣としてみえる。〔荀子、王覇〕に王会解〕にも奇獣としてみえる。〔荀子、王覇〕にま合わない。〔山海経、西山経〕に「中曲の山に声は合わない。〔山海経、西山経〕に「中曲の山に声は合わない。「終れを食ふ」とし、交声とするが、して倨い。 意とし、また駮議・駮正・駮論のように用いる。 と同字で、駁はその省文。駁はその慣用音である。 会意 をいう。〔説文〕一〇上に「馬の如くに 馬と交とに従う。交とは雑色 駁

薄 〔薄〕17 うすい・いやしむ・せまるハク

「林薄なり 」といい、 薄くする意がある。〔説文〕 一下に 形声 林叢の意とするが、字は厚薄 声符は噂。尊にものを搏って

膊

魄

璞

薄[薄]

罼

季子白盤〕に「博伐」に作り、その用法は博・製のまっている。〔詩、小雅、六月〕「玃狁を薄伐す」は、〔號いう。〔詩、小雅、六月〕「玃狁を薄伐す」は、〔號はた薄技・薄葬・薄謝・薄徳・薄菲・薄物のように 仮借義である。 「薄冰を履むが如し」のように用いる。また薄近のの薄の意に用いることが多い。〔詩、小雅、小旻〕 に不幸・軽微・僅少の意があり、薄幸・薄命・薄禄、 ることをいう。厚が幸慶を意味するのに対して、薄 薄りてこれを觀る」は迫の意。薄暮とは、暮夕に薄葉とし、〔左伝〕僖二十三年「その裸を觀んと欲し、意とし、〔左伝〕僖二十三年「その裸を觀んと欲し、 また薄近の

霏 雨にぬれた革・しろいハク・ハ

する。人の死を魄といい、さらされた獣屍を輩とい (覇)の初文。覇は生気のない月の白い光を示すた 革ではなく、さらされて色の脱けた獣皮で、霸ニー下に「雨、革を濡らすなり」というが、濡れた 軍 い、月光を覇という。 めに、鞏に月を加えた形である。字はまた魄と通用 会意 れて白くなった獣皮をいう。〔説文〕 雨と革とに従う。雨にさらさ みな同系の語である。

簙 18 すごろく

え、〔後漢書、梁冀伝、注〕に引く鮑宏の〔博経〕を計子、外儲説、左上〕〔孔子家語、五儀解〕にみ案書の間の語とする。局戯のことは〔列子、説されるとは〔列子、説されるとは〕を書の間の語とする。局戯のことは〔列子、説されるという。〕を言います。 形声 簙の初文。〔説文〕五上に「局戯なり。 声符は博 (博)。 博は博奕で

中 山王墓よりその遺品一式が出土した。を含えたます方がよいという孔子の語を録している。近時をなす方がよいという孔子の語を録している。近時 にその競技法を説くことが詳しい。〔論語、陽貨〕 飽食終日、為すところもなく過すよりは、 博奕

鎛 18 [鑮] 24 つりがね・おおがね・すきハク

器であるがその字に鎛を用い、〔周礼、鎛氏〕もま とあり、鎛鐘の意とする。斉の〔叔夷鎛〕は自名の 聲に應ずる所以なり。堵(セット)には二鑮を以ふ。り、「大鐘なり。淳于(楽器の名)の屬なり。鐘・するものであった。〔説文〕一四上にまた鑮の字があするものであった。〔説文〕一四上にまた鑮の字があ がある。〔周礼〕に鐏師の官があり、大鐘の鐏を鼓頌、臣工〕に「乃の錢(すき)鐏を莠へよ」の句に曰く、田器なり」とすきの意とする。〔詩、周とに曰く、田器なり」とすきの意とする。〔詩、周とし、田様木上の金華(金飾り)なり」とし、また「一 形声 から、編鐘のように数 た鎛を用いており、鎛がその正字。鎛は大鐘である 大樂を奏するときは、則ち鑮を鼓ちてこれに應ず」 声符は専。〔説文〕一四上に「鎛鱗なり。鐘

轉〕は一四二字に及ぶ四九二字、秦の〔秦公い。〔叔夷鎛〕は銘文 器を合せることはな

」は一四二字に及ぶ



その字を誤り、「国語、周語」の「韋昭注」に、「鏄大器である。のち鏄の知識が失われて、「説文」も大器である。 は小鐘なり」と注している。

バク

麦 (麥)1 むバ

**

る穀なり。秋に種ゑて厚く甕けす。故にこれを麥とふみを示すものであろう。〔説文〕五下に「芒のあふみを示すものであろう。〔説文〕五下に「芒のあ会意 旧字は麥に作り、來と女とに従う。 欠は麦 る。麦の熟するときを麦秋という。 年を贈る」とあるもので、すなわち大麦・小麦であ いたの嘉禾とは、〔詩、周 頌、思文〕に「我に來り、その嘉禾とは、〔詩、周 頌、思文」に「我に來り、う。周には始祖后稷が嘉禾をえたとする伝承があう。周には始祖后稷があ うことを示すものと、また異なる意味のものであろ 踏藉を示すもので、年・委のように穀霊に扮して舞う話を示すものにすぎない。夕はおそらく麦ふみ、そのていうものにすぎない。夕はおそらく麦ふみ、その 形訓、注〕にみえ、秋播夏収のことを五行説によっ |牧に従ふ」とする。金王・火王の説は〔淮南子、墜火王(夏)のときにして死す。來の穗ある者に従ひ、火王(夏)のときにして死す。來の穗ある者に従ひ、 謂ふ。麥は金なり。金王(秋)のときにして生れ、

莫ュ ひぐれ・くらい・おそい・なしバク・ボ

さに冥れんとするなり。日の茻中に在るに從ふ」と は日が重複する字形である。〔説文〕「下に「日ま いう。全体が象形的な構造の字である。莫と冥とは 没しようとするさまで、暮の初文。暮 会意 舞と日とに従う。日が草間に

> 墓中はもとより「常夜ゆく」世界である。墓に借用したかと思われる亜字形図象の例がある。 金文には明らかに旦暮の意とみられる用例はなく、 逆は心のたがうことのない友人、莫大は最大の意。 のように用いる。否定詞としての用法は、摩・ 定詞として、〔晋公蠡〕に「來王せざるもの莫し」 無・亡などと声が通ずることによる仮借である。莫 いずれも夕暮の時を示す字と思われる。金文には否 双声。卜文にはなお林夕・艸日に従う字があって、

寞 ¹³ しずか・さびしい

形声 意である。 その去るときは寞天寂地といわれた。幕天席地をひ 「野寂漠としてそれ人無し」と漠に作ることもある ねった語で、もうだれからも対手にされないという 方に行くときは驚天動地、幾月かたてば昏天黒地、 状などをいう語であろう。監察の官である御史が地 が、寂寞はともに廟室の静寂なさまで、また墓室の 声符は莫。寂寞をいう。〔楚辞、遠遊〕に

幕 13 まく・おおう

ものを幕下、幕府とはその本営をいう。酒徒劉伶、ころを幕営といい、その左右を幕僚・幕友、直属の の〔酒徳頌〕に、天地の間をかりの旅宿にたとえ きに携行して、陣営や宿舎に用いた。将軍のあると いわゆる天幕、旁にあるものを帷という。軍行の 「帷、上に在るを幕といふ」とあり、形声 声符は莫。〔説文〕七下に 声符は莫。〔説文〕七下に

句がある。 に、「天地を幕席と爲さば、富貴も泥沙の如し」のて「幕天庸地」という。白楽天が元徴之に和した詩

漢 13 さばく・さびしい・ひろい

通用の字である。雲の覆うことを漠々・冪々のようり」とあり、〔武帝紀〕にも「幕を絕る」とみえ、の李陵の詩と伝えるものに、「萬里を徑て沙幕を度」とあり、漠々とは広漠の意。〔漢書〕李陵伝〕が、「北海の流沙なり。一に曰く、淸きなが、 にいうのは、形況の語である。 声符は莫。〔説文〕一一上に

駁 14 まだらのうま・まじる・あやまるバク・ハク

であるが異形、その慣用を異にする字である。 駁議・駁論など、駮と同じように用いる。もと同字 の雑わるもので、それより雑駁の義となる。駁正・ 爻は色の相雑わるを示す形であろう。すなわち黄白色純ならず」とし、爻声の字とするが音が合わない。 の省文。〔説文〕一〇上に駮とは別に駁をあげて「馬 正字は駮に作り、馬と交とに従う。爻は交

夢 15 しずかなはかバク

えた形のものがあり、亞(亜)は玄室の形、莫は墓、 バク 金文の図象に、亞字形中に莫や犬を加 漠 声符は莫。莫に墓の意がある。

駁

嵾

縛[縛]

貘 瀑

藐

邈

で、墓の初文である。 う。莫夕に従う募は重複の字であるから、夢が正形 り、また蓼字条四下に「死して宋蓼たるなり」とい「説文」の夕部七上に蓼の字があり、「宋なり」とあ犬は犬牲を意味する。墓室のさまを示す字である。

縛 16 【縛】16 しばる・つなぐ・いましめる

「晉の襄公、秦の囚を縛す」のようにいう。降服の〔左伝〕僖六年「武王親しくその縛を釋く」、文二年 をいう。 陥ることを、自縄自縛という。 とき面を覆うことを面縛、自ら身動きならぬ状態に 文〕「三上に「束ぬるなり」とあり、束縛すること 木の根を縛る意より、人を縛する意となり、 形声 みこむ形で、縛はこれを縛る意。〔説 声符は専。専は若木の根を包

貘 17 獣の名・ばく

集〕などにみえるが、辟邪の力があるとされることむという。夢を食うという話は、わが国の〔節用むという。夢を食うという話は、わが国の〔節用 「貘なるものは象鼻犀目、牛尾虎足、南方山谷の中り」とし、豹の属とする。 古楽天の 〔貘屛讚序〕に蜀中に出づ」という。〔爾雅、釈獣〕には「白豹な蜀中に出づ」という。〔爾雅、釈獣〕には「白豹な た。〔神異経〕に名を鑿鉄といい、鉄を食い水を飲 圖すれば邪を辟く」とあり、呪霊のあるものとされ : 生じ、その皮に寢ぬるときは瘟を辟け、その形を 声符は莫。〔説文〕九下に「熊に似て黄黑色

から生れた話であろう。

瀑 にわかあめ・はやい・たきバク

瀑とは異なる。 飛流して以て道を界つ」の句がある。滝は早瀬で、意に用い、茶峠の〔天台山に遊ぶの賦〕に「瀑布 「終に風ふき且つ暴る」の暴は瀑の意。飛流瀑泉のま。 てしぶき、たきの義がある。〔詩、邶風、終風〕に曰く、沫なり。一に曰く、瀑質つるなり」とあっ 一上に「疾雨なり」とあってにわか雨。また「一 形声 される形で、急激の意がある。〔説文〕 声符は暴、暴は獣屍が日に暴

藐 18 はるか・ひろい・ちいさいバク・ビョウ(ベウ)

〔荘子、逍遥遊〕に「藐姑射の山に神人ありて居 藐** 鸏 る」とあり、 り」とは、若少の王子を人に託するときの辞である。 人の住む山。 仙洞御所の意にも用いる。また。おが国では「はこやの山」とよみ、わが国では「はこやの山」とよみ、 形声 の意とするが、字は形容の語に用 声符は貌。〔説文〕「下に紫草

邈 とおい・はるか・かろんずるバク

沙さに 「邈として慕ふべからず」とは、 り、邈と声義同じ。〔楚辞、九章、懐 彩声 声符は號。葉に藐遠の意があ 遠く隔絶す

を軽視することを邈視という。 附〕二下に「遠きなり」とする。 る意。〔方言〕に「離るるなり」とあり、〔説文新 藐と声義通じ、

さらす・かわかすバク

もと同じ形象の字。暴は暴露の義、皋は皋白の義でくのと同じく、筆画に相違するところがあっても、 であって日ではない。またその下部は、梟を皐と書を別字とするが、暴は獣屍の形で、その上部は獣頭・ 爾らざるときは、その時を失ふなり」とあって両形よかるのみ。日、中するときは必ず須く暴曬すべし。 り。ただ下少しく異なり。後人專ら輒ち傍日を加へ 訓、書証」に「古は暴曬の字と、暴疾の字と相似た 曝が作られた。すなわち暴の俗字である。〔顔氏家で、曝の初文。暴が暴虐の義に用いられるに及んで、 ある。暴に曝の意があり、曝はその繁文にすぎない。 声符は暴。暴は獣屍が日に暴されている形

爆 やく・はじけるバク

ような大音を発するものもあり、除夜などには喧噪が、のち火薬を用いる。また爆仗ともいい、霹靂(神楽器)にそのことがみえる。古くは竹を焚いた「紫雲) よって鬼を祓うもので、古くから用いられており、 灼裂の音をとる擬声的な語である。爆竹はその音に 火の勢いによってものが爆散することをいう。その 「灼くなり」、〔広雅、釈詁〕に「爇くなり」とあり、 れて乾き裂ける形。〔説文〕一〇上に 声符は暴。暴は獣屍がさらさ

を極める。

熹 20 まっしぐら・にわか・たちまちバク

てまっすぐに進むことを驀進・驀然・驀地という。「馬に上るなり」とあり、馬を走らせ 地は的と同じく、状態詞を作る助詞である。 声符は莫。〔説文〕一〇上に

う。發(発)は並に従うて左右同時に進む意、別は左右に両分すること、半は性体を両分することをい

骨節を別つ字であるが、みなバラバラにするという

意を示すもので、指示とみてよい。分は刀をもって

の声義をとるものであろう。すべてものを両分する

形について「分別して相背く形に象る」という。背

なり」とは、八と別と近似の音によって訓し、その によって、数の八を示す。〔説文〕ニトに「別るる

畑 9 [島]10 はた・はたけ

捌10

えぶり・さばく・やつハチ・ハツ

同じ系統の語である。

쎎

形声

声符は別。穀物をかきさらえ

レシュー 「Mark of Mark 国字 「人ごとに火田の黴(税)を納れしむ」の句がある。 のち焼畑の意にも用いる。白楽天の〔東南行〕に国で火田というのは、古くは狩猟のことであったが、 もの」がある。古くは焼畑耕作がひろく行なわれて 一八・四一三三に「植ゑし田も蒔きしはたけも」とあ いたので、このような字が作られたのであろう。中 り、さきの〔日本紀私記〕の訓にも別に「はたけつ 火と田とに従う。焼畑。水田を田というの

鉢 13

はハ ち・ハツ

の字を用いる。

書や証書の類に、改竄を避けるため、八に代えてこ

くの意を生ずる。わが国では捌くとよむ。また公文

のあるものは世。これでものをかきわけるので、

は、「えぶり」、歯のないものが捌、

捌き歯

形声

正字は盋に作り、犮声。仏寺で使う食器 Pā

ハチ

2 やハ つチ

両分の形。左右に両分して数える数えかた

を著けるとき、下の烏帽子を締めるためにしたものて茶筅売りをしたなごりといわれる。鉢巻きは、兜用いられた。鉢たたきは、空也の一門が鉦をたたい鬼いられた。鉢たたきは、空也の一門が鉦をたたいになっている。

である。今は頭に直接に巻きつける。

指事

ハツ

犮5 はらう・ころす ているものがあり、いわゆる伏瘞である。秦の伏祠にれるもので、宮廟や聖所の奠基や祓・護のために、田いるもので、宮廟や聖所の奠基や祓・護のために、生物に斜点を加えることが多い。犬性は修祓のため性体に斜点を加えることが多い。犬性は修祓のため姓体に斜点を加えることが多い。犬性は修祓のためた。 承けるものである。 の形はいくらか異なるが、家・家・墜・遂などのれるさまをいう擬声語である。友は犬牲の形で、それるさまをいう擬声語である。 刺发たり」という。刺发とは、足がばらばらにみだ にも、犬牲を用いた。 犬に從ひてこれを了く。その足を曳くときは、則ち **犮声の字は、みなその声義を**

誓气

会意

婺

くさをかる・のぞくハツ

帗 8 まいの名・ひざかけハツ・フツ

なわち蔽黻、礼装用の前かけの意に用いる。 | W舞は修祓のための舞楽であろう。社稷の祭祀のをつける。それは呪的な意味をもつものであるから、をつける。 色の繒を手にもって舞うもので、その上に全羽の綫をが、〔周礼、舞師〕〔楽師〕に帗舞の名があり、五さい。〔説文〕七下に「一幅の巾なり」とあい。 ときに、 妙舞を舞う定めであった。字はまた市、 形声 声符は发。发は祓の初文。 す

発 。

【多】12 いる・すすむ・おこる・たつ

金部一四上に爨の字があり、「兩刃木柄、以て草を刈

初文。〔広雅、釈詁〕に「撥は除くなり」とみえる。 というのも、除草のことをいう。登はおそらく撥の とるという。〔左伝〕隠六年、「これを芟夷蘊崇す」

るべし」とみえるものが、その器である。

やどる・いおりハツ・フツ

会意 は左右の足をそろえて、出発を用意する姿勢。下部 旧字は發に作り、量と弓と殳とに従う。 址

> 策、斉策」「將を發してこれを撃たしむ」のように 載駆〕、齊子(斉の若ものたち)夕に發す」、〔戦国ぎょうです。 まず射儀を行なう定めであった。それでことをはじ す」とあり、およそ儀礼・饗宴をはじめるときには、 が多く、〔詩、小雅、賓之初筵〕に「彼の有的に發して発するのである。射は儀礼的な意味をもつことして発するのである。射は儀礼的な意味をもつこと るなり」と発射の意とするが、それは攻撃の相図とを告知する意であろう。「説文」一二下に「鉄、發すを告知する意であろう。「説文」一二下に「鉄、發す は弓を射る形。攻撃に先だってまず弓を発し、開戦

となったとき、晋の大夫が反首(乱れ髪)茨舎(草伝)僖十五年、晋侯が秦と韓原に戦うて敗れ、捕虜伝」権・五年、晋侯が秦と韓原に戦うて敗れ、捕虜いま茇に作り、〔箋〕に「草含なり」という。〔左

〔詩、召南、甘棠〕「召伯の废りし所」の句を引く。 〔説文〕 れ下に「舍るなり」として、

九下に「含るなり」として、声符は发。太は犬牲をいう。

また古く呪的な祓いとしての意味をもつ行為であっ舎)してこれに従ったとしるしているが、草宿りも

た。废は犮の声義を承ける字である。

ことを発覚、にわかに起ることを発狂・発作という。 発明、心より発することを発憤・発心、あばかれる 明けを明発、また発動・発揮、新たに知られることを いう。 の場所、そこより発足する。発足・発起の意より、夜 中山王墓の字は立に従うており、立は儀礼

髪 1 【髮】15

氏〕に、夏至にこれを夷り、秋に芟り、冬には料きて艸を蹋夷す(ふみならす)」とあり、「周礼、薙がない」とあり、「別れ、薙がない」とない。「説文〕ニ上に「足を以をふみ固めることをいう。「説文〕ニ上に「足を以

殳は芟の省文で、草を刈る意。草を刈り、両足で土*

そろえて、前方に出発する姿勢を示し、 量と
殳とに従う。
量は両足を

な呪儀的な意味を失って形声字となったものと思わ 譲の儀礼を意味する字であったが、 ……た形の字であるから、もとは形声の字でなく、祓れた形の字であるから、もとは形声の字形に似ている。犬牲を示す犮と、首とをなら る。また重文二を録するが、第一字は〔盟由〕に称音義〕に引く〔説文〕に「頂上の毛なり」とみえ称音義〕に引く〔説文〕に「頂上の毛なり」とみえ形声 声符は攻。〔説文〕ヵ±に「根たり」「表 馬の状態を述べて「髪の敚きもの」という語があり、 声符は犮。〔説文〕丸上に「根なり」、〔慧 のちそのよう

鹨 門路

ハツ 犮 帗 废 癹 発[發] 髪〔髪〕

授 15 おさめる・はねる・あばく

(発) はじめる意がある。〔説文〕ニニ上に「松う曲矢を以て中つること能はず」とは、弓のだれ接めて、これを正に反す」とみえる。〔説文〕ニニ上に「松う曲矢を以て中つること能はず」とは、弓のに「极弓曲矢を以て中つること能はず」とは、弓のに「极弓曲矢を以て中つること能はず」とは、弓のに「松の正しくないもの。また〔礼記、曲社、上〕に「衣は撥ぬること冊れ」とあって、その文は蹶・越に指摘す。「格務訓」に「琴或いは撥剌枉橈す」の撥と作論で、おきにいう字があり、口は都邑、址はその古音があったのであろう。と地は上り、撥にその古音があったのであろう。と神韻しており、撥にその古音があったのは、場にが書いる意で、都邑を寇略することをいう。發(発)。発に攻撃をを寇略することをいう。發(発)。そに退という字があり、口は都邑、址はそこに乱入する意で、都邑を寇略することをいう。發(発)。そに政撃をを逃れる意があり、口は都邑、址はそこに乱入する意で、都邑を寇略することをいう。發(発)。そに攻撃をを逃れるところがある。

一般 5 そそぐ・はねる・まく

形声 声符は發(発)。発に発散の意がある。〔玉地という。愛刺は魚のはねるさまをいい、水墨にお地という。愛刺は魚のはねるさまをいい、水墨において墨の勢いを用いる画法を愛墨、忘年会のことをいて墨の勢いを用いる画法を愛墨、忘年会のことをいて墨の勢いを用いる画法を愛墨、忘年会のことを

魃 15 ひでり

こうこうかい はなるないのであれたのでいるのでは、

大荒北経]に「保民の山あり。人あり、青衣を衣る、大荒北経]に「保民の山あり。人あり、青衣を衣る、黄帝の女魃といふ。蚩尤、兵を作して黄帝を伐つ。黄帝乃ち應龍をして、これを冀州の野に攻めしつ。黄帝乃ち應龍をして、これを冀州の野に攻めしむ。應龍、水を畜ぶ。蚩尤、風伯雨師に請ひて、大郎、麓に蚩尤を殺す。魃復上ることを得ず。居る所む。遂に蚩尤を殺す。魃復上ることを得ず。居る所む。遂に蚩尤を殺す。魃復上ることを得ず。居る所む。方によると、女魃は人の形にして禿、長は紀、三尺、目は頂にあり、遠行すること風の如く、このあらわれるところは、赤地千里に及ぶ大旱を受そのあらわれるところは、赤地千里に及ぶ大旱を受けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〔詩、大雅、雲漢〕に「旱魃、虐を爲けるという。〕、

19 かも

バツ

伐 6 うつ・きる・ほこる

陈析

う。〔説文〕ハ上に「撃つなり」、また「一に曰く、一人を斬るを伐といい、多くのものを斬るを**とい会意 人と戈とに従う。戈をもって人を斬る形。

取るなり」というが、字は明らかに斬首の形である。 ト辞に「三十羌を伐さんか」「十羌又五を伐さんか」 のようにいうものが多く、これらが殷墓のいわゆるのようにいうものが多く、これらが殷墓のいわゆるのまうにいっものであろう。また征伐の意に用い、外敵を討伐することをいい、またその武功を伐という。「でかっ。斬首の数をもって、その武功を数えるからである。軍功を旌表することを伐乾という。「での本字はた。世々伐旌のことのある家を関といい、名門とされる。斬首のことよりして、すべて器をもってものを切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、を切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、を切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、を切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、を切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、を切る意に用い、伐木・伐柯・伐水のようにいい、方。「たった」となり、「たった」「いった」となり、「かった」となる。またものをそこなう意となり、「だった」「かった」とは、いきたなく飲むものをいい、を伐ふと謂ふ」とは、いぎたなく飲むものをいい、を伐ふと謂ふ」とは、いぎたなく飲むものをいい、を伐ふと謂ふ」とは、いぎたなく飲むものをいい、を伐ふと謂ふ」とは、いぎたなく飲むものをいい、を伐ふとである。

抜って抜」のぬくことるこひく

菱の「废」のかどる・くさのね

筏12 「撥」16 いかだ

冶長〕に「道行はれずんば、桴に乗じて海に浮ばで、また筏舫という。古くは桴を用い、〔論語、公で、また筏舫という。古くは桴を用い、〔論語、公派をさめを桴という。筏は竹を編んで水を渡るものを桴という。筏は海中の大船なり」とあり、小紅が大きに「撥は海中の大船なり」とあり、小彩声 声符は伐。正字は綴に作り、發(発)声。形声 声符は伐。正字は綴に作り、發

茇[皮]

筏(棳)

跋

罰(罰)

がみえる。

好 2 パッ・ハッ・ハイ

割 4 国計 15 つみ・とがめ

图

を原義とする字である。〔説文〕四下に「皐の小な意味する言が、真正でないときに、その上に関を加えてその器を敗り、その盟誓は破棄すべきもえて、その盟誓が不実であることを示す字。それにえて、その盟誓が不実であることを示す字。それにという。言は神に盟誓することを会意 言と刀とに従う。言は神に盟誓することを

職金」に「士の金罰貨罰を受けて、司兵に入るるこ あるから、 とした神明に対する背信について課せられるもので 対する違背行為であり、従ってそれは、盟誓の対象 鼎〕に、軍律に背くものに対して「廼ち罰す」とあ 「天の罰を致す」とあり、もと天罰をいう。〔師旂る〕の舎・害と同じ意象である。〔書、湯誓〕に の器である世に対して刺割を加える「舍つ」「害すぶし、刀はこれに刺割を加えて破棄する意で、祝禱 に屋を架するのと同じく、神明の咎を受けることを である言の上に网をきせるのは、たとえば亡国の社ら、一般の刑事犯と異なるところがある。盟誓の書 ば宣誓に反して偽証するという性質のものであるか が、罰はそのような肉刑ではないから、「辠の小な 刑を施すことで、いわゆる肉刑に属するものである 辜がその本字。皋・辜はいずれも辛に従い、入墨の - : : : ららげ、罪害はいずれも魚網をいう字で、辠して無効にする意である。刑罰の字に罪罟を用いるしてカラトオー ちまさに罰すべし」と説くが、网も刀もみな言に対 るものなり。刀詈に從ふ。未だ刀を以て賊する所あ の語を載せている。これらはいずれも盟誓・誓約に るもの」という。罰は盟誓に関するもので、たとえ して加えられているものであり、その盟誓を不正と らざるも、ただ刀を持して罵詈するのみにても、則 贖罪的な性質をもつものである。「周礼」

14 いさお・いえがら

> () ることである。 ることである。

第 16 はなし

の用法である。 国字 新しいおはなしというほどの意であろう。 ような意味を与えてのことであろう。 みな近世以来ような意味を与えてのことであろう。 みな近世以来

ハン

反 4 かえす・そむく

(直) ければ、千萬人と雖も音往かん」という語がある。自反とは反省というに同じ。

半5「半」5 わかつ・なかば

单 **企**

象形 半体の肉の形。上部の八はその両分する意を示す。〔説文〕二上に「物、中分するなり」とし、を示す。〔説文〕二上に「物、中分するなり」とし、分つべきなり」と牛を両分する意とする。〔秦公設〕に附刻する字や、戦国期のものに、牛に従う字形がに附刻する字や、戦国期のものに、牛に従う字形がに附刻する字や、戦国期のものに、牛に従う字形がに附刻する字や、戦国期のものに、牛に従う字形がに対して金半鈞」のような用法がある。副・部・判などの方なその頭音が同じで、両分の意のある字である。

12 5 かぶ・はびこる・ひたす・ひろい

である。〔大保設〕に「厥の反するにおよんで、王、崖下の聖所、それを攀援するのは、神聖を冒す行為

形面 声符はピ。 じは人がうつ向けれていが、汎は広汎の意である。

犯 5 おかす・たがう・やぶる

会意 獣の形と吐とに従う。 Pは人の俯す形であるから、そのままに解するとするが、わが国の「大一蔵を記していうところの「香れば、わが国の「大一蔵を記していうところの「香れば、わが国の「大一蔵を記していうとなら」と法にふれる意とするが、原義はタブーを犯する意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をする意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をする意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をする意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をする意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をおきことをいう。のちすべて法規を破り、他人を侵犯する意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をおきいう。のちずべて法規を破り、他人を侵犯する意に用いる。本来犯罪とは、神に対する冒瀆をおきなり」とおり、そのき厳を冒すを犯という。終さまた。

形声 声符は凡(凡)。凡は風の声符であり、そ の省文。[釈 名、釈船]に「帆は泛なり、風に隨ひ の省文。[釈 名、釈船]に「帆は泛なり、風に隨ひ らしむるなり」とあり、舟行に帆をあげて風力を利 用した。三国以来、江南に事多く、水軍も編成され て、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 て、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 で、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 で、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 で、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 で、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟 で、帆柱を立てた大帆船が作られている。一般の舟

孔 6 うく・ひろい・ただよう

を受けて早く流れる意である。

伴って伴りつつれいともがらいともなう

学の意となる。伴読は侍読、伴食は正客に随うて陪伴の意となる。伴読は侍読、伴食は正客に随うて陪れ、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての用義で、伴は伴が、それは伴奐という連語としての意となる。

食する意。伴奏とは助奏をいう。

判っ【判】マカかれる・わかつ・さばく

両分する意で、天地の上下に分れるを剖判という。 を示す。〔説文〕四下に「分つなり」という。 ことを判という。 判断もまた同じ。法令の備わらない時代においては、 するので、その文書を判書といい、花押のようなかった。その両分する部分に、割印として印判を押捺った。 すべて重要な約定は、同版にそのことをしるし、そ 夫婦の約をなすこと。いまでいえば婚姻届である。 となり、「周礼、媒氏」「萬民の判を掌る」とは、のち両分して左証とすることより、契約を証する意 判決例が判定の基礎となるので、判決文や判例集の ものであるから、審判といい、判決・判定という。 う。その文書によって契約上のことを審理裁定する きはんを判押といい、印を用いるときには印判とい れを両分して、それぞれ証として保持する定めであ 形声 両分した形。判は刀を加えて両分の意 声符は半(半)。半は牛牲を b

手っ ちりとり

る器」という。箕に長い柄をつけたもので、竹を編以の器なり。象形」とあり、「玉篇」に「糞を棄つ以の器なり。象形」とあり、「玉篇」に「糞を棄つ以の器なり。象形」とあり、「玉篇」に「糞を棄った。 (まではかき集めるのに用いき、ごみをおしのけます。

ハン

犯

帆[帆]

汎

件[件]

判[判]

を畢する器である。 んで作る。畚・糞と声義が近い。棄はこの字に従う 子を棄てる意。畢は上部が網となっていて、 鳥

坂 さか・つつみ

字である。坂は堤防を築いたところや、山脇の坂道 作る。阪は神梯を示す自に従う字で、聖所に関する坂とはそのような急坂をいう。〔説文〕一四下に阪に をなしているところをいう。 声符は反。反に攀援、よじのぼる意があり、

うかぶ・ひろいハン・ホウ

泛覧・泛論は汎の意である。 流屍をみることも多かったのであろう。兆々古代にあっては、大洪水のときなどに、このような る。土に埋めるのを突、その上を覆うのを変という。いう字で、氾は俯している屍、泛は仰向けの屍であいう字で、氾は俯している屍、泛は仰向けの屍であ う。〔説文〕一上に「浮ぶなり」というが、 死者の漂流するさまを泛、また心とい形声 声符は乏。乏は死者の象。水 流屍を

米, けもののつめ・わかつハン・ベン

*

加えると、番となる。番の初文とみてよい字である。象形 獣の爪の形。この下に掌の象形である田を 「説文」ニ上に「辨別するなり」とし、「讀みて辨の 若くす」という。重文として録する古文の字形は平

である。釆をこの字のままで用いた例はない。 (平)と似ており、平にも便の音があるが、別の字

阪7 さか・つつみ・けわしハン

いい。 「ないであるう。〔書、泰誓〕に「宮室・臺 たとえたのであろう。〔書、泰誓〕に「宮室・臺 たとえたのであろう。〔書、泰誓〕に「宮室・臺 たとえたのである神田にあって、ひとり栄えるものに る周の王室に、ひとり権勢を、恣にする褒姒のこと苗)あり」というのは比喩的な表現で、危亡に瀕す苗)あり」というのは比喩的な表現で、危亡に瀕す正月」に「彼の阪田を贈るに「菀たる特(一本の理所に設けられている急坂を阪という。〔詩、小雅、聖所に設けられている急坂を阪という。〔詩、小雅、 日く、澤障なり。一に日く、山脅なり」とあり、る。〔説文〕一四下に「坡なるものを阪といふ。一に光は、大きなでは、大きなではなるものを下といふ。一に光声の一声符は反。反に紫茫然、よじのぼるの意があ なわち聖職者を意味する語のようである。 も「阪尹」の語があり、険峻のところにある尹、すいる坂を阪といったものであろう。〔書、立政〕に が、このような神殿的構造をもつ高台に設けられて 阪なり」とあって互訓。自は神梯の形であり、その坂のほか堤、山脇の義があるとする。前条に「陂は

拌 すてる・さく・まぜるハン

き割る意である。拌蚌とは、貝を割って中の珠をと木を撃つときは、則ち拌く」とあるから、もとたたた ること。いま攪拌のように、まぜかえす意に用いる。

板。 いた・ふだ・はんぎハン・バン

板々たり「下民卒く癉む」の〔伝〕に「板々とはがりすることを悼む詩である。〔大雅、衆 〔伝〕に「一丈を板と爲す」とあるのは、 形声 反するなり」とあって、道を失う形容の語とする。 とは、徳望ある武将が没して、板屋のうちにかりも 小戎〕に「その板屋に在りて「我が心曲を亂る」といる。」といる一堵の版の大きさをいう。また〔秦風、き用いる一堵の版の大きさをいう。また〔秦風、 とが多く、もと同源の語とみてよい 板刻は木版、その本を板本という。版と通用するこ を用いた。〔詩、小雅、鴻雁〕「百堵みな作る」 板は古い字書にみえず、古くは書版のように版の字 の図象に、木にヨキを加えている形のものがある。 はその板のそりかえる意をもつものであろう。金文 声符は反。薄くそぎとった木片をいう。反 版築のと の

泮 8 〔類〕14 泮ハ 宮ン

ある袢宮をいう。郷射は、儀礼の際にその儀場を從ひ半に従ふ。半の亦聲なり」とあり、魯の神廟で從ひ半に従ふ。半の亦聲なり」とあり、魯の神廟での宮なり。西南を水と爲し、東北を牆と爲す。水にの宮なり。西南を水と爲し、東北を牆と爲す。水に がある。〔説文〕 一上に「諸侯鄕射形声 声符は半(半)。半に旁の意 声符は半(半)。半に旁の

版 解けることを泮換という。それが字の原義であろう。 「冰の未だ泮けざるに迨べ」という句があり、 うとされるが、漢碑に畔に作ることもあり、 にほり、ことともある。〔詩、邶風、匏有苦葉〕た賴に作ることもある。〔詩、邶風、匏有苦葉〕 泮宮は半ば水をめぐらしたものであるから泮宮とい る。辟雍は水をめぐらした中央に明堂を建てるが、 京、辟雍の儀礼では、この射儀を行なうのが常礼でいる。時確の儀礼では、この射儀を行なうのが常礼で議で、西周期の金文にみえる。その神都であるない。 あった。泮宮は魯の神廟であり、諸侯の辟雍にあた いた・はんぎ・ふだハン 字はま 氷の

う。のち字をしるす書版に用いて版牘といい、また 城壁や土垣などはこの方法で築く。その板を版とい 中間に土を入れてこれを撞き固めるのが版築の法で、 版木の意とする。 はなく、版築のとき両側にあてる牆板の形。その 形声 に「半木なり」とするが、半木の象で 声符は反。片は〔説文〕七上

叛。 そむく・わかれるハン・ホン

及んで、形声字の叛が作られたのであろう。 すべて反といい、反が叛の初文。反が多義化するに その義に用いる例をみない。金文では叛乱・謀叛を たのであろう。〔説文〕二上に「半なり」というも、 って守られている聖地への、叛逆的な行為を意味し 形で、その攀援することが、急阪によ 声符は半(半)。反は攀援の

胖 范 班 般

> 胖 かたみ・ゆたか・やすらかハン

戦場で矢槍を防ぐのに用いる。 胖なり」のように用いる。 胖襖は綿入れの短衣、タヒメッ 「ストタッ」「心廣く體ある。 肉の最もゆたかなところ。 [大学]「心廣く體 とは「膺肉なり」の誤りで、いわゆる膴胖、片身でうに用いる。〔説文〕にまた「一に曰く、廣肉なり」 [儀礼、少牢礼]に「司馬、羊の右胖を升す」のよ「半体の肉なり」とあり、両分して脅しの肉をいう。 形声 体の肉で胖の初文。〔説文〕ニ上に 声符は半(半)。半は牛の半

范。 かた・いがた

るが、 鋳型の義にも用いる。土は型、木は模、竹は笵であいぎ。 かんじょう おいがながら かいがん かんしゅう まいの でいき いっち 范はもと土范の字で、 形声 なり」というもその用例なく、 声符は況。〔説文〕一下に「艸 土器の制作と関係ある 土笵・

陽范 陰范 合范

に関する名と思われる。 字であろう。地名や氏姓にみえる范は、 土器の制作

班10 わかつ・つらねる・ならびハン

班 ĨĤ_∞ 班

会意 珏と刀とに従う。 珏は一連の玉。これを分

> える。頭髪の白黒相雑わるを班白の人という。〔孟子、公孫丑、上〕に「是の若く班しきか」とみ分つことをいう。両分したものは均等であるから、 爵・班秩は爵秩を分つこと、班田は田土を等分にい、その一系の玉、班位・班次の意となる。班である。両者を合せて一朋、両分したものを班といである。両者を合せて一朋、両分したものを班とい 頒つ」の文による。瑞玉としては圭などを用いるがり」とあり、〔書、舜 典〕の「瑞を群后(諸侯)につことを班という。〔説文〕」上に「瑞玉を分つな 朱絲を以て玉二穀を繋く」とあり、その系を切るの に両分することをいう。〔左伝〕裏十八年「獻子」 班は玉の綴りである玉朋を両分する意で、 朋を左右

畔 (畔)10 あぜ・さかい・き-

り」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣り」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣り」とあり、あぜをいう。飯と連話である。〔詩、大雅、皇矣〕「帝、文王に謂ふ 然く畔撲すること無かれ」の「帝、文王に謂ふ 然く畔撲すること無かれ」の「策」に「跋扈なり」、また「大雅、巻阿」「爾の游「寒」に「跋扈なり」、また「大雅、巻阿」「爾の游「寒」に「ひき」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣り」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣り」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣り」とあり、あぜをいう。飯と通用して畔逆・畔臣 畔 形声 がある。〔説文〕「三下に「田の界な 声符は岩(半)。半に旁の意

般10 めぐる・はこぶ・たのしむハン

く、漢魏以後の語である。[荘子、『七方』に足をってみえ、[広雅、釈詁]にみえる便旋などと同じってみえ、[広雅、釈詁]にみえる便旋などと同じなど。『松野』などに至然は多く円形のものであるから、それで般旋の義を 敖す」、〔尽心、下〕「般樂飲酒す」のようにいう。遊樂のためであり、〔孟子、公孫丑、上〕「般樂意遊樂のためであり、〔孟子、公孫丑、上〕「般樂意味の形にしるす。舟はすなわち盤、これを撃つのは *ををできる。〔説文〕ハ下に「辟くるなり。舟の旋る意となる。〔説文〕ハ下に「辞くるなり。舟の旋る 伝〕に「樂なり」という。 せ、 りまるくする形から出た語であろう。〔詩、周 頌、質のように投げ出して坐ることを般礴という。やは 第のように投げ出して坐ることを般礴という。 ト辞には||数実の名を凡と庚との合文の形にしるしてさす形ではない。ト文、金文にその字がみえ、特に し、舟に棹さして方向をかえる意とするが、殳は棹 に象る。舟に從ひ、殳に從ふ。殳は旋らすなり」と 般〕は巡守して四岳河海を祀る詩とされ、般は〔毛 いる。凡は舟の形に作り、また金文の般も明らかに り、また楽器として撃つことから般楽(楽しむ)の のものを挹みとる形とも、また盤を撃つ形ともみえ 盤にものを入れて運ぶので運搬・盤旋の意とな 舟と殳とに従う。舟は盤の象形。殳は盤中 古くからその義に用いた

第 11 かた・のり

を示す字であるという。笵・法は双声の訓である。 氾聲。古法に竹刑あり」として、いわゆる竹刑り。氾聲。古法に竹刑あり」として、いわゆる竹刑をした。 [説文] 五上に「法統一

竹刑は〔左伝〕定九年にみえ、鄧精の作った刑法とけれるものであるが、これを笵とよぶ例はなく、笵されるものであるが、これを笵とよぶ例はなく、笵されるものであるが、これを笵とよぶ例はなく、笵されるものであるが、これを笵とは「鋭といい、大には型という。大きを制作するときに、まず土をねり、模笵を作ってその形を定めるもので、一般を用いるのが正字である。竹刑の説は、刑書は必ずしも竹刑に限らず、春秋期には趙鞅・荀寅が刑罪を作り、子産が刑書を持たと伝えられている。範ずしも竹刑に限らず、春秋期には趙鞅・荀寅が刑罪を作り、子産が刑書を持たと伝えられている。範ずしも竹刑に限らず、春秋期には趙鞅・荀寅が刑事を作り、子産が刑書を持たと伝えられている。範でとは、一般に対している。を記述している。である。本代では、一般に対している。を記述している。である。本代では、一般に対している。を記述している。を記述している。を記述した。

絆 11 きずな・つなぐ

Whit 形声 声符はは(半)。[説文] 一三 いからめて自由を失わせることを、編料・部絆といからめて自由を失わせることを、編料・部絆といからめて自由を失わせることを、編料・部絆という。

駅 11 ひさぐ・うる・あきない

斑12 「辨」18 まだら・わける

林 12 まがき

- を組んだ形。〔説文〕三下に「藩なり」 会意 林と爻とに従う。爻はまがき

まみな樊を用い、馬の腹帯をも樊纓という。
と豊韻をもって訓する。〔詩、斉風、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉風、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉風、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉風、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉風、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉順、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉順、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉順、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、斉明、東方未明〕のと豊韻をもって訓する。〔詩、本代

飯 1 (飯) 13 かし・くらう

朝御

珠という。無為徒食の徒を罵って飯袋・飯嚢という。 に「黍を食ふには箸を以ふることのれ」とあり、また「飯を摶むること母れ」とあるから、指で食べたて「飯を摶むること母れ」とあるから、指で食べたた「飯を摶むること母れ」とあるから、指で食べたた「飯を摶むること母れ」とあるから、指で食べたで、親指の根もとを飯という。また口中に含むことで、親指の根もとを飯という。また「飯をする」という。無為徒食の徒を罵って飯袋・飯嚢という。形声 声符は反。「説文」玉下に「食ふなり」と

搬 13 はこぶ・うつす

後起の字である。古くは般を用いた。 ちれた。古い字書にみえず、元明以後に用いられ、 的なだに用いる。のち運搬の字として搬が作 といっであり、また盤中に食事を入れて運ぶので、 のがであり、また盤中に食事を入れて運ぶので、 のが作

煩 3 ハン・ボン

ときの姿。〔説文〕ヵ上に「熱にて頭会意 火と頂とに従う。頁は儀礼の

2

飯[飯]

搬

煩

頒幡樊

痛むなり」と火を熱と解するが、身熱の意とするの は無理である。また「一に曰く、焚の省聲なり」と り。これを治むる莫きなり」の注に、「煩言とは忿 り。これを治むる莫きなり」の注に、「煩言とは忿 争なり」とあり、煩労・煩冤の意となる。火は赤・ 争なり」とあり、煩労・煩冤の意となる。火は赤・ ももとその意があったものと思われ、煩冤を祓うこ とを煩といったのであろう。

13 大きな頭・わかつ

15 のぼり・はた・ふきん

七下に「書兄、觚を拭くの布なり」とあって、いわという。「説文」というと動くものをいう。「説文」といるという。「説文」とは、『常の形。本は獣の『常の形。

ゆる黒板拭きのような布の意とする。觚とは書版で、古くはこれを削って使用したが、のちには粉板とよぶ黒板式のものが用いられた。しかし幡の初義はおそらく権で 旗竿に著ける旗ぎれ、幡搾をいう。また直巾ともいわれるもので、「磯などの類である。そのひるがえるさまを、番々という。「漢書、鮑宣伝」に、鮑宣がときの宰相を告発して捕えられると、大学の諸生千余人が幡を掲げて行進し、その放免を要学の諸生千余人が幡を掲げて行進し、その放免を要学の諸生千余人が幡を掲げて行進し、その放免を要求した。紀元前のことである。また書には古く織帛の類を用いたが、のち細長く切った形のものを用い、「大きないった。材質はなお帛であるから、帛書という。歌ばして何度も用いるものには油素があり、青鷺畑のころから行なわれていたようである。字の本義は旗で、〔詩、小雅、資之初筵〕に「威儀幡々たり」とあり、翩跹というのと声義が近い。〔孟子、り」とあり、翩跹というのと声義が近い。〔孟子、り」とあり、翩跹というのと声義が近い。〔孟子、り」とあり、翩跹というのと声義が近い。〔孟子、り」とあり、翩跹というのと声義が近い。〔孟子、り」とあり、翩跹というのと声義が近い。「本社、大きないった。」

株 15 まがき・とりかご

帰るの詩」に「久しく樊籠の裡にありしも、復自然れて行かざるなり」とあり、繋ぎとめられる意とすれて行かざるなり」とあり、繋ぎとめられる意とするが、株は樊籬(まがき)を示す字であるから、そるが、株は奘籬(まがき)を示す字であるから、そるが、株は野とに従う。株はまがき、平は両手で女意が、株と特とに従う。株はまがき、平は両手で

に反ることを得たり」の句がある。

米田 15 しろみず・うずまき・あふれる

・腕 15 きずあと・あとかた

あり、未開社会になおその風を存するものがある。という、大学を加える絵身と、外刀などで肉を傷つけて文様とする瘢痕とがでは、朱など文様を加える絵身と、針で入墨するの法に、朱など文様を加える絵身と、針で入墨するの法に、朱など文様を加える絵りと、針で入墨すると、小刀などで肉を傷つけて文様とする瘢痕とがある。という、一般になっている。

年 15 軍の出行のまつり・かた・のり

範 學?

一四上に「範載なり。車に從ひて、笵の省聲」とすいう。軋も戦も、みな犬性に従う字である。〔説文〕するとき、犬性をひいて、車を清めて出発する礼を形声 声符は戦。軋は戦戦。軋戦は軍などが出行

まカテゴリーの訳語に用いる。 「書、大学で、土宛を治、木で作ったものを構という。それ字で、土宛を治、木で作ったものを構という。それ字で、土宛を治、木で作ったものを構という。それの語があり、自然界の原則をいう。第1はまた範型をいうるが、字は軋載を原義とする。範はまた範型をいうるが、字は軋載を原義とする。範はまた範型をいうるが、字は軋載を原義とする。範はまた範型をいうるが、字は軋載を原義とする。

M 16 やきにく・やく・ひもろぎ

繁16【繁】17「新】13 しげし・おおい

精 精 新 新 春 春

条事に服する婦人の盛飾をいう。敏・毒などもその を正字とし、「馬の髪・飾なり。糸毎に從ふ」とし、 を正字とし、「馬の髪・飾なり。糸毎に從ふ」とし、 で左伝〕哀二十三年「以て旌鍬に稱ふべきか」の文を引く。旌繁とは旌旗と馬飾の紫との意であるが、 を引く。旌繁とは旌旗と馬飾の繋との意であるが、 を引く。旌繁とは旌旗と馬飾のなり、本来は

> 形象の字で、毒には篤厚、繁に繁縟の意があるの となり、また虚礼の甚だしいことを繁文 縟礼という。金文に「多福蘇釐」の語があり、繁多の意に用り、また虚礼の甚だしいことを繁文 縟礼という。金文に「多福蘇釐」の語があり、繁多の意に用

旛 8 ハン

旛 **浴**

ひらひらするものの意がある。〔説文〕七上に「驚な形声 声符は番。番は獣の掌の形で、うすくて

あるものが多い。 あまりで無幅の下垂するものを謂ふ」とあり、松幅 のきれを旗として垂らしたもの。晋制によると、東 方に青竜幡、西方に白虎幡など四神像、中央は黄竜、 大の字には鳥書を用いた。胡は牛の銀下の垂れ肉で、 での字には鳥書を用いた。胡は牛の銀下の垂れ肉で、 があるものが多い。

18 みだす・もつれる・ひもとく

藩 18 おがき・さかい

藩

攀(扳)

蹯

がある。 藩の声義は蕃・樊と近く、通用の例詩句よりとる。藩の声義は蕃・樊と近く、通用の例(幹)なり」とみえ、新井白石の〔藩翰譜〕はこの(幹)なり」とみえ、新井白石の〔藩翰譜〕はこれ翰

攀ュ「扳」、かいよじる

形声 声符は数。字はまた扱に作り、 ない。高いところに撃じ上る意。〔荘子、馬 ないたを折るのを攀花・攀折、すがりつくことを攀 花の枝を折るのを攀花・攀折、すがりつくことを攀 花の枝を折るのを攀花・攀折、すがりつくことを攀 れを慕う小臣たちが竜の髯にとりすがったが、髯が なけて小臣たちは地上に落とされたという話があり、 大けて小臣たちは地上に落とされたという話があり、

19 獣の足うら・あしあと

形声 声符は番。番は獣の掌の形であるから、 に臨んで熊蹯を食して死せんことを請ふ」とあり、死 に臨んで熊蹯を食して死せんことを請ふ」とあり、死 に臨んで熊蹯を所望するほどであるから、よほどの 珍味であったのであろう。〔孟子〕に熊掌とよんで 珍味であったのであろう。〔孟子〕に熊掌とよんで

19 おおおび

古代工芸の粋を示すものがあり、遺品が多い。にするものとされた。革帯のとめ金である帯鉤には、とみえ、厲は大帯の余りを垂れて飾りとするもの、とみえ、厲は大帯の余りを垂れて飾りとするもの、桓二年「繋鷹游纓は、その敷を明らかにするなり」

バン

交 8 馬冠・うまのつらあて

挽』〔輓〕』 が

『車を引くなり』とし、後から推すを推という。挽作り、発(免)声。〔説文〕一四上に発作 形声 声符は発(免)。正字は輓に

た。益州の演王やわが国の倭王に与えられた璽印は、おからの観念によるもので、漢以後、南方の諸国にもあるのちの観念によるもので、漢以後、南方の諸国に仮借。のち虫を加えたのは、南方の諸族を蛇種とす

く)のように用い、 字はまた挽回や挽裂(ひき裂く)・挽強(強弓をひ 歌は柩車を挽くときの歌で、輓歌とかくのが正字。 輓と別の義として用いられる。

晚1 (晚)1 くれ・おそい・おくれるバン

期・年齢にもわたっていう。〔戦国策、斉策〕「晩まり、晩春・晩年・晩学のように、時 日の晩れなずむことから、副詞化したものであろう。 にこれを救ふと孰與れぞ」のような用法もあるが、 形声 に「莫なり」とあって、晩暮をいう。 声符は免(免)。〔説文〕七上

番12 獣の足のうら・かわるバン・ハン

「獣足これを番と謂ふ。釆に從ふ。田はその掌に象ねて、獣掌全体の象形字である。〔説文〕二上にねて、獣掌全体の象形字である。〔説文〕二上に非に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、 それより順次・交番の意となる。部隊を分別するこ 高」「申伯番々として旣に謝に入る」などは、勇武 る。〔書、泰誓〕「番々たる良士」、〔詩、大雅、崧にはのち鑑の字を用い、番は交代・順次の意に用いにはの知は、番と同じくして「播く」意。獣掌の字く」の匊は、番と同じくして「播く」意。獣掌の字 あり、「楚辞、九歌、湘夫人」に「芳椒を成堂に匊 る」という。古文の字形は誤って匊と釈することが 番人・番卒という。蕃に通用することもあり、番語とを番陳、その組頭を番頭、当番でことに当る人を のさまをいうに用いる。もと一歩ずつふみ出す意で、

> 蛮 は蕃語、番奴は蕃人をいう。 【絲虫】 25 南方の異族・なんばん

孌

みな蛇鈕である。

一詩 する。 設」に「総夏を鯱事す」とあって、総と夏とを対称 伐つことをしるす「號季子白盤」に「百絲」、また「秦公せよ」とあり、「晋公鑫」に「百絲」、また「秦公はより、「明な終うない」という。 暖がを名はみえるが、四方に分けていう例はない。 暖がを といふ」という。『爾雅、釈地』に「九夷八狄七戎は蠻」、『周礼、大司馬』に「其の外方五百里を蠻畿「南蠻なり。蛇種」とあり、〔書、禹貢〕に「三百里 **、そかえる意の字である。その呪祝をなす巫女を、祝を加える意の字である。その呪祝をなす巫女を、祝藤に異変を加えようとする字であり、鱗はもと呪ん。 なわち變はこの絲を撃つことによって、その盟誓や しての糸飾りを加えたもので、變や變(変)の字形祝禱の器である言を中心として、その左右に呪飾とる。曼と声の通ずる字である。繰の字形は、盟誓・ 「戎蠻子」の名があり、〔公羊伝〕に「戎曼」に作いう。古くは楚を蛮と称した。〔左伝〕昭十二年にいう。古くは楚を蛮と称した。〔左伝〕昭十二年に 定まったのは後世のことで、金文には夷・戎・蛮の 六蠻、これを四海と謂ふ」とみえるが、四夷の名の 意に用いており、縁は蠻の初文。〔説文〕一三上に からも知られるように、儀礼に関する字である。す 小雅、采芑〕に「蠢爾たる荆蠻」とは、楚を。文献において夷夏を対称するのと同じである。 旧字は蠻に作り、綴声。金文には縁を蠻の

匜を作爲す」のように銘する。般が初文、

、槃・盤は八名)の盤

その繁文である。

「承槃なり」とし、重文として盤と鎜とをあげる。形声 声符は般。般は盤の初文。〔説文〕六上に 縣 槃 14 [盤] 18 水を入れる。〔匽侯匝〕「匽侯、姜、乗(人名)の盤をいう。撃匝が一組の器で、匝には注ぎ口があって じ、沃盥せんことを請ふ」とあり、手をあらう盥されている。 その字形はともに金文にみえる。承槃は木の受け台。 たらい・たのしむ・めぐるバン

輓 14 くるまをひく・ひくバン

轑 * 牧喪、そのとき歌うものを輓歌という。字はまいない。前にあって引くのを輓という。極事を引くとあり、前にあって引くのを輓という。極事を引く た挽に作る。輓近は晩近の意である。 襄 十四年「或いはこれを輓き、或いはこれを推す 形声 上に「車を引くなり」という。〔左伝〕 声符は発(免)。〔説文〕-四

発出 15 水盤・たらい・はちざら・わだかまる

我遇难随

事、初九]「盤相す。貞きに居る 事、初九]「盤相す。貞きに居る なぬことを盤桓という。[易、屯 を整理をしいう。[別、地 が、とない。 をという。 に利し」とみえる。字は槃に通用 うに用いる。また盤は多く円形 ともあり、盤楽・盤遊・盤逸のよ 承盤、木の台をいう。盤を撃って楽器の用とするこ る例はない。槃は後起の字であり、かつその字義は な盤に作り、ときに鎜に作るものもあるが、槃に作 す形で、 その一体の字として盤・盤を録するが、金文にはみ 盤の初文。〔説文〕六上に繋を正字とし、声符は般。般は舟(盤)中のものを挹み出 THE RESERVE 18

いわ・わだかまる

である。

とされているが、その詩は密会の楽しみを歌う民謡 瀾に在り「碩人これ寛なり」とあり、賢者退隠の詩な盤辟といい、〔詩、衛風、考槃〕に「槃を考してを盤ぽ。

を盤辞とい

することがあり、めぐり歩くこと

は盤と通用し、繋紆・磐桓のようにもいう。則ち國磐石よりも安し」とあって、堅固の意。則ち國磐石よりも安し」とあって、堅固の意。 を磐という。〔荀子、富国〕「仁人國を用ゐるときは で円く大きなもの。それで石の円くして大きなもの 声符は般。般は盤の初文。盤は器の平らか 字

蕃 しげる・ふえる・おおいバン

ン 磐 蕃 ۲ Ł 比

丕

器 ₩ W W W W

蕃夷・蕃客といい、藩と通用して蕃屛・蕃籬のようらず」とは、同姓不婚の原則をいう。蛮と通用して「男女姓を同じうするときは、その生蕃」とは、「女性を関する。」とは、その生蕃」といい、ものの蕃育・蕃息する意に用いる。「左伝」 に用いる。 形声 声符は番。〔説文〕一下に「艸茂るなり」と

比

したしむ・くらべる・したがうヒ

与えられている。

形は単純であるが、その小異の間に、形義の区別が

Ł

ならぶ・さじ・なきははヒ

رر°

たものと思われる。ならべ比べるときには比肩・比相比輔する意より、比親・私比のような意味に転じ

の意に用いており、それが字の初義であろう。その

較、なかまを比類・比倫、どれもこれものときには

文を左比せよ」「毛父を右比せよ」とあって、比輔文を左いせよ」「毛父を右比せよ」、「毛状という。金文には〔班段〕に「毛がに親しむのを比という。金文には〔班段〕に「毛がんは比して周せず」とあり、一部のものだけにな

「説文」ハ上に「密しむなり」とし、二人相親しむ(従)の初文。右向けは比で比親、比較の字となる。

会意

二人相並ぶ形。左向けは从にして、

形とする。〔論語、為政〕に「君子は周して比せず、

して匕形に作り、妣甲・妣 象形としてよい。ただト文に、 文字としては同形。〔説文〕ハ上に「相興に比敍す字化して、ヒの形となる。もと異なる象形であるが、 丙の妣の字に用いる。やや 人並んではじめてその義をなすもので、字は匕匙の一名柶」とは匕杓、さじの意である。比叙の義は二 象形 であり、また「ヒは亦比を用て飯を取る所以なり。 るなり。反人に從ふ」とあるのは、人の左文の字義 右向きの人の形、またさじの形。ともに文 人の下体をやや屈曲

た形は尸、その左文が妣の初文である匕となる。字 Ł

直立した字は左右にかかわ

人の下体の屈曲し

おおきい・さかんなヒ

比々という。

Ă **Ť**

下体に肥点を加え、その声を転じたもので、 「大なり」とし、「一に從ひ、不聲」とするが、不の る肥点が、横線化したものである。〔説文〕一上に ころに実の入るべきところが胚胎していることを示象形 不は萼不の形で、下部の肥点は、花蔕のと し、丕の初文。下部の一は、もと花蔕のところにあ

皮 5 ntp

象形 獣革を手で剝ぎとる形に象る。〔説文〕三下に「獣革を剝取するもの、これを皮と謂ふ」とし、係がない。字は革の半形で、それを手で剝ぎ起こしている形。獣皮は古代の衣服や武具・装備の最も重ている形。獣皮は古代の衣服や武具・装備の最も重でれる料であり、斉の鮑 叔のごときも、鮑を金文要な材料であり、斉の鮑 叔のごときも、鮑を金文要な材料であり、斉の鮑 叔のごときも、鮑を金文でなが、爲の省聲」とも形に象る。〔説文〕三下象形

妃 6 きさき・つま

会意 字はもと女と已とに従う。とは蛇形で祀の

「西華の紫妃」のようにいう例がある。神につかえ 現があるが、斉にも長女が巫児として家に残り、家味したのであろう。卜辞には「河の妾」のような表 みない廟号である。〔左伝〕桓二年に「嘉耦を妃とるものであろう。斉器の孝大妃・中妃は、他に例をるものであろう。斉器の孝大妃・中妃は、他に例を 「霊妃は囚(死)せざるか」「霊妃に御(禦)らんが用いられている。ト辞に霊妃という名がみえ、 【陳侯午敦]に「鑒侯午、群諸侯の獻金を以て、皇宗を言った。」を言った。配匹の字ではない。 斉器のの紀(改)であって、配匹の字ではない。 斉器の 己に儷ばしむ」とするが、己に従う字は姓として声は合わない。〔段注〕に字を会意とし、「女を以て声は合わない。〔段注〕に字を会意とし、「女を以て 〔説文〕 二下に「匹なり」として己声の字とするが ったものであろう。 た妃が、のち王妃の称となり、一般の妃妻の義とな 廟につかえる伝統があった。のちにも神女の尊号に 奉仕者、その神に捧げられた神の女たるものを、意 ふ」とみえるが、おそらく妃の原義は、祀に対する いふ」、〔礼記、曲礼、下〕に「天子の妃を后とい □君中妃の祭器を作る」とあり、妣の尊号として妃 妣孝大妃の祭器を作る」、また〔酈侯段〕に「皇妣の称なり 初文。その祭祀にかかわる女性をいう字であろう。

否っ しからず・おおいなり

香香香

会意 不と口とに従う。不は否定、口は D、祝禱

を否という。「説文」三上に「本ざるなり。口に從ひ、不に従ふ」とあり、諾否の否の義に解している。否にはこの否定の意のほかに、丕大の義とみるべき用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、同形にしてまた別の一字である。「善用法があり、これ否定の義には「師設設」に「否善」、「皇子子子」の不不は、文献にみえる「丕々」であり、字はまた「守宮盤」に「周師(人名)不配」のように、一方宮盤」に「周師(人名)不配」のように、一方宮盤」に「周師(人名)不配」のようで、一方宮盤」に「周師(人名)不配」のように、一方宮盤」に「周師(人名)不配」のように、一方宮盤」に「周師(人名)不配」のように、一方宮盤」に「周師(人名)不配」の「善生数」である。「善生数」である。「一方であるがら、これは否定の否を冠した用法である。「一方であるがある。「書、表表表」に、一方である。「一方である。」に、「一方である。」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である。」に、「一方であるが、「一方であるがあり、「一方であるが、「一方であるが、「一方であるがあり、「一方である」に、「一方である。「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である。」に、「一方である。「一方である。」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方である。」に、「一方である」に、「一方で表しまる」に、「一方である」に、「一方である」に、「一方で表しまる」に、「一方で表しまる」に、「一方で表しまって、「一方で表しまる」に、「一方で表しまる」に、「一方である」に、「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方できる。「一方で表しまる。「一方で表しまる。「一方できる。」に、「一方できる。「一方できる。」に、「

舞、典〕に「二十有八載、帝乃ち殂落(死)す。百 (妣)「大宗皇且皇妣」のようにいう例がある。〔書、 て妣を録する。列国期の金文に「皇且(祖)皇妣 り」とあり、父には考、母には妣という。重文とし 形声 声符は此。〔説文〕三下に「沒したる母な

の称として用いる。姓、考妣を喪ふが若し」とあり、考妣は父母の死後

屁 7 AL

屁口とは、肛門をいう。屁は擬声的な語である。 形声 声符は比。尸は人の臥している形。屁眼

比っ おおう・ひさし・たのむ

批で、挽」るかっ

彼のかれいかしこ

顔をでして

ヒ 屁 庇 批[搉] 彼 披

界 肥

佐僧 声符は皮。代名詞はすべてもとその字なく地の字を仮借して用いる。〔説文〕ニ下に「往きて加ふる所あるなり」とは、彼と加との畳韻をもって加ふる所あるなり」とは、彼と加との畳韻をもって加ふる所ある。近出の「中山王円壺」銘にも皮を彼じ例がある。近出の「中山王円壺」銘にも皮を彼じ例がある。近出の「中山王円壺」銘にも皮を彼じ例がある。近出の「中山王円壺」銘にも皮を彼いる。〔詩、周頌、振鷲」「彼に在りても思まるること無く」此に在りても射はるること無く」此に在りても射はるること無し」、またこと無く」此に在りても射はるること無し」、またに下るものであろう。漢碑にはみな彼の字を用いている。〔詩、周頌、振鷲」「彼に在りても思まるるに、者が、一十月之交」「彼の月にして微くる」と彼此を対称して削くる」と彼此を対称して削くる」と彼此を対称して削くる」と彼此を対称して削くる。此の日にして微くる」と彼此を対称して削くる。此の日にして微くる」と彼此を対称して削くる。此の日にして微くる」と彼此を対称して削くる。此の目にして微くる」と彼此を対称して削くる。とない、ないといいる。「説文」に、行いといいない。「はないといいないと、一つないといいない。」

披。 ひらく・わける・なびく

が ・ 大きとることをいう。「説文」 二上に ・ 一等より持つを披といふ」とみえる。「能礼、既夕 ・ できょり持つを披といふ」とみえる。「能礼、既夕 ・ できょり持つを披といふ」とみえる。「能礼、既夕 ・ できょり持つを披といふ」とみえる。「能礼、既夕 ・ できょし、大夫は六人、士は四人が旁より これを扶持する。「説文」はその義によって披を解するが、皮は獣皮を披くこと、披き張ることを原義 とし、性体を披くことを披磔という。披甲・披衷は ・ とし、性体を披くことを披磔という。披甲・投表は とし、性体を披くことを披磔という。披甲・投表は ・ とし、性体を披くことを披ぐという。と、 ・ とし、性体を披くことを披磔という。と、 ・ とし、性体を披くことを披磔という。と、 ・ とし、性体を披くことを披磔という。と、 ・ とし、性体を披くことを披磔という。と、 ・ とし、性体を披くことを披磔という。と、 ・ とし、性体を披くことを披露さいる。 ・ とし、 ・

をいう。

男 8 たまう・あたえる

#

象形 第5年 (第5年) (第5

肥 8 こえる・ゆたか・さかん

なり」とし、会意とする。また「肉は過多なるべかしくあらわれることをいう。〔説文〕四下に「多肉配する形で、そのとき下体の肥肉が著い、というない。」では人の必要ない。

では、肥の字義と合わない。肥は盈満・宛なのをでと同じく、坐してその下体の盈満なることを示すった同じく、坐してその下体の盈満なることを示すった同じく、坐してその下体の盈満なることを示すったと同じく、坐してその下体の盈満なることを示すったと同じく、坐してその下体の盈満なることを示すった。 食肉の肥美、土地の肥饒の意に用いる。の意より、食肉の肥美、土地の肥饒の意に用いる。の意より、食肉の肥美、土地の肥饒の意に用いる。の意より、食肉の肥美、土地の肥白の意味が、それのでは、それのでは、大きないり、不を脂といふ」とみえ、肉の少ないものをといひ、不を脂といふ」とみえ、肉の少ないものをといひ、不を脂といふ」とみえ、肉の少ないものをといひ、不を脂といふ」とみえ、肉の少ないものをといひ、不を脂といふ」とみえ、肉の少ないものをといひ、不を脂といふ」として、

陂 8 さか・つつみ・かたむく

形声 声符は皮。皮に喉咙としてう路が 形声 声符は皮。皮に喉咙としてういの意とする。[玉篇] に「傾くなり。邪めなり」などの訓をあげるのは、陂陀(うねうねする)の意などの訓をあげるのは、陂陀(うねうねする)の意などの訓をあげるのは、陂陀(うねうねする)の意をどの訓をあげるのは、陂陀(うねうねする)の意をどの訓をあげるのは、陂陀(うねうねする)の意をが、招魂が「文異豹飾、陂陁に侍す」の陂陁は、堤腔・、招魂が「文異豹飾、陂陁に侍す」の陂陁は、地震・大きの意がある。

17 8 くし・そむく・わるい・あらず

FFF

に「違ふなり。飛下する翅に従ふ。その相背くを取のならぶもの。古くは非なといった。〔説文〕一下象形 櫛の形。すき櫛のように、左右に細かい歯

男 9 【男】8 ひしゃく・いやしい・へりくだる

窄 史 異

酒を酌むのに用いる。〔説文〕三下に「賤しきものとる形で、椑の初文。柄のある匕杓のような形で、会意・上部は杯形の器の形。下部はその柄を手に

なり。事を執るものなり。ナ甲に従ふ」とし、「段なり。事を執るものなり。ナ甲に従ふ」といい、のヒ杓の形である。裨は隋円形で「製造」といい、のヒ杓の形である。裨は隋円形で「製造」といい、の世役の字に卑を用いるのは仮借。金文にはなお卑賤の用義例はない。この使役形に用いることから、卑賤・卑少・卑俗の意を生じ、尊卑対称の語となる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の卑なる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の卑なる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の卑なる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の卑なる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の卑なる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の喜となる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の語となる。また卑下より地の卑湿、力の卑弱、地味の喜となる。また卑下より地の東湿、力の卑弱、地味の語となる。また卑下より地の東部といる。

19 みかづき・初月

2D

文にその義の用法をみない。 文にその義の用法をみない。 でにその義の用法が、
はいが、
というが、
はいわゆる三日月にあたる。
初吉の中の特定の日をいう。
文献にはみえるが、
金
でいた。
の明なり」とあり、
唇の上の用語。
「書、
ならざるの明なり」とあり、
唇の上の用語。
「書、
ならざるの明なり」とあり、
といいう。
日相の第一

秘。 え・ほこ・ゆだめ

秘の初文。〔説文〕六上に「櫝なり」というのはそ頭部を、柄に装着する部分の象形で、野声 声符は必。必は戈や矛などの

近い字である。

が、積竹杖をいう。割り竹を合せて作った、竹の柄で、積竹杖をいう。割り竹を合せて作った、竹

此ののとつしむ

「大誥」に「天闕に我が成功を毖けたり」「天亦これの、夜歩みて止下に祀る」、〔洛誥〕に「予冲子(王)、「歩みて上下に祀る」、〔洛誥〕に「予冲子(王)、「歩みて上下に祀る」、〔洛誥〕に「予冲子(王)、「歩みて上下に祀る」、〔洛誥〕に「予冲子(王)、「歩い声符でなければならない。〔説文〕に〔書、大比が声符でなければならない。〔説文〕に〔書、大比が声符でなければならない。〔説文〕に〔書、大比が声符でなければならない。〔説文〕に〔書、大比が声符でなければならない。〔説文〕に〔書、大に 字は会意。毖はその形声字、必は意符、 は戚の秘部を主とする形であり、邲はそれを聖器と って、惨むと惨くの二訓が生ずる。 邲が初文でその して拝する形の字であるから、慎祀・勤毖の義とな 我が謀を宣邲(つつしむ)す」とあるものがその義 金文では〔晋姜鼎〕「明德を經鑑(やわらげ)し、となっては〔晋姜鼎〕「明徳を怨む。義に用い、その例は〔詩〕〔書〕にわたってみえる。 用て我が民を勤め毖く」という。慎祀と勤毖との二 比が声符でなければならない。「説文」に「書、大拝する形で、会意。その形声字である毖においては、 るが、初文の如においては、必は戚のような聖器を 〔説文〕八上に「愼むなり。 の従う尗は必と形が近い。毖はその形声字で比声。 ,如がこの字の初形であろうと思われる。必 必は戈矛の頭部や戚などの形で、戚* 形声 正字は郊。必と卩とに従う。 比に從ひ、必聲」とす 比がその声

毗 9 「妣」10 ヒ たすける・あつくする

已歩毗(魮) 砒 秕 秕 飛 俾

下方 声符は比。比にたすける意が 「人の臍なり」とし、「別に從ふ。 図は气の通するを 取るなり」という。幼児の頭骨の柔く動く部分と、 原との間に通気の関係があるとする、古代の医術による字説であるが、この字を臍や通気の義に用いる が初形であるとする」にいうように図に従うの が初形であるとするならば、それは頭顱の象とみる に吐けらる」のように輔毗の意に用い、毖と か、陽に吐けらる」のように輔毗の意に用い、毖と が初形であるとするならば、それは頭顱の象とみる ほかなく、それに対する儀礼を意味する字であろう。 古い字形がなく、その初形初義を確かめがたい。

砒 9 ひと

礼のまつり

う。〔楚辞、九歌〕に大司命・小司命の祭祀歌があ祀るなり」とあり、大司命・小司命を祀る祭儀をい形声 声符は此。〔説文〕」上に「豚を以て司命を形声

もって祠る。祀令にその規定があったという。 もって祠る。祀令にその規定があったという。 生をするもので、民家では春秋に司命を祀る。「風 佐をするもので、民家では春秋に司命を祀る。「風 佐通」にその儀礼をしるしているが、長さ尺二寸の 人像を作り、行住つねにこれを奉じ、春秋に腊を り、蒼器の「滔子孟 姜壺」にも大司命の名がみえ り、蒼器の「滔子孟 姜壺」にも大司命の名がみえ

秕り しいな・あやまり

そのような政治を秕政、誤りを秕繆という。 いまい ちざる栗なり」とあり、実の入らぬいまた層米をいう。役立たずのものを秕糠・ ことで、 となり、実の入らぬいます。 声符は此。〔説文〕七上に「成

飛り とぶ・あがる・はやい

俾ロ しもべ・したがう・せしむ

那 里智果

文〕ハ上に「益すなり」とあって俾益の義とし、ま形声 声符は卑(卑)。卑に使役の義がある。〔説

を用いており、それが本義、卑の繁文である。俾倪閟宮」「爾をして昌にして熾ならしむ」に使役の俾思いなな。ない、一に我に埤益す」の詩句による訓である。「魯頌、一に我に埤益す」の詩句による訓である。「魯頌、の義は〔詩、邶風、壮門〕「王事、我を適む 政事 睥睨と同じく、その仮借義である。
は横目でにらむ意で、またひめがきの意に用いる。 た「一に日く、 俾門侍人なり」とは下僕の意。俾益

匪 はこ・あらず・かのヒ

区別して読む必要がある。 彼の仮借字である。詩篇にこの両義の用法があり、 風、匪風」「匪の風は發たり」匪の車は偈たり」は、多い。ときに指示詞として用いることがあり、「常なて吟誦した句とされる。詩にこの否定詞の用法がじて吟誦した句とされる。詩にこの否定詞の用法が 雅、何草不黄〕「兕に匪ず虎に匪ず 彼の曠野に、率ぬた。字は否定詞に仮借することが多く、〔詩、小 書〕の文がある。玄黄は織物、古くは幣帛の類を納 文〕に「逸周書に曰く、玄黃を匪に實たす」と あり、 の。匪は〔説文〕二三下に「器、竹匧に似たり」と形声 声符は非。非は比櫛の類で、その密なるも 滕文公、下〕に「其の玄黃を篚にす」という〔逸 「逸周書」の文を引くが、いまその文なく、〔孟子、 ふ」の句は、孔子がそのながい亡命中に、思わず嘆 竹で編んだ籠の類。字はまた篚に作る。〔説

疲10 つかれる・ものうい・とぼしいヒ

0 福

みな声義の近い字である。兵士の『六韜』に「疲勞あり、労苦して病困するをいう。病・離・憊など、形声 声符は皮。〔説文〕七下に「勞るるなり」と あるという。 は撃つべし」とあり、敵の困憊に乗じて撃つべきで

秘。(秘)。 神秘・ひそか・かくすヒ

う。 の名であったらしい。祕字が禾に従うべき理由はな 声の字である。秘は祕の俗字。もと黍に従うて香草 密はその密儀の方法を示すものであり、祕はただ形 必を用いる呪儀を示す字であるが、字形よりいえば、 示しないものの意となる。秘密はともに必に従い、 秘義・祕薬・祕訣、祕法など、容易に人に対して開儀が行なわれたのであろう。それより祕奥・祕蘊・ 子を求める神、いわゆる郊襟。その幽暗なる宮で秘 るとするものである。閼宮は媒神を祀るところで、 の言たる、閉なり」とは、関ニ上に閉門の義があ一上に「神なり」とし、神祕の意。〔繋伝〕に「必 が密儀の方法であり、その密儀を祕という。〔説文〕 その呪儀が殊に神祕にして、祕密とされたのであろ く、筆の誤りである。 密は廟中において必に火を加えている形。それ 形。 形声 おそらく必を用いる呪儀があり、 声符は必。必は戈矛の秘部

蚍 おおあり

> 甚だしいのを笑う語である。 かす」の句があり、身のほどを知らず、うぬ惚れの とあり、大きな蟻をいう。〔説文〕の正字は妣と蟲 一三下に「蚍蜉、大螘なり」形声 声符は比。〔説文〕

被10 ふすま・とばり・こうむる・およぶヒ 0

姨

う。被酒は酔っぱらい、被離・被麗はばらばらに分をいい、被髪は長髪を垂らしているもので散髪をい 〔説文〕 を多く用いるが、そえ髪を加えることがあった。 いう。〔詩、召南、采蘩〕「被の僮々たる」は、婦人被害・被謗といい、告発訴求を受けることを被告と 散する意で擬声語に近く、また他より受けるものを 被裘・被服はもとより、すべて上より被覆するもののは、〔論語〕にいう寝衣の制のなごりであろう。 形声 かもじのことであろう。そのとき簪・参など髪飾りたちが祭事に奉仕するときの、髪につける飾りで、 の寝衣に頷・袖をつけて、丈より長いものを用いる 被、これなり」という。衾は大被で掛布団、わが国 [論語、郷党] 「必ず寢衣あり」の注に「今の小臥 八上に「寢衣なり。長さ一身有半」とあり、 声符は皮。皮に表面に被るものの意がある。

冒 11 いなか・おしむ

0 0

があり、都に対して辺地をいう。 室の直営地であった。〔絲鏤〕に「民人都啚」の語わち地図である。卜辞に東啚・西啚の語があり、王 の所在地を、図形にしるしたものは圖(図)、すな 落を示す。その聚落を鄙といい、啚はその初文。啚 文・金文の字形は、口形の下に積禾の形を加え、聚 受くるなり」とするが、字の下部は廩倉の形。ト受くるなり」とするが、字の下部は廩倉の形。ト形、〔説文〕五下に「嗇むなり。口崮に從ふ。崮は 形。〔説文〕五下に「嗇むなり。 口と歯とに従う。歯は収穫物を収める廩の。* 器

埤 ひめがき・ます・たすけるヒ

ころを埤薄という。地の低いところを埤湿といい、地味のやせていると地の低いところを埤湿といい、地味のやせていると塊は低い土垣、それで城上のひめがきをいう。また埤は低い土垣、それで城上のひめがきをいう。また に埤遺(余分に負担させる)す」の意によるものでり」というのは、〔詩、邶風、北門〕「政事、一に我り」というのは、〔詩、邶風、北門〕「政事、一に我」のの意がある。〔説文〕 三下に「増な」 あろうが、それは髀の仮借義。卑はもと下卑の意。 形声 声符は卑(卑)。卑に低いも

はしため・わらわ

なり。女卑に從ふ。卑は亦聲なり」とする。古くは、 の女を婢という。〔説文〕一二下に「女の卑しきもの 声符は톡(卑)。卑に俾使の意があり、 そ

埤 婢 陴 悲 扉[扉] 棐

> 〔任安に報ずる書〕に「臧獲婢妾」の語があり、下ばなる。 ぬに辞す」とみえる。婢子は女子の謙称。司馬遷の婢に倍す」とみえる。婢子は女子の謙称。司馬遷の 男下女をいう。 が行なわれた。〔世説新語、徳行〕に「奴の價は、女子の罪あるものは没して官婢とし、民間では売買

陴 11 ひめがき・ものみべいヒ

醡 \$ P

字はまた埤に作る。 う。自は神梯の形であるから、神域の俾倪である。 上の俾倪なり」という。籀文の字形は城郭の亭に従年「陴を守る者、みな哭す」の〔杜注〕に「陴は城年「陴を守る者、みな哭す」の〔杜注〕に「陴は城 孔穴、すなわちのぞき穴のことで、〔左伝〕宣十二 文〕一四下に「城上の女牆なり」とあって、ひめが形声 - 声符は卑(卑)。卑に卑小の意がある。〔説 きをいう。また「俾倪なり」というのは、城壁上の

悲 かなしむ・なげく

逃

用いる。〔論語、述而〕「憤せずんば發せず、悱せず要素の字であるが、心がせまって、いいなやむ意に 字には悲・悱・誹など、 んば啓せず」のようにいい、用義が異なる。非声の 形声 むものに冠して悲笳・悲風のようにいう。悱は同じあって悲痛の意。悲哀の意より、すべてその情を含あって悲痛の 声符は非。〔説文〕一〇下に「痛むなり」と 不安定な心情をいうものが

多い。

扉 12 [編] ととびら

とは片戸をいう。 葦扇のことである。扉はくるるで開閉するもの、一いまれのは扇という。[荀子、礼論]にいう菲は、そものは扇という。[近れ なり」とあり、木の戸は扉といい、葦などで作った 形声 の意がある。〔説文〕二上に「戶の扇がある。〔説文〕二上に「戶の扇が 声符は非。非に左右並ぶも 0

斐 12 うつくしい・あきらか・なびく ヒ

事へしむ」の語がある。に「諸侯の士をして、斐然として争うて入りて秦にに「諸侯の士をして、斐然として争うて入りて秦に 然の義に用いることがあって、「史記、太史公自序」斐然とは、才徳のすぐれていることをいう。また靡 章を成すも、これを裁する所以を知らず」とみえ、 變す。その文斐し」の文を引く。、…)、・・ がある。〔説文〕ヵ上に「分別して文があるなり」とし、〔場、草卦、上九、象伝〕「君子豹」あるなり」とし、「場、草汁、上九、象伝〕「君子豹」とし、「髪」、 単に 左右ならぶ意 「論語、公冶長」「吾が黨の小子狂簡、斐然として ボ・ドなどみな声義近く、同じ系統の語であろう。 錯はるなり」とあって、匪とも通用する。費・斑・
錯はるなり」とあって、匪とも通用する。費・斑・ 「その文蔚し」に作る。〔詩、衞風、洪奥」「匪たる參す。その文斐し」の文を引く。いまの〔易〕は〈〉

棐 12 ゆだめ・たすける

「民の彝を棐く」の語があり、ゆだめで弓を輔正す非は両旁より挟む形である。〔書、洛誥・呂刑〕に「輔は弓弩を正すの器」とあって、ゆだめをいう。 るように、民を導く意。すなわちその引伸義である。 なり」とあり、「荀子、性悪、注〕に形声 声符は非。〔説文〕六上に「輔

脾 12 ひぞう

葉」という。醯にして用いたものである。袋を脾析といい、儀礼のときこれを削んで「牛百てす」とあり、五行説によって春に配する。牛の胃 形体」に胃気を補助するものとして、俾助の意をも って解する。〔呂氏春秋、孟春〕に「祭るに脾を以 に「土の臓なり」とあり、〔釈 名、釈形声 声符は卑(卑)。〔説文〕四下

腓 12 こむら・ふくらはぎ・あしきりヒ

る。また臏の刑をいう。 ふくらはぎ、また腓腸ということがある。こむらに 腨なり」とあり、腨もまたこむらの意。 対して、手のひじをたこむらという。〔雄略記〕に 声符は非。〔説文〕四下に「脛

非12 かぶら・うすい

義に用い、 菲食は粗食、菲才は才の薄きものとして 「筋なり」とあるが、字は多く菲薄の形声 声符は非。〔説文〕一下に

一般の はいかい かかり とうままもなっちゃん こうでき

形容し、*ひと声義が通ずる。 う。菲々は花の美しいさま、香気のただようさまを 謙称に用いる。菲杖は送葬のときの草履と杖とをい

費12 ついえ・ついやす・そこなう

曹

り」とあり、もとむだに消費することをいう語であ [呂氏春秋、禁塞]に「神を費し魂を傷ましむ」と その否定的な意味を含む字であろうと思われる。金 ろう。弗は金文において否定詞に用いており、費は あり、無用に精神を労するをいう。のち費用の意と 文の人名に劇性があり、劇は刀で費をさく形である。 を用いることを費心・費神といい、力を用いること ず」とは、無駄に費やさないという意であろう。心 なった。〔論語、尭曰〕に「君子は惠なるも費さ を費力といい、時間つぶしを費時という。 声符は弗。〔説文〕六下に「財用を散ずるな

痺 13 「痹」」3 Lyna

が、痺の字が用いられている。痺はうずらの雌をい う字。〔説文〕と下に「溼病なり」とあり、湿気に となることが〔素問〕にみえる。〔史記、扁鵲伝〕 には風・寒・溼の三気あり、三気ともに至るとき痺 よる感覚の痲痺、すなわちリウマチスをいう。病因 に痺医の名があり、当時すでにその専門医があった。 形声 り、畀声。痹に作るものが正形である 声符は卑(卑)。また痹に作

裨 13 おぎなう・たすける・そえるヒ

幒 Ŷ

「接ぐなり」とあって、布帛の足らざるところを継 また裨益の義のある字である。裨は〔説文〕ハ上に であるが、金文に使役の義に用いており、卑小の意。 ぎ足す意とする。それで補うこと、裨補・裨益を原 とは軍の一部をいう。 義とし、のちたすける意となる。裨将は副将、裨師 声符は卑(卑)。卑は杯・杓をとる形の字

賁 ¹³ かざる・おおきい・うつくしい・やぶれるヒ・フン・ホン

秦恭恭未未

伝」に「五色成らざる、・1・・・
り」と訓し、卉声とするが、声が異なる。[京房易形声 声符は舞の省文。[説文] 六下に「飾るな形声 「文飾なり。黃白色なり」とあり、雑彩の飾りをい 小雅、白駒〕に「賁然として來る」とは、白馬の毛うに用いる。貝をもって飾るものを賁という。〔詩、 質を冠していい、泰薗(弓袋)・泰較(車較)の う語とみられる。金文の賜与中に、文飾あるものを を資臨という。文飾の意のときには音はヒ、資軍は色に潤いがあることをいう。貴人の光臨を得ること 、序卦伝、鄭注〕に「文飾の皃」、〔王粛注〕にに「五色成らざる、これを賁といふ」、また

声義を承ける字である。 あり、また内より外にあふれる力を示し、賁はその 孟賁と夏育という二人の勇者の名を合せて、古の勇敗軍、黄歳は去勢した豚で、その音はフン、賁育は 者の意に用いる。皋は華の咲き出る形で美しい意が

形声

声符は非。〔説文新附〕一三上

に「帛の赤色なるもの」、〔玉篇〕に

緋

あかのねりぎぬ・ひいろヒ

悶 神廟の名・とごす・かくす

「隋書」に緋緑・緋褌(袴)などの語がみえる。わ用例のない字で、「北斉書」に緋甲(ひおどし)、「絳き 練なり」とみえる。官衣に用いるが、先秦に「絳き 練なり」とみえる。官衣に用いるが、先秦に「絳き awas

のが請予儀礼の行なわれる神廟であったのであろう。 郊禖の神に祈って子をえたとされるが、閟宮そのも 関宮〕はその廟歌。周の始祖姜嫄を祀る。姜嫄はるところをいう。関宮は魯の神廟で、〔詩、魯頌、るところをいう。関宮は魯の神廟で、〔詩、魯頌、 「門を閉すなり」とあり、閉して秘す 声符は必。「説文」一二上に

靜

形声

はかわせみ。〔文選、注〕に「大小は爵(雀)の如

羽雀なり。鬱林に出づ」とする。

ツ。鬱林に出づ」とする。翡翠声符は非。〔説文〕四上に「赤

く、雄は赤くして翡といひ、雌は青くして翠とい

翡14

かわせみ

が国の官衣にも、好んで用いられた。

碑 (碑)13 たていし・いしぶみヒ

穴)をあけ、そこからつるべ式に紐で棺を下したが、に棺を下すとき、碑を立ててその上部に穿(丸いに棺を下すとき、碑を立ててその上部に穿(丸いいう。古くは宮廟に碑を立てて、日景をはかって時いう。古くは宮廟に碑を立てて、日景をはかって時 が蒐集保存されている。 領域をなしている。いま西安碑林には、多くの古碑 とされ、碑学は帖学とともに、書法研究の重要な 伝記資料としてのみならず、歴代書法の重要な遺品 の穿のなごりを残しているものが多い。碑銘はその うになって、碑文となる。それで古い碑文には、そ その碑にのち名姓をしるし、経歴や功績をしるすよ 形声 に「豎てたる石なり」とあり、石碑を 声符は卑(卑)。〔説文〕九下

いなか・いやしい・かたくなヒ

くその羽を用いた。

ð 7 **各** 是

鄰、五鄰を里、四里を酇、五酇を鄙としており、鄙礼〕の規定するところで、〔周礼、遂戊〕に五家をなる。〔説文〕≒下に「五酇を鄙と爲す」とは〔周。は鄙の初文。これに聚落を示す邑を加えて、鄙と皆は鄙の初文。 形声 は五百家の聚落をいう。都と鄙と対文、〔左伝〕荘 声符は圖。圖は農耕地とその穀倉を示す字。

> 圖」の語がある。鄙の所在を地図化したものを 圖。金文には圖字を用い、斉器の〔輪縛〕に「民人がでいていう。鄙人・鄙見・鄙意は、みな謙称である. **鄙野・鄙薄・鄙吝など、すべて洗練されないものにいう。都雅に対して鄙俗の意に用い、鄙近・鄙賤・** (図)といい、いわば荘園図のようなものである。 二十八年「群公子、みな鄙なり」とあって、辺鄙を

罷 つかれる・やむ・よわい・ゆるすヒ・ハイ

ようとして、労罷・困憊の状に達するのを罷という。形の字がある。能も獣畜の形で、獣がそれを擺脱しいのである。ト文には鹿・豕・雉・兔の属に隅するという。というのである。との罷れるのを待って、これを捕え 「网・能に從ふ。賢能ありて網に入り、即ち貰され 比喩的な訓義で文字が構成されることはなく、罷は 能を賢能の人、网を法網の意とするが、そのような 小司窓」の八辟の一である「議能の辟」を引く。てこれを遺はさるるを言ふなり」と説き、[掲礼、てこれを遺はさるるを言ふなり」と説き、[場れ う休止の意となる。官を免ずることを罷免という。ら、〔論語、子罕〕「罷めんと欲するも能はず」とい 擺と声義の通ずる字である。疲れて休止することか である。〔説文〕七下に「皋あるを遺すなり」 とし、

帷翠帳 高堂を飾る」などの句があり、調度にも多であるが、「翡翠珠被」爛として光を齊しうす」「翡小」とみえる。〔楚辞、招魂〕はいわゆる招魂の詩ふ」とみえる。〔楚辞、招魂〕はいわゆる招魂の詩

誹 15

形声 義がある。〔説文〕三上に「謗るなり」 声符は非。非に是非・非違の

閟 碑[碑] 緋 翡 鄙 罷 誹

髀

いる字である。 とあり、誹惑と誹謗のように用いる。〔**歳む、 難言〕にみえ、戦国期の語である。非に否定の義が ものにはこれを撃たせたと伝える。誹謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。誹謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。誹謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。計謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。計謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。計謗は〔韓非子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。計謗は〔韓北子、 ものにはこれを撃たせたと伝える。計謗は〔韓本子、主

避 16 (避) 17 とける・のがれる・しりぞく

形声 声符は徐。(説文)二下に「回避する意となり、避難・避暑・避世のように用いる。 席を避けるのは尊者に対する礼、避諱は君父の実名席を避けるのは尊者に対する礼、避諱は君父の実名を避けること。実名忌避の俗は、中国においては甚

写 1 雪のふるさま・ひるがえる

臂 17 とだむき・ひじ・まえあし

22 17 猛獣の名

・ 大雅、 「説文」 九下に「約。 を献す 赤豹 黄雅、 とあり、呂 梁山系中に住む猛獣の名である。〔礼記、曲礼、上〕「前に摯獣あるときは、則ち貔貅を載つ」とは、行軍中の後列に、そのことを信号として知らせる意である。〔書、牧き、と、 「倫はくは恒々たれ。虎の如く貔の如く 衆の如くれれ」とみえるが、貔の実態はよく知られない。

| 18 | 「実験] 24 | 「長夏] 21 | さかん・いかる

大雅、蕩」「內、中國に凝る」の〔伝〕に「醉はずに説文〕」〇下に「壯大なるなり。三大と三目とに從ふ。二目を贈と爲し、三目を曩と爲す。益^大なるなり。一に曰く、迫るなり。讀みて易の處養氏の若なり。一に曰く、迫るなり。讀みて易の處養氏の若なり。とあって、處(伏)の音があるとする。哭・くす」とあって、處(伏)の音があるとする。
 大雅、蕩」「內、中國に凝る」の〔伝〕に「醉はずにいた。

18 そえうま

とは、並んで走るさまをいう語である。とは、並んで走るさまをいう語である。[説文]一〇上に「鰺畑 を切。秀馬なり」とあり、中央の馬が服、左を鰺なり。秀馬なり」とあり、中央の馬が服、左を鰺なり。紫に宝石に相並ぶ

4月 18 と とともも

「髀を拊って雀躍して輟めず」という語がある。 東を廃していて、外ももに肉が入ることをいう。「髀肉の歎」は、久しく関あり、そとももをいう。「髀肉の歎」は、久しく関あり、そとももをいう。「髀肉の歎」は、久しく関あり、そとももをいう。「髀肉の歎」は、久しく関あり、そとももをいう。「髀肉の歎」は、久しく関かになることを歎く語で、蜀の劉備の故事。久しく関かり、という語がある。

産言 20 たとえる・さとす

意があり、声義の近い字である。 いから 「能く近く譬を取ること遠からず」、 「論語、 変也] 大雅、抑」「譬を取ること遠からず」、 〔論語、変也] 大雅、抑」「譬を取ること遠からず」、 〔論語、変也] は 哲警喩す」とみえる。例は近きに求めるべく、 〔詩、相響喩す」とみえる。例は近きに求めるべく、 〔詩、相響喩す」とみえる。例は近きに求めるべく、 〔詩、相響喩す」とみえる。例は近きに求めるべく、 〔詩、

月貝 21 「実験」 24 せいき・いかる

関

金意 正字は爨、略して三貝に従い、この字形で 最厚の字に用いられる。〔玉篇〕に「最厚は力を作 なようす)して、首に靈山を冠す」という。また なようす)して、首に靈山を冠す」という。また ないずれもはげしい勢いを示す語で、爨の本義に おいて用いるが、最屓はのち声援をなす意に用いる。 な意 正字は爨、略して三貝に従い、この字形で なが、この字形で

春柳

象形 馬のくつわの形。初形は車に従わず、その字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字に含まれる恵は、馬鼻を繋ぐものであるとしている。轡はその馬鼻の紐を中心として、左右に紐をめぐらしている形で、字は全体がその象形である。「石鼓文、鑾車石」以下、漢碑の字形もほぼその形に従う。「段注」に、篆文を車の字形に改めているのはよくない。「金文編」に「公質器」の「馬轡乗」の字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字を録しているが、その字は車下に三糸を列するの字に表を見いる。

鼠(器)

轡

F,

弥(彌)(頭)

沫[釁]

て尊ばれるよりも、泥亀として生きながらえようと 「尾を塗(泥)中に曳く」という。死して神亀とし した話がみえる。貧賤のうちに生を全うすることを、 神武東征のとき、巌阿の間から「尾ある人」が出没 〔説文〕にいう系尾の俗は、わが国の古俗にもあり、 は尾聯(連)、長篇の物語の最後には大尾という。 の部分を尾声、律詩の結二句を対句の形とするとき すべて後尾末端にあるものをいい、また曲調の最後 であるが、徴は尾の正訓ではない。獣尾の意より、 属する形となる。尾と微(微)とは声義の通ずる字 の形である蜀を連ねると屬(属)となり、牝牡相人には尾がなく、字は獣尾の形である。これに牡獣 系く。西南夷みな然り」と人の尾後と解するが、毛に從ふ。尸の後に在り。古人或いは飾りて尾に 承 象形 尾 柔なる 剛柔相成すことを歌う〔逸詩〕がみえる。 れる。〔逸周書、太子晋解〕に「馬の剛なる「轡のて、「轡の柔なる」という詩篇があったことが知らて、「轡の柔なる」という詩篇があったことが知ら 襄二十六年に「國子、轡の柔なるを賦す」とあっもので馬轡のみを賜与することがあった。〔左伝〕 獣の尾毛の形。〔説文〕ハ下に「微なり。 お・けもののお・すえ・うしろビ 馬もまた剛ならず「轡も亦柔ならず」と、

生を漏るまで、霊冬(霊終)ならんことを」といゆたかな意であろう。彌の字は金文にみえ、〔史語がと、「福懷事祿、黃者にして生を彌へんことを」、また爾上に玉形を加えた形に作り、「論詩」に「朋とれる」とし、「久長なり」と訓するが、その字はもと髪のとし、「久長なり」と訓するが、その字はもと髪のとし、「久長なり」と訓するが、その字はもと髪のとし、「久長なり」と訓するが、その字はもと髪のとし、「久長なり」と訓するが、その字はもと髪の 儀礼に関する字であろう。ゆえに弥久の意となる。 づいたもので、もとは珠や文身(爾)による魂振り かれているのは、弓に配するものとしてその形に近 われる。〔輪轉〕の字の爾の部分が矢に近い形にか 弓も呪具としてその儀礼に用いるものであろうと思 爾は女性の文身、彇の字の従う珠(日)は魂振り、 と鶸・彌に作るもので、長命を意味する字である。 形を镾とする〔説文〕の解は甚だ疑うべく、字はも う。これら金文の例によって考えると、字の初文正 いことをいう字である。〔説文〕は字を長に従う字 文身を示す字で美しい意があり、踊はもと髪の美し 弥の(彌)17 (彌)21 どこういいよいよ いう譬喩で、〔荘子、秋水〕にみえる。 長と爾とに従う。長は髪、爾は女性の 〔説文〕九下に正字を歸に作り、

神 源 意

沫 8 「釁」26

あらう・かおあらうビ・バイ

形声 声符は未。〔説文〕一上に「面を洒れなり」とみえる。重文として古文一字を録し、その字形は順に似ている。金文に「眉壽永命」というときの眉を、盤中の水をもって頭髪を洒う形に作る。その字が沫の初文であるが、音をもって眉と通用し、金文の眉寿の字にはすべてその字を用いる。今の字形になおすと釁となり、字は会意である。神酒をもって身を清めることを釁といい、首髪を洒うて清めることを釁という。釁・釁の上部は、いずれもそのることを釁という。釁・切のと頭上にかぶる形で、容器を倒にして、器中のものを頭上にかぶる形で、象形的な意象の字である。

弭。 ゆはず・とどめる

門標道多

会意 弓と耳とに従う。耳は弓の両端に用いる骨轡の紛れたるを解くべきものなり」とあり、耳声の轡の紛れたるを解くべきものなり」とあり、耳声の字とするが、声が異なる。重文として兒(児)に従っ字をするが、声が異なる。重文として兒(児)に従っ字をあげるが、児も弓末の弭の形。縁とは角飾や音飾を漆で固定したもの。弭は外すことがないもので、漆で固定する。〔詩、小雅、采薇〕に「寒頭魚で、漆で固定する。〔詩、小雅、采薇〕に「泉頭魚で、漆で固定する。〔詩、小雅、采薇〕に「泉頭魚で、漆で固定する。〔詩、小雅、采薇〕に「泉頭魚で、漆で固定したもの。弭は外すことがないもの情飾を漆で固定したもの。弭は外すことがないまいます。

で研究・預乱は、兵乱をとどめ治めることをいう。た弭兵・預乱は、兵乱をとどめ治めることをいう。

眉 g ばゆ

象形 目の上にある眉の形。〔説文〕四上に「目上の毛なり」とし、「目に從ひ、眉の形に象る。上は何葉に象るなり」とする。額の皺を加えた字形とするものであるが、字の上部は、呪的な目的で加えられている眉飾の形で、おそらく巫女などが、眼の兄弟を加えているものであるが、字の上部は、呪的な目的で加えらまた媚女(巫女)を殺す蔑の字形から、それが特殊な呪飾であることが知られるが、その字は骨、な呪飾であることが知られるが、その字は骨、な呪飾であることが知られる。その呪飾を加えた媚女が呪儀を行なうことを、媚蠱という。金文に「黄希眉藻」の語が多く用いられるが、その字は骨、ないの養酒を爲りて、以て眉濤を介む」とあり、眉寿とは長寿の意。婦人の蛾眉を美しとすることは甚だ古く、〔詩、衛風、碩人〕にみえる。画眉のことは秦人の始皇帝の宮中にはじまるとされるが、呪飾としては、古代にすでに行なわれていることである。

美 9 うつくしい・よい・ほめる

* ** ** *** ***

象形 羊の全形。下部の大は、羊が子を生むこと

The second secon

形の字によるものであろう。 外に垂れ、また美と釈しうる字であるが、名詞に用 従うというも、大はその下体である。美は羊の肥美 するものなり。 形である。〔説文〕四上に「甘し」と訓し、「羊に從 を羍というときの大と同じ意で、羊の後脚をも含む り、その羽飾は羊角の状と異なって、先端が左右に う。卜文にまた人が頭に羽飾を加えている字形があ さらに移して人の徳行や自然風物の美しいことをい すべきものをいう。それで形の美、肉味の美をいう。 の、義は犠牲に用いて完美なるもの、美も神に供薦 はみな羊に従い、善は羊神判によって勝利をえたも の状を示し、神に薦むべきものである。善・義・美 いており、用義を知りがたい。いまの美の字は、羊 大に從ふ。羊は六畜に在りて、主として膳に給 美と善と同意なり」とする。羊大に

敗10 かすか

の意よりして数妙の意となる。 常を(後)の上部の山字形のところは、みな髪帯や後(後)の上部の山字形のとろろは、みな髪のの形。 微や筋の字形の中央は、みな長髪の呪術者を、ある。 散は若い巫女を、徴・傲は長髪の呪術者を、ある。 散は若い巫女を、徴・傲は長髪の呪術者を、ある。 散は若い巫女を、徴・傲は長髪の呪術者を、ある。

梶 11 がじ・こずえ

る。木は楮の一種で、その樹皮で紙を作る。 ものであろう。また車の梶棒、木の名の意にも用いた その杪と梶と同義であるので、梶をその意に用いた に用いる。その本字は概。かじとりを挟秒といい、 に用いる。その本字は概。かじとりを挟秒といい、 をの本義はこずえ。わが国では船尾のかじの意 で、字の本義はこずえ。りが国では船尾のかじの意

加 11 えびら・そなえる

備ュ そなえる・つぶさに

ビ梶葡備媚寐

衛原 省首衛

これらのことに気疲れすることを憊という。 挙・備論、あらかじめすることを予備・備忘とい 備荒・備急・備蓄、十分を期することを備悉・備 玉を箙のような器に収めて、数えたものであろう。 「璧二備を用ふ」とあって、玉を数えるのに用いる。 いう語であるが、すべて対策を用意することをいい、 と訓する例がない。〔説文〕は葡を備具の義とした[広雅、釈詁]や諸経注にもみな備具の義とし、慎[広雅、 いることが多い。「洹子孟姜壺」に「璧玉備一銅」 のであろうが、字は葡を負う形で、なお旅の意に用 ため、備には周慎の意をもって「愼むなり」とした 八上に「愼むなり」と訓し、古文一字を録する。 それを負うのは、戦いに備える意である。〔説文〕 形声 声符は前。 葡は箙の象形にしてその初文。

媚 こびる・よろこぶ・いつくしむ

一个一个一个

初義は媚蠱とよばれる呪術を行なう巫女をいう。漢〔巻阿〕「庶人に媚ばる」は媚愛の意であるが、字のり」と訓する。〔詩、大雅、仮楽〕「天子に媚ばる」、り」と訓する。〔詩、大雅、仮楽〕「天子に媚ばる」、たもので、巫女をいう。〔説文〕一三下に「説ぶなたもので、巫女をいう。[説文〕一三下に「説ぶなたもので、巫女をいう。漢はその眉節を施した事」 声符は屑。層は眉節。媚はその眉節を施し

て自ら衒媚す」とみえる。に、「媚道とは妖邪巫蠱、以に、「媚道とは妖邪巫蠱、以に、「媚道とは妖邪巫蠱、以いたもので、〔鄭注〕に「今じたもので、〔鄭注〕に「今

が動き

寐 12 おる・ねむる

はず、寢するも寐ねざること數日」とは、寝食を廃る。廫は夢の初文。〔左伝〕昭十二年「饋するも食するもの。廖の省に從ひ、未聲」とす「願」を持た。〔説文〕七下に「臥

ビ 湄 琵 微〔微〕鼻〔鼻〕 糒 糜 縻 薇

声的に加えられているものであろう。することをいう。寐息をたてて寐ることで、未は擬

湄 12 みぎわ・ほとり

龍田海

形声 声符は眉。〔説文〕――上に「水艸交はるを ところ。字はまた糜に作り、〔詩、小雅、巧言〕「河 ところ。字はまた糜に作り、〔詩、小雅、巧言〕「河 ところ。字はまた糜に作り、〔詩、小雅、巧言〕「河 ところ。字はまた糜に作り、〔詩、小雅、巧言」「河 ところ。字はまた糜に作り、〔詩、木本では、水神の降り下る

琵12 びわ

形声 声符は比。〔説文新附〕一二下 ではもと象形の字である。魚のあんこうを琵琶魚と を、鳥孫公主がこれを馬上に弾じたことからはじま き、鳥孫公主がこれを馬上に弾じたことからはじま でたという。琵琶の二字とも、もと珡に従う字形で である。魚のあんこうを琵琶魚と

微13【微】13 かすか・ひそか・そぐ・なし

は長髪の媚女を歐つ形。このような媚女によって他を微という。数は微の初文とみてよい字である。数をいい、そのような呪儀を道路において行なうことをいい、そのような呪儀を道路において行なうことをいい、そのような呪儀を道路にあって他がある。

The state of the s

意となる。 散の声義を承ける字である。 意となる。 散の声義を承ける字である。

鼻 14 【鼻】14 はな・はじめ・とって

を引きて自ら界ふるなり。自界に従 をいうものであろう。人の生はまず鼻からその形が をいうものであろう。人の生はまず鼻からその形が うとは人をおそれること、鼻で洒うのを鼻洒、脈が うとは人をおそれること、鼻で洒うのを鼻洒という。

> 順という。
>
> 形声 声符は前で、備の省声。備に が高の意があり、備蓄として軍糧などに用意するほしいいを、糒という。〔説文〕セ上に に用意するほしいいを、糒という。〔説文〕セ上に が高があり、備蓄として軍糧など

麻水 17 がゆ・ただれる・ついやす・ほろぼす

成米 形声 声符は脈、(麻)。麻は古く明像、「粉骨糜軀」は、今ならば粉骨砕身という語で濃い粥をいう。これを他に及ぼして、「礼記、少機」「國家糜敝す」は、秩序の敗壊、「旧唐書、章皋濃い粥をいう。これを他に及ぼして、「礼記、少機」「國家糜敝す」は、秩序の敗壊、「旧唐書、章皋濃い粥をいう。これを他に及ぼして、「礼記、少機」「粉骨糜軀」は、今ならば粉骨砕身という語で、大きに、「から、「から、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、「から、「から、」は、「から、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、「から、」は、「から、」は、「から、」は、「から、「から、」は、いっしい。」は、「から、」は、いっしい。」は、い

脈外 17 きずな・つなぐ・しばる・すりへる

際・摩に声義の相通ずるところがある。 「特の響なり」とあり、轡で麇繋することを 三上に「牛の轡なり」とあり、轡で麇繋することを に糜の声がある。〔説文〕 一 に糜の声がある。〔説文〕 一

で のえんどう・ばら・ぜんまい

無は香草で、魏の曹操が好んで衣中に蔵したという。 がラ、紫薇はサルスベリ、白薇はフナバラソウ。薇がら、紫薇はサルスベリ、白薇はフナバラソウ。薇が牛には麓、豚には薇を加えて祭祀に供した。薔薇は的な草摘みの俗があった。のち官園にこれを植え、的な草摘みの俗があった。のち官園にこれを植え、

東 17 なれしか・ほとり

南 中 東

「伊尹の狀、面に須糜無し」は、鬚眉の仮借である。「仲舎の際に居る」は湄の仮借。また「荀子、非相」「河の糜に居る」は湄の仮借。また「荀子、非相」「河の麋に居る」は『個の仮信。また「荀子、非相」、「以よい として儀礼のときに用いられた。「詩、小雅、写言」として儀礼のときに用いられた。「詩、小雅、写言」として儀礼のときに用いられた。「詩文」「〇上に「鹿の屬なり」形声 声符は米。〔説文〕「〇上に「鹿の屬なり」形声 声符は米。〔説文〕「〇上に「鹿の屬なり」

成月 19 なびく・うつくしい・つきる

靡きは 意より、従う・偃す・美し・散り乱れる・はなれる ぶ意はない。 に用いるのは仮借、非は非余というすき櫛の形で飛 意として、靡無(なし)の義を本義とする。また他 一下に「披靡なり」とは風になびくこと。風に靡く の、斐然として美しいものの意がある。〔説文〕っ にも非に飛の義があるとするものもあるが、 のは、声の仮借である。〔通訓定声〕に非を否定の などの諸義を生ずる。〔詩、小雅、栄薇〕「室靡く家 **獨**狁の故なり」のように無しの意に用いる 形声 麻を糜・縻・靡などの声字として用い の声がある。非が意符。非に相並ぶも 声符は麻(麻)。麻に糜・糜・ 靡を無

義を承けるものとしてよい。ある字であるから、これら麻声に従う字は、その声る。麻を歐ってほぐすを散という。麻は散乱の意の

20 ひろい・はるか・ながれる

形声 声符は獺(弥)。弥は魂振りの儀礼を示す 形画、新台」に「河水瀰々たり」と、水勢のさかん が風、新台」に「河水瀰々たり」と、水勢のさかん なことをいう。瀰漫・瀰散のように広がりゆくこと なことをいう。

霰 21 「微」13 ごさめ

語も、〔万葉〕では他に例のない用字である。 といまな句を用いる。人麻呂の用字法・表記 はに特色のあることは知られているが、この霏霰の 法に特色のあることは知られているが、この霏霰の がで、煙霏霰(煙たなび でなび、()」のような句を用いる。人麻呂の用字法・表記 が、この霏霰の

配置 21 あらう・つつしむ・うつくしい

て地の配所にそそぎ、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地の配所にそそぎ、地霊をよび興す儀礼をいう字で水器をもって人に水をそそぐ形で、首髪を洗う声で水器をもって人に水をそそぐ形で、首髪を洗う高。すなわち「髪を洗ふ」の沫の初文。また字の上意。すなわち「髪を洗ふ」の沫の初文。また字の上意。すなわち「髪を洗ふ」の沫の初文。また字の上部だけをとっていえば、興の字で、興は酒器をもって地の配所にそそぎ、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をよび興す儀礼をいう字で、地霊をはいる。

ヒツ

| たぐい・けものをかぞえる助数詞・ひき

不一一所

with the state of the state of

ヒツ必泌畢粥筆

いるのは、仮借の用法である。車輛の両輪相並ぶ形であり、これを布帛の長さに用両は、のち布帛の長さの意に用いるが、兩(両)も

少 5 兵器の秘部・かならず・なしとげる

1 专谈设

東北 兵器の松部の形で、松の初文。共立 だった などの頭部を、柄に装着する部分を主とする形である。〔説文〕ニ上に「分極なり。八 代に従ふとすとがである。〔説文〕ニ上に「分極なり。八 代に従ふとすがつ分極の義も明らかでなく、字を八弋に従うとすかつ分極の義も明らかでなく、字を八弋に従うとすかつ分極の義も明らかでなく、字を八弋に従うとすかるか」の意の弋ではなく、秘の初文としての必でくるみ〕の意の弋ではなく、秘の初文としての必でくるみ〕の意の弋ではなく、秘の初文としての必でくるみ〕の意の弋ではなく、秘の初文としての必でくるみ〕の意の弋ではなく、本の初義にはのち秘の字が作せを必の字に用いる。必の初義にはのち秘の字が作せを必の字に用いる。必の初義にはのち秘の字が作りない。とは副詞の必然の意に用いられ、必は副詞の必然の意に用いられて、必死・必を必の字に用いる。という。という。というのとないのではないのでは、本のととを期する意に用いる。という。という。というのとないのではない。大いではない。

泌 8 ほそくはやい流れ・いずみ

(かげり)を生じたものを泌暈という。わが国では泌剤は水勢の相うつ音を形容する。沁みこんで暈をいう。その音は必、水声を形容する凝声語である。をいう。その音は必、水声を形容する擬声語である。をいう。その音は必、水声を形容する擬声語である。

MM に ヒッしみあとを沁暈・沁痕という。 しみあとを沁暈・沁痕という。

単 11 あみ・おわる・ことごとく

那 12 車のおおい・ゆだめ・たすける

韓奕」「簟茀錯衡」の〔伝〕に「簟茀は、漆ぬりの 形声 声符は弱。百はもと西(敷物)の形に作り、 で、文献に基というものにあたる。〔説文〕 二下に で、文献に基というものにあたる。〔説文〕 二下に で、文献に基というのは、弓の形をなおす「ゆだめ」 と解するもので、「引に従ひ、丙聲」と引を意符と と解するもので、「引に従ひ、丙聲」と引を意符と と解するもので、「引に従ひ、丙聲」と引を意符と と解するもので、「引に従ひ、丙聲」と引を意符と と解するもので、「引に従い、丙聲」と引を意符と と解するもので、「引に従い、丙醇」と引を意符と とのある車の蔽いとみるべきである。「詩、大雅、 でのある車の蔽いとみるべきである。「詩、大雅、 を解するもので、「引に従い、「一覧・「一覧・「一覧・」」の形に作り、

い。〔詩〕にはその用法はない。また「ゆだめ」のとあり、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてよし、字を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨以、子を輔弼の意に用いるのが仮借義。〔書、大禹謨い、子を輔弼の意に用いるものは、みなのちの用義であり、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、それらの文献は、戦国期以後の成立と考えてより、で記述とい。また「ゆだめ」のであるう。

筆 12 よでツ

会意 竹と幸とに従う。幸は筆を支刻したものと思われる。甲骨文の契刻は、まず筆で文をを筆と謂ふ。華竹に従ふ」とあり、楚では律、呉・を筆と謂ふ。華竹に従ふ」とあり、楚では律、呉・を筆を謂ふ。華を作ることは秦の蒙恬にはじまるとする説もあるが、甲骨にすでに朱墨で加えられるとする説もあるが、甲骨にすでに朱墨で加えられるとする説もあるが、甲骨にすでに朱墨で加えられるとする説もあるが、甲骨にすでに朱墨で加えられるとする説もあるが、甲骨にすでに朱墨で加えられるとする説もあるが、甲骨にすでにあり、準は筆を手たものと思われる。甲骨文の契刻は、まず筆で文をたものと思われる。甲骨文の契刻は、まず筆で文をたものと思われる。甲骨文の契刻は、まず筆で文を表します。

でいた文字がある。いま存する筆には、居延の木 肥質の筆がある。〔戦国策、趙策〕に刀筆、揚雄の はないれたが、近年出土した晋の侯馬盟書は、玉に朱 なわれたが、近年出土した晋の侯馬盟書は、玉に朱 書あるいは墨書したもので、当時の筆墨のあとを存するものである。

三月 3 せまる・おいたてる

形声 声符は高。高はものの漲れる 「説文新附」ニ下に「近きなり」と訓し、迫近の意。 「説文新附」ニ下に「近きなり」と訓し、迫近の意。 「説文新附」ニ下に「近きなり」と訓し、迫近の意。 「説文新附」ニ下に「近きなり」と訓し、迫近の意。 「ないった」と 「はいった」と 「はいった 「はいった」と 「はいった」と 「はいった 「はいった 「はいった 「はいった 「はいった

事 15 まめ・いばら

正的 15 馬がこえる・たくましい

有駜】「駜たるあり「駜たるあり」の〔伝〕に「馬等から「馬飽くなり」とするが、〔詩、魯頌、新聞、 形声 声符は必。〔説文〕 - 〇上に

逼

華駜

觱(嘴)

謐蹕

ヒャク

百

おり、この字もその肥強をいう。はこの字のあとに、馬の盛強なるをいう字を列して肥えて彊き貌」とあり、その訓義がよい。〔説文〕

觱 16 「觱」15 ひちりき

下声 正字は響に従い、その字が声である。字は角に従うており、とあり、着人の目は栗型なり。以て馬を驚かす。角に従ひ、鷺の臀なり。離は古文詩の字なり」とあり、羌人の用いる角度、大型であるが、早くから觱の字形で行なわれている。であるが、早くから觱の字形で行なわれている。であるが、早くから觱の字形で行なわれている。であるが、早くから觱の字形で行なわれている。である。字は角に従うており、とあり、鶯発とは寒風の吹き荒むことをいう。また〔大雅、瞻卬〕に「觱沸たき荒むことをいう。また〔大雅、瞻卬〕に「觱沸たる框泉」とは、泉水の涌き出るさまを形容する語である。字は角に従うており、もと角器をいう字であるる。字は角に従うており、もと角器をいう字であるる。字は角に従うており、もと角器をいう字であるから、やはり角笛の類であろう。のちの觱篥は竹管で、唐のとき亀弦国から伝えられたものという。管で、唐のとき亀弦国から伝えられたものという。

三口 1 つまびらか・つつしむ・やすらか と 1 ヒツ

三上に「靜かに語るなり」とする。言は祈禱や盟誓、意であろう。[爾雅、釈言]に「靜なり」、「説文」刃の器の秘部の形で、これを聖器とし、呪鍼とするい。 血部に「械器なり」とするが、必は兵政権を関する。 強は「説文」五上、東極

うることをいう。など声義が通じ、宓は廟中にその聖器をおをいう。****

18 さきばらい

ヒャク

百 6 ひゃく・もも・もろもろ

图图 【图图

なり。十百を一貫と爲す。貫は章なり」というが、十なり。一白に從ふ。敷、十十を百と爲す。百は白し、数の百を示す字とする。〔説文〕四上に「十の指事 声符である白の上に、一横線を加えて区別

百慮のように用いる。 花・百官・百般・百事・百子・百世・百代・百薬・ のであるから、全体の意に用いることが多く、百 に△を加えている例はない。数の百は成数を示すも たものかと思われる。百の字形以外に、白の義の字 に△形を加えており、 がたい。白の形は髑髏の形である白と異なって、中むりに説をなしているところがあって、文義をとり あるいは髑髏の鼻の竅を示し

ヒュウ

11 虎の毛のもよう・まだら・あやヒュウ(ヒウ)・ヒョウ(ヘウ)

影卷

(説文)五上に『虎文なり。虎に從ふ。彡はそ 会意 らわす記号的な文字で、彪とは虎文の美をいう。 虎と彡とに従う。彡は色彩、形相の美をあ

馬馬 30 多くの馬が走るヒュウ(ヘウ)

7 7 1 000

鐘〕があり、韓宗のための器を作っている。また「驫々は走るなり」という。列国の器に「驫を覧」に「衆馬行くなり」、また「広雅、釈訓」に「‱巻」、「泉水」、「泉水」、「泉水」、「泉水」、「泉水」、「泉水」、

The second second

ヒョウ 氷[冰](仌)

流域にいた羌人の族であろう。韓は当時河曲部にあ **屬姒の名がみえるものが二器あり、姒姓を称して 魔羌は韓室につかえていた異族である。**

ビュウ

終17 まとう・あやまりビュウ (ビウ)・ボク・キュウ (キウ)

0

そこから誤謬の意が生れる。また繆々は穆と通じて知られる。繆は糾繆(まといつく)の意であるが、穆以下を大廟と昭・穆に配祀したものであることが 周廟の制は文・武・成を先世として祀り、康・昭・と称したらしく、のち康昭宮・康穆宮の名があり、 三上に「枲の十絜なり」とし、また「一に曰く、 寥の古紐は以いであったと考えられる。〔説文〕。寥。寥を声符とするものにまた璆・膠があり、は寥・廖。寥を声符とするものにまた璆・膠があり、形声 声符は翏。翏に醪の声があるが、漻の本音 金文にみえる廟制をもっていえば、周の大廟は康宮 と宗廟制とが直接に関連するものとは考えがたい。 替婚の形式から出たものとする説もあるが、交替婚 義、すなわち縄を左右交替にかけてゆくように、交 ずるので、周の宗廟の制である昭穆制を、紹繆の ような状態をいう。字はまた昭穆の穆と声義が通 合せてものをまといつける意の連語。鳥が巣を作る 綢繆なり」という。次条に「綢は繆なり」とあり、

> 深く思うさま。その他繆異・繆戻などは、謬と同深く思うさま。その他繆異・繆戻などは、謬と同いない。 死の意である。

謬 18 みだりごと・あやまり・いつわるビュウ(ビウ)

いう。繆と声義が通ずる。誤謬を糾すことを糾謬と誤謬・謬妄のように用い、誤謬を糾すことを糾謬とは、とりとめのない、きりのない言説の意である。 「謬悠の說、荒唐の言、端崖無きの辭を以てす」と認めなり」の諸訓をあげている。〔荘子、天下〕に、誤りなり」の諸訓をあげている。〔荘子、天下〕に、 とあり、〔広雅、釈詁〕に「差ふなり。欺くなり。 形声 る。〔説文〕三上に「狂者の妄言なり」 声符は翏。翏に繆の声があ

ヒョウ

氷 5 「冰」。「仌」4

る。 と凝成のように、これを各、別の字として用いてい に從ふ」と凝と同字であるとするが、漢碑には冰霜 月」の語がある。〔説文〕はまた「凝、俗に冰は疑 別に冰字を出して「水堅きなり。仌に從ひ、水に從 象形 る。仌は用例なく、冰は斉器の〔陳逆殷〕に「冰ふ」とするが、二字を別の字とすることは疑問であ 「凍るなり。水の凝る形に象る」という。また 正字は人に作り、氷結の象形。〔説文〕一

であるから、これを疑うべき理由はない。 造した字とするが、すでに列国期の斉器にみえる字 じ字形がみえる。〔戦術篇〕に、冰を魏晋の人の偽〔詩、小雅、小宛〕「薄冰を履むが如し」にも、同る。〔唐石経、書、若牙〕「春、冰を涉る」の冰は、る。〔唐石経、書、羌米〕「春、冰を涉る」の冰は、

妥 なげる・なげわたす・おちるヒョウ(ヘウ)

木瓜を以てす」とあって、投の字を用いている。 衛風、木瓜〕にも投果の俗を歌い、「我に投ずるに るが、 を待つ意である。受は手に直接受け渡しする形であ 歌垣などのときに、思う男に果物をなげ、その応答 投擲の意。その詩はいわゆる投果の俗を歌うもので、 するが、〔玉篇〕に「擲つなり」とするのがよく、するが、〔玉篇〕に「擲つなり」とするのがよく、ける形である。 摽は〔毛伝〕に「落つるなり」と訓 としては受・受・爱・働など、みな上下の手で相承 標 有梅〕の詩句で、「韓詩」に摽を受に作る。字形います。と摽の音でよむという。「詩、召南、りの若くす」と摽の音でよむという。「詩、召南、 付すなり」とし、「讃みて、詩の摽つるものに梅有矣。「説文」四下に「物落つるに、上下相す字である。〔説文〕四下に「物落つるに、上下相す字である。〔説文〕四下に「物落つるものに梅有 標と同じく投擲の意をもつのであろう。〔詩、 から与え、あちらで受け取ることを示 上下の手の合する形。こちら

表 おもて・あらわす・しるしヒョウ(ヘウ)

会意

〔説文〕八上に「上衣なり。衣に從ひ、毛に從ふ。 裘を衣るに、 毛を以て表と爲す」という。 毛のみえるのが表である。 衣と毛とに従う。 獣

ヒョウ

受

表 俵

殍

票[要][變]

もので、時計をも表という。 うに用いる。表座は台のある日時計。目盛りをした ものの意となり、表識・表題、また発表・表現のよ 色の裏地をつけた。表裏の意より、外にあらわれる にいうものが多く、車上に虎皮を用いるときには、 る。金文の賜与に「虎宮熏裏」「虎宮朱裏」のよう か」とあり、普通には毛を表にして用いたものであ 裏の盡くるときは、毛の恃むところ無きを知らざる

俵 10 ちる・わかつ・たわら

う。わが国では、米俵などの意に用いる。 刑部〕に「俵分して散ず」というのは、山分けをい 分与する意である。古い用例はなく、〔六部成語、形声 声符は表。〔玉篇〕に「散ずるなり」とは、

豹 ひょう (ヘウ)

とするが、転音の過程を考えがたい。〔晉書、王献やとするが、声は合わない。〔徐箋〕には勺の転声〔説文〕九下に「虎に似て圜文あり」とし、勺声の(勺)の形で残されたもので、勺は声符ではない。 たとみられる獣の字形もみえる。その斑文がのち勺 卜文に虎文の獣のほかに、豹斑をつけ 字の初文はおそらく象形で、

> 子の変に処する道を、君子豹変という。「その文、蔚たる(うるわしき)なり」とあり、 見るのみ」という話があり、 この郎(人)、また管中より豹を窺ふ。時に一斑を いう。また〔易、革卦〕に「君子豹變す」とは、 南風競はず(お前が負けそうじゃ)と。門生曰く、 之伝〕に「嘗て門生の樗蒲(双六の類)を観て曰く、 一斑の美とは、 豹斑を

髟 かみがたれる・たてがみ ヒョウ(ヘウ)・ヒュウ(ヒウ)

がある。馬のときには、たてがみの意となる。 〔秋興の賦〕に「斑饕髟として以て弁を承く」の句 長髪やまた老人の蓬髪の状などを形容する。潘岳の 示す記号的な文字であるから、影とはゆたかな髪の とあり、〔玉篇〕に「長髪髟々たるなり」に作る。 さまをいう。〔説文〕丸上に「長髪猋々たるなり 髪の人の形。ぎはそのゆたかなさまを 長と彡とに従う。長は長で長い

殍 うえじに ヒョウ (ヘウ)・フ

殣という。獾も饑饉による餓死者のことである。 れとなって、所在にこれを埋めたので、殍殣・道 と。饑饉のときには、多くの餓死者が出て行きだお 作る。「發く」とは倉廩を開いて、米穀を給するこ 餓莩あるも、發くことを知らず」とあって、餓莩にあり、餓殍をいう。〔孟子、梁恵王、上〕に「塗にがない。〔五子、梁恵王、上〕に「塗に形声」声符は学。〔玉篇〕に「餓死するなり」と

票 11 「 要] 11 「 解] 18 と いかとぶ・とぶ

大 12 犬の走るさま・はしる・つむじかぜ

| 12 | 12 | はかる・しなさだめ |

る。〔広雅、釈詁〕に「平なり。議なり」とあり平形声 声符は平(平)。平は秤で、持平の意があ

Spills to displace as as a graph since .

は、公平に評価すること。その語を評語という。竹林の七賢の一人であるに籍は、奇矯の行いで知られるが、みだりに時事を論じたり、人物を批評することはなかった。評論の結果を評判という。中国ではとはなかった。評論の結果を評判という。竹とはなかった。評論の話と評論という。竹様の子に評価する意である。

標3 (火)20 かるい・はやい

形声 正字は僕に作り、受声。要は 原を焚くこと。焚かれてその火勢で軽 意がある。〔説文〕八上に「輕きなり」とあり、軽 挙するものを襞(票)という。票に軽く挙がり漂う 意がある。〔説文〕八上に「輕きなり」とあり、軽 挙するものの意。〔方言〕に、楚では軽薄なものを いう語とする。身軽に行動することをいい、僄勇・いう語とする。身軽に行動することをいい、僄勇・いう。要は

票 13 さす・おびやかす・はぐ・つよい

登し易し」というような、狂慢の俗をいう語であった。 ・ 「儒墨を剽剝す」とあり、、また「一に曰く、人を剽禁するなり」とあり、、また「一に曰く、人を剽劫するなり」とあり、攻撃を加える意である。ことをいい、剽悍・剽狡など、僄と同義に用いる。ことをいい、剽悍・剽狡など、僄と同義に用いる。ことをいい、剽悍・剽狡など、僄と同義に用いる。ことをいい、剽悍・剽狡など、僄と同義に用いる。ことをいい、剽悍・剽狡など、僄と同義に用いる。これでは、「震壓を剽剝す」とあり、攻撃を加える意である。「震墜を剽剝す」とあり、また「一に曰く、人を剽撃はなく、「史記、貨殖伝」に「その俗をいう語であった。

光は「凭」8 もたれる・よる

形声 声符は鳴っ 憑と通用する字で (机)に従う。俗に凭に作り、「凭れる」のように用いる。「説文」「四上に凭を正字とし「几に依るなり。任几に従ふ」とし、馮声によむという。また「周書に曰く、玉几に凭る」の文を引くが、いまの〔書、に曰く、玉几に凭る」の文を引くが、いまの〔書、に曰く、玉几に凭る」の文を引くが、いまの〔書、に曰く、玉几に凭る」の文を引くが、いまの〔書、に曰く、玉凡に凭を正字として、一次を正字とすべきみない。憑依の憑とも関連して、憂を正字とすべきみない。憑依の憑とも関連して、憂を正字とすべきみない。憑依の憑とも関連して、憂を正字とすべきのあろう。

好 4 すばやい・かるい・みだら

標は「抛」8 うつ・なげうつ・おちる

みてよい。
は栗つなり」とあり、拗は摽の異体字と詰〕に「拗は雫つなり」とあり、拗は摽の異体字とにこれを思ひ
寤めて辟つこと摽たるあり」とは、投果の俗を歌う。また[邶風、枯・ダ 戸靜かにここ投果の俗を歌う。また[邶風、枯・ダ 戸靜かにここ

漂4 ただよう・うごく・かるい・あらう

形声 正字は奥に従い、奥(票)声楽学の意がある。水に漂という。それで水に漂うことを漂という。「説文」二上に「浮ぶなり」とは、漂流する意である。水に漂といい、火に熛という。である。水に漂といい、火に熛という。である。水に漂といい、火に熛という。である。水に漂といい、火に熛という。である。水に漂という。流もまた生子を水に流すことを意味する字である。票に浮動の意があり、漂にを意味する字である。票に浮動の意があり、漂にとを意味する字である。票に浮動の意があり、漂にかっ。うらぶれて定処するところもないのを漂流の意があって、所定めずさまようことを漂泊という。人の世はしばしば浮草にたとえられるが、それを漂流という。人の世はしばしば浮草にたとえられるが、それを漂流という。また水にもんで洗った。

標 15 とずえ・はしら・しるし・たてる

が高く伸びて揺れることをいう。また標木として立る。〔説文〕六上に「木の抄末なり」とあって、消滅る。〔説文〕六上に「木の抄末なり」とあって、消滅る。〔説文〕六上に「木の抄末なり」とあっては悪に従い、幾(票)声

ヒョウ 漂 標 熛 憑 飘 縹 飄

ので標示の意となり、その木をまた榜という。 互いに称誉することを「相標榜す」というが、榜もまた榜示の意であるから、もとその善行を称揚する意であり、そのことを目的とすることをまた標榜という。字はまた標榜に作ることがある。目的とするところは、また規範とすることであるから、標準・標致のは、また規範とすることであるから、標準・標致のは、また規範とすることであるから、標準・標致の意となる。標章は標示の記号、商標のように、記号は、記号を表示の意に用いる。

近 5 火がとぶ・はやい・はやて しょう (ヘウ)

形声 正字は奥に従い、奥(票)声は焚見の象で、その火勢でものが標を含む字形である。〔説文〕一〇上に「火飛ぶなり」というが、もと焚屍のことをいう字であり、化去しというが、もと焚屍ののことをいう。奥が熛の初文で、下部に火を含む字形である。〔説文〕一〇上に「火飛ぶなり」というが、もと焚屍の象で、その火勢でものが標を含む字であり、一般である。原矢とは火箭をいう。

憑 16 よる・たのむ

形声 声符は馮。馮に馮依の意がある。凡に馮るを悪といい、その心情を憑という。[書、顧命]に、王凡に憑る」と憑を用いる。「楚辞、離騒]「憑つれども求索に厭かず」「喟心に憑ちて弦に歴たり」は満盈の意。字はおそらくもと麤に従う字であろう。相よって勢いをなすことから、憑る・憑む・憑の相よって勢いをなすことから、憑る・憑む・憑のの相よって勢いをなすことから、憑る・憑む・憑のの相よって勢いをなすことから、憑る・憑む・憑のの意がある。凡に馮る形声 声符は馮。馮に馮依の意がある。凡に馮る形声 声符は馮。

一別 16 ヒョウ (ヘウ)

の 17 はなだいろ (ヘウ)

大声 正字は奏に従い、奏(票)声を標 細といい、書帙を作るので縹帙という。の帛を縹 細といい、書帙を作るので縹帙という。の帛を縹 細といい、書帙を作るので縹帙という。の帛を縹 細といい、書帙を作るので縹帙という。また。 その色で、酒にも春清縹酒というのがあった。その色の帛を縹 細といい、書帙を作るので縹帙という。

更が 20 つむじかぜ・はやて・ひるがえる ヒョウ (ヘウ)

10

流病」

やまい・うれえる・つかれるビョウ(ビャウ)・ヘイ

人の性情などの上に移して飘逸・飄泊・飄零のよとあり、旋風をいう。暴風・疾風などの強風をいい、 うに用いる。猋・飆と声義の通ずる字である。 高く揚がる意をもつ。〔説文〕一三下に「回風なり」 票は焚屍の象で、火勢によってものが* 正字は煛に従い、爂(票)声。

21 つむじかぜ・まヒョウ (ヘウ) まいあがる・みだれる

まの颱風のような大風をいう。 萬里」とあり、北溟よりして南溟に徙るという。い る。〔荘子、逍遥遊〕に「扶搖に搏ちて上ること九 扶揺は飆の緩音、扶揺の音を急にすると飆の音とな 〔爾雅、釈天〕に「扶搖これを猋と謂ふ」とあり、 とあり、重文として包に従う字をあげる。 意がある。〔説文〕」三下に「扶搖の風形声 声符は森。森に森忽・森急の

鐮23 くつわ(ヘウ)

風、碩人」に「朱幩鑣々たり」とあり、朱幩はくつ車馬には、そこにも美しい飾りをつけた。〔詩、衛出ており、そこに鑾鈴なきかけることもある。富人の出ており、そこに鑾鈴をかけることもある。富人の出ており、そこに鑾鈴 従う字を録する。馬の口に銜えて、その両端は外に なったものであろう。 になびくさまをいう。そのような形容語が、名詞に わの飾り、朱糸をまとうたもので、鑣々はそれが風 「馬の銜なり」とし、重文として角に 形声 声符は麃。〔説文〕「四上に 朱幩はくつ

ビョ

苗 8 なえ・すえ ビョウ (ベウ)

〔詩、魏風、碩鼠〕「碩鼠碩鼠 我が苗を食ふことなあるかな」とあり、すべて田穀の初生のものをいう。 秒 末・渺遠の義に仮借したものであろう。 せいき せいぶく せいぶん せいぶん せいぶん ては江西・湖北・湖南の地は、かれらの居住地であ 苗族の名とする。古く南人とよばれるもので、かつ 田、「公羊伝」には春の田の名とする。また南方のな、(公羊伝)には春の田の名とする。また南方の猟(狩)の意に用い、「左伝」「穀梁伝」には夏の猟(谷)の かれ」とは、領主の搾取をうらむ詩である。また田 **禾苗をいう。〔論語、子罕〕「苗うゑて秀でざるもの** 会意 に「艸の田に生ずるものなり」とし、 艸と田とに従う。 〔説文〕 一下

秒 9 のぎ・かすか・ビョウ(ベウ) ・わずか

とあり、 ものであるから、僅少のものをいう単位とする。 や角度をはかるとき、分の六十分の一をいう。秒忽 の忽は、蜘蛛の糸であるという説がある。 先端に伸びている穂先をいう。極めて細い 会意 時

> また欠点、すべて不健康な状態のものをいう。 なり」、また「儀礼、既夕礼」に「疾、病なり」の るが、のち疾病のように連ねて、病を名詞に用いる ようにいう。疾が名詞、病はその状態をいう語であ えがく・かく・うつすビョウ(ベウ) 声符は丙。〔説文〕七下に

描加

以後に用例のみえるものである。 字と称せられた。この字は古い字書にみえず、 ことをいう。黄庭堅の字は筆力軽妙であるので、描し。描は輕くして豪は重し」と、その筆意の異なる 形声 声符は苗。〔六書故〕に「描と摹と聲相近 唐 、 、 宋 。 描

猫 1 (貓) 15 ねこ (ベウ)

感じられていたのである。 猫睛というのは、猫の目のことである。子の日は鼠う。家猫を狸奴という。時とともによく変るものを を行なうことを、猫鬼という。猫は不気味なものと の日。その日に猫を用いて巫蠱(呪詛のまじない) 形声 雑に作り、「貍(狸)の屬なり」と 声符は苗。〔説文新附〕九下に

水 水 12 ひろいみず・はるか・ひろいビョウ(ベウ)

の詩文に多く用いられている。 漫など、はてしなく広い水のさまをいう。 上に「大水なり」とあり、森だ・森を意一三水に従う。〔説文新附〕一

渺 はるか・ひろいビョウ (ベウ)

〔管子〕や〔楚辞〕にみえるが、古くは眇を用いた。 淼よりも古く行なわれていた字である。 なり」とする。渺茫・渺漫など、森と声義同じ。附〕二上に森の一体の字とし、〔玉篇〕に「水長き附〕二上に森の一体の字とし、〔玉篇〕に「水長き 声符は眇。眇に渺遠の意がある。〔説文新

廟 [庸]1 みたまや(ベウ)

自動動動

所を廟という。金文の廷礼冊命は、 またそのことは祖霊の前で行なわれたので、 礼で、そのときに政事が行なわれたので朝政といい、 ることがある。朝は朝日の礼、すなわち日を迎える を用いている。宗廟の意より、神殿・政庁の意に用 し、庿に作る。〔儀礼〕十七篇には、すべてその字貌なり」というのと同じである。また古文一字を録ぎ いる。金文の字形にはときに广に従わず、朝を用い の貌を尊ぶなり」と、貌と畳韻をもって解する。の貌を尊ぶなり」と、貌と畳韻をもって解する。「妃文」九下に「先祖分離して、宗廟の意となる。「説文〕九下に「先祖 繋が記、祭法、注〕に「宗廟なるものは、先祖の尊[礼記、祭法、注] に「宗廟なるものは、先祖の尊 ところで、それがまた廟所であったが、のち祭政が 会意 广と朝(朝)とに従う。 もと朝礼を行なう すべて宮廟の中 その祀

> ることも 廷で行なわれており、 あっ た。 ときには臣下の廟で行なわれ

ヒョク

皕 12 二日ロク

の最大の蒐集である。皕の形を含む爽・畫は、とう。清の陸心源は宋本二百種を蔵して「皕宋楼」とう。清の陸心源は宋本二百種を蔵して「皕宋楼」といった。清の陸心源は宋本二百種を蔵して「皕宋楼」といった。 モチーフとする文様を示す形である。 もに文身を加えることを意味する字で、皕は乳房を 会意 二百に従う。〔説文〕四上に

配 20 (副) 11 さく・ひらく・わかつ

飾りをつけていない散爵のことである。疈は疈辜の 行なわれた。また〔周礼、鬯人〕に「凡そ鵩事にき、蝎蟲を防ぐために、城門に犬皮を磔することが は散を用ふ」とあり、散とはそのとき用いる酒器で、 を疈きて、 「疈辜を以て四方百物を祭る」の〔注〕に、「牲の胸 『空記: ないて磔することをいう。[周礼、大宗伯]を左右に披いて磔することをいう。[周礼、大宗伯]を左右になる。 複判をもって災厄を祓うとき、その皮 顧奉とは、犠牲をもって災厄を被うとき、その皮をといい、副の初文。すべて両分することを驅といい、 ふくれる意。その盈満したものを二分することを疈 疈きてこれを磔す」とみえる。大儺のと 会意 畐はゆたかな容器で、ものの 二畐と刀とに従う。

> ことに用いられ、副弐の意には副の字を用いる。も と同じ字であるが、慣用によって二字に分岐したも のとみてよい

6 めす・ビン

肌 4, W) K

母なり」とあり、牡には「畜父なり」という。牝牡ぞれ性器の部分の象形である。〔説文〕二上に「畜ぐれ性器の部分の象形である。〔説文〕二上に「畜ぐれ性器の部分の象形である。〔説文〕二上に「畜ぐれた」。「いん」 くる(滅びる)なり」という。 り、〔書、牧誓〕に「牝雞の晨するは、これ家の索は獣畜にいう語であるが、また牝鶏のような語もあ

口 9 しな・たぐい・わかつ・かず・のりヒン

60 А А Я Я Я **44** 44 44

品が祝禱を列する意であることが知られる。 そのことばを謳という。これらの系列字によって、形で、これに対して祈ることを歐(欧)・歐といい、水で、これに対して祈ることを歐(欧)・歐といい、たとえば區(区)は秘匿の所において祝禱を列するたとえば區 衆と爲す。故に三口に從ふ。會意」とする。しかし 〔説文〕ニ下に「衆・庶なり」、〔段注〕に「人三を品とは種々の祝禱をあわせて行なうことをいう。 会意 三口に従う。口はD、祝禱を収める器の形。 多くの

廟[庿]

ヒョク

皕

驅(副)

ヒン

牝品

the state of the s

ヒン 浜〔濱〕 彬〔份〕 貧 斌〔份〕 稟〔禀〕 賓〔賓〕

には、日本の意となり、品種の意となり、品第の意となる。「登設」に「臣三品を賜ふ。州人・東人・庸人なり」とあって、臣の出身地に品を以てす」とあるのも、伊虜をそれぞれその出に品を以てす」とあるのは、金・銀・銅の三種をいう。のち三品」とあるのは、金・銀・銅の三種をいう。のち三品」とあるのは、金・銀・銅の三種をいう。のち三品」とあるのは、金・銀・銅の三種をいう。のちっ般に種類・品種、その等級を区分する意に用い、それに品第・評価を加える意となる。人の性情につそれに品第・評価を加える意となる。人の性情につそれに品第・評価を加える意となる。人の性情につる規範を、品位・品格・品行・品性・品藻・品流など、その語が甚だ多い。その品流に応じて立てられている規範を、品式という。詩についていえば、「詩品」る規範を、品式という。詩についていえば、「詩品」る規範を、品式という。詩についていえば、「詩品」る規範を、品式という。詩についていえば、「詩品」る規範を、品式という。詩についていえば、「詩品」などの書がある。

ドラ 正字は頻に作り、また濱に作る。頻声近、10【濱】17 はま・みぎわ・そう・はて

語がある。 語がある。 に賓声である。いま濱(浜)と獺とは慣用を異にし、た賓声である。いま濱(浜)と獺とは慣用を異にし、た賓声である。いま濱(浜)と瀬とは慣用を異にし、八季土の濱 王臣に非ざる莫し」とあり、水涯の意より、地の尽きるところをいう。〔公羊伝〕僖四意より、地の尽きるところをいう。〔公羊伝〕僖四篇の意に用い、〔国語、斉語〕に「死に濱づく」の瀬の意に用い、〔国語、斉語〕に「死に濱づく」の瀬の意に用い、〔国語、斉語〕に「死に濱づく」の瀬の意に用い、〔国語、斉語〕に「死に濱づく」の瀬の意に用い、〔国語、斉語〕に「死に濱づく」の

彬江「份」のあきらか・うつくしい

るから、その文体は優雅であるべきをいう。 おは粉にして粉群」とあり、頌は神霊に告げるものである。字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるのちに君子なり」とあり、野は野鄙、史とは文飾ののちに君子なり」とあり、野は野鄙、史とは文飾ののちに君子なり」とあり、野は野鄙、史とは文飾ののちに君子なり」とあり、野は野鄙、史とは文飾の。 字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるる。字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるる。字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるる。字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるる。字はまた滅に作るが、これは文武を兼ね備えるる。字はまた滅に作るが、これは文武を持つという。

貧口 まずしい・すくない・とぼしい

斌12 「份」6 うつくしい・いりみだれる

い、一体として彬をあげる。彬・份・斌は要するに文〕ハ上に份を正字とし、「文質備はるなり」といく質の貌」とするが、正字は桃。〔説いる。「玉篇〕に、文章、文と武とに従う。〔玉篇〕に

用いている。 「実記、儒林伝」に「斌々として文學の士多し」とに用例なく、彬を用いることが最も多い。また斌はに用例なく、彬を用いることが最も多い。また斌はに用例なく、彬を用いることが最も多い。また斌は一字にして字体を異にするものであるが、份は文献

寛末 13 □東□13 扶持・うまれつき・うける

京 二 新華

蜜 15 【賓】14 まろうど・きゃく・したがう

南倉 家分

賓は穷にさらに貝を加えた形である。〔説文〕云下を供えて神を迎える意であり、賓とは客神をいう。の初文。万の形は犠牲の下体の象形で、廟中に犠牲会意 べと万と貝とに従う。古くは穷に作り、賓

歌伯(人名)を寧んぜしむ。貝を賓らる」とあって、に貝布を賓る、〔三瞬〕に「王、孟(人名)をしてに貝布を賓る、〔三瞬〕に「王、孟(人名)をしてに貝布を賓る、〔三瞬〕に「王、孟(人名)をしていり、外使に贈物をすまた外使を迎える儀礼を賓といい、外使に贈物をすまた外使を迎える儀礼を賓といい、外使に贈物をす 西 周以後のことであり、列国期には貝にかえて鼎せいる。 好賓と好宗とを相対して用いており、同宗と他とを の家廟に属しないものを賓客と称した。〔虘鐘〕に の字形は、その形に従っている。字は賓迎を初義と の形にかかれることもあり、〔説文〕の録する古文 式で、祖霊を迎えることをいう。その字はときに完 はなす形が鬱である。卜辞に「王、穷す」という形のがそれで、羊に我(鋸)を加えて、下体を切り作る字形があり、万は鬱の下部の丂の形にみえるも 神を周廟に迎えることを歌う詩である。卜文に方に た客人や食客などをも賓という。〔説文〕に字を写れている。「記文」に字を写れている。 含めていったらしく「賓客及び我が父兄」のように 賓として迎える諸侯の意。春秋期には同族の人をも **寳報の礼を賓という。〔小盂鼎〕に邦寳というのは、** の義となる。客も客神を意味する字であった。のち いう。〔詩、周頌、有客〕は、客神として殷の祖 を加えている字形もある。賓主の義よりのち主従の いう例が多い。本支の関係が次第に分化して、自分 し、のち異姓の神に専用されるようになって、賓客 として迎えることを意味した。客とは異姓の客神を なり」とあって賓客の意とするが、もとは客神を賓 に「敬ふ所なり」と賓敬の意とし、「玉篇」に「客

声とするのは誤りである。

¶ 16 主をたすける人・みちびく・うやまう

南南原南

形声 声符は(賞)。實は主に対して客をいう。 形声 声符は(賞)。實は主に対して客をいう。 において償と實とを混用しているが、價は賓を動詞において償と實とを混用しているが、價は質を割して、則ち償せしたが、質が、質ができる。。 では、質が、質ができる。」のように、礼書が、賃貸でする。質を動詞化した字とみてよい。 か」、「儀礼、背ができる。」のように、礼書が、質ができる。質を動詞化した字とみてよい。 をあり、優礼において償と質とを混用しているが、價は資を動詞において償と質とを混用しているが、價は資を動詞に対して客をいう。

擯17 すてる・しりぞける・みちびく

が開います。 を解してこの字を録するが、字は擯斥・擯棄の意に用いる。主客を輔佐するものを介といい、主に従うものでのを擯、客に従うものを介という。主に従うものであるから、外に排除する意をもつに至ったのであろあるから、外に排除する意をもつに至ったのであるから、外に排除する意をもつに至ったのであるから、それで擯斥のように用いる。

上が 17 虎の皮のもよう・あや

舵たるなり」とみえるが、ほとんど用例はない。 院文の文彩あることをいう。[説文] 五上に「虎文

17 「分」7 地名・周の故地

師」という軍団名や、基地名としての敷がみえていた幽の卣」があり、また「鱧設」〔静設〕には「敷の司るものもある。また「敷伯」の器があり、「敷の司るものもある。また「敷伯」の器があり、「敷の司るものもある。また「敷伯」の器があり、「敷め」などの器に干名字があり、〔敗尊〕〔敷ڧ〕などの器に干名字があり、〔敗尊〕 るが、 その字形は、牲獣を焚殺し、それに支を加えて祈る の詩篇のうちに、周公の名がみえるのは、そのよ諸器」はそのような移民の器であろう。〔詩、豳風〕 くその故地には、殷の遺民が多く移され、その軍団がこの地に入り、のち豊鎬の地に移ったが、おそらがこの地に入り、のち豊崎の地に移ったが、おそら 字形字義を知りがたいとするものである。邠は形声 幽山あり。山に從ひ、豕に從ふ。闕」とする。その に字を邠に作り、「周の太王の國。右扶風美陽に在 もので、その祭儀を示す字である。豩は豕部九下に にいたことを示すものと考えられる。
数は豳の初文 うな移民の統治者として、周公一族のものがこの地 をもって北方の玁狁に備えたものと思われる。〔数 る。豳は陝西の重要な地であったらしい。かつて周 の字であるから、豳がその初文である。金文に数の あげ、「美陽亭は卽ち豳なり。民俗、夜を以て市す。 り」として分声の字とし、また重文として豳の字を 専ら地名・国名として用いる。〔説文〕六下 犠牲を焚く祭儀を示す字であ 二豕と火とに従う。

And the second s

名として、形声字の邠が作られたもので、邠が正字 る。もとそのような祭儀を示す字であろう。のち地 う形で、豳もその形に従うものであったと考えられ つ獣、すなわち祟の初文である。金文の敷は錦に従(殺)・弑(弑) などの字の従うところで、呪霊をも 上帝に類す」の肆の初文と解しているが、帬は殺も両帬に従う黐の字形をあげ、〔書、舜典〕「肆にも両帬に従う黐の字形をあげ、〔書、舜典〕「肆にはこの字の説解を未詳としている。また希部九下に 「二豕なり。豳これに從ふ。闕」とあって、〔説文〕 であるのではない。

頻 【頻】16 「頻」19 みぎわ・しきり

であろうが、むしろ顰蹙の字義との関係に問題が「比なり」とは、比親(したしむ)の意とするもの 義を明らかにする資料はない。〔広雅、釈詁〕に礼を意味する字であったと思われるが、いまその初 はずや」のように瀕危(危い)・瀕涯(水のほとり)ここに頻し、「大雅、召旻」「頻(瀕)よりすと云ここに頻し、「大雅、発表」「國步いる字であるが、古くは〔詩、大雅、桑美」「國步いる字であるが、古くは〔詩、大雅、桑美」 となった。 大の實附する(近づく)所なり。響戚して前まず 大の實附する(近づく)所なり。響戚して前まず 大の實別する(近づく)所なり。響戚して前まず となり。 きの姿であるから、それは水獺における何らかの儀 おいては順に用いる字である。 真は儀礼を行なうと の意に用いる。〔説文〕の正字とする瀕は、金文に とは、いま慣用を異にする字であるから、ここでは 歩(歩)と頁とに従う。〔説

> 用いられる。 あるようである。 いまは「頻り」という副詞に多く

殯 18 かりもがり

で、〔詩、秦風、小戎〕に武将の殯葬を歌うて、殯を行なう宮を殯宮という。古く板屋と称したもの辞に、祖霊を祭るとき、「王、賓す」の語を用いる。 これでは、夏の時代)は胙階(主人の階)に賓し、また「夏后(夏の時代)は胙幣(主人の階)に賓し、遇す。 ぎに從ひ、賓に從ふ。賓の亦聲なり」とし、これを賓に在り。まさに葬柩に遷さんとして、これを賓 た桃茢などで祓いをすることが、〔左伝〕にみえています。 weer to the total であっています。そのとき襚という呪飾を加え、ま五日、大夫・士・庶人は三日」とあり、殯が終って 〔礼記、王制〕に「天子は七日にして殯し、 て封ずる。ここに至って生死の分が定まるのである。 大斂を行ない、棺に納めてその棺槨を泥で塗りこめ のとき、なお生人たる主人として扱うか、死したる 賓す」という〔礼記、檀弓、上〕の文を引く。殯礼殷人は兩楹(廟の柱)の閒に賓し、周人は賓階に公。 対する賓送の礼を殯という。〔説文〕四下に「死し いる。殯祭が終ると、死者は賓として扱われる。ト 賓で、賓迎・賓送の意があり、死者に 声符は寳(寳)。寳は寳主の 諸侯は

屋に在りて「我が心曲を亂さしむ」と歌う。いわゆ 「ここに君子を念ふに 温として玉の如し る殯宮の挽歌である。 その板

臏 あしきる・ひざのさらヒン

臨沂の銀雀山西漢墓より、その兵法書の竹簡が発えまずだきなどとなってその讐に報いた。近年山東ろう。のち龐涓を破ってその讐に報いた。近年山東孫臏と称するのは、刖刑を受けてからのよび名であ 罪五百」とあり、〔注〕に臏脚の刑を、周では別に 〔史記、秦本紀〕に「鼎を擧げて臏を絕つ」とあり、 見され、中に「擒龐涓」の一章がある。 に兵法を学び、同門の龐涓に妬まれて刖刑を受けた。のちに臏と称するものであろう。兵法家孫臏は孫武のちに臏と称するものであろう。兵法家孫臏は孫武 えて斬る形の字があり、それがおそらく肌の初文。改めたとしている。卜文に、人の脚に我(鋸)を加 が切れることを絶臏という。〔周礼、司刑〕に「別る」のない。〕のといいのをもちあげたとき、脛骨が折れ、筋あまり重いものをもちあげたとき、脛骨が折れ、筋 帯なり」とあり、膝頭のいわゆる皿の部分とする。 声符は置(質)。「説文」骨部四下に「郭の声に「郭の声に「郭の声をはない。」

瀕 みぎわ・はま・そうヒン

うに名詞に用い、また瀕は瀕海のように動詞に用い たい。漢碑に濱と瀕と両見し、濱は河濱・海濱のよ (浜)の声義によって説くもので、字の本義としが 渉と頁との会意とする。字を賓附と解するのは、濱

推測させるものである。 歌うものであり、水葬・舟葬の形式があったことを 〔小雅、鼓鍾〕などは、水辺における送葬の儀礼を 聖所とされることがあり、〔詩、邶風、二子乗 舟〕めることはできない。水涯は古代においてしばしば を含むものがあるかも知れないが、いまそれを確か 瀕・濱もその声義のうちに、水辺儀礼としての意味 てたもので、順は古代の水辺の儀礼を示す字である。 である。〔説文〕はおそらく順の古い字形を瀕に充古い儀礼のなごりを存するもので、瀕とは異なる字 ある。それは水に臨み、川渡りをするなど、何らか 文〕が正字とする字形は、金文では順に用いる字で も「妸(人名)、厥の懶吏に貝を賜ふ」とあり、〔説 - に で いっと と同じく、順とよむべき字である。また〔陝角〕に その懶子效に、王の様へる貝二十朋を賜ふ」とあったの字形についていえば、金文の〔效尊〕に「公、 ており、両字の間には明らかに用義上の区別がある 懶子は〔越王鐘〕にいう「順なる余が子孫」

繽20 花のさかんなさま・みだれるヒン

容する、擬声的な語である。 の諸神)繽として竝び迎ふ」とあり、群神の相並ぶなり」とみえる。〔楚辞、離騒〕に「禿髪(九疑山形声 声符は賓(賓)。〔玉篇〕に「貔紛は盛なる して用いることが多い。花の乱れ飛ぶさまなどを形 さかんなさまをいう。繽紛・繽翻のように、連語と

撑 [腹]19

しかめる・ひそめる・うれえるヒン

繽

颦[矉]

ビン 忞 旻

> わ哀艶であるので、里中の醜女もみなそれに効うたその里に臏す」という。美人の憂愁するさまは一き 避けたという。これを効颦という。が、里の富人は門を閉ざし、貧人は走って見るのをが、里の富人は門を閉ざし、貧人は走って見るのを た臏に作り、〔荘子、天運〕に「西施、心を病みて字を瀕の省文に従うと解するものであろう。字はま字を瀕の省文に従うと解するものであろう。字はま なり」という。〔説文〕に渡水のことをいうのは、 〔玉篇〕に「顰蹙するなり。憂愁して樂しまざる狀 下に「水を渉りて顰戚するなり」、 形声 声符は頻(頻)。[説文] ニアル

ビン

恣 つとめる・みだれるビン・ブン

忞とは関係がない。文・莫・面・民の声をもつ字の なり、転倒して穆忞・芒菱となる。金文の文は中には侔莫という。その語は転じて黽勉・密勿・覊没とは作うは、勉強することを文莫という。また北燕外郊で語に、勉強することを文莫という。また北燕外郊で 心を加えた字形であるが、その心は文身の文様で、 莫は、吾はなほ人のごときなり」とあり、燕・斉の また「説文」支部三下に「敃は彊むるなり」とあっを散に作り、〔爾雅、釈詁〕に「強むるなり」とし、(対)の德に在りて忞めたり」の文を引く。いま字(対)の徳に在りて忞めたり」の文を引く。いま字 「疆むるなり」とし、〔書、立政〕「受形声 声符は文。〔説文〕一〇下に形声

間に、通用するものがある。

旻 そら・あきぞらビン

一老を遺して余一人を屏けて以て位に在らしめず」辞)をおくり、「旻天不弔(不淑)にして、整ひにに、孔子の没した記事がみえ、哀公がこれに誄(弔の秋天説は、今文家の説である。〔左伝〕哀十六年の秋天説は、今文家の説である。〔左伝〕哀十六年 〔小雅、雨無正〕にも「旻天疾畏」とみえ、天威の 下ることをいう語である。 れるが、〔毛公鼎〕に「敗天疾畏」の語があり、敗という語がある。旻に閔傷の義が含まれているとさ 王風、黍離〕の〔毛伝〕も、これに近い。〔説文〕 天と稱す」は〔書、大禹謨〕の〔孔伝〕の文。〔詩、また「處書に曰く、仁閔にして下を覆ふは、則ち旻また「處書に曰く、仁閔にして下を覆ふは、則ち旻、「安」「天なり」とあり、〔爾雅、釈天〕の文。 声符は文。〔説文〕七上に「秋

泯 ほろびる・みだれる・しずむビン・ミン

泯々は〔玉篇〕に「亂るるなり」とあり、紊乱の意。醜なり」の語があり、〔書、呂刑〕の文による。をとる。〔逸周書、祭公解〕に「泯々芬々、厚顏忍をとあり、〔説文新附〕二上に「滅ぶなり」とその訓とあり、〔説文新附〕二上に「滅ぶなり」とその訓 泯は水の横流によって、秩序の失われることをいう ものであろう。 「國として泯びざる靡し」の〔伝〕に「滅ぶなり」「盡くるなり」、〔詩、大雅、季を変えるなり」、〔詩、大雅、季を変えるなり」、「爾雅、釈詁〕に 声符は民。〔爾雅、釈詁〕

敃。 [番]。 「敷」13 つとめる

雅、釈詁〕に「昬、敯は勉なり」とし、〔書、般庚〕が養責することを示す。字はまた昬・贁に作る。〔爾 古く通用していたものであろう。 形よりいえば、敃は勉強、泯は滅止の意であるが、 る。〔兮甲盤〕 「休にして敗むこと亡し」も同じ。字 て敗むこと亡し」のように用い、敗を泯の意に用い り」とあり、勉強の意。字は民を殴つ形で、これを り」とし、〔爾雅、釈詁〕や〔玉篇〕に「勉むるな 民と支とに従う。〔説文〕三下に「彊むるな

敏の「敏」は さとし・つとめる・はやい

等港

す字である。〔大盂鼎〕に「敏みて朝夕に入り諫め文〕はまた字を毎声とするが、毎は婦人の盛容を示 〔説文〕 三下に「疾きなり」と敏疾の意とする。 〔説 儀のときの姿、敏は祭事にいそしむ婦人の姿である。 ている形が敏である。妻と似た形であるが、妻は婚 髪飾りをつけ盛装した婦人の姿。その髪に手をそえ 初形は毎(毎)と又(手)とに従う。 毎は E,

> 敏(拇)を履み」、后稷を娠んだという。〔箋〕に説話を歌うものであるが、始祖姜嫄が「帝の武り」の語がある。〔詩、大雅、生民〕は周の感生帝り」の語がある。〔詩、大雅、生民〕は周の感生帝に非ず。古を好みて、敏めてこれを求めたるものな 「敏は拇なり」とあり、拇に仮借した用法である。 述而」に「我は生れながらにしてこれを知るものいう語となり、敏疾・敏慧のように用いる。〔論語、いう語となり、 毎の下部を人の走る形とした字形である。敏捷とは 奔走といい、婦人には敏捷という。捷の初文は声。 父(人名)の休に揚ふ」のように、毎を用いることで、「それではなり、「五の休に毎み揚ふ」、「縣改設」、「毎みて伯辞ない、「師簽設」、「女をなせ、ない、「師簽設」、「女をなせ、ない、「師簽設」、「「のまった しょうだいがっしょうだい。また「大きりょ」、「「一のま」、「女をなせ、「かんないだ」。 もと婦人が祭事にいそしむ語であるが、のち敏速を ともあって、 毎がその初文。祭事につかえることを

紊 10 みだれるビン・ブン

條ありて紊れず」と「書、般庚、上」の文を引く。 『別るるなり」とあり、「商書に曰く、 『別を記して、「「「」」の文を引く。 『記文』、「三上に 紋と字の要素は同じであるが、慣用を異にする。 は花紋の意である。 声符は文。〔説文〕一三上に 紋

瓶」(瓶)3 「餅」4 漂響・びん・つるべ

114

は、これ疊の恥なり」とあって、餅・罍はともに酒し、また丼声。〔詩、小雅、蓼莪〕に「餅の罄くる形声 一声符は幷。〔説文〕五下に正字として餠を録

意である。また水がめ、つるべの意に用いる。 晉の恥なり」という。後ろだてとして、面倒をみる 器。缾は小器で、罍より酒を承ける。 十四年にこの詩句を引いて、「王室の寧からざるは、 〔左伝〕昭二

関12 「関」はいたむ・あわれむ・うれえる

「閔に遭ふこと旣に多し」とは、憂苦のことをいう。「然へ」からという。「詩、邶風、柏舟」て閔をう。 憫は閔の繁文。また愍と声義の通ずる字である。 思との合文のようである。[左伝]宣十二年「少くしるなり」とし、古文一字を録する。その字形は母と 鬧 趣 形声 一二上に「弔する者、門に在形声 声符は文。〔説文〕

愍 いたむ・うれえる・あわれむビン・ミン

0 鏬

「傷むなり。憂ふるなり。愛むなり」の訓がある。一〇下に「痛むなり」とあり、〔広雅、釈詁〕に 愍悼は閔悼、閔と通用する例が多い。 〔段注〕に「閔と義異なる」とするが、愍凶は閔凶、 声符は敗。敗につとめる意がある。〔説文〕

国 地名・種族の名ビン

る。[周礼、職方氏]の[鄭注]に、「閩は蟹の別なに「東南越、蛇種なり」とあり、虫を蛇種の意とすての原義は知られない。[説文]二上、「 会意 門と虫とに従う。会意字とし

にも蛇民とよばれる種族がいたという。 り」とあり、東越の原住民で、福州城内には、のち

僶 つとめる・はげむビン・ミン

風〕「黽勉、心を同じうす」とは、若い夫婦が生活まった*** 声符は黽。黽は僶の初文。〔詩、邶風、谷彩声 声符は黽。黽は僶の初文。〔詩、邶風、谷 げむ意の連語で、これと同系の語が多い。 の労苦をともにするをいう。僶勉・僶俛は、勉めは

緡

とし、一貫ごとに二十銭の税を課する税法があった。くなわ、その銭を緡銭という。漢代には干銭を一貫釣魚のことをいうのが定まりであった。また銭を貫 れ緡」とは、釣り糸をいう。結婚の詩の発想には、

びんのけ・びんづらピン

その寝乱れた姿を「鬢亂釵横」という。人の剣士のことをしるしている。女の髪にも用い、

つりいと・なわ・かけるビン 機矣」「その釣はこれ何ぞ これ絲こ形声 声符は昬。〔詩、召南、何彼 声符は唇。〔詩、召南、何彼

不 はなぶさ・おおきい・ずフ

菜菜 加利斯

は、「不願なる文王」、その他同じ語例に「不杯」 ・ 「不願なる文王」、その他同じ語例に「不杯」 ・ 「不願なる大神巫成」の語がある。金文に「不願」 「不願なる大神巫成」の語がある。金文に「不願」 「不願なる大神巫成」の語がある。金文に「不願」 「不願なる大神巫成」の語がある。金文に「不願」 「不願なる大神巫成」の語がある。字は不のままで、 ・ 「本いに願かに不いに承く」、秦の〔詛楚文〕にも 「不順なる文王」、その他同じ語例に「不杯」 「不嚭」などがある。「不顯」は〔詩〕〔書〕にも多 に用いることは、 く、不(丕)は大の意の修飾語である。不を否定詞 んで意味を合せていたが、当時まだ反語の形式はな くみえる。従来は「顯かならざらんや」と反語によ のことである。〔説文〕は仮借義をもって字形を説 り」がその初義の用法で、鄂不は萼柎、花のうてな 雅、常棣」「常棣(からなし)の華・鄂不韡々たの用法で、字はもと花の萼柎の形である。〔詩、小の用法で、字はもと花の萼柎の形である。〔詩、小 「下り來らず」と否定の義を導くが、その義は仮借 字形を鳥が高く天に向かって飛ぶ形とし、そのまま り。一に從ふ。一はなほ天のごときなり」という。 〔説文〕二上に「鳥飛んで上翔し、下り來らざるな と象形で花の萼桁の形であるが、その義に用いられ仮僧 不定・打消の「ず」に仮借して用いる。も ることは殆どなく、その本義には*ホネなどを用いる。 ト辞以来のことで、代名詞や否定

> 諸橋〔大漢和辞典〕に約千八百余を録している。 ようにいう語は極めて多く、「佩文韻府」に約四千、系の字を成している。不を上に冠して不偏・不党の のわれることを剖といい、不・丕・否・音・剖は一 否、実が充実してわれそうな状態となるのが音、そ ・ 胚胎の形を生ずるのが不、その実のふくらんだ形がいた。 例がある。不は萼柎の形で、花が終り実に移るとき、 (奕、偉大なる徳)に揚へずんばあらず」のような效(人名)、敢て萬年まで夙夜奔走して、公の休亦文も西周初期にはすでにみえ、〔效卣〕に「鳥庫、文も西周が と否定の命辞を左右に排して刻する例であるから、 「今日雨ふるか」「今日雨ふらざるか」のように肯定 否定詞がなくては卜法も成り立たない。二重否定の ったと考えられる。卜辞における貞間の形式は、これらの字ははじめから仮借的な用法をもつ字であ 詞を充足することは、文字成立の条件であるから、

たおれる・ふすフ・ホク

ことをいう。トは顚れる音の擬声語である。 また頓力上に「下首なり」とあり、頭優・頭倒する 形声 ある。〔説文〕ハ上に「頓るるなり」、形声 声符は下。トに赴・訃の声が

夫 おっと・おとこ・かの・それフ・フウ

大大大

朩

はりからいます。 男子の正装の姿である。妻も女子が髪飾大は人の正面形で、その頭に加えている一

ピン 僶 緍 鬢 フ 不 仆 夫

The second secon

者や、 と爲し、 に称しているが、夫人・夫子は「夫の人」という婉〔曾姫無卹壺〕に「聖 題の夫人、曾姫無卹」のよう理者の位置にあったものであろう。夫人という語は、 (宴) す」のようにみえ、その地位は社会的に重要 の鬲千又五十夫」とあって、百五十夫に一伯というくは伯とよばれた。〔宜侯夨殷〕に「鄭の七伯、厥いう。大夫とは、そのような夫の管理者であり、古いう。大夫とは、そのような夫の管理者であり、古 夫」、〔散氏盤〕「散の有司十夫」のように、臣従の に「厥の臣二十夫」「衆一夫」、「伯克壺」「僕三十 う語に用い、〔大盂鼎〕に「人鬲千又五十夫」「人鬲、てよみわけていたのである。夫はまた成人男子をい たい年齢である。大と夫とは古く字が通用し、卜辞 [論語、泰伯]「以て六尺の孤を託すべし」とは、十後人の加えたものであろう。この計算法によると、 夫といふ」とする。「周制」以下の文は、おそらく 写した字である。〔説文〕一〇下に「丈夫なり。大に なものとされている。おそらく荘園的な経営地の管 に「用て嘉賓大夫を樂しましむ」「台て大夫を浸 割合である。列国期には大夫の称が用いられ、金文 馭より庶人に至るまで六百又五十又九夫」、〔晉鼎〕 にも大夫を夫々としるしているが、前後の文によっ 八歳の王子ということになるが、すでに孤と称しが りをつけた形で、夫妻とは、婚礼のときの晴れ姿を 労役のことに服するそれぞれの身分のものを 一は以て簪に象るなり。周制、八寸を以て尺 十尺を丈と爲す。人は長八尺なり。 故に丈

> 〔論語、子罕〕「逝くものはかくの如き夫、晝夜を舍用いた。語末に詠嘆の助詞として用いることがあり、評した語。「夫の人」という語は、男子に対しても評した語。「夫の人」という語は、男子に対しても るときの「夫れ」という発語に用い、〔左伝〕にそ は言はず。言へば必ず當る」とは、孔子が閔子騫を用法から出た語である。〔論語、先進〕に「夫の人曲的な呼称。もと尊敬の意を示すもので、代名詞の曲的な呼称。もと尊敬の意を示すもので、代名詞の の例が多い。 かず」など、〔論語〕以後に多い。また語端を改め

父 ちち・男子の称・としよりフ・ホ

民中

があり、 に「父曆よ」のようにいうのは、武将や執政としてつけてよぶ。[班殷]「毛父を左比せよ」、〔毛公鼎〕にある人は、父子の関係をこえて、尊称として父をにある人は、父子の関係をこえて、尊称として父を その指揮権を示したものであろう。ゆえにその地位 地位を示したものである。父も斧鉞を儀器として、 もあるが、金文の字形に、戊(鉞)をもつ形のものもつものを杖の形とする。また火をもつ形とする説 ゐて教ふる者なり。又に從ひて、杖を擧ぐ」とし、 下に「矩なり」と畳韻をもって訓し、「家長の、 人の形。斧の頭部をもつ形が父である。〔説文〕三 会意 初形は斧と又(手)とに従う。斧鉞をも その鉞頭をもつ形である。斧鉞は儀器とし 率

> が多い。 きは、 父兄というのは父輩・兄輩の人をいう類別的呼称で 小雅、伐木〕に「諸父を招く」の句がある。金文に 雅〕諸篇の作者として、尹吉甫の名が知られている。 雍父・伯辟父・師華父のように、父をつけてよぶ例の毛伯・毛公をよぶ名である。西 周期の金文に信める 伯父・叔父もまた父輩であるから父といい、「詩、 則ちこれに父事す」とみえる。 のち甫の字を用いることもあり、〔詩、

付5 わたす・たのむ・あたえる

13°

[晉鼎] [散氏盤] にその字がみえ、人と又とに従う。 付は〔説文〕ハ上に「興ふるなり。寸に從ふ。もの人に手でものをわたす意で、交付・付託の意がある。 会意 嘱の意である。 付与・付託の意より付属の意となる。付属はもと付付与・付託の意より付属の意となる。 を持して人に 人と寸とに従う。寸はものを手にもつ形。 對ふ」とあって、付与の意とする。

布5 ぬの・しく・つらねる・ひろげるフ・ホ

屚 4

は今の木綿布無し。ただ麻布及び葛布あるのみ」ととあり、枲麻で作った布をいう。〔段注〕に「古にとあり、枲麻で作った布をいう。〔段注〕に「古に形声 声符は父。〔説文〕七下に「桑のギルル

いう。わが国では祁衣とよむ。ころがある。布衣は粗衣、身分のないものを布衣ところがある。 税と地税)無し」のように、税の意がある。布はま □孟子、公孫丑、上」「廛(店)に夫里の布(人頭布銭の名が用いられた。税を布をもって納めるので、 舒しうるものであるから、 の品とされ、のち銭貨が行なわれるようになっても、 う。毛や絹を布にしたものがあった。布は対価交換 が織物をもって、その原糸を買いにまわることをい 衛風、氓〕に「布を抱きて絲を資ふ」とは、行商人なる。〔守宮 盤〕の賜与に「毳布三」とあり、〔詩、する。〔守宮 盤〕の賜与に「毳 敷・普と声義の通ずると

ほとぎ・もたいフ・カン

1 ± 0

〔淮南子、説林訓〕に「君子に酒あるときは、鄙人」。 ぎょくく く、口の狭いもので、腹旁に環耳をつけ、紐をつけ自名の器もあって、その字は鉓に作る。器腹が大き 缶を鼓ち、 鼓つことは、〔史記、藺相如伝〕に、相如が秦王に器・水器として用いる。また釣瓶にも用いた。缶を門外は缶、門内は壺なり」とみえ、壺と同じく酒 缶は瓦器であるが、青銅をもって製することもあり、 缶を鼓つ」とあって、鄙人のなすところであった。 いる。象形」という。[礼記、礼器]に「五獻の章、酒 漿を盛る所以なり。秦人これを鼓ちて以て謌をはよう。 **へ ***** 土器のほとぎの形。[説文]五下に「瓦器、象形 土器のほとぎの形。[説文]五下に「瓦器、 、秦声を歌わせた話がしるされている。 孚

巫

寶の声符であるから、古くその音があったはずであ 文に缶を寶(宝)の字に用いている例があり、また る。いま缶は、罐の常用字として用いる。 を鼓ちて歌ふ」とある盆も、同系の水器である。 て扱う。〔荘子、至楽〕に「莊子まさに箕居し、 金 盆場 字 卵をかえす・とらえる・まこと

8 0 ţ 巡巡 \$ 4

からその義に用いられている。〔書、高宗彫日〕には敷大。字信の義はすでに〔者滅鐘〕にみえ、古くは敷大。 るもので、学大・学信の意は仮借義であろう。学大 象の異なるものである。孚は俘獲・俘略を原義とす は、保の古い字形にみえるもので、孚の字形とは意 眉壽繁釐を祈る」とある孚は、孚信の意。重文の字 金文では孚を俘獲の俘に用い、「貝を孚る」「金を孚 卵の孚化する意とする。また「一に曰く、信なり」 「卵卽ち字るなり。爪子に從ふ」とし、爪を鳥爪、 手で子を修える形で、修の初文。〔説文〕三下に とは、〔段注〕に、鶏卵は必ず鶏になる意だという。 爪と子とに従う。 爪は手で上から押える形

> くの象」とする。孚声と付声はともに滂母の声で、 通ずるところがある。 きて出づ」を、〔説文〕の甲字条一四下に「孚甲を戴 付にす」に作り、〔史記、律書〕「萬物、符甲を剖『天旣に命を孚にす」を、〔魏石経〕などに「命を

巫 みこ・かんなぎ

0

には季女(末娘)が神につかえる斎女として家に残とがみえるが、〔詩、国風〕の諸篇によると、一般 のことに、これでは、また、これに現をとしています。古は巫咸、初めて巫と作る」という。女はのなり。人の兩褎もて舞ふ形に象る。工と意をすものなり。人の兩褎もて舞ふ形に象る。工と意をに「祝なり。女、能く無形に事へ、舞を以て神を降に「祝なり。女、能く無形に事へ、舞を以て神を降に「祝なり。女、能く無形に事へ、舞を以て神を降に「祝なり。女、能く無形に事へ、舞を以て神を降に「祝なり。女、能く無形に事へ、無を以て神を降に「祝なり。女、能く無形に事へ、無を以て神を発している。」といいましている。 公が国中の長女の嫁するのを禁じて、巫児としたこ を覡、女を巫とする。〔漢書、地理志〕に、斉の襄下」に、巫はその精爽をもって神を降すもので、男 伝〕襄二十六年にみえる楚の巫臣は、字を子霊といは呪具の工をもって神につかえるものである。〔左 字条一上に「靈巫、玉を以て神に事ふ」とみえ、 い、巫と霊と名字対待をなしている。〔国語、楚語、 に「祝なり。女、能く無形に事へ、舞を以て神を降手に奉じて、呪むなすものをいう。〔説文〕五上手に奉じて、いると に、巫はその精爽をもって神を降すもので、 工と両手に従う。工は呪具。その呪具を両 巫

A CONTRACTOR OF THE PROPERTY O

の田を加える形のものがあり、「魏石経」の古文の盟書」に至って、左右が<形となり、また下に祝禱とは「田姜設」にその形がみえる。列国期の「侯馬ははない」とはない。 の王には巫祝王として性格があり、殷の始祖湯、ま英・菫に従う字形は、みなその声義を承ける。古代 行なわれたのと同じである。葉は巫を焚殺する形。とを示すものとみられ、大旱のときに焚巫のことが若(諸)なるか」とは、犠牲として巫を用いるこ がある。 行を司る神巫として歌われている。篆文の字形はト騒〕に「巫咸まさに夕に降らんとす」と、太陽の運 に「不願なる大神巫威」とみえ、また〔楚辞、離りの第一に巫咸の名がみえる。巫咸は秦の〔詛楚文〕の第一に巫咸の名がみえる。巫咸は秦の〔詛を 大荒西経〕に十巫の名がみえて、十日を言り、そ巫として神話的な伝承をもつものがある。「山海経」のことがしるされている。巫の上位のものには、神のことがしるされている。巫の上位のものには、神 〔司巫〕に巫降、〔男巫〕に旁 招という神降しのこ ったようである。〔周礼〕には巫系の諸職があり、 せんか」とあって、田の神を祭祀の対象とするもの みえる田は、「今日、田に小禘せんか」「東田に禘 や塞が琵に従う形であるのと同じ意である。ト辞に 字形と同じである。田は呪具を組み合せた形で、展 文・金文にみえず、卜文・金文に工を縦横に組み合 とをしるし、〔女巫〕に舞雩、すなわち雨請いの舞 を好み、各地の巫が楚に赴いて、楚は一時巫祝文化 を救おうとしたという伝承がある。楚の霊王は巫術 た春秋期の宋の景王にも、大旱のとき、自焚して旱 また「それ田を用て、祖戊に求むるに、

> 密接な関係をもつものであった。 秦の思想においても、儒・墨・老荘の思想の成立にの文学が生れた。巫は古代文化の担持者であり、先 の中心となったが、その巫祝の没落過程に、〔楚辞〕

扶 竹 たすける・まもる・よるフ 0 梵

乩筆を動かし、砂盤の上に自然に文字がしるされる扶持し、下から香を焚くと、神がその縄めによって 代に扶乩というよいが行なわれ、砂上に乩筆(お筆神木、同根の両樹が相扶持する形であるという。元 先)を垂らし、その縄に弓をつけて、両人がこれを とあり、扶持し保護する意である。扶桑は東海中の 形声 という。わが国のこっくりに似た卜法である。 声符は夫。〔説文〕「三上に「左くるなり」

芙 はフ す

粁 漢の洛陽やのちの帝都宮園に多く芙蓉苑が営まれた。紫、をいりに荷芙渠としてみえ、その別名を芙蓉という。釈草〕に荷芙渠としてみえ、その別名を芙蓉という。 人が愛用したことが、〔三才図会〕にみえる。 白の大輪の花をつける。わが国では芙蓉帽を禿髪の 城という。また落葉灌木の類に木芙蓉があり、紅・ 美人を形容して芙蓉の姿といい、仙人の居城を芙蓉 「芙蓉なり」とみえ、蓮をいう。[爾雅、「芙蓉なり」とみえ、蓮をいう。[爾雅、形声 声符は夫。[説文新附] | 下に

くら・つかさ・やくしょ・みやこフ

뼸 資祭爾原

「大史乃ちこれを盟府に藏す」とあって、大師・大り。大師これを掌る」、また〔逸周書、賞麦解〕り。大師これを掌る」、また〔逸周書、賞麦解〕所・故府の類があった。僖二十六年「載は盟府に在 とあり、 「勳は王室に在り。藏して盟府に在り」のように、 「載書(盟約の書)は藏して周府に在り」、僖五年 形声 名に用いられる。 金文に腐のような字形がみえ、すでに府庫の意に用 ところに用いるのは、のちの用義である。列国期の 史がこれを掌る。これを府庫のように諸物を蔵める これを故府に視たり」とあり、各国にそれぞれ盟 賞は國の典なり。藏して盟府に在り」、定元年「吾、 に、他日の証とするのである。また襄十一年「夫れ 四年「藏して周府に在り。覆視すべきなり」のよう 盟約などの重要な文書は、これを周府に蔵した。定 いている。のち政府・官府の称となり、行政区域の 重要な文書を府に蔵した。〔左伝〕定四年、 声符は付。〔説文〕九下に「文書の藏なり

怖。[悑]1 おそれる・おののく

子、逍遥遊」「吾その言に驚怖す」とあり、畏怖・ 恐怖・驚怖の意に用いる。 るなり」と訓し、一体として怖をあげている。〔荘 開懈 形声 O下に捕を正字とし、「惶る 声符は布。〔説文〕

拊 なでる・うつ・たたく・にぎり

の、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 が、世、に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 多表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 多表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 を表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 を表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 を表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 を表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 を表。」に、典楽の夔が「石を撃ち石を拊てば、百 拍つことを「掌を拊つ」、哀痛することを「心を拊 獸率ゐ舞ふ」とあり、拊はうちあわせること。手を つ」「膺を拊つ」、また心の勇むとき「髀を拊つ」と 声符は父。父は斧鉞をもつ形であるから、 声符は付。〔説文〕一ニ上に に社神を祭り犬牲を供えるところを墜といい、地の護ることを限、玉を備えて陽気を発するのを陽、前 くはすべて自の形であり、神梯の象である。 初文である。阜の字形は漢碑に至ってみえるが、 るのは天人の際のことであり、邪眼をおいて聖域を る。神饌を際といい、神梯の前に供える。そこで祭 わが国では高梯・倉梯のようにいうものがそれであ 神が天に通うとき、この神梯によるものとされた。 る。卜文の陟降の字は、この神梯を上下する形で、 おいても、これが神梯の形であることは明らかであ はなく、かつ卜文・金文はもとより、小篆の字形にする。しかし山岡をこのように垂直の形にかくこと

附 8 つく・あわせる・したがう

鳥

斧8

おの・まさかり・フ

きる

0

いう。

また弓のにぎりのところをいう。

駉

用い、また指揮をとるときの儀器で、父とはその儀 〔説文〕 一四上に「斫るなり」とあり、斧鉞は刑具に

父の第一画がその象形、斧はその形声字である。

林に入る」の語がある。

神梯・おか・おおきい

ので、〔孟子、梁恵王、上〕に「斧斤、時を以て山の刑」の語がある。もとより伐薪などにも用いるも 器を執るものをいう。〔国語、周語〕に「斧鉞刀墨

を含む字である。〔礼記、雑記〕「大夫は士に附す」 先祖に合食するなり」 本義ではない。示部一上の袝字条に、「後死の者、 〔左伝〕定四年「土田培敦」とあるのも、みな同じ わす。〔説文〕一四下に「附婁、小さき土山なり」との象であるから、そこに附祭(合祀)する意をあら 形声 の注に、「附は讀んで祔と爲す。祔祭なり」とす 語であるが、これらは連語で義をなすもので、附の 注〕に「小阜なり」とする。いわゆる培塿の義で、 襄二十四年の文を引く。いま部婁に作り、「杜預 し、「春秋傳に曰く、附婁に松柏無し」と〔左伝〕 声符は付。付に付与の意がある。自は神梯 とあり、附もこの耐祭の意

> であるから、傅会の方が字義に合している。 ことで、また傅会という。附はもと神事に関する字 関係でないものを、無理に同一であるとこじつける 属・附託・附著の意となる。附会とは、もと同一の る。それより親附・附近の意となり、附従・附

とりこ・いけどり・とるフ

\$

古

どり 礼が行なわれた。斉の桓公が管仲を赦すときに、葬り、また新しい霊を受けたものとして、再生の儀 『軍の獲る所なり』とし、[左伝] 成三年「以て俘負・字金・字戈のようにいう。[説文] 八上に俘を で、ギネ゚ 形声 をすることがしるされている。 その儀礼を行なっている。また近出の「刻設、一」 ものは、すでに異族邪神に穢されたものであるから、 わゆる俘囚・俘虜をいう。一たび敵の俘囚となった もあるが、のち人に限定した俘の字が作られた。 金文に「孚車百兩」「孚牛三百五十五牛」などの例 戦と爲す」の文を引く。軍獲をすべて孚といい、 もし復帰する機会があるときは、一たび死者として 俘囚となったものを奪還して、 声符は学。 学は子を捕えて抑止する形の字 魂振りの儀礼

俛。[俯]10 [類]15 会意 ふす・かがむ

に従う。頁は儀礼を行なうと 正字は頫。兆と頁と

七三九

附 俘 俛[俯][頫]

斧

阜

「大いなる陸なり。山の石なきものなり。象形」とは、もと神事に関するものが多い。〔説文〕」四下には、もと神事に関するものが多い。〔説文〕」四下に に陟降するときに用いる梯で、この部に属する字

象形

字はもと手の形に作り、神梯の象。神が天

777

production of the contract of

たることあり」のときは免の音、悗首・悗視のときである。[礼記、表記]に「悗焉として、日に孳々悗す姿勢よりいえば、分娩の免に従うものとすべきの形によるものと、分娩の形によるものとがあり、 雄曰く、人面の類くなり」とあり、類仰すなわち俯に從ふ。太史の卜書に、頫仰の字は此の如くす。紫に説文〕ヵ上に「頫は低頭するなり。頁と逃の省と 仰の字とする。また一体として俛を録し、「頫、あ は俯の音でよむ。俯はその形声字である。 解して免の音をもって読むこともある。兔には免冑 形声の字は俯に作るものであるが、俛をまた形声と るいは人発に從ふ」とあり、また会意とする。その きの姿で、ト兆を仔細に見るときの姿勢を頫という。

村の「跗」2 るの足・いかだ・うてな

付するところをいう意がある。 また花萼の座の部分を柎という。付には、すべて依 類を懸繋する器の、台足をいう。俗に跗に作る。ゆ づかのことを拊というが、柎を用いることもある。 足なり」とあり、鐘鼓のような楽器の ** * 声符は付。「説文」フ」に 『 声符は付。〔説文〕六上に「闌

言 9 死のしらせ

た仆・赴の声義とも関係がある。〔儀礼、既夕礼〕形声 声符はド。トに仆・赴の声があり、訃はま の死を赴告することをいう。〔礼記、雑記〕には、に「赴して、君の臣某死せり、といふ」とあり、そ その字に訃を用いている。

The state of the s

負。〔負〕。 おう・たのむ・まける・そむく

負 負をその意に用いるのは、声近くして仮借するもの 意に用いるが、敗は貝を撃ってこれを毀敗する形。る。負恃の意はその引伸の義であろう。また勝敗の の子を襁負して至る」など、みな背に負う意に用い 生民」「これを任ひこれを負ふ」、〔論語、子路〕「そまえ」「これを任ひこれを負ふ」、〔論語、子路〕「それかめがたいが、貝を負う形とみてよい。〔詩、大雅、かめがたいが、貝を負う形とみてよい。〔詩、大雅、 守るに從ふ。恃む所有るなり」とする。古い字形が 負・背もまた、声近くして通用したものと思われる。 ず背走す。故にまた勝負の稱と爲す」というが、 であろう。〔徐箋〕に「凡そ戰ひて敗るるときは必 なく、戦国期の字形を存するのみで、その初形を確 「説文」 六下に「恃むなり。人の貝を会意 人と貝とに従う。貝を負う形

赴 9 おもむく・むかう・つげるフ

ŵ あり、 す。嫠(人名)叔市(素服・喪服)して、現みてという。金文には『師嫠閔』に「師龢父、悞(殂)字で、〔礼記〕には多く訃告、〔左伝〕には多く赴告字で、〔礼記〕には多く訃告、〔左伝〕には多く赴告 た遠く告げることを、赴といったようである。 王に告ぐ」とあって、告という。速やかに告げ、 速やかに至ることをいう。もと訃告に用いる 形声 ある。「説文」ニ上に「趨くなり」と形声 声符は下。トに仆・訃の声が

俯10 形声 ふす・うつむく・ねる・かくれる

声符は府。正字は頫。また俛に作り、 声義

> 「俯仰の閒に既に陳迹と爲る」の語がある。しばらくの間の意。王羲之の〔蘭亭の記の序〕に 地理を察す』という。また〔盂子、尽心、上〕「仰繋辞伝、上〕に「仰いで以て天文を觀、俯して以て繋辞伝、上〕に「仰いで以て天文を觀、俯して以て以な同じであるが、いまは多く俯を用いる。[易、 対文とする。俯仰の間とは、人の起き伏しする意で、 いでは天に愧ぢず、俯して人に怍ぢず」と、俯仰を

尃 しく・あまねし・ひろい

Ď M ***** **

崖

む」とあり、敷・薄の意がある。専が若木の根を包専は敷の初文である。〔充・鐘〕に「専いに王命を奠・出入して命を塼く」のように敷の意に用いており、 従い、甫を手にもつ形。甫は若木の形で、若木の根 会意 地に施すことをいう。〔説文〕三下に「布くなり」 を包んで、これを土に扶植する意。それより広く各 政治的な行為を意味する字となったものと思われる。 すべきである。〔毛公鼎〕に「命を噂き、政を尃く」 と訓し甫声とするが、又はものを持つ形で、会意と ものであろう。ゆえにその字が専命・尃政のような、 において、社を設けて、社樹を植える儀礼に関する んで植える形であるのは、あるいは古代封建の儀礼 甫と寸とに従う。金文の字形は甫と又とに

浮10〜浮」10 ラかぶ・ただよう・すぎる

生・浮誇のようにいう。 游・浮漂のように、水上を漂う意で、水草を浮萍・ 空に浮ぶものを浮雲、根拠のないものを浮言・浮

祔 あわせまつる・まつり

葬、祔祭・祔食は合祀をいう。 の序に従って合祀することをいう。祔葬・祔窓は合とあり、先祖を昭穆の二班に分って祀り、その昭穆 士虞礼〕に「卒哭して、明日、その班を以て耐す」にでき、そので、そので、合祀をいう。〔儀礼、に合食するなり」とあって、合祀をいう。〔儀礼、 形声 る。〔説文〕」とに「後死の者、先祖 声符は付。付に合せる意があ

釜 10 [鬴] 17 かま・なべ

南部

礼〕や〔漢書〕には鬴字を用いる。平底にして無足、鮭の名があり、斉器の諸釜もみな量器である。〔鳥・鍾の名があり、斉器の諸釜もみな量器である。〔鳥・ ろう。 〔左伝〕昭三年に、量器として豆・区・釜・ と称しており、釜が初文。鬴はむしろ後起の字であ 金文に〔子禾子釜〕〔陳純釜〕など、みな器名に釜「鍍の屬なり」といい、重文として釜をあげている。 声符は父。〔説文〕三下に正字を鬴とし、

袝

釜(鬴)

埠

婦[婦]

大腹の器である。

埠 はとば・ふなつきば

というのはその方言であった。呉江に魚歩・亀歩、 の舟つき場である。卓はもと神の陟降する神梯の象また湘江に霊妃歩のようにいうのは浦のことで、そまた。 もとは浦という語であったらしく、呉・楚の地で歩形声 - 声符は草。埠頭ははとば、舟つき場をいう する埠税のことがみえている。 して埠の字が作られた。〔六部成語〕に埠頭で課税であるが、小さな丘をいう字と誤られ、舟つき場と

婦 (婦)1 主婦・よめ・つま・おんなフ

東期時

掘されて、壮大な遺構と、豊富精巧な遺品が出土し 股の武丁期に多数の帚某・子某の名がみえ、これを 〔令改〕に「婦子後人」の語がある。〔爾雅、釈親〕婦の初文で、その音でよまれたとみてよい。周初の婦の初文で、その音でよまれたとみてよい。『** される。〔説文〕二下に「婦は服なり。女の帚を持 武丁一人の婦であり子とする解釈もあったが、それ 用いられ、卜辞には常好・帚妌のようにいう。帚は た。婦好はおそらく王妃の地位にあったものと推測 は類別呼称とみるべきものである。近年婦好墓が発 に「その妻を婦と爲す」とあり、もと子の婦をいう。 旧字は婦に作り、帚声。帚は古く婦の字に

「永く厥の身に襲き、厥の敵に克たしむ」とあって、また。 大君・王削姜などの婦人が、外事に関与している例 大君・王削姜などの婦人が、外事に関与している例 でいるのではいて氏族の行動が記録されたことによるもので 銘にはなお残されているのであろう。西周の家父長る、婦人の宗教的な役割についての伝統が、その器 うかを問うものが多い。 安否についてトするとき、姑の霊が災厄をなす 万をこえる軍を動員していることがある。それはお ではなく、帚に鬯酒をそそいで、宗廟の内を清めちて灑掃するに從ふ」とする。しかし帚は灑掃の具 くから甚だ困難なものとされており、卜辞に婦人の の問題は、氏族霊としての融和のこともあって、 て合せて祭るのが原則であった。もっとも婦と姑と 数例あり、また祭るときには、父・母を考・妣とし て以来、婦人の地位は次第に公的な性格を弱めてき 制が、その宗法制による貴族社会の秩序を作りあげ 知られる。刻はおそらく殷の貴族の後で、その器で 母の霊が守護霊的な機能をもつものであったことが そらく、婦人がその出自の氏族を代表して、その名 妌には、ときに外征のことを卜するものもあり、 は宗廟に奉仕すべきものであった。しかし婦好や婦 るためのものである。それが婦の任務であり、婦人 ているが、それでも金文に夫妻の名を列するものが 文母日庚の祭器を作ることをいう。殷代におけ かど

桴 いかだ・むなぎ・ばちフ・フウ

神影

のばちの意に用いるのは、枹の仮借である。 「説をなら」、上に「喧慄の名なり」と棟木の意に解するが、文」、上に「喧慄の名なり」と棟木の意に解するが、文」、上に「喧慄の名なり」と棟木の意に解するが、文」をといる。 「道行なはれずんば、桴に乗じて海に浮ばん」と、孔子の嘆いた語をのせている。 「説をなら」と様木の意に解するが、変している。 「説をなら、字に浮ぶものの意がある。 「説をする。」

符11 わりふ・しるし・おふだ

簡簡

1 めあさ・あまかわ・うえじに フ・ヒョウ(ヘウ)

(野) 形声 声符は学。〔説文〕一下に「笑」 なり」とあり、鬼目草をいう。また字甲(芽)の意に用いるときは「めばえ」、一揆と通ずるときは餓死者をいう。〔孟子、梁・恵王、上〕にを呼があり」とは、殍の意である。

博 12 つく・かしずく・たすける・もり・わりふ

灣。 》

宮 12 とむ・ゆたか・さかん・さいわい

形声 声符は畐。書は酒樽の形で、充足するもの意がある。「説文」七下に「備はるなり」とあり、の意がある。「説文」七下に「備はるなり」とあり、の意がある。「説文」七下に「備はるなり」という。と韻し、「魯州、関宮」では熾・背・試と韻する。と韻し、「魯州、関宮」では熾・背・試と韻する。と韻し、「魯州、関宮」では、まれて富みとのできる字である。唐の王元宝は、金銀を畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳んで屋と為し、時人はこれを富窟とよんだ。金畳の類である。「論語、「沙川」では刺りでは、またで、「神門」に「富を見ること貧の如し」の語がある。富と福とは、文字としては同源であるが、必ずしも同義の語ではない。

近日 12 カまねし・ひろい・ゆきわたる

字の初形がなくて確かめることができない。それならば、広く誓約に参加する者の意となるが、それならば、広く誓約に参加する者の意となるが、視禱関係の字としてその字義を求めうることになる。

脱 12 はらわた・こころ

信予。 フ蔵・府はすべて人の活力を蓄養するところである。蔵・府はすべて人の活力を蓄養するところである。に臓腑の意とする。人の内臓に五臓六腑があり、形声 声符は府。府はものを蔵するところ。ゆえ形声

海 3 ひろい・おおきい

形声 声符は専。専は若木の根を包 ルで扶植する意。〔説文〕 二上に「大いなり」とし、〔詩、小雅、北京 に天命を受けられたり」のほか、金文に専命・専政 に天命を受けられたり」のほか、金文に専命・専政 に天命を受けられたり」のほか、金文に専命・専政 のように布・敷の意に用いる。専が溥の初文。溥は

見 3 かも・あひる

景。

ることに、問題がある。〔詩、大雅、鳧鷖〕は祖祭野であり、そもそも鳧をあひると定めて字形を解する。〔段注〕に「人を長れざるなり」とするのは俗る。〔段注〕に「人を長れざるなり」とするのは俗る。〔段注〕に「人をしれざるなり」とするのは俗る。〔段注〕に「人をしているをいう。 金文字の字形は、鳥のり」とあり、あひるをいう。〔説文〕三下に「舒達、鶩な会意 鳥と人とに従う。〔説文〕三下に「舒達、鶩な会意 鳥と人とに従う。〔説文〕三下に「舒達、鶩な

。 を歌う祭事詩であるが、『鳧鷺、涇(水名)に在り 公尸ここに燕しここに來る」とあって、鳧鷺はここでは、鳥形霊としての意味をもつものであろう。 [周は、鳥形霊としての意味をもつものであろう。 [周は、鳥形霊としての意味をもつものであろう。 [周は、鳥形霊としての意味をもつものであるかも知れない。いずれにしても鳧の字形における人の形は、霊的な意味をもつものと思われ、鳧鷺も季節的にくる渡り鳥であろう。

1974 ア がかえる・かえる・そだつ

博 14 大桑・まるた

神はわが国ではくれと訓し、まるたの意とする。神はわが国ではくれと訓し、まるたの意とする。にも神桑に作り、太陽説話において、十日が交替で上るとされる東方の神木である。天地を通ずる大木という考えかたは、わが国の高木の神の名にもみらにも神桑に作り、太陽説話において、十日が交替で上るとされる東方の神木である。天地を通ずる大木という考えかたは、わが国の高木の神の名にもみらいう考えかたは、わが国の高木の神の名にもみらいるという考えかたは、わが国の高木の神の名にもみられる。のち神桑は、わが国の高木の神の名にもみらい。のち神桑は、わが国の高木の神桑に、おるたの意とする。

存物 4 フ くさる・ただれる・いためる

心といい、役立たぬ学者を腐儒という。をいう。またすべて腐敗し、壊乱したをのをいい、腐朽の意に用いる。腐刑は割勢の刑。ものをいい、腐朽の意に用いる。腐刑は割勢の刑。をいう。またすべて腐敗し、壊乱したもの

敷 15 (敷) 15 しく・あまねし・ひろめる

む形で、これを撃って土を堅めるのが形声 声符は尊。奪は若木を植えこ

の系列のものである。

溥の初文。敷は布と声義近く、敷政・敷陳・敷衍***。 天命を受く」のように用いるが、専はのちの敷・ する。金文に専を「命を専く」「政を専く」「尊いに敷である。〔説文〕三下に「數(施)すなり」と訓 のように用いる。

膚15 [臚]20 はだ・あぶら・あさいフ

THON SET

「公孫碩膚」というのも、貴族的なおおどかさをほ 大雅、文王」「殷士の膚飯なるも、京に裸 將(清め浅・膚薄のようにいう。しかし古い用例では、〔詩、浅・膚薄のようにいう。しかし古い用例では、〔詩、 意から、浅い、平らかなものの義が生じ、膚見・膚膚となるという過程を考えることができる。皮膚の 字形に缶に従う形のものがあり、盧に缶声を加えて、ど、杂母の字にその例が多い。〔金文編〕にあげる [書、呂刑]が〔甫刑〕に、また面と稟、洛と貉な腐声に変じたものであろう。同様の関係のものには、 韻し、〔素問〕に膚と餘・去を韻していることから籀文としている。〔詩、癰風、狼跋〕に膚と胡とをいる。 めた語で、ともに大の義である。 の祭)す」は、その敏徳をほめる語、「豳風、狼跋」 なり」と訓し、重文として膚をあげ、その字形を その転音であろう。〔説文〕四下に臚をあげて「皮 いえば、膚は古く盧の声であったと考えられ、のち 正字は臚に作り、盧声。盧声は来母。膚は

賦 おさめる・よむ・あたえる・となえる

もと象形で母の字。金文には母の字形のま

訓し、 きかけるもので、そのことがまた、そのまま言魂的象に対して詩的表現をもってこれを描写し、はたら 形声 文学として展開した。「寄物陳思」のごときも、 山川都邑を歌ったものに起原 物などがあるが、賦はもと土地ぼめの呪誦として、 や、また遊覧・遊猟、その他に物そのものを歌う詠 ような儀礼詩があったのであろう。賦には山川都邑 るものをいう。〔巻阿〕に歌われる祭祀にも、その て誦詠する歌〕のように、儀礼歌として定着してい ぬる」とは、わが国でいえば〔万葉〕の〔所に当り らに即吟の詩を加えるということである。「詩を矢る に歌ふ」とは、一定の賦誦の詩を吟詠したのち、さ 巻阿〕に「詩を矢ぬること多からず ここを以て遂れるうな表現方法による文辞を賦という。〔詩、大雅、 なはたらきをよび起すという古代の言語観にもとづ 象に対して詩的表現をもってこれを描写し、 の呪誦文学に起原するものと思われる。それは対ものをいう。文体の一に賦というものがあり、古代 える)の意となるが、天賦・賦命とは天性・生来の とをいう。賦斂(おさめる)の意より、賦与(あた ものであろう。賦貢とは、貢納の負担を配分するこ **楚賦は胥賦というのと同じく、賦役のことをも含む** ということの実質は、その賦税を徴することにある。 くものである。その表現の方法を賦といい、そのよ こ、小大の楚賦を誤めよ」とあり、政命を敷く賦斂の意とする。〔毛公鼎〕に「命を専き政 声符は武。〔説文〕六下に「劔むるなり」と し、それより言魂的な そ

普 19 膊 17 衣裳のときには襚という。 生者を知るものは賻る」とあって、贈る人と死者と明という。〔儀礼、既夕礼〕「死者を知るものは贈り、 というのは、 「助くるなり」とし、〔広雅、釈詁〕に「送るなり」とし、〔広雅、釈詁〕に「送るなり」六下に その学を譜学という。 は「籍錄なり」とあって、系譜・年譜・譜牒の類を り」と表示の意とし、〔玉篇〕に「屬なり」という 何れも貨財を用いた。車馬を贈るときには賵とい いう。系譜のことは、歴代名家の重んずるところで のは、系属の図表の意である。〔説文新附〕三上に の関係によって、贈と賻との礼が異なる。賻贈には 系譜・表 おくりもの・おくるフ 形声 ぎらい。**また、みな葬送の際のことである。ゆえに賻 形声 に「布なり。布列してその事を見すな 声符は専。専に傅ける・傅け 声符は普。〔釈名、釈典芸〕

∰. 4 なかれ・ず ず

庹

蔑・侮慢のように用い、侮・務・蔑は声義の通ずる禦ぐ」と務をその義に用いるのは、仮借。侮は侮い、兄弟牆(家の中)に鬩ぐも、外その繁をは、「兄弟牆(家の中)に鬩ぐも、外その繁ない、兄弟・一人)を侮らず」のように用いる。〔詩、小雅、常人〕を侮らず」のように用いる。〔詩、小雅、常人〕を侮らず」のように用いる。〔詩、小雅、常 人)を侮らず」のように用いる。〔詩、小雅、常無れ」、〔左伝〕昭元年に「鰥寡(身寄りのない老意。〔書、般康、上〕に「汝、老成の人を侮ること意。〔書、釈話〕に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕んずるなり」とあって軽侮の「法雅、釈詁」に「輕人ない」となっている。 字である。 に「昏々たり」という。〔説文〕八上に「傷るなり」、に「昏々たり」という。〔説文〕八上に「傷るなり」を含み、〔荘子、胠箧〕「天下毎々たり」の〔注〕 声符は毎(毎)。毎に昏昧(くらい)の義

武 たけし・つよい・もののふ・あとブ・ム

まであり、その音を仮借し、のち毋に作って禁止の ** TH 0 故並致

坟

なでる

会意

詞に専用する。

に用いるのは金文に至ってみえるが、字形は#のま 詞には、莫・罔・無などあり、みな同声。毋を禁止したもので、いまの字形による解釈である。禁止の うのは、諸経注に引く〔説文〕の文によって再構成 禁止して、姦すこと勿からしむ、に作るべし」とい 從ふ。內に一畫あり。これを姦す形に象る。これをという。〔恵記〕に「まさに止むるの詞なり。女に 〔緊伝〕に「能く守ること有るなり。これ指事なり」 むるなり。女に従ふ。これを奸す者あり」とし、 として、母と区別した。〔説文〕、ニ下に「これを止ぎま、打消に用いる。のち両乳の間を直線化した字形ま、打消に用いる。のち両乳の間を直線化した字形

舞と同声であるため、武舞を原義とする説もある生、堂子をもうえる。 閒に過ぎず」、〔礼記、曲礼、上〕「堂上には武を接「武は迹なり」とあり、〔国語、周語〕「歩武尺寸の 生民」「帝の武の敏を履みて歌く」の〔伝〕にまると、まなど、ないない。またいう語が多くみえる。〔詩、大雅、武など、武徳をいう語が多くみえる。〔詩、大雅、 止は前進の意。金文に文武・元武・聖武・桓武・孝 「文において、止戈を武と爲す」とする解をとるが、 兵を戢む。故に止戈を武と爲す」という文を引き、伝〕宣十二年「楚の莊王曰く、それ武は功を定め、 て前進することを歩武という。〔説文〕二下に〔左 堂下には武を布く」など、みな歩武の意である。 戈と止とに従う。止は歩の略形。戈を執っせ、む

なわれて、字の原意は失われている。

侮

(侮)。

あなどる

の字は用いられることがなく、形声字の撫の字で行 る礼があり、その礼を示すものと思われる。のちこ 撫は坟の形声字とみてよい。死者を棺に敷める大敷行為をいう。〔説文〕三下に「撫するなり」とあり、行為をいう。〔説文〕三下に「撫するなり」とあり、

改はその屍体を撫して、死霊を慰める

亡と支とに従う。亡は屍体。

主人主婦が死者に身を寄せてこれを撫す

はなるを記録がは

う。〔麙 羌 鐘〕に「武文・咸く刺なり」の語がある。(ときできょう)に「武文・咸く」 的なり、これに対して武徳をい儀礼を意味するものであり、これに対して武徳をい を征す」とみえる。文は文身の美をいう字で、聖化の るす〔利設〕の銘(挿図)に、「珷、商(殷の正号)て文珷の字がある。周の武王が殷を伐ったことをして、 文武丁があり、周では文・武相嗣ぎ、その専字とださい。

敄。 つとめる・うれえるブ・ボウ

強の意は務に、瞀乱の意は瞀の字となる。 があり、 に苦しむであろうという。教に瞀乱の意があり、 十四年に引いて、字を悔に作る。梅の声でよむ字で棟〕「外その務を禦ぐ」の本字は敄。〔左伝〕僖二、 ある。〔毛公鼎〕に「鰥寡を敄ましめん」という語 勉めて努力する、これを敄と謂ふ」とあるから、 ちまでも残されて 強の意。宋の張有の〔復古編〕に「北燕の外、相 「説文」三下に「殭むるなり」とあり、 刻薄の政が行なわれると、老人たちが生活 会意 人を駆迫して使役することを示す。 いた語である。〔詩、小雅、常いた語である。〔詩、小雅、常 矛と支とに従う。矛をもって わゆる勉

部11 **₽**₽° わける・ふわけ・むれ・すべる・さか

形声 声符は音。 音に割戦・部分の意がある。

饮 侮[侮] 武 敄 船

ブ

村

る。 熟成して部戦するものであるから、分裂・部分の意に分つことをいう。音は果実などの実る形、やがて 「説文」六下に「天水の狄部なり」と地名に解する 地域・行政・職分・地位などの区分にこの字を用い に用いる。部は邑に従うてその地域をいう。ゆえに が、〔玉篇〕に「分割なり」と訓するように、部分 部屋とは、割りあてられた室のことである。

葡 ¹³ ぶブ どう

王翰の〔涼 州詞〕に「葡萄の美酒、夜光の杯」と で、その色と芳香とを愛した。 歌われているように、人々はこれを白玉の杯に酌ん その果汁で作る酒は、美酒として珍重された。 声符は匍。葡萄は西域より伝えられた果樹

嫵 こびる・みめよいブ

って、 媚と声義の近い字である。 **語であろう。〔玉篇〕に「媚は嫵媚なり」とあり、** に「媚びるなり」、[広雅、釈詁]に「好なり」とあすべてゆたかな状態をいう語である。[説文]二下 女子の媚好なるをいう。もと舞う姿態をいう た蕪には豊、廡には大の訓があって、 ル声 声符は無。無は舞の初文。ま

|| || 大きい家・いえ・ろうか・ひさし

無とは大屋をいう。〔説文〕カトに「堂下の周屋な 豊・膴大など豊大の意があり、形声 声符は無。無に蕪 声符は無。無に蕪*

> 蕪(しげる)に通用し、〔書、洪範〕「庶草蕃廡」は *。 ある。無に豊大の意があり、ゆえに離う意がある。 とする。〔後漢書、侯覧伝〕に「高廡百尺」の語が とする。〔¹⁵46年 「完然 無は触ふなり。触は覆ふなり」とあって、大屋の義する。また〔釈名、「歌宮室〕に「大屋を無といふ。する。また〔釈名、「歌宮室〕に「大屋を無といふ。とあって、建物を連ねる廊無、すなわち廊下の意ととあって、建物を連ねる廊無、すなわち廊下の意と 蕃蕪の意である。 七臣七主〕に「臺榭相望むものは、亡國の廡なり」の文献にその義に用いる例はあまりみえず、〔管子、 り」とあり、堂を中心とする建物の意とする。先秦

無 15 なでる・やすんずる・おさえる

司馬侯の子を見て、撫して泣く」というのは、その す字であろうと思われる。〔国語、音語〕「叔」がよったは死者であるから、死者に対して安撫する礼を示 と関係のある語であろうと思われる。 である。わが国においても、「なでる」は「のどむ」 もいう。撫育・撫養のようにいうのは、のちの用法 撫す」「軍を撫す」のように、政治や軍事について 振り・魂鎮め的な意味の行為であるが、のち「民を ·力によって安撫・撫循をなすことをいう。もとは魂な四年、「君の靈を以て、これを撫す」とは、威霊の 礼である。のちひろく安撫の礼をいい、〔左伝〕定 撫と同声。もしその字が撫の初文であるとすれば、 げている。支部三下に「改、撫するなり」とあって、た「一に曰く、循ふなり」とし、古文として辷をあ 鋫 形声 一三上に「安んずるなり」、ま 声符は無。〔説文〕

> 舞 15 まう・おどる・はげますブ

雞 逻 0 森

り)のような呪飾をつけており、おそらく羽舞をる。舞の初形である無には、その両袖に羽縫(羽飾舞の字に無を用いるが、ときに定に従う選の字があ舞の字に無を舞の意に用い、金文も宴舞・歌ない。卜文では無を舞の意に用い、金文も宴舞・歌 〔論語、先進〕に暮春のこととして、「舞雩に風ふか 〔詩、邶風、簡兮〕に「左手に籥を執り 右手に翟に「始めて六羽を獻ず」というのは、舞羽をいう。 のであろう。卜辞には無を舞雩の意に用い、雩はと行なったもので、それが古文の字形に残されている れ、詠じて歸らん」とみえる。舞楽のことはすべて ものであろう。その俗はのち民俗として伝えられ、 のである。舞雩における舞も、やはり羽舞に類した 配者としての周人に、その舞を献ずることを歌うも れる殷人の舞であった。殷の遺民たちが、新しい (雉の羽)を秉る」とあって、この舞は万舞とよば きに羽に従う字形にかかれている。〔春秋〕隠五年 を録し、その字は羽亡に従って鬯に作るが、用例は するが、舞は無の繁文である。重文として古文一字 「樂しむなり。足を用て相背く」とし、無声の字と す舛を加えて舞の字が作られた。〔説文〕 五下 有無の無に専用されるようになって、下に舞形を示 無と舛とに従う。無は舞の初文。のち無が

であるから、法文を曲説することを舞文という。 神事に起原し、のち民間に伝承された。巫舞のこと 舞16

賦〕に「索上を走りて相逢ふ」とみえる。 この字を用いる。綱渡りの曲芸を儛絙という。左右 人をいう。わが国の〔職員令〕雅楽寮の儛師の字に、 夏后啓ここにおいて九代を儛ふ」とみえる。また舞からが ルースで、「山海経、海外西経」「大樂の野、化した用法の字。「山海経、海外西経」「大樂の野、形声 声符は舞。舞の異文とみてよく、舞を動詞形声 声符は舞。舞の異文とみてよく、舞を動詞

膴 ほじし・ゆたか・おおきい・うつくしいブ

のように、その地味の肥沃な状態をいう。 のの意がある。〔詩、大雅、緜〕に「周原膴々たり」く大きなもので、膴・胖にはいずれも豊盛なるも え、注に生魚の大臠であるという。大臠は肉の厚 する。〔周礼、内饗〕に膴粋を膳に供することがみずる。〔周礼、内饗〕に膴粋を膳に供することがみし)なり」とし、また楊雄説として「鳥腊なり」と る。〔説文〕四下に「骨無き腊(ほじる。〔説文〕四下に「骨無き腊(ほじあがあれ声) 声符は無。無に無犬の意があれ

無 しげる・あれる・かぶらブ

ある。蕪菁はかぶら。また北人は鼕菁とよぶが、 う。荒蕪して、雑草の茂るにまかせた状をいう語で 「説文〕 - 下に「薉るるなり」とあって、蕪穢をいり、蕪とは草の繁茂することをいう。 形声 膴 声符は無。無に豊盛の意があ 蕪

フウ

封

蕪・蔓にいずれも大の意がある。 ら謙遜していう語である。 燕辞・蕪詞は、自

フウ

封 9 上をもる・領地・ほうずる・さかいフウ・ホウ

對 未

国の方位の土を取り、黄土で包み、白茅に苴み、こに白、北に驪、中央には黄色の土をおく。そして封と、国中に大社を建て、壝の東には青、南に赤、西と、国中に大社を建て、壝の東には青、南に赤、西 その方法をしるしている。諸侯は、命を周に受ける 封とは封樹することをいう。〔逸周書、作雒解〕に、の壝(土盛り〕を設け、その四號に封ず」とあって、 。 【周礼、封人】に「凡そ國を封ずるには、その社 稷となり歴史的な事実ではない。封建のしかたは、とより歴史的な事実ではない。封建のしかたは、 〔孟子、万章、下〕〔礼記、王制〕にみえるが、もあるが、金文の字は又に従う形である。封土の地はあるが、金文の字は又に従う形である。封土の地は 五十里」という。寸に法度の意があるとするもので 制度を守るなり。公侯は百里、伯は七十里、子男は るの土なり。之に從ひ、土に從ひ、寸に從ふ。その れで封建の意となる。〔説文〕「三下に「諸侯を爵す を示す。社を樹て、封建するときの儀礼をいう。その形。そこに神霊の憑る木として社樹を樹えること 丰と土と又とに従う。土は土地神たる社主

> える弄は、境界に樹てる榜示的なものであるから、殆ど唯一の信頼しうる資料である。〔散氏盤〕にみ方法と規模とを知りうる。古代封建の礼をしるす、方法と規模とを知りうる。古代封建の礼をしるす、 封建の封とはまた異なるものである。 理者たる鄭の七伯などを賜うており、当時の封建の数十姓、鬲(下層の民)と庶人約千七百人、鬲の管数十姓、鬲(下層の民)と庶人約千七百人、鬲の管に邑三十五が含まれ、人民としては宜地にある王人 て、その土地人民の数を明らかにしがたいが、土地 土地人民のことをしるしている。銘文に欠落があっ れ」と命じ、その封建に当って賜与する礼服礼器や、 南郷す。王、虎侯矢に命じて曰く、縁、宜に侯とな侯を転封する旨を宣言し、「王、宜の宗祉に立ちて 察に従っているとき、宜の地に至って、その地に虎 れた。周初の〔宜侯失設〕は、虎侯矢が王の東国巡る形である。封建のことは、古く社において行なわる形である。封建のことは、古く社において行なわ いが、封の字形では、明らかに土主の上に樹を植え れを土封とするという。社樹のことには及んでい

風。 かぜ・ふく・おしえ・ならわしフウ

晷 • HE 湖

ず。故に蟲は八日にして化す。虫に從ひ、凡聲」 東北を融風とする八風の名をあげ、「風動いて蟲生 風、西方を聞闌風、西北を不周風、北方を広莫風、 方を明庶風、東南を清明風、南方を景風、西南を涼 とがある。〔説文〕一三下に「八風なり」として、東 形で、その右上に声符として凡の形を加えているこ 形声 声符は凡。卜文の風の字形は、鳳形の鳥の

る例があり、上帝を祀るのと同じく、禘の祭儀をも風を殴どいふ。年を奉らんか。一月」のようにトすを奉らんか」「貞ふ。北方に禘せんか、」といふ。 いふ。年を奉らんか」「貞ふ。南方に禘せんか。完辞に「貞ふ。東方に禘せんか。析といふ。風を磬との使者たる風神の名に起原するものと思われる。ト 〔大荒東経〕に「女和月母の國あり。人あり、名を五采の鳥あり。冠有り、名を狂鳥といふ」、また といふ。西北隅に處りて、以て日月の長短を司る。 た。この方神・風神の名が、〔山海経〕のうちにも といふ。風を夾といふ。年を奉らんか。一月」「貞 は岩・夾(因・民)、西方は彜・韋(夷・韋)、北方 比すると、東方は析・魯([山海経] 折・俊)、南方 な記述がある。これを卜辞にみえる神名・風名と対 することなからしめ、その短長を司る」というよう 東極隅に處りて、以て日月を止め、相閒はりて出沒鳧といふ。北方を鳧といふ。來風を發といふ。これ 出入す」、「大荒西経」「名を石夷といふ。來風を韋 夸(来)風を乎民といふ。南極に處りて、 :に「神あり。名を囚々乎といふ。南方を因乎といふ。極に處りて、以て風を出入す」とみえ、〔大荒南経〕 折丹といふ。 古伝として伝えられていて、〔大荒東経〕に「名を って祀っている。自然神としても重要な神々であっ 八風に分つことは、卜辞にみえる四方の方神と、そ 股 (鳧・ 狻) のように、ほぼ対応する関係に 卜文・金文には風に作る字形はない。風を 東方を折といふ。來風を俊といふ。東 以て風を

子、天文訓』にもこの「虱うっっこ。 と八風のことがみえ、「呂氏春秋、有始」 〔淮南郎五年「夫れ舞は八音を節して、八風を行ふサールな隠五年「夫れ舞は八音を節して、八風を行ふサールない。 の御者であるから、この〔尭典〕の文は、すべて神北方は狡とするものと、ほぼ対応する。羲和も太陽 「四鳥を使ふ」のように、鳥形の神を使者として使 名をあげるような伝承のうちに、そのなごりをみる 殆ど棄てられ、季節風的な解釈のもとに改められて 文〕は〔淮南子〕の文をとるが、もと神話的伝承に 性質のものである。〔説文〕にいう八風は、〔左伝〕 〔山海経〕の伝える伝承よりも、のちに位置すべき 話から奪胎して作られた政治的文章であり、それは というのは、東方の神は析、南方は因、西方は夷、 は「厥の民は夷ぎ」、北方は「厥の民は隩かくす」 は「厥の民は折れ」、南方は「厥の民は因り」、西方ぜられ、その治績をしるす文がある。東方について うものが多い。卜文の風が鳥の形、それも鳳の形で するものであった。「山海経」にみえる神々には、 司るものであり、風神はその使者として神意を伝達 間に保持されていたことが知られる。方神は日月を の方位名をあげ、また雇に九雇ありとしてその四季 たとえば佳部四上雉字条に、雉の十四種をあげてそ 由来するものであった方神・風神の名は、ここでは いる。ただ風を鳥神との関係において説く古伝は、 殷が滅びたのちも、その伝承が一部の巫祝の

> 者であり、その生活の様式を規定するもので、 る神聖病であった。風は自然と人間の生活との媒介 きる。風邪のごときも、この神によってもたらされ な古代風神の観念から、概ねこれを解することがで 民謡である。風の字のもつ多様な訓義は、このよう であろう。それが歌詠に発するものは風、すなわち 風光・風物・風味が生れ、その地に住む人の性情に 域の風土性が特色づけられ、その土俗が規定される ること、方神の意を受けて、これをその地域に宣示 列するが、 文においても、雲や虹などは、みな竜形の神とされ 天上の竜形の神が起すものと解したのであろう。 刻石には、小篆と同じ字形が用いられている。字形に移行した時期は明らかではないが、秦の も深く作用して、風格・風骨を形成するとされたの いない。これによってその風土・風俗が規定され、 ものであるという観念が、古く存していたことは疑 し風行させるものであること、これによってその地 ていた。風の用義は甚だ多く、字書には二十数義を ことができる。このような鳥形風神が、 ような営みを風化といい、流風という。 風がもと方神の使役する鳥形の使者であ か、秦の会稽がなり 風を

楓 13 かえで・おかずら

と南方の楓とはまた異なり、南方の楓は実は栗房の形であることを、説明したものであろう。北方の楓風に動き、葉ずれの音がするという。字が風に従う風に動き、葉ずれの音がするという。字が風に従う風に動き、葉ずれの音がするという。字が風に従うれている。[説文]六上に「楓

楓橋と名を改めたものだという。という。注解はもと封橋といい、唐人の書にその名がみ県の楓橋はもと封橋といい、唐人の書にその名がみ県の楓橋はもと封橋といい、唐人の書にその名がみようで、これを焚けば香気を発するという。江蘇や

14 フゥ・まい・きちがい

順として恐れられた。 形声 声府は風。風は神意をもたらす神の使者と 形声 声府は風。風は神意を伝達するもので、病因の える。風は風行して神意を伝達するもので、病因の える。風は風行して神意を伝達するもので、病因の でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・瘋 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・瘋 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・瘋 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・瘋 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・痼 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・痼 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・痼 でない神聖病的な流行性の疾患は、風邪・痼

16 ほのめかす・そらんずる・おしえる

26 かぜ

星であるという。古い時代の風神の観念が、星宿の師・雨師を祀る」とみえ、「鄭注」に、風師とは箕周礼、大きに」とみえ、「鄭注」に、風師とは箕彫・雨師を祀る」とみえ、「鄭徳と以て、司中・司命・観が声 声符は風。風の異体字とされるもので、

フウ

諷觀

フク 日

伏宓

らされた、戦国以後のことである。信仰へ移っているのは、西方から星宿の知識がもれ

フク

口又 4 おさめる・したがう

F

会意 『と又とに従う。『は人の跪坐している形をの後ろから手を加えて、これを圧服する形が良で、明治の意を示す。「説文」三下に「治むるなり」、既治の意を示す。「説文」三下に「治むるなり」、既治の意を示す。「説文」三下に「治むるなり」、に発注」に「手に節を持して、以てこれを治むるなり」と解するが、字は人を背後から圧服し、跪坐させる形で、降服の服の初文である。「辞し、院坐させる形で、降服の服の初文である。「辞し、院坐させる形で、降服の服の初文である。ト辞に羌人・南人と同じく、異族犠牲として艮を用いてに羌人・南人と同じく、異族犠牲として艮を用いてに羌人・南人と同じく、異族犠牲として艮を用いてことがあり、艮は異族の名である。「宗は、」に、「治むる形」とは、「治して、」といる形との後ろから手を加えて、これを圧服される。

伏 6 ぎせいを埋める・ふせる・かくす

多

の奠基や墓室の棺下に埋めるもので、これを伏瘞とくない。人と犬とに従う。ともに犠牲として、建物

の腰坑などに、犬牲やの腰坑などに、犬牲やの腰坑などに、犬牲やには、大が伏して人を伺う意と解するのは、ないは人とし、犬が伏して人を伺う意と解するのは、気量・埋土など、あるいは風行し、あるいは地中から侵入してくるものもあるので、風蠱に対しては城島・は、こと、犬が伏して人を伺う意と解するのは、ないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〔説文〕ハ上に「記さなり。人に從ひ、犬にないう。〕

納めている例がある。 た武人と犬牲とを合せ た武人と犬ない、盛装し 人牲をおき、あるいは

亞字形中莫犬図象

意文の図象に、亜字形中に莫と犬とを加えたものがあり、莫は墓の意であろう。殷墟西区の墓葬七三九年、この多数の犬牲は、もとより埋蠱を祓うためのものであるが、その大部分は少年または未成年のものであるが、その大部分は少年または未成年のものである。その殉葬の目的は、おそらくその生命力を収奪して、これを死者の復活の資とするものであろうと思われる。秦の地で行なわれた伏祠も、もと蠱をふせぐための祭儀で、犬牲を用いた。圧服のための呪的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の呪的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の院的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の院的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の院的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の院的な方法である。のち伏蔵の意より俯伏・伏謁の意に用い、また服従の意に用いる。

28 やすらか・しずか・ひそか

七四九

The state of the s

默するなり」の訓があり、その字義は宗と近い。宋 を經難し、我が「飲」を宣如す」の語があり、仰は戚言に安寧を祈る儀礼であろう。〔晉 姜 鼎〕に「明德霊に安寧を祈る儀礼であろう。〔晉 姜 鼎〕に「明德る。金文に、廟中に二必を並べる形の字があり、祖 「密・康は靜なり」の文を引くが、密は必に火を加 が知られる。〔玉篇〕に「止まるなり、靜かなり、 斧の属を拝する形である。戚斧を聖器として廟中に を求めるための儀礼を示す字である。 は廟中に戚の頭部を聖器としておく形で、また鎮静 おき、あるいはこれを拝して祈る儀礼のあったこと えてこれを清める儀礼であるから、宓とはまた異な 声とする。〔段注〕に密の初文とし、〔爾雅、釈詁〕 あろう。〔説文〕七下に「安らかなり」と訓し、 を廟中におくのは、安寧を求むる意味をもつ儀礼で は戚や斧などの秘部を含む形。これ ☆と必とに従う。☆は廟。

服。(服)。 もちいる・したがう・おこなうフク

る所以なり。舟に從ひ、艮聲」とする。一日の義はに「用ふるなり。一に曰く、車右の「騑なり。舟旋に「用ふるなり。一に曰く、車右の「騑なり。舟旋ることを示す字であろうと思われる。〔説文〕八下 偏は舟。弁は盤の初形。盤に臨んで人が服する形を 車に馬をつける服馬の意とするものであるが、舟は らかの儀礼に服する、あるいは服することを用意す しるしているのは、盤は礼器であるから、そこで何 * 声符は侵。 足は人に屈服するものの形。 左声符はな。 *

> ことを心にかけることを服膺という。降伏は降服と のち一定の儀礼や任務に従うことを服といい、その 初義は、盤中のものを献ずる儀礼を示す字であろう。 す儀礼のしかたであったと考えられる。それで服の し、旅服を献ずることが、服従し臣事することを示て服という。車服・衣服など、その例である。服酒 る品々のことである。それで車馬・器用の属をすべ がその儀礼に参加するとき、「邦賓、その旅服を障 裸礼を行なってから儀礼に入る。また邦賓たる賓客なstktを行なってから儀礼に入る。また邦賓たる資本に服酒の儀礼がしるされており、門に入って服酒し、 ときには「乃の服に在れ」のようにいう。〔小盂鼎〕 大服とは諸侯の地位をいう。王ならば王服、臣下の 更ぐ」「大服に登る」の語があり、服とは服事服職、 。含字ではない。周初の〔班設〕に「虢 城 公の服を礼器としての盤であるから、服は服馬や舟行に関す しるすのがよい。 く」という儀礼がしるされており、旅服とは献上す

复9 かフ える

常 面量模

形は、 を加えたが、もと器を反覆する形で、それに又やイ 会意 を加えて往復の復の字となった。 もって反覆(うちかえす)する意。往復の意から欠 金文の字形には又を加えたものがあり、やはり器を (くりかえす、往復)の意を示したものと思われる。 上下に口のある量器の形に夊を加えて、反復 量器の形と、文(足)とに従う。ト文の字

量 9 骨 ふくらみのある器・みたすフク・ヒョク

H

り。高の省に従ふ。高厚の形に象る。讀みて伏の若それで盈満の意がある。〔説文〕玉下に「滿つるな象形」酒樽など、下部にふくらみのある器の形。 も用いるが、建物に用いる例はない。福・富の字はこれに従う。のち布幅(きれ)の字に *るなり。腹の滿つるを偪といふ」とみえる。 の器腹のふくらみのある形。〔方言〕に「窟は滿つ くす」とするが、字は建物の形でなく、樽・壺など

副 さく・わかつ・そう・ひかえフク

曲・礼、上」「天子の爲に瓜を削くときは、これを副となることを釃といい、驪辜という。「礼記、を磔殺することを釃といい、驪辜という。「礼記、て正副・尉弐の意となり、そえるものをいう。犠牲て正副・尉弋。 には副本をいう。 副驅 つまり八分すること。正副相対し、書類などのとき にす」とは、横切りしたものをまた四つ切りにして する意。〔説文〕四下に「判つなり」とし、両判に の意があり、副はそれを両分 声符は畐。畐に盈満

匐 はらばう・はうフク・ホク

「地に伏するなり」とあり、匍匐ではらばう意。双 审 形声 条に「手もて行くなり」、匐字条に 声符は富。〔説文〕九上の匍字

行くことで、意味が少しく異なる。 をみな「はらばふ」と訓しているが、宛転はころび いる形。[類聚名義抄]に、伏・宛転・匍匐・蒲伏声の連語である。行は人がい節ぎ、あるいは俯して声の連語である。た。

虚 虎のさま

女媧とともに、南方の神話にみえる創造神である。の女神を虙妃といい、虙戯の女とされるが、虙戯はの名)に用い、字はまた宓・伏に作る。北方の洛水の名)に用い、字はまた宓・伏に作る。北方の洛水の名)に用い、字はまた宓・伏に作る。北方の洛水では『『神子』であるが、その用義例はなく、字は忠猷・虙羲(神とするが、その用義例はなく、字は忠猷・虙羲(神 ことは知られない。〔説文〕五上に「虎の兒なり」 そえ、祈る餞礼があったのであろうが、その古儀の 0) 松部の形。虎皮にこれを聖器として 声符は必。必は戚・斧など

唱 きれはば・はば・ふちフク

円周であるから、面積の意となる。辺幅を飾るとは、 人が外面を飾るのに務めることをいう の広さである。すべて横幅を幅といい、幅員は員が 七下に「布帛の廣さなり」とあり、二尺二寸が一幅 な形で、巾は横はばをいう。〔説文〕形声 声符は畐。畐は器腹のゆたか

復 12 かえる・むくいる・くりかえす・またフク

西不得 医为 克

フク 虙 幅 復 福[編] 腹 箙

> 衣を以て招き、「梟、某復れ」と三たびよぶのであ者一人、死者の衣冠をもち、屋上に発り、北面して礼は、〔儀礼、士喪礼〕にしるされており、復するは、楚の王室が用いた招魂儀礼の歌である。復の儀は、楚の王室が用いた招魂儀礼の歌である。復の儀 た儀礼の実際をみることができる。 の歌うところによって、当時の貴族の間に行なわれの資料とすべきものがある。また〔招魂〕〔大招〕 古代文字の死葬関係の諸字には、さらに豊富に儀礼 る。礼書にしるすところは、その復礼のみであるが すことをも復といい、[楚辞]の[招魂][大招]との状態に回復することをいう。死者の霊をよび返 〔晉鼎〕に「厥の絲束を復せしむ」「則ち復命せし 「説文」ニ下に「往來するなり」と訓し、復帰の意。 む」のように、返付・返報の意に用いる。すべても する形。それを往来の意に用いたものが復である。 声符は夏。夏は量器を反覆(うちかえす)

福 13 【福】14 さいわい・たすけ・ひもろぎ

减 福酮

あり、福・富の字は畐に従う。金文にまた霜に作る とる。金文に畐をそのまま福字の義に用いるものが 「盈なり」というのは、器中にものの盈満する義を 〔説文〕 上に「祐くるなり」、「繁伝」には「備は形声 声符は富。冨は器腹のゆたかな酒樽の形。 ****、 | と、畳韻の字で解する。 [広雅、釈詁] にるなり」と、畳韻の字で解する。 [広雅、釈詁] に

> 帰福ともいう。神に供えたものを頒つのは、共餐の語〕に「必ず速やかに祠りて、福を歸れ」とあり、て同族の間に頒つ。これを致福という。〔国語、晋とをいう。祭肉をも福といい、これをひもろぎとしとをいう。祭肉をも福といい、これをひもろぎとし るところも、またその受福のためであった。 順福など、福禄に関する語が多く、祭祀の目的とす 与えられるのである。金文には降福・受福・多福・ 儀礼にあたる。これによって、神の福禄がその人に 字があり、宗廟に酒樽を備えて祭り、福を求めるこ

腹 13 はら・あつい・こころフク

腹をかかえて大笑いすることを、捧腹絶倒という。 出て腹をさらし、「我は腹中の書を曝す」 という。晋の郝隆は、七月七日の虫干しに日中に 引伸義である。人に知られない感情を腹誹・腹悲のも盈満のところは腹であり、「厚きなり」とはその ようにいう。博学強識、多くことを識るものを腹笥 の注に「厚きなり」とみえるが、人の身体の最 きなり」という。[礼記、月令]「水澤、腹堅なり」腹が大きく、盗満の義がある。[説文]四下に「厚腹が大きく、盗法。 形声 (うちかえす) する形の字で、その器 声符は夏。夏は量器を反覆 と称した。

箙 やなぐい・えびらフク

用み事み 開展用 旗

の用字にも、すでに仮借によるものが少なくない。 の用字にも、すでに仮借によるものが少なくない。 節用字にも、すでに仮借によるものが少なくない。 節用字にも、すでに仮借によるものが少なくない。 節用字にも、すでに、質問と、でいるがあり、魚皮をもって箙を作ることが多かった。魚皮は魚獣の皮。オットセイなどの皮を用いたものである。〔国語、晋語〕に質服の語がみえるが、それは職事は、「ない。」と類の象形の字を用いるが、それは職事は、「ない。」と類の象形の字を用いるが、それは職事は、「ない。」と類の象形の字を用いるが、それは職事は、「ない。」と類の象形の字を用いるが、それは職事は、「ない。」と言い、「ない。」と言い、「はいい。」とは、「はいい。」とは、「はいい。」とは、「はいい。」とは、「はいい。」とは、「はいい。」とない。

複 4 カカせ・かさねる・わたいれ

幅 15 こうもり

「蝙蝠なり」とあり、〔方言〕に、関東形声 声符は畐。〔説文〕一三上に

は、そのとぶさまの形容から出た語であろう。ので、中国ではこれを吉祥の文様に用いる。蝙蝠とのは、東国ではこれを古祥の文様に用いる。蝙蝠とでは服翼とよぶという。蝠の音が福に通ずるという

蝮 15 まむし

「鬼なり」とあり、忠字条一三上に「鬼なり」とあり、忠字条一三上に「鬼なり」とあり、忠字条一三上に「鬼なり」とあり、忠字条一三上に「鬼なり」とし、虫を蝮の象形、蝮をその形声をとする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、虫を聴と字とする。「爾雅、釈魚」の文によって、由を聴と字とする。

16 車輪のや

覆18 【覆】18 くつがえる・おおう・しらべる

あり、覂字条七下に「反覆(うちかえす)するな変に る。〔説文〕七下に「覂へるなり」と変に、 をいして後の意があ

利8 かんばし・かおり・におい

朝期の文人が愛用した語である。

輔 20 やなぐい・えびら・ふいごう

形声 声符は荷。前は紫の初文で象形字。[広野歌器]に「鞴靫は矢の藤なり」とあって、えびらの意。[説文]一三上絥字条に車絥の絥の一体の字とするが、字形からいえば鞴は葡の繁文である。字はまた章に従う。わが国ではふいごうの字に用いる。ふいごうには獣皮、特に狸の皮を用いた。葡も獣皮の形と含む字である。

弗 5 もとる・はらう・あらず

市 4 [芾] 8 [载] 4 [黻] 7

(級)11

ひざかけ・まえだれフッ

帯より巾の垂れている形。その巾は蔽膝、

т

命せられて赤黻葱衡す」という文があり、葱衡は佩記、玉藻〕の文を引く。〔玉藻〕の下文になお「三記・『キーンド

巾に從ひ、帶に連ねたる形に象る」とし、一体として象る。天子は朱市、諸侯は赤市、大夫は葱衡なり。作い、上古、衣は前を蔽ふのみ。市は以てこれで輝なり。上古、衣は前を蔽ふのみ。市は以てこれずなわち礼装用のひざかけである。〔説文〕七下にすなわち礼装用のひざかけである。〔説文〕七下にすなわち礼装用のひざかけである。〔説文〕七下に

一命せられて縕奲し、再命せられて赤韠す」と〔礼。一命せられて縕奲し、再命せられてままり。 ない。下は廣さ二尺、上は廣さ一尺、その頸は五寸。てす。下は廣さ二尺、上は廣さ一尺、その頸は五寸。

払って拂】8 はらう・のぞく・はなつ

輔のときはヒツの音でよみ、弼と通用の義である。 撃するなり」とあり、〔通訓定声〕に「蘇俗にこれ を拍といふ」とみえ、払衣・払拭・払塵のように、 強く撃って払う動作をいう。〔孟子、告子、下〕に 法家拂士」という語があり、法を執って道を托げ ない人をいう。払戻・払拭のときはフツ、払士・払 撃するなり」とあり、〔通訓定声〕に「蘇俗にこれ 撃するなり」とあり、〔通訓定声〕に「蘇俗にこれ 撃するなり」とあり、〔通訓定声〕に「蘇俗にこれ を拍といふ」とみえ、払衣・払拭・払塵のように、 強く撃って払う動作をいう。〔孟子、告子、下〕に 「法家拂士」という語があり、法を執って道を托げ ない人をいう。払戻・払拭のときはフツ、払士・私

沸 8 わく・わきたつ・にえる

一成 10 はらう・きょめる・のぞく

て殺す形で、祓の初文。それによって形声 声符は女。 友は犬を犠牲とし

フツ 市[芾][韍][黻][紱] 弗 払[拂]

のようにいう例が多いが、〔礼記、玉

市幽亢(衡)」「赤市朱黃」「戴市四黃」「朱市幽黃」「紫市」「叔市」「朱市」、また佩玉と合せて「赤市」「戴市」「叔市」「朱市」、また佩玉と合せて「赤

加えた。金文の礼服の賜与においても、市を賜うこ天子の衣裳においても、市には最も絢爛たる文飾をこれに離散文章、つまり縫取りの文様などをつけた。これに離散文章、つまり終しまりの文様などをつけた。玉をいう。蔽膝は古代の礼装として重要なもので、玉をいう。蔽膝は古代の礼装として重要なもので、

初期には「市鳥」(市と履物)、のち「赤

とが多く、

沙沸祓

七五三

フツ

という。祓は犬牲を用い、それで禳うことを原義と先進〕「沂に浴し、舞雩に風す」のように水辺ではないない。というというものである。上巳の俗は、〔論語、祓除す」というものである。上巳の俗は、〔論語、 という。[韓詩説]に「鄭國の俗、三月上巳、湊洧という。[韓詩説]に「鄭國の俗、三月上巳、湊洧祓除とは、今の三月上巳、水上に如くの類の如し」 「歳時の祓除釁浴を掌る」の「鄭注」に、「歳時の 上に「惡を除く祭なり」とみてる。〔周礼、女巫〕邪悪を祓うもので、祓禳のことをいう。〔説文〕一 雨水の上に之き、招魂續魄す。 じく招魂続魄、いわゆる魂振りのためのものである。よるものであるが、その修禊の目的は上巳の俗と同 は祓の仮借。わが国の祓は修禊の方法で、みそぎに する。〔詩、大雅、生民〕「以て子無きを弗ふ」の弗 蘭草を乗り、不祥を

秋 11 ひも・まとう

た冕(冠)を結ぶときに用い、紋冕とは、礼服を身合せた組紐をいう。綬は印綬、璽印に用いる紐。ま がある。〔広雅、釈器〕に「綬なり」とあり、より形声 一声符はな。 女は弗と同声で、相通ずること に著けることをいう。

綿ュ「綍」コ ひも・ひきづな

する。[礼記、曲礼、上]に「葬を助くるときは、れたる枲なり」とあり、麻糸の乱れたものをいうと 必ず紼を執る」とあって、紼は柩車を曳く紐。それ れるの意がある。〔説文〕一三上に「亂 声符は弗。弗にもとる、みだ

がない。

を「紼婆」という。字はまた綍に作り、紱・市と通りを「紼婆」という。字はまたタゥートータっトーターで挽歌のことをまた紼謳といい、枢旁に立てる羽飾 用することがある。

艴 けしきばむ・いかるフツ・ボツ

뽽 う。艴・勃ともに擬声的な語である。 して悅ばず」とは、怒色が面にあらわれることをい 勃如」に作る。〔孟子、公孫・丑、上〕「曾西艴然と 「論語、郷党」の語を引く。 である。〔説文〕九上に「色、絶如たり」る。〔説文〕九上に「色、絶如たりがいた。 声符は弗。 弗にもとる意があ いまの「論語」は

縣 15 にかよう・かみかざりフツ

「その容貌奇豔、世の見る所に非ざるを謂ふなり」 虚の賦」「神仙の髣髴たるが若し」の「郭璞注」に[史晨碑]に「髣髴として在すが若し」とみえ、[子に是碑]に「髣髴として在すが若し」とみえ、[子によっ」と うのは、髪の気配の意を含ませたものであろう。 作り、佛(仏)・彿・髴はみな同じ。髣髴が影に従 とあり、〔史記〕には字を彷彿に作る。また仿佛に 形声 声符は弗。髣髴は双声の連語

ブツ

14 (佛) ほのか・たがう・ほとけブツ・フツ

洲 文〕八上に「見ること審かならざる 形声 旧字は佛に作り、弗声。〔説

> 「時の仔肩(大任)を佛け 我に顯德の行を示す」字はまた彷彿・髣髴に作る。〔詩、周 頌、敬之〕には審かならざるなり」とあって、仿仏の状をいう。 なり」とあり、〔字林〕に「仿は相似たるなり。佛 は Buddha の音訳で、覚者の意であるという。 の仏は弼の仮借。字はのち仏陀の仏に用いる。仏陀

勿 はた・なかれブツ・フツ・モチ

多粉 K 当 打多号 の野の

に遽なることを勿々と稱す」とし、重文として从になる旗ぎれ)、幅半ば異なり。民を趣す所以なり。故の三游(吹流し)あるに象る。雑篇(へり飾りのあの三游(吹流し)あるに象る。雑篇(へり飾りのあ を旗幟の形とし、「州里建つる所の旗なり。その柄 を行なうので、禁止の意となる。〔説文〕ヵ下に字 のとみられる。これによって弾劾(悪邪を祓う術) 弦の部分を断続形にしたもので、弾弦の象を示すも 呪飾として旗に加えた。雑帛を物といい、〔周礼、亀蛇四游・熊羆五游といわれるように物象をかき、またはその下垂する三游の象とするのである。游には左はその下垂する三游の象とするのである。游には 従う字を録する。〔説文〕は勹を旗の柄の形とし、 た。〔説文〕の字説は、勿をその物旌(氏族標識の るところのもので、そこに氏族霊が宿るものとされ つ」という。物とはそれぞれの氏族や家の標識とす 司常〕に「大夫・士は物を建つ。州里には旟を建 弓体に呪飾をつけた字形。その初形は、弓

を弾じて悪邪を祓う呪儀を示す字で、のちの鳴弦に形象ではなく、弓体に従う字である。おそらく弓弦 旗)として解するものであるが、卜文の字形はその 8 もの・しるし

牛を農耕のことに用いることが全くなかったとはし に犂をならべて用いる字形があることからいえば、 形は象を土木のことに使役する形であり、またト文 春秋期以来のこととされているが、爲(為す)の初 って土を撥ねる形であり、牛耕を示すと思われる字うところは三游雑帛の形と異なり、明らかに犂をもに逮なることを勿々と稱す」というが、物の字の従いは これで、「説文」は「州里建つる所の旗なり。とな趣す所以なり。故の三游(吹流し)あるに象る。雑帛(へり飾りのあの三游(吹流し)あるに象る。雑帛(へり飾りのあたい、「説文」は「州里建つる所の旗なり。その柄 物は、牛の毛色をいい、雑色の牛をいう。勿字条丸 雅、無羊〕に「三十これ物「爾の牲則ち具はる」の義に関することでなく、字の初義でない。〔詩、小義に関することでなく、字の初義でない。〔詩、小 故に牛に従ふ。勿聲」という。牛は物の大なるもの 訓し、「牛を大物と爲す。天地の數は牽牛より起る。 それを物といったとも考えられよう。牛耕は一般に とを対文として用いるものがあり、雑色の牛を物と えず、その毛色をいう形声字である。ト辞に牛と物 に加えるのみで、犂を用いて撥土している形とはみ である。ただ物の字形は、勿を牛上、あるいは牛旁 の数は牽牛の星座を首として、左動するものである であるから、万物を代表するものである。また天地 いう。牛耕に用いるものが雑色の牛であったから、 から、天地の数の首であるとする。いずれも字形字 る形。〔説文〕ニ上に「萬物なり」と 声符は勿。勿は犂で土を撥ね

りの弓矢を賜う例が多い。みな儀礼における祓、禳金文には彤弓彤矢・旅弓旅矢のように丹塗り・黒塗金文には光弓彤矢・な

侯・窒など、古代の呪儀を示すとみられる字があり、

ら一となり、

物色(はた)による祓禳の儀礼が、その字形の上か の射儀に用いるものである。のち弓弦による祓禳と、

しかも字は撥土の勿と混同され、物色

*用いられること多く、字形のうちにも失・誓・殹・て用いたものであろう。弓矢の属は、古くは呪儀に

れて、字形の意味が理解されず、撥土の勿を仮借し いられることがない。おそらく古い鳴弦の俗が失わには撥土の勿の形が用いられ、弓弦の勿の字形は用 同じであるため混一し、金文に至って禁止の意の勿

弦の勿、物旌の勿、撥土の勿の三者は、形近く音がもとの形象はまた物旌の勿とは同じでない。ただ弓

物の従うところの勿は、犂をもって土を撥ねる形で、ところの勿と同一形とするに至ったものであろうが、

弦の断続線が斿の形と誤られ、これを物の字の従う あたるものと考えられる。のち字形が変化して、

弓

「その物を辨じて、その政令を掌る」の注に、「物と であったが、旗幟偃游(吹流しの類)を示す雑帛のはその字形はみられない。物ははじめ雑色の牛の意じであるため、のちに勿と混じて用いられ、金文にじであるため、のちに勿と混じて用いられ、金文にものが、おそらくその初形であろうが、その声が同ものが、おそらくその初形であろうが、その声が同 霊的な観念のなごりがみられる。物故とは、死して も、「もの」という語には「もののけ」のように精 古くは氏族霊が宿るとする観念があった。わが国で は衣服・兵器の屬なり」とみえ、それらのものには 含められて万物・物色の意となった。〔周礼、司隷〕 味をもち、その氏族霊を宿すものとされた。呪飾と 郷 射礼、記〕「旌には各 その物を以てす」は、みますをは、記〕「旌には各 その物を以てす」は、礼、あり」、〔周礼、司常〕「雜帛を物と爲す」、〔儀礼、 の意に用いられ、〔左伝〕定十年「叔孫氏の甲に物なり、それを求める意となる。物はまた標識として 判つことをいう。物色はのち形状、状貌をいう語と うに、すべて物色(ようすをみる)してその吉凶を て地を物す」、「保章氏」「五雲の物を以てす」の び、〔犬人〕に「牷物を用ふ」というのも同じ。牷色を取るなり」とあって、犠牲には純色のものを尚 色をいう。〔周礼、牧人〕「これを毛す」の注に「純 勿と同声であるため、雑帛の勿が、雑色の牛の字に しての勿は、卜文では弓形のものに游をつけた形の な旌旗の類を著けることで、もとは呪飾としての意 の物を辨ず」、〔草人〕「土化の灋(法)を掌り、 も純色をいう。さらに他にも及ぼして、〔鶏人〕「そ 物は物色の意に用いられて、牛に限らず、その毛

意外なことの意に用いる。

をすることをいう。勿怪は物怪。けしからぬ、不吉の「勿体ない」は「物体」で、ものものしいようす のち点を加えて匆々に作り、早々の意とする。国語 形である。〔説文〕にいう「勿々」は急々の意で、 至った。犂の右肩にある字形が、撥土の形の勿の原 の字もまた、耕牛撥土の字である物の字を用いるに

とは特殊を意味する語であった。 られている。わが国においても、 である。物はいわば、そこでは一般者としてとらえ う古代的な観念を、存在の基本におこうとしたもの のうちには、その存在を秩序づける原理があるとい 〔詩、大雅、烝民〕「物あれば則あり」とは、存在 鬼神に化する意、 物化とはその変化の相をいう。 ものは一般を、

刎 くびはねる・きるフン

交」という。 ら死することを自刎、生死を約することを「刎頸の 下」に天子が崩ずるときの礼をしるし、「至らざる ものはその祀を廢し、その人を刎る」とみえる。自 「剄るなり」という。[礼記、檀弓、竹き 声符は勿。[説文新附]四下に

吻 7 [脗]11 くちさき・ことばつき・くちびるフン

唇の両辺、 はまた脗に作る。 であるから、両事の一致することを吻合という。字 口吻といい、 議論好きの人を吻士という。両辺同形 すなわち口角をいう。またその語気を 二上に「口邊なり」とあり、 形声 声符は勿。〔説文〕

よそおう・かざる・にぎるフン

扮装・扮飾の意に用いる。粉に通じて、「六書故」 粉 の義に用いる。 に「打扮(かざる)」の語があり、 なり」と訓するが、ともにその用義例は殆どなく、 「握るなり」、〔広雅、釈詁〕に「動く 声符は分。〔説文〕一二上に 宋元以後にはそ

忿 8 いかる・うらむフン

變 濛のように用いる。 憤と声義が近い。 「悄るなり」とあり、忿怒・忿怨・忿 形声 声符は分。〔説文〕一〇下に

氛 [零] いき・わざわいフン

用いるが、〔詩、小雅、信南山〕に「雪を雨らすこあった。重文として録する雰は、雰囲気のようにも 〔左伝〕

〔国語〕に、巫祝の徒が多くそのことに従い、 祥氛を察する話がみえ、また各地に望気の台なども **祲を見るに、祭祥に非ざるなり。喪氛なり」という。** と雰々たり」のように用いて、形容の語であり、 年「楚の氛甚だ惡し」、また昭十五年「吾、赤黑の そのあらわれるものを禮といい、〔左伝〕襄二十七 ている。望(望)の初形は、遠く気を望む形である。 われるものとされ、卜辞には望気のことが多くみえ 吉祥。祥に対して、氛は妖氛のように邪悪なものを 天地の間にある気象のあらわれをいう。祥(祥)は いうことが多い。古くは、地気が天に反映してあら -上に「祥气なり」 とあり、 形声 - 声符は分。〔説文〕 慣

用の異なる字である。

粉10

こな・いろどる・おしろいフン

があるから、漢魏のころすでに行なわれていたのでれた。曹植の[洛神の賦]に「鉛華鶴ひず」の句子にも化粧するものが多く、白粉にも鉛華が用いら初に倍す」とあり、脂粉を用いた。穴がい 下絵作りすることを粉本、人のために骨身を惜しま飾という。粉はすべて粉末状のものをいい、胡粉で飾という。粉はすべて粉末状のものをいい、胡粉で 子、顕学」に「脂澤粉黛を用ふるときは、則ちその だ白く、朱を施すことだだ赤し」とみえる。〔韓非、玉の〔登徒子好色の賦〕に「粉を著くることた****** ぬことを粉骨砕身という。 同じ性質のものである。ゆえに外面を飾ることを粉 あろう。化粧は古くは神事に用いたもので、仮面と を加えたものを香粉という。頰紅には經粉があり、 は米粉を用いたが、その光潤なるものを英粉、 くるものなり」とあり、 ことあり、自分シ、・・ タに和密なるものの意がある。〔説文〕七上に「面に傅って意がある。〔記文〕七上に「面に傅っているがある。 声符は分。分に細密なるも 2光潤なるものを英粉、丁香ら白粉をいう。白粉には古く

紛 みだれる・まじる・さかんなさまフン

紛々のように用いる。粉藹・粉縕・粉華などは、 り交って美しいこと、その入り乱れた状態を紛乱、 たい。字は糸の乱れることをいい、紛紜・紛糾・ り」と解するのは字の一義であろうが、通訓としが 形声 ある。〔説文〕一三上に「馬尾の韜な 声符は分。分に細分する意が

問題のもつれることを紛擾という。

梦12 むなぎ・みだす

をいう。 賦〕に「棼稼っという語があって、棟木とたるきと木の義とする。それが字の本義で、班固の〔西都の のち紊と通用して、棼乱の意に用いる。 屋の棟なり」とあって、二重屋根の棟 声符は分。〔説文〕六上に「複

焚 12 やく・たく

山松学校

想弾圧の手段としてしばしば行なわれていることで 字形を誤っている。 ある。〔説文〕の篆文は楙に従うが、楙はまがきで、 流の語もある。極刑として焚刑があり、自ら焚殺す るを自焚という。焚書・禁書は、秦の始皇以来、思 焚いた焚車などの話もあるが、焚琴煮鶴という無風 きを嘆いて硯を焚いた焚硯、世俗の交を絶って車を ばしば富人の徳行として伝えられている。文才の拙 行なわれた。焚券は借用証を焚きすてることで、 くことをいう。焚香の俗は六朝貴族の間に大いに のがそれにあたる。山野に限らず、すべてものを焚 るやき狩りである。〔春秋〕桓七年に火田というも 作り、「燒田するなり」という。田は田猟、いわゆ 林と火とに従う。〔説文〕一〇上に字を焚に

棼 焚 雰 噴 墳 憤 奮

> 雰 12 きり・ふりしきるさまフン

を雰囲気という。〔説文〕「上に正字を氛に作る。 雰々は雨雪などのふるさま。その場の全体的な気分 とあり、 雰 すべて雰霧のような状態のものをいう。 の意がある。〔玉篇〕に「霧氣なり」 声符は分。分に分散するもの

噴 15 いかる・いきどおる・はくフン・ホン

はふき出すこと、噴壺とは如露である。ような勢いのものを噴出・噴盈のようにいう。ような勢いのものを噴出・噴盈のようにいう。さめ)は中からふき出して止めがたいもので、 鼓らすなり」とあり、擬声的な語である。噴嚏(く 「説文」 ニュに「吒るなり」、また「一に曰く、 中より外にあらわれるものの意がある。 声符は賁。賁は皋に従う字で、 噴えその 鼻を

墳 はか・おか・つつみフン・ホン

記、檀弓、上〕にみえる。「古は墓して墳せず」 合葬した墓に、嵩さ四尺の封土をしたことが、〔礼には小さな盛り土をしたらしく、孔子がその父母を 〔礼記、檀弓、上〕「古は墓して墳せず」とあり、股に、墓なり」とあり、土を盛りあげた墓をいう。 土し、遺構の全容を知ることができる。 のものが多い。近年中山王墓からその塋域図が出の陵墓は地下深く作られ、戦国期のものには直坑式 大きなものの意がある。〔説文〕 | 三下 声符は賛。賁にもりあがる、 一般の墳墓

> 五典」は古代の書、合せて墳典という。 を變罔両、水の怪を竜罔象というのと同じ。 い所の名に用いる。墳羊は土の怪をいう。 形であるから、墳丘・墳防のように、平地より小高 は、そのときの孔子の語である。墳は土の隆起する 木石の怪

憤 15 いきどおる・くるしむ・もだえるフン

することを憤発という。 の意である。憤怒・憤懣の意に用いるが、 に「中に憤るときは則ち前に應ず」というのも、 るまでは、啓発を与えない意。〔淮南子、脩務訓〕「憤せずんば啓せず」とは、内に求める心が充実す 文〕一〇下に「憑るなり」とあり、「論語、述而」 形声 より外にあらわれることをいう。 声符は賁。賁は皋に従い、 心の激発

奮 ふるう・はげむ・いさましいフン

奮

もの」であるから、奮の義があるとするが、 く、奮飛すること能はず」と〔詩、邶風、柏舟〕「輩ぶなり」とし、「奞の田上にあるに從ふ。詩に日い『 の句を引く。輩は羽部四上に「輩、大いに飛ぶな に関するものであろうと思われる。〔説文〕四上に 字形において関連がある。おそらくともに死喪の礼 ご とみえる。〔爾雅、釈鳥〕に「雉の絕だ力ある 金文の字形は、衣と隹と田とに従う。金文 衣と雀と手とに従うており、奮と奪とは、 金文の

用いる。 奪もおそらく、その霊が鳥形霊として脱然として脱 のうちに鳥があり、田形のものは鳥籠の形とみてよ 去する字。奮を奪との関係において考えると、衣襟 られていたのであろう。奮発・奮起・奮迅のように い。その奮飛のさまに、何らかの呪的な意味が考え

糞 けがれをとる。はらう・つちかう。くそフン

棄除するのである。〔説文〕四下に「棄除するなり」 とし、「廾に從ふ。華を推し、米を棄つるなり」と 「左伝」昭三年「小人、先人の敝廬を糞除す」は、「左伝」昭三年「小人、先人の敝廬を糞除す」に「糞除して常に潔墓の掃除をいう。漢の「僮約」に「糞除して常に潔墓の掃除をいう。漢の「僮約」に「糞除して常に潔 その尾穴より出るものが屎である。糞を動詞にして で、字の下部は胃の上部と同じく、胃中のものの形。 るものは、矢なり」とする。矢は屎。その本字は蓾 いう。なお「官溥説」として、「米に似て米に非ざ に糞するの醴」は、塵を掃き取るときの心得をいう。 糞除の義に用い、〔礼記、曲礼、上〕「長者のため り)土の仮借字である。[任少卿に報ずる書]に「養土の牆」は、坋(ち語がある。[論語、公冶長]「糞土の牆」は、坋(ちに少卿に報ずる書]に「養土の中に幽せらる」の 会意 の意。これを華(ちりとり)に入れて、会意 米と蝉と廾とに従う。米は屎

羵 土中の怪

といふ」という話がみえる。【准南子、氾論訓】に、羊ならん。丘、これを聞けり。木石の怪を墳羊の、何ぞやと。對へて曰く、吾、井を穿ちて泊を獲たり、何ぞやと。對へて曰く、丘の聞く所を以てするい。「本ならん。丘、これを聞けり。木石の怪を變罔に、羊ならん。丘、これを聞けり。木石の怪を變罔に、羊ならん。丘、これを関といふ。土の怪を變罔に、羊ならん。といか」という話がみえる。【淮南子、氾論訓】にといふ」という話がみえる。【淮南子、氾論訓】にといふ」という話がみえる。 形声 この字は〔説文〕に収めていないが、許慎は〔淮南釈天〕にも「土神、これを羵羊と謂ふ」とみえる。 「井に墳羊を生ず」というのはこれである。〔広雅、 を正字とみなしているのであろう。それならば字は、子〕に自ら注した人であるから、〔淮南子〕の墳羊 羊形の怪であるというので羵に作ったもので、 の字であると思われる。 声符は賁。〔国語、魯語〕に「季桓子、井 後起

養 18 たいこ・じんだいこ

命〕に「大貝鼖鼓」とあり、即位継体の儀礼のときに鼓す」は、〔周礼、鼓人〕の文による。〔書、顧釈器〕の文。また「鼖は八尺にして兩面、以て軍事 上に「大鼓これを鼓と謂ふ」とするのは、「爾雅、 鳖 뾁 鼓上に三方に岐れる羽飾などをつけている形の字が 一般の鼓楽の類とは異なるものであろう。卜文には に陳設している。必ずしも軍行の器とは限らないが、 あり、この字の字形と似ている。泉屋博古館に蔵す に大の意がある。[説文] 五形声 声符は賛の省文。賁

> おそらく木製のものであったので、いま存するもの あるが、この種の遺品は甚だ少ない。実用のものは る蛇腹文の銅鼓は、前後両面を鼓する器制のもので をみないのであろう。

鬱 20 むしめし

鱳 瓣 飜

金文の器銘に蜂設・罅鼎・罅簫・罅盤などがあり、「飯氣蒸すなり」とあって、全熟の米であるという。 『叔隋器』に「これ王、宗周に奉す」、「献侯鼎」「ことがき、生は祭名であるから、器はその意を含む名であろう。 いう。饝は一たび蒸した米、餾は〔説文〕五下に [泂酌]にいう祭儀もそれであり、飾はその祭饌のり、罅とはその祭祀に用いる器に冠する語である。 れ成王、大いに奉して、宗周に在り」、〔五段〕「こ れ王初めて成周に奉す」など、みな重要な祭祀であ 炊きかたに関する字である。字はまた饙に作る。

分4 わかつ・はなれる・きまり・さだめ

外外

化の意となり、またその区分に従うことから、身 つ形。分は肉を分つ形とみてよい。分割・分異・分「刀は以て物を分別するなり」という。別は骨を分 分・天分・本分・分限・名分・職分などの意となる を両分する意。〔説文〕二上に「別つなり」とし、 八と刀とに従う。八は両分の形。刀でもの

文 文身・あや・もよう・かざる・ふみブン・モン

愛 冬 冬 葵 ~ **

「書、大誥」に「前寧人」「寧王」の語があり、それ文の字形は、そこに×形や心字形の文様を加える。 ように先人に冠していう語で、文とは死者のいわば もと文の字である。文は祭事に文祖・文考・文母の に語義不明の「前寧人」「寧王」となったもので、 のちの伝承者が誤ってその「文」を寧と釈し、つい 文の文に文様として心字形が加えられているため、 は金文に「前文人」「文王」という語にあたる。金 にくらべて胸郭の部分をひろくしている。卜文・金 る線と解するが、字の全体は人の正面形であり、大 れる畫なり。交文に象る」とし、その全体を交錯す 朱などで加える文身をいう。〔説文〕九上に「錯は 形の胸部に文身の文様を加えた形。聖化のために、 文身の形。ト文・金文の字形は、人の正面

『髪文身』、「墨子、公孟』に「鰲髪文身」、「史記、短髪文身」、「墨子、公孟」に「墓佐」に「越人、その系列の字である。 [荘子、逍遥遊]に「越人、とすることがあり、凶・兇・戦・を強・戦にしたしていた。 凶礼のときにも胸に×形を加えて呪禁考えられる。凶礼のときにも胸に×形を加えて呪禁 加えて廟にお参りする姿を顔(顔)という。これら加えた字は香(彦)、成人のとき、その文飾を面に(産)、その字の上部は文である。また成年式に文を 質彬々として、 飾をひたい(厂)に加えて呪禁とするものが産いときのみでなく、たとえば出生のとき、×形の文 し、孔子はその伝統を斯文といい、斯文の担持者で 伝えられた。人文・文化・文学などはすべて文と称 南アジアの諸族の間には、のちまでも永くその俗が があったことは、〔後漢書、東夷列伝〕にみえ、東にあったものと思われる。わが国の古俗にもその風 ている文身の俗は、もと夷系諸族の間に広汎に行な 越世家」「文身斷髮」など、多く越人の異俗とされ ので、爽・奭・爾はみなそれを示す字である。死葬 よんだ。婦人のときは両乳をモチーフとして加える 身を加えて屍体を聖化し、祭るときには文を冠して聖記号である。死葬のとき、朱をもって胸にその然 んでいる。文の対待語は質。〔論語、雍也〕に「文 あることを自負した。文を含む語彙は干数百にも及 われていたものであり、殷もまたその文化圏のうち 一般の人に及ぶまで、一様に行なわれていたものと したころ、殷にもその習俗があり、貴顕のものより の聖化の方法として加えられるもので、文字が成立 のことからいえば、文身は加入式の儀礼のとき、そ 然るのちに君子なり」とみえる。

> 彣 あや・うつくしいブン

と、が相雑わって、色彩をなすことをいう。文章をまかな」とあり、〔古論語〕に字を戫に作る。青と赤い、(竹)「周は二代に監み、郁々乎として文なる語、八佾〕「周は二代に監み、郁々乎として文なるあるなり」とあって互文。(鹹はいま都に作り、〔論 上に「鹹あるなり」とする。有部七上に「鹹は文章 た彣彰に作る。もと文身の美をいう語である。 ぎは文彩あることを示す。〔説文〕九会意 文とぎとに従う。文は文身。 文と彡とに従う。*な文身。

蚊10 [蟲]17 かブン

兵命 春命

部版に用いる字は、側繊亜下して蚊脚のように引いの一体の字で、みな形声。『説文』ニーとに「人を齧・び飛蟲なり」とする。『漢書、中山靖王伝』に「聚・は飛蟲なり」とする。『漢書、中山靖王伝』に「聚・は、また唇と蚊とに従う字。蚊はそ形声 正字は民、また唇と蚊とに従う字。蚊はそ形声 正字は民、また唇と蚊とに従う字。蚊はそ る。騒・蚊はいずれもその擬声語である。 て書く。蚊蝱は微力卑賤、にくむべきものにたとえ

聞14 [曆]14 「瞎」」5 きく・ほまれ

間間 4 事期回 西南北

彣

蚊(髭) 聞(睛)(睛)

の字形と同じく、酒爵をあげる形であり、卜文の意である。金文の字形である暗は、また婚、勲、韜(名)後の一般の字形である暗は、また婚、勲・韜(名)後の一般の字形と同じく、酒野をある。 たがたよう間の意、「毛公鼎」「正聞あること無し」、「徐王鐘」間の意、「毛公鼎」「敢て聞せざることあること母れ」は以た「蔡設」「敢て聞せざることあること母れ」は以思い言語。の諸篇にもみえ、当時の用語であろう。ま聞きた」、 したるは、……「率く酒に肆ひたればなり」の聞は、作る。〔大盂鼎〕「我聞くに、殷の、命(天命)を墜形字であるが、金文に至って耳に昏形を加えた字に聞、王に奏上する意である。卜文の聞字はすべて象聞、王に奏上する意である。卜文の聞字はすべて象 で、祝禱して神の啓示を待ち、それを聞きうるものト文はその旁に、祝禱の器である世をそえている形ト文はその劈に、祝禱の器である。聖(聖)の初形も、 「聲を知るなり」とあり、〔段注〕に「往くを聽とい 象形字と形が異なると同時に、その字義内容にも、 日乙酉、夕に月に食することあり。聞せんか」は以か」という聖は、いずれも聴の意である。また「三か」という聖は、いずれも聴の意である。また「三 る例があり、「聖くことあるか」「それ聖くこと亡き系に属するものである。卜辞には聖を聴く意に用い を聖といった。それで聞・聖・聴の字形は、もと一 また一手をあげて、口にあてている形は以聞、すな 側身形の上に大きな耳をかき、神の啓示を聞く形。 ひ、來るを聞といふ」とするが、 わち奏上する意を示す形である。〔説文〕一二上に られる。聞をまた瑉に作ることがあるのは、声の近 卜文の象形字と異なる要素が加わっているものとみ 声符は門。卜文にみえる字の初形は、人の 聽(聴)の偏の部

> 変化を生じたものと思われる。 至ってはじめてみえるもので、 である。字形字義の推移とともに、その声にもまた い字を求めたものであろう。聞の字形は、戦国期に 字を門声とするもの

(云)5 器の柄・ひのえへイ

5

数の第三にあたるものに用いる。丙部は書の四部で ある。また兵器として杖鉾の類にもこの形のものみなそれぞれその上に兵器を樹て、衣裳をおく形でみなー! 物の台座とみるべきもので、゛商・裔・裔などは、初義を説くものではない。ト文の字形は明らかに器 〔爾雅、釈魚〕に「魚尾、これを丙と謂ふ」とある 陰陽の理によって説くが、字形に合うところがない。 |萬物成りて炳然たり。陰气初めて起り、陽气まさに||柄の初文とみてよい。〔説文〕||四下に「南方に位し、 丙科・丙舎・丙部・丙夜のように、すべて分類・序 初義を求めるべきではない。十干の第三であるから 丙に用いるのは音の仮借。その仮借義によって字の があり、柄はその形に従う字である。これを十干の のは、その形をもって名づけたものにすぎず、丙の り。丙は乙を承け、人の肩に象る」とする。字形を 虧けんとす。 器物の台座。また槍杖などの石づきの形。 一の口に入るに從ふ。一なる者は陽な

> のえは火の兄である。銅祭器などの鋳作が行なわれることが多かった。 起った迷信で、江戸期以後わが国でも行なわれ、多 丙 午にあたる年を婦人の厄年とすることは明代にBooks からたまから、その第三は十二時をいう。干支の分したもので、その第三は十二時をいう。干支の くの不幸を生んだ。古代には吉日としてその日に青 ある経史子集の第三部で諸子、丙夜は夜の時間を五

平5年)5 たいらか・やすらか・ひとしいヘイ・ベン

テ 罗李手平

、「辨秩」に、〔詩、小雅、栄芑〕「平々たる左右」をとは字源が異なる。平の古音は便に近く、〔書、尭史〕「百姓を平章す」を〔礼記、楽記〕に「便章」に、また〔尭典〕「東作を平秩す」を〔史記〕に「便章」に、また 〔尭典〕「不久たる。平の古音は便に近く、〔書、尭とは字源が異なる。平の古音は便に近く、〔書、尭とは字源が異なる。平の古音は便に近く、〔書、尭 〔左伝〕襄十一年に「便蕃」に作る。おそらく手斧 Ů, 〔説文〕五上に「語、平らかに舒ぶるなり。亏に從 会意 をうつ音の擬声語であろう。それより平治・平定・ の成果をかなり取り入れている。于を語気と解する 字を討論した学者の一人で、ときの小学元士であっ り」という。爰礼は漢の平帝のとき、未央廷中に文 片が左右に散る形に従う。平らかに削る意を示す。 の類想にすぎず、字形に即するものでない。于は弓 のもその一であるが、于を感動詞に用いることから た。小学は文字学。〔説文〕の文字学は、このとき 八に從ふ。八は分なり」とあり、「禿禮の說な 手斧の形である于と、その手斧で削った破

至平の論の意である。 あってかわらぬものをいう。批評の意に用いるのは とをいう。また平常・平生のように、日常のうちに なり」とあり、至公至平にして、準則となすべきこ 記、張 釈之伝〕に「廷尉(法務大臣)は天下の平平均の意となり、すべて安定した状態をいう。〔史

兵 7 武器・へいし・いくさ

飛 湔

警戒を意味する。「觀兵」とは「兵を觀す」意で、 ときには干や 戚をもって舞う。戈を執る形は戒で、 兵器の意であるが、のち戦う人をもいう。〔周礼、 「兵器」の注に「干戚なり」とあり、兵舞の しきには干や 戚をもって舞う。戈を執る形は戒で、 ときには干や 戚をもって舞う。戈を執る形は戒で、 ときには干や 戚をもって舞う。 大を報る形は 元で、 ときには干や 戚をもって舞う。 大を報る形は 元で、 ときには干や 成をもって舞う。 大きない。 二巻60、 に対している形。 武器をとっ 「兵は不祥の器なり」という。〔左伝〕隠四年に「兵る孔子の語をあげている。〔左伝〕隠四年に「兵る孔子の語をあげている。〔君:、 〔論語、顔淵〕に、民生の要として兵・食・信の三器なり。爭は事の末なり」という范蠡の語がみえる。がある。〔国語、越語〕に「勇は逆德なり。兵は凶がある。〔国語、越語〕に「勇は逆德なり。兵は凶がある。〔国語、越語〕に「勇は逆德なり。兵は凶 かんとす」とは、古い語であるが、いまの時代に最 も切当な語である。 その武器と兵勢を誇示すること、すなわち示威の意 兵・食を去るも、信を失うべきでないとす

粤 せわしい

甹 ₩ Ţ 0 ₩

意味するところを述べていない。これに近い字形と意味するところを述べていない。これに近い字形と意味するところを述べていない。これに近い字形と意味するところを述べていない。これに近い字形と意味するところを述べていない。これに近い字形と 「亟やかなる詞」とするのはその意とみられ、〔爾雅・粤はその儀礼を示す字である。〔説文〕五上に粤を も、祭事にいそしむことから出ている語と思われ、 敏捷が祭祀用語であることからいえば、これらの語 を声字とするものに傳・娉があり、傳・俠・娉婷のがあり、何かを祈禱する儀礼を示す字であろう。粤 ように身動きの敏捷なさまをいう字である。奔走や それに近い。〔師酉殷〕に、由を両手で捧げる字形 て、缶を名づけて甾といふ」という甾の古文の形がると礼器の形とみられ、〔説文〕甾部二下「東楚にると礼器の形とみられ、〔説文〕甾部二下「東楚に である。由は礼冠の象に近いが、穹の形象から考え 字とすべきであろう。かつ字は輔弼の意とみるべき 粤の初文とみて、定の意とするが、号は粤とは別の なる詞なり。万に從ひ、由に從ふ」とするが、その 会意 す字であろうと思われる。〔説文〕五上に「亟やか 寧と似ており、粤も寧のように何らかの儀礼を示*4*。その字形は、血盤を万上におく形である由は礼器。その字形は、血盤を万上におく形である 万上に由をおく形。 汚は掲げもつ台の形、

> に通ずるので、その状を娉婷という。粤は古い字形 る語であろう。粤夆はまた屛蓬に作り、[山海経]釈訓」に「粤夆は掣曳なり」というのも、関係のあ の解を加えておく。 も用義もない字であるが、粤声の字によって一おう ものであるという。その身を傾ける状態が、傳・娉 にみえる怪獣の名。左右に首があって、相牽引する

並 「火」10 ならぶ・ともに・みな

林林

相連なる形で、声義は同じであるが、幷は二人の側〇下に「併ぶなり。二立に從ふ」という。幷は二人の位置に並んで立つを竝(並)という。〔説文〕 | 称のようにいう。 行。すべて相並んで行動することを並観・並進・並 身形、竝は相並ぶ正面形である。いわゆる並列・並 は位。その位置すべきところに人の立つ形。二人そ 会意 正字は竝に作り、立を左右に並べた形。立

併。(件)10 ならぶ・あわせる・ともにへて

うも、 古文には竝、今文には併を用いることが多い ることで、用義に異なるところがある。「儀礼」 で、並進のようにいい、併は合併のように一体とな 形で、併の初文。〔説文〕ハ上に「並ぶなり」とい 丼の繁文である。 並(並)は左右に並ぶこと 二人並んだ側身形を、横に連ねている 形声 旧字は併に作り、幷声。 丼は

ヘイ 坪[坪] 丼[并] 秉 俜 柄[柄](棟)(枋) 炳[昺] 苹 娉

[坪] 8 つぼ・たいらかへイ

奇生

位名は、類例のないものである。 い字で、わが国では、地積をいう単位の坪に用いる。 とあり、「平は亦聲なり」とする。殆ど用義例のな りとること。〔説文〕一三下に「地平らかなるなり」 いま三・三平方をいうが、このように端数のある単 声符は平(平)。平はものを平らかにけず

井 8 「并」6 ならぶ・あわせる

に從ひ、开聲」とし、また「一に曰く、二を持するたは二を加える。〔説文〕ハ上に「相從ふなり。以い。」のは二を加える。〔説文〕ハ上に「相從ふながで、一ま会意 二人相並び、これを横につなぐ形で、一ま 合わない。ト文は二人相連なる形。秦の権量銘にもに從ふを丼と爲す」とするが、开声説は字の本形に 意に用いる。 みえる字である。人を併せる意より、すべて併合の

秉 8 とる・たば

¥ 軍軍

会意 :、「「東をいう。 「説文」三下に「禾の束なり」、 〔爾雅、釈詁〕に「執るなり」とあって、禾の束を 末と又とに従う。 末を束ねて手にもつ形で、

> なるを鑄たり。用て旨酒を實たさん」という。秉は宮とする。斉器の「国差鱠」に「西郭の寶鱠四秉とは、田に残されている落穂をいう。未束は四秉をとは、田に残されている落穂をいう。未束は四秉を執る形である。〔詩、小雅、だば、「彼に遺棄あり」 「元明の徳を乗る」、「叔向父禹殷」「威儀を乗る」て、「伯茲殷」「徳を乗ること恭純」、「虢な産」ない「徳を乗ること恭純」、「虢な産」ない。「徳なたは、韓の単位。禾束に限らず、すべて堅く執る意に用い 徳を秉る」、〔大雅、烝民〕「民の彝を秉る この懿こと明邺ならざる罔し」、〔詩、大雅、文王〕「文ののように用いる。文献では〔書、君奭」「德を秉るのように用いる。文献では〔書、君奭」「德を秉る 德を好む」など、古い用例が多い。

俜 つかう・たすける・おとこだてヘイ

あろう。聘・娉も粤の声義を承ける字である。 儀礼をたすける意から、のちその義に転じたもので 関する字であろう。〔説文〕八上に「使ふなり」と その字を噂に作る。粤がその初文。傳もその儀礼にみられる。金文に「王位を豐く」と雩を用い、また 〔繋伝〕に「俠なり」とする。任俠の意。古く 形声 載せている形で、ある儀礼を示す字と 声符は粤。粤は万上に礼器を

柄。〔柄〕。〔棟〕12〔枋〕8

え・もと・つか・いきおいへイ

「柯なり」とあり、 に作り、〔周礼〕には枋を用いる。〔説文〕六上にに作り、〔周礼〕には枋を用いる。〔説文〕六上には石づきの形。字はまた柔声 古くは木の枝を適当な長さに切 形声 声符は丙(丙)。

の。権柄をたのむ態度を大柄(横柄)という。「韓非子、二柄」は、賞罰の大権を論じたもいう。「韓非子、二柄」は、賞罰の大権を論じたもいう。「韓非子、二柄」は、賞罰の大権を決はず」と「国語、斉語」「國を治むるに、その柄を失はず」とって柄とした。柄によって器を操るものであるから、

炯の「長」の かきらか 声符は丙(丙)。〔説文〕一〇

形声

子は豹變す。その文蔚たり」とあって、炳蔚とは文 彩の著明なることをいう。字はまた昺に作る。 「革卦」に「大人は虎變す。その文炳たり」「君 上に「明かなり」、〔玉篇〕に「明著な

中 9 うきくさ・よもぎ

[箋]に繭の類とする。一名にして両義があり、「爾 뿣 雅、釈草〕にも両義をあげる。草木など方言でよば 小雅、鹿鳴〕「呦々たる鹿鳴 野の苹を食む」は、て生ずるものなり」とあって、水草をいう。〔詩、 れるものに、そのようなことが多い。 形声 に「游なり。根無くして、 声符は平(平)。〔説文〕一下 水に浮び

娉10 へイ・めとる

のち婦人の美しいさまをいう。聘と通じて、娉会はことを敏捷というが、娉婷もそのような語であろう。 ら、気に入りを便傳という。婦人が祭事にいそしむ 形声 むことをいう字。よく立ち働くことか 声符は豊。粤は祭事にいそし

ずるところがある。 婚約者、娉財は結納をいう。娉・聘はその声義に通

唑 10 きざはし

なものとなった時期の語である。君権が著しく強大たもので、〔戦国策〕にみえる。君権が著しく強大天子を陛下とよぶのは、直接に指称することを避け 階なり」とあり、宮廟の堂室に升る階段をいう。 形声 ぶ形。〔説文〕 一四下に「高きに升るの 声符は坒。坒は土上に人の並

屛" かき・ついたて・しりぞく・ひそめるへイ

を屏く」、「郷党」「氣を屏めて息せざる者に似たように用いる。また転じて、「論語、尭日」「四惡のであるから、〔国語、斉語」「以て周室を屛る」のであるから、〔国語、斉語」「以て周室を屛る」ののであるから、〔国語、斉語」「以て周室を屛る」のである。人を護るも り」のようにいう。 人の隠れるところの意である。屏障は屛風と「蔽ふなり」と訓し、屋塀のなかをい一般。 だき 声符は丼。 〔説文〕ハ上に 声符は弁。〔説文〕ハ上に

閉 とざす・ふさぐ・おさめるヘイ

₽₽

それを門中に樹てている形である。「説文」「ニ」に するための、榜示的な機能をもつものと思われる。 の形。在・存の字は才に従い、才はその場所を聖化 門と才とに従う。才は祝禱の器を著けた木

陛

屛

閉 敝

萍

睥

聘

が、中を樹てることも、その一方法であった。家居門の呪禁の儀礼には種々の方法があったと思われる 標 木である。これを門中に施すときは、すべてのいます。 する。金文の〔豆閉段〕の字は門中にず形をしるし帝経〕に午の形に作っており、杵形の鍵閉であると り」とあり、〔段注〕に、才は王羲之の書いた〔黄『門を閉づるなり。門に従ふ。才は門を姫る所以な『 樇 立入りを禁ずる意となる。門は内外を別つところで、 することを閉口という。 沈黙を守ることを閉口という。わが国では返答に窮 して読書ばかりしている人を閉戸先生、一切他事に ており、それは才の初文。その地を修祓する意の 巾に從ふ。衣の敗るる形に象る」とするが、梲 帅 やぶれる・すてる・おおうへイ 制料 胡椒

敝 12

それを歐って敝る意。〔説文〕七下に「帗なり」とる礼装用のひざかけで、その飾りはいたみやすい。 会意 為を意味したものとみられる。衣裳を歐つことは、 える形であるのは、もと何らか呪的な意味をもつ行 し、佾の亦声とする。佾は〔説文〕七下に「敗衣な

> 感染呪術的な方法と考えることができるからである ち甚だ重要なものであった。 を示すものが多い。蔽膝は礼装用として、衣裳のう 攴部三下の字には、呪的な目的で、ものを歐つ行為

萍 12 うきくさ・よもぎ

う蓬は転蓬、また飛蓬ともいい、風に飄揺する草逢ふ」という。〔杜詩〕に「萍蓬、定居無し」とい源をいる。〕という。〔杜詩〕に「萍蓬、定居無し」といい。戦をはいることを「萍水相」をいる。 この字は水部にあり、後増の字であろう。王勃の である。何れも漂泊の人にたとえる。

脾 13 みる・にらむ

た女牆(ひめがき)ともいう。いふ」とみえ、そこから敵状をうかがうもので、いふ」とみえ、そこから敵状をうかがうもので、 とをいう。「釈名、釈宮室」に「城上の垣を睥睨とり」とあり、睥睨とは邪視、強く視線を走らせるこり」とあり、睥睨とは邪視、強く視線を走らせるこ形声 声符は卑(卑)。[広雅、釈詁]に「視るな形声

聘 13 まねく・とう・もとめるヘイ

「問ふなり」、〔説文〕一二上に「訪ふなり」とあり、

声符は辟。辟は便辟、身のこ

ようにもいう。白居易の〔元九に与ふるの書〕に礼を意味した。のち聘徴・招聘の意に用い、聘妾の礼を意味した。のち聘徴・招聘の意に用い、聘妾の [国語、鄭語] に聘后の語があって、本来は重い儀 通ずることが多く、そのとき弓矢などを用いること 「倡妓を聘せんと欲す」の語があり、身請けするこ とが行なわれたのであろう。〔儀礼、聘礼〕〔礼記、の由形の器を掲げる形で、聘礼の儀礼にも、そのこ ことを行なうためのものであろう。粤は礼器として 大問には卿相を派遣し、小聘には大夫を使者とした。 聘義〕に、聘享の礼の次第が詳しくしるされている。 が、「穀梁伝」隠元年にみえる。誓約・祓禳などの 聘問・訪問をいう。列国期には、諸国の間に使聘を

第 14

そのときには、上下の間に十字形などの箅が穿たれをいう。甑には鬲部が上と連なっているものがあり、とあり、甑の底の蒸気を通すようにしくもの、「す」とあり、甑の底の蒸気を通すようにしくもの、「す」 ていて、穿という。 ふものなり。。飯の底を蔽ふ所以なり」 形声 声符は畀。〔説文〕五上に「蔽 がきない。

幣15 (幣)15 きぬ・ぬさ・おくりものヘイ

帛をいう。幣物には帛に限らず、玉・馬・皮革の類まで、 玉幣・爵のことを贊く」とあり、幣とは神を祀る幣

> なり、幣貨・幣用という。 美に過ぎることを戒めとしている。のち貨幣の意と 聘礼〕に「幣、美なるときは則ち禮沒し」とあり、 を供え、また財貨を用いることもあった。〔儀礼、

弊15【弊】15 【獘〕16 たおれる・やぶれるへイ

を地に祭る。地、墳る。犬に與ふ。犬斃る。小臣に〔左伝〕の物語では、「毒してこれを獻ず。公、これ 用いている。 に与え、小臣に与えて、毒殺の計があったと誣告し興ふ。小臣も亦斃る」とあって、まず地に祭り、犬 とあり、晋の驪姫の乱に、犬に毒肉を与えて、犬がることをいう。〔左伝〕僖四年「犬に與ふ。犬斃る」 雅、釈言〕に「踣るるなり」とあって、犬が繁化す 〔説文〕一○上に「頓仆(たおれる)するなり」、〔爾かけが、古びて破れることをいう。正字は鐅に作り、 灣 橋 そのため毒死することがあったのであろう。この 斃死したことをいう。毒見のときに犬が用いられ、 があった字であろうと思われる。漢碑には弊の字を 斃とは、区別して用いられる。本来そのような区別 その毒死を示す獘(弊)の字が作られていたとして たことである。それで異常があれば犬に試みるので た。地に祭ることは、饗礼のとき必ず行なわれてい 少しもふしぎではない。のち弊害の弊と斃死の 声。敝は蔽膝など礼装用の前 旧字は弊に作り、敝

嬖 きにいり・なれる・いやしいヘイ

は嬖臣・嬖僮といい、宦官などをいうことが多か をいう。嬖妾・ に「便嬖、愛するなり」とあって、気に入りのもの なしのよいことを言う。〔説文〕「二下

蔽 おおう・かくす・くらいヘイ

た。〔左伝〕昭元年に嬖大夫という官名がみえる。

目がほころび破れた状態であり、そのように草の生 れる。敝は礼装用の前かけである蔽膝などが、織り いる字で、もと草が乱れ生うるさまをいう字と思わ しかし厳はおおいかくすこと、掩蔽・蔽隠の意に用 ろう。〔毛伝〕に蔽芾を「小なる貌」としている。召南、甘棠〕「蔽芾たる甘棠」の句によるものであ い乱れるさまより、蔽う意を生じたものであろう。 「藏々たる小艸なり」とするのは、〔詩、「藏々たる小艸なり」とするのは、〔説文〕 一下に形声 声符は 飲む

帶 17 [誇] 14 つへ かイ う

経〕に「幷封は前後に首あり」、また〔大荒西経〕 二字を連用する。「爾雅、釈訓」に「撃きするなり」 文〕ニ下に「使なり」、また次条の锋に「使なり」 **粤は礼器を掲げる形で、諤は神につかえ祈る意。外** とあって、 と訓するが、この二字は単用することなく、 に使いしてその儀礼を行なうことを德という。〔説 悪に誘う意とする。 「山海経、海外西 形声 るが、〔説文〕には諤を収めていない。 声符は諤。諤は嚮の初文であ

義を確かめうる例がない。 さまをいう語である。鬱もその系列字であるが、字 娉・諤があり、もと婦人が祭事に奉仕する娉婷たる* 。ることをいうものであろう。考声に従う字に考・と覧れ」とは、群臣小人が相引いて、進退を誤らせ るという。〔詩、周頌、小毖〕に「予を辞蜂するこって、前後に互いに引くため、進退しがたい獣であって、前後に互いに引くため、進退しがたい獣であって、前後に互いに引くため、進退しがたい獣であって、前後に互い に「獸あり。左右に首あり。名を屛蓬といふ」とあ

薜 17 まさきのかずら・やまぜりヘイ・ヘキ

に「薜荔を披り、女蘿を帶とす」という。山鬼は山 わが国でいう山姥の類であろう。 形声 声符は辟。「やまぜり」や、 山鬼」

朝 17 さや・さやかざり

鞞」とあり、鮫皮などを用いたものであろう。 異なるものである。〔逸周書、王会解〕に「魚皮の 刀室は、獣革や魚皮で作るものであるから、これと を列しているから、玉器であろう。〔説文〕のいう ある。〔番生設〕の賜与に鹵黄(佩玉)・鞞刹・玉環に、帯に繋けるための器具である昭文帯のことで 賜与のうちに「鞞刹」の名がみえ、刀を順びるときとあって、さやの意とする。西周期金文にみえるとあって、首やの意とする。西の明金文にみえるり。「説文」三下に「刀室なり」

鞞 鼙 塀(塀)

> 敷 18 <u>(</u> 敷 <u>)</u> 16 たおれる

形であろう。 (たおれる)するなり」という。〔左伝〕 僖四年に毒 作り、弊に作る。〔説文〕一〇上に撃をあげ、「頼仆疲弊してたおれ死ぬことを斃という。字はまた獘に 肉を犬に試み、「犬斃る」とみえ、この方が古い字 て破れることをいう。弊はものの疲弊する意に用い、 斷繁 人の野たれ死するを斃という。 など礼装用の前かけが、古び 形声 声符は敝。敝は蔽膝

東 21 軍鼓・こつづみ

撃鼓、地を動かして來る」の句がある。 いたものであろう。白居易の〔長恨歌〕に「漁陽のいたものであろう。白居易の〔長恨歌〕に「漁陽のは、耳を威す所以なり」とあり、騒がしくうちたたは、耳を威す所以なり きゅきへ (呉子、論将) に「それ撃鼓金鐸らすものである。〔呉子、論将〕に「それ撃鼓を覚むなり」とあって、攻撃のとき騎走しながらうち鳴鼓なり」とあって、攻撃のとき騎走しながらうち鳴 鼓なり」とあり、馬上で鼓つ軍鼓。〔字林〕に「小ものの意がある。〔説文〕五上に「騎 数常 形声 声符は卑(卑)。卑に小さな

塀12 (塀)14 へい・かき

者に似たり」のように用いる。のち屛風(衝立)の日、四悪を屏く」、「郷党」「氣を屛めて息せざる機をふせぐもので、屏ける意がある。〔論語、・発をいう。屛の字形に即していえば、屛とは死者の汚れをふり。」とあり、尺障で、原は〔説文〕八上に「破ふなり」とあり、屛障字。屛は〔説文〕八上に「破ふなり」とあり、屛障字。屛は〔説文〕八上に「破ふなり」とあり、屛障字。屛が塀の本国字 形声 旧字は塀に作り、屛声。屛が塀の本国字 形声 ベイ Ш 米

> 塀は屛の俗字とされるが、高い土塀のことをいう字 として用いられる。 すことを主とする字で、土塀のような用法はない。 る。屛は屛厠(便所)のように見通せないように隠 樹を蓋と爲し、嶽石を屛と爲す」とは屋屛の意であ で塀の字が作られた。白居易の〔冷泉亭記〕に「山意となるが、屋外に土で築くもののために、わが国意となるが、屋外に土で築くもののために、わが国

ベイ

5 さべらイ

X Ħ,

ようである。 の読若音には、ときに許慎の故郷の方言音がある その音は当時の汝南の方言であろうという。〔説文〕 の例として、この条を引く。周祖謨の〔間学集〕に、るが、〔顔氏家訓、音辞〕に、古今の音の異なる字のが、〔顔氏家訓、音辞〕に、古今の音の異なる字り」とあり、その字音は「讀みて猛の若くす」とあり」 象形 平皿の形。〔説文〕五上に「飲食の用器な

米 こべん・マ

111

*

「粟の實なり。禾實の形に象る」とあり、穀人をいまた。 そにないの形になる。ここのではないでは、それに穀実のついている形。〔説文〕七上に 下文の字形は、一の上下にそれぞれ三小点を付

渚・湖熟文化などの古文化では、すでに水稲の栽培 家嶺文化、江淮下流の青蓮岡文化、長江下流の良いない。 通じて華北には行なわれず、華南では江漠の域の屈います。 またい。 とは、これには行なわれず、華南では江漠の域の屈います。 しており、金文の稲粱の字も同じ。米は脱より。 のものであることが確かめられている。 が行なわれていた。屈家嶺の米種は、日本種と同系

袂 9 そで・たもと

音、矞の音でよむこともあるが、袂が通音。人と相になる、釈衣服〕に「製なり」とし、開張して智の「説やるき、釈衣服」に「製なり」とし、開張して智の「説文」ハ上に「褎なり」とみえ、たもとをいう。 攘う」「袂を投ず」という。〔左伝〕哀十六年「袂をとり」、一袂を投ず」という。〔左伝〕哀十六年「袂を別れることを「袂を分つ」、奮い起つことを「袂を 以て面を掩ふ」は、深く恥じ入るさまである。 部を欠くもの。袂とは大きな袖をいう。 衣と夬とに従う。夬は円の一

麛 しかのこ・けもののこべイ

〔呂氏春秋、楽成〕にみえている。 じめて魯に出仕したとき、麝裘をつけたことが、じめて魯に出仕したとき、麝裘をつけたことが、

13 つみ・きみ・つかえる・のり・おさめるヘキ・ヒ・ヘイ

即即 好解解

の正百辟」、〔秦章〕に「辟、忠彦」、〔聖 舞〕「殷が辟たる天子」のようにいう。また〔師撃 舞〕「殷が辟たる天子」のようにいう。また〔師撃 「殷の正百辟」、〔麦尊〕に「辟、忠彦」、「献」、〔太盂鼎〕に 鲸 語義が変遷してきたものと思われ、辟声の字は、大る。辟は罪辟の意より、辟治・辟君・辟事のように 盨〕「用て我一人に辟ふ」のように、辟事の意とす鼎〕「厥の德を哲にし、以て先王に辟へたり」、〔 塑鼎〕「厥の德を哲にし、以て先王に辟へたり」、〔 塑 ときに卒に従うことがあり、腰肉を刳る形である。字は、人の蹲踞する後ろから曲刀を加える形。辛は罪時によって神の徒隷とされたものであろう。その罪時によって神の徒隷とされたものであろう。その るものが多い。卜辞に「多辟臣」という語があり、義にも及ぶが、罪辟が字の原義で、それより引伸す の後ろより円形に肉を刳りとる形で、罪辟の意であに従うものでなく、卜文・金文の字形によると、人 從ふ。その罪を節制するなり。口に從ふは、法を用 片の形。〔説文〕丸上に「法なり。卩に從ひ、辛に罰を示す。口は小さな円形にかかれており、その肉 会意 義の字となお通用することも多く、そのため字の多 体この基本義より引伸したものであるが、その引伸 辟の重いものは大辟といい、大辟とは腰斬の刑をい る。訓義極めて多く、字書にあげるところは五十数 ふるものなり」とするが、字は卩(節)や口(法) の後ろより曲刀である辛を加えて、肉を切り取る刑会意 ピと口と辛とに従う。尸は人の側身形。そ

> ことのある字である。

碧 みどり・あおみどりへキ

〔山海経、西山経〕「その山、その下に靑碧多し」とあり、崑崙に珊瑚碧樹を産するといわれる。 はん こうしゅう 四字であるが、碧にはひとり「石の靑美なるもの」四字であるが、碧にはひとり「石の靑美なる 渭 名となり、碧空・碧海・紺碧のように用いる。 の注に「亦玉の類なり」という。その玉色より色の 〔説文〕玉部一上に「石の玉に似たるもの」「石の玉 に次ぐもの」と訓するもの約三十字。「石の美なる の靑美なるもの」とあり、碧玉をいう 形声 声符は白。〔説文〕「上に「石

僻15 かたよる・さける・かたほとりへキ

また一義として「旁より牽くなり」という。そのを僻という。〔説文〕ハ上に「避くるなり」とあり、 刑で、罪辟を意味する字である。それを避ける姿勢 という。字はまた辟と通用する。 形声 から辛(曲刀)を加えてその肉を切る 声符は辞。辟は人の腰に後ろ

劈 さく・つんざく・やぶるへキ

刳りとる形。〔説文〕四下に「破るなだ 声 声符は辞。辟は曲刀で腰肉を

寧

母の死を哀しんで自ら面に刻むもの。景仰する人声語である。劈頭はまっ先。劈面は光がの俗で、父声語である。 の死にも、 が、副とは別の字。霹靂をまた辟歴といい、もと擬 副と声義同じとし、「劈行なはれて副廢す」とする 曲刀の辛を含むが、さらに刀を加える。〔段注〕に り」と劈と双声の字をもって訓する。辟の字形中に これによって哀をあらわすという。

輕

養養

壁 16 かべ・かき・がけへキ

壁銭は平ぐも、壁蝨はだに、壁虎はやもり。壁中も「家居、ただ四壁立つのみ」とみえる。壁魚はしみ、 辟御する所以なり」という。極貧でなんの財貨もなどあり、「釈名、釈宮室」に「壁は辟なり。風寒をとあり、「釈名、釈宮室」に「壁は辟なり。風寒をとあり、「釈名、釈宮室」に「壁はけなり」 また一の世界である。 い生活を、壁立という。〔史記、司馬相如伝〕に 声符は辞。辞に僻る・避ける

むねうつ・なでる・ひらくヘキ

〔孝経、喪親章〕に「擗踊哭泣し、哀しみて以てこ 「寤めて擗つこと摽たるあり」の句がある。悲痛のに「心を拊つなり」とあり、〔詩、邶風、柑仁等に「心を拊つなり」とあり、〔詩、邶風、柑仁等、路。」を「神子」にいる。「爾雅、釈訓」には、「はたたがみ」であるが、 とき、胸をうち足を踏んで嘆くことを、擗踊という。 れを送る」とみえる。

壁 18 たへ まキ

> り)、大無(巫)飼堂(神名)と大飼命(神名)とえ、「上天子(神名)に璧・玉備(箙)一嗣(一綴え、「上天子(神名)にいま、(神名)と大飼命(神名)といる。 の器であるが、玉器 されている。婦好墓の時代より、約千年近くものち 二嗣・鼓鐘一肆(一列一組)」を用いることがしるに璧・兩壺・八鼎、南宮子(神名)に甓二備・玉に またしかできた。 下戈、その他多くの玉製品が出土している。斉器の 下戈、その他多くの玉製品が出土している。斉器の ており、近年殿の婦好墓からは玉璧・玉環・玉玦・ 壁雕に作り、辟を用いることはない。辟雍は文献にのであろうとする説がある。金文の辟雍の字はみな のであろう。玉器には早くから精美なものが作られ た諸侯が聘饗の儀礼のときに、儀器としてもつもを以て天に禮す」とあり、天を祀る瑞玉をいう。まを以て天に禮す」とあり、天を祀る瑞玉をいう。また各、三寸の壁である。[周礼、大宗仲]に「蒼氅た」とあり、中心孔が径三寸ならば、上下の肉もまふ」とあり、中心孔が径三寸ならば、上下の肉もま 〔爾雅、釈器〕に「肉、孔に倍する、これを璧と謂 いうように、大池にかこまれた円形の聖所であった のであった。古い時代の有孔石斧が、儀器化したも きものなり」とあり、平円で中に円孔のある玉。 い形のものの意がある。〔説文〕|上に「瑞玉、圜形声| 声符は辞。群に辟確(神宮)のようにまる

の昭王がその十五城をの和氏の璧は、秦 への信仰は依然とし

はわが国においても魂であった。壁を含ませるのは、魂振りのためであろう。「たま」と交換することを望んだといわれる。死者の口中にと交換することを望んだといわれる。死者の口中に

癖 18 くへ せキ

「殘生竟に抱く煙霞の癖」の句がある。「煙霞の癖」のようにいう。倪瓚の〔次韻詩〕に「煙霞の癖」のようにいう。倪瓒 方に偏る性癖をいう。晋の大将軍杜預は〔左伝注〕不良をいう。のち嗜好などの習癖をいい、すべて一不良をいう。のち嗜好などの習癖をいい、すべて一 「食消せずして、肚中に留まるなり」とあり、消化 を残した人であるが、平生〔左伝〕を愛読し、「臣 声符は辟。辟に僻る意がある。〔玉篇〕に

襞 ひだ・たたむ

愛の ころ、ひだをいう。折目でないしわを縛といい、 わがついていたみ破れることを網摺という。 あり、折目を正しくつけること、またその折目のと 形声 〔説文〕ハ上に「ひだある衣なり」と 声符は辟。辟に僻る意がある。

躄 あしなえ

注に「兩足、行くこと能はざるなり」とあり、跛は大辟とは腰斬の刑をいう。[礼記、王制]「跛躄」の形声 声符は辟。辟は刑罰、腰の肉を刳りとる刑。 片足、躄は両足を失うものをいう。

ひらく

玉襞 闢

ヘキ

壁

JE W

「四門を闢く である。混沌を聞いて天地が創造されることを、開放う辟邪の意があり、辟の声義を承けるところがあ 「匿を闢く」や「四方を佑闢す」の語には、邪悪を 劈は刀でものを両分することをいう。〔説文〕一三上 の字形を用いる。闢はのちの形声字である。金文の する字は、門の両扉を開く形に作る。〔書、舜典〕 に「開くなり」とあり、門を開く意。重文として録 声符は辟。辟に辟邪、また劈の意があり、 、は、もとその字に作る。金文の〔大

露 かみなり・はためく

という。 辟歴ともしるすが、いずれも擬声語である。隕石の はなま 落下するとき、霹靂音を発することがある。 ることをいう。霹靂は疾雷、はたたがみ。字はまた にして裁決する敏才を、霹靂手と称する。 い。また霹靂斧ともいう。山積する案件を忽ちい。また霹靂斧ともいう。山積する案件を忽ち時邪のために小児に帯びさせるものを霹靂楔 声符は辟。胖に劈の意があり、ものの裂け その小

ベキ

-2 おおう

する。 象形 て物を覆ふ。いま羅と爲す」とあって、冪の初文と垂して、全体を覆う形とする。〔玉篇〕に「巾を以一の下垂するに從ふ」とあり、布幕などの両辺が下 (を字として用いる例はない。 上から覆うもの。「説文」七下に「覆ふなり。

糸 いと・かすかべキ

8 88 88 88

汨 より糸、声義ともに異なる。〔繋伝〕に「蠶の吐く幺・玄と同形である。いま絲の字に用いるが、絲は玄・玄と同形である。いま絲の字に用いるが、絲はする。その形は下部の糸のほつれた形を欠くもので、 所を忽と爲す。十忽を絲と爲す。糸は五忽なり」と あり、絲の半分が糸である。ゆえに微少の意がある。 束絲の形に象る」とあり、重文として古文の形を録 川ベ のキ 名 糸たばの形。〔説文〕一三上に「細き絲なり。

している。〔荆楚歳事記〕に、五月五日をその日と原の沈みし所の水なり」と、故事を加えた説解を施 「説文」二上に冥の省声とし、「長沙の汨羅淵、屈・を密の音でよむことがあり、その音とする説もある。 ところは知られない。漢の金日磾の日形声 声符は日であるが、声の由る

> 節句の行事を、その故事に牽合したものであろう。 して、舟を出して競渡などが行なわれたというのは

覓 11 もとめる・さがす・ながしめベキ

ŧø

中着切のことを、覓貼児という。 ****、「句を覚む」「食を覚む」のように用いる。 とあり、「句を覚む」「食を覚む」のように用いる。 【と字の意象が近い。〔玉篇〕に「索求するなり」 手と見とに従う。手をかざして見る意で、

幎 3 バキ・ベイ・ベン

黒い布を用いた。 る。〔儀礼、 伝えられるが、死者にはみな幎を被らせたものであ を地下に見ることを恥じて、幎冒をつけて死んだと 士喪礼〕に「幎冒に緇を用ふ」とあり、

幂 おおう・たれぎぬベキ

覆うている状態を「雲幕々たり」のようにいう。 すべて器の上を覆うものをいい、また雲が厚く空を ふ」の注に「覆ふなり」とあり、棺を覆う布をいう。形声 声符は[*。〔儀礼、既夕礼〕「冪に疏布を用

歴は草の生い重なるさまである。

鼎 おおい・かなえのふたべキ

魲

てものを覆うものの義となって、車乗のとき前にか また食器を覆うときには冥を用い、これもまた転じ る。のち鼎に限らず、すべて上より覆い包むことを 局が鼎を打げるための横木、鼏は鼎を覆うものであ ける虎皮を「虎宮」という。 いい、「秦公殷」に「禹の寳に鼏宅す」の語がある。 ている。〔儀礼、士冠礼〕に「扃鼏を設く」とあり、解としがたい。〔段注〕には「鼎の覆なり」と改め解としがたい。〔段注〕には「鼎の覆なり」と改め というのは、鳥の義をもって字を解するもので、正 まに鼎の耳を貫きてこれを擧ぐ。鼎に從ひ、〔聲」 うものを鼏という。〔説文〕七上に「木を以て横さ 会意 ()と鼎とに従う。鼎上を蓋う形で、その蓋

左へ引く

形に象る」という。丿へは左右にゆれる形であるかいう。〔説文〕二三下に「右より戻るなり。左に引くいう。〔説文〕二三下に「右より戻るなり。左に引くがない。書の楷法の上で、この線のひきかたを療ど とするが、天は身体をおりまげる形で、 **丿とは関係**

軅

ヘツ

ベッ

别

背

ベツ

蔑〔機〕

線。〔繋伝〕に「天の字はこれに従ふ」象形 右上から左下へ向かって引く

5 「漁舟丿乀」のように用いることがある。

ベ

ッ

别 7 わかつ・ わ

形

首。 に「故書に傅辨に作る」とあるのも、 ことを〔周礼、小宰〕に傳別というが、〔鄭司農注〕 東誥〕に「別く先哲王に求め聞く」の別は、辨・ **** ので、この書では異体字の名を用いている。[書、 字の古名であるが、別の字という意味と混じやすい 巻を著録している。また白字ともいう。別字は異体 があったらしく、〔漢書、芸文志〕に〔別字〕十三形である。古くから異体の字が多く、その弁別の要 別する意に用いる。ゆえにまた別離・別異の意とな る。文字学の上でいう別字とは、字の正体以外の字 るなり」とあり、 ころを、 会意 まつげかざり 丹と刀とに従う。 丹は骨の省文。 骨節のと 刀で分解する意。〔説文〕四下に「分解す すべてものを分別解体し、区分区 その例である。

上に「目正しからざるなり」とあり、末の音でよむの呪力を加えるため睫飾りなどする形。〔説文〕四の呪力を加えるため睫飾りなどする形。〔説文〕四の呪力を加えるため睫飾りなどが気儀を行なうとき、眼 象形 で、巫女などが呪儀を行なうとき、 目の上に呪飾を加えたもの

> とをいう。 敵の巫女を戈にかけて殺し、その呪力を蔑くするこ よばれる邪霊が、夢魔としてあらわれること、蔑はの声義を承ける字である。夢はこの呪飾をした媚と いずれも背

夏 13

る意とするが、その字には聲がある。夏はおそらく篾が正字である。〔段注〕に夏を目の明らかならざ その異体の字であろう。

蔑 15 [機] 20 ないがしろにする・ないベツ「あらわす

強然 34

帮 教幹機

文・金文の字は、ときに下部を女に作っており、 るときは、則ち蔑然たり。戍に從ふ」とする。ト文、四上に「勞目、精無きなり。首に從ふ。人勞す文〕四上に「勞目、精無きなり。首に從ふ。人勞す の字形では、その巫女に戈を加える形である。〔説の呪能を無力にする。これを蔑という。卜文・金文 る巫女。戦争などのとき、この媚とよばれる巫女が会意 背と伐とに従う。背は眼に呪飾を加えてい 呪祝を行なうので、戦が終るとその巫女を斬り、敵

み、暦(暦)は功歴をいう。蔑をまた禾に従うて機(保由)「保(官名)に蔑暦せらる」、〔霰鼎〕「鍛(人名)の暦を蔑はし、金を賜ふ」のように用いる。 (保由) 「解を蔑はし、金を賜ふ」のように用いる。 う語があり、軍功を表彰する旌表の意に用いる。う語があり、軍功を表彰する旌表の意に用いる。 は、蔑という語の遺音である。 [玉篇] にベツの音でよんでいる。この伐・閥の音 えられ、歴代世功の家を伐関といい、門閥の閥も、 関係もない字である。蔑暦の蔑は、のち伐の字で伝 上に磯字を録し「禾なり」とするが、禾麦とは何のそれは目部四上の曠の字義である。〔説文〕は禾部七 「勞目、精無きなり」とする解はその本義でなく、 り、蔑視・蔑棄・蔑如のように用いる。〔説文〕の 拡大し、民人を殺すことをいう。 日はその祝禱を収める器である。〔国語、周語〕「そ その軍門の前で、神に告げる祝詞をよみあげる意で、 う字である。禾は軍門に立てる標木の形で、軍門に作ることもあり、磯曆の二字はともにもと禾に従 れは功烈を「蔑す」意となる。金文に「蔑曆」といの呪力を無力とするので、「蔑し」とよみ、またそ の民人を蔑殺す」とは、巫女を殺すことから用義が の左右には禾形の標木を樹てる定めであった。暦は なわち媚女を戈にかける形である。これによって敵 のち軽蔑の意とな またそ

瞥17 ちらりとみるベツ

ゆるなり」という。一瞥・瞥見のように用い、 目なり」とし、「一に曰く、財かに見形声 声符は敝。〔説文〕四上に「過 また

> 瞥列・瞥裂は畳韻の語であるが、チラリというほど の迅速のさまをいう。擬声的な語である。 たび・くつしたベッ

はその非礼をとがめる語。席に即くときには、これ字がある。[左伝] 哀二十五年「鑢して席に登る」またその月に見まり、 またその声は蔑・末で、それぞれを組み合せた形声「足袋なり」とあり、その材料は革・皮・韋・巾、んで作った靴下状のものをいう。〔説文〕五下にんで作った靴下状のものをいう。〔説文〕五下に まの地下足袋に近いものである。 形声 篾席というものがあり、そのように編 声符は蔑。竹を編んだ敷物に

ध すっぽん・みのがめベツ

るものを、鼈甲という。陸機に「鼈の賦」一篇があった、上」「穀と魚鼈と勝げて食ふべからず」とあり、正、上」「穀と魚鼈と勝げて食ふべからず」とあり、たま、魚の鼈」の名がみえ、資物とされる。 [孟子、梁恵 の鼈」の名がみえ、資物とされる。 [孟子、梁恵 の鼈」の名がみえ、資物とされる。 [孟子、梁恵 の鼈」の名がみえ、資物とされる。 [金子と 虌 肉は最も美味で、鼈裾という。〔周礼〕に〔鼈人〕鼈は美味強壮の食用とされた。甲の四周の柔らかい る。 引いて「介蟲なり」に作る。〔周礼、考工記、注〕 の職があり、亀や鼈・貝などをとり、季節によって に「外骨は龜の屬なり。內骨は鼈の屬なり」とあり、 「甲蟲なり」とあり、【芸文類聚】に形声 声符は敝。【説文】一三下に

4 かた・きれ・ひら

て獄を折むべきものは、由(子路の名)なるか」と僅少のもの、一部分をいう。〔論語、顔淵〕「片言以片であるから片方、一偏の意となり、分列するもの 〔説文〕七上に「判木なり。半木に從ふ」とするの 片・雪片など微少のものをいう。 片雲・片月・片帆のように一部分のものをいい、 は、一言にして明快に獄事を審判することをいう。 のであろうが、版築のためのあて木である。その一 は、自然木を枝のついたまま両判したものと解する れを擣き堅めて土壁とする。その方法を版築という。 木の形。片を左右両辺に立てて、中に土をおき、こ 城壁などを築くときの、版築に用いるあて

辺 5 【邊】19 くにざかい・ほとり・はし

爆爆 0 0

形声 〔説文〕ニ下に「垂厓を行くなり」とするが、〔爾雅· ある。これを道路の要所に設けたものが邊(辺)。 て知られる祭梟の俗を示す字。すなわち髑髏棚で上にして台上におかれている屍体の形で、首祭とし 旧字は邊に作り、鼻声。鼻は魯。鼻の竅を

辺鄙・周辺などの意に用いる。 めて呪禁とすることを意味する字である。字はまた によるもので、徼は祭梟による呪祭、塞は呪具を埋 とからも知られる。辺徼・辺塞の徼・塞もその俗ことは、たとえば楚の屈禦寇は、字は子辺というこいる。辺が外族に対する呪禁の方法を示す字であるいる。辺が外族に対する呪禁の方法を示す字であるいる。 は、その遺習であり、髑髏棚の遺迹も多く残されて 台湾や東南地域から太平洋諸島にわたる首狩りの俗 姿が多くみられるのは、南方の苗・黎の俗であろう。 がある。また古い銅鼓の文様に、首を携えた武人の わち侯、穣のことにあたるものを意味した。聖域を にあって、射儀をもってその邪悪を禳うもの、すな鼎〕に「殷の邊侯甸」の語があり、侯とはこの辺地境界のところが辺であり、辺鄙の意となる。〔大盂 う。すなわち異族霊の支配するところである。 あって、 釈詁〕に「垂なり」、〔広雅、釈詁〕に「方なり」と 辺境・辺陲をいう。それで域外を方外とい その

返っ「返」のかえる・かえす

型超河

の『頌鼎』に「瑾章(玉器の名)を反入(返納)ニ下に「還るなり」とあり、反の亦きとする。金文ニ下に「還るなり」とあり、反の亦きまさる。金文形声 声符は反。反に返反の意がある。〔説文〕 西伯戡黎〕に「祖伊、反る」とあり、〔敦煌本残巻〕*メーサーンをイギー。 ギ゙、、タヤ。 こまい、とない。す」とあって、反を返の意に用いており、また〔書、す」とあって、反を返の意に用いており、また〔書、

> 照のように用いる。 としてのち返が作られた。返還の意より、返魂・返も同じ。金文では反を多く叛の意に用い、往返の字も同じ。

柉 木の名・ハン

有名である。 えない。宝鶏県より出土した二組の柉禁は、ことにの語があるのを用いたもので、文献にはその名はみ ておく台を校禁という。〔礼器碑〕に「邊校禁壺」き酒樽をおく台を禁といい、青銅彝器をセットとしに「木なり。皮は索と爲すべし」という。儀礼のと 形声 声符は乏。乏に定・泛の声がある。〔玉篇〕

扁 9 かたあみど・ひらたい・ひとつヘン

など大型の箱にも用いるもので、たとえば〔書、金形とみるべきである。扁扉は門戸に限らず、榱・匱西には榜を謂ひて篇と曰ふ」とあり、〔説文〕は扁がたい。竹部玉上篇字条に「書なり。一に曰く、關がモ 用い、また扁平・扁小の意となり、扁額・扁舟のよ うに用いる。 その戸を開く形である。片戸であるから一偏の意に 縢〕に「籥(鍵)を啓きて書を見る」とあり、啓はなど大型の箱にも用いるもので、たとえば〔書、念 冊書、扁を扁額の意に解するが、字の初形初義とし 册なるものは、門戶に署するの文なり」とし、冊を う。〔説文〕ニ下に「署するなり。戸册に從ふ。戸 象形 の形に作る。その両扁のものを扉とい 編戸の形。戸の下部を、編戸

盼 くろめがち・みるヘン・ハン

「多白の眼」と訓する字二文をあげている。とが押韻の字である。〔説文〕はこの字につづいて、 「巧笑倩たり「美目盼たり」の句がある。〔葉詩説〕詩、衛風、碩人〕は君侯夫人を迎える祝頌詩で、これがは、日もとのはっきりしたさまをいう。り」とあり、目もとのはっきりしたさまをいう。 に「黑色なり」というのは、黒目がちの意。情と盼 形声 く〔説文〕四上に「目の白黑分るるな 声符は分。〔玄応音義〕に引

砭 いしばり・いましめヘン

横渠はその室に〔砭愚〕〔訂頑〕の二文を掲げたが、たと思われる。のち砭鍼は訓戒の意に用いる。『サビドルド のちの〔東銘〕〔西銘〕である。 をとる治療法を示すもので、余は古くは石針であっ 愈・癒(癒)系統の字は、余の形の針でその膿 漿 「服皮注」に「石は砭石なり」とあって、治療のた者なり」とみえ、「左伝」襄二十三年「薨石」の「以て砭針と爲すべし。癰腫(できもの)を治する経〕「高氏の山、その下に歳石多し」の〔郭注〕に経〕「高氏の山、その下に歳石多し」の〔郭注〕に 扁鵲が鍼石を用いて治療したことがみえるが、 わゆるさじを投げる意である。〔史記、扁鵲伝〕に、 秦策〕に「扁鵲怒りてその石を投ず」とあり、い かには、薬と並んで砭針が重要とされた。「戦国策、めには、薬と並んで砭針が重要とされた。「戦国策、 刺すなり」とあり、石鍼をいう。〔山海経、東山がなり」とあり、石鍼をいう。〔以然です。ある。〔説文〕九下に「石を以て病を「 形声 声符は芝。芝に泛・窓の声が

多 9 ほうむる・つかあな

会意 穴とごとに従う。芝は死者の功績をも勒するようになった。それが碑の起原をなり、とこのである。字はまた封・場と通用とする。指を変なり。一に曰く、蓋ふなり」とするが、芝は泛屍の字、空は土でに「要は覆ふなり」、また覆字条七下に「覆は空下に「要は覆ふなり」、また覆字条七下に「覆は空下に「要は覆ふなり」、また覆字条七下に「覆は空下に「要は覆ふなり」とするが、変も乏を変なり。一に曰く、蓋ふなり」とするが、変も乏をいう。対策をも勒するようになった。それが碑の起原をなしている。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。古い碑の上部には、その穿穴のあとを残している。

が久 9 【縁く】 23 かわる・あらためる・みだれる

響

会意 旧字は變に作り、縦と支とに従う。〔説文〕 (製) の一に曰く、絕えなり」とし、総声とするが、絡は金文なり。一に曰く、絕方とところがない。「広雅、が、その行為について説くところがない。「広雅、が、その行為について説くところがない。「広雅、が、その行為について説くところがない。「広雅、が、その行為について説くところがない。「広雅、が、その行為について説くところがない。「説文」を意という。「親さなり」とするが、楽は出誓の書である言の両義に当るところがない。線は出誓の書である言の両義に当るところがない。線は出誓の書である言の両義に当るところがない。線は出誓の書である言の両義に当るところがない。線は出誓の書である言の両

病に、遊糸を飾りとして垂れている形で、そのゆえをして変更する意となり、変乱する意となる。すべて正常を軟、盂春」「天の道を變ずること無かれ」とあり、天道は正常にして不変、これに反するものを変という。変更の更もまた支に従う形で、丙形の器を撃つう。変更の更もまた支に従う形で、丙形の器を撃つう。変更の更もまた支に従う形で、丙形の器を撃つう。変更の更もまた支に従う形で、丙形の器を撃つう。変更の更もまた支に従う形で、丙形の器を撃つこと、殻・改で、殻は紫をなす獣を殴つ呪儀を示す。いわゆる殺がなで、殻は紫をなす獣を殴つ呪儀を示す。いわゆる殺がない、飛ばを示する。「結氣は物と爲り、游魂は變と爲る」とは、死者の意。「礼記、礼運」「大夫の宗廟に死する、ことによって変化するものを変改させる方法をいう。それによって変化するものを変改させる方法をいう。それによって変化するものを変改させる方法をいう。それによって変化するものを、また変という。「易、繋によって変化するものを、また変という。「易、繋に、死者の意。「礼記、礼運」「大夫の宗廟に死する、これを變と謂ふ」とあるのは、正しい死所をえないう語があり、爽変の意。盟誓にたがうことをいう。それいう語があり、爽変の意。盟誓にたがうことをいう。それに、第の手が作られたのである。という語がありとして、表に、というない。

偏り、偏りいかたよる・ひとつ・ひとえに

比 11 おとしめる・ヘらす・とがめる

偏 12 ヘン

遍12 (遍)13 ヘンカまねし

など、この字を用いることが多い。 は近世語に多く用い、わが国では一遍・遍路・遍照る。編と同字で、徧の方が古い字形である。中国で正字とし、「而るなり」とあって「周市」の意とす正字とし、「雨るなり」とあって「周市」の意とす正字とし、「雨るなり」とあって、周市。[説文]ニ下に徧を形声 旧字は遍に作り、扁声。[説文]ニ下に徧を

編 4 ヘン・きびしい

を識る詩である。 を識る詩である。 を識る詩である。 を識さ詩である。 を講述、その政治の褊急にして、搾取してやまぬこと をは、その政治の褊急にして、搾取してやまぬこと をは、その政治の褊急にして、搾取してやまぬこと を識る、 高にいう。 [詩、本の性情について、福心・編急のようにいう。 [詩、本の政治の編念にして、搾取してやまぬこと とば、その政治の編念にして、搾取してやまぬこと とば、その政治の編念にして、搾取してやまぬこと

篇 15 へん

一に曰く、關西には榜を謂ひて篇といふ」とあり、意がある。〔説文〕玉上に「書なり。(論文〕玉上に「書なり。(論文〕玉上に「書なり。)

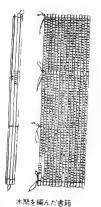
逼(過) 編 篇 編[編] 翩 駢 褒がある。〔説文〕五上に「書なり。 に編次するものかある。〔説文〕五上に「書なり。

「李白一斗、詩百篇」のようにいい、〔詩〕の〔雅〕で今白一斗、詩百篇」のようにいい、〔詩〕の〔雅〕で今白一斗、詩百篇」のようにいい、〔詩〕の〔雅〕で今白一斗、詩百篇」のようにいい、〔詩〕の〔雅〕は十篇を一併とするので篇什という。

編 15 (編) 15 ヘン

編業

う。資料によって書を編次することを編修、年次別的を表示している。「説文」二三上に「簡を次するなり」とあり、機簡はその札の一長一短、中に二編あるの形に象る」とあるが、機簡はその札の長短みな同じく、二ヵ所を太い糸で横に編んでいる。古くは常皮を用いて編んだらしく、孔子が晩年に〔易〕を好んで愛読し、「韋編三く、孔子が晩年に〔易〕を好んで愛読し、「韋編三く、孔子が晩年に〔易〕を好んで愛読し、「韋編三く、孔子が晩年に〔易〕を好んで愛読し、「韋編三く、孔子が晩年に〔易〕を好んで愛読し、「韋編三く、八子が晩年に〔易〕を対している。」に、「新聞」という。資料によって書を編次することを編修、年次別でおいる。「第十年では、「新聞」という。「新聞」という。「本書」



に編次するものは編年、組み入れることを編入、ま

験番号にあたる。 に対して情実を避けたが、これを編号という。いまの試して情実を避けたが、これを編号という。宋の科挙の試験のとき、名を紙を貼ってかくし、番号で整理の試験のとき、名を紙を貼ってかくし、番号で整理の試験のとき、名を紙を貼ってかくになった。第一本を

15 ヘン ながえる

財 8 ヘン・ベン

(説文) I ○上に「二馬を駕するなり」とあり、二頭立ての馬車。その走るを騈馳という。転じて二字連語をなすものを騈字、四字六字の対偶をもって文を構成するものを騈字、四字六字の対偶をもって文を構成するものを騈字(一枚あばら)、足の指ならば 新掛のようにいう。騈拇は無用のものにたとえ、騈掛のようにいう。「一枚あばら)、足の指ならば 新掛のようにいう。「一枚あばら)、足の指ならば 新った (本野 大き (大き 大き (大き 大き) (大き (大き) (大き (大き) (大き) (大き) (大き (大き) (大き)

寛罗 24 ヘン たけのたかつき

弁[党] 弁[辨]

〔詩、豳風、伐柯〕に「籩豆、踐たるあり」の句が籩は竹器、豆の如きもの」とあり、容量は四升。 たもので、金文の簠と同じ造字法である。その曲形 「上公は豆四十」、また〔礼記、礼器〕に「天子の豆 ある。〔周礼、籩人、注〕に「竹なるを籩といふ。 は、青銅器の簠がもと竹器であった時代の名ごりで を録するが、 二十有六」とあり、籩の器数はみえないが、〔周礼、 **籩人〕に「四籩の實」という語があるから、四籩で** あり、籩豆の並ぶさまを歌う。〔周礼、掌客〕に て、豆間において祭ることを選祭という。 ーセットをなしていたのであろう。籩中の食を取っ その字形はいわゆる曲形中に鷽を加え 形声 に「竹豆なり」とあり、また籀文一字 声符は邊(辺)。〔説文〕五上

ベン

深いやねン・メン

象形 [段注] に「古は屋は四注、東西南北みな交覆する 七下に「交覆すること深き屋なり。象形」とあり、 もすでに多いが、殷代建築の遺構から考えられるそ なり」という。しかし字は四注(寄棟)の形ともみ の構造は、四注交覆のようなものでなく、切妻形式 両旁の垂れる形である。nに従う字はト文に 屋根が左右に深く垂れている形。 〔説文〕

> 宮廟宗室をはじめ、ほとんど神事に関するもので、 る廟屋の類で、一般の居住の形式は、なお粗末なも のものである。また屋棟のある建物は、神事に用い 家(殷の祖王、上甲をまつる所)」のように用いる 室・家なども「血室(犠牲を用いるへや)」「上甲の のであった。卜文にみえる宀に従うものは約七十字、 のが、字の原義であった。

丏 しかばね・おおうベン・メン

対向きの字であるから、同じく流屍の形である。水に泛ぶものを泛という。 丏はその反 る」とし、「繁伝」に「左右壅蔽して、面分たざる 「説文」九上に「見えざるなり。 離蔽するの形に象 ところとする。すなわち、周礼、射人」の「鄭司農的中の相図をする矢かずとりが、身をひそめている そのような形ではない。〔段注〕に、射礼において なり」、左右から蔽うて顔がみえない意とするが、 注〕に「容とは乏なり。獲(矢の当り)を待つ者の注〕に「容とは乏なり。獲(矢の当り)を待つ者の 乏と丏とは、篆文相似たり。義は矢を蔽ふことを取蔽るるところなり」とあるのを引いて、「按ずるに 泛、その方向の異なるものが沔である。 丏声の字は、 ない説である。流屍の伏するものは氾、仰ぐものはる。あに禮經はもと丏に作れるか」というが、証の みな丏の声義を承けるものとみてよい。 象形 芝の反文。芝は屍体の形で、

十 4 くくった髪・はやい・うつ

象形 冠の形。古い字形がなくて確かめがたいが、

冠)して射るものとする説と、空手搏ちであるとすい。まれる。その舞を休舞といい、その舞うさまがき、高くであるところから、躁疾下急の意がある。〔漢意疾であるところから、躁疾下急の意がある。〔漢ないない。 漢碑の〔礼器碑〕〔孔宙碑〕などにみえる字形をも る説とがあるが、卞は髪を括ってそれを包んだ形で あろう。弁と同声の字である。

弁。[食]。 かんむり

自 齊 背

籍文一、或る体一を録する。その或る体が、いまは收といふ。見に從ふ。象形」とし、重文として「冕なり。周には覚といひ、殿には呼といひ、夏に『光が 弁冠の形。[説文] / 下に字の正形を覚とし、象形 弁冠の形。[説文] / 下に字の正形を覚とし、 るものであるから、書の巻頭に加える語を弁言とい ときには麻帯をつけて、弁経という。弁は頭に加ええる。〔周礼、弁師〕は、王の五冕を掌る。弔葬のえる。〔周礼、弁師〕は、王の五冕を掌る。弔葬のとあるものは皮弁で、それに玉を飾りとして多く加 という。〔詩、衞風、淇奥〕に「會弁、星の如し」官は黒い布で作り爵弁、武官は白鹿の皮で作り皮弁 の弁の字形に近い。髪を包むような形のもので、文 う。いま辨・瓣・辯の略字として、常用の字とする が、弁・辨・瓣・辯の四字は、みな本来の字義を異 にするものであった。

弁5【辨】16 わける・しらべる・おさめるベン

が、 約することを示す字で、原告と被告に分れて相争う 弁冠の字。 離・弁治・弁正・考弁などの意に用いる。弁はもとの主張を区分し、分明にする意。ゆえに判別・分 を用いる。〔説文〕四下に「判なり」とあり、両者 意がある。刀でものを両分するをいう。いま弁の字 四字を一体にすることは、無理な話である。 旧字は辨に作り、辞声。辞は二人並んで誓 いま辨・瓣・辯もまた略して弁を用いる

弁 5 (瓣)19 うりのさね・はなびらベン

とみえ、歯なみが瓠を割って種が並ぶように美しい「齒は瓠犀の如し」の〔伝〕に、「瓠犀は瓠瓣なり」 瓜中の實の相並ぶことをいう。〔詩、衛風、碩人〕 文〕七下に「瓜中の實なり」とあり、 のにたとえる。のち花弁の意に用いる。 形声 旧字は瓣に作り、発声。〔説 碩人

弁 5 (辯)21 あらそう・おさめる・わけるベン

「その獄訟を辯ず」とあり、また〔礼記、曲礼、その獄訟を裁定することをいう。〔周礼、卿士〕にきてある。〔説文〕一四下に「治なり」というのは、 する意の字であるから、辯(弁)とは、獄訟にあた 原告と被告に分れて相争う意がある。言は神に立誓 って当事者がそれぞれ自己詛盟を行なうことをいう 形声 二人並んで誓約することを示す字で、 旧字は辯に作り、発声。 辞は

> 字の弁は、もと弁冠の字であるが、辨・瓣・辯三字う。字は辨・便と通用することが多い。いまの常用 の略字として用いる。 ある。もと獄訟をいい、またそれを治めることをい 上〕に「分爭辯訟は、禮に非ざれば決せず」の語が

写 まつる・かなうベン・メン

の字である。瞑眩(薬で目まいする)の瞑の音でよ 字で、それを祀ることを寘という。それと同じ意象 とから知られるように、流屍の象。これを祀ること みえぬ字である。 む。〔説文〕七下に「冥合なり」とするが、用例の を写という。眞(真)は道殣、行き倒れを意味する を沔、その伏流するものを氾というこ会意 べんべん でありに従う。 野は、流屍

芥~ 「拚」。 べをうつ

除の意にも用い、参乗という。抃舞の字は多く抃を「手を拊つなり」という。その字は参に通じて、掃 用いる。抃舞・抃躍は手を拍ち、躍り上って舞い喜 ぶ意である。卞は手を拊つ音で、擬声的な語であろう。 符は弁。〔説文〕 ニュに辨に作り、声形声 声符は下。また辨に作り、声

沔 おぼれる

う。〔説文〕 狮 |一上に川の名とするが、字の初義では |屍の流れるを記といい、仰屍を沔とい | 販売 | 声符は式。当は流廃の象。状

> 通用するもので、瀰は瀰漫、水の満ち流れるさまを[伝]に「水の流れ滿つるなり」とあるのは、瀰とない。[詩、小雅、『水』「沔たる 彼の 流水」の り」とみえる。 いう。その〔釈文〕に引く〔説文〕に「水滿つるな

便 やすらか・ならう・たやすく・すなわちベン・ビン

ちまわること、便佞は口上手で油断しがたいものでまた便習・便安の意となる。便巧・便辟は身軽にたまた何習・ 使役に便することを便という。ゆえに便利・便宜、 馬を鞭治するように、人を鞭うって柔順ならしめ、 るべく、便はその鞭度を人に加えている形である。 更と極めて近い形で、馬に鞭度を加えている形とみ 「大鼎」及び〔石鼓文、霝石〕にみえる駿の字は **** が、それでは会意の義を明らかにしがたい 有るときは、これを更む。人と更とに從ふ」とする ある。便々は唯々としてことに従うことをいう。 会意 に「安んずるなり。人、不便なるもの 人と更とに従う。〔説文〕ハ上 。金文の

眄。 ながしめ・よこめベン・メン

眅 字である。 詁〕に「視るなり」とするが、 計〕に「視るなり」とするが、流眄・顧眄をいうるなり」とは流し目でみることをいう。〔広雅、釈視しないで片目でみること、「一に曰く、邪めに視しないで片目でみること、「一に曰く、邪めに視れている。 [説文]四上に「目、偏合するなり」とは、 形声 字形から考えられるように、流屍の象 声符は
写。
写は
記・泛・
河の 人を正

勉 (勉)。 つとめる・はげますベン

とあり、勉とは自ら勉励することであるが、字は未なり」という。〔中庸〕に「勉強してこれを行ふ」 そ勉と言ふものは、皆相迫る意なり。自ら勉むる者 文〕一三下に「彊むるなり」とあり、〔段注〕に「凡死、 農事につとめることをいう。〔説 で、その作業の姿勢をいう。 の形に従い、もと農耕をいう。 とは、自ら迫るなり。人を勉むる者とは、人に迫る 形声 声符は免(免)。力は耒の象 免は俛す形をいう字

娩10 [挽]10

分娩の免とは形が異なり、冑を免ぐ形である。声義娩の初文。免はまた免冑の意に用いる。その初形は娩は「子を生みて身を発るるなり」というが、免が娩は「子を生みて身を発るるなり」というが、免が は相通ずるが、字形はもと異なるものであった。 (免) 声。免は分娩のときの姿勢。〔説文〕 一四下に 形声 を挽とする。 する。いずれも発〔説文〕一四下に正字

冕 かんむり

紞 纊(耳あて)あり」とし、黄帝がはじめて冕をたさり。 邃き延、垂れたる鎏(旒、たれ飾り)、の冠なり。邃き延、垂れたる鎏(旒、たれ飾り)、 作ったとする、事物起原説を述べている。歴代の帝 王図に皇帝の冠しているものがそれである。「周礼、 冠冕の形。〔説文〕七下に「大夫以上なべん」声 声符は発(免)。上部の同が

> 冕服の制をしるしているが、

> 〔後漢書、 **0最り則としるしているが、〔後漢書、與服志〕に弁師〕に「王の五冕を掌る」とあり、〔司服〕にも弁師〕に「王の五冕を掌る」とあり、〔司服〕にも 諸説を列ねているように、古制はあまり明らかでな い。天子は前後十二旒、上公は九旒であるという。

辡 14 うったえる・あらそうベン

という自己担盟をした。辡は二人並んで誓約するこ田に辛をそえ、もし違背のときは入墨の刑を受けるこ は辮髪の字である。 訟に関する字、瓣・辮は両班に分れる意があり、 訟ふるなり」とし、二辛を罪人二人と解するが、 合せて善となる。〔説文〕一四下に「皋人、相與に おくことを辯(弁)、羊神判のときには羊と詰とを示すものとみてよい。自己詛盟の言に対して、辡を とを示す字で、紛争の当事者たる原告・被告双方を 誓約のとき、その書を入れる器である 会意 二辛に従う。辛は入墨の器で ぬり、辮*は獄

辨 さばく・つとめる・ととのえるベン・ハン

を好む傾向がある。 べて弁治の意である。官庁用語に、この種の異体字 辦公・辦案・辦差・辦事・辦理のように用いる。す 体とみなしてよい。 処理する弁治の義から転じたもので、辨(弁)の俗 形声 に「力を致すなり」とするが、ものを ただ近世以来官庁用語として、 声符は発。〔説文新附〕「三下

17 くらい メン・メン

幽暗の状をいうものであろう。 資と同じ意象の字で 限らず、他の古俗に関する文字の、字形学的な理解 ものは架屍の形。同に作るものは台座の形。外界とられていないようである。盲は鼻。下部を方に作る 見えざるなり。闕」とあって、その字形の意味が知形義の関係が明らかでない。自部四上にも「騫、宮 ざるなり。一に曰く、寤々、人を省せず」というが らいえば、臱に従う形が正しい。寄とはその建物の あげる霧の字形も、〔大盂鼎〕にみえる邊の字形かの全体にわたっていいうることである。〔説文〕に 失われるようになった。このことは祭梟関係の字に これを列国の都城の門に埋めることが行なわれて また春秋期に至っても、長秋の虜酋の首を獲て、 殷墟の遺址には、断首祭梟の俗を示す断首坑が多く 棚をおく室が霧であり、辺塞の呪禁の建物をいう。 棚を設けて呪禁とすることが行なわれた。その髑髏 接する辺境のところには、断首祭梟、いわゆる髑髏 要所に設けたものは邊(辺)、建物の中にこれを設 俗を示す字。すなわち髑髏棚である。これを道路の けたものを癟という。〔説文〕七下に「癟々、見え れている屍体の形で、 そのような祭梟の俗が失われるとともに、 唇は夢。鼻の竅を上にして台上にお 一と鷽とに従う。一は廟屋、 首祭として知られる祭梟の 方

ホ

とあって、

小吏や小児もみな編髪にした。

뾁

侌

學智

鞭

むちうつ

甫 なえぎ・はたけ・はじめホ・フ

崩

なり」と訓し、〔段注〕に「經典の鞭はみな人に施 して、馬に施すを謂はず」というが、金文の駿の字

その初文であると思われる。〔説文〕三下に「殿つ 含まれる更に近い形で、それが鞭の象形字であり、

声符は便。便の初形は、金文の駿の字形に

るのを専といい、専・甫には声義の関係がある。 法である。甫は苗木で植樹のはじめをいい、その圃 あるとすれば、吉父がその正字、甫はその仮借の用 あるこれれば、『といったのは例外的なもので、[詩、大雅、教高』に表えて、『女郎』の「青甫、誦を作る」、また[烝民]『仲『漢』、『本明』では、『本明』の「『古甫、誦を作る」、また「『本明』のは例外的なもので、[詩、大雅、教高』を押いるのは例外的なもので、[詩、大雅、教高』 とものな例外的なもので、〔詩、を用いるのは例外的なもので、〔詩、 ***こを用い、甫を用いる例はない。経籍においても、甫 しては、金文にはすべて伯懋父・師雍父のように父の苗を示す象形字、圃の初文である。男子の美称と 列国期以後の字形によって説くもので、もとは圃中 に從ふ」と会意に解し、父の亦声とするが、それは った。〔説文〕三下に「男子の美稱なり。用と父と 部は用の形となるが、もと苗木の根をかこむ形であ 苗木の根をかためる形。のち上部は父、下

W W 歩8 。〔步〕, **y*** あゆむ・あるく・ゆく ď

> 保 9 たもつ・たすける・やすんずるホ・ホウ

意味をもつ行為であった。 わが国では反閉という。

その儀礼を践上といい

地を歩むということが、地霊に対する慰撫・鎮圧の ト辞にも、王の歩することを卜する例が多い。その むときには、歩してその地に赴くのが古儀であった。

歩く。〔書、召誥〕に「王、朝に周(宗周)より歩せて歩武という。堂上では徐歩し、堂下では大股にせて歩武という。堂上では徐歩し、堂下では大股に して豐(豊京)に至る」とあり、神事的な儀礼に臨

を接し、堂下には武を布く」の武は半歩の意で、 という。大尺とは周尺。〔曲礼、上〕「堂上には武

合

王制〕に大尺で八尺を一歩、

いまは六尺四寸である

と互訓するが、行は十字路の象形字である。〔礼記、 「行くなり」と訓し、行字条二下に「人の歩趨なり」

にして、前に歩行する意を示す。

二上に

左右の足あとを重ねた形。左右の足を交互

佩 799 界 美人 原質 显 81

「養ふなり」と訓し、字を孚の古文の形に従うとす 振り儀礼のありかたを示している。〔説文〕八上に 生子の魂振りとして加えたもの、また褓として裾になる。まない。また。また。また。また。また。また。また。また。また。また。また、また。また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、また、また もつもので、字形の全体は、新しい生命に対する魂 加えられているものは、生子に対する霊衣の意味を 卜文の字形は、 人と子と褓の形に従う。 辩 20

謙して鞭駘という。

舜はたれては、

が、人を勉励する意に用いる。 己れの愚に鞭うつを、 いう。鞭撻は、もと牛馬を使役するときの語であるいう。鞭撻は、もと牛馬を使役するときの語であるいう。をない、などのちの杖刑・笞刑にあたる。馬鞭には鞭策・鞭突とのちの杖刑・笞刑にあたる。馬鞭には鞭兵を持

た〔国語、魯語〕「薄刑には鞭扑を用ふ」とあり、

典〕に「鞭は官刑を作し、扑は教刑を作す」、またれ、まさしく馬に加えている形である。〔書、では、まさしく馬に加えている形である。〔書、

る。漢の〔鹵簿令〕に「羊車の小吏はみな辮髪す」あり、古くこの方面にその俗のあったことが知られ 土器にも、辮髪俗を示すらしい頭飾りをもつものが 金を以てこれを爲る」という。西北地区出土の彩陶 〔漢書、匈奴伝〕「比疎」の注に、「辮髪の飾なり。 ことで、 頭部に辮髪の形を加えており、チベット系の古俗に も辮髪の俗があった。 いわゆる辮髪をいう。卜文にみえる羌は、 「交ふるなり」とは、交え編みにする また匈奴にもその俗があり、 声符は笄。〔説文〕「三上に

辮 歩(歩)

ばれている。周公の家が明公・明保とよばれるの勲である召公奭は、金文では「皇天尹大保」とよ勲である召公奭は、金文では「皇天尹大保」とよ保」を図象的にしるしているものがあり、周初の元 歴代の王をたすけた保衡とよばれる聖職者は、王室でに殷のときに存しており、湯をたすけた伊尹以来、巫祝王、奭は召公の名である。このような伝統はす な性格のものであったので、〔書、君奭〕では、周 その霊の媒介者であった。それは本来は巫祝王的によってはじめて康王に継承されるもので、大保は 成王の保持するいわば天皇霊が、大保を通ずること その霊の授受の儀礼を司会している。古い形式では、 うことをしるすものであるが、このとき大保召公が、 成王が没するとき、康王がその即位継体の礼を行ない。
聖職者として最高の地位を占めた。〔書、顧命〕は、 受に関する儀礼に関与する聖職者の称号であったら対する魂振り儀礼を示す字。古くはすべて、霊の授 保は僳の字形からも知られるように、新しい生命に 意がある。〔詩、小雅、天保〕「天、爾を保定す 亦子の霊が保護されるので、保に保護・保持・保有の が国の「真床襲衾」にあたる。この儀礼によって生 とが知られる。褓はまた保衣・保呂ともいわれ、わのであり、像における玉や褓は、その呪器であるこ る。このことからいえば、保は霊の授受を司るも 公が召公のことを「君奭よ」とよんでいる。君とは に対して、召公の家は大保の称号を保ち、 るが、字は字虜・字卵の字で、保とは関係がない。 の祖王と並んで、連綿として歴代の祭祀を享けてい その最高官を大保という。周初の器に「大 いずれも

> るが、 保塞・保甲など、軍事に関する語にも用いる。金文 孔 だこれ固し」とあり、保定は天意によるものと とが知られる。 では宝と通用することがあり、 されている。保はもと神事的な受霊の儀礼を意味す のち保護・保障の意より防衛的な意となり、 古く同音であったこ

匍

卿 0 割

連語である。金文の「大玉鼎」などに「四方を御有の人を救ふ」とは、身をもって守りたすける意。双声のを救ふ」とは、身をもって守りたすける意。双声の風、谷風」「凡そ民に喪あるときは「匍匐してこれり」とあり、はらばうことを匍匐という。〔詩、邶り」とあり、はらばうことを匍匐という。〔詩、邶り』とあり、はらばうことを匍匐という。〔詩、邶 形声 である。 佑・撫有と同義で、匍を「薄い」の意に用いたものといい、[左伝]には多く撫有という。匍有は敷 す」の語があり、〔書、金縢〕に「四方を敷佑す」 のり、はらばうことを匍匐という。〔詩、声符は甫。〔説文〕 九上に「手もて行く 郷な

哺 ふくむ・はぐくむ・くうホ

戦国期の作り話であろう。周初に、自由な出仕を求みえるが、その話はもと〔韓詩外伝〕にあるもので、なる。〔史記、魯世家〕に、周公の吐哺猩髪の話がなる。〔史記、魯世家〕に、周次に与えるので、哺育の意とことをいう。それを幼児に与えるので、哺育の意と 蝋 める遊説の士などあるはずがない。 咀するなり」とあり、口に含んでかむ** 声符は甫。〔説文〕ニ上に「哺 声符は甫。〔説文〕二上に「哺

はたけ・その · ·

10

學び」「圃を爲る」ことを問うているから、 とをいう。「論語、子路」に、数遅が孔子に「稼をて圃に数す」とは、柳の枝を折って畑の垣を作るこ を園という。〔詩、斉風、東方未明〕に「柳を折りを植うるを圃といふ」とあり、果樹を植えるところ その植樹のところを圃という。[説文] トトトに「菜金竈 口と甫とに従う。 粛は苗木の根を包んだ形 とは、すでに区別されていたのであろう。

捕 とる・とらえる

定がある。 ことをいう。捕えて縛する意をもつ字である。その 辨 逃亡するものを逋逃という。〔唐律〕に捕亡律の規 る。〔説文〕一三上に「取るなり」とし、人を捕える 包みこむ形で、ものを繋縛する意があ 声符は甫。甫は若い木の根を

浦ロ から・はま

常武」「彼の准浦に奉ふ」の〔伝〕に「浦は涯ない。「独なり」とあり、水の涯をいう。〔詩、大雅、に「水瀬なり」とあり、水の涯をいう。〔詩、大雅、「いる」と 淵 り」とみえる。入江のように水の広くなるあたりを いうことが多い。 形声 敷などひろい意がある。「説文」ーー上 声符は甫。甫声の字に、専・

10 晦]12

- Jense

朄

「寶晦」といい、資は織物、晦は農作物をいう。 作したものであろう。後期の金文に推曳の賦貢を作したものであろう。後期の金文に推曳 の〔賢殷〕に「百晦」の語があり、一夫が一畝を耕げるが俗体、いまの畝はその形から出ている。鳥初げるが俗体、いまの畝はその形から出ている。鳥が とあって、百歩の地をいう。また十久に従う字をあ 文〕一三下に「六尺を歩と爲し、歩百を晦と爲す」形声 声符は毎(毎)。毎に母の声がある。〔説

逋 にげる・かくれる

強機

逋負、世を捨てた人を逋客という。 歸せん」とは、虜囚の脱走者をいう。税を納めな 亡者。〔左伝〕僖十五年「其れ逋れてその國に逃 いことを逋租・逋税、負債を払わないことを逋債・ ディージャーは、とあって、逃亡者の意。〔書、大に「亡ぐるなり」とあって、逃亡者の意。〔書、大に「亡ぐるなり」とあって、浦縛を免れたものを逋という。〔説文〕こ上して、捕縛を免れたものを逋という。〔説文〕 声符は甫。甫は若木の根を縛る形。捕に対

堡 12 とりで・おか・つつみ

塁をもって防衛とするものを堡塞・保塁・堡障との。 声符は保。保に保衛・保守の意があり、・ う。西域の堡塞は漢以来作られているが、その交通 土

畝(晦)

逋 堡 痡 補 葆

> いま西域の地に堡塁のあとが多く残されている。 慧琳の〔一切経音義〕に「堡は高土なり」とみえる。のころに多く用いられている。古い字書にはみえず、が盛んとなったのは唐以後のことで、この字も唐宋が盛んとなったのは唐以後のことで、この字も唐宋

痡 やむ・つかれる

(機は、みな痛と同じく並母に属する字である。 * る。罷繁困憊することをいう字であるが、罷・斃・ ないという。 ない、これであるが、罷・斃・ に下の海を毒痛す」の語があ に下の海を毒痛す」の語があ に防れば、我が馬は椿み、犬どきょな、ことをいう。〔詩、周南、巻耳〕に「彼の砠(岩山)ことをいう。〔詩、周南、巻耳〕に「彼の砠(岩山)になり」とあり、赤(ごしい)病 爄 形声 声符は甫。〔説文〕七下に「病

補 おぎなう・つくろう・たす・たすけるホ

補充という。 とを補佐・裨補、空欠の官職を任ずることを補任・ころを補うことから補塡・補充・修補、補助するこなり」とあり、修理・補繕のことをいう。欠けたとなり」とあり、修理・補繕のことをいう。欠けたと 八上に「衣を完ふなり」、〔玉篇〕に「故きを治むる(説文〕つめる、輔ける、の意がある。〔説文〕のある、「説文」を持ちる。「説文」を持ち、「おきを治むる」を表している。

葆 まもる・はねかざり・やすんずるホ・ホウ(ハウ)

蒲 輔 (車蓋の羽飾)・葆車(その羽飾を樹てた車)のよ 後の通ずる字である。また保の声義を承けて、羽葆義の通ずる字である。また保の声義を承けて、羽葆義の通ずる字である。また保の声義を承けて、羽葆義の通ずる字である。また、また、また。また、また、また、また 舗(舗)(鋪) 形声 をおり また ***・**・**・ 声符は保。〔説文〕一下に「艸

> い例はなく、文葆の義は保の声義を承ける。

蒲 がま・かわやなぎ・むしろ

柔弱の体質を蒲柳の質という。 り、また屋根を蓋うこともあって蒲屋という。川柳がま・しょうぶの類の水草をいう。編んで蒲席を作がま・しょうぶの類の水草をいう。編んで蒲席を作 を蒲柳という。その柳葉はことに柔弱であるので、 淵 艸なり。或いは以て席を作る」とあり、 形声 声符は浦。〔説文〕一下に「水

輔 たすける

0 軵

があり、輔佐・輔弼・輔翼の意に用いる。がつづくからであろうが、鑿説である。輔に補の意がつづくからであろうが、鑿説である。輔に補の意 車とするのは、その語に「唇亡びて齒寒し」の句あり、もと車とそえ木の意。のち上顎を輔、下顎をあり、もと車とそえ木の意。のち上顎を輔、下顎を とをいう。〔左伝〕僖五年に「輔車相依る」の語が がある。車にそえ木を著けて、車輻の力を輔けるこ 形声 声符は甫。甫は尊。専に傅く・傅けるの意

舗15 (舗) 15 (舗) 15 しく・つらねる

を鋪に作り、「門に著くる鋪首なり」 声符は甫。〔説文〕一四上に字

いま舗の字を用いる。甫に敷き陳ねる意がある。うのも同じ。のち店舗の字に用い、また舗に作る。 やます意。〔江漢〕の「淮夷をこれ鋪ましむ」とい し 仍ち醜房を執ふ」は痛怒の仮借。痛憝はうちなませて引手とする。〔詩、大雅、常武〕「淮夷を錆敦 ませて引手とする。〔詩、大雅、常武〕「淮夷を錦敦とあって、亀蛇などの形をした門鐶。これに環を含とあって、亀蛇などの形をした門鐶。これに環を含

簠18 (医)。(固)7 稲粱をそなえる器

全 () 盘 西西西西

る。 八簋」という瑚・簋もまた、 まは古く同声はまった。(左伝) 哀十一年に「胡塞 また獣に従うて厩に作るものがある。甫・夫・古・また獣に従うて厩に作るものがある。甫・夫・古・る。金文の簠の自名の器には固に作るものが多く、 竹皿に從ひ、甫聲」とし、古文として医を録す 声符は甫。〔説文〕五上に「黍稷の圜器な 簠簋のことである。

文〕には簠を圜器とする 器として作られることが多 うものであるが、それは竹 簠・簋の篆文の字形はいず 方形で、円形のものは段が、いま存する簠はみな長 かったからであろう。〔説 もいわゆる曲文の形に従



黼 いうものが多く、黍稷の類を盛って供える器である。 (簋) である。簠の銘文には「用て稻粱を盛る」と ぬいとり・あやホ・フ

その文様の形をいう字ではない。 だつところであるから、そこに刺繍で文様を加えた。 甚だ多く、の市はおそらく黼黻、 測の言である。金文に「赤きち」のようにいう例がとは知られず、漢代の文献にいうところは、みな推と 繍」の〔伝〕に黼を斧形、黻を両己相背く形である であるとされる。〔書、皋陶謨〕「藻火粉米黼黻締れを黼と謂ふ」とあり、両己相背く形のものがそれれを黼と謂ふ」とあり、両己相背く形のものがそれ 「白と黑と、これを黼といふ」、〔爾雅、釈器〕「斧こ あろう。黹は蔽膝の形であり、蔽膝は礼装の最もめ いい、のがその象形で黼の初文、黼はその形声字で とし、〔詩、伝〕の説と異なるが、実際の詳しいこ の文様は斧文である。〔詩、小雅、 形声 又である。〔詩、小雅、采菽、伝〕にと黑と相次するの文なり」とあり、そ 声符は甫。〔説文〕七下に「白 ぬいとりの文様を

戊 5

栈

ほこ・つちのえボ・ボウ 竹州

> 形である。郭沫若は、戚の形と解し、戊と戚はその字形によると、戊は刃部が鉞に似ている大きな矛の 十日のうちに六甲があり、五竜は五辰で五行、相拘 甲五龍、相拘絞するに象る。戊は丁を承け、人の脅い。など、なり、ないのない。これでは、「中宮なり。六 りのある刃器、己は屈曲した器の形である。 たく丙丁のように相対する関係が考えられ、戊はそ 古音が同じであったとするが、音韻の上からそのこ が多く、字の本義を説くものでない。ト文・金文の 十二支に関する字の説解は、当時の俗説によるもの 字形と何ら関するところがない。〔説文〕の十干・ 絞すとは、干支を甲子・乙丑のように組み合せなが は亀甲と獣骨の形をとる甲乙、台座と釘頭をうちた とを証しがたく、金文には別に「我の字がある。十干 ら数えてゆくことであるが、これらのことはすべて に象る」という。中宮とは五行の中、六甲は干支六 兵器の形。斧や鉞に近い柄のある矛の形。

5 はボ は・ モ

ずゆ

通用することがあり、金文では母と毋とは同じ字形 乳を加えた字形である。〔説文〕一二下に「 象る。一に曰く、子に乳するに象るなり」とする り」と、声の近い語によって訓し、「子を寝く形にり」と、声の近い語によって訓し、「子を寝く形に を用いている。母の義に用いるのは、音の仮借であ が、子の形をそえたものはない。卜文では女と母と えた字形である。〔説文〕||二下に、||牧ふな||両乳を垂れている女の形。女の字形に、両

とは牝器の象形である。ト文では羊・豕・鹿などま。 牛と土とに従う、土の形に生暑の髪別 る。金文の女子名に、可母・魚母のように母という が国とも概ね同じ。〔詩、大雅、生民〕「帝の武の〔義証〕に「これ南北の通語なり」としており、わ 第三指は中指、第四指は無名指、第五指は小指。 失ふ」とあって、足の親指をもいう。第二指は食指、 優を取る」の注に「その足の大指斬られ、遂に屢を 伝〕定十四年「闔閭(越王)將指を傷つく。その一 を履みて散く」の敏(敏)は、拇の仮借字である。

牡

おす・ ボ・ボウ

14

1

例が多い。男子の名には父や甫をそえていう。

姥 うば・ばば

墓 13

菩提は道・覚・智などに当る語である。

の音訳に用い、菩薩は菩提薩埵(大道心衆生)の意。野祭のときこの草を束ねて神主とした。のち仏教語

なり」とあり、倍草・黄倍草ともいう。

声符は音。〔説文〕一下に「艸

がないことである。 であるが、このような心中譚は、中国ではあまり例 中することを歌う長篇の叙事詩である。後追い心中 の公姥の嫁いびりに追われて、ついに若い夫婦が心 姥という。 じ語である。また夫の母、すなわち姑をまた姥・公 覧冥訓〕に西王母を西姥と称しており、母と姥と同気祭がん まおりょ まょぎ 女と老とに従う。老女をいう。〔淮南子、 、古詩〔焦 仲卿の妻の為に作る〕は、こ

募 12 つのる・まねく

ものを募集するのが、その原義であろう。 に従うものであるから、もとは農耕のため入殖する 役や、軍役のことに用いるが、字は耒の形である力 募役・募兵・募勇のように、主として土木などの力 むるなり」とあり、人を募集・招募することをいう。 ある。〔説文〕一三下に「廣くこれを求 形声 声符は莫。莫に摸、とる意が

吉 12 ほとけぐさ

> 〔急・就篇、注〕には昏暮説があるが、死を暗黒の「無さな」や「周礼、注〕には思慕の意とする説、「かくさ」や「周礼、注」には思慕の意とする説、をに経営の意があるとするのは附会にすぎず、またとあるのは丘墓の意。〔段注〕に、墓に規模の意、とあるのは丘墓の意。〔段注〕に、墓に規模の意、 上にも、碑学として重要な資料とされている。 して残されている。史伝の資料として、また書法の 墓門には墓表を立て、墓碑・墓誌をしるし、石に刻 墓に封ず」というのは、おそらく事実ではあるまい はない。〔書、武成〕に「箕子の囚を釋し、此干のされる。墓は古くは地下に作られ、封土を盛ることされる。墓は古くは地下に作られ、封土を盛ること 墓室の意であろう。幽暗の意とも、寂寞の意とも解 いるものがあり、亜(亞)は玄室、犬は犬牲、莫は図象のうちに、亞字形中に犬、また莫の形を加えて 世界とする通念からいえば、昏暮説がよい。金文の はか・おくつき 意がある。〔説文〕 一三下に「丘なり 声符は莫。莫に夕暮・暗黒の

さぐる・とる・うつすボ・モ

捉・摸倣にはみなこの字を用いる。横掏とは手さぐ用が異なる。模はさぐりとる意に用い、摸索・摸 声符は莫。暮の異体の字であるが、字の慣

おボ やゆび

拇

は姆師・姆傅、その教えを姆教という。

また保姆ともいう。女師として教戒を主とするもの

て人を教ふる者、

姆

うば・あによめ

形声

声符は母。母がわりのうばな

いるものであるから、士でも土でもない。

△は牡器の形を記号的に用いて

解する説もあるが、

に引く文には「雄なり」の語がある。土の形を士と いる。〔説文〕ニ下に「畜父なり」とし、〔音義〕類

にそれぞれ匕・丄をつけて、その牝牡の別を示して

十にして子無く、出でてまた嫁せず、能く婦道を以 り」とあり、「儀礼、士昏礼、注」に「婦人、年五り」とあり、「儀礼、士昏礼、注して「婦人、年五とおり」 ニニドに「女師な

今時の乳母の若し」とみえる。

「將指なり」とあり、 ****** 形声 声符は母。 | ボ 牡 姆 声符は母。〔説文〕一ニ上に 親指をいう。〔左

拇

姥

募

菩 墓

摸

摹 暮〔莫〕 謨 簿[簿] ホウ

りで人のものをすりとるものをいう。

慕 14 したう・おもう・ならう

† o † ° °

「快が麻慕をおほいにす」、「荘子、徐无鬼」「蟻のである。思慕の義には、「孟子、万章、上」「人少である。思慕の義には、「孟子、万章、上」「人少のある。思慕の義には、「孟子、万章、上」「人少のある。思慕の義には、「五子、海・上」「大変の意味が、「大慕元成す」など、みな護の意味が、「大源を表しては則ち父母を慕ふ」、「大変を表しています。」 するが、金文には慕を「謨る」の義に用い、「禹鼎引形声 声符は莫。〔説文〕一〇下に「習ふなり」と 羊肉を慕ふは、羊肉羶ければなり」など、戦国期以 後の使いかたである。

摹14 うつす・ならう・かた

摸範とすることをいう。「後漢書、蔡邕伝」に、邕端・「規るなり」とあり、規摹すること、「ない」とあり、規摹すること、「おり」とあり、規學すること、「説文」一二上に 外に立てると、これを観て摹写するものが雲集し、 が六経の文字を正定して、その自書の碑刻を太学門 また。 またまその車乗が日に千余両に及んだという。 摹搨・摹 という。 帖・臨事などはみな規摹すること、その書を摹本

暮≒〔莫〕□ くれ・ひぐれ・よる・おそい

**

ない。な

形声 声符は莫。莫は草間に日の入る形。暮の初

公の名を、

り。日の茻中に在るに從ふ。茻は亦聲なり」という。文。〔説文〕一下に「莫、日まさに冥れんとするな 草原に日が没しようとする形であるから、その下に 意に用いられるようになって、暮夜の字が作られた。 また日を加えるのは繁文であるが、莫が多く禁止の に「烈士暮年 肚心已まず」の句がある。 人の晩年もまた夕暮である。魏の武帝の〔碣石篇〕

謨 17 はかる・はかりごとボ

ŋ 謀と通ずる字であるが、謀は神に祈り謀ること、謨 こと)を蓋ふことを謨るは、みな余の績だり」と戸に埋めることに成功したと考えて、「都君(舜の に、瞽瞍(舜の父の名)の少子である象が、舜を井 本来は悪だくみをいう字であった。 をいう。〔爾雅、釈詁〕に「謨は僞なり」とあり、禹謨〕〔皋鞠謨〕などがあり、みな君臣相謨ること為違。 前条の謀に「難を虞るを謀といふ」とみえる。 爲 三上に「議謀するなり」とあ 形声 声符は莫。〔説文〕

簿 19 [簿]19 ちょうめん・しるす

形声 旧字は簿に作り、溥声。尊に薄小なるもの

書をいう。簿書は〔周礼〕に「要會」とよぶもので、の意があり、竹札の薄小なるもの、それを綴った簿 籍の意となる。官簿ももと簿牒形式のものであった。それを簿冊にして整理したものが簿、のち簿書・簿 漢簡中に司馬遷の官簿が残されている。 もと銭穀の出納などをしるし、漢の木簡の類である。

ホウ

2 つつむ・はこホウ(ハウ)

このままで用いる例はない。包・匈・匍匐などの人の曲れる形に象る。包裹する所あるなり」という。たいる形。[説文]九上に「裹むなり。(字は、この形に従う。 象形 人の側身形。人が身をかがめ

2 方形の容器・はこホウ(ハウ)

爲り、狀は簋の如くこして、うこに「竹簋方なるものは、器名なり。竹を以てこれをに「竹簋方なるものは、器名なり。竹を以てこれを 重文として籀文の字形を録するが、それは金文の 象形 竹を編んだ器の形である。〔儀礼、聘礼〕「夫人、下簠の従うところと同じく、曲形といわれるもので、 大夫をして勞せしむるに、二竹簋方を以てす」の注 くるの器なり。 狀は簋の如くにして、方なり」という。 方形の容器の形。〔説文〕二三下に「物を受 象形。讀みて方の若くす」とあり、

實際藝を作る」とあり、「書、康誥」の「小子封」はない。とするが、金文の字形では、禾穂が上にするなり」とするが、金文の字形では、禾穂が上に「艸盛んにして丰々たるなり。生に從うて、上下達するなり」とするが、金文の字形では、禾穂が上に「艸盛んにして丰々たるなり。生に從うて、上下達するなり。生に從うて、上下達するなり。 祀といわれるものである。祭祀名としての口は、そ 祭祀名を冠した名である。のちに肺・閉・繋また報形に作る。匚はその祭祀の名で、報乙・報丙はその の祀所の区画の象形。簠の従うところは竹器の象形 である。『は卜文において報乙・報丙・報丁など先円く、簠は長方形であるから、竹簋方とは簠のこと 草木のさかんに茂るさま。【説文】六下に 匚中に乙丙丁をしるして区・医のような (徴)といい、また敖・傲という。いずれも外族をする呪儀であり、長髪の巫祝者を殴つことを徴 巫女を殴つことを微(微)といい、邪霊の力を微くいとをなった。 若いにその邪霊を追放しうるとされたからである。若いにその邪霊を追放しうるとされたからである。若い 罪によって国外に追放することを、放という。放は 用いられるのは、方が架屍祭梟(さらし首)の俗 架屍の象である方が、方外の国や遠方・方位の意に 方は卜辞において土方・馬方・召方など、圏外異族 では、方系統の諸字の構造を説くことができない。 ような呪儀において、架屍を用いるものを徼とい 懲らしめ、これを威圧するための呪儀である。この 方を殴つ形。架屍を殴つことによって、共感呪術的 を示し、これをその境界の呪禁としたからである。 の国をよぶ名であり、また四方遠方の称に用いる。 解したが、それも字形と合わず、かつ方舟・耒耜説 いものであり、徐仲舒は方を耒耜(すき)の形とう。しかしト文・金文の字形は、舟の形とはしがた

であるから、もと別の字である。

草のさかんなさま・みめよいホウ・ボウ

#

儀を示す字であり、そのことから方の諸義が引伸さ 法であった。断首葬は身首異所、首十個、身十個ず 的な意味から、直接に導くことのできるものである れるが、方域・方向・方法などは、この字のもつ呪 にも及ぶことがある。方は架屍、放は邪霊追放の呪 つを、それぞれ一坑に収め、ときに数十坑・数百体 の殷墓に数多くみられる断首葬も、同様の呪禁の方

包 (包)5 はらむ・つつむ・いれるホウ(ハウ)

るが、この日は十二支とは関係がない。包・卆・身当時の俗説によって、包が日に従う所以を説いてい起る。子は人の生るる所なり」とし、なお以下に、 から、 括・包囲の意に用いる。已は腹中の子の象形である 中に在り。子の未だ成らざる形に象る。元气は子に ø はみな懐妊の象形字である。包蔵の意よりして、包 日の形に作るべきである。 文〕九上に「人の裏好するに象る。巳、象形 人の腹中に子のある形。〔説

6 にかよう・さまようホウ(ハウ)

豆に盛る形である。また豊満なさまをいう。といれている。奉は禾穂を奉ずる形、豊(豊)は禾穂をにあたる。奉は禾穂を奉ずる形、豊(豊)は禾穂を

かた・さらしもの・とつくに・みちホウ(ハウ)

・オサ

ずずす

また。 われるものであるが、辺の正字である邊は、その鼻われるものであるが、**。 この呪儀の声義を承ける。それは多く辺徹で行な

竅を上にして架した祭梟の俗を示す字である。ゆ

る」「皦か」「竅へる」など、敷に従う字は、みなので、境界における呪儀を示し、「徼める」「邀へので、境界における呪儀を示し、「徼める」「邀へる」、*****

仿造、宋刻の様式をとる版本を仿宋本という。 係があろう。古式にならうのを仿古、まねて作るを效(効)、まねる意であるが、それは仿仏の訓と関 炒 惶という畳韻の連語による訓である。また仿效は倣紫に作る。またさまようとする訓もあり、それは仿紫にかるの連語による訓である。字はまた彷彿・髣わち双声の連語による訓である。字はまた彷彿・髣 形声 似るなり」とするのは仿仏の義。すな 声符は方。〔説文〕八上に「相

ホウ 丰 方 包(包) をもって、方を方舟と解する一証とするものであろ

形に象る」とし、

重文として防を録する。その字形

をいう。それが聖所を防禦する方法であった。安陽防は神梯の象である自の前に、その呪禁を施すこと

で、これを神の陟降する聖所に施すを防という。

による呪禁は、あらゆる聖所に対して施されるもの えに方と辺とには、共通義が多い。方のような祭梟

に「併せたる船なり。兩舟の、省きて頭を總びたるいる形で、これを境界の呪禁とする。[説文] ハ下

架屍の形。横にわたした木に、人を架けて

おろか・あきれるホウ(ハウ)・タイ

「呆気」にとられるという。 タイの音でよむ。わが国では癡呆・阿呆のように用おろかなことを「朱傪」「朱打豫」のようにいい、おき。 保の省文で、保の音でよむ。元の俗語に、形声 ** い、また「呆れる」とよむ。 ひどく呆れるようすを、

あう・さからう

その人逢俉す」とあり、〔索隠〕に「相逢うて驚く 書」に天地の変を述べ、「鬼哭すること呼ぶが若く、は、季悟・逢俉の意に解したもので、〔史記、天官 神気を逢々という。〔説文〕五下に「牾ふなり」と えるを奉といい、その神気にあうことを逢といい、 の上に神の下降する意を示す。山ならば峯、神を迎 なり」とする。当時の俗語であろう。 つ枝の形。久は下降する足の形。木立会意 久と丰とに従う、丰は木の秀 夕と丰とに従う。丰は木の秀

さまよう・ほのかホウ(ハウ)

また彷彿の意に用い、揚雄の〔甘泉の賦〕の〔李善彷徨す〕など、〔荘子〕にこの語を好んで用いる。 側に爲すなし」、〔大宗師〕「茫然として塵垢の外に さまよう意。「荘子、 注〕に〔説文〕を引いて、「彷彿、相似て視ること 声符は方。〔玉篇〕に「彷徨なり」とあり 逍遥遊」「彷徨乎と してその

双声の連語である。 穠 かならざるなり」という。彷徨は畳韻、彷彿はstr

芳 かおり・かんばしい・はなホウ(ハウ)

罗 「固に衆芳の在るところ」とは、群賢をいう。 芳書・芳情・芳年のようにいう。〔楚辞、 いう。芬芳は双声の連語。人事の上に移して芳声・ 艸なり」とあり、花の芬香あるものを 声符は方。〔説文〕一下に「香 離騒

邦、「邦」、 なか、「かか」

出

邦は封建、国(國)は城邑。邦は領土をいい、国は 形に作り、封樹の意を示す。〔周礼、大宰、注〕に 形声 い字である。 国都をいう。〔説文〕に録する古文の字形は、ある 「大なるを邦といひ、小なるを國といふ」とするが、 金文の字形は、丰の部分を土主(土地神)と若木の なり」とし、前条の邑にも「國なり」とあって同訓 いは뼯の初文であろう。〔魏石経〕の古文にみえな 旧字は邦に作り、丰声。〔説文〕六下に「國

咆 **ほえる・なく・いかる** ホウ(ハウ)

声をいう。動物のたけり吼える声を咆吼、人のはげ しく怒り吼えることを咆勃という。 ø に「嘷くなり」とあり、動物の吼える 形声 声符は包(包)。 [説文] ニ上

うける・たてまつる・たすける・つかえるホウ

す」「二弄す」のように用いるが、これは楞示の樹字形があり、境界の画定のとき、その地に「一弄は、神明の祐助を受ける意。〔於氏盤〕に奉に近いは、神明の祐助を受ける意。〔於氏盤〕に奉に近い [周礼、大司徒]「五帝を祀り、牛牲を奉ず」の注に いう。〔左伝〕僖三十三年「天、我に奉ずるなり」、「進むるなり」、「広雅、釈詁〕に「獻ずるなり」と 「承くるなり。手に從ひ、廾に從ひ、丰聲」とする く頂戴したものである。 のようにいう。月俸ももと月奉としるし、ありがた る語であるが、のち尊上に対して奉御・奉行・奉職 封に近い字義のものであろう。奉はもと神事に用い 木をそこに樹てることで、奉献とは字義が異なり、 が、丰を捧げている形であり、神明に奉献する意。 を迎え神に献ずることを奉という。〔説文〕三上に 神霊のくだる形である。それで丰を両手で捧げ、神 の形で神の憑るところ。拳はその枝に 丰と奴とに従う。羊は秀つ枝

宝。〔寶〕20〔宋〕10

I 爾爾角

う。〔説文〕セ下に「珍なり」と訓し、珍宝の義と 玉や貝を供薦する形で、その供薦するものを宝とい 蘇器の銘には「寶隣彜」のように、その器に宝を冠います。 するが、もと宗廟に供薦する貴重なものを宝という。 旧字は寶に作り、缶声。一は廟所。廟所に

「寶龜」を「葆龜」に作り、「留侯世家」に「寶祀」用」を「保門」に作る例が多い。〔史記、楽書〕に用」を「保段」に作り、他に「寶と」を「保設」に作り、他に「寶」を「保設」に作り、他に「寶」を「保設」に作り、 を「葆祠」に作る。葆もまた通用の字である。 もと保に従う字であろう。**・宝は通用の字で、 案赤刀」の文を引く。今本に「陳寶」に作る。案は とす。 七下に「藏するなり」と訓し、[書、顧命] の「陳 七下に「藏するなり」と訓し、[書、顧命] の「陳 墨・宝章のようにいう。字はまた案に作り、[説文] い、天子の位を宝位・宝祚、尊敬の語に用いて宝宝として宝貴とするものに冠して、宝玉・宝剣とい宝として宝貴とするものに冠して、宝玉・宝剣とい していうのが例であり、廟中の祭器をいう。のち財

くりや ハウ)

刃物を庖丁という。 庖は料理人、丁はその名である。 いま料理に用いる 主〕に文恵君のために牛を解く庖丁の話がみえる。 解くべき肉を庖というのであろう。 [荘子、養生 言たる苞なり。肉を裹むを苞苴といふ」とするが、 遠ざかる」とみえる。「鳥れ、庖人、注〕に「庖の「孟子、梁惠王、上」に「ここを以て君子は庖廚に「鳥れ、 しょいますはをいう。」とあり、料理場をいう。「鳥れ」 声符は包(包)。〔説文〕九下

抱。〔抱〕。〔褒〕』 いだく・まもるホウ

抱をその「或る體」の字とする。〔釈 名、釈姿容〕くことを抱という。〔説文〕ハ上に寝を正字とし、くことを抱という。〔説文〕ハ上に寝を正字とし、 は腹中に子のある形。子を抱 声符は包 (包)。包

庖

抱[抱][蹇]

拋[抛]

放

朋(朋) いう。傲に放の字形を含む。辺徼におけるその儀(微)、長髪のものを殴つ儀礼を徴(微)、また傲と放とは追放の儀礼をいう。巫女を殴つものは微 を加える対象としての架屍である。〔繋伝〕に「古 下に「逐ふなり」と訓し、方声とするが、方は殴撃下に「逐ふなり」と訓し、方声とするが、方は殴撃 って邪霊を放逐する呪儀を、放という。〔説文〕四のて邪霊を放逐する呪儀を、放という。〔説文〕四くな。 方と支とに従う。 方は架屍の形。これを殴い

来の樸素を保つことを「樸を抱く」という。同じ用いかたである。〔老子〕第十九章に、 ろをいう。心を抱く、志を抱く、罪を抱くなども、 があり、声義が近い。懐抱とはまた、心に思うとこ に「保なり」とし、保もまた懐抱する形に作るもの 人間本

拋。「拋」7 なげる・なげうつ・すてるホウ(ハウ)

行なわれた。わが国の瓦投げの類であろう。いま拋 擲・拋物線などの語に用いる。 では、寒食の日に拋堶という瓦石をとばす遊びが り、酒宴中に曲調に合せて毬を投げる遊び。また宋 以後に至って用例のみえる字で、唐に拋毬楽があ 柳 つるなり」とみえる。赲はものを投擲する形。を示さ 「撃つなり」、〔説文新附〕一二上に「棄 形声 声符は朸。〔広雅、釈詁〕に

放 8 はなつ・ほしいままにするホウ(ハウ)

法[灋]

の辺境の呪鎮とする。放とは、祭梟(首祭)をもをしるし、「驩兜を崇山に放つ」とあり、放ってそをといるし、「驩兜を崇山に放つ」とあり、放ってそまなど。」に、四凶を四方に放竄する神話声義を承け、辺黴における追放の儀礼に関する字で声義を承け、辺黴における追放の儀礼に関する字で声義を承け、辺黴における追放の儀礼に関する字で声義を承け、辺黴における追放の儀礼に関する字で って境界の呪鎮とする儀礼をいう。 に従う。敫の形に従う徼・邀・竅・檄はみなその礼を徼といい、放の上に頭骨の白を加えた敷の形れを徼といい、放の上に頭骨の白を加えた敷の形

朋。(朋)。 貝のつづり・とも・ホゥ なかま

爾

朋とは一対をなすもので、賓主に供 も一連二系の貝朋を荷なう形の字。 う。朋友の朋は棚に作るものが正字であるが、それ 字を鳳の古文とするが、別の字である。金文に貝を 数えるとき貝朋、 それを荷なう形のものがある (挿図)。 [説文] 四上は 象形 貝を綴った形。一連二系で、金文の図象に , また貝十朋・貝三十朋のようにい

法。[灋]1 のり・のっとる・てだてホウ(ハフ)

引伸の義である。

する両樽を朋酒という。朋友はその

は神判に用いる神羊で、獬廌とよばれるもの。**** 会意 1 正字は灋に作り、 た。 灣灣

鴟夷子皮を繋けて去ったことが、〔墨子、非儒〕にさらに他国に赴くとき、世話になった田常の門にことが、亡命者の道であった。孔子も斉に亡命し、ことが、亡命者の道であった。孔子も斉に亡命し、 斉の国に亡命したが、大祓の鴟夷と同じ名を用いる たを辞し、自ら鴟夷子皮と名を改め、海上よりして終王句践につかえた范蠡は、ことの成るや越王のも終王句践につかえた范蠡は、ことの成るや越王のも諫めて殺され、鴟夷に包んで海に投棄された。また 礼を示す字であった。春秋末の伍子胥は呉王夫差をの意とするが、これは古代の神判における大祓の儀 觸れてこれを去らしむる所以なり」とし、水を平準を平らかにすること水の如し。腐は不直なるものに 法である。〔説文〕一○上は灋字条に「刑なり。これ れる。のちその神羊の形である廌を省略したものが、 うな法式によって、八重潮の潮のかなたに遠く流さ を欺き、神を穢したものとして、わが国の大祓のよような大きなものを用いたのであろう。敗訴者は神ような大きなものを用いたのであろう。敗訴者は神 の獣皮は鴟夷とよばれるもので、馬を空抜きにしたな獣皮に包んで投棄することを示すものがある。そ に投棄することを示す字で、金文には、これを大き れた盟誓とを、敗訴者の提供した神羊とともに、水 示す。すなわち灋の字形は、その敗訴者と、破棄さ 詛盟に虚偽があったとして蓋を去り、 盟誓の器の形であるIDの、蓋をとり去った形。その 面形。口はその審判のとき、自己詛盟をして誓った 大と口とに従うて、大はその神判に敗れたものの正 のち刑罰の法・法則・法制の意となり、法式・規範 を江海に投ずる、古代的な刑罰の法を原義とするが、 みえる。それが亡命者の儀礼であった。法は犯罪者 破棄する意を

の意となる。金文では灋を「貯が命を灋(廃)することがれ」と廢(廃)の意に、また〔大盂鼎〕「先こと勿れ」と廢(廃)の意に、また〔大盂鼎〕「先王を灋保す」と法則の意とする。〔史娘設〕に「灋・王を灋保す」と法則の意とする。〔史娘設〕に「灋・王を灋保す」と法則の意とする。〔史娘設〕に「灋・天・任法〕「それ法なるものは、上の民を一にし、下を使ふ所以なり」という。法術的な観念は戦国期に入って起り、[荀子〕〔韓非子〕に至って完成された。のち技術的なものをもいい、技法・書法のようにいう。灋の字形・字義の推移のうちに、古代的な法観念の展開をたどることができる。

泡8 (泡) 8 あわ・うたかた

形声 声符は包(包)。包に包みこうに、泡沫は最もはかないものにたとえる。

炮のあずる・やく

> 字、傲ることをいう。 字、傲ることをいう。 字、傲ることをいう。 字、傲ることをいう。

祭の名・神をさがしまつるホウ(ハウ)

古くは所定めぬ神が多かったのであろう。名を問い、その祀るべきところを問う話が多いが、ある。わが国の〔風土記〕などに、あらわれる神のある。わが国の〔風土忠〕などに、あらわれる神のは方に従い、その声義を受けるが、匚がその初文で

胞。【胞】の えな・はらから

たさい。 ある形。〔説文〕九上に「兒の生るるのを、 では、とあり、胞衣をいう。この胞衣を地中に 要なり」とあり、胞衣をいう。この胞衣を地中に 要なり」とあり、胞衣をいう。この胞衣を地中に をなったものに、甘草などを和して楽用とするものを、 のなる。

包 9 むしろぐさ・つと・つつみ・むらがる

体 10 ふち・たまもの

形声 声符は母。[玉篇]に「俸は小なる鬼」とし、また俸給をいう。俸禄の字はもと奉禄に作り、奉は神霊や尊貴に奉ずることを原義とする。[漢書、宣帝紀] 神 爵三年に「今小吏みな事を勤むるも奉祿薄し。その百姓を侵漁すること冊からんと欲するも難し。それ吏百石以下の奉に十の五を増せよ」とあり、五割の増俸を命じている。薄小が諸悪の根源であった。賃上げ問題の歴史は、紀元前に遡る古いものであることが知られる。

が たすける・とも

南角角角 爾爾

形声 声符は別(朋)。別は貝を一連二系に綴ったもの。側は朋を負う形であるが、金文では倗友の意。注に僩に作るものがあるという。金文に朋友の意。注に僩に作るものがあるという。金文に朋友の意。注に僩に作るものがあるという。金文に朋友を伽容・倗友に作り、「娜友婚媾」と連ねていうことが多く、倗友とは同族中の同輩のものをいう。朋党は倗党。もと血縁者をいう語であった。〔説文〕に字を鳳に従うとするが、風の初形を誤り解したもで字を鳳に従うとするが、風の初形を誤り解したもので、全く別の字である。

倣 10 ならう・まねする・よる

人を殴つ呪儀から出ている字である。 大を殴つ呪儀から出ている字である。 これが、 はは衆死を殴って、 ないで、 放に依倣の義が含まれて用いる共感呪術の方法で、 放に依倣の義が含まれて用いる共感呪術の方法で、 放に依倣の義が含まれて用いる共感呪術の方法で、 放に依倣の義が含まれて用いる字である。

峰10 [峯]10 みねり

砲10【砲】10【職】21 おおづつ

震は、みな爆裂音の擬声語である。 電は、みな爆裂音の擬声語である。 で高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 で高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。火砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。水砲は南宋、金元 での高格を破壊した話がある。水砲は南宋、金元 での際に作られ、はじめ霹靂砲といった。砲・礟・驛

俸 倗 倣 峰[峯] 砲[砲][礟]

胞(胞)

苞

10 ふね・もやいぶねホウ (ハウ)

三恕〕に「舟を紡べず、風を避けざれば、則ち以て文、霝雨石〕にみえ、両舟を繋ぐ意。〔孔子家語、頭の意とする。舟を榜ぐ人をいう。舫の字は〔石鼓頭の意とする。舟を榜ぐ人をいう。舫の字は〔石鼓を伐たしむ〕の〔繁注〕に、舫を榜人、すなわち船 〔史記、張儀伝〕に「一舫に五十人と三月の食を載渉るべからず」とあり、これによって舟が安定する。 令〕のことで、「六月、漁師に命ぎで蛟(水中の竜)とは何の関係もない。〔明堂月令〕とは〔礼記、月との声義を承ける字とするが、方は架屍の形で、舟 [説文〕は方八下に「倂せたる船なり」とし、舫を 方には比方、すなわちならべる意がある。 「明堂月令に曰く、舫人の水に習ふ者なり」とする。 す」とあり、その積載力をも多くすることができた 声符は方。〔説文〕ハ下に「船なり」とし、

袍10 わたいれ・ふだんぎホウ(ハウ)

縕袍はふだん着のどてらをいう。清代に礼服に用い か」と、子路が孔子にほめられている一条がある。を衣たる者と立ちて恥ぢざるものは、それ出なる [論語、子罕]「触れたる縕袍を衣て、狐貉(の裘)ことからいえば、絹わたを用いたものであろう。 た筒袖の長衣を、袍子という。 に「襺なり」とあり、字が繭に従う形声 声符は包(包)。〔説文〕八上

> 覂 おおう・くつがえる・とぼしいホウ

ている。 「説文」七下に「覆ふなり」とし、「広雅、釈詁」に 土をかけて覆う意で、***へごう義が近い。 ・芝は屍体。これに ることである。乏に従う字は、みなその声義を承け 「棄つるなり」というが、もとは変死体を覆い埋め

匏

孔子の語ともみえないはしたない語である。〔陽貨〕 馬んぞ能く繫りて食はれざらんや」というのは、 には後出の資料が多いようである。 る意。「論語、陽貨」「吾豊匏瓜(苦瓜)ならんや。 すべきを取るなり」と、包の声義を取るとする。夸 は刳り抜く器であるから、瓠を刳り抜いて匏壺とす 形声 声符は包(包)。〔説文〕 九上

崩"(崩)"

あり、〔詩、小雅、天保〕に「南山の壽の如く 簥(礼記、曲礼、下〕「天子の死するを崩といふ」とであるから、その聖域の異変をいう字であろう。 〔説文〕に「山壞るるなり」とあって、山崩れの字鳳を朋とする誤った字形解釈から生れた字である。 とし、古文の字形は旨(阜)に従う。自は神梯の形 声符は朋 (朋)。 [説

ひさご・ふくべかり(ハウ)

に「瓠なり」とし、「その、物を包藏

くずれる・たおれる・やぶれるホウ

文〕丸下の字は鳳形に従うが、

けず崩れず」という。

捧 11 ささげる・もつ

[釈 名、釈姿容]に「逢なり。兩手相逢うて以てこ」。 形声 うこと。笑いこけることを捧腹絶倒という。 の美しさをまねる醜女の話がみえる。また捧腹は笑 い。捧心は悲しむ。〔荘子、天運〕に、西施の捧心れを執るなり」というのは、音義的な解釈にすぎな 声符は奉。奉に捧持の意があり、その初文。

掊 さく・かきとる・へらすホウ(ハウ)

「孟子、告子、下」に「培克、位に在り」とは聚斂かきとる意で、当時の用法である。[荘子、胠箧]・計を掊き衡を折る」、また〔逍遥遊〕「吾その用無「斗を掊き衡を折る」、また〔逍遥遊〕「吾その用無にした。」 はない 当時の用法である。[荘子、胠箧]・はない。 当時の用法である。[荘子、胠箧]・はない。 当時の用法である。「注言ない。」とは、塩田の塩を水に入りて鹽を取るを掊と爲す」とは、塩田の塩を水に入りて鹽を取るを掊と爲す」とは、塩田の塩を水に入りて鹽を取るを拾きる。 の臣。「掊る」ように苛税をとりたてるものをいう。 〔説文〕三上に「把るなり」とし、また「いま鹽官、 形声 熟して、剖ける状態のものをいう。 声符は音。音は木の実などが

京 11 にる (ハウ)

さす」とあり、烹鮮という。「史記、越世家」に 章に「大國を治むるには、小鮮(小魚)を烹るが活 で「大國を治むるには、小鮮(小魚)を烹るが活 で、「大國を治むるには、小鮮(小魚)を烹るが活 で、「老子」第六十 「狡兔死して走狗烹らる」の句がある。 ることもあり、そのときには大きな鼎、鼎鑊を用 人を烹殺す

の句がある。 た。文天祥の正気歌に「鼎鑊甘きこと飴の如し」

The state of the s

烽11 [烽]15 のろし・とぶひ

そのため国を滅ぼしたと伝えられる。 る。周の幽王は褒姒の歓心を買うため烽燧を弄び、まっぱりょう。そうないまり、唐の兵部烽式に詳しい規定があは棄市す」とあり、唐の兵部烽式に詳しい規定があ という 燧を撃ぐるものは罰一斤八兩、故に擧げざるもの 辺境の急は、烽火台ののろしによって知らされ、高辺境の急は、烽火台ののろしによって知らされ、高表なり。邊に警あるときは、則ち火を擧ぐ」という。 櫓を設けて遠望に便した。〔晋令〕に「誤って烽 字を缝に作り、逢声とし、「燧燧、候 唐の兵部烽式に詳しい規定があ 声符は拳。〔説文〕「○上に正

対

静祥

13

道

逢 11

あう・まみえる・むかえる

う訓である。

なひ」をいうのが原義であり、訪の字義によくかな が字の原義であった。国語の「訪れ」とは神の「音 を求めて祭ることを訪といい、その神意を訪うことを、聖職者や長老に謀ることを訪という。神の所在ど、聖職者や長老に謀ることを訪という。神の所在

萌ュ きざす・めばえ・たみホウ(ハウ)

語の萌黄は、黄と青との間色である。わが国では萠 て明に従う。明母の字に亡・戊などの音がある。国〔説文〕のあげる小篆も、漢碑にみえる字形もすべ〔説文〕のあげる小篆も、漢碑にみえる字形もすべ の字を用いることがある。 農民のことを萌黎という。字は古い字形がなく、 意。萌生・萌動のように用いる。は・虻に仮借して、に「艸木の芽なり」とあって、萌芽の500~ 形声 声符は明(明)。〔説文〕-下 うのは、もと「逢魔時」のなまったもので、夕闇にを、わが国で「おほまどき」「茫莽時」のようにいき事にも用いるのは、のちの用法である。夕暮どきる事にも用いるのは、のちの用法である。夕暮どきるは、子孫それ吉に逢はん」のように、

意に用いる。逢迎は迎合の意。〔書、洪範〕に「身

逢ふ」のように用いるのが原義に近く、

のち遭逢の

神怪の類に出逢うことをいう。「殃に逢ふ」「凶にみえ、不若は邪神。逢うとは、不若や螭魅罔両など、

若に逢はず。螭魅罔兩も能くこれに逢ふ莫し」と呼をを知らしむ。故に民、川澤山林に入るも、不神姦を知らしむ。故に民、川澤山林に入るも、不もと神怪変異に逢う意。〔左伝〕宣三年「民をして

〔説文〕ニトに「遇ふなり」と遭遇の意とするが、

声符は拳。拳は木の秀つ枝に神の降る形。

訪ュ とう・はかる・たずねるホウ(ハウ)

とする。汎訪は双声の訓。もと神意に踏るあり、〔説文〕三上に「汎く謀るを訪 ホウ 烽(烽) 声符は方。方に方くする意が 萌 訪 逢

報 12 むくいる・こたえる・しらせる・まつりホウ(ハウ)

まぎれて魔が出没するものと考えられていた。

彭

〔国語、晋語〕「文王、蔡原に諏ひ、辛君に訪ふ」なに謀るなり」という。〔書、洪範〕「箕子に訪ふ」、ことをいい、〔詩、周 頌、訪落、序〕に「嗣王、廟ことをいい、〔詩、周 頌、訪落、序〕に「嗣王、廟

上から抑えて、服従させる意。手かせを加えて圧服 会意 幸と長とに従う。幸は手のかせ、長は人を

の古代にもあったのであろう。 産土神信仰と同じく、地神と氏神との混同が、 祖先に感謝する最も重要なものとされた。わが国の 反る所以なり」とあり、その祭は報本反始、天地とか、まれん 『私の類を報、通知書の類を報単という。「礼記、て、新聞を報、通知書の類を報単という。「礼記、 報仇の意となり、報酬の意となる。報道の意より 祀る祭祀の名。のち報告・報知の意となり、報徳・ある。〔国語、魯語〕「有虞氏、報ず」はその遠祖をに報ず」とは、返礼として贈るもので、資報の意でに報ず」とは、返礼として贈るもので、資報の意で 祀することをいう。〔鴉生殷〕「伯氏則ち璧を琱生た「これ丁公に報ぜん」と、その恩寵にこたえて報 の文報に揚ふ」とあって、父祖の恩寵の意とし、 いる。〔令殷〕に「令(人名)、敢て皇王の室と丁公いる。〔令殷〕に「令(人名)、敢て皇王の室といることであるが、金文には字を応報・報賞の意に用ることであるが、金文には字を応報・報賞の意に用 ち判決の意である。報とは報復刑的にその当を加え 當を奏す」「廷尉の當、是なり」という当、すなわ (当)とは〔史記、張 歌之伝〕「廷尉(検察の長官)(当)とは〔史記、張 歌之伝〕「廷爲解するなり」という。*卒 は執の従うところ、當服する人なり。卒に從ひ、艮に從ふ。艮は罪に「罪に當る人なり。卒に從ひ、 罰であるから「報いる」意となる。「説文」一〇下に するのは、刑罰に服させることであり、報復的な処 ま

彭12 つづみのおと・さかん・ふくれるホウ(ハウ)

七八九

ホウ 蜂[鑑] 裒 豊(豐) 飽[飽]

あらわす。「説文]五上に「鼓の聲なり」とし、彡彩などを示す記号に用いられ、彭とは鼓声の震動を な線を重ねたもので、その震動音を示す。鼓声のさ 声とするが、声が合わない。かつ彡は長短の断続的 あらわす。〔説文〕五上に「鼓の聲なり」とし、 かんなことをいう擬声的な語である。ト文・金文で 賢臣で、君を諫めて聴かれず、水死したと伝えられ れる人で、〔史記、楚世家〕に陸終の第三子として みえ、七百歳の寿を保ったという。また彭咸は殷のみえ、七百歳の寿を保ったという。また彭咸は殷の を司るとされる十巫のうちの巫咸は、おそらく彭楚巫の守護霊的な神巫の名であると思われる。太陽 歌われているが、彭氏は古い聖職者の家柄であろう。 る。〔楚辞、離騒〕にも、その指標とする人として , ¥

棚 たな・さじき・ひさしホウ(ハウ) 咸とも関係のあるものであろう。

誤篇」に「樓閣なり」とあるのは、いわゆる複道の なら 屋根のある廊下である。 なり」とあり、また閣ともいう。[倉形声 声符は朋。[説文] 六上に「様

焙 12 あぶる・ほうじるホウ・ハイ

形声 にあぶって、ふくらむことをいう。焙茶はほうじ茶。

る。[茶経]に焙茶の語があり、白居易の詩に「夜茶に関して用いられ、茶とともに輸入された字であ 焙炉・焙籠は茶などを乾かす紙張りの器。この字は 火、焙茶香し」の句がある。

峰13「遙」23 はち

敷も、みな能く人を害す」とあり、小さな虫でも軽なり、を蟄すものなり」という。〔国語、豊語〕「帆蜿織 みな人のようすをなぞらえていう。 という。蜂屯・蜂午は雑踏するさま、蜂房は蜂の巣。んじがたいことをいう。一時に群起することを蜂起 不 形声 声。〔説文〕一三下に「飛蟲、 正字は蠭に作り、逢

裒 あつめる・おおい・とるホウ

で、襟を重ねることをいう。〔爾雅、釈詁〕に「聚会意 衣と臼とに従う。衣の襟を両手で合せる意 苛税を徴することを、裒剋また裒刻という。 野に遺棄された多数の戦死者を、兄弟ならばその屍 雅、常棣」「原隰に裒まるも「兄弟求む」とは、むるなり」「多きなり」とあり、集まる意。〔詩、むるなり」「多きなり」とあり、集まる意。〔詩、 を求めあるくであろうという。人の衣を剝ぐように 原

豐豆 對豆 整 业 型兒

雪 品品品

象形 類を盛るもの。上部を声符とする説は「儀礼、大射 に「豆の豐滿なるものなり」という。豆は黍稷 という一説をあげる。これは〔燕礼〕や〔時礼〕にる。また「一に曰く、鄕飲酒に豊になるものあり」 声の字としているが、全体を象形とみてよい字であ 儀、鄭注〕など古くからあり、[唐本説文]にも形 豊というとされているが、そのような形の遺器はな それで酒戒のために豊侯の像を台基とし、その器を ある。豊侯は酒に淫して国を滅ぼした人と伝えられ、 みえる豊のことで、酒杯をおく台、いわゆる反坫で 略字に用いる。字は豊満盛大の意をもち、豊穣・豊 豊容のように用いる。 年のほか、他に及ぼして豊屋・豊功・豊祚・豊碑・ い。豊の字はもと醴酒の醴の字であるが、 豆中にものを盛って入れた形。〔説文〕五上 いま豐の

飽は(飽)は あり(ハウ)

幒 際零

離、事類」に「飽學して才餒うる者あり」という用いて、人が酒食に厭足することをいう。「文心が満足されることをいい、飽は飽食・酔飽のようにが満足されることをいい、飽は飽食・酔飽のように 形声 語があり、飽学は必ずしも才を助けるものではな 声符は包(包)。包に盈満の意がある。〔説

褓 むつき・かいまきホウ(ハウ)

〔伝〕に「褓なり」という。すなわち産衣である。 出生のときは「載ちこれに裼を衣せしむ」とあり、となる。〔詩、小雅、斯干〕は室寿ぎの詩で、女子となる。〔詩、小雅、斯干〕は室寿ぎの詩で、女子 褓は保の声義を承ける字である。 なう。緥ならば、子を負うもの、 として身を包むものであるから、裸がその字義にか 字。「説文」「三ょには探を正字とするも、もと霊衣 声符は保。保は新生の霊を守る儀礼を示す あるいは腹衣の類

層

彌

鞄 かわつくり・かばんホウ(ハウ)

らく麞であろう。〔墨子、非儒〕に「鞄函車匠」のの〔輪轉〕に鮑(叔を麞叔に作り、鞄の初文はおそれ、考工記〕に柔皮の工として鮑氏がみえる。金文礼、考工記〕に柔皮の工として鮑氏がみえる。金文礼、 ばんはふみばさみの夾板などから出た語であろう語がある。わが国では鞄をかばんの意に用いる。か といわれる。 形声

髣 にる・かすか・さながらホウ(ハウ)

り」と仿を正字とする。仿仏・彷彿・髣髴のように形声 一声符は芳。〔説文〕八上に「仿、相似たるな とが多い それぞれの字を用いる。彷彿・髣髴の字を用いるこ とみえる、わず 双声の連語として用いる。さながら似る、ぼんやり かにみえるのような語意に合せて、

鳫 ほうおう

ホウ

鞄

髣

鳳 澎

に「革を柔ぐる工なり」とあり、「周 声符は包(包)。〔説文〕三下 か

葡萄人

声符は凡(凡)。卜辞にこの字を風の意に

弱水に濯ひ、莫に風穴に宿す」という神話的な説明海の外に翱翔し、崐嵢を過り、砥柱に飲み、羽を海の外に翱翔 用いる。卜辞にみえる風は、鳳形の鳥の象形字に、 られ、また〔書、尭典〕では、その神話が、四方四方風神の名は、のち〔山海 経〕にそのまま伝え四方風神の名は、のち〔山海 経〕にそのまま伝え 鳳に遘はんか」とは大風の意。風はこの神鳥の羽ば 夔鳳文は、この鳥が神鳥であり、霊の世界にかかわませる。 殷 周期の青銅器に多く用いられるを加えている。殷 周期の青銅器に多く用いられる 曰く、鳳の象なり」という。そしてその神鳥とされ るその鳥の形が用いられており、「神鳥なり。天老 作られたのであろう。卜文・金文には風の字形はな に、虫を加えた形である。風はもと鳥形の神であっときに凡を声符としてそえている。゛風はその凡の下 の民治を示す説話に変改されている。鳳が風神とさ たきによって起るものと考えられていたのであろう。 加えていて、風の字義に用いられている。「それ大 に辛字形の冠飾を戴き、ときに右上に凡形の声符を るものであったことを示している。卜文の鳳は頭上 る異相を列挙した上、「東方君子の國より出で、四 える。〔説文〕四上の鳳字条には、卜辞に風神とす く、〔説文〕二三下に録する字形に、虫に従う形がみ のち竜形の神とする観念が起って、風の字が この鳥が方神の神意伝達者であり、 その

> またわが国の山車のように、種々の造りものを従え桐はもとより実事実景ではなく、その車は鳳輦鸞車える吉野遊幸のような性質のものである。鳳凰・梧 詩篇のほかに、新作をも加える意である。 ていたのであろう。篇末に「詩を矢ぬること多から を行なうことを歌うもので、わが国の「万葉」にみ ちが山阿の間に遊んで、その聖所で魂振り的な宴遊に」と歌われている。〔巻阿〕の詩は、王宮の人た され、梧桐とも組み合されて、〔詩、大雅、巻阿〕 その原形に近いものと思われる。鳳凰はのち瑞祥化 飾を加えているものがあって、鳥としては、孔雀が るとする。その鳳の字形には、大きな羽に多くの で、風土・風気・風俗はみなそれによって規定され てその方域のすべてが、神意によって風化されるの 伝達のため飛翔するときに風が起るとされた。そし に「鳳凰鳴けり 彼の高原に ここを以て遂に歌ふ」とあるのも、当所誦詠の 梧桐生ず 彼の朝陽

澎 波のうちあう音ホウ(ハウ)

;¥;°

その描写は聴覚的であるとともに、また視覚的な効 水を含む字を、それぞれ数十字連ねて用いており、 には、山を写すときは山を含む字、水を写すときは 声の連語で、また擬声的な語である。〔上林の賦〕 「沸子として暴に怒り、海(浦澎湃たり」とあり、双あう音を澎湃という。司馬相如の〔上林の賦〕にあり、海(神)が、から、京のは、一、から、京のいる。一、本のは、京のいる。一、本のいる。一、本のいる。一、本の

廬という。

果をもっている。

緥 むつき(ハウ)

褓を用いる。褓は子を負うもの、腹衣また大藉と見の衣なり」とみえ、産衣の意とするが、産衣には見の衣なり」とみえ、産衣の意とするが、産衣にはない。 ・ (説文) 一三上に「小 襲。衾の意味をもつものであろう。タムイキヤッッいわゆる大藉であるが、もとは受いわゆる大 下方をくるむ形の衣がそえられており、それが産衣、いう全身を包むものなどをいう。保の古い字形には、 わゆる大藉であるが、もとは受霊の衣、すなわち 声符は保。保は新生の霊を守

蓬 15 よもぎ・くさむら・みだれるホウ

・ である。 ・ でる。 ・ れたままの髪を蓬髪、また蓬で葺いた粗末な家を蓬っるものであるから、雲の乱れなびくさまを蓬勃、乱 桑陶樹など、その例である。蓬は風に飛び、乱れ散 壺に似ているので、三壺という。わが国では新年にという。他にも二仙山があり、三山みなその山形が る儀礼がある。東海中に蓬萊山があり、神仙が住む 内則〕に、射人が桑弧蓬矢をもって、天地四方を射 もぎで作る矢はよく邪気を祓う力があり、〔礼記、あり、風に従って千里に飄揺するものがある。よ もぎの一種で蓬蒿という。 一下に「蒿なり」とあり、よ 秋蓬・飛蓬・転蓬の名も 声符は逢。〔説文〕

> 虣 しいたげる・きびしいホウ(ハウ)・ボウ

虐の語がみえるが、のちには殆ど用いられることの あって、暴虐の徒をいう。〔漢書、五行志〕にも虣禁じ、盜を去る」、また〔司虣〕に「虣亂」の語がを加えている。〔周礼、司市〕に「刑罰を以て虣を 駹 ない字である。 会意 五上に「虐ぐるなり。急なり」の二訓 武と虎とに従う。〔説文新附〕

褒 15 【聚】17 ふところの大きい衣・ほめるホウ(ハウ)

要姒これを滅ぼす」と歌われている。 内子となることが〔礼記、雑記、上〕にみえ、褒揚として仕えるものが、褒衣を賜うて、はじめて夫人 り」というのは、褒賞・褒美の意。命婦(女官名)の儒者の服装であった。また〔玉篇〕に「揚美な 盛服して門に至りて上謁す」とあり、それが当時 広の意となる。〔漢書、楊不疑伝〕に「襃衣博帶、乳子を包みこんでいる形である。それより褒袖・裾 褒はその略体の字。〔説文〕八上に「衣、博裾なる て知られ、〔詩、小雅、正月〕に「赫々たる宗周 のことである。周の幽王の妃襃姒は亡国の夫人としの意もそこから出ている。その用義法は、秦漢以後の意もそこから出ている。その用義法は、秦漢以後 なり」とあり、裾の広い意とするが、もとは懐中に は、襟もとをゆるやかにするので、襃大の意となる。 乳子の形。衣中に乳子をかかえるとき 旧字は襃に作り、孚声。孚は

> 鋒 15 **鋒** ほさき・きっさき・つるぎホウ

「兵の湍なり」とあり、武器の鋭い切先をいう。〔漢ない。 木の秀つ枝をいう。〔説文〕一四上に 形声 声符は拳。拳は神の降りくる

縫16【縫】17 ぬう・ぬいめ ホウ

「縫衣淺帶、矯言僞行、以て天下の主を迷惑す」と、う。[周礼] に縫人の職がある。[荘子、盗跖] にう。[四代] 送葬のことを主とするものであった。 話〕に「合せるなり」とあり、衣服を縫うことを や巫女の用いるものと似ている。儒者は古くは神事 薄い帯をつけているのは、当時の儒服、いまの神官 儒者に論難を加えているが、腋のあいた寛闊な服に 「鍼を以て衣を鉄ふなり」、「広雅、釈形声 声符は逢。〔説文〕」三三上に

鮑 16 「篳」20 しおづけ・あわび・かわつくり

哥美 野野

る魚なり」とあり、うすじおで漬けこんだ魚。 形声 声符は包(包)。〔説文〕ニー下に「鐘えた」

子、輪、子仲、姜の寶鎛を作る」とあり、姜斉と通る。斉器の〔輪鐸〕に「齊の辟쀟叔の孫、遣仲の「管鮑の交」で知られる鮑叔の鮑を、金文に쀟に作「管鮑の交」で知られる鮑叔の鮑を、金文に쀟に作る。、注:に江淮の地で行なわれるという。 を「あはび」の意に用いる。 である。陶も古く缶声の字であった。わが国では鮑を鞄によみかえている。その本字は驟に作るべき字を鞄によみかえている。その本字は驟に作るべき字 る大族となったものであろう。鮑にも皮作りの意が 鮑叔は皮革業者として産を成し、斉の国政を左右す あり、〔周礼、考工記〕の「攻皮の工」の注に、鮑 婚関係をもつ大族であったが、糶の字から考えると、 れ、選人、注〕に工隹りりでです。とあり、[周と流しくして、腐臭ならしむるなり」とあり、[周と流しくして、腐臭ならしむるなり」とあり、[周と流しくして、腐臭ならしむるなり。埋藏するこれ、選人、注: る。「釈名、釈飲食」に「鮑は腐なり。埋藏するこ 魚・箸魚ともいわれる方法で、腐臭の強いものであ

幫 17 「新」12 「轄」15 たすける

与すること。幫間は仲介者、酒宴の席をとりもちす幫助は手伝い、刑事犯のときには、犯罪に便宜を供幫助 る太鼓もちをいう。字はまた幇・幚に作る。 治すものなり」とあって、履を修理する巾であると 声符は封。〔広韻〕に「幫衣なり。絲鞋を

彙 ふくろ・つつむホウ(ハウ)・ヒョウ(ヘウ)

声符は缶。声符を除いた字形は東で、東は 声

[精][精]

彙

篰

繃鵬

部 17 用いている。 は大、負担を増大させることであろう。橐を動詞に ること毋れ。襲棄するときは廼ち鰥寡を務ましめり、包んだものである。〔毛公鼎〕に「気で襲撃すり、包んだものである。〔毛公鼎〕に「気できょう ん」とあって、龔橐というのは張大の意に近く、龔 古く寶(宝)の声符に用いる字で、その音がある。 るが、声符を除いた形が橐の象形であり、また缶も また字形について「薬の省に從ひ、匋の省聲」とす 下に「嚢の張大なる兒」とし、大きな嚢の意とする。符として石を加えて嚢の字が作られた。〔説文〕六 たけ か だ 形声 声符は部。部にものを両分す

ね簿札、すなわち云葉り頁でうった。 節はのちの簿にあたる。秦漢の竹簡や木簡は概だ。節はのちの簿にあたる。秦漢の竹簡や木簡は概だ。 「粛安なり」とみえ、「広雅」にはこの二字とも竹葉でなった。とみえ、「広雅」にはこの二字とも竹葉である。[説文]五上に に従う。竹簡のことを、秦漢のときには滿爰とよん すなわち伝票の類であった。

繃 つかねる・せおいおび・ほうたいホウ(ハウ)

緘に作る。〔釈名、釈喪制〕に「棺の束を緘といき織ぬ」と〔墨子、節葬〕の文を引く。今本は繃をが、馬は會稽に葬らる。桐棺三寸、葛以てこれ日く、禹は會稽に葬らる。桐棺三寸、葛以てこれ 形声 上に「束ぬるなり」とあり、「墨子に 声符は關(崩)。〔説文〕一三

いまは繃帯の字に用いる。注〕に「今の小兒繃なり」というのは、背負い帯。注〕に「今の小兒繃なり」というのは、背負い帯。ふ」とみえ、緘の字を用いることもある。[漢書、ふ」とみえ、緘の字を用いることもある。

鵬 おおとり

で、大きな雲を鵬雲、また鵬挙・鵬程・鵬図など、 颱風をいう。「その翼、垂天の雲の若し」というの 由闊大なる世界を寓した。扶揺は「飈」の緩音で、 季節的に颱風の猛威を受けるモンスーン地帯の発想 みなこの〔荘子〕の文から出ている語である。 であろうと思われる。〔荘子〕はそこに、精神の自 に移る大鵬の活動のさまが写されているが、それは 千里、扶揺に搏って上ること九万里、北溟より南溟思われる。〔荘子、逍遥遊〕の巻頭第一に、水撃三思われる。〔荘子、逍遥遊〕の巻頭第一に、水撃三 風神の観念は鵬に移されて、両字に分化したものと 行するものとされた。のち瑞鳥としての鳳凰となり は卜文において風神とされ、神意の伝達者として風 してこの字をあげる。鳳・鵬はもと同源の字で、鳳 声符は朋(朋)。〔説文〕四上に鳳の古文と

龎 たかどの・おおきいホウ (ハウ)・ロウ

なその声を異にしており、会意字であろう。鄭・釈 ・・・・・なり」として、また竜声とするが、鄭・寵・龐はみなり」として、また竜声とするが、鄭・寵・龍・ 「高屋なり」として竜声とし、寵字条七下に「尊居その字はいずれも恭の意をもつ。〔説文〕九下に その竜を扱うことを示す。難・觀などの字形もあり、古代の呪的儀礼に用いられ、金文には 会意 广と龍(竜)とに従う。竜は

And the second s

ž,

□ 3 「□ 3 しぬ・にげる・なし・やむ ボウ (バウ)・ム

所所所 下のの

象形 死者の肢を曲げている形。〔説文〕ニ下に隠れる意とするが、卜文・金文の字形は死者の屈に隠れる意とするが、卜文・金文の字形は死者の屈肢の形であり、その毛髪のなお存するものは元、原財に棄てられていることを荒という。その形で、流屍を泛、埋葬したものを空という。亡・之ば声義ともに近い字である。〔繋伝〕に「魯の昭之は声義ともに近い字である。〔繋伝〕に「魯の昭之は声義ともに近い字である。〔繋伝〕に「魯の昭之は声義ともに近い字である。〔紫伝〕に「魯の昭之は声後ともに近い字である。〕な説は、原子皮と名を改めて亡命したのも、死罪をもって水に投棄される者の意である。死亡より亡失、また亡家・亡国の意となる。また無に通じて、亡慮は凡そ、亡法はれる者の意である。死亡より亡人とは述するが、「説文」ニ下に

という。无は亡の異体字で、無の音でよまれる。岐路があり、容易に捕えがたいことを、「亡羊の歎」ば、これを逐うものが多くても、岐路のうちにまた無法。〔列子、説符〕に亡羊の話があり、一羊が逃無法。〔列子、説符〕

とぼしい・すてる・やふせぎ ボウ (バフ)・ホウ (ハフ)

E V

象形 仰むけの屍体の体。〔説文〕二下に訓義をつけず、「春秋傳に曰く、正に反するを乏と爲す」と、「左伝」宣十五年の文を引く。正の反文で不正の意であるとするものであるが、字は屍体の象形。近は流屍、突は棺を墓坑に下すこと、変は埋める意。また匱乏・乏困のように貧苦をいう。不正の故意。また匱乏・乏困のように貧苦をいう。不正の故意。また匱乏・乏困のように貧苦をいう。不正の故意、また度乏・之困のように貧苦をいう。不正の故る。乏を矢ふせぎの意に用いるのは別義。変のように、人りこんだところに身を引いて、あたり矢の数を唱えるので、その義に転用したものと思われる。数を唱えるので、その義に転用したものと思われる。数を唱えるので、その義に転用したものと思われる。とに従う字は、みな乏の声義を承ける。ことまた声義く亡の反文の形で、ともに屍体の形。亡とまた声義く亡の反文の形で、ともに屍体の形。亡とまた声義く山の反文の形で、ともに屍体の形。亡とまた声義

日 4 ボウ・モウ

蟹夷の頭衣なり。□に従ふ。二はその飾りなり」と
「無をいう。[説文]セ下に「小兒及び」。 類をいう。[説文]セ下に「小兒及び

まい。 を記し春秋、知化」「別ち帳を為りて以て死す」 う。[呂氏春秋、知化」「別ち帳を為りて以て死す」 う。[呂氏春秋、知化」「別ち帳を為りて以て死す」 う。[呂氏春秋、知化」「別ち帳を為りて以て死す」 の形を翻むを冒といふ。その形を覆ひて、人をして の形を翻むを冒といふ。その形を覆ひて、人をして 悪むこと勿からしむるなり」とは、身衣である。面 悪むこと勿からしむるなり」とは、身衣である。面 悪むこと勿からしむるなり」とは、身衣である。面 悪むこと勿からしむるなり」とは、身衣である。面 悪むこと勿からしむるなり」とは、身衣である。面 悪むことのからしむるなり」とは、身衣である。面 悪むことのからしむるなり」とは、身衣である。面 悪むことのからしむるなり」とは、身衣である。面 たき被いて目をあらわすことを曼という。曼の上部 は目の形。頭衣・面衣・身衣のようにものをもって 身を覆うことは、すべて禁忌に当っての隔離儀礼の 方法であった。

卯 5 さく・ころす・う

4P # 4P

0

んか」など、牛羊の性について卯ということが多く、 を置して出づ。門を開くの形に象る。「説文」」一四下 解するものであるが、ト文・金文の字形は牡肉を両 解するものであるが、ト文・金文の字形は牡肉を両 解するものであるが、ト文・金文の字形は牡肉を両 解する形とみられる。ト辞に卯を用性の法の名に用 い、「祖乙に羌十又五を侑め、罕を卵し、一牛を作 い、「祖乙に羌十又五を侑め、罕を別し、一牛を作 い、「祖乙に羌十又五をイめ、早を別し、一牛を作 のんか」「唐(湯)に三十羌を侑め、戸を のたい、は、 のたい。 をする。 をするが、トない。 とは、 のたい。 の

簿という。 第という。 第という。 第という。 第という。 第という。 第という。 第という。 第という。 第に別を含むのは、英代の剛卯の遺風を承の「卯杖」「卯槌」の俗は、漢代の剛卯の遺風を承の「卯杖」「卯槌」の俗は、漢代の剛卯の遺風を承の「卯杖」「卯槌」の俗は、漢代の剛卯の遺風を承の「卯杖」「卯槌」の俗は、漢代の剛卯の遺風を承の「卯杖」「卯槌」の俗は、漢代の剛卯の遺風を承のという。

だら「忙」らいそがしい・あわただしい

形声 声符は世(山)。[列子、楊朱]「子産忙然として、以てこれに應ふる無し」は茫然の意。もととして、以てこれに應ふる無し」は茫然の意。もとの意に用いるのは、唐宋以後のことである。唐の「淡々忙々」はなお汲々専一のさまをいう。多忙の意に用いるのは、唐宋以後のことである。唐の「次天」によると、忙功のものには賃金の割増しがです。

年 6 ヸのなきごえ

坊っ まち・みせ・てら

埗"或

院の内部も坊に分れ、一坊の主を坊主という。中は坊巷、その門は坊門、坊ごとに坊長がいた。寺中は坊巷、その門は坊門、坊ごとに坊長がいた。寺附)二三下に「邑里の名なり」という。街路の区画附)二三下に「邑里の名なり」という。街路の区画形声 声符は店。 方に区画の意がある。〔説文新形声

妨っ さまたげる・そこなう

形声 声符は芳。方は呪禁にして防め、「大きな」とあり、「六書故」に「女人は他の進むを妨ぐるなり」とあり、「六書故」に「女人は他の進むを妨ぐるなり」とするが、巫女をもって妨急とした、古代の呪的な方法のなごりであろう。方は架尾、曷は林を用いて呪禁とする方法であった。方に従う字のうちには、そのような古い呪的方法のなごりを残めを用いて呪禁とする方法であった。方に従う字のうちには、そのような古い呪的方法のなごりを残しているものがある。

尨 7 むくいぬ・みだれる・おおきいがつ ボウ(バウ)

質 太

まで、転じて大量のものを尨大という。 とて吠えしむることなかれ」の句を引く。ぎば多毛の形。「周礼、牧人」「尨を用ひて可なり」は、雑色の形。「周礼、牧人」「尨を用ひて可なり」は、雑色不純のものを性に用いること。雑色の毛を、袋に用いることを、尨服という。尨茸とは多くのものがることを、尨服という。尨茸とは多くのものがあることを、尨服という。尨茸とは多形。「説文」「○上に「犬の毛もないる」という。

応ィ「心」で かずれる

党 世上世上世

的な世界である。 坐忘とはあらゆる思惟の営みを拒否する、純粋経験 門中、顔回を好み、〔大宗師〕に、顔回が坐忘の境等など、みな〔荘子〕中の語である。〔荘子〕は孔年など、みな〔荘子〕中の語である。〔荘子〕は孔 地を説いて、孔夫子を驚嘆させた話をのせている。 ある。〔荘子〕も忘を好み、忘言・忘我・忘形・忘 のまさに至らんとするを知らず」とは、孔子の語で 發しては食を忘れ、樂しみては以て憂を忘れ、老い は意識に存しないことで、「論語、述而」「價りを 字形となる。〔詩、大雅、仮楽〕「窓だす忘れず 舊字形となる。〔詩、大雅、仮楽〕「窓だす忘れず 舊を謹れず」のように用い、列国期以後に至って忘のを謹れず」のように用い、列国期以後に至って忘の は遺失しない意で、忘却の意と少しく異なる。忘と 章に率由す」、また「儀礼、士冠礼」「壽考忘まず」 形声 ず」、「置卣」「置(召、人名)敢て王の休異(翼) り、識とは記憶をいう。記憶に存しないことを忘と るなり。心に從ひ、亡に從ふ。亡は亦聲なり」とあ いう。金文に字を謳に作り、「献彝」「十世まで謹れ 声符は亡(亡)。〔説文〕一〇下に「識らざ

見ィ 「貌」」4 がたち・かお・すがた

京雅 號

〔説文〕ハ下に「頌儀なり。人に従ふ。白は人面の**象形** 白は人の頭顱の形。今は亡き人の形である。

とう ぎじょ こうが くり だいことをいう。 て 白とは形の似ていること、髣髴たる状態をいう。できなないことをいう。字は貌を用いることが多く、貌似ないことをいう。字は貌を用いることが多く、貌似 象るなり」としている。それは祀るべき人の形兒でうよりも頭顱の形で、下文の兜字条に「兄は人頭にうよりも頭顱の形で、下文の兜字条に「兄は人頭に 外面的で内実の伴わないものを貌という。 は、外面だけで同一行動をとるものの意。すべて、 その意。〔左伝〕定元年に「貌して出づるもの」と てこれを受く」とは、外面は喜んで受け、その実の しろの形をいう。〔逸周書、芮良夫解〕「王、貌しに失われ、その形状のみを存する状態であり、かた るが、皃はむしろ容儀を備えないもので、神気すで ある。〔説文〕に「頌儀なり」とは、容儀の意であ 形に象る」とし、重文二字を録する。白は人面とい 宗廟〕〔広雅、釈詁〕に「廟は貌なり」とは

のぎ・けさき・ほこさきボウ(バウ)

展の日にその像を作り、迎春の前一日、この神に上た。 芒神は沿着々僧ネレー 芒然・芒々然のように用いる。 合して、牛が天神さまの使者となった。茫と通じて を送る。わが国でも古くその俗があり、春雷を迎え 牛を逐わせ、立春の日に綵杖で三たび鞭うち寒気 別いる。芒神は迎春の儀礼に祀る勾芒神。冬至後のものを芒種といい、芒刺・芒刃のように形容詞的に て土牛を送ることが行なわれたが、のち天神信仰と さきをいう。稲や麦など、のぎのある 声符は亡(亡)。のぎ、穂の

防 ふせぐ・まもるボウ(バウ)

財

〔逸周書、作雒解〕に、大廟明堂の施設を述べたもいでは、「「廟中の路、これを唐と謂ふ」とみえ、釈宮〕に「廟中の路、これを唐と謂ふ」とみえ、 ると思われる。次条に「隄唐なり」とあり、〔爾雅、その聖所を守るための、呪禁の方法をいうものであ は社神・社主を意味するものであることからいえば 梯の形である自に従うものであること、〔説文〕の 「防を以て水を止む」とその意に用いるが、字が神 に「隄なり」と堤防の意とする。〔周礼、稲人〕に梟を示す字で、呪禁の方法である。〔説文〕」四下梟を示す字で、呪禁の方法である。〔説文〕」四下影声 声符は方。方は境界にさらし首をする祭 本来聖所を守る意であるが、のち都城や国境、重要 堤で庭中の道を囲んだもので、防もそのようなもの あげる或る体の字は、方の下に上を加えており、土 な境界のところを防禦する意となった。 しての書を埋めたお土居の類であるのと似ている。 であろう。 ののうちに、「隄唐」というものがある。小さな土 いわゆる堤防の類ではない。堵が呪符と

侔 8 ひとしい・そろう・したがうボウ

「窓強」など同じ語とみられる。のちに失われた古いない。(論語、述而)の「文莫」、〔説文〕にいう語があって、努力する意に用い、〔管子、宙合〕の語があって、努力する意に用い、〔管子、宙合〕の語があって、努力する意に用い、〔管子、宙合〕の あって均等の意とする。〔方言〕に「侔莫」という 「地しきなり」、「広雅、釈詁」に「愛しきなり」といい。等なるなり」、「周礼、弓人、注」にいいる。「説文」へ上に「齊しきなり」、「別な」へ上に「齊しきなり」、「別なり」、「別なり」、「別なり」、「別なり

語のようである。

房。 顧命〕に「東房」「西房」の名があり、房室の制は 中という。明・清の郷試を房試というのは個室で行うところであるが、のち房室の義となり、居室を房 秀に在るなり」と旁の意をもって解する。〔書、****** なわれるからで、牢にも独房がある。 古くから存したのであろう。堂房はもと儀礼を行な (房)。 形声 のの意がある。〔説文〕一二上に「室、 へや・すまい・たてもの・ふさボウ(バウ) 声符は方。方に区画されたも

忠。 たみ ボウ (バウ)

田亡 8 名世民を避けたもので、「唐石経」から行なわれた。育す」の語がある。字はまた甿に作る。唐の太宗のることもあり、漢の〔威陽霊台碑〕に「以て苗朝をることもあり、漢の〔成陽霊台碑〕に「以て苗朝を 〔詩、衞風、氓〕に「氓の蚩々たる」布を抱きて絲農奴的な身分のものが多く、氓黎・氓隷という。民と氓とを区別していう。氓は他より赴く亡命者で、民と氓とを区別していう。氓は他より赴く亡命者で、 みな悅んでこれが氓となることを願はん」とあり、 を買ふ」という行商人も、氓であった。萌を仮借す と訓するが、「孟子、 たみ ボウ (バウ) 意がある。〔説文〕一三下に「民なり」 公孫丑、上」「則ち天下の民、 声符は亡(亡)。亡に逃亡の

意がある。〔説文〕 一三下に「田民な 形声 声符は亡(亡)。亡に逃亡の

甿なり」とみえ、都市にも流民の住む一郭があった。 のは、 と同字である。〔管子、軽重、甲〕に「北郭なるも 太宗世民の名を避けて、〔唐石経〕に甿に作る。もだがまえ、 「贮隷の人」とよばれる身分のものであった。[周礼で)に、秦に対してまず兵を挙げた陳沙にの同じ字で、秦に対してまず兵を挙げた陳沙にり」とあり、農奴的な身分のものをいう。氓と声義り」とあり、 させるために、時期によって結婚の機会を与えるも とは、下剤とよばれる最も緩やかな役法で役夫を徴 遂人〕に「凡そ野を治むるに下劑を以てし、甿を致 し、甿を招くには最低の土地を保障し、土地に定着 すに田里を以てし、甿を安んずるに樂昏を以てす」 流民の救済法をいう。召募によって赴くもの 盡く屨縷(男は草履、女は糸をひさぐ)の 〔唐石経〕に甿に作る。 * 昴 9 F なり、冒死・冒顔の意となり、冒昧・冒嫉の意となるが、靑冒をつけて進むので、冒険・冒突の意とを言ふものは、見る所無きが若し」と盲進の意とすれ

る。すべて無頓着に行動することをいう。

すばる ボウ (バウ)

「白虎宿の星なり」とあり、すばる星形を一声符は卯。 「説文」 ォーに

声符は卵。〔説文〕七上に

肪膩という。美人の条件とされたものである。 、、・・・・ て柔らかいことを肪脆、あぶらぎって滑らかな肌を 「肥ゆるなり」とあり、脂肪をいう。あぶらが多く きわたる意がある。〔説文〕四下に 声符は方。方にあつまる、ゆ

冒。(冒)。 おおう・おかす・かぶるボウ(バウ)

6

に甲衣をつけて進撃する意とする。 〔段注〕 に「目 衣。〔説文〕セドに「家りて前むなり」とあり、 会意 旧字は冒に作り、同と目とに従う。書は頭 頭

肪冒(冒)

昴

某 眊 茅

〔書、尭典〕「日は短く、星は昴なり」とは、仲冬のプレアデス星団で、肉眼では六星だけみえる。の星の名は、他に二、三あるのみである。おうし座をいう。〔枕草子〕に「星はすばる」とあり、国語をいう。〔枕草子〕 どき粉八合」という語があって、このときそばを蒔*に昴星がま南にあること。わが国にも「すばるまん るという。 くと、一升の実から八合の粉がとれるほど豊作であ

肪。

あぶら・こえボウ(バウ)

こえる

某 9 ばかる・それがし・なにがし

H H Ħ° * *

作りかたはない。また梅を某とかく文献例はなく、 甘いものは酸の母であるというが、そのような字の とは、その字形解釈を欠く意である。〔段注〕に、 果なり。木に從ひ、甘に從ふ。闕」とする。「闕」謀。初文。〔説文〕六上にこれを梅の本字とし、「酸」 会意 うに神にささげ、その神示を受ける。神に謀る意で 入れる器。それを木の枝の上に著けて、申し文のよ 日と木とに従う。日は神に祝禱する祝詞を**

> 神意により、神意を介してなされることをいう。 とを行なった。某に従う字は謀・鞢・媒など、みなけ、居くここに咨謀す」とあり、群神に諮謀してこ け、周くここに咨談す」とあり、群神に諮談してこには、〔詩、小雅、皇々者華〕に「載ち馳せ載ち驅なとは「廟に謀る」ことをいう。およそ征役のとき某とは「廟に謀る」ことをいう。およそ征役のとき 頌、訪落〕の序に「嗣王、廟に謀るなり」とあり、加えたもので、甘に従う字形ではない。〔詩、別 加えたもので、甘に従う字形ではない。〔詩、『聞る某の字形は、木の上に祝禱を収める器である田を 公父子がその戦勝の祝禱を行なったが、銘文にみえ り、最高の神祇官であった。この征伐に当って、 り、その子伯禽も、〔大祝禽鼎〕に大祝と称してお を作っている。周公は当時最高の聖職者の地位にあ 祝禱に効果があったとして、金百銭を賜い、その器 〔説文〕に梅の重文としてあげる楳は形声字で、某 伐つ。周公某り、禽祸る」とあり、 子の名のみえる貴重なものであるが、「王、 の字義とは関係がない。周初の〔禽殷〕は、 伯禽の行なった 禁候を 周公父 周

眊9 くらい・おろか・みだれる・としよりボウ(バウ)・モウ

している。 に用いることが多く、〔武帝紀〕「夫の老眊を哀し ち眸子眊し」という。〔漢書〕には、眊を老耄の意あり、〔孟子、離婁、上〕「胸中正しからざれば、則あり、〔孟子、離婁、上〕「胸中正しからざれば、則(説文〕四上に「目に精少きなり」と む」の〔顔師古注〕 形声 に、「眊は古の耄の字なり」と 声符は毛。毛に耄の意がある。

茅 かや・ちがや・かやぶきボウ(バウ)

を包む」「白茅純束」とあり、茅でこれを包むのでも用い、〔詩、召南、野有死麕〕に「白茅もてこれをなぎ、という。犠牲を供薦するときのしきものに り、白茅に包んで与えるものを茅社、諸侯に与える 天子が諸王子を封ずるとき、大社から五色の土をと 茅屋という。「茅茨剪らず」とは、尭の王宮の粗末根の葺きかえに用いるもの、かやぶきの家を茅檐・ ひたして儀場を清めるもので、各地から貢納される。 て互訓。〔左伝〕僖四年「爾の貢する包茅入らず。とう、次条の菅に「茅なり」とあっ では茅巻に用いる。 ものを茅土という。茅は多く神事に用いた。わが国 であったことをいう。おそらく神殿の古式であろう。 ある。「豳風、七月」「晝は爾ゆきて茅かれ」とは屋 また朝会のとき、これを束ねてその席を示すものを 以て酒を縮す無し」とは、祭祀のとき、これに酒を **旬師〕は、その蕭茅を供する職であった。** 声符は矛。〔説文〕一下に「菅

茆。 じゅんさい・かやボウ(バウ)

には沼沚谿澗の水草をとって供えた。茅と通用し、草であるじゅんさいをとって、神に供える意。祭事草であるじゅんさいをとって、神に供える意。祭事 〔詩、魯頌、 **茆檐・茆屋のようにいうことがある。** 泮水」「ここにその茆を采る」とは、水 奏なり」とあり、じゅんさいをいう。 声符は卵。「説文」一下に「凫

10 わける・さく・ひらくボウ・ホウ

> かる」とは、胸を剖き開くこと。すべて両分開剖すて、〔玉篇〕の文による。〔荘子、胠箧〕「比干は 部で、〔玉篇〕の〔注〕に「中分するを剖となす」とあっ 倍・掊・部などみな一系の字。〔左伝〕襄十四年まで、背、ままなどみな一系の字。〔左伝〕襄十四年とあり、剖判とは天地の開闢をいう語である。 することを剖という。〔説文〕四下に「剣つなり」がはようとしている形で、これを両分を問います。 一部けようとしている形で、これを両分をしている形で、これを両分をはいる。音は果実の熟して ることを剖という。 声符は音。音は果実の熟して

あまねし・かたわら・かたよるボウ(バウ)

爾爾爾 夢易手 勇

文二、籍文一を録するが、籍文は秀に作り、別の字。一上に「溥きなり。二に從ふ。闕。方聲」とし、古形声 声符は方。**たに四方の意がある。〔説文〕 方と盤旋(めぐる)の意をもつ字であり、溥くゆきえてこれを搬ぶ意を示す字がある。従って旁は、四ある。凡は般の初文で、卜文には凡の四隅に手を加ある。凡は般の初文で、卜文には凡の四隅に手を加 聞す」と、旁を四方の意に用いており、通用の字で ないとされている。字は卜文・金文にみえ、呉文)に「闕」としているように、その字形は明確で なく、字形にも誤りがあろう。正篆の字形も、〔説古文の二字は、一は〔汗簡〕にみえるが、他に用例古文の二字は、一は〔汗

> 室・旁出・旁側はみな傍の義。傍は旁の限定され流のように用いるのがその本義、旁観・旁視・旁 示されている。旁及・旁招・旁達・旁通・旁溥・旁 正篆の字形は、漢碑もみなその形に作り、当時通行 たものをいう。 のものであったと思われるが、卜文・金文の字形で わたること、旁くめぐること、その周辺の意をもつ は凡・方に従うて、四方に及ぶ意であることがよく

旄 はたかざり・はたぼこ・かざしボウ(バウ)・モウ

亦声とするが、〔繁伝〕には毛声をするが、〔繁伝〕とし、字を 形声 だとし、字を从と毛の会意にしてとし、字を从と毛の会意にして幢。

軍を指麾するのに用いた。旗に 尾を竿首に著ける。〔書、牧誓〕 ことも多く、「孟子、梁恵王、下」 べき字が多い。旄飾には犛牛の に「羽旄の美」という語がある。 は呪飾としてまた鳥の羽を飾る に「右に白旄を秉る」とあって、

紡10 つむぐ・いとをうむボウ(バウ)

名方。

する。糸をつむぐこと。〔国語、晋語〕に「獻子、[玉篇〕に「紡絲なり」、〔広韻〕に「紡績なり」と 形声 声符は方。〔説文〕 一三上に「網絲なり」、

ことをいう。 方には架屍の意があり、紡も上に懸けて糸を絹める* ** 執へて廷の槐に紡く」とあり、懸繋の意に用いる。 とあり、懸繋の意に用いる。

耄 10 おいぼれる・としよりボウ(バウ)・モウ(マウ)

百年にして耄荒す」とあり、耄碌する意である。 耄期という。[書、呂刑]に「王、國を享くること等罪といふ」とあり、百歳を期というのと合せて、等。 といふ」とあり、百歳を期というのと合せて、等。 またい。 はれば、曲れ、上〕に「八十九十号 省文に従う字とする。蒿は白よもぎで、 声符は毛。〔説文〕ハ上に蒿の

沱 はるか・ひろい ボウ (バウ)

くつづくことを滄茫、とりとめもないさまを茫洋、えつづくことを滄茫、とりとめもないさまを茫洋、茫々とは広大にして果てしないさまをいう。水の遠 茫昧という。 だいでないことを茫漠ではんやりするさまを茫然、定かでないことを茫漠で 「茫々たる禹迹、畫して九州と爲す」とあって、に「速やかなり」とみえるが、[左伝] 襄四年 かなり」とみえるが、〔左伝〕襄四年声符は芒。〔方言〕に「遽なり」、〔玉篇〕

蚌 どぶがい・はまぐりボウ(バウ)

とともに盈虚するものと考えられていた。 なるときは、則ち蚌蛤實ちて群陰盈つ」とあり、 蚌珠という。[呂氏春秋、精通]に「月望(十五夜) う。真珠を含むものがあって蚌胎といいう。真珠を含むものがあって蚌胎といいて、「蜃の屬なり」とあり、は 声符は丰。〔説文〕-三上に はまぐりをい 、その珠を

耄 蚌 望(望)(朢)

> 望 11 室二 望 14 のぞむ・ねがうボウ(バウ)

聖 而為了

ト辞に望 乗とよばれる氏族があって、征役に従う呪力を封ずるためにまず殺される。これを蔑という。 なうので、戦いに敗れると、これらの巫女は、その も、このような媚女の一隊がいて、種々の呪儀を行 さかんに行なわれたのであった。また戦陣の陣頭に トするもので、戦争のときには、このような呪儀が ある苦方を、一せいに望視する呪儀を行なうことを 眉飾を加えた巫女三千人をして、山西北方の異族で 人三千をして、苦方を望ましむること勿きか」とは、って敵に圧服を加える呪儀を望という。ト辞に「媚って敵に圧服を加える呪儀を望という。ト辞に「媚とによってその妖祥を察し、またその眼の呪力によ 亡はのちに加えられた声符である。卜文の望は、 意符とし、亡去の義をもって解するものであるが、 が足をそばだてて遠く望む形の象形字。遠く望むこ に在り、その還るを望むなり」とするのは、亡声を 形が行なわれている。〔説文〕 三下に「出亡して外 五夜の望の意を示した会意字であるが、のち望の字 げており、それは卜文の望の字形に月を加えて、十 加えた形声字。また〔説文〕八上に別に朢の字をあ る人の形で、もと象形。望はそれに声符として亡を 形声 卜文は、大きな目をあげて、先方を仰ぎ この族は望の儀礼を掌る職能のもの

川)を望む」という曹操の語から出ている。「たくなり、欲望となる。欲望の次々と広まるを望意となり、欲望となる。欲望の次々と広まるを望 意となり、欲望となる。欲望の次々と広まるを望遠の祭儀である。それより遠望の意となり、希望の なごりである。がは遠方の神を招くことで、望と一 あるのは、ト辞に巫祝が望の呪儀を行なったことの 祀をいう。〔周礼、男巫〕に「望祀望衍を掌る」と楽〕「以て四望を祀る」とは、その地域の山川の祭 の望と作れ」とは、望鎮としてその地を治めること。望といい、その支配者を望鎮という。[斑殷]「四方 〔無夷鼎〕 などに至ってみえる。 望気によって地の となり、〔書、舜典〕「山川に望す」、〔周礼、大司のち名望のようにいう。望は望気の意より祭祀の名のち名望のようにいう。望は望気の意より祭祀の名 吉凶を察し、支配を行なうので、その地域を望、地 き既望という。亡声を加えるのは、西周後期のき文に月を四週に分ち、第三週を望ののち、すなわ金文に月を四週に分ち、第三週を望ののち、すなわ とき、月影が満ちてみえるので、十五夜を望という。また人のつまだつ形で、廷ではない。日月の相望む な目を竪にしるしたもので、遠望する眼の形。壬も 望である。〔説文〕が臣と解している部分は、 を省いた形を出しているが、その古文の形が卜文の 壬に從ふ。壬は朝廷なり」とし、古文としてその月 のほかに、壬部八上に朢を録し、「月滿ちて日と相的な意味をもつものであった。〔説文〕にはこの望 む歌が多いが、そこでは望むという行為が、魂振 る儀礼である。また〔万葉〕の羈旅歌にも家郷を望 であろうと思われる。わが国では、国見などにあた 以て君に朝するなり。月に從ひ、臣に從ひ、 大き

昨 11 びとみ

● 下声 一声符は字。〔説文新附〕四上に 「目の童子なり」とあり、瞳をいう。 「孟子、離婁、上〕「人を存るものは、眸子より良き ものは莫し。眸子はその惡を掩ふこと能はず」とあ り、また「その言を聴き、その眸子を觀ば、人焉ん ぞ庾さんや」という。「眼は口ほどにものを言い」 という俚諺通りである。

傍にがたわら・そう・よる

帽12帽]12 ボウ(バウ)

とあり、頭に被るものである。『世紀 かが、頭に被るものである。『世紀 かが、頭に被るものである。『世紀 かが、頭に被るものである。『世紀 かが、頭に被るものである。『世紀 かが、頭に被るものである。『世紀 かが、理に被るものである。『世紀 かが、世末の「飲 中八仙歌」に「張旭三杯、草聖傳ふ 帽を脱し頂 で、杜甫の「飲 中八仙歌」に「張旭三杯、草聖傳ふ 帽を脱し頂 を露す王公の前 毫を揮ひて紙に落せば雲煙の如 を露す王公の前 毫を揮ひて紙に落せば雲煙の如 とことは、その酔態をいう。

棒12 「棓」12 ぼう・むち

を指とし、「悦なり」といい、計声。 大杖をいう。いま棒の字を用いるが、棒は〔玉篇〕 大杖をいう。いま棒の字を用いるが、棒は〔玉篇〕 大杖をいう。いま棒の字を用いるが、棒は〔玉篇〕 す」などという。

炉炉 12 草がふかい・くさむら

会意 四世に従う。中は草。〔説文〕中学 一下に「衆艸なり」とするが、くさむらの意の茶の初文であろう。〔説文〕は莽を犬の名らの意の茶の初文であろう。〔説文〕は莽を犬の名とし、端と別義の字としている。また〔説文〕艸部とし、端と別義の字としている。また〔説文〕艸部としているが、〔石鼓文〕神部に従う字が多く、古い秦篆にその字形の行なわに輝に従う字が多く、古い秦篆にその字形の行なわに端に従う字が多く、古い秦篆にその字形の行なわに端に従う字が多く、古い秦篆にその字形の行なわに

写 12 がえる・かう・あきなう

野りた

形声 声符は卵。卵に両分の意がある。〔説文〕 とは、衣食の功をたがいに交換する分業のことをいとは、衣食の功をたがいに交換する分業のことをいとは、衣食の功をたがいに交換する分業のことをいい、で換する分業のことをいい。質々然とは、疲労の末に気力の尽きることをいい。

あろう。それで楙盛・楙美の意がある。とあり、茂と声義同じ。ただ木と草との別がある。とあり、茂と声義同じ。ただ木と草との別がある。とあり、茂と声義同じ。ただ木と草との別がある。形声 声符は矛。〔説文〕六上に「木盛なるなり」形声 声符は矛。〔説文〕六上に「木盛なるなり」

デ 3 ボウ (バウ)・ホウ (ハウ)

下声 声符は等。秀にあまねくゆき をり」とあり、滂淙は双声の連語で、水勢の広く盛 がい。 おいでは、滂沱は大雨のさま。「詩、「陳風、 でいっ、滂沱は大雨のさま。「詩、「陳風、 でいっ。滂沱は大雨のさま。「詩、「陳風、 でいっ。滂沱は大雨のさま。「詩、「陳風、 でいっ。滂沱は大雨のさま。「詩、「陳風、 でいっ。 った。 では、 「神べれるさまをいう。 は、 夢神と同じく、 広がりみちて一となるさまをいう。 は ボカ(バウ)

榜 14 ゆだめ・こぐ・いかだ・たてふだ

ぐ! ボケ 榜示という。古くは標表とよんだものである。

秋目 4 みだれる・くらい・まどう

房 4 おきばら・ぼうこう

ゆばりつぼと訓して、両者を区別している。 「説文」四下に「脅なり」とあり、また膀胱の意とする。〔類聚名義抄〕に、膀をゆばりぶくろ、胱をする。「熱寒名義抄〕に、膀をゆばりぶくろ、胱を下している。

針 4 ばこ

形声 声符は字。鋒と同義。〔集韻〕に「鋒なり」とするが、中国では用例のない字である。わが国では山鉾の意に用い、山車の上に、高い木を飾り物として立てるものをいう。鉾は神を迎えるためのもので、鋒字に含まれる拳は、木の秀つ枝に神の下る形である。ト文・金文の家形の字の上に、矛や木を樹てている形のものがある。『紫海 甲段 にいる形のものがある。『紫海 東韻〕に「鋒なり」形声 声符は字。鋒と同義。〔集韻〕に「鋒なり」

ボウ 沓 膀 鉾 髦 暴(暴) 蝱[虻]

髳(毅)

14 ながいけ・さげがみ・すぐれる がウ (バウ)・モウ

とし、字を会意とするが、だけは人の頭髪の形であり、とし、字を会意とするが、だけは人の頭髪の形であり、影部の字は、それに声符をいのなり」とあり、豪毛をいう。それで人の俊傑なるものを俊髦という。幼児のたれ髪の左右にふりないのを必ずない。「髪中の髪を謂ふ」「髪中の髪を謂ふ」「髪中の髪を謂ふ」「髪中の髪を調ふ」「髪中の髪を調み」とし、字を会意とするが、だけの頭髪の形であり、影響のでは、という。

||柔||1 || || さらす・あらわす・あれる・にわか

最下 島州 署次 。 軍不

画を異にするだけで、同じ字である。[説文] は本本とに従ひ、これを卅つ」とし、ことの速やかであること、暴疾急速の意とするが、暴の異文にすぎず、ともに暴露の字で、曝の初文である。暴は日照りにともに暴露の字で、曝の初文である。暴は日照りにとらされているものであるから、暴疾の意となる。さらされているものであるから、暴疾の意となる。さらされているものであるから、暴疾の意となる。にいう。風雨の状態にも、暴風・暴雨・暴雷のようにいう。風雨の状態にも、暴風・暴雨・暴雷のようにいう。風雨の状態にも、暴風・暴雨・暴雷のようにいう。風雨の状態にも、暴風・暴雨・暴雷のようにいるが、のち「晞く」という字の本義を示すのに、、曝の字が作られた。曝は暴の繁文である。

転 15 【虻】9 あぶ (バウ)

野 15 「「「「「」」 19 だれがみ だれがみ

「書、牧誓」に「庸・蜀・羌・髪・微・盧・彭・僕」 ・と・髪・髪はみな形義の通ずる字である。髪は とし、数声とする。〔詩、鄘風、柏 とい、数声とする。〔詩、鄘風、柏 とい、数声とする。〔詩、鄘風、柏 といる彼の兩髪」の句を引くが、いま髦に作 る。髪・髪・繋はみな形義の通ずる字である。髪は

And the second s

贵 いらか・むながわらボウ(バウ)

を呪禁として飾った。わが国の鯱飾りは、その遺風する。その両端を標といい、そこには霊脈を離たと を存するものである。 その両端を標といい、そこには霊鳥奇獣など

曹 16 くらい・もだえるボウ(バウ)

味のように用いる。 「詩、小雅、正月」「天を視るに夢々たものである。 〔詩、小雅、正月」「天を視るに夢々たものである。 〔詩、小雅、正月」「天を視るに夢々たものである。 〔詩、小雅、正月〕「天を視るに夢々た 四上に「目明らかならざるなり。首に従ひ、旬に従る。の明らかでない状態をいう。〔説文〕 に「十煇の癰(法)を掌り、以て妖祥を觀、吉凶ふ。旬は目數揺くなり」という。[周礼、眡禊] 司農注〕に、瞢とは日月瞢々、その光なきさまをい 司農注〕に、箐ニはヨー・・、 との第六に春をあげている。〔鄭と吟ず」とあり、その第六に春をあげている。〔鄭と吟ず」とあり、その第六に春をあげている。〔鄭 この字もその下に目をそえて瞢然不明の意を示した などの字と同じく、夢魔をなすところの媚の形で、文〕は字を苜と旬とに分っているが、上部は夢・薨 うとし、天候日輝の異変であると解している。「説 会意 夢の省文と目とに従う。意識

膨 ふくれる ボウ (バウ)・ホウ (ハウ)

従うのは、腹部に膨脹を感ずることが多いからであ のがその内部から膨らむことを膨脹という。肉に形声 声符は影。**とは鼓声の鳴りひびくこと。も る。すべてすっきりしないことを膨悶という。

謀 16 はかる・はかりごとボウ

<u>a</u> 伝〕襄四年の文をとる。〔国語、魯語〕に「事を諮覧説文〕三上に「難を慮るを謀といふ」とは、「法 形声 字の原義。〔書、康誥〕「非謀非彝を用ふること勿に詩、周頌、訪落〕の序に「廟に謀る」というのが う。各も祝禱して神に嘆き訴える意の字である。 るを謀と爲す」とあり、もと神に諮謀することをい の枝に祝禱をつけて神意を諮う形の字で、謀の初文。 るは、これ我が后の徳なり」とあり、戦も酒と犬牲きことをいう。〔書、君陳〕に「これ謀り、これ戦き、こればり、こればり、こればいる。 意に用いるのは、甚だしく神意に叛くものというべちの用法である。策謀・謀略・陰謀のように詐謀の 「君子は、道を謀りて食を謀らず」というのは、の とを供えて神意に猷ることをいう。〔論語、衞霊公〕 れ」は、神意に謀ってのち、はじめて事を行なうべ 声符は某。某の初形は臼と木とに従い、 P S 7 X X 木

賵 16 おくる・おくりものボウ(バウ)

きである。

える。乗馬束帛の類を贈るのである。

声符は冒(冒)。〔説文新附〕

懋 つとめる・さかん・うるわしいボウ

なり

があり、字はまた茂に作る。茂・楙・懋の三字通用 し、みな美盛の意に用いる。

蟊 ねきりむし

泰 「左伝」成十三年「我が蟊賊を率ゐて、以て來りてとあり、作物の害虫をいう。また人に及ぼして、 小雅、大田」に「その螟螣と「その蟊賊とを去る」その形に象る」というが、矛声の字である。〔詩、その形に象る」というが、矛声の字である。〔詩、 我が邊境を蕩搖す」、昭三十二年「蟊賊遠く屛く」 のように用いる。貪吏は多く蟊賊にたとえられ、貪 「蟲の艸根を食ふものなり。蟲に從ひ、 一声符は矛。〔説文〕」三下に

る。漢代には災異免官のことがあった。 吏が民生を害するときに、蟊が発生するともい われ

ARCS Mari

誇 17 そしる (バウ)

〔左伝〕成十八年「民に謗言無し」というのが、治ように、ひろく世論の攻撃を受ける意に用いる。 を謗る」、〔呂氏春秋、達鬱〕「國人、みな謗る」の苦。 ただしてそしる意とする。〔国語、周語〕「國人、王大にしてそしる意とする。〔国語、周語〕「國人、王 政の要諦である。 と訓し、人に向かって他を悪言すること、事実を誇 がある。〔説文〕三上に「毀るなり」形声 声符は旁。秀に他に及ぼす意

懵 19

おろか・みだれるボウ

形声

声符は警。警に警乱の意があ

り、懵の初文。 「説文」 IOFの字形は

文〕に残されている、まれな例の一である。

ず」のように、忘の意に用いる。金文の字が〔説

金文の〔靈尊〕に「鷹敢て王の休異〔翼〕を謹れがなく、ただ揚雄の〔太玄〕に、この字を用いる。 意で、祝禱の意をもって言に従う。文献に殆ど用例

をいう。〔説文〕三上に「責望するなり」とはその

んで妖祥を知り、敵を圧服する儀礼

声符は望(望)。望は気を望

鍪 17 かぶと・かま

鸄 [広雅] にも釜の類とする。その器の形が、兜の鉢 の部分に似ているので、 「鍑の屬なり」とみえ、〔急就篇〕がまで、一声符は教。〔説文〕」四上に形声を一声符は数。〔説文〕」四上に のち兜鍪の意に用いる。

麰 おおむぎ

祖后稷が嘉禾をえたという伝承を歌うものである。〔詩、『殷』、思文〕に「我に來牟を貽る」とは、周の始り、大麦をいう。略して牟を用いることもあり、 周は西方よりよい麦種をえて興起したのであろう。 撃撃 五下に「來麰、麥なり」とあ 形声 声符は牟。〔説文〕

M

玄思を馳せるために、

麻薬を用いるものがあった。

の麻薬の類である。六朝の文人のうちにも、その じ。〔元典章、刑部〕に懵薬という語があり、 夢に従うが、のち懵の字が用いられる。瞢と声義同

いま

北 きた・そむく・にげるホク・ハイ

会意 に北方の意に用い、また地名の邶に用いており、古二人相背くに從ふ」とあり、背の初文。卜文・金文 となる。北室は婦人、北堂は母のあるところ。天子 くその音があった。相背く意より、敗北・敗走の意 二人相背く形。〔説文〕ハ上に「乖くなり。 水

> く、洛陽では北邙山に墓地があった。にして南方は陽。それで墓地も北郊に営むことが多にして南方は陽。それで墓地も北郊に営むことが多 の南面に対して、臣下は北面・北嚮する。北方は陰

美ュ ラつ・わずらわしい

業用 神の臣僕たるものであった。 とするのは、僕を卑賤のことに従うものとすること 神事に従うものであった。〔説文〕が菐を「瀆菐」 が業に従うのもその意であるらしく、宰・僕はもと めるとき、丵を用いることがあったのであろう。僕* 宰の字形に、ときに丵に従うものがある。牲肉を治* 語であろうと思われる。撲・撲・璞などの字は、美その義が明らかでなく、煩猥のことをいう畳韻の連である。〔説文〕三上に「濱葉なり」と訓するも、である。〔説文〕三上に「濱葉なり」と訓するも、 からの訓義であろうが、僕はもと神事に従うもので に従うており、これをあらけずりすることをいう。 あるいは撲ちつける器。これを両手にもつ形が、 のついた木を著け、その柄をもって、ものを鑿り、一分で もつ形。業は上部に鑿歯(鋸状の歯) 会意 **学と**力とに従う。 学を両手で

ボク

2 うらなう ・うらかた

0

象形 獣骨や亀版を灼いて、そのひびわれによっ

謹 懵 ホク 北 菐 ボク

謹 18

のぞむ・せめる・あざむくボウ(バウ)

八〇三

という。清末以来、殷墟より甲骨のト片多数が出土という。銅とトとは畳韻。灼いてその裂ける音をト 〔説文〕三下に「龜を灼いて剝くなり。龜を灼くの 骨を用いていたことが知られる。 初期の獣骨が多く出土しており、 形に象る。一に曰く、龜兆の縱横なるに象るなり」 て、吉凶をトうことをいう。 それぞれその表面に走る。それが卜兆とよばれるも と、鑽の部分には縦の線、灼の部分には横の線が、 ばれる円形の穴を掘って、その部分に火熱を加える よばれる楽形の縦長の穴を掘り、その横に灼とよ し、そのト法が明らかにされた。また鄭州からは、 十二鑽にして盡く」とあるが、小屯出土の大亀にので、トの字形となる。[荘子、外物]に「一龜七 らん」とあり、[伝]に「トは予ふるなり」という。雅、天保」に「君曰く、爾をトするに 萬壽無疆な記、亀筴伝]に褚少孫の[補伝]がある。[詩、小老」に詳しく記述されている。ト兆の解釈は、[史考]に詳しく記述されている。ト兆の解釈は、[史 第は、〔儀礼、士喪礼〕に当時のしかたがしるされ は、百鑽を超えるような例もある。占卜の儀礼の次 いて、対馬にその古法が残され、伴信友の〔正トている。中国古代の卜法は、わが国にも伝えられて 期待するものであり、トいの本質は、自己の行為に その手続きにすぎない。〔周礼〕に大トの官があり、 トするという行為は、神によって承認されることを ついて、神の承認をうることにある。占トはいわば ト人の後裔にトを姓とするものが多く、孔門の子夏か は、姓名を卜商という。 トはそのひびわれの形 。ト法は、まず鑽と、亀トよりさきに獣

支 4 うざつ

事。*

木⁴・ボク・モク

強、教厚」など、みな朴の義である。

強、教育」なり、地を冒ひて生ず。東方の行なり、当時の音(釈名、釈天)にも「胃ふなり」とあり、当時の音義的解釈であるが、卯字条一四下にも「胃ふなり。字形の旁出するものは、みな枝とみてよい。析と通用し、の旁出するものは、みな枝とみてよい。析と通用し、の旁出するものは、みな枝とみてよい。析と通用し、の旁出するものは、みな枝とみである。

木 6 木の皮・ほおのき・すなお

雅、釈詁]に「離すなり」とあり、それが古義であ 形声 声符は下。木の皮を剝ぎとる

が残されているという。(登辞、天間)の神話にみえ、山西の方言にその語の厚い木であるから、厚朴という。朴牛は牡牛。皮の厚い木であるから、厚朴という。朴牛は牡牛。質・朴素の義に用いる。木の名としては、ほおの木。

牧 8 うしかい・やしなう・まき・おさめる

特状状物

会意 牛と支とに従う。牛を逐うて放牧する意。会意 牛と支とに従う。牛を養ふ人なり」とあり、また牧養すること、牧場の意に用いる。牛に限らず、馬や羊を牧養することをもいう。〔左伝〕襄十四年にはみな卑賤のものであった。また民治を牧養のことはみな卑賤のものであった。また民治を牧養のことはみな卑賤のものであった。また民治を牧養のことはみな卑賤のものであった。また民治を牧養のことはみな卑賤のものであった。また民治を牧養のこととない、〔書、立政)、また牧

昨 3 ボクむ・したしむ・やわらぐ

に「百姓親睦す」という。 や僕に「百姓親睦す」という。 みな神霊を迎えるときの態度に いかならない。転じて同族の人に対する親和の情をい となり」とみえる。また[広雅、釈詁]に「信なり」と のがり」とみえる。また[広雅、釈詁]に「信なり」と のがり」とみえる。また[広雅、釈詁]に「信なり」と のがり」とみえる。また[広雅、釈詁]に「信なり」と のがり」とみえる。また「一に曰く、砂みて和 廟中四上に「目順ふなり」、また「一に曰く、砂みて和 廟中四上に「目順ふなり」、また「一に曰く、砂みて和 廟中四上に「百姓親睦す」という。

翠

桑

僕は じもべ・ともがら・やつがれ

震 学学思

形声 声符は業。「説文」三上に「事を給するものなり。人業に從ふ。業は亦聲なり」と会意とする。に従う者と解するものであるが、業は撲伐の意である。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、人に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、大に十等ありとして、王・る。〔左伝〕昭七年に、大に十等ありとして、王・さい。と神事に奉仕するものの形にしるされており、もと神事に奉仕するものの形にしるされており、もと神事に奉仕するものの形にしるされており、もと神事に奉仕するものの形にしるされており、もと神事にを持ちるものとなるが、僕はおくの表に対していることが注意される。臣は神の徒続として神にささげられたものであり、僕ももとそのよりによっていることが注意される。臣は神の権続として神にささげられたものであり、僕ももとそのよりに、大きない。本相の幸も、

となるが、 司馬遷が任安に与えた書中に、その語を用いている。注目すべき事実であろう。のち自己の譲利とたり 鼎]では「王、駿す。潦仲(人名)履となる」とように、士の上に僕射が位置しており、また〔令だ中期の〔趨段〕に「僕射・士・誤・小大右隣〕のだ中期の〔趨段〕に「僕射・士・誤・小大右隣」の 場与の対象とされており、また〔師設設〕に「併せい」に「伯大師、伯克に僕三十夫を賜ふ」とあって、電」に「伯大師、伯克に僕三十夫を賜ふ」とあって、は、「伯大師、伯克に僕三十夫を賜ふ」とあって、僕がすでに低い地位のものであったことは、「伯克 酒を酌む人の形が、僕の初形であると思われる。臣のがあるが、それは神酒を酌む形である。そのといた。金文の図象に醜字形とよびならわされているも 廟室の形に従うており、僕の職事がなお神事に関す だ中期の〔趯段〕に「僕射・士・説・小大右隣」の牧・臣妾をごれ」とあることからも知られる。た 字となり、僕はのち太僕三公の官となり、臣も大臣いなり、僕はのちな僕三公の官となり、臣も大臣廟中で牲肉を扱うものであった。宰はのち宰相・た うな身分の変化は、古代奴隷制の問題を考えるとき、 うに、重臣の地位に列するものとなる。僕のこのよ それがやがて王の侍従の臣となり、僕射・太僕のよ として、臣妾とともに神につかえるものであったが、 るものであったことが知られる。僕はもと神の徒隷 みえ、王の侍従の臣とされている。この贋の字形は、 ば、官制史の上で、その名が最高位に位置すること や僕がはじめから奴隷的な身分のものであったなら て我が家の西原東隔(組織の名)の僕駿・百工・ は、考えがたいことである。ただ西周期において、 いずれも本来は神につかえるものであっ

甲骨文の刻字のあとに、朱墨を塡めているものがあ「書する墨なり」とあり、書写に用いる墨をいう。 す」、〔礼記、玉藻〕「史、墨を定む」とは、占卜の存したものと思われる。〔周礼、占人〕「史、墨を占のが、その俗が失われたのち、処刑の方法として遺のが、その俗が失われたのち、処刑の方法として遺 ている。黒は火を燻して繋の中に煤をとる字形であしるし、楚の帛書をはじめ、漢簡の類が多く残されその文を写したものであろう。古くは帛・竹・木に とき、そのまちかたに墨を加えることをいう。漢に 墨を用いた。入墨は古くは文身の一方法であったも るから、それを固形にして用いる法は、古くからあ れている。また金文に、冊命の書を授受する儀礼を り、また刻辞の前に墨書したあとを存するものもあ る人を含めて、その人を墨客という。また水墨の法 あるから、書画のことを墨技といい、詩文をよくす に作られていた。墨は書画文房の最も重要なもので て書墨十螺・墨丸などの語がある。墨はまるめた形 入って、書写のことが大いに行なわれ、墨も普及し ったものと思われる。いわゆる墨刑は、入墨にその しるす例があり、金文にみえる廷礼冊命の部分は、 って、筆墨は甲骨文の時代において、すでに用いら 黒 (黑) と土とに従う。〔説文〕一三下に

美 5 うつ・うちたおす

墨の芸術とよばれる。

は、中国画において特異の地位を占め、その芸術は

墨山(墨)15

すみ・モク

ずらりと並ぶのを、驚列という。は、一般の人の進物に用いられた。百官が礼装しては、一般の人の進物に用いられた。百官が礼装してするので、毛に色を塗って区別するという。古代にするので、毛に色を塗って区別するという。古代に

the second secon

糖类。

「数仗」の語がある。いま相撲の字に用いる。 「数仗」の語がある。いま相撲の字に用いる。 「数性」の語があり、戈をもって撲つ意。「今甲盤」にもの語があり、戈をもって撲つ意。「今甲盤」にもからず。「奈局 鐘」に「厥の都を繋伐す」とするが、「書、般庚、とことをいう。「奈局 鐘」に「厥の都を繋伐す」というで、強くたたきふせることをいう。「奈局 鐘」に「厥の都を繋伐す」というで、強いないの語がある。いま相撲の字に用いる。

樸 16 あらき・きじ・もと・すなお

形声 声符は繋。(説文) 六上に「木 大学ででは、など、大生には葉という。葉は「説文」に入るないが、 一方を関して横を抱く」、第三十二章「横は小なりと雖も、天下能く臣とするもの莫きなり」とあっまたれ理の自然を保つもので、「老子」第十九章「素を見して横を抱く」、第三十二章「横は小なりと雖も、天下能く臣とするもの真きなり」とあって、ものの至純なる状態をいう。清代の学術は、「事を實にし、是を求む」という。漢は「記されて、ものの至純なる状態をいう。清代の学術は、「事を實にし、是を求む」という実証の精神を基調して横りまた、大下能く臣とするもの莫きなり」とあって、ものの至純なる状態をいう。清代の学術は、「事を實にし、是を求む」という実証の精神を基調して横つである。ただ僕厚は尚ぶべきも、撲晒・撲撃に陥ってはならない。

移16 ボク のる・つつしむ・まこと・やわらぐ

? 解

野野野野家

20 あひる

ともいうように、農村では多く飼われ、放ち飼いに為なり」とあり、あひるをいう。家鴨 下声 声符は教。〔説文〕四下に「舒

は、ずれも水役を示す字で、父の上部はその形。父々、ボッ・しずむ 会意 だと文とに従う。已は犯の従いまうとする意である。〔説文〕三下に字形の上部に作り、「水に入りて取る所あるなり。又の同を同に作り、「水に入りて取る所あるなり。又の同にった。 でいるに従ふ。同は淵水なり」という。 夏部九上部にちるに従ふ。同は淵水なり」という。 夏部九上部 がようとする意である。〔説文》という。 日は犯の従った。

没って没」でしずむ・しぬ・ない

は没(沒)の初文とみてよい。

歿8「易」8 じぬ・おわる・つきる

勢 9 おこる・さかん・あらそう・にわか

形声 声符は学。李は花果に実が入ればにも、勃如たり」とは緊張するさまである。

「色、勃如たり」とはいう。「説文」ニ三下に「排するなり」というも、勃興が本義。楚の闘勃、字は子上。漢の張興、字は子上、また樊興も字は子上。分物」に婦姑の相争うを「婦姑勃毅」という。勃谿はにらみ合うこと。「説文」はその義によって、排はにらみ合うこと。「説文」はその義によって、排はにらみ合うこと。「説文」はその義によって、排はにらみ合うこと。「説文」はその義によって、排はにらみ合うこと。「説文」はその義によって、排するのあらわれることをいう。「論語、郷党」とは緊張するさまである。

浡 10 おこる

ボツ 勃 浡 渤 ホン 本 奔〔奔〕

オ 12 ボッ かんなさま

たのも、そのことが機縁をなしていたといわれる。
なころである。神仙説が戦国期の斉の地におこっなところとされるが、そこは蜃気楼のあらわれやするところとされるが、そこは蜃気楼のあらわれやすいところである。神仙説が戦国期の斉の地におことを、
はちょうである。神仙説が戦国期の斉の地におこった。
はちょうである。神仙説が戦国期の斉の地に関ることを、
まらわれることをいう。雲気の盛んに興ることを、
まられることをいう。雲気の盛んに興ることを、
まられることが機縁をなしていたといわれる。

ホン

本 5 もと・もとい・はじめ・ほん

指事 木の下部に肥点を加えたもので、指示的な方法である。〔説文〕☆上に「木下を本といふ」とあり、木の下に一を加えた形とするが、もと肥点を加えて、その部分を示す形であった。卜文・金文に用義例はみえないが、本末・本支のように対称し、指示的な

奔 8 【奔】 9 はしる・はゃい・にげる

春 笨 犇 るなり」と訓し、「黄の省聲なり。走と同意。俱にえ、足早に奔走する意を示す。〔説文〕一〇Fに「走え、足早に奔走する意を示す。〔説文〕一〇Fに「走を加会意 人の走る形である天と、その下に三止を加

他のものに及ぼして奔牛・奔馬のようにいう。 とれる、とする。奔走は祭祀用語であり、金文に来事に従うことを「夙夜奔走せよ」という。 「爾雅、釈宮」に、堂上では行、堂下では歩、門外では樹、中庭では走、大路では奔という。 「周公設」に「克く上下帝に奔走せよ」、「麦香」「周公設」に「克く上下帝に奔走せよ」、「麦香」「周公設」に「克く上下帝に奔走せよ」、「麦香」「周公設」に「克く上下帝に奔走せよ」、「麦香」「周公設」に「克く上下帝に奔走せよ」、「大大のときには敏捷という。のち急疾に赴くことをいい、君命に赴くことを奔命、他国より急いで帰葬することを奔喪、もない。

畚10 ふご・もっこ

を平らかにして、畚築を稱る」とみえている。 (左伝) 宣十一年に「板幹(両旁に立てるそえ木)び、それを杵で築き固めて、土壁を作る工法をいう。び、それを杵で築き固めて、土壁を作る工法をいう。
を平らかにして、畚築を稱る」とみえている。

第 1 竹うらの白い皮・あらい

12 はしる・ひしめく

あり、森や麤・驫と同じ造字法である。〔集韻〕に会意 三牛に従う。〔広韻〕に「牛驚くなり」と

奔の古字であるとするが、奔は人の走る形。国語で はひしめく意にも用いる。

翻 18 (翻)18 (飜)21 とぶ・ひるがえる

翻覆の意があり、身をひるがえして飛ぶこと。本を がある。〔説文新附〕四上に「飛ぶなり」という。 めることを翻然という。 ることを翻刻、他国語を訳することを翻訳、心を改 ひらいてみることを翻読、版木を写しかえて出版す 形声 形。番に平たくひらひらするものの意 声符は番。番は獣の掌の象

凡³ 文 え はこぶ・およそ・すべて・なみのボン・ハン

月月月

四隅をもつ形である。「方はそれ凡せんか」とは、般は、それを撃つ形に作り、また運搬の搬は、その字形は明らかに盤の形である。卜辞にみえる般庚の 伝〕に「最括して言ふなり」とあり、全体をまとての形はときに舟の形に釈されることがある。[紫文の形はときに舟の形に釈されることがある。[紫 うて会意であるとし、二隅をまとめる意とするが、 めていうときに「凡そ」というが、字の初義ではな 方とよばれる異族の侵入の有無をトするものであり い。〔説文〕[三下にまた、字形を二と及の古文に従 盤の形。舟も盤の形であるから、卜文・金

> 、儀がみえ、三方を祓う祭儀のようである。〔詩、周にいう。 [大豊設] に「王、三方に凡す」という祭にいう。 [大豊設] に風の声符となる。風は古く鳳とかかれ、風はこのって、他に波及する意をもつものと思われる。ゆえって、他に波及する意をもつものと思われる。ゆえ 名であるが、おそらく祀ってその禍殃を他に移すこ「祖丁に凡せんか」「父乙に凡せんか」とは、祖祭のべる。 な例があり、かなり古くからの用法である。 「凡そ十又五夫なり」、「凡そ散の有司十夫」のよう である。まとめていう用いかたは、「散氏盤」に 称したのであろう。わが国の吉野仙遊のようなもの 字はその篇中にみえず、山川の祭祀そのものを般と 頌、般〕は山川の祭祀を歌うものであるが、般のい。 *** 運ぶこと、それで移動することを盤旋・運搬のよう も凡に従うが、凡はもとは盤の象形で、盤に乗せて て移動するものであるから、汎・帆(帆)などの字鳳は鳳形の鳥に、凡声を加えた字である。風によっ 鳳形の鳥の飛翔によって生ずるものと考えられた。 とを祈るものであろう。すなわち凡に盤旋の意があ

盆 はち・ほとぎ

处型 少分、公司

器としてみえる。〔荘子、至楽〕に、荘子の妻が死 で、鑑と同じく水器である。〔儀礼、士喪礼〕に水期の器に〔曾大保盆〕があり、鑑に似た形制のもの盤は大腹で口が狭く、盆は底が狭く口が広い。列国 形声 んで、恵子が弔問に出かけると、荘子はあぐらに坐 声符は分。〔説文〕五上に「盎なり」とあり、 士喪礼」に水

> に、たたいて即席の拍子とりに用いた。 して、盆を鼓して歌っていたという。缶と同じよう

梵 清浄 ・ハン

音訳。離煩清浄の意で、その音訳語として作られたの意義を詳かにせず」という。梵語 Brāhmaṇa の 形声字である。すべて仏教語に用いる。 六上に「西域の釋書より出づ。未だそ形声 声符は凡(凡)。〔説文新附〕

7

麻 (麻)1

榆

とは、 『修 祓のときにこれを著ける俗があった。中国では、意とすべきであろう。わが国では戸香を神事に用いは、广は宮廟の象であるから、林皮を神事に用いる、广は宮廟の象であるから、林皮を神事に用いる 御祀とよばれるものが、修祓の意をもつ祭儀である。 故に广に從ふ」とするが、麻に限らず、糸を績ぐこ 会意 て、〔段注〕に「林は必ず屋下においてこれを績ぐ。 あって互訓。杣は麻皮の形。字が广に従う意につ 七下に「鹹と同じ。人の治むる所なり。屋下に在り、 / 枲なり」の語がある。枲字条モトに「麻なり」と、ッッ゚に從ひ、棘に從ふ」とし、〔繋伝〕には文首に、 すべて野外の作業ではない。麻が广に従うの 旧字は麻に作り、广と林とに従う。〔説文〕

形にかかれ、糸たばを拗じた形である。おそらく麻たばなどを用いたものであろう。麻で織った布は締谷といい、多く神事に用いる。冠冕の類に麻髪・組織といい、多く神事に用いる。冠冕の類に麻髪・組織といい、多く神事に用いる。冠冕の類に麻髪・組織といい、多く神事に用いる。 記髪の類に麻髪・組織といい、多く神事にある。おそらく麻がはなどを用いたものであろう。麻で織った布は締ちにない。 供する枲麻を麻といったものと思われる。うものであろう。これらのことからいえば、神事に 「麻衣、雪の如し」とあって、その経帷子の類をい が、御の字の午形のところは、卜文・金文では幺の

痲 しびれる・あばたマ・バ

さぶたなど、人の疥癬の状を示す象形字である。疹・痘瘡の意とする。疹の初文含も、もと皮膚のか疹・痘瘡の意とする。疹の初文含も、もと皮膚のか いう。柿は外皮のはがれる状と似ており、ゆえに痲あり、痲疹ははしか、痲子は痘瘡、痲薬は痲酔薬をあり、 声符は林。〔正字通〕に「風熱病なり」と

壓 1 [灰] 1 こまかい・なに

る。いまは「麽事」のように疑問の意に用いる。るものはその俗字であるが、多く麽の字が用いられるものはその俗字であるが、多く麽の字が用いられ 「小なり」の意を承けるとするものである。麼に作 と細小の意とする。字は幺に従うており、話〕に「微なり」、〔説文新附〕四下に 形声 声符は麻 (麻)。[広雅、釈

摩 15 (摩)15 こする・みがく・へるマ・バ

上に「研ぐなり」とあり、 形声 声符は麻(麻)。〔説文〕 ニニ 両方をすり

7 痲 摩〔摩〕 磨〔磨〕〔礦〕 魔(魔)

费 当 \$

マイ

毎(毎)

どの音訳語に、この字を用いることが多い。 を撫摩、敵状を推測することを揣摩という。梵語ななどに書画を刻することを摩崖、人を慰安することなどに書画を刻することを摩崖、人を慰安すること 合せることであるから、また磨滅の意となる。懸崖 る形。これに又(手)を加えた形は敏(敏)で、敏

0

事命

磨16 (磨) 16 (礦) 24 みがく・すりへるマ・バ

とは婦人が祭祀にいそしむことをいう。〔説文〕

婦人が祭事のために髪に簪飾を加えてい

ることがある。 事となった。摩と通用して磨崖・磨擦のように用い 「爾雅、釈器」に「石、これを磨と謂ふ」、「広雅、『談文〕九下に正字を礦とし、石磑の意とするが、『話文』九下に正字を礦とし、石磑の意とするが、『話文』とは摩。石にこすって磨くのを磨という。「「「「」」 ろから行なわれたが、結局は年功を数えるのみの行 とをいう。官吏の定期査察を摩勘といい、宋の中ご釈器」にも「穢くなり」とあり、すべて磨礪するこ釈器」にも「穢くなり」とあり、すべて磨礪するこ 嚈 形声 声符は麻(麻)。手でもむの 毎々は草の茂るさまをいう語であるが、「文選、魏為える「興人の誦」に「原田毎々たり」の句があり、啓」とし、草盛の意とする。「左伝」傳二十八年に齊」とし、草盛の意とする。「左伝」傳二十八年に「艸盛にして上に出づるなり。中に從ひ、母下に「艸盛にして上に出づるなり。中に從ひ、母

「叔夷鐘」「女肇めて戎工(軍事)に敏めたり」の意に用いられる。[大豊段]「毎しみて朝夕に入りて諫めよ」、「後か」、「大盂鼎」「毎しみて朝夕に入りて諫めよ」、「たまっ」、「たまっ」、「たまっ」、「大豊の

原義ではない。毎の字形は金文にみえ、その字は敏 都賦、注〕に引いて莓々に作っており、草盛は毎の

ような例がある。毎と敏とはもと一字であったらし

魔』(魔)21 おマ に・バ

から生れた字である。 すなわち外道・悪鬼の音訳語の略で、その音訳の語 , 九上に「鬼なり」という。梵語 Māra, 形声 声符は麻(麻)。〔説文新附〕

毎6 (毎) つねに・いそしむ・

妹 8 いもうと・おとめマイ

華〕に「良朋ありと毎も」という用法があり、 「毎に」のような副詞的用法は仮借。〔小雅、皇々者

を加え、簪笄を用いた。毎・疌はいずれもその姿を いう。その飾りの篤厚にすぎるものを毒という。

る」「被の祁々たる」のように、髪に被(そえ髪) を整えて臨み、〔詩、召南、采蘩〕に「被の僮々た の奔走という語に近い。祭事には、婦人はその婦容 まめまめしく祭事に従うことをいう語で、祭祀用語 立ち働く形は走で、捷の初文。敏捷とは、婦人がく、婦人が家廟の祭祀にいそしむことをいう。その

も仮借である。

(よあけ)の意に用い、「大盂鼎」に「妹辰、大服〔鄭注〕に「紂の都する所なり」という。また昧爽〔紫末に明かにす」という妹邦のことであろう。 (儀礼) あり」の妹辰は、その意である。 に史ることあらんか」とは、〔書、酒誥〕に「大命**。ない、姉には「女兄なり」としている。卜文に「妹あり、姉には「女兄なり」としている。卜文に「妹 声符は末。〔説文〕一二下に「女弟なり」と

枚 8 みき・いたきれ・かぞえるマイ・バイ

〔左伝〕襄二十一年「その枚數を識す」と馬鞭の意幹を枚といふ」とあり、〔説文〕はその義による。 斧斤をもって削りとった木を枚という。ト辞に「舟 みえる字形は、木に斧斤を加えている形とみられ、に用いるが、枚を杖の意に用いる例はない。金文に 句を引く。〔周南、汝墳、注〕に「枝を條といひ、 に従ふ」とし、〔詩、大雅、旱麓〕「條枚に施る」の 文」六上に「幹なり。杖と爲すべし。木に從ひ、支中一 つ形で、斧でうった木片をいう。〔説 り、これを銜枚という。を出さぬように枚を口に銜ませて行軍することがあ ことを枚挙という。隠密のうちに行動するとき、声ろう。薄く削ったものを枚といい、一枚ずつ数える を枚る」という例があり、これは刳り舟のことであ 会意 木と支とに従う。支は斧をも

昧。 よあけ・くらい・おろかマイ

* * * *

鄭風、女曰鶏鳴〕に「女はいふ雞鳴なりと 士はいに明けんとするなり」とあり、味足ともいう。〔詩、に明けんとするなり」とあり、味足ともいう。〔詩、形声 声符は未。〔説文〕七上に「味きなり。まさ た。なお幽昧のときであるから、昧い意となる。礼がある。古くは朝日を迎える「腎盂」の礼があっ にも昧爽に多君が廟に入り、明に王が周廟に入る儀 をいう。〔兔殷〕に「昧爽、王、大廟に客る」とあった。****。 とあって、鶏鳴よりも前の朝まだき って、大廟の儀礼は昧爽に行なわれる。〔小盂鼎〕

埋10 「種」18 「貍」14 マイ・バイ

〔周礼、司盟〕は、その盟載の法を掌るものである。そそぐことが行なわれた。その書を載書という。 さくにとが行なわれた。その書を載書という。 古くは盟書なども地に埋め、牲血をその上に ですが用いられる。「説文」一下に「種は塞むるなど、また、とのときだけ、埋と同声である。「周礼、埋める種性のときだけ、埋と同声である。「周礼、埋める種性のときだけ、埋と同声である。「周礼、埋める種性のときだけ、埋はっている。「説文」一下に「種は塞むるなの字が用いられる。「説文」一下に「種は塞むるなの字が用いられる。「説文」一下に「種は塞むるなの字が用いられる。「説文」一下に「種は塞むるなの字が用いられる。「説文」一下に「種は塞むるな 埋めること。地下には埋蠱のように、地中に呪物を山林には貍といい、川沢には沈という。貍は犠牲を が、のち犠牲に限らず、すべて地下に埋めることを 磔によってこれを防いだ。埋はもと薶の略字である うに自在に空を往来するものがあるので、埋牲や風 埋めて呪詛することがあり、また蠱には、風蠱のよ 形声 また貍に作り、また埋に作る。いま埋 正字は薶に作り、貍声。字は

> 邁 ゆく・すぎる・たちさるマイ

多 不多

「腫の行邁に謀るが如し、是を以て道に得ず」と歌行邁はまた行きずりの人をいい、〔小雅、小旻〕と靡々たり、中心搖々たり」と、漂泊の不安を歌う。 うである。 う。西周末期には、宗周の地にも各地からの亡命 て用いられる。「詩、王風、黍離」に「行き邁くこ 者が入りこんでいて、秩序を乱すことが多かったよ をときに「邁年」に作ることがあり、萬の繁文とし なり」とし、蠆の省声とする。金文に「眉壽萬年」形声 - 声符は蕙(万)。〔説文〕二下に「遠行する形声 - 声符は蕙(万)。〔説文〕二下に「遠行する

マク

膜 まく・うすかわマク・ボ

あり、仏教でいう頂礼のしかたをいう。 「釈名、釈形体」に「幕なり」とあり 「釈名、釈形体」に「幕なり」とあり をいう。「穆天子伝」に膜拝の語が をなった。 声符は莫。莫に幕の意がある。

柾 まさ

偏旁を和訓して用いるもので、槙をまき、樫をかしじ字であるが、わが国では木のまさめの意に用いる。 国字 字の本音はキュウ(キウ)で柩と声義の同

条に「まさ・すぢ・きめ・しは」の訓を加えている。 とよむのと同じ。まさは木理。〔字鏡集〕には理字

france of the state of the stat

マツ

すえ・しも・よわい・ないマツ・バツ

業 8 すつり

米州

梢・末端をいう。また仮借して無・莫・蔑と通じ、位に肥点を加えた字。本末・始末のように用い、末し、木上に一のある形とするが、*と同じくその部 否定詞に用いる。 部位を示す。〔説文〕ストムに「木上を末といふ」と 木の末端。その部分に肥点を加えて、その

抹 ぬる・けすマツ・バツ

のするものであった。 みな抹顔をつけていたという。はちまきは、もと神 秦の始皇帝が海上で神に出会うたとき、その神々は りつけることを塗抹という。消すときには抹消とい う。抹香は仏前に香をまくこと。抹額ははちまき。 形声 声符は末。末に粉末の意があり、それを塗

に「之の子ここに歸ぐ ここにその駒に 秣ふ」のるが、郷秣の字には秣を用いる。〔詩、周南、漢広〕のが、帰を食ふ穀なり」とし、秣はその一体であり、「馬を食ふ穀なり」とし、秣はその一体である。〔説文〕五下に正字を鮇に

秣 10 〔妹〕14 まぐさ・かいば・まぐさかう

形声

声符は末。末に細かなものの

子は首飾りとし、蒸して薔薇水を作る。また一種の 紅茉莉には、人を死に至らせる毒があるという。

紅色蔓生のものは夜に花を開き、芳香愛すべく、女 ら南海に入り、中国西南の温熱の地に栽培された。 訳の名でよばれた。また毛輪花ともいう。インドか

沫 あわ・みなわ・あわだつ・あせマツ・バッ

に「人 流沫に鑑みるもの莫し」とあり、あわ立ちの川の名とする。〔淮南子、俶真訓〕 形声 マツ末 声符は末。〔説文〕ニー上に蜀 抹 俶真訓〕

沫

茉

秣[餘]

麿[麿]

マン

万(萬)

句がある。

ていい、森蘭丸のように丸の字を用いるのは、そのの自称として用いた。のち男の子の幼名の下につけの うにしるす。古い時代に、男子をよぶ称、また男子 麻と呂との合字。柿本人麻呂を人麿のよ

麿 18 (麿) 18 まろ

語の転化したものである。 国字

7

沫若水とよばれる。郭沫若はその名を用いた。うに用いる。蜀の沫水は若水とともに江にそそぎ、つもの、また流れる汗をいう。わが国では沫雪のよっもの、また流れる汗をいう。わが国では沫雪のよっちの、また流れる汗をい

流れる水をいう。噴沫・騰沫のように水たまや泡立

万 3 【萬】13 まん・さそり・よろず

副門 高衛衛衛 - W W W

原産。古くは柰花、また抹鷹・末麗・末利など、音

声符は末。茉莉花をいう。茉莉はペルシャ

歌われている。その武舞には干戚(盾とまさかり)、「大き」、など、大きり、、など、大きりである。とのでは、大きりである。とのでは、大きりである。とのでは、大きりである。一般人の舞楽であった。〔詩、があり、軍旅の数をいうのに用いる。また舞の名にがあり、軍旅の数をいうのに用いる。また舞の名にがあり、軍旅の数をいうのに用いる。また舞の名に に「邁年」としるすことがある。 に「眉霧萬年」の語を多く用いるが、その字はとき 文舞には羽籥(翟の羽と笛)を用いた。金文の銘末 別のものであろう。萬をそのような虫の名として用 ず、〔段注〕に蠆と同形であるから、その類であろ「蟲なり。斉に從ふ。象形」とするも虫の名をあげ いた例はない。卜文にはすでに数字の万に用いる例 うという。蠆はさそりであるが、萬と音が異なり、 象形 旧字は萬に作り、虫の形。〔説文〕 | 四下に

H 6 まんじ・いりみだれるさまマン・バン

の入り乱れる状態を卍巴という。左にめぐるもの吉祥万徳の集まるところの印とする。音は万。もの す記号。十字形の各末端に、回転方向をつけた形。 図象 もと仏教で用いたもので、吉祥・幸福を示

右旋するものを右卍という。

あたるマン・ベン・メン

「繭の字、これに從ふ」というが、巾・帀を主体とあるが、おそらく繭の初文であろう。〔繋伝〕に あろう。金文に「大命に市る」という例がある。 に「嬴は當るなり」とは、一中一ぱいの帛のことで する字で、上部は帯に著けるところ。〔広雅、釈詁〕 當るなり。闕。讀みて宀の若くす」と象形 布帛の形。〔説文〕四上に「相

胾 あたるバン

の形はその文繡。その文様の豊満であることをい とりがたい。巾の左右に文飾を加えたもので、両入 の解は附会の甚だしいものである。〔玉篇〕に「明 のところに繋る形で、数の二十ではなく、〔説文〕 〔段注〕にも「その法未だ聞かず」という。 敷」以下の文は、他書に引くところも異同が多く、 ふは平なり。讀みて蟹の若くす」とする。「五行の 廿に從ふ。五行の敷、二十分を一辰と爲す。 る蔽膝(膝かけ)の巾をいう。上部は、帯に繋ける(ま)。 大巾の帛に、飾文を加えた形。礼装に用い象形 大巾の幕に、飾文を加えた形。礼装に用い かにせんと欲す。當るなり」というのも、その意を ところである。〔説文〕ゼ下に「平らかなるなり。 うもので、滿(満)の初文とみてよい。満は盈満す ることをいう字である。 廿は帯 アに従

> 曼 めうつくし・ゆたか・ひろマン・バン

画面

湯問」「韓娥(韓の歌ひめ)曼馨に因りて哀哭す」という。「孔だ愛にして且つ長し」、また〔列子、目が美しく大きいことをいう語である。〔詩、魯頌、[説文]三下に「引くなり」という。面衣を引いて、「説文]三下に「引くなり」という。面衣を引いて、 衣を引 会意 「蛾眉曼睩」とは、婦人の美しい目もとをいう。 **滿・滿(満)は同系の語である。** う。曼延は連なる、曼衍は無限をいう。曼・漫、め)の意であるが、そのような目の美しさを曼とい 曼にして以て流觀す」は、いわゆる流・眄(ながします) では、 ままれて (ながして余韻のあることをいう。 [楚辞、哀野] 「我が目をて余韻のあることをいう。 とは、それを歌声に用いたもので、 いて、 ハて、目のあらわれる形で、〔楚辞、招魂〕胃(冒)と又とに従う。冒は面衣。その面 目のあらわれる形で、〔楚辞、 声をゆたかにし

満12 (滿)14 みちる・たる・おごるマン

ことがある。 満を引くとは大杯を傾けること。字は漫と通用する 成・成就することにもいう。満を持すとは弓勢、 満することをいう。また転じて、すべてものの完 ある。〔説文〕ニェに「盈溢なり」とあり、水の充 鱗 た厳膝(膝かけ)の形で、満盈の意が形声 声符は菌。菌は文 纏を加え

嫚 14 「優」13 みなどる・けがす・おこたる

慢 ¹⁴ 帽 おこたる・あなどる・おごるマン 形声 声符は曼。曼は面衣を引いて

字はまた優に作る。

女が流し目して視る意で、不敬・侮嫚の意となる。

文〕二下に「侮り易るなり」とあり、

声符は曼。曼は流し目。「説

をいう。慢易・慢侮・慢心・傲慢など、すべて傲り 悔るときのようすで、嫚と声義が近い。 「憜るなり」とは、女がそのような態度をとること 流し目をする形。〔説文〕一〇下に

漫 14 ひろい・たいら・あまねし・みだりにマン

形声 ことがある。繭は、一面の文繡をいう字である。 渺 曼・漫術のように用いる。またとりとめのない とをいう。水の果てしなく連なるさまを漫とい まりのないことを散漫という。溝(満)と通用する ことをいい、漫遊・漫言・漫吟のように用い、まと 声符は曼。曼は目の長くゆたかで美しいこ

蔓 15 つる・のびる・はびこるマン

「葛の屬なり」とあり、蔦・葛など蔓草の類をいう。 灣 その伸び広がることを蔓延という。 る意があり、 形声 かで美しいことをいう。長く横に伸び つるの伸びるもの。〔説文〕一下に 声符は曼。曼は目の長くゆた

瞒 あざむく・くらいマン

とを瞞着という。着は助字である。 また人を欺瞞するときの目つきでもあり、だますこ り」とあって、目がかげってよくみえぬことをいう。 「平目なり」とするが、〔繋伝〕に「目の験低るるな くて、 目のまぎれることをいう。「説文」四上に た蔽膝(膝かけ)の形。その文飾が多 声符は繭。隣は文繡を加え

縵 ¹⁷ もようのないきぬ・ゆるいマン

子、斉物論)「縵なるもの」とはそよ風をいう。 縵表白裏」という。模様のない布帛で、生地の粗い の文無きものなり」とし、「漢律に、衣を賜ふ者は、 形声 ものの意がある。〔説文〕 - 三上に「繒』 声符は曼。曼に平らかで広い

鏝 19 こてン

官が左手にもつものを、鏝板という。「四上に「鐡の朽なり」とあり、壁を塗るこて。左 なるものの意がある。〔説文〕 声符は曼。曼に平漫

饅 まんじゅう

魏晋のころから作られていたようである。とは、というである。というない。これのではまた曼頭に作り、束皙の〔餠の賦〕にみえる。一般は一声符は曼。曼に平漫なるものの意がある。

鬘 かずら・かみかざり

マン 縵 鏝 饅 鬉 3 未 味

魅[魁]

1

縵・蘰の字を用い、鬘の字を用いることはない。等の学の学に用いる字である。わが国の〔万葉〕には、いまない。これをつけて、身を荘厳する。仏教の用語、をいう。これをつけて、身を荘厳する。仏教の用語、 形声 声符は曼。頭にまとうて飾るもので、華鬘

未5 いまだ・ゆくすえ・ひつじミ・ビ

*

含むものがある。 爽・妹辰のようにいう。未声の字には、未然の意を等。また。の義に用いる例がなく、未明を金文では味はまだその義に用いる例がなく、未明を金文では味ま明・未聞・未定のように用いるが、卜文・金文に 関係で連語を作ることが多く、未来・未然・未見・ 「未だ」のように時の関係に用いるのは仮借。時の 形で、その伸びすぎたものを剪栽するのを制という。 煩瑣な解釈である。未は枝葉の先が長く伸びてゆく 木の枝葉を重ぬるに象る」とするが、五行説による「味なり。六月、滋味なり。五行は、木は未に老ゆ。多形 木の枝葉の茂りゆく形。〔説文〕 | 四下に象形 木の枝葉の茂りゆく形。〔説文〕 | 四下に

味 8 あき

味なり」とあり、五味をいう。よく味 声符は未。〔説文〕こ上に「滋

> である。 味を味とす」の語がある。味噌はわが国独自のもの わうことを玩味という。〔老子〕第六十三章に「無わうことを玩味という。〔老子〕第六十三章に「無

魅15 [鬽]13 もののけ・すだま

影 糊素

女よりもはるかに純情である。 の伝奇〔任氏伝〕にみえる女に化けた狐は、 蠱媚を善く 神怪をなす話が多い。〔玄中記〕に「狐百歳にして る所。以て人の害を爲す」とあり、〔楚辞、九歌〕 の〔山鬼〕の類であろう。鳥獣の年を経たものが、 して四足あり。好んで人を惑はす。 に、「魅は怪物なり。或いはいふ。魅は人面獸身に を鬽といふ」とみえる。〔左伝〕文十八年〔服虔注〕 の日至を以て地示物彪を致す」の注に、「百物の神いっ」。 ちょぎゅ 物の怪をいう。 [周礼、春官] 「夏がよい。物とは、物の怪をいう。 [場れ、春官] 「夏 〔説文〕は「老物の精なり」に作っており、その方 未声。 は祟の初形と似ている。〔文選、注〕などに引く て、下体を獣形とする字形を録しているが、その字 髪の怪物である。〔説文〕ヵ上に「老精の物なり」 会意 ジを鬼毛と解する。また重文として魅を録し、 いま常用字として魅を用いる。なお籀文とし 正字は鬼と彡とに従う。ぎは深い毛で、 し、人をして迷惑せしむ」とあるが、 山林異氣の生ず

ミツ

ミン

民

密 ひそか・かくす・やすらか・こまミツ

に作る。 の証をえがたい。〔趙毀〕に、廟中に戈を二つなら密は同声にして、宓は密の初文であるとするが、そ いう。 念する儀礼であることが知られる。必に従う字のう 〔伝〕に「寧なり」とあり、廟中において安寧を祈 天有成命〕に「夙夜、命を基むること宥密なり」のと等される。「詩で、とないとなった精密の意が生れる。「詩、同頌、昊あるから、また精密の意が生れる。「詩、同頌、昊 あるから、また精密の意が生れる。「詩、周頌、昊のために、秘密のうちに行なわれた。厳かな儀礼で 祝禱の儀礼を意味した。その儀礼は、 中に戚・鉞の類を奉ずるのは、安寧を求める儀礼で 密の初文。また〔高密戈〕の密の字も、下は火の形 べ、その下に火を加えている形の字があり、それが が、形義ともに失するものである。〔段注〕に宓・ に字を宓声の字とし、「山の堂の如きものなり」と ぬ秘儀として行なわれたのであろう。〔説文〕丸下 を清める儀礼で、このことはおそらく、他見を許さ ある。密はそれを火で清めるもので、一そう厳重な て必(柲)を奉ずる儀礼を示す字には、共通の声義 ち、宓・秘・閟・密のように、それぞれ聖所におい ■の山は火、菫の土も、もと火の形である。 ある。火の形は山や土と誤られることが多く、 ・鉞などの器。廟中で聖器に火を加え、これ・***** 字の下部を山とみて、山の形をいう字とする 宓は〔説文〕七下に「安なり」とあり、廟 親密なるもの

> 蜜 14 [驅]27 みつ・はちみつ

> > 妙

妙。

すぐれる・うつくしいミョウ(メウ)

形声

ある。〔広雅、釈詁〕に「好なり」と

声符は少。少に眇・秒の声が

その形声字である。蜂蜜は営養剤であるとともに、 た蜜蠟で印璽を作って、死者に贈ることもあった。 死者をひたして蜜人とするときはミイラとなる。ま 箱に蜂の集まる形を示した会意字とみるべく、 蜜をその或る体にして、宓声とする。 形声 を躓として、字を鄒声とし、 〔説文〕一三下に正字 蠠は養蜂の巣 蜜は

なり」も、「釈文」によると、「王粛本」は眇に作説卦」「神なるものは萬物に妙にして言を爲すもの説卦」「神なるものは萬物に妙にして言を爲すもの思・とない。」、「夢、「夢、「夢、」、「夢、「夢、」、「夢、

るべく、〔老子〕第一章「以て其の妙を觀る」 妙好の義とする。精妙・精徴の義はおそらく眇に作

ミャク

脈の(脈)の(脉)の

ている。〔説文〕にはこの字を収めていない。 れたものであるらしく、漢碑には字をみな妙に作っ る」とするが、その字は「老子」の文によって作ら ろう。〔玉篇〕に字の初文を玅とし、「今、妙に作 るとあるから、「萬物を眇る」とするのが原意であ

ミリメートル

会意 「脈法」という古書が引用されている。意思の通ず 維をなしているという。〔史記、扁鵲倉公伝〕に 脈を示す象形字。〔説文〕一下には正字を鹹に作り、 ることを、気脈を通ずるという。 人体には十二の経脈、十五の絡脈があり、 中国の古代医学は脈絡の研究を中心とするもので、 血脈をいう。脈理の連なるところを脈絡という。 旧字は脈に作り、肉と派とに従う。派は水 陽維、 陰

ミョウ

4

軿

7

民

たみ・ひと

們 雕

国字

(センチメートル)といい、粍(ミリメー

トル)と

厘や毛などの単位名を米に配して、糎

いう。瓦のときも同じ。中国においても、これと似

た造字法を用いている。

ミン

ことが多く、民・人はもとみな本族以外のものをい う語であった。 ト辞・金文に人というものも、異種族のものをよぶ

眠1[瞑]1 ねむる・いこう・くらいミン・メン

无射・虚无などの例があり、その当時には无の字も

一般に行なわれていたのであろう。

に眼睛を刺割する形である。

。郭沫若は萌・盲・民で考えると、字は明らか

しない。金文の字形によって考えると、

らん」と草の茂る形であるとするが、字形は全く類 注〕に、「古文の民は、蓋し萌生繁廡の形に象るな

知りがたい。「魏石経」にもその字形がある。

(段

文一字を録し、「衆萌なり。古文の象に従ふ」とす

、その字形は何を意味するものか、その意象を

う。〔広雅、釈詁〕に「亂るるなり」とは目のくら 眠と瞑とは慣用を異にする字である。眠は睡眠をい を用いる。 むこと、すなわち眠眩の意であろう。その字には瞑 形声 を瞑に作り、字を会意とするが、 声符は民。〔説文〕四上に正字 いま

4

无 なムし

をも、民といった。〔大盂鼎〕「四方を匍(敷)有し、をも、民といった。〔大盂鼎〕「四方を匍(敷)前、とがあった。その語義が拡大されて、新附の民一般

とがあった。その語義が拡大されて、

神にささげられるもので、そのとき傷害を加えるこ 化されることが多いが、それは神の徒隷臣僕として、 となしうるという。古代には異族の俘虜などが奴隷 となった奴隷であり、この字形は古代奴隷制の一証 の声が相通ずることを論じ、民は眼睛を失って盲目

る亡し」などは、その支配下にあるものを包括的にという。 はいましょう では、その支配下にあるものを包括的にという。 などは、その支配下にあるものを包括的にという。 などは、その支配下にあるものを包括的にという。 などは、それのよびし民と、受けられたまひし疆土とをいる。 は无く、往くものにして復らざるは无し」など、文また〔秦〕九三に「平らかなるものにして彼かざる らんことを」の亡を、无の形に作り、「易、 思弁的な解釈である。〔越王鐘〕「萬葉まで亡疆な 「元に通ずるものは、虚元の道なり」とするのも、 るが、 の一角を欠く形で、天が西北に傾くことを示すとす の説に、天の西北に屈するを无と爲す」という。天 て无をあげ、「奇字无。元に通ずるものなり。王育 ₹ あげて「亡なり、亡に從ひ、無聲」とし、重文とし もと屈屍の象にすぎない。また〔繋伝〕に 〔説文〕は亡部『三下に無亡に従う字を 亡の異体の字。 亡は屍骨の形 无妄、

> 、ニニー れた字のようである。漢碑には无窮・无為・无彊・れた字のようである。漢碑には无窮・无為・无彊・ 大宗師〕に「无莊」の名があり、无は南方で行なわ *****』 〔易〕 に多くこの字を用いる。また 〔荘子、献では〔易〕 に多くこの字を用いる。また 〔荘子、 象形 一眼を刺して害する形。〔説文〕ニ下に古

矛 5 ほこぶっ

あるが、常用字表はその音のみを用いている。 の武威を示すことをいう。矛盾は特殊なよみかたで A ひし疆土を適正す」の適は、 適正という。[宗周 鐘]「王肇めて文武の勤めたまます。 ちょうしょう だんしょう なんかい かんかん ことをらせ かん かんしゅう ことを かんしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう 丈四尺のものは夷矛、枝刀のあるものは戟。この矛 り。兵車に建つ。長さ二丈。象形」という。長さ二 燕 形。〔説文〕一四上に「酋矛な 矛を建てて巡察し、 長い柄をもつほこの そ

務 つとめる・はげます・しごとム・ブ・ボウ(バウ)

牖 彩。

というのが、その義にあたる。力は未の象形である は時のえがたきを知りて、務めて趣くべからしむ」 てそのことに赴く意。〔淮南子、脩務訓〕に「聖人釈詁〕や〔玉篇〕には「強むるなり」とあり、努め釈詁〕や〔玉篇〕には「強むるなり」とあり、努め 「説文」一三下に「趣くなり」とあり、「玄広音義」形声 声符はな。 教は矛をあげて人にせまる形。形声 声符はな。 に引いて「趣くこと疾やかなり」とする。〔爾雅 務とは農事に時を失わず勉強する意。勉もま

に「民に宜しく人に宜し」と民・人を並称しており、 眠(瞑) A 矛

離も楽人として目を失っている。〔詩、大雅、仮楽〕などもみな瞽師であった。秦の始皇帝のとき、高漸などもみな瞽師であった。

などもみな聲師であった。秦の始皇帝のとき、高漸して、その眼に刺割を加えたもので、たとえば楽人 後民という。民の起源は、もと神につかえるものと を用ひ、後民にこれ語げよ」と、その子孫を含めて

のような語があり、

作った器であるが、なかに「民人都鄙」「人民都邑」 いう語である。斉器の「輪鎛」は、鮑叔の子孫の

また「徐鐘」には「孫々これ

ム 無 夢〔審〕霧〔霧〕〔霁〕 メイ 名

membrane in membrane membrane in the second of the secon

The state of the s

A graph a way of specific source of the control of

ることが多い。
ることが多い。
を書きいう語である。
農事についてこの字を用いめ、一時に武を講ず」、また [呂氏春秋、上農] にめ、一時に武を講ず」、また [呂氏春秋、上農] にめ、一時に武を講ず」、また [呂氏春秋、上農] に

無 12 ない・まう

林爽爽森

仮借 もと象形で、人の舞う形。のち無に両足をつけた舞が舞楽の字となり、無は専ら有無の無、否之に「豐なり」と訓し、字を林に従う形とするが、それは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、それは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、それは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、それは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、とれは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、とれは篆文の誤った字形による解釈で、かつ〔爾雅、とれば篆文の誤った字形による解釈で、もと雨請いをする舞雩をいう字であった。「説文」にまた「或いは記ふ、規模の字なり。大世に従ふは、敷の積なり。林なるものは木の多きなり」という。上部を大時の形、下部を林に従う形とし、規模の模にして多数の意とするが、ト文・金文の字形は極めて簡明に、下部を本には記念が、ト文・金文の字形は極めて簡明に、下部を本に従う形とし、字が表と、人の舞う形。のち無に両足を声近く通用するが、声の仮借によるもので、無の字には有無の義はない。

夢13 「腰」21 ゆめ・ゆめみる・くら

魔となってその心をみだすもので、夢はその呪霊の 術を行なう巫女の形。その呪霊は、人の睡眠中に夢会意 莧(声)と夕とに従う。莧は媚蠱などの呪 省聲」とし、「繋伝」には瞢の亦声とするが、必ず 下に瘳の字を録しているが、もと同じ字である。夢 なすわざとされた。〔説文〕は夕部七上に夢、寥部七 を「説文」に「明かならざるなり。夕に從ひ、譬の ※」と「占夢」の文を引く。〔大ト、注〕に「夢は思郷、四に曰く悟郷、五に曰く喜郷、六に曰く懼。 ふ。一に曰く正瘳、二に曰く舜(逆)瘳、三に曰くとし、「周禮に、日月星辰を以て、六瘳の吉凶を占 て覺ることあるなり。一に從ひ、だに從ふ。夢聲」で、「周礼」には廫の字を用いる。〔説文〕に「寐ね 視るに夢々たり」は、その瞢々の意。夢は審の省文 る」状態をいう語である。〔詩、小雅、正月〕「天をしも瞢の省声や亦声ではなく、譬は「明かならざ 部も、覚の形に従う。その呪霊が、夢の中で種々の(寛) とは廟中にその媚女のいる形である。夢の上 あるが、 その啓示をもたらすものは媚とよばれる巫女、寛はない。憲は神霊の啓示としてあらわれるもので、 うように、古くは予占に用いた。 廫は寝に従う字で 人の精神の揺むるところ、占ふべきものなり」とい 暗示を行なう。それで大ト・小トの官があって、夢 寝は正寝で廟室の意であり、疒に従う形で

夢」とあり、人の世も所詮は夢である。

「古住今來、真に一いものが多く、華胥の国に夢遊し、夢想を楽しむこいものが多く、華胥の国に夢遊し、夢想を楽しむこともあって、それを斃という。庶人の夢は自由にして楽しいものが多く、華胥の国に夢遊し、夢想を楽しむこともできる。楊万里の詩句に「古往今來、真智ともできる。楊万里の詩句に「古往今來、真智といが行なわれた。その例は〔左伝〕に多くみえてといが行なわれた。その例は〔左伝〕に多くみえてといが行なわれた。その例は〔左伝〕に多くみえているできる。

霧19 「家」17 「家」13 きり・くらい

下では、 を録する。「説文」二下に「地气殺して、天という意がある。「説文」二下に「地气殺して、天という意がある。「説文」二下に「地气殺して、天という意がある。「釈名、釈天」に「冒ふなり。氣寒亂しを録する。「釈名、釈天」に「冒ふなり。氣寒亂しを録する。「釈名、釈天」に「冒ふなり。氣寒亂しを録する。「釈名、釈天」に「冒ふなり。氣寒亂しを録するなり」とその声義を説くが、明母で、物を獲冒するなり」とその声義を説くが、明母で、

メイ

名 6 な・ほまれ・なだかい・もじ

R PADD SP

廟に告げる儀礼が行なわれる。このとき名をつけ、はその祝禱の器の形。子が生れて三月になると、家会憲 祭內と、祝禱を収める器の形とに従う。口

まず廟に告げ、字をつける。いわゆる小字である。る」とあるが、これは後世の略礼であろう。生れて (東階)に立ちて西郷(嚮)す。世婦、子を抱き、君、沐浴朝服し、夫人もまたかくの如くす。皆作階 礼を詳しく記しており、「世子生るるときは、則ち る意で、夕はその肉の形。〔礼記、内則〕に生子の 名品などの意となる。 ら名分の意が生れ、また名声・名流、さらに名作 を用いないのと同じである。名実という考えかたか 実名を忌避する。わが国の王朝の女房たちが、実名 ま実体に外ならぬものであるから、字をつけてよび、 なわれ、加入儀礼としての意味をもつ。名はそのま 字をつけるのが定めであった。命名は祖霊の前で行 一定期間を過ぎて、命名の儀礼、また冠礼のときに 西階(客階)より升る。君これに名づけて、乃ち降 る田の形である。多は多肉の形、祭は肉をもって祭 金文の字形では上部は祭肉の形。下は祝禱の器であ 命いふなり。ロタに從ふ。夕なるものは冥なり。冥はばじめて家族の一員となる。〔説文〕二上に「自ら くして相見ず。故に口を以て自ら名いふ」とするが、

介 8 いいつけ・いのち・うまれつき

金 全 一

て神の啓示を待つもの。ゆえに神の啓示の意となる。会意 令と口とに従う。**は礼冠を著けて、跪い

受す」は、いずれも天命の意。天命の思想は周初の(命)を受けらる」、〔七数〕「顯々たる受令(命)あり。のようにいい、また〔晋公察〕「大命を確(膺)が、「大盂鼎」「天の有する大令には命の意に用い、「大盂鼎」「天の有する大令には命の意に用い、「大盂鼎」「天の有する大令には命の意に用い、「大盂鼎」「天の有する大令には命の意に関する。令は神意を聴く形で、金文より分化した字である。令は神意を聴く形で、金文より分化した字である。令は神意を聴く形で、金文 子が五十にして天命を知ったというのは、その意で 知らざれば、以て君子と爲す無きなり」という。孔 与のものである。[論語、尭曰]の末章に、「命をようにいう。命はもと神の命ずるところであり、天 令ふ」、「康鼎」「女に幽黃(玉衡の名)を令ふ」のです。 「まてい」ならいでいることが多い。「献設」「厥の臣獻(人名)に金車をのまった。 の意があって、初期の金文には令を賜与の意に用い ばみえる。王や尊上の命ずるところをもまた命とい ものであり、金文に「先王の命」という語がしばし の祭祀歌がある。祖霊もまた神として後人に命ずる 神名があり、〔楚辞、九歌〕に〔大司命〕〔小司命〕 文に習見する。「洹子孟姜壺」に「大司命」という 「永命眉壽」「靈命老い難からんことを」の語が、金 〔書、周書〕の諸篇にもみえ、周王朝創建の理念で 命の字が用いられる。命と令とはもと一字、命は令 ており、令が命の初文。西周中期以後に至って、るものであった。卜文・金文には令を命の意に用いるものであった。卜文・金文には令を命の意に用い する意に解するが、その字はもと神の命令を意味す い、金文に明命・休命・嘉命の語がある。また恩命 あった。人の寿命も天の与えるところであるから、 に「使ふなり。口に從ひ、令に從ふ」と、口で命令 口はJ、祝禱を収める器。神に祈ってその啓示を待 その与えられたものを命という。〔説文〕 二上

> 亞聖」と称している。 才といい、始岐の〔孟子題辞〕に、孟子を「命世のあろう。一世に名のある人を命世、その才を命世の

明8(明)8 あきらか・あかるい・きょい

) (6) (10)

ある。 会意 神明の意であり、それより清明の徳をいう。 出する形となっている。それはかつての地下式の 〔説文〕七上に「照らすなり。月に從ひ、囧に從ふ」 のを、地上に移した形式であると考えられる。 よって復原すると、中央に堂があり、四方に室が旁 に神事を明といい、聖職を明公・明保という。周初に神事を明えて祀るので、明は囧と月とに従う。ゆえに神を迎えて祀るので、明は囧と月とに従う。ゆえ 明堂であった。その方坑に面したところが明、 の四方に横穴式の居室を作る。全体が亞字形をなし と神明を迎えるところであり、「易、緊辞伝、下」雅、楚茨〕に「祀事孔だ明かなり」という。明はもとし、また古文の一字を録し、明に作る。〔詩、小とし、また古文の一字を録し、明に作る。〔詩、小 そこは神を祀るところであり、神明の意がある。 ある。漢代の明堂は、その遺址と考えられる遺構にしており、いずれも最高の聖職者を意味する称号で の周公は金文に明公とよばれ、その子は明保と称 に神を迎えて祀るので、明は囧と月とに従う。 中央の方坑のところが光の入るところで、すなわち 意。古く穴下式の住居では、中央に方坑を掘り、そ 意である。葬器を明器、神水を明水というのもその に「神明の徳に通ず」というように、明とは神明の 囧と月とに従う。窓から月光が入りこむ意 そこ

メイ 迷〔迷〕 冥 溟 盟〔盟〕〔盥〕

すたら香。凶界のここが明どの語があり、神聖感をもつ語であった。明は幽に「天子明哲」「穆々として明德を帥秉す」「明刑」な

対する語。幽界のことが明明の故を知る」という。転明の故を知る」という。転明の故を知る」という。転じて光明・著明の意となじて光明・著明の意となる。



迷り【迷】10 まよう・まどう・あやまる

形声 声符は※。〔説文〕ニ下に「惑ふなり」とあい、[玉篇〕に「亂るるなり」とする。〔詩、小雅、いなだ。 「放王受(紂)の酒德に迷亂して酗ふが若くす。 ること無れ」、〔梓材」「迷民を和懌し、先後せしること無れ」、〔梓材」「迷民を和懌し、先後せしること無れ」、〔梓材」「迷民を和懌し、先後せしること無れ」、〔梓材」「迷民を和懌し、先後せしることを出る。非がある。。「迷陽迷陽、吾が行を傷ることなかれ」の語がある。生きかたを誤ることを迷途という。

字(10 くらい・ふかい・はるか メイ・ミョウ (ミャウ)・ベン

界。京

象形 幌冒の形。幌冒は死者の面を覆う布である。

『聲。日の敷は十、十六日にして日始めて虧くるは、『聲。日の敷は十、十六日にして日始めて虧くるは、『説文』 七上に 「錺きなり。日に從ひ、六に從ふ。 幽なり」とし、〔緊伝〕に末字を「冥なり」とする。(「聲。日の數は十、十六日にして日始めて虧くるは、「響。 工喪礼」に「幎目には緇を用ふ。方尺二寸、裏と受いまれ」に「幎目には緇を用ふ。方尺二寸、裏と受なな解釈である。字は全体が象形で幎冒の形。〔儀礼、な解釈である。字は全体が象形で頼冒の下。〔儀礼、 字の下半を日と六、日は十干であるから十六日にし 決するので、冥暗・昏冥の意となり、死者の処るとある。この幎冒を施すことによって、幽冥のことが されている部分は、結び紐の組繫を垂れている形で 幎冒をもってその面を覆うた。字の下部の、六と解 くし、組繋を著く」とあり、死霊を隔離するために、 く、冥昏の意となるはずはない。全く謎解きのよう て月くらしとするが、十六日はなお既望で満月に近 記〕の類のものが多い。暗黙のうちに心意の通ずる 婚のように死後に結婚することもあり、死者が現世 ころを冥界・冥土という。冥界には冥司がおり、冥 想・冥感という。また冥頑・冥昧は道理にくらい意 に報恩することを冥報という。仏教の説話に「冥報 冥に従う字は、みなその声義を承ける。 ことを冥契・冥会といい、深く思念することを冥

溟 13 くらい・うみ

がい 形声 声符は冥。実に冥暗の意がある空の暗さをいう。〔玉篇〕に「溟は溟濛、小雨な「説文」二上に「小雨溟々たるなり」とし、雨の降「説文」二上に「小雨溟々たるなり」とし、雨の降「説文」二上に「小雨溟々たるなり」とも、雨の降ので、実に冥暗の意がある空の暗さをいう。〔玉篇〕に「溟は溟濛、小雨なり」とみえる。

13 【照】13 【四】12 ちかう

会意 で血を歃って盟うことをいう。〔説文〕七上に正字 〔釈 名、釈言語〕に「その事を神明に告ぐるものな文・古文の字はみな明に従う。金文の字形も同じ。 各一字を録する。〔説文〕は〔周礼、司盟〕〔玉府〕 聞に從ひ、血に從ふ」とし、重文として**篆文・古文** は、則ち盟ふ。諸侯再び相與に會す。十二歳にして を照に作り、「周禮に曰く、國に疑はしきあるとき 説かないが、囧は明、神明に誓う意であるから、篆 下部は血に従う形がよい。〔説文〕は囧に従う意を 及び〔左伝〕の文による。血盟をいう字であるから、 は牲を殺し血を敵り、朱盤玉敦、以て牛耳を立つ。一たび盥ふ。北面して天の司愼・司命に詔ぐ。盥に一たび盥ふ。北面して天の司愼・司命に詔ぐ。盥に 民を失はしめ、命を隊し民を亡ぼし、その國家を踣た王先公、七姓十二國の祖、明神これを殛し、その 聞ふこと或らば、司愼・司命、名山名川、群神群祀、 神に誓うて自己詛祝をするもので、その文書を載と のであるが、大事を盟、小事を詛という。いずれも り」という。〔周礼、詛祝〕は盟詛のことを掌るもったが、 師これを職る」とみえる。盟誓の形式は、 いう。〔左伝〕僖二十六年に「載は盟府に在り。 ば 〔左伝〕 襄十一年、盟約の辞のあとに「茲の命に 明(明)と血とに従う。明は神明。その前 たとえ 大

四、五〇字から一〇〇字前後、多いものは二二〇余 玉・石はともに圭形に整えられており、各片に概ね に墨書したもの約五○○○片が坑蔵されていた。 侯馬遺址から出土したもので、玉や石に朱書、とき 春秋のとき晋の都であったと思われる新田の近くの 書〕にも、その類の語がみえる。〔侯馬盟書〕は、 さん」のような詛祝の語を加える。近出の「侯馬盟 捧げられるものであった。 それは神に誓うためのものであろう。獣牲を用いる にしても、玉器を用いるにしても、いずれも盟誓と 坑には、璧などの玉器を坑蔵していることもあり、 は、神に対して誓うという行為であり、神に対して られるもので、三晋分立のときにあたる。この盟書

配13

呪詛や卜筮のことに及ぶものもある。盟書坑蔵の区にたものである。盟書はその宗盟類を主とし、他に

その宗族内部に紛争があり、その和協の盟誓をしるの一人である趙鞅(趙孟、趙簡子)を中心として、

字をしるすものがある。〔左伝〕にみえる晋の六卿

瞑 4 くらい・くれる

は暮色・晩景をいう。
『は日暮幽暗の意。暝色とで、暗黒の世界をいう。暝は日暮幽暗の意。暝色とで、暗黒の世界をいう。暝は日暮幽暗の意。暝色と

県からも、圭形石片に墨書した盟書の坑蔵品が発見その盟辞によって知ることができる。近時河南の湿た盟誓が数次にわたって行なわれたらしいことも、出している。ときに玉を加えていることもあり、ま出している。ときに玉を加えていることもあり、ま出している。ときに玉を加えていることもあり、盟書坑域にはまた多くの牛・羊・馬の埋牲があり、盟書坑域にはまた多くの牛・羊・馬の埋牲があり、盟書坑域にはまた多くの牛・羊・馬の埋牲があり、盟書坑

された。その一部はかつて出土して「沁陽盟書」一

夕む 4 しるす・かきつける・きざむ

のもので、列国期になると作器者の名を銘する単純廷礼、田土の授受など、最も重要な公文書的な性格さくるなり」とするが、金文の内容は、褒賞や冊命とする。〔礼記、祭法〕に「銘なるものは、自ら名とする。〔礼記、祭法〕に「銘なるものは、自ら名とする。〔礼記、祭法〕に「銘なるものは、自ら名とする。〔説文新附〕「四上に「記なり」

記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。 記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。 記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。 記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。 記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。 記・銘刻といい、また銘心鏤骨という。

14 とりがなく・なる・きこえる

景 新春 東

会意 であろう。卜文には、口耳の口を示すとみられる確 るものが多いのも、鳥占の俗をその背景にもつもの の意である。〔詩、国風〕の諸篇に、鳥の発想をと は、鳳鳴を聞かず、 ものであろう。〔書、君奭〕に「我は則ち鳴鳥を聞 は何らかの啓示を含む鳥鳴で、これを占卜に用いる あろう。卜辞に「鳴鳥あり」という語があり、それ らば鳴も、そのような構造の字として理解すべきで らず、これを阻害するもののある意である。それな 唯は神意の応諾を示す字。難は神の応諾にもかかわ 口の会意とするが、その造字法は唯と同様であり、 示す字。〔説文〕四上に「鳥の聲なり」とし、鳥と 神に祈り、鳥のようすによって占う鳥占のしかたを 別んやここにそれ能く格ることあらんや」と 口と鳥とに従う。口はD、祝禱を収める器 さればこそ神意に達しがたいと

片である。晋の定公十五年、韓氏がその主盟と考え 「大き」で、大き三郎 「大き」で、大き三郎 「大き」で、大き一郎 「大き一郎」で、大き一郎 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎 「大き一郎」 「大き一郎 「大き一郎」 「大き一郎」 「大き一郎 「大き一郎」 「大き一郎 「

かな字形はない。

瞑 15 めをつぶる・くらい・ねむるメイ・メン

霊は〔諡法解〕に「壅遏して通ぜざるを靈といふ」に安んぜずして、瞑目しないことがあったという。 瞑らず。成といふ。乃ち瞑る」とあり、その諡号をである。〔左伝〕文元年「これに諡して靈といふ。意である。〔説文〕四上に「目を翕はすなり」とは も、後事を約して、はじめて「乃ち瞑して、含(口のように、悪諡とされている。[左伝〕襄十九年に ずんば、厥の疾瘳えず」とあり、「孟子、滕文公、ことを瞑眩という。〔書、党命、上〕「若し藥瞑眩せことを瞑眩という。〔書、党命、上〕「若し藥瞑眩せ 視ないことをも瞑という。また薬毒で眼くらみする 中に含む珠)を受く」という例がみえる。「以て瞑 上」にもその語を引いている。 すべし」とは、安んじて死ぬこと。目を閉じて物を 面を覆う面衣。これを覆うのは瞑目の 声符は冥。冥は幎冒。死者の

螟 ずいむし・くきむしメイ

と、この虫はいわゆる螟鰧の属。〔説文〕の次条質に從ふ。冥は亦聲なり」という。穀葉は穀心の誤に従ふ。冥は亦聲なり」という。穀葉は穀心の誤にして法を犯すときは、卽ち螟を生ず。虫に従ひ、にして法を犯すときは、卽ち螟を生ず。虫に従ひ、 に蟘(螣)をあげ、「蟲の、苗葉を食ふものなり」 って人民を苦しめると、その虫が生ずるのであると とし、その正字の形が貸に従うのは、吏が高利をも 「蟲の穀菜を食ふものなり。吏、冥々形声 声符は冥。〔説文〕一三上に

> 田祖、神あり 乗りて炎火に男へん」とあり、虫よその蟊賊とを去れ 我が田稼ぎますること無かれその蟊賊とを去れ 我が田稼ぎますること無かれいない。このような字解は、その反辞職する慣行があった。このような字解は、その反辞職する慣行があった。このような字解は、その反辞職する慣行があった。このような字解は、その反辞職する慣行があった。このような字解は、その反辞職する慣行があった。 大な災異が生じたとき、三公・大臣が責任を取ってるが、後漢以来「災異策免」のことが行なわれ、重であるというのは、文字学の限界を超えた解釈であいう。秋の虫害は、すべて姦吏・貪吏の悪行の結果 けに用いる呪祝の語である。

謎 17 なぞ・いいまどわすメイ

日の夫」という謎で、その名を教える。申蘭・申春るものは、車中の猴、門東の草」「禾中に走る、一 が、 小説〔謝小娥伝〕は、男装の麗人の復讐譚である行なわれたもので、文字捜しの謎が多い。唐の伝奇 という兄弟の賊であった。 辞といった。酒席で興ずるときに、酒令としてよく 賊に殺された夫が夢にあらわれて、「我を殺せ 三上に「隱語なり」という。古くは廋。 声符は迷(迷)。〔説文新附〕

メツ

滅 13 ほろびる・きえる・うしなうメツ

娍。

形声 声符は威。威は戉(鉞)を火に加えて、 火

滅・滅尽の意に用いる。滅裂は雑多で統一のないこば、するの頭らんや」とあって、威を滅亡、滅を火の上文に「燎のまさに揚ぐるとき」なんぞこれを滅の上文に「燎のまさに揚ぐるとき」なんぞこれを滅いる。気が、いかいのであろう。〔詩、小雅、正月〕する呪儀があったのであろう。〔詩、小雅、正月〕 を鎖める意の字であるが、呪的な意味をもつ方法で て解しているが、戊は聖器、これをもって火を鎮圧 語化した語がある。 と。わが国の近世語に、滅法・滅相・滅多など、俗 上に「滅ぶるなり」と訓し、その義を五行説をもっ や」とあるように、火を消す意。威を〔説文〕「○ し。嚮ひ邇づくべからず。それなほ撲滅すべけん 滅絶する意。〔書、般庚、上〕「火の原に燎くるが若あろう。〔説文〕一上に「盡くるなり」とあって、

メン

免 8 (発)7 ぬメ ぐン・・ まぬかれる・ゆるすベン・フ

컏

字である。金文に〔免觶〕〔免簠〕など、免氏の器免の象形で、免と字形は似ているが、全く異なる。 と。
を見ず。會意」という文を補入しているが、兎は足を見ず。會意」という文を補入しているが、翌はえず、〔段注〕に「兎、兎逸するなり、兎に從ひて く形とみられるものである。この字は〔説文〕にみ 免脱の意とすべきもの。一は分娩の象で、胯間を開 字に二系あり、 一は免冑、冑を免ぐ形で、

統と娩・俛系統との二者があり、もと字源を異にす してまぎれるようになった。 るものであるが、相似た字形であるため、のち混一 俛は俛す形をいう。兔に従う字に免冑・冕などの系 ・ (娩するに) 嘉なるか」とは、男子を出生する意。 加えて開き、分娩をたすける意で、卜辞にいう「弇 形の字。奏は胯間を開く形、弇は胯間の左右に手を瓦はふぐりの形である。敻とは、そのふぐりを撃つ する字であるが、動物の胯間の形を主とするもので、 また甕亭は「柔章なり」すなわち柔らかい皮と訓で、桑・弇・瓊などの字が、その字形と関係がある。で、桑・桑・瓊などの字が、その字形と関係がある。うところは、上部は人の上体、下部は胯間を開く形うところは、上部は人の上体、下部は胯間を開く形 と勿れ」とある字である。別に分娩・俛伏の字の従 命を聽く」、また〔礼記、曲礼、上〕「冠は免ぐこ語〕「左右、冑を免ぎて下る」、[晋語]「冑を免ぎて が多く、その字形は冑を免ぐ形である。〔国語、周

9 おもて・つら・むかう・めんメン



 な、こ・・・・
 ないが、「師遠方彝」の「強圭」の字は、百形の前はいが、「師遠方彝」の「強圭」の字は、百形の前はないが、「師墓場」の下に象をは、という。 古い字形はないが、「師遠母」の形に象をは、という。 古い字形はないが、「説文」カ上に「顔前なり。 雅、何人斯〕は人を呪詛する詩であるが、「覵たる人面や鬼面を透かし彫りしたものもある。〔詩、小人面や鬼面を透かし彫り を使用することがあったようである。殷代の遺址か

> 晤・面試・面争・面折とい で接に相対してなすことを面 罔し」とは、けろりとして恥ぬ目あり 人を視るに極まり 知らずの顔を罵る語である。

面諛、速決することを面決とやか、表面だけのことを面交・

ときには値を用いる。用いて、ま向うの義と、そむく意とがある。そむく 速決することを面決という。また正反の意に

偭 そむく・むかう

意。面こにでのます。 書、項羽伝」「馬童(人の名)これに面く」は個の はいり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め なり」とするが、「楚辞、離縁」「規矩に価きて改め をいう。「漢が が、偭にもまた正反の義がある。 面に正反の義があり、偭はその反義の字である 形声 声符は面。面にま向う、

棉 わた・きわた

それが近代紡績業の発端をなした。 清朝に至ってその栽培を奨励し、資金をも供与した。清朝に至ってその栽培を奨励し、資金をも供与した。に入った。のち江南の各地に木棉提挙司がおかれ、に入った。のち江南の各地に木棉提挙司がおかれた。

> 綿 / 脉 15 つらなる・きぬわた・まとうメン

繭から糸をつむぎとることからの引伸義である。 の字を用いる。綿はきぬわた。綿字の諸義は、みな はるかなこと、綿密は行きとどくこと。いま多く綿 を発す。 一条を であること。双声・畳韻の語を聯縣字という。 解解は連 なること。双声・畳韻の語を聯縣字という。 解釈は連 なること。 双声・畳韻の語を聯縣字という。 解釈は連 なること。 双声・畳韻の語を聯縣字という。 解釈は連 なること。 双声・畳韻の語を聯縣字という。 解釈は連

緬 ほそいと・はるか・とおいメン・ペン

用例である。 て領を引くして南望す」とあるものが、早い時期の ・ 瀬窓のように用いる。〔国語、楚語〕「緬然としま。 然気 をいる。 (国語、楚語)「緬然としいい、瀬谷 がったいい、瀬谷 がいる (国語・海に) がいまれる (国語・海に) がいまれる (国語・海に) がいまいる (国語・海に) がいまいる (国語・海の) はいまいる (国語・海の) はいまいる (国語・大学) はいまいる (国語・大学) はいまいる (国語・大学) はいまいる (国語・大学) にいまいる (国語・大 をいう。〔広雅、釈詁〕に「緜は小なり」とあり、 「殼き絲なり」とあり、最も細手の糸 声符は面。〔説文〕一三上

麪 15 [麵] 20 むメン こ

字はまた麵に作る。これで麵類のものを作る。 褻 の屑末なり」とあり、小麦粉を形声 声符は巧。〔説文〕五下に 声符は丐。〔説文〕五下に「麥 いう。

Ŧ

茂 8 しげる・うつくしい・すぐれる・つとめるモ・ボウ

茂

面

偭

棉

綿〔緜〕

緬

ときに楸を用いる。「広雅、釈詁」に「茂は勉なり」とあり、楸と声義同じ。「詩」には茂、「漢書」には形声 声符は戊。〔説文〕 こり 株に作る。その声に、豊盛の意がある。 保j「松柏の茂るが如し」を、〔説文〕六上に引いてとあり、「懋める」の字に用いる。〔詩、小雅、天 声符は戊。〔説文〕一下に「艸、豐盛なり」

模 かた・のっとる・もようモ・ボ

下の模楷、李元禮」とよばれた。元礼はその字であのを模楷という。後漢の党人の指導者李膺は、「天のを模楷という。後漢の党人の指導者李膺は、「天 となった。樸・攀とも通用するが、字はもと木に刻る。模様ももと模範の意であったが、のち文様の意 すること、 版木に付することをいう。 形声 なり」とあり、模範・法式とすべきも 声符は莫。〔説文〕六上に「法

け・けもの・わずかモウ(マウ)

手き必

「左伝」隠三年「瀾谿沼祉の毛」とは水草で、神饌、の斑白となること。また地表に生ずる草をもいい、、はて、象形」とあり、体毛をいう。二毛とは饕髪毛なり。象形」とあり、体毛をいう。二毛とは饕髪をいい。「説文」八上に「眉髮の屬、及び獣

という。 に供するものをいう。草木の生じないところを不毛

妄。〔妄〕。 みだり・いつわり・あやまるモウ(マウ)・ボウ(バウ)

给 中

「敢て荒寧せず」、〔文侯之命〕「荒寧なること田れ」〔晋美鼎〕「妄寧なるに暇あらず」は、〔書、無逸〕 なり」 形声 と同義。妄と荒とは字義に関連がある。荒は遺棄さ の妄執・妄念が、むしろ字の原義に近い。 含む字であろう。虚妄・虚謎の意であるが、仏教語れた屍体。妄も亡に従うて、その呪霊へのおそれを という。〔毛公鼎〕「敢て妄寧なること母れ」、声符は亡(亡)。〔説文〕一二下に「亂るる

网 あみ・おおう

門門剛門門

縄を結びて以て出し、以て漁する所なり。口に從ふ。像とおいて以て出し、以て漁する所なり。口に從ふ。象形の網の形で、網の初文。〔説文〕七下に「臣犧、 経〕にみえるものと同じである。 る形で、口に従う字ではない。古文の字形は「魏石 辞伝、下〕にみえる。字は太綱から網を垂らしてい 疱犠が網を作ったという事物起原説話は、〔易、繋下は网の交文に象る」とし、重文四字を録している。

子皿 8 はじめ・としかさ (バウ)

盤沢 斯公氏的恐。

列とするが、金文に孟辛父・孟上父のようにいう例のようにいう。男子には伯・仲・叔・季をもって序「姉なり」と訓し、女子には孟姜・孟屬・孟妊東母 意である。生れて最初の儀礼であるから、始めの意 子儀礼を示し、受霊の意をもつ字である。また金文 古文の字形は子を呆の形に作るが、果は保にして生 とするが、この字形で皿を声符とするものはない している形。〔説文〕一四下に「長なり」とし、皿声している形。〔説文〕一四下に「長なり」とし、皿声となる。 子と皿とに従う。生れた子に産湯をつかわ 長・最先の意となる。〔方言〕や「広雅、釈親〕となり、兄弟やその他の序列にも及ぼして用い、 に子の上に八をそえた字形があり、それは水で祓う 言」の〔釈文〕に「音は漫瀾」とあり、また軽率という意の畳韻の連語。〔荘子、斉物論〕「孟浪のもあって、男子にも用いる。孟浪はとりとめもない なこと、放浪の意にも用いる。 最

盲。(盲)。 めしい・くらいモウ(マウ)

無きなり」とあり、〔淮南子、泰俗訓〕に「盲は目意がある。〔説文〕四上に「目に牟子」を表する。「記文〕四上に「目に牟子」を持た。 盲動・盲進、無批判に人に従うことを盲従という。 明の人たちが多かった。わけもなく行動することを の形存するも、能く見る無きものなり」という。 盲明とはあきめくら、愚民をいう。 い時代には、史官は瞽史といい、楽官や巫祝にも失

图 あみ・とらえる・なしモウ(マウ)

州岡

ないことを嘆く意で、有無の無に用いる。网が罔、小雅、蓼莪」「皇天、極まり罔し」は、天の助けのいることが多く、獣網を罔、漁網を署という。〔詩、文としてこの字をあげるが、その字は罔の字形を用文としてこの字をあげるが、その字は罔の字形を用 亡声で無の義に通用する。 声符は亡(亡)。〔説文〕七下は网字条に重

ぶ」とあり、〔三家詩〕による。〔礼記、昏義〕「性(荇菜)を抜きとる意。〔玉篇〕に「左右にこれを観(芳菜)を抜きとる意。〔玉篇〕に「左右にこれを穏(から)を抜きたる符楽は「左右にこれを芼る」は、あかざ に魚を用ふ。これに芼するに蘋藻を以てす」とあり、 房中歌に作りかえたものである。 は、夫人の祭事を歌う祭祀歌であったものを、のち 魚肉には水草を添えて供える。〔関雎〕の詩の原型 「説文」一下に「艸覆ひ夢るなり」 しも蔓草ではない。〔詩、周南、 声符は毛。毛に草の意がある。 関なりと

たけし(マウ)

〔戦国策、韓策〕に「齊の大夫諸子、犬ありてはな はだ猛なり」とみえ、当時猛犬を飼うことが多かっ 「健き犬なり」とあって、猛犬をいう。形声 声符は孟。〔説文〕 | 〇上に 声符は孟。〔説文〕一〇上に

罔

芼

猛莽

網

蒙

下〕に「苛政は虎よりも猛し」という孔子の語を録 すべて勇猛、また猛烈の意に用いる。〔礼記、檀弓、て獳猛という。転じて猛将・猛虎・猛火のように、という。 する。苛政とは苛征、すなわち苛税をいう。 た。添字条一〇上に「怒れる犬なり」とあり、 合せ

莽 12 くさふかし・くさむら・おおう・あらいモウ(マウ)・ボウ(バウ)

茂るにまかせているのをいう。草莽はまた都雅に対の意となり、また莽蒼という。[荘子、逍遥遊]の意となり、また莽蒼という。[荘子、逍遥遊]の意となり、また莽蒼という。[荘子、逍遥遊]が表している。東京が草のに、莽蒼という。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたものであろう。草の茂るにまかせたところで草莽がたちのである。 て莽乾坤のようにいう。をいう。粗野にして乱鼻 **莽は莽に方、すなわち墓地を架屍祭梟をもって清** い、そこに神宮である辟雅が含まれていたが、そのな意とすべきである。西周の聖都の名を葬京といる意とすべきである。西周の聖都の名を葬京といが茶であるから、字の初義は、犬性をもって人を葬が茶であるから、字の初義は、犬性をもって人を葬 莫は墓、犬は犬牲である。その両者を合せたもの字形中に莫をかき、また犬をかくものがあって、 兔を艸中に逐ふものを謂ひて莽と爲す」とするが、*****。ことをいう。〔説文〕一下に「南昌にて、犬の善くことをいう。〔説文〕一下に「南昌にて、犬の善く をいう。粗野にして乱暴なことを莽鹵、天地を罵っして在野・民間の意となり、草莽の臣とは在野の人 め守る意で、もと墓地をいい、のち神都の名となっ 義ではない。金文図象のうちに、玄室の形である亞 それは一方言をもって字を解するもので、本来の字 茻に墓の意があり、 会意 犬と茻とに従う。犬は犬牲、 犬牲をもって葬る

14 あみ・とらえる (バウ)

剛內門

のをいう。〔老子〕第七十三章「天網は恢々、疎なの文である。鳥獣を捕る網のほか、すべて網目のもとなり、さらに糸を加えて網となる。三字みな紫鷺を放り、さらに糸を加えて網となる。三字みな紫鷺 るも失はず」とあり、天網とは法網にたとえる。 一網打尽という。 声符は罔。その初文は网、亡声を加えて

蒙 14 おおう・こうむる・くらい・おろかモウ・ボウ

語〕に「甲冑を蒙る」の語がある。冢はその頭部を 寄生してその枝を蒙う。蒙は古い字形がなくて、なとする。女羅ともいうひかげかずらの類で、松柏にとする。 切り除いた形であるが、やはり身を家うものである 全体を身に蒙り、身を蒙うものをいう。「国語、晋の形。字形の全体は、獣皮を披いた形であり、そのお確かめがたいところがあるが、上部は獣の角や耳 例のない字である。また蒙を「王母なり」と草の名 家声の字とする。家は〔説文〕七下に「覆ふなり」象形 | 獣皮の形。〔説文〕一下に字を艸部に属し、 うに、その全形を存するものである。〔詩、 から、冢・蒙はもと一字、ただ蒙は縫いぐるみのよ とあり、豕を覆う意であるとするが、そのような用

である。追儺に用いる方相氏の面は四目、その二目 法がある。のち謙称として一人称に用いる。 ろう。〔左伝〕僖二十四年「上下相蒙く」という用は蒙うものであるから、また蒙昧の意となるのであ いるのを童蒙といい、転じて蒙昧の意に用いる。蒙 鬼神の姿をしているものである。童髪をふり乱して のものを蒙棋という。棋は鬼面。髪をふり乱して、 「狐裘尨茸」に作る。その毛の乱れるさまをいう語 「狐裘蒙戎」を、〔左伝〕僖五年に引いて

くらい・うすぐらい

りこむさまをいう。〔詩、豳風、東山〕「零雨それ濛りに「微雨の皃なり」とあり、小雨のけぶるように降 霧のたちこめる状態などをいう。 たり」の〔伝〕に「雨ふる貌なり」とみえる。 形声 * くらいなどの意がある。[説文] | 一上 声符は蒙。蒙に全体をおおう、 また

□ 5 めモ・ク みる・めくばせする・かなめ

自合

とし、「史記」に項羽も重瞳子であったというが、であるという。「尚書大伝」に古の聖人舜を重瞳子形」とし、「童子を重ぬるなり」、すなわち重瞳子形」とし、「童子を重ぬるなり」、すなわち重瞳子のあるという。

目で相図することを、目撃・目送・目禁のようにい その形に従う。目を動詞に用いて、目をはたらかせ、 球・眼睛をあらわした字が臣で、望・監などの字はこの字は横目を縦にしたものにすぎない。その眼 分類標題することを目録・目次・要目のようにいう。 人の眉目は最もめだつところであるから注目といい、 目を以てす」とは、めくばせして意を通じ合うこと。 う。〔国語、周語〕「國人敢て言ふものなし。道路に

沐 かみをあらう・あらう・うるおうモク

則ち以て上帝を祀るべし」とは身を清める意。楚でとを浴という。〔孟子、離婁、下〕「齋戒沐浴せば、とを浴という。 は猴を沐猴とよび、衣冠を整えてもおちつきのない ものがあり、項羽は直ちにその男を殺したという。 ものを、沐猴冠という。この語をもって項羽を罵る 「髪を洗ふなり」とあり、身を洗うこ 形声 声符は木。〔説文〕一一上に

黙 15 (無) 16 だまる・もだす・しずかモク・ボク

覹 默。

古音であったらしい。〔説文〕一〇上に「犬、暫く人形声 声符は黒(黒)。黒に墨の声があり、その のことであり、〔国語、楚語〕に「是においてか三いう字ではないかと思われる。黙は喪に服するとき めに字を作ることはありえないから、これは犬牲を 人を逐ふなり」に作る。犬が人を逐うことをいうた を逐ふなり」とあり、「唐本説文」に「犬、潛かに 声符は黒(黑)。黒に墨の声があり、

> 「高宗(殷の武丁)誠陰、三年言はず」とあり、服と、すなわち諫闍三年の意である。[論語、憲問]と、すなわち。詩詩 間中、犬牲をもってその喪を守る古儀があったので 作ることもあるが、それはのちの作字で、「殯」の期ときこのタブーが科せられたのであろう。「黙を嘿に 年默して以て道を思ふ」とある黙は、喪に服するこ された。黙は犬牲を埋めて喪に服することで、その 喪の間は黙して言わず、ものを言うことはタブーと あろうと思われる。

籾のもみ

ている。 う。「類聚 名義抄」に籾にもみ・ちまき・かしきか国字 まだ穀皮をつけたままの米。あらしねをい 劒は雑飯をいう字。その正字は丑に従う。米部にいず、までしての訓をつけ、また劒にもかしきかてと訓している。 も丑に従う字がある。古い時代には穀をもみと訓し

モン

もん・かどぐち・いえ・みうちモン

ある。〔釈名、釈宮室〕に「捫すなり」はその動詞は護なり」などと同じく、当時の音義説による解で 戶に從ふ。象形」とする。門・聞は畳韻の訓。「戶 象形 門の形。〔説文〕一二上に「聞するなり。

門・門閥・門望・門下・門生のようにいう。 た形の 訓。卜文・金文の字形は、両戸上に一横木をわたし まのが多い。門は家に代って用いられ、家ものが多い。門は家に代って用いられ、家

們 10 ともがら

をいう。 〔方言〕に們渾という語があり、肥満体をいう。に用いる。〔元典章〕や〔元雑劇〕では毎という。 声符は門。門は家、その家門に属するもの 我們(われら)のように複数を示す接尾語

紋 10 あや・しわ・もんモン

織紋をいう。わが国では紋章・紋所の意に用いる。形方 声符は文。〔玉篇〕に「紫やぶなり」とあり とあり

問 とう・たずねる・しらべる・たよりモン・ブン

0 拿 0 問

き字ではない。〔詩、魯頌、洋水〕に「淑問するこ神意に諮り問う意であるから、糾訊の訊と互訓すべ 門はおそらく廟門。そこに祝禱の器をおいて、神意 を互訓とするが、訊の初形は艦に作り、罪人を糾問 とし、言部三上に「説は問ふなり」とあって訊・問 下民に清問す」のように、もと神事に用いる語であ と皋陶(古の神名)の如し、〔書、呂刑〕「皇帝、 する字である。しかし問は廟門に祝禱の器をおき、 を諮うことを問という。〔説文〕ニ上に「訊ふなり」 また神意にかなうことを問といい、八詩、 門と口とに従う。口はJ、祝禱を収める器 大雅、

> ある。 字に闇・闇などがあり、みなその儀礼に関する字で 祭ご、その問を隕さず」とはその意。同じ構造法の 問答のように用いるのは、のちの転義である。

捫 なでる・おさえる・とる・ひねる

悶 12 くであったという。夏いい・・・・と対坐し、「蝨を捫りて言ひ」、 旁 に人無きがごとと対坐し、「蝨を捫りて言ひ」、 ったり、 となり、 となり、 工猛は褐を衣て、当時威権の高い桓温 くであったという。腹をなでることを捫腹という。 る風があり、王猛は褐を衣て、当時威権の高い桓温を開かせない意である。旨のころ、捫蝨を風流とすを開かせない意である。旨のころ、捫蝨を風流とす 舌は舌をおさえてものを言わせぬこと、開くところ 抑〕「朕が舌を捫ふること莫かれ」の句を引く。捫 形声 「無持するなり」とし、〔詩、大雅、 声符は門。〔説文〕一二上に

もだえる・うれえる

刚 0 H

悶死することがある。 う。憤懣の甚だしいときには、悶懣のすえに悶絶・に「賤に處りて悶べず」とは、気にしないことをいとあって三字同訓の字である。〔乳二岁記されるとをいまた懣字条に「煩なり」、憤字条に「懣ゆるなり」また懣字条に「煩なり」、憤字条に「懣ゆるなり」 形声 また懣字条に「煩なり」、憤字条に 声符は門。〔説文〕一〇下に「懣ゆるなり」、

匁 もんめ

国字 あった。匁は文目。唐の開元通宝の一枚の重さが一位で、一両の六十分の一に用い、銀六十匁が一両で 一貫の千分の一の重量をいう。また銭の単

匁を用いた。単に目ともいう。

また文が長さの単位にも用いられるので、重量には 貫の千分の一であったので、のち貨幣用語となる。

也 世・なり・ や・かな

\$ ح°

で盤と一組をなし、新出の睡光地奏簡の奏律類にでない。文末の語詞には古くは殿を用い、秦の〔新郪虎い。文末の語詞には古くは殿を用い、秦の〔新郪虎が態と一組をなし、器に「盤に」と銘するものが多ることがあるとしても、それは仮借の義。 匜は水器 語末の助詞にのみ用いる。 受ける男女のことをしるして、「男はその勢を露はている。性器の名については、〔神異経〕に天刑を 字形をあげているが、それは秦漢のときの字形で、「女陰なり。象形」とし、重文として秦刻石の也の「 象形 「可殿」という用法がみえる。殿はもと、呪医が矢 字の初形ではない。字は金文にみえ、明らかに匜の で病気を祓うときのかけ声である。也はのち語中・ っていえば、施にその義がある。也をその義に用い し、女はその殺を彰はす」とあり、声の近い字をも 象形であるが、〔段注〕になお女陰象形説を固執し **匜とよばれる水器の形。〔説文〕** | 二下に

冶 とかす・いる・つくる・なまめかしゃ

問捫 悶 匁 也 冶

モン

們

紋

とする。「説文」ニー下に「強かすなり」を等名の意とする。字は父(米)に属する字とされるが、金文の字形は写・金などに含まれる舒煌の形に従う。鋳冶して光彩を発するので、また艶冶の意に用いる。「荀子、非相」に子・冶・土、「漢武内に用いる。「荀子、非相」に子・冶・土、「漢武内に用いる。「荀子、非相」に子・冶・土、「漢武内に用いる。

夜8 よ・よる・よなか

火 大夫 火

引 や・か・ちち

することもある。 することもある。 また疑問の終助詞に用いる。また爺の略字と であるが、邪とは別に、耶蘇・耶律などの字に用い であるが、邪とは別に、耶蘇・耶はその異体の字 形質

野ロ「埜」ロ「科」」の・ひな・いなか

ジがいない。

桃

形声 声符は予。〔説文〕一三下に「郊外なり」と

(上篇) に性に作る字である。卜文に埜の字がみえるが、用義例に明らかでないところがある。「大京るが、用義例に明らかでないところがある。「大京るが、用義例に明らかでないところがある。「大京ないに従うて田社の義の字とすれば、埜は叢林の社の表に従うて田社の義の字とすれば、埜は叢林の社の表に対して田野といい、野鄙・樸野の義がある。新となる。これに対して野は予声の形声字である。都となる。これに対して野は予声の形声字である。都となる。これに対して野は予声の形声字である。都はに対して田野といい、野鄙・樸野の義がある。が親の子は、山野の心を忘れず、これを飼養してもその本性たる野心を失うことがないので、人の非望をの本性たる野心を失うことがないので、人の非望をの本性たる野心を失うことがないので、人の非望をかった。野にまた土をつけて別墅の字に用いるのはでない。野にまた土をつけて別墅の字に用いるのはででは、対しているという。野にまた土をつけて別野の字に用いるのはでないが、対している。

椰13 やし

形声 声符は耶。果樹の名で、やし。[嶺南雑記] 形声 声符は耶。果樹の名で、やし。[嶺南雑記] 形声 声符は耶。果樹の名で、やし。[嶺南雑記] 形声 声符は耶。果樹の名で、やし。[嶺南雑記] 形声 までは、毒に遇へば即ち裂く」と異聞を器を用ふるときは、毒に遇へば即ち裂く」と異聞を器を用ふるときは、毒に遇へば即ち裂く」と異聞を器を用ふるときは、毒に遇へば即ち裂く」と異聞を報じしている。漿は酒味あり、はじめ極めて清芳なるも、まもなく渾濁するという。

第 13 ちち・おやじ・あるじ

すなり」とあり、父母を爺嬢という。杜甫の〔兵車形声 声符は耶。〔玉篇〕に「爺、俗に父爺と爲

をよび、下僚が上官をよぶときにも用いる。た国姓爺のように、男子の尊称に用い、下僕が主人た国姓爺のように、男子の尊称に用い、下僕が主人行」に「爺孃妻子、走つて相送る」の句がある。ま

ヤク

厄 4 くびき・きのふし・わざわい

馬馬

象形 車馬に用いるくびきの形。〔説文〕九上に「科厄、木節なり。世に從ひ、「聲」とするが、「は木節の字でなく、また字は厂声ではない。〔詩、大雅、韓奕〕に「絳革金厄あり」と馬具を歌う。厄は車のくびきの形。馬首を後ろから扼する弓形の器である。木節を科厄というのは、くびきの名を木節である。木節を科厄というのは、くびきの名を木節である。木節を科厄というのは、くびきの名を木節である。木節を科厄というのは、くびきの名を木節である。木節な科厄というのは、くびきの名を木節である。木節な科厄というのは、くびきの名を木節である。木節なり、これは金厄の形を説くものとみてよい。厄形の字はみな厄の声義を承ける。これを災厄の意に用いるのは見・関の義で、転義の用法である。の意に用いるのは見・関の義で、転義の用法である。の意に用いるのは見・関の義で、転義の用法である。

見 5 せまい・なやむ・わざわい

さなくぐり戸の形である。「孟子、尽心、下」「君子門」の義とし、ともに乙声とするが、その部分は小二上に「陰きなり」、「繋伝」に「小泉形」、戸下のくぐり戸の形。〔説文〕

ら、窮屈・窮厄の意となる。(孔子)の陳蔡の閒に尼めるは、上下の交り無けれ(孔子)の陳蔡の閒に尼めるは、上下の交り無けれ

役っ「役」のやく・しごと・いくさ・めしつかい

作門 放 以

東京 できょう できない できない これで できなり」と成役の義とし、古文として役をあげている。 できょう とは役で表の類であるから、古文の字形は、その殳をもつ意である。「繁伝」 殳部三下の校字条に、「司馬法に曰く、羽を執るに校を取り、とあり、羽を収杖の上に著けて、巡行するときに呪器として用いたものである。役とは校を奉じて戍役に任ずることで、のちひろく征戍・行役の意に用いる。「周礼、で、のちひろく征戍・行役の意に用いる。「周礼、で、のちひろく征戍・行役の意に用いる。「周礼、で、のちひろく征戍・行役の意に用いる。「周礼、で、のちひろく征戍・行役の意に用いる。「周礼、り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体的な任務を意味するが、春秋り、もと関重の共同体が、大の役を表している。

犯っ おさえる・とる・もつ

別っ けわしい・せまい

前 8 「論」22 まつりのな

形

を証すべき適例がない。

形声 声符は今(勺)。勺に約(約)の声がある。

見 8 ふさがる・けわしい

> 書」に愿の字形を用いている。 生活の上に移して阸窮・阸困という。〔史記〕〔漢生活の上に移して阸窮・阸困という。〔史記〕〔漢・『をある。のち人の住むところを阸巷・阸陋といい、様の形である』に従うており、聖所の隘路をいう字

約の「約」のかすがいわりか

別を加える意である。 形声 声符は句(勺)。勺に前の声 がある。勺はものをかがませている形。 に説文] ニ三上に「纏束するなり」とあり、約束とは たがいにしばり合せることをいう。要所をまとめる ので要約、不要を省くので節約の意となる。約剤と は契約。約は結準に 実施で、(勺)。勺に前の声

訳に舞るかけいやく

のように題するものが多い。

転 12 くびき

朝 光天

目の中に列している。

『説文』、車馬を賜うときの品かに字は厄に従うて軛に作るべきであるが、軛は俗字とされる。「説文」「四上に軶を正体とし、「轅俗字とされる。「説文」「四上に軶を正体とし、「轅俗字とされる。「説文」「四上に・東京であるが、軛はかった。」という。馬の首に繋げる弓形の器をでその初文。

13 ヤク・アク・アイ

形声 声符は益(益)。益の字源に 「捉ふるなり」という。強くつかんで締める ことをいう。益殺とは経数。字はまた扼と通じ、扼 に「捉ふるなり」という。強くつかんで締める は終るの系列の字で、手で締める意。〔説文〕 一 という。益殺とは終数。字はまた扼と通じ、扼 がながれるがである。

薬16【薬】19 くすり・いやす

る。治療を施すことを療といい、療の初文。古く治とあり、薬草をいう。また毒薬を薬ということもあい、薬草をいう。また毒薬を薬ということもあい、薬草をいう。また毒薬を薬ということもあい、薬草をいう。また毒薬を薬ということもあい、薬草をいう。また毒薬を薬ということもあい、薬の声があり、その音の転化したもい。

ない。 ない。 で、この詩を従来、賢者退隠、ひとり飢えを楽し ので、この詩を従来、賢者退隠、ひとり飢えを楽し ので、この詩を従来、賢者退隠、ひとり飢えを楽し ので、この詩を従来、賢者退隠、ひとり飢えを楽し かごとを歌うと解しているのは、甚だしい誤解であ なことを歌うと解しているのは、甚だしい誤解であ なことを歌うと解しているのは、甚だしい誤解であ

龠 17 ふき

龠

全 21 やける・ひかり・かがやく

賦〕に電光を「震々爚々」と形容している。 の連語であるが、擬声語であろう。班固の〔西都のの連語であるが、擬声語であろう。理論は畳韻でを発し、光りかがやく状態をいう。操きなは、大り」とあって、火り」という。〔玉篇〕に「電光なり」とあって、火り」という。「大光なり」と形容している。

躍 21 【曜】21 おどる・はやい・あがる

形声 旧字は躍に作り、翟声。翟に見が、躍して上ることをいう。〔孟子、尽心、上」「君話」に「上るなり、跳ぶなり、進むなり」とあって、武・躍して上ることをいう。〔孟子、尽心、上」「君話」に「上ることをいう。〔孟子、尽心、上」「君話」に「上ることをいう。〔孟子、尽心、上」「君話」に「上ることをいう。

形声 声符は常。常は三孔のある笛楽師。 で、籥の初文であるが、「説文」五上に「書僮の竹笘なり」とあって、習字用の書写版でに「書僮の竹笘なり」とあって、習字用の書写版であるとする。いまの石板・黒板の類で、拭いとってあるとする。いまの石板・黒板の類で、拭いとってあるとする。「老子」第五章に「天地の関は、それはふいごう。「老子」第五章に「天地の関は、それはふいごう。「老子」第五章に「天地の関は、それはふいごう。「老子」第五章に「天地の関は、それは、一般に対している。

文開 32 よぶ・やわらげる

ユ

5 よる・よし・もちいる (エウ)

意の引伸義である。

油 8 ユ・ユウ(イウ)

献のいえるこしかり

会意 舟と余とに従う。井は髭の形。余は手術用の把手のある大きな針。この針で膿血を盤に移しとるのである。金文の字形は、針の横に斜線をそえているが、それは膿血を盤に移すことを示す。これによってその患部が治癒するので、兪は癒(癒)の初文。治癒によって苦悩が除かれ、心が愉しみ愉まることを愈という。〔説文〕ハ下に「空中の木もて舟に従ひ、公に從ふ。公は水なり」とし、字形について「丛(集)に從ひ、舟に従ひ、公に從ふ。公は水なり」とし、字形について「丛(集)に從ひ、舟は下文・金文の受・前・般・米なり」といい、南と水とをもって解するが、兪を舟の義に用いる例はない。舟は下文・金文の受・前・般・米ない、前に従ひ、公に從ふ。公は水なり」といい、愉はない。かなこのような兪の声義を受けるもので、愉・愈・おるように、それは盤の形である。兪系の諸字はんの治癒によって心の安らぐことをいい、輸は他にものを移すこと、移送の意を承ける。「論響でに「兪改すること或る勿れ」とあり、改め渝る意でに「兪改すること或る勿れ」とあり、改め渝る意であるが、これも移送の意からの転義であろう。

見り ひきとめる・しばらく

财

10 ゆがむ・よわい

金倉 二瓜に従う。瓜が連なって成 るときには、形よく成熟しがたいことを示す。〔説文〕セ下に「本、末に勝たず、微弱なを示す。〔説文〕セ下に「本、末に勝たず、微弱なを示す。〔玉篇〕に「勢病なり」と訓するが、器義とする。〔玉篇〕に「勢病なり」と訓するが、器様とする。〔玉篇〕に「磐病なり」と訓するが、器様とする。〔玉篇〕に「鐘括」の語があり、多く窳の字を用いる。

小12 ユ とす・さとる・たとえ・つげる

に「君子は義に喩る」と、さとる意に用いる。 といい。 でいる意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。喩は他取る意で、これよりして彼に移す意がある。

庾12 い

形であるから、腴の声義をとるものであろう。 「水漕の倉なり」とあるが、もとは野積みする倉のことである。〔詩、小雅、楚茨〕「我が庾これ億」のことである。〔詩、小雅、楚茨〕「我が庾これ億」のことである。〔詩、小雅、楚茨〕「我が庾これ億」のに満して、また。

愉に「愉」に たのしい・よろこぶ

〔伝〕に「樂しむなり」とみえるが、なお偸む意を 〔詩、唐風、山有枢〕「他人これを愉しまん」の に「私に戴るときは偸々如たり」とあって、孔子のの偸によって説くものであろうが、〔論語、郷党〕 る。〔段注〕は「周礼、大司徒」「則ち民偸からず」 誤りであって「淺薄の樂しみなり」の意であるとす 愉薄の意であるらしい。〔段注〕に「薄樂なり」の 取る意で、これによって病苦を除き、心の安らぐの も含むようである。〔説文〕に偸字を収めず、 同義であり、 の安らぎをいう字であることからいえば、字は愈と くつろぐときの状態をいう。愈・癒が治癒による心 を愉という。〔説文〕一〇下に「薄なり」というのは は愉にその声義があった。 針で膿血などを除き、これを盤に移し形声が旧字は愉に作り、兪声。兪は 愉には愉楽の意があるとしてよい。 古く

12 ユ・ヨウ (エウ)・トウ

ハミ〇

念 3 ユ いえる・まさる・いよいよ

動態

仮借で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。 (で、なお治癒していない状態をいう。

楡 13 にれ

はるにれは高さ三十米、あきにれも高さは十余米のに「楡枋」(にれと檀木)を小木の意に用いるが、に「楡枋」(にれと檀木)を小木の意に用いるが、また次の枌字条に「枌楡なり」とみえる。[荘子、逍遥遊りの台字条に「枌楡なり」とあり、また次に「楡米

落葉喬木である。その材は堅く、細工物に適する。

13 美玉の名・たま

腹 3 ユ かいこえる・とむ

| 20 | 13 | ユ | こえる・すぎる・とおい・ますます

「越ゆるなり」と訓している。

15 ゆがむ・ひくい・よわる

お声 声符は脚。脚は成熟しない瓜の注に「洗き縦みなり」とは、窪地の義。[荀子、議兵]に「洗き縦みなり」とは、窪地の義。[荀子、議兵]に「械用兵革、縦括にして便利ならざるものは弱に「械用兵革、縦だにして便利ならざるものは弱に「被の注に「縦とは器の病なり」とみえ、器のゆがんでいびつのものをいう。また手足の不自由な意にも用いる。

ま 16 へつらう・おもねる

新 16 (2m) 16 ユ さとす・いさめる

• 16 【解】16 いたす・おくる・つくす・まける

輸輸

癒18 (癒)18 (添)14 やむ・いえる

ユウ

又 2 みぎのて・また・たすける・ふたたび 2 ユウ(イウ)

義である。〔礼記、王制〕「王三たびこれを又す」は[伝]に「復なり」、〔儀礼〕「又これに命ず」も復の 又二月の又の意に用いる。保又・専又は保有・専有。 文には、又を左右の右、「成又り功又り」の有、十 三下に「手なり。象形。三指なるものは、手の列多 呪儀を行なう意。又が右手の初文である。〔説文〕 宥の義。みな手を加えることによって、その意を をもつ形で、左右はいずれも祝禱や呪具をもって、 はその手に祝禱の器をもつ形、左は左手に呪具の工 略して三に過ぎざるのみ」という。卜文・金 右手の指を出している形で、右の初文。右 天命又びせず」の

友 4 とも・兄弟・したしむ・たすける

料習 他此

を誤るもので、金文に督に作る字であろう。曰は祝 「亦古文友なり」とするが、これはおそらくその形 に手をならべた形に作る。〔説文〕に古文二字を録 するなり」という。金文の字形は、多くは双のよう 文〕三下に「同志を友と爲す。二又に從ふ。相交友 禱を収めた器。その上に双方の手をおくのは、盟誓 その第一字は双の形、第二字は習の字形で、 二又に従う。各手をもって助ける意。〔説

> 「用て倗瞀に饗せん」のようにいう。〔書、君陳〕に いう。〔詩、周南、関雎〕「琴瑟これを友とす」とは、(朋)は一連二系の貝で、相繋属する関係のものを 定四年、「朋友相衞る」の〔何休注〕に、「同門を朋族中の友生とを並挙したものであろう。〔公羊伝〕 「兄弟に友に」というように、友とは同族の倗習の 同族の兄弟をいうときには儩瞀という語を用いる。のを官友・官守友・法友・友正などのようによび、 友親の意である。 大された用法で、同胞は古くは倗といった。#トサーといひ、同志を友といふ」と解するのは、のちの拡 ありと雖も の情誼をいう字である。〔詩、小雅、常棣〕「兄弟 間における友誼の情をいう語で、習が名詞、友はそ 同族者として盟誓を行なった者を意味する語で、 上に双方の手をおくのと同じ。金文には、同僚のも のときの形式で、いま就任式や婚礼のとき、聖書の 友生に如かず」の句も、同胞の兄弟と、

尤 とが・ことなる・もっとも・はなはだユウ(イウ)

¥

どがあり、これらは毛の深い獣の形で、いずれも呪 い。他にこれと似た字形のものに、求や希(祟)なとトする例が多く、その字は牲殺されている犬に近 獣の象形である。卜辞に「尤虫るか」「尤亡きか」るなり。乙に從ひ、又聲」とするが、殺されている **尤禍をもたらすものである。〔説文〕 - 四下に「異な** 呪霊をもつ獣の形。その呪霊によって人に

> 尤過の意となり、〔論語、為政〕「言に尤寡く、 ・**・*** 物という。〔荘子、徐无鬼〕に「夫子は物の尤なる 術を意味する字である。尤異の訓も災異の意とす は殺で、ともに禍殃を救済・減殺するための共感呪 霊をもつものである。求を殴つ形は救、帬を殴つ形 ものなり」の物も、もと神怪を意味した。のち人の から出ている。その呪霊のすぐれたものを尤異・尤 に悔寡し」のように用いる。 く、尤字のその他の訓義は、みなこれを用いる呪儀

级 ちいさい・かすか・このユウ(イウ)・ジ

쌇 88

ている。幺は糸たば、これを捌らすを幼といい、幼を幼子の象とみて、この系列字の解釈をすべて誤っ示代名詞としては、玆の形を用いる。〔説文〕は幺 会意 「丝の休」のように用いる。ときには〔晉鼎〕「絲 あるとする。すなわち丝を幽微の初文と解するものるなり」とし、山中に丝の隠れる意で、丝の亦声で 子の初めて生るるの形に象る」とし、丝には「微かなり で、玆の初文。従ってジの音でよむべき字である。 なり。二幺に従ふ」というが、二幺が並んでも、微 の五夫」のように絲の形を用いることもあるが、指 ト文・金文に丝を茲の義に用い「丝の人」「丝の彜」 くすべる形である。幽は幽黒の意。玆は糸たばの形 であるが、丝は糸束を並べた形で、幽はそれを火で 小の意となるはずはない。また幽字条四下に「隱る 二幺に従う。幺は〔説文〕四下に「小なり。

は拗の初文である

有の【有】のかるいもつこ

到

「四方を匍有す」など、保有の意に有を用いる。ま の意に用い、金文には〔大盂鼎〕「天の有する大命」の問題にすぎない。月は肉の象形。卜文には又を有 [春秋伝] 「日月これを食するあり」の例を引き、有 た〔班段〕に「有周」のような使いかたがみえる。 とは異変ある意とするが、それは〔春秋〕の記載法 〔説文〕 七上に「宜しく有るべからざるなり」と、 又と肉とに従う。肉をもって神に侑める意。

佑, たすけるユウ(イウ)

AS OF

祐(祐)とも通用する字である。 文王の「謨、不いに承くる哉武王の烈、我が後人を文王の「謨、不いに承くる哉武王の烈、我が後人をいう。〔孟子、滕文公、下〕に「丕いに顯かなる哉いう。〔孟子、滕文公、下〕に「韓」をなった。 にみえず、「仏雅、釈詁」に「佑は助くるなり」と のように、天の佑助を受けることをいう。〔説文〕 けられて徳を秉る」、〔多士〕「我が有周に佑命あり」 もつ形で、佑ける意がある。〔書、君奭〕「純いに佑形声 一声符は名。右は祝禱の器であるごを右手に し、咸正を以てして缺くる無し」という。 右

酒器の名

有(有) 佑 卣 攸 肜(肜)

ユウ

瓠を刳って酒器に用いたものらしく、瓢な酒器の名である。卣はもと瓠形の器で、みな酒器の名である。卣はもと瓠形の器で、 〔広雅、釈器〕に「彝・卣・罍は器なり」とあり、 卣の古制のものには、 瓠形の把手のついた器で、酒器に用いる。 なお瓠形を存するものがある。 、瓢簞の類。 古くは

多く、鬯とは鬱鬯「鬯一卣」を賜う例が が多い。金文の賜与に 殷周期のものに精品 のち青銅器で作られ、

(香草)をもって香を 空虚となったものが卣。古く卣・由は同声、同形で あったと考えられる。

攸 みそぎ・ゆるやか・ところユウ(イウ)

順

「支は、水に入りて杖つく所以なり」としているが、〔説文〕の原意をえたものとしがたい。〔繋伝〕に こと他々たりに作る。按ずるにまさに行水攸々たり に「行水なり」とあり、〔段注〕に「唐本に水行くて滌う意で、身を清めることをいう。〔説文〕三下。 会意 に作るべし」と、流れる水のさまをいうと解するが、 人と水と支とに従う。人の背後に水をかけ

> そのことをいうものであった。 訓義は、音の仮借。古くから潔斎のために沐浴する て修禊のことに関している。「攸て」「攸」などのと言葉なる。「なって滌うことを滌がいう。攸の系列字は、すべをもって滌うことを*** ことが行なわれたが、〔説文〕のいう行水も、もと その修潔を示す。また悠とはその修潔をえた心情を いう。みそぎに用いる細い枝などを條(条)、これ みそぎを終えて修潔をえたことを修といい、三は これも奇異な解釈である。字はみそぎをする意で、

彫っ「船」の またのまつり

卣

1

鐘声を「雕々」と形容しており、 舟は盤の形である。〔宗周 鐘〕〔秦公 鐘〕に、そのいる。〔唐写本玉篇〕に肜日の肜を形に作っており、いる。〔唐写本玉篇〕に肜日の肜を形に作っており、 が、声義ともに異なり、 い。〔説文〕にいう舟行の義は影。同形の字である 董作賓は鼓声をもって祭ったものであろうと解して 声を示す彡を長短四、五本引く形のものであるから、 ものであるという。形は祭の翌日に行なわれるあと 商には形といひ、周には繹といふ」とする〔爾雅・いう、「高宗形日〕の形と解して、「夏には復祚といひう。〔説文〕に「船行くなり」とする。〔段注〕に 従う。盤を鼓って、その音のひびきを示す字であろ 会意 の祭のことで、卜辞にその名がみえる。その字は鼓 釈天〕の文を引き、それは「舟行延長の意を取る」 「説文」ハ下に正字を影に作り、舟と言とに のちの用法とみられる。 形々とその声が近 U

邑 7 みやこ・まち・! むら

e°

邑と称した。〔詩、商頌、殷武〕に「商邑翼々たであろう。卜辞に大邑節の名がみえ、殷の王都を大ころは長方の□の形で、その宿舎地の象をとるもの 〔左伝〕 荘二十八年に「凡そ邑に宗廟先君の主ある 邑二百又九十又九邑と、民人都鄙とを賜ふ」とあっ の居住地をいう。斉器の〔輪鏤〕に「侯氏、これに 厥の田を田つくらしめよ」とあり、ここでは耕作者 には農奴の授受にあたって「必ず尚に厥の邑に處り、 る。国都の他にも一般の邑里のことをいい、〔晉鼎〕 みな謙称して、自国のことを弊邑・小邑と称してい (今の洛陽)をいう。[左伝]の外交の辞に、列国は 名のみえるものが数器あり、当時造営された成 周篇に新邑・大邑の名がみえ、周初の金文にも新邑の り」と歌われているものである。〔書、周書〕の諸 つ形にしるすのと同じ造字法であるが、衆の従うと は、誤りである。衆の字形が口の下に三人相並び立 解し、大邑小邑の都城の制に節度がある意とするの の制、尊卑大小あり。卪に從ふ」という。卪を節と ま。城中に多くの人のあることを示し、城邑・都邑 続らしている形。巴は下が本形で、人の跪居するさ て、邑は聚落というほどの規模のものであろう。 をいう。〔説文〕六下に「國なり。口に從ふ。 を都といひ、無きを邑といふ」とみえる。 □と巴とに従う。□は都邑の外郭、城壁を 先王

> 酉~(酉)~ さけ・とり
> ユウ(イウ)

象形

8

0

酒器。〔説文〕五上に「气行るなり。

そてコエ上こ「气行るなり。乃に従ひ、鹵敷物の上に卣をおく形。卣は儀礼に用いる。

<u>.</u> 0 全量量 F 可可可

すべき。 猫(猫)・ 飲はみな歯声。 歯はその酒気をいう。 さい。 という。 では、との字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、 その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、 その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、 その字は用例がない。 金文に、物で、 をあげるが、 その字は用のでは、 とし、 古 侑。[姷]。 すすめる・たすけるユウ(イウ)

呦

鹿のなくこえ

形声

声符は幼。〔説文〕三上に「鹿

こび)を賜ふ」など、以と同様に用いる。

鹿鳴〕に「呦々たる鹿鳴 野の萃を食む」の句がある。

の鳴く聲なり」とあり、「詩、小雅、

る。日本鹿の鳴く声には、十種の声の意味を区別す

刷 閘

عُ W

礼、膳夫]「樂を以て食を侑む」のように、侑食・は、紫キーで医偶(つれあい)の意とするが、[周り」とあって匹偶(つれあい)の意とするが、[周はなっ]とする。[広雅 釈詁]にも「侑は耦するな従ふ」とする。[広雅 釈詁]にも「侑は耦するな 形声 固. 字。 める意となった。姷は別義の字と思われる。 侑酒が原義。もと神に侑薦する意から、のち人に侑 三下に正字を姷に作り、「耦するなり。或いは人に 祭肉を神に薦める意で、侑の初文。〔説文〕 もって ユウ (イウ) 声符は有。有は祭肉を手にもつことを示す

> 勇。 (勇)。[勈]。 瀬 題 角角 いさむ・ヨウ

ることができるという。

形声 り、勇気をいう。斉器の〔庚壺〕に、武臣の功を賞 は、慫慂の慂であろう。力は耒の形で、勇を示す 字を勈に作り、或る体として戒、 べきものではない。〔説文〕一三下に「气なり」とあ われる。金文の人名にその字がみえる。古文の字形 文の形をあげるが、或る体の字が初形であろうと思 して「甬々たり」とあり、甬を勇の字に用いている。 旧字は勇に作り、甬声。〔説文〕の正篆は また甬心に従う古

9 かこい・その・にわ・かぎりユウ(イウ)

XX XX

園の意。「周礼」に園人の職がある。「秦公設」に「諫設」に「併せて王の宥を嗣めよ」とあって、苑なき、は、は、は、は、なき、ない。として田形の中に四木を加えた形をあげる。ない。とし、「一に曰く、禽獸には囿といふ」とあり、り」とし、「一に曰く、禽獸には囿といふ」とあり、り」とし、「一に曰く、禽獸には囿といふ」とあり、 「四方を電囿せよ」とあって、奄有というのと同じ。 ひろく占有し支配することをいう。 声符は有。〔説文〕六下に「苑に垣有るな

宥 9 ゆるす・すすめる・たすけるユウ(イウ)

B

の侑と同義で、礼を加えることをいう。侑薦と宥恕三たび宥す」の宥は、〔儀礼、有司徹〕「賓に侑す」に宥を命ず」、〔周礼、大司楽〕「王、大いに食す。これことをいう。〔左伝〕荘十八年「王、饗醴す。これことをいう。〔左伝〕荘十八年「王、饗醴す。これ と、字義が相関連する。 す」とみえる。字は廟に祭肉を薦め、神宥を求める とあり、有免の意。〔書、舜典〕「刑は五刑を宥う形声 声符は宥。〔説文〕七下に「寛うするなり」 , 北下に「寛うするなり」

<u>区</u> くろ・かすか・ふかい・くらいユウ(イウ)

幽

会意 然と火とに従う。 丝は糸たば。それを火で ユウ 有 宥 幽 斿 柚 疣 祐[祐]

> 色のものをいう。(ことはで) その玄遠の趣を幽思・幽趣という。 拘繋することを幽囚といい、また死後は幽冥の世界 示す字である。胸も山の形に従う字であるが、 であるから、鬼神に関して幽鬼・幽明といい、 色のものをいう。人を幽暗のところに幽閉するので、 糸たばを列ねた形であり、幽とは糸を纁染する法を 中の紋なるに從ふ、紋は亦聲なり」とし、紋を隠微幽微の意となる。〔説文〕四下に「隱るるなり。山 の字形は明らかに火に従う。また丝は弦の初文で、 山に従うて山中に幽居する意とするが、卜文・金文 燻べて黒色とする。その色は幽暗であるから幽遠・ また

斿, はた・ふきながし・あそぶユウ(イウ)

川 自多新

いう。いわゆる綴斿(吹き流し)、また旒ともいう。る」の注に、正幅(旗)の旁につけるものであると [周礼、巾車]「大常、十有二斿を建てて、以て祀るとしているが、斿・遊・游はみな同じ字である。としているが、斿・遊・游はみな同じ字である。 会意 もので、斿は遊の初文。〔説文〕七上は游をその字 くは外に旅するとき、その氏族旗を掲げて出遊した ゆず(イウ)・ジク(ヂク) 放と子とに従う。牀は旗竿と吹き流し。古然

> の軸。柚にその二音があるのは、由にその二音を含された。〔詩、小雅、大東〕「杼柚それ空し」は織機された。〔詩、小雅、大東〕「杼柚それ空し」は織機本味〕に「雲夢の柚」をあげており、江南の美果と むからである。 は橘柚」とあり、楊州の貢物であった。[呂氏春秋、 の強いものである。〔書、禹貢〕に「厥の包(貢物) なり。橙に似て酢し、とあり、香味形声 声符は曲。〔説文〕六上に「條

疣。 いぼ (イウ)

を以て附贅縣疣と爲す」とあり、よけいなものをいとあり、いぼをいう。〔荘子、大宗師〕に「彼は生とあり、いぼをいう。〔荘子、だ宗師〕に「彼は生形声 声符は尤。〔玉篇〕に「死ほっ ちに接する機会が多かったからであろうと思われる この学派が司祭的な聖職にあって、このような人た う。〔荘子〕に奇形疾病の名が多く登場するのは、

祐 (記) たすける・さいユウ(イウ)

市

・ アニれをふく、コ・右を多くその義に用いるが、佑 ・ 天これを右く」、また〔書〕には天佑・純佑・佑 ・ 楽〕「保右してこれを命ず」、『恩頌、 我将〕「これ ・ ですり)の意。金文の右者・右助、〔詩、大雅、仮 ・ な文の右者・右助、〔詩、大雅、仮 ・ な文の右者・右助、〔詩、大雅、仮 は「説文」にみえない。右は祝詞を奉じて神祐を求命・啓佑など、右・佑を多くその義に用いるが、作 (たすけ)の意。金文の右者・右助、[詩、大雅、仮右の声義を承ける。ト文に「又々」とあるは有祐がその初文。[説文] -上に「助くるなり」とあり、 声符は右。右に佑助・祐助の意があり、

める意、 祐は後起の字である。

羑, すすめる・みちびくユウ(イウ)

そのようなところの名であろう。髪ともと同じ字でずれも辟雍や社など聖所の施設であるから、羑里もずれもにます。 たという。古代の囚獄の名は、霊台・圜土など、い確かめがたい。周の文王は紂のため羑里に幽閉されば、羊を羞める形と思われるが、古い字形がなくてば、羊を あろうと思われる。 に「導くなり、進むなり」とあり、その義からいえ も合わない。〔説文〕に「善を進むるなり」、〔玉篇〕 を久とするが、字形に疑問があり、声 〔説文〕四上に形声とし、 声符

悒 うれえる・むせぶユウ(イフ)

して余佗傺す」とあり、心の鬱結して伸びがたいこ「憂ふるなり」という。〔楚辞、離騒〕に「忳と鬱悒がいるなり」とあり、〔玉篇〕にも、 とをいう。悒々は心の結ぼれるさまをいう。 声符は邑。〔説文〕一〇下に

挹 くむ・とる・おさえるユウ(イフ)

挹損・挹退はおさえる、へりくだる意。また揖と声て酒 漿を挹むべからず」は、斗杓をもって酌む意。いう。〔詩、小雅、大東〕「これ北には斗あるも」以いう。〔詩、小雅、犬どり 義が通ずるのは、その姿勢が似ているからであろう。 「抒むなり」とあり、酌みとることを 声符は邑。〔説文〕゛ニ上に

<u></u>
基□ [誘] 14

菱 鬱輔美

て羑字をあげている。言部三上に「誠は誘なり」、ものであろう。重文としてまた誘・請及び古文とし 邪の義とするから、姦邪をもって誘引する義とする うものであろうが、ほとんど用例のない字である。 **塾に誘導の義があるとはみえず、おそらく同声仮借** また〔玄応音義〕に「誘は導なり、引なり、教なり。 麦に從ふ」と会意に解する。〔説文〕はムヵ上を姦いれる。〔説文〕九上に「相誠呼するなり。ムに從ひ、れる。〔説文〕九上に「相誠呼するなり。ムに從ひ、 加えている字形があり、字はその象形であると思われている形であろう。卜辞にみえる羌には、辮髪をれている形であろう。卜辞にみえる羌には、辮髪を の訓であろう。拠・羑はもと一字。羌人のことをい 亦相勸むるなり」とあり、みな誘導の字であるが、 菱にムを加えた形であるが、 ムは辮髪を垂

悠山 おもう・うれえる・はるか・ゆるやかユウ(イウ)

小雅、十月之交」「悠々たる我が里」の〔伝〕に揚など、心に鬱屈のない状態をいう語である。〔詩、本来は必ずしも憂思の意ではない。むしろ悠々・悠本来は必ずしも憂思の意ではない。むしろ悠々・悠り」とし、〔節継、釈詁〕に「思ふなり」とするが、り」とし、〔節継、釈詁〕に「思ふなり」とするが、 「悠々は憂ふるなり」とあり、〔段注〕にこれを悠の そぎする意。そのみそぎを終えて、心の伸びやかと なった状態を悠という。〔説文〕一〇下に「憂ふるな をかけて滌い、身を清めることで、み形素 声符は攸。攸は人の背後に水

> 遠のように時や空間、また悠繆のようにとりとめあるから、悠然・悠思・悠揚の意となり、悠久・悠あるから、悠然・悠思・悠揚の意となり、悠久・悠 から、 心が安らかであれば、その想念も悠かで悠という。 心が安らかであれば、その想念も悠 もない意に用いる。 あり、その修潔した心の安らぎ、つつましい状態を 本義とする。攸・修・滌はみなみそぎに関する字で

莠 はぐさ・みにくいユウ(イウ)

に「好言、口よりし「莠言も口よりす」の句がある。という。それで醜悪の意となり、〔詩、小雅、正月〕 「莠を惡むは、その苗を亂ることを恐るればなり」 び)に似て実の入らぬもの。〔孟子、尽心、下〕にのなり」とあり、一本数茎、よく茂り、稷(たかき なり」とあり、童粱ともいう。〔詩、 「稂あらず、莠あらず」の〔伝〕に「苗に似たるも り、童粱ともいう。〔詩、小雅、大田〕、『秋天日、「禾粟下に生ずるは秀」 形声 声符は秀。秀に誘の声がある

主 1 とが・つみ・あやまち

〔伝〕に「過なり」とみえるもので、他に用例なく、 ことがある。 尤の繁文とみてよい。また郵の字を仮借して用いる***** の文を引く。〔詩、邶風、緑衣〕「訧無からしむ」のし、〔書、呂刑〕「報ずるに庶訧(諸刑)を以てす」し、〔書、と明ら、『報ずるに庶哉(諸刑)を以てす」 形声 がある。〔説文〕三上に「罪なり」と 声符は尤。尤に尤、過ちの義

道 11 ゆるやか・くつろぐ・ところ

下声 声符は歯。体・悠・曲と声義がなり」の「釈文」に「自得の貌」とみえて悠然然たり」の「釈文」に「自得の貌」とみえて悠然然たり」の「釈文」に「自得の貌」とみえて悠然が近い。「主人追爾として笑ふ」の意。 状面の [答實戲]「主人追爾として笑ふ」の意。 ない はいう。

游

あそぶ・およぐ・ゆくユウ(イウ)

膦

郵 しゅくば・あやまち・とがユウ(イウ)

筵〕に「その郵を知らず」とは、尤過の意である。どがあった。字は式に仮借し、〔詩、小雅、賓之初;との各過するところをしるしており、そこに駅舎な路の経過するところをしるしており、そこに駅舎な かなり」とみえる。近出の〔鄂君啓節〕に水路・陸「德の流行するは、置郵して命を傳ふるよりも速や くことを、置郵という。[孟子、公孫丑、上]には伝書。辺境への通路の経過するところに駅舎をおは伝書。 行るの舍なり」とし、「垂は邊なり」という。書となる。 (辺地)。〔説文〕六下に「境上に書を 垂と邑とに従う。垂は辺陲

あった。

楽の意となる。古くは斿・游・遊はみな通用の字で

自由に動くものをいい、それより遊

固定しないで、

り」とするが、游は外遊、また游泳の字に用いる。 は水の流るるが如し。故に流と稱ふことを得るな

文に斿を遊・游の意に用いる。〔段注〕に「旗の游

旗の流なり」とは、吹き流しの類をいう。卜文・金像の流なり」とは、吹き流しの類文。[説文]七上に「産ることで、遊(遊)・游の初文。[説文]七上に「産形」 声符は켥。斿は氏族の旗を建てて外に旅す

猶12 (猶)12

はかりごと・なおユウ(イウ)

揖 えしゃく・おす・おさめる・ゆずるユウ(イフ)・シュウ(シフ)

礼節の重要なものとされた。 声符は旨。 貴は清母、声の転

質質

闷

0 臀 能够

またとう。「水経、江水注」に、猶御は好ん獣であるという。「水経、江水注」に、猶郷は好んと、(電子)、である。「説文」とあり、いいで、(できる)、とし、「玉篇」に猿の類で叩鼻長尾のは、(できる)、とし、「一にっている。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一にある。「説文」→○上に「玃の屬なり」とし、「一に 猿の種類は多く、 猿の種類は多く、その名も多いが、この字は猶予、反、空に乗ずること飛ぶが若し」とその生態をいう。 で巌樹に遊び、「一騰百歩、 旧字は猶に作り、督声。
善に輪・
輪の声が 或いは三百丈、順往倒

とあり、 公孫丑、上〕「齊を以て王たるは、由手を反すがご子がきない。」というでは、ないない。これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、一次には、一次には、一次には、一次には、一次には、一次に と一字であるが、猷は謀猷の字となり、他の諸訓はして又夜に鳴く」の又も狖の意である。猶・猷はも狖がその本字。〔楚辞、九歌、山鬼〕に「後続りなと に・まさに・もってなど、用法の多い字である。 ときのみ」のように用いる。他にはなはだ・すで なる。兄弟の子を猶子・猶孫といい、わが国では養 たのであろう。〔説文〕が「玃の屬」とするものは、 る例がある。〔説文〕に猷を収めず、当時猶を用 みで、金文には猷、漢碑には良猶・徽猶など猶に作 るのは、これをもって神を祀り、神意に謀る意であって、神に供えるべき酒であり、それに犬牲を加え って字義を考えうる。酋一四下は「繹酒なり」とあ語である。猶は猷と字の要素が同じであり、猷によ 辞、離騒〕に「心猶豫して狐疑す」とあり、その語また餘謀の意にも用いる。猶予は双声の語で、〔楚また。いま はまた〔九歌〕に夷猶ともいうもので、状態をいう 猶然の意より猶予・猶疑、また若似の意と

裕 12 ゆたか・ゆるやか・ひろいユウ

揖 游

猶[猶][猷]

裕

前 心公公

形声 声符は谷。谷は容・欲の従うところの谷で、 統谷の谷とは別の字。祝禱の器である出の上に、彷 総として神気のあらわれることを示す形であり、廟 佛として神気のあらわれることを示す形であり、廟 佛として神気のあらわれるものは客、これに対してい、 が、祈禱する人の衣裳の寛闇であることをいう字で あろう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あろう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるう。寛(寛)もまた廟中にあって、巫女の祈禱 あるが、の意となる。「国語、周語」に「享祀すること ときに至り、布施優裕なり」とは、神事に布施する ことがゆたかな意。もともと神事に関していう語で あるが、のち人の裕福なことをいう。

遊12【遊】13 あそぶ・ゆく・まじわる

節 与後意

祭祀を歌うものである。〔秦風、蒹葭〕も詩意不明ないらず」とは、水の女神。その詩は漢水の女神ないらず。〕には遊を収めず、游字条七上に「旌旗の流なり」とし、重文として遊の字をあげている。の流なり」とし、重文として遊の字をあげている。の流なり」とし、重文として遊の字をあげている。の方また游泳の字が分岐した。遊とは遊行移動するのをいう。〔詩、周南、漢広〕「漢に游女あり、求ものをいう。〔詩、周南、漢広〕「漢に游女あり、求ものをいう。〔詩、周南、漢広〕

のものとされるが、これも水神祭祀の歌で、女神を追述して咨嗟詠歎するのは、女神祭祀の基本的な形だである。すべて自在に行動し、移動するものを遊れいい、もと神霊の遊行に関して用いた語である。たことは、遊の古義をなお存するものであった。といい、もと神霊の遊行に関して用いた語である。たことは、遊の古義をなお存するものであった。才が原義であり、「あそばす」という敬語もそこから生れる。神とともにある状態をいう。すべて故郷を離れることを遊学・遊館・遊子といい、天子がから生れる。神とともにある状態をいう。すべて故がら生れる。神とともにある状態をいう。すべて故郷を離れることを遊学・遊館・遊子といい、天子がから生れる。神とともにある状態をいう。である、神をとれる。神とともにある状態をいう。すべて故の楽しむを遊心という。「論語、述れる」としている。

釉 2 ユウ (イウ)

形声 声符は由。由に油化したものの意がある。 で、学が宋に従うのは、その光沢のある意であろう。段代にすでに釉化を利用した灰釉陶がみられるが、後漢には青磁や黒褐釉磁の技法も試みられていが、後漢には青磁や黒褐釉磁の技法も試みられていが、後漢には青磁や黒褐釉磁の技法も試みられている。唐の三彩、宋の青磁・白磁に至って、その技法は頂点に達した。

が 1 おす・おとこ・まさる・さかん

形声 声符は太とされているが、声なに表に従う字があるが、人名であるから用義を金文に友に従う字があるが、人名であるから用義を知りがたい。漢碑には、右に従う字形が多く用いられている。鳥の雌雄をいう字であるが、雄豪・雄和・雄健・雄大・雄深など、男子の徳性を意味することが多い。〔老子〕に雌雄の語が多く、第二十八章に「その雄を知り、その雌を守りて、天下八章に「その雄を知り、その雌を守りて、天下八章に「その雄を知り、その雌を守りて、天下八章に「その雄を知り、その雌を守りて、天下の谿(根元)と爲る」の語がある。

楢 13 ユウ (イウ)

水声 声符は常。「説文」六上に「柔楽生する木であるという。いずれもどんぐりのなる業生する木であるという。いずれもどんぐりのなる木である。

良 3 ユウ(イフ)

をでいまった。 をでいまた香嚢をしいう。とがある。「繋伝」に「書嚢なり」と解し、「玉篇」には「包むなり」とする。なり」と解し、「玉篇」には「包むなり」とする。なり」と解し、「玉篇」には「包むなり」とする。なり」と解し、「玉篇」には「包むなり」とする。とあるように、を表して、という。という。という。

起3 ユウ(イウ)

原意圖。

14 ユウ・ダイ

会意 能と火とに従う。「証券文」にその形の字本的、「左伝」宣八年の敬臧を、「公書伝」に「庸々」に「韓国の一族の字とする。」に「唐々」に「韓国の一族一の子とする。」に「在公人、炎の省聲」とし、炎声の字とする。「書、洛訓「火始めて縱々たり」の鏃を、「漢書、格訓「火始めて縱々たり」の鏃を、「漢書、梅福伝」に「庸々」に作り、「淮南子、墜形訓」「東北を炎風といふ」を一に「融風」に作るなど、音のおうたどることもできる。熊の字形は最も嬴に似ており、「左伝」宣八年の敬臧を、「公書は、音のとうには質繁に作る。このような通用の例もあって、公司には質繁に作る。このような通用の例もあって、公司には質繁に作る。このような通用の例もあって、公司には質繁に作る。このような通用の例もあって、公司には質繁に作る。このような通用の例もあって、

京字であり、やどかりのような水虫である。編は編に従う字であり、やどかりのような水虫であるから、熊とは類の異なるものであるが、また両者の関係を思り、以て羽淵に入る」とあり、魚と熊という関係である。鯀の子である禹も、塗山氏と婚したが、化して熊となった姿をみて、塗山氏と婚したが、化して熊となった姿をみて、塗山氏と婚したが、化して熊となった姿をみて、塗山氏と婚したが、化して熊となった姿をみて、塗山氏はおそれて石となり、風が「わが子を帰せ」と呼ぶと、その石の北方が破れて、啓が生れたという啓母石の説話を伝えている。まが「わが子を帰せ」と呼ぶと、その石の北方が破れて、啓が生れたもので、熊と顧との関係を示唆族の間に伝えられたもので、熊と顧との関係を示唆するものであるかも知れない。〔左伝〕昭七年や古るものであるかも知れない。〔左伝〕昭七年や字形は、水虫の形であるように思われる。龍・熊・原・扇の諸字の間の関連については、なお明らかで字形は、水虫の形であるように思われる。龍・熊・熊・贏の諸字の間の関連については、なお明らかでないところがある。

天乃 4 ユウ(イウ)

する。誘掖・誘致、また誘惑の意に用いる。

夏 15 「夏心」13 うれえる・なやむ・くるしむ

会意 喪中にあって愁える人の形に、心を加えた形。〔説文〕一〇下に悪を正字とし、「悪は愁ふるなり。心真に従ふ。悪ひの心、顔面に形る。故に真に従ふ。悪ひの心、顔面に形る。故に真に従ふ。悪ひの心、顔面に形る。故に真に従ふ。悪ひの心、顔面に形る。故に真にない。を加えている。寒が喪に服する未亡人の、寒部事に、「親文」は恵を愛、憂を優と解する。〔毛公鼎〕に「我の、先王の憂を作さざらんことを欲す」とある憂は、煩慢して頭痛に苦しむ者の象形とみられる字で、頭には衰経を加えている。喪に服するものの憂愁の意より、すべて悲痛・憂苦の情をいう。ちれる字で、頭には衰経を加えている。喪に服するものの憂愁の意より、すべて悲痛・憂苦の情をいう。とある憂は、煩煙とで頭痛に苦しむ者の象形とみられる字で、頭には衰経を加えている。喪に服するものの憂愁の意より、すべて悲痛・憂苦の情をいう。には憂心を歌うものが多い。

た。15 やく・かがりび・にわび ユウ(イウ)

積んで燎く祭儀をいう。[周礼、大宗伯]「槱燎を以くなり」という。〔詩、大雅、棫樸]「これを薪にしくなり」という。〔詩、大雅、棫樸]「これを薪にしくなり」という。〔詩、大雅、棫樸]「これを薪にした。 下声 声符は酉。〔説文〕

八三九

たものである。は燎を用いるものが多く、牲をその上にのせて焚いは燎を用いるものが多く、牲をその上にのせて焚いの祭儀でかがり火をたくこと。卜辞にみえる祭祀にて司中・司命・槱師・雨師を祀る」とあり、燎はそて司中・司命・橋師・雨師をまる

牖 15 ユウ(イウ)

〒16 とける・やわらぐ・とおる・あきらか

(4) こった(イウ) であると思われる。由・一つでは、とけてやわらかいという共通義があり、声義の通ずるところが認められる。由・一つでは、とけてやわらかいという共通義があると思われる。由・

16 かるい車・かるい

優 7 わざおぎ・やさしい・まさる・ゆたか

をもつ人。その憂愁にうちしずむ姿を優といい、またその姿をまねするものを優という。「説文」ハ上に「饒きなり。一に曰く、倡ふものなり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。饒とは飽食の意で、優の字義にふさわり」とする。一定日く、倡ふものなり」といるのであると思われる。いわば悲れて潜むをなす者であった。「左伝」襄六年、「少くして相狎れ、なす者であった。「左伝」襄六年、「少くして相狎れ、なす者であった。「左伝」、東にいる。

長じて相優す」とは戯れ合う意。「杜光」に「満優」の語なり」という。「石鼓文、作原石」に「游優」の語があり、その字は軽に作る。圣は土主(土地神)を耐る形であり、そこに神霊を招き哀告の儀礼を行なうのであろう。〔詩、大雅、巻阿〕は、わが国の吉うのであろう。〔詩、大雅、巻阿〕は、わが国の吉うのであろう。〔詩、大雅、巻阿〕は、わが国の吉うのであろう。〔詩、大雅、巻阿〕は、わが国の吉うのであろう。〔詩、大雅、巻阿〕は、わが国の吉うのである。後もまで、何かながなかながなかなが、から、一様ではない。ながなるかなが、などもないで、その篇末に「優なるかながながなるかなが、優伶のことは、すべて神事にながなる。とを歌うもので、その篇末に「優なるかながなるかなが、優伶のことは、すべて神事にながない。後長・優柔のように用いる。字をまた慢に作ることもあるが、憂の字形のうちにすでに心が含まれている。

別 7 ユウ (イウ)・ヨウ (エウ)

低 18 はえ・はや・はらご

18 コウ(イウ)

を 21 種に土をかぶせる・つちならし・すき

ユウ 鼬 耰 ヨ 与「與」予 予で 溺の二人が「耰して輟めず」、渡し場も教えなかっ だという話を載せている。鋤耰はすき。「説文」に を尋ねさせたところ、長記・架。 道に迷うて子路に道を尋ねさせたところ、長記・架。 でという話を載せている。鋤耰はすき。「説文」に、孔子が亡命中、

で、土をならすのに用いる。「榎は田を摩つ器なり」とあり、土塊をくだくもの「

3

与。【與】14 Bleita·saina·saina·saina

字もあり、奥は数人協力してこれを搬ぶ形である。 とされたのであろう。ト文に角を両手で捧げる形の に、象牙に彫飾を加えたものがあり。それは聖器 土木工事に象を使役したことは爲(為)の字の構造 からも知られる。侯家荘遺址や婦好墓からの出土品 象牙の類であろう。象は殷代には江北の地にも棲息 しており、卜辞に「象を獲んか」と卜する例もあり、 與もそれに近い意象の字で、与はおそらく牙の形、 ふりそそぎ、地霊をよぶ儀礼を意味する字である。 は、同とよばれる酒器をもって裸圏の酒を地主に礼的な行為を意味する。同じく舁に従う形である興 器である日の形をそえており、それは祝禱を伴う儀 の字がみえ、並列の意に用いるが、その下に祝禱の げて運ぶ意。興して運ぶことをいう。〔輪鎛〕にそ に作業することから生れた後起の義で、 〔説文〕 三上に「驚與なり」とするが、これは共同 る。与は象牙のような貴重なものの形であろう。 もつ舁と、与とに従う。四方より与をかつぐ形であ 会意 正字は與。上下左右の手で四方からものを もと与をあ

う。勺の字形とは全く関係がない。す。これ與と同じ」とするが、与は與の略体であろは勺部一四上に与をあげ、「賜予なり、一勺を与と爲とれより参与の意となり、党与の意となる。〔説文〕

子 4 またえる・たまう・ゆるす・われ

図】 象形 織物の横糸を通す「ひ」の形の余に用いるのはに借いるに至ったものでによるなり。相予ふる形に象る」とするが、字形は両手相与える形とはみえず、下には糸が垂れている。「説文」は下文に幻の字を録し、「根部窓するなり。反予に従ふ」とするが、予と幻は機杼の往来することを示す字で、その往来無窮の機巧を幻ども称したのであろう。「爾雅、釈詁」に「賜ふなり」とあり、「詩、小雅、深蔵」「君子來朝す 何をかとあり、「詩、小雅、深蔵」「君子來朝す 何をかとあり、「詩、小雅、深蔵」「君子來朝す 何をかとあり、「詩、小雅、深蔵」「君子來朝す 何をかとあり、「詩、小雅、深蔵」「君子來朝す 何をかたもの。「論語、述而」「天、徳を予に生ず」と、一人称の余に用いるのは仮借。のち本義の字として杼が作られ、予は賜与の義や代名詞など、仮借にのみ用いられ、予は賜与の義や代名詞など、仮借にの利用いられ、その初形も忘れられるに至ったものでみ用いられ、その初形も忘れらにないう。

猶予のように用いるが、その語は容与と同じく双声ぎょ」とするが、その両義とも用例がない。また字をなるものなり。賈侍中(賈逵)の説に、物に害あらなるものなり。賈侍中(賈逵)の説に、物に害あらなるものなり。賈侍中(賈逵)の説に、物に害めの大い。

どは舒緩・逸予の義とみてよい。〔礼記、学記〕にまず」、〔孟子、梁恵王、下〕「我が王、豫ばず」ない。字の古い用例としては、〔書、顧命〕「王、豫しい。字の古い用例としては、〔書、顧命〕「王、豫しい。字の連語で、形況の語であるから、字の初義としがた 例をもっていえば、豫は象をつないで予占とする意 使役する形。また力部一三下に「勨は蘇(愮)、緩う字としては、卜文・金文に爲(為)があり、象をう字としては、卜文・金文に爲(為)があり、象を (予) 占する方法があったのかも知れない。象に従 従って予の本義は予測の意とすべく、象によって豫 念に作る。念は愉(愉)の異文とみるべき字である。 意である。予にこの両義があるが、逸予の義はおそ そ事 豫めするときは、則ち立つ」は予定・予測の「未だ發せざるに禁ずるを、豫といふ」、〔中庸〕「凡 い。爲・勨・豫は一系をなす字のようである。 かと思われるが、なおこれを確かめることはできな かなるなり」とあって、農耕をいう字である。この めするときは、則ち立つ」は予定・予測の

余

余

把手のある細い手術刀の形。下の八の形は、

九年、小白余」のように、晋侯が「小白」と一たびれる。〔説文〕ニ上に「語の舒かなるなり」というれる。〔説文〕ニ上に「語の舒かなるなり」というのが多く、その刀で膿血を破る意を示すものとみらの終の字形では、右下に一曲線をそえる形のも金文の絵の字形では、右下に一曲線をそえる形のも 略字として用いる。余の本義は兪系・除系の諸字のろうが、のちみな一般の代名詞となった。いま餘のある。おそらく王位継承権の順位者としての名であ 定身分の王子の名として、固有名詞的に用いる例が 除系統では呪器として用いるもので、 修 祓に関する字である。余は兪系統では手術刀、 限らず、「身親ら」など、他にも例が多く、必ずし 法をいうとするが、そのような複称的な語法は余に 自らその名をいい、さらに「余」をそえるような語 うちに残されている。 卜辞にみえるが、卜辞では子・余・我をそれぞれ特 その形によるものであろう。字は一人称に用いられ、 な曲針である。櫛形に作った玉器を非余というのも、除系統では呪器として用いるもので、その形は大き も舒緩の語法でない。かつ代名詞の用法はすべて仮

余 7 [餘] 16 あまる・ゆたか・ひま

すべて残余のものをいい、またことが終ってのちも、 の饒字下に「飽くなり」とみえ、食余をいう。のち 形声 文〕五下に「饒きなり」とあり、 下に「饒きなり」とあり、前条旧字は餘に作り、余声。〔説

> ーーとでうら。 用法も異なり、餘を「わ波のようにいう。字はいま余を用いるが、余は針のその趣の存することを余意・余光・余韻・余慶・余 形で、もと別の字である。用法も異なり、餘を「 れ」に用いることはない。

舁 10 かつぎあげる・かくヨ・キョ

で舁がせた話がみえている。 に、玄が三十人乗りの大輦を作らせ、これを二百人(与)・興・興の諸字はこれに従う。〔晋書、桓玄伝〕(与)・興・興の諸字はこれに従う。〔晋書、桓玄伝〕 〔説文〕 三上に「共に擧ぐるなり」とあり、 胃 会意 り手を加えて、もちあげる形である。 田と廾とに従う。上下左右よ

畬 12 あらた

二歳は休耕の期間。また新たに開墾した田を畬田と 歳を菑、二歳を畬、 と異なる。〔礼記、坊記、注〕に引く〔説文〕に一地〕に、一歳を奮、二歳を新田、三歳を畬とするの 畲 いう。焼畑耕作を畬ということもある。 「二歳の治田なり」とあり、「爾雅、釈形声 声符は余。「説文」」=下に 三歳を新田としている。一歳・

船 ふね・なおす

博喩」に「艅艎鷁首は、川を渉るの良圖なり」とあ ものが金文にみえるが、それは舟形の盤に、手術刀り、呪飾をつけた船の意とする。この字形のままの 「艅龍、舟の名なり」という。 [抱朴子」「艅龍、舟の名なり」という。 [説文新附] 八下に形声 声符は余。 [説文新附] 八下に

忘れられ、別の形声字として作られた字である。 わち愈・癒(癒)の初文である。古代の字の形義が**** の余をもって膿血を移し、除きさるもので兪、すな

誉13 [譽]21 ほめる・ほまれ・たのしむ

る。誉とは神の与えるものであった。 して神から与えられるものを、誉といったようであ 下に祝禱の器の形であるJを加えた字があり、 「髦はしき士を譽しむ」の句がある。〔輪鎛〕に誉の「韓は燕譽す」は、燕豫で楽しむ意。 [思斉] にも「韓结燕譽す」は、燕豫で楽しむ意。 [忠斉] にも _タヒミッタメーム とあり、称誉をいう。〔大雅、韓奕〕に「聲美なり」とあり、称誉をいう。〔大雅、韓奕サビ 〔詩、周頌、振驚〕「以て永く譽を終へん」の〔筆〕 〔説文〕三上に「稱むるなり」という。 旧字は譽に作り、與(与)声 祝禱

預 13 たのしむ・あずかる・あらかじめョ

う。〔蛾術篇〕巻二八に、魏晋の際の造字であろうとず、古い用例がなく、おそらく豫の略体の字であろず、古い用例がなく、おそらく豫の略体の字であろ 予は機杼の杼で横糸を通す「ひ」の形であるから、予は機杼の杼で横糸を通す「ひ」の形であるが、らず」とする。頁は儀礼を行なうときの姿であるが、 している。 会意の字ともみえず、形声の字である。漢碑にみえ 「安んずるなり。頁に從ふは未だ詳な 声符は予。〔説文新附〕九上に

飫13 (僕)16 あく・くらう

り、芙声とするが、芙は笑の初文で声 形声 〔説文〕五下に正字を鉄に作 預 飫〔鉄〕 輿 歟

> とを飫賜といい、それより燕食・飽食の意となる。 詩を作り、以て飫歌と爲す」とみえる。加膳するこ 歌という。〔国語、周語〕「昔、武王殷に克ちてこのは私なり」とあって、私宴の意とする。その歌を飫が合わず、飫の字形がよい。〔爾雅、釈言〕に「飫

> > 旟

は3 た

形声

声符は與(与)。〔説文〕七上

ば人や鼠は死に、蚕は肥えるという。 に「毒石なり。漢中に出づ」とあり、

これを食え

興 こし・のせる・くるま

と同じく労働歌であり、無為的な識言として言占と興論として、民衆の声とされた。輿人の歌は、登話れ、その歌うところは輿人の歌、その言うところは糞をかつぐ形。これに従うものは賤役のものとさなり」とあり、昇声とするが、四隅に手をかけてなり」とあり、昇声とするが、四隅に手をかけてなり」とあり、昇声とするが、四隅に手をかけて うけとられることがあり、〔左伝〕には多くその例 を録する。 会意 車と昇とに従う。〔説文〕-四上に「車の興 いま世論の字におきかえられている。

歟 18 か・や・やすらか

語気を示すものとする。與(与)をその意に用いる 「安らかなる气なり」とあり、ゆるい詠嘆や疑問の こともある。 形声 ... ために欠を加える。〔説文〕 ハ下に形声 声符は與(与)。語気を示す

碧 毒のある石

ヨウ 形声 だ石で、 毒砂ともいう。〔説文〕 ヵ下 声符は與(与)。 砒素を含ん

旟

幺

た赤旗。周では州里にこの旗を建てた。 に「革鳥をその上に錯く。 士衆を進む。*** ヨウ

<u>\$</u> かすか・ちいさい・くらいヨウ(エウ)

ઠ્ઠ 8

小の説もそれに近く、その系統の本文をもつもの成の形に象る。以て正を養ふなり」とあり、李陽成の形に象る。以て正を養ふなり」とあり、李陽成の形に象ると爲す。幺は冒昧に象るなり。亦子の初重ぬるを幺と爲す。幺は冒昧に象るなり。ムを「六書故」に「蜀本説文」を引いて「衾なり。ムを「六書故」に「蜀本説文」を引いて「衾なり。ムを「六書故」に「っまっ」 し蚊・幽・幾はみな糸たばの形。金文に幺を玄の字は幺を幼にして子の初生の形とする説による。しかは幺を幼にして子の初生の形とする説による。しか は、〔説文〕の丝・幽・幾の説解にみえるが、それ があったのであろう。幺に幽微の意があるとするの みえない。おそらく幼から推測した説であろう。 なり。子の初生の形に象る」とするが、その形とは もの。 幺・幼・拗は一系の字である。〔説文〕四下に「小 象形 s ***。幼はこれに拗じる棒を通した形で、拗の初文。幼はこれに拗じる棒を通した形で、拗じて結んだ小さな糸たばの形。糸たばを拗じて結んだ

ョウ天孕幼用羊

からである。幺を幺徴の意に用いる先秦の例はない。とれてある。幺を幺徴の意に用いる先秦の例はない。それがある。またがある。またがある。

天 4 身をくねらす・わかい・わざわい

** **

無の姿勢をいう。[説文] - 〇下に「屈するなり。大に従ふ。象形」とし、「繁伝」に「その頭頸を天嫡に従ふ。象形」とし、「繁伝」に「その頭頸を天嫡に従ふ。象形」とし、「繁伝」に「その頭頸を天嫡に従ふ。象形」とし、「繁伝」に「その頭頸を天嫡に状った。大若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。それで若死を天折・天逝といら、天若の意がある。その異様なエクスタシーの状態にあることを妖といい、その呪祝によって他に害をもたらすことがあって、妖という。天が祝禱を奉ずる形と、(異)で娯の初文。神を娯しませることをあった。天が頭等をしませることであり、神楽の古い形笑もまた神を楽しませることであった。

子 5 はらむ・みもち・ふくむ

F 6

とするが、乃は人の側身形である。身もまた人の側〔説文〕一四下に「子を裹むなり。子に從ひ、乃聲」象形 子を孕む形。腹中に子のあることを示す。

の褒とは、懐孕のことである。

幼 5 おさない・ねじる (イウ)

\$ 18 9

象形 糸かせに木を通して拗じている形で、拗の象形 糸かせに木を通して拗じている形で、対に従ひ、力に従ふ」とするが、力に従う形ではない。下文に幺の上に木を通した形のものがあではない。下文に幺の上に木を通した形のものがあり、それで拗転する意を示す。〔説文〕に拗の字がなく、幼がその字である。幼少・幼稚・幼弱の意になく、幼がその字である。幼少・幼稚・幼弱の意にお、學ぶ」とあって、幼学の語が生れ、外傳についる。『礼記、曲礼、上〕「人生れて十年を幼といる。學ぶ」とあって、幼学の語が生れ、外傳についる形で、拗の象形

用 5 もちいる・はたらき・そなえ・もって

以 地上用

@

その中間に木を編んで柵の形としたもので、犠牲をて施行すべしの意とするが、字は両端に木を樹て、中に従ふ」とする。トしてそれが中るとき、はじめう。[説文]三下に「施行すべきなり。トに従ひ、象形 柵の木を組んだ形で、甬や墉はその形に従象釈

大れておく柵の形であり、これを犠牲に用いた。それで人を犠牲とするときも「用ふ」という。「春秋」れで人を犠牲とするときも「用ふ」という。「春秋」とに土を塗りこんだものは痛、用の上部に繋けると上に土を塗りこんだものは痛である。ト辞に出行や狩猟をトするとき、その判断の語に「これを用ひよ」のようにしるし、用を施行の意に用いる。「昏鼎」にな「管姫無岬壺」「後嗣これを雨ひよ」のようには「管姫無岬壺」「後嗣これを雨ひよ」のようには「管姫無岬壺」「後嗣これを雨ひよ」のようには「管姫無岬壺」「後嗣これを南ひよ」のようには「管姫無岬壺」「後嗣これを南ひよ」のように庸を用いる。みな通用の字であった。

羊 6 ヨウ(ヤウ)

美 太太太 美

妖 ~ 「媄」ロ ヨウ (エウ)

野声 「説文」に正字を娱に作り、 「巧なり。一に曰く、女子の笑ふ克」とし、「詩に曰 く、桃の族々たる」と「詩、周南、桃天」の句を引 く。いま「桃の天々たる」と天の字に作る。また 「巧なり」は「巧笑なり」の誤りであろう。芙は巫女が両手を上にかざし、頭を傾けて舞い興じてエク スタシーの状態にあることを示す。その前に祝禱を 収める器である」をおくものは若。若も巫女が神が かりの状態となった。一記する形である。〔楚 に反するを謎と為す」というのも神の憑く形 で、そのような憑き人は、衒媚呪詛をなすものとし て恐れられた。示部一上に諜の字があり、「地、物 に反するを謎と爲すなり」とあって、神怪変化の類 をいう。妖美・妖艶のものは、みな妖魅のなすとこ ろで、警戒を要するものである。

角 7 おけ・とおる

用。用用

ヨウ

妖〔媄〕

角伴

侯[倂]

杳

殀

象形 筒形のもので、上部に繋けるところのあるもの、桶の初文。用は竹や木を組んだ形である。くさまをいう語として、「写に従ひ、用聲」とするが、全体が象形の字である。写上上には「噂むなり。が、全体が象形の字である。写上上には「噂むなり。が、全体が象形の字である。写上上には「噂むなり。が、全体が象形の字である。写出上には「噂むなり。が、全体が象形の字である。写生上には「噂むなり。が、全体が象形の字である。「漢書、奥服志」に「乗興は龍首衛軛、左右に吉陽常あり」という第にあたり、小鈴をいう。また鐘の柄の部分を用という。桶形の柄の旁または上部に、懸撃する鐶をつけている形である。用は器体が筒形のもので、用・角・庸は形の系列をなす字である。

佯 8 いつわる・あざむく

作には様(樣)、そのまねをするの意がある。 りことをいう。表面をいつわって、愚かに振舞うことを伴愚、善人にみせかけることを伴善という。ま とを伴愚、善人にみせかけることを伴善という。ま とを伴愚、善人にみせかけることを伴善という。ま をを伴愚、善人にみせかけることを伴善という。ま ををはず。「史記、宋世家」に「箕子は被 ・ でいる。」とあり、狂気をよそお

僕 ∞ 「倂」。 おくる・つきびと

> 勝・賸は一系の字である。 勝・賸は一系の字である。 「説文」にまた「呂不韋曰く、有侁氏、伊尹を以て女を侯る」と〔本味〕篇の文を引く。伊尹を以て女を侯る」と〔本味〕篇の文を引く。伊尹を女子の嫁に従うものを媵という。〔毛公鼎〕に「汝安子の嫁に従う。世勝という。〔毛公鼎〕に「汝安子の嫁に従う。世勝と順は一系の字である。

本日 8 はるか・くらい・ふかい・しずか

会意 木と日とに従う。日が森に沈 ・ 本さ。〔説文〕六上に「冥きなり。日 の木下に在るに従ふ」とあり、その薄明の意から、 遥か、深いなどの意となる。香 渺・香邃・香漠の ように用いる。日の木上にあるをまっ いう。東を日と木の会意字とするのは誤りで、それ いう。東を日と木の会意字とするのは誤りで、それ

妖 8 わかじに・ころす

獣の子を殺さず、その蕃育をはかることをいう。財称する。〔礼記、王制〕に「天を妖さず」とは、尽心、上〕に「妖壽貳はず、身を修めて以てこれを供つ。命を立つる所以なり」と、妖・壽(寿)をを俟つ。命を立つる所以なり」と、妖・壽(寿)をを俟つ。命を立つる所以なり」と、妖・壽(寿)をを俟つ。命を立つる所以なり」とあり、〔孟子、とに夭若の意がある。〔玉篇〕

角 の ヨウ

う。〔説文〕ハ上に「痛むなり」とし、形声 声符は甬。甬は筒形の器をい

The state of the s

羊を洗うかとみられる字形がある。〔山海経、郭が、〔爾雅、釈詁〕に「多きなり」という。ト文に、が、〔爾雅、釈詁〕に「多きなり」という。ト文に、死声 声符は羊。〔説文〕一上に斉の水名とする

孫)無からんか」、〔礼記、檀弓、上〕「俑を爲りし梁。 ない。 いま、だら、とこ、上〕「始めて俑を作る者は、それ後(子とはない。」 がある いまいた例がない。〔孟子、角声とするが、その義に用いた例がない。〔孟子、 者を不仁と謂ふ」の〔注〕に「偶人なり」とあり、

の風が開かれた れによって殉葬 人形をいう。こ 墓中に入れる土

とするが、事実

「俑を爲す」とは、悪例をはじめる意に用いる。 は逆で、殉葬にかえて土偶が作られたのである。

易。 ひかり コウ (ヤウ)

·0丁里里里 P

象形 台上に玉をおき、その玉光が下方に放射す 三義を列している。揚・長・彊はみな畳韻の字。字 に從ふ。一に曰く、飛きもの衆きやなりと。一に曰く、長 に從ふ。一に曰く、飛揚するなりと。一に曰く、長 なりと。一に曰く、飛きもの衆きがなりと」と一日 なりと。一に曰く、飛きもの衆きがなりと」と一日 なりと。一に曰く、飛きもの衆きがなりと」と一日 なりと。一に曰く、飛きもの衆きやなりと」と一日 なりと。一に曰く、長 うものでなく、陽光の放射に象るものであることはく所以なり。會意」というが、金文の字形は勿に従 開明なる所以。勿は旌旗、風を得て開展す。一は開形を〔説文〕に三字の会意とし、〔繁伝〕に「日は 明らかである。また上部も日でなく、玉の形。金文

「王の休に駅へて對ふ」、『克溫』「敢て天子の丕願な「王の休に駅へて持念」に「天子の"休"。紫で、「起觶」にる形。〔伊設〕に「天子の"休"。紫であるが、揚の初形は駅に作り、玉を掲げていの語であるが、揚の初形は駅に作り、玉を掲げていの語があり、冊命賜与に奉答する意に「對揚」という語があり、冊命賜与に奉答する意に「對揚」という語があり、冊命賜与に奉答する意 場といい、また旗にその呪能が与えられることを場 儀であった。その玉を神梯の前におく形は陽、墓中 てその玉光にふれることは、魂振りの意味をもつ呪 その呪儀を行なうものが巫女であることを示すこと 義を承ける。 という。易は陽の初文。これに従う字はみなその声 の坑道である羨道などにおいて魂振りするところを もある。珠には霊的な力があるとされ、それを掲げ の形、凡はそれを奉ずる人。ときには女を加えて、 は必ずしも勿の形でなく、万に作るものはその台座

集。 ふだ・よョウ (エフ)・セイ

文〕のいう意味に用いた例をみない。 「永枼(世)忘るること田れ」のようにいう。[説り、[王孫遺者鐘]「枼(世)萬孫子」、[驫 羌 鐘]り、「王孫遺者鐘]「枼(世)萬孫子」、「驫 羌 質 をいう。〔説文〕 六上に「楄なり。薄きものなり」 ごとに茂る形。新しい枝を加えること とするが、金文には字を世の繁文に用いることがあ 会意 世と木とに従う。木の枝が年

える「妖夫曳衒す」が、異服をきて呪謡を歌う妖で衣服・歌謡を加えているのは、〔楚辞、天問〕にみ

あるから、それを加えたものである。

条に「衣服・歌謠・艸木の怪、これを禊と謂ふ」と、妖・殀・禊はみな一系の字である。虫部「三上鑿字

(祥)・昜(場)などの関係と同じ。天は巫女が夭屈

して舞う形、芙は両手をあげて舞う形。天・芙

文である。芙に笑の声があるのは、甬(誦)・羊

げて舞い、神がかりの状態となる意で、芙は笑の初

〔中庸〕に「聲名、中國に洋溢す」のように、比喩 ことをいう語である。それで大洋の意となる。また 注〕に「洋の音は祥」とあり、その音もあったらし く、洋々は湯々というのと同じく、水勢のさかんな

洋火(マ

するが、芙は艸に従う字ではなく、巫女が両手をあ厭を用いる。〔漢書、五行志〕に、艸木の怪を妖と

のによる。字は多く妖に作るが、祑が正字。略してるを災と爲し、地、物に反するを妖と爲す」とある

洋 9 ひろい・あふれる・うみヨウ (ヤウ)・ショウ (シャウ)

||¥°

袄 g 【袟】12 わざわい・まがごと すなり」という。〔左伝〕宣十五年「天、時に反する上に「地、物に反するを談と爲 チ)・洋行(外国商会)のように用いる。 う。のち西洋・外来のものに冠して、 的に用いる。海のようにひろい水を大洋・海洋と 形声 正字は襟に作り、芙声。〔説

窈 おくゆかしい・おくぶかい・あでやかヨウ(エウ)

心養々たり」の〔伝〕〔箋〕に憂うる意と解してり、病なり」とする。〔詩、邶風、二子乗 舟〕「中り、病なり」とする。〔詩、邶風、二子乗 舟〕「中なるなり」、〔玉篇〕に「憂ふるない。

い山中をさまよう意に用いる。 辞〕に「旣に窈窕として丘を經たり」とあり、 のであることの一証である。陶淵明の『帰去来のの妖治のさまをいう。〔周南〕の詩がこの方面のもちゃ 「方言」によると、それは河南西部の方言で、婦人 君子の好逑」の〔伝〕に「幽閒なり」とあり、たり」という。〔詩、周南、関雎〕「窈窕たる淑女はたり」という。〔詩、周南、関雎〕「窈窕たる淑女はに「至道の精は窈々冥々たり。至道の極は昏々默々に「至道の精は窈々 文〕セトに「深遠なるなり」とあり、「荘子、在 形声 www.sogj.とあり、『荘子、在宥』た形で、ゆるくまがる意がある。『説を形す』、『説をおり、『荘子、正常』 声符は幼。幼は糸かせを拗じ

股10 [候]12 ヨウ

に近い。〔公羊伝〕昭五年「潰泉とは何ぞ。直泉な一上に「水、超涌するなり」とみえ、ほとんど互訓う。〔説文〕一上に「縢るなり」とあり、縢字条一点、説文」の一と、「かっ」とあり、井戸水などの涌出するをいれば

涌 10 [湧] 12 わく・ふきでる

声符は甬。甬に筒形のものの

の病原体を媒介するという。

膌 財的祭

する意。字はまた湧に作る。物価の暴騰することを り。直泉とは何ぞ。涌泉なり」とあって、水の涌出

嫁するときに、その伴うものを勝といい、財貨をお奉じている形。人にものをおくることをいう。女が 書に音を朕とし、天子の義とするが、その声の字はくることを難という。朕はその初文である。朕は字 本義とはしがたい。舟は盤の形。そは両手でものを 未詳とする。代名詞は仮借の用法であるから、字の 訓するが、その形と義については「闕」、すなわち ハ下に「直禁の切(チン)」と附音し、「我なり」と 正字は鯸に作り、舟と关とに従う。〔説文〕

に「目深き皃なり」という。尭が藐姑射の山に住む るが、上は頭衣を覆う形であろう。また暗字条四上に「深目なり。穴中の目に從ふ」とあ

要の「要」のこし、もとめる・やくだつ

The state of the s

Plant Mark the American Selection Space

to the services .

變 學學

という文書作成者の名をしるしており、緩の字を用 領といい、領はくび。要領を保つとは、命を全う部分は腰部骨盤の形。人体の最も枢要なる部分を要 三上に「身の中なり。人の要に象をであるから、下部を女に作る。腰の初文。〔説文〕であるから、下部を女に作る。腰の初文。〔説文〕象形 腰骨の形。女子の腰骨は発達が著しいもの いている。 いう。〔散氏盤〕の銘末に「厥の左史鏢、史正仲農」すること。重要・要約、また約束することを券要と

挨拶語であった。恙虫はけだにの幼虫で、風土病弟、恙あらざるか」と問うたという。漢・六朝の弟、恙あらざるか」と問うたという。漢・六朝のを迎えるとき、「子の父母、恙あらざるか」「子の兄おり、恙の意。〔呂氏春秋、異用〕に、孔子が弟子おり、恙の意。〔呂氏春秋、異用〕に、孔子が弟子

容10 すがた・いれる・よろこぶョウ

尚 唿

の字。みな神容に接することを示す意象のもので、 谷と全く意象の異なる字である。容・欲・浴は一系 下に「盛なるなり。宀谷に從ふ」とし、古文として 公に従う字をあげるが、公は公廷の形であるから、 のあらわれることを願うのを欲という。〔説文〕セ る器日の上に、その祝禱に対して神気の彷彿として 山谷の谷とは関係がない。 一と谷とに従う。一は廟。谷は祝禱を収め

盾

会意

穴と目とに従う。〔説文〕四上

音 10 涌貴という。

とおくみる・はるかヨウ(エウ)

恙10 つつが・うれえ・やまいョウ(ヤウ)

ヨウ 要〔要〕 容 恙 涌[湧] 窅 窈

股[般] う話が、〔荘子、逍遥遊〕にみえる。 ころに来て、「昏然としてその天下を喪れ」たといころに来て、「昏然としてその天下を喪れ」たとい

例の字を解することはできない。 別の字を解することはできない。 別の字を解することはできない。

当日 10 水をめぐらした宮殿・めぐる

A0 00≅ M³

金宝 巛(水)と豊。 と住とに従う。巛は水の流れる形。金文の字形は巛と呂(宮)と住とに従うており、雕金文の字形は巛と呂(宮)と住とに従うており、彫まる水辺にわたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺にわたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺にといたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたり来る鳥であるが、鳥形霊としい。住は水辺におたりとされ、そのようなわたり鳥とはその大池のほとりに造営されることが多く、金となすもの」とするが、のちの字形によって説くものである。水は自然の流れをとり入れた大池で、辟礁はその大池のほとりに造営されることが多く、金とは、大池に漁し、井を浮か、金をなすもの」とするが、のちの字形によって説くものである。水は自然の流れをとり入れた大池で、辟礁はその大池のほとりに造営されることが多く、金とは、大池に漁し、井を浮か、金をなすもの。長い、大池に入り、紙筒、「彼の西雕」をなずると、大池に入り、紙筒、「彼の西雕」をなずると、大池に従う。 には水の流れる形。

に」の〔伝〕に「澤なり」、〔大雅、監合〕「ああ辟能に樂しむ」の〔伝〕に「水、丘を繞ること壁の如たにみえる字形があり、それは邑の右旁に川をしるし、水にとり囲まれた邑の形で、水に壅閉された邑の状を示す営をを対す字である。辟雕の雕と、墾閉の状を示す営態を示す字である。辟雕の雕と、墾閉の状を示す営態を示す字である。辟雕の雕と、郷別の状を示す営とは、もと別の字である。辟雕の雕は、のち雍の字を用いることがあり、そのため壅閉の義とまぎれることがあったのであろう。

庸 11 もちいる・つね

> 様性の法を示す。庸の字形に三系の字がある。 ち凡庸の意となり、「国語、斉語」「君の庸臣なり」 とは凡庸の臣の意。庸常・中庸はまたその義の転じ たものであろう。字の初義は、字形からみて城墉の たものである。重文の字は〔説文〕五下に「用ひるなたものである。重文の字は〔説文〕五下に「用ひるな たものである。重文の字は〔説文〕五下に「用ひるな たものである。重文の字は〔説文〕五下に「用ひるな たものである。重文の字は〔説文〕五下に「用ひるな たものである。の字がある。の

手 11 やむ・かゆい・できもの・きず

大学 である。 「場なり」とし、充瘡の類としているが、恙と同じく憂いのための疾をいう字である。 である。 をいう句がある。 「裏変り」とし、充瘡の類としているが、 が、恙と同じく憂いのための疾をいう字である。 という句がある。 をいう句がある。 をいうない。 という句がある。 をいう句がある。 をいう句がある。 をいうない。 という句がある。 をいうない。 という句がある。 をいうない。 というのない。 というのない。 というのない。 というのない。 というない。 といるない。 というない。 といるない。 といる。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といる。 といるない。 といるない。 といる。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といるない。 といる。 といるな、 といるない。 といるな、 といるない。

新 1 「装」 1 わざわい・まがごと

語がある。妖と通用する字である。 とをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」ととをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」ととをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」ととをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」ととをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」とをいう。[玉篇] に「災なり、巧言の貌なり」と

舎 11 うた (エウ)

に「徒歌なり」とする。徒歌とは楽を用いないもの呪詛的に祈るときの歌。〔説文〕三上

を収めていない。
を収めていない。
「国語、『語』に「妖祥を謠で、謠(謡)の初文。「国語、『語』に「妖祥を謠で、謠(謡)の初文。「国語、『語』に「妖祥を謠で、謠(謡)の初文。「国語、『語』に「妖祥を謠

佐12 よこしまり)

アである。字はまた徭と通用する。 といふ」とみえる。名は警とも通用することのあるといふ」とみえる。名は警とも通用することのある正でないことをいう。〔方言〕に「邪なり。山(関)は「死なり。山(関)が純

担勿 12 あげる・こたえる・あきらか コウ(ヤウ)

學學問題

の恩寵にこたえる意に用いる。それは「み魂を賜の光にふれることは、魂振り的な呪能をもつものとに作る。ときに女の形を下に加えることもある。「説文」ニ上に「飛擧するなり」とし、重文として一形を録するが、それは金文の字形の誤変したものである。金文に「王の休に對揚す」のように、そである。金文に「王の休に對揚す」のように、そである。金文に「王の休に對揚す」のように、その光声 声符は場。書は玉光が下に放射する形。それは「み魂を賜の光にふれることは、魂振り的な呪能をもつものと

ョウ係揚揺〔搖〕葉遥〔遙〕陽

な水占の俗を歌う。揚を激揚の意に用いている。 の形式がとられたことを示唆するものであろう。易の形式がとられたことを示唆するものであろう。易の形式がとられたことを示唆するものであるが、別に鳩の字があり、その通用の義とみられる。 (詩、国風) に〔揚之水〕の詩三篇があり、みるから、国風) に〔揚之水〕の詩三篇があり、みな水占の俗を歌う。揚を激揚の意に用いている。ない。

揺12【搖】13 ヨウ(エウ)

葉12 は・よ・すえ は・よ・すえ

名や人の姓のときには「葉縣」「葉公」のように、説文」一下に「艸木の葉なり」という。葉は薄いり」とあり、金文では百世を百枼としるし、その義に用いる。世・枼・葉は古音の近い字であった。地である。世・枼・葉は木の新しく出た枝を示す字。形声 声符は枼。業は木の新しく出た枝を示す字。形声 声符は枼。業は木の新しく出た枝を示す字。

ショウの音でよむ。

遥 12 【遙】14 はるか・ながい・さまよう

1 ひなた・ひかり・あたたか・いつわり ヨウ(ヤウ)

声符は易。〔説文〕だ上に「木なり」とする

なり、温なり、暖なり、乾なりなどの訓がある。ほり、開なり、清なり、吉なり、尊なり、大なり、高 かに伴と仮借通用する。 ろは、みなその訓義として用いられ、明なり、顕な るからであろう。陰陽相対し、陽の属性とするとこ は、聖所における魂振り儀礼のしかたを示す字であ に用いる。陰陽が何れも神梯の形である自に従うの から、〔詩、豳風、七月〕「我が朱孔だ陽し」のよう「洛の陽に」とみえる。色をもっていえば赤である。 ☆、ホピ 南、川にあっては北岸をいう。〔號季子白盤〕にいう。陽光の及ぶところを陽といい、山にあってはいう。陽光の及ぶところを陽といい、山にあっては

傭 13 やとう・もちいる・ひとしいョウ

この義に用いた適例をみない。秦漢以後、傭山」「昊天傭しからず」の〔伝〕に「均し」とみえず、「かくない」の。「伝」に「均し」とみえいきなり、直きなり」と訓する。〔詩、小雅、節南しきなり、直きなり」と訓する。〔詩、小雅、節南 ばその口入屋である。 起した陳 涉は傭耕の人であった。傭肆とは、いわ耕・傭客の意に用い、始皇帝の没後、最初に叛乱を などの意がある。[説文] ハ上に「N・形声 声符は庸。庸に用いる、凡・ 小雅、節弦南の別の上に「均を開いる、凡庸

瑶13 [瑤]14 うつくしい玉・たまョウ(エウ)

を以てす」の句がある。投果の俗をいい、歌垣など あり、〔詩、 のとき、女が思う男に果物を投げ、男が佩びている 衛風、木瓜〕に「これに報ずるに瓊瑤文〕」上に「石の美なるものなり」と 形声 旧字は瑤に作り、名声。〔説

台・瑶琴、神仏の住むところを瑶池・瑶圃という。だを投げてこたえる俗がある。玉で飾るものを瑶

後 3 おくる・つきそう・おくりめ

內城鄉路路外

銘するものが多い。 の類を、 多く、これを勝という。[左伝]成八年「諸侯、女る意。婚嫁のとき、夫人が姪娣を伴ってゆくことが形声 声符は朕。朕は盤中のものを奉じて人に農 をもいう。伊尹や百里奚は、みないわゆる媵臣であを嫁するときは、同姓は媵す」とあり、そのつき人 あり、金文にその例がある。そのとき持参する礼器 った。列国期には、異姓の国からも媵を出すことが **媵器という。金文に、婦人の器には媵器と**

徭 まウ (エウ)

た。〔淮南子、精神訓〕に「生は則ち徭役にして、役・徭戍などで、遠く辺境に移されることが多かっ役・徭戍な 労働歌として歌ったものが器(謠)で、〔左伝〕に善と通用する字であろう。徭役に赴くものが、その書 死は乃ち休息なり」の語がある。 形声 声符は蚤。蚤は祭肉をそなえて祈る意で、

楊 かわやなぎ

杉

[説文] 六上は、 り」としている。 れで、「爾雅、注」に「以て箭と爲すべし」とする。 〔左伝〕 宣十二年に「董澤の蒲」 とみえるものがそ う。水辺に生じ、矢を作るに適するものとされる。 も、諸書に引く文に「蒲柳なり」に作り、楊柳をい 檉に「河柳なり」、柳に「小楊な

溶 13 水がながれる・ゆったりとする・とけるョウ

溶解・溶液の意に用いる。 とをいう。そのなかにすべてが溶けこむことから、 なり」とあり、溶々・溶溢は水のゆたかに流れるこ がある。裕も同系の語。〔説文〕 一上に「水盛なる 形声 あらわれることで、ゆたかにみつる意 声符は容。容は祖霊の神気の

焬 あぶる・さらす・かしぐョウ(ヤウ)

くるを煬といふ」とみえ、甚だ芳しくない名である

猺 種族の名ったの

形声 蓬山に居る猺公は、性最も悍強、山野に疾行し、臀等が、 実際の 実際にわたって住む種族の名。広東に向広から湖南・雲南にわたって住む種族の名。広東に 声符は名。広西平南県東北の地を本拠とし

に肉尾をもつという。いわゆる「尾ある人」である

14

600

腰 (腰)13 こし (エウ)

至って用いられる字である。 漢碑などにも腰の字はなおみえず、 腰の初文。要を主要・要領・要約などの意に用いる 寒碑などにも腰の字はなおみえず、六朝期以後に及んで、別にその本義の字として腰が作られた。 声符は要(要)。要は女子の腰骨の象形で、

蓉 13 ふよう・もくふようヨウ

騒〕にみえるものである。木蓮を木芙蓉という。 「芙蓉なり」とあるのは蓮。〔楚辞、離北声 声符は容。〔説文新附〕 | 下に

涠

すすめる・しいるョウ

って、容易にこえることのできる土垣の類をもいう。

蛹 さ な ぎ

り」とあり、 さなぎをいう。 意がある。〔説文〕一三上に「繭蟲な形声 声符は甬。甬に筒形のものの

雅 やわらぐ・よろこぶ・いだくョウ

爤

慵

€ 3

のうい・おこたるウ 形声

とをいう。

字であろう。雍和・雍容の意に用いる。 けた。雍は應(応)・鷹とともに、鳥占いに関する 字で、わたり鳥を鳥形置これに、おないので、おたり鳥を鳥形置これに、と呂(宮)と隹とに従う辟雅という。雖は巛(水)と呂(宮)と隹とに従う 祖を祭る神廟をいう。金文に登儺といい、 に従うものであろう。正字は雕。雕は辟雕、先世先 おそらく廟中に隹を携える形で、广と人と隹とおそらく廟中に隹を携える形で、どんとしている。字は〔説文〕にみえず、初形を知りがたい わたり鳥を鳥形霊とみなし、そこに祠堂を設

腰〔腰〕 蓉 蛹 雍 墉 慂 慵 曄 「日高く睡足りてなほ起きるに慵し」という。 知らん」の句がある。その〔香炉峯草堂詩 様[樣]

熔

ョウ

1

14 かがやく・あきらか・さかんヨウ(エフ)

and the second s

に勤む」とあり、〔釈文〕に「卑きを垣といひ、高の初文はその形に従う。〔書、梓材〕に「旣に垣塘 の象形字で、墉上に望楼のある形である。*(城)に「城の垣なり」とあり、その古文の形は寧。城郭 きで墉の初文。〔説文〕一三下 声符は庸。庸は土が ような美しさをいう。漢以後に字の用例がみえる。に「明なり、盛なり」という。曄々は花のかがやく 疁 会意 に「光くなり」とし、[広雅、釈詁]会意 日と華とに従う。[説文] 七上

様1(樣)15 かた・ようす・くぬぎョウ(ヤウ)・ショウ(シャウ)

また「さまありげ」のように用いる。 かたちの意に用いるが、国語では敬称の「さま」、 様を様式・様子の字に用いる。様子は見本。さま、 はまた橡に作り、像(写す)とも通用する。それで 文〕六上に「栩の實なり」という。 形声 旧字は樣に作り、義声。〔説 字

漾 14 ただよう ヨウ (ヤウ)

せざるに、秀人の説くものを慫慂と謂ふ」とあり、〔方言〕に「南楚の閒、凡そ己は喜怒することを欲形声 声符は涌。慫慂という語にのみ用いる。

本人の気乗りせぬことを、わきからすすめはやすこ

쀎

る。漂漾を本義とする字であるが、「曾姫無卹壺」 とするが、字の本義は、水脈の遠く揺動する意であ に地名としてみえる。字はまた養に作る。 漾はその声義を承ける。〔説文〕一上に隴西の水名の句を引く。永は水脈、その水脈の長いさまをいい. なり」とあり、〔詩、周南、漢広〕の「江の羕き」形声 一声符は羕。 義は〔説文〕 二下に「水長き

熔14 とける

...の句がある。その〔香炉峯草堂詩〕にも

漢宮の寵姫飛燕は、薄く眉を描いて「遠山黛」と称

「懶きなり」とあり、

慵懶をいう。

声符は庸。〔説文新附〕一〇下

し、またうす紅を施して「情なになっと称した。

形声 声符は容。 容に溶の意があり、 すべてが

八五二

The state of the s

う意である。 の意である。 加熱熔解して、一に融けあ にまとまることをいう。加熱熔解して、一に融けあ

煙 4 ヨウ(エフ)

場 4 できもの・よう

陽。電

す職である。

踊4 「踴」16 ヨウる

を第一 声符は第一番に対している。字明をいう。「詩、『歌風、撃鼓』「踊躍して兵を用ふ」は勇武のさま。「左伝」昭三年に、国に別(足切り)の刑多くして、義足の踊が騰貴した話がみえる。字の刑多くして、義足の踊が騰貴した話がみえる。字はまた踴に作る。

加 周の国の名

ボ・鄘・衛の名は卜文にみえ、鄘を庸に作る。 にみえる異族の国の名で、邶・鄘・衛とは異なる。 にみえる異族の国の名で、邶・鄘・衛とは異なる。 「段注」に漢南の国とするのは、〔書、牧誓〕 とし、〔段注〕に漢南の国とするのは、〔書、牧誓〕 が、郷・衛の国風である。〔説文〕六下に南夷の国 が、郷・衞の国風である。〔説文〕六下に南東の国

雅 15 たか

二 15 「客」 15 かまど・かま・すえもの

魚魚

養 15 やしなう・まかなう・そだてる

養預工

形声 声符は羊。〔説文〕玉下に「供養するなり」 に「育なり・畜なり・長なり・守なり」、〔玉 を加える。古文の字形は金文の図象にこれに近いも を加える。古文の字形は金文の図象にこれに近いも を加える。古文の字形は金文の図象にこれに近いも ででが、文思式のために、解牛に託して養生の道を にしてが、文思式のために、解牛に託して養生の道を にしてが、文思式のために、解牛に託して養生の道を にしてが、文思式のために、解中に託して養生の道を にして批を養はん」という。抽を養うとは巧慧に対 する生活態度で、高士の道とされた。

進16 ヨウ

(宮)と隹とに従い、わたり鳥の来る水辺を、霊のた神宮を辟儺という。儺の初形は巛(水)と吕形声 声符は薙。獾の初文は攤で、水をめぐらし

その水を城に注ぐこともあった。 のまたの水を城に注ぐこともあった。 の意となる。「穀薬伝」のほ成五年「梁山崩れ、河を壅遏して三日流れず」と のに成五年「梁山崩れ、河を壅遏して三日流れず」と のほんえる。列国期には、城を攻めるために川を壅いで、 古代かえる。列国期には、城を攻めるために川を壅いで、 古代の水を城に注ぐこともあった。 雅も廟屋で とい宿るところとして起ったものであろう。雅も廟屋で とい宿るところとして起ったものであろう。雅も廟屋で とい宿るところとして起ったものであろう。 雅も廟屋で とい

推 16 ヨウ

三品 16 【名】 17 ラたう・そしる・うわさ

をは祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 管は祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 では祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 であった。「神雅、釈楽」に「徒歌する、これを謠と謂いるった。「詩、魏風、國有様」は、土地を棄ててがあった。「詩、魏風、國有様」は、土地を棄ててがあった。「詩、魏風、國有様」は、土地を棄ててがあった。「はいる。」という。 をは祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 をは祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 をは祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 をは祭内を供えて祈禱する意。その詞を謡という。 では、土地を棄てて があった。「は歌なり」と

という。童は結髪しないもので、徒隷の意。童謡とという。童は結髪しないもので、徒隷の意がなったとされるのも、この種のものを採集したのであろう。これら古い史書類にみえのを採集したのであろう。これら古い史書類にみえのを採集したのであろう。これら古い史書類にみえる謡・諺は、すべて「古謡諺」に集録されている。 童は結髪しないもので、徒隷の意。童謡とという。童は結髪しないもので、徒隷の意。童謡とという。童は結髪しないもので、徒隷の意。童謡と

夕析 17 【 **夕所** 18 【 **夕** 18 【 **夕** 19 ウ(エウ)・ユウ(イウ)・チュウ(チウ) 18 【 **夕 1** 22 【 **夕 1** 2 】 18 【 **夕 1**

THE THE THE

形声 「説文」ニ下に正字を繇に作り、警声。 警は祭肉を供えて祈る意で、**(語)の初文。**: それに呪飾を加えている形で、これを下いに用いる。 経とはその占下の辞をいう。「説文」に「隨從なり」 と訓するのは、曲の声義と通ずるものと解したのであろう。 蘇の字形は「説文」の木部六上・口部六下・瓜部七下にみえるが、金文には鯀・邎の字形があって、鯀が正形であろう。 警は祈りを、鯀とはそれによって得た占下をいい、その占断の辞を鯀という。金文には鯀を感動詞に用い、「灸伯・穀段」に「泄験・動と」のように用いる、また〔師實設〕に「泄験・動と」のように用いる、また〔師實設〕に「泄験・曲と通用する例が多く、ことに〔漢書〕には自・由・従の意に、多く鯀の字を用いている。鯀は於・由と通用する例が多く、ことに〔漢書〕には自・由・従の意に、多く鯀の字を用いている。鯀は於・由と近日によって神意をとう意であり、「小盂脈」

ができる。
「薯(質、虜酋)に邎ふ」という。
・繇・遜は「薯に卽きて厥の故を邎ふ」という。
・・繇・遜は「톰(酋、虜酋)に邎ふ」とは訊問する意。
また

作 1 むね・あたる・うける・いだく

啊。 原

「これ予一人、多幅を膺受す」は「毛公鼎」「大命を宮」。「戎狄をこれ膺つ」は膺懲の意。〔書、君陳宮宮」「戎狄をこれ膺つ」は膺懲の意。〔書、君陳宮宮」 雁受す」と同語。雁・應・膺は一系の字である。 ます じゅうてき 第一の類であろう。 〔詩、魯頌、形。その鳥は鷹隼の類であろう。 〔詩、魯頌、 の初文であることが知られる。確はむねに生を抱く ではその馬具を「金雁」と称しているので、雁が膺 「鏤膺(彫刻のある馬の胸がい)」の語があり、金文 『からでであり、「おりでは、「ないない」、「「ないない」、「「ないない」、「ないないない」、「ないないない」、「「ないないない」、「ないないない」、「ないないないない。」、「「ないないないないないない 「膺を拊つこと無れ」とみえる。〔詩、 は膺なり」とあって互訓。〔孔子家語、子夏間〕には膺なり」とあって互訓。〔孔子のご、『かん上に「匈引く〔説文〕にもその字形がある。「「部九上に「匈引く〔説文]にに作る字が漢碑にみえ、〔慧琳音義〕に 「乳上の骨なり」とあるように胸骨をい 〔説文〕四下に「匈なり」と訓する。〔倉頡篇〕に られ、 形声 のちその二字に分化したものとみられる。 声符は雁。雁は應(応)・膺の初文と考え い、下部を 采まに

賸 17 おくる・あまり・そえる

ョウ

擁

声符は邕。金文の字形は、巛(水)と吕

辞鑑とよばれる神殿をいう。 隹を加えているのは、 (宮)と隹との会意字で、周囲に水をめぐらした宮、

わたり鳥のあつまる水辺を、祖霊の来帰する聖所と

股金零粉のようにいう。 文のつけたしを賸稿、老残の身を賸魄残魂、老妓を きままた からいある。のち加増・余分の意となり、詩 「鑫四酉(酒)を贈り、……巻邦に宗婦たらしむ」「紫器としての銘をもつものが多く、[晋姜鼎]に賸器としての銘をもつものが多く、[晋姜鼎]に するなり」、また「一に曰く、送るなり、、闘ふるな女子のときは滕となる。〔説文〕六下に「物相増加入れ、これを奉じて人におくる意。財物のときは賸、 器の数は二十六器に及んでおり、その権勢をうかが 「豔妻」の圅氏であろうが、〔圅皇父鼎〕にみえる朘 は宗婦、〔曾侯簠〕「叔姬靈、黃邦に迮ぐ。曾侯、 り」という。婚嫁のとき、その女に従う姪娣を媵と いい、またそのときに贈る財物を賸という。金文に 声符は朕(朕)。朕は舟(盤)中にものを

邀 むかえる・もとめる・あうヨウ(エウ)

言〕に「老聃、西のかた秦に遊ぶ。郊に邈ふ」とあり、邀は徼から分化した字であろう。〔荘子、寓あり、邀は徼から分化した字であろう。〔荘子、寓 文〕にみえないが、〔左伝〕成十三年「豊敢て亂をの呪力によって呪詛を加える呪儀をいう。字は〔説 を加えたもので、辺境における祭梟の俗を示す。こ は祭梟(首祭)の俗を示す放の上部に、頭顱の形形声が高行は敷。敷の語頭子音の脱落した声。敷 れを道路において行なうのは、邪霊をよび出し、そ 迎える意であるが、本来は邀撃のように、敵を

> む」のように用い、徼と通用する。 邀め邀えて、これを撃つ意である。 また「福を邀

| Total | To 曜18 (曜)18 ひかり・かがやく・あきらかョウ(エウ)

瀁 18 あふれる・ひろいョウ(ヤウ)

があり、

そこで鳥を捕り、魚を漁して神饌としたこ

宗周の地に移された。葊京の辟雝には自然の大池等がから。莽京は豊京、のちその神殿は鎬京、すなわちいる。莽京は豊京、のちその神殿は鎬京、すなわち

え、〔詩、大雅、霊台〕に鎬京辟雕の名があり、

雝

とされた。〔説文〕四上に「雕渠なり」と「せきれ 考えたのであろう。鳥は鳥形霊として、祖霊の化身

い」の意に解するが、金文には葬京辟雝の名がみ

の字形は、まさにその聖所神殿のありかたを示して

ま週日を曜日という。

[玉篇]に「涯際なきなり」とあり、養々、滉養は形声 声符は養。正字は濛で、養はその古文。 水のはてしなく流れるさまをいう。

燿 ひかり・かがやく・あきらかヨウ(エウ)

殷の祖霊が参向し、鷺羽の舞を献ずる。西儺とは文式が客戻る「またこの容あり」と歌う。客神として

周、頌、振瀚)に「振鸞ここに飛ぶ、彼の西儺にいる。」は、「はっぱい」は、かいませば、が歌われていて、神苑風のものとなっている。「詩、が歌われていて、神苑風のものとなっている。「詩、 辟雝を歌う〔霊台〕には、魚鳥を放ち飼いすること とが、〔麦尊〕などの器銘にみえている。のち鎬京

ものであろう。 曜と通ず」という。火光を燿、日光を曜と区別した 文〕|〇上に「照るなり」、〔玉篇〕に「光るなり、 があり、曜(曜)・耀の声となる。〔説形声 声符は翟。翟に躍(躍)の声

跳18 神殿の名・さわ・やわらぐョウ

J. J. * A B), p

これらのことからいえば、雌は辟雝を示す字、隹は 水のほとりに祀所を設けて、祖霊を祀る歌である。 渡来するところが、聖所とされることが多かった。 魯には泮宮といい、〔詩、魯頌、泮水〕にそのさます。は次、この廟所である。諸侯にもそのような聖所があって、 鳥形霊的な観念によって添えられているもので、 燕しここに寧んず」とあって、鳧鷺の降りてくる涇 〔大雅、鳧鷺〕にも「鳧鷺、涇に在り のとされているが、泮は水名である。渡り鳥などの が歌われている。泮宮は半円形に水をめぐらしたも

公尸ここに

占いを示す字と考えられ、神意にかなうことをいう。 ゆえに雍和の意となる。 ように用いる。確と声義の通ずる字である。雍は鳥 を敬離す」、「総工鼎」「用て賓客を雕しましむ」のたは、「株理和・雕々の意に用いるが、「大盂鼎」に「徳経生は、「のいうような特定の鳥名ではない。字はま「説文」のいうような特定の鳥名ではない。字はま「説文」

18 あがる(ヤウ)

の意である。 して輕く颺る」のように、風波などをいうのがもと とをいう。 「今、子少くして 声をはりあげて宣言すること。〔左伝〕昭二十八年 〔書、益稷〕に「皋陶、拜手稽首して颺言す」とは、揚する所なり」とあり、風で飛揚することをいう。 。 | 別淵明の [帰去来の辞] に「舟は搖々と | 別えが、 | 「帰去来の辞] に「舟は搖々と くして飀らず」とは、 | 風采のあがらぬこ で揚の初文。〔説文〕 | 三下に「風の飛 声符は昜。昜は玉を捧げる形

蝈 はヨえウ

〔説文〕 「三下に「營々たる青蠅。蟲の大腹なるもの なり」とし、字を会意とするが、形声としてよい。 の康濤は年七十にして蠅頭の小楷を善くした。芥川 蠅頭の書を好んだ人である。 があり、その語頭子音の脱したもの。 形声 声符は黽。黽に繩(縄)の声

ョウ 饁 瓔 鷂 饗〔變〕

鏞 大きな鐘・かね・つりがねョウ

があり、 を縛とよんでいる。斉・晋・秦に長文の銘をもつ縛***。 古楽鐘の名としては、この鏞形のものの字である。古楽鐘の名としては、この鏞形のもの をいう。金角は車につける小鈴。角・庸・鏞は一系鼓斁たるあり」とは、大鐘の奕々として立派なことにき これを鏞と謂ふ」とする。〔詩、商頌、那〕に「庸これを鏞と謂ふ」とする。〔詩、商頌、那〕に「西方の樂、益稷」「笙鏞以て閒す」の〔鄭注〕に「西方の樂、益をとく」ともま 自名の器もある。 「大鐘これを鏞と謂ふ」という。〔書、 声符は庸。〔説文〕一四上に

鰪 19 おくる・かれいいヨウ(エフ)

ໝ風、七月〕「彼の南畝に鑑す」の伝に、「饋るなめり、農場の人に食事をはこぶことをいう。〔詩、あり、農場の人に食事をはこぶことをいう。〔詩、 り」とみえる。 。るのと同じ。〔説文〕 五下に「田に前するなり」と 頭子音が脱落したもので、名が闊とな形声 声符は蓋。盍は匣母、その語

耀 かがやく・ひかり・あきらかョウ(エウ)

ある。字は〔説文〕にみえず、おそらく燿がその初 う。徳をもって天下を帰服させることを耀蟬の術と〔国語、晋語〕に「以て德を廣遠に耀やかす」とい〔 文であろう。 いう。蟬には、光に向かって飛ぶ習性があるからで 燿は耀の正字であるが、いま耀の字形が用いられる。 声符は翟。翟に曜(曜)・燿の声がある。

> 21 辟儺・やわらぐ

太宰・癰廚の諸職をおき、その祭祀にあたらせた。 [説文] 九下に「天子、辟雕に饗飲す」とあって辟雕の字とする。金文に字を璧雕に作り、とあって辟雕の字とする。金文に字を璧雕に作り、とあって辞雕の字とする。金文に字を璧雕に作り、といる。 ろう。漢人は廱の字を好み、漢碑にその字を用い 辟雝と畤とが、このころには混同されていたのであ ものが多い。字はまた雍と通用する。

瓔 くびかざり・たまョウ(ヤウ)・エイ

意である。〔後漢書、東夷伝〕に、馬韓の俗では、身辺に垂れ、荘厳するものを瓔珞という。 珞も絡の 瓔珠を衣に綴じることを好んだという。 ものなり」とあり、首飾りに用いる。仏像に著けて 女子に繋けている形。〔玉篇〕に「石の玉に似たる 声符は嬰。嬰は女子の首飾り。貝の綴りを

鷂 はしたかョウ(エウ)

種の軽わざは、漢の画塼の類にみえている。 竿の上で軽わざをすることを鵜子翻身という。 の一種で、はしたか。紙鳶のことを鶴子、また長い 釈鳥〕に負雀という鳥で、雀を捕食するという。鷹 、鳥なり」とあり、猛禽の名。〔爾雅、形声 声符は名。〔説文〕四上に「鷙

賽 22 「難食」 27 にたもの・あさめしョウ

11.p

ことを掌る。饗膳は熟食のものを供すること。朝あり、煮たものと生のもの。また〔饗人〕は割烹のあり、煮たものと生のもの。また〔そ人〕は割烹の 食を饗、夕食を飧といい、古くはその二食であった。 だものをいう。[周礼、司儀]に「饗飯を致す」と声とする。また「孰(食なり」と訓し、よく煮こん声とする。また「孰(食なり」と訓し、よく煮こん 声符は確。〔説文〕五下に饗を正字とし、雝

鷺 22 鳥がなく・なくヨウ(エウ)

聲なり」とみえる。 の牡を求む」の句があり、〔毛伝〕に「鷺は雌雉の

艦 できもの・ふさがるョウ

擁腫は癰腫。節こぶの多いことである。〔庚桑楚〕あろう。〔荘子、逍遥遊〕に樗木について「その大あろう。〔荘子、逍遥遊〕に樗木について「その大あり、はった。〕というでは、おそらく医家では命中、世話になった難えの家は、おそらく医家で ぐなり」とあって、悪質の腫物をいう。孔子が衛に はない。 下に「腫るるなり」、また「釈'名、釈疾病〕に「壅通じて雍にも壅(ふさぐ)の意がある。〔説文〕七 篇には癰腫に作っている。 声符は雝。雝にふさぐ意があり、また雍に

麗 うなされる ヨウ (エフ)・エン

慰鬼 蠱の呪詛によるものとされた。 薨とは、もと夢魔に うな死を遂げるものは、概ね権貴の人であった。 よる死をいう字で、にわかに死ぬ意である。そのよ り」とあり、 いときには、そのために死ぬこともある。夢魔は媚い る。〔説文新附〕九上に「霧に驚くな いわゆる夢魔にうなされる意。はげし 声符は厭。厭に厭圧の意があ

爥24 みさご・うおたかヨウ(ヤウ)

形声 る。鷹の如く鸇の如し』とあり、鷹揚の揚を鳥名 下」に「呂尚七十 にそのことを「蒼鳥群飛す(孰かこれを萃めしむしての鷹狩りをいうものであろう。〔楚辞、天問〕 とが空に遊弋するのは、おそらく「うけひ狩り」と 鷹揚」とあり、師尚父は太公望呂尚。呂尚が軍をさわしくない。〔大雅、大明〕に「維師尚父善時継さわしくない。〔大雅、大明〕に「維師尚父善時継さごは猛禽であるから、閑雅な房中歌の発想にはふさごは猛禽であるから、閑雅な房中歌の発想にはふ 「關々たる雎鳩」をみさごと解する説があるが、み 注〕に「鷹に似て尾上白し」という。 のちの解釈によるものであろう。「後漢書、文苑伝、 指揮して、その勇猛なること鷹の飛揚するが如くで の鸞とする〔三家詩説〕があったことが知られる。 る」と歌うており、これを奇瑞のこととするのは、 あると解されている。しかし揚は鸞の仮借。鷹と鸞 またうおたかという。〔詩、周南、関雎〕の「鷹に似て尾上白し」という。鷹の一種でみ 声符は楊。〔爾雅、釈鳥〕にみえ、〔郭璞 氣は三軍に冠たり 詩人歌を作

ヨク

3 (推)11 いぐるみ・く

F°

(物) は同系、赤・叔は 大い字と惟の字とに分化する。 七、巻の形は弔。金 代の字と惟の字とに分化する。 七、巻の刃部である・赤を 成。の刃部である・赤を 成。の刃部である・赤を 成。の刃部である・赤を あるとするが、字は弋射の意に用いて、いぐるみの 象形。形は似ているが、もとの異なるもので、のち るに象るなり」として、鋭くうちこんだくいの形で

たしているところがある。 そのため字系に混淆を来 (繳)と叔とは声が近く、 別系の字であるが、弔

甘射

抑 おさえる・おす・そもそもヨク

料 ら抑える意で、手に従う。その反文の形は字として 83 叩は仰ぐ、その反文であるか 会意 正字は印の反文の形

の古い形は、この語詞の用法であった。 十 月之交〕「抑、此の皇父」のようにいう。「抑」とをきっしょう。 それにもなる しゅっぱい しゅっぱい できる でいかい できる でいかい しゅうじゅう かいしゅう しゅうしゅう アル・ステート はっぱい しょうしゅう しょうしゅう ことをもいう。語詞としては抑は「或いは」、また上〕「禹、洪水を抑ふ」のように、水勢を抑塞する **・抑志・抑撫のように用い、また〔孟子、滕文公、**・抑志・抑撫のように用い、また〔孟子、滕文は何の姿勢となる。人を抑圧する意より転じて、抑、ば仰の姿勢となる。人を抑圧する意よりいえば抑、下よりいえ 反印に從ふ」とし、抑をその俗体の字とする。卬は 用いることがない。「説文」カ上に「按ふるなり。

沃 7 [漢] 10 そそぐ・うつくしいヨク

葉沃若たり」とは葉のつややかなさまをいう。の葉沃若たり」とは葉のつややかなさまをいう。のはい清める沃盥が字の初義。〔詩、衛風、氓〕「そのまた沃柔の意があるとする。〔周礼、小臣〕「大祭祀には朝覲し、王に沃ぎて盥せしむ」とあって、手をには死れる。「ときは関ち上肥ゆ。故に沃土といふ」とし、また天柔の意があるとする。〔段注〕にり」とあり、農地に水を注ぐ意とする。〔段注〕にり」とあり、農地に水を注ぐ意とする。〔段注〕にり」とあり、農地に水を注ぐ意とする。〔段注〕にり」とあり、農地に水を注ぐ意とする。 ち沃土・沃野の意に用いる。 [説文] 二上に漢を正字とし、芙声。「漑 灌するな 形声 声符は天。天にわか ゆたかな意がある。

浴 10 ゆあみ・あびる

。 谷犹

に祈って、その霊のすがたがあらわれること、欲は 声符は谷。谷に容・欲の声がある。答は廟 ョク沃〔苌〕浴 欲

> 形であり、字を会意とする。しかし谷が空虚、欠が 谷に従い、欠は口を開いてものを欲し、慕液を催すなり」と改め、字形は山谷の形で、空虚の意である ハ下に「貪欲なり」と訓する。〔段注〕に文を「貪 がう意で、*ケタペムでは答嗟詠嘆することを示す。〔説文〕を裕という。裕はみそぎ、欲はその神容を見んとねを格という。 その神容が彷彿としてあらわれること。その下す福 義にも系連するところがある。 ** いう。わが国でもゆあみは潔斎のために行なわれた。 た蘇るときの儀礼を意味する。これを招魂続魄と 声符は谷。谷に容・浴・裕の声があり、字 邻 ほっする・ねがう・のぞむョク

> > 文字にもまた、堕落の傾向がある。 「礼記、祭義」「そのこれを薦むるや、敬にして欲な もとは神霊に接したいという宗教的願望を意味した。 のち欲は欲望の意となり、欲情・貪欲の字となるが、 り」の注に「欲は婉順なり」とあって裕の意。 って浴し、その尊容の浴がなるを見んと欲する。って浴し、その尊容の浴がなるを見んと欲する。神に祈慕液というような会意は、あるべきでない。神に祈

淢 ほりわり・はやい流れヨク・イキ(ヰキ)

桓公につかえることになったわけである。〔論語、繋ぎる儀礼で、これによって管仲は新しい生をえて、繋ぎる儀礼で、これによって管仲は新しい生をえて、に対する儀礼であるから、これは一たび死し、またに対する儀礼であるから、これは一たび死し、また

はみそぎをすることであった。この三釁三浴は死者

える。繋は上から酒をそそいで身を清めること、浴 れて斉につれ帰されたとき、三釁三浴したことがみ の字とみてよい。「国語、斉語」に、管仲が捕えらし上に「身を洒ふなり」とあり、浴・欲・容は一系し上に「身を洒ふなり」とあり、浴・欲・容は一系

廟見のためにみそぎする意味であろう。〔説文〕 -

そのあらわれることを願うことであり、沐浴の浴も

する意がある。それが字の本義であろう。 減す」は堀割りをめぐらすこと。或に区域、 館をいう。〔詩、大雅、文王有声〕「城を築きてこれ「滷の広」「下滅の広」の名がみえ、滅の地の離宮別

の節供の行事となる。みな時節が改まり、

死 してま

の浴もみそぎで、のち三月三日の上巳や五月の端午 先進〕「沂(川の名)に浴し、舞雩(地名)に風す」

郊 祭日の名・あくるひ・たすけるヨク

なる。卜辞にいう翌日は祭名。彫祭の後に行なわれ 加え、あるいは翌日の意をもって日を加えた字形と 文に字を翼形に作り、昆虫類の虫が翅をたたんでいて翊々たり」とは翼々の意。翼と同義に用いる。ト る象形の字で、後期になるとそれに立を声符として 楽志〕にみえる〔郊祀歌〕に「神の來ること泛とし とし、「繋伝」に輔翊・翼戴の義とする。「漢書、礼とし、「繋伝」に輔翊・翼戴の義とする。「漢書、礼とし、「繋ぶ兒」の上に「飛ぶ兒」 声符は立。立に位・翌(翌)

八五八

翊の意にも用いる。翼とはもと別の字であるが、 同声相通じて、のち輔

翌二(窓)」 あくるひ

量網 · P° \$ 加 °#

[周書] の諸篇に数回みえる。みな明日の意。卜文 り、〔尚書、金縢〕「王、翌日乃ち瘳えたり」以下、字となった。〔爾雅、釈言〕に「翌は明なり」とあ字となった。〔爾雅、釈言〕に「翌は明なり」とあと要素が同じで、もと同字であるが、慣用の異なると要素が同じで、 の字形の変化をたどって考えると、翊と翌とは同じ のち文献では翌・翼を用いる。 声符は立。立に位・翊の声がある。郊の字

惟 いぐるみ

繳を播きて以て雲を凌ぐ」とあり、矰繳を網のよう。 を増繳という。曹植の〔繳に離る雁の賦〕に「纖 を増繳という。曹植の〔繳に離る雁の賦〕に「纖 は解する矢なり」とみえ、いぐるみ 鳴」「鳧と雁とを弋す」と、一般に弋を用いる。矢 えて、 を繳射するなり」とあり、七と声義同じ。 うにあげる弋法があったのであろう。 。 鳥に用いることを示す。〔詩、鄭風、女田鶏 別するなり」とあり、弋と声義同じ。隹を加 形声 形で惟の初文。〔説文〕四上に「飛鳥 声符は弋。弋はいぐるみの象

異は「広」8 こんまく

廨 廖原压压压

(説文)にいう行屋とは行在・行宮の意とみてよい。 とうでは、佐において廷礼のことが行なわれており、 は、佐において廷礼のことが行なわれており、 では、佐において廷礼のことが行なわれており、 では、 佐において廷礼のことがにない。 立にも異・翼の音があり、ト辞には明日を羽よい。 立にも異・翼の音があり、ト辞には明日を羽よい。 立にも異・翼の音があり、ト辞には明日を羽よい。 立にも異・翼の音があり、ト辞には明日を羽よい。 饗・醴す」とあるたは、廙の別体の字であるとみていた。(第一週)丁亥、穆王、下減の広に在り。穆王、吉(第一週)丁亥、穆王、下減の広に在り。穆王、吉(第一週)丁亥、穆王期の〔長由孟〕に「隹三月初に作る字があり、穆王期の〔長由孟〕に「隹三月初に作る字があり、穆王朝の別体の字であるとみて 〔后祖丁尊〕に「王、廙に在り」とみえており、こざがまでは、一人のない字である。殷の金文とみられる文献には用例のない字である。殷の金文とみられる [墨子、備城門]の「城上の四隅、童異 (重廙)、 その文字もまた失われたのである。 において重要な意味をもった行宮の制が失われて、 麋・ 広とは別に後に作られた字であろう。 古代王朝 その音を「ラフ」とし、「屋の聲なり」というのは、 〔説文〕には殷金文にみえる廙の字を録し、周金文 に設営する幕舎の意とするものであるが、孫治譲は すべきこと、今の蒙古包の類の如し」という。 といふ。王の居る所の帳なり。帳に梁柱あり。移徙 引き、「四合(四方に帷を垂れて)宮室に象るを幄り、〔段注〕に〔周礼、幕人〕「帷幕、幄空」の注をり、〔段注〕に〔周礼、幕人〕「帷幕、幄空」の注を にみえる应を収めていない。〔集韻〕に应を収めて の廙が周金文にみえる庁の初文であると思われる。 声符は異。 尊〕に「王、廙に在り」とみえており、こ [説文] 九下に 「行屋なり」とあ 野外

蚊は (製) 18 いさごむし・まどわす

ことがある。〔周礼、・螻氏〕の〔鄭注〕に「蝎は讀「短狐は水神なり」とあり、その字はまた魊に作る であるから、「この好歌を作りて「以て反側(裏切がたいが、ただの人ならば、呪詛の語も達するはずがたいが、 則ち得べからず」、鬼や蜮は変幻自在のもので測り 河童のような話である。〔詩、小雅、何人斯〕は、かられば人は瘡を発し、甚だしいものは死に至るという。 の音は、その古音を存するものとしてよい。 なって、その声もまた転じたものであろう。鄭玄 文は或であるから、蟈・蜮はもと一字。字形が蟈と された。〔太平御覧〕巻九に引く〔韓詩内伝〕に り)を極む」と歌う。蜮は人の呪詛の及ばぬものと 人を呪詛することを歌う詩で、「鬼たり蜮たるは 弧」と称するもので、くままり、工・射影などの名がある。〔漢書、五行志〕に「短ないないないない。」というないないないないないない。 て三足。气を以て射て人を殺す んで蜮と爲す。蜮は蝦蟆なり」という。その怒鳴す 一三上に「短狐なり。鼈に似形声 声符は或。〔説文〕

慾 15 このみ・よく

詞的用法の字である。[論語、公冶長] に、ある人形声 声符は欲。欲に慾の意があり、慾はその名

and the state of t

欲とは神の尊容をみんと欲することであるが、慾と のである。勇は無慾、計算をしないことから生れる。 は人間の慾望をいう。 のある限り、真の勇剛を得ることはできないとするや慾なり。なんぞ剛なることを得ん」と評した。慾 が申棖を剛者であると推賞したところ、孔子は「棖

閾 16

「行くに闖を履まず」とあり、〔礼記、玉漢〕にも「上」、「神なり」という。〔論語、郷党〕にも「上」、「神なり」という。〔論語、郷党〕に あって、このような規定があるのであろう。 そのことを戒めている。しきみには何らかの禁忌が 腿 を限定する意がある。 声符は或。或にもの 〔説文〕

翌年 17 【発】17 【歴】20 つばさ・たすける

然是《大学》

多い。〔王孫遺者鐘〕に「畏忌護々たり」とあり、して上に在り、異として下に在り」など、その例が 名)敢て王の休異を忘れず、「虢叔旅鐘」「嚴と「故に天、異臨して子しむ」、「盟自」「豐(召、人家と、異臨して子しむ」、「盟自」「豐(召、人家とに翼戴・輔翼の字をみな異に作り、「大馬派」 のであるから、敬翼の意となる。羽翼もまた翼蔽す 握も翼敬の義である。異は鬼形の神で畏忌すべきも 「翅なり」とし、羽部四上に「翅は翼なり」と互訓。 て翼の字形をあげる。 字形をあげる。いずれも異声。〔説文〕に〔説文〕に下に正字を爨に作り、篆文とし ヨク 閾

> られたものであろう。 の字として異・翼、また翊・翌と区別するために作 義と合するに至ったものであろう。蹼の字は、羽翼 るものであるから、金文に用いる異の義が、翼の字

意17 はとむぎ

た話がある。下って〔抱朴子、仙薬〕に薏苡を仙薬持ち帰ったところ、貨財を私するという批難を受け とすることがみえる。 ため風土の疾を免れた。それで帰るとき多くこれを その瘴癘の地にあって、この実を常食としていた 説く説話としたものであろう。漢の馬援が南征し、 あるから、おそらく薏苡をもって、その奴姓起原を - ^ - ^ - () にも似た話がみえる。夏は姒姓の国で〔帝王世紀〕にも似た話がみえる。夏は姒姓の国で 孕み、胸を剖いて禹を生んだという説話があり、 をとしるす説話によると、むかし鯀は有学氏の女、女嬉しるす説話によると、むかし鯀は有学氏の女、女婆と象形」という。日は以の初形。[吳越春秋]巻六に いるとき、これであるとき、これでは、これである。 下に賈侍中(賈逵)説として、「目は意目の實なり。 「説文」「下に「薏菅なり」とあり、また日字条「四 形声 をいう。字はまた意以・薏苡(作る。形声 声符は意。薏苡(はとむぎ)

倮 はだか・かたぬぐラ・カ (クヮ)

喇 形声 裸(嬴) 声符は果。果は贏の省文。〔礼記、月令〕 屛

翼〔翼〕〔翼〕

薏

ラ

倮

がみえる。また薄葬を倮葬という。韰倮は狭隘の意いみえる。また薄葬を倮葬という。〔淮南子、説林訓〕に「西方の倮國」のこという。〔淮なじ、ばなん 浅毛のものを倮獣とする。本来は人の倮身・倮体を 藏せざるに象る。虎豹の屬は恆に淺毛なり」とあり、「中央は土、その蟲は倮」の注に「物、露見して隱 で、そのときは果の音でよむ。

喇 12 ものいう

まなことをいって人を欺くことを、喇咙という。刺きなことをいって人を欺くことを、喇咙となる。 声符は刺。喇叭・喇嘛の字に用い、また大兆声 に潑剌の意がある。

裸13 [嬴]19 はだか・はだぬぐ

動詞的に用いる。〔孟子、公孫・丑、上〕「祖裼裸裎」し、浴場をのぞき見する話がある。倮と同じ語で、し、浴場をのぞき見する話がある。倮と同じ語で、骨が一枚骨であるというので「その裸を觀んと欲 二十三年、晋の文公重耳の流離譚のうちに、その胸嬴に作り、嬴声。「祖ぐなり」と訓する。〔左伝〕僖は、『左は』(左は)といまる。〔左伝〕僖は、『後文。〔説文〕八上の正字は、『 はだをあらわした無作法なようすをいう。 形声 声符は果。果は贏の

扇

マグン 不明とするものであろうが、巖の字形から考えると、不明とするものであろうが、巖、とする。その字形を曰く、獸名なりと、象形。闕」とする。その字形を曰く、獸名なりと、象形。 やどかりの形であろう。〔玉篇〕に「魚に翼あるも やどかりに似た形である。

蓏螺羅(羅) 羸 贏 蘿 邏

また熊と似ており、 の、見はるるときは則ち大水あり」とするが、字は 熊も水神とされることがある。

加14

要術」に引いて、「草に在るを蓏といふ」とする。 を果といひ、地に在るを蔵といふ」とあり、「斉民が八」 らぶさま。「説文」 - 下に「木に在る また蔬菜と合せて、蓏蔬という。 もの、羅なるものの意がある。 会意 艸と呱とに従う。呱は瓜がな 蓏の声には、裸の

螺 たにし・うずまき

の髪で、仏像にその形のものが多い。渦巻形を螺旋見の形のものをいう。螺髻・螺髪は巻貝のような形形声 声符は累。累にたばね累ねる意があり、巻 また蝶貝や鸚鵡貝の裏を漆器に嵌めこんだものを螺 鈿、貝殼で作った杯を螺杯という。

羅 (羅) 20 あみ・つらなる・うすもの

A S

会意 ものがあり、もと象形の字であるが、のち糸を加え に「これを畢しこれを羅す」とあって、畢は柄のつだ氏初めて羅を作る」という。〔詩、小雅、鴛鴦〕 芒氏初めて羅を作る」という。〔詩、小雅、鴛鴦〕を以て鳥を習するなり。 网に從ひ、維に從ふ。古はをはて鳥を .た手網、羅はしかけ網のように張りめぐらすもの 例と維との会意字となる。 「説文」
七下に「糸 **网と維とに従う。卜文に畢で鳥を覆う形の**

をいう。 る桑摘み女。この類の歌は、もと古い門つけの祝い 歌から展開したものであろう。 が多く、また羅敷は古楽府の「陌上き」に歌われ のを、網羅・羅列という。羅浮は南方の神山で伝説 い、綺羅・羅袂のようにいう。またものを列ねるいう。その網のような網目のあるうすぎぬを羅と

甂 19 じがばち・やどかり

「蠮嬴なり」とあって、 りを羸蚌・羸蜆、また羸蛤という。 はまた蝶を用いるが、果は羸の省文である。やどか た虫の名に、羸に従うものが多い。〔説文〕一三上に 形。 じがばちをいう。その字に

羸 はラ だか

ば、人の裸には倮・裸を用い、貝虫の類には贏を用 雅、釈詁〕に「智々なり」とみえる。字形よりいえ昭三十一年「童子、羸にして轉び、以て歌ふ」、[広昭三十一年「童子、羸にして轉び、以て歌ふ」、[広 にこもる形は脈。果は倮・裸の意である。〔左伝〕形声 声符は羸。羸は殼をはなれたやどかり。殼 いるべきであろう。

蘿 ひかげかずら・つたかずら

離 はひかげかずら。字は蘿径・蘿月のように、つたか「莪なり」とあって、つのよもぎの意とする。女蘿 形声 つらなるものをいう。〔説文〕一下に 声符は羅。羅は網目のように

> 香山のまさか木を繋どしたというのは、ひかげかずずらの意に用いることが多い。〔神代紀〕に、天の た。 いであった。木に蔦類がまとうことも、吉祥とされ らのことである。鬘をまくことは、神事のときの装

邏 めぐる・みまわる

とは、武装して偵邏することをいう。托鉢すること るなり」とあって巡邏の意。〔玉篇〕に「游兵なり」 を邏斎というが、その語はまた乞食の異称とされる。 る意がある。〔説文新附〕 ニ下に「巡 声符は羅。羅にくまなくめぐ

ライ

耒

四下に「手もて耕す曲木なり」とし、「木もて非をいた」とし、「木もて非ないない」とし、「木もて非ないない」といい、「おいま」といい、「おいま」といいます。「説文」 ます 使うている形に作り、またト文・金文の藉の字も、 分を手と解したのであろうが、金文の図象にすきを 作のこととは関係がない。すきの上部の手にもつ部 推すに從ふ」とするが、扌は草の散乱する形で、耕 虫害の原因となると考えら 来を足で踏んで用いる形に作る。 農具のけがれは、 *** 会意 すきの初形である力と、手と

れた。これをとり扱う職能 のものがあり、挿図の金文

てみることができる。 が異なる。耒の形は耒や静(靜)の古い字形によっ 字に未・耜・鐇・鍬・犂などがあり、みなその形制 小正」に、正月に農耕をはじめるにあたって、まに、垂が未耜を作ったという起原説話があり、〔夏 ず垂を祀る儀礼のことをしるしている。すきとよむ 図象はそのことを示すものであろう。「世本、作篇」

And the second control of the second control

来 ~ [來] 8 むぎ・きたる

水松 从 T

来月、さらに「來す」の意に用いられており、みな見されている。字は卜辞では往来の意に、また来旬 公がこれを受けてまた「嘉禾」一篇を作ったという。 工】にも「於事なる來牟」の句があり、周の后、稷、正言」にも「於事なる來牟」の句を引く。〔周頌、臣思文〕「我に來難を語る」の句を引く。〔周頌、臣思教。(《後名。天の來すところなり」とし、〔詩、周領、臣集る。天の來すところなり」とし、〔詩、周領、臣集る。天の來すところなり」とし、〔詩、周領、臣集 化圏に属するが、古い遺址から麦種を収めた器が発 后稷の伝承が古いものであろう。その故地は彩陶文 后稷は周の始祖であり、また農業神でもあるから、 公に送ったことをしるす〔帰禾〕の一篇があり、周 叔が異畝同穎の禾をえて、たたのによってこれを周い、異ないがなる。また周公説話にも、〔書序〕に唐う伝承がある。また『書字』。 がその瑞麦嘉禾をえて、周が勃興するに至ったとい ころの瑞麥・来難なり。一來に二縫あり。芒東の形に象る。「説文」五下に「周受くると

> 仮借の用法である。 くみられる。 ト辞にはすでに仮借の方法が多

徠 きってる

徂徠と号した。

萊 あかざ・あれち

が、また荒蕪の地を草萊という。耕さざるものをいふ」とあり、は という。〔周礼、遂入〕「萊五十畝」の注に「休してだ」に「北山に萊あり」とみえ、採って食料としただ」 休閑地のことである

雷13 [歸]20 [歸]23 かみなり・ いかずち

⊕(⊕ # # # # # # THE WHEN

画

形声 字を収めないが、畾声とする字が十字あり、金文に 正字は靄に作り、晶声。いま「説文」に畾

> 石の隕ちるときにも雷声を発するので、雷斧・電標の場面には鼓をうつ雷神の姿がかかれている。気はないは鼓を鳴らすのに似ており、また雷鼓といい を用いることが多く、「詩、召南」に「殷其霊」のにみえ、「詩」「周礼」など、古文系の書にはなお霊とが多く、雷文は霊界を象徴した。雷の字形は漢碑とが多く、雷文は霊界を象徴した。雷の字形は漢碑 漢の場合には鼓をうつ雷神の姿がかかれている。これが、また雷鼓といその音は鼓を鳴らすのに似ており、また雷鼓とい 文訓」「陰陽相薄り、感じて雷と爲る」とみえる。 また鼺に作る。 の名がある。古代の青銅器の地文に雷文を埋めるこ が相触れて、轟音を発するのである。「淮南子、 晶に從ふ。回轉の形に象る」とあり、天地陰陽の気 形がみえる。もと象形の字であった。〔説文〕一下 は四田に従う形のものもある。古文・籀文にその字 一篇がある。雷は〔詩〕では男子の象とする。字は に「陰陽薄動す。臨雨はものを生ずるものなり。 天

酹 14 そそぐ・さけ

祭ったが、これを酹詩という。 祀り、酹とは酒をそそぐ祭儀である。みな地におねて、それに酒をそそいで祭ることで、餟とは肉 唐の賈島は歳末に年間の詩文を集め、 てする祭で、飲酒饗宴のとき、まず地に祭る裸礼に あたる。また神下しのときにも、この祭儀を行なう。 に「酹祭なり」とあって互訓。餟は諸神の祭座を連 それに酒をそそいで祭ることで、餟とは肉を 「餟祭なり」とあり、食部五下餟字条 声符は守。〔説文〕「四下 酒をそそ

磊 多くの石・大きい石・

(10g) 会意 三石に従う。〔説文〕九下に 「 森石の兄なり」という。〔楚辞、九歌、 旧 「 石磊々として葛蔓々たり」、また〔 古詩〕 山鬼〕に「 石磊々として葛蔓々たり」、また〔 古詩〕 山鬼」に「 石磊々として葛葵々たり」、また〔 古詩〕 山鬼」に「 金々とり間からなり、 また〔 古詩〕 山鬼」に「 金々として 高くり、 また〔 古詩〕 いった。

餐 15 たまう・たまもの・ねぎらう

頼 16 【報】16 たよる・たのむ・さいわい

新作品 一声符は刺。〔説文〕六下に「顧いるなり」とあり、余分の利益のある意としており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝書、高帝紀、注〕に引いて「利なり」としており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝としており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝としており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝ととしており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝としており、それは利便の意であろう。〔左伝〕寝としており、それは利便の意であろう。「本社の関を得ん」は利便の意である意とないう。刺は光烈。貝は負財。その余光余烈によっていう。刺は光烈。貝は負財。その余光余烈によっていう。刺ば光烈。貝は負財。その余光余烈には、「震いない」という。ゆえに頼いる。

るから、依頼という。に善・幸・福の意があり、みな依拠すべきものであ

低い 17 やぶれる・つかれる・すたれる

雷 17 つぼみ

瀬19 (瀬)19 せ・はやせ

形声 声符は頼(賴)。『説文』一元 「楚辞、九歌、湘君』に「本、沙上を流るるなり」とあり、 「楚辞、九歌、湘君』に「石瀬は淺々たり」とみえ、 浅瀬をいう。〔漢書、武帝紀、注〕に「吳越にてこ れを瀨と謂ふ。中國にてこれを磧と謂ふ」とあり、 れを瀨と謂ふ。中國にてこれを磧と謂ふ」とあり、 であり、山川の急湍をいう。激して水の高まるとこ うをわが国では瀬枕といい、狭い海峡を瀬戸、そこ は安危のかかる急所であるから、瀬戸際という。

瀬 21 レプラ

形声 声符は賴(頼)。字はまた癘に作り、鷹の

与のものをいい、癩は神聖病とされた。を病んでいたのであろうといわれている。頼とは天この病あること」と、その不幸を嘆いた。伯牛は癩この病あること」と、その不幸を嘆いた。伯牛は癩店をとる。[論語、雍也]に、弟子の伯牛の病を訪声をとる。[論語、

19 さけを入れる器・さかだる ライ・ルイ(ルヰ)

「龜目の酒尊なり。 形声 字形をあげている。〔繋伝〕に「畾は亦聲なり」とすこと窮まらざるに繋る」といい、重文として罍の 殷周青銅器には、地文として一般に用いられてい 制・文様について、確かな知識が失われていたため に「黃目尊なり」というのも、 ものがなく、〔周礼、司尊彝〕の「黄彝」の〔鄭注〕るものである。いま存する磐には亀目の文様をもつ その意があるとするが、雷文は罍に限るものでなく. 山上の飲酒に用いることを歌うが、旅先で山に登っ 南、巻耳〕「我姑く彼の金罍に酌まん」とあって、た形のもので、殷周期にその精品が多い。〔詩、周 れる。罍には自名の器があり、広肩細頸の壺に類し 構成される饕餮文を、そのようによんだものと思わ であろう。おそらく目雷文とよばれる雷文によって し、〔唐写本〕にもこの三字があって、器の雷文に 声符は畾。〔説文〕六上に正字を櫑とし、 木に刻して雲雷の象を作す。施 当時すでに古器の器

に「司宮(官名)、「後礼、少牢饋食礼」て用いるような器ではない。「儀礼、少牢饋食礼」

がない。



に古器とは異なるものである。は酒器であるから、〔儀礼〕にみえるものは、すでは酒器であるから、〔儀礼〕にみえるものは、すで

第 22 ふえ・ひびき

なが に「三孔の龠なり。大なるものはこれを笙と謂ひ、その中なるものはこれを窺と謂ひ、その中なるものはこれを窺と謂ひ、小の本るものはこれを箹と謂ふ」とあり、笙の笛のような竹管の楽器。〔荘子、斉物論〕に「地籟は則ちまっな竹管の楽器。〔荘子、斉物論〕に「地籟は則ちまっな竹管の楽器。〔荘子、斉物論〕に「地籟は則ちまっなり。」という。

ラク

洛ョラク

間 多次日 好粉

一上に左馮翊(陝西)の水名とする。〔虢季子白彩香を含め、「大学」の水名とする。〔虢季子白彩声 声符は各。各に烙・絡の声がある。〔説文〕

籟

ラク

洛

烙珞

絡

落

『 こ、 い 等りを文にみえる。洛水の女神は宓妃、曹いる。洛都造営のことは、〔書、洛誥〕〔たぎ。れた「殷の八師」は、周初の戡定作戦に動員されてして、ここに見りまた。 篇や、当時の金文にみえる。洛水の女神は宓妃、 ち成 周と改めた。成周とは軍事都市の意であるら これ茲の中國に宅らん」とここに都することを宣言 に都する計画があって、「阿尊」に、武王が「余は いる。洛邑は、周初に殷が滅びたとき、はじめここめたとする説もあるが、漢碑には洛・維をともに用めって王たる国であるから、水を避けて雒の字に改もって王たる国であるから、水を避けて雒の字に改 に多く雑を用いる。後漢は洛陽に都し、漢は火徳を る伊洛の洛とはまた異なるもので、伊洛の洛は経籍 て君子を祝頌する詩である。この洛は、洛陽を流れ く、〔詩、小雅、瞻彼洛矣〕は、洛水の風物によっ 盤〕に「玁狁(北方の族の名)を博伐す、 植に〔洛神の賦〕がある。 したという。はじめ造営のときには新邑と称し、の の侵寇する地であった。その下流は宗周の都に近 に」という句があり、当時洛水の上流北方は、玁狁 ここに殷の雄族を移し、その氏族軍で構成さ 洛の陽

烙 10 ゃく・やきばり

形声 声符は名。各に洛・路の声が 形声 声符は名。各に洛・路の声が が手は、妲己のために炮烙の刑を用い、銅柱に は、罪人に烙鉄(烙きごて)を加える規定があった。 は、罪人に烙鉄(烙きごて)を加える規定があった。 は、罪人に烙鉄(烙きごて)を加える規定があった。 は、罪人に格鉄(烙きごて)を加える規定があった。 は、罪人に格鉄(烙きごて)を加える規定があった。

らせ、その悶死するのを見て楽しんだという。

路 10 玉かざり・まとう

お声 声符は各。各に洛・絡の声がある。路は瓔 である。瓔珞は仏像や寺院を荘厳するために用いるで、仏像では身に著けて飾る。多く仏教で用いるもので、仏像では身に著けて飾る。多く仏教で用いる事がある。現は瓔

終12 めぐる・まつわる・ふるわた

形声 声符は名。各に洛・格の声が の意とする。それが初義であろうが、麻糸のまとい の意とする。それが初義であろうが、麻糸のまとい の意とする。それが初義であろうが、麻糸のまとい のきところから、めぐりつづくものをいい、往来の 絶えないことを終釋、頭に巻いて飾るものを絡頭、 糸まき車を絡率、馬のむなかいを絡纓という。人体 糸まき車を絡率、馬のむなかいを絡纓という。人体

落 12 おちる・くだる・やむ・しぬ

章 華の臺を成す。願はくは諸侯とこれを落せん」、 とあって零と落を区別するが、零は雨露のことをいう語である。流落・落魄のように、もとの姿を失う ことをいう。また建造物や器物ができ上ったとき、 ことをいう。また建造物や器物ができ上ったとき、 ことをいう。また建造物や器物ができ上ったとき、 ことをいう。また建造物や器物ができ上ったとき、

The second secon

駱 ラチ 埒

ぎの詩で、〔箋〕に「旣に成りてこれを釁し、斯干める儀礼をいう。〔詩、小雅、斯干〕は新室の室寿のない。ない。ない、いずれも牲血をもってこれを清 「死するなり」と「始なり」の両訓がある。旧を除き新を迎える意があって、〔爾雅、釈詁〕にという。草木零落の意とは、また別義である。落に の詩を歌うて以てこれを落す」とあり、これを落成 また昭四年、鐘を作って、「大夫を饗して、以てこ

酪 ちちしる・こんず・さけラク

名がある。 をいう。牧畜社会で多く用いる。茶に酪奴という異 り」とあり、乳を煮つめて飲料やチーズとしたもの ある。〔説文新附〕一四下に「乳 漿な形声 声符は各。各に洛・絡の声が

犖 14 まだらうし・すぐれるラク

りわけてすぐれたもの、 卓犖は畳韻の語である。 形声 文」ニ上に「駁牛なり」とみえる。と 声符は勢(労)の省文。〔説 分明なものを卓犖という。

雒 川の名・みみずく

洛と区別して、雒としるすことが多い。後漢が洛陽あって、「みみづく」とする。伊洛の洛を、涇洛のあって、「みみづく」とする。伊洛の洛を、涇洛の に都し、漢は火徳の国であるから、洛の字を雒に改 ある。〔説文〕四上に「忌欺なり」と形声 声符は各。各に洛・絡の声が

めたという説があるが、漢碑に洛を用いる例が多い。

粉

駱 かわらげ・らくだラク

粫 0 **F**

繹。百戲の一に駱越というものがあり、鼻飲のこと える。当時珍獣とされていたのであろう。駱駅は絡 「後漢書、南匈奴伝」に駱駝二頭を献ずることがみ であるという。

ラチ

埒10 ませがき・つつみ・さかいラチ

計 である競べ馬から出た語とされている。 入場が許されることを埒があくという。賀茂の神事 馬を見る人は、柵外で久しく待たされるので、漸く う。小さな土垣や、また馬場の柵などをもいう。競 形声 「庳き垣なり」とあり、 声符は守。〔説文〕一三下に ませがきをい

東 9 もとる・いさお ラツ

读

ずる形容である。〔説文〕ニ上に血を「足、剌血な或いは撥削として枉橈す」とは、強い撥音で乱れ弾て、ばらばらとなる意。〔淮南子、脩務訓〕に「琴文〕に「戾るなり」とは、束ねたものを切りほぐし文〕に「戾 会意 はものを束ねて、なかにものの充ちている形。〔説 公設」に「刺々越々(烈々桓々)」という。に「克くその刺(烈)を競ふもの亡し」、また〔秦に「克くその刺(烈)を競ふもの亡し」、また〔秦に用いて、刺祖・刺考・光刺のように用い、〔班段〕に用いて、刺祖・刺考・光刺のように用い、〔班段〕 り」というのと同じ擬声語。金文にこの字を烈の義 字の初形は柬に従い、柬と刀とに従う。柬

将 10 とる・つまむ・なでるラツ

「芣苢を采り采る。薄らくここにこれを捋る」は草「取ること易きなり」とあり、〔詩、周南、芣言〕 を冒すことを、「虎の鬚を捋る」という。 いう。自ら得意となるさまである。あなどって危険 をむしりとる意。鬚を撫でることを「鬚を捋る」と 形声 とる形で、捋の初文。〔説文〕ニニ上に 声符は等。守は五指でものを

辣 14 からい・きびしいラツ

世以来用いる語で、のちの造字である。 刺といふ」とみえ、腕ききを辣手・辣腕という。 59「一切経音義〕に引く〔通俗文〕に「辛甚だしきを 声符は束で刺の省文。刺に烈の意がある。 近

るから、これは治と訓すべき例である。 皋陶謨』「亂にして敬」は治政の才をいうものであ

卵 たまご ラン・コン

乱

7 () 13

みだれる・おさめるラン・ロン

劕

ラン

様」に引く「説す」に十を卵の古文とするが、その爲す」とあって音が異なる。[五経文字] 「九経字解と無卵は〔礼記、内則〕「卵漿り」の注に「讀んで鯤と無明は〔礼記、内則〕「卵漿り」の注に「讀んで鯤となり」という。〔段注〕に魚卵であろうとするが、なり」という。〔段注〕に魚卵であろうとするが、 がないが、ともかく左右対生の形である。 形は石部九下に礦の古文とする形である。古い字形 「凡そ物、乳すること無きものは卵生 象形 卵の対生する形。[説文] に

婪¹ [惏]¹ むさぼる・おしむ

「治むるなり。働に從ひ、乙に從ふ。乙はこれを治

る意。それで糸を治める意の字である。〔繋伝〕に

乙は骨ベラなどの形で、それをほぐして解きおさめ

上下に手を加えている形で、もつれた糸をあらわす。

旧字は亂。衞と乙とに従う。衞は糸かせの

下に「惏、河内の北にて、貪を謂ひて惏といふ」と 食婪の意。また「杜林説」として、ト者が相詐験す 楚糊 あり、声義同じく、同字異文であろう。 るのを婪というとする一説をあげている。心部一〇 形声 一二下に「貪るなり」 声符は林。〔説文〕 とし、

嵐 12 嵐気・あらし

「牧設」に「芸術が乱れる、

に「廼ち夤るること多し」、「琱生設、一」に「廼ち夤るること多し」、「琱生設、村は かだからない。 金文ではれる、 亂が治める意の字である。 金文では

訓詁にそのような思惟過程を含むことはありえず、 訓詁的実証であるとする説もあるが、古代の文字の の古代における弁証法的な思惟の行なわれたことの、 を反訓という。そしてこの反訓という事実を、中国 の両訓があり、この矛盾した訓を同時的にもつこと 改めている。字書には亂(乱)にみだれると治める るから、〔段注〕にその文を「治まらざるなり」と むるなり」とするが、乱は紛乱の意に用いる字であ

詩文の世界に入るようになった。わが国では、はげ 屬 江南の生活が興ってのち、その嵐影湖光の好風景が、 翠嵐を歌うものは謝霊運の山水の詩などにはじまる。 しい風雨をいう。 会意 また緑にうるおう山気をいう。嵐気・ 山と風とに従う。山の嵐気、

爵 みだれる・おさめる

\$\$.

「琱生設、一」「余敢て働さず」のように働を乱ののであろう。金文に〔牧設〕「廼ち働るること多し」、いるが、それは〔説文〕以前から誤用されていたもいるが、それは〔説文〕以前から誤用されていたも 意に用いる。亂に治・乱の二義があるとするのは、 形であるから、この字が亂の初文。亂はこれに乙形えて、そのもつれを解こうとして、なお解きかねる 幺は糸かせにかけてある糸の形、その上下に手を加設けて止める意であるとするが、無理な解釈である。 幺とは幼子、『は境界で、幼子の相争うのを境界を 義とし、音は亂(乱)と同じとする。〔段注〕に、 といい、「一に曰く、理むるなり」とあって理治の 「治むるなり。幺子相亂る。受はこれを治むるなり」れたことを示す。亂(乱)の初文。〔説文〕四下に 衝・亂の二字を混同したものである。 となる。〔説文〕は働と亂の字義を誤って互易して の骨器を用いて解きほぐす意であるから、理治の義 糸の上下に手を加えている形で、糸のも

骸 わずらわしい・みだれる・おこたるラン

と訓し、夤の亦声とする。〔玉篇〕に「惰るなり、たいこととなる。〔説文〕三下に「鬼法しきなり」 あるから、糸のもつれは一そう甚だしく、拾収しが 会意 もつれている糸。支はこれを撃つ形で

〔玉篇〕にも「亂、或いは銜に作る」という。〔書、 も、漢碑には衡に作るものと亂に作るものとがあり、 た。たとえば〔楚辞〕形式の作品に見える「亂辭」て、両者の別が失われ、箘・亂を同字とするに至って、両者の別が失われ、箘・亂を同字とするに至っ のち慣用の上で、乱を紊乱の意に用いるようになっ に「余敢て働さず」のように、衝を乱の意に用いる。

毎年自然に

う紛乱して煩わしさを加える意の字である。するが、亂は骨器で糸を解きおさめる字、黻は一そ亂るるなり」とし、亂(乱)と声義が同じであると

覧 17 【覧】21 みる・ながめ

会意 旧字は覽に作り、監と見とに野見 従う。監は鑑の初文で、鑑に写して見ることを覧という。〔説文〕ハ下に「観るなり」とあり、監の亦声とする。監にはまた濫の声もある。覧も俯して見る意があり、〔楚辞、九歌、雲中君〕とは、雲神の祭祀歌で、「冀州を覽るに餘りあり」とは、大上より俯して覧る意。〔離騒〕に「皇覽て余が初た。皆なり、監と見とにをいる。」は尊貴の人の行為をいう。覧は御覧をの度に探る」は尊貴の人の行為をいう。覧は御覧を本義とする字である。

1 門をしめる木・さえぎる・ふせぐ・みだりに

間声に従うものであったと思われる。 間声に従うものであったと思われる。 形面 声符は柬。柬に練(練)の声があり、また を遮る木をいう。建物のてすりに施したものを闌 た。遮る木をいう。建物のてすりに施したものを闌 だりに」という訓を生ずる。直訴することを闌駕上 だりに」という訓を生ずる。直訴することを闌駕上 だりに」という訓を生ずる。直訴することを闌駕上

温 18 はびこる・みだりに

形面 形声 声符は監。監に濫の声がある。 いの句があるが、この草摘みであった。を定めて神に「うけひ」をする草摘みであった。を定めて神に「うけひ」をする草摘みであった。を定めて神に「うけひ」をする草摘みであった。を定めて神に「うけひ」をする草摘みであった。を定めて神に「うけひ」をする草摘みであった。という。 「ない」 「ない」 「ない」 「おいった。 「ない」 「ない」 「おいった。 「ない」 「おいった。 「ない」 「おいった。 「おいった。」 「いった。」 「いた

19 おこたる・なまける

> の人に似合わぬ語である。懶婦魚という魚があって、 (類)。「説文」二三下に懶を正字 とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を とするが、懶を用いることもある。陶淵明の〔子を

蘭 19 【蘭】21 らん

くて役に立たぬという。

その油は遊戯場で用いると明るいが、紡績場では暗

形声 旧字は繭に作り、闌声。〔説 が〕は水辺の歌垣を歌う詩で、「土と女と 方に萠 を乗る」の〔箋〕に「繭なり」とあり、その を乗る」の〔箋〕に「繭なり」とあり、ふじばかま を乗る」の〔箋〕に「繭なり」とあり、ふじばかま を乗る」の〔箋〕に「繭なり」とあり、ふじばかま を乗る」の〔箋〕に「繭なり」とあり、ふじばかま をでいう。春蘭は一茎一花、蔥繭は一茎数花、心の白 いものは素心蘭、福建の秋蘭を建繭という。蘭は香 気高く、〔楚辞〕に多く歌われている。のち文雅の 士の愛するところとなり、結社や雅会にその名を用 いるものが多い。

19 やぶれぎぬ・ぼろ

(説文]八上に「禍これを襤褸と謂ふ」 形声 声符は監 監に鑑の声がある

のを「襤褸選」とよんだ。

19 みだれる・おさめる

精 受 西麻

〔魏石経〕にみえる古文は、夤に近い形である。そ の字形から、夤の訓が混入したのではないかと思わ れで〔説文〕に「亂るるなり」と訓するのは、古文 また。 ときには蟹夏と対称するときの蟹(蛮)に用いて を文では字を鑾旂(鈴飾りのついた旂)の鑾に用い、 とういう意味の会意であるのか、説くところがない。 れる。縁はもともと誓約に関し、神に誓うためのも する古文の字形は、言を要素とするものでなく、 秋期の〔秦公殷〕にみえる語である。〔説文〕に録 「縁夏」という。「縁旂」は西周器に、「縁夏」は春ばん。 の三義を列し、「言絲に從ふ」と会意に解するが、 のであるはずである。〔説文〕三上に「亂るるなり。 (変)という。攴を加えない縁は、神意にかなうも ものを變といい、また縁に支を加えることを變としませる意の字かと思われる。それで巫女の美しいしませる意の字かと思われる。それで巫女の美しい 一に曰く、 に違うことがない意を示したもので、もとは神を楽 象形 への誓約を示し、それに呪飾をつけて、その誓約 言の両旁に糸飾りを垂れている形。言は神 治まるなり。一に曰く、絶えざるなり」

> (変)によって考えるべきである。 のであり、神を楽しませるためのもので、ときに響能を加えることもあったのであろう。響・蛮の音は古くは近い声であったらしく、宋の景公の名は〔史合人表〕に欒に作る。金文に〔宋公絲鼎〕というものがあって、縁がその本字であり、それが曼とも、また欒とも伝えられている。響鈴の響はその鈴の音を形容する字であろう。〔説文〕はその声によってのがあって、縁の形義は、むしろこれを撃つ形の變わぬ説で、縁の形義は、むしろこれを撃つ形の變のであり、神を楽しませるためのもので、ときに響いたがある。

損 20 さえぎる

欄20【欄】21 テン

る垣根の意であるから、ときには牢閑(おり)の意は欄檻なり」とあって建物のてすり。もとは遮閉すはあうちの木。また一体として欄をあげるが、いまはあうちの木。また一体として欄をあげるが、いまい。 発声 お東 形声 声符は閑。〔説文〕

外を欄外という。 文の部分を黒い線でかこむのを鳥糸欄といい、その文の部分を黒い線でかこむのを鳥糸欄といい、その刷の本

年 20 おおきなかご・ふせご・かたみ

(「筐なり」とあり、竹で編んだ籠をいう。 を変きしめるものである。〔点雅、釈詁〕 なわちふせごのことであるという。上から衣をかけて、香を焚きしめるものである。〔点雅、釈詁〕 藍の声がある。〔説文〕玉上 に「大きなる篝なり」とあり、〔段注〕には薫篝、 をから衣をから、上から衣をから。

21 ラン ただれる・あきらか・やく

(場) であるから、欄房の食という。 関々は光り、「機下の電がまなどに用いる。酒は過ぎると内臓をいためるものまなどに用いる。酒は過ぎると内臓をいためるものまなどに用いる。酒は過ぎると内臓をいためるものまなどに用いる。酒は過ぎると内臓をいためるものであるから、欄房の食という。 のち花の美しく咲き乱れるさまなどに用いる。酒は過ぎると内臓をいためるものであるから、欄房の食という。 関々は光りかがやくだった。 電の主式はその眼爛々として光り、「機下の電がの如し」といわれた。

編1 22 やま・やまなみ

絲

声符は総。〔説文〕四上に「赤

ろう。巒丘とは小山をいう。 大きな切身を臠というが、それと同じ系統の語であした山なみの意とする。若く姿のよい女を變、肉の 山〕に「山の墜きものなり」とあって、うなうねと 縁3 小にして鋭し」とするが、「爾雅、釈 が声 声符は縁。〔説文〕九下に「山

欒 おうち・ザボン・鐘口の角ラン

虎通、墳墓〕には士は槐、庶人は楊柳とする。〔説 文〕の楊は槐の誤り。また朱欒・香欒はザボン。鐘 |楊||というのは、緯書の〔礼緯含文嘉〕の文。「白サードに、天子は松を植ゑ、諸侯は柏、大夫は欒、士はに、天子は樂、士は なり」とあって、「あふち」の木をいう。また「禮 つけていることが多い。 の下辺の両端を欒といい、その左欒に鸞鳳の文様を 声符は縁。〔説文〕六上に「欄に似たるもの

攬は「艦」は「擥」は とる・すべる

ひ、伯奇、夢を食ふ」など、諸凶を食し終ったこと志、中」に、別相氏の大(儺ののち、「攬諸、咎を食清」という。攪諸という神があり、〔後漢書、礼楽清」という。攪諸という神があり、〔後ば てもつ意。全体を総攬することをいう。攬轡は馬できたが、それが、それが、それが、それが、それが、これののとあり、あつめ 出発する。 を奏上する儀礼のあることをしるしている。 志を抱いて地方官に赴くことを「攬轡澄 声符は覽(覧)。〔説文〕一二

ともづな

である。

27

鑾

備に擧はり、靑多し」とあり、当時の人は多くこその状は「高さ五尺、雞頭燕領、蛇頭魚尾、五色

が多い。後漢の太史令蔡衡の〔決疑要注〕によるとずれも想像上の神鳥であるから、その形状には異説ずれも想像上の神鳥であるから、その形状には異説

色多きものは紫鶯、白色多きものは鵠令である。は鳳、青色多きものは鸞、黄色多きものは宛雛、 鶏・雉に似ている。鳳の属に五あり、赤色多きもの 王会解〕の文による。赤色五朵、鶏身赤尾とは、 王のとき、氏・羌鸞鳥を獻ず」とは、[逸周書]り、盛世にあらわれる瑞鳥とされる。また「周の成だり、盛世にあらわれる瑞鳥とされる。また「周の成だ

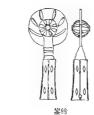
の馬、鑢に八紫あり。鈴は鸞鳥の聲に象る。臀飾するときは則ち敬むなり」という。鑢は馬銜(くつばみ)、四馬の各鑢に両鑾をつける。〔詩、秦風、小み)、四馬の各鑢に両鑾をつける。〔詩、秦風、小なり」とあり、鑾を鑢に属するか、衡に属するかにつり」とあり、響を鑢に属するか、衡に属するかにつり」とあり、響を鑢に属するか、質いでは、一切では、いて両説があるが、済泉や村の西周墓出土の車器が、一切に、八君の乗る車、形声 声符は線。〔説文〕一四上に「八君の乗る車、形声 声符は線。〔説文〕一四上に「八君の乗る車、 端の四方に孔があって によると、鑾は衡の軛の部分から四個出ており、

ある。金文では縁を鑾と蠻(蛮)の字に両用しておるものを和、鑢にあるものを鸞とするが、鑾の意で小雅、蓼瀬。「和鸞儺々たり」の〔伝〕に、軾にあ小雅、蓼瀬。「和鸞儺々たり」の〔伝〕に、軾にあ

ゆる和鸞で鸞鈴、これを車旗馬飾に用いた。〔詩、 多い。金文に鑾旂を賜うことが多くみえるが、いわ れを鳳と誤認したという。鸞鳳と合せていうことが

れることから、のち天子の車駕にのみ用いて、鸞り、まだ字が分化していない。鸞は聖徳の瑞祥とさり、まだ字が分化していない。鸞は聖徳の瑞祥とさ

あろう。 旂の上につけたもので う例が多いが、これは 装着されていたとみら れる。金文に鑾旂を賜



〔詩、大雅、巻阿〕にみえ、その詩には仙境に遊幸 つけることは、西周期の鐘に多くみえており、その例がある。鐘の鼓右のところに鸞鳥らしい文様を 国期以後に至ってみえ、〔逸周書〕や〔楚辞〕にそ するさまが歌われている。鸞鳳を並称することは列 興・鸞駕・鸞旌・鸞輅のようにいう。 鳳凰のことは

續 30 めでたい鳥の名・らんラン

こに和鑾と鸞鳥との関係が示されているようである。

吏。 つかさ・おさめる

美人

は春秋期に入ってからのことで、行政の組織や官職 祭祀官として派遣されたものが、のちに吏治のこと 德あるは、猛火よりも烈し」の語があるのみである。 〔書〕にみえず、〔書、偽古文、胤征〕に「天吏に逸 意に用いるものであろう。吏としての用法は〔詩〕 に任じたのであろう。 て、「厥の工吏を反せしむ」とあるのは百工吏人の 西 周後期の〔師實盤〕に淮夷の叛乱のことを述べまい。 はたば、 意味した。史は事と字形が同じであるが、たとえば う。これに対して事は外祭で、事はもと祭の使者を に祭名としてみえ、祖王を内祭として祭ることをい るが、古い字形では木の枝先の形である。史は卜辞 亦声とする。またその一とは法を意味するとしていいます。 とし、「一に從ひ、史に從ふ」もので、史のなり」とし、「一に從ひ、史に從ふ」もので、史の 化した字である。〔説文〕一上に「人を治むるもの またまつりの使者であるが、吏はそれから声義の分 る形で、事と同形。事はまつりを示す字で、それは の上の枝がわかれ、また小さな吹き流しをつけてい を又(手)でもつ形。 *もその形であるが、史は木 そのころからようやく整えられてきている。 祝禱を収める器である日を木に著け、これ いわゆる吏治が一般化するの

するどい・りえき

刺 彩 料料

利益の意に用いる。 厚生」、〔論語、憲問〕「利を見ては義を思ふ」など、など、など、強制の義に用い、また〔書、大禹謨〕に「利用など鋭利の義に用い、また〔書、だ禹謨〕に「利用 宣六年に「利劍」、〔戦国策、 起のものであろう。〔老子〕第五十三章や〔公羊伝〕 字形を存するものがある。篆文の字形はおそらく後 犂鋤の犂の初文とすべく、漢碑に至ってもなおそのの形。金文の字形はすべてその形であるから、利は [説文]に重文として録するものは称で、犂鋤の犂する意で、鋭利の義は利鎌をいうとみてよい。なお門の形である。字は字形のままに禾を刈って収益と 和は軍門媾和の字で、その従うところの禾も両禾軍*和の省に從ふ」とし、和よりして利をうるとするが、に「銛きなり。刀に從ふ。和して然るのちに利あり。 禾と刀とに従う。禾を刈る意。[説文] 四下 斉策』の 堅箭利金」

木と子とに従う。

〔詩、衛風、木瓜〕に「我に投ずるに木李を以てす」 重文とする好は〔書、椊材〕の梓の古文である。 木に從ひ、子聲」とするも声が合わず、〔説文〕が に「我に投ずるに木李を以てす」 〔説文〕 六上に「李果なり。

> とあり、冷して賞味した。 曹丕の〔呉質に与うる書〕に「朱李を寒水に沈む」 ****。 青房・車下・顔回・令枝などの李があったという。 に、漢の武帝が上林苑を修めたとき、その名果ににもその名がみえる。品種頗る多く、[西京雑記]にもその名がみえる。品種頗る多く、[西京雑記] と投果の俗を歌う。〔礼記、内則〕〔周礼、大司徒〕

里 さと・むら・まちり

これを城市に移して坊里という。〔礼記、祭法〕「大 的な田土には、条里的な区画を施したこともあり、 があり、里を単位としてとり扱っている。 ろう。西周後期の〔大設〕に「余既に大(人名)ろう。西周後期の〔大談〕に「霖既に太に大のであ族的な構成をもち、その官長を里君といったのであ に乃の里を賜ふ」のように、田里を他に転賜する例 社であり、「百姓里君」といわれるように、もと氏 「里君」の誤りである。里を行政単位として五十家 諸尹と里君と百工と」とあって、〔酒誥〕の文は成周に至り、命を出して三事の命を舍く。卿事察ととする説もあるが、周初の〔令秦〕に「明公、朝にとする説もあるが、周初の〔令秦〕に「明公、朝にとする説もあるが、周初の〔令秦〕に「明公、朝にとする説もあるが、周初の〔を〕に明公、明に明公、明に明と同じとあり、この「里居」を〔説文〕の解と同じ とする説、 に在りては、百僚庶尹、これ亞これ族、百工と百姓 するが、声が合わない。〔書、酒誥〕に「越に内服り」とあり、『繋伝』に「一に曰く、土聲なり」と 里社のあるところをいう。〔説文〕「三下に「居るな 田と土とに従う。土は社の初文で、 二十五家とする説などがあるが、里は里

The second secon

梨理

といい、その俗を俚俗という。といい、その俗を俚俗という。、是と族居し、大夫、ひとり社を立つることを得ず。民と族居し、百家以上ならば則ちともに一社を立つ。今時の里社百家以上ならば則ちともに一社を立つ。今時の里社歩、のち三百六十歩とする。城邑に対して田野を里歩、のち三百六十歩とする。城邑に対して田野を里歩、のち三百六十歩とする。城邑に対して田野を理か、のち三百六十歩とする。

メメ 8 あきらか

XXX 会意 二爻に従う。爻は文身の文様 に説文」三下にただ「二爻なり」とするも、殺部に 属する爾・爽はみな女子の文身の象とすべきもので 属する爾・爽はみな女子の文身の象とすべきもので 属する爾・爽はみな女子の文身の象とすべきもので ある。その音は離・麗と同じ語系であり、殺はその 数部に

俚。 いなか・いやしい・たのみ

本り、「広雅、釈言」に「賴なり」と あって、聊頼の義。「漢書、季布伝賛」「その畫、 無し」とあって、聊頼とは依拠する、根拠とする意 無し」とあって、聊頼とは依拠する、根拠とする意 である。しかし字の本義はおそらく俚俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく俚俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便 である。しかし字の本義はおそらく個俗の意で、便

粒10 (在)11 のぞむて

形声 声符は位。金文では立を位の意にも用いて

And the second s

は、擬声的な語である。
は、擬声的な語である。
は、擬声的な語である。
には、字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。〔詩、小雅、宗言」「方いる。字はまた莅に作る。

利 10 まつり

*/ 11 おさめる・ひらく

門教學等

本(大い)なる丸が皇公、京宗(都の本宗)の餘。(よきたまもの)を受く」、「守宮盤」「守宮(人麓(ようたまもの)を受く」、「守宮盤」「守宮(人産)、周師(人名)の盤に對揚す、「大克鼎」「強ないた字を贅に作るものに、「悪侯鼎」「敢て天子の私になった。 に難かなる休養に對揚す」、「大克鼎」「強な場合」という。 だいで、「大克鼎」「などの例がある。また〔叔 向父鼎」「者と強強」に「繁摩」という語があり、子孫の繁栄をいう。 だはなりという語があり、子孫の繁栄をいう。 だはなりという語があり、子孫の繁栄をいう。 だはなりを賜ふこに難かなる休養に對揚す」、「大克鼎」「強ないう。 だいで、「強ない」とないう。 だいで、「ない」とないう。 だいで、「であるが、それは自然の恩恵により、天より賜うものであるが、それは自然の恩恵により、天より賜うものであるが、それは自然の恩恵により、「一、「ない」という語が皇が、「本ない」にない。

梨川なし

唐宋の詩人はことに梨花を愛し、その詩が多い。 き技芸を習わせたので、演劇のことを梨園という。 勝郡の美梨二箱を献じ、また魏の文帝の詔に、真定 陽郡の美梨二箱を献じ、また魏の文帝の詔に、真定 陽郡の美梨二箱を献じ、また魏の文帝の詔に、真定 場面の美梨二箱を献じ、また魏の文帝の詔に、真定 して知られた。曹操が兗州の牧であったとき、山 たとして知られた。曹操が兗州の牧であったとき、山 として知られた。曹操が兗州の牧であったとき、山 という。

理 11 おさめる・すじ・きめ・あや

氏」に「王乃ち玉人をして玉を理めしむ」のように「王乃ち玉人をして玉を理めしむ」のよう、「韓非子、和野」とあり、「韓非子、和野」といい、「東京は、「東京は、「東京は、「東京は、「東京は、「東京は、「東京は、

型は、 へのに / であるところから、人の皮膚を肌理気といい、客観化して道理・天理のように用いる。対して地理の語がある。さらに人に及ぼして情理・という。またすべて条理のあることをいい、天文にという。玉に文理があるところから、人の皮膚を肌理いう。玉に文理があるところから、人の皮膚を肌理

形声 〔説文〕二上に正字を繋に作り、 をすき」をいう。耕すなり」と訓し、黎声の字とする。 字は初に従うて称声としてよく、牛にひかせる「からすき」をいう。耕字条四下にも「犂なり」とあって互訓。孔門の冉耕は字は伯牛、また司馬耕は一名犂で、みな牛耕よりその名字をえている。「国語、智慧」「秦は牛を以て田し、水もて糧を通ず」とみった。春秋以後、犂耕のことは大いに普及している。「国語、香秋以後、犂耕のことは大いに普及している。それまた黎と通用し、黎に黎黒の意

があるので、老人の顔色の衰えたものをいう。〔書、豪学、中〕に「犂老を播棄す」の語がある。またまだら牛をいい、〔論語、雍也〕に「犂牛の子、繋くしてかつ角あらば、用ふること勿からんと欲すと雖も、山川それこれを含てんや」とあり、犠牲に用いうるとする。

利12 りだりばら

リ 犂〔繋〕痢 詈 嫠 裏〔裡〕 嫠く、血痢・気痢・赤痢・白痢・赤白痢・酒痢・五色形声 声符は利。下痢をいう。痢疾にも種類が多

ころである。 痢・暴痢・久痢などがある。概ね湿熱暑毒の致すと

四日 12 ののしる

徴的なものであった。 の器に网をかけ、刀を加えるなど、一般に極めて象 罰することが期待されている。詛盟の方法は、盟誓の歌は、そのことだまによる呪能によって、これを を歌うものであるが、「爾の歌」として作られたこ り」という。この詩もまた、その裏切り者への呪詛 いて「予に匪ずといふと雖も「旣に爾の歌を作れ雅、桑柔」に「覆背して善く詈る」とあり、つづ雅、桑柔」に「覆背して善く詈る」とあり、つづなわれていた習俗であることが知られる。〔詩、大なわれていた習俗であることが知られる。〔詩、大 らいえば、それは罵詈というような単純な行為でなえる字であることに注意している。詈の文字構造か く、古代における詛盟の方法に関していて、古く行 〔詩〕〔書〕にもみえるが、罵は〔史記〕に至ってみ く、その不正を罰する意となる。〔句読〕に、詈は あるから、その神明を絶ち、軽侮を加えるのみでな を遮断する意である。罰は詈にまた刀を加える形でけるのは、亡国の社に屋を加えるのと同じく、神明けるのは、亡国の社に屋を加えるのと同じく、神明 ことを罰するのである。立誓のための祝詞に網をか り」というが、辠人を捕えるのではなく、神を偽る 「罵るなり。网に從ひ、言に從ふ。皋人を网するな。と、これを無効とする意を示す。[説文] セドにって、これを無効とする意を示す。[説文] セドに の器に网(網)をかけるのは、その誓約に虚偽があ

秋反 13 おさめる・ひく

月費湯

(たすける)・侑(すすめる)の意がある。(だすける)・侑(すすめる)の意がある。又には沿で、嫠もその声義を承ける字であろう。又には沿で、嫠もその声義を承ける字であろう。文には沿れい。ト文・金文にその字があり、金文では人名にない。 芦鹿 声符は 巻。 芦に穀を治める意がある。 〔説形声 声符は 巻。 芦に穀を治める意がある。 〔説形声 声符は 巻。 芦に穀を治める意がある。 〔説

裏13 「裡」1 りち・うら

寒里會。寒

行という官があった。字はまた裡に作る。 でいう。〔詩、邶風、緑衣〕「綠衣黃裏」のように、衣の裏地をいう。金文の車服の賜与に「虎宮薫裏」のように吐を用いる。私行を裏といい、唐に監察裏のように里を用いる。私行を裏といい、唐に監察裏のように里を用いる。私行を裏といい、唐に監察裏のように里を用いる。私行を裏といい、唐に監察裏のように、衣の真なり」と形声 声符は里。〔説文〕ハ上に「衣の內なり」と形声 声符は里。〔説文〕ハ上に「衣の內なり」と形声 声符は里。〔説文〕ハ上に「衣の內なり」と

巻14 やもな

り」とみえる。〔左伝〕昭十九年に「己嫠婦と爲に「夫無きなり」、〔玉篇〕に「寡婦なに「疾婦な 形声 声符は弊。〔説文新附〕二下

リ 貍[狸] 履[屦] 氂 犛 璃 罹 網

む」の句がある。

む」の句がある。

ないが、
いいである。

ないが、
いいである。

ないが、
いいである。
はいのである。
ないである。
ないである。
ないである。

24 (狸)10 のねこ・たぬき・うずめる

を養には「貍に似たり」という。貍は野猫。また狸ともいい、字を狸に作ることがある。猫と狸とはよともいい、字を狸に作ることがある。猫と狸とはよともいい、字を狸に作ることがある。猫と狸とはよとく人を迷わすものらしく、〔太平広記〕や〔太平よく人を迷わすものらしく、〔太平広記〕や〔太平よく人を迷わすものらしく、〔太平広記〕や〔太平など通用し、埋牲の意に用いる。

履ら「腰」らくつ・ふむ・おこない

る。古く舞楽に大夏・昭夏というのは、もと頭の字形を用いるものがある。 「大殿」は土を履む儀礼をいう。いわゆる践土の礼であるた。その足に舟を加えているのは魘の形で、の賜へる里を頼む」とあって、新たに所領となったの賜へる里を頼む」とあって、新たに所領となったの賜へる里を頼む」とあって、新たに所領となったの賜へる里を頼む」とあって、新たに所領となった土地を履むことは儀礼として重要な意味をもち、「易、履むことは儀礼として重要な意味をもち、「易、履むことは儀礼として重要な意味をもち、「易、履むことは儀礼として重要な意味をもち、「常」のように、位に即くことをいうのは、もと頭の字形を用いるものがある。

整 15 りしのお (バウ)

を 15 り・ボウ(バウ)

璃 15 たまの名・るり

を玻璃版という。
を玻璃版という。
を玻璃版という。(漢書、西域伝)に「璧琉璃」の名がみえて域の大秦国(ローマ帝国)に十種のものを産すると域。大秦国(ローマ帝国)に十種のものを産するとが。だれ、一方のは、 一方のは、 一方のは

16 うれえる・かかる・あう

形声 声符は羅の省文。〔説文新附〕 形声 声符は羅の省文。〔説文新附〕 だ詳ならず」とするが、際に捕われた鳥を心情化しだ詳ならず」とするが、際に捕われた鳥を心情化しだ詳ならず」とするが、際に捕われた鳥を心情化した字で、羅にかかって憂える意。それで災厄に逢うた字で、羅にかかって優える意。それで災厄に逢うた字で、羅にかかっ。

名 17 くつのいとかざり・ひざかけ・つなぐ

大きないとから、ことではまた橋と通用し、「玉を吹きる。また香嚢を佩びること、すなわち香纓をいまする。また香嚢を佩びること、すなわち香纓をいまする。また香嚢を佩びること、すなわち香纓をいまたこれを解くということに、泉徴的な意味がび、またこれを解くということに、泉徴的な意味がび、またこれを解くということに、泉徴的な意味がび、またこれを解くということに、泉徴的な意味がが、またこれを解くということに、泉徴的な意味がが、またこれを解くということに、泉徴的な意味がが、またこれを解くということに、泉徴的な意味がが、またこれを解くということに、泉徴的な意味が、電機のとき、女の服の飾り、温している形を示す字で、それを組にが発音に続きれている形を示す字で、それを組にが発音に続きれている形を示す字で、それを組にが発音に続きれている形を示す字で、それを組にが発音に表する。裏は虫がつながる

いう。紐飾りには象徴的な意味があるとされた。纓帯を給といい、結んだ帯の余りを垂れるのを褵と「袷を施し、襖を結び、父母の戒めを申ぬ」という。篇〕に「衣帶なり」という。〔後漢書、馬援伝〕に篇〕に「衣帶なり」という。〔後漢書、馬援伝〕に

整18 おさめる・さいわい

静 黃鹭 電影 養

鯉 18 こり

聖。聖

野家、字は祝魚。また孔子九世の後にも、名は鮒、字は不魚というのに対して、鮒は叔魚という。 「大野なり」とあって互訓。鬣鮪の属は、 なりがそのような早年のとき、魯侯から賜与を受けれる。 ではり出て竜門を超え、竜となると伝えられる。 なり分であったかどうか、甚だ疑問である。〔論語、 ではり出て竜門を超え、竜となると伝えられる。 なりがそのような早年のとき、魯侯から賜与を受けたことをしるしており、庭訓のことをまた鯉庭という。 とをしるしており、庭訓のことをまた鯉庭というが、 大野で角というのに対して、鮒は叔魚という。音の はずり、字は叔魚。また孔子九世の後にも、名は鮒、 字は子魚というものがある。〔古楽府〕に、双鯉魚 の中に書信を託することを歌うものがあり、書信を 聖書、また鯉素という。

第 19 はなす・たがう・かかる・うぐいす

形声 声符は离。〔説文〕四上に「雕りなり、は離を離黄と解するが、字は離別・離去のまで、これを離去することを離れる。(ときは、桑摘みのはじまるときであった。鳴ける倉庚あり。三月、妾子始めて蠶す」とあって、鳴ける倉庚あり。三月、妾子始めて蠶す」とあって、鳴ける倉庚あり。三月、妾子始めて蠶す」とあって、鳴ける倉庚あり。三月、妾子始めて蠶す」とあって、常り、は離を離黄と解するが、字は離別・離去の表に用いる。离に黐の声があり、離は黐と住、とり、

ものが多い。離は罹の意である。をのが多い。離は罹の意である。離は黐と性に従い、は螭、離にまたその声がある。離は黐と性に従い、は螭、離にまたその声がある。離は黐と住に従い、は螭、離にまたその声がある。離は黐と住に従い、という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離という。〔史記、周本紀〕「豺の如く離の如し」の離れるという。

20 くろいイ

変2 つづく・つらなる

震 智女长子

びつづくさまをいう。鹿の生態より出た字である。『説文』ニ下に「行くこと邏々たるなり」とある。『説文』ニ下に「行くこと邏々たるなり」とある。『説文』ニ下に「行くこと邏々たるなり」と形声 声符は麗。麗にならぶ・つづくものの意が

25 まがき

かきねとしてめぐらしたものを籬牆・籬落という。こと離々たるなり」とし、粗いまがきの意とする。こと離々たるなり」とし、粗いまがきの意とする。できれているなり。柴竹を以てこれを作る。硫きれる。「雑なり。柴竹を以てこれを作る。硫きれる。「神なんないます。

29 くろうま

のち華清池の温泉をもって知られる。 たところ、秦の始皇帝がここに大宮殿阿房を築いた。 の頷下にある珠を驪珠という。驪山はもと驪戎のい 魯祖 また驪竜のように、馬の他にも用いる。驪竜 駒」に「驪たるあり黃たるあり」とみ 「馬の深き黑色のものなり」という。 形声 声符は麗。〔説文〕一〇上に

鸝 うぐいす

黄鸝は黄鳥・倉黄がその古名、宋玉〔高唐の賦〕 字とするが、離は離去をその原義とする字であろう。 鳥・黄離・倉庚という。〔説文〕四上は離をその本 に至って、 きできます。黄鸝は朝鮮うぐいす。また黄声符は麗。黄鸝は朝鮮うぐいす。また黄 はじめて黄鸝の名がみえる。

垄 8 大きな土くれリク・ロク

幸梁(地名)なり」とし、「繁伝」には「讀みて速笑声とする。また「讀みて逐の若くす。一に曰く、空々たるなり」とあって、土塊の相累なる形とし、空々たるなり」とあって、土塊の相累なる形とし、 突は中部一下に「菌哭、地蕈。田中に叢生す」とあの若くす」とあり、音義ともにかなりの混乱がある。 象形 のようである。〔説文〕一三下に「土塊 六を重ねた形。六は幕舎の象

> 聖所を凌轢することをいう。宍はおそらく神霊を き字である。 迎えるため、神梯の前に設ける幕舎の形で、これを り」とあって、夌と関係があり、夌は凌越の字で、 **料に從ふ。 料は高なり。** 形があり、陸一四下の籀文もその三共の形に従うて は屋上の鰹木の形、坴はそれを重ねた繁文とみるべ いる。また夌字条五下に「越ゆるなり。 って菌草の類とし、その籀文に三吳を重ねている字 一に曰く、 奏辱 (凌遅) な タに 從ひ、

陸 11 おか・りくリク・ロク

畻

る。土は土主にして社。また両盲の間に宍をおく形前に両宍をおき、その下にまた土をしるすものがあ **坴々たるさまであるから、陸とは土があって石のな** 形声 る。千木や鰹木をおくわが国の神社建築に似たとこのものもあって、それが神の宿るべき建物の形であ のところに埋蔵されており、山上の祭祀が行なわれ 寧郷の〔大鐃〕[四羊懐方尊] なども、山中の高平は、神を迎え祀るに適したところで、たとえば湖南は、神を迎え祀るに適したところで、たとえば湖南いところであるとする。およそ山上の高平のところいところであるとする。およそ山上の高平のところ たことを示す遺器である。金文の図象には、神梯の り」とし、坴声とする。〔段注〕に、 とを示す字であろう。〔説文〕「四下に「高平の地な の前にその幕舎を設け、高平の地で神を迎え祀るこ 声符は壺。幸は神を迎える幕舎の形。 坴は土塊の 神梯

> がある。陸離は双声、 伝〕に「俗に陸沈し、世を金馬門に避く」という語 〔荘子、則陽〕にその語がみえる。〔史記、東方朔 思われる。大賢が世に隠れることを陸沈と 陸はこの山人取氷の古儀に関するところのある字と の下文に、いまその古礼は失われたとしているが、 そのため坴のように二つの建物、あるいは蠡のよう 道とするものであるが、その観測所をいうもので、 ある。〔杜預注〕に「陸は道なり」とは、日の通る 出入の時期を定めるもので、いわば日景の観測所で という。北陸・西陸は、そこで日景を観測し、氷の ってこれを祓い、出すときは羹を献じてこれを啓く蔵するときにはまず司寒の神に祀り、桃瓠棘ををもしまるときにはまず司寒の神に祀り、桃瓠棘矢をも 氷を蔵し、 儀礼のことがしるされている。日が北陸にあるとき に三尖を設けて観測に便したものであろう。〔左伝〕 ろがあって、注意される。[左伝] 昭四年に蔵氷の 四月立夏、 日が西陸にあるとき氷を出す 光彩のあるさまをいう。

僇 13 はじ・ころすりク

辱・僇死のように用いる。 なり」とするが、いずれもその用例はない。 行像々たるなり」とあり、また「一に曰く、且く その字義も近い。「説文」八上に「癡的形声 声符は寥。寥に戮の声があり

戮 13 あわせる

「力を勠すとは、力を丼せるなり」と形声 声符は愛。〔説文〕 一三下に

あった。戮と通用することがある。 り」のように、もと農耕に協力することをいう語で 「方春、農桑興る。百姓力を勠せ、自ら盡すの時な 協同の意。 力はすき、「漢書、 元が帝紀」に

大と一とに従う。一はその立つところの位

 $\stackrel{\star}{\Delta}$

桂13 [移]16 わりせク

「魯頌、闕宮」にその名がみえる。 でいる。これである。「詩、豳風、七月」、またするわせの品種のもの。「詩、ぬべ、後にうえて先に熟上に「疾く孰するなり」とあり、後にうえて先に熟上に「狭くいい 欄 穆に作り、翏声。[説文] 七 形声 声符は幸。字はまた

書に位を立に作る」、また「鄭司農注」に「立は讀小、宗伯」「建國の神位を掌る」の「鄭注」に「故い。」

立の原音は、その両音を含むものであろう。〔周礼・立の原音は、その両音を含むものであろう。〔周礼・に立つ」、また「立(位)に卽く」と両義に用いる。 り」とあり、一定のところに立つ意。金文に「中廷 という名詞に用いる。〔説文〕一〇下に「住まるな 置を示す。それで金文には、立つという動詞と、位

戮 15 ころす・つみ・はずかしめるリク

ずれも声義の通ずる字で、戮に僇・勠の意を含むと 燕策〕「父母家族、 みるべきある。 て僇すことをいう。戮辱は僇辱、戮力は勠力、 をいう。〔書、甘誓〕「命を用ひざるものは社に戮せという。〔書、ケサザタタ。を用ひざるものは社に戮せこと一二下に「殺すなり」とあり、罪によって殺すこと え、〔湯誓〕「予は則ち汝を孥戮せん」、〔戦国策、ん」、〔湯誓〕「予は則ち汝を孥戮せん」、〔戦国策、 声符は翏。翏に憀・勠の声がある。〔説文〕 みな戮沒せらる」とあり、動 せ

律。 である。

ちながら寢ねて顚僵す」などは、

みな副詞の用法

どころに曹無傷を殺す」、欧陽脩〔蒼蠅の賦〕「立 ことを立徳・立命という。〔史記、項羽本紀〕「立ち ることを立言・立論、人格・信条の基調を確立する 立法・立制、時期のはじめを立春、また意見を述べ 位の義に用いている。ものをはじめることを立案・

声があるのと同じで、 るのと同じで、喩母と来母の間に、そのよう声符は書。書に律声があるのは、立に位の

秦の〔秦山碑〕に「皇帝、立に臨む」と、立をなお差、事に立むの歳」のようにいい、涖の義に用いる。書に位を泄字と爲す」とみえる。斉器の紀年に「敞書に位を泄字と爲す」とみえる。斉器の紀年に「敞肆師〕「牲を社に用ひ、則ち位を爲す」の注に「故肆師」「姓を社に用ひ、則ち位を爲す」という。また涖にも作り、[周礼、んで位と爲す」という。また涖にも作り、[周礼、んで位と爲す」という。また涖にも作り、[周礼、 令」という語が、そのまま呪語となった。 加えた。のちには呪祝の言の終りにいう「急々如律書の末文などに、「律令の如くせよ」のような語を の意とする。律令の制は秦漢以後のことであり、詔 刑律・律令の意に用いる。先秦の文には多く律呂 ら、「爾雅、釈詁]に「法なり、常なり」と訓し、ら、「爾雅、釈詁]に「法なり、常なり」と訓し、である。律度量衡はものの基本をなすものであるかである。 す所以なり」とあって、これは律呂の制をいうものとする。〔国語、周語〕に「律は均を立て、度を出えて、度を出えて、度を出えて、度を出えて、度を出えて、度を出えて、近しく布くなり」とし、一律に公布する意 な関係をもつものがあったと考えられる。〔説文〕

栗 くり・きびしい・つつしむリツ

南 最級 李

0

とするものはいがの形。〔魏石経〕の篆文も西に従 は、誤った字形解釈によって附会した説で、西の形 を西に従うものとし、西方戦栗の意があるとするの 日く、民をして戦栗せしむ」とあるのによるが、字 八佾〕に社樹のことを論じて、「周人は栗を以てす。」という。戦栗の語は、〔論語、西方に至りて戦栗す」という。戦栗の語は、〔論語、西方に至りて戦栗す」という。戦栗の語は、〔論語、 「古文栗、西に從ひ二卤に從ふ。徐巡の説に、木、 實下垂す。 である。〔説文〕t上に「木なり。木に從ひてそのている。鹵は栗のいがの形で、木と一体をなす字形 たらしく、[石鼓文、作原石]の字は、三肉に従う 形は二肉、充力の字形はもと三肉に従うものであっ 木の上に歯形の実をつけている形。古文の 故に鹵に從ふ」として古文の字形をあげ、

リツ

<u>1/</u> たつ・のぞむ・つくてリツ・リュウ(リフ)

稑[穋] 戮 ij ý 立 律 栗

りャク 掠略[畧]

の厳寒をいい、字はまた凓烈に作る。借。〔詩、豳風、七月〕「二の日栗烈」とは、冬二月うており、なお誤った形による。戦栗の意は慄の仮

実 13 おそれる・おののく・ふるえる

する。〔書、湯誥〕に「慄々として危懼し、まさに[広雅、釈言] に「戰くなり」とあり、戦慄の意と形声 声符は栗。〔爾雅、釈詁〕に「懼るるなり」、 深淵に隕ちんとするが若し」とみえる。栗・凓の字 を仮借することがある。

葎 かなむぐら

なる。みな方言なり」という。わが国で八重葎とい えば、荒廃した家をいう。

リャク

掠 かすめる・はらう・むちうつりゃク

その聚を輸掠す」とみえる。また鞭うつことを掠っ なり」とあり、〔左伝〕昭二十年「民力を斬刈 形声 ある。〔説文新附〕一二上に「奪取する 声符は京。京に涼・諒の声が

州に流す」という。のち罪によって遠方に移すこと その初義でなく、流屍の意よりすでに転じた用法で 小・弁〕「彼の舟の流るるに譬ふ」などは、いずれもい。〔詩、大雅、常武〕「川の流るるが如し」、〔小雅、い。〔詩、大雅、常武〕「川の流るるが如し」、〔小雅、 は「石鼓文、臨雨石」にみえ、籀文の字形としてよは「石鼓文、臨雨石」にみえ、籀文の字形ともでいるもの、泛は仰ぐ形のものをいう。流の正案の字形 遊旒・流蘇(吹き流しの類)を著けることが多い。歩き、神遊びに発する。中国の祭事に用いる旗には、遊幸、神遊びに発する。中国の祭事に用いる旗には、 あって、風流となる。わが国では風流は仮装して群 移の意となる。上に風行の風あり、下に流変の流が 数義を列するが、もと流屍の意より水流・流派・流 を流刑という。流の用義は甚だ多く、字書には二十 をしるしており、それは邪悪の神を四極に封じて、 べきであろう。〔書、舜典〕に四凶を流竄すること て養否を定めるような俗があったことをも、考慮す あるいは生子を一たび水に投じて、その浮沈によっ ある。流屍の字は、古く初生児を水に投棄する俗、 際に流屍多く、池・泛もまた流屍の形で、氾は伏す 舞する祭事の芸能を意味するが、その起原は神々の 水の間にあるのは流屍の象である。古代には氾濫の また曲梁 して汗靑を照らさん」の句がある。
文字、祥の「零丁洋を過ぐるの詩」に「丹心を留取状では、ない、ない、ないがない。」に「丹心を留取れていい、注意することを留意・留心という。 滞の意であるから、 邶風、廃丘〕「流離の子」を〔爾雅、釈鳥〕に「留とは同声。その声義の間にも関係があろう。〔詩、とは同声。 えたものである。すなわち灌漑用の溜池の形で、溜るものの両旁に溜り水の形を加え、その旁に田をそ 金文に「留鐘」があり、その字形は川流とみられ 字形を説くもので、字の初義をえたものとしがたい は門を閉づるの象なり」とするが、十二支によって 萬物已に出づ。酉を秋門と爲す。萬物已に入る。一 「丣、古文の酉なり。卵に從ふ。卵を春門と爲す。 声が合わない。丣は霄一四下の古文で、〔説文〕に文〕一三下に「止まるなり」と訓し、卯声とするが、 離」に作り、染色の流黄をまた留黄という。留は留 の初文。留止・滞留の義はその転義である。流と留 けるものである。留止の意より、待つことを留待・ 、(やな)を蟹という。みなその声義を承めるから、寒腫(はれもの)を瘤といい、

留10 とどまる・のこる・ひさしいリュウ(リウ)・ル そこに神が宿るとされたのであろう。

竜 10 【龍】16 けっけゅう

盟

中

西門界新しま

象形

頭に辛字形の冠飾をつけた蛇身の獣の形。

会意 に水が停蓄することから、 |野と田とに従う。 野は溜り水の象形。 田地 留滞の意となる。「説

明、能く細にして能く巨、能く短にして能く長。 〔説文〕一下に「鱗蟲の長なり。能く幽にして能く

春

リュウ

留竜〔龍〕

リュウ

下に筆をはらうように伸ばすことを掠という。 笞、林木を伐るを「林を掠ふ」という。書法で、左

略1[暑]1 いとなむ・はかりごと・とる・ほぼリャク

85 明

貫〕「嵎夷旣に略す」とは、その地を服し、その境、1三下に「土地を經略するなり」とあり、〔書、禹。 形声 界を定める意である。略に進行・収取・略治などの 意があり、またその計謀を策略・方略という。「左 伝〕隠五年「地を略す」の〔杜注〕に「略とは總攝 「武王・成王の伐ちたる商圖を省し、出でて東國の略」とはその版図をいう。金文ならば、〔宜侯失殷〕 を定めるのが本義である。詳・略と相対称する語で、 巡行するの名なり」とあって、土地を按行し、境界 展に伴って用いられ、〔左伝〕荘二十一年「武公の ほぼその大綱を定める意がある。略は土地経済の発 圖を省す」のように、図というところである。 農地 治・智・法・奪などの訓がある。〔詩、周頌、載謀の字となるのと同じである。それより転じて、 の境界を画定することが必要となって、略の字が生 れたのであろう。略が計略の字となるのは、図が図 絮・䂮の仮借字である。 文となった。 文となった。 である。 は起頭のするどい農具をいい、 声符は各。各に洛・絡の声がある。「説文」

リュウ

やなぎ リュウ (リウ)

[説文] 六上に「小楊なり」とあり、楊柳の小茎小 粣 る。[本草]の李時珍説に「柳枝弱くして垂流す。東方未明」に「柳を折りて圃に變す」と歌われてい葉がいるもの。柔らかい枝であるので、〔詩、斉風、葉なるもの。柔らかい枝であるので、〔詩、斉風、葉 作られた。 えるのは六朝期のころからで、楊柳詞の類が多くえたので、軍営を柳営という。柳条柳花が詩文にみ 漢の周亜父は咸陽西南の細柳に陣して名将の名をないこれを柳と謂ふ」と流との同声によって説く。 声符は卵。留の省文に従うものであろう。 桃

流 ながれる・ゆく・なかまりュウ(リウ)

会意としての造字法であるが、のち流の字形が用い 充は突忽なり」とし、重文として流の字形を録する。 ある。〔説文〕一下に「水行くなり。林充に從ふ。 女。 の或る体にして突出の字とするが、 られている。字は充に従い、充は「説文」「四下に **沝は〔説文〕ニ下に「二水なり。闕」としでその** 声を欠き、また夼の本字広に「順ならずして忽ち出 **而はその頭毛の形を加えたものであるが、これが二** づるなり。到子に從ふ」とするが、広は生子の象。 正字は二水の間に充(流屍)を加えた形で、 流屍の形で

器の文様にみえる虺竜文の竜形に似ており、それト文・金文に襲の字形がみえるが、その竜形は青銅いて、すでに胚胎するものであることが知られる。 れ、たとえば羌系の共工氏、夏系の鯀・禹、南方古い伝承を伝えていたのであろう。竜は洪水神とさ 范氏となった。蔡墨は史墨ともいわれる巫史の家で 族は東夷におり、のち南陽の魯県に移り、夏后の世龍氏」「御龍氏」の伝承について語っている。その龍氏」「御龍氏」の伝承について語っている。そのいかにいるのあらわれた話がみえ、蔡墨が「紫 用いる呪的儀礼があったことが知られる。〔左伝〕 異例のものである。卜文に竜形に従うものに竜・の条の文は長文で、かつ韻語を用いており、本文中 でない。後世の図様をもっていえば、竜と交わる亀 のうち、東方の青竜は竜、南方の朱雀は鳳、 て、呪的な儀礼に用いられたものであろう。また、뾌 り、四霊の観念がこれらの字形の成立した当時にお にもみられるもので、霊獣たることを示すものであ 冠飾をつけている。この種の冠飾は鳳・虎の卜文形 るとする。字は蛇身の獣の象形で、頭上に辛字形の の字は肉に従い、旁は肉飛の形。音は童の省声であ 分にして天に登り、 という考えかたがあったようである。〔説文〕のこ の白虎は虎で、 に作る字があり、兄は祝禱する意の字である。四霊 を両手で奉ずる形であるから、呪霊のあるものとし つけた字形であるが、ひとり北方玄鼉の形は明らか につかえて河漢の二竜を畜うたが、また晋に入って (鄭)・龐などがあり、竜を神霊のものとして ト文に竜・鳳・虎はいずれも冠飾を 秋分にして淵に潛む」とし、 西方

琉笠粒隆[隆]硫旒 溜(澑)

をかくした捲尾の竜の形にかかれている。竜の昇天 神の普遍的な形態であった。卜文では雲も雲中に頭 系の女媧も、みな竜形の神とされており、それが水 *旬、も、竜が珠を抱く形にしるされている。虹 蜆という考えかたがあったのであろう。十日を言え **観貞ふ。妣庚は王の疾に襲するか」のように、襲は紀≥。ゆきまたまた。**なら、青は呪霊をもつもので、卜辞に「乙未。卜して は弓形の両端に両頭をもつ竜の形であらわされてい える。その古代的な信仰は、殷周以後にも巫史にそれで卜辞にはしばしば「襲あるか」という語がみ る古代のシャーマニズム的な信仰に起原している。 その形にかかれる。竜の観念は、その呪霊を駆使す て、他の鳳形の夔鳳文、虎形の饕餮文とともに盛行よって伝えられ、青銅器時代には、竜は虺竜文とし 王孫闛が玉をもって祈り、水阜を免れたという話を 早を禱る玉なり。龍文」とあり、〔国語、楚語〕に、 のせている。 こた。竜文を刻した玉は瓏。〔説文〕一上に「瓏は

琉 玉の名・るりリュウ(リウ)

でいた。 「漢書」には「流離」としるし、火斉珠をいう。古漢書」には「流離」としるし、火斉珠をいう。古形声 声符は流。流は流の省文。琉璃は玉の名。 古代のガラスをいうことがある。琉球は〔隋書〕に 字を用いる。琉璃廠は清代工部に属する陶器の製作 「流求」に作る。のち仏典で梵語の音訳語に、この く大秦国(ローマ)からもたらされたものといい、 所で、いま北京の地名として残され、書肆や文房の 町として知られている。

笠 かさ リュウ (リフ)

並 小雅、無羊」には牧人、〔周頌、良耜〕には農夫が簪は雨を避け、笠は暑をふせぐものであった。〔詩、 柄のある大きな笠である。笠は頭上に載せるもの。 笠。穀という。 これを用いている。車上に立てる大きなものを、 の柄無きものなり」とする。簦は簦蓋、 形声 声符は立。〔説文〕五上に「簦

粒 つぶ (リフ)

声符は立。米粒をい

がきの意とする。〔書、益稷〕、『ふ民乃ち粒す』は、また椹字条に「米を以て羹を和するなり」と、こなまたは、『よりないない。 まさに粒に作るべし」という。下句に「我に來生のるは、爾の極に醒ざるは莫し」の〔箋〕に「立は粒食すること。〔詩、周頌、思文〕「我が烝民を立れ食すること。〔詩、周頌、思文〕「我が烝民を立 (麰)を貽る」とあるので、〔益稷〕の「乃ち粒す」 のように、立を粒と読むのがよい。 媍 う。「説文」七上に「糂なり」、 形声

隆11 [隆]12 さかん・たかい・おおきいリュウ

ことを示す形で、神をそこに迎える意である。〔説 前に地主を祀る土主をおき、夂はそこに神霊の降る 文」六下に「豐大なり。生に從ひ、降聲」とするが 声が合わない。隆・豊は畳韻の訓である。〔尚書大 会意 字の初形は、鼻と欠と土とに

としているが、その声とはしがたい。また字が生に 伝」「隆谷」の「鄭注」に、字を降の音で読むべし 字の立意をえていよう。すなわち神梯の前に土主を にも王・丰・正などの形に従う字がある。〔王莽量〕 従うとすることも古字の証すべきものがなく、 霊威の豊盛なることを隆という。ゆえに隆盛・隆 の「長壽隆崇」の隆は土に従うており、それが最も 高・隆興・隆大の意となる。 おき、そこに神霊の降下するのを迎える意で、その

硫 いおう リュウ (リウ)

る。李時珍の説に、「性質通流、色膩中黃」である[本草]に黄牙・陽侯・将軍などの異名をあげてい 形声 の脂を加えて傷薬の軟膏とする。 硫黄と名づけるという。硫黄木はつけ木。豚 声符は充。充は流の省文。硫黄をいう。

旒 はたあし・たまだれりュウ(リウ)

類をいう。天子の旗には十二旒をつけた。〔礼記、類をいう。天子の旗には十二旒をつけた。〔礼記、 とあり、はたあし、旗に垂らせるきれ、吹き流しの 玉 藻〕に「天子の玉藻、十有二旒」とあり、冠冕 には五彩のたまだれを垂らす。これを冕旒という。

溜 [潘] [15 たまりみず・しりュウ(リウ) したたり・はやせ

酃 貯水で溜の初文。〔説文〕二上に鬱林形声 声符は留。留は灌漑のための

することを溜息という。 宣二年「三たび進みて溜に及ぶ」は「鬱。雨水のおて廣門に入る」とみえるものである。また〔左伝〕 ちる所をいう。胃にもたれてつかえるものを溜飲、 れた水で、〔晏子春秋、雑上〕に「蚤蔵、溜水至り 郡の川の名とするが、本義は溜水。もとは洪水で溢

福」 ざくろ (リウ)

その色は紅く、紅裙をまた榴裙という。 「兼名苑にいふ。若榴、石榴なり」とみえ、佐久路 に飛ぶ砲弾を榴霰弾という。一に丹若というように という。石榴がはじくように多数の弾が一時に四方 と訓する。ざくろには実多く、子の多いことを榴房 声符は留。石榴をいう。〔倭名類聚抄〕に

劉 ころす・かつ・めぐるりュウ(リウ)

「則ち商の紂王を咸劉す」とみえる。字は劉に従う「則ち商の紂王を咸劉す」とみえる。字は劉に従う「盡く劉すこと無かれ」、〔逸周書、世俘解〕に「盡く劉教を本義とする字である。〔書、般奏、上〕に劉殺を本義とする字である。〔書、般奏 る。〔逸周書〕にいう「咸劉」とは、のちの凌遅刑て耶声。釗には刑る意があり、耶には両分の意があ 編照」の句があり、注に「回觀するなり。 なまない。 とばしい字であるが、「淮南子、原道訓」に「劉覧とばしい字であるが、「淮南子、原道訓」に「劉覧 の訓義を列し、〔方言〕には「殺すなり」とあり、 のような惨殺のしかたをいうものであろう。訓義の 形声 〔爾雅、釈詁〕に「殺す・克つ・陳ぬ」だが、 声符はず。 呼は留の省文。 声符は卵。卵は留の 劉は讀

> ねくめぐる意がある。 いう。 むこと留連の留にして、劉氏の劉に非ざるなり」と また留声に従う字がある。留は溜水で、あま

瘤 こぶ(リウ)

という。肉の塊状となって消えないものを瘤という。 に「流なり。血流聚まりて生ずる所の瘤腫なり」と下に「腫れものなり」とあり、「釈名、釈疾病」と下に「腫れものなり」とあり、「釈名、釈疾病」という。「説文」 形声 声符は留。留は溜り水の意で、

雷15 うえ・うけ リュウ (リウ)

雷 則ち漁せず。時に食ひて珍に力めず」、民利を侵す に「彼に遺棄あり、此に滯穗あり、これ寡婦の利なが、いかにも思いつきである。〔詩、小雅、だ町が、いかにも思いつきである。〔詩、小雅、だ式、筍となり、また嫠婦の音を合せると歯となるとする い。郝懿行の〔爾雅義疏〕に、寡婦の音を合せると婦)の笱」とよんでいるが、その理由が明らかでな婦)の また「故に君子は、仕へては則ち稼せず、田しては **曰く、君子は利を盡くさずして、民に遺す」といい** れていた。〔礼記、坊記〕にこの詩句を引いて、「子り」とあって、落穂拾いは寡婦の特権として認めら 魚をとるもの。〔爾雅、釈器〕にこれを「嫠婦〔寡 り」とする。山川の水を堰き、「うえ」をしかけての筍、魚の留まる所なり。 閑留に従ふ。留は亦聲な ける「うえ」をいう。〔説文〕七下に「曲梁。寡婦いる「うえ」をいう。〔説文〕七下に「曲梁。寡婦いる」といる。 形声 声符は留。留は水溜りの意。

> が漢代にまで残されていたとすれば、その古代的な筍」とよばれるものであろう。そしてそのような語 一般くこと世れ 我が躬すら関れられざるに 我が後くこと世れ 我が躬すら関れられてるに 我が答を的な表現として「我が梁に逝くこと母れ 我が符を願」はいずれも棄婦の詩であるが、棄婦の詩の定型 ことがないという。〔詩、邶風、谷風〕〔小雅、 珍重とすべきである。 性という問題もあるかと思われるが、なお詳らかに 習俗は、慣習としてなお地方に伝えられていたもの を恤むに遑あらんや」という詩句がある。その梁に 筍」「嫠婦の筍」のような語が残されていることは、 と思われる。なおその習俗の起原については魚と女 されており、それがいわゆる「寡婦の笱」「嫠婦の おいても、その婦人の特別な遺留分として権利が残 しがたい。ともかく〔説文〕や〔爾雅〕に「寡婦の しかけた筍を発くことなかれとは、それは離婚後に

窿 17 ゆみなりの天井・ドリュウ

形声 神を迎えるためのものであろう。 やや高い円丘の形をしたものであろう。穹窿はド る形として夕をしるす。土主はのちの社。 その初形は、神梯の前に土主をおき、そこに神の降 ーム形の天井。そのような天井をもつ建物も、 声符は隆(隆)。隆は神霊の降下する円丘。 おそらく もと

瀏 18 きよい・ふかい・ながれるリュウ (リウ)

「流清き兒なり」とし、〔詩、鄭風、溱水形声 声符は劉。〔説文〕 - 上に

瀏

リュウ

榴(權)

劉 瘤

清]「瀏としてそれ清し」の句を引く。〔玉篇〕には、"激"は目もとの涼しいさま、"劉元は清く明らま、瀏院は目もとの涼しいさま、"劉元は清く明られなさま。陸機の〔文賦〕に「詩は情に縁りて綺靡、此は物に體して瀏亮」とみえる。『夢声の》を・響・懸して劉亮」とみえる。『湊市』の瀏を「文號、とも声義の近い字である。[湊浦〕の瀏を「文號、とも声義の近い字である。[湊浦〕の瀏を「文號、とも声義の近い字である。[湊浦〕の瀏を「文號、中部試、注」に引く〔韓詩〕に漻に作り、「淸き統、中部試、注〕に引く〔韓詩〕に漻に作り、「淸き統、中部試、注)に引く。[玉篇〕には、「劉としている。

電 18 のきした・あまだれ・したたり

正明 形声 声符は留。 常に溜り水の意が できょう ある。〔説文〕 二下に「屋水の流るるなり」とあり、その流れおちる槍、あまだれ受けの承 雷 の意となる。〔老学庵筆記〕に、霤 槽の中に関れて捕縛を免れた人の話があり、その家では世々で増を覚明神として祀ったという。 覚とは蜜をいう 質情を覚明神として祀ったという。 覚とは蜜をいう である。

19 りュウ(リウ)・キュウ(キウ)

2 かぜ・つむじかぜ・はやてりょう *

歌・慶はみな一系の字である。 『荘子、斉物論』「西方を飂風といふ」とあり、 さるか」の「釈文」に、飂に作るものがあり、 であか」の「釈文」に、飂に作るものがあり、 を変われば響々たるを聞かる。 であか」の「釈文」に、『高風なり」とあり、 であか」の「釈文」に、『高風なり」とあり、

リョ

日 7 かね・せぼね・律呂

の四国は、もと大嶽の嶽神である伯夷の裔で、のちれて四国となったが、呂はもと甫と称し、[詩、九である。昭・穆期には獣侯としてみえるものがそれである。昭・穆期には獣族としてみえるものがそれ、昭王はこれを救うために南征して没した。当時れ、昭王はこれを救うために南征して没した。当時れ、昭王はこれを救うために南征して没した。当時のその関連器に、獣侯・獣の名がしばしばみえる。その国の神話的伝承を文献化した「書、呂郡で、「獣それ萬年ならんことを」の獣は、獣侯の都で、「武を礼職」ともいう。これによっていえば、呂を心呂にして呂侯の国名とするのは誤りであり、金文の「唐呂」の語によって銅の鋳塊の形とすり、金文の「唐呂」の語によって銅の鋳塊の形とすり、金文の「唐呂」の語によって銅の鋳塊の形とすが、記を心呂にして呂侯の国名とするのは誤りであり、金文の「唐呂」の語によって銅の鋳塊の形とすが、、記を心呂にして呂侯の国名とするのは誤いのちいた。

侶 9 とも・ともがら

旅10【旅】10 軍列・たび・つらねる

福 海 为 例 後

もみえるが、盧の仮借で、黒塗りの弓矢をいう。 矢は〔書、文候之命〕、〔左伝〕僖二十八年の策命に だい。 旅・魯は通用の字。また金文の賜与にみえる旅弓旅 竿を略した形で、〔三体石 経〕の古文にもみえる。 古文以て魯衞の魯となす」とするが、それは从の旗 も、そこから出ている。覊旅・旅客の義は、列国期陳、〔大雅、大明〕の「殷・商の旅」という旅祭の義〔詩、小雅、賞之初筵〕「奢核をこれ旅ぬ」という旅祭の表には氏族旗を車に樹てて出行したものであろう。 である。〔説文〕にまた古文一字を録し、「古文旅、 に仕官するための、客遊の時代に入ってからのこと 以後、氏族的共同体が分解し、本貰の地を離れて他 またその旅器に「螢彝」の字を用いることも多く、があって、金文には「旅彝」と銘する祭器が多い。 るが、別宮のあるときにはそこで祖祭を行なうこと あった。王は上帝に旅祭し、諸侯は封内の山川を祀るも軍旅のことに限らず、外祭のために旅することも [周礼、大司徒]の文による。*****」の」と、軍旅の意とする。 軍五百人を旅とするのほり」と、軍旅の意とする。 軍五百人を旅とするのほ てゆく形、旅は多数の人が従う形であるが、必ずし なり、 人を旅と爲す。从と从とに從ふ。从は俱にするな くの人が他に出行する意。それで軍行の集団の意と ヘヒ、軍旅の意とする。軍五百人を旅とするのは、 旅行の意となる。〔説文〕七上に「軍の五百 **放と从とに従う。放は旗。旗を掲げて、多** う。

虜 3 【房】12 とりこ・いけどり・しもべ

リョ 虜〔虜〕 膂 慮 閻うところと同じ。〔説文〕 七上に「獲彩声 声符は唐。盧・慮などの従

たるものなり」とあって軍獲、すなわち捕虜の意と する。字形について「出に從ひ、力に從ふ。・だり とし、力をもって捕え、これを貫穿する意とするのは、珠数繋ぎにすることであろうが、金文の庭の字を占に作ることからいえば、唐が声符であろう。 「仍て醜虜を執ふ」という句がある。「説文」に繁文を男の形に従い、その頭に索をまいた形とするもので、「たって、対し、、大雅、常武」は淮夷を討つことを歌うもので、あろうが、古い字形がなくて確かめがたい。金文には醜虜のことを「執訊」または「い」。 には醜虜のことを「執訊」または「い」。 には醜虜のことを「執訊」または「い」。 には醜虜のことを「執訊」または「い」。 であろうが、古い字形がなくて確かめがたい。金文には醜虜のことを「執訊」または「いるとである」といた形とするものである。すれている。 をすれば、また唐声の字とみられる。 中に従う諸字とは、一おう別系とみるほかない。

佐戸 4 せのにく・ちから・せぼね

尾 15 りョ・ロ こころ・かんがえ 15 りョ・ロ

形声 声符は庸。盧・虜も同声の字。〔説文〕一〇

下に「謀思するなり」とあり、謀三上「難を慮るを は字をみな慮に作っている。 下に「謀思するなり」とあり、謀三上「難を慮るを はい。〔詩、小雅、雨無正〕「慮ることなく圖ることな し」のように古い用例のある語であるが、卜文・金 でにその字がなく、近出の〔や 山王鼎〕に忌の字 がみえ形声。慮もまた形声の字とみてよい。漢碑に がみえ形声。慮もまた形声の字とみてよい。漢碑に がみえ形声。慮もまた形声の字とみてよい。漢碑に がみえ形声。慮もまた形声の字とみてよい。漢碑に

15 里門・むら・すまい

問。

形声 声符は呂。〔説文〕二上に「里門なり」とし、「周禮に五家を比と爲し、五比を閻と爲す。固は侶なり。二十五家、相群侶とするなり」と〔周礼、大司徒〕の文を引く。〔書、武成〕に「商容の閻に式す」とあり、賢人として知られる商容の住む里門に、車上より軾によって礼し、礼を尽すことをいう。その「正義」に引く〔説文〕に「族居の里門なり」とする。〔戦国策、斉策〕に「女暮に出でて遷らざれば、則ち吾閻に倚りて望む」とあり、家門に対して里門を閻という。それで閻里・閻巷の意ともなった。秦のとき、貧民には賦役を免じてこれを里たにおいたので、窮民を閻左という。陳勝が兵をあげたとき、これに従うものは多く閻左の民であった。金文の字は虐に従い、呂と同声である。

リョウ

→ 1 2 リョウ(レウ) 8 下に「行くに脛相交はるなり。子の背無きに従ふ。 下に「行くに脛相交はるなり。子の背無きに従ふ。 下に「行くに脛相交はるなり。子の背無きに従ふ。 下に「行くに脛相交はるなり」とし、牛の足のもつ下に「行くに脛相交はるなり」とし、牛の足のもついががたい状態をいう語で、「繚兵」というのと同じ。びがたい状態をいう語で、「繚兵」というのと同じ。びがたい状態をいう語で、「繚兵」というのと同じ。びがたい状態をいう語で、「繚兵」というのと同じ。であろう。「後漢書、孔融伝」に、融が年十二にしであろう。「後漢書、孔融伝」に、融が年十二にしであろう。「後漢書、孔融伝」に、融が年十二にしてあるも、大にしては未だ必ずしも奇ならず」といった3の陰部を了と称するのは、その形よりしていう。た男の陰部を了と称するのは、その形よりしていう。た男の陰部を了と称するのは、その形よりしていう。

象形 両輪の形で輛の初文。〔説文〕 1下に附を正字とし、「再びするなり。 □に従ふ。闕」とあって、字とし、「再びするなり。 □に従ふ。平分するなり。亦以終を一兩と爲す。一兩に従ふ。平分するなり。亦以 という。金文にその両形があり、金車馬両の字に用いる。もと車の両輪をいい、のちすべて左右対称のものをいう。

良っ よい・まこと・すぐれる・やや

「善なり。富の省に從ひ、亡聲」とするが、字形もれ、その糧をはかるものをいう。〔説文〕玉下に 象形 声も合わない。その録する小篆及び古文三字は、み 乗」「良金」「良臣」などの語があって、その字形を な甚だしく初形を失ったものである。金文に「良馬 「良は量なり。力を量りて動き、軟て限を超えざる うな使いかたもありえよう。〔釈名、釈言語〕に 知りうる。〔字例〕にその形を「風箱留實」、風を送 なり」というのは音義説にすぎないが、量も嚢の上 って穀の良否をよりわけるものとしており、そのよ に流し口のある形で、穀物を入れてその量をはかる 司農注]にまた歴(歴)の字に作り、歴は釜鬲の鬲に〔栗氏〕の職があって、嘉量を掌る。栗は〔鄭かえすことのできるものである。[周礼、考工記]かえすことのできるものである。[周礼、考工記]かえすことのできるものである。[周礼、考工記] ものであるから、良・量は、その字形と声義とに通 ずるところがある。良は上下に口あり、上下にうち 良養なるものをもいう。〔詩、秦風、黄鳥〕は、秦鬼かり、良穀の義よりして、車馬器服、さらには人の は穀量の器であるが、その良善なるものを択ぶ意が に用いることがあって、鬲はまた量器に用いる。良 の穆公に従死する奄息ら三人の死を嘆くものである 嚢の上下に流し口をつけて、穀物などを入

が、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良人を殲す」の句がある。良人はまた夫をいい、「孟大を殲す」の句がある。良人はまた夫をいい、「孟とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がみえる。良は天与のものとされ、とを誇る良人の話がある。良人はまた夫をいい、「孟が、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良か、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良が、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良い、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良い、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良い、その三章各章に「彼の蒼なるものは天 我が良い、ことをその学の綱領とした。

変 8 しのぐ・すたれる

完 9 まこと・たすける・あきらか

京・高はいずれもアーチ状の凱旋門を意味する字でない。心と高の省に從ふ」と高の省文とするが、るなり。心と高の省に從ふ」と高の省文とするが、気観における儀礼に関する字であろうと思わ近く、京観における儀礼に関する字であろうと思わ近く、京観における儀礼に関する字であろうと思わ近く、京観における儀礼に関する字であろうと思わば、京観に対している。京に

何 10 ふたつ・わざ・たくみ

を下する語であろう。 を対して、のちの使いかたである。左右の手を用い のがみえ、のちの使いかたである。左右の手を用い のがみえ、のちの使いかたである。左右の手を用い

凌10 「勝」14 ひむろ

滕は氷を贈る意の字であろう。麦はおそらく陵の省ず、胅は盤中にものを納れて奉ずる形であるから、『凌』絵に入る」の句を引く。朕声とするも声が合わ『凌』絵に入る」の句を引く。朕声とするも声が合わ出づるなり、朕聲」とし、[詩、豳風、七月]の出づるなり、朕聲」とし、[詩、豳風、七月]の出がるなり、朕聲」とし、[詩、豳風、七月]の省、『説文】

リョウ

倆 凌(勝)

料梁凉[凉]

料 10 はかる・くらべる・しろ・かて

料。

会意 米と斗とに従う。斗は柄のついたますで、 会意 米と斗とに従う。斗は柄のついたますで、 対量の をより、 定量・資料・料理・飼料の意となる。 料理 をとなり、 「料量平らかなり」といわれた。 料量の きより、 定量・資料・料理・飼料の意となる。 料理 とは前後の事情を料り処置する意で、 調理の意はの ちの用法である。

②犬 11 はり・はし・とびいし・やな

精帯、はは

と両木をかけわたす形とに従う。金文では泌また粱形声 - 声符は泌。泌は簗の初文。古文の形は、水

上に盗のひそむことを知って、梁上の君子に道を説また「梁上の君子」とは盗人。後漢の陳寔が、梁 を動かす」とあり、「梁塵秘抄」によりとる。 人虞公、雅歌を善くしたとなると、「漢興り、魯の正字であろう。梁塵は〔七略〕に「漢興り、魯の皆。となると、「漢明り、魯の皆、といると、「漢明り、魯のと、「漢明のようにしるすこともあるが、諒闇がそのは、 家屋の主材、また人の首領として指揮する人をいう。 より、すべて横にわたした木、家屋の横材をもいい 「敝笱(破れたやな)梁に在り」という。水橋の意 にしかける簗・筍の意となり、[斉風、敝筍]にに「石の水を縋るを梁といふ」とみえる。またそこに「石の水を綿るを梁といふ」とみえる。またそこ 風、有狐〕「彼の淇(水名)の梁に在り」の〔伝〕 するのは、古文の字形に合うが、刅声というのは声 粱・諒の字に仮借することもあり、 上棟に対してその横木を梁という。合せて棟梁とは きな飛び石を代りに用いることもあって、〔詩、衛 が合わない。梁は水に木を渡すこともあり、また大 を稲粱の字とする。〔説文〕 ハト上に「水橋なり」と いたという故事による。 諒闇をまた梁

涼11 「凉」10 りまい・すずしい・さびしい

凌川 しのぐ・のりこえる

形声 声符は変。変と声義の通ずる を水名と解するが、凌声の字には凌越の義をもつも を水名と解するが、凌声の字には凌越の義をもつも を水名と解するが、凌声の字には凌越の義をもつも

猟 1 【獵】18 かり・とらえる・あさる

でにその萌芽的なものがみられる。

田字は獵に作り、災声。巤は獣のたてがみを声 旧字は獵に作り、災声。巤は獣のたてがみでなく、「うけひ狩り」のように、神に誓約して、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。狩猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。将猟は共同体の重要な行事として、公的にとする。将猟を強、冬猟を狩というとする。頃は祭祀のためのみでなく、「うけひ狩り」のように、神に誓約して、谷前の風が盛んとなり、それはまた軍事的な修練をがねた。戦国のころより遊猟の風が盛んで、初期のかねた。戦国のころより遊猟の人が表に表情を対して、公の形というというというというというに対している。

1 たかくとぶ・とぶ リョウ (リウ)・リュウ (リウ)

农

のも、高飛の意より転じたものであろう。のも、高飛の意より転じたものであろう。 大空を寥 原という が と会意とするが、全体を象形とみてよい。その
一覧と尾羽の形である。〔荘子、斉物論〕「而獨りこれが響々たるを聞かざるか」の注に「長風の聲なれが響々たるを聞かざるか」の注に「長風の聲なれが響々たるを聞かざるか」の注に「長風の聲ない。との形である。

卯1 たのしむ・ねがう・いささか

形方 声符は等。

「脚」 る。[説文] 二上に「耳鳴るなり」と

調するも、その用義の例はない。聊頼はたのむ、無聊は楽しみなしの意。[詩、檜風、素冠]「聊くは無聊は楽しみなしの意。[詩、檜風、素冠]「聊くは無聊は楽しみなしの意。[詩、檜風、素冠]「聊くは無聊は楽しみなしの意。[詩、檜風、素冠]「聊くは無聊は楽しみながう意であろう。「聊戻」は寒気、「聊憶」は遊放、「聊慮」

|を 11 みささぎ・つか・おか

門意 艺艺

ことが多く、のち陵墓の意に用いる。とが多く、のち陵墓の意に用いる。そこに陵墓を営むとれるところ。その地は山の平坦に近づくところでいるところ。その地は山の平坦に近づくところで、また。

第 2 りョウ (りゃウ)

输

菱12 「菱」15 ひしゅ

様を菱文といい、菱角のあるものを稜という。れたのは、六朝末期以後のことである。菱形の文化の菱花鏡が与えられたというが、菱花鏡が行なわ

三里 12 はかる・おしはかる・ますめ

象形 流し口のついた大きな素の形。下部に土の形態をつけていることがある。[説文] ハ上に「輕重を稱るなり。重の省に從ひ、鄰の省聲」とするが、重の形に従うものはのちの形であり、また曏の字とは何の関係もない。ト文・金文の字形は、薬の形である東の上に、穀を流し入れる口をとりつけてあり、これに入れてその量をはかるもので、その分量を容量という。分量のみでなく、重量や距離を計測する意にも用いて、測量・量計・量度・量知の意とする。量という。分量のみでなく、重量や距離を計測する量という。分量のみでなく、東重や距離を計測する意にも用いて、測量・量計・量度・量知の意とする。類で表現、新聞により、「一種を表現である。」とので、その一定量を糧という。

夏3 「燎」16 リョウ(レウ)

激 **** ***

が、凡そ祭祀に慎まぬものはなく、〔説文〕の字解古文の慎字なり。天を祭るは愼む所以なり」とする「柴して天を祭るなり。火に從ひ、睿に從ふ。眘はこれを字形化したものが寮である。〔説文〕一〇上にこれを字形化したものが寮である。〔説文〕一〇上に

笈〔燎〕

稜〔棱〕

粱僚

は、のちの字形によって附会したものである。字は、のちの字形によって附会したものであるが、庭燎のであろう。金文にその形に従う寮の字形があり、「毛公鼎」に大史寮・卿事寮の名がみえる。大史寮は祭祀関係、卿事寮は行政関係の系列とみられる。後は庭燎(にわび)の燎の初文であるが、庭燎の客がは祭祀関係、卿事寮は行政関係の系列とみられる。字にはのち燎を用い、尞が声字化された。字にはのち燎を用い、尞が声字化された。

稜13 「梭」2 かど・すみ

大学 では、人の肝をもってこの鬼を祀ったという。 正字は様に作り、変声。〔説 という。 一様なり。 孤楼は殿堂上、最高の處なり」という。 のち稜の字形が用いられ、稜角のあるもの、角材をいい、その語は〔漢書、李広伝〕にみえる。 御史は稜官としておそれられた。〔夷堅志〕に湖北稜 野鬼の話があり、湖北・江西では、人の肝をもってこの鬼を祀ったという。

沙米 3 りョウ(りャウ)

新作品。

を「應」 廖 を表示のようである。「説文」七上に「禾の米なり」と殺実の意とする。梁肉といえば富貴の人の食うもと殺実の意とする。梁肉といえば富貴の人の食うもと殺実の意とする。梁肉といえば富貴の人の食うもと殺害の意とする。

> ★子 4 リョウ (レク) 十妃、みな縞紵を衣、粱肉を食ふ」とみえている。 十妃、みな縞紵を衣、粱肉を食ふ」とみえている。 いうのが定めであった。〔戦国策、斉策〕に「後宮

僚 4 つかさ・やくにん・あいやく

多4 りョウ(レウ)

と同字にして空虚の意であるとしてい形声 - 声符は習。〔玉篇〕に字を廫

リョウ 慘漻綾領

するものであろう。多く姓に用い、漢魏以後に至っ義を未詳とする。寥と同字で、ただその慣用を異に るが、〔説文新附〕丸下に「人の姓なり」とし、 てみえる字である。 字

さとる・さわやか・かなしむリョウ(レウ)

琴の音などの澄み徹るのを惨亮というが、擬声的というが、擬声の意。 「惨然たるなり」とあって、了然の意。 形声 声符は零。〔説文〕一○下に 廖 戻のように、悲哀の情を伴うものである。 タートーティンな語であろう。あまりに清澄であることは惨慄・タートーターグ 声符は翏。〔説文〕一〇下に

1 きよらか・たかい・ながれる

の「漢書、礼楽志」の「郊祀歌、天門」に通じて、「漢書、礼楽志」の「郊祀歌、天門」に通じて、「漢書、礼祭されり」という。また寥とも 語である。 「寂漻たる上天」のように用いる。〔荘子、知北遊〕 じて、いわゆる「寥天一」に帰する状態を形容する 「油然漻然として入らざる莫し」とは天地の化に乗 形声 声符は翏。〔説文〕一一上に

綾14 あや・あやぎぬ・りんずリョウ

れているものを繒綾、色糸を用いるものを綾錦とう。生地のままのものを綾紈、綾が表面にあらわった。 生地のままのものを綾紈、綾が表面にあらわ細かきものを謂ひて綾といふ」とし、あやぎぬをい いう。綾子は唐宋音の国語化したものである。 る。〔説文〕」三上に「東齊にて布帛の形声 声符は変。変に菱形の意があ

領14 くび・えり・おさめる・うけるリョウ(リャウ)・レイ

を迎える祝、頌の詩であるが、「領は蛤蛸(すくもむを迎える祝、頌の詩であるが、「領は蛤蛸(すくもむないうくびをいう。〔詩、衛風、張人)は君夫人るにえりくびをいう。〔詩、衛風、張人〕は君夫人るにえりくびをいう。〔詩、衛風、張人〕は君夫人の誤りとする。〔釈名、釈衣服〕に「頸なり」、「広がれている。〔説文〕九上に「項なり」 領の意となり、領地・領事のように支配する意とな は腰と頸部で、人体の最も重要なところ。それで統 し)の如し」と、首すじの美しさを形容する。要領 者を領袖という。 袖とがめだつところであるから、人の儀表たる指導 領悟するところを本領という。 り、心に領して領悟・領略の意となり、その独自に 衣服において、領と

寮15 つかさ・やくにん・あいやくリョウ(レウ)

全會

『卿事寮』の名がみえ、「三事四方を尹し、卿事寮を「卿事寮」の名がみえ、「三事四方を尹し、卿事寮をといい、もと僚友を意味した。周初の〔令彝〕に と簑とに従い、もと庭燎(にわび)を用いる祭儀形声 声符は尞。尞の初文は袞。金文の字形は宮 の寮人は王の臣従の人をいう。また〔令彝〕に用て寮人に匓せん(食事を供する)」とあって、こ る。また「令殷」に「用て王の逆造(出入)を饗し、受けしむ」とみえ、当時の行政府をさす語と思われ をいう字であろう。その祭儀をともにするものを寮

に辟たらしむ」とあり、この百寮は百官というほど区別しており、中期の〔牧殷〕に「女に命じて百寮 茲の卿事寮・大史寮に役め、 弦り劇事寮・大史寮に彼め、父(毛公)において卽の意であろう。後期の〔毛公鼎〕には「巳、日げてに辟たらしむ」とあり、この『ラト』、**。 「乃の寮と乃の友事を左右せよ」と、寮と友事とを 族・卿事・大史寮を併せ銅めしむ」という。行政は きて正さしめよ」とあり、「番生設」には「王、公 乃の敵(嫡)寮とを康んじ能めよ」とあり、その下承けつがれていて、斉の〔叔夷鐘〕に「乃の友事と 公族のほかは卿事寮・大史寮の二系に分れ、大史寮 このとき叔夷は「縣三百」を賜うているので、四千る。敵寮とはその直属の官吏をさすものであろう。 文に四千の徒を与え「乃の敵寮と爲せ」と命じてい しい。行政組織を寮とよぶことは、春秋期にもなお は祭祀儀礼、卿事寮が吏治の系列のものであったら 人の官吏は、その行政に服するため必要とされたも 寮はその建物より名づけたもので、その寮をともに 寮・大学寮・雅楽寮・典薬寮など、みな寮という。 のと思われる。わが国の古い官制においても、図書 するものが、同僚であった。

15 リョウ(レフ)

[説文] | ○下に「毛鑞なり。髪の囟(頭)上に在り、下部は馬の疾走する足と尾の形に象る。 図は尸の頭の形である。*鬣の初文で、鬣はその形意なり」とするが、図は籀文の図とは関係がなく、 及び毛髪の巤々たるの形に象る。これ籀文子字と同 象形 上部は馬首とその鬣の形。

声の字である。

And the second of the second o

僚 15 さとし・あきらか・むなしいリョウ(レウ)

と寥声とには声義に通ずるところがあって、惨慄下に「慧きなり」とあり、惨と声義が近い。 寮声を焼 (にわび)をいう。[説文] 一〇とで はまた憭慄に作り、また繚戻に作ることがある。 声符は尞。尞の初形は尞で、

敕 15 ととのえる・オリョウ(レウ) えらぶ・つつしむ

義とし、金文では〔陳助殷〕に「吉金を來み擇ぶ」語、商頌、殷武〕に「來くその阻に入る」と深のと同義の訓である。來は両義に用いられる字で、 を引く。「鄭注」に穿徹の意としており、「史記、魯書に曰く、乃の甲冑を敷めよ」と「書、貴誓」の文書に曰く、乃の甲冑を敷めよ」と「書、貴誓」の文り」とし、梁声とするが、声が合わない。また「周り」とし、梁声とするが、声が合わない。また「周り」とし、梁声とするが、声が合わない。また「周り」とし、梁声とするが、声が合わない。また「周り」としており、「思いきない」という。 ことができよう。 敹の訓義は、そのような字形解釈から、これを導く であり、それに支を加えるのは、獣肉を処理する意 下は米で、獣爪の形。獣爪をもって深く肉をとる意 という語がある。梁の字形はその上部が獣骨の上半 だ〔孔伝〕に教を「簡ぶなり」としており、〔説文〕世家〕に引いて教を陳に作り、陳列の意とする。た 、「乘声とするが、声が合わない。また「周索と支とに従う。〔説文〕三下に「擇ななり」

蓼 15 たで (レウ)・リク

> 心寫く(気が晴れる)」とあり、恋愛詩的な発想を応うともぎ)は「零露清子・既に君子を見るに「我が所」は君子を祝、頌する詩。「蓼たる彼の蕭(かわば)は君子を祝、頌する詩。「蓼たる彼の蕭(かわば) 母や我を鞠ふ」の句がある。また「小雅、蓼」この詩は父母の恩をしのぶもので、「父や我を生み 蓼莪]「蓼々たるものは莪」とは、よく伸びた朝鮮)が、 おが国にも「蓼食う虫」の諺がある。〔詩、小雅、わが国にも「蓼食う虫」の諺がある。〔詩、小雅、 とっている。 て美味であるという。蓼々はその伸びそだつさま。 菊で、しろよもぎに似たわかなをいい、これは甘く 英、薔嘆なり」とあり、たでをいう。 お声 声符は習。「説文」「「に・う 声符は零。「説文」「下に「辛

計 5 リョウ(リャウ)

舟〕「人を諒とせず」、「小雅、何人斯」「諒に我を相接する地であることが知られる。〔詩、鄘風、柏上報ををしている。〕、「神雅、何人斯」「諒に我を相接する地であることが知られる。〔詩、鄘風、柏二南と簾とを「ブミニュ 「衆信を諒といふ。周南・召南・衞の語なり」と、 目姜する地であることが知られる。〔詩、鄘風、柏二南と衛とを一方言区域としており、二南と衛とは、4年 〔広雅、釈詁〕に「智なり」とする。〔方言〕にまた とよばれる凱旋門で、そこでは種々の呪儀が行なわる。 あり、亮もその省文に従う。京は京観 あり、亮もその省文に従う。京は京観 文〕三上に「信なり」とし、〔方言〕に「知るなり」、 その感応を得ることから、諒信の意が生れる。〔説 れた。諒もそこで祝禱する儀礼に関する字であろう。

> 「直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、 のち諒恕・諒察の意に用いる。〔論語、季氏〕にいい、字はまた亮・涼・梁に作ることがある。 なり」という語がある。 「彼の武王を涼く」は諒の仮借字。天子の服喪を諒って

輛 15 車輛・ならぶりョウ(リャウ)

形声 の字が別に作られたのである。 のを、両という。もと両の字を用いたが、 車一乗を輛という。すべて左右相対して用をなす 輛はその形声の字である。左右の車輪をそろえて、 声符は兩(両)。兩は両輪の形で輛の初文。 のち車輛

輬 15 ねぐるま リョウ (リャウ)

柩車に用いている。 紀〕に、始皇帝の屍を轀輬車に載せたことがみえ、 内儲説、上〕に轀車の語があり、〔史記、秦始皇本ない。鰮輬を合せて一車とする説もある。〔韓非子、で、鰮輬を合せて一車とする説もある。〔韓せい 「臥車なり」という。轀・輬は温涼の意をとるもの あり、いまの寝台車にあたる。また轞一四上にも一ある。〔説文〕一四上に「臥車なり」と 形声 声符は京。京に倞・涼の声が

遼 15 (遼) 16 はるか・とおい・めぐるリョウ(レウ)

〔説文〕ニ下に「遠きなり」とあり、遼遠の意とす る。〔公羊伝〕桓十一年「少しくこれを選緩せよ」 る火の意があり、遼繞の意がある。 声符は尞。尞は袞。袞にめぐ

力

遠・緩の義を生ずるのであろう。 はゆるくする意。尞にめぐる意があって、そこから

燎 にわび・あきらか・てらすリョウ(レウ)

とする。〔書、般庚、上〕「火の原を燎くが若し。嚮なり」とする。尞を庭燎(にわび)、燎を燎原の意 燎猟という。 祭るなり」とみえ、 を焚く形に作る。〔説文〕一〇上に「尞、柴して天を ひ邇づくべからず」という。野火を放って猟するを、 寮は燎の初文。ト文は木を組んでそれ ** また別に燎において「火を放つ 声符は尞。尞の初形は尞で、

療 17 [樂] 20 いやす・なおすりョウ(レウ)

を、「飢を樂しむべし」と読んで、賢者退隠の詩と の字には、療の字が用いられるが、糜はその古い治 の若くす」とし、重文として療の字を録する。治療 の形。〔説文〕セドに「治すなり」、また「讀みて勞解。」に作り、樂(楽)声。楽は鈴 にまた「棲遅」という語があり、閑静な生活をいうは、人知れぬ伏屋で逢引きをする意である。その詩は、 するのは誤りで、飢とは性的不充足、それを癴すの 〕「衡門(かぶき門)の下(以て飢を樂すべし」 形声 声符は尞。正字は樂

> 語とされるが、これも密会をいう語である。攈は、 この詩に楽の字でみえるほかには、用例がない。

瞭 17 あきらか (レウ)

これを目に施して瞭という。〔孟子、離婁、上〕「胸 明であることをいう。 中正しければ、則ち眸子瞭かなり」とあり、瞳の清 形声 燎(にわび)。袞に明らかの意がある。 声符は尞。尞の初文は尞で庭

糧18 〔粮〕13 かて (リャウ)

ふ」とする。すべて定量を給する意であろう。秦漢のり、注に「行道を糧といひ、止居するを食とい り」とする。〔周礼、廩人〕に「凡そ邦に會同師役るので、糧とは食糧をいう。〔説文〕七上に「穀なるので、糧とは食糧をいう。〔説文〕七上に「穀な の虎節や木簡に、そのことをしるすものがある。字 の事あるときは、則ちその糧とその食とを治む」と はまた粮に作る。 豪の形。それによって一定量をはか 声符は量。量は穀量をはかる

繚 18 まとう・めぐる・もとるリョウ(レウ)

と線(糾・線)戻(みだれる)の意のある字である。の名)を線らす」とは、花をめぐらしまとう意。もの名)を 意。〔楚辞、 る。〔説文〕一三上に「纏ふなり」とあり、線繞の後心 焼っ(にわび)。衰にめぐる火の意があ 九歌、湘夫人」に「これに杜衡(香草 声符は尞。尞の初文は寮で庭

> **監** 25 花のみだれ咲くさまを繚乱という。 たてがみ・ひげりョウ(レフ)

礪 欖穲

そのたてがみを靡かせて走るさま。鬣はそれに頭髪形
声符は鷺。巤は獣のたてがみ。馬などが、 馬の巤などの意に用いる。 ある。〔説文〕九上に「髪鬣々たるなり」とするが、 を示す影を加えたもので、巤の繁文とみてよい字で

リョク

2 すき・ちから・つとめる・はげむリョク・リキ

1

とをいう字。のち『叔夷鐘』「力あること虎の如し」乃ちまた秋あるが若し』のように、もと農耕のこれでする。「書、殺疾、上」「農の田に服し節に力め、ができる。〔書、殺疾、上〕「農の田に服し節に力め、ができる。〔書、殺疾、上〕「農の田に服し節に力め、 耤の古い字形はすきを踏む形である。それらのトもつ形。加・嘉・静はみなすきを清める儀礼をいい、もつ形。加・嘉・静はみなすきを清める儀礼をいい、を筋肉の力と解するが、字は未の形で、未はすきを 禦ぐ」という。筋字条に「肉の力なり」とあり、力筋の形に象る。功を治むるを力といふ。能く大災を筋の形に象る。功を治むるを力といふ。能く大災を象形 すきの形。〔説文〕ニミ下に「筋なり。人の のように用いる。農耕のことは最も力を要すること 文・金文の字形によって、その意象を確かめること

であり、ゆえに力田といい、役務に及ぼして力役と 金力・権力は本来の意味での力ではない

菉 12 かりやす

をもって、君子祝 頌の発想としているのである。猗々たり(美しい)」とみえる。草木の茂る美しさ猗々たり(美しい)」 葉は竹に似ており、〔詩、衛風、淇奥〕に「豪竹葉は竹に似ており、〔詩、歳まままままままないわれる。その莎という。黄を染めて金色をなすといわれる。その莎という。 声符は彔。

緑1(線)1 みどり

ら出たものにすぎない。王莽のとき各地に群盗が起たは、五行をもってすべてのものを配当する思想か で「綠林の豪客」とは、そのような盗賊の徒をいう 語、陽貨」「紫の朱を奪ふを惡む」のような考えか 語となった。 を掲げて故人をしのぶ哀切な悼亡の詩である。〔論 裳はその正色である。この〔緑衣〕の詩は、その衣 るが、〔易、坤卦〕に「黃、裳元吉」の語があり、黄 とがその地位をかえたものとする解釈がなされてい り、この詩を正妻に対して妾の僭上する詩、衣と裳 綠衣黃裳」の緑を、のちに間色とする考えかたがあ るものなり」という。〔詩、邶風、緑衣〕「綠の衣形声 声符は泉。〔説文〕一三上に「帛の靑黃色な そのうち緑林に拠るものが強盛であった。それ

IJ

吝 7 おしむ・ やぶさか・はじる

奝 **♦** 。 **念**

い意。のち吝嗇の意に用いる。 の卦辞に「吝」の語を用いることが多く、〔屯卦〕 れる意と思われる。ゆえに恨惜の義を生ずる。〔揚〕れる意と思われる。ゆえに恨惜の義を生ずる。〔揚〕れら、死者に祝薦して哀悼し、邪霊の愚るのをおそから、死者に祝薦して哀悼し、邪霊の愚るのをおそから、死者に 答の字義はえられない。文は文身、口は祝禱である [段注]に会意の字とし、「多くこれを文るに口を以ており、文身の象に従う字であることは疑いがない。 てす」と、口説をもって飾る意とするが、それでは の字とするが、声が合わない。古文の形は彣に従う ろう。〔説文〕ニ上に「恨惜するなり」とし、文声器の形。死者に対して祈る意を原義とするものであ 礼的な意味で、文身を施す。口はD、祝禱を収める 会意 文と口とに従う。文は文身。死者に通過儀

侖 8 まるい・まとまる・おもうリン・ロン

亷 줶

林 象形 して一連をなし、まるくまとめられているものをい 木簡などの編冊をまるく巻いた形。相次序

リョク

菉

緑[綠]

リン

吝 侖

厘

崙とは天の形であり、霊の赴く世界をいう。 意がある。すべて混融してまとまるものは崑崙。崑 序次第のある一連のもの、相対して義をなす よい。侖声のものには倫・綸・輪・論など、みな順 册に従ふ」もので会意とするが、全体を象形とみて う。〔説文〕五下に「思ふなり」と訓し、「人に從ひ、 もの 0

林 はやし・あつまる・おおいリン

椭 . *

ろう。王念孫にその説がある。 その本字にふれていない。君はおそらく群の義であ られない。〔段注〕に「假借の義なり」とするが 釈詁〕も同じであるが、その訓義の由るところは知 さまをいう。〔伝〕に「林は君なり」とあり、〔爾雅ざるあり」とあり、壬・林は祖霊を迎える礼の整った 雅、賓之初筵〕に「百禮旣に至る(壬たるあり林たるものなり」とするが、林は平地に限らない。〔小 彼の平林」の〔伝〕に、「平林とは林木の平地にあ るを林といふ」とする。〔詩、小雅、車拳〕「依たる 会意 二木に従う。〔説文〕六上に「平土に叢木あ

厘 分の十分の一・りん・みせリン・リ・テン

を慣用音とする。 た釐の略字として用いられ、毫釐・釐毛の字義とな られたもので、店と声義の同じ字であるが、 形声 分の十分の一の名に用いる。 声符は里。もと廛(店)の略字として用い わが国では、 のちま

10 なかま・ともがら・たぐい・みちリン

篇〕に「名顯れて絕疎、等倫を異にす」とは、いわれ対を合して一となる関係のものをいう。[急 就相対を合して一となる関係のものをいう。[急 就命は人倫・父子・兄弟・夫婦など不可分のもので、 ゆる絶倫である。 は、百兩を一輩と爲す」とあって等輩の意であり、 り」という。輩「四上は「若し軍、車を發するとき「説文」ハ上に「輩なり」、また「一に曰く、道な 全体として一の秩序をなすものをいう。 声符は侖。侖は相次第して、

恪 10 やぶさか・おしむリン

であろう。 用いて悋気という。人を許すにやぶさかなという意 が国では吝・悋は慣用を異にし、悋は嫉妬する意に とみてよい字である。吝嗇をまた悋嗇に作る。わ 声符は吝。答におしむ意があり、吝の繁文

林 むさぼる・そこなうリン・ラン

があり、みな悲傷の意。字は凜・廩と通用する。玉の〔風賦〕に「淋慄」、〔高唐の賦〕に淋慄の語 さをいうときには、惏慄のように林の声でよむ。 といふ」とあって、 声符は林。〔説文〕・〇下

淪11 さざなみ・しずむリン

字を用いるのは、淪の義の拡張用法である。 に「山阜陷るなり」としており、土地の陥陥にそのり、古くからその義に用いる。陯一四下を〔説文〕 の如し、淪みて胥以に亡ぶること無れ」とは、淪亡、流・淪没の意がある。[大雅、料]に「彼の泉流 と歌う。ものが沈むときに波紋を生ずるので、また り これを河の漘に寘く 河水清くして且つ淪つ」魏風、伐檀」は美しい木樵歌で「坎々として輪を伐魏風、伐檀」は美しい木樵歌で「坎々として輪を伐など、と流と爲す」とあって、さざなみの意である。〔詩、 があり、 をいう。〔書、微子〕にも「今殷それ淪喪す」とあ 倫とは波紋をいう。〔説文〕 二上に「小波声符は侖。侖に相次第して連なるものの意

琳 12 たまのな

擬声語であろう。 れるものである。また琳琅は玉声。玉のふれる音の 琳琅玕」の名がみえている。雍州の貢する美玉とさ 玉なり」とあり、〔書、禹貢〕に「球形声 声符は林。〔説文〕」上に「美

粦 12 おにび・ほたるびリン

「兵死し、 淋漓たる象を示すものであろう。〔説文〕「〇上に以流れたと、大の上下に小点を加えているのは、鮮血のいた形。大の上下に小点を加えているのは、鮮血の 及び牛馬の血、粦と爲る。粦は鬼火なり。 会意 とに従う。大は人の形、舛は両足を開 金文の字形によると、大と舛

> 「久血、燐と爲る」、〔説林訓〕「簪を拔きて燐を招 聖所であり、そこより粦火を発したりするのであろ る形とみられ、隣とはそのような人牲をもって祀る 招けば聲に應じて至り、血灑ぎて人を汙す。簪を以 鬼火が暗夜に人を逐う意とする説もあるが、金文の けうるものとされている。粦の字形が舛に従うのは て招くときは則ち至らず」とあって、簪は粦火を避 子、天瑞〕に「馬血の轉鄰と爲り、人血の野火と爲 う。粦は燐の初文。粦に光を発するものの意がある く」の〔高注〕に、「燐血精、野火に似たり。これを ものであるからとし、 る」は、「萬物みな機より出でて、みな機に入る」 えても、鬼火の意とはしがたい。鬼火のことは〔列 炎舛に從ふ」と炎舛の会意とするが、炎下に舛を加 また〔淮南子、氾論訓〕に

鄰 白石の光るさま・せせらぎリン

と歌う〔王風〕〔鄭風〕の詩は、思いのかなわぬ発 [鄭風]にみえ、三篇みなその水占の発想をとる。る詩句によって訓する。 [楊之水] は他にも [王風] 想であり、「白石粼々たり」とは、その川底の石が がかなわぬとされた。「揚れる水・束薪を流さず」流れ去るときは吉、せかれて流れないときは、思い 山で祭が行なわれるとき、柴を谷川に流して、その 風、揚之水」に「揚れる水(白石粼々たり」とみえ、生がいまり、「熱々たるなり」とあり、〔詩、唐ださせ のの意がある。〔説文〕一下に「水、 声符は粦。粦に光を発するも 東薪を流さず」

水の粼々たるさまとするのは誤りである。また月光いごとのかなうことをいう発想である。〔説文〕に きらきらと光に反射する意で、束薪は流れ去り、願 り、輪郭・輪番などの意に用いる。

稟16 [亩]8 こめぐら・くら・あつめるリン

廪 0 東

生、また略して廩生という。といい、官費生として食事料を供されるものを廩膳をいい、官費生として食事料を供されるものを廩給廩栗によって官吏の俸禄を給するので、俸給を廩給廩栗によって官吏の俸禄を給するのを圖(図)という。の屬の所在を全面に記入したものを圖(図)という。の屬の所在を全面に記入したものを圖(図)という。の ために蓋うた形である。地方の穀倉を啚という。そ ころと同じく、下部は積禾の象、上部は雨露を防ぐ 文〕に戸牖の象とするも、金文の字形は啚に従うと 桓十四年「八月、御廩災す」とみえる。回を〔説れを粢盛に供した。廩とはその御廩をいう。〔春秋〕 倉に藏す」とあって、藉田の収穫を神倉に収め、こ 師〕などにみえ、〔礼記、月令〕に「帝籍の收を神 るが、そのような声義の関係はない。また「靣して を倉と謂ふ」とし、倉に倉黄・早率の意があるとす の藏なり。倉黃として取りてこれを藏む。故にこれ 字形をあげている。「倉黃」は上文の倉字条に「穀 の形に象る。中に戸牖あり」とし、重文として廩のこれを取る。故にこれを向と謂ふ。入回に従ふ。屋 するところなり。宗廟の桑盛、倉黄として向して形にして、廩の初文である。〔説文〕に「穀の振入形にして、廩の初文である。〔説文〕に「穀の振入 従う。〔説文〕五下に正字を卣に作る。その字は象 形声 声符は稟。稟は廩倉の形である靣と禾とに 新

> 懍 16 おそれる・つつしむ・くるしむリン

は、創作のときの緊張したきびしさをいう語である。 陸機の〔文賦〕に「心懍々として以て霜を懷ふ」と 「臣下懍然」の注に「悚 栗の貌」とあるのが本義。 - ・・・ 『広雅、釈詁』に「敬なり」、『荀子、議兵』である。『広雅、釈詁』に「敬なり」、『埼介』 子之歌〕に「懍乎として朽索の六馬を取するが若にしか」に「懍乎として朽索の六馬を取するが若を下れる。「書、五形声 声符は稟。稟に凜烈の意がある。〔書、五形声 角を崩さるるが若し」とみえるが、いずれも偽古文 し」、また〔泰誓、中〕に「百姓懍々として、その おリン び

ところから、蛍火をいう。 る人牲を示すものとみられる。また熱なくして光る の声義を受け、燐はその粦火の字、隣は聖所におけ えることもあったのであろう。粦に従う字はみなそ その血、燐と爲る」とあって、戦場などで鬼火の燃 う。〔論衡、徇死〕に「人の兵死するや、世に言ふ、旨同じく、あるいは〔許慎注〕の存するものであろいは〔許慎注〕の存するものであろて燃ゆる火の如し」という。その文は〔説文〕と大て燃ゆる火の如し」という。 百日ならば則ち燐と爲る。遙かに望むに、炯々とし みえる。その注に「血精、 あり、〔淮南子、氾論訓〕に「久血、燐と爲る」と条「○上に「兵死し、及び牛馬の血、粦となる」と 形。それより発する鬼火を燐という。〔説文〕粦字 形声 声符は粦。粦は聖所に人牲とされたもの 地に在り。暴露することに「久血、燐と爲る」と

遴16 [傑]14 ゆきなやむ・あつまるリン

まり、 綸

であった。軽は多く葬車として用いる。車輪の意よ いふ」とあり、輻とは輪の矢、三十本を用いる定め わ・くるま・まわりリン まるくつらなるものをい 声符は侖。侖は次第してあつ

輪 15

寒さの厳しさをいう双声の連語である。

れている。凜々・凜凓・凜冽は、身にせまるようなれている。凜々・凜凓・凜冽は、身にせまるような (氷)に從ひ、糜聲」とするが、凜の字形が用いら

凜 15 │ 燻 │ 18 りン

ざるに至ることをいう。

り、天下に施行して次第に強く結束し、解くべから 「王言は絲の如きも、その出づるや綸の如し」とあ る糸を綸、また琴瑟の絃をいう。〔礼記、緇衣〕にり」とあって、青い組紐の意とするが、魚釣に用いり」とあって、

た糸をいう。〔説文〕二三上に「青絲を糾せたる綬ながれるものをいい、綸とはより合せ

声符は淪。 侖は次第あるもの、

編

つりいと・なわ・ひも・つつむリン

をも粼々という。すべて清澄の光をいう。

凛(凜) 輪 廩(回) 燣 燐

遴[僯]

リン隣〔郷〕霖臨轔藺銤

形声 声符は紫。 森は人性 「説文」二下に「行くこと難きなり」とし、「易に 「説文」二下に「行くこと難きなり」とし、「易に はる。「行くこと難し」とは、人性によって呪禁を なる。「行くこと難し」とは、人性によって呪禁を 加えられた聖所などの、侵し難い意であろう。吝と 加えられた聖所などの、侵し難い意であろう。吝と かえられた聖所などの、侵し難い意であろう。吝と を選ぶく、答音をまた遴番という。また人を選ぶ ことを選束・選選というのは選に選集の意があり、 そのうちより選ぶ意である。

新。裁学時

これトす」とあり、また「鄰を買ふ」ともいう。「右隣」「小大右隣」とはそのような祭祀の場にはその両字形が行なわれている。「右隣」「小大右隣」とはそのような祭祀の場となった。漢碑にはその両字形が行なわれている。なった。漢碑にはその両字形が行なわれている。「左伝」昭三年「宅をこれトするに非ず。ただ鄰をなった。漢碑にはその両字形が行なわれたことを示してた。

東 16 ながあめ

爾。

という。字はまた淋と通用する。による。久雨をいう。雨で水量が増すことを霖。潦以往なるを霖と爲す」とあり、〔左伝〕隠九年の文形声 声符は林。〔説文〕二下に「雨ふること三日

18 のぞむ・みおろす・てらす

图 起如 。 言

たるあり」など、みな神霊の監臨する意。金文に いても〔大盂雅〕「故に天翼臨す」、〔毛公鼎〕「我 が有周に臨保す」など、すべて神霊の監臨するをい が有周に臨保す」など、すべて神霊の監臨するをい が有周に臨保す」など、すべて神霊の監臨するをい が有周に臨保す」など、すべて神霊の監臨するをい が有周に臨保す」など、すべて神霊の監臨するをい が有別に臨保す」など、すべて神霊の監路するをい が有別に臨保す」など、すべて神霊の監路するをい が有別に臨保す」など、すべて神霊の監路する意。金文に をい が有別に臨れで作る。 孤終 はいでも、大雅、雲漢〕では はいでも、大雅、雲漢)では はいでも、大雅、雲漢)では はいでは、大雅、雲漢)では はいでは、大雅、雲漢)では はいでする。 のでは はいでする

19 くるまのひびき・わ・とじきみ

醒 20 い・いぐさ

頭の交」は、よく知られている故事である。 野の交」は、よく知られている故事である。 野の交」は、よく知られている故事である。「難」のである。「墨子、号令」に、城上から落下させるのである。「墨子、号令」に、城上から落下させるのである。「墨子、号令」に、城上から落下させるがよっている。重さ二十斤、機を用いている。 発するという。戦国のとき、藺相如と廉頗の「刎っている。」。 一次である。「歌」に「莞に似て がするという。戦国のとき、藺相如と廉頗の「刎っている。」。

鮮 23 うろこ・さかな

のの意があり、また相連なるものの意形声 声符は粦。粦は燐火で光るも

うな霊物の末節の一部をうかがうを鱗爪という。 獣いがある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。がある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。がある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。 がある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。 がある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。 がある。〔説文〕 ニ下に「魚甲なり」とあって、うり。 がある。〔説文〕 ニアに「魚甲なり」とあって、うり。 がある。〔説文〕 ニアに「魚甲なり」とあって、うり。

て白尾、馬足人手にして四角、名を獲如といふ」、山経〕「皋塗の山に獣あり。その狀は鹿の如くにして赤尾、その音(鳴く声)は謠、その名を鹿くにして赤尾、その音(鳴く声)は謠、その名を鹿り。その狀は馬の如くにして白首、その文は虎の如り。その狀は馬の如くにして白首、その文は虎の如 〔命殷〕に鹿を賜うことをしるしており、〔貉子卣〕。 ことを刻したものであろう。西 周期の金文では、ことを刻したものであろう。西 ほりの金文では、 虎・玄武の四霊のほかに、麟 四乳鏡には、青竜・朱雀・白 化されたものであろう。漢末三国のころ行なわれ ての鹿に、のち種々の要素がつけ加えられて、神獣 ばしば白鹿を献ずる記録がみえるが、麟は神鹿とし の麟の図様には、羽翼を加えて羽翼獣とする観念が念は殷周のとき以来のことであるが、ただ漢以後 には浮彫式の鹿文を付している。鹿を神獣とする観 おそらく「うけひ狩り」でえた大鹿の鹿頭に、その 文様とする大鼎があり、また甲骨文に、鹿頭刻辞と銅器にも、殷器に〔鹿鼎〕とよばれ、鹿頭を鼎側の るなど、神事と関係の深いことからも知られる。青 に鹿鳴を用い、[大雅、霊台] に麀鹿が歌われてい獣とすることは、[詩、小雅、霊智] が祭事の発想 名を夫諸といふ」など、鹿形の神獣が多い。鹿を神 〔中山経〕 「獸あり。その狀は白鹿の如くにして四角 れたものと思われる。麟は瑞獣とされ、後漢以後し あり、これは西方の天馬など神獣の観念と合して生 いわれるものがあって、鹿頭に刻文を残している。

れることがあった。

れている。唐のころまで、そのような文様が用いら

ル

瑠 14 るり

腹 15 まつり

形声 声符は響。〔説文〕四下に「楚・ なり」とあり、繋む所りて新を食するを離腹といるり」とあり、繋むでは八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。もし二なり」とあり、繋北では八月に行なわれた。し二なり」とあり、東北では、二月と八月である。臘・ でもって行なうならば、二月と八月である。臘・ でもって行なうならば、二月と八月である。臘・ でをもって行なうならば、二月と八月である。臘・ でをもって行なうならば、二月と八月である。臘・

の形を加えているものがあ

麟が四霊の仲間に加えら

麟(磨)

調り、天下をして大いに離すること五日、膿するこ帝紀〕に、「太初二年三月、河東に行幸して后土をいる」とあるのも、その俗であろう。〔漢書、武以てす」とあるのも、その俗であろう。〔漢書、武以てす」とあるのも 新歳、 と五日、門戶を祠ること臘に比せしむ」という。 [四民月令]に臘膢の俗を詳記する。その翌日は小 次は燕祭、のち三日にして祀事が終るという。

縷 いと・きぬ・くるル・ロウ

征は税。長い糸であるから、縷言・縷述のように、いう。〔孟子、尽心、下〕に「布縷の征」とあって、いう。〔孟子、尽心、下〕に「布縷の征」とあって、ねる形。〔説文〕一三上に「綫なり」と 絶えずにつづくさまをいう。 して煙の如し」「絶えざること縷の如し」のように、 くどくどと詳しく述べることをいう。また「縷々と 声符は婁。婁は髪をたばね重

ルイ

厽 かさねる・つちくれルイ(ルヰ)

う。野外の軍壁や民家の牆壁に、この形式のものが 重ねて崩れぬようにしたもので、坂頭・版光ともい り、坺とは鍬で掘り起した土。それをそのまま積み 多い。壘(塁)と同字とみてよく、塁はその形を整 えたものをいう。 に「坂土を禁めて牆壁と爲す」とあ象形 土を重ねた形。〔説文〕一四下

> 淚 [淚]1 なみだ・なく

雨の如し」「洗澡交~零る」、また「後漢書、南匈奴伝」に「泣淚想望す」などの例がみえるが、洗薬の例はなく、「説文」にもみえない。仏滅後の大阿羅俊は、三途の衆生を悲しんで泣きに泣くゆえに、漢は、三途の衆生を悲しんで泣きに泣くゆえに、漢は、三途の衆生を悲しんで泣きに泣くゆえに、本意深等者という。晋の羊祜は、つねに硯山に登って、漢意美 以後に用いられる字で、漢碑には「遠きを望んで涙 褫 「墮淚の碑」と称した。杜甫は涕淚を好んだ人で、られ、人みな仰いで淚を垂れたというので、杜預がその山水を楽しんだが、没後にその碑が山上に立て その詩に涕を用いる句は五十を超え、涙を用いるも のは百句を超えている。〔紅楼夢〕に「淚天淚地」 の語があり、これもまたよく淚するものである。 は涕といい、その象形字は絮。涙は漢形声 旧字は淚に作り、槩声。古く

累二〔案〕12 かさねる・しばる・わずらわすルイ(ルヰ)

營 字。また糸の単位量に用いる。〔孟子、梁恵王、しており、この条と解を異にしている。桑は桑積の に解するが、盆を〔説文〕一四下に案土牆壁の形と盆に從ひ、糸に從ふ。厽は十零の重さなり」と会意 下」「その子弟を係累す」とは繋縛する意で、累と 「國事を以て君を累はさん」のようにいう。漢碑に事を託して、その労を借ることを、〔戦国策、斉策〕 はまとうてその自由を奪うことをいう。ゆえに人に 畾の省声。〔説文〕一四下に「増すなり。 形声 正字は絫に作り、厽声。累は

用いる。厽は土塊を重ねる形で、絫には適当でない。 厽は糸たばを重ねた形とみてよい は累・粲の字がともにみえ、〔漢書〕には粲の字を

塁12 (壘)18 とりで・かさねる・つづくルイ(ルヰ)

壘

に壘多きは、これ卿大夫の辱なり」とみえる。畾は「軍壁なり」とあり、〔礼記、曲礼、上〕に「四郊形声 旧字は壘に作り、畾声。〔説文〕一三下に う。出丸を壘城、その壘壁に迫ることを「壘を摩みあげたもの。その土壁の長くつづくものを塁とい 御は旌を靡かせ、壘を摩して還る」とみえる。 厽。鍬で掘り起した土を重ねて、そのまま土壁に積* す」という。〔左伝〕宣十二年「師を致すものは、

誄13 [讄]22 しのびごと・いのるルイ(ルキ)

[説文] は字を讄に作り、また繋声に従う字に作る 諡を贈るとするのである。「論語、述而」に「誄に り、生前の事功を述べて哀悼することで、そのとき という。〔論語〕にみえる誄は、子路が孔子の病を 日く、爾を上下の鬼神に禱る」とあり、「釈文」に であり、死者を弔う辞ではない。本来は祝詞のよう 禱ることを求めたときのことで、生者に対する禱告 くりかえしの多い荘重なものであったと思われる。 な禱告の辞であり、その辞は典礼文にふさわし 三上に「諡するなり」とあ形声 声符は来。〔説文〕

の魯の哀公の誄辞が、「左伝」哀十六年にみえている。思われる。晶は塁壁の字である。孔子が没したとき そのことからいえば、字は累に従うのがよいように

縲 とりなわルイ(ルヰ)

ら縲紲の「辱」に沈溺する」ことを嘆いている。の「思選も〔任少卿に報ずる書〕において、「自る。「思選も〔任少卿に報ずる書〕において、「自なり」として、孔子はその子を妻としたことがみえ

類 18 (類) 19 まつり・たぐい・にるルイ(ルヰ)

以、「周礼、小宗伯」「四望四類」、「淮南子、本経す」、「周礼、小宗伯」「四望四類」、「淮常では、ここに薦す」、また「書、尭典」「ここに上帝に類とどまらない。〔詩、大雅、皇矣〕に「ここに類しとどまらない。〔詩、大雅、皇矣〕に「ここに類しとどまらない。〔詩、大雅、皇矣〕に「ここに類しとどまらない。〔詩、大雅、皇矣〕に「ここに類し 意となり、〔楚辞、九歌、懷沙〕「吾まさに以て類をからざることを思ふ」のように用いる。また法式の て克く類」、〔左伝〕僖二十四年「召穆公、周德の類 それよりして類善の意となり、〔皇矣〕「克く明にし 啓くときには、必ず上帝に類する祭祀が行なわれた。 大牲をもって上下の神を祀るもので、ことに軍行を訓」「その社に類す」など、みな祭名で類祭をいう。 犬に從ひ、頪の聲」とするが、種類の多いのは犬に を薦めて拝する形で、その祭儀を類という。〔説文〕 一〇上に「種類相似たり。ただ犬を甚だしと爲す。 米と犬とは神に供えるもの。頁はこれ 旧字は米と犬と頁とに従う。

> 「曉り難きなり。頁米に從ふ。一に曰く、鮮白の兒。となる意である。賴声とされる頪は、頁部九上にとなる意である。な 立をもつものが多い。 如きなり」とするが、その用例なく、字義が明らか 粉の省に從ふ」という。〔段注〕に「頪・類は古今 爲さんとす」とは、その清を保って世を棄て、軌範 て、のち獺が作られた。示部の字に、そのような成 でない。類が種類の意となり、本来の類祭の字とし の字なり」と同一字とし、「種の繁多なること米の

羸 やせる・よわい・つかれる・くるしむルイ(ルヰ)

羸弱・老羸・羸病のように用いる。 [説文]四上に「痩るなり」とあり、 もって、羸羊を羸というのであろう。羸は喩母の声羸声で、この字は声が異なる。おそらく羸弱の意を 会意 ることもできようが、ここでは会意字とみてよい。 であるから聿(律)・位(立)のような関係を考え 魔と羊とに従う。魔に従う嬴・鸁は多くは 人に及ぼして

1 とらえる・つなぐ・まつわる

墨条 のを繋ぐ紐を燥という。〔左伝〕僖三十三年「纍臣う。〔爾雅、釈言〕に「拘なり」とあり、捕囚のも珠の如し」を例とするが、〔説文〕の文は獄治をい珠の如し」を例とするが、〔説文〕の文は獄治をい 注〕に「礼記、楽記」「繋々乎として端しきこと貫 形声 「綴りて理を得るなり」とあり、「段 声符は畾。〔説文〕一三上に

> 藩に觸る。その角を羸ぐ」の〔馬融注〕に「大索をない」とみえる。〔易、大壮〕「延羊、に「黑き索なり」とみえる。〔易、大壮〕「延羊、に「黑き索なり」とみえる。〔易、大壮〕「延羊、に「黒きななり」とみえる。 罪に陥ることを繋継という。〔論語、公意である。罪に陥ることを繋継という。〔論語、公意である。罪に陥ることを繋継という。〔論語、公意である。 たという。罪に陥ることを繋泄という。〔論語、公意である。罪に陥ることを繋ださいう。 (論語、 ごうの血で清める儀礼に用いるべきところを、 教されるを以て鼓に釁らず」とは、捕囚を殺して、軍鼓をそを以て鼓に釁らず」とは、捕囚を殺して、軍鼓をそ を以て鼓に繋らず」とは、捕囚を殺して、 あり、その四字に通用の義がある。 なり」とするが、その羸を縲・纍・累に作る諸本が

螺23 やみつかれる・おこたるルイ(ルヰ)

「韓詩外伝」に「贏乎として」に作る。みな声義の「纍々乎として襲すの狗の如し」と形容しているが、「纍々乎として襲する。」に、亡命中の孔子ををいう。〔史記、孔子世家〕に、亡命中の孔子を 常 近い字である。 また「一に曰く、嬾惰なり」とするが、疲弊し病困 して歸する所無きが若し」とは、安息をえないことの状をいう語である。〔老子〕第二十章「傑々兮と まをいう。〔説文〕ハ上に「垂るる兒」 声符は纍。 燥は糸の重なるさ

74 まつり
ルイ(ルヰ)

れを祭る、これなり」とあり、「今尚書説」である。を祭るとは何ぞ。天は南方に位す。南郊に就きてこ を祭る」という。〔五経異義〕に「事類を以てこれ す獺が作られた。〔説文〕「上に「事類を以てこれ などの意に用いられるようになって、その本義を示 形声 祭る祭名で、瀬の初文。類がのち種類 声符は類(類)。類は上帝を

A CONTRACT OF THE CONTRACT OF

「古尚書説」では「時に非ずして天を祭る」、すなわち臨時の祭とするもので、たとえば天災・軍行のときなどに祭る。[礼記、王制]に「天子まさに出でんとするときは、上帝に類す」とあり、出行のときなどに祭る。[礼記、王制]に「天子まさに出でない。 「たい 、」「伏とは伏犬を謂ふなり」とあり、「木で、「大とは伏犬を謂ふなり」とあり、「木で、「大き」に、「伏とは伏犬を謂ふ。王の車を以て「「大き」に、「伏とは伏犬を謂ふ。王の車を以て「大き」に、「伏とは伏犬を謂ふ。王の車を以て「大き」に、「伏とは伏犬を謂ふ。 とあり、「本を難った」とあるのも同じ祓練の儀礼である。伏整にといふ」とあるのも同じ祓練の儀礼である。大路には大性を用いる祭儀が多い。

l

合っ みことのり・いいつけ・よい・せしめる

て、謹み跪いて神意を聴く人の形に作る。その神意 ものの形。上部は三角形に似た深い冠の形である。 するものであるが、下文・金文の形は、礼帽を著け するものであるが、下文・金文の形は、礼帽を著け でに從ふ」と会意に解する。人を集、卩を節とし、 いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕九上に「號を發するものなり。人・ いた。〔説文〕れ上に「號を發するものなり。人・ のであるが、下文・金文の形は、礼帽を著け で、謹み跪いて神意を贈く人の形に作る。その神意

は、神の命ずるところである。金文の命の字は、は、神の命ずるところである。金文の命の字形の字形のままで、「天令」「天令」「休令」「先王の令」「祖考の令」のようにしるされており、西周後期に至って、これに祝禱を収める器のり、西周後期に至って、これに祝禱を収める器のたことが知られる。若ももと刀に従わない字であったが、西周中期から日を加えた字形となった。また鈴も、「毛公鼎」の「朱旂二鈴」、また「楚王金が、西周中期から日を加えた字形となった。また鈴も、「毛公鼎」の「朱旂二鈴」、また「楚王金が、西周中期から日を加えた字形となった。また命令・命はなお一字であったことが知られる。鈴は神を送るときの楽器である。神意に従うことから令善の義となり、令名・令聞のように用いる。

礼 5 【禮】18 れいぎ・うやまう

形声 旧字は禮に作り、声符は豊。豊は醴で禮の が文。その醴酒を用いる饗醴のときの儀礼を礼と いう。〔説文〕」上に「履なり」と畳韻の字をもって訓し、「神に事へて福を致す所以なり」とその義 を説き、豊の亦声とする。ト文・金文の豊声の字には、狂の形に従うもの、二丰の形に従うものもある。 は、狂の形に従うもの、二丰の形に従うものもある。 は、狂の形に従うものである。「説文」に古文 とは声義ともに異なるものである。〔説文〕に古文 とは声義ともに異なるものである。〔説文〕に古文 とは声義ともに異なるものである。〔説文〕に古文

例が多い。礼はもと祭儀に用いる字であったが、の全体を包含するに至り、「中庸」に「禮儀三百、必嫌三千」の語がある。中国の古代文化は、その意感儀三千」の語がある。中国の古代文化は、その意感儀三千」の語がある。中国の古代文化は、その意感儀三千」の語がある。中国の古代文化は、その意感儀三千」の語がある。中国の古代文化は、その意感儀三千」の語がある。中国の古代文化は、その意味で礼教的文化であると規定することができる。その結果、繁文海礼、形式に流れ、内実を失うことが多かった。「論語、陽貨」に「禮儀三百、必要故を立ふならんや」とは、礼が形式のみに堕することを責める語である。しかし礼の形式化は時代とともに著しくて、この国における自由人の系譜は、つねに反礼俗的である。皆の阮籍は礼教に拘わらず、これを識るものに対しては、「禮は豊我の爲らず、これを識るものに対しては、「禮は豊我の爲らず、これを識るものに対しては、「禮は豊我の爲らず、これを識るものに対しては、「禮は豊我の爲られとものまらんや」といって、これを拒否に設けられしものならんや」といって、これを拒否に設けられしものならんや」といって、これを拒否したという。

伶ィ がくじん・わざおぎ・こもの

陰險

とさまを伶仃という。字はまた伶丁・伶俜・零丁に 「説文」ハ上に「弄なり」というのは、舞楽を行な う伶優の義とするものであろう。伶官は楽官、舞楽 をもって神につかえ、世襲的なものであった。「左 伝」成九年に楚囚のことをしるし、「その族を問ふ。 伝」成九年に楚囚のことをしるし、「その族を問ふ。 伝」成九年に楚囚のことをしるし、「その族を問ふ。 「左」 大父の職官なり。敢て二事あらんやと。 これに琴を奥へしむ。南音を操る」という。一人ゆ これに琴を奥へしむ。南音を操る」という。一人ゆ と、まなの職官なり。なて二事あらんやと。 のであった。「左

作る。畳韻の連語である。

冷 7 つめたい・ひややか・さむい

眼・冷笑・冷淡・冷面のように用いる。 は黙して神意を聴く意で、無感動の意がある。冷は黙して神意を聴く意で、無感動の意がある。冷燥・冷寒冷をいう。*

励 7 (勵) 16 はげむ・つとめる

でで表す。 は石ころ。力は相の形であるから、石の多い荒地を は石ころ。力は相の形であるから、石の多い荒地を は石ころ。力は相の形であるから、石の多い荒地を は石ころ。力は相の形であるから、石の多い荒地を でいる。 でい。 でいる。

戻って戻りるもとる・つみ・いたる

大とに従う。戸下に犬牲を埋めて呪禁とする意で、ここを侵すことは背戻のこととされる。 「説文」「〇上に「曲るなり。犬の戸下に出づるに従ふ。 戻なるものは、身曲戻するなり」とし、犬が戸下をくぐるとき身をねじまげる意であるとするが、犬のそのような動作のために字を作ることはない。犬のそのような動作のために字を作ることはない。犬のそのような動作のために字を作ることはない。犬のそのような動作のために字を作ることはない。犬のそのような動作のために字を降す、〔大雅、抑〕「亦これこれ戻れり、〔左伝〕文四年「それ飲が戸下をくぐるとき身をねじまげる意であるとするとする。犬の戸下に犬牲を埋めて呪禁をしている。また〔詩、小雅、南無・例はみな罪長の意に用いる。また〔詩、小雅、南無・例はみな罪長の意に用いる。また〔詩、小雅、南無・例はみな罪長の意に用いる。また〔詩、小雅、南無・別は入る罪長の意としているととなる。

止まる・至るの義をも生ずるのであろう。戻と至戻の二義に用いるが、戸下の呪禁の意から、る」、「魯頌、泮水」「魯侯戾る」はみな至る意。罪る」、「魯頌、泮水」「魯侯戾る」はみな至る意。罪

例 8 ためし・しきたり・おおむね

形声 声符は列。列は裂骨・裂肉の 墓を責め禁ずること、すなわち遮辺の意である。 に説文」八上に「比なり」とあり、此例の意とするが、それはのちの転義。[周礼、司隷、注]に「属が、それはのちの転義。[周礼、司隷、注]に「属が、それはのちの転義。[周礼、司隷、注]に「属が、それはのちの転義。[周礼、司隷、注]に「属が、それはのちのも字は凡例・慣例の意に用いる。

金 8 ひとや

今 8 ルイ・リン

玲 荔のさといことをいい、万葉人はこの字を愛なる。古い字書にみえないが、万葉人はこの字を愛なる。古い字書にみえないが、万葉人はこの字を愛なる。 おい字書にみえないが、万葉人はこの字を愛いる。 ***

冷

励(勵)

囹恰

日大をうけているものであろう。 用法をうけているものであろう。

玲9 玉の音

全の 形声 声符は念。『説文』一上に「玉な音で、擬声語。『日本紀私記、神代、下』「手玉玲瓏」は「手たまもゆらに」とよむ。『古事記、上』にも「玉の緒もゆらにとりゆらかして」とあり、にも「玉の緒もゆらにとりゆらかして」とあり、に、来母の字が多い。

芳が 10 おおにら・れいし

択ュ ねじる・くじく・ばち

化した字である。 化した字である。

いまく・さとる・したがう

を聴く意。略はその繁文とみてよい字である。〔説文〕一三上に「聴くなり」、「広雅、釈である。〔説文〕一三上に「聴くなり」、「広雅、釈である。〔説文〕一三上に「聴くなり」、「広雅、釈である。〔淮南子、・斉子県」「道に通ぜざるもうことをいう。〔淮南子、・斉子県」「道に通ぜざるもうことをいう。〔淮南子、・斉子県」「道に通ぜざるもうことをいう。〔淮南子、・斉子県」「道に通ぜざるもうことをいう。〔淮南子、・斉子県」「道に通ばざるもうことをいう。〔淮南子、・大子県」「道に通ばである。

針3 すず・りん

是 全年等

の音の擬声語。令の亦声とするのは、これをもってに「令丁なり」とあり、令の亦声とする。令丁は鈴は神をよび、神を送るものであった。〔説文〕一四上は神をよび、神を送るものであった。〔説文〕一四上を声を声を聴く意。鈴

で、療の初文は糜に作る。のち警蹕に鈴を用い、それは手にもって振る鈴、すなわち楽を主としたの とき、例が多いが、それは旂に和鑾をつけたものである。例が多いが、それは旂に和鑾を文に鑾旂を賜ううのは鈴を旗に用いるもの、また金文に鑾旂を賜う 閣におり、書簡の脇付には鈴下という。閣下という その音をもって邪霊を祓うためであった。将軍は鈴 また山中修道の人が錫一杖の類を用いるのも、みな 分、口縦二寸六分、両面に饕餮文が加えられている。 安陽出土の鈴に高さ一寸四分、口横一寸半の小鈴が 鼎〕に「朱旂二鈴」、「番生設〕に「金葊二鈴」とい の〔伝〕に「和は軾の前に在り。鈴は旂の上に在 の類につけ、「詩、周頌、載見」「和鈴央々たり」ことを命ずるものと解するのである。鈴は旗や車馬 のと同様に用いる。 がある。古代の医療にシャーマンは鈴を用いたが、 あり、河南濬県の馬坑から出たものは、高さ三寸六 り」とみえ、舌があって、 動くときは鳴る。「毛公

零 13 ふる・おちる

ある。また〔鄭風、野有蔓草〕「零露、薄たり」はで、「艦雨旣に零る」とは、雨を瑞兆とするものでで、「艦雨旣に零る」とは、雨を瑞兆とするものでで、「鯱雨飲に零る」とは、雨を瑞兆とするものでという。〔詩、鄘風、定之方・中〕は都遷りを歌う詩という。〔詩文〕一「下に下る。〔説文〕一「下に

零丁を歎く」の句がある。
文天、祥の〔零丁洋を過ぐるの詩〕に「零丁洋裏、紫天とは、人のうらぶれるのを零落・零丁という。邂逅の喜びを歌う発想である。草木の葉の枯れ落ち然に

属 4 はげしい・はげむ・わるい・といし

上西、西山 高島 山野

「物これが鷹を爲す」は遡の意。また〔司隷」「王宮る。〔詩、大雅、民労」「以て醜厲を謹めよ」、〔瞻切」「この大厲を降す」など、みな悪厲の意である。 「会、「会、「会」、「似の子があり、その石の字形はもと石室の祠処の形であるから、そこで祝禱呪詛のことが行なわれたのであろう。それよりして厳厲・とい行なわれたのであろう。それよりして厳厲・ととが行なわれたのであろう。とみえる。玉石を磨御」に「厲を取り鍛を取る」とみえる。玉石を磨御」に「厲を取り鍛を取る」とみえる。玉石を磨御」に「厲を取り鍛を取る」とみえる。玉石を磨御」に「厲を取り鍛を取る」とみえる。玉石を磨り、「一、「、」

霊 15 (電) 24 みと・たま・かみ

17. 正字とする靈は、その用例をみない。正字とする靈は、その用例をみない。

The State of the S

福 等 等 華 等 等 等

· AN

初金 15 おおい・くろい・のり

添 16 みお・しずく

の歌にも、澪標の字を用いている。 「みをつくし」とよむ。[色葉字類鈔、下、雑]に ないなさ細江の澪標 吾を頼めてあさましものを」 といなさ細江の澪標 吾を頼めてあさましものを」 をいまな知江の澪標 吾を頼めてあさましものを」

隷16 「熱」17 つく・したがう・しもべ

神 講 大

その禍殃を移されたものが、「社稷の常隸」として えており、当時そのような呪儀があったのであろう。 寶かば、何の益かあらん」といって許さなかったといったが、楚王は「腹心の疾を除くも、これを股肱にめたが、巻王は「腹心の疾を除くも、これを股肱に いう話がある。同様の話は〔左伝〕になお他にもみ すべし」と、その禍殃を臣下のものに移すことを勧の身に當らんか。若しこれを禁らば、令尹司馬に移の身に當らんか。若しこれを禁らば、令尹司馬に移 罪禍をその人に転移し附着させる意とみるべきであ らわれたとき、周の太史がこれを予して、「それ王る。〔左伝〕袁六年に、衆赤鳥のような雲が空にある。〔左伝〕袁六年に、衆赤鳥のような雲が空にあ るものであった。〔説文〕に「附着するなり」とは、 神への犠牲として献じたもの、すなわち神の徒隷た されば罪隷の人の意に用い、〔左伝〕成十六年「魯古くは罪隷の人の意に用い、〔左伝〕成十六年「魯は津、手に巾を執る形より誤ったものである。隷はは半、手に巾を執る形より誤ったものである。 もと神事に従うもので、臣妾童僕と同じく、古くは の常縁なり」、定四年「社稷の常隸なり」のように、 字に隶に従うものなく、みな柔の形に作るが、 合わず、また字形をも解するところがない。漢碑の に「附着するなり。隶に從ひ、柰聲」とするが声が儀の方法を示す字であると思われる。〔説文〕三下 を移す形で、その咎尤を他に転移する古代的な呪 呪霊をもつ獣の形。隷はそれに巾を加えてその呪霊 より変化したものである。祟の初形は柔、祟をなす 祟と巾と手とに従う。のちの字形は、そ たり ま それ

ではない。 ことができる。隷書の名は、おそらく神事に用いる 書」は玉に朱書・墨書したものであるが、これと雲年のものである。また前四世紀末に近い〔侯馬盟なである。近年出土の雲夢に地の秦簡は、始皇帝末でにみられ、秦において行なわれていたものが秦隷 〔漢書、芸文志〕に「これを徒隷に施す」としてい 思われる。「徒隸に施す」ための簡略字であったの た。のちの木簡・竹簡類はその系列に属するものと 神殿経済や政令の施行に関して用いることが多かっ ものが原義で、文字はこの当時、宮廷儀礼や盟誓、 夢秦簡とを比較すると、隷書への展開のあとをみる る。筆記体に近いその字形は、戦国古文のうちにす 布をもつ形となる。隷書の字体は、秦の始皇帝のと 部の形のようである。 の字形に似た形で示されるように、者をなす獣の尾 神に献ぜられたものであった。隶の下部は、また求 程邈が小篆を省改して作ったものといわれ、 もしまた聿ならば、 それは呪

嶺 みね・さか・やまなみレイ・リョウ(リャウ)

というが、「峯嶺高峻」のように合せていうこともべきもの」とする。峰に対して、そのかたそばを嶺 ある。また連峰を嶺といい、広州の境に連亙する峰 り」とあり、〔正字通〕に「山の肩領、道路を通ず を五嶺という。その南方は嶺表、全く風土の異なる 異域であった。 形声 をいう。〔説文新附〕丸下に「山道な 声符は領。領は衣のえりくび

> 17 かレ つイ ったい・えやみイ・ライ

祭す」とあって、祭とはその災厄を他に移す呪儀を にの神、則ち水旱瘟疫の災、ここにおいてかこれを なき。 にはいてかこれを にはいてかこれを にはいてかこれを にはいてかこれを にはいてかこれを いう。 れる。〔左伝〕昭四年「癘疾降らず」のように、そ を承ける字である。病因の明らかでない神聖病とさ るが、厲は悪厲を意味する字であるから、その声義 また疫痢の類をも癘という。 七下に「惡疾なり」とし蠆の省声とす形声 声符は鷹の省文萬。〔説文〕 (説文)

霝 あめふる・おちる

雨儀礼、霊はそのことを司る女巫、またその神気を〔楚辞、離騒〕などにしばしばみえている。霝は請(霊)という。並祝の指導者を楚では霊脩といい、 の気は巫の司るところであるから、その巫を靈 受けた雨をえて、吉祥とするものである。その神明 定之方中」は衛の都遷りのさまを歌うもので、「霊 一下に「雨零るなり」とし、下の三口を雨滴の象列して雨を請う請雨儀礼を示す字である。〔説文〕 雨旣に零る」の句がある。霊雨は霝雨。神明の気を に対して感応して零る雨を霝雨という。〔詩、鄘風、 り、請雨儀礼を示す字であることは疑いない。 とするが、口の部分は卜文・金文以下みな日の形であ いう字であった。 会意 を収める器の形で、多くの祝禱の器を 雨と三口とに従う。口は祝禱 それ

齢 (齢) とし・よわい

林」に 字形を用いることは、それよりのちのことである。 齡 歯をみて容易に獣畜の年齢を知ることができた。人 の年齢も同じ。漢碑に字を軨、また零に作り、齢の 「年齒なり」という。牧畜においては、その 形声 文新附] ニ下に「年なり」とし、〔字 旧字は齢に作り、令声。〔説

礪 といし・あらと・とぐレイ

溪

ている。」というでは、釈詁」に「磨くなり」とみなるものを礪という。〔書、費誓〕に「乃の鋒刃をなるものを礪という。〔書、費誓〕に「乃の鋒刃をなるものを砥、粗いない」というでは、私いいのでは、私いいのでは、 る厲禁の儀礼が行なわれたともみられる。 にみえる礪は石室の形に従い、そこで邪悪をとどめ える。のち「砥節礪行」のようにいう。 声符は厲。厲に礪石の意がある。〔説文新 (子中医)

藜 あかざ

こと。〔管子、小 匡〕に「五穀番らずして、蓬蒿藜六年「これが蓬蒿藜藿を斬る」とは荒蕪の地を闢く六年「これが蓬茘藜藿を斬る」とは荒蕪の地を闢くなり」とあり、あかざ。〔左伝〕昭十 影 藿の羹」の語がある。〔詩、小雅、北山〕「北山にょくときる。 はら、また。 供した。〔淮南子、精神訓〕〔史記、自序〕に「藜 藋並び興る」 形声 とみえる。その初生のものを食用に 声符は黎。〔説文〕一下に「艸

なお歌楽して自ら楽しんだという。 あるとき、藜藿にも飽かざること七日に及んだが、

麗四河 湯 かかる・うるわしい・ならぶレイ・リ

霧脈 替繁

鹿皮なり」という。これより伉儷(夫婦)の意とな皮」とあり、結納として儷皮を用い、〔注〕に「兩皮」とあり、結納として儷皮を用い、〔注〕に「兩い近い。〔儀礼、士昏礼〕に、「納徴に、文纁末音艦に近い。〔儀礼、 せ唇礼〕に、「納徴に、文纁末音艦に近い。〔後礼、 せ唇れ〕に、 あどの用義が、字の初義廟門に入りて、碑に麗ぐ」などの用義が、字の初義廟門に入りて、碑に麗ぐ」などの用義が、字の初義 は他に比すべきものがない。甲骨文に鹿頭に刻辞し たものがあり、 り、ならぶ意となる。また美麗の意は鹿角について いうべきものであろう。鹿皮も美麗であるが、 (法)に麗らざるもの」。また「礼記、祭義」「旣に 礼、大司寇〕「凡そ萬民の罪過ありて、いまだ灋な、然という。」の初義は〔詩、小雅、魚麗〕「魚、罍に麗る」、〔鳥な、然という。」とする意。字形が鹿角を主とするものとすれば、字とする意。字形が鹿角を主とするものとすれば、字とする意。字形が鹿角を主とするものとすれば、字とする意。字形が鹿角を主とするものとすれば、字とする意。 聘す。蓋し鹿皮なり」とは、婚礼の納徴(結納)いた。また、これである。丽は古文の形。また「禮、麗皮もて納ない声とする。丽は古文の形。また「禮、麗皮もて納食を見ること急なれば、則ち必ず旅び行く」といい、 られる。〔説文〕一〇上に「旅びて行くなり、 形とされるが、卜文・金文は鹿角を主とする字とみ 字の上部の丽が麗の初文で、鹿皮を並べた おそらく「うけひ狩り」をして獲た 鹿の性、 鹿角

> 戦国期以後の用法である。「竝ぶ」の訓は、儷皮と 国策、中山策〕に「佳魔」の語がみえるが、みなている。〔書、偽古文畢命〕に「奢麗」、また〔戦ものであるらしく、大事を記念する意味の文を刻しものであるらしく、大事を記念する意味の文を刻し して用いるに至ってからのものであろう。

孁 みして

紀〕に「大日孁 奪」の名に用いている。 (神代孁は中国に殆どその用例なく、わが国では〔神代孁は中国に殆どその用例なく、わが国では〔神代孁は一句を その巫を靈また孁という。〔楚辞、離騒〕に「靈惰」 の語があり、もとそのような巫祝者をいう語である。 形とするが、三口は祝禱の器である日を列ねた形。 り」という。霝字条二下に「雨零るなり」とし、象 靈(霊)と声義同じ。〔説文〕 ニドに「女の字な 儀礼を示す字で、孁はその巫女をいう。 会意 ここの女とに従う。 話は諸雨の

<u>盭</u> もとる・そむく

齄 0 H XX

らかでない。盩一○下は「引撃するなり。卒・支にて戻の若くす」とするが、これを会意とする意が明 ただす)するなり。弦の省に從ひ、蟄に從ふ。讀み(戾)と声義が近い。〔説文〕一二下に「弼戾(責め これを殴って訊問することを示す字で、 錠を施した罪人を、血をすすって神に誓約させ、 会意 罪戻の戻

麗(丽)

孁

盭 糲

> 糲 〔史記〕〔漢書〕にはなお多く盭の字を用いてい 来は罪戻の意でなく、声義の通用する字である。 ている字形で、罪戾の戾(戾)の本字とみるべきで ある。戻は戸下に犬牲を呪禁として加える形で、本 るが、盩は罪人を訊問する意、盭はそれに縛を加え 意であるとする。すると盭は弦をもって撃つ意とな 從ふ。血を見るなり」とあり、血が流れるほど撃つ くろこめ る。

糕 食」とあり、 十分精白してない米穀の類をいう。 形声 る。〔史記、太史公自序〕に「糲梁の 声符は厲。厲に粗悪の意があれた。*

なり」とあり、海中の岩石に附着し、層々相重なる 蝈 かき・ライ の意がある。〔説文〕一三上に「蚌の『形声 声符は鷹。鷹に粗剛なるも

屬

醴 あまざけ・あまい・うまいレイ

にするものを蠣黄という。

ものであるから、蠣房の名がある。その肉を塩づけ

0 四 **大學** 可信 四篇 3章

腰に在り。王、饗醴す」、「大鼎」「大(人名)、厥でにて熟するものである。「師逮彝」「王、周の康」 二文を用いる。〔説文〕 | 四下に「酒一宿にして孰す形声 声符は豊。豊は醴の初文で、金文にはその るものなり」とする。あまざけの類。少麴多米、

麗 21 ならぶ・たぐい・つく

形画 声符は麗。麗につく、ならぶ を順という。四字六字の対句をもって構成する修のを儷という。四字六字の対句をもって構成する修のを儷という。四字六字の対句をもって構成する修のを儷という。四字六字の対句をもって構成する修のを儷という。四字六字の対句をもって構成する修のを儷という。四字六字の対句をもって構成する修

福コ れんじ・のき・てまり

舞・玉を加える字があり、巫に従うものはない。すなわち霊の初文。金文の字形には霝下に示・心・玉を以て神に事ふ」とし、重文として靈をあげる。「説文」―上に「靈巫なり。

多典 21 むしばむ・かい

食い虫の意とし、彖声とするが、声は合わない。 鑑 とみるべきである。ただこの字を、虫ばむ意に用い が橐の中の穀などを食う虫を示すのと、相似た構造 いう。〔説文〕一三下に「蟲の木中を齧むなり」と木 氮素 の字であるから、彖はその虫食いのあとを示すもの うとする愚かさを笑う語である。〔広雅、釈魚〕にあり、その貝を割って海水を酌み、大海の量を測ろあり、 る例が殆どなく、螺のような形の貝の名であるらし 蝸牛の意とするのは、その形がこの貝と似て い。〔漢書、東方朔伝〕に「蠡を以て海を測る」と 〔郭璞注〕に「禐海中に出づ。大なるものは斗の如笑だ。」に「禐海・ 一根腰大腹のものである。 [広雅、釈魚] の麻字条の 瓠欚を謂ふなり」とあって、その形状は瓢に似て、 らであろう。「周礼、鬯人」の「郷注」に「瓢とは て酒杯に用いた。蠡の音は蜾蠃の蠃に近く、蜾蠃は し。以て酒杯と爲すべし」とあって、その貝を剖 会意 は虫食いのあとのような形を 象と触とに従う。象 いるか

の形状によって名をえているものである。の形状によって名をえているものである。このことからいえば、蠡・蠃・胡廬とは匏のことである。このことか廬と同語で、胡廬とは匏のことである。このことかった状によって名をえているものである。

高貴 3 りゅう・おかみ りゅう・おかみ りゅう・おかみ りゅう・おかみ しゅうりょう (リャウ)

字で、〔説文〕は字を竜部に属しており、字の構造 せる神として、竜形の霊獣が考えられた。〔説文〕 一下に「龍なり」とし、
二下に「龍なり」とし、
二声とする。
両声のある そこに散りけむ」の「をかみ」、また〔神武紀、上〕 四「吾が崗の於可美に言ひて落らしめし雪の摧けし 法からいっても、 神社」の多いことをしるしており、わが国でも水神 ある。〔代 匠記〕に、泉の出るところに「意加美の が「これ高龗となる」の注に、「於箇美」の訓が イザナギがカグツチを三段に斬りたおし、その一段 龗の字のままで用いている例は殆どない。 とされた。〔玉篇〕に「また靈に作る」としており、 形声 礼である。龍(竜)は雨雪などを降ら 霝声としてよい。【万葉】ニ・一〇 声符は霝。霝は降雨を祈る儀

レキ

秋 10 単門・まばら・ならぶ

N N

会意の一両不をならべた形。不は軍門に立てる標識。

これを左右に立てて門とする。「説文」七上に「稀、護麻なり」と、禾を植えることのまばらなさまをいうとするが、秤に従う字はみな軍礼に関するもので、禾素とは関係がない。「周礼、大司馬」にので、禾素とは関係がない。「周礼、大司馬」にがまいて祝禱することを示す字で、和とは和議をいう。股器の図象に両禾が左右に相対する形に作るものがあり(禅図)、そこで功歴を旌ますることを、金文で放器の図象に両禾が左右に相対する形に作るものがあり(禅図)、そこで功歴を旌ますることを、金文で放器の図象に両禾が左右に相対する形に作るものがあり(禅図)、そこで功歴を旌ますることを、金文で放器を殺し、その呪能を絶つこと、暦(暦)は軍門に祝禱することがある。度暦、その功績を報告する礼である。度をまた禾を加えて機に作ることがある。

严。 為。 為

十夫を賜ふ」などの例十夫を賜ふ」などの例をあるが、それが人鬲の本字であろう。同音仮借して、鬲をその字に用いたものと思われる。



展 12 ルキ かる

会意 パと称とに従う。厂は崖下、杯は両禾車門の象。麻はその陣地の前に両禾を樹てて、軍を駐屯の象。麻はその陣地の前に両禾を樹てて、軍を駐屯と訓し、〔段注〕に治庁の義とする。甘部暦字条五社。本本に「麻は調なり」とあり、調和の意とするが、上に「麻は調なり」とあり、調和の意とするが、上に「麻は調なり」とあり、調和の意とするが、当な本来は軍門和議のことを示す字である。「毛ど下、杯は両禾車門であろう。

暦 14 「暦」16 こよみ・いさおし・かず

野春村 日本

「暦象なり。日に従ひ、麻聲」とするが、古くは暦に、日は祝詞を収める器で、軍門においてその功歴門、日は祝詞を収める器で、軍門においてその功歴のは祝詞を収める器で、軍門においてその功歴の表意 旧字は曆に作り、縣と曰とに従う。縣は軍

に麻を用いた。字は金文においては日に従い、計は解を収める器の形であるから、軍門においてその功歴を神に告げて、旌表する意。金文にそのことを字形に作ることがあり、軍門の象である禾の形に従字形に作ることがあり、軍門の象である禾の形に従字がる。暦数のことは農時を定めるもので治国の大本いる。暦数のことは農時を定めるもので治国の大本とされ、[論語、発日] に「天の曆數、汝の躬に在とされ、[論語、発日] に「天の曆數、汝の躬に在り」という尭の語を引用する。曆の字の成立よりいる。曆数のことは農時を定めるもので、これを曆えば、その字はもと軍礼に関するもので、これを曆刻に用いるのはのちの転義である。

14 【歴】16 けみする・すぎる・かぞえる

歴 せない 森穂

形声 旧字は歴に作り、駅声。原は軍門のあるところ。止は往来の義で、歴とは軍行において経歴するところをいう。〔説文〕二上に「過るなり」、〔默るところをいう。〔説文〕二上に「過るなり」、〔默るところをいう。〔説文〕二上に「過るなり」、〔默るとことがあり、これも経歴の意とみてよい。歴は金文ではがあり、これも経歴の意とみてよい。歴は金文ではいが、曆(曆)との関係においてその字義を考えることができる。曆は両天章門の前で祝禱して神に告げ、その功歴を姓表する意であるから、歴とは告げ、その功歴を姓表する意であるから、歴とはとより、経歴・歴史の意となる。各地をめぐることを歴遊、時を経ることを歴年・歴世・歴代という。米は軍門のあるととができる。野は神子の神子の神子の形に従う字でいま字を歴に作るが、もと両禾の森の形に従う字でいま字を歴に作るが、もと両禾の森の形に従う字でいま字を歴述、時を経ることを歴年・歴世・歴代という。

櫟 く ぬ き

〔人間世〕に櫟社の木の話がみえる。いずれも不材〔社子、逍遥遊〕に不材の木である樗の話があり、〔社子、逍遥遊〕に不材の木である樗の話があり、 う。山野に自生する雑木で、不材の木とされる。 の木であるから、合せて樗櫟という。 形声 に「櫟木なり」とあって、くぬぎをい 声符は樂(楽)。〔説文〕六上

瀝 こす・したむ・したたる・そそぐレキ

り」とあり、酒を漉すことをいう。歴々は水の流れる意がある。〔説文〕二上に「漉すなで、一生に「漉すない。」とあり、酒を漉すことをいう。歴々は水の流れて、一般では、一般では、一般では、一般では、一般では、 の。土瀝青とはアスファルトをいう。 油を加えてねったもので、腐朽どめに塗りこめるも あり、血盟して報復を誓う意である。瀝青は松脂に そそぐ音。〔呉越春秋〕に「瀝血の仇」という語が

攊 ゆびひしぎ・かいばおけ・うまやレキ

武帝の〔碣石篇〕に「老驥、櫪に伏するも、志は千指・麻指ともいう。また馬のかいば桶をいう。魏のをならべて、木を加えてしばる拷問の器。また拶をならべて、木を加えてしばる拷問の器。また拶をならべて、木を加えてしばる拷問の器。また拶をならべて、木を加えてしばる拷問の器。また拶に 里に在り」の句がある。 形声 声符は歴 (歴)。 [説文] 六上

蝶 20 あきらか・しろい

として用いる。〔李善注〕に「光明の貌」とあり、波を凌ぎて的皪たり」とあり、的皪のように畳韻語 紅蓮のかがやくようなさまをいう。 声符は樂(楽)。左思の「魏都の賦」「丹藕

礫 こいし・つぶて

〔広雅、釈詁〕に「擽は撃つなり」とみえる。 な小石をいう。つぶてを投げることを擽といい、に「小石なり」とあり、つぶてのよう 形声 声符は樂(楽)。〔説文〕九下

轢 ひく・ふむ・ふみにじる

あった。皪・礫・轢の三字に、轢き砕かれたものをり、犬牲を轢き殺すのは、軍を発するときの儀礼で いう共通義がある。 形声 上に「車の踐むところなり」とあり、 声符は樂(楽)。〔説文〕一四

配22 地名・リ

「菊慈童」は、その伝承を歌う。

「駒県は神仙の地とれ、隋のとき菊潭県と改名された。わが国の謡曲れ、隋のとき菊潭県と改名された。わが国の謡曲 して知られる。 その地に菊潭があり、仙境として知ら形声を一声符は魘。河南南陽の県名。

轣 23 車の音・ひく・ふむレキ

声符は歴(歴)。轣轣を〔方言〕に糸くり

で、また車の声をもいう。滑稽(水さし)と同じよ車とする。ぐるぐるとまわるときの音を形容する語 も轣轆という。双声の擬声語である。 うに、とめどないものであるから、でたらめの話を

蹇 雷ルキ

形声 (五行の金気が移らず)、秋に霹靂多し。霹靂なるも きの音を形容する、畳韻の擬声語である。 のは金氣なり」とみえる。霹靂は雷霆の炸裂すると に、「王者、言從はざれば、則ち金、革に從はず 声符は歴(歴)。〔春秋繁露、五行五事〕

レツ

列 わける・つらねる・ならべるレツ

影 肾。

帛のことをいう字である。列に割裂と陳列との意がま列を陳列、裂を分解・割裂の字とするが、裂は裂 のことでで、「詛楚文」の字形も同じ意象である。断首してで、「詛楚文」の字形も同じ意象である。断首してで、「詛楚文」の字形も同じ意象である。断首してるなり」と訓して多声とするが、列は頭部を截る形 疈辜とは、犠牲を割いて悪邪を祓うことをいう。 列藤率」の「盧弁注」に「列は鼺辜なり」とみえ、 多々たるなり」と水流の意とし、列四下に「分解すれる形に作る。[説文]は多一下を「水流るることする形に作る。「説文」は多一下を「水流るること」 ダと刀とに従う。 筝は断首の象。 頭髪を存

に遡って、列世・列代・列朝のようにいう。 記・列宿・列第・整列のように用いる。また時間的 が生れる。のちその列におくことをいい、列次・列 墓の例では、断首と残身を各十個ずつ一坑中に埋め、首坑が、その遮遡とよばれるものと考えられる。殷逖、悪邪をさえぎる義をももつ字である。殷墓の断 数列にわたって並べられており、そこより陳列の意 * としてその聖域の出入のところに埋める意で、列はとしてその聖域の出入のところに埋める意で、列は あり、遮辺のことをいう。すなわち断首して、呪禁 影 烈

劣 おとる・わずか・すくないレツ

劣薄とは知恵の浅いことをいう。 それよりして才分の劣る意となり、優劣の字とする。 力は耒の形であるから、耕作力の乏しいことをいう。 下に「弱なり。力少に從ふ」とするが、 会意 少と力とに従う。〔説文〕「三

₩ 6 断首の形

列・烈の系統の字となる。断首して焚くことを烈となり、岁は残骨の形で奴・餐、罗は断首の形で、とするが、水流には冽々という。罗と岁とは形が異とするが、水流には冽々という。罗と岁とは形が異「水流るること罗々たるなり。川に従ひ、列の省暋」 いう。骨節を裂くことを別という。 毛の残っている頭骨の形。〔説文〕ニートに

さむい・つめたいレッ

レツ 劣 ¥ 冽 烈 茢 迾

> 意が含まれている。 た水の清冽、風の寒涼なることをいう。列に激烈の 氣なり」とあって、寒冷の甚だしいことをいう。ま 下泉」の〔伝〕に「寒なり」、また〔玉篇〕に「寒 形声 声符は列。〔詩、曹風、下泉〕「冽たる彼の

やく・はげしい・あきらか・てがらレツ

桃苅・執戈を以てす。これを惡ればなり」とあり、桃苅・執戈を以てす。これを惡ればなり」とあり、檀子、下〕に、「君、臣の喪に臨むときは、巫祝・檀子、下〕に、「君、臣の喪に臨むときは、巫祝・

だら、「なり」、すなわち「あしのほ」の意という。 「周礼、「皮右」にみえる桃苅は、そのあしのする。 「周礼、「皮右」にみえる桃苅は、そのあしのする。「周礼、「皮右」にみえる桃苅は、そのあしのほ」の意と

声符は列。〔説文〕~下に「芳

魚車が

祖」は刺祖の意である。〔爾雅、釈詁〕に「烈は業に刺の字を用いる。〔詩、小雅、賓之弘之の「烈佐僧。金文では刺考(考は父)・光刺・刺々のよう仮借。金文では刺考(考は父)・光刺・刺々のよう意が生れる。字を戦功などの功烈の意に用いるのは意が生れる。字を戦功などの功烈の意に用いるのは の武帝の〔碣石篇〕に、「烈士暮年(肚心已まず」士・烈婦の烈は烈行、鷹(はげしい)に通ずる。魏かたがあり、のち功烈の意に転じたのであろう。烈かたがあり、のち功烈の意に転じたのであろう。烈 の句がある。 して烈光(かがやかしい名誉)あり」のような用い の字にみな烈を用いる。〔詩、周頌、載見〕「の字にみな烈を用いる。〔詩、『詩』が、その本字は刺。文献では、なり」と訓するが、その本字は刺。文献では、 に解するが、もと列屍を焚く意であるから、酷烈の を貰きて火に加ふるを烈といふ」と、列を陳列の意雅、生民」「載ち燔き載ち烈く」の〔伝〕に「これり」とするが、もと列屍を焚く字である。〔詩、大り」とするが、もと列屍を焚く字である。〔詩、大 らに焚く形の字である。〔説文〕−○上に「火猛な 列と火とに従う。別は断首。烈はそれをさ 載見」「休にく献では、功烈

刻 10 あしのほ

> 迥 さえぎる・はらう・さきばらいレツ

であろう。

おそらく遮辺(悪邪を祓う)の意が含まれているの呪禁の力があるとされており、茢字の従う列には、 によると、君に膳するときにも桃茢を用いた。 中の屍体)を祓はしむ」とみえる。〔礼記、玉藻〕 九年「乃ち巫をして桃茢を以て先づ殯(かりもがりこれを呪具としてその不祥を祓う。〔左伝〕襲二十

隊)非常を何ふ。これ 「通俗文」に「天子出づるときは、虎賁(親衛の部 「通俗文」に「天子出づるときは、虎賁(親衛の部 を別して、変別(悪邪を祓う)の意。服虔の なり」とあり、遮別(悪邪を祓う)の意。服虔の ころに施すことを別という。〔説文〕ニ下に「恋る 呪禁とする意。それを人の出入すると いまさ、 声符は列。列は断首を列して お声 声符は列。列は断首を列して

で、本来は人性をもって魔禁とすることをいてない。 で、本来は人性をもっ 語がみえ、「鄭司農注」 虞〕などに「厲禁」の 山虞〕〔沢

断首坑

が、これはのちの用義

を遮遡と謂ふ」とする

てその屬を帥ゐて墓鷹を巡る」の〔鄭注〕に「厲と「その屬を帥ゐて墓鷹を巡る」の〔鄭注〕に「厲と、 本来は墓域などに施すべきもので、〔周礼、墓大夫〕 に「山澤は列して賦せず」とは、厲禁を加えること。 に「遮列してこれを守る」という。〔礼記、玉藻〕 禁を施すことである。これを出入のところに施すの 殷墓の断首坑を列するような方法で、その墓域に呪 は學限、遮列の處なり」という。「塋限遮列」とは、 を遡という。 レツ 裂

裂 12 さく・やぶる・きれレツ

とあって、裁ち残りの裂の意とするが、布帛を截る脱で、ある。[説文] 八上に「鱠の餘なり」形声 声符は列。列に列断する意が べてはげしく裂く、ものを分裂する意に用い、 眥 興ふ」とあり、裁断とは異なる裂きかたである。す ことをいう。〔左伝〕昭元年「裳帛を裂きてこれを 刑の最も残酷なるものである。 に結んで、一時に四方に走らせる刑を車裂という。 を裂く、膚を裂くのようにもいう。人の四肢を四馬

レン

帘 酒やのはた・はた

「広韻」に「青帝、酒家の望子(旗)なり」という。 「広韻」に「青帝、酒家の望子(旗)なり」という。 巾は旗のつもり。酒屋には必ず大きな酒旗を掲げた。 帘の音は暖簾を連想させる。 穴と巾とに従う。穴はおそらく空のつもり、

恋 【絲】23 レン

が多い。攣と声義の通ずる字である。 ふ」とみえる。六朝期の民歌に、恋情を歌うもの かれることをいう。〔漢書、羌肱伝〕に「兄弟相戀

連『(連】』 つらなる・つれ・しきりにレン

輔 神

下に「員連なり」と訓するが、員連の意が明らかで選ぶのに用いる。「おいこ」の類である。〔説文〕ニ 会意 ない。〔段注〕には負車と解し、「人、車を輓いて行 くに、車は後に在りて負ふが如きなり」とするが、 擔ひて物を運ぶなり」とあり、〔詩、小雅、泰苗〕い。〔玉篇〕に「犍は運ぶなり」、〔広韻〕に「撻は 負とは負担、背に負うことであって、引く車ではな うことをいう。〔淮南子、人間訓〕「粟を負輦して至り」の〔虞翻注〕に「連は輦なり」とあり、背に負 [易、蹇卦]「往くときは蹇なるも、來るときは連な大雅、生民」にも「これ任これ負」の今月277 「我が任我が輦」とある任・輦は、負連をいう。〔詩、 る」の注に「擔ふなり」とあり、輦とはおいこ、 生民」にも「これ任これ負」の句がある。 車と辵とに従う。車は蟄。背に負うて荷を

とき物を運ぶのに用いる木器で、地に曳く「そり」畚絹の類である。梮はまた橋・蛬に作り、山行のたいが 例がなく、やはり負輦と解すべく、字の誤りかとも う。員連は畳韻で古語のようにもみえるが、その用 の形式のものもあり、その背に負うものを負輦とい 思われる。連続の意は、聯と通用の義とみるべく、 その本義ではない。

廉13 (廉)13 かたわら・すみ・いさぎよいレン

〔説文〕九下に「Kはなり」とあって似大・偏人の意(治)など、頭音のLiのkが脱落する例がみられる。 に「簡にして廉」とその字を用い、「孟子、尽心、廉・廉倹の義は谦の仮借であるが、〔書、皋隔は、原本のは 意となり、折目を正すことから廉直の意となる。清 とする。一方に偏することから廉隅(かたすみ)の 下〕にも「廉潔」の語がある。 字であるが、見母の声に監(藍)・各形声 声符は兼(兼)。兼は見母の

楝 おうち

いう。[山海経、中山経]にこの木名があり、[郭指頭の如く、白くして黏り、以て衣を浣ふべし」と、とするもその形状をいわず、[玉篇]に「その子はの声がある。[説文]六上に「木なり」 であるので金鈴子という。〔万葉〕の憶良の歌には淡紫色で五弁、夏開き、円い実を結ぶ。鈴のよう 注〕にそのことがみえる。葉は南天に似て互生、花 形声 声符は東。東に煉・練(練)

いる。「後漢書、光烈陰皇后紀」に「大后の鏡奩」器中にもののある形。鏡を収め、また香箱などに用器中にもののある形。鏡を収め、また香箱などに用 会意 の語がある。書画の軸装したものを奩軸という。 大と區(区)とに従う。大は蓋の形。區は

濂 13

きよらか・ひたす・やすらかレン

また門にさす俗があった。

「阿布知の花」がみえ、端午にはその葉を腰に帯び、

漣 さざなみ・なみだつ・つらなるレン

「薄冰なり」とし、潘岳の〔寡婦の賦〕「水谦々としる小水なり」という。〔段注〕は〔繋伝〕によってる小水なり」という。〔段注〕は〔紫伝〕によって

〔説文〕 二上に「薄水なり。一に曰く、

中の絶えた

声符は衆(兼)。兼に廉(廉)の声がある。

練1(練)15 ねりぎぬ・ねる・よなげるレン

煉 13

ころを渉る意の字であろう。

濂の字がみえ、下に渉を加えた形である。清浅のと り、廉潔の義となる。金文の〔令鼎〕に人名として〔広雅、釈詁〕に「潰すなり」という。清浅の意よい。 て以て微しく凝る」を証とするが、兼々は浅い流れ。

絲の法」があり、〔染人〕にも暴練のことをしるす。 「玉篇」に「煮て漚ふなり」とあり、熱して糸をやわらかにすることをいう。〔周礼、考工記〕に「衆りたる繒なり」、 詩文を推敲することをもいい、皮日休の〔論詩〕う。転じて練習・練磨・練武・練兵のように用いる。 昼は日にさらし、夜は井にひたす。これを水凍とい に「百練字を成し 千練句を成す」の句がある。 旧字は練に作り、東声。東に煉・鍊(錬)

のある形で、黑(黒)や薫(薫)などはその形に従

(錬) の声がある。 東は嚢の中にもの

形声

声符は東。東に練(練)・錬品

加熱薫蒸する意を示す。「説文」一〇上に「金を

游 15 あわれむ・いつくしむ・おしむレン

懈

まどう「含子」了」で、「隣むべし楊柳傷心の樹(憐まれ、みごとなものをいう語に用いる。初唐の劉「憐むべきかな」と用いる例もあるが、のち風情の「憐むべきかな」と用いる例もあるが、のち風情の「 相憐み もと憐憫すべきものの意で、「荘子、庚桑楚」に 〔呉越春秋〕に、伍子胥が歌う〔河上歌〕に「同病 を窮極する形の字で、また哀憐すべき状態にある。は哀なり」とみえる。亟も上下のせまるところに人 **〔爾雅、釈詁〕に「愛するなり」というのは、国語** 形。〔説文〕一〇下に「哀れむなり」と哀憐の意とし に「吳人憐亟す」の句があり、〔方言〕に「亟・憐 にいう「愛しむ」の意である。〔石鼓文、呉人石〕 むべし桃李斷腸の花」の句がある。 声符は粦。粦は人を磔死し、燐火を発する 同愛相救ふ」の句がある。「憐むべし」は

蓮 はす・はちす

かせており、いわゆる縁語。仏教に一蓮托生の説が南〕の「魚は戲る蓮葉の閒」の蓮には恋の声をひび たとえている。蓮歩は美人の形容、漢の楽府曲〔江蓉という。周茂叔の〔愛蓮説〕に、蓮を人の君子にいい、茎を茄といい、葉を荷、根を藕、その華を美いい、茎を茄といい、葉を荷、根を藕、その華を美いい、 あり、蓮台・蓮門など、仏教語を用いることが多い 形声 に「芙渠の實なり」という。実を蓮と 声符は連(連)。〔説文〕一下

辇 てぐるま・ひく・になうレン

THE WAY TO A THE PARTY OF THE P

盒14 はこ・くしげ 上げることを煉厲という。
ないない。
が仏薬金丹を作ることを煉丹、利刃に火入れして仕 のことをしるす。土を焼いて瓦とするを煉瓦、道家 五色の石を錦煉して、以て蒼天を補ふ」と女媧補天鑠治するなり」とあり、「論衡、談天」に「女媧氏、紫治するなり」とあり、「論衡、談天」に「女媧氏、

レン 濂 煉 奩 漣 練[練] 憐 蓮 辇

輦して公に如く」など、婦人や老齢者に用いる。儀でその母を輦す」、また定六年「公 叔文子、老す。 た。〔左伝〕荘十二年「南宮萬(人名)、乗車を以に「輦に饗初の蓋あり」とみえ、羽などで蓋をつけするというが、疑わしいことである。〔周礼、巾車〕するというが、疑わしいことである。〔周礼、巾車〕 殷の胡奴車は十八人、周の輜輦は十五人をもって輦」をといいた。〔司馬法〕に夏后氏の余車は二十人、漢代には天子・将相をはじめ、大家・婦人は多く牛妹はくびきの形で、牛車などを用いたのであろう。 礼のための出行、宮中の往来にも用いた。「てぐる 形ではない。夫は夫妻の婚儀に盛装した形である。 に在りてこれを引くなり」とするが、夫をならべた 一四上に「輓く車なり」とし、麸に従う意を「車前 は興してゆくものである。 車と麸とに従う。麸はくびきの形。〔説文〕 川を渡るときの興を、

濂 16 [兼]13

の兄弟、関中に張横渠、閩中に朱子が出て宋学の宋学の祖となった。藤に周濂渓、洛に程明道・伊川宋学の祖となった。濂に周濂渓、洛に程明道・伊川太をなった。孫に周濂渓、洛に程明道・伊川太をなった。というでは、 形が用いられている。療法は、は名としては療の字とするが、地名としては療の字 体系をなしたので、その学を濂洛関閩の学という。 この地に北宋のとき周敦頤が出て濂渓 形声 声符は廉(廉)。〔説文〕に濂

錬16 (練)17 ねる・ねりがね

> 繡 ことを凍、火をもってすることを煉、糸ならば練、とあり、熱してその不純を去る意。水をもってする の秘法とされた。 り金を分出するアマルガムの技術と結合して、 金ならば錬といい、錬磨・錬成という。錬丹は朱よ その形に従う。〔説文〕一四上に「金を治むるなり」 のものを加工する形で、黑(黒)・薫(薫)などは 煉・練(練)の声がある。東は橐の中枕・練(練)の声がある。東は橐の中枕・なった。 旧字は錬に作り、東声。東に

斂17 [殮]17 おさめる・いれる・とるレン

魿

る形。 会意 むなど、 にひそめて外にあらわさないことをいう。 李膺伝〕「氣を肝け迹を斂む」のように、すべて内。鴨伝」「氣を肝け迹を斂むて以て德と爲す」、[漢書、大雅、蕩]「怨みを斂めて以て德と爲す」、[漢書、 きのことである。また手を斂む、膝を斂む、袂を斂愛のものを収斂して、副葬とする。聚斂とはそのと <u> 斂藏してまた見ざるなり」とあり、このときその遺</u> 【歌名、釈喪制〕に「尸に衣せて棺するを斂といふ。」でできる。 って収斂の意とするも、それは棺に収める斂葬の意。 字とみられる。〔説文〕三下に「收むるなり」とあ 衣を衣せることを殮といい、そのときの儀礼をいうる形。おそらく斂葬することをいう字で、死者に葬 整えて収め入れることをいい、転じて〔詩、 僉と支とに従う。 衆は二人並んで祝禱す

聯 17 つらねる・つづく・あわせるレン

> るものは、その左耳を取る」とあり、戦場で首級をるとしているのがよい。[周礼、大司徒]に「獲たるとしているのがよい。[周礼、大司徒]に「獲た」 都方広寺門前にあり、塔を建てて供養した。のちす えたときは、その左耳を切ってその証とした。取・ とをいう字とし、耳を切ってこれを糸で貫く形であ 頰に連なるものなり。絲に從ふ。絲は連なりて絕え ので、字義にいくらか異なるところがある。 など二字連語として用いるものを、 べて聯及・聯属するものをいう。文字の双声・畳語 皸の字は、みなそのことを示す字である。わが国で ような意象の字ではない。〔書契淵源〕に献聝のこ ざるなり」とし、耳と頰と連なる意とするが、その る。〔説文〕一二上に「連ぬるなり。耳に從ふ。耳は いま連の字を代用する。聯には左右対称の意がある 文禄の役のときえた耳・鼻を葬った耳塚が、京 (関)の形で、左右に連ね貫く意があ 耳と鈴とに従う。鈴は門關 聯綿字という。

鎌18 (鎌)18

とみえる。芒角鎌利とは、ものの鋭きに過ぎることり。關よりして西にては、或いはこれを鎌といふ」 |四上に「鍥なり」とあり、〔方言〕に「鍥は刈鉤なつ意であり、それを刈るものを鎌という。〔説文〕 形声 がある。兼は両禾を合せて束として持 声符は兼 (兼)。兼に廉の声

簾

の〔伝〕に「壯好の貌」とする。男に孌童というのき貌」とする。また「斉風、甫田」「婉たり孌たり」が、といる李女の逝くを思ふ」と歌う。〔伝〕に「美しい。 は、近侍の美少年をいう。 〔詩、小雅、車鍪〕は、神に仕える女の、その許さ

擊 23 まげる・かがむ・かけるレン

瀲

みなぎる・うかぶ・みぎわレン

鎌を隔てて人と応接するので、これを簾衣と称した。 夏侯亶は吝嗇で、侍妾十数人あるもみな被服なく、からなた。ととなる。今のないのではない。これではないのではない。それではないない。それではないない。これではないない。これではないない。これではないない。 う。貴人は簾内にあり、后妃の室を簾中、太后・母

に「堂簾なり」とあって、すだれをい

声符は廉(廉)。〔説文〕五上

簾の風情を歌う詩が多い。

學びては妻、生疎の字を問ひ「酒を嘗めては兒、激その杯を激豔杯という。陸游の「閑意詩」に「經をさまをいう。杯に酒をなみなみとつぐことを微潔針、さまをいう。杯に酒をなみなみとつぐことを微潔針、た声 声符は斂。微灩は水があふれ、水光りする そのかがみこむような形のものをいう。攣々は恋々、 また疒に従う形の字がある。 攀なり。その體、上曲して攀々然たるなり」とは、 わることを攣拘という。「釈名、釈宮室」に「欒はわることを攣拘という。「釈名、釈宮室」に「欒はとあり、彎曲したものを手にかける意。ものにこだとあり、彎曲したものを手にかける意。ものにこだ ある。〔説文〕:上に「係くるなり」形声 声符は縁。縁に彎曲の意が

籢 23 かがみばこ 蘞

やぶがらし・かがみぐさ

灩の杯に斟ぐ」の句がある。

ある。 籲 の籤なり」とあり、奩と声義同じ。奩の形声の字で 収める意がある。〔説文〕五上に「鏡 形声 声符は斂。斂に、ものを中に

歌で、「葛生ひて棘に蒙り(蘞、域(墓域)に蔓を円錐形につける。〔詩、唐風、葛生〕は哀切な挽性の菊科の草で、五、六月ごろ小さな紅緑色の五花性の菊科の草で、五、六月ごろ小さな紅緑色の五花

蘞なり」とし、かがみぐさをいう。蔓

声符は斂。〔説文〕「下に「白

綅 25 きりみ・やせる

0 貕

あり、〔段注〕に戀(恋)と古今の字であるとする。 声符は縁。〔説文〕三下に「慕ふなり」と く、切肉なり」という。〔淮南子、説林訓〕に「一〔説文〕四下に「臞するなり」とし、また「一に曰 形声 声符は縁。縁に攀まるものの意がある。

形声

Ţi Ţi+

變

したう・うつくしレン・ラン

その墓域のさまを歌う。

、域(墓域)に

用は近ごろのことであるという。 す」の意に用いるが、〔大言海〕によると、 せ細る)の字には臠を用いる。わが国で「みそなは をいう。〔詩〕はいま「欒々」に作るが、羸瘠(や棘人は憂攣のためにやつれた人で、臠々はそのさま 〔詩、檜風、素冠〕に、「棘人臠々たり」とあり、もって全豹を知るというのと同じ。一曰の義は、 臠の肉を嘗め、 一鑊の味を知る」とは、 その誤

(爐)20 いろり・ひばち

るされている。 炉開きをし、 爐と謂ふ」とみえる。〔燕京 歳時記〕に、十月朔に 字通 酒を沃ぎ肉臠を爐中に炙き、圍坐飮唱す。 形声 要な場所であるが、 に引く〔歳時雑記〕に、「京師、十月の朔、に引く〔歳られ。」に、「京師、十月の朔、河であるが、中国の古い文献にみえず、〔正 旧字は爐に作り、盧声。いろりは民家で重 いしわたを敷いた炉を設けることがし これを暖

図 しおち・あれち

ø

を防(斥)と謂ひ、西方にてはこれを鹵と謂ふ」とに象る。安定(地名)に鹵縣あり。東方にてはこれに象る。安定(地名)に鹵縣あり。東方にてはこれない。なて、。以本と、。なて、。四方に後ひ、鹽の形はない。「武文」

臠 П 炉(爐) 鹵

レン

瀲蘞

攀

下天生を鹵といひ、人生を鹽といふ」の二句が、東 方の句の上にある。安定はは東平涼の地であるが、 大のは、太原学院 臓池は西方に限らず、山西の地にもあり、「春秋」 曜元年「晉の荀吳、師を帥ゐて狄を大鹵に敗る」の 田元年「晉の荀吳、師を帥ゐて狄を大鹵に敗る」の 経に岩塩を産することは、早くから知られていた。 地に岩塩を産することは、早くから知られていた。 地に岩塩を産することは、早くから知られていた。 地に岩塩を産することは、早くから知られていた。 本場うことがみえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがみえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがみえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜鼎」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜県」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜県」に「我に を賜うことがあえ、春秋期の「晋姜県」に「我に を明うことがあるから、鹵塩を精製して貢優としたも のであろう。免(人名)は史官、晋姜は晋侯夫人で あり、これらの鹵塩は主として祭祀、あるいは祭祀 のであろう。のの助数詞は、神梯の前に、由形の器を 捧げる形にかかれ、鹵と同じように、その器に塩を 収めたのであろう。

上 3 ロ まいない・おくりもの

となるが、「左伝」 桓二年「部の大鼎を以て公に路取りて還る」とあって、軍獲をいう。のち賄賂の意像の師を敗る。これを敷むるに王命を以てし、路をとあり、人に遺贈するもの。もと賄賂性のものでなく、「左伝」 荘二十八年「齊侯、衞を伐ちて戰ひ、路を開を敗る。これを敷むるに王命を以てし、路をとなるが、「左伝」 桓二年「部の大鼎を以てし、路をとあり、人に遺贈するもの。もどれ路性のものでなり、「おいる」とは、「はいる」とは、「はいる」といる。

の賄賂も、〔左伝〕に多くみえる。 の賄賂も、〔左伝〕に多くみえる。 の賄賂も、〔左伝〕に多くみえる。

路 13 みち・ただしい

E SE

本では名。各に路・洛の声がある。各は祝 をは神の下る道をいう。[説文] ニ下に「道なり」 とあり、会意とし、「繋伝」に各声とする。道は異 とあり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路は祝禱、途は余の形の大針を呪器として であり、路が神を下す儀礼に関している。路寝・路門・路 を修 下する ことを示す字 をである。 本び、天子の御寝や駕御のものに路を冠していう のは、路が神を下す儀礼に関する字であるからであ ろう。天子の車を大略という。略は路の声義をとる 字である。

幹 13 天子の車・くるま

・ 下下です。
 ・ 下下でするが、とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車である。
 ・ 下下でする。
 ・ 下下へでするが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車であるが、天子の車に「殷の輅」とあり、古式の車」にあたるものできた。

いう例はない。

色 15 おろか・国名

|塩 16 ロ | 少写のとき誤りやすく、「魯魚の誤り」という。

意 是 一种

形声 声符は虚。「脱文」五上に「飯器なり」とし次の山部に「凵、出虚なり。飯器。柳を以てこれを膚に従う形に作っているが、その器は妙爐であろうとされている。盤部二二下に、魔を大きな板の名とし、「甾に從ひ、虎聲。讀みて盧の若くす」とあり、酒だる、鑒のことであるが、盧では歯が声符であり、酒だる、響のことであろう。「趙曹鼎」の「射盧」は射廬(辟難附設の射儀を行なう場)、盧は仮借の字である。盧に黒の意があり、旅もまた黒の意に用いていて、盧・旅は通用する。「書、文伝の一部の「射盧」中である。盧に黒の意があり、旅もまた黒の意に用いていて、盧・旅は通用する。「書、文伝の一部の「射盧」中である。盧に黒の意があり、原もまた黒の意に用いていて、盧・旅は通用する。「書、文伝の一部の「射盧」を向の弓矢で、儀礼のときに用いるものである。笑い声を胡盧というのは擬声語。盧鵬は両字ともに黒の意があり、鳥の鵜をいう。

路 16

という。内膳司式にもみえていて、食用に供した。岐」と訓しており、ふきはその省略された形であるだ甘草の異名にも用いる。〔和名類聚抄〕に「布々た甘草の異名にも用いる。〔和名類聚抄〕に「布々た甘草の異名にも ふき。その茎を食用とする。ま形声 声符は路。ふき。その茎を食用とする。ま

廬

蕗

廬

櫓[楠]

蘆

19 かりや・いおり・やどる・いっ

廬窟

字 形声 声符は處。〔説文〕九下に「寄なり。秋冬にろ は去り、春夏には居る」とあって、農耕の時期にだ名 け寄宿する田中の廬舎の意。〔段注〕に〔詩、大雅、公劉〕に「ここに盧旅す」、「小雅、信南山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句につづいて、『韓山」「中田に廬あり」の句があって、盧と瓜と対文であるから、これも田中の廬舎の意とはしがたい。秋冬邑居のことは〔漢書、食貨志〕にもみえるが、経書の解釈としてしるされているもので、事実の記述ではない。また〔儀礼、既夕記〕に「倚廬に居る」という依廬は、廬舎室室、墓室に象ったものであろう。のち草は、廬舎できた。「なら、また〔後れ、既夕記〕に「倚廬に居る」という依廬・「ならところの名であり、屋室の制のものではない。また〔後れ、既夕記〕に「倚廬に居る」という依廬は、廬舎できた。本と「である。という依廬・「ならところの名であり、屋室の間に用いる。廬山は江西は、「東宮の名勝。宋の段陽脩の〔廬山高〕は、この名勝を自在に歌いあげた長篇である。

櫓 19 「槭」15 中ぐら・ろ・たて

置 20 あし・よー

配 21 つゆ・うるおす・あらわれる・もれる

して、境に相望む」とあり、

戦場

行〕は挽歌で、「薤上の露」何ぞ晞き易き」とその骨という。また人生の無常にたとえ、古楽府「薤露あらわれることを、露見・露呈、かくさぬことを露あらわれることを、露見・露呈、かくさぬことを露 るものとされる。また暴露はさらされる意。本意の萬物を潤す所以なり」とあり、雨露は万物を生育する。 はかなさを歌う。 「潤澤なり」、「玉篇」に「天の津液、「潤澤なり」、「玉篇」に「天の津液、 形声 声符は路。〔説文〕一一下に

籚 えロ かご

束ねて竹刀のようにし、器物の柄とするものをいう。 る。その小なるものを籃という。 また竹籠。〔広雅、釈器〕に「鷹は筐なり」とみえ 竹の矛戟の矜なり」とあり、割り竹を形声。声符は盧。〔説文〕五上に「積

艫 へさき・とも

舟の大いさ一丈四方をよぶ単位名であるという。わ もある。船歌を艫歌という。 船の頭なり」とへさきの意とするが、ともとする説 が国の「石」というのに類する。また「一に曰く、 をなり」とあり、「段注」によると、また声 声符は盧、「説文」!」によると、 声符は盧。〔説文〕ハ下に「舳

鑪 いろり・ひばち

形击 声符は盧。〔説文〕一四上に「方鑪なり」と

> 火鉢や酒甕などをも鱸と称する。〔史記、司馬相如り」というが、廃盧は烹炊に用いるものであろう。 ことを当爐という。爐は鑢と同字である。 伝〕に、相如が衣食に窮して、文君をして「鑪に當 廬」と称している。 盧は らしめ」た話がある。酒場を開いて客に給仕させる り、列国器の〔王子嬰次鑪〕には、その器を「茂から、方鑪という。また器に鑪と名づけるものがあから、方鑪という。また器に鑪と名づけるものがあ あって、爐(炉)をいう。方形にしきるものである

鷺 24

十八首の一にその古辞を録し、「漢曲、蓋し鼓を飾って、朱鷺曲というものがあった。漢の短簫鏡歌がして來り舞ふ。舊鼓吹、朱鷺曲これなり」とあいて、朱鷺曲というものがあった。漢の短簫鏡歌が、朱鷺曲とれなり」とあいて、これも鷺舞である。その「疏」を値つ」とあって、これも鷺舞である。その「疏」を値つ」とあって、これも鷺舞である。その「疏」を値つ」とあって、これも鷺舞である。 鳥なり」とする。〔詩、陳風、宛丘〕に「その驚羽献ずることを歌うもので、〔韓詩章句〕に「潔白の骸ずることを歌うもので、〔韓詩章句〕に「潔白の れている。 廟祭に朱羽を著けて舞う舞楽が、のちまでも伝承さやはりもと鷺羽の舞曲であったのであろう。孔子の 尚ばれて、神事に用いられた。〔詩、周頌、振鷺〕 るに鷺を以てするに因りて、曲に名づく」とするが は、周に滅ぼされた殷の子孫が、周廟に振鷺の舞を 形声 鷺なり」とあり、古くからその潔白が 声符は路。〔説文〕四上に「白

(説文) 五上に「飯器な **騙** その残骨坑とともに数多くならんでいる。 墓の断首坑には、頭顱十個ずつを収めた断首坑が、 断首祭梟の俗があって、これを遮遡といった。殷いまたというには多くの屍骨が放置されていたのであろう。古くには多くの屍骨が放置されていたのであろう。古く 伝〕に「頭顱僵

ろロ ば

形声

声符は盧。〔説文〕一〇上に

「馬に似て長耳」とあって、驢馬をい

鱸 しめて、これを送ったという。 すロ ずき

その死を弔った文帝は、会者にみな驢鳴一声をなさ 戚の間に流行したという。魏の王粲は驢鳴を好み、 中西園で白驢に駕してこれを楽しんだので、一時貴 え、孝武のとき上林苑に入った。孝霊のとき、宮 [日知録]巻二九によると、その名は漢に至ってみ う。〔段注〕に、秦人がこの字を作ったとするが、

伝〕に、斉王竦が秋風に因って呉中の鱸魚の膾を思いう。七、八月頃が美味とされる。〔晉書、張翰り。色白くして黑點あり、巨口細鱗、四鰓あり」と 名産地。わが国の島根松江は、鱸を産するのでその 月に方めて出づ。長さ僅か數寸、狀微しく鱖に似た 形声 い、官をやめて東帰した話をのせる。松江はその の注に「鱸は吳中に出づ。浙江尤も盛なり。四五 声符は盧。〔本草〕に四鰓魚とし、李時珍

藍 25 ピくろ

を烏鬼という。〔詩、曹風、候人〕に「これ鵜、 でその漁法が行なわれており、唐詩には鸕鷀のことで されている。中国にも古くから、長江上流の地など 〔隋書、東夷伝〕に、わが国の鵜飼いのことがしる。 鵜に川鵜と海鵜があり、わが国では海鵜を用いる。 用いるものは鸕鷀というのが本名である。鵜飼いのりに鵜の字を用いるが、鵜はペリカンで、鵜飼いに では安産を祈る信仰がある。またわが国では鵜のと くらふ」とあり、胎生とする伝承があって、わが国 ること、絲の緒の若し。水鳥なるも、高樹の上に集せみ、少なきものも五、六を生む。相連なりて出づ 孕み、旣に胎してまた吐生す。多きものは八、九を 馬融伝、注〕に引く「異物志」に「能く深水に沒し、馬融伝、注〕に引く「異物志」に「能く深水に沒なにもまた黒の意があり、鵜の鳥をいう。「後漢書、女にもまた黒の意があり、鵜の鳥をいう。「後漢書、女にもまた黒の意があり、とあり、とあり、とない。 魚を取りて食ふ。卵を生まずして、雛を池澤の閒に う・しまつどり

る。〔説文〕一〇上に「齊にて黑を謂ひ兆声 声符は盧。盧にも黒の意があ

點 28

くろい

初心な男をからかう誘引の詩である。

く、水に没することのできない鳥で、この詩は女が に在り その翼を濡らさず」とは鸕鷀のことではな

て驢と爲す」とあって斉の語とするが、 鸕驢 ロウ 労(勢) 虚声の字に

> 定四年注に「士は盧弓」とあるが、金文には彤弓彤いる。〔荀子、大略〕に「大夫は黑弓」、〔公羊伝〕 矢・旅弓旅矢を併せて賜う例がある。 「旅弓矢千」は、丹塗りの「彤弓彤矢」に対して黒 塗りのものをいう。金文には「旅弓旅矢」の字を用 文侯之命〕「盧弓一、盧矢百」、〔左伝〕僖二十八年だれ、これはまた盧・旅を用いることもあり、〔書、ある。字はまた盧・旅を用いることもあり、〔書、 黒の義をもつものが多く、水・木・犬部にその字が

鸕

名をとったという。

ロウ

老 6 おいる・としより・なれるロウ (ラウ)

뽥 0 香心湯

小雅、十月之交〕「*愁に一老を遺して「我が王を年「桓公立ちて、乃ち老す」のようにいう。〔詩で年「桓公立ちて、乃ち老す」のようにいう。〔詩でれる。老をもって致仕することを、〔左伝〕隠三たれる。老をもって致 盟書〕の老の字形と同じく、止に従う字にかかれて いるのは、何らか意味を含めているようで興味がも 字盤〕〔叔夷鐘〕に「霝(霊)命の老い難からんこまだ、ことことで、死に近づくをいう。〔斉大七はもと死をいう字で、死に近づくをいう。〔斉大七はもと死をいう字で、死に近づくをいう。〕また なり」とするが、化するものは髪の色のみではない。ふ。人毛七に従ふ。須(鬚)髪の白に變ずるを言ふふ。人毛七に従ふ。須(鬚)髪の白に變ずるを言ふ人をいう。〔説文〕八上に「考なり。七十を老とい

> の意であろう。 いうのか不明であるが、おそらく老司教というほど 老婦の祭なり」とみえる。老子は姓は李、なぜ老とらう。老婦とは驚神。〔礼記、礼器〕に「それ奥はを見せしむ」とあり、年末の蜡祭に百神の労をねぎ ときは、則ち豳頌を飲き、土鼓を撃ちて以て老物 のであるから、〔周礼、籥で〕に「國にて蜡を祭る誌にも用いた語である。神霊もまた老して衰えるも誌にも用いた語である。神霊もまた老して衰えるもまたもしめず」は、魯の哀公が、孔子の没したときの守らしめず」は、魯

つとめる・つかれる・ねぎらうロウ (ラウ)

州州 火火で

受霊のための器という意味に用いられることが多い。 れる。衣は人の生死に関する重要な儀礼において、 われ、箋とは聖火をもって衣を清め祓う儀礼とみら「其の政事に菫箋す」という。勤労の意であると思 近い。斉器の〔叔夷鎛〕には簑に作る字があって、(中山王鼎〕に、心に従う形の字があって、それに「中山王鼎」に、心に従う形の字があって、それに 〔中山王鼎〕に、心に従う形の字があって、それにまた重文一字を録し、その字は戀に作る。近出のまた重文一字を録し、その字は戀に作る。近出の は勞す」というが、会意とする理由が明らかでない 熒の省とに從ふ。熒火、【を燒く。力を用ふるもの(静)という。〔説文〕 | 三下に「劇しきなり。力と 破うものは労、丹青の色をもって清めることを静 具を清める儀礼が行なわれる。火を繁らしてこれを具を清める儀礼が行なわれる。火を繁らしてこれをめることを示すもので、農耕のはじめと終りに、農 火の形。力は来の形。熒は聖火として、その未を清金意 一 熒と力とに従う。熒は庭療など、かがり

語、公冶長」に、顔淵の願うところは、「人に勞を労の意となり、労役・労苦・労悴の意となる。「論ものが勞(労)である。のち転じてひろく事功・勤ものが勞(労)である。のち転じてひろく事功・勤 勤労の字には、農耕に関するものが多い。 施さ」ないこと、人を使わぬということであった。 りの儀礼を衣に加えるものは袋、それを耒に加える 「勞とは勞賚を謂ふ」とみえる。聖火をもって魂振 に、神の恩寵を受ける意に用いるのが原義。「詩、 字である。それで労も「勞賜」「勞來(賚)」のよう 姿もそのような魂振り的な意味をもつ儀礼に関する 早麓」「神の勞する所以なり」の〔箋〕

丙

り、〔徐広注〕に「一に云ふ。今殷民、神犧を受す。」というというに「乃ち神祇の祀を陋淫す」に作〔史記、宋世家〕に「乃ち神祇の祀を陋淫す」に作〔史記、等〕 微子」「乃ち神祇の犠牲を竊攘(ぬすむ)す」をは字を側陋の陋の初文と解するものであろう。〔書、 ない訓であり、その形義も明らかでない。〔説文〕 「一に曰く、箕の屬なり」というが、すべて用例の [繁伝]に「側幽なり」として会意とする。またニトに「側逃なり」とし、丙声とするが声が合わず、ニトに「側逃なり」とし、丙声とするが声が合わず、 ことを意味する側唇の唇の字ではない。〔説文〕「 る丙とを合せた字で、いわゆる合文であり、賤しい が、それは雪という祭名と、廟号としての干名であ 会意 という祖神の名を函で示すことがある LLと丙とに従う。 ト辞に報丙

> 丙はその穴室の門戸の象を示すものであろう。 窃攘にあたる。その一時隠匿のところを函といい、 又一に云ふ。陋淫して神祇を侵す」とあり、陋淫は

弄 7 もてあそぶ・たわむれる・このむロウ

再門

男子出生のときの儀礼を、「乃ち男子を生まば、載ともに玉に従う字である。〔詩、小雅、斯干〕に、 文〕三上に「玩ぶなり」とあって、玩弄をいう。 会意 のであった。紫緑の初文は僕に作り、子の上に玉をおすなわち玩弄は、本来呪器としてこれをもたせるも ま字形に示すものである。弄を玩褻・弄戯の意に用う「裳を衣せ」「璋を弄せし」める儀礼を、そのま めであり、璋を弄せしめるのは魂振りのためである。璋を弄せしむ」と歌う。裳を衣せるのは受霊のた ち牀に寢ねしめ いるのは、のちの転義である。 すそに襲衾をまとうた形に作る。〔斯干〕にい 玉と廾とに従う。両手で玉をもつ形。「説 載ちこれに裳を衣せ 載ちこれに

おり・ひとや・かこむ・いけにえロウ(ラウ)

躶 图图图

形に作る。〔説文〕ニ上に「閑なり。牛馬を養ふ閎作るのがよい。卜文では、その中に牛や羊を入れる 牢閑とよばれる牛舎の柵の形であるから、字は牢に含然 ・一と牛とに従う。一は家の形でなく、もと 一と牛とに従う。一は家の形でなく、

> に入りて、人の牛馬を竊む」とみえる。〔貉子卣〕とを大牢という。〔墨子、天志、下〕に「人の欄牢牢牲の意に用い、牛・羊・豕の三牲を合せ用いるこ 動にまぎれて婦女財物を掠め取ること、牢剌はばら憂いあるものの意である。牢周・捜牢・牢灑は、騒 いうが、牢人とするのがよく、牢人とは牢騒の人、愁・牢鬚に憂愁の意。わが国で無禄のものを活人と 宇籠という。〔淮南子、本経訓〕に「天地を宇籠す」を含む、まなた。 ぱきはん しょうしゅうきょとめて一処に入れるので、一まとめにすることをまとめて一処に入れるので、一まとめにすることを k、 吟騰vvvv - vv といい語かある。字に仮借通用の義が多く、牢落は遼落、牢う。字に仮借通用の義が多く、牢落は遼落、牢るといい語がある。また別舎の意に用いて、牢獄とい 堅牢に作られていて、堅牢・牢固の意がある。また 牢閑は獣畜を入れるところであるから、その構造も ろう。天子に十二閑があり、牲畜をそこに養うた。 旅に在り」とあって、王の牢閑において行なわれての礼を行なうことがみえ、その礼はいずれも「王、 三」を与えられており、また「盠駒尊」に王が執駒 とあって、闌圏を設けて牛・羊をおくところ。牢を 入口の狭い牛圏の形である。閑一三上は「闌なり」するが、冬の省文に従う形でない。それは中広く、 なり。牛と冬の省に從ふ。その四周市るに象る」と ばらというほどの擬声語である。 いる。庪はおそらく閑の初文で、王牢をいう字であ に王牢を治める礼をしるし、貉子(人名)は「鹿

拉 8 くじく・やぶる・つれてゆくロウ(ラフ)・ラ

「摧くなり」とあり、〔左伝〕桓十八年形声 声符は立。〔説文〕一二上に

位雑はかき集めること。[古楽府、短簫鏡歌、有所など。 ***。 ****。 ないのであろう。いう。拉はつかむことで、挫き殺したのであろう。 「彭生多力にして、公の幹を拉ちてこれを殺す」と 注に、斉の公子彭生が魯の桓公を暗殺したことを、 <u>两</u> 9 せまい・いやしい・ひくいロウ

銘〕の文がある。 何の陋かこれあらん」という。劉禹錫に〔陋室のと称された。〔論語、子罕〕に「君子これに居らば、と称された。〔論語、子罕〕に「君子これに居らば、 にあり、一簞の食、一瓢の飲の生活に安んじて、 陰・卑陋の意となったものと思われる。 顔回は陋巷 神域に蔵するので、僻陋・側陋の意となり、のち狭る石室に、神祇のものを蔵する意であろう。これを 岩穴などの入口の象形とみられ、陋は神梯の前にあ は、狩んで隠匿することをいう。思うに匧は石室・ しく、〔史記、宋世家〕「乃ち神祇の祀を陋淫す」と 西二下は「側逃なり」とあって隠れる意であるら る。〔説文〕一四下に「院陜なり」とあ 声符は唇。 医に側陋の意があ

郎。

(鄓)10

きみ・おとこロウ(ラウ)

形声

口のある器に入れて、良否をふきわけ

声符は良。良は米穀を上下に

強制徴発を拉夫といい、戦時には軍夫に充てるため

の贈り物を焚き捨てると歌う。つれ去ることを拉致ありと、拉雑して摧いてこれを燒かん」と、男からありと

心変りする男を責めて、「聞く、君に他心

によく行なわれたことである。

朗口(朗)口[腹]口 あきらか・ほがらか

り」という。 ることから朗悟、また朗読・朗誦・朗吟のように用 いる。〔国語、楚語〕に「それ聖は能く光遠宣朗な 月明の朗照の意をいう字であるが、その光の朗々た 形声 を朖に作り、「明なり」という。 声符は良。〔説文〕七上に正字 もと

浪10 なみ・うごく・みだれる・たわむれるロウ(ラウ)

麎 「滄浪の水なり。南して江に入る」と 形声 声符は良。〔説文〕一一上に

> ことを歌う詩である。放浪はさまよう。良は風箱で「離浪笑傲」という。[終風] は棄てられた婦人の「***ないますがからかうことを、[詩、邶風、終風] によっていまった。 という。「終風] にみえる。は [孟子、離婁、上] [楚辞、漁父の辞] にみえる。は [五子、離婁、上] [楚辞、漁父の辞] にみえる。 狼 人は牢人で牢騒、すなわち憂いをもつ人の意である 穀をよりわけるので、はげしく動かす意がある。浪 あって、漢水の下流をいう。漁父の歌う〔滄浪歌〕 おおかみ・みだれる・あらいロウ(ラウ)

飕

るから、浪・狼に繆、乱の意をもつのであろう。 て、これも狼藉の意。良は風箱で反覆するものであ公、上」に「樂蔵(豊年)には粒米狼戻す」とあっ公、上」に「樂蔵(豊年)には粒米狼戻す」とあった。 て、その肩背を失うて知らざるを、則ち狼疾の人と 語である。〔孟子、告子、上〕に「その一指を養う 同じくあわてるさまで、いずれも狼とは関係のない 繆 戻と同じく紛乱のさま、狼狽・狼跋は、剌趾ととをとう。ことのできない獣とされる。狼藉・狼戻は、またない。 まずい まっぱい かいこう できない獣とされる。狼藉・狼戻は、滅ぼさん。諺に曰く、狼子野心ありと」とみえ、飼滅ぼさん。 虎の狀、豺狼の聲あり。殺さずんば必ず若敖氏を その代表とされる。〔左伝〕宣四年、「この子や、 似ている。暴虐の甚だしいものを虎狼・豺狼とい 白頰、高前廣後」という。その鳴く声は小児の声に呼ば、高前廣後」という。その鳴く声は小児の声に形声 声符は良。〔説文〕一〇上に「犬に似て鋸頭 声符は良。〔説文〕一〇上に「犬に似て鋭頭

婁山 むなしい・あらいロウ・ル

郎〔郎〕 陋 朗(朗)(朖) 浪 狼 婁

に〔十二郎を祭る文〕がある。女子にもまたこの字 となる。排行を付して、十二郎のようにいう。韓愈石以上を郎といい、のち官僚の意となり、男子の称石

秦にはじまり、漢代に郎官の制が定まった。吏二十 る。良人とは良士の意。諸省に郎中令をおくことは 「彼の蒼たるものは天」わが良人を殲す」の句があ の三士が、穆公に殉葬されることを悲しむ詩で、

「詩、秦風、

ものをえらび取ることから、良士の意となった。 る風箱の形であって、その初義ではない。良善なる

黄鳥」は、秦の三良といわれる子車氏

〔段注〕に「郞を以て男子の稱、及び官名と爲すも のは、みな良の假借なり」とするが、良も穀皮をと

義をとる字である。〔説文〕六下に魯の地名とする。 る形であるが、のち良士の意に用いる。郎はその声

を用いて女郎という。

ロウ 屚 琅 莨原[廊] 楼[樓] 滝[瀧]

とするが、どうして婁空の象となるかを、 「空なり。田に從ひ、中女に從ふ。婁空の意なり」 く重ねる、 がない。婁空とは、髪を巻き重ねて、軽く透かして まどの明るいことを麗廔という。光のよく透る意 曳かず曳かず」とはその摟の意である。糸かずのもと換といい、〔詩、唐風、山有枢〕「子に衣裳あるもを換といい、〔詩、唐風、山有枢〕「子に衣裳あるもあり、建物に樓(楼)という。 結長に衣を摟くこと である。高く積みあげた形であるから層景の意が いる意である。人の眼の明らかなものを離襲といい、 う。數は婁をたたく形。〔繋伝〕に「一に曰く、婁多いことを縷、その婁の乱れたさまを數(数)とい 務は愚なり」とあり、畳韻の連語。紛乱の意より、 愚昧の義となるのであろう。 女の髪を上に高く巻きあげて重ねた形。高 すかすなどの意がある。〔説文〕一二下に 裾長に衣を摟くこと 説くこと

漏

ある。〔詩、大雅、抑〕「尚くは屋漏に愧ぢざらん」り」という。漏は漏刻(水時計)。屚は屋漏の字でるなり。雨の尸下に在るに從ふ。尸なるものは屋な 内の隠僻のところの意であろう。 の屋漏については諸説あるも、漏は陋の借字で、屋 会意 形。〔説文〕二下に「屋穿たれて水下 尸と雨とに従う。尸は屋根の

琅

釈地〕に「西北の美なるもの」としている。[山海る。[急歌篇] に琅玕を火斉珠であるとし、[爾雅、崙の山に産する。[本草] に「青琅玕」の名がみえなの山に産する。[光等] 経、海内西経〕にみえるもので、和闐の原産であ を琅書という。 るとする説がある。琅々は玉声の擬声語。道家の書 珠に似たるものなり」とあり、 に似たるものなり」とあり、崑場声符は良。〔説文〕一上に「琅

莨叫 ちからぐさ・おおあわ・たばこロウ(ラウ)

形声 声符は良。「説文」」下にただでいる。「本のは、「「神の名なり」という。司馬相如のでは、「中の地域には則ち藏莨兼葭を生ず、」とあり、莨足草ともいい、牛馬の網草とする。「本とあり、莨足草ともいい、牛馬の網草とする。「本とあり、莨足草ともいい、牛馬の網草とする。「本とあり、莨足草ともいい、牛馬の網草とする。「本とあり、食いで 国で莨をたばこの字にあてる。 すれば人をして狂浪放宕ならしめるという。 草〕に「莨菪」という毒草のことがみえ、これを服 わが

廊12 (廊)13 ひさし・ろうかロウ(ラウ)

露 を廊下餐という。 る人を廊廟の器、廊廟の才という。廊餐とは、出勤のを、郎といったのであろう。その政務に与るに足 ある正殿、ここで政務をとる。その廊廡に侍するも 西の序なり」とみえ、廊下をいう。廊廟はひさしの の侍するところであろう。〔説文新附〕 ヵ下に「東 形声 しや、廊下のところをいう。もと郎官 声符は郎(郎)。建物のひさ

楼 13 【樓】15 たかどの・やぐら・ものみロウ

重層なるものの意がある。〔説文〕六上に「重屋な に標識を樹てたものを、喬という。春秋期には高教的な意味をもつものであったと思われる。その上 り」という。重屋の象は殷器の図象などにもみえ、 層の台観を作ることが多かった。そのころにはもと もと神明を迎えるために築いた楼台であるから、 婦人の髪を高く巻きあげて重ねた形で、 形声 旧字は樓に作り、婁声。婁は 宗



のがある。〔東観漢記〕に、公孫述は符瑞を受けて、も高楼を築くものが多く、画塼にそのさまを画くも 加えられてきたようである。漢代には民間の富家に の宗教的な意味とともに、軍事的・政治的な意味が 「十層の赤樓」を作ったという話がみえている。

滝 13 〔龍〕19 はやせ・ひたすロウ・リョウ・ソウ(サウ)

斕 8:1:

形声 たる見」と、雨の降るさまとする。〔広義校訂〕に、 声符は竜(龍)。〔説文〕一上に「雨瀧々

「雨零れば瀧つ山川」一〇・二三〇八のようにいう。 わゆる瀧は、古くは垂水といった。〔倭名類聚抄〕・麻零れば瀧つ山川」「〇・二三〇八のようにいう。い べしという。わが国の〔万葉〕の用法はその意で、 字は水に従うものであるから、急流の水を本義とす 瀧に「飛泉」の字をあてている。

廔 まど・のき

える。また〔説文〕に一義として、「一に曰く、種かりまど。留字条七上に「窻牖麗慶蘭明なり」とみ称地と同系の語で、明るく光ることをいう。慶はあれた。 ものがあって、それと通用する義である。 うるなり」というのは、播種の器に樓(楼)とよぶ 九下に「屋、麗廔なるなり」とあり、麗廔は離婁・ 透きまのあるものの意がある。〔説文〕 声符は宴。婁にかさなるもの、

捜 ひく・あつめる・とる

「孟子、告子、下」に「東家の牆を踰えて、その處」き聚むるなり」とあって、たぐりよせることをいう。き聚むるなり」とあって、たぐりよせることをいう。東に建、糸をまき を「摟入懐中」という。 子を摟く」とあり、さぐりとる意。だきしめること

漏 もれる・うしなう・ときロウ

を刻す。 晝夜百節あり」とあって、 形声 文〕二上に「銅を以て水を受け、節形声 声符は扇。屚は雨漏り。〔説 水時計をいう。

> 漏刻は〔周礼、挈壺氏〕にみえ、唐のとき漏刻博士る。それで漏泄の意となり、また漏雨の意に用いる。 その遺構の漏刻台が発見されている。 をおいた。わが国では天智期からはじめられ、近年 夏至には昼六十刻、夜四十刻、冬至には昼夜を反す

撈 5 すくいあげる・とる

取るを撈といふ」とみえる。網などを使わず、 言〕に「取るなり」とあり、〔通俗文〕に「沈みて く労働をいう。撈は漁撈について用いる字で、〔方て清める意で、農耕に関する字であるが、のちひろ して貝などを取ることをいう。 声符は勢(労)。労はもと耒を聖火をもっ 潜水

潦 15 小さな川・あまみず・たまりみず・ながあめ口ウ(ラウ)

「魏は天保以後、吏事を重んじ、容止の溫藉なるもあり、身辺をかまわぬ意。〔北魏書、崔瞻伝〕にとをいう。嵆康の〔絶交書〕に「我、潦倒麤疎」とで漢草を采ったのである。潦倒は人のうらぶれるこで漢草を采ったのである。潦倒は人のうらぶれるこ とき「瀾谿沼沚の毛(水草)」を神に供える礼があ清冽な谷川の流れをいうのが原義であろう。祭祀の 〔詩、召南、采蘋〕に「ここに以て藻を采る 彼のる鬼」とあり、行潦すなわち「にはたづみ」をいう。る鬼」とあり、行潦すなわち「にはたづみ」をいう。形声 声符は尞。〔説文〕一上に「雨水の大いな 行潦に」はそのような雨水ではなく、谷川の意で、 り、〔采蘋〕はそのことを歌うもので、特定の山川

> う語であった。 はもと落托というのと同義で、おちぶれることをい 整うた美しさの意に移っていったのであろう。潦倒 いることをいう。なげやりのしどけない美しさから、 のを謂ひて潦倒と爲す」とあって、容止のすぐれて

萝15 よもぎル

費 するもの。〔毛詩会箋〕に蘆であろうという。「玉篇」と、江東では魚臭を消すのに用いるという。「芸篇」と、江東では魚臭を消すのに用いるという。〔玉篇〕と、江東では魚臭を消すのに用いるという。〔玉篇〕 以て魚を烹るべし」とあり、「爾雅、郭注」による る意がある。〔説文〕一下に「艸なり。 形声 声符は婁。婁に高くぬきんで

癆 17 いたむ・おとろえるロウ(ラウ)

肺結核を癆咳といい、これを伝える微生物を癆虫るが、積労によって病困することをいう字である。 れられた。 という。字はまた労咳に作り、不治の病としておそ 薬毒を謂ひて殤といふ」とあり、薬の中毒の意とす 意がある。[説文] 七下に「朝鮮にて、 形声 声符は勞(労)。労に疲労の

螻 けロらウ

襛 形声 三上に「螻蛄なり」とあり、形声 声符は婁。〔説文〕

けらをいう。螻蛄に五能あり、飛び、木に縁り、

ロウ

摟漏

潦

とあり、 いう。また悪臭を発し、螻蛄臭という。螻蟻はけらして一芸に達せず、そのような人を「螻蛄の才」と に泳ぎ、土を掘り、 ともに一類のものである。 走ることもできるが、みな拙に

18 どぶろく・にごりざけロウ(ラウ)

をいう。 酒であるので、甘醪ともいう。ずれも今の蘇俗に白酒というものであるとする。甘 醪はその味の濃いものをいう。〔通訓定声〕に、 體も一宿熟のものであるが薄いものをいい、 形声 「汁滓の酒なり」とあり、一宿熟の酒 声符は翏。〔説文〕一四下に ķ

壟 19 [權] 19 おか・つか

畝はいなか。また墓上に土盛りをするので、腹墓といれいなか。また墓上に土盛りをするので、腹墓とそれより一市の利を独占することを壟断という。覧 丘壟の高いところで市況をみ、利益を独占すること。 丑、下〕「龍斷を私するものあり」とは壟断の意。をうているだ。」「鬼だなり」という。〔孟子、公孫正字を壠に作り、「丘壠なり」という。〔孟子、公孫正字を壠に作り、「丘壠なり」という。〔五子、いまだ いい態堂という。 形声 がるものの意がある。「説文」一三下に 声符は龍(竜)。竜にもりあ

腦 19 [臈] 16 まつり・くれロウ (ラフ)

断〕に、「夏には嘉平、殷には清祀、周には大蜡、『冬至後三戌(の日)、百神を臘祭す」とあり、「独《本》、」と、迎えて祭るをいう。〔説文〕四下に 形声 声符は巤。冬至後に、百神を

> 〔史記、秦本紀〕に「惠文君の十二年、初めて臘す」、漢に臘といふ」とあって、年を送る祭であった。 用いるが、また宮中の人を上臈のようにいう。 [晏子春秋] にみえる。わが国ではその字を僧位に と関係があろう。〔荆楚歳時記〕に十二月八日を臘いたとする説もあるが明らかでなく、字はやはり猟 替のときに行なわれる大祭である。臘性には鶏を用 至後三戌の祭で、夏至三伏の祭と相対し、季節の交 して臘せず」、「礼記、「月令」「孟冬の日、先祖五祀を爲す」とみえる。また「左伝」僖五年「慶(祭) 〔正義〕に「秦の惠文王、始めて中國に效ひてこれ を臘す」とあり、秦漢以前より行なわれている。冬

鏤 19 ほる・ちりばめる・はがねロウ・ル

り、金銀を以て花を鏤めて飾りと爲す」とあり、冠至り、その王始めて冠を制す。錦綵を以てこれを爲を「雕心鏤骨」という。「隋書、倭国伝」に「隋にの間の語であるという。文詞を作るに腐心することの間の語であるという。文詞を作るに腐心すること をいう。[説文]にまた「夏書に曰く、梁州は鏤を鉄の意とする。刻鏤すること、透かし彫りすること、娥なり。以て刻鏤すべし」とあり、刻鏤を加える剛哉なり。以て刻鏤すべし」とあり、刻鏤を加える剛 [書、禹貢]の文、一曰の義は、[方言]に江淮陳蘇 貢す。一に曰く、鏤は釜なり」という。[夏書]は ものの意がある。「説文」一四上に「剛・形声 声符は婁。婁に透きまのある

> きのことである。 位十二等の次にこの記述があるから、 大化新政のと

隴 19 おか・うねロウ・リョウ

が多い。 「天水(地名)の大阪なり」とする。隴西行〕「隴西行」「天水(地名)の大阪なり」とする。隴西は中国よ「天水(地名)の大阪なり」とする。隴西は中国よがるものの意がある。[説文]一四下に 驟 頭水〕がある。六朝以後にも、隴西を歌う塞外詩 隴西はシルクロードの起点であった。 形声 声符は龍(竜)。竜にもりあ

朧 おロ ばう

「朗月何ぞ朧々たる」の句がある。 ろに立ちこめた状態をいう。潘岳の〔悼亡詩〕に文新附〕七上に「朦朧なり」とあって、月光のおぼす。 めたものを意味することがある。〔説 声符は龍(竜)。竜にたちこ

瓏 雨ごいの玉・たまロウ・リョウ

〔左伝〕昭二十九年に「瀧輔」という玉名がみえる。 圏が楚の六宝をあげ、その中に水旱を祈る玉があり、 きに琥を用いるのと同じ。〔国語、楚語〕に、まま 龍の亦声とする。雨請いをする玉で、兵を発すると たその光明のさまをいう語にも用いる。 玉石の鳴る音を玲瓏というのは、擬声語である。 文」一上に「旱を禱る玉なり。龍文を爲る」とあり 形声 た玉で、雨請いのときに用いる。〔説 声符は龍(竜)。竜文を加え

唐の李賀や温庭筠、また詞人たちが好んで歌うとこいない。 とれている。 とれている。 とれている。 は然間の蠟が伝うて流れおちるのを、蠟涙という。 晩まれ、 こりない は祭祀に明燭を供することを言える。 とれている。 背22 耳のきこえぬこと・ろうロウ

なわち仮借字である。〔説文〕一四下に「易の數、

21

蜜ろう・ろうロウ(ラフ)

馨

などの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなり」という。「国語、 晋語」「聾 聵には聴かしむなり」という。「国語、 晋語」「聾 聵には聴かしむなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニ上に「聞ゆること無きなどの意がある。[説文]ニーに 料白の聞えない桟敷。俗に仲間から外されることを あざけっていう。 形声 声符は龍(竜)。竜にこもる、たちこめる

六を含み、

さな幕舎の形とみられるものである。陵の字形にも その字は神梯の前に六を重ねた形をしるし、六は小 古い字形は<に作る。陸はこの字形に従うもので、り、陰の変をもって陰の正たる八に従うとするが、 の数理によって説く。六は陰の変、九は陽の変であ は六に變じ、八に正し。入に從ひ、八に從ふ」と易

陵と陸とは関係のある字であろう。陸と

髏 21 ろであった。

されこうべ

ような状態をいう字である。〔説文〕

声符は婁。婁は透かし彫りの

ロク

仂 あまりロク・リョク

俗があったことは、殷墓にみられるおびただしい断

また方・白などの系列字によって、これを知

も首狩り族の間に残されたが、中国の古代にもその を加えたような形をいう。髑髏棚の風は、のちまで いう。その肉がおちて、竅穴みなあらわれ、鏤刻四下に「髑髏なり」とあり、どくろ・されこうべを四下に「髑髏なり」とあり、どくろ・されこうべを

充てる意である。 とみえる。三年分の年度会計の一割を、葬儀費用に 「喪には三年の仂を用ふ」の注に「十分の一なり」 え、その端数となるものを仂という。〔礼記、王制〕え、その端数となるものを仂という。〔礼記、王制〕死声 声符は力。力は扐の省文。指にはさんで数

<u>六</u> むつ・リク

0 介介

て用いられることがなく、数の六にのみ用いる。す仮借 小さな暮舎の形であるが、その原義におい 肋 彔

> 扐5 ゆびにはさむ・あまりロク・リョク

形を失ったものである。

などに至ってみえるもので、すでに甚だしくその初 ろう。〔説文〕の小篆の字形は、戦国期の信陽竹簡 六は同声、その声をとって数の六に用いたものであ

で数え、その余を外すことをいう。 餘、これを扐といふ」とあって、筮竹を指にはさん に卦す」と易筮の法を引く。〔玉篇〕に「凡そ數の 似ている。〔説文〕二上に「易筮に、再び扐して後 剙 の先端は二股に分れていて、 形声 声符は力。力は耒の象形。耒 、指の形に

肋。 あばら・キン

肋骨をいう。また筋の略字として用いる。 に似ている。〔説文〕四下に「脅骨なり」とあり、の先端は二股に分れていて、肋骨の形 形声 声符は力。力は耒の象形。耒

泉 8

竉 かご・こめる・こもるロウ

ることができる。

ではまた「家に籠る」「社寺に籠る」のように用い とする、籠絡は他人を思うようにすること。わが国 る。 いる。籠禽は籠の鳥、籠統・籠蓋、籠括は一まとめ って、 かごをいう。[周礼、遂師]に「丘籠を共す」とあい、土に「土を擧ぐるの器なり」とあり、土に「土を擧ぐるの器なり」とあり、土をり、一を持ち、を持ち、を持ち、また。 籠妻とはかくし妻をいう。 土もっこの類。また矢を入れる箙の意にも用土

籠 1 ロク 仂 六 扐

ようである。鏨が福に通ずるのと同じである。

7 然泰

あろう。また金文に禄の字に用いて「通泉永命ならる。金文に泉氏諸器があり、殷の泉父の裔の作器でものでない。金文の字形はまさにその器を示してい にあげる篆文の字形は、崇をなす獣の形で、正確なとあり、その錐の回転する音を彖々という。〔説文〕文〕七上に「木を刻すること彔々たるなり。象形」 んことを」「用て純彔を旂む」のように用いる。 錐で木を刻み、木屑の散る形に象る。 〔説

泐。 石がさける・かける・ほるロク

ありて泐す」とは、そこから自然に剝落する意でああるものを示す。〔周礼、考工記総目〕に「石、時の頭が二般に分れている形で、水成岩などの筋目のの頭が二般に分れている形で、水成岩などの筋目の とするが、、防の声義を承ける形声字である。 力は未える。 泐字条二 上に「水石の理なり」として会意 とを勝函という。 る。勒と通用し、 〔説文〕 一四下に「防は地理なり」とみ 勒書を手泐といい、手紙を書くこ 声符は防。防は地脈をいう。

勒 おもがい・くつわロク

*** 多量學

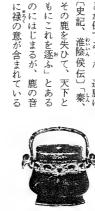
形声 り」とあり、金文に「攸勒」というもので、車服賜 与形式のものにみえる。馬首にまとうて、 声符は力。〔説文〕三下に「馬頭の絡銜な 口にくわ

> ることを勤銘という。令〕に「物ごとに工名を勒す」とあり、碑銘を加え いう。泐に通じて石に刻むことをいい、〔礼記、月 を勒す」といい、子弟に対して教えることを教勒と えさせる金具をいう。転じて軍を整えることを「兵

鹿 しロかク

煮 等所於 曹教者

「史記、准陰侯伝」「秦、とが例であった。逐鹿はとが例であった。逐鹿は別ない。 例などがある。辟雍(神宮)の霊囿において鹿を養 金文に鹿を賜与する例、鹿文を浮彫的に帯文とする大きく文様として加えたものがある。西周中期の大きく文様として加えたものがある。西周中期の 刻辞したもの、また〔鹿鼎〕のように鹿頭を器腹にれている。聖獣とする観念があったらしく、鹿頭にれている。 である。 足の形に象る。鳥鹿の足は相比す。比に從ふ」とい 郷 飲酒の儀礼には、〔詩、小雅、庭鳴〕を奏することがぶん。 鳥と鹿の足を同列に説くのは不類というべき 鹿の形。〔説文〕一〇上に「獸なり。頭角四 卜文・金文にみえ、その字は象形的にかか



絡子卣の鹿文浮彫

れど飽かぬ」という祝、頌の発想と、同じ性質のも のである。

金銭 22 ロク よみかご・ふみ

轆

いとぐるま・ろくろロク

のとき録尚書事の官があった。

なる。文簿を総録するものを録事といい、漢の武帝から銘録することをいい、鈔録・記録・録籍の意とから銘録することをいい、鈔録・記録・録籍の意と

〔老子〕をいう。もと文籠の意であるが、秘籙の意「道を受くるの法、初に五干文の籙を受く」とは、 予言。のち道教の秘文をいい、〔隋書、経籍志〕に、 「高祖、錄に膺り、圖を受く」とあって、天の符命形声 声符は錄(録)。張衡の〔東京の賦〕に より予言をいう字となった。 にあたり、天子となることをいう。籙は讖緯による

ロン

恐 ま

麓 19 [菉] 12

ふもと・やまもりロク

容する、双声の擬声語である。

もつものを轆轤という。その回転軸のまわる音を形 回転台を轆轤台という。すべて回転するはたらきを 井戸の釣瓶を上下するものを轆轤、陶器の形を作る形声 一声符は鹿。いとぐるまのことを轣轆車、車

頌の詩の発想とすることは、〔万葉〕の「見る」「見 繁茂するところである。草木の繁茂を瞻ることを祝 の旱麓を瞻るに」とあるのも、旱山の麓の意。木の り」とあって、ふもとの意。〔詩、大雅、旱麓〕「彼 烈風雷雨にも迷はず」の〔鄭注〕に「麓は山足な 字とはみえない。〔書、舜典〕「大麓に納るれば、 文・金文にその形に作るものがあるが、麓と同義の で苑囿をいう。重文として菉の字形をあげる。ト 守る」の〔杜注〕に「衡鹿は官名」とあり、鹿は麓 という。〔左伝〕昭二十年「山林の木、衡鹿これを り」とし、「一に曰く、 声符は鹿。〔説文〕六上に「山林を守る吏な 林の山に屬くを麓と爲す」

> 崙 山口の名

そこは霊の赴くところであった。 信仰と、関連するものであろう。〔楚辞〕文学では、 念は、おそらく西方に神秘を求める古代の宗教的な が全体として円形をなすもの。そこを霊界とする観 綸 九下に「崑崙なり」とあり、崑崙はけわしくて山容 形声 全体をなすものをいう。〔説文新附〕 声符は侖。侖は次序をもって

論 15 はかる・いいあらそう・とくロン

論 「議るなり」とあり、語字条三上に「論難するを語するとのる意がある。〔説文〕三上に「Notes まとめる意がある。〔説文〕三上に ワ 和 形声 声符は命。 倫に次序をもって

麓〔菉〕

籙

ロン

崙

·\$ さいわい・よろこび・よい・ふちロク 桑 0 勈

禄12 (祿)13

「善なり」という。〔論語、為政〕「子張、祿を于 のは仮借。〔説文〕一上に、『編なり』、〔広雅〕は多く彔を用いる。彔は錐もみの形で、禄に用いる形實 旧字は祿に作り、彔声。金文・鏡銘などに 俗に受く」とは碌々、流俗に従うことをいう。 んだのである。〔荘子、漁父〕に「祿々として變を んことを學ぶ」とあり、孔門の人も就職のために学 めに

碌 13 石の多いさま・いしころロク

いうほどの擬声語である。 りのかきかたがあるというが、要するにごろごろと ぬもの。「容斎三筆」に「鹿々」「陸々」など、七通 ろしているさまをいう。碌々は凡俗、数えるに足ら 「石の皃なり」とあって、石がごろご 形声 | 声符は彔。〔説文新附〕 カトに

録 [録] しるす・うつす・かきつけロク

録々・歴録、また陸離という。泉は刻鑿の器である 性悪〕に「桓公の蔥、文王の錄」とは、その剣を色 声義をとるとするもので、青黄の間の色。「荀子、 によって名づけたものである。また金属性の光を 形声 文」一四上に「金の色なり」とは緑の 旧字は錄に作り、彔声。〔説

ならぬとして とあり、自由な論議には、拘束的な前提があっては 非を定め、適否をはかるのである。[荘子、胠篋] に、「天下の聖法を殫殘して、民ともに論議すべし」 問〕に「討論」の語があり、討は検討。討論して是といふ」とみえ、討論することをいう。「論語、憲 いる。

8 やわらぐ・かなう・こたえる・したがうワ・カ(クヮ)

W) ** **

軍の駐屯地。東は天と同じくその駐屯地の標識であ その安置するところに未を立てる。これを餗といい、 行のときに携える祭内の形で、そこに軍神を祀り、 半形のもの)である。卜文に餗の字がみえ、自は軍軍門に立てるものは禾、補木のついた和表(鳥居の ふ。いまこれを疊門といふ。兩旌を立てて以てこれて左右和の門と爲す」の〔鄭注〕に「軍門を和とい を爲す」としているが、それは後世の制であって、 和を原義とする字である。「周礼、大司馬」「姓を以来声とするが、相和する字は龢であり、和は軍門媾磨ふるなり」と応和、相和する意と解し、また字を磨ふるなり」と応和、相和する意と解し、また字を この字においては軍門で盟誓し、和議を行なう意で左右両禾は軍門の象。口は己、祝禱を収める器で、 ……る。ゆえに和平の意となる。〔説文〕 二上に「相ある。ゆえに和平の意となる。〔説文〕 二上に「相 会意 禾と口とに従う。禾は軍門に立てる標識でか

しるさせたという。秦のとき一たび廃し、漢に至っを樹てて「誹謗の木」といい、民の欲するところをが行なわれた。〔古今注〕によると、尭のときこれが行なわれた。〔古ら注〕によると、尭のときこれ 貫」「和夷、績を底す」の「鄭注」に「讀みて桓とう」であるものであろう。「桓」と「和」とは同声、〔書、禹多出する木を通したもの。古代の交和の遺制を伝え、今出する木を通したもの。古代の交和の遺制を伝え 酷吏伝〕「寺門の桓東に瘞む」の注に引く〔如 淳宗・字条に「亭郵の表(標木)なり」とするが、〔漢書・字条に「亭郵の表(標木)なり」とするが、〔漢書・字条に「亭郵の表(標木)なり」とするが、〔漢書・字 ものであろう。和はまた桓という。〔説文〕六上桓「交和して合す」とあって、交和とは両禾を組んだ を夾みて各一桓あり」とあって、屋上の柱に、横に 説〕に「舊亭傳(駅亭、うまや)は、四角の面百步 使を魏に通ず」、また〔斉策〕〔孫子、軍争〕にも 禾形に従い、禾は軍門の和表、ここで旌表を受ける 交午とはいわゆる大版四出の形である。休も古くは てまたこれを復し、その形によって交午柱という。 ても、宮殿前や都城の大通りに華表を林立すること のことで、わが国の鳥居の半形に近い。後世におい ほこれを和表といふ」とみえる。和表はのちの華表 も、「陳・宋の俗、桓を言ふこと和の如し、いまないふ」とする。〔酷吏伝、注〕に引く〔如淳説〕に あり。高さ丈餘。大版(板)あり、柱を貫きて四出 に土を四方に築き、上に屋あり、屋上に柱の出づる る。和は〔戦国策、燕策〕に「乃ち西和門を開きて、 ではそのことを「篾磨」という。蔑はまた磯に作ることを休という。ゆえに休に栄光の意がある。金文 名づけて桓表といふ。縣の治するところ、兩邊 「穠曆」二字ともに禾形に従うのは、それが軍

> 「發して節に中る、これを和といふ。和なるものは、はその系統のものも加えられている。〔中庸〕に である。協和の字は龢。龠に従うていて楽音のかな数義を列するが、みな軍門和議の義からの引伸の義 語とされている。 天下の達道なり」とあって、和は最高の徳行を示す 魏策〕「五味を調和す」は龢字の義で、和の訓義に うことをいい、それより調和の意となる。「戦国策、 という例がある。和の訓義は甚だ多く、字書に三十 和順の意となる。金文に、父祖に対して自らを和子 前で媾和をするのは、降服の儀礼にあたる。これに 門で行なわれる儀礼であるからである。両禾軍門の よって和平がもたらされるので、和平の意となり、

倭10 やまと・したがうワ・イ(ヰ)

あって、倭遲は畳韻の連語。倭遲はまた威夷・逶遲四牡〕の句を引く。〔毛伝〕に「歷遠の貌なり」ととし、「詩に曰く、周道倭遲たり」と〔詩、小雅、とし、「詩に曰く、周道倭遲たり」と〔詩、小雅、 に倭人あり。分れて百餘國となる」、「魏略」に「倭の史書にみえ、〔漢書、地理志、下〕に「桀浪海中の史書にみえ、〔漢書、地理志、下〕に「桀浪海中 稲魂を被って舞うのは年、女を委といい、委声の字 などにも作る。委はもと田舞の状をいう字で、男が なさまをいう。〔説文〕八上に倭を「順ふ兒なり」 す」「その舊語を聞くに、自ら太伯の後なりと謂ふ」 は帶方東南の大海中に在り。山島に依りて國を爲 はその声義を承ける。わが国の古名として古く中国 赝 形声 舞う女の形で、その姿の低くしなやか 声符は委。委は稲魂を被って

> 国も、その古名であろう。 などの語がある。〔後漢書、 光武紀〕にみえる倭奴

話 3 はなす・はなし

人を讖讖し、呪詛するような語にも用い、その方がまた〔一切経音義〕に「訛言なり」というように、ることをいうとし、『広雅、釈詁』に「恥づるなり」、 なり」とする。しかし〔方言〕に、楚言では狡猾な話。言を知らず」とあり、〔杜注〕に「話言」を「善顓頊に饕餮という不才子があり、「教訓すべからず、紅光さいというで、とし、また〔左伝〕文十八年、して善言するなり」とし、また〔左伝〕文十八年、 せもつ字である。人の話には、警戒すべきものが多 であった。字はまた訛・獪と通じ、その声義をも合 える形であるから、もと呪詛的な言を意味するもの わぬものである。字の構造は、祝禱の器に剞劂を加 こと遠からず」とあって、この話言は上帝の意にそ 大雅、板〕に「話を出すこと然ならず 猶を爲す出だすも人意に逆らうところがある意。また〔詩、出だすも人意に逆らうところがある意。また〔詩、 これ愚人は「覆つて我を僭すと謂ふ」とは、善言を れに話言を告ぐれば、徳に順ひてこれ行ふ 原義である。〔詩、大雅、抑〕「それこれ哲人は する警戒すべき発言をいう。〔説文〕三上に「會合ななない。ないではいの声義を承けるもので、話とは盟誓などを破棄 蓋を厥で刮りとる形であるから、昏は刮の初文。話だ、明日は日、祝禱を収める器の形。その器の無は曲刀、口は日、祝禱を収める器の形。その器の いのである。 は香。唇は厥と口とに従い、形声を一声符は舌。舌の初形 声符は舌。舌の初形 それ

14 くぼみ・ひくいワ・アイ

こと、また盛衰の意に用いる。 に「深き貌なり」という。窪隆は汚隆で高低のあるあり、また「一に曰く、窊みなり」とし、〔玉篇〕あり、また「一に曰く、窊みなり」とし、〔玉篇〕と『『木なり』と』(『木なり』と》(『『木なり』と》(『『 形声 声符は窒。圭に哇・絓の声が

全 ととのう・あう・やわらぐワ・カ(クヮ)

の意に用いる。勵は龠と力(未)とに従う字で、やな文に勵の字があり、「大克鼎」「克く王の服に勵へしむ」、「強縁鼎」「魯ない、「士父鐘」で永らに勵へしむ」、「後縁鼎」「魯ない、「大克鼎」「京人王の服に勵へは、「大きな福」を兼ない。 ませず しゃわよう _ かよう と 牛 髪 し 鐘 〕 「萬民を協龢す」のように用い、また鐘銘に しょ 期に至ってみえ、「沈児鐘」「百生を酥會す」、「秦公期に至ってみえ、「沈児鐘」「百生を酥會す」、「秦公 「蘇鐘」「淑蘇鐘」「永鐘」のようにいう。農耕儀礼 はり農耕の儀礼に用いる楽をいう。龢の字形は列国 に従う形であるが、その禾は軍門の意でなく、もと が、和は軍門における媾和を示す字である。龢も禾 樂和調するなり」に作る。 と同じうす」という。〔一切経音義〕に引いて、「音 いう。〔説文〕ニ下に「調ふなり」とし、「讀みて和・「論本」「声符は禾。龠は笛。楽音のととのうことを 和と同声で同義に用いる

> 従う順子のことを「和子」と称している。 くから混同されたらしく、〔陳肪設〕に祖考の徳に 和は軍門媾和の字で、もと龢と別の字であるが、早 、とによって、北地にも農耕を可能ならしめたという。 も農耕儀礼との関連をたどりうる。のち戦国の繋行ても考えられることであり、南人の銅鼓、殷人の鏡でも、字の類を用いることは、わが国の銅鐸においに鐘・鐸の類を用いることは、わが国の銅鐸においた鏡・鐸の類を用いることは、わが国の銅鐸におい は、陰陽五行をもって律呂を案じ、律呂を調えるこ

ワイ

歪。〔瞬〕18 ゆがむ・ひずむワイ

淮 を加えたものであるが、殆ど用例のない字である。 られた。正字は儀礼の場所を示す立に、爲ぐ意の爾 その声が転じ、字もまた明清に至ってこの字形が作「嫷、正しからざるなり」とし、爾声の字とする。 婿 川の名 俗字。本字は鱗。〔説文〕立部・○下に会意 不正の二字を合せて作られた

〔今甲盤〕に「淮夷は舊我が實畮の人なり」、〔師袁 これでは、西周期にはしばしば周の侵寇をうけた。名があり、西周期にはしばしば周の侵寇をうけた。文化があり、独自の土器文化をもつ。ト辞に准餗の文化があり、独自の土器文化をもつ。ト辞に准餗の く推夷とよばれる夷系の種族が住み、下流に青蓮崗野、 声符は隹。川の名。江・河の間の大水。古

ワイ

歪(瞬)

淮

隈

矮

詩、〔魯頌、泮水〕もその献捷の詩である。〔詩、大雅、江漢〕は宣王期の准。 寺、「警貨、控がからした正正」である。〔詩、大雅、江漢〕は宣王期の淮夷討伐のである。〔詩、大雅、江漢〕は宣王期の淮夷討伐の意(織物)晦(農作物)の朝貢義務をもつものとの意 設〕に「淮夷は繇我が賣畮の臣なり」という。

猥12 みだりに・いやしい・おおいワイ

形声 声符は畏。〔説文〕一〇上に

〔前の出師表〕「猥りに自ら狂屈す」のように自謙だりに吠えたてる意とする。しかし字は、諸葛亮だりに吠えたてる意とする。しかし字は、諸葛亮 談の意に用いる。 のであろう。のち猥細・猥雑の意となり、猥褻・猥の意に用い、畏には畏懼、おそれはばかる意がある たてる意とする。しかし字は、諸葛の「犬の吠ゆる聲なり」とあり、犬の 売りみ

隈 くま・すみ・きしワイ

いう。隈と隩と声義近く、いずれも貴に従うて聖域り」とあり、隩字条一四下に「水の隈、『まなり」といい。 こ説文』―四下に「水の曲れる隩ない。 といい 一下 一声符は長。長に畏懼の意があ ところの意であろう。 のことをいう字である。その深奥にして畏懼すべき

矮13 みじかい・こびとワイ・アイ

るも、手足を矮めず」のように用いる。 林〕に「足矮くして便ならず」「猨、高木より堕つ林〕に「足矮くして便ならず」「猨、高木より堕つる。〔説文新附〕玉下に「短人なり」とみえる。〔易 附〕五下に「短人なり」とみえる。〔易。舞う女の姿で、姿勢を低くする意があ 形声 声符は委。委は稲魂を被って 小男で醜い

the state of the s

ものを矮陋といい、低くて小さな家を矮屋という。

賄 おくる・まいない・たからワイ・カイ(クヮイ)

滋 豐く、賄賂並び行はる」というが、本来は襄二年を養養に、 ないのを賄賂という。 〔左伝〕昭六年「亂獄、用いるものを賄賂という。 〔左伝〕昭六年「亂獄、のように用いる。 貨賄は財貨。 これを不正の目的で るのは、賄賂性のものとされる。 るように、事後の謝礼を賄という。これを事前に贈 十八年「事を先にし賄を後にするは、禮なり」とあ を本義とし、〔左伝〕文十二年「厚くこれに賄る」 けおちすることを歌う。有は有。賄は人に贈ること かどわかされた村の女が、自分の荷物をまとめてか 行商人。その詩は、糸買いに村々をわたる行商人に を以て遷らん」の〔伝〕に「財なり」という。氓は あり、〔詩、衞風、氓〕「爾の車を以て來れ、我が賄れ、ない。なき、 だったき だいがある。〔説文〕六下に「財なり」と 声符は有(有)。有に侑る意

濊 けがれ・にごる・あおいワイ・カイ(クヮイ)・カツ(クヮツ)

いう語とする。礙滞によって濁る意となる。穢と一上に「礙げられたる流れなり」とあり、水声を り、その語頭子音の脱落したものであろう。〔説文〕 東夷伝」にその伝がある。その十月祭天の俗などの ことがしるされていて、注意される。 形声 の声がある。もともと喉・鰯の声があ 声符は歳(歳)。歳に歳・穢

> 會 17 しげる・おおう・くらいワイ

蔚たり 南山に朝隋あり」とあって、朝隋は虹、ででこることをいう。〔詩、曹風、候人〕に「薈たりびこることをいう。〔詩、曹風、候人〕に「薈たりべき」とし、草の生いは火電 を謙遜していうことがある。 する。薈蕞は乱雑にとりみだしたさまをいい、自著 ・
蔚はその虹のたちあらわれるときのさまを形容

といれるときのさまを形容

といれるときのさまを

といれるときのものでは

といれるとものでは

といれると 声符は會(会)。〔説文〕 - 下

> にそれぞれ短い外郭線をそえた形で、或においては なり」とする。卜文・金文の字形は、或の口の周辺 「邦なり。口に從ひ戈に從ひ、又一に從ふ。一は地 外にさらに外郭を加えた字である。〔説文〕:三下に に及んで、その初義を示す國の字が作られた。或の 国の意に用いる。のち或を「或り」や副詞に用いる

穢18 けがす・あれるワイ・エ (エ)・アイ

大春が茂る」というように、穢とは禾間の雑草をいう。 (詩、周 頌、良耜〕の〔箋〕に「艸穢旣に除かれて、 の声があり、羨に荒蕪の意がある。 をいか、 の声があり、羨に流蕪の意がある。 するなり。君に穢德無し。又何ぞ禳はん」とみえ、伝〕昭二十六年「天の彗あるは、以て穢を除かんと伝〕昭二十六年「天の彗あるは、以て穢を除かんと 穢は汚穢をいう。 転じて醜穢・穢俗、また穢吏のように用いる。〔左

ワク

或 くに・あるいは・うたがうワク・ヨク・コク・イキ(ヰキ)

軞 村 或或效物

会意 をもって守る意であるから、國(国)の初文。もと会意 ´_______________________________これを戈

> 孔子に謂ふ」のように、不特定のものをいう。有の 或は又・有とも声義通じ、「論語、為政」「或ひと、「四或を康んじ能む」など、國の初文として用いる。として域をあげる。或・域・國はもと一字であった。として域をあげる。或・域・國はもと一字であった。 下の一画だけが残されている。「説文」にまた重文 いる。 不智なるを或ふこと無れ」とあり、疑う意に用いて 疑問・疑惑の意ともなる。〔孟子、告子、上〕「王の 「あるいは」の意に用い、その限定の意によって、 限定的な用法であるから、そのアクセントをかえて

「隻」16

るべきものをいう。わが国では枠の字を用い、枠は子音の脱落したもの。糸まきのように、骨組みとな 国字。滑稽本などにみえる字である。 正字は籆に作り、隻声。隻は獲、 その語頭

惑 12 まどう・うたがう・あやしむワク

夢 黄

形声 声符は或。 ずに限定の意があり、それより

択に惑う心情をいう とあり、惑乱・疑惑をいう。限定することから、選 疑惑の意を生ずる。「説文」一〇下に「亂るるなり」

隻14 「虁」26 はかる・のり

それは「經維」の意である。 「號季子白盤」に「四方を經縷す」の語があるが、 *^* しせぎ まなが生れるのであろう。〔離騒〕にみえる例が古い。 て探す意の字であるらしく、そこから商る、規度の ると、禽鳥を射て草間におちたものを、見当をつけ いまその字は矱に作る。彠・矱の字形によって考え 騒〕「矩襲の同じきところを求めよ」の句を引く。 キャ゚、゚゚゚にまた重文として虁の字をあげ、〔楚辞、離〔説文〕にまた重文として虁の字をあげ、〔楚辞、離 占いに用いるのでなければ、規度の意としがたい。 義を列している。雈を持する形とするのは、雈を鳥 形声 声符は隻。隻は獲の

鋈 15 しろがね・メッキワク・ヨク

作の技術は、すでに高度なものがあったのであろう。 その武将の生前の凜々しい姿を歌う。当時、武具製 「鋈續」という。〔小戎〕は武将の死を弔う挽歌で、 | 「白金なり」とあるが、鍍金することをいう。〔詩、秦風、 いない。 に馬のむながいの鐶ををいう。 「白金なり」とあるが、鍍金すること ワク 形声 蒦〔鞭〕 鋈 雘 声符は沃。〔説文〕一四上に

> 雘 丹の土・良質の丹・しんしゃワク

味もあったものと思われる。 なく、信仰上のこともあり、また美観をたすける意 者の山、その下に靑雘多し」とみえる。それを聖域に山海経、南山経」「難山、その下に丹腰多し。常はば、「山海経、南山経」「難」、その下に丹腰多し。常はばいます。 の建造物や器材に塗って用いた。保存によいのみで 形声 声符は隻。隻に隻の声がある。

ワン

剜 えぐる・けずる

〔六部成語、刑部〕に「剜眼の刑」というのがあって、まさい。 四下に「鹘るなり」とするが、底からえぐり取る意。四下に「鹘るなり」とするが、底からえぐり取る意。 肉を刀でまるくえぐり取ることをいう。〔説文新附〕 眼をくりぬく刑をいう。 形声 する形で、ふくよかな肉の意がある。 声符は宛。宛は廟中に人の坐

盌10 [碗]13 [椀]12 [瓮]10 わん・はち

· 经[°] 7290

然

盌(碗)(椀)[盌] いう。〔説文〕五上に「小盂なり」とあり、小さなゆたかな形。そのまるくふくよかな形状の器を盌と 形声 声符は夗。夗は人が坐して、ひざのまるく 惋 湾[灣] 腕[掔]

ワン

剜

で、お祝いに用いた。 で飲む酒。椀飯は、正月に大名から将軍に献ずる膳 椀をいう。字はまた盌・碗・椀に作る。椀酒は茶碗

惋

惜しむ意に用いる。 したという。惋惜・惋働という語もあって、悲しみ記〕に、この秘境の話をきいたものが、「みな歎惋」 嘆き訴えるときの姿勢である。陶淵明の「桃花源・一声符は宛。宛は廟中に跪坐している形で、

湾12「灣」25 いりうみ

湾々曲々とは、ひどく入りくんでいることをいう。 「樹は新亭(南京の地名)の岸に似たり 沙は龍尾る。入江・入海をいう。庾信の〔謂れを望む詩〕にる。入江・入海をいう。庾信の〔謂れを望む詩〕にる。入江・入海をいう。陳信の〔謂れを望む詩〕にある。本に響曲の意があ 比較的に早い用例で、唐宋以後に至って多くみえる。 灣(南京附近の地名)の如し」の句があり、それがからなき。

腕 12 [擊] 13 うで・うでくび・にぎるワン

憤りの甚だしいことを切歯扼腕という。 肘・肱といい、肩となるという。扼腕は憤るさま。 〔通訓定声〕に、掌より次第に上に及んで、腕・ 〔説文〕 一上に正字を撃に作り「手の撃なり」と し、〔揚雄説〕として「握る」の訓を加えている。 いう。それで手のふくよかなところを腕という。 人の形で、膝のまるくふくよかな形を 形声 声符は宛。宛は廟中に跪く

綰 むすぶ・つなぐ・わなワン

0 (\$ B) 8 B

を綽綰することを煽る」のように用い、眉壽永命を命を綽綰す」、「置き場別「胃姜(人の名)用て眉壽のを綽綰す」、「置き場別」「用て眉壽を煽句し、永という語があり、〔蔡姞設〕「用て眉壽を煽句し、永という語があり、〔玉篇〕に「貫くなり」とあ釈詁〕に「縮むなり」、〔玉篇〕に「貫くなり」とあ 뼮 [説文] 三上に「惡しき絳なり」というも、[広雅、光声 声符は官。官の語頭子音の脱落したもの。 であろう。[漢書、周勃伝]に「絳侯、皇帝の璽のであろう。[漢書、周勃伝]に「絳侯、皇帝の璽ぶことを示す。眉壽を祈る儀礼としての意味をもつぶことを示す。眉壽を祈る儀礼としての意味をもつ 綰に又を加えているものがあり、その糸を引き、結 たぐりよせ、引き伸ばす意に用いる。金文の字形に、 結髪、少年のときをいう。 を箱ぶ」とあって、璽印の紐を結ぶをいう。綰髪は

彎 22 ひく・まがる

〔説文〕一二下に「弓を持して矢を關へるなり」とあ示す意があるので、その義をとるとするのである。 会意説をとる人もある。響・臠などにゆるい曲線を総声二十字のうち、彎・灣(濟)だけが声が異なり、 り、弓をひくこと、弓の彎曲するさまをいう。弓な りの形を彎々という。 形声 の頭音の脱したものかと思われるが、 声符は緑。蟹(蛮)・臠など

	γ	-	门	八		儿	人					1	Z	J		Ī				T-		
į							7			:	=							-	-		部	3
											Ð							Ī	ij		首	Î
		九三0 [九三〇 1	九三〇	九三〇	九三〇日	九二九,	九二九一	九二九			九九一	<u> </u>	九九九	九二九	九二九一十	九二九 一	, ,	17	-		•
	土				=	又	Δ	厂	(E)	Ļ	+	L	-	L	′]	刀	カ (1)	Ц	ル		覧	
				ŢĒ	画				٦								ૃ				表	Ē
	九三二	九三二	九三					盐二			九三一											
	幺	干	巾	己	工	_	山	中	尸		七 (寸	والمس	子	女	大	夕	夊	夂	士
						M					元		• •									
	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	九三四	<u>T</u>	九三四		九三四	九三	九三	盐	九 壹	造	盐	九三三	空
	ιĊ	pun		13左	13 右		ì		-11-	ð	Ý	扌		1	一		三		t			
	一・小		u i	「阜」			〔差〕		一	乙	水	到					F					
	小	·		上	立芸	盐八		九三七	(‡)	九三七	卆	九三六	卆	①	九三五	九三五	卆	九三五	卆	卆	- 二	九三四
	毛	比	母	<u>六</u> 殳												宝文	皇攴		<u>皇</u> 手	皇 戶	宝 戈	四
					(岁												攵		‡			
	九四一	九四一	<u> </u>	品二 <u></u> 耂	九四一	九四	温一ネ	<u> </u>			瓮 牙		九三九一山			元元		瓷/火	元元		九三九 气	
			万〔肉〕				← [示]		入 (v)		7	Л	Я	义	又		八()	八				L(
		(1) (#					Ű		ڻ	Ů							· (5)	\cup		(字:水)		
	九四三		九四二	九四二	九四二		九四二	九四二	九四二	九四二	九四二	九四二	九四二		九四二	九四二	_	九四一	九四一		九四一	九四二、〕
	石	矢	矛	目(Ш	皮	白	癶	疒	疋へ	田	用	生	甘	瓦	瓜	玉	玄	-			
				<u>H</u>						E							王			5. S		[是](礼)
	九四	九四五	九四五	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四	九四四			九四三	j
Ĺ		-1-	-71.		<u> </u>	225	1-3	12.20	15.35	15-3	p=_10	15-25	E-34	pr. 24	F-3	12.20	14.74	E 24				

九二七

九二九

丙丕世且 丘 丐不丑 节 万 上 丈 三 丌 节 丁 七 5 一 部 部 丰 2 Ц 並両因丞丙 首 部 **差** 公 奈 鼍 卷 公 究 三 究 롶 前井主主 并 丸 索 九 四 三 五 七八 三 五 九 九 九 九 九 九 九 九 乾乳乳乱也艺九乙包 乘乗乖底自 引 部 累 公 층 事争予 部 콧 플 ద 部 三 一七0 四 四七九 六 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 1 歪 泵 公 伉 伍 件 仰 休 伎 企 会 仮 伊 令 付 代 他 仙 仞 多 多 仗 仕 仔 仡 以 仂 仏 풄 弄 低 佇 但 体 伸 住 住 似 伺 作 佐 估 何 伽 佚 位 伇 仿 伏 份 份 伐 任 伝 仲 佻 侜 侏 侍 侈 使 供 佶 佹 侃 価 佳 侌 佾 依 伶 余 余 佑 佛 伴 伴 伯 佞 佃 八 三 六 九九 六 至 震 俛 俘 俗 促 俎 信 侵 侵 俊 俟 侯 係 侷 俠 俄 例 侖 來 俟 佯 侑 侔 併 侮 佩 **元** 元 云 슬 축 八八八四五四五四五 土 修借控候倖個倹倦倪惊俱倨供倝信俺倚侶俚俑倂保便俜侮 숭 六 谷 垂 偃倭倫倆倮們倣倗俸倂俯俯俵俾倍俳倒倜俶倀値倉倩倢倡

四水歺立穴禾内示 网缶糸米竹 而老羽羊 网还罗 (え) (玄) 六 (尹) (至) ш 画 九四五 九四五 九四五五五五 九四五 九四六 加五 九四七 九四六 九四六 九四七 九四七 九四七 臼至自臣 肉 聿 耳 耒 艸色艮舟舛舌 两衣行血虫虎 月 (舛 (EE) () (7) 九四七 九四七 九四八 九四七七 九四七 九四七 九四七 九四七 九四八 热八 九 九 九四八 辛車身足走赤貝多豕豆谷言角見 釆酉邑 辵 七 (E) ß 画 九四八九四八 九 四 九 九 九五〇 九至() **左** 九五() 九吾(**2** 麦舛臣長里 非青雨佳隶阜門長金 革面 長 (長) 食 (青) ß 九 画 九吾(九五〇 盎 五 五 香首食飛風頁音韭韋 竜鬼鬲鬯鬥髟高骨馬 食) 龍 十一画 画 九三 九五二 九 九 九 五 九 五 三 二 盎 亀黒黄麻麥鹿鹵 黑黍黄 鼠鼓鼎黽 黄 (麻 (麦 「龜」 (黄 無 十二画 九 九 五 九 五 三 九 五 三 九五三 九 九 九 五三 九 九 五 三 齊鼻 龜龍 (斉) 十四画 (歯 十五画 (亀) 十六画 十七画 九 五 吾 九吾 九 聖 聖 九吾

傍傅備傘傚傀偉偭偏偏偷偵停側偰偁倏偖健偈偶偶偽偕假 ⁷ 克 兆 先 充 光 兇 兄 兂 元 允 兀 儿 傑 儻 儼 儷 儺 偰 儵 儲 儡 優 償 儛 **三岛部** 金公公惠惠泰泰泰 部 天寶 童 台 秦 墨 三 台 秦 秦 栗 再內再冊回向目科內口 賞兼兼家典具具其兵共六公 量 生 春 景 景 景 女 甚 喜 喜 宝 部 宝 宝 富 品 奈 元 元 四 左 八 九 云 6 風風処屍凡克克18 16 15 点16 15 凍凝凜凉凌凍凋凄准冽冷冶冴况冰冱 那 刹 制 刵 刺 刷 刻 刳 券 券 刮 利 別 判 判 初 刪 列 刎 刖 荆 刑 刓 初 刉 21 17 16 15 14 13 割 朝 劇 劇 劇 劇 劇 副 劃 剽 朝 創 剩 劇 劇 割 割 割 割

格 哿 哥 員 唉 品 咥 唉 咲 咠 咫 咨 哉 咬 咺 咸 咢 咳 品 咽 哀 哇 和 呦 命 啖啄唾商唱啎貴啓啓喝唯啞哺唄唐唐哲唇唆哭哽哮唁貴唏 嘆嗾嘗嘖嗷暳嘅嘏嘉嘔嘆喿嗇嗤嗣嗜嗟暤嗅嘩嗚喇喩喃啼 19 18 17 16 16 17 18 嚏 鷹 翳 噺 噪 噬 嚆 噭 器 噩 噦 噫 噴 嘲 噂 噌 嘱 嘯 嘬 噑 嘘 嘼 器 嘻 部 垢型 垣 垔 坴 坪 坪 坡 坫 坻 坦 坼 垂 坤 坰 尭 坳 坊 坂 址 坐 坑 均 坎 地 圾 堰 埜 埠 埤 培 堂 堆 埽 埴 執 執 堀 堇 埼 基 域 堊 埒 埋 埊 城 埍 埃 城 塗 壄 塡 塚 塐 塑 寒 塊 塩 榮 塁 報 堡 塀 塔 堵 堤 塚 堕 壻 揚 堅 堣 堯 堪 壺壹売壯声壱壮壬士 土 壤壠壟壞壘壙壐壑壓壅壁壇壌墾

與弊弊韓弇奔弄弁弁弁弁廿升 升 廼建廻延廷延 7 部 五二〇 五二〇 五二〇 五二〇 至 云 允 香 三 香 明弧 等弥 弢 等弦 弟 驰 传 弗 弘 弔 书 引 点 考 弓 裁 弑 式 弋 部 九二九九五八五 從徙御徒復徐従徑律待徇很後狢徊給給彼徂征径往往役彷
 □
 三
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1< 部 恃恨恆恒恟恊恪悔恢怜怖怛性怙怳怯怪快恰忳忸伉伉忤忨
 三
 二
 二
 二
 二
 二
 二
 六
 三
 三
 五
 二
 二
 六
 五
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九
 九< 惨惛惚腔惓悸惟悋悒悑悖悩悌悄悛悃悟悍悝悔悅悦恬恂恤 惰 惻 惚 惴 愀 慌 愷 愒 惸 愒 愕 惋 惏 惏 惇 悼 惕 悵 惜 棲 悴 情 情 惝
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五
 五 働 憎 慥 慴 慚 慘 慠 慷 慳 慣 慨 慄 愴 愼 慎 愧 慨 愷 慍 愉 愉 惱 愓 三 三 三 三 美 五 17 懦 懍 憺 懆 憾 懐 懈 憶 懌 憐 憭 憤 憫 憚 憜 懀 憧 憔 僣 憬 憒 憀 慵

26 21 20 19 17 16 16 寮審寫數寥寧寧寢實察寒寤寠寬寡 藤寶寵親麝慶寰藍寮審寫數寥寧寧寢實察寒寤寠寬寡 八八六 三九〇 16 15 14 導導對每尊尋專將尉專将射尅封專対寿寺 ¹⁷ 厳尟尠営巣常党単尚尚当尖尗少 。 峡岱岫岬岡岸岩岳岑岐山 山 省屰屯山 山 屬屨屦屐層層 部臺具全金 部 三 元 空 空 三元九三二九五三九五三九五三九五三九五三六九三二九五三 嵩嵯嵬嵐嵆嵎嵒嵌崙崩崩崧崇崔崑崎崖峯峰島峭峻峽峨峠 23 22 21 20 17 15 14 嚴 醬 巔 巍 巉 巌 嶺 嶷 嶽 嶢 嶋 嶄 二二九〇三四二二九〇三四二二二十八八六 異異巷巹配巵巴巳己己 已 琵差巫巩左巧巨巨工 部 带席帨師常帰帝帥帘帔帛帑帙俗帖希帆帆布市市市市市市 干 幫幬帮幣幣幡幟幀微幗幎幕幌帽帽幇幅幀帳帶常 **表** 至 克 - P 超幾幾幽丝幼幻幺 部 庾廃廂廁庸庿庶康庵庭座庫庪度废庠亭应庖府废废店底庚

海洛洋滔派派洞浅洗津净洵洲洒洽洸洪洚洫活海洿洩泐油 淚流涖浴淇涌浡浦浮浮浜涂涅涕涎浸浸涉消消浩浩涓浣牾 涿淺淸清淒深淨涉渚淳淑渋済淬混淆涸渓涵渇涯淵液溢浪 滋渾港港湖減渠渙渴渦温湮渥淮淚淪淩涼減淘添添淀潭淡 源源溪漢滑溫益湾湧游満渤渺湄湃湯渡湛湍測湊湔湘渚湿 演滝兼潘溜溶滅溟滂溥漠滔演溺滞滄溯準溼溲溼滓溝溝溘 濟潔潔潰漏漣漻漾漫滿漂滌滴專滯漱漕漸滲漆漬滸漁漢溉 濃澱澹濁澤澡激澣潦澑澎潘潑澄澂潮潮潭潺潛潜潟潤澁潸 瀬瀬瀬濤瀟瀣瀏濫瀁瀑瀆瀉濱濘濤濯濯濡濕濟濠濊濂澪濛 狩狡辣狛狙狎狗装狄狂 ff 犯 灣 灝 灘 灑 灋 瀲 瀰 灌 瀧 瀝 瀨 部 搖獅 쨃 猾 猿 猥 猶 猶 猱 揉 猪 猴 猨 猟 猛 猫 猪 猜 猊 狼 狸 狽 狷 狹 独 若茎苦芽苑英芳芙芸花芝芽

囁 懼 懽 隱 懶 抗拥抉极技托规机扣扛极扦并勃払打势才 部 拘拠拒拒拡拐拗押抑扼抛抃扮扶批扳抜把投択折抍抄抒扫 拮 括 按 拉 抹 拋 抱 抱 拇 拚 拂 拊 拋 披 拌 拔 拍 拝 拈 抵 抽 担 拓 拙 招 挺 捗 捉 捜 挿 振 挫 捃 挶 挾 捍 括 捐 挨 挑 拭 拯 拾 持 指 拶 拷 挂 挟 拱 接推捶捷授捨捨採採控控捲揭掘掀据掬掛掖捋挹捕挽棚挥 揮 揆 換 援 援 揜 椽 握 捩 掠 捫 掊 捧 描 排 捻 捺 掏 掉 掇 掟 探 掃 掃 措 搏搨搗損搔搜搧摂搢搾携推揺揚揖揄搭提惣揬插揃揉揣揭 播燃燒撞撒擂攤撒摄傷樓標摘捣摟摭摭摺摧摑搖拾摸嫓搬 ¼ 擾 擷 擴 搖 擯 擣 濯 檯 擠 擦 擬 擁 擗 擔 逹 墁 據 擐 撼 撈 撲 撫 掇 24 23 22 21 20 19 攬攪撄攢攝攜攔獽攗擺擿 汽汎池汐汝江汗汗芳氾汀芥 沿沿泳泄铁沃沐沒没沔汨泛沛沌沈冲沢汰次汭沙汨汻決汲 沫 泡 泡 法 沸 泯 泌 沬 泮 泊 波 泥 注 注 泝 泝 沮 沾 沼 治 沽 泂 況 泣 河

7 我成戌戎戍戈戊戊戈 戈 戆戀懿懸懲懟懲懋懇應憑憊憝憲 戴戲發戰 戲戲 截 戦 散 戢 戡 戡 戟 戚 戛 或 戔 覺 戕 妍 成 戒 B 公 部 素 部 丸 5 久 八 宣 B 公 允 2 宣 艺 艺 是 界 圖 亮 景 三 敕放敍敖教教敔救教敏数效教敃敀政戛故放攸改攻玫攺改 嚴整 骸 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 敷 散 敷 敷 散 敷 散 敷 敷 散 敷 散 敷 敷 散 散 散 散 散 散 敷 敷 m 示 元 析 解 掛 示 計 計 計 計 計 報 報 斐 斑 文 數 斃 斂 斁 斀 旅旅库旁旆旃旂斿施菊炕於从方 方 斷斷新斯斮断斬斫斧 超旦旧日日陽踪既既无先 无 癫 旟 膻 燧 旛 旗 旒 旒 族 旋 旌 呢 昨 界 曷 映 昱 明 明 旻 昔 昃 昌 昇 昏 昆 昊 昂 昕 旺 易 的 早 早 旬 旨 暁 晷 晚 畫 晢 晨 晤 晞 晦 晉 晋 時 晒 晃 晐 晏 易 昧 昴 昺 昬 星 是 昭 春 曄暝暮暢暱暠㬎暖暖暑暉暇暈暗普晚智皙晰晴晴晶暑晵景

蒸落葉葬萩葵萌著菜菌菊菓莉華荷華茶草荘茜荘荒茂茉苗 迪述返迎近迅辺込 📜 蘭藻藍藩藤蕗薬薄薦薪薫蔵蔦蓉蓄 [5] 避還遼選遷遵遺適遭遮遣遠違遥遊遍道遅達 交交 毫 毫 部 共三 公 美 美 岩 豆 豆 喜 喜 丟 五 豆 兒 关 韭 菜 乔 老 数 鄭 献 鄙 郷 御 都 郵 部 都 郷 郭 郎 郡 鄂 郎 郊 郁 邶 邸 邵 邪 邦 邦 郑 隍 陧 隅 階 煙 陵 隆 陸 陴 陪 陶 陳 陬 陲 険 陷 陰 陛 陟 陝 陣 陞 除 降 陘 忞念忝忠思忽忘忘忍忍忒志忌応必心 心 隴隳隋隰隲隱隣 图悉患悪恋恙恥息恕恧恣恵恭恐恐恩恁怒怠忽思急急怨忿 憲 煎 愁 喜 慮 欲 憂 憃 從 慙 憇 慶 慧 慧 慰 湧 慕 厲 熊 孫 朔 朔 愿 穀 慇

樽樵樹橛檠橋橘機機橫樓樐樣槱標樊樋槽樞 櫪 欄 櫬 櫓 櫟 櫑 櫛 櫜 櫱 櫂 檻 橐 檀 檢 檄 樺 款数欽欺款欲敕献数款欣钦欧次次欠⁴ 水 氣氛気气 구는 다 그는 그 교 교 교 然焼焦煮焱焰烽烹费類煮焉烈烙患烝烖烄威烟熒鳥炮炳点 大八大 大八大 大八大 大八五 大八五 大八五 大八五 大八五 大八五 大八五 燐燎 燎 燔 燃 燉 燈 燖 燋 燒 熾 熹 燕 燄 熢 熛 熱 熟 熯 熨 燁 熔 熊 煽 熇

息曠曜曜曙曛&曖曆曇暾㬎曉暨暴暫暵暦 $\stackrel{13}{\text{e}}$ 替 督 替 最 最 曼 曹 書 晋 召 召 更 曲 曳 $\stackrel{6}{\text{H}}$ 望朝朝期期腹朗望望朗除朕朔朏朋朋服服有有 杖杉材机杠杏杞杆杆朴朵杂朱束朽机未末本宋术礼 *眨 枋 板 柿 杯 枏 東 枕 析 枢 松 杪 杼 杵 枝 杲 杭 果 在 李 来 杜 村 束 条* 20 25 二七六 = = 契 栩 桔 桓 栞 栝 格 核 桜 栧 案 柳 枼 柚 柾 某 柄 柄 柎 秘 柰 栃 柢 柱 柱 梓 梭 梱 梏 梗 梟 桰 械 栗 梅 桐 桃 桑 栓 栓 栖 亲 株 桟 栽 根 立至至 五五二九七 0 술 **汽**

五二八 七四 九 五三 五二八 八三 荒荆茵茆茅苞萃范茇苔苫苴苟苟苛革带带芭芮芯芟芹芥芽 覚養 莨 莅 莠 莫 莩 莫 荼 萩 莊 莊 茜 莖 莞 茢 荔 茫 茷 荅 荐 荃 茹 茲 茠 音 番 菡 萱 葷 葛 萼 葦 菉 菉 菱 萊 莽 菩 萍 菲 菭 萋 菁 萃 菖 菽 菑 菜 雈 **藝** 蘇 蒙 蕭 蒼 蓆 蓐 蒐 蓍 蒔 蓑 蒿 蓋 耘 葎 萬 葆 葡 葩 董 著 葱 蕪 蕃 蕩 蔬 蕝 蕊 蕘 蕭 蕉 蕨 瞢 茬 蔞 蓮 蓼 湊 蔓 蓬 茂 蓽 募 蔟 蔥 蔣 蔡 七七 大 至 更 四 四 四 四 四 二 二 九 九 八 八八 七 大 五 五 四 四 四 二 二 九 九 八 八八 七 大 二 三 五 五 四 五 四 二 二 九 五 三 三 九 五 三 三 九 六 五 三 三 二 九 五 三 三 九 六 五 三 三 二 九 五 三 三 九 五 三 三 九 六 七 七 四 二 二 九 五 三 三 九 藤藪藝雜藐雜蘅藏漢藉薩薰薈蕾薏薜薇薄薙薨薨薅薤薀蔽 迎近辿迅运迁迁込亡 ²³ 蘿 蘞 蘭 蘗 蘧 蘆 藺 蘇 蘄 藿 蘊 藹 藜 藥 洮 追 洒 退 没 涑 莎 逆 洛 洽 治 泊 決 油 沼 治 沮 沭 泎 泂 泇 逑 返 沌 汻 週達逸菱連追逢逋逗透途逖逞通逐速造逝逍逡這逕述迾迷 遡 遘 遣 遠 遊 逾 遍 逼 遁 道 達 遄 遂 遒 遑 遇 運 遌 過 運 遏 逷 逮 進 避 澶 遺 遠 還 遒 遴 遼 邁 遲 選 遷 遶 遵 遹 遺 遯 適 遭 遽 遨 遙 遞 遜

延焱交 交 一 是 景 臺 七 景 三 八 17 13 8 4 牆 牒 牀 爿 贖牖牕牌牋版片 片 牙 部 部 四三八 四三八 四三八 **三** 50 五 六 四 九 五 九 四 九 五 五 九 四 九 元 五 五 元 瓷 全空至宝 쏦 = 瑞瑟瑕琳琵琶瑚琢琴琯瑛琅琉理琢現球琀珞班珠珥珩玲玷 23 21 20 19 17 16 增量瓔瓏瓌瓌瓊環環璞璣璃璋瑾璆瑠瑤瑱瑣糓瑰瑶瑜瑑 - - OE - OE - - OE - - OE - OE - OE - - OE 元 福禎禪禍禄祥祐祖神祝祉祈社礼 部 肥肧狀肢肴肱肯股肩肩育肜肘肖肖肛肓肝肋肎骨肌克 服 脆 脂 胱 胯 脇 脅 胸 胗 脉 胞 胞 胖 胚 背 肺 胆 胎 胙 胥 胑 胡 胤 亨 肪 腕腑腓脾腆脹腊腎腔腋脗脳脫脱脤脣脩脛脚胅脈脈能胴脊 播膳膩膢膚膝膠膂羸膜膀膊腿膏腰腰腴腹腦腸腺腥腫腱腳

部首索引 砥砦砭砒砕砂研書石石 增矯矮短矩矩矧矣知佚矣失 矢 福確禮 碧碑碩磁褐碗碌碑碓碎硎 碁碍硫硝硝硬硯研砲砲破 的社祀⁸⁵ 示 礦 礦 礫 礪 礜 礙 礁 磺 碳 磨 磨 磬 磊 磐 磔 磋 磎 群祭 祐 祓 祔 秘 祖 柘 祟 神 祝 祠 祗 祘 祡 枯 祛 祆 祊 秕 祋 祉 祆 祇 祈 禧 撰 禦 韻 碼 榮 福 禖 稀 禎 楊 禔 祿 禀 禁 祺 禊 禐 禄 霺 票 艾克克克克 部 二重五元 景墨 部 金色豆豆 企业 医三重 稌程程稅稅稍稀²²²¹¹ 移秣秣秘秩租秦称秭秬秧秒秕采秋科杨 積 糠 穏 穎 稻 稺 穂 稷 穀 稾 稿 稽 稼 稲 稱 種 穀 稜 稑 稟 稗 稔 稠 稚 棋 穿窃穽突空空穹究穴 穴 龝穰 機穩 穢 穡 穣 穠 穫 穉 穗 穋 穆 穌 鼠竅窿窶窺窰窯窳窮窪窩窟窠窗窖窘窕窒窓窈窅窋¹⁰ 7 叔夕卢 夕 競 竵 端 竭 童 竦 竣 章 竟 並 竚 站 辛 立 立 額 竈 竇 竆

加瓜瓜蟹壁莹玉玉率率妙玄玄速邏鑫邊邀逐週激 21 18 17 16 14 13 11 10 9 5 1 19 16 11 羸甕飯甍甃甄瓶໊瓶瓷瓷瓮瓦 万 瓣瓢瓠 8 画 男 甸 町 男 由 田 申 申 田 葡 甬 甫 用 財 整 整 選 產 産 生 生 畧略畢時畦異留畚畝畔畔畠畜畛畟畐畑畋畎畍界畏甿畀甽 項疏疎差走疋疋 **正** 疊 關 關 疇 疆 疆 畿 當 畳 畸 畬 晦 番 畳 畯 畫 ¹³ 痾 瘌 痡 痘 痛 痒 痕 病 病 疲 疼 疹 症 疾 疵 痁 疴 疣 疥 疫 ⁵ 療療瘤癌瘴瘵瘤瘫瘢瘦瘡瘠瘞瘍瘉瘋瘖痲痹痺痴痰痼痿瘂 8 7 6 5 的 克百白 白 發登発發桑 水 癰 癰 癬 癩 癪 糜 癡 癒 癖 癆 癘 查差差交部 杂页杂杂 宣部 美元素公表 眾 告 真 真 眥 眩 眊 眄 盼 苜 眉 相 省 盾 県 県 看 盲 盲 直 盱 旬 目

締緻線縄鍾緗緒緝緊緩緩緘緣縁縮練絲綠綠網綿緋綴綻 繚繙繎繕織穘繡繛繭鞼縲貗縭繇縵繃縫縹繆<u>縻繁</u>縶總纎謮 缶缶 估 纜纛纚纘纖纓纍纏續纈辮繽纂繼纁繰繩繳繫繪繹 群義着羞羔羧麦美羍羌羊羊羅貿罕罔网 耀翻翩翻翻翘翼翼翳翰翯翩翩翦翟翫翡翟翠翠纂翛翔翔羿 棚耜耗耗耕耕耘耒 耒 耑耐耏耎而 而 耋耄耆耇老考 四 公 部 素素 墨 亮 晤聞 聡 聚 聝 聘 聖 聖 莊 聆 聊 耻 耽 耼 耿 耶 耴 耳 耳 變 耨 賴 耦 耤 翻擊肇肇錦肆肅粛孝聿 聿 聾聽職聶聵聯聴聰聲聱瑉 部 致至 至 臭臭真百自 自 臧臤臥區 臣 鬱膻腐胾肉肉 辞舒舐舍舍舌 舌 釁舊興與舅舄春舁與臽曰曰与 吕 臻臺

編複禪禕褐裸裨裼絵裾褐裡裕補裙結袍被袒袖袂衽衿 第笘笥笹笮罢笊笑笑笏笄笈竿竺竹 竹 襤襜襚襛襟褫褥褓 筮 筱 筹 筴 筥 筵 筆 筏 答 筒 等 筑 筌 筅 筍 策 笄 筋 筈 笠 笨 符 笵 笛 笞 七 六 六 四 五 二 二 四 三 二 二 四 五 二 二 四 五 二 二 四 五 二 二 六 六 四 八 八 八 二 二 六 六 三 二 六 20 籍廉簿簿簸籕篋簡簿簟簞簭簫簡簡篰簇暮竇簋簃隻篤築築 七 三 三 六 五 三 八八 五 三 四 三 九 五 四 三 九 五 四 三 九 五 四 三 九 五 四 三 九 紙索紗紘級紜約約紂馴紅級糾紀紆系礼糸糸 糸 糶糴糲糧 絀 紿 組 紲 紳 紹 終 終 紫 細 紺 紭 経 絅 紋 紡 紛 紊 納 納 紐 素 紝 紓 純 総 綜 綫 緌 緒 綬 綽 緇 綵 綱 繁 綺 綥 綦 維 綍 緐 絺 続 綏 綆 絹 鋊 銤 經

艮 rfn 行

話 誇 詣 詰 詭 該 詼 詈 評 詆 註 詛 訴 診 詔 証 詞 訾 詐 詁 詘 詎 訶 詠 誦說話點誤誤語話談誨誠話誄誉誂誅詫詹詮誠詳詢詩蹈試 幹誰諸諄諏諐誾誼諆課謁**誒誘誘**謗誣誖認認読誕說説誓誠 諮諮諡諢諺諼誼謔諱諫諧謁謂諳論諒誹諂調調談誕諾請請 こことには、こことにはは、こことにははは、<l 謗 謨 謐 謄 謄 謖 謝 講 講 謙 謇 謹 譁 謌 謡 騟 諛 謀 諷 諦 諜 諶 諸 그 강 홀 譲護議絲譜譚譔譛譙證識警譏譆譌鯀鞺謬謪警韾謹謳謠謎 公 交
 17
 16
 14
 13
 12
 11
 8
 7
 28
 20
 18
 13
 10
 7
 7
 28
 28
 20
 18
 13
 10
 7
 7
 28
 28
 28
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 7
 20
 28
 28
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 7
 20
 28
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 7
 20
 28
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 7
 20
 20
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 7
 20
 20
 28
 20
 18
 18
 10
 7
 2
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 20
 <t 財貨賃負負負貝弐 貝 貔貘貓貍貍貌貊貉貈豹豺豻豸 ¹⁶ 賢 頸 賦 賓 賠 賣 賤 賞 賀 質 賜 賛 賡 賣 賓 賑 賖 賕 賄 賂 賁 賃 賊 賊 賷

般般般般的舵船船舶舫般航船舟 舟 羼叠舜舛 奸 舖舖舓 17 7 6 艱良良 色 部量公量 部查蓋罩 **元 八 八 茎 亮 芼 八 萱** 宝二 克 九 八 八 三八 蜂蜑蛸蛻蜃蜀蛾蛮蚰蛤蛟蝉蛙蛋蛇蛍蚌蚊蚍蚤蚩蚕虻虹虺 最 蟄 螭 螭 螫 螽 融 螟 螣 螢 蝱 蝮 蝠 蝶 蝡 蝕 蜭 蝨 蝦 蝟 蜮 蜜 蜺 蜾 蛹 部 14 裏裏裏裏裝裘裘裔裂装裁褒袋袈束衰衰衺衮衾袁表衣 22 襲嬴襞褎褻襄褰褧褱褢滎褒褎裴製裳 21 20 18 17 16 14 18 11 7 23 19 18 實覺 觀 観 覧 觀 觀 覩 親 覡 覘 覗 視 覚 覓 視 規 見 見 覉 覇 覈 覆 覆 部三克克重重

鎮鎖鍋鎧鍊鍪鍛鰔鍼鍾鍵鍋錄録鍊錢錫錘錐錠錆錯鋼錮錦 鑑鑄鑒鐵鐸據鐃鐙鐘鏤鏐鏞鏝鏠鐍鏃鏟鏁鏗鏡鎌鎌鎜鎛鎭 閔閏閒間閑開閉門閃門 門 長 長 鑿鑾鑽鑰鑱鑪鑮鑣鑠鑛 雛雜雞傷灌雖雕雒雑雜雉雎雋雌雅雁雄集雇雇雁雅惟惟雀 需義零雷家電電雰雰雲零雪雪響雨 雨 ²⁸ ¹⁹ 樂離難雘雝難雙 霹霺霸家露霰霧雷霝霧電霜霞霖霏霑寬霍雾霊霊霅霆震霄 食 靡非 非 靜靚静靖靖青青 靑 鏖靈靈靄靁霾霽 鞠葬俸鞍鞄靴靴靭靫革革靨面面斎斉斉館餓飽飾飼 <u>菜豆豆类末末霉素豆</u> 部 五合 部 葉墨 部 音 音 耀韭 韭 韤韣韜韙韔韓韍韋 韋 韈韆 顰鞴鞹 語韻額頤領賴頗預頒頓頌頎頑順須項頂頃頁 **頁** 響響韻韶

超超超越超超越赳起起赴走 走 赭赫赧赦赤 赤 贖 贜 理 蹢 蹟 蹤 蹜 蹙 蹈 蹋 蹉 蹇 蹊 踴 蹄 踳 踵 蹂 踽 踏 踔 踐 踖 踧 踞 踦 踊 輝輔輓輓輒輕輅軾載輂較軶軸軽軼軟転較軒軍軌軋車 25 24 21 20 19 18 18 17 16 15 15 14 景 醸 醻 醴 醸 醸 醪 醫 醫 醮 醢 醍 醒 醐 碪 醉 醇 酹 酸 酷 酷 酵 酪 酩 奸 臨臣 臣 躪 長 釐量野重里 里 釋釉釈采采 来 部 全界 部 昔 部 全公会量会 部 灵色灵景 8 新班組鉱鉤鉛鉛鉞鈍鈕鈔鈎釣釣釧釵釦釜釘針 据 鋈 鋒 鋪 鋳 銷 鋤 鋏 銳 鋭 銘 鉾 銅 銚 銭 銓 銑 銃 鉶 銀 銜

	3	30	27							_									_								
\$ 20 7	*	彰	鸕		黛	2		23	鷕	騺	22	名	制制	含	自鷄	高 鶴	21 鶯	20	鵬	鶂	19 鶏	鵜	鵠	18 鵝	鶇	17鴻	H
部首索引	77/	Š	九三	호 크	奚	<u> </u>		29	<u>슻</u>	三七九	交	八五至		四七			奈	今	七九三	四七		空	#1:#	숲	\$110	三三三	長
ı				33 定應	23	21	1月	質別	罐	麗	麑	廔	19	18	原	塵	16 麇	13 麀	11.鹿				24	11			
5				基記七	八九三	三九五	47.7			九0.			一五	그 그는	1114	HOM BOM	- 13			周剖		鹼	鹽	鹵	区		雕
	11 亀		存	4	15 黙	黒		H		11								<u></u> 完	<u> </u>			岩	兲	力0九	剖	7	감
	- M		亀部	_			- 7	黒郊		黄	直	•			麼	嘘	麻	麻	腧		20 婳	19	27 姓.	麫.	亚麥	麥	٤
+	22	2	1		言	三 三		部		Ž	音		<u>-</u>	至	시 오 기	<u>수</u>	於	읏	剖	3	<u></u>	菜	유	<u></u>	六九二	剖	Š
	黱	X.	豆 ;	粉黑	黨	20 黥	點	製	力黑	占 M	黜	17 黛	默	16	12 黑	黑	<u> </u>	23	17 計	15 ラス	12	黍	÷ ,	25	12	#	
-	类九	==		ハモニー		三	呈	八國〇	713	7 17	五八	类九	싎	二六四		剖	_				9	部部	_			黄部	
	15鼐	鼎] T	鼎]	敞	25	24 暫	趙	9 1	8 書 i	17 電				12											
	车	六九		部部		Ott		# H10		-			那部				歯					黹		28 2	賣厚	6 2 震	女
			了						24			4	미			皇	部		100		-	部			<u> </u>	2	;
						14 等	型		94	!	ļ	.4 早	鼻		18 軸 J	13 試	鼠	2	1 18 套蓋	· 14	せ立	支 荳	3 支	鼓	16	源	į
-	폴	툿	12%			13 15.	音	<u>s</u>	44.1	0114	-	5	部	É	79	五三六	部	センス						部	墨		
			33	東 東	見重	10000000000000000000000000000000000000	22	龎	19 龏	16 龍	:	龍	2	6 2 点	4 2 萬 齒	2 2 吾 妻	1 公 6	20	動	19			5				
			九0三	九四		1 -	-	七九三	101	ハギ		部部	35 1										1	齒			
							_						-1:	7 J	L 12	9 =	700	臺	皇 27	<u> </u>	哭 17	三	Ī	部	· 美	101	_
																			鯱	22 献	龠	1	龠	16	手	6	
																			五0	흐	슷	7	部	四七	台	13	
																											7
																		-									\dashv

九五三

類願類題顓頭顕顒顏翦顎額頻頾類類頼頻顯頭頹頸頰頷頫 会 至 吉 部 七 七 八 七 八 至 三 七四 二 八 八 五 三 八 四 二 二 五 八 九 五 部 **芪餘餒鋑餐翻餓養餌鮇飽飾飼飴飫飯飩飭飲飧飤飢食** 駒駕駁馽駄駆駅馳馱馴馭馬馬 **馬** 馨馥香 香 馘 苗首 部 重重素 部 프 글 스 스 스 스 二 三 六 六 五四九一 三 二 九 五 三 九 五 三 九 25 24 23 22 21 20 19 18 18 17 16 鬣鬢鬟鬠鬚髮蓁鬒鬏鬋鬄鬆鬈縈髽髻髹 部 部 部 50 50 50 50 鮲 鰐 鯛 鯛 鯖 鯨 鯉 鯈 魣 鮮 鮫 鮭 鮑 鮎 鮫 魯 魚 10 竜 魚 竜 三 二 六三 三 九一八五 **鳥** 鱻鱸 鱢 鰛 鱗 鱒 鰺 鰹 鰥 鰯 鰌 鴨鴛鴥鴆鴈鴉鳴鳳鳶鳧鳩鳥

字

訓

索

引

予 きま

19 17 16 15 14 13 譆緊噫嘻誒嗟

 \equiv

19 繰

蓋

景

8京

っ

쏫

めおうみが

蔥

13 あおいろ あ

五量

17電

あおぐ

仰

14 12 12 際 開 間

三

22 22 18 17 蘇觀觀邀

あおぐろ

10

交

17 黝

18 藍

あいだ

10治 10

숬

15 敵

喘

14 碧

あおみどり

あえぐ

あいて

あいむこ

11語

僚

12 翕

あ ¹² お **敢**

13

公

26 22 贖贖 17 12 購貲 ¹⁹ ¹² あ ¹⁹ 證 証 かし ぎぬあかのねり 萊 形 あかね あかぬり あがなう あかつち あかざ あかご 孩

21 20騰 ¹³ 嫌 あきない 曼 あかる 21 あがる あきたらぬ 丟 시 七 中0周

12 あきなう 00 11 11

12品 12景 消清 11章 11 10朗 11彬 唿 11 11 11 10 早. 11 14 展

14 察 21 爛 20 闡 13 13 12 飫飽獣 9宣 22 儻 20 19 18 鏡 燿 9 怠 23 20 あく あきれる あきる 照 する かに 立ち 五 三四五三四九七三 云 芸 至 五 至 쏲 침 101

翌翌郊昱 八吾 츳 15 憧 18 16 15 顎額額 あさ 16 褰 あご 16擎 12揚 あざける 20 15 11 9 あ 16 12 腫膚淺浅・暁暁 あさがお あさあけ 麻麻晨藤 200 13 詫 16 6 暾旭 経 あさひ あさのおび あさぬの あざなう あさたば 糺 交至 公式 ¹³ ¹² ¹¹ ¹¹ ⁷ ⁵ ⁴ ⁸ 葦 在 趾 脚 足 疋 止 し 18 11 獵 猟 あさる あさめし 型 五三 쿮 4. 24 22 鱢 鰺 あしあと ¹⁶ 福 あじ 20 三 趾 あじわう 剪 咀 あしのほ あしなえ 19 14 農 晨 あしたかぐ 晨 まあしげ 18 駐 九0五 あう **市**市區 東 10 與 13預 のえるうつ 9 變 める 完 大四 あたり 財賊 大い 財 城 あ だ 咫 倡倡 10 9 略 あそぶ あそび あぜみち 計算 O. あたためる ¹³ ¹³ ¹³ 煙暖暖 ¹⁷ ¹³ ¹³ ¹² ¹² 燠 煦 溫 陽 温 あたたかい 寇 あたたか あたかも あたえる 汽 풋 을 을 つあたまをう 56 7 百 ¹⁶ 焊 暖 六五 <u></u> 스 코 폴 盖 15 15 14 13 13 13 13 12 12 11 11 9 熱諄熇腹亶蒸暑暑渥惇淳厚 8 散衝 數 當 觝 滿 值 あつい 23 應

五

曼

益

元

六円四回四回二元六八四四三八八四四三八八四四三八八四二元八八四二元八八四二元八八四四三八八四四三八八八八八八八二八八八二</

字訓索引

(あく)

~あつい)

- 10 10 8 8 7 まやし 妖告奇怪妖・ 整部 21 18 14 14 14 編 續 綾 綵 綺 まあ 16 13 12 12 11 11 11 12 険 傾 幾 睡 険 あやぎぬっ しむ 公 蓋 16 14 10 9 6 6 錯 駁 迷 迷 妄 妄 19 18 17 譌繆繆 14 14 誤誤 15 個 25 四九七 壳 あ33 18 15 12 12 12 11 11 11 11 11 15 6 5 麤 鬆 駔 莽 疏 疎 婁 笨 粗 梗 10 10 9 狼 桀 草 あら あらあ あゆ あらかじめ 16 澡 14 14 13 12 漂滌溲湯 褐褐 あらう = 0 蓋 = あらず あらしお あらき あらが ħ 0.0 픛 。。。。。 変 戛 革 易 更 改 改 あらためる 16 璞 あ²¹ 20 ら辞議 12 畬 19 齗 あらたま 14 逐 逐訂 소 소 あられ 概概 20 霰 あらわす 22 鷙 あらま あらどり あらと 礪 霊 101 101 13 8 7 勢況况 8 或る 20 覺 ある 23 21 露 あり 超 15 徴 あらわ 有有存在 出 H 슬 れる 型 18 17 16 15 10 9 穢 纂 蕪 暴 荒 荒 萊 鹵 13 12 番 菑 5 5 ある i5 ま主 並 あれる あれち 13 爺 あれた 泡お ある ある 歩 步 승 슬 あわただし あわせる 11 あわい 13 12 8 8 梁 粟 沫 泡 14複 忙 あわせまつ あわせ た 스 첫 兲 公 至至 20 16 **肇 鮑** あわてる 20 17 6 躁 遽 忙 あわだつ n 元 至0 一品艺 - 20 電 いいあらそ 間稱道道称言台金 い ¹⁷ う 謎 8命 公平 11 訥 いいまどわ ⁵令 15 論 いいつけ b V٦ 六 六 **四** 天 天 **三** 츳 승 至 수 公共 칼 五 四

巣蝉荐 14 ¹² 敦 10 g 妣 毗 6 寸 あつまる あつまり あつし あつくす 7 6 扱 あつかう 15 あつめる 捃拾亩勼 100 <u>소</u> 13 13 12 12 12 10 蓄 戢 萃 最 最 冣 景 票 元 あ ¹³な 嗣 15 11 瘢痕 19 18 18 17 15 11 10 10 8 7 7 轍 蹟 蹤 遺 墟 痕 速 迹 武 阯 址 次5九 あとつぎ あとかた あてる あと 賣 四六0 慢累 蚩 倨 12 窖 ¹³ 窠 あなどる あなぐら 福五 100 四九四 110 승 ¹³ 嫂 ¹⁵ 招 接 話 空空 れるに あね かく 孟 00 あ²⁰ 16 13 び 鶩 鴨 鳧 あひる あばら あぶらさし ¹⁵ 卓 あ ¹⁰ ぶ 浴 ₆灯 あぶら あぶみ あぶらざら 0 승 20 16 鐙 燈 廿 あまい 业 あふれる あぶる あぶりにく 炙 意 益 益 9 帝 雪 あまね 18 雷 20 18 建 あまごい あまだれ 学 あまつさえ あまつかみ 旬 帀 匊 かくて か わ 六宝 古四 칭 15 15 14 13 12 敷敷漫遍遍 9 7 6 衍余多 15 潦 编 12 普 10 旁 10 あまみず あまる あまり 餕 もの 蓋 九九九 九九九 温品 0周小 元 光 16 14 8 4 あ糖 飴 雨 天 め 20 15 辮編 20 16 贏餘 12 11 剩 19羅 11 あむ あみ 꾿 室 三 兲 毫 **票** 票 14 綾 ¹¹章 19 19 黼藻 12 絢 理 11彩 3 17 9 8 6 6 殆 省 危 危 17 11 11 10 7 18 16 餳 糖 18 4 あや あめふ る 云な言 至至 艺 臺 公 宝九 宝玉

22 22 3

薑

슾

字訓索引

(あやうい~

いう

い 19 15 10 9 9 8 4 4 いえが 廬 無家室屋門戶戸え い 12 い 18 18 14 13 9 お 硫 お 癒 癒 癒 癒 癒 17 7 6 W 14 機 毎 毎 と も で 分 숬 풋 슲 宝 空 いがた いかる 8倍 いかめ いかずち 咆忿 かだ い 9 8 6 いき 奈 如 かん 雰息氛 24 24 21 21 異 異 員 員 哭 15噴 增 15 瞋 13 慍 艴 10 9 虓怒 去 公司 10 g 6 5 搭 存 生 9 7 7 6 6 軍役兵役戎 いきる 憤噴慷忼 きどおる 型式 三 芸 Ξ 至 い 17 ⁴ い 8 ⁶ いけ 韓井 げ 沼池 け 19 17 繳 矰 ぶね 15 14 12 10 10 9 5 w 22 15 w 16 15 15 12 11 10 10 勲閥勛速迹刺功 t 鑄鋳 t 憩瞑憇惕停眠息 ¹³ 9 碁弈 15 15 13 潔潔廉 14 14 11 誘誘幾 いざなう 13 いさぎよ いさごむし え 積 暦 暦 赳仡 六 ≣ 菫 九0至 九0皇 いさめる 碌 しだたみ しずえ しころ 至 20 い 12 11 11 6 安 いず 荷 い ¹⁹ す 繆 へりいしゆみの 磁瓷 いしやき いしぶみ 袥 弩 しび いそぐ 追 いそがり 每每 急急很 磯そ 104 古 ¹⁶ 複 19 17 懐膺 16 いたす ħ **杂** 叠 奎 13 13 12 12 12 12 11 11 11 11 11 10 10 10 8 4 い 愴傷閔惄痛惻悼帳惜悽悴惨疼凋怛弔 む · 17 東 が 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 く 22 19 11 いただき 18 いたち <u>20</u> <u>201</u> 六四四 <u></u> 型七

字訓索引(いたむ~いる)

		颁	17 斂	¹⁵ 関	¹⁵	20	納	納	8 逐	包	⁵ 包	<u>4</u> 内	内	いれる	20 黥	いれず	22 鑄	15 鋳	13 煎	12 發	10 射	9 発	· 炒	· 居	7冶
		お八	₽	蓋	叁	실	六品	公品	二九	芸		六六	奈		四五	Á		弄	픨	六九五	売	六九五	鬥	1公	읖
	12 賀	いわう	岬	いわあ	23 巖	超	15	22 記	8岩	いわ	24	20 爐	8炉	いろり	18 績	10 粉	いろどる	彩	彩	いろどり	16	いろかざり	8	· 色	いろ
	益		中0周	な	兲	兲	t0t	<u>-</u>	弄		끄	20元	九0九		卆	卖	る	畫	畫	り 	空	b	를	空	
		10栽	うえこみ	15	¹² 筌	3 <u> -</u>	うえ	27 盧烏	鴻	卯	う		5	8 <u>~</u>	インド	9 矧	8. 佚	。 況	农	いわんや	13		いわや	21 鰯	いわし
		量	<i>~</i>	八七九	蓋	500		九	至	七九四				츳		回中()	04回	盐	<u></u>		Ξ	型六		元	
	19	17 餧		超	16 餓		15 餓	稼							埶		栽	10 飢		うえる	秧	うえつけ		殍	うえじに
_		型二	型	四0四	益	블	品		<u></u>	01	至	盍	<u></u>	즐		至	量七	五			至		=	阿正	
	穴	うがつ	題	18	¹⁶ 諜	¹⁶ 窺	殲	覘	覗	損	探	候	9 矣	9 侯	7	うかがう	18 鯀	舷	うおのな	²⁴ 鸉	うおたか	魚	うお	²¹ 饑	²¹ 饑
	員		弄	=	402	弄	盟	픙	=	七	<u></u>	8	츳	类	孟		5	<u></u>				益		증	四五
ļ	15 諾	うけがう	15 配	うけ	30 麗鳥	21 鶯	19 離	うぐい	Å.	うく	12 萍	9 苹	うきくさ	20 瀲	10 浮	¹⁰ 浮	7泛 さ	⁵ 氾	うかぶ	28 数	25 鑱	²² 攢	14 崭	掘	。 穿
	至六	つ 	発		公品	交	갈		六九九九		至	岩		20元	0個中	0個小	004	究		量	풒	蓋	美	Ī	五八
	16 撼	12 揄	。 杂	⁶ 杂	うごかす	22 龕	17	15 請	15 請	14 領	13 禀	13 稟	13 歆	紹	9 拜	8 奉	· 拝	· 水	8受	·享	托		うける	舟	うけだらい
_	OMI	흥	좃	종		兲	<u></u> 을	<u>₩</u>	<u>\$</u>	<u> </u>	1三0	OIII	Ξ	四四四	公	六品	公	平型	E 011	- た0	型二	丟		₩ 0×	² ν
				うさぎ	21	蝡	うごめく		17 盪	16 蕩		15播	14 漂	13	13 滔	¹² 揺	動	浪	8 波	7 抈	业		うごく	²³ 攪	¹⁷ 擡
-		즟	<u> </u>		<u>123</u>	蓋		<u> </u>	至	至	吾	完	tilt.	益.	六四九			九三	六七	臺	兰	至		10	五六九
	漏	奪	滅	13 遁	¹³ 損	12 喪	⁵ 失	うしなる	*牧公	うしかい	17 濤	15潮	期	11	6 汐	うしお	先	うじ	±±	牛	うし	16 蹄	うさぎわな	11 図	うさぎあみ
	土	五十五	슬	瓷	兲	四四四	売		\(\text{\tin}\text{\te}\tint{\text{\ti}\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\t		至	<u>څ</u>	2	Ŝ	三		등 -		五二	艺		台	な	売	<i>A</i>
	16	12 旅	非	單	. 涼	淡	: 凉			うすい	12	うず	6 El	うす			7尾	うしろ		ぎ	うしのつの	15 氂	うしのお	15 墜	15 墜
_	充	八四	四四	五七九	公	兲	<u>公</u>	五七九	<u>=</u>		大		丰		至	<u></u>		_	22		ó	<u></u>	40	<u>=</u>	<u>=</u>
	10厘	10埋 (10	うずめる	12湍	うずまく	17 螺 cko	0,4	4巴 桑	_	13 搗	春豐	うすつく	11堆 素	うずたかい	16 濛	うすぐらい	19 野	15 据 云	12 竣	うずくまる	10紗 臺	うすぎぬ	14膜 clo	うすかわ	17 薄 至
;	11 全言		10明	10 円	うた		15 嘘	10 虓		15 嘘										15 瘞	三 4 2	14 貍	0 14 墐	13 塡	12 隋
	台	29 29	六五	玄		四五〇	-	11011	₹ -	<u>-</u>	至	三		숭	숭	0	18 20 10	充宅	_	哭	소프	₹ 10	===	≘	四八九九

字訓索引

14 10 10 0
領 卷 裾 衽 衿 的 斁 擇 選 敕 選 撰 銓 搜 僉 按 掇 採 搜 差 柬 芼 択 忿 忿
八二八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
6 おいな 113 おいた 7 板 15 14 7 を 18
那多お梁茛菸蚍蜉麟棟;扇扇シ驅踵駆馳逐追逐負負追う
三
The left left left left left left left lef
せい 図
10 10 9 9 8 7 6 6 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
套蓋冒冒奄庇 13 おおいなり 2 20 18 17 2 20 18 21 2 20 18
10 お 24 18 お 19 11 お 18 18 17 17 16 16 16 15 14 14 13 13 13 12 12 12 10 10 接 辞 縛 辞 整 紳 お 覆 覆 薈 幬 壅 蔽 冪 蒙 蓋 幎 幕 葺 莽 敝 搭 揜 要
カ
英荒計俺俟荒皇洪奐恢奕阜尨宏宇丕弘広臣巨木太孔大部
 基本 二二 <l< td=""></l<>
19 18 17 17 16 16 15 15 14 14 14 13 13 13 12 12 12 12 12 12 11 11 11 10 10 譚豐鴻豁膴蕩誕廣誕蓆碩豊溥賁隆博博覃項寓隆張混泰泰
表表 三二百 安 天 六 天 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 4 5 4 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 8 7 7 7 7 7 8 7 7 7 7 7 7 7 8 7 7 7 7 7 7 8 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 8 7
きなっています。
23 17 10 15 17 15 19 11 15 21 10 10 15 6 15 16 15 13 15 8 15 10 10 10
19 11 12 13 13 14 15 15 15 16 16 16 16 16 17 17 18 18 18 18 18 19 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11
11 11 8 8 5 5 5 8 5 4 5 15 14 11 11 8 5 17 5 9 9 5 8 5 8 5 4 5 15 14 11 11 8 5 17 5 9 9 5 8 5 8 5 8 5 8 5 8 5 8 5 8 5 8 5
1
13 お 12 11 お 20 14 14 13 9 9 9 9 8 6 5 3 お 19 19 19 15 15 12 12 乗 か 菜 菜 か 觸 僣 管 触 冒 冒 侵 侵 迕 奸 犯 干 か 隴 壠 壟 墳 墟 堡
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
3 2 70

うまれつき うまをつ 그 즐 14 13 11 10 槑 楳 梅 梅 うみものを うやうや 19 17 盤 膿 うめく うむ 完 至 픗 贈婚 裏裡浦 うらかた うら うら \$00 公共 一九四 奈 当 29 18 16 16 16 13 11 11 9 9 8 8 8 8 9 5 薫 懟 憝 憾 慍 悵 悽 恨 怨 忿 毒 快 ぢ 17 15 寶 賣 14 5 3 h H H うららか うらやむ 蓋 <u>~</u> 四九七 空 1110 莱 200 12 11 9 8 7 渥涵治沾沐 う ¹² 電 おう □ うるう 19 5 瓣 弁 りのさね 九量 발 う 12 う 21 16 14 14 11 る 株 る 纂 髹 漆 柴 桼 う 21 17 16 16 13 13 12 7 6 露 濕 霑 澤 裛 溼 湿 沢 うるお れるっれえつか 10 恙 19 麗 17 17 懲 齌 うれえる うれえ 問題 추 을 틀 **E**10 奈高 芸 13 <u>=</u> うわごと ¹²釉 △ 10 23 鱗 24 20 19 顰 [[] [[] うわぐすり うんき うわがき うろこ うろたえる え えがく 芝 土 吾 吾 8 7 7 を 刻 叔 抉 ざる 靨 九六二 蓋 云 풏 四至 풄 > 至五 흐 至 配 17 9 え 16 癘 疫 み 獲 るえ 16 え 10 え 20 14 11 8 え 30 7 6 6 6 え 5 期 旅 鞴 箙 葡 弢 5 胡 狄 戎 夷 ヴ 胞 胞 な をと 玉七九 ౧ 崖 叠 芸 至 支之 훘

。 拜 拝 ¹³ 基 おぎなう 10 10 新翁 おきな 掟科 おきて **荻** 13蒸 おがら おがむ 33 記 記 み み おきたつ おき おきかまど 咒 四八() 七七九 ろ 奥稅 稅 奥措 11拾 10厝 10値 10 庪 8 含 舎 弄 35 E3 20 16 釋 錯 16 9 衽 17 10 賾 窈 欬 種 13 墓 ¹⁵億 13 13 置實 おくり おくり おくめ おくみ おくぶか おくび おくて おくつき おくゆか 媵 娃 め 卆 15 17 おくる 16 16 16 輸 追 班遞 20 嚴 桶 矟 お 12 11 9 け 晩 晩 後 おこたる おごそか おこす おくれ さき 敀 倦怠 る 15 屦 15 履 おこない 空 샾 슬 슬 12奢 * 喬敖倪倨侈 ⁶夸 16 12 發 17 瘒 18 擧 16 16 無 おごる おこる 六九五 쉳 쉳 六九五 24 芸 그 ¹¹ 11 10 9 8 捫捺挹按制 22 15 14 14 14 驕踞慢滿傲 部 崖 18 18 鎭鎮 ¹⁰ 宰 <u>5</u> 正 おさえる おさえ おさ 抑扼肘 押 四九二 四九八 八美 101 슬 ² 义 。 定 おさめる おさない おさまる 撫踏 八四 발 8 奈 夰 六 0 11 10 12 11 11 10 10 10 10 10 21 19 19 18 18 17 17 17 16 16 16 16 16 16 15 15 15 15 辯緣繳釐閩險斂變辨整輯墾駛賦撥箝緝 14 14 13 13 領 臧 嫠 亂 소 三九七 全当 Ξ き き 至 品十七四 忢 三 겆 超 公共 公

16 9 7 薫香芳 かおり 16褰 かかと かかえる ¹⁷嬥 20 かおりぐ かが 薑 ¹⁵ 編 編 網 第 **後** 拘 屈 23 籔 かがめる かがむ かがみばこ かがみぐさ 輝皇 21 20 19 18 爚耀爍燿 16 かがり 出掛 かがりび かかり 三六 至 - 20 - 蠣 12 牋 = 슷 19 14 13 10 5 5 5 續 劄 牒 記 札 册 冊 10 院 かきのある か 14 14 き 銘誌 9 8 割 かきもの かきつける 숬 12 11 8 畫域画 19 19 13 疆 疆 18 15 額額 がくじ 10書 かぎる 伶 中山 益 中中 かくれる 盖 n 19 18 18 け 鏁 鎖 し 를 를 를 か 16 11 8 8 8 けが 壁崖岸崖 / ね ま こ ま も が け 影 15 12 12 蔭景晷 13 債 る かげ 100 둦 九九 ¹² 帕軸 かけもの かける 츳 12 11 11 9 圏 駅 面 か ¹⁷ で 曖 23 孿 13 営 かげる かこつける 九四 줐 춫 か ²⁰ 17 10 か 12 さ 翻 繋 旄 ぎ 舃 15 14 9 8 層層重沓 15 13 11 10 9 瘡量笠疹胗 10套 かさねもの かさねる 12 鳥 善4 かささぎ かさねぞう 兹仍 蓝 <u>35.</u> 四九 종 仝 里 四

988666555お記録をいたり 13 溺 n t おぼれる おぼしめし おぼえる 20 朧 6 辽田 7 おみ おぼろ 9 重 おもい 16 謂 13想 13意 12為 17.臆 16 襲 13 騰 =23 16 15 調諛諂 。 面表 17 15 13 9 おもむく 堂 おもて おもねる おもに ¹⁶ 操致 おもてざし 10 徐 おもむき おもむろ 籉 슬 ぉ ¹⁵ ゃ 慮 21 16 15 權錘権 お 16 10 税 親 票 おやじ る 13 爺 12 8 游泳 およぐ おやゆび 3 及 よ ぶ およそ 壹 芸 咒 元 公 追 9 9 追 迨 11速 10被 13 13達 12達 9 略 18 績 18 織 14摺 10 降 6 5 在処 おりる おりもの おりほん おりたたむ & 7 7 6 拠折捐宅 おる 16 12 據寓 哭 四四八 四五 卆 りおれい おろか 13 13 12 愚頑鈍 まい 야근 승 量 既咸歾歿卒了帮卸卸弃 11 11 11 10 終竟旣訖 おろかなさ 12 12 対 が く ¹¹ 婦女 おんな 8妲 おんなの 18 17 10 9 數 蟁 蚊 耶 5 かい 枻貝辰 か 四0元 聖 六四 四六九 芸九 10 9 槐峡 10 かいかざり かいかざり 7貝 益 13 蜃 24 10 蚕 かいがら かいこ かいしょ ¹²棠 かいどう かいたい かいこのま 蓋 14 10 餘 秣 20 15 櫪 槽 か ²² う 糴 かいば かいな 8 清市 かいばおけ 13 13 飼賈 12 12 貿 かいまき カュ 肱太 かえす いよね 云 抗 200 盃八 2 公司 か 21 13 8 7 2 13 藤 酬 返 返 9 7 かえって かえって - 元 11 9 眷省 13 楓 21 21 13 顧顧睠 かえで 9 8 7 7 7 6 5 かえる みる 四 草 草 云云 三六0 福八 좄 立生生态之尖尖

11 彩 が ざ り 25 Sale 22 18 17 16 15 15 14 14 13 襲壘鍾積增輝複増葺 型案 12 **曾** 累陪 nn nn 舵 舳 球粧 11彫 13 楫 単 15 15 13 賁 13 飾 かじ ئے き怜臤ご! 恐恐 15 15 **慧**慧 12 容 ¹³喿 12傅 かしら かしましい 四日 一盐 允を 蓋 13 12 12 11 11 滓貸貰粕假 6 6 3 松糸幺 16曆 數 暦 算 ¹³ 数員 9 かすか かず 秒 하 野九() 四九() 四七 票 슾 芸 芸 公里 칟 찬일 蓋 좇 公 七 校 羍 13 12 鈔 7 抄 かすめる 17 霞 20 籌 16熹 16 **暨** 嘒 かずら かすみ かせ かずとり かす 14 男 かり かすかなひ かすかなひ かな 弄 計開 尘 秃 盟 丸 <u>۸</u> 九 范 范 型 8肩 16 14 歷 歴 13 筭 20 9 かぜ 算 8肩 前 かぜふく かた かぞえる 1110 승 震九 占四九 公0 15 15 14 範 潟 様 13 13 12 12 12 10 10 10 9 扁 15 樣 15 15 15 8 かたい かたあし かたあみど 鉄遒 堅骨 剛核勁固現 犀硬 三元 9 증 **弱**0社 종 숲 28 14 13 10 戇 鄙 頑 狷 寇仇 かたいじ ろいってく 23 ¹⁴ 慳 かたく かたく 15 緊 かたくし かたき 8 奇 かたがわ 22 饘 かたがゆ る もつ 丟九 量 ¥0 즟 歪 B 10長 野気 ¹⁹ 難 難 難 多多な見体形な ¹⁵璋 かたそぎの 8 かたじけな 15 かたし かたこと 3 F かたしろ たま 完 17 9 **篡**胖 15 僻 13 締 17 膻 23 17 15 體 劕 質 14 6 寸 13 裼 かたぬぐ ² かたな 14 14 貌像 かたみ かたまり かたびら かたほとり 兲 좄 芸 盖 쏲 좄 좃 즟 益 졾 兲九 跛 頃俄陂失仄 11 <u>8</u> 勿 かたる 1144 壹 兲 类 六七七 华 孟 10 徒 劉 戡 勝 勝 捷 尅 剋 克 且 か 18 つ 鵝 13 12 10 愷凱豊 がちょう かちどき かたわら =0 101 101 100 宝 芸 = 충 00 靔

九七〇

	9 9 9 8 8 8 6 \$ 15 12 11 10 10 10 9 9 8 \$ 11 8 8 8 \$ 16 16 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12	
字訓索引	三	
引 (きょ	9 8 き 8 き 14 き 16 15 14 13 き 12 11 10 10 8 8 8 8 2 き 16 14 10 10 10 8 8 8 8 2 き 16 14 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	_
(きざし~きる)	<u> </u>	
さる)	## # まり	
	もの	
	11 8 7 3 17 9 3 10 5 3 11 3 20 12 3 14 20	
	你來来於數段於為 朔北 於規 整	
	8 * 8 * 8 * 15 14 * 8 * 17 15 15 13 10 8 * 16 > 10 15	1
-		
	70	1
	15 12 4 き 19 さきのよう 11	
	17 16 15 15 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14	1
	こう 分 充 分 甘 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三	
	6 8 11 8 10 8 15 13 10 10 9 9 9 9 7 7 9	
	かるまるとことをあることをある。	ı
	19 18 18 13 11 11 11 11 11 9 8 8 8 8 15 14 1	
	高金	
	15 15 14 13 11 11 10 9 9 \$ 23 14 13 13 12 10 10 10 10 0 20 0	
	よう な 日 日 三 玉 三 か 二 二 二 一 二 一 二 一 二 一 二 一 二 一 二 一 二 一 二	
-	25 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	
	25 12 きり 3 きり 4 株 株 27 25 19 17 16 13 12 10 き 13 13 き 22 15 15 15 微 株 株 3 5 3 3 3 3 5 3 3 3 3 5 3 3 3 3 5 3 3 3 3 5 3 3 3 3 3 5 3 3 3 3 3 5 3 3 3 3 3 5 3	
-	12 11 11 0 0 0 0 0 0 0	
	型	
	ん	

23 18 15 12 10 7 か 19 12 か 15 13 12 10 體軀魄腔骨体ら類犂 5 鴉雅雅鳥 胴 **う** からだのど からなし 電電 からな からす からしな 芥 型 10 10 格格 がらんちょ からむ 102 14 12 僑寓 かりしろ 菉 18 殯 かりとる 9 荷 かりくさ かりもがり かりずまい かりする 鴈 元六 **2**00 ==0 四六() か 20 20 番籍 ¹⁴ ¹⁴ ¹² ¹¹ ⁹ ⁹ 槀 槁 萎 涸 殆 枯 18 邈 19 かれい ず 革河皮 かわく かわかす かろんず かわ れる 翼 를 Ξ 그 그 그 á 0 かわのな かわせみ かわのくま かわつくり 九 かわらよも 16 かわらなで かりやなぎ かわやなぎ 蕭 萩 · 代化化-かわる ¹¹ 10 10 9 6 勘核案思考 が23 6 19 15 識慮 かんがえ かんがえる 13 **楗** 9 局 III0 馥 21 19 15 14 藪 薂 稽 察 かんのき かんぬき かんなぎ かんざし 煮香芳 25 14 11 10 羅 級 紭 紘 11 9 9 5 冕 覍 冠 弁 かんばしい ひもむり かんむり 素 E 0 E 증 Ó 挫 ¹² 黄 きいろ 20 8 效 効 きおう きえる ききん ききいれな 会 芸 。 妃后 きくいむし きざし 堆 鳴 キッナッキッ きこり きこえる **四**六0 六 6 7 8 충 컸 垩 \$Q\$ 七五九七五九七五九 五

九七二

き 13 12 4 3 きれはし まれ ナー 12 棉 わた 唱 22 21 18 16 襲 劗 斷 獸 きれはば 爿 29 35 ₆尽 きわまる る きわめる きをあわ きわだつ 至 100 22 語 云 19 10 6 餼氣気 10 9 9 悔 恨 悔 21 齧 16 13 11 8 3 橛褐锥杭弋 10 哺 くいちがう くうき くいる くう 臺 **M** 18 鵠 14 閣 <u>4</u> 区 く ぎ <u>苹</u> くる 辱 茠 耘 ¹⁰ 臭 享 。 15 15 潜潜 くさい くさ くさかり くさかり 뤂 至 が 嫭 12 10 群 丵 。 茇 炭 3 七 <u>*</u>芸 るさま くさの くさむら くさのは くさのね さのな しげ 三四 究 00 六九七 17 14 11 10 8 擠摧捩挫拉 23 籤 * 笔 18 叢 くじ 梳非 癹 嚔 きめ きをぬく かる 盃九 くずあさ 惠 くしろ くすのき くじける しけずる 奈 폴 18際 13 隓 19 藥 くだく 14 管 ずれる 슷 **종** 丟 픗 7 內 く ¹² ち 落 12 痢 e 件だり 10降 くちさき くだりばら きばし ちごもる 26 15 脗 くちる くつがえる 吻 くちびる 12 くちひげ 바바 三十三 23 22 鎌轡 くつわ 17網 かざり くつの も 勒 くつろぐ 銜 くつばみ くどくどし くどくどい 或国邦邦土 いと 를 출 즟 044 츳 セーセ 210

こころうご

17 15 15 14 14 13 13 12 11 膽 慮 緒 緒 魂 腹 腸 腑 情

18 ご 7 こ 15 14 13 簟 ざ 快 こころ 課 嘗 試

字訓索引

(こころ~ころす)

こころみる

志

-----くれ精精詳れ ででである。* く 増 増添添加 銀桑お盼 18 騏 くわえる のうま くろめがち くろぼ くろみどり 즟 蓋 14 16 磬 9 8 染 沓 けがす けおり けい 架 17 17 6 6 褻 汙 汚 けさき 12 電 けがわ けさ けがれをと けしきばむ 芒 が 夳 夳 10 9 けた 蓝 けづの 0 그 그 七 。 突 突 13 13 10 煙煙烟 歷歴 けもの けむり け ¹⁹ わ 蹴 坡 14 犗 めもののつ 20 麝 けらい · 兇 7 尾 ける 臣 けら ょせいする けもののな けもののこ けものをき 16 13 13 險 隗 嵬 けん 冠 険 15 請 15 請 12 10 貸恋 こいねがう 종 17 15 12 7 こ 9 臀噌喊声え拷 蝠蝠 こうのとり 14 13 穀 楮 ごうも こうも 14 蒙 10被 20 馨 18 鵠 こうぞ 19 16 9 魏 椹 柑 こうじ こうむる こうばし 13 13 13 腴 雋 跨 鱼资 15 こおる こおり 冰氷久 翌粟 こがめ こがねいろ こがね こがたな 金 もつ 를 풒 寒寒凍 17 16 燥蕉 99874 こころ _ 野さ0 空 四九七 탕 四九七 凸 垂 垂 <u> 35</u>

13 13 13 誅 弑 こんいろ 21 15 15 15 15 預 劉 黎 蔡 敦 13 13 煞 殛 紺 10 桁 ころもかけ 6 衣 る も こんず ころもをは 漿酪 富富 13 壺 10 倖 幸休 ざい さ 二 4 20 17 16 16 15 14 10 攔闌壅閼遮遮迾 三 公公 界 同 门 さかい 17 11 10 8 8 嶺崎陘陂坡 ¹² 9993 棹柱柱竿お さか ¹⁴ 9 榮 栄 さかき さかえる 11 g 桮 盃 12 智 さかし 顚 V 즐 10 10 酌 さか 遡 溯 泝 泝 さかのぼる ²³ 8 鱗肴 19 17 觶 鍾 21 19 かつぼ へ 20 さかな いかず きの 薑 完装 五四 쏲 슾 츳 五五七 11 10 悟 悖 6 4 さから かん 16 熾 18 奰 17 燁 14 曄 焬 21 鼠 18 豐 13 豊 12 隆 積 杢 雄 12 盛 さかんな 富 さかんなさ 404 18 18 闐襛 挺 12 隋 さきにく さきに 24 鷺 埼尖先 さきばらい さぎ さきにする る さかんにす 日 九〇五 六 四四四 叠 ずり 刳 ²¹ 饎 さけさかな 14 髦 17 14 13 10 7 7 さ 16 14 鮭 酹 酪 酒 酉 酉 け 橊 榴 ¹³ 掉探 21 10 さくら 14 酵 さけのもと ざくろ さぐる さけぶ さげがみ 邮号 100 승 소 쏬 **E**01 숦 公式 슬 艺 兲

2	18電 公0	7 名		るのはたり	第		14 意思		a 旋	3 13 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15	3 年	· 影	艺	艺 出	4仁	したしむ	19 第 型	したしい	17 質 元		L	15 東	種 畫	したがき
2		=		Z Z	1 A		3 6	<u> </u>		象 /	i i	9 配 20年	雪	したな	軍 和	したばかま		したのたれ	14 製	~	19. 流		11 涿	に
加州 素	· 阿	9 票	4	しなやか	12 評	12	しなさだめ	初 一声	9品	9級	多科 宝	しな	18 製	14 新	第		9	8 思	しとやか	15 夜 景心		14. 蕨 野	D 医	しとね
列	12		き 进	[10]	10 世	死	8 奶	8 多	8 本	7 沙	7 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	년 列 : _ 蓋	王 伯	了 化 1	3 二 五 五	3 亡 盂	_ k	16	ろも	しにんのこ	16 輭 奈	13 嫋	11軟 중4	加旋
9	s 姑 宝	しばらく	13 造	しばしば	16薪	しばかる	13 楚	9柴 票	6芝 至	ば	忍空	オ		ハ	ハ	Ç	15 架	11凌 公	8菱 公	しのぐ	16 篠 皇	13 筱 翌	しの	17 薨
12 心心	しべ	15 选 显	14 列加比 四六	11次 票	しぶる	15 澁	14 初加上	11 渋		승	13 痹	13 痺 ==	しびれる	17 縻 排0	2 16 4 至	16縛	16 縢	12 余 品	12 繁 三二	11累 公益	11.梏 三	しばる	15 暫 臺	11 頃 iii
17 轄	しめくくる	9 染 三八	しむ	14漬 景	しみる	9津	D	しみでるも	27 鷹	た しまつどり	16編	14嶋	12階	10島 福	9洲	6州	しま	13搾	しぼる	21 編 臺	しぼりぞめ	10凋 601	しぼむ	16 本心 異公
13 虜		12 童 奈	10 俾 誓	しもべ	17霜	*				12 絞 高穴	¹² 結	8 拠 ご	5		24 觀		18 観	16 観	14 睹			_	しめす	17 轄
	11郵	しゅくば	16 儒 808	>	8 姑 量	í	13 男 三七	しゅうと	12.喋 KOM	しゃべる	21.麝		11匙 票0	しゃくし		90			14 墅 豊			16 隷		14 臧
	13 軾	しょく	12 娟	じょか	12 首	しょうぶ	18篇	ż	しょうのふ	12 秦 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□		しょうぎ		25 鑰	16錠 駅		111 尉	じょう	10 殉	じゅんし	9茆 表		16儒 202	じゅしゃ
15 天蚰	しらみ	23	19	18 覆 宝	18 覆 莹	17檢 등	17 鞠	16 辨	13 詰	12 診	12 検 素0	間 🔐				· 按 =		5弁 詣		12 報		13 粲		しらげたこ
	7 肛 型	t	20 攘			11/組 表	9 彦	。 卻 六	却表	5 斥 蠹			16 避			10 復	10 退		9 奥		9 紂 霊		17 臀 奈	Lb

さ 20 13 ん 觸 触 ぎ 18 17 離 隰 椒 さんし 13 **筹** ¹³ 椹 さわぐ さわる さわらぎ 仌 温 売 6 し 19 14 14 汐お 譜 慂 誣 しいたげる しいす あわせ 立芸 九五 茫 一 숲 しか 栞 おり じがばち し ¹⁶ 機 の こ _ _ しかけ た け 20 16 **肇 鮑** 顯 蜾 11 24 し 17 お け 18 監 しおいけ しおづけ しおち しおから しかばね 六 五 스 8 8 5 し 12 咄呵叱ゃ然 唱怒 唯命 24 颦 19 18 矉 蹙 否 <u>6</u> 加 ⁹ 是 しかり しからず しかも しかめる 壳 黑岩 츳 畫 四九 日十十四 元 元 吉 商 奈 宝 元 蓋 一九 ¹⁶ ¹¹ ¹⁰ ¹⁰ ⁴ 臻 連 連 荐 仍 19 17 16 11 瀕頻頻睡 15 褥 12 然 8例 しきもの しきたり しかれども きむしろ 型式 ない **=**0 薑 뿔 四六七 罕 四元 三0 蓋 薑 17 16 13 し 14 14 し 12 繁繁 籐 げ 構 構 む 軸 18 15 15 藉鋪舖 15 15 15 15 舗敷敷播 15 14 **敶** 摛 尊 じく 10 6 薦 풋 촟 岩九 鬥 10 10 8 しげる 18 11 7 6 職務役役 <u>6</u> 而 29 18 鬱 穠 しごと 툸 슾 404 空 릇 18 17 醬 醢 獅猊 11 逡 14 磁 じしゃ ししびしお 포 穴 云 景 79 78 公 岩 交 計畫 幸 幸 000 卆 業涓 15 **夢** しずく か なは 坌 秃 <u> 폭</u> 80 스글 등00 至 五 章 允 ≣ 畫 父 仌 公元 상 ハ九九 益 폿 莱 슲 し 18 18 17 5 しず そ 鎭 鎮 壓 圧 ず める した 第第 したおび たおび れ 慕恋 し²⁰ た蘇 しだい 舌 产 10 率率從扈倭 殉 。。。。 服附述若 10俾 10追 10 10 従恵 9 8 6 6 委如叒 和 四三九 22 21 21 18 17 17 16 16 16 15 15 14 14 13 13 12 12 12 12 12 12 12 18 屬幅縣隸蘇蘇隨瓊濱遼濱懋馴跟異属随順循惠聆 したがえる 八五至八五 五 四 四 四 二 六 풎

18 12 12 12 博 K 50 10 9 7 す 10 9 す 10 脈脉条 ビ荒荒き ## 10 **健 是 是** 14.頗 Gau すごろく すこやか すこぶる 3 7 すずき 10 晉 16 16 澡 澣 14 13 獎 奨 13 勧 12 12 11 10 10 9 9 登奠羞烝差姜宥 第 箔 だ 癈 た 魑 魅 鬽 すたれる す ¹³ ¹³ ⁹ だ 裾 裔 衽 21 19 19 16 齊贊勸膳 覗 立 ⁶ ⁶ ⁵ ⁴ 吐 弛 去 芝 17 16 儡 頹 すっぽん 00¢ す ⁹ 7 す 20 な砂沙な釋 16 14 11 樸愿淳 10 6 悌朴 すなどる 23 19 **髓 髄** 脛 す 15 ね 馴 18 12 12 12 12 11 闔都惣惣渾都 すべる 13 13 12 稜 煤 隈 15 15 12 10 7 7 す 登 櫢 棲 栖 住 住 む 13 遄 13 溘 12 13極 12 給 ź z る すれると 25 15 15 15 12 12 10 8 鑱 劌 銳 鋭 犀 劂 剡 粉 わる る 門

14 14 13 13 13 12 12 11 11 11 10 9 8 8 6 3 3 2 1 19 11 8 5 徵 徽 節 瑞 號 祲 証 符 旌 章 祥 祥 点 物 表 印 P 才 P 克 識 液 知 汁 る 15 12 12 11 11 10 8 し 10 10 9 8 5 皚 皓 皓 皎 皐 皋 叔 が 料 城 城 臭 白 20 籍 20 籍 19 19 簿 しろ 16 編 10 8 素 帛 ¹¹ 堊 しろげよね しろぎぬ しろがね しろつち しろくぬる しろきぬ 九宝 **₹**00 超 じんがね しんしゃ じんたい しんがり んだいこ んぞう 公三五 軟吸吸う ず 芯 芯 ず 14 す 13 す 4 4 不 17 16 螽 螟 14 14 13 算酸窠 b 13 12 12 9 8 8 7 5 t à 裔葉稍胤苗杪尾末 à すがた 据 15 **空** すえる えもの 蔣 姚銭 14 13 隙 鈕 16錢 15 鋤 7 16 16 16 14 13 13 13 12 12 12 11 10 10 9 8 7 12 12 12 12 13 13 13 13 13 12 12 12 12 13 すきす 六 19 黎 る 抄 りぐれたう うぐれる うぐれたひ 九八〇 れたも す 22 20 17 16 16 15 14 14 14 14 13 13 12 12 12 10 10 10 9 8 8 8 8 8 8 8 8 8 線 額 額 儁 拳 髦 瑰 魁 雋 傑 喬 堪 偉 倜 俶 高 妙 茂 卓 奇 英 九 益 豊 승 美 九七 = 등 聋

33 度更 應應 そまつ 側

13 11 嵩 崧

その精

8 8 6 3 其苑氒丌

ぜ 22 19 19 12 10 10 9 19 瀬瀬 瀬 畮 畝 脊背 ¹⁴ ¹³ ¹² ¹¹ ¹⁰ ⁹ 関 楗 堰 欶 欬 啄 17 繃 14 **蓍** せおいおび 権 ぜいのな せき せ 104 10 脊 11 * Z せなか 14 粼 せぼね 肾 貫 ぜにさし せともの せっけん せせらぎ 18 警 せきばらい せのにく せしめる 令 しむ 戸 仌 13 12 11 隘 孱 笮 14 11 膂 **率** せまいわな 公 公 九四 せ 18 17 16 13 13 み 蹙 薄 薄 逼 遒 13 13 数 詭 苔責推訟証拶刺劾呵攻��。関めて せめいる ¹⁸ 蟬 믎 픗 弖 究 兖 III. 四五 三五 10 7 **控** 粤 24 讓 21 譴 20 19 譲 譙 18 謹 數數 13 13 誅 賽 14 慥 せりあう せん ると 芹 ñ 혓 19 17 12 11 10 8 8 瀕濱傍副浜沿沿 17薇 17 檀 祖祖且 トル・ナメー せんぞ 師 せんせ V 00 著 恕驂 21 驂 18 騑 そえる そえのり 13 僧 麗 ぞうり 佐弐 僧 12 10残 10 裁 10 挫 10害 10害 そこなう 13 13 微 04周 きら = 04周 会 五七 쁰 七九五 9 100 24 20 17 15 14 13 13 13 13 12 12 讒騫擠劌慘損賊賊遏費殘 12 12 詛 訾 そしる そ 24 19 そ 讒 諧 湔浃洒注注沃写瀉 謗 謡誹 쏬 0 - そなえてまっつる 10 息 そなえ そその 嗾唆 かす 岩票 墨 8 そねむ そなえもの そなえる 16 膳 九 101

15 11 たくま m 技匠 5 5 3 工 21 19 18 18 17 15 儷類類雙醜敵 鼻 ⁵ 20 讀 ¹²善 たくみ たくわえる たくみな 20三 **갓**도 盏 18 18 儲藏 14 蒙 酣 いけもの たけ たけなわ たけづつ たけだけ 110 풋0 た 18 18 17 たけを 簡簡 部 ま も けるだ 15 .15 碻 確 蛸凧 つきたけのたか 12 筍 たしなむ 14 慥 たしかに たしか たこ たけり ¹⁵ 篁 ²² 籜 たけの のこ 四六 かわ 山山川 至六 Ē 蓋 福福 12 繁 ⁶ 出 15 12 12 7 た僧補給足す たすける たすけ たすき だす 右 =0 吾 岩丸 - 芸 - 蓋 숲 12 11 11 11 11 10 掾 翊 埤 陪 紹 掖 祐 10 9 芸 12 12 12 12 詔 接 援 15 獎 14 獎 13 13 12 摂 契 幇 12補 19 ¹³裨 璔 ¹²棐 15 ¹⁵ 賛 12 傅 16擔 15 諒 15 儋 岩 15 13 13 **潯搜跡** ¹¹ 探討 10捜 10 訊 16 鞗 12 尋 尋 26 21 讚攝 たずねる たそが たずさ 伺 な える 垩 20 翻 18 闘 17 16 撃 戦 撃 ¹³戦 10 13 頌 12 雷 第 11 11 惟 唯 たたく たたかう 26 讚 たたえる 16獨 10 10 10 9 豊 8 5 ただし 17 17 15 14 14 14 13 擣鍛撞槌毃敲搏 是直忠 笞 窑 <u>~</u> Ξ 0.1 公20 ≟ 争 ただす 19 17 繩 劕 ¹⁰ 站 佇 16 16 15 諫 遹 彈 15縄 15質 13 督 13 運 13 幹 たたみ ただちに たたず 14 **榦** 13董 12弾 今 8条 CLE 8株 CLE 8株 CLE た 22 19 12 だ **豊** 襞 豊 14 14 10 10 6 漾漂浮浮汎 ただれる すけものたたりをな ただよう 17 臂 たたむ 22 疊 たたり 朮 常 오 = 四五九 五 四五九 084 034 共七

九八六

七回

三二六

九五

四季

15 14 10 9 魄魂神神

の福

04四

¹⁵ 道

空

たまだれ

分

たまたま

兖

弄

秃

15 15 15 10 賽賜慶俸

景

陽 たまよばい

克 云 器

丟

뜻 뜻

たまりみず

溜洿

_																									
	19 權	19 起 九八	塚 (0)	棟	12 塚 com	11陵 公	10. 家 KOM	柄	9柄 芸	- 8枋	7把 奚	つか	4.安 元	つえぼこ	女 累	つえつく	12 策 🔤	11梃 台	7杖 鼍	つえ	17 糜 扫	12費 岩田	ついやす	11啄 灩	ついばむ
		つかさ		0.	つかえる	13 辞	卸	御		8		事		_									18 壙		
\mid		13		17		7 市	一つか	18 職	0	四			ス	0		123	3 P		六	15寮	14 僚		六	- 6更	 主
	101	兴	む	北三	十一元	八至	ねる	型	壹	元	十		个	秃	口二元	7	/ 三五九	さどる	田 州田市	小 公公	小八条	五四三	善	人 公乳	一
		14 遣	13 遣	11 書			9派	_	19		16 億		15		12 勞		10病		10 疲		切	つかれ	17 癉	つかれ	15
		芸二	芸	三五七	三五七	六七七	六七七	わす		숙			五五	六四	<u>九</u> 三	七七九	共	芫	#11	친들	云	れる		n	中中
	10消	京	既	8枯	* 物	8 歿	· 尽	⁵ 央	つきる	9 倂	8 俟	つきび	<u>з</u>	つきでる	13 媵	つきそ	9 姪	つきそい	今	次	つぎ	坡	月	月	つき
	SE 0	景	四四四	共	읒	矣	八〇	益		公里	公五	<u>ک</u>	至	る	고 종	う	空	<i>\r</i>	증	兲		臺	臺	臺	
	¹² 着	¹² 就	11 著	9 突	9 卽	· 附	· 突	8 到	即	扔	つく	²¹ 殲	19 摩	17 克瓜	整	增	15 銷	盘	退	歌	温	涸	旣	温	10消
	秃	四0九	五九九	至	耋	七元	至	巹	至	齊		五六九	크	薑	戸	乔四	垩	四八〇	差	<u>=</u>	Ξ	4411	79 129	=	0
	17 飼	¹⁵ 潯	15 緟	15 賡	13 続	13 嗣	13 継	12 尋	12 尋	紹	8 亞	7似	⁷ 亜	5亩	つぐ	²¹ 儷	17 隸	17 擣	16 隷	¹⁵ 撞	15 衝	14 槍	13	¹² 傅	¹² 着
	픗	門八	五	=	孟	三七四	票	鬥一	四八		==	兲	=	兲		九0二	八九	至	八九九	六吾	五	西 六	五九九九	温	丸九九
	7佃	つくりだ	17 償	15 賠	15 賡	つぐなう	16 輸	16 輸	15	13	單	**************************************	9	つくす	10	6机	² 几	つくえ	25	25	22	21 續	20 纂	20 繼	17 績
	六言	だ	西至	交	=	<u>5</u>	슬	스	포	푯	五七九	릇	五七九		Ξ] [] []	120		五	三五五	<u> </u>	五五五	至至	킃	<u>**</u>
		10乘	。 乗	つけこ	14 除	つけか	18 繕	¹² 補	つくろ	19 譔	¹⁵ 撰	¹⁴ 製	14構 三	堆構	12 為	11 造	10 造	9 為	8 制	7 冶	⁷ 作	₆ 匠	<u>5</u>	⁵ 乍	つくる
		弄		ŭ	三九四	ن	壹	セセカ	う 	픗	五	五00	===	=	Ŧ	五	差	141	四九四	스	三四四	三	八七五	Oldin	
		15 評	14	14 計	14 語	12	12 詔	12 詞	11 控	11控	¹⁰ 訊	9 赴	9 曹	7告	⁷ 告	5	つげる	18 蹤	16	14 漬	跟	尴	つける	9 衿	つけひも
		四八七	300	=======================================	굸	슬	四四六	三十二	HON	FOF	鬥	0厘件	三四五	100	Hijo	三式		四至	聖	至尖	壳	中村二		三0元	*
			16 壌	4槌	推			杵		<u>3</u>	つち	* 拙	つたない	23 蘿	14 蔦	つたかず	13 傳 公園	伝	つたえる	14 蔦	つた		つじ	11 晦	つごもり
F		2 0	型 (0)	=	=	- 英七	至七 。	型元	폭		14			상	交至	<u>6</u>	三	- E		÷ 0€	- 00	=	17	九 11	
	22 霾 六七	つちふる	all In	つちのと	成な	つちのえ	<u>г</u>	つちのあな	超 品	つちならし	煙 門	つちけぶり	16費 一美	塊。	11書 音	四十二年	公公 公路	当	5 出	つちくれ	2 元	つちぐもり	17葉	培	つちかう
L	-ti		_=								_=			_=	-62	-6	7.0	-5	£.		+==	-			

20 18 17 13 13 12 11 繼壘聯続継塁接 提。 つ 10 つ 14 12 12 11 相 で 意 が 管 筒 琯 相 つり 増ってい 25 類 = つづける つづく 11 10 宋 10 悛 10 10 虔 10恭 9 畏 12 12 敢 11 11 11 10 13 13 愼慎 ¹⁴ 説 競 愨 飭 33貈 型 丰 四七五 10% 10 きもの つづったか 22 22 儼 21 **亹** 20 嚴 20 [隱 19 18 謹 17 17 つつまし つつ っっ_む む ¹⁴ ¹³ ¹³ 鼓鼓鼓 ¹⁵ 境 堤 堤 埒 苞 陂 坡 阪 坂 15 10 儉 倹 つづみ つつみ つづまや つづみのお 三军 か 10 座 。 苞 苴 22 20 19 17 17 囊蘊櫜橐薀 ¹⁴ 裏 草 15 14 8 綴叕 つどい つづれ つづる つと 綸 0 0 汽 買 壸 29 二 10屑 三九九 슬 19 17 16 勸 懋 勵 16 辨 13 孳 ¹¹ 博 博 島 14 14 っ 20 綱維な農 15 僶 13 13 13 勤 12 勞 つなぐ 73 13 農 敏 つ 18 ね 縁 20 **総** 21 16 14 13 縛綰継 つのぎり 性 つのぎ つの 毎毎 素 纍 常 恆 恒 ね 元 四五九 푪 17 翼 12 募 つばな 20 17翼 つばさ つばき つのる つののまが ずきののの つば さか 011 孺 婦婦 婦婦 17 蕾 つまず 8妻 妃 つぶて ¹² 8 8 8 備 具 具 粒 % つぶさに つま 17 15 謐審 13 10 詳案 13 跳 ¹¹ 6 跂企 22 19 17 14 躓 蹶 蹉 疐 12 10 鈕 紐 11 つまむ にするら つまどる つまづく つまだつ つまみ 16 諦 つまびらか 四四七 四四七 中十四 70 弄六 Ë 五九() 薑 氕丸 か

牕窗

蓋

洵迥

10官 公司

台

とがめる

とが

とける を する

芸

墜埊

煮 煮

九九五

九九〇

父丈

とざす

とおす

とがる

19 18 18 17 16 14 13 13 9 懲 懲 謹 謹 閼 閡 禁 遏 弭 とどろく ¹⁷ ¹⁵ ¹⁵ ¹⁵ ¹⁴ ¹⁴ 蹇駐駐稽疐滯 となえる とどめる が は 話 語 唱 僧 徇 とばり との 殿 16 隣 鄰 とねり となり りの ¹⁸ ¹⁵ ¹³ ¹² ¹² ¹¹ **奥** 踔 跳 翔 翔 翏 世 豊 票 飛 12 12 扉 扉 とぶ 扇 11梁 ハ 扇 とびら 18 とび 扃 鴟 승 승 숭 兰 五七四 六000 四五 125 125 35 15 14 儉 匱 20 とぼそ どぶろく 翻 易 とぶひ とぶさま どぶが 貧 九八 汽 11 9 と 10 全 6 # 9 å å 酒泊止 とむらう 12富 とむ 亖 21 20 20 16 屬黨 轄 儕 15 14 僕 等属族 10 倫 10 10 9 7 7 們党侶伴伴 11曹 とも 燈檠灯灯 8 置 公品 <u>수</u> 台 與俱 暨 僉 偕 型骨併並共 数骨併並共 27 纜 ともにする ともに ともなう ともづ 吃 な 仌 捕 10 10 10 9 9 8 8 7 6 5 5 拿捉隺拏柙罔拘字收囚収 ど 16 11 8 度 度 とらえる 13 鉦 執 13 11 8 7 7 禽鳥佳酉酉 型 18 欒 獵 城 20 17 15 鞹 鞟 虢 とらのこえ なめすとらがわを 22 17 14 14 13 繋網 馽 溢 とり とらわれび Ň いれ 훘 웃 14 13 寨塞 とりで ¹²換 とりこ 鳴 とりさげる とりがなく とり とりかえる かご 公 秉拔征受取扼抜把抒汲扱扱机 16 駅 剔 23 9 咬 とり さま とりのとぶ とりのぞく とり 蘊 縲 かこえ もち な わ 斟劇盜鈔最最揜畧略 盗 10 10 10 9 捉冣挈俘 10 10 探採捋 票 秃 矣 矣 읖 六 六 六 六 六 六 六 盗 ₹0<u>:</u>1 壳 臺 2 公益

			_	_																						
	婚			ر با ا	なまめかし	13 腥	なまにく	贴	なまず	17 膾	なます	16	なまじいに	婶	なまける	12 鈍	なまくら	17 膻	13 腥	なまぐさい	13	なまぐさ	18 鎬	17 鬴	17 鍋	16 錠
	尧		E.	Î	Ĺ_	₹	_	皇		九七		<u>≕</u>	に	会	る	숯	6	至	₹ 00	さい	=	さ	프	型	二	四六〇
		J	3 FL ,	³ 凡	なみの	15	15 漕	うれずる	なみだの	14 漣 むむ	なみだっ		なみた	11.			10 注			17		! 波			13	
		3	2	<u>유</u>		五四四	35. [29]	j	な	九0七	ره 	六七七		八九四	二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二	二 四	六 七	[29 [29		垒	九三至	六七七		丢	弄九	
	¹⁵ 隤	息	划	3 1	12 《《	12	缩	¹² 菱	10	¹⁰ 疾	· 阻	. 良	5 . 尼	‡	なやむ	14	14 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	11	加	なめる	16順	13	なめら	13	拿章	なめしがわ
	좃	八元	d C ≡	100	는 는 는	六品	≘	10	六岩	툿	蓋	三五	슻			四八		奈	Orli		三八五	 E3	か	墨	六	がわ
į	10 拼	7均	ならす	1 麦等	4	14	14 慣	14 綿	傚	11 習	四四	加	校	10 效	9便		7 季			ならい	_	なら	²³ 囏	17 艱	15 憂	15 憚
	E 0	401		<u> </u>		だニ	三	三	E O	四〇九	四〇九	六	10	그	444	元	元		霊		슬		三	-	슬	<u></u> 三
	²¹ 儷	19) I	8	 18 雙	15	排	和	. 伯	10	8 NR	。 科	· 伊	· 並	2 并	= 🔻	- 2 L tot	ならど	15 耜	やす	ならび	16		班	ならび	10 耕
	九0三	カO	778	מעו מ	三	소		차0:1	关	类	九01	六二	六	六	25	季	404	231	三		たが	소	公二	104	Ů.	MON.
	15 質	1	4 1	[2	12 就	11済	7成				なりか	16 嗜	たとう				- な 1 り								- 9	ならべる
	壳	ノ カ			四()九	릋	四九三	四九三		四 九 九	**	=	11.25	. E74				善		ならんでま	中国中	りし	六八四	수드라	九0四	べる
糸	.6 追:	15	超	14	有	1	10 索	なわ	23 犪	17 褻	16 嬖	慣	13 馴	11 羽台	11 習	10	爽	7 忸	8	なれる	聚	なれし	28 藥	17 劕	17濟	16 喘
2	=	上三五	图长()	ハ九	見	n min	三			玉	七六四	픗	叫		四0元	兲	元		츠	<i>ي</i>	丰	か	E 0	三八九	三	=======================================
	12 変	なんば	8	Ė	すれたんと		20	¹² 拒	12 渠	 孰	10 盍	10 奚			9胡					8若	· 汝	女	克			16 縢
	XOX	h	四		Ä	, i	四九	三	三	加九	1101	11110	兲	型	芸	<u></u>	五七	~	壳四	三九七	=		弄 六九	L	四六〇	六五
		4 آباً	におう									9 香			にえる	18		—- 8 於	6			_ 子	に			25 癬
		奈 丸	,	107	さけ			2.	宝	中0周	中0周	二九九	ψ·	三百五	る	三六		夳	픗	兲	弄			13	-	, 10x
			6										.7		8		14				_	長 6	1.7	11	8	
		兴	8							握	10 拳 -			にぎる	粉	にぎり	脈	ぎやか		にかわ	15		にかよう		善苦	にがな
-			瓷	究	_	_		立至	空	九	홋	芸	芸	_	崇	_	놋		=		七點	芸		章	=	
1			11 淆		1.2%	,	18	20		にこげ			9 奔	8 奔	北	<u>_</u>	<u>L</u>	にげる	16 憝	15 僧	14 憎	班嫉	惡	悪	¹⁰ 疾	にくむ
3 d	411.	型型	E S		_	-	<u> </u>	ゖ	₩OII		七七九	六	양	상	을	七九四	七九四		좃	蓋	蓋	兲	カ	力 し	兲	
	Ŗ	.3 Ņ	につめる	27	22	トナヤ	こ月	图 /	19 賃	にせもの	19 鯖	にしん	4 ∐	にじゅ	14 滲 里	にじむ	16 錦	にしき	¹⁶ 霓!	14 蜺!	9 虹	にじ	₆ 西	にし	18	16
	37.2	E.	ි 	스 포	八五五五				兲	() 	종		22	ゥ	四六		Ē				カカカ		四九三		奈	九二四

ど 19 と 24 21 20 18 18 17 17 17 16 済 済 濱 攝 攘 擥 聶 殮 斂 揲 擁 16 16 15 15 15 14 14 14 13 13 13 操餐撈撚撮摟摘奪裒摸摂 空 14 関 17 16 13 11 濘 澱 塗 淀 16 隧 トンネル とをしめる な 完 奈 竞 13 9 5 なお 20 (にする にする たする ¹⁰ 軼 ಈ 苗 全ケイフ なえる なえぎ 伸 甫 会 四九二 긆 交至 16 15 霖潦 10 6 4 な 20 17 17 衷仲中か樂療點 15 15 駔 儈 10 袁 14 12 11 8 5 なが 後 選 脩 長 永 がい ながあめ ながいころ なかがい ながいけ 仌 좆 5 5 中央 は なかだち 22 18 7 謫 謫 汨 な l2 8 なかす がす **堵** 坻 かす 12 11 9 なが なかだか なかま 5凸 瓷 しめ 七七五 究 10 7 ながれる 五 勿曲 ながらえる 眺 21 17 覽覧 20 16 16 15 10 黨 儔 儕 輩 倫 なかれ 存 ながめ ながれ ながめる 七四四 <u>~</u> 尧 등 医光 쏬 八公 晉 公公 公公 16 15 14 13 12 嗷 嘷 嘖 嗥 啼 12 12 11 8 なぎ 陼渚渚坻ぎ 兲 ≣ 11 11 10 9 7 7 6 6 なげく 惋帳 歎唉 咨 忼 忼 次 次 げく ¹⁴ 動 ¹⁵ 信 なぐさめる 14 戦 ず なさけ なげわたす 变 噫歎嘘嘆慷 芒星 좃 歪 101 101 Ì な 8 な 12 9 7 7 6 で 泥 ず 為 成 作 成 5 必 なじむ なしとげる 음 至九0 盖 흥 至 四九三 양 상 空 슬 Ŧ 16 15 11 10 8 7 なで 解撫捫捋拊改でる 19 16 12 懷 懐 循 頭夏 12 **栾** な つ め なつく 名 17 10 擬准 13 準 なづける なつ なだか なぞらう なぞらえる 九九二 三 9 某にが 14 14 7 な 11 10 8 腰 厨 何 に 斜 衰 陀 12 9 8 斐施披 17 15 嬲嬈 なびく なぶる ななめ ななつ 七 公 蓝 四六0 せこまたれ 201 八0元 亭 完 九 三 五 元 元 五 土

九九四

12 12 12 12 12 12 12 12										_	_		_														
13載 20 12 2 2 2 2 2 2 2 2	1	12 塔	のせる	好		0 3	10 美	のこる	追	追	のこす	。	のこき	2 電	8 0 3	o 利	· 7	- 0	2 花	1 1 相	7 1	4 1	2 1	0 1	.o 干阝	8 可 =	うのき
13載 20 12 2 2 3 3 12 2 3 3 3 4 4 3 3 3 4 4		六四七		美	/ +	- III	三 兵 六		=	=	_	八四	b	120	, <i>t</i>	: :	芸	-	*	2 2	5 -	<u>ا</u> ج	≝ -t	9 = 3 = 3 - 7	== == == ==	E 2	Ē
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	7 7 7 7 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	17姓					4 条:	11	雪	10	10涂	10 除	10	9	9	- 8 排	8] 拧	7	5担	5 写	5 千	」源			
11型 元 0 0 1 1 2 0 0 1 1 2 0 0 1 1 2 0 0 1 1 2 0 0 0 0	2	V	合	弄	空岩	三九〇	1 1																		•		
11	7 7	7 -	のど	21 灋	15 鼎	」 月 枝	き貝	.] }	8 法	8典		のっと	9後	のち	18	18	17 覬	14 聖	拉								
10 12 12 12 12 12 12 12	NA.	Z .		六五	五五		3		六五	奈	壳	る	云		公三	슬	一	七九九	샾						اله		
10次 8 元 12		7	10 汀	のべき	15 蔓	14	12					5 申															
10 11 12 12 13 14 14 15 15 15 15 15 15		-		えん				,					る		6		す					しる	소		_		
11] [3]	0	10 乘	10	9 乗	8 昇	17	<u> </u>		_			15 幅		15 埶	_	19					10					
13 12 12 12 13 15 15 15 15 15 15 15										る				h		せる	善							. W			
Sec 15 15 15 16 17 17 18 18 19 19 18 19 19 19	13	1 E	2	12 喫	12 飲	11 禽				15 誇				14		6				~				17			11 西
15 15 15 15 15 15 15 15											もの						*/-							,	开	-	仓
15 11 12 15 16 17 18 18 18 18 18 18 19 18 18	26	2 湯	1 É z	18	16	16		_	5 :	15	15 住主						10								<u>。</u>		
15 11 12 12 13 13 2 12 14 15 15 15 15 16 17 16 16 17 16 17 16 17 16 17 16 18 18 18 18 18 18 18	立	: 1/3 -t				思																			h	鬱	飮
19 18 (株) 10 (株) 2 (.#.	3	ī	15	<u>≅</u> 11																				_	四四	震
19 18 18 11 12 11 12 12 12 13 3 刀 2 14 15 15 12 2 12 12 13 3 刀 2 14 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15					烽	ろし					のろう		のろい			のろ	騎	駿	駕	馭	乘	乗	のる	雪雪	のりと	11 凌	のりい
12 は 17 14 12 11 は 8 7 は 19 16 は 17 は 10 は 15 13 13 6 5 5 は か 映 著 舊 虚 虚 ば む か か 鏤 鋼 な お が か な と を こここここ	-							_										갖	呈	<u></u>	兲	弄		蓋		益	る
12 は 17 14 12 11 は 8 7 は 19 16 は 17 は 10 は 15 13 13 6 5 5 は か 映 著 舊 虚 虚 ば む か か 鏤 鋼 な お が か な と を こここここ		蛆		18	はえ	匐		9	7 /	B	はうり	10 宫	ばいま	9 肺	₆ 灰	₆ 灰	はい	場場	łĬ	15 図	¹² 葉	12	刃	³ 刃	は	l:	t l
ボース ボース ボース ボ		- X	Í	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\		下至0	元宝					五		<u> </u>	같	같		四五九		聖書	八四九	単生	四七九	四七九			
ボース ボース ボース ボ	將	: カ	t	17 薨	14 浩	12虚	虚	はかは	t j	8 臣 i	7 亜	はかの	19	16 鋼	はがわ	17	はがめ	10 捗	はかど	項	¹³ 墓	13 坐	6宅	5 丘	はか	。映	はえて
	衰			= £	≣	二	二			=		^			-,0	四六	ける	六0元	る	七五七	汽	竖				四三	9
算	¹⁴ 算	13	1 9	3 年 分	13	12 12 12	22猶	12 智	7 第	2 157	1	11	はかり	8 折〕	8	ばかり	21	16	15 権	14 鈴		はか	11 措	はか	6 F	はか	16 実
算	墨	슬	31																		." 四元	ŋ		らう	五	みち	- 1
訪商規料称茹校某度訂思咨計癸図究忖仞增緩籌縣蘇謨謀	訪	11 商	一 i 規	見り	10	10	茹	10校	泉										6	 5 初	はか	22		18		17	
大 四 四 六 四 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 四 四 元 九 五 五 五 二 四 四 元 九 五 五 五 五 五 二 五 五 二 五 五 二 五 五 二 二 五 二 二 五 二 二 五 二		四四四																									

はな 歪 公会 秃 五七九 **芙 芫** 容 17 16 燮 燖 15 14 熟 髣 14 像 12 11 11 11 7 7 煮烹庶孰肖肖 13 煮 題節() 四九 12 9 9 8 8 12 12 9 突 俄 突 わか 16 15 に 21 19 18 燎 槱 わ 鷄 鶏 雞 17 遽 15 13 12 に 18 下 流 数 かに 至 高 言 で 至 にわとり 12 はわう にわかあめ á 茳 17 16 縫縫 17 16 ぬ 17 16 15 糠糠か 縫縫緻 17 10 鍼針 ぬかず ぬいめ ぬいばり ぬいとり 寫 ぬいぐつ ぬう **X** 四七三 至 表 秃 굯 **歪** 8 8 7 拔 捧 拔 ぬ 擢 挺 擅 ¹⁴ 8 搴抽 17 8 濘泥 15 15 韻 艏 ぬきとる ぬきでる ぬかるみ 4 至 ぬきがき ぬきんでる 五九四 至 空記 至 奈 奈 奈 奈 六六
 12
 12
 11
 11
 11
 9
 a
 15
 15
 8
 8
 a
 13
 a
 14
 13
 10
 9
 8

 檢
 签
 签
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金
 金 15 12 11 11 8 褫 揄 脫 脱 免 ぬぐう **京** 京 京 五二 去 交 容 買完 野宝 쯛 壽 슬 公司七 岩 叠 플 秃 ね 17 14 14 13 11 10 8 れ 黝 墐 墍 塗 堇 涂 抹 根 抵 音 8 沼 17 16 8 濡 霑 沾 5 ぬ 22 ぬる ぬま ね 1,0%
 15
 13
 ね
 19
 17
 16
 15
 14
 14
 13

 蔥葱
 ぎ願 競 冀 樂 望 僥 想
 11 9 庶 迨 ねがう 吾 兲 兲 15 14 12 賚 犒 勞 9 柢 猫猫 ¹⁵ 輬 10栖 17 鼠鼠 ねぐるま ねぐら ねだい ねじる ねざす ねこ ねきりむし 四九七 6 Ξ 芸 公元 ね 23 17 11 む 霧 黏 粘 ね 15 15 13 12 10 8 や 瞑 瞑 睡 寐 眠 枕 ねばる 並 ねばつち ¹² 規 ねたむ 六出 兲0 즟 慥叮 ねんごろ 17 16 15 14 14 13 13 12 10 鍊鍊練練擦擦擦擦擦擦碗 ¹⁵ 練練 17 16 鍊 鍊 ねりぎぬ ねる ねりいと ねりがね 四六 わり~ た0七 츳 츳 ¹⁵ 址 址 壄 埜 野 のう 0 슬 슬 슻

10 旄 表 |

21 19 13 10 羸嬴裸倮

夳

18 はたおり 10 にたおり

は 20 15 7 6 6 6 臓 膚 宍 肉 肉 肌

めく はたがひら

14 14 14 13 隻圖稱詢 13 13 13 準 虞 虞 13 12 12 12 12 12 12 12 12 12 推量評評等程程測揣 26 21 21 20 養 壽 權 籌 はぎぼね 益景 7 は 11 秀 11 11 10 產産哺 はぐくむ = 16 螣 はくいむし 17 貘 ば ¹³ く 剽 はぐさ はぐき はげむ 7. 急げ **四**八0 門〇 撒運運般凡凡 紫箱 © 匱 運 営 笥 笑 35. 迎梁 9 5 は 18 14 13 10 9 9 7 7 6 3 擷箝擠挾柙挟夾扱扱叉 15 はさみ はさむ 型 左 二九七 丰 当 元 土 はしか はしがき 10 棄 はじめ はしたのた 型 蕉 善 9 作 はじめる 15 14 緒鼻 14 鼻 ばしょ 奔辵走 愧赧 17 15 醜 慙 空筈 21 15 10 蘧 蓮 荷 ⁷ 芙 14 慚 10 耻 るはずか 7 7 はじる 共 19 18 15 15 16 14 14 11 10 10 10 10 9 9 8 4 6 6 6 6 6 ¹⁵ 5 駘外 はた はせる はずれ 弛 三 古の 三 古 大 一五二 委八 夳 六九四 20公

20 20 15 は 19 19 19 15 13 13 12 慶飄 熛や瀧瀬瀬瀬澑滝溜湍

10 9 9 9 8 7 5 5 5 娠胚姙胎胚妊孕包包

りつけ

16 盧 ひいれ

ひいろ

はりねずみ

#

15 13 ひ 24 21 19 膝 厀 ざ 櫢 蘖 櫱

ひざかけ

巾

はらわた

ひかえ

は ⁸ ⁸ ¹⁶ や 林 拍 ¹⁶ 霍

弗 犮 はらう 7 薇

二富

はりだす

はらばう

はらむ

はりつけ

15 8 8 k 6 l 22 12 12 12 槧版板を発音を発展・晴晴

ひいでる

ひこばえ 9 彦 元

ひこ

☆ 🖺

秀

9 胎

はらごもる

12 8 7 はれる

ひあかり

はやくとぶ さま

はらから

はれもの

13 腫

ひきとめる

¹³碎

13

艺 立 至 ひきつれる

至 盐 至

はらご

ひさい 16 割 勃 気 を ひざこぶし ひ 15 13 17 8 7 ひド ひし 電 14 13 跽 跪 ひさめ 12 ひざまず -0 <u>#</u> 秘宓 ひそかに ひそか ひぞう 9 增 ひぜん 19 襞 ひたい 14 霎 20 19 灌瀧 ひづめ ひつじ ひちりき ひだり 羊未 9 俑 11偶 言0 絅 偏偏 ひとしい ひとかた ひとし ひとえ ひとがた ひとえもの 勻 144 16 16 13 11 10 9 ひ 12 獨 嬛 榮 榮 特 独 と 酷 14 11 10 10 10 10 8 獄圉倉埍圄新囹 ひとよぎ ひとや ,青青 15 11 11 8 撚 捫 捻 拈 18 ひのくち ひのき ひのかさ ひのえ ひの 18 雛 ひなた ひなどり ねる 20 19 響韻 ひびき ひのと 公室 公室 | 11 11 10 ひ 12 10 9 ひ 14 10 | 陳 埤 倪 め 媛 姫 姫 め 勝 凌 18繙 V 11.1 允 PS 29

字訓索引(ひざかけ~ひもの)

ひ 20 16 16 14 13 * 番 播 福 福 9 杯 型 ひょうしぎ ひょうしぎ できゃか ひゃゃか 8 7 7 5 智扣启斥 占 ひらく ひら

 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5
 5 11 9 4 晝昼日 ひる ひらめく ひらたい 18 18 17 15 14 瀁 藐 闊 廣 漫 12 水 水 ひろう ひろい 夸 竞 びんづら き き き き U 18 15 15 8 U 5 b k が B 整 拡 める る 本 び ¹² ¹² び ⁸ ん 琵 琶 わ 坦 ひろま ひろに 廷 わ Ť ふかい ふいごう ふえる 玄 3 17 16 16 15 豁 隩 叡 潭 草 ふき \$ p 6 k 16 12 11 瓢 壺 匏 ふくべ 鮭 13 9 8 7 葺風刷吹 る 幡 ふきなが ĩ ¹² 彭 脹 ふくろ ふくれる ふくらむ ふく ふくらはぎ 壬 夗 夃 か 公園 晝 11 取 かま ネじかずら ¹⁹ 藤 ^三 ¹² 筌 19 18 藤藤 s ¹⁵ 第 \$ 18 17 16 16 16 18 13 13 12 薶 闉 壅 銦 閼 塡 塞 莊 ふしてある 五 奎 至 五三 숲 증 芸

字訓索引

(25)

ほう

14 12 11 9 4 まがと 25 18 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 12 10 2 25 18 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15	9 ま 12 まえかけ まえかけ 芸術 散 装 宝 宝 を まんかけ 芸術 大
8877666544333卷柱局柱曲拐句勾允尤克	3 1 ま 12 るるま 15 ま 22 17 10 ま 8 まかす 一
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	16 14 14 8 \$ 22 17 14 12 11 11 9 9 8 薪槇槙牧 ^姜 彎闡跼詘逗斜卷紆屈
16 16 11 10 9 9 ま 16 ま 9 まぐわ	8 ま 14 10 10 ま 14 10 10 ま 15 15 15 15 14 枚 5 餘 秣 芻 ぐ 5 餘 稼 芻 ぐ 5
10 10 10 9 9 9 9 9 8 8 8 7 眞真悃亮貞信洵恂忠実良	7 4 ま 14 14 13 10 8 ま 10 ま 23 14 ま デ 全 2 2 試 整 誠 悃 忠 き 孫 ジ 攀 迦 ぽ
	是
12 6 s in	元 11 11 15 16 15 16 16 17 17 18 17 18 18 18 18
日本 日	11
公 六	「
- 1	
ト ト ニ コ 七 エ 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七	8 ま 10 ま 10 ま 12 ま 13 ま 16 14 12 接 y 2
14 ままだらうし 数	12 12 11 ま 9 7 りまたのまつ 5 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0 5 5 6 0
<i>h</i>	98777まります。 まちばず 里色坊町市 まちばず こ 元 金 量 変の 巻

ぼ ¹⁴ ¹⁰ 膀 胱 ¹² 9 葬 窆 帽帽 17編 ほうそう 喜 焙焙 ぼうふら ほうたい ほうずる ほうじる ぼうこう ほうき 鳳 ほうおう ほうむる 00 슬 11011 蓋 00 풢七 5 €他 16 ほ 11 10 8 7 7 ほ類お 摩 哮 咆 吠 吼 える ほぐれる ほがらか ほかけ ほおひげ ほおのき 土至 101 六四 公 13 12 9 6 E 10 E 5 接 按 c 5 17緊 7芒 炭 ほこぶくろ 촟 さ ¹⁵ ¹⁵ ¹³ ¹² ¹² ¹¹ ¹⁰ 肆 横 肆 惕 散 逞 恣 9 星 ¹⁴ 紀 綻 袒 13 詫 ほしいまま ほさき ほころびる 퐃 兲() ほ 16 14 12 11 ギ 膴 膊 腊 脩 ほ 23 17 15 11 ほ 11 そ 纖 繊 痩 細 そ 紵 のほそあさぬ s 放 にするほしいまま 兖 12 ボ 11 ほ 鈕 タ 釦 たん 欲 ほっする 四 ¹² 粦 16 11 螢 蛍 17 14 **繁** 辱 廂 15 緬 皇 ほそいと ほど ほっす ほたるび ほたる ほだす ほそどの ほそいけ 兲 **奈 奈** 五九六 <u>=</u> <u> 소</u> 薑 五九七 五九七 19 17 16 14 12 11 8 7 5 ほ 邊 麋 頭 滸 湄 陲 垂 汻 辺 り ¹¹ 施 ¹² 菩 9 6 盆 缶 ほとんど ほどこす ほとけ ほとけぐさ 佛仏 慢側惚彷佛仏仄の談焱焰炎的 23 19 ほねのず ほのめかす にくほねつきの 10 9 ほね 叔 三四四 **、 蓋 蓋 益** 五四 15 14 14 13 曙暗聞誉 ¹⁰ 笑 10 ほめう 11 ほ 程 略 屠 ほまれ ほほえむ 名 四四 尘 쏯 墨 四四 쓸 179 179 七五九 益 ほ 17 17 14 14 11 9 6 り 濠 壑 塹 叡 堀 洫 池 り 10唐 ほ 26 ら 讚 ほる Ξ 5 Ξ 六四四 쓸 14 13 10 8 ほろびる 量 ⁵ ほ 17 14 12 10 7 本ん糜 戦喪 剗赤 19 襤 ぼ ¹³ ろ 幌 ほ ¹¹ ほれる 27 19 12 鑽鏤瑚 ほろぼす ほろぐるま 中中平 슬 温 23 13 遷 僊 25 21 14 13 13 臟 賊 賕 賄 賂 (舞り 9 9 前 13 舞無 8 佾 まいのれ ²¹ 飆 まうさま まいる まいない まいあがる ŧ **基** 要 叠 蓋 温 === 耋 푳 一大 た品 九0 中国中

六 っ

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
1
1
12短 天 4 7 5 5 5 5 5 5 5 5 5
18
14 15 16 16 17 10 10 10 10 10 10 10
14 13 15 16 16 18 18 18 18 18 18
10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10
10 10 10 10 10 10 10 10
10 10 10 10 10 10 10 10
10 10 10 10 10 10 10 10
23 22 22 21 20 20 19 19 18 18 18 18 16 16 16 15 15 14 14 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13
11
10 また 16 13 13 13 13 12 12 12 12 12 12 13 14 11 11 10 10 9 9 8 8 6 7 方 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
18 16 14 13 12 9 8 6 7 7 7 7 7 7 7 7 7
18 16 14 13 12 9 8 8 8 9 17 16 16 15 15 14 13 13 12 10 9 9 8 8 8 9 9 8 9 9
る
14 14 14 み は 14 み 10 み 10 み 10 み 12 12 10 8 み 27 14 11 8 8 3 み 27 14 11 8 8 3 平 27 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 11 11 8 8 3 平 27 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14
セススススススススススススススススススススススススススススススススススス

17 16 15 14 14 13 13 12 12 10 10 10 9 9 9 8 8 8 5 機 臈 膢 禘 禋 歲 歳 報 啻 莉 祔 祠 砒 柴 郊 茉 事 史 20 幕 公司 完全全 まつり まったし まっしぐら 仝 圭 수 졸 朝政治 7 7 亨 まつる まつりのな まつりごと まつりのに 플 슾 슾 100至 <u>\$00</u> 四九五 츳 八九五 10 9 9 8 8 7 \$ 臬 侯 侯 的 的 的 的 7 迄 窓窗四門四向ぎ 19 16 醜 禩 まつわる 五九 八九五 슬 交 弄六 17 16 15 繆 擐 縣 12 10 9 惑迷迷 ¹⁴ 裏 製 和 路 ¹⁵ 牖牕 まどう まとう 21 纏 $\overset{5}{\mathbb{H}}$ まないた まどわす まとまる まなびや まなじり まとめる 侖 10. ま 24 13 12 11 10 8 5 まねな 選聘 募速 速招 召 4 4 5 5 5 まねなす。 10 ま 10 秝 is 眩 12 10 9 爲 倣 為 8 7 免 免 ¹⁶ 9 8 學 宦 学 まぬかれる まばゆい 201 승 슬 110 011 110 豆糸 18 16 15 11 覲謁謁逢 ま 15 g め 蝮 虺 14 障 20 霍 15車 まむし 4幻まぼろし まもる まま まめのわか 云 **差 差** ¹¹ 10 製 圏 10 8 捍抱 16衛 16 14 14 13 10 8 6 4 3 まる。 園園海圓員侖団円丸まるい ¹⁷ 7 檀 杆 s ゅみ まるきばし 11 毬 16 瘴 10 9 迷迷 マラリア まよう まるいあな 숫 104 歪 ハハカ 芸 墨 숫 좃 35. ま ¹⁸ ¹⁸ 暦 暦 11 9 専 | 4 7 まるた 16 諜 15 14 9 賓客 15 輪 まわり まわし まわる まるめる 三四十 20 13 饅飩 ま 18 11 9 7 7 轉 転 廻 巡 迂 ¹⁴ 献 まんじゅっ 萬万 央 まんなか まんぞく まんじ 其身 2 123 聚 16 澪 18 14 14 14 10 8 驅實船箕躬実 みおろす みおくる 8月ま みお 三 五七四 売0 七 五七四 至 七五

字訓索引(みどり~むすぶ)

12 12 12 12 12 12 12 12																									
1																									
1																									
11 11 12 12 13 14 14 14 14 14 14 14																									
11 12 12 13 13 14 14 15 15 15 15 15 15																									
19 19 19 10 10 10 10 10																									
18 18 18 18 18 18 19 18 18																									
1.																									
15 15 15 15 15 15 15 15																									
1																									
3 女 [2] 23			ž						Ø.)				ざと	型	さき					がる				
12 19 19 18 10 10 10 10 10 10 10								: 11	10	4			故	3		8					めい				めあ
12 12 13 16 16 16 16 16 16 16		於	· ×											•	ばせす		ĭt		うくし		•				わす
12 12 13 15 16 16 15 15 15 15 15		12	12									_	_				5				14				19
12 12 12 13 13 14 14 15 15 15 15 15 15			Æ																る			''		5	
10 10 14 13 15 16 17 17 18 16 17 18 16 17 18 18 16 17 18 18 16 17 18 18 18 18 18 18 18	-	23 US#F	22		18								_						13	_				12	12
18 16 10 10 10 10 10 10 10																									
る。 5 日																									
11 10 かすらしい 22 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2																									
9 5 5 も 11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1																									
9 5 5 も 11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1																									
問 の の の の の の の の の の の の の			E 0:1	芝		悪光	#0 <u>#</u>	景		四八九	岩	六	<i>ل</i> ا			九	育 0	とい	三五	长000	☆ 02	퉂	芸元	至	
1																									
13 も 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13 13	***																								
なる 三																									
一			소	よう	臺	三	γ,	九九		益八		六七四	=	鬥	鬥	こり	五七九	五七九	L	ž	至		五三七		五四〇

19	12	7	<u> </u>	7	91	1 =	7.	20	13	7.	16	13	10	10	a	a	 g	7.	17	8	7	7.	14	1/
港	港	みなと	孤	みなしご	²¹ 殲	にする	みなごろし	20 瀲	滂	みなぎる	16 儘	僉	娅	俱	9 咸	皆	並	みな	嬰	克	児	みどりご	14 綠	4級
4011	₽O#		莹		풏		1	九0九	8	る	凸	盖	尧	芫	150	창	尧		鬥八	兲	兲		公元	公允
25 鼈	みのが	14 蓑	みの	17 領	10	10 峰	7 岑	みね	18 魌	醜	17 類	17 類	11	みにく	8 沫	みなわ	30 原原	13 源	13 源	10 原	みなもと	9 南	みなみ	12 湊
	か	를		九00	· 范	范				29	丟	善	스 듯	۲ ۲	<u></u>	わ	云元	0411	云元	云九	もと	交交	み	五五
0	18	ず	み		みみ	23 邏		17		16 瞠				18	16穆	13	_				26		9	
	聵		みみきこえ	耳	み		みまわる	27	みまかる			みはる								みのる		稼		みのり
	卆			兲0		숭		五		六五七	둧		鬥	뜻		六岩	高八	至	五		中の国		中の国	_
	10 宮	みや	5 孕	みもち	28	19	信信	みめよし	- 25	# #	三 よい	前	7 14 或 瞑	みみをきる	. 瑣	10 E	みみたま	耶	みみたぶ	. 斜	おみずく	i i	j V	トみみきりの
	一七五		八四四		夳	夳	五九	ĩ	岩	益	V	, E	9		至	Ξ	ŧ	ろ	3	, / E	\ \ \ \			ŋ o.
	12都	11都	みやび	15	みや	12 虚	11 虚	ځ	みや	12都	都	11	· 府	8	。 京	7 邑	7 邦	7邦	みやこ	12 衇	脈	脈	9 脉	7.
	二 公三	立	Ü	一五	みやこのち				みやこのあ	心心	수무건	===	清	I	1,70		吉温	芸品	څ	八四		싎	八品	`
14			13				-									_			10				_	2
察	13 : 脾	13	13	. 胡	12 - ±1			見 形	111	匪	見修	。 引形	· 身			7 見					ミリメー	雅	雅	みゃしゃか
点九	芝	谷	P2	公里の	~	一五五	三				225					_					ŀ	싪	益	カ
		· 宛	てすわ	みをかり	虹	みわける	26矋	²⁴ 觀	23 鑑	²² 覿	22 鑒	²¹ 覽	19 闚	18 瞻	18	18 観	17 覧	17 觏	17	16 瞠	16 覩	16 窺	15 監	14 脖
		五	わる	かがめ	1	る	四六六		三三	空區		八六六	五九	中,中	三	=	公公	<u>=</u>		空	奈	莱	芫	奈
	17	11	11 這	11部		9 逆	。 迎		むか	19	15	15 趣	14 對	13	¹² 答	価値	郷	9面	9赴	7 対	6 円	むかう		
	巡 7								むかえる								_					5	đ	د
12		<u></u>	壹 2	益	五 17	元士	量	量 15	15	12	里 12	100	至 20	五 五 15	た かっ かっ	<u>을</u> -11	2000年8	≟ 7	超0 7	至	<u></u> 元	8	6	
答	酢	٧,	7 尨	Ψ.	17	まつる		15 稟	稿	棋	程	むぎわら	20	¹⁵ 麪	むぎこ	変	*來	来	⁷ 麦	むぎ	21	*	先	もかし
六 四 九	美	る	七九五	<u></u>	匵		して	三三	=	弄	둦	ь 	<u></u> 을	呈		ᄎ	<u></u> 수	<u></u>			至	포	五	
11	11	11	Ω	8	7	5	む	18 餮	う	むさ	¹² 甥	¹² 壻	¹² 婿	むこ	16	。 屍	むくろ	13 腫	むくみ	21 醻	17 謝	13 酬	12 報	12
婪	11倉	戦	8沓	8 至	忨	叨	3	食) ===	-/3	- 1.3	717								ba-2 2	L-0 11		12
婪				至			むさぼる			むさぼりく							ク		H	P28				
梦 ☆ 13	兲	兲0	六四三	Ξ	三	汽		空		り く —	四九八	四九八	四九八		101	= 元七		E01		P78	三九四	<u> </u>	六九	五
女 公宝		50 15 题	9 13 新	三 13 貉	13 新	至	10	空		15 金		57 18 蟲	12	12 虫虫	101 101 当	₹ 8 見	6 虫	6曲	<u>4</u>	むし	三五 22 號後		5元 11	室加林
梦 ☆ 13	売一 むしば	天O 15 0K 10K	9 13 新 10次	三 13 貉 10火	13 新 10公	≦ むじな	10 冤	空中み	むじつのつ	15 世 翌	売 むしくい	5九八 18 虫虫 五三	12 名 至三	¹² 蛱 景	1011 12 出 III40	表 8 是	6虫 型	图01 6 出 1 图0	4 巴 宾	むし	三九四 22 號食 六五三	12 個	式 11 林 公	皇 11
梦 ☆ 33 彌	売一 むしば	15 00 10以	9 13 新 10次	三 13 貉 10%	13 新 10公	汽	10	空		15 金	売 むしくい	57 18 蟲	12	12 虫虫	101 101 当	₹ 8 見	6 虫	6曲	<u>4</u>	P78	三五 22 號後	12 個	5元 11	11 1

-						,								_											
	1	5年1	5 1 5 元	5 1	女 姓	とから	5 10	6 1	2 등	1 V	いやかま	18 語	16	16 諠	喧喧		やかま	17館	館	やかた	奶	刃	やいば	? 灸 [±	やいと
	3	4	7	9 3 9 3	元 · 约	3	***		: :	-	く	=	云	云	증	至	い	Ξ	≣		四七九	四式		H4 I	
	16 焼	15	-	-	13		-			10	10 烙				6	や	澄	8 匋	やきもの	10烙		20	16播	燔	やきにく
	£256 \$255	会		dent		3E.	七五七	ES ES ES	슾	九0五	소	六		슬	슱		墨	益	<i>(</i>)	至	b 	10 th	30点	304	
+	官官	-	9要				16解		13署	13	10 庭	。府	⁷ 廷	庁	やくし	23 鑠	²¹ 爛	20 譯	19爆	18	烟	16 燎	16 燔	¹⁶ 燋	¹⁶ 樵
-		h	公司		っ	₹00	卆			益	<u>^</u>	崇	六三	₹00	j.	景九七	公	슬	六九四	空	幸	<u> </u>	100	五三	至
	6 臣	やした			第 要			13	やし	17 優	8易	やさしい	16 蔬	やさい	13 彀	やごろ	²¹ 爚	やける	19 櫓	¹⁵ 樓	15	¹³ 楼	やぐら	15 寮	14 僚
	<u>=</u>	ž	至	奈	奉	六四	_	슻		600	四九	ψ,	至		三〇九		会		产	九 六	츠	九六		公	公室
	⁷ 社	やしろ	19 鏑	班	やじり	15養	15	15	15 頤	14 飼	報	14 毓	14 飴	13 蓄	13 飼	11	10	9 食	90位	8 牧	8 乳	8乳	8育	拿	6 艾
	弄		苔蓝	委		至	=	芫	=	芸	豊	玉	=	秃	芸	益	五0	空	¥	₩ 6	立ち	550	亖	三式	九九
	寂	11康	10 悌	10泰	10 徐	复	9 便	9 胖	· 恬	8宓	· 定	8坦	7妥	7妥	7 晏	⁶ 安	₅ 平	5	やすら	- 8 - 8 - 8 - 8 - 8 - 8 - 8 - 8 - 8 - 8	休	やすむ	15 賤	やすい	。 社
	至0.5	₩ 3E.	六六	좆		=	七七五	104	즟	蓝九	<u>×</u>	至七九	五六〇	<u>\$</u>	臺	=	兴0	岩	7),		士		촟		売
	13 綏	。 保	⁷ 巡	- 巡	5尼	やすん	靖	13	やすんず	10 恁	やすらぐ	23 犪	18 歟	17 論	16 澹	16 憺	16 靜	15 億	14 寧	14 寧	14 静	13 兼	12	進	11
	四八六	444	(25) (25) (26)		奈	やすんずる	第00	月00	ル ず	=	ぐ	500		III II	弄四		품00	卆	空	空三	100	九0七	空	兲	八四
	8	やど	16	重	¹¹ 悴	やつか		やっこ							やだけ			22 腥	19	15 痩	15 瘠	憔	やせる	15 撫	13 葆
	六四		411	411	四八五	る	六三九	_	八0至	'n	六九四	六九四		五三五	rT		三	兲	八九五	五八	至0九	四班〇	4	七四六	セセカ
		22 躔	_	17館		12		10	_	8废	8废	_	 8 舎		次		19 嬴		13 傭	13 賃		屋	10 倩	やとう	9亭
		至	九二	Ξ	=	11110	四八	四九七	六九七	六九七	六九五	弄二	売	兲0	兲0	る	<u>수</u>	かり	· 프	<u>=</u>	二式	二七九	五九	う	<u>~</u>
	.8												_			ゃ		ゃ						11	*
			やぶる		?	やぶさか	数	やぶがらし	動	やぶ		やはず	密	のふく	11 管	ねじた	整	やねがわら	20		やなぐい	柳	なぎ	梁	な
-	九四四	六九九		八九0	公元	_	九0九		至		E34								五三	五二		숯		公=	
	器	敝	崩	崩	殆	祖	?択 ₹	やぶれる	19 艦	やぶれぎ	18 際 三天	殬	¹⁷ 斁	16 瘵	劈	15 喧	14 摺	13 隓	13 傷	13 隓	翌	翌	堕	敗	破
	恶	茎	六	六	<u>弄</u>	蓋	五七三		쏫	<u>~</u>	兲	六三九	亮	置	芸	弄	四四八	尧	四六	兲	惠	2	尧	登	立士
	₹ 5	やまい	14 豪	やまあらし	5	ぬま	やまあ	¹⁰ 陝	· 岬	やまあ	22 繙	17 嶽	8 岳	7 岑	з Ц	やま	24	19 壞	個	16 終	16 擇	堰	¹⁵ 弊	¹⁵ 弊	¹³ 賁
	老六		三九	5	查		いの	九五五	둧	٠·	公	10	110	5	悪		至	九五		六四	東七川	九五	六四	岩温	七四

22 18 8 4 2 t も (黨 藉 若 今 乃 し も ¹⁷ だす 名字 もたげる 읖 六 三 九 四 三式 売七 를 ¹⁴ ¹⁰ ⁸ 馵 倚 凭 乖 ≣□ もちいる もちいね もちあわ もたれる もたらす である。 (ICE 兲 も 12 11 11 2 接 接 捻 もって 10 10 10 9 9 9 8 7 6 6 6 6 5 4 4 値拿挾拏持挟拈扼有有收寺収手丸 もちまえ 15 8 7 翫 玩 弄 18 18 2 繙 燃 了 最最最常尤 8 5 直用 もてあそぶ もつれる もっぱら もっとも 顓醇嫥壹專純 専 壱 八三四 八四四 **三** 22 饗 8字 もてなす 11011 1九0 至 13 13 も 資資とで ¹¹ ¹⁰ ¹⁰ ⁹ ⁹ ⁹ ⁹ ⁷ ⁵ ⁵ ⁴ ⁴ ³ 或殉索要要徇曷求勾匄气告艺 基 阯 址 もとめる 8 20 17 16 15 15 14 転 激 微 請 請 戦 10 8 素 固 13 聘 ¹³ 鬼 痩 敫 もとる 0 九七 ¹⁴ 痘 も 20 ぬ 数 け 13 蛻 ものさし ものう ものいみ ものいう ものおきだ 六四〇 衰衰 もののけ も 緩 ¹⁴ 模文 舫 ¹² も 森 り 13 催 いきぬ もようのな もよう もやいぶね 24 震 も 髀 14 10 6 も も 9 も 16 む 籾 み 縗 もよおす 兲 六岩 싎 も 21 14 11 11 10 9 8 8 3 霧 漏 漏 透 透 洩 泄 16 15 11 6 諸諸庶百 超脆 12 盛 11 盛 12 傅 もろもろ もる 関 んのかぎ 듯 숲 もんのしき み もんのしき 18 17 15 10 10 9 9 5 5 5 d 數 矰 箭 晉 晋 耶 哉 矢 乎 也 もんめ 三元 取 三型 ¹⁵ 加 聞 梱 19 もんばん 匁 Þ

中国 슻

出 Ξ

丟 三 三

字訓索引(やまい~ゆるい)

载					-		_																
	14 1 認記	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	12	釈	赦	拾	拾	計	20	10	· 有	· 免	. 発	2	2	<u>5</u> 町	* 孝	允	ゆるす		する		超
元	空	产	戏九九	元六	芝	完	売	三		至	슬	승	슬	至	至	±	益	元		三		せに	=_
揺 打	几机机	18	14	14 賒	覧	¹³ 寛	12 裕	12	12 舒	道	悠	10 紓	10 徐	7 攸	ゆるや	· 弛	ゆるめ	²² 聽	20 釋	聴	17 縱	16 縦	15
		三九六	三九六	三九四	1	114	皇	弄七	三	슻	슻	三三	豊	슬	か	Ξ	る	₹Q±	売	空	二六	四六	生宝
10 等	9 9 是	9 盘								よい	9 昧	· 影	5日	よあけ	¹² 葉	9 柴	8 夜	代	₅ 世	よ	,	t	¹³ 搖
12 1	5.		門八	丰	公	豐六	元	云	公共		10	츳	兲		公元	ద	슻	100年	四二二		_		八四九
11 9						題		22 懿		18 韙		14 臧		13 祿	13 義	12 禄	12 善	淑	伽俶	10	10宵	10純	10
	717	四人五	1	しれる	云	吾中	うま	圭	蓋	至	三美	五五二	七九	차=0	三	九금()	奎	四八	至	問題の	四四()	豐六	8 0%
						 10 尅	9										14 様		_		15	14 瘍	13 酩
16 g 緯 2 と		「横	筷	よこ						よくする		`	14漸	うやく	惊ハ	展				ようす			
≣_	- <u>=</u>		奕		交宝	=	=	01118	票0		亲		=				至	四五七	四五七		四八五		八九
誼	。 好	よしみ こ こ み	2 程	13	崔	· 由	<u>5</u> 円		ELI 9	j よこめ	. 橋	すき	よこに	24 讒	¹² 傜	10 衰	9 姦	·郭	7 佞	邪	よこしま	⁷ 杠	よこぎ
益	六	4	= =	=	吴	슻	<u>±</u>		七五五		カカ		わた	橐	公元	克五	110	三九五	空	三九五	3 .	亖	
13 5	よ ⁵ つぎ	よっ	10	次	よだれ	¹⁵ 靚	¹³ 裝	¹² 装	7 扮	よそお	¹² 粧	7 妝 圖	よそお	5他	5外	よそ	10 託	よせる	19 鯖	よせなべ	19 攀	扳	よじる
三七四	-		五九	弄六		_	35.	Æ.	六		25.	÷.		ナレ	八		五七三		돌으		第0年	七〇五	
·呼	5 号召马	よぶ	16 寰	5	よの	9 俗	よの	15	14 %#5	11	ょ	8	_ }	16									
	pg -			<u>11</u>	なか	- TH	つね	4V/\	称	.) (両)	なげる	夜	なかか	澱	淀	よどむ) (16) (16)	淀	よど	12 街	みち	よつまた	始
	四三五		1 110	四九二		[29]			-	*		六		九	ル		九	淀		_		またの	五二
	豐 ₹ 22 23 3		1 110	<u>끄</u>		五番 10 割川			+ よみす	*		夜 宗 姓		九	淀瓷粒		九	ル	よど 32 額	_	35 15 靚	よつまたの 12 喚	
		21 箍	1 110	<u>끄</u>		[29]			七	20 蘇 毫	16 穌	14 整 章		九	ル		九	ナし		_		またの	五二
511 よ	222讀	21 箍	199	15 賦 讀	14.読	10割川	よむ	14 嘉	七よみする	20 蘇 毫	16 穌	14 整 章	12 甦	九よみがえる	12 計 長	よみ	18 贅 五四	ナし	32 額	24	15 靚 - あこ よめい	またの 12 喚	整 8 招
11 よめ	22讀 会 8拠	21	199	15 賦 讀	14.読	10 計	よむ	14 嘉 光	七よみする	20 蘇 毫	16 穌 毫	14 整 章	12 甦	九よみがえる	12 計 長	よみ	18	よぶん	32 篇	24 日 日 日 五	15 靚 50	またの 12 喚 三 13	新二 8 初 四 章
11婦 = 8凭	22讀 会 8拠 1公 よろ	21	19	三 5賦 喜 7杖 鼍	14 読 会 6 因 三	10 計 章 5 由	- よむ - 5扔 翼	14 嘉 克 5 仗 異	しょみする 5分 亜	²⁰ 蘇 毫 4仍	16 新 章 3夕 西	5 4 姓	12姓 章 15隻 九七	よみがえる 15蓬 売	九 12 計 三人 14 高 三 12	よみ 12 萍	18 20 9 本 七八	た よぶん 6 交 元	32 篇	24 置 11 婚	15 靚 - あこ よめい	またの 12喚 三 13嫁	№ 2 8 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
11婦 = 8凭	22讀 会 8 拠 1公 よろこび	21	1100 19籀 元 7扶 景 9	三 5賦 喜 7杖 鼍	14読 会 6因 三	10 計 章 5 由	よむ 5扔 翼	14 嘉 克 5 仗 異	しょみする 5分 亜	☆蘇 耄 4仍 異	16 新 章 3夕 西	5 4 姓	12姓 章 15隻 九七	カー よみがえる 15 蓬 売二	九 12 計 三 14 高 三	よみ 12 萍 芸 1	18 20 9 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	1 よぶん 6 艾 元	32篇 (元 よもぎ	24 2 1 1 4 三 1	15 靚 至二 よめいり	またの 12喚 三 13嫁	№ 2 8 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
11婦 富 8凭 21次 12禄	22讀 会 8 拠 1 へ よろこび	217	1100 19籀 元 7扶 15、9 青 元	15賦 8 7杖 墨 8函 元	14読 会 6因 三 5甲 六	10訓 壹 5由 会 4介 金	ょむ 5扔 景 よろい	七 14 嘉 ま 5 仗 [異 16 憑 きゃ]	セ よみする 5 合 誓 16 遵	* 20蘇 墨 4仍 墨 16據 1公	16穌 雪 3夕 西 15撚 公置	5 14 姓 至七 よる 15 夢	12 胜 5 数 九七 14 暮 大二	九 よみがえる 15落 夫二 14馬 七六	12計 表 4	よみ 12萍 紫川 1英 大二 。	18教員 408 9 中 七八 11 1 18八	た	32篇 〈元 よもぎ 10宵 280	24 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	15視 801 よめいり 10倚	またの 12喚 三 13嫁 大 9 恃	翌 8招 號 1婦 齒 8夜
11婦 15 8凭 12禄 250	22讀 会 8 拠 一〇 よろこび	21 2 2 8 依 1 8 2 101	1100 19籀 元 7扶 15、9 青 元	15賦 8 7杖 墨 8函 元	14読 会 6因 三 5甲 六	10訓 壹 5由 会 4介 金	ょむ 5扔 景 よろい	七 14 嘉 ま 5 仗 [異 16 憑 きゃ]	七 よみする 5 合 臺 16 遵 三七 12款	* 20蘇 墨 4仍 墨 16據 1公	16穌 雪 3夕 西 15撚 公置	14姓 至4 よる 15 遵 2114	12 胜 5 数 九七 14 暮 大二	九 よみがえる 15落 共二 14馬 七六	12計 表 4	よみ 12萍 大二 11莫 大二	18教員 408 9 中 七八 11 1 18八	九 よぶん 6 交 売 10 倣 大型	32篇 (元) よもぎ 10宵	24 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	15 靚 至0 よめいり 10 倚 六	またの 12喚 三 13嫁 夫 9恃 三	型 8招 Bill 11婦 七日 8夜 八日

12 7 杜 章 やまなし ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 章 ・ 章 22 17 播 嶺 17 薜 やまけわし やまにれ やまと やまぜり 10豺 電 梗 숙 三五七 公 兲 13 嵯 -12 12 8 場場阿 三三三 17 嶷 ¹⁹ 兼 12 松 言 いさま やまのたか やみつかれ やまのな しいさま 13 僊 やまひと **ぶかいさま** る やまびと やまのくま 盖 公室 夳 わ 15 13 12 12 11 や輟 戢廃 寝 掇 める 18 18 18 17 16 16 15 14 13 12 12 11 10 6 癒 癒 鹽 癉 殫 瘵 罷 瘉 歇 落 痡 痒 息 休 $\stackrel{\scriptscriptstyle{3}}{ ext{ ext{ ext{$\draw{1}$}}}}$ $\stackrel{3}{\vdash}$ やむ 型岩 六 喜 75 至 을 을 증 좀 秃 七五 싙 霊 슬 七七九 会 五四 七九四 七九四 Ŧ や127や1414や15ら稍良や嫠寡も廢 12 12 11 10 10 9 媆毳軟腦脆耎 14 13 遣 遣 14 槍 9 柵 やわらか やわらか やる やり 35. E 0 E 三0 至0三 蓋 츷 芸 四四五 公 졾 全 会 0 V 16 16 15 15 穆諧調調 15 15 14 誾嘻暢 ¹³ 雅睦 紓 和 侃 尼 かやりらか。 かわらか。 やわらぐ 公公 스 프 프 2000 숲 **=** 立 六公五 合 会 臺 20岁 合 V 4 ゆ 17 8 7 ゆ 15 14 13 ゆ 9 ゆ 3 夬 が 實 牀 床 か 镽 繍 肆 え 故 え 夕 32 12 額揉 ゆ ¹² ゆ ¹⁰ う 飧 うげ ゆあみ やわらげる 四六 슻 ≘ 20 17 16 14 8 8 整 遵 遴 僯 迍 豕 14 講 18 15 齋 窳 ゆきなやむ 殣 ゆきだおれ 雪雪 12 普 ゆきあう ゆぎ ゆがむ ゆき 靫 呱 歪 五八 五九〇 <u>=</u> 을 중 출 **출** ¹⁶ ¹⁵ ¹⁵ ¹⁴ ¹³ ¹² ¹² ¹¹ ¹⁰ ¹⁰ 邁 適 遊 遊 遊 遊 游 逝 流 逝 5 未 9 沮 8歩 · 征往往步行出尤为 슬 $\frac{1}{0}$ 至 숲 숲 그 그 **=** 至 즟 四九七 畫 中午中 蓋 四九五 元 **B**10 三 三 pщ tt. 至 至 12 12 11 10 9 8 7 4 ゆ 24 20 17 17 17 14 13 12 裕富曼泰胖肥余易た讓譲禪謙謙遜禅揖 ゆ ²¹ 10 ず 櫻 桜 9柚 ゆすらう ゆごて 中0周 22 21 20 18 18 17 16 16 13 13 穰饒贈豐穣優餘膴腴豊 ゆだめ ゆたかに 20 5 鬒 含 する ゆたかなか 伽 四七九 四六七 四六 100 을 참 송 00 꾸= 뽓 公(0) 스 丸0 中国十 世 12 11 10 9 p 13 12 筈桰括弭境煮煮 ²⁰櫪 ⁵ ゆびにはさ ゆびぜめ ゆびさす ゆび 8弦 ゆみ ゆでる ゆづる ゆびひしぎ む 拶 芸 140 九九九 = \equiv 売品 쿬 17 15 15 10 懦緩緩紓 16 ゆ 21 撼らぐ ¹³夢 ゆめみる ²¹
夢 夢め引 ゆるい ゆみをひく ゆみなり = 슻 스 갖 프 등 <u>=</u>0

渉	11済	10	10	9度	。 就	8 杭	6	6 日	わたる	19 轍	わだち	5付	わたす	9 津	わたし	7 私	$\stackrel{2}{\not L}$	わたくし	15 磐	¹⁵ 盤	わだかまる	14 複	褐	福
四四二	틎	258 258 ===	E0	公園(0	E0			六	_	空		芸		04国	ば	풋도	三五七	i	404	10%	まる	五五	三五	三
¹⁰ 笑	10	10	啼	9 至	9 唉	9 咲	わらう	程	わら	¹² 唤	わめく	17謝	13 詫	わびる	25	わにの	20	¹² 蝉	わに	14紹	わな	22	17濟	渡
22 22 	四三九	041		空	四三九	黑光		三			`	三九四	兲0	9	폴	るい	=	Ξ		<u>추</u>		六三	픚	亮
整	11符	10	約	9約 急	契契	9 契	8	8券	わりふ	課	わりあ	程	程	わりあて	婢	8 妾	わらわ	¹² 童	わらべ	¹⁶ 蕨	わらび	¹³ 嗤	荒	亞
量	超二	墨	읖	슬	完	完	五五五	蓋		스	てる	六	六					奈		臺		三七四	黃	六
¹⁴ 殠	٧ [.]	わるいにお	18 獷	77 獰	17 醜	16 憝	14 厲	思	¹² 惡	悪	10	9 姦	。 非	。 邪	邪	⁶ 兇	4 <u>×</u>	わるい	12 割	12 割	わる	16 劑	¹² 傅	¹² 牌
<u> </u>		お	프	至	=	兲		窓	九	九	元	110	014	둞 도	五五	立	갂		Ē	Ξ		置	間	至
- 12	E E	O 1 文 月	o 1 关 月	主 文化 二	0 7	7 芒	子 利	5台	î J	* to	1 鬼	3 13	支 5	9 为	れるもの	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2				9 7				わるがしこ
	/ P	= -		5 3			= ==	: =			7	7	< -t-	71		-		_						
										1 12	3 1 元	2 1 元 元	0 1 字里		豆木	于力		1 社	1 われをわ	7 分 巻	なう	われをう	15 儂	12 般
										ار - ع	L 2	L 2	七	L 5. =		ž	- E	H H 1	¥	종		ί	六七五	스
	_																							
												_												

直 19 17 羸齢 30 21 19 ら 14 ら 16 鸞 蘭 蘭 ん 羸 ば 駱 15 益 よわる 公 公 公 14 り 13 9 り 33 16 10 綾 4 鈴 厘 ん 龗 龍 竜 15 14 11 るり りゅう 陸 ŋ ろ 15 13 12 無 廊 廊 れ 21 ん 魔 じ 荔 21 櫺 ろうか レプラ n 슬 八九六 <u>추</u>의 允 八六六 15 8 かじに 2 元 ²⁶ ろ 驢 ば 九三 20 13 11 11 11 11 10 10 9 9 8 7 7 7 7 6 6 5 5 4 4 6 18 19 $^$ ¹² 筍 わかも わかだけ わかつ 黑 ¹⁴ 缉 僮 壻 わかれみち わきたつ **公** 交卖 四九八 わきばら 승 わず 業 術 術 倆 技 伎 かりを使作信令 わ 21 18 16 14 12 ぎ 辯 辨 劃 斑 部剖削 兆 わざと 害祇岛殃氛灾災克夭厄 **麦** 슻 わずらう E0# 502 翌 袍 た 棉 架 た 穋 稑
 16
 16
 7
 7
 わすれる

 15
 15
 15
 表
 12 11 案 累 わすれぐさ いわずら わし 八九四 八九四

© Shizuka Shirakawa 1994 Printed in Japan ISBN4-582-12811-4 A5判(21.6cm) 総ページ1072 乱丁・落丁本は直接読者サービス係までお送りください。送料小社負担でお取替えいたします。